

国定読本用語総覧2：第二期『尋常小学読本』明治四十三年度以降使用 あ～て

著者	国立国語研究所
ページ	3-882
発行年月日	1987-03
シリーズ	国立国語研究所国語辞典編集資料；2
URL	http://doi.org/10.15084/00001615

国立国語研究所
国語辞典
編集資料
2

国定読本用語総覧

2

第二期「あゝて」

●『尋常小学読本』明治四十二年度以降使用

国立国語研究所編

© 1987 The National Language Research Institute

刊行のことば

国立国語研究所は、その事業項目として国語辞典の編集を掲げている。その一つは歴史的辞典であるが、日本語の展開発達を記述する基礎をなすものとして、我々は日本大語誌とも名づけるべきものを構想した。文献の上にたどられる限りの日本語の足跡を、用例として収集し整理しようとするものである。

時代をかりに三百年、百五十年、五十年等に区切つて見るとき、一八五〇年以後の百五十年は、日本語が近代的発展をとげた、著しい一時代である。そして一九〇一年からの五十年は、現代語の基礎の確立した時期と見ることができ。

我々は、まずこの五十年にしぼつて、用例収集の作業にとりかかった。ここに取りあげる六種の国定読本は、ちょうどこの時期に使用されたものであつて、この時期の国語教育の基本教材であり、その用語は、それ自身発展しつつ、国民的な現代語の成立の基礎をなすことができる。

この作業は、もともと、この時期の用語を採集する方法の検討のために、試験的に行つてきたものであるが、その作業の結果は、現代言語生活の基幹である、いわゆる標準語の確立の経過を示す基本的な資料となるものと考えられる。

ここで国定読本というのは、明治三十七年四月から昭和二十四年三月までの間に使用された文部省著作の小学校用国語教科書六種のことである。その六種を使用時期に従つて示すと次の通りである。

- 第一期 明治三十七年より使用『尋常小学読本』（今日イエスシ読本と俗称）一～八
- 第二期 明治四十三年より使用『尋常小学読本』（今日ハタタコ読本と俗称）卷一～十二
- 第三期 大正七年より使用『尋常小学国語読本』（今日ハナハト読本と俗称）卷一～十二
- 第四期 昭和八年より使用『小学国語読本』（今日サクラ読本と俗称）卷一～十二
- 第五期 昭和十六年より使用『ヨミカタ』一～二『よみかた』三～四『初等科国語』一～八（今日アサヒ読本と俗称）
- 第六期 昭和二十二年より使用『こくご』一～四『国語』第三学年（上下）第四～六学年（各上中下）（今日みんな

いいこ読本と俗称)

第一期国定読本については、『国定読本用語総覧1』(第一期 あくん)をさきに刊行したが、さらに第二期国定読本について国立公文書館所蔵本を用いて作業を進めた結果、ここに編集を完了したので、『国定読本用語総覧2』及び『国定読本用語総覧3』の二分冊で刊行することにした。二分冊にするのは義務教育年限が第一期当時の四年から六年に延長され、したがって六年間の教科書として内容が倍以上になっているためである。このたび刊行するのはその第一分冊『国定読本用語総覧2』であるが、これには第二期の用語「あくて」の部を収める。

この『国定読本用語総覧2』の編集作業及び諸本の調査にあたったのは、主幹 飛田良文(言語変化研究部長)、研究員 高梨信博(兼任)、調査員 林大(前所長・名誉所員)、見坊豪紀(元第三研究部長)ほか非常勤調査員五名である。

国定読本の諸本の調査にあたっては次の機関・大学及び諸氏のお世話になったことを記して謝意を表する。

国立公文書館、国立教育研究所附属教育図書館、東書文庫、福岡県教育センター、藤沢市文書館、横須賀市教育研究所、愛知教育大学附属図書館、滋賀大学附属図書館教育学部分館、筑波大学学校教育部、奈良女子大学附属図書館、福岡教育大学附属図書館、文化庁文化語課主任国語調査官 安永実、同国語調査官 西田絢子、滋賀大学教授 鈴木博、岐阜大学助教授 梶山雅史、福岡大学助教授 安井篤、筑波大学専任講師 塩澤和子

また、前巻にひきつづき印刷刊行を引き受けられた三省堂にも謝意を表する。

昭和六十二年三月三日

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

解説

- (一) はじめに
- (二) 国定読本第一期から第二期へ
- (三) 第二期国定読本について
 - (三・一) 『尋常小学読本』の位置
 - (三・二) 『尋常小学読本』編集の考え方
 - (三・三) 書誌・諸本・底本

(一) はじめに

国定読本の資料的意味と、第一期国定読本については、『国定読本用語総覧』の解説に記したので、ここでは、第一期から第二期への読本改訂の事情と、今回の作業対象である第二期国定読本について少しく解説しておくこととする。

(二) 国定読本第一期から第二期へ

明治三十七年四月、第一期のいわゆるイエスシ読本が使用されてから明治四十三年四月第二期のいわゆるハタタコ読本の使用されるまで、日露戦争などいくつかの大きな出来事があった。直接的には義務教育年限の延長、仮名遣いの改定などがある。

時代の推移は教科書の材料・字句の訂正を余儀なくした。例えば、郵便制度の改正は「第三種、第四種とあって」(巻八・四ページ)を「第三種、第四種、第五種とあって」のように訂正し、第一期国定読本の第一種本と

第二種本とを区別する目安となっている。こうした第一期『尋常小学読本』の修正作業は文部大臣官房図書課で行われ修正稿本が作成されたが、仮名遣いを改正する論があったため、修正稿本の確定を延ばしていた。

明治四十年三月二十日勅令第五十二号をもって「小学校令」の大改正が行われ、それまでの義務教育年限が四年から六年に延長された。「小学校令」の第三章第十八条には、

尋常小学校ノ修業年限ハ六箇年トス

高等小学校ノ修業年限ハ二箇年トス但シ延長シテ三箇年ト為スコト

ヲ得

と定められた。ただし、この勅令第五十二号には附則があり、

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス(中略)

特別ノ事情ニ依リ第十八条第一項ニ依リ難キ場合ニ於テハ市町村立小学校ニ在リテハ市町村又ハ町村学校組合ニ於テ、私立小学校ニ在リテハ設立者ニ於テ期間ヲ定メテ府県知事ノ認可ヲ受ケ当分ノ内尋常小学校ニ関シテハ仍従前ノ規定ニ依ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ高等小学校ニ関シテモ仍従前ノ規定ニ依ルコトヲ得

前項ニ依ル尋常小学校ノ教科目ニ関シテハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

と付記された。

この改正にともない、「小学校令施行規則」も文部省令第六号により明治四十年三月二十五日に改正された。第一章第一節の第三条は国語で、国語ハ普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス尋常小学校ニ於テハ初ハ発音ヲ正シ仮名ノ読ミ方書キ方、綴リ方ヲ知ラシメ漸ク進ミテハ日常須知ノ文字及普通文ニ及ホシ又言語ヲ練習セシムヘシ

高等小学校ニ於テハ稍々進ミタル程度ニ於テ日常須知ノ文字及普通

文ノ読ミ方、書キ方、綴リ方ヲ授ケ又言語ヲ練習セシムヘシ
読ミ方、書キ方、綴リ方ハ各々其ノ主トスル所ニ依リ教授時間ヲ区
別スルコトヲ得ルモ特ニ注意シテ相聯絡セシメンコトヲ要ス
読本ノ文章ハ平易ニシテ国語ノ模範ト為リ且児童ノ心情ヲ快活純正
ナラシムルモノナルヲ要シ其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科其ノ
他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ
女児ノ學級ニ用フル読本ニハ特ニ家事上ノ事項ヲ交フヘシ
文章ノ綴リ方ハ読ミ方又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項児童ノ日
常見聞セル事項及処世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ其ノ行文ハ平易
ニシテ旨趣明瞭ナランコトヲ要ス

書キ方ニ用フル漢字ノ書体ハ楷書行書ノ一種若ハ二種トス
国語ヲ授クル際ニハ常ニ其ノ意義ヲ明瞭ニシ且既修ノ文字ヲ以テ通
常ノ人名、地名等ニ応用セシメ単語、短句、短文ヲ書取ラシメ若ハ
改作セシメテ仮名及語句ノ用法ニ習熟セシメンコトヲ務ムヘシ他ノ
教科目ヲ授クル際ニ於テモ常ニ言語ノ練習ニ注意シ又文字ヲ書カシ
ムルトキハ其ノ字形及字行ヲ正シクセシメンコトヲ要ス

と記されている。

このように国定読本の文章は「平易ニシテ国語ノ模範」となり、その
材料は「修身、歴史、地理、理科其ノ他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味
ニ富ムモノ」と規定された。また、第十七条では尋常小学校各学年の

国 語	教 科 目	学 年	毎 週 授 課 時 数
一 〇	第一学年	第一学年	毎週 二時間
		第二学年	毎週 二時間
	第二学年	第三学年	毎週 二時間
		第四学年	毎週 二時間
	第三学年	第五学年	毎週 二時間
		第六学年	毎週 二時間

「教授ノ程度及毎週教授時数」を定め、第四号表に小学校五年六年の分
を加え、左表のように記している。

次に仮名遣い改定の問題は、明治三十三年制定の小学校令施行規則の
第二号表に原因がある。それまでの教科書は歴史的仮名遣いを用いてい
たが、生徒の習得に困難であるとして、字音については発音にもとづく
いわゆる棒引き仮名遣いを第二号表に採用した。これが第一期国定読本
に使用された結果、生徒は歴史的仮名遣いを用いている国語の仮名遣い
との間に混乱を生じた。そこで、字音仮名遣いと国語仮名遣いとの統一
をはかり、国語教育の困難を除くため、文部省は、明治三十八年から高
等教育会議、国語調査委員会へ諮問し、答申案が作成された。しかし、
その内容については文部省内に反対があり、そのままになっていた。明
治四十一年五月には国定教科書修正の事業のため臨時仮名遣調査委員会
が設けられた。審議の結果、同年九月七日の文部省訓令第十号でそれま
での小学校令施行規則の第一号表から第三号表までが削除され、棒引き
仮名遣いが廃止されることになった。その趣旨について文部大臣小松原
英太郎は訓令で次のように述べている。

又字音仮名遣ハ当初改正ノ際ハ児童ヲシテ国語學習上ニ於ケル困難
ヲ避ケシメントスル趣旨ニ出テタルモノナレトモ實施ノ結果ニ鑑ミ
予期ノ目的ニ副フコト能ハサルヲ認メタルヲ以テ今回国定教科用図
書改正ノ時期に迫レルヲ機トシ之ヲ廃止セリ惟フニ仮名遣ハ時勢ノ

進歩ニ伴ヒ整理ヲ要スヘキコト勿論ナリト雖尚益々慎重ナル研究ヲ積ミ以テ其ノ目的ヲ達センコトヲ期ス

省令改正ノ結果字音仮名遣ハ小学校ニ於テモ他ノ学校ニ於ケルカ如ク古來慣用ノ例ニ依ルヘク教科用圖書亦之ニ依リテ編纂セラルヘシ
(後略)

こうして仮名遣いの問題が解決し第二期国定読本編集への条件がとつた。その事情は保科孝一著『ある国語学者の回想』にくわしい。

明治四十一年九月五日勅令第二百八号により教科用圖書調査委員会の官制が發布され、その第三部において国語読本の編纂が開始された。

この委員会は文部大臣の監督に属し小学校の修身、歴史、国語の教科用圖書を調査審議し、またその他の教科用圖書の調査を行う機関であつた。会長、副会長ほか委員三十四名によつて總會と部會が構成された。

總會は「編纂ニ関スル大体ノ主義方針、部ノ主査ヲ經タル圖書ノ確定」、部會は委員中から選任された主査委員が、第一部「修身」、第二部「歴史」、第三部「国語」を分担し、各部における「編纂ニ関スル要旨、起草員ノ起草シタル圖書ノ審査」を任務とした。

会長 加藤弘之

副会長 菊地大麓

委員 松平正直、古沢滋、小笠原長生、岡田良平、吉川重吉、大島健一、柴四朗、高田早苗、江原素六、井上通泰

委員 (主査委員)

第一部「修身」山川健次郎 (部長)、一木喜徳郎、穂積八束、森

林太郎、中島力造、渡部董之介、三宅米吉、森岡常蔵、吉田熊次

第二部「歴史」辻新次 (部長)、三上参次、萩野由之、田中義成、

牧瀬五一郎、槇山栄次、喜田貞吉

第三部「国語」井上哲次郎 (部長)、芳賀矢一、松村茂助、市村

瓊次郎、和田萬吉、下田次郎、乙竹岩造、三土忠造

〔官報〕明治四十一年九月二十八日、二十九日号)

各部四名以内の委員が起草を担当し、若干の起草委員補助がおかれた。第三部の「国語」は起草委員に芳賀矢一、乙竹岩造、三土忠造、起草委員補助に高野辰之が任命された。

(三) 第二期国定読本について

(三・一) 『尋常小学読本』の位置

第二期国定読本の『尋常小学読本』という名称は、明治二十年五月文部省編輯局蔵版のものを受けた第一期国定読本の名称を、さらに受けたものである。これはその巻一の冒頭によつて、今日俗にハタタコ読本と呼ばれる。

この読本の使用にあつて文部省は編纂趣意書を公にしているが、そこには第一期において示された国語の統一という基本的な目標が貫かれている。しかし具体的な方法には、模範語から標準語へ、言語の練習から自然的口語へと、編集の方針を發展させた。

第一期の編纂趣意書には、

文章ハ口語ヲ多クシ、用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取り、カクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ、其統一ヲ図ルヲ務ムルト

共ニ、出来得ル丈兒童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取りテ、談話及綴り方ノ応用ニ適セシメタリ。

と記されており、「東京ノ中流社会ニ行ハルルモノ」が標準とされた。そして標準語という用語はなかった。

第二期の編纂趣意書では、

口語ハ略東京語ヲ以テ標準語トセリ。但シ東京語ノ訛音・卑語ト認ムルモノハ固ヨリ之ヲ採ラズ。例ヘバヒラツタイトイハズシテヒラタイトイヒ、イイ天氣ヲ採ラズシテヨイ天氣ヲ採レルガ如シ。国語

読本ハ一方ニ於テ国語統一ノ実効ヲ挙ゲントスルモノナレバ、教授者ハ成ルベク読本ノ言語ニ熟シテ、訛音及ビ方言ヲ匡正スルノ覚悟ナカルベカラズ。

打消ノ助動詞「ナイ」ハ東部地方ニ行ハレ、「ン」ハ関西地方ニ行ハル。旧読本ハ主トシテ「ン」ヲ採リシガ、新読本ハ東京語ヲ標準トシテ、最初ハ多ク「ナイ」ヲ用ヒ、後「ン」ヲ加ヘタル処アリ。打消ノ過去ニハ多クナカツタヲ用ヒタルモ亦同ジ。(第三章)

と述べている。「東京語ヲ標準語」とし「訛音・卑語ト認ムルモノハ固ヨリ之ヲ採ラズ」という態度をとった。打消の助動詞「ナイ」についても東京語を標準とした。そして東京語の認識と編集の態度を対照している。すなわち、

旧読本ハ児童学習ノ便ヲ図リテ、言語ノ形式ヲ論理的ニ文法的ニ解剖シ、単純ナル形式ニ練熟セシメテ、次第二複雑ナル文ノ構造ニ入ラントセリ。故ニ長ク連続セル文ハ殊更ニ之ヲ分解シ、接続詞ヲ加ヘテ二文トシ、副詞的語句ノ遠ク隔タリタルモノハ、最後に述語ノ部ヲ二回繰リカヘス等、文学的趣味ノ低減ヲ犠牲トシテ専ラ言語ノ練習ニ力ヲ用ヒタルハ、旧読本編纂趣旨書ニ明言セルトコロナリ。然レドモ学齡児童ノ談話ハ必ズシモ嬰兒ノ片言ニアラズ、随分複雑ナル口語ヲ話シ得、綴リ得ルコト、実例ニ徴シテ明白ナレバ、寧ロ自然的言語ノ形体ヲ採ルノ優レルニ如カザルヲ信ジ、今回ハ大体ニ於テ簡單ヨリ複雑ニ進ムヲ方針トシテ、出来得ルカギリハ自然的口語ニ近カラシムルヲ期セリ。(第三章)

さらに、その口語は「未ダ確乎タル標準ヲ得ズ」として次のように記している。

然レドモ我が口語ハ未ダ確乎タル標準ヲ得ズ、社会ノ階級尊卑等ニ於テ、又ハ児童ノ男女間ニ於テモ特殊ノ言語アルヲ以テ、学校用読本トシテハ純然タル自然的言語ヲ写スコト能ハザル憾慚シトセズ。

教授者ハ読本以外ニ於テ務メテ児童ノ言語ヲ練習セシムル工夫ヲ積マンコトヲ要ス。

第二期国定読本編纂の主眼は、「大国民ノ品格ヲ造成スル」ことであつた。

其ノ他海国思想ヲ養成シ、田園趣味ヲ涵養シ、又立憲自治ノ思想ヲ確固ニシテ、大国民ノ品格ヲ造成スルガ如キ材料ハ務メテ之ヲ採択シ、之ヲ一貫スルニ忠君愛國ノ精神ヲ以テシ、快濶・勤勉・忠誠能ク其ノ職務ニ尽スベキ国民ノ堅実ナル氣風ヲ養成セントスルハ、本書編纂ノ主眼トスル所ナリ。

そこで材料が吟味され、日本特殊の材料、国民的童話・伝説・謎・俚諺・金言等、高学年用には抽象的訓誡が加えられた。卷十一第十七課「時間」はその代表的なものであらう。

人生七十年と見るも六十万時間に過ぎず。其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の為に費す時間は三分の二を占め、實際修学及び業務に用ふる時間は僅かに二十万時間を越えざるべし。身を立て、父母をあらはすも、産を破り、祖先をはづかしむるも、功業を成し、公益を広むるも、将又無為にして一生を終ふるも、唯此の二十万時間を利用するとせざるとにあり。

百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。二三十歳の短命にして美名を万世にとどむる者あり。人生の長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て量るべからず。之を思へば一寸の光陰も軽んずべからず。

このような第一期と第二期の異なる点は編纂趣意書の次のことばに要約されよう。

漢字数ノ増加、字音仮名遣ノ復旧、義務教育年限延長ノ結果ヨリ生ゼル材料排列ノ変更等ハ新読本ノ旧読本ト異ナル主点ニシテ、特殊国民的材料ノ加入、文学的趣味ノ添加等ハ編纂者が従来ノ読本ノ欠

点ヲ補ハントシタル努力ヲ示スモノナリ。(第一章)

この第二期国定読本『尋常小学読本』はその担当者によって芳賀読本とも呼ばれた。第四期国定読本の中心的編集者であった井上赳氏は、本書を国民文学読本、国民思想読本と評した。

芳賀読本は文学読本だという世評が、当時すでにありました。それは吉岡読本の言語主義に對し、当然いわれるべき批評でありそして当時好評を得るゆえんでもありました。しかし、単に文学読本と云つて妥当であるかどうか。吉岡読本に比べてたしかに興味感情も豊かであり、文章の表現における芳賀先生のご苦心もいろいろ伝え聞いていますが、芳賀先生のねらわれたものは、もう一つ奥にあると私は思います。

芳賀読本を通観して感じられる特色は、単なる文学読本でなくいわば国民文学読本、もっと極言すれば国民思想読本といった趣きがあることであります。一つ一つの素材の選び方なり、表現なりが、国民の思想精神を啓培することをもって目標とされている。これは吉岡読本と比較して、特に注意される点であります。

まず、数多くの日本童話、伝説、神話、史的人物、特に皇室を中心とする忠臣、孝子、英雄、賢女、才女、文化的偉人等が読本教材の根幹となっています。しかし、一面から見るとこれらは、あえて芳賀先生をまつて始めて教科書に選出されたものではありません。(中略) 国定第一回の吉岡読本でさえ、こうした教材を少なからず民間読本から受けついでいます。もちろん芳賀先生は、その時代の文章家をもつて任じられ、人も世も認めていたのですから、これらの素材をすべて新しく書きかえられ、また現代の国家的、社会的生活事象は新しく選り、新しく書かれたものが多い。博学で、らい落で、物に拘泥せず、多分にユーモアを蔵していられた先生としては、これらの正面切った教材の間を縫うように、いかにも先生ら

しいと思われるものが随所に見出され、それが国民思想読本としてこんな一体となっている観があります。(国定読本の編集)

また五十嵐力博士は『国定読本文章之研究』(二松堂・明治四十五年刊)の中で、

又此の十二冊の中には以前の読本の秀逸を其のまゝ取り入れたのもあり、その他にもよく整つて可なりに興味のあるのが無いではないが、概していふと、

一、妥當な語句が用ゐられて居らぬ。

一、文脈が整つて居らぬ、続き具合、離れ具合、転じ具合、照応の具合が立派に出来て居らぬ。

一、正面からの知識的臚列が多く、側面、背面、裏面、内面、より觀察した趣味本位の文章が少ない。

一、文章に命がない、品位がない、弾んで居らぬ、油がかゝつて居らぬ。

といふ難があります。知識的、形式的にいふと、いろ／＼な材料が広く集められて、御献立もなかくよく整つて居りますけれども、文章として見ては、落ちついた、熟した文とは云はれません、趣味生命のある文章とは云はれません。

と、批判した。

以上のほかに、第二期国定読本は物語教材が増加した反面、児童の生活をえがいた教材が少なくなっている。

(三・二) 『尋常小学読本』編集の考え方

第二期国定読本は第一期の「国語の統一」という根本方針を受けつぎ、さらに「大国民ノ品格ヲ造成スル」ことを主眼として、その実現のための教育上の配慮をはらった。第二期の「尋常小学読本編纂趣意書」によ

って、第一期と比較しながらその要点を紹介しよう。
形式については第六章に次のように述べている。

(1)第二期国定読本は冊数及び毎冊の行数字数などはすべて第一期の体裁をとり、「其ノ頁数ハ旧読本ニ比シテ約一割六七分ノ増加」を示している。それが著しいのは巻九・十・十一・十二であり、課数も増加している。第二期と第一期のページ数を比較した表は左の通りである。

なお、巻九・十・十一・十二が比較しているのは第一期の高等小学一、二年の分である。

巻	第二期	第一期
一	五五	五八
二	六六	六〇
三	七四	六〇
四	八三	七〇
五	八二	七四
六	八六	九〇
七	九二	八六
八	九五	九四
九	九六	七六
十	一〇四	七九
十一	一一八	八四
十二	一二一	八六
計	一〇七二	九一七

文字と符号については次の通りである。

(2)片仮名は巻一から提示し、範語法によってハタ・タコ・コトリ・タマゴなどのように二字もしくは三字を習得するようにした。これは第一期が模範語の語形を示さず、椅子・枝・雀・石を図示してイ・エ・ス・シの仮名を提示したのと異っている。

仮名の新字を提示する場合は、必ずしも名詞で行うことをせず、「形

容詞・動詞・助詞ニ於テセルコトアリ」というように、例えば「ヲ」は「テヲヒイテアゲマス」のように助詞として、「キ」は「トンボガトンデキマス」のように動詞として提示した。これは第一期が発音教授を起点として仮名の排列を考慮し「専ラ訛音矯正ノ便ヲ図リテ、イエ・スシ・ツツ・ヒシ等ヲ対照シテ」提示したのと異っている。

しかし、発音教育をおろそかにしたのではなく、「一語一語ノ発音ヲ最モ正確ニ教授スベキハ言ヲ待タズ。混淆シ易キ発音ニ就キテハ教授者ノ特ニ注意センコトヲ望ム。」と重要性を強調している。

(3)五十音図の仮名・その濁音・半濁音、ハ行転呼音、促音、長音(ケイ・ヘイやカア・ニイのごとき長音)を巻一に示し、拗音、拗長音は巻二に提示した。また濁音・半濁音の仮名は便宜清音の字の後に提示した。

促音及び拗音の書き方は、第一期が「トツテ」「シャシン」のように右脇に細書したのに対して、第二期は「トツテ」「シャシン」のように通常の音と同じく直書した。ただし、外国語は「此ノ限ニアラズ」であって細書した。

(4)平仮名は第二学年、すなわち巻三から提示し「摘出スル語ノ意義ヲ重ンジテ」、「さくら・うつくしい」「やま・はな・とり・のはら」などのように提示した。第一期が「へ・り・か・や」など字形・筆法が片仮名と近似した平仮名から提示したのと異っている。

なお、平仮名四十七字は巻三第一課から第六課までで全部提示した。

(5)変体仮名は第一期にはなく、第二期で提示したものである。これは「文部省令ノ結果トシテ新ニ加レルモノ」であって、その趣旨は「国民教育トシテ世上ノ慣用最モ弘キモノヲ知ラシメントスル」にあり、読み方に課し、綴り方には必要ないと指示している。この変体仮名について編纂趣意書には「普通ナルモノ二十五字」は巻十から巻十二までの韻文の中に提示したと記しているが、実際には次の二十六字である。

何(あ) 比(い) ね(え) た(お) ゐ(か) ゐ(き)
 六(こ) き(さ) あ(し) も(す) お(そ) と(た)
 七(た) ち(ち) て(て) や(と) か(な) ま(に)
 八(の) え(は) ぬ(ふ) と(よ) り(り) ゑ(れ)
 九(わ) せ(を)

(6) 漢字の提示については、第一期の第一学年が「一ヨリ十マデノ数字ヲ教フルノミ」であったのに対して、第二期では第一学年後期用の巻二に、「日月大小山川等ノ簡易ナル文字二十余字」を提示した。特に下級学年の二年・三年・四年に注意をほらい、同一課もしくは接近した課で工夫をこらした。すなわち、①なるべく字形の類似したものを接近して排列する(手牛・男思・鳥島・持待・類願など)。②觀念の類似したものを接近して排列する(東西南北・左右・前後・明暗・遠近・多少・表裏・問答・内外・晴曇・寒暖など)。③結構の基本となる文字をなるべく前におく(毎海・糸細紙・申神・里野鯉・車輕・黃廣・穴空・貝買賣など)。なお、平仮名を提示する時期には新漢字を提示していない。

漢字の字数は、第一期は尋常四学年間に五百字、高等一・二学年を合わせて八百五十字であったが、第二期は十二巻を通じて一千三百六十字となった。趣意書の付録「新出漢字表」「読替漢字表」によると各巻の新出の漢字、読み替え字数は下表の通りである。

第一期は八百五十字のほかに傍訓を施した漢字が多かったが、第二期は「読本中二現レタル漢字ハ必ズ新漢字トシテ教授スベキ方針」をとり、人名・地名の固有名詞を除き、一切振り仮名を用いず、必ず新字として提示した。しかし巻九からはこの方針をゆるめている。

新字は欄外に摘出し、読み替えの字は傍線を施して示し、熟語として二字以上連続し離すことのできないものは、その連続に傍線を施した(上手・弟子・大人・何時・何所など)。

一度使用した漢字は、なるべく重ねて練習できるようにした。例えば、

巻六の巻尾に「終」の漢字があるのは、同巻中に「終」の字を学んだからである。

漢字選択の標準は「応用ノ最モ広キモノヲ採ル」ことにおき、第一期においては人名・地名・代名詞・副詞・接統詞・助動詞に用いられる漢字を避けたが、第二期は、例えば、人名の「鈴木」「佐藤」の「鈴」「佐」、代名詞の「其・此・之・是」の類、接統詞・副詞の「又・亦・未・遂・五」の類は、応用の最も広いものとみなし教授することとした。

漢字の字体については、第一期では文字の簡易なるを主として「糸・虫・蚕」を用い「絲・蟲・蠶」は用いなかったのであるが、第二期は「社会ノ用例ニ準拠」して「糸絲・虫蟲・蠶」を使用した。

(7)「分別書方」すなわち分ち書きは、巻四の終わりまで用い、第一期と同じである。その分別法は明治三十九年文部大臣官房図書課で編成し同年十二月国語調査委員会の議決を経た「分別書キ方案」による。その結果、第一期で「カラス ガ ナイテキマス」となっていたものを

計	新 字	読み替え
一	一〇	〇
二	二四	二
三	五一	九
四	六八	一五
五	一二二	三一
六	一四六	五四
七	一七四	八九
八	一七七	一一七
九	一五七	一六八
十	一五六	一八〇
十一	一四一	一七〇
十二	一三四	一四九
計	一三六〇	九八四

「カラス ガ ナイテ キマス」のように「テ」を上動詞につけ「キマス」を独立させた。また、人名の下「サン」は、「タケヲサン」のようになっていたものを「タケヲ サン」と分ち書きした。

(8)送り仮名は、明治四十年国語調査委員会編纂の「送仮名法」に準拠した。ただし、二つの動詞の複合する場合、上の動詞が二音のときはその送り仮名を省いた。これは同法の附則によっている。また、「盡クス」「分カツ」など三音の語で、同法によると二音を送るべきものは、便宜第一期と同じく語尾のみを送った。

(9)句読法については、明治三十九年文部大臣官房図書課が編成し、同年十月国語調査委員会の議決を経た「句読法案」に準拠した。第一期に比べると「、」が減じた。これは第一期の場合、代名詞・副詞・接続詞などは、ほとんど各語の下に「、」を施したのを止めたためである。第二期は新たに、同一種類の語を並列した中間に「・」を用いた。

分ち書きで一語の二行にわたるものは、前行の終りに「」を用い、改行すべき箇所で行前に余地のないものは「」を用い、挿入文に「」を付し、挿入文中に他の挿入文のある場合は『』を用いた。これらは第一期と同じである。

(10)外国の地名で仮名書きしたものは右側に双線＝を施し、また、仮名書きした外国人名には単線―を施した。

(11)字音仮名遣いは、第一期が発音にもとづく表記法であったが、第二期は歴史的仮名遣いによった。(三・一)で詳述した通りである。文章については次の通りである。

(12)口語は巻一から提示し、韻文・独思・独語・引用文を除いて、巻五第十六課まですべて敬体(編纂趣意書には崇敬体とある)を用いた。巻五第十七課ではじめて常体の口語を用い、文語に移る階梯とした。巻九以上の口語は記述体を用いた。

(13)敬体には「アリマス」「ゴザイマス」「デス」を用い、常体の記述体

には「ノデアル」の体を採用した。

(14)口語はほぼ「東京語ヲ以テ標準語」とし、「自然的口語ニ近カラムル」ことを期した。(三・一)で述べた通りである。打消の助動詞は主に「ナイ」を用い「ン」を加えた。過去に「ナカツタ」を用いたのも同じ趣旨による。

(15)文語は、第三学年後期用巻六の初めから提出し、第四学年以後文語を多くした。左表の通りである。

卷	文体	
	口語	文語
六	一八	七
七	一三	一三
八	一二	一四
九	六	二一
十	六	二一
十一	五	二三
十二	三	二五

(16)行文は趣味を多くすることにつとめ、擬人法、問答体を用い、無味に流れることを防いだ。

(17)書簡文は、巻五第二十一課「はがき」の口語文から提示し、候文は、第五学年前期用巻九から提示した。書簡文の送り仮名は、巻九・十の第五学年用は「申上候」「願上候」「相成候」「存候」「仕候」の五種に限り送り仮名を省き、他は「致し候」「致し居り候」「驚き入り候」のように送り、巻十一からはすべて「致候」「致居候」「驚入候」とし、書簡文の特例を示した。

(18)韻文は、巻一に一、巻二に二、巻三以上に各三を収めた。第一期から採るもの三、修正稿本から採るもの六、懸賞によりて採るもの八、人に囑して作らしめたもの二、その他十二篇は起草者の作である。格調は七五調(一九)、七七調(三)、五七調(二)、五五調(一)、八七調

(一)、八八調(二)、雑体(五)と記されている。
教材については趣意書の第四章に詳しい。

(9)材料の選択については義務教育に最も有効な「実用・趣味・両方面より見テ」価値あるものを選択した。特色の第一は「国民独有ノ材料ヲ選択」したこと。例えば、巻一の「キクノゴモン・キリノゴモン」、巻四の「ワラ・のし・鯉節・雛祭」、巻五の「梅干」、巻七の「家の紋・日本紙」。

第二は国民的童話・伝説を採用したこと。例えば「桃太郎・猿蟹合戦・牛若弁慶・瘤取・餅ノ的・天神様・花咲爺・野見宿禰・義家・浦島太郎・仁田四郎・因幡ノ白兔・那須与一・小子部螺贏・鴨越の坂落し・天岩戸・釜盗人」など。

第三は謎・俚諺・金言を随所に挿入したこと。例えば巻六に俚諺の課を置く。

第四は抽象的訓誡を上級学年用に加えたこと。例えば、巻九の「養生」、巻十一の「笑」「時間」、巻十二の「苦楽」「主婦の務」。

第五は「大国民ノ品格ヲ造成」する材料として「海国思想ヲ養成シ、田園趣味ヲ涵養シ、又立憲自治ノ思想ヲ確固」にする材料を採用し、忠君愛国の精神を以て一貫した。

歴史材料と地理材料は、巻九以上においたが、これは、「従来ハ義務教育中、別ニ歴史・地理等単独ノ教科ナカリシガ、今ヤ尋常第五学年以後ニ於テ、歴史・地理・理科等ノ授業ヲ受クルコト」となったことによる。

(20)挿絵は、「児童ニ適確ナル印象ヲ与フルヲ主眼」として、人物・家屋・衣服は、なるべく「多数国民ノ階級ヲ標準」とし、貴族的にならないようにした。

季節は、日本中央部を標準とした。

以上は「尋常小学読本編纂趣意書」に述べるところである。第一期の

「言語ノ練習」から「自然的口語」「大国民ノ品格ノ造成」へと重点が移っている。

なお、用語の特色の一端をここに述べておく。

第二期の用語の特色は、やはり第一期で樹立された一人称・二人称の代名詞、あるいは「おとうさん」「おかあさん」などの親族名称の体系を發展させた点に認められる。一人称の場合、「わたくし」「ぼく」であったものに、「わたし」「おれ」「われわれ」などが加わり文学的趣味が添えられた。親族名称においても、「おかあさん」には山の手ことばの「おかあさま」、下町ことばの「おっかさん」が加えられ、自然的口語を反映させている。

第一期の用語と比較すると、同義語でありながら変わっているものがある。例えば、

〔第一期〕

ウミバタ (海端)

ゼニ (銭)

ともす (点)

タツトブ (尊)

よほど (余程)

リョーカハ (両側)

などがある。

表記の面からみると、例えば

〔第一期〕

オホガキ

大坂

きかんしゃ

春、夏、秋、冬

〔第二期〕

大阪

春・夏・秋・冬

キクワン車

のように、漢字の字体に変更のあるもの、符号「、」と「・」の交替したもの、字音仮名遣いの反映するものなどがある。表記上第二期が目立

つのは、「アメリカ」「イギリス」「ロシア」など外国地名の「線」と、「スチブンソン」など外国人名の「線」である。これらは朱引と呼ばれ漢文訓読に使われてきたものの復活である。

付属語では、打消の助動詞に変更がみられ、第一期は「ン」が主で「ナイ」は従の関係にあったが、第二期は「ナイ」に統一され「ン」は「マセン」の形でのみ使われている。過去形については、「ナカツタ」で統一され「ナンド」は見られない。

第二期の中で「ゆれ」のあるものは、「大きいのは」「大きなのは」という場合の「い」と「な」である。「小サイノヲ」「小サナノモ」「アタタカイ日」「キイロナノ」など、体言あるいは体言相当の助詞に続くときにゆれがみられる。

今日と異なるものには、「世界最旧の」「席末」「故里」「空中飛行器」「高ユビ」「とや」などが目につく。助詞の用法にも、次の「に」のような例がみられる。

みんなと橋のたもとに出合つて、川について四五町行くと、(巻六・八ページ)

マサラ ト トモキチ ト オハナ ガ 三人デ ノハラ ニ。アソンデ キマス。(巻三・六ページ)

逆に、今日の用法の普及に力を発揮したと考えられるものに「電報を打つ」がある。第一期の「電報をかける」が「うつ」になり一般化したのも、この第二期国定読本に採用されたからであろう。

誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。(巻八・四五ページ)

(三・三) 書誌・諸本・底本

第二期国定読本の編集は、教科用図書調査委員会第三部が担当し、明治四十一年十月に着手して明治四十二年十一月初旬に完了した。起草にあたったのは次の四人であった。

起草委員……芳賀矢一・乙竹岩造・三土忠造
起草委員補助……高野辰之

起草にあたっては、明治三十七年四月以降使用した国定読本及び文部省内において起稿した修正原本を基礎とした。一卷の原稿が完成することとに第三部会の修正をへて、更に教科用図書調査委員会の総会に提出して可決された。

教科書の翻刻・販売については、明治三十六年に制定された「小学校教科用図書翻刻発行規則」が明治三十八年四月に改定されて、教科書の製版印刷・製本の工場や事務所所在地が東京市と大阪市に限定された。このとき、十名が翻刻発行を許可されている。明治四十二年には文部省が「小学校教科用図書翻刻ニ関スル規定」を告示し、個人が翻刻発行することを廃止し日本書籍、東京書籍、大阪書籍の三株式会社に限って許可した。発行の割合は四、四、二と定められ、販売はすべて国定教科書共同販売所を通すこととした。共同販売所は各府県に一以上の特約販売所を設けて、その下にいくつかの取次販売所をおき、各々その供給区域を定めた。

ところで、教科用図書調査委員会の総会が可決した第二期『尋常小学読本』には、第一期のと同様に文部省原本があるのかどうか、調査した範囲では未見である。翻刻本の奥付にも記載がない。したがって、第二期『尋常小学読本』(ハタタコ読本)の初版がいつ発行されたか決定できないが、われわれの調査の結果では最も早い時期のものは次の通りである。

- 巻一 明治四十二年九月十日翻刻発行 博文館
- 巻二 明治四十三年三月五日翻刻発行 東京書籍
- 巻三 明治四十二年八月七日翻刻発行 博文館
- 巻四 明治四十三年四月二十八日翻刻発行 日本書籍
- 巻五 明治四十二年十月五日翻刻発行 博文館

卷六 明治四十三年五月十五日翻刻発行 日本書籍
卷七 明治四十二年十月二十八日翻刻発行 博文館
卷八 明治四十三年六月十五日翻刻発行 日本書籍
卷九 明治四十二年十二月十日翻刻発行 博文館
卷十 明治四十三年六月二十八日翻刻発行 日本書籍
卷十一 明治四十三年一月二十一日翻刻発行 日本書籍
卷十二 明治四十三年七月二十一日翻刻発行 日本書籍
この第二期国定読本は何回かにわたって修正が加えられた。修正事項は次の文部省から刊行された「国定教科書使用上ノ注意」ほかの記事によって知ることができる。

「国定教科書使用上ノ注意」のうち、『尋常小学読本』の修正に関するものは次の五冊である。なお、その修正箇所には、すでに修正されたものと、これから修正する予定になっているものとが含まれている。

明治四十三年十二月調 明治四十四年二月十日発行 文部大臣官房
図書課

明治四十五年二月調 明治四十五年四月十八日発行 文部省図書局
大正元年十月調 大正元年十二月七日発行 文部省図書局
大正二年三月調 大正二年四月八日発行 文部省図書局
大正二年十二月調 大正三年一月三十日発行 文部省
このほかには、重複する部分もあるが、次のものがある。
小学読本小学書キ方手本(前期)修正事項 大正三年十一月 大正三年十二月十二日発行 文部省
小学読本小学書キ方手本(後期)修正事項 大正四年四月 大正四年六月十三日発行 文部省
尋常小学読本正誤表 芳賀矢一 『教育時論』第九五二号 明治四十四年九月二十五日
これらの資料によって知られる修正事項およそ二五〇項目(国定読

本用語総覧3」の付録参照)を、以下の機関・大学・個人が所蔵している翻刻本について調査した。

国立公文書館・国立教育研究所附属教育図書館・国立国語研究所・東書文庫・福岡県教育センター・藤沢市文書館・横須賀市教育研究所・愛知教育大学附属図書館・滋賀大学附属図書館教育学部分館・筑波大学学校教育部・奈良女子大学附属図書館・福岡教育大学附属図書館・飛田良文

これら約四百冊の所蔵本にみられる修正箇所の調査結果は別稿にゆずることとする。第二期国定読本は明治天皇の崩御を境として大改正されたが、全十二冊を通して、課の移動、また全文にわたる修正などで著しい変異のあるものは、次の五課である。この五課を基準として分類すると、第二期国定読本は次の六種に分けられる。

巻	種類	第一種					
		第二種	第三種	第四種	第五種	第六種	
三	十七	ほしとり	八月三十一日	ホシトリ	ほしとり		
四	三	十一月三日			十月三十一日		
八	二十四 二十五	橘中佐 (一)(二) (全文訂正)					
十一	八	我が海軍					
十二	二十八	卒業					
「国定教科書使用上ノ注意」発行年月		(明治43.4) 明治45.4	大正元.12	大正2.4	大正3.1	大正3.12	(大正7.3)
					国民の至情		

本書の底本には国立公文書館(内閣文庫)所蔵本を使用した。その翻刻印刷・翻刻発行・発行所は次の通りである。

巻一 明治四十三年一月二十一日翻刻印刷 二月十五日翻刻発行

卷二	日本書籍 明治四十三年二月十八日翻刻印刷 三月五日翻刻発行 日本書籍
卷三	明治四十三年一月二十一日翻刻印刷 二月二十八日翻刻発行 東京書籍
卷四	明治四十三年四月十五日翻刻印刷 四月二十八日翻刻発行 日本書籍
卷五	明治四十三年一月二十一日翻刻印刷 二月二十八日翻刻発行 東京書籍
卷六	明治四十三年五月一日翻刻印刷 五月十五日翻刻発行 日本書籍
卷七	明治四十二年十二月五日翻刻印刷 十二月二十一日翻刻発行 日本書籍
卷八	明治四十三年五月二十八日翻刻印刷 六月十五日翻刻発行 日本書籍
卷九	明治四十二年十二月二十一日翻刻印刷 明治四十三年一月十五日翻刻発行 日本書籍
卷十	明治四十三年六月二十一日翻刻印刷 六月二十八日翻刻発行 日本書籍
卷十一	明治四十三年一月十日翻刻印刷 二月五日翻刻発行 東京書籍
卷十二	明治四十三年七月十二日翻刻印刷 七月二十一日翻刻発行 日本書籍

この国立公文書館所蔵本は、右の通り、明治四十二、四十三年に翻刻発行されたことになっており、第二期国定読本の初期のものと考えられる。ただその内容は、巻によってすでに修正が加えられており、先の五課の分類によれば、第二種に属するものである。

なお、第二期国定読本には巻一から巻四の四冊について、秋季に始業する学級のための秋季始業読本があった。「編纂趣意書」の附記には「秋季ニ始業スル学級ノ為、本会ハ別ニ秋季始業読本一ヨリ四ニ至ル四巻ヲ編纂セリ。即チ尋常第一学年・第二学年用ニシテ、是等ノ下級学生ニ対シテハ、直観教授ノ上ヨリ、季節ニ応ジテ材料ノ排列ヲ変更スルノ必要最モ大ナレバナリ。」と記されている。編纂の方針趣旨は春季始業用のものと差異がなく、漢字も四冊を通じて同数を提示し、巻五へ接続している。解説の執筆にあたっては以下の文献を参考にした。

古田東朔『小学読本便覧』第六巻 昭和五十八年三月 武蔵野書院
海後宗臣『日本教科書大系』近代編四〇九 国語(一)〇六 昭和三十
八〇三十九年 講談社

唐沢富太郎『教科書の歴史』昭和三十一年一月 創文社

秋田喜三郎『初等教育国語教科書発達史』昭和五十二年十月 文化評論
出版

井上越著・古田東朔編『国定教科書編纂二十五年』昭和五十九年五
月 武蔵野書院

西原慶一『近代国語教育史』昭和四十年十一月 穂波出版社

文部省総務局調査課『調査資料第十一輯 国民学校並に幼稚園関係
法令の沿革』昭和十八年三月

文部省『学制百年史』昭和四十七年十月 帝国地方行政学会

『国語教育史資料』第五巻 教育課程史 昭和五十六年四月 東京
法令出版

『複製国定教科書（国民学校期）解説』昭和五十七年二月 ほるぷ
出版

凡 例

- (一) 内容 (二) 底本 (三) 用語採集の範囲 (四) 見出し語の立て方 (五) 見出し語の注記 (五・一) 見出し (五・二) 漢字 (五・三) 品詞 (五・四) 人名・地名などの注記 (五・五) 度数 (五・六) 表記 (五・七) 活用形 (六) 見出し語の排列 (七) 用例と所在 (七・一) 用例文 (七・二) 所在 (七・三) 層別

(一) 内 容

本書は、明治四十三年度から用いられた第二期国定読本『尋常小學讀本』(いわゆるハタタコ読本。全十二冊。)の全用語を五十音順に排列し、その全用例のうちアからテの部までを収めたものである。

(二) 底 本

国立公文書館内閣文庫所蔵のもの(函架番号三七五・四七)を底本として用いた。(解説参照)

(三) 用語採集の範囲

底本のうち、

- ① 目録
② 本文
③ 図版

の部分を用語採集の対象とした。ただし、③のうち、判読しがたい語は除いた。

表紙・扉・ページを示す数字・奥付などの部分は、用語採集の対象としない。

なお、本文の上部欄外に示された、仮名・漢字の新出と読み替えの表示は、トの部以下の用例を収めた『国定読本用語総覧3』の巻末に別にまとめて付録とする。

(四) 見出し語の立て方

自立語は原則として文節から助詞・助動詞を切り離したものを一単位とし、助詞・助動詞は、『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』(国立国語研究所報告3)を参考にして単位を決定した。ただし、

① 形容動詞は立てない。形容動詞の語幹にあたる部分を「形状詞」として一単位とし、語尾にあたる部分を助動詞とする。

② サ変動詞「する」、および「いたす・くださる・なさる・もうしあげる」など意味上ほぼサ変動詞「する」にあたるものが、体言または体言相当のものにじかに接続している場合は切り離さない。

③ 助詞・助動詞を構成要素に持つ副詞・接続詞等の処理は別に行う。

④ 動植物名や固有名詞(人名・地名・戦争名・課名・題名など)は全体で一単位とする。

⑤ 同語形であっても品詞の異なるもの、口語・文語などで活用の異なるものは別見出しとして扱った。ただし、「会う」のように口語五段活用と文語四段活用の終止形が同形で併存するものは、一つの見出しにまとめた。

なお、単位決定の詳細については、別に問題語一覧を作成する予定である。

複合語などの後部にあらわれる要素については、次のように切り出して見出しに立て、**ひ**で、主となる見出しを参照させて検索できるようにした。

あいて **ひ**いくさあいて・はなしあいて

また見出し語のうち、以下にあげるように、国定読本に用いられた語形が、現代語として一般的な語形と異なっていたり、漢字表記の語で、読みに二通りの可能性があったりして、検索に支障をきたすおそれのあるものや、相互に参照することが望ましいと思われるものは、* 印をつけた空見出しをもうけ、参照すべき項目を示した。

* いりよう **ひ**にゅうよう (入用)

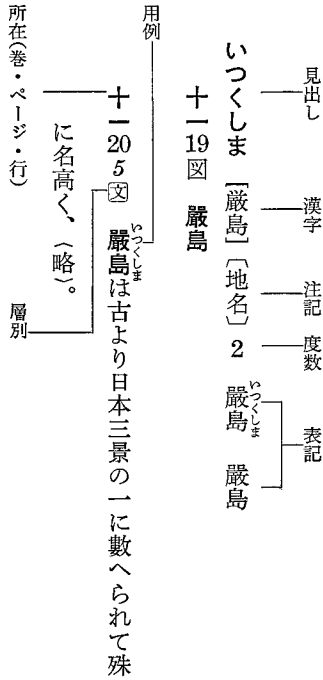
* かねだか **ひ**きんだか (金高)

* そぼ **ひ**おぼ (祖母)

(五) 見出し語の注記

各見出し語ごとに、次のような事項を記した。

例



品詞

活用形

いわ・う「祝」(四・五) 2 祝フ 祝ふ「フ」

五 18 6 鯉ガタキヲ上ルヤウニ、ズンズンシユツセヲセヨト

イフ心デ祝フノデセウ。

(五・一) 見出し

現代仮名遣いによって、和語・漢語は平仮名、外来語は片仮名で記した。

活用語は終止形を見出しとし、活用しない部分と活用する部分との間に・(中点)を入れた。

(五・二) 漢字

語の識別のため、必要に応じて、見出し語にあたる漢字を注記した。

(五・三) 品詞

品詞は次の通りとし、後に記すような略号を用いて示した。なお、助詞と動詞は、さらに細分類を行った。

名詞(名) 代名詞(代名) 形状詞(形状) 副詞(副)

連体詞(連体) 接続詞(接) 感動詞(感) 助詞

動詞 形容詞(形) 助動詞(助動)

助詞は次のように分類し、後に記すような略号を用いて示した。

格助詞(格助) 副助詞(副助) 係助詞(係助) 接続助詞

(接助) 並立助詞(並助) 準体助詞(準助) 終助詞(終

助) 間投助詞(間助)

また、動詞は活用の種類によって分かち、次のように示した。

四段(四) 五段(五) 上二段(上二) 上二段(上二)

下二段(下二) 下一段(下一) カ行変格(カ変) サ行変

格(サ変) ナ行変格(ナ変) ラ行変格(ラ変)

(五・四) 人名・地名などの注記

見出し語の意味・用法について、必要に応じて、「人名・地名・課名・話し手名」などの注記を加えた。

(五・五) 度数

見出し語ごとに、その使用度数(用例の数)を記した。

(五・六) 表記

その見出し語の全用例について、片仮名・平仮名・漢字や、振り仮名の有無などの表記の異なりを列挙した。二種類以上の表記がある場合は、次の順とした。

- ① 片仮名
- ② 平仮名
- ③ 変体仮名
- ④ 漢字(片仮名の振り仮名つき)
- ⑤ 漢字(平仮名の振り仮名つき)
- ⑥ 漢字(振り仮名なし)
- ⑦ アラビア数字
- ⑧ ローマ数字

(五・七) 活用形

活用のある見出し語の用例について、活用形の異なるものを列挙した。ただし、ここでいう活用形の異なりとは、未然形・連用形などの別ではなく、語形上の異なりをさす。

活用形を列挙する際、活用しない部分(見出しで、中点・より前の部分)

は「で」記し、活用する部分を、原文通りの仮名遣いで、片仮名によって示した。

また、二つ以上の活用形がある場合は、五十音順に並べた。

(六) 見出し語の排列

見出し語の排列は現代仮名遣いの五十音順とする。ただし、片仮名は平仮名に、濁音・半濁音は清音に、小字(アイウエオ つゃゅょ)は普通の仮名に、長音符号「ー」は直前の仮名の母音に、それぞれ置き換えたものとみなして、一字目から順次、五十音順に排列する。

同じ仮名の連なりとなった見出しは、次の各項を一字目から順に適用して排列する。

- ① 清音↓濁音↓半濁音
- ② 小文字↓大文字
- すなわち、拗音↓直音、促音↓直音
- ③ 普通の仮名↓長音符号

以上によっても排列の決まらないものは、次の各項を順に適用して排列する。

- ① 次の品詞順とする。
 名詞↓代名詞↓形状詞↓副詞↓連体詞↓接続詞↓感動詞↓助詞↓
 動詞↓形容詞↓助動詞
 a 名詞のなかでは次の順とする。
 課名↓話し手名↓人名↓地名↓それ以外の名詞
 b 助詞のなかでは次の順とする。
 格助詞↓副助詞↓係助詞↓接続助詞↓並立助詞↓準体助詞↓終助詞↓間投助詞
 c 動詞のなかでは次の活用順とする。

あ

ああ「嗚呼」(感) 15 アア ア、あ
 ああ
 二34 イマ日ガデマス。(略)ダ
 ンダンノボツテキマス。アア、モ
 ウスツカリノポリマシタ。
 二242 図「ドコダラウ、アア、アノ
 木ノ下ニタケヲサンガキマ
 ス。」
 四53 図 太郎(略)が見えませう。
 あれがうちです。」次郎「ああ、
 あれですか。
 四77 図 太郎(略)を入れると、
 六人でせう。」次郎「ああ、さうで
 す、さうです。」
 五48 図 「あ、あふなかつた。も
 し君が居なかつたら、僕は死んでし
 まつたのだらう。」
 五617 図 あきの夜長を鳴き通す、あ
 、おもしろい蟲のこゑ。
 五628 図 秋の夜長を鳴き通す、あ
 、おもしろい蟲のこゑ。
 六308 図 直吉は後でふと氣が附い
 て、「あ、大へんなことをした。
 今のお客にもう一錢上げなければな
 らなかつた。」といつて、(略)。
 六593 図 それから信玄が死んだと聞
 いた時、謙信は「ああ、をしい事を

した。(略)。」といつてなげいた。
 六636 図 めくらは杖を受取つて、
 「あ、ありがたうございます。うれ
 しいこと。」とれいいつて、(略)。
 七402 図 (略)、「あ、金がない程
 残念なことではない。(略)。」と、思
 はずひとり言をいひました。
 七434 図 (略)、「あ、よい馬、名
 馬々々。誰の馬か。」とたづねまし
 た。
 八421 図 (略)、角の呉服屋が焼けてあ
 るのださうだ。あ、火の勢が一そ
 う強くなつた。
 八901 図 「ア、残念。多数ノ部下ヲ
 死ナセタ上、セツカク占領シタ陣地
 ヲ取返サレテ残念千萬ダ。」
 十二875 図 喜剣(略)、義士復仇
 の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを
 知るに及びて、驚いて曰く、「あ、
 余死せん。(略)。我が心の良雄を
 默待せしは罪死に當れり。」と。
 あい 凸さんぎょうくみあい・のりあい
 ばしや・のりあいぶね・ばあい・まあい
 い・わりあい
 あい「愛」(名) 2 愛
 六828 図 二つとや、二人のおや御
 を大切に、思へや、ふかき父の愛、母
 の愛。
 六828 図 二つとや、二人のおや御
 を大切に、思へや、ふかき父の愛、母
 の愛。
 あい「藍」(名) 5 アキ 藍

八643 紺や淺黄ヤカスリハアキデ染
 メマス。
 八651 藍ハ何カラ取りマスカ。
 八652 藍ハ何カラ取りマスカ。藍ノ
 草カラデス。
 八652 藍ノ草ハ綿ノ木ト同ジ様ニ如
 ニ作リマス。
 八653 綿ハ實カラトリマスガ、藍ハ
 葉ト莖カラ取ルノデス。
 あいあた・る「相当」(四) 1 相當
 『一リ』
 十一627 図 拜啓來る十五日は亡父
 七回忌に相當り候に付、午後三時西
 方寺に於て法會相營度候間、(略)。
 あいあつま・る「相集」(四) 1 相集る
 『一リ』
 十二692 図 (略)レミングと稱する地
 鼠の一種なり。(略)、温暖なる地方
 に移らんと欲するもの期せずして相
 集り、次第に其の數を加ふ。
 あいいとな・む「相當」(四) 1 相當
 『一ミ』
 十一628 図 拜啓來る十五日は亡父
 七回忌に相當り候に付、午後三時西
 方寺に於て法會相營度候間、(略)。
 あいうえお(略)「五十音圖」 3 アイ
 ウエオ(略) あいうえお(略)
 一541 アイウエオ(略)「第三卷付
 録參照」
 二前付け1 アイウエオ(略)「第三
 卷付録參照」
 三204 あいうえお(略)「第三卷付

録參照」
 あいおう・じる「相應」(上一) 1 相應
 じる『一ジ』
 十一1115 秋の夜長には衣打つきぬた
 の音が村々相應じて聞える。
 あいおな・じ「相同」(形) 3 相同ジ
 『一ジ・一ジク』
 八742 図 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル
 爪アリ。用ナキ時之ヲカクスコト、
 虎モ猫モ相同ジ。
 十二513 図 内國ノ商業モ、海外ノ貿
 易モ、有無相通ズルノ理法ニ基ツケ
 ルハ相同ジク、需要供給ノ原則ニヨ
 リテ物價ノ高下スルモ亦相同ジ。
 十二514 図 内國ノ商業モ、海外ノ貿
 易モ、有無相通ズルノ理法ニ基ツケ
 ルハ相同ジク、需要供給ノ原則ニヨ
 リテ物價ノ高下スルモ亦相同ジ。
 あいかわらず「相変」(副) 1 相かは
 らず
 八344 何時も丈夫さうな老人であつ
 たが、(略)。(略) 若いむすこが、
 今では其の後をついで、朝から晩ま
 で相かはらず、「トンテンカン、トン
 テンカン。」と働いてゐる。
 あいきち 凸すずきあいきち・すずきあ
 いきちさま
 あいけい「愛敬」(名) 3 愛敬 凸ふあ
 いけい
 十一542 図 花客ニ接シテ愛敬ヲ盡ス
 ハ商人ノ美德ナレドモ、(略)。
 十二339 図 外温順愛敬の徳を守り

て、内確固たる志操を持し、(略)、
自若として其の常を失はざるは日本
女子の美德なり。

十二718 図 現在の職務に忠實なれ
ば、上下の愛敬・信用其の身に集り、
心廣く、體ゆたかなり。

あいこ「愛顧」(名) 1 愛顧

十二522 図 商人ニシテ(略)。(略)、
平素ノ愛顧ニナレテ、商品ノ品質ヲ
下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナ
リ。

あいことなり「相異」(ラ変) 1 相異
なり「一リ」

十二1089 図 上奏といひ、建議とい
ひ、請願といひ、其の手續に於て各
相異なりといへども、(略)。

あいさく「愛作」(人名) 5 愛作

九825 一人は熊吉、一人は愛作とい
つて、年は同じく十五歳。

九844 (略)、もはや熊吉と愛作の二
人だけの競走となつた。

九8410 愛作は驚いて、ひらりと馬か
ら飛下りて、(略)。

九859 愛作方の人々は愛作の肩をた
ゝいて、(略)。

九876 此の話が傳はつて愛作は五箇
村はおるか、近所近べんのほめ者と
なつた。

あいさくがた「愛作方」(名) 1 愛作
方

九859 愛作方の人々は愛作の肩をた
ゝいて、(略)。

あいさくさん「愛作」(人名) 2 愛作
さん

九8610 図 愛作さんのりつばな心がけ
で、熊吉の命が助かりました。

九871 図 愛作さんは實に見上げたも
のです。

あいさつ「挨拶」(名) 1 あいさつ

十356 図 あいさつをしてもいていね
い、少しも生意氣な風がなく、(略)。
あいさつする「挨拶」(サ変) 2 アイ
サツスル あいさつする「一シ」

二297 アソコデモ、ココデモ、「シ
ンネンオメデタウ。」「シンネンオ
メデタウ。」トアイサツシテキマ
ス。

六768 羽織・はかまの主人は一同に
向つて、うれしさうに、「どうも御
苦勞、御苦勞。」とあいさつしまし
た。

あいじよう「愛情」(名) 1 愛情

十一5810 「兵士は皆我が子も同様で
ある。我が子の死ぬのを見て父が命
を惜しむ理由はない。(略)。將軍の
愛情と勇氣によつて、軍中の花が助
かつたので、全軍一同に歡喜の聲を
あげた、(略)。

あいしる「相知」(四) 2 相知る 相
識る「一ラ一リ」

九799 図 筑紫へ下る道に、昔より相
知りし驛長ありて、道眞の今の身の
上を深く悲しみにしに、(略)。

十二866 図 薩摩の士に喜剣といふ人

あり、未だ良雄と相識らざりしが、
一日良雄に面會し、反復直言して復
仇の事を勧む。

あいす「愛」(サ変) 2 愛す「一ス
ル」

十408 図 圖 我に愛する良馬あり。
十一1131 図 校長も着實温厚なる人に
して、生徒を愛すること子の如く、
生徒も亦校長をしたふこと父母の如
し。

あいず「合図」(名) 8 アヒツ あひ
づ 合圖

六137 又トブ時ニハガアノト鳴合
フ。ソレハアヒツデアル。

六141 モシ列ニハナレルヤウナコト
ガアツテモ、ソノアヒツヲ聞クト、
スグ列ニ加ルノデアル。

九832 神主は(略)、「支度。」とい
ふあひづの一番太鼓を打鳴らした。

九833 五人の騎手は神に勝利をいの
つて、第二のあひづを待ちかまへて
ゐる。

九838 二番太鼓の「並べ。」のあひづ
に、五人の騎手は打連れて、拜殿の
後の大きな立石の前に並んで、(略)。
十562 圖 兵營内の生活は規律正
しく、朝の起床より夜の消燈まで、
一々喇叭の合圖により、(略)。

十一588 手早く帶をほどいて、ピ
エールの體にくゝりつけて合圖をす
ると、兵士等は力を合せて二人を引
上げた。

十二605 図 されど十字街頭に立てる
巡查の一擧手の合圖に、通行の人は
行くも止るも唯其の命に従ひて、少
しも混雜を生ずることなし。

あいすむ「相済」(四) 1 相済む「一
マ」

十二9010 図 若し家内に傳染病等にか
ゝるものあらば、近處・隣へ對して
も申しわけなく、世間へ對しても相
済まぬ次第ならずや。

あいせつ「相接」(サ変) 2 相接す
「一ス一セ」

十一175 図 本土の西、近く九州と相
接せんとする所、下關海峡あり。

十二634 図 壯麗なる馬車・自動車の
多きは巴里を第一とし、(略)、殊に
公園・廣小路の如きは、十數臺列を
なして前後相接す。

あいだ「間」(名) 55 アヒダ 間

三107 ネエサンハコノアヒダト
ナリムラヘオヨメニイキマシタ。

三667 図 「ウラシマサン、コノア
ヒダハアリガタウゴザイマシタ。

四214 図 (略)、中ユビト小ユビ
ノアヒダノガクスリユビデ
ス。」

四385 図 「コノアヒダ大キナフカ
ガ來タ時ニ、君ラハズキブ
ンアワテマシタネ。

五95 一思ひにとび下りると、何だ
か目がまはつて、しばらくの間は何
も知らずにゐました。

五115 それから田や畠の間を通過して来るうちに、(略)。

五474 園 この間先生がおつしやつたではないか。」

五556 シカタナシニ、ヒルノ間ハ木ノウロヤ穴ノ中ニカクレテキテ、夜ニナルト(略)。

五745 東生田の門から西一の谷の門までの間、(略)、人や馬でふさがつてゐる。

六91 (略)、森の間からはお社の赤い鳥居が見えます。

六154 かつた稲が雨にぬれると、米がわるくなるから、天氣のよい間に取入れなければなりません。

六497 秀吉が信長に言ひつかつて、敵を攻めに行つてゐた間の事でしたが、(略)。

六558 謙信はそれを知つて、こちらから先がけをしようと、夜の間に信玄の陣に攻入つた。

六698 私がこゝへまゐつたのは、(略)、今年で三十年になります。その間に色々な子どもを見ました。

六738 私は(略)、三十年の間にどうしてもきらひな子供が七八人ございました。

六775 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガアル。

七27 園 我ガ死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ残リテアル間

ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七317 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、(略)。

七317 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。

七707 岩ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。

七778 波ニユラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動く間ヲ、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、(略)。

八99 園 この間にいさんがかへつて來ましたので、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。

八111 園 一人の分はうっかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。

八257 園 朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」

九151 園 是ヨリ南流シテ吾妻川ヲ合セ、赤城・榛名ノ二山ノ間ヲ流れ、前橋市ノ西ヲ過グ。

九248 園 (略)、男子は十七歳より四十歳までの間、何れも兵役に服する義務あり。

九355 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、凡そ百二十四里、其の間に五十三次といつて、重要な宿場が五十三あつた。

九421 園 是等ノ山ト元ノ噴火口ノマハリノ山トノ間ニ水ノタマリタルモノハ蘆湖ニシテ、(略)。

九424 園 マシテ幾萬年ノ久シキ間、此ノ大ナル湖水ヨリ流れ落ちタル水ノ力ハハカリ知ルベカラズ。

九492 園 かゝる間に、又向ふより一組の隊商到着せしが、(略)。

九551 園 (略)、イカハ水中ニオヨグ間ハ水色ナレドモ、岩石ナドニ附着スル時ハ岩石ト同ジ色ニ見ユ。

九649 園 空氣は(略)、握りこぶしの間にも、凡そ少しにてもすき間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。

九872 園 どうか今日から一年の間、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。」

十188 讀んでゐる間には書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、(略)。

十281 宮の森のこんもりと茂つた間から、古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、(略)。

十551 園 畠山は(略)、ひそかに我を此の齋藤別當のもとに預け、別當は七日の間手もとに置いて、木會へつかはしたり。

十705 園 (略)、岩と波との間にボートをあやつり居たる少女の働は、人間業とは見えす。

十7510 園 兩肺ノ間ニ心臓アリ。

十818 園 あいぬは時々子熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。

十958 園 (略)、老樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗キ間ヲ行ケバ、官幣大社春日神社ニ到ル。

十1029 園 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、(略)。

十175 園 氣候の暖まる間絶えず之を産出するを以て、一群の数は次第に増加す。

十14110 園 (略)、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。」

十14910 數千年の久しい間、土人の絶えてたゆまない丹誠の結果である。

十1696 園 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

十1722 園 「君は畫家として一家を成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。

十1846 園 其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、(略)。

十1977 園 又豊原より眞岡に至る間も近時道路新に開け、(略)。

十1981 園 帝國領の中部クスナナイとマヌイとの間は最も狭く、且山脈低くして、(略)。

十11094 チョンガーの間は人に侮

られるから、成るべく早く冠禮を行ふ。

十二23 是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

十二61 4 (略)、人道と車道との間なる左右二列の緑樹は枝を交へて、雅麗比なし。

十二99 10 (略) 若し公衆の間に、規則を守り、規律を重んずる心乏しき時は(略)。

十二114 5 (略) 此の風一度軍人の間に起りては、士氣も兵氣も衰ふべければ、(略)。

十二115 9 (略) 禮儀も亦軍に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

あいだ「間」(援助) 10 間

九12 8 (略) 此の地方には賣行よろしかるべしと存ぜられ候間、なほ三十反御送り下され度、(略)。

九43 10 (略) 又御宮裏の田も、本年は水も十分に御座候間、少しも御案じ下さるまじく候。

九72 3 (略) 幸に私方は左程の損害も無く、家族一同無事に御座候間、御安心下され度候。

十26 10 (略) 私も明年は是非とも御仲間入致し度と今より相樂しみ居り候間、時々營内の様子御報知下されたく願上候。

十91 2 (略) 御村も當村と同じく水利

の良き割合には田地少く、整理の必要これあり候様存ぜられ候間、御差支これなく候はば、(略)、御來會相成候ては如何。

十一40 10 (略) 當總督府にて出版相成候臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候間、御覽下され度候。

十一62 3 (略) (略)、御心安き方々御招待致度と存候間、同日午後五時御光來下され候はば光榮の至に存候。

十一62 9 (略) (略)、午後三時西方寺に於て法會相營度候間、御多用中恐入候へども、御參列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

十一63 6 (略) (略)、來る六月三十日(土曜日)午後二時建碑式舉行致候間、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

十一63 8 (略) 追て準備の都合もこれ有り候間、御來會下され候はば、(略) 高野義太郎宛御一報下され度候。

あいたいりつす「相對立」(サ変) 1

相對立ス「一シ」

十一104 2 (略) 蜀國ノ魏・吳二強國ト相對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

あいだがら「間柄」(名) 1 間がら七20 4 (略) どういふわけで、おたがひに親類の間がらでございますか。」あいたすく「相助」(下二) 1 相助ク

「一ケ」

十一51 7 (略) 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、(略)。

あいたつす「相達」(サ変) 1 相達

十一61 10 (略) 拜啓、老父事本年満六十歳に相達候に付、(略)。

あいたのしみおり「相樂居」(ラ変) 1 相樂しみ居り「一リ」

十26 10 (略) (略)、私も明年は是非とも御仲間入致し度と今より相樂しみ居り候間、時々營内の様子御報知下されたく願上候。

あいだま「藍玉」(名) 2 藍玉

八65 7 藍ハ(略)。(略)。サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、ソレカラウスニ入レテツキカタメマス。ソレヲ藍玉トイヒマス。

八65 8 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。

あいつ「會津」(地名) 3 會津 會津

十二37 5 (略) 會津の城主蒲生忠郷死せり。

十二37 5 (略) 會津は奥羽重要の地にして、一日も守なかるべからず。

十二38 3 (略) 秀忠大いに感じて其の言に隨ひ、嘉明を擧げて會津に封ぜり。

あいつうす「相通」(サ変) 3 相通ス

相通す「一ジ・一ズル」

九87 10 (略) 賣買トイフコトナカリシ遠キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

十二50 3 (略) 千里比隣の今の世は有無互いに相通じ、世界各國皆市場。

十二51 2 (略) 内國ノ商業モ、海外ノ貿易モ、有無相通ズルノ理法ニ基ツケルハ相同ジク、(略)。

あいつぐ「相次」(四) 2 相つぐ相次ぐ「一イ・一ギ」

十二75 5 (略)、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈没し、其の他にも相

ついで沈没せるもの多し。

十二66 6 (略) 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、一隊又一隊、續々相次ぎ、三日三夜引きも

切らず、(略)。

あいつづく「相統」(四) 1 相ツマク

七8 1 (略) 「親子二代相ツマイテノ忠義カンズルニアマリアリ。

あいつらなる「相連」(四) 2 相連ル相連る「一リ」

十97 7 (略) コ・ヨリ眺ムレバ、東二春日・三笠・若草等ノ山々相連リ、(略)。

十二40 9 (略) 阿蘇山の舊噴火口は(略)、此の間に根子岳・高岳・中

岳・島嶺子岳・杵島岳の五岳東より西に相連りて突起す。

あいて「相手」(名) 7 アヒテ 相手

ひいくさあいて・はなしあいて

三十四図 「日本中ニハヨワイモノ

バカリデ、ジブンノアヒテニナルモノハ一人モナイ。」

五五五 又鳥ノ方ヘ行キマスト、「オ前ハケモノガラウ。」トイツテ、アヒテニシテクレマセン。

六五五 川中島の戦で名高い上杉謙信は強い大将であつた。その相手は武田信玄で、(略)。

八三七 「トンテンカン、トンテンカン。」と、毎朝早くから弟子を相手に

につちを打つ音が聞える。

九八六 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかけさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつ

ばな行だ。

九八六 相手の熊吉があので、今日の勝負はきまらないが、(略)。

十二五八 東西ノ交通盛ニシテ千里比隣ノ如キ今日ニ於テハ商業ハ世界ヲ相手ノ商業トナレリ。

あいどくす「愛読」(サ変) 1 愛読す

『一セ』

十五六 二人共に和漢の學に通じ、其の作れる文は古文の手本として、今なほひろく愛讀せらる。

あいならぶ「相並」(四) 5 相並ぶ

『ピーン』

十二七〇 二瀑相並んで雄を争ひ、其のひびき萬雷のとどろくが如く、(略)。

十二八二 數隻の漁舟相並び、波にくどくるかぶり火の下に、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、(略)。

十二八二 村役場と學校とは相並びて村の中央に在り。

十二八六 安東縣は(略)、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十二六一 兩側には白色の高屋相並び、(略)。

あいなりおり「相成居」(ラ変) 1 相成居

十二九七 日・露の境は(略)、四箇所に境界石を置きて、分明に相成居候。

あいなる「相成」(四) 9 相成る 相成

『一リール』ひおんおくりあいなる・ごらいかいあいなる・しゅつばん

あいなる 九三七 然るところ翌朝三時頃急に水音はげしく相成り、犬のなき聲もたゞならずと思ふ間もなく、(略)。

十五五 拜啓、入營後はや二箇月に相成候。

十二九 此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

十二三七 (略)、交通の利便いよく開け、産業の發達は益々多望に相成候。

十二四七 (略)、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

十二九五 光陰矢の如く、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。

十二九七 (略)近時道路新に開け、交通大いに便利に相成候。

十二一〇五 之を伐採せば少からぬ收益と相成るべく、(略)。

十二一〇七 住めば都とやら、此の極北の寒地も今はや生れ故郷の如き心持に相成候。

あいにくむ「相憎」(四) 2 相惡む

『一ミーム』

十二三七 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、(略)。

十二三八 「高虎の嘉明と相惡むは私の小事なり。

あいにる「相似」(上二) 4 相似ル

相似る 『一二』

八七二 虎ト猫トハ最モヨク相似タル獸ナリ。

八七五 此ノ外目・鼻・耳ノ形ヨリ、尾ノ長ク、ヒゲノ太キマデ、相似タル所甚ダ多シ。

九九五 之を過ぎて拜殿あり、拜殿の後に本殿あり、いづれも善盡し、美盡せり。是より西南にあたりて、家光の廟あり、建築の善美を盡せる

亦相似たり。

十二三〇 鳥居勝商といふ者あり、(略)。(略)。昔調伊企薩は(略)。

(略)。古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。

アイヌ(名) 6 あいぬ

十七九 あいぬの男子は髪とひげとを長くのばし、耳に金屬製の輪をはめ、こしに小刀をさぐ。

十八〇 あいぬの風俗はこれのみにても既に内地人と同じからず。

十八一 あいぬは時々子熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。

十八二 あいぬの熊祭とて有名な

十八三 あいぬの言語は日本語とは全く異なり。彼らは元は讀み書きも知らず、算數の考もとぼしかりしが、(略)。

十八四 あいぬの數、古は甚だ多かりしが、近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に足らず。されば北海道舊土人保護法と稱する法律ありて、(略)、厚く保護の方法を講ぜり。

アイヌじん(名) 1 あいぬ人

十七五 是は北海道に住するあいぬ人を畫がけるものにて、左は男子、右は女子なり。

アイヌのふうぞく「課名」 2 あいぬの風俗

十目九 第二十二課 あいぬの風俗

十79 第二十二課 あいぬの風俗
あいのぞむ「相望」(四) 1 相望む

「ム」

十一17 淡路島の北方、本土と相望む所、明石海峡となり、(略)。
あいはんす「相反」(サ変) 1 相反す

「シ」

八13 北半球と南半球とは時候全く相反し、北半球の夏は南半球の冬なり。

あひひとし「相等」(形) 1 相等し

「シ」

十二61 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

あひひらく「相開」(四) 1 相開く

「キ」

十一62 親族一同打ち寄り、心ばかりの祝宴相開き、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)。
あひふだ「合札」(名) 1 合札

十二100 英國にては停車場に手荷物預けるに合札を要せず、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。

あいまつ「相待」(四) 2 相待ツ相待つ「ツ」
十一25 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車の兩輪の如し。」といへども、(略)。
十二53 富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。

あい・みる「相見」(上一) 2 相見る

「ミ・ミル」

九49 父がひに心もとなく思ひ合ひし父子の、今無事に相見し喜は如何なりしぞ。

十38 敵の將軍ステッセル、乃木大將と會見の(略)。(略)くづれ残れる民屋も、今ぞ相見る二將軍。

あいもち「相持」(名) 1 相持

八72 今より後はたがひに親密に暮すべし。世はすべて相持なり。」

あいよぶ「相呼」(四) 1 相呼ぶ

「ン」

十二28 敵の衛兵相呼んで尋ねんとするに、(略)。

あいらし「愛」(形) 1 愛ラシ

「シ」

十96 神鹿ノ三々五々友ヲ呼ビ、人ニ近ヅキ來リテ食ヲ求ムルモ愛ラシ。

あいわす「相和」(サ変) 1 相和す

「シ」

十二84 紳士は更に埃太利の國歌を彈始めた。幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

あ・う「會」(四・五) 7 アフ あふ

會ふ「ツ・ハ・ヒ・フ」
う・まいりあう

七84 「航海といふものはかういふ面白いものですが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。

九45 アリは(略)、たゞ父にあ

はんを樂みに一日々々と旅行をつづけたり。

十22 張良、橋上ニテ白髮ノ一老人ニアフ。

十一109 男の冠をかぶり、(略)、小馬に乗つて、田舎道を通るのを見る。

と、昔の人に會つた様な氣がする。

十一110 婦人は室内に引込んでゐて、來客に會ふことも、外出することとも少い。

十二32 是等の人々は皆非常の大に事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二38 廉頗之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。

あ・う「合」(五) 1 合ふ「フ」
おちあう・おもいあう・かさなりあう・かたりあう・くみあう・こみあう・すすめあう・となりあう・なきあう・ひきあう・まにあいかぬ・まにあう・むかいあう

三62 みんなめづらしい貝ばかりです。(略)。はまぐりのやうに二つ合ふのもありますが、(略)。

あう「敢」
あえて「敢」(副) 2 アヘテ

十一103 孔明涙ヲ流シテ、「臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致スベシ。」ト答フ。

十一106 魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。蜀ノ軍(略)、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。仲達アヘテ近ヅカズ。

あお「青」(名) 6 アヲ 青

一415 アカアラキムラサキ

四37 麥ワラデハ(略)、又赤ヤ青ヤキ色ニソメテ、麥ワラザイクニモツカヒマス。

七35 塗物に黄・赤・黒・青などさまぐの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。

十48 色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

十48 例へば赤に青を加ふれば、紫となり、(略)。

十48 例へば(略)、青に黄を加ふれば、綠となるが如し。

あおあ「青青」(副) 4 アヲアラ
青青 青々
三29 アタラシイ竹ハアラアラトシテ、マコトニウツクシイモノデス。

三58 うみの水が青青として、どこまでもつづいてゐます。

十28 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

十二79 (略)、前面の一島草木青々として、花開き、鳥さへづり、

(略)。

あおい「青」(形) 9 アライ あをい

青イ 青い「一イーク」

三68 ノハラニハ、アライクサ

ノ中ニ、(略)、イロイロナハナ

ガサイデキマス。

三84 イマニアノナヘガノビ

テ、アライタタミヲシイタヤウ

ニナリマセウ。

三55 みちでほたるを一びき

つかまへて、(略)。あをいひかり

がかみの上からすいてみえま

す。

三37 父のいふとほり、そとへ

はなしたら、あをく光りながら、

しづかにとんでいきました。

六21 白い砂に青い松、どこのはま

べを見ても、美しい景色である。

六29 銅ハ人ニ使ハレテキデモ、

時々青イ物ヲ出シマセウ。ソレガヤ

ハリサビデス。

七82 海岸の松原も次第に遠くな

つて、(略)。どちらを向いても青い

水ばかりです。

九75 櫻ノ花ニハ(略)。瓣ノ色ハ白

又ハウス桃色デ、萼ノ色ハ青イ。

十二22 若し其の中に青い水草を入

れて置けば、(略)。

あおきこんよう「青木昆陽」(人名) 1

青木昆陽

十31 此ノ芋ノ(略)。然ルニ今

日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至

リシハ、主トシテ井戸平左衛門ト青

木昆陽トノ盡力ニヨル。

あおきたてまつる「仰奉」(四) 2 仰

ぎ奉る「一ラーリ」

十二15 教育勅語と戊辰詔書と

は、(略)、之を拜讀するもの誰か御

聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よ

りも深きを仰ぎ奉らざらん。

十二109 天皇陛下を大元帥と仰ぎ

奉り、國民皆兵なる今の御代、

(略)。

あおき・みる「仰見」(上一) 1 仰ぎ見

る「一ミル」

十一116 我が皇室の大き

い。あまねき光仰ぎ見る 同胞す

べて六千萬。

あおきわ・く「属分」(下二) 1 あふぎ

分く「一クル」

九66 オルガンにて美しき音を發

せしむるが如き、唐箕の車をまはし

て、もみとしひなどをあふぎ分くる

が如き皆然り。

あおぐ「仰」(四) 4 あふぐ 仰グ

仰ぐ「一ガーギーグ」

六82 人々忠義を第一

に、あふげや、高き君の恩、國の恩、

十102 コ、ニマウヅルモノ、誰カ

ハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ

御威徳ヲ仰ガザラン。

十二45 又衣服の原料も

綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に

求むること少かりしによる。

十二110 されば朕は汝等を股肱と

頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其

の親は特に深かるべき。

あおぎ・む「青褪」(下二) 2 青ざむ

「一メ」

八70 耳鳴り、目暗み、手

足なえて、動くことかなはず、皮膚

の色さへ青ざめて、身體は全く力な

きにいたれり。

九61 室内にのみ居て、外出する

こと少き人の、色青ざめて元氣なき

は、日光に浴せざるが爲なり。

あおし「青」(形) 1 青し「一シ」

八83 ヨーロッパ人は大むね皮膚

白く、髪赤く、眼の色青し。

あおじろ・い「青白」(形) 1 青白い

「一ク」

七30 蠶は(略)。(略)、色も

はじめは黒いが、だん／＼かはつて

青白くなる。

あおぞら「青空」(名) 3 青ぞら 青

空

三58 うみの水が(略)。とほく

の方では青ぞらといつしよ

になつてゐるやうに見えます。

四14 青ぞら高く そびえたち

からだに雪の きものきて、

(略)、ふじは日本一の山。

十一20 瀬戸内海の沿岸には(略)、

汽船絶えず通航して、遠く近く黒烟

の青空にたなびくを見る。

あか「赤」(名) 11 アカ 赤 凸まつか

一41 アカアヲキムラサキ

三68 ノハラニハ、アライクサ

ノ中ニ、アカヤ、キイロヤ、ム

ラサキヤ、イロイロナハナガサ

イデキマス。

三94 アカトキイロトムラサキ

ト三イロソロツテキレイデス。

四37 麥ワラデハヤネヲフキマ

スガ、又赤ヤ青ヤ黄色ニソ

メテ、麥ワラザイクニモツカヒマ

ス。

七35 塗物に黄・赤・黒・青など

さまざまの色あるは、皆うるしに色

を着けたるなり。

十48 色の原色は赤・青・黄にし

て、之を種々に配合すれば、種々の

色を生ず。

十48 例へば赤に青を加ふれば、

紫となり、青に黄を加ふれば、緑と

なるが如し。

十49 赤と緑とを並ぶれば、赤も

緑もよく引立ちて見ゆれども、(略)。

十49 赤と緑とを並ぶれば、赤も

緑もよく引立ちて見ゆれども、(略)。

十49 赤と黒とを並ぶれば、赤も

黒もよく引立ちて見ゆれども、(略)。

十49 赤と黒とを並ぶれば、赤も

黒もよく引立ちて見ゆれども、(略)。

十49 赤と黒とを並ぶれば、赤も

黒もよく引立ちて見ゆれども、(略)。

十49 赤と黒とを並ぶれば、赤も

黒もよく引立ちて見ゆれども、(略)。

あかい「赤」(形) 13 アカイ 赤イ

赤い「一イーク」

一25 アカイトリキガミエマス。

一40 アサガホガサキマシタ。ア

カイノヤシロイノヤイロイロ
マジツテキマス。
三三〇 ナハヲウエテキル女ハ、
マルイカサヲカブツテ、アカイ
タスキヲカケテ、(略)。
三三〇 コノ赤イジエバンハイモ
ウトノデス。
四七六 (略)、そのさをのさき
にはひらいた赤い扇がつけてあ
ります。
四八二 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、(略)。
五一六 鯉ハ(略)。(略)。ソノ色ニハ
クロイノモアリ、赤イノモアリ、白
イノモアツテ、(略)。
五二八 (略) もとよりすつぱいこのから
だ、しほにつかつてからくなり、し
そにそまつて赤くなり、(略)。
五五〇 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜
ハ中ガ赤イ。
六九一 (略)、森の間からはお社の赤
い鳥居が見えます。
六二八 (略) 「ソレデモ鐵ハデキニサビ
テ、赤クナルデハアリマセンカ。」
六七四 (略)、先生に何か聞かれて
も、答へることが出来ないで、顔を
赤くする子供もございました。
一三九 霜にやけて、赤くなつた杉垣
の中には、(略)。
あかがね「銅」(名) 6 銅
六二五 (略) 「金ニハいろ／＼アリマス
ガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、

私ドモノ仲間ノ銅デセウ。
六二五 (略) 銅ハ(略)、金ヤ銀ヨリモタ
クサンアリマスカラ、シタガツテネ
ダンモヤスウゴザイマス。
六二六 (略) シテ見レバ銅ホド役ニ立ツ
モノハアリマスマイ。」
六二六 (略) 「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、(略)。
六二七 (略) 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハ
イレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ
銅ヨリモマダ上デス。」
六二八 (略) 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、
時々青イ物ヲ出シマセウ。
あかぎ「赤城」(地名) 1 赤城
九一五 (略) 是ヨリ南流シテ吾妻川ヲ合
セ、赤城・榛名ノ二山ノ間ヲ流レ、
前橋市ノ西ヲ過グ。
あかぎさん「赤城山」(地名) 1 赤城
山
九一七 (略) 赤城山
あかこ「赤子」(名) 1 赤子
七二四 (略) 陸ニスムモノデハ、象ガマツ
一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大
人ト赤子ヨリモ、モツトチガフ。
あかさかじょう「赤坂城」(名) 1 赤
坂城
一四三 (略) 熊王直ちに河内に行き
て、赤坂城のほとりになつてゐる。
あかし「明石」(名) 1 明石
一三〇 (略) 我ガ軍艦ノ名ヲ
(略)。(略) 又嚴島・橋立・須磨・
明石・宇治・龍田等ハ名勝ノ地ヲ以

テ名ツケタルモノニシテ、(略)。
あかし「赤」(形) 2 赤し「一キ一
ク」
八三六 (略) ヨーロッパ人は大むね皮膚
白く、髪赤く、眼の色青し。
九一四 (略) 赤き帽子のトルコ人
(略)。
あかし「明石海峡」(地名)
二 明石海峡 明石海峡
一四七 (略) 淡路島の北方、本土と相
望む所、明石海峡となり、(略)。
一四八 (略) 明石海峡
あかだま「赤玉」(名) 1 赤だま
九一五 (略) 西洋婦人のボンネット
花をかざりてうるはしく、支那の帽
子はいたゞきに、結ぶ赤だまはい
らし。
あがつまがわ「吾妻川」(地名) 2 吾
妻川 吾妻川
九一六 (略) 是ヨリ南流シテ吾妻川ヲ合
セ、赤城・榛名ノ二山ノ間ヲ流レ、
前橋市ノ西ヲ過グ。
九一七 (略) 吾妻川
あがつまやま「吾妻山」(地名) 1 吾
妻山
九一七 (略) 吾妻山
あかはた「赤旗」(名) 1 赤はた
五二八 (略) へいけのぐんぜいが(略)。
(略)。(略) 海とをかにちにおし立て
た何千本の赤はたは、まるで火のも
えたつたやうに見える。
あかほりがわ「赤堀川」(地名) 3 赤

堀川
九一七 (略) 利根川ハ(略)。(略) 栗
橋ヲ過ギテ、間モナク二ツニ分ル。
北ナルヲ赤堀川トイヒ、南ナルヲ權
現堂川トイフ。
九一八 (略) 赤堀川ハ關宿ノ北ニテフタ
、ビニツニ分レ、(略)。
九一七 (略) 赤堀川
あかまつみのり「赤松光範」(人名)
二 赤松光範 赤松光範
一四四 (略) 吉野の朝の頃、赤松光
範 楠木正儀と攝津の住吉に戦ひ
て、散々に撃破られたり。
一四三 (略) 「赤松光範の臣宇野六
郎の子なり。
あがめたまう「崇給」(四) 1 あがめ
たまふ「一ヒ」
八二六 (略) 八咫鏡を授けたまひて、
(略)。(略) その神勅によりて、代々の
天皇はこれを宮中にあがめたまひし
が、(略)。
あかり「明」(名) 4 アカリ あかり
明り
五二七 (略) この時べんけいは火の明りを
たよりにたづねて行つて、一人のか
りうどをつれて來た。
七二六 (略) 今風デアカリガ消エマシ
タ。」
七二七 (略) この星を見分けることや、
燈臺のあかりを知ること、船に乗
る者には大切な事です。」
一四九 (略) 川上にかざり火の明り先

づ見え初めて、ほうくと呼ぶ聲を聞く内に、(略)。

あがり「上」(名) 1 上り 上つまさき

あがり

七四五 藤 上り下りの藤の紋、(略)。

紋の数々かぎりなし。

あがりゆく「上行」(四) 1 上り行ク

「一」

九七八 銀行貯金ニテモ、郵便貯金

ニテモ、預ケタル金高ノ次第二上り

行クハ樂シキモノナリ。

あがる「上」(四・五) 23 アガル あ

がる 上ル 上る 舉ル 舉る 「一

ツ・ラ・リ・ル・レ」 上るきあが

る・おあがりくださる・おきあがる・

たちあがる・できあがる・とびあが

る・はねあがる・まいあがる

二307 鷹 タコタコ アガレ。

二313 鷹 (略) クモ マデ アガレ。

二315 鷹 天マデ アガレ。

二322 鷹 エダコニジダコ、ドチ

ラモ マケズ、クモマデアガレ。

二323 鷹 天マデアガレ。

二326 鷹 アレアレ、アガル。

二377 ヒバリガ(略)。(略)、マ

タアソコカラモ一ピキ上リマ

シタ。

二378 サヘヅリナガラダンドン

タカク上ツテイキマス。

二393 ケレドモ上ルトキニハ、

スカラズグトビタチマス。

二443 アサ日ノ上ル方ガ東

デ、ユフ日ノ入ル方ガ西デス。

二471 鷹 それよりはやねの上

へあがつてはたけ。」

四55 イマ一足デヲカヘ上ラ

ウトイフ所デ、(略)。

四775 ふねはなみにゆられて、

上つたり下つたりします。

五705 晩ニナルト、花火ガ上ルトイ

フ話デアル。

八137 ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ

上ツタ。

八232 日はもう高く上つてゐます。

八289 鷹 「入リテ見給へ。」トイフ

ニ、何心ナクエンニ上リテ、南ノ口

ヨリ入ラントスレバ、(略)。

九665 鷹 帆かけ船の水上を走る、た

この空高く上る、是皆人の自然の風

を利用したるなり。

十一946 鷹 (略)、又普通の價に復す

るか、場合によりては尚それ以上に

上るべし。

十二279 鷹 (略)、若し向ひの山

にのろしのがるを見れば、幸にして

城を出でたりと知れ。

十二541 鷹 富國ノ實ノ舉ルト舉ラザ

ルトハ我ガ商人ノ信用・勤勉・機敏

ノ如何ニ存ス。

十二541 鷹 富國ノ實ノ舉ルト舉ラザ

ルトハ我ガ商人ノ信用・勤勉・機敏

ノ如何ニ存ス。

十二9310 鷹 孔子事へて吏となりしに、

治績大いに擧り、職を退きし後も弟

子の道を問ふもの益々多かりき。

あかるい「明」(形) 8 あかるい 明

ルイ 明るい 「一イ・カツ・ク」

三125 へやの中まであかるく

なりました。「ひらがなのドリル」

三367 鷹 「ここがあかるいから、

みえないのです。

五18 (略)、今まであかるかつたせ

かがくらやみになつて、(略)。

五43 それでせかい中がまたもとの

とほりあかるくなつたと申します。

五446 トンネルヲ出ルト、マタ明ル

クナツテ、ヒロイ海ガ見エマス。

六144 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、

空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ。

九333 スチブソンは若い時から機

關の事に明るかつたが、(略)。

九702 雨戸を明けて見ると、明るい

月夜である、(略)。

あかんぼ「赤坊」(名) 1 アカンボ

二372 鷹 「アカンボノトキニ、ダ

イテチチヲノマセテクダサツタ

ノハ、ドナタデスカ。

あき「明」 ひとめあき

あき「秋」(名) 28 あき 秋

五616 鷹 あきの夜長を鳴き通す、あ

き、おもしろい蟲のこゑ。

五627 鷹 秋の夜長を鳴き通す、あ

き、おもしろい蟲のこゑ。

六27 春は花、秋はもみぢで、山の

ながめは時々かはる。

六41 日本の國には春・夏・秋・冬

かはるく色々な花がさき、色々な鳥

が鳴く。

六58 鷹 (略)、白つゆむすぶ秋の野

のちぐさの花もおもしろや。

六67 鷹 一年ヲ春・夏・秋・冬ノ四

季ニ分ツ。

六74 鷹 九月ノ初ヨリ十一月ノ終マ

デハ秋ナリ。

六76 鷹 秋ハスバシク、冬ハ寒シ。

六126 モウ秋ニナツタカラ、ガンガ

オヒオヒトンデ來ル。

七341 蠶をかふのは春と夏と秋の三

度で、春・夏・秋といふ名が

ある。

八82 鷹 秋の日の空すみわたり、

風暖にさてもよき日や。

八373 鷹 (略)、ききやう・かるか

や・をみなへし、秋の花多けれど、

(略)。

八605 鷹 石山寺の秋の月、雲をさ

まりてかげ清し。

八816 鷹 (略)、南半球にては木の葉

散りしきて、蟲の鳴く秋の時候な

り。

九2910 鷹 靖國神社ノ秋ノ大祭ハ十一

月五日ヨリ行ハル。

九694 (略)、黄色に實のつた秋の田

の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、

(略)。

九697 秋の末になつて、風の吹散し

た木の葉の上に、雨の降りかゝるの

は、何となく物さびしい。

九80 2 図 驛長驚くなかれ、時の
變り改るを。花咲く春あれば、葉落
つる秋あり。」

九80 9 図 いつか秋のなかばも過ぎ
て、九月十日の夜となれり。

九96 7 図 (略)、夏の盛りの頃、秋の
紅葉の折には來り遊ぶもの最も多
し。

十一6 6 図 秋・冬の花少き季節に
入りても、食物に不足することなき
は、(略)。

十一7 4 図 雄蜂は(略)、何等の勞
働をなさざるを以て、秋の初には
皆働蜂にさし殺さる。

十一18 10 図 秋の山は紅葉の錦を織
り、冬の木は白雪の綿を重ねぬ。

十一99 6 図 (略)、夏より秋にかけ
てこゝに集る臘肭獸は數千頭にも達
することこれあり候。

十一111 4 秋の夜長には衣打つきぬた
の音が村々相應じて聞える。

十二67 5 図 又燕の春來りて秋去り、
雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二67 5 図 又燕の春來りて秋去り、
雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二83 9 變化極らない妙音は、忽ち
人の心を百花満開ののどかな春によ
はせ、又忽ち落葉散敷く秋のさびし
さに沈ませる。

あき「安芸」(名) 3 安藝 安藝

十一29 10 図 (略) 我が軍艦ノ名ヲ
(略)。國名ヲ以テ名ヅケラレタルモ

ノニハ、安藝・薩摩・石見・肥前・
相模・周防・丹後等アリ。

十一32 1 図 戦艦ハ(略)。(略)。安

藝・薩摩・鹿島・香取等はナリ。

十二15 6 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、
安藝ハ呉デ造ツタノデアル。

あきこ「秋蚕」(名) 1 秋こ

七34 2 蠶をかふのは春と夏と秋の三
度で、春こ・夏こ・秋こといふ名が
ある。

あきとこ「孩」(四) 1 あきとこ

「一フ」

十二27 5 図 (略) 敵は長圍の計を取れ
るに、我は糧食殆ど盡きたり。今は
轍にあきとふ鮒の如し。

あきない「商」(名) 1 アキナヒ

四23 4 オマツガオトミトアキナ

ヒノアソビヲシテキマス。

あきないのあそび「課名」2 アキナヒ
ノアソビ

四目9 ハ アキナヒノアソビ

四23 3 ハ アキナヒノアソビ

あきめくら「明宣」(名) 1 アキメク
ラ

七22 6 図 目ハ見ユレドモ、字ノ讀メ

ザル人ヲアキメクラトイフ。

あきやす「い」(飽易) (形) 1 アキ易イ
「一ク」

十一66 2 日々同じ食物ヲ用ヒルト、

アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。

あきらか「明」(形状) 2 明か

九26 1 図 將校には(略)。其の下に

下士あり、兵卒あり。上下の別明か
にして、何れも上官の命令を守るは
(略)。

十90 8 図 同學士は(略)、學理に
も通じ、實地にも明かなる人に候へ
ば、(略)。

あきる「飽」(上一) 1 アキル「一
キ」

三69 4 オモシロイアソビモ毎日
見ルト、シマヒニハアキテキマ
ス。

あく「開」(五) 3 アク あく「一
イ」

二15 6 ホエルト、口ガアイテ、
クハヘテキタサカナハミツノ

ナカヘオチマシタ。

五66 5 図 そのおしまひのあいてあ
る所へ、『おかささんからもよろし
く。』と書きたして下さい。

六24 1 それがため、かめに大きな穴
があいて、水が流れ出ましたから、
(略)。

あく「飽」(四) 2 あく「一カ」

ひみあく

八59 7 図 琵琶の形に似たりとて、

其の名をおへる湖の かゞみの如き

水の面、あかぬながめは八つの景。

九94 5 図 此の門一に日暮門の名ある
は、日暮るるまで見れどもあかずと
の意なりとぞ。

あく「明」(下二) 5 明く「一クレ・
一ケ」ひうちあく

九48 7 図 夜明くれば、砂の上に新し
き駱駝の足跡あり。

九72 10 図 (略)、二十八日は(略)
眠につきたる者これなく候。明けて
二十九日には雨も止み、風も静まり
て、(略)。

十69 3 図 夜明けて見れば、岩の上に
一隻の難破船横たはれり。

十一73 10 図 夜明けて後、住持畫工に
向ひて、(略)、夜中のぞき見たる姿
をして見するに、(略)。

十二7 9 図 夜に入りて、(略)、敵艦
隊は四分五裂の有様となれり。明く
れば二十八日、天よく晴れて海波靜
かなり。

あぐ「上」(下二) 15 あぐ 上ぐ 舉

ぐ「一グル・一ゲ・一グヨ」ひおんい
わ

いもうしあぐ・おんまちもうしあぐ・
かぞえあぐ・きこえあぐ・ごあんない
もうしあぐ・ごほうちもうしあぐ・ご
ほうもうしあぐ・そだてあぐ・ねがい
あぐ・のりあぐ・はりあぐ・ひきあ
ぐ・まさあぐ・もうしあぐ

十10 10 図 其の他森林は氣候を和げ、
土砂の流出を防ぎ、(略)に一種の
風景を添ふる等、其の効用あげて數
ふべからず。

十51 4 図 手塚其の間に敵の草ずり
を上げ、こぶしも通れとさし通し、
(略)。

十一13 10 図 此の頃備前の國に兒島高
徳といふ武士あり、主上尚笠置にお

はしませし時、早くも義兵を擧げしが、(略)。

十一172 〇 (略)、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十一447 〇 (略)、正儀は(略)、「今日は吉日なり、元服せよ。」とて、もとよりを上げて、和田小次郎正寛と名乗らせ、(略)。

十一453 〇 思はず大聲をあげて泣號びぬ。

十一597 〇 老いもる父の望は一つ。(略)、孝子の譽我が家にあげよ。

十二49 〇 露國が連敗の勢を回復せん爲、本國に於ける海軍の幾んど全勢力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、(略)。

十二810 〇 (略)、ネボカトフ少將は白旗をかゝげ、戦艦ニコライ一世以下四隻を擧げて其の部下と共に降服せり。

十二28 〇 翌十五日の朝、勝商は山に上りてのろしをあげ、走りて岡崎に到り、(略)。

十二294 〇 十六日勝商は再び山上にのろしをあげ、次いで城に入らんとするに、(略)。

十二335 〇 凡そ婦人の道は(略)、子に教へて家名をあげしむるに在り。

十二383 〇 秀忠大いに感じて其の言に隨ひ、嘉明を擧げて會津に封ぜ

り。

十二971 〇 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。

十二1041 〇 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、(略)。

あくじ「悪事」(名) 1 悪事

十二538 〇 他人ノ惡事・短所ヲアザケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナリ。

あくしゅ「握手」(名) 1 握手

十一414 〇 『さらば』と、握手ねんごろゝ、別れて行くや右左。

あくしゅう「悪臭」(名) 1 惡臭

九571 〇 是等ハ多クハ(略) 武器又ハ他ノ動物ノイトフ惡味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、(略)。

あくび「欠伸」(名) 1 あくび

六702 あくびをしたり、わき見をしたりしてゐて、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、(略)。

あくまで「飽迄」(副) 1 あくまで

九633 〇 田村麻呂は(略)、力あくまで強き人にて、怒る時はたけき獸も恐れたり。

あくみ「惡味」(名) 2 惡味

九5610 〇 是等ハ多クハ(略) 武器又ハ他ノ動物ノイトフ惡味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、(略)。

九578 〇 タトヘバ(略)、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアル

ガ如シ。

あぐむひせめあぐむ

あくる「明」(連体) 2 アクル あく

六75 〇 十二月ノ初ヨリアクル年ノ

二月ノ終マデハ冬ナリ。
十一444 〇 あくる年は六郎の七回忌なり。

あけひよあけ・よあけごろ・よあけまえ

あけひはたあげす・むねあげ
あげおろし「上下」(名) 1 上ゲオロシ

六794 大キナキカイデ、ドンナ重イ荷物デモラク／＼ト上ゲオロシヲシテキル。

あけはな・つ「開放」(四) 1 開放つ
「一チ」

九608 〇 時々障子を開放ちて、新しき空氣を流通せしむべし。

あけはなる「明離」(下二) 1 明けはなる「一レ」

九745 〇 全家立退の用意致し居り候中、夜も明けはなれて、水は次第に減退致し候。

あげはのちよう「揚羽蝶」(名) 1 揚羽ノ蝶

九578 〇 タトヘバ(略)、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。

あけゆく「明行」(四) 1 明け行く「一ク」

十二794 〇 (略)、朝の二時頃「陸」

「陸」「陸」と呼ぶものあり。(略)。

明け行くまゝに見渡せば、(略)。

あける「明」(下二) 1 明ける「一ケ」

五802 (略)、夜のうちにがけの上まで出た。まもなく夜が明けた。

あける「開」(下二) 7 アケル あける 明ケル 明ける「一ケ」ひおあけなざる

三358 (略)、いそいでかみをあけてみると、ほたるはやはり中にゐます。

三735 (略)、オトヒメノイツタコトモワスレテ、タマデバコヲアケテ見ルト、(略)。

四407 (略)、ソツトフタヲアケテ、外ヲ見ルト、何ダカヤウスガチガツテキマス。

五35 あまりおもしろさうなので、大神は少しばかり戸をあけて、おのぞきになりました。

五71 ソノ光ガキラ／＼トシテ、ワルモノドモハ目ヲアケテキルコトガデキマセン。

六662 熊ハイツツラモノデ、人ノ家ノクラノ戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ儀ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

九702 雨戸を明けて見ると、明るい月夜である、(略)。

あける「上」(下二) 18 アゲル あげ

る 上ゲル 上げる 《一ゲ一ゲル》
 母おあげなざる・おあげもうす・おだ
 しもうしあげる・ごあんないもうしあ
 げる・さしあげる・しあげる・すいあ
 げる・とりあげる・のりあげる・はり
 あげる・ひきあげる・ひろいあげる・
 みあげる・もうしあげる・もりあげる
 一226 ソロソロ オアルキナサイ
 テヲ ヒイテ アゲマス。
 二46 図 「ミナサン ニキク ノハ
 ナヲ アゲマス。
 二47 図 タケヲ サンニハドレヲ
 アゲマセウ。」
 二63 図 「オハナサン ハーバン
 小サイカラ、一バン 大キイノ
 ヲ アゲマセウ。
 三67 1 図 オレイ ニリユウグウヘ
 ツレテ 行ツテ アゲマセウ。
 四26 8 図 「三十セン アゲマス カラ、
 コレデ トツテ クダサイ。」
 四42 3 図 「人に物をあげる時
 に、なぜのしをつけるのです
 か。」
 四68 5 図 三郎「オカアサン、(略)。
 苦ケレバ 私ガ カハリ ニノンデ
 上ゲマセウ。」
 五48 4 二人は(略)、そこにたふれま
 した。しばらくたつて、顔を上げて、
 そのあたりを見まはすと、(略)。
 六31 1 図 今のお客にもう一錢上げな
 ければならなかつた。」
 六78 3 白イ帆ヲアゲタ帆カケ船モイ

クツトナクハイツテ来ル。
 八46 2 図 伯父さんが御安心なさる様
 に早く返事を上げよう。
 八69 2 図 此のかはせの金は、ほんの
 僅かですが、何かすきな物を買つて
 上げて下さい。
 九23 6 図 其の時にはおたがひに目ざ
 ましい働をして、我が高千穂艦の名
 をあげよう。
 九23 7 図 此のわけをよくおつかさ
 んにいつて上げて、安心させるがよ
 い。」
 九23 9 水兵は(略)、やがて手をあげ
 て敬禮して、につこりと笑つて立去
 った。
 九83 1 神主は先づ神前で祝詞を上げ
 て、(略)あひづの一番太鼓を打鳴
 らした。
 十一59 1 (略)、全軍一同に歡喜の聲
 をあげた、アルプの山もふるふばか
 りに。
 あご「類」(名) 2 アゴ
 八73 2 図 虎モ猫モアゴ短ク、首太
 シ。
 八73 3 図 アゴ短ケレバ、物ヲカム力
 強ク、(略)。
 あごころうし「赤穂浪士」(名) 1 赤
 穂浪士
 十二85 8 図 赤穂浪士が數年の苦難を
 忍び、遂に主君の仇を報じて、從容
 死に就けるは(略)、日本武士道の
 精華を發揮せるものといふべし。

あさ「麻」(名) 5 アサ 麻
 六34 6 図 麻又ハカムシノ糸ニテ織
 リタルモノヲ麻織物トイフ。
 六35 図 アサ
 十一100 1 図 農産物の種類は(略)、
 大麥・小麥・燕麥・裸麥・薺・
 麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、
 (略)。
 十一102 2 図 支那ノ昔後漢ノ末、天
 下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レ
 リ。
 十二45 6 図 (略)、又衣服の原料も
 綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に
 求むること少かりしによる。
 あさ「朝」(名) 30 アサ あさ 朝
 ひまいあさ・ゆきのあさ
 三44 3 アサ日ノ上ル方ガ東
 デ、ユフ日ノ入ル方ガ西デ
 ス。
 四47 1 皆さんがあさおきる時
 には、みじかいはりがどの字
 の所にありますか。
 四48 4 図 といひはあさからかつ
 ちん、かつちん。
 四50 2 図 われらがねどこで、や
 すんで居るまも、(略)、あさま
 でかうして、かつちん、かつちん。
 四69 8 図 朝早くから むどばた
 で、母はせい出す あらひ物。
 五63 7 図 あさつては八まんさまのお
 まつりですから、朝早くからあそび
 にいらつしやい。

六8 3 家を出たのは朝の七時ごろで
 した。
 六29 8 ある日主人は朝から用たしに
 出たので、二人が店のるすをしてゐ
 ると、(略)。
 六37 2 朝おきて見ると、池に水がは
 つてゐた。
 六37 8 朝おきると、雪が五六寸つも
 つてゐた。
 六39 4 図 今日朝からあちらこちら
 を見物した。
 六46 5 又ある朝早く信長がかりに出
 ようとして、「誰も居らぬか。」とよ
 びますと、(略)。
 八22 6 次の朝農夫はいつになく早く
 起きて、(略)。
 八34 4 (略)、朝から晩まで相かはら
 ず、「トンテンカン、トンテンカン。」
 と働いてゐる。
 九20 10 図 村の方々は朝に夕に色々
 とやさしく御世話下され、(略)。
 九35 7 それが今は朝の急行列車で東
 京を出立すれば、晩にははや京都に
 着くことが出来る。
 九61 1 図 人多き都會に住む者は、
 (略)、又朝早く起きて、木立しげき
 公園等を散歩すべし。
 九67 9 雨のはれた朝、花の香を送つ
 て、そよ／＼と吹く春風には、我が
 身も蝶の様に飛立ちたくなる。
 九82 7 (略)、祭の當日には、おびた
 しい見物人が朝早くから宮の境内

へつめかけた。

十168 図 ある雪の朝、皇后は美しき

御庭の雪景色を御覽じて、(略)。

十232 図 窓 「(略)、五日目ノ朝此ノ
處ニテ我ヲ待ツベシ。」

十234 図 五日目ノ朝行キテ見レバ、
老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。

十238 図 窓 今ヨリ後五日目ノ朝再ビ
來ルベシ。」

十2310 図 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ
先ダテレタリ。

十241 図 老人怒リテ、五日目ノ朝ヲ
約スルコト亦前ノ如シ。

十561 図 兵營内の生活は規律正し
く、朝の起床より夜の消燈まで、一
々喇叭の合圖により、(略)。

十一494 四日目の朝、大將は何心な
く外を眺めてゐると、(略)。

十二288 図 翌十五日の朝、勝商は山
に上りてのろしをあげ、走りて岡崎
に到り、(略)。

十二767 図 西曆一千四百九十二年八
月三日の朝、(略)、西班牙パロスの
港は未明より人の山を築けり。

十二7810 図 (略)、朝の二時頃「陸」
「陸」「陸」と呼ぶものあり。

あさい「浅」(形) 4 アサイ あさい
浅イ「一イ」

一181 アサイ ハチフカイ ツポ

三96 あさい川 「ひらがなのドリ
ル」

七747 (略)、岸ニ近い浅イ所カラ五

十ヒログラキノ所マデニハ、海草ガ
ハエテキル。

七767 (略)、マツ緑色ノモノハ浅イ
所ニ、紅色ノモノハ深い所ニ、茶色
ノモノハソノ中間ニハエテキルノデ
アル。

あさいと「麻糸」(名) 1 麻糸

六347 図 麻糸ニテ織リタルモノハカ
ヤナドニツクリ、(略)。

あさおき「朝起」(名) 1 朝起

九435 図 祖父様はいつもの通り
朝起にて、私どもの目をさまし候頃
には、はや朝顔のはちをならべて、
(略)。

あさおりもの「麻織物」(名) 2 アサ
織物 麻織物

六334 図 織物ニハキヌ織物・モメ
ン織物・アサ織物・毛織物ナダイロ
くアリ。

六347 図 麻又ハカラムシノ糸ニテ織
リタルモノヲ麻織物トイフ。

あさがお「朝顔」(名) 5 アサガホ
朝顔

一401 アサガホ ガサキマシタ。

八364 図 垣根からむ朝顔の さ
きはかりつゝ、いさぎよく、にこりに
しまぬ白蓮の 巻葉をもるゝつゆ涼
し。

九86 (略)、朝顔ノ花ハジャウゴノ
様ナ形ヲシテキル。

九8 図 アサガホ

九436 図 祖父様は(略)、はや朝

顔のはちをならべて、昨日は九つ咲
きたり、今朝は十二咲きたりなどと
御喜に御座候。

あさかせ「朝風」(名) 2 朝風

八895 二人ハ投ゲ出サレテユメウツ
、二人ハ吹ク朝風ニ正氣ヅイタ。

十一307 図 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美
ナレ。風ノ名ヲ負ヘルモノニ神風・
春風・朝風・疾風・松風・追風・野
分等アリ。

あさぎ「浅黄」(名) 4 浅黄

八639 木綿織物ニ紺ヤ浅黄ヤカスリ
ヤ其ノ他色々ナ縞ガアルノハ、ドウ
シテコシラヘルノデスカ。

八643 紺ヤ浅黄ヤカスリハアキデ染
メマス。

八645 紺ヤ浅黄ヤカスリハアキデ染
メマス。コク染メタノガ紺デ、ウス
イノガ浅黄デス。

八661 其ノ中へ白絲ヤ白布ヲ入レ
テ、紺ヤ浅黄ニ染メルノデス。

あさきち「浅吉」(人名) 1 浅吉

八681 図 二月四日 浅吉 御主人様
あさきちどの「浅吉殿」(人名) 1 浅
吉殿

八694 図 二月六日 井上勉藏 浅吉
殿

あさぎり「朝霧」(名) 1 朝霧

十二773 図 船の次第に朝霧の中にか
くれ行くを見送りで、(略)。

あさくさ「浅草」(地名) 1 浅草

七556 図 浅草ノ観音堂モ東ノ方ニ見

ユ。
あさくさこうえん「浅草公園」(名) 1
浅草公園

七567 図 浅草公園ニハ種々ノ見セ物
アリ。

あさくさゆき「浅草行」(名) 1 浅草
行

七558 図 上野ノ山ヲ下リテ、浅草行
ノ電車ニ乗ル。

あざけりわらう「嘲笑」(四) 2 アザ
ケリ笑フ「ハーフ」

十256 図 韓信(略)、ヤガテハラバ
ヒテ膝ノ下ヲクグル。見ル者アザケ
リ笑ハザルハナシ。

十一538 図 他人ノ惡事・短所ヲアザ
ケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナ
リ。

あざける「嘲」(四) 2 あざける「一
リール」

十541 図 平生にても、若き人は白
髪を見て侮る心あり。まして戦場に
ては、進まんとすれば、大人げなし
とあざけり、退く時には、今はかな
ふまじとそしる。

十二771 図 (略)、コロンブスの暴舉
をあざける者、皇后の無謀をそしる
者、口々に語り合へり。

あさし「浅」(形) 2 浅シ 浅し「一
クレーシ」

十一3310 図 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近
寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、(略)。
サレバ艦體輕ク、小サク、船脚ハ淺

ゝことを止め、足は食堂へ行くことを止めたり。

八三〇 虎ト猫トハ (略)。(略)。

足モマタ太クシテ、力強シ。

八四一 虎ト猫トハ (略)。(略)。

足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル爪アリ。

八四二 虎モ猫モ足ノ裏ヤハラカナレバ、歩ム時音ヲ立テズシテ、(略)。

八四三 命ノママニ拾ヒ取りテサ、グ。老人足ニテ之ヲ受ケ、笑ヒテ去ル。

八四四 (略)、左右ノ手ハ肩ヨリ分レ、二本ノ足ハ全身ヲ支フ。

八四五 腦ハ其ノ報告ニヨツテ判別シ、手・足・口等ニ命令シテ活動セシム。

八四六 (略)、郵便配達夫・車夫等ノ足ノ強キ、(略)、ヨク之ヲ使用スルヲ以テナリ。

八四七 (略)、又あつし織の短きつゝ袖を着、足にもあつし織のきやはんをはく。

八四八 畝傍山・香具山・耳無山ノ三山、(略)、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

八四九 追手が接近すれば速力を速め、後れゝば脚のきざみを短くする。(略)。アラビヤ人はこゝに始めて馬に全速力を出させて、(略)。

八五〇 (略) 三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。

十一七三 今度のはひぢを張り、足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の卧したる様をなせり。

十一七四 (略)、人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所を知らず。

十一七五 喜剣大いに罵つて曰く、「(略)。黙ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

十一七六 「あ、余死せん。(略)我が足、獸として良雄に食はしめたり。

あし「悪」(形) 1 惡し「一シキ」

六八三 (略)、善き事たがひにすゝめあひ、惡しきをいさめよ、友と友、人と人。

あじ「味」(名) 10 味

六八四 塩ト砂糖トハ物ノ味ヲ附クルニ大切ナルモノニシテ、(略)。

六八五 塩ト砂糖トハ (略)、コノ二ツノ物ナケレバ、物ノ味ハウマカラズ。

六八六 桃がじゆくしましたから、(略)。(略)。(略)、實も大きく、味もよほどよろしうございます。

六八七 さつそくいたゞきましたすが、味は又かくべつでございます。

六八九 其の湯には大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。

六九〇 目ハ (略)、耳ハ (略)、鼻ハ (略)、口ハ味ヲ味ハヒテ、各之ヲ腦ニ報告ス。

十一六四 材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨリ考ヘナケレバナラス。

十一六五 (略)、味ハ人々ノ好ミヲ考ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選バナケレバナラス。

十一六六 又魚類ヤ野菜ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

十一六七 我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

あじ「鱒」(名) 1 アデ

七二〇 魚類ニハイワシ・アヂ・サバ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガアリ、(略)。

あしあと「足跡」(名) 3 足跡

九四六 すべて沙漠の旅行は、以前に通リし駱駝の足跡を目あてて行くなり。

九四七 然るに此の大風の爲に、今までの駱駝の足跡消えたれば、(略)。

九四八 夜明くれば、砂の上に新しき駱駝の足跡あり。

あしお「足尾」(地名) 3 足尾

九四九 足尾

九五〇 我が國銅山ノ中ニテ最モ盛ニ銅ヲ産出スルハ足尾・小坂・別子等ナリ。

九五一 (略)、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は 銅の産額むびあふし。

あしおと「足音」(名) 2 足おと音

三六六 あゆめよ、あゆめよ、足おとたかく。

七六一 犬は耳ざとき動物にして、眠れる時も人の足音を聞けば、たちち目さます。

あしおどうざん「足尾銅山」(課名) 2

足尾銅山

十目 第十七課 足尾銅山

十目 第十七課 足尾銅山

あしおどうざん「足尾銅山」(名) 1

足尾銅山

十目 第十七課 足尾銅山

十目 第十七課 足尾銅山

あしおまぢ「足尾町」(地名) 1 足尾町

十六四 (略)、今や足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、學校・病院・銀行等皆備ラザルナシ。

あしかが「足利」(地名) 1 足利

九四九 足利

あしかがうじ「足利氏」(人名) 1 足利氏

十二三 足利氏の大兵來り攻め、城遂に陥り、保・義鑑共に戰死す。

あした「朝」(名) 3 朝

九八〇 (略)、片時も君を忘れ奉ること無く、雨の朝、風の夕、見るもの聞くものにつけて、都の空のみしたはしく、(略)。

九40 図 蘆ノ湖
九42 文 是等ノ山ト元ノ噴火口ノマ

ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、(略)。

實の名より取れる橙^{だい}色・柿^{かき}色・葡萄^{ぶどう}色・小豆色、其の他（略）等、色の

一 33 5 タハタケ アゼ ウネ

タツテ、ナヘヲ田ノ中ヘナゲ
入レテキマス。

十28 唯あぜの様の木に雀がたくさ
ん集つてゐて、(略)。

あぜみち「畦道」(名) 1 あぜ道

六9 4 あぜ道を七八町通つて、小
川の橋を渡ると、御社の前へ出まし
た。

あぜみちづたい「畦道伝」(名) 1 あ
ぜ道傳ひ

十29 10 犬を連れた男が銃を肩にし
て、森の蔭から出て来て、あぜ道傳
ひにあちらの岡へ向つた。

あせゐ「焦」(五) 2 あせる 『ツ・
ール』

九34 9 やがて汽車が動き出すと、馬
上の人のはしきりにむちを打つてあせ
つて見たが、(略) どうして競走が
出来よう。

十一56 7 おくれゝばピエールはこさ
えて死ぬであらう。兵士等は氣をあ
せるのみで、何の工夫もつかぬ。
あそこ「彼処」(代名) 5 アソコ あ
そこ

二29 5 アソコデモ、ココデモ、
「シンネンオメデタウ。」(略)。
トアイサツシテキマス。

三17 6 グランナサイ、マタアソコ
カラモ一ピキ上リマシタ。

三57 2 アソコニハオトウサンノ
チャイロノオビガアリ、コチラ
ニハオカアサンノモンツキノ

ハオリガアリマス。

三61 2 はまべのまつの木の下
へ行つて見ませう。あそこには
うつくしいかひや小石がたく
さんあります。

四4 6 園 太郎「あそこに高い火の

見のはしこが見える。(略)。

あそさん「阿蘇山」(課名) 2 阿蘇山

十二目12 第十一課 阿蘇山

十二39 9 第十一課 阿蘇山

あそさん「阿蘇山」(地名) 3 阿蘇山

十二40 5 園 就中噴火口の最も大なる

を肥後の阿蘇山とす。

十二40 7 園 阿蘇山の舊噴火口は南北

の長徑六里、東西の短徑四里にわた

り、(略)。

十二42 3 園 阿蘇山は此の如く複雑な

る一大火山にして、山中に多くの噴

火口及び温泉あり。

あそだに「阿蘇谷」(地名) 1 阿蘇谷

十二41 園 阿蘇谷

あそぼす「おおいあそぼす・おもとめ

あそぼす

あそび「遊」(名) 4 アソビ 遊びあ

きないのあそび・おんあそび・のあそ

び・やまあそびする

三68 3 (略)、ウラシマノ來タノ

ヲタイソウヨロコンデ、イロイロ

ナゴチソウヲシタリ、サマザマ

ノアソビヲシテ見セマシタ。

三69 4 オモシロイアソビモ毎日
見ルト、シマヒニハアキテキマ

ス。

四23 4 オマツガオトミトアキナ

ヒノアソビヲシテキマス。

十101 4 園 (略)、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ

遊ヲナシ給ヒ、(略)。

あそびくらす「遊暮」(四) 2 遊び暮

す「サ・シ」

十一71 10 園 此の繪をかける畫工久し

く此の寺に寄食してありしが、何一

つ畫がくこともなく、毎日遊び暮し

て三年を経たり。

十二70 9 園 少壯有爲の間を徒に遊び

暮さば、老いて後悔ゆともかひなか

るべし。

あそびたまう「遊給」(四) 1 遊び給

ふ「へ」

十二72 4 園 我衣食の費をいとふに

あらざれども、何處へなりとも出で

て遊び給へ。

あそびなる「遊慣」(下二) 1 遊びふ

る「レ」

十一22 10 園 文餘のろかい操りて、

行手定めぬ浪まくら、百尋・千尋海

の底、遊びふれる庭廣し。

あそぶ「遊」(四・五) 23 アソブ あ

そぶ 遊ぶ 遊ぶ『ビ・ブ・ベ・

イン』おあそびなさる・きたりあそ

ぶ

二75 オハナトオキクガアソン

デキマス。

二22 2 園 「カクレンボヲシテアソ

ビマセウ。

二29 3 ヲトコノ子モ、ヤンナノ子

モ、オモシロサウニアソンデキ

マス。

三4 6 園 デテキテ、イツシヨニ

アソビマセンカ。」

三6 3 (略)、ヨロコンデイツシヨ

ニノハラヘアソビニイキマシ

タ。

三6 7 マサヲトモキチトオハ

ナガ三人デノハラニアソンデ

キマス。

三11 5 オトウトハ犬ガスキデ、

イツモブチトアソンデキマス。

四7 8 二人はまだ方々ながめ

て、あそんでゐましたが、(略)。

四76 1 オハルハヨロコンデ、友ダ

チヲヨビアツメテアソビマシタ。

五33 8 (略)、ナノ畠ニアソンデキル

蝶ヲ見ルト、ナノ花ガトビ立ツタノ

カト思ヒマス。

五63 7 園 あさつては八まんさまのお

まつりですから、朝早くからあそび

にいらつしやい。

五67 8 子ドモハフダンヨリハ美シイ

着物ヲ着テアソンデキル。

六11 6 それから又方々であそんで、

うちへかへつたのは夕方でした。

六22 8 一人の子どもが水がめのふち

へ上つて、遊んでゐるうちにふみは

づして、(略)。

六38 2 學校で雪投をして遊んだ。

六38 2 木村さんが遊びに來た。

八15 8 何モシナイデ遊ンデキルノハ
樂ナヤウニ見エルガ、却ツテ苦シイ
モノデアル。働クコトハ人ノ本分デ
アル。

九11 2 舞ヘヤ舞ヘヤ、花に草に。
蝶の遊ぶ時は今なり。

九12 1 歌ヘ歌ヘ、枝にこずゑに。
鳥の遊ぶ時は今なり。

九6 8 外國人の我が國に来る者亦
必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞
せざるものなし。

十一20 8 我が國に遊べる西洋人は
此の瀬戸内海の風景を賞して、世界
海上の一大公園なりといへり。

十一50 9 「馬が子供と遊んでゐるの
を見たことがある。

十一69 5 「よく勉強、又よく遊ぶ。」
はよく時間を利用する所以なり。

あだ「仇」(名) 2 仇

十二85 8 赤穂浪士が數年の苦難
を忍び、遂に主君の仇を報じて、從
容死に就けるは(略)、日本武士道
の精華を發揮せるものといふべし。

十二86 9 「主人は死し、主家は
亡びたるに、汝家老として仇を報ず
るを知らず、(略)。

あた「価」(名) 84 アタヒ あたひ
價 込ものにあたひ

六33 7 着物・羽織・ハカマ・オビ
ナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ
絹織物ニテツクル。

七29 4 (略)、絹織物のあたひの高い

のも、けつしてむりではない。
八38 2 マツチハーダースノ價三四
錢グラキナレバ、(略)。

八38 3 カクノ如ク價ノ安キモノニ
テ、カクノ如ク便利ナルモノハ世ニ
少カルベシ。

九89 7 是金銀ハ價高ク、(略)、直
段ノ變動モ少キ等、貨幣トスルニ最
モ便利ナレバナリ。

十一10 2 手數ノカ、ツタマツチノ價
ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造ス
ルカラデアル。

十一65 1 材料ノ種類ヤ料理ノ方法
ハ、(略)、經濟上ヨリハ、成
ルベク價ノ安イモノヲ求メ、(略)。

十一90 6 物の價は効用あること
と、隨意に得られざることにより
て生ずるものなり。

十一90 8 故に隨意に得られざるも
のなりとも、効用なきものは價ある
ことなく、(略)。

十一90 9 (略)、効用あるものなり
とも、隨意に得らるゝものは亦價あ
ることなし。

十一91 2 例へばこゝに一種の石あ
り、(略)、飾にも實用にもならざる
ものならば、之を買ふものなく、隨
つて價あることなし。

十一91 4 日光・空氣の如きは、
(略)、隨意に得らるゝものなれば、
之を買ふ必要なく、隨つて亦價ある
ことなし。

十一91 6 されど水は都會など
にては、時として價を生ずることあ
り。

十一91 8 物の價の高下は主として
需要と供給との關係によりて定まる
ものなり。

十一91 10 しかして供給の需要より
も少きときは物の價は高くなり、多
きときは安くなるなり。

十一92 3 (略)、其の五人は各其
の家の他人の手に渡らんことを恐れ
て、争ひて高き價をつくべし。

十一92 4 かくて其の家の價は段々
高くなりて、(略)。

十一92 4 (略)、最も高き價をつけ
たる人の手に渡るべきなり。

十一92 8 (略)、賣家の持主五人
は各其の家の賣れざらんことを恐れ
て、争ひて其の價を低くすべし。

十一92 9 かくて其の家の價は段々
安くなりて、(略)。

十一92 9 (略)、最も價を低くした
る人、其の家を賣ることを得べきな
り。

十一93 1 物の價はかくの如く需要
供給の關係によりて、或時は高く、
或時は安くなるものなれども、(略)。

十一93 4 此の金額を普通の價とい
ふ。

十一93 6 (略)、買手にはかに増す
ときは、靴の價にはかに高くなり
て、(略)。

十一93 10 かくる時は靴の供給次第
に増來り、靴の價はやうやく安くな
りて、(略)。

十一94 1 (略)、靴の價は(略)、
普通の價に復するか、場合によりて
は尚それ以下に下るべし。

十一94 3 又之と反對に、價次第に
安くなりて、普通の價よりも下るに
至る時は、(略)。

十一94 3 又之と反對に、價次第に
安くなりて、普通の價よりも下るに
至る時は、(略)。

十一94 5 (略)、供給も隨つて減じ
て、又普通の價に復するか、場合に
よりては尚それ以上に上るべし。

十一94 6 即ち物の價は普通の價を
本として上下すと知るべし。

十一94 6 即ち物の價は普通の價を
本として上下すと知るべし。

十一94 8 物の價はかく上下するも
のなれども、(略)。

十一94 10 (略)、需要増すに隨ひ
て、其の價益々高くなり、(略)。

十一95 2 即ち供給に限りあるもの
は一定の價なしといふべし。

あた「能」(四) 15 能フ 能ふ「一
ハ」

八81 9 かくる地方にては氣候つね
に寒冷にして、美しき花木を見るこ
と能はず。

九66 3 若し空氣ならんには、
(略)多くの生物は其の生を保つこと

能はざるべし。

九七六 一度ニ拾錢以上ノ貯金ヲナスコト能ハザル者ノ爲ニハ、郵便切手ニヨリテ貯金スル便利ナル方法アリ。

一二四 いくより見ても山にさへぎられ、かすみにへだてられて、其の全景を見ること能はず。

二五 若シ勇氣アラバ我ヲ殺セ。殺ス能ハズバ、我が勝ノ下ラクマレ。」

六九 墨を流したる如き空模様にて、一寸先をも見分くること能はず、(略)。

一三六 當臺北市街の如きは、(略)、街路井然、總督官邸をはじめ建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程に御座候。

一七六 裏見瀧は(略)、先年大風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝を見ること能はず。

一九一 是飲料水とぼくして、意のまゝに之を得ること能はざればなり。

二二六 武田勝頼大軍を率ゐて來り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず、攻めあぐみて長圍の計を取り、(略)。

二六六 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、(略)、山あれば越え、河あれば泳ぎ、道に當るもの一として之をさまたぐるこ

と能はざりきといふ。

二六九 (略)、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、飢餓刻々にせまるが故に、(略)。

二七四 遠征の船は(略)、船の(略)かくれ行くを見送りに、數萬の見物人は再び此の船を見ること能はざるべしと語れり。

二七八 人々始めて陸地の近きを知り、其の夜は一同うれしさに眠ること能はず。

二一〇 若し公衆の間に、規則を守り、規律を重んずる心乏しき時は是等文明の利器も其の運用を全くすること能はず。

あたう「与」(下二) 13 あたふ 與フ 與ふ「フーフルーへ」

九八〇 (略)、道眞は「驛長驚くなかれ、(略)。(略)」といふ意味の詩を作りてあたへたりといふ。

一〇八 されど森林のあたふる利益は是のみに止らず。

一〇五 (略)、森林は漁業の爲にも大いなる利益をあたふ。

二四六 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテイフヤウ、(略)トテ、其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。

四四九 曲線は直線よりもやはらかなる感覺を與ふるを以て、曲線を用ふれば、更に美しき模様を得べし。

八三一 (略)、農業を營まんとするものには土地を與へ、農具・種子等

を給し、(略)。

二四七 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形状も様々なり。

二四二 (略)、「さらば是にて本意を遂げよ。」とて、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしためたり。

二四四 正儀は河内にて領地を興へんとしたれども、熊王は「何の戦功もなければ。」とて受けざりき。

二四八 (略)、正儀は(略)、「今日は吉日なり、元服せよ。」とて、(略)、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。

二四六 かくて光範の與へたる刀には事の由を書添へて送り返し、(略)。

二九五 老人長者の爲に道をゆづり、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、(略)、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

二〇八 又貴族院及び衆議院は各獨立して上奏し、建議し、且臣民の請願を受くるの權能を與へられたり。

あたえる ひなげあたえる
あたかも「拾」(副) 6 アタカモ あたかも

二七八 五月五日ニ(略)、男子ノ福運ヲイノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。靖國神社ノ春ノ大祭ハアタカモ此ノ日ニ始ル。

一九四 (略)落葉・こけ及び(略)木の根などは、地上に落ちたる水をふくみさゝふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。

二八五 (略)ブラッシノ仕掛アリテ、縫紉ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。アタカモ人ノ頭髮ヲクシケヅルニ似タリ。

二九〇 「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。

二九五 天氣圖とは(略)一般の天氣要素を地圖の上に記載し、あたかも天上より下界を見下すが如く、一目に全國天候の如何を示すものなり。

二六九 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、遠く之を望めば、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

あたか「暖」(形状) 7 あたか温暖

二九一 はるになつて、だんだんあたかになると、枯れたあとから、まためをふき出して、(略)。

五〇七 ひるはあたかな日にてられ、夜は美しい月をうかべながら、休なしにあるきました。

六二二 ツバメハ暖ニナルト、ドコカラカトンデ來テ、涼シクナルト、マタドコカヘトンデ行ク。

- 八八〇 秋の日の空すみわたり、風暖にさてもよき日や。
 一七四 前面は海に臨み、後は山を負ひ、冬暖に夏涼し。
 一七五 氣候の暖なる間絶えず之を産出するを以て、(略)。
 一四三 我が國は氣候温に、地味肥え、極めて耕種に適し、米・麥の栽培は最も早く開けたり。
 あたたかい「暖」(形) 6 アタタカイ あたたかい アタ、カイ 暖い「イ」
 二三七 阿タタカイフトコロノ中へイレテ、ネンネコウタヲウタツテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 三三 哈尔ノアタタカイ日ニ、マサヲガ本ヲヨンデキマシタ。
 三九 あたたかい日「ひらがなのドル」
 一七 阿タタカイカゼガソヨソヨトムギノホノ上ヲフイテキマス。
 五三 茶ノ木ノ高サハ大デイ三四尺グラキデ、アタ、カイトコロニヨクソダツ木デス。
 六三 今日は天氣がよくて暖いから、うちではすゝはきをした。
 あたたか・し「暖」(形) 2 アタタカシ 暖し「ク」
 六七 春ハアタタカク、夏ハ暑シ。
 八三八 年のはじめの福壽草、黄金の色の暖く、(略)。
 あたたまりにくい「暖悪」(形) 1 温りにくい「イ」
 一〇七 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。
 あたたまる「暖」(四) 1 温る「リ」
 一七一 其の熱氣に温りたる水の自然に地上にわき出づるもの、即ち温泉なり。
 あたためる「暖」(下一) 1 温める「メル」
 一〇七 床下に土石を盛り、數條のみぞを造つて、一方の口から火をたいて室内を温める。
 あだな「渾名」(名) 1 あだ名
 一五七 馬クドナールは此の隊の司令官で、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。
 あたま「頭」(名) 26 アタマ あたま 頭 ヲしらがあたま
 二四 一「ヤツトカラダガデキマシタ。コレカラアタマヲツクリマセウ。」
 二四 一「コレデアタマモデキマシタ。」
 二七 四五日マヘニアタマヲダシタケノコガ、モウコンナニノビテ、(略)。
 三七 かねるは(略)。とんぼな

- どがあたまの上をとびまはつても、見むきもしません。
 四一 六 あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、(略)、ふじは日本一の山。
 四三 父は三郎のあたまをなでながら、「三郎はこんやは大そうもの知りになつたね。」といひました。
 四九 サカナノニホヒガシマスマガ、アタマモヲモアリマセン。
 五三 鯉ハ(略)。(略)、兩ワキニアタマカラヲマデ(略)ウロコガ三六枚ツツナランデキマス。
 五五 ぬぎりは(略)、その釜をあたまにかぶつて、兩手をついてぬぎり出しました。
 五九 鹿ガ(略)。フト水ニウツツタジブンノスガタヲ見テ、アタマカラ足マデツクノトナガメテ、(略)。
 七〇 食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。
 七六 犬の種類は(略)。(略)。
 あるものは頭大きくまるくして、しゝの如く、(略)。
 七九 ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。
 八五 駝鳥は鳥類の中で一番大きくて、卵も子供の頭程ある。
 九二 此の地に八岐の大蛇とて八つの頭と八つの尾とある大蛇あり、(略)。

- 九三 七 (略)、やゝありてかの大蛇あらはれ出で、八つの頭を八つの槽の中に入れ、酒を飲みてよひふしたり。
 九四 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「それは餘りな御言葉です。(略) どうぞ之を御覽下さい。」といつて、其の手紙を差出した。
 九五 (略)といひ聞かせた。水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。
 九六 赤き帽子のトルコ人、長き白布のくちと頭に巻ける印度人、(略)。
 九七 (略)、手ぬぐひ三尺引きしぼり、頭に結ぶはち巻は次第々々にすたれ行く。
 九八 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、其ノ上ニ頭ヲイタダキ、(略)。
 九九 身體ノ最上部ナル頭ノ中ニハ腦アリ。
 一〇〇 頭ノ骨ノ堅キハ腦ヲ護ランガ爲ナリ。
 一〇一 殺したる熊の頭は垣にかけて、永く之を保存するを以て、(略)。
 一〇二 鵜の鮎を吞むは必ず頭よりす。
 一〇三 くはへたる魚をふりかへて、頭より吞下す早業は、鵜匠のな

はさばきよりも一層の見物なり。
あたま【熱海】(地名) 2 熱海 熱海

173 図 我が國は(略)。温泉の多
きこと(略)。中にも最も世に知ら

れたるは、西に道後・有馬、東に箱
根・熱海・伊香保等あり。

174 図 熱海は伊豆の東岸にあり。
前面は海に臨み、後は山を負ひ、冬

暖に夏涼し。
あたらし【新】(形) 12 新シ 新シ

『シー・シー・シキ』
758 1 図 コノ公園ハ新シクシテ、古

木多カラザレド、種々ノ草花ウルハ
シク咲キミダレタリ。

83 1 図 神殿は昔ながらの白木造に
して、二十年ごとに新しく造らせた

まふ御定なりと承る。
871 7 図 諸君我を苦しめんとし

て、此の數日間少しも食物を送らざ
るが故に、新しき血出來ずして、

(略)。
895 7 図 近年新しき港も成りたれ

ば、海陸運輸の便益々開け、(略)。
940 1 図 今ハ此ノ七湯ノ外ニ新シキ

温泉場モ開ケ、廣キ新道モ出來、山
ノフモトナル湯本マデハ電車サハ開

通セリ。
948 7 図 夜明くれば、砂の上に新し

き駱駝の足跡あり。
960 9 図 時々障子を明放ちて、新し

き空氣を流通せしむべし。
960 10 図 人多き都會に住む者は、

折々野外に出でて、新しき空氣をす
ひ、又朝早く起きて、木立しげき公
園等を散歩すべし。
961 9 図 (略)、早く寝ね、早く起

き、新しき空氣をすひ、常に日光に
浴して、なほ病にかゝらば、是我が

罪にあらず。
176 1 図 心臓ハ肺臓ヨリ來ル新シキ

血ヲ全身ニ送り、又身體ノ各部ヨリ
歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ

送ル。
117 7 図 其の數餘りに多くなる時

は、女王は新しく生れたる雌蜂に其
の位をゆづり、臣下をひきゐて分離

す。
1265 4 図 最も人目を引くものは國

會議事堂なりといへども、其の規模
甚だ大ならず、其の建築も亦新し。

あたらし【新】(形) 6 アタラシイ
新シイ 新しい『一イ』

329 1 (略)、タケノカハガオチ
テ、リツバナ竹ニナリマス。アタ

ラシイ竹ハアヲアヲシテ、マ
コトニウツクシイモノデス。

569 5 オ宮ニハエマガタクサンカケ
テアル。古イノモ新シイノモアル。

571 6 図 『ジブンノ角ハ(略)。(略)』
毎年春ニナルトオチルガ、オチルト

スグ又新シイノガハエテ、ソノタビ
ニ枝ガ一ツツツフェル。

674 6 (略)、新しいしるしばんてん
を着てゐる大工が一番目立ちます。

736 3 町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸
工場ガ出來タ。
931 8 フルトンは之に驚かず、更に
新しい機關をイギリスに注文して、

又一つの船を造つた。
あたり【辺】(名) 7 アタリ あたり

ひさくちようあたり・そこらあたり・
まのあたり

548 5 (略)、顔を上げて、そのあ
たりを見まはすと、かみなりがおち

て、その高い木がまつ二つにさけて
ゐました。
844 図 (略)、宇治橋のたもとにい

たる。このあたり御山木細工・貝細
工などを賣る店多し。

956 6 図 尊之を受けて、進みて駿
河の國に至り給ひしに、(略)、「此

のあたりに鹿多し。かりし給へ。」
917 2 図 霞浦・北浦等ノ合流スルア

タリニハ名勝ノ地少カラズ。
972 8 図 (略)、二十八日は終日大

暴風雨にて、川近きあたりにばつ
く立退きたる者もこれあり、(略)。

163 2 図 此ノアタリ、元ハ山間ノサ
ビシキ村落ナリシガ、(略)。

114 2 図 陵に至る路のあたり櫻樹
多し。

あたり【へ】あたりしだい・ひあたり
あたる【当】(四・五) 24 アタル あ

たる 當ル 當る『一ツ・一リ・一ル・
一レ』ひあいあたる・つきあたる・み

あたる

236 1 ヤハウマクアタリマシタ。
236 1 アタルト、モチハ白イト
リニナツテ、バツトトンディキ

マシタ。
233 3 かわいいものにあたればこ

はれます。私はなんぞせう。
416 2 (略)、矢ににあたつたゐの

ししが、(略) かけおりて來まし
た。
58 1 天皇ハ(略)、天皇ノオクラ

キニオツキニナリマシタ。ソノ日ハ
二月十一日ニアタリマスカラ、コノ

日ヲキゲンセツト申シテ、(略)。
556 3 人ハ(略)。又サムイ時ニハ

火ニアタリマス。
618 5 図 カネ尺ハクデラ尺ヨリ少シ

ミジカク、ソノ一尺ハクデラ尺ノハ
寸ニアタル。
888 3 (略)、間モナク砲彈ノ破片ガ

中佐ノコシニアツテ、中佐ハドウ
ト其ノ場ニ倒レタ。
895 2 図 名古屋は平野の間にあり。

四通八達の要路にあたれるを以て、
早くより東海道一の大都會なりし

が、(略)。
915 6 図 栗橋ハ東北鐵道ノ通路ニア

タリ、一大鐵橋カ、レリ。
916 5 図 鬼怒川ノ落合フ所ヨリ少シ

ク下流ニアタリテ船戸アリ。
938 9 図 箱根山ハ(略)。東海道ノ

通路ニアタレラヲ以テ、昔ハ人馬ノ
往來甚ダ盛ナリキ。

九415 〔略〕此ノスリバチノソコニアタ

レル所ハ大ナル噴火口ニシテ、(略)。

九951 〔略〕是より西南にあたりて、家

光の廟あり、(略)。

十一89 〔略〕蜜蜂の群集生活を營むを得るは、(略)、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體の爲には身命ををしまざるによる。

十一326 〔略〕巡洋艦ハ軍艦中最モ任務ノ多キモノニシテ、戦艦ト共ニ敵ニ當リ、(略)。

十一1138 〔略〕其の翌年學校の經費を議するに當リ、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。

十二62 〔略〕東郷司令長官は(略)、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當リ、(略)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二81 〔略〕、鬱陵島附近に集りて敵を待ちしが、東方に當りて、はるかに數條の黒煙を見る。

十二355 〔略〕コ、ニ本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

十二669 〔略〕、山あれば越え、河あれば泳ぎ、道に當るもの一として之をさまたぐる。こと能はざりきといふ。

十二878 〔略〕「あ、余死せん。(略)。我が心の良雄を默待せしは罪

死に當れり。」

十二1048 〔略〕公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、(略)。

十二1068 〔略〕、及び各府縣に於て多額の直接國税を納むるもの十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるものはなり。

あちら「彼方」(代名) 10 アチラ あちら

一321 アチラ デモコチラ デモタノクサヲトツテキマス。

一426 ヒゴヒガ(略)、四ヒキマス。アチラ カラモ一ビキキマス。

二25 アチラノソラガマツカニナリマシタ。

二137 〔略〕「ドコヘナガレディクノデセウ。」「アチラノ大キナ川ヘナガレコムノデス。」

二614 〔略〕、アチラノ山モ、コチラノ山モ、一メンニミゴトナハナザカリニナリマシタ。

五404 こちらの方は、これからの人の切符を切つてゐるのです。あちらの方は、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。

七161 〔略〕東京へ立ちます。用事は四五日ですむはずですが、十日ばかりはあちらに居ます。

七163 〔略〕、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、御系

なりよなくおつしやつて下さい。

八416 火事だ、火事だ。どこだらう、あまり遠くはないらしい。あちらの空がまつかだ。

十291 犬を運れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、あぜ道傳ひにあちらの岡へ向つた。

あちらこちら「彼方此方」(代名) 7 アチラコチラ あちらこちら

三486 水の中ではあと足で水をかきながら、あちらこちらへおよぎまわります。

五372 すぎるはさうとは心づかず、あちらこちらをたづねまはつて、(略)、たくさんの子どもをもらつて、つれて来ました。

六394 〔略〕今日は朝からあちらこちらを見物した。

六777 小サナ和船モアチラコチララコギマハツテキル。

七98 〔略〕、あちらこちらに桑つむをとめ、日まし／＼にはるごも太る。

十668 他のボートを見れば、(略)ものもあり、(略)ものもある。あちらこちら入亂れて戦場のやうである。

十二209 又ひよやつぐみは美しく熟してある果實をついばむ。それが爲におのづと種子をあちらこちらへ散布する。

あつ(感) 1 アツ

八304 〔略〕死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、(略)。

あつ「当」(下二) 3 あつ 當つ「ツル・ーテ」

十704 〔略〕此の間岩にも當てず、波にもまかせず、岩と波との間にボートをあやつり居たる少女の働は、人間業とは見えず。

十一739 〔略〕、今度はひちを張り、足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の臥したる様をなせり。

十一1153 〔略〕、其の利益を以て學校の基本金とし、其の一部をさきて、一村共同の有益なる費用にあつることとせり。

あつい「厚」(形) 2 アツイ 厚イ「ーイ」

八846 橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツタ。

十二131 〔略〕、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切断スル。

あつい「暑」(形) 6 アツイ あつい 暑イ 暑い「ーイ」

四376 マダコノホカニ麥ワラデ作ツタ物デ、アツイジブンニツカフ物ガアリマス。

五288 〔略〕、七月・八月あついころ、三日三ばんの土用ぼし、(略)。

八328 夏のどんな暑い日でも、あ

せを流しながら、暮方まで働いてゐた。

十一65 暑イ時分ハ其ノ必要ナク、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

十一107 朝鮮は夏も暑い、冬は又案外に寒い。

十一111 暑い時分汽車に乗つて朝鮮を旅行すると、どここの山陰にも白い着物が乾してある。

あつ・い「熱」(形) 1 熱イ「イ」

十五 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、(略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出来ルサウデアル。

あつかい ひとくしゅとりあつかいりょう・とりあつかい

あつかう「扱」(四) 1 扱フ「フ」ひとあつかう

十一87 今ハ僅カニ六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。

あつさ「厚」(名) 1 厚さ

九63 田村麻呂は身の丈五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、體重は三十貫を越え、(略)。

あつさ「暑」(名) 1 暑さ

九43 暑さに増し候へば、何とぞ御身御大切に成し下され、(略)、御歸りの程御待ち申上候。

あつさり(副) 1 アツサリ

十二65 寒イ時ハ(略)アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、暑イ時分ハ(略)、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

あつし「厚」(形) 12 アツシ あつし厚シ 厚し「キーク」

八14 代々の天皇は皇大神宮をたふとびたまふときはめてあつく、國民もまた深くうやまひ奉りて、(略)。

九30 國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、誰カハ義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。

九63 かばかりの大功ありし人故、天皇の御信任も厚く、其の薨ぜし時、天皇は深く之ををしみ給ひき。

十83 あいぬの數、(略)。されば北海道舊土人保護法と稱する法律ありて、(略)、厚く保護の方法を講ぜり。

十一32 故ニ何レモ大ナル大砲ヲ備へ、又艦ノ要部ハ極メテ厚キ鋼鐵ニテ包メリ。

十二95 冬は寒氣厳しく、(略)、海岸も海水厚く凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、(略)。

十一113 兒童は(略)、學校を思ふ心厚く、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。

十二38 蘭相如といふ賢臣あり。敵國案に使用して功ありしかば、趙王厚く之を用ふ。

十二57 其の炭坑は炭層厚く、炭量亦豊富なり。

十二63 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。

十二85 皇后も亦コロンプスを見引して、厚く其の勳功を賞せり。

十二115 太古以來忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、(略)。

あつし「暑」(形) 3 暑シ 暑し「カラーク・シ」

六7 春ハアタタカク、夏ハ暑シ。

八82 又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。

八83 我が日本の國の大部分は、冬も甚だしく寒からず、夏も甚だしく暑からず、(略)。

あつし「熱」(形) 3 熱し「キーク」

十二8 「熱き國」しげる林 1 生ひ立ちし 我、タガヤサン、(略)。

十七 數日の後、水夫は此の少女の手に熱き感謝の涙をそそぎて、我が家が歸りたりとぞ。

十一89 熱き地方の白蟻は周圍十

間、高さ三間にも達する小山の如き巢を造り、(略)。

あつし「厚」(名) 3 あつし織

十80 あいぬの風俗は(略)。(略)。又あつし織の短き袖を着、足にもあつし織のきやはんをはく。

十80 又あつし織の短き袖を着、足にもあつし織のきやはんをはく。

十80 あつし織とは、おひょうといふ木の皮を細く裂きて織りたる織物なり。

あつた「熱田」(地名) 1 熱田

八95 名古屋の南に熱田あり。今合して名古屋市の一部となれり。

あつたじんぐう「熱田神宮」(名) 1 熱田神宮

九6 草薙劍は尾張の國にとゞめ給ひしかば、宮を建ててそこにまつれり。今の熱田神宮即ち是なり。

あつた「天晴」(形状) 1 あつたばれ 九21 八幡様に日参いたし候も、そなたがあつたばれなるてがらを立て候様との心願に候。

あつまりきたる「集来」(四) 3 集り来る「リール」

十10 總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り来るものなるを以て、(略)。

十一 82 4 魚は火の光を追ひて集り來り、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、(略)。

十二 67 9 (略) オレンジの熟する季節には、數多の猿遠く數百里の地より集り來りて之を食ひ、(略)。

あつまる [集] (四・五) 21 アツマルあつまる 集ル 集る 『一ツ・一リ』

四 30 1 三郎のうちでは夕はん

が今すんで、みんなあつまつて、色色なはなしをしてゐます。

五 2 5 よい神さまがたは、(略)、一

同あまの岩戸の外にあつまつて、おかくらをおはじめになりました。

五 11 7 それから田や畠の間を通つて來るうちに、(略)、なかまがあつま

つて來て、いよくにぎやかになりました。

五 15 6 大キナコヒガタクサンアツマツテオヨイデキルノハ、マコトニミ

ゴトナモノデス。

六 74 6 男や女や年よりや子供も大ぜい集つてゐますが、(略)。

七 72 8 中デオモシロイノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキル。

九 9 8 (略)、ニンジンノ様ニカラカサヲヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモアル。

九 10 4 タンボ、ヨメナナドハ一リン咲ノ様ニ見エルガ、實ハ一ツノ莖

ノ上ニ、タクサンノ小サナ花が集ツテ咲イデキルノデアル。

九 34 6 いよく鐵道が出來て、汽車の運轉をして見る日になると、四方からの見物人は雲の如く集つた。

九 41 1 旅人ノ往來盛ナリシ箱根驛モ、浴客ノ多ク集レル今ノ箱根七湯モ、(略)。

九 53 7 黄色ノ蝶ハ菜種ノ花ニムラガリ、白色ノ蝶ハ大根畠ニ集ル。

九 82 10 やがて五人の騎手は(略)、靜々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて來た。

十 7 5 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキル。

十 8 4 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イデキル。

十 28 7 唯あぜの様の木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。

十 73 9 (略) は有馬の温泉にして、京都・大阪に近ければ、浴客多く集り、すこぶる繁榮せり。

十 89 2 (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、(略)。

十一 99 7 (略) 多來加灣頭に小さき海豹あり、夏より秋にかけてこゝに集る鰐鰐獸は數千頭にも達すること

これあり候。

十二 7 10 我が艦隊は(略)、爵陵島附近に集りて敵を待ちしが、(略)。

十二 71 8 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。

十二 83 4 聴衆は四方から集つて來て、見る内に人山を築いた。

あつむ [集] (下二) 12 集ム 集む 『一メ』

七 6 7 (略)、『残りタル一門ノモノドモヲ集メテ、朝敵ヲホロボセ。』ト申シ殘シタリ。

七 24 2 アル夜弟子ヲ集メテ、書物ノ講義ヲセシ時、(略)。

七 54 7 上野公園ニハ廣キ動物園アリテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メタリ。

九 14 10 (略) サ、ヤカナル細谷川ハ、流れ下ルニシタガヒテ、數多ノ小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。

九 29 4 (略)、内外古今ノ武器其ノ他軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九 29 6 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、昔ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ造リタルモノニシテ、(略)。

十 76 2 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臟ニ送ル。

十 97 4 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。(略)。我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。

十一 14 3 然るに今、主上隠岐に遷され給ふと聞き、一族共を集めていへるやう、(略)。

十一 82 2 かなり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、(略)。

十一 85 5 此ノ流ハ自ラ集メラレテ、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入ル。

十二 27 3 信昌將士を集めていふやう、(略)。

あつめきたる [集米] (四) 2 集め來る 『一リ・一ル』

十一 6 9 働蜂中には蜂の集め來る蜜を檢査する檢査掛あり。

十一 7 2 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、(略)。

あつめる [集] (下二) 2 集メル 集める 『一メ』 凸かいあつめる・かきあつめる・よびあつめる

五 36 6 昔雄略天皇が(略)、こをたくさん集めて來いとおほせになりました。

十一 9 6 (略)、十二箱ヅツ集メテ紙ニ包ム者、皆ソレハニチガフ。

あて [当] 凸めあて

あて [宛] 凸たかのよしだらうあて

あてな [宛名] (名) 1 あて名

五 66 7 それから表の方へあて名を書いてお出しなさい。

あてる [当] (下二) 3 アテル あてる 『一テ』 凸おしあてる・さがしあ

てる・わりあてる

四五一 何デセウ。アテテゴランナサイ。

五四三 (略) 耳がさけるやうなおそろしいかみなりが鳴りました。」二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふれました。

五八四 この時よしつねは、「(略)。」といひながら、馬に一むちあててかけ下りた。

あと「後」(名) 22 アト あと 後

一三九 (略) クルマ ニツンダ タカラモノ、(略) サルガ アト オス エンヤラヤ。

三二二 バンノゴハンノスندگان アトデ、オヂイサン ハイロイロナオモシロイ ハナシヲキカセテクダサイマス。

四二八 (略) 「一バン太イノガオヤユビ、一バン小サイノガ小ユビデ、マン中ノ一バン高イノハ、中ユビトモ、高高ユビトモイヒマス。アトノ二本ハ知リマセン。」

四二九 (略) はるになつて、だんだんあたたかになると、枯れたあとから、まためをふき出して、(略)。

五二四 (略) あとから馬おひおひついで、ちよんくくく すいつちよん。

六三〇 直吉は後でふと氣が附いて、

「(略)。」といつて、すぐに追つかけて行つて、残りの一錢を渡した。

六三二 (略) あとになつて、主人はこの事を聞いて、直吉は正直ものだと思つて、長松にはひまをやつた。

六六七 (略) 後カラ一ツツヌケテオチルノヲ知リマセン。ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ來ルコトガアリマス。

六七〇 一人の年取つた男が(略) 木やりの歌を歌ひ出すと、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

七〇六 (略) かへる道々あと見かへれば、葉末々に夜つゆが光る。

七二八 (略) 品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけです。

七三七 (略) 人ハ皆前へ前へト進ンデ行ツテ、後へハ引キカヘサナイカラ、(略)。

八二九 (略) 幾度カマハリタレドモ、入ルコトヲ得ズ、クチヲシクモ工ノ笑聲ヲ後ニシテ歸レリ。

八三四 (略) 去年の暮に死んでしまつた。(略) 若いむすこが、今では其の後をついで、朝から晩まで相かはらず、「トントンカン、トントンカン。」と働いてゐる。

八四一 弓張を持つて走る人が、後から後からとつづいて飛んで行く。

八四八 弓張を持つて走る人が、後から後からとつづいて飛んで行く。

一二五 (略) 「我々元丹波の松よ、山こむる霞を後よ、いかだして都に來けり。」

一三五 (略) 馬も(略)。死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。

一四三 (略) 佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、かく諸國を巡り歩くなり。」

一六〇 (略) 出征兵士の弟ぞ、我は。兄君、我も後より行らん。兄弟共に敵をば討せん。

一六六 (略) 例へば(略)、又汁氣ノナイモノノ次ニハ汁物ヲ出シ、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。

一二九 (略) 余の彼を避くるは國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」

あと「跡」(名) 10 アト 跡 ヲ あしあと・せきしよあと・だんがんと

九三九 (略) 昔ノ關所ハ僅カニ其ノアトラ止ムルノミ。

九六六 (略) されば一年中遊覽者跡を絶たず、(略)。

一〇七五 (略) 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ跡ニシテ、今ハオホムネ田畠トナレリ。

一〇八四 (略) コ、ニ程近キ飛鳥ノ安居院ハ古ノ飛鳥寺ノ跡ニシテ、(略)。

一一二九 (略) 藏王堂の東なる吉水神社は醍醐天皇の行宮の跡なり。

一一四八 (略) 「それ、馬主が逃げた。」といふので、大將の部下の二三人は直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。

一一〇六 (略) 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

一一一七 (略) 建國以來三千年 歴史の跡にかんがみて、日進月歩ゆるみなき 同胞すべて六千萬。

一二二五 (略) 上るや石のきざし、の、左に高き大銀杏、問はばや、遠き世々の跡。

一二六五 (略) 露西亞の狼は行くく雪中に倒るゝ佛兵の跡を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。

あとあし「後足」(名) 2 あと足 後足

三二五 水の中ではあと足で水をかきながら、あちらこちらへおよぎまわります。

六六五 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、後足デ立上ツテ、大キナ手ノヒラデツカミカ、ツテ、(略)。

あな「穴」(名) 6 穴 ヲ あしあな

五五五 シカタナシニ、ヒルノ間ハ木ノウロヤ穴ノ中ニカクレテサテ、(略)。

六二四 (略) 大きな石を持つて來て、力まかせに投げつけました。それがため、かめに大きな穴があいて、水が流れ出しましたから、(略)。

七七八 文 園 のきよりおつる雨だれの

たえず休まず打つ時は、石にも穴をうがつなり。

十一八八五 文 蚯蚓は地下に穴をうがちて住み、(略)。

十一八八六 文 蚯蚓は地下に穴をうがちて住み、多量の土を呑込みては之を地上の穴の口に出す。

十一八九五 文 蟻は(略)、多くは地下に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

あな(感) 1 あな

十一五三一 文 手塚、首をたづさへて、(略)。(略)。樋口は一目見て、「あ

な、むざんや、實盛にて候。」

あなた「彼方」(代名) 1 あなた

十644 はるかあなたに白い水煙が見える。

あなた「貴方」(代名) 8 アナタ あ

なた

一四八3 ワタクシガコチラノハシ

ヲモツカラ、アナタハソチラ

ノハシヲオモチナサイ。

四二七8 園 あなたのおなまは大

てい枯れてしまつたやうです。

四六13 園 アナタハノチニハ、キ

ツト兄サマガタヨリモ、オエラ

クオナリニナリマス。」

七196 園 あなたと私は親類ださうで

ございますから、どうかこれからお

心安く願ひます。」

七二〇7 園 「あなたと私は大そう似て

ゐるではありませんか。

七二〇8 園 第一あなたにも私にも豆が

なります。

七二19 園 「あなたはその美しい花

だけでたくさんでございます。

七二二1 園 あなたほどの大きな花ぶさ

は見たことがございません。

あなたがた「貴方方」(代名) 3 あな

たがた あなた方

四四81 あなたがたは何じかんが

くかうに居ますか。

九八69 園 「もう改めて勝負には及び

ません。勝はあなた方のものです。

九八72 園 どうか今日から一年の

間、あなた方の村が五箇村の頭にな

つて、御支配をなさつて下さい。」

あなたさま「貴方様」(代名) 1 あな

た様

七四25 園 あなた様にも、(略)、主人

のお目にとまるやうになされるのが

大事と考へまして、今日このお金を

出しましたのでございます。」

あなた「俺」(四五) 3 俺る 『一

ラール』

十539 園 平生にても、若き人は白

髪を見て侮る心あり。

十一1094 チヨンガーの間は人に侮ら

れるから、成るべく早く冠禮を行

ふ。

十二1132 園 (略)、小敵を侮らず、大

敵を恐れず、十分に自己の職務を盡

へ給ふ。

あに「兄」(名) 3 あに 兄

四336 あにの次郎が又よこか

ら、「(略)」。

八165 園 禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、

「(略)。」トイヒシニ、(略)。

十158 園 紫式部は幼き頃より物覺よ

く、兄の書を読むを聞きゐて、直ち

に之をそらんじ、(略)。

あに「豈」(副) 1 豈

十二1164 園 (略) 忠勇の精神は我等

が祖先の教訓なり。我等豈一日も之

を忘れんや。

あにおと「兄弟」(名) 1 兄弟

六833 園 (略)、みきは一つの枝と

枝、仲よく暮せよ、兄弟・姉妹。

あにがみさまがた「兄神様方」(名) 1

アニ神サマガタ

四591 アニ神サマガタノオトモ

ヲシテ、フクロヲカツイデイラ

ツシヤツタノデ、(略)。

あにがみ「兄君」(名) 1 兄君

十一604 園 出征兵士の弟ぞ、我は。

兄君、我も後より行らん。兄弟共に

敵をば討さん。

あにさまがた「兄様方」(名) 1 兄サ

マガタ

四六14 園 アナタハノチニハ、キ

ツト兄サマガタヨリモ、オエラ

クオナリニナリマス。」

あにわわん「亜庭湾」(地名) 2 亜庭

湾 亞庭湾

十一986 園 鯨の主産地は西海岸及

び亞庭湾、鰹の主産地は東海岸にて、

(略)。

十一98 園 亞庭湾

あね「姉」(名) 5 アネ あね 姉

四316 その時あねのおはるは、

「三郎さんはまだそれを知ら

なかつたのですか。(略)」。

四731 オハルハアネニテツダツ

テモラツテ、オヒナサマヲカザ

リマシタ。

五642 園 九月十三日 あねより お

ちよさま

五681 オチヨトオハナハアネニツレ

ラレテ、オ宮ニサンケイシタ。

六605 園 姉のおつるは立ちよつて、

(略)、ことばやさしくなぐさめる。

あねいも「姉妹」(名) 2 あねいも

と 姉妹

六598 園 身をきるやうな北風の吹

く夕暮にあねいもと、かへりをいそ

ぐ野中道。

六833 園 (略)、みきは一つの枝と

枝、仲よく暮せよ、兄弟・姉妹。

あねうえ「姉上」(名) 1 姉上

九432 園 姉上も最早御全快にて、

四五日前より起きて蠶の世話をなさ

れ居り候。

あの「彼」(連体) 27 アノ あの

一283 アノハタヲゴランナサ

イ。アレガグンキデス。

二133 園 「コノ川ハドコカラナ

ガレテクルノデスカ。」アノ山ノオクカラナガレテクルノデス。」

二23 6 図 ワタクシハアノモノオ

キノ中ヘカクレマス。」

二24 8 図 「ドコダラウ、アア、アノ

木ノ下ニタケヲサンガキ

マス。」

二45 6 アノ太イ木ハカレタヤ

ウニエマスガ、ツボミガタ

クサンツイテキマス。

二46 8 グランナサイ、アノオヤネ

ニハウメバチノ大キナモンガ

ツイテキマス。

二33 5 ナヘヲウエテキル女ハ、

(略)、コエヲソロヘテ、ウタツ

テキマス。アノウタヲオキキ

ナサイ。

二34 2 グランナサイ、モウアノ

ヒロイ田ガハンブンバカリウ

ワリマシタ。

二34 4 グランナサイ、(略)。イマ

ニアノナヘガノビテ、アライ

タタミヲシタヤウニナリマ

セウ。

二56 7 アノキモノトハカマハ

ニイサンノデス。

二60 6 今にあのあみをだんだ

んはまべへひきよせてくると、

(略)。

四4 8 図 「あそこに高い火の見

のはしこが見える。あのこちら

に白いかべが見えませう。

四6 1 図 あの川むかふの木の

しげつてゐるのが、八まんさま

のもりです。」

四6 7 図 今あのはしの上を人

がいくたりとほつてゐますか。」

四65 8 今あのをめ木の枝

から枝へとんでゐます。

四78 4 図 「あの扇をいおとすもの

はないか。あれをいらないと

いふのもざんねんだ。

五41 8 まだむかふからいそいで走つ

て来る人があります。あの人はもう

間に合はないでせう。

七22 8 図 私どもの親類で、小さくて

かはいらしいのは、あの春の野に咲

くれんげ草でございませう。」

七40 8 図 「あゝ、金がない程残念な

ことはな。武士としてはあのくら

ゐな馬をもつて見たい。」

七49 8 図 (略)、日本紙ハ神ダナヲ指

サシテ、「ソナニイバツテモ、ア

ノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマ

イ。」トイヒマシタ。

七80 8 図 「私も(略)、皆さんと同じ

様に、あの運動場で體操をしたり、

この講堂でお話を聞いたりしてゐた

のです。

八9 5 図 (略) いでや、あの岩の小かげ

に、皆うちよりてえもの数へん。

九86 4 図 相手の熊吉があので、

今日の勝負はきまらないが、(略)。」

十34 8 或人が主人に向つて、(略)、

どういふ御見込で、あの青年を御用

ひになつたのかとたづねた。

十36 4 図 (略)、中にはそれをふんだ

者もありましたが、あの青年ははい

ると直に書物を取上げて、テーブル

の上に置きました。

十一56 8 さては生きてゐるのか。あ

の勇ましい少年を殺してはならぬ。

十二82 10 老人は、どうしてあのバイ

オリンから、あんな音が出るか、

(略)と不思議さうにバイオリンと紳

士の手つきを打ちまもつて居た。

あばらぼね「肋骨」(名) 1 あばら骨

七59 8 図 犬の種類は(略)。(略)。

あばら骨の数へらゝ程やせ細りた

るものあり。

あばれる「暴」(下二) 1 あばれる

《一レ》

四18 1 ゐのししはますますあば

れてかけおります。

あびせか・く「浴掛」(下二) 1 アビセ

カク《一クル》

七91 9 図 (略)、敵ノ砲臺ヨリハ砲

丸ヲアビセカクルコトイヨく盛ナ

リ。

あひる「家鴨」(名) 4 あひる

八55 4 又にはとり・七面鳥・あひる

などは(略)高く飛ばないから、其

のつばさが小さい。

八58 5 尾の短いのはかはせみ・あひ

るなどで、(略)。

十29 7 二三羽のあひるが岸の霜柱を

ふみくだきながら、しきりにゑをあ

さつてゐる。

十88 1 其の外あひるや七面鳥なども

家に飼はれる鳥である。

あ・びる「浴」(上一) 2 アビル《一

ビ》

四57 5 図 「ソレナラ海ノ水ヲア

ビテ、ネテキルガヨイ。」

四57 8 白ウサギハスグ海ノ水

ヲアビマシタガ、(略)、ナホナホ

クルシンデキマシタ。

あぶない「危」(形) 2 あぶない《一

イ・カッ》

五46 8 図 音次郎はおどろいて、道ば

たの高い木の下へにげこみました。

友吉は「略」。かみなりの鳴る時に

は、そんな所にあるてはあぶない。」

といつて、(略)。

五48 8 図 「あゝ、あぶなかつた。も

し君が居なかつたら、僕は死んでし

まつたのだらう。」

あぶら「油」(名) 4 あぶら 油 ぐき

かいあぶら・すみとあぶら・たねあぶ

ら・まめあぶら

五58 8 油ニモ色々アリマス。魚カラ

トツタモノモアリ、ケモノカラトツ

タモノモアリ、シヨクブツカラトツ

タノモアリマス。

五60 8 ランプニトボスノハ石油トイ

ヒマス。(略)、ワキ出タママノハニ

ゴツテキマスガ、シアゲルト、スキ

トホツタ油ニナルノデス。

十677 鯨は(略)。其の肉は食用と

なり、あぶらは機械油になり、(略)。

十866 豚肉はあぶらに富んでゐて、

養分の多いことは牛肉におとらぬ。

あぶらけ「脂気」(名)1 アブラ氣

十一656 寒い時ハ特ニ體温ヲ維持

スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他ア

ブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、

(略)。

あぶらな「油菜」(名)1 アブラナ

十81 アブラナ・ツバキナドノ葉ハ

一ツオキニ莖ニ附イテ居リ、(略)。

あぶらむし「油虫」(名)3 油蟲

十一889 蟻は油蟲を養ふ。

十一889 油蟲は植物の若芽・若葉

などに群り着きて、其の植物の汁を

吸ひ、身體より絶えず甘き汁を出す

ものなれば、(略)。

十一891 (略)、蟻は此の甘き汁を

得んが爲に、油蟲の附着せる植物に

集りて之を保護し、(略)。

アフリカ「地名」4 アフリカ アフ

リカ 亞フリカ

八77 亞フリカ

八791 亞フリカ大陸の西、ヨーロッパ

大陸の南にある大陸をアフリカといふ。

十二671 (略)、亞フリカ・印度

の獅子、南亞米利加の野牛等の、

(略)、食物を追うて其の居を轉ずる

は珍しきことにあらず。

十二776 巴ロスを出帆して七日目

に、亞フリカの北西岸に近きカナリ

ヤ島に着し、(略)。

アフリカじん(名)1 アフリカ人

八836 アフリカ人は皮膚黒く、髪

ちざれたり。

アフリカたいりく「地名」1 アフリカ

大陸

八797 (略)、ヨーロッパ大陸とア

フリカ大陸との中間にある地中海を

過ぎ、(略)。

アフリカネグロじん(名)1 アフリ

カ、ネグロ人

八82 亞フリカ、ネグロ人

あふる「溢」(下二)2 アフル あふ

る「ルル・イレ」

九422 (略)、湖水ノアフレテ流ル

、モノハ即チ早川ナリ。

十753 此の地も亦夏甚だ涼しくし

て、暑をさくるによろしければ、夏

時浴客あふるゝばかりなり。

あふれる「溢」(下二)1 あふれる

「イレル」

十二847 銅貨といはず、金銀貨とい

はず、雨の降る様に手當り次第に投

込む。(略)。老人は之を袋に移し

て、再び帽子を差出す。見る間に復

あふれるばかり。

あべのなまかる「安倍仲麻呂」(人名)

1 安倍仲麻呂

十962 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリ

テ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月

ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。

あべのひらふ「阿倍比羅夫」(人名)1

阿倍比羅夫

九622 蝦夷は(略)、齊明天皇の

御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、

其の後も度々叛きて、(略)。

あまい「甘」(形)3 アマイ 「イ

ク」

四108 一本ハキザハシデ、モウ

アマクナリマシタ。

四115 サハストアマクナツテ、

タイソウウマイカキデス。

十一666 (略)、アマイ物ノ後ニハ塩

カライ物ヲ配合スル類デアル。

あまえる「甘」(下二)1 あまえる

「イエ」

七174 おほせにあまえて申し上げ

ますが、種物屋から西洋西瓜の種を

三色ばかり買つて來ていたゞきたう

ございます。

あまがえる「雨蛙」(名)1 雨ガヘル

九535 田ニスムカヘルハ土色ニシ

テ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ綠色

ナリ。

あまし「甘」(形)3 アマシ 甘し

「キーシ」

六536 塩ハカラク、砂糖ハアマ

シ。

十二8810 油蟲は(略)、其の植物

の汁を吸ひ、身體より絶えず甘き汁

を出すものなれば、(略)。

十一891 (略)、蟻は此の甘き汁を

得んが爲に、油蟲の附着せる植物に

集りて之を保護し、(略)。

あま・す「余」(四)2 餘す 「一ス・

セ」ひもてあます

十二272 城中には僅かに四五日の

糧食を餘せるのみ。

十二697 過ぐる處の沿路、果實・

草根を始め、凡そ取つて以て食ふべ

きものは殆ど餘す所なし。

あまた「數多」(副)6 アマタ 數多

七563 雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀

音堂ニ向ツテ行ケバ、兩ガハニアマ

タノ店アリ。

九149 (略)細谷川ハ、流れ下ル

ニシタガヒテ、數多ノ小流ヲ集メ、

沼田町ニ至ル。

十一299 諸子ハ數多アル我ガ軍艦

ノ名ヲ知レルナルベシ。

十一375 (略)、其の外支那形船

に限りて許されたる數多の開港場も

これあり候。

十一756 我が國には數多の瀑布あ

り、(略)。

十二678 (略)、數多の猿遠く數

百里の地より集り來りて之を食ひ、

(略)。

あまだれ「雨垂」(名)1 雨だれ

七783 のきよりおつる雨だれの

たえず休まず打つ時は、石にも穴

をうがつなり。

あまつさえ「刺」(副)1 あまつさへ

九795 道眞は罪もなきに官を下げ

られ、あまつさへ遠國へうつされしかども、(略)。

あまてらすおおみかみ「天照大御神」

〔人名〕6 天照大神 天照大神

512 天照大神の御弟に、すさのを

のみことといふきのあらひ神さまが
ありました。

822 神代の昔皇祖天照大神瓊

杵尊をこの國に降したまはんとせ

し時、八咫鏡を授けたまひて、(略)。

828 (略)、後神殿を今の五十鈴
の川上に造り、この御鏡を御神體と
して、皇祖天照大神をまつりたまへ
るなり。

918 神代の昔、天照大神の御

弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひし
に、(略)。

943 尊「こは神劔なり、私すべ

きにあらす。」とて、之を天照大神
に奉り給ふ。

943 天照大神、八咫鏡・八坂瓊

曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしか
ば、これより三種の神器の一となれ
り。

あまど「雨戸」(名) 1 雨戸

970 雨戸を明けて見ると、明るい

月夜である、(略)。

あまねし「遍」(形) 2 アマネシ あ

まねし「一キーク」

1081 名所・舊跡ヲアマネク尋ネ

ンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感
アルベシ。

1116 我が皇室の大みいつ。あまねき

光仰ぎ見る 同胞すべて六千萬。

あまのいわと「天岩戸」〔課名〕2 あ

まのいはと

511 第一 あまのいはと

511 第一 あまのいはと

あまのいわと「天岩戸」(名) 2 あま

の岩戸

516 大神はおどろいて、あまの岩
戸の戸をたてて、その中へおかくれ
になりました。

525 よい神さまがたは、(略)、一

同あまの岩戸の外にあつまつて、お
かぐらをおはじめになりました。

あまのはしだて「天橋立」〔地名〕1

天の橋立

927 (略) いく野の道の遠

ければ、ふみ見ずといひし 言の葉
は、天の橋立 末かけて、後の世永
くくちざらん。

あまのはら「天原」(名) 1 天の原

1965 昔安倍仲麻呂ガ(略)、

天の原ふりさけ見れば、春日なる三
笠の山に出でし月かも。トヨメルコ
ト(略)。

あまみず「雨水」(名) 1 雨水

622 ある家のはに大きな水がめ
があつて、雨水が一ぱいたまつてあ
りました。

あま「余」(名) 5 アマリ 餘り

餘りしまんあまり・にじつぶんあま

り・にしゅうかんあまり・はつかあま

733 正行ハコレヲ見テ、カナシ

サノアマリ、ツト立チテ別室ニ行キ
タリ。

781 親子二代相ツバイテノ忠

義カンズルニアマリアリ。

140 厚意謝するに餘りあ

り。

112 何れの家にてても卵を賣れ
ば、其の代金にて一年中用ふる塩・
醬油を買ふに餘あり。

1278 船員は失望の餘り、コロ

ンブスを海に投じて歸國せんと謀る
に至れり。

あまり「余」(形状) 7 あまり 餘り

919 ふと通りかゝつた大尉が之を
見て、あまりに女々しいふるまひと
思つて、「(略)。」と言葉鋭くしか
つた。

919 「それは餘りな御言葉です。

(略)」。私も日本男子です。何で命
ををしませう。

949 聞けばハッサンはアリの來

ることの餘りにおそければ、(略)、
迎へかたぐに來りしなり。

965 然れども空氣の流通餘りに

強き時は、却つて火の消ゆることあ
るべし。

1177 其の數餘りに多くなる時

は、女王は(略)、臣下をひきゐて
分離す。

1115 臨幸餘りにおそかりしか

ば、人をしてうかゞはしむるに、警
固の武士、播磨の今宿といふ所より
山陰道へかゝりて遷幸をなし奉ると
いふ。

1275 亞細亞の東端は歐羅巴の

西端に近しと信じ、地球を餘りに小
さく見たるコロンブスの誤は(略)。

あまり「余」(副) 15 アマリ あまり

餘り

143 (略)、アマリハタラクノ

ナカツタモノヲ右ノ方ニナ
ラバタノデス。

146 「あまりほしがきれい

だから、二つ 三つ はたきおとさ
うと思ふのだ。」

170 (略)、アマリナガクナリ

マスカラ、モウウチヘカヘリマ
セウ。」

173 アマリカナシクナツタカ

ラ、オトヒメノイッタコトモ
ワスレテ、タマテバコヲアケテ
見ルト、(略)。

166 羽の色はあまりうつく

しくはありませんが、(略)。

153 あまりおもしろさうなので、

大神は少しばかり戸をあけて、おの
どきになりました。

141 火事だ、火事だ。どこだら

う、あまり遠くはないらしい。

166 初は熱があまり高いので、
一時はどうなることかと心配いたし

ましたが、(略)、一先安心いたしました。

九八二 杜の森を離れるまでは、餘り甲乙はなかつた。

五八二 (國字) (略)、又學科も小學校を卒業したる者には餘りむづかしとも覺え申さず候。

一八五 (略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。

一八六 内地では昔から餘り多くは飼はなかつたが、琉球ではたくさん飼つて居つた。

一一九五 (國字) 其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

一一一〇 朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

一二七六 (略) されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

あまる (余) (四) 3 餘ル 餘る (一ル・一レ)

九八一 (國字) (略)、詩を作りて天皇の御感に入り、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが、(略)。

一五二 (國字) 今は七十にも餘れば、殊の外白髪には成りたらんに、髪・ひげの黒きは如何に。

一〇九 (國字) (略)、仁王門ヲ入レバ百間ニ餘ル長廊アリ。

あみ (網) (名) 9 あみ 網ひたもあみ

三六五 右の方に五六そうかたまつてゐるのは、今あみをおろしてゐるのです。

三六六 今にあのあみをだんだんはまべへひきよせてくると、(略)。

一九二 (略) しかのみならず落葉・こけ及び網の如くひろがれる木の根などは、地上に落ちたる水をふくみさふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。

一六七 捕鯨法には(略)、又以前には鯨の通路に網を張つて鉞を打つ方法などもあつた。

一一八 (國字) 蜘蛛は其の體より絲を出して網を張る。

一一八 (國字) 網を張らんとする時は、先づ幾條かのやゝ太き絲を渡し、之を本として、次第に細き絲をかけ、終に完全なる網を造る。

一一八 (國字) (略)、之を本として、次第に細き絲をかけ、終に完全なる網を造る。

一一八 (國字) 此の網にて蟲を捕ふるは漁業の類とも見るべし。

一一九 (國字) (略)、鯨の群をなして海岸近く寄來る時は(略)、特殊の網を用ひずとも漁網にてすくひ取るを得る程にて、(略)。

あみのめ (網目) (名) 1 網ノ目

一七七 櫻や梅ノ葉ハ唯一スヂノ太イ脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

あむ (編) (四) 2 アム 編む (一ミ)

一四二 (國字) 我等ノ家ニ數ケル疊ノ表ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナリ。

一一二 (國字) 又麥稈眞田を編み花筵を織ること行はれ、(略)。

あめ (雨) (名) 29 アメ 雨 おおあめ・ひとあめごと

一六一 アメ カサ カラカサ

三三 (國字) アメ ガ フリツヅイテ、田ノ水ガタクサンニナリマシタ。

四八 (國字) (略)、そのうちに雨がふりさうになつたので、いそいで山を下りました。

五八 私はもと雨の一しづくです。

五八 (國字) (略)、雨もつよくふつてきました。

一六五 かつた稻が雨にぬれると、米がわるくなるから、(略)。

一六六 十二月十一日 月曜 雨

一六八 十二月十六日 土曜 雨

一七〇 大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。

一七二 (國字) 中ニモ福井丸ノボートニハ敵ノ砲丸雨ノ如クニ降りソ、ゲリ。

一七四 (國字) 雨は夜中にはれて、今日はうららかなる天氣なり。

八六一 (國字) 滋賀唐崎の一つ松、夜の雨にぞ名を得たる。

九七一 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。

九七四 春の雨はしめやかに降つて、のきの玉水の音も靜かに聞える。

九七六 併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、其の時はうらめしい心地がする。

九七八 併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、其の時はうらめしい心地がする。

九七九 雨のはれた朝、花の香を送つて、そよぐと吹く春風には、我が身も蝶の様に飛立ちたくなる。

九八〇 梅の實の熟する頃降續く五月雨は、農家に取つては大切な雨である、それはちやうど田植の時節であるから。

九八二 秋の末になつて、風の吹散した木の葉の上に、雨の降りかゝるのは、何となく物さびしい。

九八四 冬の雨の日は、短い日がなほ更早く暗くなる。

九八五 夜が更けて、雨の音が靜かになつたから、止んだことと思つてゐると、(略)。

九八六 (國字) 明けて二十九日には雨も止み、風も靜まりて、(略)。

九八八 (國字) (略)、雨の朝、風の夕、見るもの聞くものにつけて、都の空の

みしたはしく、(略)。

十810 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。

十一307 雨ニハ春雨・時雨・夕立・村雨、(略)其ノ外(略)等アリ。

十一762 中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水烟深谷をおほひ、其の瀧つぼの深さは(略)。

十二194 天氣圖とは(略)晴・曇・雨・雪、風の方向・強弱、温度等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

十二198 天氣圖に用ふる普通の符號は左の如し。(略) ● 雨

十二84 略、聴衆は錢をつかんで、争つて老人のさゝげた帽子の中へ投入れる。銅貨といはず、金銀貨といはず、雨の降る様に手當り次第に投込む。

あめあられ「雨霞」(名) 1 雨アラレ
八864 敵ノ彈丸ハ雨アラレノ様ニ飛ンデ來ル。

あめがした「天下」(名) 1 天が下
十894 略、さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれがもかし。

あめかぜ「雨風」(名) 1 雨風
九672 さて此の雨風も四季の時候につれて、それ／＼にちがふ。

あめとかぜ「課名」2 雨と風

九目7 第二十課 雨と風

九6610 第二十課 雨と風
あめのうずめのみこと「天鈿女命」(人名) 1 あめのうずめのみこと

五26 その時あめのうずめのみことといふ女の神さまのまひがおもしろかつたから、(略)。

あめのむらくものつるぎ「天叢雲劍」(名) 4 天叢雲劍 天叢雲劍と申し、後に改めて草薙劍と申すこととなり。

九46 かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、劍の名を天叢雲劍と申せり。

九52 倭姫命此の時天叢雲劍を尊に授け、「つゝしみて怠ることなかれ。」と教へ給へり。

九59 尊こゝにおいて天叢雲劍を抜きて、草を薙拂ひ給ふに、(略)。

あめや「鉛屋」(名) 1 アメヤ
五675 道ノ兩ガハニハ、アメヤ・オモチヤヤ・クダモノヤ・クワシヤナドガ店ヲナラベテキル。

アメリカ「地名」6 アメリカ 亞米利加ひきたアメリカ・きたアメリカどじん・みなみアメリカ

九3010 始めて之を船に用ひて汽船を造つたのは、アメリカのフルトンといふ人、(略)。

十309 甘諸ノ名ハ(略)。(略)。
原産地ハアメリカニシテ、(略)。

十309 甘諸ノ名ハ(略)。(略)。

原産地ハアメリカニシテ、アメリカヨリルソンニ傳ハリ、(略)。

十439 翌年英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、ドイツ・アメリカ等ノ諸國ヨリモ續々註文ヲ受ケ、(略)。

十一287 又支那沿岸はおろか、印度・南洋より亞米利加・歐羅巴の航路をも開くに至れり。

十一899 アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。

アメリカたいりく「地名」3 アメリカ大陸 亞米利加大陸

八762 我等若し汽船に乗りて、我が帝國の港を出で、東へ東へと進み行かば、凡そ二週間の後にはアメリカ大陸に着くべし。

八762 アメリカ大陸は北アメリカと南アメリカとに分る。

十二809 其の後コロンブスは數回の航海を試みしが、一千四百九十八年第三回の航海に於て、オリノコ河口に達し、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

あやう・い「危」(形) 2 あやふい「一イ」

六24 略、子どもはあやふい命をたすかりました。

六577 信玄はそのすきにあやふい命をたすかつた。

し「一キーク」

十552 あやふき敵の手より救ひくれたる厚恩、いかでか忘るべき。

十二948 或時齊の臣景公に告げて曰く、「魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん。」と。

あやしむ「怪」(四) 7 アヤシム あやしむ「一ミーム」

七34 正行ハ(略)ツト立チテ別室ニ行キタリ。母アヤシミテ、ソノ室ヲウカマフニ、(略)。

七511 母ハ(略)六錢をはらひて、一通の手紙を受取りたり。お花はあやしみて、(略)三錢の切手がはつてあるのに、なぜまたおあしを拂ふのですか。」と問へり。

八528 ヤガテ同志ノ一人御前二進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、手ワナ、キ聲フルフ。入鹿アヤシミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、(略)。

九41 尊(略)大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劍の先少しくかけたり。あやしみて尾をさきて見給ふに、(略)。

十一432 熊王(略)、赤坂城のほとりにたゞずむ。正儀の臣兵庫介忠元あやしみて、「何者ぞ。」と問へば、(略)。

十二379 秀忠あやしみて、「汝多年嘉明と不和なりと聞く。今之を推舉するは如何に。」と問ふ。

十二656 獨逸帝國は創建以來年尚

浅ければ、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは固よりあやしむに足らず。

あや・す(五) 1 あやす 《一シ》

十一51 2 やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、(略)、戯れてゐると、馬は(略)、口でおもちやをさぐけて、其の子供をあやしてゐた。

あやつり・いる「操居」(上一) 1 あやつり居る 《一イ》

十70 5 此の間岩にも當てず、波にもまかせず、岩と波との間にボート

をあやつり居たる少女の働は、(略)。

あやつ・る「操」(四) 2 あやつる 操る 《一リ》

十70 10 山なす大波を物とせせず、男勝りの大力にてボートをあやつり

しダーリングの手は、(略)。

十一22 7 文餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、(略)。

あやまち「過」(名) 4 過

十一69 8 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

十一69 10 若し過あらば、深く之を悔いて、其の過を再びせざらんことをちかふべし。

十一69 10 (略)、其の過を再びせざらんことをちかふべし。

十二95 6 「君子は過あれば謝す。

あやまり「誤」(名) 3 誤

十19 10 さてかりに印刷して、讀合せて見て、誤があれば、幾度でも其の活字を抜きかへて植直す。

十20 1 一字も誤がなくつてから本刷にかゝるのである。

十二75 10 (略)と信じ、地球を餘りに小さく見たるゴロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

あやまる「誤」(四) 2 誤る 《一リ・一レ》

八72 1 諸君我を苦しめんとして、此の数日間少しも食物を送らざるが故に、(略)、諸君は皆却つて自ら苦しむにいたれり。(略)。諸君は今にして諸君の誤れるをさとりしならん。

十二113 9 (略)、小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

あやめ「菖蒲」(名) 2 アヤメ あやめ

六5 7 日本の國は花の國。うめ・も・さくら・ふぢ・あやめ、(略)。

九8 1 又ユリヤアヤメノ花ハ暮ノ色ガ瓣ト一ツ色デアル。

あゆ「鮎」(名) 3 あゆ 鮎

十一81 6 (略)、大なる鵜は能く十二三尾のあゆを喉元にふくむといふ。

十二81 7 鵜の鮎を吞むは必ず頭よ

りす。

十一82 8 (略)、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鮎を得るを常とす。

あゆみつかる「歩疲」(下二) 1 歩みつかき 《一レ》

十88 10 夜晝三日供御もなく、歩みつかまて松かげに いこはせ給ふかしこさよ。

あゆむ「歩」(四五) 7 あゆむ 歩ム 歩む 《一マ・ム・一メ》

三25 6 はいしい、はいしい、あゆめよ、小馬。

三25 8 山でも、さかでも、ずんずん あゆめ。

三26 5 あゆめよ、あゆめよ、足おとたかく。

三26 5 あゆめよ、あゆめよ、足おとたかく。

八74 7 虎モ猫モ足ノ裏ヤハラカナレバ、歩ム時音ヲ立テズシテ、(略)。

九37 7 馬は馬子が引いて、ゆるく歩むのだから、早いことはない。

九82 9 やがて五人の騎手は(略)、静々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて來た。

あらあらしい「荒荒」(形) 1 荒々しい 《一ク》

十86 1 西洋の馬がおとなしくて、日本

の馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。

あらいい「新居」(地名) 1 新居

九37 2 箱根と新居とは關所があつて、(略)。

あらいい「荒」(形) 2 あらしい 《一イ・一ク》

四16 6 (略)大きなのししで、(略)、はないきをあらくして、土けむりをたてて、とんで來ます。

五1 3 (略)、すさのをのみことといふきのあらいい神さまがありました。

あらいいがし「洗流」(名) 1 洗ヒ流シ

十一66 10 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ・洗ヒ流シヲスル所デアルカラ、(略)。

あらいいもの「洗物」(名) 1 あらひ物

四70 3 朝早くから あどばたで、母はせい出す あらひ物。

あらう「洗」(四五) 8 アラフ 洗フ 洗ふ 《一ツ・ヒ・一フ》

四60 3 ハヤク川へ行ツテ、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、(略)。

七64 8 われくは毎朝顔を洗ひ、口をすすぐ。

七73 2 又物ヲ洗ツタリファイタリスル時ニ使フ海綿モ、(略)。

八5 5 五十鈴川の水に口すすぎ手洗ひて(略)、御宮の前にいたる。

九59 3 衣服もよく洗ひて、よこれたるをば着ることなかれ。

十43 1 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重

ネテ、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。

十54 5 凶 悲しきは老の白髪なり。』といひしにたがはず、墨を塗りて候。」とて、之を洗ふに白髪の頭となれり。

十一111 1 朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

あらかじめ「予」(副) 3 アラカジメ豫め

八51 9 凶 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲオコナハントシ、アラカジメ其ノ手ハズラ定メタリ。

十二92 1 凶 日々の暮しは(略)。家の収入を基として、豫め其の支出を定め、衣服・飲食の費皆其の範圍を越ゆることなかるべし。

十二113 7 凶 故に十分に信義を盡さんとせば、豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。

あらし「嵐」(名) 2 あらし 嵐々おあらし

十14 9 凶 圀 (略)、折からの 夜半のあらしに そののちは 音もきえず。

十68 2 凶 或夜にはかの嵐に吹かれて、(略) 岩の上に乘上げたる帆前船あり。

あらし「荒」(形) 1 荒し「一ク」
十70 1 凶 岩に近づけば、波は益々荒

く、ボートは幾度となく打ちもどされ打ちもどさるゝを、(略)。

あらす「荒」(四・五) 2 荒す「一ス」ひきりあらす
八20 4 (略)、雀といふものは(略)、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

十10 2 凶 森林なければ、土砂附近の田畠に飛散りて、其の土地を荒すこと多し。

あらそ「争」(四・五) 11 あらそふ争フ 争ふ「一ツ・ヒ・フ」

六75 1 間もなくむねの上からもちを投げると、大ぜいがあらそつてそれを拾ひました。

十54 2 凶 白髪頭にて若き人と先を争ふもはゞかりあり。
十一16 7 凶 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、(略)。

十一77 10 凶 二瀑相並んで雄を争ひ、其のひゞき萬雷のとゞろくが如く、(略)。

十一92 3 凶 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は(略)、争ひて高き價をつくべし。

十一92 8 凶 (略)、同様な賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は(略)、争ひて其の價を低くすべし。

十二52 7 凶 近年各國商人皆争ヒテ其

ノ方法ヲ講ジ、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。

十二79 6 凶 船員皆歡喜して、コロンプスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。

十二80 4 凶 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、皆争ひてコロンプスを歡迎し、(略)。

十二84 3 やゝあつて紳士はしばらく弾く手を止めると、聽衆は錢をつかんで、争つて老人のさゝげた帽子の中へ投入れる。

十二93 5 凶 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひたり。

あらた「新」(形状) 2 新
十66 7 他のボートを見れば、今新に鯨を追ふものもあり、鉦を打つて鯨に引廻されてあるものもある。

十一97 7 凶 近時道路新に開け、交通大いに便利に相成候。
あらたまる ひかりあらたまる
あらたむ「改」(下二) 3 改む「一メ」

九15 凶 此の劔初は天叢雲劔と申し、後に改めて草薙劔と申すこととなれり。

九6 2 凶 これより此の劔の名を改めて草薙劔と申す。
十二30 6 凶 其の將伊企儼をして(略)、「日本の將我がしりを食へ。」と號ばしむ。伊企儼却つて「新羅王

我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、(略)。

あらためて「改」(副) 2 改めて
九86 5 凶 (略)、今日の勝負はきまらないが、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。」

九86 9 凶 「もう改めて勝負には及びません。」
あらて「新」(名) 1 新
八87 4 之ヲ見タ敵ハ更ニ新ヲ加ヘテ、フタ、ビ攻メヨセテ來タ。

あらなみ「荒波」(名) 1 荒波
十69 9 凶 やがて二人は荒波に打返さるゝ船の頭を立直し、死力を盡して漕進む。

アラビヤ「地名」 4 アラビヤ
九44 8 凶 昔アラビヤの或町にハッサンといふ者あり、(略)。

十一46 6 アラビヤは世界に名高い良馬の産地である。

十一49 9 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一51 3 此の一事でアラビヤに名馬の産する所以が分つた。
アラビヤうま「課名」 2 アラビヤ馬
十一目12 第十一課 アラビヤ馬
十一46 5 第十一課 アラビヤ馬
アラビヤうま「名」 2 アラビヤ馬

十一46 6 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、(略)。

七九三 文 韻 小さきありもいそしめ

里の波を渡るなり。

十一889 蠅は油蟲を養ふ。

十一891 油蟲は（略）甘き汁を出すものなれば、蠅は此の甘き汁を得んが爲に、（略）之を保護し、或は（略）成長せしむ。

十一894 蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、多くは地下に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

十一899 アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。

あり「在（ラ変）ありありあり在り在り有り非『ラ・リール・レー』

六67 一年ニハ十二ヶ月アリ。

六182 物サシニハカネ尺トクデラ尺トアリ。

六195 ハカリニモ色々アリ。

六335 織物ニハキヌ織物（略）毛織物ナドイロくアリ。

六543 ニモノヲスルニモ砂糖ヲ用フルコトアリ。

六673 材木ニハ松・杉・ヒノキ・栗・ケヤキナドアリ。

六816 又多クノホリアリテ、川ト川トツツナゲリ。

七27 一門ノ者一人ニテモ生キ残りテアル間ハ、（略）、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七39 汝ヲサナクトモ、（略）、

コレホドノワケノ分ラヌコトハアルマジ。

七43 父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。

七82 「親子二代相ツマイトノ忠義カンズルニアマリアリ。

七228 シカルニ目ハ見エズシテ、大學者トナリシ人アリ、（略）。

七235 保己一ノ家ハ今ノ東京、ソノコロノ江戸ノ番町ニアリ、（略）。

七358 塗物に黄・赤・黒・青などさまぐの色あるは、（略）。

七547 上野公園ニハ廣キ動物園アリテ、（略）。

七548 ソノ他博物館・パノラマナドアリ。

七563 （略）、観音堂ニ向ツテ行ケバ、兩ガハニアマタノ店アリ。

七568 浅草公園ニハ種々ノ見セ物アリ。

七578 宮城ノ前ノ廣場ニハ楠木正成ノ銅像アリ。

七579 櫻田門ヲ出ツレバ、日比谷公園アリ。

七584 コ・ニハ美シキ池アリ。

七585 廣キ運動場モアリ。

七587 公園ヲ出ツレバ、海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。

七591 社ノカタハラニ遊就館アリ。

せ細りたるものあり。
七602 あるく時肉のゆれ動く程こえ太りたるものあり。
七635 （略）、犬のくびに（略）をかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。
八34 （略）、皇室及び國家に大事あれば、かならずこれを告げたまふ。
八36 明治三十七八年戰役の終りたる後も、天皇陛下御參拜あらせられ、（略）。
八51 （略）の戦利品たる大砲、（略）の記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。
八78 今日神嘗祭なれば、夕方には内宮へ勅使の參拜もあるべしといふ。
八16 「召使ノ中ニカ、ル事ヲヨク心得タル者アリ。
八27 昔百濟川成トイフ名高キ畫エアリキ。
八28 其ノ友ニ飛驒工トテ世ニ聞エタル大工アリ。
八28 川成行キテ見ルニ、小サキ四角四面ノ堂アリテ、（略）。
八29 「見セ申シ度キ繪出來タリ。御出アリタシ。」
八50 此ノ頃中大兄皇子ト申スカシコキ皇子アリキ。
八51 サル程ニ（略）ニヨリテ、入鹿ノ參内スルコトアリ。

八54 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、（略）。

八61 堅田の浦の浮御堂、おち来るかりもふぜいあり。

八71 「（略）、我はたゞ坐して食ふ者にあらず。

八714 我的職務は食物をこなし、之を血の製造場へ送るにあり。

八729 「猫デナイシヨウコニ竹ヲ書イテオキ。」トイフコトアリ。

八741 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル爪アリ。

八743 猫ノロニハ上下ニ二本ツツノ鋭キ牙アリテ、（略）。

八745 又其ノ舌ニハ（略）ノ如キトゲアリ、骨ニ附キタル肉ヲ食取ルニ便ナリ。

八754 タバ猫ノ毛色ニハ黒・白・三毛ナド様々アレド、虎ハ一様ナリ。

八755 猫ノ中ニモ其ノ毛色虎ニ似タルモノアリ、之ヲ虎猫トイフ。

八759 我が大日本帝國はアジア大陸の東の海中にある島國なり。

八764 北アメリカには合衆國といふ國あり。

八781 ヨーロッパ大陸には（略）等の國々あり。

八782 フランスは海をへだててイギリスの南にあり。

八784 フランスの隣國にて、其の東北にあるドイツは（略）。

ゝりたることなき人あり、(略)。
 九60 1 図 然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。
 九61 10 図 飲食に注意し、(略)、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。
 九63 9 図 かばかりの大功ありし人故、(略)。
 九64 6 図 是我等の周圍に空氣のあればなり。
 九64 9 図 空氣は(略)、凡そ少しにてもすぎ間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。
 九65 3 図 是茶わんの中に空氣ありて、水の進入するを防げばなり。
 九65 10 図 然れども空氣の流通餘りに強き時は、却つて火の消ゆることあるべし。
 九72 9 図 (略) 立退きたる者もこれあり、同夜は近村の者一人も眠につきたる者これなく候。
 九74 1 図 (略)、川上の堤防切れ、隣村は大半水中にあり、救をもとむる聲かまびすしく候故、(略)。
 九74 7 図 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、(略)。
 九75 2 図 死者四人、傷者四五十人もこれあり候。
 九76 10 図 (略) 能ハザル者ノ爲ニハ、郵便切手ニヨリテ貯金スル便利ナル方法アリ。
 九77 4 図 又銀行ニ貯金スル方法モアリ。

九78 6 図 タバシ貯金センガ爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。
 九79 10 図 筑紫へ下る道に、昔より相知りし驛長ありて、(略)。
 九80 2 図 驛長驚くなかれ、時の變り改るを。花咲く春あれば、葉落つる秋あり。
 九80 2 図 花咲く春あれば、葉落つる秋あり。
 九81 3 図 (略)、其の御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。
 九81 7 図 恩賜の御衣なほこゝに在り。
 九88 1 図 若シ今ノ世ニモナホカ、ル事アリトセバ、其ノ不便如何バカリナラン。
 九88 2 図 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、(略)、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。
 九89 3 図 貨幣トシタル物品ハ(略)。
 九89 4 図 賣ル・買フ、財産ノ財、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルコトアリ。
 九89 4 図 賣ル・買フ、財産ノ財、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、(略)。
 九90 3 図 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨・銀貨・銅貨ノ三種アリ。
 九93 7 図 日光の市街盡くる所に大谷川あり。
 九94 2 図 (略)、表門を入れれば五重塔あり。

九94 4 図 此の門一に日暮門の名あるは、(略)との意なりとぞ。
 九94 10 図 之を過ぎて拜殿あり、(略)。
 九95 1 図 (略)、拜殿の後に本殿あり、(略)。
 九95 2 図 是より西南にあたりて、家光の廟あり、(略)。
 九95 5 図 (略)、男體山のふもとに中禪寺湖あり、(略)。
 九95 8 図 天皇陛下かつてこゝに行幸あり、(略)。
 十2 10 図 日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。
 十14 2 図 かね土ま 塗込められてあらはれぬぬきもあるなり。
 十17 5 図 是白樂天の詩に、「(略)」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、(略)。
 十22 10 図 驚キテ目送スレバ、ヤ、アリテ引返シ來リ、(略)。
 十23 7 図 「長者ト約シテ後ル、ハ禮ニ非ズ。
 十24 3 図 (略)、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、シバラクアリテ、カノ老人來レリ。
 十25 2 図 若シ勇氣アラバ我ヲ殺セ。
 十27 3 図 (略)、手放し難き商用これあり候へば、(略)。
 十33 2 図 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。
 十34 2 図 東京ノ西南、目黒ナル墓石

ノ面ニ「甘諸先生墓」トアリ。
 十40 5 図 これぞ武門の面目。』と、大將答力あり。
 十40 8 図 『我に愛する良馬あり。
 十40 10 図 『厚意謝するに餘りあり。
 十41 9 図 蘭ハ水草ナリ。葉ナクシテ唯莖アリ。
 十41 10 図 莖ハ圓クシテ、長サ五尺バカリ、短キハ二尺位ナルモアリ。
 十43 6 図 (略) 世人ノ注目スル所トナラズ、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。
 十43 9 図 (略)、翌年英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、(略)。
 十44 8 図 線には直線と曲線とあり。
 十47 2 図 模様には全く無意味なるもあれども、(略)。
 十50 6 図 「思ふ様あれば、名乗るまじ。
 十51 8 図 『存ずる由あり。
 十52 5 図 「そは武藏の齋藤別當にはあらずや。
 十53 9 図 平生にても、若き人は白髪を見て悔る心あり。
 十54 3 図 白髪頭にて若き人と先を争ふもはゞかりあり。
 十56 5 図 (略) 居室・兵器・寢具其の他一切所持品の清潔検査これあり候。
 十59 1 図 (略) 忠臣・義士に關する講談等もこれあり、面白く有益に

存候。

十594 國手 何か不都合なる事あり

て、罰に處せられたる者は（略）。

十608 國 足尾銅山ハ日光山ノ西南ニ

アリ、（略）。

十6110 國 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道

アリ。

十621 國 其ノ左右上下更に無數ノ坑

道アリ、（略）。

十621 國（略）、又上下ニ通ズル大ナ

ル堅坑アリ。

十627 國 選鑛場ニハ種々ノ機械ア

リ、（略）。

十6210 國 製煉場ニハ殊ニ大イナル爐

アリテ、（略）。

十682 國 英國東海岸の一島に燈臺あ

り。

十684 國（略）、此の燈臺附近の岩の

上に乗上げたる帆船あり。

十689 國 燈臺番の娘にグレース、ダ

ーリングとて心やさしき少女あり。

十716 國（略）に程近き寺院の庭上

には、右手にかいを握れる少女の銅

像あり、（略）。

十719 國 地球の内部には熱氣あり。

十722 國（略）、即ち温泉なり。絶え

ずわき出づるものと、時を定めてわ

き出づるものとあり。

十728 國 温泉のわき出づる處はおほ

むね火山の附近に在りて、（略）。

十725 國 其の湯には大抵一種の臭氣

あり、味あり、色あり。

十725 國 其の湯には大抵一種の臭氣

あり、味あり、色あり。

十725 國 其の湯には大抵一種の臭氣

あり、味あり、色あり。

十7210 國 我が國は火山國にして、全

國到る處に温泉あり。

十733 國 中にも最も世に知られたる

は、西に道後・有馬、東に箱根・熱

海・伊香保等あり。

十734 國 道後は四國の伊豫にあり。

十744 國 熱海は伊豆の東岸にあり。

十749 國 伊香保も亦古くより知られ

たる温泉にして、榛名山のふもとに

あり。

十757 國 全身ニ二百餘ノ骨アリ。

十759 國 胸ノ左右ニハ肺アリ。

十7510 國 兩肺ノ間ニハ心臓アリ。

十763 國 腹ノ中ニハ胃ト腸トアリ。

十766 國 此ノ外腹ニハ種々ノ内臓ア

リ。

十767 國 身體ノ最上部ナル頭ノ中ニ

ハ腦アリ。

十771 國 目・耳・鼻・口ハ何レモ腦

ニ近キ位置ニ在リ。

十776 國 スベテ重要ナル機關アル部

分ハ、（略）。

十781 國 強キカラ要スル部分ニハ強

キ筋肉アリ。

十819 國 あいぬは（略）盛大なる儀

式を行ふことあり。

十826 國（略）、今は（略）、讀み書

き・計算をもなし得るものあるに至

り、（略）。

十827 國（略）、今は（略）、中には

小學校教員となれるものもあり。

十8210 國 されば北海道舊土人保護法

と稱する法律ありて、（略）。

十901 國 金剛山下に忠士あり。

十906 國（略）に關する講話これ

あり候。

十911 國 御村も（略）田地少く、

整理の必要これあり候様存ぜられ候

間、（略）。

十923 國 來る八日講話會これあり

候由にて（略）。

十925 國 仰の如く本村にも耕地整

理の必要これあり、（略）。

十941 國 奈良市街ハ奈良停車場ノ東

ニアリ。

十948 國 堂塔雜舎ノ數百七十五ア

リ、（略）。

十952 國（略）等ノ敷地ハ皆昔ノ興

福寺ノ境内ニ在リ。

十962 國 三笠山ハ此ノ神社ノ後方ニ

アリ。

十963 國 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリ

テ、（略）。

十963 國 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリ

テ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ツル月

ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、（略）。

十972 國 東大寺ノ境内ニ正倉院ア

リ。

十978 國（略）、西ニハ西大寺・藥師

寺等ノ堂塔アリ。

十984 國 法隆寺ノ附近ニハ廣瀨神

社・龍田神社アリ。

十989 國 コ、ニ官幣大社大神神社ア

リ。

十992 國 初瀬山ノ中腹ニ長谷ノ觀音

アリ、（略）。

十994 國（略）、仁王門ヲ入レバ百間

ニ餘ル長廊アリ。

十999 國（略）トイフ梅ノ木ハ此ノ

廊ノカタハラニアリ。

十9910 國 長廊盡キテ本堂アリ。

十1002 國 三輪町ノ南ニ櫻井町アリ。

十1005 國 櫻井町ヲ南ヘ去レバ談山神

社ノ一ノ鳥居アリ。

十1007 國 社殿壯麗ニシテ、關西日光

ノ稱アリ。

十1008 國 社殿ノ後ノ山ニハ鎌足ノ墓

アリ。

十1012 國 多武峯ヲ西ヘ下レバ岡寺ア

リ。

十1021 國 畝傍山ノ東北ニハ神武天皇

ノ御陵アリ。

十1022 國 又近ク綏靖天皇ノ御陵ア

リ。

十1025 國 又畝傍山ノ東南ニ橿原神宮

アリ。

十1029 國 大和國ハ久シキ間皇都ノア

リシ地ニシテ、（略）。

十1032 國 名所・舊蹟ヲアマネク尋ネ

ンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感

アルベシ。

十124 國 吉野の町に入れば藏王堂

- あり。
- 十一24 ㊦ 堂前四本の櫻ある處は(略)。
- 十一34 ㊦ (略) 向ふの山腹に如意輪寺あり。
- 十一39 ㊦ 寺の上の小高き所に後醍醐天皇の陵あり。
- 十一310 ㊦ 天皇のこゝに行幸ありしより三年、(略)。
- 十一310 ㊦ (略)、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、(略)。
- 十一43 ㊦ 本道を更に南へ進めば、庭園を以て名高き竹林院あり。
- 十一44 ㊦ 尚進めば、水分神社・金峰神社等あり。
- 十一46 ㊦ 吉野山は(略)、到る處櫻樹あらざるなし。
- 十一410 ㊦ 吉野には古く離宮あり、(略)。
- 十一51 ㊦ (略)、應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、(略)。
- 十一51 ㊦ (略)、山城へ遷都ありし後は其の事絶えたり。
- 十一57 ㊦ 蜜蜂は(略)、一群の總數數萬に及ぶものあり。
- 十一57 ㊦ 群中には必ず雌蜂・雄蜂・働蜂の三種あり。
- 十一69 ㊦ 働蜂中には蜂の集め来る蜜を検査する検査掛あり。
- 十一610 ㊦ 又之を受取りて貯ふる貯

- 蓄掛あり。
- 十一71 ㊦ 怠りて持歸らざるものあれば、検査掛は内に入るを許さず、(略)。
- 十一75 ㊦ 女王の任務は卵を産むにあり。
- 十一86 ㊦ 働蜂の武器は體の後方にある鋭利なる針にして、(略)。
- 十一139 ㊦ 此の頃備前の國に兒島高德といふ武士あり、(略)。
- 十一141 ㊦ (略)、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、其のまゝにて止むたり。
- 十一145 ㊦ 志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。身を殺して仁を成すことあり。とかや。
- 十一148 ㊦ (略)、心ある者どもいづれも此の議に同ず。
- 十一161 ㊦ 時、范蠡無きにしもあるず。
- 十一164 ㊦ 主上は詩の心を御さとりありて、(略)。
- 十一167 ㊦ 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、(略)。
- 十一175 ㊦ 本土の西、近く九州と相接せんとする所、下關海峡あり。
- 十一1710 ㊦ 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、(略)。
- 十一1710 ㊦ 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、(略)。
- 十一201 ㊦ (略) 夜景も亦一段のお

- もむきあり。
- 十一22 ㊦ 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。
- 十一23 ㊦ 幾年こゝにきまへとる鐵より堅きのひふあり。
- 十一251 ㊦ 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「略」といへども、(略)。
- 十一256 ㊦ (略)、荷車には人の引くあり、牛馬に引かしむるあり。
- 十一256 ㊦ (略)、荷車には人の引くあり、牛馬に引かしむるあり。
- 十一2610 ㊦ (略) 等其の目的により、大小・構造千差萬別あり。
- 十一271 ㊦ 和船の大なるは五百石積・千石積等ありて、近海を航行すれども、(略)。
- 十一272 ㊦ 西洋形の帆船前船には二本・三本の櫓もあるもあり。
- 十一273 ㊦ 西洋形の帆船前船には二本・三本の櫓もあるもあり。
- 十一277 ㊦ (略)は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。
- 十一282 ㊦ (略)、今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。
- 十一2810 ㊦ 軍事上にも用ふる車には、砲車・材料車・輜重車等種々あり。
- 十一296 ㊦ (略)も決して座上の空談にあらざらんとす。
- 十一299 ㊦ 諸子ハ數多アル我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。

- 十一301 ㊦ 國名ヲ以テ名ヅケラレタルモノニハ、安藝(略)等アリ。
- 十一303 ㊦ 山ノ名ヲ附シタルモノニ三笠(略)等、川ノ名ヲ附シタルモノニ隅田(略)等アリ。
- 十一307 ㊦ 風ノ名ヲ負ヘルモノニ神風(略)等アリ。
- 十一309 ㊦ 雨ニハ春雨・(略)、雪ニハ初雪(略)、其ノ外(略)等アリ。
- 十一3010 ㊦ 季節ノ名ニハ初春(略)等アリ。
- 十一333 ㊦ (略)、時ニ戰艦ト合同シテ敵ノ主力ト戰フコトアリ。
- 十一333 ㊦ 其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、何レモ(略)スルコトヲ得。
- 十一352 ㊦ 以上ノ外、尚(略)等ノ如キ特別任務ヲ有スルモノアリ。
- 十一373 ㊦ 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。
- 十一375 ㊦ (略)、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。
- 十一392 ㊦ 竹にも直径一尺以上のものこれあり、(略)。
- 十一402 ㊦ (略)、中には直径二十尺餘、一樹にて千五百尺メの材積を得るものもこれあり候由、(略)。
- 十一416 ㊦ 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、(略)。
- 十一463 ㊦ (略)、心の變ることもあ

るべきかとて、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十一529 内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、(略)、心中ノ苦ヲ如何ニセン。

十一534 (略)、時ト場合トニヨリテ笑フベカラザルコトアリ。

十一544 (略)、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

十一638 (略) 追て準備の都合もこれ有り候間、(略)。

十一682 (略) 身を立て、父母をあらはすも、(略)も、唯此の二十萬時間を利用するとせざるとにあり。

十一683 (略) 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。

十一684 (略) 二十歳の短命にして美名を萬世にとむる者あり。

十一693 (略) 然れども人の勢力には限りあり。

十一6910 (略) 若し過あらば、深く之を悔いて、(略)。

十一7010 (略) 「時は金なり。」といふ古言あれども、(略)、時間は金銭よりも貴し。

十一712 (略)、今日の如く通信交通の機關發達し、社會の活動敏速なる時代にありては、(略)。

十一716 (略) 泉州堺に一國寺といふ寺あり。

十一719 (略) 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)。

十一723 (略) 我衣食の費をいふにあらざれども、(略)。

十一725 (略) 愚僧も所用ありて京へ上り、(略)。

十一7410 (略) 「先に畫がきたる櫓の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、(略)。」

十一757 (略) 我が國には數多の瀑布あり、(略)。

十一768 (略) 紀伊國那智山には四十八瀧あり。

十一7610 (略)、一條の谷川あり、(略)。

十一772 (略) 更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。

十一774 (略) 神戸市に近き布引瀧は雌雄二瀧あり。

十一7710 (略) ナイヤガラ瀑布は(略)、左瀑は幅三百餘丈、右瀑は百餘丈、高さ各約十六丈あり。

十一783 (略)、大地も爲にふるひ、附近數百歩の地にありては、器に盛れる水常に波紋を生ず。

十一795 (略) 市を出でて橋を渡れば長良村あり。

十一796 (略) 此の川上に瀬尻村あり。

十一8410 (略) コレニハ細小ノ針金ニテ作リタルブラッシノ仕掛アリテ、(略)。

十一874 (略) 機械ノ力ハ驚クベキモノニアラズヤ。

十一8910 (略) (略)に産する蟻の一種

に收穫蟻といふものあり。

十一906 (略) 物の價は効用あることと、隨意に得られざることにによりて生ずるものなり。

十一908 (略) 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、(略)。

十一908 (略)、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなくし。

十一909 (略)、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなくし。

十一9010 (略) 例へばこゝに一種の石あり、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、(略)。

十一912 (略)、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、随つて價あることなくし。

十一914 (略) 日光・空氣の如きは、(略)、之を買ふ必要なく、随つて亦價あることなくし。

十一916 (略) されど水は大都會などにては、時として價を生ずることあり。

十一921 (略) 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。

十一922 (略) 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。

十一926 (略) 之に反して、同様な賣

家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。

十一934 (略) 物の價は(略)金額に等しからんとする傾きあるものなり。

十一939 (略) 他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。

十一948 (略)、供給に限りある物、例へば(略)古人の書畫・古器物などの如きは、(略)。

十一9410 (略)、供給に限りある物、例へば(略)などの如きは、(略)、需要の減ずるに非るよりは、決して安くなることなきなり。

十一952 (略) 即ち供給に限りあるものは一定の價なしといふべし。

十一961 (略) (略)、海岸も海水厚く凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、(略)。

十一974 (略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、(略)。

十一996 (略) 多來加灣頭に小さき海豹島あり、(略)。

十一998 (略) (略) こゝに集る臘肭獸は數千頭にも達することこれあり候。

十一1006 (略)、又山脈の兩がには石炭層各所にあり、(略)。

十一1013 (略)、今後尚着手すべき事は多々これ有り候。

十一1023 (略) 劉備ハ漢朝ノ末流、英明ニシテ大志アリ。

- 十二102 5 図 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、(略)。
- 十二102 5 図 (略)、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)。
- 十二102 10 図 (略)「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。
- 十二102 10 図 (略)「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。
- 十二104 7 図 (略)「出師ノ表ヲ見テ泣カザルモノハ人ニ非ズ。」
- 十二111 7 図 我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。
- 十二111 8 図 村の財産家に勸業に熱心なる人あり、(略)。
- 十二112 2 図 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて(略)を買ふに餘あり。
- 十二112 7 図 村役場と學校とは相並びて村の中央に在リ。
- 十二113 8 図 或年暴風雨の爲に不作なりしことあり、(略)。
- 十二115 1 図 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、(略)。
- 十二12 9 図 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。
- 十二14 5 図 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。
- 十二15 8 図 「皇國の興廢此の一戦にあり。
- 十二16 1 図 (略)、東郷司令長官は(略)、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。
- 十二16 7 図 (略)、敵の艦列忽ち亂れ、早くも戦列を離るゝものあり。
- 十二16 8 図 (略)「ハ、一二天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ。
- 十二16 4 図 日々の天氣は我等の生活に大なる關係あり。
- 十二16 7 図 我が國には東京に中央氣象臺あり。
- 十二16 9 図 (略)、全國に凡そ百箇處の測候所あり。
- 十二18 1 図 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、(略)。
- 十二18 3 図 又一地方に荒模様ある時は、(略)。
- 十二18 7 図 (略)、圓錐形を以て暴風雨のおそれあるを示す。
- 十二19 3 図 諸子は(略)天氣圖を見たることありや。
- 十二27 6 図 鳥居勝商といふ者あり、(略)。
- 十二28 6 図 (略)、一老兵のいふ、「(略)。(略) 鯨の繩にふるゝならん。」といへば、「さもあらん。」とて止む。
- 十二30 2 図 (略) 徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。圍の解けんは二三日の内にあらん。」
- 十二30 9 図 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかば、(略)。
- 十二31 5 図 新田義貞、尊良親王を奉じて越前國金崎の城に在りし時、(略)。
- 十二31 10 図 (略)「二子の君の爲に戦死せるは(略)」。尚三子あれば更に再舉を圖るべし。」
- 十二33 5 図 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在リ。
- 十二33 9 図 (略)、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。
- 十二37 7 図 (略)「年老いて其の任にあらず。」
- 十二37 9 図 (略)「嘉明に如く者はあらじ。」
- 十二38 6 図 支那の昔趙といふ國に閼如といふ賢臣あり。
- 十二38 7 図 敵國秦に使用して功ありしかば、趙王厚く之を用ふ。
- 十二39 3 図 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。
- 十二41 1 図 (略)、其の西にある高岳は高さ千六百九メートルあり。
- 十二41 3 図 (略)、其の西にある高岳は高さ千六百九メートルあり。
- 十二41 8 図 中岳は(略)、深さ百二十五メートルあり。
- 十二41 8 図 内に二箇の噴孔ありて、(略)を噴出す。
- 十二41 10 図 但し此の噴孔は時々其の位置を變じ、其の勢力にも消長あり。
- 十二42 1 図 烏帽子岳は其の西南方に在りて、(略)。
- 十二42 4 図 阿蘇山は(略)、山の中に多くの噴火口及び温泉あり。
- 十二42 10 図 其の破裂するや、(略)飛散し、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。
- 十二44 1 図 古來瑞穂の國の名ある所以なり。
- 十二44 4 図 現今我が國の耕作地は(略)凡そ五百五十萬町歩あり。
- 十二45 4 図 是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。
- 十二45 8 図 我が國の農業は、決して現状を以て満足すべきにあらず。
- 十二46 2 図 (略)、大いに荒地を開き、美田を増すの必要あり。
- 十二46 9 図 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。
- 十二47 1 図 農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、(略)。
- 十二48 4 図 (略)樺太・臺灣太古より其の出入ぬ林あり。
- 十二48 10 図 農産收入何れど、小さき蟲の吐出す 生絲と無二の輸出品。

十二517 同 一國民ノ嗜好ニモ亦時々ノ變遷アリ。
 十二524 信用ノ基ハ正直ニアリ。
 十二532 (略) スルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラズ。
 十二547 市街に大山通・兒玉町・乃木町等の名あるは、(略)の記念たり。
 十二5410 大連より(略)を経て、北へ進むこと約二百哩、遼陽あり。
 十二555 (略) 奉天は、(略)、南滿洲鐵道中央停車場のある處なり。
 十二565 南滿洲の支線としては旅順線・(略)・安奉線あり。
 十二572 營口は一に牛莊港と稱し、遼河の河口にありて、(略)。
 十二587 安東縣は(略)、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。
 十二593 倫敦にはテムス河、巴里にはセーヌ河、伯林にはスプレー河ありて(略)。
 十二649 ルーブル博物館は名畫・古彫刻最も多く美術博物館として世界無比の名あり。
 十二656 獨逸帝國は(略)、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは固よりあやしむに足らず。
 十二6510 (略)、露西亞の狼は(略)、中部獨逸にまで來りしことあり。
 十二664 (略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二664 全然移住せし例は(略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。
 十二669 (略)、山あれば越え、河あれば泳ぎ、(略)。
 十二669 (略)、山あれば越え、河あれば泳ぎ、(略)。
 十二674 (略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。
 十二695 (略)、遠く之を望めば、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。
 十二698 (略)、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず(略)。
 十二705 苦あれば必ず樂あり、(略)。
 十二705 苦あれば必ず樂あり、(略)。
 十二705 苦あれば必ず樂あり、(略)。
 十二705 樂あれば必ず苦あり、(略)。
 十二705 樂あれば必ず苦あり、(略)。
 十二712 (略) 自ら苦しむは、百害あるも一利なし。
 十二716 遠き慮なければ、必ず近き憂あり。
 十二724 (略)、自ら省みてやましき所ある者は、苦多く、樂少し。
 十二726 (略) 「疏食をくらひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。」

十二769 熱湯の海ありと語る者、(略)、口々に語り合へり。
 十二7610 (略)、舟を呑む海獸ありと談ずる者、(略)、口々に語り合へり。
 十二791 (略)、朝の二時頃「陸」「陸」と呼ぶものあり。
 十二864 四十七士の統領たる大石良雄は初め京都に在り。
 十二866 薩摩の士に喜劍といふ人あり、(略)。
 十二901 (略) 其の例數ふるにいとまあらず。
 十二904 家内には老人あり、子供あり。
 十二905 家内には老人あり、子供あり。
 十二909 若し家内に傳染病等にかゝるものあらば、近處・隣へ對しても申しわけなく、(略)。
 十二912 主婦は老人にいたはりかつく外、幼兒を育て上ぐる大任あり。
 十二949 「魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん。」
 十二952 (略) 戲樂を奏せしかば、孔子は禮に反せるものありとて之を止めしむ。
 十二956 「君子は過あれば謝す。
 十二963 (略)、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。
 十二966 (略)、母たましく機上に

在り。
 十二969 孟子(略)、戰國爭奪の世に在りて、専ら聖人の道を講ぜり。
 十二991 道を行くにも、(略)にも、自ら公衆に對する禮儀あり。
 十二994 (略)、他人の安眠をさまたぐるが如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。
 十二999 (略)等の交通機關、(略)等の公共營造物に在りては、敏速と規律とを尊ぶものなれば、(略)。
 十二9910 (略)、之に必要な諸種の規則あり。
 十二1010 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。
 十二1023 其の土地に廣狹の差あり、其の組織に繁簡の別ありといへども、(略)。
 十二1024 其の土地に廣狹の差あり、其の組織に繁簡の別ありといへども、(略)。
 十二1055 凡て制度の運用は人にあり。
 十二1065 (略)、國家に勳勞あり又は學識あるものより勅任せられたるもの、(略)。
 十二1065 (略)、國家に勳勞あり又は學識あるものより勅任せられたるもの、(略)。
 十二1075 帝國議會の主要なる任務

は法律及び歳出・歳入の豫算を議定するにあり。

十二108 2 図 若し兩院の決議一致せざるときは、帝國議會の協賛にあらず。

十二110 4 図 (略)、其の後時世の移り變るに連れて、兵制にも變遷あること、(略)。

十二110 6 図 勅諭は(略)、復古の政と共に陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御諭しあり、(略)。

十二111 10 図 平生より此の覺悟なきものは、時に臨みて或は不覺の名を取ることあらんと戒め給ふ。

十二112 10 図 さはあれ、勇氣には大勇と小勇との區別あり。

十二112 10 図 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、真正の軍人にあらず。

十二113 1 図 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、真正の軍人にあらず。

十二113 10 図 (略) 大いなる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと諭し給ふ。

十二115 9 図 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

十二117 2 図 此の五箇條は(略)、軍人として始めて守るべき事に非ず。ありがたい「有難」(形) 6 アリガタ

イ ありがたい 有りがたい 「ウ」 三66 7 図 「ウラシマサン、コノアヒダハアリガタウゴザイマシタ。

三70 2 図 「イロイロオセワニナツテ、アリガタウゴザイマスガ、(略)。

四26 6 図 オマツハツリヲワタシテ、「毎下アリガタウゴザイマス。」(略)。

七68 4 図 見事な桃をたくさんおくり下さいます、有りがたう存じます。

八11 7 図 御寫眞をありがたう。八66 6 図 (略)、一週間もおひまをいただきます、まことに有りがたう存じます。

ありがたい「有難」(形) 3 有りがたし 有り難し 「一ク」

九72 1 図 御見舞狀有りがたく拜讀仕候。

十92 3 図 來る八日講話會これあり候由にて御誘ひ下され有り難く存候。

十一62 10 図 (略) 法會相營度候間、御多用中恐入候へども、御參列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

ありがたなみだ「有難涙」(名) 1 有りがた涙

八66 8 図 病中の祖母も大そうよろこびまして、有りがた涙をこぼして居ります。ありがたい「有難」(感) 1 ありがた

う 五20 6 図 母は(略)といひました。おはなは戸だなの中から一番大きなさらを持つて來ました。母は「ありがたう。

ありがたいございます「有難御座」(感) 2 アリガタウゴザイマス ありがたうございます

二9 4 図 「ドウゾ オアガリクダサイ」。「アリガタウゴザイマス。」

六63 6 図 めくらは杖を受取つて、「あゝ、ありがたうございます。

ありさま「有様」(名) 9 有様 有さん ありさま

九19 5 図 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。

九67 2 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。

十43 1 図 (略)、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。

十80 5 図 あいぬの風俗は(略)。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

十一31 1 図 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモヒ見ルベク、(略)。

十一38 5 図 耕作に水牛を使用する様も珍しく、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覺え申候。

十一72 9 図 (略)、「かしこに行きて、彼の畫師の有様を見給へ。」とささやくに、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。

十一115 6 図 萬事此の有様なれば、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

十二7 8 図 (略)、無二無三に攻撃せしかば、敵艦隊は四分五裂の有様となれり。

ありさん「阿里山」(地名) 1 阿里山 十一39 9 図 阿里山の檜材は世界無比の良材と稱せらるゝものにて、(略)。

ありた ひととくたにありたきよみずさつまやき

ありま「有馬」(地名) 2 有馬 十73 8 図 温泉の多きこと(略)。中にも最も世に知られたるは、西に道後・有馬、東に箱根・熱海・伊香保等あり。

十73 8 図 道後に次ぎて早く世に知られたるは有馬の温泉にして、京都・大阪に近ければ、浴客多く集り、すこぶる繁榮せり。

ある「或」(連体) 65 アル ある 或

二33 2 ムカシアルトコロニ、タヤハタケヲタクサンモツテキ

タ人ガアリマシタ。

二34 2 アル日トモダチニユミノ

ジマンヲシテ、(略)。
 二50² ムカシアルトコロニ、ヨ
 イオヂイサントワルイオヂイサ
 ンガアリマシタ。
 二51² アル日犬ハオヂイサン
 ノタモトヲクハヘテ、(略)。
 三34⁷ あるばんまさを ははは
 といつしよによそからかへつ
 てきました。
 三45⁶ あるばん一人の男がそ
 らをむいて、ながいさををふ
 りまはしてゐました。
 三54⁷ アル日母ガ「早く、早く。」
 トヨンダノニ、(略)。
 三65⁴ アル日ウミベへ出テ見
 ルト、(略)。
 三69⁷ ソノウチニウラシマハ
 ウチヘカヘリタクナツタカラ、
 アル日オトヒメニ、「(略)。」ト
 イヒマシタ。
 四38¹ アル日タヒヒラメサバ
 タコナドガオヨイデキルト、
 (略)。
 四52⁶ アル日ハマベへ出テ見
 ルト、ワニザメガ居マシタカ
 ラ、(略)。
 五1³ ある時生馬のかはをはいで、
 (略)へおなげ入れになりました。
 五6⁶ 又アル時ドコカラトモナク一
 羽ノ金色ノトビガトンデ來テ、オ弓
 ノサキニトマリマシタ。
 五11⁸ ある時上の方でさわがしいお

とがするから、見上げると、(略)。
 五45⁸ ある日友吉と音次郎の二人が
 よそからかへつて來る道で、にはか
 に雲が出て、かみなりが鳴り出しま
 した。
 六20⁴ 昔ある國で大きな象の目方を
 はからうとしたが、(略)。
 六22⁶ ある家にはに大きな水がめ
 があつて、雨水が一ぱいたまつてゐ
 ました。
 六24⁵ アル晩金物ヤノ店デ、ヤクワ
 ントテツビンガメイノジマンバナ
 シヲシマシタ。
 六29⁸ ある日主人は朝から用たしに
 出たので、(略)るすをしてゐると、
 (略)ふでを買ひに來た。
 六46² ある日信長が夜明け前に出か
 けようとする、(略)。
 六46⁵ 又ある朝早く信長がかりに出
 ようとして、「(略)。」とよびます
 と、(略)。
 六47⁵ ある年、城のへいが百間ぼか
 りこはれた事がありました。
 六55⁵ ある時謙信が山の上に陣取つ
 てゐると、信玄は(略)、はさみう
 ちにしようとした。
 七5⁶ (略)アル年敵ノ大將、高
 師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來リ攻
 ム。
 七24² (略)アル夜弟子ヲ集メテ、書物
 ノ講義ヲセシ時、(略)、トモシビキ
 エタリ。

七60⁶ (略)あるものは頭大きくまるく
 して、しゝの如く、あるものは顔長
 くとがりて、狐の如し。
 七60⁷ (略)あるものは頭大きくまるく
 して、しゝの如く、あるものは顔長
 くとがりて、狐の如し。
 七63³ (略)ある山國にては、犬のくび
 に(略)かごをかけおきて、つかれ
 たる旅人をすくはしむることあり。
 七82⁸ (略)ある時には鯨が頭から高く
 水けを吹いてゐることがあります。
 七83³ (略)又ある時にはとび魚が甲板
 の上へとび上ることもあります。
 八16³ (略)松下禪尼、アル日時頼
 ヲ招待セントテ、ス、ケタル障子ノ
 破レヲツクロヒキタリ。
 八19¹ 昔西洋のある所に、(略)、何
 不足なく暮してゐた農夫がありまし
 た。
 八19⁹ ある日一人の友だちは、この
 農夫と野原の草の上に坐つて、いろ
 く世間話をしてゐたが、(略)。
 八31⁹ ある時は釘をこしらへてゐ
 た。
 八32¹ ある時は鎌をきたへてゐた。
 八33² ある時の話に、「(略)。」と
 いった。
 八50⁸ (略)アル日皇子、寺ノニハニテ
 ケマリノ會ヲナシ給ヒ、鎌足モ參リ
 合せタリ。
 八69⁶ (略)ある時口・耳・目・手・足
 等一同申し合せて、胃に向つていふ

やう、(略)。
 八82¹ (略)ある土人の如きは水を以て
 家を造りて住めり。
 九18⁹ (略)、ある日我が軍艦萬千穂
 の一水兵が女手の手紙を読みながら
 泣いてゐた。
 九33¹⁰ 其の頃イギリスのある會社
 で、馬車鐵道をこしらへようといふ
 話があつたが、(略)。
 九44⁸ (略)昔アラビヤの或町にハッサ
 ンといふ者あり、(略)。
 九44¹⁰ (略)或時旅行先より手紙を送り
 て、(略)と言ひつかはしたり。
 九56² (略)故ニ或地方ニテハ之ヲドビ
 ンワリトイフ。
 九56⁸ (略)或動物ハ之ニ反シテ、(略)、
 コトニアザヤカナル體色ヲ有ス。
 九58⁵ (略)八十歳を越えて病を知ら
 ざる或老人に、長生の方法を問ひし
 に、(略)。
 九81¹⁰ 昔或氏神のお祭に競馬の神事
 といふ事があつた。
 九82⁴ 或年選ばれた子供の中に、す
 ぐれて上手な騎手が二人あつた。
 九88⁹ (略)サレバ何レノ國ニテモ、世
 ノ進ムニシタガヒ、或種類ノ物品ヲ
 定メテ之ヲ仲ダチトシ、(略)。
 十16⁸ (略)ある雪の朝、皇后は美しき
 御庭の雪景色を御覽じて、「(略)。」
 と仰せられしに、(略)。
 十32¹ (略)日頃(略)ト心ガケシガ、
 或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、

大イニ喜ビ、(略)。
 十33 6 因 昆陽ハ(略)ト思ヒ、或年試ミニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚ダ良カリキ。
 十34 4 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。
 十34 7 或人が主人に向つて、(略)とたづねた。
 十68 2 因 或夜にはかの嵐に吹かれて、(略)に乗上げたる帆船前船あり。
 十147 2 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。
 十148 2 アラビヤ人は後をふりかへりく、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。
 十150 6 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。
 十172 1 因 住持は心得ぬ事に思ひて、或時畫工に向ひ、「(略)」といへば、(略)。
 十172 8 因 或夜小僧住持の居間に來りて、「(略)」とささやくに、行きうかどへば、(略)。
 十193 1 因 物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、(略)。
 十193 2 因 物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、(略)。
 十105 7 因 或時將軍馬諤、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。

十113 7 因 或年暴風雨の爲に不作なりしことあり、(略)。
 十294 7 因 或時齊の臣景公に告げて曰く、「(略)」と。
 ある「在」(五) 529 アル ある「一ツ・ラ・リー・ール・レ」
 一19 2 ホンガアリマス。
 一19 4 テホンガアリマス。
 一19 6 フデガアリマス。
 一25 2 モリノナカニオミヤガアリマス。
 一35 4 カドニハゴフクヤガアリマス。
 二3 7 ウツクシイデハアリマセンカ。
 二16 5 大キナノモアリ、小サナノモアリ、(略)。
 二16 6 大キナノモアリ、小サナノモアリ、(略)。
 二16 7 (略)、マルイノモ、ホソナガイノモアリマス。
 二17 2 クルクルマハツテ、クモノスニカカルノモアリマス。
 二18 2 ミヅノウヘニオチテ、フネノヤウニナツテ、ハシルノモアリマス。
 二19 5 モシナツデアツタラ、ドナイロヲツケタデセウ。
 二27 7 ドコノイヘニモカドマツガタテアリマス。
 二33 4 (略)、タヤハタケヲタクサンモツテキタ人ガアリマシ

タ。
 二43 6 因 コハサウナ目ヲシテ、ニランデキルデハアリマセンカ。
 二44 7 ココニハウメノ木ガタクサンアリマス。
 二45 4 白イノモコウバイモアリマス。
 二47 7 (略)、ドコノテンジンサマノオヤシロニモ、ウメノ木ガウエテアリマス。
 二49 2 (略)オトシダマニイタダイタ本ガ一サツアリマス。
 二49 4 コレニハウツクシイエガアツテ、(略)。
 二49 5 (略)、ハナサカデデイノオハナシガカイテアリマス。
 二50 4 ムカシアルトコロニ、ヨイオデイスントワルイオデイスンガアリマシタ。
 三1 6 マコトニウツクシイデハアリマセンカ。
 三2 6 サクラノ木ハ、ヨソノクニニハ、コンナニタクサンアリマセン。
 三2 6 アツテモ、日本ノサクラノヤウナウツクシイハナハサキマセン。
 三10 5 ウチニハネエサンガ一人、ニイサンガ三人、オトウトトイモウトガ一人ヅツアリマス。
 三13 5 ムカシタイマノケハヤト

イフチカラノツヨイ人ガアリマシタ。
 三13 8 (略)、ダレトスマフヲトツテモ、マケタコトハアリマセン。
 三16 5 「おれよりちからのつよい人はあるまい。」「ひらがなのドリル」
 三19 2 ヒバリハオリルトキニハ、ケツシテスノアルトコロヘハオリマセン。
 三22 2 わたくしには口も目も耳もありません。
 三22 3 手もあしもありません。
 三22 5 まるいけれどもまりのやうにまんまるではありません。
 三22 6 うごかずにゐますが、しんだのではありません。
 三23 6 牛にはつがあるけれども、うまにはありません。
 三23 7 牛にはつがあるけれども、うまにはありません。
 三23 8 うまにはたてがあるけれども、牛にはありません。
 三23 8 うまにはたてがあるけれども、牛にはありません。
 三30 1 (略)ザルカゴナド、竹で作ツタモノガタクサンアリマス。
 三30 4 ソノホカ竹ノスタレモアリ、竹ノカキネモアリマス。
 三30 5 ソノホカ竹ノスタレモ

アリ、竹ノカキネモアリマス。
 三30 タルヤヲケニモ、竹ノ
 タガガカケテアリマス。
 三31 竹ノツカヒミチハマダマ
 ダタクサンアリマス。
 三32 馬ニマダハヲヒカセテ、
 田ヲカキナラシテキル人モア
 リマス。
 三32 4 ナハシロデナヘヲトツテ
 キル人モアリマス。
 三32 6 ナヘカゴニナヘヲ入レ
 テ、ハシツテイク人モアリマ
 ス。
 三38 1 がくかうへもつて行くも
 のは、みんなこのふろしきの
 中につつんであります。
 三38 2 ほかにまだだいいなもの
 が三つあります。
 三39 5 耳もよくきこえて、きき
 おとすやうなことはありませ
 ん。
 三43 1 ソノ日ノイクサニテガ
 ラノアツタモノヲ左ノ方ニ
 ナラベテ、(略)。
 三49 5 水の上で足をのぼし
 て、ぼんやりうかんでゐること
 もあります。
 三53 1 ハツニナル女ノ子ガア
 リマシタ。
 三56 4 ザシキノウチニ(略)、ウ
 チヂユウノ人ノキモノガホシ
 テアリマス。

三56 6 アハセモ、ワタイレモ、ヒ
 トヘモノモ、カタビラモアリマ
 ス。
 三57 3 アソコニハオトウサンノ
 チヤイロノオビガアリ、(略)。
 三57 4 (略)、コチラニハオカアサ
 ンノモンツキノハオリガアリ
 マス。
 三59 5 ほをかけてゐるのも
 あり、かけてゐないのもありま
 す。
 三59 7 ほをかけてゐるのも
 あり、かけてゐないのもありま
 す。
 三60 1 くらいけむりを出して走
 つていくせんもあります。
 三61 3 あそこにはうつくしいか
 ひや小石がたくさんあります。
 三61 8 こんなに大きいのも、こ
 んなに小さいのもあります。
 三62 2 はまぐりのやうに二つ
 合ふのもありますが、(略)。
 三62 5 (略)、さざえのやうに、
 ふかいつばのかたちになつて
 ゐるのもあります。
 三62 7 又あはびの貝のやう
 に、一つでひらたいのもあり
 ます。
 三63 3 (略)、この貝がらは(略)、
 おもてにうづまきがあります。
 三63 8 そのうづまきに、(略)と、
 (略)と、ふたいろあります。

三65 2 ムカシウラシマ太郎トイ
 フ人ガアリマシタ。
 三72 7 (略)、父モ母モシンデ
 シマツテ、ジブンノウチモアリ
 マセン、(略)。
 三73 1 (略)、トモダチモミンナ
 キナクナツテ、知ツテキルモノ
 ハ一人モアリマセン。
 四1 3 私どものがくかうは町
 の中ほどにあります。
 四1 5 ふでやかみを賣るみせ
 も、本を賣るうちも、みんな
 がくかうのきんじよにありま
 す。
 四2 3 (略)、左がはにいうびんき
 よくがあります。
 四2 5 そのすぢむかひに大きな
 ごぶくやがあります。
 四3 1 (略)、大きな店がたくさん
 あります。
 四8 7 ドンナウチデモオイハヒ
 ヲシナイトコロハアリマセン。
 四9 1 日ノマルノコクキガアサ
 日ニカガイイテキルノハ、イ
 サマシイデハアリマセンカ。
 四9 4 私ドモノガクカウデモ、
 ケサ天長セツノシキガアリマ
 シタ。
 四10 5 ウチニハカキノ木ガニ
 本アリマス。
 四11 3 (略)カカシガタテアリ
 マス。

四12 4 ウラノ山ニハクリノ木
 ノ林ガアリマス。
 四13 3 クリ林ノ中ニハ、ドンダ
 リノ木モ五六本アリマス。
 四15 8 はじめの日も、つぎの
 日も、たくさんえものがありま
 した。
 四16 4 牛ほどもある大きな
 のししで、(略)。
 四20 1 (略)、ただつねをほめる
 こゑは、山もくづれるほどで
 あつたといひます。
 四23 7 オマツノ店ニハ、糸ヤ
 (略)ガナラベテアリマス。
 四27 8 (略)、かうさむくなつ
 ては、しかたがありますまい。
 四36 5 ソノホカツカヒミチハマ
 ダイクラモアリマス。
 四37 3 麦ワラザイクニハカゴヤ
 オモチヤヤ色色ナ物ガアリマ
 ス。
 四37 6 マダコノホカニ麦ワラ
 デ作ツタ物デ、アツイジブン
 ニツカフ物ガアリマス。
 四41 6 (略)、ソバニ一セン五リン
 トカイタフダガタテアリマ
 シタ。
 四43 6 (略) このまん中に小さな物
 があります。
 四46 1 皆さんはとけいにかいて
 ある字がよめますか。
 四46 7 とけいになる時には、長

いはりはどこにありますか。

四七二 皆さんがあさおきる時には、みじかいはりがどの字の所にありますか。

四七五 皆さんがよるねる時には、みじかいはりがどの字の所にありますか。

四七七 一日のうちには何じかんありますか。

四七五 木ノヤウニカタイガ、木デハアリマセン。

四七五 サカナノニホヒガシマサガ、アタマモヲモアリマセン。

四八二 (略)、ソノママデヤイタリニタリシテタベルノデハアリマセン。

四八五 やぶの竹は(略)、中にはさが土までとどいてゐるものもあります。

四八六 羽の色はあまりうつくしくはありませんが、(略)。

四八七 三郎ハ(略)、ヒマサヘアレバ、母ノソバへ来テ、(略)。

四八八 たらひの中に あるは何。

四八九 ひざの上には 何がある。

四九〇 (略)、そのさをのさきにはひらいた赤い扇がつけてあります。

五〇一 天照大神の御弟に、すさのみことといふきのあらい神さまが

ありました。

五二二 (略)、見上げると、はしがかけてあつて、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

五二四 日本一ノ大キナホトケサマハ、ナラノオ寺ニアリマス。

五二五 (略)、目ノ長サガ三尺九寸、手ノヒラノ長サガ五尺六寸、中指ノ長サガ五尺アリマス。

五二六 池ノ中デコヒガオイデキルノヲ見タコトガアリマセウ。

五二七 (略)、クロイテンノアルウロコガ三十六枚ツツナランデキマス。

五二八 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、(略)。

五二九 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、(略)。

五三〇 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、(略)。

五三一 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、(略)。

五三二 目ハ大キクテ、口ノ右左ニハ太イヒゲガアリマス。

五三三 時ニハ二三尺モ高クトブコトガアリマス。

五三四 鯉ノタキ上リトイツテ、タキデモ上ルコトガアルサウデス。

五三五 男ノ子ノアルウチデハ、五月ノセツクニ鯉ノフキナガシラ立テマス。

五三八 〔おはなや、用があるから、

ちよつとお出で。〕

五三九 〔そこにおさらがあるから、取つておくれ。〕

五四〇 それからそこに切つてあるたけのこをおなべの中へ入れておくれ。〕

五四一 かまをぬすまれたものがありました。

五四二 (略)といふうはさがあるの

で、行つて見ると、(略)。

五四三 (略)、行つて見ると、なるほどそのかまがあります。

五四四 〔この釜は昔から私のうちに

ある釜です。〕

五四五 この釜はお前の物にちがひあるまい。

五四六 コ、ニ茶ノ木ガアリマス。

五四七 ヨクソダツタ茶ノ葉ハ長サガ二寸バカリモアリマス。

五四八 ツヤガアツテ、色ハコイミドリ色デス。

五四九 花ニハベンガ五ツアツテ、ヨイニホヒガシマス。

五五〇 (略)、ソノ中ニマルイ種ガ二ツ三ツツツアリマス。

五五一 マタ三番茶・四番茶マデモツムコトガアリマスガ、(略)。

五五二 蝶ニハ大キナノモ、小サナノモアリ、(略)。

五五三 (略)、羽ノ色ニモ、白イノ

ヤ、キイロナノヤ、黒イノヤ、マダ

ラナノヤサマ／＼アリマスガ、(略)。

五五四 カラデセウ。

五五五 下りる人もあり、のりこまうとする人もあり、(略)。

五五六 下りる人もあり、のりこまうとする人もあり、(略)。

五五七 (略)、むかへに來た人もあり、見おくりに來た人もあつて、大そうこみ合つてゐます。

五五八 (略)、むかへに來た人もあり、見おくりに來た人もあつて、大そうこみ合つてゐます。

五五九 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、もうのりこんだ人もあります。

五六〇 かばんを持つて走つて行く人もあります。

五六一 まだきつぷを買つてゐる人もあります。

五六二 まだむかふからいそいで走つて來る人があります。

五六三 汽車はどんなことがあつても待ちません、(略)。

五六四 〔かみなりは高いもののある所へおちるのだ。〕

五六五 マクハ瓜ヤタ顔ヤ西瓜ニハ、マルイ形ノモ、長イ形ノモアル。

五六六 キ瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、(略)。

五六七 キ瓜ニハカハニ(略)、カボチャニハデコボコガアル。

五50 4 ソノ他ノ瓜ハ大テイナメラカ
デアル。
五51 6 (略)、ニナクレバタベラレナ
イノハ、カボチャトトウ瓜ト夕顔デ
アル。
五52 3 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエ
テキルノガアル。
五52 5 花ハ夕顔ダケガ白クテ、ソノ
他ハ皆黄色デアル。
五54 3 園「私ハ羽ガアルカラ、鳥ノ仲
間ダ。」
五57 5 近ゴロハ又マツチトイフベン
リナ物ガ出来テ、火打石ヤ火打金ヲ
使フ人ハメツタニアリマセン。
五58 1 ソノホカニ石炭トイフモノガ
アリマス。
五58 8 油ニ毛色々アリマス。
五59 1 魚カラトツタモノモアリ、
(略)モアリ、(略)モアリマス。
五59 1 (略)モアリ、ケモノカラトツ
タモノモアリ、(略)モアリマス。
五59 2 (略)モアリ、(略)モアリ、
シヨクブツカラトツタノモアリマ
ス。
五64 4 (略)と書いてあります。
五65 5 園 さあ、こゝに葉書がありま
す。」
五67 4 大キナ字ヲ書イタ大キナノボ
リガ立テテアル。
五68 7 オ宮ガアル。
五69 4 オ宮ニハエマガタクサンカケ
テアル。

五69 5 オ宮ニハエマガ(略)。古イ
ノモ新シイノモアル。
五69 6 ヨシツネ・ペンケイノエモア
リ、ニタンノ四郎ノエモアル。
五69 6 ヨシツネ・ペンケイノエモア
リ、ニタンノ四郎ノエモアル。
五69 8 又日本ヘイガロシヤヘイトタ
、カツテキルエモアル。
五70 5 (略)ヤラ、(略)ヤラ、ニギ
ヤカナコトデアル。
五70 6 晩ニナルト、花ガ上ルトイ
フ話デアル。
五71 5 園 牛ノ角トハチガツテ枝ガア
ル。
五71 8 園 角ノアルケモノモタクサン
知ツテキルガ、(略)。
五76 2 ひよどりこえはしろの北の方
にあつて、(略)。
五76 3 ひよどりこえは(略)、よつ
ぽどけはしい所である。
五77 1 見ると丈の高い、たくましい
男である。
五79 7 園 鹿の通れる所を馬の通れな
いといふことがあるものか。
五80 3 見下せば、しろは何十丈ある
か知れないがけの下にある。
五80 3 見下せば、しろは何十丈ある
か知れないがけの下にある。
五80 4 東西の二門は今いくさのまつ
さい中である。
六1 2 わが日本は島國である。
六1 4 海岸には切立てたやうな岩山

もあるが、(略)。
六1 5 一面に小松のはえた小松原も
あり、又(略)長い松原もある。
六1 6 (略)小松原もあり、又大きな
松がならんだ長い松原もある。
六2 2 白い砂に青い松、どこのはま
べを見ても、美しい景色である。
六3 2 所々に白いぬのをさらしたや
うなたきや谷川があつて、(略)。
六3 6 (略)や、(略)は、まるであ
にかいたやうである。
六8 8 たんぼのさきにこんもりとし
た森があつて、(略)。
六9 2 御社の後には松山がありま
す。
六9 7 御社の後から山へのぼる道が
あります。
六13 4 (略)、少シ先ノ方ニトシデ行
ク。ソレハ道アンナイデアル。
六13 7 (略)ガア／＼ト鳴合フ。ソレ
ハアヒヅデアル。
六13 8 モシ列ニハナレルヤウナコト
ガアツテモ、ソノアヒヅヲ聞クト、
スグ列ニ加ルノデアル。
六14 2 (略)、ソノアヒヅヲ聞クト、
スグ列ニ加ルノデアル。
六14 6 (略)ハ道ニマヨフカラ、大テ
イ月夜ニトブノデアル。
六22 6 ある家にはに大きな水がめ
があつて、雨水が一ぱいたまつてあ
りました。
六24 8 園 「金ニハイロ／＼アリマス

ガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、
(略)。
六25 5 園 金ヤギンハ(略)、ドチヲ
モタクサンアリマセンカラ、ネダン
モ高ウゴザイマス。
六25 8 園 銅ハ(略)、金ヤ銀ヨリモ
タクサンアリマスカラ、(略)ネダ
ンモヤスウゴザイマス。
六26 5 園 シテ見レバ銅ホド役ニ立ツ
モノハアリマスマイ。」
六26 7 園 「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、(略)。
六26 8 園 「(略)、ソレヨリモツトタ
クサンアツテ、モツト役ニ立ツモノ
ハ鐵デセウ。
六28 4 園 「ソレデモ鐵ハデキニサビ
テ、赤クナルデハアリマセンカ。」
六29 7 直吉と長松は同じ店のでつち
であつた。
六32 6 園 「だんながおるすだから、
なほさらまちがひがあつてはならな
い。」
六41 1 園 おみやげもおみやげ話も様
々あるから、たのしみにして待つて
おいで。
六46 3 (略)、はや、馬を乗りまはし
てゐる者があります。
六47 6 ある年、城のへいが百問ばか
りこはれた事がありました。
六49 3 秀吉はいくさの上手な人で、
(略)、一ぺんもまけたことがありま
せん。

六五二 一 (略)、その使のもつて来た文の中に、(略)といふふれいなことばがありました。

六五三 川中島の戦で名高い上杉謙信は強い大將であつた。

六五四 その相手は武田信玄で、これも謙信におとらないいくさの上手であつた。

六五五 上杉謙信はこんな強い人であつたが、又なさげぶかい人であつた。

六五六 上杉謙信はこんな強い人であつたが、又なさげぶかい人であつた。

六五七 熊ノ毛色ハ(略)、ムネノ所ダケ三月ナリノ白イ毛ガアリマス。

六五八 シグマトイフ熊ハ小馬ホドアツテ、力ガ強ウゴザイマス。

六五九 熊ハ(略)、カズノ子ノ俵ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

六六〇 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカマヘルコトガアリマス。

六六一 ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ來ルコトガアリマス。

六六二 むねの上には(略)弓矢や扇車がかざつてあります。

六六三 めさの前にはおみきやもちや魚がそなへてあります。

六六四 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シ

ナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガアル。

六七七 アレハハシケデアル。

六七八 正面ニアル二本エントツノ汽船ハ(略)。

六七八 今ニ出帆スルノデアラウ。

六八〇 アレハ停車場へ送ルノデアラウ。

七五四 しかし卸賣商人で、問屋をしてゐる場合がたくさんあります。

七五五 西洋西瓜には色々あるさうでございますが、(略)。

七五六 「あなたと私は大そう似てゐるではありませんか。」

七五七 豆類にはつるになるのとならぬのがあります。」

七五八 色々なキカイガアツテモ、ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デス。

七五九 ドンナガクキガアツテモ、手ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出スコトハ出來マスマイ。

七六〇 サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。

七六一 一匹の蠶の口から出る絲をのぼして見ると、五六町もあるといふことである。

七六二 一匹の蠶の口から出る絲をのぼして見ると、五六町もあるといふことである。

七六三 蠶が(略)、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。

七六四 蠶の口の中には小さいくだが一つある。

七六五 (略)ねばつたしるが外へ出ると、すぐにかわいて絲になるのである。

七六六 (略)、さなぎをころしておいて、それから繭をにて、絲を取るのである。

七六七 蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春・夏・秋といふ名がある。

七六八 (略)、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

七六九 (略)、右ノ方ニハ皿・ハチ・茶ワンナドノ焼物ヲ賣ル店ガアリ、(略)。

七七〇 (略)、左ノ方ニハゼン・ワシ・ハシナドノ塗物ヲ賣ル店ガアル。

七七一 ドノ店ニモ品物ガキレイニナラベテアル。

七七二 店ハ兩ガハニアツテ、マン中ノ道ハセマイガ、(略)。

七七三 出口ニ近イ所ニハ、着物・羽織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。

七七四 (略)、出口ニハ(略)ナドヲ賣ル金物屋ト、(略)ナドヲ賣ル荒物屋ガアル。

七七五 日用品ナラバ、マツ何デモアルトイツテヨロシイ。

七七六 又一ドニ色々ナ物ヲ買集メタイ時ニハ、一トコロデスムカラ便利デアル。

七七七 山内一豊が(略)のころ、大そうよい馬を賣りに來た者がありました。

七七八 (略)、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。

七七九 (略)、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いひなかつた。」

七八〇 (略)、これが一豊の出世のものとつたといふことであります。

七八一 マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デアルシ、書物モ(略)。

七八二 (略)、コノタクサンノ障子ハ皆僕ヲノ仲間デハツテアルデハナイカ。

七八三 コ、ニアル属モウチハモヤハリサウダ。」

七八四 「僕等ノ仲間ニハカラカサニナツタリ、合羽ニナツタリスルモノガアル。

七八五 「これにはちやんと三錢の切手はつてあるのに、なぜまたおあしを拂ふのですか。」

七八六 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、(略)。

七八七 水を飲まないことはあつても、水のまじつた物や、(略)を口に入れないことはない。

七八八 くだ物も水をふくんで居り、やさいにも水けがある。

- 七65 8 けれども水をたくさん飲みすぎたり、冷い水の中に長くはいつてゐたりするのはよくである。
- 七65 9 (略) を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがある。
- 七66 9 国 もとからある分にくらべると、實も大きく、味もよほどよろしうございます。
- 七70 1 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モアル。
- 七70 5 魚類ニハイワシ・(略) ナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガアリ、(略)。
- 七70 8 (略) タヒ・(略) ナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。
- 七71 1 (略) ナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデキルモノモアル。
- 七72 3 軍カンヤ汽船ハ時々カキヲカキオトサナケレバナライ程デアアル。
- 七72 4 又眞珠貝トイフモノガアル。
- 七72 6 (略) 美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカラノ中ニアルノデアアル。
- 七72 6 (略) 美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカラノ中ニアルノデアアル。
- 七73 2 (略) サンゴハコノ蟲ノ骨デアアル。
- 七73 5 (略) 海綿モ、ヤハリ海ノソコノ岩ナドニ取リツイテキル蟲ノ骨デアアル。
- 七73 8 陸ノケモノニニタモノニハ、ラツコ・ラツトセイナドガアリ、魚ニ似タモノニハ、鯨ガアル。
- 七73 9 (略) 魚ニ似タモノニハ、鯨ガアル。
- 七74 5 海ノ深イ所ハ何千ヒロモアル。
- 七74 9 海草ニモ色々アル。
- 七75 2 マヅタベラレルモノニハ、コンブ・(略) ナドガアリ、(略)。
- 七75 3 (略) ノリニスルモノニハ、フノリ・(略) トコロテンニスルモノニハ、テングサガアル。
- 七75 4 コノ他マダタクサンアルガ、イズレモヨイ肥料ニナル。
- 七75 6 海草ノ形ハ様々デアアル。
- 七75 7 オビノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、(略) ノモアル。
- 七75 9 (略) ゼンタイガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。
- 七76 1 又ニハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。
- 七76 2 又ニハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。
- 七76 4 ミルヤモヅクノ様ニ緑色ノモノモアレバ、(略) ノモノモアリ、(略) ノモノモアル。
- 七76 5 (略) ノモノモアレバ、コンブヤアラメノヤウニ茶色ノモノモアリ、(略) ノモノモアル。
- 七76 6 (略) ノモノモアレバ、(略) ノモノモアリ、テングサノヤウニ紅色ノモノモアル。
- 七76 9 (略) マヅ緑色ノモノハ浅イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアアル。
- 七77 4 根モ(略) デハナク、(略) 岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデアアル。
- 七77 7 廣イ海ニハ、コノ通りニ多クノ動物ヤ植物ガアル。
- 七78 1 (略) 様々ノ魚ヤケモノガ(略) シテキルノハ、(略) 美シイ景色デアラウ。
- 七81 7 国 私の乗つてゐる明治丸といふのは、長さが六十間程もある大きな汽船で、(略)。
- 七81 8 国 私の乗つてゐる明治丸といふのは、(略) 乗組の人員は二百人もあります。
- 七82 8 国 (略) その美しさは何とも言ひ様がありません。
- 七82 9 国 ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。
- 七83 2 国 (略) いるかがおよいであるのを見ることもあります。
- 七83 5 国 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。
- 七84 9 国 「航海といふものは(略) 又時にはおそろしい目にあふこともあります。
- 七85 3 国 しかし船はなか／＼沈むものではありません。
- 七85 4 国 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなる事もあります。
- 七86 2 国 船にはらしんぎといふものがあつて、それで方角をとつて進んで行くのです。
- 七86 7 国 海岸には燈臺がありますから、それを見ると、あれはどこだといふことが分ります。
- 七87 7 国 「さておしまひに一ついつておきたい事があります。
- 七87 7 国 日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。
- 七87 9 国 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんか。
- 七88 1 国 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんか。
- 七88 2 国 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。
- 七88 2 国 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。
- 七88 7 国 皆さんの中にも、(略) 外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。
- 七88 8 国 又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。
- 八14 8 村デハ農夫ガクハフカツイ

デ、タンボへ出ル時デアル。
 八154 人ノ職業ニハイロくアツテ、皆メイくノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。
 八155 (略)、皆メイくノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。
 八161 何モシナイデ遊ンデキルノハ(略)、却ツテ苦シイモノデアル。
 八161 働クコトハ人ノ本分デアル。
 八193 昔西洋のある所に、(略)、何不足なく暮してゐた農夫がありました。
 八206 農夫は之を聞いて、(略)はこの雀のせいではあるまいかと思ひました。
 八208 図 「それはさうと、君は白い雀を見たことがあるか。」
 八232 (略)、自分の家は(略)、誰も起きてゐる様子がありません。
 八234 牛小屋の牛はしきりに鳴いてゐるのに、誰も草をやるものがありません。
 八238 此の男は居酒屋に酒代の借がある、其のかたに持つて行かうとするのです。
 八312 僕の近所に年よりのかぢ屋があつた。
 八314 (略)、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。
 八323 又車のわを打つてゐた事もあつた。

八326 (略)、つくろひを頼んだ事があつたが、翌日すぐにこしらへてくれた。
 八332 仕事をしながら、僕に色々な話をした事もある。
 八341 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。
 八437 一切の書類や記録類も皆ぶじであつたといふことだ。
 八439 火は一日も無くてはならぬものである。
 八444 (略)も、(略)も、皆火の力の利用によるのである。
 八478 図 「(略)、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、(略)。」
 八494 図 こゝに頼信紙があるから、書いてお出し。」
 八561 陸上に居る鳥で、はぎの長いのは駝鳥である。
 八562 駝鳥は(略)、卵も子供の頭程ある。
 八576 それで「いすかのはしのくひちがひ。」といふことがある。
 八584 (略)、からだの割合に目の最も大きいのはふくろふ・みみづなどである。
 八587 尾の短いのは(略)などで、長いのはきじ・山鳥・くじやくなどである。
 八591 大きなものになると、(略)、天井へつかへる程である。
 八637 綿ノ中ニハ種ガアリマスカ

ラ、(略)、ソレヲ取去ルノデス。
 八641 木綿織物ニ(略)色々な縞ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。
 八842 (略)、名譽ノ戦死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)ノ二人ハ軍神トマデイハレタ。
 八846 橘中佐ハ東宮武官トシテ皇太子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツタ。
 八869 時ハ八月三十一日ノ朝日モマダ上ラナイ頃デアツタ。
 八898 陣地ハフタ、ビ敵ニ取返サレルノデアアラウ。
 八927 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイクラモアルガ、(略)。
 八929 (略)、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。
 八929 (略)、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。
 八931 海軍ノ廣瀬中佐モヤハリ同じデアル。
 九610 コ、ニ櫻ノ花ガアル。
 九610 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツテ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。
 九78 (略)、豆ヤ藤ノ花ノ瓣ハ不揃デアル。
 九82 又ユリヤアヤメノ花ハ萼ノ色ガ瓣ト一ツ色デアル。
 九85 其ノ形モマタ様々デアル。

九91 イチゴノ花ハボンノ様ナ形デ、ホタルブクロノ花ハフクロノ様デアル。
 九93 シソノ花ノ様ニクチビルノ形ヲシタノモアリ、(略)ノモアル。
 九94 (略)ノモアリ、オシロイノ花ノ様ニクダノ形ヲシタノモアル。
 九97 タトヘバボタンノ様ニ一リン咲ノモアリ、(略)ノモアル。
 九99 (略)ノモアリ、ニンジンノ様ニカラカサヲヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモアル。
 九101 又麥ノホノ様ナ形ニナツテ咲クモノニハ大葉子ノ花ナドガアリ、(略)ニハ藤ナドガアル。
 九102 (略)ニハ大葉子ノ花ナドガアリ、總ノ形ニナツテ咲クモノニハ藤ナドガアル。
 九104 タンボ、ヨメナナドハ一リン咲ノ様ニ見エルガ、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。
 九189 明治二十七八年戦役の時であつた、(略)。
 九1910 図 私には妻も子もありません。
 九205 大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。
 九234 図 其のうちには花々しい戦争もあるだらう。
 九309 (略)、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

九三二 今は水路に汽船があり、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

九三八 鐵道の通じてゐない所でも、

九八五 八 (略)、上を下へのさわぎである。

九八六 一 (略)にかまはず、馬をかけ

尖ツテキル葉モアリ、ヘコンデキル
葉モアル。
十62 へリモ鋸^{ノギリ}ノ齒ノ様ニギザク

紙の上を布で包んだのもある。
 213 又りつばなものになると、革
 をきせたのもある。

- 十214 是は活版刷の本の造り方であるが、(略)。
- 十215 (略)、この外に木版刷の本もある。
- 十217 それは(略)版木を造り、一枚づつ手刷にするのである。
- 十292 畑に續いて、農家が一けんある。
- 十294 物置の後には、大きなだいぐの木があつて、(略)枝もたわむ程なつてゐる。
- 十348 (略)、知名の人の手紙を持つて來た者も大勢あつたのに、(略)。
- 十364 (略)、中にはそれをふんだ者もありましたが、(略)。
- 十667 (略)、今新に鯨を追ふものもあり、鰐を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。
- 十668 (略)、今新に鯨を追ふものもあり、鰐を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。
- 十669 あちらこちら入亂れて戦場のやうである。
- 十671 捕鯨は實に勇壯なものである。
- 十672 捕鯨法には此の外に汽船の備砲から鰐を打つ方法もあり、又(略)などもあつた。
- 十673 捕鯨法には此の外に(略)もあり、又以前には鯨の通路に網を張つて鰐を打つ方法などもあつた。
- 十6710 昔は大鯨一頭を捕へると、

- (略)の生活費を支へ得ると言つたものである。
- 十835 犬と猫は最も多く家に飼はれる獣である。
- 十837 犬は夜を守らせる爲、又はかりに使ふ爲に飼ひ、猫は鼠を捕らせる爲に飼ふのである。
- 十839 (略)、家畜としてもつと大切なものは牛・馬・羊・豚等である。
- 十843 其の上牛肉と牛乳は飲食物としても大切である。
- 十846 東京市だけでも、一年にほふる牛は數千頭にも上るといふことである。
- 十853 死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。
- 十855 (略)、兵器・糧食を運送し、(略)、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。
- 十858 (略)、とかくに之をいぢめる風がある。
- 十8510 西洋の馬がおとなしくて、日本の馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、(略)。
- 十861 (略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。
- 十862 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするのも、人に恐れるからである。
- 十869 隣國の支那人は最も多く豚肉を食ふ國民である。

- 十871 羊や山羊は毛が必要である。
- 十882 其の外あひるや七面鳥なども家に飼はれる鳥である。
- 十993 一箱ノマツチヲ造ル手數モナカク、複雑ナモノデ、ソレヲ大勢ノ人ガ手分シテスルノデアル。
- 十103 手數ノカ、ツタマツチノ價ノ安いノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。
- 十105 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。
- 十118 (略)一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、(略)、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヤ發明ヲスルコトモアル。
- 十119 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、(略)。
- 十119 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、(略)。
- 十121 (略)、コ、ニ注意シナケレバナラナイノハ共同一致トイフコトデアル。
- 十121 分業デスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、(略)。
- 十132 (略)等ハ皆分業ニ外ナラズノデアル。
- 十146 アラビヤは世界に名高い良馬の産地である。
- 十146 飲まず食はずに終日・終夜走つても尚平然として居るといふことである。
- 十1472 こゝにアラビヤ馬の違者な

- ことを證明する面白い話がある。
- 十1502 數千年の久しい間、土人の絶えてたゆまない丹誠の結果である。
- 十1508 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。
- 十1509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。
- 十1551 隊中にピエールといふ年の頃十三四ばかりの少年鼓手があつた。
- 十15510 耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。
- 十1563 どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。
- 十1567 おくれ、ばピエールはこゝえて死ぬであらう。
- 十15610 (略)とさげふ人を誰かと思れば、將軍マクドナルドである。
- 十1571 マクドナルドは此の隊の司令官で、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。
- 十1577 (略)「兵士は皆我が子も同様である。
- 十1587 (略)、少年ははや息も絶え絶えである。
- 十1644 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。
- 十1647 同ジ材料デモ、(略)、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニ

- モ大イナル得失ガアル。
- 十一65 寒イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、(略)。
- 十一65 寒イ時ハ(略)、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。
- 十一65 暑イ時分ハ(略)、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。
- 十一66 食物ハ又變化ガ大切デアル。
- 十一66 例ヘバ(略)ヲ添ヘ、(略)ヲ出シ、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。
- 十一66 至ルマデ、皆ソレゾレ工夫ガ入用デアル。
- 十一66 常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。
- 十一67 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ・洗ヒ流シヲスル所デアルカラ、(略)。
- 十一67 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハワカシイ話デアル。
- 十一107 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。
- 十一107 町には瓦屋根の家もあるが、田舎は大抵葺屋根ばかりである。
- 十一107 町には瓦屋根の家もあるが、田舎は大抵葺屋根ばかりである。
- 十一107 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。
- 十一107 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。
- 十一107 此のオンドルがある爲に、(略)冬でも夜具を用ひない。
- 十一108 (略)、朝鮮では「(略)」といふ意味のことわざがある。
- 十一108 第二に目につくのは白い着物である。
- 十一110 (略)、普通の墓は大抵土を盛上げるばかりである。
- 十一110 きせるは(略)。長いのは四尺もある。
- 十一111 朝鮮人は(略)、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。
- 十一111 暑い時分汽車に乗つて朝鮮を旅行すると、どここの山陰にも白い着物が乾してある。
- 十一112 (略)、大キナ戦艦ナドニナルト、設計圖バカリデ數百枚モアルトイフ。
- 十一112 設計圖ガ出來上ルト、(略)實物大ノ圖ヲ作ツテ、始メテ製造ニ着手スルノデアル。
- 十二12 工場ニハ色々アル。
- 十二12 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、鋼鐵・眞鍮類ヲ鑄ル處モアリ、(略)。
- 十二12 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、鋼鐵・眞鍮類ヲ鑄ル處モアリ、(略)。
- 十二12 (略)、汽鑪・煙突等ヲ造ル處モアリ、又木製ノ器具類ヲ製造スル木工場モアル。
- 十二12 (略)、汽鑪・煙突等ヲ造ル處モアリ、又木製ノ器具類ヲ製造スル木工場モアル。
- 十二14 (略)、實際ハ(略)ニモソレノ附屬具ガアリ、(略)。
- 十二15 我が國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノハ(略)、中ニモ横須賀ト吳ノガ最大ナモノデアル。
- 十二15 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、安藝ハ吳デ造ツタノデアル。
- 十二15 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ疊ムカ、コンクリートデ固メルカシテアル。
- 十二15 船ヲ其ノ中ニ入レテ一方ノ扉ヲ閉デ、其ノ水ヲポンプデカイ出シテ工事ニ掛ルノデアル。
- 十二16 我が國デ一番大キイノハ佐世保海軍工廠ノ船渠デ、長サ百三十四間、渠口ノ幅十九間餘、深サ八間餘アル。
- 十二20 植物の花には、同種の他の花の花粉を受けると、良い實を結ぶものがある。
- 十二21 (略)、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。
- 十二21 若し之を消費するものがないければ、(略)呼吸作用を営むことが出來なくなる道理である。
- 十二21 (略)炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。
- 十二21 外に同化作用といつて、盛に炭酸瓦斯を取つて、(略)酸素を放つ作用がある。
- 十二22 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)、地球上の植物は盡く枯死すべきである。
- 十二22 (略)は、他にも種々の原因もあるが、(略)。
- 十二22 (略)、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。
- 十二22 (略)、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。
- 十二22 是は水中にとけてゐる酸素が吸盡されるからである。
- 十二22 是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。
- 十二23 (略)、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。
- 十二34 (略)、縣廳カラモ知事ノ代理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。
- 十二34 (略)、其ノ内何千圓ハ町内有志者ノ寄附金デアル。
- 十二35 (略)、今新校舍ノ出來上ツタノハ眞ニ慶賀スベキ事デアル。
- 十二36 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、(略)。
- 十二37 (略)、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。
- 十二81 頭には霜をいたゞき、(略)、

路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音楽師がある。

十二817 處は塊太利の首府維也納の大公園、今日はにぎやかな祭日である。

十二827 木蔭に立つてつく／＼と此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

十二842 やゝあつて紳士はしばらく弾く手を止めると、(略)。

十二853 かの情深い紳士は誰であつたか、(略)。

十二855 佛蘭西のバイオリンの名手アレキサンドル・ブーシェであつたと後はなつて分つた。

あるいは「或」(副)2 或は

十二948 或時齊の臣景公に告げて曰く、「魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん。」と。

十二1119 平生より此の覺悟なきものは、時に臨みて或は不覺の名を取ることあらんと戒め給ふ。

あるいは「或」(接)19 或ハ 或は

十449 直線を適當の長さに切り、一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶ時は、美しき模様を生ず。

十449 直線を適當の長さに切り、一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶ時は、美しき模様を生ず。

十449 直線を適當の長さに切り、

一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶ時は、美しき模様を生ず。

十624 發掘シタル銅鑛ハ、或ハ電

氣ジカケノ機械ニテマキ上ゲ、或ハ坑内ニ敷キタルレールニヨリテ坑外ニ運ビ出シ、之ヲ選鑛場ニ送ル。

十625 發掘シタル銅鑛ハ、或ハ電

氣ジカケノ機械ニテマキ上ゲ、或ハ坑内ニ敷キタルレールニヨリテ坑外ニ運ビ出シ、之ヲ選鑛場ニ送ル。

十658 ボートは銆に附けた長いつな

に引かれて、或は右に或は左に引廻される。

十658 ボートは銆に附けた長いつな

に引かれて、或は右に或は左に引廻される。

十一326 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ情勢ヲサグリ、或ハ我が運送船・商船ヲ保護シ、或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

十一328 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ

情勢ヲサグリ、或ハ我が運送船・商船ヲ保護シ、或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

十一329 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ

情勢ヲサグリ、或ハ我が運送船・商船ヲ保護シ、或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

十一329 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ

情勢ヲサグリ、或ハ我が運送船・商船ヲ保護シ、或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

十一338 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。

十一338 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近

寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。

十一341 通報艦ハ主トシテ艦隊ノ

命令・報告等ヲ傳達シ、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が艦隊ニ報告ス。

十一858 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コ

レヲ練條機ト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、(略)。

十一858 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練條機ト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、(略)。

十一892 (略)、蟻は(略)、油蟲の

附着せる植物に集りて之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十二99 (略)、敵艦の大部分は我

が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。

十二910 (略)、敵艦の大部分は我

が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。

十二102 我が國の地方自治團體

は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。

とびあるく・めぐりあるく・もちあるく

二604 オヂイサンハヨロコンデ、

ソノハヒヲカゴニイレテ、「(略)カレ木ニハナヲサカセマセウ」トヨンデアルキマシタ。

三246 牛は力がつよいけれど

も、あるくことがおそろぐさいます。

四54 オマハタチノセナカノ

上ヲアルイテ、カゾヘテ見ルカラ、ムカフノヲカマデナランデ見ヨ。」

四64 みちをとほる人は、あしだのはにはさまつた雪をたたきおとしながらあるいてゐます。

五108 野はらは平ですから、ゆつ

りあるきました。

五111 ひるはあたたかな日にてら

され、夜は美しい月をうかべながら、休なしにあるきました。

五125 (略)、兩がはいへがたち

らんで、人がいそがしさうにあるいてゐました。

六616 まへからわたしは目がわ

るく、杖をたよりにあるきます。

七59 犬の種類は(略)。(略)。

あるく時肉のゆれ動く程こえ太り

たるものあり。

七71 エビノピン／＼ハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

八14 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛乳ヲ家々ニ配達シテアルク。

八55 鶴・さぎ・くひななど水の中をあるく鳥ははきが長い。

あるじ「主(名)1 主

九78 東風吹かばにほひおこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな。

アルプさん「地名」1 アルプ山

十一54 ナポレオンがアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた時は冬の半で、(略)。

アルプのやま「地名」1 アルプの山

十一59 (略)、全軍一同に歡喜の聲をあげた、アルプの山もふるふばかりに。

あれ「彼」(代名)13 アレ あれ

一285 アノハタヲゴランナサイ。アレガグンキデス。

三24 ムカフノ山ニハ、ユキガフツタヤウニ白クナツタトコロガミエマス。アレモサクラノハナデス。

四52 「あそこに(略)が見える。あのこちらに白いかべが見えませう。あれがうちです。」

四53 「ああ、あれですか。」

四34 次郎「だんごにつけるこなは。」三郎「あれも豆です。」

四78 「あの扇をいとおすものはないか。あれをいらないといふのもざんねんだ。」

五41 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ました。あれは今のつた人の手荷物でせう。

六77 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガアル。アレハハシケデアル。

六80 オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。アレハ停車場ヘ送ルノデアラウ。

七86 海岸には燈臺がありますから、それを見ると、あれはどこだといふことが分ります。

十35 (略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。主人は答へて、「あれが此の室にはいる前、(略)。」

十36 (略)、靜かに自分の順番を待つてゐました。あれの温順なことをよく現して居ります。

十一49 (略)「あれ程の名馬はいくら金を拂つても惜しくはない。」と、口々にほめた。

あれひきはあれ

あれ(感)2 あれ

五60 あれ、松蟲が鳴いてゐる。

五61 あれ、鈴蟲も鳴き出した。

あれあれ(感)2 アレアレ

二32 アレアレ、サガル。ヒケヒケ、イトヲ。

二32 アレアレ、アガル。ハナスナ、イトヲ。

アレキサンドルブーシェー「人名」1
アレキサンドル、ブーシェー

十二85 佛蘭西のバイオリンの名手アレキサンドル、ブーシェーであつたとはいふに後になつて分つた。

あれち「荒地」(名)2 荒地

十33 (略)、是等ノ島ニハ作物ノ出來ザル荒地多クレバ、罪人ドモハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、(略)。

十二46 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及ぶに比すれば、(略)、大いに荒地を開き、美田を増すの必要あり。

あれもよう「荒模様」(名)1 荒模様

十二18 又一地方に荒模様ある時は、測候所は地方暴風雨警報を發して之を豫告し、警報の信號を各信號所に掲ぐ。

あわ「粟」(名)1 粟

十81 食物は粟・稗・うばゆりの根等を主とし、(略)。

あわじしま「淡路島」(地名)2 淡路島

十一17 淡路島の北方、本土と相望む所、明石海峡となり、四國に近き所、鳴門海峡となる。

十一18 淡路島

あわす「合」(下二)9 合ス 合ス併す「一セ」ひいあわす・くみあわす・さそいあわす・つづりあわす・まいりあわす・みあわす・もうしあわす・もうしあわせおり

九15 是ヨリ南流シテ吾妻川ヲ合

セ、赤城・榛名ノ二山ノ間ヲ流れ、(略)。

九15 更ニ東南ニ流レテ、(略)、渡良瀬川ヲ合セテ栗橋ニ至ル。

九16 利根川ノ本流ハ東南ニ流レテ鬼怒川・小貝川ヲ合セ、益々其ノ大イサヲ増ス。

九27 第一師團より第十八師團に至る十八箇師團、外に近衛師團を合せて十九箇師團となれり。

九96 (略)、よく人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。

十一43 (略)、一族の者領地をうばひて、我を追出したり。光範と心を併せての事とて、如何ともし難ければ、(略)。

十一93 物の價は(略)、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。

十二47 我が大日本帝國の古き六十八國、沖繩諸島合せてぞ、府は三つ、縣は四十三。

十二48 (略)、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は、銅の産額に比ぶと。

あわせ「合」ひおんさそいあわせ・といあわせのてがみ

あわせ「裕」(名)1 アハセ

三56 アハセモ、ワタイレモ、ヒトヘモノモ、カタピラモアリマ

ス。

あわせもちう「合用」(上二) 2 併せ用ふ「一ヒ」

145 6 図 第七圖は縦・横・斜三様の線を併せ用ひたるものなり。

146 8 図 見よ、(略)、直線・曲線を併せ用ひたる第十四圖・第十五圖の模様の如何に麗しきかを。

あわ・せる「合」(下二) 3 アハセル合せる「一セ・一セル」ひいあわせる・うちあわせる・よみあわせる

143 2 (略)、四ヒキキマス。アチラカラモ一ヒキキマス。アハセテ

五ヒキデス。

四21 7 図「ウチノニイサンヤネエサンヲアハセルト、ミンナデ

五人デスカラ、(略)。

1158 8 (略)、兵士等は力を合せて二人を引上げた。

あわづ「粟津」(地名) 1 粟津 八60 2 図 粟津の松の色はえて、かすまぬ空ののどけさよ。

あわ・てる「慌」(下二) 2 アワテルあわてる「一テ」

四39 1 図「コノアヒダ大キナフカガ来タ時ニ、君ヲハズキブンアワテマシタネ。

1157 8 將軍は(略)、はや谷へ下りようとする。兵士等はあわてて異口同音に、「將軍の命は我々千萬人の命よりも貴い。(略)。」といつて引止める。

あわび「鮑」(名) 2 あはびひのしあわび

362 6 又あはびの貝のやうに、一つでひらいたのもあります。

四43 1 図 のしあはびといふのは、あはびの肉をのして、紙のやうにうすくしたものです。

あわれ「哀」(形状) 2 あはれ

1069 6 図 水夫等は(略)、息も絶えへんに救を呼べり。少女は之を見て、「あはれなり、父上。早く船を出して救はん。(略)。」とせき立つ。

1281 8 忠實な大は古帽子をくはへて、あはれな主人の爲に、道行く人の授與へる喜捨を待ちわびてゐる。

あわれ「哀」(感) 1 あはれ

1135 5 図 、「さはいへど うらやましき身も輕き君、床柱。あはれ我、梁や棟木や、桁どもをいつもせおひて 片時も 休む間なし。」と 角柱 ひとりつづやく。

あわれみたま・う「哀給」(四) 3 アハレミタマフ アハレミ給フ あはれみ給ふ「一ヒ・一フ」

六81 1 図 昔に徳天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲアハレミタマヒキ。

九30 5 図 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々アリ。カクノ如ク國事ニタフレル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツ

キヲ見ルモノ、(略)。

1211 8 図 陛下が(略)、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、常に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の拜察せらるゝは、(略)。

あわれ・む「哀」(四五) 6 アハレムあはれむ「一ミ・一ム・一メ」

六84 8 図 七つとや、なんきをする人見るときは、力のかぎりいたはれよ、あはれめよ。

八92 6 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレム心モ深カツタ。

1081 7 図 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、不作ノ年餓死スル人ノ多キヲアハレミ、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

1043 8 図 (略)、一族の者領地をうばひて、我を追出した。 (略)。」と答ふ。忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、(略)。

1276 10 図 (略)、舟を呑む海獸ありと談ずる者、乗組員の運命をあはれむ者、コロンブスの暴舉をあざける者、(略)、口々に語り合へり。

1212 6 図 下は上を敬し、上は下をあはれみ、一致協同して王事に勤むべし。

あん「案」ひほりつあん・よさんあんあん「餡」(名) 3 あん

四33 8 図 「略」、もちやだんこのあんは何で作るのですか。」

四34 5 図 「それではあんの豆と、だんごにつけるこなの豆と同じですか、ちがひますか。」

四35 1 図 「あんにするのはあづきといふ豆で、(略)。」

あんえいはねん「安永八年」(名) 1 安永八年

1243 2 図 (略) 安永八年櫻島の破裂せし時は、(略)。

あながい「案外」(副) 1 案外

11107 8 朝鮮は夏も暑い、冬は又案外に寒い。

あんき「安危」(名) 1 安危

12109 1 図 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、(略)。

あんぐう「行宮」(名) 1 行宮

11229 9 圖 藏王堂の東なる吉水神社は後醍醐天皇の行宮の跡なり。

あんごいん「安居院」(名) 1 安居院

1010 9 図 コ、二程近キ飛鳥ノ安居院ハ古ノ飛鳥寺ノ跡ニシテ、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。

あんこくしよく「暗黒色」(名) 1 暗黒色

九53 8 図 晝ハ暗キ所ニヒソミ、日暮ヨリ出デテ飛ブカウモリハ暗黒色ニシテ、(略)。

あんざいしょ「行在所」(名) 2 行在所

十884 笠置^{かさぎ}の山の行在所、寄する雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち給ふ。

十一157 高徳せめても此の所存を上聞に達せばやとて、行在所の御庭にしのび入り、(略)。

あんじおり【案居】(ラ変) 1 案じ居り『一リ』

九71 連日の大雨に候へば、大川に近き御地は如何と案じ居り候ところ、(略)。

あんしん【安心】(形状) 2 アンシン 安心 心ごあんしんくださる・ごあんしんなさる

四395 ボクラハカウイフカタイヨロヒヲキテキルカラ、ドンナ時デモ、コノ中へハイツテ、内カラトヲシメテキサヘスレバ、アンシンナモノデス。

八427 (略)、どこまで焼けて行くか分らない。仕合に風上で安心だが、叔父さんのうちはどうだらう。

あんしんいたす【安心】(五) 1 安心いたす『一シ』

八674 昨朝あたりから熱がずっと下つて、食事が進みますから、一先安心いたしました。

あんしんさ・せる【安心】(下二) 1 安心させる『一セル』

九237 此のわけをよくおつかさんについて上げて、安心させるがよい。

あんしん・する【安心】(サ変) 1 安心する『一シ』

八685 其の後どうかと思つてゐましたが、手紙を見て安心しました。あんしんつかまつる【安心仕】(四) 1 安心仕『一リ』

九432 少しも御障なく入らせられ候由、一同安心仕候。

あんず【案】(サ変) 1 案ず『一ズル』心ごあんじくださる・ごあんじもうしおり

十4910 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。

あんぜん【安全】(名) 1 安全 他ノ動物ハ(略)、之ニ近ツクコトナキガ故ニ、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。

あんぜん【安全】(形状) 1 安全 九766 金銭ヲ安全ニ貯フルニハ郵便貯金トナスヲヨシトス。

あんとう【安東】(地名) 1 安東 十二57 安東

あんとうけん【安東県】(地名) 2 安東 十二581 安奉線は奉天より鴨緑江の江口に近き安東縣に達して、(略)。

十二585 安東縣は鴨緑江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、安奉鐵道改築落成の日には、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

あんどん【行灯】(名) 2 アンドン 五592 アンドンニトボスノハ大テイナタネカラトツタ種油デス。

五603 ランプニ石油ヲトボスヤウニナツテカラ、アンドンハダングダンニスタレテ來マシタ。

あんな(形状) 7 アンナ あんな 四五7 「うちのまへの川があんなにまがりがつて、とほくの方へながれてゐます。

四655 あんな 小さなからだで、あんな 大きなこゑの 出るのがふしぎです。

四656 あんな 小さなからだで、あんな 大きなこゑの 出るのがふしぎです。

四665 (略)、うめの花のさくじぶんから、あんなうつくしいこゑでなきはじめます。

七483 モトユヒヤ水引ノヤウナ、アンナ丈夫ナ物ハ日本紙デナクレバ出來ナイ。

十二8210 老人は、どうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、どうして(略)かと不思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

十二831 老人は、(略)、どうして又自分の弾く時にはあんな音が出ないのかと不思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

あんない【案内】(名) 1 あんない 心ごあんないもうしあげる・みちあんない 五798 さあ、あんないをせよ。」と言ひつけて、夜のうちにがけの上まで出た。

あんないぶん 心こうわかいのあんないぶん

あんばい【塩梅】(名) 1 塩梅 十一645 同ジ材料デモ、料理ノ塩梅ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、(略)。

アンピン【安平】(地名) 1 安平 十一372 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。

あんぼうせん【安奉線】(名) 2 安奉線 十二564 南滿洲の支線としては旅順線・營口線・煙台線・撫順線・安奉線あり。

十二581 安奉線は奉天より鴨緑江の江口に近き安東縣に達して、韓國の縦貫鐵道に連結す。

あんぼうてつどうかいちくらくせい【安奉鐵道改築落成】(名) 1 安奉鐵道改築落成 十二586 安東縣は鴨緑江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、安奉鐵道改築落成の日には、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十二586 安東縣は鴨緑江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、安奉鐵道改築落成の日には、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十二586 安東縣は鴨緑江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、安奉鐵道改築落成の日には、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十二586 安東縣は鴨緑江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、安奉鐵道改築落成の日には、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

あんみん「安眠」(名) 1 安眠

十二99 〆 〆 (略)、旅館にて夜晩く高聲を發して、他人の安眠をさまたぐるが如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。

あんらく「安楽」(名) 1 安楽

十二70 〆 〆 老後の安樂を願ふ者は若年の辛苦をいとふべからず。
あんらく「安楽」(形状) 1 安楽
九38 〆 〆 關所も無ければ、川止も無いから、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出来る。

い

い(名) 1 い

十二118 〆 〆 いろはのいをも わきまへぬ 身のいつしかに 積み得る、(略)、世の人並の 文字の數。

い「井」(名) 1 井

六43 〆 〆 井ノ中ノカハヅ大海ヲ知らズ。

い「衣」ひぎよい

い「位」ひだいにい

い「胃」(名) 6 胃

八69 〆 〆 ある時口・耳・目・手・足等一同申し合せて、胃に向つていふやう、(略)、汝はただ坐して食ふのみにて、少しも我等に報ゆる所なし。

八71 〆 〆 こゝにおいて、胃は一同に向つて曰く、「諸君は知らずや、我はたゞ坐して食ふ者にあらず。

九47 〆 〆 〆 「若し明日中に水のある所に着かずば、駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なかるべし。」

十76 〆 〆 〆 腹ノ中ニハ胃ト腸トアリ。

十76 〆 〆 〆 胃ハ口ヨリ入來レル食物ヲコナシ、(略)。

十76 〆 〆 〆 腸ハ胃ニテコナシ盡サザルモノヲコナシテ、其ノ不用ナルモノヲ體外ニ出ス。

い「意」(名) 6 意

九94 〆 〆 〆 此の門一に日暮門の名あるは、日暮るるまで見れどもあかずとの意なりとぞ。

十17 〆 〆 〆 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪は(略)。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は

直ちに其の意を察し奉りしなり。
十一75 〆 〆 〆 「先に晝がきたる檜の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、(略)、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、之を書添へんとて、わざぐ歸り來りたるなり。」

十一87 〆 〆 〆 加フルニ彼ノ蠟燭ノ心トスル太キ絲、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲、細大意ノマ、ニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。

十一91 〆 〆 〆 されど水は大都會などに

ては、時として價を生ずることあり。是飲料水とぼしくして意のまゝに之を得ること能はざればなり。

十二96 〆 〆 〆 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、市井の感化を恐れて、三度其の居を遷せりといふ。

い「網」ひくものい

い「蘭」(名) 1 蘭

十41 〆 〆 〆 蘭ハ水草ナリ。葉ナクシテ唯莖アリ。(略)。我等ノ家ニ數ケル壘ノ表ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナリ。

いあわす「居合」(下二) 1 居合す

「一セ」

十一45 〆 〆 〆 (略)、刀を取直して腹かき切らんとす。居合せたる人々涙に

くれながら、「(略)。」と、取つておさへて動かせず。

いあわせる「居合」(下二) 1 居合せ

「一セ」
六23 〆 〆 〆 一人の子どもが(略)、かめの中へおちました。居合せた子どもは皆うろたへてさわぎました。

いひいず「言出」(下二) 1 いひ出づ

「一デ」

十39 〆 〆 〆 〆 たち正していひ出でぬ、『此の方面の戦鬪に 二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』と。
いひいる「言居」(上二) 2 いひ居る
言ひ居る 「一イ」
十一73 〆 〆 〆 (略)、前の如く夜もすが

ら寝ねずして、明日はかく晝がかなどひとり言いひ居たり。

十二38 〆 〆 〆 (略) 魔嬭之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。

いいえ(感) 7 イイエ いいえ いゝえ

二23 〆 〆 〆 (略)、イツシヨニコ

ノカキネノワキニカクレマセウ。「イイエ、イツシヨニキテハイクマセン。

三64 〆 〆 〆 「どこでこんなにたくさんおひろひになりました。」と

ききましたら、「いいえ、これは

ひろつたのではない。
四7 〆 〆 〆 太郎「(略)」。今あのはし

の上を人がいくたりとほつて

るますか。」次郎「五人です。」太郎「いいえ、六人です。」

四28 〆 〆 〆 あなたのおなまは大きい枯れてしまつたやうです。(略)。」といひました。のぎくは

「いいえ、私たちは枯れたやうに見えても、ねは生きてゐます。

四33 〆 〆 〆 おはる「(略) ごはんにたく麦と、うどんやさうめんにする麦は同じですか、ちがひますか。」三郎「同じです。」おはる「いいえ、うどんやさうめんにする麦は小麦で、ごはんにたく麦は大麦です。」

四68 6 三郎「(略)。苦ケレバ私

ガカハリニノンデ上ゲマセウ。」

母「イイエ、オクスリ ハジブン

デノマナケレバ、何ニモナリマ
セン。」

六61 4 蘭「もしおなかでもいたい

か、おとし物でもしたのか。」と、

「(略)、ことばやさしくなぐさめる。

涙をふいて女の子、「いゝえ、さう

ではありません。(略)。」

いいおう「言終」(下二) 1 いひ終ふ

「へ」

七87 4 船長はかくいひ終へて、一

段と聲をはり上げて、「(略)。」

いいきかす「言聞」(下二) 1 いひき

かす「へ」

七53 9 小花は「小包郵便でもやは

り四匁までが三錢ですか。」と問ふ

に、母はなほ「小包郵便は(略)、

八錢でよいのです。(略)。昔はひき

やくといふものがあつて、(略)。今

では切手をはつて出しさへすれば、

「(略)、大そう便利です。」といひき

かせたり。

いいきかせる「言聞」(下二) 1 いひ

聞かせる「へ」

九23 8 大尉は(略)、水兵の手を握

つて、「(略)。此のわけをよくおつ

かさんにいつて上げて、安心させる

がよい。」といひ聞かせた。

いいきたる「言来」(四) 1 イヒ来ル

「へ」

八29 9 數日ノ後、川成ヨリ「見

セ申シ度キ輸出來タリ。御出アリタ

シ。」ト、エノモトニイヒ來レリ。

いいすつ「言捨」(下二) 1 イヒ捨ツ

「へ」

十23 3 驚キテ目送スレバ、ヤ、ア

リテ引返シ來リ、「(略)、五日目ノ

朝此ノ處ニテ我ヲ待ツベシ。」トイ

ヒ捨テ去レリ。

いいつかる「言付」(五) 1 言ひつか

る「へ」

六49 6 秀吉が信長に言ひつかつて、

敵を攻めに行つてゐた間の事でした

が、(略)。

いいつかわす「言遣」(四) 1 言ひつ

かはす「へ」

九45 1 或時旅行先より手紙を送り

て、其の子のアリに駱駝を連れて、

荷物を取りに来るべしと言ひつかは

したり。

いいつけ「言付」(名) 1 イヒツケ

三11 1 ワタクシハオカアサンノ

イヒツケヲヨクキイテ、イモウ

トノモリヲシタリ、オツカヒ

ニイツタリシマス。

いいいつける「言付」(下二) 5 いひつ

ける 言ヒツケル 言ひつける 言付

ケル「へ」

三53 2 何ヲ言ヒツケラレテモ、

「ハイ、今スグニ。」トイヒナガ

ラ、ナカナカトリカカリマセン。

五27 3 役人は(略)、「(略)」。釜ぬ

す人はその方にきまつたぞ。」とい

つて、下役どもに言ひつけて、しば

らせました。

五80 1 よしつねはこれを聞くと、

「(略)。さあ、あんないをせよ。」と

言ひつけて、夜のうちにがけの上ま

で出た。

六47 8 信長はとうとう秀吉にいひつ

けて、直させることにしました。

八91 1 コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬

丁ニ言付ケテ、(略)。其ノ時ハスグ

馬ヲ引イテ來イ。(略)。其ノ時ハオ

レノ死體ヲセオツテ歸ル積リデカケ

ツケヨ。」トイツタガ(略)。

いいふくむ「言含」(下二) 1 言ヒフ

クム「へ」

七3 1 正成ハ道ニテサトス

ヤウ、(略)。ヨク父ノ言フコトラ

聞分ケヨ。(略)。我が死ニタル後モ

一門ノ者一人ニテモ生キ殘リテアル

間ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御

タメニツクスベシ。(略)。」ト、ネ

ンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシ

タリ。

いいよう「言様」(名) 1 言ひ様

七82 7 月夜には波が銀の様に光つ

て、その美しさは何とも言ひ様があ

りません。

いいんむがくむいいん

い・う「言」(四・五) 457 イフ いふ

言フ 言ふ 曰ふ「へ」

フ・フ・フ

二35 1 アル日トモダチニユミノ

ジマンヲシテ、「カガミモチヲ

マトニシテ、イテミマセウカ」

トイヒマシタ。

二36 7 ソレカラコノ人ノタニ

ハ、オ米ガスコシモデキナクナ

ツタトイヒマス。

二46 7 天ジンサマハスガハラノ

ミチザネトイフ チユウギナオ

カタヲマツツタノデス。

二13 4 ムカシタイマノケハヤト

イフ チカラノツヨイ人ガア

リマシタ。

二14 6 (略)、ノミノスクネトイ

フ人トスマフヲオトラセニ

ナリマシタ。

二16 6 「おれよりちからのつよい

人はあるまい。」といつて、け

はやがじまんをしました。「(ひ

らがなのドリル)」

二36 6 まさはふしぎさうに、

「どうしてもう光らないのでせ

う。」といひますと、(略)。

二37 2 (略)、父は「ここがあか

るいから、みえないのです。く

らいところへはなしてごらん。」

といひました。

二37 2 父のいふとほり、そとへ

はなしたら、あをく光りながら、

しづかにとんでいきました。

二39 1 これがなければ、せんせい

のおつしやることや、みんな

の言ふことがわかりません。

三40 けれどもそのほかによけいなことは言ひません。

三42 ミナモトノヨシイヘトイフタイシヤウガイクサニ行ツタトキ、(略)。

三43 ソレデイツデモイクサニカツタトイフコトデス。

三45 東ト西ト南ト北ヲ四方トイヒマス。

三46 (略)、「あまりほしがきれいだから二つ三つはたきおとさうと思ふのだ。」(略)。ともだちは「ばかなことをいふ。」

三47 ともだちは「ばかなことをいふ。」(略)、「いつてわらひました。」

三53 何ヲ言ヒツケラレテモ、「ハイ、今スグニ。」トイヒナガラ、ナカナカトリカカリマセン。

三54 (略)。「トヨバレテモ、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、ナカナカスグニハ行キマセン。」

三54 「ハヤクオサラヒヲナサイ。」トイハレテモ、「ハイ、今スグニ。」トコタヘルバカリデス。

三55 (略)、「イツモノトホリ、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、スグニハキマセンデシタ。」

三65 ムカシウラシマ太郎トイフ人ガアリマシタ。

三67 (略)、「大キナカメガ出テキテ、(略)。」私ノセナカヘオノリナサイ。」トイヒマス。

三67 リユウグウニハオトヒメトイフキレイナオヒメサマガ居テ、(略)。

三70 ソノウチニウラシマハウチヘカヘリタクナツタカラ、アル日オトヒメニ、「(略)。」アマリナガクナリマスカラ、モウウチヘカヘリマセウ。」トイヒマシタ。

三71 オトヒメハ「(略)。」シカシケツシテフタヲオアケナサイマスナ。」トイツテ、タマテバコトイフリツバナハコヲワタシマシタ。

三72 (略)、「タマテバコトイフリツバナハコヲワタシマシタ。」

三73 (略)、「オトヒメノイツタコトモワスレテ、タマテバコラアケテ見ルト、(略)。」

四17 (略)、「にたんの四郎ただつねといふぶしが、(略)。」そのておひじしにむかひました。

四20 (略)、「ただつねをほめるこゑは、山もくづれるほどであつたといひます。」

四20 (略)、「マン中ノ一バン高イノハ、中ユビトモ、高高ユビトモイヒマス。」

四23 オヂイサンハ「ナルホド、ソノトホリデス。」トイツテ、ニツコリワラヒマシタ。

四28 「びきのきつねがさきのこつてゐるのぎくを見つけて、(略)。」まことに、おきのどくなことです。」といひました。

四30 母が父に「もうすぐお正月ですから、もち米をよういしなければなりません。」といひますと、(略)。

四31 「おもちにするのはもち米といふ米です。」

四35 「あんにするのはあづきといふ豆で、(略)。」

四35 (略)、「こなにするのは大豆といふ豆です。」

四35 父は(略)、「三郎はこんなは大そうもの知りになつたね。」といひました。

四36 皆サンノ知ツテキルダケイツテゴランナサイ。

四39 (略)、「サザエガ岩ノカゲカラヨビトメテ、(略)。」ボクラハ(略)、「アンシンナモノデス。」トイツテ、ジマンバナシラシマシタ。

四40 サザエハ(略)、「(略)。」カラノナイモノハカイサウナモノダ。」トイツテ、スマシテキマシタ。

四43 (略)、「のしあはびといふのは、あはびの肉をのして、紙のやうにうすくしたものです。」

四53 (略)、「ワニザメガ居マシタカラ、(略)。」ドツチガ多イカ、クラブテ見ヨウ。」トイヒマシタ。

四54 白ウサギハコレヲ見テ、(略)。「ムカフノヲカマデナランデ見ヨ。」トイヒマシタ。

四55 ワニザメハ白ウサギノイフトホリニナラビマシタ。

四55 イマ一足デヲカヘ上ラウトイフ所デ、(略)。「トイツテワラヒマシタ。」

四56 オレハココノヲカヘ來タカツタノダ。」トイツテワラヒマシタ。

四58 ソコヘオホクニヌシノミコトトイフ神サマガオ出デニナリマシタ。

四61 ソノノチオホクニヌシノミコトハ白ウサギノイツタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

四64 昔からうめにうぐひすといつて、うめの花のさくじぶんから、あんなうつくしいこゑでなきはじめます。

四67 三郎ハシンバイシテ、(略)、「(略)。」苦シイコトハゴザイマ

マシタ。

四43 (略)、「のしあはびといふのは、あはびの肉をのして、紙のやうにうすくしたものです。」

四53 (略)、「ワニザメガ居マシタカラ、(略)。」ドツチガ多イカ、クラブテ見ヨウ。」トイヒマシタ。

四54 白ウサギハコレヲ見テ、(略)。「ムカフノヲカマデナランデ見ヨ。」トイヒマシタ。

四55 ワニザメハ白ウサギノイフトホリニナラビマシタ。

四55 イマ一足デヲカヘ上ラウトイフ所デ、(略)。「トイツテワラヒマシタ。」

四56 オレハココノヲカヘ來タカツタノダ。」トイツテワラヒマシタ。

四58 ソコヘオホクニヌシノミコトトイフ神サマガオ出デニナリマシタ。

四61 ソノノチオホクニヌシノミコトハ白ウサギノイツタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

四64 昔からうめにうぐひすといつて、うめの花のさくじぶんから、あんなうつくしいこゑでなきはじめます。

四67 三郎ハシンバイシテ、(略)、「(略)。」苦シイコトハゴザイマ

センカ。」トイツテタツネマス。
 四七四 (略)、母ノ所へ行ツテ、
 「オカアサマ、オヒナサマヲカザ
 リマシタカラ、ゴラン下サイ。」
 トイヒマシタ。
 四七五 母ハ來テ見テ、「タイソウ
 ヨクカザレマシタ。(略)。」トイ
 ヒマシタ。
 四七七 一人のくわんぢよがその
 下に立つてさしまねいてゐま
 す。さをのさきの扇をいよ
 といふのでせう。
 四七八 扇をいとおとすもの
 はないか。あれをいないと
 いふのもさんねんだ。
 四七九 その時一人がすすみ出
 て、「なすのよ」と申すもの
 が「さいます。(略)。」といひま
 した。
 五一一 天照大神の御弟に、すさを
 のみことといふきのあらひ神さまが
 ありました。
 五二七 その時あめのうずめのみこと
 といふ女の神さまのまひがおもしろ
 かつたから、(略)。
 五三七 手力男のみことといふ力のつ
 よい神さまが、これをごらんになる
 と、(略)。
 五六三 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ
 出テ來テ、(略)、ヨイミチノ方へ御
 アンナイ申シ上ゲマシタ。
 五九七 きがついて見ると、人が二三

人立つて、「見ことなきた。」とい
 つて、ながめてゐました。
 五一一 そばを通る人が「美しい川
 だ。」といつて、ほめました。
 五三六 (略)、ひろくとして、どち
 らを見ても水ばかりです。こゝを人
 が海といひます。
 五四二 日本一ノ大キナホトケサマ
 ハ、(略)。ナラノ大ブツトイツテ名
 高イモノデス。
 五六一 鯉ハ昔カラ川魚ノ長トイハレ
 テキマス。
 五七六 鯉ノタキ上リトイツテ、タキ
 デモ上ルコトガアルサウデス。
 五八六 鯉ガタキヲ上ルヤウニ、ズン
 ズンシユツセヲセヨトイフ心デ祝フ
 ノデセウ。
 五九四 おはなは「はい。」といひな
 がら、いそいで行つて見ると、(略)。
 五二〇 母は戸だなの方をさして、
 「そこにおさらがあるから、取つて
 おくれ。」といひました。
 五二六 母は「ちよつとお待ち。」と
 いつて、(略)。
 五二七 母は(略)、「手がなまぐさい
 から、そのひしやくを取つて、水を
 かけておくれ。」といひました。
 五二七 ぬす人はきんじよに住んで
 あるゐざりだといふうさはさがあるの
 で、行つて見ると、(略)。
 五三六 (略)、「この釜は昔から私の
 うちにある釜です。(略)。」といつ

て、どうしてもかへしません。
 五二六 前「お前のいふことはまこと
 にもつとだ。
 五二七 役人は後からこゑをかけて、
 「こら待て、ゐざり。(略)。」といつ
 て、下役どもに言ひつけて、しばらく
 せました。
 五三二 (略)、一バンハジメニツムノ
 ヲ一番茶トイヒマス。
 五三三 ソレカラ十四五日タツツム
 ノヲ二番茶トイヒマス。
 五三六 コノカハイラシイ、美シイ蝶
 ヲツカマヘテイヂメル人ハ、ドウイ
 フ心デセウ。
 五三六 昔雄略天皇がすがるといふ人
 をおめしになつて、(略)。
 五三六 こといふのはかひこのこと
 で、(略)。
 五三八 天皇は(略)、すぎるには小
 子部といふ姓をたまはりました。
 五四三 山ヲホリヌイタ所デス。」
 五四四 文太郎ハビツクリシテ、父ニ
 キ、マスト、「コレハトンネルトイ
 ツテ、(略)。」トイヒマシタ。
 五四八 文太郎ハヨロコンデ、「海ダ、
 海ダ。」トイツテキルウチニ、(略)。
 五四七 友吉は「早くこつちへ來たま
 へ。(略)。」といつて、そこをのか
 せようとしたが、(略)。
 五四七 友吉は「かみなりは高いもの
 のある所へおちるのだ。(略)。」と

いつて、むりに手をひつぽつてつれ
 出しました。
 五四二 音次郎は友吉のかたに手をか
 けて、「あゝ、あぶなかつた。(略)。」
 といひました。
 五四五 キ瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔
 ・西瓜・トウ瓜・カボチャ・ヘチマ
 ナドヲ瓜トイフ。
 五四五 マヅ形カライヘバ、キ瓜・白
 瓜・ヘチマハ細長ク、トウ瓜ハ太ク、
 カボチャハ平タイ。
 五五三 (略)、カウモリハ「私ハ鳥デ
 モケモノデモナイカラ。」トイツテ、
 ドチラヘモツキマセンデシタ。
 五五三 (略)「私ハカラダガネズミニ
 ニテキルカラ、ケモノノ仲間ダ。」
 トイツテ、ケモノノミカタニナリマ
 シタ。
 五五五 (略)「私ハ羽ガアルカラ、鳥
 ノ仲間ダ。」トイツテ、鳥ノ方ニツ
 キマシタ。
 五五五 ソノ時カウモリガケモノノ方
 へ行キマスト、「オ前ハ鳥デハナイ
 カ。」トイツテ、仲間へ入レマセン。
 五五五 又鳥ノ方へ行キマスト、「オ
 前ハケモノダラウ。」トイツテ、ア
 ヒテニシテクレマセン。
 五五五 (略)、ヒルノ間ハ(略)ニカ
 クレテキテ、夜ニナルト出テ空ヲト
 ビアルクヤウニナツタトイフハナシ
 デス。
 五五二 近ゴロハ又マツチトイフベン

リナ物ガ出来テ、(略)。

五五八 (略)炭ハ、木ヲヤイテコシラヘタモノデス。ソレユエ木炭トイヒマス。

五五九 ソノホカニ石炭トイフモノガアリマス。

五五八 (略)、石ノヤウニカタクナツテキマスカラ、石炭トイヒマス。

五五九 ランプニトボスノハ石油トイヒマス。

五六〇 昔ノ人ハ石炭ノコトヲモエル土、石油ノコトヲモエル水トイヒマシタ。

五六一 それを母に見せますと、母は「よく出来ました。(略)」といひました。

五七〇 晩ニナルト、火花ガ上ルトイフ話デアル。

五七九 鹿の通れる所を馬の通れないといふことがあるものか。

五八四 この時よしつねは、「われを手本にせよ。」といひながら、馬に一むちあててかけ下りた。

六〇三 御社の後には松山があります。その松山へのぼらうといふのです。

六一七 八 尺ノ十倍ヲ丈、尺ノ十分ノ一ヲ寸、寸ノ十分ノ一ヲ分、分ノ十分ノ一ヲ厘トイフ。

六二九 一 升ノ十倍ヲ斗、斗ノ十倍ヲ石トイヒ、(略)。

六三九 一 升ノ十分ノ一ヲ合、

合ノ十分ノ一ヲ勺トイフ。

六四〇 一 貫ノ千分ノ一ヲ忽、忽ノ十分ノ一ヲ分、分ノ十分ノ一ヲ厘トイフ。

六四一 (略)一人の子どもが、「そんな私がはかつて見ませう。」といつて、まづ象を船にのらせました。

六四二 マツヤクワンガイヒマスニハ、「金ニハいろ／＼アリマスガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デセウ。

六四三 ヤクワンハソレヲ聞イデ、「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」トイヒマシタ。

六四四 ソノ時鐵ビンハ、「(略)銅ハ人ニ使ハレテサビテモ、時々青イ物ヲ出シマセウ。(略)。」トイヒマシタノデ、(略)。

六四五 直吉は後でふと氣が附いて、「あゝ、大へんなことをした。今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」といつて、すぐに追つかけて行つて、(略)。

六四六 (略)、長松は笑つて、「先では知らないのだから、一錢まうけておけばよかつたのに。」といつたら、(略)。

六四七 (略)、直吉は、「だんながおるすだから、なほさらまぢがひがあつてはならない。」といつても、長松はまだ笑つてゐた。

六六三 絹糸ニテ織リタルモノヲ絹織物トイフ。

六六四 木綿糸ニテ織リタルモノヲ木綿織物トイフ。

六四五 麻又ハカラムシノ糸ニテ織リタルモノヲ麻織物トイフ。

六五六 (略)、ケモノノ毛ヲツムギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。

六五七 日本中を平げて、後には朝鮮までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ人は、もといはたつて身分のひくい人でございました。

六五八 小さい時の名を日吉丸といひました。

六五九 お寺では「こんないたづら者はごめんです。」といつて、うちへかへしました。

六六〇 (略)、信長は京都で光秀といふけらいにころされました。

六六一 (略)、しまひには日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。

六六二 (略)、その使のもつて來た文の中に、秀吉を日本國王にするといふふれいなことがありました。

六六三 謙信はそれを聞いて、「(略)敵の國の人には何のうらみもない。(略)。」といつて、じぶんの國から塩を送らせた。

六六四 (略)、謙信は「ああ、をしい事をした。よいいくさ相手になくなつた。」といつてなげいた。

六六五 めくらは杖を受取つて、「あゝ、ありがたうございます。うれしいこと。」とれいといつて、(略)。

六六六 (略)、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。コレヲ月ノワトイヒマス。

六六七 シグマトイフ熊ハ小馬ホドアツテ、力ガ強ウゴザイマス。

六六八 熊ハイタヅラモノデ、(略)、カズノ子ノ俄ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

六六九 歌がすむと手打をして、ロ々に「おめでたう、おめでたう。」といひました。

六七〇 大阪ハ昔ハ難波トイヒテ、仁徳天皇ノ都シタマヒシトコロナリ。

六七一 市中ヲ流ル、川ヲ淀川トイフ。

六七二 (略)、いつはりいはぬが子供らの學びのはじめぞ、つゝしめよ、いましめよ。

六七三 (略)、病は口より入るといふ。

六七四 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

六七五 ナンデハ年スデニ十歳ヲコエタリ。ヨク父ノ言フコトヲ聞分ケヨ。

六七六 正行ノ如キハ(略)、國民ノ手本トイフベシ。

- 七125 商賣上でげんきんといひ、かけといふのは何の事ですか。
- 七125 商賣上でげんきんといひ、かけといふのは何の事ですか。
- 七133 ねぎられたら引く積りで、高くいふ直段がかけねです。
- 七134 たとへば十五錢で賣つてよいものを二十錢といふやうなものです。
- 七136 正直な商人はかけねなどはいひません。
- 七138 小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。
- 七141 小賣をする商人を小賣商人といひます。
- 七141 卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、(略)。
- 七144 (略)、卸賣をするものを卸賣商人といひます。
- 七145 問屋といふのは何の事です。
- 七146 問屋といふのは他人からのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。
- 七148 たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にたのまれて、それをほかへ賣渡してやり、又(略)店のことです。
- 七149 たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人になのまれて、それをほかへ賣渡してやり、(略)。
- 七152 (略)、又織物を買ひたいといふ人になのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。
- 七199 島のゑんどうがかきの外からこゑをかけて「(略)。(略)、どうかこれからお心安く願ひます。」といふ。
- 七203 どういふわけで、おたがひに親類の間がらでございますか。」
- 七206 (略)、ゑんどうのいふに、「あなと私は大そう似てゐるではありませんか。」
- 七227 目ハ見ユレドモ、字ノ讀メザル人ヲアキメクラトイフ。
- 七241 時ノ人 番町デ目アキ目クラニ物ヲキ、トイヒタリトイフ。
- 七241 時ノ人 番町デ目アキ目クラニ物ヲキ、トイヒタリトイフ。
- 七248 (略)、弟子ドモハ、「先生、少シオ待チ下サイマセ。今風デアカリガ消エマシタ。」トイフ。
- 七249 「サテ、目アキトイフモノハ不自由ナモノダ。」
- 七252 保己一ハ笑ヒテ、「サテ、目アキトイフモノハ不自由ナモノダ。」トイヒタリトゾ。
- 七266 イソガシイ時ニ手ノ足リナイトイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。
- 七267 イソガシイ時ニ手ノ足リナイトイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。
- トイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。
- 七278 何事ニヨラズ手ノハタラクノヨイノヲ上手トイヒ、手ノハタラクノワルイノヲ下手トイヒマス。
- 七279 (略)、手ノハタラクノワルイノヲ下手トイヒマス。
- 七288 一匹の蠶の口から出る絲をのぼして見ると、五六町もあるといふことである。
- 七331 これを蠶の蛾といふ。
- 七338 その卵を産みつけさせた紙を蠶明紙といふ。
- 七342 蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春・夏・秋といふ名がある。
- 七351 かくして出来たるものをすやきといふ。
- 七361 うるしの上に金又は銀にてゑがきたるものをまきゑといふ。
- 七385 日用品ナラバ、マツ何デモアルトイツテヨロシイ。
- 七397 (略)、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。
- 七404 一豊も(略)、家へかへつて、「あゝ、金がない程残念なことはない。(略)。」と、思はずひとり言をいひました。
- 七417 (略)、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いはなかつた。
- 七437 けらいのものが、「これは一豊の馬でございます。」といひますと、(略)。
- 七439 「日ごろ貧しい暮しをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもとめた。
- 七448 (略)、信長は大そう感心して、これが一豊の出世のもとになつたといふことであります。
- 七446 おほよそ家の紋どころ、いふもかしこし、菊と桐。
- 七468 西洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、「(略)。(略)、書物モ近ゴロハ大テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ。」トイフト、(略)。
- 七474 (略)、日本紙ハ「(略)。コ、ニアル属モウチハモヤハリサウダ。」トイヒマス。
- 七478 西洋紙ハ「(略)。便利ニオイテハトモカナフマイ。」トイヒマス。
- 七481 「イヤ、君ラハ破レ易クテ、少シモ強ミトイフモノガナイ。
- 七497 西洋紙ハ又「葉書ヤ切手ヤ印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」トイヒマスと、(略)。
- 七501 (略)、日本紙ハ神ダナヲ指サシテ、「ソナニイバツテモ、アノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマイ。」トイヒマシタ。
- 七508 (略)、配達夫は「おかあさ

んをよんで下さい。」といふ。
七53 〇 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、(略)。

七55 〇 サレドモコ、ニテ見ユルハ東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。

七61 〇 昔より「犬は三日かへば、三年その恩をわすれず。」といへり。

七62 〇 外國にては(略)。二三匹の犬、よく二三百頭の牛、二三千頭の羊を追ひまはして、主人の行く方へ行かしむといふ。

七63 〇 又近ごろは戦場にも犬を用ひて、たふれたる兵士をさがしむといふ。

七64 〇 ゆ・茶・汁・すひ物はいふまでもない。酒やすや(略)も水がなければ出来ない。

七72 〇 又眞珠貝トイフモノガアル。

七76 〇 一ガインイフコトハ出来ナイガ、マツ緑色ノモノハ浅イ所ニ、(略)、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。

七81 〇 私の乗つてゐる明治丸といふのは、長さが六十間程もある大きな汽船で、(略)。

七84 〇 「航海といふものはいふものではないが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。

七84 〇 「航海といふものはいふものではないが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。

七86 〇 船にはらしんぎといふもの

があつて、それで方角をとつて進んで行くのです。

七86 〇 海岸には燈臺がありますから、それを見ると、あれはどこだといふことが分ります。

七87 〇 「さておしまひに一ついつておきたい事があります。

七88 〇 たとへば自分のうちを恐ろしがる様なもので、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。

八54 〇 その神々しさはいはん方なし。

八57 〇 その御門を板垣御門といふ。

八78 〇 今日(かん)は神嘗祭(かみかひ)なれば、夕方には内宮へ勅使の参拜もあるべしといふ。

八10 〇 (略)まじめになり過ぎましたので、にいさんによそ行の顔だといつて笑はれました。

八16 〇 禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「召使ノ中ニカ、ル事ヲヨク心得タル者アリ。ソレニ命ジタマヘ。」トイヒシニ、(略)。

八17 〇 義景重ネテ、「サラバコトク張リカヘ給ヘ。(略)。」トイハバ、(略)。

八20 〇 (略)、雀といふものはすぐふえるもので、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

八20 〇 (略)、雀といふものは(略)、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

八21 〇 さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくなるといふが、毎年一羽づつしか出て来ない。

八22 〇 (略)、毎朝早くすを出て、ゑをさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。

八25 〇 (略)、まだねてゐた妻を呼起して、「朝ね程損なものはない。(略)。」といつて、今見た事をすっかり話して聞かせました。

八27 〇 農夫は「おかげで目がさめた。御恩は一生忘れない。」といつて、かたく友だちの手を握りしめました。

八27 〇 昔百濟(ハル)川成トイフ名高キ畫エアリキ。

八28 〇 一日川成ニ向ヒテ、(略)四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。」トイヘリ。

八28 〇 「入リテ見給ヘ。」トイフニ、何心ナクエンニ上リテ、南ノ口ヨリ入ラントスレバ、(略)。

八30 〇 工、川成ヲ音ナヘバ、「イザ、コナタヘ。」トイフ。

八30 〇 (略)、川成腹ヲカ、ヘテ笑ヒナガラ、「カク我ノ居ルニ、何ユエニ入リ給ハザルカ。」トイフ。

八33 〇 刀は武士のたましひといはれたものだから、きたへる時は身を清めて、一心不亂に打つたものだ。

八33 〇 刀は武士のたましひといはれたものだから、きたへる時は身を清めて、一心不亂に打つたものだ。

八33 〇 ある時の話に、「(略)刀は(略)、きたへる時は身を清めて、一心不亂に打つたものだ。」といつた。

八43 〇 一切の書類や記録類も皆ぶじであつたといふことだ。

八44 〇 聞けば此の火事は(略)、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

八47 〇 焼けない事さへいへば、御安心なさるから、ゴアンシンクダサイと書くにも及ばない。

八48 〇 又ヤケナイといへば、うちの焼けなかつたことも分るから、ウチもいらぬ。

八57 〇 それで「いすかのはしのくひちがひ。」といふことがある。

八65 〇 ソレヲ藍玉トイヒマス。

八69 〇 ある時口・耳・目・手・足等一同申し合せて、胃に向つていふやう、「我等はつねにいそがしく働けるに、(略)。

八72 〇 諸君若し我に食物を送るために働きたりといはば、我もまた諸君を養ふために勞したりといはるん。

八72 〇 (略)、我もまた諸君を養ふために勞したりといはるん。

八72 〇 こゝにおいて、胃は一同に向つて曰く、「(略)世はすべて相持なり。」といふに、手足等一同成程と感心せり。

八72 〇 「猫デナイシヨウコニ竹ヲ

書イテオキ。」トイフコトアリ。

八七五 猫ノ中ニモ其ノ毛色虎ニ似タルモノアリ、之ヲ虎猫トイフ。

八七六 北アメリカには合衆國といふ國あり。

八七六 此の國にて商業の最も盛なる都會をニューヨークといふ。

八七八 首府をバリーといひ、世界中最も美しき都なり。

八七九 アジヤ大陸の西、ヨーロッパ大陸の南にある大陸をアフリカといふ。

八八〇 我等の住む世界は圓きもの故、名づけて地球といふ。

八八四 (略)、ソノ中デモ海軍ノ廣瀬中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ軍神トマデイハレタ。

八九〇 中佐ハ「ア、残念。(略)、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ殘念千萬ダ。」トイヒナガラ、(略)。

八九九 コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ「(略)」。其ノ時ハオレノ死體ヲセオツテ歸ル積リデカケツケヨ。」トイツタガ、(略)。

八九二 (略)、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツパデアツタカラデアル。

九八四 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレトク變ツテキル。

九二六 右は地質といひ、編がらといひ、此の地方には賣行よろしか

るべしと存ぜられ候間、(略)。

九二七 右は地質といひ、編がらといひ、此の地方には賣行よろしかるべしと存ぜられ候間、(略)。

九二八 北ナルヲ赤堀川トイヒ、南ナルヲ權現堂川トイフ。

九二九 北ナルヲ赤堀川トイヒ、南ナルヲ權現堂川トイフ。

九三〇 水兵は(略)、「(略)」。どうぞ之を御覽下さい。」といつて、其の手紙を差出した。

九三一 (略)、『(略)』、定めて不自由なる事もあらん。何にてもゑんりやなく言へ。』

九三二 おつかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られるが、まだ其の折に出會はないのだ。

九三三 此のわけをよくおつかさんにいつて上げて、安心させるがよい。」

九三六 二箇旅團の歩兵にそこぼくの騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へたるものを師團といふ。

九三九 社殿ノカタハラナル西洋風ノ建物ヲ遊就館トイヒ、(略)軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九四〇 始めて之を船に用ひて汽船を造つたのは、アメリカのフルトンといふ人、(略)。

九四一 (略)、又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、イギリスのステブンソンといふ人である。

九四二 (略)、「何月何日初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、(略)。

九四三 之を聞いて、是までフルトンを笑つた人々も(略)、皆其の成功を喜んだといふことである。

九四四 其の頃イギリスのある會社で、馬車鐵道をこしらへようといふ話があつたが、(略)。

九四五 (略)、ステブンソンの發明した汽車を用ひて見ようといふことになつて、(略)。

九四六 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、凡そ百二十四里、(略)。

九四七 (略)、其の間に五十三次といつて、重な宿場が五十三あつた。

九四八 「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九四九 其の頃之を川止といつた。

九五〇 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、關所破といつて、其のものは重い罰を受け

た。

九五二 七湯トハ湯本・塔澤・堂島・宮下・底倉・木賀及ビ蘆湯ヲイフ。

九五三 水ノシヅクモ度重ナレバ石ヲモウガツトイフ。

九四三 といふ者あり、(略)。

九四四 又一人、「然らばかの子供の乗れる駱駝を殺さん。」といふ。

九四五 農夫ナドハ小枝ト見チガヘテ、土ビンヨカケ、落シテワルコトアリ。故ニ或地方ニテハ之ヲドビンワリトイフ。

九四六 口にうましとて多く食ふことなかれ。(略)。今一口といふ所に止めよ。

九四七 八十歳を越えて病を知らざる或老人に、長生の方法を問ひしに、「(略)。」と答へたりといふ。

九四八 酒・煙草の害は今更に言ふまでもなし。

九四九 (略)、平生の養生法を問へば、「我は天氣にも相談せず、毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。」といへり。

九五〇 「夜半十二時前一時間の眠は、十二時後二時間の眠にまさる。」といへり。

九五二 西洋のことわざにも「よく日光の見舞ふ家には醫者は見舞はず。」といへり。

九五三 されども又いつくしみ深き人にて、笑ふ時は子供もなつき親しみたりといふ。

九五四 之をうむりし時は、よろひ・劔・弓・矢等を共にをさめ、かばねを宮城の方に向ひて立たせ、ながく皇城を守護せしめたりといふ。

九64 〇 空氣は（略）、凡そ少し

てもすぎ間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。

九67 1 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。

九67 6 「紅白花は開く煙雨の中。」といふ景色は、静かな中に美しいなごめである。

九76 10 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒオキテ、貯金セントスル時ニハ、其ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、（略）。

九78 10 是は菅原道真が右大臣といふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅立たんとする時、（略）。

九80 2 〇 （略）、道真は「驛長驚くなかれ、時の變り改るを。」（略）といふ意味の詩を作りてあたへたりといふ。

九80 3 〇 （略）、道真は「（略）」といふ意味の詩を作りてあたへたりといふ。

九81 10 昔或氏神のお祭に競馬の神事といふ事があつた。

九82 3 〇 それは（略）、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九82 5 一人は熊吉、一人は愛作といつて、年は同じく十五歳。

九83 2 〇 神主は（略）、それがすむと、「支度。」といふあひづの一番太鼓

を打鳴らした。

九86 7 〇 愛作方の人々は愛作の肩をたゝいて、「感心だく、えらい子だ。（略）」といつた。

九87 5 〇 熊吉方の人々は、「もう改めて勝負には及びません。（略）」といつた。

九87 9 〇 賣買トイフコトナカリシ遠キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九89 5 〇 賣ル・買フ、（略）等ノ字ノ一部ニ員ノ字アルハ、支那ノ古代ニ員ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。

九92 6 〇 〇 （略）いく野の道の遠ければ、ふみ見ずといひし 言の葉は、天の橋立 末かけて、後の世永くくちざらん。

九94 8 〇 〇 次の門を唐門といふ。

十11 9 〇 〇 （略）、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、（略）。

十3 9 〇 〇 其の工事の總費用は（略）、一里の長さだけ十圓金貨を並べたるに等しいといふ。

十6 7 〇 〇 普通ノ葉ヲ單葉トイヒ、此ノ種類ノ葉ヲ複葉トイフ。

十6 8 〇 〇 普通ノ葉ヲ單葉トイヒ、此ノ種類ノ葉ヲ複葉トイフ。

十6 9 〇 〇 葉ニハスベテ葉脈トイフモノガアル。

保安林といふ。

十13 3 〇 〇 〇 「さはいへど うらやましきえ 身も輕き 君、床柱。

十16 2 〇 〇 （略）、父の爲時は常に其の頭をなでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

十16 5 〇 〇 （略）、式部は（略）、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

十16 6 〇 〇 （略）、式部は（略）、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

十17 5 〇 〇 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかゝけて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、（略）。

十18 5 〇 〇 讀んでゐる間は（略）、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、本といふものはたやすく出来るものではない。

十18 5 〇 〇 （略）、本といふものはたやすく出来るものではない。

十22 7 〇 〇 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落シ、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」トイフ。

十23 9 〇 〇 大イニ怒リテ、「（略）。今ヨリ後五日目ノ朝再ビ來ルベシ。」トイフニ、（略）。

十24 4 〇 〇 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテイフヤウ、「汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、遂ニ王者ノ師タラン。

（略）。」トテ、其ノ書ヲ與ヘテ去レ

リ。

十30 6 〇 〇 關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。

十30 6 〇 〇 （略）、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、（略）。

十30 7 〇 〇 （略）、琉球ニテハ唐芋トイフ。

十32 7 〇 〇 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。

十34 8 〇 〇 或人が（略）、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十35 9 〇 〇 （略）、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよけいなことはいひません。

十36 6 〇 〇 それで注意深い男といふことを知りました。

十37 6 〇 〇 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、（略）雇ふことに致しました。

十37 10 〇 〇 主人は答へて、「（略）。りつばな人の手紙よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。といつた。

十42 6 〇 〇 （略）、其ノ織方ヲ發明シタルハ岡山縣ノ磯崎眠亀トイフ人ナリ。

十44 3 〇 〇 近年ノ輸出高ハ年々五六百萬圓ヲ下ラズトイフ。

十44 5 〇 〇 眠亀ガ（略）、機械ヲ發明

シ、國產ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。

十509 〔略〕。組めや手塚。」といふまゝに、はや弓を捨てて進み寄る。

十518 〔圖〕 名乗れと申せば、『存ずる由あり。木曾殿見知り給ふ。』といひて名乗らず。

十543 〔圖〕 實盛日頃申し候に、『（略）。悲しきは老の白髪なり。』といひしにたがはず、墨を塗りて候。」

十6010 〔圖〕 足尾銅山ハ（略）、今ヨリ三百年前、此ノ地ノ人始メテ之ヲ發見セリトイフ。

十613 〔圖〕 （略）ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、大抵此ノ山ヨリ產出シタルモノナリトイフ。

十679 昔は大鯨一頭を捕へると、人口數百人の一村、一箇月の生活費を支へ得ると言つたものである。

十8010 〔圖〕 あつし織とは、おひようと云ふ木の皮を細く裂きて織りたる織物なり。

十846 東京市だけでも、一年にほふる牛は數千頭にも上るといふことである。

十8410 何から何まで役に立つて、不用な部分といふものは一つもない。

十877 廣く家畜といへば、鳥類までも入れて言ふ。

も入れて言ふ。

十9510 〔圖〕 毎年節分ノ夜盡ク之ニ點火ストイフ。

十974 〔圖〕 我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。

十998 〔圖〕 紀貫之ガ（略）。トヨミタリトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラニアリ。

十122 〔圖〕 大いそぐとばる花は吉野山。といひし古人の句我をあざむかず。

十123 〔圖〕 こゝを口の千本といふ。

十138 〔圖〕 正平の昔、楠木正行ガ（略）、あへらじとゐねて思へばあづさ弓 なき數にいる名をぞとむむる。といふ一首の和歌を書残せるは此の所なり。

十142 〔圖〕 陵に至る路のあたり櫻樹多し。之を中の千本といふ。

十145 〔圖〕 此の附近にも亦櫻樹多し。之を奥の千本といふ。

十149 〔圖〕 花は麓より咲初めて次第に山上に及び、（略）、奥の花の盛りとなるまでは、ほとんど一月にわたるといふ。

十158 〔圖〕 雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、（略）。

十198 〔圖〕 此ノ様ニ大勢ノ人ガ手分ヲシテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

十1110 〔略〕、コ、ニ注意シナケレバナラナイノハ共同一致トイフコト

デアル。

十129 又國家全體カライヘバ、農夫ノ（略）、大工ノ（略）、商人ノ（略）、官公吏ノ（略）、教師ノ（略）等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。

十139 〔圖〕 此の頃備前の國に兒島高德といふ武士あり、（略）。

十143 〔圖〕 （略）、一族共を集めていへるやう、『志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。』（略）。

十148 〔圖〕 （略）、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。』といへば、（略）。

十152 〔圖〕 （略）、警固の武士、播磨の今宿といふ所より山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

十153 〔圖〕 （略）、警固の武士、播磨の今宿といふ所より山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

十167 〔圖〕 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、（略）。

十1610 〔圖〕 （略）、范蠡といふ無二の忠臣の助を得て、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十179 〔圖〕 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十209 〔圖〕 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界海上の一大公園なりといへり。

十252 〔圖〕 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車の兩輪の如し。」といへども、（略）。

十296 〔圖〕 人智の進歩は際限なしといふべし。

十315 〔圖〕 水雷艇ニハ（略）鳥ノ名ヲ用ヒタリ。（略）。又第何號艇トノミイフモノモ多シ。

十353 〔圖〕 四面皆海ナル我が帝國ハ、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十354 〔圖〕 （略）、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十393 〔圖〕 （略）、是にて竹筏といふ臺灣特有の船を造り候。

十416 〔圖〕 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、（略）。

十422 〔圖〕 （略）、一日光範に向ひて、（略）。（略）、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。」と涙を流していふ。

十4610 飲まず食はずに終日・終夜走つても尚平然として居るといふことである。

十474 さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。

十475 馬主はもう一文も引けぬといふ。

十4710 「それ、馬主が逃げた。」といふので、大將の部下の二三人は

(略)、其の跡を追つかけた。
 十一498 (略)、前の馬主が再び馬をひいて来て、「閣下、三千金が惜しう御座いますか。(略)。」といった。
 十一516 (略)「笑フ門ニハ福來ル。」トイヘリ。
 十一5410 隊中にビエールといふ年の頃十三四ばかりの少年鼓手があつた。
 十一571 マクドナルは(略)、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。
 十一575 兵士等はあわてて異口同音に、「(略)」。ビエールは我々にお任せ下さい。」といつて引止める。
 十一582 早くしないと、ビエールが死んでしまふ。」と、しかる様にいふので、兵士は止むを得ず將軍を谷底へ下した。
 十一643 人ヲ招待スル時ハイフマデモナク、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトが大切デアル。
 十一7010 (略)「時は金なり。」といふ古言あれども、(略)。
 十一716 (略) 泉州^{くわんしゅう}堺^{さかい}に一國寺といふ寺あり。
 十一725 (略) 住持は心得ぬ事に思ひて、或時畫工に向ひ、「(略)」。我衣食の費をいとふにあらざれども、何處へなりとも出でて遊び給へ。(略)。」といへば、(略)。

十一734 (略) 筆勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。
 十一744 (略) 「そは昨夜のぞき見て知りたり。」といへば、畫師それより後の二枚には畫がかず、(略)。
 十一793 (略) 鶴飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鶴飼をおもふに至れり。
 十一793 (略) 鶴飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鶴飼をおもふに至れり。
 十一817 (略) 大なる鶴は能く十二三尾のあゆを喉元^{のどもと}にふくむといふ。
 十一867 (略) 上手ナル者ハ一分時ニヨク十數本ノ絲ヲツナグトイフ。
 十一8710 (略) 蜜蜂^{みつばち}の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは醸造の業と建築の業とをかねたりといはんか。
 十一887 (略) かくて數年の後には、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。
 十一897 (略) 熱き地方の白蟻は(略) 小山の如き巢を造り、木質にて内部を圍むといふ。
 十一898 (略) 熱き地方の白蟻は(略) 小山の如き巢を造り、木質にて内部を圍むといふ。熱練なる土木技師ともいふべし。
 十一899 (略) アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。

十一934 (略) 此の金額を普通の價といふ。
 十一952 (略) 即ち供給に限りあるものは一定の價なしといふべし。
 十一1024 (略) 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、(略)。
 十一10210 (略) 備サトシテ曰ク、「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。願ハクハ再ビイフコトナカレ。」ト。
 十一1031 (略) 是ヨリ諸將マタイフ者ナカリキ。
 十一1037 (略) 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「我ガ子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。(略)。」トイヒシニ、(略)。
 十一1039 (略) 備又其ノ子ニ向ヒテ、「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」トイフ。
 十一1065 (略) 時ノ人「死セル諸葛、生ケル仲達ヲ走ラス。」トイヘリ。
 十一1068 (略) 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。
 十一1076 (略) 床下に土石を盛り、(略)、一方の口から火をたいて室内を温める。之をオンドルといふ。
 十一1082 (略) 朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のこと

わざがある。
 十一1093 (略) まだ冠禮を行はない者はチヨンガーといつて、髪を三つ打ちにして後へたらしめてゐる。
 十一1112 (略) 魔下^{マジカ}將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。
 十二123 (略) 大キナ戰艦ナドニナルト、設計圖バカリデ數百枚モアルトイフ。
 十二1210 (略) 何千貫トイフ大鐵鎚^{デッヅキ}モ一人ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出來、(略)。
 十二137 (略) 船ヲ組立テルニハ(略)、其ノ上ニ先ヅ龍骨^{リウコツ}トイフモノヲ置ク。
 十二1310 (略) コレハ人ノ脊骨^{セボネ}ノ様ナモノデ、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨^{ロウボツ}ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。之ヲ肋材トイフ。
 十二157 (略) 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等ヲスル處ヲ船渠^{センキョ}トイフ。
 十二174 (略) 之を全國天氣豫報といふ。
 十二176 (略) 又各測候所が(略)、其の地方の天氣を豫告するを地方天氣豫報といふ。
 十二2110 (略) 外に同化作用といつて、盛に炭酸瓦斯を取つて、其の中の炭素を養分にして酸素を放つ作用がある。
 十二231 (略) 是は前にいつた様な關係が

びんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

十二273 図 信昌將士を集めていふやう、「(略)」。城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。」と。

十二276 図 鳥居勝商といふ者あり、進み出でて其の使たらんことを請ひ、約していふやう、「(略)」。

十二277 図 (略)、「進み出でて其の使たらんことを請ひ、約していふやう、「(略)」。

十二285 図 (略)、「一老兵のいふ、「水方にみなぎれり。流をさかのぼる鱸の繩にふるゝならん。」といへば、

十二286 図 (略)、「一老兵のいふ、「水方にみなぎれり。流をさかのぼる鱸の繩にふるゝならん。」といへば、

十二291 図 信長、勝商の勞を賞し、且いふ、「(略)」。汝も止りて我と共に向け。」と。

十二296 図 勝頼、勝商に向ひていふ、「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。

十二306 図 伊企儼却つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、「(略)」。

十二331 図 かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりし

は、(略) 形名の妻と其の徳を同じうすとやいはん。

十二363 図 (略)、「コ、ニ新校舎ノ落成ヲ見ルニ至レルハ、國民教育ノ一慶事トイフベシ。

十二374 図 古語に「私事を以て公事をすてず。」といへり。

十二386 図 支那の昔趙といふ國に蘭相如といふ賢臣あり。

十二391 図 相如の白ふやう、「余は秦王を其の朝に叱したるもの。何ぞ獨り廉將軍を恐れんや。(略)」といふ。

十二394 図 (略) 『兩虎共に闘へば、勢共に生ぎず。』といへり。

十二396 図 相如の白ふやう、「(略)」。余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」といふ。

十二433 図 (略) 安永八年櫻島の破裂せし時は、九州・四國・山陽・山陰・東海道までも火山灰を降らしたといふ。

十二461 図 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、尚甚だ狭小なりといふべく、(略)。

十二474 図 「農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。」といへるワシントン

の言味はふべし。

十二521 図 米國商人ガ(略) 廣告ニ費ス金額ハ、一箇年實ニ十二億圓ノ多キニ達ストイフ。

十二661 図 (略)、「道に當るものとして之をさまたぐることはざりきといふ。

十二791 図 「何處ぞ。」「すぐ其處に。」といふ聲かまびすしく、(略)。

十二828 図 (略)、「ちよつと貸したまへ。」と言ひながら、其のバイオリンを取つて彈始めた。

十二844 図 銅貨といはず、金銀貨といはず、雨の降る様に手當り次第に投込む。

十二851 図 銅貨といはず、金銀貨といはず、雨の降る様に手當り次第に投込む。

十二851 図 赤穂浪士が(略)、「從容死に就けるは(略)」、日本武士道の精華を發揮せるものといふべし。

十二866 図 薩摩の士に喜劍といふ人あり、(略)。

十二883 図 時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

十二887 図 出入口に、はき物の置かれたる家には、盗人のうかふこと多しといへり。

十二914 図 「其の母によりて其の子を養せよ。」といへるが如く、(略)。

十二935 図 孔子は魯といふ國に生れ、(略)。

十二964 図 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、(略)、「三度其の居を遷せりといふ。

十二971 図 (略)、「國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

十二986 図 公德とは(略)等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二1007 図 之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。

十二1027 図 何をか自治の精神といふ。

十二1088 図 上奏といひ、建議といひ、請願といひ、其の手續に於て各相異なりといへども、(略)。

十二1088 図 上奏といひ、建議といひ、請願といひ、其の手續に於て各相異なりといへども、(略)。

十二1133 図 (略)、「十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。

十二1136 図 信とは我が言を行ひ、義とは我が分を盡すをいふ。

十二1164 図 海行かば水づくかばね、

(略)。といふ忠勇の精神は我等が祖先の教訓なり。

十二116 〇 誠の一字之を貫くは、あらゆる修身の徳を一言にて盡し給へるものといふべし。

いえ「家」(課名) 2 家

十目5 第四課 家

十一14 第四課 家

いえ「家」(名) 55 イヘイヘ 家 〇
うりいえ

二27 〇 ドコノイヘニモカドマツ
ガタテアリマス。

五12 〇 まもなく町の中へはいると、
兩がはいへがたちならんで、(略)。

六8 〇 家を出たのは朝の七時ごろで
した。

六22 〇 ある家の中には大きな水がめ
があつて、(略)。

六66 〇 熊ハイタツラモノデ、人ノ家
ノクラノ戸ヲ明ケテ、(略)。

六67 〇 松・杉・ヒノキ・ケヤキハ
板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、
船ヲ作ルニ用フ。

六68 〇 栗ハカタクシテ、ナガクク
サラザレバ、家ノドガイ又ハ鐵道ノ
マクラ木ナドトス。

六68 〇 桐ハヤハラカクシテ弱キ木
ナレバ、家ヲタツル材木トシテハ用
ヒラザレドモ、(略)。

六69 〇 材木ヲ用ヒテ家ヲタツルモ
ノハダイクニシテ、(略)。

八6 〇 十とや、遠き祖先のをし

へをも 守りてつくせ、家のため、國
のため。

七32 〇 正成ハタシテ戰死シテ、ソ
ノクビハ家ニ送ラレタリ。

七23 〇 保己一ノ家ハ今ノ東京、ソ
ノコロノ江戸ノ番町ニアリ、(略)。

七25 〇 大工ガ家ヲタテルノモ、(略)
モ、皆手デスルノデス。

七26 〇 家デモ國デモ手ヲヨクハタラ
カセル人ガ多ケレバ多イ程盛ニナリ
マス。

七39 〇 一豊もほしくてくたまらな
いから、家へかへつて、(略)。」と、
思はずひとり言をいひました。

七44 〇 〇 おほよそ家の紋どころ、
いふもかしこし、菊と桐。

七45 〇 〇 (略)、家の氏の名多けれ
ば、紋の数々かぎりなし。

七83 〇 〇 外國の港に着くと、見な
れない形の家がならんで立つてゐま
す。

八23 〇 〇 (略)、自分の家は戸がまだし
まつてゐて、誰も起きてゐる様子が
ありません。

八24 〇 〇 (略)、隣の家の方へ行きます。
八25 〇 〇 (略)、すぐ家の中へかけこん
で、まだねてゐた妻を呼び起して、
(略)。

八32 〇 〇 僕の家で一度つるべの金たが
がこはれた時、つころひを頼んだ事
があつたが、(略)。

八53 〇 〇 蝦夷モマタ其ノ家ニテ自殺

セリ。
八58 〇 〇 (略)、若し家の中でひろげさ
せたら、座敷一ぱいになつて、天井
へつかへる程である。

八82 〇 〇 ある土人の如きは氷を以て
家を造りて住めり。

九61 〇 〇 家を建つるには日あたりよ
き所をえらび、(略)。

九61 〇 〇 西洋のことわざにも「よ
く日光の見舞ふ家には醫者は見舞は
ず。」といへり。

九68 〇 〇 恐ろしいのは二百十日頃の大
あらしで、家は倒れる、(略)。

十一16 〇 〇 (略) 家組立つる 木々
そ今 語り出しぬ。

十一14 〇 〇 梁・棟木 つかぬき。
柱 何一つ 取外すとも、たちまち
家え崩れん。」

十一29 〇 〇 家の横に水がよくすんだ小川
が流れてゐる。

十一42 〇 〇 我等ノ家ニ敷ケル疊ノ表
ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナ
リ。

十一81 〇 〇 其の家ははつたて小屋の如
く、床もなく、天井もなし。

十一83 〇 〇 犬と猫は最も多く家に飼はれ
る獸である。

十一88 〇 〇 其の外あひるや七面鳥なども
家に飼はれる鳥である。

十一43 〇 〇 忠元あはれみて、己が家
に連歸り、(略)。

十一60 〇 〇 親に事へ、弟を助け、

家を治めん、妹我は。
十一60 〇 〇 家の事をば心につけ
ず、御國の爲に行きませ、いざや。

十一92 〇 〇 (略)、其の五人は各其
の家の他人の手に渡らんことを恐れ
て、(略)。

十一92 〇 〇 かくて其の家の價は段々
高くなりて、(略)。

十一92 〇 〇 (略)、賣家の持主五人
は各其の家の賣れざらんことを恐れ
て、(略)。

十一92 〇 〇 かくて其の家の價は段々
安くなりて、(略)。

十一92 〇 〇 (略)、最も價を低くした
る人、其の家を賣ることを得べきな
り。

十一106 〇 〇 朝鮮の地に上陸して、第一
に目につくのは家の低くて小さい事
である。

十一107 〇 〇 町には瓦屋根の家もある
が、(略)。

十一107 〇 〇 家の構造は主として寒さを
防ぐ様に出來てゐる。

十一107 〇 〇 是が朝鮮の家の小さくなつ
た重なる原因である。

十一107 〇 〇 此のオンドルがある爲に、普
通の家では冬でも夜具を用ひない。

十一112 〇 〇 (略)、近年作物の改良も
出來、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、
雞を飼はざる家なし。

十一112 〇 〇 何れの家にも卵を賣れ
ば、其の代金にて一年中用ふる塩・

醬油を買ふに餘あり。

十二88 6 出入口に、はき物の置亂れたる家には、盗人のうかつこと多しといへり。

十二89 4 家内のよく整頓せる程の家は日々のふき掃除も必ず行届きて清潔なるものなり。

十二92 1 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、(略)。

十二92 4 身分不相當の活計は産を破り、家を亡す基なり。

十二92 8 身分相當の交際には家を保つ上にも必要なり。

いえいえ「家々」(名) 2 家々 八4 2 家々に日の丸の旗を立てたり。

八14 3 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛乳ヲ家々ニ配達シテアルク。

いえども 〆といえども

いえのもの「課名」 2 家の紋

七目4 第十三 家の紋

七44 第十三 家の紋

いえみつ「家光」(人名) 1 家光

九95 2 是より西南にあたりて、家光の廟あり、(略)。

いえやす「家康」(人名) 2 家康 〆とくがわいえやす

十二28 9 (略)、勝商は(略)、走りて岡崎に到り、家康に見て援を求む。

十二28 9 家康直ちに勝商をして織田信長に見えて、長篠城の急を告げ

しむ。

いおえ「五百重」(名) 1 五百重

十13 1 熱き國 しげる林に生ひ立ちし 我、タガヤサン、(略)はるゝと 五百重のしほ路、故里の空なつかしや。」

いおきち 〆うちやまいおきち・うちやまいおきちさま

いおとす「射落」(五) 3 いおとす

四77 8 (略)、これを一矢でいおとすことは、なかなかむづかしさうです。

四78 4 「あの扇をいおとすものはないか。

四79 3 そらをとんでゐる鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの名人でございます。

いおり「庵」(名) 1 イホリ

十一102 6 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、(略)。

いおりもこう「庵木瓜」(名) 1 いほりもかう

七44 9 おほよそ家の紋どころ、(略)。(略)。いほりもかうは孝行の曾我兄弟に知られたり。

いか「以下」 〆じゅんようかんいかすう

せき・しれいちようかんいかむりよろくせんにん・せんかんニコライいっせ

いかしせき・それいか・ちゅうおう

いか・ひやくいか・みかさいかるくせき・よしおい

いか「鳥賊」(名) 3 イカ

七71 2 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナダガスデキル。

七71 5 (略)、タコヤイカノアシヲソロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。

九54 10 (略)、イカハ水中ニオヨグ間ハ水色ナレドモ、岩石ナドニ附着スル時ハ岩石ト同ジ色ニ見ユ。

いか「如何」(形状) 1 如何

九49 7 たがひに心もとなく思ひ合ひし父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

いがい 〆しよていいがい

いかい 〆いこうげき「威海衛攻撃」(名) 1 威海衛攻撃

九20 7 (略)、又八月十日の威海衛攻撃とやらにもかくべつの働なりきとのこと、(略)。

いか「如何」(副) 2 如何

九71 1 連日の大雨に候へば、大川に近き御地は如何と案じ居り候ところ、(略)。

九71 6 御一家御無事に御座候や。御老人・御子供衆も御大勢の事故如何と御案じ申し居り候。

いかだ「筏」(名) 1 いかだ

六3 4 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、(略)。

いかだす「筏」(サ変) 1 いかだす

「一シ」

十12 6 「我元 丹波の松よ、山こむる 霞を後よ、いかだして都に來けり。」

いかで「争」(副) 2 いかで

十54 9 崑山は『いかでかゝる幼き者に刀を立てん。』とて、(略)。

十二119 10 六年の月日 手を取りて、教へ給ひし 師の君の 導きなくば、いかで我が 心に開く、智え徳ぞ。

いかでか「争」(副) 3 いかでか 如何でか

十55 3 あやふき敵の手より救ひくれたる厚恩、いかでか忘るべき。」

十一45 1 (略)、年頃の恩愛、殊には今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

十二115 10 禮儀も(略)、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

いかなる「如何」(連体) 6 如何ナル 如何なる

九31 4 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出来上るものではない。

十一16 2 (略)、何事を如何なる者の書きたるか、讀みかねて上聞に達したり。

十二33 5 此の心は何處如何なる場合にも忘るべからず。

十二33 10 図 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。
 十二50 9 図 我等ハ世界ノ市場ヨリ如何ナル物品ヲモ買ヒ得ルガ如ク、(略)。
 十二115 1 図 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、(略)。
 いかに「如何」(副) 22 イカニ いかに如何ニ 如何に 如何
 七54 9 図 春ノ花盛リイカニ美シカラシ。
 八30 7 図 工恐ルく近ヨリテ見レバ、コハ如何ニ、カノ死人ト見エシハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。
 八71 5 図 我若し食物をこなす事なくば、全身を養ふ血は如何にして得らるべき。
 八87 1 イカニ心ハ堅クテモ、身ハ鐵石デナイ。
 九40 8 図 (略)ト、(略)トヲクラベ見バ、世ノ轉變ノ如何ニ甚ダシキニ驚クナラン。
 九91 9 図 (略)、勅なれば いたもかしこし、うぐひすの 問はば如何にと 雲るまで 聞え上げたる 言の葉は、(略)。
 十16 9 図 (略)「香爐^{かうろ}の雪は如何に。」
 十40 1 図 (略)「此の方面の戦鬨に 二子を失ひ給ひつる 閣下の

心如何にぞ。』と。
 十46 10 図 見よ、(略)の模様の如何に麗しきかを。
 十52 8 図 今は七十にも餘れば、殊の外白髪には成りたらんに、髪・ひげの黒きは如何に。
 十53 3 図 「如何に、髪・ひげの黒きは。」
 十89 6 図 (略)、いかにせん、頼むかげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。
 十一25 8 図 昔都大路をねり行きたりし絲毛の車は如何に優美なりけん。
 十一45 5 図 正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、(略)。
 十一52 10 図 内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセン。
 十一73 5 図 かくて次の夜は如何にとうかゞふに、(略)。
 十二74 3 図 (略)、畫師は驚きて、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。
 十二27 2 図 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。
 十二36 8 図 將來本校ニ學ブ者ノ幸福如何ゾヤ。
 十二37 10 図 「汝多年嘉明と不和なりと聞く。今之を推舉するは如何に。」
 十二95 5 図 我、罪を魯君に得たり、如何にせば可ならん。」

十二104 3 図 (略)直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、(略)。
 いかに「如何」(副) 4 イカニモ如何にも
 五72 6 図 ケレドモコノ足ハ細クテ、イカニモ弱サウニ見エル。
 九20 8 図 「聞けば、そなたは豊島の戦にも出ず、又(略)にもかくべつの働なかりきとのこと、母は如何にも残念に思ひ候。
 九86 3 図 (略)、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。
 十一41 7 図 如何にもして討取り申すべし。
 いかがかり「如何計」(副) 2 如何バカリ 如何ばかり
 九21 9 図 如何ばかりの思にて、此の手紙をしたゞめしか、よくく御察しこれあり度候。」
 九88 2 図 若シ今ノ世ニモナホカ、ル事アリトセバ、其ノ不便如何バカリナラン。
 いかが「伊香保」(地名) 2 伊香保 伊香保
 十73 3 図 温泉の多きこと(略)。中にも最も世に知られたるは、西に道後・有馬、東に箱根・熱海・伊香保等あり。
 十74 8 図 伊香保も亦古より知られ

たる温泉にして、榛名山のふもとにあり。
 いかがど「如何程」(副) 2 いか程如何程
 七40 6 図 「その馬の直はいか程でございます。」
 十二111 2 図 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。
 いかり「碇」(名) 1 いかり
 七81 9 図 まづいかりをぬいて港を出て行くと、(略)。
 いかる「怒」(四・五) 9 怒ル 怒る
 九63 3 図 田村麻呂は(略)、力あくまで強き人にて、怒る時はたけき獸も恐れたり。
 十23 6 図 大イニ怒リテ、「長者ト約シテ後ル、ハ禮ニ非ズ。(略)。」トイフニ、(略)。
 十23 10 図 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ先ダタレタリ。老人怒リテ、(略)。
 十26 1 図 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、(略)。
 十76 9 図 (略)、喜ブモ怒ルモ悲シムモ皆腦ノ作用ナリ。
 十一47 5 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。
 十二6 8 図 風號び海怒りて、波浪山の如くなれども、(略)。
 十二30 2 図 勝南城に向ひ、高らかに

號んで曰く、「(略)」。圍の解けんは二三日の内にあらん。」と。勝頼怒りて之を殺せり。

十二803 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、皆争ひてコロンブスを歓迎し、(略)。

いかん「如何」(名)3 如何ひてんきいかん

十二196 (略) 天氣圖とは(略)、一目に全國天候の如何を示すものなり。

十二542 (略) 富國ノ實ノ舉ルト擧ラザルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏ノ如何ニ存ス。

十二1008 (略) 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは(略)。

いかん「如何」(副)3 如何

十一914 (略) 有志の方々御さそひ合せの上、御來會相成候ては如何。

十一435 (略) 光範と心を併せての事として、如何ともし難ければ、(略)。

十一488 追手のトルコ人は如何ともすべき方法が無い。

いき「生」ひながいき

いき「息」(名)4 イキ いき 息ひ

ためいき・はないき・ひといき

四501 (略)、ちつとも休まず、

いきをもつがずに、あさまで

かうして、かつちん、かつちん。

八908 (略)、中佐ノイキハトウトウ

其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。

十695 (略) 水夫等は(略)、息も絶えぬに救を呼べり。

十一586 (略)、少年ははや息も絶え絶えである。

いき「壹岐」(名)2 壹岐 壹岐

十二32 (略) 海防艦壹岐

十一336 (略) 海防艦ハ(略)ヲ目的トス。壹岐・鎮遠・見島等はナリ。

いき「意氣」(名)2 意氣

十二526 (略) 天性快活ナル人モ、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十二307 (略) 古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。

いきいき「生」(副)1 活々

十二291 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

いきうま「生馬」(名)1 生馬

五14 ある時生馬のかはをはいで、

大神がはたをもらせていらつしやる

所へおなげ入れになりました。

いきおい「勢」(名)13 イキホヒ

いきほひ 勢

六504 それからは秀吉のいきほひ

は、しぜん一日と盛になりました。

七53 (略) 正成戦死シテ後ハ、敵ノイ

キホヒマスノ強ク、(略)。

八422 あゝ、火の勢が一そう強くな

つた。

八498 (略)、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。

八852 (略)、中佐ハ(略)、部下ノ大隊ヲヒキキテ、勢鋭ク進撃シタ。

九351 やがて汽車が動き出すと、

(略)。見物人一同は其の早いと其の勢のすさまじいのに驚いた。

九657 (略)、皆空気を送りて、火の勢を盛ならしむる爲にして、(略)。

九836 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「是非勝つてくれ。」(略)。」などと、口々に勢をつけてゐる。

十一168 (略)、呉の勢盛になりて、會稽山の戰に越の軍を打破りたり。

十二48 (略) 露國が連敗の勢を回復せん爲、(略)全勢力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、(略)。

十二394 (略) 『兩虎共に闘へば、勢共に生さず。』といへり。

十二601 (略)、首府の人口も年々著しく増加する勢なれば、其の巴里と同數に至るも亦甚だ遠からざるべし。

十二935 (略)、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひたり。

いきおいよく「勢良」(副)1 いきはひよく

七629 (略) 八九頭の犬いきほひよく

人に乗せたるそりを引きて、雪の道を走り行くさま、まことにいさまし。

いきす「息栖」(名)2 息栖 息栖

九175 (略) 中ニモ香取・息栖ノ兩社ハ北浦ノホトリナル鹿島トトモニ三社ノ名アリ。

九179 (略) 香取・息栖ノ一ノ鳥居ハ何レモ川ノ中ニ立テリ。

いきすじんじや「息栖神社」(名)1 息栖神社

九17 (略) 息栖神社

いきた・える「息絶」(下)1 息絶える「一エ」

十665 六七十尺の大鯨も今は全く息絶えて、水面に横たはる。

いきどおる「憤」(四)3 いきどほる 憤る「一ラ・リ」ひののしりいきどおる

九797 (略) 道眞は罪もなきに官を下げられ、あまつさへ遠國へうつされしかども、少しも世をいきどほり、人をうらむる心なかりき。

十二711 (略) 世を憤り、人をねたみ、身をはかなみて自ら苦しむは、百害あるも一利なし。

十二712 (略) 世を憤らんよりは、進みて之を救済すべし。

いきな「伊企雛」(人名)2 伊企雛ひ

十二304 (略) 其の將伊企雛をして日本に向つて、「日本の將我がしりを食へ。」と號ばしむ。

十二305 伊企健却つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、遂に殺されたり。

いきのこる「生残」(四) 2 生キ残ル

生残る「一リ・一レ」

七27 我ガ死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ残リテアル間

ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、(略)。

十685 生残れる水夫は破れたる船體にすがり、(略)聲を限りに救を呼べり。

イギリス「地名」5 イギリス

八771 我ガ日本帝國の如き島國にして、商業・工業いづれ

も盛に、海軍強く、商船多し。

八781 フランスは海をへだててイギリスの南にあり。

九312 (略)、又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、イギリスの

スチブンソンといふ人である。

九318 フルトンは之に驚かず、更に新しい機關をイギリスに注文して、

又一つの船を造つた。

九330 其の頃イギリスのある會社で、馬車鐵道をこしらへようといふ

話があつたが、(略)。

イギリスこく「地名」1 イギリス國

八769 こより汽船に乗りて、ふたゝび東へ進めば、一週間にしてイ

ギリス國の港に着く。

い・きる「生」(上一) 6 生きる「一

キ」

四286 のぎくは「いいえ、私は枯れたやうに見えても、ねは生きてゐます。」

四807 よ一は(略)、もしこれをいそごつたら、生きてはゐま

いとかくごをきめて、(略)。

七655 (略)水はわれくの生活にもつとも大切なもので、水がなければ、

生きてゐることは出来ない。

十一561 さては生きてゐるのか。

十一1082 「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」

十二2210 (略)、水を取換へなくては金魚は割合に長く生きてゐる。

いきる「射切」(五) 1 いきる「一

ラ」

四824 よ一は(略)、ひようと一矢いはなしました。赤い扇は

かなめのきはをいきられて、(略)。

いく「行」(五) 99 イク いく 行く

行く「一カ・キ・ク・ツ」が

つこうへもつていくもの

一468 ヒケシガトンデイク。

一523 カアカア、カラスガナイテイク。

一525 カラスカラス、ドコヘイク。

一536 (略)、カアカア、カラス

ガナイテイク。

二135 「ドコヘナガレテイク

ノデセウ。」

二273 トモキチハヨロコンデ、ト

ンデイクマシタ。

二274 犬モヲフツテ、ツイ

テイクマス。

二363 (略)、モチハ白イトリニ

ナツテ、パツトトンデイクマシ

タ。

二514 ハタケノスミヘツレテ

イツテ、(略)。

二532 (略)ソノ犬ヲツレテイ

ツテ、ハタケノスミヲホツテ

ミマシタガ、(略)。

二573 (略)マタコノウスヲカ

リテイツテ、米ヲツイテミマシ

タガ、(略)。

二488 「コレガスンデカライ

キマセウ。」

二574 「コレガスンデカライ

キマセウ。」

二63 (略)イツシヨニノハラヘ

アソビニイクマシタ。

二106 一バン上ノニイサンハ

イマヘタイニイツテキマス。

二108 ネエサンハコノアヒダ

トナリムラヘオヨメニイクマシ

タ。

二113 ワタクシハ(略)、オツカヒ

ニイツタリシマス。

二117 オトウサンヤニイサンハ

マイアサハヤクカラタンボヘイクマス。

二178 サヘヅリナガラダンダン

タカク上ツテイクマス。

二326 ナヘカゴニナヘヲ入レ

テ、ハシツテイク人モアリマ

ス。

二374 (略)、あをく光りながら、

しづかにとんでいきました。

二377 さあ、これからがくかう

へ行きませう。

二378 がくかうへもつて行くも

のは、(略)。

二426 (略)トイフタイシヤウガ

イクサニ行ツタトキ、(略)。

二542 「(略)、オイデナサイ。」ト

ヨバレテモ、「(略)。」トイツテ、

ナカナカスグニハ行キマセン。

二555 (略)、トナリノネコガダ

イジナキンギヨヲトツテ、ニゲ

テ行キマシタ。

二601 くらいいけむりを出して走

つていくきせんもあります。

二611 はまべのまつの木の下

へ行つて見ませう。

二671 オレイニリユウグウヘ

ツレテ行ツテアゲマセウ。

二675 ウラシマガヨロコンデ、カ

メニノルト、ダンダンウミノ

中ヘシヅンデ行ツテ、(略)。

四21 けいさつしよのよこを北

へまがつて、すこし行くと、

(略)。

四125 (略)、毎アサ早くオキテ、

行ツテ見ルノガタノシミデス。
 四52 島ノ上ニ居タ白ウサギ
 ガ、ムカフノ大キナヲカヘ行
 ツテ見タイト思ツテ、(略)。
 四55 白ウサギハ一ツニツト
 カゾヘテ、ワタツテ行キマシタ
 ガ、(略)。
 四60 〇 〇 ハヤク川ヘ行ツテ、シ
 ホケノナイ水デカラダヲア
 ラツテ、(略)。
 四61 〇 〇 ヨロコンデオホクニヌシノ
 ミコトノ所ヘオレイニ行ツ
 テ、(略)。
 四64 〇 〇 今日は早くから學校ヘ
 行ツテ、みんなで雪なげをし
 せう。
 四74 〇 〇 スツカリカザツテカラ、母
 ノ所ヘ行ツテ、(略)。
 五74 〇 〇 ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ
 行キマシタ。
 五19 〇 〇 おはなは「はい。」といひな
 がら、いそいで行ツテ見ると、(略)。
 五22 〇 〇 (略)といふうはさがあるの
 で、行ツテ見ると、なるほどそのか
 まがあります。
 五25 〇 〇 どうして釜のやうな重い物
 が持つて行かれませう。
 五29 〇 〇 (略)、うんどう會にもつい
 て行く。
 五39 〇 〇 かばんを持つて走つて行く人
 もあります。
 五42 〇 〇 (略)、山モ川モ野原モ林モ後

ノ方ヘトンデ行クヤウニ見エマス。
 五45 〇 〇 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイ
 タ時、(略)。
 五54 〇 〇 ソノ時カウモリガケモノノ方
 ヘ行キマス、(略)。
 五55 〇 〇 又鳥ノ方ヘ行キマス、(略)。
 五64 〇 〇 「あさつては學校がお休
 ですから、二人とも行つてお出でなさ
 い。
 五76 〇 〇 ふだんは人も通らない道だか
 ら、どこをどう行つてよいか分らな
 い。
 五76 〇 〇 この時べんけいは火の明りを
 たよりにたづねて行つて、一人のか
 りうどをつれて来た。
 六35 〇 〇 早い流をいかだの下つて行く
 のや、(略)。
 六36 〇 〇 (略)、しづかな川をほかけ船
 の上つて行くのは、(略)。
 六85 〇 〇 (略)、川について、四五町行
 くと、もう町をはづれて、たんぼへ
 出ました。
 六12 〇 〇 ツバメハ暖ニナルト、ドコカ
 ラカトンデ来テ、涼シクナルト、マ
 タドコカヘトンデ行く。
 六13 〇 〇 (略)一羽ノガンハ列ヲハナ
 レテ、少シ先ノ方ニトンデ行く。
 六13 〇 〇 ホカノガンハ道アンナイノ行
 ク方ヘツイテ行く。
 六13 〇 〇 ホカノガンハ道アンナイノ行
 ク方ヘツイテ行く。
 六31 〇 〇 直吉は(略)、「(略)」とい

つて、すぐに追つかけて行つて、残
 りの一錢を渡した。
 六37 〇 〇 學校からかへつてから、をば
 さんの所へ使ひに行つた。
 六39 〇 〇 第一番に御所ををがんで、
 それから東山の方へ行つた。
 六40 〇 〇 (略)、それから北山の方へ
 行つて、金閣寺を見て、(略)。
 六43 〇 〇 (略)、後には朝鮮までも攻め
 て行つた豊臣秀吉といふ人は、(略)。
 六45 〇 〇 (略)、どこへ行つてもながく
 は居つきませんでした。
 六49 〇 〇 (略)、敵は戦はないでにげて
 行くやうになりました。
 六49 〇 〇 秀吉が信長に言ひつかつて、
 敵を攻めに行つてゐた間の事でした
 が、(略)。
 六66 〇 〇 熊ハ(略)、カズノ子ノ俵ヲ
 カツイデ、ニゲテ行クコトガアルト
 イヒマス。
 六66 〇 〇 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカ
 マヘルコトガアリマス。
 六66 〇 〇 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ
 通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、
 (略)。
 六77 〇 〇 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シ
 ナガラ早く走ツテ行く小サナ船ガア
 ル。
 六80 〇 〇 オロシタ荷物ハスグニ車ニノ
 セテ、馬ニヒカセテ行く。
 七37 〇 〇 (略)、人ハ皆前ヘ前ヘト進
 デ行ツテ、後ヘハ引キカヘサナイカ

ラ、(略)。
 七81 〇 〇 まづいかりをぬいて港を出
 て行くと、(略)。
 七86 〇 〇 船には(略)、それで方角
 をとつて進んで行くのです。
 八22 〇 〇 (略)、野原の方までも行つて
 たづねましたが、影も形も見えませ
 ん。
 八23 〇 〇 水車場へ行くのかと思つて見
 てみると、(略)。
 八23 〇 〇 (略)、水車場の方へは行かず
 に、居酒屋の方へ行きます。
 八23 〇 〇 (略)、水車場の方へは行かず
 に、居酒屋の方へ行きます。
 八23 〇 〇 (略)酒代の借があるので、
 其のかたに持つて行かうとするので
 す。
 八24 〇 〇 (略)、隣の家の方へ行きま
 す。
 八25 〇 〇 朝ねをしてゐる間に、身代
 が減つて行くのだ。」
 八34 〇 〇 其の時分までよそへ奉公に行
 つて居つた若いむすこが、(略)。
 八41 〇 〇 弓張を持つて走る人が、後か
 ら後からとつて飛んで行く。
 八42 〇 〇 (略)、今夜の此のはげしい風
 では、どこまで焼けて行くか分らな
 い。
 八43 〇 〇 叔父さんのうちへ見まひに行
 つたにいきさんが歸つての語に、(略)。
 九37 〇 〇 かごも人の肩でかいて、休み
 く行くのだから、(略)。

九84 6 二人の馬は五分々々に進んで行つたが、(略)。

十6 10 本ノ方ガ太クテ、サキヘ行く程段々ニ細クナツテ、(略)。

十7 4 (略)、本ノ方カラマツ直ニ幾

スデカノ脈ガ並ンデ出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキル。

十30 2 銀杏の木のは急いで山の方へ逃げて行く。

十63 10 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。

十64 8 四五隻のボートは母船を離れて、我先にと漕いで行く。

十一48 3 アラビヤ人は(略)、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。

十一55 2 眞先に立つて、太鼓を打ちながら、かひなくしく進んで行く。

十一56 9 此の時「自分が行かう。」とさげふ人を誰かと見れば、(略)。

十一100 8 近年は(略)、冠禮は段段すたれて行く。

十二13 10 (略)、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行く。

十二83 7 (略)、軽く浮立つた調子に、(略)、ふわりくと春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

十二84 10 (略)、紳士はバイオリンを老人に渡し、目禮して何處へか行つた。

いく [生] (四) 1 生ク 《一ケ》

十一106 5 時ノ人「死セシ諸葛、生ケル仲達ヲ走ラス。」トイヘリ。

いく [生] (上二) 2 生ク 生く 《一キ》

七2 3 我ガ生キテフタ、ビ汝ヲ見ンコトハカタカルベシ。

十二39 4 兩虎共に闘へば、勢共に生きず。』といへり。

いくえ [幾重] (名) 1 幾重

八85 5 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、(略)。

いくげつ [幾月] (名) 1 幾月

十103 1 名所・舊蹟ヲアマネク尋ネンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感アルベシ。

いくさ [戦] (名) 17 イクサ いくさ

三42 6 ミナモトノヨシイヘトイフタイシヤウガイクサニ行ツタトキ、(略)。

三42 8 ソノ日ノイクサニテガラノアツタモノヲ左ノ方ニナラベテ、(略)。

三43 8 ソレデイツデモイクサニカッタトイフコトデス。

五29 7 ましていくさの時、は、なくてはならぬこのわたし。

五80 4 東西の二門は今いくさのまつさい中である。

六44 3 たゞ人がいくさのはなしをすると、耳をすまして聞いてゐました。

六48 8 秀吉はいくさの上手な人で、(略)。

六48 8 秀吉は(略)、たびくいくさをしたけれども、一ぺんもまけたことがありません。

六52 8 (略)、そのいくさの終らない中に病氣でなくなつてしまひました。

六55 4 その相手は武田信玄で、これも謙信におとらないいくさの上手であつた。

六56 6 謙信は勝氣な人で、いよいよいくさがはげしくなると、じつとしては居られない。

六58 7 「われはたがひにいくさをしてゐるけれども、(略)。

九19 4 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、(略)。

九20 9 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。

九21 2 『一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、(略)。

十一59 10 軍に行かば、からだをいとへ。彈丸に死とも、病に死もな。

十二3 10 國を思ふ道に二つはなかりけり、軍のには立つも立たぬも。

いくさあいて [戦相手] (名) 1 いくさ相手

六59 4 それから信玄が死んだと聞いた時、謙信は「(略)」。よいいくさ

相手がなくなつた。』といつてなげいた。

いくさにんぎょう [戦人形] (名) 1 軍人形

九27 6 五月五日ニ軍人形ヲカザリ、ノボリヲ立テテ、男子ノ福運ヲイノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。

いくさびと [戦人] (名) 1 軍人

十二3 6 鍛ひたる劔の光いちじるく世にゐるやかせ、我が軍人。

いくさぶね [戦船] (名) 1 いくさ船

五74 7 又海には一面にいくさ船がならんでゐて、(略)。

いくじしやく [幾十尺] (名) 1 幾十尺

十一76 3 (略)、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。

いくすじ [幾筋] (名) 5 イクスズ 幾スズ 幾條

三56 1 ザシキノウチニイクスズモツナヲハツテ、(略)。

六81 4 淀川ハイクスズニモ分レテ海ニソグ。

十7 3 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラマツ直ニ幾スズカノ脈ガ並ンデ出テ、(略)。

十7 9 モミヂノ葉ハ幾スズカノ脈ガ本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキル。

十一88 2 蜘蛛は(略)。網を張らんとする時は、先づ幾條かのやう太

き絲を渡し、(略)。

いくせん「幾千」(名) 1 幾千

十二84 幾千の聴衆は帽子をぬいで
相和して歌った。

いくせんねんかん「幾千年間」(名) 1
幾千年間

十二93 支那幾千年間の人物中、
大聖として徳化の尚今日に著しきも
の、孔子に如くはなし。

いくせんまん「幾千万」(名) 1 幾千
萬

十二69 時としては幾千萬とも數
知れぬ大群、(略)。

いくそうばい「幾層倍」(名) 1 幾層
倍

十二22 木版では一枚づつ彫るから、
手間が幾層倍もかかる。

いくた「生田」(地名) 1 生田

五74 へいけのぐんぜいがふくはら
のしろを守つてゐる。東生田の門か
ら西一の谷の門までの間、(略)。

いくた「幾多」(副) 1 幾多

十一29 大小幾多の軍艦は海上の
浮城とも稱すべく、(略)。

いくだい「幾台」(名) 1 幾臺

十一84 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自
動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ
廻轉スベク、(略)。

*いくたびひいくど

いくたり「幾人」(名) 1 いくたり
四68 今あのはしの上を人
がいくたりとほつてゐますか。」

いくつ「幾」(名) 3 イクツ いくつ

一41 イクツサイタカ、カゾヘテ
ゴランナサイ。

五77 「年はいくつか。」

六78 白帆ヲアゲタ帆カケ船モイ
クツトナクハイツテ來ル。

*いくつきひいくげつ

いくど「幾度」(名) 15 幾度
八29 幾度カマハリタレドモ、入
ルコトヲ得ズ、(略)。

九33 さて幾度も幾度も造り直し
て、(略)。

九37 さて幾度も幾度も造り直し
て、(略)。

十18 さて書きはじめてからも、消
したり加へたりして、我我の讀む様
なものになるまでには、幾度書直す
かも知れない。

十19 誤があれば、幾度でも
其の活字を抜きかへて植直す。

十20 色のたくさんまじつた
美しい繪畫や地圖のやうなものは、
幾度も幾度も印刷を重ねなければな
らぬ。

十20 色のたくさんまじつた
美しい繪畫や地圖のやうなものは、
幾度も幾度も印刷を重ねなければな
らぬ。

十25 (略)、色のたくさんまじつた
美しい繪畫や地圖のやうなものは、
幾度も幾度も印刷を重ねなければな
らぬ。

十66 若者は長い劔を突通し幾度と
なく抜いては又突く。

十68 幾度かいそべに出で
てながめしが、(略)。

十70 岩に近づけば、波は益々荒
く、ボートは幾度となく打ちもどさ
れ打ちもどさるゝを、(略)。

十一45 如何でか討たるべ
き。幾度か思ひ直して討たんとすれ
ども、(略)。

十一112 村長は(略)、幾度の改
選にも常に選舉せられて、二十餘年
間勤続せり。

十二36 伊企懺却つて「新羅王我
がしりを食へ。」といひて、幾度責
めらるれども改めず、遂に殺された
り。

十二78 朝の風を聞きては
鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸
の影かと疑へるも、幾度なるを知ら
ず。

十二82 帽子の中に一文の錢もない
老人は、(略)、帽子の内を眺めて
は、幾度かためいきをついて居る。

いくどうおん「異口同音」(名) 1 異
口同音

十一57 兵士等はあわてて異口同音
に、「將軍の命は我々千萬人の命よ
りも貴い。ピエールは我々にお任せ
下さい。」といつて引止める。

いくとせ「幾年」(名) 1 幾年

十一23 幾年こゝにきまへたる
鐵より堅きのひかあり。

いくにち「幾日」(名) 1 幾日

九36 大水などの時には、水のひく
までは幾日も泊つて待つてゐなけ
ればならなかつた。

いくの「生野」(地名) 1 いく野

九25 みるのうちより 宮人の
袖引止めて、大江山 いく野の道
の 遠ければ、ふみ見ずといひし
言の葉は、(略)。

いくの「生野」(地名) 1 生野

十二48 古く知らるゝ佐渡・生
野、其の他無數の礦坑は 山をうみ
ちて山を鑛る。

いくひやくかぶ「幾百株」(名) 1 幾
百株

十99 廊下ノ兩ガハニハ幾百株ト
ナク牡丹ヲ植込ミタリ。

いくひやくじよう「幾百丈」(名) 1
幾百丈

十一56 深さは幾百丈とも知れない
谷底、(略)。

いくページぶん「名」 1 幾ページ分

十20 印刷する紙は廣い大きな紙
で、幾ページ分も一度に刷れる。

いくまんねん「幾万年」(名) 1 幾萬
年

九42 マシテ幾萬年ノ久シキ間、此
ノ大ナル湖水ヨリ流レ落チタル水ノ
カハ(略)。

いくよ「幾代」(名) 1 幾代

九21 (略)、うぐひすの 間は
ば如何にと 雲のまで 聞え上げた
る 言の葉は、幾代の春か かを
らん。

いくら「幾」(名) 7 イクラ いくら

二64 4 コンド ハイクラ ハヒヲ
フリカケテモ、ハナハスコシモ
サキマセン。
四23 8 園「ソノ糸ハ一カケイクラ
デスカ。」
四25 4 園 ミンナデイクラ ニナリ
マスカ。」
四77 7 いくら弓の名人でも、こ
れを一矢でいおとすことは、
なかなかむづかしさうです。
五73 6 (略) 美シイ角ガ木ノ枝ニヒ
ツカ、ツテ、イクラモガイデモハツ
レマセン。
七86 4 園 又夜はいくら暗くても、星
が出てゐれば、(略)、居る場所や方
角がちやんと分ります。
十一49 2 園 「あれ程の名馬はいくら
金を拂つても惜しくはない。」
いくらも「幾」(副)2 イクラモ
四36 5 ソノホカツカヒミチハマ
ダイクラモアリマス。
八92 7 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイ
クラモアルガ、(略)。
いけ「生」ムはないけ
いけ「池」(名)8 イケ 池ひさるさ
わのいけ
一15 1 イケ ニフネ
五15 5 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。
六37 3 朝おきて見ると、池に氷がは
つてゐた。
七58 4 園 コノ公園ハ(略)。コ、ニハ

美シキ池アリ。
七71 4 エビノ(略)、カニノ(略)
様子ハ、池ヤ川ニススムモノトチガハ
ナイガ、(略)。
九84 6 (略)、池の右手へさしかゝつ
た時、(略)。
九84 9 熊吉ハ(略)轉がつて、池の
中へ落ちこんだ。
十一112 2 園 池には大抵鯉・鮒等を養
ひて、(略)。
いけみず「池水」(名)1 池水
八36 3 園 野べも山べも新緑の風
に藤波さわぐ時、池水にほふかきつ
ばた。
いける「生」(下)1 イケル「一
ケ」
四74 7 (略)、花イケニハモモノ
花トヒガンザクラヲイケマシ
タ。
いける「行」(下)4 イケル いけ
る「一ケ」
二23 4 園 「イイエ、イツシヨニキ
テハイケマセン。
二35 5 園 「モチハタイセツナオ米
デコシラヘタモノデスカラ、
イテハイケマセン。」
八11 3 園 伯母様お笑ひになつてはい
けませんよ。
八25 4 園 「成程これではいけない。」
いけん「意見」(名)3 意見
十一114 1 園 園 「不作の後なれば、
成るべく經費を節約したしとの校長

の意見によりて豫算を編成したるな
り。」
十二74 9 園 コロンブスは(略)、歐羅
巴の西海岸より西を指して進まば、
印度の東海岸に到着すべしとの意見
を抱けり。
十二108 7 園 上奏とは文書を天皇に奉
呈し、建議とは文書を政府に提出し
て意見を述べざるをいふ。
いこじんぐうこうこういこ
いこう「憩」(四)1 いこふ「一ハ」
十89 1 園 夜晝三日供御もなく、歩
みつかまで松かげに いこはせ給ふ
かしこさよ。
いこま「生駒」(名)2 生駒 生駒
十一30 2 園 (略)我が軍艦ノ名ヲ
(略)。(略)山ノ名ヲ附シタルモノ
二三笠・富士・筑波・生駒・鞍馬・
伊吹・淺間等、(略)。
十一33 5 園 巡洋艦ハ(略)。(略)。
筑波・生駒・出雲・千歳ナドハ之ニ
属ス。
いころす「射殺」(五)1 イコロス
「一シ」
二33 6 (略)、トリヤケモノヲイコ
ロシテ、オモシロガツテキマシタ。
いさ(副)1 いさ
十99 5 園 人はいさ心も知らず、故
里は花ぞ昔の香にほひける。
いざ(感)2 イザ いざ
八8 6 園 友よ、來よ。手かごを持ち
て、いざ、裏山にきのこたつねん。

八30 1 園 園 工、川成ヲ音ナヘバ、
「イザコナタヘ。」トイフ。
いさお「功」(名)1 いさを
八9 7 園 園 (略)、皆うちよりてえも
の數へん。たけがりのいさをくらべ
ん。
いざかや「居酒屋」(名)2 居酒屋
八23 7 (略)、居酒屋の方へ行きます。
八23 8 此の男は居酒屋に酒代の借が
あるので、其のかたに持つて行かう
とするのです。
いさぎよし「潔」(形)2 いさぎよし
潔し「一ケ」
八36 5 園 垣根にからむ朝顔のさ
きはかりつゝいさぎよく、にこりに
しまぬ白蓮の 巻葉をもるゝつゆ涼
し。
十一18 園 昔より富士ハ(略)。然れ
ども四時雪をいたゞきて潔く、其の
形白扇を倒にかけたが如く美しき
は、なほ我が國第一の山といふべく
(略)。
いささか「聊」(副)1 いさゝか
十二112 5 園 (略)、上官の者は常に下
級の人をいたはりて、いさゝかも輕
侮の念を有すべからず。
いざないよす「誘寄」(下)1 誘ひ
寄す「一セ」
十二5 6 園 東郷司令長官ハ(略)、
先づ小軍艦をして敵艦隊を沖島附近
に誘ひ寄せしむ。
いざなう「誘」(四)1 いざなふ「一

ヒ

九五七 図 (略) 賊どもいつはり降り、

「此のあたりには鹿多し。かりし給へ。」と勸めて、尊をいざなひ、(略)、火を放ちて焼き奉らんとせり。

イサベラ (人名) 2 イサベラ

十二七三 図 (略) は伊太利人コロンブスにして、彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラなりき。

十二七五 図 (略)、遂に皇后イサベラの知る所となり、其の保護の下に此の大探検を行ふに至れり。

いさまし [勇] (形) 4 いさまし 勇まし [シク・シ]

七六三 図 八九頭の犬いきほひよく數人を乗せたるそりを引きて、雪の道を走り行くさま、まことにいさまし。

十一七 図 グレース、ダーリングの生家に程近き寺院の庭上には、(略)、永く此の勇まし、やさしく、且は麗しき昔物語を語れり。

十一六〇 図 うきうきし、勇ましうまし。出征兵士の弟ぞ、我は。

十一六二 図 勇氣は彼に、情は是に、勇まし、やさし、をしの別。

いさましい [勇] (形) 5 イサマシイ 勇ましい [イ]

四九一 日ノマルノコクキガアサ日ニカガイテキルノハ、イサマシイデハアリマセンカ。

五六七 イサマシイタイコノ音ガ森ノ中カラキコエテクル。

九六八 一天にはかにかき曇つて、ほし物を取込むひまもない夕立は、さわがしい中に勇ましい。

十一五五 (略)、かの勇ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。

十一五六 あゝの勇ましい少年を殺してはならぬ。

いさましきしょうじょ [課名] 2 勇ましき少女

十目六 第十九課 勇ましき少女

十六八 第十九課 勇ましき少女

いさましき [勇] (名) 1 勇ましき

十一二六 図 筋骨たくましき若者が櫓を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましきよ。

いさみいさむ [勇勇] (四) 1 勇み勇む [ミ]

十一六四 図 勇み勇みて出で行く兵士。

いさむ [勇] (四) 1 勇む [ミ]

いさみいさむ 父の手紙を讀みて心勇み、(略)、隊南と共に出立したり。

いさむ [諫] (下二) 1 いさむ [メヨ]

六八三 図 四つとや、善き事たがひにすゝめあひ、惡しきをいさめよ、友と友、人と人。

いざや (感) 1 いざや

十一六〇 図 親に事へ、弟を助け、家を治めん、妹我は。家の事をば心にかけず、御國の爲に行きませ、いざや。

いざり [膝行] (名) 6 ゐざり

五二二 ぬす人はきんじよに住んでゐるゐざりだといふはさがあるの、(略)。

五二四 図 それを私のするにこのゐざりがぬすんだのでございます。

五二五 又ゐざりは「略」、私は足の立たないもので、兩手をついて、やつとゐざりあるくものでございます。

五二六 役人は「略」、そのうちにゐざりにむかつて、(略)。

五二六 ゐざりは「略」、その釜をあたまにかぶつて、兩手をついてゐざり出しました。

五二七 図 「こら待て、ゐざり。

いざりあるく [膝行歩] (五) 1 ゐざりあるく [ク]

五二四 図 「略」、私は足の立たないもので、兩手をついて、やつとゐざりあるくものでございます。

いざりだす [膝行出] (五) 1 ゐざり出す [シ]

五二六 ゐざりは「略」、その釜をあたまにかぶつて、兩手をついてゐざり出しました。

いざりび [漁火] (名) 1 漁火

十一一九 図 月影の小波にだけ、漁

火の波間に出没する夜景も亦一段のおもむきあり。

いし [石] (名) 16 いし いし 石

いし・さざれいし・たていし・ひうちいし

一六三 イシ イス ハシ ハス

三三二 いし「ひらがなのドリル」

五五八 大昔ハ「略」火ヲ出シマシタガ、ソレカラ後ニハ石ト金ヲウチ合セテ出スヤウニナリマシタ。

五五九 (略)、石ノヤウニカタクナツテキマスカラ、石炭トイヒマス。

六二七 それから象をおろして、その代りに石をたくさんつみました。

六二八 (略)、その石をおろして、な

六二九 (略)、その石をおろして、な

六三〇 その時一人の子どもは大きな石を持って来て、力まかせに投げつけました。

七七七 海草ハ「略」。根モ「略」、タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツクダケノ用ヲナスモノデア

七七八 図 のきよりおつる雨だれのたえず休まず打つ時は、石にも穴をうがつなり。

九四二 図 水ノシヅクモ度重ナレバ石ヲモウガツトイフ。

九四三 図 (略)、東照宮の正面に出づ。石の大鳥居高さ三丈餘、(略)。

十一九〇 図 例へばこゝに一種の石あ

り、(略)、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、随つて價あることなし。

十一108 貴人の墓には内地の様に石をたてるけれども、(略)。

十二158 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ疊ムカ、コンクリートデ固メルカシテアル。

十二249 上るや石のきざめしの、左に高き大銀杏、(略)。

十二824 最早弾く力も盡きて、傍の石にこしを下し、(略)。

いしかわ「石川」(地名) 1 石川

十二496 近年やみに産額の増大せしは北陸の 福井・石川・富山なる 羽二重織の輸出品。

いじす「維持」(サ変) 3 維持ス 維持す「スル・ーセ」

十一510 終日労働して、一群の生計を維持するものは働蜂なり。

十一1048 蜀國ノ魏・呉二強國ト相對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

十二1116 國家を護り、國權を維持するは兵力に頼るを以て、(略)。

いじする「維持」(サ変) 1 維持スル「スル」

十一655 寒イ時ハ特ニ體溫ヲ維持スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。

いしだん「石段」(名) 2 イシダン

石ダン

一255 (略)オミヤガアリマス。(略)。タカイ イシダン モミエマス。

五684 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石ダンノ道ヲ上ツテ、(略)。

いしづちやま「石鎚山」(地名) 1 石鎚山

十一18 石鎚山

いしのこ「石粉」(名) 1 石のこ 七348 やき物をつくるには、土又は石のこをねりかためてかわかし、かまどに入れて焼く。

いじめる「苛」(下二) 4 イヂメル いぢめる「一メ・一メル」

五363 コノカハイラシイ、美シイ蝶ヲツカマヘテイヂメル人ハ、ドウイフ心デセウ。

八218 又若し外の雀が見つけると、よつてたかつていぢめるので、(略)。

十858 すべて家畜はよく勞らなければならぬが、とかくに之をいぢめる風がある。

十8510 西洋の馬がおとなしくて、日本の馬のおとなしくないのは、(略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。

いしや「医者」(名) 4 醫者 ヲイおしやさま

九597 常に無病にして、醫者にかゝりたることなき人あり、(略)。

九5910 「我は天氣にも相談せず、

毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。」

九616 西洋のことわざにも「よく日光の見舞ふ家には醫者は見舞はず。」といへり。

九856 (略)、熊吉に水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわざである。

いしや「石屋」(名) 1 石屋

八145 大工ハノコギリ、左官ハコテ、石屋ハノミ、カヂ屋ハツチ、仕立屋ハ針、ソレノ道具ヲ持ツテ、メイノ仕事ニカ、ル。

いしやまでら「石山寺」(名) 1 石山寺

八605 石山寺の秋の月、雲をさまりてかげ清し。

いじゅう「移住」(名) 1 移住 ヲいちじてきいじゅう・じゅうるいのいじゅう

十二687 一定の季節に最も多數の移住を見るは(略)に住せるレミングと稱する地鼠の一種なり。

いじゅうす「移住」(サ変) 2 移住す「スル・ーセ」

十二662 全然移住せし例は(略)、通常の灰色の鼠の一群大舉して、印度よりペルシャを経て歐羅巴に移り、(略)黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二671 此の如く全然移住するは

稀に見ることなれども、(略)。

いじょう「以上」(名) 3 以上 ヲいちよくえんいじょう・いっしやくいじょう・ごえんいじょう・ごせんまんえん

いじょう・しちじゅうごマイルいじょう・じっせんいじょう・せんいじょう・それいじょう・にせんいじょう

九142 拜啓、(略)。(略)。本月二十日までには必ず發送仕るべく候。以上。

十一351 戦艦ハ(略)。(略)。潜水艇ハ(略)。以上ノ外、尚水雷母艦・工作船・給炭船等ノ如キ特別任務ヲ有スルモノアリ。

十二1148 一には、(略)。(略)。一には、(略)。(略)。以上の五箇條即ち忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を(略)。

いじょう「異状」(名) 1 異状 九748 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、其の他にはかく別の異状これなく、(略)。

いしよく「衣食」(名) 1 衣食 十一728 我衣食の費をいとおにあらざれども、何處へなりとも出でて遊び給へ。

いしよくじゅう「衣食住」(名) 2 衣食住

十499 欄間の彫物、唐紙の地紙をはじめ、着物の縞模様、焼物・塗物の繪模様、其の他菓子類に至るまで、我等の衣食住には模様・色とりをほ

どこしたるもの多し。

十二438 〔略〕、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

いしん「維新」(名) 1 維新 〆めいじ

いしん

九298 〔略〕 益次郎ハ維新ノ際軍事ニ功勞多カリシ人ナリ。

いしんぜんこ「維新前後」(名) 1 維新前後

九279 〔略〕 維新前後國事ニタフレタル人々ヲ始メ、(略)。

いしんまえ「維新前」(名) 1 維新前

十843 維新前までは牛肉を食ふ人は至つて少かつたが、今では全國食はぬ處がなくなつた。

いす「椅子」(名) 2 イス 椅子

一163 イシイス ハシ ハス

十355 〔略〕 談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、すぐに立つて、椅子をゆづりました。

いず「伊豆」(地名) 1 伊豆 〆さがみ

するがいずさんごく

十744 〔略〕 熱海は伊豆の東岸にあり。

いず「出」(下二) 47 出ツ 出づ

《一ツ・一ツ・一ツ・一ツ・一ツ》〆あらわ

れいず・いれいず・うかびいず・おきいず・おどりいず・おもいれいず・すみいず・つきいず・ながれいず・ぬけいず・のがれいず・ほどばしりいず・

よみいず・わきいず

六546 〔略〕 塩ハ山ヨリモ出ツレドモ、ワガ國ニテハ海ノ水ヨリツクル。

七14 〔略〕、ソノ折父トトモニ戰場ニ出デントセシガ、(略)。

七542 〔略〕 新橋停車場ヲ出デテ、上野行ノ電車ニ乗ル。

七571 〔略〕 コ、ヲ一メグリシテ隅田川ノホトリニ出ツ。

七579 〔略〕 櫻田門ヲ出ツレバ、日比谷公園アリ。

七586 〔略〕 公園ヲ出ツレバ、海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。

八43 〔略〕 八時宿を出でて、町を南へ行けば、(略)。

八523 〔略〕 天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ、入鹿カタハラニ侍ス。

八531 〔略〕 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出デズ。

八761 〔略〕 我等若シ汽船に乗りて、我が帝國の港を出で、東へ東へと進み行かば、(略)。

八801 〔略〕 かくの如く日本を出で、海を越え、陸を越え、東へ東へと進めば、(略)。

九42 〔略〕 あやしみて尾をさきて見給ふに、一ふりの劍出でたり。

九212 〔略〕 『一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事あらん。』

九248 〔略〕 騎兵は進退敏活にして、多

くは友軍の前方に出でて敵狀をさぐる。

九538 〔略〕 晝ハ暗キ所ニヒソミ、日暮ヨリ出デテ飛ブカウモリハ(略)。

九601 〔略〕 人多き都會に住む者は、折々野外に出でて、新しき空氣をすひ(略)。

九804 〔略〕 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、(略)。

九941 〔略〕 川を渡りて坂路を上れば、東照宮の正面に出づ。

十25 〔略〕、湖水より出づる瀬田川は下流宇治川となり、(略)。

十87 〔略〕 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。

十97 〔略〕、數時間の暴雨にもたちまち大水出で、(略)。

十536 〔略〕 『戦場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。』

十691 〔略〕、眠れる父をゆり起して、幾度かいそべに出でてながめしが、(略)。

十893 〔略〕、さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれがもふし。

十926 〔略〕、折々會合の節は其の話も出で、(略)。

十941 〔略〕 停車場ヲ出デテ、左ニ開化天皇ノ陵ヲ拜シ、猿澤ノ池ニ至ル。

十963 〔略〕、都ニアリシ時此ノ山ニ出ツル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出

デテ、(略)。

十966 〔略〕 天の原ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。

十108 〔略〕 コ、ヨリ西北へ進メバ、敵傍・樞原ノ地ニ出ツ。

十133 〔略〕 吉水神社を出づれば、谷をへだてて向ふの山腹に如意輪寺あり。

十163 〔略〕、力強く壯なるものは外に出でて花の蜜を吸來る。

十1464 〔略〕、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十1705 〔略〕、又人より訪問を受ける時は直ちに出でて應接すべし。

十1724 〔略〕 我衣食の費をいとふにあらざれども、何處へなりとも出でて遊び給へ。

十1795 〔略〕 市を出でて橋を渡れば長良村あり。

十1834 〔略〕、半月金華山の上に

出でて、川風たもとを拂ふも快し。

十1853 〔略〕 梳綿機ヨリ出ツル綿花ハ眞白雪ノ如ク、(略)。

十1032 〔略〕 孔明、劉備ニ事へ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、(略)。

十1279 〔略〕、若し向ひの山にのろしあがるを見れば、幸にして城を出でたりと知れ。

十1333 〔略〕、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、保の母と同じく、忠義の爲には恩愛を

忘るゝ眞心より出でたり。

十二63 〇 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。

十二87 〇 喜劍其の後江戸に出で、義士復仇の擧を聞き、(略)。

十二87 〇 (略) 郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。

十二91 〇 男子は外に出でて不在勝のものなれば、(略)。

十二91 〇 日々の暮しは「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。

十二96 〇 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、(略)。

十二97 〇 國民は個人の集合より成るものなれば、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

いすか「鵜」(名) 2 いすか

八57 〇 いすかのくちばしは上と下がくちがひがつてゐる。

八57 〇 それで「いすかのはしのくちがひ。」といふことがある。

いづくんぞ「安」(副) 1 いづくんぞ

十二105 〇 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。

いづく「何処」(代名) 6 いづくい

づゐ 何處

十二2 〇 いづこより見ても山にさへ

ぎられ、かすみにへだてられて、其

の全景を見ること能はず。

十38 〇 (略) 敵の將軍ステッセル、乃木大將と會見の處はいづれ水師營。

十一72 〇 我衣食の費をいとなにあらざれども、何處へなりとも出でて遊び給へ。

十二33 〇 此の心は何處如何なる場合にも忘るべからず。

十二79 〇 (略) 朝の二時頃「陸」「陸」と呼ぶものあり。「何處ぞ。」

十二84 〇 歌が終ると、紳士はバイオリンを老人に渡し、目禮して何處へか行つた。

いすず「五十鈴」(地名) 1 五十鈴

八27 〇 (略) 後神殿を今の五十鈴の川上に造り、(略) 皇祖天照大神をまつりたまへるなり。

いすづがわ「五十鈴川」(地名) 2 五

十鈴川 五十鈴川

八45 〇 五十鈴川は流早くして、水清らかなり。

八54 〇 五十鈴川の水に口すゝぎ手洗ひて左へ行き、(略)。

イスパニヤ「地名」 6 西班牙

十二73 〇 (略) 彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラなりき。

十二76 〇 (略) 空しく志を抱いて

西班牙に轉じ、居ること多年、遂に

皇后イサベラの知る所となり、(略)。

十二76 〇 (略) 今日のコロンブスが遠征隊出發の日なりとて、西班牙パロスの港は未明より人の山を築けり。

十二79 〇 (略) コロンブスは深紅の美服を着し、西班牙の國旗を持し、(略) 眞先に上陸し、(略)。

十二79 〇 (略) 此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。

十二80 〇 (略) かくてコロンブスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。

いずはんとう「伊豆半島」(地名) 1

伊豆半島

十二72 〇 我が國は(略) 全國到處に温泉あり。伊豆半島のみにも三十箇所を數ふ。

いずも「出雲」(名) 1 出雲

十一33 〇 巡洋艦ハ(略)。(略) 筑波・生駒・出雲・千歳ナドハ之ニ屬ス。

いずものくに「出雲國」(地名) 1 出雲

雲の國

九18 〇 神代の昔、天照大神の御弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひしに、(略)。

いづれ「何」(代名) 24 イツレ いづれ

何レ 何れ

七58 〇 (略) 海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。イツレモ洋風ノレングワヅクリニテリツパナリ。

七69 〇 いづれも大よろこびで、(略)と申して居ります。

七55 海草ニモ色々アル。(略)。コ

ノ他マダタクサンアルガ、イツレモヨイ肥料ニナル。

八49 〇 (略) の戦利品たる大砲、日本海海戰の記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。

八77 〇 イギリスは(略) 商業・工業いづれも盛に、海軍強く、商船多し。

九17 〇 香取・息栖ノ一ノ鳥居ハ何レモ川ノ中ニ立テリ。

九24 〇 (略) 男子は十七歳より四十歳までの間、何れも兵役に服する義務あり。

九25 〇 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵は何れも戰爭に必要にして、(略)。

九26 〇 將校には大將・(略) あり。其の下に下士あり、兵卒あり。上下の別明かにして、何れも上官の命令を守るは(略)。

九88 〇 サレバ何レノ國ニテモ、世ノ進ムニシタガヒ、(略) 物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九95 〇 之を過ぎて拜殿あり、拜殿の後に本殿あり、いづれも善盡し、美盡せり。

十74 〇 (略) 盛夏の候は何れの旅館も空室なきに至るを常とす。

十77 〇 目・耳・鼻・口ハ何レモ腦ニ近キ位置ニ在リ。

十78 〇 又力士ノ如キハ常ニ全身ニ

カヲ入ル、ヲ以テ、何レノ部分モヨク發達セリ。

十101 9 畝傍山・香具山・耳無山ノ

三山、イツレモ麗シキ山ニシテ、(略)。

十一14 8 図 (略)、心ある者どもいづれも此の議に同ず。

十一30 5 図 (略)、鹿島・香取ハ何レモ上古ノ武神ヲマツレル神宮ノ名ナリ。

十一31 10 図 戦艦ハ(略)。故ニ何レモ大ナル大砲ヲ備へ、(略)。

十一33 3 図 其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、何レモ多量ノ石炭ヲ積ミ、(略)長時間航海スルコトヲ得。

十一112 1 図 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて(略)を買ふに餘あり。

十二12 8 工場ニハ色々アル。(略)。

イツレモ大規模ニ出来テキテ、(略)。

十二16 5 図 故に文明諸國に於ては何れも氣象臺・測候所を置きて、日々氣象を調査す。

十二59 5 図 (略)、之に架したる橋は何れも壯大にして、市の美觀を添ふ。

十二66 8 図 又かつて栗鼠の大群(略)、何れも南より北へ同一の進路を取りて、(略)。

いづれ「何」(副)2 いづれ 何れ

九86 5 図 (略)、今日の勝負はきまらないが、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。」

十92 6 図 (略)、折々會合の節は其

の話も出で、何れ熟考の上實行せんと申合せ居り候事とて、(略)。

いせ「伊勢」(地名)4 伊勢 伊勢

八17 7 図 (略)、國民もまた深くうやまひ奉りて、一生に一度は、かならず伊勢に参拜せんと心がけざるものなし。

八7 2 図 (略) とこしへに民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大

神。

九5 1 図 尊は先づ伊勢にいたりて神宮を拜し、(略)。

九6 6 図 尊(略)、道にて病にかゝり、遂に伊勢にてかくれ給へり。

いせい「威勢」(名)1 せせい

五17 1 鯉ハマコトニせセイノヨイ魚

デス。(略)。時ニハ二三尺モ高クト

ブコトガアリマス。又ドンナ流ノ早

イ川デモ、オヨイデノボリマス。

いせざき「伊勢崎」(地名)1 伊勢崎

十二49 4 図 絹織物の産地には、

(略)、群馬の桐生・伊勢崎も 古く

其の名を知らざたり。

いせたいふ「伊勢大輔」(人名)1 伊勢大輔

十95 5 図 (略)、古の奈良の都の八重

櫻、今日九重にほひぬるかな。ト、

伊勢大輔ノヨミシ其ノ奈良櫻ノ名残

ヲトメタリ。

いぜん「以前」(名)2 以前 ひとっせん ひとくねん いぜん・さんびやくねん

いぜん・しひやくねん いぜん・にひやくねん いぜん・ろくじゅうねん いぜん

九46 6 図 すべて沙漠の旅行は、以前

に通じし駱駝の足跡を目あてて行く

なり。

十67 2 捕鯨法には(略)、又以前に

は鯨の通路に網を張つて銚を打つ方法などもあつた。

いそ「磯」(名)1 いそ

十一22 2 図 高く鼻つくいその香

に、不斷の花のかをりあり。

いそがし「忙」(形)1 いそがし「一

シク」

八69 8 図 「我等はつねにいそがし

く働けるに、汝はただ坐して食ふの

みにて、(略)。

いそがしい「忙」(形)5 イソガシイ

いそがしい 《一・イ・イ・ク》 ひと

いそがしい

五12 5 まもなく町の中へはいると、

(略)、人がいそがしさうにあるいて

ゐました。

六15 5 それで取入れの時は大へんに

いそがしくて、夜も十分に眠れない

ほどです。

七26 5 イソガシイ時ニ手ノ足りナイ

トイフノハ、ハタラク人ノ少イトイ

フコトデス。

七31 5 (略)、二万匹の蠶をかふのに、

人一人付きゝりて、眠るひまもない

程いそがしい。

十二20 4 蝶や蜂は花から花へいそがし

しさうに飛廻つて花の汁を吸ふ。

いそがしさ「忙」(名)1 いそがしさ

六17 2 (略)、田うゑや草取りの苦し

さも、取入れのいそがしさも、全く

わすれてしまひます。

いそぎ「急」(名)1 急ぎ

十二89 1 図 (略)、急ぎの場合にも混

雑なく、暗き時にも手探にて用を足

し得る様に、(略)。

いそぐ「急」(四五)17 イソグ い

そぐ 急ぐ 急ぐ 《一・イ・イ・ガ・ギ・

グ・グ・グ》 ひとりのいそぐ

一47 2 ハシゴヲカツイデイソグ。

一47 3 イソグ、イソグ。

一47 4 イソグ、イソグ。

三27 1 図 けれどもいそいで つま

づくまいぞ。

三35 8 (略)、光がみえません。「お

や、にげたのかしらん。」と、い

そいでかみをあけてみると、

(略)。

四8 2 (略)、そのうちに雨が

ふりさうになつたので、いそいで

山を下りました。

五19 4 おはなは「はい。」といひな

がら、いそいで行つて見ると、(略)。

五41 2 まだむかふからいそいで走つ

て来る人があります。

六42 5 イソガバマハレ。

六48 2 秀吉は大ぜいの人を十組に分

けて、(略)、仕事をいそがせました

から、すぐに出来上りました。
六60 1 園 (略)、かへりをいそぐ野中道。

六62 8 園 それを聞くより妹のおふみはいそぎ道ばたを、そこかこゝかとさがすうち、(略)。

七16 1 園 急ぎますのでうかゞひませんが、(略)。
八15 3 兵士ハ練兵場へ向ヒ、旅人ハ停車場へ急グ。

九48 8 園 (略) 駱駝の足跡あり。之に力を得て南へくと急がするに、(略)。

十30 2 銀杏の木は急いで山の方へ逃げて行く。
十66 10 さきのボートは鯨を引きながら母船の方へ急ぐ。

いそこなう「射損」(五) 1 いそこなう「一ツ」

四80 7 よ一は(略)、もしこれをいそこなつたら、生きてはゐまいとかくこをきめて、(略)。

いそざきみんき「磯崎眠亀」(人名) 1 磯崎眠亀

十42 5 園 花筵ヲ(略)、其ノ織方ヲ發明シタルハ岡山縣ノ磯崎眠亀トイフ人ナリ。

いそしむ「勤」(四) 2 いそしむ「マーマー」

七79 3 園 小さきありもいそしめば、塔をもきづき、つばめさへ千里の波を渡るなり。

十二117 7 園 (略)、唯々一の誠心を以て報國盡忠の道にいそしまんとす。

いそづたい「磯伝」(名) 1 いそ傳ひ十二23 7 園 七里の濱のいそ傳ひ、稻村が崎、名將の劔投ぜし古戰場。

いそべ「磯辺」(名) 2 いそべ十68 10 園 (略)、幾度かいそべに出でてながめしが、墨を流したる如き空模様にて、(略)。

十一21 8 園 我は海の子、白浪れさわぐいそべの松原に、(略)。
いた「板」(名) 4 板ひうすいた・まないた

六67 6 園 松・杉・ヒノキ・ケヤキハ板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、船ヲ作ルニ用フ。

六69 1 園 材木ヲヒキテ、板又ハ柱トナスモノハコビキナリ。

十二13 1 (略)、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切斷スル。

十二14 1 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。

いたい「痛」(形) 5 イタイ いたい「イイ・イク」

二38 6 園 カゼヲヒイタリオナカライタクシタリシタトキニ、(略)。

四56 6 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、ハマベニタツテ、ナイテキマシタ。

四58 1 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、マヘヨリモカヘツテイタクナツテ、(略)。

六60 7 園 もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

七25 8 カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出来マセン。

いたがきこもん「板垣御門」(名) 2 板垣御門

八5 6 園 (略)、御宮の前にいたる。その御門を板垣御門といふ。

八5 7 園 板垣御門を入りて、玉垣御門の前にて拜し奉る。

いだきつく「抱付」(四) 1 抱きつく「キ」

十69 4 園 (略) 一隻の難破船横たはれり。水夫等はなほばしらに抱きつきて、息も絶えぐに救を呼べり。

いだく「抱」(四) 2 抱く「イイ・イク」

十二74 9 園 コロンブスは(略)西を指して進まば、印度の東海岸に到着すべしとの意見を抱けり。

十二76 4 園 (略) 空しく志を抱いて西班牙に轉じ、居ること多年、(略)。
いたさ「痛」(名) 1 イタサ

り「一リ」
九74 4 園 全家立退の用意致し居り候中、(略)、水は次第に減退致し候。

九75 5 園 當村に引取りて保護を致し居り候者も百二十名の多きに上り候。

いたす「致」(四・五) 12 イタス いたす 致す「サ・シ・ス」

おんなかまいいいたす・おんみおくりいたす・かいつういたす・がくしゅういたす・かんしゃいたしおり・きょこ

ういたす・げんたいいたす・ごしょうたいいたす・ごどうこういたす・さんかいいたす・じつちけんぶんいたす・しゅつちよういたす・しょうちいたす・しんばいいたす・せいこういたす・せいぞういたしおり・つうどくいたす・にっさんいたす・はいしゃくいたし

おり・はつそういたす・はんばいいたしおり・へんじよういたす・らくせいいたす

五8 3 (略)、コノ日ヲキゲンセツト申シテ、毎年オイハヒワイタスノデゴザイマス。

五21 3 園 「こんどは何の御用をいたしませう。」

五23 4 園 私はよその物をぬすむやうなことはいたしません。」

七68 9 園 母は(略)と申して、おとなりへもおすそ分けをいたしました。

七81 4 図 私は年中航海をしてゐるもので、それから、少しそのお話をいたしませう。

十37 8 図 (略)、なほ平生の行をしらべて雇ふことに致しました。

十56 7 図 兵器は(略)、其の手入は最も念入に致し候。

十一95 7 図 其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

十一103 8 図 (略)、孔明涙ヲ流シテ、「臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致スベシ。」ト答フ。

十二10 7 図 「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラス。

十二53 3 図 富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。

十二102 8 図 地方人民協同一致して、(略)、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。

いだす「出」(四)10 出ス 出ス「一シースーセ」ヨウちいだす・おいだす・おせいだす・おもいいだす・おりいだす・かたりいだす・きりいだす・こぎいだす・さしいだす・たずねいだす・つくりいだす・とびいだす・とりいだす・にげいだす・はきいだす・はこびいだす・ひきいだす・みえいだす・よびいだす

九41 9 図 噴火一タン止ミテ後、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。

十69 6 図 早く船を出して救はん。

十76 5 図 (略)、腸ハ胃ニテコナシ盡サザルモノヲコナシテ、其ノ不用ナルモノヲ體外ニ出ス。

十一79 9 図 此の間毎夜月なき時をうかゞひて漁舟を出す。

十二84 3 図 先ツ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、(略)。

十二88 1 図 蜘蛛は其の體より絲を出して網を張る。

十二88 6 図 蚯蚓は(略)、多量の土を呑込みては之を地上の穴の口に出す。

十二88 10 図 油蟲は(略)、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、(略)。

十一115 7 図 (略)、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

十二87 2 図 獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

いたす「悪戯」(名)1 いたづら

六73 6 図 わたしのからだがかんなにぐらつくやうになつたのも、その子供たちのいたづらからでございます。

いたづら「徒」(形状)4 徒

十一11 4 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、ソナン手數ガ省ケテ、徒二時間

ヲ費スコトガナイ。

十二70 9 図 少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。

十二71 5 図 身をはかなむも過ぎしことは追ふべからず。常に前を望みて、徒に後を顧みることなかれ。

十二72 10 図 引込思案の人は徒に其の結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、(略)。

いたす「悪戯者」(名)2 イタヅラモノ いたづら者

六44 7 図 (略)、おきやうなどは何べんをしへてもおぼえません。(略)。

お寺では「こんないたづら者はごめんです。」といつて、うちへかへしました。

六66 1 熊ハイタヅラモノデ、人ノ家ノクラノ戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ俵ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

いただき「頂」(名)3 いたゞき

九51 2 図 (略)、支那の帽子はいたゞきに、結ぶ赤だまかはいらし。

十27 9 図 (略)、見渡せば四方の山々のいたゞきは、はやまつ白になつてゐる。

十一55 2 図 ふと山のいたゞきの方にすさまじい物音が聞え始めたと思ふと、(略)。

いただきたてまつる「頂奉」(四)1 イタマキ奉ル「一ル」

八50 5 図 鎌足早クヨリ其ノ人トナリヲシタヒ奉リ、大事ヲ成スニハ此ノ皇子ヲイタマキ奉ルヨリ他ニ道ナシト思ヒシガ、(略)。

いただく「頂」(四・五)14 イタダク

いただく「いたゞく」『イ・イ・キ』

二49 1 図 (略)、オカアサンカラオートシダマニイタダイタ本ガ一サツアリマス。

三57 6 図 私ガヲバサンカライタダイタムラサキ色ノハオリハ、(略)。

三61 6 図 をちさんのおみやげに貝をこんなにたくさんいただきました。

四41 8 図 をばさんからいただいたおとしだまに(略)。

五2 4 図 よい神さまがたは、どうかして大神にまた出ていただきたいと、色色ござうだんの上、(略)。

五65 8 図 お手紙をいたゞいて、まことにうれしうございます。

六37 7 図 をばさんから塩せんべいをいただいた。

七17 6 図 (略)、種物屋から西洋西瓜の種を三色ばかり買つて來ていたゞきたうございます。

七18 5 図 (略)、これも二三種買つて來ていたゞきたうございます。

七68 5 図 見事な桃を(略)。さつそくいたゞきました。

七68 5 図 見事な桃を(略)。さつそくいたゞきました。

八66 5 取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいただきまして、(略)。

十一 8 昔より富士は(略)。然れども四時雪をいたゞきて深く、(略)。

十七 5 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、其ノ上ニ頭ヲイタダキ、(略)。

十二 8 頭には霜をいたゞき、身にはつゞれをまとひ、(略)老人の辻音樂師がある。

いたって「至」(副) 6 いたつて 至つて

六 43 6 (略)豊臣秀吉といふ人は、もとはいたつて身分のひくい人でございました。

七 60 2 毛のいたつて短きもの是指さきにてもつまめぬ程なれど、(略)。

八 31 4 (略)、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。

十 84 3 維新前までは牛肉を食ふ人は至つて少かつたが、(略)。

十一 96 6 併し夏は氣候温和にして、至つて凌ぎよく候。

十二 21 9 植物も(略)、炭酸瓦斯を吐出すが、其の吐出す炭酸瓦斯の分量は至つて少い。

いたり「至」(名) 2 至

十一 40 8 著人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

十一 62 4 御光來下され候

はば光榮の至に存候。

いたりたまふ「至給」(四) 2 いたり給ふ 至り給ふ「一と」

九 1 8 神代の昔、天照大神の御弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひしに、(略)。

九 5 5 尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、(略)。

イタリヤ「地名」 3 イタリヤ イタリヤ

十一 54 7 ナボレオンがアルプ山を越えてイタリヤへ攻入つた時は冬の半で、(略)。

十二 73 10 當時伊太利は貿易の中心地にして、印度地方の寶石・香料・絹布類は盛にベニス・ゼノア等の港を経て歐洲へ輸入せり。

十二 74 10 たま／＼元の忽必烈に仕へたる伊太利の大旅行家マルコ・ポーロの日本に關する記事を読み、(略)。

イタリヤじん(名) 1 イタリヤ人

十二 73 7 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして、(略)。

いたる「至」(四・五) 80 イタル いたる 至る 到ル 到る「一」

七 54 4 十五分ホドニテ日本橋ニイタル。

七 58 9 電車ニテ九段坂ノ上ニイタリ、靖國神社ニサンケイス。

八 4 4 八時宿を出でて、町を南へ

行けば、宇治橋のたもとにいたる。

八 5 6 (略)、神樂殿・御馬屋の前を通り、御宮の前にいたる。

八 40 7 我が國ニテハ、初ハモツパヲ輸入品ヲ用ヒタリシガ、明治八年ヨリ内地ニテモ之ヲ製造スルニイタレリ。

八 51 6 (略)、同志ノ人々ヲモカタラヒテ、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。

八 70 9 かくて二三日を過せしに、耳鳴り、目暗み、(略)、身體は全く力なきにいたれり。

八 71 9 諸君我を苦しめんとして、(略)、新しき血出來ずして、諸君は皆却つて自ら苦しむにいたれり。

九 3 10 尊(略) 劔を抜きて、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劔の先少しくかけたり。

九 5 1 尊は先づ伊勢にいたりて神宮を拜し、(略)。

九 14 10 (略)利根岳ヨリ發スルサ、ヤカナル細谷川ハ、(略)、數多ノ小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。

九 15 5 更ニ東南ニ流レテ、(略)ヲ過ギ、渡良瀬川ヲ合セテ栗橋ニ至ル。

九 27 1 (略)、我が國の陸軍は(略)第一師團より第十八師團に至る十八箇師團、(略)。

九 62 6 桓武天皇の御代に至り、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。

九 63 8 (略)、さしもに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

九 80 4 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、(略)。

九 88 8 カクテ持チアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

九 89 1 サレバ何レノ國ニテモ、世ノ進ムニシタガヒ、(略)、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九 94 3 進んで陽明門に至る。

十二 2 9 日本一の長流を信濃川とす。信濃の東南部より發し、越後の新潟に至りて海に入る。

十二 2 9 良(略)、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、シバラクアリテ、カノ老人來レリ。

十 26 2 (略)、其ノ初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

十 31 5 然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、(略)ノ盡力ニヨル。

十 32 6 (略)、是ヨリ後ハ五穀不作ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レリ。

- 十327 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。
- 十3310 幕府ハ此ノ書物ニ種芋ヲ添ヘテ、島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、聞モナク全國ニ作ラル、ニ至レリ。
- 十433 (略) 考案ヲ續ケ、明治十一年ニ至リ、ヤウヤク一種ノ機械ヲ發明セリ。
- 十442 (略) 販路次第ニ開ケ、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、遂ニ今日ノ盛大ヲ見ルニ至レリ。
- 十498 欄間の彫物、唐紙の地紙をはじめ、着物の縞模様、焼物・塗物の繪模様、其の他菓子類に至るまで、我等の衣食住には(略)。
- 十743 箱根は(略)、盛夏の候は何れの旅館も空室なきに至るを常とす。
- 十805 あいぬの風俗はこれのみにても既に内地人と同じからず。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。
- 十826 (略)、今は内地人と同じく、読み書き・計算をもし得るものあるに至り、中には小學校教員となれるものもあり。
- 十9310 (略)、大阪ヨリ奈良ニ至ルニハ關西線ニヨルベシ。
- 十942 停車場ヲ出デテ、左ニ開化天皇ノ陵ヲ拜シ、猿澤ノ池ニ至ル。
- 十958 (略)、老樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗キ間ヲ行ケバ、官幣大社春日神社ニ到ル。
- 十968 春日神社ヨリ西北ニ向ヒテ東大寺ニ到ル。
- 十991 三輪町ヨリ東南ヘ向ヒ、初瀬川ニソヒテ爪先上リニ行ケバ、初瀬町ニ至ル。
- 十一41 陵に至る路のあたり櫻樹多し。
- 十一65 (略)、外役の蜂は朝より夕に至るまで、營營として寸時も休まず。
- 十一19 釜山ニ至ル
- 十一283 其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へたるを以て、(略)。四萬噸前後の大汽船をも製造するに至れり。
- 十一288 (略)、又支那沿岸はおろか、印度・南洋より亞米利加・歐羅巴の航路をも開くに至れり。
- 十一361 當總督府の經營も着着其の効を見るに至り候事、(略)。
- 十一667 其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。
- 十一672 臺所ハ(略)、流シ元・戸ダナヲハジメ、料理道具・食器・フキンナドニ至ルマデ、常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラヌ。
- 十一694 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。
- 十一772 又一山を越ゆれば、第三の瀧に至る。
- 十一794 (略) 長良川の鵜飼は最も名高く、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。
- 十一939 かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、又他の職業に従事する人も(略)、之に轉業するに至るべし。
- 十一944 又之と反對に、價次第に安くなりて、普通の價よりも下るに至る時は、(略)。
- 十一976 又豊原より眞岡に至る間も近時道路新に開け、(略)。
- 十一1008 (略) 石炭層各所にある、殆ど無盡藏に候へども、未だ盛に採掘に着手せらるゝには至らず候。
- 十一1125 又麥稈眞田を編み、花筵を織ること行はれ、十二三歳の少女も手を空しうする者なきに至れり。
- 十一1147 之によりて用水路の改修行はれ、(略)、二毛作をなし得る良田五十六町歩を得るに至れり。
- 十一11410 里道の改修も全く成り、村内の重なる道路は荷車・人力車を通ずるに至れり。
- 十一1155 十四五年の後には村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。
- 十二96 (略)、幕下と共に一驅逐艦に移りしが、(略)に追撃せられ、遂に捕へらるゝに至れり。
- 十二173 (略)、毎日其の日の午後六時より翌日の午後六時に至る、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。
- 十二275 城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。
- 十二289 (略)、勝商は(略)、走りて岡崎に到り、家康に見えて援を求む。
- 十二299 翌日壯士十餘人、勝商を圍みて城門に到る。
- 十二363 (略)、コ、ニ新校舍ノ落成ヲ見ルニ至レルハ、國民教育ノ一慶事トイフベシ。
- 十二385 嘉明後此の事を聞きて大いに恥ぢ、高虎と水魚の交をなすに至れりとぞ。
- 十二397 廉頗(略)、相如の門に至りて罪を謝し、つひに無二の親交を結べりとぞ。
- 十二437 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、(略)。
- 十二439 (略)、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。
- 十二464 栽培法の如きも、(略)、能く學理を應用せば、(略)。家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)を供給せんこと、實に今日の

急務なり。

十二56 1 〇 奉天より北すること約百八十八哩、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

十二56 2 〇 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、大連よりこゝに至る四百三十六哩。

十二60 2 〇 (略)、首府の人口も年々著しく増加する勢なれば、其の巴里と同數に至るも亦甚だ遠からざるべし。

十二68 3 〇 (略)、冬日河水盡く氷結するに至れば、大群をなし、水を尋ねて低地に下り、(略)。

十二69 1 〇 満目の廣野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

十二72 10 〇 (略)、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。

十二76 6 〇 (略)、居ること多年、遂に皇后イサベラの知る所となり、其の保護の下に此の大探檢を行ふに至れり。

十二78 3 〇 船員は失望の餘り、コロンブスを海に投じて歸國せんと謀るに至れり。

十二80 9 〇 其の後コロンブスは(略)第三回の航海に於て、オリノコ河口に達し、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

十二88 9 〇 座敷の床の間より臺所の戸棚に至るまで、諸道具の置場處を

一定し、(略)。

十二112 2 〇 上元帥より下一卒に至るまで、官職の高下、就職の新舊によりて上下の分別最も正し。

十二114 5 〇 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、(略)、節操も武勇も忘れ果てて、世人の爪弾を受くるに至るべし。

いたるところ「至所」(名) 7 到るところ 到ル處 到る處

九96 4 〇 我が國到るところ名勝の地にとほしからざれども、(略)。

十31 4 〇 然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、(略)。

十72 10 〇 我が國は火山國にして、全國到る處に温泉あり。

十一4 6 〇 吉野山は口・中・奥の千本の外、到る處櫻樹あらざるなし。

十一17 10 〇 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々は各所に散在す。

十一29 3 〇 大小幾多の軍艦は(略)、遠く四方に航行して、到る處に國光をかざりかせり。

十二63 2 〇 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、市中到る處其の往來織るが如く、(略)。

いたわりやしなう「勞養」(四) 1 いたより養ふ「一ハ」

十41 3 〇 團圓『我に愛する良馬あり今日の記念に獻ずべし。』(略)。

(略)、他日我が手に受領せば、なぐくいたより養はん。』

いたわる「勞」(四・五) 5 イタハル いたはる 勞る「一ツ・ラー・リ・一レ」

六84 8 〇 七つとや、なんぎをする人見るときは、力のかぎりいたはれよ、あはれめよ。

八89 7 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トトモニ中佐ライタハツタ。

十85 7 すべて家畜はよく勞らなければならぬが、とかくに之をいぢめる風がある。

十一43 8 〇 忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、かくと正儀に告ぐるに、正儀は情深き武士なれば、呼出して召使ひたり。

十二112 5 〇 (略)、上官の者は常に下級の人をいたはりて、いさゝかも輕侮の念を有すべからず。

いち「一」(課名) 49 一 ひといいち・だいいつか・にっぽんいちのもの

二目2 一 ニハトリ
二目9 十九 ハナサカデイ
二目11 一 ニハトリ
二目50 1 十九 ハナサカデイ

三目2 一 サクラ

三目2 一 サクラ……一
三目12 二十四 ウラシマノハナシ

三1 1 一 サクラ
三64 8 二十四 ウラシマノハナシ

四目2 一 私どものまち
四目2 一 私どものまち……
四目5 十七 白ウサギ
四目12 二十四 なすのよ一
四1 1 一 私どものまち
四52 2 十七 白ウサギ
四76 2 二十四 なすのよ一

五目2 第一 あまのいはと……一
五目5 第四 水のたび
五目12 第二十四 ひよどりこえのさ
五8 4 第四 水のたび
五74 2 第二十四 ひよどりこえのさ
六目2 第一 日本……一
六目2 第十四 豊臣秀吉
六43 4 第十四 豊臣秀吉

七目2 第一 楠木正行……一
七目2 第一 楠木正行……一
七目4 第十六 東京見物
七目9 第二十一 海ノ生物
七目12 第二十四 航海の話
七1 1 第一 楠木正行
七54 1 第十六 東京見物

七54 1 第十六 東京見物

七69 8	第二十一	海ノ生物	(一)
七80 3	第二十四	航海の話	(一)
八目 2	第一	皇大神宮……	一
八目 8	第七	白雀……	(一)
八目 10	第二十二	世界の話……	(一)
八目 12	第二十四	橋中佐……	(一)
八18 9	第七	白雀 (一)	
八75 7	第二十二	世界の話 (一)	
八83 9	第二十四	橋中佐 (一)	
九目 2	第一課	草薙劍……	(一)
九目 2	第一課	草薙劍……	(一)
九1 2	第一課	草薙劍……	(一)
十目 2	第一課	日本一の物……	一
十目 14	第二十六課	大和巡り	(一)
十93 8	第二十六課	大和巡り	(一)
十一目 2	第一課	吉野山……	一
十二目 2	第一課	天皇陛下の御製……	一
……			
いち [二] (名) 19	一	1	I ぐい
がついちにち・ごいちじさんじつぶ			
ん・ごいちじはん・さんのいち・さ			
んぶんのいち・じゅうぶんのいち・せ			
かいいち・せかいだいいち・ぜんとう			
だいいち・せんぶんのいち・そのい			
ち・だいいち・だいいちぎ・だいいち			
しだん・だいいちず・だいいちだん・			
うきようこうじまつくたけひらちよう			
いち・なんじゅうぶんのいち・につぼ			
いんいち・につぼんだいいち・にひやく			
まいかんいんえん・にぶんのいち・やく			
くいちわりごぶ・ヨーロッパだいいち			

二48 6	(略)、二サツ	ハトクホン
ノ	ト	ニデス。
四46 図	I	
六20 3	(一)	
六75 図	一	
六75 図	一	
六75 図	一	ドダイ
七9 3	(一)	
八48 図	一	
八59 3	(一)	
八66 3	一、小ぞうから主人へ	
九10 6	(一)	
九17 図	1	
九91 5	一	
十16 5 図	是程の才學をもちながら、	
式部は少しも高ぶるたる風なく、常		
に一といふ文字をだに知らぬ顔に過		
したりといふ。		
十一 2 図	1	
十一 21 1	(一)	
十一 59 4	一、	
十一 115 9	(一)	
十一 117 10	一	
いち [位置] (名) 2	位置	
十77 1 図	目・耳・鼻・口ハ何レモ腦	
ニ近キ位置ニ在リ。		
十二 41 10 図	但し此の噴孔は時々其の	
位置を變じ、其の勢力にも消長あり。		
いちいち [二] (副) 6	一々	
七61 3 図	耳のたれたるもの、立ちた	
るもの、尾の(略)、足の短きもの、		
長きものなど、一々數ヘがたし。		

九37 2	箱根と新居とは關所があつ	
て、役人が一々旅人をしらべて通し		
た。		
十35 8 図	(略)、何を聞いても、一々	
明白に答へて、しかもよいいなこと		
はいひません。		
十56 1 図	兵營内の生活は(略)、	
朝の起床より夜の消燈まで、一々喇		
叭の合圖により、(略)。		
十62 7 図	發掘シタル銅鑛ハ、(略)、	
之ヲ選鑛場ニ送ル。(略)、此ノ機械		
ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選リ分ク。		
十一 102 8 図	劉備深ク孔明ヲ信賴シ、	
一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、(略)。		
いちいん [二] (名) 1	一員	
十一 50 3	古來アラビヤ人は馬を家族	
の一員と考へて、家長は之を自分の		
子供と同じ様にかはいがる。		
いちえん [二] (名) 1	一圓	
九91 1 図	我が國ノ紙幣ハ日本銀行ヨ	
リ發行スルモノニシテ、一圓・五圓		
・十圓・百圓ノ四種流通ス。		
いちおくえん [二] (名) 1	一億	
圓		
十一 83 7 図	年々一億圓ノ綿花ヲ輸入	
シテ、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所		
用ヲミタシテ、(略)。		
いちおくえんいじよう [二] (名) 1	一億圓以上	
十二 45 1 図	(略)、生絲は輸出品の首	
位を占めて、其の價額一億圓以上に		
及ぶ。		

いちおんしん [二] (名) 1	一音	
信		
八48 4 図	電報は十五字までが一音信	
で、(略)。		
いちがいに [二] (副) 1	一ガイニ	
七76 6	一ガイニイフコトハ出來ナイ	
ガ、マツ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅		
色ノモノハ深い所ニ、茶色ノモノハ		
ソノ中間ニハエテキルノデアル。		
いちがつ [二] (名) 1	一月	
十一 96 2 図	御承知の通り、冬は寒	
氣厳しく、(略)、一月より三月まで		
凡そ三箇月間は航路殆ど全く絶え、		
(略)。		
いちがついちにち [二] (名) 1	一月一日	
一月一日		
二80 2	一月一日 二月十一日 五月	
二十八日	十一月三日	
いちがつにじゅうごにち [二] (名) 1	二月二十五日	
(名) 1	一月二十五日	
十60 4 図	一月二十五日 内山五百	
吉	加藤善作様	
いちくちくかん [二] (名) 1	一驅逐艦	
一驅逐艦		
十二 9 4 図	敵の司令長官(略)は昨	
日の戰闘に傷を負ひ、幕下と共に一		
驅逐艦に移りしが、(略)。		
いちぐん [二] (名) 6	一群	
十65 2	鯨の一群は影も形も見えなく	
なつた。		
十一 5 6 図	蜜蜂は群を爲して共同の	
生活を営み、一群の總數數萬に及ぶ		

ものあり。

十一510 終日労働して、一群の生

計を維持するものは働蜂なり。

十一76 氣候の暖なる間絶えず之を産出するを以て、一群の数は次第に増加す。

十一79 (略)、分離したる一群は直ちに其の中に入る。

十二66 (略)、通常の灰色の鼠の一群大舉して、印度よりベルシヤを経て歐羅巴に移り、(略)。

いちぐんそう「一軍曹」(名) 1 一軍曹

八88 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。

いちけいじ「一慶事」(名) 1 一慶事

十二36 今本町民諸君ノ熱心ニヨリ、コ、ニ新校舍ノ落成ヲ見ルニ至レルハ、國民教育ノ一慶事トイフベシ。

いちげん「一言」(名) 1 一言

十二101 我等五千萬の同胞は(略)、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

いちご「毎」(名) 2 イチゴ

九89 イチゴノ花ハボンノ様ナ形デ、(略)。

九8 図 イチゴ

いちご「一語」(名) 1 一語

十二101 (略)、道行く人の容儀等を見れば、(略)、其の國人と一語を交へずして、早くも其の國民の品格

の知らるゝものなり。

いちこう「一合」(名) 1 一合

九88 (略)、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

いちこん「一言」(名) 3 一言

七41 (略)、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いはなかつた。」

十二36 郡長ハ左ノ祝文ヲ讀ンダ。(略)。謹ンデ一言ヲノベテ祝意ヲ表ス。

十二116 誠の一字之を貫くは、あらゆる修身の徳を一言にて盡し給へるものといふべし。

いちざ「一座」(名) 1 一座

十55 義仲之を見て、「(略)」と、さめぐと泣きたれば、一座皆よろひの袖をしぼらざるはなかりき。

いちざん「一山」(名) 1 一山

十二77 瀧の後より山路を上るのと四町餘、(略)。又一山を越ゆれば、第三の瀧に至る。

いちじ「二字」(名) 2 一字

十20 一字も誤がなくなつてから本刷にかゝるのである。

十二116 誠の一字之を貫くは、あらゆる修身の徳を一言にて盡し給へるものといふべし。

いちじ「一事」(名) 2 一事

十一51 (略)、馬はさもうれしうに、口でおもちゃをさゝげて、其の子供をあやしてゐた。此の一事で

アラビヤに名馬の産する所以が分つた。」

十二88 出入口の混雜せる程なれば、一事が萬事、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

いちじ「一時」(名) 3 一時

八66 初は熱があまり高いので、一時はどうなることかと心配いたしました、(略)。

十42 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ねテ、一時ハ赤洗フガ如キ有様トナレリ。

十二70 永遠の幸福を望む者は一時の勞苦を忍ぶべし。

いちじかん「二時間」(名) 4 一時間

九34 (略)、一時間に十五マイルも走る汽車とはどうして競走が出来よう。

九60 夜半十二時前一時間の眠は、十二時後二時間の眠にまさる。」といへり。

十98 奈良ヨリ汽車ニ乗リテ南ヘ進メバ、一時間バカリニシテ三輪町ニ達ス。

十一28 (略)、今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。

いちじかんよ「二時間余」(名) 1 一時間餘

十一82 (略)、漁夫は一時間餘にして數千尾の鮎を得るを常とす。

いちじぎょう「一事業」(名) 1 一事

業

十一115 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、其の一事業として杉・檜等の植林を營み、(略)、一村共同の有益なる費用にあつることとせり。

* いちじつ いちにち

いちじてきいじゅう「二時的移住」(名) 1 一時的移住

十二65 (略)、露西亞の狼は(略)佛兵の跡を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。此の如きは動物の一時的移住なり。

いちじに「一時」(副) 5 一時に

五81 これを見た三千人の軍ぜいは、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。

十一91 森林の樹木は(略)、雨の一度に地上に落つるを止め、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。

十一11 近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ること禁ぜり。

十一55 (略)、百雷の一時に落ちかゝる様なひびきと共に、山のやうな雪なだれがなだれて來て、(略)。

十二31 (略)、保・義鑑共に戦死す。保の母は一時に二子を失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの外、(略)。

いちじゅ「一樹」(名) 1 一樹

十一40 阿里山の檜材は(略)、中には直徑二十尺餘、一樹にて千五

百尺の材積を得るものもこれあり
候由、(略)。

いちじょう「二条」(名) 2 一條

十一76回 瀧の後より山路を上るこ
と四町餘、一條の谷川あり、(略)。

十一97回 是より一條の大道遠く
北へ通じてロシア領に入候。

いちじょうてんのう「一条天皇」(人名)

1 一條天皇

十一52回 一條天皇の頃には才學すぐ
れたる宮女多かりしが、最も世に聞
えたるは紫式部と清少納言となり。

いちじょうにん「商人」(名) 1 一
商人

十43回 (略)、唯一商人アリテ、其ノ
中ノ數種ヲ買取タルノミナリキ。

いちじょうぶふん「一部分」(名) 1

一部分

十78回 身體ノ構造ハ(略)、一小
部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關
スルモノナレバ、(略)。

いちじょうろくしゃく「二丈六尺」(名)

1 一丈六尺

五14回 ナラノ大ブツツイツテ(略)。
(略)、カホノ長サガ一丈六尺、(略)。

いちじるし「著」(形・ク活) 2 いち
じるし「一ク」

十38回 庭に一本桑の木、彈丸あ
ともいちじるく、くづれ残れる民屋

2、今ぞ相見る二將軍。

十二35回 鍛ひたる劍の光いちじ
るく 世にあやかせ、我が軍人。

いちじるし「著」(形・シク活) 9 著
シ著し「一シ・シカラ・シキ・
シク」

八95回 (略)、鐵道の開通せしより、
商工業の發達著しく、(略)。

八95回 (略)、産業の發達は今後い
よいよ著しからん。

十11回 森林の効用かくの如く著し
きを以て、(略)。

十61回 明治二十年頃、新式ノ機械
ヲ用ヒシ以來、(略)、産出高モ著シ
ク増加シ、(略)。

十一38回 中部の山林には樟・
松・杉・檜・樅等の繁茂著し
く、(略)。

十一114回 又肥料の利目も著しく、
作物の發育も目立ちてよくなりて、
(略)。

十二49回 養蠶業の盛大は 長野
・埼玉等群馬、海なき縣に著し。

十二60回 (略)、首府の人口も年々
著しく増加する勢なれば、(略)。

十二93回 (略)、大聖として徳化の
尚今日に著しきもの、孔子に如くは
なし。

いちじるしい「著」(形) 1 著しい
「一ク」

十二22回 (略)、空氣中の炭酸瓦斯の
分量が著しく減つて、(略)。

いちぢ「二途」(形状) 1 一途

十二116回 (略)、軍人たる者は一途
に忠節を重んじ、國家の大事に際し

ては、身命をすつること鴻毛よりも
輕き覺悟なかるべからず。

いちすいへい「二水兵」(名) 1 一水
兵

九18回 (略)、ある日我が軍艦高千穂
の一水兵が女手の手紙を読みながら
泣いてゐた。

いちぞく「一族」(名) 2 一族 ひとまめ
のいちぞく

七86回 正行ハ(略)、一族ノ人々
トトモニ戰死ヲゲタリ。

十一43回 (略)父の討死したる
後、一族の者領地をうばひて、我を
追出したり。

いちぞくども「一族共」(名) 1 一族
共

十一14回 然るに今、主上隠岐に遷
され給ふと聞き、一族共を集めてい
へるやう、(略)。

いちダース(名) 1 一ダース

八38回 マッチハ一ダースノ價三四
錢グラキナレバ、(略)。

いちだいかざん「二大火山」(名) 1

一大火山

十二42回 阿蘇山は此の如く複雑な
る一大火山にして、山中に多くの噴
火口及び温泉あり。

いちだいこうえん「一大公園」(名) 1

一大公園

十一20回 我が國に遊べる西洋人は
此の瀬戸内海の風景を賞して、世界
海上の一大公園なりといへり。

いちだいい「二大事」(名) 2 一大事
七41回 このお金は私がこちらへま
ゐる時、『夫の一大事の折に使へ。』
と申して、父の渡してくれた金でござ
います。

十二32回 かの山内一豊の妻が貧苦
に居て、夫の一大事を忘れざりしは、
(略)。

いちたいじゅ「二大樹」(名) 1 一大
樹

十一38回 (略)、南部には榕樹も
見受け申候。其の氣根の地に入りて、
數幹・數十幹入亂れて一大樹を成し
たるは(略)。

いちだいてつきょう「二大鉄橋」(名)

1 一大鐵橋

九15回 栗橋ハ東北鐵道ノ通路ニア
タリ、一大鐵橋カ、レリ。

いちだん「二弾」(名) 1 一彈

八89回 (略)、一彈又モ中佐ノ胸ヲツ
ラスキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。

いちだん「一段」(副) 2 一段

七87回 船長はかくいひ終へて、一
段と聲をはり上げて、「さておしま
ひに一ついつておきたい事がありま
す。

十一19回 (略)、朝日・夕日を負ひ
て、島がくれ行く白帆の影のどか
なり。月影の小波にだけ、漁火の
波間に出没する夜景も亦一段のおも
むきあり。

いちちほう「二地方」(名) 2 一地方

十一 89 9 図 アメリカの一地方に産

する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。

十二 18 2 図 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、(略)。又一地方に荒模様ある時は、(略)。

いちちゅうたい「一中隊」(名) 1 一中隊

九 26 4 図 歩兵は平時凡そ百五十人を一中隊とし、之を三箇小隊に分つ。

いちど「二度」(名) 15 一ど 一度

二 64 1 図 「モウ 一ド ハナヲサカセテミヨ。」

四 80 3 一どはじたいしましたが、よしつねがゆるしません。

七 7 5 図 (略)、今一度天顔ヲラガミテマキリタシ。」

七 90 6 図 「残念ナリ、今一度。」ト、中佐ハマタモ船内ヲカケメグレリ。

七 91 2 図 (略)「今一度。」ト、中佐ハ三タビタヅネマハレリ。

八 1 6 図 (略)、一生に一度は、かならず伊勢に参拜せんと心がけざるものなし。

八 32 4 僕の家で一度つるべの金たががこはれた時、つくるひを頼んだ事があつたが、(略)。

八 87 6 図 「一度占領シタ此ノ高地、全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。

九 31 4 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出来上

るものではない。

九 76 7 図 郵便貯金ニテハ一度ノ預ケ高一入拾錢以上ナリ。

九 76 8 図 一度ニ拾錢以上ノ貯金ヲナスコト能ハザル者ノ爲ニハ、(略)。

九 77 5 図 普通ノ銀行ニテハ一度ニ五圓以上ノ預金ノミヲ取りアツカヘドモ、(略)。

十 20 3 一色の印刷は一度刷ればよいが、(略)。

十一 46 3 図 (略)、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十一 72 2 図 (略)、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。

いちどう「一同」(名) 15 一どう 一同 ひとくぞくいちどう・かないいちどう・かんちゅういちどう・くちみみめてあしらいちどう・けんぶつにんいちどう・こうじかんけいしやいちどう・しんぞくいちどう・たいちゅういちどう・てあしらいちどう・われらいちどう

四 19 7 よりともはじめ 一どうのもの、ただつねをほめることゑは、(略)。

五 2 5 よい神さまがたは、(略)、一同あまの岩戸の外にあつまつて、おかげをおはじめになりました。

六 76 5 羽織・はかまの主人は一同に向つて、(略)。

七 90 1 図 ボートハヤガテ福井丸ノカタハラニ卸サレテ、一同乗リウツレ

リ。

八 15 1 役所デモ、會社デモ、上カラ下マデ一同ソロッテ事務ニ取りカ、ル。

八 71 1 図 (略)、耳鳴り、目暗み、手足なえて、(略)。こゝにおいて、胃は一同に向つて曰く、(略)。

九 43 2 図 少しも御障なく入らせられ候由、一同安心仕候。

九 45 9 図 日暮るれば、一同テントを張りて夜を過す。

九 46 3 図 一同は(略)、進行を止め、風のをさまるを待てり。

九 47 1 図 (略)、一同は行くべき方にまよひて、右に往き、左に往き、空しく一日を過せり。

九 49 1 図 アリは(略)、ねんごろに同行を頼みしに、一同快く引受けた

り。

十一 48 10 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて來た。

十二 36 9 式終ツテ、一同校舍ヲ巡覽シタ。

十二 78 9 図 人々始めて陸地の近きを知り、其の夜は一同うれしさに眠ること能はず。

十二 85 4 かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。

一同は唯神の仕業とのみ思つた。

いちどうに「一同」(副) 1 一同に

十一 59 1 (略)、軍中の花が助かつたので、全軍一同に歡喜の聲をあげた、

(略)。

いちとかい「一都會」(名) 2 一都會 十 63 4 図 此ノアタリ、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、(略)、今ヤ足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、學校・病院・銀行等皆備ラザルナシ。

十二 66 5 図 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、(略)。

いちどに「二度」(副) 7 一ど 一度に 一度に

三 16 2 ミテキタ人ハミンナ一ドニテヲタイテホメマシタ。

四 69 4 図 「サウ 一ド ニノンデハ、カヘツテワルイノデス。

四 83 2 海の方でもふなばたをたたいて、一どにどつと、ほめ

した。

七 38 9 又一ド二色ヲナ物ヲ買集メタイ時ニハ、一トコロデスムカラ便利デアル。

十 8 10 図 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落

つるを止め、(略)。

十 20 9 印刷する紙は廣い大きな紙で、幾ページ分も一度に刷れる。

十 30 2 榛の木の小雀は一度にばつと飛立つた。

いちに「一二」(名) 1 一二

十 47 4 図 次の圖は其の一二の例を示すものなり。

いちにち「一日」(名) 23 一日 ひとひ

ちち
四47 一日のうちに何じかん
ありますか。
六37 北風が一日ふき通して寒かつた。
六71 一日もけつせきもせず、ちこくもしなかつた子供もございました。
七49 正行(略)、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナカリキ。
七31 (略)、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。
七57 廣キ東京ノ見物ハ一日ニテハツクシガタシ。
七63 われ／＼は一日も水を飲まないことはない。
七80 (略) 明治丸の船長は、一日その町の學校へまねかれて、航海の話をなしたり。
八27 一日川成ニ向ヒテ、(略)。「トイヘリ。
八31 一日も休んだ事がない。
八43 火は一日も無くてはならぬものである。
九35 一日の旅程を十里づつと見て、十二日程かゝつた。
九44 候(略)、一日も早く御用御すましの上、御歸りの程御待ち申上候。
九46 阿リは(略)、たゞ父にあはんを樂みに一日々々と旅行をつゞけたり。

九46 阿リは(略)、たゞ父にあはんを樂みに一日々々と旅行をつゞけたり。
九47 一同は行くべき方にまよひて、右に往き、左に往き、空しく一日を過せり。
九76 一日二錢・二錢ツツニテモ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニハ、(略)。
十一41 熊王といふ者あり、一日光範に向ひて、(略)。
十二37 會津は奥羽重要の地にして、一日も守なかるべからず。
十二46 農業は(略)、國家一日もこれなかるべからず。
十二86 薩摩の士に喜劍といふ人あり、(略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勧む。
十二91 (略)、むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ時、一日の勞苦は忘れられて、更に明日の活動を思ふなり。
十二116 我等豈一日も之を忘れんや。
いちにねん「二年」(名) 1 二年
十一72 愚僧も所用ありて京へ上り、二年在京せんもはかり難し。
いちねん「二年」(名) 5 一年
六67 一年ニハ十二ヶ月アリ。
六67 一年ヲ春・夏・秋・冬ノ四季ニ分ツ。

九87 どうか今日から一年の間、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。
十81 あいぬは時々熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して(略)。
十84 東京市だけでも、一年にほふる牛は數千頭にも上るといふことである。
いちねんかん「二年間」(名) 1 一年間
八40 外国へ輸出スルモノミニテモ、一年間一千萬圓ノ金高ニ達シ、(略)。
いちねんじゅう「二年中」(名) 6 一年中
四85 十一月三日ハ一年中デコトニオメデタイ日デス。
六44 日本の國には(略)。一年中にからりとほれた日が多い。
八32 一年中の重だちたる祭日には勅使を差立てたまひ、(略)。
九68 稻の花は散る、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。
九96 されば一年中遊覽者跡を絶たず、(略)。
十一112 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて一年中用ふる塩・醤油を買ふに餘あり。
いちのたに「二谷」(地名) 1 一の谷

五74 へいけのぐんぜいがふくはらのしろを守つてゐる。東生田の門から西一の谷の門までの間、(略)。
いちのとりい「二鳥居」(名) 2 一ノ鳥居
九17 香取・息栖ノ一ノ鳥居ハ何レモ川ノ中ニ立テリ。
十100 櫻井町ヲ南ヘ去レバ談山神社ノ一ノ鳥居アリ。
いちば「市場」(名) 1 市場 ぐうおいちば
九15 前橋市ハ人口四萬アマリ、有名ナル生絲ノ市場ナリ。
いちばん「一番」(名) 1 一番
五70 今スマフガハジマツテキル。勝負ガ一番スムト、(略)。
いちばん「一番」(副) 23 一番 一番
二61 「オハナサンハ一番小サイカラ、一番大キイノヲアゲマセウ。
二62 「オハナサンハ一番小サイカラ、一番大キイノヲアゲマセウ。
二63 ヲバサンハ一番大キイカラ、一番小サイノヲトリマス。
二64 ヲバサンハ一番大キイカラ、一番小サイノヲトリマス。
三10 一バン上ノニイサンハイマヘイタイニイツテキマス。

四二七 このへんは町中で一ぱ

んにぎやかなところで、(略)。

四二五 園 「一バン太イノガオヤ

ユビ、一バン小サイノガ小ユビ

デ、(略)。

四二五 園 「一バン太イノガオヤ

ユビ、一バン小サイノガ小ユビ

デ、(略)。

四二六 園 「(略)、マン中ノ一バン

高イノハ、中ユビトモ、高高ユ

ビトモイヒマス。

四二二 園 ニイサン ハ一バン太ツ

テ、一バン力ガツヨイカラ、オ

ヤユビデス。

四二二 園 ニイサン ハ一バン太ツ

テ、一バン力ガツヨイカラ、オ

ヤユビデス。

四二六 園 「(略)、一バンシマヒニ居

タノガ、白ウサギノ毛ヲミン

ナムシリトツテシマヒマシタ。

四二八 園 「一バン上ノダンニハダ

イリサマヲナラベテ、(略)。

五二七 園 日本ノ一バンハジメノ天皇ヲ

神武天皇ト申シ上ゲマス。

五二四 園 おはなは戸だなの中から一ぱ

んなきなさらを持つて来ました。

五二六 園 「(略)、一バンハジメニツムノ

ヲ一番茶トイヒマス。

五三三 園 ソノ葉デコシラヘル茶ガ一番

ヨイ茶ニナリマス。

六二四 園 「金ニハイロくアリマス

ガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、

私ドモノ仲間ノ銅デセウ。

六六四 園 日本ニ居ルケモノノ中デ一番

強イノハ熊デス。

六七四 園 「(略)、新しいしるしぼんでん

を着てゐる大工が一番目立ちます。

七四二 園 陸ニスムモノデハ、象ガマツ

一番大キイガ、(略)。

八五六 園 駝鳥は鳥類の中で一番大きく

て、卵も子供ノ頭程ある。

一二一六 園 我が國デ一番大キイノハ佐

世保海軍工廠ノ船渠デ、(略)。

いちばんだいこ「一番太鼓」(名) 1

一番太鼓

九三二 園 神主は先づ神前で祝詞を上げ

て、それがすむと、「支度。」といふ

あひづの一番太鼓を打鳴らした。

いちばんちゃん「一番茶」(名) 1 一番

茶

五三二 園 五月ゴロカラツミハジメマス

ガ、一バンハジメニツムノヲ一番茶

トイヒマス。

いちびだん「一美談」(名) 1 一美談

一二八五 園 赤穂浪士が数年の苦難を

忍び、遂に主君の仇を報じて、従容

死に就けるは徳川時代に於ける史上

の一美談たるのみならず、(略)。

いちぶ「二分」(名) 1 一分

七二九 園 卯からかへつたばかりの蠶は

(略)、長さは一分ばかりしかない。

いちぶ「二部」(名) 8 一部

八七八 園 ロシヤは(略)、其の領地

甚だ廣く、アジア大陸のシベリヤも

また其の一部なり。

八八二 園 かゝる地方にては、人は皆

はだかにして、布片を身體の一部に

まとうに過ぎず。

八九五 園 名古屋の南に熱田あり。今

合して名古屋市の一部となれり。

九三二 園 「(略)、しらべて見ると、機關

の一部に故障があつたので、すぐそ

れを直した。

九八四 園 賣ル・買フ、財産ノ財、

貨幣ノ貨幣等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アル

ハ、(略)。

一一四〇 園 當總督府にて出版相成

候臺灣寫眞帖一部(略)。

一一一五 園 「(略)、其の利益を以て學

校の基本金とし、其の一部をさきて、

一村共同の有益なる費用にあつること

とせり。

一二六九 園 しかも僅かに飢をしのぐ

は先頭に進める一部に過ぎず、(略)。

いちぶふん「一部分」(名) 2 一部分

九七六 園 「(略)、餘程ノ金高トナリテ、

(略)、家業ノ元手ノ一部分トモナス

コトヲ得ベシ。

一二一二 園 分業デスル仕事ハ皆全體ノ

一部分デアルカラ、(略)。

いちへいし「一兵士」(名) 1 一兵士

八八九 園 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ

倒レテ居タ一兵士トモニ中佐ヲイ

タハツタ。

いちべついい「一別以来」(副) 1

一別以来

一一三五 園 一別以來御變りもこれ

無く候や。

いちぼく「二木」(名) 2 一木

一一〇二 園 「(略)、昔ナガラノ山河、一

木・一草盡ク上古ヲ談ゼザルナシ。

一一六八 園 路傍の一草・一木も學問

の種ならぬはなく、(略)。

いちまい「二枚」(名) 9 一まい 一

枚

一二一八 園 オハナハモミザノハヲ

一まいヒロヒマシタ。

八一〇 園 「(略)寫眞をとりました。

(略)、兩方一枚づつ差上げます。

一〇六 園 「(略)、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サ

イ葉ニ分レテナル。

一二一六 園 「(略)版木を造り、一枚づつ

手刷にするのである。

一二一〇 園 版木では一枚々々彫らなけれ

ばならぬから、(略)。

一二二二 園 「(略)、木版では一枚づつ彫る

から、(略)。

一二二八 園 「(略)、古い銀杏の木が一本、

(略)、今は葉一枚も残つてゐない。

一二一〇 園 「(略)一枚の葉書にて申

し込めば直ちに送り来る。

いちマイル(名) 1 一哩

一一二八 園 「(略)、我が國に一哩の鐵

道も、一隻の汽船もなかりしなり。

いちまんごせんにひやくしちじゅうろく

フィート(名) 1 一萬五千二百七十

六呎

十31 日本一の大トンネルは(略)。
其の長さ一萬五千二百七十六呎、即ち一里六町四十間五尺。

いちまんさんぜんしちじゅうよしゃく

「二万三千七十餘尺」(名) 1 一萬三千七十餘尺

十13 日本一の高山は臺灣の新高山なり。其の高さは一萬三千七十餘尺にして、(略)。

いちめい「一命」(名) 3 一命

九20 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命をすてて君に報ゆる爲には候はずや。

九22 おつかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られるが、(略)。

九58 熟せざるくだ物、生にえの肉、くさりたる魚などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

いちめん「一面」(名) 8 一めん 一面

二61 阿チヲノ山モ、コチヲノ山モ、一めんニミゴトナハナザカリニナリマシタ。

三14 ヲカノ上ニモ、ツツミノ上ニモ、サクラノハナガ一めんニサキマシタ。

五74 又海には一面にいくさ船がならんでゐて、(略)。

六15 一面に小松のはえた小松原もあり、(略)。

六25 どの山にも木がよくしげつてゐる。松・杉・ひのきなどが一面にはえてゐるのは(略)。

九53 海ノソコノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類ハ、其ノ體ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。

十二78 又嚴冬の頃は瀑水落つるに隨ひ氷結して、一面玉山銀臺となり、(略)。

十一100 森林は(略)、蝦夷松・落葉松・白樺等一面に生ひ茂り、(略)。

いちもつ「一物」(名) 1 一物

十二69 列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、(略)。

いちもん「一文」(名) 2 一文

十一47 大將は今少しまけぬかといふ。馬主はもう一文も引けぬといふ。

十二82 帽子の中に一文の錢もない老人は、(略)。

いちもん「一門」(名) 3 一門

七26 我ガ死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ残リテアル間ハ、(略)、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七67 父ハ臣ヲ(略)、『残りタル一門ノモノドモヲ集メテ、朝敵ヲホロボセ。』ト申シ殘シタリ。

八54 藤原氏ノ一門コレヨリナガクサカエタリ。

いちもんじ「一文字」(名) 1 一文字

十一97 日・露の境は幅五間餘

を一文字に森林を伐りすかし、東西三十三里、(略)。

いちや「一夜」(名) 1 一夜

九69 恐ろしいのは二十日頃の大あらしで、(略)、一年中の農夫の辛苦が一晩の中にむだになつてしまふこともある。

いちよう「胃腸」(名) 1 胃腸

十一65 暑イ時分ハ(略)、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

いちよう「銀杏」(名) 2 銀杏 銀杏

十28 宮の森のこんもりと茂つた間から、古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、今は葉一枚も残つてゐない。

十30 銀杏の木は急いで山の方へ逃げて行く。

いちよう「一様」(形状) 2 一様

七76 色モノモアレバ、(略)茶色ノモノアリ、(略)紅色ノモノモアル。

八75 タゞ猫ノ毛色ニハ黒・白・三毛ナド様々アレド、虎ハ一様ナリ。

いちり「一利」(名) 1 一利

十二71 世を憤り、人をねたみ、身をはかなみて自ら苦しむは、百害あるも一利なし。

いちり「一里」(名) 2 一里

九40 (一里)

十37 (略)、一里の長さだけ十圓金貨を並べたるに等しいといふ。

いちりよ「一里余」(名) 2 一里餘

九18 銚子港ノ東南一里餘、大崎ニハ燈臺アリ。

十100 (略)、坂路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、多武峯ナル談山神社ニ達ス。

いちりよう「一領」(名) 1 一領

十一44 天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。

いちりろくちようしじけん「一里六町四十間五尺」(名) 1 一里六町四十間五尺

十32 日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。其の長さ一萬五千二百七十六呎、即ち一里六町四十間五尺。

いちりん「一厘」(名) 2 一厘

六32 ほんとのまうけでない金は一厘でも取つてはならない。

十一115 村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。

いちりん「一輪」(名) 1 一輪

十一25 四國の猫車、臺灣の揀車の如きは唯一輪なり。

いちりんざき「一輪咲」(名) 2 一りん咲

九96 タトヘバボタンノ様ニ一りん咲ノモアリ、(略)。

九10 タンポコ・ヨメナナドハ一りん咲ノ様ニ見エルガ、實ハ(略)、

タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテ
キルノデアル。

いちれい「二例」(名) 1 一 例

十179 是白樂天の詩に、(略)、清
少納言は直ちに其の意を察し奉りし
なり。萬づに心きたること、此の
一例にても知るべし。

いちれつ「二列」(名) 1 一 レツ

五163 (略) アタマカララマデーレ
ツニ、(略) ウロコガ三十六枚ツツナ
ランデキマス。

いちろう「一郎」(話し手名) 4 一郎

八455 一郎「どうしてそんなに早く
伯父さんに分つたのでせう。」

八467 一郎「これでようございます
か。」

八477 一郎「これでようございます
か。」

八493 一郎「かうすると、ちやうど
十五字になります。」

いちろうじん「二老人」(名) 1 一 老
人

十226 張良、橋上ニテ白髪ノ一老
人ニアフ。

いちろうへい「二老兵」(名) 1 一 老
兵

十284 (略)、一老兵のいふ、
「(略) 流をさかのぼる鱸の縄にふ
るゝならん。」といへば、「さもあら
ん。」とて止む。

いちわ「二羽」(名) 3 一 羽

五66 又アル時ドコカラトモナク一

羽ノ金色ノトビガトンデ來テ、(略)。
六131 ソノ時ニハ一羽ノガンハ列ヲ
ハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。

八216 白い雀が(略)。(略)、毎
年一羽づつしか出て來ない。

いつ「二」(名) 22 一

九144 (略)、必ず三種の神器を受
けつぎ給ふ。草薙劍は即ち其の一な
り。

九455 天照大神、八咫鏡・八坂瓊
曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしか
ば、これより三種の神器の一となれ
り。

九159 赤堀川ハ(略)ニツ二分
レ、一ハ東南ニ流レテ利根ノ本流ヲ
ナシ、一ハ(略)江戸川トナル。

九1510 赤堀川ハ(略)ニツ二分
レ、一ハ(略)利根ノ本流ヲナシ、
一ハ西南ニ向ヒ、權現堂川ニ合シテ
江戸川トナル。

九943 進んで陽明門に至る。此の
門一に日暮門の名あるは、(略)。

十423 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花鳥
等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ我
ガ國輸出品ノ一ナリ。

十206 嚴島は古より日本三景の
一に數へられて殊に名高く、(略)。

十1034 孔明、(略)蜀ノ國ヲ建
テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシ
ム。

十1182 上下心一にして、同
胞すべて六千萬。

十241 文武道を異にすれども、
國に盡す誠は一なり。

十255 其の西南なる首山堡は
(略)、明治三十七八年戰役激戦地の
一なり。

十266 (略)、道に當るものと
して之をさまたぐることはざりき
といふ。

十280 (略)、此の西班牙の新領
地をサンサルバドルと命名せり。是
今の西印度諸島の一なり。

十2102 其の土地に廣狭の差あ
り、其の組織に繁簡の別ありといへ
ども、(略)、其の團體の幸福を進め、
國運の發展を期するは一なり。

十2111 一には、軍人としては忠
節を盡すを本分と爲すべし。

十2112 一には、軍人は禮儀を正
しくすべし。

十21129 一には、軍人は武勇を尚
ぶべし。

十21135 一には、軍人は信義を重
んずべし。

十21142 一には、軍人は質素を旨
とすべし。

十211410 (略)、此の五箇條を行は
んには一の誠心こそ大切なれと仰せ
給へり。

十21152 此の五箇條を行ふも、結
局一の誠心を本とす論し給へる、
(略)。

十21176 (略)、唯々一の誠心を以

て報國盡忠の道にいそしまんとす。
いつ「何時」(代名) 11 イツ いつ
何時

三438 ソレデイツデモイクサニ
カツタトイフコトデス。

三577 (略) ムラサキ色ノハオリ
ハ、イツマデタツテモ、色ガカ
ハリマセン。

五345 蝶ハイツ見テモカハイラシイ
モノデス。

五546 イツマデタツテモ勝負ガツカ
ナイカラ、(略)。

六127 ガンハイツデモ一シヨニナツ
テ、列ヲツクツテトブ。

六288 モシセイ出シテ使ツテクレ
サヘスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキ
マス。

八226 次の朝農夫はいつになく早く
起きて、(略)。

九707 夜が更けて、(略)、止んだこ
とと思つてゐると、翌朝起きて見れ
ば、何時の間に雪に變つたか、(略)。

九912 之ヲ日本銀行ニ持行カバ、
何時ニテモ金貨ト交換スルコトヲ得
ベシ。

十221 又活字は何時でも直に植ゑる
ことが出来るが、(略)。

十233 人世には思はぬ不幸、驚
くべき事變の何時起り來らずとも限
らず。

いっかい「二家」(名) 8 一家 凸いっし
んいっかい・こいっかい

十177 屋内には中央にゐるを造り、一家之を圍みて談笑す。
 十一518 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、(略)、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。
 十一519 (略)、一家舉ツテ笑フベシ。
 十一5110 笑ハント欲セバ、一家ノ和合ヲ計ルベシ。
 十一5110 一家和合セザル時ハ家道次第二オトロヘテ、(略)。
 十一615 勇み勇みて出で行く兵士。はげましつゝも見送る一家。
 十一722 「君は畫家として一家を成せる人なるに、(略)。
 十一1156 (略)、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。
 いつか「五日」(名) 1 五日もごがいつか・じゅういちがついつか
 八687 五日でも十日でも、(略)、ゆつくり看病してお上げなさい。
 いつか「何時」(副) 4 イツカいつか
 一511 イツカセンセイガオハナシニナリマシタ、(略)。
 八266 其の中に雀のことはいつかわすれて、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、(略)。
 九809 いつか秋のなかばも過ぎて、九月十日の夜となれり。
 十一694 活動するのみにて休養す

ることなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。
 いつかく「一角」(名) 1 一角
 十一765 (略)、先年大風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、(略)。
 いつかけ「五掛」(名) 1 五カケ
 四242 「ソノ糸ハ一カケイクラデスカ。」(略)。「ソレデハ五カケモラヒマセウ。
 いつかげつ「一箇月」(名) 1 一箇月
 十679 昔は大鯨一頭を捕へると、人口數百人の一村、一箇月の生活費を支へ得ると言つたものである。
 いつかごと「五日毎」(名) 1 五日毎
 九671 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。
 いつかじゅう「一家中」(名) 1 一家中
 十二904 一家中に病人なき程仕合なる事なし。
 いかしよ「一箇所」(名) 3 一ヶ所
 一箇所
 八865 中佐ハハヤ、右手ニ一ヶ所ノ傷ヲ受ケタガ、(略)。
 十735 湯のわき出づる口僅かに一箇所にして、(略)。
 十749 湯元は一箇所にして、之を戸毎の浴室に引けり。
 いつかたな「五刀」(名) 1 五刀
 四192 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀

六刀さしとほしました。
 いかねん「一箇年」(名) 2 一箇年
 十一954 光陰矢の如く、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。
 十二529 米國商人ガ(略)廣告ニ費ス金額ハ、一箇年實ニ十二億圓ノ多キニ達ストイフ。
 いつかめ「五日目」(名) 5 五日目
 十231 (略)、五日目ノ朝此ノ處ニテ我ヲ待ツベシ」。
 十234 五日目ノ朝行キテ見レバ、(略)。
 十238 今ヨリ後五日目ノ朝再び來ルベシ」。
 十2310 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ先ダタレタリ。
 十241 老人怒リテ、五日目ノ朝ヲ約スルコト亦前ノ如シ。
 いかん「二巻」(名) 2 二巻
 十243 フトコロヨリ一巻ノ書ヲ取出シテイフヤウ、(略)。
 十362 私はわざと一巻の書物を床の上に投げておきました。
 いかん「一艦」(名) 1 一艦
 十二792 (略)、先頭の一艦が發せる號砲に、人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所を知らず。
 につき「一騎」(名) 1 一騎
 九84 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れつゞいて三騎までも後れて、(略)。
 いっきよしゅ「一挙手」(名) 1 一舉

手
 十二605 されど十字街頭に立てる巡查の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雜を生ずることなし。
 につく「居着」(五) 1 居つく「一キ」
 六45 (略)、ほうこうの方には身が入りません、どこへ行つてもながくは居つきませんでした。
 につくしま「嚴島」(地名) 2 嚴島
 嚴島
 十一19 嚴島
 十一205 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、(略)。
 につくしま「嚴島」(名) 1 嚴島
 十一303 (略)我が軍艦ノ名ヲ(略)。(略)。又嚴島・橋立・須磨・明石・宇治・龍田等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ツケタルモノニシテ、(略)。
 につくしみぶかし「慈深」(形) 1 につくしみ深し「一キ」
 九634 されども又につくしみ深き人にて、笑ふ時は子供もなつき親しみたりといふ。
 につけいむばんせいといけい
 につけん「一軒」(名) 1 一けん
 十29 畑に續いて、農家が一けんある。
 いっこ「二戸」(名) 1 一戸
 十一921 例へばこゝに一戸の賣家ありて、(略)。

いっこう「一行」(名) 2 一行

九四七〇 之が爲に一行の用意せる水も残り少になれり。

一二〇九 我等五千萬の同胞は(略)、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

いっこく 凸いわみいっこく・おうみいっこく

いっこくじ「一國寺」(名) 2 一國寺

一一七六 泉州堺に一國寺といふ寺あり。

一一七四 (略)、又再び引返して一國寺に歸れり。

いっさい「一切」(名) 3 一切

八四三 一切の書類や記録類も皆ぶじであつたといふことだ。

一五六 居室・兵器・寢具その他一切所持品の清潔検査これあり候。

一二〇五 (略)、天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。

いっさい「一切」(副) 2 一切

九三九 山上ナル蘆湖ノホトリニ關所アリテ、日暮ヨリ後ハ一切旅人ノ通行ヲ差止メタレバ、(略)。

九四九 次の門を唐門といふ。木材は一切唐木を用ひたり。

いっさくねん「一昨年」(名) 1 一昨年

七六六 一昨年つぎ木をしたわか木に、(略)。

いっさつ「一冊」(名) 3 一サツ

二四八 一サツハシウシンノ本、(略)。

二四八 (略)、一サツハカキカタノオテホン、(略)。

二四九 (略) オトシダマニイタダイタ本ガ一サツアリマス。

いっさん「一散」(副) 2 一散に

九八四 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。

一一四七 (略)、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

いっし「一子」(名) 1 一子

一一四一 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、(略)。

いっしか「何時」(副) 5 いっしか

七一四 ながい夏の日いっしか暮れて、うある手先に月かげ動く。

八三七 (略) いっしか木々もうらがれて、さびしきにはのささん花や、(略)。

一二一四 質素を旨とせざればいっしか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、心も無下に賤しくなりて、節操も武勇も忘れ果てて、世人の爪弾を受くるに至るべし。

一二一五 いろはのいをも わきまへぬ 身のいっしかに 積み得る、(略)、世の人並の 文字の數。

一二一五 (略)、西も東も 知らざりし 身のいっしかに 分けにた

る、(略)。世の人並の 道の筋。

いっしやく「一尺」(名) 2 一尺

六八四 かね尺ハクデラ尺ヨリ少シミジカク、ソノ一尺ハクデラ尺ノハ寸ニアタル。

七二八 (略)、木綿は一尺の絹織物を織る絹絲は出来ない。

いっしやくいじょう「一尺以上」(名) 1 一尺以上

一一三九 竹にも直径一尺以上のものこれあり、(略)。

いっしやくにすん「一尺二寸」(名) 1 一尺二寸

九六三 田村麻呂は身の丈五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、體重は三十貫を越え、(略)。

いっしゅ「一首」(名) 1 一首

一一三八 正平の昔、楠木正行が(略)。といふ一首の和歌を書残せるは此の所なり。

いっしゅ「一株」(名) 1 一株

一五九 師範學校門内ノ八重櫻一株、(略) 其ノ奈良櫻ノ名残ヲトマメタリ。

いっしゅ「一種」(名) 10 一種

一五九 其の他森林は(略)、神社・佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

一四三 (略)、明治十一年ニ至リ、ヤウヤク一種ノ機械ヲ發明セリ。

一七二 温泉の(略)。其の湯には

大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。

一一一三 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、(略)。

一一八九 (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。是即ち一種の牧畜なり。

一一八九 アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。

一一八九 一種の草の實を食用とするを以て、(略)。

一一九〇 例へばこゝに一種の石あり、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、(略)。

一二六八 東南シベリヤの高地に住めるかもしかの一種は、(略)。

一二六八 (略) レミングと稱する地鼠の一種なり。

いっしゅうかん「一週間」(名) 3 一週間

八二六 一週間程たづねたが、白雀は見つかりませんでした。

八六五 取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいただきまして、(略)。

八七六 (略)、ふたゝび東へ進めば、一週間にしてイギリス國の港に着く。

いっしょ「一緒」(名) 20 イツシヨ

- いっしょ 一シヨ 一しよ
- 二227 ㊦ 「マサヲサン、イツシヨ
ニコノカキネノワキニカクレ
マセウ。」
- 二233 ㊦ 「イエエ、イツシヨ ニキ
テハイケマセン。」
- 二496 コレカライツシヨ ニヨン
デミマセウ。
- 三45 ㊦ デテキテ、イツシヨ ニ
アソビマセンカ。」
- 三54 ㊦ 「略、チツトソトヘデ
テ、イツシヨ ニウタヲウタヒマ
セウ。」
- 三62 ソコヘトモダチガサソヒ
ニキマシタカラ、ヨロコンデ
イツシヨ ニノハラヘアソビニ
イキマシタ。
- 三92 ソレカラ三人デツンダ
ノヲイツシヨニシテ、ハナタバ
ヲコシラヘマシタ。
- 三347 あるばんまさははは
といっしょによそからかへつ
てきました。
- 三587 うみの水が(略)。とほく
の方では青ぞらといっしょ
になつてゐるやうに見えます。
- 三608 (略)、女や子どもも大ぜ
い出て、いっしょになつてひき
あげます。
- 四96 (略)、センセイモセイト
モ一シヨニ君ガヨノウタヲ
ウタヒマシタ。
- 五88 そこで大ぜいと一しよになつ
て、せまい谷へ下りました。
- 五92 私どものなかまは、出合ふ
とすぐに一しよになるのがきまりで
す。
- 五133 けれども重い物は皆そこへし
づめてしまつて、軽い物は一しよに
ここまでもつて來ました。
- 五638 ㊦ おはなさんもつれて一しよ
にお出でなさい。
- 五662 ㊦ あさつてはおはなさんと一
しよにきつとまゐります。
- 六128 ガンハイツデモ一シヨニナツ
テ、列ヲツクツテトブ。
- 七667 ㊦ いっしょについだ梨の木
の方は、今年はまだ實がなりません。
- 八106 ㊦ 私もみんなと一しよの分は
まじめになり過ぎましたので、(略)。
- 八123 ㊦ なるほど皆さんと一しよの
分は、(略)少しまじめになつてあ
ます。
- いっしょう「一生」(名) 4 一生
- 八16 ㊦ (略)、一生に一度は、かな
らず伊勢に参拜せんと心がけざるも
のなし。
- 八273 ㊦ 御恩は一生忘れない。」
- 十一681 ㊦ (略)、將又無爲にして一
生を終ふるも、(略)。
- 十一683 ㊦ 百歳の長命を保ちて、一
生を坐食に費す者あり。
- いっしょう「一笑」(名) 1 一笑
- 十二763 ㊦ コロンブスは(略)、熱心
- に此の説を主張したりしが、何人も
一笑に附して顧みるものなかりき。
- いっしょう「す」(一) 1 一笑
- 十二868 ㊦ (略)、一日良雄に面會し、
反復直言して復仇の事を勧む。良雄
一笑して更に耳を傾けず。
- いっしょく「二色」(名) 1 一色
- 十203 一色の印刷は一度刷ればよい
が、(略)。
- いっしん「一」(名) 1 一身一家
- 十444 ㊦ 眠龍が一身一家ヲ忘レテ、
熱心ニ此ノ業ニ志シ、機械ヲ發明シ、
國產ヲ廣メシハ(略)。
- いっしんに「二心」(副) 2 一心二
一心に
- 七231 ㊦ 保己一ハ(略)、人ニ書物
ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉
強セシカバ、(略)。
- 十184 讀んでゐる間には中に書いて
ある事ばかりを一心に考へてゐるか
ら、どうして出来るものかといふ事
は深く考へないが、(略)。
- いっしんふらん「二心不乱」(名) 1
一心不乱
- 八337 ㊦ 刀は(略)、きたへる時は
身を清めて、一心不乱に打つたもの
だ。」
- いっすん「一寸」(名) 2 一寸
- 十289 烟には麥がもう一寸程にのび
てゐる。
- 十一686 ㊦ 之を思へば一寸の光陰も
輕んずべからず。
- いっすんさき「一寸先」(名) 2 一寸先
- 七854 ㊦ 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。
- 十692 ㊦ (略)、墨を流したる如き空
模様にて、一寸先をも見分くること
能はず、(略)。
- いっせい「二世」(名) 1 一世 ひと
かんニコライいっせいいかしせき
- 十二968 ㊦ 孟子これより感奮・勉勵
して遂に一世の大家となり、(略)。
- いっせき「二隻」(名) 4 一隻
- 十639 一隻の捕鯨船が今靜かに波を
切つて進んで行く。
- 十648 漕拔けた一隻は(略)、見る
内に一頭の鯨に近寄り、(略)。
- 十693 ㊦ (略)、岩の上に一隻の難破
船横たはれり。
- 十一286 ㊦ (略)、我が國に二哩の鐵
道も、一隻の汽船もなかりしなり。
- いっせきわ「のうぎよういっせきわ
いっせつ」(名) 1 一節 ひとさん
ぐうにつきのいっせつ
- 十一507 或人のアラビヤ旅行日記の
一節に次の様なことが書いてある。
- いっせん「一戰」(名) 1 一戰
- 十二58 ㊦ 「皇國の興廢此の一戰に
あり。
- いっせん「二錢」(名) 7 一せん 一
錢

- 七七八 〇 噴火、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、はげみ進むに何事の、など成らざらん、(略)。
- 七九七 〇 〇 (略)、一たんめあて定めては、わき目もふらず、怠らず、ふるひ進むに何事かなど成らざらん、(略)。
- 九四八 〇 噴火一タン止ミテ後、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。
- いっち 〇 きようどういっち・きようどういっちす
- いっちきようどうす「一致協同」(サ変) 2 一致協同す「一シ」
- 一二二 〇 〇 我等臣民も(略)、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。
- 一二二六 〇 下は上を敬し、上は下をあはれみ、一致協同して王事に勤むべし。
- いっちす「一致」(サ変) 3 一致す「一シ・ス・セ」
- 一二一三 〇 〇 村會議員も全村一致して之を選挙し、互に競争するが如きこと更になし。
- 一二一〇八 〇 〇 若し兩院の決議一致せざるときは、帝國議會の協賛にあらず。
- 一二一〇八 〇 〇 兩院の決議一致すとも、天皇の裁可を経ざれば其の効力を生ぜざるなり。
- いっちゅうや「一昼夜」(名) 1 一晝夜
- 一七四六 〇 (略)、大湯と稱するは一晝夜に數回噴出す。
- いっちよう「一斤」(名) 1 一廳
- 一二四七 〇 〇 (略)、府は三つ、縣は四十三。北海道の一廳と、外に南北新領土。
- いっつ「五」(名) 3 五ツ 五つ
- 五三 〇 〇 花ニハベンガ五ツアツテ、ヨイニホヒガシマス。
- 八六一 〇 〇 三つ四つ五つうち連れて、矢走をさして歸り行く 白帆を送る夕風に、(略)。
- 九六 〇 〇 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツテ、(略)。
- いっつう「一通」(名) 1 一通
- 七五〇 〇 〇 母は(略)六錢をはらひて、一通の手紙を受取りたり。
- いっつとや「五」(感) 1 五つとや
- 六八三 〇 〇 五つとや、いっつはりいはぬが子供らの 學びのはじめぞ、つゝしめよ、いましめよ。
- いっつい「一定」(名) 6 一定
- 一一一 〇 〇 (略)、近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ることを禁ぜり。
- 一四四 〇 〇 直線を適當の長さに切り、一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶる時は、美しき模様を生ず。
- 一一九五 〇 〇 (略)、供給に限りある物、例へば(略)の如きは、需要増すに隨ひて、其の價益高くなり、(略)。即ち供給に限りあるものは一定の價なしといふべし。
- 一二六七 〇 〇 (略)、獸類中にも(略)、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。
- 一二六八 〇 〇 一定の季節に最も多數の移住を見るは(略)レミングと稱する地鼠の一種なり。
- 一二一〇六 〇 〇 衆議院は一定の選舉資格を有する臣民の公選したる議員を以て組織し、(略)。
- いっついす「一定」(サ変) 2 一定ス一定す「一シ・セ」
- 九八二 〇 〇 貨幣トシタル物品ハ時代ニヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。
- 一二一八八 〇 〇 座敷の床の間より臺所の戸棚に至るまで、諸道具の置場處を一定し、前後左右次第よく並べて、(略)。
- いってん「一天」(名) 1 一天
- 九六五 〇 〇 一天にはかにかき疊つて、ほし物を取込むひまもない夕立は、さわがしい中に勇ましい。
- いってん「一点」(名) 2 一點
- 一二五二 〇 〇 公明正大ニシテ、心中一點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。
- 一二七八 〇 〇 十時頃はかに一點の燈火をみとめしが、(略)。
- いってんばんじよう「一天万乗」(名) 1 一天萬乘
- 一一一三五 〇 〇 臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。
- いっとう「一島」(名) 4 一島
- 一六八 〇 〇 英國東海岸の一島に燈臺あり。
- 一一一八 〇 〇 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。
- 一一一八 〇 〇 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、(略)。
- 一二七九 〇 〇 (略)、前面の一島草木青々として、花開き、鳥さへづり、(略)。
- いっとう「一頭」(名) 3 一頭
- 一六四 〇 〇 (略)、見る内に一頭の鯨に近寄り、(略)破裂矢をしかけた鉅を打つ。
- 一六四 〇 〇 昔は大鯨一頭を捕へると、人口數百人の一村、一箇月の生活費を支へ得ると言つたものである。
- 一一一四七 〇 〇 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。
- いっとき「一時」(名) 1 一時
- 八三五 〇 〇 (略)、山々の 櫻も咲けば、梨・すも、皆一時に紅白の花のながめの うるはしさ。
- いっくに「一」(副) 4 一ニ 一に
- 一一一六 〇 〇 秋・冬の花少き季節に入りても、食物に不足することなきは、一に其の勞役の結果なり。
- 一二一〇七 〇 〇 「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得

タルモノハ、一二天皇陛下ノ御後威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ。

十二571 図 營口は一に牛莊港と稱し、(略)。

十二103 図 一般人民の(略)を選挙するも、(略)を選挙するも、(略)を選挙するも、一に此の精神に基づくべく、(略)。

いっぱい「一杯」(形状) 3 一パイ一パイ

三86 図 「ボクモモウテニ一パイニナリマシタ。」

六77 図 廣イ港ガ船デ一パイニナツテキル。

十二84 5 またゝく間に帽子に一ぱいになった。

いっぱい「一杯」(副) 2 一パイ一ぱい ぐざしきいっぱい・ちからいっぱい

二20 3 ワタクシノキモノニハ、ホソイハリガ一パイハエテキマス。

六22 7 (略) 大きな水がめがあつて、雨水が一ぱいたまつてゐました。

いっぱい「一発」(名) 2 一發

七92 5 図 一發ノ砲丸ハタチマチ中佐ノ身ヲ拂ヘリ。

十30 1 ずどんと一發。何を撃つたのだらう。

いっぱい「一半」(名) 1 一半

十68 4 図 船體二つにくだけて、一半

ははや大波にさらはれたり。

いっぱい「一般」(名) 2 一般 ぐおうしゅうじんいっぱい

十二19 4 図 天氣圖とは(略)晴・曇・雨・雪、風の方向・強弱、温度等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

十二104 8 図 (略) 自治團體の事業は、地方人民の一般に之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

いっぱいんこくみん「一般國民」(名) 1 一般國民

十二109 9 図 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽にすべからざるものなれ。

いっぱいんじんみん「一般人民」(名) 2 一般人民

十二102 10 図 一般人民の府縣・郡・市町村會議員を選挙するも、(略)、市・町村會に於て市・町村長を選挙するも、一に此の精神に基づくべく、(略)。

十二104 4 図 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、自治團體の圓滿なる發達は得て望むべからず。

いっぱいんせんきょにん「一般選挙人」(名) 1 一般選挙人

十二109 3 図 (略)、議員たる者は(略) 忠實に其の職責を盡すべく、一般選

舉人も亦公平無私の精神を以て参政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

いっぴき「一匹」(名) 11 一ビキ一びき 一匹

一42 1 ヒゴヒガ一ビキニヒキ三ビキ 四ヒキ、(略)。

一43 1 アチラカラモ一ビキキマス。

二50 6 ヨイオヂイサンハ白イ犬ヲ一ビキカツテ、(略)。

三17 6 ヒバリガ(略)。(略)、マタアソコカラモ一ビキ上リマシタ。

三35 1 みちでほたるを一びきつかまへて、(略)。

三40 6 うが(略)さかなをとつてゐました。(略)、すぐに一びきくはへて、でてきます。

三41 1 (略)また一びきくはへて、ういて出ます。

四27 5 一びきのきつねがさきのこつてゐるのぎくを見つけて、(略)。

七28 7 一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、(略)。

七33 8 蛾は(略)。(略)。一匹でおよそ四五百程の卵を産む。

十一5 8 図 雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、(略)。

いっぴやくにじゅうにん「二百二十人」(名) 1 一百二十人

十二77 3 図 (略)、乗組總數は二百二十人。

いっぶく「二服」(名) 1 一服

八44 8 一服のすひがらがこんな大火事になった。

いっぶんじ「二分時」(名) 1 一分時

十一86 6 図 上手ナル者ハ一分時ニヨク十數本ノ絲ヲツナゲトイフ。

いっぺん「一片」(名) 3 一片

七92 6 図 中佐ハ一片ノ肉ヲボートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。

十一68 9 図 (略)、街上に落ちたる硝子の一片を去るも、公衆の利益なるべし。

十二111 3 図 (略)、一片忠節の心ならんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

いっぺん「一遍」(名) 2 一ペン一ペン

一49 4 サア、タケヲサンカラオトビナサイ。一ペンニヘン三ペン(略)。

六49 1 秀吉は(略)、たびゝいくさをしたけれども、一ぺんもまけたことがありません。

いっぺん「一編」(名) 1 一篇

九81 4 図 道眞(略)、一篇の詩を作

りたり。

いっぺんいたす「二変」(四) 1 一變致す「一シ」

十59 7 図 入營當時は友人も少く、生活も一變致し候事とて、多少不自

由を感じ候へども、(略)。

いっぽう「一方」(名) 7 一方

六四八 信長は(略)、それからだん／＼重く取立てて、一方の大將にしました。

十一四九 一方にはアラビヤ人の不實を罵りながら、一方には「(略)」と、口々にほめた。

十一四九 一方にはアラビヤ人の不實を罵りながら、一方には「(略)」と、口々にほめた。

十一四九 一方にはアラビヤ人の不實を罵りながら、一方には「(略)」と、口々にほめた。

十一一〇五 (略)、数條のみぞを造つて一方の口から火をたいて室内を温める。

十二一五 船ヲ其ノ中ニ入レテ一方ノ扉ヲ閉ヂ、(略)。

十二二一 動物は(略)、空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出す。(略)。然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。

十二二八 黒き影は城の一方より現れ出で、ひらりとばかり身を水中に投入れたり。

いっぽう「一報」ひごいっぽうくださるいっぽう「一法」(名) 1 一法

十一八二 火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。

いっぽう「一本」(名) 12 一ポン一本

二六六 (略) キクノハナヲア

ゲマス。(略) サア、ミンナデ一ポンツツモツテ、(略)。

二五五 (略) 小サナマツノ木ヲ一本ウエマシタ。

四一〇 (略) カキノ木ガ二本アリマス。(略)。一本ハキザハシデ、(略)。

四一一 今一本ノ木ハシブカキデスカラ、(略)。

六三〇 (略) ふでを買ひに來た。一本三せんづつのを二本買つて、(略)。

七二七 筆一本デ美シイエヲカイタリ、(略)。

八四〇 之ヲ思ハバ一本ノマツチモソマツニハ使フベカラズ。

十二八 (略)、古い銀杏の木が一本、(略)。

十二二七 (略)、櫓はおほむね一本なり。

十二二七 其の座敷の一間の杉戸には櫓一本を畫がき、(略)。

十二七五 (略)、唯櫓一本を畫がきて、東國へ出立せり。

十二八六 昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ、一本ノツムニ一人ヲ要スベキニ、(略)。

いつも「何時」(副) 10 イツモいつも 何時も

三二四 オトウトハ犬ガスキデ、イツモブチトアソンデキマス。

三三九 私 はよくねむりますから、目はいつもはつきりして

ゐて、よく見えます。

三五五 アル日母ガ「(略)」トヨンダノニ、イツモノトホリ、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、スグニハキマセンデシタ。

六七二 學校でいつも先生にほめられ、友だちにもすかれた善い子供は、(略)、りつぱな人になりました。

七二六 宿はいつもの所です。

八一〇 三郎はいつもにくくしてゐますから、寫眞でも笑つて寫つてゐます。

八三二 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。

九四三 祖父様はいつもの通り朝起にて、(略)。

十三六 家は我、梁や棟木や桁どもをいつもせおひて片時も休む間なし。と 角柱 ひとりつぶやく。

十一五五 ビエールが打ついつもの太鼓に違ない。

いつわり「偽」(名) 1 いつはり

六八八 (略)、いつはりいはぬが子供らの學びのはじめぞ、つゝしめよ、いましめよ。

いつわりくだる「偽降」(四) 1 いつわり降る 「一り」

九五八 尊(略) 駿河の國に至り給ひしに、ここにありし賊どもいつはり降り、「(略)」と勸めて、尊をいざなひ、尊の野に入り給ふを見て、

火を放ちて焼き奉らんとせり。

いで(感) 2 いで

十一二四 大船を乗出して、我は拾はん、海の富。

十一二四 海軍艦に乘組みて、我は護らん、海の國。

いで「出」ひおんいで・おんいでなざるいできたる「出来」(四) 1 出で来る

七五〇 (略) といふ。母は出で來りて、「(略)」といふ。母は出で來りて、(略)、一通の手紙を受取りたり。

いでさる「出去」(四) 1 出で去る

十一七五 畫工「(略)」とて、一枝を書添へ、別を告げて出で去れりとなん。

いでや(感) 4 いでや

八九五 いでや、あの岩の小かげに、皆うちよりてえもの數へん。

九一六 いでや此の劔の由來をかたらん。

十一一四 臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。」といへば、(略)。

十二一〇 いでや、其の二三を申さん。

いでゆく「出行」(四) 1 出で行く

「一ク」

十一614 勇み勇みて出で行く兵士。はげましつゝも見送る一家。

いである

いと「糸」(名) 27 イト 糸 絲 ヨあ

さいと・きいと・きぬいと・しろいと・ぼうせきいと・もめんいと

一214 フトイヒモ。ホソイイト。

二325 阿レアレ、サガル。ヒケヒケ、イトヲ。

二327 阿レアレ、アガル。ハナス

六、イトヲ。

四236 オマツノ店ニハ、糸ヤ

キレヤフデヤカミガナラベテ

アリマス。

四238 「ソノ糸ハ一カケイク

ラデスカ。」

四255 オマツハ糸トフデヲ紙

ニツツンデ、ワタシナガラ、

「(略)。」

四257 「糸ガ十五セン、フデガ

七セン、(略)。」

六346 麻又ハカラムシノ糸ニテ織

リタルモノヲ麻織物トイフ。

六348 (略)、カラムシノ糸ニテ

織リタルモノハカタビラナドニツク

ル。

七287 一匹の蠶の口から出る絲をの

ばして見ると、(略)。

七288 この長い絲を出す蟲が(略)。

七322 (略)、口から美しい絲を出し

て、からだを包む。

七326 蠶の口の中には、(略)。(略)

ねばつたしるが外へ出ると、すぐに

七332 蛾が出ると、絲が取れないか

ら、(略)。

七334 (略)、それから繭をにて、絲

を取るのである。

八648 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノ

ガ織物デス。

十一859 (略)綿花ハ(略)。(略)。

(略)、イヨイヨ延シテ、イヨ／＼細

クシ、次第ニヨリヲカケテ絲ノ形ニ

近ツカシム。

十一863 工女ハ(略)、絶エズ絲

ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲ

ツナグ。

十一867 上手ナル者ハ一分時ニヨ

ク十數本ノ絲ヲツナグトイフ。

十一872 (略)彼ノ蠟燭ノ心トス

ル太キ絲、(略)。

十一873 (略)、蜘蛛ノイノ如キ細

キ絲、(略)。

十一877 蠶の絲を吐きて繭を造る

は(略)。

十一878 (略)、葉巻蟲の絲にて葉

をつづり合するは裁縫の業に同じ。

十一881 蜘蛛は其の體より絲を出

して網を張る。

十一882 網を張らんとする時は、

先づ幾條かのやゝ太キ絲を渡し、

(略)。

十一883 (略)、次第に細キ絲をか

け、終に完全なる網を造る。

十二829 (略)、其のバイオリンを取

つて彈始めた。弓が一度絲にふれる

と、(略)。

いと「最」(副) 2 いと

九918 (略)、勅なれば いとも

かしこし、うぐひすの 問はば如何

にと 雲るまで 聞え上げたる 言

の葉は、(略)。

十一726 「そはいと名残をしき

事なり。

いと「厭」(四) 6 イトフ いとふ

「ハーフ」(ハ)

九5610 是等ハ多クハ他ノ動物ノ

恐ル、武器又ハ他ノ動物ノイトフ惡

味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、(略)。

十一899 蜜蜂の群集生活を営むを

得るは、共同團結して勞働をいとは

ず、(略)、團體の爲には生命をし

まざるによる。

十一5910 軍に行かば、からだを

いとへ。彈丸に死せとも、病に死せ

な。

十一723 我衣食の費をいとなむに

あらざれども、何處へなりとも出で

て遊び給へ。

十二708 老後の安樂を願ふ者は若

年の辛苦をいとふべからず。

十二710 富貴は人の共に欲する所、

貧賤は人の共にいとふ所なりといへ

ども、(略)。

いどう「異同」(名) 1 異同

九899 是金銀ハ(略)、産地異ナリ

トモ、成分ニ異同ナクシテ、(略)。

いとく「い」とく

いとぐるま「糸車」(名) 1 絲車

十一869 昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ、

一本ノツムニ一人ヲ要スベキニ、

(略)。

いとげぐるま「糸毛車」(名) 1 絲毛

車

十一26 絲毛車

いとげのくるま「糸毛車」(名) 1 絲

毛の車

十一257 昔都大路をねり行きたり

し絲毛の車は如何に優美なりけん。

いとしんたい「課名」 2 胃と身體

八目8 第二十 胃と身體

八695 第二十 胃と身體

いとど(副) 1 いとど

九509 夏の經木や麥わらは 見

るにもいとど輕げなり。

いとなむ「營」(四・五) 7 營ム 營

む「マー・ミーム」 ヨあいいとな

む

十一441 (略)、此ノ業ヲ營ムモノモ

亦追々ニ増加シ、(略)。

十二8210 (略)、農業を營まんとする

ものには土地を與へ、農具・種子等

を給し、(略)。

十一566 蜜蜂は群を爲して共同の

生活を營み、(略)。

十一622 勤蜂の若きものは内に居

て幼蟲を育て、又は其の居室を營み、

(略)。

- 十一 8 8 図 蜜蜂の群集生活を齎むを得るは、(略)。
- 十一 15 2 図 (略)、其の一事業として杉・檜等の植林を齎み、(略)。
- 十二 21 5 (略)、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、遂には地球上の動物が呼吸作用を齎むことが出来なくなる道理である。
- いどばた「井戸端」(名) 2 キドバタ ゐどばた
- 二 26 1 オカアサンハ キドバタデ 水ヲクンデ キマス。
- 四 70 1 圖 朝早くから ゐどばたで、母はせい出す あらひ物。
- いどへいざえもん「井戸平左衛門」(人名) 1 井戸平左衛門
- 十 31 5 図 此ノ芋ノ(略)。然ルニ今日ノ如ク全國到處ニ作ラル、ニ至リシハ、主トシテ井戸平左衛門ト青木昆陽トノ盡力ニヨル。
- いとま「暇」(名) 2 いとま 暇 ムおんいとま
- 十二 87 8 図 是より暇を請ひて郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。
- 十二 89 10 図 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにいとまあらず。
- いとまこい ムおんいとまこいしたまういとる「射取」(五) 1 いとる 「一ツ」
- 四 15 6 (略)、高いところからお
- ひおろして来るものを、弓でいとつたのです。
- いとれる「射取」(下) 1 いとれる 「一ツ」
- 四 16 8 (略) 大きなゐのししで、(略)。早くて早くて、とても弓矢ではいとれません。
- いなか「田舎」(名) 2 ゐなか 田舎 七 12 1 圖 母がてぎはの大こんなます、これがゐなかの年こしざかな。
- 十一 107 1 町には瓦屋根の家もあるが、田舎は大抵葺屋根ばかりである。
- いなかのしき「課名」 2 ゐなかの四季 七 目 4 第三 ゐなかの四季 七 目 2 第三 ゐなかの四季
- いなかみち「田舎道」(名) 1 田舎道 十一 109 1 男の(略)、小馬に乗つて、田舎道を通るのを見ると、昔の人に會つた様な氣がする。
- いなびかり「稲光」(名) 1 いなびかり
- 五 48 1 (略) 目がくらむやうないなびかりがして、耳がさけるやうなおそろしいかみなりが鳴りました。
- いなむ「否」(四) 1 否む 「一ム」
- 十二 37 8 図 高虎「年老いて其の任にあらず」とて之を否む。
- いなむらがさき「稲村崎」(地名) 2 稲村が崎
- 十二 23 8 図 七里が濱のいそ傳ひ、稲村が崎、名將の 劔投ぜし古戦場。
- 十二 25 図 稲村が崎
- いなん ムごじゅうどいなん いにしえ「古」(名) 8 古 九 14 7 図 利根川ハ(略)、古ヨリ坂東太郎ノ名アリ。
- 九 27 7 図 五月五日ニ(略)、男子ノ福運ヲイノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。
- 九 93 1 圖 (略)、古の 奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬと、つかうまつりし 言の葉の (略)。
- 十 82 8 図 あいぬの数、古は甚だ多かりしが、近年次第に減少して、(略)。
- 十 95 3 圖 (略)、古の奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな。
- 十 101 4 図 コ、ニ程近キ飛鳥ノ安居院ハ古ノ飛鳥寺ノ跡ニシテ、(略)。
- 十一 20 5 図 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、(略)。
- 十二 2 6 圖 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。
- いぬ「犬」(課名) 2 犬 七 目 6 第十八 犬 七 59 6 第十八 犬
- いぬ「犬」(名) 32 イヌ いぬ 犬 ムかりいぬ
- 一 17 4 クロイネコシロイイヌ
- 一 38 4 圖 クルマニツンダタカラモノ、イヌガヒキダス エンヤラヤ。
- 二 14 8 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘニキマシタ。
- 二 15 2 (略)、ミヅノナカニモサ
- カナヲクハヘタ犬ガキマス。
- 二 27 3 犬モヲフツテ、ツイテイキマス。
- 二 50 6 ヨイオヂイサンハ白イ犬ヲ一ピキカツテ、(略)。
- 二 51 2 アル日犬ハオヂイサンノタモトヲクハヘテ、(略)。
- 二 52 7 トナリノワルイオヂイサンハ(略)、犬ヲカリニキマシタ。
- 二 53 2 サウシテソノ犬ヲツレテイツテ、(略)。
- 二 54 2 オヂイサンハ(略)、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。
- 二 54 6 ヨイオヂイサンハ(略)、犬ヲウヅメテ、(略)。
- 三 11 4 オトウトハ犬ガスキデ、イツモブチトアソンデキマス。
- 三 13 2 いぬはおきて、ないてゐます。「ひらがなのドリル」
- 三 49 6 人や犬などは水の中にながく居ることはできません。
- 四 64 1 犬はよろこんで、雪の中をとびあるいてゐます。
- 五 73 7 鹿ハ(略)。(略)。トウく犬ニ追ヒツメラレマシタ。
- 七 59 7 図 犬の種類はすこぶる多し。
- 七 61 4 図 すべて犬は人になれ易く、かしこくして、よく主人の命を守る。
- 七 61 6 図 昔より「犬は三日かへば、三年その恩をわすれず。」といへり。

七61 8 犬は耳ざとき動物にして、眠れる時も人の足音を聞けば、たち目目をさます。

七62 5 外国にては、犬をして牛かひ・羊かひの手つだひをなさしむ。

七62 6 二三匹の犬、よく二三百頭の牛・二三千頭の羊を追ひまはして、主人の行く方へ行かしむといふ。

七62 8 又寒き國にては、犬をしてそりを引かしむ。

七62 9 八九頭の犬いきほひよく數人を乗せたるそりを引きて、雪の道を走り行くさま、(略)。

七63 3 ある山國にては、犬のくびに薬品・食物などを入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。

七63 6 又近ごろは戦場にも犬を用ひて、たふれたる兵士をさがしむといふ。

九73 7 翌朝三時頃急に水音がけししく相成り、犬のなき聲もたゞならずと思ふ間もなく、(略)。

十29 9 犬を連れた男が銃を肩にして、(略)。

十80 7 男子も女子も寒き時は犬の皮などにて造れる羽織の如きものを用ひ、(略)。

十83 5 犬と猫は最も多く家に飼はれる獸である。

十83 5 犬は夜を守らせる爲、又はかりに使ふ爲に飼ひ、(略)。

十二81 8 忠實な犬は古帽子をくはへて、あはれな主人の爲に、道行く人の投與へる喜捨を待ちわびてゐる。

いぬ「寝」(下二) 4 いぬ 寝ぬ「ネ」 必ずずまりいぬ

九11 6 葉かげにいねし鳥ははやゆめも見あきつ。

九60 6 早く寝ねて早く起くべし。

九61 9 (略)、早く寝ね、早く起き、(略)。

十一73 6 (略)、前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく晝がかなどひとり言いひ居たり。

いぬのよくばり「課名」 2 イヌノヨクバリ

二目 8 イヌノヨクバリ

二14 2 イヌノヨクバリ

いぬぼうざき「犬吠崎」 「地名」 2 犬吠崎 犬吠崎

九17 図 犬吠崎

九18 3 鉢子港ノ東南一里餘、犬吠崎ニハ燈臺アリ。東太平洋ニ面シ、風景ノ美ヲ以テ名高シ。

いね「稲」(名) 10 イネ いね 稲

一33 6 イネムギイモダイコン

四36 1 イネノワラデハ、タワラコモムシロナハワラデミノナドヲ作りマス。

六8 6 たんぼにはいねがよくみのつて、風のふくたびに黄色な波が立つてゐます。

六14 8 どここの田を見ても、稲がよく

じゆくして、重さうにほをたれてゐます。

六15 2 (略)、人が大ぜい出て、稲をかつてゐます。

六15 3 かつた稲が雨にぬれると、米がわるくなるから、(略)。

六15 7 刈つた稲はさをや木にかけるか、地面にひろげるかして、よく日にかわかしす。

七11 2 稲は實がいる、日よりはつとく、(略)。

九68 9 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、(略)、稲の花は散る、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

十一35 9 (略)、南部にてははや稲の花盛りの由に御座候。

いねこき「稲扱」(名) 1 稲こき

六16 1 かわくと、それを稲こきでこいてもみを取ります。

いのうえべんぞう「井上勉蔵」 「人名」 1 井上勉蔵

八69 3 二月六日 井上勉蔵 浅吉殿

いのうこうけん「稻生恒軒」 「人名」 1 稻生恒軒

十二32 5 (略)、稻生恒軒の妻の常に祖先の祭に心を盡したる、(略)、皆後世女子の模範とすべき徳行なり。

いのしし「猪」(名) 6 ゐのしし

四16 2 (略)、矢にあたつたゐの

ししが、(略) かけおりて來ました。

四16 4 牛ほどもある大きなゐのししで、きばをむき出して、はないきをあらくして、土けむりをたてて、とんで來ます。

四17 4 ゐのししはまつすぐにただつねの方へ下りて來ます。

四17 7 (略)、ただつねは馬からゐのししのせなかへうしろむきにとびうつりました。

四17 8 ゐのししはますますあばれてかけおります。

四19 2 ゐのししはどつとたふれましたが、(略)。

いのち「命」(名) 13 命

六24 2 (略)、子どもはあやふい命をたすかりました。

六57 7 信玄はそのすきにあやふい命をたすかつた。

九19 3 命がをしくなつたか、妻子がこひしくなつたか。

九20 1 何で命をしみませう。

九75 3 死者四人、(略)。幸に命を全うしたる者も、大がいは着のみ着のまゝにて、(略)。

九86 2 勝も勝、大勝であつたのに、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは(略)。

九87 1 愛作さんのりつばな心がけで、熊吉の命が助かりました。

十33 3 (略)、罪人ドモハ魚類・果

實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

十一458(四) (略)、刀を取直して腹かき切らんとす。(略)、「何とて命を捨つるに及ぶべき。」と、取つておさへて動かせず。

十一573(四) 「將軍の命は我々千萬人の命よりも貴い。」

十一574(四) 「將軍の命は我々千萬人の命よりも貴い。」

十一579(四) 我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。

十一612(四) 武勇のはたらき命さへげて、御國の敵を討ちなん、我は。

いのる〔祈〕(四・五) 5 イノル いのる〔ツール〕

四816 しばらく目を つぶつて、神さまにいのつて から、目をひらいて見ると、こんどは扇が少しおちついて 見えます。

八71(四) とこしへに民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大

神。

九277(四) 五月五日二軍人形ヲカザリ、ノボリヲ立テテ、男子ノ福運ヲ

イノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。

九833 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

十二25(四) 承けつぎし國の柱の動きなく榮えゆく代を尚いのるかな。

いはなす〔射放〕(五) 1 いはなす〔シ〕

四823 よ一は(略)、よくねらひをさだめ、弓を引きしほつて、ひようと一矢いはなしました。

いはる〔威張〕(五) 2 イバル〔ツ〕

三144 ソレデ「日本中ニハヨワイモノバカリデ、ジブンノアヒテニナルモノハ一人モナイ。」ト、イバツテキマシタ。

七498(四) 西洋紙ハ又「葉書ヤ切手ヤ印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」トイヒマスト、日本紙ハ(略)、「ソナニイバツテモ、アノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマイ。」(略)。

いふう〔遺風〕(名) 2 遺風

十一11610(四) (略)、禮儀は早く唐人も稱へし其の名君子國。祖先の遺風つきく、同胞すべて六千萬。

十二29(四) 祖宗の大業を承けて、(略)。我等臣民も亦祖先の遺風に

従ひ、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

いぶき〔伊吹〕(名) 1 イブキ

十一302(四) (略) 我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略) 山ノ名ヲ附シタルモノニ三笠・富士・筑波・生駒・鞍馬・伊吹・淺間等、(略)。

いふく〔衣服〕(名) 7 衣服

九593(四) 衣服もよく洗ひて、よこれたるをば着ることなかれ。

九614(四) (略)、夜具・衣服の類はしばく日光にかわすべし。

十804(四) あいぬの風俗は(略)。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

十二456(四) (略)、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

十二897(四) 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二907(四) 四季寒暑の變り目にはとりわけ衣服・飲食に氣を附くべし。

十二921(四) 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、衣服・飲食の費皆其の範圍を越ゆることなかるべし。

いほく〔今〕(名) 124 イマ いま 今

いほく〔今〕(名) 124 イマ いま 今

いほく〔今〕(名) 124 イマ いま 今

二27 イマ日ガデマス。

二77 オキクガイマオキヤクニナツテキマシタ。

二204 イマハ木ノ上ニキマシタ、モウスコシタツト、(略)。

三106 一パン上ノニイサンハイマヘイタイニイツテキマス。

三404 今もぐつたかとおもふと、すぐに一びきくはへて、でてきます。

三533(四) 何ヲ言ヒツケラレテモ、「ハイ、今スグニ。」トイヒナガラ、ナカナカトリカカリマセン。

三541(四) (略)、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、ナカナカスグニハ行キマセン。

三545(四) (略)、「ハイ、今スグニ。」トコタヘルバカリデス。

三552(四) (略)、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、スグニハキマセンデシタ。

三604 右の方に五六そうかたまつてゐるのは、今あみをおろしてゐるのです。

四64(四) 「それでは今くるまのとはつてゐる長いしが、(略)。」

四67(四) 今あのはしの上を人がいくたりとほつてゐますか。」

四298 (略)「夕はんが今すんで、みんなあつまつて、色色はなしをしてゐます。」

四434(四) それがだんだんにかはつて、今では紙で作つたのしをつかふやうになりました。

四452(四) 今でも(略)、すべてなまぐさものをおくる時には、のしをつけません。」

四515 今ハ死ンデキマシタ、モトハ海ノ中デオヨイデキマシタ。

四517 海ニキタ時ヨリモ、今ハスコシ長イ名ヲモツテキマス。

四653 今あのをめの木の枝から枝へとんでゐます。

四六六 今モ外カラカヘツテ、ス
グココヘ來テキル所デス。
五一八 (略)、今まであかるかつたせ
かいがくらやみになつて、(略)。
五三九 汽車が今ていしやばへつきま
した。
五四五 あちらの方のは、今下りた人
の切符をうけ取つてゐるのです。
五四一 あれは今のつた人の手荷物で
せう。
五四七 (略)モ、馬モ車モ今見エタ
カト思フト、スグ後ニナツテシマヒ
マス。
五五七 図 それから今すぐへんじを
書いてお出しなさい。
五七〇 才宮ノ裏デハ今スマフガハジ
マツテキル。
五八四 東西の二門は今いくさのまつ
さい中である。
六二七 図 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハ
イレマセンガ、(略)。
六三〇 図 今のお客にもう一錢上げな
ければならなかつた。
六六一 図 いまその杖をもぎ取られ、
かへりの道が知れませんか。
六七九 一 ハトバノ右ニ着イテキル汽船
ハ今荷物ヲオロシテキル。
六八二 左手ノ汽船ハ今荷物ヲ積ミコ
ンデキル。
六八一 図 昔仁徳天皇ハ立上ル煙ノ少
キヲ見テ、(略)今ハ工業モ大イニ
ヒラケテ、エントツノ煙ハ空ヲオホ

ヘリ。
六八四 図 (略)、昔を考へ、今を知
り、學びの光を身にそへよ、身につ
けよ。
七二〇 図 保已一ノ家ハ今ノ東京、ソ
ノコロノ江戸ノ番町ニアリ、(略)。
七二四 図 「先生、少シオ待テ下サイ
マセ。今風デアカリガ消エマシタ。」
七五三 図 昔はひきやくといふものが
あつて、(略)今では切手をはつて
出しさへすれば、どんな遠い所へも
とどきますから、(略)。
七八五 図 廣瀬中佐ノ乗レル福井丸
ハ、今旅順ノ港口ニ進ミタリ。
七八八 図 「杉野ハ今點火ヲ終ヘタ
ルゾ。
七九六 図 船ハ次第ニ沈ミ行キテ、
水ハスデニ甲板ヲヒタセリ。今ハゼ
ヒナシ。」
八二七 図 (略)、後神殿を今の五十鈴
の川上に造り、(略)。
八二九 (略)、今見た事をすっかり話
して聞かせました。
八三三 図 「自分は今こそこんな小刀
や釘などを造つてゐるが、元は少し
は人に知られた刀がらで、(略)。
八三四 其の時分までよそへ奉公に行
つて居つた若いむすこが、今では其
の後をついで、(略)。
八四四 図 マツチハ今ヨリ凡ソ百年
前、外國ニテ發明セラレタルモノナ
リ。

八四九 図 今ヨリ千二百年ノ昔、(略)。
八七二 図 諸君は今にして諸君の誤
れるをさともしならん。
八七四 図 今より後はたがひに親密
に暮すべし。
八九三 図 名古屋城は、今より凡そ三
百年前、徳川家康が(略)造らしめ
たる名城にして、(略)。
八九六 図 名古屋の南に熱田あり。今
合して名古屋市の一部となれり。
九〇一 図 (略)、毎年來りて、我が
娘を取食ひ、今また残りの一人をも
食はんとす。
九〇八 図 (略)、宮を建ててそこにま
つれり。今の熱田神宮即ち是なり。
九一〇 図 花に宿れる蝶は今眠さめ
たり。
九一一 図 蝶の遊ぶ時は今なり。
九一二 図 鳥の遊ぶ時は今なり。
九二二 図 併し今の戦争は昔とちがつ
て、一人で進んで功名を立てる様な
ことは出来ない。
九三二 図 それが今は朝の急行列車で東
京を出立すれば、晚にははや京都に
着くことが出来る。
九三三 図 昔の道中には(略)。(略)今
は水路に汽船があり、陸上にも所々
方々に鐵道が通じてゐる。
九三九 図 (略)、今ハ此ノ山坂ヲ越ユ
ルモノ少シ。
九四〇 図 今ハ此ノ七湯ノ外ニ新シキ
温泉場モ開ケ、廣キ新道モ出來、(略)

電車サヘ開通セリ。
九四七 図 昔ヲ知レル人、若シ舊道ノ
今ノサビシサト、昔ノニギハシサト
ヲクラベ見バ、(略)。
九四八 図 (略)箱根驛モ、浴客ノ多
ク集レル今ノ箱根七湯モ、遠キ昔ハ
(略)噴火山ナリシナリ。
九四九 図 (略)、ソレヨリ噴出シタル
物ノ四方ニナダレテ、冷エカタマリ
タルガ、今ノ箱根山ヲ成セルナリ。
九五〇 図 此ノ四山ノ噴火モ今ハ全ク
止ミタリ。
九五九 図 然るに此の大風の爲に、今
までの駱駝の足跡消えたれば(略)。
九六六 図 たがひに心もとなく思ひ合
ひし父子の、今無事にて相見し喜は
如何なりしぞ。
九七〇 図 古風ゆかしき我が國の
かんむり・烏帽子今は唯 祭の服に
残りたり。
九七九 図 (略)、昔より相知りし驛長
ありて、道眞の今の身の上を深く悲
しみしに、(略)。
九八二 図 去年の今夜清涼殿の御宴に
待し、(略)、其の御衣は今なほ西の
はてに住む身に近くあり。
九八三 図 賣買トイフコトナカリシ遠
キ昔ニハ、(略)。若シ今ノ世ニモナ
ホカ・ル事アリトセバ、(略)。
九八五 図 今ノ文明諸國ノ貨幣ニハ主
トシテ金銀ヲ用フ。
九八六 図 然るに此の寺は今より凡そ

一千二百年以前のものにて、昔ながらの形を存せり。

十117 [図] 人々皆 静まりいねし
ま夜中に 家組立つる 木々も今
語り出しぬ。

十156 [図] (略)、其の作れる文は古文
の手本として、今なほひろく愛讀せ
らる。

十237 [図] 今ヨリ後五日目ノ朝再ビ
來ルベシ。

十2610 [圖] (略)、私も明年は是非と
も御仲間入致し度と今より相樂しみ
居り候間、(略)。

十282 (略)、古い銀杏の木が一本、
木枯に吹きさらされて、今は葉一枚
も残つてゐない。

十293 霜にやけて、赤くなつた杉垣
の中には、寒菊が今を盛りと咲いて
ゐる。

十312 [図] 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳
ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、
(略)。

十389 [圖] (略)、くづれ残れる民屋
1、今ぞ相見る二將軍。

十527 [圖] 義仲の幼目に見たりし時
も、(略)。今は七十にも餘れば、殊
の外白髪には成りたらんに、(略)。

十541 [圖] まして戦場にては、(略)。
退く時には、今はかなふまじとそし
る。

十609 [圖] (略)、今ヨリ三百年前、此ノ
地ノ人始メテ之ヲ發見セリトイフ。

十6310 一隻の捕鯨船が今靜かに波を
切つて進んで行く。

十665 六七十尺の大鯨も今は全く息
絶えて、水面に横たはる。

十667 他のボートを見れば、今新に
鯨を追ふものもあり、鋸を打つて鯨
に引廻されてゐるものもある。

十7910 [圖] 然れども入墨をほどこすこ
とは今は全く禁ぜられたり。

十825 [圖] 彼等は元は(略)、算數の
考もとぼしかりしが、今は内地人と
同じく、讀み書き・計算をまなし得
るものあるに至り、(略)。

十829 [圖] あいぬの數、古は甚だ多か
りしが、近年次第に減少して、今は
僅かに二萬人に足らず。

十844 維新前までは牛肉を食ふ人は
至つて少かつたが、今では全國食は
ぬ處がなくなつた。

十949 [圖] (略)、規模極メテ大ナリシ
ガ、今ハ往時ノ三ノ一ニモ足ラズ。

十975 [圖] 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ
跡ニシテ、今ハオホムネ田畠トナレ
リ。

十983 [圖] (略)、千二百餘年ヲ經タル
古堂ノ中ニハ當時ノ佛像今尚存ス。

十1016 [圖] (略)、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ
皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺
ナリ。今ハサ、ヤカナル堂中ニ古キ
丈六ノ佛ノミ殘レリ。

十1142 [圖] (略)、主上尚笠置におは
しませし時、(略)。然るに今、主上

隱岐に遷され給ふと聞き、(略)。

十1258 [圖] 昔都大路をねり行きたり
し絲毛の車は(略)。今は兩陛下も馬
車に召し給へば、古風の牛車は博物
館に行かずば見るべからず。

十1278 [圖] フルトンの始めて造りし
汽船は、今の小さき川蒸氣程の大き
さなりしならん。

十1285 [圖] 思へば今より六十年以前
には、(略)。

十1359 [圖] 御地は今尚冬の季節と
存候。

十1449 [圖] 夜に入りて、討つべきは
今なりと、心を取直せども、(略)。

十1456 [圖] (略) 心の中を打明け
て、「今は自ら死ぬるより外なし。」
とて、(略)。

十1459 [圖] 居合せたる人々(略)、
取つておさへて動かせず。熊王今は
せん方なく、(略)。

十1765 [圖] (略)、先年大風雨の爲、
瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝
を見ること能はず。

十18610 [圖] 昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ、
一本ノツムニ一人ヲ要スベキニ、今
ハ(略)、能ク二千本ノツムヲ扱フコ
トヲ得ベシ。

十11016 [圖] (略)、此の極北の寒地
も今ははや生れ故郷の如き心持に相
成候。

十1287 [圖] 敵今は逃れぬところと覺
悟したりけん、(略)。

十12188 [圖] 故に今より出帆せんとす
る船は、之を見て出發を見合せ、
(略)。

十1274 [圖] 「(略)、我は糧食殆ど
盡きたり。今は轡にあぎとふ鮒の如
し。」

十1278 [圖] 「事の成否は今より豫
測すべからず、(略)。」

十1311 [圖] 「良人今獨り身を全う
して、祖先以來の勇名を辱しめ給ふ
か。」

十1352 (略)、此ノ改築ヲ計畫シ、
今新校舍ノ出來上ツタノハ眞ニ慶賀
スベキ事デアル。

十1362 [圖] 今本町民諸君ノ熱心ニヨ
リ、コ、ニ新校舍ノ落成ヲ見ルニ至
レルハ、(略)。

十13710 [圖] 「汝多年嘉明と不和なり
と聞く。今之を推舉するは如何に。」

十1431 [圖] 今より百三十餘年前安永
八年櫻島の破裂せし時は、(略)。

十1449 [圖] 養蠶も亦早くより開け
て、今尚益々盛なり。

十1502 [圖] 千里比隣の今の世は
有無互に相通じ、世界各國皆市場。
十1801 [圖] (略)、コロンブスは(略)
サンサルバドルと命名せり。是今の
西印度諸島の一なり。

十1852 (略)、今の今まで誰一人も
氣附かなかつた。

十1852 (略)、今の今まで誰一人も
氣附かなかつた。

十二86② 〔略〕、東京高輪泉岳寺の墓前には今尚香花の絶ゆることなし。

十二96⑦ 〔略〕「汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。」

十二109⑦ 天皇陛下を大元帥と仰ぎ奉り、國民皆兵なる今の御代、〔略〕。

十二109⑩ 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ〔略〕。今謹みて其の大意を述べん。

十二110⑤ 〔略〕、復古の政と共に陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御論しあり、〔略〕。

いま「居間」(名) 2 居間
十二72⑧ 或夜小僧住持の居間に來りて、〔略〕。

十二89⑤ 凡そ家内の掃除は座敷・居間・臺所のみならず、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。

いま「今」(副) 9 イマ 今
四11③ 一本ハキザハシデ、〔略〕。〔略〕。今一本ノ木ハシブカキデスカラ、〔略〕。

四55④ 〔略〕、イマ一足デヲカヘ上ラウトイフ所デ、〔略〕。

七7⑤ 〔略〕、今一度天顔ヲヲガミテマキリタシ。」

七90⑥ 〔略〕「残念ナリ、今一度。」ト、中佐ハマタモ船内ヲカケメグレリ。

七91② 〔略〕「今一度。」ト、中佐ハ三タビタヅネマハレリ。

八53① 他ノ二人ハ〔略〕、恐レテ出デズ。今シバシタメラハバ事アラハレントス。

八67⑧ 〔略〕、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

九58③ 口にうましとて多く食ふことなかれ。〔略〕。今一口といふ所に止めよ。

十一47④ 〔略〕馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。いまえもんひすずきいまえもん

いまかいまかと「今今」(副) 1 今か
十一14⑨ 〔略〕舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

いまさら「今更」(副) 2 今更
八38⑦ 〔略〕、此ノモノノナカリシ昔ヲ思ヒ出ストキハ、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル、ナリ。

九58⑩ 酒・煙草の害は今更に言ふまでもなし。

いまし・む「戒」(下二) 4 イマシム
いましむ 戒む『一メモーメモ』

六84① 〔略〕、いつはりいはぬが子供らの學びのはじめぞ、つゝしめよ、いましめよ。

七4⑧ 〔略〕、コレホドノワケノ分ヲヌコトハアルマジ。ヨク／＼考へ見ヨ。〔略〕。トテ、泣ク／＼イマ

シメタリ。

十二33① 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、〔略〕。

十二96⑥ 直ちに其の機を斷ち、孟子を戒めて曰く、「汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。」と。

いましめたまふ「戒給」(四) 2 戒め給ふ『一フ』

十二111⑩ 平生より此の覺悟なきものは、時に臨みて或は不覺の名を取ることあらんと戒め給ふ。

十二114⑦ 〔略〕、士氣も兵氣も衰ふべければ、ゆめ此の訓を忘るなど、ねんごろに戒め給ふ。

いまじゆく「今宿」(地名) 1 今宿
十一15② 〔略〕、播磨の今宿といふ所より山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

いまだ「未」(副) 13 イマダ いまだ未ダ 未だ
八38⑨ 諸子ハイマダマツチノ製造場ヲ見タルコトナカルベシ。

八50⑥ 鎌足早くヨリ其ノ人トナリヲシタヒ奉リ、〔略〕ト思ヒシガ、未ダ近ヅキ奉ル折ヲ得ザリキ。

十一13⑩ 〔略〕、早くも義兵を擧げしが、事の未だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、

〔略〕。
十一18③ 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、〔略〕。

十一41⑨ 〔略〕 いまだ幼ければ、敵も心をゆるすべく、〔略〕。

十一72② 〔略〕「君は〔略〕、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。」

十一74⑦ 然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。

十一100⑦ 〔略〕、殆ど無盡藏に候へども、未だ盛に採掘に着手せらるゝには至らず候。

十一115⑦ 〔略〕、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

十二65⑤ 獨逸帝國は創建以來年尚淺ければ、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは〔略〕。

十二77⑧ 〔略〕更に西へ向つて航行せり。是より先は未だ航行せしことなき大洋なれば、〔略〕。

十二86⑥ 薩摩の士に喜劍といふ人あり、未だ良雄と相識らざりしが、〔略〕。

十二101⑥ 他國に行きて、〔略〕等を見れば、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

いまに「今」(副) 8 イマニ 今に今に

一36⑤ カミナリガナリダシマシタ。イマニユフダチガキマス。

三18④ サヘヅルダケサヘヅルト、

十二四三 質素を旨とせざればいつ

しか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、
心も無下に賤しくなりて、節操も武
勇も忘れ果てて、(略)。

いやしむ 卑 (四) 2 イヤシム 賤
しむ (一ム)

十一五四 他人ノ歡心ヲ買ハントシ
テヘツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイ
ヤシムベシ。

十二九二 儉約を守るは大切なれど
も、人情にそむき、義理に外れても、
費用を惜しむは賤しむべき事なり。

いよ 伊予 (地名) 1 伊豫

十七三 道後は四國の伊豫にあり。

いよいよ 愈 (副) 21 イヨイヨ イ
ヨく いよいよ いよく

五十一 右からも、左からも、
なかまがあつまつて來て、いよく
にぎやかになりました。

六五 謙信は勝氣な人で、いよいよ
いくさがはげしくなると、じつとし
ては居られない。

七九二 敵ノ砲臺ヨリハ砲
丸ヲアビセカクルコトイよく盛ナ
リ。

八七 御製を思ひ出で
て、我が國體のたふとさ、いよいよ
身にしみておぼゆ。

八五二 アラカジメ其ノ手ハ
ズラ定メタリ。サテイよく其ノ日
トナレリ。

八九五 海陸運輸の便益、開
け、産業の發達は今後いよいよ著し
からん。

九四 鐵道を敷き、其の上を
走る汽車を造つた。いよく鐵道が
出來て、汽車の運轉をして見る日に
なると、(略)。

九四五 出立したり。さてい
よく沙漠に入りしが、(略)。

十二六 拜啓、いよく來月一日
より御入營、軍務に服せられ候事、
(略)。

十四三 然レドモ少シモ其ノ志ヲタ
ワメズ、イよく勇氣ヲフルヒテ考
案ヲ續ケ、(略)。

十一一 坂路の左右すでに
櫻多し。行く吉野宮に參拜し、
(略)眺望いよく開けて、満目總
べて花なり。

十一三六 かねて御承知の
通りに候處、いよく實地見聞致候
へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。

十一三六 今や西部縱貫鐵道も全
部開通致候事とて、交通の利便いよ
く開け、(略)。

十一四四 あくる年は六郎の七回忌
なり。いよく忌日になりて、熊王
今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心
に思ひ定めたるに、(略)。

十一四七 昔トルコの或大將がアラビ
ヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ
約束をした。さていよく馬を受取
る段になつて、(略)。

十一六三 かねて御賛同下され候
故近藤大尉記念碑、いよく出來上
り候については、(略)。

十一七七 上に隨つて、瀧はいよ
く小、境は益々靜かなり。

十一八五 又更ニ他ノ機械ニ
移シ、イヨイヨ延シテ、イよく細
クシ、(略)。

十一八五 又更ニ他ノ機械ニ
移シ、イヨイヨ延シテ、イよく細
クシ、(略)。

十一八五 又更ニ他ノ機械ニ
移シ、イヨイヨ延シテ、イよく細
クシ、(略)。

十一八五 又更ニ他ノ機械ニ
移シ、イヨイヨ延シテ、イよく細
クシ、(略)。

十一八五 又更ニ他ノ機械ニ
移シ、イヨイヨ延シテ、イよく細
クシ、(略)。

二八五 「オキクサンデスカ。ヨ
クイラツシヤイマシタ。」

四五九 アニ神サマガタノオトモ
ヲシテ、フクロヲカツイデイラ
ツシヤツタノデ、オソクオナリ
ニナツタノデス。

五一五 大神がはたをおらせて
いらつしやる所へおなげ入れになり
ました。

五十四 ナラノ大ブツツイツテ (略)。
スワツテイラツシヤル高サガ五丈三
尺五寸、(略)。

五三 あさつては八まんさまのお
まつりですから、朝早くからあそび
にいらつしやい。(略)。あねより

六五二 秀吉は (略)、「日本國には
天皇へいかがいらつしやるではない
か。」と、(略)。

いり 〆おんなかまいりいたす・でいり
ぐち・でいりす・なかまいり・ねんい
り・ひのいり

いりきたる 〆入來 (四) 2 入來ル
入り來る 〆一レ

十七六 胃ハロヨリ入來レル食物ヲ
コナシ、(略)。

十一八 他群の蜂、我が群
中に入り來れば、直ちに之をさし殺
す。

いりくち 〆入口 (名) 3 入口

七三六 新シイ勸工場が出來タ。
マツ入口ヲハイルト、(略)。

いりくち 〆入口 (名) 3 入口

七三六 新シイ勸工場が出來タ。
マツ入口ヲハイルト、(略)。

いりくち 〆入口 (名) 3 入口

七三六 新シイ勸工場が出來タ。
マツ入口ヲハイルト、(略)。

七三六 新シイ勸工場が出來タ。
マツ入口ヲハイルト、(略)。

七50 4 図「松村さん、郵便。」とよびて、配達夫は入口に立ちたり。
 十一 96 10 図「大泊は樺太島の入口とも申すべく、全島第一の良港に候。いりたまう」「入給」(四) 2 入り給フ入り給ふ「一ハーフ」
 八30 6 図「工驚キ、(略)ニゲ出セバ、川成(略)、「カク我ノ居ルニ、何ユエニ入り給ハザルカ。」トイフ。九5 8 図(略)、「ここにありし賊ども(略)、「尊をいざなひ、尊の野に入り給ふを見て、火を放ちて焼き奉らんとせり。
 いりひ「入日」(名) 1 入日
 八60 1 図「まづ渡り見ん瀬田の橋、かゞやく入日美しや。
 いりみだる「入乱」(下二) 1 入亂る「一レ」
 十一 38 9 候「(略)榕樹も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは見事に御座候。
 いりみだ・れる「入乱」(下二) 1 入亂れる「一レ」
 十66 9 他のボートを見れば、今新に鯨を追ふものもあり、鰯を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。あちらこちら入亂れて戦場のやうである。
 *いりよう 凸にゆうよう
 いりよく「威力」(名) 1 威力
 十二 103 8 図 市町村長・議員等を選

舉するには(略)「私交上の關係をさしはさむべからず。まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、(略)。
 いる「入」(四・五) 50 イル いる
 入ル 入る 入「一ツ・一ラ・一リ・一ル・一ル」ハおそれいる・おちいる・おどろきいる・くぐりいる・せめいる
 三44 4 (略)、「ユフ日ノ入ル方ガ西デス。
 五52 2 ヘチマハワカイウチハタベラレルガ、實ガイルトタベラレナイ。
 六43 1 病ハ口ヨリ入ル。
 六45 4 (略)、「ほうこうの方には身が入りません、(略)。
 六85 2 図「(略)、「病は口より入るといふ。飲物・食物氣を附けよ、心せよ。
 七11 2 図 稻は實がいる、(略)。
 七56 4 図 勸工場ニ入りタルコ、チス。
 七56 5 図 仁王門ヲ入りテ、觀音堂ヲ拜シ、(略)。
 八4 6 図 橋を渡りて神苑に入る。
 八5 7 図 板垣御門を入りて、玉垣御門の前にて拜し奉る。
 八28 7 図「入りテ見給へ。」トイフニ、何心ナクエンニ上リテ、南ノ口ヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト閉ヅ。
 八28 9 図(略)、「何心ナクエンニ上リテ、南ノ口ヨリ入ラントスレバ、其

ノ戸ハタト閉ヅ。
 八29 2 図 驚キテ西ノ口ヨリ入ラントスレバ、其ノ戸マタハタト閉ヂテ、(略)。
 八29 5 図 幾度カマハリタレドモ、入ルコトヲ得ズ、(略)。
 八30 2 図 工、川成ヲ音ナヘバ、「イヤ、コナタヘ。」トイフ。サラバトテ入ラントスルニ、(略)。
 八40 1 図(略)、「一箱ノマツチガ我等ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手ヲ要スルカラ知ラズ。
 九16 1 図 江戸川ハ南流シテ海ニ入ル。
 九16 9 図 本流ハ下リテ、(略)「太平洋ニ入ル。
 九45 7 図 さていよく沙漠に入りしが、(略)。
 九58 1 図「病は口より入る。」
 九81 1 図(略)、「詩を作りて天皇の御感に入り、御衣を賜はりて(略)。
 九94 2 図(略)、「表門を入れれば五重塔あり。
 十二 5 図 近江一國の川流はほとんど全く此の湖水に入り、(略)。
 十二 9 図 日本一の長流を信濃川とす(略)、「越後の新潟に至りて海に入る。
 十30 10 図 原産地ハアメリカニシテ、(略)、「ルソンヨリ支那ニ入りシガ、(略)。
 十93 9 図 京都ヨリ汽車ニテ奈良ニ入ルニハ奈良線ニヨルベク、(略)。

十99 3 図(略)、「仁王門ヲ入レバ百間ニ餘ル長廊アリ。
 十一 2 4 図 吉野の町に入れば藏王堂あり。
 十一 3 7 図「あへらじとらねて思へばあづさ弓 なき數に在る名をぞとどむる。
 十一 6 7 図 秋・冬の花少き季節に入リても、食物に不足することなきは、(略)。
 十一 7 1 図(略)、「検査掛は内に入るを許さず、(略)。
 十一 7 1 図(略)、「強ひて入らんとすれば立ちどころにさし殺す。
 十一 7 10 図 此の時箱・櫓等を(略)置けば、分離したる一群は直ちに其の中に入る。
 十一 15 5 図(略)、「主上はや院庄に入らせ給ひぬと申す。
 十一 38 9 候「(略)榕樹も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは(略)。
 十一 43 6 図(略)、「佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、(略)。
 十一 44 9 図 夜に入りて、討つべきは今なりと、心を取直せども、(略)。
 十一 45 10 図(略)、「さて往生院に入りて僧となり、(略)。
 十一 75 7 図 我が國には數多の瀑布あり、古來多く詩歌に入り、畫圖に上る。

十一83 10 図 紡績工場ニ入りテ見ヨ。
 十一85 6 図 此ノ流ハ（略）親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入ル。
 十一97 3 圖 是より一條の大道遠く北へ通じてロシア領に入候。
 十一103 2 図 孔明、劉備ニ事へ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、（略）。
 十二7 6 図 夜に入りて、（略）砲火をくゞつて敵艦にせまり、（略）。
 十二19 1 図 （略）、又航海中の船は早く港に入りて難を避くることを得るなり。
 十二29 4 図 （略）、次いで城に入らんとするに、不幸發見せられて、（略）。
 十二48 4 圖 樺太・臺灣太古より 松島等の入らぬ林あり。
 十二58 10 図 南滿洲鐵道によりて、（略）二週間に於て歐羅巴の中央に入るべし。
 十二68 5 図 （略）、冬日（略）、水を尋ねて低地に下り、春を待ちて再び山谷に入る。
 十二91 10 図 日々の暮しは「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。
 いる「要」(五) 3 イル いる 「一ラ・ーリ」
 二44 2 圖 「タルマサンニハ、耳ハイリマセン。」
 八47 4 圖 又ことばも電報だから、そんなにていねいに書くことはいらない。」

八48 2 圖 又ヤケナイといへば、うちの焼けなかつたことも分るから、ウチもいらぬ。
 いる「居」(上一) 47 キル ゐる
 居ル 居る 《キ・キル・キレ》 ぐあやつりいる・いいいる・かんがえいる・ききいる・しりいる・つくろいいる・なきいる・なぐさめいる・なげきいる
 一20 2 トンボガトンデキマス。
 一20 4 セミガナイデキマス。
 一24 3 オヤドリガコココトヨンデキマス。
 一24 6 ヒヨコガビヨビヨビヨトナイデキマス。
 一26 3 キノエダニカタツムリガキマス。
 一27 3 ネエサンガエヲミテキマス。
 一27 6 ニイサンガジヲカイテキマス。
 一32 5 アチラデモコチラデモタノクサヲトツテキマス。
 一33 4 オモシロイウタヲウタツテキマス。
 一41 1 アカイノヤシロイノヤイロイロマジツテキマス。
 一42 5 ヒゴヒガ（略）、四ヒキキマス。
 二2 7 ミテキルウチニダンダンノボツテキマス。
 二7 6 オハナトオキクガアソンデキマス。

二12 3 圖 「略、コノ川ニコヒガキマスカ。」
 二12 6 圖 「コンナ小サナ川ニハコヒハキマセン。」
 二15 2 圖 （略、ミヅノナカニモサカナヲクハヘタガキマス。
 二15 7 圖 （略、クハヘテキタサカナハミヅノナカヘオチマシタ。
 二20 4 ワタクシノキモノニハ、ホソイハリガ一パイハエテキマス。
 二20 5 イマハ木ノ上ニキマシガ、（略）。
 二21 3 ワタクシノカラダハ、日ニヤケタヤウナイロヲシテキマス。
 二22 4 圖 ワタクシハオニニナツテ、ココニタツテキマス。
 二23 4 圖 「略、イツシヨニキテハイクマセン。」
 二24 5 圖 「略、アノ木ノ下ニタケヲサンガキマス。」
 二25 5 オバアサンハ火ヲタイテ、ユフハンノシタクヲシテキマス。
 二25 7 オダイサンハウマニカヒバラヤツテキマス。
 二26 2 オカアサンハキドバタデ水ヲクンデキマス。
 二28 3 コクキハヒラヒラトカゼニウゴイテキマス。
 二29 3 ヲトコノ子モ、ランナノ子

モ、オモシロサウニアソンデキマス。
 二29 7 アソコデモ、ココデモ、（略）アイサツシテキマス。
 二33 3 圖 （略、タヤハタケヲタクサンモツテキタ人ガアリマシタ。
 二33 7 圖 （略、トリヤケモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。
 二43 6 圖 コハサウナ目ヲシテ、ニランデキルデハアリマセンカ。」
 二46 2 アノ太イ木ハ（略、ツボミガタクサンツイテキマス。
 二46 5 圖 （略、アノオヤネニハウメバチノ大キナモンガツイテキマス。
 二48 3 ワタクシハ本ヲ五サツモツテキマス。
 二51 1 ヨイオダイサンハ白イ犬ヲ一ピキカツテ、子ドモノヤウニカハイガツテキマシタ。
 二63 2 圖 （略）オダイサンハコノハナシヲキイテ、ノコツテキタハヒヲカキアツメテ、（略）。
 二63 5 ヨクノフカイオダイサンハ（略）、トノサマノオカヘリヲマツテキマシタ。
 二3 5 圖 （略、マサヲガ本ヲヨンデキマシタ。
 二4 5 圖 「略、ノニモ山ニモワタクシドモノナカマガタク

サンサイデ 中マス。

三54 〔略〕、ソナニウチニ
バカリ 中ナイデ、チツトソトヘ
デテ、〔略〕。〕

三67 〔略〕三人 デノハラニア
ソソデ 中マス。

三73 ノハラ ニハ、〔略〕、イロイ
ロナハナガサイテ 中マス。

三106 一バン上ノ ニイサンハ
イマヘイタイニイツテ 中マス。

三115 オトウトハ 〔略〕、イツモ
ブチトアソソデ 中マス。

三128 にはのまつの木の上
へ月がでて あります。〔ひらがな
のドリル〕

三131 にはとりはとやでねて
あります。〔ひらがなのドリル〕

三132 いぬはおきて、ないてあ
ます。〔ひらがなのドリル〕

三144 ソレデ 〔略〕。ト、イバツ
テ 中マシタ。

三162 ミテ 中タ人ハミンナ一
ドニテヲタイテホメマシタ。

三174 アタカイカゼガソヨソ
ヨトムギノホノ上ヲフイテ
中マス。

三175 ヒバリガオモシロサウニ
サヘツツテ 中マス。

三197 〔略〕、子ヒバリハスノ中
デ、ドンナニマツテ 中ルコト
デセウ。

三225 うごかずにあります、し

んだのではありません。

三244 牛のつめは二つにわれ
てありますが、うまのはわれて
ありません。

三245 牛のつめは二つにわれ
てありますが、うまのはわれて
ありません。

三317 ドコデモ 田ウエガハジマ
ツテ 中マス。

三321 〔略〕、田ヲカキナラシテ
中ル人モアリマス。

三323 ナハシロデナヘヲトツテ
中ル人モアリマス。

三331 子ドモガ 〔略〕、ナヘヲ田
ノ中ヘナゲスレテ 中マス。

三332 ナヘヲウエテ 中ル女ハ、
〔略〕、コエヲソロヘテ、ウタツ
テ 中マス。

三334 ナヘヲウエテ 中ル女ハ、
〔略〕、コエヲソロヘテ、ウタツ
テ 中マス。

三361 〔略〕、ほたるはやはり中
に あります。

三362 けれども光つては ありませ
ん。

三393 〔略〕、目はいつもはつき
りしてゐて、よく見えます。

三404 うが川の中でさかな
をとつて ありました。

三408 見てゐるうちにまた一
びきくはへて、ういて 出ます。

三413 それをからすが木のう

から見てゐて、〔略〕。

三457 〔略〕一人の男が 〔略〕、
ながいさををふりまはして あり
ました。

三461 〔略〕「おい、なにをしてゐる
のだ。」

三474 かへるはをかに ありと
きには、〔略〕、手をついてすわ
つて あります。

三476 かへるは 〔略〕、手をつい
てすわつて あります。

三482 〔略〕、ばくつとくつて、へ
いきなかなほをして あります。

三495 水の上で足をのばして、
ぼんやりうかんで あります。

三497 人や犬などは水の中
にながく 居ることは できません。

三581 私がキヨネンマデキテ
中タワタイレハ、〔略〕。

三586 うみの水が青青として、
どこまでも つづいて あります。

三587 とほくの方では青ぞら
といつしよになつて ありますやう
に見えます。

三594 〔略〕、舟がたくさんおき
へ出て あります。

三595 ほをかけて ありますのもあ
り、かけて ありますのも ありま
す。

三596 ほをかけて ありますのもあ

り、かけて ありますのも ありま
す。

三602 左の方にはなればなれ
になつて ありますのは、魚をつつ
て あります舟です。

三603 左の方にはなればなれ
になつて ありますのは、魚をつつ
て あります舟です。

三604 右の方に五六そうかた
まつて ありますのは、今あみをお
ろして ありますのです。

三605 右の方に五六そうかた
まつて ありますのは、今あみをお
ろして ありますのです。

三625 〔略〕、さざえのやうに、
ふかいつぽのかたちになつて
あります。

三635 そのうづまきに、右から
左へまはつて ありますのと、〔略〕
と、ふたいろ あります。

三637 そのうづまきに、〔略〕と、
左から右へまはつて ありますの
と、ふたいろ あります。

三658 〔略〕、子ドモガ大ゼイデ
カメヲツカマヘテ、オモチヤニ
シテ 中マス。

三665 〔略〕、ウラシマガウミベ
デツリヲシテ 中ルト、大キナ
カメガ出デキテ、〔略〕。

三681 リユウグウニハオトヒメ
トイフキレイナオヒメサマガ
居テ、〔略〕。

三68 ウラシマハ(略)、ウチヘ
カヘルノモワスレテヰマシタ。
三72 (略)、トモダチモミンナ
ヰナクナツテ、知ツテヰルモノ
ハ一人モアリマセン。
三73 (略)、トモダチモミンナ
ヰナクナツテ、知ツテヰルモノ
ハ一人モアリマセン。
四55 (略)「ああ、あれですか。私
はまるでちがつた方を見てあ
ました。」
四61 (略)「うちのまへの川が
(略)、とほくの方へながれて
あます。
四62 (略)あの川むかふの木の
しげつてゐるのが、八まんさま
のもりです。」
四64 (略)「それでは今くるまのと
ほつてゐる長いはしが、(略)。」
四68 (略)今あのはしの上を人
がいくたりとほつてあますか。」
四75 (略)「くるまにのつてゐる
人を入れると、六人でせう。」
四81 (略)二人はまだ方方がめ
て、あそんでゐましたが、(略)。
四91 (略)日ノマルノコクキガアサ
日ニカガヤイテヰルノハ、イ
サマシイデハアリマセンカ。
四107 (略)今年ハエダガヲレルホ
ドタクサンナツテヰマス。
四155 (略)大ぜいのものが下にま
ちかまへてゐて、(略)けものを、

弓でいとつたのです。
四163 (略)ゐのししが、上の方
からよりともの居る方へか
けおりて來ました。
四171 (略)この時よりとものそば
に居た、(略)といふぶしが、
(略)。
四184 (略)ただつねはしつかりとを
をにぎつて、のつてあます。
四195 (略)「ただつねはすぐに
そばのたふれてゐた木の上
へとびのきました。
四204 (略)「次郎、オマヘハ手ノ
ユビノ名ヲ知ツテヰマスカ。」
四235 (略)オマツガオトミトアキナ
ヒノアソビヲシテヰマス。
四272 (略)くさのかげにないてゐ
た虫も(略)。
四275 (略)一ぴきのきつねがさきの
こつてゐるのぎくを見つけて、
(略)。
四286 (略)「(略)、私たちは枯れた
やうに見えても、ねは生きて
あます。
四288 (略)土の中で、しづかにら
い年のほるをまつてゐるの
です。
四302 (略)三郎のうちでは(略)、み
んなあつまつて、色々はなし
をしてあます。
四323 (略)「知つてあますとも。
四366 (略)皆サンノ知ツテヰルダケ

イツテゴランナサイ。
四382 (略)アル日タヒヒラメサバ
タコナドガオヨイデヰルト、
(略)。
四392 (略)ボクラハカウイフカ
タイヨロヒヲキテヰルカラ、
(略)。
四394 (略)「(略)、コノ中ヘハイッ
テ、内カラトヲシメテヰサヘ
スレバ、アンシンナモノデス。」
四406 (略)「(略)トイツテ、スマシテ
ヰマシタ。
四411 (略)「フタヲアケテ、外ヲ
見ルト、何ダカヤウスガチ
ガツテヰマス。
四421 (略)「(略)をばさんからいたいた
おとしだまにのしがついてゐ
ました。
四458 (略)皆さんはとけいの見方
を知つてあますか。
四481 (略)あなたがたは何じかんが
くかうに居ますか。
四497 (略)われらがねどこで、や
すんで居るまも、(略)。
四515 (略)今ハ死ンデヰマスガ、モ
トハ海ノ中デオヨイデヰマ
シタ。
四516 (略)「(略)、モトハ海ノ中デ
オヨイデヰマシタ。
四516 (略)海ニヰタ時ヨリモ、今
ハスコシ長イ名ヲモツテヰマ
ス。

四518 (略)「(略)、今ハスコシ長イ名
ヲモツテヰマス。
四523 (略)島ノ上ニ居タ白ウサギ
ガ、(略)、海ヲワタルクフウヲ
カンガヘテヰマシタ。
四526 (略)島ノ上ニ居タ白ウサギ
ガ、(略)、海ヲワタルクフウヲ
カンガヘテヰマシタ。
四527 (略)アル日ハマベヘ出テ見
ルト、ワニザメガ居マシタカ
ラ、(略)。
四563 (略)「ワニザメハ(略)、大ソウ
オコツテ、一バンシマヒニ居タ
ノガ、(略)ムシリトツテシマヒ
マシタ。
四567 (略)白ウサギハ(略)、ハマベニ
タツテ、ナイテヰマシタ。
四575 (略)「ソレナラ海ノ水ヲア
ビテ、ネテヰルガヨイ。」
四582 (略)「マヘヨリモカヘッ
テイタクナツテ、ナホナホクル
シンデヰマシタ。
四632 (略)ゆふべは(略)、しづかな
ばんでしたから、少しも知らず
にゐました。
四635 (略)やぶの竹は(略)さがが
土までとどいてゐるのもあ
ります。
四642 (略)犬はよるこんで、雪の中
ををとびあるいてあます。
四644 (略)みちをとほる人は、(略)
雪をたたきおとしながらあるい

てゐます。

四六五 一 うぐひすがないてゐます。

四六四 今あのうめの木の枝から枝へとんでゐます。

四六七 三郎ノ母ハ四五日マヘカラ風ヲヒイテネテヅマス。

四六七 今モ外カラカヘツテ、スグココヘ來テヅル所デス。

四七四 (略) げんじはを、へいけは海で、むかひあつてゐた時、(略)。

四七二 一人のくわんぢよがその下に立つて、さしまねいてゐます。

四七七 扇は風にふかれて、ぐるぐるまはつてゐます。

四七九 二 四 二 そらをとんでゐる鳥でも、(略)。

四八〇 一 よ一は(略)、もしこれをいそこなつたら、生きてはゐまいとかくごをきめて、(略)。

五七一 (略)、ワルモノドモハ目ヲアケテヅルコトガデキマセン。

五八六 そらからふつて、山の木のはの上に休んでゐましたが、(略)。

五九五 (略)。何だか目がまはつて、しばらくの間は何も知らずにゐました。

五九七 きがついて見ると、人が二三人立つて、「見ることなきた。」といつて、ながめてゐました。

五一〇 魚はうれしさうにういたりし

づんだりして、およいでゐました。

五一二 三 (略)、はしがかけてあつて、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

五二六 (略)、兩がはいへがたちならんで、人がいそがしさうにあるいてゐました。

五二八 (略)、何かと思つたら、にもつをつんだ船が通つてゐたのです。

五三〇 (略)、大ブツサマノマヘニ立つテヅル人ガ、コンナニ小サク見えマス。

五三五 池ノ中デコヒガオヨイデヅルノヲ見タコトガアリマセウ。

五三六 大キナコヒガ(略)オヨイデヅルノハ、マコトニミゴトナモノデス。

五三六 一 鯉ハ昔カラ川魚ノ長トイハレテヅマス。

五三六 三 ウロコハカラヲフイタヤウニカサナリ合ツテヅテ、(略)。

五三六 五 (略)ウロコガ三十六枚ヅツナランデヅマス。

五三六 七 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、皆金色ヲオビテヅマス。

五三七 蟲ナダガ水ノ上ヲトンデヅルト、ハネ上ツテツテ食ヒマス。

五三九 母は(略)、さしみをこしらへてゐます。

五四二 ぬす人はきんじよに住んでゐるゐざりだといふうはさがあるの

で、(略)。

五四二 二 四 「これは私が毎日使つてゐた釜でございます。」

五四四 四 二 その釜は私が前から持つてゐたのでございます。」

五二五 八 役人はしばらく考へてゐましたが、(略)。

五三二 大ゼイノ女ガ茶ヲツンデヅマス。

五三三 七 サクラノ花ノ下ニトンデヅル白イ蝶ヲ見ルト、(略)。

五三四 一 (略)、ナノ島ニアソンデヅル蝶ヲ見ルト、(略)。

五三四 四 又羽ヲタハンデ、シヅカニ木ノ葉ノ上ニネムツタヤウニシテヅルノヲ見ルト、(略)。

五三四 五 (略)、ドンナユメヲ見テヅルノカト思ヒマス。

五三九 四 (略)、大そうこみ合つてゐます。

五三九 八 まだきつぷを買つてゐる人もあります。

五四〇 二 かいさつ口では切符をしらべてゐます。

五四四 (略)、これからの人の切符を切つてゐるのです。

五四六 (略)、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。

五四二 二 マドカラ外ヲ見テヅルト、山モ川モ野原モ林モ後ノ方ヘトンデ行クヤウニ見エマス。

五四五 田デハタライテヅル人モ、道

ヲ通ツテヅル人モ、(略)、スグ後ニナツテシマヒマス。

五四六 田デハタライテヅル人モ、道ヲ通ツテヅル人モ、(略)。

五四二 走ツテヅル汽車ガスレチガフ時ニハ、(略)。

五四三 (略)、向フノ汽車ニノツテヅル人ノカホハヨク見エマセン。

五四三 (略) 外ヲ見ルト、汽車ハハシノ上ヲ通ツテヅルシタ。

五四四 文太郎ハヨロコンデ、「海ダ、海ダ。」トイツテヅルウチニ、又暗クナツテ、(略)。

五四五 汽車ガ(略)ヘツイタ時、文太郎ハモツトノツテヅルタイト思ヒマシタ。

五四六 はじめのうちは遠くの方にきこえてゐましたが、だん／＼近くなつて、(略)。

五四八 二 四 二 かみなりの鳴る時には、そんな所にゐてはあぶない。」

五四八 (略)、顔を上げて、そのあたりを見まはすと、かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてゐました。

五四八 二 四 二 もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」

五四二 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエテヅルノガアル。

五四六 二 四 「私ハカラダガネズミニニテヅルカラ、ケモノノ仲間ダ。」

五四七 (略)、ヒルノ間ハ木ノウロヤ

穴ノ中ニカクレテヰテ、夜ニナルト
出テ（略）。
五五八 コレハ大昔ハエテヰタ木ガ土
ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物
デ、（略）。
五五九 （略）、石ノヤウニカタクナツ
テヰマスカラ、石炭トイヒマス。
五六〇 （略）、ワキ出タマノハニゴ
ツテヰマスガ、シアゲルト、スキト
ホツタ油ニナルノデス。
五六〇 八 あれ、松蟲が鳴いてゐる。
五六二 八 「ねえさんの所からお手紙
が来てゐます。
五六五 八 そのおしまひのあいてゐ
る所へ、『（略）』と書きたして下さ
い。
五六七 八 道ノ兩ガハニハ、（略）ナドガ
店ヲナラベテヰル。
五六八 八 子ドモハフダンヨリハ美シイ
着物ヲ着テアソンデヰル。
五六八 八 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ
テヰル。
五六九 八 又日本ヘイガロシヤヘイトタ
、カツテヰルエモアル。
五七〇 八 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
マツテヰル。
五七〇 八 角ノアルケモノモタクサン
知ツテヰルガ、（略）。
五七二 八 （略）、コンナリツパナ角ヲ
モツテヰルモノハナイヤウダ。
五七四 八 へいけのぐんぜいがふくはら
のしろを守つてゐる。

五七四 六 （略）から（略）まで、人や
馬でふさがつてゐる。
五七四 七 又海には一面にいくさ船がな
らんでゐて、（略）。
五七五 八 手にはかりに使ふ弓矢を持つ
てゐる。
五七九 一 八 「（略）つめがわれてゐると
ゐないだけのちがひだ。
五七九 二 八 「（略）つめがわれてゐると
ゐないだけのちがひだ。
六一三 八 わが日本は（略）。 四方は海
にとりまかれてゐる。
六一四 八 海岸には（略）、平たい砂原
になつてゐる所が多い。
六一八 八 （略）、高い松はしぜんにおも
しろい枝ふりになつてゐる。
六二四 八 どの山にも木がよくしげつて
ゐる。
六二六 八 松・杉・ひのきなどが一面に
はえてゐるのは目がさめるやうな心
持がする。
六三〇 八 （略）橋、橋の下に立つてつ
りする人など、それ／＼川の景色を
そへてゐる。
六三二 八 たんぼにはいねがよくみのつ
て、風のふくたびに黄色な波が立つ
てゐます。
六四〇 八 （略）、道ばたにはきれいな草
花が咲きみだれてゐます。
六四一 八 （略）、稲がよくじゆくして、
重さうにほをたれてゐます。
六四五 八 （略）、人が大ぜい出て、稲を

かつてゐます。
六四七 八 その時そこに居た一人の子ど
もが、『（略）』といつて、（略）。
六四七 八 （略）大きな水がめがあつて、
雨水が一ぱいたまつてゐました。
六四八 八 一人の子どもが水がめのふち
へ上つて、遊んでゐるうちにふみは
づして、（略）。
六四八 八 モシセイ出シテ使ツテクレ
サヘスレバ、鐵ハイツデモ光ツテヰ
マス。
六四九 八 銅ハ人ニ使ハレテヰテモ、
時々青イ物ヲ出シマセウ。
六五〇 八 （略）、二人が店のるすをして
ゐると、一人の男の子がふでを買ひ
に來た。
六五二 八 「それでもだんなが居ない
から、（略）、誰にも知れはしない。」
六五二 八 「（略）、だまつてゐれば、
誰にも知れはしない。」
六五二 八 「（略）」といつても、長松は
まだ笑つてゐた。
六五三 八 朝おきて見ると、池に氷がは
つてゐた。
六五三 八 朝おきて見ると、雪が五六寸も
つてゐた。
六五四 八 （略）、耳をすまして聞いてゐ
ました。
六五五 八 （略）武士になりたいと思つ
てゐたのです。
六五五 八 （略）りつばな武士になりた
いと思つてゐましたから、ほうこう

の方には身が入りません、（略）。
六五六 八 （略）、はや、馬を乗りまはし
てゐる者があります。
六五七 八 秀吉が（略）、敵を攻めに行
つてゐた間の事でしたが、（略）。
六五八 八 ある時謙信が山の上に陣取つ
てゐると、信玄は（略）、はさみう
ちにしようとした。
六五八 八 武田信玄の國は山國で、塩が
ない。塩はとなりの國から買つてゐ
た。
六五八 八 「われ／＼はたがひにいく
さをしてゐるけれども、（略）。
六六〇 八 八つばかりの女の子、（略）、
ひとりしく／＼泣いてゐる。
六六〇 八 八 「なんでそんなに泣いて
ゐる。
六六四 八 日本ニ居ルケモノノ中デ一番
強イノハ熊デス。
六六五 八 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、先生に何か聞かれて
も、答へることが出来ないで、（略）。
六六五 八 ちゃんとしせいをよくして、
氣を付けてゐて、何を聞かれても、
はつきりと答へる子供もございまし
た。
六七一 八 よくおちついてゐて、少しも
書きそこなひなどをしない子供もこ
ざいました。
六七二 八 （略）、顔のちがふやうに、せ
いしつも色々かはつてゐます。
六七三 八 （略）悪い子供は、おとなにな

つてから、大ていつまらない人になつてゐます。

六四六 男や女や年よりや子供も大ぜい集つてゐますが、(略)。

六四七 (略)、新しいしるしばんてんを着てゐる大工が一番目立ちます。

六四八 廣い港ガ船デーパーイニナツテ
六四九 小サナ和船モアチラコチララ
コギマハツテキル。

六五〇 (略) 汽船ハシキリニキテキ
ヲ鳴ラシテキル。

六五一 ハトバノ右ニ着イテキル汽船
ハ今荷物ヲオロシテキル。

六五二 ハトバノ右ニ着イテキル汽船
ハ今荷物ヲオロシテキル。

六五三 左手ノ汽船ハ今荷物ヲ積ミコ
ンデキル。

六五四 (略)、ドンナ重イ荷物デモラ
クノト上ゲオロシラシテキル。

六五五 卸賣といふのは品物をたく
さん持つてゐて、小賣店ヘ大口に賣
渡すことで、(略)。

六五六 (略) 風が吹く度にむらさき
のふさが動いてゐる。

六五七 (略) 「とくに申し上げようと思
つてゐました。」
六五八 「あなたと私は大そう似て

ゐるではありませんか。

七〇一 葉は羽形で、二枚づつ向ひ
合つてゐますし、(略)。

七〇二 (略)、花は同じく蝶の形を
してゐます。

七〇三 私はこんな大きななりをし
てゐますが、(略)、私の豆はたべら
れません。

七〇四 フトコロ手バカリシテキル人
ガ多ケレバ多イ程オトロヘマス。

七〇五 (略)、しきりに食物をさがし
てゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひ
はじめ。

七〇六 (略)、ソコニ繪草紙屋・(略)
ナドガナランデキル。

七〇七 出口ニ近イ所ニハ、着物・羽
織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。

七〇八 店ニハ番人ガ居テ、買ハウト
思フ物ハスグニ買ヘル。

七〇九 これまで貧しい暮らしをして
ゐるのに、(略)。

七一〇 (略)、こんな大金を持つて
ゐるなら、なぜあると一言いはなか
つた。

七一一 (略) 「日ごろ貧しい暮らしをして
ゐる一豊が、よくもかういふよい馬
を買ひもめた。」
七一二 (略)、水がなければ、生きて
ゐることは出来ない。
七一三 (略)、冷たい水の中に長くはい
つてゐたりするのはよくである。
七一四 父は(略)皆つき木をする

と申してゐます。

七二一 (略)、エヒ・(略)ナドノヤ
ウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデキルモノ
モアル。

七二二 (略)、エビ・カニ・タコ・イ
カナドガスンデキル。

七二三 (略)、サザエ・カキナドハ岩
ニツイテキル。

七二四 蟲類モタクサン居ル。

七二五 (略)、タクサン集ツテ、木ノ
枝ノ様ナ形ヲシテキル。

七二六 (略) 海綿モ、ヤハリ海ノソ
コノ岩ナドニ取リツイテキル蟲ノ骨
デアル。

七二七 海ニハ又ケモノガスンデキル。
七二八 (略) カラ(略)マデニハ、
海草ガハエテキル。

七二九 (略)、ゼンタイガ細カニ分レ
テ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。

七三〇 (略)、マツ緑色ノモノハ浅イ
所ニ、紅色ノモノハ深い所ニ、茶色
ノモノハソノ中間ニハエテキルノデ
アル。

七三一 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略)。

七三二 (略) 「私も子供の時には(略)體
操をしたり、この講堂でお話を聞い
たりしてゐたのです。」
七三三 私は年中航海をしてゐるも
のですから、(略)。
七三四 私の乗つてゐる明治丸とい

ふのは、(略)。

七三六 (略)、立ちならんでゐる人
家も、段々に小さく見える様になり
ます。

七三七 (略) 鯨が頭から高く水け
を吹いてゐることがあります。

七三八 (略) いるかがおよいでゐ
るのを見ることもあります。

七三九 (略)、見なれない形の家が
ならんで立つてゐます。

七四〇 (略) そこに居る人は私たちとは
まるでちがつた風をして、(略)。

七四一 (略) そこに居る人は私たちとは
まるでちがつた風をして、かはつた
ことばで話してゐます。

七四二 (略)、星が出てゐれば、そ
れに使つて、居る場所や方角がちや
んと分ります。

七四三 (略)、星が出てゐれば、そ
れに使つて、居る場所や方角がちや
んと分ります。

七四四 三郎はいつもにこ／＼して
ゐますから、(略)。

七四五 三郎は(略)、寫眞でも笑
つて寫つてゐます。

七四六 一人の分はうっかりしてゐ
る間に寫されましたので、(略)。
七四七 よく寫つてゐるので、皆さ
んにお目にかゝつたやうな氣がしま
す。
七四八 おはなさんも(略)よく寫
つてゐます。

八125 図 なるほど皆さんと一しよの分は、(略)少しまじめになつてゐます。
 八141 (略)、父ハハヤ店ニスワツテ商賣ノ用向ヲシラベテキル。
 八155 (略)、皆メイノノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。
 八158 何モシナイデ遊ンデキルノハ樂ナヤウニ見エルガ、却ツテ苦シイモノデアル。
 八192 (略)、何不足なく暮してゐた農夫がありました。
 八198 親類や友だちは(略)、どうしたらよいかと、いろ／＼考へてゐました。
 八201 ある日一人の友だちは、この農夫と野原の草の上に坐つて、いろ／＼世間話をしてゐたが、(略)。
 八202 (略)、そこらあたりに飛んでゐた雀を見て、(略)といふことを話しました。
 八211 図 白い雀が實際居るのか。
 八215 図 「居るさうだ。」
 八227 (略)、若しや白雀が居はしまいかと、屋敷のまはりを見まはつて、(略)。
 八231 (略)戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。
 八231 (略)戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。
 八232 日はもう高く上つてゐます。
 八233 牛小屋の牛はしきりに鳴いて

ゐるのに、誰も草をやるものがありません。
 八237 水車場へ行くのかと思つて見てゐると、(略)、居酒屋の方へ行きます。
 八247 どうするのかと氣を附けてゐると、隣の家の方へ行きます。
 八251 此の下女は毎朝かうして、(略)、牛乳を賣つてゐたのです。
 八255 (略)、すぐ家の中へかけこんで、まだねてゐた妻を呼起して、(略)。
 八257 図 朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」
 八319 僕は時々其の仕事場の前に立つて見てゐた。
 八319 ある時は釘をこしらへてゐた。
 八322 ある時は鎌をきたへてゐた。
 八323 又車のわを打つてゐた事もあつた。
 八331 夏のどんな暑い日でも、(略)、暮方まで働いてゐた。
 八334 図 「自分は今こそこんな小刀や釘などを造つてゐるが、元は少しは人に知られた刀かぢで、(略)。
 八345 (略)若いむすこが、(略)、朝から晩まで相かはらず、「(略)」と働いてゐる。
 八417 火のこが花火のやうに散つてゐる。
 八421 (略)、もう本町通へ抜けて、角の呉服屋が焼けてゐるのださうだ。

八425 長い天氣つゞきで、かわききつてゐる上に、(略)。
 八555 又にはとり・(略)などは陸上や水上にばかり居て高く飛ばないから、(略)。
 八559 陸上に居る鳥で、はぎの長いのは駝鳥である。
 八571 (略)、陸鳥のくちばしは圓く細くて、先がとがつて居る。
 八575 いすかのくちばしは上と下がくちががつてゐる。
 八622 皆サンノ着物ニシテキル木綿織物ハドウシテ造リマスカ。
 八684 図 其の後どうかと思つてゐましたが、手紙を見て安心しました。
 八881 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。
 八882 (略)、ソレデモタワマズ、奮戰ヲツバケテ居ルト、(略)。
 八886 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。
 八896 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トモニ(略)。
 八916 図 (略)、砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、我が軍ガ苦戰シテキルト思へ。
 八922 馬丁ハ(略)、様子ノ分ルノヲ待ツテ居タガ、(略)。
 九71 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツテ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。
 九72 又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテ

キルカラ、(略)。
 九77 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、(略)。
 九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。
 九710 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。
 九84 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレ／＼變ツテキル。
 九86 豆ノ花ハ蝶ノ形ヲシテキルシ、(略)。
 九87 (略)、朝顔ノ花ハジャウゴノ様ナ形ヲシテキル。
 九89 菜ヤ大根ノ花ヲ見ルト、瓣ガ四ツ揃ツテ、十字形ニナツテキル。
 九104 (略)、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。
 九191 (略)一水兵ガ女手の手紙を讀みながら泣いてゐた。
 九199 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、(略)。
 九233 図 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。
 九239 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、(略)。
 九336 スチブンソンは(略)、日夜其の事ばかり考へてゐた。
 九3610 大水などの時には、(略)幾

日でも泊つて待つてゐなければならなかつた。

九三八 今水路に汽船があり、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

九三八 鐵道の通じてゐない所でも、馬車や人力車がある。

九五五 〇 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、(略)。

九六二 〇 室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青ざめて元氣なきは、(略)。

九七〇 夜が更けて、(略)、止んだことと思つてゐると、翌朝起きて見れば、(略)。

九七〇 〇 (略)、翌朝起きて見れば、(略)、そこから一面銀世界になつてゐることもある。

九八三 五人の騎手は(略)、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

九八三 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「(略)」などと、口々に勢をつけてゐる。

九八三 〇 (略)、五人の騎手は(略)、三番太鼓を今やおそしと待構へてゐる。

九五〇 サキヤ本ノ圓イ葉モアレバ、尖ツテキル葉モアリ、ヘコンデキル葉モアル。

一六六 サキヤ本ノ圓イ葉モアレバ、尖ツテキル葉モアリ、ヘコンデキル葉モアル。

一六六 〇 (略)、一體ニスベくシテキル

ルノモアル。

一六五 〇 (略)、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテキル。

一七五 〇 (略) 幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキル。

一七八 〇 (略)、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

一七〇 〇 モミデノ葉ハ幾スデカノ脈ガ本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキル。

一八三 〇 (略)、ナデシコナドノ葉ハ二枚ヅツ向ヒ合ツテ附イテキル。

一八五 〇 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イテキル。

一八三 〇 本の中には(略)、晝や地圖や寫眞のはいつてゐるものもある。

一八三 〇 讀んでゐる間には書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、(略)。

一八四 〇 讀んでゐる間には中に書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、(略)。

一八四 〇 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果で、(略)。

一八四 〇 (略)、見渡せば四方の山々のいたゞきは、はやまつ白になつてゐる。

一八四 〇 (略)、古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、今は葉一枚も残つてゐない。

一八四 〇 はうきを立たした様に高く雲をはらはうとしてゐる。

一八四 〇 (略)、人影の見えないのみか、かゝしの骨も残つてゐない。

一八四 〇 唯あぜの様の木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。

一八四 〇 畑には麥がもう一寸程にのびてゐる。

一八四 〇 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、(略)活々とした色を見せてゐる。

一八四 〇 (略)、寒菊が今を盛りと咲いてゐる。

一八四 〇 (略)、黄色い大きな實が枝もたわむ程なつてゐる。

一八四 〇 家の横に水をよくすんだ小川が流れてゐる。

一八四 〇 二三羽のあひるが(略)、しきりにゑをあさつてゐる。

一八四 〇 はきくしてゐて、禮儀・作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

一八四 〇 (略)、禮儀・作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

一八四 〇 人が大勢込合つてゐる中で、少しも人に先んじようとはせず、(略)。

一八四 〇 (略)、爪は短く切つてゐました。

一八四 〇 (略)、爪は短く切つてゐました。

一八四 〇 外の者は(略)、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。

一八四 〇 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めまして上、(略)。

一八四 〇 (略)、そよくと吹く風に、海面はさざ波を立ててゐる。

一八四 〇 甲板に立つてゐた船長を始め、三十五人の若者は(略)。

一八四 〇 他のボートを見れば、(略)、錨を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。

一八四 〇 豚肉はあぶらに富んでゐて、養分の多いことは牛肉におとらぬ。

一八四 〇 殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。

一八四 〇 働蜂の若きものは内に居て幼蟲を育て、又は其の居室を営み、(略)。

一八四 〇 (略)、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變ヘ、又器具ヲ取換ヘナケレバナライノデ、(略)。

一八四 〇 (略) 一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ精神ヲコラスコトニナルカラ、(略)。

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

一八四 〇

十一477 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、靜かに其の金を拾ひ上げ、(略)。
 十一478 (略)、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。
 十一494 (略)、大將は何心なく外を眺めてゐると、前の馬主が再び馬をひいて來て、(略)。
 十一4910 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。
 十一506 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。
 十一509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。
 十一511 (略) 三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。
 十一512 (略)、馬は(略)、口でおもちやをさゝげて、其の子供をあやしてゐた。
 十一561 さては生きてゐるのか。
 十一563 どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。
 十一1074 家の構造は主として寒さを防ぐ様に出来てゐる。
 十一1082 (略)、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のことわざがある。

十一1094 まだ冠禮を行はない者はチヨンガーといつて、髪を三つ打ちにして後へたらしめてゐる。
 十一1099 死人を葬るのに、小高い所で南に面してゐる日當りのよい地を選ぶ。
 十一1103 (略) 山や岡には、(略) 圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。
 十一1106 婦人は室内に引込んでゐて、來客に會ふことも、外出することも少い。
 十一1109 (略) 外出する時には、うちかけの様なものをかぶつて、目ばかり出してゐる。
 十二44 治に居て亂を忘れざるも此の心なり。
 十二129 イツレモ大規模ニ出來テキテ、盡ク蒸氣や電氣ノ力ヲ利用スル。
 十二208 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。
 十二228 是は水中にとけてゐる酸素が吸盡されるからである。
 十二231 (略)、水を取換へなくても金魚は割合に長く生きてゐる。
 十二329 かの山内一豐の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略)。
 十二343 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、(略)。
 十二815 (略) 路ばたにバイオリンを

彈いて居る老人の辻音樂師がある。
 十二819 忠實な犬は(略)、道行く人の投與へる喜捨を待ちわびてゐる。
 十二824 帽子の中に一文の錢もない老人は、(略)、幾度かためいきをついて居る。
 十二825 (略)、額を両手に支へて人知れぬ涙をこぼして居る。
 十二826 木蔭に立つてつく／＼と此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。
 十二833 老人は、(略) 不思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。
 十二852 日ははや没して、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、今の今まで誰一人も氣附かなかつた。
 いる「射」(上二) 6 イル いる
 《イ・イル・イヨ》
 二335 ユミヲイルコトガスキデ、トリヤケモノヲイヨコロシテ、オモシロガツテキマシタ。
 二347 園 「カガミモチヲマトニシテ、イテミマセウカ。」
 二355 園 「モチハ(略)、イテハイケマセン。」
 二357 トモダチハ「(略)」ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。
 四773 さをのさきの扇をいよといふのでせう。

四785 園 あれをいらないといふのもざんねんだ。
 いる「鑄」(上二) 2 鑄ル 鑄る 《イ
 ル》
 十二127 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、鋼鐵・眞鍮類ヲ鑄ル處モアリ、(略)。
 十二488 園 古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は 山をうがちて山を鑄る。
 いる「入」(下二) 11 入ル 入る
 《ル・ルル・レ・レレヨ》ヨおとしいる・かきいる・すいいる・なげい
 る・やといいる
 六537 園 ツケ物ハスベテ塩ニテツケ、ミソモ醬油ヲ塩ヲ入レテツクル。
 七349 園 やき物をつくるには、土又は石のこをねりかためてかわかし、かまどに入れて焼く。
 七634 園 ある山國にては、犬のくびに藥品・食物などを入れたるかごを
 かけおきて、(略)。
 八395 園 (略)、頭ニ藥ヲツケ、其ノカタマルヲ待チテ、箱ニ入ル。
 八705 園 (略)、手は食物を口に入るゝことを止め、(略)。
 九38 園 (略) かの大蛇あらはれ出で、八つの頭を八つの槽の中に入
 れ、酒を飲んでよひふしたり。
 九652 園 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。
 十507 園 唯首を取つて、大將の見

参に入れよ。

十59 6 罽^{カサ} (略)、罽に處せられたる

者は (略)、又重き者は營倉に入れられ候由承り申候。

十70 9 水夫は盡く燈臺番の小屋に入れられたり。

十78 5 又力士ノ如キハ常ニ全身ニカヲ入ル、ヲ以テ、(略)。

いるか「入鹿」(人名) 7 入鹿 ヲそがのいるか

八51 7 サル程ニ三韓ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、入鹿ノ参内スルコトアリ。

八52 3 天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ、入鹿カタハラニ侍ス。

八52 8 入鹿アヤシミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、「御前近ウシテ。」ト答フ。

八52 9 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、(略)。

八53 3 皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

八53 6 之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デテ、入鹿ノ足ヲキル。

八53 6 入鹿ツヒニ殺サレタリ。

いるか「海豚」(名) 1 いるか

七83 1 何萬とも知れないいるかがおよいでゐるのを見ることもありま

す。

いるかふし「入鹿父子」「人名」 1 入鹿父子

八50 1 中臣鎌足コレヲウレヘテ、

國ノタメニ入鹿父子ヲノゾカント思ヒ立チタリ。

いれ ヲていれ・とりいれ・とりいれだか・わたれ

いれずみ「入墨」(名) 2 入墨

十79 9 女子は (略)、又口の周圍、手首・手の甲等には入墨をほどこせり。

十79 10 然れども入墨をほどこすことは今は全く禁ぜられたり。

いれる「入」(下二) 23 イレル 入レル 入れる「一レ一レル」 ヲおなげ

いれる・とりいれる・なげいれる・のりいれる・やといいれる

二21 5 ワタクシヲヒノナカヘイレルト、大キナコエヲタテテ、トビダシマス。

二37 6 アタタカイフトコロノ中ヘイレテ、ネンネコウタヲウ

タツテクダサツタノハ、(略)。

二59 7 オヂイサンハ (略)、ソノハヒヲカゴニイレテ、(略)。

三32 5 ナヘカゴニナヘヲ入レテ、ハシツテイク人モアリマス。

四7 5 「くるまにのつてゐる人を入れると、六人でせう。」

五20 7 (略) たけのこをおなべの中へ入れておくれ。」

五21 2 (略)、おはなはざるの中のたけのこをなべの中へ入れました。

五21 6 母は (略)、切つたさしみをさらの中へ入れて、(略)。

五55 2 ソノ時カウモリガケモノノ方ヘ行キマス、トイッテ、仲間ヘ入レマセン。

五57 6 火バチナドニ入レル炭ハ、木ヲヤイテコシラヘタモノデス。

六16 8 米を俵に入れた、その俵をつみ重ねてながめた時は、(略)。

七64 2 水を飲まないことはあつても、水のまじつた物や、水をまぜてこしらへた物を口に入れないことはない。

八48 9 (略)、うちの名の和田を入れて、十五字になるやうに書いてごらん。

八65 7 サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、ソレカラウスニ入レテツキカメマス。

八65 8 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。

八66 1 其ノ中ヘ白絲ヤ白布ヲ入レテ、紺ヤ淺黄ニ染メルノデス。

八88 6 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。

十19 9 圖や畫は別に堅い木に彫り、寫眞は銅版に彫りつけて、相當の場所に入れる。

十87 7 廣く家畜といへば、鳥類までも入れて言ふ。

十一9 6 (略)、揃ヘテ箱ニ入レル者 (略)。

十二15 9 船渠ノ (略)。船ヲ其ノ中ニ入レテ一方ノ扉ヲ閉ヂ、(略)。

十二22 7 金魚を細口のびんに入れて、二三日も水を取換へないと、(略)。

十二22 9 若し其の中に青い水草を入れて置けば、(略)。

いる「色」(名) 43 イロ 色 ヲあずき

いろ・うすもいろ・かきいろ・きいろ・きいろい・きんいろ・けいろ・こ

うばいろ・こんいろ・さくらいろ・じゅうにんといろ・だいだいろ・ち

やいろ・つちいろ・とびいろ・ねずみいろ・はいいろ・ひとついろ・ふじいろ・ふたいろ・ぶどういろ・べにいろ・みいろ・みずいろ・みどりいろ・むらさきいろ・ももいろ・もようとい

ろ

二19 3 (略) モミヂノハヲ一マイヒロヒマシタ。(略)。イロモ

ソノトホリニツケマシタ。

二19 6 モシナツデアツタラ、ド

ンナイロヲツケタデセウ。

二21 2 ワタクシノカラダハ、日ニヤケタヤウナイロヲシテキマス。

三57 8 (略) ムラサキ色ノハオリハ、イツマデタツテモ、色ガカハリマセン。

四66 1 羽の色はあまりうつくしくはありませんが、(略)。

五16 5 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、皆

金色ヲオビテキマス。

五31 2 ツヤガアツテ、色ハコイミド

リ色デス。

五31 十一月ゴロ白イ色ノ花ガサキマス。

五35 蝶ニハ（略）、羽ノ色ニモ、白イノヤ、キイロナノヤ、黒イノヤ、マダラナノヤサマ／＼アリマスガ、（略）。

七29 （略）、色もはじめは黒いが、だん／＼かはつて青白くなる。

七35 （略）塗物に黄・赤・黒・青などさま／＼の色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。

七35 （略）塗物に黄・赤・黒・青などさま／＼の色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。

七76 色モ一様デハナイ。（略）綠色ノモノモアレバ、（略）茶色ノモノモアリ、（略）紅色ノモノモアル。

七77 波ニユラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動ク間ヲ、（略）。

七82 （略）日の出や日の入には日光が波にうつつて、水の色が金色になります。

八34 （略）年のはじめの福壽草、黄金の色の暖く、（略）。

八60 （略）栗津の松の色はえて、かすまぬ空ののどけさよ。

八70 （略）、皮膚の色さへ青ざめて、（略）。

八86 （略）ヨーロッパ人は大むね皮膚白く、髪赤く、眼の色青し。

八88 （略）我等日本人は髪も黒く、眼

も黒く、皮膚の色は黄なり。

九74 瓣ノ色ハ白又ハウス桃色デ、萼ノ色ハ青イ。

九74 （略）、萼ノ色ハ青イ。

九82 又ユリヤアヤメノ花ハ萼ノ色ガ瓣ト一ツ色デアル。

九11 （略）緑色そふ林は 汝が樂しき庭ぞ。

九53 （略）、其ノ體ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。

九54 （略）動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、（略）。

九54 （略）、自ラ其ノ周圍ノ物ノ色トマギレテ、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。

九54 （略）動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物ノ色ノ變ズルニシタガツテ、保護色ノ變ズルモノアリ。

九54 （略）野ウサギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、（略）。

九55 （略）、岩石ナドニ附着スル時ハ岩石ト同ジ色ニ見ユ。

九61 （略）室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青ざめて元氣なきは、（略）。

九64 （略）空氣は形もなく、色もなければ、目には見えざれども、（略）。

九94 （略）金銀の光、丹青の色、目もまばゆきばかりなり。

十20 （略）、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなのは、

（略）。

十29 （略）、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、（略）活々とした色を見せてゐる。

十48 （略）色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

十48 （略）色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

十49 （略）、色の名稱も亦千種萬様なり。

十49 （略）繪畫・模様等を色どりするには、色の調和を考へざるべからず。

十72 （略）其の湯には大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。

十77 （略）目ハ色・形ヲ見、（略）、各之ヲ腦ニ報告ス。

十一66 （略）其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

十二32 （略）保の母は（略）、「二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。（略）」とて、少しも悲しむ色を見せざりき。

いろいろ「色色」（形状）25 イロイロイロく いろいろ 色色 色々

二16 カゼガフイテ、イロイロナ木ノハガトンデキマス。

二56 ツクタビニ、ウスノ中カラオカネヤキモノヤ、イロイ

ロナタカラモノガデマシタ。

三72 ノハラニハ、（略）、アカヤ、キイロヤ、ムラサキヤ、イロイロナハナガサイデキマス。

三12 （略）、オヂイサンハイロイロナオモシロイハナシヲキカセテクダサイマス。

三29 竹ハイロイロナヤクニタチマス。

三38 これで本の中のじやゑや、せんせいの見せてくださるいろいろなものを見るのです。

三68 （略）、イロイロナゴチソウヲシタリ、サマザマノアソビヲシテ見セマシタ。

四30 （略）、みんなあつまつて、色色はなしをしてゐます。

四37 麥ワラザイクニハカゴヤオモチヤヤ色色ナ物ガアリマス。

六42 日本の國には春・夏・秋・冬かはる／＼色々な花がさき、色々な鳥が鳴く。

六43 日本の國には春・夏・秋・冬かはる／＼色々な花がさき、色々な鳥が鳴く。

六25 金ヤギンハ美シクテ、指ワニナツタリ、トケイニナツタリ、ソノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマ

ガ、（略）。

六69 その間に色色な子どもを見ま

した。

七26 色々ナキカイガアツテモ、ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デス。

七28 シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。

七37 色々ナ店ノ前ヲ通ツテ、左ヘ折レタリ、右ヘ折レタリスルト、(略)。

七38 又一下ニ色々ナ物ヲ買集メタイ時ニハ、一トコロデスムカラ便利デアル。

七69 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モアル。

八32 仕事をしながら、僕に色々な話をした事もある。

八63 木綿織物ニ紺ヤ淺黄ヤカスリヤ其ノ他色々ナ縞ガアルノハ、(略)。

八64 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノガ縞物デス。

十18 我々は毎日日本を讀んで色々な事を覺える。

十37 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、(略)。

十84 (略)、農家では牛を色々の勞働に使役する。

十84 (略)、其の骨や角は色々の細工物に使ふ。

いろいろ「色色」(副) 17 イロイロイロ／＼ いろ／＼ 色色 色々

一40 アサガホガ(略)。アカイ

ノヤシロイノヤイロイロマジツテキマス。

三70 「イロイロオセワニナツテ、アリガタウゴザイマスガ、(略)。

五24 よい神さまがたは、どうかして大神にまた出ていただきたいと、色色／＼さうだんの上、(略)。

五58 油ニモ色々アリマス。

六19 ハカリニモ色々アリ。

六24 「金ニハイロ／＼アリマサガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、(略)。

六33 織物ニハキヌ織物・モメン織物・アサ織物・毛織物ナダイロ／＼アリ。

六72 (略)、顔のちがふやうに、せいしつも色々かはつてゐます。

七17 西洋西瓜には色々あるさうでございますが、(略)。

七74 海草ニモ色々アル。

八15 人ノ職業ニハイロ／＼アツテ、(略)。

八19 親類や友だちは大そう心配しまして、どうしたらよいかと、いろ／＼考へてゐました。

八20 ある日一人の友だちは、この農夫と野原の草の上に坐つて、いろ／＼世間話をしてゐたが、(略)。

九21 村の方々は朝に夕に色々とやさしく御世話下され、(略)。

九35 昔の旅行には色々難儀なことがあつた。

十55 色色取りまぎれ、つひ／＼御無音に打過ぎ候。

十二26 工場ニハ色々アル。いろ／＼「色香」(名) 1 色香

九91 色香も深き 紅梅の(略)。

いろどり「彩」(名) 5 色どり 色どり

九56 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、(略)。

九57 (略)、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。

十47 若し此の模様ニ種々の色どりを加ふるときは、一層其の美しさを増すべし。

十49 (略)、我等の衣食住には模様・色どりをほどこしたるもの多し。

十49 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。

いろどり「彩」(サ変) 1 色どります

「スル」

十49 繪畫・模様等を色どりにするには、色の調和を考へざるべからず。

いろどる「彩」(五) 1 色どる「ッ」

て、色どつた大きな弓矢や扇車がかざつてあります。

いろは(名) 1 いろは

十二118 いろはのいをも わきまへぬ 身のいつしかに 積み得る、(略)、世の人並の 文字の數。

いろはにほへと(略)「いろは」 1 いろはにほへと(略)

三74 いろはにほへと(略)「第三卷付録参照」

いろり「開扉裏」(名) 2 いろり

七11 松を火にたくゐるりのそばで、夜はよもやま話がはずむ。

十81 屋内には中央にゐるりを造り、一家之を圍みて談笑す。

いわ「岩」(名) 13 岩

四38 (略)、サザエガ岩ノカゲカラヨビトメテ、(略)。

七70 岩ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。

七71 (略)、サザエ・カキナドハ岩ニツイテキル。

七73 海綿モ、ヤハリ海ノソコノ岩ナドニ取リツイテキル蟲ノ骨デアル。

七77 根モ(略)、タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデアル。

八95 いでや、あの岩の小かげに、皆うちよりてえもの數へん。たけがりのいさをくらべん。

九93 岩にくだくる清流、雪と散

り、玉と飛ぶ。

十68 〆 〔略〕、此の燈臺附近の岩の上に乘上げたる帆船あり。

十69 〆 〔略〕、岩の上に一隻の難破船横たはれり。

十70 〆 岩に近づけば、波は益々荒く、〔略〕。

十70 〆 此の間岩にも當てず、波にもまかせず、岩と波との間にボートをあやつり居たる少女の働は、〔略〕。

十70 〆 〔略〕、岩と波との間にボートをあやつり居たる少女の働は、〔略〕。

十二42 〆 其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、〔略〕。

いわい 凸おいわい・おんいわいもうしあぐ

いわ・う 〔祝〕(四・五) 2 祝フ 祝ふ

〔一フ〕

五18 〆 鯉ガタキヲ上ルヤウニ、ズンズンシユツセラセヨトイフ心デ祝フノデセウ。

八37 〆 〔略〕、中にも君の千代八千代 祝ふや菊の花の宴。

いわお 〔殿〕(名) 1 いはほ

四10 〆 君がよはちよにやちよに、さされ石の いはほとなりて、こけのむすまで。

いわき 〔磐城〕(地名) 1 磐城

九17 〆 磐城

いわく 〔日〕(名) 20 日ク 日く

八71 〆 こゝにおいて、胃は一同に向つて曰く、「〔略〕。」といふに、〔略〕。

九47 〆 〔略〕、人々のかたるを聞けば、一人の曰く、「〔略〕。」

十13 〆 主柱 靜かに曰く、「〔略〕。」

十24 〆 其ノ中ノ一人曰ク、「〔略〕。」

十78 〆 西洋ノ古語ニ曰ク、「〔略〕。」

十一102 〆 備サトシテ曰ク、「〔略〕。」

十一104 〆 後人曰ク、「〔略〕。」

十一105 〆 孟獲答ヘテ曰ク、「〔略〕。」

十二10 〆 東郷司令長官此の戦況を打電し、其の後に附加して曰く、「〔略〕。」と。

十二29 〆 勝南城に向ひ、高らかに號んで曰く、「〔略〕。」と。

十二52 〆 信用ノ基ハ正直ニアリ。故ニ曰ク、「正直ハ最善ノ商略ナリ。」

十二72 〆 孔子曰く、「〔略〕。」と。

十二86 〆 喜観大いに罵つて曰く、「〔略〕。獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて

十二87 〆 喜観(略)を知るに及びて、驚いて曰く、「〔略〕。」と。

十二88 〆 〔略〕、其の墓を拜して曰く、「〔略〕。」と、刀を抜き切腹して

終る。

十二93 〆 〔略〕、其の子に教へて曰く、「〔略〕。」と。

十二94 〆 或時齊の臣景公に告げて曰く、「〔略〕。」と。

十二95 〆 景公歸りて群臣に告げて曰く「〔略〕。」と。

十二96 〆 〔略〕、孟子を戒めて曰く、「〔略〕。」と。

十二97 〆 孝經に曰く、「〔略〕。」と。

いわし 〔鰯〕(名) 1 イワシ

七70 〆 魚類ニハイワシ・アヂ・サバ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガアリ、〔略〕。

いわし 〔岩代〕(地名) 1 岩代

九17 〆 岩代

いわと 凸あめのいわと

いわばし 〔石走〕(四) 1 石走る

〔一ル〕

十一3 〆 花よねてよしや吉野のよし水はまぐらのもとと石走る音

いわみ 〔石見〕(名) 1 石見

十二29 〆 〔略〕我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。國名ヲ以テ名ツケラレタルモノハ、安藝・薩摩・石見・肥前・相模・周防・丹後等アリ。

いわみ 一國

ノナキニ至レリ。

いわみのくに 〔石見國〕(地名) 1 石見ノ國

十31 〆 平左衛門ハ石見ノ國ノ役人ニテ、百七十餘年程前ノ人ナリ。

いわやま 〔岩山〕(名) 1 岩山

六1 〆 海岸には切立てたやうな岩山もあるが、平たい砂原になつてゐる所が多い。

いわゆる 〔所謂〕(連体) 2 イハユル

九18 〆 利根川ハイハユル關東平野ヲ貫流シ、本流・支流ノ長サヲ合スレバ、一千餘里ニ及ブ。

十二100 〆 外國人に接するに〔略〕、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

いわれ 〔磐余〕(地名) 1 磐余

十100 〆 其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、神功皇后以後、シバく皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。

いわれ 〔謂〕(名) 1 いはれ

八21 〆 諸子は皇大神宮のかくばかりたふときいはれを知れりや。

いわんや 〔況〕(副) 1 イハンヤ

十一53 〆 他人ノ惡事・短所ヲアザケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナリ。イハンヤ我ニ優レル人ヲネタミ、其ノ聲譽ヲ傷ツケントシテ笑フ者ニ於テヤヤ。

いん 〔印〕凸ひづけいん

いん「眞」ひさんじかいいん・のりくみ
いん
いん「院」(名) 1 院ひあんごいん・
おうじょういん・きぞくいん・しゅう
ぎいん・しょうそういん・ちくりんい
ん
十一464図 熊王(略)、さて往生院
に入りて僧となり、(略)。(略)、其
の後は一度も院の門外へは出でざり
きとぞ。
いんけんす「引見」(サ変) 1 引見す
「シ」
十二805図 (略)、皇后も亦コロンブ
スを引見して、厚く其の勳功を賞せ
り。
いんさつ「印刷」(名) 4 印刷
十203 一色の印刷は一度刷ればよい
が、(略)。
十205 (略)、色のたくさんまじつた
美しい繪畫や地圖のやうなものは、
幾度も幾度も印刷を重ねなければな
らぬ。
十207 印刷が出来上つてから本にと
おるまでも、まだ中々手数がかゝ
る。
十218 活版は印刷が終れば、其の活
字を取離すことが出来るから、(略)。
いんさつする「印刷」(サ変) 2 印刷
する「シ—スル」
十1910 さてかりに印刷して、讀合せ
て見て、誤があれば、(略)。
十208 印刷する紙は廣い大きな紙で、

幾ページ分も一度に刷れる。
いんさつぶつ「印刷物」(名) 1 印刷
物
十二528図 米國商人ガ新聞其ノ他ノ
印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、
(略)。
いんし「印紙」(名) 1 印紙
七495図 西洋紙ハ又「葉書ヤ切手ヤ
印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」ト
イヒマスト、(略)。
いんしょく「飲食」(名) 4 飲食
九581図 「病は口より入る。」つゝし
むべきは飲食なり。
九618図 飲食に注意し、(略)、常に
日光に浴して、なほ病にかゝらば、
是我が罪にあらず。
十二907図 四季寒暑の變り目にはと
りわけ衣服・飲食に氣を附くべし。
十二921図 (略)、豫め其の支出を定
め、衣服・飲食の費皆其の範圍を越
ゆることなかるべし。
いんしょくぶつ「飲食物」(名) 2 飲
食物
十587図 兵營内の酒保には日用品
・飲食物等を販賣致し居り候へば、
(略)。
十842 其の上牛肉と牛乳は飲食物と
しても大切である。
インチひなんインチ
インド「地名」7 印度 ひにしインド
しょうとう
八789図 アジヤ大陸には印度・支

那・韓國等あり。
十一287図 今や(略)、又支那沿岸は
おろか、印度・南洋より亞米利加・
歐羅巴の航路をも開くに至れり。
十二663図 (略)、通常の灰色の鼠の
一群大舉して、印度よりペルシヤを
經て歐羅巴に移り、(略)。
十二672図 (略)、亞弗利加・印度の
獅子、南亞米利加の野牛等の、(略)。
十二742図 當時伊太利は(略)。然
るに印度との交通は長日月を要し、
中途の危險亦少からざれば、(略)。
十二748図 コロンブスは(略)、歐羅
巴の西海岸より西を指して進まば、
印度の東海岸に到着すべしとの意見
を抱けり。
十二758図 (略)、若し歐羅巴より西
へ向つて進まば、印度に達する前、
日本又は支那に到着するならんと。
インドじん(名) 1 印度人
九516図 (略)、長き白布くるく
と頭に巻ける印度人、(略)。
インドちほう(名) 1 印度地方
十二7310図 (略)、印度地方の寶石・
香料・絹布類は盛にベニス・ゼノア
等の港を經て歐洲へ輸入せり。
インドよう「地名」2 印度洋
八77図 印度洋
八798図 ヨーロッパより船にて日本
へ歸るには、(略)地中海を過ぎ、
印度洋を渡りて、東へ東へと進むな
り。

いんのしょう「院庄」(地名) 1 院庄
十一155図 (略)、主上はや院庄に入
らせ給ひぬと申す。
いんばぬま「印旛沼」(地名) 2 印旛
沼 印旛沼
九169図 下總ノ手賀沼・印旛沼・長
沼等ノ水ハ南ヨリ之ニ注ギ、(略)。
九17図 印旛沼
いんようすい「飲用水」(名) 1 飲用
水
九454図 (略)駱駝に乗り、飲用水
其の外何くれと用意して、隊商と共
に出立したり。
いんりよう「飲料」(名) 1 飲料
十874 羊の肉も亦食用となり、山羊
の乳は牛乳のやうに飲料になる。
いんりようすい「飲料水」(名) 1 飲
料水
十一916図 さてど水は大都會など
にては、時として價を生ずることあ
り。是飲料水とぼしくして、意のま
ゝに之を得ること能はざればなり。
う
う「雨」ひせんこくぼうふううけいほう
・だいぼうふうう・ちほうぼうふうう
けいほう・てんきよほうおよびぼうふ
ううけいほう・ぼうふうう
う「鵜」(名) 15 う 鵜

三40 3 うが川の中でさかなをとつてゐました。

三42 2 うのまねするからず、水におぼれる。(ひらがなのドリル)

十一79 1 鵜を使ひて魚を捕ふること、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。

十一80 5 鵜匠は一人にて十二羽の鵜を使ひ、(略)。

十一80 7 此の間に鵜を引上げて吞みたる魚を吐かせ、再び之を水に放ち、(略)。

十一81 1 鵜(略)、鵜は盛に活動し、ひたすら其の獲物の多からんことを競ふ。

十一81 3 鵜の首元は細なはにてしばりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、(略)。

十一81 6 鵜(略)、大なる鵜は能く十二三尾のあゆを喉元(のどもと)にふくむといふ。

十一81 7 鵜の鮎(あゆ)を吞むは必ず頭よりす。

十一82 3 鵜 かざり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。

十一82 4 鵜 魚は(略)、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、(略)。

十一82 5 鵜(略)鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふることを得るなり。

十一82 7 鵜はくざり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、(略)。

十一82 10 鵜(略)、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、(略)。

十一83 3 鵜なはを引上げて、鵜のふなばたに立並べる時、(略)。
う〔得〕(下二) 60 得《ウ・ウル・エ》

ひおさめう・かいう・こころう・たしう・たつしう・つみう・なしう・まなびう・わけう

八29 5 北へマハレバ、東ノ戸開キ、東へマハレバ、北ノ戸開ク。幾度カマハリタレドモ、入ルコトヲ得ズ、(略)。

八50 7 鵜(略)、大事ヲ成スニハ此ノ皇子ヲイタマキ奉ルヨリ他ニ道ナシト思ヒシガ、未ダ近ヅキ奉ル折ヲ得ザリキ。

八51 4 コレヨリ鎌足、皇子ト親シミ奉ルコトヲ得テ、(略)、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。

八61 2 鵜 滋賀唐崎の一つ松、夜の雨にぞ名を得たる。

八71 5 鵜 我若し食物をこなす事なくば、全身を養ふ血は如何にして得らるべき。

八75 1 虎モマタ猫ノ如ク、ヨク木ニヨデ上ルコトヲ得。

八79 5 鵜(略)、二週間あまりにして日本に歸着することを得べし。

八94 5 鵜(略)、朝日・夕日にかざきて、遠く數里の外よりも望み見ることを得べし。

九46 3 鵜 一同はやむことを得ず、進行を止めて、風のをさまるを待てり。

九48 8 鵜(略)新しき駱駝の足跡あり。之に力を得て、南へ／＼と急がするに、(略)。

九57 6 鵜(略)、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。

九76 3 鵜(略)、餘程ノ金高トナリテ、ヤ、高價ナル必要品モ買フコトヲ得ベク、(略)。

九76 4 鵜(略)、家業ノ元手ノ一部分トモナスコトヲ得ベシ。

九91 3 鵜(略)之ヲ日本銀行ニ持行カバ、何時ニテモ金貨ト交換スルコトヲ得ベシ。

十23 9 鵜 大イニ怒リテ、(略)。今ヨリ後五日目ノ朝再ビ來ルベシ。トイフニ、良ヤムヲ得ズシテ歸レリ。

十40 3 鵜 二人の我が子それ／＼に、死所を得たるを喜べり。

十46 1 鵜(略)、曲線を用ふれば、更に美しき模様を得べし。

十46 3 鵜 右の第八圖の角を取れば、左の第九圖を得、(略)。

十46 5 鵜(略)、右の第十圖の八角形の角を圓くすれば、左の第十一圖を得。

十61 8 鵜(略)、新式ノ機械ヲ用ヒ

シ以來、大イニ人力ヲ省クコトヲ得テ、產出高モ著シク増加シ、(略)。

十75 1 旅館は山により、谷に臨みて、山水のながめをほしいまゝにするを得べし。

十一8 1 鵜 故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。

十一8 8 鵜 蜜蜂の群集生活を営むを得るは、共同團結して勞動をいとはず、(略)、團體の爲には身命をしまざるによる。

十一16 10 鵜(略)、越王勾踐(略)、范蠡といふ無二の忠臣の助を得て、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十一17 1 鵜(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十一27 4 鵜 帆の運用自在なれば、風の方角に關らず、十分に風力を利用することを得。

十一33 5 鵜(略)、何レモ多量ノ石炭ヲ積ミ、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。

十一40 2 鵜(略)、中には直徑二十尺餘、一樹にて千五百尺ノ材積を得るものもこれあり候由、(略)。

十一58 3 鵜(略)と、しかる様にいふので、兵士は止むを得ず將軍を谷底へ下した。

十一75 2 鵜(略) 一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、(略)よき

枝ぶりの槍を見て、其の意を得たれば、之を書添へんとて、(略)。

十一76 ㊦ 裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、(略)。

十一82 ㊦ (略)、水面近く浮ぶが故に、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふることを得るなり。

十一82 ㊦ (略)、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鮎を得るを常とす。

十一87 ㊦ (略)、今ハ僅カニ六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。

十一89 ㊦ (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、(略)。

十一90 ㊦ 物の價は効用あることと、隨意に得られざることによりて生ずるものなり。

十一90 ㊦ 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、(略)。

十一90 ㊦ (略)、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなし。

十一90 ㊦ (略)、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、(略)。

十一91 ㊦ 日光・空氣の如きは、(略)、隨意に得らるゝものなれば、之を買ふ必要なく、(略)。

十一91 ㊦ 是飲料水とぼしくして、

意のまゝに之を得ること能はざればなり。

十一92 ㊦ (略)、最も價を低くしたる人、其の家を賣ることを得べきなり。

十一99 ㊦ (略)、特殊の網を用ひずとも、撚網にてすくひ取るを得る程にて、(略)。

十一100 ㊦ 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然林にして、(略)。

十一114 ㊦ (略)、灌漑・排水其のよろしきを得て、水田は乾田となり、(略)。

十一114 ㊦ 之によりて用水路の改修行はれ、(略)、二毛作をなし得る良田五十六町歩を得るに至れり。

十二11 ㊦ 朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ擇ブ。

十二17 ㊦ (略)、我等は之を見て、明日の天氣如何を豫知することを得べく、(略)。

十二17 ㊦ (略)、又其の日の天氣豫報は毎朝の新聞紙にても知るを得べし。

十二19 ㊦ 故に今より出帆せんとする船は、之を見て出發を見合せ、又航海中の船は早く港に入りて難を避くることを得るなり。

十二35 ㊦ コ、ニ本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル

所ナリ。

十二36 ㊦ 本校舎ノ建築ハ(略)、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

十二43 ㊦ (略)、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

十二46 ㊦ (略)、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

十二75 ㊦ (略)、又ポーロの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、(略)。

十二78 ㊦ (略)、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。

十二95 ㊦ 景公歸りて群臣に告げて曰く「(略)。我、罪を魯君に得たり、(略)。」

十二104 ㊦ 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、(略)によりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

十二105 ㊦ 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。

十二107 ㊦ (略)、法律案は政府の外、貴族院・衆議院共に各之を提出するを得。

う(助動) 108 ウ う 《ウ》
二4 ㊦ タケヲサンニハドレヲアゲマセウ。

二5 ㊦ 「オトヨサンノハドレニシマセウ。」

二6 ㊦ 「オハナサンハ(略)、一パン大キイノヲアゲマセウ。」

二7 ㊦ サア、ミンナデ(略)、キミガヨヲウタヒマセウ。」

二13 ㊦ 「ドコヘナガレテイクノデセウ。」

二19 ㊦ モシナツデアツタラ、ドンナイロヲツケタデセウ。

二22 ㊦ 「カクレンボヲシテアソビマセウ。」

二23 ㊦ (略)、イツシヨニコノカキネノワキニカクレマセウ。」

二24 ㊦ 「ドコダラウ、アア、アノ木ノ下ニタケヲサンガキマス。」

二34 ㊦ 「カガミモチヲマトニシテ、イデミマセウカ。」

二40 ㊦ 「ミンナデユキダルマヲツクリマセウ。」

二41 ㊦ 「マダ小サイカラ、モウスコシ大キクシマセウ。」

二41 ㊦ コレカラアタマヲツクリマセウ。」

二42 ㊦ ダルマサンノ目ハ(略)、大キナ目ヲツケマセウ。」

二44 ㊦ 「耳ハドウシマセウ。」

二49 ㊦ コレカライツシヨニヨンデミマセウ。

二60 ㊦ (略)、カレ木ニハナヲサカセマセウ。」

三48 窓 「コレガ スンデ カライ
キマセウ。」
三55 窓 「略、チツトソトヘデ
テ、イツシヨ ニウタヲウタヒマ
セウ。」
三57 窓 「コレガ スンデ カライ
キマセウ。」
三75 窓 「コレ カラ ハナヲツミ
マセウ。」
三83 窓 「ソレデハ ワタクシハス
ミレヲ ツミマセウ。」
三185 サヘヅルダケサヘヅルト、
イマニマタオリテキマセウ。
三198 略、子ヒバリハスノ中
デ、ドンナニマツテキルコト
デセウ。
三234 私はなんでせう。
三284 コレカラ二三日タツタラ、
マダズツトタカクナリマセウ。
三345 イマニアノナヘガノビ
テ、アライタタミヲシイタヤウ
ニナリマセウ。
三365 窓 「どうしてもう光らない
のでせう。」
三377 さあ、これからがくかう
へ行きませう。
三415 窓 「水の中へはいつたら、
どんな心もちだらう。」
三464 窓 「あまりほしがきれい
だから、二つ三つはたきおとさ
うと思ふのだ。」
三612 はまべのまつの木の下

へ行つて見ませう。
三671 窓 オレイニリユウグウヘ
ツレテ行ツテアゲマセウ。
三704 窓 アマリナガクナリマス
カラ、モウウチヘカヘリマセウ。」
三714 窓 ソレデハオワカレノシ
ルシニコノハコヲオ上ゲマウ
シマセウ。
四45 窓 うちはどれでせう。」
四51 窓 あのこちらに白いかべ
が見えませう。あれがうちで
す。」
四76 窓 「くるまにのつてゐる
人を入れると、六人でせう。」
四243 窓 「ソレデハ五カケモラヒ
マセウ。」
四295 窓 らい年またお目にかか
りませう。
四377 皆サン何デセウ。
四437 窓 このまん中に小さな物
がありませう。これがのしあは
びのかはりです。」
四443 窓 「どうしてのしあはびを
つけるやうになつたのでせう。」
四452 窓 それですから、略、な
まぐさのしるしにのしあはび
をつけるやうになつたのでせ
う。
四518 何デセウ。アテテゴラン
ナサイ。
四534 窓 ワニザメハ「ソレハオ
モシロカラウ。」ト答ヘテ、略。

四555 イマ一足デヲカヘ上ラ
ウトイフ所デ、略。
四646 今日早くから學校へ
行つて、みんなで雪なげをしま
せう。
四685 窓 苦ケレバ私ガカハリニ
ノンデ上ゲマセウ。」
四693 窓 「略、モツトタクサン
ノンダラ、早くナホリマセウ。」
四774 さをのさきの扇をい
よといふのでせう。
五156 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。
五186 略、ズンズンシユツセラセ
ヨトイフ心デ祝フノデセウ。
五213 窓 「こんどは何の御用をいた
しませう。」
五232 大そうおこつて、取りかへさ
うとすると、略。
五252 窓 どうして釜のやうな重い物
が持つて行かれませう。
五361 略、ヤ、カンザシナドニ蝶ノ
形ノツケテアルノモ、ソノスガタガ
カハイラシイカラデセウ。
五363 コノカハイラシイ、美シイ蝶
ヲツカマヘテイヂメル人ハ、ドウイ
フ心デセウ。
五392 下りる人もあり、のりこまう
とする人もあり、略。
五411 あれは今のつた人の手荷物で
せう。
五414 あの人はいもう間に合はないで

せう。
五435 向フノ汽車カラコチラノ汽車
ヲ見テモ、同じコトデセウ。
五491 窓 もし君が居なかつたら、僕
は死んでしまつたのだらう。」
五554 窓 又鳥ノ方ヘ行キマス、
「オ前ハケモノダラウ。」トイッテ、
アヒテニシテクレマセン。
五708 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷
川ノ中ヘハイリマシタ。
五806 へいけ方はがけの上から、て
きの軍ぜいが攻めこまうとはゆめに
も思はない。
五811 略、人も顔を見合せて進ま
うとはしない。
六93 その松山へのぼらうといふの
です。
六204 昔ある國で大きな象の目方を
はからうとしたが、略。
六208 窓 「そんなら私がかつて見
ませう。」
六252 窓 「略、ナカデー番人ノ役
ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デセ
ウ。
六268 窓 「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、略。
六271 窓 「略、ソレヨリモツトタ
クサンアツテ、モツト役ニ立ツモノ
ハ鐵デセウ。
六292 窓 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、
時々青イ物ヲ出シマセウ。
六788 今ニ出帆スルノデアラウ。

六80 2 アレハ停車場へ送ルノデアアラウ。

七22 4 図 私どもの親類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲くれんげ草でございませう。」

七25 6 モシ手ガナカツタラ、ドノクラ半不自由デセウ。

七27 5 筆一本デ美シイエヲカイタリ、(略)タリシテ、人ヲ感心サセルノモ、手ノハタラキデセウ。

七38 7 店ニハ番人ガ居テ、買ハウト思フ物ハスグニ買ヘル。

七39 7 (略)皆ほしいとは思ひましたが、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。

七39 8 馬の主は馬を引いてかへらうとしました。

七42 5 図 さだめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのこととございませう。

七78 1 (略)シテキルノハ、陸上デハ見ルコトノ出来ナイ美シイ景色デアラウ。

七81 4 図 私は年中航海をしてゐるものですから、少しそのお話をいたしませう。

七81 5 図 皆さんは海を御存じでせう。

七81 6 図 汽船も軍艦も御存じでせう。

七88 5 図 (略)、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。

七88 7 図 皆さんの中にも、(略)外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。

七88 8 図 又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。

八13 3 図 (略)お目にかゝりたくありません。その内参りませう。

八23 9 (略)酒代の借があるので、其のかたに持つて行かうとするのです。

八41 5 火事だ、火事だ。どこだらう、あまり遠くはないらしい。

八42 8 仕合に風上で安心だが、叔父さんのうちはどうだらう。

八43 2 さつきからももう二時間もたつから、四五十戸も焼けただらう。

八44 8 (略)、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

八45 6 図 「どうしてそんなに早く伯父さんに分つたのでせう。」

八45 8 図 (略)、誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。

八88 8 中佐ハ目ヲ見張りテ、軍刀ヲ杖ニ起上ラウトスル。

八89 8 陣地ハフタ、ビ敵ニ取返サレルノデアアラウ。

九20 2 図 何で命ををしみませう。

九23 4 図 其のうちには花々しい戦争もあるだらう。

九33 5 (略)、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、日夜其の事ばかり考へてゐた。

九82 6 図 「今年の競馬はさぞ面白からう。」

十28 3 (略)、古い銀杏の木が一本、(略)。はうきを立てた様に高く雲をはらはうとしてゐる。

十30 1 何を撃つたのだらう。

十一56 7 おくれ、ばビエールはこゝで死んであらう。

十一56 9 図 此の時「自分が行かう。」とさけぶ人を誰かと見れば、(略)。

ウィーン(地名) 1 維也納

十二81 6 處は埃太利の首府維也納の大公園、(略)。

う・う「植」(下二) 4 植ウ 植う「ウル・エ」

八47 図 廣き道の左右に梅・松・櫻などを植ゑたり。

十32 6 図 (略)此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、(略)。隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、(略)。

十33 5 図 昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、(略)。

十一111 10 図 (略)、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、(略)。

うえ「上」(名) 110 ウヘ 上 ヲあねうえ・おばうえさま・そのうえ・ちちうえ・ちちうえさま・みのうえ・やまのうえのみはらし

ニ14 6 犬ガ(略)、ハシノウヘ

ニキマシタ。

ニ15 4 (略)、ハシノウヘカラ、

ワント一コエホエマシタ。

ニ17 3 (略)、イロイロナ木ノハガトンデキマス。(略)。ミツノウヘニオチテ、(略)。

ニ20 4 イマハ木ノ上ニキマサガ、モウスコシタツト、(略)、下ヘトビオリマス。

ニ54 7 (略)、犬ヲウツメテ、ソノ上ニ(略)ヲ一本ウエマシタ。

ニ63 3 (略)、カレ木ノ上ニノボツテ、(略)。

三12 ヲカノ上ニモ、ツツミノ上ニモ、サクランハナガ一メ

ンニサキマシタ。

三12 ヲカノ上ニモ、ツツミノ上ニモ、サクランハナガ一メ

ンニサキマシタ。

三10 5 一パン上ノニイサンハイマヘイタイニイツテキマス。

三12 7 にはのまつの木の上へ月がでてゐます。「ひらがなのドリル」

三17 4 アタタカイカゼガソヨソヨトムギノホノ上ヲフイテキマス。

三35 3 あをいひかりがかみの上からすいてみえます。

三41 2 それをからすが木の上から見てゐて、(略)。

三47 1 図 (略)やねの上へあがつてはたけ。」

三47 7 かへるは(略)。とんぼな

どがあたまの上をとびまはつても、(略)。

三49 (略)、下へもぐつて、(略)、ひとりでにかぶやうにして、水の上へ出てきます。

三49 水の上で足をのぼして、ぼんやりうかんでゐることもあります。

三50 かへるは水の中にも、をかの上にもすむことができます。

三72 ウラシマハハコヲモラツテ、マタカメノセナカニノツテ、海ノ上へ出て来マシタ。

四6 (略) 今あのはしの上を人がいくたりとほつてゐますか。」

四13 (略) あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、(略)。

四16 (略)、矢にあたつたのししが、上の方から(略)へかけおきて来ました。

四19 (略)、ただつねはすぐにそばのたふれてゐた木の上へとびのきました。

四52 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、(略)。

四54 (略) オマヘタチノセナカノ上ヲアルイテ、カゾヘテ見ルカラ、(略)。

四60 (略)、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。」

四71 (略)、母はせい出すはりしごと。ひざの上には何かある。

四73 一バン上ノダンニハダイリサマヲナラベテ、(略)。

四82 赤い扇は(略)二つ三つまはつて、波の上におちました。

五24 よい神さまがたは、(略)、色色ごさうだんの上、(略)、おくらをおはじめになりました。

五86 そらからふつて、山の木のはの上に休んでゐましたが、(略)。

五87 (略)、風にふかれて、土の上へおちました。

五99 それから少し来ると、高いがけの上へ出ました。

五118 ある時上の方でさわがしいおとがするから、見上げると、はしかけてあつて、(略)。

五126 やがて重い物が私どもの上へ来ましたが、何かと思つたら、(略) 船が通つてゐたのです。

五172 蟲ナドガ水ノ上ヲトンデキルト、ハネ上ツテトツテ食ヒマス。

五34 (略)、シヅカニ木ノ葉ノ上ニネムツタヤウニシテキルノヲ見ルト、(略)。

五40 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで来ました。

五43 (略)、汽車ハハシノ上ヲ通ツテキマシタ。

五80 (略)、夜のうちにがけの上まで出た。

五85 へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。

六37 川の上にかけた橋、(略)。

六10 (略)、草の上にすわつて、にぎりめしをたべた時は(略)。

六28 (略) 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅ヨリモマダ上デス。」

六52 京都の東山の山の上に秀吉のはかがございます。

六55 ある時謙信が山の上に陣取つてゐると、(略)。

六72 むねの上には紙のぬさを立てて、色どつた大きな弓矢や扇車がかざつてあります。

六74 間もなくむねの上からもちを投げると、(略)。

七33 蛾は(略)、出て来ると、すぐに紙の上において卵を産みつけさせる。

七35 (略) うるしの上に金又は銀にてゑがきたるものをまきゑといふ。

七58 (略) 電車ニテ九段坂ノ上ニイタリ、靖國神社ニサンケイス。

七59 (略) カヘリ道ニ坂ノ上ヨリ見下セバ、(略)。

七71 アサリ・ハマグリナドハ砂ヤ泥ノ上ニ居リ、(略)。

七83 (略) とび魚が甲板の上へと

び上ることもあります。

八15 役所デモ、會社デモ、上カラ下マデ一同ソロツテ事務ニ取りカ、ル。

八20 (略)、この農夫と野原の草の上に坐つて、(略)。

八39 (略) 箱ハウスキ木片ヲ折り、其ノ上ニ紙ヲ張りテ造リ、(略)。

八39 (略) 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數マデ數ヘ上グレバ、(略)。

八42 長い天氣つゞきで、かわききつてゐる上に、今夜の此のはげしい風では、どこまで焼けて行くか分らない。

八57 いすかのくちばしは上と下がくちかがつてゐる。

八55 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、(略)。

八90 (略) 多數ノ部下ヲ死ナセタ上、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ残念千萬ダ。」

九4 (略) かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、(略)。

九10 (略)、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。

九13 (略) 紺がすり上物十反だけ御見立の上、二口とも本月十五日までに御送り相成度願上候。

九27 (略) 靖國神社ハ東京九段坂ノ上

ニアリ。

九33 4 (略)、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、(略)。

九34 4 (略) 鐵道を敷き、其の上を走る汽車を造つた。

九44 3 (略) (略)、一日も早く御用御すましの、御歸りの程御待ち申上候。

九48 7 (略) 夜明くれば、砂の上に新しき駱駝の足跡あり。

九53 9 (略)、海ノソコノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類ハ、(略)。

九55 8 (略) エダシヤクトリハ、其ノ體色ノ桑ノ木ニ似タル上、其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ、メニ突出スルトキハ、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

九69 4 (略)、黄色に實のつた秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、(略)。

九69 8 (略)、風の吹散した木の葉の上に、雨の降りかゝるのは、(略)。

九85 7 (略) 水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわぎである。

九93 8 (略) 岩にくだくる清流、(略)。

十五 5 (略) 大鬼蓮ハ(略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出來ルサウデアル。

二十 10 印刷する紙は(略)。それを

折つて、揃へてとどる。其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。

十21 1 表紙には紙ばかりのもあり、紙の上を布で包んだのもある。

十21 6 それは版下を堅い木にはりつけて、其の上から彫つて版木を造り、(略)。

十26 7 (略) 御入營の上は、品行方正、職務に忠實にして、隊中の模範となられ度、(略)。

十28 4 中程の枝の上に鳥が二羽止つて、(略)。

十36 2 (略) 私はわざと一卷の書物を床の上に投げておきました。

十36 5 (略) 書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

十37 7 (略) 色々な美質をもつてあることをよく見定めました上、なほ平生の行をしらべて雇ふことに致しました。

十42 9 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ネテ、(略)。

十64 1 見張人がマストの上から北の方を指さして聲高く呼んだ。

十68 3 (略)、此の燈臺附近の岩の上に乗上げた帆前船あり。

十69 3 (略) 夜明けて見れば、岩の上に一隻の難破船横たはれり。

十75 5 (略) 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、其ノ上ニ頭ヲイタダキ、(略)。

十75 8 (略) 骨ハ筋肉ニ包マレ、皮膚更

ニ其ノ上ヲオホフ。

十82 1 (略)、垣の上には多くの頭骨、風雨にさらされて残れり。

十91 4 (略)、有志の方々御さそひ合せの上、御來會相成候ては如何。

十92 6 (略)、何れ熟考の上實行せんと申合せ居り候事とて、(略)。

十一 3 9 (略) 寺の上の小高き所に後醍醐天皇の陵あり。

十一 27 10 (略) 其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へたるを以て、(略)。

十一 35 3 (略)、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十一 35 4 (略)、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十一 64 6 同ジ材料デモ、(略)、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニモ大イナル得失ガアル。

十一 83 4 (略)、半月金華山の上に

出でて、川風たもとを拂ふも快し。

十一 108 5 男はゆるやかな股引をはき、胸衣を着けて、其の上に長い上衣を着る。

十一 117 10 (略) 東洋平和の天職は

かゝる、我等の肩の上。

十二 13 5 船ヲ組立テルニハ、船臺ノ上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、(略)。

十二 13 7 (略)、船臺ノ上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、其ノ上ニ先ヅ龍骨トイフモノヲ置ク。

十二 14 1 (略)、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。

十二 19 5 (略) 天氣圖とは(略)一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

十二 19 10 (略) 又風の方向は矢を以て示し、矢の上へ向ふは南風、(略)。

十二 92 8 (略) 身分相當の交際は家を保つ上にも必要なり。

十二 114 9 (略) 五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、此の五箇條を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せ給へり。

十二 116 8 (略) 平常質素を旨とすべきは修身・處世の上に於て何人にも最も大切なること言を待たず。

うえ「飢」(名) 1 飢は先頭に進める一部に過ぎず、(略)。

うえ「植」(四) 1 植込ム「ミ」

うえ「植」(四) 1 植込ム「ミ」

十 99 9 (略) 廊下ノ兩ガハニハ幾百株トナク牡丹ヲ植込ミタリ。

うえ「飢」(サ変) 3 餓死ス

餓死ス「スル」

十 31 7 (略)、不作ノ年餓死スル人ノ多キヲアハレミ、(略)。

十 32 5 (略) 五穀不作ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レ

リ。

十33 4 図 (略)、罪人ドモハ魚類・果
實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死
スルモノ年々少カラザリキ。

うえずぎけんしん「上杉謙信」〔課名〕

2 上杉謙信

六目5 第十七 上杉謙信

六55 1 第十七 上杉謙信

うえずぎけんしん「上杉謙信」〔人名〕

2 上杉謙信

六55 2 川中島の戦で名高い上杉謙信
は強い大将であつた。

六58 1 上杉謙信はこんな強い人で
あつたが、又なさげぶかい人であつ
た。

うえつけ「植付」(名) 1 植付

十一35 8 図 當地にてはとくに苗の
植付も終り、(略)。

うえなおす「植直」(五) 1 植直す

《一ス》

十20 1 さてかりに印刷して、讀合せ
て見て、誤があれば、幾度でも其の
活字を抜きかへて植直す。

うえの「上野」〔地名〕1 上野

七55 7 図 上野ノ山下下リテ、淺草行
ノ電車ニ乗ル。

うえのこうえん「上野公園」(名) 2

上野公園

七54 6 図 ソレヨリ二十分アマリニテ

上野公園ニ着ク。

七54 6 図 上野公園ニハ廣キ動物園ア
リテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メ

タリ。ソノ他博物館・パノラマナド
アリ。コ、ニハ櫻ノ木多シ。

うえのゆき「上野行」(名) 1 上野行

七54 2 図 新橋停車場ヲ出デテ、上野
行ノ電車ニ乗ル。

うえゆき「植行」(五) 1 うえ行く

《一ク》

七10 3 図 ならぶすがさ涼しいこゑ
で、歌ひながらにうえ行くさなへ。

うゑる「植」(下) 6 ウエル うゑ
る 植ゑる 《一エーエル》

二47 6 (略)、ドコノテンジンサ
マノオヤシロニモ、ウメノ木

ガウエテアリマス。

二55 1 (略)、犬ヲウツメテ、ソノ
上ニ小サナマツノ木ヲ一本

ウエマシタ。

三33 2 ナヘヲウエテキル女ハ、
マルイカサヲカブツテ、アカイ

タスキヲカケテ、(略)。

七10 5 図 (略) うゑ行くさなへ。な
がい夏の日いつしか暮れて、うゑる

手先に月かげ動く。

七69 3 図 (略)、こんな見事な桃がな
るのなら、植ゑて見たいと申して居

ります。

十22 1 又活字は何時でも直に植ゑる
ことが出来るが、(略)。

うお「魚」(名) 26 魚ウかわうお・と
びうお

三60 3 (略)、魚をつつてゐる舟
です。

四45 3 図 今でも魚や貝や鳥

や、すべてなまぐさものを おく
る時には、のしをつけません。」

五10 5 魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。

五17 1 鯉ハマコトニサセイノヨイ魚
デス。

五19 7 母は流しもとで、まないたに
魚をのせて、さしみをこしらへてゐ

ます。

五53 8 油ニモ色々アリマス。魚カラ
トツタモノモアリ、(略)。

六66 5 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカ
マヘルコトガアリマス。

六66 6 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ
通シテ、(略)。

六74 4 ぬさの前にはおみきやもちや
魚がそなへてあります。

七69 9 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色
々ノ動物ガ居リ、サマシノ植物モ

アル。

七73 8 (略)、魚ニ似タモノニハ、鯨
ガアル。

七77 8 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル

ノハ、(略)。

九58 7 図 (略)、くさりたる魚などを
食ひて、一命をうしなふ者少からず。

九88 3 図 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ
魚ヲ米ニ取換ヘントテ、(略)。

九88 4 図 其ノ農夫若シ魚ヲ望マズバ、
(略)。

九88 5 図 乙ノ農夫モ亦魚ヲ望マズバ、
(略)。

九88 7 図 (略)、其ノ魚ハ腐リテ、一
合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

十29 6 (略) 小川ガ流れてゐる。魚
の影は一つも見えない。

十一79 1 図 鵜を使ひて魚を捕ふこ
と、我が國にては古來廣く諸所に行

はれたり。

十一80 8 図 此の間に鵜を引上げて吞
みたる魚を吐かせ、(略)。

十一81 4 図 鵜の首元は細なはにてし
ばりたれば、捕へたる魚を腹中に吞

下すことなく、(略)。

十一81 8 図 くはへたる魚をふりかへ
て、頭より吞下す早業は、(略)。

十一82 2 図 かざり火をたくは魚を集
めんが爲なるのみならず、(略)。

十一82 3 図 魚は火の光を追ひて集り
來り、(略)。

十一82 5 図 (略)、鵜は深く沈まずし
て、たやすく魚を捕ふことを得る

なり。

十一102 10 図 「我ノ孔明アルハアタ
カモ魚ノ水アルガ如シ。

うおいちば「魚市場」(名) 1 魚市場

七54 4 図 右ノ方ハ魚市場ニテ、賣買
ノコエカマビスシ。

うおうさおう「右往左往」(名) 1 右
往左往

十一80 6 図 鵜匠は一人にて十二羽の
鵜を使い、十二條の細なはを片手に

握り、右往左往思ひくく浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。

うかい「鵜飼」(課名) 2 鵜飼

十一目 第二十課 鵜飼

十一78 第二十課 鵜飼

うかい「鵜飼」(名) 5 鵜飼

十一79 2 中にも美濃の長良川の鵜飼は最も名高く、(略)。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

十一79 3 (略)、鵜飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鵜飼をおもふに至れり。

カヅニ、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。

七16 2 急ぎますのでうかがひませんが、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、御多分りよなくおつしやつて下さい。

九48 2 (略)、人々のねしづまるをうかがひ、ひそかに駱駝にうち乗って、そこより逃れ出でたり。

十一15 1 臨幸餘りにおそかりしかば、人をしてうかがひしむるに、(略)山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

十一72 10 (略)、「かしこに行きて、彼の畫師の有様を見給へ。」ときさやくに、行きてうかがへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。

十一73 5 かくて次の夜は如何にとうかがふに、前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく晝がかななどひとり言いひ居たり。

十一79 9 鵜飼は(略)。此の間毎夜月なき時をうかがひて漁舟を出す。

十二88 6 出入口に、はき物の置亂れたる家には、盗人のうかがふこと多しといへり。

うがつつ「穿」(四) 6 ウガツ うがつつ「チーツ」

七78 5 園のきよりおつる雨だれのたえず休まず打つ時は、石にも穴をうがつなり。

九42 4 水ノシヅクモ度重ナレバ石ヲモウガツトイフ。

九42 6 山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、カ、リテハタキトナリ、(略)。

十一88 5 蚯蚓は地下に穴をうがて住み、(略)。

十一89 5 蟻は(略)、多くは地下に穴をうがて、部屋・廊下を造り、(略)。

十二48 8 園古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は 山をうがて山を鑿る。

うかびいず「浮出」(下二) 1 浮び出づ「ツル」

十一82 7 鵜はくぐり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、(略)。

うかぶ「浮」(四・五) 5 うかぶ 浮ぶ「ビープ・ベーン」

三49 2 (略)、下へもぐつて、しばらくたつと、ひとりてにうかぶやうにして、水の上へ出てきます。

三49 5 水の上で足をのぼして、ぼんやりうかんでゐることもあります。

十一82 5 魚は(略)、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、(略)。

十一82 10 (略)、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、(略)。

十二78 8 (略)、又果實の附きたる枝の波のまに／＼浮べるを見たり。

うかぶ「浮」(下二) 2 浮ぶ「べ」

十一79 10 観客は遊船を中流に浮べて、鵜舟の下り来るを待つ。

十二79 9 (略)、コロンブスは深紅の美服を着し、(略)、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、(略)。

うかべる「浮」(下二) 2 うかべる 浮べる「べ」

五10 8 ひるはあたたかな日にてらされ、夜は美しい月をうかべながら、休なしにあるきました。そばを通る人が「美しい川だ。」といつて、ほめました。

九31 7 (略)最初の船は、フランスのセイヌ川に浮べたが、不幸にも直に沈んでしまつた。

うきあがる「浮上」(五) 1 浮上る「ツ」

十66 1 鯨は再び浮上つた。

うきさ「浮草」(名) 1 ウキサ

十五1 植物ノ葉ニハウキクサノ葉ノ様ニ小サナノモアリ、(略)。

うきしろ「浮城」(名) 1 浮城

十一29 2 大小幾多の軍艦は海上の浮城とも稱すべく、(略)。

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

十二83 6 重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

かれるやうな心持になる。

うきみどう「浮御堂」(名) 1 浮御堂

861 堅田の浦の浮御堂、おち来るかりもふぜいあり。

う・く「浮」(五) 3 うく 浮ク「イ」

341 1 見てゐるうちにまた一びきくはて、ういて出ます。

510 5 魚はうれしさうにういたりしづんだりして、およいでゐました。

777 8 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ダリオヨイダリシテキルノハ、(略)美シイ景色デアラウ。

う・く「受」(下二) 17 受ク 受ク 承ク「一クル・一ケ」ムかりうく・ひきうく

955 5 倭姫命此の時天叢雲劔を尊に授け、「(略)」と教へ給へり。尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、(略)。

976 5 又病氣其ノ他ノ場合ニモ、他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカルベシ。

1229 9 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落シ、(略)良(略)拾ヒ取りテサ、グ。老人足ニテ之ヲ受ケ、笑ヒテ去ル。

1246 6 (略)、其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。受ケテ見レバ、世ニモ得難キ兵書ナリ。

14310 10 (略)、翌年英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、ドイツ・アメリカ等

ノ諸國ヨリモ續々注文ヲ受ケ、販路次第二開ケ、(略)。

1144 4 正儀は河内にて領地を與へんとしたれども、熊王は「何の戦功もなければ」とて受けざりき。

1170 4 (略)、又人より訪問を受ける時は直ちにでて應接すべし。

1222 2 神代より承けし寶をまもりて、治め來にけり、日の本つ國。

1228 8 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

1274 4 我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、(略)。

1274 4 (略)、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈没し、(略)。

1226 7 天正三年五月奥平信昌、徳川家康の命を受けて長篠城を守る。

1291 3 (略)、幼兒は母の感化を受けること最も多し。

1296 2 孔子の孫子思の學説を受け、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

12108 6 又貴族院及び衆議院は(略)、且臣民の請願を受けるの權能を與へられたり。

12112 3 故に下級の者の上官の命を承くるや、直ちに陛下の命令なり

と思ふべく、(略)。

12114 4 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、(略)、節操も武勇も忘れ果てて、世人の爪弾を受けるに至るべし。

うぐいす「鶯」(課名) 2 うぐひす 四目 8 二十 うぐひす

四64 7 二十 うぐひす うぐいす「鶯」(名) 5 うぐひす

四65 1 ほうほけきよ、ほうほけきよ。うぐひすがないてゐます。

四66 4 昔からうめに うぐひすといつて、うめの花のさくじぶんから、(略)なきははじめます。

五27 7 二月・三月花ざかり、うぐひす鳴いた春の日の たのしい時もゆめのうち。

八35 1 (略)、つゞいてかゝる梅が香に、うぐひす 鳴かぬ 里もなし。

九91 8 (略)、勅なれば いともかしこし、うぐひすの 問はば如何にと 雲あまで 聞え上げたる 言の葉は、(略)。

うけたまう「受給」(四) 1 受ケ給フ「一へ」

八51 3 (略)、皇子ノクツヌゲタリ。鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツキテ皇子ニサ、ゲシニ、皇子モマタヒザマツキテ、之ヲ受ケ給ヘリ。

うけたまわりきたる「承来」(四) 1 ウケタマハリ來ル「一リ」

七45 ミヅカラ御コトバラウケタマハリ來リテ我ニツグタルヲ、汝ハ早クモワスレタルカ。

うけたまわりもうす「承申」(四) 1 承り申「一シ」

十59 6 (略)、罰に處せられたる者は外出を禁ぜられ、又重き者は營倉に入れられ候由承り申候。

うけたまわる「承」(四・五) 3 承る「一リール」

七21 5 「さうでございますか、はじめて承りました。

八31 1 神殿は昔ながらの白木造にして、二十年ごとに新しく造らせたまふ御定なりと承る。

十92 8 (略)、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

うけつぎたまう「受継給」(四) 1 受けつぎ給ふ「一フ」

九14 4 代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。

うけつぐ「受継」(四) 1 承けつぐ「一ギ」

十二24 承けつぎし國の柱の動きなく榮えゆく代を問ひのるかな。

うけつけ「受付」(名) 1 受付 八48 受付

うけとりにな「受取人」(名) 1 受取人

七52 1 この手紙は(略)。(略)。

不足の時には、その不足の倍だけを受取人の方で拂はなければならぬのです。」

うけとる「受取」(四・五) 9 うけ取る 受取る「一ッ・ラー・リール」

540 5 あちらの方のは、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。

63 5 圖 (略)、やうく杖を見つけて出し、すぐに拾つて取つてやる。めくらは杖を受取つて、「あゝ、ありがたうございます。(略)。

712 7 圖 品物と引きかへに代金を受取るのが現金で、(略)。

712 9 圖 (略)、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけてす。

750 6 圖 「松村さん、郵便。」とよびて、配達夫は入口に立ちたり。お花は「はい。」と答へて受取らんとせしが、(略)。

750 9 圖 母は出で来りて、やがて六錢をはらひて、一通の手紙を受取りたり。

116 10 圖 働蜂中には蜂の集め来る蜜を検査する検査掛あり。又之を受取りて貯ふる貯蓄掛あり。

1147 3 (略) 一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。

12100 4 圖 (略)、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起る

こと殆ど無し。

うける「受」(下二) 5 ウケル 受ケル 受ける「一ケ・一ケル」ひきうける・みうけもうす

231 2 圖 カゼ ヨク ウケテ、クモマデアガレ。

886 5 中佐ハハヤ、右手ニ一ヶ所ノ傷ヲ受ケタガ、(略)。

888 1 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。

937 5 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、關所破といつて、其のものは重い罰を受けた。

1220 7 植物の花には、同種の他の花の花粉を受けると、良い實を結ぶものがある。

うごう「烏合」(名) 1 烏合

12111 5 圖 (略)、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。此の如き人の組織せる軍隊は即ち烏合の衆に同じ。

うごかす「動」(四・五) 6 ウゴカス うごかす 動かす 動かす「一・シ・ス」

558 6 石炭ノ火ノ力ハ(略)、汽車ヤ汽船ヤソノ他ノキカイナドヲウゴカスノニハ、皆コレヲ使ヒマス。

728 4 手バカリ動カシテモ、チエガナケレバ何ノ役ニモ立チマセン。

730 9 食つてしまふと、頭をうごか

して、しきりに桑の葉をたづねる。

966 6 圖 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。

969 5 (略) 秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、むら雀のぼつと飛立つのは面白い。

1120 7 圖 (略)、屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

うごき「動」(名) 2 動き

11116 5 圖 神代はるけき昔より君臣分は定まりて、萬世一系動きなき我が皇室の大みいつ。

1222 4 圖 承けつぎし國の柱の動きなく榮えゆく代を尚いのるかな。

うごきだす「動出」(五) 1 動き出す「一・ス」

934 8 やがて汽車が動き出すと、馬上の人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、(略) どうして競走が出来るよう。

うごく「動」(四・五) 14 ウゴク うごく 動く 動く「一・イ・カ・ク」

228 3 コクキハヒラヒラトカゼニウゴイテキマス。

322 5 うごかずにあますが、しんだのではありません。

448 7 圖 とけいは あさからかつちん、かつちん。おんなじひびきで、うごいて居れども、(略)。

710 5 圖 (略)、歌ひながらにうゑ行

くさなへ。ながい夏の日いつしか暮れて、うゑる手先に月かげ動く。

719 4 にはの藤の花が咲いて、風が吹く度にむらさきのふさが動いてゐる。

777 8 波ニユラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動く間ヲ、(略)。

778 8 圖 (略)、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、はげみ進むに何事のなご成らざらん、(略)。

844 8 大きなきかいの動くのも、汽車や汽船の走るのも、皆火の力の利用によるのである。

870 8 圖 かくて二三日を過せしに、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、(略)。

924 4 此の時も少し進んだきりで、やがて動かなくなつたが、しらべて見ると、機關の一部に故障があつたので、(略)。

1228 5 中程の枝の上に鳥が二羽止つて、さつきから少しも動かない。

1145 9 圖 (略)、刀を取直して腹かき切らんとす。居合せたる人々(略)、「何とて命を捨つるに及ぶべき。」と、取つておさへて動かせず。

1278 4 圖 コロンブスは獨り堅固なる決心を以て動かざること山の如く、(略)。

1295 9 圖 此の會に於ける孔子の行動は(略)、孔子は義を以て人を動かせしなり。

うさぎ 母しろうさぎ・のうさぎ
うし「牛」(名) 24 ウシ うし 牛

一 92 シカウシツノ

一 95 ウシノツノ

三 31 うし「ひらがなのドリル」

三 135 ウシノツノヤ、シカノ

ツノデモ ヲツテシマフ ホドデ、
(略)。

三 236 牛にはつのがあつたけれど
も、うまにはありません。

三 238 うまにはたてがみがある
けれども、牛にはありません。

三 242 牛はからだが大くて、足
がみじかうございます。

三 243 牛のつめは二つにわれ
てゐますが、(略)。

三 246 牛は力がつよいけれど
も、あるくことがおそうござい
ます。

三 247 うまは牛よりよわいけれ
ども、はしることがはやうござ
います。

四 164 牛ほどもある 大きな
のししで、(略)、土けむりをた
てて、とんで 來ます。

五 714 牛ノ角トハチガツテ枝ガア
ル。

六 796 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカ
ラ牛ヲ何匹トナクツルシオロシタ。

七 626 二匹の犬、よく二三百頭
の牛、二三千頭の羊を追ひまはして、
主人の行く方へ行かしむといふ。

八 191 昔西洋のある所に、畑もたく
さんもつて、牛もたくさんかひ、何
不足なく暮してゐた農夫がありまし
た。

八 194 (略)、牛も段々減り、畑の取
高も年々に少くなつて、五六年の中
によほど財産を減らしました。

八 233 牛小屋の牛はしきりに鳴いて
ゐるのに、誰も草をやるものがあり
ません。

九 893 貨幣トシタル物品ハ(略)。
貝・毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコ
トアリ。

十 838 (略)、家畜としてもつと大切
なものは牛・馬・羊・豚等である。

十 841 田を耕させたり、荷車を引か
せたり、重い物を負はせて遠くへ運
ばせたり、農家では牛を色々の労働
に使役する。

十 845 東京市だけでも、一年にほふ
る牛は數千頭にも上るといふことで
ある。

十 851 馬も牛と同様に労働にも使は
れ、食用にもなる。

十 852 馬も(略)。死んだ後で、身
體の全部にすたりのないことも牛と
同じである。

十 862 又馬が人をけたり、牛が人を
突いたりするもの、人に恐れるから
である。

うじ「氏」(名) 1 氏 母あしかがう
じ・くすのきうじ・ふじわらうじ

七 458 家の氏の名多けれ
ば、紋の数々かぎりなし。

うじ「宇治」(名) 3 宇治

十一 303 又嚴島・橋立・須磨・明

石・宇治・龍田等ハ名勝ノ地ヲ以テ

名ヅケタルモノニシテ、(略)。

十一 32 砲艦宇治

十一 33 砲艦ハ(略)。サレバ艦體

輕ク、小サク、船脚ハ淺シ。宇治・
隅田等はナリ。

うしかい「牛飼」(名) 1 牛かひ

七 625 外國にては、犬をして牛か
ひ・羊かひの手つだひをなさしむ。

うじがみ「氏神」(名) 1 氏神

九 810 昔或氏神のお祭に競馬の神事
といふ事があつた。

うじがわ「宇治川」(地名) 1 宇治川

十二 6 湖水より出づる瀬田

川は下流宇治川となり、淀川となり
て、(略)。

うじこ「氏子」(名) 1 氏子

九 821 昔或氏神のお祭に(略)。そ
れは氏子の五箇村から子供の騎手を
一人づつ出して、(略)。

うしこや「牛小屋」(名) 2 牛小屋

八 233 牛小屋の牛はしきりに鳴いて
ゐるのに、誰も草をやるものがあり
ません。

八 245 (略)、今度は下女がばけつを
さげて、牛小屋から出て來ました。

うじでら「氏寺」(名) 1 氏寺

十 945 此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニ

シテ藤原不比等ノ建立セシトコロ、
(略)。

うしとうま「課名」2 うしとうま

三 目 9 ハ うしとうま

三 235 ハ うしとうま

うじな「宇品」(地名) 2 宇品 宇品

十一 19 宇品

十一 20 瀬戸内海の沿岸には高

松・多度津・高濱・尾道・宇品等の
港多く、(略)。

うしないたま「失給」(四) 1 失ひ
給ふ「一ヒ」

十 39 此の方面の戦鬪に 二子を失
ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』

と。

うしなう「失」(四・五) 9 ウシナフ

うしなふ 失フ 失ふ「一ツツハ
一ヒーフ」

七 925 中佐ハボートニ坐シテ、ナ
ホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキキ
タリ。

九 588 (略)、くさりたる魚などを
食ひて、一命をうしなふ者少からず。

十 106 海岸又は河岸の森林を伐拂
ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地
方も少からず。

十一 156 衆皆力を失ひて散りぐ
に成れり。

十一 489 「騎者・騎馬・黄金、三
つとも失つてしまひました。」

十二 318 (略)、保・義鑑共に戦死

した

した

した

した

した

す。保の母は一時に二子を失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの外、(略)。
 十二34 1 図 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

十二52 1 図 商人ニシテ信用ヲ失フト

キハ其ノ極終ニ破産ヲマヌカレズ。

十二73 2 図 引込思案の人は(略)、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、

良好なる時機を失ふこと多し。

うじばし「宇治橋」(名) 1 宇治橋

八4 3 図 (略)、町を南へ行けば、宇治橋のたもとにいたる。

うじよう「鶴匠」(名) 3 鶴匠 鶴匠

十一80 2 図 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみのを着く。

十一80 5 図 鶴匠は一人にて十二羽の鶴を使い、十二條の細なはを片手に握り、(略)、たくみにさばきてもつれしめず。

十一81 9 図 くはへたる魚をふりかへて、頭より吞下す早業は鶴匠のなはさばきよりも一層の見物なり。

うしろ「後」(名) 24 ウシロ 後 〆おんうしろ

一45 3 ヒダリミギマヘウシロ

五26 8 役人は後からこゑをかけて、「こら待て、ゐざり。(略)。」といつて、(略)。

五42 3 マドカラ外ヲ見テキルト、山

モ川モ野原モ林モ後ノ方ヘトンデ行

クヤウニ見エマス。

五42 8 (略)モ、馬モ車モ今見エタ

カト思フト、スグ後ニナツテシマヒ

マス。

五73 1 ソノ時後ノ方カラカリウドノ

來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ

出シマシタ。

五78 3 図 しろの後はけはしい阪で、

馬の通れる所ではございません。」

六9 2 御社の後には松山がありま

す。

六9 7 御社の後から山へのぼる道が

あります。

六57 5 その時信玄のけらいが、後か

らやり先で謙信の馬のしりを力一ぱ

いになぐりつた。

六64 2 図 めくらは杖を受取つて、

(略)、見えぬ目ながらふりかへり、

二人の行くへ見送れば、二人も後ふ

りかへる。

六66 7 (略) 魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩

ニカツイデ行キマスガ、後カラ一ツ

ツツヌケテオチルノヲ知リマセン。

九29 1 図 社殿ノ後ニハ美シク作ラレ

タル庭アリ。

九55 8 図 其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木

ニ附ケ、體ヲナ、メニ突出スルトキ

ハ、(略)。

九83 9 (略)、拜殿の後の大きな立石

の前に並んで、(略)。

九94 10 図 (略)、拜殿の後に本殿あり、

(略)。

十29 4 物置の後には、大きなだい

くの木があつて、(略)。

十35 2 図 「あれが此の室にはいる前、

(略)、はいつてからは静かに後の戸

をしめた。

十74 4 図 熱海は(略)。前面は海に

臨み、後は山を負ひ、(略)。

十100 7 図 社殿ノ後ノ山ニハ鎌足ノ墓

アリ。

十一48 2 アラビヤ人は後をふりかへ

りく、絶えず追手と或間隔を保ち

ながら進んで行く。

十一76 3 図 裏見瀧は後の細道より瀧

の裏面を望み見るを以て此の名を得

たりしが、(略)。

十一76 9 図 瀧の後より山路を上るこ

と四町餘、(略)。

十一109 4 まだ冠禮を行はない者はチ

ヨングーといつて、髪を三つ打ちに

して後へたらしめてゐる。

十二71 5 図 (略) 過ぎしことは追ふ

べからず。常に前を望みて、徒に後

を顧みることなかれ。

* うしろあし 〆あとあし

うしろむき「後向」(名) 1 うしろむ

き

四17 8 (略)、ただつねは馬から

ゐのししのせなかへうしろむき

にとびうつりました。

うしわかまる「牛若丸」(人名) 1 ウ

シワカマル

一30 2 ベンケイガ ウシワカマル

ニマケマシタ。

うす「白」(名) 5 ウス 〆すりうす

二56 1 ヨイオヂイサンハヤガデ

コノ木ヲキツテ、ウスヲツク

ツテ、ソレデ米ヲツキマシタ

ガ、(略)。

二56 3 (略)、ツクタビニ、ウス

ノ中カラオカネヤキモノヤ、

イロイロナタカラモノガデマシ

タ。

二57 2 ヨクノフカイオヂイサン

ハマタコノウスヲカリテイツ

テ、米ヲツイテミマシタガ、

(略)。

二57 7 (略)、ソノウスヲコハシ

テ、火ニクベテ、ヤイテシマヒ

マシタ。

八65 7 藍ハ(略)。(略)。サウシテ其

ノ莖ト葉ヲ細カクキサンデ、日ニホ

シテ、ソレカラウスニ入レテツキカ

タメマス。

うすい「薄」(形) 2 ウスイ うすい

「イーク」

四43 3 図 のしあはびといふの

は、あはびの肉を、のして、紙

のやうにうすくしたものです。

八64 4 コク染メタノガ紺デ、ウスイ

ノガ淺黄デス。

うすいた「薄板」(名) 1 ウス板

八39 3 図 マツ木材ヲ切りテ、湯氣ニ

テムシ、ケヅリテウス板トシ、細ク

キザミテデク木トシ、(略)。

うすし「薄」(形) 1 ウスシ 「一キ」

八39 5 箱ハウスキ木片ヲ折り、其ノ上ニ紙ヲ張りテ造リ、(略)。

うずまき「渦巻」(名) 2 うづまき

三63 8 (略)、この貝がらはかたつむりのやうに、おもてにうづまきがあります。

三63 4 そのうづまきに、右から左へまはつてゐるのと、左から右へまはつてゐるのと、ふたいろあります。

うずめ、うずめのみこと
うずめる「埋」(下二) 2 ウヅメル
うづめる「一メ」

二54 7 ヨイオデイサンハ(略)、犬ヲウヅメテ、ソノ上ニ小サ

ナマツノ木ヲ一本ウエマシタ。

十一54 8 (略)、山も谷も雪にうづめられて、吹く風は身を切るやうに寒かつた。

うすもも「薄桃色」(名) 1 ウス桃色

九7 4 瓣ノ色ハ白又ハウス桃色デ、暮ノ色ハ青イ。

うずも「埋」(下二) 1 埋る「一」

十二69 1 満目の廣野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

うずら「鶺鴒」(名) 1 鶺鴒

十一31 3 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・雲雀・鵲・雁・鴻・雉・鷗・鷗・鷗・鷗等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

うせつ「雨雪」(名) 1 雨雪

十一30 10 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモヒ見ルベク、(略)。

うた「歌」(名) 15 ウタ 歌、ウカぞえうた・こうたまじり・こくさんのうた・たこのうた・とけいのうた・ねんねこうた・みうた

一33 2 ドコデモオモシロイウタヲウタツテキマス。

二16 ニハトリ(略)。ヒノデナイウチニナンベンモウタヲウタヒマス。

二21 ワタクシノウタヲキクト、人ガダンダンオキテキマス。

三5 5 (略) 小トリガマドノソトカラノゾイテ、「マサヲサン、(略)、イツシヨニウタヲウタヒマセウ。」

三33 5 ナヘヲウエテキル女ハ、(略)。アノウタヲオキキナサイ。

四9 7 (略)、センセイモセイトモ一シヨニ君ガヨノウタヲウタヒマシタ。

六75 8 一人の年取つた男がこゑをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、(略)。

六76 8 歌がすむと手打をして、ロマに「おめでたう、おめでたう。」といひました。

九28 7 (略)、本殿ニハカシコクモ天皇陛下ノ御製ノ歌ヲカ、ゲタリ。

九36 7 「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九79 8 東風吹かばにほひおこせよ梅の花、(略)。是は菅原道真が(略)、庭の梅に別をしみてよめる歌なり。

十56 8 兵舎内にては歌をうたふ事、(略)等堅く禁ぜられ居り候。

十一21 8 生れてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せくる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。

十二34 8 先ツ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。

十二84 9 歌が終ると、紳士はバイオリンを老人に渡し、目禮して何處へか行つた。

うだいじん「右大臣」(名) 1 右大臣

九78 10 是は菅原道真が右大臣といふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅立たんとする時、(略)。

うた「歌」(五) 1 歌ひ出す「一ス」

六75 8 (略)、木やりの歌を歌ひ出すと、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

うた「歌」(四・五) 29 ウタフうたふ 歌フ 歌ふ「一ツツハハヒ。一フーへ」ひまえやうたえや

一33 2 ドコデモオモシロイウタヲウタツテキマス。

二17 ニハトリ(略)。ヒノデナイウチニナンベンモウタヲウタヒマス。

二67 8 サア、ミンナデ(略)、キミガヨヲウタヒマセウ。」

二37 6 (略)、ネンネコウタヲウタツテクダサツタノハ、ドナタデスカ。

三5 5 (略) 小トリガマドノソトカラノゾイテ、「マサヲサン、(略)、イツシヨニウタヲウタヒマセウ。」

三33 4 ナヘヲウエテキル女ハ、(略)、コエヲソロヘテ、ウタツテキマス。

四9 7 (略)、センセイモセイトモ一シヨニ君ガヨノウタヲウタヒマシタ。

六76 2 (略)、木やりの歌を歌ひ出すと、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

七10 8 ならぶすがさ涼しいこゑで、歌ひながらにうゑ行くさなへ。

八94 8 名古屋は(略)、「尾張名古屋は城で持つ。」とうたはれたり。

九11 7 葉かげにいねし鳥ははやゆめも見あきつ。歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。

九11 7 歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。

九117 文韻 歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。
 九118 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 九118 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 九118 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 九1110 文韻 歌へ歌へ、枝にこずゑに。
 九1110 文韻 歌へ歌へ、枝にこずゑに。
 九122 文韻 歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。
 九122 文韻 歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。
 九122 文韻 歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。
 九123 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 九123 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 九123 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 九123 文韻 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。
 十56 医手 兵舎内にては歌をうたふ事、(略)等堅く禁ぜられ居り候。
 十101 文 昔ノ人ノ 来て見ればこゝも櫻の峯つゞき、吉野初瀬の花の中宿。ト歌ヒシハコ、ナリ。
 十二34 8 先ツ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。
 十二39 10 富士山の古歌には煙の立

つことを歌へるもの多く、(略)。
 十二84 9 幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。
 うたがう「疑」(四) 3 疑ふ「一ヒ・フ・一」へ
 十一45 2 文 (略)、少しも疑ふ心なき正儀の様を見ては、刀のつかに手をかくべきやうもなし。
 十二78 1 文 (略)、朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。
 十二78 2 文 (略)、朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。
 うち「内」(名) 94 ウチ うち 中内 凸そのうち・まるのうち・わたくしのうち
 二14 ヒノ デナイ ウチ ニナン
 ベン モウタ ヲ ウタ ヒマス。
 二31 ミテ キル ウチ ニ ダンダン
 ノ ボツテ キマス。
 二19 1 ソレ ヲ モツテ、ウチ ヘカ
 ヘツテ、(略)。
 二43 2 文 (略)、ボク ガ ウチ カラ
 タドン ヲ モラツテ キマス カラ。
 二55 4 (略)、一月 モ タタナイ ウ
 チ ニ、(略)、大キナ タイ 木 ニ
 ナリ マシタ。
 三53 3 文 (略)、ソナニ ウチ ニ
 バカリ キナイデ、チツト ソト ヘ

デテ、イツシヨ ニ ウタ ヲ ウタ
 ヒマセウ。
 三10 3 ウチ ニハ ネエサン ガ 一
 人、ニイサン ガ 三人、オトウト
 トイモウト ガ 一人 ツツ アリマ
 ス。
 三11 7 ウチ ノ 人 ガ ミンナ ソト
 ヘ デルト キ ニハ、オバアサン ガ
 オルス キ ヲ ナサイマス。
 三35 5 うち へかへつて、うちに
 みせようとしたら、光がみえま
 せん。
 三41 1 見てゐる うちに また 一
 びきくはへて、ういて 出ます。
 三55 8 今日 ハ ウチ ノ 虫 ボシデ
 ス。
 三56 1 ザシキノ ウチ ニイクスデ
 モツナ ヲ ハツテ、(略)。
 三68 7 ウラシマ ハ (略)、ウチ ヘ
 カヘル ノ モワスレテ キマシタ。
 三69 6 (略) ウラシマ ハ ウチ ヘ
 カヘリタク ナツタ カラ、(略)。
 三70 4 文 アマリ ナガク ナリマス
 カラ、モウウチ ヘカヘリマセウ。
 三72 5 ウチ ヘカヘツテ 見ルト、
 オドロキマシタ、(略)。
 三72 7 (略)、ジブン ノ ウチ モア
 リマセン、(略)。
 四14 4 ふで や かみ を 賣る みせ
 も、本を 賣る うち も、(略)。
 四44 4 文 (略)、町が 一目に 見
 えます ね。 うち は どれでせう。」

四52 2 文 あの こちらに 白い かべ
 が 見えませう。 あれが うちで
 す。」
 四56 6 文 「うちの まへの 川が
 あんなに まがりまがつて、とほく
 の 方へ ながれて ゐます。
 四86 ドンナ ウチ デモ オイハヒ
 ヲ シナイ ト コロ ハ アリマセン。
 四105 ウチ ニハ カキノ 木 ガ ニ
 本 アリマス。
 四21 6 文 「ウチ ノ ニイサン ヤネ
 エサン ヲ アハセルト、ミンナ デ
 五人 デス カラ、(略)。
 四29 8 三郎の うち では 夕はん
 が 今 すんで、(略)。
 四39 4 文 ボクラ ハ カウイフ カ
 タイヨロヒ ヲ キテ キル カラ、
 ドンナ 時 デモ、コノ 中 ヘ ハイ
 ツテ、内カラ ト ヲ シメテ キ
 サヘ スレバ、アンシンナ モノ デ
 ス。」
 四47 7 一日の うち には 何じかん
 あります か。
 四80 6 よ一は 心の うちで、も
 しこれを いそこなつたら、生き
 ては ゐまい と かくこを きめ
 て、(略)。
 五11 6 それから 田や 畠の間を 通つて
 来るうちに、(略)、なかまが あつま
 つて来て、(略)。
 五17 7 男ノ子ノアルウチデハ、五月
 ノセツクニ 鯉ノフキナガシヲ 立デマ

ス。

五23 ㊦ 「この釜は昔から私のうちにある釜です。」

五27 ㊦ (略)、うぐひす鳴いた春の日の たのしい時もゆめのうち。

五39 ㊦ 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、もうのりこんだ人もあります。

五44 ㊦ 文太郎ハヨロコンデ、「海ダ、海ダ。」トイツテキルウチニ、又暗クナツテ、何モ見エマセン。

五46 ㊦ はじめのうちは遠くの方にきこえてゐましたが、だん／＼近くなつて、(略)。

五52 ㊦ ヘチマハワカイウチハタペラレルガ、實ガイルトタペラレナイ。

五80 ㊦ よしつねは(略)、夜のうちにがけの上まで出た。

六11 ㊦ それから又方々であそんで、うちへかへつたのは夕方でした。

六22 ㊦ 一人の子どもが水がめのふちへ上つて、遊んでゐるうちにふみはづして、かめの中へおちました。

六36 ㊦ 今日は天氣がよくて暖いから、うちではすゝはきをした。

六36 ㊦ うちが見ちがへるやうにきれいになつた。

六43 ㊦ うちがまづしかつたので、八つの時にお寺へ小ぞうにやられましたが、(略)。

六44 ㊦ お寺では「こんないたづら者はごめんです。」といつて、うちへか

へしました。

六53 ㊦ をしいことに、そのいくさの終らない中に病氣でなくなつてしまひました。

六63 ㊦ (略) おふみはいそぎ道ばたを そこかゝかどさがすうち、少しはなれたくさむらに、やう／＼杖を見つけ出し、(略)。

七7 ㊦ (略) コノ度ノ合戦ニハ、師直ラノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラガクビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、(略)。

七29 ㊦ けれども一月ばかりの内に は、皆さんの小指程の大きさになり、(略)。

七32 ㊦ (略)、口から美しい糸を出して、からだを包む。それが二三日の内に出来上つて繭になる。

七33 ㊦ 蛾が出ると、糸が取れないから、まだ出ない内にむして、さなぎをころしておいて、(略)。

七42 ㊦ (略)、御主人織田様には、近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。

七88 ㊦ たとへば自分のうちを恐ろしがる様なもので、(略)。

八5 ㊦ (略)の戦利品たる大砲、日本海海戦の記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。

八5 ㊦ (略) 御垣の内をうかゞひ奉れば、神殿の御屋根はかやにてふき、(略)。

八12 ㊦ おはなさんはしばらく見ないうちに、髪が大そうきれいになりました。

八19 ㊦ (略)、牛も段々減り、(略)、五六年の中によほど財産を減らししました。

八30 ㊦ サラバトテ入ラントスルニ内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、(略)。

八42 ㊦ 仕合に風上で安心だが、叔父さんのうちはどうだらう。

八43 ㊦ 叔父さんのうちへ見まひに行つたにいさんが歸つての話を、(略)。

八43 ㊦ (略)、二棟の土蔵の中、一棟はどう／＼焼けおちたさうだ。

八46 ㊦ サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタ

八47 ㊦ サクヤウチヤケナイ

八48 ㊦ 又ヤケナイといへば、うちの焼けなかつたことも分るから、ウチもいらない。

八48 ㊦ 又ヤケナイといへば、うちの焼けなかつたことも分るから、ウチもいらない。

八48 ㊦ (略)、うちの名の和田を入れて、十五字になるやうに書いてごらん。」

八88 ㊦ カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。

九30 ㊦ 蒸氣機關は(略)、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

九67 ㊦ 「紅白は開く煙雨の中。」といふ景色は、(略)。

九69 ㊦ (略)、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

九74 ㊦ (略) 全家立退の用意致し居り候中、夜も明けはなれて、(略)。

九75 ㊦ (略) 全村百餘戸の中二十戸も押流され候。

九88 ㊦ カクテ持チアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

九92 ㊦ (略) みるのうちより 宮人の袖引止めて、大江山 いく野の道の遠ければ、ふみ見ずといひし言の葉は、(略)。

十25 ㊦ (略)、良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、信ハ外ニ兵ヲ用ヒテ、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

十60 ㊦ 我ガ國銅山ノ中ニテ最モ盛ニ銅ヲ産出スルハ足尾・小坂・別子等ナリ。

十64 ㊦ 漕拔けた一隻は(略)、見る内に一頭の鯨に近寄り、急處めけて破裂矢をしかけた鉅を打つ。

十一6 ㊦ (略) 働蜂の若きものは内に居て幼蟲を育て、又は其の居室を營み、(略)。

十一7 ㊦ (略) 怠りて持歸らざるものあれば、検査掛は内に入るを許さず、(略)。

十一40 ㊦ (略) 全島の住民は約三百餘

萬と申候。其の中内地人は八萬餘、(略)。

十二518 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、(略)一家ノ内笑フコト多シ。

十二528 内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセン。

十一532 ヨク笑ハント欲スルモノハ、(略)、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

十二676 人生七十年と見るも六十萬時間に過ぎず。其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。

十二747 然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。

十二801 川上にかぎり火の明り先づ見え初めて、ほうくと呼ぶ聲を聞く内に、舟は早くも目前にせまり来る。

十一1061 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。

十二910 (略)、三十八隻の中逃げおほせたるは巡洋艦以下數隻のみ。

十二1310 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支ヘ、(略)。

十二302 徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。圍の解けんは二三日の内にあらん。」

十二3310 外温順・愛敬の徳を守り

て、内確固たる志操を持し、(略)。

十二3410 (略)、之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、其ノ内何千圓ハ町内有志者ノ寄附金デアル。

十二418 (略)、其の火口は(略)。

内に二箇の噴孔ありて、(略)。

十二731 引込思案の人は(略)、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。

十二823 帽子の中に一文の錢もない老人は、(略)、帽子の内を眺めては、幾度かためいきをついて居る。

十二834 聴衆は四方から集つて来て、見る内に人山を築いた。

うち「打」ひてうち・とりうち・なみうちぎわ・はさみうち・ひうちいし・ひうちがね・ひとうち・みつうち

うちあ・く「打明」(下二)1 打明く

「一ケ」

十一456 (略)、熊王年来包みたる

心の中を打明けて、(略)。

うちあわ・せる「打合」(下二)1 ウチ合セル「一セ」

556 大昔ハ木ヲコスツテ火ヲ

出シシタガ、ソレカラ後ニハ石ト

金ヲウチ合セテ出スヤウニナリマシ

タ。

うちいだ・す「打出」(四)3 ウチ出ス

打出す「一シ・一ス」

790 中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウ

チ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。

九73 然るところ翌朝三時頃急

に水音はげしく相成り、(略)、隣村にて早がねを打出し候。

十二69 (略)、熟練なる我が砲手は物ともせず、打出す砲弾よく命中して、(略)。

うちうみ「内海」(名)2 内海

十一179 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一205 瀬戸内海の(略)。内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

うちかえ・す「打返」(四)2 うち返す打返す「一サ・一ス」

十699 やがて二人は荒波に打返さるゝ船の頭を立直し、死力を盡して漕進む。

十一887 蚯蚓は(略)、多量の土を呑みては之を地上の穴の口に出す。かくて數年の後には、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。

うちかけ「打掛」(名)1 うちかけ

十一1108 京城地方の婦人がたまゝ外出する時には、うちかけの様なものをかぶつて、目ばかり出してゐる。

うちか・ける「撃掛」(下二)1 ウチカケル「一ケ」

八871 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲

ヲウチカケタ。

うちこ・む「打込」(五)1 打込む「一ム」

十662 ボートは(略)、又も鯨に近

寄り、今度は銃を以て破裂矢を打込む。

うちじに・す「討死」(サ変)3 討死す「一シ・一セ」

十一415 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、(略)。

十一424 また我に代りて討死したる六郎の形見とも思ふものを。」

十一433 住吉の戦に父の討死したる後、一族の者領地をうばひて、我を追出したり。

うちじに・する「討死」(サ変)1 討死スル「一スル」

八905 此ノメデタイ日ニ討死スルノハ軍人ノ面目ダ。

うちじゅう「家中」(名)2 ウチヂユウ

ウ うち中

三562 (略)、ウチヂユウノ人ノ

キモノガホシテアリマス。

八101 この間にいさんがかへつて

來ましたので、うち中の者がそろつて寫真をとりました。

うちす・ぐ「打過」(上二)1 打過ぐ

「一ギ」

十559 色色取りまぎれ、つひ

く御無音に打過ぎ候。

うちそろ・う「打揃」(四)1 打揃ふ

「一ウ」

十二918 家内能く和合して、(略)、

むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ

時、一日の勞苦は忘れられて、(略)。

うちだ・す「打出」(五)1 打出ス「一

- ス
八五七 敵ハ（略）幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。
うちたまう「討給」(四) 1 討ち給ふ「一ヒ」
九六五 尊これより引返して近江の賊を討ち給ひしが、（略）。
うちがう「打達」(下二) 1 うちちがふ「一ヘ」
八六二 神殿の御屋根はかやにてふき、（略）、兩はしに千木をうちちがへたり。
うちつる「打連」(下二) 2 うち連る打連る「一レ」
八六六 三つ四つ五つうち連れて、矢走をさして歸り行く 白帆を送る夕風に、聲程近し、三井のかね。
九四九 やがて親子打連れて、心楽しく發足したり。
うちつる「打連」(下二) 1 打連れる「一レ」
九三三 五人の騎手は打連れて、拜殿の後の大きな立石の前に並んで、（略）。
うちとおし「打通」(名) 1 うち通し
一四六 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、四五日間うち通し、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。
うちとく「打解」(下二) 1 うちとく「一ケ」
一三九 昨日の敵は今日の友、語ることばもうちとけて、我はたゝへつ、かの防備。
うちとりもうす「討取申」(四) 1 討取り申す「一ス」
一四一 正儀は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。如何にもして討取り申すべし。
うちとる「討取」(四) 1 討取る「一ル」
一四二 河内に行きて正儀に仕へん。長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。
うちならす「打鳴」(五) 2 打鳴らす「一シース」
九三二 神主は「支度」といふあひづの一番太鼓を打鳴らした。
一五五 打鳴らす太鼓の音は段々に低くかすかになる。
うちぬく「打抜」(五) 1 打抜く「一イ」
八八九 一彈又も中佐ノ胸ヲツラスキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。
うちのる「打乗」(四・五) 2 うち乗る 打乗る「一ツーリ」
一五六 急に馬に打乗つて、味方のまづ先に立つて、信玄の本陣に切りこんで、（略）。
九四八 ひそかに駱駝にうち乗りて、そこより逃れ出でたり。
うちほろぼしたまう「討滅給」(四) 1 討滅し給ふ「一ヘ」
九六一 尊は難をまぬかれ給ひ、なほ進みて賊を討滅し給へり。
うちほろぼす「討滅」(五) 1 うちほろぼす「一シ」
一五〇 秀吉は（略）、光秀をうちほろぼしました。
うちまたがる「打跨」(四) 1 打ちまたがる「一ツ」
一五一 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こふしも通れとさし通し、やがて打ちまたがつて首をかく。
うちまもる「打守」(四・五) 2 ウチマモル 打ちまもる「一ツーリ」
一五二 韓信シバシ其ノ面ヲウチマモリシガ、ヤガテハラバヒテ膝ノ下ヲクグル。
一五三 老人は、どうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、どうして又（略）かと思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。
うちもどす「打戻」(四) 2 打ちもどす「一サ」
一五四 岩に近づけば、波は益々荒く、ボートは幾度となく打ちもどされ打ちもどさるゝを、辛くして難破船に漕着けたり。
一五五 波トは幾度となく打ちもどされ打ちもどさるゝを、（略）。
うちやぶる「打破」(四・五) 3 うちやぶる 打破る 撃破る「一ラーリ」
一五六 呉の勢盛になりて、會稽山の戦に越の軍を打破りたり。
一五七 赤松光範、楠木正儀と攝津の住吉に戦ひて、散々に撃破られたり。
うちやまいおきち「内山五百吉」(人名) 1 内山五百吉
一六〇 一月二十五日 内山五百吉 加藤善作様
うちやまいおきちさま「内山五百吉様」(人名) 1 内山五百吉様
一六一 十一月二十五日 加藤善作 内山五百吉様
うちよる「打寄」(四) 2 うちよる打寄る「一リ」
一六二 いでや、あの岩の小かげに、皆うちよるゝもの數へん。
八九 親族一同打寄り、心ばかりの祝宴相開き、（略）。
うちわ「打忘」(名) 1 ウチハ 忘る
一六三 日本紙ハ「略」障子ハ皆僕ラノ仲間デハツテアルデハナイカ。コハニアル属モウチハモヤハリサウダ。
うちわすれる「打忘」(下二) 1 ウチ忘レル「一レ」
一六四 軍曹ハ自分ノ重傷ヲモウチ忘レテ、アランカギリノ力ヲツクシタ

ガ、(略)。

うちわなり「團扇形」(名) 1 ウチハナリ

七七六 海草ノ形ハ(略)。(略)。又ニ

ハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。

うちわらう「打笑」(四) 1 打笑ふ

「一へ」

十二八七 良雄平然頭を低くして之を食ひ、からくと打笑へり。

うつつ「打」(四・五) 19 うつつ 打つ

「一タ・一チ・一ツ・一ツ」

五七六 何でも裏からまはつて、てきのふいをうたなければならぬ。」

五八七 へいけはふいを打たれて、どうすることも出来ない。

六五六 信玄はふいをうたれておどろいたが、(略)。

六五七 (略)、信玄の本陣に切りこんで、信玄に打つてかゝつた。

七七八 図 きのよりおつる雨だれのたえず休まず打つ時は、石にも穴をうがつなり。

八三九 「トテンカン、トテンカン。」と、毎朝早くから弟子を相手につちを打つ音が聞える。

八四〇 ある時は鎌をきたへてゐた。又車のわを打つてゐた事もあつた。

八四一 刀は(略)、きたへる時は身を清めて、一心不乱に打つたものだ。」

八四二 図 (略)、誰かすぐに東京へ電

報を打つたのだらう。

九三四 やがて汽車が動き出すと、馬上の人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、(略)。

九四五 図 星の形を打ちたるは陸軍兵の帽子にて、(略)。

九六六 漕拔けた一隻は(略)、急處めがけて破裂矢をしかけた銃を打つ。

九七一 他のボートを見れば、(略)、銃を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。

九七二 捕鯨法には此の外に汽船の備砲から銃を打つ方法もあり、(略)。

九七七 捕鯨法には(略)鯨の通路に網を張つて銃を打つ方法などもあつた。

九八〇 眞先に立つて、太鼓を打ちながら、かひなく進んで行く。

九八五 ビエールが打ついつもの太鼓に違ない。

九八六 図 ふなばたを打つ音、ほうくと呼ぶ聲、水に飛散る火のこの光にはげまされて、鵜は盛に活動し、(略)。

九八九 秋の夜長には衣打つきぬたの音が村々相應じて聞える。

一〇〇〇 図 討ツ 討つ 討つ 討つ

「一タ・一チ・一ツ」 討つ 討つ 討つ

八五二 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出デズ。

九六〇 (略)、東國の蝦夷叛きしか

ば、天皇日本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

九六一 蝦夷は(略)、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、(略)。

一〇一五 手塚は家來を討たせじと、敵に組みつく。

一〇二〇 図 「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、(略)。

一〇二五 図 いやよく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。

一〇三〇 図 夜に入りて、討つべきは今なりと、心を取直せども、(略)。

一〇三五 図 (略)、年頃の恩愛、殊に今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

一〇四〇 図 幾度か思ひ直して討たんとすれども、(略)、刀のつかに手をかくべきやうもなし。

一〇四五 図 兄君、我も後より行かん。兄弟共に敵をば討さん。

一〇五〇 図 武勇のはたらき命さへげて、御國の敵を討ちなん、我は。

一〇五五 図 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかば、夜に乘じて城をすてて逃れんとす。

一〇六〇 図 犬を連れた男が銃を肩にして、(略)。ずどんと一發。何を撃つたのだらう。

一〇六五 図 撃つ 「一ツ」

一〇七〇 犬を連れた男が銃を肩にして、(略)。ずどんと一發。何を撃つたのだらう。

一〇七五 図 撃つ 「一ツ」

一〇八〇 犬を連れた男が銃を肩にして、(略)。ずどんと一發。何を撃つたのだらう。

一〇八五 図 撃つ 「一ツ」

一〇九〇 犬を連れた男が銃を肩にして、(略)。ずどんと一發。何を撃つたのだらう。

る「一シ」

八一九 一人の分はうつかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。

うづき「卯月」(名) 1 卯月

十一三〇 季節ノ名ニハ初春・如月・彌生・卯月・水無月・長月・菊月等アリ。

うつくし「美」(形) 17 美シ 美シ

「一シ・一シカラ・一シキ・一シク・一シケレ」

六八六 桐ハ(略)、輕クシテ美シケレバ、ツクエ・本バコ・タンス・ハキモノナドヲ作ルニ用フ。

七四九 コ、ニハ櫻ノ木多シ。春ノ花盛リイカニ美シカラシ。

七五八 コ、ニハ美シキ池アリ。

八〇一 図 (略)、かゝやく入日美しや。

八八三 首府をバリといひ、世界中最も美しき都なり。

八八四 図 かゝる地方にては氣候つねに寒冷にして、美しき花木を見ること能はず。

九二九 杜殿ノ後ニハ美シク作ラレタル庭アリ。

九四八 (略)、又切レテハ急流トナリ、遂ニ今日ノ如キ美シキ景色トナリシナリ。

九五六 図 (略) 木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、(略)。

九五六 図 (略) 木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、(略)。

九五六 図 (略) 木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、(略)。

九五六 図 (略) 木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、(略)。

- 九57 8 図 (略)、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。
- 九66 7 図 オルガンにて美しき音を發せしむるが如き、(略)。
- 十一19 図 (略)、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。
- 十六18 図 ある雪の朝、皇后は美しき御庭の雪景色を御覽じて、(略)。
- 十四22 図 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花鳥等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ我が國輸出品ノ一ナリ。
- 十四40 図 直線を適當の長さに切り、一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶる時は、美しき模様を生ず。
- 十四50 図 (略)、曲線を用ふれば、更に美しき模様を得べし。
- 十一77 4 図 美しき瀧にして、眞に白布をさらせるが如し。
- うつくしい [美] (形) 37 ウツクシイ うつくしい 美シイ 美しい 《！ーイーウーカッーク》 〽おうつくしい
- 二36 アア、モウ スツカリノボリマシタ。ウツクシイデハアリマセンカ。
- 二41 (略)、コノウツクシイ日ノデヲミルコトガデキマセン。
- 二49 3 コレニハウツクシイエガアツテ、(略)。
- 二59 4 (略)、ウツクシイハナガサキマシタ。
- 三15 (略)、サクラノハナガ一メンニサキマシタ。マコトニウツクシイデハアリマセンカ。
- 三27 (略)、日本ノサクラノヤウナウツクシイハナハサキマセン。
- 三35 ウツクシイサクラノハナガ、(略)。
- 三51 コンドハウツクシイ小トリガ(略)。
- 三29 2 アタラシイ竹ハアヲアヲトシテ、マコトニウツクシイモノデス。
- 三61 2 あそこにはうつくしいかひや小石がたくさんあります。
- 四66 1 羽の色はあまりうつくしくはありませんが、(略)。
- 四66 6 昔からうめにうぐひすといつて、(略)、あんなうつくしいこゝでなきはじめます。
- 四73 7 ソノ左ト右ニウツクシイシヨクダイヲ立テマシタ。
- 四75 5 図 「タイソウウヨクカザレマシタ。マア、ウツクシイコト。
- 五10 8 (略)、夜は美しい月をうかべながら、(略)。
- 五11 2 図 そばを通る人が「美しい川だ。」といつて、ほめました。
- 五35 3 蝶ニハ(略)サマ／＼アリマスガ、ドレヲ見テモ美シウゴザイマス。
- 五35 4 コノ美シイ蝶ガトビマハルノデ、花ゾノヤ野原ノケシキガ一ソウ引立チマス。
- 五36 2 コノカハイラシイ、美シイ蝶ヲツカマヘテイデメル人ハ、ドウイフ心デセウ。
- 五67 7 子ドモハフダンヨリハ美シイ着物ヲ着テアソンデキル。
- 五73 5 (略)美シイ角ガ木ノ枝ニヒツカ、ツテ、イクラモガイテモハツレマセン。
- 六22 2 白い砂に青い松、どこのまへを見て、美しい景色である。
- 六46 6 月夜のながめもまた美しい。
- 六55 5 図 (略)大島・小島その中通ふ白ほの美しや。
- 六64 4 図 わけてさくらの吉野山、一目千本咲きみちて、かすみか雲か美しや。
- 六25 3 図 金ヤギンハ美シクテ、指ワニナツタリ、トケイニナツタリ、ソノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、(略)。
- 七27 3 筆一本デ美シイエヲカイタリ、(略)。
- 七32 2 (略)、口から美しい絲を出して、からだを包む。
- 七68 7 図 母はこんな美しい大きな桃は、はじめて見たと申して、(略)。
- 七72 5 指ワヤエリドメナドニハメル美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。
- 七77 7 波ニユラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動ク間ヲ、(略)。
- 七78 1 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、陸上デハ見ルコトノ出来ナイ美シイ景色デアラウ。
- 九67 7 「紅白花は開ク煙雨の中。」といふ景色は、靜かな中に美しいなぐめである。
- 十20 4 (略)、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、幾度も幾度も印刷を重ねなければならぬ。
- 十37 4 図 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。
- 十二20 8 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。
- 十二82 9 弓が一度絲にふれると、天上の音樂の様な美しい音がわき出した。
- うつくしさ [美] (名) 2 美しさ
- 七82 7 図 月夜には波が銀の様に光つて、その美しさは何とも言ひ様がありません。
- 十47 7 図 若し此の模様に種々の色どりを加ふるときは、一層其の美しさを増すべし。
- うつしたてまつる [移奉] (四) 1 遷し奉る 《ール》
- 十一13 5 図 (略)、北條高時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。臣下として

一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること
無道の極みなり。

うつす〔写〕（四・五）3 ウツス う

つす 寫す『サ・シー・ス』

八111 一人の分はうつかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。

九285 〔略〕、社殿ハ上古ノ風ヲウツシテ造リ、〔略〕。

十192 畫をかく人、圖をひく人、寫眞をうつす人の苦心も亦一通りではない。

うつす〔映〕（四）2 うつす 『セ』

九957 〔略〕、湖面鏡の如く、四方の山々皆倒に影をうつせり。

十一832 〔略〕、數十隻の遊船、岐阜提灯の光を水にうつせる奇觀は筆も言葉も盡し難し。

うつす〔移〕（四・五）11 うつす 移ス 移す 遷す『サ・シー・ス・セ』

七322 この時木の枝やわらなどで作つたまぶしへうつしてやると、〔略〕。

七802 〔略〕、ふるひ進むに何事かなど成らざらん、ばんじやくの重きもつひにうつすべし。

九796 道眞は罪もなきに官を下げられ、あまつさへ遠國へうつされしかども、〔略〕。

十704 岩に近づけば、〔略〕。父は直ちに勞果てたる水夫を助けて、ボートにうつす。

十一142 然るに今、主上隠岐に遷され給ふと聞き、〔略〕。

十一858 〔略〕、コレヲ練篠機ト稱スル機械ニカケテ、〔略〕、又更ニ他ノ機械ニ移シ、イヨイヨ延シテ、イヨく細クシ、〔略〕。

十一8510 サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サトナシテ、〔略〕。

十一893 〔略〕、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、〔略〕、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十二677 〔略〕、獸類中にも〔略〕、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。

十二846 銅貨といはず、金銀貨といはず、〔略〕。また、く間に帽子に一ぱいになつた。老人は之を袋に移して、〔略〕。

十二964 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、〔略〕、三度其の居を遷せりといふ。

うつたえる〔訴〕（下一）2 うつたへる『セ』

五237 かまをぬすまれたものがありました。〔略〕、どうしてもかへしません。しかたがないから、うつたへて出ました。

五241 うつたへた人は、〔略〕。このぬさがりぬすんだのでございませう」と申しませう。

うつつ 凸ゆめうつつ

うつつのみや〔宇都宮〕〔地名〕2 宇都宮

宮

九17 宇都宮

九25 宇都宮

うつりかわる〔移変〕（四・五）2 移リ變ル 移り變る『ル』

十一111 〔略〕、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變へ、又器具ヲ取換ヘナケレバナラナイノデ、〔略〕。

十二110 〔略〕、其の後時世の移り變るに連れて、兵制にも變遷あること、〔略〕。

うつりたまう〔移給〕（四）1 ウツリタマフ『セ』

七54 〔略〕、天皇ハ吉野山ノカリノ皇居ニウツリタマヘリ。

うつりようとうふきん〔爵陵島附近〕（名）1 爵陵島附近

十二710 我が艦隊は〔略〕、爵陵島附近に集りて敵を待ちしが、〔略〕。

うつる〔写〕（五）5 寫る『ツ・リ』

八105 〔略〕、寫眞でも笑つて寫つてゐます。

八112 一人の分はうつかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。

八117 よく寫つてゐるので、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。

八121 三郎さんは實にかはいらしく寫りました。

八122 おはなさんも一人の分はほんとによく寫つてゐます。

うつる〔映〕（四・五）4 ウツル うつる『ツ・リ・ール』

五711 フト水ニウツツタジブンノスガタヲ見テ、〔略〕。

七825 日の出や日の入には日光が波にうつつて、水の色が金色になります。

十一824 魚は〔略〕、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、〔略〕。

十二431 熔岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。

うつる〔移〕（四）4 うつる 移る『ツ・ラー・リ』 ひとびうつる・のりうつる

八422 あゝ、火の勢が一そう強くなつた。又隣へうつしたのかも知れない。

十二94 敵の司令長官〔略〕は昨日の戦鬪に傷を負ひ、幕下と共に一驅逐艦に移りしが、〔略〕。

十二662 〔略〕、通常の灰色の鼠の一群大舉して、印度よりペルシャを経て歐羅巴に移り、〔略〕。

十二692 〔略〕、温暖なる地方に移らんと欲するもの期せずして相集り、〔略〕。

うつわ〔器〕（名）1 器

十一784 〔略〕、器に盛れる水常に

波紋を生ず。

うで「腕」(名) 1 ウデ

七三〇 図 (略)、正行ハ(略)、今ニモハラ切ラントス。母ハ走りヨリテ、正行ノウデヲオサヘ、(略)。

うてん「雨天」(名) 1 雨天

一五七五 図 (略)、學科は夜分又は雨天等を利用して學習致し候。

うとからす「課名」2 うとからす

三目 十四 うとからす

三四十 十四 うとからす

うどん「饅頭」(名) 3 うどん

四三二 図 それではうどんやさうめんは何でつくりまスカ。

四三二 図 うどんやさうめんにする麥は同じですか、ちがひまスカ。

四三三 図 (略)、うどんやさうめんにする麥は小麥で、ごはんにたく麥は大麥です。

うなぎ「鰻」(名) 1 鰻

一一八二 図 鰻をくはへてくちばしに巻附かれ、持て餘して見ゆるをかかし。

うなじ「項」(名) 1 うなじ

一一九 図 (略)「我元」木曾の檜よ、白雲を うなじよまきて、峯高く空よそびえき。

うなづく「領」(四) 1 うなづく「一

キ」

一四八 図 げにくと 皆うなづきて、(略)。

うなわ「鵜飼」(名) 1 鵜飼

一一八三 図 鵜飼を引上げて、鵜のふなばたに立並べる時、(略)。

うね「畝」(名) 2 ウネ うね

一三三 五 タハタケ アゼ ウネ

一三三 五 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、(略)。

うねび「畝傍」(地名) 1 畝傍

一四〇 八 図 コ、ヨリ西北へ進メバ、畝傍・檀原ノ地ニ出ツ。

うねびやま「畝傍山」(地名) 3 畝傍山

一四〇 八 図 畝傍山・香具山・耳無山ノ三山、イヅレモ麗シキ山ニシテ、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

一四〇 八 図 畝傍山ノ東北ニハ神武天皇ノ御陵アリ。

一四〇 八 図 又畝傍山ノ東南ニ檀原神宮アリ。

うねり(名) 1 うねり

一四〇 八 図 (略)、月見のころも近づけば、萩のうねりにやどる玉、(略)。

うのろくろ「宇野六郎」(人名) 2

宇野六郎 宇野六郎

一一四一 五 図 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、(略)。

一一四三 五 図 「赤松光範の臣宇野六郎の子なり。

うばいたてまつる「奉奉」(四) 1 う

ばひ奉る「一リ」

一一四六 五 図 いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起

し、(略)。

うばう「奉」(四五) 2 うばふ 奉

ふ「ハ・ヒ」

一一四三 四 図 (略)、一族の者領地をうばひて、我を追出したり。

一二八三 五 人々は唯神曲に心を奪はれて、妙音の外には何物も見えも聞えもしない。

うばく「右瀑」(名) 1 右瀑

一一七九 五 図 ナイヤガラ瀑布は左右二つに分れ、左瀑は幅三百餘丈、右瀑は百餘丈、高さ各約十六丈あり。

うばゆり「姥百合」(名) 1 うばゆり

一八二 五 図 あいぬの風俗は(略)。(略)、食物は粟・稗・うばゆりの根等を主とし、(略)。

うぶね「鵜舟」(名) 1 鵜舟

一一七九 五 図 観客は遊船を中流に浮べて、鵜舟の下り来るを待つ。

うま「馬」(名) 七五 ウマ うま 馬

アラビヤうま・いきうま・うしとうま・くらべうま・こうま・たけうま・おんうまや

一六四 ウマクラクルマ

二二五 六 オヂイサン ハ ウマ ニカヒ

バラヤツテキマス。

三三〇 一 大きなうまがはしつてきました。「ひらがなのドリル」

三三六 牛にはつのがあるけれども、うまにはありません。

三三六 牛にはたてがみがあるけれども、牛にはありません。

二四一 うまはからだがほそくて、足がながうございます。

二四四 牛のつめは二つにわれてゐますが、うまのはわれてゐません。

二四七 うまは牛よりよいけれども、はしることがはやうございます。

三三八 馬ニマグハヲヒカセテ、田ヲカキナラシテキル人モアリマス。

四三三 村の人人が、毎日やさいやすみやたぎぎを馬やくるまにつんで、賣りにきます。

四三七 (略) ただつねといふぶしが、弓矢をなげすて、馬をとばして、そのておひじしにむかひました。

四三七 すれちがつた時に、ただつねは馬からゐのししのせなかへうしろむきにとびうつりました。

四八〇 八 よ一は(略)、馬にまたがつて、海の中へのり入れました。

四八二 八 (略) よしつねをはじめ、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。

五二二 (略)、はしがかけてあつて、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

五二七 田デハタイテキル人モ、道ヲ通ツテキル人モ、馬モ車モ今見エ

タカト思フト、(略)。

五七六 へいけのぐんぜいがふくはらのしろを守つてゐる。(略)、北は山のふもとから南は海の波うちぎはまで、人や馬でふさがつてゐる。

五七八 しろの後にはいい阪で、馬の通れる所ではございません。」

五七八 鹿も四つ足なら馬も四つ足、(略)。

五七九 鹿の通れる所を馬の通れないといふことがあるものか。

五八〇 (略)、馬もこはがつてすくんでしまひ、人も顔を見合せて進まうとはしない。

五八四 この時よしつねは、(略)、馬に一むちあててかけ下りた。

五六八 ある日信長が夜明け前に出かけようとする、はや、馬を乗りまはしてゐる者があります。

五六八 急に馬に打乗つて、味方のまつ先に立つて、信玄の本陣に切りこんで、(略)。

六五七 その時信玄のけらいが、後からやり先で謙信の馬のしりを力一ぱいになぐりつけた。

六五七 馬はおどろいてとび上つた。

六八〇 オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。

七三九 山内一豊が織田信長のけらいになつたばかりのころ、大そうよい馬を賣りに来た者がありました。

七三九 馬の主は馬を引いてかへらう

としました。

七三九 馬の主は馬を引いてかへらうとしました。

七四〇 武士としてはあのくらゐな馬をもつて見たい。」

七四〇 「その馬の直はいか程でございます。」

七四〇 「どうぞこれでその馬をおもとめあそばしませ。」

七四二 さだめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのこととございませう。

七四二 あなた様にも、その折にはよい馬にめして、主人のお目にとまるやうになされるのが大事と考へまして、(略)。

七四三 一豊は妻に禮をのべて、その馬をもとめました。

七四三 やがて馬ぞろへの日となつて、一豊の馬ははたして信長の目にとまつて、(略)。

七四四 「あ、よい馬、名馬々々。

七四四 誰の馬か。」

七四六 「これは一豊の馬でございます。」

七四九 「日ごろ貧しい暮しをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもめた。

八一四 町八段々人通りガ多クナツテ、車モ通り、馬モ通ル。

八五六 駝鳥は(略)。走ることは馬よりも早いで、(略)。

八九四 (略) 敵ノ陣地ヲ取ツタト思

へ。其ノ時ハスグ馬ヲ引イテ来イ。

九三四 中には汽車と競走する積で、馬に乗つて来た人もある。

九三六 「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」

九三七 昔の道中には馬とかこがあつた。

九三七 馬は馬子が引いて、ゆるく歩むのだから、早いことはない。

九八二 やがて五人の騎手は(略)、静々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて来た。

九八三 (略)「並べ。」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿の後の大きな立石の前に並んで、馬の頭を揃へて、(略)。

九八四 三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一散にかけ出した。

九八四 二人の馬は五分々々に進んで行つたが、(略)。

九八七 (略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。

九八八 愛作は驚いて、ひらりと馬から飛下りて、(略)。

九八八 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかせさせたら、(略)。

一〇五一 三人組合ひて馬より落つ。

一〇五八 (略)、家畜としてもつと大切なものは牛・馬・羊・豚等である。

一〇六一 馬も牛と同様に労働にも使はれ、食用にもなる。

一〇八五 其の上戦争には必ず無くては

ならぬもので、兵器・糧食を運送し、将卒と共に戦場を駆けめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

一〇八八 西洋の馬がおとなしくて、日本馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、(略)。

一〇八九 西洋の馬がおとなしくて、日本馬のおとなしくないのは、(略)。

一〇八一 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするのも、人に恐れるからである。

一一二九 重砲車の如きは十頭の馬をして引かしむ。

一一四七 さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。

一一四八 馬主は(略)、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

一一四八 (略)、大將の部下の二三人は直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。

一一四八 アラビヤ人は(略)馬に全速力を出させて、雲を霞と逃げのびた。

一一四九 (略)、前の馬主が再び馬をひいて来て、「略。」といった。

一一四九 此の馬が欲しう御座いますか。」

十一49 9 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一50 2 古来アラビヤ人は馬を家族の一員と考へて、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいる。

十一50 4 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。

十一50 9 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。」

十一50 10 (略) 三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。

十一51 1 (略)、馬はさもうれしうに、口でおもちやをさくげて、其の子供をあやしてゐた。

うまい「甘」(形) 7 ウマイ うまい
「イーウ・ーク」

二36 1 ヤハウマク アタリマシタ。

三69 2 ウマイゴチソウモ 毎日タベルト、シマヒニハイヤニナリマス。

四11 7 サハスト アマクナツテ、タイソウウマイカキデス。

四12 8 クリハユデタベテモ、ヤイテタベテモ、ウマイモノデス。

四55 6 園 「オマヘタチハウマクオレニダマサレタナ。」

六10 8 すざしい風にふかれながら、草の上にすわつて、にぎりめしをたべた時は大そううまうございまし

た。

七17 9 園 西洋西瓜には(略)、なるべく大きくてうまい實のなるやうなのをお願い申します。

うまおい「馬追」(名) 1 馬おひ
五62 4 園 あとから馬おひおひついで、ちよんくくくく すいつちよん。

うまし「甘」(形) 2 ウマシ うまし
「一カラ・ーシ」

六54 5 園 塩ト砂糖トハ(略)、コノ二ツノ物ナクレバ、物ノ味ハウマカラズ。

九58 1 園 ロにうましとて多く食ふことなけれ。

うましく「味」(名) 1 うまし國
十二47 10 園 温熱二帯にまゝがりで、天産多きうまし國。

うまじる「馬印」(名) 1 馬じるし
六49 4 後には秀吉の馬じるしを見ると、敵は戦はないでにげて行くやうになりました。

うまざるえ「馬揃」(名) 2 馬ぞろへ
七42 3 園 (略)、御主人織田様には、近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。

七43 2 やがて馬ぞろへの日となつて、一豊の馬はたして信長の目にとまつて、(略)。

うまぬし「馬主」(名) 5 馬主
十一47 4 馬主はもう一文も引けぬといふ。

十一47 7 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、(略)。

十一47 10 園 「それ、馬主が逃げた。」といふので、(略)。

十一48 7 (略)、夜のときは全く馬主の行方をかくした。

十一49 4 (略)、前の馬主が再び馬をひいて来て、(略)。

うまる「埋」(五) 1 ウマル 「一ツ」
五58 2 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物デ、(略)、石炭トイヒマス。

うまる「生」(下二) 7 生る 「ール・ーレ」

十16 1 園 「汝の男と生れざりしが口をし。」

十一7 7 園 (略)、女王は新しく生れたる雌蜂に其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。

十一21 7 園 生れてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、(略)。

十一112 8 園 村長は村の舊家に生れ、極めて親切公平なる人なれば、(略)。

十二74 4 園 ゼノアに生れて幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンプスは(略)。

十二93 4 園 孔子は凡そ二千四百六十年前、支那の春秋時代に生る。

十二93 6 園 孔子は魯といふ國に生れ、人と爲り禮を好み、温良・恭儉なりき。

うまれく「生来」(カ変) 2 生れく

生れ來「一キ」

七78 6 園 我等は人と生れきて、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、(略)。

七79 6 園 ましてや人と生れ来て、一たんめあて定めては、わき目もふらず、怠らず、(略)。

うまれこきよう「生故郷」(名) 1 生れ故郷

十一101 6 園 (略)、此の極北の寒地も今ははや生れ故郷の如き心持に相成候。

うみ「海」(課名) 2 うみ
三目10 二十二 うみ

三58 4 二十二 うみ
うみ「海」(名) 64 ウミ うみ 海

うちうみ・さちのうみ・やまうみ・われはうみのこ

三58 5 うみの水が青青として、どこまでもつづいてゐます。

三66 2 ウラシマハ(略)、子ドモカラソノカメヲ買ツテ、ウミヘハナシテヤリマシタ。

三67 5 ウラシマガヨロコンデ、カメニノルト、ダンダンウミノ中ヘシヅンデ行ツテ、(略)。

三72 4 ウラシマハ(略)、マタカメノセナカニノツテ、海ノ上ヘ出テ來マシタ。

四39 7 ソノウチニ海ノ水ヲカキマハスヤウナ大キナオトガシマシタ。

- 四五一 今ハ死ンデキマスガ、モトハ海ノ中デオヨイデキマシタ。
- 四五一 海ニキタ時ヨリモ、今ハスコシ長イ名ヲモツテキマス。
- 四五二 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、(略)、海ヲワタルクフウヲカンガヘテキマシタ。
- 四五五 〔ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテキルガヨイ。〕
- 四五七 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、(略)。
- 四六四 やしまのたたかひにげんじはをか、へいけは海で、むかひあつてゐた時、(略)。
- 四八一 よ一は(略)、馬にまたがつて、海の中へのり入れました。
- 四八三 をかの方では(略)。海の方でも(略)。
- 五一三 (略)、ひろくとして、どちらを見ても水ばかりです。こゝを人が海といひます。
- 五四七 トンネルヲ出ルト、マタ明珠ナツテ、ヒロイ海が見エマス。
- 五四七 文太郎ハヨロコнде、「海ダ、海ダ。」トイツテキルウチニ、(略)。
- 五四八 文太郎ハヨロコnde、「海ダ、海ダ。」トイツテキルウチニ、(略)。
- 五七四 (略)、北は山のふもとから南は海の波打きはまで、(略)。
- 五七四 又海には一面にいくさ船がならんでゐて、(略)。
- 五七四 (略)、海とをかとおし立てた何千本の赤はたは、(略)。
- 六一二 わが日本は島國である。四方は海にとりまかれてゐる。
- 六四六 塩ハ山ヨリモ出ヅレドモ、ワガ國ニテハ海ノ水ヨリツクル。
- 六八五 淀川ハイクスデニモ分レテ海ニソ、グ。
- 七六九 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モアル。
- 七七三 (略)海綿モ、ヤハリ海ノソコノ岩ナドニ取りツイテキル蟲ノ骨デアル。
- 七七六 海ニハ又ケモノガスンデキル。
- 七七五 海ノ深イ所ハ何千ヒロモアル。
- 七七七 廣イ海ニハ、コノ通りニ多クノ動物ヤ植物ガアル。
- 七八一 皆さんは海を御存じでせう。
- 七八五 そんな時には海の深さをはかつたり、きてきやかねを鳴らしたります。
- 七八七 日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。
- 七八八 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。
- 七八八 又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。
- 七八九 (略)小さい時から海になれておくやうにしたいものです。」
- 七八九 大砲ノヒマキハ、天モオチ、海モサクルカト思フバカリナリ。
- 七九二 中佐ハ一片ノ肉ヲポートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。
- 七八一 フランスは海をへだててイギリスの南にあり。
- 八〇一 (略)日本を出で、海を越え、陸を越え、東へ東へと進めば、(略)。
- 八〇八 地球の表面の凡そ三分の二は海にして、三分の一は陸なり。
- 九六一 江戸川ハ南流シテ海ニ入ル。
- 九三三 (略)、海ノソコノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類ハ、(略)。
- 一二七 (略)下流宇治川となり、淀川となりて、大阪に至りて海に注ぐ。
- 一二九 (略)、越後の新潟に至りて海に入る。
- 一七四 前面は海に臨み、後は山を負ひ、冬暖に夏涼し。
- 一八六 船の其の間を行くとき、(略)、かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。
- 一九六 海の静かなることは鏡の如く、(略)。
- 二一 我は海の子、白浪とさわぐいそべの松原に、(略)。
- 二一九 (略)、千里寄せくる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。
- 二二 百尋・千尋海の底、遊びふれとる庭廣し。
- 二三 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。
- 二四 いで、大船を乗出して、我は拾はん、海の富。
- 二五 いで、軍艦に乘組みて、我は護らん、海の國。
- 二六 四面皆海ナル我が帝國ハ、(略)、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。
- 二七 (略)、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。
- 二八 風號び海怒りて、波浪山の如くなれども、(略)。
- 二九 (略)、敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。
- 三〇 (略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、(略)。
- 三一 四方の海の底廣く、魚介さま／＼海草の無限の富を藏したり。
- 三二 養蠶業の盛大は、長野・埼玉をて群馬、海なき縣に著し。
- 三七 熱湯の海ありと語る者、

舟を呑む海獸ありと談ずる者、(略)。

十二78 船員は失望の餘り、コロ
ンブスを海に投じて歸國せんと謀る
に至れり。

十二83 重く沈んだ調に暗い／＼海
の底へ引込まれるやうな氣がするか
と思ふと、(略)。

十二116 海行かば水づくかば
ね、山行かば草蒸すかばね、(略)。
十二120 師の賜物の 智を德
を、かちにゑをりに 世の海を
たりて行かん。

うみだす「生出」(五) 1 産ミ出ス
「一ス」

八15 人ノ幸福ハ皆自分ノ働デ産ミ
出ス外ハナイ。

うみつ・ける「産付」(下) 2 産みつ
ける「一ケ」

七33 蛾は(略)、出て来ると、す
ぐに紙の上において卵を産みつけさ
せる。

七33 7 その卵を産みつけさせた紙を
蠶卵紙といふ。

うみのせいふつ「課名」 4 海ノ生物
七目9 第二十一 海ノ生物：(一)
七目10 第二十二 海ノ生物：(二)
七69 8 第二十一 海ノ生物 (一)
七74 4 第二十二 海ノ生物 (二)

うみべ「海辺」(名) 3 ウミベ 海べ
三65 4 アル日ウミベへ出テ見
ルト、子ドモガ大ゼイデカメ
ヲツカマヘテ、(略)。

三66 4 ソレカラ二三日タツテ、

ウラシマガウミベデツリヲシ
テキルト、(略)。

六16 海べはふだん強い風がふくか
ら、高い松はしぜんにおもしろい枝
ぶりになつてゐる。

うむ「有無」(名) 3 有無
九87 10 (略)、必要ノ場合ニ物ト物
トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギ
ザリキ。

十二50 千里比隣の今の世は
有無互に相通じ、世界各國皆市場。
十二51 内國ノ商業モ、海外ノ貿
易モ、有無相通ズルノ理法ニ基ツケ
ルハ相同ジク、(略)。

うむ「産」(四・五) 4 生ム 産む
「ム・メ・ーン」

七16 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生
メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオ
トシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

七33 5 蛾は繭から出ると、やがて卵
を産んで、間もなく死んでしまふか
ら、(略)。

七33 9 一匹でおよそ四五百程の卵を
産む。

十一75 女王の任務は卵を産むに
あり。

うめ「梅」(名) 15 ウメ うめ 梅
二44 6 コレハ天ジンサマノオ
ヤシロデス。ココニハウメノ
木ガタクサンアリマス。
二47 3 コノオカタハウメノハ

(ナガオスキデシタカラ、(略)。

二47 6 (略)、ドコノテンジンサ
マノオヤシロニモ、ウメノ木
ガウエテアリマス。

四65 3 今あのうめの木の枝
から枝へとんでゐます。

四66 4 昔からうめにうぐひす
といつて、(略)。

四66 5 (略)、うめの花のさく
じぶんから、あんなうつくしい
こゑでなきはじめます。

六57 日本は花の國。うめ・
も・さくら・ふち・あやめ、(略)。
八47 廣き道の左右に梅・松・櫻
などを植ゑたり。

八34 9 (略)、つゞいてかをる梅
が香に、うぐひす 鳴かぬ 里もな
し。

九76 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤ
ウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、(略)。
九81 1 梅の實の熟する頃降續く五月
雨は、(略)。

九78 東風吹かばにほひおこせ
よ梅の花、主なしとて春を忘るな。
九79 2 是は菅原道真が(略)、筑
紫へ旅立たんとする時、庭の梅に別
ををしてみよめる歌なり。

十75 櫻や梅ノ葉ハ唯一スデノ太イ
脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ
細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

十99 8 紀貫之ガ(略)。トヨミタ
リトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラ

ニアリ。

うめばち「梅鉢」(名) 2 ウメバチ
梅ばち

二46 3 コレハ天ジンサマノオ
ヤシロデス。(略)、アノオ
ヤネニハウメバチノ大キナモ
ンガツイテキマス。

七45 4 (略)、梅ばち・櫻・たちば
なや、(略)、紋の數々かぎりなし。

うめぼし「梅干」(課名) 2 うめぼし
五目11 第十 うめぼし
五27 5 第十 うめぼし

うやまいたてまつる「敬奉」(四) 1
うやまひ奉る「一リ」

八15 代々の天皇は皇大神宮をた
ふとびたまふときはめてあつく、
國民もまた深くうやまひ奉りて、
(略)。

うやまう「敬」(五) 1 ウヤマフ「一
ハ」

八92 8 橘中佐ハ(略)。(略)、軍神ト
イハレル程ニウヤマハレタノハ、平
生カラノ行ガリツパデアツタカラデ
アル。

うら「浦」 ムおののうら・かすみがう
ら・かただのうら・だんのうら
うら「裏」(名) 6 ウラ 裏 ムおみや
うら

四12 3 ウラノ山ニハクリノ木
ノ林ガアリマス。
五65 6 おちよはしばらく考へて、葉
書の裏へ次のやうに書きました。

- 五70 1 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
マツテキル。
- 五75 5 何でも裏からまはつて、て
きのふいをうたなければならぬ。」
- 七48 7 西洋紙ハナホマケズニ、
「(略)、僕等ハ少シシガラキ水ニヌレ
テモ、裏ヘハ通ラナイ。」
- 八74 7 虎モ猫モ足ノ裏ヤハラカナ
レバ、歩ム時音ヲ立テズシテ、(略)。
- うらおもて「裏表」(名) 1 裏表
- 七47 6 西洋紙ハ「君ラハ表ダケシ
カ役ニ立タナイガ、僕ラハ裏表トモ
ニ使ハレル。
- うらがる「末枯」(下二) 1 うらがる
『一』
- 八37 6 図 いつしか木々もうらがれ
て、さびしきにはのささん花や、
(略)。
- ウラジオストック「地名」 1 ウラヂオ
ストック
- 十二4 10 露國が(略)太平洋第二
・第三艦隊は、朝鮮海峡を経てウラ
ヂオストックに向はんとす。
- うらしま「浦島」(人名) 8 ウラシマ
- 三65 8 ウラシマハカイサウニ
思ツテ、子ドモカラソノカメヲ
買ツテ、ウミヘハナシテヤリマ
シタ。
- 三66 4 (略)、ウラシマガウミベ
デツリヲシテキルト、(略)。
- 三67 4 ウラシマガヨロコンデ、カ
メニノルト、(略)。
- 三68 1 (略)、ウラシマノ來タノ
ヲタイソウヨロコンデ、(略)。
- 三68 5 ウラシマハ(略)、リュウウゲ
ウノオキヤクサマニナツテ、ウ
チヘカヘルノモワスレテキマ
シタ。
- 三69 6 ソノウチニウラシマハ
ウチヘカヘリタクナツタカラ、
(略)。
- 三72 3 ウラシマハハコヲモラツ
テ、マタカメノセナカニノツ
テ、海ノ上ヘ出テ來マシタ。
- 三73 6 (略)、中カラ白イケムリ
ガ出テ、ウラシマハニハカニオ
ヂイサンニナツテシマヒマシタ。
- うらしまさん「浦島」(人名) 1 ウラ
シマサン
- 三66 7 (略)、大キナカメガ出
テキテ、「ウラシマサン、コノア
ヒダハアリガタウゴザイマシタ。
うらしまたろう「浦島太郎」(人名) 1
ウラシマ太郎
- 三65 1 ムカシウラシマ太郎トイ
フ人ガアリマシタ。
- うらしまのはなし「課名」 4 ウラシマ
ノハナシ
- 三目12 二十四 ウラシマノハナシ
(一)
- 三目13 二十五 ウラシマノハナシ
(二)
- 三64 8 二十四 ウラシマノハナシ
(一)
- 三69 1 二十五 ウラシマノハナシ
(二)
- うらまちどおり「裏町通」(名) 1 裏
町通
- 八41 9 火元は裏町通の材木屋で、も
う本町通へ抜けて、角の呉服屋が焼
けてゐるのださうだ。
- うらみ「裏見」(地名) 2 裏見
- 十一75 8 日光山には華嚴瀧を始と
して、霧降・裏見・方等・般若等其
の名世に知られたるもの少からず。
- 十一75 9 中にも華嚴・霧降・裏見
を日光の三大瀑布と稱す。
- うらみ「恨」(名) 3 うらみ ぐみうら
み
- 六58 8 「われ／＼はたがひにい
くさをしてゐるけれども、敵の國の人
には何のうらみもない。
- 十一16 9 呉の勢盛になりて、(略)
越の軍を打破りたり。此のうらみ忘
れ難く、越王勾踐つぶさに辛苦をな
めて報復を圖り、(略)。
- 十二39 5 余の彼を避くるは、國
家の急を先にして、私のうらみを後
にするが爲なり。」
- うらみち「裏道」(名) 1 裏道
- 五75 8 何でも裏からまはつて、てき
のふいをうたなければならぬ。」と
考へて、(略)、こつそりと裏道から
ひよどりごえに向つた。
- うらみのたき「裏見瀧」(地名) 1 裏
見瀧
- 十一76 3 裏見瀧は後の細道より瀧
の裏面を望み見るを以て此の名を得
たりしが、(略)。
- うらむ「恨」(上二) 1 うらむ「一
ムル」
- 九79 7 道眞は罪もなきに官を下げ
られ、あまつさへ遠國へうつされし
かども、少しも世をいきどほり、人
をうらむる心なかりき。
- うらめしい「恨」(形) 1 うらめしい
『一』
- 九67 8 春の初に降るのは一雨毎に花
をもよほすかとうれしい。(略)。併
し此の雨はやがて花を散す雨となる
ので、其の時はうらめしい心地がす
る。
- うらもん「裏門」(名) 1 裏門
- 八23 5 その中に入男が麥俵をかつい
で、裏門から出て來ました。(略)。
- 此の男は居酒屋に酒代の借があるの
で、其のかたに持つて行かうとする
のです。
- うらやま「裏山」(名) 2 裏山
- 八8 6 友よ、來よ。手かごを持
ちて、いざ、裏山にきのこたづねん。
- 九74 3 (略)、川上の堤防切れ、
(略)、是は大變なりと、直ちに老母
と子供を裏山に立退かせ、(略)。
- うらやまし「羨」(形) 1 うらやまし
『一シキ』
- 十三3 羨 羨 「さはいへど うらや
ましき 身も輕き 君、床柱。あ

はれ我、梁や棟木や 桁どもをい
つもせおひて 片時も 休む間な
し。」

うらやましい ぐおうらやましい

うらやむ「羨」(五) 1 うらやむ「マ」

ハ193 初は近所の人にもうらやまれ

る程の身代でしたが、(略)。

うららか「麗」(形状) 1 うらゝか

ハ42図 十月十七日 晴 雨は夜中

にはれて、今日はうらゝかなる天気

なり。

ウラルさんちゅう(名) 1 ウラル山中

十二65図 又かつて栗鼠の大神ウラ

ル山中の一都會に現れしが、(略)。

うらわ「浦和」(地名) 1 浦和

九17図 浦和

うり「瓜」(課名) 2 瓜

五目5 第十七 瓜

五493 第十七 瓜

うり「瓜」(名) 7 ウリ 瓜 ぐしろう

り・まくわうり

一136 ナストウリ

五495 西瓜・マクハ瓜・白瓜・タ

顔・西瓜・トウ瓜・カボチャ・ヘチ

マナドヲ瓜トイフ。

五503 西瓜ニハカハニ小サイトゲ

ガアリ、カボチャニハデコボコガア

ル。ソノ他ノ瓜ハ大テイナメラカデ

アル。

五507 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜

ハ中ガ赤イ。西瓜ノ種ハ大テイ黒イ

ガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

五512 西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコ

シ、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲノ

コス。

五523 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエ

テキルノガアル。花ハ夕顔ダケガ白

クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。

五526 瓜ノツルニハナスビハナラヌ。

うり「荒」 ぐおろしうり・おろしうり

しょうにん・こうり・こうりしょうに

ん・こうりてん・はかりうり

うりいえ「売家」(名) 3 賣家

十一921図 例へばこゝに一戸の賣家

ありて、之を買はんとする人五人あ

るときは、(略)。

十一926図 (略)、同様なる賣家五戸

ありて、買はんとする人唯一人なる

ときは、(略)。

十一927図 (略)、賣家の持主五人

は各其の家の賣れざらんことを恐れ

て、争ひて其の價を低くすべし。

うりかい「売買」(名) 2 賣買

七545図 右ノ方ハ魚市場ニテ、賣買

ノコエカマビスシ。

九879図 賣買トイフコトナカリシ遠

キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物ヲ

取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリ

キ。

うりだす「売出」(五) 1 賣出す「一

ス」

七343 わが國は昔から養蠶の盛な國

で、生絲は外國へ賣出す品物の第一

である。

うりもみ「瓜揉」(名) 1 瓜もみ

五517 西瓜や白瓜ハ生デ瓜もみニシ

テモ、ツケ物ニシテモタベ、又ニテ

モタベル。

うりゅう「瓜生」(人名) 2 瓜生 瓜

生

十二62図 (略)、東郷司令長官は

(略)、片岡・出羽・瓜生・東郷(少

將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二84図 (略)、片岡・瓜生・東郷

の諸隊は其の退路を絶ち、(略)。

うりゅうたもつ「瓜生保」(人名) 1

瓜生保

十二316図 新田義貞、尊良親王を奉

じて越前國金崎の城に在りし時、

瓜生保其の弟義鑑等と共に杣山に

旗あげして義貞に應ず。

うりわたす「売渡」(五) 3 賣渡す

「一シース」

七139図 小賣といふのは商人から

品物を使ふ人にすぐに賣渡すことで

す。

七142図 卸賣といふのは品物をたく

さん持つてゐて、小賣店へ大口に賣

渡すことで、(略)。

七151図 たとへばごふく問屋といふ

のは、織物を買りたいといふ人にた

のまれて、それをほかへ賣渡してや

り、(略)。

うる「売」(四・五) 20 賣ル 賣る

「一ツーリールーレ」

三645図 貝ざいくを賣るみせで

買つてきたのです。」

四13 ふでやかみを賣るみせ

も、本を賣るうちも、みんなが

くかうのきんじよにありますが。

四14 ふでやかみを賣るみせ

も、本を賣るうちも、みんなが

くかうのきんじよにあります。

四33 村の人人が、毎日やさい

やすみやたきを馬やくる

まにつんで、賣りにきます。

七134図 たとへば十五錢で賣つてよ

いものを二十錢といふやうなもので

す。

七147図 問屋といふのは他人からた

のまれて、品物を買つたり買つたり

して、口錢を取る店のことです。

七149図 たとへばごふく問屋といふ

のは、織物を買りたいといふ人にた

のまれて、それをほかへ賣渡してや

り、(略)。

七365 マツ入口ヲハイルト、右ノ方

ニハ皿・ハチ・茶ワンナドノ焼物ヲ

賣ル店ガアリ、(略)。

七366 (略)、左ノ方ニハゼン・ワン

・ハシナドノ塗物ヲ賣ル店ガアル。

七382 出口ニ近イ所ニハ、着物・羽

織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。

七383 (略)、出口ニハ鍋・釜・鐵

ビン・火バシナドヲ賣ル金物屋ト、

(略)。

七384 (略)、ツケ・タラヒ・ザルナ

ドヲ賣ル荒物屋ガアル。

七39 4 (略)、大そうよい馬を賣りに来た者がありました。

八45 図 このあたり御山木細工・貝細工などを賣る店多し。

八25 1 此の下女は毎朝かうして、主人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。

九89 3 図 賣ル・買フ、財産ノ財、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。

十一10 4 若シ一人ノ手デ製造スルナラバ、一包三錢ヤ三錢五厘ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。

十一92 10 図 かくて其の家の價は段々安くなりて、最も價を低くしたる人其の家を賣ることを得べきなり。

十一112 1 図 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて一年中用ふる塩・醬油を買ふに餘あり。

十一112 3 図 池には大抵鯉・鮒等を養ひて、二年毎に之を賣るに、其の利少からず。

十一112 3 図 池には大抵鯉・鮒等を養ひて、二年毎に之を賣るに、其の利少からず。

十一112 3 図 池には大抵鯉・鮒等を養ひて、二年毎に之を賣るに、其の利少からず。

うる「売」(下二) 1 賣る『一レ』

十一92 7 図 (略)、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、(略)。

うるお・す「潤」(四) 1 うるほす『一シ』

十9 10 図 森林は能く暴風をさへへ、

(略)、土砂の飛散を防ぎ、又常に土地をうるほして、土砂を落付かしむ。

うるし「漆」(名) 3 うるし

七35 7 塗物はくりたる木又は組合せたる木・竹又紙などにうるしを塗りてつくる。

七35 8 図 塗物に黄・赤・黒・青などさまざまの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。

七35 9 図 うるしの上に金又は銀にてゑがきたるものをまき多といふ。

うるわ・し「麗」(形) 9 ウルハシうるはし 麗シ 麗し『一シ・一シキ・一シク』

七58 2 図 コノ公園ハ(略)、種々ノ草花ウルハシク咲キミダレタリ。

八83 3 図 我が日本の國の(略)、雪月花のながめも折節にかはりて面白く、山川の風景もうるはし。

九51 1 図 西洋婦人のボンネット花をかざりてうるはしく、(略)。

十46 10 図 見よ、曲線のみにて成れる(略)、(略)の模様の如何に麗しきかを。

十49 10 図 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。

十71 7 図 グレース、ダーリングの(略)、永く此の勇ましく、やさしく、且は麗しき昔物語を語れり。

十72 4 図 温泉のわき出づる處はおほ

むね火山の附近に在りて、四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。

十101 9 図 敵傍山・香具山・耳無山ノ三山、イツレモ麗シキ山ニシテ、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

十一16 4 図 主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

うるわしさ「麗」(名) 1 うるはしさ

八35 9 図 (略)、山々の 櫻も咲けば、梨・すもゝ、皆一時に紅白の花のながめの うるはしさ。

うれ・う「憂」(下二) 4 ウレフ うれふ 憂ふ『一フル・一へ』

八49 9 図 (略)、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。中臣鎌足コレヲウレヘテ、國ノタメニ入鹿父子ヲノゾカント思ヒ立チタリ。

十一113 9 図 或年暴風雨の爲に不作なりしことあり、其の翌年學校の經費を議するに當り、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。

十二29 10 図 勝南城に向ひ、高らかに號んで曰く、「諸君、憂ふることなかれ。徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。圍の解けんは二三日の内にあらん。」と。

十二73 3 図 快活なる精神を以て熱心に其の事業に従事せば、天下何事か

成らざるを憂へん。

うれえ「憂」(名) 2 ウレへ 憂

九54 4 図 (略) 動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。シタガツテ敵ニオソハル、ウレヘ少ク、(略)。

十二71 6 図 遠き慮なければ、必ず近き憂あり。

うれし「嬉」(形) 19 うれし うまし『一シ・一シケレ』

八9 2 図 山風にきのこかをれり。うれし、この松の根もとに、まつ見つけつと高く呼ぶ聲。

十一60 2 図 うましうまし、勇ましうまし。出征兵士の弟ぞ、我は。

十一60 2 図 うましうまし、勇ましうまし。

十一60 2 図 うましうまし、勇ましうまし。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。(略)、學びの道の六年をば、卒へし今日こそ うれしけれ。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。

十二118 1 図 うれしうれしや、うましやな。

うんでん・する
〔運転〕(サ変) 1 運転

スル「一スル」

十二12 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出来、(略)。

うんどう「運動」(名) 3 運動

九59 運動不足なれば、食物のこなれ悪く、血のめぐりにぶく、身體弱りて、氣分もふさぐ。

九60 然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。

九61 飲食に注意し、身體の清潔を保ち、適度の運動を怠らず、(略)なほ病にかゝらば、是我が罪にあらす。

うんどうかい「運動會」(名) 2 うん

どうくわい うんどう會

四71 太郎きのふは うんどうくわいで、どろによこしたこのはかま。

五29 しわはよつてもわかい氣で、小さい君らのなかま入、うんどう會にもつて行く。

うんどうす「運動」(サ変) 1 運動す

「一スル」

九59 「我は(略)、毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。」

うんどうば「運動場」(名) 2 運動場

七58 コノ公園ハ(略)。(略)。

廣キ運動場モアリ。

七80 「私も子供の時には毎日この學校へ通つて、皆さんと同じ様に、

あの運動場で體操をしたり、(略)。

うんむ「雲霧」(名) 1 雲霧

十一30 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモヒ見ルベク、(略)。

うんめい「運命」(名) 2 運命

十一13 北條高時、後醍醐天皇を隱岐へ流し奉る。(略)。武家の運命も今に盡きなんと、罵りいきどほる聲ちまたに滿つ。

十二76 乗組員の運命をあはれむ者、コロンブスの暴舉をあざける者、(略)、口々に語り合へり。

うんゆ「運輸」(名) 2 運輸 ムかいりくうんゆ

九18 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ、運輸ノ便スコブル多シ。

十一24 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形状も様々なり。

うんよう「運用」(名) 3 運用

十一27 帆の運用自在なれば、風の方向に關らず、十分に風力を利用することを得。

十二100 汽車・汽船・電車等の交通機關、博物館・圖書館等の公共營造物に在りては、(略)。若し公衆の間に、規則を守り、規律を重んずる心乏しき時は是等文明の利器も其の運用を全くすること能はず。

十二105 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。(略)。凡て制度の運用は人にあり。

え

え「柄」(名) 1 え

六57 ぐんばいうちではふせいだが、えが折れて、かた先へ切りつけられた。

え「重」 ムいおえ・いくえ・ここのえ・やえざくら

え「得」 ムこころえ

え「絵」(名) 17 え 糸 繪 畫 ムとぎだしまきえ・まきえ

一27 ネエサンガエヲミテキマス

二49 コレニハウツクシイエガアツテ、(略)。

三34 これを本の中のじやゑや、(略)を見るのです。

五69 オ官ニハエマガタクサンカケテアル。(略)。ヨシツネ・ペンケイノエモアリ、ニタンノ四郎ノエモアル。

五69 (略)、ニタンノ四郎ノエモアル。

五69 又日本ヘイガロシヤヘイトタ、カツテキルエモアル。

六36 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つ

て行くのは、まるでゑにかいたやうである。

六35 水せんの花を見てゑをかい

七27 筆一本デ美シイエヲカイト

ラヘタリシテ、(略)。

八28 四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。

八29 「見セ申シ度キ繪出来タリ。

八30 カノ死人ト見エシハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。

十18 本の中には字ばかりのもあるが、畫や地圖や寫真のはいつてゐるものもある。

十一19 畫をかく人、圖をひく人、寫真をうつす人の苦心も亦一通りではない。

十一19 圖や畫は別に堅い木に彫り、寫真は銅版に彫りつけて、相當の場所に入れる。

十一71 此の畫の出来たる由來こそ面白けれ。

十一71 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)。

え「餌」(名) 2 ゑ

八21 又若し外の雀が見つけると、(略)、毎朝早くすを出て、ゑをさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。」

十29 二三羽のあひるが、(略)、し

きりにゑをあさつてゐる。

えい「榮」(名) 2 榮

十一637 國手 (略) 故近藤大尉記念碑、いよく出来上り候については、(略) 建碑式舉行致候間、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

十二723 國 位人臣の榮を極め、當天下に冠たるも、自ら省みてやましき所ある者は、苦多く、榮少し。

えい「顔」(名) 1 エヒ

七708 (略)、エヒ・カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデキルモノモアル。

えい「營」(副) 1 營營

十一65 國 百花満開の候には、外役の蜂は朝より夕に至るまで、營營として寸時も休まず。

えい「えん」(名) 1 永遠

十二707 國 永遠の幸福を望む者は一時の勞苦を忍ぶべし。

えい「口」(地名) 4 營口

十二5610 國 營口線は大石橋より分れ、營口に於て清國京奉線の支線に連接す。

十二571 國 營口は一に牛莊港と稱し、(略)、大連と共に滿洲の二大門戸と稱せらる。

十二57 國 營口

十二586 國 安東縣は(略)、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

えい「こうせん」(營口線) (名) 2 營口

線

十二564 國 南滿洲の支線としては旅順線・營口線・煙台線・撫順線・安奉線あり。

十二5610 國 營口線は大石橋より分れ、營口に於て清國京奉線の支線に連接す。

えい「く」(英國) (地名) 3 英國

十二439 國 (略)、翌年英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、ドイツ・アメリカ等ノ諸國ヨリモ續々註文ヲ受ケ、(略)。

十二641 國 英國は國會の最も早く開けたる國にして、テームス河岸の國會議事堂は第一に觀客の目を引く建築物なり。

十二1002 國 英國にては停車場に手荷物預くるに合札を要せず、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。

えい「くはくぶつかん」(英國博物館) (名) 2 英國博物館

十二637 國 倫敦には英國博物館・英蘭銀行・國會議事堂等世界に名を知られたる建築物多し。

十二638 國 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

えい「こくひがしかいがん」(英國東海岸) (名) 1 英國東海岸

十二682 國 英國東海岸の一島に燈臺あり。

えい「せい」(衛生) (名) 6 衛生

十二525 國 笑ハント欲セバ、衛生ニ

注意シ、身體ヲ健全ニスベシ。

十一648 國 材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨリ考ヘナケレバナラヌ。

十一110 國 朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

十二6110 國 街路は掃除最もよく行きてゐて、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。

十二984 國 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にせる等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ德義をいふ。

十二1047 國 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、地方人民の一般に之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

えい「せいじょう」(衛生上) (名) 3 衛生上

十一649 國 材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、(略)。衛生上ヨリハ、成ルベク滋養ニ富ンデ、コナレノ良イモノヲ選ブベク、(略)。

十二898 國 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二905 國 衛生上の注意を怠らずして、何人も病にかされぬ様にすべし。

し。

えい「そう」(營倉) (名) 1 營倉

十二596 國手 何か不都合なる事ありて、罰に處せられたる者は外出を禁ぜられ、又重き者は營倉に入れられ候由承り申候。

えい「ぞうぶつ」(こうきようえいぞうぶつ) (名) 2 營内

えい「ない」(營内) (名) 2 營内

十二2610 國手 申すまでもなく御入營の上は、(略)、時々營内の様子御報知下されたく願上候。

十二599 國手 入營當時は(略)、營内の生活にもなれ、日々楽しく暮し居り候。

えい「ふつ」(く) (英仏二國) (名) 1 英佛二國

十二655 國 獨逸帝國は創建以來年尚淺ければ、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは固よりあやしむに足らず。

えい「へい」(衛兵) (名) 1 衛兵

十二284 國 黒き影は城の一方より現れ出で、ひらりとばかり身を水中に投入れたり。繩の鈴はしきりに鳴る。敵の衛兵相呼んで尋ねんとするに、(略)。

えい「べい」(く) (英米二國) (名) 1 英・米二國

十二438 國 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國ヘ送リシニ、(略)。

えい「めい」(英明) (形状) 1 英明

十一1023 劉備ハ漢朝ノ末流、英明ニシテ大志アリ。

えいゆう「英雄」(名) 2 英雄

十一1022 支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。

十二262 歴史は長き 七百年、興亡すべてゆめに似て、英雄墓はこけ蒸しぬ。

えいらんぎんこう「英蘭銀行」(名) 2 英蘭銀行 英蘭銀行

十二637 倫敦には英國博物館・英蘭銀行・國會議事堂等世界に名を知られたる建築物多し。

十二639 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。

えいり「鋭利」(形状) 1 鋭利

十一86 蜂の武器は體の後方にある鋭利なる針にして、攻撃にも防禦にも常に之を用ふ。

えがお「笑顔」(名) 2 笑顔

七115 刈つて、ひろげて、日にかわかし、米にこなして、俵につめて、家内そろつて、笑顔。

七115 家内そろつて、笑顔。

えがく「描」(四) 14 エガク えがく

七355 花鳥・山水・人物などのものやうは、うはぐすりをかくる前にえがく。

七359 うるしの上に金又は銀にてえがきたるものをまきあといふ。

八308 カノ死人ト見エシハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。

十795 是は北海道に住するあいぬ人を畫がけるものにて、(略)。

十一717 其の座敷の一間の杉戸には繪一本を畫がき、(略)。

十一718 他の一間には鶴二十五羽ばかり畫がけり。

十一710 此の繪をかける畫工(略)、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して三年を経たり。

十一733 翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。

十二736 明日はかく畫がかんなどひとり言いひ居たり。

十二738 十日餘にして鶴二十四五羽を畫がけり。

十一742 「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」

十一745 畫師それより後の二枚には畫がかず、唯繪一本を畫がきて、東國へ出立せり。

十一745 唯繪一本を畫がきて、東國へ出立せり。

十一749 「先に畫がきたる繪の枝に一枝足らぬ所あり、(略)。」

えがたし「得難」(形) 1 得難シ

キ

十247 受ケテ見レバ、世ニモ得難キ兵書ナリ。

えき「益」(名) 2 益

十一697 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、時間を徒費すること甚だし。

十二717 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

えき「駅」(名) 1 驛 ぐげしやえきはこねえき

十二561 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、(略)。

えきちやう「駅長」(名) 2 驛長

九799 筑紫へ下る道に、昔より相知りし驛長ありて、道眞の今の身の上を深く悲しみに、(略)。

九801 道眞は「驛長驚くなかれ、時の變り改るを。(略)」といふ意味の詩を作りてあたへたりといふ。

えきふ「駅夫」(名) 1 えきふ

五407 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ました。

えし「絵師」(名) 3 畫師

十一729 「かしこに行きて、彼の畫師の有様を見給へ。」

十一742 畫師は驚きて、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。

十一744 畫師それより後の

二枚には畫がかず、唯繪一本を畫がきて、(略)。

えず「絵圖」(名) 1 畫圖

十一757 我が國には數多の瀑布あり、古來多く詩歌に入り、畫圖に上る。

えぞ「蝦夷」(名) 4 蝦夷 蝦夷

九49 人皇第十二代景行天皇の御代、東國の蝦夷叛きしかば、天皇日本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

九62 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、景行天皇の御代日本武尊之を征し給ひ、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、其の後も度々叛きて、(略)。

九63 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、(略)、さしに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

十二309 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかば、夜に乗じて城をすてて逃れんとす。

えぞうしや「絵紙屋」(名) 1 繪草紙屋

七368 筆・墨・紙ナドノ店、クシ・カンザシナドノ店ヲ見テ、右ヘ折レルト、ソコニ繪草紙屋・ゲタ屋・オモチヤ屋ナドガナランデキル。

えぞども「蝦夷共」(名) 1 蝦夷ども

九63 尊はなほも進みて北に向ひ給ひしに、蝦夷ども皆恐れて降参

し、東國ことごとく平ぎたり。
えぞまつ「蝦夷松」(名) 1 蝦夷松

十一1004(園) 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然林にして、榎松・蝦夷松・落葉松・白樺等一面に生ひ茂り、(略)。

えだ「枝」(名) 27 エダ 枝ひこえだ・ひとえだ

一261 キノエダ ニカタツムリガキマス。

二59(略) カレ木ノエダニカカツカトオモフト、ウツクシイハナガサキマシタ。

四106 ウチニハカキノ木ガ二本アリマス。今年ハエダガラレルホドタクサンナツテキマス。

四65(略) 今あのうめの木の枝から枝へとんでゐます。

四65(略) 今あのうめの木の枝から枝へとんでゐます。

五28(園) 五月・六月實がなれば、枝からふるひととされて、(略)。

五30(略) コ、ニ茶ノ木ガアリマス。ハガヨクシゲツテ、下ノ方ハ枝モ見えマセン。

五71(園) 「ジブンノ角ハ(略)」。牛ノ角トハチガツテ枝ガアル。

五71(園) 毎年春ニナルトオチルガ、オチルトスグ又新シイノガハエテ、ソノタビニ枝ガ一ツツフエル。

五73(略) 美シイ角ガ木ノ枝ニヒ

ツカ、ツテ、イクラモガイテモハツレマセン。

六66(略) ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。

六83(園) (略)、みきは一つの枝と枝、仲よく暮せよ、兄弟・姉妹。

六83(園) (略)、みきは一つの枝と枝、仲よく暮せよ、兄弟・姉妹。

七30(略) 桑の葉をやると、(略)。

七32(略) この時木の枝やわらなどで作つたまふしへうつしてやると、(略)。

七72(略) 中デオモシロイノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキル。

七75(略) 海草ノ形ハ様々デアル。(略)、ゼンタイガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。

八5(略) 數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高く天をつく。

九11(園) 歌へ歌へ、枝にこずゑに。鳥の遊ぶ時は今なり。

九56(園) 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

九91(園) 色香も深き 紅梅の枝にむすびて、(略)。

十8(園) 森林の樹木はたがひに其の

枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。

十28(略) 中程の枝の上に鳥が二羽止つて、さつきから少しも動かない。

十29(略) 物置の後は、大きなだいぐの木があつて、黄色い大きな實が枝もたわむ程なつてゐる。

十一74(園) 「先に晝がきたる檜の枝に一枝足らぬ所あり、(略)」。

十二61(略) 人道と車道との間なる左右二列の緑樹は枝を交へて、雅麗比なし。

十二78(略) 又果實の附きたる枝の波のまに／＼浮べるを見たり。

えだこ「絵風」(名) 1 エダコ

二31(園) エダコニジダコ、ドチラモマケズ、クモマデアガレ。

えだしやくとり「枝尺蠖」(名) 1 エダシヤクトリ

九55(園) タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ體色ノ桑ノ木ニ似タル上、其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ、メニ突出スルトキハ、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

えだぶり「枝振」(名) 3 枝ぶり

六1(略) 海べはふだん強い風がふくから、高い松はしぜんにおもしろい枝ぶりになつてゐる。

六5(園) 見上げる峯の一つ松、はまべはつゞく松原の 枝ぶりすべておもしろや。

十一75(園) 「先に晝がきたる檜の

枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、(略)」。

えちこ「越後」(地名) 3 越後 越後

九14(園) 上野ノ東北、越後ノ國境ナル利根岳ヨリ發スルサ、ヤカナル細谷川ハ、(略)。

九17(園) 越後

十二9(園) 信濃の東南部より發し、越後の新潟に至りて海に入る。

えちぜん「越前」(地名) 2 越前

十二31(園) 越前國金崎 越前國金崎

瓜生 保其の弟義鑑等と共に仙山に旗あげして義貞に應ず。

えつ「越」(地名) 2 越

十一16(園) 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、呉の勢盛になりて、會稽山の戦に越の軍を打破りたり。

十一16(園) (略)、呉の勢盛になりて、會稽山の戦に越の軍を打破りたり。

えつおう「越王」(名) 1 越王

十一16(園) 此のうらみ忘れ難く、越王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

えて「得」(副) 1 得て

十二104(園) 公吏・議員等(略)、如

何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、自治團體の圓滿なる發達は得て望むべからず。

えど「江戸」(地名) 4 江戸

七二三 保己一ノ家ハ今ノ東京、ソノコロノ江戸ノ番町ニアリ、(略)。

九三五 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、(略)。

十二八七 喜剣其の後江戸に出で、義士復仇の擧を聞き、(略)。

十二八七 郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。

えどがわ「江戸川」(地名) 5 江戸川

九一六 赤堀川ハ(略)ニツツ分レ、一ハ(略)、一ハ西南ニ向ヒ、權現堂川ニ合シテ江戸川トナル。

九一六 江戸川ハ南流シテ海ニ入ル。其ノ流ハ下總・武藏ノ國境ヲナセリ。

九一六 コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運河ハ、(略)。

九一六 (略)、東京ヨリ江戸川ヲサカノボリテ利根川ニ通ズル汽船ノ通路ニシテ、(略)。

九一七 江戸川

えとく・す「會得」(サ変) 1 會得ス

《一シ》

九二四 良大イニ喜ビテ、朝夕之ヲ讀ミ、遂ニ兵法ヲ會得シタリ。

えどじょう「江戸城」(名) 1 江戸城

十六一 此ノ銅山ハ(略)、江戸城及ビ日光東照宮等ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、大抵此ノ山ヨリ産出シタルモノナリトイフ。

えび「蝦」(名) 2 エビ

七二 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナドガスタンデキル。

七二 エビノピン／＼ハネタリ、カニノ横ニハツテアルク様子ハ(略)。

えぼし「烏帽子」(名) 1 烏帽子

九五一 古風ゆかしき我が國のかんむり・烏帽子今は唯、祭の服に残りたり。

えぼしだけ「烏帽子岳」(地名) 3 烏帽子岳

十二四〇 阿蘇山の舊噴火口は(略)にわたり、此の間に根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳の五岳東より西に相連りて突起す。

十二四一 烏帽子岳

十二四一 烏帽子岳は其の西南方に在りて、直徑八百メートルの噴火口を有し、(略)。

えほん「繪本」(名) 1 絵本

三二〇 絵本が四さつ。「ひらがなのドリル」

えま「絵馬」(名) 1 エマ

五九 才宮ニハエマガタクサンカケテアル。(略)。ヨシツネ・ペンケイノエモアリ、ニタンノ四郎ノエモアル。又日本ヘイガロシヤヘイトタ、

カツテキルエモアル。

えみし「蝦夷」「人名」 2 蝦夷 蝦夷

八四八 (略)、皇極天皇ノ御代、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。

八五七 入鹿ツヒニ殺サレタリ。蝦夷モマタ其ノ家ニテ自殺セリ。

えむ「笑」(四) 1 笑む「エマ」

十一一六 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

えもの「獲物」(名) 5 えもの 獲物

四一八 (略) けものを、弓でいとつたのです。はじめの日も、つぎの日も、たくさん えものがありました。

七六三 犬は(略)。(略)。又その鼻はよく物のにほひをかき分くるをもつて、かりに用ひて、えものをさがしむるに適す。

八九六 いでや、あの岩の小かけに、皆うちよりてえもの數へん。たけがりのいさをくらべん。

十一一八 (略)、鵜は盛に活動し、ひたすら其の獲物の多からんことを競ふ。

十一二二 鵜はくぐり入る毎に獲物なくして浮び出ること少ければ、漁夫は一時閒餘にして數千百尾の鰯を得るを常とす。

えもよう「絵模様」(名) 1 絵模様

十四九 欄間の彫物、唐紙の地紙を

はじめ、着物の縞模様、焼物・塗物の繪模様、其の他菓子類に至るまで、我等の衣食住には模様・色どりをほどこしたるもの多し。

えらい「偉」(形) 2 エライ えらい

《一イ》おえらい

四六一 ソノノチオホクニヌシノミコトハ白ウサギノイッタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

九八五 「感心だく、えらい子だ。(略)、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたつばな行だ。

えらびかた「選方」(名) 1 選ビ方

十一六五 季節ニ依ツテ、食物ノ選ビ方ニ多少ノ注意ヲ要スル。

えらぶ「選」(四・五) 7 えらぶ 選ぶ

九六一 家を建つるには日あたりよき所をえらび、夜具・衣服の類はしばく日光にかわすべし。

九八四 或年選ばれた子供の中に、すぐれて上手な騎手が二人あつた。

十一六四 衛生上ヨリハ、成ルベク滋養ニ富ンデ、コナレノ良イモノヲ選ブベク、(略)。

十一六五 (略)、味ハ人々ノ好ミヲ考ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選バナケレバナラス。

十一七〇 人を訪問する時は業務をさまたげざる時間を選び、用事終れ

ば直ちに去るべく、(略)。

十一90 1 図 一種の草の實を食用とするを以て、常に此の草の多く生ずる所を選びて住み、(略)。

十一109 10 死人を葬るのに、小高い所で南に面してゐる日當りのよい地を選ぶ。

えり「襟」(名) 1 えり

九85 1 愛作は(略)、すぐに熊吉のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引きよせた。

えりどめ「襟留」(名) 1 エリドメ

七72 4 指ワヤエリドメナドニハメル

美シイ眞珠ハ、(略)。

えりわ・く「選分」(下二) 2 選り分ク

『ク・ク』

十62 7 図 發掘シタル銅鑛ハ、(略)。

選鑛場ニハ種々ノ機械アリ、此ノ機械ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選り分ク。

十62 9 図 カク選り分ケタルモノハ之ヲ製煉場ニ送ル。

えん「円」ひいちえん・いちおくえん・

いちおくえんいじよう・いつせんまんえん・ごえん・ごえんいじよう・ごせ

んまんえんいじよう・さんぜんえん・じゅうえん・じゅうえんきんか・じゅ

うにおくえん・なんぜんえん・なんま

んなんぜんえん・にじゅうえん・ひやくまいかんいちえん・ひやくえん・

えん「寔」(名) 2 寔ひぎょえん

八37 5 図 (略)、秋の花草多けれど、中にも君の千代八千代 祝ふや菊の花の寔。

十一26 6 図 (略)大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の寔を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。

えん「園」ひどうぶつえん

えん「縁」(名) 1 エン

八28 8 図 「入りテ見給へ。」トイフニ、何心ナクエンニ上リテ、南ノロヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト閉ツ。

えんう「煙雨」(名) 1 煙雨

九67 6 「紅白花は開ク煙雨の中。」といふ景色は、靜かな中に美しいなためである。

えんかい「沿海」(名) 1 沿海

十一34 2 図 通報艦ハ(略)、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が艦隊ニ報告ス。

えんがく「円覚」(名) 1 圓覺

十二26 3 図 建長・圓覺古寺の山門高き松風に 昔の音やこもるら

えんが「沿岸」(名) 4 沿岸ひしな

えんが「沿岸」(名) 4 沿岸ひしな

十一20 2 図 瀬戸内海の沿岸には高松・多度津・高濱・尾道・宇品等の港多く、(略)。

十一20 5 図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

十一33 6 図 海防艦ハ専ラ自國ノ沿岸

ヲ護ルコトヲ目的トス。

十一33 8 図 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。

えんぐん「援軍」(名) 3 援軍

十二27 2 図 城中には僅かに四五日の糧食を餘せるのみ。援軍の來らん日も亦期すべからず。

十二27 10 図 三日を過ぎなば、又山上に來りて援軍の消息を示さん。」

十二29 6 図 「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。

えんけい「円形」(名) 1 圓形

十二41 6 図 中岳は(略)、其の火口は直徑六百メートルの圓形をなし、(略)。

えんこ「緣故」(名) 1 緣故

十二103 7 図 市町村長・議員等を選挙するには専ら其の人物に重きを置き、親族・緣故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

えんこく「遠國」(名) 2 遠國

九79 5 図 道眞は罪もなきに官を下げられ、あまつさへ遠國へうつされしかども、(略)。

十一13 5 図 (略)、北條高時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。

えんじや「縁者」(名) 1 縁者

十二92 8 図 親類・縁者はもとより、

世間の交際をも外さず、(略)。

えんすいけい「円錐形」(名) 2 圓錐形

十二18 6 図 書間は(略)、圓筒形を以て風雨の強きを、圓錐形を以て暴風雨のおそれあるを示す。

十二18 8 図 夜間は紅燈を赤球に、綠燈を圓筒形に、紅綠二燈を圓錐形に代ふ。

えんせい「遠征」(名) 1 遠征

十二77 2 図 コロンブスは(略)。(略)遠征の船は三隻の小艦にして、乗組總數は一百二十人。

えんせいじだい「遠征時代」(名) 1 遠征時代

十二80 10 図 コロンブスの遠征時代は我が國後土御門天皇の御代にして、(略)。

えんせいたい「遠征隊」(名) 1 遠征隊

十二76 8 図 (略)、今日はコロンブスが遠征隊出發の日なりとて、西班牙パロスの港は未明より人の山を築けり。

えんそく「遠足」(課名) 2 遠足

六目4 第三 遠足

六7 7 第三 遠足

えんそく「遠足」(名) 1 遠足

六8 2 私ばかりでなくよくそく通り、三人の友だちと遠足に出かけました。

えんだい「煙台」(地名) 1 煙台

十二57 図 煙台
えんだいせん「煙台線」(名) 1 煙台線
十二56 4 図 南滿洲の支線としては旅順線・營口線・煙台線・撫順線・安奉線あり。
えんちよう「延長」(名) 1 延長
十一28 6 図 今や全國鐵道の延長六千哩を越え、(略)。
えんちよう「する」延長「(サ変)」1 延長スル「一セ」
十二35 1 就學兒童ノ數ガ年々増加シ、義務教育年限モ六年ニ延長セラレタノデ、(略)。
えんとう「遠島」(名) 1 遠島
十33 1 図 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。
えんどう「豌豆」(話し手名) 1 えんどう
七21 9 えんどう「あなたはその美しい花だけでたくさんでございます。」
えんどう「豌豆」(名) 3 えんどう
豌豆
七19 4 島のえんどうがかきの外からこゑをかけて、(略)。
七20 6 (略)。「と問へば、えんどうのいふに、(略)。」
十一100 1 図 農産物の種類は北海道と大差なく、大麥・小麥・燕麥・裸麥・蕎麥・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、(略)。
えんとうけい「円筒形」(名) 2 圓筒

形 圓筒形
十二18 6 図 書間は(略)、圓筒形を以て風雨の強きを、圓錐形を以て暴風雨のおそれあるを示す。
十二18 7 図 夜間は紅燈を赤球に、綠燈を圓筒形に、紅綠二燈を圓錐形に代ふ。
えんとつ「煙突」(名) 2 エントツ
煙突 ヲにほんえんとつ
六81 2 図 今ハ工業モ大イニヒラケテ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。
十二12 7 工場ニハ色々アル。(略)。
汽罐・煙突等ヲ造ル處モアリ、(略)。
えんぶん「塩分」(名) 1 塩分
十72 6 図 其の湯には大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。是種々の塩分をふくめるが故なり。
えんぼう「遠方」(名) 1 遠方
九24 9 図 砲兵は大炮を以て遠方より敵を砲撃し、友軍を前進し易からしむ。
えんまん「円満」(形状) 2 圓滿
十二95 10 図 智徳の最も圓滿に發達せる人格は孔子に於て之を見るべし。
十二104 5 図 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、自治團體の圓滿なる發達は得て望むべからず。
えんやう「感」3 エンヤラヤ
一38 6 圖 クルマ ニ ツンダ タカラモノ、イヌガ ヒキダス エン

ヤラヤ。
一39 3 圖 サルガ アト オス エンヤラヤ。
一39 6 圖 キジガ ツナヒク エンヤラヤ。
えんりよ「遠慮」(名) 1 えんりよ
えんりよ
九21 3 圖 一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。何にてもえんりよなく言へ。』
えんろ「沿路」(名) 1 沿路
十二69 6 図 過ぐる處の沿路、果實・草根を始め、凡そ取つて以て食ふべきものは殆ど餘す所なし。
お
お「尾」(名) 13 ヲを 尾
二27 3 犬モヲフツテ、ツイテイキマス。
四18 3 ゐのししは(略)。ただつねはしつかりとををにぎつて、のつてゐます。
四50 7 サカナノニホヒガシマスガ、アタマモヲモアリマセン。
五16 3 鯉ハ(略)。(略)、兩ワキニアタマカラヲマデーレッツニ、クロイテンノアルウロコガ三十六枚ツツナランデキマス。

七60 9 図 犬の種類は(略)。(略)。(略)、尾ののびたるもの、たれたるもの、まきたるもの、(略)。
七76 1 又ニハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。
八58 4 尾の短いのはかはせみ・あひるなどで、長いのはきじ・山鳥・くじやくなどである。
八58 8 くじやくは時時尾を扇形にひろげて見せる。
八75 2 図 虎モ猫モ(略)。(略)。此ノ外目・鼻・耳ノ形ヨリ、尾ノ長ク、ヒゲノ太キマデ、相似タル所甚ダ多シ。
九2 10 図 此の地に八岐の大蛇とて八つの頭と八つの尾とある大蛇あり、(略)。
九3 10 図 (略)、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劔の先少しくかけたり。
九4 1 図 あやしみて尾をさきて見給ふに、一ふりの劔出でたり。
十一50 10 (略) 三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。
おあがりくださる「御上下」(五) 1
オアガリクダサル「一イ」
二9 3 圖 オハナハオキクヲ(略)、オチャトオクワシヲダシマシタ。「ドウゾオアガリクダサイ。」
おあけなざる「御開」(五) 1 オアケナサル「一イ」

三71 6 園 シカシケツシテフタヲ
 オアケナサイマスナ。」
 おあげなさる「御上」(五) 1 お上げ
 なさる「一い」
 八68 9 園 五日でも十日でも、一人で
 ね起きの出来るまで、ゆつくり看病
 してお上げなさい。
 おあげもうす「御上申」(五) 1 オ上
 ゲマウス「一い」
 三71 8 園 ソレデハオワカレノシ
 ルシニコノハコヲオ上ゲマウ
 シマセウ。
 おあし(名) 1 おあし
 七51 8 園 「これにはちゃんと三錢の
 切手はつてあるのに、なぜまたお
 あしを拂ふのですか。」
 おあそびなさる「御遊」(五) 1 オア
 ソビナサル「一い」
 四75 7 園 母ハ來テ見テ、「(略)。
 オチヨサンヤオマツサンヲヨ
 ンデ來テ、オアソビナサイ。」ト
 イヒマシタ。
 おあつまり「御集」(名) 1 お集り
 七42 5 園 さだめて皆様は御じまんの
 馬に乗つてお集りのことでございま
 せう。
 おあるきなさる「御歩」(五) 1 オア
 ルキナサル「一い」
 一22 2 園 ソロソロ オアルキナサイ。
 おい「老」(名) 1 老
 十54 8 園 白髪頭にて若き人と先を
 争ふもはゞかりあり。悲しきは老の

白髪なり。」
 おい「負」ひておいじし
 おい「追」ひうまおい
 おい(感) 1 おい
 三46 1 園 そこへともだちがき
 て、「おい、なにをしてゐるの
 だ。」ときくと、(略)。
 おい「追」ひ出す「追出」(四) 1 追出す
 「一い」
 十一43 4 園 住吉の戦に父の討死し
 たる後、一族の者領地をうばひて、
 我を追出したたり。
 おい「追」ひ出す「追追」(副) 5 オヒオヒ
 追々
 六12 6 園 モウ秋ニナツタカラ、ガンガ
 オヒオヒトンデ來ル。
 九72 6 園 二十七日の夜中頃より追
 々増水、二十八日は終日大暴風雨に
 て、川近きあたりにはぼつ／＼立退
 きたる者もこれあり、(略)。
 十44 1 園 (略)、販路次第ニ開ケ、此
 ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、
 遂ニ今日ノ盛大ヲ見ルニ至レリ。
 十一40 7 園 教育の事業も段々進歩
 し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相
 成候事、(略)。
 十一101 2 園 (略)我が帝國の領土
 となりしより、諸種の經營追々成功
 致候へども、今後尚着手すべき事は
 多々これ有り候。
 おい「追」ひ出す「追降」(五) 1 おひおろ
 す「一い」

四15 5 大ぜいのものが下にま
 ちかまへてゐて、高いところか
 らおひおろして来るものを、
 弓でいとつたのです。
 おい「追」ひ出す「追返」(五) 1 追ひかへ
 す「一い」
 六52 6 園 (略)、その使の持つて來た文
 の中に、(略)といふぶれいなこと
 ばがありました。秀吉は大そうおこ
 つて、「(略)。」と、その使を追ひか
 へして、二度目の朝鮮せいばつをは
 じめました。
 おい「追」ひ出す「追風」(名) 1 追風
 十一30 7 園 驅逐艦ノ名ゴソ更ニ優美
 ナレ。風ノ名ヲ負ヘルモノニ神風・
 春風・朝風・疾風・松風・追風・野
 分等アリ。
 おい「生」ひ出す「生茂」(四) 1 生ひ茂る
 「一い」
 十一100 4 園 森林は(略)廣大なる
 天然林にして、榎松・蝦夷松・落葉
 松・白樺等一面に生ひ茂り、(略)。
 おい「生」ひ出す「御医者様」(名) 1 オ
 イシヤサマ
 四69 5 園 オイシヤサマノオツシ
 ヤルトホリノマナケレバナリマ
 セン。」
 おい「生」ひ出す「御忙」(形) 1 おいそ
 がしい「一い」
 八66 4 園 取分けおいそがしい中を、
 一週間もおひまをいただきますして、
 まことに有りがたう存じます。

おいたつ「生立」(四) 1 生ひ立つ
 「一い」
 十12 9 園 「熱き國 しげる林」
 生ひ立ちし 我、タガヤサン、(略)。
 おいつく「追付」(五) 1 おひつく
 「一い」
 五62 4 園 あとから馬おひおひつ
 て、ちよん／＼／＼ すいつち
 よん。
 おいつ／＼「追詰」(下) 1 追ヒツ
 メル「一い」
 五73 7 園 (略)角ガ木ノ枝ニヒツカ、
 ツテ、イクラモガイデモハツレマセ
 ン。トウ／＼犬ニ追ヒツメラレマシ
 タ。
 おいでる「御出」(五) 3 オイデ
 ナサル お出でなさる「一い」
 三53 7 園 「モウゴハンダカラ、オ
 イデナサイ。」
 五64 1 園 おはなさんもつれて一しよ
 にお出でなさい。九月十三日 あね
 より おちよさま
 五64 7 園 (略)、母は「あさつては學
 校がお休ですから、二人とも行つて
 お出でなさい。
 おい「御出」(下) 3 おいでる
 オ出デル お出でる「一い」
 四58 4 園 ソコヘオホクニヌシノミコ
 トトイフ 神サマガオ出デニ
 ナリマシタ。
 五18 8 園 「おはなや、用があるから、

ちよつとお出で。」と、母はだいいところからよびました。

六四三 図 おみやげもおみやげ話も様々あるから、たのしみにして待つて

おいで。(略) 父より 太郎どの お花どの

おいはらう「追払」(四・五) 2 追拂

フ 追拂ふ「一ッ・ヒ」

八八七 中佐ハ(略)、トウく山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。

十二六六 図 (略)、通常の灰色の鼠の一群大舉して、(略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

おいまわす「追回」(四) 1 追ひまはす「一シ」

七六二 図 二三匹の犬、よく二三百頭の牛、二三千頭の羊を追ひまはして、主人の行く方へ行かしむといふ。

おいわい「御祝」(名) 3 オイハヒ

お祝ひ

四八六 十一月三日ハ(略)。ドンナウチデモ オイハヒヲシナイトコロハアリマセン。

五八三 ソノ日ハ二月十一日ニアタリマスカラ、コノ日ヲキゲンセツト申シテ、毎年オイハヒヲイタスノデゴザイマス。

六七五 (略) むねの上からもちを投げると、(略)。これがすむと、むし

ろをしいて、お祝ひのさかもりがはじまりました。

おう「王」ひえつおう・しらぎおう・しんおう

おう「負」(四・五) 9 おふ 負フ 負ふ「一ハ・ヒ・フ」へひせおう

六五三 図 日本の國は松の國。(略)。

わけて名におふ松島の 大島・小島 その中を 通ふ白ほの美しや。

八五九 図 琵琶の形に似たりとて、其の名をおへる湖の かゞみの如き水の面、(略)。

七四五 図 熱海は(略)。前面は海に臨み、後は山を負ひ、冬暖に夏涼し。

八三〇 (略)、重い物を負はせて遠くへ運ばせたり、農家では牛を色々の労働に使役する。

一一一九 図 (略)、朝日・夕日を負ひて、鳥がくれ行く白帆の影ものどかなり。

一一三〇 図 驅逐艦ノ名こそ更ニ優美ナレ。風ノ名ヲ負ヘルモノニ神風・春風・朝風・疾風・松風・追風・野分等アリ。

一一一八 図 武勇のほまれ細戈 千足ちあしの國の名に負ひて、禮儀は早く唐人も 稱へし其の名君子國。

一二九 図 敵の司令長官(略)は昨日の戦闘に傷を負ひ、幕下と共に一驅逐艦に移りしが、(略)。

一二九七 図 (略)、世界強國の國民た

る名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

おう「追」(四・五) 9 追フ 追ふ「ウ・ハ・ヒ・フ」

一六六 (略)、今新に鯨を追ふものもあり、鰯を打つて鯨に引廻されてるものもある。

一一八二 図 魚は火の光を追ひて集り來り、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、(略)。

一一九五 図 其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

一一一〇 蜀ノ軍其ノ槍ヲ護リテ國ニ歸ラントス。魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。

一二三五 図 ソモく明治五年學制發布以來、教育ノ普及發達ハ年ヲ追ウテイヨく盛ニ、(略)。

一二六五 図 (略)、露西亞の狼は行くく雪中に倒るゝ佛兵の跡を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。

一二六七 図 (略)、亞弗利加・印度の獅子、南亞米利加の野牛等の、(略)、食物を追つて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

一二六七 図 (略)、獸類中にも食物を求め、氣候を追ひて、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。

一二七四 図 身をはかなむも過ぎしことは追ふべからず。

おう「終」(下二) 8 終フ 終ふ 終ふ「フル・ヘ」ひいおう・はりおう

七八四 図 長き航海を終へて歸り來れる明治丸の船長は、(略)。

七八九 図 「杉野ハ今點火ヲ終ヘタルゾ。」

一五八 図 (略)、水曜日其の日の課業を終へたる時より夕食前まで外出を許され候。

一四八 図 奈良見物ヲ終ヘテ法隆寺ニ向フ。

一一六八 図 (略)、功業を成し、公益を廣むるも、將又無爲にして一生を終ふるも、唯此の二十萬時間を利用するとせざるとにあり。

一二八七 図 (略) 郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、良雄以下既に死を賜へり。

一二九六 図 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母たましく機上に在り。

一二一八 図 (略)、學びの道の六年をば、卒へし今日こそうれしけれ。

おう「奥羽」(地名) 1 奥羽

一二三七 図 會津は奥羽重要な地にして、一日も守なかるべからず。

おうぎ「扇」(名) 9 扇

四七六 (略)、そのさをのさきにはひらいた赤い扇がつけてあります。

- 四七三 ざるのさきの扇をい
よといふのでせう。
- 四七六 扇は風にふかれて、ぐる
ぐるまはつてゐます。
- 四七八 扇 「あの扇をいおとすも
はないか。
- 四八八 (略)、こんどは扇が少し
おちついて見えます。
- 四八四 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、(略)。
- 七四七 (略)、日本紙ハ「略」皆僕
ヲノ仲間デハツテアルデハナイカ。
コ、ニアル扇モウチハモヤハリサウ
ダ。」トイヒマス。
- 八九五 名古屋は(略)。(略)、商工
業の發達著しく、焼物・塗物・扇・
綿絲・織物等の産出すこぶる盛な
り。
- 九六五 扇を使へば風起り、むちを
ふるへば音を發す。
- おうぎがた「扇形」(名) 1 扇形
- 八五八 くじやくは時時尾を扇形にひ
ろげて見せる。
- おうぎぐるま「扇車」(名) 1 扇車
- 六七四 むねの上には紙のぬさを立て
て、色どつた大きな弓矢や扇車がか
ざつてあります。
- おうじ「王事」(名) 1 王事
- 十二二六 (略)、一には、軍人は禮儀を正
しくすべし。(略)。下は上を敬し、
上は下をあはれみ、一致協同して王
事に勤むべし。
- おうじ「往時」(名) 1 往時
- 十九四 (略)、昔ハ境内方四町、堂
塔難舎ノ數百七十五アリ、規模極メ
テ大ナリシガ、今ハ往時ノ三ノ一二
モ足ラズ。
- おうじ「皇子」(名) 9 皇子ひなかの
おおえのおうじ
- 八五〇 (略) 此ノ頃中大兄皇子ト申スカ
シコキ皇子アリキ。
- 八五五 鎌足(略)、大事ヲ成スニ
ハ此ノ皇子ヲイタゞキ奉ルヨリ他ニ
道ナシト思ヒシガ、(略)。
- 八五八 アル日皇子、寺ノニハニテ
ケマリノ會ヲナシ給ヒ、鎌足モ參リ
合セタリ。
- 八六一 御遊ナカバニシテ、マリヲ
ケ給フハズミニ、皇子ノクツヌゲタ
リ。
- 八六一 鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツ
キテ皇子ニサ、ゲシニ、(略)。
- 八六一 (略)、皇子モマタヒザマツ
キテ、之ヲ受ケ給ヘリ。
- 八五八 コレヨリ鎌足、皇子ト親シ
ミ奉ルコトヲ得テ、(略)。
- 八五三 皇子コラヘカネテ、ヲドリ
出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。
- 十〇五 (略)、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ
皇子ニ近ツキ奉リシハ、即チ此ノ寺
ナリ。
- おうしつ「王室」(名) 1 王室
- 十二九四 當時支那は王室衰へ、諸
侯各其の國によりて互に勢を爭ひた
り。
- おうじ「王者」(名) 1 王者
- 十二四 汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、
遂ニ王者ノ師タラン。
- おうじ「桜樹」(名) 3 櫻樹
- 十一四二 陵に至る路のあたり櫻樹
多し。
- 十一四四 此の附近にも亦櫻樹多
し。
- 十一四六 吉野山は口・中・奥の千
本の外、到る處櫻樹あらざるなし。
- おうしゅう「歐洲」(地名) 1 歐洲
- 十二七四 (略)、印度地方の寶石・
香料・絹布類は盛にベニス・ゼノア
等の港を経て、歐洲へ輸入せり。
- おうしゅうじんいっぽん「歐洲人一般」
(名) 1 歐洲人一般
- 十二七四 然るに印度との交通は長
日月を要し、中途の危険亦少からざ
れば、便利なる航路を開かんことは
歐洲人一般の希望なりき。
- おうじよういん「往生院」(名) 1 往生
院
- 十一四五 熊王今はせん方なく、其
の刀にてもとどりを切放ち、さて往
生院に入りて僧となり、(略)。
- おうじ「上」(上) 1 應じる
- 九三二 此の度は大丈夫と考へて、
「何月何日初航海をするから、何人
にも乗船の望に應じる。」といふこ
とを新聞紙に廣告したが、(略)。
- おうじんてんのう「応神天皇」(人名)
1 應神天皇
- 十一四一 吉野には古く離宮あり、
應神天皇の頃より奈良朝の頃には度
々行幸ありしが、(略)。
- おうず「応」(サ変) 3 應ズ 應ず
「ジーズ・ゼ」
- 十一四九 孔明ハ沈着ニシテ、機ニ
臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。
- 十二六四 敵の先頭部隊は直ちに砲
火を開始せしが、我は之に應ぜず、
距離六千メートルに近づきて始めて
應戦し、はげしく敵を砲撃せしかば、
(略)。
- 十二三二 新田義貞、尊良親王を奉
じて越前國金崎の城に在りし時、
瓜生保其の弟義繼等と共に杣山に旗
あげして義貞に應ず。
- おうせき「往昔」(名) 2 往昔
- 十三七 道後は(略)。(略)、古代
より世に著れ、往昔天皇の行幸し給
ひしことも數回に及べり。
- 十二〇二 其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余
ノ地ニシテ、神功皇后以後、シバ
く皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。
- おうせつ「応接」(サ変) 1 應接す
「ス」
- 十二七五 (略)、又人より訪問を受
くる時は直ちに出席して應接すべし。
- おうせんす「応戦」(サ変) 1 應戦す
「シ」
- 十二六五 敵の先頭部隊は直ちに砲

火を開始せしが、我は之に應ぜず、距離六千メートルに近づきて始めて應戦し、はげしく敵を砲撃せしかば、(略)。

おうつくしい【御美】(形) 1 お美しい【一イ】

七二九〇 〔あなたはその美しい花だけでたくさんでございます。〕

おうぶん【応分】(名) 1 應分

十二九二九 身分相當の交際は家を保持上にも必要なり。(略)、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、(略)。

おうみ【近江】(地名) 2 近江

九六五 尊これより引返して近江の賊を討ち給ひしが、(略)。

十二二 日本一の湖水は近江の琵琶湖にして、周囲六十里。

おうみいっこく【近江一國】(名) 1

近江一國

十二四 近江一國の川流はほとんど全く此の湖水に入り、(略)。

おうみはつけい【近江八景】(課名) 2

近江八景

八目五 第十七 近江八景

八五二 第十七 近江八景

おうようす【応用】(サ変) 3 應用す

【一セ】

十二二九五 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。空中の交通開始せられ、又其の軍事上に應用せらるゝも決して座上の空談にあらずらんとす。

十二四六 栽培法の如きも、舊法になつまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

十二六二 〔略〕、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。

おうようする【応用】(サ変) 1 應用する【一シ】

九三一 蒸氣機關は(略)。(略)、又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、イギリスのステュブンソンといふ人である。

おうらい【往來】(名) 6 往來

九三八 箱根山ハ(略)。東海道ノ通路ニアタレルヲ以テ、昔ハ人馬ノ往來甚ダ盛ナリキ。

九三九 然ルニ明治維新ノ後ハ大名ノ往來全ク絶エ、鐵道開通後ハ旅客ハ皆汽車ノ便ニヨルヲ以テ、今ハ此ノ山坂ヲ越ユルモノ少シ。

九四〇 旅人ノ往來盛ナリシ箱根驛モ、(略)。

十一九七 其の南部は車馬の往來自在にして、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、(略)、輕便鐵道も出來居候。

十二六四 市の中央最も繁華なる處は道幅狭く、車馬街上に滿ちて往來頗る困難なり。

十二六三 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、市中到る處其の往來織るが如く、殊に公園・廣

小路の如きは、十數臺列をなして前後相接す。

おうらいす【往來】(サ変) 2 往來す【一スル一セ】

九四九 〔略〕、駱駝に乗りて隊商の仲間に加り、大沙漠を往來するを業とせり。

十二六三 然れども地下には各種の鐵道縱横に貫通し、チームス河床の下をも往來せり。

おうらやましい【御義】(形) 1 おうらやましい【一イ】

七二七 此のよい時節に東京へお上りはおうらやましい事でございませう。

おうりよっこう【鴨緑江】(地名) 2

鴨緑江 鴨緑江

十二五七 安奉線は奉天より鴨緑江の江口に近き安東縣に達して、韓國の縱貫鐵道に連結す。

おうりよっこうふきん【鴨緑江付近】(名) 1 鴨緑江付近

十二五八 安東縣は鴨緑江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、(略)。

おえらい【御偉】(形) 1 オエライ

四六一 アナタハノチニハ、キツト兄サマガタヨリモ、オエラクオナリニナリマス。」

おおあめ【大雨】(名) 1 大雨

九七〇 連日の大雨に候へば、大川に近き御地は如何と案じ居り候ところ、(略)、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

おおあらし【大嵐】(名) 1 大あらし

九六八 恐ろしいのは二十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、稻の花は散る、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

おおい【大】(形状) 7 大い 大い

十〇五 總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り來るものなるを以て、森林は漁業の爲にも大なる利益をあたふ。

十四四 眠亀ガ(略)、機械ヲ發明シ、國産ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。

十六二 製煉場ニハ殊ニ大イナル爐アリテ、銅鑛ヨリ銅ヲフキ分クルナリ。

十一一五 高德(略)、行在所の御庭にしのび入り、大いなる櫻の木の幹をけつりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

十一六四 同ジ材料デモ、(略)、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニモ大イナル得失ガアル。

十二九〇 病氣のみに限らず、何事にも少しの不注意は大いなる禍を招く。

十二113 9 図 (略)、小さき信義を立て
んが爲に大なる順逆を誤り、又は
公道の理非に踏迷ふが如きこと有る
べからずと諭し給ふ。

おおい「多」(形) 32 おほい 多イ

多い「イイークーケレ」

四44 7 図 「人の死んだ時などの

おめでたくない時には、なまぐ

さものをもちひないことがお

ほいのです。

四53 1 図 「オマヘノナカマトオ

レノナカマト、ドツチガ多イ

カ、クラベテ見ヨウ。」

四54 1 図 「ナルホド、オマヘノナ

カマハズキブン多イ。

五50 8 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソ

ノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

六1 4 海岸には切立てたやうな岩山

もあるが、平たい砂原になつてゐる

所が多い。

六2 3 日本には山が多い。

六3 4 日本には川が多い。

六4 5 日本には川が多い。一年中

にからりと流れた日が多い。

六14 4 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、

空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晚ニ多イ。

六39 8 図 三十三間堂のほとけのかず

の多いにはおどろいた。

七26 8 家デモ國デモ手ヲヨクハタラ

カセル人ガ多ケレバ多イ程盛ニナリ

マス。

カセル人ガ多ケレバ多イ程盛ニナリ

マス。

七27 1 フトコロ手バカリシテキル人

ガ多ケレバ多イ程オトロヘマス。

七27 1 フトコロ手バカリシテキル人

ガ多ケレバ多イ程オトロヘマス。

七87 8 図 日本は海國でありながら、

海を恐れる人の多いのは残念な事だ

す。

八14 2 町ハ段々人通りガ多クナツ

テ、車モ通り、馬モ通ル。

八44 2 毎日の食物のたきから種々

の工業まで、火の力を要することは

數へきれない程多い。

九38 4 其の上道もよくなり、橋も多

くかけられた。

十5 7 葉ノ形ニハ卵形ト橢圓形ガ最

モ多イガ、錢ノ様ニ圓イノモアリ、

針ノ様ニ細長イノモアル。

十22 4 それ故近年は木版が段々すた

れて、活版を用ひることが多くなつ

た。

十83 5 犬と猫は最も多く家に飼はれ

る獸である。

十86 6 豚肉はあぶらに富んでゐて、

養分の多いことは牛肉におとらぬ。

十86 7 内地では昔から餘り多くは飼

はなかつたが、琉球ではたくさん飼

つて居つた。

十86 9 隣國の支那人は最も多く豚肉

を食ふ國民である。

く農家に飼はれるのは雞で、(略)。

十87 10 (略)、雞卵や雞肉の養分の多

いことは知らぬ人はない。

十10 1 (略)、全體ノ人ガ同じ仕事

ヲスルヨリモ、分業デスル方ガ品物

ノ出來バエガ良クテ、製造高モハル

カニ多イ。

十10 9 隨ツテ良イ品物ガ出來テ、

製造高モ多クナル。

十11 3 分業法ニ依ラズ、一人デ種

々ノ仕事ヲスルコトニナルト、(略)、

ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。

十14 9 アラビヤに良馬の多く産す

るのは、風土が馬の飼養に適してゐ

るばかりではない。

十16 6 寒イ時ハ(略)、獸肉其ノ

他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアル

ガ、(略)。

十二81 9 見る物の多い今日の祭日

に、時代後れの下手な音曲に耳を傾

ける者は一人もない。

おおいがわ「大井川」(地名) 2 大井

川

九36 2 (略)、富士川・大井川・天龍

川なども、其の頃は橋が無かつたか

ら、人の肩車に乗つたり渡船に乗つ

たりして渡つたのであつた。

九36 7 図 「箱根八里は馬でも越すが、

越すに越されぬ大井川。」といふ歌な

どもあつた。

おおいさ「大」(名) 1 大イサ

テ鬼怒川・小貝川ヲ合せ、益々其ノ

大イサヲ増ス。

おおいしよしお「大石良雄」(人名) 1

大石良雄

十二86 4 図 四十七士の統領たる大石

良雄は初め京都に在り。日々遊樂を

事として全く復仇の事を忘れたるが

如し。

おおい「大分」(地名) 1 大分

十42 4 図 花筵ヲ最も多ク産スルハ岡

山・廣島・福岡・大分等ノ諸縣ニシ

テ、(略)。

おおいちよう「大銀杏」(名) 1 大銀

杏

十二24 10 図 上るや石のきざめし

の、左に高き大銀杏、間はばや、遠

き世々の跡。

おおいに「大」(副) 18 大イニ 大い

に

六81 2 図 今ハ工業モ大イニヒラケ

テ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。

七4 8 図 正行大イニカンジテ、コレ

ヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一

日モワスル・コトナカリキ。

九33 1 之を聞いて、是までフルト

ンを笑つた人々も大いに感心して、

皆其の成功を喜んだといふことであ

る。

十23 6 図 (略)、老人ステニ來リテ、

良ヲ待テリ。大イニ怒リテ、「長者

ト約シテ後ル・ハ禮ニ非ズ。(略)。」

十247 受ケテ見レバ、世ニモ得難キ兵書ナリ。良大イニ喜ビテ、朝夕之ヲ讀ミ、遂ニ兵法ヲ會得シタリ。
 十322 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノヲト心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。
 十617 新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、大イニ人力ヲ省クコトヲ得テ、産出高モ著シク増加シ、(略)。
 十928 此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。
 十一977 又豊原より眞岡に至る間も近時道路新に開け、交通大いに便利に相成候。
 十二226 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、他にも種々の原因もあるが、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。
 十二281 鳥居勝商といふ者あり、進み出でて其の使たらんことを請ひ、約していふやう、(略)。三日を過ぎなば、又山上に來りて援軍の消息を示さん。」と。信昌大いに喜ぶ。
 十二383 何ぞ私事を以て公事を害せんや。」と答ふ。秀忠大いに感じて其の言に隨ひ、嘉明を擧げて會津に封ぜり。
 十二384 嘉明後此の事を聞きて大

いに恥ぢ、高虎と水魚の交をなすに至れりとぞ。
 十二462 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、尚甚だ狭小なりといふべく、大いに荒地を開き、美田を増すの必要あり。
 十二535 (略)、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。
 十二868 喜劍大いに罵つて曰く、「(略)、人面獸心とは汝の事なるべし。獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。
 十二9310 孔子事へて吏となりしに、治績大いに擧り、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。
 十二1054 (略)、地方人民たる者は大いに力を是等の事業に盡すべきなり。
 おおう「覆」(四)7 オホフ おほふ
 六812 今ハ工業モ大イニヒラケテ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。
 九462 四日目の正午頃、大風吹起りて、砂煙は天をおほへり。
 十758 骨ハ筋肉ニ包マレ、皮膚更ニ其ノ上ヲオホフ。
 十779 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテオホハレタルハ肺臟及ビ心臓ヲ保護

センガ爲ナリ。
 十二762 中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水烟深谷をおほひ、其の瀧つばの深さは幾十尺なるを知らず。
 十二610 (略)、敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。
 十二483 又森林は全國の山野にばはぬ處なく、殊に名高き木曾・吉野(略)。
 おおえひなかなのおおえのおうじ
 おおえやま「大江山」(地名) 1 大江山
 九924 みすのうちより 官人の袖引止めて、大江山 いく野の道の遠ければ、ふみ見ずといひし言の葉は、(略)。
 おおおにばす「大鬼蓮」(名) 1 大鬼蓮
 十五8 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、葉ノ質モ丈夫デアルカラ、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出來ルサウデアル。
 おおかじ「大火事」(名) 3 大火事
 八449 一服のすひがらがこんな大火事になつた。
 八457 「こちらでは近年にない大火事だから、誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。
 十二8910 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにとまあらず。

おおかぜ「大風」(名) 2 大風
 九462 四日目の正午頃、大風吹起りて、砂煙は天をおほへり。
 九469 然るに此の大風の爲に、今までの駱駝の足跡消えたれば、(略)。
 おおかた「大方」(名) 1 大方
 十278 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果てて、(略)。
 おおがち「天勝」(名) 1 大勝
 九861 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかけさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。
 おおかみ「狼」(名) 1 狼
 十二658 (略)、露西亞の狼は行くく雪中に倒るゝ佛兵の後を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。
 おおかみ「天神」(名) 1 天神
 八72 とこしへに民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大
 おおかわ「大川」(人名) 1 大川
 二247 大川
 おおかわ「大川」(名) 2 大川
 九146 利根川ハ日本東部ノ大川ニシテ、全長凡ソ七十三里、古ヨリ坂東太郎ノ名アリ。
 九70 連日の大雨に候へば、大川に近き御地は如何と案じ居り候ところ、(略)。
 おおき「大木」(人名) 1 大木
 二247 大木
 おおき「大」(形) 23 大キイ 大

い「イー・ーク」

二62 〇 「オハナサンハ一バン

小サイカラ、一バン大キイノヲ
アゲマセウ。

二64 〇 ヲバサンハ一バン大キ

イカラ、一バン小サイノヲト
リマス。

二40 〇 「モウコンナニ大キク
ナリマシタ。」

二41 〇 「マダ小サイカラ、モウ
スコシ大キクシマセウ。」

二42 〇 ダルマサンノ目ハ大
キイカラ、大キナ目ヲツケマセ
ウ。」

二55 〇 ソノマツノ木ハズンズ
ン大キクナツテ、(略)。

三61 〇 (略)めづらしい貝ばかり
です。こんなに大きいのも、こ
んなに小さいのもあります。

四22 〇 大キイネエサンハセイ
ガ高イカラ、高ユビデス。

五16 〇 目ハ大キクテ、ロノ右左ニハ
太ヒヒゲガアリマス。

五18 〇 鯉ノヤウニゲンキガヨク、大
キクナツテカラハ、(略)、ズンズン
シユツセヲセヨトイフ心デ祝フノデ
セウ。

七17 〇 西洋西瓜には(略)、なる
べく大きくてうまい實のなるやうな
のをお願い申します。

七30 〇 小さい時分はやはらかな葉を
こまかく切つてやるが、大きくなる

と、枝のまゝやる。

七60 〇 あるものは頭大きくまるく
して、しゝの如く、あるものは顔長
くとがりて、狐の如し。

七67 〇 もとからある分にくらべる
と、實も大きく、味もよほどよろし
うございます。

七74 〇 鯨ハカラダガハナハダ大キ
イ。

七74 〇 陸ニスムモノデハ、象ガマツ
一番大キイガ、(略)。

七88 〇 皆さんの中にも、大きな
つてから外國へ商賣その他の用事で
出かける人もありませう。

八55 〇 (略)、他の鳥をとらへて食ふ
鳥や、(略)、氣候によつてすむ所を
かへる鳥は總べてつばさが大きい。

八56 〇 駝鳥は鳥類の中で一番大きく
て、卵も子供の頭程ある。

八58 〇 (略)、からだの割合に目の最
も大きいのはふくろふ・みみづく
などである。

十二15 〇 我が國ノ造船所デ、最モ規
模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、(略)。
十二15 〇 又私設デハ三菱・川崎等ノ
造船所ガ最モ大キイ。

十二16 〇 我が國デ一番大キイノハ佐
世保海軍工廠ノ船渠デ、(略)。

おおきさ「大」(名) 7 大キサ 大き
さ

七29 〇 卵からかへつたばかりの蠶は
あり程の大きさで、長さは一分ばか

りしかない。

七29 〇 けれども一月ばかりの内に
は、皆さんの小指程の大きさになり、
(略)。

九71 〇 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツ
テ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。

十47 〇 全國無數の佛像中奈良の大
佛の大きさの日本一なることは諸子
すでに之を知れり。

十96 〇 東大寺ハ(略)、タマニ大
佛ノ大キサノ驚クベキノミナラズ、
(略)。

十二27 〇 フルトンの始めて造りし
汽船は、今の小さき川蒸氣程の大き
さなりしならん。

十二40 〇 其の噴火口の大きさは日
本第一たるのみならず、亦實に世界
第一と稱せらる。

おおきな「大」(連体) 52 大キナ 大
きな

二13 〇 「アチラノ大キナ川ハ
ナガレコムノデス。」

二16 〇 (略)木ノハガトンデキ
マス。大キナノモアリ、小サナ
ノモアリ、(略)。

二21 〇 ワタクシヲヒノナカヘ
イレルト、大キナコエヲタテ
テ、トビダシマス。

二42 〇 ダルマサンノ目ハ大
キイカラ、大キナ目ヲツケマセ
ウ。」

二46 〇 (略)、アノオヤネニハウ

メバチノ大キナモンガツイテ
キマス。

二55 〇 ソノマツノ木ハ(略)、
天マデトドクカトオモフヤウ
ナ、大キナ太イ木ニナリマシ
タ。

三10 〇 大きなうまがはしつてき
ました。「ひらがなのドリル」

三47 〇 かへるはをかにあると
きには、大きな目をして、手
をついてすわつてゐます。

三66 〇 (略)、ウラシマガウミベ
デツリヲシテキルト、大キナ
カメガ出デキデ、(略)。

四24 〇 そのすぢむかひに大きな
ごふくやがあります。

四28 〇 このへんは町中で一ぱ
んにぎやかなところで、大きな
店がたくさんあります。

四16 〇 牛ほどもある大きな
のしして、(略)。

四38 〇 「コノアヒダ大キナフカ
ガ來タ時ニ、君ラハズキ
ンアワテマシタネ。

四39 〇 ソノウチニ海ノ水ヲ
カキマハスヤウナ大キナオト
ガシマシタ。

四52 〇 島ノ上ニ居タ白ウサギ
ガ、ムカフノ大キナヲカヘ行
ツテ見タイト思ツテ、(略)。

四65 〇 あんな小さなからだで、
あんな大きなこゑの出るのが

ふしぎです。

五14 日本一ノ大キナホトケサマハ、ナラノオ寺ニアリマス。

五15 大キナコヒガタクサンアツマツテオヨイデキルノハ、マコトニミゴトナモノデス。

五20 おはなは戸だなの中から一ぱん大きなさらを持つて来ました。

五34 蝶ニハ大キナノモ、小サナノモアリ、(略)。

五67 大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テテアル。

五67 大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テテアル。

五68 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石ダンノ道ヲ上ツテ、モウ一ツ小サナ鳥居ヲクマルト、(略)。

五68 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツテキル。

五73 タクマシイ大キナカリ犬ガ四五匹デオツカケテ来マス。

六15 一面に小松のはえた小松原もあり、又大きな松がならんだ長い松原もある。

六20 昔ある國で大きな象の目方をはからうとしたが、(略)。

六22 ある家にはに大きな水がめがあつて、雨水が一ぱいたまつてゐました。

六23 その時一人の子どもは大きな石を持つて来て、力まかせに投げつけました。

六24 (略)、かめに大きな穴があいて、水が流れ出ましたから、(略)。

六27 〇ノ他釘や針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍カンノヤウナ大キナ物マデ、(略)。

六46 熊ガ人ニムカツテ来ル時ニハ、後足デ立上ツテ、大キナ手ノヒラデツカミカ、ツテ、(略)。

六74 むねの上には紙のぬさを立てて、色どつた大きな弓矢や扇車がかざつてあります。

六75 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガアル。

六79 大キナキカイデ、ドンナ重イ荷物デモラク／＼ト上ゲオロシヲシテキル。

七21 私はこの大きななりをしてゐますが、島の藤豆さんとはちがつて、私の豆はたべられません。

七22 あなたほどの大きな花ぶさは見たことがございません。

七31 大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。

七66 一昨年つぎ木をしたわか木に、もうこんなに大きなのがなつたのでございます。

七68 母はこんな美しい大きな桃は、はじめて見たと申して、(略)。
七81 明治丸といふのは、長さが六十間程もある大きな汽船で、乗組

の人員は二百人もあります。

八44 大きなきかいの動くのも、汽車や汽船の走るのも、皆火の力の利用によるのである。

八58 くじやくは(略)。大きなものになると、若し家の中でひろげさせたら、座敷一ぱいになつて、天井へつかへる程である。

九83 (略)、五人の騎手は打連れて、拜殿の後の大きな立石の前に並んで、(略)。

十5 植物ノ葉ニハウキクサノ葉ノ様ニ小サナノモアリ、蓮・芭蕉ノ様ニ廣クテ大キナノモアル。

十20 印刷する紙は廣い大きな紙で、幾ページ分も一度に刷れる。

十29 物置の後は、大きなだいの木があつて、(略)。

十29 (略)、黄色い大きな實が枝もたわむ程なつてゐる。

十67 鯨は獸類中最も大きなもので、長さは十五間、即ち九十尺にも及ぶものも珍しくはない。

十一11 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、(略)。

十二12 (略)、大キナ戦艦ナドニナルト、設計圖バカリデ數百枚モアルトイフ。
十二14 (略)、大キナ船デハ船底モ兩側モ二重張ニスル。
おおきみ「大君」(名) 3 大君
十39 乃木大將はおこそか、

御めぐみ深き大君の 大みことのり傳ふれば、かれかしこみて謝しまつる。

十一116 北は樺太・千島より、南臺灣・澎湖島、朝鮮八道おしなべて、我が大君の食す國と、朝日の御旗ひるがへも、同胞すべて六千萬。

十二116 海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ。

おおく「多」(名) 17 多ク 多ク
六81 又多クノホリアリテ、川ト川トヲツナゲリ。

七23 保己一ハ(略)、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲアラハセリ。

七25 (略)多クノデシ保己ニニツキテ學ビシカバ、(略)。

七58 公園ヲ出ツレバ、海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。

七76 廣イ海ニハ、コノ通りニ多クノ動物ヤ植物ガアル。

九83 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレム變ツテキル。

九24 騎兵は進退敏活にして、多くは友軍の前方に出て敵狀をさぐる。
九56 是等ハ多クハ他ノ動物ノ恐ル・武器又ハ他ノ動物ノイトフ惡味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、(略)。
九66 若し空氣ならんには、人

も鳥獸も草木も多くの生物は其の生を保つこと能はざるべし。

九82 8 やがて五人の騎手は多くの人々に付きそはれ、静々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて來た。

十8 4 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イデキル。

十82 1 図 (略)、垣の上には多くの頭骨、風雨にさらされて残れり。

十一89 4 図 蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、多くは地下に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

十一93 7 図 かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、(略)。

十一108 6 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十二42 3 図 阿蘇山は此の如く複雑なる一大火山にして、山中に多くの噴火口及び温泉あり。

十二60 10 図 (略)、人家も多くは六七層にして、町幅も亦之に適へり。

おおく「多」(副) 2 多ク 多く

六34 4 図 ワレヲノ着物ハ多クコノ木綿織物ニテツクル。

十二47 1 図 農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉を勞するが故に、身體常に健全なり。

おおくじら「大鯨」(名) 2 大鯨

十66 4 六七十尺の大鯨も今は全く息絶えて、水面に横たはる。

十67 8 昔は大鯨一頭を捕へると、人口數百人の一村、一箇月の生活費を支へ得ると言つたものである。

おおくち「大口」(名) 1 大口

七14 2 図 卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、(略)。

おおくにぬしのみこと「大國主神」(人名) 3 オホクニヌシノミコト

四58 3 白ウサギハ (略)、ナホナホクルシンデキマシタ。ソコヘオホクニヌシノミコトトイフ 神サ

マガオ出デニナリマシタ。

四60 8 ヨロコンデオホクニヌシノミコトノ所ヘオレイニ行ツテ、(略)。

四61 7 ソノノチオホクニヌシノミコトハ白ウサギノイッタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

おおくりくださる「御送下」(五) 1

おおくり下さる「一イ」

七68 3 図 見事な桃をたくさんおおくり下さりまして、有りがたう存じます。

おおくえ「大声」(名) 1 大聲

十一45 3 図 (略)、少しも疑ふ心なき正儀の様を見ては、刀のつかに手をかきべきやうもなし。思はず大聲をあげて泣號びぬ。

おおさか「大阪」(課名) 2 大阪

六目12 第二十四 大阪

六80 3 第二十四 大阪

おおさか「大阪」(地名) 7 大阪

六80 4 図 大阪ハ昔ハ難波トイヒテ、仁徳天皇ノ都シタマヒシトコロナリ。秀吉コ、二城ヲキヅキシヨリ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナレリ。

九25 図 大阪

九27 3 図 師團司令部のある所は東京・大阪・名古屋・廣島・熊本等軍事上重要な地なり。

十二6 図 (略)、湖水より出づる瀬田川は下流宇治川となり、淀川となりて、大阪に至りて海に注ぐ。

十73 9 図 道後に次ぎて早く世に知られたるは有馬の温泉にして、京都・大阪に近ければ、浴客多く集り、すこぶる繁榮せり。

十93 10 図 (略)、大阪ヨリ奈良ニ至ルニハ關西線ニヨルベシ。

十一18 図 大阪

おおし「多」(形) 95 多シ 多し「一カラ・一カリ・一カル・一キ・一ク・一ケ・一シ」

六54 8 図 砂糖ハ種々ノモノヨリトレドモ、砂糖キビヨリツクルモノ多シ。

六67 4 図 材木ニハ松・杉・ヒノキ・栗・ケヤキナダアリ。モツトモ多ク用フルモノハ松ト杉トニシテ、(略)。

六68 1 図 杉ハデンシン柱ニ用ヒ、又ハコ・ヲケ・タルナドラ作ルニ用フルコト多シ。

六81 6 図 堀ト橋トノ多キヲモツテ名高シ。

七45 8 図 (略)、家の氏の名多ければ、紋の數々かぎりなし。

七54 9 図 上野公園ニハ (略)。(略)コ、ニハ櫻ノ木多シ。

七58 1 図 コノ公園ハ新シクシテ、古木多カラザレド、種々ノ草花ウルハシク咲キミダレタリ。

七59 7 図 犬の種類はすこぶる多し。

八4 5 図 このあたり御山木細工・貝細工などを賣る店多し。

八37 3 図 (略)、ききやう・かるかや・をみなへし、秋の花草多けれど、中にも君の千代八千代 祝ふや菊の花の宴。

八49 9 図 (略)、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。

八75 3 図 此ノ外目・鼻・耳ノ形ヨリ、尾ノ長ク、ヒゲノ太キマデ、相似タル所甚ダ多シ。

八77 4 図 イギリスは (略)、商業・工業いづれも盛に、海軍強く、商船多し。

八77 6 図 首府ロンドンハ世界の都市中にて、人口最も多きところなり。

八81 2 図 地球を南北の兩半球に分てば、北半球は南半球よりも陸地多

し。

九三三 東海道の旅行中、最も多

く衆人の目をひくものは、富士山と名古屋城の金のしやちほことなるべし。

九五七 此のあたりに鹿多し。かりし給へ。」

九一八 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ、運輸ノ便スコブル多シ。

九二四 歩兵は戦争の主力にして、其の數最も多し。

九二八 境内ニハ櫻最モ多ク、春ノ盛リニハ花ノ雲タナビキテ、(略)。

九二九 木石ノ配合オモキ多シ。

九二九 内外古今ノ武器其ノ他軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九二九 益次郎ハ維新ノ際軍事ニ功勞多カリシナリ。

九三九 諸大名其ノ他旅客ノ宿泊スルモノ多ク、湖水ノホトリニハニギヤカナル市街アリキ。

九四一 旅人ノ往來盛ナリシ箱根驛モ、浴客ノ多ク集レル今ノ箱根七湯モ、(略)。

九五〇 路行く人のかぶりもの、中折・鳥打・山高や、シルクハットと類多し。

九五二 づきんにおこそ・大黒と其の名其の類亦多し。

九五八 口にうましとて多く食ふことなれ。

九五八 多く飲むことなれ。

九五九 きたなき水を飲んで、恐ろ

しき病にかゝる者多し。

九六〇 然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。

九六〇 人多き都會に住む者は、折々野外に出て、新しき空氣をすひ、(略)。

九七五 當村に引取りて保護を致し居り候者も百二十名の多きに上り候。

九六八 夏の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶもの最も多し。

九一〇 森林なければ、土砂附近の田畠に飛散りて、其の土地を荒すこと多し。

九一〇 總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り來るものなるを以て、(略)。

九一五 一條天皇の頃には才學すぐれたる宮女多かりしが、(略)。

九三一 不作ノ年餓死スル人ノ多キヲアハレミ、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

九三三 是等ノ島ニハ作物ノ出來ザル荒地多ケレバ、罪人ドモハ(略)、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

九四四 花筵ヲ最モ多ク産スルハ岡山・廣島・福岡・大分等ノ諸縣ニシテ、(略)。

九四七 模様には全く無意味なるもあれども、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。

九四七 かくの如き模様の工夫は無限に多し。

九四九 我等の衣食住には模様・色どりをほどこしたるもの多し。

九六一 此ノ銅山ハ發見ノ當初ヨリ産出高スコブル多ク、(略)。

九六一 然レドモ其ノ頃ハ(略)、産出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト多カリシナリ。

九七三 我が國は火山國にして、(略)。温泉の多きこと實に世界第一なり。

九七三 京都・大阪に近ければ、浴客多く集り、すこぶる繁榮せり。

九七四 箱根は温泉場の數も多く、廣大なる旅館も少からざれども、(略)。

九八〇 あいぬの風俗は(略)。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

九八二 あいぬの數、古は甚だ多かりしが、近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に足らず。

九八五 大小ノ燈籠左右ニ多ク、其ノ數二千ニ近シ。

九八七 帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。

九八八 其ノ他古陵墓甚だ多シ。

一一一 六田の渡を渡りて上り行く坂路の左右すでに櫻多し。

一一二 陵に至る路のあたり櫻樹多し。

一一四 此の附近にも亦櫻樹多し。

一一七 一群の數は次第に増加す。其の數餘りに多くなる時は、(略)。

一二〇 瀬戸内海の沿岸には高松・多度津・高濱・尾道・宇品等の港多く、(略)。

一二四 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形狀も様々なり。

一二六 都會の地には電車・自動車等も次第に多く行はれて、ひとへに速力を競ふ世とはなれり。

一三〇 水雷艇ニハ(略)鳥ノ名ヲ用ヒタリ。(略)。又第何號艇トノミイフモノモ多シ。

一三二 巡洋艦ハ軍艦中最モ任務ノ多キモノニシテ、(略)。

一三九 臺南は南部の都會にて、附近に名所・舊蹟の多き所に御座候。

一五一 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、(略)、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

一一六 我等の周圍には讀むべき書多く、學ぶべき物多く、成すべき事限りなし。

十一691 図 我等の周圍には讀むべき書多く、學ぶべき物多く、成すべき事限りなし。

十一757 図 我が國には數多の瀑布あり、古來多く詩歌に入り、畫圖に上る。

十一812 図 (略)、鵜は盛に活動し、ひたすら其の獲物の多からんことを競ふ。

十一901 図 一種の草の實を食用とするを以て、常に此の草の多く生ずる所を選びて住み、(略)。

十一9110 図 しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。

十一937 図 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、靴の價にはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。

十一985 圖 (略)、鯨と鰯との漁利は殊に多く、鮭・鱒も亦少からず候。

十一1001 圖 (略)、大麥・小麥・燕麥・裸麥・藁・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、又牧畜にも適し候。

十一11110 図 (略)、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、雞を飼はざる家なし。

十二76 図 (略)、敵の兩旗艦は遂に沈没し、其の他にも相ついで沈没せるもの多し。

十二313 図 賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圍を解きて

去れり。

十二3910 図 富士山の古歌には煙の立つことを歌へるもの多く、時時破裂せしことも亦歴史に見えたり。

十二4710 圖 我が大日本帝國の(略)。溫熱二帶にまゝがりて、天産多きうまし國。

十二529 図 米國商人ガ(略)廣告ニ費ス金額ハ、一箇年實ニ十二億圓ノ多キニ達ストイフ。

十二539 図 我が國ハ島國ニシテ、海外交通ノ便最モ多ク、(略)。

十二557 図 其の附近我が國人の在留するもの多し。

十二598 図 倫敦は人口四百八十萬、接續都會を合すれば七百三十萬の多きに達す。

十二632 図 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、市中到る處其の往來織るが如く、(略)。

十二638 図 倫敦には英國博物館・英蘭銀行・國會議事堂等世界に名を知られたる建築物多し。

十二638 図 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

十二6310 図 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。

十二648 図 ルーブル博物館は名畫・古彫刻最も多く、美術博物館として世界無比の名あり。

下に冠たるも、自ら省みてやましき所ある者は、苦多く、樂少し。
十二732 図 引込思案の人は(略)、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。
十二887 図 出入口に、はき物の置亂れたる家には、盗人のうかどふこと多しといへり。
十二888 図 出入口の混雜せる程なれば、一事が萬事、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。
十二913 図 男子は外に出でて不在勝のものなれば、幼兒は母の感化を受けること最も多し。
十二942 図 孔子事へて吏となりしに、治績大いに擧り、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。
十二1014 図 國力我に劣れる國民を見て、(略)之と交るを喜ばざるが如きは、(略)、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐること多し。
十二1176 図 我等は修身書に於て、歴史に於て、讀本に於て、既に祖先の事蹟を學び得たること多し。
おとし「英雄」(形) 1 を、し「一シ」
十一617 圖 勇み勇みて出で行く兵士。はげましつゝも見送る一家。勇氣は彼に、情は是に、勇まし、やさし、を、しの別。
おとしひみやこおとし

おとし・える「御教」(下二) 1 オラシヘル「一へ」

四577 (略)、「ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテキルガヨイ。」トオラシヘニナリマシタ。

おとし「大島」(名) 1 大島六54 圖 わけて名におふ松島の大島・小島その中を 通ふ白はの美しや。

おとし「仰」(下二) 4 おほす 仰す「一セ」

八25 圖 神代の昔皇祖天照大神、瓊々杵尊をこの國に降したまはんとせし時、(略)、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。

九244 圖 かしくも天皇陛下は自ら大元帥なるぞとおほせて、陸海軍をすべ給ふ。

十1610 圖 ある雪の朝、皇后は美しき御庭の雪景色を御覽じて、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、(略)。

十二116 圖 (略)、陛下の下し給へる勅語の中に、「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚ブ。」と仰せられたり。

おとし「果」ひにげおとし
おとし「果」ひにげおとし
オーストリア「地名」 2 奧大利 奧太利

十二816 處は奧太利の首府維也納の大公園、今日はにぎやかな祭日であ

る。

十二84 紳士は更に壤太利の國歌を
彈始めた。

おおせ「仰」(名) 3 おほせ 仰

五374 図 すがるは(略)、「天子様の
おほせだから、子を出すやうに。」

と、たくさんの子どもをももらつて、
つれて來ました。

七174 図 おほせにあまえて申し上げ
ますが、種物屋から西洋西瓜の種を
三色ばかり買つて來ていたときたう
ございます。

十924 圖 仰の如く本村にも耕地整
理の必要これあり、折々會合の節は
其の語も出で、何れ熟考の上實行せ
んと申合せ居り候事とて、(略)。

おおせい「大勢」(名) 20 大ゼイ 大
ぜい 大勢 今にあのあみをだんだ
んはまべへひきよせてくると、
女や子どもも大ぜい出て、いつ
しよになつてひきあげます。

三656 (略)、子ドモガ大ゼイデ
カメヲツカマヘテ、オモチャニ
シテキマス。

四154 大ぜいのものが下にま
ちかまへてゐて、高いところか
らおひおろして來るけものを、
弓でいとつたのです。

四53 5 ワニザメハ「(略)。」ト答
へテ、スグニナカマヲ大ゼイツ
レテ來マシタ。

五28 (略)、大ぜいの神さまがた
は手をたたいて、お笑ひになりまし
た。

五88 そこで大ぜいと一しよになつ
て、せまい谷へ下りました。

五321 大ゼイノ女ガ茶ヲツンデキマ
ス。

五385 すがるはその大ぜいの子をお
みやのそばでやしなつて居つたと申
します。

六152 今日天気もよいから、人が
大ぜい出て、稻をかつてゐます。

六476 けらいが大ぜい直しにかゝり
ましたが、中々はかどりません。

六481 秀吉は大ぜいの人を十組に分
けて、(略)。

六622 圖 室「わるい子どもが大ぜい
でわたしの手からもぎ取つて、は
ふつた音はしましたが、(略)。」

六745 男や女や年よりや子供も大ぜ
い集つてゐますが、(略)。

六748 間もなくむねの上からもちを
投げると、大ぜいがあらそつてそれ
を拾ひました。

七21 圖 室 コノ度ノ戦、敵ハ大ゼイ
ニシテ、味方ハ小ゼイナリ。

八842 明治三十七八年ノ戦役ニ、君
ノタメ國ノタメ、名譽ノ戦死ヲトゲ
タ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

十348 (略)、知名の人の手紙を持つ
て來た者も大勢あつたのに、どうい
ふ御見込で、あの青年を御用ひにな

つたのかとたづねた。

十368 圖 人が大勢込合つてゐる中
で、少しも人に先んじようとはせ
ず、靜かに自分の順番を待つてゐま
した。

十一93 一箱ノマツチヲ造ル手數モ
ナカク、複雑ナモノデ、ソレヲ大勢
ノ人が手分シテスルノデアル。

十一97 此ノ様ニ大勢ノ人が手分ヲ
シテ、別ノ仕事ヲスルコトヲ分業
トイフ。

おおせいだす「仰出」(四) 1 オホセ
出ス「一サ」

七85 圖 天皇ハ(略)、「(略)フカク
汝ヲタノミニ思フゾ。」トオホセ出
サレタリ。

おおせくださる「仰下」(下二) 1 お
ほせ下さる「一レ」

九214 圖 村の方々は(略)、「(略)。
定めて不自由なる事もあらん。何に
てもゑんりよなく言へ。」と親切に
おほせ下され候。

おおせこと「仰言」(名) 1 仰言

九92 圖 室 きさいの宮の 仰言、御
聲のもとに、古の奈良の都の八重
櫻、今日九重に にほひぬと、つか
うまつりし 言の葉の 花は千歳も
散らざらん。

おおせたまう「仰給」(四) 2 仰せ給
ふ「一ハ」

十二34 圖 陛下は忠勇なる我が臣民
を深く信頼し給ひて、國民は一つ心

に守りけり、遠つ御祖の神の教を。
と仰せ給へり。

十二114 圖 (略)の五箇條を特に軍
人の精神と論し給へる上に、此の五
箇條を行はんには一の誠心こそ大切
なれと仰せ給へり。

おお・せる「仰」(下二) 4 オホセル
おほせる「一セ」

二612 トノサマガココヲオトホ
リニナツテ、「(略)ハナヲサカ
セテミヨ。」トオホセニナリマ
シタ。

二643 ソノウチニトノサマガ
オトホリニナツテ、「モウ一ド
ハナヲサカセテミヨ。」トオホ
セニナリマシタ。

五366 昔雄略天皇がすがるといふ人
をおめしになつて、こをたくさん集
めて來いとおほせになりました。

五384 天皇はこれをごらんになつ
て、(略)、「その子は皆お前にやる
から、やしなつてやるがよい。」と
おほせになつて、(略)。

おおぞら「大空」(名) 3 大空

八547 わし・たか・とびなどの様
に、大空を飛びまはつて、他の鳥を
とらへて食う鳥や、(略)。

九413 圖 若シ鳥ノ如ク高く大空ヨリ
箱根山ヲ見下サバ、全體ノ形ノスリ
バチヲ倒ニシタルニヒトシキヲ見ル
ベシ。

九484 圖 晴れたる大空には無数の星

かゞやけり。

おわたがわ「大田川」〔地名〕 1 大田川

十一19 大田川

おおだち「大太刀」(名) 1 大太刀

八35 大「略」、元は少しは人に知ら

れた刀からで、若い時から何十本と

なく大太刀・小太刀をきたへた。

おおちから「大力」(名) 1 大

男勝りの大いにてボートをあやつり

しダリーングの手は「略」。

おおどおり「大通」(名) 1 大通

十二61 大「略」 シャンゼリゼーの大通

の如きは、世界最美の街路と稱せら

る。

おおとまり「大泊」〔地名〕 3 大泊

大泊

十一96 大泊 大泊は樺太島の入口と

も申すべく、全島第一の良港に候。

十一97 大泊 (略)、こゝに樺太廳の

所在地豊原あり、鈴谷川平野の中央

に位し、大泊より十里、輕便鐵道も

出來居候。

十一98 大泊

おとり「鴻」(名) 1 鴻

十一31 水雷艇二ハ千鳥・真鶴・

雲雀・鵜・雁・鴻・雉・鷗・鶺鴒・

鷺等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

おとり「大鳥居」(名) 3 大鳥居

九29 大 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、昔

ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ

造リタルモノニシテ、日本第一ノ金

ノ大鳥居ナリ。

九29 大鳥居ノ前ノ大廣場ニハ大

村益次郎ノ銅像アリ。

九94 石の大鳥居高さ三丈餘、表

門を入れば五重塔あり。

おおなみ「大波」(名) 3 大波

十68 船體二つにくだけて、一半

ははや大波にさらはれたり。

十69 父は此の大波に何とて行か

るべきと思ひしが、娘のやさしき心

にはげまされて、ボートを用意す。

十70 山なす大波を物ともせず、

男勝りの大いにてボートをあやつり

しダリーングの手は、(略)。

おのうら「大浦」〔地名〕 1 大の浦

十二48 三池・夕張・大の浦、

掘れど炭礦限りなく、(略)。

おおばこ「大葉子」(名) 2 オホバコ

大葉子

九90 又麥ノホノ様ナ形ニナツテ咲

クモノニハ大葉子ノ花ナドガアリ、

(略)。

九9 大 オホバコ

おおひろば「大広場」(名) 1 大廣場

九29 大鳥居ノ前ノ大廣場ニハ大

村益次郎ノ銅像アリ。

おおぶね「大船」(名) 1 大船

十一24 大い、大船を乗出して、

我は拾はん、海の富。

おおみいつ「大御稜威」(名) 1 大み

いつ

十一116 神代はるけき昔より

君臣分は定まりて、萬世一系動きな

き 我が皇室の大みいつ。

おおみかみ「大御神」(名) 5 大神

あまてらすおおみかみ

五14 天照大神の御弟に、(略)。あ

る時生馬のかはをはいで、大神がは

たをらせていらつしやる所へおな

げ入れになりました。

五16 大神はおどろいて、あまの岩

戸の戸をたてて、その中へおかくれ

になりました。

五23 よい神さまがたは、どうかし

て大神にまた出でいただきたいと、

色色ござうだんの上、(略)。

五34 あまりおもしろさうなので、

大神は少しばかり戸をあけて、おの

ぞきになりました。

五41 手力男のみことといふ力のつ

よい神さまが、これをこらんになる

と、すぐに大神のお手をとつて、お

出し申し上げました。

おおみこころ「大御心」(名) 1 大御心

十二18 陛下が(略)、常に國家を

思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の

拜察せらるゝは、かしこしともかし

こき極みなり。

おおみこと「大御言」(名) 1 大御言

十二115 此の五箇條を行ふも、結

局一の誠心を本とす諭し給へる、

返すくも服膺すべき大御言ならず

や。

おおみことのり「大詔」(名) 2 大み

ことのり

十39 乃木大將はおこそか、

御めぐみ深き大君の 大みことのり

傳ふれば、かれかしこみて謝しまつ

る。

十一118 修身の徳是なりと、教

育勅語のり給ひ、戦後經營かくこそ

と、戊申の詔書かしこしや。大みこ

とのりたふとびて、同胞すべて六千

萬。

おおみず「大水」(名) 2 大水

九36 大水などの時には、水のひく

までは幾日でも泊つて待つてゐなけ

ればならなかつた。

十97 故に若しみだりに森林をき

り荒す時は、数時間の暴雨にもたち

まち大水出で、(略)。

おおみや「大宮」〔地名〕 1 大宮

九17 大宮

おおみよ「大御代」(名) 2 大御代

十二109 天皇陛下を大元帥と仰ぎ

奉り、國民皆兵なる今の御代、國

民たる者は皆軍人たる心得なかるべ

からず。

十二110 (略)、明治の大御代に及

びて、復古の政と共に陸海軍の今の

制度を定め給へる由來を詳に御諭し

あり、(略)。

おおみわじんじや「大神神社」(名) 1

大神神社

十98 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠

緑シタ、ルガ如シ。コ、ニ官幣大社
大神神社アリ。

おおむかし「大昔」(名) 2 大昔

五56 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
出シマシタガ、(略)。

五58 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土
ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物
デ、(略)、石炭トイヒマス。

おおむぎ「大麦」(名) 3 大麦

四32 図 大麦

四33 図 「いいえ、うどんやさう
めんにする麦は小麦で、こは
んにたく麦は大麦です。」

十一99 図 農産物の種類は北海道
と大差なく、大麦・小麦・燕麥・裸
麥・藁藁・麻・馬鈴薯・豌豆等の收
穫多く、(略)。

おおむね「大旨」(副) 5 オホムネ

おほむね 大むね

八83 図 ヨーロッパ人は大むね皮膚
白く、髪赤く、眼の色青し。

十四4 図 我が國の建物はおほむね木
造なれば、古社寺等も昔のまゝにて
今にのけるは甚だ少し。

十二72 図 温泉のわき出づる處はおほ
むね火山の附近に在りて、四圍の風
光麗しく、神氣自らさわやかなるを
覺ゆ。

十97 図 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ
跡ニシテ、今ハオホムネ田畠トナレ
リ。

十一27 図 和船の大なるは五百石積

・千石積等ありて、近海を航行すれ
ども、櫓はおほむね一本なり。

おおむね「大村益次郎」(人名) 1 大村益次郎

九29 図 大鳥居ノ前ノ大廣場ニハ大
村益次郎ノ銅像アリ。

おおやけ「公」(名) 1 公

十二38 図 「高虎の嘉明と相惡む
は私の小事なり。是は公の大事なり。

おおやま「大山」(人名) 1 大山

二24 図 大山

おおやま「大山通」(地名) 1
大山通

十二54 図 市街に大山通・兒玉町・
乃木町等の名あるは、明治三十七八
年戦役の記念たり。

おおゆ「大湯」(名) 1 大湯

十74 図 湯のわき出づる處二十餘箇
所、大湯と稱するは一晝夜に數回噴
出す。

おおゆき「大雪」(名) 1 大雪

七85 図 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。

おおよそ「大凡」(副) 2 おほよそ

七44 図 おほよそ家の紋どころ、
いふもかしこし、菊と桐。楠木父子
の菊水は、(略)。

八76 図 神殿の御有様、おほよそ内
宮に同じと見奉る。

おおよろこび「大喜」(名) 1 大よろこび

七69 図 いづれも大よろこびで、こ
んな見事な桃がなるのなら、植ゑて
見たいと申して居ります。

おか「丘」(名) 3 ヲカ 岡 凸さくら
がおか

三一2 ヲカノ上ニモ、ツツミノ
上ニモ、サクラノハナガ一メ
ンニサキマシタ。

十29 犬を連れた男が銃を肩にし
て、森の蔭から出て来て、あぜ道傳
ひにあちらの岡へ向つた。

十一110 都市・村落の周圍の山や岡
には、まんぢゆうの様に圓く盛上げ
た土山が數知れず並んでゐる。

おか「陸」(名) 9 ヲカ をか
三47 4 かへるはをかにゐると
きには、大きな目をして、手
をついてすわつてゐます。

三50 2 かへるは水の中にも、
をかの上にもすむことがで
きるのです。

四52 4 島ノ上ニ居タ白ウサギ
ガ、ムカフノ大キナヲカヘ行
ツテ見タイト思ツテ、海ヲワ
タルクフウヲカンガヘテキマシ
タ。

四54 5 Omahaヘタチノセナカノ
上ヲアルイテ、カゾヘテ見ル
カラ、ムカフノヲカマデナラン
デ見ヨ。」

四55 4 イマ一足デヲカヘ上ラ
ウトイフ所デ、(略)。

四55 7 図 オレハココノヲカヘ
來タカツタノダ。」

四76 3 やしまのたたかひにげん
じはをか、へいけは海で、む
かひあつてゐた時、(略)。

四82 7 をかの方では(略)。海
の方でも(略)。

五74 7 (略)、海とをかとにおし立て
た何千本の赤はたは、(略)。

おかあさま「御母様」(名) 1 オカア
サマ

四75 2 図 「オカアサマ、オヒナサマ
ヲカザリマシタカラ、ゴラン下
サイ。」

おかあさん「御母」(課名) 2 オカア
サン

二目5 十五 オカアサン

二37 1 十五 オカアサン

おかあさん「御母」(名) 13 オカアサ
ン おかあさん

一50 5 ハヤクカヘラナイト、オカ
アサンガシンバイシマス。

二26 1 オカアサンハキドバタデ
水ヲクンデキマス。

二39 6 図 キモノヲヌツタリセン
タクシタリシテクダサルノハ、
ドナタデスカ。」ソレハオカア
サンデス。

二39 6 図 オカアサンハワタクシ
ヲカハイガツテクダサイマス。

二40 2 図 ワタクシモオカアサン
ヲダイジニシマス。」

二487 ソノホカニ、オカアサン
カラオトシダマニイタダイタ本
ガ一サツアリマス。
三111 ワタクシハオカアサンノ
イヒツケヲヨクキイテ、イモウ
トノモリヲシタリ、オツカヒ
ニイツタリシマス。
三57 (略)、コチラニハオカアサ
ンノモンツキノハオリガアリ
マス。
四681 (略)「オカアサン、ソノオクス
リハニガウゴザイマスカ。
五66 (略) そのおしまひのあいてゐ
る所へ、『おかあさんからもよろし
く。』と書きたして下さい。
七507 (略) お花は「はい。」と答へて
受取らんとせしが、配達夫は「おか
あさんをよんで下さい。」といふ。
八127 (略) おはなさんは(略)。段々
おかあさんに似て來ます。
八129 (略) この寫眞で見ると、おかあ
さんの小さい時分にそっくりです。
おかいあそばす「御飼遊」(五) 1 お
かひあそばす「一ス」
五368 (略)、皇后さまがかひこをお
かひあそばすためにごさいました。
おかえり「御婦」(名) 1 オカヘリ
二634 ヨクノフカイオヂイサン
ハ(略)、カレ木ノ上ニノボツ
テ、トノサマノオカヘリヲマツ
テキマシタ。
おかぐら「御神楽」(名) 1 おかぐら

五25 よい神さまがたは、どうかし
て大神にまた出ていただきたいと、
(略)、一同あまの岩戸の外にあつま
つて、おかぐらをおはじめになりま
した。
おかくれなさる「御隠」(五) 1 オカ
クレナサル「一イ」
二225 (略)「カクレンボヲシテアソ
ビマセウ。(略)ミナサン、ハヤク
オカクレナサイ。」
おかくれ「御隠」(下二) 1 おかく
れる「一レ」
五17 大神はおどろいて、あまの岩
戸の戸をたてて、その中へおかくれ
になりました。
おかげ「御陰」(名) 1 おかげ
八273 (略) 二三ヶ月立つてから、前の
友だちが來て、(略)農夫は「おか
げで目がさめた。御恩は一生忘れな
い。」といつて、かたく友だちの手
を握りしめました。
おかげさま「御陰様」(名) 1 オカゲ
サマ
四612 (略) 白ウサギガ(略)ナホリ
マシタ。ヨロコンデオホクニヌシノ
ミコトノ所へオレイニ行ツ
テ、「オカゲサマデ、カラダハコ
ノトホリニナホリマシタ。
おかざき「岡崎」(地名) 2 岡崎
十二275 (略) 城を抜け出でて岡崎に
至り、急を主公に告ぐる者なきか。」
十二289 (略)、勝商は山に上りて

のろしをあげ、走りて岡崎に到り、
家康に見えて援を求む。
おかし「御菓子」(名) 1 オクワシ
二91 オハナハオキクヲザシキ
ヘトホシテ、オチヤトオクワシ
ヲダシマシタ。
おかし「可笑」(形) 2 をかし「一
シ」
九527 (略) 車夫のかぶるは形より
まんぢゅう笠の名もをかし。
十一82 (略) 鰻をくはへてくちばしに
巻附かれ、持て餘して見ゆるもをか
し。
おかしい「可笑」(形) 2 ヲカシイ
「一イ」
四412 (略)、何ダカヤウスガ
チガツテキマス。コレハヲカシ
イトオモツテ、ヨクヨク見ル
ト、(略)。
十一674 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置
ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミ
ナイノハヲカシイ話デアル。
おかす「冒」(四) 1 をかす「一サ」
十二905 (略) 衛生上の注意を怠らずし
て、何人も病にをかされぬ様にすべ
し。
おかた「御方」(名) 3 オカタ オ方
二471 天ジンサマハスガハラノ
ミチザネトイフチュウギナオ
カタヲマツツタノデス。
二473 コノオカタハウメノハ
ナガオスキデシタカラ、(略)。

四618 ソノノチオホクニヌシノミ
コトハ白ウサギノイツタトホ
リ、エライオ方ニオナリニナ
リマシタ。
おかだけいぞう「岡田敬造」(人名) 1
岡田敬造
九758 (略) 十月二日 岡田敬造 堤
富次様
おかだけいぞうさま「岡田敬造様」(人
名) 1 岡田敬造様
九719 (略) 九月三十日 堤富次 岡
田敬造様
おかでら「岡寺」(名) 2 岡寺
十一1012 (略) 多武峯ヲ西ヘ下レバ岡寺ア
リ。
十一1012 (略) 岡寺ハ西國三十三番第七ノ
札處ナリ。
おかね「御金」(名) 4 オカネ お金
二523 (略)、土ノ中カラ、オカ
ネヤラ、キモノヤラ、ソノホカ
タカラモノガタクサンデマシタ。
二564 ツクタビニ、ウスノ中
カラオカネヤキモノヤ、イロイ
ロナタカラモノガデマシタ。
七418 (略) このお金は私がこちらへま
ゐる時、「夫の一大事の折に使へ。」
と申して、父の渡してくれた金でご
ざいます。
七428 (略) あなた様にも、その折には
よい馬にめして、主人のお目にとま
るやうになされるのが大事と考へま
して、今日このお金を出しましたの

でございます。」

おが・む〔拜〕(四・五) 4 ヲガムを

がむ『ミーム・ーン』

五69 2 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ

テキル。サンケイスル人ハ皆カハル

くコレヲ鳴ラシテヲガム。

五69 2 オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシ

テヲガンダ。

六39 5 第一番に御所ををがんで、

それから東山の方へ行つた。

七75 5 図 コノ度ノ合戦ニハ、師直

ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ヲガ

クビヲカレラニ取ラスルカ、ニツノ

中ノ一ツト思ヘバ、今一度天顔ヲヲ

ガミテマキリタシ。」

おかやま〔岡山〕〔地名〕 3 岡山

九25 図 岡山

十42 4 図 花筵ヲ最モ多ク産スルハ岡

山・廣島・福岡・大分等ノ諸縣ニシ

テ、(略)。

十一18 図 岡山

おかやまけん〔岡山県〕〔地名〕 1 岡

山縣

十42 5 図 花筵ヲ最モ多ク産スルハ

(略)、其ノ織方ヲ發明シタルハ岡山

縣ノ磯崎眼龜トイフ人ナリ。

おかわり〔御変〕(名) 1 おかはり

六39 2 図 おちいさんもおばあさんも

おかはりはないか。

おき〔隠岐〕〔地名〕 2 隠岐

十一13 4 図 元弘二年三月、北條高

時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。

十一14 2 図 然るに今、主上隠岐に遷

され給ふと聞き、一族共を集めてい

へるやう、(略)。

おき〔沖〕(名) 2 オキ おき

三59 3 今日 は なみ が おだやか

で、舟がたくさん おきへ出て

ゐます。

六78 1 オキノ方カラ黒クヌツタ船ガ

ハイツテ來ル。

おき〔起〕ヨあさおき・ねおき・ねおき

す

おき〔置〕ヨひとつおき・ものおき

おきあが〔起上〕(五) 1 起上ル

『一ラ』

八88 8 (略) 中佐ヲ壕ノ内ニ入レテ

カイハウシタ。(略) 中佐ハ目ヲ

見張りテ、軍刀ヲ杖ニ起上ラウトス

ル。

おきいず〔起出〕(下二) 1 起出づ

『一デ』

十一73 3 図 翌日晝工の早朝に起出で

て晝がけるを見れば、皆ふしたる鶴

なり。

おききなさる〔御聞〕(五) 1 オキキ

ナサル 『一イ』

三33 5 アノウタヲ オキキナサ

イ。

おきく〔人名〕 3 オキク ヨおはなと

おきく

二74 オハナト オキクガアソン

デキマス。

二77 オキクガイマ オキヤクニ

ナツテキマシタ。

二87 オハナハ オキクヲザシキ

ヘトホシテ、オチヤトオクワシ

ヲダシマシタ。

おきく〔御聞〕(五) 1 オキク 『一

キ』

三14 5 (略) ト、イバツテキマシ

タ。ソレヲ天子サマガ オキキ

ニナツテ、(略)。

おきくさん〔人名〕 1 オキクサン

二84 図 「オキクサンデスカ。ヨ

クイラツシヤイマシタ。」

おきくさん〔御菊〕(名) 2 おきくさ

ん

四27 7 図 一ぴきのきつねがさ

きのこつてゐるのぎくを見つけ

て、「おきくさん、おきくさん、か

うさむくなつては、しかたが

ありますまい。

四27 7 図 「おきくさん、おきくさん、

かうさむくなつては、しかた

がありますまい。

おきて〔掟〕(名) 2 おきて

十41 1 図 軍のおきてにしたがひ

て、他日我が手に受領せば、なぐく

いたえり養はん。』

十二118 8 図 人の子どもの ねしな

べて、ぬむを御國のおきてなる、

學びの道の 六年をば、卒へし今日

こそうれしけれ。

おきな〔翁〕(名) 1 おきな

九26 図 (略)、夫婦の老人(略)泣

きかなしめるを見給ふ。尊は「(略)。」

と問はせ給へば、おきなは「(略)。」

と答ふ。

おきなわ〔沖繩〕〔地名〕 1 沖繩

九56 4 図 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、

(略)、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、

羽ヲ閉ヂテ、草木ノ枝ニトマルトキ

ハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

おきなわじょうとう〔沖繩諸島〕〔地名〕

1 沖繩諸島

十二47 8 図 我が大日本帝國の古

き六十八國ノ沖繩諸島合せてぞ、

府は三つ、縣は四十三。

おきのしまふきん〔沖島付近〕(名) 1

沖島附近

十二56 図 東郷司令長官は直ちに全

軍に出動を命じ、先づ小軍艦をして

敵艦隊を沖島附近に誘ひ寄せしむ。

おきのどく〔御気毒〕(形状) 1 おき

のどく

四28 2 図 あなたのおなかまは大

てい枯れてしまつたやうです。

まことにおきのどくなことです。」

おきばしよ〔置場所〕(名) 1 置場所

十二88 10 図 座敷の床の間より臺所の

戸棚に至るまで、諸道具の置場所を

一定し、(略)。

おきみだる〔置乱〕(下二) 1 置亂る

『一レ』

十二88 6 図 出入口に、はき物の置亂

れたる家には、盗人のうかゞふこと

多しといへり。

おきやく【御客】(名) 2 オキヤク

お客

二81 オキク ガイマ オキヤク ニ
ナツテ キマシタ。

六308 図 今のお客にもう一錢上げな
ければならなかつた。」

おきやくさま【御客様】(名) 1 オキ
ヤクサマ

三68 6 ウラシマ ハオモシロクテ
タマリマセンカラ、リユウグウノ
オキヤクサマ ニナツテ、ウチヘ

カヘルノモワスレテ キマシタ。

おきよう【御経】(名) 1 おきやう
六44 2 (略)、八つの時にお寺へ小ぞ
うにやられました、おきやうなど

は何べんをへてもおぼえせん。

お・きる【起】(上二) 12 オキル おき
る 起きる 『キ・キル』

二22 ワタクシノウタヲキク
ト、人ガダンゲンオキテキマス。

二41 オソク オキル人ハ、コノ
ウツクシイ日ノデヲミルコト
ガデキマセン。

三13 2 いぬはおきて、ないてゐ
ます。〔ひらがなのドリル〕

四12 5 コノゴロハクリノオチル
ジブンデ、毎アサ早く オキテ、
行ツテ見ルノガタノシミデス。

四47 1 皆さんがあさおきる時
には、みじかいはりがどの字
の所にありますか。

四62 3 けさおきて見ると、雪が

たくさんつもつて、どこを見て
もまつ白です。

六37 2 朝おきて見ると、池に氷がは
つてゐた。

六37 8 朝おきると、雪が五六寸つも
つてゐた。

八22 6 次の朝農夫はいつになく早く
起きて、(略)。

八23 1 歸つて見ると、自分の家は戸
がまだしまつてゐて、誰も起きてゐ
る様子がありません。

八26 2 其の後は毎朝必ず早く起き
て、下男や下女は早くから畑へ出し
て働かせ、(略)。

九70 6 (略)、止んだことと思つてゐ
ると、翌朝起きて見れば、何時の間
に雪に變つたか、そこら一面銀世界
になつてゐることもある。

おく【奥】(名) 4 オク 奥 奥 奥 奥 奥
かおくのせんぼん

二13 8 図 「アノ山ノオクカラナ
ガレテクルノデス。」

十一1 8 図 吉野山霞の奥は知らね
ども、見ゆる限りは櫻なりけす。

十一4 8 図 (略)、麓の花、中の花の
盛り過ぎて、奥の花の盛りとなるま
では、ほとんど一月にわたるとい
ふ。

十二89 6 図 凡そ家内の掃除は座敷・
居間・臺所のみならず、便所の隅よ
り下駄箱の奥までも注意せざるべか
らず。

おく【置】(四・五) 31 オク おく

置ク 置く 『イー・カー・キー・ク・

ーケ』 凸かいおく・かく・こしおく・か
けおく・とのえおく・なしおく

二58 7 ヨイオデイサン ハソノハ
ヒヲモラツテキテ、カマドノ
下ニオキマシタ。

四74 2 ニダン目ニハクワンデヨ
ラスエテ、三ダン目ニハ五人バ
ヤシヲオキマシタ。

五24 1 やく人は二人をよび出して、
その釜を前において取りしらべまし
た。

六22 1 さうして前にしるしを付け
ておいた所まで船が水につかつた時
に、(略)。

六23 2 一人の子どもが(略)、かめ
の中へおちました。すてておけば、
すぐ死んでしまひます。

六31 6 図 (略)、残りの一錢を渡した。
かへつて来ると、長松は笑つて、「先
では知らないのだから、一錢まうけ
ておけばよかつたのに。」

七12 8 図 (略)、品物を渡しておいて、
後になつて代金を受取るのがかけて
す。

七33 3 (略)、まだ出ない内にむして、
さなぎをこしらへておいて、それから
繭をにて、絲を取るのである。

七33 6 蛾は繭から出ると、(略)死
んでしまふから、出て来ると、すぐ
に紙の上において卵を産みつけさせ

る。

七51 8 図 この手紙は四匁より重いの
に、差出人が三錢しかはつておきま
せん。

七77 6 図 「さておしまひに一ついつ
ておきたい事があります。

七88 9 図 それですから小さい時から
海になれておくやうにしたいもので
す。」

八65 8 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオク
ト、紺色ノ汁ガ出マス。

八72 8 図 「猫デナイシヨウコニ竹
ヲ書イテオキ。」 トイフコトアリ。

十36 2 図 私はわざと一巻の書物を床
の上に投げておきました。

十36 5 図 (略)、あの青年ははいると
直に書物を取上げて、テーブルの上
に置きました。

十44 9 図 直線を適當の長さに切り、
一定の間合を置きて、或は縦に、或
は横に、或はななめに並ぶる時は、
美しき模様を生ず。

十55 1 図 (略)、ひそかに我を此の
齋藤別當のもとに預け、別當は七日
の間手もとに置きて、木曾へつかは
したり。

十一7 9 図 此の時箱・樽等を適當な
所に置けば、分離したる一群は直
ちに其の中に入る。

十一66 10 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、
ニタキ・洗ヒ流シヲスル所デアルカ
ラ、(略)。

十一67② (略)、流シ元・戸ダナヲハジメ、料理道具・食器・フキンナドニ至ルマデ、常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラス。

十一67③ 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハフカシイ話デアル。

十一97⑩ (略)、四箇所に境界石を置いて、分明に相成居候。

十二13⑧ 船ヲ組立テルニハ、船臺ノ上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、其ノ上ニ先ヅ龍骨トイフモノヲ置ク。

十二16⑤ (略) 故に文明諸國に於ては何れも氣象臺・測候所を置いて、日々氣象を調査す。

十二16⑨ (略)、全國に凡そ百箇處の測候所あり。尚韓國・清國にも二十餘箇處を置けり。

十二22⑩ 若し其の中に青い水草を入れて置けば、水を取換へなくても金魚は割合に長く生きてゐる。

十二36⑥ (略) 本校舎ノ建築ハ(略)實用ニ重キヲ置キ、其ノ注意ノ周到ナル、縣下マレニ見ル所ナルベシ。

十二55⑥ (略) 清國政府はこゝに總督を置いて滿洲全部を總管し、我が國亦總領事を置けり。

十二55⑥ (略) 清國政府はこゝに總督を置いて滿洲全部を總管し、我が國亦總領事を置けり。

十二108⑦ (略) 市町村長・議員等を選挙するには専ら其の人物に重きを置

き、親族・縁故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

おく〔起〕(上二) 5 起ク 起ク「キーク」

九43③ (略) 姉上も最早御全快にて、四五日前より起きて蠶の世話をなされ居り候。

九60⑥ (略) 早く寝ねて早く起くべし。

九61① (略) 人多き都會に住む者は、(略)、又朝早く起きて、木立しげき公園等を散歩すべし。

九61⑨ (略)、早く寝ね、早く起き、新しき空氣をすひ、常に日光に浴して、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

十24② (略) 良此ノ度コソハト、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、(略)。

おくすり〔御薬〕(名) 2 オクスリ 四68② (略) 「オカアサン、ソノオクスリハニガウゴザイマスカ。

四68⑥ (略) 「イイエ、オクスリハジブンデノマナケレバ、何ニモナリマセン」。

おくだいらのぶまさ〔奥平信昌〕(人名) 1 奥平信昌

十二26⑦ (略) 天正三年五月奥平信昌、徳川家康の命を受けて長篠城を守る。

おくない〔屋内〕(名) 1 屋内 十81⑥ (略) 其の家はほつたて小屋の如く、(略)。(略) 屋内には中央にゐるりを造り、一家之を圍みて談笑す。

おくのせんぼん〔奥千本〕(地名) 2 奥ノ千本 奥ノ千本

十一2④ (略) 奥ノ千本 十一4⑤ (略) 尚進めば、水分神社・金峰神社等あり。此の附近にも亦櫻樹多し。之を奥の千本といふ。

おくのま〔奥間〕(名) 1 おくのみ 四71⑤ (略) 夜おそくまで おくのまに、母はせい出す はりしごと。

おくゆかし〔奥床〕(形) 1 奥ゆかし

十二99⑥ (略) 老人長者の爲に道をゆづり、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、個人としても、國民としても、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

おくらい〔御位〕(名) 1 オクラキ 五7⑧ (略) 天皇ハ國ノ中ノワルモノドモヲノコラズオタヒラゲニナツテ、天皇ノオクラキニオツキニナリマシタ。

おぐらし〔小暗〕(形) 1 小暗シ「キ」

十95⑧ (略) 帝室博物館ヲ觀覽シテ、老樹路ヲサシハサミテ晝尚小暗半間ヲ行クバ、官幣大社春日神社ニ到ル。

おくりゝおんみおくりいたす・みおくり

おくりかえす〔送返〕(四) 1 送り返す「し」

十一46② (略) かくて光範の與へたる

刀には事の由を書添へて送り返し、(略)。

おくりきたる〔送來〕(四) 1 送り來る「ール」

十二100⑥ (略) 又獨逸にては圖書館の書籍を借受くるに一枚の葉書にて申し込めば直ちに送り來る。

おくりもの〔贈物〕(名) 1 オクリモノ

四51③ (略) チョット見ルト、リツパデハナイガ、オメデタイ時ノオクリモノニナリマス。

おくる〔送〕(四・五) 17 おくる 送ル 送る「ツ・ラー・リール」

おおくりくださる・おんおくりあいなる・おんおくりくださる・しゃしんをおくるがみ・にゆうえいするともにおくる・みおくる・ももをおくるがみ・りよこうさきのちちにおくるがみ

六51④ (略) 支那からは大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、もとより強い日本兵にはかなひません。

六58⑤ (略) ところがとなり國では信玄をこまらせようと思つて、塩を送らせないことにした。

六59② (略) 謙信はそれを聞いて、「(略)」といつて、じぶんの國から塩を送らせた。

六80② (略) オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。アレハ停車場へ送ルノデアラウ。

七三〇 正成ハタシテ戦死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。

八六一 三つ四つ五つうち連れて、矢走をさして歸り行く。白帆を送る夕風に、聲程近し、三井のかね。

八七四 我的職務は食物をこなし、之を血の製造場へ送るにあり。

八七九 諸君我を苦しめんとし、此の数日間少しも食物を送らざるが故に、新しき血出來ずして、(略)。

八七二 諸君若し我に食物を送るために働きたりといはば、我もまた諸君を養ふために勞したりといはん。

九四四 或時旅行先より手紙を送りて、其の子のアリに(略)と言ひつかはしたり。

九六六 臺所にて火吹竹を使ふも、かち屋にてふいごを用ふるも、皆空氣を送りて、火の勢を盛ならしむる爲にして、(略)。

九六九 雨のはれた朝、花の香を送つて、そよ／＼と吹く春風には、我が身も蝶の様に飛立ちたくなる。

一四三八 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國ヘ送りシニ、翌年英國ヨリ注文アリシヲ始トシ、(略)。

一六二六 發掘シタル銅鐵ハ、(略)坑外ニ運び出シ、之ヲ選鑛場ニ送ル。

一六二九 カク選り分ケタルモノハ之ヲ製煉場ニ送ル。

一七六一 心臓ハ肺臓ヨリ來ル新シキ血ヲ全身ニ送り、(略)。

一七六 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ送ル。

おくる「贈」(五) 1 おくる「ール」 四四五 今でも魚や貝や鳥や、すべてなまぐさものをおくる時には、のしをつけません。」

おくる「遅」(下二) 3 後ル 後る「ール・ール」

一七二 五日目ノ朝行キテ見レバ、老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。大イニ怒リテ、「長者ト約シテ後ル、ハ禮ニ非ズ。」

一七〇 殊に集會の時間は正しく守らざるべからず。一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。

一七〇 例へば六十人の集會に其の中の一人若し十分を後るとせば、六十人の時間の損失は合して十時間となるべし。

おくれ「後」(名) 1 後れ じだいおくれ

一七二 身分相當の交際は家を保つ上にも必要なり。(略)、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、公共の事業にも後れを取るべからず。

おくれる「遅」(下二) 5 おくれる 後れる「ール・ール」

一八四 馬場の中程から一騎後れ、

二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、(略)。

一八四 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、(略)。

一八四 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、(略)。

一八四 追手が接近すれば速力を速め、後れゝば脚のきざみを短くする。

一五六 打鳴らす太鼓の音は段々に低くかすかになる。おくれゝばピエールはこゝえて死ぬであらう。

おくれる「送」(下二) 1 送れる「ール」

一七二 近い所ならもつと目方がふえても、四錢で送れます。

おくれる「御恩」(下二) 3 おくれる「ール」

一七二 母は戸だなの方をさして、「そこにおさががあるから、取つておくれ。」といひました。

一七二 母は「(略)」。それからそこに切つてあるたけのこをおなべの中へ入れておくれ。」

一七二 母は「(略)」、「手がなまぐさいから、そのひしやくを取つて、水をかけておくれ。」

おけ「桶」(名) 3 ヲケ

一八五 タルヤヲケニモ、竹ノタガガカケテアリマス。

一六七 杉ハデンシン柱ニ用ヒ、又ハコ・ヲケ・タルナドヲ作ルニ用フルコト多シ。

一七三 (略)、ヲケ・タラヒ・ザルナドヲ賣ル荒物屋ガアル。

おくる じにおける おこころやす・い「御心安」(形) 1 お心安い「ーク」

一七九 あなたと私は親類ださうでございますから、どうかこれからお心安く願ひます。」

おこす「起」(四) 9 起ス 起す「サー・シー・ス」 じひきおこす・ゆりおこす・よびおこす

一七二 我が死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ殘リテアル間ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。

一七四 大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

一八〇 カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、誰カハ義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。

一八〇 然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。

一八六 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。

一八六 (略)、君をうばひ奉りて義軍を起し、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべ

し。」

十一117 〇 商工業の發達に 皇國の富を起さんと、勤勉・努力もゆみなき 同胞すべて六千萬。

十二6 〇 (略)、打出す砲彈よく命中して、敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。

十二104 〇 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、(略)。

おこす「遣」(下二) 1 おこす『一セヨ』

九78 〇 東風吹かばにほひおこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな。

おこそ「御高祖」(名) 1 おこそ

九52 〇 づきんにおこそ・大黒と

其の名其の類亦多し。

おこそか「嚴」(形状) 1 おこそか

十38 〇 乃木大將はおこそか、

御めぐみ深き大君の 大みことのり傳ふれば、かれかしこみて謝しまつる。

おこたる「怠」(四) 5 怠る『一ラ・一リ・ール』

七79 〇

一たんめあて定めては、わき目もふらず、怠らず、ふるひ進むに何事かなど成らざらん、(略)。

九5 〇 倭姫命此の時天叢雲劍を尊に授け、「つゝしみて怠ることなかれ。」と教へ給へり。

九61 〇 (略)、適度の運動を怠らず、(略)、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

十一6 〇 働蜂中には蜂の集め来る蜜を檢査する檢査掛あり。(略)。怠りて持歸らざるものあれば、(略)。

十二90 〇 衛生上の注意を怠らずして、何人も病にをかされぬ様にすべし。

おことば「御言葉」(名) 1 御言葉

九19 〇 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「それは餘りな御言葉です。」

おこない「行」(名) 6 行

八92 〇 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレム心モ深カツタ。(略)、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。

九86 〇 (略)、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

十37 〇 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めまして上、なほ平生の行をしらべて雇ふことに致しました。

十37 〇 りつばな人の手紙よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。

十一53 〇 ヨク笑ハント欲スルモノ

ハ、常ニ其ノ行ヲツ、シミ、上、天ニ恥ヂズ、下、地ニ恥ヂズ、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

十二33 〇 平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。

おこないやすし「行易」(形) 1 行ひ易し『一ク』

十二117 〇 「此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。行ひ易く、守り易し。」

おこなう「行」(四・五) 22 オコナフ

行フ 行ふ『一ハ・一ヒ・一フ』

らびおこなう

八51 〇 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲオコナハントシ、アラカジメ其ノ手ハズヲ定メタリ。

九29 〇 靖國神社ノ秋ノ大祭ハ十一月五日ヨリ行ハル。

九30 〇 春秋兩度ノ大祭ニハ(略)、種々ノ餘興モ行ハレテ甚ダニギヤカナリ。

十81 〇 あいぬは時々熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。

十一39 〇 南部地方には製糖業盛に行はれ居候。

十一69 〇 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

十一79 〇 鵜を使ひて魚を捕ふること、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。

十一103 〇 孔明、劉備ニ事へ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、(略)。

十一109 〇 まだ冠禮を行はない者はチョンガーといつて、髪を三つ打ちにして後へたらしめる。

十一109 〇 チョンガーの間は人に侮られるから、成るべく早く冠禮を行ふ。

十一114 〇 耕地整理は(略)、昨年既に之を完成せり。之によりて用水路の改修行はれ、灌漑・排水其のよろしきを得て、(略)。

十二23 〇 是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

十二32 〇 (略)、鈴木今右衛門の妻の慈善を行ひたる、皆後世女子の模範とすべき德行なり。

十二72 〇 守る所正しければ、心に憂苦なく、行ふ所直ければ、身常に自由なり。

十二76 〇 (略)、其の保護の下に此の大探檢を行ふに至れり。

十二95 〇 「魯人は君子の道をして其の君を輔くるに、我が臣の行ふ所は禮に反す。

十二97 〇 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。

十二113 5 信とは我が言を行ひ、義とは我が分を盡すをいふ。

十二114 9 略 忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、此の五箇條を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せ給へり。

十二115 2 此の五箇條を行ふも、結局一の誠心を本とす論し給へる、返すくも服膺すべき大御言ならずや。

十二115 9 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

十二117 1 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

おこなえる「行」(下二) 1 行へる

「一へ」
十一109 6 金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎててもチョンガーで、大人の仲間入が出来ない。

おこなわ「行」(下二) 3 行ハル

行はる「ルール・ーレ」

九90 7 銀貨・銅貨ハ廣ク用ヒラル
レドモ、金貨ハ日常流通スルコト少シ。是金貨ニ代ル紙幣ノ行ハル、ニヨル。

十一26 2 都會の地には電車・自動車等も次第に多く行はれて、ひとへ

に速力を競ふ世とはなれり。

十一112 4 又麥稈眞田を編み、花筵を織ること行はれ、十二三歳の少女も手を空しうする者なきに至れり。
おこなわ「行」(下二) 1 行はる「ーレ」

十一109 7 近年は斬髮の風が行はれて、冠禮は段段すたれて行く。

おこまり「御困」(名) 1 オコマリ
五6 2 コノ天皇ガワルモノドモヲ御セイバツニナツタ時、オトホリスデノミチガケハシクテ、オコマリノコトガゴザイマシタ。

おこめ「御米」(名) 2 オミ

二35 2 3 「モチハタイセツナオミデコシラヘタモノデスカラ、イテハイクマセン。」

二36 6 ソレカラコノ人ノタニハ、オミガスコシモデキナクナツタトイヒマス。

おこり「驕」(名) 2 をこり

十二92 4 身分不相當の活計は産を破り、家を亡す基なり。をこりに流るるは易く、をこりより儉約に進むは難し。

十二92 5 をこりに流るるは易く、をこりより儉約に進むは難し。

おこりきたる「起来」(四) 1 起り来る「ーラ」

十二33 7 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

おこる「怒」(五) 5 オコル おこる

「ーッ」

二57 7 略、ヨイモノハナンニモデマセン。マタオコツテ、ソノウスヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイテシマヒマシタ。

四56 2 ワニザメハソレヲキクト、大ソウオコツテ、(略)、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。

五23 1 かまをぬすまれたものがありました。(略)。大そうおこつて、取りかへさうとすると、(略)。

六52 2 略、秀吉を日本國王にするといふふれいなことばがありました。秀吉は大そうおこつて、「日本國には天皇へいかがいらしやるではないか。」と、その使を追ひかへして、(略)。

八25 2 此の下女は毎朝かうして、主人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。農夫はおこつて、其のばけつを引つたりしました。

おこる「起」(四五) 12 起ル
「ーッ・ラー・ーッ・ーッ」ムふき

おこる

八91 9 略、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

九64 5 扇を使へば風起り、むちをふるへば音を發す。

十31 8 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、(略)、之ヲ救ハントスル義心ヨ

り起レリ。

十一8 5 されば氣候不順にして、花のとほしき時は蜂合戦の起ること珍しからず。

十一17 2 此の故事を引き、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十一23 10 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

十一23 10 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

十一29 4 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。

十一102 2 支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。

十二42 8 火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。

十二100 4 英國にては(略)、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。

十二114 5 此の風一度軍人の間に起りては、士氣も兵氣も衰ふべければ、(略)。

おさう「押」(下二) 3 オサフ おさ

ふ 押ふ「一へ」

七3 7 略、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。母ハ走りヨリテ、正行ノウデヲ

オサへ、(略)。
十51 3 敵は手塚の家來を押へ、刀

を抜きて首をかく。

十一45 8 図 (略)、刀を取直して腹かき切らんとす。居合せたる人々(略)、取つておさへて動かさず。

おさき「御先」(名) 1 オサキ

五6 4 図 コノ天皇ガワルモノドモヲ御セイバツニナツタ時、オトホリスデノミチガケハシクテ、(略)ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ出テ來テ、オサキニ立ツテ、ヨイミチノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシタ。

おさな・し「幼」(形) 8 ヲサナシ 幼し「一キ・一ク・一ケレ」

七3 8 図「汝ヲサナクトモ、父ノ子ナレバ、コレホドノワケノ分ヲヌコトハアルマジ。

七4 1 図 父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。

十15 7 図 紫式部は幼き頃より物覺よく、兄の書を讀むを聞きゐて、直ちに之をそらんじ、(略)。

十54 9 図「いかでかゝる幼き者に刀を立てん。」

十一41 9 図「いまだ幼ければ、敵も心をゆるすべく、(略)。」

十一42 3 図「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。

十一42 6 図 年長じては敵も近づけ申すまじ。幼き時に参りてこそ。」

十二32 5 図 孝女お房の幼き身を以て能く父母に事へたる、(略)、皆後世

女子の模範とすべき德行なり。

おさなめ「幼目」(名) 1 幼目

十52 5 図 義仲の幼目に見たりし時も、すでに白髪まじりの老人なりき。

おさまる「治」(四・五) 3 をさまる

「一ツ・一リ・一ル」

八60 6 図 石山寺の秋の月、雲をさまりてかげ清し。

九46 4 図 一同はやむことを得ず、進行を止めて、風のをさまるを待てり。

十63 8 昨夜の風雨は名残なくをさまつて、(略)、海面はさざ波を立ててゐる。

おさむ「収」(下二) 4 ヲサム をさむ 収む 納む「一ムル・一メ」

九29 5 図 社前ナ青銅ノ鳥居ハ、昔ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ造リタルモノニシテ、(略)。

九64 1 図 之をばうむりし時は、よろひ・劍・弓・矢等を共にをさめ、(略)。

十二105 7 図 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を収むるを得んや。

十二106 7 図 (略)各府縣に於て多額の直接國税を納むるもの十五人の中より一人を互選し、(略)。

おさむ「治」(下二) 4 ヲサム 治む「一ムル・一メ」

八18 7 図 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲヲサメタル

モ、(略)。

十一60 7 図 親に事へ、弟を助け、家を治めん、妹我は。

十二27 7 図 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。

十二33 4 図 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。

おさむ「修」(下二) 2 修む「一ムル・一メ」

十二11 3 図 教育勅語と戊申詔書とは、我等が身を修め、世に處するの道を示し給へるものにして、(略)。

十二4 4 図 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

おさめ・う「取得」(下二) 1 収メ得「一エ」

十二10 7 図「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一二天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、(略)。

おさめ・く「治来」(カ変) 1 治め來「一キ」

十二2 3 図 神代より承けし寶をまもりにて、治め來にけり、日の本つ國。

おさら「御皿」(名) 1 おさら

五20 2 図「そこにおさらがあるから、取つておくれ。」

おさら「御渡」(名) 2 オサラヒ

三5 8 (略)、マサヲガ本ヲヨシ

デキマシタ。(略)。スコシタツテ

オサラヒガスミマシタ。

三54 3 図「ハヤクオサラヒヲナサイ。」

おし・くち・おし・なごり・おし おしあ・てる「押当」(下二) 1 おしあ

てる「一テ」

六60 3 図 八つばかりの女の子、たもとを顔におしあてて、ひとりしく泣いてゐる。

おしい「惜」(形) 5 をしい 惜しい「一イ・一ウ・一ク」 凸おなごりおしい

六52 8 (略)、二度目の朝鮮せいばつをはじめました。をしいことに、そのいくさの終らない中に病氣でなくなつてしまひました。

六59 4 図「ああ、をしい事をした。よいいくさ相手がなくなつた。」

九19 3 図「こらどうした。命がをしくなつたか、妻子がこひしくなつたか。

十一49 3 図「あれ程の名馬はいくら金を拂つても惜しくはない。」

十一49 6 図「閣下、三千金が惜しう御座いますか。」

おじいさん「御祖父」(話し手名) 2

オヂイサン

四20 3 オヂイサン「次郎、オマヘハ手ノユビノ名ヲ知ツテキマスカ。」

四21 2 オヂイサン「オヤユビノ次

ノハ人サシユビデ、(略)。」
おじいさん「御祖父」(名) 22 オヂイ
サン おぢいさん

371 オヂイサン ハヤマヘシバ
カリニ、オバアサン ハカハヘ
セントクニ。

441 ヨイ オヂイサン ハコブヲ
トラレテヨロコビマシタ。

445 ワルイ オヂイサン ハコブ
ヲツケラレテコマリマシタ。

256 オヂイサン ハウマニカヒ
バヲヤツテキマス。

503 ムカシアルトコロニ、ヨ
イ オヂイサン トワルイ オヂイサ
ンガアリマシタ。

503 ムカシアルトコロニ、ヨ
イ オヂイサン トワルイ オヂイサ
ンガアリマシタ。

505 ヨイ オヂイサン ハ白イ犬
ヲ一ピキカツテ、(略)カハイガ
ツテキマシタ。

512 アル日犬ハ オヂイサン
ノタモトヲクハヘテ、ハタケノ
スミヘツレテイツテ、(略)。

522 オヂイサンガソコヲホル
ト、(略)タカラモノガタクサン
デマシタ。

526 トナリノワルイ オヂイサ
ンハ(略)、犬ヲカリニキマシ
タ。

537 オヂイサンハ(略)、ソノ
犬ヲコロシテシマヒマシタ。

545 ヨイ オヂイサンハ(略)マ
ツノ木ヲ一本ウエマシタ。

557 ヨイ オヂイサンハヤガテ
コノ木ヲキツテ、(略)。

571 ヨクノフカイ オヂイサン
ハマタコノウスヲカリテイッ
テ、(略)。

585 ヨイ オヂイサン ハソノハ
ヒヲモラツテキテ、(略)。

596 オヂイサン ハヨロコンデ、ソ
ノハヒヲカゴニイレテ、(略)。

627 ヨクノフカイ オヂイサン
ハ(略)、トノサマノオカヘリヲ
マツテキマシタ。

655 (略)、ワルイ オヂイサンハ
トウトウ シバラレテシマヒマシ
タ。

712 (略)、オヂイサン ハイロイ
ロナオモシロイハナシヲキカセ
テクダサイマス。

736 (略)、ウラシマハニハカニ
オヂイサン ニナツテシマヒマシ
タ。

742 オヂイサンハ「(略)。」ト
イツテ、ニツコリワラヒマシタ。

639 おぢいさんもおばあさんも
おかはりはないか。

おし「[教] (下二) 5 教フ 教ふ
『フルーへ』」

752 母は「(略)不足の時には、
その不足の倍だけを受取人の方で拂
はなければならぬのです。」と教へ

たり。
231 汝ハ教フルニ足ル者ナ
リ、(略)。」トイヒ捨テ去レリ。

233 凡そ婦人の道は夫を助け
て家政を治め、子に教へて家名をあ
げしむるに在リ。

293 魯の重臣某の病死せんと
せし時、其の子に教へて曰く、「孔
子は年少にして禮を好み。我死せ
ば、汝必ず之を師とせよ。」と。

294 「君君たり。臣臣たり。父
父たり。子子たり。」とは孔子が景公
に教へたる語なり。

おし「[教] (名) 4 をしへ 教訓
685 (略)、遠き祖先のをしへ
をも守りてつくせ、家のため、國
のため。」

749 正行(略)父ト母トノ教ヲ
守リテ、一日モワスル、コトナカリ
キ。

233 國民は一つ心に守りけ
り、遠く御祖の神の教を。

246 一には、軍人は質素を旨
とすべし。(略)、ゆめ此の訓を忘る
など、ねんごろに戒め給ふ。

おし「[教] (四) 3 教へ給
ふ 訓へ給ふ『ヒーフーへ』」

959 倭姫命此の時天叢雲劍を尊
に授け、「つゝしみて怠ることなか
れ。」と教へ給へり。

1134 能く義理をわきまへ、精
神を修養し、(略)、十分に自己の職

務を盡す人を眞の大勇の人といふべ
しと訓へ給ふ。

1199 六年の月日 手を取り
て、教へ給ひし 師の君の 導きな
くば、いかで我が 心に開く、智え
徳え。

おし「[教] (下二) 1 教
へ参らす『セ』」

169 紫式部は(略)。夫に別れ
て後、(略)、上東門院に漢文・漢詩
を教へ参らせたり。

おし「[教] (下二) 3 ヲシヘル
をしへる『へ』」

521 アル日犬ハ(略)、「コロ
ホレ、ワンワンワン。(略)。」トラ
シヘマシタ。

465 (略)、シホケノナイ水デ
カラダヲアラツテ、ガマノホ
ヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。」

トラシヘテクダサイマシタ。

443 (略)、おきやうなどは何べん
をしへてもおぼえません。

おじさん「伯父」(名) 7 をぢさん
叔父さん 伯父さん

365 をぢさんのおみやげに貝
をこんなにくささんいただき
ました。

368 私はをぢさんに、「(略)。」
とききましたら、(略)。

427 仕合に風上で安心だが、叔父
さんのうちはどうだらう。

433 叔父さんのうちへ見まひに行

其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)。シタガツテ敵ニオソハル、ウレハ少ク、(略)。

九54 〇 〇 シタガツテ敵ニオソハル、ウレハ少ク、我ヨリ敵ヲオソフニハ便ナリ。

おそく「遅」(名) 1 おそく 四71 〇 夜 おそく まで おくの まに、母はせい出す はりしごと。

おそし「遅」(形) 4 おそし 晩し「一カリーク・ケレ・シ」

九49 〇 〇 聞けばハッサンはアリの來ることの餘りにおそければ、(略)、迎へかたぐこゝに來りしなり。

九83 〇 〇 (略)、五人の騎手は(略)、三番太鼓を今やおそしと待構へてゐる。

十一15 〇 〇 臨幸餘りにおそかりしかば、人をしてうかどはしむるに、(略)。

十二99 〇 〇 (略)、旅館にて夜晩く高聲を發して、他人の安眠をさまたぐるが如きは、(略)。

おそらく「恐」(副) 1 恐らく 十45 〇 〇 恐らくは木造建築物中世界最舊のものなるべし。

おそる「恐」(下二) 12 恐る 恐る「一ルル・一レ」 〇 おどろきおそる 八53 〇 〇 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出デズ。

九64 〇 〇 尊は(略)北に向ひ給ひしに、蝦夷ども皆恐れて降参し、東國ことごとく平ぎたり。

九56 〇 〇 是等ハ多クハ他ノ動物ノ恐ル、武器又ハ他ノ動物ノイトフ惡味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、(略)。

九63 〇 〇 田村麻呂は(略)、怒る時はたけき獸も恐れたり。

十一23 〇 〇 浪にたどふ氷山も、來らば來れ、恐れんや。

十一82 〇 〇 魚は(略)、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、(略)。

十一92 〇 〇 (略)一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は各其の家の他人の手に渡らんことを恐れて、争ひて高き價をつくべし。

十一92 〇 〇 (略)、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、争ひて其の價を低くすべし。

十一105 〇 〇 孔明、護ノ舊功ヲ惜シミシカド、軍律ヲ亂サンコトヲ恐れ、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、(略)。

十二39 〇 〇 〇 「余は秦王を其の朝に叱したるもの。何ぞ獨り廉將軍を恐れんや。」

十二96 〇 〇 孟子の幼時母は(略)、市井の感化を恐れて、三度其の居を遷せりといふ。

十二113 〇 〇 (略)、小敵を侮らず、大敵を恐れず、(略)。

おそろおそろ「恐恐」(副) 1 恐ルく 八30 〇 〇 (略)死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。(略)。工恐ルく近ヨリテ見レバ、(略)。

おそれ「恐」(名) 2 おそれ 十二18 〇 〇 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、中央氣象臺は(略)之を豫告す。

十二18 〇 〇 信號は(略)。(略)、圓錐形を以て暴風雨のおそれあるを示す。

おそれい「恐入」(四) 1 恐入「一(リ)」

十一62 〇 〇 (略)法會相當度候間、御多用中恐入候へども、御参列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

おそれる「恐」(下二) 4 オソレル おそれる 恐れる「一レ・一レル」

五7 〇 〇 (略)、ワルモノドモハ(略)ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ行キマシタ。

六51 〇 〇 そこで支那もおそれて、わぼくを申しこんで來ましたが、(略)。

七87 〇 〇 日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。

十86 〇 〇 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするのも、人に恐れるからである。

おそろし「恐」(形) 2 恐ロシ 恐ろし「一シキ」

九41 〇 〇 (略)箱根七湯モ、遠キ昔ハ

共ニ恐ロシキ噴火山ナリシナリ。 九58 〇 〇 きたなき水を飲みて、恐ろしき病にかゝる者多し。

おそろしい「恐」(形) 6 おそろしい 恐ろしい「一イ」

五48 〇 〇 (略)、耳がさけるやうなおそろしいかみなが鳴りました。

七65 〇 〇 又きたない水やくさつた水を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがある。

七84 〇 〇 航海といふものは(略)、又時にはおそろしい目にあふこともあります。

八31 〇 〇 せが高く、目がするどくて、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。

八44 〇 〇 一服のすひがらがこんな大火事になつた。火は實に恐ろしいものだ。

九68 〇 〇 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、稲の花は散る、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

おそろしがる「恐」(五) 2 恐ろしがる「一ル」

七88 〇 〇 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。

七88 〇 〇 たとへば自分のうちを恐ろしがる様なもの、(略)。

おそろしげ「恐」(形状) 1 恐ろしげ

八五七 目の最も恐ろしげなのは、わし・たかの類で、(略)。

おだむとくがわおだにこう

おたいら・ける「御平」(下二) 1 オタ

ヒラゲル「一ゲ」

五七 天皇ハ國ノ中ノワルモノド

モヲコラズオタヒラゲニナツテ、(略)。

おたがい「御互」(名) 2 おたがひ

七二〇 どのいふわけで、おたがひに親類の間からでございますか。」

九二四 其の時にはおたがひに目ざましい働きをして、我が高千穂艦の名をあげよう。

おださま「織田様」(人名) 1 織田様

七四二 御主人織田様には、

近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。

おだしなさる「御出」(五) 2 お出し

なさる「一イ」

五六八 それから今すぐにへんじを書いてお出しなさい。」

五六七 それから表の方へあて名を書いてお出しなさい。」

おだしもうしあ・げる「御出申上」(下二)

1 お出し申し上げる「一ゲ」

五四 手力男のみことといふ力のつよい神さまが、(略)、すぐに大神のお手をとつて、お出し申し上げました。

おだす「御出」(五) 1 お出す「一

シ」

八四九 くに頼信紙があるから、書いてお出し。」

おたず・ねる「御尋」(下二) 2 オタツ

ネル「一ネ」

四五七 ソコヘカミサマガタガ

オトホリガカリニナツテ、「ナゼ

ナクノカ。」トオタツネニナリ

マシタ。

四五九 コノ神サマモ、「ナゼナク

ノカ。」トオタツネニナリマシ

タカラ、(略)。

おた・つ「御立」(五) 1 お立つ「一

チ」

六三八 午前六時の汽車で、おとうさ

んが京都へお立ちになった。

おだのぶな「織田信長」(人名) 3

織田信長

六四五 (略)、木下藤吉郎秀吉と名の

つて、織田信長につかへました。

七三九 山内一豊が織田信長のけらい

になったばかりのころ、大そうよい

馬を賣りに来た者がありました。

十二二八 家康直ちに勝商をして織

田信長に見えて、長篠城の急を告げ

しむ。

おだまきむしずのおだまき

おだやか「穩」(形状) 1 おだやか

三五一 今日 は なみ が おだやか

で、舟がたくさんおきへ出て

ゐます。

小田原城

十二八二 小田原城の遠征時代は

(略)、北條早雲が小田原城に據り

て、次第に其の權力を四隣に張らんと

とせる頃なりき。

おちあ・う「落合」(四) 1 落合フ「一

フ」

九一六 利根川ノ本流ハ(略)。鬼

怒川ノ落合フ所ヨリ少シク下流ニア

タリテ船戸アリ。

おちい・る「陥」(四) 1 陥る「一リ」

十二三二 足利氏の大兵來り攻め、

城遂に陥り、保・義鑑共に戦死す。

おちかか・る「落掛」(五) 1 落ちかゝ

る「一ル」

十一五五 (略)、百雷の一時に落ちかゝ

る様なひとと共、山のやうな

雪なだれがなだれて来て、(略)。

おち・く「落来」(カ来) 1 おち來「一

クル」

八六一 堅田の浦の浮御堂、おち

來るかりもふぜいあり。

おちぐち「落口」(名) 1 落口

九九六 此の湖の落口は華嚴瀧とな

る。

おちこ・む「落込」(五) 1 落ちこむ

「一ン」

九八四 熊吉は(略)、そのはずみに

ころころと轉がつて、池の中へ落ち

こんだ。

十八八 笠置の山の行在所、寄す

る雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち

給ふ。

おちつく・く「落着」(五) 4 おちつく

落ちつく 落付く「一イ・一カ」

四八八 (略)、船がゆれて、まどが

さだまりません。しばらく目を

つぶつて、(略)、こんどは扇が

少しおちついて見えます。

六七一 よくおちついてゐて、少しも

書きそこなひなどをしてない子供も

ございました。

十〇一 森林は(略)、又常に土地

をうるほして、土砂を落付かしむ。

十六六 船長の落ちついた力のこもつ

た號令に、船ははや方向を轉じて、

北へ向つて走る。

おちば「落葉」(名) 2 落葉

十九二 (略) 落葉・こけ及び(略)

木の根などは、地上に落ちたる水を

ふくみさゝふること、あたかも海綿

の如くなるを以て、(略)。

十二八三 (略) 妙音は、忽ち人の心

を百花満開ののどかな春によはせ、

又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈

ませる。

おちや「御茶」(名) 1 オチャ

二九一 オハナハオキクヲザシキ

ヘトホシテ、オチャトオクワシ

ヲダシマシタ。

おちよ「話し手名」1 おちよ

五五五 おちよ「それでも私はまだ手

紙の書き方を習ひませんか、どう書いてよいかわかりません。」

おちよ〔人名〕8 オチヨ おちよ

四四二 1 おちよはそれを見て、母に「(略)。」と問ひました。

四四四 1 おちよは又、「(略)。」と問ひました。

五三六 (略) 母は手紙をおちよにわたしました。

五三八 おちよは取上げて讀んで見ると、(略)。

五六四 おちよはよろこんで、母にはなしますと、母は「(略)。」

五五九 おちよはしばらく考へて、葉書の裏へ次のやうに書きました。

五六一 オチヨトオハナハアネニツレラレテ、オ宮ニサンケイシタ。

五六一 オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシテラガンダ。

おちよさま〔人名〕1 おちよさま

五六一 九月十三日 あねより おちよさま

おちよさん〔人名〕1 オチヨサン

四七五 母ハ來テ見テ、「(略)。

オチヨサンヤオマツサンヲヨンデ來テ、オアソビナサイ。」

お・ちる〔落〕(上二) 19 オチル おちる

二一六 (略) クハヘテキタサカナハミヅノナカヘオチマシタ。

二一八 (略) 木ノハガトンデキマス。(略) ミヅノウヘニオチ

テ、フネノヤウニナツテ、ハシルノモアリマス。

三二八 ヒバリガ(略)。(略) オリルトキニハ、オチルヤウニハヤクオリテキマス。

三二八 ダンダンノビルト、タケノカハガオチテ、リツパナ竹ニナリマス。

三三〇 くだれやなぎにとびつくかへる、とんではおち、おちてはとび、(略)。

三三〇 (略) とんではおち、おちてはとび、(略)。

三五一 (略) おちても、おちても、またとぶほかに、(略)。

三五一 (略) おちても、おちても、またとぶほかに、(略)。

四二四 コノゴロハクリノオチルジブンデ、(略)。

四二六 はのおちた木もみんなまつ白になつて、(略)。

四二六 赤い扇はかなめのきはをいきられて、(略) 波の上に

おちました。

五八七 私はもと雨の一しづくです。(略) 風にふかれて、土の上へおち

ました。

五七三 (略) 「かみなりは高いもののある所へおちるのだ。

五八五 (略) かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてあまし

た。

五七一 (略) 「ジブンノ角ハジツニリツパナ物ダ。(略) 毎年春ニナルトオチルガ、オチルトスグ又新シイノガハエテ、(略)。

五七一 (略) 毎年春ニナルトオチルガ、オチルトスグ又新シイノガハエテ、(略)。

六二一 一人の子どもが水がめのふちへ上つて、遊んでゐるうちにふみはづして、かめの中へおちました。

六四二 サルモ木カラオチル。

六六八 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、

後カラ一ツツツヌケテオチルノヲ知リマセン。

おつ〔乙〕(名) 2 乙

九八八 (略) タトヘバコニ漁夫アリテ、(略) 先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタ

リトセヨ。其ノ農夫若シ魚ヲ望マズバ、更ニ乙ノ農夫ノ所ニ行カザルベ

カラズ。

九八八 (略) 乙ノ農夫モ亦魚ヲ望マズバ、更ニ丙丁ノ農夫ニ談ゼザルベカ

ラズ。

おつ〔落〕(上二) 13 オツ おつ

つ『チ・ツ・ツル』とくづれお

つ・ながれおつ

七七八 (略) のきよりおつる雨だれのたえず休まず打つ時は、石にも穴

をうがつなり。

七八九 (略) 大砲ノヒマキハ、天モオチ、海モサクルカト思フバカリナリ。

七九二 (略) ボートハ水ニオツル砲丸ノシブキニ包マレタリ。

九八〇 (略) 花咲く春あれば、葉落つる秋あり。」

一七九 (略) 昔より富士は日本一の高山と稱せられしが、(略) 臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一九一 (略) 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。

一九九 (略) などは、地上に落ちたる水をふくみさゝふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。

一五一 (略) 敵は一人、此方は二人。三人組合ひて馬より落つ。

一二五 (略) 大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。

一四一 (略) 主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を挙げしが、(略) 笠置も落ちたる由風聞ありしかば、(略)。

一六八 (略) 街上に落ちたる硝子の一片を去るも、公衆の利益なるべし。

一七八 (略) 又嚴冬の頃は瀑水落つるに隨ひ氷結して、一面玉山銀臺となり、(略)。

一九〇 (略) 此の草の成長を保護し、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

おつかい「御使」(名) 1 オツカヒ

三二〇 ワタクシハ(略)、イモウトノモリヲシタリ、オツカヒニイツタリシマス。

おつかける「追掛」(下二) 3 オツカケル 追つかける「一ケ」

五七三 タクマシイ大キナカリ犬ガ四五匹デオツカケテ来マス。

六三二 直吉は(略)。今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」

といつて、すぐに追つかけて行つて、残りの一錢を渡した。

十一四八 一「それ、馬主が逃げた。」といふので、大將の部下の二三人は

(略)、其の跡を追つかけた。

おつかさん「御母」(名) 3 おつかさん

九二二 大尉は(略)、水兵の手を握つて、「(略) おつかさんの精神は

感心の外はない。

九二二 〇 おつかさんは「一命をすてて君に報いよ。」といつて居られるが、(略)。

九二三 〇 此のわけをよくおつかさんにいつて上げて、安心させるがよい。

おつき「御着」(名) 1 お着

七二七 〇 ぶじお着のことと存じます。(略) 東京へお上りはおうらやましい事でございます。

おつ・く「御就」(五) 1 オツク「一

キ」

五七八 天皇ハ(略)、天皇ノオクラ

ホニオツキニナリマシタ。

おつしやる「仰」(五) 5 オツシヤル

おつしやる「イー・ツ・ール」

三三八 これがなければ、せんせいの

おつしやることや、みんなの言ふことがわかりません。

三六四 私ををぶさんに、「(略)。」とききましたら、「貝ざいくを

賣るみせで買つてきたのです。」とおつしやいました。

四六九 〇 オイシヤサマノオツシヤルトホリノマナケレバナリマセン。」

五七四 〇 この間先生がおつしやつたではないか。」

七二六 〇 (略)、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、御参

りよなくおつしやつて下さい。

おつて「追手」(名) 3 追手

十一四八 アラビヤ人は(略)、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。

十一四八 〇 追手が接近すれば速力を速め、後れは脚のききみを短くする。

十一四八 〇 追手のトルコ人は如何ともすべき方法が無い。

おつて「追」(副) 1 追て

十一六三 〇 追て準備の都合もこれ有り候間、(略) 御一報下され度候。おつと「夫」(名) 6 夫

七四〇 妻はこれ聞いて、夫に向つて、「(略)。」

七四九 〇 このお金は(略)、『夫の一大事の折に使へ。』と申して、父の

渡してくれた金でございます。

一六二 〇 紫式部は(略) 夫に別れて後、宮中に召されて、(略)。

一三〇 〇 形名の妻、夫を勵まして、(略)。

一三二 〇 かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略)。

一三三 〇 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。

おつとせい「臘臍」(名) 2 ヲツトセイ 臘臍

七三〇 陸ノケモノニニタモノニハ、ラツコ・ラツトセイナダガアリ、(略)。

十一九七 〇 (略) こゝに集る臘臍は數千頭にも達することこれあり候。

おつみなさる「御摘」(五) 1 オツミナサル「一イ」

三七八 〇 (略)、マサヲサンハタ

ンポボヲオツミナサイ。」

おつる「人名」 1 おつる

六六〇 〇 姉のおつるは立ちよつて、(略)。

おて「御手」(名) 1 お手

五四一 〇 手力男のみことといふ力のつよい神さまが、(略) 大神のお手をとつて、お出し申し上げました。

おてかず「御手数」(名) 1 おてかず

七二八 〇 (略) めづらしい草花をほしくと申して居りますから、お

てかずでも、これも二三種買つて来ていたゞきたうございます。

おてがみ「御手紙」(名) 2 お手紙

五三二 〇 「ねえさんの所からお手紙が来てゐます。

五三六 〇 お手紙をいたゞいて、まことにうれしうございます。

おてほん「御手本」(名) 1 オテホン

二四八 〇 (略)、一サツハカキカタノオテホン、(略)。

おてら「御寺」(名) 5 オテラ オ寺

一五三 〇 オミヤノモリへ、オテラノヤネへ、カアカア、カラスガナイデイク。

五二四 〇 日本一ノ大キナホトケサマハ、ナラノオ寺ニアリマス。

六三九 〇 清水寺をはじめ、たくさんのお寺やお宮へさんけいした。

六四四 〇 うちがまづしかつたので、八つの時にお寺へ小ぞうにやられました、(略)。

六四七 〇 お寺では「こないたづら者はごめんです。」といつて、うちへかへしました。

おと「音」(名) 25 オト おと 音

あしおと・つつおと・みずおと・ものおと

四三九 〇 ソノウチニ海ノ水ヲ

カキマハスヤウナ 大キナ オト
ガシマシタ。

五12 1 ある時上の方でさわがしいお
とがするから、見上げると、はしが
かけてあつて、人や馬や車がたくさ
ん通つてゐるのです。

五43 6 ソノウチニ下ノ方デカミナリ
ノヤウナ音ガシマシタ。

五67 4 イサマシイタイコノ音ガ森ノ
中カラキコエテクル。

五70 4 見セ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤ
ラ、フエ・タイコデハヤシタテル音
ヤラ、ニギヤカナコトデアル。

五73 1 ソノ時後ノ方カラカリウドノ
來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ
出シマシタ。

六62 4 園 園 「わるい子どもが大ぜい
で、わたしの手からもぎ取つて、は
ふつた音はしましたが、(略)。」

七12 2 園 たなのもちひくねずみの音
も、ふけてのきばに雪降積る。

七31 3 大きな蠶がたくさんで桑の葉
を食ふ時には、木の葉に雨が降りか
ゝるやうな音がする。

八31 7 「トンテンカン、トンテンカ
ン」と、毎朝早くから弟子を相手
につちを打つ音が聞える。

八74 7 園 虎モ猫モ足ノ裏ヤハラカナ
レバ、歩ム時音ヲ立テズシテ、(略)。

九64 5 園 扇を使へば風起り、むちを
ふるへば音を發す。

九67 4 春の雨はしめやかに降つて、

のきの玉水の音も靜かに聞える。
九70 1 葉の散果てた冬木立に吹きす
さむ木枯の風は音を聞くだけでも物
すこい。

九70 5 夜が更けて、雨の音が靜かに
なつたから、止んだことと思つてゐ
ると、(略)。

十14 10 園 (略)、折からの 夜半の
あらしに そののちは 音もきこえ
ず。

十74 7 園 湯のわき出づる處二十餘箇
所、(略)。噴出する時は湯氣立ちの
ぼりて、鳴動の音すさまじ。

十一3 2 園 花よねてよしや吉野の
よし水は まくらのもとより石走る音。
十一55 8 靜かな山の中に流れる水の
音が遠く聞えるばかり。

十一55 9 しばらくすると、谷底の方
に太鼓の音がかすかに聞える。

十一56 6 打鳴らす太鼓の音は段々に
低くかすかになる。

十一58 4 將軍が谷底へ下りた時に
は、もう太鼓の音は聞えぬ。

十一80 10 園 ふなばたを打つ音、ほ
うくと呼ぶ聲、水に飛散る火のこ
の光にはげまされて、鶉は盛に活動
し、(略)。

十一111 5 秋の夜長には衣打つきぬた
の音が村々相應じて聞える。

十二26 5 園 建長・圓覺古寺の 山
門高き松風に 昔の音やこもるらん。

おとうさん【御父】(名) 6 オトウサ

ン おとうさん

二26 3 オトウサン ハマダカヘリ
マセン。

二26 7 ソコヘ オトウサン ガカヘ
ツテ キマシタ。

三11 6 オトウサン ヤニイサン ハ
マイアサハヤク カラタンボヘ
イキマス。

三57 2 アソコ ニハ オトウサン ノ
チャイロノ オビガアリ、(略)。

六38 4 午前六時の汽車で、おとうさ
んが京都へお立ちになつた。

六38 8 午後京都からおとうさんの手
紙が着いた。

おとうと【弟】(名) 7 オトウト 弟
ひおんおとうと

三10 4 ウチニハ(略)、オトウト
トイモウトガ一人 ヅツ アリマ
ス。

三11 3 オトウト ハ犬ガスキデ、
イツモ ブチトアソンデキマス。

四58 8 コノ神サマハサキホドオ
トホリニナツタ 神サマガタノ
弟ノ方デス。

十一60 3 園 出征兵士の弟ぞ、我は。
十一60 6 園 親に事へ、弟を助け、
家を治めん、妹我は。

十一61 1 園 きらばきらば、父母き
らば。弟きらば、妹きらば。

十二31 6 園 (略)、瓜生保其の弟義鑑
等と共に杣山に旗あげして義貞に應
ず。

おとおりがかる【御通掛】(五) 1 オ
トホリガカル 《一リ》

四56 8 白ウサギハ(略)、ナイテキ
マシタ。ソコヘ カミサマガタガ
オトホリガカリ ニナツテ、(略)。

おとおすじ【御通筋】(名) 1 オト
ホリスジ

五6 1 コノ天皇ガワルモノドモヲ御
セイバツニナツタ時、オトホリスヂ
ノミチガケハシクテ、オコマリノコ
トガゴザイマシタ。

おとおる【御通】(五) 3 オトホル
《一リ》

二60 5 トノサマガココヲオトホ
リニナツテ、(略)。

二63 6 ソノウチニトノサマガ
オトホリニナツテ、(略)。

四58 6 コノ神サマハサキホドオ
トホリニナツタ 神サマガタノ
弟ノ方デス。

おとこ【男】(名) 14 ヲトコ 男

二29 2 ヲトコノ子モ、ランナノ子
モ、オモシロサウニアソンデキ
マス。

三45 6 あるばん一人の男がそ
らをむいて、(略)。

五17 7 男ノ子ノアルウチデハ、五月
ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立テマ
ス。

五77 1 見ると丈の高い、たくましい
男である。

六30 1 ある日(略)、一人の男の子が

ふでを買ひに來た。

六30 5 男の子も氣がつかずにそのまゝかへつた。

六74 5 男や女や年よりや子供も大ぜい集つてゐますが、(略)。

六75 7 一人の年取つた男がこゑをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、(略)。

八23 8 此の男は居酒屋に酒代の借があるの、(略)。

十16 1 〔図〕 紫式部は幼き頃より物覺よく、(略)、父の爲時は常に其の頭をなでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

十29 9 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て來て、(略)。

十36 6 〔図〕 それで注意深い男といふことを知りました。

十108 4 男はゆるやかな股引をはき、胴衣を着けて、其の上に長い上衣を着る。

十108 9 男の冠をかぶり、其のひもを長くたらし、小馬に乗つて、田舎道を通るのを見ると、昔の人に會つた様な氣がする。

おとごさかり「男盛」(名) 1 男盛り

七6 8 〔図〕 「父正成ノ戦死セシ時、臣ハワツカニ十一歳、(略)。シカルニ正行スデニ男盛りニ及ベリ。

おとこまさり「男勝」(名) 1 男勝り

十70 10 〔図〕 山なす大波を物とせせず、男勝りの大力にてボートをあやつり

しダーリングの手は、今ややさしきをとめの手にかへりて、(略)。

おとし ひとよりごえのさかおとし

おとし いる「陥」(下二) 1 陥る「レ」

十二56 8 〔略〕、露軍は海軍根據地として此の地を死守し、我が軍は苦戦十一箇月にして之を陥れたり。

おとしだま「御年玉」(名) 2 オトシダマ おとしだま

二49 1 〔略〕、オカアサンカラオトシダマニイタダイタ本ガ一サツアリマス。

四41 8 をぼさんからいただいたおとしだまにのしがついてゐました。

おとしもの「落物」(名) 1 おとし物

六60 8 〔図〕 もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)、ことばやさしくなくさめる。

おとしろう「音次郎」「人名」 5 音次郎

五45 8 ある日友吉と音次郎の二人がよそからかへつて來る道で、(略)。

五46 5 音次郎はおどろいて、道ばたの高い木の下へにげこみました。

五47 2 友吉は(略)、そこをのかせようとしたが、音次郎はなかくきまぜん。

五47 8 音次郎が木の下を出ると、間もなく目がくらむやうないなびかりがして、(略)。

五48 7 音次郎は友吉のかたに手をかけて、(略)。

おとす「落」(四・五) 6 オトス おとす 落ス 落す「一サ一シ」ひい

おとす・かきおとす・ききおとす・せめおとす・たたきおとす・はきおとす・はたきおとす・ふるいおとす

六70 8 字を書くのに、筆をおとしたり、すみをこぼしたり、(略)。

七17 〔図〕 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

九22 2 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、(略)、「わたしが惡かつた。おつかさんの精神は感心の外はない。(略)。

九56 2 〔図〕 農夫ナドハ小枝ト見テガヘテ、土ビンヲカケ、落シテワルコトアリ。

九78 10 〔図〕 是は菅原道眞が右大臣といふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅立たんとする時、(略)。

十22 7 〔図〕 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落シ、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」トイフ。

おとと ひとあにおとと

おとな「大人」(名) 5 おとな 大人

六72 5 〔略〕善い子供は、おとなになつてから、りつばな人になりました。

六72 8 〔略〕悪い子供は、おとなになつてから、大ていつまらない人になつてゐます。

七4 8 〔図〕 大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七74 2 陸ニスムモノデハ、象ガマヅ一番大キイガ、鯨ニクララルト、大人ト赤子ヨリモ、モツトチガフ。

十一109 6 金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎててもチョンガーで、大人の仲間入が出來ない。

おとな「訪」(四) 2 音ナフ 訪フ

「ヒ一」

八29 9 〔図〕 數日ノ後、川成ヨリ「(略)」。御出アリタシ。」ト、エノモトニイヒ來レリ。工、川成ヲ音ナヘバ、「イザ、コナタヘ。」トイフ。

十一102 6 〔図〕 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

おとなげなし「大人氣無」(形) 1 大人げなし「一シ」

十54 1 〔図〕 平生にても、若き人は白髪を見て悔る心あり。まして戰場にては、進まんとすれば、大人げなしとあざけり、(略)。

おとなしい「大人」(形) 2 おとなしい「一ク」

十85 8 西洋の馬がおとなしくて、日本馬の馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、(略)。

十85 9 西洋の馬がおとなしくないのは、育て

方・使ひ方にあることで、(略)。
 おとなり「御隣」(名) 1 おとなり
 七68 母はこんな美しい大きな桃
 は、はじめて見たと申して、おとな
 りへもおすそ分けをいたしました。
 おとびなさる「御跳」(五) 1 オトビ
 ナサル「一い」
 一49 サア、タケヲサンカラオ
 トビナサイ。一ペン二ヘン三ベン
 (略)。
 おとひめ「乙姫」(人名) 4 オトヒメ
 三67 リユウグウニハオトヒメ
 トイフクレイナオヒメサマガ
 居テ、(略)。
 三69 (略)ウラシマハ(略)、ア
 ル日オトヒメニ、「(略)、モウウ
 チヘカヘリマセウ。」トイヒマシ
 タ。
 三70 オトヒメハ「(略)。」トイ
 ツテ、タマテバコトイフリツパ
 ナハコヲワタシマシタ。
 三73 (略)、オトヒメノイッタ
 コトモワスレテ、タマテバコヲ
 アケテ見ルト、(略)。
 おとみ「話し手名」 3 オトミ
 四23 オトミ「ソノ糸ハ一カケ
 イクラデスカ。」
 四24 オトミ「ソレデハ五カケモ
 ラヒマセウ。」
 四25 オトミ「ソノ細イノヲ二
 本クダサイ。」
 おとみ「人名」 2 オトミ

四23 オマツガオトミトアキナ
 ヒノアソビヲシテキマス。
 四26 オトミハマルクキツタ白
 イ紙ヲ三ツ出シテ、(略)。
 おとめ「乙女」(名) 2 をとめ
 七9 園(略)、あちらこちらに桑つ
 むをとめ、日まし／＼にはるごも太
 る。
 十71 園(略)、男勝りの大力にて
 ボートをあやつりしダリリングの手
 は、今ややさしきをとめの手にかへ
 りて、半死半生の水夫を親切に看護
 せり。
 おとも「御供」(名) 3 オトモ 御供
 二64 トノサマヤ、オトモノ人
 ノ目モ、口モ、耳モ、ハヒダラ
 ケニナリマシタ。
 四59 アニ神サマガタノオトモ
 ヲシテ、フクロヲカツイデイラ
 ツシヤツタノデ、オソクオナリ
 ニナツタノデス。
 十88 園 君の御供に仕へしは 藤
 房・季房唯二人。
 おとよさん「人名」 1 オトヨサン
 二5 園「オトヨサンノハドレ
 ニシマセウ。」
 おとらせる「御取」(下二) 1 オトラ
 セル「一セ」
 三14 ソレヲ天子サマガオキ
 キニナツテ、ノミノスクネト
 イフ人トスマフヲオトラセニ
 ナリマシタ。

おどりのいず「躍出」(下二) 1 ヲドリ
 出ツ「一デ」
 八53 園(略)、長キヤリヲトツテ物
 カゲニカクレ給フ。(略)。皇子コラ
 ヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩
 ヲキリ給フ。
 おどりにこむ「踊込」(五) 1 ヲドリコ
 ム「一ン」
 八86 中佐ハマツサキニ立ツテ、敵
 中ヘヲドリコンデ、タチマチ三人ノ
 敵ヲ斬り殺シタ。
 おどりとつ「踊立」(四) 1 をどり立
 つ「一ツ」
 十二3 園 此の御製を拜讀しては、
 何人も義勇の心にとどり立つるべ
 し。
 おとる「劣」(四・五) 5 オトルお
 とる 劣る「一ラ一レ」
 六55 その相手は武田信玄で、これ
 も謙信におとらないいくさの上手で
 あつた。
 七1 園 楠木正行ハ正成ノ子ニシ
 テ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。
 九60 園 空気の大切なことも食物
 におとらず。
 十86 豚肉はあぶらに富んでゐて、
 養分の多いことは牛肉におとらぬ。
 十二10 園 国力我に劣れる國民を見
 て、やゝもすれば輕侮の念を以て之
 を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ば
 ざるが如きは、(略)。
 おとろつ「衰」(下二) 4 オトロフ

衰ふ「一フ一へ」
 十一52 園 一家和合セザル時ハ家道
 次第ニオトロヘテ、笑聲ノ戸ヨリモ
 ル、事ナカルベシ。
 十一52 園 天性快活ナル人モ、身體
 ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロ
 ヘテ笑フコト少シ。
 十二93 園 當時支那は王室衰へ、諸
 侯各其の國によりて互に勢を争ひた
 り。
 十二114 園 此の風一度軍人の間に
 起りては、士氣も兵氣も衰ふべけれ
 ば、(略)。
 おとろえる「衰」(下二) 1 オトロヘ
 ル「一へ」ハやせおとろえる
 七27 園 家デモ國デモ(略)。フトコ
 ロ手バカリシテキル人ガ多クレバ多
 イ程オトロヘマス。
 おどろかす「驚」(四) 2 オドロカス
 驚かす「一ス」
 七54 園 銀座通ノニギハシサマヅ目
 ヲオドロカス。
 九93 園 其の上にかゝれる朱塗の
 橋、美觀先づ目を驚かす。
 おどろき「驚」(名) 1 驚
 九47 園 又一人、然らばかの子供の
 乗れる駱駝を殺さん」といふ。之を
 聞けるアリの驚は一方ならず、(略)。
 おどろきいる「驚入」(四) 2 驚き入
 る 驚入「一リ」
 九71 園(略)、本日の新聞により、
 御地方は非常の出水にて、死傷も少

からざる由承知致し驚き入り候。

十一 36 3 國 (略)、いよく實地見聞致候へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。

おどろきおそる「驚恐」(下二) 1 驚き恐る「一レ」

十二 66 6 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、一隊又一隊、續々相次ぎ、三日三夜引きも切らず、人々の驚き恐れて逃げかくるゝ中、(略)。

おどろく「驚」(四・五) 36 オドロク

おどろく 驚く 驚く「一イ・一カ・一キ・一ク」

三 72 6 ウチヘカヘツテ見ルト、オドロキマシタ、父モ母モシンデシマツテ、ジブンノウチモアリマセン、トモダチモミンナキナクナツテ、知ツテキルモノハ一人モアリマセン。

五 1 6 ある時生馬のかはをはいで、(略) おなげ入れになりました。大神はおどろいて、あまの岩戸の戸をたてて、その中へおかくれになりました。

五 46 5 (略)、雨もつよくふつてきました。音次郎はおどろいて、道ばたの高い木の下へにげこみました。

五 73 2 ソノ時後ノ方カラカリウドノ來ル音ガシタノデ、オドロイデカケ出シマシタ。

六 40 1 三十三間堂のほとけのかず

の多いにはおどろいた。

六 56 2 信玄はふいをうたれておどろいたが、たちまち陣立をかねて、敵を引受けた。

六 57 6 (略) 馬のしりを力一ぱいになぐりつけた。馬はおどろいてとび上つた。

七 41 2 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、「略」一豊はおどろいて、「これは又どうした金か。

八 24 1 此の男は居酒屋に酒代の借があるのので其のかたに持つて行かうとするのです。農夫は驚いて、其の麥俵を取りもどしました。

八 29 1 (略)、何心ナクエンニ上リテ、南ノロヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト閉ジ。驚キテ西ノロヨリ入ラントスレバ、其ノ戸マタハタト閉ジテ、(略)。

八 30 4 (略)、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、(略)。

八 38 8 我等ハ平生マツチヲ用ヒナレタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、此ノモノノナカリシ昔ヲ思ヒ出ストキハ、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カルナリ。

八 39 1 マツチノ製造ニハ驚クベキ手數ノカ、ルモノナリ。

九 19 8 (略)と言葉鋭くしかつた。水兵は驚いて、立上つてしばらく大

尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「それは餘りな御言葉です。

九 31 8 フルトンが工夫に工夫を重ねて造つた最初の船は、(略)、不幸にも直に沈んでしまつた。フルトンは之に驚かず、(略)、又一つの船を造つた。

九 35 2 見物人一同は其の早いのと其の勢のすさまじいのに驚いた。

九 40 9 昔ヲ知レル人、若シ舊道ノ今ノサビシサト、昔ノニギハシサトヨクラベ見バ、世ノ轉變ノ如何ニ甚ダシキニ驚クナラン。

九 73 9 (略)、隣村にて早がねを打出し候。驚きて飛出し候へば、川上の堤防切れ、隣村は大半水中になり、(略)。

九 80 1 「驛長驚くなかれ、時の變り改るを。花咲く春あれば、葉落つる秋あり。」

九 84 10 熊吉は(略)、池の中へ落ちこんだ。愛作は驚いて、ひらりと馬から飛下りて、すぐに熊吉のえりを引つつかんで、(略)。

十 22 10 老人足ニテ之ヲ受ケ、笑ヒテ去ル。驚キテ目送スレバ、ヤ、アリテ引返シ來リ、(略)。

十 96 10 東大寺ハ(略)、タマニ大佛ノ大キサノ驚クベキノミナラズ、大佛殿ノ高サ十五丈、東西長サ二十

九丈、眞ニ世界第一ノ木造建築物ト

ス。

十一 23 10 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

十一 24 9 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん。

十一 28 9 國運發展の速なること實に驚くにたへたり。

十一 45 5 思はず大聲をあげて泣號びぬ。正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、(略)。

十一 46 7 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、四五日間うち通し、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。

十一 57 2 此の時「自分が行かう。」とさけぶ人を誰かと見れば、將軍マクドナルである。(略)。兵士等は驚いた。

十一 74 2 (略)、「今日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、夜中のぞき見たる姿をして見るに、畫師は驚きて、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。

十一 74 8 然るに未だ一月もたざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。住持は驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、再び歸り來られしは何故ぞ。」と問へば、(略)。

十一 80 9 此の間に鵜を引上げて呑みたる魚を吐かせ、再び之を水に放

ち、又かゞり火に薪を添ふるなど、其の手練實に驚くべし。

十一84㉔ (略)、其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

十一87㉔ 機械ノ力ハ驚クベキモノニアラズヤ。

十二33㉔ 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り来らずとも限らず。

十二79㉔ (略)、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。

十二87㉔ 喜劍 (略)、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、驚いて曰く、「(略)。

我が心の良雄を默待せしは罪死に當れり。」と。

おなか「御中」(名)2 オナカ おなか

二38㉔ カゼヲヒイタリ オナカ

ライタクシタリシタトキニ、シン

ンバイシテ、(略)。

六60㉔ もおなかでもいたいの

か、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

おなか「御仲間」(名)1 おなか

四28㉔ 「おきくさん、(略)。あなたのおなかまは大てい枯れてしまつたやうです。

おなげい・れる「御投入」(下一)1 おなげ入れる「ーレ」

五15 (略)、すさのをのみことといふきのあらい神さまがありました。

ある時生馬のかはをはいで、大神がはたをおらせていらつしやる所へおなげ入れになりました。

おなごりおし・い「御名残惜」(形)1

オナゴリラシイ「ーイ」

三70㉔ (略)、モウウチヘカヘリマセウ。」トイハマシタ。オト

ヒメハ「ソレハマコトニオナゴリラシイコトデゴザイマスガ、(略)。」(略)。

おなじ「同」(形状)7 同ジ 同ジ

あいおなじ

四21㉔ (略)、ミンナデ五人デ

スカラ、カタ手ノユビノカズト同ジデス。

四32㉔ (略)ごはんにくと麦と、うどんやさうめんにする

麦は同じですか、ちがひますか。」

四33㉔ 「同じです。」

四34㉔ 「それではあんの豆と、

だんごにつけるこな豆と同じですか、ちがひますか。」

七13㉔ かけとかけねとは同じですか。

八93㉔ 橘中佐ハ(略)。(略)、軍神ト

イハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデ

アル。海軍ノ廣瀬中佐モヤハリ同ジ

デアル。

十85㉔ 馬も牛と同様に(略)。死んだ後で、身體の全部にすたりのない

ことも牛と同じである。

おなじ「同」(連体)15 オナジ 同ジ

三28㉔ (略)タケノコガ、モウコ

ンナニノビテ、私ノセイトオ

ナジクラキニナリマシタ。

五43㉔ 走ツテキル汽車ガスレチガフ

時ニハ、向フノ汽車ニツツテキル人

ノカホハヨク見エマセン。向フノ汽

車カラコチラノ汽車ヲ見デモ、同ジ

コトデセウ。

六11㉔ かへりには同じ道を通らず

に、別の道から下りました。

六29㉔ 直吉と長松は同じ店のでつち

であつた。

七80㉔ 「私も子供の時には毎日

この學校へ通つて、皆さんと同じ様

に、あの運動場で體操をしたり、こ

の講堂でお話を聞いたりしてゐたの

です。

八65㉔ 藍ノ草ハ綿ノ木ト同ジ様ニ細

ニ作リマス。

十21㉔ 活版は印刷が終れば、其の活

字を取離すことが出来るから、同じ

活字を何度でも組立てて使へる。

十一99㉔ 同ジ人数デ同ジ時間ニ物ヲ

製造スルノニ、(略)。

十一99㉔ 同ジ人数デ同ジ時間ニ物ヲ

製造スルノニ、(略)。

十一910㉔ (略)、全體ノ人ガ同ジ仕事

ヲスルヨリモ、分業デスル方ガ(略)。

十一107㉔ 又毎日同ジ仕事ヲクリカヘ

スカラ、誰モ早く其ノ仕事ニ熟練スル。

十一50㉔ 古來アラビヤ人は馬を家族の一員と考へて、家長は之を自分の子供と同じ様にかはがる。

十一64㉔ 同ジ材料デモ、料理ノ塩梅ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、(略)。

十一66㉔ 日々同ジ食物ヲ用ヒルト、

アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。

十一66㉔ (略)、毎日同ジ獻立ヲクリ

カヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

おなじ「同」(形)18 同ジ 同ジ「ー

ジ・ージウ・ージカラ・ージク・ージケレ」

八76㉔ (略)、外宮に參拜す。神殿

の御有様、おほよそ内宮に同じと見

奉る。

八74㉔ 猫ノ口ニハ上下ニ二本ツツ

ノ鋭キ牙アリテ、(略)。(略)。虎モ

マタ同ジ。

八80㉔ かくの如く日本を出で、海

を越え、陸を越え、東へ東へと進め

ば、又元の日本に歸り来る。西へ西

へと進むもまた同じ。

九54㉔ タトヘバ北國ニスム野ウサ

ギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレ

ドモ、雪ノ降ル頃トナレバ、全ク白

色ニ變ジ、(略)。

九55㉔ (略)、イカハ水中ニオヨグ

間ハ水色ナレドモ、岩石ナドニ附着

スル時ハ岩石ト同ジ色ニ見ユ。

十167 清少納言も亦紫式部と同じく宮中に仕へ、其の才氣を以て知られたりき。

十79 女子は耳に耳輪をはむるこ

と男子に同じく、又口の周圍、手首・手の甲等には入墨をほどこせり。

十80 あいぬの風俗はこれのみにても既に内地人と同じからず。

十82 彼等は（略）、今は内地人と同じく、讀み書き・計算をもなし得るものあるに至り、中には小學校教員となるものもあり。

十90 御村も當村と同じく水利の良き割合には田地少く、整理の必要これあり候様存ぜられ候間（略）。

十87 蠶の絲を吐きて繭を造るは紡績の業に等しく、葉巻蟲の絲にて葉をつむり合するは裁縫の業に同じ。

十101 此の極北の寒地も今はや生れ故郷の如き心持に相成候。極南暑熱の御地にても同じことと存候。

十21 植物も動物と同じく、呼吸作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、（略）。

十32 かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、戰陣の際に良人の名譽を全うせる形名の妻と其の徳を同じうすといはん。

十33 楠木正行の母が正行を戒

め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、保の母と同じく、忠義の爲には恩愛を忘るゝ眞心より出でたり。

十51 人種・風俗ノ異ナルニ依リテ、人ノ嗜好モ亦同ジカラズ。

十53 商人ハ軍人ノ戰場ニ立ツト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戰爭ニ從事スベシ。

十111 此の如き人の組織せる軍隊は即ち鳥合の衆に同じ。

おなじく「同」(副)3 同ジク 同ジク 七21 第一あなたにも私にも豆がなります。（略）、花は同じく蝶の形をしてゐます。

八89 一彈又モ中佐ノ胸ヲツラヌキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。

（略）軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トモニ中佐ヲイタハツタ。

九82 一人は熊吉、一人は愛作といつて、年は同じく十五歳。

おなじく「同」(接)5 同ジク

七16 問合の手紙（略）同じくへん

七68 桃をおくる手紙（略）同じく

八11 寫眞をおくる手紙（略）同じく返事

九13 注文狀（略）同じく返事

九71 水害見舞の文（略）同じく返事

おなべ「御鍋」(名)1 おなべ 五20 母は「(略)」。それからそこへ入れておくれ。」

おな・る「御成」(五)3 オナル

四59 アニ神サマガタノオトモヲシテ、フクロヲカツイデイヤツシヤツタノデ、オソクオナリニナツタノデス。

四61 アナタハノチニハ、キツト兄サマガタヨリモ、オエラクオナリニナリマス。」

四62 ソノノチオホクニヌシノミコトハ（略）、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

おに「鬼」(名)1 オニ

二22 「カクレンボヲシテアソビマセウ。ワタクシハオニニナツテ、ココニタツテキマス。」

おにばす 凸おおにばす

おねがい「御願」(名)1 御願

八67 勝手がましい御願ですが、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

おねがいもうす「御願申」(五)1 お願ひ申す

七18 なるべく大きくてうまい實のなるやうなのを願ひ申します。（略）鈴木愛吉 高橋忠一様

おの「己」(代名)1 おの

十二27 古の書見る度に思ふか

な、おのが治むる國は如何にと。 おのおの「各」(名)14 各

九83 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「(略)。」などと、口々に勢をつけてゐる。

十71 数日の後、水夫は（略）、各我が家に歸りたりとぞ。

十77 目ハ色・形ヲ見、耳ハ音聲ヲ聞キ、鼻ハ香ヲカギ、口ハ味ヲ味ハヒテ、各之ヲ腦ニ報告ス。

十一51 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

十一65 又魚類ヤ野菜ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

十一76 霧降瀧は上下二層に分れ、高さ各十四五丈、（略）。

十一77 ナイヤガラ瀑布は左右二つに分れ、（略）、高さ各約十六丈あり。

十一92 一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は各其の家の他人の手に渡らんことを恐れて、争ひて高き價をつくべし。

十一92 同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、争ひて其の價を低くすべし。

十二59 ③ 倫敦にはテムズ河、巴

里にはセーヌ河、伯林にはスプリー

河ありて各其の市街を貫流す。

十二93 ⑤ 當時支那は王室衰へ、諸

侯各其の國によりて互に勢を争ひた

り。

十二107 ⑦ (略)、法律案は政府の

外、貴族院・衆議院共に各之を提出

するを得。

十二108 ⑤ 又貴族院及び衆議院は各

獨立して上奏し、建議し、且臣民の請

願を受くるの權能を與へられたり。

十二108 ⑨ 上奏といひ、建議とい

ひ、請願といひ、其の手續に於て各

相異なりといへども、要は下情上達

の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

おのずから「目」(副) 8 おのづから

自ラ 自ら

九29 ① 境内ニハ櫻最モ多ク、春ノ

盛リニハ花ノ雲タナビキテ、「花ハ

櫻木、人ハ武士。」ノコトワザモ自

ラ思ヒ出デラル。

十72 ④ 温泉のわき出づる處はおほ

むね火山の附近に在りて、四圍の風

光麗しく、神氣自らさわやかなるを

覺ゆ。

十85 ⑥ (略)、日本の馬のおとなしく

ないのは、育て方・使ひ方にあるこ

とで、日本では餘りいぢめた爲に、お

のづから荒々しくなつたのである。

十一51 ⑧ 親子・夫婦・兄弟・姉妹

ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其

ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、家運自ラ開

ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

十一52 ④ 心樂シケレバ自ラ笑フ。

十一85 ⑤ 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ

(略)。此ノ流ハ自ラ集メラレテ、

親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入

ル。

十二97 ⑥ 官位・門地・技術・財産

・學問等に於て衆を抜く者は、個人

としても自ら高尚なる品格を要する

が如く、(略)。

十二98 ⑩ 道を行くにも、舟・車に

乗るにも、旅館に宿るにも、自ら公

衆に對する禮儀あり。

おのずと「目」(副) 1 おのづと

十二20 ⑨ 又ひよやつぐみは(略) 果

實をついばむ。それが爲におのづと

種子をあちらこちらへ散布する。

おのぞく「御視」(五) 1 おのぞく

「一キ」

五3 ⑤ あまりおもしろさうなので、

大神は少しばかり戸をあけて、おの

ぞきになりました。

おのぼり「御上」(名) 1 お上り

七17 ② 此のよい時節に東京へお

上りはおうらやましい事でございま

す。

おのみち「尾道」(地名) 2 尾道 尾道

十一18 ④ 尾道

十一20 ② 瀬戸内海の沿岸には高

松・多度津・高濱・尾道・宇品等の

港多く、(略)。

おのりなさる「御乗」(五) 1 オノリ

ナサル「一イ」

三67 ② (略)、大キナカメガ出

テキテ、「(略)」。私ノセナカヘ

オノリナサイ。」トイヒマス。

おのれ「己」(名) 4 己

十一43 ⑧ 忠元あはれみて、己が家

に連歸り、(略)。

十一53 ② ヨク笑ハント欲スルモノ

ハ、常ニ其ノ行ヲツ、シミ、(略)、

外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル

工夫ヲナスベシ。

十一53 ④ 己ヒトリ樂シトテ、他人

ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ

人ナリ。

十二53 ⑧ 他人ノ惡事・短所ヲアザ

ケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナ

リ。

おば「伯母」(名) 1 伯母 伯母より

八13 ④ 十一月八日 伯母より お

はなさま

おば「祖母」(名) 2 祖母

八66 ⑦ 病中の祖母も大そうよろこ

びまして、有りがた涙をこぼして居

ります。

八67 ⑥ 祖母一人孫一人の事で御座

いますから、(略)、どうか今四五日

のところ御ゆるしを願ひ度う御座い

ます。

おばあさん「御祖母」(名) 4 オバア

サン おばあさん

一37 ⑤ オデイサン ハヤマヘシバ

カリニ、オバアサン ハカハヘ

センタクニ。

二25 ③ オバアサン ハ火ヲタイテ、

ユフハンノシタクヲシテキマス。

三12 ① ウチノ人ガミンナソト

ヘデルトキニハ、オバアサンガ

オルスキヲナサイマス。

六39 ② おぢいさんもおばあさんも

おかはりはないか。(略)。父より

太郎どの お花どの

おばうえさま「伯母上様」(名) 1 伯

母上様

八11 ⑤ 十一月五日 はな 伯母上

様

おばさま「伯母様」(名) 1 伯母様

八11 ② 伯母様お笑ひになつてはい

けませんよ。

おばさん「伯母」(名) 5 ヲバサン

をばさん

二6 ③ ヲバサンハ一バン大キ

イカラ、一バン小サイノヲト

リマス。

三57 ⑥ 私ガヲバサン カライタダ

イタムラサキ色ノハオリハ、

(略)。

四41 ⑧ をばさん からいただいた

おとしだまにのしが ついてあ

りました。

六37 ⑥ 學校からかへつてから、をば

さんの所へ使ひに行つた。

六37 ⑦ をばさんから塩せんべいをい

たゞいた。

おはじめる「御始」(下一) 1 おはじめる「一メ」

五26 よい神さまがたは、(略)、おかげをおはじめになりました。

おはじめる「御恥」(形) 1 おはじめる「一イ」

七218 図 私はこんな大きななりをしてありますが、(略)、私の豆はたべられませんが、まことにおはじめる「御恥」(形) 1 おはじめる「一イ」

おはじめる「雄蜂」(名) 4 雄蜂

十一57 図 群中には必ず雌蜂・雄蜂・働蜂の三種あり。

十一58 図 雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、雄蜂は二三百匹、餘は皆働蜂なり。

十一6 図 雄蜂

十一72 図 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、何等の労働をもなさざるを以て、秋の初には皆働蜂にさし殺さる。

おはな「話し手名」2 オハナ

三82 オハナ「ソレデハ ワタクシハスミレヲツミマセウ。」

三88 オハナ「スミレハタクサンナイカラ、マダソソナニツメマセン。」

おはな「人名」14 オハナ おはな

二74 オハナトオキクガアソンデキマス。

二87 オハナハオキクヲザシキ

ヘトホシテ、オチャトオクワシヲダシマシタ。

二186 オハナハモミデノハラ一マイヒロヒマシタ。

三66 マサヲトモキチトオハナガ三人デノハラニアソンデキマス。

五188 図 「おはなや、用があるから、ちよつとお出で。」

五192 おはなは「はい。」といひながら、いそいで行つて見ると、(略)。

五204 おはなは戸だなの中から一ばん大きなさらを持つて來ました。

五211 (略)、おはなはざるの中のたけのこをなべの中へ入れました。

五223 おはなは水がめから水をくんで、母の手にかけました。

五681 オチヨトオハナハアネニツレラレテ、オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシテラガシタ。

五692 オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシテラガシタ。

七504 図 お花は「はい。」と答へて受取らんとせしが、(略)。

七511 図 お花はあやしみて、「(略)なぞまたおあしを拂ふのですか。」と問へり。

七523 図 お花は「小包郵便でもやはり四匁までが三錢ですか。」と問ふに、(略)。

おはなさま「人名」1 おはなさま

八135 図 十一月八日 伯母よりおはなさま

おはなさん「人名」6 オハナサンおはなさん

二61 図 「オハナサンハ一バン小サイカラ、一バン大キイノヲアゲマセウ。」

五638 図 おはなさんもつれて一しよにお出でなさい。九月十三日 あねより おちよさま

五661 図 あさつてはおはなさんと一しよにきつとまゐります。

八121 図 おはなさんも一人の分はほんとによく寫つてゐます。

八124 図 なるほど皆さんと一しよの分は、おはなさんも次郎さんも少しまじめになつてゐます。

八125 図 おはなさんはしばらく見ないうちに、髪が大そうきれいになりました。

おはなし「御話」(名) 5 オハナシ

二494 コレニハウツクシイエガアツテ、ハナサカデイノオハナシガカイテアリマス。

五654 図 「お話をする通りに書けばよいのです。さあ、こゝに葉書があります。」

七809 図 「私も(略)この學校へ通つて、(略)、この講堂でお話を聞いたりしてゐたのです。」

七812 図 今日このなつかしい學校へ來て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしうございます。

七814 図 私は年中航海をしてゐるものですから、少しそのお話をいたしませう。

おはなす「御話」(五) 1 オハナス「一シ」

一512 イツカセンセイガオハナシニナリマシタ、(略)。

おはなとおきく「課名」2 オハナトオキク

二目5 四 オハナトオキク

二72 四 オハナトオキク

おはなの「人名」1 お花どの

六417 図 十二月十六日 父より太郎どの お花どの

おはる「話し手名」2 おはる

四325 おはる「それではごはんにたく麥と、(略)。」

四333 おはる「いいえ、うどんやさうめんにする麥は(略)。」

おはる「人名」5 オハル おはる

四316 その時あねのおはるは、「(略)。」

四722 図 これはおはるのはれぎのはおり。

四724 図 おはるのあしたはひなさままつり。

四731 オハルハアネニテツグツテモラツテ、オヒナサマヲカザリマシタ。

四758 オハルハヨロコンデ、友ダチヲヨビアツメテアソビマシタ。

おび「帯」(名) 5 オビ帯

- 三57 3 アソコニハオトウサンノ
チャイロノオビガアリ、(略)。
六33 6 着物・羽織・ハカマ・オビ
ナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ
絹織物ニテツクル。
七25 6 モシ手ガナカツタラ、ドノク
ラキ不自由デセウ。(略)。オビラム
スプロトモ出来マセン。
七76 6 海草ノ形ハ様々デアル。オビ
ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、(略)。
十一58 7 手早く帯をほどいて、ピエ
ル¹の體にくりつけて合圖をする
と、兵士等は力を合せて二人を引上
げた。
おびただし「影」(形)2 おびた
たびとどし「シー・シキ」
十52 1 図 若者かと思へば、面にお
びたどしきしためり。
十二48 7 図 (略)、東に小坂、西別
子、足尾併せて三山は 銅の産額に
びとどし。
おびただし「影」(形)1 おびた
しい「一イ」
九82 7 (略)、祭の當日には、おびた
どし見物人が朝早くから宮の境内
へつめかけた。
おひなさま「御雛様」(名)2 オヒナ
サマ
四73 2 オハルハアネニテツダツ
テモラツテ、オヒナサマヲカザ
リマシタ。
四75 2 図 「オカアサマ、オヒナサマ
ヲカザリマシタカラ、ゴラン下
サイ。」
おひま「御暇」(名)1 おひま
八66 5 取分けおいそがしい中を、
一週間もおひまをいただきます、
まことに有りがたう存じます。
おひめさま「御姫様」(名)1 オヒメ
サマ
三68 1 リユウグウニハオトヒメ
トイフキレイナオヒメサマガ
居テ、(略)。
おひよう(名)1 おひよう
十80 10 図 あつし織とは、おひようと
いふ木の皮を細く裂きて織りたる織
物なり。
おびる「帯」(上)1 オビル「一
ビ」
五16 7 ソノ色ニハクロイノモアリ、
赤イノモアリ、白イノモアツテ、皆
金色ヲオビテキマス。
おひろ「御拾」(五)1 おひろふ
「一ヒ」
三64 1 図 (略)貝をこんなにた
くさんいただきました。(略)。(略)。
「どこでこんなにたくさんおひ
ろひになりました。」とききまし
たら、(略)。
おぶ「帯」(上)2 オブ おぶ 帯
ぶ「一ビ・一ブ」
九3 9 図 尊時分はよしと、おびさせ
給へる劔を抜きて、(略)。
十24 9 図 韓信大刀ヲオビテ市中ヲ行
ク。
十25 1 図 「汝長大ニシテ、劔ヲオ
ブトイヘドモ、心甚ダ弱シ。
十二31 2 図 形名の妻、(略)、自ら劔
を帯び、侍女數人と弓を取りて盛に
弦を鳴らせり。
おふさ「御房」(人名)1 お房
十二32 5 図 孝女お房の幼き身を以て
能く父母に事へたる、(略)、皆後世
女子の模範とすべき德行なり。
おふだ「御札」(名)1 御札
七49 8 図 (略)、日本紙ハ神ダナヲ指
サシテ、「ソナナニイバツテモ、ア
ノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマ
イ。」トイヒマシタ。
おふみ「人名」1 おふみ
六62 8 図 それを聞くより妹の おふ
みはいそぎ道ばたを そここゝか
とさがすうち、(略)。
おぼえ「ひものおぼえ」
おぼえもう「す」[覚申](四)2 覚え申
す 覚え申「一サ・一シ」
十58 2 図 (略)、又學科も小學校を
卒業したる者には餘りむづかしとも
覚え申さず候。
十一38 6 図 (略)、又平田に廣東婦
人が隊を成して草取を爲す有様は殊
に興味を覺え申候。
おぼえる「覚」(下)2 おぼえる
覺える「一エ・一エル」
六44 8 (略)、八つの時にお寺へ小ぞ
うにやられましたがおきやうなど
は何べんをしへてもおぼえません。
十18 1 我々は毎日本を讀んで色々な
事を覺える。
おぼつかなし「覚束無」(形)1 オボ
ツカナシ「一キ」
八17 2 図 「我モコレ程ノ事ハ心得タ
リ。人手ヲカルニモ及バズ。」トテ、
オボツカナキ手ツキニテ、破レタル
所ヲ一間ツツ張レリ。
おほめる「御誉」(下)1 オホメル
「一メ」
二62 4 「コレハメヅラシイ。ミゴ
ト、ミゴト。」トオホメニナツ
テ、(略)。
おほゆ「覚」(下)3 オボユ おほ
ゆ 覺ゆ「一エ・一ユ」
七4 7 図 カクテハ君ノ御用ニ立ツ
ベシトモオボエズ。」
八7 4 図 (略)、我が國體のたふとさ、
いよいよ身にしてみておほゆ。
十72 5 図 温泉のわき出づる處は(略)
火山の附近に在りて、四圍の風光麗
しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。
おほり「御堀」(名)1 御堀
七57 6 図 宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫
眞ニテ見知リタル二重橋カ、レリ。
おほる「溺」(下)1 おほる「一
レ」
十二70 1 図 されば河水・湖水におほ
れて魚腹に葬らるゝもの、(略)。
おほれる「溺」(下)1 おほれる
「一レル」

三42 ② うのまねするからず、水

におぼれる。

おまえ「御前」(代名) 12 オマへ お

まへ 才前 お前

三26 ① ③ おまへが すずめば、わ

たしも すずむ。

三27 ③ ④ おまへが ころべば、わた

しも ころぶ。

四20 ③ ④ オヂイサン「次郎、オマへ

ハ手ノユビノ名ヲ知ツテキ

マスカ。」

四52 ③ ④ (略)、ワニザメガ居マシ

タカラ、「オマへノナカマトオ

レノナカマト、ドツチガ多イ

カ、クラベテ見ヨウ。」(略)。

四53 ③ ④ 白ウサギハコレヲ見

テ、「ナルホド、オマへノナカマ

ハズキブン多イ。

五26 ② ④ 役人は(略)、そのうちにゐ

ざりにむかつて、「お前のいふこと

はまことにもつともだ。

五26 ③ ④ この釜はお前の物にちがひ

あるまい。

五38 ② ④ 天皇は(略)、「その子は皆

お前にやるから、やしなつてやるが

よい。」とおほせになつて、(略)。

五55 ① ④ ソノ時カウモリガケモノノ

方ヘ行キマスト、「才前ハ鳥デハナ

イカ。」トイツテ、仲間ヘ入レマセ

ン。

五55 ④ ④ 又鳥ノ方ヘ行キマスト、

「才前ハケモノダラウ。」トイツテ、

アヒテニシテクレマセン。

八46 ② ④ 父「(略)。お前一つ書いて

ごらん。」

九22 ⑤ ④ 大尉は(略)、水兵の手を

握つて、「(略)。お前の残念がるの

ももつともだ。

おまえたち「御前達」(代名) 2 オマ

ヘタチ

四54 ② ④ オマヘタチノセナカノ

上ヲアルイテ、カゾヘテ見ル

カラ、ムカフノヲカマデナラン

デ見ヨ。」

四55 ③ ④ 「オマヘタチハウマク

オレニダマサレタナ。

おまかせください。御任下」(五) 1

お任せ下さる「一イ」

十一57 ④ ④ 兵士等は(略)、「將軍の

命は我々千萬人の命よりも貴い。ピ

エールは我々にお任せ下さい。」と

いつて引止める。

おまください。御任下」(五) 1 オ

待チ下サル「一イ」

七24 ⑥ ④ 保己一ハ(略)、講義ヲツ

マケタレバ、弟子ドモハ、「先生、

少シオ待チ下サイマセ。今風デアカ

リガ消エマシタ。」トイフ。

おまちなさる「御待」(五) 1 オマチ

ナサル「一イ」

二43 ① ④ 「チヨツトオマチナサイ、

ボクガウチカラタドンヲモ

ラツテキマスカラ。」

おまつ「話し手名」1 オマツ

四24 ① ④ オマツ「三センデス。」

おまつ「人名」5 オマツ

四23 ④ ④ オマツガオトミトアキナ

ヒノアソビヲシテキマス。

四23 ⑤ ④ オマツノ店ニハ、糸ヤ

キレヤフデヤカミガナラベテ

アリマス。

四24 ⑥ ④ オマツハ太イフデト細

イフデヲ出シテ、(略)。

四25 ⑤ ④ オマツハ糸トフデヲ紙

ニツツンデ、ワタシナガラ、

(略)。

四26 ⑤ ④ オマツハツリヲワタシ

テ、(略)。

おまつ「御待」(五) 1 お待つ「一

チ」

五21 ⑤ ④ 「こんどは何の御用をいた

しませう。」母は「ちよつとお待

ち。」といつて、(略)。

おまつさん「人名」1 オマツサン

四75 ⑥ ④ オチヨサンヤオマツサ

ンヲヨンデ來テ、オアソビナサ

イ。」

おまつり「御祭」(名) 2 おまつり

お祭

五63 ⑥ ④ あさつては八まんさまのお

まつりですから、朝早くからあそび

にいらつしやい。

九81 ⑩ 昔或氏神のお祭に競馬の神事

といふ事があつた。

おみき「御神酒」(名) 1 おみき

六74 ④ ぬさの前にはおみきやもちや

魚がそなへてあります。

おみこみ「御見込」(名) 1 御見込

十34 ⑧ 或人が主人に向つて、(略)、

どういふ御見込で、あの青年を御用

ひになつたのかとたつねた。

おみなえし「女郎花」(名) 1 をみな

へし

八37 ② ④ (略)、ききやう・かるか

や・をみなへし、秋の花草多けれど、

(略)。

おみや「御宮」(名) 9 オミヤ おみ

や 才宮 お宮

一25 ② ④ モリノナカニオミヤガ

アリマス。

一52 ⑥ ④ カラスカラス、ドコヘ

イク。オミヤノモリヘ、オテラ

ノヤネヘ、(略)。

五38 ⑥ ④ すがるはその大ぜいの子をお

みやのそばでやしなつて居つたと申

します。

五68 ② ④ オチヨトオハナハアネニツレ

ラレテ、才宮ニサンケイシタ。

五68 ⑥ (略)、モウ一ツ小サナ鳥居ヲ

クバルト、才宮ガアル。

五68 ⑦ ④ 才宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ

テキル。

五69 ④ ④ 才宮ニハエマガタクサンカケ

テアル。

五70 ① ④ 才宮ノ裏デハ今スマフガハジ

マツテキル。

六39 ⑦ ④ 清水寺をはじめ、たくさん

のお寺やお宮へさんけいした。

おみやうら「御宮裏」(名) 1 御宮裏

九四八(園) 又御宮裏の田も、本年は

水も十分に御座候間、(略)。

おみやげ「御土産」(名) 2 おみやげ

三六一(を) 皆さんの おみやげに貝

を、こんな にたくさん いただき

ました。

六四八(園) おみやげも おみやげ話も様

々あるから、たのしみにして待つて

おいで。

おみやげばなし「御土産話」(名) 1

おみやげ話

六四八(園) おみやげも おみやげ話も様

々あるから、たのしみにして待つて

おいで。

おめ「御目」(名) 4 お目

四二九(園) 今年はもう これで す

みました。らい年 また お目にか

かりませう。」

七四二(園) あなた様にも、その折には

よい馬にめして、主人のお目にとま

るやうになされるのが大事と考へま

して、(略)。

八二一(園) 御寫眞をありがたう。よく

寫つてゐるので、皆さんにお目にか

ゝつたやうな氣がします。

八三三(園) 寫眞を見て、急に皆さんに

お目にかゝりたくなりました。

おめす「御召」(五) 1 おめす

五三六(園) 昔雄略天皇がすがるといふ人

をおめしになつて、(略)とおほせ

になりました。

おめでた・い「御目出度」(形) 5 オメ

デタイ おめでたい 『イー・ウ・

ク』

二二九(園) 「シンネン オメデタウ。」

二二九(園) 「シンネン オメデタウ。」

四八五 十一月三日ハ一年中デコ

トニ オメデタイ日デス。

四四八(園) 「人の 死んだ時などの

おめでたくない時 には、なまぐ

さものをもちひない ことがお

ほいのです。

四五一(園) チョット見ルト、リツパ

デハ ナイガ、オメデタイ時ノ

オクリモノ ニナリマス。

おめでたう「御目出度」(感) 2 おめ

でたう

六七六(園) 歌がすむと手打をして、口

々に「おめでたう、おめでたう。」

といひました。

六七六(園) 歌がすむと手打をして、口

々に「おめでたう、おめでたう。」

といひました。

おも「面」(名) 1 面

八五九(園) 琵琶の形に似たりとて、

其の名をおへる湖の かゞみの如き

水の面、(略)。

おも「主」(形状) 6 主 重

九三五(園) 昔東海道といつたのは(略)、

其の間に五十三次といつて、重な宿

場が五十三あつた。

十九二(園) 當日は本村の重なる人々

も精々誘ひ合せ、是非參會致すべく

候。

十一三七(園) 本島産物の重なるもの

は、御承知の糯米・米・茶・砂糖等

にて、(略)。

十一一〇七(園) 室が廣く、天井が高いと温

りにくいから、成るべく狭く低くす

る必要がある。是が朝鮮の家の小さ

くなつた重なる原因である。

十一一四九(園) 里道の改修も全く成り、

村内の重なる道路は荷車・人力車を

通ずるに至れり。

十二六二(園) 倫敦は(略) 街路狭けれ

ば、古風の乗合馬車を以て主なる交

通機關とす。

おもい「思」(名) 3 思ひ 思ひひと

おもいに

九二一(園) 母も(略)、我が子にく

しとはつゆ思ひ申さず。如何ばかり

の思にて、此の手紙をしたゝめしか、

よく御察しこれあり度候。」

九八〇(園) (略)、都の空のみしたはし

く、僅かに詩歌に思をよせて、ひと

り自らなぐさめ居たり。

十二三九(園) 保の母は一時に二子を

失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの

外、「(略)。」とて、少しも悲しむ色

を見せざりき。

おもい「重」(形) 11 重イ 重い

『イー・ーク』

五二六(園) やがて重い物が私どもの上へ

來ましたから、何かと思つたら、にも

つをつんだ船が通つてゐたのです。

五三二(園) けれども重い物は皆そこへし

づめてしまつて、軽い物は一しよに

こまでもつて來ました。

五二五(園) どうして釜のやうな重い物

が持つて行かれませう。

六四八(園) この田を見ても、稻がよく

じゆくして、重さうにほをたれてゐ

ます。

六四八(園) 信長は(略)、それからだん

／＼重く取立てて、一方の大將にし

ました。

六四九(園) 大キナキカイデ、ドンナ重イ

荷物デモラク／＼ト上ゲオロシヲシ

テキル。

七五八(園) 「手紙は(略)、四匁より少

しでも重いと、その倍の六匁だけ切

手をはらなければなりません。

七五八(園) この手紙は四匁より重いの

に、差出人が三錢しかはつておきま

せん。

九三七(園) (略)、關所破といつて、其の

ものは重い罰を受けた。

十八三(園) 田を耕させたり、荷車を引か

せたり、重い物を負はせて遠くへ運

ばせたり、(略)。

十二八三(園) 重く沈んだ調に暗い／＼海

の底へ引込まれるやうな氣がするか

と思ふと、(略)。

おもいあう「思合」(四) 1 思ひ合ふ

『一ヒ』

九四九(園) たがひに心もたなく思ひ合

ひし父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

おもいず「思出」(下二) 5 オモヒ

出ツ 思ヒ出ツ 思ヒ出ツ 《一テ》 八73 図 (略) の御製を思ひ出で

て、我が國體のたふとさ、いよいよ身にしてみておぼゆ。

九29 1 図 (略)、春ノ盛りニハ花ノ雲タナビキテ、「花ハ櫻木、人ハ武士。」ノコトワザモ自ラ思ヒ出デラル。

十17 5 図 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかくけて見る。」といふ句あるを思ひ出でて間はせ給ひしを、(略)。

十96 4 図 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリテ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。

十102 6 図 コ、ニマウヅルモノ、誰カハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ御威徳ヲ仰ガザラン。

おもいだす「思出」(四) 3 思ヒ出ス 思ヒ出ス 《一サ・一シ・一ス》

八38 7 図 (略)、此ノモノノナカリシ昔ヲ思ヒ出ストキハ、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル、ナリ。

九21 5 図 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

十53 4 図 「されば思ひ出したる事の候。實盛日頃申し候に、『(略)』といひしにたがはず、墨を塗りて

候。」

おもいおもい「思思」(副) 2 思ヒく 思ヒく

七91 8 図 四隻ノ船ハ皆爆沈シテ、乗員ハ思ヒくニコギサラントシ、(略)。

十一80 6 図 鶴匠は(略)、右往左往思ヒく浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。

おもいかまう「思構」(下二) 1 思ヒ構ふ 《一ヘ》

十一74 3 図 (略)、畫師は驚きて、「我が畫がちゃんと思ヒ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。

おもいさだむ「思定」(下二) 1 思ヒ定む 《一メ》

十一44 5 図 いやよく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。

おもいだす「思出」(五) 2 思ひだす 思ヒ出ス 《一シ》

三48 3 かへるは (略)。思ひだし たやうにざふんと水の中へとびこみます。

八20 7 友だちはふと思ひ出したやうに、「それはさうと、君は白い雀を見たことがあるか。」

おもいたつ「思立」(四) 1 思ヒ立ツ 《一チ》

八50 1 図 中臣鎌足コレヲウレヘテ、國ノタメニ入鹿父子ヲノゾカント思ヒ立チタリ。

おもいつづく「思続」(下二) 1 思ヒ續く 《一ケ》

十一44 10 図 (略)、年頃の恩愛、殊に今日の元服の事等思ヒ續けては、如何でか討たるべき。

おもいとがむ「思咎」(下二) 1 思ヒとがむ 《一ムル》

十一16 5 図 されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ヒとがむることなかりき。

おもいなおす「思直」(四) 1 思ヒ直す 《一シ》

十一45 1 図 (略)、如何でか討たるべき。幾度か思ひ直して討たんとすれども、(略)。

おもいみる「思見」(上二) 1 オモヒ見ル 《一ミル》

十一31 1 図 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモヒ見ルベク、又優ニヤサシキ武人ノ風流モシノバル。

おもいもうす「思申」(四) 1 思ヒ申す 《一サ》

九21 9 図 母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。

おもいわずらう「思煩」(四) 1 思ヒわづらふ 《一ヒ》

十二73 1 図 引込思案の人は徒に其の結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、(略)。

おもいう「思」(四・五) 89 オモフ おもふ 思フ 思ふ 《一ッ・一ハ・一ヒ・

一フ・一ヘ》

二55 5 ソノマツノ木ハ(略)、天マデトドクカトオモフヤウナ、大キナ太イ木ニナリマシタ。

二59 4 (略)、ハヒガ(略)、川ムカフノカレ木ノエダニカカツタカトオモフト、ウツクシイハナガサキマシタ。

三40 5 今もぐつたかとおもふと、すぐに一びきくはへて、でてきます。

三46 4 図 「あまりほしがきれいだから、二つ三つはたきおとさうと思ふのだ。」

三66 1 ウラシマハカイサウニ思ツテ、子ドモカラソノカメヲ買ツテ、ウミヘハナシテヤリマシタ。

四18 7 もうすこしでよりとものちかくへ來るかと思ふと、ただつねは(略)、つづけて五刀六刀さしとほしました。

四41 2 (略)、何ダカヤウスガチガツテキマス。コレハヲカシイトオモツテ、ヨクヨク見ルト、(略)。

四52 5 (略) 白ウサギガ、ムカフノ大キナヲカヘ行ツテ見タイト思ツテ、海ヲワタルクフウヲカンガヘテキマシタ。

五12 7 やがて重い物が私どもの上へ

来ましたから、何かと思つたら、にも

つをつんだ船が通つてゐたのです。

五29 〇 〇 (略)、しほにつかつてから

くなり、しそにそまつて赤くなり、

(略)、三日三ばんの土用ぼし、思へ

ばつらいことばかり、(略)。

五33 〇 サクラノ花ノ下ニトンデキル

白イ蝶ヲ見ルト、花ガチツタノカト

思ヒ、(略)。

五34 〇 (略)、ナノ畠ニアソンデキル

蝶ヲ見ルト、ナノ花ガトビ立ツタノ

カト思ヒマス。

五34 〇 (略) 木ノ葉ノ上ニネムツタ

ヤウニシテキルノヲ見ルト、ドンナ

ユメラ見テキルノカト思ヒマス。

五42 〇 (略)、馬モ車モ今見エタカト

思フト、スグ後ニナツテシマヒマス。

五43 〇 文太郎ハフシギニ思ツテ外ヲ

見ルト、(略)。

五45 〇 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイ

タ時、文太郎ハモツトノツテキタイ

ト思ヒマシタ。

五70 〇 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷

川ノ中ヘハイリマシタ。

五80 〇 へいけ方はがけの上から、て

きの軍ぜいが攻めこまうとはゆめに

も思はない。

五80 〇 よしつねはこゝぞと思つて、

「進めく。」とさしづをしたが、

(略)。

六37 〇 學校で徳川光圀の話の聞いて、

紙などをそまつにしてはならな

いと思つた。

六44 〇 じぶんの心では武士になつた

いと思つてゐたのです。

六45 〇 けれども日吉丸は、どうかし

てりつばな武士になりたいと思つて

ゐましたから、(略)。

六58 〇 ところがとなり國では信玄を

こまらせようと思つて、塩を送らせ

ないことにした。

六82 〇 (略)、二人のおや御を大

切に、思へや、ふかき父の愛、母の愛。

七75 〇 (略)、師直ヲノクビヲ正

行ガ取ルカ、正行ヲガクビヲカレラ

ニ取ラスルカ、ニツノ中ノ一ツト思

へバ、今一度天顔ヲラガミテマキリ

タシ。」

七84 〇 フカク汝ヲタノミニ思フ

ゾ。」

七96 〇 「とくに申し上げようと思

つてゐました。

七98 〇 店ニハ番人ガ居テ、買ハウト

思フ物ハスグニ買ヘル。

七99 〇 これを見た人は皆ほしいとは思

ひましたが、(略)。

七46 〇 (略) 君ヲチノ仲間ヨリ

モ、僕ヲノ仲間ノ方ガヨケイニ用ヒ

ラレルヤウニナツタカト思フ。

七67 〇 (略)、來年はたくさんなら

せて、たくさん差上げたいと思つて

居ります。

七85 〇 (略)、山の様な波が立つ

て、船は今にも沈むかと思ふ様にな

ります。

七89 〇 大砲ノヒマキハ、天モオチ、

海モサクルカト思フバカリナリ。

八59 〇 (略)、數千年もへたらんか

と思はるゝ老木枝をまじへて、高く

天をつく。

八18 〇 「我モ後ニハコトハク

張りカヘント思ヘドモ、(略)。」

八20 〇 農夫は之を聞いて、近年麥の

取高の少いのは、この雀のせいでは

あるまいかと思ひました。

八22 〇 農夫は此の話を聞いて、「それ

はめづらしい。どうかして其の雀を

つかまへて見たい。」と思ひました。

八23 〇 (略) 下男が麥俵をかついで、

裏門から出て來ました。水車場へ行

くのかと思つて見てゐると、(略)。

八38 〇 我等ハ平生マツチヲ用ヒナ

レタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、

(略)、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル

ハナリ。

八40 〇 (略)、一箱ノマツチガ我等

ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手

ヲ要スルカラ知ラズ。之ヲ思ハバ一

本ノマツチモソマツニハ使フベカラ

ズ。

八50 〇 鎌足(略)、大事ヲ成スニ

ハ此ノ皇子ヲイタマキ奉ルヨリ他ニ

道ナシト思ヒシガ、未ダ近ヅキ奉ル

折ヲ得ザリキ。

八68 〇 其の後どうかと思つてゐま

したが、手紙を見て安心しました。

八91 〇 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞

エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見事

ニ敵ノ陣地ヲ取ツタト思ヘ。

八91 〇 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、

砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、我ガ

軍ガ苦戦シテキルト思ヘ。

九19 〇 ふと通りかゝつた大尉が之を

見て、あまりに女々しいふるまひと

思つて、(略)。

九19 〇 軍人となつて、いくさに出

たのを男子の面目とも思はず、其の

有様は何事だ。

九20 〇 (略)、母は如何にも残

念に思ひ候。

九23 〇 豊島の戦に出なかつたこと

は艦中一同残念に思つてゐる。

九70 〇 夜が更けて、雨の音が靜かに

なつたから、止んだことと思つてゐ

ると、(略)。

九73 〇 (略) 急に水音はげしく

相成り、犬のなき聲もたゞならずと

思ふ間もなく、隣村にて早がねを打

出し候。

十49 〇 諸子よ、試みに此の外に諸

子が日本一と思ふ物を數へ見よ。

十22 〇 良無禮ナリトハ思ヘドモ、

老人ノ言ナレバ、命ノマヽニ拾ヒ取

リテサヽグ。

十33 〇 昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ

芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、或

年試ミニ之ヲ作りシニ、(略)。

十35 〇 人に親切なことは是でも知

れると思ひました。

十50 6 図 思ふ様あれば、名乗るまじ。唯首を取つて、大將の見参に入れよ。

十51 9 図 士かと思へば、錦のひたれ着たり。大將かと思へば、續く者なし。

十52 1 図 若者かと思へば、面におびたゞしきしわたゞめり。老人かと思へば、髪つや／＼と黒し。

十53 7 図 戦場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。

十69 8 図 父は此の大波に何とて行かるべきと思ひしが、(略)。

十97 9 図 人ヲシテソマロニ佛教ノ盛ナリシ奈良時代ヲオモハシム。

十一3 6 図 あへらじとゐねて思へばあづさ弓 なき數にいる名をぞとむる。

十一28 5 図 思へば今より六十年前には、我が國に一哩の鐵道も、一隻の汽船もなかりしなり。

十一42 4 図 また我に代りて討死したる六郎の形見とも思ふものを。」

十一47 9 馬主は(略)、馬の耳に口を寄せて、何事が話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

十一53 4 図 己ヒトリ樂シトテ、他人ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ人ナリ。

十一55 3 ふと山のいたゞきの方に

すさまじい物音が聞え始めたと思ふと、(略)、山のやうな雪なだれがなだれて来て、(略)。

十一68 6 図 人生の長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て量るべからず。之を思へば、一寸の光陰も輕んずべからず。

十一69 7 図 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、時間を徒費すること甚だし。

十一70 1 図 思ひても返らぬことをくよく／＼と心配するは、未練にして愚なる人のする事なり。

十一72 1 図 (略) 晝工(略)、毎日遊び暮して三年を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、(略)。

十一73 2 図 さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ寢間に歸れり。

十一79 3 図 (略)、鶴飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鶴飼をおもふに至れり。

十一79 4 図 (略)、鶴飼といへば長良川をおもひ、長良川といへば鶴飼をおもふに至れり。

十一113 3 図 (略)、兒童は(略)、學校を思ふ心厚く、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。

十二1 8 図 陛下が(略)、常に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の拜察せらるゝは、(略)。

十二2 6 図 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。

十二3 9 図 國を思ふ道に二つはなかりけり、軍のには立つも立たぬも。

十二31 3 図 賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圍を解きて去れり。

十二33 6 図 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

十二46 8 図 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。

十二83 6 重く沈んだ調に暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかと思ふと、(略)。

十二85 4 一同は唯神の仕業とのみ思つた。

十二91 9 図 (略)、むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ時、一日の勞苦は忘れられて、更に明日の活動を思ふなり。

十二101 9 図 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、(略)、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

十二112 4 図 故に下級の者の上官の命を承くるや、直ちに陛下の命令なりと思ふべく、(略)。

十二113 7 図 故に十分に信義を盡さんと思はば、豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。

十二115 6 図 此の勅諭は特に軍人に賜へるものなれども、獨り軍人としての心得なりと思ふべからず。

十二120 2 図 思へばうれし、師の情。思へばうれし、師の恵。

十二120 3 図 思へばうれし、師の情。思へばうれし、師の恵。

おもえらく「思」(名) 1 思へらく

十二75 7 図 (略) マルコ、ポーロの日本に關する記事を読み、又ポーロの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、若し歐羅巴より西へ向つて進まば、印度に達する前、日本又は支那に到着するならんと。

おもき「重」(名) 2 重キ 重キ

十二36 6 図 本校舎ノ建築ハ(略)、専ラ教授ノ便ヲ計リ、實用ニ重キヲ置キ、其ノ注意ノ周到ナル、縣下マレニ見ル所ナルベシ。

十二103 6 図 市町村長・議員等を選擧するに専ら其の人物に重きを置き、(略) 私交上の關係をさしはさむべからず。

おもさ「重」(名) 2 重サ

六19 4 図 物ノ重サハハカリニテハカル。重サヲハカルニハ貫ヲモトトス。

おもし「重」(形) 8 重シ 重し「キークーシ」

七80 2 図 (略)、ふるひ進むに何事かなど成らざらん、ばんじやくの

重きもつひにうつすべし。

八54 4 図 (略) 天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。

十59 5 図 (略) 罰に處せられたる者は外出を禁ぜられ、又重き者は營倉に入れられ候由承り申候。

十一71 4 図 他人をして時間を損失せしむるは其の罪金銭を損失せしむるよりも重し。

十一118 1 図 (略) 東方文明先進の任務は重き日本國。

十二29 7 図 (略) 「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。さらば我必ず重く汝を賞せん。」

十二37 3 図 私事は軽く、公事は重し。
十二91 5 図 (略) 子供の行儀・作法等につきては、主婦たる人の責任最も重し。

おもしろい「面白」(形) 23 オモシロイ おもしろい 面白い 面白い
『ーイー・カッ・カ・ーク』

一33 1 図 ドコデモ オモシロイウタヲウタツテキマス。

二29 3 図 ヲトコノ子モ、ランナノ子モ、オモシロサウニアソンデキマス。

二60 7 図 「オモシロイコトダ。ハナヲサカセテミヨ。」

三12 3 図 (略) オダイサンハイロイロナオモシロイハナシヲキカセテクダサイマス。

三17 5 図 ヒバリガオモシロサウニサヘツツテキマス。

三68 5 図 ウラシマハオモシロクテタマリマセンカラ、(略)ウチヘカヘルノモワスレテキマシタ。

三69 3 図 オモシロイアソビモ毎日見ルト、シマヒニハアキテキマス。

四53 4 図 (略)「オマヘノナカマトオレノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテ見ヨウ。」トイヒマシタ。ワニザメハ「ソレハオモシロカラウ。」ト答ヘテ、(略)。

五28 図 その時あめのうずめのみことといふ女の神さまのまひがおもしろかつたから、大ぜいの神さまがたは(略)お笑ひになりました。

五33 図 あまりおもしろさうなので、大神は少しばかり戸をあけて、おのぞきになりました。

五45 4 図 左ヲ見テモ、右ヲ見テモ、ケシキガカハルノデ、文太郎ハオモシロクテタマリマセン。

五61 7 図 あきの夜長を鳴き通す、あゝ、おもしろい蟲のこゑ。

五62 8 図 秋の夜長を鳴き通す、あゝ、おもしろい蟲のこゑ。

六18 図 海はふだん強い風がふくから、高い松はしげんにおもしろい枝ぶりになつてゐる。

六58 2 図 見上げる峯の一つ松、はまべはつゞく松原の枝ぶりすべておもしろや。

六61 1 図 うめ・もゝ・さくら・ふぢ

・あやめ、白つゆむすぶ秋の野のちぐさの花もおもしろや。

七27 6 図 ドンナガクキガアツテモ、手ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出スコトハ出来マスマイ。

七71 6 図 (略)タコヤイカノアシヲソロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。

七72 7 図 中デオモシロイノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキル。

七84 7 図 「航海といふものはかういふ面白いのですが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。

九69 6 図 (略)風が鳴子を動かすと、むら雀のぼつと飛立つのは面白い。

九82 6 図 「今年の競馬はさぞ面白からう。」

十一47 1 図 こゝにアラビヤ馬の達者なことを證明する面白い話がある。

おもしろがる「面白」(五) 1 オモシロガル「ーツ」

二33 7 図 (略)トリヤケモノヲイコロシテ、オモシロカツテキマシタ。

おもしろし「面白」(形) 7 面白シ面白し『ーイー・キーク・ケレ』

九51 8 図 (略) 赤き帽子のトルコ人、長き白布くるくくと頭に巻ける印度人、所變れば様々に變るよそほひ面白や。

九55 3 図 保護色ノ變ズルハスデニ面白キコトナリ。

九55 4 図 ソレヨリモナホ面白キハ、其ノ動物ノ身ブリニヨリテ、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。

十59 1 図 (略)「又日曜日等には忠臣・義士に關する講談等もこれあり、面白く有益に存候。

十93 6 図 (略) 尚々久しく拜借致し居り候農業一夕話、まことに面白く通讀致し候。

十一71 8 図 此の畫の出來たる由來こそ面白けれ。

おもだつ「主立」(四) 1 重だつ「ーチ」

八3 2 図 (略) 一年中の重だちたる祭日には勅使を差立てたまひ、(略)。

おもち「御餅」(名) 2 おもち

四31 2 図 「おもちにするのはもち米といふ米です。

四31 4 図 ごはんの米はねばりけがすくないから、おもちにはなりません。」

おもちいる「御用」(上一) 1 御用ひる「ーヒ」

十34 9 図 或人が主人に向つて、(略)、「どういふ御見込で、あの青年を御用

ひになつたのかとたづねた。

おもちなさる「御持」(五) 1 オモチ

ナサル「一イ」

486 ワタクシガコチラノハシ

ヲモツカラ、アナタハソチラ

ノハシヲオモチナサイ。

おもちゃ「玩具」(名) 3 オモチヤ

おもちゃ

365 (略)、子ドモガ大ゼイデ

カメヲツカマヘテ、オモチヤニ

シテキマス。

437 麥ワラザイクニハカゴヤ

オモチヤヤ色色ナ物ガアリマ

ス。

1151 (略)、馬はさもうれしさう

に、口でおもちやをさうげて、其の

子供をあやしてゐた。

おもちゃ「玩具屋」(名) 2 オモチ

ヤヤ オモチヤ屋

567 道ノ兩ガハニハ、アメヤ・オ

モチヤヤ・クダモノヤ・クワシヤナ

ドガ店ヲナラベテキル。

736 (略)、ソコニ繪草紙屋・ゲタ

屋・オモチヤ屋ナドガナランデキ

ル。

おもて「表」(名) 6 おもて 表ひう

らおもて

363 (略)、この貝がらはかた

つむりのやうに、おもてにう

づまきがあります。

566 (略) それから表の方へあて名を

575 (略) 「表から攻めおとすことは

むづかしい。何でも裏からまはつ

て、てきのふいをうたなければなら

ぬ。」

747 (略) 西洋紙ハ「君ヲハ表ダケシ

カ役ニ立タナイガ、僕ヲハ裏表トモ

ニ使ハレル。

956 (略) 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、

其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリ

レドモ、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、

(略)。

142 (略) (略) 疊ノ表ハ、此ノ莖ヲ

アミテ造リタルモノナリ。

おもて「面」(名) 4 面

125 (略) 韓信シバシ其ノ面ヲウチマ

モリシガ、ヤガテハラバヒテ勝ノ下

ヲクグル。

134 (略) 東京ノ西南、目黒ナル墓石

ノ面ニ「甘諸先生墓」トアリ。

152 (略) 若者かと思へば、面にお

びたゞしきしわたゝめり。

1152 (略) 内ニ省ミテ、ヤマシキコ

トアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心

中ノ苦ヲ如何ニセン。

おもてもん「表門」(名) 1 表門

94 (略) 石の大鳥居高さ三丈餘、表

門を入れば五重塔あり。

おもとめあそばす「御求遊」(五) 1

おもとめあそばす「一シ」

740 (略) 妻は(略) 十兩の金を出し

て、「どうぞこれでその馬をおもと

おもばしら「主柱」(名) 1 主柱

13 (略) 主柱 靜かに曰く、「ね

だ低く、たるきは高し。(略)。つか

となり 床となる身も、それゝくの

務をもてり。

おもみ「重」(名) 1 重み

621 (略) さうして象の重みで船の水に

つかつた所にしるしを附けました。

おもむき「趣」(名) 2 オモムキ お

もむき

929 (略) 社殿ノ後ニハ美シク作ラレ

タル庭アリ。木石ノ配合オモムキ多

シ。

119 (略) 月影の小波にくだけ、漁

火の波間に出没する夜景も亦一段の

おもむきあり。

おもむく「赴」(四) 2 オモムク「一

ク」

163 (略) 此ノアタリ、元ハ山間ノ

サビシキ村落ナリシガ、鑛業ノ盛大

ニオモムクト共ニ次第ニ發達シテ、

(略)。

1251 (略) 故ニ商業ニ従事スルモノ

ハ常ニ花客ノ嗜好ヲ考へ、流行ノオ

モムク所ヲ察セザルベカラズ。

おもわず「思」(副) 5 思はず

548 (略)、耳がさけるやうなおそ

ろしいかみなりが鳴りました。二人

は思はず耳に手をあてて、そこにた

ふれました。

740 (略) 一豊もほしくてくたたらな

残念なことはない。(略)。」と、思

はずひとり言をいひました。

922 (略) 大尉は之を讀んで、思はずも

涙を落し、水兵の手を握つて、(略)。

970 (略)、身を切るやうな寒さに

思はず首をぢぢめることもある。

1145 (略)、少しも疑ふ心なき

正儀の様を見ては、刀のつかに手を

かくべきやうもなし。思はず大聲を

あげて泣きだぬ。

おもんず「重」(サ変) 9 重ンズ 重

んず「一ジーズ・ズル・ゼ」

1105 (略) 孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規

律ヲ重ンジタリ。

1237 (略) 將軍秀忠、高虎の武名を

重ンじて、之に封ぜん。

1251 (略) 商人ノ第一ニ重ンズベキ

ハ信用ナリ。

1298 (略) 國民各自の行爲をつゝし

み、品格を重ンずるは即ち國民の

品格を高むる所以なりといへども、

(略)。

1298 (略) 公德とは公衆の衛生を重

んじ、(略)等、總べて衆人の利害を

考へて其の行爲をつゝしむ徳義をい

ふ。

1210 (略) 若し公衆の間に、規則を

守り、規律を重ンずる心乏しき時は

(略)。

1211 (略)、軍人たる者は一途

に忠節を重んじ、國家の大事に際し

ては、身命をすつること鴻毛よりも

輕き覺悟なかるべからず。

十二113 5 図 一には、軍人は信義を重んずべし。

十二116 7 図 信義は（略）、商工業の人としても常に之を重んぜざるべからず。

おもんばかり 〔慮〕（名）1 慮

十二71 6 図 遠き慮なければ、必ず近き憂あり。

おもんばかり 〔慮〕（四）2 慮る「一ル」

十二71 7 図 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

十二71 9 図 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。是即ち遠きを慮る所以なり。

おや 〔親〕（名）2 オヤ 親 ひととおつみおや

一51 8 （略）、オヤ ニシンバイラカケルノハワルイコトデス。

十一60 6 図 親に事へ、弟を助け、家を治めん、妹我は。

おや（感）1 おや

三35 7 図 （略）、光がみえません。「おや、にげたのかしらん。」といそいでかみをあけてみると、（略）。

おやくにんさま 〔御役人様〕（名）1

お役人さま

五24 6 図 やく人は二人をよび出し

て、（略）取りしらべました。（略）。

又るざりは「お役人さま、ごらんの通り、私は（略）、両手をついて、やつとるざりあるくものでござい

す。

おやこ 〔親子〕（名）2 親子

九49 7 図 やがて親子打連れて、心樂しく發足したり。

十一51 7 図 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、（略）、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

おやこ 〔親御〕（名）1 おや御

六82 7 図 二つとや、二人のおや御を大切に、思へや、ふかき父の愛、母の愛。

おやこにだい 〔親子二代〕（名）1 親子二代

七8 1 図 「親子二代相ツバイデノ忠義カンズルニアマリアリ。

おやしろ 〔御社〕（名）7 オヤシロ

お社 御社

二44 5 コレハ天ジンサマノオヤシロデス。

二47 5 （略）、ドコノテンジンサマノオヤシロニモ、ウメノ木ガウエテアリマス。

六9 1 （略）、森の間からはお社の赤い鳥居が見えます。

六9 1 御社の後には松山があります。

六9 5 （略）、小川の橋を渡ると、御社の前へ出ました。

六9 5 まづ御社にさんけいして、しばらくそこで休みました。

六9 7 御社の後から山へのぼる道があります。

おやすみ 〔御休〕（名）1 お休

五64 6 図 「あさつては學校がお休ですから、二人とも行つてお出でなさい。

おやどり 〔親鳥〕（名）2 オヤドリ

一24 1 オヤドリガコココトヨンデキマス。

三19 5 （略）、オヤドリガオリテコナイトキニハ、子ヒバリハ（略）、ドンナニマツテキルコト

デセウ。

おやね 〔御屋根〕（名）1 オヤネ

二46 3 （略）、アノオヤネニハウメバチノ大キナモンガツイテキマス。

おやゆび 〔親指〕（名）3 オヤユビ

四20 5 図 「一バン太イノガオヤユビ、一バン小サイノガ小ユビデ、（略）。

四21 2 図 「オヤユビノ次ノハ人サシユビデ、（略）。」

四22 2 図 ニイサンハ一バン太ツテ、一バン力ガツヨイカラ、オヤユビデス。

おやゆびだい 〔親指大〕（名）1 親指大

十一85 5 図 此ノ流ハ自ラ集メラレテ、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中

ニ入ル。

お・ゆ 〔老〕（上二）4 老ゆ 「一イ」

十一59 5 図 老いまる父の望は一つ。

十一59 9 図 老いたる母の願は一つ。

十二37 7 図 高虎「年老いて其の任にあらず。」とて之を否む。

十二70 9 図 少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。

おゆみ 〔御弓〕（名）1 オ弓

五6 7 （略）一羽ノ金色ノトビガトンデ來テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

おゆるし 〔御許〕（名）1 御ゆるし

八67 8 図 （略）、勝手がましい御願ですが、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

およぎまわる 〔泳回〕（五）1 およぎまはる 「一リ」

三48 7 かへるは（略）。（略）。水の中ではあと足で水をかきながら、あちらこちらへおよぎまはります。

およぐ 〔泳〕（四・五）14 オヨグ およぐ 泳ぐ 「一イ・ギ・グ」

四38 2 アル日タヒヒラメサバタコナドガオヨイデキルト、（略）。

四51 6 （略）、モトハ海ノ中デオヨイデキマシタ。

五10 6 魚はうれしうにういたりしづんだりして、およいでゐました。

五15 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。
五157 大キナコヒガタクサンアツマ
ツテオヨイデキルノハ、マコトニミ
ゴトナモノデス。
五175 鯉ハ(略)。(略)。又ドンナ
流ノ早イ川デモ、オヨイデノボリマ
ス。
七704 魚類ニハイワシ・アデ・サ
バ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、
水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガア
リ、(略)。
七708 魚類ニハ(略)、タヒ・ボラ・
ハモ・コチ・キスナドノヤウニ、岩
ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガア
リ、(略)。
七715 (略)、タコヤイカノアシヲソ
ロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。
七779 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略) 美シイ景色デアラウ。
七831 (略) いるかがおよいであ
るのを見ることもあります。
九551 (略)、イカハ水中ニオヨグ
間ハ水色ナレドモ、(略)。
十663 鯨は段々弱つて、泳ぐ力もな
くなる。
十二669 (略) 又かつて栗鼠の大群ウラ
ル山中の一都會に現れしが、(略)、
山あれば越え、河あれば泳ぎ、(略)。
およそ「凡」(副) 25 およそ 凡ソ
凡そ

七316 蟹が桑の葉を食ふのは、およ
そ二十五日から四十日の間で、(略)。
七338 一匹でおよそ四五百程の卵を
産む。
八404 (略) マツチハ今ヨリ凡ソ百年
前、外國ニテ發明セラレタルモノナ
リ。
八761 (略)、我が帝國の港を出
で、東へ東へと進み行かば、凡そ二
週間の後にはアメリカ大陸に着くべ
し。
八808 (略) 地球の表面の凡そ三分の二
は海にして、三分の一は陸なり。
八936 (略) 名古屋城は今より凡そ三百
年前、徳川家康が諸大名に課して造
らしめたる名城にして、(略)。
九146 (略) 利根川ハ(略)、全長凡ソ
七十三里、(略)。
九264 (略) 歩兵は平時凡そ百五十人を
一中隊とし、之を三箇小隊に分つ。
九355 昔東海道といつたのは(略)、
凡そ百二十四里、(略)。
九649 (略) 空氣は(略)、節穴の中に
も、握りこぶしの間にも、凡そ少し
にてもすき間ある所には、必ず存在
せずといふこと無し。
九956 (略) 男體山のふもとに中
禪寺湖あり、周囲凡そ六里、(略)。
十一14 (略) 其の高さは(略)、富士山
より高きこと凡そ一千尺なり。
十43 (略) 然るに此の寺は今より凡そ
一千二百年以前のものにて、(略)。

十634 (略)、今ヤ足尾町ハ人口凡
ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、(略)。
十一962 (略) (略)、一月より三月
まで凡そ三箇月間は航路殆ど全く絶
え、(略)。
十二168 (略)、全國に凡そ百箇處
の測候所あり。
十二334 (略) 凡そ婦人の道は夫を助け
て家政を治め、子に教へて家名をあ
げしむるに在り。
十二443 (略) 現今我が國の耕作地は
(略) 凡そ五百五十萬町歩あり。
十二445 (略)、米の作付反別は凡
そ二百九十萬町歩、(略)。
十二445 (略)、其の收穫は年々凡
そ四千六七百萬石にして、(略)。
十二446 (略)、麥の作付反別は凡
そ百八十萬町歩、(略)。
十二447 (略)、其の收穫は年々凡
そ二千萬石なり。
十二696 (略)、果實・草根を始め、
凡そ取つて以て食ふべきものは殆ど
餘す所なし。
十二895 (略) 凡そ家内の掃除は座敷・
居間・臺所のみならず、便所の隅よ
り下駄箱の奥までも注意せざるべか
らず。
十二933 (略) 孔子は凡そ二千四百六十
年前、支那の春秋時代に生る。
および「及」(接) 32 及び 及び
ひてんきょうおよびぼうふううけい
ほう

八33 (略)、皇室及び國家に大
事あれば、かならずこれを告げたま
ふ。
八48 (略) 明治二十七八年及び三十七
八年戰役の戦利品たる大砲、(略)。
八48 (略) 郵便切手貼付及日付印ノ場所
九3910 (略) 七湯トハ湯本・塔ノ澤・堂
ガ島・宮ノ下・底倉・木賀及び蘆ノ
湯ヲイフ。
十92 (略) 落葉・こけ及び網の
如くひろがれる木の根などは、(略)。
十467 (略) 見よ、曲線のみにて成れる
第十二圖及び第十三圖、直線・曲線
を併せ用ひたる(略)の模様の如何
に麗しきかを。
十577 (略) 學科は讀法の講義
及び毎日の術科に關する説明に御座
候。
十583 (略) 外出日は日曜日・祝日及
び大祭日にて、(略)。
十612 (略)、江戸城及び日光東照
宮等ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、(略)。
十779 (略) ハ肺臟及び心臓ヲ保
護センガ爲ナリ。
十一192 (略) 兩岸及び島々、見渡す限
り田園よく開けて、(略)。
十一205 (略) 内海の沿岸及び島々には
名勝の地少からず。
十一327 (略) 或ハ敵ノ港灣及び軍艦ノ
情勢ヲサグリ、(略)。
十一644 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、
其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコト

ガ大切デアル。

十一678 ㊦ (略)、實際修學及び業務に用ふる時間は僅かに二十萬時間を越えざるべし。

十一986 ㊦ 鯨の主産地は西海岸及び亞庭灣、鯨の主産地は東海岸にて、(略)。

十一1002 ㊦ 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然林にして、(略)。

十二83 ㊦ よりて主戦艦隊及び巡洋艦隊は東方に向つて、其の進路をふさぎ、(略)。

十二101 ㊦ 敵の死傷及び捕虜は司令長官以下無慮六千人。

十二1110 ㊦ 其ノ圖ハ船ノ切断面及び構成等ヲ何十分ノ一ニシテ縮圖デ、(略)。

十二181 ㊦ 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、(略)。

十二424 ㊦ 阿蘇山は(略)、山の中に多くの噴火口及び温泉あり。

十二4210 ㊦ 熔岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。

十二443 ㊦ 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬町歩あり。

十二546 ㊦ 市街建築物及び埠頭等頗る規模の壯大なるを見る。

十二588 ㊦ 南滿洲鐵道によりて、露西亞の東清鐵道及びシベリヤ鐵道を

利用せんか、(略)。

十二687 ㊦ (略) 露西亞及びシベリヤの寒き平地に住せるレミングと稱する地鼠の一種なり。

十二983 ㊦ (略)、殊に他國人の注意を引くものは社會の公德及び國民の度量なりとす。

十二1066 ㊦ 皇族・公侯爵、同爵の互選せる伯子男爵、國家に勤務あり(略) 勅任せられたるもの、及び各府縣に於て多額の直接國稅を納むるもの十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるものはなり。

十二1074 ㊦ 帝國議會の主要なる任務は法律及び歳入・歳出の豫算を議定するにあり。

十二1079 ㊦ しかして、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経たる後、(略)。

十二1085 ㊦ 又貴族院及び衆議院は(略)の權能を與へられたり。

およぶ「及」(四・五) 26 及ぶ

「パー・ビー・ブ・ペーン」

七69 ㊦ シカルニ正行スデニ男盛リニ及べり。

八171 ㊦ 「我モコレ程ノ事ハ心得タリ。人手ヲカルニモ及バズ。」

八472 ㊦ 焼けない事さへいへば、御安心なさるから、ゴアンシンクダサイと書くにも及ばない。

八479 ㊦ 「(略)、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、サクヤとは

書くには及ばない。

八687 ㊦ こちらのほうとも都合がつくから、心配するには及びません。

八879 ㊦ (略) 部下ヲハゲマシ、敵ヲ撃退スルコト數度ニ及ンダ。

九186 ㊦ 利根川ハ(略)、本流・支流ノ長サヲ合スレバ、一千餘里ニ及ブ。

九602 ㊦ 「過ぎたるは及ばざるが如し。」と知るべし。

九733 ㊦ (略)、もはや心配には及ぶまじと立退きたる者も引返したる程に御座候。

九869 ㊦ 「もう改めて勝負には及びません。勝はあなたの方のものです。」

十327 ㊦ 隣國ノ人モ聞傳ヘテ是ヲ植エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至リトイフ。

十676 ㊦ 鯨は(略)、長さは十五間、即ち九十尺にも及ぶものも珍しくはない。

十737 ㊦ (略)、往昔天皇の行幸し給ひしことも數回に及べり。

十一474 ㊦ 花は、麓より咲初めて次第に山上に及び、(略)。

十一577 ㊦ 蜜蜂は(略)、一群の總數數萬に及ぶものあり。

十一282 ㊦ (略)、今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。

と、しきりに望めば、力及ぼず、(略) 名刀を與へて行かしめたり。

十一458 ㊦ (略)、「何とて命を捨つるに及ぶべき。」と、取つておさへて動かせず。

十一839 ㊦ (略)、尚海外ニ輸出スルモノ五千萬圓以上ニ及ブ。

十一1054 ㊦ 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、(略)。

十二111 ㊦ (略) 麾下將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

十二451 ㊦ (略)、生絲は輸出品の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。

十二461 ㊦ 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、尚甚だ狭小なりといふべく、(略)。

十二655 ㊦ 獨逸帝國は(略)、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは固よりあやしむに足らず。

十二875 ㊦ 喜劍(略)、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、驚いて曰く、(略)。

十二1104 ㊦ (略)、明治の大御代に及びて、(略) 陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御論しあり、(略)。

およぼす「及」(四) 1 及す 「一ス」

十二1092 ㊦ 帝國議會の協賛は國家の

盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、(略)。

およむ【御読】(五) 1 オヨム 『ミ』

四95 センセイガチヨクゴヲオヨミニナツテ、(略)。

およめ【御嫁】(名) 1 オヨメ

三108 ネエサン ハコノアヒダトナリムラヘオヨメニイキマシタ。

おり【折】(名) 8 折ひかざおりえぼし

七14 正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トモニ

戰場ニ出デントセシガ、(略)。

七419 此のお金は(略)、『夫の一大事の折に使へ。』と申して、父の

渡してくれた金でございます。

七426 (略)、御主人織田様には、

近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。(略)。あなた様にも、

その折にはよい馬にめして、(略)。

八506 鎌足(略)、大事ヲ成スニハ此ノ皇子ヲイタキ奉ルヨリ他ニ

道ナシト思ヒシガ、未ダ近ヅキ奉ル折ヲ得ザリキ。

九231 つかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られる

が、まだ其の折に出會はないのだ。

九967 (略)、夏の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶものも最多し。

十一421 (略)、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。』

十二17 陛下が萬機の政をみそなはす御かたはら、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、(略)。

おり【織】 〆あつしおり・けおりもの・はぶたえおり・もめんおりもの

おり【居】(ラ変) 4 居り 居り 居

『リール』 〆あいなりおり・あんじおり・いたしおり・かんしやいたし

おり・くらしおり・ごあんじもうしおり・しめおり・せいぞういたしおり・

たもちおり・できおり・なされおり・はいしやくいたしおり・はんばいいいたし

おり・もうしあわせおり・よろこびおり

八306 (略) 「カク我ノ居ルニ、何ユエニ入り給ハザルカ。」

十5610 兵舎内にては歌をうたふ事、(略)等堅く禁ぜられ居り候。

十一399 南部地方には製糖業盛に行はれ居候。

十二764 是に於て空しく志を抱いて西班牙に轉じ、居ること多年、

(略)。

おりいだす【織出】(四) 2 織出ス『シー・セ』

十423 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花鳥等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ

(略)。

自ラ花筵數十種ヲ織出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、(略)。

おりおり【折折】(副) 3 をりく折々

五786 「鹿はをりく通ります。」

九6010 人多き都會に住む者は、折々野外に出でて、新しき空氣をす

ひ、又(略)等を散歩すべし。

十925 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、折々會合の節は

其の語も出で、(略)。

おりかた【織方】(名) 1 織方

十425 花筵ヲ最も多ク産スルハ(略)、其ノ織方ヲ發明シタルハ岡山

縣ノ磯崎^{いそざき}眠^{いね}龜^{かめ}トイフナリ。

おりから【折】(名) 2 折カラ 折から

八892 ホットーイキツク折カラ、一彈又モ中佐ノ胸ヲツラヌキ、軍曹ノ

胸ヲモ打抜イタ。

十149 げにくと 皆うなづきて、折からの 夜半のあらしに そ

のちは 音もきこえず。

おりとる【折取】(四) 1 折取る『ル』

おりふし【折節】(名) 1 折節

八832 我が日本の國の大部分は、(略)、雪月花のながめも折節にかは

りて面白く、(略)。

おりもの【織物】(課名) 2 織物

六目11 第十 織物

六33 第十 織物

おりもの【織物】(名) 5 織物 〆あさ

おりもの・きぬおりもの

六334 織物ニハキヌ織物・モメン織物・アサ織物・毛織物ナダイロ

くアリ。

七149 たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にた

のまれて、それをほかへ賣渡してやり、(略)。

七151 (略)、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。

八954 名古屋は(略)。(略)、焼物・塗物・扇・綿絲・織物等の産出すこぶる盛なり。

十811 あつし織とは、おひようと

いふ木の皮を細く裂きて織りたる織物なり。

お・りる【降】(上) 19 オリル 下りる『リール』 〆かけおりる・と

びおりる

三184 サヘヅルダケサヘヅルト、

イマニマタオリテキマセウ。

三185 オリルトキニハ、オチル

ヤウニハヤクオリテキマス。

三187 オリルトキニハ、オチルヤウニハヤクオリテキマス。
 三191 ヒバリハオリルトキニハ、ケツシテスノアルトコロヘハオリマセン。
 三192 ヒバリハ(略)、ケツシテスノアルトコロヘハオリマセン。
 三195 ユフガタニナツテモ、オヤドリガオリテコナイトキニハ、(略)。
 四83 二人は(略)、いそいで山を下りました。
 四175 ゐのししはまつすぐにただつねの方へ下りて來ます。
 五91 そこで大ぜいと一しよになつて、せまい谷へ下りました。
 五391 汽車が今ていしやばへつきました。下りる人もあり、のりこまうとする人もあり、(略)。
 五395 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、もうのりこんだ人もあります。
 五395 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、(略)。
 五405 あちらの方は、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。
 五781 園 「こゝからしろの方へ下りることが出来るか。」
 六113 御社の後から山へのぼる道があります。(略)。かへりには(略)、別の道から下りました。

六114 (略)、下りる時には二時間しかかかりませんでした。
 十一564 (略)、谷へ下りる細道も雪や水にとざされて、どこか全く知れない。
 十一572 將軍は(略)、はや谷へ下りようとする。
 十一584 將軍が谷底へ下りた時には、もう太鼓の音は聞えぬ。
 おる「折」(四・五) 4 ヲル 折る「ツ・ツ・リ」
 三136 (略)チカラノツヨイ人ガアリマシタ。ウシノツノヤ、シカノツノデモヲツテシマフホドデ、(略)。
 八396 箱ハウスキ木片ヲ折り、其ノ上ニ紙ヲ張りテ造リ、(略)。
 九848 (略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。
 十209 印刷する紙は廣い大きな紙で、幾ページ分も一度に刷れる。それを折つて、揃へてとちる。
 おる「居」(五) 18 居ル 居る「ツ・ラ・リ・ール」
 四487 園 とけいはあさからかつちん、かつちん。おんなじひびきで、うごいて居れども、(略)。
 五386 すぎるはその大ぜいの子をおみやのそばでやしなつて居つたと申します。
 五761 この中にはべんけいも居つた。

六467 園 「誰も居らぬか。」
 六471 園 「藤吉郎秀吉こゝにひかへて居ります。」
 六567 謙信は勝氣な人で、いよいよいくさがはげしくなると、じつとしては居られない。
 七184 園 又母がかね／＼めづらしい草花をほしくと申して居りますから、(略)。
 七646 くだ物も水をふくんで居り、やさいにも水けがある。
 七678 園 (略)、來年はたくさんならせて、たくさん差上げたいと思つて居ります。
 七693 園 (略)、こんな見事な桃があるのなら、植ゑて見たいと申して居ります。
 七699 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色々ノ動物ガ居リ、サマン／＼ノ植物モアル。
 七717 アサリ・ハマグリナドハ砂ヤ泥ノ上ニ居リ、サザエ・カキナドハ岩ニツイテキル。
 八343 其の時分までよそへ奉公に行つて居つた若いむすこが、今では其の後をついで、(略)。
 八668 園 病中の祖母も(略)、有りがた涙をこぼして居ります。
 九231 園 おつかさんは『(略)』といつて居られるが、まだ其の折に出會はないのだ。
 十82 アブラナ・ツバキナドノ葉ハ

一ツオキニ莖ニ附イテ居リ、(略)ノ葉ハ二枚ヅツ向ヒ合ツテ附イテキル。
 十3610 園 あれの温順なことをよく現して居ります。
 十868 (略)、琉球ではたくさん飼つて居つた。
 おる「織」(四・五) 16 おる 織ル 織る「ツ・ラ・リ・ール」
 五14 (略)、大神がはたをおらせていらつしやる所へ(略)。
 六335 園 絹糸ニテ織リタルモノヲ絹織物トイフ。
 六341 園 木綿糸ニテ織リタルモノヲ木綿織物トイフ。
 六346 園 麻又ハカラムシノ糸ニテ織リタルモノヲ麻織物トイフ。
 六347 園 麻糸ニテ織リタルモノハカヤナドニツクリ、(略)。
 六348 園 (略)、カラムシノ糸ニテ織リタルモノハカタビラナドニツクル。
 六355 園 (略)、ケモノノ毛ヲツムギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。
 七291 (略)、木綿は一尺の絹織物を織る絹糸は出来ない。
 七292 蠶をかつて絹糸を取り、絹糸を織つて絹織物にするまでには、大それた手間がかかる。
 八624 木綿絲ヲ機デ織ツテ造リマス。
 八648 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノ

の代りに石をたくさんつみました。
六22 さうして前にしるしを附けて

おいた所まで船が水につかつた時に、その石をおろして、(略)。

六79 2 ハトバノ右ニ着イテキル汽船ハ今荷物ヲオロシテキル。

六79 8 オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。

七89 9 園 ポートハヤガテ福井丸ノカタハラニ卸サレテ、一同乗リウツレリ。

十一58 1 園 大砲のつなをくゝりつけて、早く自分を谷へ下せ。

十一58 8 (略)、兵士は止むを得ず將軍を谷底へ下した。

十二82 4 (略)、傍の石にこしを下し、額を両手に支へて人知れぬ涙をこぼして居る。

十二89 1 園 (略)、錠を下すべき處には錠を下し、(略)。

十二89 1 園 (略)、錠を下すべき處には錠を下し、(略)。

十二89 1 園 (略)、錠を下すべき處には錠を下し、(略)。

おろち「大蛇」(名) 5 大蛇 ヲやまたのおろち

九2 10 園 此の地に八岐の大蛇とて八つの頭と八つの尾とある大蛇あり、(略)。

九3 4 園 (略)「さらば我汝等のために其の大蛇を退治せん。」

九3 7 園 (略)、やゝありてかの大蛇あらはれ出で、八つの頭を八つの槽の中に入れ、酒を飲んでよふふしたり。

九3 10 園 尊(略)、ずたずたに大蛇

を斬り給ひしに、尾にいたりて、劍の先少しかけたり。

九4 5 園 かの大蛇の住みし上には濃雲常に立ちこめたれば、劍の名を天叢雲劍と申せり。

おわかれ「御分」(五) 1 お分る「一り」

八45 9 園 「こちらでは近年にない大火事だから、(略)それが東京の今朝の新聞に出たので、お分りになったのちがひない。

おわかれ「御別」(名) 1 オワカレ

三71 1 園 ソレデハオワカレノシルシニコノハコヲオ上ゲマウシマセウ。

おわします「御座」(四) 2 おはします「一スーセ」

十一13 10 園 (略)、主上尚笠置におはしませし時、(略)。

十二24 4 園 (略)、長谷観音の堂近く、露坐の大佛 おはします。

おわらう「御笑」(五) 3 お笑ふ「一ヒ」

五3 1 (略)女の神さまのまひがおもしろかつたから、大ぜいの神さまがたは手をたたいて、お笑ひになりました。

五38 1 天皇はこれをごらんになつて、大そうお笑ひになりましたが、(略)。

八11 2 園 一人の分はうっかりしてゐる間に寫されましたので、かへつて

よく寫りました。伯母様お笑ひになつてはいけませんよ。

おわり「終」(名) 18 ヲハリ をはり終り 終

一55 6 ヲハリ

二66 2 ヲハリ

三74 6 をはり

四83 4 をはり

五82 1 をはり

六7 1 園 三月ノ初ヨリ五月ノ終マデハ春ナリ。

六7 2 園 六月ノ初ヨリ八月ノ終マデハ夏ナリ。

六7 4 園 九月ノ初ヨリ十一月ノ終マデハ秋ナリ。

六7 5 園 十二月ノ初ヨリアクル年ノ二月ノ終マデハ冬ナリ。

六86 2 終

七92 8 終

八48 園 (略)本文の終り又は受信人居所氏名の下に(略)

八96 1 終

九96 10 尋常小學讀本卷九終

十108 3 尋常小學讀本卷十終

十一118 7 尋常小學讀本卷十一終

持つ。」とうたはれたり。
おわりのくに「尾張国」(地名) 1 尾張の國

九6 6 園 草薙劍は尾張の國にとゞめ給ひしかば、宮を建ててそこにまつれり。

おわりやごふくてん「尾張屋呉服店」(名) 1 尾張屋呉服店

九14 3 園 五月七日 尾張屋呉服店 山本屋様

おわりやごふくてんおんちゅう「尾張屋呉服店御中」(名) 1 尾張屋呉服店御中

九13 5 園 五月三日 山本屋太七郎 尾張屋呉服店御中

おわる「終」(四・五) 9 終ル 終る

《一ッーラーリールーレ》

六52 8 をしいことに、そのいくさの終らない中に病氣でなくなつてしまひました。

八3 5 園 明治三十七八年戦役の終りたる後も、天皇陛下御參拜あらせられ、(略)。

十21 8 活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、(略)。

十一35 8 園 當地にてはとくに苗の植付も終り、(略)。

十一70 4 園 人を訪問する時は(略)、用事終れば直ちに去るべく、(略)。

十一79 8 園 鵜飼は五月中旬に始り、十月中旬に終る。

十二36 9 式終ツテ、一同校舎ヲ巡覽

シタ。

十二84 9 歌が終ると、(略)、目禮して何處へか行つた。

十二88 2 喜劔(略)、「我當に萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を抜き切腹して終る。

おん「恩」(名) 4 恩ひごおん

六82 5 人々忠義を第一に、あふげや、高き君の恩、國の恩。

六82 5 人々忠義を第一に、あふげや、高き君の恩、國の恩。

七61 7 昔より「犬は三日かへば、三年その恩をわすれず。」といへり。

十一44 8 (略)、正儀は(略)、「今日は吉日なり、元服せよ。」とて、もとよりを上げて、和田小次郎正寛と名乗らせ、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。熊王恩に感じ、涙せきあへず。

おんあい「恩愛」(名) 2 恩愛

十一44 10 (略)、年頃の恩愛、殊には今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

十二33 9 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)、忠義の爲には恩愛を忘るゝ真心より出でたり。

おんあそび「御遊」(名) 1 御遊

八50 9 (略)ケマリノ會ヲナシ給ヒ、(略)。御遊ナカバニシテ、マリヲケ給フハズミニ、皇子ノクツヌゲ

タリ。

おんありさま「御有様」(名) 1 御有様

八7 6 (略)、外宮に參拜す。神殿の御有様、おほよそ内宮に同じと見奉る。

おんい「恩威」(名) 1 恩威

九63 6 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、恩威ならび行はれて、向ふ所敵なく、(略)。

おんいで「御出」(名) 1 御出

八29 8 數日ノ後、川成ヨリ「見申シ度キ繪出來タリ。御出アリタシ。」ト、エノモトニヒ來レリ。

おんいでなさる「御出」(下二) 1 御出でなさる 《一レ》

九20 9 (略)、「母は如何にも残念に思ひ候。何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。

おんいとま「御暇」(名) 1 御いとま

十一41 8 是より御いとま賜はり、河内に行きて正儀に仕へん。

おんいとまごいしたまふ「御暇乞給」(四) 1 御いとまごひし給ふ 《一フ》

九5 2 尊は(略)、又御叔母倭姫命に御いとまごひし給ふ。

おんいまいもうしあぐ「御祝申上」(下二) 1 御祝ひ申上 《一ゲ》

十27 4 御入營、軍務に服せられ候事、(略)。(略)、手紙を以て御祝ひ申上候。

おんうしろ「御後」(名) 1 御後

八52 5 中大兄皇子(略)物カゲニカクレ給フ。鎌足ハ弓矢ヲ持ツテ御後ニシタガヘリ。

おんうまや「御馬屋」(名) 1 御馬屋

八5 5 五十鈴川の水に口すゝぎ(略)、神樂殿・御馬屋の前を通り、御宮の前にいたる。

おんおくりあいなる「御送相成」(四) 1 御送り相成 《一リ》

九13 1 十反だけ御見立の上、二口とも本月十五日までに御送り相成度願上候。

おんおくりくださる「御送下」(下二) 1 御送り下さる 《一レ》

九12 8 (略)、此の地方には賣行よろしかるべしと存ぜられ候間、なほ三十反御送り下され度、(略)。

おんおとうと「御弟」(名) 2 御弟

五1 2 天照大神の御弟に、すさのをのみことといふきのあらひ神さまがありました。

九1 8 神代の昔、天照大神の御弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひしに、(略)。

おんおば「御叔母」(名) 1 御叔母

九5 1 尊は(略)神宮を拜し、又御叔母倭姫命に御いとまごひし給ふ。

おんかえり「御帰」(名) 1 御歸り

九44 3 (略)、一日も早く御用御すましの上、御歸りの程御待ち申上候。

おんかがみ「御鏡」(名) 1 御鏡

八2 7 (略)、この御鏡を御神體として、皇祖天照大神をまつりたまへるなり。

おんがく「音楽」(名) 1 音楽ひつじ

おんがく・つじおんがくし

十二82 9 弓が一度糸にふれると、天上の音楽の様な美しい音がわき出した。

おんかざり「御飾」(名) 1 御かざり

八6 6 (略)、神殿の(略)。(略)、金色の金物きら／＼と日にかゞやけり。その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、(略)。

おんかた「御方」(名) 1 御方

八54 2 中大兄皇子ハ(略)。天智天皇ト申シ奉ルハ即チ此ノ御方ナリ。

おんかたわら「御傍」(名) 1 御かたはら

十二1 6 陛下が萬機の政をみそなはす御かたはら、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、(略)。

おんかまえ「御構」(名) 1 御かまへ

八6 7 (略)、神殿の(略)。(略)、その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、かへつてかしこく、かたじけなし。

おんかわり「御変」(名) 1 御變り

十一35 7 一別以來御變りもこれ無く候や。

おんぎよく「音曲」(名) 1 音曲

十二810 (略)、路ばたにバイオリン

を弾いて居る老人の辻音楽師がある。(略)。(略)、時代後れの下手な

音曲に耳を傾ける者は一人もない。

おんくらい「御位」(名) 1 御位

九18 (略) 代々の天皇の御位に即かせ

給ふ時には、必ず三種の神器を受け

つぎ給ふ。

おんこう ぐちゃくじつおんこう

おんこうやすし「御心安」(形) 1

御心安し「一キ」

十一62 (略) 親族一同打寄り、

心ばかりの祝宴相開き、御心安き方

々御招待致度と存候間、(略)。

おんことば「御言葉」(名) 1 御コト

七45 (略) ミヅカラ御コトバヲウケ

タマハリ来リテ我ニツゲタルヲ、汝

ハ早クモワスレタルカ。

おんこどもしゅう「御子供衆」(名) 1

御子供衆

九715 (略) 御一家御無事に御座候

や、御老人・御子供衆も御大勢の事

故如何と御案じ申し居り候。

おんさしいだし「御差出」(名) 1 御

差出

九125 (略) 去月二十五日御差出の結

物二十反本日到着。

おんさしつかえ「御差支」(名) 1 御

差支

十912 (略) 御差支これなく

候はば、有志の方々御さそひ合せの

上、御來會相成候ては如何。

おんさそいあわせ「御誘合」(名) 1

御さそひ合せ

十918 (略) 御差支これなく

候はば、有志の方々御さそひ合せの

上、御來會相成候ては如何。

おんさそいくださる「御誘下」(下二)

1 御誘ひ下さる「一レ」

十928 (略) 来る八日講話會これあ

り候由にて御誘ひ下され有り難く存

候。

おんさだめ「御定」(名) 1 御定

八31 (略) 神殿は(略)、二十年ごと

に新しく造らせたまふ御定なりと承

る。

おんさつし「御察」(名) 1 御察し

九210 (略) 如何ばかりの思にて、此

の手紙をしたゝめしか、よく御

察しこれあり度候。

おんさとし「御諭」(名) 1 御諭し

十二110 (略) 勅諭は(略)、明治の大

御代に及びて、復古の政と共に陸海

軍の今の制度を定め給へる由來を詳

に御諭しあり、(略)。

おんさととり「御悟」(名) 1 御さと

十一16 (略) 主上は詩の心を御さと

ありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひ

ぬ。

おんさわり「御障」(名) 1 御障

九431 (略) 少しも御障なく入らせら

れ候由、一同安心仕候。

おんし「恩賜」(名) 2 恩賜

九813 (略) 道真今昔の感にたへず、恩

賜の御衣をさへぎて、はるかに東方

を拜し、(略)。

九817 (略) 恩賜の御衣なほこゝに在

り。さへぎ持ちて毎日餘香を拜す。

おんしき「御式」(名) 1 御式

八37 (略) 明治三十七八年戦役の終り

たる後も、天皇陛下御參拜あらせら

れ、平和の成りたるを告げたまひし

が、その御式の盛なること前古たぐ

ひなかりきと申す。

おんしつ「温室」(名) 1 温室

十一95 (略) 乾イタ軸木ノ先へ藥

品ヲ附ケル者、ソレヲ温室デ乾カス

者、(略)。

おんじゅん「温順」(名) 1 温順

十二339 (略) 外温順・愛敬の徳を守り

て、内確固たる志操を持し、(略)、

自若として其の常を失はざるは日本

女子の美德なり。

おんじゅん「温順」(形状) 1 温順

十36 (略) 人が大勢込合つてゐる中

で、少しも人に先んじようとはせ

ず、靜かに自分の順番を待つてゐま

した。あれの温順なことをよく現し

て居ります。

おんしん ぐいちおんしん

おんすまし「御済」(名) 1 御すまし

九442 (略) 一日も早く御用御

すましの上、御歸りの程御待ち申上

候。

おんせい「音声」(名) 1 音聲

十772 (略) 耳ハ音聲ヲ聞キ、

(略)、各之ヲ腦ニ報告ス。

おんせわくださる「御世話下」(下二)

1 御世話下さる「一レ」

九211 (略) 村の方々は朝に夕に色々

とやさしく御世話下され、(略)。

と親切におほせ下され候。

おんせん「温泉」(課名) 2 温泉

十目7 第二十課 温泉

十718 第二十課 温泉

おんせん「温泉」(名) 8 温泉

十710 (略) 其の熱氣に温りたる水の自

然に地上にわき出づるもの、即ち温

泉なり。

十728 (略) 温泉のわき出づる處はおほ

むね火山の附近に在りて、四圍の風

光麗しく、神氣自らさわやかなるを

覺ゆ。

十726 (略) 温泉の諸種の病を治する

は、たゞに其のふくめる礦物の効の

みならず、一つには又(略)、美麗

なる風光に接するが爲なるべし。

十720 (略) 我が國は火山國にして、全

國到る處に温泉あり。

十731 (略) 温泉の多きこと實に世界第

一なり。

十738 (略) 道後に次ぎて早く世に知ら

れたるは有馬の温泉にして、(略)。

十748 (略) 伊香保も亦古より知られ

たる温泉にして、榛名山のふもとに

あり。

十二424 (略) 阿蘇山は此の如く複雑な

る一大火山にして、山中に多くの噴火口及び温泉あり。

おんせんば「温泉場」(名) 2 温泉場
温泉場

九四〇(図) 今ハ此ノ七湯ノ外ニ新シキ温泉場モ開ケ、(略)。

七四一(図) 箱根は温泉場の數も多く、廣大なる旅館も少からざれども、(略)。

おんそん「御村」(名) 1 御村

十九〇(圖) 御村も當村と同じく水利の良き割合には田地少く、整理の必要これあり候様存ぜられ候間、(略)。

おんたちよりくださる「御立寄下」(下二) 1 御立寄下さる「一レ」

十一九一(圖) 御道筋の事故御立寄下さる候はば、小生も御同行致すべく候。

おんため「御為」(名) 5 御タメ 御爲

七二八(圖) 我が死ニタル後モ、(略)忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七四〇(圖) 大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七七一(圖) モシ病ニカ、リテ早ク死ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナリ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベシ。

八八四(略)、中佐ハ今度ノ出陣ヲ幸ニ、帝國ノタメ、天皇陛下ノ御タメニ、メザマシイ勦ヲシナクレバナラナイト、(略)。

十九八(圖) 此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、(略)。

おんだん「温暖」(形状) 1 温暖

十二六九(圖) 満目ノ廣野雪に埋れて食物ノ缺乏せる頃に至れば、温暖なる地方に移らんと欲するもの期せずして相集り、(略)。

おんち「御地」(名) 3 御地

九七〇(圖) 連日ノ大雨に候へば、大川に近き御地は如何と案じ居り候ところ、(略)。

十一三五(圖) 御地は今尚冬の季節と存候。

十一一〇(圖) 極南暑熱の御地にても同じことと存候。

おんちほう「御地方」(名) 1 御地方

九七一(圖) (略)、本日ノ新聞により、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

おんちゅう ヲおわりやごふくてんおんちゅう
おんてかすながら「御手数」(副) 1
御手数ながら

十一六三(圖) (略)、御來會下され候はば、御手数ながら来る二十八日まで、(略)御一報下され度候。

おんてがみ「御手紙」(名) 3 御手紙
九四二(圖) 十二日附の御手紙今朝到着拜見仕候。
十九二(圖) 御手紙拜見仕候。
十一九五(圖) 先般御手紙にて御近況

を承知致し、御なつかしく存候。

おんど「温度」(名) 1 温度

十二一九(圖) (略) 晴・曇・雨・雪、風の方角・強弱、温度等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

おんとき「御時」(名) 1 御時

九六二(圖) (略)、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、(略)。

おんともつこうまつる「御供仕」(四) 1 御供仕うまつる「一レ」

十一一三(圖) (略)、北條高時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。(略) 御供仕うまつれる警固の武士もよろひの袖をしぼらざるはなかりき。

オンドル(名) 3 オンドル

十一一〇(圖) 床下に土石を盛り、數條のみぞを造つて、一方の口から火をたいて室内を温める。之をオンドルといふ。

十一一〇(圖) 此のオンドルがある爲に、普通の家では冬でも夜具を用ひない。

十一一〇(圖) オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、(略)。

おんな「女」(名) 10 ヨンナ 女
二二九(圖) ヲトコノ子モ、ヨンナノ子モ、オモシロサウニアソンデキマス。

三三三(圖) ナヘヲウエテキル女ハ、(略)、コエヲソロヘテ、ウタツテキマス。
三三三(圖) ハツニナル女ノ子ガア

リマシタ。

三六〇(略)、女や子どもも大ぜい出て、いつしよになつてひきあげます。

五二七 その時あめのうずめのみことといふ女の神さまのまひがおもしろかつたから、(略)。

五三二(圖) 大ゼイノ女ガ茶ヲツンデキマス。

六六〇(圖) 八つばかりの女の子、たとを顔におしあてて、ひとりしくく泣いてゐる。

六六一(圖) 涙をふいて女の子、「いゝえ、さうではありません。

六七五 男や女や年よりや子供も大ぜい集つてゐますが、(略)。

一一〇八(圖) 女は短上衣を着て、西洋婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着ける。

おんなかまいりいたす「御仲間入」(四) 1 御仲間入致す「一シ」

一六九(圖) (略)、私も明年は是非とも御仲間入致し度と今より相樂しみ居り候間、時々營内の様子御報知下されたく願上候。

おんなこども「女子供」(名) 1 女子供

九三六 關所も無ければ、川止も無いから、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出来る。
おんなじ「同」(連体) 2 おんなじ
四四八(圖) といひはあさからかつ

ちん、かつちん。おんなじひびきで、うごいて居れども、(略)。
 四四八圖 (略)、ちつとも おんなじ所をささずに、ばんまでかうして、かつちん、かつちん。
 おんなつかし「御懷」(形) 1 御なつかし「一シク」
 十一九五六圖 先般御手紙にて御近況を承知致し、御なつかしく存候。
 おんなで「女手」(名) 1 女手
 九一八〇 (略)、ある日我が軍艦高千穂の一水兵が女手の手紙を読みながら泣いてゐた。
 おんにわ「御庭」(名) 2 御庭
 十169圖 ある雪の朝、皇后は美しき御庭の雪景色を御覽じて、(略)。
 十一158圖 高德(略)、行在所の御庭にしのび入り、大いなる櫻の木の手をけつりて、(略)。
 おんねつにたい「温熱二帯」(名) 1 温熱二帯
 十二4710圖 北海道の一驛と、外に南北新領土。温熱二帯にまゝがりて、天産多きうまし國。
 おんまえ「御前」(名) 3 御前
 八526圖 天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ(略)。ヤガテ同志ノ一人御前ニ進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、(略)。
 八528圖 入鹿アヤシミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、「御前近ウシテ。」ト答フ。

十1610圖 ある雪の朝、皇后は(略)、「(略)。」と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみずをまき上げたり。
 おんまちもうしあぐ「御待申上」(下二) 1 御待ち申上「(ゲ)」
 九448圖 (略)、一日も早く御用御すましの上、御歸りの程御待ち申上候。
 おんみ「御身」(名) 1 御身
 九441圖 何とぞ御身御大切に成し下され、(略)、御歸りの程御待ち申上候。
 おんみおくりいたす「御見送」(四) 1 御見送致す「一ス」
 十272圖 當日參上御見送致すはずに候へども、(略)。
 おんみたて「御見立」(名) 1 御見立
 九1210圖 (略)老人向きの紺がすり上物十反だけ御見立の上、(略)御送り相成度願上候。
 おんみちすじ「御道筋」(名) 1 御道筋
 十914圖 御道筋の事故御立寄下され候はば、小生も御同行致すべく候。
 おんみまい「御見舞」(名) 1 御見舞
 九717圖 御一家御無事に御座候や、(略)如何と御案じ申し居り候。取りあへず御見舞まで。
 おんみまいじょう「御見舞状」(名) 1 御見舞状
 九721圖 御見舞状有りがたく拜讀仕候。

おんみや「御宮」(名) 2 御宮
 八32圖 (略)皇大神宮をたふとびたまふこと(略)。(略)かゝるたふとき御宮なれば、(略)。
 八56圖 五十鈴川の水に口すゝぎ(略)、神樂殿・御馬屋の前を通り、御宮の前にいたる。
 おんもうしこし「御申越」(名) 1 御申越
 九139圖 次に老人向きの紺がすりは、御申越の期日までは少々間に合ひかね候事と存候。
 おんやしる「御社」(名) 1 御社
 十二248圖 由比の濱を右に見て、雪の下村通行けば、八幡宮の御社。
 おんやね「御屋根」(名) 1 御屋根
 八59圖 (略)、神殿の御屋根はかやにてふき、棟にはかつを木をならべ、兩はしに千木をうちちがへたり。
 おんよろこび「御喜」(名) 1 御喜
 九438圖 祖父様は(略)、はや朝顔のはちをならべて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。
 おんりょう「温良」(形状) 1 温良
 十二936圖 孔子は(略)、人と爲り禮を好み、温良・恭儉なりき。
 おんれい「御礼」(名) 1 御禮
 九756圖 御見舞状有りがたく拜讀仕候。(略)。取急ぎ御禮かたがた右御報申上候。

おんわ「温和」(形状) 1 温和
 十一965圖 併し夏は氣候温和にして、至つて凄きよく候。
 か「下」ひこんごうせんか
 か「可」(名) 1 可
 十二955圖 我、罪を魯君に得たり、如何にせば可ならん。」
 か「貨」(名) 1 貨
 九894圖 (略)、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。
 か「香」(名) 5 香ひいろか
 八349圖 (略)、つゞいてかをる梅が香に、うぐひす 鳴かぬ 里もなし。
 九679 (略)、花の香を送つて、そよぐと吹く春風には、我が身も蝶の様に飛立ちたくなる。
 十772圖 目ハ色・形ヲ見、耳ハ音聲ヲ聞キ、鼻ハ香ヲカギ、口ハ味ヲ味ハヒテ、各之ヲ腦ニ報告ス。
 十997圖 人はいさ心も知らず、故里は 花ぞ昔の香にほひける。
 十一222圖 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。
 か「家」ひいっか・いっかじゅう・かくれが・げきけんか・ざいさんか・すみ

か・せんもんか・だいらよこうか
か「箇」ひいっかげつ・いっかしよ・

さんかげつかん・さんじっかしよ・し
かしよ・しかねん・しちにち・しち
かねん・じゅういっかげつ・じゅうに
かげつ・すうかしよ・にかげつ・にさ
んかげつ・にじゅうかしよ・ひゃっ
かしよ

か「課」ひだいいつか・だいくか・だ
いごか・だいさんか・だいしか・だ
いしか・だいいつか・だいいじゅうい
つか・だいいじゅうか・だいいじゅう
か・だいいじゅうさんか・だいいじゅう
か・だいいじゅうしちか・だいいじゅう
つか・だいいじゅうはちか・だいいじゅう
ろつか・だいにいか・だいにじつか・だ
いにじゅういっつか・だいにじゅうごか・
だいにじゅうさんか・だいにじゅうし
か・だいにじゅうしちか・だいにじゅう
うにか・だいにじゅうはちか・だいに
じゅうろつか・だいはちか・だいろつ
か

か(副助) 40 か ひいかでか・い
つか・いまかいまかと・なんだか
— 41 2 イクツサイタカ、カゾヘテ
ゴランナサイ。
四 19 4 (略)、たふれるが早い
か、ただつねはすぐに(略)木の
上へとびのきました。
四 27 3 (略) 虫も死んでしまつた
のか、もうなくこゑもきこえ

ません。

四 53 1 箇 「オマヘノナカマトオ
レノナカマト、ドツチガ多イ
カ、クラベテ見ヨウ。」

四 54 1 箇 オレノ方ガ少イカモ
知レナイ。

四 78 6 箇 だれか上手なものは
ないか。」

五 65 2 箇 「(略)、どう書いてよいか
わかりません。」

五 76 4 ふだんは人も通らない道だか
ら、どこをどう行つてよいか分ら
ない。

五 80 3 見下せば、しろは何十丈ある
か知れないがけの下にある。

六 12 2 ツバメハ暖ニナルト、ドコカ
ラカトンデ来テ、(略)。

六 12 3 ツバメハ(略)、涼シクナル
ト、マタドコカヘトンデ行ク。

六 20 5 (略) 象の目方をはからうと
したが、どうしてはかつてよいか分
りませんでした。

六 70 3 (略)、先生に何か聞かれて
も、答へることが出来ないで、(略)。

七 16 3 手 (略)、何かあらでとの
へて来る物がございますなら、御
ゑんりよなくおつしやつて下さい。

八 29 4 箇 北ヘマハレバ、東ノ戸開
キ、(略)。幾度カマハリタレドモ、
入ルコトヲ得ズ、(略)。

八 40 2 箇 (略)、一箱ノマツチガ我等
ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手

ヲ要スルカヲ知ラズ。

八 42 3 又隣へうつつたのかも知れな
い。

八 42 7 (略)、今夜の此のはげしい風
では、どこまで焼けて行くか分らな
い。

八 45 7 箇 「こちらでは近年にない大
火事だから、誰かすぐに東京へ電報
を打つたのだらう。

八 69 2 手 此のかはせの金は、ほんの
僅かですが、何かすきな物を買つて
上げて下さい。

九 21 10 箇 手 如何ばかりの思にて、此
の手紙をしたゝめしか、よく御
察しこれあり度候。」

九 70 7 (略)、翌朝起きて見れば、何
時の間に雪に變つたか、そこら一面
銀世界になつてゐることもある。

九 84 1 三番太鼓が鳴るが早い、五
匹の馬は一散にかけ出した。

十 7 3 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラ
マツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出
テ、(略)。

十 7 9 モミデノ葉ハ幾スデカノ脈ガ
本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキ
ル。

十 18 10 (略)、我の読む様なものに
なるまでには、幾度書直すかも知れ
ない。

十 28 6 廣い田の面は(略)、人影の
見えないのみか、かゝしの骨も残つ
てゐない。

十 47 1 箇 見よ、(略)の模様の如何
に麗しきかを。

十 59 3 箇 手 何か不都合なる事あり
て、罰に處せられたる者は(略)。

十 68 10 箇 (略)、幾度かいそべに出で
てながめしが、(略)。

十 114 5 箇 志士・仁人は生を求
めて仁を害することなし。身を殺し
て仁を成すことあり。」とかや。

十 145 1 箇 幾度か思ひ直して討たん
とすれども、(略)。

十 147 8 馬主は(略)、馬の耳に口
を寄せて、何事か話してゐるかと思
ふと、(略)。

十 156 5 (略)、谷へ下りる細道も雪
や氷にとざされて、どこか全く知れ
ない。

十 172 7 箇 さらば年來の謝恩に何
か書きて参らすべし。」

十 188 2 箇 網を張らんとする時は、
先づ幾條かのやゝ太き絲を渡し、
(略)。

十 258 9 箇 (略)、露西亞の東清鐵道
及びシベリヤ鐵道を利用せんか、大
連より僅かに二週間にして歐羅巴の
中央に入るべし。

十 282 3 (略) 老人は、(略)、帽子の
内を眺めては、幾度かためいきをつ
いて居る。

十 284 10 歌が終ると、紳士は(略)、
目禮して何處へか行つた。

十 285 3 かの情深い紳士は誰であつ

たか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。
か(係助) 11 カ か

七十九(文) (略)、わき目もふらず、
怠らず、ふるひ進むに何事かなど
成らざらん、ばんじやくの 重きも
つひにうつすべし。

九十六(文) (略)ヲ見ルモノ、誰力ハ
義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。

九十二(文) (略) 雲あまで 聞え上
げたる 言の葉は、幾代の春か
をらん。

十二十二(文) 何者にてか候ふらん。

十十二(文) コ、ニマウヅルモノ、誰力
ハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ
御威徳ヲ仰ガザラン。

十一二十四(文) (略)をくらべんには、
誰か人智の進歩の大なるに驚かざら
ん。

十二一十四(文) (略)、之を拜讀するもの
誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛
の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。

十二三十八(文) 秀忠「さらば誰か然る
べき。」といふ。

十二七十三(文) 快活なる精神を以て熱心
に其の事業に従事せば、天下何事か
成らざるを憂へん。

十二一〇二(文) 何をか自治の精神とい
ふ。

十二一五二(文) 心誠ならざれば、如何な
る言行も表面の裝飾に過ぎざれば、
何の用にか立たん。

か(並助) 13 カ か

六六四(文) (略)、一目千本咲きみち
て、かすみか雲か美しや。

六六四(文) (略)、一目千本咲きみち
て、かすみか雲か美しや。

六十五(文) 刈つた稲はさをや木にかける
か、地面にひろげるかして、よく日
にかわかします。

六十五(文) 刈つた稲はさをや木にかける
か、地面にひろげるかして、よく日
にかわかします。

六三十一(文) (略) おふみはいそぎ道ば
たを そこかこゝかとさがすうち、
(略)。

六三十一(文) (略) おふみはいそぎ道ば
たを そこかこゝかとさがすうち、
(略)。

七七三(文) コノ度ノ合戦ニハ、師直
ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ヲガ
クビヲカレヲニ取ラスルカ、ニツノ
中ノ一ツト思ヘバ、(略)。

七七四(文) コノ度ノ合戦ニハ、師直
ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ヲガ
クビヲカレヲニ取ラスルカ、ニツノ
中ノ一ツト思ヘバ、(略)。

七三十一(文) (略)、その間に一日か二日づ
つ眠ることが四度ある。

十一九四(文) (略)、靴の價はやうやく
安くなりて、普通の價に復するか、
場合によりては尚それ以下に下るべ
し。

十一九四(文) (略)、供給も随つて減じ
て、又普通の價に復するか、場合に

よりては尚それ以上に上るべし。

十二一五(文) 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ
疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ
テアル。

十二一五(文) 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ
疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ
テアル。

二二七(文) カ か 弓ものか
二二七(文) ウツクシイデハアリマセン
カ。

二二五(文) 「オキクサンデスカ。ヨ
クイラツシヤイマシタ。」

二二四(文) 「ニイサン、コノ川 ニコ
ヒガキマスカ。」

二二三(文) 「コノ川 ハドコカラナ
ガレテクルノデスカ。」

二二四(文) 「カガミモチヲマトニ
シテ、イテミマセウカ。」

二二四(文) (略)、ダイテチヲヲノ
マセテクダサツタノハ、ドナタ
デスカ。

二二四(文) (略)、ネンネコウタヲウ
タツテクダサツタノハ、ドナタ
デスカ。

二二四(文) (略)、ゴハンヲタベサセ
テクダサツタノハ、ドナタデス
カ。

二二四(文) (略)、クスリヲノマセテ
クダサツタノハ、ドナタデス
カ。

ドナタデスカ。」

二四三(文) コハサウナ目ヲシテ、ニ
ランデキルデハアリマセンカ。」

二五五(文) ソノマツノ木ハ(略)、
天マデトドクカトオモフヤウ
ナ、大キナ太イ木ニナリマシ
タ。

二五九(文) (略)、ハヒガ(略)カレ木
ノエダニカカツタカトオモフ
ト、ウツクシイハナガサキマシ
タ。

三二六(文) マコトニウツクシイデハ
アリマセンカ。

三四六(文) デテキテ、イツシヨニ
アソビマセンカ。」

三四十(文) 今もぐつたかとおもふ
と、すぐに一びきくはへて、でて
きます。

四四三(文) 「ああ、あれですか。
四六八(文) 今あのはしの上を人
がいくたりとほつてゐますか。」

四九二(文) 日ノマルノコクキガアサ
日ニカガイテキルノハ、イ
サマシイデハアリマセンカ。

四一八(文) (略)よりともものちかくへ
来るかと思ふと、ただつねは
(略)五刀六刀さしとほしました。

四二四(文) 「次郎、オマヘハ手ノ
ユビノ名ヲ知ツテキマスカ。」

四二三(文) 「ソノ糸ハ一カケイク
ラデスカ。」

四二五(文) ミンナデイクラニナリ

拂ふのですか。」

七52 5 函 「小包郵便でもやはり四匁までが三錢ですか。」

七85 1 函 (略)、山の様な波が立つて、船は今にも沈むかと思ふ様になります。

七88 1 函 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんか。

七88 2 函 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。

七89 3 函 大砲ノヒキハ、天モオチ、海モサクルカト思フバカリナリ。

八5 2 函 (略)、數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高くと天をつく。

八19 7 親類や友だちは(略)、どうしたらよいかと、いろ／＼考へてゐました。

八20 6 農夫は(略)、この雀のせいではあるまいかと思ひました。

八20 9 函 「(略)、君は白い雀を見たことがあるか。」

八21 2 函 白い雀が實際居るのか。」

八22 7 (略)、若しや白雀が居はしまいかと、屋敷のまはりを見まはつて、野原の方までも行つてたづねましたが、(略)。

八23 6 水車場へ行くのかと思つて見てゐると、(略)。

ると、(略)。

八27 1 函 「どうだ、白雀は見つかったか。」

八30 6 函 「カク我ノ居ルニ、何ユエニ入り給ハザルカ。」

八46 7 函 「これようございますか。」

八47 7 函 「これようございますか。」

八62 3 皆サンノ着物ニシテキル木綿織物ハドウシテ造リマスカ。

八62 5 木綿絲ハドウシテ出来マスカ。

八62 8 綿ハ何カラトリマスカ。

八63 1 綿ノ木ハドコニ出来マスカ。

八63 2 又ドウシテ出来マスカ。

八64 2 木綿織物ニ(略)色々ナ縞ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデス力。

八65 1 藍ハ何カラ取りマスカ。

八67 1 函 (略)、一時はどうなることかと心配いたしました、(略)。

九67 6 春の初に降るのは一雨毎に花をもよほすかとうれしい。

十18 5 讀んでゐる間は(略)、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、(略)。

十34 9 或人が(略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十51 9 函 士かと思れば、錦のひたゝれ着けたり。

十51 9 函 大將かと思へば、續く者なし。

十51 10 函 京家・西國の者かとすれば、坂東聲なり。

十52 1 函 若者かと思へば、面におびたゞしきしわたゝめり。

十52 2 函 老人かと思れば、髪つや／＼と黒し。

十65 10 今にも沈むかと冷々する。

十一16 3 函 (略)、何事を如何なる者の書きたるかと、讀みかねて上聞に達したり。

十一18 2 函 船の其の間を行くとき、島かと思れば岬なり。

十一18 3 函 岬かと思れば島なり。

十一46 3 函 (略)、心の變ることもあるべきかとて、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

としぶと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

十一49 6 函 「閣下、三千金が惜しう御座いますか。」

十一49 7 函 此の馬が欲しう御座いますか。」

十一56 2 ピエールが打ついつもの太鼓に違ない。さては生きてゐるのか。

十一56 3 どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。

十一56 9 此の時「自分が行かう。」とさげふ人を誰かと思れば、將軍マクドナルである。

十一59 8 函 さらば行くか、やよ待て、我が子。

十一74 3 函 (略)、畫師は驚きて、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。

十一87 10 函 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは醸造の業と建築の業とをかねたりといはんか。

十二27 6 函 城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。」

十二31 2 函 形名の妻、夫を勵まして、「良人今獨り身を全うして、祖先以來の勇名を辱しめ給ふか。」と、(略)。

十二78 1 函 (略)、朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、(略)。

十二78 2 函 (略)、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知ら

ず。

十二83 1 老人は、どうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、どうして（略）出ないのかと不思議さうに、（略）打ちまもつて居た。

十二83 2 老人は、どうして（略）出るか、どうして又自分の弾く時にはあんな音が出ないのかと不思議さうに、（略）打ちまもつて居た。

十二83 6 重く沈んだ調に（略）へ引込まれるやうな気がするかと思ふと、軽く浮立つた調子に、（略）へ連れて行かれるやうな心持になる。

が「蛾」（名）3 蛾 蛾

七33 1 （略）、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て来る。これを蠶の蛾といふ。

七33 2 蛾が出ると、絲が取れないから、（略）、さなぎをころしておいて、（略）、絲を取るのである。

七33 4 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、（略）。

が（格助）1120 ガ が、あめがした・いなむらがさき・かすみがうら・きみがよ・これがすんでから・さくらがおか・しちりがはま・どうがしま・はるがきた

— 19 1 ホンガアリマス。

— 19 3 テホンガアリマス。

— 19 5 フデガアリマス。

— 20 1 トンボガトンデキマス。

— 20 3 セミガナイテキマス。

— 23 1 エリノハナガサキマシタ。

— 24 1 オヤドリガココココトヨ

ンデキマス。

— 24 4 ヒヨコガビヨビヨビヨト

ナイテキマス。

— 25 2 モリノナカニオミヤガ

アリマス。

— 25 3 アカイトリキガミエマス。

— 26 2 キノエダニカタツムリ

ガキマス。

— 27 1 ネエサンガエヲミテキ

マス。

— 27 4 ニイサンガジヲカイト

キマス。

— 28 1 ヘイタイガナランデキマ

ス。

— 28 5 アレガグンキデス。

— 30 1 ベンケイガウシワカマル

ニマケマシタ。

— 35 3 カドニハゴフクヤガアリ

マス。

— 36 1 ソラガクモツテキマシタ。

— 36 3 カミナリガナリダシマシ

タ。

— 36 6 イマニユフダチガキマ

ス。

— 38 4 （略）、イヌガヒキダス

エンヤラヤ。

— 39 1 サルガアトオスエン

ヤラヤ。

— 39 4 キジガツナヒクエン

ヤラヤ。

— 40 1 アサガホガサキマシタ。

— 42 1 ヒゴヒガ（略）、四ヒキ

マス。

— 46 1 カネガナル。

— 46 2 ヒケシガトンデイク。

— 48 1 ワタクシガコチラノハシ

ヲモツカラ、アナタハソチラ

ノハシヲオモチナサイ。

— 50 5 ハヤクカヘラナイト、オカ

アサンガシンバイシマス。

— 51 1 イツカセンセイガオハナ

シニナリマシタ、（略）。

— 52 2 カアカア、カラスガナ

イテイク。

— 53 5 （略）、カアカア、カラス

ガナイテイク。

— 2 2 （略）、人ガダンダンオキ

テキマス。

— 2 5 アチラノソラガマツカ

ニナリマシタ。

— 2 7 イマ日ガデマス。

— 4 3 オソクオキル人ハ、コノ

ウツクシイ日ノデヲミルコト

ガデキマセン。

— 7 5 オハナトオキクガアソン

デキマス。

— 7 7 オキクガイマオキヤクニ

ナツテキマシタ。

— 9 6 デタデタ、ツキガ。

— 10 3 （略）、ボンノヤウナ

ツキガ。

— 11 2 マタデタ、月ガ。

— 11 6 （略）、ボンノヤウナ

月ガ。

— 12 3 （略）、コノ川ニコヒ

ガキマスカ。」

— 14 3 犬ガサカナヲクハヘテ、

ハシノウヘニキマシタ。

— 15 2 （略）、ミヅノナカニモサ

カナヲクハヘタ犬ガキマス。

— 15 6 ホエルト、口ガアイト、

（略）サカナハミツノナカヘ

オチマシタ。

— 16 3 カゼガフイテ、イロイロナ

木ノハガトンデキマス。

— 16 4 （略）、イロイロナ木ノハ

ガトンデキマス。

— 20 3 ワタクシノキモノニハ、

ホソイハリガパイハエテキ

マス。

— 24 5 （略）、アノ木ノ下ニ

タケヲサンガキマス。」

— 25 2 モウ日ガクレマシタ。

— 26 7 ソコヘオトウサンガカヘ

ツテキマシタ。

— 27 7 ドコノイヘニモカドマツ

ガタテアリマス。

— 33 4 ムカシアルトコロニ、タ

ヤハタケヲタクサンモツテキ

タ人ガアリマシタ。

— 33 5 ユミヲイルコトガスキ

デ、（略）。

— 36 6 （略）コノ人ノタニハ、

- オ米ガスコシモデキナクナツタ
トイヒマス。
- 二41 窓 「ヤットカラダガデキマ
シタ。」
- 二42 1 窓 コレガハナデ、コレガ
口デス。
- 二42 2 窓 コレガハナデ、コレガ
口デス。
- 二43 2 窓 「(略)、ボクガウチカラ
タドンヲモラツテキマスカラ。」
- 二44 7 ココニハウメノ木ガタ
クサンアリマス。
- 二45 1 モウハナガサキハジメマ
シタ。
- 二46 1 (略)、ツボミガタクサン
ツイテキマス。
- 二46 4 (略)、アノオヤネニハウ
メバチノ大キナモンガツイテ
キマス。
- 二47 4 コノオカタハウメノハ
ナガオスキデシタカラ、(略)。
- 二47 6 (略)、ドコノテンジンサ
マノオヤシロニモ、ウメノ木
ガウエテアリマス。
- 二49 2 (略)、オカアサンカラオト
シダマニイタダイタ本ガ一サ
ツアリマス。
- 二49 3 コレニハウツクシイエガ
アツテ、(略)。
- 二49 5 (略)、ハナサカデデイノオ
ハナシガカイトアリマス。
- 二50 4 ムカシアルトコロニ、ヨ
イオデイスアントワルイオデイス
ンガアリマシタ。
- 二52 2 オデイスンガソコロホル
ト、(略)。
- 二52 5 (略)タカラモノガタクサ
ンデマシタ。
- 二56 6 (略)、イロイロナタカラモ
ノガデマシタ。
- 二59 1 スルトカゼガフイテ、ハ
ヒガバツトタツテ、(略)。
- 二59 1 スルトカゼガフイテ、ハ
ヒガバツトタツテ、(略)。
- 二59 5 (略)、ウツクシイハナガ
サキマシタ。
- 二60 5 トノサマガココヲオトホ
リニナツテ、(略)。
- 二63 6 (略)トノサマガオトホリ
ニナツテ、(略)。
- 三1 3 (略)、サクラノハナガ一
メンニサキマシタ。
- 三2 2 (略)、ユキガフツタヤウ
ニ白クナツタトコロガミエマ
ス。
- 三2 3 (略)、ユキガフツタヤウ
ニ白クナツタトコロガミエマ
ス。
- 三2 3 (略)、ユキガフツタヤウ
ニ白クナツタトコロガミエマ
ス。
- 三3 4 (略)、マサヲガ本ヲヨシ
ンデキマシタ。
- 三3 6 ウツクシイサクラノハナ
ガ、マドノソトカラノゾイテ、
(略)。
- 三4 3 窓 「(略)ワタクシドモノ
ナカマガタクサンサイテキマ
ス。
- 三4 8 窓 「コレガスンデカラ
イキマセウ。」
- 三5 1 コンドハウツクシイ小ト
リガマドノソトカラノゾイ
テ、(略)。
- 三5 7 窓 「コレガスンデカラ
イキマセウ。」
- 三5 8 (略)オサラヒガスママシ
タ。
- 三6 1 ソコヘトモダチガサソヒ
ニキマシタカラ、(略)。
- 三6 6 マサヲトモキチトオハ
ナガ三人デノハラニアソンデ
キマス。
- 三7 3 ノハラニハ、(略)、イロイ
ロナハナガサイテキマス。
- 三9 8 小さなむしがとんできま
した。「ひらがなのドリル」
- 三10 1 大きなうまがはしつてき
ました。「ひらがなのドリル」
- 三10 3 ウチニハネエサンガ一人、
ニイサンガ三人、オトウトトイ
モウトガ一人ツツアリマス。
- 三10 4 (略)、ニイサンガ三人、オ
トウトトイモウトガ一人ツツ
アリマス。
- 三10 4 (略)、オトウトトイモウト
ガ一人ツツアリマス。
- 三11 4 オトウトハ犬ガスキデ、
イツモブテトアソンデキマス。
- 三11 8 ウチノ人ガミンナソト
ヘデルトキニハ、(略)。
- 三12 1 (略)、オバアサンガオルス
キヲナサイマス。
- 三12 8 (略)月がでてゐます。「ひ
らがなのドリル」
- 三13 5 ムカシタイマノケハヤト
イフチカラノツヨイ人ガア
リマシタ。
- 三14 5 ソレヲ天子サマガオキ
キニナツテ、(略)。
- 三15 1 ケハヤハ(略)、ケルコト
ガマコトニハヤカツタノデス。
- 三15 2 シカシスクネモチカラガ
ツヨクテ、スバシコイ人デシタ
カラ、(略)。
- 三16 6 (略)、けはやがじまんを
しました。「ひらがなのドリル」
- 三17 3 アタカカイカゼガソヨソ
ヨトムギノホノ上ヲフイテ
キマス。
- 三17 4 ヒバリガオモシロサウニ
サヘツツテキマス。
- 三19 5 (略)、オヤドリガオリテ
コナイトキニハ、(略)。
- 三20 1 ひばちが一つ。「ひらがな
のドリル」
- 三20 1 ゆのみが二つ。「ひらがな
のドリル」
- 三20 2 ふえが三本。「ひらがな
のドリル」
- 三20 2 糸本が四さつ。「ひらがな

のドリル」

三20 子ども が 五にん。「ひらが
なのドリル」

三23 私 は そと が かたくて、中
が やはらかです。

三23 私 は そと が かたくて、中
が やはらかです。

三23 私 は そと が かたくて、中
が やはらかです。

三23 うまにはたてがみがある
けれども、牛にはありません。

三24 うまは からだ が ぼそく
て、足がながうございます。

三24 うまは からだ が ぼそく
て、足がながうございます。

三24 牛は からだ が 太くて、足
が みじかう ございます。

三24 牛は からだ が 太くて、足
が みじかう ございます。

三24 牛は 力が つよいけれど
も、あるくことがおそうござい
ます。

三24 牛は 力が つよいけれど
も、あるくことがおそうござい
ます。

三24 うまは (略)、はしる こと
が はやう ございます。

三26 おまへが すすめば、わ
たしも すすむ。

三27 おまへが ころべば、わた
しも ころぶ。

三28 (略) タケノコガ、モウコ

ンナニノビテ、(略)。

三28 (略)、タケノカハ ガ オチ
テ、リツバナ竹ニナリマス。

三29 ダイー タケノコガ タベラ
レマス。

三30 (略) ナド、竹デ作ツタモ
ノガタクサンアリマス。

三30 タルヤヤケニモ、竹ノ
タガガカケテアリマス。

三31 (略)、センドウガ舟ヲヤ
ルサヲニモ、竹ヲツカヒマス。

三31 アメガフリツツイテ、田
ノ水ガタクサンニナリマシタ。

三31 (略)、田ノ水ガタクサン
ニナリマシタ。

三31 ドコデモ田ウエガハジマ
ツテキマス。

三32 子ドモ ガ 二人アゼニ
タツテ、(略)。

三33 「コトシハホウネン、ホ
ニホガサイテ、(略)。」

三34 (略)、ミチノ小グサモ
米ガナル。」

三34 (略)、モウアノヒロイ田
ガハンブンバカリウワリマシタ。

三34 イマニアノナヘガノビ
テ、(略)。

三35 あをいひかりがかみの
上からすいてみえます。

三35 (略)、ちちにみせようと
したら、光がみえません。

三36 「ここがあかるいから、

みえないのです。

三37 七じがなりました。

三38 ほかにまだだいじなもの
が三つあります。

三38 これがなければ、せんせい
のおつしやることや、みんな
の言ふことがわかりません。

三39 (略)、せんせいの おつしや
ることや、みんなの言ふこと
がわかりません。

三40 うが川の中で 小さな
をとつてみました。

三41 それをからすが木の上
から見てゐて、(略)。

三42 (略) トイフタイシヤウガ
イクサニ行ツタトキ、(略)。

三43 (略)、ミンナガフンパツス
ルヤウニナリマシタ。

三44 アサ日ノ上ル方ガ東
デ、(略)。

三44 (略)、ユフ日ノ入ル方ガ
西デス。

三45 右ノ手ノサス方ガ南
デ、(略)。

三45 (略)、左ノ手ノサス方
ガ北デス。

三45 あるばん一人の男が
(略)、ながいさををふりまはし
てゐました。

三45 そこへともだちがきて、
「(略)。」ときくと、(略)。

三46 「あまりほしがきれい

だから、(略)。」

三47 とんぼなどがあたまの
上をとびまはつても、(略)。

三48 小さな虫がまへへくる
と、(略)。

三50 かへるは水の中にも、
をかの上にもすむことがで
きるのです。

三51 ハツニナル女ノ子ガア
リマシタ。

三54 アル日母ガ「早く、早く。」
トヨンダノニ、(略)。

三54 (略)、トナリノネコガダ
イジナキンギョヲトツテ、ニゲ
テ行キマシタ。

三56 (略)、ウチヂユウノ人ノ
キモノガホシテアリマス。

三57 アソコニハオトウサンノ
チャイロノオビガアリ、(略)。

三57 (略)、コチラニハオカアサ
ンノモンツキノハオリガアリ
マス。

三57 私ガヨバサンカライタ
ダイタムラサキ色ノハオリハ、
(略)。

三57 (略) ムラサキ色ノハオリ
ハ、イツマデタツテモ、色ガカ
ハリマセン。

三58 私ガキヨネンマデキテ
キタワタイレハ、(略)。

三58 うみの水が青青として、
どこまでも つづいてゐます。

三58

三58

三59 1 今日 は な み が お だ や か
で、(略)。
三59 2 (略)、舟が たくさん おき
へ 出 て り ま す。
三61 3 (略) う つ く し い か ひ や 小
石 が た く さ ん あ り ま す。
三63 3 (略)、この 貝 が ら は (略)、
おもて に う づ ま き が あ り ま す。
三65 2 ム カ シ ウ ラ シ マ 太 郎 ト イ
フ 人 ガ ア リ マ シ タ。
三65 5 (略)、子 ド モ ガ 大 ゼ イ デ
カ メ ヲ ツ カ マ ヘ テ、オ モ チ ヤ ニ
シ テ キ マ ス。
三66 4 (略)、ウ ラ シ マ ガ ウ ミ ベ
デ ヲ リ ヲ シ テ キ ル ト、(略)。
三66 6 (略)、大 キ ナ カ メ ガ 出 テ
キ テ、(略)。
三67 4 ウ ラ シ マ ガ ヨ ロ コ ン デ、カ
メ ニ ル ト、(略)。
三68 1 リ ュ ウ グ ウ ニ ハ オ ト ヒ メ
ト イ フ キ レ イ ナ オ ヒ メ サ マ ガ
居 テ、(略)。
三73 5 (略)、中 カ ラ 白 イ ケ ム リ
ガ 出 テ、(略)。
四1 7 が く か う の 西 ど な り は や
く ば で、や く ば の ま む か ひ が
け い さ つ し よ で す。
四2 3 (略)、左 が は に い う び ん き
よ く が あ り ま す。
四2 5 そ の す ち む か ひ に 大 き な
ご ふ く や が あ り ま す。
四2 8 (略)、大 き な 店 が た く さ

ん あ り ま す。
四3 2 村 の 人 人 が、(略) を
(略)、賣 り に き ま す。
四3 8 太 郎 と 次 郎 が 二 人 で 山
へ の ぼ り ま し た。
四4 3 窓 「(略)、こ こ か ら 見 る
と、町 が 一 目 に 見 え ま す ね。
四4 7 窓 「あ そ こ に 高 い 火 の 見
の は し が 見 え る。
四5 1 窓 あ の こ ち ら に 白 い か べ
が 見 え ま せ う。
四5 2 窓 あ れ が う ち で す。」
四5 7 窓 「う ち の ま へ の 川 が
あ ん な に ま が り ま が つ て、と ほ く
の 方 へ な が れ て り ま す。
四6 2 窓 あ の 川 む か ふ の 木 の
し げ つ て る の が、ハ ま ん さ ま
の も り で す。」
四6 5 窓 「(略) く る ま の と ほ つ て
ゐ る 長 い は し が、ハ ま ん さ ま
の ま へ の は し で す ね。」
四6 8 窓 今 あ の は し の 上 を 人
が い く た り と ほ つ て り ま す か。」
四8 1 (略) 雨 が ふ り さ う に な
つ た の で、(略)。
四8 8 日 ノ マ ル ノ コ ク キ ガ ア サ
日 ニ カ ガ ヤ イ テ キ ル ノ ハ、
(略)。
四9 4 (略)、ケ サ 天 長 セ ツ ノ シ
キ ガ ア リ マ シ タ。
四9 4 セ ン セ イ ガ チ ヨ ク ゴ ヲ オ
ヨ ミ ニ ナ ツ テ、(略)。

四9 8 窓 君 が よ は ち よ に や
ち よ に、(略)。
四10 5 ウ チ ニ ハ カ キ ノ 木 ガ ニ
本 ア リ マ ス。
四10 6 今 年 ハ エ ダ ガ ヲ レ ル ホ
ド タ ク サ ン ナ ツ テ キ マ ス。
四10 8 カ ラ ス ガ 毎 日 ト リ ニ 來
マ ス カ ラ、(略)。
四11 2 (略) カ カ シ ガ タ テ ア リ
マ ス。
四12 3 ウ ラ ノ 山 ニ ハ ク リ ノ 木
ノ 林 ガ ア リ マ ス。
四12 6 (略)、毎 ア サ 早 ク オ キ テ、
行 ツ テ 見 ル ノ ガ タ ノ シ ミ デ ス。
四15 2 昔 み な も と の よ り と も が
(略) ま き が り を し ま し た。
四15 4 大 ぜ い の も の が 下 に ま
ち か ま へ て る て、(略) け も の を、
弓 で い と つ た の で す。
四15 8 (略)、た く さ ん え も の が
あ り ま し た。
四16 2 (略)、矢 に あ た つ た ゐ の
し し が、上 の 方 か ら (略) かけ
お り て 來 ま し た。
四17 2 (略) と い ふ ぶ し が、(略)、
そ の て お ひ じ し に む か ひ ま し た。
四19 3 (略)、た ふ れ る が 早 い か、
た だ つ ね は す ぐ に (略) の 上
へ と び の き ま し た。
四19 7 (略) 一 だ う の も の が、た
だ つ ね を ほ め る こ ゑ は、(略)。
四20 5 窓 「一 バ ン 太 イ ノ ガ オ ヤ

ユ ビ、(略)。
四20 6 窓 「(略)、一 バ ン 小 サ イ ノ
ガ 小 ユ ビ デ、(略)。
四21 5 窓 「(略)、中 ユ ビ ト 小 ユ ビ
ノ ア ヒ ダ ノ ガ ク ス リ ユ ビ デ
ス。」
四22 2 窓 ニ イ サ ン ハ 一 バ ン 太 ツ
テ、一 バ ン カ ガ ツ ヨ イ カ ラ、オ
ヤ ユ ビ デ ス。
四22 3 窓 大 キ イ ネ エ サ ン ハ セ イ
ガ 高 イ カ ラ、高 高 ユ ビ デ ス。
四23 4 オ マ ツ ガ オ ト ミ ト ア キ ナ
ヒ ノ ア ソ ビ ヲ シ テ キ マ ス。
四23 6 オ マ ツ ノ 店 ニ ハ、糸 ヤ
キ レ ヤ フ デ ヤ カ ミ ガ ナ ラ ベ テ
ア リ マ ス。
四25 1 窓 「コ ノ 太 イ ノ ガ 五 セ ン
デ、細 イ ノ ハ 三 セ ン 五 リ ン デ
ス。」
四25 7 窓 「糸 ガ 十 五 セ ン、フ デ ガ
七 セ ン、ミ ン ナ デ 二 十 二 セ ン ニ
ナ リ マ ス。」
四25 7 窓 「糸 ガ 十 五 セ ン、フ デ ガ
七 セ ン、(略)。」
四26 8 さ む い 北 か ぜ が ふ い て、
(略)。
四27 5 一 び き の き つ ね が さ き の
こ つ て る の ぎ く を 見 つ けて、
(略)。
四27 8 窓 「(略)、か う さ む く な つ
て は、し か た が あ り ま す ま い。
四29 8 三 郎 の う ち で は 夕 は ん

が今すんで、(略)。
 四30 母が父に「(略)」といひますと、(略)。
 四31 4 宮 ごはんの米はねばりけがすくないから、おもちにはなりません。
 四33 6 あにの次郎が又よこから、「(略)」。
 四33 7 宮 「こんどはにいさんがきくが、(略)」。
 四37 3 麥ワラザイクニハカゴヤオモチヤヤ色色ナ物ガアリマス。
 四37 6 (略) 麥ワラデ作ツタ物デ、アツイジブンニツカフ物ガアリマス。
 四38 2 アル日タヒヒラメサバタコナドガオヨイデキルト、(略)。
 四38 2 (略)、サザエガ岩ノカゲカラヨビトメテ、(略)。
 四38 7 宮 「(略)大キナフカガ来タ時ニ、(略)」。
 四39 8 (略) 海ノ水ヲカキマハスヤウナ大キナオトガシマシタ。
 四41 1 (略)、何ダカヤウスガチガツテキマス。
 四41 5 (略)、ソバニ一セン五リントカイツダガタテアリマシタ。
 四42 1 をばさんからいただいた

おとしだまにのしがついてゐました。
 四43 3 宮 それがだんだんにかはつて、今では(略)をつかふやうになりました。
 四43 6 宮 このまん中に小さな物がありませう。
 四43 7 宮 これがのしあはびのかはりです。
 四44 7 宮 「(略)おめでたくない時には、なまぐさものをもちひないことがおほいのです。
 四46 2 皆さんはとけいにかいてある字がよめますか。
 四46 4 とけいの長いはりとみじかいのはりはどちらが早くまはりますか。
 四46 5 とけいになる時には、長いのはりはどこにありますか。
 四47 1 皆さんがあさおきる時には、(略)。
 四47 2 皆さんがあさおきる時には、みじかいのはりがどの字の所にありますか。
 四47 4 皆さんがよるねる時には、(略)。
 四47 5 皆さんがよるねる時には、みじかいのはりがどの字の所にありますか。
 四49 6 宮 われらがねどこで、やすんで居るまも、(略)。
 四50 6 サカナノニホヒガシマス

ガ、アタマモヲモアリマセン。
 四52 3 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、(略)、海ヲワタルクフウヲカンガヘテキマシタ。
 四52 7 アル日ハマベヘ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、(略)。
 四53 1 宮 「オマヘノナカマトオレノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテ見ヨウ。」
 四54 1 宮 「ナルホド、オマヘノナカマハズキブン多イ。オレノ方ガ少イカモ知レナイ。
 四56 3 (略)、一バンシマヒニ居タノガ、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。
 四56 8 ソコヘカミサマガタガオトホリガカリニナツテ、(略)。
 四57 6 宮 「ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテキルガヨイ。」
 四58 4 ソコヘ(略)トイフ神サマガオ出デニナリマシタ。
 四60 6 白ウサギガソノトホリニシマス、(略)。
 四62 4 (略)、雪がたくさんつもつて、どこを見てもまつ白です。
 四62 8 ゆふべは風がなくて、しづかなばんでしたから、(略)。
 四63 4 (略)、中にはさがき土までとどいてゐるのもあります。

四63 8 はのおちた木もみんなまつ白になつて、はながさいたやうです。
 四65 1 うぐひすがないてゐます。
 四65 8 あんな小さなからだであんな大きなこゑの出るのがふしぎです。
 四68 4 宮 苦クレバ私ガカハリニノンデ上ゲマセウ。」
 四72 1 宮 ひざの上には何が
 四76 8 (略)、そのさをのさきにはひらいた赤い扇がつけてあります。
 四77 1 一人のくわんぢよがその下に立つて、さしまねいてゐます。
 四78 7 その時一人がすすみ出て、(略)。
 四79 1 宮 「なすのよ一と申すものがございます。
 四80 5 一どはじたいしましたが、よしつねがゆるしませんでした。
 四81 4 (略)、船がゆれて、まどがさだまりません。
 四81 4 (略)、船がゆれて、まどがさだまりません。
 四81 8 (略)、こんどは扇が少しおちついて見えます。
 四82 8 (略)、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。
 五1 3 天照大神の御弟に、(略)と

いふきのあらひ神さまがありまし
た。

五14 (略)、大神がはたをおらせて
いらつしやる所へおなげ入れになり
ました。

五18 (略)、今まであかるかつたせ
かいがくらくらみになつて、(略)。

五21 (略)、わるい神さまがさまざ
まのわるいことをはじめました。

五28 (略)といふ女の神さまのま
ひがおもしろかつたから、(略)。

五38 手力男のみことといふ力のつ
よい神さまが、これをごらんになる
と、(略)。

五42 それでせかい中がまたものと
とほりあかるくなつたと申します。

五45 春が来た、春が来た、どこ
に來た。

五45 春が来た、春が来た、どこ
に來た。

五48 花がさく、花がさく、どこ
にさく。

五48 花がさく、花がさく、どこ
にさく。

五48 鳥がなく、鳥がなく、どこ
でなく。

五48 鳥がなく、鳥がなく、どこ
でなく。

五58 コノ天皇ガワルモノドモヲ御
セイバツニナツタ時、(略)。

五62 (略)、オトホリスデノミチガ
ケハシクテ、オコマリノコトゴザ

イマシタ。

五62 (略)、オトホリスデノミチガ
ケハシクテ、オコマリノコトゴザ
イマシタ。

五63 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ
出テ來テ、(略)。

五67 (略)一羽ノ金色ノトビガトン
デ來テ、(略)。

五68 ソノ光ガキラ／＼トシテ、
(略)。

五72 (略)、ワルモノドモハ目ヲア
ケテキルコトガデキマセン。

五92 私どものなかまは、出合ふと
すぐに一しよになるのがきまりで
す。

五94 (略)、何だか目がまはつて、
(略)。

五96 きがついて見ると、(略)。

五96 (略)、人が二三人立つて、
「(略)」といつて、ながめてゐまし
た。

五112 そばを通る人が「美しい川
だ。」といつて、ほめました。

五117 (略)、なかまがあつまつて
來て、いよくにぎやかになりました
た。

五121 ある時上の方でさわがしいお
とがするから、見上げると、(略)。

五122 (略)、はしがかけてあつて、
人や馬や車がたくさん通つてゐるの
です。

五122 (略)、人や馬や車がたくさん
通つてゐるのです。

通つてゐるのです。

五125 (略)、兩がはいへがたちな
らんで、(略)。

五125 (略)、人がいそがしさうにあ
るいてゐました。

五126 やがて重い物が私どもの上へ
來ましたから、何かと思つたら、
(略)。

五128 (略)、何かと思つたら、にも
つをつんだ船が通つてゐたのです。

五136 こゝを人が海といひます。

五143 スワツテイラツシヤル高サガ
五丈三尺五寸、(略)。

五144 (略)、カホノ長サガ一丈六
尺、(略)。

五145 (略)、耳ノ長サガ八尺五寸、
(略)。

五146 (略)、目ノ長サガ三尺九寸、
(略)。

五148 (略)、手ノヒラノ長サガ五尺
六寸、(略)。

五151 (略)、中指ノ長サガ五尺アリ
マス。

五153 (略)ニ立ツテキル人ガ、コ
ンナニ小サク見エマス。

五155 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。

五156 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。

五156 大キナコヒガタクサンアツマ
ツテオヨイデキルノハ、(略)。

五164 (略)ウロコガ三十六枚ヅツ

ナランデキマス。

五168 (略)、口ノ右左ニハ太イヒゲ
ガアリマス。

五172 蟲ナドガ水ノ上ヲトンデキル
ト、(略)。

五174 時ニハ二三尺モ高クトブコト
ガアリマス。

五177 (略)、タキデモ上ルコトガア
ルサウデス。

五182 鯉ノヤウニゲンキガヨク、
(略)。

五183 (略)、鯉ガタキヲ上ルヤウ
ニ、ズンズンシユツセヲセヨトイフ
心デ祝フノデセウ。

五188 (略)、用があるから、ち
よつとお出で。」

五202 (略)「そこにおさらがあるから、
取つておくれ。」

五218 (略)「手がなまぐさいから、
(略)、水をかけておくれ。」

五226 かまをぬすまれたものがあり
ました。

五228 (略)といふうはさがあるの
で、行つて見ると、(略)。

五231 (略)、行つて見ると、なるほ
どそのかまがあります。

五237 しかたがないから、うつたへ
て出ました。

五242 (略)「これは私が毎日使つてゐ
た釜でございます。」

五243 (略)「このゐざりがぬすん
だのでございます。」

五25 1 図 どうして釜のやうな重い物が持つて行かれませう。
 五25 3 図 その釜は私が前から持つてゐたのでございます。」
 五28 1 圖 五月・六月實がなれば、枝からふるひおとされて、(略)。
 五30 2 コ、ニ茶ノ木ガアリマス。
 五30 2 ハガヨクシゲツテ、下ノ方ハ枝モ見エマセン。
 五31 1 ヨクソダツタ茶ノ葉ハ長サガ二寸バカリモアリマス。
 五31 2 ツヤガアツテ、色ハコイミドリ色デス。
 五31 4 十一月ゴロ白イ色ノ花ガサキマス。
 五31 5 花ニハベンガ五ツアツテ、ヨイニホヒガシマス。
 五31 5 花ニハベンガ五ツアツテ、ヨイニホヒガシマス。
 五31 8 (略)、ソノ中ニマルイ種ガニツツツツアリマス。
 五32 1 大ゼイノ女ガ茶ヲツンデキマス。
 五33 1 ソノ葉デコシラヘル茶ガ一番ヨイ茶ニナリマス。
 五33 4 マタ三番茶・四番茶マデモツムコトガアリマスガ、(略)。
 五33 8 (略) ヲ見ルト、花ガチツタノカト思ヒ、(略)。
 五34 1 (略) ヲ見ルト、ナノ花ガトビ立ツタノカト思ヒマス。
 五35 4 コノ美シイ蝶ガトビマハルノ

デ、(略) ガーソウ引立チマス。
 五35 5 (略)、花ゾノヤ野原ノケシキガーソウ引立チマス。
 五35 8 (略)、ソノスガタガカハイラシイカラデセウ。
 五36 5 昔雄略天皇が(略)をおめしになつて、(略)。
 五36 8 (略)、皇后さまがかひこをおかひあそばすためでございます。
 五38 3 図 「その子は皆お前にやるから、やになつてやるがよい。」
 五39 1 汽車が今ていしやばへつきました。
 五39 5 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、(略)。
 五40 7 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ました。
 五41 2 もう汽車が出來す。
 五41 3 まだむかふからいそいで走つて來る人があります。
 五41 4 汽車はどんなことがあつても待ちません、(略)。
 五43 2 走ツテキル汽車ガスレチガフ時ニハ、(略)。
 五43 7 (略) 下ノ方デカミナリノヤウナ音ガシマシタ。
 五44 7 (略)、ヒロイ海ガ見エマス。
 五45 3 (略)、ケシキガカルノデ、文太郎ハオモシロクテタマリマセン。
 五45 5 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイタ時、(略)。

五45 8 ある日友吉と音次郎の二人がよそからかへつて來る道で、(略)。
 五46 1 (略)、にはかに雲が出て、かみなりが鳴り出しました。
 五46 2 (略)、かみなりが鳴り出しました。
 五47 4 圖 この間先生がおつしやつたではないか。」
 五47 8 音次郎が木の下を出ると、
 五47 8 (略) 目がくらむやうないなびかりがして、(略)。
 五48 1 (略) 目がくらむやうないなびかりがして、(略)。
 五48 1 (略)、耳がさけるやうなおそろしいかみなりが鳴りました。
 五48 2 (略) おそろしいかみなりが鳴りました。
 五48 5 (略)、かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてゐました。
 五48 6 (略)、その高い木がまつ二つにさけてゐました。
 五48 8 圖 もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」
 五50 1 キ瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、(略)。
 五50 2 (略)、カボチャニハデコボコガアル。
 五50 5 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜ハ中ガ赤イ。
 五50 6 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜

ハ中ガ赤イ。
 五50 7 (略)、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。
 五52 2 ヘチマハ(略)、實ガイルトタベラレナイ。
 五52 3 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエテキルノガアル。
 五52 4 花ハタ顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。
 五52 8 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワヲシタ時、(略)。
 五53 4 ソノ中ニケモノガ勝チサウニナツタノヲ見テ、(略)。
 五53 6 圖 「私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケモノノ仲間ダ。」
 五54 1 シバラクタツト、ケモノガ負ケサウニナツタノデ、(略)。
 五54 3 圖 「私ハ羽ガアルカラ、鳥ノ仲間ダ。」
 五54 6 イツマデタツテモ勝負ガツカナイカラ、(略)。
 五54 7 (略)、兩方ガ仲ナホリヲシマシタ。
 五54 8 ソノ時カウモリガケモノノ方ヘ行キマス、(略)。
 五57 3 近ゴロハ又マツチトイフベシリナ物ガ出來テ、(略)。
 五58 1 ソノホカニ石炭トイフモノガアリマス。
 五58 2 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出來タ物デ、(略)。

五60 8 圖 あれ、松蟲が鳴いてゐる。
 五63 2 圖 「ねえさんの所からお手紙が来てゐます。
 五64 6 圖 「あさつては學校がお休ですから、(略)。
 五65 5 圖 さあ、こゝに葉書がありま
 五67 3 大キナ字ヲ書イタ大キナノボ
 リガ立テテアル。
 五67 4 イサマシイタイコノ音ガ森ノ
 中カラキコエテクル。
 五67 6 道ノ兩ガハニハ、(略)ナド
 ガ店ヲナラベテキル。
 五68 7 オ宮ガアル。
 五68 8 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ
 テキル。
 五69 4 オ宮ニハエマガタクサンカケ
 テアル。
 五69 7 又日本ヘイガロシヤヘイトタ
 、カツテキルエモアル。
 五70 1 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
 マツテキル。
 五70 2 勝負ガ一番スムト、ワアツト
 ホメルコエガキコエル。
 五70 2 勝負ガ一番スムト、ワアツト
 ホメルコエガキコエル。
 五70 5 晩ニナルト、花火ガ上ルトイ
 フ話デアル。
 五70 8 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷
 川ノ中ヘハイリマシタ。
 五71 5 圖 牛ノ角トハチガツテ枝ガア
 ル。

五71 6 圖 (略)、オチルトスグ又新シ
 イノガハエテ、(略)。
 五71 7 圖 (略)、ソノタビニ枝ガ一ツ
 ツツフェル。
 五72 7 圖 (略)、モツト太クテ強イ足
 ガホシイモノダ。
 五73 1 (略)ノ來ル音ガシタノデ、
 オドロイテカケ出シマシタ。
 五73 3 タクマシイ大キナカリ犬ガ四
 五匹デオツカケテ來マス。
 五73 6 (略)美シイ角ガ木ノ枝ニヒ
 ツカ、ツテ、(略)。
 五74 3 へいけのぐんぜいがふくはら
 のしろを守つてゐる。
 五74 7 又海には一面にいくさ船がな
 らんでゐて、(略)。
 五76 5 そのうちに日が暮れて、まつ
 暗になつてしまつた。
 五78 1 圖 「こゝからしろの方へ下り
 ることが出来るか。」
 五78 8 圖 (略)、たゞつめがわれて
 ゐるとゐないだけのちがひだ。
 五79 7 圖 鹿の通れる所を馬の通れな
 いといふことがあるものか。
 五80 2 まもなく夜が明けた。
 五80 5 へいけ方はがけの上から、て
 きの軍ぜいが攻めこまうとはゆめに
 も思はない。
 六1 4 (略) 岩山もあるが、平たい
 砂原になつてゐる所が多い。
 六1 6 (略)、又大きな松がならんだ
 長い松原もある。

六1 7 海べはふだん強い風がふくか
 ら、(略)。
 六2 3 日本には山が多い。
 六2 4 どの山にも木がよくしげつて
 ゐる。
 六2 5 松・杉・ひのきなどが一面に
 はえてゐるのは(略)。
 六2 6 (略) 目がさめるやうな心持
 がする。
 六2 7 (略) 目がさめるやうな心持
 がする。
 六3 2 (略) たきや谷川があつて、
 一そう山の景色を引立てる。
 六3 4 日本には川が多い。
 六4 3 日本の國には(略)色々な花
 がさき、色々な鳥が鳴く。
 六4 3 日本の國には(略)色々な花
 がさき、色々な鳥が鳴く。
 六4 5 一年中からりとほれた日が
 多い。
 六8 6 たんぽにはいねがよくみのつ
 て、(略)。
 六8 7 (略)、風のふくたびに黄色な
 波が立つてゐます。
 六8 8 たんぽのさきにこんもりとし
 た森があつて、(略)。
 六9 1 (略)、森の間からはお社の赤
 い鳥居が見えます。
 六9 2 御社の後には松山がありま
 す。
 六9 7 御社の後から山へのぼる道が
 あります。

六10 2 (略)、道はたにはきれいな草
 花が咲きみだれてゐます。
 六12 6 モウ秋ニナツタカラ、ガンガ
 オヒオヒトンデ來ル。
 六13 8 モシ列ニハナレルヤウナコト
 ガアツテモ、(略)。
 六14 3 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、
 空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ。
 六14 8 (略)、稻がよくじゆくして、
 重さうにほをたれてゐます。
 六15 2 (略)、人が大ぜい出て、稻を
 かつてゐます。
 六15 3 かつた稻が雨にぬれると、米
 がわるくなるから、(略)。
 六15 3 かつた稻が雨にぬれると、米
 がわるくなるから、(略)。
 六20 7 その時そこに居た一人の子ど
 もが、「(略)」といつて、(略)。
 六20 8 圖 「そんなら私がはかつて見
 ませう。」
 六22 1 (略)しるしを附けておいた
 所まで船が水につかつた時に、(略)。
 六22 6 ある家の中には大きな水がめ
 があつて、(略)。
 六22 7 (略)、雨水が一ぱいたまつて
 ゐました。
 六22 8 一人の子どもが(略)、かめ
 の中へおちました。
 六23 8 それがため、かめに大きな穴
 があいて、(略)、子どもはあやふい
 命をたすかりました。
 六24 1 (略)、かめに大きな穴があい

て、水が流れ出ましたから、(略)。
 六24 1 (略)、かめに大きな穴があいて、水が流れ出ましたから、(略)。
 六24 6 (略)、ヤクワントテツピンガメイ、ジマンバナシマシマシタ。
 六24 7 マツヤクワンガイヒマスニハ、(略)。
 六27 6 (略)、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコトガ出来マセン。
 六27 6 (略)、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコトガ出来マセン。
 六28 6 (略)「私タチノサビルノハ皆人ガ使ハナイカラデス。
 六29 2 (略) ソレガヤハリサビデス。
 六30 1 (略)、二人が店のすをしてゐると、(略)。
 六30 2 (略)、一人の男の子がふでを買ひに來た。
 六30 5 男の子も氣がつかずにそのまゝかへつた。
 六30 7 直吉は後でふと氣が附いて、(略)。
 六31 8 (略)「そんな事が出来るものか。
 六32 3 (略)「それでもだんなが居ないから、だまつてゐれば、誰にも知れはしない。」
 六32 5 (略)「だんながおるすだから、なほさらまちがあつてはならない。」
 六32 6 (略)「(略)、なほさらまちがあつてはならない。」
 六35 8 今日天気がよくて暖い

ら、うちではすゝはきをした。
 六36 3 ゆか下から去年なくしたこまが出てうれしかつた。
 六36 4 うちが見ちがへるやうにきれになつた。
 六36 7 道がわるかつた。
 六37 3 (略)、池に氷がはつてゐた。
 六37 3 北風が一日ふき通して寒かつた。
 六38 1 朝おきると、雪が五六寸もつてゐた。
 六38 2 木村さんが遊びに來た。
 六38 4 (略)、おとうさんが京都へお立ちになつた。
 六38 8 (略)おとうさんの手紙が着いた。
 六44 1 うちがまつしかつたので、八つの時にお寺へ小ぞうにやられましたが、(略)。
 六44 3 たゞ人がいくさのはなしをすると、耳をすまして聞いてゐました。
 六45 4 (略)、ほうこうの方には身が入りません、(略)。
 六45 6 年が十八のころです、(略)。
 六46 2 ある日信長が夜明け前に出かけようとすると、(略)。
 六46 3 (略)、はや、馬を乗りまはしてゐる者があります。
 六46 5 又ある朝早く信長がかりに出ようとして、(略)。
 六47 5 ある年、城のへいが百間ばかりこはれた事がありました。

六47 6 ある年、城のへいが百間ばかりこはれた事がありました。
 六47 6 けらいが大ぜい直しにかゝりましたが、(略)。
 六49 2 秀吉は(略)、一べんもまけたことがありません。
 六49 6 秀吉が信長に言ひつかつて、敵を攻めに行つてゐた間の事でしたが、(略)。
 六50 8 (略)日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。
 六51 2 秀吉はもう日本中に敵がなくなつたから、(略)。
 六52 1 (略)といふふれいなことばがありました。
 六52 5 (略)「日本國には天皇へいかがいらしやるではないか。」
 六53 2 京都の東山の山の上に秀吉のはかがございます。
 六55 5 ある時謙信が山の上に陣取つてゐると、(略)。
 六56 6 謙信は(略)いくさがはげしくなると、じつとしては居られない。
 六57 2 信玄は刀を抜くひまがない。
 六57 3 (略)、えが折れて、かた先へ切りつけられた。
 六57 5 その時信玄のけらいが、(略)を力一ぱいになぐりつけた。
 六58 3 武田信玄の國は山國で、塩がない。
 六59 3 それから信玄が死んだと聞いた時、(略)。

た時、(略)。
 六59 4 (略) よいいくさ相手になくなつた。」
 六61 5 (略) まへからわたしは目かわるく、杖をたよりにあるきます。
 六61 8 (略) いまその杖をもぎ取られ、かへりの道が知れません。」
 六62 1 (略)「そんなわるさを誰がした。」
 六62 2 (略)「わるい子どもが大ぜいでわたしの手からもぎ取つて、はふつた音はしましたが、(略)。」
 六62 5 (略)「(略)、かなしいことに目が見えず、さがすことさへ出来ません。」
 六64 5 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、(略)。
 六65 1 熊ノ毛色ハ(略)三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。
 六65 6 シグマトイフ熊ハ(略)、力ガ強ウゴザイマス。
 六66 4 熊ハ(略)俵ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。
 六66 5 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカマヘルコトガアリマス。
 六67 1 ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ來ルコトガアリマス。
 六67 1 ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ來ルコトガアリマス。
 六69 6 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、(略)。

六六九 七 私がかゝへまるつたのは、この學校がたつた年でございますから、(略)。

六七〇 三 (略)、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、(略)。

六七二 二 私はたい子供がすきでございすが、(略)。

六七三 三 (略) どうしてもきらひな子供が七八人ございました。

六七四 四 私のからだがかんなんにぐらつくやうになつたのも、(略)。

六七五 五 むねの上には(略)弓矢や扇車がかざつてあります。

六七六 六 めさの前にはおみきやもちや魚がそなへてあります。

六七七 七 (略)、新しいしるしばんてんを着てゐる大工が一番目立ちます。

六七八 八 (略)、大ぜいがあらそつてそれを拾ひました。

六七九 九 これがすむと、(略)、お祝ひのさかもりがはじまりました。

七八〇 〇 (略)、お祝ひのさかもりがはじまりました。

七八一 一 一人の年取つた男がかゝをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、(略)。

七八二 二 歌がすむと手打をして、(略)。

七八三 三 廣イ港ガ船デ一パイニナツテキル。

七八四 四 高イホバシラヤ、ヒクイホバシラカタクサン重リ合ツテ、(略)。

七八五 五 (略) 早く走ツテ行ク小サナ

船ガアル。

七八六 六 オキノ方カラ黒クヌツタ船ガハイツテ来ル。

七八七 七 (略)、いつはりいはぬが子供らの 學びのはじめぞ、つゝしめよ、いましめよ。

七八八 八 正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、(略)。

七八九 九 我ガ生キテフタ、ビ汝ヲ見ンコトハカタカルベシ。

七九〇 〇 我ガ死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ残りテアル間ハ、(略)。

七九一 一 (略)、師直ラノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラガクビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、(略)。

七九二 二 (略)、正行ラガクビヲカレラニ取ラスルカ、(略)。

七九三 三 コレ(略)、正行ガ二十三歳ノ時ナリキ。

七九四 四 (略)、麥はほが出る、葉は花盛リ。

七九五 五 (略)、葉末々々に夜つゆが光る。

七九六 六 (略)、村の祭のたいこがひびく。

七九七 七 稻は實がいる、日よりはつとく、(略)。

七九八 八 (略)、夜はよもやま話がはびく。

七九九 九 母がてぎはの大こんなま

す、(略)。

七二〇 〇 (略)、これがゐるなかの年こしざかな。

七二一 一 品物と引きかへに代金を受取るのが現金で、(略)。

七二二 二 (略)、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがか

けです。

七二三 三 ねざられたら引く積りで、高くいふ直段がかけねです。

七二四 四 しかし卸賣商人で、問屋をしてゐる場合がたくさんあります。

七二五 五 急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。

七二六 六 (略)、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、(略)。

七二七 七 又母がかねぐめづらしい草花をほしくと申して居りますから、(略)。

七二八 八 にはの藤の花が咲いて、(略)。

七二九 九 (略)、風が吹く度にむらさきのふさが動いてゐる。

七三〇 〇 (略)、風が吹く度にむらさきのふさが動いてゐる。

七三一 一 島のゑんどうがかきの外からこゑをかけて、(略)。

七三二 二 第一あなたにも私にも豆がなります。

七三三 三 豆類にはつるになるのとならぬのがあります。」

七三四 四 あなたほどの大きな花ぶさは見たことがございません。

す、(略)。

七三六 六 今風デアカリガ消エマシタ。」

七三七 七 モシ手ガナカツタラ、ドノクラキ不自由デセウ。

七三八 八 大工ガ家ヲタテルノモ、(略)。

七三九 九 (略) モ、左官ガカベヲヌルノモ(略)。

七四〇 〇 (略) モ、センドウガ船ヲコグノモ、(略)。

七四一 一 (略) モ、農夫ガ田ヲタガヤシ、畠ヲツクルノモ、(略)。

七四二 二 色々ナキカイガアツテモ、ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デス。

七四三 三 (略) 手ヲヨクハタラカセル人ガ多クレバ多イ程盛ニナリマス。

七四四 四 フトコロ手バカリシテキル人ガ多クレバ多イ程オトロヘマス。

七四五 五 ドンナガクキガアツテモ、(略)。

七四六 六 (略)、手ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出スコトハ出来マスマイ。

七四七 七 サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。

七四八 八 コレハチエガ少イカラデス。

七四九 九 手バカリ動カシテモ、チエガナクレバ何ノ役ニモ立チマセン。

七五〇 〇 この長い糸を出す蟲が百匹もなければ、(略)。

七五一 一 蠶をかつて(略)までには、大そうな手間がかかる。

す、(略)。

- 七三十一 大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、(略)。
- 七三十二 (略)、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。
- 七三十三 (略)、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。
- 七三十四 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、(略)。
- 七三十五 (略)、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。
- 七三十六 (略)、しまひにはからだがつきとほつて見える。
- 七三十七 それが二三日の内に出来上つて繭になる。
- 七三十八 繭の口の中には小さいくだが一つある。
- 七三十九 そのくだから出すねばつたしるが外へ出ると、すぐにかわいて絲になるのである。
- 七四十 蠶が繭を作つてから二十日あまりたつと、(略)。
- 七四十一 (略)、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て来る。
- 七四十二 蛾が出ると、絲が取れないから、(略)。
- 七四十三 蛾が出ると、絲が取れないから、(略)。
- 七四十四 蛾が出ると、絲が取れないから、(略)。
- 七四十五 蠶をかふのは(略)の三度で、春こ・夏こ・秋こといふ名がある。
- 七四十六 町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸工場ガ出来タ。
- 七四十七 (略)、右ノ方ニハ皿・ハチ・

- 茶ワンナドノ焼物ヲ賣ル店ガアリ、(略)。
- 七四十八 (略)、左ノ方ニハゼン・ワン・ハシナドノ塗物ヲ賣ル店ガアル。
- 七四十九 (略)、ソコニ繪草紙屋・ゲタ屋・オモチヤ屋ナドガナランデキル。
- 七五十 ドノ店ニモ品物ガキレイニナラベテアル。
- 七五十一 出口ニ近イ所ニハ、着物・羽織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。
- 七五十二 (略)、出口ニハ(略)ナドヲ賣ル金物屋ト、(略)ナドヲ賣ル荒物屋ガアル。
- 七五十三 品物ハ皆正札附デ、カケ直ガナイ。
- 七五十四 店ニハ番人ガ居テ、買ハウト思フ物ハスグニ買ヘル。
- 七五十五 何モ買フモノガナケレバ、ソノマ、カヘツテモヨイ。
- 七五十六 山内一豊が織田信長のけらいになつたばかりのころ、(略)。
- 七五十七 (略)、大そうよい馬を賣りに来た者がありました。
- 七五十八 (略)、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。
- 七五十九 (略)、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。
- 七六十 (略)、「あゝ、金がない程残念なことはない。」
- 七六十一 七六十二 (略) このお金は私がこちらへま

- ある時、『略』と申して、父の渡してくれた金でございます。
- 七六十三 (略) あなた様にも、その折にはよい馬にめして、主人のお目にどまるやうになされるのが大事と考へまして、(略)。
- 七六十四 けらいのものが、『略』といひますと、『略』。
- 七六十五 「日ごろ貧しい暮しをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもとめた。」
- 七六十六 (略)、信長は大そう感心して、これが一豊の出世のもとになつたといふことであります。
- 七六十七 西洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、『略』トイフト、(略)。
- 七六十八 「世ノ中ガヒラケテカラ、(略)。」
- 七六十九 「(略)、ドウモ君タチノ仲間ヨリモ、僕ラノ仲間ノ方ガヨケイニ用ヒラレルヤウニナツタカト思フ。」
- 七七十 「(略)、君ラハ破レ易クテ、少シモ強ミトイフモノガナイ。」
- 七七十一 日本紙ハコヨリニシテ物ヲシバルコトガ出来ル。
- 七七十二 「僕等ノ仲間ニハカラカサニナツタリ、合羽ニナツタリスルモノガアル。」
- 七七十三 「これにはちゃんと三錢の切手がつてあるのに、(略)。」
- 七七十四 七七十五 (略) この手紙は四匁より重いの

- に、差出人が三錢しかはつておきません。
- 七七十六 (略) つまり三錢だけが不足です。
- 七十七 「小包郵便でもやはり四匁までが三錢ですか。」
- 七十八 近い所ならもつと目方がふえても、四錢で送れます。
- 七十九 又新聞は二十匁までが五匁、書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、(略)。
- 八十 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、(略)。
- 八十一 (略)、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、(略)。
- 八十二 酒や(略)も、水がなければ出来ない。
- 八十三 くだ物も水をふくんで居り、やさいにも水けがある。
- 八十四 時々湯にはいらないと、からだきたなくなる。
- 八十五 (略)、水がなければ、生きてゐることは出来ない。
- 八十六 (略)を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがある。
- 八十七 桃がじゆくしましたから、少しばかりですが、差上げます。
- 八十八 (略) わか木に、もうこんなに大きなのがなつたのでございませう。
- 八十九 (略) 梨の木の方は、今年

はまだ實がなりません。

七69 罎 (略)、こんな見事な桃があるのなら、植ゑて見たいと申して居ります。

七69 海ノ中ニハ (略) 色々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モアル。

七70 魚類ニハ (略)、水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガアリ、(略)。

七70 8 (略)、岩ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。

七71 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナドガスデキル。

七72 又眞珠貝トイフモノガアル。

七73 6 海ニハ又ケモノガスデキル。

七73 8 陸ノケモノニニタモノニハ、ラツコ・ヲツトセイナドガアリ、(略)。

七73 9 (略)、魚ニ似タモノニハ、鯨ガアル。

七74 1 鯨ハカラダガハナハダ大キイ。

七74 2 陸ニスムモノデハ、象ガマツ一番大キイガ、(略)。

七74 8 (略)ノ所マデニハ、海草ガハエテキル。

七75 2 マツタベラレルモノニハ、コンブ・(略)ナドガアリ、(略)。

七75 3 (略)、トコロテンニスルモノニハ、テングサガアル。

七75 8 (略)、ゼンタイガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。

七77 1 海草ハ大テイ花ガ咲カナイ。

七77 6 廣イ海ニハ、コノ通りニ多クノ動物ヤ植物ガアル。

七77 7 波ニウラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動ク間ヲ、(略)。

七77 8 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、(略)。

七81 7 罎 私の乗つてゐる明治丸といふのは、長さが六十間程もある大きな汽船で、(略)。

七82 5 罎 日の出や日の入には日光が波にうつつて、水の色が金色になります。

七82 6 罎 (略)、水の色が金色になります。

七82 6 罎 月夜には波が銀の様に光つて、(略)。

七82 7 罎 (略)、その美しさは何とも言ひ様がありません。

七82 8 罎 ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。

七82 9 罎 ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。

七83 1 罎 何萬とも知れないいるかがおよいであるのを見ることがあります。

七83 4 罎 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

七83 7 罎 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七84 9 罎 急に暴風雨が来ると、山の様な波が立つて、(略)。

七85 1 罎 急に暴風雨が来ると、山の様な波が立つて、(略)。

七85 3 罎 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、(略)。

七85 8 罎 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、(略)。

七85 7 罎 (略)、浅瀬へ乗上げたり、外の船につきあたつたりする様なまぢがひが出来ます。

七86 1 罎 船にはらしんぎといふものがあつて、(略)。

七86 4 罎 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちゃんと分ります。

七86 6 罎 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちゃんと分ります。

七86 7 罎 海岸には燈臺がありますから、(略)。

七86 9 罎 (略)、それを見ると、あれはどこだといふことが分ります。

七87 6 罎 「さておしまひに一ついつておきたい事があります。

七87 9 罎 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんか。

七88 2 罎 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。

八2 4 罎 「この鏡を見ること我を

見るが如くせよ。」

八9 9 罎 この間にいさんがかへつて來ましたので、(略)。

八10 1 罎 (略)、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。

八11 9 罎 (略)、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。

八12 6 罎 おはなさんは(略)、髪が大そうきれいになりました。

八13 7 罎 ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ上ツタ。

八13 7 罎 ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ上ツタ。

八14 2 罎 町ハ段々人通りガ多クナツテ、車モ通り、馬モ通ル。

八14 7 罎 村デハ農夫ガクハヲカツイデ、タンボヘ出ル時デアル。

八14 9 罎 學校デハモウ授業ガハジマツタ。

八15 6 罎 働クコトガナケレバ、食物モ買ハレナイシ、着物モコシラヘラレナイ。

八18 6 罎 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲサメタルモ、(略)ニヨルナルベシ。

八19 2 罎 昔西洋のある所に、(略)、何不足なく暮してゐた農夫があら

た。

八20 8 罎 「それはさうと、君は白い雀を見たことがあるか。」

八21 1 罎 「いや、見たことがない。

八21 1 罎 白い雀が實際居るのか。」

八二六 ㊦ さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくなるといふが、(略)。

八二七 ㊦ 又若し外の雀が見つけると、よつてたかつていぢめるので、(略)。

八二八 (略)、若しや白雀が居はしまいかと、屋敷のまはりを見まはつて、(略)。

八二九 (略)、自分の家は戸がまだしまつてゐて、(略)。

八三〇 (略)、自分の家は(略)、誰も起きてゐる様子がありません。

八三一 ㊦ 牛小屋の牛はしきりに鳴いてゐるのに、誰も草をやるものがありません。

八三二 (略) その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て來ました。

八三三 ㊦ 此の男は居酒屋に酒代の借があるの、(略)。

八三四 (略)、今度は下女がばけつをさげて、牛小屋から出て來ました。

八三五 ㊦ 朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」

八三六 (略)、前の友だちが來て、「(略)」と、笑ひながらたづねました。

八三七 ㊦ 「おかげで目がさめた。

八三八 ㊦ (略)、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

八三九 ㊦ 僕の近所に年よりのかぢ屋があつた。

八四〇 ㊦ セが高く、目からするどくて、(略)。

八四一 ㊦ セが高く、目がするどくて、(略)。

八四二 ㊦ 「(略)」と、毎朝早くから弟子を相手につちを打つ音が聞える。

八四三 ㊦ 一日も休んだ事がない。

八四四 ㊦ 僕の家で一度つるべの金たががこはれた時、つくるひを頼んだ事があつたが、(略)。

八四五 ㊦ 僕の家で一度つるべの金たががこはれた時、つくるひを頼んだ事があつたが、(略)。

八四六 ㊦ 若いむすこが、今では其の後をついで、朝から晩まで相かはらず、「(略)」と働いてゐる。

八四七 ㊦ (略)、つづいてかをる梅が香に、うぐひす鳴かぬ里もなし。

八四八 ㊦ (略)、一箱ノマツチガ我等ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手ヲ要スルカヲ知ラズ。

八四九 ㊦ かねが鳴る。

八五〇 ㊦ あちらの空がまつかだ。

八五一 ㊦ 火のこが花火のやうに散つてゐる。

八五二 ㊦ 弓張を持つて走る人が、後から後からとつづいて飛んで行く。

八五三 ㊦ (略)、角の呉服屋が焼けてゐるのださうだ。

八五四 ㊦ あゝ、火の勢が一そう強くなつた。

八五五 ㊦ 火事場でさわぐ人の聲がここ

までも聞える。

八五六 ㊦ 叔父さんのうちへ見まひに行つたにいさんが歸つての話を、(略)。

八五七 ㊦ これ程有用な火でも、ひよつとまちがふと大へんな事が出来る。

八五八 ㊦ 多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

八五九 ㊦ 一服のすひがらがこんな大火事になつた。

八六〇 ㊦ 「東京のをちさんから火事見まひの電報が來た。」

八六一 ㊦ それが東京の今朝の新聞に出たので、お分りになつたのにちがひない。

八六二 ㊦ 伯父さんが御安心なさる様に早く返事を上げよう。

八六三 ㊦ 電報は十五字までが一音信で、(略)。

八六四 ㊦ こゝに頼信紙があるから、書いてお出し。」

八六五 ㊦ (略)、他の鳥をとらへて食ふ鳥や、(略)すむ所をかへる鳥は、總べてつばさが大きい。

八六六 ㊦ 又にはとり(略)などは(略)、其のつばさが小さい。

八六七 ㊦ (略)など水の中をあるく鳥ははぎが長い。

八六八 ㊦ 併しかはせみははぎも首も短くて、くちばしばかりが長い。

八六九 ㊦ 駝鳥ははぎも首も長くて、くちばしだけが短い。

八七〇 ㊦ 水鳥のくちばしは平たくて先

が圓く、(略)。

八七一 (略)、陸鳥のくちばしは圓く細くて、先がとがつて居る。

八七二 ㊦ わし・たか・とびなどは上くちばしがことに鋭くて、やゝ太い。

八七三 ㊦ いすかのくちばしは上と下がくちちがつてゐる。

八七四 ㊦ それで「いすかのはしのくちちがひ。」といふことがある。

八七五 ㊦ (略)、七月頃ニ花ガ咲イテ、九月カラ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマス。

八七六 ㊦ (略)、七月頃ニ花ガ咲イテ、九月カラ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマス。

八七七 ㊦ 實ガ熟スルト、サケテ中カラ白イ綿ガハミ出シマス。

八七八 ㊦ 實ガ熟スルト、サケテ中カラ白イ綿ガハミ出シマス。

八七九 ㊦ 綿ノ中ニハ種ガアリマスカラ、(略)。

八八〇 ㊦ 木綿織物ニ(略)色々ナ縞ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。

八八一 ㊦ コク染メタノガ紺デ、ウスイノガ淺黄デス。

八八二 ㊦ コク染メタノガ紺デ、ウスイノガ淺黄デス。

八八三 ㊦ 又所々白ク染メ殘シタノガカスリデス。

八八四 ㊦ 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノガ縞物デス。

八65 9 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオク

ト、紺色ノ汁ガ出マス。

八66 9 罎 初は熱があまり高いので、一時はどうなることかと心配いたしましたが、(略)。

八67 2 罎 昨朝あたりから熱がずつと下つて、食事も進みますから、(略)。

八68 6 罎 こちらのほうどうとも都合がつくから、心配するには及びません。

八71 7 罎 諸君(略)、此の数日間少しも食物を送らざるが故に、新しき血出來ずして、(略)。

八74 1 罎 虎ハ前足ノ一撃ニテ鹿ナドヲタフスコト、猫ノネズミヲトラフルガ如シ。

八80 3 罎 これ世界の圓きがためにして、(略)。

八88 3 (略) 砲彈ノ破片ガ中佐ノコシニアツツテ、(略)。

八89 7 敵ノ突撃ノ聲ガ盛ニ聞エル。

八91 2 罎 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、(略)。

八91 2 罎 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、(略)。

八91 5 罎 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、(略)。

八91 5 罎 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、(略)。

ルト思へ。

八91 9 (略)、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ

起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

八92 9 (略)、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。

八93 6 罎 名古屋城は(略)、徳川家康が諸大名に課して造らしめたる名城にして、(略)。

九6 10 コ、ニ櫻ノ花ガアル。

九6 10 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツ

テ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。

九7 1 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツ

テ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。

九7 3 又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカラ、一ツツツニ取離スコトガ出來ル。

九7 6 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤ

ウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、(略)。

九8 1 ツ、ジノ花ヲ見ルト、(略)、

引キサカナケレバ取離スコトガ出來ナイ。

九8 2 又ユリヤアヤメノ花ハ萼ノ色

ガ瓣ト一ツ色デアル。

九8 8 (略)、瓣ガ四ツ揃ツテ、十字

形ニナツテキル。

九10 1 又麥ノホノ様ナ形ニナツテ咲

クモノニハ大葉子ノ花ナドガアリ、

(略)。

九10 2 (略)、總ノ形ニナツテ咲クモ

ノニハ藤ナドガアル。

九10 4 (略)、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、

タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテ

キルノデアル。

九10 10 罎 春風渡る廣野は 汝がた

のしき庭ぞ。

九11 9 罎 綠色そふ林は 汝が樂し

き庭ぞ。

九18 10 (略) 一水兵が女手の手紙を

讀みながら泣いてゐた。

九19 1 ふと通るかゝつた大尉が之を

見て、あまりに女々しいふるまひと

思つて、(略)。

九19 3 罎 命がをしくなつたか、(略)。

九19 3 罎 (略)、妻子がこひしくなつ

たか。

九20 4 (略)、次の様な事が書いてあ

つた。

九21 1 罎 罎 『一人の子が國家の爲

いくさに出でし事なれば、(略)。

九21 5 罎 (略)、そなたのふがひな

きことが思ひ出されて、(略)。

九21 7 罎 (略)、そなたがあつぱれ

なるてがらを立て候様との心願に

候。

九22 4 罎 「わたしが惡かつた。

九22 9 罎 (略)、自分の職務に精を出

すのが第一だ。

九23 3 罎 併し是も仕方がない。

九23 7 罎 此のわけをよくおつかさん

にいって上げて、安心させるがよ

い。」

九31 5 フルトンが工夫に工夫を重ね

て造つた最初の船は、(略)。

九32 5 (略)、機關の一部に故障があ

つたので、すぐそれを直した。

九33 8 (略)、終に其の目的を達する

ことが出來た。

九34 1 (略)、馬車鐵道をこしらへよ

うといふ話があつたが、(略)。

九34 5 いやゝ鐵道が出來て、(略)。

九34 8 やがて汽車が動き出すと、

(略)。

九34 10 (略)、一時間に十五マイルも

走る汽車とはどうして競走が出來よ

う。

九35 6 (略)、其の間に五十三次とい

つて、重な宿場が五十三あつた。

九35 7 それが今は朝の急行列車で東

京を立出すれば、晚にははや京都に

着くことが出來る。

九35 9 (略)、晚にははや京都に着く

ことが出來る。

九35 10 昔の旅行には色々難儀なこと

があつた。

九36 3 (略)、其の頃は橋が無かつた

から、(略)。

九37 2 箱根と新居とには關所があつ

て、(略)。

九37 2 (略)、役人が一々旅人をしら

べて通した。

九37 6 昔の道中には馬とかががあつ

た。

九37 7 馬は馬子が引いて、ゆるゝ

歩むのだから、早いことはない。

九38 2 今は水路に汽船があり、陸上

にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

- 九三三 (略)、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。
 九三八 鐵道の通じてゐない所でも、馬車や人力車がある。
 九三六 (略)、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出来た。
 九四一 (略)、ソレヨリ噴出シタル物ノ四方ニナダレテ、冷エカタマリタルガ、今ノ箱根山ヲ成セルナリ。
 九四三 (略)、之が爲に一行の用意せる水も残り少になれり。
 九四五 (略)、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、(略)サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。
 九四七 (略)、他ノ動物ハ(略)、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。
 九四九 (略)、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。
 九五九 (略)「我は天氣にも相談せず、毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。」
 九六〇 (略)「過ぎたるは及ばざるが如し。」と知るべし。
 九六一 (略)人の、色青ざめて元氣なきは、日光に浴せざるが爲なり。
 九六五 (略)、火消つばの火の消ゆるは空氣の供給絶ゆるが爲なり。
 九六九 (略)燈の火の風に吹消さるゝが如きはなり。
 九七一 (略)我等は常に此の空氣を吸は

- んが爲に呼吸す。
 九六七 (略)オルガンにて美しき音を發せしむるが如き、(略)が如き皆然り。
 九六九 (略)が如き、唐箕の車をまはして、もみとしひなとをあふぎ分くるが如き皆然り。
 九七〇 (略)、其の時はうらめしい心地がする。
 九七一 (略)、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。
 九七三 (略)、黄色に實のつた秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、(略)。
 九七四 冬の雨の日は、短い日がなほ更早く暗くなる。
 九七五 夜が更けて、(略)。
 九七六 (略)、雨の音が静かになつたから、止んだことと思つてゐると、(略)。
 九七八 (略)、他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカルベシ。
 九七九 (略)タミシ貯金センガ爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。
 九八〇 (略)タミシ貯金センガ爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。
 九八二 (略)是は菅原道真が右大臣といふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅立たんとする時、庭の梅に別ををし

- みてよめる歌なり。
 九八四 昔或氏神のお祭に競馬の神事といふ事があつた。
 九八六 (略)、すぐれて上手な騎手が二人あつた。
 九八七 (略)、おびたゞしい見物人が朝早くから宮の境内へつめかけた。
 九八八 (略)神前で祝詞を上げて、それがすむと、「支度。」といふあひづの一番太鼓を打鳴らした。
 九八九 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九〇 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九一 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九二 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九三 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九四 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九五 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九六 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九七 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九八 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 九九九 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。
 一〇〇〇 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。

- 一〇〇一 葉ノ形ニハ卵形ト楕圓形ガ最も多イガ、(略)。
 一〇〇二 (略)、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテキル。
 一〇〇三 バラノ葉ヤ豆ノ葉ガ即チソレデアル。
 一〇〇四 葉ニハスベテ葉脈トイフモノガアル。
 一〇〇五 本ノ方ガ太クテ、サキヘ行ク程段々ニ細クナツテ、(略)。
 一〇〇六 (略)、本ノ方カラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、(略)。
 一〇〇七 櫻ヤ梅ノ葉ハ唯一スデノ太イ脈ガマン中ニ通ツテ、(略)。
 一〇〇八 (略)、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。
 一〇〇九 モミデノ葉ハ幾スデカノ脈ガ本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキル。
 一〇一〇 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イテキル。
 一〇一一 (略)「汝の男と生れざりしが口をし。」
 一〇一二 活版所では、活字拾ひがそれを読みながら、活字を拾つて並べる。
 一〇一三 (略)、誤があれば、幾度でも其の活字を抜きかへて植直す。
 一〇一四 一字も誤がなくなつてから本刷にかゝるのである。
 一〇一五 印刷が出来上つてから本にとちるまでも、まだ中々手数がかゝ

- る。
- 十208 (略)、また中々手数がかる。
- 十218 活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、(略)。
- 十218 活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、(略)。
- 十221 木版では(略)、其の自由がきかぬ。
- 十221 又活字は何時でも直に植ゑることが出来るが、(略)。
- 十222 (略)、木版では(略)、手間が幾層倍もかる。
- 十223 それ故近年は木版が段々すたれて、活版を用ひることが多くなつた。
- 十224 (略)、活版を用ひることが多くなつた。
- 十282 (略)、古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、(略)。
- 十284 中程の枝の上に鳥が二羽止つて、さつきから少しも動かない。
- 十287 唯あぜの様な木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。
- 十289 畑には麥がもう一寸程にのびてゐる。
- 十2810 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、(略)。
- 十292 畑に續いて、農家が一けんある。
- 十293 (略)、寒菊が今を盛りと咲いてゐる。

- 十294 物置の後は、大きなだいぐの木があつて、(略)。
- 十295 (略)、黄色い大きな實が枝もたむ程なつてゐる。
- 十296 家の横に水をよくすんだ小川が流れてゐる。
- 十297 二三羽のあひるが(略)、しきりにゑをあさつてゐる。
- 十299 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、(略)。
- 十316 (略) 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、(略)、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。
- 十347 或人が主人に向つて、(略)とたづねた。
- 十351 (略) 「あれが此の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。
- 十354 (略) 談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、(略)。
- 十357 (略) あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風がなく、(略)。
- 十363 (略) 外の者は少しも氣が附かないで、中にはそれをふんだ者もありましたが、(略)。
- 十368 (略) 人が大勢込合つてゐる中で、少しも人に先んじようとはせず、(略)。
- 十378 (略)、何よりも、本人の行がたしかな保證です。
- 十431 (略)、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。

- 十444 (略) 眠亀ガ一身一家ヲ忘レテ、熱心ニ此ノ業ニ志シ、機械ヲ發明シ、國産ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。
- 十487 (略) 例へば赤に青を加ふれば、紫となり、青に黄を加ふれば、綠となるが如し。
- 十496 (略) 赤と綠とを並ぶれば、赤も綠もよく引立ちて見ゆれども、赤と黒とを並ぶれば、赤の黒ずみて見ゆるが如し。
- 十622 (略) 數千人ノ坑夫ガ銅鑛ヲ掘取ルコト、晝夜止ム時ナシ。
- 十6310 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。
- 十6310 見張人がマストの上から北の方を指さして聲高く呼んだ。
- 十645 はるかのかのあなたに白い水煙が見える。
- 十651 小山の様な白波が高くくだけて、夕立のやうに降散る。
- 十666 流れ出る血に紅の波がたゞよふ。
- 十726 (略) 是種々の塩分をふくめるが故なり。
- 十729 (略) 温泉の諸種の病を治するは、(略)、美麗なる風光に接するが爲なるべし。
- 十778 (略) 頭ノ骨ノ堅キハ腦ヲ護ランガ爲ナリ。
- 十779 (略) 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテオホハレタルハ肺臟及ビ心臟ヲ保護

- センガ爲ナリ。
- 十844 (略)、今では全國食はぬ處がなくなつた。
- 十848 又皮・骨・ひづめなどからはにかが出來、(略)。
- 十858 すべて家畜は(略)、とかくに之をいぢめる風がある。
- 十858 西洋の馬がおとなしくて、日本馬のおとなしくないのは、(略)。
- 十861 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするもの、人に恐れるからである。
- 十862 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするもの、(略)。
- 十865 しかも其の成長が極めて早い。
- 十871 羊や山羊は毛が必要である。
- 十8910 (略) やみの天地をまた元の御代に返すは誰が任ぞ。
- 十962 (略) 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリテ、(略)ヲ思ヒ出デテ、(略)。トヨメルコト人ノヨク知ル所ナリ。
- 十982 (略) 此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、(略)。
- 十989 (略) 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠綠シタ、ルガ如シ。
- 十994 (略) 紀貫之ガ(略)。トヨミタリトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラニアリ。
- 十1014 (略)、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、鎌足ガ靴ヲササ、ゲテ

皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。

十1015 図 (略)、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、(略)。

十一16 図 (略) 吉野山の光景まのあたり見るが如し。

十一34 図 正平の昔、楠木正行が(略)の名字を壁に書連ね、(略)。

といふ一首の和歌を書残せるは此の所なり。

十一93 (略)、ソレヲ大勢ノ人ガ手分シテスルノデアル。

十一97 此ノ様ニ大勢ノ人ガ手分ヲシテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

十一99 (略)、全體ノ人ガ同ジ仕事ヲスルヨリモ、(略)。

十一910 (略)、分業デスル方ガ品物ノ出来バエガ良クテ、製造高モハルカニ多イ。

十一101 (略) 品物ノ出来バエガ良クテ、製造高モハルカニ多イ。

十一105 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。

十一106 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトニナル。

十一108 随ツテ良イ品物ガ出来テ、製造高モ多クナル。

十一112 (略)、ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。

十一114 (略)、ソナナ手數ガ省ケ

テ、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十一115 (略)、ソナナ手數ガ省ケテ、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十二22 (略)、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。

十二24 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、(略)。

十二185 図 (略)、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十二188 図 春は島山霞に包まれて眠るが如く、(略)。

十二194 図 (略)、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、(略)。

十二258 図 自轉車の兩輪が前後に並べるも亦様變れり。

十二267 図 筋骨たくまじき若者が櫓を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましさを。

十二385 図 (略)、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覺え申候。

十一438 図 忠元あはれみて、己が家に連歸り、(略)。

十一472 二、アラビヤ馬の違者なことを證明する面白い話がある。

十一472 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。

十一4710 図 「それ、馬主が逃げた。」といふので、(略)。

十一488 追手が接近すれば速力を速め、後れ／＼脚のききみを短くする。

十一488 追手のトルコ人は如何ともすべき方法が無い。

十一495 (略)、前の馬主が再び馬をひいて来て、「略」といつた。

十一496 図 「閣下、三千金が惜しう御座いますか。」

十一496 図 此の馬が欲しい御座いますか。

十一499 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一508 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。

十一509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。

十一509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。

十一5010 (略) 三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。

十一513 此の一事でアラビヤに名馬の産する所以が分つた。」

十一547 ナポレオンがアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた時は冬の半で、(略)。

十一551 隊中にピエールといふ年の頃十三四ばかりの少年鼓手があつた。

十一553 (略) すさまじい物音が聞え始めたと思ふと、(略)。

十一554 (略)、山のやうな雪なだれがなだれて来て、(略)。

十一558 静かな山の中に流れる水の音が遠く聞えるばかり。

十一559 (略)、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。

十一561 ピエールが打ついつも太鼓に達しない。

十一569 図 此の時「自分が行かう。」とさげふ人を誰かと見れば、(略)。

十一579 図 我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。

十一582 図 早くしないと、ピエールが死んでしまふ。」

十一584 將軍が谷底へ下りた時には、もう太鼓の音は聞えぬ。

十一5810 將軍の愛情と勇氣によつて、軍中の花が助かつたので、(略)。

十一644 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

十一647 (略)、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニモ大イナル得失ガアル。

十一655 寒イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、(略)。

十一656 寒イ時ハ(略)、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。

十一658 (略)、暑イ時分ハ(略)消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

十一661 食物ハ又變化ガ大切デア

ル。
 十一664 (略)、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。
 十一668 (略)ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。
 十一669 常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。
 十一673 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハヲカシイ話デアル。
 十一688 (略) 古人の片言・隻句も我等が師なり。
 十一705 (略) 約束の時日を違ふるが如きは時間の賊なり。
 十一742 (略) 「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」
 十一775 (略) 美しき瀧にして、眞に白布をさらせるが如し。
 十一782 (略) (略)、其のひゞき萬雷のとゞろくが如く、(略)。
 十一822 (略) かゞり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、(略)。
 十一825 (略) 魚は(略)、水面近く浮ぶが故に、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふことを得るなり。
 十一847 (略) 綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、(略)。
 十一854 (略) (略)、四尺程ノ幅トナリテ進ム様、精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。

十一891 (略) 蟻は此の甘き汁を得んが爲に、(略)之を保護し、(略)成長せしむ。
 十一944 (略)、次第に其の製造高を減ずるが故に、供給も随つて減じて、(略)。
 十一10210 (略) 「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。
 十一1039 (略) 「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」
 十一1076 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、(略)。
 十一1076 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、(略)。
 十一1077 (略)、成るべく狭く低くする必要がある。
 十一1077 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。
 十一1079 此のオンドルがある爲に、普通の家では冬でも夜具を用ひない。
 十一10710 オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、(略)。
 十一10710 オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、(略)。
 十一1081 「米のなしいのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」
 十一1082 (略)、朝鮮では「(略)」といふ意味のことわざがある。
 十一1092 (略)を見ると、昔の人に

會つた様な氣がする。
 十一1095 金がなくて、冠禮の行へない者は、(略)。
 十一1097 (略)、三十を過ぎててもチョンガーで、大人の仲間入が出来ない。
 十一1097 近年は斬髮の風が行はれて、冠禮は段段すたれて行く。
 十一1103 (略)、まんぢゆうの様に圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。
 十一1107 京城地方の婦人がたまく外出する時には、(略)。
 十一1114 (略)、どこの山陰にも白い着物が乾してある。
 十一1115 秋の夜長には衣打つきぬたの音が村々相應じて聞える。
 十一1133 (略) 其の他の教員も(略)、職務に勉勵するが故に、兒童は皆よく之になつて、(略)。
 十一1135 (略) 村會議員も(略)、互に競争するが如きこと更になし。
 十一1138 (略) は、我等が身を修め、世に處するの道を示し給へるものにして、(略)。
 十一116 (略) 陛下が萬機の政をみそなはず御かたはら、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、(略)。
 十二27 (略) 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。
 十二48 (略) 露國が連敗の勢を回復せん爲、(略)全勢力を擧げて組織せる(略)は、(略)。

十二59 (略)「(略)」との信號旗が戰鬪旗と共に我が艦三笠にかゝげられたるは(略)。
 十二106 (略) 「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)。
 十二121 (略)、多人數ノ技師や技手ガ永クカゝツテ製圖スルカラ、(略)。
 十二123 設計圖ガ出來上ルト、(略)。
 十二1210 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出來、(略)。
 十二133 船體ノ材料ガホゞ整フト、組立ニ取リカゝル。
 十二143 コレデ船ノ大體ノ形ガ出來ル。
 十二147 (略)龍骨ニモ、肋材ニモ、梁ニモ、外皮板ニモソレ々ノ附屬具ガアリ、(略)。
 十二152 (略)、スツカリ出來上ルマデニハ非常ナ手數ガ掛ル。
 十二154 (略)、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデアル。
 十二155 又私設デハ三菱・川崎等ノ造船所ガ最も大キイ。
 十二174 (略) 又各測候所が(略)によりて、其の地方の天氣を豫告するを地方天氣豫報といふ。
 十二195 (略)、あたかも天上より下界を見下すが如く、一日に全國天候の如何を示すものなり。
 十二207 植物の花には、同種の他の

花の花粉を受けると、良い實を結ぶものがある。

十二209 それが爲におのづと種子をあちらこちらへ散布する。

十二213 若し之を消費するものがないければ、(略)。

十二214 (略)、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、(略)。

十二214 (略)、遂には地球上の動物が呼吸作用を営むことが出来なくなる道理である。

十二215 (略)、遂には地球上の動物が呼吸作用を営むことが出来なくなる道理である。

十二216 然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、(略)。

十二217 (略)、一方に於て植物が之を消費するからである。

十二221 (略)、盛に炭酸瓦斯を取つて、其の中の炭素を養分にして酸素を放つ作用がある。

十二222 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)。

十二223 (略)、空氣中の炭酸瓦斯の分量が著しく減つて、(略)。

十二224 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、(略)。

十二226 (略)、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

十二228 是は水中に於てある酸素が吸盡されるからである。

十二231 是は前にいつた様な關係が

びんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

十二329 かの山内一豐の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略)。

十二331 楠木正行の母が正行を戒め、(略)。

十二332 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)。

十二342 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)。

十二343 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、(略)。

十二344 (略) 學校ガ落成シテ、前週ノ土曜日ニハ落成式ガ舉行サレタ。

十二347 (略)、縣廳カラモ知事ノ代理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。

十二351 就學兒童ノ數ガ年々増加シ、(略)。

十二393 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。

十二396 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。

十二459 耕地の面積廣大なるが如くなれども、(略)。

十二4510 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、(略)。

十二469 農業は我等が生活に必要な材料を作り出す所以にして、(略)。

十二472 農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉を勞するが故に、身體常に健全なり。

十二509 我等ハ世界ノ市場ヨリ如何ナル物品ヲモ買ヒ得ルガ如ク、(略)。

十二523 見本ト現物トヲ異ニシ、約束ノ期限ヲ違ヘ、平素ノ愛顧ニナレテ、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

十二528 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、(略)。

十二531 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、(略)。

十二583 此の鐵道は(略)にして、明治四十二年よりこれが改築に着手せり。

十二633 (略)、市中到る處其の往來織るが如く、(略)。

十二658 ナポレオンがモスコーより退軍せし時、(略)。

十二675 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二695 (略)、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

十二699 (略)、飢餓刻々にせまるが故に、次第に行進を早め、(略)。

十二768 (略)、今日はコロンプスが遠征隊出發の日なりとて、(略)。

十二792 (略)、先頭の一艦が發せる號砲に、人々喜びて、(略)。

十二811 コロンプスの遠征時代は(略)、北條早雲が小田原城に據りて、次第に其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。

十二816 頭には霜をいたゞき、(略)、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音樂師がある。

十二827 木蔭に立つてつくぐとこの様子を見てゐた一人の紳士があつた。

十二829 弓が一度絲にふれると、天上の音樂の様な美しい音がわき出した。

十二829 弓が一度絲にふれると、天上の音樂の様な美しい音がわき出した。

十二831 老人は、どうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、どうして又自分の弾く時にはあんな音が出ないのかと(略)。

十二832 (略)、どうして又自分の弾く時にはあんな音が出ないのかと(略)。

十二836 重く沈んだ調に暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかと思ふと、(略)。

十二84 9 歌が終ると、紳士はパイオリンを老人に渡し、目禮して何處へか行つた。

十二85 1 (略)、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、(略)。

十二85 8 赤穂浪士が數年の苦難を忍び、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは(略)。

十二86 5 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。

十二87 7 出入口の混雜せる程なれば、一事が萬事、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

十二88 8 (略)、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

十二91 4 「其の母によりて其の子を養せよ。」といへるが如く、(略)。

十二93 9 是孔子が十七歳の時なりき。

十二94 5 「(略)。」とは孔子が景公に教へたる語なり。

十二94 10 景公よりて魯と好を結ばんが爲に魯公と會見す。

十二95 8 此の會に於ける孔子の行動は蘭相如が秦王を叱したるとは異なり、(略)。

十二96 7 「汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。」

十二96 7 汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。

十二97 6 (略)、個人としても自ら

高尚なる品格を要するが如く、(略)。
十二98 8 (略)を不潔にし、(略)をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、(略)。

十二99 4 (略)他人をおしのけ、(略)我獨り廣き場處を占領し、(略)、他人の安眠をさまたぐるが如きは、(略)。

十二99 5 老人長者の爲に道をゆづり、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、(略)。

十二101 2 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)。

十二103 9 まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、(略)。

十二105 2 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、(略)。

十二110 2 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを論し給ひ、(略)。

十二113 9 (略)、小さき信義を立てんが爲に大いなる順逆を誤り、(略)。

十二113 10 (略)、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

十二116 1 武勇の精神も亦國民が古

來のほこりとなす所なり。

十二116 4 (略)。といふ忠勇の精神は我等が祖先の教訓なり。

十二117 1 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、(略)。

が(接助) 203 が ひとところ

二20 5 イマハ木ノ上ニキマス

ガ、モウスコシタツト、キモノヲヌイデ、下ヘトビオリマス。

二35 6 トモダチハ「(略)、イテハイクマセン。」ト、トメマシタガ、

キカナイデイマシタ。

二46 1 アノ太イ木ハカレタヤウニミエマスガ、ツボミガタクサンツイテキマス。

二53 4 (略)、ハタケノスミヲホツテミマシタガ、キタナイドロ

水ノホカニハナンニモデテキマセン。

二56 3 ヨイオヂイサンハ(略)、ソレデ米ヲツキマシタガ、ツクタブニ、(略)、イロイロナタ

カラモノガデマシタ。

二57 4 ヨクノフカイオヂイサンハ(略)、米ヲツイテミマシタ

ガ、ヤツバリキタナイモノバカリデテ、ヨイモノハナンニモデマセン。

二22 5 うごかず いるますが、し

んだのではありません。

二22 8 私をころがすのはだれ

にもできますが、たたせること

や、二つかさねることは、どう

してもできません。

二24 4 牛のつめは二つにわれてゐますが、うまのはわれてゐません。

二41 8 (略)。一つやつて見よう。」

と、川の中へはいりました

が、がぶがぶと水をのんで、とうとうしんでしまひました。

二62 3 はまぐりのやうに二つ合ふのもありますが、さざえのやうに、ふかいつぼのかたちになつてゐるのもあります。

二70 2 「イロイロオセワニナツテ、アリガタウゴザイマスガ、アマリナガクナリマスカラ、モウウチヘカヘリマセウ。」

二71 1 「ソレハマコトニオナゴリヲシイコトデゴザイマスガ、ソレデハオワカレノシルシニ

コノハコヲオ上ゲマウシマセウ。

四8 1 二人はまた方々ながめて、あそんでゐましたが、そのうちに雨がふりさうになつたので、いそいで山を下りました。

四19 3 あのししはどつとたふれましたが、たふれるが早い

か、ただつねは(略)木の上へと

びのきました。

四三七 図 「こんどはにいさんが

きくが、もちやだんごのあん
は何で作るのですか。」

四三六 麥ワラデハヤネヲフキマ
スガ、又赤ヤ青ヤキ色ニソ
メデ、麥ワラザイクニモツカヒマ
ス。

四五五 木ノヤウニカタイガ、
木デハアリマセン。

四五七 サカナノニホヒガシマス
ガ、アタマモヲモアリマセン。

四五八 ヨク人ノタベルモノデ
スガ、ソノママデヤイタリニ
タリシテタベルノデハアリマ
セン。

四六一 チヨツト見ルト、リツパ
デハナイガ、オメデタイ時ノ
オクリモノニナリマス。

四五一 今ハ死ンデキマスガ、モ
トハ海ノ中デオヨイデキマ
シタ。

四五五 白ウサギハ(略)、ワタツテ
行キマシタガ、イマ一足デヲカ
ヘ上ラウトイフ所デ、「(略)。」
トイツテワラヒマシタ。

四五八 白ウサギハスグ海ノ水
ヲアビマシタガ、マヘヨリモ
カヘツテイタクナツテ、ナホナホ
クルシンデキマシタ。

四六六 羽の色はあまりうつく
しくはありませんが、なくこゑ
はまことにかはいらしうござい

ます。

四八四 一どはじたいしましたが、
よしつねがゆるしません。

五八六 そらからふつて、山の木のは
の上に休んでゐましたが、風にふか
れて、土の上へおちました。

五二五 役人はしばらく考へてゐま
したが、そのうちにゐざりにむかつ
て、「(略)。」と申しわたしました。

五三二 五月ゴロカラツミハジメマス
ガ、一バンハジメニツムノヲ一番茶
トイヒマス。

五三三 マタ三番茶・四番茶マデモツ
ムコトガアリマスガ、ソナニツム
ト、茶ノ木ノタメニハヨクナイサウ
デス。

五三五 蝶ニハ大キナノモ、小サナノ
モアリ、羽ノ色ニモ、(略)ヤサマ
ムアリマスガ、ドレヲ見テモ美シ
ウゴザイマス。

五三八 天皇はこれをこらんになつ
て、大そうお笑ひになりましたが、
「(略)。」とおほせになつて、する
には小子供といふ姓をたまはりました。

五四六 はじめのうちは遠くの方にき
こえてゐましたが、だん／＼近くな
つて、雨もつよくふつてきました。

五四七 友吉は「(略)。」といつて、
そこをのかせようとしましたが、音
次郎はなか／＼きません。

五五〇 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソ
ノ他ノ瓜ノハ白イノガ多い。

五五二 ヘチマハワカイウチハタベラ
レルガ、實ガイルトタベラレナイ。

五五八 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
出シマシタガ、ソレカラ後ニハ石ト
金ヲウチ合セテ出スヤウニナリマシ
タ。

五六〇 (略)、ワキ出タママノハニゴ
ツテキマスガ、シアゲルト、スキト
ホツタ油ニナルノデス。

五七六 毎年春ニナルトオチルガ、
オチルトスグ又新シイノガハエテ、
ソノタビニ枝ガ一ツツツエル。

五七二 角ノアルケモノモタクサン
知ツテキルガ、コンナリツパナ角ヲ
モツテキルモノハナイヤウダ。

五八〇 よしつねはこゝぞと思つて、
「進め／＼。」とさしづをしたが、馬
もこはがつてすくんでしまひ、人も
顔を見合せて進まうとはしない。

六一四 海岸には切立てたやうな岩山
もあるが、平たい砂原になつてゐる
所が多い。

六一一 のぼる時には三時間かゝつ
たが、下りる時には二時間しかかゝ
りませんでした。

六二〇 昔ある國で大きな象の目方を
はからうとしたが、どうしてはかつ
てよいかわりませんでした。

六二四 「金ニハイロ／＼アリマス
ガ、ナカデー番人ノ役ニ立ツノハ、
私ドモノ仲間ノ銅デセウ。

六二五 金ヤギンハ(略)、ソノ他
イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、
ドチラモタクサンアリマセンカラ、
ネダンモ高ウゴザイマス。

六二八 「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、ソレヨ
リモツトタクサンアツテ、モツト役
ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六二九 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハ
イレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ
銅ヨリモマダ上デス。」

六四二 (略)、八つの時にお寺へ小ぞ
うにやられましたがおきやうなど
は何べんをしへてもおぼえません。

六四七 けらいが大ぜい直しにかゝり
ましたが、中々はかどりません。

六四九 秀吉が(略)、敵を攻めに行
つてゐた間の事でしたが、信長は京
都で光秀といふけらいにころされま
した。

六五〇 (略) 勝家などはこれをきら
つて、てきたひましたが、かへつて
ほろぼされて、(略)。

六五五 支那からは大兵をおくつて、
朝鮮をたすけましたが、もとより強
い日本兵にはかなひません。

六五七 そこで支那もおそれて、わぼ
くを申しこんで來ましたが、その使
のもつて來た文の中に、(略)とい
ふふれいなことがありました。

六五八 信玄はふいをうたれておどろ
いたが、たちまち陣立をかねて、敵

を引受けた。

六五七 ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、かた先へ切りつけられた。

六五八 上杉謙信はこんな強い人であつたが、又なさげぶかい人であつた。

六六二 〔略〕わたしの手からもぎ取つて、はふつた音はしましたが、かなしいことに目が見えず、さがすことさへ出来ません。」

六六六 ソノツカマヘタ魚ヲ〔略〕、肩ニカツイデ行キマスガ、後カラ一ツツヌケテオチルノヲ知リマセン。

六七二 十人十色と申しますが、まことにその通りで、〔略〕。

六七三 私は一たい子供がすきでございしますが、〔略〕どうしてもきらひな子供が七八人ございました。

六七四 男や女や年よりや子供も大ぜい集つてゐますが、新しいしるしばんてんを着てゐる大工が一番目立ちます。

七一一 〔略〕、ソノ折父トトモニ戦場ニ出デントセシガ、正成ハ道ニテサトスヤウ、〔略〕。

七五八 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、アル年敵ノ大將高師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來リ攻ム。

七五九 用事は四五日ですむはずで

すが、十日ばかりはあちらに居ます。

七六二 急ぎますのでうかゞひません、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、御あんりよくおつしやつて下さい。

七六五 おほせにあまえて申し上げますが、種物屋から西洋西瓜の種を三色ばかり買つて來ていたゞきたうございします。

七六九 西洋西瓜には色々あるさうでございしますが、なるべく大きくてうまい實のなるやうなのをお願い申し上げます。

七七一 私はこんな大きななりをしてゐますが、〔略〕、私の豆はたべられませんが、〔略〕。

七二二 保己一ハ五歳ノ時メクラトナリシガ、〔略〕、一心ニ勉強セシカバ、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲアラハセリ。

七二九 〔略〕、色もはじめは黒いが、だんぐかはつて青白くなる。

七三〇 小さい時分はやはらかな葉をこまかく切つてやるが、大きくなると、枝のまゝやる。

七三七 〔略〕、マン中ノ道ハセマイガ、人ハ皆前ヘ前ト進ンデ行ツテ、後ヘハ引キカヘサナイカラ、通り道ノセマイ割合ニハコンザツシナイ。

七三六 これを見た人は皆ほしいとは思ひましたが、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。

七四七 〔君ヲハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ヲハ裏表トモニ使ハレル。〕

七四八 〔君等ハ水ニヌレルト、スグニベタ／＼ニナルガ、僕等ハ少シグラキ水ニヌレテモ、裏ヘハ通ラナイ。〕

七五〇 お花は「はい。」と答へて受取らんとせしが、配達夫は「おかあさんをよんで下さい。」といふ。

七五五 〔手紙は四匁までは三錢ですが、四匁より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。〕

七五五 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、賃錢も高かつたのです。

七六四 桃がじゆくしましたから、少しばかりですが、差上げます。

七六六 さつそくいたゞきました、味が、味は又かくべつでございします。

七七一 エビノ〔略〕、カニノ〔略〕様子ハ、池ヤ川ニヌムモノトチガハナイガ、タコヤイカノアシヲソロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。

七七二 陸ニヌムモノデハ、象ガマツ一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大人ト赤子ヨリモ、モツトチガフ。

七七四 コンナ所ニハ〔略〕、植物ハマツタクナイガ、岸ニ近イ〔略〕ノ

所マデニハ、海草ガハエテキル。

七七五 コノ他マダタクサンアルガ、イヅレモヨイ肥料ニナル。

七七八 一ガインイフコトハ出来ナイガ、マツ緑色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深い所ニ、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。

七八八 〔航海といふものはかういふ面白いものですが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。〕

八二六 〔略〕、代々の天皇はこれを宮中にあがめたまひしが、後神殿を今の五十鈴の川上に造り、〔略〕、皇祖天照大神をまつりたまへるなり。

八三七 明治三十七八年戦役の終りたる後も、〔略〕、平和の成りたるを告げたまひしが、その御式の盛なること前古たぐひなかりきと申す。

八五九 何モシナイデ遊ンデキルノハ樂ナヤウニ見エルガ、却ツテ苦シイモノデアル。

八九四 初は近所の人にもうらやまれる程の身代でしたが、牛も段々減り、畑の取高も年々に少くなつて、五六年の中によほど財産を減らしました。

八二一 ある日一人の友だちは、〔略〕、いろ／＼世間話をしてゐたが、〔略〕、雀といふものはすぐふえるもので、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

八二六 さうしてそれをつかまへる

と、大へんに仕合がよくなるといふが、毎年一羽づつしか出て来ない。

八22 9 次の朝農夫はいつになく早く起きて、(略)、野原の方までも行つてたづねましたが、影も形も見えませんでした。

八26 5 一週間程たづねたが、白雀は見つかりませんでした。

八31 4 (略)、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。

八32 7 僕の家で(略)、つくろひを頼んだ事があつたが、翌日すぐにこしらへてくれた。

八33 4 匣 「自分は今こそこんな小刀や釘などを造つてゐるが、元は少しは人に知られた刀かぢで、(略)」。

八34 1 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。

八40 6 匣 我が國ニテハ、初ハモツバラ輸入品ヲ用ヒタリシガ、明治八年ヨリ内地ニテモ之ヲ製造スルニイタレリ。

八42 7 仕合に風上で安心だが、叔父さんのうちはどうだらう。

八43 5 (略)、やうく米屋の土藏でとまつたが、二棟の土藏の中、一棟はとうく焼けおちたさうだ。

八47 8 匣 「それでもよいが、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、サクヤとは書くには及ばない。

八50 6 匣 鎌足(略)、大事ヲ成スニ

ハ此ノ皇子ヲイタマキ奉ルヨリ他ニ道ナシト思ヒシガ、未ダ近ヅキ奉ル折ヲ得ザリキ。

八53 1 匣 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出デズ。

八55 3 綿ハ實カラトリマスガ、藍ハ葉ト莖カラ取ルノデス。

八67 2 匣 初は熱があまり高いので、一時はどうなることかと心配いたしました(略)、一先安心いたしました。

八67 8 匣 (略)、勝手がましい御願ですが、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

八68 4 匣 其の後どうかと思つてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八69 1 匣 此のかはせの金は、ほんの僅かですが、何かすきな物を買つて上げて下さい。

八84 2 (略)、名譽ノ戦死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、ソノ中デモ(略)ノ二人ハ軍神トマデイハレタ。

八84 7 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戦地ヘ向ツタガ、中佐ハ(略)、メザマシイ働ヲシナケレバナラナイト、(略)、部下ノ大隊ヲヒキキテ、勢鋭ク進撃シタ。

八86 1 我が兵ハ物トモセズ敵陣メガケテ突撃シタガ、敵ハツルギノ林ヲ以テムカヘタ。

八86 5 中佐ハハヤ、右手ニ一ヶ所ノ

傷ヲ受ケタガ、少シモヒルマズ、(略)、トウく山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立デタ。

八88 1 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、ソレデモタワマズ、奮戦ヲツバケテ居ルト、(略)。

八90 8 軍曹ハ(略)、アランカギリノ力ヲツクシタガ、中佐ノイキハトウトウ其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。

八91 9 (略)、中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ、「(略)」トイツタガ、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

八92 3 馬丁ハ(略)、様子ノ分ルノヲ待ツテ居タガ、トウく戦死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死ガイニ取リスガツテ泣イタ。

八92 7 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイクラモアルガ、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツパデアツタカラデアアル。

八95 3 匣 (略)、早くより東海道一の大都會なりしが、鐵道の開通せしより、商工業の發達著しく、(略)。

九2 8 匣 「我等には元八人の娘ありしが、(略)八つの頭と八つの尾とある大蛇あり、毎年來りて、我が娘を取食ひ、(略)。

九6 5 匣 尊これより引返して近江の賊を討ち給ひしが、道にて病にかゝり、遂に伊勢にてかくれ給へり。

九7 7 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、豆ヤ藤ノ花ノ瓣ハ不揃デアアル。

九7 9 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキデ、引キサカナケレバ取離スコトガ出來ナイ。

九10 3 タンポ・ヨメナナドハ一リン咲ノ様ニ見エルガ、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアアル。

九19 9 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「(略)」といつて、其の手紙を差出した。

九23 1 匣 おつかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られるが、まだ其の折に出會はないのだ。

九23 9 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。

九26 9 匣 (略)までは、我が國の陸軍は僅かに七箇師團に過ぎざりしが、戦役後十三箇師團となり、(略)十九箇師團となれり。

九30 8 蒸氣機關は二百年程前に發明せられたが、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

九31 7 (略)最初の船は、フランスのセイヌ川に浮べたが、不幸にも直に沈んでしまつた。

九32 2 (略)、何人にも乗船の望に應

九32 2 (略)、何人にも乗船の望に應

じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、其の日になつて乗船したものは僅か十二人に過ぎなかつた。

九三二 此の時も少し進んだきりで、やがて動かなくなつたが、しらべて見ると、機關の一部に故障があつたので、すぐそれを直した。

九三三 スチブソンは若い時から機關の事に明かつたが、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、日夜其の事ばかり考へてゐた。

九三四 其の頃イギリスのある會社で、馬車鐵道をこしらへようといふ話があつたが、スチブソンの發明した汽車を用ひて見ようといふことになつて、(略)。

九三四 やがて汽車が動き出すと、馬上の人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、一時間に十五マイルも走る汽車とはどうして競走が出来よう。

九三六 「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」

九四五 「アリは十歳ばかりの子供なりしが、父の手紙を讀みて心勇み、(略)、隊商と共に出立したり。

九四五 さていよく沙漠に入りしが、木のかげ一つもなき砂原つゞきなれば、其の苦しさたとへんに物なし。

九四九 かくる間に、又向ふより一

組の隊商到着せしが、其の中にはアリの父ハッサンもまじれり。

九六二 (略)、景行天皇の御代日本武尊之を征し給ひ、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばゝなりき。

九八〇 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、片時も君を忘れ奉ること無く、(略)、都の空のみしたはしく、僅かに詩歌に思をよせて、ひとり自らなぐさめ居たり。

九八二 (略) 天皇の御感に入り、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが、其の御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。

九八六 二人の馬は五分々に進んで行つたが、(略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。

九八六 相手の熊吉があつたので、今日の勝負はきまらないが、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。

一〇一六 昔より富士は日本一の高山と稱せられしが、(略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇五八 葉ノ形ニハ卵形ト橢圓形ガ最も多イガ、錢ノ様ニ圓イノモアリ、針ノ様ニ細長イノモアル。

一〇五九 一條天皇の頃には才學すぐ

れたる宮女多かりしが、最も世に聞えたるは紫式部と清少納言となり。

一〇八二 本の中には字ばかりのもあるが、畫や地圖や寫眞のはいつてゐるものもある。

一〇八五 讀んでゐる間は(略)、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、本といふものはたやすく出来るものではない。

一〇九〇 一色の印刷は一度刷ればよいが、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、幾度も幾度も印刷を重ねなければならぬ。

一〇九四 是は活版刷の本の造り方であるが、この外に木版刷の本もある。

一一二二 又活字は何時でも直に植ゑることが出来るが、木版では一枚づつ彫るから、手間が幾層倍もかかる。

一二五五 韓信シバシ其ノ面ヲウチマモリシガ、ヤガテハラバヒテ膝ノ下ヲクグル。

一三〇〇 (略)、アメリカヨリルソンニ傳ハリ、ルソンヨリ支那ニ入りシガ、支那ヨリ琉球、琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。

一三二一 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノヲ用心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。

一三三二 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、是等

ノ島ニハ作物ノ出來ザル荒地多ケレバ、(略)、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

一三四五 志望者は五十人ばかりも來たが、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。

一三五五 談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、すぐに立つて、椅子をゆづりました。

一三六四 外の者は(略)、中にはそれをふんだ者もありましたが、あの青年ははいると直に書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

一三七四 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。

一四二八 (略)、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ねテ、(略)。

一四三五 眠亀ハ(略)、海外ニ輸出セント試ミシガ、此ノ時ハナホ世人ノ注目スル所トナラズ、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。

一四六二 此ノアタリ、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、(略)次第ニ發達シテ、今ヤ足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、(略)。

一四六九 (略)、幾度かいそへに出でてながめしが、墨を流したる如き空模様にて、一寸先をも見分くること能はず、(略)。

十69 父は此の大波に何とて行か
るべきと思ひしが、娘のやさしき心
にはげまされて、ボートを用意す。
十82 彼等は元は読み書きも知ら
ず、算数の考もとぼしかりしが、今
は（略）、読み書き・計算をまなし
得るものあるに至り、中には小學校
教員となるものもあり。
十82 ぬのぬの数、古は甚だ多か
りしが、近年次第に減少して、今は
僅かに二萬人に足らず。
十83 是等も家畜の中に數へられる
が、家畜としてもつと大切なものは
牛・馬・羊・豚等である。
十84 維新前までは牛肉を食ふ人は
至つて少かつたが、今では全國食は
ぬ處がなくなつた。
十85 すべて家畜はよく勞らなけれ
ばならぬが、とかくに之をいぢめる
風がある。
十86 内地では昔から餘り多くは飼
はなかつたが、琉球ではたくさん飼
つて居つた。
十94 規模極メテ大ナリシ
ガ、今ハ往時ノ三ノ一ニモ足ラズ。
十一5 應神天皇の頃より
奈良朝の頃には度々行幸ありしが、
山城へ遷都ありし後は其の事絶えた
り。
十一11 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益
ノアルモノデアルガ、コ、ニ注意シ
ナクレバナライノハ共同一致トイ

フコトデアル。
十一13 主上尚笠置におは
しませし時、早くも義兵を擧げしが、
事の未だ成らざるに先だち、笠置も
落ちたる由風聞ありしかば、（略）。
十一16 是は昔、支那に呉・越と
いふ二國ありてたがひに争ひしが、
呉の勢盛になりて、會稽山の戰に越
の軍を打破りたり。
十一42 光範「幼き身を唯一人敵
國へやらんも心許なし。（略）」と
て固く止めしが、「年長じては敵も
近づけ申すまじ。（略）」と、しき
りに望めば、（略）。
十一47 馬主はしばらく大將の顔を
見つめてゐたが、靜かに其の金を拾
ひ上げ、馬の耳に口を寄せて、何事
か話してゐるかと思ふと、ひらりと
飛乗つて一散にかけ出した。
十一55 「（略）」と聲を揃へて呼ん
だが、何の答もない。
十一58 方々を尋ねて、やう
くさがし當てたが、少年ははや息
も絶え絶えである。
十一65 寒い時ハ（略）、獸肉其ノ
他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアル
ガ、（略）、暑い時分ハ（略）、アツ
サリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノ
ガヨイ。
十一71 此の繪をかける畫工久し
く此の寺に寄食してありしが、何一
つ畫がくこともなく、毎日遊び暮し

て三年を経たり。
十一72 何か書きて參らす
べし。」とて、心構せし様なりしが、
又筆もとらで四五日過ぎたり。
十一74 「先に畫がきたる櫓の
枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝり
しが、（略）よき枝ぶりの繪を見て、
其の意を得たれば、（略）。」
十一76 裏見瀧は後の細道より瀧
の裏面を望み見るを以て此の名を得
たりしが、（略）、今は其の奇勝を見
ること能はず。
十一102 民間ニ在リテ耕作
ヲ事トセシガ、才名世ニカクレナケ
レバ、劉備ハ三度マデモ其ノイホリ
ヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。
十一107 町には瓦屋根の家もある
が、田舎は大抵葺屋根ばかりである。
十一107 朝鮮は夏も暑いが、冬は又
案外に寒い。
十一108 「米のないのは辛抱も出來
るが、薪がなければ生きてゐられ
ぬ。」
十一110 朝鮮人は餘り衛生に注意し
ないが、婦人の着物をよく洗ふこと
は感心である。
十二5 我が海軍は（略）、全力を
朝鮮海峡に集中せしが、遂に之と會
して、世界史上空前なる大海戰とな
れり。
十二6 敵の先頭部隊は直ちに砲
火を開始せしが、我は之に應ぜず、

（略）に近づきて始めて應戦し、は
げしく敵を砲撃せしかば、（略）。
十二8 我が艦隊は（略）に集り
て敵を待ちしが、東方に當りて、は
るかに數條の黒煙を見る。
十二9 敵の司令長官（略）は
（略）、幕下と共に一驅逐艦に移りし
が、（略）に追撃せられ、遂に捕へ
らるゝに至れり。
十二21 植物も動物と同じく、呼吸
作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出
すが、其の吐出す炭酸瓦斯の分量は
至つて少い。
十二22 然るに炭酸瓦斯が絶えず供
給されるのは、他にも種々の原因も
あるが、動物の呼吸作用も與つて大
いに力があるのである。
十二65 かつて栗鼠の大群ウラル
山中の一都會に現れしが、一隊又一
隊、續々相次ぎ、三日三夜引きも切
らず、（略）。
十二76 コロンブスは（略）、熱心
に此の説を主張したりしが、何人も
一笑に附して顧みるものなかりき。
十二78 十時頃はあるかに一點の燈
火をみとめしが、朝の二時頃「陸」
「陸」「陸」と呼ぶものあり。
十二80 かくてコロンブスは報告
の爲、西班牙に歸航せしが、パロス
港の群集は出帆の日に數倍し、（略）。
十二80 其の後コロンブスは數回
の航海を試みしが、（略）第三回の

航海に於て、オリノコ河口に達し、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

十二86 〇 (略)、未だ良雄と相識らざりしが、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勧む。

かあかあ (感) 2 カアカア

一52 1 〇 カアカア、カラスガナイテイク。

一53 4 〇 (略)、カアカア、カラスガナイテイク。

があがあ (感) 1 ガア／＼

六13 6 ホカノガンハ (略)。又トプ時ニハガア／＼ト鳴合フ。ソレハアヒツデアル。

かい [貝] (課名) 2 かひ

三目11 二十三 かひ

三61 4 二十三 かひ

かい [甲斐] (地名) 1 甲斐

九17 〇 甲斐

かい [會] (名) 2 會 ぐうんどうかい

い・こうわかい・こうわかいのあんないぶん・さんじかい・しん・しん・しん・かい・せいねんかい・ふけんぐん・かい・ふけんぐん・しん・しん・しん・かい・いん

八50 8 〇 アル日皇子、寺ノニハニテケマリノ會ヲナシ給ヒ、鎌足モ参リ合セタリ。

十二95 7 〇 景公よりて魯と好を結ばんが爲に魯公と會見す。(略)。此の會に於ける孔子の行動は(略)。

かい [回] ぐさんかい・しんかい・しんかい・き・すうかい・だいさんかい・かい・ぼうふしちかい

かい [貝] (名) 10 かひ 貝 ぐしんじ

ゆがい

三61 2 あそこにはうつくしいか

ひや小石がたぐさんあります。

三61 5 をちさんのおみやげに貝

をこんなにたくさんいただきました。

三61 7 みんなめづらしい貝ばかりです。

三62 6 又あはびの貝のやうに、

一つでひらたいのもあります。

四45 3 〇 今でも魚や貝や鳥

や、すべてなまぐさものをおく

る時には、のしをつけません。

七69 9 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色

々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モ

アル。

七72 5 指ワヤエリドメナドニハメル

美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカラノ中ニ

アルノデアル。

九89 3 〇 貨幣トシタル物品ハ時代ニ

ヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。貝・

毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコトア

リ。

九89 4 〇 賣ル・買フ、財産ノ財、貨

幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アル

ハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故

ナリトイフ。

九89 5 〇 (略)、支那ノ古代ニ貝ヲ用

ヒタルガ故ナリトイフ。

かい [海] ぐちちゆうかい・につぽんか

いかいせん

かい [買] ぐうりかい

かい [飼] ぐうかい・うしかい・ひつじ

かい

かい [櫃] (名) 1 かい ぐろかい

十71 6 〇 グレース、ダーリングの生

家に程近き寺院の庭上には、右手に

かいを握れる少女の銅像あり。(略)。

がい [害] (名) 1 害

九58 9 〇 酒・煙草の害は今更に言ふ

までもなし。

かいあつめる [買集] (下二) 1 買集

メル [一メ]

七38 9 又一ド二色々ナ物ヲ買集メタ

イ時ニハ、一トコロデスムカラ便利

デアル。

かい [買得] (下二) 1 買得 [一

ウル]

十二50 9 〇 我等ハ世界ノ市場ヨリ如

何ナル物品ヲモ買ヒ得ルガ如ク、

(略)。

がいえき [外役] (名) 1 外役

十一6 4 〇 百花満開の候には、外役

の蜂は朝より夕に至るまで、營營と

して寸時も休まず。

かいおく [買置] (四) 1 買ヒオク

〔一キ〕

九76 10 〇 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒ

ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、(略)。

かいが [絵画] (名) 2 絵畫

十20 4 (略)、色のたくさんまじつた

美しい繪畫や地圖のやうなものは、

幾度も幾度も印刷を重ねなければならぬ。

十49 3 〇 繪畫・模様等を色どりする

には、色の調和を考へざるべからず。

かいがい [海外] (名) 4 海外

十43 5 〇 眠亀ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、

自ラ花錠數十種ヲ織出シ、海外ニ輸

出セント試ミシガ、(略)。

十一83 8 〇 年々一億圓ノ綿花ヲ輸入

シテ、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所

用ヲミタシテ、尚海外ニ輸出スルモ

ノ五千萬圓以上ニ及ブ。

十二49 9 〇 世界無比なる七寶の

名は海外にぞろけり、(略)。

十二51 2 〇 内國ノ商業モ、海外ノ貿

易モ、有無相通ズルノ理法ニ基ツケ

ルハ相同ジク、(略)。

かいがいこうつう [海外交通] (名) 1

海外交通

十二53 9 〇 我が國ハ島國ニシテ、海

外交通ノ便最モ多ク、殊ニ近クハ人

口四億ヲ有スル支那ノ大國ニ隣ス。

かいがいししい [甲斐甲斐] (形) 1 か

ひん／＼しい [一ク]

十一55 1 (略) 年の頃十三四ばかり

の少年鼓手があつた。眞先に立つて、

太鼓を打ちながら、かひ／＼しく進

んで行く。

かいがいぼうえき「海外貿易」(名) 2

海外貿易

十二53 5 図 (略) 富國ノ道ヲ講ズル

コト今日ノ急務ニシテ、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。

十二53 10 図 我ガ國ハ島國ニシテ、海外交通ノ便最モ多ク、殊ニ近クハ人口四億ヲ有スル支那ノ大國ニ隣ス。海外貿易ノ將來ハ頗ル多望ナリ。

かいかつ「快活」(形状) 4 快活

十79 1 図 身體ノ健全ナルトキハ精神モ亦常ニ快活ニシテ、何事ヲ爲シテモ良キ結果ヲ見ルナルベシ。

十一52 3 図 身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。

十二52 6 図 天性快活ナル人モ、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十二73 2 図 快活なる精神を以て熱心に其の事業に従事せば、天下何事か成らざるを憂へん。

かいかてんのう「開化天皇」(人名) 1
開化天皇

十94 2 図 停車場ヲ出デテ、左ニ開化天皇ノ陵ヲ拜シ、猿澤ノ池ニ至ル。

かいがら「貝殻」(名) 1 貝がら
三63 1 (略)、この貝がらはかたつむりのやうに、おもてにうづまきがあります。

かいがん「海岸」(名) 5 海岸 ヲいひがしかいがん・にしかいがん・ひがしかいがん

六1 8 海岸には切立てたやうな岩山もあるが、平たい砂原になつてゐる所が多い。

七82 2 図 海岸の松原も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。

七86 7 図 海岸には燈臺がありますから、それを見ると、あれはどこだといふことが分ります。

十10 5 図 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

十一95 10 図 (略) 海岸も海水厚く凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、(略)。

がいかん「外觀」(名) 1 外觀
十二36 4 図 本校舎ノ建築ハ質素堅固ヲ主トシ、外觀美ナラザレドモ、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

かいがんちかく「海岸近」(名) 1 海岸近く
十一99 2 図 春夏の交産卵の爲、鯨の群をなして海岸近く寄來る時は海水爲に白色を呈し、(略)。

かいきよう ヲあしかいきよう・しかいきよう・しものせきかいきよう・ちようせんかいきよう・なるとかいきよう・ほうよかいきよう

かいぐん「海軍」(名) 7 海軍 ヲいひかいぐんこうしょう・りくかいぐん・りくかいぐんしょうそつ・わがかいぐん

八77 9 図 イギリスは我が日本帝國の如き島國にして、商業・工業いづれも盛に、海軍強く、商船多し。

八84 3 (略)、ソノ中デモ海軍ノ廣瀬中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ軍神トマデイハレタ。

八92 9 海軍ノ廣瀬中佐モヤハリ同じデアル。

十一35 4 図 四面皆海ナル我が帝國ハ、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十二4 8 図 露國が(略)、本國に於ける海軍の幾んど全勢力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、朝鮮海峡を経てウラヂオストツクに向はんトす。

十二4 10 図 我が海軍は初より敵を近海に迎へ撃つの計を定め、全力を朝鮮海峡に集中せしが、(略)。

十二15 3 我ガ國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデア

ル。
かいぐんこんきよち「海軍根拠地」(名) 1 海軍根拠地
十二56 7 図 (略) 旅順口に達す。日露の戦役に於ては、露軍は海軍根拠地の

として此の地を死守し、(略)。

かいぐんしょう「海軍省」(名) 1 海軍省

七58 6 図 公園ヲ出ヅレバ、海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。

かいけい「會稽」(地名) 1 會稽
十一17 1 図 此のうらみ忘れ難く、越王勾踐つづさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

かいけいざんのたたかい「會稽山戰」(名) 1 會稽山の戰
十一16 8 図 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、呉の勢盛になりて、會稽山の戰に越の軍を打破りたり。

かいけん「會見」(名) 1 會見 ヲいひしえいのかいけん
十38 4 図 旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル 乃木大將と會見の處はいづゝ水師營。

かいげん「開原」(地名) 1 開原
十二57 図 開原
かいけんす「會見」(サ変) 1 會見す
《一ス》

十二95 1 図 景公よりて魯と好を結ばんが爲に魯公と會見す。

かいこ「蚕」(課名) 2 蠶
七目10 第九 蠶
七28 6 第九 蠶

かいこ「蚕」(名) 16 かひこ 蠶
五36 7 こといふのはかひこのこと

で、皇后さまがかひこをおかひあそばすためでした。

五36 8 こといふのはかひこのことで、皇后さまがかひこをおかひあそばすためでした。

七28 7 一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。

七29 1 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大それた手間がかかる。

七29 6 卵からかへつたばかりの蠶はあり程の大きさで、長さは一分ばかりしかない。

七31 1 大きな蠶がたくさん桑の葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。

七31 3 そのころになると、二万匹の蠶をかふのに、一人付きゝりて、眠るひまもない程いそがしい。

七31 6 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。

七32 4 蠶の口の中には小さいくだが一つある。

七32 7 繭の中の蠶はさなぎとなる。

七32 7 蠶が繭を作つてから二十日あまりたつと、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て来る。

七32 9 これを蠶の蛾といふ。

七34 1 蠶をかふのは春と夏と秋の三

度で、春・夏・秋といふ名がある。

九43 3 繭 姉上も最早御全快にて、四五日前より起きて蠶の世話をなされ居り候。

十一87 7 蠶の絲を吐きて繭を造るは紡績の業に等しく、葉巻蟲の絲にて葉をつづり合するは裁縫の業に同じ。

十一111 10 繭 (略)、近年作物の改良も出来、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、難を飼はざる家なし。

かいごう「會合」(名) 1 會合

十92 5 繭 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、折々會合の節は其の話も出で、何れ熟考の上實行せんと申合せ居り候事とて、(略)。

かいごう「開港場」(名) 1 開港場

ひしかいごう

十一37 5 繭 (略) は本島の四開港場にこれあり、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。

かいごう「海國」(名) 2 海國

七37 7 日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。

七88 4 繭 (略)、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。

がいこく「外國」(名) 8 外國

七34 3 わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一

である。

七62 5 外國にては、犬をして牛かひ・羊かひの手つだひをなさしむ。

七83 6 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてあます。

七88 6 皆さんの中にも、大きくなつてから外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。

八40 4 マツチハ今ヨリ凡ソ百年前、外國ニテ發明セラレタルモノナリ。

八40 8 今日ニテハ其ノ製造ハナハダ盛ニシテ、外國へ輸出スルモノノミニテモ、一年間一千萬圓ノ金高ニ達シ、(略)。

十34 4 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十二50 6 外國トノ交通少カリシ時代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタリキ。

がいこくじん「外國人」(名) 2 外國人

九96 8 外國人の我が國に来る者亦必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞せざるものなし。

十二100 8 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

かいざいく「貝細工」(名) 2 貝ざいく 貝細工

三64 5 貝ざいくを賣るみせで

「買つてきたのです。」

八45 繭 (略)、宇治橋のたもとにいたる。このあたり御山木細工・貝細工などを賣る店多し。

かいざつぐち「改札口」(名) 1 かいざつ口

五40 1 かいざつ口では切符をしらべてゐます。

かいじ「海事」(名) 1 海事

十二74 4 (略) 幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンブスは(略)。

かいしゅう「開始」(サ変) 2 開始す

「セ」

十一29 4 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。空中の交通開始せられ、又其の軍事上に應用せらるゝも(略)。

十二6 4 敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、我は之に應ぜず、(略)。

かいしゃ「会社」(名) 3 會社

八14 9 役所デモ、會社デモ、上カラ下マデ一同ソロッテ事務ニ取りカ、ル。

九33 10 其の頃イギリスのある會社で、馬車鐵道をこしらへようといふ話があつたが、(略)。

九34 3 (略)、スチブンソンは其の會社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を走る汽車を造つた。

かいしゅう「改修」(名) 2 改修

十一114 5 図 耕地整理は（略）、昨年既に之を完成せり。之によりて用水路の改修行はれ、灌漑・排水其のよろしきを得て、（略）。

十一114 9 図 里道の改修も全く成り、村内の重なる道路は荷車・人力車を通ずるに至れり。

かいじゅう「海獣」(名) 1 海獣

十二76 10 図 熱湯の海ありと語る者、舟を呑む海獣ありと談ずる者、（略）、口々に語り合へり。

がいしゅつ「外出」(名) 2 外出

十58 5 図「（略）、水曜日其の日の課業を終へたる時より夕食前まで外出を許され候。

十59 5 図「何か不都合なる事ありて、罰に處せられたる者は外出を禁ぜられ、又重き者は營倉に入れられ候由承り申候。

がいしゅつ「す」「外出」(サ変) 2 外出す「スル・ーセ」

九61 2 図 室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青ざめて元氣なきは、日光に浴せざるが爲なり。

十58 8 図「兵營内の酒保には日用品・飲食物等を販賣致し居り候へば、外出せざるとも少しも不自由を感じ申さず、（略）。

がいしゅつ「する」「外出」(サ変) 2 外出する「スル」

十一110 6 婦人は室内に引込んでゐて、來客に會ふことも、外出するこ

とも少い。

十一110 7 京城地方の婦人がたゞく外出する時には、うしかけの様なものをかぶつて、目ばかり出してゐる。

がいしゅつ「び」「外出日」(名) 1 外出日

十58 3 図「外出日は日曜日・祝日及び大祭日にて、水曜日其の日の課業を終へたる時より夕食前まで外出を許され候。

かいじょう「海城」(地名) 1 海城

十二57 図 海城

かいじょう「海上」(名) 1 海上ひせ

かいかいじょう

十一29 2 図 大小幾多の軍艦は海上の浮城とも稱すべく、（略）。

かいじょう「開城」ひりよじゅんかいじょう

がいじょう「街上」(名) 2 街上

十一68 9 図「（略）、街上に落ちたる硝子の一片を去るも、公衆の利益なるべし。

十二60 4 図 市の中央最も繁華なる處は道幅狭く、車馬街上に滿ちて往來頗る困難なり。

かい「す」(三)「サ変」1 會す「ーシ」

十二5 2 図 我が海軍は初より敵を近海に迎へ撃つの計を定め、（略）、遂に之と會して、世界史上空前なる大海戦となれり。

がい「す」(害)「サ変」4 害す「スル・ースレ・ーセ」

十一14 4 図「志士・仁人は生を求

めて仁を害することなし。身を殺して仁を成すことあり。」とかや。

十一52 6 図 天性快活ナル人モ、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十二38 2 図「何ぞ私事を以て公事を害せんや。」

十二52 3 図 見本ト現物トヲ異ニシ、約束ノ期限ヲ違ヘ、平素ノ愛顧ニナレテ、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

かいすい「海水」(名) 2 海水

十一95 10 図「（略）、海岸も海水厚く凍結し、（略）。

十一99 3 図「（略）、練の群をなして海岸近く寄來る時は海水爲に白色を呈し、（略）。

かいすいよく「海水浴」(名) 1 海水浴
七65 2 又冷水浴や海水浴はひふを強くし、したがつてからだを強くし、心をさわやかにする。

かいせい「快晴」(名) 1 快晴

十二19 8 天氣圖に用ふる普通の符號は左の如し。○快晴

かいせい「す」「改正」(サ変) 1 改正す「ーシ」

十一36 4 図「當臺北市街の如きは、近年市區を改正し、街路井然、總督官邸をはじめ建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程に御座候。

かいせん「改選」(名) 1 改選

十一112 9 図 村長は（略）、深く村民

に敬愛せられ、幾度の改選にも常に選舉せられて、二十餘年間勤続せり。

かいせん「海戦」ひだいかいせん・にっぽんかいかいせん

かいぜん「改善」(名) 1 改善

十二105 1 図 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、（略）。

がいせんもん「凱旋門」(名) 2 凱旋門

十二64 5 図 巴里にもルーブル博物館・凱旋門を始め、世に聞えたる建物少からず。

十二64 9 図 凱旋門は有名なるナポレオンの計畫に成れるものにて、壯大なること世界第一と稱せらる。

かいそう「海草」(名) 8 海草

七70 7 魚類ニハ（略）、タヒ・（略）ナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、（略）。

七74 8 （略）、岸ニ近イ淺イ所カラ五十ヒログラキノ所マデニハ、海草ガハエテキル。

七74 9 海草ニモ色々アル。マツタバ
ラレルモノニハ、（略）ナドガアリ、
ノリニスルモノニハ、（略）、トコロ
テンニスルモノニハ、（略）ガアル。
コノ他マダタクサンアルガ、イヅレ
モヨイ肥料ニナル。

七75 6 海草ノ形ハ様々デアル。オビ

ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、ゼン
タイガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツ
テキルノモアル。

七77 海草ハ大テイ花ガ咲カナイ。

根モ (略) 養分ヲスヒ取ルタメノモ
ノデハナク、タゞハナレナイヤウニ、

岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲ
ナスモノデアル。

七77 海草ハスベテ養分ヲ葉ヤ莖デ
スヒ取ル。

七77 波ニユラレテ、色ノ美シイ海
草ガヒラヒラト動ク間ヲ、(略)。

十二48 四方の海の底廣く、魚
介さまぐ、海草の 無限の富を藏し
たり。

かいたく「開拓」(名) 2 開拓

十一100 羅シヤにて早くより開
拓に力を用ひたるは主として五十度
以北に候。

十一104 新版圖の事に候へば、
本島の開拓は我々國民の最も力を用
ふべき所に候。

かいたく「擧出」(五) 1 カイ出ス
「一シ」

十二15 船渠ノ (略) 船ヲ其ノ中
ニ入レテ一方ノ扉ヲ閉デ、其ノ水ヲ
ポンプデカイ出シテ工事ニ掛ルノデ
アル。

かいちく「改築」(名) 2 改築 ムあん
ぼうてつどうかいちくらくせい

十二35 此ノ改築ヲ計畫シ、
今新校舎ノ出来上ツタノハ眞ニ慶賀

スベキ事デアル。

十二58 此の鐵道は日露戰役中に
急設したる輕便鐵道にして、明治四
十二年よりこれが改築に着手せり。

かいちゅう「海中」(名) 1 海中

八75 我が大日本帝國はアジヤ大
陸の東の海中にある島國なり。

かいちゅうてつどうかいちゅうこ
かいつういたす「開通」(四) 1 開通
致「一シ」

十二36 今や西部縱貫鐵道も全
部開通致候事とて、交通の利便いよ
く開け、(略)。

かいつうす「開通」(サ変) 2 開通ス
開通す「一セ」

八95 鐵道の開通せしよ
り、商工業の發達著しく、(略)。

九40 山ノフモトナル湯本
マデハ電車サヘ開通セリ。

かいて「買手」(名) 1 買手

十一93 例へば靴を用ふること流
行して、買手にはかに増すときは、
(略)。

かいてんす「回轉」(サ変) 1 廻轉ス
「一ス」

十一84 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自
動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ
廻轉スベク、(略)。

かいどう「街道」(名) 1 街道

九35 昔東海道といったのは江戸か
ら京都へ上る街道で、凡そ百二十四
里、其の間に五十三次といつて、重

な宿場が五十三あつた。

かいとうじゅうじがいとう
かいとる「買取」(四・五) 2 買取ル
買取る「一ツ・一リ」

七15 たとへばごふく問屋といふ
のは、(略)、又織物を買ひたいとい
ふ人にたのまれて、それをほかから
買取つてやる店のことです。

十43 自ラ花筵數十種ヲ織
出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、
(略)、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數
種ヲ買取リタルノミナリキ。

かいな「腕」(名) 1 むひふ

十一23 幾年こゝにきふへとる
鐵より堅きるひふあり。

かいなし「甲斐無」(形) 1 かひなし
「一カル」

十二70 少壯有爲の間を徒に遊び
暮さば、老いて後悔ゆともかひなか
るべし。

かいならす「飼價」(四) 1 かひなら
す「一シ」

九45 アリは (略)、年頃かひな
らしたる駱駝に乗り、(略)、隊商と
共に出立したり。

かいぬし「飼主」(名) 1 飼主

十一50 馬もよく飼主になれて、其
の家族一同と親しんでゐる。

かいは「海波」(名) 1 海波

十二79 明くれば二十八日、天よ
く晴れて海波靜かなり。

かいは「飼葉」(名) 1 カヒバ

二25 オヂイサン ハウマニカヒ
バヤツテキマス。

がいひばん「外皮板」(名) 1 外皮板

十二14 實際ハ龍骨ニモ、肋
材ニモ、梁ニモ、外皮板ニモソレ
々、附屬具ガアリ、大キナ船デハ船
底モ兩側モ二重張ニスル。

かいひょうとう「海豹島」(地名) 2
海豹島 海豹島

十一98 海豹島

十一99 多來加灣頭に小さき海豹
島あり、夏より秋にかけてこゝに集
る臘脂獸は數千頭にも達することこ
れあり候。

がいぶ「外部」(名) 1 外部

八48 電報送達の際、發信人居所
氏名を送達紙の外部に表はざんとす
るものは (略)

かいふくす「回復」(サ変) 1 回復す
「一セ」

十二48 露國が連敗の勢を回復せ
ん爲、本國に於ける海軍の幾んど全
勢力を擧げて組織せる太平洋第二・
第三艦隊は、(略)。

がいへい「蓋平」(地名) 1 蓋平

十二57 蓋平

かいぼうかん「海防艦」(名) 3 海防艦

十一31 諸子ハ戰艦・巡洋艦・海
防艦・砲艦・通報艦・驅逐艦・水雷
艇・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十一32 海防艦壹岐

十一33 海防艦ハ専ラ自國ノ沿岸

ヲ護ルコトヲ目的トス。壹岐・鎮遠
・見島等はナリ。

かいほうする「介抱」(サ変) 1 カイ
ハウスル「一シ」

八87 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐
ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。

かいめん「海面」(名) 1 海面

十63 9 (略) そよ／＼と吹く風に、
海面はさゞ波を立ててゐる。

かいめん「海綿」(名) 2 海綿

七73 3 又物ヲ洗ツタリフイタリスル
時ニ使フ海綿モ、ヤハリ海ノソコノ
岩ナドニ取リツイテキル蟲ノ骨デア
ル。

十9 4 (略) 落葉・こけ(略) 木の
根などは、地上に落ちたる水をふく
みさゝふること、あたかも海綿の如
くなるを以て、水をして少しづつ静
かに流れ出でしむ。

かいもと・める「買求」(下一) 1 買ひ
もとめる「一メ」

七43 9 (略) 「日ごろ貧しい暮らしをして
ゐる一豊が、よくもかういふよい馬
を買ひもとめた。

かいりくうんゆ「海陸運輸」(名) 1
海陸運輸

八95 7 (略) 近年新しき港も成りたれ
ば、海陸運輸の便益々開け、産業の
發達は今後いよいよ著しからん。

かいりょう「改良」(名) 4 改良

十42 7 (略) 明治九年頃ヨリモツバラ花
錠ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械

ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)。
十一11 8 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事
ニバカリ掛ツテ居ルト、(略)、其ノ
仕事ニ適スル器具ノ改良ヤ發明ヲス
ルコトモアル。

十一28 1 (略) 其の後百年間の發達は蒸
氣機關の上に多大なる改良を加へた
るを以て、今や列車の速度は(略)
に及ぶものあり。

十一11 10 (略) 自ら先んじて耕作
・養蠶・養雞・養魚等の模範を示せ
しを以て、近年作物の改良も出來、
(略)。

がいろ「街路」(名) 4 街路

十一36 4 (略) 當臺北市街の如きは、
近年市區を改正し、街路井然、(略)。

十二61 2 (略) シャンゼリゼーの大通の
如きは、世界最美の街路と稱せらる。
十二61 9 (略) 伯林の市街は清潔を以て
著る。(略) 街路は掃除最もよく行
きとゞきて、(略)。

十二62 6 (略) 倫敦は(略) 街路狭けれ
ば、古風の乗合馬車を以て主なる交
通機關とす。

かう「買」(四・五) 27 買フ 買ふ
「ツッ・ハ・ヒーフ」

三64 5 (略) 貝ざいぐを賣る みせで
買つてきたのです。」

三66 2 ウラシマ ハ(略)、子ドモ
カラソノカメヲ買ツテ、ウミ
ヘハナシテヤリマシタ。

四3 5 又町からは、きれやこ

まものやさかななどを買つて
かへります。

五39 8 まだきつぷを買つてゐる人も
あります。

六30 2 (略) 二人が店のるすをして
ゐると、一人の男の子がふでを買ひ
に來た。

六30 3 一本三せんづつのを二本買つ
て、十せん銀貨を出したから、(略)。

六58 4 塩ほとんりの國から買つてゐ
た。

七14 7 (略) 問屋といふのは他人からた
のまれて、品物を買つたり買つたり
して、口銭を取る店のことです。

七15 1 (略) たとへばごふく問屋といふ
のは、(略) 又織物を買ひたいとい
ふ人にたのまれて、それをほかから
買取つてやる店のことです。

七17 6 (略) 種物屋から西洋西瓜
の種を三色ばかり買つて來ていた
きたうございます。

七18 5 (略) めづらしい草花をほ
しい／＼と申して居りますから、お
てかずでも、これも二三種買つて來
ていたゞきたうございます。

七38 7 店ニハ番人ガ居テ買ハウト思
フ物ハスグニ買ヘル。

七38 8 何モ買フモノガナケレバ、ソ
ノマ、カヘツテモヨイ。

七39 6 これを見た人は皆ほしいとは
思ひましたが、(略)、誰一人買はう
といふ者がありません。

八15 6 働クコトガナケレバ、食物モ
買ハレナイシ、着物モコシラヘラレ
ナイ。

八69 2 (略) 此のかはせの金は、ほんの
僅かですが、何かすきな物を買つて
上げて下さい。

九76 3 (略) 五年・十年ノ後ニハ、
餘程ノ金高トナリテ、ヤ、高價ナル
必要品モ買フコトヲ得ベク、(略)。

九77 1 (略) 貯金セントスル時ニ
ハ、其ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ
臺紙ニハリツケ、(略)。

九89 3 (略) 賣ル・買フ、(略) 等ノ字
ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代
ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。

十一47 3 昔トルコの或大將がアラビ
ヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ
約束をした。

十一53 10 (略) 他人ノ歡心ヲ買ハントシ
テハツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイ
ヤシムベシ。

十一65 3 (略) 味ハ人々ノ好ミヲ考
ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選
バナケレバナラス。

十一91 2 (略) 例へばこゝに一種の石あ
り、(略)、飾にも實用にもならざる
ものならば、之を買ふものなく、隨
つて價あることなし。

十一91 4 (略) 日光・空氣の如きは、
(略)、隨意に得らるゝものなれば、
之を買ふ必要なく、隨つて亦價ある
ことなし。

十一921 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。

十一926 之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。

十一112 何れの家にてても卵を賣れば、其の代金にて一年中用ふる塩・醬油を買ふに餘あり。

かう「飼」(四・五) 16 カフ かふ飼ふ「一ツ・ハ・ヒ・フ」へ

二507 ヨイオデイサン 白イ犬ヲ一ピキカツテ、(略) カハイガツテキマシタ。

七291 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そんな手間がかかる。

七314 (略)、二万匹の蠶をかふのに、人一人付きゝりて、眠るひまもない程いそがしい。

七341 蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春・夏・秋といふ名がある。

七61 昔より「犬は三日かへば、三年その恩をわすれず」といへり。

八19 (略)、畑もたくさんもつて、牛もたくさんかひ、何不足なく暮してゐた農夫がありました。

十835 犬と猫は最も多く家に飼はれる獣である。

りに使ふ爲に飼ひ、(略)。

十837 (略)、猫は鼠を捕らせる爲に飼ふのである。

十864 豚はもつぱら食用の爲に飼ふ。

十865 豚はどんな物でも食ふから、飼ふのにたやすい。

十868 豚は(略)。(略)。内地では昔から餘り多くは飼はなかつたが、(略)。

十868 豚は(略)。(略)。(略)。琉球ではたくさん飼つて居つた。

十879 鳥類の中で家畜として最も多く農家に飼はれるのは雞で、(略)。

十882 其の外あひるや七面鳥なども家に飼はれる鳥である。

十一1121 (略)、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、雞を飼はざる家なし。

かう「代」(下二) 2 代ふ「一フ・ヘ」ひとりかう・はりかう・はりかえたまう

十815 其の家はほつたて小屋の如く、床もなく、天井もなし。唯かつらなどにて、かやを結びて壁に代へ、又かやを並べて屋根となせり。

十二188 晝間は赤球を以て(略)、圓筒形を以て(略)、圓錐形を以て(略)を示す。夜間は紅燈を赤球に、綠燈を圓筒形に、紅綠二燈を圓錐形に代ふ。

かう「変」(下二) 2 變ふ「一へ」ひとりかう

十一731 (略)、「かしこに行きて、彼の畫師の有様を見給へ。」とささやくに、行きてうかへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。

十二72 敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとせり。

かうん「家運」(名) 1 家運

十一518 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

かえりぬりかえ・ひきかえ

かえがたし「代難」(形) 1 換へ難シ「一キ」

九88 (略)、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

かえしたまう「婦給」(四) 1 カヘシタマフ「一ヒ」

七41 (略) 戰場ニ出デントセシガ、正成ハ(略)ト、ネンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。(略)。

父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。

かえす「反」(四) 2 かへす 反ス「一シーセ」

十一106 蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。蜀ノ軍(略)、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。

十二254 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきりかへし かへせし人をしのびつゝ。

かえす「返」(四) 4 かへす 返す「一シーサーセ」ひとりかえす・おいかえす・おくりかえす・くりかえす・といかえす・とりかえす・ひきかえしたる・ひきかえす

五236 かまをぬすまれたものがありまして。(略)。大そうおこつて、取りかへさうとすると、「この釜は昔から私のうちにある釜です。(略)。」といつて、どうしてもかへしません。

十8910 (略) やみの天地をまた元の 御代に返すは誰が任ぞ。

十二957 是に於て齊侯魯より奪略せる地數箇處を返せり。

十二1006 (略) 圖書館の書籍を借受くるに一枚の葉書にて申し込めば直ちに送り来る。之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。

かえす「帰」(四・五) 2 カヘスカへす「一シ」

六448 お寺では「こんないたづら者は、ごめんです。」といつて、うちへかへしました。

七31 (略)、正成ハ道ニテサトスヤウ、(略)ト、ネンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。

かえすがえす「返返」(副) 1 返すく

十二1153 此の五箇條を行ふも、結局一の誠心を本とす論し給へる、

返すべくも服膺すべき大御言ならずや。

かえって「反」(副) 15 カヘツテ かへつて 却ツテ 却つて

四58 1 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、マヘヨリモ

カヘツテイタクナツテ、ナホナホ

クルシンデキマシタ。

四69 4 三郎「略」、モツトタクサンノンダラ、早クナホリマセウ。」

母「サウ一下ニノンデハ、カヘツテワルイノデス。」

六50 7 「略」勝家などはこれをきら

つて、てきたひましたが、かへつて

ほろぼされて、(略)。

八67 図 その他には何の御かざりも

なき質素なる御かまへ、かへつてか

しこく、かたじけなし。

八11 1 一人の分はうつかりしてあ

る間に寫されましたので、かへつて

よく寫りました。

八15 9 何モシナイデ遊ンデキルノハ

樂ナヤウニ見エルガ、却ツテ苦シイ

モノデアル。

八71 8 諸君我を苦しめんとして、

此の数日間少しも食物を送らざるが

故に、新しき血出來ずして、諸君は

皆却つて自ら苦しむにいたれり。

九5 10 尊こにおいて天叢雲劍を

抜きて、草を薙拂ひ給ふに、火勢却

つて賊の方に向ひ、(略)。

九57 4 他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリ

テ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ツクコトナキガ故ニ、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。

九60 1 然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。

九65 9 臺所にて火吹竹を使ふも、

(略)も、皆空氣を送りて、火の勢

を盛ならしむる爲にして、(略)。然

れども空氣の流通餘りに強き時は、

却つて火の消ゆることあるべし。

十一54 3 (略)、ミダリニ聲色ヲ作

リテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切

ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリ

トモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

十二30 5 其の將伊金難をして日本

に向つて、「日本の將我がしりを食

へ。」と號ぼしむ。伊金難却つて「新

羅王我がしりを食へ。」といひて、

(略)。

十二71 7 遠き慮なければ、必ず近

き憂あり。されど餘り小さき事にま

で遠き將來を慮るは、却つて心を苦

しめて益なし。

十二101 2 國力我に劣れる國民を見

て、やゝもすれば輕侮の念を以て之

を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ば

ざるが如きは、却つて我が國民の度

量の狭く、品格の低きを示す所以に

して、(略)。

かえり「帰」(名) 3 かへり へおんか

えり

六11 2 かへりには同じ道を通らず

に、別の道から下りました。

六60 1 身をきるやうな北風の吹

く夕暮にあねいもと、かへりをいそ

ぐ野中道。

六61 8 いまその杖をもぎ取ら

れ、かへりの道が知れせん。」

かえりきたる「帰来」(四) 4 歸り來

ル 歸り來る「リール・ール」

七80 4 長き航海を終へて歸り來れ

る明治丸の船長は、(略)。

八80 2 かくの如く日本を出で、海

を越え、陸を越え、東へ東へと進め

ば、又元の日本に歸り來る。

十七6 2 心臓ハ(略)、又身體ノ各

部ヨリ歸り來レル血ヲ集メテ、之ヲ

肺臟ニ送ル。

十二75 2 先に畫がきたる檜の

枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝり

しが、(略)よき枝ぶりの檜を見て、

其の意を得たれば、之を書添へんと

て、わざ／＼歸り來りたるなり。」

かえり「帰来」(カ変) 1 歸り來

「一こ」

十一74 9 「東國へ行き給ふと聞

きに、再び歸り來られしは何故

ぞ。」

かえりたて「聯立」(名) 1 かへりたて

七30 2 卵からかへつたばかりの蟹は

(略)。(略)。かへりたてから、しき

りに食物をさがしてゐて、(略)。

かえり「はじめ」(帰始)「下一」1 歸

り始める「一メル」

十二82 2 日は既に西へ傾いて、祭見物の人々は段々歸り始める。

かえりみ「顧」(名) 1 顧み

十二116 3 (略)、大君の邊にこそ

死なめ、顧みはせじ。

かえりみち「帰道」(名) 1 カへり道

七59 1 カへり道二坂ノ上ヨリ見下

セバ、コ、モマタ見渡スカギリ、人

家ナラザルハナシ。

かえり「省」(上) 2 省ミル

省みる「一ミ」

十一52 9 内ニ省ミテ、ヤマシキコ

トアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心

中ノ苦ヲ如何ニセン。

十二72 4 位人臣の榮を極め、富天

下に冠たるも、自ら省みてやましき

所ある者は、苦多く、樂少し。

かえり「顧」(上) 5 カへりミ

ル 顧みる「一ミミル」

十二22 7 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落

シ、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」

トイフ。

十一67 4 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置

ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミ

ナイノハヲカシイ話デアル。

十二69 10 (略)、飢餓刻々にせまる

が故に、(略)、遂に危害を顧みず、

向ふ處何物をもはからずして突進

す。

十二71 5 身をはかなむも過ぎし

ことは追ふべからず。常に前を望み

て、徒に後を顧みることなかれ。

十二76㉟ コロンブスは葡萄牙に客

遊中、熱心に此の説を主張したりしが、何人も一笑に附して顧みるものなかりき。

かえりゆく「帰行」(四・五) 1 歸り行く「一ク」

八61㉟ 図 略、矢走をさして歸り行く 白帆を送る夕風に、聲程近し、三井のかね。

かえる「蛙」(課名) 2 かへる

三目6 十八 かへる

三47㉟ 十八 かへる

かえる「蛙」(名) 4 カヘル かへる

ひあまがえる

三47㉟ かへるはをかにゐると

きには、大きな目をして、手をついてすわつてゐます。

三50㉟ かへるは水の中にも、

をかの上にもすむことがで

きるのです。

三50㉟ しだれやなぎにとびつ

くかへる、とんではおち、おちてはとび、(略)。

九53㉟ 田ニスムカヘルハ土色ニシテ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ緑色ナリ。

かえる「返」(四) 2 かへる 返る

『ラ・リー』ひふりかえる・みかえる 十一71㉟ 略、男勝りの大力にてボートをあやつりしターリングの手は、今ややさしきをとめの手にかへりて、半死半生の水夫を親切に看護

せり。

十一70㉟ 思ひても返らぬことをよくと心配するは、未練にして愚なる人のする事なり。

かえる「帰」(四・五) 47 カヘル かへる

あへる 歸ル 歸る『ラ・リー・ル・レ』ひつれかえる・もちかえる

一50㉟ ハヤクカヘラナイト、オカアサンガシンバイシマス。

二19㉟ オハナハモミヂノハヲ

一マイヒロヒマシタ。ソレヲモツテ、ウチヘカヘツテ、(略)。

二26㉟ オトウサンハマダカヘリマセン。

二26㉟ ソコヘオトウサンガカヘツテキマシタ。

三34㉟ あるばんまさを はははといつしよによそからかへつてきました。

三35㉟ うちへかへつて、ちちにみせようとしたり、光がみえま

せん。

三68㉟ ウラシマハ(略)、ウチヘカヘルノモワスレテキマシタ。

三69㉟ ソノウチニウラシマハウチヘカヘリタクナツタカラ、(略)。

三70㉟ アマリナガクナリマス

カラ、モウウチヘカヘリマセウ。」

三72㉟ ウチヘカヘツテ見ルト、オドロキマシタ、(略)。

四36 又町からは、きれやこ

まものやさかななどを買つてかへります。

四67㉟ 今モ外カラカヘツテ、スグココヘ來テキル所デス。

五26㉟ 図 この釜は、お前の物にちがひあるまい。さつそく持つてかへれ。」

五45㉟ ある日友吉と音次郎の二人がよそからかへつて来る道で、(略)、

かみなりが鳴り出しました。

六11㉟ それから又方々であそんで、うちへかへつたのは夕方でした。

六12㉟ ガンハツバメノカヘルジブンニ來テ、ツバメノ來ルジブンニカヘル。

六12㉟ ガンハ(略)、ツバメノ來ルジブンニカヘル。

六30㉟ 略、直吉は(略)そのつりに一せんの銅貨を三枚渡した。男の子も氣がつかずにそのまゝかへつた。

六31㉟ 直吉は(略)、すぐに追つかけて行つて、(略)。かへつて來ると、長松は笑つて、(略)。

六37㉟ 學校からかへつてから、をばさんの所へ使ひに行つた。

六40㉟ 明後日はこゝを立つて、道で用をたして、この次の水曜日まではかへる。

六50㉟ 秀吉は(略)、すぐに敵とわ

ほろぼしました。

七10㉟ かへる道々あと見かへれば、葉末々に夜つゆが光る。

七38㉟ 何モ買フモノガナクレバ、ソノマ、カヘツテモヨイ。

七39㉟ 略、大そうよい馬を賣りに來た者がありました。(略)。馬の主は馬を引いてかへらうとしました。

七40㉟ 一豊もほしくてくたまらな

いから、家へかへつて、「(略)」と思はずひとり言をいひました。

八75㉟ 宿に歸りて一休みの後、外宮に参拜す。

八99㉟ この間にいさんがかへつて來ましたので、うち中の者がそろつて寫真をとりました。

八21㉟ 略、毎朝早くすを出て、

多をさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。」

八22㉟ 歸つて見ると、自分の家は戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。

八24㉟ 取りもどして歸つて來ると、今度は下女がばけつをさげて、牛小屋から出て來ました。

八29㉟ 幾度カマハリタレドモ、入ルコトヲ得ズ、クチヲシクモ工ノ笑聲ヲ後ニシテ歸レリ。

八43㉟ 叔父さんのうちへ見まひに行つたにいさんが歸つての語に、(略)。

八79㉟ ヨーロッパより船にて日本へ歸るには、(略)。

八九七 其ノ時ハオレノ死體ヲセオツテ歸ル積リデカケツケヨ。」

十二三 五日目ノ朝行キテ見レバ、老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。大イニ怒リテ、「(略)」。今ヨリ後五日目ノ朝再ビ來ルベシ。」トイフニ、良ヤムヲ得ズシテ歸レリ。

十一七四 數日の後、水夫は(略)、各我が家に歸りたりとぞ。

十一三六 へらじとらねて思へばあづさ弓 なき數にいる名をぞとむる。

十一四八 追手のトルコ人は(略)。空しく歸つて、「(略)」と報告する外はない。

十一四九 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて來た。

十一七三 (略)、行きてうかゞへば、(略)寝起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ寢間に歸れり。

十一七四 (略)、畫師(略)、東國へ出立せり。然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。

十一一〇六 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。

十二六七 (略)、數多の猿遠く數百里の地より集り來りて之を食ひ、果實盡くれば、再び其の故郷に歸るを例とす。

十二八七 是より暇を請ひて郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。

十二九五 景公(略)魯公と會見す。(略)。景公歸りて群臣に告げて曰く(略)。

十二九六 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母たましく機上に在り。

かえる「(一)」(五) 1 かへる「(一)」
七二九 卵からかへつたばかりの蠶はあり程の大ききで、長さは一分ばかりしかない。

かえる「代」(下) 1 かへる「一」
へ「と」とりかえる・ぬきかえる・ぬきかえる・ひきかえる
九八六 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

かえる「(一)」(下) 3 かへる 變へル「へーへーヘル」
六五六 信玄はふいをうたれておどろいたが、たちまち陣立をかへて、敵を引受けた。

八五四 (略)、つる・がん・つばめなどの様に、氣候によつてすむ所をかへる鳥は、總べてつばまが大きい。

十一一一 (略)、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變へ、又器具ヲ

取換ヘナケレバナラナイノデ、(略)。
かえる「買」(下) 1 買ヘル「一ヘル」

七三六 店ニハ番人ガ居テ、買ハウト思フ物ハスグニ買ヘル。
かえるとも「課名」 2 かへるととも

三目 十九 かへるととも
三五〇 十九 かへるととも
かえん「火煙」(名) 1 火煙

十二六〇 (略)、打出す砲彈よく命中して、敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。
かお「顔」(名) 15 カホ かほ 顔 ヲあさがお・えがお・しらぬかおす・ゆうがお

三三八 かへるは(略)。(略)。小さな虫がまへへくると、ぱくつとくつて、へいきなかほをしてゐます。

五十四 ナラノ大ブツトイツテ(略)。(略)、カホノ長サガ一丈六尺、(略)。(略)スレチガフ時ニハ、向フノ汽車ニノツテキル人ノカホハヨク見エマセン。

五八四 二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふれました。しばらくたつて、顔を上げて、そのあたりを見まはすと、(略)。

五八一 よしつねは(略)、「進めく。」とさしづをしたが、馬もこはがつてすくんでしまひ、人も顔を見合せて進まうとはしない。

六六〇 八つばかりの女の子、たもとを顔におしあてて、ひとりしくく泣いてゐる。

六七〇 (略)、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、顔を赤くする子供もございました。

六七二 十人十色と申しますが、(略)、顔のちがふやうに、せいしつも色々かはつてゐます。

七六〇 犬の種類は(略)。(略)。(略)、あるものは顔長くとがりて、狐の如し。

七六四 われくは毎朝顔を洗ひ、口をすくぐ。
八〇八 私もみんなとしよの分はまじめになり過ぎましたので、にいさんによそ行の顔だといつて笑はれました。

九一八 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、(略)。

九二四 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、(略)。

一六五 (略)、式部は少しも高ぶりがたふ風なく、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

一四七 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、(略)、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

かおく「家屋」(名) 3 家屋

1804 図 あいぬの風俗は(略)。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

1112 10 又國家全體カライヘバ、

(略)、大工ノ家屋ヲ作り、(略)等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。

12618 図 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

かおく「顔付」(名) 1 顔附

8213 白い雀が實際居るのか。」と、ふしぎさうな顔附をして、農夫は問返しました。

かおり「香」(名) 2 かをり

7448 図 楠木父子の菊水は、忠義のかをり、なほ高し。

11223 図 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

かおる「薫」(四) 3 かをる 『ル・レー』

891 図 (略)、はや、かうばしくきのこにほへり。山風にきのこかをり。

8349 図 (略)、つゞいてかをる梅が香に、うぐひす 鳴かぬ里もなし。

921 図 (略)、勅なれば いともかしこし、うぐひすの 間はば如何にと 雲あまで 聞え上げたる 言の葉は、幾代の春か かをるらん。

か「画家」(名) 1 畫家

11721 図 住持は(略)、或時畫工に向ひ、「君は畫家として一家を

成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。

かか「抱」(下二) 1 カ、フ 『へ』

8305 図 工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、川成腹ヲカ、ヘテ笑ヒナガラ、(略)。

かか「掲」(下二) 5 カ、グ か、ぐ 掲ぐ 『グーグ』

9287 図 (略)、本殿ニハカシコクモ天皇陛下ノ御製ノ歌ヲカ、ゲタリ。

174 図 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかゝけて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、(略)。

1259 図 (略) 信號旗が戰國旗と共に我が旗艦三笠にかゝげられたるは午後一時三十分にして、(略)。

1289 図 (略)、ネボカトフ少將は白旗をかゝげ、(略)其の部下と共に降服せり。

12184 図 又一地方に荒模様ある時は、(略)、警報の信號を各信號所に掲ぐ。

かかく「価額」(名) 1 價額 ムゆしゆつかかく

12451 図 (略)、生絲は輸出品の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。

かかし「案山子」(名) 2 カカシ か、し

4112 カラスガ 毎日トリニ來

マスカラ、古イカサト古イモモヒキヲキセタカカシガタテテアリマス。

1286 廣い田の面は切株ばかりで、(略)、かゝしの骨も残つてゐない。

かがみ「鏡」(名) 5 カガミ かゞみ 鏡 ムおんかがみ・しかのみすががみ・やたのかがみ

1116 クシトカガミ

824 図 神代の昔皇祖天照大神、(略)、八咫鏡を授けたまひて、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。

8596 図 琵琶の形に似たりとて、其の名をおへる湖の かゞみの如き水の面、(略)。

9356 図 (略)、男體山のふもとに中禪寺湖あり、(略)、湖面鏡の如く、四方の山々皆倒に影をうつせり。

11196 図 海の靜かなることは鏡の如く、(略)。

かがみばこ「鏡箱」(名) 1 鏡箱

7408 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、(略)。

かがみもち「鏡餅」(名) 1 カガミモチ

2346 図 「カガミモチヲマトニシテ、イテミマセウカ。」

かがやかす「輝」(四) 2 かゞやかす ゐゞやかす 『一セ』

11293 図 大小幾多の軍艦は(略)、遠く四方に航行して、到る處に國光をかゞやかせり。

1236 図 鍛ひたる劍の光いぢるく 世にろゞやかせ、我が軍人。かがやく「輝」(四・五) 6 カガヤク かゞやく 『イー・キーク・ーク』

488 日ノマルノコクキガアサ日ニカガヤイテキルノハ、イサマシイデハアリマセンカ。

865 図 材は皆ひのきの白木を用ひ、金色の金物きらくと日にかゞやけり。

8601 図 まづ渡り見ん瀬田の橋、かゞやく入日美しや。

8942 図 名高き金のしやちほこは(略)。(略)、朝日・夕日にかゞやきて、遠く數里の外よりも望み見ることを得べし。

9484 図 晴れたる大空には無數の星かゞやけり。

12851 (略)、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、今の今まで誰一人も氣附かなかつた。

かかり ムけんさがかり・ちよちくがかかり

かがりび「篝火」(名) 5 かゞり火

117910 図 (略)、鵜舟の下り來るを待つ。川上にかゞり火の明り先づ見え初めて、(略)、舟は早くも目前にせまり來る。

11803 図 かゞり火も亦古代の風を其のままなり。

11808 図 此の間に(略)、又かゞり火に薪を添ふるなど、其の手練實

に驚くべし。

十一82② 図 かゞり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。

十一82③ 図 (略)、波にくだくるかゞり火の下に、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、(略)。

かかりやすい「羅易」(形) 1 かゝり易い「イイ」

七65① 時々湯にはいらないと、からだきたなくなる。きたなくなる、と、病氣にかゝり易い。

かかる「斯」(連体) 10 カ、ル かゝる

八3② 図 神代の昔皇祖天照大神、(略)とおほせられたり。その神勅

によりて、(略)、後神殿を今の五十鈴の川上に造り、この御鏡を御神體として、皇祖天照大神をまつりたまへるなり。(略)。かゝるたふとき御宮なれば、(略)。

八16④ 図 北條時頼ノ母松下禪尼、(略)、ス、ケタル障子ノ破レヲツク

ロヒキタリ。禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「召使ノ中ニカ、ル事ヲヨク心得タル者アリ。

八18⑦ 図 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲヲサメタルモ、カ、ル母ニ養ハレタルニヨルナルベシ。

八81⑧ 図 北極・南極に近き地方にては、半年は晝にして、半年は夜なる所あり。かゝる地方にては氣候つね

に寒冷にして、(略)。

八82⑥ 図 又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。かゝる地方にては、人は皆はだかにして、(略)。

九49② 図 アリは略、ありし事を物がたり、ねんごろに同行を頼みしに、一同快く引受けたり。かゝる間に、又向ふより一組の隊商到着せしが、(略)。

九88① 図 (略)遠キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。若シ今ノ世ニ

モナホカ、ル事アリトセバ、其ノ不便如何バカリナラン。

十54⑨ 図 「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、(略)。畠山は『いかでかゝる幼き者に刀を立てん。』とて、(略)。

十一93⑦ 図 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、靴の價にはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。かゝる時は靴屋は(略)、盛に之を製造すべく、(略)。

十一93⑩ 図 かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、又他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。かゝる時は靴の供給次第に増來り、(略)。

かかる「掛」(四・五) 34 カカル カ、

ル かかる かゝる 掛ル「ツ・リール・レー」母おちかかる・おとりかかる・さしかかる・つかみかかる・とおちかかる・とりかかる・ひっかかる・ふりかかる

二17② 図 (略)木ノハガトンデキマス。(略)。(略)、クモノスニカ

カルノモアリマス。

二59③ 図 (略)、ハヒガバットタツテ、川ムカフノカレ木ノエダニ

カカツタカトオモフト、(略)。

四29⑤ 図 らい年またお目にかかりませう。」

六11③ 図 のぼる時には三時間もかゝつたが、(略)。

六11④ 図 (略)、下りる時には二時間しかかゝりませんでした。

六47⑥ 図 けらいが大ぜい直しにかゝりましたが、中々はかどりません。

六57② 図 (略)、信玄の本陣に切りこんで、信玄に打つてかゝつた。

七29③ 図 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そうな手間がかゝる。

七57⑦ 図 宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫眞ニテ見知りタル二重橋カ、レリ。

七85③ 図 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなる事もあります。

八11⑧ 図 御寫眞をありがたう。よく寫つてゐるので、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。

八13② 図 寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなりました。

八13③ 図 母ハ臺所デ朝飯ノシタクニカ、リ、(略)。

八14⑦ 図 (略)、ソレぐノ道具ヲ持ツテ、メイぐノ仕事ニカ、ル。

八39② 図 マツチノ製造ニハ驚クベキ手數ノカ、ルモノナリ。

九15⑥ 図 栗橋ハ東北鐵道ノ通路ニアタリ、一大鐵橋カ、レリ。

九35⑦ 図 一日の旅程を十里づつと見て、十二日程かゝつた。

九42⑥ 図 山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、カ、リテハタキトナリ、ヨドミテハフチトナリ、(略)。

九59⑧ 図 常に無病にして、醫者にかゝりたることなき人あり、(略)。

九93⑧ 図 (略)に大谷川あり。(略)。其の上にかゝれる朱塗の橋、美觀先づ目を驚かす。

十20② 図 一字も誤がなくなつてから本刷にかゝるのである。

十20⑧ 図 印刷が出来上つてから本にとちるまでも、まだ中々手數がかゝる。

十22③ 図 (略)、木版では一枚づつ彫るから、手間が幾層倍もかゝる。

十一10① 図 手數ノカ、ツタマツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。

十一11③ 図 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナル

て、わざ／＼歸り來りたるなり。」

十一75 ③ 畫工「(略)」とて、一枝を書添へ、別を告げて出で去れりとなん。

かきそこない「書損」(名) 1 書きそこない

六71 ④ 字を書くのに、筆をおとしたり、すみをこぼしたり、(略)、そつつかしい子供もございました。よくおちついてゐて、少しも書きそこないなどをしない子供もございました。

かきそこない「書損」(五) 1 書きそこない

こなふ「一ツ」

六71 ① 字を書くのに、筆をおとしたり、すみをこぼしたり、書きそこなつて、紙をたくさんほごにしたりするやうな、そつつかしい子供もございました。

かきたす「書足」(五) 1 書きたす

「一シ」

五66 ⑥ そのおしまひのあいである所へ、『おかあさんからもよろしく。』と書きたして下さい。

かきたまう「書給」(四) 1 書き給ふ

「一ハ」

十一74 ① 夜明けて後、住持畫工に向ひて、『今日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。』と、(略)。

かきつく「書付」(下二) 1 書きつく

「一ケ」

十一15 ⑨ 高德(略)、大いなる櫻の木のかきつけりて、大文字に詩の句

を書きつけたり。

かきつばた「燕子花」(名) 1 かきつばた

八36 ③ 野べも山べも新緑の風に藤波さわぐ時、池水にほふかきつばた。

かきつらぬ「書連」(下二) 1 書連ぬ

「一ネ」

十一35 ⑤ 正平の昔、楠木正行が決死の士百四十三名の名字を壁に書連ね、(略)。

かきとくり「課名」 2 カキトクリ

四目5 四 カキトクリ

かきなおす「書直」(五) 1 書直す

「一ス」

十18 ⑩ さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、(略)、幾度書直すかも知れない。

かきならす「掻均」(五) 1 カキナラス

「一シ」

三31 ⑧ 馬ニマグハヲヒカセテ、

田ヲカキナラシテキル人モアリマス。

かきね「垣根」(名) 3 カキネ 垣根

二23 ① 「マサヲサン、イツシヨ

ニコノカキネノワキニカクレマセウ。」

三30 ⑤ ソノホカ竹ノスダレモ

アリ、竹ノカキネモアリマス。

八36 ④ 垣根にからむ朝顔のさきはりつゝいさぎよく、(略)。

かきのこす「書残」(四) 1 書残す

「一セ」

十一38 ⑤ 正平の昔、楠木正行が(略)なき數に在る名をぞとむる。といふ一首の和歌を書殘せるは此の所なり。

かきはじめる「書始」(下二) 1 書きはじめる

「一メ」

十18 ⑨ さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、(略)、幾度書直すかも知れない。

かきまわす「掻回」(五) 1 カキマハス

「一ス」

四39 ⑦ ソノウチニ海ノ水ヲ

カキマハスヤウナ大キナオトガシマシタ。

かきやく「花客」(名) 3 花客

十一54 ① 花客ニ接シテ愛敬ヲ盡ス

ハ商人ノ美德ナレドモ、(略)。

十二51 ① (略)、世界ノ各國ハ亦皆

我が商品ノ市場ニシテ、全世界ノ人

ハ皆我が商賣ノ花客ナリ。

十二51 ⑧ 故ニ商業ニ從事スルモノ

ハ常ニ花客ノ嗜好ヲ考へ、流行ノオ

モムク所ヲ察セザルベカラズ。

かきゆう「下級」(名) 2 下級

十二112 ③ 故に下級の者の上官の命を承くるや、直ちに陛下の命令なりと思ふべく、(略)。

十二112 ④ (略)、上官の者は常に下

級の人をいたはりて、いさ／＼かも輕侮の念を有すべからず。

かぎよう「家業」(名) 3 家業

九76 ③ 一日二錢・二錢ツツニテモ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニハ、餘程ノ金高トナリテ、(略)、家業ノ元手ノ一部分トモナスコトヲ得ベシ。

十一51 ⑧ 親子・夫婦・兄弟・姉妹

ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、家運自ラ開

ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

十一112 ⑥ されば全村頗るゆたかに

して、皆其の家業を樂しめり。

かぎよう「課業」(名) 2 課業

十57 ③ 兵營内の生活は(略)。

(略)。課業は術科と學科との二つに

て、(略)。

十58 ④ 外出日は(略)、水曜日

も其の日の課業を終へたる時より夕

食前まで外出を許され候。

かぎり「限」(名) 10 カギリ かぎり

限りハあらんかぎり

六84 ⑧ (略)、なんぎをする人見

るときは、力のかぎりいたはれよ、

あはれめよ。

七55 ③ 櫻方岡ヨリ見下セバ、見ユ

ルカギリハ皆人家ナリ。

七59 ③ (略)、コノモマタ見渡スカ

ギリ、人家ナラザルハナシ。

十68 ⑥ 生残れる水夫は(略) 聲を

限りに救を呼べり。

十一14 ④ 吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりけり。

十一198 図 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛毯を敷けるが如く、(略)。

十一585 聲を限りに「ビエールよ、ビエールよ。」と呼びながら、方々を尋ねて、(略)。

十一693 図 然れども人の勢力には限りあり。

十一948 図 (略)、供給に限りある物、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、(略)。

十一951 図 即ち供給に限りあるものは一定の價なしといふべし。

かぎりなし「限無」(形)3 かぎりなし 限りなし「一ク・一シ」

七459 図 (略)、家の氏の名多ければ、紋の数々かぎりなし。

十一691 図 我等の周圍には讀むべき書多く、學ぶべき物多く、成すべき事限りなし。

十二485 図 三池・夕張・大の浦、掘れど炭礦限りなく、(略)。

かぎ・「限」(四)4 限ル 限る「一ラ・一リ」

十一374 図 (略)、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。

十二337 図 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

十二506 図 外国トノ交通少カリシ時代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタ

リキ。

十二907 図 病氣のみに限らず、何事にも少しの不注意は大いなる禍を招く。

かぎわ・「限分」(下二)1 かぎ分く「一クル」

七622 図 犬は(略)。(略)。又その鼻はよく物のにほひをかぎ分くるをもつて、かりに用ひて、えものをさがさしむるに適す。

かく「角」ひいっかく

かく「闇」ひてんしゅかく

かく「斯」(副)34 カク かく 此

七349 図 (略)、土又は石のこをねりかためてかわかし、かまどに入れて焼く。かくして出來たるものをすやきといふ。

七874 図 この星を見分けることや、燈臺のあかりを知ること、船に乗る者には大切な事です。」船長はかくいひ終へて、一段と聲をはり上げて、(略)。

八119 図 代々の天皇は皇大神宮をたふとびたまふときはめてあつく、國民もまた深くうやまひ奉りて、一生に一度は、かならず伊勢に參拜せんと心がけざるものなし。諸子は皇大神宮のかくばかりたふときいはれを知れりや。

八184 図 (略)、破レタル所ヲ一間ツツ張レリ。(略)、「(略)、總ベテ物ハ破レタル所ノミツクロヒテ用フ

ルトキハ、シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若キ者ニ知ラセントテカクスルナリ。」

八306 図 工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、川成腹ヲカ、ヘテ笑ヒナガラ、「カク我ノ居ルニ、何ユエニ入り給ハザルカ。」トイフ。

八383 図 マツチハ一ダースノ價三四錢グラキナレバ、一箱三四厘ニモ足ラズ。カクノ如ク價ノ安キモノニテ、(略)。

八384 図 マツチハ(略)。カクノ如ク價ノ安キモノニテ、カクノ如ク便利ナルモノハ世ニ少カルベシ。

八801 図 我等(略)、東へ東へと進み行かば、(略)。(略)。かくの如く日本を出で、海を越え、陸を越え、東へ東へと進めば、又元の日本に歸り來る。

九244 図 (略)、夫婦の老人一人のむすめを中へすゑて泣きかなしめるを見給ふ。尊は「何故にかくは泣きかなしむぞ。」と問はせ給へば、(略)。

九304 図 春秋兩度ノ大祭ニハ必ず勅使ヲ差立テラレ、(略)。臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々アリ。カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ(略)。

九541 図 田ニスムカヘルハ土色ニシテ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ綠色ナリ。(略)。カクノ如ク動物ノ體色

ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)。

十一111 図 其の他森林は氣候を和げ、土砂の流出を防ぎ、(略)一種の風景を添ふる等、其の効用あけて數ふべからず。森林の効用かくの如く著しきを以て、(略)。

十一113 図 (略)、近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ることを禁ぜり。かく保護せられたる森林を保安林といふ。

十307 図 甘藷ノ名ハ(略)。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。

名稱ノカク異ナルヲ以テモ、(略)。

十476 図 直線を(略)並ぶる時は、美しき模様を生ず。(略)。(略)、曲線を用ふれば、更に美しき模様を得べし。(略)。模様には(略)、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。(略)。かくの如き模様の工夫は無限に多し。

十504 図 「唯一人ふみ止つて戦ひ給ふは誰ぞ。名乗り給へや。かく申すは信濃の國の住人、手塚太郎光盛なり。

十601 図 先は近狀御報知申上度かくの如くに御座候。

十629 図 選鑛場ニハ種々ノ機械アリ、此ノ機械ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選り分ク。カク選り分ケタルモノハ之ヲ製煉場ニ送ル。

十一283 ㊦ (略)、今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。四萬噸前後の大汽船をも製造するに至れり。かくの如くにして、汽車・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

十一436 ㊦ (略)、佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、かく諸國を巡り歩くなり。」

十一439 ㊦ 忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、かくと正儀に告ぐるに、(略)。

十一446 ㊦ いよく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、正儀はかくとも知らず、(略)。

十一625 ㊦ (略)、同日午後五時御光來下され候はば光榮の至に存候。先は御案内まで、此の如くに御座候。

十一736 ㊦ (略)、前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく晝がかなどひとり言いひ居たり。

十一931 ㊦ 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。(略)。之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。(略)。物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、(略)。

十一948 ㊦ 即ち物の價は普通の價を本として上下すと知るべし。物の價

はかく上下するものなれども、(略)。

十一1052 ㊦ (略)、孔明(略)、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。孟獲答ヘテ曰ク、「此ノ如シト知ラバ何ゾ敗レン。」ト。

十一1053 ㊦ 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、(略)。

十一1185 ㊦ 修身の徳是なりと、教育勸諭の給ひ、戦後經營かくこそと、戊申の詔書かしこしや。

十二423 ㊦ 阿蘇山の舊噴火口は南北の長徑六里、(略)、此の間に(略)の五岳東より西に相連りて突起す。(略)。阿蘇山は此の如く複雑なる一大火山にして、(略)。

十二6510 ㊦ ナポレオンがモスコより退軍せし時、露西亞の狼は(略)、中部獨逸にまで來りしことあり。此の如きは動物の一時的移住なり。

十二671 ㊦ 全然移住せし例は二百年以前、通常の灰色の鼠の一群大擧して、(略)。又かつて栗鼠の大群(略)。此の如く全然移住するは稀に見ることなれども、(略)。

十二8610 ㊦ 喜劇大いに罵つて曰く、「(略)、人面獸心とは汝の事なるべし。獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。此の如き人の組織せる軍隊は即ち鳥合の衆に同じ。

かく「欠」(四) 1 缺く「一ケ」

十二1127 ㊦ 禮儀を守る心得を缺ける軍人は國家としても許し難き罪人ぞと論し給ふ。

かく「昇」(五) 1 かく「一イ」

九379 かくも人の肩でかいて、休みく行くのだから、(略)。

かく「書」(四・五) 32 カク かく

書ク 書く「一イ・キ・ク・一ケ」

一276 ニイサンガジヲカイテキマス。

二495 コレニハ(略)、ハナサカデダイノオハナシガカイテアリマス。

四415 (略)、ソバニ一セン五リントカイタフダガタテアリマシタ。

四461 皆さんはとけいにかいてある字がよめますか。

五644 (略)、母は手紙をおちよにわたしました。おちよは取上げて讀んで見ると、(略)と書いてあります。

五648 ㊦ それから今すぐにへんじを書いてお出しなさい。」

五652 ㊦ 「それでも私はまだ手紙の書き方を習ひませんから、どう書いてよいかわかりません。」

五654 ㊦ 「お話をする通りに書けば

よいのです。

五657 おちよはしばらく考へて、葉書の裏へ次のやうに書きました。

五667 ㊦ それから表の方へあて名を書いてお出しなさい。」

五673 大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テアル。

六36 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、まるで多にかいたやうである。

六385 水せんの花を見てゑをかい

た。

六708 字を書くのに、筆をおとしたり、すみをこぼしたり、(略)。

七273 筆一本デ美シイエヲカイタリ、(略)サセルノモ、手ノハタラキデセウ。

八282 ㊦ 「我、此ノゴロ小サキ堂ヲ建テタリ。四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。」

八463 ㊦ (略)早く返事を上げよう。お前一つ書いてごらん。」

八469 ㊦ 電報の文は成るべく短く書かなければならない。

八472 ㊦ 焼けない事さへいへば、御安心なさるから、ゴアンシンクダサイと書くにも及ばない。

八473 ㊦ 又ことばも電報だから、そんなにていいいに書くことはいらない。」

八479 ㊦ 「(略)、火事の昨夜あつた

ことはもう御存じだから、サクヤとは書くには及ばない。

八四九〇図 (略)、うちの名の和田を入れて、十五字になるやうに書いてごらん。」

八四九〇図 こゝに頼信紙があるから、書いてお出し。」

八七二〇図 「猫デナイシヨウコニ竹ヲ書イテオキ。」トイフコトアリ。

九二〇四 (略)、其の手紙を差出した。

大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。

十十八 讀んでゐる間には中に書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、(略)。

十十九 畫をかく人、圖をひく人、寫眞をうつす人の苦心も亦一通りではない。

十十七 又字を書くときに、指先を見ると、爪は短く切つてゐました。

十一六三 (略)、何事を如何なる者の書きたるか、讀みかねて上聞に達したり。

十一五〇 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。

十一七九 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して三年を経たり。

十一七二 (略)、畫工「(略)」。さらば年來の謝恩に何か書きて參らすべし。」とて、(略)。

かく「搔」(四五) 4 カク かく

「キーク」ひひつかく
三四八 かねるは(略)。(略)。水の中ではあと足で水をかきながら、あちらこちらへおよぎまはります。

七二五 カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出来マセン。

十五五 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。

十五五 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、やがて打ちまたがつて首をかく。

かく「欠」(下二) 1 かく「一ケ」
九四一 (略)、おびさせ給へる劔を抜きて、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劔の先少しくかけたり。

かく「掛」(下二) 18 カク かく「一ク・クル・一ケ」ひあひせかく・こころかく

六六七 (略)ハ板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、船ヲ作ルニ用フ。
七三五 (略)は、このすやきにうはぐすりをかけて、ふたゝび焼きたるものなり。

七三五 花鳥・山水・人物などのものやうは、うはぐすりをかくる前にあがく。

九二四 工兵は陣地をきづき、道を開き、橋をかけ、鐵道を造り、電信

を通する等、もつぱら技術の事にしたがつ。

九五六 農夫ナドハ小枝ト見チガヘテ、土ビシヲカケ、落シテワルコトアリ。

九二七 (略)、大江山 いく野の道の 遠ければ、ふみ見ずといひし言の葉は、天の橋立 末かけて、後の世永くくちざらん。

十一八 (略)、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。

十六二 選鑛場ニハ種々ノ機械アリ、此ノ機械ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選リ分ク。

十八一 殺したる熊の頭は垣にかけ、永く之を保存するを以て、垣の上には多くの頭骨、風雨にさらされて残れり。

十一四五 幾度か思ひ直して討たんとすれども、少しも疑ふ心なき正義の樣を見ては、刀のつかに手をかくべきやうもなし。

十一六〇 家の事をば心にかけず、御國の爲に行きませ、いぎや。

十一七六 最も壯觀なるは華嚴に於て、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

十一八四 既ニ縫綿トナレバ梳綿機ニカク。

十一八五 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練條機ト稱スル機械ニカケテ、

或ハ合シ、或ハ延シ、(略)。
十一八五 (略)、次第二ヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ツカシム。

十一八六 サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)、更ニヨリヲカケ、ツムニマキトラシム。

十一八八 (略)、先づ幾條かのやゝ太き絲を渡し、之を本として、次第に細き絲をかけ、終に完全なる網を造る。

十一九九 (略)、夏より秋にかけてこゝに集る鰻鰯は(略)。

かく「嗅」(四) 1 カグ「一ギ」
十七七 (略)、鼻ハ香ヲカギ、(略)。

かく「學」(名) 3 學
十五五 二人共に和漢の學に通じ、(略)。

十二九六 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母たましく機上に在り。

十二九六 (略)「汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。」
かく「岳」ひごかく
かく「蓐」(名) 2 蓐 蓐

九七四 瓣ノ色ハ白又ハウス桃色デ、蓐ノ色ハ青イ。

九八二 又ユリヤアヤマノ花ハ蓐ノ色ガ瓣ト一ツ色デアル。

十一二二 (略) ちぎさの松に吹く風をいみじき樂と我は聞く。
かくいん「各員」(名) 1 各員

十二58 ㊦ 「皇國の興廢此の一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ。」との信號旗が（略）。

かくこ「覚悟」（名）4 かくこ 覚悟
四88 よ一は心のうちで、もしこれをいそなつたら、生きてはるまいと かくこをきめて、（略）。

十二111 ㊦ （略）、軍人たる者は一途に忠節を重んじ、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

十二111 ㊦ 平生より此の覺悟なきものは、時に臨みて或は不覺の名を取ることあらんと戒め給ふ。

十二117 ㊦ （略）、唯、一の誠心を以て報國盡忠の道にいそしまんとす。是即ち我等の覺悟なり。

かくこ「工場」（名）1 各工場
十二12 ㊦ 設計圖が出来上ルト、細密ナ構造分圖ヲ各工場ニ廻シ、（略）、始メテ製造ニ着手スルノデアル。

かくこ「お」覚悟置（四）1 覺悟し置く「一カ」

十二33 ㊦ 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。

かくこじん「各個人」（名）1 各個人
十二97 ㊦ 國民は個人の集合より成

るものなれば、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

かくこ「す」覚悟（サ変）2 覺悟す「一シ」

十二87 ㊦ 敵今は逃れぬところと覺悟したりけん、（略）は白旗をかゝげ、（略）其の部下と共に降服せり。

十二72 ㊦ 進取の氣象に富める人は何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。

かくこ「各自」（名）1 各自 ひとくみんかくこ

十二100 ㊦ 英國にては停車場に手荷物預くるに合札を要せず、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。

かくこ「ひ」どうがくし

かくこ「し」学識（名）1 學識
十二106 ㊦ 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。（略）、國家に勤勞あり又は學識あるものより勅任せられたるもの、（略）。

かくこ「て」斯（接）1 かくして
十一18 ㊦ 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

かくこ「し」学者（名）2 學者 ひとがくしや
七23 ㊦ 保己一ハ（略）、一心二勉

強セシカバ、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲアラハセリ。

十二32 ㊦ 昆陽ハ有名ナル學者ニテ、（略）。

かくこ「し」各種（名）1 各種
十二62 ㊦ 然れども地下には各種の鐵道縱横に貫通し、テームス河床の下をも往來せり。

かくこ「しゅう」いたす「学習」（四）1 學習致す「一シ」
十一57 ㊦ （略）、術科は午前・午後を通じて、四時間より六時間、學科は夜分又は雨天等を利用して學習致し候。

かくこ「じゅう」學術（名）2 學術
十二62 ㊦ 街路は掃除最もよく行きてきて、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。

十二111 ㊦ 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

かくこ「し」各所（名）2 各所
十一18 ㊦ 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々は各所に散在す。

十一100 ㊦ （略）、又山脈の兩がには石炭層各所にあり、（略）。

かくこ「しん」ごうじよ「各信号所」（名）1 各信號所
十二18 ㊦ （略）、測候所は地方暴風

雨警報を發して之を豫告し、警報の信號を各信號所に掲ぐ。

かくこ「隠」（四・五）2 カクス かくす「一シ・一ス」

八74 ㊦ 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル爪アリ。用ナキ時之ヲカクスコト、虎モ猫モ相同ジ。

十一48 ㊦ 間もなく日は暮れて、夜のときは全く馬主の行方をかくした。

かくこ「せい」學生（名）1 學生
九50 ㊦ 學生・生徒の帽子にも皆學校の徽章あり。

かくこ「せい」學制 ひとめいじごねんがくせいはつぶいらい
かくこ「せつ」學說（名）1 學說
十二96 ㊦ 孔子の孫子思の學說を受け、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

かくこ「そ」こうじよ「各測候所」（名）2 各測候所
十二17 ㊦ 各地の測候所は（略）中央氣象臺に報告し、中央氣象臺は各測候所の報告によりて天氣圖を作り、（略）。

十二17 ㊦ 又各測候所が（略）、其の地方の天氣を豫告するを地方天氣豫報といふ。

かくこ「各地」（名）2 各地
十二16 ㊦ 各地の測候所は其の地方の氣象觀測を毎日三回中央氣象臺に報告し、（略）。

十二19 ㊦ 天氣圖とは各地に於て同時刻に觀測したる(略)等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)、一目に全國天候の如何を示すものなり。

かくて「斯」(接)10 カクテ かくて

七46 ㊦ (略)、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。母ハ(略)、(略)。カクテハ君ノ御用ニ立ツベシトモオボエズ。」トテ、泣ク／＼イマシメタリ。

八70 ㊦ (略)耳は食事の知らせを聞きても知らぬ風をし、目は(略)、手は(略)、足は(略)。かくて二三日を過せしに、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、(略)。

九88 ㊦ タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタヅネタリトセヨ。其ノ農夫若シ魚ヲ望マズバ、更ニ乙ノ農夫ノ所ニ行カザルベカラズ。乙ノ農夫モ亦魚ヲ望マズバ、更ニ丙丁ノ農夫ニ談ゼザルベカラズ。カクテ持チアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、(略)。

十一46 ㊦ 熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、さて往生院に入りて僧となり、(略)正寛法師と名乗れり。かくて光範の與へたる刀には事の由を書添へて送り返し、(略)。

十一73 ㊦ 翌日晝工の早朝に起出でて晝がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。

なり。筆勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。かくて次の夜は如何にとうかゝふに、前の如く夜もすがら寝ねずして、(略)。

十一88 ㊦ 蚯蚓は地下に穴をうがちて住み、多量の土を呑込みては之を地上の穴の口に出す。かくて數年の後には、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。

十一92 ㊦ 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は各其の家の他の手に渡らんことを恐れて、争ひて高き價をつくべし。かくて其の家の價は段々高くなりて、(略)。

十一92 ㊦ (略)、同様な賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、争ひて其の價を低くすべし。かくて其の家の價は段々安くなりて、(略)。

十二70 ㊦ パロスを出帆して(略)更に西へ向つて航行せり。是より先は未だ航行せしことなき大洋なれば、乗組の人々も次第に不安の念を生ぜり。かくて日數は重ねども、陸地の片影だにみとめ難く、(略)。

十二80 ㊦ (略)、コロンブスは深紅の美服を着し、西班牙の國旗を持ち、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。(略)。かくて

コロンブスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。

かくぶ「各部」(名)1 各部
十76 ㊦ 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ送ル。

かくふけん「各府県」(名)1 各府縣
十二106 ㊦ (略)、及び各府縣に於て多額の直接國税を納むるもの十五人の中より一人を互選し、(略)。

かくぶふん「各部分」(名)1 各部分
十一12 ㊦ 例へば時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出來ナイ。

かくべつ「格別」(形状)3 かくべつ
七68 ㊦ さつそくいたゞきました
が、味は又かくべつでございます。
九20 ㊦ (略)、又八月十日の威海衛攻撃とやらにもかくべつの働なりきとのこと、母は如何にも残念に思ひ候。

九74 ㊦ 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、其の他にはかく別の異狀これなく、(略)。

かくむいん「学務委員」(名)1 學務委員
十二34 ㊦ 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舎ニ參集シ、(略)。

かくもん「學問」(名)5 學問
八78 ㊦ (略)ドイツは學問のよく開けたる國なり。

十18 ㊦ たくさんの本を讀んだ學問の深い人でも、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。

十一68 ㊦ 路傍の一草・一木も學問の種ならぬはなく、(略)。

十二4 ㊦ 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

十二97 ㊦ 官位・門地・技術・財産・學問等に於て榮を拔く者は、個人としても自ら高尚なる品格を要するが如く、(略)。

かくぐやま「香具山」(地名)1 香具山
十101 ㊦ 畝傍山・香具山・耳無山ノ三山、イズレモ麗シキ山ニシテ、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

かくぐらでん「神樂殿」(名)1 神樂殿
八55 ㊦ 五十鈴川の水に口すゝぎ手洗ひて左へ行き、神樂殿・御馬屋の前を通り、御宮の前にいたる。
がくり「學理」(名)2 學理
十90 ㊦ (略) 同學士は(略)、多年府縣の技師をも務め、學理にも通じ、實地にも明かなる人に候へば、其の講話は定めて有益なる事と存候。
十二46 ㊦ 栽培法の如きも、舊法になつまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

かくりょう 〆はやしかくりょう
かくる【隠】(下二) 2 かくる「一

れ」〆しまがくれゆく・にげかくる
十一149【図】さらばとて備前と播磨と

の境なる舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

十一8210【図】(略)、百にも近き鶉、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、(略)。

がくれいじどう【学齡兒童】(名) 2 學齡兒童

十二358【図】(略)、今や全國就學兒童ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、本

郡ノ如キハ實ニ百分ノ九十九ノ好成績ヲ示セリ。

十二3510【図】随ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、學校ノ増設ヲ要スルコト日一日ヨリ急ナリ。

かくれが【隠家】(名) 1 かくれが

十894【図】(略)、さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれ

がもかし。
かくれたまう【隠給】(四) 2 カクレ給フ かくれ給ふ「一フ・一へ」

八525【図】中大兄皇子命ジテ宮門ヲ閉ヂサセ、長キヤリヲトツテ物カゲニ

カクレ給フ。

九66【図】尊(略)、道にて病にかゝり、遂に伊勢にてかくれ給へり。

かくれな・し【隠無】(形) 1 カクレナシ「一ケレ」

十一1025【図】此ノ時諸葛孔明トイフ人

アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、才名世ニカクレナケレバ、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

かくれゆく【隠行】(四) 1 かくれ行く「一ク」

十二773【図】船の次第に朝霧の中にかくれ行くを見送りて、(略)。

かくれる【隠】(下二) 4 カクレル「一レ」 〆おかくれなざる・おかくれる

十二104【図】デタデタ、ツキガ。(略)。

カクレタ、クモニ。

ニ232【図】「カクレンボヲシテアソビマセウ。(略)」「(略)、イツシヨ

ニコノカキネノワキニカクレマセウ。」

ニ237【図】ワタクシハアノモノオキノ中ヘカクレマス。」

五556 シカタナシニ、ヒルノ間ハ木ノウロヤ穴ノ中ニカクレテキテ、夜

ニナルト出テ空ヲトビアルクヤウニナツタトイフハナシデス。

かくれんぼ【隠坊】(課名) 2 カクレンボ

ニ目11 十 カクレンボ

ニ221 十 カクレンボ

かくれんぼ【隠坊】(名) 1 カクレンボ

ニ222【図】「カクレンボヲシテアソビマセウ。」

かけ【掛】(名) 3 かけ 〆いつかけ・うちかけ・こころかけ・ひとかけ・ほ

かけぶね
七125【図】商賣上でげんきんといひ、

かけといふのは何の事ですか。

七129【図】(略)、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけです。

七131【図】かけとかけねとは同じですか。

かけ【懸】 〆さきがけ
かけ【陰】(名) 6 カゲ かげ 蔭

〆おかげ・おかげさま・こかげ【小陰】・こかげ【木陰】・はかげ・まつ

かげ・ものかげ・やぶかげ・やまかげ

四272 くさの かげにないてゐた虫も死んでしまつたのか、

もうなくこゑもきこえません。

四383 アル日タヒヒラメサバ

タコナドガオヨイデキルト、

サザエガ岩ノカゲカラヨビトメテ、(略)。

七707 (略)、タヒ・ボラ・ハモ・コチ・キスナドノヤウニ、岩ノカゲヤ

海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。

九457【図】(略)、木の かげ一つもなき砂原つゞきなれば、其の苦しさたとへんに物なし。

十299 犬を連れた男が銃を肩にし

て、森の蔭から出て来て、あぜ道傳ひにあららの岡へ向つた。

十896【図】御歌かしこみ、藤房は聲くもらせて、いかにせん、頼むかけとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。

かけ【影】(名) 11 かげ 影 〆つきかげ・ひとかげ

八229 (略)、若しや白雀が居はしまいかと、(略)、野原の方までも行つてたづねましたが、影も形も見え

せん。

八606【図】石山寺の秋の月、雲をさまりてかげ清し。

九956【図】(略)、男體山のふもとに中禪寺湖あり、(略)、湖面鏡の如く、

四方の山々皆倒に影をうつせり。

十103【図】總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り

来るものなるを以て、(略)。

十297 家の横に水がよくすんだ小川が流れてゐる。魚の影は一つも見えない。

十653 鯨の一群は影も形も見えなくなつた。

十一198【図】(略)、朝日・夕日を負ひて、島がぐれ行く白帆の影ものどかなり。

十一824【図】魚は火の光を追ひて集り

來り、水底にうつる鶉の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、(略)。

十二282【図】時は十四日の月夜なり。黒き影は城の一方より現れ出で、ひらりとばかり身を水中に投入れた

り。

十二287【図】しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。

十二782【図】(略)、陸地の片影だにみ

とめ難く、(略)、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。

がけ【崖】(名) 5 ガケ がけ

五98 それから少し来ると、高いがけの上へ出ました。

五801 鹿の通れる所を馬の通れないといふことがあるものか。(略)と言ひつけて、夜のうちにがけの上まで出た。

五808 見下せば、しろは何十丈あるか知れないがけの下にある。

五805 へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。

八891 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクマリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。

かけおく【掛置】(四) 1 かけおく【一キ】

七634 兎 ある山國にては、犬のくびに藥品・食物などを入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。

かけお・りる【駆降】(上) 5 かけおりる カケ下リル かけ下りる 【一リ】

四163 (略)、矢にあたつたゐのししが、上の方からよりともの居る方へかけおきて來ました。四181 ゐのししはますますあばれて かけおります。

五814 この時よしつねは、「(略)」といひながら、馬に一むちあててかけ下りた。

五816 これを見た三千人の軍ぜいは、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。

八891 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクマリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。

かけこむ【駆込】(五) 2 カケコム かけこむ 【一ミ・ーン】

五735 鹿ハ輕イ足デズンくニゲテ、林ノ中ヘカケコミマシタ。

八255 「成程これではいけない。」と、すぐ家の中へかけこんで、まだねてゐた妻を呼起して、「朝ね程損なものはない。(略)」といつて、今見た事をすつかり話して聞かせました。

かけだ・す【駆出】(五) 3 カケ出ス かけ出す 【一シ】

五732 ソノ時後ノ方カラカリウドノ來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ出シマシタ。

九841 三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一散にかけ出した。

十一479 (略)、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。かけつ・ける【駆付】(下) 2 カケツケル 【一ケ・一ケヨ】

死體ヲセオツテ歸ル積リデカケツケヨ。」

八923 馬丁ハ(略)、トウく戦死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死ガイニ取リスガツテ泣イタ。

かけつ・す【可決】(サ変) 1 可決す【一スル】

十一1137 村會にて村費を議するにも、大抵原案を可決するを常とす。

七131 かね かけとかけねとは同じですか。

七133 かね ねぎられたら引く積りで、高くいふ直段がかけねです。

七135 かね 正直な商人はかけねなどはいひません。

七386 品物ハ皆正札附デ、カケ直ガナイ。

かけめぐる【駆巡】(四・五) 2 カケメグル かけめぐる 【一ツ・一レ】

七907 かね (略)クマナク船内ヲタツネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

ケメグレリ。

十854 (略)、將卒と共に戦場をかけめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

かけよる【駆寄】(五) 1 かけよる【一ツ】

九854 附添人も見物人も、きもを冷してかけよつて、熊吉に水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやら、

(略)。

か・ける【掛】(下) 22 カケル かける 【一ケ・一ケル】

「こころがける・つめかける・でかける・なげかける・ふりかける・めがける」

一515 (略)、オヤニシンパイヲカケルノハワルイコトデス。

三306 タルヤケニモ、竹ノタガガカケテアリマス。

三333 ナハヲウエテキル女ハ、(略)、アカイタスキヲカケテ、コエヲソロヘテ、ウタツテキマス。

三594 ほを かけてゐるのもあり、かけてゐないのもあります。

三595 ほを かけてゐるのもあり、かけてゐないのもあります。

五122 (略)、はしがかけてあつて、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

五221 かね 「手がなまぐさいから、そのひしやくを取つて、水をかけておくれ。」

五224 おはなは水がめから水をくんで、母の手にかけました。

五268 役人は後からこゑをかけて、「こら待て、ゐざり。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」といつて、(略)。

五487 音次郎は友吉のかたに手をか

けて、「略」。もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」といひました。

五69 4 オ宮ニハエマガタクサンカケテアル。

六3 7 川の上にかけた橋、(略)。

六15 7 刈つた稻はさをや木にかけるか、地面にひろげるかして、よく日にかわします。

六22 3 (略)、その石をおろして、なれどもはかりにかけて、その目方を知りました。

六47 4 少しのゆだんもなく主人に仕へるころざしにかんしんして、これから信長は目をかけて使ひました。

六61 1 園 もしおなかでもいたいのか、(略)。」と、その子のかたに手をかけて、ことばやさしくなぐさめる。

七19 5 鼠のあんどろがかきの外からこゑをかけて、「とくに申し上げようと思つてあました。(略)、どうかこれからお心安く願ひます。」といふ。

八62 6 綿ヲ機械ニカケテツムグト、木綿絲ニナリマス。

八63 7 綿ノ中ニハ種ガアリマスカラ、綿クリ機械ニカケテ、ソレヲ取去ルノデス。

九38 4 其の上道もよくなり、橋も多くかけられた。

十20 10 其の上に表紙をつけて、機械

にかけて固くしめる。

十一9 4 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲコシラヘル者、(略)。

かける「駆」(下一) 2 かける「ケ・ケル」

九86 1 熊吉の落馬したのかまはず、馬をかけさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

十一46 8 アラビヤ馬の(略)、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。かげろう「陽炎」(名) 1 陽炎

十二9 5 (略)、我が驅逐艦の連・陽炎の二隻に追撃せられ、遂に捕へらるゝに至れり。

かこ「籠」(名) 4 カゴ かこひてかご・なえかご

二59 7 オヂイサンハヨロコンデ、ソノハヒヲカゴニイレテ、(略)。

三29 8 フデノヂク、モノサシフエツエザルカゴナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。

四37 3 麥ワラザイクニハカゴヤオモチャヤ色々ナ物ガアリマス。

七63 4 ある山國にては、犬のくびに薬品・食物などを入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人をつくはしむることあり。

かこ「加護」(名) 1 加護

十二10 9 珠ニ我ガ軍ノ損失・死傷ノ僅少ナリシハ歴代神靈ノ加護

ニ依ルモノト信仰スルノ外ナク、(略)。

かこ「駕籠」(名) 2 かこ

九37 6 昔の道中には馬とかこがあつた。

九37 8 かごも人の肩でかいて、休み／＼行くのだから、早くもないし、又そんなに樂でも無かつた。

かこ「火口」(名) 1 火口

十二41 5 中岳は(略)、其の火口は直徑六百メートルの圓形をなし、深さ百二十五メートルあり。

かこ「河口」(名) 2 河口ひオリノコかこ

九18 2 利根川ハ(略)。(略)。

十二57 2 營口は一に牛莊港と稱し、遼河の河口にありて、遼河水運の起點なれば、(略)。

かこ「河江」(名) 1 河江

十一33 8 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。

かこ「画工」(名) 7 畫工

して一家を成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。

十一72 6 畫工「そはいと名残をしき事なり。さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、心構せし様なりしが、(略)。

十一73 3 翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。

十一73 10 夜明けて後、住持畫工に向ひて、「今日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、夜中のぞき見たる姿をして見するに、(略)。

十一74 9 畫工「先に畫がきたる檜の枝に一枝足らぬ所あり、(略)。

かこ「くしん」(課名) 2 畫工の苦心

十一11 5 第十八課 畫工の苦心

十一71 5 第十八課 畫工の苦心

かこ「画」(名) 2 画

十二30 1 勝商城に向ひ、高らかに號んで曰く、「略。徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。圖の解けんは二三日の内にあらん。」と。

十二31 4 賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圖を解きて去れり。

かこ「囿」(四) 4 囿む「ミ・ム」ひとりかこむ

十81 7 屋内には中央にゐろりを造り、一家之を圍みて談笑す。

十一897 熱き地方の白蟻は（略）
小山の如き巢を造り、木質にて内部を圍むといふ。

十二299 翌日壯士十餘人、勝商を圍みて城門に到る。

十二796 船員皆歡喜して、コロンブスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不従順なりし罪を謝せり。

かさ「笠」（名）3 カサ 凸すげがさ・まんじゅうがさ・からかさ

一62 アメカサ カラカサ
三332 ナハヲウエテキル女ハ、マルイカサヲカブツテ、アカイタスキヲカケテ、（略）。

四111 （略）、古イカサト古イモモヒキヲキセタカカシガタテテアリマス。

かさ「藪」（名）2 カサ
六186 物ノカサハ枘ニテハカル。
六187 図 カサヲハカルニハ升ヲモトトス。

かさい「火災」（名）1 火災
十二210 図 （略）、打出す砲彈よく命中して、敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。

かざおりえぼし「風折烏帽子」（名）1
風折烏帽子
十一802 図 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみのを着く。

かざかみ「風上」（名）1 風上
八427 （略）、今夜の此のはげしい風では、どこまで焼けて行くか分らない。

い。仕合に風上で安心だが、（略）。
かさぎ「笠置」（地名）2 笠置 笠置
十一139 図 （略）、主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を挙げしが、（略）。

十一141 図 （略）、事の未だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、其のまゝにて止みたり。
かさぎのやま「笠置山」（地名）2 笠置の山 笠置の山

十884 図 笠置の山の行在所、寄する雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち給ふ。

十893 図 笠置の山を山を出でしより、天が下にはかくれがもふし。

かざぐるま「風車」（名）1 カザグルマ
一293 図 カゼニクルクル カザグルマ

かささぎ「鶺鴒」（名）1 鶺鴒
十一313 図 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・雲雀・鶺鴒・雁・鴻・雉・鶺鴒・鶺鴒等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

かさなりあさ「重台」（五）2 カサナリ合フ 重り合フ「一ツ」
五162 鯉ハ（略）。ウロコハカハラヲフイタヤウニカサナリ合ツテキテ、（略）。

六773 廣イ港ガ船デ一パイニナツテキル。高イホバシラヤ、ヒクイホバシラガタクサン重リ合ツテ、マルデ林ノヤウニ見エル。

かさなる「重」（四）3 カサナル 重
る「一リ・一レ」ひたびかさなる
六66 図 日カサナリテ月トナル。
六66 図 月カサナリテ年トナル。

十二7710 かくて日数は重れども、（略）、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。
かさぬ「重」（下二）2 重ヌ 重ぬ
一ヌ・一ネ
十4210 図 （略）、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ネテ、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。

十一192 図 秋の山は紅葉の錦を織り、冬の木は白雪の綿を重ぬ。
かさねて「重」（副）2 重ネテ 重ねて

八173 図 禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「（略）」。トイヒシニ、（略）、オボツカナキ手ツキニテ、破レタル所ヲ一問ツツ張レリ。義景重ネテ「（略）」トイハバ、（略）。

九132 図 其の節別に老人向きの紺がすり上物十反だけ（略）御送り相成度願上候。先は重ねて御註文まで。

かさねる「重」（下一）3 かさねる 重ねる「一ネ・一ネル」ひつみかさねる
三228 私をころがすのはだれにもできませんが、たたせることや、二つかさねることは、どうしてもできません。

九316 フルトンが工夫に工夫を重ねて造つた最初の船は、（略）。

十205 （略）、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、幾度も幾度も印刷を重ねなければならぬ。
かざり「飾」（名）1 飾 凸おんかざり
十一911 図 例へばこゝに一種の石あり、（略）、飾にも實用にもならざるものならば、（略）。

かざりもの「飾物」（名）1 カザリ物
六254 図 金ヤギンハ美シクテ、指ワニナツタリ、トケイニナツタリ、ソノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、（略）。

かざる「飾」（四・五）9 カザル かざる 飾る「一ツ・一リ・一レ」
四732 オハルハ（略）、オヒナサマヲカザリマシタ。

四748 スツカリカザツテカラ、母ノ所ヘ行ツテ、（略）。

四752 図 「オカアサマ、オヒナサマヲカザリマシタカラ、ゴラン下サイ。」

六743 むねの上には紙のぬさを立てて、色どつた大きな弓矢や扇車がかざつてあります。

九276 図 五月五日二軍人形ヲカザリ、ノボリヲ立テテ、男子ノ福運ヲイノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。
九511 図 西洋婦人のボンネット

花をかざりてうるはしく、(略)。

十278 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果てて、(略)。

十2810 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、(略)冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

十二608 佛國の長き歴史を飾れる壯大なる建築の数々高く中空にそびゆるのみならず、(略)。

かざれる「飾」(下一) 1 カザレル

四755 図 (略)、オヒナサマヲカザリマシタ。(略)。「タイソウヨク

カザレマシタ。

かざん「火山」(名) 4 火山 ぐいちだ

いかざん

十723 図 温泉のわき出づる處はおほむね火山の附近に在りて、四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。

十二403 図 是等は現時噴火の止れる火山なれども、現に噴火せる火山の数も全國に於ては五十座を下らず。

十二403 図 (略)、現に噴火せる火山の数も全國に於ては五十座を下らず。

十二427 図 火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。

かざんこく「火山國」(名) 1 火山國

十7210 図 我が國は火山國にして、全國到處に温泉あり。

かざんぜんたい「火山全体」(名) 1

火山全體

十二424 図 阿蘇山は(略)。火山全體の占むる面積は(略)。

かざんばい「火山灰」(名) 4 火山灰

十二419 図 内に二箇の噴孔ありて、盛に水蒸氣とよなと稱する火山灰とを噴出す。

十二429 図 其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出すことあり。

十二4210 図 熔岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。

十二433 図 (略) 安永八年櫻島の破裂せし時は、九州・四國・山陽・山陰・東海道までも火山灰を降らしたりといふ。

かし「樗」(名) 1 樗

十二387 図 中部の山林には樟・松・杉・檜・樗・椎等の繁茂著しく、南部には榕樹も見受け申候。

かし「下士」(名) 1 下士

九261 図 將校には大將・(略)・少尉あり。其の下に下士あり、兵卒あり。

かし「菓子」(名) 2 くわし 菓子

六538 図 菓子ノ中ニハ砂糖ヲフクマザルモノ少シ。

七645 酒やすや醬油も、めしやもちやくわしも、水がなければ出来ない。

かし(終助) 1 かし

十二504 図 國の富をばめやせかし。

かし「火事」(課名) 2 火事

八目14 第十三 火事

八413 第十三 火事

かし「楫」(名) 2 かぢ かぢ

十二448 図 波風のあづかなる日も船人は かぢに心を許さざらん。

十二1207 図 師の賜物の 智を徳を、かぢにををりに 世の海を たりて行かん。

かし「火事」(名) 5 クワジ 火事

おおかじ

八414 火事だ、火事だ。

八414 火事だ、火事だ。

八446 聞けば此の火事は材木屋の小屋から出たので、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

八464 図 サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタ

八478 図 (略)、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、サクヤとは書くには及ばない。

かし「夏時」(名) 1 夏時

十753 図 此の地も亦夏甚だ涼しくして、暑をさくるによろしければ、夏時浴客あふるゝばかりなり。

かし「鍛冶」(代名) 2 かしこ 彼

十一729 図 或夜小僧住持の居間に來りて、「かしこに行きて、彼の畫師

の有様を見給へ。」とささやくに、行きてうかゞへば、(略)。

十一8210 図 (略)、百にも近き鶴、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、(略)。

かしこいこども「課名」 2 かしこい子ども

六目8 第七 かしこい子ども

六202 第七 かしこい子ども

かしこさ「畏」(名) 1 かしこさ

十891 図 夜晝三日供御もなく、歩みつかまて松かげに いこはせ給ふかしこさよ。

かしこし「畏」(形) 10 カシコシ かしこし

七446 図 おほよそ家の紋どころ、いふもかしこし、菊と桐。

八68 図 (略)、神殿の(略)。(略)。

その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、かへつてかしこく、かたじけなし。

八503 図 此ノ頃中大兄皇子ト申スカシコキ皇子アリキ。

九243 図 かしこくも天皇陛下は自ら大元帥なるぞとおほせて、陸海軍をすべ給ふ。

九286 図 (略)、本殿ニハカシコクモ天皇陛下ノ御製ノ歌ヲカ、ゲタリ。

九918 図 (略)、勅なれば いともかしこし、うぐひすの 間はば如何にと 雲ゐるまで 聞え上げたる 言の葉は、(略)。

十一118 5 國 修身の徳是なりと、教育勅語のり給ひ、戦後経営かくこそと、戊申の詔書かしこしや。

十二118 國 陛下が萬機の政をみそなはず御かたはら、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、常に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の拜察せらるゝは、かしこしともかしこき極みなり。

十二119 國 (略)、かしこしともかしこき極みなり。

十二110 6 國 かしこくも朕は汝等軍人の大元帥なるぞ。(略)。とのたまへり。

かしこし「賢」(形) 2 かしこし賢し「キーク」

七61 4 國 すべて犬は人になれ易く、かしこくして、よく主人の命を守る。

十一69 9 國 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

かしこむ「畏」(四) 2 かしこむ「ミ」

十39 9 國 乃木大將はおごそか、御めぐみ深き大君の、大みことのり傳ふれば、かれかしこみて謝しまつる。

十89 5 國 御歌かしこみ、藤房は聲くもらせて、いかにせん、頼むかけとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露、かしこくひいたわりかしこく

がしたてまつる「賀奉」(四) 1 賀し

奉る「リ」

十一63 3 國 拜啓、益々御健勝賀し奉り候。

かしたまう「貸給」(五) 1 貸したまふ「一」

十二82 7 國 (略)、「ちよつと貸したまへ。」と言ひながら、其のバイオリンを取つて弾始めた。

かじつ「果実」(名) 8 果實

十33 9 國 (略)、是等ノ島ニハ作物ノ出来ザル荒地多クレバ、罪人下モハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、(略)。

十二20 8 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。

十二20 10 鳥ばかりではない、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。

十二23 3 此の外、動物は植物の果實・根・葉等食つて體を養ひ、(略)。

十二43 5 國 太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

十二67 9 國 (略)オレンジの熟する季節には、數多の猿(略)之を食ひ、果實盡くれば、再び其の故郷に歸るを例とす。

十二69 6 國 (略)、果實・草根を始め、凡そ取つて以て食ふべきものは殆ど餘す所なし。

十二78 7 國 (略)、河中に生ずる水草流れ寄り、又果實の附きたる枝の波

のまに／＼浮べるを見たり。

かじば「火事場」(名) 1 火事場 八42 3 火事場でさわぐ人の聲がここまでも聞える。

かしはら「樞原」(地名) 1 樞原 十101 8 國 コ、ヨリ西北へ進メバ、畝傍・樞原ノ地ニ出ツ。

かしはらじんぐう「樞原神宮」(名) 1 樞原神宮 十102 4 國 又畝傍山ノ東南ニ樞原神宮アリ。

かしま「鹿島」(名) 3 鹿島 鹿島 九17 7 國 中ニモ香取・息栖ノ兩社ハ北浦ノホトリナル鹿島トトモニ三社ノ名アリ。

十一30 4 國 (略)、鹿島・香取ハ何レモ上古ノ武神ヲマツレル神宮ノ名ナリ。

十一32 2 國 戦艦ハ(略)。(略)。安藝・薩摩・鹿島・香取等はナリ。

かしまじんぐう「鹿島神宮」(名) 1 鹿島神宮 九17 國 鹿島神宮

かじみまい「火事見舞」(名) 1 火事見まひ 八45 3 國 「東京のをぢさんから火事見まひの電報が來た。」

かしや「菓子屋」(名) 1 クワシヤ 五67 6 道ノ兩ガハニハ、アメヤ・オモチヤヤ・クダモノヤ・クワシヤナドガ店ヲナラベテキル。

かじや「鍛冶屋」(課名) 2 かぢ屋

八目11 第十 かぢ屋

八31 1 第十 かぢ屋 かしや「鍛冶屋」(名) 4 カチヤカヂ屋 かぢ屋

八14 5 大工ハノコギリ、左官ハコテ、石屋ハノミ、カチ屋ハツチ、仕立屋ハ針、ソレ／＼ノ道具ヲ持ツテ、メイ／＼ノ仕事ニカ、ル。

八31 2 僕の近所に年よりのかぢ屋があつた。

九65 6 國 (略)、かぢ屋にてふいごを用ふるも、皆空氣を送りて、火の勢を盛ならしむる爲にして、(略)。

十78 3 國 (略)、大工・カチヤ等ノタナゴコロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用スルヲ以テナリ。

かしよ「歌書」(名) 1 歌書 十一5 4 國 歌書よりも軍書にかなし吉野山。

かしよう「テームスかしよう」 かしよう「テームスかしよう」

かじよう「下情上達」(名) 1 下情上達 十二108 9 國 上奏といひ、建議といひ、請願といひ、其の手續に於て各相異なりといへども、要は下情上達の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

かしら「頭」(名) 6 頭 八39 4 國 マツチノ製造ニハ(略)。(略)、細クキサミテデク木トシ、火ニカワカシテ、頭ニ藥ヲツケ、(略)。

九82 3 國 (略)、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の

頭になるといふ定であつた。

九三九 (略)、五人の騎手は打連れて、
(略)、馬の頭を揃へて、三番太鼓を
今やおそしと待構へてゐる。

九七三 どうか今日から一年の間、
あなたの方の村が五箇村の頭になつて
御支配をなさつて下さい。」

十六一 (略)、父の爲時は常に其の
頭をなでて、「汝の男と生れざりし
が口をし。」といひたりとぞ。

十六九 (略) やがて二人は荒波に打返さ
るゝ船の頭を立直しく、死力を盡
して漕進む。

かしらん (終助) 1 かしらん

三三五 (略) 「おや、にげたのかしら
ん。」と、いそいでかみをあけて
みると、(略)。

かしらい「菓子類」(名) 1 菓子類

十四八 (略) 欄間の彫物、(略)、着物の
(略)、其の他菓子類に至るまで、我
等の衣食住には模様・色どりをほど
こしたるもの多し。

かす「粗」ひまめかす

かす「架」(サ変) 1 架す「一シ」

十二五九 (略) テームスとセーヌとは
(略)、河幅はるかに廣く、之に架し
たる橋は何れも壯大にして、市の美
観を添ふ。

かす「課」(サ変) 1 課す「一シ」

八九七 (略) 名古屋城は(略)、徳川家
康が諸大名に課して造らしめたる名
城にして、(略)。

かず「数」(名) 22 カズ かず 数

おてかず・おんてかずながら・てか
ず・ひかず

四二八 (略) 「ウチノニイサンヤネ
エサンヲアハセルト、ミンナデ

五人デスカラ、カタ手ノユビ
ノカズト同ジデス。

六三九 (略) 三十三間堂のほとけのかず
の多いにはおどろいた。

九二四 (略) 歩兵は戦争の主力にして、
其の數最も多し。

九三九 (略) 箱根七湯ハ、開ケ行ク
明治ノ御代ト共ニ益々サカエテ、浴
客年ニ其ノ數ヲ加フ。

七四一 (略) 箱根は温泉場の數も多く、
(略)。

八二八 (略) あいぬの數、古は甚だ多か
りしが、近年次第に減少して、今は
僅かに二萬人に足らず。

九四七 (略) 堂塔雜舎ノ數百七十五ア
リ、(略)。

九五九 (略) 大小ノ燈籠左右ニ多く、其
ノ數二千ニ近シ。

一三三 (略) あへらじとらねて思へ
ばあづさ弓 なき數に在る名をぞと
むる。

一七六 (略) 氣候の暖なる間絶えず之
を産出するを以て、一群の數は次第
に増加す。

一七六 (略) 其の數餘りに多くなる時
は、(略)。

一八八 (略) 故に飼養者の注意により

ては、次第に其の群の數を増加する
ことを得べし。

一一一〇 (略)、まんぢゅうの様に圓
く盛上げた土山が數知れず並んでゐ
る。

一二二〇 (略) 又其の強弱は矢の羽の數
にて表すなり。

一二三二 (略) 就學兒童ノ數ガ年々増加
シ、(略)。

一二三三 (略) 隨ツテ學齡兒童ノ數ハ年
々増加シテ、(略)。

一二四〇 (略) 現に噴火せる火山
の數も全國に於ては五十座を下ら
ず。

一二六九 (略)、温暖なる地方に
移らんと欲するもの期せずして相集
り、次第に其の數を加ふ。

一二六九 (略) 時としては幾千萬とも數
知れぬ大群、長列をなして枯野を横
ぎるに、(略)。

一二七〇 (略) 魚腹に葬らるゝも
の、野獸の爪牙にさかれて食はるゝも
の、其の數を知らず。

一二七四 (略) いろはのいをも わき
まへぬ 身のいつしかに 積み得と
る、(略)、世の人並の 文字の數。

ガスひたんさんガス
かすい「河水」(名) 2 河水

一二八二 (略)、冬日河水盡く氷結
するに至れば、大群をなし、水を尋
ねて低地に下り、(略)。

一二七〇 (略) されば河水・湖水におぼ
れて魚腹に葬らるゝもの、(略)、其
の數を知らず。

かずか「幽」(形状) 2 かすか
十一五五 (略) しばらくすると、谷底の方
に太鼓の音がかすかに聞える。

十一五六 (略) 打鳴らす太鼓の音は段々に
低くかすかになる。

かすが「春日」(地名) 2 春日
十九六 (略) 天の原ふりさけ見れば、
春日なる 三笠の山に出でし月かも。

十九七 (略) コ、ヨリ眺ムレバ、東ニ春
日・三笠・若草等ノ山々相連リ、
(略)。

かずかず「數数」(名) 2 數々
七四五 (略)、家の氏の名多けれ
ば、紋の數々かぎりなし。

一二六〇 (略) 佛國の長き歴史を飾れる
壯大なる建築の數々高く中空にそび
ゆるのみならず、(略)。

かすがじんじ「春日神社」(名) 2
春日神社 春日神社

十九五 (略) 帝室博物館ヲ觀覽シテ、老
樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗キ間ヲ
行ケバ、官幣大社春日神社ニ到ル。

十九六 (略) 春日神社ヨリ西北ニ向ヒテ
東大寺ニ到ル。

かずさ「上総」(地名) 1 上総
九一七 (略) 上総

かずとよ「一豊」(人名) 7 一豊 ひと
まのうちかずとよ・やまのうちかずと
よのつま

七39 一豊もほしくてくたまらな

いから、(略)。「略」。武士として
はあくらぬ馬をもつて見たい。」
と、思はずひとり言をいひました。

七41 一豊はおどろいて、「これは

又どうした金か。(略)。」

七43 一豊は妻に禮をのべて、その

馬をもとめました。

七43 2 やがて馬ぞろへの日となつ

て、一豊の馬ははたして信長の目に

とまつて、(略)。

七43 6 けらいのものが、「これは

一豊の馬でございます。」といひま

すと、(略)。

七43 8 「日ごろ貧しい暮しをして

ゐる一豊が、よくもかういふよい馬

を買ひもとめた。

七44 2 (略)、信長は大そう感心し

て、これが一豊の出世のものになつ

たといふことであります。

かずのこ「数子」(名) 1 カズノ子

六66 2 熊ハ(略)、人ノ家ノクラノ

戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ俵ヲカツイ

デ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマ

ス。

かすみ「霞」(名) 7 かすみ 霞

はるがすみ

四14 6 (略)、かすみのすそを

とほくひく、ふじは日本一の

山。

六6 4 わけてさくらの吉野山、一

目千本咲きみちて、かすみか雲か美

しや。

十二 2 2 いくより見ても山にさへ

ぎられ、かすみにへだてられて、其

の全景を見ること能はず。

十二 5 「我元 丹波の松よ、

山こむる 霞を後よ、いかだして

都に來けり。」

十一 1 吉野山霞の奥は知らね

ども、見ゆる限りは櫻なりけぞ。

十一 18 春は島山霞に包まれて眠

るが如く、(略)。

十一 48 アラビヤ人はこゝに始めて

馬に全速力を出させて、雲を霞と逃

げのびた。

かすみがうら「霞浦」(地名) 3 霞浦

九16 10 (略)、常陸ノ霞浦・北浦ノ

水ハ北ヨリ之ニ注グ。

九17 1 霞浦・北浦等ノ合流スルア

タリニハ名勝ノ地少カラズ。

九17 霞浦

かすみ「霞」(四) 1 かすみ 「一マ」

八60 3 (略)、かきやく入日美し

や。粟津の松の色はえて、かすまぬ

空ののどけさよ。

かすめる「掠」(下) 1 かすめる

「一メ」

八25 1 此の下女は毎朝かうして、主

人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐ

たのです。

かづら「葛」(名) 1 かづら

十81 5 其の家は(略)。唯かづら

などにて、かやを結びて壁に代へ、

又かやを並べて屋根となせり。

かすり「緋」(名) 3 カスリ 緋

八63 9 木綿織物ニ紺や淺黄やカスリ

ヤ其ノ他色々ナ縞ガアルノハ、ドウ

シテコシラヘルノデスカ。

八64 3 紺や淺黄やカスリハアキデ染

メマス。

八64 7 又所々白ク染メ殘シタノガカ

スリデス。

かせ「風」(名) 48 カゼ カゼ 風

あめかぜ・あめとかぜ・おいかけ・お

おかけ・かみかぜ・かわかぜ・きたか

ぜ・しおかぜ・なみかぜ・にしかぜ・

はるかぜ・ひがしかぜ・まつかぜ・み

なみかぜ・やまかぜ・ゆうかぜ

一29 1 カゼ ニクルクルカザグ

ルマ。

二16 3 カゼ ガファイテ、イロイロナ

木ノハガトンデキマス。

二28 2 コクキハヒラヒラトカゼ

ニウゴイテキマス。

二31 1 カゼ ヨクウケテ、クモ

マデアガレ。

二38 5 カゼ ヲヒイタリオナカ

ヲイタクシタリシタトキニ、シ

ンバイシテ、クスリヲノマセテ

クダサツタノハ、ドナタデスカ。

二59 1 スルトカゼ ガファイテ、ハ

ヒガバツタツテ、(略)、ウツ

クシイハナガサキマシタ。

三1 7 ヒラヒラトカゼ ニチルノ

モマタミゴトデス。

三17 3 アタタカイカゼ ガソヨソ

ヨトムギノホノ上ヲファイテ

キマス。

三51 7 カゼ ふく小えだにす

をはる小ぐも、(略)。

四62 8 ゆふべは風がなくて、し

づかなばんでしたから、少しも

知らずにゐました。

四66 8 三郎ノ母ハ四五日マヘ

カラ風ヲヒイテネテキマス。

四77 6 扇は風にふかれて、ぐる

ぐるまはつてゐます。

五8 6 そらからふつて、山の木のは

の上に休んでゐましたが、風にふか

れて、土の上へおちました。

六1 7 海べはふだん強い風がふくか

ら、高い松はしぜんにおもしろい枝

ぶりになつてゐる。

六8 6 たんぼにはいねがよくみのつ

て、風のふくたびに黄色な波が立つ

てゐます。

六10 7 すゞしい風にふかれながら、

草の上にすわつて、にぎりめしをた

べた時は(略)。

七19 3 にはの藤の花が咲いて、風が

吹く度にむらさきのふさが動いてゐ

る。

七24 2 アル夜弟子ヲ集メテ、書

物ノ講義ヲセシ時、風ニハカニ吹キ

テ、トモシビキエタリ。

七24 6 今風デアカリガ消エマシタ。」

八8 3 秋の日の空すみわたり、風暖にさてもよき日や。

八36 2 野べも山べも新緑の風に藤波さわぐ時、池水にほふかきつばた。

八42 6 長い天気つゞきで、かわききつてゐる上に、今夜の此のはげしい風では、どこまで焼けて行くか分らない。

九46 4 大風吹起りて、砂煙は天をおほへり。(略)、進行を止め、風のをさまるを待てり。

九47 1 翌日風なきて出立したれども、(略)。

九64 5 扇を使へば風起り、むちをふるへば音を發す。

九65 10 燈の火の風に吹消さるゝが如きはなり。

九66 4 空氣流動する時は風を生ず。

九66 5 帆かけ船の水上を走る、たこの空高く上る、是皆人の自然の風を利用したるなり。

九66 6 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。

九67 1 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。

九69 5 (略)、黄色に實のつた秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、

むら雀のぼつと飛立つのは面白い。

九69 7 秋の末になつて風の吹散した木の葉の上に、雨の降りかゝるのは、何となく物さびしい。

九70 1 葉の散果てた冬木立に吹きすさむ木枯の風は、音を聞くだけでも物すごい。

九73 1 明けて二十九日には雨も止み、風も静まりて、日の光さへ見え出し候へば、(略)。

九80 6 (略)、雨の朝、風の夕、見るもの聞くものにつけて、都の空のみしたはしく、(略)。

十27 10 山おろしの風は身にしみて寒い。

十63 9 昨夜の風雨は名残なくをさまつて、そよぐと吹く風に、海面はさゞ波を立ててゐる。

十一22 4 木ぎざの松に吹く風をいみじき樂と我は聞く。

十一27 3 帆の運用自在なれば、風の方向に關らず、十分に風力を利用することを得。

十一30 6 風ノ名ヲ負ヘルモノニ神風・春風・朝風・疾風・松風・追風・野分等アリ。

十一30 10 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモヒ見ルベク、(略)。

十一54 8 (略)、山も谷も雪にうづめられて、吹く風は身を切るやうに寒かつた。

十一84 7 綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

十二6 8 風號び海怒りて、波浪山の如くなれども、(略)。

十二18 5 晝間は赤球を以て風の強きを示し、(略)。

十二19 4 天氣圖とは(略)晴・曇・雨・雪、風の方向・強弱、温度等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)、一目に全國天候の如何を示すものなり。

十二19 10 又風の方向は矢を以て示し、矢の上へ向ふは南風、右へ向ふは西風、下へ向ふは北風、左へ向ふは東風とす。

十二78 1 朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。

かせい「火勢」(名) 1 火勢

九5 10 尊こにおいて天叢雲劍を抜き、草を薙拂ひ給ふに、火勢却つて賊の方に向ひ、(略)。

かせい「家政」(名) 1 家政

十二33 4 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。

かぞえ「数」(下二) 6 數ふ『フ・フルーへ』

七59 8 あばら骨の數へらるゝ程やせ細りたるものあり。

八9 6 いでや、あの岩の小かけに、皆うちよりてえもの數へん。たけがりのいさをくらべん。

十10 10 其の他森林は氣候を和げ、土砂の流出を防ぎ、神社・佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

十73 1 我が國は火山國にして、全國到る處に温泉あり。伊豆半島のみにも三十箇所を數ふ。

十一20 6 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、(略)。

十二89 10 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにいとまあらず。

かぞえあぐ「数上」(下二) 1 數へ上

八39 9 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數マデ數へ上グレバ、(略)、何十人ノ人手ヲ要スルカヲ知ラズ。

かぞえうた「数歌」(課名) 2 かぞへ歌

六目13 第二十五 かぞへ歌

六82 2 第二十五 かぞへ歌

かぞえがたし「数難」(形) 1 數へがたし『一シ』

七61 3 犬の種類はすこぶる多し。(略)耳のたれたるもの、立ちたるもの、(略)、足の短きもの、長きものなど、一々數へがたし。

かぞえきれる「数切」(下二) 2 數へキレル 數へきれる『一レ』

八四二 毎日の食物のにたきから種々の工業まで、火の力を要することは数へきれない程多い。

八七三 砲弾ニタフレル兵士ハ數ヘキレナイ。

かぞえみる「數見」(上一) 1 數ヘ見る「一ニヨ」

十四九 諸子よ、試みに此の外に諸子が日本一と思ふ物を數ヘ見よ。

かぞえみる「數」(下二) 5 カゾヘル數ヘる「一ヘーヘル」

一四三 イクツサイタカ、カゾヘテゴランナサイ。

四四四 〇マヘタチノセナカノ上ヲアルイデ、カゾヘテ見ルカラ、(略)。

四五五 白ウサギハ一ツニツトカゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、(略)。

八四七 〇にこつた字は二字に數ヘるから、(略)、十五字になるやうに書いてごらん。

十八三 犬と猫は(略)。(略)。是等も家畜の中に數ヘられるが、家畜としてもつと大切なものは牛・馬・羊・豚等である。

かぞく「家族」(名) 1 家族

十一五〇 古來アラビヤ人は馬を家族の一員と考へて、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいがる。

かぞくいちどう「家族一同」(名) 2 家族一同

九七二 〇 幸に私方は左程の損害も無く、家族一同無事に御座候間、御安心下され度候。

十一五〇 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。

かた「方」(名) 3 方ハえらびかた・おかた・おかた・おりかた・おんかた・かきかた・きりかた・しかた・しかたなし・しにかた・せんかたなし・そでかた・つかいかた・つきかた・つくりかた・でんぼうしたためかた・ゆうい・ならべかた・ひとかた・みかた・めかた・わたくしかた

四五八 コノ神サマハサキホドオトホリニナツタ神サマガタノ弟ノ方デス。

八五四 〇 その神々しさいはん方なし。

九四七 〇 (略)、今までの駱駝の足跡消えたれば、翌日風なきて出立したれども、一同は行くべき方にまよひて、右に往き、左に往き、空しく一日を過せり。

かた「形」(名) 1 かたハおうぎがた・しながたぶね・しのがた・せいようがた・たまごがた・はねがた・ひしがた

八二八 〇 その中に下男が麥俵をかついで、(略)。(略)。此の男は居酒屋に酒代の借があるので、其のかたに持つて行かうとするのです。

かた「肩」(名) 9 かた 肩

五四七 音次郎は友吉のかたに手をかけて、「(略)」。もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」といひました。

六六一 〇 もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、その子のかたに手をかけて、ことばやさしくなぐさめる。

六六六 〇 熊ハ(略)。(略)。ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。

八五三 〇 皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

九三七 〇 かごも人の肩でかいて、休みく行くのだから、早くもないし、又そんなに樂でも無かつた。

九八五 〇 愛作方の人々は愛作の肩をたいて、「感心だく、えらい子だ。

十二九 〇 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、(略)。

十七五 〇 身體ノ(略)、左右ノ手ハ肩ヨリ分レ、二本ノ足ハ全身ヲ支フ。

十一一七 〇 〇 東洋平和の天職はかゝる、我等の肩の上。東方文明先進の任務は重き日本國。

がたハあいさくがた・あなたがた・あにがみさまがた・あにさまがた・かみさまがた・くまきちがた・くれがた・へいけがた・ゆうがた

かたあし「片足」(名) 1 片足

十二二 〇 〇 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落シ、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」

トイフ。

かたい「堅」(形) 12 カタイ かない 堅イ 堅い 固い「一イーク」

三二三 〇 私はそとがかたくて、中がやはらかです。

三二三 〇 かたいものにあたればこはれます。

四三九 〇 〇 ボクラハカウイフカタイヨロヒヲキテキルカラ、(略)。

四五五 〇 木ノヤウニカタイガ、木デハアリマセン。

五三二 〇 〇 ソノ實ハツバキノ實ノヤウニカタクテ、ソノ中ニマルイ種ガニツ三ツツアリマス。

五五五 〇 (略)、石ノヤウニカタクナツテキマスカラ、石炭トイヒマス。

八二七 〇 〇 農夫は「おかげで目がさめた。御恩は一生忘れない。」といつて、かたく友だちの手を握りしめました。

八八七 〇 〇 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲ヲウチカケタ。イカニ心ハ堅クテモ、身ハ鐵石デナイ。

八九五 〇 〇 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレム心モ深カツタ。

十九九 〇 〇 圖や畫は別に堅い木に彫り、寫眞は銅版に彫りつけて、相當の場所に入れる。

十二〇 〇 〇 其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。

十215 それは版下を堅い木にはりつけて、其の上から彫つて版木を造り、(略)。

かたひ「難」ひありがたい・ありがたなみだ・ありがとう・ありがとうございます

かたおか「片岡」(人名) 2 片岡

十二62(略)、東郷司令長官は(略)、片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二84(略)、片岡・瓜生・東郷の諸隊は其の退路を絶ち、(略)。

かたがた「一方」(名) 4 方々

九20(略) 村の方々は朝に夕に色々やさしく御世話下され、『略』と親切におほせ下され候。

九214(略) 母は其の方々の顔を見る毎に、(略)。

十91(略) 御差支これなく候はば、有志の方々御さそひ合せの上、御來會相成候ては如何。

十一62(略) 心ばかりの祝宴相開き、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)御光來下され候はば光榮の至に存候。

かたがた(副助) 2 かたがた かたぐく

九49(略) 聞けばハッサンはアリの來ることの餘りにおおければ、道連のありしを幸ひ、迎へかたぐくこゝに來りしなり。

九75(略) 取急ぎ御禮かたがた右御報申上候。

かたかな「片假名」(名) 2 片假名

八48(略) 發信人の居所氏名を受信人に知らせんとする時は本文の終り又は受信人居所氏名の下に片假名にて記すべし

八48(略) 本文中の数字は片假名と分別し易き様大書すべし

かたき「仇」(名) 1 仇

十一41(略) 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、(略)「正義は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。

かたぐるま「肩車」(名) 1 肩車

九36(略) 富士川(略)なども、其の頃は橋が無かつたから、人の肩車に乗つたり渡船に乗つたりして渡つたのであつた。

かたさき「肩先」(名) 1 かた先

六57(略) 信玄は(略)ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、かた先へ切りつけられた。

かたし「堅」(形) 9 カタシ かたし

固し 堅し 堅し「一キーク」六67(略)、上品ナルハヒノキ、カタキハ栗ナリ。

六68(略) 栗ハカタクシテ、ナガククサラザレバ、家ノドダイ又ハ鐵道ノマクラ木ナドス。

七79(略) 「たん心定めては、事に動かず、さそはれず、はげみ進むに何事の など成らざらん、鐵石のかたきもつひにとほすべし。

十56(略) 兵舎内にては歌をうたふ事、高聲にて談話する事、所定以外の場所にて煙草を吸ふ事等堅く禁ぜられ居り候。

十77(略) 頭ノ骨ノ堅キハ腦ヲ護ランガ爲ナリ。

十78(略)、大工・カヂヤ等ノタナゴコロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用スルヲ以テナリ。

十一23(略) 幾年こゝにきまへたる鐵より堅きものひふあり。

十一42(略) 光範「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。(略)」とて固く止めしが、(略)。

十二32(略) 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、(略)、其の志操の固きは男子にも勝れり。

かたし「難」(形) 2 カタシ 難し

「カル・シ」ひありがたし・えがたし・かえがたし・かぞえがたし・きんじがたし・しがたし・つくしがたし・てばなしがたし・なしがたし・はかりがたし・みとめがたし・ゆるしがたし・わすれがたし

七22(略) 我が生キテフタ・ビ汝ヲ見ンコトハカタカルベシ。

十二92(略) をごりに流るるは易く、をよりより儉約に進むは難し。

かたじけなし「忝」(形) 1 かたじけなし「一シ」

八68(略) その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、かへつてか

しこく、かたじけなし。

かただのうら「堅田浦」(地名) 1 堅田の浦

八61(略) 堅田の浦の浮御堂、おち來るかりもふぜいあり。

かたち「形」(名) 40 カタチ かたち

うたち 形

二19(略) オハナハモミデノハラ一マイヒヒロヒマシタ。(略)、カミヲソノカタチニキリマシタ。

三62(略)、ささえのやうに、ふかいつばのかたちになつてゐるのがあります。

五35(略) キモノノモヤウヤ、カンザシナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、ソノスガタガカイライシイカラデセウ。

五49(略) マツ形カライヘバ、キ瓜・白瓜・ヘチマハ細長ク、トウ瓜ハ太ク、カボチャハ平タイ。

五49(略) マクハ瓜ヤタ顔ヤ西瓜ニハ、マルイ形ノモ、長イ形ノモアル。

五49(略) マクハ瓜ヤタ顔ヤ西瓜ニハ、マルイ形ノモ、長イ形ノモアル。

七21(略) 葉は羽形で、(略)、花は同じく蝶の形をしてゐます。

七32(略)、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て來る。

七72(略) 中デオモシロイノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキル。

七75(略) 海草ノ形ハ様々デアル。

七三〇 外國の港に着くと、見ない形の家がならんで立つてゐます。

八二九 (略)、若しや白雀が居はしまいかと、(略)、野原の方でも行つてたづねましたが、影も形も見えませんが。

八五九 琵琶の形に似たりとて、其の名をおへる湖の かゞみの如き水の面、(略)。

八七五 此ノ外目・鼻・耳ノ形ヨリ、尾ノ長ク、ヒゲノ太キマデ、相似タル所甚ダ多シ。

八九〇 中佐ハ「(略)」トイヒナガラ、形ヲ正シテ、「今日ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日ダ。此ノメデタイ日ニ討死スルノハ軍人ノ面目ダ。名譽ノ事ダ。」

九八五 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、(略)。其ノ形モマタ様々デア

九八六 豆ノ花ハ蝶ノ形ヲシテキルシ、(略)。

九八七 (略)、朝顔ノ花ハジャウゴノ様ナ形ヲシテキル。

九八八 イチゴノ花ハボンノ様ナ形デ、(略)。

九八九 シソノ花ノ様ニクチビルノ形ヲシタノモアリ、(略)。

九九〇 (略)、オシロイノ花ノ様ニクダノ形ヲシタノモアル。

九九一 (略)、ニンジンノ様ニカラカ

サヲヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモアル。

九一〇 又麥ノホノ様ナ形ニナツテ咲クモノニハ大葉子ノ花ナドガアリ、(略)。

九一〇 (略)、總ノ形ニナツテ咲クモノニハ藤ナドガアル。

九四一 (略) 大空ヨリ箱根山ヲ見下サバ、全體ノ形ノスリバチヲ倒ニシタルニヒトシキヲ見ルベシ。

九五〇 星ノ形を打ちたるは陸軍兵ノ帽子にて、(略)。

九五六 車夫のかぶるは形よりまんどゆう笠の名をかし。

九五六 (略)、其ノ動物ノ身ブリニヨリテ、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。

九五五 其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ、メニ突出スルトキハ、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

九六四 空氣は形もなく、色もなければ、目には見えざれども、(略)。

一〇一八 (略)、其ノ形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。

一〇四四 然るに此の寺は今より凡そ一千二百年以前のものにて、昔ながらの形を存せり。

一〇五七 葉ノ形ニハ卵形ト楕圓形ガ最も多イガ、錢ノ様ニ圓イノモアリ、針ノ様ニ細長イノモアル。

一〇五八 うち正していひ出で

ぬ、「此の方面の戦鬪に二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。」と。

一〇四七 模様には全く無意味なるもあれども、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。

一〇六五 鯨の一群は影も形も見えなくなつた。

一〇七七 目ハ色・形ヲ見、(略)。

一〇八二 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。

一〇八五 (略)、イヨイヨ延シテ、イヨ／＼細クシ、次第ニヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ツカシム。

一〇八四 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。コレヲ船ノ大體ノ形ガ出来ル。

かたつむり「蝸牛」(名) 2 カタツムリ

一〇八二 キノエダニカタツムリガキマス。デンデンムシムシツノダセヤリダセ。

一〇八三 (略)、この貝がらはかたつむりのやうに、おもてにうづまきがあります。

かた「片手」(名) 3 カタ手 片手

一〇八四 「(略)、ミンナデ五人デスカラ、カタ手ノユビノカズト同ジデス。

一〇八一 手塚の家來は組ませじと中

をへだつれば、敵は之をつかんで、片手にひつさぐ。

一〇八六 鶴匠は(略)、十二條の細なはを片手に握り、右往左往思ひ／＼に浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。

かたとき「片時」(名) 2 片時

一〇八五 筑紫に到りて後は、(略)、片時も君を忘れ奉ること無く、雨の朝、風の夕、見るもの聞くものにつけて、都の空のみしたはしく、(略)。

一〇八七 あはれ我、梁や棟木や桁どもを いつもせおひて 片時も 休む間なし。」

かたな「形名」(人名) 2 形名 ヲかみ

一〇八四 形名の妻、夫を勵まして、「良人今獨り身を全うして、祖先以來の勇名を辱しめ給ふか。」と、自ら劔を帶び、侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。

一〇八二 かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、戦陣の際に良人の名譽を全うせる形名の妻と其の徳を同じうすといはん。

かたな「刀」(名) 13 カタナ 刀 ヲい

つかなな・こがたな・むかたな

一〇八五 カタナ

一〇八四 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀

六刀さしとしました。

五74 よしつねはよろこんで、刀やよろひをやつてけらいにした。
 六57 信玄は刀を抜くひまがない。
 七35 〔略〕、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。
 八33 〔略〕 刀は武士のたましひといはれたものだから、きたへる時は身を清めて、一心不乱に打つたものだ。
 十51 〔略〕 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。
 十54 〔略〕 敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。畠山は『いかでかゝる幼き者に刀を立てん。』とて、〔略〕。
 十一45 〔略〕 幾度か思ひ直して討たんとすれども、少しも疑ふ心なき正儀の様子を見ては、刀のつかに手をかくべきやうもなし。
 十一45 〔略〕 熊王年來包みたる心の中を打明けて、今は自ら死ぬるより外なし。』とて、刀を取直して腹かき切らんとす。
 十一45 〔略〕 熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、〔略〕。
 十一46 〔略〕 かくて光範の興へたる刀には事の由を書添へて送り返し、〔略〕。
 十二88 〔略〕 喜劍直ちに泉岳寺に行き、其の墓を拜して曰く、〔略〕。』と、刀を抜き切腹して終る。
 かたなかじ「刀鍛冶」(名) 1 刀かぢ

八33 〔略〕 「自分は〔略〕、元は少しは人に知られた刀かぢで、若い時から何十本となく大太刀・小太刀をきたへた。
 かたむ 〔帷子〕(名) 2 カタビラ
 三56 アハセモ、ワタイレモ、ヒトヘモノモ、カタビラモアリマス。
 六35 〔略〕、カラムシノ糸ニテ織リタルモノハカタビラナドニツクル。
 かたま 〔園〕(四・五) 2 カタマル
 かたま 〔ツール〕ひえかたまる
 三60 右の方に五六そうかたまつてゐるのは、今あみをおろしてゐるのです。
 八39 〔略〕、細クキサミデヂク木トシ、〔略〕、頭ニ藥ヲツケ、其ノカタマルヲ待チテ、箱ニ入ル。
 かたみ 〔形見〕(名) 2 カタミ 形見
 七35 〔略〕、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。
 十一42 〔略〕 「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。また我に代りて討死したる六郎の形見とも思ふものぞ。」
 かたむ 〔固〕(下二) 1 固む 『ム』ひねりかたむ
 十一89 〔略〕 蟻は〔略〕、多くは地下に穴をうがち、部屋・廊下を造

り、其の内面を壁の如くに固む。
 かたむ 〔傾〕(名) 1 傾き
 十一93 〔略〕 物の價は〔略〕、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。
 かたむ 〔傾〕(五) 2 傾く 『イ・イク』
 十二82 日は既に西へ傾いて、祭見物の人々は段々歸り始める。
 十二82 帽子の中に一文の錢もない老人は、傾く夕日を望み、〔略〕、幾度かためいきをついて居る。
 かたむ 〔傾〕(下二) 1 傾く 『ケ』
 十二86 薩摩の士に喜劍といふ人あり、〔略〕、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勧む。良雄一笑して更に耳を傾けず。
 かたむ 〔傾〕(下二) 1 傾ける 『ケル』
 十二81 見る物の多い今日の祭日に、時代後れの下手な音曲に耳を傾ける者は一人もない。
 かた 〔固〕(下二) 1 固メル 『メル』ひつきかためる
 十二15 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ疊ムカ、コンクリートデ固メルカシテアル。
 かた 〔語〕(四) 1 カタラフ 『ヒ』
 八51 コレヨリ鎌足、皇子ト親シ

ミ奉ルコトヲ得テ、同志ノ人々ヲモカタラヒテ、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。
 かたり ひむかしがたり・むかしものがたり・ものがたり
 かたりあ 〔語合〕(四) 1 語り合ふ 『へ』
 十二77 熱湯の海ありと語る者、舟を吞む海獸ありと談ずる者、乗組員の運命をあはれむ者、コロンブスの暴舉をあざける者、皇后の無謀をそしめる者、口々に語り合へり。
 かたりい 〔語出〕(四) 1 語り出す 『シ』
 十一17 人々皆 静まりいねし 夜中に 家組立つる 木々え今 語り出しぬ。
 かた 〔語〕(四) 7 かたる 語る
 『ラール・レ』ひものがたる
 九16 此の劍初は天叢雲劍と申し、後に改めて草薙劍と申すこととなれり。いでや此の劍の由來をかたらん。
 九47 其の夜アリふと目をさまして、人々のかたるを聞けば、一人の曰く、「若し明日中に水のある所に着かずば、駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なかるべし。」
 十二7 床柱 なげきて語る、
 「熱き國 しげる林よ 生ひ立ちし我、タガヤサン、〔略〕。」
 十39 昨日の敵は今日の友、語

ることばもうちとけて、我はたゝへつ、かの防備。かれは稱へつ、我が武勇。

十一77 図 グレース、ダーリングの生家に程近き寺院の庭上には、右手にかいを握れる少女の銅像あり、永く此の勇ましく、やさしく、且は麗しき昔物語を語れり。

十二76 9 図 熱湯の海ありと語る者、舟を呑む海獣ありと談ずる者、(略)、口々に語り合へり。

十二77 5 図 (略)、數萬の見物人は再び此の船を見ること能はざるべしと語れり。

かたわら「傍」(名) 7 カタハラ 傍
ひおんかたわら
七59 1 図 社ノカタハラニ遊就館アリ。

七89 9 図 ポートハヤガテ福井丸ノカタハラニ卸サレテ、一同乗リウツレリ。

八52 3 図 天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ、入鹿カタハラニ侍ス。

八88 6 図 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。

九29 2 図 社殿ノカタハラナル西洋風ノ建物ヲ遊就館トイヒ、(略)。

十99 8 図 紀貫之ガ(略)。トヨミタリトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラニアリ。

十二82 4 最早彈く力も盡きて、傍の石にこしを下し、(略)。

かち「勝」(名) 4 勝ひおおがち・ふざいがち
九86 1 図 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかけさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九88 1 図 (略)、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九86 9 図 勝はあなたの方のものです。
十二10 6 図 手 「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)。

かちき「勝氣」(形状) 1 勝氣
六56 5 謙信は勝氣な人で、いよいよいくさはげしくなると、じつとしては居られない。

かちく「家畜」(課名) 2 家畜
十目10 第二十三課 家畜
十83 4 第二十三課 家畜

かちく「家畜」(名) 7 家畜
十83 7 犬と猫は(略)。(略)。是等も家畜の中に數へられるが、(略)。

十83 8 (略)、家畜としてもつと大切なものは牛・馬・羊・豚等である。

十85 7 すべて家畜はよく勞らなければならぬが、とかくに之をいぢめる風がある。

十87 7 廣く家畜といへば、鳥類までも入れて言ふ。

十87 8 鳥類の中で家畜として最も多く農家に飼はれるのは雞で、(略)。

十二45 6 図 (略)、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求

むること少かりしによる。
十二46 4 図 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

がちやがちやがちや(感) 1 がちやくくくく
五62 2 圖 (略)、がちやくくくくくつわ蟲(略)。

かちゅう「河中」(名) 2 河中
十二26 10 図 (略)、繩を城下の河中に張りて、城兵のひそかに逃れ出づるを防ぐ。

十二78 7 図 十月十一日、河中に生ずる水草流れ寄り、(略)。

かちよう「花鳥」(名) 3 花鳥
七35 4 図 花鳥・山水・人物などのものやうは、うはぐすりをかくる前にゑがく。

十42 2 図 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花鳥等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ我が國輸出品ノ一ナリ。

十47 2 図 模様には全く無意味なるもあれども、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。

かちよう「家長」(名) 1 家長
十一50 3 古來アラビヤ人は馬を家族の一員と考へて、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいがる。

かつ「且」(接) 6 且
九30 5 図 カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、誰カハ義勇奉公

ノ心ヲ起サザラン。
十一65 7 (略)、暑イ時分ハ其ノ必要ナク、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

十一98 2 圖 (略)は最も狭く、且山脈低くして、東西の交通最も便利なる所に御座候。

十二29 1 図 信長、勝商の勞を賞し、且いふ、「我、明日大軍を率ゐて出發せんとす。汝も止りて我と共に行け。」と。

十二72 7 図 不義にして富み且貴きは、我に於て浮雲の如し。」

十二108 5 図 又貴族院及び衆議院は各獨立して上奏し、建議し、且臣民の請願を受くるの權能を與へられたり。

かつ「勝」(五) 4 カツ 勝ツ 勝つ
「一チーッ」
三43 8 ソレデイツデモイクサニカツタトイフコトデス。

五53 4 ソノ中ニケモノガ勝チサウニナツタノヲ見テ、(略)。

九82 2 (略)、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九83 5 図 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「是非勝つてくれ。」

がつひいちがつ・いちがついちにち・いちがつにじゅうごにち・いっせんしひやくくじゅうにねんじゅううがつじゅう

うにち・くがつ・くがつさんじゅう
にち・くがつじゅうさんにち・くがつ
ついたち・くがつとおか・くがつはつ
か・くがつふつか・くがつむいか・げ
んこうにねんさんがつ・くがつ・くが
ついつか・くがつごろ・くがつちゅう
じゅん・くがつついたち・くがつな
か・くがつにじゅうはちにち・くがつ
はつか・くがつみつか・くがつよつ
か・さんがつ・さんがつみつか・さん
がつむいか・しがつ・しがつ・しが
がつごろ・しがつじゅうごにち・し
ちがつふつか・じゅういちがつ・じ
ういちがついつか・じゅういちがつ
つか・じゅういちがつようか・じゅう
がつ・じゅうがつじゅういちにち・じ
ゅうがつじゅうしちにち・じゅうが
ちゅうじゅん・じゅうがつふつか・じ
ゅうにがつ・じゅうにがつじゅうい
ちにち・じゅうにがつじゅうごにち・じ
ゅうにがつじゅうさんにち・じゅうに
がつじゅうしちにち・じゅうにがつじ
ゅうににち・じゅうにがつじゅうよつ
か・じゅうにがつじゅうろくにち・じ
ゅうにがつとおか・せいれきいっせん
しひやくじゅうにねんはちがつみつ
か・てんしょうさんねんがつ・なん
がつなんにち・にがつ・にがつごろ・
にがつじゅういちにち・にがつむいか
・にがつよつか・はちがつ・はちがつ
さんじゅういちにち・はちがつすえ・
はちがつとおか・めいじにじゅうはち

ねんががつにじゅうしちにちごぜんご
じ・ろくがつ・ろくがつごろ・ろくが
つさんじゅうにちごにじ
かつあき「勝商」〔人名〕8 勝商と
りいかつあき
十二28 〇 略、勝商は山に上りて
のろしをあげ、走りて岡崎に到り、
家康に見えて援を求む。
十二28 〇 家康直ちに勝商をして織
田信長に見えて、長篠城の急を告げ
しむ。
十二28 〇 信長、勝商の勞を賞し、
略。
十二29 〇 勝商事急なればとて直ち
に引返す。
十二29 〇 十六日勝商は再び山上に
のろしをあげ、次いで城に入らんと
するに、不幸發見せられて、遂に敵
兵に捕へらる。
十二29 〇 勝頼、勝商に向ひていふ、
「明日城門に行きて、『援軍來らず、
速に降るべし。』と告げよ。
十二29 〇 翌日壯士十餘人、勝商を
圍みて城門に到る。
十二29 〇 勝商城に向ひ、高らかに
號んで曰く、「諸君、憂ふることな
かれ。略。圍の解けんは二三日の
内にあらん。」と。
かついえ「勝家」〔人名〕1 勝家
六50 〇 信長の古いけらいの勝家など
はこれをきらつて、てきたひました
が、かへつてほろぼされて、略。

かつお「經」(名) 1 カツヲ
七70 〇 魚類ニハイワシ・アデ・サ
バ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、
水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガア
リ、略。
かつおぎ「經木」(名) 1 かつを木
八5 〇 略、神殿の御屋根はかや
にてふき、棟にはかつを木をならべ、
兩はしに千木をうちちがへたり。
かつか「閣下」(名) 2 閣下
十40 〇 閣下 此の方面の戦闘に
二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何
にぞ。と。
十一49 〇 略、大將は何心なく外
を眺めてゐると、前の馬主が再び馬
をひいて來て、「閣下、三千金が惜
しう御座いますか。
がつか「学科」(名) 4 學科
十57 〇 課業は術科と學科との二
つにて、略。
十57 〇 略、學科は夜分又は雨
天等を利用して學習致し候。
十57 〇 略、學科は讀法の講義
及び毎日の術科に關する説明に御座
候。
十58 〇 略、又學科も小學校を
卒業したる者には餘りむづかしとも
覺え申さず候。
がつき「楽器」(名) 1 ガクキ
七27 〇 ドンナガクキガアツテモ、手
ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出ス
コトハ出來マスマイ。

かつぐ「担」(五) 6 カツグ かつぐ
「一い」
一47 〇 ハシゴヲカツイデイソグ。
四59 〇 アニ神サマガタノオトモ
ヲシテ、フクロヲカツイデイラ
ツシヤツタノデ、オソクオナリ
ニナツタノデス。
六66 〇 熊ハ略、カズノ子ノ俵ヲ
カツイデ、ニゲテ行クコトガアルト
イヒマス。
六66 〇 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ
通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、
略。
八14 〇 村デハ農夫ガクハヲカツイ
デ、タンボヘ出ル時デアル。
八23 〇 その中に下男が麥俵をかつい
で、裏門から出て來ました。
かつけい「活計」(名) 1 活計
十二92 〇 身分不相當の活計は産を
破り、家を亡す基なり。
かつこ「確固」(形状) 1 確固
十二33 〇 外温順・愛敬の德を守
りて、内確固たる志操を持し、如何
なる事變に際しても、自若として其
の常を失はざるは日本女子の美德な
り。
がっこう「學校」(名) 31 ガクカウ
がくかう 學校とくこうとうじよがっ
う・しはんがっこう・しはんがっ
もんない
三37 〇 さあ、これからがくかう
へ行きませう。

三三7 7 がくかうへもつて行くものは、みんなこのふろしきの中につつんであります。
 四一2 私どものがくかうは町の中ほどにあります。
 四一4 ふでやかみを賣るみせも、本を賣るうちも、みんながくかうのきんじよにあります。
 四一6 がくかうの西どなりはやくばで、(略)。
 四93 私ドモノガクカウデモ、ケサ天長セツノシキガアリマシタ。
 四四1 あなたがたは何じかんがくかうに居ますか。
 四六5 今日は早くから學校へ行つて、みんなで雪なげをしませう。
 五六6 園 「あさつては學校がお休ですから、(略)。
 六三8 學校で徳川光圀の話を聞いて、紙などをそまつにしてはならないと思つた。
 六三5 學校からかへつてから、をばさんの所へ使ひに行つた。
 六三1 學校で雪投をして遊んだ。
 六六7 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、今年で三十年になります。
 六七2 4 學校でいつも先生にほめられ、友だちにもすかれた善い子供は、おとなになつてから、りつばな人になりました。

六七2 6 學校で先生にしかられ、友だちにもきはれた悪い子供は、おとなになつてから、大ていつまらない人になつてゐます。
 七〇5 園 (略)明治丸の船長は、一日その町の學校へまねかれて、航海の話をなしたり。
 七〇7 園 「私も子供の時には毎日この學校へ通つて、皆さんと同じ様に、あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたりしてゐたのです。
 七二1 園 今日このなつかしい學校へ来て、皆さんにお話するのは、何よりもうれしうございます。
 八四9 學校デハモウ授業ガハジマツタ。
 九〇7 園 學生・生徒の帽子にも皆學校の徽章あり。
 一〇三4 園 (略)、今や足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、學校・病院・銀行等皆備ラザルナシ。
 一〇八2 園 (略)、又政府の費用を以て學校を建つる等、厚く保護の方法を講ぜり。
 一一二2 7 園 村役場と學校とは相並びて村の中央に在り。
 一一三3 8 園 其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵するが故に、兒童は皆よく之になつて、學校を思ふ心厚く、卒業後も尚學校の門に

出入するを樂みとせり。
 一一一三4 園 (略)、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。
 一一一三8 園 (略)、其の翌年學校の經費を議するに當り、(略)。
 一一一五2 園 (略)、其の二事業として杉・檜等の植林を營み、其の利益を以て學校の基本とし、(略)。
 一二34 8 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、(略)。
 一二三六1 園 隨ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、學校ノ増設ヲ要スルコト日一日ヨリ急ナリ。
 一二三六10 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。
 一二九8 7 園 市街・道路を不潔にし、官廳・學校・神社・佛閣等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。
 がっこうへもっていくもの「課名」2
 がくかうへもっていくもの
 三目14 十三 がくかうへもつていくもの
 三三七5 十三 がくかうへもつていくもの
 がっこうらくせいしき「學校落成式」
 「課名」2 學校落成式
 十二目10 第九課 學校落成式
 十二34 2 第九課 學校落成式
 かっこう「各國」(名)1 各國々せか

十二五〇10 園 (略)、世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、全世界ノ人ハ皆我が商賣ノ花客ナリ。
 かっこうしようにん「各國商人」(名)1 各國商人
 十二五26 園 近年各國商人皆爭ヒテ其ノ方法ヲ講ジ、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。
 かつじ「活字」(名)5 活字
 十197 活版所では、活字拾ひがそれを讀みながら、活字を拾つて並べる。
 十201 (略)、幾度でも其の活字を抜きかへて植直す。
 十218 活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、同じ活字を何度でも組立てて使へる。
 十219 活版は(略)、同じ活字を何度でも組立てて使へる。
 十221 又活字は何時でも直に植ゑることが出来るが、木版では一枚づつ彫るから、手間が幾層倍もかゝる。
 かつじひろい「活字拾」(名)1 活字拾ひ
 十195 活版所では、活字拾ひがそれを讀みながら、活字を拾つて並べる。
 がっしゅうこく「合衆國」(名)1 合衆國
 八七6 4 園 北アメリカには合衆國といふ國あり。農業・工業・商業共に盛にして、國甚だ富めり。

がつす「合」(サ変) 6 合ス 合す

「一シースル」

八95 6 図 名古屋の南に熱田あり。今

合して名古屋市の一部となれり。

九15 10 図 赤堀川ハ(略)ニツニ分レ、

(略)、一ハ西南ニ向ヒ、權現堂川ニ

合シテ江戸川トナル。

九18 6 図 利根川ハ(略)、本流・支

流ノ長サヲ合スレバ、一千餘里ニ及

ブ。

十一70 9 図 例へば六十人の集會に其

の中の一人若し十分を後るとせば、

六十人の時間の損失は合して十時間

となるべし。

十一85 8 図 (略)、コレヲ練條機ト稱

スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ

延シ、(略)、次第二ヨリヲカケテ絲

ノ形ニ近ツカシム。

十二59 7 図 倫敦は人口四百八十萬、

接續都會を合すれば七百三十萬の多

きに達す。

かつせん「合戦」(名) 4 合戦 合はち

がつせん

七5 8 図 正行コノ度ハサイゴノ合戦

セントテ、(略)。

七6 4 図 父ハ臣ヲ合戦ノ場ニモト

モナハズ、『略』ト申シ殘シタリ。

七7 2 図 度ノ合戦ニハ、師直

ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラガ

クビヲカラニ取ラスルカ、(略)。」

七8 2 図 度ノ合戦サダメテナ

ンギナルベケレド、進ムモ退クモ時

ヲ見テスベシ。

かつちんかつちん(感) 4 かつちん、

かつちん

四48 5 図 といはあさからかつ

ちん、かつちん。

四49 3 図 (略)、ばんまでかうし

て、かつちん、かつちん。

四49 5 図 といはばんでもかつ

ちん、かつちん。

四50 3 図 (略)、あさまでかうし

て、かつちん、かつちん。

かつて「勝手」(形状) 1 勝手

十一12 4 例へば時計ヲ造ルノニ、其

ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手

ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時

計ニ組立テルコトハ出来ナイ。

かつて「嘗」(副) 2 かつて

九95 8 図 天皇陛下かつてこに行幸

あり、其の風景を賞し給ひて、幸湖

の名を下し賜へり。

十二66 5 図 又かつて栗鼠の大群ウラ

ル山中の一都會に現れしが、(略)。

かつてがまし「勝手」(形) 1 勝手

がましい「一イ」

八67 7 図 (略)、勝手がましい御願で

すが、どうか今四五日のところ御ゆ

るしを願ひ度う御座います。

かつどう「活動」(名) 3 活動

十一69 4 図 活動するのみにて休養す

ることなければ心身いつか勞れて、

遂には活動にたへざるに至る。

十一71 1 図 (略)、今日の如く通信交

通の機關發達し、社會の活動敏速な
る時代にありては、時間は金錢より
も貴し。

十二91 9 図 (略)、むつまじく打揃う

て夕の膳に向ふ時、一日の勞苦は忘

れられて、更に明日の活動を思ふな

り。

かつどう「合」(サ変) 4 活動ス

活動す「一シースル」一セ

十一77 4 図 腦ハ其ノ報告ニヨツテ判別

シ、手・足・口等ニ命令シテ活動セ

シム。

十一69 3 図 活動するのみにて休養す

ることなければ心身いつか勞れて、

遂には活動にたへざるに至る。

十一81 2 図 (略)、鵠は盛に活動し、

ひたすら其の獲物の多からんことを

競ふ。

十二41 4 図 中岳は現今活動せる部分

にして、其の火口は(略)。

かつば「合羽」(名) 1 合羽

七49 1 図 日本紙ハ笑ツテ、「僕等ノ

仲間ニハカラカサニナツタリ、合羽

ニナツタリスルモノガアル。

かつは「且」(副) 1 且は

十一71 7 図 (略)少女の銅像あり、永

く此の勇ましく、やさしく、且は麗

しき昔物語を語れり。

かつばん「活版」(名) 2 活版

十一21 8 活版は印刷が終れば、其の活

字を取離すことが出来るから、同じ

活字を何度でも組立てて使へる。

十二23 3 それ故近年は木版が段々すた
れて、活版を用ひることが多くなつ
た。

かつばんじょ「活版所」(名) 2 活版所

十一19 5 かうして出来上つたものを活

版所へ渡す。

十一19 5 活版所では、活字拾ひがそ
れを讀みながら、活字を拾つて並べ
る。

かつばんずり「活版刷」(名) 1 活版刷

十一21 4 是は活版刷の本の造り方であ
るが、この外に木版刷の本もある。

かつより「勝頼」(人名) 2 勝頼 かつ

けだかつより

十二29 6 図 勝頼、勝商に向ひてい

ふ、「明日城門に行きて、『援軍來ら

ず、速に降るべし。』と告げよ。

十二30 2 図 勝頼怒りて之を殺せり。

かていわらく「家庭和楽」(名) 1 家

庭和樂

十二91 6 図 主婦は又常に家庭和樂の

中心となりて、家内一同を樂しまし

むべし。

かど「角」(名) 4 カド 角

一35 2 カド ニハゴフクヤガアリ

マス。

八42 1 図 (略)、角の呉服屋が焼けてゐ

るのださうだ。

十46 2 図 右の第八圖の角を取れば、

左の第九圖を得、(略)。

十46 4 図 (略)、右の第十圖の八角形

の角を圓くすれば、左の第十一圖を

得。

かど「門」(名) 1 門

十一516 図「笑フ門ニハ福来ル。」トイヘリ。

かどう「家道」(名) 1 家道

十一5110 図 一家和合セザル時ハ家道次第二オトロヘテ、笑聲ノ戸ヨリモル、事ナカルベシ。

かとうきよまさ「加藤清正」(人名) 1 加藤清正

八938 図 名古屋城は(略)、其の天守閣は加藤清正のきづきしものなり。

かとうぜんさく「加藤善作」(人名) 1 加藤善作

十一275 図 十一月二十五日 加藤善作 内山五百吉様

かとうぜんさくさま「加藤善作様」(人名) 1 加藤善作様

十一605 図 一月二十五日 内山五百吉 加藤善作様

かとうよしあきら「加藤嘉明」(人名) 1 加藤嘉明

十二374 図 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、(略)。

かどぐち「門口」(名) 1 カドグチ

二265 図 オトウサン ハマダカヘリマセン。トモキチ ハシンパイシテ、カドグチヘデテ ミマシタ。

かどまつ「門松」(名) 1 カドマツ

二276 図 ドコノイヘニモ カドマツガタテ アリマス。

かとり「香取」(名) 5 香取 香取

九174 図 中ニモ香取・息栖ノ兩社ハ

北浦ノホトリナル鹿島トトモニ三社ノ名アリ。

九178 図 香取・息栖ノ一ノ鳥居ハ何レモ川ノ中ニ立テリ。

十一304 図 諸子ハ數多アル我ガ軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略)。(略)。

鹿島・香取ハ何レモ上古ノ武神ヲマツレル神官ノ名ナリ。

十一322 図 戦艦ハ軍艦中最モ優勢ナルモノニシテ、(略)。(略)。安藝・薩摩・鹿島・香取等はナリ。

十一32 図 戦艦香取

かとりじんぐう「香取神宮」(名) 1 香取神宮

九17 図 香取神宮

かな「仮名」ハカタカナ

かな(終助) 3 かな

十一954 図 古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬるかな。

十二25 図 承けつぎし國の柱の動きなく 榮えゆく代を尚ひのるかな。

十二26 図 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。

かない「家内」(名) 7 家内

七115 図 (略)、米にこなしで、俵につめて、家内そろつて、ゑ顔にゑ顔。

十二88 図 出入口の混雑せる程なれば、一事が萬事、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

十二894 図 家内をよく整頓せる程の家は日々ふき掃除も必ず行届きて

清潔なるものなり。

十二895 図 凡そ家内の掃除は座敷・居間・臺所のみならず、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。

十二904 図 一家中に病人なき程仕合なる事なし。家内には老人あり、子供あり。

十二908 図 若し家内に傳染病等にかゝるものあらば、(略)、世間へ對しても相濟まぬ次第ならずや。

十二917 図 家内能く和合して、互の心にわたかまりなく、むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ時、(略)。

かないいちどう「家内一同」(名) 1 家内一同

十二916 図 主婦は又常に家庭和樂の中心となりて、家内一同を樂しましむべし。

かなう「適」(四五) 6 カナフ かなふ 適ふ「ハ・ヒ・フ・ヘ」

六515 支那からは大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、もとより強い日本兵にはかなひません。

七477 図 「君ラハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ラハ裏表トモニ使ハレル。便利ニオイテハトモカナフマ

イ」。

八708 図 かくて二三日を過せしに、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、(略)、身體は全く力なきにいたれり。

十541 図 まして戦場にては、進まんとすれば、大人げなしとあざけり、退く時には、今はかなふまじとそしる。

十二71 図 敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとせり。

十二6010 図 (略) 壯大なる建築の數々高く中空にそびゆるのみならず、人家も多くは六七層にして、町幅も亦之に適へり。

かながさき ぐえちぜんのくにながさき

かなざわ「金沢」(地名) 1 金澤

九25 図 金澤

かなし「悲」(形) 2 かなし 悲し

『シ・シキ』

十548 図 白髪頭にて若き人と先を争ふもはゞかりあり。悲しきは老の白髪なり。」

十一54 図 歌書よりも軍書にかなし吉野山。

かなしい「悲」(形) 4 カナシイ かなしい 『イ・イク』

七32 図 ウチヘカヘツテ見ルト、(略)、父モ母モシンデシマツ

テ、ジブンノウチモアリマセン、(略)。何ダカカナシクテカナシ

クテタマリマセン。

七32 何ダカカナシクテカナシクテタマリマセン。

七38 アマリカナシク ナツタカラ、オトヒメノイツタコトモ

ワスレテ、タマテバコヲアケテ
見ルト、(略)。

六六二(副) 「わるい子どもが大ぜい
でわたしの手からもぎ取つて、は
ふつた音はしましたが、かなしいこ
とに目が見えず、さがすことさへ出
来ません。」

かなしさ「悲」(名) 1 カナシサ

七三(副) 正成ハタシテ戦死シテ、ソ
ノクビハ家ニ送ラレタリ。正行ハコ
レヲ見テ、カナシサノアマリ、ツト
立チテ別室ニ行キタリ。

かなしみ「悲」(名) 1 悲

十一五三(副) 己ヒトリ樂シトテ、他人
ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ
人ナリ。

かなしみたまう「悲給」(四) 1 カナ

シミタマフ「一ヒ」

七四(副) 父ノ汝ヲカヘシタマヒシ
ハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナ
シミタマヒテニアラズ。

かなしみもう「悲中」(四) 1 かな
しみ申す「一ス」

九三(副) 此の地に八岐の大蛇とて
(略)、毎年來りて、我が娘を取食
ひ、今また残りの一人をも食はんと
す。それをかなしみ申すなり。」

かなしむ「悲」(四・五) 5 カナシム
悲シム 悲しむ「一ミームーン」
ひなきかなしむ

二五(副) オヂイサンハ(略)、ソノ
犬ヲコロシテシマヒマシタ。(略)

ヨイオヂイサンハコレヲミテ、
タイソウカナシンデ、(略)。

九八〇(副) 筑紫へ下る道に、昔より相
知りし驛長ありて、道眞の今の身の
上を深く悲しみに、(略)。

十三二(副) サレバ平左衛門ノ死セシ時
ハ、中國ノ人々、(略) 父母ニ別ル
、如ク悲シミタリトナリ。

十七六(副) 物事ヲ知分クルモ、善惡ヲ
ワキマフルモ、喜ブモ怒ルモ悲シム
モ皆腦ノ作用ナリ。

十二三(副) 保の母は一時に二子を
失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの
外、「(略)」とて、少しも悲しむ色
を見せざりき。

かなた「彼方」(代名) 2 彼方

十一八二(副) 數隻の漁舟相並び、(略)、
百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に
沈み、彼處にかくれ、此處にあらは
れ、(略)。

十二八三(副) (略)、輕く浮立つた調子に、
野越え、山越え、ふわりくと春霞
の彼方へ連れて行かれるやうな心持
になる。

かなだらけ「金盞」(名) 1 金ダラヒ
六二六(副) 銅ハ(略)。(略)。金ダラ
ヒニモナレバ、私ノヤウナヤクワン
ニモナリマス。

かなめ「要」(人名) ひわたなべかなめ
かなめ「要」(名) 1 かなめ
四八二(副) 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、(略)。

かなもの「金物」(名) 1 金物

八六(副) 材は皆ひのきの白木を用
ひ、金色の金物きら／＼と日にかゞ
やけり。

かなものや「金物屋」(名) 2 金物ヤ

金物屋
六二四(副) アル晩金物ヤノ店デ、ヤクワ
ントテツピンガメイ／＼ジマンバナ
シヲシマシタ。

七三(副) (略)、出口ニハ鍋・釜・鐵
ビン・火バシナドヲ賣ル金物屋ト、

(略)ヲ賣ル荒物屋ガアル。
かならず「必」(副) 22 かならず 必
ズ 必ず

六八五(副) (略)、心はかならず高く
もて、たとひ身分はひくゝとも、輕
くとも。

八一六(副) (略)、一生に一度は、かな
らず伊勢に参拜せんとかげざるも
のなし。

八三(副) かゝるたふとき御宮なれ
ば、(略)、皇室及び國家に大事あれ
ば、かならずこれを告げたまふ。

八二六(副) 其の後は毎朝必ず早く起き
て、(略)、自分はどうかして白雀を
見つけようと、たづねまはりました。

九一(副) 代々の天皇の御位に即かせ
給ふ時には、必ず三種の神器を受け
つぎ給ふ。

九一四(副) 本月二十日までには必ず
發送仕るべく候。

九三〇(副) 春秋兩度ノ大祭ニハ必ず勅

使ヲ差立テラレ、(略)。

九六四(副) 空氣は(略)、凡そ少しに
てもすぎ間ある所には、必ず存在せ
ずといふこと無し。

九六八(副) 外國人の我が國に來る者亦
必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞
せざるものなし。

十八五(副) 其の上戦争には必ず無くては
ならぬもので、兵器・糧食を運送し、
(略)、勇士に軍功を立てさせるもの
は馬である。

十一五七(副) 群中には必ず雌蜂・雄蜂
・働蜂の三種あり。

十一一七(副) (略)、やがて忠臣の起り
て勤王の兵を擧げ、必ず御心を安
んじ奉るべきことを聞え上げたるな
り。

十一四一(副) (略)、たとひ用心きび
しくとも、長き間には必ず討取るべ
き折に出會ふべし。」

十一八(副) 鵜の鮎を吞むは必ず頭よ
りす。

十二二九(副) 「明日城門に行きて、
『(略)』と告げよ。さらば我必ず重
く汝を賞せん。」

十二三八(副) (略) 麻頗之を見て心
安からず、「相如にあはば必ず辱し
めん。」と言ひ居たり。

十二七〇(副) 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇(副) 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二71 6 遠き慮なければ、必ず近き憂あり。

十二72 8 (略) 何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、(略)。

十二89 4 家内のよく整頓せる程の家は日々のふき掃除も必ず行届きて清潔なるものなり。

十二93 8 (略) 「孔子は年少にして禮を好めり。我死せば、汝必ず之を師とせよ。」

かならずしも「必」(副) 2 必ずしも
十二72 1 富貴は人の共に欲する所、貧賤は人の共にいとふ所なりといへども、富貴なる者必ずしも樂しからず。

十二72 2 貧賤なる者必ずしも苦しからず。

カナリヤとう「地名」1 カナリヤ島
十二77 7 パロスを出帆して七日目に、亞弗利加の北西岸に近きカナリヤ島に着し、(略)。

かに「蟹」(名) 3 カニ
一10 2 サルトカニ
七71 2 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナダガズンデキル。

七71 3 エビノピン／＼ハネタリ、カニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ川ニスムモノトチガハナイガ、(略)。

かぬ「兼」(下二) 1 かぬ「一ネ」
十一87 10 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは醸造の業と建築の業

とをかねたりといはんか。

かぬ「難」 1 くらえかぬ・まにあいかぬ・よみかぬ
かね「金」(名) 15 金 金ひあかがね・おかね・こがね・はりがね・ひうちがね

五56 8 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ出シマシタガ、ソレカラ後ニハ石ト金ヲウチ合セテ出スヤウニナリマシタ。

六24 8 「金ニハイロ／＼アリマスガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、(略)銅デセウ。

六32 1 ほんとのまうけでない金は一厘でも取つてはならない。」

七40 2 「あゝ、金がない程残念なことはない。

七40 8 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、「(略)。」

七41 8 「これは又どうした金か。
七42 1 このお金は(略)、父の渡してくれた金でございます。

八69 1 此のかはせの金は、ほんの僅かですが、何かすきな物を買つて上げて下さい。

九29 6 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、(略)、日本第一ノ金ノ大鳥居ナリ。
九77 6 (略)、貯蓄銀行ニテハ五圓ヨリ少キ金ニテモ預カル。

十一47 6 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。
十一47 8 馬主はしばらく大將の顔を

見つめてゐたが、靜かに其の金を拾ひ上げ、(略)。

十一49 2 「あれ程の名馬はいくら金を拂つても惜しくはない。」

十一70 10 「時は金なり。」といふ古言あれども、(略)、時間は金銭よりも貴し。

十一109 5 金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎてもチョンガーで、大人の仲間入が出来ない。

かね「鐘」(名) 4 カネ かねひはやがね
一46 1 カネガナル。ヒケシガトンデイク。

七85 9 きりや雪で、方角の分らなくなつた時には、(略)。そんな時には海の深さははかつたり、きてきやかねを鳴らしたりします。

八41 4 「ヂヤン、ヂヤン、ヂヤン。」かねが鳴る。火事だ、火事だ。

八61 9 (略)、矢走をさして歸り行く白帆を送る夕風に、聲程近し、三井のかね。

かねがね「兼兼」(副) 1 かね／＼
七18 2 又母がかね／＼めづらしい草花をほしくと申して居りますから、(略)。

かねじやく「曲尺」(名) 2 カネ尺
六18 1 物サシニハカネ尺トクデラ尺トアリ。

六18 2 カネ尺ハクデラ尺ヨリ少シミジカク、ソノ一尺ハクデラ尺ノハ

寸ニアタル。

かねたが「金種」(名) 1 金たが
八32 4 僕の家で一度つるべの金たががこはれた時、つくるひを頼んだ事があつたが、(略)。

*かねだかひきんだか
かねて「兼」(副) 5 カネテ かねてあねて

六8 1 私はかねてのやくそく通り、二三人の友だちと遠足に出かけました。

七57 6 宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫眞ニテ見知リタル二重橋カ、レリ。
十一36 (略) あへらじとあねて思へばあづさ弓 なき數にいる名をぞとむる。

十一36 1 當總督府の經營も着着其の効を見るに至り候事、かねて御承知の通りに候處、(略)。

十一63 3 かねて御賛同下され候故近藤大尉記念碑、いよく出来上り候については、(略)。

かの「彼」(連体) 12 カノ かの彼の

八30 8 (略)、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。(略)。工恐ル／＼近ヨリテ見レバ、コハ如何ニ、カノ死人ト見エシハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。

九3 7 尊、「さらば我汝等のために其の大蛇を退治せん。」とて、(略)

待ち給ひしに、やゝありてかの大蛇あらはれ出で、(略)。

九45 図 かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、劔の名を天叢雲劔と申せり。

九39 図 然レドモカノ名高キ箱根七湯ハ、開ケ行ク明治ノ御代ト共ニ益々サカエテ、浴客年ニ其ノ數ヲ加フ。

九47 9 図 其の夜アリふと目をさまして、人々のかたるを聞けば、(略)。又一人、「然らばかの子供の乗れる駱駝を殺さん。」といふ。

九24 9 図 張良、橋上ニテ白髮ノ一老人ニアフ。(略)。良此ノ度コソハト、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、シバラクアリテ、カノ老人來レリ。

十39 6 図 昨日の敵は今日の友、語ることもうちとけて、我はたゝへつ、かの防備。

十一55 5 隊中にピエールといふ(略)少年鼓手があった。(略)。(略)、むざんや、かの勇ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。

十一72 9 図 或夜小僧住持の居間に來りて、「かしこに行きて彼の畫師の有様を見給へ。」とささやくに、(略)。

十一87 2 図 加フルニ彼ノ蠟燭ノ心トスル太キ絲、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲、細大意ノマ、ニシテ、(略)。

十二32 8 図 かの山内一豊の妻が貧

苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略) 形名の妻と其の徳を同じうすとやいはん。

十二85 2 (略) 一人の紳士があつた。(略)、其のバイオリンを取つて彈始めた。(略)。かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。

かばひしらかば

かばかり「斯許」(副) 1 かばかり

九63 9 図 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、(略) 蝦夷も遂に全く皇威に服するに至れり。かばかりの大功ありし人故、天皇の御信任も厚く、(略)。

かばね「屍」(名) 4 かばね

九64 1 図 之をほうむりし時は、(略)、かばねを宮城の方に向ひて立たせ、(略)。

十一14 7 図 (略)、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。

十二116 2 図 海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね、(略)。

十二116 2 図 海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね、(略)。

かばん「籠」(名) 2 かばん

五39 6 かばんを持つて走つて行く人もあります。

十84 6 其の皮は革に製して、かばんや靴などを造り、(略)。

がひつ「画筆」(名) 1 畫筆

十一72 9 図 「君は畫家として一家を成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。

かぶひやくひやくかぶ・きりかぶ

がぶがぶ(副) 1 がぶがぶ

三41 8 (略)、川の中へはいりました。がぶがぶと水をのんで、とうとうしんでしまひました。

かぶりもの「被物」(課名) 2 かぶりもの

九目2 第十五課 かぶりもの

九49 9 第十五課 かぶりもの

かぶりもの「被物」(名) 2 かぶりもの

九49 10 図 路行く人のかぶりもの、中折・鳥打・山高や、シルクハットと類多し。

九52 10 図 かぶり物にはあらねども、手ぬぐひ三尺引きしぼり、頭に結ぶはち巻は (略)。

かぶる「被」(四・五) 7 カブル かぶる

三33 3 ナヘヲウエテキル女ハ、マルイカサヲカブツテ、アカイタスキヲカケテ、(略)。

五26 7 めざりは(略)、その釜をあたまにかぶつて、両手をついてゐざり出しました。

六36 2 (略)、うちではすゝはきをした。僕も手ぬぐひをかぶつて、手つだひをした。

九52 6 図 車夫のかぶるは形より

まんぢゆう笠の名をかし。

十一80 2 図 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみのを着く。

十一108 9 男の冠をかぶり、其のひもを長くたらし、小馬に乗つて、田舎道を通るのを見ると、(略)。

十一110 8 京城地方の婦人がたま／＼外出する時には、うちかけの様なものをかぶつて、目ばかり出してゐる。

かふん「花粉」(名) 2 花粉 花粉

十二20 5 其の時花の中の花粉は是等の蟲に着いて、一つの花から他の花に傳達される。

十二20 7 植物の花には、同種の他の花の花粉を受けると、良い實を結ぶものがある。

かべ「壁」(名) 6 カベ かべ 壁

四5 1 図 あのこちらに白いかべが見えませう。あれがうちです。

七25 9 大工ガ家ヲタテルノモ、左官ガカベヲヌルノモ、(略)、皆手デスルノデス。

八28 1 図 「我、此ノゴロ小サキ堂ヲ建テタリ。四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。」

十81 5 図 其の家はほつたて小屋の如く、(略)。唯かつらなどにて、かやを結びて壁に代へ、(略)。

十一35 5 図 正平の昔、楠木正行が決死の士百四十三名の名字を壁に書連ね、(略)。

ね、(略)。

十一89 5 図 蟻は（略）、多くは地下に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

かへい「貨幣」〔課名〕2 貨幣

九目22 第二十五課 貨幣

九78 第二十五課 貨幣

かへい「貨幣」(名) 8 貨幣

九89 1 図 (略)、世ノ進ムニシタガヒ、或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。貨幣即チ是ナリ。

九89 1 図 貨幣トシタル物品ハ時代ニヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。貝・毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコトアリ。

九89 4 図 (略)、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。

九89 6 図 今ノ文明諸國ノ貨幣ニハ主トシテ金銀ヲ用フ。

九89 10 図 是金銀ハ價高ク、保存スルニモ都合ヨク、(略)、分合ノ爲ニ直段ノ割合ヲ變ズルコトナク、(略)、成分ニ異同ナクシテ、直段ノ變動モ少キ等、貨幣トスルニ最モ便利ナレバナリ。

九90 2 図 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨・銀貨・銅貨ノ三種アリ。

九90 8 図 紙幣ハ貨幣ノ代用トナルモノニシテ、輕クシテ取扱ニ都合ヨキコトハ貨幣ニマサレリ。

九90 10 図 紙幣ハ(略)、輕クシテ取扱

ニ都合ヨキコトハ貨幣ニマサレリ。かべつち「壁土」(名) 1 かべ土

十四1 1 図 圖 かね土 塗込められてあらはれぬぬきもあるなり。

かほく「花木」(名) 1 花木

八81 9 図 かゝる地方にては氣候つねに寒冷にして、美しき花木を見ること能はず。

かぼちゃ「南瓜」(名) 5 カボチャ

五49 4 南瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔・西瓜・トウ瓜・カボチャ・ヘチマナドヲ瓜トイフ。

五49 7 マツ形カライヘバ、南瓜・白瓜・ヘチマハ細長ク、トウ瓜ハ太ク、カボチャハ平タイ。

五50 1 南瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、カボチャニハデコボコガアル。

五50 5 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜ハ中ガ赤イ。

五51 5 (略)、ニナクレバタベラレナイノハ、カボチャトトウ瓜トタ顔デアル。

かま「釜」(名) 12 かま 釜

五22 6 かまをぬすまれたものがありました。

五23 1 (略)、行つて見ると、なるほどそのかまがあります。

五23 3 図 「この釜は昔から私のうちにある釜です。」

五23 3 図 「この釜は昔から私のうちにある釜です。」

五23 8 やく人は二人をよび出して、

その釜を前において取りしらべました。

五24 2 図 「これは私が毎日使つてゐた釜でございます。」

五24 8 図 どうして釜のやうな重い物が持つて行かれませう。

五25 3 図 その釜は私が前から持つてゐたのでございます。」

五26 3 図 この釜はお前の物にちがひあるまい。

五26 6 むざりは(略)、その釜をあたにかぶつて、両手をついてゐざり出しました。

六27 2 図 メシヲタク釜モ鐵デス。

七38 3 (略)、出口ニハ鍋・釜・鐵ビン・火バシナドヲ賣ル金物屋ト、(略)ガアル。

かま「鎌」(名) 1 鎌

八32 1 ある時は鎌をきたへてゐた。

がま「蒲」(名) 1 ガマ

四60 3 図 (略)、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。」

かまう「構」(五) 1 かまふ 「ハ」

九85 10 図 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかせせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

かまえ へおんかまえ・こころがまえす

かまえる へまぢかまえる

かまくら「鎌倉」〔課名〕2 鎌倉

十二目7 第六課 鎌倉

十二23 6 第六課 鎌倉

かまくらぐう「鎌倉宮」(名) 1 鎌倉宮

十二25 5 図 鎌倉宮にまうでは、盡きせぬ親王のみうらみに 悲憤の涙 わきぬべし。

がましい へかつてがましい

かまたり「鎌足」(人名) 8 鎌足

足 へなかとみのかまたり・ふじわらのかまたり

八50 4 図 鎌足(略)、大事ヲ成スニハ此ノ皇子ヲイタマキ奉ルヨリ他ニ道ナシト思ヒシガ、(略)。

八50 9 図 アル日皇子、寺ノニハニテケマリノ會ヲナシ給ヒ、鎌足モ参リ合セタリ。

八51 2 図 (略)、皇子ノクツヌゲタリ。鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツキテ皇子ニサ、ゲシニ、(略)。

八51 4 図 コレヨリ鎌足、皇子ト親シミ奉ルコトヲ得テ、(略)、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。

八52 5 図 鎌足ハ弓矢ヲ持ツテ御後ニシタガヘリ。

八54 2 図 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。

十100 8 図 (略)、多武峯ナル談山神社ニ達ス。(略)。社殿ノ後ノ山ニハ鎌

足ノ墓アリ。

十101 5 図 コ、二程近キ飛鳥ノ安居院

ハ古ノ飛鳥寺ノ跡ニシテ、(略)、鎌

足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リ

シハ、即チ此ノ寺ナリ。

かまたりら「鎌足等」「人名」1 鎌足等

ハ51 8 図 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲ

オコナハントシ、アラカジメ其ノ手

ハズヲ定メタリ。

かまど「竈」(名) 3 カマド かまど

二58 6 ヨイオデイサンハソノハ

ヒヲモラツテキテ、カマドノ

下ニオキマシタ。

七34 9 図 やき物をつくるには、土又

は石のこをねりかためてかわかし、

かまどに入れて焼く。

十二90 1 図 主婦は寝に就く前、先づ

竈の下より火消壺までもよく検査し

て、(略)火の用心を忘れざる様に

すべし。

かまぬすびと「釜盗人」(課名) 2 か

まぬすびと

五目10 第九 かまぬすびと

五22 5 第九 かまぬすびと

かまぬすびと「釜盗人」(名) 1 釜ぬ

す人

五27 1 図 「こら待て、ゐざり。釜ぬ

す人はその方にきまつたぞ。」

かまびすし「喧」(形) 3 カマビスシ

かまびすし「一シーシク」

七54 5 図 右ノ方ハ魚市場ニテ、賣買

ノコエカマビスシ。

九74 1 図 (略)、川上の堤防切れ、

隣村は大半水中にあり、救をもとむ

る聲かまびすしく候故、(略)。

十二79 2 図 「何處ぞ。」「すぐ其處

に。」といふ聲かまびすしく、(略)、

人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所

を知らず。

かみ「上」(名) 4 上りかざかみ・か

わかみ・そのかみ

十一53 1 図 (略)、常ニ其ノ行ヲツ、

シミ、上、天ニ恥ヂズ、下、地ニ恥

ヂズ、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥

ヂザル工夫ヲナスベシ。

十二112 1 図 上元帥より下一卒に至る

まで、(略)上下の分別最も正し。

十二112 6 図 下は上を敬し、上は下を

あはれみ、一致協同して王事に勤む

べし。

十二112 6 図 下は上を敬し、上は下を

あはれみ、一致協同して王事に勤む

べし。

かみ「神」(名) 3 神々あにがみさま

がた・あまてらすおおみかみ・うじが

み・おおかみ・おおみかみ

九83 3 五人の騎手は神に勝利をいの

つて、第二のあひづを待ちかまへて

ゐる。

十二3 3 図 國民は一つ心に守りけ

り、遠つ御祖の神の教を。

十二85 4 かの情深い紳士は誰であつ

たか、老人も知らぬ、聴衆も知ら

ぬ。一同は唯神の仕業とのみ思つた。

かみ「紙」(名) 24 カミ かみ 紙

おてがみ・からかみ・きょうとからの

てがみ・じがみ・てがみ・といあわせ

のてがみ・ももをおくるてがみ・りよ

こうさきのちちにおくるてがみ

二19 2 ソレヲモツテ、ウチヘカ

ヘツテ、カミヲソノカタチニ

キリマシタ。

三35 2 みちでほたるを一びき

つかまへて、母からかみをもら

つてつみしました。

三35 3 あをいひかりがかみの

上からすいてみえます。

三35 8 (略)、いそいでかみをあ

けてみると、ほたるはやはり

中にゐます。

四1 3 ふでやかみを賣るみせ

も、本を賣るうちも、みんなが

くかうのきんじよにあります。

四23 6 オマツノ店ニハ、糸ヤ

キレヤフデヤカミガナラベテ

アリマス。

四25 5 オマツハ糸トフデヲ紙

ニツツンデ、(略)。

四26 1 オトミハマルクキツタ白

イ紙ヲ三ツ出シテ、「三十セン

アゲマスカラ、コレデトツテク

ダサイ。」

四43 2 図 のしあはびといふの

は、あはびの肉をのして、紙

のやうにうすくしたものです。

四43 4 図 それがだんだんにかは

つて、今では紙で作つたのし

をつかふやうになりました。

六36 8 學校で徳川光圀の話を聞いて、紙などをそまつにしてはならな

いと思つた。

六71 1 字を書くのに、(略)、書きそ

こなつて、紙をたくさんほごにし

りするやうな、そつつかしい子供も

ございました。

六74 2 むねの上には紙のぬさを立て

て、色どつた大きな弓矢や扇車がか

ざつてあります。

七33 6 蛾は(略)、出て來ると、す

ぐに紙の上において卵を産みつけさ

せる。

七33 7 その卵を産みつけさせた紙を

蠶卵紙といふ。

七35 6 図 塗物はくりたる木又は組合

せたる木・竹又紙などにうるしを塗

りてつくる。

七36 7 筆・墨・紙ナドノ店、クシ・

カンザシナドノ店ヲ見テ、(略)。

八39 6 図 箱ハウスキ木片ヲ折り、其

ノ上ニ紙ヲ張りテ造リ、外ガハニ藥

ヲ塗ルナリ。

八39 8 図 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出

シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數

マデ數ヘ上グレバ、(略)。

十20 8 印刷する紙は廣い大きな紙

で、幾ページ分も一度に刷れる。

十20 8 印刷する紙は廣い大きな紙

で、幾ページ分も一度に刷れる。

十21 表紙には紙ばかりのもあり、

紙の上を布で包んだのもある。

十21 表紙には紙ばかりのもあり、

紙の上を布で包んだのもある。

十196 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲ

コシラヘル者、(略)、揃ヘテ箱ニ入

レル者、十二箱ツツ集メテ紙ニ包ム

者、皆ソレノニチガフ。

かみ「髪」(名) 10 髪ひたてがみ

八126 囲 おはなさんはしばらく見な

いうちに、髪が大そうきれいになり

ました。

八836 図 ヨーロッパ人は大むね皮膚

白く、髪赤く、眼の色青し。

八837 図 アフリカ人は皮膚黒く、髪

ちざれたり。

八837 図 我等日本人は髪も黒く、眼

も黒く、皮膚の色は黄なり。

十522 図 老人かと思れば、髪つや

くと黒し。

十528 図 今は七十にも餘れば、殊

の外白髪には成りたらんに、髪・ひ

げの黒きは如何に。

十533 図 「如何に、髪・ひげの黒

きは。」

十536 図 實盛日頃申し候に、『戦

場に出でん時は髪を染めんと思ふな

り。

十796 図 あいぬの男子は髪とひげと

を長くのばし、(略)。

十1093 まだ冠禮を行はない者はチ

ヨンガーといつて、髪を三つ打ちに

して後へたらしてゐる。

かみいち「上市」(地名) 1 上市

十12 図 上市

かみかぜ「神風」(名) 1 神風

十1307 図 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美

ナレ。風ノ名ヲ負ヘルモノニ神風・

春風・朝風・疾風・松風・追風・野

分等アリ。

かみなす「嚼熟」(四) 1 かみなす

す「一ス」

九584 図 食物はよくかみなすべ

し。

かみさま「神様」(名) 9 神さま

さま

四584 ソコヘオホクニヌシノミコ

トトイフ 神サマガオ出デニ

ナリマシタ。

四585 コノ神サマハサキホドオ

トホリニナツタ 神サマガタノ

弟ノ方デス。

四594 コノ神サマモ、「ナゼナク

ノカ。」トオタヅネニナリマシ

タカラ(略)。

四598 スルト 神サマハ、「(略)。」

トヲシヘテクダサイマシタ。

四816 しばらく目をつぶつて、

神さまにいのつてから、目を

ひらいて見ると、(略)。

五13 天照大神の御弟に、すさのを

のみことといふきのあらひ神さまが

ありました。

五21 (略)、今まであかるかつたせ

かいがくらやみになつて、わるい神

さまがさまたまのわるいことをはじ

めました。

五27 その時あめのうずめのみこと

といふ女の神さまのまひがおもしろ

かつたから、(略)。

五38 手力男のみことといふ力のつ

よい神さまが、(略)、すぐに大神の

お手をとつて、お出し申し上げまし

た。

かみさまがた「神様方」(名) 4 カミ

サマガタ 神サマガタ 神さまがた

四568 ソコヘカミサマガタガ

オトホリガカリニナツテ、「ナゼ

ナクノカ。」トオタヅネニナリ

マシタ。

四587 コノ神サマハサキホドオ

トホリニナツタ 神サマガタノ

弟ノ方デス。

五28 よい神さまがたは、(略)、一

同あまの岩戸の外にあつまつて、お

かぐらをおはじけになりました。

五28 その時(略)、大ぜいの神さ

まがたは手をたたいて、お笑ひにな

りました。

かみだな「神棚」(名) 2 神ダナ

七497 (略)、日本紙ハ神ダナヲ指

サシテ、「ソソナニイバツテモ、ア

ノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマ

イ。」トイヒマシタ。

七498 図 「ソソナニイバツテモ、ア

ノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマ

イ。」

かみつけぬのかたな「上毛野形名」

「人名」 1 上毛野形名

十二309 図 上毛野形名、蝦夷を討ち

て利あらず、兵皆四散せしかば、夜

に乘じて城をすてて逃れんとす。

かみなり「雷」(課名) 2 かみなり

五目4 第十六 かみなり

五457 第十六 かみなり

かみなり「雷」(名) 7 カミナリ

かみなり

一363 カミナリ ガナリダシマシ

タ。

五436 ソノウチニ下ノ方デカミナリ

ノヤウナ音ガシマシタ。(略)、汽車

ハハシノ上ヲ通ツテキマシタ。

五461 (略)よそからかへつて来る

道で、にはかに雲が出て、かみなり

が鳴り出しました。

五467 図 かみなりの鳴る時には、そ

んな所にあてはあぶない。」

五473 図 「かみなりは高いものにあ

る所へおちるのだ。

五482 (略)、間もなく目がくらむや

うないなびかりがして、耳がさける

やうなおそろしいかみなりが鳴りま

した。

五485 (略)、顔を上げて、そのあた

りを見まはすと、かみなりがおちて、

その高い木がまつ二つにさけてゐま

した。

かみなりさま「雷様」(名) 1 かみなりさま

四138圖 あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山。

かみなりもん「雷門」(名) 1 雷門
七561圖 雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀音堂ニ向ツテ行ケバ、兩ガハニアマタノ店アリ。

かみふたご「上二子」(地名) 1 上二子
九419圖 噴火一タン止ミテ後、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。上二子・下二子・神山・駒岳是ナリ。

かみふたごやま「上二子山」(地名) 1 上二子山
九40圖 上二子山
かみむらんかんたい「上村艦隊」(名) 1 上村艦隊

十二61圖 (略)、東郷司令長官は三笠以下六隻の主戦艦隊を率ゐて、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。

かみやま「神山」(地名) 2 神山

九40圖 神山
九419圖 噴火一タン止ミテ後、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。上二子・下二子・神山・駒岳是ナリ。

かみよ「神代」(名) 4 神代
八22圖 神代の昔皇祖天照大神

瓊々杵尊をこの國に降したまはんとせし時、(略)。

九18圖 神代の昔、天照大神の御弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひしに、(略)。

十二1164圖 神代はるけき昔より君臣分は定まりて、萬世一系動きなき我が皇室の大みいつ。
十二22圖 神代より承けし寶をまもりて、治め來にけり、日の本つ國。

かむ「嚙」(四) 2 カム かむ「ム・メ」

八733圖 虎モ猫モ(略)。アゴ短ケレバ、物ヲカム力強く、(略)。

九586圖 (略) 或老人に、長生の方法を問ひしに、「やはらかなるものも二十七度かめ。」と答へたりといふ。

かめ「瓶」(名) 2 かめ ぐみずがめ
六231圖 一人の子どもが水がめのふちへ上つて、遊んでゐるうちにふみはづして、かめの中へおちました。

六241圖 それがため、かめに大きな穴があいて、水が流れ出ましたから、(略)。

かめ「亀」(名) 5 カメ

三656圖 (略)、子ドモガ大ゼイデカメヲツカマヘテ、オモチヤニシテキマス。

三662圖 ウラシマハ(略)、子ドモカラソノカメヲ買ツテ、ウミ

へハナシテヤリマシタ。

三666圖 (略)、ウラシマガウミベデツリヲシテキルト、大キナカメガ出テキテ、(略)。

三674圖 ウラシマガヨロコンデ、カ

メニノルト、(略)、マモナクリユウグウノ門ヘツキマシタ。

三723圖 ウラシマハ(略)、マタカメノセナカニノツテ、海ノ上ヘ出テ來マシタ。

かめい「家名」(名) 1 家名

十二334圖 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。

かも(終助) 1 かも

十966圖 天の原ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。がもうたださと「蒲生忠郷」(人名) 1 蒲生忠郷

十二375圖 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、會津の城主蒲生忠郷死せり。

かもしか「麝鹿」(名) 1 かもしか
十二681圖 東南シベリヤの高地に住めるかもしかの一種は、冬日(略)、大群をなし、水を尋ねて低地に下り、春を待ちて再び山谷に入る。

かもめ「鷗」(名) 1 鷗

十一813圖 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・雲雀・鷗・雁・鴻・雉・鷗・鷗・鷗・鷗等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

かもん「家門」(名) 1 家門

十二319圖 (略) 「二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。」

かや「茅」(名) 3 かや ぐかるかや
八59圖 (略)、神殿の御屋根はかやにてふき、棟にはかつを木をならべ、(略)。

十815圖 其の家は(略)。唯かづらなどにて、かやを結びて壁に代へ、又かやを並べて屋根となせり。
十815圖 (略)、又かやを並べて屋根となせり。

かや「蚊帳」(名) 1 カヤ
六347圖 麻糸ニテ織リタルモノハカヤナドニツクリ、(略)。

かゆい「痒」(形) 1 カユイ「イイ」
七257圖 モシ手ガナカツタラ、(略)。(略)。カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出來マセン。

かよいちよう「通帳」(名) 2 通帳
九778圖 郵便局ニテモ銀行ニテモ、金銭ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ書入レタル通帳ヲ渡ス。

九778圖 此ノ通帳ハ此ノ後金銭ヲ預クル時又ハ引出ス時共ニ必要ナルモノナレバ、大切ニ保存スベシ。

かよう「火曜」(名) 1 火曜
六372圖 十二月十二日 火曜 晴

かよう「新様」(形状) 1 かやう
十一741圖 夜明けて後、住持畫工に向ひて、「今日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、夜中のぞ

き見たる姿をして見るに、(略)。
かよう「通(五)2 通ふ『ツッ
フ』」

六五五圖 わけて名におふ松島の 大
島・小島その中を 通ふ白ほの美し
や。

七八〇圖 「私も子供の時には毎日こ
の學校へ通つて、(略)、あの運動場
で體操をしたり、この講堂でお話を
聞いたたりしてゐたのです。

から「(名)3 カラひかいがら・
すがら・もみがら

四四一 サザエハスグカラノ中
へヒツコンデ、フタヲシメテ、
(略)。

四四四圖 カラノナイモノハカ
ハイサウナモノダ。」

七二五 (略)美シイ眞珠ハ、コノ貝
ノカラノ中ニアルノデアル。
から(格助)210 カラ からひおりか
ら・きようとからのてがみ・こぞうか
らしゅじんへ・これがすんでから・し
ゅじんからこぞうへ・それから・それ
ですから

一四二 アチラカラモ一ビキキマ
ス。

一四九 サア、タケヲサンカラオ
トビナサイ。

二一三 一圖 「コノ川ハドコカラナ
ガレテクルノデスカ。」

二一三 二圖 「アノ山ノオクカラナ
ガレテクルノデス。」

二一五 (略)、ハシノウヘカラ、
ワント一コエホエマシタ。

二一五 二圖 「ヤットカラダガデキマ
シタ。コレカラ アタマヲツクリ
マセウ。」

二四三 二圖 「(略)、ボクガウチカラ
タドンヲモラツテキマスカラ。」

二四八 ソノホカニ、オカアサン
カラ オトシダマニイタダイタ本
ガ一サツアリマス。

二四九 コレカラ イツシヨニヨン
デミマセウ。

二五二 (略)、土ノ中カラ、(略)
タカラモノガタクサンデマシタ。

二五六 (略)、ウスノ中カラ(略)、
イロイロナタカラモノガデマシ
タ。

三三六 ウツクシイサクラノハナ
ガ、マドノソトカラノゾイテ、
(略)。

三三八 一圖 「コレガスデカライ
キマセウ。」

三五二 コンドハウツクシイ小ト
リガマドノソトカラノゾイ
テ、(略)。

三五七 一圖 「コレガスデカライ
キマセウ。」

三六四 一圖 「コレカラハナヲツミ
マセウ。」

三六六 オトウサンヤニイサンハ
マイアサハヤクカラタンボヘ
イキマス。

三六七 (略)、ゴランナサイ、マタアソコ
カラモ一ビキ上リマシタ。

三六九 ケレドモ上ルトキニハ、
スカラ スグトビタチマス。

三七八 コレカラ二三日タツタラ、
マダズツトタカクナリマセウ。

三七八 あるばんまさはははは
といつしよによそ から かへつ
てきました。

三九五 (略)、母からかみをもら
つてつみました。

三九五 あをいひかりがかみの上
からすいてみえます。

三七六 さあ、これからがくかう
へ行きませう。

四一三 それをからすが木の 上
から見てゐて、(略)。

四一八 こひやふななどは水か
ら出ると、しんでしまひます。

五七六 私ガヲバサンカライタ
ダイタムラサキ色ノハオリハ、
(略)。

六三三 (略)、右から左へまはつ
てゐると、左から右へま
はつてゐると、ふたいろあり
ます。

六三六 (略)、右から左へまはつ
てゐると、左から右へま
はつてゐると、ふたいろあり
ます。

六六一 ウラシマハ(略)、子ドモ
カラソノカメラヲ買ツテ、(略)。

三七五 (略)、タマデバコヲアケテ
見ルト、中カラ白イケムリガ
出テ、(略)。

四三六 又町からは、(略)など
を買つてかへります。

四四二 一圖 「にいさん、ここから見
ると、町が一目に見えますね。

四四五 (略)下にまちかまへてゐ
て、高いところからおひおろし
て来るけものを、弓でいとい
つたのです。

四六二 (略)ゐのししが、上の方
からよりともの 居る方へか
けおりて 來ました。

四六七 (略)、ただつねは馬から
ゐのししのせなかへうしろむき
にとびうつりました。

四九二 一圖 (略)、枯れたあとから、
まためをふき出して、(略)。

四三六 あにの次郎が又よこか
ら、「こんどはにいさんがきく
が、(略)。」

四三八 アル日(略)ナドガオヨ
イデキルト、サザエガ岩ノカ
ゲカラヨビトメテ、(略)。

四三九 一圖 (略)、ドンナ時デモ、コ
ノ中へハイツテ、内カラトヲ
シメテキサヘスレバ、アンシン
ナモノデス。」

四四七 スコシタツテカラ、ソツト
フタヲアケテ、外ヲ見ルト、
(略)。

へくにうちやぶられた。

六91 (略)、森の間からはお社の赤い鳥居が見えます。

六97 御社の後から山へのぼる道があります。

六112 かへりには同じ道を通らずに、別の道から下りました。

六122 ツバメハ暖ニナルト、ドコカラカトンデ来テ、涼シクナルト、マタドコカヘトンデ行ク。

六274 (略)ノヤウナ小サイ物カラ、(略)ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコトガ出来マセン。

六298 ある日主人は朝から用たしに出たので、(略)。

六368 ゆか下から去年なくしたこまが出てうれしかった。

六375 学校からかへつてから、をばさんの所へ使ひに行つた。

六376 学校からかへつてから、をばさんの所へ使ひに行つた。

六377 をばさんから塩せんべいをい

たどいた。

六387 午後京都からおとうさんの手紙が着いた。

六394 今日朝からあちらこちらを見物した。

六423 サルモ木カラオチル。

六473 (略)こゝろざしにかんしんして、これから信長は目をかけて使ひました。

六514 支那からは大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、(略)。

六558 謙信はそれを知つて、こちらから先がけをしようと、夜の間に信玄の陣に攻入つた。

六575 その時信玄のけらいが、後からやり先で謙信の馬のしりを力一ぱいになぐりつけた。

六584 塩はとなりの國から買つてゐた。

六592 謙信は(略)、じぶんの國から塩を送らせた。

六615 (略) まへからわたしは目がわるく、杖をたよりにあるきます。

六623 (略) 「わるい子どもが大ぜいでわたしの手からもぎ取つて、は

ふつた音はしましたが、(略)。」

六667 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマヌガ、後カラ一ツツヌケテオチルノヲ知リマセン。

六671 ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ来ルコトガアリマス。

六726 (略) 善い子供は、おとなになつてから、りつぱな人になりました。

六728 (略) 悪い子供は、おとなになつてから、大ていつまらない人になつてゐます。

六736 私のからだがかんなんにぐらつくやうになつたのも、その子供たち

のいたづらからでございます。

六748 間もなくむねの上からもちを投げると、(略)。

六781 オキノ方カラ黒クヌツタ船ガハイツテ来ル。

六796 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカラ牛ヲ何匹トナクツルシオロシタ。

七138 小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。

七146 問屋といふのは他人からたのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口銭を取る店のことです。

七152 (略)、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。

七175 (略)、種物屋から西洋西瓜の種を三色ばかり買つて来ていたきたうございます。

七195 畠のゑんどうがかきの外からこゑをかけて、(略)。

七198 (略)、どうかこれから安心安く願ひます。」

七287 一匹の蠶の口から出る絲をの

ばして見ると、(略)。

七296 卵からかへつたばかりの蠶はあり程の大きさで、(略)。

七302 かへりたてから、しきりに食物をさがしてゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひはじめる。

七316 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、(略)。

七322 (略)、口から美しい絲を出し

て、からだを包む。

七325 そのくだから出すねばつたしるが外へ出ると、(略)。

七328 蠶が繭を作つてから二十日あまりたつと、(略)。

七334 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、(略)。

七342 わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

七408 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、(略)。

七463 (略) 「世ノ中ガヒラケテカラ、ドウモ君ヲチノ仲間ヨリモ、僕ヲノ仲間ノ方ガヨクイニ用ヒラレルヤウニナツタカト思フ。

七669 もとからある分にくらべると、實も大きく、味もよほどよろしうございます。

七747 (略)、岸ニ近い淺イ所カラ五十ヒログラキノ所マデニハ、海草ガハエテキル。

七828 ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。

七885 皆さんの中にも、大きくなつてから外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。

七889 それですから小さい時から海になれておくやうにしたいものです。」

八151 役所デモ、會社デモ、上カラ

下マデ一同ソロッテ事務ニ取りカ、
 八23 5 その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て來ました。
 八24 5 (略) 下女がばけつをさげて、牛小屋から出て來ました。
 八26 3 (略)、下男や下女は早くから畑へ出して働かせ、(略)。
 八26 9 二三ヶ月立つてから、前の友だちが來て、「(略)」と、笑ひながらたづねました。
 八31 6 (略)、毎朝早くから弟子を相手につちを打つ音が聞える。
 八33 5 園 (略)、元は少しは人に知られた刀かちで、若い時から何十本となく大太刀・小太刀をきたへた。
 八34 4 (略)、朝から晩まで相かはらず、「トンテンカン、トンテンカン。」と働いてゐる。
 八41 7 弓張を持つて走る人が、後から後からとついて飛んで行く。
 八41 8 (略)、後から後からとついて飛んで行く。
 八43 1 さつきからもう二時間もたつから、四五十戸も焼けただらう。
 八44 1 毎日の食物のにたきから種々の工業まで、火の力を要することは数へきれない程多い。
 八44 7 聞けば此の火事は材木屋の小屋から出たので、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。
 八45 3 園 「東京のをちさんから火事

見まひの電報が來た。」
 八62 8 綿ハ何カラトリマスカ。
 八62 9 綿ノ木カラトリマス。
 八63 4 (略)、九月カラ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマス。
 八63 6 實ガ熟スルト、サケテ中カラ白イ綿ガハミ出シマス。
 八65 1 藍ハ何カラ取りマスカ。
 八65 2 藍ノ草カラデス。
 八65 3 綿ハ實カラトリマスガ、(略)。
 八65 4 (略)、藍ハ葉ト莖カラ取ルノデス。
 八67 2 園 昨朝あたりから熱がずつと下つて、食事も進みますから、一先安心いたしました。
 八85 5 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。
 八87 1 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲ヲウチカケタ。
 八92 5 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレム心モ深カツタ。
 八92 8 (略)、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。
 九33 3 スチブンソンは若い時から機關の事に明るかつたが、(略)。
 九34 6 (略)、四方からの見物人は雲の如く集つた。
 九35 4 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、(略)。

九82 1 それは氏子の五箇村から子供の騎手を一人づつ出して、競馬をさせて、(略)。
 九82 7 (略)、おびたゞしい見物人が朝早くから宮の境内へつめかけた。
 九84 3 杜の森を離れるまでは、餘り甲乙はなかつた。馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、(略)。
 九84 10 愛作は驚いて、ひらりと馬から飛下りて、(略)。
 九87 2 園 どうか今日から一年の間、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。」
 十7 3 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキル。
 十7 7 (略) 太イ脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。
 十7 9 モミデノ葉ハ幾スデカノ脈ガ本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキル。
 十18 9 さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、(略)、幾度書直すかも知れない。
 十20 2 一字も誤がなくなつてから本刷にかゝるのである。
 十20 7 印刷が出来上つてから本にとぢるまでも、まだ中々手数がかる。
 十21 6 それは版下を堅い木にはりつ

けて、其の上から彫つて版木を造り、(略)。
 十28 1 宮の森のこんもりと茂つた間から、古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、今は葉一枚も残つてゐない。
 十28 5 (略) 鳥が二羽止つて、さつきから少しも動かない。
 十29 9 犬を連れた男が(略)、森の蔭から出て來て、(略)。
 十35 2 園 「あれが此の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。」
 十64 1 見張人がマストの上から北の方を指さして聲高く呼んだ。
 十67 2 捕鯨法には此の外に汽船の備砲から銛を打つ方法もあり、(略)。
 十84 8 又皮・骨・ひづめなどからにはかはが出來、血や腸は肥料になる。
 十84 9 何から何まで役に立つて、不用な部分といふものは一つもない。
 十86 7 内地では昔から餘り多くは飼はなかつたが、(略)。
 十12 9 又國家全體カライヘバ、(略)等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。
 十147 2 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。
 十107 5 一方の口から火をたいて室内を温める。
 十110 9 上流の婦人は四方を閉ぢた

輿に乗つて、外から見られない様に
する。

十二13 9 (略)、此ノ脊骨ノ左右カラ
肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。

十二13 10 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支
へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ
造ツテ甲板トスル。

十二20 4 蝶や蜂は花から花へいそが
しさうに飛廻つて花の汁を吸ふ。

十二20 6 其の時花の中の花粉は(略)、
一つの花から他の花に傳達される。

十二34 3 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツ
テキタ學校ガ落成シテ、(略)。

十二34 6 (略)、縣廳カラモ知事ノ代
理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。

十二82 10 (略)、どうしてあのパイオ
リンから、あんな音が出るか、(略)。

十二83 4 聴衆は四方から集つて來
て、見る内に人山を築いた。

から(接助) 137 カラ から

一48 2 ワタクシガコチラノハシ
ヲモツカラ、アナタハソチラ

ノハシヲオモチナサイ。

二6 2 〇「オハナサンハ一バン
小サイカラ、一バン大キイノヲ
アゲマセウ。

二6 4 〇 ヲバサンハ一バン大キ
イカラ、一バン小サイノヲト
リマス。

二35 4 〇「モチハタイセツナオ米
デコシラヘタモノデスカラ、
イテハイケマセン。」

二41 2 〇「マダ小サイカラ、モウ
スコシ大キクシマセウ。」

二42 5 〇 ダルマサンノ目ハ大
キイカラ、大キナ目ヲツケマセ
ウ。」

二43 3 〇「チヨツトオマチナサイ、
ボクガウチカラタドンヲモラ
ツテキマスカラ。」

二47 4 〇 コノオカタハウメノハ
ナガオスキデシタカラ、ドコ
ノテンジンサマノオヤシロニ
モ、ウメノ木ガウエテアリマス。

三6 2 〇 ソコヘトモダチガサソヒ
ニキマシタカラ、ヨロコンデ
イッショニノハラヘアソビニ
イキマシタ。

三7 6 〇 ボクハレンゲヲツム
カラ、マサヲサンハタンポボヲ
オツミナサイ。」

三8 8 〇「スミレハタクサンナ
イカラ、マダソナンニツメマセ
ン。」

三15 4 〇 シカシスクネモチカラガ
ツヨクテ、スバシコイ人デシタ
カラ、ナカナカケハヤニハケラ
レマセン、(略)。

三36 7 〇「ここがあかるいから、
みえないのです。

三39 2 〇 私はよるよくねむります
から、目はいつもはつきりして
ゐて、よく見えます。

三43 6 〇 ダレモ右ノ方ノナカマ

ニハイルノハイヤデスカラ、
ミンナガフンパツスルヤウニ
ナリマシタ。

三46 3 〇「あまりほしがきれい
だから、二つ三つはたきおとさ
うと思ふのだ。」

三53 6 〇「モウゴハンダカラ、オ
イデナサイ。」

三68 5 〇 ウラシマハオモシロクテ
タマリマセンカラ、リュウグウノ
オキヤクサマニナツテ、ウチヘ
カヘルノモワスレテ、キマシタ。

三69 7 (略)ウラシマハウチヘ
カヘリタクナツタカラ、アル日
オトヒメニ、「略」、モウウチヘ
カヘリマセウ。」トイヒマシタ。

三70 3 〇 (略)、アマリナガクナリ
マスカラ、モウウチヘカヘリマ
セウ。」

三73 3 〇 アマリカナシクナツタカ
ラ、オトヒメノイツタコトモ
ワスレテ、タマテバコヲアケテ
見ルト、(略)。

四11 1 〇 カラスガ毎日トリニ來
マスカラ、(略)カカシガタテ
アリマス。

四11 4 〇 今一本ノ木ハシブカキ
デスカラ、サハサナケレバタベラ
レマセン。

四21 7 〇 (略)、ミンナデ五人デ
スカラ、カタ手ノユビノカズ
ト同ジデス。

四22 2 〇 ニイサンハ一バン太ツ
テ、一バンカガツヨイカラ、オ
ヤユビデス。

四22 3 〇 大キイネエサンハセイ
ガ高イカラ、高高ユビデス。

四22 5 〇 小サイネエサンハ私ヨ
リモスコシ高イカラ、クスリユ
ビデス。

四26 3 〇「三十センアゲマスカラ、
コレデトツテクダサイ。」

四30 4 〇「もうすぐお正月です
から、もち米をよいしなればば
なりません。」

四31 4 〇 ごほんの米はねばりけ
がすくないから、おもちには
なりません。」

四39 3 〇 ボクラハカウイフカ
タイヨロヒヲキテキルカラ、
(略)、コノ中ヘハイツテ、内カ
ラトヲシメテキサヘスレバ、
アンシンナモノデス。」

四52 7 〇 アル日ハマベヘ出テ見
ルト、ワニザメガ居マシタカ
ラ、(略)、ドツチガ多イカ、ク
ラベテ見ヨウ。」トイヒマシタ。

四54 4 〇 オマヘタチノセナカノ
上ヲアルイテ、カゾヘテ見ル
カラ、ムカフノヲカマデナラン
デ見ヨ。」

四56 6 〇 白ウサギハイタクテタマ
リマセンカラ、ハマベニタツテ、
ナイテキマシタ。

四59 6 コノ神サマモ、「ナゼナクノカ。」トオタツネニナリマシタカラ、白ウサギハ（略）、又ソノワケヲ申シアゲマシタ。

四63 1 ゆふべは風がなくて、しづかなばんでしたから、少しも知らずにゐました。

四75 3 四 「オカアサマ、オヒナサマヲカザリマシタカラ、ゴラン下サイ。」

五2 8 （略）といふ女の神さまのまひがおもしろかつたから、大ぜいの神さまがたは手をたたいて、お笑ひになりました。

五8 2 ソノ日ハ二月十一日ニアタリマスカラ、コノ日ヲキゲンセツト申シテ、毎年オイハヒヲイタスノデゴザイマス。

五10 2 野はらは平ですから、ゆつくりあるきました。

五12 1 ある時上の方でさわがしいおとがするから、見上げると、（略）、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

五12 7 やがて重い物が私どもの上へ來ましたから、何かと思つたら、にもつをつんだ船が通つてゐたのです。

五18 8 四 「おはなや、用があるから、ちよつとお出で。」

五20 2 四 「そこにおさらがあるから、取つておくれ。」

五21 8 四 「手がなまぐさいから、そ

のひしやくを取つて、水をかけておくれ。」

五23 7 しかたがないから、うつたへて出ました。

五35 8 キモノノモヤウヤ、カンザシナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、ソノスガタガカイライシイカラデセウ。

五37 4 四 「天子様のおほせだから、子を出すやうに。」

五38 2 四 「その子は皆お前にやるから、やしなつてやるがよい。」

五53 2 四 （略）、カウモリハ「私ハ鳥デモケモノデモナイカラ。」トイツテ、ドチラヘモツキマセンデシタ。

五53 6 四 「私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケモノノ仲間ダ。」

五54 3 四 「私ハ羽ガアルカラ、鳥ノ仲間ダ。」

五54 7 イツマデタツテモ勝負ガツカナイカラ、兩方ガ仲ナホリヲシマシタ。

五58 4 （略）、石ノヤウニカタクナツテキマスカラ、石炭トヒマス。

五63 7 四 あさつては八まんさまのおまつりですから、朝早くからあそびにいらつしやい。

五64 6 四 「あさつては學校がお休ですから、二人とも行つてお出でなさい。」

五65 2 四 「それでも私はまだ手紙の書き方を習ひませんから、どう書い

てよいかわかりません。」

五76 4 ふだんは人も通らない道だから、どこをどう行つてよいか分らない。

六1 7 海べはふだん強い風がふくから、高い松はしぜんにおもしろい枝ぶりになつてゐる。

六12 6 モウ秋ニナツタカラ、ガンガオヒオヒトンデ來ル。

六14 5 曇ツタ夜ヲ月ノナイ夜ハ道ニマヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデアル。

六15 2 今日ハ天氣もよいから、人が大ぜい出て、稻をかつてゐます。

六15 4 かつた稻が雨にぬれると、米がわるくなるから、天氣のよい間に取入れなければなりません。

六24 2 （略）、かめに大きな穴があいて、水が流れ出ましたから、子どもはあやふい命をたすかりました。

六25 6 四 金ヤギンハ（略）、ドチラモタクサンアリマセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。

六25 8 四 銅ハ（略）、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、シタガツテネダンモヤスウゴザイマス。

六28 6 四 「私タチノサビルノハ皆人ガ使ハナイカラデス。

六30 3 一本三せんづつのを二本買つて、十せん銀貨を出したから、直吉は何の氣なしにそのつりに一せん銅貨を三枚渡した。

六31 5 四 「先では知らないのだから、一錢まうけておけばよかつたのに。」

六32 3 四 「それでもだんなが居ないから、だまつてゐれば、誰にも知れはしない。」

六32 5 四 「だんながおるすだから、なほさらまちがひがあつてはならぬい。」

六36 1 今日ハ天氣がよくて暖いから、うちではすゝきはをした。

六41 1 四 おみやげもおみやげ話も様々あるから、たのしみにして待つておいで。

六45 3 けれども日吉丸は、どうかしてりつぱな武士になりたいと思つてゐましたから、ほうこうの方には身が入りません、（略）。

六48 3 秀吉は大ぜいの人を十組に分けて、一組に十間づつわりあてて、仕事をいそがせましたから、すぐに出來上りました。

六51 2 秀吉はもう日本中に敵がなくなつたから、こんどは朝鮮せいばつをはじめました。

六69 8 私がかゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、今年で三十年になります。

七18 4 四 又母がかねくめづらしい草花をほしいく／＼と申して居りますから、（略）、これも二三種買つて來ていたゞきたうございます。

七19 7 四 あなたと私は親類ださうで

ございますから、どうかこれからお心安く願ひます。」

七二八 サルニハ（略）。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。コレハチエガ少イカラデス。

七三二 蛾が出ると、絲が取れないから、まだ出ない内にむして、さなぎをころしておいて、それから繭をにて、絲を取るのである。

七三六 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、出て来ると、すぐに紙の上において卵を産みつけさせる。

七三五（略）、人ハ皆前へ前へト進ンデ行ツテ、後ハ引キカヘサナイカラ、通り道ノセマイ割合ニハコンザツシナイ。

七三九 又一トコロデスムカウ便利イ時ニハ、一トコロデスムカウ便利デアル。

七三九 一豊もほしくてくたまらなから、家へかへつて、「あゝ、金がない程残念なことはない。武士としてはあのくらゐな馬をもつて見たい。」と、思はずひとり言をいひました。

七五三 今では切手をはつて出さへすれば、どんな遠い所へもとどきますから、大そう便利で。」

七六三 桃がじゅくじゅくしましたから、少しばかりですが、差上げます。

七八四 私は年中航海をしてゐるものですから、少しそのお話をいたしませう。

七八八 海岸には燈臺がありますから、それを見ると、あれはどこだといふことが分ります。

八一〇 三郎はいつもにこ／＼してゐますから、寫眞でも笑つて寫つてゐます。

八三三 刀は武士のたましひといはれたものだから、きたへる時は身を清めて、一心不亂に打つたものだ。」

八四一 さつきからも二時間もたつから、四五十戸も焼けただらう。

八四七 火事だから、誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。

八四九 焼けない事さへいへば、御安心なさるから、ゴアンシンクダサイと書くにも及ばない。

八五三 又ことばも電報だから、そんなにていいに書くことはいらない。」

八五九 「（略）、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、サクヤとは書くには及ばない。

八六五 又にはとり・（略）などは陸上や水上にばかり居て高く飛ばないから、其のつばさが小さい。

八六八 走ることは馬よりも早いので、空を飛ぶ必要はないから、つばさはなほ小さい。

八七二 綿ノ中ニハ種ガアリマスカラ、綿クリ機械ニカケテ、ソレヲ取去ルノデス。

八七六 昨朝あたりから熱がずつと下つて、食事も進みますから、一先安心いたしました。

八八〇 祖母一人孫一人の事で御座いますから、（略）、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

八八四 こちらの方はどうとも都合がつくから、心配するには及びません。

八八八（略）、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。

八九二 又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカラ、一ツツツニ取離スコトガ出来ル。

八九六 「何月何日初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」

九〇〇 無かつたから、人の肩車に乗つたり渡船に乗つたりして渡つたのであつた。

九〇四 馬は馬子が引いて、ゆる／＼歩むのだから、早いことはない。

九〇八 かごも人の肩でかいて、休み／＼行くのだから、早くもないし、又そんなに樂でも無かつた。

九一二 關所も無ければ、川止も無いから、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出来る。

九一六（略）五月雨は、農家に取つては大切な雨である、それはちやうど田植の時節であるから。

九二〇 夜が更けて、雨の音が靜かになつたから、止んだことと思つてゐると、（略）。

九二四（略）大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、葉ノ質モ丈夫デアルカラ、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出来ルサウデアル。

九二八 讀んでゐる間は中に書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、（略）。

九三二 活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、同じ活字を何度でも組立てて使へる。

九三六 木版では一枚々彫らなければならぬから、其の自由がきかぬ。

九四〇（略）、木版では一枚づつ彫るから、手間が幾層倍もかゝる。

十86 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするの、人に恐れるからである。

十86 豚はどんな物でも食ふから、飼ふのにたやすい。

十87 殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。

十10 手數ノカ、ツタマツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。

十10 又毎日同ジ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク其ノ仕事ニ熟練スル。

十11 7 (略) ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ精神ヲコラスコトニナルカラ、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヤ發明ヲスルコトモアル。

十12 1 分業デスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、ソレノノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。

十12 5 寒イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。

十12 6 暑イ時分ハ其ノ必要ナク、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

十12 7 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ・洗ヒ流シラスル所デアルカラ、(略) 常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラス。

十107 室ガ廣ク、天井ガ高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。

十107 10 オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のことわざがある。

十109 5 チョングーの間は人に侮られるから、成るべく早く冠禮を行ふ。

十12 1 (略) 多人數ノ技師ヤ技手ガ永クカ、ツテ製圖スルカラ、大キナ戰艦ナドニナルト、設計圖バカリデ數百枚モアルトイフ。

十21 然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。

十22 9 金魚を細口のびんに入れて、二三日も水を取換へないと、金魚は死んでしまふ。是は水中にとけてゐる酸素が吸盡されるからである。

十23 若し其の中に青い水草を入れて置けば、水を取換へなくても金魚は割合に長く生きてゐる。是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

からい [辛] (形) 1 からい [一ク] ぐしおからい

五28 6 もとよりすつばいこのからだ、しほにつかつてからくなり、しそにそまつて赤くなり、(略)。

からいも [唐芋] (名) 1 唐芋

十30 6 關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。

からかさ [唐傘] (名) 3 カラカサ

一6 3 アメカサカラカサ

七49 1 日本紙ハ笑ツテ、「僕等ノ仲間ニハカラカサニナツタリ、合羽ニナツタリスルモノガアル。

九9 7 (略) ニンジンノ様ニカラカサヲヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモアル。

からかみ [唐紙] (名) 1 唐紙

十49 7 欄間の彫物、唐紙の地紙をはじめ、(略)。

からから (副) 1 からく

十28 7 黙ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。良雄平然頭を低くして之を食ひ、からくと打笑へり。

からくさもよう [唐草模様] (名) 1

唐草模様

十47 3 模様には (略)、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。唐草模様・波模様の如き是なり。

からくして [辛] (副) 1 辛くして

十70 2 岩に近づけば、波は益々荒く、ボートは幾度となく打ちもどされ打ちもどさるゝを、辛くして難破船に漕着けたり。

からさき ぐしがからさき

からし [枯] (名) ぐしがらし

からし [辛] (形) 1 カラシ [一ク]

六53 6 塩ハカラク、砂糖ハアマシ。からす [鳥] (名) 11 カラス からす

鳥 ぐうとからす・やたがらす

一52 2 カアカア、カラスガナイテイク。

一52 4 カラスカラス、ドコヘイク。

一52 4 カラスカラス、ドコヘイク。

一53 5 (略) カアカア、カラスガナイテイク。

二28 4 ケサハカラスノナクコエモ、スズメノナクコエモ、ウレシサウニキコエマス。

三41 2 それをからすが木の上から見てゐて、(略)。

三42 2 うのまねするからす、水におぼれる。(ひらがなのドリル)

四10 8 カラスガ毎日トリニ來マスカラ、(略) カカシガタテアリマス。

五6 3 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ出テ來テ、オサキニ立ツテ、ヨイミチノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシタ。

十28 4 中程の枝の上に鳥が二羽止つ

て、さつきから少しも動かない。

十301 銀杏の木は急いで山の方へ逃げて行く。

ガラス(名) 1 硝子

十一689 図 (略)、街上に落ちたる硝子の一片を去るも、公衆の利益なるべし。

からすむぎ「烏麦」(名) 1 燕麥

十一9910 図 農産物の種類は北海道と大差なく、大麥・小麥・燕麥・裸麥・薔臺・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、(略)。

からだ「体」(名) 20 カラダ からだ 體 ひとみずとからだ

二211 ワタクシノカラダハ、日ニヤケタヤウナイロヲシテキマス。

二414 図 「ヤツトカラダガデキマシタ。コレカラアタマヲツクリマセウ。」

三241 うまは からだが ほそくて、足がながうございます。

三242 牛はからだが大くて、足がみじかうございます。

四144 図 (略)、からだに雪のきものきて、かすみのすそをとほくひく、ふじは日本一の山。

四603 図 (略)、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。

四607 白ウサギガソノトホリニ

シマスト、カラダハスツカリ

モトノヤウニナホリマシタ。

四612 図 「オカゲサマデ、カラダハコノトホリニナホリマシタ。

四656 うぐひすが(略)。(略)。あんな小さなからだで、あんな大きなこゑの出るのがふしぎです。

五285 図 もとよりすつばいこのからだ、しほにつかつかたからくなり、しそにそまつて赤くなり、(略)。

五536 図 (略)、カウモリハ(略)。(略)。「私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケモノノ仲間ダ。」

六734 私は古机でございます。(略)。私のからだはこんなにくらつくやうになつたのも、その子供たちのいたづらからでございます。

七319 蠶が(略)。眠る度に皮をぬぎかへて、しまひにはからだのすきとほつて見える。

七322 (略)まぶしへうつしてやると、口から美しい絲を出して、からだを包む。

七649 時々湯にはいらないと、からだのきたなくなる。

七653 又冷水浴や海水浴はひふを強くし、したがつてからだを強くし、心をさわやかにする。

七741 鯨ハカラダガハナハダ大キイ。

八579 (略)、からだの割合に目の最

も大きいのはふくろふ・みみづくなどである。

十一5910 図 軍に行かば、からだをいとへ。彈丸に死をも、病に死もな。

十二815 頭には霜をいたゞき、身にはつゞれをまとひ、やせ衰へた體を義足に支へて、(略)老人の辻音楽師がある。

からびと「唐人」(名) 1 唐人

十一1169 図 武勇のほまれ細戈千足の國の名に負ひて、禮儀は早く唐人も稱へし其の名君子國。

からふと「樺太」(地名) 6 樺太 樺太 たいわんよりからふとへ

十一984 図 樺太にて最も有望なるは漁業にて、鯨と鯔との漁利は殊に多く、鮭・鱈も亦少からず候。

十一98 図 樺太

十一11510 図 北は樺太・千島より、南臺灣・澎湖島・朝鮮八道おしなべて、我が大君の食す國と、(略)。

十二168 図 南臺灣の熱帯地方より北樺太の寒帯に近き地方まで、全國に凡そ百箇處の測候所あり。

十二443 図 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬町歩あり。

十二484 図 又森林は全國の山野たはぬ處なく、殊に名高き木曾・吉野 樺太・臺灣太古より けふの 入らぬ林あり。

からふとちよう「樺太庁」(名) 1 樺太廳

十一974 図 (略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、(略)。

からふとちよう「樺太島」(地名) 1 樺太島

十一9610 図 大泊は樺太島の入口とも申すべく、全島第一の良港に候。

からふとちよう「樺太島」(地名) 2 樺太より臺灣へ

十一953 第二十四課 樺太より臺灣へ

からまつ「唐松」(名) 1 落葉松

十一1004 図 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然林にして、榎松・蝦夷松・落葉松・白樺等一面に生ひ茂り、(略)。

からむ「格」(四) 1 からむ「ム」

八364 図 垣根にからむ朝顔のさきかはりつゝいさぎよく、(略)。

からむし「苧」(名) 3 カラムシ

六346 図 麻又ハカラムシノ糸ニテ織リタルモノハカタビラナドニツクル。

六35 図 カラムシ

からもん「唐門」(名) 1 唐門

九948 図 次の門を唐門といふ。木材は一切唐木を用ひたり。

ケレバ、ツクエ・本バコ・タンス・ハキモノナドヲ作ルニ用フ。
 六八五(六) (略)、心はかならず高くもて、たとひ身分はひくくとも、軽くとも。
 九一〇(九) 舞へや舞へや、たもと軽く舞へや。
 九一四(四) 舞へや舞へや、たもと軽く舞へや。
 九二〇(〇) 紙幣ハ貨幣ノ代用ナルモノニシテ、輕クシテ取扱ニ都合ヨキコトハ貨幣ニマサレリ。
 一三三(三) 「さはいへど うらやましき 身も輕き 君、床柱。
 一三三(三) 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、(略)サレバ艦體輕ク、小サク、船脚ハ淺シ。
 一三四(四) 通報艦ハ主トシテ艦隊ノ命令・報告等ヲ傳達シ、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、(略)故ニ艦體甚ダ輕ク、速度亦大ナリ。
 一三四(四) 驅逐艦ハ艦體最モ輕ク、速度最モ大ニシテ、(略)。
 一三七(七) 私事は輕く、公事は重し。古語に「私事を以て公事をすてず。」といへり。
 一二三(三) (略)、軍人たる者は一途に忠節を重んじ、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。
 かれ「彼」(代名) 5 かれ 彼

一三九(九) 乃木大將はおごそか、(略) 大みことのり傳ふれば、かれかしこみて謝しまつる。
 一三九(九) (略)、我はたへつ、かの防備。かれは稱へつ、我が武勇。
 一六一(一) 勇み勇みて出で行く兵士。はげましつゝも見送る一家。勇氣は彼に、情は是に、(略)。
 一二三(三) 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。
 一二三(三) (略)は伊太利人コロンブスにして、彼をして其の志を成さしめたるは(略)なりき。
 かれ「鰐」(名) 2 カレヒ
 七七〇(〇) (略)、エヒ・カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデナルモノモアル。
 九三三(三) (略)、海ノソコノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類ハ、其ノ體ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。
 がい「雅麗」(名) 1 雅麗
 一二六(六) 兩側には白色の高屋相並び、人道と車道との間なる左右二列の綠樹は枝を交へて、雅麗比なし。
 かれ「枯木」(名) 5 カレ木 枯木
 二五九(九) (略)、ハヒガバツタツテ、川ムカフノカレ木ノエダニカカツタカトオモフト、ウツクシイハナガサキマシタ。
 二六〇(〇) 「ハナサカデイ、ハナサカデイ、カレ木ニハナヲサカ

セマセウ。」
 二六一(一) ハヒヲトツテ、カレ木ニナゲカケマス、アチラノ山モ、コチラノ山モ、一メンニミゴトナハナザカリニナリマシタ。
 二六三(三) ヨクノフカイオヂイサンハ(略)、カレ木ノ上ニノボツテ、トノサマノオカヘリヲマツテキマシタ。
 一七八(八) 又嚴冬の頃は瀑水落つるに隨ひ氷結して、(略)、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。
 かれ「枯野」(名) 1 枯野
 一二六(六) 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、(略)。
 かれ「枯葉」(名) 3 枯葉
 九五四(四) タトヘバ北國ニスム野ウサギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、(略)。
 九五六(六) 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、(略)。
 九五六(六) (略)、羽ヲ閉ヂテ、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。
 かれは「つ」(下二) 1 かれは「つ」
 一九九(九) 故に若しみだりに森林をきり荒す時は、(略)、數日のひでりにも河水全くかれはつべし。

かれら「彼等」(代名) 2 カレラ 彼等
 七七四(四) コノ度ノ合戦ニハ、師直ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ヲガクビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、(略)。
 一八二(二) あいぬの言語は(略)。彼等は元は讀み書きも知らず、算數の考もとぼしかりしが、(略)。
 かれ「枯」(下二) 5 カレル かれる 枯れる 「一」
 二四五(五) アノ太イ木ハカレタヤウニミエマスガ、ツボミガタクサンツイテキマス。
 四二七(七) さむい北かぜがふいて、のほらのくさやはなは太いてかれてしまひました。
 四二八(八) (略)のぎくを見つけて、「(略)あなたのおなかまは大てい枯れてしまつたやうです。
 四二八(八) 「いいえ、私たちは枯れたやうに見えても、ねは生きてゐます。
 四二九(九) はるになつて、だんだんあたたかになると、枯れたあとから、まためをふき出して、(略)。
 かる「家老」(名) 1 家老
 一二八(八) 「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、(略)。
 かるんず「輕」(サ変) 1 輕んず 「一」

十二68 之を思へば、一寸の光陰も輕んずべからず。

かわ「川」〔課名〕2 カハ

二目7 六 カハ

二12 1 六 カハ

かわ「川」(名) 30 カハ 川 河 川

がつまがわ・あかほりがわ・あさひがわ・いすずがわ・うじがわ・えどがわ・おおいがわ・おおかわ・おおたがわ・きぬがわ・こかいがわ・こがわ・ごんげんどうがわ・しなのがわ・すずやがわ・すずやがわへいや・スプレーがわ・すみだがわ・セイヌがわ・セイヌがわ・せたがわ・だいやがわ・たつたがわ・たにがわ・チームスがわ・てんりゅうがわ・とねがわ・ないぶちがわ・ながらがわ・はつせがわ・はやかわ・ひのかわ・ふじがわ・ほそたにがわ・よしのがわ・よどがわ・るうたがわ・わたらせがわ

一37 6 オダイサン ハヤマ ヘシバ カリニ、オバアサン ハカハ ヘセントクニ。

二12 2 〔ニイサン、コノ川 ニコヒガキマスカ。〕

二12 5 〔コンナ 小サナ川 ニハコヒハキマセン。〕

二13 1 〔コノ川 ハドコカラナガレテクルノデスカ。〕

二13 7 〔アチラノ大キナ川ヘナガレコムノデス。〕

三9 6 あさい川「ひらがなのドリル」

ル」

三40 3 うが川の中 でさかなをとつてゐました。

三41 7 一つやつて見よう。」と、川の中へはいりましたが、

(略)。

四5 6 〔うちのまへの川が あんなにまがりがつて、とほくの方へながれてゐます。〕

四60 2 〔ハヤク川へ行ツテ、シホケノナイ水デカラダ ヲアラツテ、(略)〕

五11 2 〔そばを通る人が「美しい川だ。」といつて、ほめました。〕

五17 5 又ドンナ流ノ早イ川デモ、オヨイデノボリマス。

五42 2 マドカラ外ヲ見テキルト、山モ川モ野原モ林モ後ノ方ヘトンデ行クヤウニ見エマス。

六3 4 日本には川が多い。

六3 5 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、まるでゑにかいたやうである。

六3 7 川の上にかけた橋、橋の下に立つてつりする人など、それ／＼川の景色をそへてゐる。

六3 8 (略)、それ／＼川の景色をそへてゐる。

六8 4 みんなと橋のたもとに出合つて、川について、四五町行くと、(略)。

六81 4 市中ヲ流ル、川ヲ淀川トイフ。

六81 6 又多クノホリアリテ、川ト川トヲツナゲリ。

六81 6 又多クノホリアリテ、川ト川トヲツナゲリ。

七57 1 川ノ向フガハハ向島ニテ、川トヲツナゲリ。

七71 4 エビノピン／＼ハネタリ、カニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ川ニスムモノトチガハナイガ、(略)。

九17 10 香取・息栖ノ一ノ鳥居ハ何レモ川ノ中ニ立テリ。

九18 7 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ、運輸ノ便スコブル多シ。

九72 7 〔略〕、二十八日は終日大暴風雨にて、川近きあたりにはぼつ／＼立退きたる者もこれあり、(略)。

九94 1 川を渡りて坂路を上れば、東照宮の正面に出づ。

十一30 2 〔略〕我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略) 山ノ名ヲ附シタルモノニ(略)、川ノ名ヲ附シタルモノニ隅田・利根・最上・淀等アリ。

十一77 1 更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。

十二66 9 〔略〕、山あれば越え、河あれば泳ぎ、道に當るもの一として之をさまたぐるこゝ能はざりきといふ。

かわ「皮」(名) 10 カハ かは 皮

けがわ

三28 5 ダンダンノビルト、タケノカハガオチテ、リツパナ竹ニナリマス。

三29 6 タケノカハハモノヲツツムノニツカハレマス。

五1 4 〔略〕、すさのをのみことといふきのあらひ神さまがありました。

ある時生馬のかはをはいで、(略)。

五50 1 キ瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、カボチャニハデコボコガアル。

六65 3 熊ノ皮ハヨイシキ物ニナリマス。

七31 8 蠶が(略)。眠る度に皮をぬぎかへて、(略)。

十80 7 男子も女子も寒き時は犬の皮などにて造れる羽織の如きものを用ひ、(略)。

十80 10 あつし織とは、おひようと

いふ木の皮を細く裂きて織りたる織物なり。

十84 6 〔略〕、一年にほふる牛は(略)。

其の皮は革に製して、かばんや靴などを造り、(略)。

十84 8 又皮・骨・ひづめなどからはにかはが出来、(略)。

かわ「革」(名) 1 革 革なめしがわ

十21 2 表紙には紙ばかりのものあり、紙の上を布で包んだものもある。又り

つばなものになると、革をきせたのもある。

がわ ぐそとがわ・ひだりがわ・むこう

がわ・りようがわ

かわいがる「可愛」(五) 3 カハイガ

ル かわいがる「一ツ・ール」

二397 園 オカアサンハワタクシ

ヲカハイガツテクダサイマス。

二511 ヨイオデイサンハ白イ犬

ヲ一ピキカツテ、子ドモノヤ

ウニカハイガツテキマシタ。

十一504 古来アラビヤ人は馬を家族

の一員と考へて、家長は之を自分の

子供と同じ様にかはいがる。

かわいそう「可哀相」(形状) 5 カハ

イサウ かはいさう

三661 ウラシマハカハイサウニ

思ツテ、子ドモカラソノカメヲ

買ツテ、ウミヘハナシテヤリマ

シタ。

四405 園 (略)タヒヤヒラメナド

ハキツトヤラレタニチガヒナ

イ。カラノナイモノハカハイ

サウナモノダ。」

四601 園 (略)マヘヨリモカヘ

ツテイタクナツテ、ナホナホク

ルシンデキマシタ。(略)白ウサ

ギハ(略)又ソノワケヲ申シ

上ゲマシタ。スルト神サマハ、

「ソレハカハイサウナコトダ。

五735 カハイサウニ美シイ角ガ木ノ

枝ニヒツカ、ツテ、イクラモガイデ

モハヅレマセン。

六591 園 「われ／＼はたがひにく

には何のうらみもない。それを苦しめるのはかはいさうだ。」

かわいらし「可愛」(形) 1 かはいら

し「一シ」

九513 園 (略)支那の帽子はいた

ゞきに、結ぶ赤だまかはいらし。

かわいらしい「可愛」(形) 6 カハイ

ラシイ かはいらしい「一イ・一ウ・

一ク」

四663 うぐひすが(略)。(略)。

(略)なくこゑはまことにかは

いらしうございます。

五346 蝶ハイツ見デモカハイラシイ

モノデス。

五358 キモノノモヤウヤ、カンザ

シナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、

ソノスガタガカハイラシイカラデセ

ウ。

五362 コノカハイラシイ、美シイ蝶

ヲツカマヘテイデメル人ハ、ドウイ

フ心デセウ。

七223 園 私どもの親類で、小さくて

かはいらしいのは、あの春の野に咲

くれんげ草でございませう。」

八119 園 三郎さんは實にかはいらし

く寫りました。

かわうお「川魚」(名) 1 川魚

五161 鯉ハ昔カラ川魚ノ長トイハレ

テキマス。

かわかす「乾」(四・五) 8 カワカス

かわかす 乾カス「一・一ス」

か、地面にひろげるかして、よく日にかわかします。

六164 そのもみを又よく日にかわか

して、すりうすですつて、(略)。

七113 園 刈つて、ひろげて、日にか

わかして、米にこなして、俵につめ

て、(略)。

七349 園 やき物をつくるには、土又

は石のこをねりかためてかわかし、

かまどに入れて焼く。

八394 園 (略)細クキザミデク木

トシ、火ニカワカシテ、(略)。

九615 園 (略)夜具・衣服の類はし

ばく日光にかわかすべし。

十一94 (略)軸木ヲ火ニ乾カス

者、(略)。

十一95 (略)乾イタ軸木ノ先ハ藥

品ヲ附ケル者、ソレヲ温室デ乾カス

者、(略)。

かわかぜ「川風」(名) 1 川風

十一834 園 鵜なはを引上げて、(略)

半月金華山の上に出でて、川風たも

とを拂ふも快し。

かわかみ「川上」(名) 4 川上

八27 園 (略)後神殿を今の五十鈴

の川上に造り、(略)皇祖天照大神

をまつりたまへるなり。

九7310 園 驚きて飛出し候へば、川

上の堤防切れ、隣村は大半水中にあ

り、(略)。

十一795 園 此の川上に瀬尻村あり。

づ見え初めて、ほう／＼と呼ぶ聲を聞く内に、舟は早くも目前にせまり来る。

かわききる「乾切」(五) 1 かわきき

る「一ツ」

八425 長い天氣つゞきで、かわきき

つてゐる上に、今夜の此のはげしい

風では、どこまで焼けて行くか分ら

ない。

かわく「乾」(五) 3 かわく 乾ク

「一イ・一ク」

六158 刈つた稻は(略)よく日に

かわかします。かわくと、それを稻

こきでこいてもみを取ります。

七326 蠶の口の中には(略)その

くだから出すねばつたしるが外へ出ると、すぐにかわいて絲になるので

ある。

十一94 (略)軸木ヲ火ニ乾カス者、

乾イタ軸木ノ先ハ藥品ヲ附ケル者、

(略)。

かわぐち「川口」(人名) 1 川口

二246 川口

かわさき「川崎」(地名) 1 川崎

十二155 又私設デハ三菱・川崎等ノ

造船所ガ最モ大キイ。

かわじょうき「川蒸気」(名) 1 川蒸氣

十一278 園 フルトンの始めて造りし

汽船は、今の小さき川蒸氣程の大き

さなりしならん。

かわず「蛙」(名) 1 カハヅ

六433 井ノ中ノカハヅ大海ヲ知ラ

だん／＼かはつて青白くなる。

七84 1 図 そこに居る人は私たちとはまるでちがつた風をして、かはつたことばで話してゐます。

八83 2 図 (略)、雪月花のながめも折節にかはりて面白く、山川の風景もうるはし。

九84 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレ／＼變ツテナル。

九51 7 図 赤き帽子のトルコ人、長き白布くる／＼と頭に巻ける印度人、所變れば様々に變るよそほひ面白や。

九51 8 図 (略)、所變れば様々に變るよそほひ面白や。

九70 7 冬の雨の日は、(略)。(略)、翌朝起きて見れば、何時の間に雪に變つたか、そこら一面銀世界になつてゐることもある。

十一25 4 図 (略)「車の兩輪の如し。」といへども、(略)の如きは唯一輪なり。自轉車の兩輪が前後に並べるも亦様變れり。

十一46 3 図 (略)、往生院に入りて僧となり、(略)。(略)、心の變ることもあるべきかとて、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十一104 2 図 備崩ズルニ臨ミ、(略)。(略)。孔明はヨリ幼主ヲ輔ケ、益々心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

かわるがわる「近代」(副) 2 カハル／＼ かはる／＼

五69 1 サンケイスル人ハ皆カハル／＼コレヲ鳴ラシテヲガム。

六4 2 日本の國には春・夏・秋・冬かはる／＼色々な花がさき、色々な鳥が鳴く。

かん「漢」(地名) 1 漢

十25 8 図 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖ニ仕ヘ、(略)。

かん「官」(名) 2 官／＼こすぎしむかん・じむかん・しれいかん

九78 10 図 是は菅原道眞が右大臣といふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅立たんとする時、(略)。

九79 4 図 道眞は罪もなきに官を下げられ、あまつさへ遠國へうつされしかども、(略)。

かん「巻」 1 巻いっかん

かん「換」 1 換ひやくまいかんいちえんかん「貫」(名) 2 貫／＼さんじつかん・なんぜんかん

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

かん「棺」(名) 1 棺

十一106 1 図 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

かん「間」(名) 10 間／＼いくせんねん

に相連りて突起す。

十二70 9 図 少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。

十二101 9 図 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

かん「感」(名) 2 感／＼ぎよかん

九81 3 図 道眞今昔の感にたへず、恩賜の御衣をさ／＼けて、はるかに東方を拜し、一篇の詩を作りたり。

十103 2 図 名所・舊蹟ヲアマネク尋ネンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感アルベシ。

かん「幹」 1 幹すうかん・すうじつかん

かん「館」 1 館いこくはくぶつかん・すいぞくかん・ていしつはくぶつかん・としよかん・はくぶつかん・びじゅつはくぶつかん・ゆうしゅうかん・ルーブルはくぶつかん

かん「艦」(名) 4 艦いちくちくかん・いっかん・かいぼうかん・くちくかん・じゅんようかん・じゅんようかん・いんかいすうせき・じゅんようかん・たい・たちほかん・たちほかんのりくみすいはい・つうほうかん

九19 6 図 兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

九19 6 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

九50 5 図 (略)、艦の名あるは水兵ぞ。」

帽。

十一3110 戦艦ハ（略）。（略）、又艦ノ要部ハ極メテ厚キ鋼鐵ニテ包メリ。

かん〔冠〕（形状）2 冠

十二639 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

十二724 位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、自ら省みてやましき所ある者は、苦多く、樂少し。

がん〔雁〕（課名）2 がん

六目5 第四 がん

六121 第四 がん

がん〔岸〕 凸ほくせいがん
がん〔雁〕（名）8 がん 雁

六124 がんハツバメノカヘルジブンニ來テ、ツバメノ來ルジブンニカヘル。

六126 モウ秋ニナツタカラ、ガングオヒオヒトンデ來ル。

六127 がんハイツデモ一シヨニナツテ、列ヲツクツテトブ。

六131 ソノ時ニハ一羽ノガングハ列ヲハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。

六134 ホカノガングハ道アンナイノ行ク方ヘツイテ行ク。

六143 がんノ鳴クコエヲ聞クノハ、空ガ暗レテ、月ノ明ルイ晚ニ多イ。

八548 （略）、つる・がん・つばめなどの様に、氣候によつてすみ所をかへる鳥は、總べてつばさが大きい。

十二675 又燕の春來りて秋去り、

雁の秋來りて春去るが如く、（略）。

かんい〔官位〕（名）1 官位

十二975 官位・門地・技術・財産・學問等に於て衆を抜く者は、個人としても自ら高尚なる品格を要するが如く、（略）。

かんう〔關羽〕（人名）1 關羽

十一1028 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽・張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。

かんか〔感化〕（名）2 感化

十二918 幼兒は母の感化を受くること最も多し。「其の母によりて其の子を養せよ。」といへるが如く、（略）。

十二964 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、市井の感化を恐れ、三度其の居を遷せりといふ。

かんがい〔灌溉〕（名）1 灌溉
十一1145 用水路の改修行はれ、灌溉・排水其のよろしきを得て、（略）。

かんがえう〔考〕（下二）4 考フ 考ふ

かんがえう〔考〕（下二）4 考フ 考ふ

かんがえう〔考〕（下二）4 考フ 考ふ

かんがえう〔考〕（下二）4 考フ 考ふ

かんがえう〔考〕（下二）4 考フ 考ふ

かんがえう〔考〕（下二）4 考フ 考ふ

十二985 公德とは（略）、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつしむ徳義をいふ。

かんがえ〔考〕（名）3 考

十188 たくさんの本を讀んだ學問の深い人でも、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。

十824 彼等は元は讀み書きも知らず、算數の考もとぼしかりしが、（略）。

十一122 分業デスル仕事ハ（略）、ソレ／＼ノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。

かんがえいる〔考居〕（上二）1 考へ居る

十二746 （略）、便利なる航路を開かんことは歐洲人一般の希望なりき。（略）、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンブスは最も熱心に之を考へ居たり。

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

かんがえみる〔考見〕（上二）1 考へ見る

たが、（略）。

五656 おちよはしばらく考へて、葉書の裏へ次のやうに書きました。

五757 何でも裏からまはつて、てきのふいをうたなければならぬ。」と考へて、（略）、こつそりと裏道からひよどりごえに向つた。

七293 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そう手間がかかる。それを考へると、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

七427 （略）、その折にはよい馬にめして、主人のお目にとまるやうになされるのが大事と考へまして、今日このお金を出したのでございます。

八197 親類や友だちは大そう心配しまして、どうしたらよいかと、いろ／＼考へてゐました。

九310 此の度は大丈夫と考へて、「何月何日初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、（略）。

九336 （略）、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、日夜其の事ばかり考へてゐた。

十184 讀んでゐる間には中に書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、（略）。

十185 (略)、どうして出来るものか
 といふ事は深く考へないが、(略)。
 十一503 古来アラビヤ人は馬を家族
 の一員と考へて、家長は之を自分の
 子供と同じ様にかはいる。
 十二649 材料ノ種類や料理ノ方法
 ハ、先づ衛生・經濟・味ノ三方面ヨ
 リ考へナクレバナラス。
 十二652 (略)、味ハ人々ノ好ミヲ考
 ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選
 バナクレバナラス。
 かんかく「間隔」(名) 1 間隔
 十一482 アラビヤ人は後をふりかへ
 りく、絶えず追手と或間隔を保ちな
 がら進んで行く。
 かんかく「感覺」(名) 1 感覺
 十四59 (略) 曲線は直線よりもやはら
 なる感覺を與ふるを以て、(略)。
 かんがみる「鑑」(上一) 1 かんがみ
 る「一」
 十一1177 (略) 建國以來三千年 歴史
 の跡にかんがみて、日進月歩ゆるみ
 なき 同胞すべて六千萬。
 かんき「寒氣」(名) 1 寒氣
 十一959 (略) 冬は寒氣厳しく、
 地面は三尺の下まで凍り、海岸も海
 水厚く凍結し、(略)。
 かんき「歡喜」(名) 2 歡喜
 十一591 將軍の愛情と勇氣によつ
 て、軍中の花が助かつたので、全軍
 一同に歡喜の聲をあげた、(略)。
 十二799 (略)、コロンプスは

(略)、歡喜を眼の光に浮べて眞先に
 上陸し、此の西班牙の新領地をサン
 サルバドルと命名せり。
 かんき「寒氣」(名) 1 寒氣
 十二93 霜にやけて、赤くなつた杉垣
 の中には、寒氣が今を盛りと咲いて
 る。
 かんき「歡喜」(サ変) 1 歡喜す
 「一」
 十二796 (略) 船員皆歡喜して、コロ
 プスの身邊を圍み、争ひてこれまで
 の不從順なりし罪を謝せり。
 かんき「觀客」(名) 2 觀客
 十一799 (略) 鵜飼は(略)。觀客は遊
 船を中流に浮べて、鵜舟の下り来る
 を待つ。
 十二643 (略)、テームス河岸の國
 會議事堂は第一に觀客の目を引く建
 築物なり。
 かんき「感泣」(サ変) 1 感泣
 す「一」
 十二116 (略) 將軍之を聞きて感泣せざ
 るはなかりき。
 かんき「感興」(名) 1 感興
 十一207 (略)、屋島・壇浦は源平
 の昔語に人の感興を動かすこと甚だ
 切なり。
 かんぎ「勸業」(名) 1 勸業
 十一1118 (略) 村の財産家に勸業に熱心
 なる人あり、自ら先んじて耕作・養
 蠶・養雞・養魚等の模範を示せしを
 以て、(略)。

かんけい「關係」(名) 7 關係 どの
 ぶつとしよくぶつのかんけい
 十一918 (略) 物の價の高下は主として
 需要と供給との關係によりて定まる
 ものなり。
 十一931 (略) 物の價はかくの如く需要
 供給の關係によりて、或時は高く、
 或時は安くなるものなれども、(略)。
 十二164 (略) 日々の天氣は我等の生活
 に大なる關係あり。
 十二231 (略) 動物は(略)空氣中の酸素
 を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出す。(略)。植
 物も(略)。(略)炭酸瓦斯を取つて
 (略)酸素を放つ作用がある。(略)。
 是は前にいつた様な關係がびんの中
 の金魚と水草の間に行はれるからで
 ある。
 十二235 (略) 此の外、動物は植物の果實
 ・根・葉等食つて體を養ひ、植物
 は動物質の腐敗物を肥料として成長
 する等、生存上動物と植物の關係は
 極めて密接なものである。
 十二1037 (略) 市町村長・議員等を選舉
 するには(略)親族・縁故其の他私
 交上の關係をさしはさむべからず。
 十二1092 (略) 帝國議會の協賛は國家の
 盛衰、國民の安危に重大なる關係を
 及すものなれば、(略)。
 かんけい「いしや」 どのかんけいしや
 ちどう
 かんげい「す」(歡迎) (サ変) 1 歡迎す
 「一」

十二804 (略) かくてコロンプスは報告
 の爲、西班牙に歸航せしが、パロス
 港の群衆は出帆の日に數倍し、略、
 皆争ひてコロンプスを歡迎し、(略)。
 かんげき「感激」(名) 1 感激
 十二112 (略) 殊ニ我が軍ノ損失・死
 傷ノ僅少ナリシハ歴代神靈ノ加護ニ
 依ルモノト信仰スルノ外ナク、(略)。
 皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯
 感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ
 如シ。
 かんこう「勸工場」(課名) 2 勸工場
 七目12 第十一 勸工場
 七36 第十一 勸工場
 かんこう「勸工場」(名) 2 勸工場
 七36 町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸
 工場ガ出來タ。
 七56 (略)、兩ガハニアマタノ店
 アリ。勸工場ニ入リタルコ、チス。
 かんこう「官吏」(名) 1 官吏
 十一1210 (略)、農夫ノ田畑ヲ耕シ、
 大工ノ家屋ヲ作り、商人ノ物品ヲ賣
 買シ、官公吏ノ事務ヲ取扱ヒ、教師
 ノ生徒ヲ教育スル等ハ(略)。
 かんこく「韓國」(地名) 4 韓國 韓國
 八789 (略) アジヤ大陸には印度・支
 那・韓國等あり。
 十二169 (略)、全國に凡そ百箇處
 の測候所あり。尚韓國・清國にも二
 十餘箇處を置けり。
 十二57 (略) 韓國
 十二58 (略) 安奉線は(略)、韓國の

縦貫鐵道に連結す。

かんごす「看護」(サ変) 1 看護す

《一セ》

717 ㊦ (略) ターリングの手は、今ややさしきをとめの手にかへりて、半死半生の水夫を親切に看護せり。

かんさいせん「関西線」(名) 1 関西線

730 ㊦ (略) 大阪ヨリ奈良ニ至ルニハ関西線ニヨルベシ。

かんさいにっこう「関西日光」(地名)

1 関西日光

1007 ㊦ (略) 多武峯ナル談山神社ニ達ス。社殿壯麗ニシテ、関西日光ノ稱アリ。

かんざし「簪」(名) 3 カンザシ

535 ㊦ キモノノモヤウヤ、カンザシナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、ソノスガタガカハイラシイカラデセウ。

736 ㊦ 筆・墨・紙ナドノ店、クシ・カンザシナドノ店ヲ見テ、(略)。

772 ㊦ カンザシノ玉ヤラジメニスルサンゴハコノ蟲ノ骨デアル。

かんし「漢詩」(名) 1 漢詩

16 ㊦ 夫に別れて後、宮中に召されて、上東門院に漢文・漢詩を教へ參らせたり。

かんじもうす「感申」(四) 1 感じ申す《一サ》

158 ㊦ 兵營内の酒保には日用品・飲食物等を販賣致し居り候へば、外出せずとも少しも不自由を感じ申

さず、(略)。

かんしや「感謝」(名) 1 感謝

717 ㊦ (略) 半死半生の水夫を親切に看護せり。数日の後、水夫は此の少女の手に熱き感謝の涙をそそぎて、(略)。

かんしやいたしおり「感謝致居」(ラ変) 1 感謝致し居り《一リ》

159 ㊦ 中隊長殿の何事に注意の周密なるは隊中一同感謝致し居り候。

かんしよ「甘諸」(課名) 2 甘諸

1011 第十課 甘諸

1034 第十課 甘諸

かんしよ「甘諸」(名) 1 甘諸

1305 ㊦ 甘諸ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。

かんしよ「寒暑」 ㊦ しきかんしよ

かんじよ「官女」(名) 2 クワンデヨ

くわんぢよ

474 ㊦ ニダン目ニハクワンデヨ

ラスエテ、三ダン目ニハ五人バヤ

シヲオキマシタ。

477 ㊦ 一人のくわんぢよがその下に立つて、さしまねいてゐます。

かんしよ「官省」(名) 1 官省

758 ㊦ 公園ヲ出ヅレバ、海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。

かんじよ「寛城子」(地名) 1 寛

城子

1257 ㊦ 寛城子

かんしよ「官職」(名) 1 官職

12112 ㊦ 上元帥より下一卒に至るまで、官職の高下、就職の新舊によりて上下の分別最も正し。

かんしよせんせいのはか「甘諸先生墓」(名) 1 甘諸先生墓

1342 ㊦ 昆陽ハ七十二歳ニテ死セリ。東京ノ西南、目黒ナル墓石ノ面ニ「甘諸先生墓」トアリ。

かんしん「韓信」(人名) 3 韓信 ㊦ ちよりようとかんしん

1249 ㊦ 韓信大刀ヲオビテ市中ヲ行ク。

1255 ㊦ 韓信シバシ其ノ面ヲウチマ

モリシガ、ヤガテハラバヒテ勝ノ下

ラクグル。

1258 ㊦ 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖

ニ仕ヘ、良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、信ハ

外ニ兵ヲ用ヒテ、遂ニ高祖ヲシテ其

ノ大業ヲ成サシメタリ。

かんしん「感心」(名) 1 感心

9224 ㊦ おつかさんの精神は感心の外はない。

かんしん「歡心」(名) 1 歡心

115310 ㊦ 他人ノ歡心ヲ買ハントシ

テヘツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイ

ヤシムベシ。

かんしん「感心」(形状) 3 感心

98510 ㊦ 「感心だくく、えらい子だ。

(略)、人の命にはかへられないと、

相手を助けてやつたのは如何にも見上げたつばな行だ。

98510 ㊦ 「感心だくく、えらい子だ。

11111 ㊦ 朝鮮人は餘り衛生に注意し

ないが、婦人の着物をよく洗ふこと

は感心である。

かんしんさ・せる「感心」(下二) 1 感

心サセル《一セル》

7274 ㊦ 筆一本デ美シイエヲカイタ

リ、ノミーツデ見事ナホリ物ヲコシ

ラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ、

手ノハタラクデセウ。

かんしんす「感心」(サ変) 1 感心す

《一セ》

8726 ㊦ 諸君若し我に食物を送るた

めに働きたりといはば、我もまた諸

君を養ふために勞したりといはん。

(略) 世はすべて相持なり。」とい

ふに、手足等一同成程と感心せり。

かんしん・する「感心」(サ変) 4 かん

しんする 感心する 《一シ》

6473 ㊦ 少しのゆだんもなく主人に

仕へるこゝろざしにかんしんして、

これから信長は目をかけて使ひまし

た。

6484 ㊦ 秀吉は(略)、仕事をいそが

せましたから、すぐに出来上りまし

た。信長はこれを見て、ますくかん

しんして、それからだんく重く

取立てて、(略)。

7442 ㊦ 見上げた志のもの、りつばな

武士。」と、信長は大そう感心して、

これが一豊の出世のものとなつたと
いふことであります。

九三三 (略)、百五十マイルを三十二
時間で走つた。之を聞いて、是まで
フルトン^{フルトン}を笑つた人々も大いに感心
して、(略)。

かんす「関」(サ変) 6 關ス 關す

『スル』

九二九 (略)、内外古今ノ武器其ノ
他軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

十五七 (略)、學科は讀法の講義
及び毎日の術科に關する説明に御座
候。

十五八 (略) 忠臣・義士に關す
る講談等もこれあり、面白く有益に
存候。

十七八 (略) 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナ
ルモノニテ、一少部分ノ傷害モ直チ
ニ全身ノ元氣ニ關スルモノナレバ、
(略)。

十九〇 (略) 耕地整理に關する
講話これあり候。

十二七四 (略) 伊太利の大旅行家
マルコ・ポーロの日本に關する記事
を讀み、(略)。

かんす「感」(サ変) 7 カンズ 感ず

『ジ・ズル・ゼ』

七四八 (略) 母ハ(略)、「略」トテ、
泣クノイマシメタリ。正行大イニ
カンジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ
教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナ
カリキ。

七八一 (略) 「親子二代相ツバイテノ
忠義カンズルニアマリアリ。

十五九 (略) 入營當時は友人も少く、
生活も一變致し候事とて、多少不自
由を感じ候へども、(略)。

十一四四 (略) 熊王恩に感じて、涙せき
あへず。

十二三三 (略)。「略」。何ぞ私事を以て
公事を害せんや。」と答ふ。秀忠
いに感じて其の言に隨ひ、嘉明を舉
げて會津に封ぜり。

十二七八 (略) コロンブスは獨り堅固な
る決心を以て動かざること山の如
く、船員も其の勇氣に感じて命令に
服せざるを得ざりき。

十二九九 (略) に道をゆづり、(略)
に席を與ふるが如きは、個人として
も、國民としても、其の心の奥ゆか
しきを感じずや。

かんせい「す」(完成) 1 完成す
『セ』

十一一四 (略) 耕地整理は縣下諸村に先
んじて着手し、昨年既に之を完成せ
り。

かんせき「岩石」(名) 2 岩石

九五五 (略)、イカハ(略)、岩石
ナドニ附着スル時ハ岩石ト同ジ色ニ
見ユ。

九五五 (略)、イカハ(略)、岩石
ナドニ附着スル時ハ岩石ト同ジ色ニ
見ユ。

かんせん「ゆうしんかんせんす

かんぜん「完全」(形状) 2 完全

十一一二 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其
ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手
ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時
計ニ組立テルコトハ出來ナイ。

十一八八 (略)、先づ幾條かのや、
太き絲を渡し、之を本として、次第
に細き絲をかけ、終に完全なる網を
造る。

かんそく「観測」(名) 1 観測 ムきし
ようかんそく

十二一七 (略) 又各測候所が此の全國天
氣豫報と其の地の觀測とによりて、
其の地方の天氣を豫告するを地方天
氣豫報といふ。

かんそく「観測」(サ変) 1 観測す
『シ』

十二一九 (略) 各地に於て同時刻
に觀測したる晴・曇・雨・雪、風の
方向・強弱、温度等一般の天氣要素
を地圖の上に記載し、(略)。

かんたい「寒帯」(名) 1 寒帯

十二一六 (略) 南臺灣の熱帶地方より北
緯太の寒帯に近き地方まで、(略)。

かんたい「艦體」(名) 4 艦體

十一三三 (略) 巡洋艦ハ(略)。(略)。
其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、何レ
モ多量ノ石炭ヲ積ミ、大ナル速度ニ
テ長時間航海スルコトヲ得。

十一三三 (略) 砲艦ハ(略)。サレバ艦
體輕ク、小サク、船脚ハ淺シ。

十一三四 (略) 通報艦ハ(略)。故ニ艦

體甚ダ輕ク、速度亦大ナリ。

十一三四 (略) 驅逐艦ハ艦體最モ輕ク、
速度最モ大ニシテ、(略)。

かんたい「艦隊」(名) 4 艦隊 ムかみ
むらんたい・しゅせんかんたい・た
いへいようだいにだいさんかんたい・
てきかんたい・れんごうかんたい

十一三四 (略) 通報艦ハ主トシテ艦隊ノ
命令・報告等ヲ傳達シ、(略)。

十一三四 (略) 通報艦ハ(略)、或ハ敵
ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、
我が艦隊ニ報告ス。

十二七九 (略) 我が艦隊は東郷司令長官
の命により、鬱陵島附近に集りて敵
を待ちしが、(略)。

十二九九 (略)、敵艦の大部分は我が
艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或
は捕獲せられて、(略)。

かんち「寒地」(名) 1 寒地

十一一〇 (略) 此の極北の寒地
も今ははや生れ故郷の如き心持に相
成候。

かんちゅう「いちどう」(艦中一同) (名)

1 艦中一同

九二三 (略) 豐島の戦に出なかつたこと
は艦中一同残念に思つてゐる。

かんちよう「官庁」(名) 2 官廳

十二一七 (略) 是等の豫報は氣象臺・測
候所を始め、官廳・諸役所等の前に
揭示せらるゝを以て、(略)。

十二九八 (略) 市街・道路を不潔にし、
官廳・學校・神社・佛閣等の建築物

をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。

かんちょう【漢朝】(名) 3 漢朝

十一〇二【劉備ハ漢朝ノ末流、英明ニシテ大志アリ。

十一〇三【漢朝ノ復興ヲ圖リ、シキリニ賢士ヲモトム。

十一〇四【孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、先ヅ南方ノ亂ヲ平ゲ、遂ニ自ラ諸軍ヲ率キテ北征ス。

かんつうす【貫通】(サ変) 1 貫通す

『一シ』

十二六二【然れども地下には各種の鐵道縱横に貫通し、テームス河床の下をも往來せり。

かんてい【イソウとくかんてい】

カンテラ(名) 1 カンテラ

十六二【カンテラノ光ヲ便リニ數千人ノ坑夫ガ銅鑛ヲ掘取ルコト、晝夜止ム時ナシ。

かんでん【乾田】(名) 1 乾田

十一一四【(略) 用水路の改修行はれ、灌漑・排水其のよろしきを得て、水田は乾田となり、(略)。

かんと【關東】(地名) 1 關東

十三〇【關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。

かんと【關東平野】(地名) 1

九一五【利根川ハイハユル關東平野

ヲ貫流シ、(略)。

かんとんぶじん【廣東婦人】(名) 1

十一三八【(略)、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覺え申候。

かん【鮑】(名) 1 カンナ

一六五【ノミキリカンナノコギリかんなめさい【神嘗祭】(名) 1 神嘗祭

八七【今日は神嘗祭なれば、夕方には内宮へ勅使の參拜もあるべしといふ。

かんぬし【神主】(名) 1 神主

九三【神主は先づ神前で祝詞を上げて、(略)。

かんのん【観音】(名) 1 観音

十九九【初瀬山ノ中腹ニ長谷ノ観音アリ、(略)。

かんのんどう【観音堂】(名) 3 観音堂

七五五【淺草ノ觀音堂モ東ノ方ニ見ユ。

七五六【雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀音堂ニ向ツテ行ケバ、兩ガハニアマタノ店アリ。

七五六【仁王門ヲ入りテ觀音堂ヲ拜シ、(略)。

かんばん【看板】(名) 1 カンバン

一三五【ミセノレンカンバン

かんばん【甲板】(名) 4 甲板

七三三【又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

七九一【船ハ次第ニ沈ミ行キテ、水ハステニ甲板ヲヒタセリ。

一六四【甲板に立つてゐた船長を始め、三十五人の若者はひとしく目を其の方向に向けた。

一二四【肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。

かんびす【完備】(サ変) 1 完備す

『一セ』

一二七【スチンソンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。

かんびよう【看病】(サ変) 1 看病する

八六八【一人でね起きの出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。

かんふう【寒風】(名) 1 寒風

一一三【寒風身を切る様な冬の日でも、氷の下の水をくんでせんたくする。

かんぶん【漢文】(名) 1 漢文

一六六【夫に別れて後、宮中に召されて、上東門院に漢文・漢詩を教へ参らせたり。

かんぶん【感奮・勉勵】(サ変) 1 感奮・勉勵す

『一シ』

一二九【孟子を戒めて曰く、「汝の今學を廢するは我が此の機を

斷つが如し。」と。孟子これより感奮・勉勵して遂に一世の大家となり、(略)。

かんべいたいしゃ【官幣大社】(名) 2

官幣大社

一〇五【(略)、官幣大社春日神社ニ到ル。

一〇八【コ、ニ官幣大社大神神社アリ。

かんむてんのう【桓武天皇】(人名) 1

桓武天皇

九二五【桓武天皇の御代に至り、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。

かんむり【冠】(名) 2 かんむり冠

九五一【古風ゆかしき我が國のかんむり・烏帽子今は唯 祭の服に残りたり。

一一〇【男の冠をかぶり、其のひもを長くたらし、(略)、昔の人に會つた様な氣がする。

かんめい【官命】(名) 1 官命

一一三【先月は官命により南部地方へ出張致候。

かんゆうす【勧誘】(サ変) 1 勧誘す

『一スル』

一二〇【市町村長・議員等を選挙するには(略)。まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、(略)。

かんらんす【観覽】(サ変) 1 観覽ス

『一シ』

五五六 (略)、ヒルノ間ハ木ノウロヤ
穴ノ中ニカクレテキテ、(略)。
五五七 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
出シマシタガ、(略)。
五五八 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
出シマシタガ、(略)。
五五九 火バチナドニ入レル炭ハ、木
ヲヤイテコシラヘタモノデス。
五六〇 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土
ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物
デ、(略)、石炭トイヒマス。
五六一 (略)美シイ角ガ木ノ枝ニヒ
ツカ、ツテ、イクラモガイテモハツ
レマセン。
五六二 どの山にも木がよくしげつて
ゐる。
五六三 刈つた稻はさをや木にかける
か、地面にひろげるかして、よく日
にかわかしす。
五六四 サルモ木カラオチル。
五六五 桐ハヤハラカクシテ弱キ木
ナレバ、家ヲタツル材木トシテハ用
ヒラレザレドモ、(略)。
五六六 大きな蠶がたくさんで桑の葉
を食ふ時には、木の葉に雨が降りか
ゝるやうな音がする。
五六七 この時木の枝やわらなどで作
つたまふしへうつしてやると、(略)。
五六八 塗物はくりたる木又は組合
せたる木・竹又紙などにうるしを塗
りてつくる。
五六九 塗物はくりたる木又は組合

せたる木・竹又紙などにうるしを塗
りてつくる。
七六〇 コ、ニハ櫻ノ木多シ。
七六一 いつしよについだ梨の木の
方は、今年はまだ實がなりません。
七六二 (略)、やしき中の桃の木に
皆つぎ木をすと申してゐます。
七六三 中デオモシロイノハサンゴ
デ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ
形ヲシテキル。
七六四 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出
シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數
マデ數ヘ上グレバ、(略)。
七六五 綿ノ木カラトリマス。
七六六 綿ノ木ハドコニ出来マスカ。
七六七 綿ノ木ハ畑ニ作リマス。
七六八 藍ノ草ハ綿ノ木ト同ジ様ニ畑
ニ作リマス。
七六九 虎モマタ猫ノ如ク、ヨク木
ニヨヂ上ルコトヲ得。
七七〇 (略)、南半球にては木の葉
散りしきて、蟲の鳴く秋の時候なり。
七七一 さていよ／＼沙漠に入りし
が、木のかげ一つもなき砂原つゞき
なれば、(略)。
七七二 (略)、木ノ葉ニヤドル雨ガ
ヘルハ緑色ナリ。
七七三 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダ
シヤクトリハ、(略)。
七七四 (略)、其ノ體色ノ桑ノ木ニ
似タル上、(略)。
七七五 (略)、其ノ體ノ後ノハシヲ

桑ノ木ニ附ケ、(略)。
七七六 秋の末になつて、風の吹散し
た木の葉の上に、雨の降りかゝるの
は、(略)。
七七七 (略)落葉・こけ及び網の
如くひろがれる木の根などは、(略)。
七七八 圖や畫は別に堅い木に彫り、
寫眞は銅版に彫りつけて、相當の場
所に入れる。
七七九 それは版下を堅い木にはりつ
けて、其の上から彫つて版木を造り、
(略)。
七八〇 黄に紅に林をかざつてゐた木
の葉も、大方は散果てて、(略)。
七八一 (略)、古い銀杏の木が一本、
木枯に吹きさらされて、今は葉一枚
も残つてゐない。
七八二 物置の後には、大きなだい
／＼の木があつて、(略)。
七八三 銀杏の木の鳥は急いで山の方
へ逃げて行く。
七八四 庭に一本葉の木、(略)。
七八五 あつし織とは、おひようと
いふ木の皮を細く裂きて織りたる織
物なり。
七八六 紀貫之ガ(略)。トヨミタ
リトイフ梅ノ木ハ(略)。
七八七 (略)、大いなる櫻の木の
幹をけづりて、大文字に詩の句を書
きつけたり。
七八八 秋の山は紅葉の錦を織
り、冬の木は白雪の綿を重ねぬ。

き「氣」(名) 22 き 氣きおきのどく
・かちき・なんのきなし
五八九 天照大神あまてらすかみの御弟に、すさのを
のみことといふきのあらひ神さまが
ありました。
五九〇 (略)、何だか目がまはつて、
しばらくの間は何も知らずにゐまし
た。きがついて見ると、人が二三人
立つて、「見」ごとなきただ。」といつ
て、ながめてゐました。
五九一 しわはよつてもわかい氣
で、小さい君らのなま入、うんど
う會にもつて行く。
五九二 一本三せんづつのを二本買つ
て、十せん銀貨を出したから、(略)
そのつりに一せんの銅貨を三枚渡し
た。男の子も氣がつかずにそのまゝ
かへつた。
五九三 直吉は後でふと氣が附いて、
「(略)。今のお客にもう一錢上げな
ければならなかつた。」といつて、
(略)。
五九四 ちゃんとしせいをよくして、
氣を附けてゐて、何を聞かれても、
はつきりと答へる子供もございまし
た。
五九五 (略)、病は口より入ると
いふ。飲物・食物氣を附けよ、心せ
よ。
五九六 又きたない水やぐさつた水を
飲むと、おそろしい病氣にかゝるこ
とがある。よく氣を附けなければな

らない。

八119 御寫眞をありがたう。よく寫つてゐるので、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。

八247 どうするのかと氣を附けてゐると、隣の家の方へ行きます。

九314 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出來上るものではない。

十363 私はわざと一卷の書物を床の上に投げておきました。外の者は少しも氣が附かないで、中にはそれをふんだ者もありましたが、(略)。

十863 (略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするのも、人に恐れるからである。氣を附けなければならぬ。

十一219 (略)、千里寄せる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。

十一563 どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。

十一567 おくれ、ばピエールはこゝえて死ぬであらう。兵士等は氣をあせるのみで、何の工夫もつかぬ。

十一7410 (略)「先に畫がきたる櫓の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、(略)」。十一1002 男の冠をかぶり、(略)、田舎道を通るのを見ると、昔の人に會つた様な氣がする。

十二338 (略)、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。

十二835 重く沈んだ調に暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかと思ふと、(略)。

十二907 四季寒暑の變り目にはとりわけ衣服・飲食に氣を附くべし。

十二958 (略) 蘭相如が秦王を叱したるとは異なり、相如は氣を以て人を服せりといへども、孔子は義を以て人を動かせしなり。

き「忌」ひしちかいき・ぼうふしちかいき

き「記」ひりようき

き「黄」(名)7 キ 黄ひあさぎ
一415 アカアヲキムヲサキ
七357 塗物に黄・赤・黒・青などさまざまの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。

八838 我等日本人は髪も黒く、眼も黒く、皮膚の色は黄なり。
九577 (略) 毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黄ト黒トノダンダラニテ、(略)。

十278 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果てて、(略)。
十482 色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

十486 例へば(略)、青に黄を加ふれば、緑となるが如し。
き「着」ひうわぎ・はれぎ

き「機」(名)1 機ひせいぼうき・そめんき・れんじようき

十一1049 孔明ハ沈着ニシテ機ニ臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。
き(助動)284 キ 機「キ・シ・シカ」

六805 大阪ハ昔ハ難波トイヒテ、仁徳天皇ノ都シタマヒシトコロナリ。
六806 秀吉コノニ城ヲキヅキシヨリ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナレリ。

六811 昔仁徳天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲアハレミタマヒキ。

七13 正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、(略)。
七15 (略)、ソノ折父トトモニ戰場ニ出デントセシガ、(略)。

七41 父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。

七51 正行大イニカンジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナカリキ。

七56 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。
七62 父正成ノ戦死セシ時、臣ハワヅカニ十一歳、(略)。

七88 コレ正成戦死ノ後十三年目ニシテ、正行ガ二十三歳ノ時ナリキ。
七228 シカルニ目ハ見エズシテ、大學者トナリシ人アリ、塙保己一コ

レナリ。

七229 保己一ハ五歳ノ時メクラトナリシガ、(略)、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲアラハセリ。

七231 (略)、人ニ書物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカバ、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲアラハセリ。

七236 (略)、多クノデシ保己一二ツキテ學ビシカバ、(略)。
七242 アル夜弟子ヲ集メテ、書物ノ講義ヲセシ時、風ニハカニ吹キテ、トモシビキエタリ。

七506 お花は「はい。」と答へて受取らんとせしが、配達夫は「(略)」といふ。

八23 神代の昔皇祖天照大神、瓊々杵尊をこの國に降したまはんとせし時、(略)とおほせられたり。

八26 (略)、代々の天皇はこれを宮中にあがめたまひしが、(略)。
八37 (略)、天皇陛下御參拜あらせられ、平和の成りたるを告げたまひしが、(略)。

八38 (略)、その御式の盛なること前古たぐひなかりきと申す。
八68 禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「(略)」。トイヒシニ、(略)。

八277 昔百濟川成トイフ名高キ畫エアリキ。
八308 (略)、カノ死人ト見エシハ、フスマニエケル繪ナリシナリ。

- 八309 〔略〕、カノ死人ト見エシ
ハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。
八387 〔略〕、此ノモノノナカリシ
昔ヲ思ヒ出ストキハ、今更ニ其ノ便
利ナルニ驚カル、ナリ。
八406 〔略〕 我ガ國ニテハ、初ハモツパ
ラ輸入品ヲ用ヒタリシガ、〔略〕内
地ニテモ之ヲ製造スルニイタレリ。
八499 〔略〕、蘇我入鹿勢ヲホシイ
マ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフ
ルマヒ多カリキ。
八504 〔略〕 此ノ頃中大兄皇子ト申スカ
シコキ皇子アリキ。
八506 〔略〕 鎌足〔略〕、大事ヲ成スニ
ハ此ノ皇子ヲイタマキ奉ルヨリ他ニ
道ナシト思ヒシガ、〔略〕。
八507 〔略〕、未ダ近ヅキ奉ル折ラ
得ザリキ。
八513 〔略〕 鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツ
キテ皇子ニサ、ゲシニ、皇子モ〔略〕
受ケ給ヘリ。
八531 〔略〕 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ
討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出
デズ。
八543 〔略〕 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ
奉リテ功アリシカバ、〔略〕、藤原ノ
姓ヲタマヘリ。
八707 〔略〕 かくて二三日を過せしに、
〔略〕、身體は全く力なきにいたれり。
八721 〔略〕 諸君は今にして諸君の誤
れるをさともしならん。
八938 〔略〕、其の天守閣は加藤清

- 正のきづきしものなり。
八953 〔略〕、早くより東海道一の
大都會なりしが、〔略〕等の産出す
こぶる盛なり。
八953 〔略〕、鐵道の開通せしより、
商工業の發達著しく、〔略〕。
九19 〔略〕 素戔鳴尊出雲の國に
いたり給ひしに、〔略〕泣きかなしめ
るを見給ふ。
九28 〔略〕 「我等には元八人の娘あ
りしが、〔略〕。
九36 〔略〕、其のほとりに娘を坐
せしめて待ち給ひしに、〔略〕かの太
蛇あらはれ出で、〔略〕、酒を飲みて
よひふしたり。
九310 〔略〕、ずたずたに太蛇を斬
り給ひしに、尾にいたりて、劔の先
少しくかけたり。
九44 〔略〕 天照大神、〔略〕之を皇孫
に授け給ひしかば、これより三種の
神器の一となれり。
九46 〔略〕 かの太蛇の住みし上には叢
雲常に立ちこめたれば、劔の名を天
叢雲劔と申せり。
九49 〔略〕、東國の蝦夷叛きしか
ば、天皇日本武尊に命じて、之を討
たしめ給ふ。
九55 〔略〕 尊之を受けて、進みて駿河
の國に至り給ひしに、〔略〕、火を放
ちて焼き奉らんとせり。
九56 〔略〕 尊之を受けて、進みて駿河
の國に至り給ひしに、ここにありし

- 賊どもいつはり降り、〔略〕。
九63 〔略〕 尊はなほも進みて北に向ひ
給ひしに、〔略〕、東國ことごとく平
ぎたり。
九65 〔略〕 尊これより引返して近江の
賊を討ち給ひしが、〔略〕伊勢にて
かくれ給へり。
九67 〔略〕 草薙劔は尾張の國にとどめ
給ひしかば、宮を建ててそこにまつ
れり。
九116 〔略〕 葉かげにいねし鳥ははや
ゆめも見あきつ。
九208 〔略〕 「聞けば、そなたは〔略〕
威海衛攻撃とやらにもかくべつの働
なかりきとのこと、〔略〕。
九212 〔略〕 『一人の子が國家の爲
いくさに出でし事なれば、定めて不
自由なる事もあらん。
九2110 〔略〕 如何ばかりの思にて、此
の手紙をしたゝめしか、よくく御
察しこれあり度候。』
九269 〔略〕 明治二十七八年の戦役まで
は、我が國の陸軍は僅かに七箇師團
に過ぎざりしが、〔略〕、外に近衛師
團を合せて十九箇師團となれり。
九299 〔略〕 益次郎ハ維新ノ際軍事ニ功
勞多カリシ人ナリ。
九304 〔略〕 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下
ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々ア
リ。
九3810 〔略〕 東海道ノ通路ニアタレルヲ
以テ、昔ハ人馬ノ往來甚タ盛ナリキ。

- 九393 〔略〕、湖水ノホトリニハニ
ギヤカナル市街アリキ。
九411 〔略〕 旅人ノ往來盛ナリシ箱根驛
モ、浴客ノ多ク集レル今ノ箱根七湯
モ、〔略〕。
九412 〔略〕、遠キ昔ハ共ニ恐ロシ
キ噴火山ナリシナリ。
九428 〔略〕 山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、
〔略〕、遂ニ今日ノ如キ美シキ景色ト
ナリシナリ。
九453 〔略〕 アリは十歳ばかりの子供な
りしが、〔略〕、隊商と共に出立した
り。
九457 〔略〕 さていよく沙漠に入りし
が、〔略〕、其の苦しさたとへんに物
なし。
九467 〔略〕 すべて沙漠の旅行は、以前
に通じし駱駝の足跡を目あてに行く
なり。
九4810 〔略〕 アリは〔略〕、ありし事を
物がたり、ねんごろに同行を頼みし
に、一同快く引受けたり。
九491 〔略〕、ありし事を物がた
り、ねんごろに同行を頼みしに、一
同快く引受けたり。
九492 〔略〕、又向ふより一組の隊
商到着せしが、其の中にはアリの父
ハッサンもまじれり。
九495 〔略〕 聞けばハッサンは〔略〕、
道連のありしを幸ひ、迎へかたぐ
こゝに來りしなり。
九495 〔略〕、道連のありしを幸ひ、

迎へかたぐくこゝに來りしなり。

九四六 図 たがひに心もとなく思ひ合ひし父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

九四九 図 (略)、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

九四七 図 (略)、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

九五八 図 (略)或老人に、長生の方法を問ひしに、「(略)」と答へたりといふ。

九五九 図 よごれし手にて目をこすりて目をわづらひし人あり。

九五九 図 よごれし手にて目をこすりて目をわづらひし人あり。

九六二 四 図 (略)、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、(略)。

九六二 五 図 (略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばらくなりき。

九六二 五 図 (略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばらくなりき。

九六三 七 図 (略)、さしにも強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

九六三 九 図 かばかりの大功ありし人故、天皇の御信任も厚く、其の薨ぜし時天皇は深く之をしみ給ひき。

九六三 一〇 図 (略)、其の薨ぜし時、天皇は深く之をしみ給ひき。

九六三 一〇 図 (略)、其の薨ぜし時、天皇は深く之をしみ給ひき。

は深く之をしみ給ひき。

九六四 一 図 之をうらむりし時は、(略)、かばねを宮城の方に向ひて立たせ、(略)。

九七九 六 図 道眞は(略)、あまつさへ遠國へうつされしかども、少しも世をいきどほり、人をうらむる心なかりき。

九七九 八 図 道眞は(略)、少しも世をいきどほり、人をうらむる心なかりき。

九七九 九 図 筑紫へ下る道に、昔より相知りし驛長ありて、道眞の今の身の上を深く悲しみにし、(略)。

九八〇 一 図 (略)、昔より相知りし驛長ありて、道眞の今の身の上を深く悲しみにし、(略)。

九八〇 五 図 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、(略)、僅かに詩歌に思をよせて、ひとり自らなぐさめ居たり。

九八二 二 図 去年の今夜(略)身に餘る面目をほどこしたりしが、其の御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。

九八七 九 図 賣買トイフコトナカリシ遠キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九八八 一 図 (略)、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九八八 一 図 (略)、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九八八 一 図 (略)、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九八八 一 図 (略)、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九九二 六 図 みすのうちより 官人の袖引止めて、大江山 いく野の道の遠ければ、ふみ見ずといひし言の葉は、(略)。

九九三 四 図 さいの宮の 仰言、御聲のもとに、古の 奈良の都の 八重櫻、今日九重に にほひぬと、つかうまつりし 言の葉の (略)。

一〇一六 図 昔より富士は日本一の高山と稱せられしが、(略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一七 図 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。

一〇一六 一 図 (略)、父の爲時は(略)、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

一〇一六 八 図 清少納言も(略)、其の才氣を以て知られたるき。

一〇一六 一〇 図 (略)、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。

一〇一六 一〇 図 (略)、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。

一〇一七 二 図 皇后の御感一入なりきとぞ。

一〇一七 六 図 (略)といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。

一〇一七 八 図 (略)、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。

一〇二五 四 図 韓信シバシ其ノ面ヲウチマモリシガ、ヤガテハラバヒテ勝ノ下ヲクゲル。

一〇二六 一 図 (略)、其ノ初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

一〇二六 二 図 (略)、其ノ初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

一〇三〇 八 図 名稱ノカク異ナルヲ以テモ、此ノ芋ノ次第二西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

一〇三〇 一〇 図 (略)、アメリカヨリルソン

一〇三〇 一〇 図 (略)、アメリカヨリルソン

- ニ傳ハリ、ルソンヨリ支那ニ入りシガ、(略)、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。
- 十311 國 (略)、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。
- 十312 國 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、(略)。
- 十315 國 然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、(略)ノ盡力ニヨル。
- 十316 國 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、(略)、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。
- 十321 國 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノヲト心ガケシガ、(略)。
- 十323 國 (略)、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。
- 十323 國 (略)、其ノ出來非常ニ良カリシヲ以テ、數年ナラズシテ石見一國ニヒロガリ、(略)、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レリ。
- 十328 國 サレバ平左衛門ノ死セシ時ハ、(略)父母ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。
- 十332 國 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。
- 十334 國 (略)、罪人ドモハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。
- 十336 國 (略)、或年試ミニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚ダ良カリキ。
- 十337 國 (略)、或年試ミニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚ダ良カリキ。
- 十339 國 (略)、島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、間モナク全國ニ作ラル、ニ至レリ。
- 十416 國 砲音絶えし砲臺にひらめき立てり、日の御旗。
- 十428 國 (略)、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。
- 十435 國 (略)、海外ニ輸出セント試ミシガ、(略)、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。
- 十437 國 (略)、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。
- 十438 國 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國ヘ送りシニ、(略)。
- 十439 國 (略)、翌年英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、(略)、遂ニ今日ノ盛大ヲ見ルニ至レリ。
- 十445 國 眠亀ガ(略)、機械ヲ發明シ、國產ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。
- 十526 國 義仲の幼目に見たりし時も、すでに白髪まじりの老人なりき。
- 十527 國 義仲の幼目に見たりし時も、すでに白髪まじりの老人なりき。
- 十544 國 『(略)』といひしにたがはず、墨を塗るて候。」
- 十547 國 「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。
- 十547 國 「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、(略)。
- 十556 國 (略)、さめくくと泣きたれば、一座皆よろひの袖をしぼらざるはなかりき。
- 十615 國 然レドモ其ノ頃ハ掘取リテフキ分クル方法ナホ不十分ナリシカバ、產出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト多カリシナリ。
- 十616 國 (略)、產出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト多カリシナリ。
- 十617 國 明治二十年頃、新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、大イニ人力ヲ省クコトヲ得テ、(略)世界有數ノ大銅山トナレリ。
- 十632 國 (略)、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、鑛業ノ盛大ニオモムクト共ニ次第ニ發達シテ、(略)。
- 十691 國 (略)、幾度かいそべに出でてながめしが、(略)、心ならずも夜明を待ちたり。
- 十698 國 父は此の大波に何とて行かざるべきと思ひしが、娘のやさしき心にはげまされて、ボートを用意す。
- 十711 國 (略)、男勝りの大力にてボートをあやつりしダーリングの手は、(略)、半死半生の水夫を親切に看護せり。
- 十737 國 (略)、往昔天皇の行幸し給ひしことも數回に及べり。
- 十824 國 彼等は元は読み書きも知らず、算數の考もとばしかりしが、今は内地人と同じく、読み書き・計算をもし得るものあるに至り、(略)。
- 十828 國 あいぬの數、古は甚だ多かりしが、近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に足らず。
- 十887 國 君の御供に仕へしは藤房・季房唯二人。
- 十893 國 さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれがもふし。
- 十946 國 此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニシテ藤原不比等ノ建立セシトコロ、(略)。
- 十949 國 (略)、規模極メテ大ナリシガ、今ハ往時ノ三ノ一ニモ足ラズ。
- 十955 國 (略)、ト、伊勢大輔ノヨミシ其ノ奈良櫻ノ名残ヲトメタリ。
- 十963 國 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリテ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。
- 十966 國 天の原ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。
- 十979 國 人ヲシテソマロニ佛教ノ盛ナリシ奈良時代ヲオモハシム。
- 十1004 國 其ノ附近ノ地ハ(略)、神功皇后以後、シバく皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。
- 十1011 國 昔ノ人ノ(略)。ト歌ヒシハコ・ナリ。
- 十1016 國 (略)、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、鎌足ガ靴ヲサハゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺

ナリ。

十102 9 國 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、(略)。

十一2 2 國 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、(略)。

十一2 7 國 (略) 大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。

十一3 10 國 天皇のこゝに行幸ありしより三年、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、(略)。

十一3 10 國 (略)、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、(略)。

十一5 1 國 (略)、應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、山城へ遷都ありし後は其の事絶えたり。

十一5 1 國 (略)、山城へ遷都ありし後は其の事絶えたり。

十一5 2 國 其の後吉野の朝の皇居となりしは人の能く知る所なり。

十一13 8 國 御供仕うまつれる警固の武士もよろひの袖をしぼらざるはなかりき。

十一13 10 國 (略)、主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を擧げしが、(略)。

十一13 10 國 (略)、主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を擧げしが、(略)。

十一14 1 國 (略)、事の未だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、其のまゝにて止みたり。

十一15 1 國 臨幸餘りにおそかりしかば、人をしてうかゞはしむるに、(略)。

十一15 5 國 (略) 杉坂に着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ひぬと申す。

十一16 5 國 されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ひとがむることもなかりき。

十一16 6 國 (略)、思ひとがむることもなかりき。

十一16 7 國 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、呉の勢盛になりて、(略) 越の軍を打破りたり。

十一25 7 國 昔都大路をねり行きたりし絲毛の車は如何に優美なりけん。

十一27 5 國 スチブンスンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。

十一27 8 國 フルトンの始めて造りし汽船は、今の小さき川蒸氣程の大きくなりしならん。

十一27 9 國 フルトンの始めて造りし汽船は、今の小さき川蒸氣程の大きくなりしならん。

十一28 6 國 思へば今より六十年以前には、我が國に一哩の鐵道も、一隻の汽船もなかりしなり。

十一36 8 國 (略)、いよく實地見聞致候へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。

十一42 5 國 光範「(略)」とて固く止めしが、(略)。

十一42 10 國 (略)、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしたたり。

十一44 8 國 正儀は河内にて領地を與へんとしたれども、熊王は「(略)」とて受けざりき。

十一44 8 國 (略)、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。

十一46 4 國 (略)、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十一71 9 國 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)、毎日遊び暮して三年を経たり。

十一72 3 國 (略) 「君は畫家として一家を成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。

十一72 7 國 さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。

十一72 7 國 (略)、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。

十一73 7 國 住持は知らぬ顔して過せしに、十日餘にして鶴二十四五羽を畫がけり。

十一74 8 國 住持は驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、再び歸り來られしは何故ぞ。」と問へば、(略)。

十一74 9 國 住持は驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、再び歸り來られしは何故ぞ。」と問へば、(略)。

十一74 10 國 「先に畫がきたる櫓の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、(略)、之を書添へんとて、わざと歸り來りたるなり。」

十一76 4 國 裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、(略)、今は其の奇勝を見ること能はず。

十一101 1 國 五十度以南我が帝國の領土となりしより、諸種の經營追々成功致候へども、(略)。

十一102 5 國 (略)、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

十一102 8 國 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽・張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。

十一103 1 國 是ヨリ諸將マタイフ者ナカリキ。

十一103 7 國 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「(略)」トイヒシニ、孔明涙ヲ流シテ、「(略)」ト答フ。

十一104 3 國 蜀國ノ(略)、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

十一104 10 図 サキニ蜀ノ南方亂レシヤ、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕ヘ、(略)。

十一105 4 図 カクスルコト七回ニ及ビシカバ、賊將(略)、マタ反スルコトナカリキ。

十一105 5 図 (略)、賊將(略)、マタ反スルコトナカリキ。

十一105 9 図 孔明、謾ノ舊功ヲ惜シミシカド、(略)、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、又自ラ責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。

十一106 7 図 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、(略)、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十一111 9 図 (略)、自ら先んじて(略)等の模範を示せしを以て、近年作物の改良も出来、(略)。

十一113 7 図 或年暴風雨の爲に不作なりしことあり、(略)。

十一113 10 図 (略)、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、村長は「(略)」と説明したれば、さらばとて原案のまゝに決議せり。

十一116 9 図 (略)、禮儀は早く唐人も 稱へし其の名君子國。

十二2 2 図 神代より承けし寶をまもりにて、治め來にけり、日の本つ國。

十二2 4 図 承けつぎし國の柱の動きなく榮えゆく代を尚いのるかな。

十二5 2 図 我が海軍は(略)、全力を朝鮮海峡に集中せしが、遂に之と會して、世界史上空前なる大海戦となれり。

十二6 4 図 敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、我は之に應ぜず、(略)。

十二6 6 図 (略)、はげしく敵を砲撃せしかば、敵の艦列忽ち亂れ、早くも戦列を離るゝものあり。

十二7 3 図 我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、(略)、其の他にも相ついで沈没せるもの多し。

十二7 7 図 (略)、無二無三に攻撃せしかば、敵艦隊は四分五裂の有様となれり。

十二8 1 図 (略)、鬱陵島附近に集りて敵を待ちしが、東方に當りて、はるかに數條の黒煙を見る。

十二9 4 図 敵の司令長官(略)は(略)、幕下と共に一驅逐艦に移りしが、(略)、遂に捕へらるゝに至れり。

十二10 9 図 殊ニ我が軍ノ損失・死傷ノ僅少ナリシハ(略)。

十二11 7 図 將卒之を聞きて感泣せざるはなかりき。

十二23 9 図 七里濱のいそ傳ひ、稻村が崎、名將の劔投ぜし古戦場。

十二25 4 図 若宮堂の舞の袖、しづのをたまきくりかへし かへせし人をしのびつゝ。

十二30 9 図 (略)、兵皆四散せしかば、夜に乗じて城をすてて逃れんとす。

十二31 5 図 新田義貞、(略)越前國金崎の城に在りし時、瓜生保(略)義貞に應ず。

十二32 1 図 保の母は(略)、「(略)」とて少しも悲しむ色を見せざりき。

十二32 9 図 かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略)。

十二33 2 図 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)。

十二37 4 図 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、會津の城主蒲生忠郷死せり。

十二38 7 図 敵國秦に使用して功ありしかば、趙王厚く之を用ふ。

十二38 8 図 趙の將軍にて武功の聞え高かりし廉頗之を見て心安からず、「(略)」と言ひ居たり。

十二40 1 図 富士山の古歌には煙の立つことを歌へるもの多く、時時破裂せしことも亦歴史に見えたり。

十二40 2 図 昔箱根山の噴火せしことは我等既に之を學べり。

十二43 2 図 (略)安永八年櫻島の破裂せし時は、(略)までも火山灰を降らしたりといふ。

十二43 5 図 太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

十二45 7 図 (略)、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

十二49 5 図 近年やみに産額の増大せしは北陸の 福井・石川・富山なる 羽二重織の輸出品。

十二50 6 図 外國トノ交通少カリシ時代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタリキ。

十二50 7 図 外國トノ交通少カリシ時代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタリキ。

十二56 9 図 其の後方の山々は皆我が同胞の血をそぎし地ならざるはなし。

十二65 8 図 ナボレオンがモスコより退軍せし時、露西亞の狼は(略)、中部獨逸にまで來りしことあり。

十二65 10 図 (略)、露西亞の狼は(略)、中部獨逸にまで來りしことあり。

十二66 2 図 全然移住せし例は二百年以前、(略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二66 4 図 (略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二66 4 図 (略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二665 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、(略)、道に當るもの一として之をさまたぐることはざりきといふ。

十二6610 (略)、道に當るもの一として之をさまたぐることはざりきといふ。

十二714 身をはかなむも過ぎしことは追ふべからず。

十二737 四百年以前までは東半球の人は全く西半球を知らざりき。

十二739 (略)、彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラなりき。

十二744 (略)、便利なる航路を開かんことは歐洲一般の希望なりき。

十二761 (略)、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

十二763 コロンブスは葡萄牙に客遊中、熱心に此の説を主張したりしが、何人も一笑に附して顧みるものなかりき。

十二763 (略)、何人も一笑に附して顧みるものなかりき。

十二778 是より先は未だ航行せしことなき大洋なれば、乗組の人々も次第に不安の念を生ぜり。

十二786 (略)、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。

十二7810 十時頃はあるかに一點の燈火をみとめしが、朝の二時頃「陸」「陸」「陸」と呼ぶものあり。

十二797 船員皆歡喜して、(略)、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。

十二802 かくてコロンブスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。

十二803 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、皆争ひてコロンブスを歡迎し、(略)。

十二804 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、(略)。

十二804 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、(略)。

十二804 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、(略)。

十二807 其の後コロンブスは數回の航海を試みしが、一千四百九十八年(略)、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

十二812 コロンブスの遠征時代は(略)、北條早雲が(略)、次第に其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。

十二866 薩摩の士に喜劍といふ人あり、未だ良雄と相識らざりしが、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勧む。

十二878 我が心の良雄を默待せしは罪死に當れり。」

十二8910 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにいとまあらず。

十二936 孔子は魯といふ國に生れ、人と爲り禮を好み、温良・恭儉なりき。

十二937 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く、(略)。

十二9310 是孔子が十七歳の時なりき。

十二9310 孔子事へて吏となりしに、治績大いに舉り、(略)。

十二941 (略)、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。

十二942 (略)、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。

十二951 其の時齊の有司進みて戲樂を奏せしかば、孔子は禮に反せるものありとて之を止めしむ。

十二9510 (略)、相如は氣を以て人を服せりといへども、孔子は義を以て人を動かせしなり。

十二965 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、(略)。

十二1185 (略)、學びの道の六年をば、卒へし今日こそうれしけれ。

十二1192 (略)、西も東も知らざりし身のいつしかに分けなたる、世の人並の文字の數、世の人

並の道の筋。

十二1199 六年の月日 手を取りて、教へ給ひし 師の君の(略)。

き[旗] ひとしんごうき・せんとうき

き[器] ひくうちゅうひこうき

き[騎] ひくいっき・さんき・にき

き[魏] (地名) 1 魏

十一1044 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、(略)。

き[義] (名) 3 義ひだいいちぎ

十一145 義を見てせざるは勇無きなり。

十二959 此の會に於ける孔子の行動は(略)、相如は氣を以て人を服せりといへども、孔子は義を以て人を動かせしなり。

十二1136 信とは我が言を行ひ、義とは我が分を盡すをいふ。

き[儀] ひらしんぎ

き[議] (名) 1 議

十一148 いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)。」といへば、心ある者どもいづれも此の議に同ず。

きいと「生糸」(名) 5 生絲

七34 わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

九152 前橋市ハ人口四萬アマリ、有名ナル生絲ノ市場ナリ。

十二4410 (略)、生絲は輸出品の首

位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。

十二45 〔略〕、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

十二49 〔圖〕 農産收入何れぞ、小さき蟲の吐出す 生絲と無二の輸出品。

きいのくになちさん「紀伊國那智山」

〔地名〕1 紀伊國那智山

十一76 〔圖〕 紀伊國那智山には四十八瀧あり。

キイルン「基隆」〔地名〕1 基隆

十一37 〔圖〕 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。

キイルンこう「基隆港」(名) 1 基隆港

十一37 〔圖〕 基隆港の大規模の築港も遠からず落成致すべく、打狗の築港も唯今盛に工事中に御座候。

きいろ「黄色」(名) 5 キイロ キ色 黄色

三71 ノハラニハ、アライクサノ中ニ、アカヤ、キイロヤ、ムラサキヤ、イロイロナハナガサ

イテキマス。
三94 アカトキイロトムラサキト三イロソツテキレイデス。

四37 1 麥ワラデハ(略)、又赤ヤ青ヤキ色ニソメテ、麥ワラザイクニモツカヒマス。

九53 〔圖〕 黄色ノ蝶ハ菜種ノ花ニムラ

ガリ、白色ノ蝶ハ大根畠ニ集ル。

九69 3 今年は何事もなくて、黄色に實のつた秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、(略)。

きいろ「黄色」(形状) 5 キイロ 黄色

二55 〔圖〕 「ワタクシニハソノキイロナノヲクダサイ。」

五35 1 蝶ニハ(略)、羽ノ色ニモ、白イノヤ、キイロナノヤ、黒イノヤ、マダラナノヤサマ／＼アリマ

ガ、(略)。

五50 5 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜ハ中ガ赤イ。

五52 4 瓜ノ(略)。花ハタ顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。

六87 たんぼにはいねがよくみのつて、風のふくたびに黄色な波が立つてゐます。

きいろい「黄色」(形) 1 黄色い「イ」

十29 5 (略)、大きなだい／＼の木があつて、黄色い大きな實が枝もたわむ程なつてゐる。

ぎいん「議員」(名) 8 議員 ぐんかいぎいん・そんかいぎいん・ちようかいぎいん・ふけんぐんしちようそんかいぎいん

十二103 4 〔略〕、議員の経費を議するも、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。

十二103 6 〔圖〕 市町村長・議員等を選

舉するに専ら其の人物に重きを置き、親族・縁故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

十二104 3 〔圖〕 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、(略)。

十二106 4 〔圖〕 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。

十二106 8 〔圖〕 第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。

十二106 10 〔圖〕 衆議院は一定の選舉資格を有する臣民の公選したる議員を以て組織し、議員の任期は四箇年なり。

十二107 1 〔圖〕 衆議院は(略)、議員の任期は四箇年なり。

十二109 2 〔圖〕 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

きえる「消」(下) 1 消エル「エ」

七24 7 〔圖〕 今風デアカリガ消エマシタ。

きが「木質」〔地名〕2 木質 木質

九39 10 〔圖〕 七湯トハ湯本・塔ノ澤・堂ガ島・宮ノ下・底倉・木質及ビ蘆ノ湯ライフ。

九40 〔圖〕 木質

きが「飢餓」(名) 1 飢餓

十二69 9 〔圖〕 しかも僅かに飢をしのぐは先頭に進める一部に過ぎず、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、飢餓刻々にせまるが故に、(略)。

きかい「機械」(名) 22 キカイ きかい 機械 ぐわたくりきかい

五58 6 石炭ノ火ノ力ハ木炭ヨリモズツツヨイノデ、汽車ヤ汽船ヤソノ他ノキカイナドヲウゴカスノニハ、皆コレヲ使ヒマス。

六79 3 左手ノ汽船ハ今荷物ヲ積ミコンデキル。大キナキカイデ、ドンナ重イ荷物デモラク／＼ト上ゲオロシヲシテキル。

七26 3 色ナキカイガアツテモ、ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デス。

八44 3 大きなきかいの動くのも、汽車や汽船の走るのも、皆火の力の利用によるのである。

八62 6 綿ヲ機械ニカケテツムグト、木綿絲ニナリマス。

十20 6 又極上品なものになると機械では刷らないで、手刷にする。

十20 10 其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。

十42 7 〔圖〕 花錠ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)。

十二317 足利氏の大兵来り攻め、城遂に陥り、保・義鑑共に戦死す。
きかんしゃ「機関車」(名) 3 キクワ
ン車 機関車

六275 ソノ他釘や針ノヤウナ小サ
イ物カラ、キクワン車・軍カンノヤ
ウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナクレバ、
コシラヘルコトガ出来マセン。

十一275 スチブソンノ造りし機
關車は、今日の完備せる機關車にく
らぶべくもあらず。

十一276 スチブソンノ造りし機
關車は、今日の完備せる機關車にく
らぶべくもあらず。

きかんら「義鑑等」(人名) 1 義鑑等
十二316 新田義貞、尊良親王を奉
じて越前國金崎の城に在りし時、瓜
生保其の弟義鑑等と共に杣山に旗あ
げして義貞に應ず。

きき「木木」(名) 2 木々

八376 木々 木々もうらがれ
て、さびしきにはのさざん花や、北
風寒きやぶかげに、びはの花咲く年
の暮。

十一17 人々皆 静まりいねし
ま夜中に 家組立つる 木々も今
語り出しぬ。

きき「いる」(聞居) (上二) 1 聞きある

「一い」

十158 紫式部は幼き頃より物覺よ
く、兄の書を読むを聞きあて、直ち
に之をそらんじ、(略)。

ききおとす「聞落」(五) 1 ききおと
す「一ス」

三394 耳もよくきこえて、きき
おとす やうなことはありませ
ん。

ききつたう「聞伝」(下二) 1 聞傳フ

「一へ」
十326 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植
エ、遂ニハ中国地方全體ニ及ブニ至
レリトイフ。

ききめ「利目」(名) 1 利目
十一1147 又肥料の利目も著しく、
作物の發育も目立ちてよくなりて、
村人の喜一方ならず。

ききよう「桔梗」(名) 1 ききやう
八372 (略)、ききやう・かるか
や・をみなへし、秋の花草多けれど、
(略)。

ききわく「聞分」(下二) 1 聞分ク
「一ケヨ」
七19 ヨク父ノ言フコトヲ聞分
ケヨ。(略)。我が死ニタル後モ、一
門ノ者一人ニテモ生キ残りテアル間
ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タ
メニツクスベシ。

きく「菊」(名) 4 キク 菊々おきく
さん・きつねとのぎく・のぎく
一161 キクノゴモン
二45 「ミナサンニキクノハ
ナヲアゲマス。
七46 おほよそ家の紋どころ、
いふもかしこし、菊と桐。

八375 (略)、秋の花草多けれど、
中にも君の千代八千代 祝ふや菊の
花の宴。

きく「利」(五) 1 きく「一カ」

こころきく・おきく・おききなざる
十221 木版では一枚々彫らなけれ
ばならぬから、其の自由がきかぬ。

きく「聞」(四・五) 71 キク きく
聞ク 聞く 聴く「一い・一カ・キ
ーク・一ケ」

二21 ワタクシノウタヲキク
ト、人ガダンダンオキテキマス。
二356 トモダチハ「(略)、イテハ
イケマセン。」ト、トメマシタガ、
キカナイデイマシタ。

二527 トナリノワルイオヂイサ
ンハソレヲキイテ、犬ヲカリ
ニキマシタ。

二631 ヨクノフカイオヂイサン
ハコノハナシヲキイテ、(略)。
三112 ワタクシハオカアサンノ
イヒツケヲヨクキイテ、イモウ
トノモリヲシタリ、オツカヒ
ニイツタリシマス。

三396 なにをきかれても、この
口ではつくりこたへます。
三462 そこへともだちがきて、
「おい、なにをしてゐるのだ。」
ときくと、(略)。

三648 私はをちさんに、「どこ
でこんなにたくさん おひろひ
になりました。」とききましたら、

(略)。

四138 (略)、かみなりさまを
下にきく、ふじは日本一の山。

四306 母が父に「(略)」とい
ひますと、三郎はそれをきい
て、(略)。

四337 「こんどはにいさんが
きくが、もちやだんこのあん
は何で作るのですか。」

四562 ワニザメハソレヲキク
ト、大ソウオコツテ、(略)。

五442 文太郎ハビツクリシテ、父ニ
キ、マスト、「コレハトンネルトイ
ツテ、山ヲホリヌイタ所デス。」ト
イヒマシタ。

五472 友吉は「早くこつちへ來たま
へ。(略)」といつて、そこをの
せようとしたが、音次郎はなか
くきません。

五787 「鹿はをりく通ります。」よ
しつねはこれを聞くと、(略)。
六141 モシ列ニハナレルヤウナコト
ガアツテモ、ソノアヒツヲ聞クト、
スグ列ニ加ルノデアル。

六143 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、
空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ。
六282 (略)、人ノ役ニ立ツコトハ銅
ヨリモマダ上デス。」ヤクワンハソ
レヲ聞イテ、(略)。

六328 あとになつて、主人はこの事
を聞いて、直吉は正直ものだとはめ
て、長松にはひまをやつた。

六36 8 學校で徳川光圀^{とくがわみつこう}の話を聞いて、紙などをそまつにしてはならないと思つた。

六44 4 たゞ人がいくさのはなしをする、耳をすまして聞いてゐました。

六50 1 秀吉はこの知らせを聞くと、すぐに（略）かへつて来て、（略）。

六50 8 （略）日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。

六58 6 ところがとなり國では（略）、塩を送らせないことにした。謙信はそれを聞いて、（略）、じぶんの國から塩を送らせた。

六59 8 それから信玄が死んだと聞いた時、謙信は「ああ、をしい事をした。（略）」といつてなげいた。

六62 7 圖 「（略）」さがすことさへ出来ません。」それを聞くより妹のおふみはいそぎ道ばたをそこかこゝかとさがすうち、（略）。

六70 8 あくびをしたり、わき見をしたりしてゐて、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、（略）。

六70 6 ちゃんとしせいをよくして、氣を付けてゐて、何を聞かれても、はつきりと答へる子供もござい

た。

七1 6 圖 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

七7 7 圖 （略）今一度天顔ヲラガミテマキリタシ。」ト、涙ナガラニ申

シ上ゲタリ。天皇ハコレヲ聞キ、ミヌヲ高クマキ上ゲサセ、（略）。

七23 1 圖 保己一ハ（略）、人ニ書物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカバ、（略）。

七23 9 圖 時ノ人 番町デ目アキ目クラニ物ヲキ、トイヒタリトイフ。

七40 5 一豊も（略）、思はずひとり言をいひました。妻はこれを聞いて、（略）。

七61 9 圖 犬は耳ざとき動物にして、眠れる時も人の足音を聞けば、たゞちに目をさます。

七80 9 圖 「私も子供の時には（略）、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。

七84 2 圖 見るもの聞くもの總べてめづらしいものばかりです。」

八20 5 （略）、雀といふものはすぐふえるもので、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。農夫は之を聞いて、（略）。

八22 8 農夫は此の話を聞いて、「それはめづらしい。（略）」と思ひ

ました。

八44 6 聞けば此の火事は材木屋の小屋から出たので、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

八70 8 圖 （略）耳は食事の知らせを聞きても知らぬ風をし、（略）。

八92 8 馬丁ハ（略）、トウ／＼戦死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死

ガイニ取リスガツテ泣イタ。

九20 6 圖 「聞けば、そなたは豊島^{とよしま}の戦にも出ず、又八月十日の威海衛^{威海衛}攻撃とやらにもかくべつの働なかりきとのこと、（略）。

九23 9 （略）」といひ聞かせた。水兵は頭を下げて聞いてゐたが、（略）。

九32 9 （略）、百五十マイルを三十二時間で走つた。之を聞いて、是までフルトン^{フルトン}を笑つた人々も大いに感心して、（略）。

九47 4 圖 其の夜アリふと目をさまして、人々のかたるを聞けば、一人の曰く、（略）。

九47 10 圖 又一人、「略。」といふ。之を聞けるアリの驚は一方ならず、（略）。

九49 8 圖 聞けばハッサン^{ハッサン}はアリの來ることの餘りにおそければ、（略）、迎へかた／＼こゝに來りしなり。

九70 8 葉の散果てた冬木立に吹きすさむ木枯の風は、音を聞くだけでも物すごい。

九80 6 圖 （略）、雨の朝、風の夕、見るもの聞くものにつけて、都の空のみしたはしく、（略）。

十32 1 圖 （略）、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、（略）。

十35 8 圖 （略）、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよいいなことはいひません。

十52 4 圖 何者にてか候ふらん。」義

仲之を聞きて、「そは武藏^{むさし}の齋藤別當にはあらずや。

十77 2 圖 目ハ色・形ヲ見、耳ハ音聲ヲ聞キ、（略）、各之ヲ腦ニ報告ス。

十一14 8 圖 然るに今、主上隠岐に遷され給ふと聞き、一族共を集めていへるやう、（略）。

十一21 8 圖 生れてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せくる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。

十一22 5 圖 ふぎさの松に吹く風をいみじき樂と我は聞く。

十一36 8 圖 （略）、いよく實地見聞致候へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。

十一55 10 （略）、谷底の方に太鼓の音がすかに聞える。耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。

十一57 5 兵士等はあわてて（略）、將軍の命は我々千萬人の命よりも貴い。（略）」といつて引止める。

將軍はどうしてもきかね。

十一74 8 圖 「東國へ行き給ふと聞きしに、再び歸り來られしは何故ぞ。」

十一80 1 圖 （略）、ほう／＼と呼ぶ聲を聞く内に、舟は早くも目前にせま

り來る。

十一106 2 圖 蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。魏將司馬仲達^{クワン}聞キテ之ヲ追フ。

十二116 因 「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ

祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚^{オロコ}ブ。」

と仰せられたり。將卒之を聞きて感泣せざるはなかりき。

十二31 因 (略) 弓を取りて盛に弦^コを鳴らせり。賊之を聞きて、城中兵

尚多からんと思ひ、(略)。

十二37 因 汝多年嘉明と不和なりと聞く。

十二38 因 嘉明後此の事を聞きて大いに恥ぢ、高虎と水魚の交をなすに至れりとぞ。

十二38 因 (略) 廉頗^{れんぱ}之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。相如聞きて、

力めて之を避け、(略)。

十二39 因 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」といふ。廉頗之を聞きて、深く其の非をさと、(略)。

十二78 1 因 (略)、朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、(略)。

十二87 4 因 喜釵^{きし}其の後江戸に出で、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

十二106 2 因 (略)、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聽く機關に供せさせ給へり。

きぐ「器具」(名) 2 器具

十一11 1 分業法ニ依ラズ、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變

へ、又器具ヲ取換ヘナケレバナラナ

イノデ、(略)。

十一11 8 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、(略)、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヲ發明ヲスルコトモアル。

きくすい「菊水」(名) 1 菊水

七44 7 因 におよそ家の紋どころ、(略)。楠木父子の菊水は、忠義のかをりなほ高し。

きくつき「菊月」(名) 1 菊月

十一30 10 因 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美ナレ。(略)。季節ノ名ニハ初春・如月・彌生・卯月・水無月・長月・菊月等アリ。

きくのはな「課名」 2 キクノハナ

二目 4 三 キクノハナ

二4 4 三 キクノハナ

きぐるい「器具類」(名) 1 器具類

十二12 8 (略)、又木製ノ器具類ヲ製造スル木工場モアル。

きぐん「義軍」(名) 1 義軍

十一14 6 因 いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)、名を子孫に傳ふべし。」

きぐん「魏軍」(名) 2 魏軍

十一106 1 因 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。

十一106 6 因 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、(略)。

きげい「技芸」(名) 1 技藝

十二11 3 因 如何程技藝に通じ、學術

に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

きげん「喜剣」(人名) 4 喜剣 凸れつしきげん・れつしきげんひ

十二86 6 因 薩摩^{さつま}の士に喜剣といふ人あり、(略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勸む。

十二86 8 因 喜剣大いに罵つて曰く、「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、人面獸心とは汝の事なるべし。」

十二87 4 因 喜釵其の後江戸に出で、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

十二87 10 因 喜釵直ちに泉岳寺に行き、(略)、「我當に萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を抜き切腹して終る。

きげん「危険」(名) 1 危険

十二74 2 因 然るに印度との交通は長日月を要し、中途の危険亦少からざれば、(略)。

きげん「起源」(名) 1 起源

十二43 9 因 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。是即ち農業の起原なり。

きげん「期限」(名) 1 期限

十二52 2 因 (略)、約束ノ期限ヲ違へ、(略)ガ如キ皆信用ヲ害スル所以

ナリ。

きげんせつ「紀元節」(名) 1 キゲンセツ

五8 2 天皇ハ(略)、天皇ノオクラキニオツキニナリマシタ。ソノ日ハ二月十一日ニアタリマスカラ、コノ日ヲキゲンセツト申シテ、毎年オイハヒライタスノデゴザイマス。

きこう「氣候」(名) 10 氣候

八54 9 (略)、つる・がん・つばめなどの様に、氣候によつてすむ所をかへる鳥は、(略)。

八81 8 因 北極・南極に近き地方にては、(略)。かゝる地方にては氣候つねに寒冷にして、(略)。

八82 4 因 又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。

十10 8 因 其の他森林は氣候を和げ、(略)等、其の効用あげて數ふべからず。

十一7 5 因 氣候の暖なる間絶えず之を産出するを以て、(略)。

十一8 4 因 されば氣候不順にして、花のとほしき時は蜂合戰の起ること珍しからず。

十一96 5 因 併し夏は氣候溫和にして、至つて凌ぎよく候。

十二43 10 因 我が國は氣候溫に、地味肥え、極めて耕種に適し、(略)。

十二45 4 因 是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。

十二676 〔略〕、獸類中にも食物を求め、氣候を追ひて、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。

きこう 〔騎行〕(名) 1 騎行

十一467 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、四五日間うち通し、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。

きこうす 〔帰航〕(サ変) 1 歸航す

〔一セ〕

十二802 〔略〕かくてコロンブスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。

きこえ 〔聞〕(名) 1 聞え

十二388 趙の將軍にて武功の聞え高かりし廉頗之を見て心安からず、(略)。

きこえあぐ 〔聞上〕(下二) 2 聞え上ぐ

〔一ゲ〕

九110 〔略〕、勅なればいともかしこし、うぐひすの間はば如何にと 雲るまで 聞え上げたる 言の葉は、(略)。

十一173 高徳せめても此の所存を上聞に達せばやとて、(略)。(略)。(略)、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

きこえはじめる 〔開始〕(下二) 1 聞え始める

〔一メ〕

十一553 ふと山のいたゞきの方にすさまじい物音が聞え始めたと思ふと、(略)。

きこえる 〔聞〕(下二) 18 キコエル

きこえる 聞エル 聞える 〔一エーエル〕

二291 ケサハカラスノナクコエモ、スズメノナクコエモ、ウレシサウニキコエマス。

三181 サヘズリナガラ(略)。モウコエバカリキコエテ、スガタハミエマセン。

三394 耳もよくきこえて、ききおとすやうなことはありません。

四274 (略)虫も死んでしまつたのか、もうなくこゑもきこえません。

五463 (略)、かみなりが鳴り出しました。はじめのうちは遠くの方にきこえてゐましたが、(略)。

五675 イサマシイタイコノ音が森ノ中カラキコエテクル。

五703 勝負ガ一番スムト、ワアツトホメルコエガキコエル。

八317 (略)と、毎朝早くから弟子を相手につちを打つ音が聞える。

八424 火事場でさわぐ人の聲がここまでも聞える。

八897 敵ノ突撃ノ聲ガ盛ニ聞エル。

八912 〔略〕「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、(略)。

八915 〔略〕若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、砲聲・銃聲ガツバクヤウナラ、(略)。

九675 春の雨はしめやかに降つて、

のきの玉水の音も静かに聞える。

十一558 静かな山の中に流れる水の音が遠く聞えるばかり。

十一5510 しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。

十一584 將軍が谷底へ下りた時には、もう太鼓の音は聞えぬ。

十一1115 秋の夜長には衣打つきぬたの音が村々相應じて聞える。

十二841 人々は唯神曲に心を奪はれて、妙音の外には何物も見えも聞えもしない。

きこくす 〔帰国〕(サ変) 1 歸國す

〔一セ〕

十二783 船員は失望の餘り、コロンブスを海に投じて歸國せんと謀るに至れり。

きこにきょうこく 〔魏呉二強國〕(名)

1 魏・呉二強國

十一1042 蜀國ノ魏・呉二強國ト相對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

きこゆ 〔聞〕(下二) 8 きこゆ 聞ユ

聞ユ 〔一エーユーユル〕

七911 中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。

八278 其ノ友ニ飛驒工トテ世ニ聞エタル大工アリ。

十一1410 げにくと 皆うなづきて、折からの 夜半のあらしに そののちは 音もきこえず。

十一153 一條天皇の頃には才學すぐ

れたる宮女多かりしが、最も世に聞えたるは紫式部と清少納言となり。

十一689 波風にまじりて聞ゆる悲鳴の聲に目をさまし、(略)。

十一767 霧降瀧は(略)、三瀑布中最も美觀を以て聞ユ。

十二608 巴里の市街は壯麗を以て聞ユ。

十二646 巴里にもルーブル博物館・凱旋門を始め、世に聞えたる建物少からず。

きこり 〔樵〕(名) 1 樵

十二484 又森林は(略)、殊に名高き木曾・吉野 樺太・臺灣太古より 松・杉の入らぬ林あり。

きこん 〔氣根〕(名) 1 氣根

十一389 南部には榕樹も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは(略)。

きさい 〔后〕(名) 1 きさい

九9210 きさいの宮の仰言、(略)。

きさい 〔奇才〕(名) 1 奇才

十一1066 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

きさいす 〔記載〕(サ変) 1 記載す

〔一シ〕

十二195 天氣圖とは(略)一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)、一目に全國天候の如何を示すものなり。

ぎざぎざ (名) 2 ギザ／＼

十六 〇 へリモ鋸ノ齒ノ様ニギザ／＼ノアルノモアレバ、一體ニスベ／＼シテキルノモアル。

十六 〇 ギザ／＼ノ深イノニナルト、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテキル。

ぎざはし「階」(名) 1 きざえし

十二 二四 〇 上るや石のきざえしの、左に高き大銀杏(略)。

ぎざみ「刻」(名) 1 きざみ

十一 四八 〇 馬主は(略)。(略) 追手が接近すれば速力を速め、後れ／＼脚のきざみを短くする。

ぎざ・む「刻」(四・五) 2 キザム

八 三九 〇 マツ木材ヲ切りテ、(略)、ケツリテウス板トシ、細クキザミテデク木トシ、(略)。

八 六五 〇 サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、(略)。

きざらぎ「如月」(名) 1 如月

十一 三〇 〇 季節ノ名ニハ初春・如月・彌生・卯月・水無月・長月・菊月等アリ。

きざわし「木酥」(名) 1 キザハシ

四 一〇 〇 ウチニハカキノ木ガ二本アリマス。(略) 一本ハキザハシデ、モウアマクナリマシタ。

きし「岸」(名) 4 岸

七 七四 〇 (略)、岸ニ近イ淺イ所カラ五トヒログラキノ所マデニハ、海草ガ

ハエテキル。

九 八五 〇 (略)、池の中へ落ちこんだ。

愛作は(略)すぐに熊吉のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引きよせた。

十 二九 〇 (略) 水をよくすんだ小川が流れてゐる。(略) 二三羽のあひるが岸の霜柱をふみくだきながら、(略)。

十二 二八 〇 黒き影は(略)身を水中に投入したり。(略)しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。

きじ「雉」(名) 3 キジ きし 雉

一 三九 〇 キジガツナヒク エンヤラヤ。

八 五八 〇 尾の短いのは(略)などで、長いのはきじ・山鳥・くじやくなどである。

十一 八一 〇 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・雲雀・鵲・雁・鴻・雉・鷗・鷺等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

きじ「記事」(名) 1 記事

十二 七四 〇 たま／＼(略)マルコ、ボロの日本に關する記事を読み、(略)。

きし「技師」(名) 3 技師 ヲどぼくぎし

十 九〇 〇 (略)、農商務省の技師田島農學士の耕地整理に關する講話これあり候。

十 九〇 〇 同學士は(略)、多年府縣の技師をも務め、學理にも通じ、實地にも明かなる人に候へば、(略)。

十二 一二 〇 船ヲ造ルニハ(略)。(略)、

多人數ノ技師ヤ技手ガ永クカ、ツテ製圖スルカラ、(略)。

きし「義士」(名) 3 義士

十 五八 〇 (略)、又日曜日等には忠臣・義士に關する講談等もこれあり、面白ク有益に存候。

十二 二七 〇 喜劍其の後江戸に出で、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

十二 二八 〇 時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

きしき「儀式」(名) 2 儀式

十 八一 〇 あいぬは時々熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。

十一 五三 〇 儀式・公會等ノ席ニテ談笑ヲツ・シムハ我等文明國民ノ美風ナリ。

きじつ「期日」(名) 2 期日

九 一三 〇 次に老人向きの紺がすりは、御申越の期日までには少々間に合ひかね候事と存候。

十二 一〇〇 〇 又獨逸にては圖書館の書籍を借受くるに(略) 之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。

きじどう「うこつかいぎじどう

きしべ「岸辺」(名) 1 岸べ

十 七〇 〇 父はボートに引返し、二人は(略)、遂に岸べに漕着けたり。

きしまだけ「杵島岳」(地名) 3 杵島岳 杵島岳

十二 四〇 〇 阿蘇山の(略)、此の間

に根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳の五岳東より西に相連りて突起す。

十二 四一 〇 杵島岳

十二 四二 〇 (略)、其の北なる杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。

きしゃ「汽車」(名) 33 汽車 ヲきせんきしゃのはつめい

五 三九 〇 汽車が今ていしやばへつきました。

五 四一 〇 もう汽車が出ます。

五 四一 〇 汽車はどんなことがあつても待ちません、きまつた時間にちゃんと出ます。

五 四一 〇 文太郎ハ父ニツレラレテ、ハジメテ汽車ニノリマシタ。

五 四三 〇 走ツテキル汽車ガスレチガフ時ニハ、(略)。

五 四三 〇 (略)、向フノ汽車ニノツテキル人ノカホハヨク見エマセン。

五 四三 〇 向フノ汽車カラコチラノ汽車ヲ見テモ、同ジコトデセウ。

五 四三 〇 向フノ汽車カラコチラノ汽車ヲ見テモ、同ジコトデセウ。

五 四三 〇 (略)、汽車ハハシノ上ヲ通ツテキマシタ。

五 四四 〇 汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハイリマシタ。

五 四五 〇 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイタ時、文太郎ハモツトツツテキタイト思ヒマシタ。

五五八 石炭ノ(略)、汽車ヤ汽船ヤ

ソノ他ノキカイナドヲウゴカスノニ

ハ、皆コレヲ使ヒマス。

六三八 午前六時の汽車で、おとうさ

んが京都へお立ちになつた。

六三九 昨日六時の汽車に間に合つ

て、晩の九時二十分に京都に着いた。

六八〇 港ニハ船ノ出入シダク、停

車場ニハ汽車ノ發着タエズ。

七五八 急に商用が出来て、明朝六

時の汽車で東京へ立ちます。

八四三 大きなきかいの動くのも、汽

車や汽船の走るのも、皆火の力の利

用によるのである。

九三一 蒸氣機關は(略)。(略)、又

之を車に應用して、汽車をこしらへ

たのは、イギリスのステブソンとい

ふ人である。

九三二 (略)、ステブソンの發明し

た汽車を用ひて見ようといふことにな

つて、(略)。

九三四 (略)、ステブソンは其の會

社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を

走る汽車を造つた。

九三五 いよ／＼鐵道が出来て、汽車

の運轉をして見る日になると、(略)。

九三六 中には汽車と競走する積で、

馬に乗つて來た人もある。

九三八 やがて汽車が動き出すと、

(略)。

九四〇 (略)、一時間に十五マイルも

走る汽車とはどうして競走が出来よ

う。

九四一 (略)、鐵道開通後ハ旅客ハ

皆汽車ノ便ニヨルヲ以テ、(略)。

九四二 汽車は此のトンネルを通過

するに七八分を費す。

九四三 京都ヨリ汽車ニテ奈良ニ入

ルニハ奈良線ニヨルベク、(略)。

九四四 奈良ヨリ汽車ニ乗リテ南へ

進メバ、一時間バカリニシテ三輪町

ニ達ス。

九四五 上古の舟車と今日の汽車

・汽船とをくらべんには、誰か人智

の進歩の大なるに驚かざらん。

九四六 (略)、汽車・汽船の進歩

ハ世界諸國をして日に益々接近せし

む。

九四七 暑い時分汽車に乗つて朝鮮

を旅行すると、(略)。

九四八 (略)、汽車・汽船等の中

に通機關、博物館・圖書館等の公共營

造物に在りては、敏速と規律とを尊

ぶものなれば、(略)。

九四九 (略) 1 喜捨

十二五〇 (略) 老人の辻音楽師があ

る。忠實な犬は古帽子をくはへて、

(略)、道行く人の投與へる喜捨を待

ちわびてゐる。

きしゃ「騎者」(名) 1 騎者

十二五一 (略) 騎者・騎馬・黄金、三

つとも失つてしまひました。」

きしゃでんしやちゆう「汽車電中」

(名) 1 汽車・電中

十二五二 他國に行きて、(略)、汽

車・電車中に於ける乗客の舉止、

(略)等を見れば、(略)、早くも其の

國民の品格の知らるゝものなり。

きしゃのたび「課名」 2 汽車ノタビ

五目 第十五 汽車ノタビ

五四七 第十五 汽車ノタビ

きしゅ「騎手」(名) 6 騎手

九四九 それは氏子の五箇村から子供

の騎手を一人づつ出して、競馬をさ

せて、(略)。

九五〇 或年選ばれた子供の中に、す

ぐれて上手な騎手が二人あつた。

九五一 やがて五人の騎手は(略)、

靜々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つ

て來た。

九五二 五人の騎手は神に勝利をいの

つて、第二のあひづを待ちかまへて

ゐる。

九五三 五箇村の人々は各我が村の騎

手に向つて、(略)、口々に勢をつけ

てゐる。

九五四 (略)、五人の騎手は(略)、

馬の頭を揃へて、三番太鼓を今やお

そしと待構へてゐる。

きしゅ「技手」(名) 1 技手

十二五五 船ヲ造ルニハ(略)。(略)、

多人數ノ技師ヤ技手ガ永クカ、ツテ

製圖スルカラ、(略)。

きしゅ「義州」(地名) 1 義州

十二五六 義州

きしゅ「技術」(名) 2 技術

九五七 工兵は陣地をきづき、道を

開き、橋をかけ、鐵道を造り、電信

を通ずる等、もつぱら技術の事にし

たがふ。

九五八 官位・門地・技術・財産

・學問等に於て衆を抜く者は、個人

としても自ら高尚なる品格を要する

が如く、(略)。

きしゅ「氣象」(名) 2 氣象

九五九 故に文明諸國に於ては何

れも氣象臺・測候所を置きて、日々

の氣象を調査す。

六〇〇 進取の氣象に富める人は

何事を爲すにも、此の事は必ず成る

べしと覺悟して、熱心に其の事に従

ふを以て、成功は期せずして到る。

六〇一 「奇勝」(名) 1 奇勝

六〇二 裏見瀧は後の細道より瀧

の裏面を望み見るを以て此の名を得

たりしが、(略)、今は其の奇勝を見

ること能はず。

六〇三 「起床」(名) 1 起床

六〇四 兵營内の生活は規律正し

く、朝の起床より夜の消燈まで、一

々喇叭の合圖により、(略)。

六〇五 「徽章」(名) 1 徽章

六〇六 學生・生徒の帽子にも

皆學校の徽章あり。

きじょう「機上」(名) 1 機上

十二96 〇 其の後孟子出でて學び、
學を卒へずして歸りし時、母たま
く機上に在り。

きじょう「魏將」(名) 1 魏將

十一106 〇 魏將司馬仲達聞キテ之ヲ
追フ。

きじょうかんそく「氣象觀測」(名) 1

氣象觀測

十二16 〇 各地の測候所は其の地方
の氣象觀測を毎日三回中央氣象臺に
報告し、(略)。

きじょうだい「氣象台」(名) 2 氣象

臺ひちゅうおうきしじょうだい

十二16 〇 故に文明諸國に於ては何
れも氣象臺・測候所を置きて、日々
の氣象を調査す。

十二17 〇 是等の豫報は氣象臺・測
候所を始め、官廳・諸役所等の前に
揭示せらるゝを以て、(略)。

きしよくす「寄食」(サ変) 1 寄食す

《一シ》
十一71 〇 此の繪をかける畫工久し
く此の寺に寄食してありしが、何一
つ畫がくこともなく、毎日遊び暮し
て三年を経たり。

きじん「貴人」(名) 1 貴人

十一109 〇 貴人の墓には内地の様に石
をたてるけれども、普通の墓は大抵
土を盛上げるばかりである。

きしん「義心」(名) 1 義心

十一31 〇 二人ガ之ヲヒロメントセシ
ハ、不作ノ年餓死スル人ノ多キヲア
ハレミ、之ヲ救ハントスル義心ヨリ
起レリ。

きす「鱈」(名) 1 キス

七70 〇 魚類ニハ(略)、タヒ・ボラ・
ハモ・コチ・キスナドノヤウニ、岩
ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガア
リ、(略)。

きす「期」(サ変) 4 期す 《一ス・一
スル・一セ》

十二27 〇 援軍の來らん日も亦期す
べからず。

十二69 〇 (略)、温暖なる地方に
移らんと欲するもの期せずして相集
り、次第に其の數を加ふ。

十二72 〇 (略)、此の事は必ず成る
べしと覺悟して、熱心に其の事に従
ふを以て、成功は期せずして到る。

十二102 〇 (略)、地方自治の精神に
基づきて、其の團體の幸福を進め、
國運の發展を期するは一なり。

きす「傷」(名) 2 傷

八86 〇 中佐ハハヤ、右手ニ一ヶ所ノ
傷ヲ受ケタガ、少シモヒルマズ、左
手ニ軍刀ヲ持ツテ(略)。

十二9 〇 敵の司令長官ロジェスト
ウエンスキー中將は昨日の戦闘に傷
を負ひ、(略)。

きす「議」(サ変) 3 議す 《一スル》

十一113 〇 村會にて村費を議するに
も、大抵原案を可決するを常とす。

十一113 〇 (略)、其の翌年學校の經
費を議するに當り、村會にては其の
豫算の不足なるべきをうれへて、之
を増加せんとせしに、(略)。

十二103 〇 (略)、議員の經費を議す
るも、亦常に此の公平なる精神を以
てすべし。

きす「築」(四・五) 6 キヅク き
づく 築く 《一イ・一キ・一ケ》

六80 〇 秀吉コ、二城ヲキヅキシヨ
リ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナ
レリ。

七79 〇 小さきありもいそしめ
ば、塔をもきづき、つばめさへ千
里の波を渡るなり。

八93 〇 名古屋城は(略)、其の
天守閣は加藤清正のきづきしものな
り。

九24 〇 工兵は陣地をきづき、道を
開き、(略)。

十二76 〇 (略)、今日はコロンブス
が遠征隊出發の日なりとて、西班牙
パロスの港は未明より人の山を築け
り。

十二83 〇 聴衆は四方から集つて來
て、見る内に人山を築いた。

きす「傷」(下二) 3 傷ツク 傷
つく 《一クル・一ケ》

十一53 〇 イハンヤ我ニ優レル人ヲ
ネタミ、其ノ聲ヲ傷ツケントシテ
笑フ者ニ於テヤ。

十二98 〇 市街・道路を不潔にし、

(略)等の建築物をけがし、公園の
樹木を折取るが如きは、公德の低き
を示し、大國民の品格を傷つくるも
のなり。

十二101 〇 國力我に劣れる國民を見
て、やゝもすれば輕侮の念を以て之
を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ば
ざるが如きは、(略)、國交を傷つけ、
随つて國力の發展をさまたぐるこ
と多し。

きせき「奇績」(名) 1 奇績

十二106 〇 「我が聯合艦隊ガ克ク
勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得
タルモノハ、(略)。

きせつ「季節」(名) 8 季節

十一6 〇 秋・冬の花少き季節に入
りても、食物に不足することなきは、
(略)。

十一30 〇 季節ノ名ニハ初春・如月
・彌生・卯月・水無月・長月・菊月
等アリ。

十一35 〇 御地は今尚冬の季節と
存候。

十一65 〇 季節ニ依ツテ、食物ノ選ビ
方ニ多少ノ注意ヲ要スル。寒イ時ハ
(略)、暑イ時分ハ(略)。

十一65 〇 又魚類ヤ野菜ハ各其ノ季節
ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化
モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

十二67 〇 又燕の春來りて秋去り、
雁の秋來りて春去るが如く、獸類中
にも(略)、毎年一定の季節に其の

居を移すもの少からず。

十二678 南亞米利加の森林にオレ

ンジの熟する季節には、(略)。

十二686 一定の季節に最も多数の

移住を見るは(略)。

きせる「煙管」(名) 1 きせる

十一1104 朝鮮人は煙草を好む。き

せるは身分の高い人程長いを用ひ

る。

きせる「着」(下) 3 キセル きせ

る「一セ」

四112 (略)、古イカサト古イモ

モヒキヲキセタカカシガタテ

テアリマス。

四726 回はあしたはひなさ

ままつり。きせてやりたい この

はれぎ。

十二2 表紙には(略)。又つばな

ものになると、革をきせたのもある。

きせん「汽船」(名) 25 きせん 汽船

ひだいきせん

三601 くろいけむりを出して走

つていくきせんもあります。

五586 石炭ノ火ノ力ハ(略)、汽車

ヤ汽船ヤソノ他ノキカイナドヲウゴ

カスノニハ、皆コレヲ使ヒマス。

六775 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シ

ナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガア

ル。

六786 正面ニアル二本エントツノ

汽船ハシキリニキテキヲ鳴ラシテキ

ル。

六791 ハトバノ右ニ着イテキル汽船

ハ今荷物ヲオロシテキル。

六792 左手ノ汽船ハ今荷物ヲ積みコ

ンデキル。

六795 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカ

ラ牛ヲ何匹トナクツルシオロシタ。

七721 軍カンヤ汽船ハ時々カキヲ

カキオトサナクレバナライ程デア

ル。

七815 汽船も軍艦も御存じでせ

う。

七817 私の乗つてゐる明治丸とい

ふのは、長さが六十間程もある大

きな汽船で、乗組の人員は二百人もあ

ります。

八44 大きなきかいの動くのも、汽

車や汽船の走るのも、皆火の力の利

用によるのである。

八759 我等若し汽船に乗りて、我

が帝國の港を出で、東へ東へと進み

行かば、(略)。

八768 こゝより汽船に乗りて、ふ

たゝび東へ進めば、(略)。

九138 拜啓、御註文の綿物三十

反、本日通運便により汽船平安丸に

て發送いたし候。

九167 コ、ヨリ江戸川ニ通ズル

運河ハ、東京ヨリ江戸川ヲサカノボ

リテ利根川ニ通ズル汽船ノ通路ニシ

テ、(略)。

九3010 蒸氣機關は(略)。始めて之

を船に用ひて汽船を造つたのは、ア

メリカのフルトンといふ人、(略)。

九382 今水路に汽船があり、陸上

にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

十672 捕鯨法には此の外に汽船の備

砲から銃を打つ方法もあり、(略)。

十一203 瀬戸内海の沿岸には(略)

等の港多く、汽船絶えず通航して、

遠く近く黒煙の青空にたなびくを見

る。

十一248 上古の舟車と今日の汽車

・汽船とをくらべんには、誰か人智

の進歩の大なるに驚かざらん。

十一278 フルトンの始めて造りし

汽船は、今の小さき川蒸氣程の大き

さなりしならん。

十一283 かくの如くにして、汽車

・汽船の進歩は世界諸國をして日に

益々接近せしむ。

十一286 思へば今より六十年前

には、我が國に一哩の鐵道も、一隻

の汽船もなかりしなり。

十二992 (略)、汽車・汽船等の中

にて我獨り廣き場處を占領し、(略)

が如きは、文明國民の爲すべきこと

にあらず。

十二998 汽車・汽船・電車等の交

通機關、博物館・圖書館等の公共營

造物に在りては、敏速と規律とを尊

ぶものなれば、(略)。

きせんきしゃのはつめい「課名」2 汽

船・汽車の發明

九日11 第十課 汽船・汽車の發明

九307 第十課 汽船・汽車の發明

きそ「木會」(話し手名) 1 木會

十53 木會「如何に、髪・ひげの黒き

は。」

きそ「木會」(地名) 3 木會 木會

十118 木會「我元 木會の檜よ、

(略)。」

十551 (略)、別當は七日の間手

もとに置きて、木會へつかはしたり。

十二48 又森林は全國の山野

たほはぬ處なく、殊に名高き木會・

吉野 (略)。

きそ「競」(四) 2 競ふ 「一フ」

十一263 都會の地には電車・自動

車等も次第に多く行はれて、ひとへ

に速力を競ふ世とはなれり。

十一813 (略)、鶴は盛に活動し、

ひたすら其の獲物の多からんことを

競ふ。

きそ「規則」(名) 2 規則

十二9910 汽車・汽船・電車等の交

通機關、博物館・圖書館等の公共營

造物に在りては、敏速と規律とを尊

ぶものなれば、之に必要な諸種の

規則あり。

十二9910 若し公衆の間に、規則を

守り、規律を重んずる心乏しき時は

是等文明の利器も其の運用を全くす

ること能はず。

ぎそく「義足」(名) 1 義足

十二815 頭には霜をいたゞき、身に

はつゞれをまとい、やせ衰へた體を

義足に支へて、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音楽師がある。

きぞくいん「貴族院」(名) 4 貴族院

十二108 帝國議會は貴族院・衆議院の兩院より成る。

十二106 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。

十二107 (略)、法律案は政府の外、貴族院・衆議院共に各之を提出するを得。

十二108 又貴族院及び衆議院は各獨立して上奏し、建議し、且臣民の請願を受くるの權能を與へられたり。

きぞどの「木曾殿」(人名) 2 木曾殿

木曾殿

十50 唯首を取つて、大將の見参に入れよ。木曾殿には見知り給はん。

十51 名乗れと申せば、『存ずる由あり。木曾殿見知り給ふ。』といひて名乗らず。

きた「北」(名) 22 北

三45 右ノ手ノサス方ガ南デ、左ノ手ノサス方ガ北デス。

三45 東ト西ト南ト北ヲ四方トイヒマス。

四18 けいさつしよのよこを北へまがつて、すこし行くと、(略)。

五74 (略)、北は山のふもとから南は海の波打ぎはまで、人や馬でふさがつてゐる。

五76 ひよりごえはしろの北の方にあつて、(略)。

八29 北へマハレバ、東ノ戸開キ、東へマハレバ、北ノ戸開ク。

八29 北へマハレバ、東ノ戸開キ、東へマハレバ、北ノ戸開ク。

九6 尊はなほも進みて北に向ひ給ひしに、蝦夷ども皆恐れて降参し、東國ことごとく平ぎたり。

九15 北ナルヲ赤堀川トイヒ、南ナルヲ權現堂川トイフ。

九15 赤堀川ハ關宿ノ北ニテフタ、ビニツ二分レ、(略)。

九16 (略)、常陸ノ霞浦・北浦ノ水ハ北ヨリ之ニ注グ。

十64 見張人がマストの上から北の方を指さして聲高く呼んだ。

十64 (略)、船ははや方向を轉じて、北へ向つて走る。

十94 興福寺ノ五重塔高ク其ノ北ニソビユ。

十一79 長良川は岐阜市の北を東より西へ流る。

十一97 是より一條の大道遠く北へ通じてロシア領に入候。

十一115 北は樺太・千島より、南臺灣・澎湖島、朝鮮八道おしなべて、我が大君の食す國と、(略)。

十二16 南臺灣の熱帯地方より北

樺太の寒帯に近き地方まで、全國に凡そ百箇處の測候所あり。

十二42 烏帽子岳は(略)、其の北なる杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。

十二54 大連より南山・得利寺・大石橋等の戰蹟を経て、北へ進むこと約二百哩、遼陽あり。

十二55 滿洲政治・交通の中心たる奉天は、遼陽の北約四十哩、(略)。

十二66 (略)、何れも南より北へ同一の進路を取りて、(略)。

きたアメリカ「地名」 3 北アメリカ

八76 アメリカ大陸は北アメリカと南アメリカとに分る。

八76 北アメリカには合衆國といふ國あり。

八77 北アメリカ

きたアメリカどじん(名) 1 北アメリカ土人

八82 北アメリカ土人

きた「う」[鍛](四・五) 2 鍛フ 鍛ふ

「ヒーフ」

十二35 鍛ひたる劔の光いちじるく世にのびやかせ、我が軍人。

十二126 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、(略)。

きた「う」[鍛](下二) 1 きまふ

十二23 幾年こにきまふとる鐵より堅きのひふあり。

きたうら「北浦」(地名) 4 北浦

九16 (略)、常陸ノ霞浦・北浦ノ水ハ北ヨリ之ニ注グ。

九17 霞浦・北浦等ノ合流スルアタリニハ名勝ノ地少カラズ。

九17 中ニモ香取・息栖ノ兩社ハ北浦ノホトリナル鹿島トモニ三社ノ名アリ。

九17 北浦

きた「える」[鍛](下二) 3 きたへる

「へーヘル」

八32 ある時は鎌をきたへてゐた。

八33 若し時から何十本となく大太刀・小太刀をきたへた。

八33 刀は武士のたましひといはれたものだから、きたへる時は身を清めて、一心不乱に打つたものだ。

きたかぜ「北風」(名) 5 北かぜ 北風

四26 さむい北かぜがふいて、のはらのくさはなは太い

かれてしまひました。

六37 北風が一日ふき通して寒かつた。

六59 身をきるやうな北風の吹く夕暮にあねいもと、かへりをいそぐ野中道。

八37 北風寒きやぶかげに、びはの花咲く年の暮。

十二20 又風の方向は矢を以て示し、(略)、下へ向ふは北風、(略)。

きたぐに「北風」(名) 1 北風

九54 タトヘバ北風ニスム野ウサ

ギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、雪ノ降ル頃トナレバ、全ク白色ニ變ジ、(略)。

きたす「北」(サ変) 1 北す「一スル」

十二55 〇 奉天より北すること約百八十八哩、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

きたて「氣立」(名) 1 氣だて

八31 〇 (略)、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。

きたない「汚」(形) 6 キタナイ

きたない「汚」(形) 6 キタナイ

二53 〇 キタナイドロ水ノホカニ

ハナンニモ デテキマセン。

二57 〇 (略)、ヤツパリ キタナイモノ

ノバカリ デテ、ヨイモノ ハナ

ンニモ デマセン。

五13 〇 町の中を通る時にきたない物を

をなげつけられるのにはこまりまし

た。

七65 〇 時々湯にはいらないと、から

だがきたなくなる。

七65 〇 きたなくなると、病氣にかゝ

り易い。

七65 〇 又きたない水やくさつた水を

飲むと、おそろしい病氣にかゝるこ

とがある。

きたなし「汚」(形) 1 きたなし「一

キ」

九58 〇 きたなき水を飲んで、恐ろ

しき病にかゝる者多し。

きたの「北野」(地名) 1 北野

六40 〇 (略)、北野の天神様へさん

けいする。

きたはんきゅう「北半球」(名) 4 北

半球

八81 〇 地球を南北の兩半球に分て

ば、北半球は南半球よりも陸地多し。

八81 〇 北半球と南半球とは時候全

く相反し、北半球の夏は南半球の冬

なり。

八81 〇 (略)、北半球の夏は南半球

の冬なり。

八81 〇 北半球にて百花咲きみだれ

て、蝶の飛ぶ春の時節は、南半球に

ては(略)。

きたま・う「来給」(五) 1 來たまふ

「一へ」

五46 〇 友吉は「早くこつちへ來た

まへ。

きたやま「北山」(地名) 1 北山

六40 〇 (略)、それから北山の方へ

行つて、金閣寺を見て、北野の天神

様へさんけいする。

きたりあそぶ「来遊」(四) 1 來り遊

ぶ「一づ」

九96 〇 されば一年中遊覽者跡を絶

たず、夏の盛りの頃、秋の紅葉の折

には來り遊ぶもの最も多し。

きたりせむ「来攻」(下二) 3 來り攻

ム 來り攻む「一ム・一ム・一ム」

七57 〇 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居

ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、アル年敵ノ大將、高師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來リ攻ム。

十二26 〇 武田勝頼大軍を率ゐて來

り攻むれども、城兵善く戦ひて抜く

こと能はず、(略)。

十二31 〇 足利氏の大兵來り攻め、

城遂に陥り、保・義鑑共に戦死す。

きたる「来」(連体) 6 來る

十90 〇 拜啓、來る八日午後一時

半より當村小學校に於て、(略)講

話これあり候。

十92 〇 來る八日講話會これあ

り候由にて御誘ひ下され有り難く存

候。

十一62 〇 (略)、來る七月二日の

誕生日を以て、親族一同打寄り、心

ばかりの祝宴相開き、(略)。

十一62 〇 拜啓來る十五日は亡父

七回忌に相當り候に付、(略)。

十一63 〇 (略)、來る六月三十日

(土曜日) 午後二時建碑式舉行致候

間、(略)。

十一63 〇 (略) 來る二十八日ま

でに、(略) 宛御一報下され度候。

きたる「来」(四) 18 來る 來る

「一ラ・一リ・一ル・一レ」ハあつまりき

たる・あつめきたる・いいきたる・い

できたる・いりきたる・うけたまわり

きたる・おくりきたる・おこりきた

る・かえりきたる・すいききたる・せま

りきたる・ちかづきたる・とらえき

たる・ひきかえしきたる・ひろいきた

る・ましきたる

九31 〇 此の地に(略)大蛇あり、

毎年來りて、我が娘を取食ひ、今ま

た残りの一人をも食はんとす。

九45 〇 或時旅行先より手紙を送り

て、其の子のアリに駱駝を連れて、

荷物を取りに來るべしと言ひつかは

したり。

九49 〇 聞けばハッサンは(略)、

道連のありしを幸ひ、迎へかたゝゝ

こゝに來りしなり。

九96 〇 外國人の我が國に來る者亦

必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞

せざるものなし。

十23 〇 五日目ノ朝行キテ見レバ、

老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。

十23 〇 今ヨリ後五日目ノ朝再ビ

來ルベシ。」

十24 〇 良(略)、夜半ヨリ起キテ

橋上ニ至レバ、シバラクアリテ、カ

ノ老人來レリ。

十76 〇 心臓ハ肺臟ヨリ來ル新シキ

血ヲ全身ニ送り、(略)。

十一23 〇 浪にたゞよふ氷山も、

來らば來れ、恐れんや。

十一23 〇 浪にたゞよふ氷山も、

來らば來れ、恐れんや。

十一51 〇 「笑フ門ニハ福來ル。」ト

イヘリ。

十一72 〇 或夜小僧住持の居間に來

りて、「(略)。」とささやくに、(略)。

十二272 援軍の来らん日も亦期すべからず。

十二2710 三日を過ぎなば、又山上に來りて援軍の消息を示さん。」

十二296 援軍來らず、速に降るべし。」

十二6510 (略)、露西亞の狼は(略)佛兵の跡を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。

十二675 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二675 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

きちにち「吉日」(名)1 吉日

十一446 今日は吉日なり、元服せよ。」

きちやくす「帰着」(サ変)1 歸着す

八794 ヨーロッパよりシベリヤ鐵道にて東方へ向はば、二週間あまりにして日本に歸着することを得べし。

きちよう「貴重」(形状)1 貴重

十一707 一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。

きつぐ「氣付」(五)1 氣附く

十二852 日ははや没して、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、今の今まで誰一人も氣附かなかつた。

ぎつしゃ「牛車」(名)1 牛車

十一259 今は(略)、古風の牛車は博物館に行かざれば見るべからず。

きつて「切手」(名)4 切手 凸ゆうびんきつて・ゆうびんきつてちようふ

七495 葉書や切手や印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」

七512 「これにはちやんと三錢の切手はつてあるのに、なぜまたおあしを拂ふのですか。」

七516 「手紙は(略)、四角より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。

七536 今では切手をはつて出さへすれば、どんな遠い所へもとどきますから、大そう便利です。」

きつと(副)4 キット きつと

四404 「コンドハタヒヤヒラメナドハ キットヤラレタニチガヒナイ。

四614 アナタハノチニハ、キツト兄サマガタヨリモ、オエラクオナリニナリマス。」

四793 そらをとんでゐる鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの名人でございます。

五662 あさつてはおはなさんと一しよにきつとまゐります。

きつね「狐」(名)2 きつね 狐

四275 一びきのきつねが、さきのこつてゐるのぎくを見つけて、

(略)。

七608 犬の種類は(略)。(略)、あるものは顔長くとがりて、狐の如し。

きつねとのぎく「課名」2 きつねとのぎく

四目10 九 きつねとのぎく

四267 九 きつねとのぎく

きつぷ「切符」(名)4 きつぷ 切符

五397 まだきつぷを買つてゐる人もあります。

五401 かいさつ口では切符をしらべてゐます。

五403 こちらのの方は、これからの人の切符を切つてゐるのです。

五405 あちらの方の方は、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。

きつりん「吉林」(地名)1 吉林

十二57 吉林

きていす「議定」(サ変)1 議定す

十二1075 帝國議會の主要なる任務は法律及び歳入・歳入の豫算を議定するにあり。

きてき「汽笛」(名)2 キテキ きてき

六786 (略)二本エントツノ汽船ハシキリニキテキヲ鳴ラシテキル。

七859 きりや雪で、方角の分らなくなつた時には、(略)。そんな時には海の深さはかつたり、きてきやかねを鳴らしたりします。

十二546 (略)大連に着す。是我が南滿洲鐵道の起點なり。

十二573 營口は(略)、遼河の河口にありて、遼河水運の起點なれば、(略)。

きにち「忌日」(名)1 忌日

十一444 いやく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。

きぬ「絹」(名)1 キヌ

二十8 キヌモメンシロヌノ

きぬいと「絹糸」(名)4 絹糸 絹絲

六335 絹糸ニテ織リタルモノヲ絹織物トイフ。

七291 この長い絲を出す蟲が百匹もなければ、木綿は一尺の絹織物を織る絹絲は出來ない。

七291 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そうな手間がかかる。

七292 (略)、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そうな手間がかかる。

きぬおりもの「絹織物」(名)7 キヌ織物 絹織物

六334 織物ニハキヌ織物・モメン織物・アサ織物・毛織物ナドイロくアリ。

六336 絹糸ニテ織リタルモノヲ絹織物トイフ。

六337 着物・羽織・ハカマ・オビナドノアタヒ高キモノハ大デイコノ

絹織物ニテツクル。

七29 1 この長い糸を出す蟲が百匹もなければ、木綿は二一尺の絹織物を織る絹糸は出来ない。

七29 2 蠶をかつて絹糸を取り、絹糸を織つて絹織物にするまでには、大それた手間がかかる。

七29 3 (略)、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

十二49 3 (略) 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も 古く其の名を知られたり。

きぬがわ「鬼怒川」〔地名〕3 鬼怒川鬼怒川

九16 3 (略) 利根川ノ本流ハ(略)鬼怒川・小貝川ヲ合せ、益々其ノ大イサヲ増ス。

九16 4 (略) 鬼怒川ノ落合ヲ所ヨリ少シク下流ニアタリテ船戸アリ。

九17 (略) 鬼怒川

きぬた「砧」(名) 1 きぬた十一11 4 朝鮮人は(略)。(略)。秋の夜長には衣打つきぬたの音が村々相應じて聞える。

きねん「記念」(名) 2 記念

十40 9 (略) 乃木大將と會見の處はいづゝ水師營。(略)。「我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ずべし。」

十二54 8 (略) 市街に大山通・兒玉町・乃木町等の名あるは、明治三十七八年戦役の記念たり。

きねんひひ「ここんどうたいいきねんひひきねんほうしんとう」〔記念砲身塔〕(名)

1 記念砲身塔

八4 9 (略) 日本海海戦の記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。

きのう「昨日」(名) 4 きのふ 昨日

四70 8 (略) 太郎 きのふは うんどうくわいで、どろによこした このはかま。

六7 8 きのふは日本ばれのよい天氣でした。

九43 7 (略) はや朝顔のはちをならべて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。

十39 4 (略) 昨日の敵は今日の友、語ることはもうちとけて、(略)。

きのこ「茸」(名) 3 きのこ

八8 6 (略) 友よ、來よ。手かごを持ちて、いざ、裏山にきのこたつねん。

八8 9 (略) たどり行く細路つたひ、はや、かうばしきのこにほへり。

八9 1 (略) 山風にきのこかをれり。

きのしたとうきちろうひでよし「木下藤吉郎秀吉」〔人名〕2 木下藤吉郎秀吉

六45 6 年が十八のころです、木下藤吉郎秀吉と名のつて、織田信長にかへました。

きのつらゆき「紀貫之」〔人名〕1 紀貫之

十99 4 (略) 紀貫之ガ 人はいさ心も知らず、故里は 花ぞ昔の香ににほひける。トヨミタリトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラニアリ。

きのどく「気毒」(形状) 1 氣の毒

九74 10 (略) 唯氣の毒なるは隣村に御座候。全村百餘戸の中二十戸も押流され候。死者四人、傷者四五十人もこれあり候。

きのは「課名」2 キノハ

二目9 八 キノハ

二16 2 八 キノハ

きのみきのまま「着身着儘」(名) 1 着のみ着のま、

九75 4 (略) 幸に命を全うしたる者も、大がいは着のみ着のまにて、(略)。

きば「牙」(名) 2 きば 牙

四16 5 牛ほどもある大きなるのししで、きばをむき出して、はないきをあらくして、(略)。

八74 3 (略) 猫ノロニハ上下二二本ツツノ鋭キ牙アリテ、肉ヲサクニ適ス。

きば「騎馬」(名) 1 騎馬

十一48 9 (略) 空しく歸つて、「騎者・騎馬・黄金、三つとも失つてしまひました。」と報告する外はない。

十一41 10 (略) いまだ幼ければ、敵も心をゆるすべく、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。」

十一95 9 (略) 冬は寒氣厳しく、地面は三尺の下まで凍り、海岸も海水厚く凍結し、(略)。

きびん「機敏」(名) 2 機敏

十一86 5 (略) 工女ハ(略)、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。熟練ト機敏トヲ要スルコト大ナリ。

十二54 2 (略) 富國ノ實ノ舉ルト舉ラザルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏ノ如何ニ存ス。

きふう「氣風」(名) 1 氣風

十一114 10 (略) 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、(略)。

きふきん「寄付金」(名) 1 寄付金

十二34 10 (略) 之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、其ノ内何千圓ハ町内有志者ノ寄附金デアル。

ぎふし「岐阜市」〔地名〕1 岐阜市

十一79 4 (略) 長良川は岐阜市の北を東より西へ流る。

ぎふちようちん「岐阜提灯」(名) 1 岐阜提灯

十一83 1 (略) 百にも近き提灯、之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯の光を水にうつせる奇観は筆も言葉も盡し難し。

きぶつ 凸きぶつ

きぶん【氣分】(名) 1 氣分

九597 運動不足なれば、食物のこなれ悪く、血のめぐりにぶく、身體弱りて、氣分もふさぐ。

きへい【騎兵】(名) 3 騎兵

九247 騎兵は進退敏活にして、多くは友軍の前方に出てて敵狀をさぐる。

九255 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵は何れも戦争に必要にして、

(略)。

九266 二箇旅團の歩兵にそこばくの騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へたるものを師團といふ。

ぎへい【義兵】(名) 1 義兵

十一1310 兒島高德といふ武士あり、主上尚箚置におはしませし時、早くも義兵を擧げしが、(略)。

きば【規模】(名) 4 規模 〆だいきば

十948 昔ハ境内方四町、堂塔雜舎ノ數百七十五アリ、規模極メテ大ナリシガ、今ハ往時ノ三ノ一二モ足ラズ。

十二153 我が國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデア

ル。

十二546 市街建築物及び埠頭等頗る規模の壯大なるを見る。

十二653 最も人目を引くものは國會議事堂なりといへども、其の規模

甚だ大ならず、其の建築も亦新し。

きぼう【希望】(名) 1 希望

十二744 然るに印度との交通は長日月を要し、中途の危険亦少からざれば、便利なる航路を開かんことは歐洲人一般の希望なりき。

きほんきん【基本金】(名) 1 基本金

十一1152 其の一事業として杉・檜等の植林を營み、其の利益を以て學校の基本金とし、(略)。

きまり【決】(名) 1 きまり

五92 私はもと雨の一しづくです。

(略) 私どものなかまは、出合ふとすぐに一しよになるのがきまりです。

きまりよし【決良】(形) 1 極りよし

十二893 諸道具の置場處を一定し、前後左右次第よく並べて、(略)、急ぎの場合にも混雜なく、暗

き時にも手探にて用を足し得る様に、極りよく整へ置くは主婦たる者の務なり。

きまる【決】(五) 3 きまる 『一ッーラ』

五271 役人は後からこゑをかけた、

「こら待て、ゐざり。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」

五415 汽車はどんなことがあつても待ちません、きまつた時間にちやんと出ます。

九864 相手の熊吉があつた通りで、

今日の勝負はきまらないが、(略)。

きみ【君】(名) 20 君 〆あにきみ・お

おきみ

四98 君がよはちよにやちよに、さざれ石の いはほとなりて、こけのむすまで。

六825 人々忠義を第一に、

あふげや、高き君の恩、國の恩。

七43 大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七47 カクテハ君ノ御用ニ立ツベシトモオボエズ。

七71 モシ病ニカハリテ早ク死ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナリ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベシ。

八374 秋の花草多けれど、中にも君の千代八千代 祝ふや菊の花の宴。

八841 明治三十七八年ノ戰役ニ、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

九2010 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命をすてて君に報ゆる爲には候はずや。

九2210 おつかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られるが、(略)。

九805 筑紫に到りて後は、(略)、片時も君を忘れ奉ること無く、(略)。

十887 君の御供に仕へしは 藤

房・李房唯二人。

十892 君は御袖に降りかゝる露拂はせて、(略)。

十一135 臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。

十一146 いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)。

十二319 「二子の君の爲に戰死せるは家門の譽なり。

十二943 「君君たり。臣臣たり。

十二943 「君君たり。臣臣たり。

十二954 「魯人は君子の道を以て其の君を輔くるに、我が臣の行ふ所は禮に反す。

十二1199 六年の月日 手を取りて、教へ給ひし 師の君の 導きな

くば、いかで我が 心に開く、智え 徳ぞ。

十二12010 師の君をば、健か。

きみ【君】(代名) 6 君

五488 音次郎は友吉のかたに手をかけて、(略)。もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。

八208 友だちはふと思ひ出したやうに、

「それはさうと、君は白い雀を見たことがあるか。」

十134 「さはいへど うらやましき身も輕き 君、床柱。あ

はれ我、梁や棟木や 桁どもをい

つもせおひて 片時も 休む間なし。」と 角柱 ひとりつぶやく。
 十一721(図) 住持は(略)、或時畫工に向ひ、「君は畫家として一家を成せる人なるに、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。
 十一1036(図) 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「我が子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。若シ不才ナラバ、君自ラ之ニ代レ。」
 十二956(図) 景公(略)。齊の臣答へて、「君子は過あれば謝す。君、實を以て謝せよ。」と。
 きみがよ「君代」(名)3 キミガヨ 君ガヨ 君ガ代
 二67(図) サア、ミンナデ一ポン ツツモツテ、キミガヨヲウタヒマセウ。」
 四96 センセイガチヨクゴヲオヨミニナツテ、センセイモセイトモ一シヨニ君ガヨノウタヲウタヒマシタ。
 十二347(略) 學校ガ落成シテ、(略)落成式ガ舉行サレタ。(略)。先ヅ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。
 きみたち「君達」(代名)1 君タチ
 七463(図) 西洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、「略」、ドウモ君タチノ仲間ヨリモ、僕ヲノ仲間ノ方ガヨケイニ用ヒラレルヤウニナツタカト思フ。
 きみら「君等」(代名)5 君ラ 君ら

君等
 四388(図) (略)タヒヒラメ(略)ナドガオヨイデキルト、サザエガ(略)、「コノアヒダ大キナフカガ來タ時ニ、君ラハズキブンアワテマシタネ。
 五295(圖) しわはよつてもわかい氣で、小さい君らのなかま入、うんどう會にもついで行く。
 七475(圖) 西洋紙ハ「君ラハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ラハ裏表トモニ使ハレル。
 七479(圖) 日本紙ハ「イヤ、君ラハ破レ易クテ、少シモ強ミトイフモノガナイ。
 七486(圖) 西洋紙ハナホマケズニ、「君等ハ水ニヌレルト、スグニベタくニナルガ、僕等ハ(略)。」
 ぎむ「義務」(名)2 義務
 九243(圖) 我が國は國民皆兵なり、男子は十七歳より四十歳までの間、何れも兵役に服する義務あり。
 十二536(圖) (略)、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。
 ぎむきよういくねんげん「義務教育年限」(名)1 義務教育年限
 十二351 就學兒童ノ數ガ年々増加シ、義務教育年限モ六年ニ延長セラレタノデ、(略)。
 きむらさん「木村」(人名)1 木村さん
 六382 木村さんが遊びに來た。

きめる「決」(下二)2 きめる「一」
 四808 よ一は心のうちで、もしこれをいそこなつたら、生きてはゐまいとかくをきめて、(略)、海の中へのり入れました。
 十346 志望者は五十人ばかりも來たが、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。
 きも「肝」(名)1 きも
 九854 熊吉は(略)、池の中へ落ちこんだ。附添人も見物人も、きもを冷してかけよつて、熊吉に水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわぎである。
 きもの「着物」(名)22 きモノ きもの
 着物 ヲもめんきものゆらい
 二202 ワタクシノキモノニハ、ホソイハリガ一パイハエテキマス。
 二206 (略)、モウスコシタツト、キモノヲヌイデ、下ヘトビオリマス。
 二393(圖) キモノヲヌツタリセントクシタリシテクダサルノハ、ドナタデスカ。」
 二524 オヂイサンガソコヲホルト、(略)、オカネヤラ、キモノヤラ、ソノホカタカラモノガタクサンデマシタ。
 二565 ツクタビニ、(略)オカネ

ヤキモノヤ、イロイロナタカラモノガデマシタ。
 三563 ザシキノウチニイクスデモツナヲハツテ、ウチヂユウノ人ノキモノガホシテアリマス。
 三567 アノキモノトハカマハニイサンノデス。
 四145(圖) (略)、からだに雪のきものきて、かすみのすそをとほくひく、ふじは日本一の山。
 五356 キモノノモヤウヤ、カンザシナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、ソノスガタガカイラシイカラデセウ。
 五678 子ドモハフダンヨリハ美シイ着物ヲ着テアソンデキル。
 六336(圖) 着物・羽織・ハカマ・オビナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ絹織物ニテツクル。
 六343(圖) ワレヲ着物ハ多クコノ木綿織物ニテツクル。
 七382 出口ニ近イ所ニハ、着物・羽織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。
 八156 働クコトガナケレバ、食物モ買ハレナイシ、着物モコシラヘラレナイ。
 八622 皆サンノ着物ニシテキル木綿織物ハドウシテ造リマスカ。
 十351(圖) 「あれが此の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。

十37 1 窓 又着物はそまつながら、さつぱりしたものを着て、齒もよく磨いてゐました。

十37 4 窓 外の者は着物だけは美しかったが、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。

十49 7 窓 (略)、着物の縞模様、焼物・塗物の繪模様、(略)、我等の衣食住には模様・色どりをほどこしたるもの多し。

十一108 3 第二に目につくのは白い着物である。男はゆるやかな股引をはき、胴衣を着けて、其の上に長い上衣を着る。

十一111 1 朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

十一111 4 暑い時分汽車に乗つて朝鮮を旅行すると、どここの山陰にも白い着物が乾してある。

きやく [客] (名) 2 客 おきやく・おきやくさま

五70 3 見せ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤラ、フエ・タイコデハヤシタテル音ヤラ、ニギヤカナコトデアル。

十二79 5 窓 (略)、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。船員皆歡喜して、コロンブスの身邊を圍み、(略)。

きやくゆうちゅう [客遊中] (名) 1

客遊中

十二76 2 窓 ゼノアに生れて (略)。

(略)。コロンブスは葡萄牙に客遊中、熱心に此の説を主張したりしが、(略)。

きやはん [脚半] (名) 1 きやはん 十80 9 窓 (略)、足にもあつし織のきやはんをはく。

きやり [木遣] (名) 1 木やり 六75 8 一人の年取つた男がこゑをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

き・ゆ [消] (下二) 4 キユ 消ゆ 『エ・ユル』 七24 3 窓 (略)、風ニハカニ吹キテ、トモシビキエタリ。

九46 10 窓 然るに此の大風の爲に、今までの駱駝の足跡消えたれば、(略)。

九65 8 窓 (略)、火消つばの火の消ゆるは空氣の供給絶ゆるが爲なり。

九65 9 窓 然れども空氣の流通餘りに強き時は、却つて火の消ゆることあるべし。

きゆう [急] (名) 3 急

十二27 5 窓 「敵は長圍の計を取れるに、我は糧食殆ど盡きたり。(略)」。城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。」

十二28 10 窓 家康直ちに勝南をして織田信長に見えて、長篠城の急を告げしむ。

十二39 5 窓 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後

にするが爲なり。」 十39 1 窓 急 十39 2 窓 急 十39 3 窓 急

五44 1 汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハイリマシタ。

六56 8 謙信は(略)、じつとしては居られない。急に馬に打乗つて、味方のまつ先に立つて、信玄の本陣に切りこんで、信玄に打つてかゝつた。

七15 7 窓 急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。

七84 9 窓 急に暴風雨が來ると、山の様な波が立つて、船は今にも沈むかと思ふ様になります。

八13 1 窓 寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなりました。

八74 8 窓 虎毛猫モ(略)、シヅカニ他獸ニ近ヨリ、急ニ飛ビツキテ之ヲ捕フ。

九73 6 窓 (略)翌朝三時頃急に水音はげしく相成り、(略)。

十二7 2 窓 敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとせり。我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、(略)。

十二29 2 窓 勝商事急なればとて直ちに引返す。

十二36 2 窓 随ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、學校ノ増設ヲ要スルコト日一日ヨリ急ナリ。

きゆう [義勇] (名) 2 義勇 十一59 6 窓 義勇の務御國に盡し、

孝子の譽我が家にあげよ。 十二3 7 窓 鍛ひたる劍の光いちじるく世にのびやかせ、我が軍人。此の御製を拜讀しては、何人も義勇の心をどり立つるべし。

きゆうか [旧家] (名) 1 舊家 十一112 8 窓 村長は村の舊家に生れ、極めて親切公平なる人なれば、深く村民に敬愛せられ、(略)。

きゆうけい [球形] (名) 1 球形 十二74 7 窓 コロンブスは初より世界は球形なりと信じ、(略)。

きゆうこう [旧功] (名) 1 舊功 十一105 8 窓 或時將軍馬謖、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。孔明、謖ノ舊功ヲ惜シミシカド、(略)。

きゆうこうれつしや [急行列車] (名) 1 急行列車 九35 7 窓 それが今は朝の急行列車で東京を出立すれば、晚にははや京都に着くことが出来る。

きゆうさいす [救済] (サ変) 1 救済す 『一ス』 十二71 2 窓 世を憤らんよりは、進みて之を救済すべし。

きゆうじつしやく [九十尺] (名) 1 九十尺 十67 6 窓 鯨は(略)、長さは十五間、即ち九十尺にも及ぶものも珍しくはない。

きゆうしゅう [九州] (地名) 4 九州 十一17 5 窓 本土の西、近く九州と相

接せんとする所、下關海峡あり。
 十一176図 四國の西には佐田岬長
 く突出で、九州にせまりて豊後海峡
 をなす。

十一19図 九州

十二43図 (略) 安永八年 櫻島の破
 裂せし時は、九州・四國・山陽・山
 陰・東海道までも火山灰を降らし
 たりといふ。

*きゅうじゅう ぐくじゅう

きゅうじゅう [急所] (名) 1 急處

十六49 (略) 見る内に一頭の鯨に近
 寄り、急處めがけて破裂矢をしかけ
 た銛を打つ。

きゅうじょ [宮女] (名) 1 宮女

十五2図 一條天皇の頃には才學す
 れたる宮女多かりしが、最も世に聞
 えたるは紫式部と清少納言となり。

きゅうじょう [宮城] (名) 4 宮城

七57図 今日ハマツ丸ノ内二行キテ
 宮城ヲ拜シ奉ル。

七57図 宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫
 眞ニテ見知りタル二重橋カ、レリ。

七57図 宮城ノ前ノ廣場ニハ楠木正
 成ノ銅像アリ。

九64図 田村麻呂は(略)。(略)之
 をはうむりし時は、(略)、かばねを
 宮城の方に向ひて立たせ、ながく皇
 城を守護せしめたりといふ。

きゅうしんす [急進] (サ変) 1 急進

ス [一スル]

十一31図 驅逐艦ノ(略)。(略)雲

霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風
 ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモ
 ヒ見ルベク、(略)。

きゅうす [給] (サ変) 1 給す 『一
 シ』

十83図 されば北海道舊土人保護法
 と稱する法律ありて、(略)土地を與
 へ、農具・種子等を給し、(略)、厚
 く保護の方法を講ぜり。

きゅうせき [旧跡] (名) 2 舊蹟

十103図 大和國ハ(略)。(略)名所・舊
 蹟ヲアマネク尋ネンニハ、幾月ノ巡
 遊モ尚足ラザル感アルベシ。

十一39図 臺南は南部の大都會に
 て、附近に名所・舊蹟の多き所に御
 座候。

きゅうせつす [急設] (サ変) 1 急設

す [一シ]

十二58図 此の鐵道は日露戰役中に
 急設したる輕便鐵道にして、(略)。

きゅうたんせん [給炭船] (名) 1 給
 炭船

十一35図 以上ノ外、尚水雷母艦・
 工作船・給炭船等ノ如キ特別任務ヲ
 有スルモノアリ。

きゅうちゅう [宮中] (名) 3 宮中

八26図 その神勅によりて、代々の
 天皇はこれを宮中にあがめたまひし
 が、(略)。

十六16図 夫に別れて後、宮中に召さ
 れて、上東門院に漢文・漢詩を教へ
 參らせたり。

十六7図 清少納言も亦紫式部と同じ
 く宮中に仕へ、(略)。

きゅうどう [旧道] (名) 1 舊道

九40図 昔ヲ知レル人、若シ舊道ノ
 今ノサビシサト、昔ノニギハシサト
 ヲクラベ見バ、世ノ轉變ノ如何ニ甚
 ダシキニ驚クナラン。

きゅうどうじん ぐくはつかいどうきゅうど
 じんほごほう

きゅうにく [牛肉] (名) 3 牛肉

十84図 其の上牛肉と牛乳は飲食物と
 しても大切である。

十84図 維新前までは牛肉を食ふ人は
 至つて少かつたが、今では全國食は
 ん處がなくなつた。

十86図 豚肉はあぶらに富んでゐて、
 養分の多いことは牛肉におとらぬ。

きゅうにゅう [牛乳] (名) 4 牛乳

八14図 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛
 乳ヲ家々ニ配達シテアルク。

八25図 此の下女は毎朝かうして、主
 人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐ
 たのです。

十84図 其の上牛肉と牛乳は飲食物と
 しても大切である。

十87図 羊の肉も亦食用となり、山羊
 の乳は牛乳のやうに飲料になる。

きゅうにゅうや [牛乳屋] (名) 1 牛
 乳屋

八14図 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛
 乳ヲ家々ニ配達シテアルク。

きゅうば [牛馬] (名) 2 牛馬

十二25図 (略)、荷車には人の引く
 あり、牛馬に引かしむるあり。

十二46図 (略)、善良なる耕作用の
 牛馬、強健なる軍用の馬匹、滋養に
 富める乳・肉等を供給せんこと、實
 に今日の急務なり。

きゅうふんかこう [旧噴火口] (名) 1
 舊噴火口

十二40図 阿蘇山の舊噴火口は南北
 の長徑六里、東西の短徑四里にわた
 り、(略)。

きゅうほう [旧法] (名) 1 舊法

十二46図 栽培法の如きも、舊法に
 なづまず、能く學理を應用せば、一
 層其の收穫を増加することを得ん。

きゅうほうこう [義勇奉公] (名) 1

義勇奉公

九30図 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下
 ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々ア
 リ。カクノ如ク國事ニタフレタル人
 ヲアラハレミ給フコトノ深ク且アツ
 キヲ見ルモノ、誰カハ義勇奉公ノ心
 ヲ起サザラン。

きゅうむ [急務] (名) 2 急務

十二46図 家畜の飼養に至りては、
 更に之を盛にし、(略)牛馬、(略)
 馬匹、(略)乳・肉等を供給せんこ
 と、實に今日の急務なり。

十二53図 強兵ヲ以テ知ラレタル我
 ガ國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ
 急務ニシテ、(略)。

きゅうもん [宮門] (名) 1 宮門

八五二 天皇大極殿ニ出デサセ給

ヒ、(略)。中大兄皇子命ジテ宮門ヲ閉デサセ、長キヤリヲトツテ物カゲニカクレ給フ。

きゅうようす「休養」(サ変) 1 休養す「スル」

十一六九 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

きゅうり「胡瓜」(名) 4 木瓜

五四四 木瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔・西瓜・トウ瓜・カボチャ・ヘチマナドヲ瓜トイフ。

五四六 マヅ形カライヘバ、木瓜・白瓜・ヘチマハ細長ク、(略)。

五四八 木瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、(略)。

五五一 木瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシテモ、ツケ物ニシテモタベ、又ニテモタベル。

きゅうりゅう「急流」(名) 1 急流

九四二 急流、カ、リテハタキトナリ、ヨドミテハフチトナリ、又切レテハ急流トナリ、遂ニ今日ノ如キ美シキ景色トナリシナリ。

きよ「居」(名) 3 居

十二六七 亞弗利加・印度の獅子、南亞米利加の野牛等の、(略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

十二六七 (略)、獸類中にも食物を求め、氣候を追ひて、毎年一定の季

節に其の居を移すもの少からず。

十二九六 孟子の幼時母は(略)、市井の感化を恐れて、三度其の居を遷せりといふ。

きよ「拳」(名) 1 拳

十二八七 喜劍其の後江戸に出で、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

きよい「御衣」(名) 4 御衣

九八一 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが、(略)。

九八二 (略)、其の御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。

九八四 道真(略)、恩賜の御衣をさへげて、はるかに東方を拜し、一篇の詩を作りたり。

九八七 恩賜の御衣なほこゝに在り。さへげて持ちて毎日餘香を拜す。

きよう「京」(地名) 1 京

十二七二 愚僧も所用ありて京へ上り、一二年在京せんもはかり難し。

きよう「経」(名) 1 境

十一七七 又一山を越ゆれば、(略)、上るに隨つて、瀧はいよく小、境は益々靜かなり。

きよう「今日」(名) 27 今日
三五五 今日 ハウチノ虫ボシデス。

三五一 今日 は なみ が おだやか

で、舟がたくさん おきへ出てゐます。

四六五 今日 は 早くから學校へ行つて、みんなで雪なげをしませう。

六五五 今日 は 天氣もよいから、人が大ぜい出て、稻をかつてゐます。

六五八 今日 は 天氣がよくて暖いから、うちではすゝはきをした。

六九四 今日 は 朝からあちらこちらを見物した。

七四二 (略) が 大事と考へまして、今日このお金を出したのでございます。

七五五 今日 ハマツ丸ノ内ニ行キテ宮城ヲ拜シ奉ル。

七六一 今日 この なつかしい學校へ来て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしうございます。

八四一 雨は夜中にはれて、今日はうららかなる天氣なり。

八七七 今日 は 神嘗祭なれば、夕方には内宮へ勅使の参拜もあるべしといふ。

八七八 今日 の この日に年來ののぞみを達したるは何等の幸ぞや。

八七〇 我等一同申し合せて、今日より働くことを止むべければ、左様心得られたし。

八九四 今日 ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日ダ。

九八六 相手の熊吉があの通りで、今日の勝負はきまらないが、(略)。

九八七 どうか今日から一年の間、(略)、御支配をなさつて下さい。

九八八 (略)、古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬと、つかうまつりし言の葉の(略)。

九八九 昨日の敵は今日の友、語ることはもうちとけて、(略)。

一〇〇〇 『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻すべし。』

一〇〇一 古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬるかな。

一〇〇二 今日 は吉日なり、元服せよ。

一〇〇三 (略)、年頃の恩愛、殊には今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

一〇〇四 今日 書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。

一〇〇五 西暦一千四百九十二年八月三日の朝、今日はゴロンブスが遠征隊出發の日なりとて、(略)。

一〇〇六 處は埃太利の首府維也納の大公園、今日はにぎやかな祭日である。

一〇〇七 見る物の多い今日の祭日に、時代後れの下手な音曲に耳を傾ける者は一人もない。

一〇〇八 (略)、學びの道の六年をば、卒へし今日こそうれしけれ。

ぎょう「業」(名) 9 業ひこうかいぎ
よう・せいとうぎよう・ようさんぎよ
う

九四九〇 (略)、駱駝に乗りて隊商の
仲間に加り、大沙漠を往來するを業
とせり。

一四四一 (略) 花筵ヲ最モ多ク産スルハ
(略)。(略)。(略)、販路次第ニ開
ケ、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増
加シ、(略)。

一四四四 (略) 眠亀ガ(略)、熱心ニ此ノ
業ニ志シ、機械ヲ發明シ、國産ヲ廣
メシハ大イナル功勞トイフベシ。

一四七九 (略) 鵜飼を業とする漁夫は皆
此ノ二村に住めり。

一四八七 (略) 蠶の絲を吐きて繭を造る
は紡績の業に等しく、(略)。

一四八八 (略) 葉巻蟲の絲にて葉
をつむり合するは裁縫の業に同じ。

一四八九 (略) 蜜蜂の蜜を吐き、又たく
みに巢を造るは釀造の業と建築の業
とをかねたりといはんか。

一四九〇 (略) 釀造の業と建築の
業とをかねたりといはんか。

一四九一 (略) 我が國の農業中最も開け
ざるは牧畜の業なり。

きょういく「教育」(名) 5 教育ひぎ
むきょういくなんげん・こくみんきよ
うい

一四四六 (略) 教育の事業も段々進歩
し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相
成候事、國家の爲眞に大賀の至に御

座候。

一四四七 (略) 十四五年の後は村民は
教育の爲、一厘の支出を要せざるに
至るべし。

一四四八 (略) ソモく明治五年學制發
布以來、教育ノ普及發達ハ年ヲ追ウ
テイヨく盛ニ、今ヤ全國就學兒童
ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、本
郡ノ如キハ實ニ百分ノ九十九ノ好成
績ヲ示セリ。

一四四九 (略) 孟子の幼時母は深く意を
其の教育に用ひ、市井の感化を恐れ
て、三度其の居を遷せりといふ。

一四五〇 (略) 例へば教育・衛生等自治
團體の事業は、地方人民の一般に之
を尊重し、之に協力するによりて、
始めて其の効果を全うすることを得
べきなり。

きょういく「教育」(サ変) 1 教
育スル「一スル」

一四五一 (略) 又國家全體カライヘバ、農
夫ノ田畑ヲ耕シ、(略)、教師ノ生徒
ヲ教育スル等ハ皆分業ニ外ナラスノ
デアル。

きょういくなんご「教育勸語」(名)

2 教育勸語

一四五二 (略) 修身の徳是なりと、教
育勸語のり給ひ、戦後經營かくこそ
と、戊申の詔書かしこしや。

一四五三 (略) 教育勸語と戊申詔書と
は、我等が身を修め、世に處するの
道を示し給へるものにして、之を拜

讀するもの誰か御聖徳の山よりも高
く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉
らざらん。

きょういん「教員」(名) 1 教員ひし
ようがっこうきょういん

一四五四 (略) 其の他の教員も校長を模
範として、職務に勉勵するが故に、
兒童は皆よく之になつて、(略)。

きょうか「橋下」(名) 1 橋下

一四五五 (略) 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落
シ、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」
トイフ。

きょうかいせき「境界石」(名) 1 境
界石

一四五六 (略) 日・露の境は(略)、四
箇所に境界石を置きて、分明に相成
居候。

きょうぎ「経木」(名) 1 経木

一四五七 (略) 夏の経木や麥わらは見
るにもいとど輕げなり。

きょうぎ「行儀」(名) 1 行儀

一四五八 (略) 子供の行儀・作法
等につきては、主婦たる人の責任最
も重し。

きょうきゅう「供給」(名) 8 供給ひ
じゅうきょうきゅう

一四五九 (略) 火消つぽの火の消ゆ
るは空氣の供給絶ゆるが爲なり。

一四六〇 (略) 物の價の高下は主として
需要と供給との關係によりて定まる
ものなり。

一四六一 (略) しかして供給の需要より

も少きときは物の價は高くなり、多
きときは安くなるなり。

一四六二 (略) かゝる時は靴の供給次第
に増えり、靴の價はやうやく安くな
りて、(略)。

一四六三 (略) 次第に其の製造高
を減ずるが故に、供給も随つて減じ
て、(略)。

一四六四 (略) 供給に限りある物、
例へば名高き古人の書畫・古器物な
どの如きは、(略)。

一四六五 (略) 即ち供給に限りあるもの
は一定の價なしといふべし。

一四六六 (略) 四面皆海にして、
魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食
すること少く、(略)。

きょうきゅう「供給」(サ変) 1 供
給ス「一セ」

一四六七 (略) 善良なる耕作用の
牛馬、強健なる軍用の馬匹、滋養に
富める乳・肉等を供給せんこと、實
に今日の急務なり。

きょうきゅう「供給」(サ変) 2

供給ス「一サースル」

一四六八 (略) 若し炭酸瓦斯を供給するも
のがなければ、空氣中の炭酸瓦斯の
分量が著しく減つて、地球上の植物
は盡く枯死すべきはずである。

一四六九 (略) 然るに炭酸瓦斯が絶えず供
給されるのは、(略)、動物の呼吸
作用も與つて大いに力があるのであ
る。

きょうくん「教訓」(名) 1 教訓

十二116 海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ。といふ忠勇の精神は我等が祖先の教訓なり。

きょうけ「京家」(名) 1 京家

十一5110 手塚、首をたづさへて、大將義仲の前行き、「略」。京家・西國の者かとすれば、坂東聲なり。

きょうけん「恭儉」(形状) 1 恭儉

十二93 孔子は魯といふ國に生れ、人と爲り禮を好み、温良・恭儉なりき。

きょうけん「強健」(形状) 2 強健

十789 常ニ身體ヲ大切ニシ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

十二465 強健なる軍用の馬匹、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

きょうけん「強堅」(形状) 1 強堅

十777 スベテ重要ナル機關アル部分ハ、殊ニ強堅ナル骨ニテ包メラレリ。

きょうこう「行幸」(名) 3 行幸

九958 天皇陛下かつてこゝに行幸あり、(略)。

十一310 天皇のこゝに行幸ありしより三年、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、(略)。

十一511 吉野には古く離宮あり、應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、(略)。

きょうこうけい「行幸啓」(名) 1 行幸啓

九303 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々アリ。

きょうこうしたまう「行幸給」(四) 1 行幸し給ふ「一ヒ」

十736 道後は(略)、帝都をさること遠けれども、古代より世に著れ、往昔天皇の行幸し給ひしことも數回に及べり。

きょうこく「きょうこく」(名) 3 協賛

十二1079 しかして、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経たる後、天皇の裁可を待ち始めて成立するものとす。

十二1082 若し兩院の決議一致せざるときは、帝國議會の協賛にあらず。

十二1091 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、議員たる者は(略)忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

きょうし「教師」(名) 1 教師

十一131 又國家全體カライヘバ、農夫ノ田畑ヲ耕シ、(略)、教師ノ生徒ヲ教育スル等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。

きょうじやく「強弱」(名) 2 強弱

十二194 風の方角・強弱、溫度等一般の天氣要素を地圖の上に

記載し、(略)。

十二202 又風の方向は矢を以て示し、(略)。又其の強弱は矢の羽の數にて表すなり。

きょうじゆ「教授」(名) 1 教授

十二366 本校舎ノ建築ハ(略)、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、専ラ教授ノ便ヲ計リ、實用ニ重キヲ置キ、(略)。

きょうじょう「狭小」(形状) 1 狭小

十二461 耕地の面積(略)、總面積の約一割五分に過ぎず。西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、尚甚だ狭小なりといふべく、(略)。

きょうじょう「教場」(名) 1 教場

十二369 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。

きょうじょう「橋上」(名) 2 橋上

十226 張良、橋上ニテ白髮ノ一老人ニアフ。

きょうじょう「強秦」(名) 1 強秦

十二393 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。

きょうす「供」(サ変) 2 供す「一スーセ」

九667 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。

十二1062 しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聽く機關に供せさせ給へり。

きょうせい「強制」(サ変) 1 強制す「一シ」

十二1038 市町村長・議員等を選挙するには(略)。まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、(略)。

きょうそう「競走」(名) 2 競走

九3410 馬場の中人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、一時間に十五マイルも走る汽車とはどうして競走が出来よう。

九845 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、(略)、もはや熊吉と愛作の二人だけの競走となつた。

きょうそう「競争」(サ変) 1 競争す「一スル」

十一1135 村會議員も全村一致して之を選挙し、互に競争するが如きこと更になし。

きょうそう「競走」(サ変) 1 競走する「一スル」

九347 中には汽車と競走する積で、馬に乗つて来た人もある。

きょうだい「兄弟」(名) 2 兄弟

十一517 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其

ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、(略)。

十一605(圖) 出征兵士の弟ぞ、我は。兄君、我も後より行らん。兄弟共に敵をば討さん。

きょうだい「強大」(形状) 1 強大

十一354(圖) 四面皆海ナル我が帝國ハ、(略)、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

きょうと「京都」(地名) 13 京都

六384 午前六時の汽車で、おとうさんが京都へお立ちになつた。

六387 午後京都からおとうさんの手紙が着いた。

六394(圖) 昨日六時の汽車に間に合つて、晩の九時二十分に京都に着いた。

六497 (略)、信長は京都で光秀といふけらいにころされました。

六532 京都の東山の山の上に秀吉のはかがございます。

七423(圖) (略)、御主人織田様には、近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。

九25(圖) 京都

九354 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、(略)。

九358 それが今は朝の急行列車で東京を出立すれば、晩にははや京都に着くことが出来る。

十739(圖) (略)有馬の温泉にして、京都・大阪に近ければ、浴客多く集り、(略)。

十939(圖) 京都ヨリ汽車ニテ奈良ニ入

ルニハ奈良線ニヨルベク、(略)。

十二489(圖) 米と麥とは全國に、製茶は静岡・三重・京都(略)。

十二864(圖) (略)大石良雄は初め京都に在り。

きょうどう「共同」(名) 1 共同 ひとつそんきょうどう・いっちききょうどう

十一56(圖) 蜜蜂は群を爲して共同の生活を営み、一群の總數數萬に及ぶものあり。

きょうどういっち「共同一致」(名) 2 共同一致

十一1110 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、コ、ニ注意シナケレバナライノハ共同一致トイフコトデアル。

十一122 分業デスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、ソレムノノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。

きょうどういっち「共同一致」(サ変) 2 協同一致

十二1027(圖) 地方人民協同一致して、自ら地方公共の事に任じ、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。

十二1046(圖) 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。

きょうどうせいかつ「共同生活」(名) 1 共同生活

十571(圖) 兵舎内にては(略)。多人数の共同生活に候へば、是はもと

より當然の事に候。

きょうどうだんけつ「共同團結」(サ変) 1 共同團結

十一88(圖) 蜜蜂の群集生活を營むを得るは、共同團結して勞働をいとはず、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體の爲には身命ををしまざるによる。

きょうとからのてがみ「課名」 2 京都からの手紙

六目13 第十二 京都からの手紙

六391 第十二 京都からの手紙

きょうとしじん「京都西陣」(地名) 1 京都西陣

十二493(圖) 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も古く其の名を知らるたり。

きょうぶ「胸部」(名) 1 胸部

十778(圖) 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテオホハレタルハ肺臓及ビ心臓ヲ保護センガ爲ナリ。

きょうへい「強兵」(名) 2 強兵

十二533(圖) 富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。

十二533(圖) 強兵ヲ以テ知ラレタル我が國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、(略)。

きょうみ「興味」(名) 1 興味

十一386(圖) (略)、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覺え申候。

きょうむ「業務」(名) 4 業務

十一678(圖) 其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は(略)、實際修學及び業務に用ふる時間は僅かに二十萬時間を越えざるべし。

十一696(圖) 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

十一703(圖) 人を訪問する時は業務をさまたげざる時間を選び、(略)。

十一957(圖) 其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

きょうり「郷里」(名) 1 郷里

十二878(圖) 是より暇を請ひて郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。

きょうりよく「協力」(サ変) 1 協力

十二1048(圖) 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、地方人民の(略)、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

きょうれん「御宴」(名) 1 御宴

九8010(圖) 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、(略)。

ぎょかい「魚介」(名) 2 魚介

十二455(圖) (略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、(略)。

十二481(圖) 四方の海の底廣く、魚

介さまぐ、海藻の 無限の富を藏したり。

ぎょかん「御感」(名) 2 御感

九八1 図 (略)、詩を作りて天皇の御感に入り、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが、(略)。

一七2 図 (略)、皇后は(略)、「香爐」の雪は如何に。」と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。皇后の御感一入なりきとぞ。

ぎょぎよう「漁業」(名) 6 漁業

七八7 図 又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。

一四4 図 (略)、森林は漁業の爲にも大いなる利益をあたふ。

一四6 図 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

一八8 4 図 蜘蛛は(略)。(略)。此の網にて蟲を捕ふるは漁業の類とも見るべし。

一四8 4 図 樺太にて最も有望なるは漁業にて、(略)。

一四9 8 図 漁業に次ぎて有望なるは農業と林業にて、(略)。

きよく「局」ひゆうびんきよく

きよく「極」(名) 2 極

一二二1 2 図 (略)、嚮二敵ニ對シ勇進敢戦シタル麾下將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

一二五2 1 図 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマヌカレズ。

きよくさんぎんだい「玉山銀台」(名) 1 玉山銀臺

一四七8 6 図 又嚴冬の頃は瀑水落つるに隨ひ氷結して、一面玉山銀臺となり、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。

きよくせん「曲線」(名) 5 曲線

一四四8 8 図 線には直線と曲線とあり。

一四四8 8 図 曲線は直線よりもやはらかなる感覺を與ふるを以て、(略)。

一四四9 9 図 (略)、曲線を用ふれば、更に美しき模様を得べし。

一四四6 6 図 見よ、曲線のみにて成れる(略)、直線・曲線を併せ用ひたる(略)の模様の如何に麗しきかを。

一四四6 8 図 (略)、直線・曲線を併せ用ひたる(略)の模様の如何に麗しきかを。

きよくなんしよねつ「極南暑熱」(名) 1 極南暑熱

一四四七 7 図 極南暑熱の御地にても同じことと存候。

きよくほく「極北」(名) 1 極北

一四四一 1 6 図 (略)、此の極北の寒地も今ははや生れ故郷の如き心持に相成候。

きよけいすいらい「魚形水雷」(名) 2 魚形水雷

一四四四 4 図 驅逐艦ハ(略)、敵艦ニ近ヅキ、魚形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈

シ、又敵ノ水雷艇ヲ驅逐・撃破スルヲ目的トス。

一四四四 4 図 水雷艇ハ(略)、敵艦ニ近ヅキ、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃沈スルヲ任務トス。

きよげつにじゅう「去月二十五日」(名) 1 去月二十五日

九四二 5 図 去月二十五日御差出の緞物二十反本日到着。

きよう「渠口」(名) 1 渠口

一四四二 2 図 我が國デ一番大キイノハ佐世保海軍工廠ノ船渠デ、(略)、渠口ノ幅十九間餘、深サ八間餘アル。

きよう「一」(シ) 1 舉行

一四四三 3 図 (略)、來る六月三十日(略)建碑式舉行致候間、御光臨の榮を賜はり度、(略)。

きよう「一」(サ変) 1 舉行ス

一四四三 5 図 コ、二本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

きよう「一」(サ変) 1 舉行ス

一四四四 4 図 (略)學校ガ落成シテ、前週ノ土曜日ニハ落成式ガ舉行サレタ。

きよし「挙止」(名) 1 舉止

一四四六 6 図 他國に行きて、(略)乘客の舉止、道行く人の容儀等を見れば、(略)、早くも其の國民の品格の

知るゝものなり。

きよし「清」(形) 1 清し「一」

八四六 6 図 石山寺の秋の月、雲をさまりてかげ清し。

きよし「居室」(名) 2 居室

一四五六 6 図 毎週土曜日の午後には居室・兵器・寢具其の他一切所持品の清潔検査これあり候。

きよし「居舟」(名) 2 漁舟

一四七九 9 図 鵜飼は(略)。此の間毎夜月なき時をうかゞひて漁舟を出す。

きよし「居所」(名) 3 居所ひじゅしんにきよししめい・はっしんにきよししめい

八四八 8 図 (略)其居所氏名を此處へ記すべし

八四八 8 図 發信人の居所氏名を受信人に知らせんとする時は(略)

八四八 8 図 發信人は自己の居所氏名を(略)此處に記すべし

きよせい「御製」(名) 5 御製ひてん

のうへいかのぎよせい

八七3 図 とこしへに民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大神の御製を思ひ出でて、(略)。

九28 6 図 (略)、本殿ニハカシコクモ

天皇陛下ノ御製ノ歌ヲカ、ゲタリ。

十一2 10 図 當時の御製に、花よねて

よしや吉野のよし水は まくらのも

と石走る音。

十二1 7 図 陛下が (略)、折にふれ

てよみ出でさせ給へる御製にも、常

に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ

大御心の拜察せらるゝは、(略)。

十二3 7 図 鍛ひたる劔の光いちじる

く世にあらやかせ、我が軍人。此の

御製を拜讀しては、(略)。

ぎよせん「漁船」(名) 1 漁船

十一26 8 図 筋骨たくましき若者が

體を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましさ

よ。

ぎよちょう「魚鳥」(名) 1 魚鳥

十二43 5 図 太古人口少く、人智も開

けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を

採りて食物とせり。

ぎよにく「魚肉」(名) 1 魚肉

十二87 1 図 (略)、足の指に魚肉數片

をはさみて良雄の面前に出す。

きよねん「去年」(名) 6 キヨネン

去年

三58 1 私ガキヨネンマデキテ

オタワタイレハ、ユキモタケ

モミジカクナツテ、モウキラレ

マセン。

四12 1 去年ハホシテ、クシガキ

ニ作りマシタ。

六36 3 ゆか下から去年なくしたこま

が出てうれしかった。

八34 1 何時も丈夫さうな老人であつ

たが、去年の暮に死んでしまつた。

九80 10 図 去年の今夜清涼殿の御宴に

侍し、(略)、御衣を賜はりて身に餘

る面目をほどこしたりしが、(略)。

九81 6 図 去年の今夜清涼に侍す。

ぎよふ「漁夫」(名) 3 漁夫

九88 2 図 タトヘバコ、ニ漁夫アリ

テ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲

ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。

十一79 6 図 鵜飼を業とする漁夫は皆

此の二村に住めり。

十一82 8 図 鵜は (略)、漁夫は一時

間餘にして數千百尾の鮎を得るを常

とす。

ぎよふく「魚腹」(名) 1 魚腹

十二70 1 図 されば河水・湖水におぼ

れて魚腹に葬らるゝもの、野獸の爪

牙にさかれて食はるゝもの、其の數

を知らず。

きよまさ 凸かとうきよまさ

きよみず 凸せとくたにありたきよみず

さつまやき

きよみずで「清水寺」(名) 1 清水寺

六39 6 図 清水寺をはじめ、たくさん

のお寺やお宮へさんけいした。

きよめる「清」(下) 1 清める

《一メ》

八33 7 図 刀は (略)、きたへる時は

身を清めて、一心不亂に打つたもの

だ。」

ぎよゆう「御有」(名) 1 御有

十97 2 図 東大寺ノ境内ニ正倉院ア

リ。帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ

寶器ヲ藏ス。

きよらか「清」(形状) 1 清らか

八4 6 図 五十鈴川は流早くして、水

清らかなり。

きより「距離」(名) 1 距離

十二6 5 図 (略)、距離六千メートル

に近づきて始めて應戦し、はげしく

敵を砲撃せしかば、(略)。

ぎより「漁利」(名) 1 漁利

十一98 5 図 (略)、鰈と鰯との漁利

は殊に多く、鮭・鱒も亦少からず候。

ぎよるい「魚類」(名) 5 魚類

七70 2 魚類ニハイワシ・アヂ・サ

バ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、

(略)、タヒ・ボラ・ハモ・コチ・キ

スナドノヤウニ、(略)、エヒ・カレ

ヒ・ヒラメナドノヤウニ、(略)。

七71 2 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ

コ・イカナドガスンデキル。

十10 3 図 總べて魚類は暗き處を喜

び、森林の影さす水中には多く集り

来るものなるを以て、(略)。

十33 3 図 (略)、罪人ドモハ魚類・果

實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死

スルモノ年々少カラザリキ。

十一65 8 又魚類ヤ野菜ハ各其ノ季節

ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化

モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

きらい「嫌」(形状) 1 きらひ

六73 3 私は一たい子供がすきでござ

います、(略)どうしてもきらひ

な子供が七八人ございました。

きららう「嫌」(五) 2 きらふ 《一ツ・

一ハ》

六50 6 (略) 秀吉のいきほひは、し

ぜんに日一日と盛になりました。信

長の古いけらいの勝家などはこれを

きらつて、てきたひましたが、(略)。

六72 7 學校で先生にしかられ、友だ

ちにもきらはれた悪い子供は、(略)。

きらきら(副) 2 キラ／＼ きら／＼

五6 8 (略) 金色ノトビガ (略) ト

マリマシタ。ソノ光ガキラ／＼トシ

テ、ワルモノドモハ目ヲアケテキル

コトガデキマセン。

八6 4 図 材は皆ひのきの白木を用

ひ、金色の金物きら／＼と日にかゝ

やけり。

きり「切」ひつききり

きり「桐」(名) 3 キリ 桐

一16 2 キリノゴモン

六68 4 図 桐ハヤハラカシテ弱キ木

ナレバ、家ヲタツル材木トシテハ用

ヒラレザレドモ、輕クシテ美シケレ

バ、ツクエ・本バコ・タンス・ハキ

モノナドヲ作ルニ用フ。

七44 6 図 おほよそ家の紋どころ、

いふもかしこし、菊と桐。

きり「鋳」(名) 1 キリ

一16 5 ノミキリ カンナノコギリ

きり「霧」(名) 5 きり 霧 ヲあさぎ

り

七五三 又きりがかつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなる事もあります。

七五五 雪や雪で、方角の分らなくなつた時には、悪くすると、浅瀬へ乗上げたり、外の船につきあたつたりする様なまちがひが出来ます。

十二三 〔圖〕「我元 吉野の杉よ、櫻木の 花をよそにて、霧深き谷間」立ちき。

十二七六 〔略〕、直下七十丈の水は〔略〕。中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水烟深谷をおほひ、〔略〕。

十二一九 天氣圖に用ふる普通の符號は左の如し。〔略〕○霧

きり〔副助〕1 きり
九三二 此の時も少し進んだきりで、やがて動かなくなつたが、〔略〕。

きり〔義理〕(名) 2 義理
十二九二 〔略〕 儉約を守るは大切なれども、人情にそむき、義理に外れても、費用を惜しむは賤しむべき事なり。

十二一三 〔略〕 能く義理をわきまへ、精神を修養し、〔略〕、十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。

きりあらす 〔切荒〕(四) 1 きり荒す

一九六 〔略〕 故に若しみにだりに森林をきり荒す時は、数時間の暴雨にもたちまち大水出で、数日のひでりにも河

水全くかれはつべし。

きりいだす 〔切出〕(四) 3 キリ出ス

切出ス 伐出す 〔一シース〕

六八八 〔略〕 材木ヲ山ヨリキリ出スモノハソマナリ。

八三九 〔略〕 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數マデ數ヘ上グレバ、〔略〕。

十二五八 〔略〕 安東縣は鴨綠江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、〔略〕。

きりかた 〔切方〕(名) 1 切方

十一六六 〔略〕 食物ハ〔略〕。其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアアル。

きりかぶ 〔切株〕(名) 1 切株
十二八 廣い田の面は切株ばかりで、〔略〕、かゝしの骨も残つてゐない。

きりきりきりきり(感) 1 きりくくく

五六一 〔略〕 きりくくく ぎりぎりす、〔略〕。

きりぎりす 〔螽斯〕(名) 1 きりぎりす
五二二 〔略〕 ぎりくくく ぎりぎりす、〔略〕。

きりこむ 〔切込〕(五) 1 切りこむ

六五七 〔略〕 急に馬に打乗つて、味方のまっ先に立つて、信玄の本陣に切りこんで、信玄に打つてかゝつた。

きりころす 〔斬殺〕(五) 1 斬り殺ス 〔一シ〕

八八六 中佐ハ〔略〕、敵中ヘヲドリ

コンデ、タチマチ三人ノ敵ヲ斬リ殺シタ。

きりすかす 〔切透〕(四) 1 伐りすかす 〔一シ〕

十一九七 〔略〕 日・露の境は幅五間餘を一文字に森林を伐りすかし、東西三十三里、〔略〕。

きりたてる 〔切立〕(下) 1 切立てる 〔一テ〕

六一 〔略〕 海岸には切立てたやうな岩山もあるが、平たい砂原になつてゐる所が多い。

きりたまう 〔切給〕(四) 2 キリ給フ
斬り給ふ 〔一ヒ・一フ〕

八五三 〔略〕 皇子コヲヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

九三〇 〔略〕 尊(略) 劔を抜きて、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劔の先少しくかけたり。

きりつ 〔規律〕(名) 4 規律
十一一〇 〔略〕 孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規律ヲ重シタリ。

十二九八 〔略〕 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にす等、〔略〕。

十二九九 〔略〕 汽車・汽船・電車等の交通機關、博物館・圖書館等の公共營造物に在りては、敏速と規律とを尊ぶものなれば、〔略〕。

十二一〇 〔略〕 若し公衆の間に、規則を守り、規律を重んずる心乏しき時は

是等文明の利器も其の運用を全くすること能はず。

きりつ・ける 〔切付〕(下) 1 切りつける 〔一ケ〕

六五七 〔略〕 信玄は〔略〕。ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、かた先へ切りつけられた。

きりつただし 〔規律正〕(形) 1 規律正し 〔一シク〕

十五五 〔略〕 兵營内の生活は規律正しく、朝の起床より夜の消燈まで、一々喇叭の合圖により、〔略〕。

きりとる 〔切取〕(四) 1 伐取る 〔一ル〕

十一一 〔略〕、近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ること禁ぜり。

きりはなつ 〔切放〕(四) 1 切放つ 〔一テ〕

十一四 〔略〕 熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、さて往生院に入りて僧となり、〔略〕。

きりはらう 〔切払〕(四) 1 伐拂ふ 〔一ヒ〕

十〇六 〔略〕 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

きりばり 〔切張〕(名) 1 切張
八七六 〔略〕、破レタル所ヲ一聞ツツ張レリ。義景重ネテ、「サラバコト」ハク張りカヘ給ヘ。切張ハマダラニナリテ見苦シ。」トイヘバ、

(略)。

きりふり【霧降】〔地名〕2 霧降

十二75 〇 日光山には華嚴瀧を始として、霧降・裏見・方等・般若等其の名世に知られたるもの少からず。

十一75 〇 中にも華嚴・霧降・裏見を日光の三大瀑布と稱す。

きりふりのたき【霧降瀧】〔地名〕1

霧降瀧

十一76 〇 霧降瀧は上下二層に分れ、高さ各十四五丈、三瀑布中最も美觀を以て聞ゆ。

きりゅう【桐生】〔地名〕2 桐生 桐生

九17 〇 桐生

十二49 〇 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も古く其の名を知られたり。

き・る【切】(四・五)20 キル きる

切ル 切る 伐ル 斬ル 『一ツ・一ラ・一リ・ール』 刈いきる・かききる・かわききる・くいきる・ひきもきらず・よこぎる

二19 〇 (略)、カミヲソノカタチ

ニキリマシタ。

二56 〇 ヨイオダイサンハヤガテ

コノ木ヲキツテ、ウスヲツクツテ、(略)。

四26 〇 オトミハマルクキツタ白

イ紙ヲ三ツ出シテ、(略)。

五20 〇 それからそこに切つてある

だけのこをおなべの中へ入れておく

れ。」

五21 〇 母は(略)。切つたさしみを

さらの中へ入れて、(略)。

五40 〇 こちらのの方は、これからの

人の切符を切つてゐるのです。

六59 〇 身をきるやうな北風の吹

く夕暮にあねいもと、(略)。

七3 〇 (略)、正行ハ父ノカタミノ

刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラント

七30 〇 小さい時分はやはらかな葉を

こまかく切つてやるが、大きくなると、枝のまゝやる。

八39 〇 マヅ木材ヲ切りテ、湯氣ニ

テムシ、ケヅリテウス板トシ、細ク

キザミテデク木トシ、(略)。

八53 〇 之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デ

テ、入鹿ノ足ヲキル。

九70 〇 (略)、身を切るやうな寒さに

思はず首をちぎめることもある。

十37 〇 又字を書くときに、指先を

見ると、爪は短く切つてゐました。

十44 〇 直線を適當の長さに切り、

一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶ時は、

美しき模様を生ず。

十63 〇 一隻の捕鯨船が今靜かに波を

切つて進んで行く。

十一54 〇 (略)、山も谷も雪にうづめ

られて、吹く風は身を切るやうに寒

かつた。

十一105 〇 孔明、謾ノ舊功ヲ惜シミ

シカド、(略)、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、(略)。

十一106 〇 (略)、仲達ハ孔明ノ墓ヲ

祭り、(略)、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、

薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十一111 〇 寒風身を切る様な冬の日で

も、氷の下の水をくんでせんたくす

る。

十二13 〇 (略)、何時ト厚イ鐵ノ板デ

モ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切斷ス

ル。

きる【着】(上二)11 キル きる 着

ル 着る『キ・キル』

三58 〇 私ガキヨネンマデキテ

キタワタイレハ、ユキモタケ

モミジカクナツテ、モウキラレ

マセン。

三58 〇 (略)、ユキモタケモミジ

カクナツテ、モウキラレマセン。

四14 〇 (略)、からだに雪の

きものきて、かすみのすそを

とほくひく、ふじは日本一の

山。

四39 〇 ボクラハカウイフカ

タイヨロヒヲキテキルカラ、

(略)。

五67 〇 子ドモハフダンヨリハ美シイ

着物ヲ着テアソンデキル。

六74 〇 (略)、新しいしるしばんでん

を着てゐる大工が一番目立ちます。

九59 〇 衣服もよく洗ひて、よごれ

たるをば着ることなかれ。

十37 〇 又着物はそまつながら、さ

つぱりしたものを着て、(略)。

十80 〇 (略)、又あつし織の短きつ

袖を着、足にもあつし織のきやは

んをはく。

十一108 〇 男はゆるやかな股引をは

き、胴衣を着て、其の上に長い上

衣を着る。

十一108 〇 女は短い上衣を着て、西洋

婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着

ける。

きる【切】(下二)3 切ル 切る『一

ルレ・ール』

九42 〇 (略)、カ、リテハタキトナ

リ、ヨドミテハフチトナリ、又切レ

テハ急流トナリ、(略)。

九73 〇 (略)、川上の堤防切れ、

隣村は大半水中にあり、(略)。

十一86 〇 工女ハ(略)、絶エズ絲

二目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲ

ツナグ。

きれ【切】(名)2 キレ きれ

四3 〇 又町からは、きれやこ

まものやさかななどを買つて

かへります。

四23 〇 オマツノ店ニハ、糸ヤ

キレヤフデヤカミガナラベテ

アリマス。

きれい【奇麗】(形状)11 キレイ き

れい 奇麗

一23 〇 ユリノハナガサキマシタ。

キレイデゴザイマス。

三95 (略)、ハナタバヲコシラヘ

マシタ。アカトキイロトムラサキト三イロソロッテキレイデス。

三46 (略) 「あまりほしがきれいだから、二つ三つはたきおとさうと思ふのだ。」

三67 リユウグウニハオトヒメトイフキレイナオヒメサマガ居テ、(略)。

四29 (略)、まためをふき出して、そのうちにきれいなはなをさかせて見せます。

六98 (略)、道ばたにはきれいな草花が咲きみだれてゐます。

六36 (略)、うちではすゝはきをした。(略)。うちが見ちがへるやうにきれいになつた。

七36 ドノ店ニモ品物ガキレイニナラベテアル。

八12 おはなさんはしばらく見ないうちに、髪が大そうきれいになりました。

九59 (略) 住居もなるべくきれいにせよ。

十一67 座敷や庭園ヲ綺麗ニシテ置ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハワカシイ話デアル。

きれいずき「綺麗好」(形状) 1 きれいずき

十35 (略) 「(略)、先づ着物のほこりを拂ひ、(略)。きれいずきで、つゝ

しみ深いことは、それでよく分りました。

きれる「切」(下二) 5 きれる 切れる「一レール」ムかぞえきれる

三52 (略) かぜふく小えだにすをはる小ぐも、はつてはきれ、きれてははり、(略)。

三52 (略)、はつてはきれ、きれてははり、(略)。

三52 (略)、きれても、きれても、またはるほどに、とうとう小えだにすをはつた。

三52 (略)、きれても、きれても、またはるほどに、(略)。

九68 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、稲の花は散る、(略)。

きろく「記録類」(名) 1 記録類

八43 役場は幸に焼けなかつた。一切の書類や記録類も皆ぶじであつたといふことだ。

きわ「際」(名) 1 きは 弓てぎわ・なみうちぎわ

四82 赤い扇はかなめのきはをいきられて、(略)。

きわまりない「窮無」(形) 1 極りない「一い」

十二83 變化極りない妙音は、忽ち人の心を百花満開ののどかな春によはせ、又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈ませる。

きわまる「窮」(四) 1 きはまる

「一ル」

十一18 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

きわみ「窮」(名) 2 極み

十一13 臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。

十二19 (略)、常に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の拜察せらるゝは、かしこしともかしこき極みなり。

きわむ「窮」(下二) 1 極む「一メ」

十二72 位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、自ら省みてやましき所ある者は、苦多く、樂少し。

きわめて「極」(副) 11 きはめて 極

メテ 極めて

八14 代々の天皇は皇大神宮をたふとびたまふときははめてあつく、(略)。

十50 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。

十78 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、(略)。

十86 しかも其の成長が極めて早い。

十94 堂塔難舎ノ數百七十五アリ、規模極メテ大ナリシガ、今ハ往時ノ三ノ一二モ足ラズ。

十一82 同群中の蜂は極めて親密

に生活すれども、(略)。

十一31 又艦ノ要部ハ極メテ厚キ鋼鐵ニテ包メリ。

十一90 例へばこゝに一種の石あり、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、(略)。

十一12 村長は村の舊家に生れ、極めて親切公平なる人なれば、深く村民に敬愛せられ、(略)。

十二23 (略)、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。

十二43 我が國は氣候温に、地味肥え、極めて耕種に適し、米・麥の栽培は最も早く開けたり。

きん「金」(名) 7 金 弓きふきん・きほんきん・さんぜんきん

六25 金ヤギンハ美シクテ、(略)、ソノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマ

スガ、ドチラモタクサンアリマセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。

六25 銅ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、(略)。

七35 うるしの上に金又は銀にてゑがきたるものをまきゑといふ。

七40 「その馬の直はいか程でございます。」「金十兩。」

八93 東海道の旅行中、最も多く衆人の目をひくものは、富士山と名古屋城の金のしやちほことなるべし。

八93 名高き金のしやちほこは此

の天守閣の棟の兩はしにあり。

十一381圖 其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様は御座候。

ぎん〔銀〕(名) 4 ギン 銀

六253圖 金ヤギンハ美シクテ、(略)、ソノ他イロくナカザリ物ニナリマ
スガ、ドチラモタクサンアリマセン
カラ、ネダンモ高ウゴザイマス。
六257圖 銅ハソレニヒキカヘテ、金
ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、
(略)。

七359圖 うるしの上に金又は銀にて
ゑがきたるものをまきゑといふ。

七826圖 月夜には波が銀の様に光つ
て、その美しさは何とも言ひ様があ
りません。

きんいろ〔金色〕(名) 4 金色

五66 又アル時ドコカラトモナク一
羽ノ金色ノトビガトンデ來テ、オ弓
ノサキニトマリマシタ。

五166 鯉ハ(略)。ウロコハ(略)。

ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノ
モアリ、白イノモアツテ、皆金色ヲ
オビテキマス。

七826圖 日の出や日の入には日光が
波にうつつて、水の色が金色になり
ます。

八64圖 材は皆ひのきの白木を用
ひ、金色の金物きら／＼と目にきら
やけり。

きんか〔金貨〕(名) 4 金貨 ぎんぎゅう

えんきんか

九902圖 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨
・銀貨・銅貨ノ三種アリ。

九905圖 銀貨・銅貨ハ廣ク用ヒラル
レドモ、金貨ハ日常流通スルコト少
シ。

九906圖 是金貨ニ代ル紙幣ノ行ハル
、ニヨル。

九913圖 我が國ノ紙幣ハ(略)。之
ヲ日本銀行ニ持行カバ、何時ニテモ
金貨ト交換スルコトヲ得ベシ。

きんか〔銀貨〕(名) 2 銀貨 ぎんぎん
んか・じっせんぎんか

九903圖 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨
・銀貨・銅貨ノ三種アリ。

九903圖 銀貨・銅貨ハ廣ク用ヒラル
レドモ、金貨ハ日常流通スルコト少
シ。

きんかい〔近海〕(名) 2 近海

十一271圖 和船の大なるは五百石積
・千石積等ありて、近海を航行すれ
ども、櫓はおほむね一本なり。

十二51圖 我が海軍は初より敵を近
海に迎へ撃つ計を定め、全力を朝
鮮海峡に集中せしが、(略)。

きんかく〔金額〕(名) 3 金額

十一933圖 物の價は(略)、常に其
の物を製造する費用と相當の利益と
を併せたる金額に等しからんとする
傾きあるものなり。

十一934圖 此の金額を普通の價とい
ふ。

十二529圖 米國商人ガ(略)廣告ニ

費ス金額ハ、一箇年實二十二億圓ノ
多キニ達ストイフ。

きんかくじ〔金閣寺〕(名) 1 金閣寺
六403圖 明日は銀閣寺を見て、それ
から北山の方へ行つて、金閣寺を見
て、北野の天神様へさんけいする。

きんかくじ〔銀閣寺〕(名) 1 銀閣寺
六401圖 明日は銀閣寺を見て、それ
から北山の方へ行つて、金閣寺を見
て、(略)。

きんかざん〔金華山〕(地名) 1 金華山
十一833圖 鵜なはを引上げて、鵜の
ふなばたに立並べる時、半月金華山
の上に出でて、川風たもとを拂ふも
快し。

きんぎょ〔金魚〕(名) 5 キンギョ
金魚
三555 (略)、トナリノネコガダ
イジナキンギョヲトツテ、ニゲ
テ行キマシタ。

十二227 金魚を細口のびんに入れ
て、二三日も水を取換へないと、金
魚は死んでしまふ。

十二228 金魚を細口のびんに入れ
て、二三日も水を取換へないと、金
魚は死んでしまふ。

十二2210 若し其の中に青い水草を入
れて置けば、(略)金魚は割合に長
く生きてゐる。

十二231 是は前にいつた様な關係が
びんの中の金魚と水草の間に行はれ

るからである。

きんぎょう ぎんぎょう
きんぎん〔金銀〕(名) 3 金銀
九896圖 今ノ文明諸國ノ貨幣ニハ主
トシテ金銀ヲ用フ。

九896圖 是金銀ハ價高ク、保存スル
ニモ都合ヨク、又分合スルコトモタ
ヤスキシテ、分合ノ爲ニ直段ノ割合
ヲ變ズルコトナク、産地異ナリトモ、
成分ニ異同ナクシテ、直段ノ變動モ
少キ等、貨幣トスルニ最モ便利ナレ
バナリ。

九946圖 金銀の光、丹青の色、目も
まばゆきばかりなり。

きんぎんか〔金銀貨〕(名) 1 金銀貨
十二844 銅貨といはず、金銀貨とい
はず、雨の降る様に手當り次第に投
込む。

きんげん〔謹嚴〕(形状) 1 謹嚴

十一535圖 謹嚴ナルベキ場合ニ笑フ
ハ、禮ヲ知ラザル人ナリ。

きんげん〔謹言〕(感) 1 謹言
十932圖 御手紙拜見仕候。(略)。
取りあへず御返事まで。謹言。三月
六日 中林作之助 藤村孝藏様

ぎんこう〔銀行〕(名) 4 銀行 ぎん
らんぎんこう・ちよちくぎんこう・に
っぽんぎんこう

九774圖 又銀行ニ貯金スル方法モア
リ。

九774圖 普通ノ銀行ニテハ一度二五
圓以上ノ預金ノミヲ取りアツカヘド

モ、貯蓄銀行ニテハ五圓ヨリ少キ金
ニテモ預カル。

九七七 郵便局ニテモ銀行ニテモ、
金銭ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ
書入レタル通帳ヲ渡ス。

十63 略、今ヤ足尾町ハ人口凡
ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、學校
・病院・銀行等皆備ラザルナシ。

きんこうちょきん「銀行貯金」(名) 1
銀行貯金

九七八 銀行貯金ニテモ、郵便貯金
ニテモ、預ケタル金高ノ次第二上リ
行クハ樂シキモノナリ。

きんこつ「筋骨」(名) 1 筋骨

十一26 筋骨たくましき若者が
體を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましさ
よ。

きんざどおり「銀座通」(地名) 1 銀
座通

七54 銀座通ノニギハシサマヅ目
ヲオドロカス。

きんじ「近時」(名) 1 近時

十一97 又豊原より眞岡に至る
間も近時道路新に開け、交通大いに
便利に相成候。

きんじがたし「禁難」(形) 1 禁じ難
し「一シ」

十一41 天皇の(略)、北方の天
を望みて崩御ありし御心事を察し奉
れば、涙わき出でて禁じ難し。

きんしゅう「金州」(地名) 1 金州
十二57 金州

きんしゅう「錦州」(地名) 1 錦州
十二57 錦州

きんじよ「近所」(名) 6 きんじよ
近所 近處

四15 ふでやかみを賣るみせ
も、本を賣るうちも、みんな
がくかうの きんじよに ありま
す。

五22 ぬす人はきんじよに住んで
ゐるゐざりだといふうはさがあるの
で、(略)。

五28 五月・六月實がなれば、枝
からふるひおとされて、きんじよの
町へ持出され、何升何合はかり賣。

八19 初は近所の人にもうらやまれ
る程の身代でしたが、(略)。

八31 僕の近所に年よりのかぢ屋が
あつた。

十二90 若し家内に傳染病等にか
ゝるものあらば、近處・隣へ對して
も申しわけなく、世間へ對しても相
濟まぬ次第ならずや。

きんしょう「僅少」(形状) 1 僅少
十二10 殊ニ我が軍ノ損失・死
傷ノ僅少ナリシハ歴代神靈ノ加護ニ
依ルモノト信仰スルノ外ナク、(略)。

きんじょう「近状」(名) 1 近状
十60 先は近状御報知申上度か
くの如くに御座候。

きんじよきんべん「近所近辺」(名) 1
近所近べん

九87 此の話が傳はつて、愛作は五

箇村はおろか、近所近べんのほめ者
となつた。

きんず「禁」(サ変) 5 禁ズ 禁ず
「一ジ一ゼ」

十一11 略、近年一定の森林を指
定し、其の樹木を一時に伐取ること
を禁ぜり。

十56 兵舎内にては歌をうたふ
事、高聲にて談話する事、所定以外
の場所にて煙草を吸ふ事等堅く禁ぜ
られ居り候。

十59 何か不都合なる事あり
て、罰に處せられたる者は外出を禁
ぜられ、(略)。

十80 然れども入墨をほどこすこ
とは今は全く禁ぜられたり。

十一106 略、仲達ハ孔明ノ墓
ヲ祭り、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ
草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイ
フ。

きんせい「近世」(名) 1 近世
十二62 街路は掃除最もよく行き
とどきて、衛生・消防を始め、近世
の學術を應用せる百般の設備皆具れ
り。

きんせいとし「近世都市」(名) 1 近
世都市

十二62 伯林の市街は清潔を以て
著る。(略)。(略)、近世の學術を應
用せる百般の設備皆具れり。此の點
より見れば眞に近世都市の好模範た
り。

きんせかい「銀世界」(名) 1 銀世界
九70 略、翌朝起きて見れば、何
時の間に雪に變つたか、そこら一面
銀世界になつてゐることもある。

きんせん「金銭」(名) 6 金銭
九76 金銭ヲ安全ニ貯フルニハ郵
便貯金トナスヲヨシトス。

九77 略、貯金セントスル時ニ
ハ、其ノ金銭ニテ郵便切手ヲ買ヒテ
臺紙ニハリツケ、(略)。

九77 郵便局ニテモ銀行ニテモ、
金銭ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ
書入レタル通帳ヲ渡ス。

九77 此ノ通帳ハ此ノ後金銭ヲ預
クル時又ハ引出ス時共ニ必要ナルモ
ノナレバ、(略)。

十一71 「時は金なり。」といふ古
言あれども、(略)、時間は金銭より
も貴し。

十一71 他人をして時間を損失せ
しむるは其の罪金銭を損失せしむる
よりも重し。

きんぞくす「勤続」(サ変) 1 勤續す
「一セ」

十一112 村長は(略)、幾度の改
選にも常に選舉せられて、二十餘年
間勤續せり。

きんぞくせい「金屬製」(名) 1 金屬製
十79 あいぬの男子は髪とひげと
を長くのばし、耳に金屬製の輪をは
め、こしに小刀をさぐ。

きんそん「近村」(名) 1 近村
十二57 近村

九七二(國) (略)、川近きあたりには
ぼつ／＼立退きたる者もこれあり、
同夜は近村の者一人も眠につきたる
者これなく候。

ぎんだい ぐきよくざんぎんだい
きんだか「金高」(名) 4 金高

八四〇(國) (略)、外國へ輸出スルモノ
ノミニテモ、一年間一千萬圓ノ金高
ニ達シ、(略)。

九七六(國) 一日二一錢・二錢ツツニテ
モ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニ
ハ、餘程ノ金高トナリテ、(略)。

九七七(國) 郵便局ニテモ銀行ニテモ、
金錢ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ
書入レタル通帳ヲ渡ス。

九七八(國) 銀行貯金ニテモ、郵便貯金
ニテモ、預ケタル金高ノ次第二上リ
行クハ樂シキモノナリ。

きんにく「筋肉」(名) 4 筋肉

一七五(國) 骨ハ筋肉ニ包マレ、皮膚更
ニ其ノ上ヲオホフ。

一七八(國) 強キ力ヲ要スル部分ニハ強
キ筋肉アリ。

一七八(國) 又筋肉ハ之ヲ用フルニシタ
ガヒテ發達ス。

一二四(國) 農業に従事するものは
(略)、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉
を勞するが故に、身體常に健全なり。

きんねん「近年」(名) 15 近年

八二〇 農夫は之を聞いて、近年麥の
取高の少いのは、この雀のせいでは
あるまいかと思ひました。

八四五(國) 「こちらでは近年にない大
火事だから、誰かすぐに東京へ電報
を打つたのだらう。

八九七(國) 近年新しき港も成りたれ
ば、海陸運輸の便益ヲ開け、(略)。

一〇一一(國) 森林の効用かくの如く著
しきを以て、近年一定の森林を指定
し、其の樹木を一時に伐取ることを
禁ぜり。

一〇二二 それ故近年は木版が段々すた
れて、活版を用ひることが多くなつ
た。

一〇四四(國) 近年ノ輸出高ハ年々五六百
萬圓ヲ下ラズトイフ。

一〇八二(國) あいぬの数、古は甚だ多か
りしが、近年次第に減少して、今は
僅かに二萬人に足らず。

一一二九(國) 近年は空中飛行器の發明
諸國に起れり。

一一三六(國) 當臺北市街の如きは、
近年市區を改正し、(略)。

一一四〇 近年は斬髪風の行はれ
て、冠禮は段段すたれて行く。

一一四一(國) (略)、近年作物の改良も
出來、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多
く、雞を飼はざる家なし。

一二四四(國) 繭の取入高は年々増加し
て近年三百五十萬石を越え、(略)。

一二四五(國) 近年ぐみに産額の増
大せしは北陸の 福井・石川・富山

なる 羽二重織の輸出品。
一二五二(國) 近年各國商人皆爭ヒテ其

ノ方法ヲ講ジ、廣告ノ爲ニハ多額ノ
費ヲ投ズルヲ惜シマズ。

一二五九(國) 然れども近年獨逸國力の
盛に發展すると共に、首府の人口も
年々著しく増加する勢なれば、(略)。

きんのう「勤王」(名) 1 勤王

一一一七(國) (略)、やがて忠臣の起
りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安
んじ奉るべきことを聞え上げたるな
り。

きんぶじんじゃ「金峰神社」(名) 2

金峰神社 金峯神社

一一二(國) 金峯神社

一一四四(國) 尚進めば、水分神社・金
峰神社等あり。

きんべん「勤勉」(形状) 2 勤勉
一一一七(國) 商工業の發達に 皇國
の富を起さんと、勤勉・努力もゆみ
なき 同胞すべて六千萬。

一二五四(國) 富國ノ實ノ舉ルト舉ラザ
ルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏
ノ如何ニ存ス。

きんべん ぐきんじょきんべん
きんよう「金曜」(名) 1 金曜

六三三 十二月十五日 金曜 晴

く「九」(課名) 10 九ひだいく・だい
くか

二目6 五 ツキ……九

二目10 九 ナゾ

二二〇 九 ナゾ

三目10 九 こうま

三二五 九 こうま

四目10 九 きつねとのぎく

四二六 九 きつねとのぎく

七目4 第三 ゐなかの四季……九

八目5 第四 寫眞をおくる手紙……

九

十一目4 第三課 分業……九

く「九」(名) 2 九 九ひごぜんくじ

・さんじゃくくすん・じゅうにりくち
よう・じんじようしうがくとくほん
まきく・だいくず・めいじくねんごろ
四四六 九 IX

八四八 九 IX
く「区」ひとくきようこうじまちくたけ
ひらちよういち・ひがしくひらのちよ
うちようめ

く「句」(名) 4 句

一七五(國) 是白樂天の詩に、「香爐峯
の雪はすだれをかゝげて見る。」と
いふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひ
しを、(略)。

一一二(國) ふきそくとばのゝ花は
吉野山。といひし古人の句我をあざ
むかず。

一一五(國) 古人の句に、歌書よりも
軍書にかなし吉野山。

一一五(國) 高德(略)、大文字に詩
の句を書きつけた。天、勾踐を空

しうするなかれ。時、^{はんれい}范蠡無きにし
もあらず。

く「苦」(名) 6 苦

六四二 樂ハ苦ノ種、苦ハ樂ノ種。

六四二 樂ハ苦ノ種、苦ハ樂ノ種。

十一五二 内ニ省ミテ、ヤマシキコ

トアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心
中ノ苦ヲ如何ニセン。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

十二七〇 苦あれば必ず樂あり、樂
あれば必ず苦あり。

ぐあい「具合」(名) 1 工合

九八四 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見
ルト、カウイフ工合ニソレハ變ツ

テキル。

くいきる「食切」(四) 1 食切る

「一リ」

十一九〇 收穫蟻といふもの
あり。(略) 周囲の雜草を食切り

て、ひたすら此の草の成長を保護し、
(略)。

くいこむ「食込」(五) 1 食込む

「一ン」

十六五 破裂矢は鯨の體內に深く食込
んで破裂した。

くいちがひ「食違」(名) 1 くいちがひ

八五七 それで「いすかのほしのくひ
ちがひ。」といふことがある。

くいちがう「食違」(五) 1 くいちが
ふ「一ツ」

八五七 いすかのくちぼしは上と下が
くひちがつてゐる。

くいとる「食取」(四) 1 食取ル

「一ル」

八七四 猫ノ口ニハ(略)。又其ノ
舌ニハ(略)太キ毛ノ如キトゲアリ、

骨ニ附キタル肉ヲ食取ルニ便ナリ。

くいな「水鶏」(名) 1 くひな

八五七 鶴・さぎ・くひななど水の中
をあるく鳥ははきが長い。

くいはじめる「食始」(下一) 1 食ひ
はじめる「一メル」

七三〇 (略)、しきりに食物をさがし

てゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひ
はじめる。

くいもの「食物」(名) 1 食物

六八五 病は口より入ると
いふ。飲物・食物氣を附けよ、心せ
よ。

くら「食」(四・五) 27 くふ 食フ

食ふ「一ツ・ハ・ヒーフ・ヘ」

三四八 小さな虫がまへへくる
と、ぱくつとくつて、へいきなか
はをしてゐます。

五七三 鯉ハ(略)。蟲ナドガ水ノ上
ヲトンデキルト、ハネ上ツテトツテ

食ヒマス。

七三〇 食つてしまふと、頭をうごか
して、しきりに桑の葉をたづねる。

七三二 大きな蠶がたくさんで桑の葉
を食ふ時には、(略)。

七三六 蠶が桑の葉を食ふのは、およ
そ二十五日から四十日の間で、(略)。

八五八 わし・たか・とびなどの様
に、(略)、他の鳥をとらへて食ふ鳥
や、(略)。

八六九 ある時口・耳・目・手・
足等一同申し合せて、胃に向つてい
ふやう、(略)、汝はただ坐して食ふ
のみにて、(略)。

八七一 胃は一同に向つて
曰く、「(略)、我はたゞ坐して食ふ者
にあらず。

九三〇 此の地に八岐の大蛇とて
(略)、毎年來りて、我が娘を取食ひ、
今また残りの一人をも食はんとす。
九五八 口にうましとて多く食ふこ
となかれ。
九五八 熟せざるくだ物、生にえの
肉、くさりたる魚などを食ひて、一
命をうしなふ者少からず。
一七五 取ルモ捨ツルモ、行クモ止
ルモ、食物ヲ食フモ、言語ヲ發スル
モ、皆腦ノ命令ニヨル。
一八四 維新前までは牛肉を食ふ人は
至つて少かつたが、(略)。
一八四 (略)、今では全國食はぬ處が
なくなつた。
一八五 豚はどんな物でも食ふから、
飼ふのにたやすい。
一八六 隣國の支那人は最も多く豚肉
を食ふ國民である。
一八六 アラビヤ馬の(略)。飲ま
ず食はずに終日・終夜走つても尚平
然として居るといふことである。
一八六 此の外、動物は植物の果實
・根・葉等食つて體を養ひ、(略)。
一八六 其の將伊企雛をして日
本に向つて、「日本の將我がしりを
食へ。」と號ぼしむ。
一八六 伊企雛却つて「新羅王
我がしりを食へ。」といひて、(略)。
一八六 オレンジの熟する
季節には、數多の猿達數百里の地
より集り來りて之を食ひ、(略)。
一八六 (略)、果實・草根を始
め、凡そ取つて以て食ふべきものは

殆ど餘す所なし。

十二69 ㊦ (略)、列後に在るものは

更に一物をも食ふこと能はず、(略)。

十二70 ㊦ (略)、野獸の爪牙にさか

れて食はるゝもの、其の數を知らず。

十二87 ㊦ 獸ならば、かくして食

へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみ

て良雄の面前に出す。

十二87 ㊦ 良雄平然頭を低くして之

を食ひ、(略)。

十二87 ㊦ (略)、我が足、獸とし

て良雄に食はしめたり。

ぐう ぐうかまくらぐう・とうしようぐう・

はちまんぐう・よしのぐう

くうき「空氣」(課名) 2 空氣

九目6 第十九課 空氣

九64 第十九課 空氣

くうき「空氣」(名) 20 空氣

九60 ㊦ 空氣の大切なことも食物

におとらず。

九60 ㊦ 閉ぢたる室内にはよごれた

る空氣こもる。

九60 ㊦ 時々障子を開放ちて、新し

き空氣を流通せしむべし。

九60 ㊦ 人多き都會に住む者は、折

々野外に出でて、新しき空氣をすひ、

(略)、木立しげき公園等を散歩すべ

し。

九61 ㊦ (略)、早く寝ね、早く起き、

新しき空氣をすひ、常に日光に浴し

て、なほ病にかゝらば、是我が罪に

あらず。

九64 ㊦ 扇を使へば風起り、むちを

ふるへば音を發す。是我等の周圍に

空氣のあればなり。

九64 ㊦ 空氣は形もなく、色もなけ

れば、目には見えざれども、(略)、

凡そ少しにてもすぎ間ある所には、

必ず存在せずといふこと無し。

九65 ㊦ 是茶わんの中に空氣あり

て、水の進入するを防げばなり。

九65 ㊦ 火は空氣なければ燃えず。

九65 ㊦ 臺所にて火吹竹を使ふも、

かち屋にてふいごを用ふるも、皆空

氣を送りて、火の勢を盛ならしむる

爲にして、(略)。

九65 ㊦ (略)、火消つばの火の消ゆ

るは空氣の供給絶ゆるが爲なり。

九65 ㊦ 然れども空氣の流通餘りに

強き時は、却つて火の消ゆることあ

るべし。

九66 ㊦ 我等は常に此の空氣を吸は

んが爲に呼吸す。

九66 ㊦ 若し空氣なからんには、人

も鳥獸も草木も多くの生物は其の生

を保つこと能はざるべし。

九66 ㊦ 空氣流動する時は風を生

ず。

九66 ㊦ 又人は空氣を動かし、風を

起して、種々の用に供す。

十二72 ㊦ 温泉の諸種の病を治する

は、(略)、一つには又地を轉じて清

新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に

接するが爲なるべし。

十二75 ㊦ 肺ハ鼻・口ヨリ吸入ル、空

氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。

十一91 ㊦ 日光・空氣の如きは、人

の生命を保つに必要なれども、隨意

に得らるゝものなれば、之を買ふ必

要なく、隨つて亦價あることなし。

十二47 ㊦ 農業に従事するものは多

く野外にありて、清潔なる空氣を呼

吸し、筋肉を勞するが故に、身體常

に健全なり。

くうきちゅう「空氣中」(名) 4 空氣中

十二21 ㊦ 動物は呼吸作用によつて、

空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐

出す。

十二21 ㊦ 若し之を消費するものがな

ければ、空氣中には炭酸瓦斯が段々

に増加し、(略)。

十二21 ㊦ 然るに空氣中の炭酸瓦斯の

分量が増さないのは、一方に於て植

物が之を消費するからである。

十二22 ㊦ 若し炭酸瓦斯を供給するも

のがなければ、空氣中の炭酸瓦斯の

分量が著しく減つて、(略)。

くうしつ「空室」(名) 1 空室

十74 ㊦ (略)、近く東京・横濱をひ

かへたれば、盛夏の候は何れの旅館

も空室なきに至るを常とす。

くうぜん「空前」(形状) 1 空前

十二5 ㊦ (略)、世界史上空前なる

大海戦となれり。

くうだん「空談」(名) 1 空談

十一29 ㊦ 近年は空中飛行器の發

明諸國に起れり。空中の交通開始せ

られ、又其の軍事上に應用せらるゝ

も決して座上の空談にあらざらんと

す。

くうちゅう「空中」(名) 2 空中

十一29 ㊦ 近年は空中飛行器の發明

諸國に起れり。空中の交通開始せら

れ、(略)。

十一31 ㊦ 其ノ敏速ナル行動ハ鳥

ノ空中ヲ飛行スル如クナレバナルベ

シ。

くうちゅうひこうき「空中飛行器」(名)

1 空中飛行器

十一29 ㊦ 近年は空中飛行器の發明

諸國に起れり。

くうひふす「空費」(サ変) 1 空費す

《一セ》

十一70 ㊦ 殊に集會の時間は正しく

守らざるべからず。一人の後ろゝ爲

に多人數をして貴重の時間を空費せ

しむればなり。

くがつ「九月」(名) 2 九月

六74 ㊦ 九月ノ初ヨリ十一月ノ終マ

デハ秋ナリ。

八63 ㊦ (略)、九月カラ十月ノ初頃ニ

實ガ熟シマス。

くがつさんじゅうにち「九月三十日」

(名) 1 九月三十日

九71 ㊦ 九月三十日 堤富次 岡

田敬造様

くがつじゅうさんにち「九月十三日」

(名) 1 九月十三日

五64 ㊦ 九月十三日 あねより お

ちよさま

くがつついたち「九月一日」(名) 1

九月一日

七67 ㊦ 九月一日 佐藤眞一 村田

新太郎様

くがつとおか「九月十日」(名) 1 九

月十日

九80 ㊦ いつか秋のなかばも過ぎ

て、九月十日の夜となれり。

くがつはつか「九月二十日」(名) 1

九月二十日

十一101 ㊦ 九月二十日 仁吉 徳

太郎様

くがつふつか「九月二日」(名) 1 九

月二日

七69 ㊦ 九月二日 村田新太郎 佐

藤眞一様

くがつむいか「九月六日」(名) 1 九

月六日

十二77 ㊦ (略)、九月六日更に西へ

向つて航行せり。

くき「茎」(名) 11 莖

七75 海草ハスベテ養分ヲ葉ヤ莖デ

スヒ取ル。

八65 4 綿ハ實カラトリマスガ、藍ハ

葉ト莖カラ取ルノデス。

八65 5 藍ノ草ハ(略)。(略)。サウシ

テ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日

ニホシテ、ソレカラウスニ入レテツ

キカタメマス。

九10 3 タンボ・ヨメナナドハ(略)

一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ
花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。

十8 1 葉ノ莖ニ附ク様子ニモ種々ア

ル。

十8 2 アブラナ・ツバキナドノ葉ハ

一ツオキニ莖ニ附イテ居リ、(略)。

十8 4 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一

處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イテキ

ル。

十41 ㊦ 蘭ハ水草ナリ。葉ナクシテ

唯莖アリ。

十41 ㊦ 莖ハ圓クシテ、長サ五尺バ

カリ、短キハ二尺位ナルモアリ。

十42 1 ㊦ 我等ノ家ニ數ケル疊ノ表

ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナ

リ。

十42 2 ㊦ 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花

鳥等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ

(略)。

くき「釘」(名) 3 釘

六27 4 ㊦ ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サ

イ物カラ、キクワン車・軍カンノヤ

ウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ、

コシラヘルコトガ出来マセン。

八31 ㊦ (略) かち屋があつた。(略)。

ある時は釘をこしらへてゐた。

八33 ㊦ ㊦ 「自分は今こそこんな小刀

や釘などを造つてゐるが、元は少し

は人に知られた刀かちで、(略)。

くぐりいゝる「潜入」(四) 1 くぐり入

る「ール」

十一82 ㊦ 鵜はくぐり入る毎に獲物

なくして浮び出づること少ければ、
(略)。

くぐりつゝける「括付」(下) 2 くゝ

りつける「一ケ」

十一58 1 ㊦ 大砲のつなをくぐりつけ

て、早く自分を谷へ下せ。

十一58 ㊦ 手早く帯をほどいて、ピエ

ールの體にくぐりつけて合圖をする

と、(略)。

くぐる「潜」(四・五) 5 クグルクマ

ル くぐる「一ツ・一リール・一レ」

五68 ㊦ 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石

ダンノ道ヲ上ツテ、モウ一ツ小サナ

鳥居ヲクバルト、オ宮ガアル。

八88 ㊦ 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸

ノ下ヲクバリナガラ、ケハシイガケ

ヲカケ下リタ。

十25 3 ㊦ 若シ勇氣アラバ我ヲ殺

セ。殺ス能ハズバ、我が勝ノ下ヲク

バレ。

十25 5 ㊦ 韓信(略)、ヤガテハラバヒ

テ勝ノ下ヲクグル。見ル者アザケリ

笑ハザルハナシ。

十二7 ㊦ 夜に入りて、我が驅逐隊

・水雷艇隊は砲火をくぐつて敵艦に

せまり、(略)。

くこ「供御」(名) 1 供御

十88 ㊦ ㊦ 夜晝三日供御もなく、歩

みつかまで松かげに いこはせ給ふ

かしこさよ。

くさ「臭」 匂なまぐさ・なまぐさもの

くさ「草」(名) 17 クサ くさ 草

うきくさ・からくさもよう・こぐさ・
たのくさ・てんぐさ・はなぐさ・みず

くさ・わかくさ

一12 1 ツキクサクモ

三3 2 くさ「ひらがなのドリル」

三6 8 ノハラニハ、アライクサ

ノ中ニ、(略)、イロイロナハナ

ガサイテキマス。

四26 8 (略)、のはらのくさや

はなは大いにかけてしまひまし

た。

四27 ㊦ くさのかげにないてゐ

た虫も(略)。

六10 ㊦ すゞしい風にふかれながら、

草の上にすわつて、にぎりめしをた

べた時は(略)。

八19 ㊦ ある日一人の友だちは、この

農夫と野原の草の上に坐つて、いろ

く世間話をしてゐたが、(略)。

八23 4 牛小屋の牛はしきりに鳴いて

ゐるのに、誰も草をやるものがあり

ません。

八65 ㊦ 藍ハ何カラ取リマスカ。藍ノ

草カラデス。

八65 ㊦ 藍ノ草ハ綿ノ木ト同ジ様ニ畑

ニ作リマス。

九5 ㊦ ㊦ 尊こゝにおいて天叢雲劔を

抜きて、草を薙拂ひ給ふに、火勢却

つて賊の方に向ひ、(略)。

九11 ㊦ ㊦ 舞へや舞へや、花に草に。

蝶の遊ぶ時は今なり。

十一89 10 ㊦ 一種の草の實を食用とす

るを以て、(略)。

十一901 図 (略)、常に此の草の多く生ずる所を選びて住み、(略)。

十一902 図 (略)、ひたすら此の草の成長を保護し、(略)。

十一106 8 図 (略)、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十二116 2 図 (略) 海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ。

くさ [種] 凸ちぐさ

くさい 凸なまぐさい

くさき [草木] (名) 1 草木

九56 6 図 (略)、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、羽ヲ閉デテ、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

くさずり [草摺] (名) 1 草ずり

十一51 4 図 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、(略)。

くさと [草取] (名) 3 草取り 草取六17 1 (略)、田うゑや草取りの苦しさも、取入れのいそがしさも、全くわすれてしまひます。

九52 3 図 (略) 昔の風をそのまゝに、田植・草取・取入れに 農夫の辛苦共にする すげ笠こそはたふとけれ。

十一38 5 図 (略)、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覺え申候。

くさなぎのつるぎ [草薙剣] [課名] 4

草薙剣 草薙剣

九目 2 第一課 草薙剣 (一)

九目 3 第二課 草薙剣 (二)

九1 2 第一課 草薙剣 (一)

くさなぎのつるぎ [草薙剣] (名) 4

九1 4 図 代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。草薙剣は即ち其の一なり。

九1 5 図 此の剣初は天叢雲剣と申し、後に改めて草薙剣と申すこととなれり。

九6 2 図 尊こゝにおいて天叢雲剣を抜きて、草を薙拂ひ給ふに、(略)。

これより此の剣の名を改めて草薙剣と申す。

九6 6 図 草薙剣は尾張の國にとゞめ給ひしかば、宮を建ててそこにまつれり。今の熱田神宮即ち是なり。

くさばな [草花] (名) 3 草花

六10 1 (略)、道ばたにはきれいな草花が咲きみだれてゐます。

七18 3 図 又母がかねぐめづらしい草花をほしくと申して居りますから、(略)。

七58 2 図 コノ公園ハ新シクシテ、古木多カラザレド、種々ノ草花ウルハシク咲キミダレタリ。

くさむら [草薙] (名) 1 くさむら六63 2 図 (略) おふみはいそぎ道ば

たを そこかこゝかとさがすうち、少しはなれたくさむらに、やうく杖を見つげ出し、(略)。

くさる [腐] (四五) 5 クサル くさる 腐ル 『ツツーラーリ』

六68 2 図 栗ハカタクシテ、ナガククサラザレバ、家ノドダイ又ハ鐵道ノマクラ木ナドトス。

七65 8 又きたない水やくさつた水を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがある。

八30 3 図 (略)、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タイハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

九58 7 図 熟せざるくだ物、生にえの肉、くさりたる魚などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

九88 7 図 カクテ持テアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、一台ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

くし [櫛] (名) 2 クシ

一11 4 クシトカガミ

七36 7 (略)、クシ・カンザシナドノ店ヲ見テ、(略)。

くしがき [串柿] (名) 1 クシガキ

四12 1 去年ハホシテ、クシガキニ作リマシタ。

くじく [挫] (五) 1 くじく 『一ク』

九31 4 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出来上るものではない。

くしけずる [梳] (四) 1 クシケヅル

くじゅうさん [九十三] [課名] 4 九十三

『一ル』

十一85 2 図 (略) ブラッシノ仕掛アリテ、縫紉ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。アタカモ人ノ頭髮ヲクシケヅルニ似タリ。

くじにじつぶん [九時二十分] (名) 1

九時二十分

六39 3 図 昨日六時の汽車に間に合つて、晩の九時二十分に京都に着いた。

くじやく [孔雀] (名) 2 くじやく

八58 7 尾の短いのは (略) などで、長いのはきじ・山鳥・くじやくなどである。

八58 7 くじやくは時時尾を扇形にひろげて見せる。

くじゅう [九十] [課名] 2 九十

十目12 第二十五課 講話會の案内文

十一目10 第二十三課 物の價……九十

くじゅういち [九十二] [課名] 1 九十二

九目13 第二十六課 三才女……九十一

くじゅうく 凸ひやくぶんのくじゅうく

くじゅうご [九十五] [課名] 1 九十五

十一目11 第二十四課 樺太より臺灣へ……九十五

くじゅうさん [九十三] [課名] 4 九十三

八目14 第二十六 名古屋……九十三

九目¹⁴ 第二十七課 日光山……九
十三 第二十六課 大和巡り (一) ……九十三
十二目¹⁰ 第二十三課 孔子と孟子…
……九十三
くじゅうしち「九十七」(課名) 1 九
十七 ひとくふんのくじゅうしち
十二目¹¹ 第二十四課 大國民の品格
……九十七
くじゅうしち「九十八」(課名) 1 九
十八 第二十七課 大和巡り (二) ……九十八
くじゅうしち「九十四里」(名) 1 九
十四里 日本一の長流を信濃川と
す。(略)。長さ九十四里。
くじら「鯨」(名) 15 鯨 ひとおおくじら
七⁷³ 9 海ニハ又ケモノガステンデキ
ル。(略)。魚ニ似タモノニハ、鯨ガ
アル。
七⁷³ 9 鯨ハカラダガハナハダ大キ
イ。
七⁷⁴ 2 陸ニスムモノデハ、象ガマツ
一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大
人ト赤子ヨリモ、モツトチガフ。
七⁸² 8 図 ある時には鯨が頭から高く
水けを吹いてゐることがあります。
十⁶⁴ 9 (略)、見る内に一頭の鯨に近
寄り、急處めがけて破裂矢をしかけ
た銚を打つ。

十⁶⁵ 2 鯨の一群は影も形も見えなく
なつた。
十⁶⁵ 5 破裂矢は鯨の體内に深く食込
んで破裂した。
十⁶⁶ 1 鯨は再び浮上つた。
十⁶⁶ 2 ポートはつなをたぐつて、又
も鯨に近寄り、今度は銃を以て破裂
矢を打込む。
十⁶⁶ 2 鯨は段々弱つて、泳ぐ力もな
くなる。
十⁶⁶ 7 他のポートを見れば、今新に
鯨を追ふものもあり、(略)。
十⁶⁶ 8 (略)、銚を打つて鯨に引廻さ
れてゐるものもある。
十⁶⁶ 10 さきのポートは鯨を引きなが
ら母船の方へ急ぐ。
十⁶⁷ 3 捕鯨法には(略)、又以前に
は鯨の通路に網を張つて銚を打つ方
法などもあつた。
十⁶⁷ 5 鯨は獸類中最も大きなもの
で、長さは十五間、即ち九十尺にも
及ぶものも珍しくはない。
くじらじやく「鯨尺」(名) 3 クヂラ尺
六¹⁸ 1 図 物サシニハカネ尺トクヂラ
尺トアリ。
六¹⁸ 3 図 カネ尺ハクヂラ尺ヨリ少シ
ミジカク、ソノ一尺ハクヂラ尺ノハ
寸ニアタル。
六¹⁸ 4 図 カネ尺ハ(略)、ソノ一尺
ハクヂラ尺ノ八寸ニアタル。
くしん「苦心」(名) 1 苦心 ひとがこう
のくしん

十¹⁹ 2 畫をかく人、圖をひく人、寫
眞をうつす人の苦心も亦一通りでは
ない。
くす「樺」(名) 1 樺
十一³⁸ 7 図 中部の山林には樺・松
・杉・檜・樅・椎等の繁茂著しく、
(略)。
くすのきうじ「楠木氏」(人名) 1 楠
木氏
七⁵ 5 図 (略)、天皇ハ吉野山ノカリ
ノ皇居ニウツリタマヘリ。楠木氏ハ
ソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦
ヒシガ、(略)。
くすのきふし「楠木父子」(人名) 1
楠木父子
七⁴⁴ 7 図 おほよそ家の紋どころ、
(略)。楠木父子の菊水は、忠義のか
をりなほ高し。
くすのきまさしげ「楠木正成」(人名)
1 楠木正成
七⁵⁷ 7 図 宮城ノ前ノ廣場ニハ楠木正
成ノ銅像アリ。
くすのきまさつら「楠木正行」(課名)
4 楠木正行 楠木正行
七⁷ 2 第一 楠木正行 (一)
七⁷ 3 第二 楠木正行 (二)
七⁷ 1 第一 楠木正行 (一)
七⁵ 2 第二 楠木正行 (二)
くすのきまさつら「楠木正行」(人名)
3 楠木正行 楠木正行
七¹ 2 図 楠木正行ハ正成ノ子ニシ
テ、父ニオトラス忠義ノ士ナリ。

十一³ 4 図 正平の昔、楠木正行が
(略)、あへらじとあねて思へばあ
づき弓 なき數にいる名をぞとむ
る。といふ一首の和歌を書残せるは
此の所なり。
十二³³ 1 図 楠木正行の母が正行を戒
め、(略)が如きは、(略)、忠義の
爲には恩愛を忘るゝ眞心より出でた
り。
くすのきまさのり「楠木正儀」(人名)
1 楠木正儀
十一⁴¹ 4 図 吉野の朝の頃、赤松光範、
楠木正儀と攝津の住吉に戦ひて、散
々に撃破られたり。
くすり「薬」(名) 4 クスリ 薬 ムウ
わぐすり・おくすり
二³⁸ 7 図 カゼヲヒイタリオナカ
ライタクシタリシタトキニ、シ
ンバイシテ、クスリヲノマセデク
ダサツタノハ、ドナタデスカ。
八³⁹ 4 図 マツチノ製造ニハ(略)。
(略)、頭ニ藥ヲツケ、其ノカタマル
ヲ待チテ、箱ニ入ル。
八³⁹ 6 図 箱ハ(略)、外ガハニ藥ヲ
塗ルナリ。
八³⁹ 8 図 此ノ上ニ、(略)、藥ヲ製ス
ル等ノ手數マデ數ヘ上グレバ、(略)。
くすりゆび「薬指」(名) 2 クスリユビ
四²¹ 5 図 (略)、中ユビト小ユビ
ノアヒダノガクスリユビデス。
四²² 5 図 小サイネエサンハ私ヨ
リモスコシ高イカラ、クスリユ

ビデス。

くずる「崩」(下二) 1 崩る「一レ」

十47「園」 梁・棟木 つか・ぬき

・柱 何一つ 取外すとも、たちまち1 家も崩れん。」

くずれおつ「崩落」(上二) 1 崩れ落

つ「一チ」

十一76「園」 裏見瀧は(略)、先年大

風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝を見ること能はず。

くずれのこる「崩残」(四) 1 くづれ残る「一レ」

十38「園」 (略)、彈丸あともいちじ

るく、くづれ残れる民屋1、今ぞ相見る二將軍。

くずれる「崩」(下二) 1 くづれる

「一レル」

四19「園」 (略)、ただつねをほめる

こゑは、山もくづれるほどであつたといひます。

クスンナイ「地名」2 クスンナイ

十一98「園」 帝國領の中部クスンナ

イとマヌイとの間は最も狭く、且山脈低くして、東西の交通最も便利なる所に御座候。

十一98「園」 クスンナイ

くせもの「曲者」(名) 1 曲者

十51「園」 「光盛、曲者の首取つて候。(略) 士かと思れば、錦のひた

ゝれ着けたり。(略)。老人かと思れば、髪つやくと黒し。何者にてか

候ふらん。」

くせん「苦戦」(名) 1 苦戦

十二56「園」 (略)、我が軍は苦戦十一

箇月にして之を陥れたり。

くせんする「苦戦」(サ変) 1 苦戦スル「一シ」

八91「園」 若シ(略)、砲聲・銃聲ガ

ツマクヤウナラ、我が軍ガ苦戦シテ

キルト思へ。

ぐそう「愚僧」(名) 1 愚僧

十一72「園」 愚僧も所用ありて京

へ上り、一二年在京せんもはかり難し。

ぐそく「具足」(名) 1 具足

十一44「園」 (略)、「今日は吉日なり、

元服せよ。」とて(略)、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。

くだ「管」(名) 3 クダ くだ

七32「園」 蠶の口の中には小さいくだが

一つある。

七32「園」 そのくだから出すねばつたし

るが外へ出ると、すぐにかわいて絲

になるのである。

九9「園」 (略)、オシロイノ花ノ様ニク

ダノ形ヲシタノモアル。

くだく「碎」(五) ぐふみくだく

くだく「碎」(下二) 4 くだく「一

クル・一ケ」

九93「園」 岩にくだくる清流、雪と散

り、玉と飛ぶ。

十68「園」 船體二つにくだけて、一半

ははや大波にさらはれたり。

十一19「園」 月影の小波にくだけ、漁

火の波間に出沒する夜景も亦一段の

おもむきあり。

十一82「園」 數隻の漁舟相並び、波に

くだくるかゞり火の下に、(略)。

くだける「碎」(下二) 1 くだける

「一ケ」

十65「園」 (略) 破裂矢をしかけた銃を

打つ。小山の様な白波が高くくだけ

て、夕立のやうに降散る。

ください「ぐごめんください

くださる「下」(五) 20 クダサル く

ださる 下さる「一イ・一ツ・一ル」

ぐおあがりくださる・おおくりくださ

る・おまかせくださる・ごあんしんく

ださる・ごらんくださる

二52「園」 タクヲサンニハドレヲ

アゲマセウ。」「ボクニハコノシ

ロイノヲクダサイ。」

二56「園」 「ワタクシニハソノキイ

ロナノヲクダサイ。」

二37「園」 「アカンボノトキニ、ダ

イテチヲノマセテクダサツタ

ノハ、ドナタデスカ。

二37「園」 アタカイフトコロノ

中ヘイレテ、ネンネコウタヲウ

タツテクダサツタノハ、ドナタ

デスカ。

二38「園」 ハシヲモツテ、ゴハン

ヲタベサセテクダサツタノハ、

ドナタデスカ。

二39「園」 (略)、シンバイシテ、クス

リヲノマセテクダサツタノハ、

ドナタデスカ。

二39「園」 キモノヲヌツタリセン

タクシタリシテクダサルノハ、

ドナタデスカ。」

二40「園」 オカアサンハワタクシ

ヲカハイガツテクダサイマス。

二62「園」 トノサマガ(略)。(略)。

「(略)。」トオホメニナツテ、タ

クサンノゴホウビヲクダサイマ

シタ。

二12「園」 (略)、オヂイサンハイロイ

ロナオモシロイハナシヲキカセ

テクダサイマス。

二38「園」 (略)、せんせいの 見せて

くださる いろいろなものを見る

のです。

四24「園」 ソレカラフデヲ見セテ

クダサイ。」

四25「園」 「ソノ細イノヲ二本

クダサイ。ミンナデイクラニナ

リマスカ。」

四26「園」 「三十センアゲマスカラ、

コレデトツテクダサイ。」

四60「園」 スルト神サマハ、「(略)。」

トヲシヘテクダサイマシタ。

五66「園」 (略)、母は「(略)。(略)、

『おかあさんからもよろしく。』と書

きたして下さい。

七16「園」 (略)、何かあらでとゝの

へて来る物がございますなら、御あ

りよくおつしやつて下さい。

七50「園」 お花は「はい。」と答へて

受取らんとせしが、配達夫は「おかあさんをよんで下さい。」といふ。

八六九 此のかはせの金は、ほんの僅かですが、何かすきな物を買つて上げて下さい。

九八七 どうか今日から一年の間、あなたの方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。」

くださる「下」(下二) 凸おせくださる・おんおくりくださる・おんさそいくださる・おんせわくださる・おんたちよりくださる・ごあんじくださる・ごあんしんくださる・こいつぽうくださる・ごさんれつなしくくださる・ごほうちくださる・ごらいかいくださる・ごらんくださる・なしくくださる

くだしたまう「下給」(四) 4 下し給ふ 下し賜ふ 降したまふ 『ハ・ヘ』

八二二 神代の昔皇祖天照大神、瓊々杵尊をこの國に降したまはんとせし時、(略)。

九五〇 天皇陛下(略)、其の風景を賞し給ひて、幸湖の名を下し賜へり。

十二一三 勝報上聞に達し、陛下の下し給へる勅語の中に、「(略)」と仰せられたり。

十二〇九 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽に

すべからざるものなれ。

くだす「下」(四) 3 下ス 『ス・セ』凸のみくだす

十一五三 他人ノ惡事・短所ヲアザケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナリ。

十一〇五 孔明、(略)、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、又自ラ責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。

十二五二 (略)、平素ノ愛顧ニナレテ、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

くだに 凸せとくだにありたきよみずさつまやき

くだびれる「草臥」(下二) 2 くだびれる 『レ』

六一〇 のぼりついたじぶんには足もだいぶくだびれて、はらもすつかりすきました。

六一一 晩にはくだびれた足をのぼして、けさまで一眠に眠りました。

くだもの「果物」(名) 2 くだ物 七六六 くだ物も水をふくんで居り、やさいにも水けがある。

九五七 熟せざるくだ物、(略)などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

くだものや「果物屋」(名) 1 クダモノヤ 五七六 道ノ兩ガハニハ、アメヤ・オモチヤヤ・クダモノヤ・クワシヤナドガ店ヲナラベテナル。

くだらのかわなり「百済川成」(人名)

1 百済川成 八二七 昔百済川成トイフ名高キ畫工アリキ。

くだりく「下來」(カ麥) 1 下り來『クル』

十一七九 觀客は遊船を中流に浮べて、鵜舟の下り來るを待つ。

くだる「下」(四・五) 9 下ル 下る降る 『ツ・ラー・リ・ール・レ』

六三六 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、(略)。

九一六 本流ハ下リテ、下總・常陸ノ國境ヲ流レテ太平洋ニ入ル。

九七九 筑紫へ下る道に、昔より相知りし驛長ありて、道眞の今の身の上を深く悲しみに、(略)。

一四四 近年ノ輸出高ハ年々五六百萬圓ヲ下ラズトイフ。

一〇一 多武峯ヲ西へ下レバ岡寺アリ。

一七五 「(略)、東國へ下る路すがら、(略)」

一二九 「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。

十二四四 (略)、現に噴火せる火山の数も全國に於ては五十座を下らず。

十二六八 (略) かもしれない一種は、

(略)、水を尋ねて低地に下り、春を待ちて再び山谷に入る。

くだんざか「九段坂」(地名) 1 九段坂 凸とうきょうくだんざか

七五九 電車ニテ九段坂ノ上ニイタリ、靖國神社ニサンケイス。

くち「口」(名) 33 口凸いりぐち・おぐち・おちぐち・かいさつぐち・かどぐち・たきぐち・でいりぐち・でぐち・ひとぐち・ふたぐちとも・ほそぐち・みなとぐち

二一五 犬ガ(略)。(略)。ホエルト、口ガアイテ、クハヘテキタサカナハ(略)。

二四二 コレガハナデ、コレガ口デス。

二六四 トノサマヤ、オトモノ人ノ目モ、口モ、耳モ、ハヒダラケニナリマシタ。

二二二 わたくしには口も目も耳もありません。

三三六 だい三には口です。

三三九 なにをきかれても、この口ではつきりこたへます。けれどもそのほかによいこと

は言ひません。

五一六 鯉ハ(略)。(略)。目ハ大キクテ、口ノ右左ニハ太ヒヒゲガアリマス。

六四三 病ハ口ヨリ入ル。

六八五 (略)、病は口より入るといふ。飲物・食物氣を附けよ、心せ

よ。

七28 7 一匹の蠶の口から出る絲をの

ばして見ると、(略)。

七32 2 (略)、口から美しい絲を出し

て、からだを包む。

七32 4 蠶の口の中には小さいくだが

一つある。

七64 2 水を飲まないことはあつて

も、水のまじつた物や、水をまぜて

こしらへた物を口に入れないことは

ない。

七64 8 われ／＼は毎朝顔を洗ひ、口

をすすぐ。

八54 4 五十鈴川の水に口すゝぎ手

洗ひて左へ行き、(略)、御宮の前に

いたる。

八28 9 4 「入りて見給へ。」トイフ

ニ、何心ナクエンニ上リテ、南ノ口

ヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト

閉ツ。

八29 1 驚キテ西ノ口ヨリ入ラント

スレバ、其ノ戸マタハタト閉デテ、

(略)。

八70 5 4 (略)、手は食物を口に入る

ゝことを止め、(略)。

八74 3 4 猫ノ口ハ上下ニ二本ツツ

ノ鋭キ牙アリテ、肉ヲサクニ適ス。

九58 1 4 「病は口より入る。」つゝし

むべきは飲食なり。

九58 1 4 口にうましとて多く食ふこ

となかれ。多く飲むことなかれ。

十73 4 4 道後は(略)。湯のわき出

づる口僅かに一箇所にして、其の分

量も少く、(略)。

十75 9 4 肺ハ鼻・口ヨリ吸入ル、空

氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。

十76 3 4 胃ハ口ヨリ入來レル食物ヲ

コナシ、(略)。

十77 1 4 目・耳・鼻・口ハ何レモ腦

ニ近キ位置ニ在リ。

十77 2 4 (略)、口ハ味ヲ味ハヒテ、

各之ヲ腦ニ報告ス。

十77 4 4 腦ハ(略)、手・足・口等

ニ命令シテ活動セシム。

十79 9 4 女子は(略)、又口の周圍、

手首・手の甲等には入墨をほどこせ

り。

十一47 8 馬主は(略)、馬の耳に口

を寄せて、何事か話してゐるかと思

ふと、ひらりと飛乗つて一散にかけ

出した。

十一51 2 (略)、馬はさもうれしさう

に、口でおもちやをさゝげて、其の

子供をあやしてゐた。

十一73 9 4 (略)、今度はひちを張り、

足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴

の卧したる様をなせり。

十一88 6 4 蚯蚓は(略)、多量の土

を吞込みては之を地上の穴の口に出

す。

十一107 5 床下に土石を盛り、數條の

みぞを造つて、一方の口から火をた

いて室内を温める。

口をし「シー・シク」

八29 5 4 北ハマハレバ、東ノ戸開キ、

(略)。幾度カマハリタレドモ、入ル

コトヲ得ズ、クチヲシクモエノ笑聲

ヲ後ニシテ歸レリ。

十16 1 4 紫式部は(略)、兄の書

を讀むを聞きゐて、(略)、少しも忘

るゝことなかりしかば、父の爲時は

(略)、「汝の男と生れざりしが口を

し」といひたりとぞ。

くちくかん「驅逐艦」(名) 6 驅逐艦

驅逐艦 ムいちくくちくかん

十一30 6 4 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美

ナレ。

十一31 7 4 諸子ハ戰艦・巡洋艦・海

防艦・砲艦・通報艦・驅逐艦・水雷

艇・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十一32 4 驅逐艦連

十一34 5 4 驅逐艦ハ艦體最モ輕ク、

速度最モ大ニシテ、敵艦ニ近ヅキ、魚

形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈シ、又敵ノ

水雷艇ヲ驅逐・撃破スルヲ目的トス。

十一34 8 4 水雷艇ハ形體甚ダ小ナレ

ドモ、速度驅逐艦ニ次ギ、(略)。

十二9 5 4 (略)、我が驅逐艦の連・

陽炎の二隻に追撃せられ、遂に捕へ

らるゝに至れり。

くちくげきは「す」驅逐撃破(サ変) 1

驅逐・撃破ス「スル」

十一34 6 4 驅逐艦ハ(略)、敵艦ニ

近ヅキ、魚形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈

ヲ目的トス。

くちくたい「驅逐隊」(名) 2 驅逐隊

驅逐隊

十一74 4 4 (略)、續いて我が驅逐隊

より二回の水雷攻撃を受けて、敵の

兩旗艦は遂に沈没し、(略)。

十二7 6 4 夜に入りて、我が驅逐隊

・水雷艇隊は砲火をくゞつて敵艦に

せまり、無二無三に攻撃せしかば、

(略)。

くちぐち「口口」(名) 5 ロ々

六76 3 歌がすむと手打をして、口々

に「おめでたう、おめでたう。」と

いひました。

九83 6 五箇村の人々は(略)、「是非

勝つてくれ。」「負けたら村の名折に

なるぞ。」「しつかりやつてくれ。」

などと、口々に勢をつけてゐる。

十24 9 4 無頼ノ少年等口々ニ罵リテ

止マズ。

十一49 3 (略)一同(略)歸つて來

た。一方には(略)罵りながら、一

方には「あれ程の名馬はいくら金を

拂つても惜しくはない。」と、口々

にほめた。

十二77 2 4 熱湯の海ありと語る者、

舟を吞む海獸ありと談ずる者、乗組

員の運命をあはれむ者、コロンプス

の暴舉をあざける者、皇后の無謀を

そしめる者、口々に語り合へり。

くちなかおくのせんぼん「口中奥千本」

〔地名〕 1 口・中・奥の千本

十一 46 図 吉野山は口・中・奥の千本の外、到る處櫻樹あらざるなし。
くちのせんぼん「口千本」〔地名〕2
口ノ千本 口の千本
十一 22 図 行くく 吉野宮に参拜し、村上義光の墓をとぶらふ。(略) 満目總べて花なり。(略)。こゝを口の千本といふ。
十一 2 図 口ノ千本
くちばし「嘴」(名) 8 クチバシ くちばし ぐうわくちばし
一 18 6 ホソナガイ クチバシ
八 56 5 (略)、首の長い鳥は大ていくちばしも長い。
八 56 6 併しかはせみははぎも首も短くて、くちばしばかりが長い。
八 56 8 駝鳥ははぎも首も長くて、くちばしだけが短い。
八 56 8 水鳥のくちばしは平たくて先が圓く、(略)。
八 56 9 (略)、陸鳥のくちばしは圓く細くて、先がとがつて居る。
八 57 4 いすかのくちばしは上と下がくちががつてゐる。
十一 82 1 図 鴨は(略)。(略)。鰻をくはへてくちばしに巻附かれ、持て餘して見ゆるもをかし。
くちびる「唇」(名) 1 クチビル
九 9 2 シソノ花ノ様ニクチビルノ形ヲシタノモアリ、(略)。
くちみみてあしらいちどう「口耳目手足等一同」(名) 1 口・耳・目・手・

足等一同
八 69 6 図 ある時口・耳・目・手・足等一同申し合せて、胃に向つていふやう、「我等はつねにいそがしく働けるに、汝はただ坐して食ふのみにて、(略)。
くつ「靴」(名) 9 クツ くつ 靴
三 8 1 くつ「ひらがなのドリル」
八 51 1 図 御遊ナカバニシテ、マリヲケ給フハズミニ、皇子ノクツヌゲタリ。
十 22 6 図 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落シ、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」トイフ。
十 84 7 (略)、一年にはふる牛は(略)。其の皮は革に製して、かばんや靴などを造り、(略)。
十 101 5 図 (略)、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。
十一 93 5 図 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、(略)。
十一 93 6 図 (略)、靴の價にはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。
十一 93 10 図 かゝる時は靴の供給次第に増來り、靴の價はやうやく安くなりて、(略)。
十一 93 10 図 かゝる時は靴の供給次第に増來り、靴の價はやうやく安くな

りて、(略)。
くつ「朽」(上二) 1 くつ 「一チ」
九 92 8 図 みすのうちより 宮人の袖引止めて、(略)、ふみ見ずといひし 言の葉は、天の橋立 末かけで、後の世永く くちざらん。
くつし ぐまんしゅうくつし・まんしゅうないちくくつし
くつつく(五) 1 クツツク 「一ク」
七 77 3 海草ハ(略)。根モ(略)、タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデア
ル。
ぐつと(副) 1 ぐつと
九 85 2 愛作は(略)、すぐに熊吉のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引きよせた。
くつや「靴屋」(名) 3 靴屋
十一 93 6 図 (略)、買手にはかに増すときは、靴の價にはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。
十一 93 7 図 かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、(略)。
十一 93 9 図 (略)、又他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。
くつわむし「蟬虫」(名) 1 くつわむし
五 62 3 図 (略)、がちやくくくくくつわむし、(略)。
くなん「苦難」(名) 1 苦難
十二 85 8 図 赤穂浪士が數年の苦難を

忍び、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは(略)。
くに「国」(名) 89 クニ 國 ぐいずものくに・いわみのくに・うましくに・えちぜんものくに・かながさき・おおくにぬしのみこと・おわりのくに・きいのくに・なちさん・きたぐに・くわしほこちたるのくに・しなのくに・しまぐに・するがのくに・となりぐに・びぜんのくに・ひのもとづくに・みくに・やまぐに・やまとのくに・わがくにのうぎよう
三 2 5 サクラノ木ハ、ヨソノクニニハ、コンナニタクサンアリマセン。
五 7 6 天皇ハ國ノ中ノワルモノドモヲコロラスオタヒラゲニナツテ、(略)。
六 4 1 日本の國には春・夏・秋・冬かはるくく色々な花がさき、色々な鳥が鳴く。
六 4 7 図 日本の國は松の國。
六 4 7 図 日本の國は松の國。
六 5 6 図 日本の國は花の國。
六 5 6 図 日本の國は花の國。
六 20 4 昔ある國で大きな象の目方をはからうとしたが、(略)。
六 54 6 図 塩ハ(略)、ワガ國ニテハ海ノ水ヨリツクル。
六 58 3 武田信玄の國は山國で、塩がない。
六 58 4 塩はとなりの國から買つてゐ

た。

六五八 國 「(略)、敵の國の人には何のうらみもない。

六五九 謙信は(略)、じぶんの國から塩を送らせた。

六八二 國 (略)、あふげや、高き君の恩、國の恩。

六八六 國 (略)、遠き祖先のをしへをも、守りてつくせ、家のため、國のため。

七三一 國 (略) 戦場ニ出デントセシガ、正成ハ道ニテサトスヤウ、「(略)」。ト、ネンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。

七二六 家デモ國デモ手ヲヨクハタラカセル人ガ多ケレバ多イ程盛ニナリマス。

七三三 わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

七三九 わが國は昔から養蠶の盛な國で、(略)。

七六二 國 又寒き國にては、大をしてそりを引かしむ。

八二二 國 神代の昔皇祖天照大神、瓊杵尊をこの國に降したまはんとせし時、(略)。

八四五 國 我が國ニテハ、初ハモツバラ輸入品ヲ用ヒタリシガ、(略)。

八四一 國 (略)、我が國輸出品中ノ重要ナルモノ一ツトナレリ。

八五〇 國 中臣鎌足(略)、國ノタメ

ニ入鹿父子ヲノゾカント思ヒ立チタリ。

八七六 國 北アメリカには合衆國といふ國あり。

八七六 國 農業・工業・商業共に盛にして、國甚だ富めり。

八七六 國 此の國にて商業の最も盛なる都會をニューヨークといふ。

八七八 國 フランスは(略)。早くより工藝・美術の發達したる國なり。

八七八 國 ドイツは學問のよく開けたる國なり。

八七八 國 ロシヤはヨーロッパ大陸の東部にひろがれる國にして、(略)。

八八二 國 又世界の中には、(略)、少しも氷雪を知らざる國あり。

八八二 國 我が日本の國の大部分は、(略)。

八八四 國 (略)、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

九二四 國 我が國は國民皆兵なり、(略)。

九二六 國 (略)、我が國の陸軍は僅かに七箇師團に過ぎざりしが、(略)。

九二七 國 五月五日ニ(略)、男子ノ福運ヲイノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。

九五一 國 古風ゆかしき我が國のかんむり・烏帽子今は唯 祭の服に残りたり。

九八八 國 サレバ何レノ國ニテモ、世

ノ進ムニシタガヒ、(略)、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九九〇 國 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨・銀貨・銅貨ノ三種アリ。

九九〇 國 我が國ノ紙幣ハ日本銀行ヨリ發行スルモノニシテ、(略)。

九九六 國 我が國到るところ名勝の地にとほしからざれども、(略)。

九九六 國 外國人の我が國に來る者亦必ずこゝに遊びて、(略)。

一〇一 國 (略)、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。

一〇四 國 我が國の建物はおほむね木造なれば、(略)。

一〇五 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、(略)。

一〇八 國 熱き國 しげる林ノ生ひ立ちし 我がタガヤサン、(略)。

一〇八 國 (略) 花筵ハ我が國輸出品ノ一ナリ。

一〇九 國 我が國銅山ノ中ニテ最も盛ニ銅ヲ産出スルハ(略)。

一七二 國 我が國は火山國にして、全國到處に温泉あり。

一七九 國 我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。

一二〇 國 我が國に遊べる西洋人は(略)。

一二四 國 いで、軍艦に乘組みて、我は護らん、海の國。

一二五 國 我が國に最も普通なるは荷車・人力車等にして、(略)。

一二八 國 (略)、我が國に一哩の鐵道も、一隻の汽船もなかりしなり。

一二七 國 我が國には數多の瀑布あり、(略)。

一二九 國 鵜を使ひて魚を捕ふること、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。

一三三 國 我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、(略)。

一三三 國 孔明、劉備ニ事ヘ、(略)、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

一三六 國 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。

一三六 國 北は樺太・千島より、南臺灣・澎湖島、朝鮮八道おしなべて、我が大君の食す國と、(略)。

一三六 國 瑞穂の國と農業は開けぬ地なし、野も山も。

一二四 國 承けつぎし國の柱の動きなく榮えゆく代を尚いのかな。

一二二 國 古の書見る度に思ふかな、おのが治むる國は如何にと。

一二三 國 國を思ふ道に二つはなかりけり、軍のには立つも立たぬも。

一二四 國 文武道を異にすれども、國に盡す誠は一なり。

一二五 國 我が國ノ造船所デ、最も規模ノ大キイノ海軍ノ工廠デ、(略)。

一二五 國 我が國デ一番大キイノハ佐

世保海軍工廠ノ船渠デ、(略)。

十二167 国 我が國には東京に中央氣象臺あり。

十二181 国 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、(略)。

十二323 国 (略)、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二386 国 支那の昔趙といふ國に蘭相如といふ賢臣あり。

十二4310 国 我が國は氣候温に、地味肥え、(略)。古來瑞穂の國の名ある所以なり。

十二441 国 古來瑞穂の國の名ある所以なり。

十二443 国 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬町歩あり。

十二447 国 我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

十二453 国 我が國の農業中最も開けるは牧畜の業なり。

十二454 国 是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。

十二458 国 我が國の農業は、決して現状を以て満足すべきにあらず。

十二504 国 〴〵産業勵みつゝ國の富をばめやせかし。

十二534 国 強兵ヲ以テ知ラレタル我が國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、(略)。

十二539 国 我が國ハ島國ニシテ、海

外交通ノ便最モ多ク、(略)。

十二556 国 (略)、我が國亦總領事を置き。

十二642 国 英國は國會の最も早く開けたる國にして、(略)。

十二8010 国 コロンブスの遠征時代は我が國後土御門天皇の御代にして、(略)。

十二935 国 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を爭ひたり。

十二936 国 孔子は魯といふ國に生れ、(略)。

十二1022 国 我が國の地方自治團體は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。

十二1059 国 我が國は萬世一系の天皇之を統治し給ひ、(略)。

十二1102 国 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを諭し給ひ、(略)。

くにぐに「[國]」(名) 1 國々

八781 国 ヨーロッパ大陸にはフランス・ドイツ・ロシア等の國々あり。

くにざかい「[國境]」(名) 1 國境

九148 国 上野ノ東北部、越後ノ國境ナル利根岳ヨリ發スルサ・ヤカナル細谷川ハ、(略)。

くにじゅう「[國中]」(名) 1 國中

十325 国 (略) 石見一國ニヒロガリ、是ヨリ後ハ五穀不作ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レリ。

くにたみ「[國民]」(名) 1 國民

十二32 国 國民は一つ心に守りけり、遠つ御祖の神の教を。

ぐにん「[愚人]」(名) 1 愚人

十二707 国 先づ苦しみて然る後に樂しむを賢者とし、先づ樂しみて然る後に苦しむを愚人とす。

くび「[首]」(名) 17 クビ くび 首

てくび

一175 クビ ニスズ

七32 国 正成ハタシテ戰死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。

七73 国 コノ度ノ合戰ニハ、師直ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ヲガクビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、(略)。

七74 国 (略)、正行ヲガクビヲカレラニ取ラスルカ、(略)。

七63 国 (略)、犬のくびに藥品・食物などを入れたるかごをかけたおきて、(略)。

八565 はぎの長い鳥は首も長く、首の長い鳥は大いにくちばしも長い。

八565 (略)、首の長い鳥は大いにくちばしも長い。

八566 併しかはせみははぎも首も短くて、くちばしばかりが長い。

八567 駝鳥ははぎも首も長くて、くちばしだけが短い。

ラヘタル時、之ヲ運ビ去ルニ便ナリ。

九703 雨戸を明けて見ると、(略)、身を切るやうな寒さに思はず首をちぎめることもある。

十506 国 唯首を取つて、大將の見参に入れよ。(略)。組めや手塚。」

十513 国 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。

十515 国 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、やがて打ちまたがつて首をかく。

十516 国 手塚、首をたづさへて、大將義仲の前行き、(略)。

十517 国 「光盛、曲者の首取つて候。

くびもと「[首元]」(名) 1 首元

十一813 国 鵜の首元は細なほにてしぱりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、(略) 十二三尾のあゆを喉元にふくむといふ。

くふう「[工夫]」(名) 9 クフウ 工夫

四525 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、(略)、海ヲワタルクフウヲカンガヘテ、キマシタ。

九315 フルトンが工夫に工夫を重ねて造つた最初の船は、(略)、不幸にも直に沈んでしまつた。

九316 フルトンが工夫に工夫を重ねて造つた最初の船は、(略)。

十427 国 (略) モツバラ花筵ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)。

工夫ヲコラセシガ、(略)。

1476 唐草模様・波模様の如きはなり。(略)。かくの如き模様の工夫は無限に多し。

11532 笑ハント欲スルモノハ、常ニ其ノ行ヲツ、シミ、上、天ニ恥ヂズ、(略)、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

11563 どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもらんでゐる。

11568 兵士等は氣をあせるのみで、何の工夫もつかぬ。

11668 其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

くふうす「工夫」(サ変)3 工夫す

『シースースル』

14910 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。

12438 人口やうやく増加し、(略)、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

12714 人をねたまんよりは、勉めて之に勝らんことを工夫すべし。

くべつ「區別」(名)1 區別

121210 さはあれ、勇氣には大勇と小勇との區別あり。

くべる「焼」(下)1 クベル

12581 (略)、ソノウスヲコハシ

テ、火ニクベテ、ヤイテシマヒマシタ。

くへん「九遍」(名)1 九へん

1496 サア、タケヲサンカラオトビナサイ。一ペンニヘン三ペン(略)七ヘン八ヘン九ヘン十ペン。

くま「熊」(課名)2 熊

六目7 第十九 熊

六43 第十九 熊

くま「熊」(名)7 熊ひこくま・しぐま

六44 日本ニ居ルケモノノ中デ一番強イノハ熊デス。

六45 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、後足デ立上ツテ、大キナ手ノヒラデツカミカ、ツテ、スルドイ爪デヒツカキマス。

六48 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。

六53 熊ノ皮ハヨイシキ物ニナリマス。

六55 シグマトイフ熊ハ小馬ホドアツテ、力ガ強ウゴザイマス。

六661 熊ハイタヅラモノデ、人ノ家ノクラノ戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ俵ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

18110 あいぬは(略)。殺したる熊の頭は垣にかけて、永く之を保存するを以て、(略)。

くまおう「熊王」(人名)8 熊王

11416 此の時討死せる宇野六郎の一子に熊王といふ者あり、(略)。

11431 熊王直ちに河内に行きて、赤坂城のほとりにたゞずむ。

11441 (略)、熊王十五歳になりぬ。

11442 (略)、熊王は「何の戦功もなければ」と受けざりき。

11445 (略)、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。

11448 熊王恩に感じて、涙せきあへず。

11455 (略)、熊王年來包みたる心の中を打明けて、(略)。

11459 熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、(略)。

くまおう「熊王丸」(課名)2 熊王丸

11目11 第十課 熊王丸

11413 第十課 熊王丸

くまがや「熊谷」(地名)1 熊谷

くまきち「熊吉」(人名)9 熊吉

9825 一人は熊吉、一人は愛作といつて、年は同じく十五歳。

9844 (略)、もはや熊吉と愛作の二人だけの競走となつた。

9847 (略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。

9848 熊吉はつるりとすべつて、

(略)、池の中へ落ちこんだ。

98410 愛作は(略)、すぐに熊吉のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引きよせた。

9855 (略)、熊吉に水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやら、(略)。

98510 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかけさせたら、(略)。

9864 相手の熊吉があつた通りで、今日の勝負はきまらないが、(略)。

98610 愛作さんのりつばな心がけで、熊吉の命が助かりました。

くまきち「熊吉方」(名)1 熊吉方

9868 熊吉方の人々は、(略)。勝はあなたの方のものです。

くまなし「限無」(形)1 クマナシ

7904 中佐ハ(略)、タマ一人クマナク船内ヲタヅネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

くままつり「熊祭」(名)1 熊祭

18110 あいぬは時々子熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。あいぬの熊祭とて有名なり。

くまもと「熊本」(地名)2 熊本

925 熊本

9273 師團司令部のある所は東京・大阪・名古屋・廣島・熊本等軍事上重要な地なり。

くみひじくみ・たかちほかのりくみすいへい・のりくみ・のりくみ

ん・のりくみそうすう・ひとくみ
くみあい ひとさんぎようくみあい
くみあいう「組合」(四) 1 組合ふ
「一七」

十512 手塚は家來を討たせじと、
敵に組みつく。敵は一人、此方は二
人。三人組合ひて馬より落つ。

くみあわす「組合」(下二) 1 組合す
「一七」

七356 塗物はくりたる木又は組合
せたる木・竹又紙などにうるしを塗
りてつくる。

くみたつ「組立」(下二) 1 組立つ
「一ツル」

十116 人々皆 静まりいねし
ま夜中に 家組立つる 木々今
語り出しぬ。

くみたて「組立」(名) 1 組立
十二134 船體ノ材料ガホマ整フト、
組立ニ取りカゝル。

くみたてる「組立」(下二) 4 組立テ
ル 組立てる 「一テ・一テル」

十219 活版は印刷が終れば、其の活
字を取離すことが出来るから、同じ
活字を何度でも組立てて使へる。

十一125 例へば時計ヲ造ルノニ、其
ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手
ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時
計ニ組立テルコトハ出来ナイ。
十二134 船ヲ組立テルニハ、船臺ノ
上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、其ノ
上ニ先ヅ龍骨トイフモノヲ置ク。

十二139 コレハ人ノ脊骨ノ様ナモノ
デ、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シ
テ、段々ニ組立テテ行ク。

くみたまう「組給」(四) 1 組み給ふ
「一八」

十505 かく申すは(略)、手塚太
郎光盛なり。よき敵ぞ、組み給へ。
くみつく「組付」(四) 1 組みつく
「一ク」

十512 手塚は家來を討たせじと、
敵に組みつく。

くむ「汲」(五) 3 クム くむ 「一
ン」

二262 オカアサン ハサドバタデ
水ヲクンデキマス。

五223 おはなは水がめから水をくん
で、母の手にかけました。

十一112 寒風身を切る様な冬の日で
も、氷の下の水をくんでせんたくす
る。

くむ「組」(四) 2 組む 「一マ・一
メ」

十507 唯首を取つて、大將の見
参に入れよ。(略)。組めや手塚。」
といふまゝに、はや弓を捨てて進み
寄る。

十5010 手塚の家來は組ませじと中
をへだつれば、(略)。
くも「雲」(名) 16 クモ 雲 ぐあめの
むらくものつるぎ・しらくも・むらく
も
十一122 ツキクサクモ

二104 カクレタ、クモニ。
二111 クロイクロイ マツクロ
イ、スミノヤウナクモニ。

二313 カゼヨク ウケテ、クモ
マデアガレ。

二322 エダコニ ジダコ、ドチ
ラモマケズ、クモマデアガレ。
四136 あたまを雲の上に
出

し、四方の山を見おろして、か
みなりさまを下にきく、ふじ
は日本一の山。

五461 (略)、にはかに雲が出て、か
みなりが鳴り出しました。

六64 わけてさくらの吉野山、一
目千本咲きみちて、かすみか雲か美
しや。

八60 石山寺の秋の月、雲をさ
まりてかげ清し。

九289 境内ニハ櫻最モ多ク、春ノ
盛リニハ花ノ雲タナビキテ、(略)。
九346 (略)、四方からの見物人は雲
の如く集つた。

十283 (略)、古い銀杏の木が一本、
(略)、今は葉一枚も残つてゐない。
はうきを立てた様に高く雲をはらは
うとしてゐる。

十一15 全山花の雲に包まれた
る吉野山の光景まのあたり見るが如
し。

十一154 (略)、道も無き山の雲を
しのぎて杉坂に着きたりしに、(略)。
十一48 アラビヤ人はこゝに始めて

馬に全速力を出させて、雲を霞と逃
げのびた。

十二781 (略)、陸地の片影だにみ
とめ難く、(略)、夕の雲を見ては陸
の影かと疑へるも、幾度なるを知ら
ず。

くも「蜘蛛」(名) 1 蜘蛛 ぐかえると
くも・くぐも
十一881 蜘蛛は其の體より絲を出
して網を張る。

くもい「雲居」(名) 1 雲の
九919 (略)、勅なれば いとも
かしこし、うぐひすの 問はば如何
にと 雲のまで 聞え上げたる 言
の葉は、幾代の春か かをらん。

くものい「蜘蛛網」(名) 1 蜘蛛ノイ
十一872 加フルニ彼ノ蠟燭ノ心ト
スル太キ絲、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲、
細大意ノマ、ニシテ、(略)。

くものす「蜘蛛巢」(名) 1 クモノス
二171 クルクルマハツテ、クモノ
スニカカルノモアリマス。

くもり「曇」(名) 4 曇
六375 十二月十三日 水曜 曇
十一528 公明正大ニシテ、心中一
點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。

十二194 天氣圖とは(略)晴・
曇・雨・雪、風の方角・強弱、温度
等一般の天氣要素を地圖の上に記載
し、(略)。

十二198 天氣圖に用ふる普通の符號
は左の如し。(略) ○ 曇

くもる〔雲〕(四・五) 3 クモル くもる 曇ル 『ツツラ』ひかきくもる

一361 ソラガクモツテキマシタ。六144 ガンノ(略)。曇ツタ夜や月ノナイ夜ハ道ニマヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデアル。

十895 〔圖〕御歌かしこみ、藤房は聲くもらせて、いかにせん、頼むかけとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。く・ゆ〔悔〕(上二) 2 悔ゆ 『一・一・ユ』

十一6910 〔圖〕若し過あらば、深く之を悔いて、其の過を再びせざらんことをちかふべし。

十二7010 〔圖〕少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。くようせい〔九曜星〕(名) 1 九曜星

七455 〔圖〕おほよそ家の紋どころ、(略)。(略)。(略)、三つ星・四つ目・九曜星、(略)。くよくよ(副) 1 くよくよ

十一701 〔圖〕思ひても返らぬことをくよくよと心配するは、未練にして愚なる人のする事なり。くら〔倉〕(名) 1 クラ

六662 熊ハ(略)、人ノ家ノクラノ戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ俵ヲカツイデ、(略)。

くら〔暗〕ひまつくら
くら〔鞍〕(名) 3 クラ くら

一164 ウマクラクルマ
三31 くら〔ひらがなのドリル〕
四828 をかの方では大しやう

よしつねをはじめ、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。

くらい〔位〕(名) 3 位ひおくらい・おんくらい
八541 〔圖〕中大兄皇子ハ後天皇ノ位ニツキ給フ。

十一78 〔圖〕(略)、女王は新しく生れたる雌蜂に其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。

十二723 〔圖〕位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、(略)。

くらい(副助) 3 クラキ くらゐ
三282 (略) タケノコガ、(略)、私ノセイト オナジ クラキ ニナリマシタ。

七255 モシ手ガナカツタラ、ドノクラキ不自由デセウ。
七403 〔圖〕武士としてはあのくらゐな馬をもつて見たい。」

くらゐ〔暗〕(形) 6 くらい 暗イ
暗い 『一・一・ク』
三368 くらゐとこころへはなしてごらん。」

五448 文太郎ハヨロコonde、「海ダ、海ダ。」トイツテキルウチニ、又暗クナツテ、何モ見エマセン。
七864 〔圖〕又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それに便つて、居る

場所や方角がちゃんと分ります。
九705 冬の雨の日は、短い日がなほ更早く暗くなる。

十二835 重く沈んだ調に暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかとと思ふと、(略)。

十二835 (略) 暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかと思ふと、(略)。

くらい(副助) 9 グラキ 位
五306 茶ノ木ノ高サハ大テイ三四尺グラキデ、(略)。

七487 〔圖〕「君等ハ水ニヌレルト、スグニベタ／＼ニナルガ、僕等ハ少シグラキ水ニヌレテモ、裏ハ通ラナイ。」

七492 〔圖〕「僕等ノ仲間ニハカラカサニナツタリ、合羽ニナツタリスルモノガアル。水ニヌレルグラキハ何デモナイコトダ。」

七747 (略)、岸ニ近イ浅イ所カラ五十ヒログラキノ所マデニハ、海草ガハエテキル。
八382 〔圖〕マツチハ一ダースノ價三四錢グラキナレバ、(略)。

九309 蒸氣機關は(略)、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。
十五5 (略) 大鬼蓮ハ(略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出来ルサウデアル。

十4110 〔圖〕莖ハ圓クシテ、長サ五尺バ

カリ、短キハ二尺位ナルモアリ。
十一468 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは(略)、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。

くらいさんとう〔位三等〕(名) 1 位三等
十一10510 〔圖〕孔明、(略)、又自ラ責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。

くらいす〔位〕(サ変) 1 位す 『一・シ』
十一975 〔圖〕(略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、鈴谷川平野の中央に位し、大泊より十里、(略)。

くらう〔食〕(四) 1 くらふ 『一・ヒ』
ひとくりくらう
十二725 〔圖〕孔子曰く、「疏食をくらひ、水を飲み、腹を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。」

くらく〔苦樂〕(課名) 2 苦樂
十二目5 第十八課 苦樂
十二704 第十八課 苦樂

くらし〔暮〕(名) 3 暮しひぐらしもん
七414 〔圖〕これまで貧しい暮しをしてゐるのに、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いひなかつた。」

七438 〔圖〕「日ごろ貧しい暮しをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもめた。

十二9110 〔圖〕日々の暮しは「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。

くらし「暗」(形) 3 暗シ 暗し

「キ」ひおぐらし

九三〇 晝ハ暗キ所ニヒソミ、日暮

ヨリ出デテ飛ブカウモリハ暗黒色ニシテ、(略)。

十〇三 總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り

来るものなるを以て、(略)。

十二八二 暗き時にも手探にて用を足し得る様に、極よく整へ

置くは主婦たる者の務なり。

くらしお「暮居」(ラ変) 1 暮し居

り「一」

十五九 略、昨今は友人も出来、管内の生活にもなれ、日々楽しく暮し居り候。

くらす「暮」(四・五) 3 暮す「一・シ・ス・セ」ひあそびくらす

六八三 略、みきは一つの枝と枝、仲よく暮せよ、兄弟・姉妹。

八一九 略、畑もたくさんもつて、牛もたくさんかひ、何不足なく暮してゐた農夫がありました。

八七二 今より後はたがひに親密に暮すべし。

ぐらつく「(五) 1 ぐらつく「一」

六七五 私は古机でございます。(略)。

私のからだがかんなにぐらつくやうになつたのも、その子供たちのいた

づからでございます。

くらぶ「比」(下二) 3 くらぶ「一・ブ・ベ」

八九七 いでや、あの岩の小さけ

に、皆うちよりてえもの數へん。たけがりのいさをくらべん。

十一二四 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰か人智

の進歩の大なるに驚かざらん。

十一二七 스티ブンソンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にく

らぶべくもあらず。

くらべうま「競馬」(課名) 2 競馬

九目 第二十四課 競馬

九八二 昔或氏神のお祭に競馬の神事といふ事があつた。

九八二 それは氏子の五箇村から子供の騎手を一人づつ出して、競馬をさせて、(略)。

九八六 「今年の競馬はさぞ面白からう。」

くらべみる「比見」(上一) 1 クラベ

見ル「一」

九四八 略、若シ舊道ノ今ノサビシサト、昔ノニギハシサトクラベ

見バ、世ノ轉變ノ如何ニ甚ダシキニ驚クナラン。

くらべる「比」(下二) 3 クラベル

くらべる「一・ベ・ベル」

四三二 「オマヘノナカマトオレノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテ見ヨウ。」

七〇一 一つしよについだ梨の木の

方は、(略)。もとからある分にくらべると、實も大きく、味もよほどよろしいございます。

七四二 陸ニスムモノデハ、象ガマツ

一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大人ト赤子ヨリモ、モツチガフ。

くらま「鞍馬」(名) 1 鞍馬

十一三〇 略、我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略)。山ノ名ヲ附シタルモノニ三笠・富士・筑波・生駒・鞍馬・伊吹・淺間等、(略)。

くらむ「眩」(四・五) 2 くらむ 暗む「一・ミ・ム」

五四八 略、目がくらむやうないなびかりがして、耳がさけるやうなおそろしいかみなりが鳴りました。

八七〇 略、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、(略)、身體は全く力なきにいたれり。

くらやみ「暗闇」(名) 1 くらやみ

五二一 さあ大へん、今まであかるかつたせかいがくらやみになつて、わるい神さまがさまざまのわるいことをはじめました。

くり「栗」(名) 6 クリ 栗ひかきと

くり

四二二 ウラノ山ニハクリノ木

ノ林ガアリマス。

四二四 コノゴロハクリノオチル

ジブンデ、毎アサ早くオキテ、行ツテ見ルノガタノシミデス。

四二七 クリハユデテタベテモ、

ヤイテタベテモ、ウマイモノデス。

六六三 材木ニハ松・杉・ヒノキ・栗・ケヤキナドアリ。

六六五 略、上品ナルハヒノキ、カタキハ栗ナリ。

六八二 栗ハカタクシテ、ナガクサラザレバ、家ノドダイ又ハ鐵道ノ

マクラ木ナドトス。

くり「繰」ひわたくりきかい

くりかえす「繰返」(四・五) 3 クリ

カヘス くりかへす「一・サ・シ・ス」

十一一〇 又毎日同ジ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早く其ノ仕事ニ熟練スル。

十一六六 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

十二二五 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへせし人をしのびつ。

くりはし「栗橋」(地名) 4 栗橋

九一五 略、渡良瀬川ヲ合セテ栗橋ニ至ル。

九一五 栗橋ハ東北鐵道ノ通路ニア

タリ、一大鐵橋カ、レリ。

九一五 栗橋ヲ過ギテ、間モナク二ツニ分ル。

九一七 栗橋

くりばやし「栗林」(名) 1 クリ林
 四三二 クリ林ノ中ニハ、ドンゲ
 リノ木モ五六本アリマス。
 くる「割」(四) 1 くる「一リ」
 七三五 塗物はくりたる木又は組合
 せたる木・竹又紙などにうるしを塗
 りてつくる。
 くる「具」ひすくいくる
 くる「暮」(下二) 4 くる 暮る
 「ルル・ルレ・レ」
 九四九 日暮るれば、一同テントを
 張りて夜を過す。
 九四四 此の門一に日暮門の名ある
 は、日暮るるまで見れどもあかずと
 の意なりとぞ。
 十一四八 居合せたる人々涙にくれ
 ながら、「何とて命を捨つるに及ぶ
 べき。」と、取つておさへて動かせ
 ず。
 十二三二 保の母は一時に二子を
 失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの
 外、「略。」とて、少しも悲しむ色
 を見せざりき。
 くる「来」(カ変) 128 クル くる 來
 ル 来る 《キクル・コ・コイ》ひはる
 がきた
 一八二 ヘイタイガナランデキマ
 ス。
 一三六 ソラガクモツテキマシタ。
 一三六 イマニ ユフダチガキマ
 ス。
 一四三 ヒゴヒガ(略)。アチラカ

ラモ一ビキキマス。
 二二二 ワタクシノウタヲキク
 ト、人ガダンダン オキテキマ
 ス。
 二二三 ミテキルウチニダンダン
 ノボツテキマス。
 二二四 オキクガイマオキヤクニ
 ナツテキマシタ。
 二二三 「コノ川ハドコカラナ
 ガレテクルノデスカ。」
 二三四 「アノ山ノオクカラナ
 ガレテクルノデス。」
 二四六 犬ガ(略)、ハシノウヘ
 ニキマシタ。
 二四六 カゼガフイテ、イロイロナ
 木ノハガトンデキマス。
 二四七 ソコヘオトウサンガカヘ
 ツテキマシタ。
 二四八 「(略)、ボクガウチカラ
 タドン ヲモラツテキマスカ
 ラ。」
 二五三 トナリノワルイオヂイサ
 ンハ(略)、犬ヲカリニキマシ
 タ。
 二五三 キタナイドロ水ノホカニ
 ハナンニモデテキマセン。
 二五八 ヨイオヂイサンハソノハ
 ヒヲモラツテキテ、カマドノ
 下ニオキマシタ。
 二五九 デテキテ、イツシヨニ
 アソビマセンカ。」
 三六一 ソコヘトモダチガサソヒ

ニキマシタカラ、(略)。
 三九八 小さなむしがとんできま
 した。「ひらがなのドリル」
 三九八 大きなうまがはしつてき
 ました。「ひらがなのドリル」
 三八五 サヘルダケサヘルト、
 イマニマタオリテキマセウ。
 三八七 オリルトキニハ、オチル
 ヤウニハヤクオリテキマス。
 三九六 ユフダチニナツテモ、オ
 ヤドリガオリテコナイトキニ
 ハ、(略)。
 三九八 (略)まさはははとい
 つしよによそからかへつてき
 ました。
 四〇〇 今もぐつたかとおもふ
 と、すぐに一びきくはへて、でて
 きます。
 四〇五 そこへともだちがきて、
 (略)。
 四一八 小さな虫がまへへくる
 と、ぱくつとくつて、(略)。
 四一九 (略)、下へもぐつて、
 (略)、ひとりでにうかぶやうに
 して、水の上へ出てきます。
 四二五 アル日母ガ「早く、早
 ク。」トヨンダノニ、(略)、スグ
 ニハキマセンデシタ。
 四三〇 今にあのあみをだんだ
 んはまべへひきよせてくると、
 (略)。
 四三六 貝ざいくを賣るみせで

買つてきたのです。」
 四三六 (略)、大キナカメガ出テ
 キテ、(略)。
 四三八 (略)、ウラシマノ來タノ
 ヲタイソウヨロコンデ、(略)。
 四三九 オモシロイアソビモ毎日
 見ルト、シマヒニハアキテキマ
 ス。
 四四二 ウラシマハ(略)、海ノ上
 へ出テ來マシタ。
 四四四 村の人人が、(略)を馬
 やくるまにつんで、賣りにき
 ます。
 四四六 カラスガ毎日トリニ來
 マスカラ、(略)。
 四四七 ケサモ五十ホドヒロツテ
 來マシタ。
 四四八 (略)下にまちかまへてゐ
 て、高いところからおひおろし
 て來るけものを、弓でいとい
 ちたのです。
 四四九 (略)あやしきが、上の方
 からよりとの居る方へか
 けおりて來ました。
 四五〇 牛ほどもある大きな
 のししで、(略)、土けむりをた
 てて、とんで來ます。
 四五二 あやしきはまつすぐにた
 だつねの方へ下りて來ます。
 四五三 もうすこしでよりとの
 ちかくへ來るかと思ふと、
 (略)。

四三八 窓 「コノアヒダ 大キナフカ
ガ 來タ 時ニ、(略)。
四三九 窓 ワニザメハ (略)、スグニ
ナカマ ヲ 大ゼイ ツレテ 來マシ
タ。
四四〇 窓 オレハ コノヲカヘ
來タカツノダ。」
四四一 窓 三郎ハ (略)、ヒマサヘア
レバ、母ノソバヘ 來テ、(略)。
四四二 窓 今モ 外カラカヘツテ、ス
グココヘ 來テ キル所デス。
四四三 窓 母ハ 來テ 見テ、「タイソウ
ヨク カザレマシタ。
四四四 窓 オチヨサンヤ オマツサ
ンヲ ヨンデ 來テ、オアソビナサ
イ。」
四四五 窓 (略)、へいけ方 から一そ
うの ふねを こぎ出して 來まし
た。
四四六 窓 春が 來た、春が 來た、どこ
に 來た。
四四七 窓 春が 來た、春が 來た、どこ
に 來た。
四四八 窓 春が 來た、春が 來た、どこ
に 來た。
四四九 窓 山に 來た、里に 來た、の
に 來た。
四五〇 窓 山に 來た、里に 來た、の
に 來た。
五六一 窓 山に 來た、里に 來た、の
に 來た。
五六二 窓 ソノ時 ヤタガラ ストイフ鳥ガ

出テ 來テ、(略)。
五六三 窓 (略)一羽ノ 金色ノトビガト
ンデ 來テ、オ弓ノサキニ トマリマシ
タ。
五六四 窓 それから 少し 來ると、高いが
けの上ヘ 出ました。
五六五 窓 だん／＼ 來ると、ひろい野は
らヘ 出ました。
五六六 窓 鳥は たのしさうに 時々 來て、
羽を ひたしました。
五六七 窓 それから 田や 畠の間を 通つて
來るうちに、(略)。
五六八 窓 (略)、右からも、左からも、
なかまが あつまつて 來て、いよく
にぎやかになりました。
五六九 窓 やがて 重い物が 私どもの上ヘ
來ましたから、(略)。
五七〇 窓 (略)、軽い物は 一しよに ここ
までも つて 來ました。
五七一 窓 こゝへ 來て 見ると、ひろく
として、どちらを 見ても 水ばかりで
す。
五七二 窓 おはなは 戸だなの中 から一ぼ
ん 大きな さらを 持つて 來ました。
五七三 窓 昔 雄略天皇が (略)、こを た
くさん 集めて 來いとおほせになりま
した。
五七四 窓 すがるは (略)、たくさんの
子どもを もらつて、つれて 來ました。
五七五 窓 (略)、むかへに 來た人もあり、
見おくりに 來た人もあつて、(略)。
五七六 窓 (略)、むかへに 來た人もあり、

見おくりに 來た人もあつて、(略)。
五七七 窓 えきふが (略)、山のやうに
荷物をつんで 來ました。
五七八 窓 まだむかふから いそいで 走つ
て 來る人があります。
五七九 窓 ある日 友吉と 音次郎の二人が
よそから かへつて 來る道で、(略)。
五八〇 窓 (略)、雨も つよく ふつて きま
した。
五八一 窓 (略)、アンドン ハダンダンニ
スタレテ 來マシタ。
五八二 窓 「ねえさんの 所からお手紙
が 來てゐます。
五八三 窓 イサマシイ タイコノ音ガ 森ノ
中カラ キコエテクル。
五八四 窓 ソノ時 後ノ方カラ カリウドノ
來ル音ガ シタノデ、(略)。
五八五 窓 タクマシイ 大キナカリ犬ガ 四
五匹 デ オツカケテ 來マス。
五八六 窓 (略)火の 明りを たよりに た
づねて 行つて、一人の かりうどを つ
れて 來た。
五八七 窓 ツバメハ 暖ニナルト、ドコカ
ラ カトンデ 來テ、涼シクナルト、マ
タ ドコカヘ トンデ 行ク。
五八八 窓 ガンハ ツバメノカヘル ジブン
ニ 來テ、ツバメノ來ル ジブンニ カヘ
ル。
五八九 窓 ガンハ ツバメノカヘル ジブン
ニ 來テ、ツバメノ來ル ジブンニ カヘ
ル。
五九〇 窓 モウ 秋ニ ナツタカラ、ガンガ

オヒオヒ トンデ 來ル。
五九一 窓 その時 一人の子どもは 大きな
石を 持つて 來て、力まかせに 投げつ
けました。
五九二 窓 (略)、二人が 店の ずをして
ゐると、一人の男の子が ふでを 買ひ
に 來た。
五九三 窓 かへつて 來ると、(略)。
五九四 窓 木村さんが 遊びに 來た。
五九五 窓 (略)かへつて 來て、光秀を
うちほろぼしました。
五九六 窓 そこで 支那も おそれて、わほ
くを 申しこんで 來ましたが、(略)。
五九七 窓 (略)、その使の もつて 來た文
の中に、(略)。
五九八 窓 熊ガ人ニ ムカツテ 來ル 時ニ
ハ、後足デ 立上ツテ、(略)。
五九九 窓 ソレヲ人ガ 後カラ 拾ツテ 來ル
コトガ アリマス。
六〇〇 窓 オキノ方カラ 黒クヌツタ 船ガ
ハイツテ 來ル。
六〇一 窓 白イ帆ヲ アゲタ 帆カケ船モイ
クツト ナク ハイツテ 來ル。
六〇二 窓 (略)、何か あちらでとゝの
へて 來る物が ございますなら、御
ゑんりよなく おつしやつて 下さい。
六〇三 窓 (略)、種物屋から 西洋西瓜
の種を 三色ばかり 買つて 來ていた
きたう ございます。
六〇四 窓 (略)、これも 二三種 買つて
來ていた きたう ございます。
六〇五 窓 (略)、さなぎが 蝶のやうな 形

になつて、藪を破つて出て来る。
 七三六 蛾は(略)、出て来ると、すぐに紙の上において卵を産みつけさせる。

七三一 色々ナ店ノ前ヲ通ツテ、(略)、知ラズくニ出口ヘ出テ来ル。

七三九 (略)、大そうよい馬を賣りに来た者がありました。

七八一 園 今日このなつかしい學校へ来て、(略)。

七八四 園 急に暴風雨が来ると、山の様な波が立つて、(略)。

八九九 園 この間にいさんがかへつて来ましたので、(略)。

八二八 園 段々おかあさんに似て来ます。

八二一 園 (略)、毎年一羽つつしか出て来ない。

八三六 その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て来ました。

八四三 取りもどして歸つて来ると、(略)。

八四六 (略) 下女がぼけつをさげて、牛小屋から出て来ました。

八六九 二三ヶ月立つてから、前の友だちが来て、(略)。

八四二 だんく下火になつて来てうれしい。

八四六 園 「東京のをちさんから火事見まひの電報が来た。」

八八四 敵ノ彈丸ハ雨アラレノ様ニ飛ンデ来ル。

八八四 之ヲ見タ敵ハ更ニ新テ加ヘテ、フタ、ビ攻メヨセテ来タ。
 八九四 園 其ノ時ハスグ馬ヲ引イテ来イ。

九三九 中には(略)、馬に乗つて来た人もある。

九四〇 やがて五人の騎手は(略)、鳥居の下へ集つて来た。

九四九 犬を連れた男が(略)、森の蔭から出て来て、(略)。

九四九 志望者は五十人ばかりも来たが、(略)。

九四九 (略)、知名の人の手紙を持つて来た者も大勢あつたのに、(略)。

九四九 園 談話最中一人の老人がはいつて来ましたが、(略)。

九四九 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて来た。

九四九 (略)、前の馬主が再び馬をひいて来て、(略)。

九四九 (略)、山のやうな雪なだれがなだれて来て、(略)。

九四九 聴衆は四方から集つて来て、見る内に人山を築いた。

九四九 (四) 1 クルル (一フ) くるる (狂) 綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルルガ如ク、機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

くるる (副) 3 クルクル くるく

一四九 園 カゼニクルクル カザグルマ。ミヅニグルグル ミヅグルマ。

一四九 カゼガフイテ、イロイロナ木ノハガトンデキマス。(略)。
 クルクル マハツテ、(略)。

九五一 園 赤き帽子のトルコ人、長き白布くるくと頭に巻ける印度人、(略)。

くるる (副) 2 グルグル ぐるぐる 一四九 園 カゼニクルクル カザグルマ。ミヅニグルグル ミヅグルマ。

四七七 さをのさきの扇を(略)。(略) 扇は風にふかれて、ぐるぐるまはつてゐます。

くるし (苦) (形) 1 苦し (一シカラ) ぐみぐるし

一四九 園 貧賤なる者必ずしも苦しからず。守る所正しければ、心に憂苦なく、行ふ所直ければ、身常に自由なり。

くるしい (苦) (形) 2 苦しい (一イ)

四六七 園 (略) 風ヲヒイテネテキマス。(略)。(略) 苦しいコトハゴザイマセンカ。」

八四九 何モシナイデ遊ンデキルノハ樂ナヤウニ見エルガ、却ツテ苦しいモノデアル。

くるしさ (苦) (名) 2 苦しき

一四九 園 (略)、田うゑや草取りの苦しきも、取入れのいそがしさも、全くわすれてしまひます。

九四八 園 さていよく沙漠に入りし

が、木のかげ一つもなき砂原つゞきなれば、其の苦しさとへんに物なし。

くるしむ (苦) (四・五) 6 クルシム 苦しむ (一ミーム・ーン)

四八二 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、マヘヨリモカハツテイタクナツテ、ナホナホクルシンデキマシタ。

八四八 園 諸君我を苦しめんとして、(略)少しも食物を送らざるが故に、新しき血出來ずして、諸君は皆却つて自ら苦しむにいたり。

一四九 園 時間の貴きを知る者は無爲に苦しむことなし。

一四九 園 先づ苦しみて然る後に樂しむを賢者とし、(略)。

一四九 園 (略)、先づ樂しみて然る後に苦しむを愚人とす。

一四九 園 世を憤り、人をねたみ、身をはかなみて自ら苦しむは、百害あるも一利なし。

くるしむ (苦) (下二) 2 苦しむ (一メ)

八四六 園 諸君我を苦しめんとして、此の數日間少しも食物を送らざるが故に、(略)。

一四九 園 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

くるしめる (苦) (下二) 1 苦しめる (一メル)

六59 1 国 「略、敵の國の人には何

のうらみもない。それを苦しめるのはかはいさうだ。」といつて、じぶんの國から塩を送らせた。

くるま「車」(名) 19 クルマ くるま車 ひとぐるま・いとびぐるま・いとびのくるま・おうぎくるま・かざぐるま・かたぐるま・にくるま・ねこくるま・みづくるま

一16 4 ウマクラクルマ

一38 1 国 クルマ ニツンダ タカラモノ、イヌガヒキダス エンヤラヤ。

四3 3 村の人人が、毎日やさいやすみやたぎぎを馬やくるまにつんで、賣りにきます。

四6 4 国 「それでは今くるまのとほつてある長いはしが、(略)。」

四7 5 国 「くるまにのつてある人を入れると、六人でせう。」

五12 2 (略)、はしがかけてあつて、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

五40 7 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ました。

五42 7 (略)、道ヲ通ツテキル人モ、馬モ車モ今見エタカト思フト、(略)。

六80 1 オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。

八14 2 町ハ段々人通りガ多クナツテ、車モ通り、馬モ通ル。

八32 2 又車のわを打つてゐた事もあ

つた。

九31 1 蒸氣機關は(略)。(略)、又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、(略)。

九33 4 スチブンソンは略、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、(略)。

九66 8 国 (略)、唐箕の車をまはして、もみとしひなとをあふぎ分くるが如き皆然り。

十一24 7 国 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形状も様々なり。

十一25 1 国 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車の兩輪の如し。」といへども、(略)。

十一28 10 国 軍事上用ふる車には、砲車・材料車・輜重車等種々あり。

十二38 10 国 相如開きて、力めて之を避け、廉頗の來るを見れば、車を轉じて逃ぐ。

十二98 10 国 道を行くにも、舟・車に乗るにも、旅館に宿るにも、自ら公衆に對する禮儀あり。

くるまとふね「課名」2 車と船
十一目8 第七課 車と船
十一24 6 第七課 車と船

くるまゆり「車百合」(名) 1 車ユリ
十8 3 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イデキル。

くるめ「久留米」(地名) 1 久留米

九25 国 久留米

くれ「呉」(地名) 3 呉 呉

十一19 国 呉

十二15 4 我が國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデアル。

十二15 6 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、安藝ハ呉デ造ツタノデアル。

くれ「暮」(名) 3 暮 ひとぐれ・ゆうぐれ

八34 1 (略)、去年の暮に死んでしまつた。

八37 9 国 (略)、北風寒きやぶかげに、びはの花咲く年の暮。

八60 8 国 春より先に咲く花は、比良の高ねの暮の雪。

グレースダーリング「人名」2 グレース、ダーリング

十68 8 国 燈臺番の娘にグレース、ダーリングとて心やさしき少女あり。

十一71 5 国 グレース、ダーリングの生家に程近き寺院の庭上には、右手にかいを握れる少女の銅像あり、永く此の勇ましく、やさしく、且は麗しき昔物語を語れり。

くれがた「暮方」(名) 3 くれがた 暮方

四16 1 三日目のくれがたのことです、(略)。

を流しながら、暮方まで働いてゐた。

十一48 4 遂に暮方になつた。

くれな「紅」(名) 2 紅

十27 8 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果てて、(略)。

十66 6 流れ出る血に紅の波がたゞよふ。

くれる「呉」(下二) 6 クレル くれる「レ」ひとくれる

五55 5 又鳥ノ方ヘ行キマスト、「オ前ハケモノダラウ。」トイツテ、アヒテニシテクレマセン。

六28 7 国 「私タチノサビルノハ皆人ガ使ハナイカラダス。モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、(略)。」

七42 1 国 このお金は私がこちらへまゐる時、『夫の一大事の折に使へ。』と申して、父の渡してくれた金でございます。

八32 8 僕の家で(略)、つくろひを頼んだ事があつたが、翌日すぐにこしらへてくれた。

九83 5 国 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「是非勝つてくれ。」

九83 6 国 「しつかりやつてくれ。」

くれる「暮」(下二) 4 クレル 暮れる「レ」

二25 2 モウ日ガクレマシタ。

五76 5 そのうちに日が暮れて、まっ暗になつてしまつた。

七10 4 国 ながい夏の日いつしか暮れて、うゑる手先に月がかけ動く。

十一486 間もなく日は暮れて、夜のときは全く馬主の行方をかくした。

くる「黒」(名) 4 黒ひまつくろ

七357 塗物に黄・赤・黒・青などさまざまの色あるは、(略)。

八754 猫ノ毛色ニハ黒・白・三毛ナド様々アレド、(略)。

九577 夕トヘバ、毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黃ト黒トノダンダラニテ、(略)。

十495 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、(略)。セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナナイ。

十一126 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、(略)。セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナナイ。

くろい「黒」(形) 11 クロイ くろい 黒い 「イー・ク」 ひまつくろい

一171 クロイネコシロイイズ

二105 黒イクロイ マツクロイ、スミノヤウナクモニ。

二105 黒イクロイ マツクロイ、(略)。

三97 くろい土「ひらがなのドリル」

三597 くろいけむりを出して走つていくきせんもあります。

五164 鯉ハ(略)。(略)、クロイデ

五165 ソノ色ニハクロイノモアリ、

赤イノモアリ、白イノモアツテ、(略)。

五352 蝶ニハ(略)、羽ノ色ニモ、白イノヤ、キイロナノヤ、黒イノヤ、

マダラナノヤサマルアリマスガ、(略)。

五506 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

六781 オキノ方カラ黒クヌツタ船ガハイツテ来ル。

七299 (略)、色もはじめは黒いが、だんくかはつて青白くなる。

くろうひまつくろう

くろうする「苦勞」(サ変) 1 苦勞スル「一シ」

十一126 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、(略)。セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナナイ。

くろえたかおかあいづめり「黒江高岡会津塗」(名) 1 黒江・高岡・會津塗

十二498 漆器は静岡、輪島塗、黒江・高岡・會津塗。

くろかわ「黒川」(地名) 1 黒川

十二41 黒川

くろし「黒」(形) 8 黒し「一キークーシ」

八837 アフリカ人は皮膚黒く、髪ちざれたり。

八837 我等日本人は髪も黒く、眼も黒く、皮膚の色は黄なり。

八838 我等日本人は髪も黒く、眼も黒く、皮膚の色は黄なり。

十522 老人かと思れば、髪つやくと黒し。

十528 殊の外白髪には成りたらんに、髪・ひげの黒きは如何に。

十533 「如何に、髪・ひげの黒きは。」

十二282 黒き影は城の一方より現れ出で、ひらりとばかり身を水中に投入れたり。

十二287 しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。

くろずむ「黒」(四) 1 黒ずむ「一ミ」

十495 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、(略)。セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナナイ。

くろぶくれ「黒膨」(名) 1 黒ブクレ

八302 内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

くろむ「黒」(四) 1 黒む「一ミ」

十一234 吹く塩風に黒みたるはだは赤銅さながらに。

くわ「桑」(名) 10 桑

七98 桑(略)、あちらこちらに桑つむをとめ、日まし／＼にはるごも太る。

七303 かへりたてから、しきりに食物をさがしてゐて桑の葉をやると、すぐ食ひはじめる。

七309 食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。

七311 大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、(略)。

七316 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、(略)。

九556 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、(略)。

九557 其ノ體色ノ桑ノ木ニ似タル上、(略)。

九559 其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ・メニ突出スルトキハ、(略)。

九5510 其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

十一1110 又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、(略)。

くわ「鐵」(名) 1 クハひまぐわ

八147 村デハ農夫ガクハヲカツイデ、タンボヘ出ル時デアル。

くわう「加」(下二) 9 加フ 加ふ「一フール・フレイヘ」

九267 二箇旅團の歩兵にそこぼくの騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へたるものを師團といふ。

九399 然レドモカノ名高キ箱根七湯ハ、(略)、浴客年ニ其ノ數ヲ加フ。

十477 若し此の模様は種々の色どりを加ふるときは、一層其の美しさを増すべし。

十485 例へば赤に青を加ふれば、紫となり、(略)。

十486 青に黄を加ふれば、緑となるが如し。

十一281 其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へた

るを以て、今や列車の速度は（略）に及ぶものあり。

十二39 ㊦ 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。

十二69 ㊦ （略）、温暖なる地方に移らんと欲するもの期せずして相集り、次第に其の數を加ふ。

十二77 ㊦ （略）、こゝにて船體に修繕を加へ、（略）。

くわう「箇」（下二）2 くはふ「へ」

十一81 ㊦ くはへたる魚をふりかへて、頭より吞下す早業は、鵜匠のなはさばきよりも一層の見物なり。

十一82 ㊦ 鰻をくはへてくちばしに巻附かれ、（略）。

くわうるに「加」（接）1 加フルニ

十一87 ㊦ （略）、今ハ僅カニ六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。加フルニ（略）太

キ絲（略）細キ絲、細大意ノマ、ニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。

くわえる「加」（下二）2 加ヘル加

へる「へ」

八87 ㊦ 之ヲ見タ敵ハ更ニ新^{アラテ}手ヲ加ヘテ、フタ、ビ攻メヨセテ來タ。

十18 ㊦ さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、（略）、幾度書直すかも知れない。

くわえる「箇」（下二）7 クハヘル

くはへる「へ」

二14 ㊦ 犬ガサカナヲクハヘテ、

ハシノウヘニキマシタ。

二15 ㊦ （略）、ミツノナカニモサ

カナヲクハヘタ犬ガキマス。

二15 ㊦ ホエルト、ロガイイテ、

クハヘテキタサカナハミツノ

ナカヘオチマシタ。

二51 ㊦ アル日犬ハオヂイサン

ノタモトヲクハヘテ、（略）。

三40 ㊦ うが（略）。（略）、すぐに

一びきくはへて、でてきます。

三41 ㊦ 見てゐるうちにまた一

びきくはへて、ういて出ます。

十二81 ㊦ 忠實な犬は古帽子をくはへ

て、（略）、道行く人の投與へる喜捨

を待ちわびてゐる。

くわし「詳」（形）2 クハシくはし

「しーシク」

十33 ㊦ ヨリテクハシク其ノ作方、

貯藏ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レ

リ。

十二88 ㊦ 事幕末の儒者林鶴梁の作

れる烈士喜劍碑の文にくはし。

くわしほちたるのくに「細戈千足國」

（地名）1 細戈千足の國

十一116 ㊦ 武勇のほまれ細戈千

足の國の名に負ひて、禮儀は早く唐

人も稱へし其の名君子國。

くわわる「加」（四・五）2 加ル加

る「りーール」

六14 ㊦ モシ列ニハナレルヤウナコト

ガアツテモ、ソノアヒヅヲ聞クト、

スグレニ加ルノデアル。

九44 ㊦ （略）、駱駝に乗りて隊商の

仲間に加り、大沙漠を往來するを業

とせり。

ぐん「軍」（名）8 軍ひだいにぐん・

ちゆうさつぐん

八91 ㊦ （略）、砲聲・銃聲ガツバク

ヤウナラ、我が軍ガ苦戦シテキルト

思へ。

十41 ㊦ 軍のおきてにしたがひ

て、他日我が手に受領せば、なみく

いたそり養はん。』

十一16 ㊦ （略）、呉の勢盛になりて、

會稽山の戰に越の軍を打破りたり。

十一106 ㊦ 蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國

ニ歸ラントス。

十一106 ㊦ 蜀ノ軍少シモサワガズ、

旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハ

ントスルモノノ如シ。

十二10 ㊦ 我が軍の死傷甚だしく、

沈没したるもの僅かに水雷艇三隻に

止れり。

十二10 ㊦ 殊ニ我が軍ノ損失・死

傷ノ僅少ナリシハ（略）。

十二56 ㊦ （略）、我が軍は苦戦十一

箇月にして之を陥れたり。

ぐん「郡」（名）1 郡ひふけんぐんし

かい・ふけんぐんしちようそんかいぎ

いん・いちぐん

十二102 ㊦ 我が國の地方自治團體

は、府縣・市の二級或は府縣・郡・

町村の三級に分れたり。

ぐんかいぎいん「郡會議員」（名）1

郡會議員

十二34 ㊦ （略）郡長・警察署長・郡

視學・町長・郡會議員・町會議員・

學務委員・有志者、其ノ他工事關係

者一同新校舍ニ參集シ、（略）。

ぐんかん「軍艦」（名）10 軍カン

艦ひしうぐんかん・ていこくぐん

かん

六27 ㊦ （略）小サイ物カラ、キク

ワン車・軍カンノヤウナ大キナ物マ

デ、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコ

トガ出來マセン。

七72 ㊦ 軍カンヤ汽船ハ時々カキヲ

カキオトサナケレバナライ程デア

ル。

七81 ㊦ 汽船も軍艦も御存じでせ

う。

九18 ㊦ （略）、ある日我が軍艦高千穂

の一水兵が女手の手紙を読みながら

泣いてゐた。

十一24 ㊦ いで、軍艦に乘組みて、

我は護らん、海の國。

十一29 ㊦ 大小幾多の軍艦は海上の

浮城とも稱すべく、遠く四方に航行

して、到る處に國光をかゞやかせり。

十一29 ㊦ 諸子ハ數多アル我が軍艦

ノ名ヲ知レルナルベシ。

十一32 ㊦ 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ

情勢ヲサグリ、（略）。

十一33 ㊦ （略）、或ハ敵ノ運送船・

商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

十一342 通報艦ハ（略）、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が艦隊ニ報告ス。

ぐんかんちゅう「軍艦中」(名) 2 軍艦中

十一318 戦艦ハ軍艦中最モ優勢ナルモノニシテ、(略)。

十一324 巡洋艦ハ軍艦中最モ任務ノ多キモノニシテ、(略)。

ぐんき「軍旗」(名) 1 グンキ
一286 ヘイタイガ ナランデキマ
ス。(略)。アレガ グンキデス。

ぐんこう「勲功」(名) 1 勲功
十二805 (略)、皇后モ亦コロンプ
スを引見して、厚ク其の勲功を賞せ
り。

ぐんこう「軍功」(名) 1 軍功
十855 (略)、將卒と共に戦場をかけ
めぐつて、勇士に軍功を立てさせる
ものは馬である。

ぐんし「君子」(名) 2 君子
十二953 魯人は君子の道を以
て其の君を輔くるに、我が臣の行ふ
所は禮に反す。

十二955 「君子は過あれば謝す。
ぐんし「軍師」(名) 1 軍師
十一1032 孔明、劉備ニ事へ、出デ
テハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツ
テハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、(略)。

ぐんじ「軍事」(名) 2 軍事

九294 (略)、内外古今ノ武器其ノ
他軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九298 益次郎ハ維新ノ際軍事ニ功
勞多カリシ人ナリ。

ぐんしがく「郡視學」(名) 1 郡視學
十二345 (略) 郡長・警察署長・郡
視學・町長・郡會議員・町會議員・
學務委員・有志者、其ノ他工事關係
者一同新校舍ニ參集シ、(略)。

ぐんしこく「君子國」(名) 1 君子國
十一1169 武勇のほまれ細戈千
足の國の名に負ひて、禮儀は早く唐
人も 稱へし其の名君子國。

ぐんじじょう「軍事上」(名) 3 軍事上
九274 師團司令部のある所は東京
・大阪・名古屋・廣島・熊本等軍事
上重要な地なり。

十一2810 軍事上に用ふる車には、
砲車・材料車・輜重車等種々あり。

十一295 空中の交通開始せられ、
又其の軍事上に應用せらるゝも決し
て座上の空談にあらずんとす。

ぐんしゅう「群集」(名) 1 群集
ぐんしゅう「群集生活」(名) 1 群集生活
十一88 蜜蜂の群集生活を營むを
得るは、共同團結して勞働をいとは
ず、(略)、團體の爲には身命をし

十二803 かくてコロンプスは報告
の爲、西班牙に歸航せしが、パロス
港の群集は出帆の日に數倍し、(略)。

ぐんしゅうせい「群集生活」(名) 1 群集生活
十一88 蜜蜂の群集生活を營むを
得るは、共同團結して勞働をいとは
ず、(略)、團體の爲には身命をし

十二803 かくてコロンプスは報告
の爲、西班牙に歸航せしが、パロス
港の群集は出帆の日に數倍し、(略)。

ぐんしゅうせい「群集生活」(名) 1 群集生活
十一88 蜜蜂の群集生活を營むを
得るは、共同團結して勞働をいとは
ず、(略)、團體の爲には身命をし

十二803 かくてコロンプスは報告
の爲、西班牙に歸航せしが、パロス
港の群集は出帆の日に數倍し、(略)。

ぐんしゅうせい「群集生活」(名) 1 群集生活
十一88 蜜蜂の群集生活を營むを
得るは、共同團結して勞働をいとは
ず、(略)、團體の爲には身命をし

十二803 かくてコロンプスは報告
の爲、西班牙に歸航せしが、パロス
港の群集は出帆の日に數倍し、(略)。

ぐんしゅうせい「群集生活」(名) 1 群集生活
十一88 蜜蜂の群集生活を營むを
得るは、共同團結して勞働をいとは
ず、(略)、團體の爲には身命をし

まざるによる。

ぐんしよ「軍書」(名) 1 軍書
十一54 歌書よりも軍書にかな
し吉野山。

ぐんしん「君臣」(名) 1 君臣
十一1164 神代はるけき昔より
君臣分は定まりて、萬世一系動きな
き 我が皇室の大みいつ。

ぐんしん「軍神」(名) 2 軍神
八84 (略)、ソノ中デモ海軍ノ廣瀬
中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ軍神ト
マデイハレタ。

八927 (略)、軍神トイハレル程ニウ
ヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリ
ツバデアツタカラデアル。

ぐんしん「群臣」(名) 1 群臣
十二953 景公歸りて群臣に告げて
曰く(略)。

ぐんじん「軍人」(名) 24 軍人
八84 (略)、君ノタメ國ノタメ、名
譽ノ戦死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツ
タガ、(略)。

八846 橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太
子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツ
タ。

八905 此ノメデアイ日ニ討死スル
ノハ軍人ノ面目ダ。

八925 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、
勇氣ニミチタ軍人デ、(略)。

九194 軍人となつて、いくさに出
たのを男子の面目とも思はず、其の
有様は何事だ。

十566 兵器は軍人のたましひに
候へば、其の入手は最も念入に致し
候。

十二536 商人ハ軍人ノ戦場ニ立ツ
ト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以
テ、平和ノ戦争ニ従事スベシ。

十二1098 天皇陛下を大元帥と仰ぎ
奉り、國民皆兵なる今の大御代、國
民たる者は皆軍人たる心得なかるべ
からず。

十二1099 明治十五年軍人に下し給
へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽に
すべからざるものなれ。

十二1107 朕は汝等軍人の大元帥な
るぞ。

十二1110 さて軍人の心得として次
の五箇條を諭し給へり。

十二1112 一には、軍人としては忠
節を盡すを本分と爲すべし。

十二1116 (略)、軍人たる者は一途
に忠節を重んじ、國家の大事に際し
ては、身命をすつること鴻毛よりも
輕き覺悟なかるべからず。

十二1121 一には、軍人は禮儀を正
しくすべし。

十二1127 禮儀を守る心得を缺ける
軍人は國家としても許し難き罪人ぞ
と諭し給ふ。

十二1129 一には、軍人は武勇を尚
ぶべし。

十二1131 血氣にはやりて、粗暴の
所行あるものは小勇の人にして、眞

正の軍人にあらず。

十二113 5 一には、軍人は信義を重んずべし。

十二114 2 一には、軍人は質素を旨とすべし。

十二114 5 此の風一度軍人の間に起りては、士氣も兵氣も衰ふべければ、(略)。

十二114 9 以上の五箇條即ち忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、(略)。

十二115 5 此の勅諭は特に軍人に賜へるものなれども、(略)。

十二115 5 此の勅諭は特に軍人に賜へるものなれども、獨り軍人としての心得なりと思ふべからず。

十二117 2 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

ぐんじんにたまわりたるちよくゆ

〔課名〕2 軍人に賜はりたる勅諭

十二114 第二十七課 軍人に賜はりたる勅諭

十二109 6 第二十七課 軍人に賜はりたる勅諭

ぐんぜい「軍勢」(名)5 ぐんぜい

軍ぜい 五74 3 へいけのぐんぜいがふくはらのしろを守つてゐる。

五75 2 げんじは二手に分れて、のり

よりのぐんぜいは東の門へ向ひ、(略)。

五75 3 (略)、よしつねのぐんぜいは西の門へ向つた。

五80 5 へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。

五81 5 これを見た三千人の軍ぜいは、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。

ぐんそう「軍曹」(名)4 軍曹ひいちぐんそう

八88 9 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクマリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。

八89 3 (略)、一彈又モ中佐ノ胸ヲツラスキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。

八89 5 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トモニ中佐ヲイタハツタ。

八90 7 軍曹ハ自分ノ重傷ヲモウチ忘レテ、アランカギリノ力ヲツクシタガ、(略)。

ぐんたい「軍隊」(名)3 軍隊 十二110 2 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを論し給ひ、(略)。

十二111 5 一片忠節の心なからんには、(略)。此の如き人の組織せる軍隊は即ち烏合の衆に同じ。

十二115 9 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得な

くして如何でか日常の社會に立たんや。

ぐんちゅう「軍中」(名)1 軍中 十一58 10 將軍の愛情と勇氣によつて、軍中の花が助かつたので、全軍一同に歡喜の聲をあげた、(略)。

ぐんちゅう「群中」(名)2 群中 十一57 7 蜜蜂は群を爲して(略)。群中には必ず雌蜂・雄蜂・働蜂の三種あり。

十一8 3 (略)、他群の蜂、我が群中に入り來れば、直ちに之をさし殺す。

ぐんちよう「郡長」(名)2 郡長 十二34 4 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集シ、(略)。

十二35 4 郡長ハ左ノ祝文ヲ讀ンダ。

ぐんとう「軍刀」(名)2 軍刀 八86 6 中佐ハ(略)、左手ニ軍刀ヲ持ツテ部下ノ兵士ヲハゲマシ、トウ／＼山上ノ敵ヲ追拂ツテ、(略)。

八88 8 中佐ハ目ヲ見張りテ、軍刀ヲ杖ニ起上ラウトスル。

ぐんばいうちわ「軍配」(名)1 ぐんばいうちは 六57 2 信玄は(略)。ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、かた先へ切りつけられた。

ぐんび「軍備」(名)1 軍備 十一105 1 (略)、孔明謀ヲ以テ其

ノ將孟獲ヲ捕へ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。

ぐんま「群馬」(地名)2 群馬

十二49 2 養蠶業の盛大は長野・埼玉きて群馬、海なき縣に著し。

十二49 4 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も古く其の名を知られたり。

ぐんむ「軍務」(名)1 軍務 十26 5 拜啓、いよく來月一日より御入營、軍務に服せられ候事、御一家を始め一村の名譽に御座候。

ぐんよう「軍用」(名)1 軍用 十二46 5 (略)、善良なる耕作用の牛馬、強健なる軍用の馬匹、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

ぐんりつ「軍律」(名)1 軍律 十一105 9 或時將軍馬護、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。孔明、(略)、軍律ヲ亂サントコトヲ恐レ、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、(略)。

ぐんれい「軍令」(名)1 軍令 十一105 8 或時將軍馬護、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。

ぐんろう「勲勞」(名)1 勲勞 十二106 5 (略)、國家に勲勞あり又は學識あるものより勅任せられたるもの、(略)。

け

け「毛」(名) 8 毛 凸いとげぐるま・

いとげのくるま

四五六 〇 (略)、白ウサギノ毛ヲミ

ンナムシリトツテシマヒマシタ。

六三五 〇 (略)、ケモノノ毛ヲツムギ

テ織リタルモノヲ毛織物トイフ。

六六五 一 熊ノ毛色ハ (略)、ムネノ所ダ

ケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。

七六〇 〇 犬の種類ハ (略)。(略)。

毛のいたつて短きものは指さきにて

もつまぬ程なれど、(略)。

七六〇 五 〇 (略)、長きものは半の如く、

立ちてもその毛はなほ地面に達す。

八七四 五 〇 猫ノ口ニハ (略)。又其ノ

舌ニハ内方ニ向ツテハエタル太キ毛

ノ如キトゲアリ、(略)。

十八七 一 羊ヤ山羊ハ毛が必要である。

十二四五 六 〇 (略)、又衣服の原料も綿

・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求

むること少かりしによる。

け「氣」凸あぶらけ・しおけ・しるけ・

ねばりけ・みずけ

げ凸おそろしげ・かるげ・しんばいげ

け「形」凸えんすいけい・えんとうけ

い・じゅうけい・だえんけい・はっ

かつけい

けい「計」(名) 2 計

十二二六 九 〇 武田勝頼 (略)、攻めあ

ぐみて長圍の計を取り、柵を城外に

廻らし、縄を城下の河中に張りて、

(略)。

十二二七 四 〇 〇 「敵は長圍の計を取れ

るに、我は糧食殆ど盡きたり。

けい「景」(名) 1 景 凸につぼんさん

けい

八五九 七 〇 〇 琵琶の形に似たりとて、

其の名をおへる湖の (略)、あかぬ

ながめは八つの景。

けいあいす「敬愛」(サ変) 1 敬愛す

「一セ」

十一一五 九 〇 〇 村長は村の舊家に生れ、

極めて親切公平なる人なれば、深く

村民に敬愛せられ、幾度の改選にも

常に選舉せられて、(略)。

けいえい「經營」(名) 2 經營 凸せん

ごけいえい

十一三五 一〇 〇 〇 當總督府の經營も着着

其の効を見るに至り候事、かねて御

承知の通りに候處、(略)。

十一一〇 一 〇 〇 五十度以南我が帝國の

領土となりしより、諸種の經營追々

成功致候へども、(略)。

けいかいしよく「警戒色」(名) 1 警

戒色

九五七 六 〇 (略)、他ノ動物ハ其ノ體色

ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之

ニ近ツコトナキガ故ニ、却ツテ其

ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。

此ノ種ノ體色ヲ警戒色ト名ヅク。

けいかく「計画」(名) 1 計畫

十二六四 一〇 〇 〇 凱旋門は有名なるナポレ

オンの計畫に成れるものにて、(略)。

けいかくする「計画」(サ変) 1 計畫

スル「一シ」

十二三五 〇 〇 就學兒童ノ數ガ年々増加

シ、(略)、此ノ改築ヲ計畫シ、今新

校舎ノ出來上ツタノハ眞二慶賀スベ

キ事デアル。

けいがする「慶賀」(サ変) 1 慶賀ス

ル「一ス」

十二三五 〇 (略)、今新校舎ノ出來上ツ

タノハ眞二慶賀スベキ事デアル。

けいぎせん「京義線」(名) 1 京義線

十二五七 〇 〇 京義線

けいぐ「敬具」(感) 3 敬具

九七五 七 〇 〇 御見舞狀有りがたく拜讀

仕候。(略)。取急ぎ御禮かたがた右

御報申上候。敬具。

十二七 四 〇 〇 拜啓、(略)。(略)。(略)、

手紙を以て御祝ひ申上候。敬具。

十一六三 七 〇 〇 拜啓、益々御健勝賀し

奉り候。(略)、此段御案内申上候。

敬具。

けいこ「警固」(名) 3 警固

十一一三 七 〇 〇 御供仕うまつれる警固の

武士もよろひの袖をしぼらざるはな

かりき。

十一一五 二 〇 〇 臨幸餘りにおそかりしか

ば、人をしてうかゞはしむるに、警

固の武士、(略)山陰道へかゝりて

遷幸をなし奉るといふ。

十一一六 二 〇 〇 翌朝警固の武士ども之を

見つけて、(略)、讀みかねて上聞に

達したり。

けいこう「景公」(人名) 5 景公

十二九四 二 〇 〇 齊の景公も亦道を孔子に

問へり。

十二九四 五 〇 〇 「君君たり。臣臣たり。

父父たり。子子たり。」とは孔子が

景公に教へたる語なり。

十二九四 七 〇 〇 或時齊の臣景公に告げて

曰く、「魯孔子を用ふ。或は齊を危く

することあらん。」と。

十二九四 九 〇 〇 景公よりて魯と好を結ば

んが爲に魯公と會見す。

十二九五 二 〇 〇 景公歸りて群臣に告げて

曰く「(略)。我、罪を魯君に得たり、

如何にせば可ならん。」と。

けいこうてんのう「景行天皇」(人名)

2 景行天皇

九四九 〇 〇 人皇第十二代景行天皇の御

代、東國の蝦夷叛きしかば、天皇日

本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

九六二 二 〇 〇 蝦夷は東北の地に住して、

叛服常ならず、景行天皇の御代日本

武尊之を征し給ひ、(略)。

けいざい「經濟」(名) 2 經濟

十一六四 〇 〇 同ジ材料デモ、(略)、料理

ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニ

モ大イナル得失ガアル。

十一六四 八 〇 〇 材料ノ種類ヤ料理ノ方法

ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨ

リ考ヘナケレバナラス。

けいざいじょう「経済上」(名) 1 經濟上

十一64 10 (略)、經濟上ヨリハ、成ルベク價ノ安イモノヲ求メ、ソレヲ成ルベクスタリノナイ様ニ用フベク、(略)。

けいざつしよ「警察署」(名) 2 けいざつしよ

四17 がくかうの西となりはやくばで、やくばのまわひがけいざつしよです。

四18 けいざつしよのよこを(略)、左がはにいうびんきよくがあります。

けいざつしよ「警察署長」(名)

1 警察署長

十二34 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舎ニ參集シ、(略)。

けいさん「計算」(名) 1 計算

十82 5 彼等は元は読み書きも知らず、算數の考もとほしかりしが、今は内地人と同じく、読み書き・計算をもなし得るものあるに至り、(略)。

けいじ「いぢいけいじ」

けいじ「す」[揭示](サ変) 1 揭示す

「一セ」

十二17 7 是等の豫報は氣象臺・測候所を始め、官廳・諸役所等の前に揭示せらるゝを以て、我等は之を見て、明日の天氣如何を豫知すること

を得べく、(略)。

けいじょう「形状」(名) 1 形状

十一24 8 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形状も様々なり。

けいじょうちほう「京城地方」(名) 1

京城地方

十一110 7 京城地方の婦人がたまく外出する時には、うちかけの様なものをかぶつて、(略)。

けい「す」[敬](サ変) 1 敬す「一シ」

十二112 6 下は上を敬し、上は下をあはれみ、一致協同して王事に勤むべし。

けいぞう「いおかだけいぞう・おかだけいぞうさま」

けいたい「形体」(名) 1 形体

十一34 8 水雷艇ハ形體甚ダ小ナレドモ、速度驅逐艦ニ次ギ、(略)。

けいたい「境内」(名) 5 境内

九28 8 靖國神社ハ(略)。(略)。

けい「内ニハ櫻最モ多ク、(略)。

九82 8 (略)、祭の當日には、おびたしい見物人が朝早くから宮の境内へつめかけた。

十94 6 此ノ寺ハ(略)、昔ハ境内方四町堂塔雜舎ノ數百七十五アリ、規模極メテ大ナリシガ、(略)。

十95 1 (略)等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境内ニ在リ。

十97 2 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。

けいちよう「輕重」(名) 1 輕重

九25 8 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵は何れも戰爭に必要にして、其の任務には輕重の別あることなし。

けいてい「いぢいかいいてい」

けいにく「鶏肉」(名) 1 雞肉

十87 10 (略)、雞卵や雞肉の養分の多いことは知らぬ人はない。

けいはく「敬白」(感) 2 敬白

九44 4 十二日附の御手紙今朝到着拜見仕候。(略)、御歸りの程御待ち申上候。敬白。七月十五日増太郎 父上様

十一62 10 拜啓来る十五日は亡父七回忌に相當り候に付、(略)、御參列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。敬白。

けいひ「經費」(名) 4 經費

十一113 8 (略)、其の翌年學校の經費を議するに當り、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。

十一113 10 「不作の後なれば、成るべく經費を節約したとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」

十二34 9 敷地總坪數何千坪、建坪何百何十坪、之二要シタ經費ハ總計何萬何千圓、(略)。

十二103 4 (略)、市町村長・參事會員等の其の事務を處理するも、議員の經費を議するも、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。

けいふ「輕浮」(名) 1 輕浮

十二114 3 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、心も無下に賤しくなりて、節操も武勇も忘れ果てて、(略)。

けいぶ「輕侮」(名) 2 輕侮

十二101 1 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、却つて我が國民の度量の狭く、品格の低きを示す所以にして、(略)。

十二112 5 (略)、上官の者は常に下級の人をいたはりて、いさゝかも輕侮の念を有すべからず。

けいべんてつどう「輕便鐵道」(名) 2 輕便鐵道

十一97 5 所在地豐原あり、(略)、輕便鐵道も出來居候。

十二58 3 安奉線は(略)。此の鐵道は日露戰役中に急設したる輕便鐵道にして、(略)。

けいほう「警報」(名) 2 警報

こくぼうふうけいほう・ちほうぼうふううけいほう・てんきよほうおよびぼうふううけいほう

十二18 4 又一地方に荒模様ある時は、測候所は地方暴風雨警報を發して之を豫告し、警報の信號を各信號所に掲ぐ。

十二18 4 信號は警報の種類により

て異なり。

けいほうせん「京奉線」(名) 1 京奉線
ひしんこくけいほうせん

十二57図 京奉線

けいらん「鶏卵」(名) 1 鶏卵

十8710 (略)、鶏卵や鶏肉の養分の多いことは知らぬ人はない。

けいれい「敬礼」(サ変) 1 敬禮する「し」

九2310 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。

けいろ「毛色」(名) 4 毛色

六648 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。

八758図 タマ猫ノ毛色ニハ黒・白・三毛ナド様々アレド、虎ハ一様ナリ。

八758図 猫ノ中ニモ其ノ毛色虎ニ似タルモノアリ、之ヲ虎猫トイフ。

九549図 タトヘバ北國ニスム野ウサギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、(略)。

けおりもの「毛織物」(名) 3 毛織物

六334図 織物ニハキヌ織物・モメン織物・アサ織物・毛織物ナドイロくアリ。

六356図 フランネル・ラシヤ・メリンスナドノ如ク、ケモノノ毛ヲツムギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。

十872 羊や山羊は毛が必要である。長くのびると、刈取つて毛織物の材料にする。

料にする。

けかい「下界」(名) 1 下界

十二195図 天氣圖とは(略)一般の天氣要素を地圖の上に記載し、あたかも天上より下界を見下すが如く、一目に全國天候の如何を示すものなり。

けがす「汚」(四) 1 けがす「し」

十二987図 市街・道路を不潔にし、官廳・學校・神社・佛閣等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。

けがわ「毛皮」(名) 1 毛皮

九893図 貨幣トシタル物品ハ時代ニヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。貝・毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコトアリ。

げきけんか「撃剣家」(名) 1 撃剣家

十782図 撃剣家・水夫等ノ手ノ太キ、(略)、ヨク之ヲ使用スルヲ以テナリ。

げきせんち ひめいじさんじゅうしちはちねんせんえきげきせんち

げきたい「撃退」(サ変) 1 撃退スル「スル」

八878 中佐ハ「略」、全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。(略)。「トサケンデ部下ヲハゲマシ、敵ヲ撃退スルコト數度ニ及ンダ。

げきちん「撃沈」(サ変) 4 撃沈ス

撃沈す「し」スル「セ」

十一346図 驅逐艦ハ「略」、敵艦ニ近ヅキ、魚形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈

シ、又敵ノ水雷艇ヲ驅逐・撃破スルヲ目的トス。

十一349図 水雷艇ハ「略」、敵艦ニ近ヅキ、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃沈スルヲ任務トス。

十一3410図 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、水雷ヲ放チテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目的トス。

十二99図 (略)、敵艦の大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。

げきちん「捕獲」(サ変) 1 撃沈・捕獲ス「ス」

十一331図 巡洋艦ハ「略」、或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

げきは ひくちくげきはす
げきよ「げきよ」(感) 1
げきよ、げきよ、げきよ、げきよ

四652 ほうほげきよ、ほうほげきよ。うぐひすがないてゐます。

げきよ、げきよ、げきよ、げきよ。

げく「外宮」(名) 1 外宮

八75図 宿に歸りて一休みの後、外宮に参拜す。神殿の御有様、おほよそ内宮に同じと見奉る。

けごん「華嚴」(地名) 2 華嚴

十一759図 中にも華嚴・霧降・裏見を日光の三大瀑布と稱す。

十一7510図 最も壯觀なるは華嚴にして、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

けごん「華嚴」(地名) 2 華嚴
瀧 華嚴瀧

九961図 此の湖の落口は華嚴瀧となる。直下七十丈、壯觀名狀すべからず。

十一758図 日光山には華嚴瀧を始として、霧降・裏見・方等・般若等其の名世に知られたるもの少からず。

けさ「今朝」(名) 8 けさ けさ 今朝

二284 けさハカラスノナクコエモ、ウレシサウニキコエマス。

四93 私ドモノガクカウデモ、ケサ天長セツノシキガアリマシタ。

四126 コノゴロハクリノオチルジブンデ、(略)。ケサモ五十ホドヒロツテ来マシタ。

四623 けさおきて見ると、雪がたくさんつもつて、(略)。

六118 晩にはくたびれた足をのぼして、けさまで一眠に眠りました。

八459図 それが東京の今朝の新聞に出たので、お分りになつたのにながひない。

九4210図 十二日附の御手紙今朝到着拜見仕候。

九437図 (略)、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなど御喜に御座候。

けしき「景色」(名) 8 ケシキ 景色

ひふゆげしき・ゆきげしき
 五35 5 コノ美シイ蝶ガトビマハルノ
 デ、花ゾノヤ野原ノケシキガ一ソウ
 引立チマス。
 五45 3 左ヲ見テモ、右ヲ見テモ、ケ
 シキガカハルノデ、文太郎ハオモシ
 ロクテタマリマセン。
 六22 2 白い砂に青い松、どこのはま
 べを見て、美しい景色である。
 六32 2 所々に白いぬのをさらしたや
 うなたきや谷川があつて、一そう山
 の景色を引立てる。
 六38 8 川の上にかけた橋、橋の下に
 立つてつりする人など、それ／＼川
 の景色をそへてゐる。
 七78 1 (略)、色ノ美シイ海草ガヒラ
 ヒラト動ク間ヲ、様々ノ魚ヤケモノ
 ガ(略)オヨイダリシテキルノハ、
 陸上デハ見ルコトノ出来ナイ美シイ
 景色デアラウ。
 九42 8 (略)、カ、リテハタキトナ
 リ、ヨドミテハフチトナリ、又切レ
 テハ急流トナリ、遂ニ今日ノ如キ美
 シキ景色トナリシナリ。
 九67 7 「紅白花は開く煙雨の中。」と
 いふ景色は、静かな中に美しいなが
 めである。
 げしゃえき「下車駅」(名) 1 下車驛
 十二100 3 (略)、旅客は下車驛にて
 各自に荷物を受取るに、間違の起る
 こと殆ど無し。
 げじょ「下女」(名) 3 下女

八24 4 (略)、今度は下女がぼけつを
 さげて、牛小屋から出て來ました。
 八24 9 此の下女は毎朝かうして、主
 人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐ
 たのです。
 八26 2 其の後は毎朝必ず早く起き
 て、下男や下女は早くから畑へ出し
 て働かせ、(略)。
 けす「消」(五) 1 消す「一シ」ひ
 ふきけす
 十18 9 さて書きはじめてからも、消
 したり加へたりして、我の讀む様
 なものになるまでには、幾度書直す
 かも知れない。
 けずる「削」(四) 3 ケズル けづる
 「一リ」ひくしけずる
 八39 3 (略) マツ木材ヲ切りテ、湯氣ニ
 テムシ、ケヅリテウス板トシ、細ク
 キザミテデク木トシ、(略)。
 九42 6 (略) 山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、
 カ、リテハタキトナリ、ヨドミテハ
 フチトナリ、(略)。
 十一15 8 (略) 高德(略)、大いなる櫻
 の木の幹をけづりて、大文字に詩の
 句を書きつけたり。
 けた「桁」(名) 1 ケタ
 六75 (略) ケタ
 けたおす「蹴倒」(五) 1 ケタフス
 「一シ」
 三16 1 スキヲネラツテ、タツタ
 一ケリデ、ケハヤヲケタフシマ
 シタ。

けたども「桁共」(名) 1 けたども
 十13 6 (略) あはれ我、梁や棟木や
 けたどもを いつもせおひて 片時
 も 休む間なし」と 角柱 ひとり
 つぶやく。
 けたばこ「下駄箱」(名) 1 下駄箱
 十二89 6 (略) 凡そ家内の掃除は座敷・
 居間・臺所のみならず、便所の隅よ
 り下駄箱の奥までも注意せざるべか
 らず。
 けたまう「蹴給」(四) 1 ケ給フ
 「一フ」
 八51 1 (略) 御遊ナカバニシテ、マリヲ
 ケ給フハズミニ、皇子ノクツヌゲタ
 リ。
 けたや「下駄屋」(名) 1 ゲタ屋
 七36 8 (略)、右へ折レルト、ソコニ
 繪草紙屋・ゲタ屋・オモチヤ屋ナド
 ガナランデキル。
 けつひい「かげつ・さんかげつかん・
 じゅうい「かげつ・じゅうい「かげつ・
 にかげつ・にさんかげつ
 けつか「結果」(名) 5 結果
 十33 6 (略)、此ノ芋ヲ植ウルニ如
 クハナシト思ヒ、或年試ミニ之ヲ作
 リシニ、其ノ結果甚ダ良カリキ。
 十79 2 (略) 身體ノ健全ナルトキハ精神
 モ亦常ニ快活ニシテ、何事ヲ爲シテ
 モ良キ結果ヲ見ルナルベシ。
 十一6 8 (略) 秋・冬の花少き季節に入
 りても、食物に不足することなきは、
 一に其の勞役の結果なり。

十一50 1 アラビヤに良馬の多く産す
 るのは、(略)。數千年の久しい間、
 土人の絶えてたゆまない丹誠の結果
 である。
 十二72 10 (略) 引込思案の人は徒に其の
 結果を思ひわづらひて、優柔不斷其
 の事業に取掛らざる中に、良好なる
 時機を失ふこと多し。
 けつき「血氣」(名) 1 血氣
 十二112 10 (略) 血氣にはやりて、粗暴の
 所行あるものは小勇の人にして、眞
 正の軍人にあらず。
 けつぎ「決議」(名) 2 決議
 十二108 1 (略) 若し兩院の決議一致せざ
 るときは、帝國議會の協賛にあらず。
 十二108 2 (略) 兩院の決議一致すると、
 天皇の裁可を経ざれば其の効力を生
 ぜざるなり。
 けつぎす「決議」(サ変) 1 決議す
 「一セ」
 十一114 2 (略)、其の翌年學校の經
 費を議するに當り、村會にては(略)、
 さらばとて原案のまゝに決議せり。
 けつきよく「結局」(副) 1 結局
 十二115 2 (略) 心誠ならざれば、如何な
 る言行も表面の裝飾に過ぎざれば、
 (略)。此の五箇條を行ふも、結局一
 の誠心を本とすと論し給へる、(略)。
 けっこう「結構」(名) 3 結構
 九93 10 (略) 朱塗の橋、美觀先づ
 目を驚かす。是即ち有名なる神橋に
 して、「日光の結構。」こゝに始る。

九69 外國人の我が國に来る者亦必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞せざるものなし。

十99 長廊盡キテ本堂アリ。結構頗ル大ニ、眺望甚ダ美ナリ。

けっし「決死」(名) 1 決死
十一34 正平の昔、楠木正行が決死の士百四十三名の名字を壁に書連ね、(略)。

けっして「決」(副) 6 ケツシテけつして 決して

三191 ヒバリ ハオリルトキニハ、ケツシテスノアルトコロヘハオリマセン。

三715 園 シカシ ケツシテフタヲオアケナサイマスナ。

七294 それを考へると、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

十一295 空中の交通開始せられ、又其の軍事上に應用せらるゝも決して座上の空談にあらざらんとす。

十一951 (略)、供給に限りある物、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、(略)、需要の減ずるに非るよりは、決して安くなることなきなり。

十二458 我が國の農業は、決して現状を以て満足すべきにあらず。けっしん「決心」(名) 1 決心

十二784 コロンブスは獨り堅固なる決心を以て動かざること山の如

く、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。

けつす「決」(サ変) 1 決す「一スル」

十二1061 しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聴く機關に供せさせ給へり。

けつせき「欠席」(名) 1 けつせき

六718 一日もけつせきもせず、ちこくもしなかつた子供もございました。

けつせきする「欠席」(サ変) 1 けつせきする「一シ」

六716 度々けつせきしたり、ちこくしたりして、先生にしかられた子供もございました。

けつせんす「決戦」(サ変) 1 決戦ス「一スル」

十一319 戦艦ハ(略)、其ノ名ノ如ク堂々敵ト決戦スルヲ目的トス。

けつぽうす「欠乏」(サ変) 1 缺乏す「一セ」

十二691 満目の廣野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

げつよう「月曜」(名) 1 月曜

六367 十二月十一日 月曜 雨

げなん「下男」(名) 2 下男

八235 その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て來ました。

て働かせ、(略)。
げにげに「実実」(副) 1 げにぐ

十148 梁・棟木 つか・ぬき・柱 何一つ 取外すとも、たちまち

1 家は崩れん。」げにぐと皆うなづきて、(略)。

けはや「蹴速」(人名) 5 ケハヤけはや

三148 ケハヤハソノナノトホリ、ケルコトガマコトニハヤカ

三155 (略)、ナカナカケハヤニハケラレマセン、(略)。

三158 (略)、タツタ一ケリデ、ケハヤケタフシマシタ。

三166 「略。」といつて、けはやがじまんをしました。「ひらがなのドリル」

三168 それで けはやはわらはれて、すくねはほめられました。

けまり「蹴鞠」(名) 2 ケマリ 蹴鞠

八508 アル日皇子、寺ノニハニテケマリノ會ヲナシ給ヒ、(略)。

十1014 コ、ニ程近キ飛鳥ノ安居院ハ古ノ飛鳥寺ノ跡ニシテ、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、(略)。

*けむ けむ

けむり「煙」(名) 7 ケムリ けむり

煙 けむすなけむり・つちけむり・みずけむり

つていくきせんもあります。
三735 (略)、タマテバコヲアケテ見ルト、中カラ白イケムリガ出テ、(略)。

六775 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シナガラ早ク走ツテ行ク小サナ船ガアル。

六808 昔仁徳天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲアハレミタマヒキ。

六812 今ハ工業モ大イニヒラケテ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。

十一214 (略)、煙となびくとまやこそ、我がつかしき住家かれ。

十二3910 富士山の古歌には煙の立つことを歌へるもの多く、(略)。

けもの「獸」(名) 26 ケモノ けもの獸

二336 (略)、トリヤケモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。

四156 (略)、高いところからおひおろして來るけものを、弓で

いとつたのです。

五528 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワヲシタ時、(略)。

五532 (略)、カウモリハ「私ハ鳥デモケモノデモナイカラ。」トイツ

テ、ドチラヘモツキマセンデシタ。

五534 ソノ中ニケモノガ勝チサウニナツタノヲ見テ、(略)。

五536 「私ハカラダガネズミニニ

テキルカラ、ケモノノ仲間ダ。」
 五53 8 ソノ中ニケモノガ勝チサウニ
 ナツタノヲ見テ、(略)、ケモノノミ
 カタニナリマシタ。
 五54 1 シバラクタツト、ケモノガ負
 ケサウニナツタノデ、(略)。
 五54 8 ソノ時カウモリガケモノノ方
 へ行キマス、
 「オ前ハ鳥デハナイ
 カ。」トイッテ、仲間へ入レマセン。
 五55 4 又鳥ノ方へ行キマス、
 「オ前ハケモノダラウ。」トイッテ、
 アヒテニシテクレマセン。
 五56 5 鳥ヤケモノハ火ヲ使フコトヲ
 知りマセン。
 五59 1 油ニモ色々アリマス。魚カラ
 トツタモノモアリ、ケモノカラトツ
 タモノモアリ、シヨクブツカラトツ
 タノモアリマス。
 五71 8 角ノアルケモノモタクサン
 知ツテキルガ、(略)。
 六35 4 フランネル・ラシヤ・メリ
 ンスナドノ如ク、ケモノノ毛ヲツム
 ギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。
 六64 4 日本ニ居ルケモノノ中デ一番
 強イノハ熊デス。
 六65 7 大テイノケモノハ一打デコロ
 サレテシマヒマス。
 七73 6 海ニハ又ケモノガスタンデキ
 ル。
 七73 7 陸ノケモノニニタモノニハ、
 ラツコ・ヲツトセイナドガアリ、魚
 ニ似タモノニハ、鯨ガアル。

七77 8 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮
 イタリ沈ンダリオイダリシテキル
 ノハ、(略)。
 八72 9 虎ト猫トハ最モヨク相似タ
 ル獸ナリ。
 九63 3 田村麻呂は(略)、怒る時
 はたけき獸も恐れたり。
 十83 5 犬と猫は最も多く家に飼はれ
 る獸である。
 十二86 10 主人は死し、主家は
 亡びたるに、汝家老として仇を報ず
 るを知らず、人面獸心とは汝の事な
 るべし。獸ならば、かくして食へ。」
 と、足の指に魚肉數片をはさみて良
 雄の面前に出す。
 十二87 6 我が目、獸として良雄
 を視、(略)。
 十二87 6 我が舌、獸とし
 て良雄を罵り、(略)。
 十二87 7 我が足、獸とし
 て良雄に食はしめたり。
 けやき「樗」(名) 2 ケヤキ
 六67 3 材木ニハ松・杉・ヒノキ・
 栗・ケヤキナドアリ。
 六67 6 松・杉・ヒノキ・ケヤキ
 ハ板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカ
 ケ、船ヲ作ルニ用フ。
 けらい「家来」(名) 14 ケライ けら
 い 家来
 一31 2 ベンケイガウシワカマル
 ニマケマシタ。ソレカラケライ
 ニナリマシタ。

三42 7 ミナモトノヨシイヘトイ
 フタイシヤウガ(略)、ケライノ
 人ヲ右ト左ニワケテスワラ
 セマシタ。
 四15 2 昔みなものよりともが
 けらいをつれて、ふじのすそ
 のでまきがりをしました。
 四78 2 げんじの大しやうよしつ
 ねはけらいにむかつて、(略)。
 五77 4 よしつねはよろこんで、刀や
 よろひをやつてけらいにした。
 六47 6 けらいが大ぜい直しにかゝり
 ましたが、中々はかどりません。信
 長は(略)。
 六49 8 (略)、信長は京都で光秀とい
 ふけらいにころされました。
 六50 5 信長の古いけらいの勝家など
 はこれをきらつて、てきたひました
 が、(略)。
 六57 4 その時信玄のけらいが、後か
 らやり先で謙信の馬のしりを力一ぱ
 いになぐりつけた。
 七39 3 山内一豊が織田信長のけらい
 になつたばかりのころ、(略)。
 七43 5 (略) 信長の目にとまつて、
 (略)。けらいのものが、「これは一
 豊の馬でございます。」といひます
 と、(略)。
 十50 9 手塚の家来は組ませじと中
 をへだつれば、(略)。
 十51 1 手塚は家来を討たせじと、
 敵に組みつく。

十51 3 敵は手塚の家来を押へ、刀
 を抜きて首をかく。
 けり「蹴」ひとけり
 けり(助動) 7 けり けり 《ケリ・ケ
 ル》
 十12 6 「我そ元 丹波の松よ、
 山こむる 霞を後よ、いかだして
 都に來けり。」
 十99 7 人はいさ心も知らず、故
 里は 花ぞ昔の香にほひける。
 十一14 吉野山霞の奥は知らね
 ども、見ゆる限りは櫻なりけぞ。
 十一21 10 (略)、千里寄せくる
 海の氣を 吸ひてわらべとふりにけ
 り。
 十二2 3 神代より承けし寶をま
 もりにて、治め來にけり、日の本つ
 國。
 十二3 2 國民は一つ心に守りけ
 り、遠つ御祖の神の教を。
 十二3 9 國を思ふ道に二つはな
 かりけり、軍のには立つも立たぬ
 も。
 ける「蹴」(下一) 3 ケル ける 《ケ
 ル》
 三14 8 ケハヤハソノナノトホ
 リ、ケルコトガマコトニハヤカ
 ツタノデス。
 三15 6 シカシ スクネモ (略)、
 スバシコイ人 デシタカラ、ナカ
 ナカケハヤニハケラレマセン、
 (略)。

十861 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするの、人に恐れるからである。

けれども(接)10 ケレドモ けれども

三193 ヒバリ ハ オリル トキニ

ハ、ケツシテスノアルトコロ

ヘハオリマセン。ケレドモ上ル

トキニハ、スカラスグ トビタチ

マス。

三271 圃 ばかばか、ばかばか、走れ

よ、小馬。けれどもいそいでつ

まづくまいぞ。

三362 (略) いそいで かみをあ

けてみると、ほたる は やはり

中にゐます。けれども 光つては

ゐません。

三397 なにを きかれても、この

口では つきりこたへます。けれ

ども そのほかによけいなこと

は言ひません。

五132 (略) きたない物をなげつけ

られるのはこまりました。けれど

も重い物は皆そこへしづめてしまつ

て、軽い物は一しよにここまでもつ

て来ました。

五451 (略) 又暗クナツテ、何モ見

エマセン。ケレドモコンドハミジカ

イトンネルデ、スグニ通りヌケマシ

タ。

五724 園 (略) コンナリツバナ角ヲ

モツテキルモノハナイヤウダ。ケレ

ドモノ足ハ細クテ、イカニモ弱サ

ウニ見エル。

六451 (略) 又よそへほうこうに出

しました。けれども日吉丸は、どう

かしてりつばな武士になりたいと思

つてゐましたから、ほうこうの方に

は身が入りません。(略)。

七297 卵からかへつたばかりの蠶は

(略)、長さは一分ばかりしかない。

けれども一月ばかりの内には、皆さ

んの小指程の大きさになり、(略)。

七656 (略)、水がなければ、生きて

ゐることは出来ない。けれども水を

たくさん飲みすぎたり、冷い水の中

に長くはいつてゐたりするのはよく

である。

けれども(接助)8 けれども

三224 まるいけれどもまりのや

うにまんまるではありません。

三236 牛には つの があるけれど

も、うまにはありません。

三238 うまには たてがみがある

けれども、牛にはありません。

三246 牛は 力 が つよいけれど

も、あるくことがおそうござい

ます。

三248 うまは 牛 より よわいけれ

ども、はしる こと が はやうござ

います。

六491 秀吉はいくさの上手な人で、

たび／＼いくさをしたけれども、一

ぺんもまけたことがあります。

六588 園 「われ／＼はたがひにいく

さをしてゐるけれども、敵の國の人

には何のうらみもない。

十一109 貴人の墓には内地の様に石

をたてるけれども、普通の墓は大抵

土を盛上げるばかりである。

けわしい(陰)(形)6 ケハシイ け

わしい 『一イ・ーク』

五62 (略)、オトホリスデノミチガ

ケハシクテ、オコマリノコトガゴザ

イマシタ。

五763 ひよどりごえは(略)、よつ

ぽどけはしい所である。

五783 しろの後にはけはしい阪で、

馬の通れる所ではございせん。」

六98 御社の後から山へのぼる道が

あります。それは細くてけはしい道

で、(略)。

八854 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、

上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、

盛ニ彈丸ヲ打出ス。

八891 軍曹ハ(略)、彈丸ノ下ヲク

マリナガラ、ケハシイガケヲカゲ下

リタ。

けん「県」(名)2 縣々あんとうけん

・おかやまけん・ふけんぐんしがい・

ふけんぐんしちようそんかいぎいん

十二278 園 我が大日本帝國の 古

き六十八國^{沖繩諸島}合せてぞ、

府は三つ、縣は四十三。

十二249 園 養蠶業の盛大は 長野

・埼玉きて群馬、海なき縣に著し。

けん「劍」(名)2 劔

十663 鯨は段々弱つて、泳ぐ力もな

くなる。若者は長い劔を突通し、幾

度となく抜いては又突く。

十二312 園 形名の妻、夫を勵まして、

「(略)。」と、自ら劔を帶び、侍女數

人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。

けん「軒」ひいつけん

けん「間」ひいちろくちようしじつけん

んごしゃく・ごけんよ・さんげん・さん

じゅうさんげんどう・じつけん・じ

ゅうくけんよ・じゅうごけん・ひやく

さんじゅうしけん・ひやつけん・ろく

じつけん

けん(助動)2 けん「ケン」

十一258 園 昔都大路をねり行きたり

し絲毛の車は如何に優美なりけん。

十二88 園 敵今は逃れぬところと

覺悟したりけん、ネボカトフ少將は

(略) 其の部下と共に降服せり。

げん「元」(地名)1 元

十二749 園 (略) 元の忽必烈に仕へ

たる伊太利の大旅行家マルコ・ポー

ロの日本に關する記事を読み、(略)。

げん「言」(名)5 言ひいちげん

十一102 園 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、

一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、(略)。

十二38 園 「嘉明に如く者はあら

じ。」と答ふるに、(略)。(略)。秀

忠(略) 其の言に隨ひ、嘉明を擧げ

て會津に封ぜり。

十二474 園 「農は人の職業中最も健

全、最も高貴にして、又最も有益な

るものなり。」といへるワシントン
の言葉はふべし。

十二113 5 図 信とは我が言を行ひ、義
とは我が分を盡すをいふ。

十二116 8 図 平常質素を旨とすべきは
修身・處世の上に於て何人にも最も
大切なことを言を待たず。

げんあん「[原案] (名) 2 原案

十一113 6 図 村會にて村費を議するに
も、大抵原案を可決するを常とす。

十一114 2 図 (略)、其の翌年學校の經
費を議するに當り、村會にては(略)、
之を増加せんとせしに、(略)、さら
ばとて原案のまゝに決議せり。

げんいん「[原因] (名) 2 原因

十一107 8 室が廣く、天井が高いと温
りにくいから、成るべく狭く低くす
る必要がある。是が朝鮮の家の小さ
くなつた重なる原因である。

十二22 5 然るに炭酸瓦斯が絶えず供
給されるのは、他にも種々の原因も
あるが、動物の呼吸作用も與つて大
いに力があるのである。

げんか「[県下] (名) 1 縣下

十二36 7 図 本校舎ノ建築ハ(略)、
其ノ注意ノ周到ナル、縣下マレニ見
ル所ナルベシ。

げんか「[喧嘩] (名) 1 ケンクワ

五52 8 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガ
ケンクワヲシタ時、(略)。

げんかしよそん「[県下諸村] (名) 1

縣下諸村

十一114 4 図 耕地整理は縣下諸村に先
んじて着手し、昨年既に之を完成せ
り。

けんぎ「[建議] (名) 2 建議

十二108 7 図 上奏とは文書を天皇に奉
呈し、建議とは文書を政府に提出し
て意見を述べざるをいふ。

十二108 8 図 上奏といひ、建議といひ、
請願といひ、(略)、要は下情上達の
道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

げんき「[元氣] (名) 3 ゲンキ 元氣
五18 1 鯉ノヤウニゲンキガヨク、
(略)。

九61 3 図 室内にのみ居て、外出する
こと少き人の、色青ざめて元氣なき
は、日光に浴せざるが爲なり。

十78 8 図 身體ノ構造ハ(略)、一小
部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關
スルモノナレバ、常ニ身體ヲ大切ニ
シ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

けんぎす「[建議] (サ変) 1 建議す
『シ』

十二108 5 図 又貴族院及び衆議院は
(略)上奏し、建議し、且臣民の請
願を受くるの權能を與へられたり。

げんきん「[現金] (名) 2 げんきん
現金

七12 5 図 商賣上でげんきんといひ、
かけといふのは何の事ですか。

七12 7 図 品物と引きかへに代金を受
取るのが現金で、(略)。

げんげん「[言言] (名) 1 言々

十一104 6 図 發スルニ臨ミ、表ヲ上
ル。言々皆忠君ノ至情ヨリ發ス。
げんこ「[堅固] (形状) 1 堅固 凸しつ
そけんこ

十二78 4 図 コロンブスは獨り堅固
なる決心を以て動かざること山の如
く、(略)。

げんこ「[言語] (名) 2 言語

十77 5 図 取ルモ捨ツルモ、(略)、言
語ヲ發スルモ、皆腦ノ命令ニヨル。

十82 3 図 あいぬの言語は日本語とは
全く異なり。

げんこう「[言行] (名) 1 言行

十二115 1 図 心誠ならざれば、如何な
る言行も表面の裝飾に過ぎざれば、
何の用にか立たん。

げんこうにねんさんがつ「元弘二年三月」
(名) 1 元弘二年三月

十一13 4 図 元弘二年三月、北條高
時、後醍醐天皇を隱岐へ流し奉る。
けんこくいらい「[建國以來] (名) 1
建國以來

十一117 7 図 建國以來三千年 歴史
の跡にかんがみて、日進月歩ゆるみ
なき 同胞すべて六千萬。

げんこん「[現今] (名) 3 現今

九90 2 図 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨
・銀貨・銅貨ノ三種アリ。

十二41 4 図 中岳は現今活動せる部分
にして、(略)。

十二44 3 図 現今我が國の耕作地は臺
灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬

町歩あり。

げんさ「凸せいけつけんさ
げんざい「[現在] (名) 1 現在

十二71 8 図 現在の職務に忠實なれ
ば、上下の愛敬・信用其の身に集り、
心廣く、體ゆたかなり。

げんさがかり「[検査係] (名) 2 検査掛
十一6 9 図 働蜂中には蜂の集め来る
蜜を検査する検査掛あり。

十一7 1 図 怠りて持歸らざるものあ
れば、検査掛は内に入るを許さず、
強ひて入らんとすれば立ちどころに
さし殺す。

げんさす「[検査] (サ変) 2 検査す
『シ』スル

十一6 9 図 働蜂中には蜂の集め来る
蜜を検査する検査掛あり。

十二10 2 図 主婦は寢に就く前、先づ
竈の下より火消壺までもよく検査し
て、戸締を爲すと共に火の用心を忘
れざる様にすべし。

げんざん「[見參] (名) 1 見參

十50 7 図 思ふ様であれば、名乗る
まじ。唯首を取つて、大將の見參に
入れよ。

げんざんち「[原産地] (名) 1 原産地
十30 8 図 甘藷ノ(略)。(略)。原産
地ハアメリカニシテ、(略)。

げんし「[賢士] (名) 1 賢士

十一102 4 図 劉備ハ(略)。漢朝ノ復
興ヲ圖リ、シキリニ賢士ヲモトム。

げんじ「[源氏] (人名) 3 げんじ

四七六 しまの たたかひに げんじはをか、へいけは海で、むかひあつてゐた時、(略)。

四七八 げんじの大しやうよしつねはけらいにむかつて、(略)。

五七五 げんじは二手に分れて、のりよりのぐんぜいは(略)、よしつねのぐんぜいは(略)。

げんじ「現時」(名) 1 現時

十二四〇 是等は現時噴火の止れる火山なれども、現に噴火せる火山の数も全國に於ては五十座を下らず。

けんじや「賢者」(名) 1 賢者

十二七〇 先づ苦しみて然る後に樂しむを賢者とし、先づ樂しみて然る後に苦しむを愚人とす。

けんしょう「けんしょう」

げんじよう「現状」(名) 1 現状

十二四八 我が國の農業は、決して現状を以て満足すべきにあらず。

げんしょう「減少」(サ変) 1 減少す「ーシ」

十二八二 あいぬの数、古は甚だ多かりしが、近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に足らず。

げんじよく「原色」(名) 1 原色

十四八 色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

けんしん「謙信」(人名) 7 謙信 ぐう

えすぎけんしん

六五五 その相手は武田信玄で、これ

も謙信におとらないくさの上手であつた。

六五五 ある時謙信が山の上に陣取つてゐると、信玄は(略)、はさみうちしようとした。

六五七 謙信はそれを知つて、(略)、夜の間に信玄の陣に攻入つた。

六五六 謙信は勝氣な人で、いよいよいくさがはげしくなると、じつとしては居られない。

六五五 その時信玄のけらいが、後からやり先で謙信の馬のしりを力一ぱいになぐりつけた。

六五八 謙信はそれを聞いて、「(略)」といつて、じぶんの國から塩を送らせた。

六五九 それから信玄が死んだと聞いた時、謙信は「ああ、をしい事をした。よいいくさ相手がなくなつた。」といつてなげいた。

けんしん「賢臣」(名) 1 賢臣

十二三八 支那の昔趙といふ國に蘭相如といふ賢臣あり。

けんず「献」(サ変) 1 献ず「ーズ」

十四九 國に『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻すべし。』

げんず「減」(サ変) 3 減ず「ージ・ーズル」

十一九四 (略)、次第に其の製造高を減ずるが故に、供給も随つて減じて、(略)。

十一九四 (略)、次第に其の製造高

を減ずるが故に、供給も随つて減じて、(略)。

を減ずるが故に、供給も随つて減じて、(略)。

十一九四 (略)、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、(略)、需要の減ずるに非るよりは、決して安くなることなきなり。

げんすい「元帥」(名) 1 元帥 ぐだい

げんすい

十二一二 上元帥より下一卒に至るまで、官職の高下、就職の新舊によりて上下の分別最も正し。

げんせい「厳正」(形状) 1 厳正

十一一〇 孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規律ヲ重ンジタリ。

けんぜん「健全」(名) 1 健全

十一五二 天性快活ナル人モ、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

けんぜん「健全」(形状) 7 健全

十七八 西洋ノ古語ニ曰ク、「健全ナル精神ハ健全ナル身體ニ宿ル。」ト。

十七八 西洋ノ古語ニ曰ク、「健全ナル精神ハ健全ナル身體ニ宿ル。」ト。

十七九 身體ノ健全ナルトキハ精神モ亦常ニ快活ニシテ、(略)。

十一五二 身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。

十一五二 笑ハント欲セバ、衛生ニ注意シ、身體ヲ健全ニスベシ。

十二四七 農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉を勞するが故に、身體常に健全なり。

十二四七 「農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。」といへるワシントン

の言味はふべし。

げんそく「原則」(名) 1 原則

十二五一 内國ノ商業モ、海外ノ貿易モ、(略)、需要供給ノ原則ニヨリテ物價ノ高下スルモ亦相同ジ。

げんたい「減退」(四) 1 減退致す「ーシ」

九七四 (略)、全家立退の用意致し居り候中、夜も明けはなれて、水は次第に減退致し候。

けんちく「建築」(名) 6 建築

九九五 是より西南にあたりて、家光の廟あり、建築の善美を盡せる亦相似たり。

十一八七 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは釀造の業と建築の業とをかねたりといはんか。

十二三四 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、(略)。

十二三六 本校舎ノ建築ハ質素堅固ヲ主トシ、外觀美ナラザレドモ、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

十二六〇 佛國の長き歴史を飾れる壯大なる建築の数々高く中空にそび

え、(略)。

916 候手 なほ縣廳よりは小杉事務官も御臨席のほずに御座候。

は今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

してかけよつて、(略)。

十二774 文 船の次第に朝霧の中にか

・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

けんりよく「権力」(名) 1 権力

十二81 1 図 (略)、「北條早雲が小田原城に據りて、次第に其の権力を四隣に張らんとせる頃なりき。」

1

こ「子」(名) 38 子母あかご・うじこ・おやこ・おやこにだい・かずのこ・たけのこ・なるこ・まご・われはうみのこ

二29 2 ヲトコノ子モ、ヨシナノ子モ、オモシロサウニアソンデキマス。

二29 2 ヲトコノ子モ、ヨシナノ子モ、オモシロサウニアソンデキマス。

三53 1 ハツニナル女ノ子ガアリマシタ。

五17 7 男ノ子ノアルウチデハ、五月ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立テマス。

五37 4 図 (略)、「天子様のおほせだから、子を出すやうに。」と、たくさんの子どもをもらつて、つれて来ました。

五38 2 図 「その子は皆お前にやるから、やしなつてやるがよい。」

五38 6 すぎるはその大ぜいの子をおみやのそばでやしなつて居つたと申

します。

六30 1 (略)、「一人の男の子がふでを買ひに來た。」

六30 5 男の子も氣がつかずにそのまゝかへつた。

六60 2 図 ハつばかりの女の子、たもとを顔におしあてて、ひとりしくく泣いてゐる。

六61 1 圖 (略)、「その子のかたに手をかけて、ことばやさしくなくさめる。」

六61 3 圖 涙をふいて女の子、「いゝえ、さうではありません。」

七1 2 図 楠木正行ハ正成ノ子ニシテ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。

七1 6 図 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。」

七3 8 図 「汝ヲサナクトモ、父ノ子ナレバ、コレホドノワケノ分ラヌコトハアルマジ。」

七7 2 図 モシ病ニカ、リテ早く死ナバ、(略)、「父ノタメニハ不孝ノ子トナルベシ。」

九19 10 図 私には妻も子もありません。

九21 1 圖 村の方々は(略)、「一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあるん。(略)。」と親切におほせ下され候。

九21 9 圖 母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。

九44 10 図 或時旅行先より手紙を送りて、其の子のアリに(略)と言ひつかはしたり。

九85 10 図 愛作方の人々は愛作の肩をたゝいて、「感心だく、えらい子だ。」

十40 2 圖 「二人の我が子それぐに、死所を得たるを喜び。」

十一21 2 圖 我は海の子、白浪れさわぐいそべの松原に、煙となびくとまやこそ、我がつかしき住家おれ。

十一43 3 圖 「赤松光範の臣宇野六郎の子なり。」

十一57 6 圖 將軍は(略)。「兵士は皆我が子も同様である。」

十一57 8 圖 我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。

十一59 4 圖 行けや行けや、とく行け、我が子。老いもる父の望は一つ。

十一59 8 圖 さらば行くか、やよ待て、我が子。老いたる母の願は一つ。

十一103 5 圖 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「我が子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。」

十一103 8 圖 備又其ノ子ニ向ヒテ、「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」トイフ。

十一113 1 圖 校長も(略)、「生徒を愛すること子の如く、生徒も亦校長をしたふこと父母の如し。」

十二33 2 図 (略)、「高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)。」

十二33 4 図 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。

十二91 4 図 「其の母によりて其の子を養せよ。」といへるが如く、(略)。

十二93 7 図 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く、(略)。

十二93 9 図 子其の遺言を奉じて、往いて學べり。

十二94 4 図 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」とは孔子が景公に教へたる語なり。

十二94 4 図 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」

こ「戸」ひいっこ・ごっこ・しごっこ・にさんじっこ・ひやくよこ

こ「個」ひさんこ・さんこしようたい・さんこだいたい・しこちゅうたい・しちこしだん・じゅうくこしだん・じゅうさんこしだん・じゅうはちこしだん・すうこ・にこ・にこりよだん・にこれんたい

こ「粉」ひいしこの・ひこの

こ「蚕」(名) 2 こひあきご・なつご・はるご

五36 6 昔雄略天皇が(略)、「こをたくさん集めて來いとおほせになりました。」

五36 7 こといふのはかひこのこと

で、(略)。

こ「湖」 ぐあしのこと・ちゅうぜんじこ・びわこ

こ「是」(代名) 2 コ こ

八30 7 図 工 恐ルく近ヨリテ見レ

バ、コハ如何ニ、カノ死人ト見エシ

ハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。

九4 2 図 (略) 尾をさきて見給ふ

に、一ふりの劔出でたり。尊「こは

神劔なり、私すべきにあらず。」とて、

(略)。

こ「五」(課名) 9 五 ぐだいご・だい

こか

二目 6 五 ツキ

二9 5 五 ツキ

三目 6 五 ノミノスクネ

三13 3 五 ノミノスクネ

四目 6 五 ふじの山

四13 5 五 ふじの山

五目 4 第三 神武天皇……………五

七目 3 第二 楠木正行……………五

十一目 3 第二課 蜜蜂……………五

こ「呉」(地名) 3 呉

十一16 7 図 是は昔、支那に呉・越と

いふ二國ありてたがひに争ひしが、

(略)。

十一16 8 図 (略) 呉の勢盛になりて、

會稽山の戦に越の軍を打破りたり。

十一17 1 図 (略) 越王勾踐つぶさに

辛苦をなめて報復を圖り、(略) 遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

こ「五」(名) 13 五 5 V ぐいちり

ろくちようしじつけんごしやく・いつ

せんごりん・ごじようさんじやく・ごす

ん・さんせんごりん・だいちしゆ・だ

いごず・てんしょうさんねんごがつ・

どうじつごごじ・はちぶんのこ・は

つしやくごすん・ひがしくひらのちよ

うごちようめ・めいじごねんがくせい

はつぷいらい・めいじさんじゆうはち

ねんごがつにじゆうしちにちごぜんご

じ・やくいちわりごぶ

四46 図 V

六75 図 五

六75 図 五

六75 図 五 ツカ

八48 図 五

八61 5 (五)

九17 図 5

九24 6 図 陸軍の兵種には五あり。

十一2 図 5

十一19 図 5

十一23 1 (五)

十一60 10 五、

十一117 5 (五)

こ「後」 ぐいゆうにじこ・せんえきこ・

そつぎようご・てつどうかいつうご・

にゆうえいご

こ「御」 ぐおやご

こ「語」(名) 1 語 ぐいちご・につば

十二94 6 図 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」とは孔子が

景公に教へたる語なり。

ごあんじくださる「御案下」(下二) 1

御案じ下さる「ール」

九43 10 図 又御宮裏の田も、本年は

水も十分に御座候間、少しも御案じ

下さるまじく候。

ごあんじもうしおり「御案申居」(ラ変)

1 御案じ申し居り「ーリ」

九71 6 図 御一家御無事に御座候

や。御老人・御子供衆も御大勢の事

故如何と御案じ申し居り候。

ごあんしんくださる「御安心下」(五)

2 ゴアンシンクダサル「ーイ」

八46 5 図 サクヤノクワジニウチハヤ

クマセンデシタシンルキミナブジデ

スゴアンシンクダサイ

八47 1 図 焼けない事さへいへば、御

安心なさるから、ゴアンシンクダサ

イと書くにも及ばない。

ごあんしんくださる「御安心下」(下二)

1 御安心下さる「ーレ」

九72 3 図 幸に私方は左程の損害も

無く、家族一同無事に御座候間、御

安心下され度候。

ごあんしんなさる「御安心」(五) 2

御安心なさる「ール」

八46 1 図 「こちらでは近年にない大

火事だから、(略)。(略) 伯父さん

が御安心なさる様に早く返事を上げ

よう。

イと書くにも及ばない。

ごあんない「御案内」(名) 1 御案内

十一62 5 図 (略) 心ばかりの祝宴

相開き、御心安き方々御招待致度と

存候間、同日午後五時御光來下され

候はば光榮の至に存候。先は御案内

まで、此の如くに御座候。

ごあんないもうしあへる「御案内申上」

(下二) 1 御案内申上「(ゲ)」

十一63 7 図 (略) 来る六月三十日

(土曜日) 午後二時建碑式舉行致候

間、御光臨の榮を賜はり度、此段御

案内申上候。

ごあんないもうしあへる「御案内申上」

(下二) 1 御案内申上シ上ゲル

「ーゲ」

五6 4 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ

出テ來テ、オサキニ立ツテ、ヨイ

ミチノ方へ御案内申シ上ゲマシ

タ。

こい「鯉」(課名) 2 コヒ

五目 8 第七 コヒ

五15 4 第七 コヒ

こい「乞」 ぐおんいとまごいしたまう

こい「鯉」(名) 13 コヒ こひ 鯉 ぐ

ひごこ

一43 4 タヒ コヒフナ

二12 3 図 「ニイサン、コノ川 ニコ

ヒガキマスカ。」

二12 6 図 「コンナ小サナ川 ニハ

コヒハキマセン。」

三49 7 こひやふなどは水か

ら出ると、しんでしまひます。

五15 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。

五15 大キナコヒガタクサンアツマ
ツテオヨイデキルノハ、マコトニミ
ゴトナモノデス。

五16 鯉ハ昔カラ川魚ノ長トイハレ
テキマス。

五17 鯉ハマコトニサセイノヨイ魚
デス。

五17 鯉ノタキ上リトイツテ、タキ
デモ上ルコトガアルサウデス。

五17 男ノ子ノアルウチデハ、五月
ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立テマ
ス。

五18 鯉ノヤウニゲンキガヨク、
(略)、ズンズンシユツセヲセヨトイ
フ心デ祝フノデセウ。

五18 (略)、鯉ガタキヲ上ルヤウ
ニ、ズンズンシユツセヲセヨトイフ
心デ祝フノデセウ。

十一112 池には大抵鯉・鮒等を養
ひて、二年毎に之を賣るに、其の利
少からず。

こい【濃】(形) 2 コイ 『イー
ク』

五31 ツヤガアツテ、色ハコイミド
リ色デス。

八64 コク染メタノガ紺デ、ウスイ
ノガ淺黄デス。

こいし【小石】(名) 1 小石
三61 あそこにはうつくしいか

ひや小石がたくさんあります。

こいしい【恋】(形) 1 こひしい
『ク』

九19 命がをしくなつたか、妻子
がこひしくなつたか。

こいつか【御一家】(名) 2 御一家
九14 御一家御無事に御座候
や。

十26 拜啓、いよく来月一日
より御入營、軍務に服せられ候事、
御一家を始め一村の名譽に御座候。

こいつぼうくさる【御一報下】(下二)
1 御一報下さる『一レ』

十一64 御來會下され候
はば、御手数ながら来る二十八日ま
でに、本町二丁目高野義太郎宛御一
報下され度候。

こいとく【御威徳】(名) 1 御威徳
十102 又敵傍山ノ東南ニ樞原神宮
アリ。コ、ニマウヅルモノ、誰カハ
(略)、皇室ノ御威徳ヲ仰ガザラン。

こう【口】ひきゆうふんかこう・ふんか
こう・ふんかこうちゅう

こう【公】(名) 1 公とくがわおだ
にこう

十一105 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、
再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。(略)、
賊將歎ジテ、「公ハ天授ナリ、敵ス
ベカラズ。」トテ、マタ反スルコト
ナカリキ。

こう【功】(名) 2 功
八54 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ

奉リテ功アリシカバ、天皇重ク用ヒ
テ大臣トナシ、(略)。

十二38 敵國きこく素もとに使用して功ありし
かば、趙王厚ク之を用ふ。

こう【甲】(名) 1 甲ひてのこう
九88 タトヘバコ、ニ漁夫アリ
テ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲
ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。

こう【交】(名) 1 交
十一99 春夏の交産卵の爲、鰥
の群をなして海岸近く寄來る時は海
水爲に白色を呈し、(略)。

こう【坑】ひたてこう
こう【孝】(名) 1 孝

十二97 孝經に曰く、「身を立て、
道を行ひ、名を後世にあげて、以て
父母をあらはすは孝の終なり。」と。

こう【効】(名) 2 効
十72 温泉の諸種の病を治する
は、たゞに其のふくめる礦物の効の
みならず、(略)。

十一36 當總督府の經營も着着
其の効を見るに至り候事、(略)、い
よく實地見聞致候へば、聞きしに
まさる進歩に驚入候。

こう【候】(名) 2 候
十74 箱根は(略)、盛夏の候は
何れの旅館も空室なきに至るを常と
す。

十一64 百花満開の候には、外役
の餘は(略)、營營として寸時も休
まず。

こう【校】ひしょうがつこう・しょうが
つこうきょういん・とうそんしょうが
つこう

こう【港】ひキイルンこう・さんこう・
しょうぎょうこう・たかおこう・ちよ
うしこう・ニューチャンこう・パロス
こう・ふとうこう・まおかこう

こう【斯】(副) 11 カウ かう
四27 「おきくさん、おきくさん、
かうさむくなつては、しかたが
ありますまい。」

四39 ボクラハカウイフカ
タイヨロヒヲキテキルカラ、
(略)、アンシンナモノデス。」

四49 とけいはあさから か
つちん、かつちん。(略)、ばんまで
かうして、かつちん、かつちん。

四50 (略)、ちつとも休まず、
いきをもつがずに、あさまで
かうして、かつちん、かつちん。

七43 (略)、「あ、よい馬、名
馬々々。誰の馬か。」とたづねまし
た。(略)、「日ごろ貧しい暮しをし
てゐる一疊が、よくもかういふよい
馬を買ひもとめた。」

七84 まづいかりをぬいて港を出
て行くと、(略)。(略)。外國の港に
着くと、(略)。(略)。「航海といふ
ものはかういふ面白いものですが、
(略)。」

八24 (略)下女がばけつをさげて、
牛小屋から出て來ました。どうする

のかと氣を附けてゐると、隣の家の方へ行きます。此の下女は毎朝かうして、主人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。

八四〇 園 ヤケナイシンルキブジワダ「一郎」かうすると、ちやうど十五字になります。」

九八四 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツテ、(略)。又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカラ、(略)。瓣ノ色ハ(略)。(略)豆ヤ藤ノ花ノ瓣ハ不揃デアル。ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。又ユリヤアヤメノ花ハ萼ノ色ガ瓣ト一ツ色デアル。多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレハ、變ツテキル。

一九四 (略)、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。さて書きはじめてからも、(略)、幾度書直すかも知れない。晝をかく人、圖をひく人、寫眞をうつす人の苦心も亦一通りではない。かうして出来上つたものを活版所へ渡す。

一三六 園 きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。(略)。人に親切なことは是でも知れると思ひました。(略)。はきくしてゐて、禮儀・作法をわきまへてゐることもそれですつかり分りました。(略)。それで注意深い男といふことを知りました。(略)。あれの温

順なことをよく現して居ります。又着物はそまつながら、さつぱりしたものを着て、齒もよく磨いてゐました。(略)。かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、(略)。

こう「諸」(四) 2 請ふ「一七」

一二七 園 鳥居勝商といふ者あり、進み出でて其の使たらんことを請ひ、約していふやう、(略)。

一二八 園 是より暇を請ひて郷里に歸り、公私の用を終へて、(略)。

こう「号」ひだいごう・だいなごうといふ・でんだいじゅうごう

こう「合」(名) 2 合ひなんごう

六九二 園 (略)、升ノ十分ノ一ヲ合、合ノ十分ノ一ヲ勾トイフ。

六九二 園 (略)、升ノ十分ノ一ヲ合、合ノ十分ノ一ヲ勾トイフ。

こうあん「考案」(名) 1 考案

一四三 園 (略)、イヨノ勇氣ヲフルヒテ考案ヲ續ケ、(略)、ヤウヤク一種ノ機械ヲ發明セリ。

こうい「行為」(名) 2 行為

一二七 園 國民各自の行為をつゝし、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、(略)。

一二八 園 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にすると、總べて衆人の利害を考へて其の行為をつゝしむ徳義

をいふ。

こうい「厚意」(名) 1 厚意

一四〇 園 園「我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ずべし。」『厚意謝するに餘りあり。』

こうい「皇威」(名) 1 皇威

九三 園 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、(略)、さしに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至り。

こういん「光陰」(名) 2 光陰

一一八 園 之を思へば、一寸の光陰も輕んずべからず。

一一九 園 光陰矢の如く、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。

こうえい「光榮」(名) 2 光榮

一一二 園 (略)、心ばかりの祝宴相開き、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)御光來下され候はば光榮の至に存候。

一二三 園 コ、ニ本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

こうえき「公益」(名) 1 公益

一一七 園 (略)、功業を成し、公益を廣むるも、將又無爲にして一生を終ふるも、(略)。

こうえん「公園」(名) 5 公園 公園 公さくさこうえん・いちだいこうえん・うえのこうえん・しばこうえん・だいこうえん・ひびやこうえん

七五九 園 コノ公園ハ新シクシテ、古

木多カラザレド、種々ノ草花ウルハシク咲キミダレタリ。

七五八 園 公園ヲ出ツレバ、海軍省ヲハジメ多クノ官省アリ。

九六一 園 人多き都會に住む者は、

(略)、又朝早く起きて、木立しげき公園等を散歩すべし。

一二三 園 壯麗なる馬車・自動車多きは巴里を第一とし、(略)、殊に公園・廣小路の如きは、十數臺列をなして前後相接す。

一二九 園 市街・道路を不潔にし、(略)等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。

こうおく「高屋」(名) 1 高屋

一二六 園 兩側には白色の高屋相並び、(略)、雅麗比なし。

こうおつ「甲乙」(名) 1 甲乙

九八二 園 (略)、五匹の馬は一散にかけ出した。社の森を離れるまでは、餘り甲乙はなかつた。馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、(略)。

こうおん「厚恩」(名) 1 厚恩

一五五 園 あやふき敵の手より救ひくれたる厚恩、いかでか忘るべき。」

こうおん「皇恩」(名) 1 皇恩
一一四 園 教育の事業も段々進歩し、著人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

こうか「効果」(名) 1 効果

十二四九〇 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、地方人民の一般に之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

こうか「高価」(形状) 1 高價

九七六〇 (略)、五年・十年ノ後ニハ、餘程ノ金高トナリテ、ヤ、高價ナル必要品モ買フコトヲ得ベク、(略)。

こうかい「黄海」(地名) 2 黃海

十二五四〇 門司にて乗船し朝鮮海峽を過ぎて、黃海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

十二五七〇 黃海

こうかい「公会」(名) 1 公會

十一五三六〇 儀式・公會等ノ席ニテ談笑ヲツ・シムハ我等文明國民ノ美風ナリ。

こうかい「航海」(名) 6 航海

こうかい 長き航海を終へて歸り來れる明治丸の船長は、(略)。

七八〇五〇 (略)明治丸の船長は、(略)、航海の話となしたり。

七八一〇〇 私は年中航海をしてゐるものですから、少しそのお話をいたしませう。

七八四七〇 「航海といふものはかういふ面白いものですが、又時にはおそろしい目にあふこともあります。

十二八〇七〇 其の後コロンブスは數回

の航海を試みしが、(略)。

十二八〇八〇 (略)、一千四百九十八年

第三回の航海に於て、オリノコ河口に達し、(略)。

こうがい「坑外」(名) 1 坑外

十六二五〇 發掘シタル銅鑛ハ、(略)坑外ニ運ビ出シ、之ヲ選鑛場ニ送ル。

こうかいぎよう「航海業」(名) 1 航海業

十二七四五〇 (略)幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンブスは(略)。

こうかい・す「後悔」(サ変) 1 後悔す

「一スル」

十一六九〇 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

こうかい・す「航海」(サ変) 1 航海ス

「一スル」

十一三三六〇 巡洋艦ハ(略)。(略)。

こうかいちゅう「航海中」(名) 1 航海中

十二一八一〇 (略)、又航海中の船は早く港に入りて難を避くることを得るなり。

こうかいのはなし「課名」 4 航海の話

七目一〇 第二十四 航海の話(一)

七目一〇 第二十五 航海の話(二)

七八〇三 第二十四 航海の話(一)

七八四四 第二十五 航海の話(二)

こうかんす「交換」(サ変) 2 交換ス

「一スル」

九八八〇 薩レバ何レノ國ニテモ、世ノ進ムニシタガヒ、或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九九一〇 我ガ國ノ紙幣ハ(略)之ヲ日本銀行ニ持行カバ、何時ニテモ金貨ト交換スルコトヲ得ベシ。

こうき「高貴」(形状) 1 高貴

十二四七三〇 「農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。」といへるワシントン

の言味はふべし。

こうぎ「講義」(名) 3 講義

七二四二〇 保己一ハ(略)。(略)アル夜弟子ヲ集メテ、書物ノ講義ヲセシ時、(略)。

七二四四〇 保己一ハソレトモ知ラズ、講義ヲツケタレバ、(略)。

十五七七〇 此の頃の術科は分隊教練にて、學科は讀法の講義及び毎日の術科に關する説明に御座候。

こうきよ「皇居」(名) 5 皇居

七五五〇 正成戦死シテ後ハ、(略)、天皇ハ吉野山ノカリノ皇居ニウツリタマヘリ。

七五五五〇 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。

七五八〇 正行コノ度ハサイゴノ合戦セントテ、皇居ニマキリテ申シ上グルヤウ、(略)。

十四〇三〇 其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、神功皇后以後、シバ

ノ皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。

十一五二〇 其の後吉野の朝の皇居となりしは人の能く知る所なり。

こうきよう「公共」(名) 3 公共

十二九二〇 (略)、世間の交際をも外さず、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、公共の事業にも後れを取るべからず。

十二九八四〇 公德とは(略)、公共の物品を大切にす等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二四〇四〇 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、(略)。

こうきよう「広狭」(名) 1 廣狹

十二四〇二〇 我が國の地方自治團體は、(略)、其の土地に廣狹の差あり、(略)。

こうきよう「孝経」(名) 1 孝經

十二九六〇 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。

こうぎよう「工業」(名) 5 工業

六八一一〇 今ハ工業モ大イニヒラケテ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。

八四四一 毎日の食物のたきから種々

の工業まで、火の力を要することは
数へきれない程多い。

八七五 〔北アメリカには合衆國といふ國あり。農業・工業・商業共に盛にして、國甚だ富めり。〕

八七七 〔イギリスは（略）、商業・工業いづれも盛に、海軍強く、商船多し。〕

十二四九 〔焼物類は（略）。漆器は（略）。世界無比なる七寶の名は海外にやどるけり、やぎ出し蒔繪の精巧も 我が工業のほこりにて。〕

こうぎょう 〔功業〕（名）1 功業

十一六七 〔功略、功業を成し、公益を廣むるも、將又無爲にして一生を終ふるも、（略）。〕

こうぎょう 〔鉱業〕（名）1 礦業

十六三 〔此ノ銅山ハ（略）。（略）。〕

此ノアタリ、（略）、鑛業ノ盛大ニオモムクト共ニ次第二發達シテ、（略）。

こうぎょう 〔公共營造物〕（名）1 公共營造物

十二九九 〔汽車・汽船・電車等の交通機關、博物館・圖書館等の公共營造物に在りては、敏速と規律とを尊ぶものなれば、（略）。〕

こうきょうしん 〔公共心〕（名）1 公共心

十二一〇五 〔又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心。〕

心の發動にして、（略）。〕

こうぎよくてんのう 〔皇極天皇〕（人名）

1 皇極天皇

八四九 〔今ヨリ千二百年ノ昔、皇極天皇ノ御代、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。〕

こうげ 〔高下〕（名）2 高下

十一九一 〔物の價の高下は主として需要と供給との關係によりて定まるものなり。〕

十二一〇二 〔上元帥より下一卒に至るまで、官職の高下、就職の新舊によりて上下の分別最も正し。〕

こうけい 〔光景〕（名）2 光景

十一一五 〔全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。〕

十二四三 〔熔岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。〕

こうげい 〔工芸〕（名）2 工藝

八七八 〔フランスは（略）。早くより工藝・美術の發達したる國なり。〕

十五〇一 〔種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。〕

こうげき 〔攻撃〕（名）1 攻撃

いらいこうげき・すいらいこうげき
十一八六 〔働蜂の武器は體の後方にある鋭利なる針にして、攻撃にも防禦にも常に之を用ふ。〕

こうげき・す 〔攻撃〕（サ変）3 攻撃ス

攻撃す 〔一スル―セ〕

十一三三 〔砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。〕

十二七三 〔我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、（略）。〕

十二七七 〔夜に入りて、我が驅逐隊・水雷艇隊は（略）、無二無三に攻撃せしかば、敵艦隊は四分五裂の有様となれり。〕

こうげ・す 〔高下〕（サ変）1 高下ス

〔一スル〕

十二五五 〔内國ノ商業モ、海外ノ貿易モ、（略）、需要供給ノ原則ニヨリテ物價ノ高下スルモ亦相同ジ。〕

こうけん 〔口のうこうけん〕

こうこう 〔江口〕（名）1 江口

十二五八 〔安奉線は奉天より鴨綠江の江口に近き安東縣に達して、（略）。〕

こうこう 〔孝行〕（名）2 孝行

七二九 〔我が死ニタル後モ、（略）、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。汝ノ孝行コレニスギタルコトナシ。〕

七四四 〔いほりもかうは孝行の會我兄弟に知られたり。〕

こうこう 〔礦坑〕（名）1 礦坑

十二四八 〔古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は 山をうがちて山を鑛る。〕

こうこう 〔皇后〕（名）6 皇后

ぐうこうぐういご・てんのうこうぐうりようへいか

十六八 〔ある雪の朝、皇后は美しき御庭の雪景色を御覽じて、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、（略）。〕

十七一 〔皇后の御感一入なりきとぞ。〕

十二七三 〔彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラナリキ。〕

十二七五 〔略、遂に皇后イサベラの知る所となり、其の保護の下に此の大探檢を行ふに至れり。〕

十二七二 〔略、コロンプスの暴舉をあざける者、皇后の無謀をそしる者、口々に語り合へり。〕

十二八〇 〔略、皇后も亦コロンプスを引見して、厚く其の勳功を賞せり。〕

こうこうさま 〔皇后様〕（名）1 皇后さま

五三六 〔略、皇后さまがかひこをおかひあそばすためにごさいました。〕

こうこうしさ 〔神神〕（名）1 神々しさ
八五四 〔略、數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高くと天をつく。その神々しさいはん方なし。〕

こうこうしゃく 〔公侯爵〕（名）1 公侯爵

十二106 4 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。皇族・公侯爵、同爵の互選せる伯子男爵、(略)。

こうこうす「航行」(サ変) 4 航行す「シ・ス・レー・セ」

十一27 1 和船の大なるは(略)、近海を航行すれども、橋はおほむね一本なり。

十一29 2 大小幾多の軍艦は(略)、遠く四方に航行して、到る處に國光をかゞやかせり。

十二77 8 (略)、こゝにて船體に修繕を加へ、九月六日更に西へ向つて航行せり。

十二77 8 是より先は未だ航行せしことなき大洋なれば、乗組の人々も次第に不安の念を生ぜり。

こうこく「広告」(名) 5 廣告

十34 4 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十二52 6 廣告ハ商業發展ノ有力ナル手段ナリ。

十二52 7 近年各國商人皆爭ヒテ其ノ方法ヲ講ジ、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。

十二52 9 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、一箇年實ニ十二億圓ノ多キニ達ストイフ。

十二52 10 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ

事ニアラズ。

こうこく「皇國」(名) 1 皇國

十二5 8 「皇國の興廢此の一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ。」

こうこくする「廣告」(サ変) 1 廣告する「シ」

九32 1 (略)、「何月何日、初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、(略)。

こうさい「交際」(名) 2 交際

十二92 7 身分相當の交際は家を保つ上にも必要なり。

十二92 9 親類・縁者はもとより、世間の交際をも外さず、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、(略)。

こうさく「耕作」(名) 3 耕作

十一38 3 米田は(略)。耕作に水牛を使用する様も珍しく、(略)。

十一102 5 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)。

十一111 9 村の財産家に勸業に熱心なる人あり、自ら先んじて耕作・養蠶・養雞・養魚等の模範を示せしを以て、近年作物の改良も出來、(略)。

こうさくせん「工作船」(名) 1 工作船

十一35 1 以上ノ外、尚水雷母艦・工作船・給炭船等ノ如キ特別任務ヲ有スルモノアリ。

こうさくち「耕作地」(名) 1 耕作地

十二44 3 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬町歩あり。

こうさくち「耕作地」(名) 1 耕作地

十二46 5 (略)、善良なる耕作用の牛馬、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

こうざん「高山」(名) 2 高山

十一3 9 日本一の高山は臺灣の新高山なり。

十一5 9 昔より富士は日本一の高山と稱せられしが、(略)。

こうざん「降参」(サ変) 1 降参す「シ」

九6 4 尊はなほも進みて北に向ひ給ひしに、蝦夷ども皆恐れて降参し、東國ことごとく平ぎたり。

こうし「孔子」(人名) 17 孔子

十二72 5 孔子曰く、「疏食をくらひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。

十二93 3 支那幾千年間の人物中、大聖として徳化の尚今日に著しきもの、孔子に如くはなし。

十二93 3 孔子は凡そ二千四百六十年前、支那の春秋時代に生る。

十二93 5 孔子は魯といふ國に生れ、人と爲り禮を好み、温良・恭儉なりき。

十二93 7 孔子は年少にして禮を好み、我死せば、汝必ず之を師とせよ。」

十二93 9 是孔子が十七歳の時なり

き。

十二93 10 孔子事へて吏となりしに、治績大いに擧り、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。

十二94 3 齊の景公も亦道を孔子に問へり。

十二94 5 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」とは孔子が景公に教へたる語なり。

十二94 8 或時齊の臣景公に告げて曰く、「魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん。」と。

十二95 2 其の時齊の有司進みて戲樂を奏せしかば、孔子は禮に反せるものありとて之を止めしむ。

十二95 7 此の會に於ける孔子の行動は、蘭相如が秦王を叱したるとは異なり、(略)、孔子は義を以て人を動かせしなり。

十二95 9 (略)、相如は氣を以て人を服せりといへども、孔子は義を以て人を動かせしなり。

十二95 10 智徳の最も圓滿に發達せる人格は孔子に於て之を見るべし。

十二96 2 孔子の孫子思の學説を受け、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

十二96 6 (略)、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

十二96 10 孟子死して二千餘年、孔子と共に其の名益々あらはる。

こうし「公私」(名) 1 公私

十二879 是より暇を請ひて郷里に
歸り、公私の用を終へて、再び江戸
に出づれば、(略)。

こうし「孝子」(名) 2 孝子

十一597 義勇の務御國に盡し、孝子の譽
我が家にあげよ。

十一777 美濃の養老瀧は孝子の傳
説を以て其の名天下に高し。

こうじ「小路」ひひるこうじ

こうじ「工事」(名) 3 工事

十三6 日本一の大トンネルは(略)。
(略)。其の工事の總費用は百九十萬
圓餘にして、(略)。

十二1510 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等
ヲスル處ヲ船渠トイフ。(略)。船ヲ
其ノ中ニ入レテ(略) 工事ニ掛ルノ
デアル。

十二348 (略) 學校ガ落成シテ、(略)。
(略)。先ツ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、
町長ハ工事ノ報告ヲシタ。

こうじ「公事」(名) 3 公事

十二373 私事は軽く、公事は重し。
十二373 古語に「私事を以て公事
をすてず」といへり。

十二382 是は公の大事なり。何
ぞ私事を以て公事を害せんや。」

こうじ「後事」(名) 1 後事

十一1035 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ
孔明ニユダネテ、「我ガ子若シタス
クベクンバ、之ヲタスケヨ。若シ不

オナラバ、君自ラ之ニ代レ。」トイ
ヒシニ、(略)。

こうじかんけい「いしやいしや」
者一同」(名) 1 工事關係者一同

十二346 (略) 學校ガ落成シテ、(略)。
(略)、其ノ他工事關係者一同新校舍
ニ參集シ、(略)。

こうじちゅう「工事中」(名) 1 工事中
十一377 (略) 打狗の築港も唯
今盛に工事中に御座候。

こうしつ「皇室」(名) 3 皇室

八33 皇室及び國家に大事あれ
ば、(略)、かならずこれを告げたまふ。

十一1027 コ、ニマウツルモノ、誰カ
ハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ
御威徳ヲ仰ガザラン。

十一1165 神代はるけき昔より
君臣分は定まりて、萬世一系動きな
き 我が皇室の大みいつ。

こうじとしじ「課名」2 公事と私事

十二11 第十課 公事と私事
十二37 第十課 公事と私事

こうしともうし「課名」2 孔子と孟子
十二10 第二十三課 孔子と孟子
十二93 第二十三課 孔子と孟子

こうじまち ひとときようこうじまちく
たけひらちよういち

こうしや「校舎」(名) 1 校舎ひしん

こうしや・ほんこうしや
十二36 學校ガ落成シテ、(略)
落成式ガ舉行サレタ。(略)。式終ツ

テ、一同校舎ヲ巡覽シタ。

こうしやく「こうこうしやく」
こうし「耕種」(名) 1 耕種
十二4310 我が國は氣候温に、地味
肥え、極めて耕種に適し、米・麥の
栽培は最も早く開けたり。

こうしゅう「公衆」(名) 4 公衆
十一6810 (略)、街上に落ちたる硝
子の一片を去るも、公衆の利益なる
べし。

十二984 公德とは公衆の衛生を重
んじ、(略)等、總べて衆人の利害
を考へて其の行爲をつゝしむ徳義を
いふ。

十二9810 道を行くにも、舟・車に
乗るにも、旅館に宿るにも、自ら公
衆に對する禮儀あり。

十二9910 若し公衆の間に、規則を
守り、規律を重んずる心乏しき時は
(略)。

こうじよ「工女」(名) 2 工女
十一862 工女ハ常ニ其ノ前ニ立
チ、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレ
バ直チニ之ヲツナグ。

十一871 (略)、今ハ僅カニ六七人
ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱
フコトヲ得ベシ。

こうじよ「孝女」(名) 1 孝女
十二325 孝女お房の幼き身を以て
能く父母に事へたる、(略)、皆後世
女子の模範とすべき德行なり。

こうししょう「工廠」(名) 1 工廠ひさ

こうししょう「工廠」(名) 1 工廠ひさ

せばかいぐんこうししょう

十二153 我が國ノ造船所デ、最モ
規模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、中
ニモ横須賀ト吳ノガ最大ナモノデア
ル。

こうししょう「高尚」(形状) 1 高尚
十二976 官位・門地・技術・財
産・學問等に於て衆を抜く者は、個
人としても自ら高尚なる品格を要す
るが如く、(略)。

*こうじしょう「工場」ひひるこうじしょう
こうじしょう「皇城」(名) 1 皇城
九642 之をほうむりし時は、(略)、
かばねを宮城の方に向ひて立たせ、
ながく皇城を守護せしめたりとい
ふ。

こうしよく「公職」(名) 1 公職ひち
ほうこうしよく
十二1094 (略)、一般選舉人も(略)
參政の公職に最も適任なる人物を選
出せざるべからず。

こうしん「行進」(名) 1 行進
十二699 (略) 幾千萬とも數知れ
ぬ大群、長列をなして枯野を横ぎる
に、(略)。(略)。(略)、飢餓刻々に
せまるが故に、次第に行進を早め、
(略)。

こうじん「後人」(名) 1 後人
十一1047 後人曰ク、「出師ノ表ヲ
見テ泣カザルモノハ人ニ非ズ。」ト。

こう・す「航」(サ変) 1 航す「一ス
ル」

十二54 4 門司にて乗船し朝鮮海峡を過ぎて、黄海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

こうず「薨」(サ変) 1 薨す 《一ゼ》

九63 10 田村麻呂は(略)。(略)。

かばかりの大功ありし人故、(略)、其の薨せし時、天皇は深く之ををしみ給ひき。

こうず「講」(サ変) 4 講ズ 講ず

《一ジーズル・一ゼ》

十83 3 されば北海道舊土人保護法と稱する法律ありて、(略)、農具・種子等を給し、(略) 學校を建つる等、厚く保護の方法を講ぜり。

十二52 7 廣告ハ(略)。近年各國商人皆爭ヒテ其ノ方法ヲ講ジ、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。

十二53 4 強兵ヲ以テ知ラレタル我が國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、(略)。

十二96 9 孟子(略)、戰國爭奪の世に在りて、専ら聖人の道を講ぜり。

こうず「上野」(地名) 3 上野 上野

九14 8 上野ノ東北部、越後ノ國境ナル利根岳ヨリ發スルサ、ヤカナル細谷川ハ、(略)。

九15 4 更ニ東南ニ流レテ、上野・武藏ノ國境ヲ過ギ、(略)。

九17 國 上野

こうせい「後世」(名) 2 後世

十二32 8 (略)、皆後世女子の模範

とすべき徳行なり。

十二97 1 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあけて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。

こうせい「高聲」(名) 2 高聲

十56 8 兵舎内にては歌をうたふ事、高聲にて談話する事、(略)等堅く禁ぜられ居り候。

十二99 3 (略)、旅館にて夜晩く高聲を發して、他人の安眠をさまたぐるが如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。

こうせい「構成」(名) 1 構成

十二11 10 其ノ圖ハ船ノ切斷面及ビ構成等ヲ何十分ノ一ニシテ縮圖デ、(略)。

こうせい「好成绩」(名) 1 好成绩

十二35 10 (略)、今ヤ全國就學兒童ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、本郡ノ如キハ實ニ百分ノ九十九ノ好成绩ヲ示セリ。

こうせん「勾踐」(人名) 2 勾踐 勾踐

十二15 10 天、勾踐を空しうするなかれ。時范蠡無きにしもあらず。

十一16 9 (略)、越王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

こうせん「口錢」(名) 1 口錢

七14 7 問屋といふのは他人からのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。

こうせん「公選」(サ変) 1 公選す

十二106 10 衆議院は一定の選舉資格を有する臣民の公選したる議員を以て組織し、(略)。

こうそ「皇祖」(名) 2 皇祖

八2 2 神代の昔皇祖天照大神、瓊々杵尊をこの國に降したまはんとせし時、(略)。

八2 8 (略)、この御鏡を御神體として、皇祖天照大神をまつりたまへるなり。

こうそ「高祖」(名) 2 高祖

十25 8 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖ニ仕へ、(略)。

十25 9 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖ニ仕へ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

こうぞう「孝蔵」(名) 1 孝蔵

こうぞう「構造」(名) 4 構造

十78 7 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、一小部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關スルモノナレバ、(略)。

十一26 10 荷足・高瀬・茶船・屋根船等其の目的により、大小・構造千差萬別あり。

十一107 3 家の構造は主として寒さを防ぐ様に出來てゐる。

十二14 4 船ヲ組立テルニハ、(略)。(略)。コレハホンノ大體ノ構造ノ話

デ、實際ハ龍骨ニモ、(略) ニモソレハ附屬具ガアリ、(略) 船底モ兩側モ二重張ニスル。

こうぞう「構造分圖」(名) 1 構造分圖

十二12 3 設計圖ガ出來上ルト、細密ナ構造分圖ヲ各工場ニ廻シ、必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、(略)。

こうぞく「皇族」(名) 1 皇族

十二106 4 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。皇族・公侯爵、同爵の互選せる伯子男爵、(略)。

こうそん「皇孫」(名) 1 皇孫

九4 4 天照大神、八咫鏡・八坂瓊曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしかば、これより三種の神器の一となれり。

こうだい「廣大」(形状) 4 廣大

十74 1 箱根は(略)、廣大なる旅館も少からざれども、(略)。

十一100 3 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然林にして、(略)。

十一105 6 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、賊將歎ジテ、(略)。其ノ度量ノ廣大ナルヲ知ルベシ。

十二45 9 耕地の面積廣大なるが如くなれども、總面積の約一割五分に過ぎず。

こうだいじんぐう「皇大神宮」(課名)

2 皇大神宮

八目2 第一 皇大神宮

八11 第一 皇大神宮

こうだいじんぐう「皇大神宮」(名) 2

皇大神宮

八12 代々の天皇は皇大神宮をたふとびたまふことはめてあつく、

國民もまた深くうやまひ奉りて、一生一度は、かならず伊勢に参拜せんと心がけざるものなし。

八19 諸子は皇大神宮のかくばかりたふときいはれを知れりや。

こうたいしでんか「皇太子殿下」(名)

2 皇太子殿下

八45 橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツタ。

八90 4 今日ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日ダ。

こうたまじり「小歌混」(名) 1 小歌交り

十一26 5 小歌交りに老船頭のさをさし行く乗合舟ののどけさよ。

こうだん「講談」(名) 1 講談

十58 10 略、又日曜日等には忠臣・義士に關する講談等もこれあり、面白く有益に存候。

こうち「高知」(地名) 1 高知

十一18 高知

こうち「耕地」(名) 2 耕地

十二45 9 耕地の面積廣大なるが如くなれども、總面積の約一割五分に

過ぎず。

十二45 10 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、(略)。

こうち「高地」(名) 2 高地

八76 6 「一度占領シタ此ノ高地、全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。

十二68 1 東南シベリヤの高地に住めるかもしかの一種は、(略)、水を尋ねて低地に下り、春を待ちて再び山谷に入る。

こうちせいり「耕地整理」(名) 3 耕地整理

十90 5 略、農商務省の技師田島農學士の耕地整理に關する講話これあり候。

十92 4 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、(略)、何れ熱考の上實行せんと申合せ居り候事とて、(略)。

十一114 4 耕地整理は縣下諸村に先んじて着手し、昨年既に之を完成せり。之によりて用水路の改修行はれ、灌漑・排水其のよろしきを得て、水田は乾田となり、(略)。

こうちよう「校長」(名) 4 校長

十一112 10 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、(略)。

十一113 1 略、生徒も亦校長をしたふこと父母の如し。

十一113 2 其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵するが故に、(略)。

範として、職務に勉勵するが故に、(略)。

十一114 1 「不作の後なれば、成るべく經費を節約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」

こうつう「交通」(名) 9 交通

かいがいこうつう・ふうしんこうつう・まんしゅうせいじこうつう

十一24 7 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形状も様々なり。

十一29 4 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。空中の交通開始せられ、(略)も決して座上の空談にあらずらんとす。

十一36 9 今や西部縦貫鐵道も全部開通致候事とて、交通の利便いよく開け、(略)。

十一96 4 西海岸の眞岡港のみ唯一の不凍港として僅かに内地との交通を保ち居候。

十一97 7 又豊原より眞岡に至る間も近時道路新に開け、交通大いに便利に相成候。

十一98 2 略の間は最も狭く、且山脈低くして、東西の交通最も便利なる所に御座候。

十二50 6 外国トノ交通少カリシ時代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタリキ。

十二50 7 東西ノ交通盛ニシテ千里比隣ノ如キ今日ニ於テハ商業ハ世界

ヲ相手ノ商業トナレリ。

十二74 2 然るに印度との交通は長日月を要し、中途の危険亦少からざれば、便利なる航路を開かんことは歐洲人一般の希望なりき。

こうつうきかん「交通機關」(名) 2 交通機關

十二62 8 倫敦は(略)、古き都市にして街路狭ければ、古風の乗合馬車を以て主なる交通機關とす。

十二99 8 汽車・汽船・電車等の交通機關、博物館・圖書館等の公共營造物に在りては、敏速と規律とを尊ぶものなれば、(略)。

こうてい「高低」(名) 1 高低

十二51 5 故ニ商人ハ常ニ全世界ニ於ケル物價ノ高低ニ注意シ、需要供給ノ情況ニ精通スルヲ要ス。

こうてつ「鋼鉄」(名) 1 鋼鉄

十一32 1 戦艦ハ(略)、又艦ノ要部ハ極メテ厚キ鋼鉄ニテ包メリ。

こうてつしんちゆうるい「鋼鉄真鍮類」(名) 1 鋼鉄・真鍮類

十二12 6 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、鋼鐵・眞鍮類ヲ鑄ル處モアリ、(略)。

こうと「皇都」(名) 1 皇都

十二18 7 夜間は紅燈を赤球に、緑

燈を圓筒形に、紅綠二燈を圓錐形に代ふ。

こうどう「公道」(名) 2 公道

十二113 〇 (略)、小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

十二117 〇 (略)「此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。行ひ易く、守り易し。」

こうどう「行動」(名) 2 行動

十一31 〇 (略) 水雷艇ニハ (略)ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。其ノ敏速ナル行動ハ鳥ノ空中ヲ飛行スル如クナレバナルベシ。

十二95 〇 (略) 戲樂を奏せしかば、孔子は禮に反せるものありとて之を止めしむ。(略)。此の會に於ける孔子の行動は蘭相如が秦王を叱したるとは異なり、(略)。

こうどう「坑道」(名) 1 坑道 ムだい

十二62 1 〇 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道アリ。其ノ左右上下更ニ無數ノ坑道アリ、又上下ニ通ズル大ナル堅坑アリ。

こうどう「講堂」(名) 1 講堂

七80 9 〇 「私も子供の時には毎日この學校へ通つて、(略)、この講堂でお話を聞いたりしてゐたのです。」

こうとうじょうがっこう「高等女學校」(名) 1 高等女學校

十95 1 〇 縣廳・裁判所・師範學校・高等女學校等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境内ニ在リ。

こうどう「す」合同」(サ変) 1 合同ス

「一シ」

十一33 2 〇 巡洋艦ハ (略)。(略)、時ニ戰艦ト合同シテ敵ノ主力ト戰フコトアリ。

こうとく「公德」(名) 3 公德

十二98 3 〇 國民各自の行爲をつしめ、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、殊に他國人の注意を引くものは社會の公德及び國民の度量なりとす。

十二98 4 〇 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にす等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつしむ德義をいふ。

十二98 8 〇 市街・道路を不潔にし、官廳・學校・神社・佛閣等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、大國民の品格を傷つくるものなり。

こうない「坑内」(名) 1 坑内

十二62 5 〇 發掘シタル銅鑛ハ、(略)、或ハ坑内ニ敷キタルレールニヨリテ坑外ニ運ビ出シ、(略)。

こうのもろなお「高師直」(人名) 1 高師直

七5 6 〇 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戰ヒシガ、アル年敵

ノ大將高師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來リ攻ム。

こうば「工場」(名) 1 工場 ムかくこ

うば・ぼうせきこうば

十二12 6 〇 工場ニハ色々アル。鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、(略)、又木製ノ器具類ヲ製造スル木工工場モアル。

こうはい「興廢」(名) 1 興廢

十二5 8 〇 「皇國の興廢此の一戰にあり。」

こうばい「紅梅」(名) 2 コウバイ

紅梅

二45 3 〇 白イノモコウバイモアリマス。

九11 6 〇 (略) 色香も深き 紅梅の枝にむすびて、(略)。

こうばい「紅梅色」(名) 1 紅梅色

十二48 8 〇 花の名より取れる桃色・紅梅色・藤色・櫻色、(略)。

こうはく「紅白」(名) 2 紅白

八35 7 〇 (略)、山々の櫻も咲けば、梨・すもも、皆一時に紅白の花のながめのうるはしさ。

九67 6 〇 春の初に降るのは一雨毎に花をもよほすかとうれしい。「紅白花は開く煙雨の中。」といふ景色は、(略)。

こうばし「香」(形) 1 かうばし

「一シク」

八8 9 〇 (略) たどり行く細路づたひ、はや、かうばしききのこにはへり。

こうばな「香花」(名) 1 香花

十二86 2 〇 四十七士の事蹟は (略)、東京高輪泉岳寺の墓前には今尚香花の絶ゆることなし。

こうば「後尾」(名) 1 後尾

十二6 3 〇 (略)、片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

こうふ「坑夫」(名) 1 坑夫

十二62 2 〇 カンテラノ光ヲ便リニ數千人ノ坑夫ガ銅鑛ヲ掘取ルコト、晝夜止ム時ナシ。

こうふく「幸福」(名) 4 幸福

八15 7 〇 人ノ幸福ハ皆自分ノ働デ産ミ出ス外ハナイ。

十二36 8 〇 本校舎ノ建築ハ (略)、其ノ注意ノ周到ナル、縣下マレニ見ル所ナルベシ。將來本校ニ學ブ者ノ幸福如何ゾヤ。

十二70 7 〇 永遠の幸福を望む者は一時の勞苦を忍ぶべし。

十二102 5 〇 (略)、地方自治の精神に基つて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。

こうふく「幸福」(形状) 1 幸福

十一69 9 〇 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

こうふくじ「興福寺」(名) 3 興福寺

十94 2 〇 興福寺ノ五重塔高ク其ノ北ニソビユ。此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニシテ藤原不比等ノ建立セシトコロ、(略)。

こうふくじ「興福寺」(名) 3 興福寺

- 十95 1 縣廳・裁判所・師範學校・高等女學校等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境内ニ在リ。
- 十97 7 〔略〕、東ニ春日・三笠・若草等ノ山々相連リ、其ノフモトニ大佛殿・興福寺高クソビエ、〔略〕。
- こうふくす 〔降服〕(サ変) 1 降服す
- 《一セ》
- 十二8 10 敵今は逃れぬところと覺悟したりけん、ネボカトフ少將は白旗をかゝげ、〔略〕其の部下と共に降服せり。
- こうふくす 〔興復〕(サ変) 1 興復ス
- 《一セ》
- 十一104 4 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、〔略〕。
- こうぶつ 〔鉱物〕(名) 1 礦物
- 十72 7 温泉の諸種の病を治するは、たゞに其のふくめる礦物の効のみならず、〔略〕。
- こうべ 〔神戸〕(地名) 1 神戸
- 十一18 國 神戸
- こうべ 〔首〕(名) 3 頭
- 十54 5 悲しきは老の白髪なり。』といひしにたがはず、墨を塗りて候。』とて、之を洗ふに白髪の頭となれり。
- 十二81 4 頭には霜をいたゞき、身にはつゞれをまとい、やせ衰へた體を義足に支へて、〔略〕老人の辻音樂師がある。
- 十二87 2 獸ならば、かくして食へ。』と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。良雄平然頭を低くして之を食ひ、からくんと打笑へり。
- こうへい 〔工兵〕(名) 3 工兵
- 九24 10 工兵は陣地をきつき、道を開き、橋をかけ、鐵道を造り、電信を通ずる等、もつぱら技術の事にしたがふ。
- 九25 5 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵は何れも戦争に必要にして、其の任務には輕重の別あることなし。
- 九26 7 二箇旅團の歩兵にそこぼくの騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へたるものを師團といふ。
- こうへい 〔公平〕(形状) 1 公平ひしんせつこうへい
- 十二103 4 〔略〕、市町村長・參事會員等の其の事務を處理するも、議員の經費を議するも、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。
- こうへいむし 〔公平無私〕(名) 2 公平無私
- 十二104 1 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。
- 十二109 3 〔略〕、一般選舉人も亦公平無私の精神を以て參政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。
- こうべし 〔神戸市〕(地名) 1 神戸市
- 十一77 4 神戸市に近き布引瀧は雌雄二瀑あり。
- こうべしいうどう 〔神戸市水道〕(名) 1 神戸市水道
- 十一77 5 神戸市に近き布引瀧は〔略〕。〔略〕。市民遊覽の地にして、又神戸市水道の源たり。
- こうほう 〔後方〕(名) 4 後方
- 九25 4 又別に輜重兵ありて、後方より兵糧・彈藥等を運ぶ。
- 十96 2 三笠山ハ此ノ神社ノ後方ニアリ。
- 十一8 6 働蜂の武器は體の後方にある鋭利なる針にして、〔略〕。
- 十二56 8 〔略〕旅順口に達す。〔略〕。其の後方の山々は〔略〕。
- こうほう 〔興亡〕(名) 1 興亡
- 十二26 1 歴史は長き七百年、興亡すべてゆめに似て、英雄墓はこけ蒸しぬ。
- こうほう 〔号砲〕(名) 1 號砲
- 十二79 2 〔略〕、朝の二時頃「陸」「陸」「陸」と呼ぶものあり。〔略〕、先頭の一艦が発せる號砲に、人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所を知らず。
- こうま 〔小馬〕(課名) 2 こうま
- 三目10 九 こうま
- 三25 4 九 こうま
- こうま 〔小馬〕(名) 5 小馬
- 三25 6 はいしい、はいしい、あゆめよ、小馬。
- 三26 8 ばかばか、ばかばか、走れよ、小馬。
- 六65 5 シグマトイフ熊ハ小馬ホドアツテ、力ガ強ウゴザイマス。
- 七59 7 犬の種類はすこぶる多し。大なるは小馬の如く、〔略〕。
- 十一108 10 男の冠をかぶり、〔略〕、小馬に乗つて、田舎道を通るのを見る
- と、〔略〕。
- こうみょう 〔功名〕(名) 1 功名
- 九22 6 併し今の戦争は昔とちがつて、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。
- こうめい 〔孔明〕(人名) 19 孔明ひしよかつこうめい
- 十一102 8 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、〔略〕。
- 十一102 9 備サトシテ曰ク、「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。
- 十一103 2 孔明、劉備ニ事へ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。
- 十一103 5 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「我が子(略)。若シ不オナラバ、君自ラ之ニ代レ。」トイヒシニ、〔略〕。
- 十一103 7 〔略〕、孔明涙ヲ流シテ、

「臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致スベシ。」ト答フ。

十一103 8 〇 備又其ノ子ニ向ヒテ、「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」トイフ。

十一104 1 〇 孔明是ヨリ幼主ヲ輔ケ、益々心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

十一104 3 〇 蜀國ノ魏・吳ニ強國ト相對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

十一104 4 〇 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、(略)。

十一104 9 〇 孔明ハ沈着ニシテ、機ニ臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。

十一104 10 〇 (略)、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕ヘ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。

十一105 2 〇 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。

十一105 7 〇 孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規律ヲ重ンジタリ。

十一105 8 〇 或時將軍馬謖(バシヨク)孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。

十一105 8 〇 孔明、謖ノ舊功ヲ惜シシカド、軍律ヲ亂サンコトヲ恐レ、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、又自ラ責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。

十一106 1 〇 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒

ス。

十一106 5 〇 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

十一106 6 〇 孔明ハ天下ノ奇才ナリ。

十一106 7 〇 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、(略)。

こうめいせいだい「公明正大」(形状) 1 公明正大

十一52 8 〇 公明正大ニシテ、心中一點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。(略)。

ヨク笑ハント欲スルモノハ、常ニ其ノ行ヲツシミ、上、天ニ恥ヂズ、下、地ニ恥ヂズ、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

こうもう「鴻毛」(名) 1 鴻毛

十二111 8 〇 (略)、軍人たる者は一途に忠節を重んじ、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

こうもはん「好模範」(名) 1 好模範

十二62 4 〇 街路は掃除最もよく行きてゝきて、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。此の點より見れば眞に近世都市の好模範たり。

こうもり「蝙蝠」(課名) 2 カウモリ

五目6 第十八 カウモリ

五27 第十八 カウモリ

こうもり「蝙蝠」(名) 4 カウモリ

五53 1 (略)、カウモリハ「私ハ鳥デ

モケモノデモナイカラ。」トイッテ、ドチラヘモツキマセシデシタ。

五54 8 ソノ時カウモリガケモノノ方ヘ行キマス、ト、「オ前ハ鳥デハナイカ。」トイッテ、仲間ヘ入レマセン。

六43 2 鳥ナキ里ノカウモリ。

九53 8 晝ハ暗キ所ニヒソミ、日暮ヨリ出デテ飛ブカウモリハ暗黒色ニシテ、(略)。

こうや「広野」(名) 1 廣野

十二68 10 〇 満目の廣野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

こうよう「効用」(名) 5 効用

十10 10 〇 其の他森林は氣候を和げ、土砂の流出を防ぎ、神社・佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

十11 1 〇 森林の効用かくの如く著しきを以て、(略)。

十一90 6 〇 物の價は効用あることと、隨意に得られざることによりて生ずるものなり。

十一90 8 〇 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、(略)。

十一90 8 〇 (略)、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなし。

こうらい「くらいくさ」(名) 3 小賣

七13 7 〇 小賣と卸賣とはどちらがひますか。

七13 8 〇 小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。

七13 9 〇 小賣をする商人を小賣商人といひます。

こうり「公吏」(名) 1 公吏

十二104 3 〇 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、(略)。

こうりしょうにん「小売商人」(名) 1 小賣商人

七14 1 〇 小賣をする商人を小賣商人といひます。

こうりてん「小売店」(名) 1 小賣店

七14 2 〇 卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、(略)。

こうりゅう「江流」(名) 1 江流

十二69 5 〇 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、(略)、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

こうりゅうす「合流」(サ変) 1 合流ス

九17 1 〇 霞浦・北浦等ノ合流スルアタリニハ名勝ノ地少カラズ。

こうりよう「ほううせきこうりようけん」(名) 1 効力

十二108 3 〇 兩院の決議一致すとも、

天皇の裁可を経ざれば其の効力を生ぜざるなり。

こうりょくにとう「紅緑二灯」(名) 1

紅緑二燈

十二18 8 図 夜間は紅燈を赤球に、綠燈を圓筒形に、紅緑二燈を圓錐形に代ふ。

こうりん ㄱこうりん

こうれい「号令」(名) 1 號令

十64 6 船長の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じて、北へ向つて走る。

こうろ「航路」(名) 3 航路

十一28 8 図 (略)、又支那沿岸はおろか、印度・南洋より亞米利加・歐羅巴の航路をも開くに至れり。

十一96 3 図 (略)、海岸も海水厚く凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、一月より三月まで凡そ三箇月間は航路殆ど全く絶え、(略)。

十二74 3 図 當時伊太利は貿易の中心地にして、(略)。(略)、便利なる航路を開かんことは歐洲人一般の希望なりき。

こうろう「功勞」(名) 3 功勞

九29 8 図 益次郎ハ維新ノ際軍事ニ功勞多カリシ人ナリ。

九62 8 図 (略)、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。

十44 5 図 眠亀ガ(略)、機械ヲ發明シ、國產ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。

こうろほう「香炉峰」(地名) 2 香爐峯

十16 9 図

ある雪の朝、皇后は美しき御庭の雪景色を御覽じて、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、(略)。

十17 3 図 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかくげて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、(略)。

こうろん「口論」(名) 1 口論

十一47 5 さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。馬主はもう一文も引けぬといふ。段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。

こうろん「公論」(名) 1 公論

十二106 1 図 しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聽く機關に供せさせ給へり。

こうわ「講話」(名) 3 講話

十90 5 図 拜啓、来る八日午後一時半より當村小學校に於て、農商務省の技師田島農學士の耕地整理に關する講話これあり候。

十90 9 図 (略)、其の講話は定めて有益なる事と存候。

十92 8 図 (略)、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

こうわかい「講話會」(名) 1 講話會

十92 2 図 来る八日講話會これあり候由にて御誘ひ下され有り難く存候。

こうわかいのあんないぶん「課名」2

講話會の案内文

十目12 第二十五課 講話會の案内文

十90 2 第二十五課 講話會の案内文

こうわん「港灣」(名) 1 港灣

十一32 7 図 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ情勢ヲサグリ、(略)。

こえ「声」(名) 45 コエ こゑ 聲

おおこえ・なきこえ・ぼんどうこえ・ひとこえ・みこえ・むしのこえ・よびこえ・わらいこえ

二21 5 ワタクシヲヒノナカヘイレルト、大キナコエヲタテテ、トビダシマス。

二28 5 ケサハカラスノナクコエモ、スズメノナクコエモ、ウレシサウニキコエマス。

二28 7 (略)、スズメノナクコエモ、ウレシサウニキコエマス。

二17 8 サヘヅリナガラ(略)。モウコエバカリキコエテ、スガタハミエマセン。

三33 4 ナヘヲウエテキル女ハ、(略)、コエヲソロヘテ、ウタツテキマス。

四19 8 (略)「一どうのものが、ただつねをほめるこゑは、山もくづれるほどであつたといひます。

四27 3 くさのかげにないてゐた虫も(略)、もうなくこゑもきこえません。

四65 7 あんな小さなからだで、あんな大きなこゑの出るのがふしぎです。

四66 2 羽の色は(略)、なくこゑはまことにかはいらしうございます。

四66 6 昔からうめにうぐひすといつて、(略)、あんなうつくしいこゑでなきはじめます。

五26 8 役人は後からこゑをかけて、「こら待て、ゐざり。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」

五61 7 図 あきの夜長を鳴き通す、あゝ、おもしろい蟲のこゑ。

五62 8 図 秋の夜長を鳴き通す、あゝ、おもしろい蟲のこゑ。

五70 2 勝負ガ一番スムト、ワアツトホメルコエガキコエル。

五70 3 見セ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤラ、フエ・タイコデハヤシタテル音ヤラ、ニギヤカナコトデアル。

六14 3 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ。

六75 7 一人の年取つた男がこゑをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、(略)。

六76 1 (略)、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

七102 園 ならぶすがさ涼しいこゑで、歌ひながらにうゑ行くさなへ。

七195 にはの藤の花が咲いて、(略)。

島のゑんどうがかきの外からこゑをかけて、「とくに申し上げようと思つてゐました。」

七545 園 右ノ方ハ魚市場ニテ、賣買ノコエカマビスシ。

七874 園 船長はかくいひ終へて、一段と聲をはり上げて、「さておしまひに一ついつておきたい事があります。」

七896 園 爆發ノ聲タチマチ船ゾコニヒマク。

七909 園 「杉野々々。」中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。

八98 園 うれし、この松の根もとに、まつ見つけつと高く呼ぶ聲。

八304 園 工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、(略)。

八428 火事場でさわぐ人の聲がここまでも聞える。

八527 園 ヤガテ同志ノ一人御前ニ進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、手ワナ、キ聲フルフ。

八619 園 (略) 白帆を送る夕風に、聲程近し、三井のかね。

八897 敵ノ突撃ノ聲ガ盛ニ聞エル。

八912 園 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、(略)。

八915 園 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、

砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、(略)。

八919 (略)、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

九741 園 (略)、隣村は大半水中にあり、救をもとむる聲かまびすしく候故、(略)。

十686 園 生残れる水夫は(略) 聲を限りに救を呼べり。

十689 園 波風にまじりて聞ゆる悲鳴の聲に目をさまし、(略)。

十895 園 (略)、藤房は聲くもらせて、いかにせん、頼むかげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。

十一137 園 武家の運命も今に盡きなんと、罵りいきどほる聲ちまたに満つ。

十一557 「ピエールよ、少年鼓手よ。」と聲を揃へて呼んだが、何の答もない。

十一584 聲を限りに「ピエールよ、ピエールよ。」と呼びながら、方々を尋ねて、(略)。

十一591 (略)、全軍一同に歡喜の聲をあげた、アルプの山もふるふばかりに。

十一801 園 (略)、ほうくと呼ぶ聲を聞く内に、舟は早くも目前にせまり来る。

十一801 園 ふなばたを打つ音、ほうくと呼ぶ聲、(略)。

十二781 園 (略)、朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、(略)。

十二792 園 「何處ぞ。」「すぐ其處に。」といふ聲かまびすしく、(略)。

こえ「越」ひよりどりこえ・ひよりどりこえのさかおとし

こえだ「小枝」(名) 4 小えだ 小枝

三517 園 かぜ ふく小えだにすをはる小ぐも、(略)。

三526 園 (略)、とうとう小えだにすをはつた。

九5510 園 (略)、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

九561 園 農夫ナドハ小枝ト見チガヘテ、土ビンヲカケ、落シテワルコトアリ。

こえたか・い「声高」(形) 1 聲高い

「一く」

十641 見張人がマストの上から北の方を指さして聲高く呼んだ。

こえふと・る「肥太」(四) 1 こえ太る

「一り」

七601 園 あばら骨の數へらるゝ程やせ細りたるものあり。あるく時肉のゆれ動く程こえ太りたるものあり。

こえゆく・く「越行」(四) 1 越え行く

「一く」

十二2310 園 極樂寺坂越え行けば、長谷觀音の堂近く、露坐の大佛おはします。

こ・える「越」(下二) 4 越える「一エ」

九361 上下八里の箱根山も越えなければならず、(略)。

十一547 ナボレオンがアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた時は、冬の半で、(略)。

十二836 (略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわりくと春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

十二836 (略)、野越え、山越え、ふわりくと春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

こえん「五円」(名) 3 五圓

九776 園 (略)、貯蓄銀行ニテハ五圓ヨリ少キ金ニテモ預カル。

九90 園 五圓

九911 園 我が國ノ紙幣ハ日本銀行ヨリ發行スルモノニシテ、一圓・五圓・十圓・百圓ノ四種流通ス。

こえんじよう「五円以上」(名) 1

五圓以上

九775 園 普通ノ銀行ニテハ一度ニ五圓以上ノ預金ノミヲ取りアツカヘドモ、(略)。

こえんりよ「御遠慮」(名) 1 御ゑんりよ

七164 園 (略)、何かあらでとゝのへて来る物がございますなら、御ゑんりよなくおつしやつて下さい。

ごおぜい「御大勢」(名) 1 御大勢

九715 園 御一家御無事に御座候や。御老人・御子供衆も御大勢の事故如何と御案じ申し居り候。

こおり「氷」(名) 4 氷

六三七 朝おきて見ると、池に氷ははつてゐた。

八八二 一 ある土人の如きは氷を以て家を造りて住めり。

一一五五 一 略、谷へ下りる細道も雪や氷にとざされて、どこか全く知れない。

一一一一 一 寒風身を切る様な冬の日でも、氷の下の水をくんでせんたくする。

こおる「凍」(四) 1 凍る「一リ」

一一九五 一 略、冬は寒氣厳しく、地面は三尺の下まで凍り、海岸も海水厚く凍結し、(略)。

こおる「御恩」(一) 1 御恩

八二七 一 農夫は「おかげで目がさめた。御恩は一忘れぬ。」といつて、かたく友だちの手を握りしめました。

こか「古歌」(名) 1 古歌

一二三九 一 富士山の古歌には煙の立つことを歌へるもの多く、(略)。

こかい「誤解」(名) 1 誤解

一二四六 一 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。是大なる誤解なり。

こかいがわ「小貝川」(地名) 2 小貝川

九一六 一 利根川ノ本流ハ「略」鬼怒川・小貝川ヲ合せ、益々其ノ大イサヲ増ス。

九一七 一 小貝川

こかく「五岳」(名) 1 五岳

一二四〇 一 略、根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳の五岳東より西に相連りて突起す。

こかけ「小陰」(名) 1 小かけ

八九五 一 略、いでや、あの岩の小かけに、皆うちよりてえもの數へん。

こかけ「木陰」(名) 1 木陰

一二八二 一 木陰に立つてつくなくと此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

こかじよう「五箇条」(名) 7 五箇條

一二一〇 一 略、さて軍人の心得として次の五箇條を論し給へり。

一二一四 一 略、以上の五箇條即ち忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を(略)。

一二一八 一 略、忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、(略)。

一二二四 一 略、此の五箇條を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せ給へり。

一二二五 一 略、此の五箇條を行ふも、結局一の誠心を本とすと論し給へる、(略)。

一二二七 一 略、此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

一二二八 一 略、此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。行ひ易く、守り易し。」

こかそん「五箇村」(名) 5 五箇村

九八二 一 略、それは氏子の五箇村から子供の手を一人づつ出して、(略)。

九八三 一 略、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九八四 一 略、五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、(略)、口々に勢をつけてゐる。

九八五 一 略、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。」

九八六 一 略、愛作は五箇村はおろか、近所近べんのほめ者となつた。

九八七 一 略、自分は今こそこんな小刀や釘などを造つてゐるが、(略)。

九八八 一 略、あいなぬの男子は(略)、こしに小刀をさぐ。

九八九 一 略、五月

九一〇 一 略、五月

九一一 一 略、五月

九一二 一 略、五月

九一三 一 略、五月

九一四 一 略、五月

九一五 一 略、五月

九一六 一 略、五月

九一七 一 略、五月

こがつころ「五月頃」(名) 2 五月頃

五三二 一 略、五月ゴロカラツミハジメマスガ、(略)。

八三三 一 略、種ヲ蒔クノハ五月頃デ、(略)。

こがつちゆうじゆん「五月中旬」(名) 1 五月中旬

一一七九 一 略、鵜飼は五月中旬に始り、十月中旬に終る。

こがつついたち「五月一日」(名) 1 五月一日

七六七 一 略、五月一日 高橋忠一 鈴木愛吉様

こがつなのか「五月七日」(名) 1 五月七日

九一四 一 略、五月七日 尾張屋呉服店 山本屋様

こがつにじゅうはちにち「五月二十八日」(名) 1 五月二十八日

二二〇 一 略、五月二十八日 五月二十八日

こがつはつか「五月二十日」(名) 1 五月二十日

一一四一 一 略、五月二十日 徳太郎 仁吉様

こがつみつか「五月三日」(名) 1 五月三日

九一三 一 略、五月三日 山本屋太七郎 尾張屋呉服店御中

こがつよっか「五月四日」(名) 1 五

月四日

七189 五月四日 鈴木愛吉 高橋

忠一様

こがね「黄金」(名) 2 黄金 黄金

八48 年のはじめの福壽草 黄金

金の色の暖く、(略)。

十一489 騎者・騎馬・黄金、三つ

とも失つてしまひました。」

こがらし「木枯」(名) 2 木枯

九701 葉の散果てた冬木立に吹きす

さむ木枯の風は、音を聞くだけでも

物すこい。

十282 (略)、古い銀杏の木が一本、

木枯に吹きさらされて、今は葉一枚

も残つてゐない。

こがわ「小川」(名) 2 小川

六94 あぜ道を七八町通つて、小川

の橋を渡ると、(略)。

十296 家の横に水がよくすんだ小川

が流れてゐる。

ごかん「後漢」(地名) 1 後漢

十一102 支那ノ昔後漢ノ末、天下

麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。

こぎひいねこき

こぎいだす「漕出」(四) 1 漕ぎ出す

《一ス》

十一267 筋骨たくましき若者が

體を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましき

よ。

こぎさる「漕去」(四) 1 コギサル

《一ラ》

七918 四隻ノ船ハ皆爆沈シテ、

乗員ハ思ヒ／＼ニコギサラントシ、

(略)。

こぎすすむ「漕進」(四) 1 漕進む

《一ム》

十6910 やがて二人は荒波に打返さ

る、船の頭を立直しく、死力を盡

して漕進む。

こぎだす「漕出」(五) 1 こぎ出す

《一シ》

四765 (略)、へいけ方から一そ

うのふねをこぎ出して、來まし

た。

こぎつく「漕着」(下二) 2 漕着く

《一ケ》

十703 (略)、ボートは幾度となく

打ちもどされ打ちもどさるゝを、辛

くして難破船に漕着けたり。

十708 父はボートに引返し、二人

は(略)、遂に岸べに漕着けたり。

こぎぬける「漕抜」(下二) 1 漕抜け

る《一ケ》

十648 四五隻のボートは母船を離れ

て、我先にと漕いで行く。漕抜けた

一隻は(略)、見る内に一頭の鯨に

近寄り、(略)。

こぎぶつ「古器物」(名) 1 古器物

十一949 (略)、例へば名高き古人

の書畫・古器物などの如きは、(略)。

こぎまわる「漕回」(五) 1 コギマハ

ル《一ツ》

六777 小サナ和船モアチラコチララ

コギマハツテキル。

こきゅうさよう「呼吸作用」(名) 4

呼吸作用

十二212 動物は呼吸作用によつて、

空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐

出す。

十二215 (略)、空氣中には炭酸瓦斯

が段々に増加し、遂には地球上の動

物が呼吸作用を営むことが出來なく

なる道理である。

十二218 植物も動物と同じく、呼吸

作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出

すが、(略)。

十二225 然るに炭酸瓦斯が絶えず供

給されるのは、(略)、動物の呼吸

作用も與つて大いに力があるのであ

る。

こきゅうす「呼吸」(サ変) 2 呼吸す

《一シース》

九661 我等は常に此の空氣を吸は

んが爲に呼吸す。

十二472 (略)、清潔なる空氣を呼

吸し、筋肉を勞するが故に、身體常

に健全なり。

こきよう「故郷」(名) 1 故郷 ぐうま

れこきよう

十二6710 (略)、數多の猿遠く數百

里の地より集り來りて之を食ひ、果

實盡くれば、再び其の故郷に歸るを

例とす。

こぎんきよう「御近況」(名) 1 御近況

十一955 先般御手紙にて御近況

を承知致し、御なつかしく存候。

こく「石」(名) 1 石 ひとひやつこく

づみ・さんびやく・こじゅうまんこく・

しせんろくしちひやくまんこく・せん

ごくづみ・にせんまんこく

六191 升ノ十倍ヲ斗、斗ノ十倍ヲ

石トイヒ、(略)。

こく「国」イギリスこく・えいこく・

えいふつにこく・えいべいにこく・か

ざんこく・がつしゅうこく・かんこく

・くんしこく・さがみするがいずさん

ごく・しよつこく・しんこく・しんこ

くけいほうせん・しんこくせいふ・ち

ようこく・にこく・につぽんこく・ふ

つこく・ふんめいこく・みんべいこく

しようにん・ほくべいがつしゅうこく

・ろくじゅうはちこく・ろこく

こく「扱」(五) 1 こく 《一イ》

六161 刈つた稻は(略)。かわくと、

それを稻こきでこいてもみを取りま

す。

こく「漕」(五) 2 コグ 漕ぐ 《一

イーク》

七261 (略)、センドウガ船ヲコグノ

モ、(略)モ、皆手デスルノデス。

十648 四五隻のボートは母船を離れ

て、我先にと漕いで行く。

こく「極」(副) 2 ゴク 極

七746 コンナ所ニハ動物モゴクマレ

デ、植物ハマツタクナイガ、(略)。

十205 又極上品なものになると、機

械では刷らないで、手刷にする。

こくうん「國運」(名) 1 國運

十二102 5 図 (略)、地方自治の精神に基づきて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。

こくうんはってん「國運發展」(名) 1 國運發展

十一28 8 図 今や全國鐵道の延長六千哩を越え、(略)、印度・南洋より亞米利加・歐羅巴の航路をも開くに至れり。國運發展の速なること實に驚くにたへたり。

こくえん「黒煙」(名) 2 黒煙 黒煙 十一20 3 図 (略)、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

十二8 2 図 我が艦隊は(略)敵を待ちしが、東方に當りて、はるかに數條の黒煙を見る。

こくおう ぐにっぽんこくおう ぐくさ「小草」(名) 1 小グサ

三33 8 圖「コトシハホウネン、ホニホガサイテ、ミチノ小グサモミガナル。」

こくさん「國産」(名) 1 國産

十44 5 図 眠龍ガ(略)、機械ヲ發明シ、國產ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。

こくさんのうた「課名」2 國産の歌

十二目14 第十三課 國産の歌 十二47 6 第十三課 國産の歌

こくじ「國事」(名) 2 國事

九27 9 図 維新前後國事ニタフレタル人々ヲ始め、(略) 忠勇ノ士ヲマツ

レル所ナリ。

九30 4 図 カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、誰カハ義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。

こくじよう「国情」(名) 1 国情

十二101 7 図 他國に行きて、(略)、道行く人の容儀等を見れば、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

こくしよく「黒色」(名) 1 黒色

十二66 4 図 (略)、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

こくじん「國人」(名) 2 國人

十二55 7 図 滿洲政治・交通の中心たる奉天は、(略)、其の附近我が國人の在留するもの多し。

十二101 7 図 他國に行きて、(略)、道行く人の容儀等を見れば、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

こくぜい ぐちよくせつこくぜい ぐくたい「國體」(名) 1 國體

八7 3 図 (略)、我が世を守れ、伊勢の大神。の御製を思ひ出でて、我が國體のたふとさ、いよいよ身にしみておぼゆ。

こくふ「國富」(名) 1 國富

十二53 5 図 (略)、海外貿易ノ發展ヲ

圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。

こぐま「子熊」(名) 1 子熊

十81 8 図 あいぬは時々子熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。

こくみん「國民」(名) 22 國民 ぐいっ

ばんこくみん・だいくみん・だいくみんのひんかく・どういつこくみん 七9 1 図 正行ノ如キハマコトニ忠孝ニツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、國民ノ手本トイフベシ。

七88 4 図 (略)自分のうちを恐ろしがる様なもので、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。

八1 4 図 代々の天皇は皇大神宮をたふとびたまふときははめてあつく、國民もまた深くうやまひ奉りて、(略)。

九24 2 図 我が國は國民皆兵なり、男子は十七歳より四十歳までの間、何れも兵役に服する義務あり。

十86 9 隣國の支那人は最も多く豚肉を食ふ國民である。

十一101 4 圖 新版圖の事に候へば、本島の開拓は我々國民の最も力を用ふべき所に候。

十二97 7 図 (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

十二97 7 図 (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

る名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

十二97 9 図 國民は個人の集合より成るものなれば、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

十二97 9 図 國民は個人の集合より成るものなれば、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

十二98 1 図 國民各自の行爲をつしめ、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、(略)。

十二98 3 図 (略)、殊に他國人の注意を引くものは社會の公德及び國民の度量なりとす。

十二99 6 図 老人長者の爲に道をゆづり、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、個人としても、國民としても、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

十二100 10 図 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)。

十二101 2 図 (略)、却つて我が國民の度量の狭く、品格の低きを示す所以にして、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐるること多し。

十二101 8 図 他國に行きて、(略)、道行く人の容儀等を見れば、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を

國情を詳にせず、其の國人と一語を

交へずして、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

十二109 國 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

十二109 1 國 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、(略)。

十二109 7 國 天皇陛下を大元帥と仰ぎ奉り、國民皆兵なる今の御代、(略)。

十二109 8 國 (略)、國民たる者は皆軍人たる心得なかるべからず。

十二115 7 國 太古以來忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、古來の歴史上の事蹟は十分に之を證明せり。

十二115 10 國 武勇の精神も亦國民が古來のほこりとなす所なり。

こくみんかくじ「國民各自」(名) 1 國民各自

十二197 10 國 國民は個人の集合より成るものなれば、(略)。國民各自の行爲をつゝし、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、(略)。

こくみんきょういく「國民教育」(名)

1 國民教育

十二36 9 國 (略)、コ、ニ新校舍ノ落成ヲ見ルニ至レルハ、國民教育ノ一慶事トイフベシ。

こくむだいじん「國務大臣」(名) 1

國務大臣

十二105 9 國 (略)、天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。

こくめい「國名」(名) 1 國名

十二29 9 國 國名ヲ以テ名ツケラレタルモノニハ、安藝・薩摩・石見・肥前・相模・周防・丹後等アリ。

こぐも「小蜘蛛」(名) 1 小ぐも

三51 8 國 かぜふく小えだにすをはる小ぐも、(略)。

こくもつ「穀物」(課名) 2 こくもつ

四目11 十 こくもつ

四29 7 十 こくもつ

こくもつ「穀物」(名) 1 穀物

九89 9 國 貨幣トシタル物品ハ時代ニヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。貝・毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコトアリ。

こくら「小倉」(地名) 1 小倉

九25 國 小倉

こくら「小倉」(名) 1 こくら

四70 7 國 これは太郎のこくらのほかま。

こくらくじざか「極樂寺坂」(地名) 1

極樂寺坂

十二23 10 國 極樂寺坂越え行けば、長谷觀音の堂近く、露坐の大佛おはします。

こくりよく「国力」(名) 2 国力

イツこくりよく

十二100 10 國 国力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)。

十二101 9 國 (略)、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐること多し。

こくろい「穀類」(名) 1 穀類

十31 10 國 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノヲト心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、(略)。

こくろう「御苦勞」(形状) 2 御苦勞

六76 7 國 羽織・はかまの主人は一同に向つて、うれしさうに、「どうも御苦勞、御苦勞。」とあいさつしました。

六76 7 國 「どうも御苦勞、御苦勞。」

こけ「苔」(名) 2 こけ

四10 9 國 君がよはちよにやちよに、さされ石のいはほとなりて、こけのむすまで。

十9 2 國 (略)落葉・こけ及び網の如くひろがれる木の根などは、地上に落ちたる水をふくみさふること、(略)。

こけむす「苔蒸」(四) 1 こけ蒸す

十二26 9 國 歴史は長き七百年、興亡すべてゆめに似て、英雄墓はこけ蒸しぬ。

こげん「古言」(名) 1 古言

十二70 10 國 「時は金なり。」といふ古

言あれども、(略)。

こげんしょう「御健勝」(名) 1 御健勝

十一63 9 國 拜啓、益々御健勝賀し奉り候。

こげんよ「五間余」(名) 1 五間餘

十一97 8 國 日・露の境は幅五間餘を一字に森林を伐りすかし、(略)。

ここ「此処」(代名) 69 ココ、ここ、此處

二22 4 國 ワタクシハオニニナツテ、ココニタツテキマス。

二29 5 アソコデモ、ココデモ、「シンネンオメデタウ。」(略)。

トアイサツシテキマス。

二44 6 コレハ天ジンサマノオヤシロデス。ココニハウメノ木ガタクサンアリマス。

二51 5 國 ハタケノスミヘツレテイツテ、「ココホレ、ワンワンワ

ン。」

二51 6 國 ココホレ、ワンワンワ

ン。」

二60 5 オヂイサンハ(略)、「略、カレ木ニハナヲサカセマセウ。」

トヨンデアルキマシタ。トノサマガココヲオトホリニナツテ、(略)。

三36 7 國 うちへかへつて、ちちにみせようとしたら(略)。(略)。

(略)、父は「ここ」があかるい

から、みえないのです。

四42 太郎と次郎が二人で山へのぼりました。次郎「いざん、ここから見ると、町が一目に見えますね。」
 四55 伊マ一足デヲカヘ上ラウトイフ所デ、「(略)。オレハココノヲカヘ來タカツノダ。」トイツテワラヒマシタ。
 四67 三郎ハ(略)、母ノソバヘ來デ「(略)。」トイツテタツネマス。今モ外カラカヘツテ、スグココヘ來テキル所デス。
 五13 町の中を通る時に(略)。けれども重い物は皆そこへしづめてしまつて、軽い物は一しよにここまでもつて來ました。
 五13 へ來て見ると、ひろくとして、どちらを見ても水ばかりです。
 五13 人を人が海といひます。
 五30 コ、ニ茶ノ木ガアリマス。
 五32 コ、ハ茶島デス。
 五65 さあ、ここに葉書がありま
 五78 よしつねはまづたづねた。
 「ここからしろの方へ下りることが出来るか。」
 五80 へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。よしつねはこゝぞと思つて、「進めく。」とさしづをしたが、(略)。

六40 (略)、晩の九時二十分に京都に着いた。(略)。明後日はこゝを立つて、道で用をたして、(略)。
 六47 「誰も居らぬか。」とよびますと、「藤吉郎秀吉」にひかへて居ります。」と答へました。
 六63 (略) おふみはいそぎ道ばたを、そここゝかとさがすうち、少しはなれたくさむらに、やうく杖を見つけ出し、(略)。
 六69 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、(略)。
 六80 大阪ハ(略)。秀吉コ、ニ城ヲキツキシヨリ、(略)。
 七47 コ、ニアル扇モウチハモヤハリサウダ。」
 七54 上野公園ニハ(略)。(略)。
 コ、ニハ櫻ノ木多シ。
 七55 櫻ガ岡ヨリ見下セバ、(略)。
 サレドモコ、ニテ見エルハ東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。
 七56 浅草公園ニハ種々ノ見セ物アリ。コ、ヲ一メグリシテ隅田川ノホトリニ出ツ。
 七58 (略)、日比谷公園アリ。(略)。コ、ニハ美シキ池アリ。廣キ運動場モアリ。
 七59 (略) 九段坂ノ上ニイタリ(略)。カヘリ道ニ坂ノ上ヨリ見下セバ、コ、モマタ見渡スカギリ、人家ナラザルハナシ。

八42 火事場でさわぐ人の聲がここまでも聞える。
 八48 (略) 其居所氏名を此處へ記すべし
 八48 發信人は自己の居所氏名を(略)此處に記すべし
 八49 (略) こゝに頼信紙があるから、書いてお出し。」
 八76 (略) アメリカ大陸に着くべし。(略)。こゝより汽船に乗りて、ふたゝび東へ進めば、一週間にしてイギリス國の港に着く。
 九55 尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、ここにありし賊どもいつはり降り、(略)。
 九60 コ、ニ櫻ノ花ガアル。
 九65 (略) 船戸アリ。コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運河ハ、(略)。
 九49 (略)、又向ふより一組の隊商到着せしが(略)。聞けばハッサンハ(略)、迎へかたゝゝこゝに來りしなり。
 九81 去年の今夜清涼に待す。(略)。恩賜の御衣なほこゝに在り。
 九88 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。
 九93 其の上にかゝれる朱塗の橋、美觀先づ目を驚かす。是即ち有名なる神橋にして、「日光の結構。」こゝに始る。
 九95 (略)、男體山のふもとに中

禪寺湖あり、(略)。天皇陛下かつてこゝに行幸あり、(略)。
 九96 (略) よく人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。(略)。外國人の我が國に來る者亦必ずこゝに遊びて、(略)。
 十28 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。
 十61 明治二十年頃、新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、(略)、産出高モ著シク増加シ、コ、ニ始メテ世界有數ノ大銅山トナレリ。
 十97 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。(略)、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。
 十97 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ跡ニシテ、今ハオホムネ田島トナレリ。コ、ヨリ眺ムレバ、(略)。
 十98 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠綠シタ、ルガ如シ。コ、ニ官幣大社大神神社アリ。
 十100 來て見ればこゝも櫻の峯つゞき、吉野初瀬の花の中宿。
 十101 昔ノ人ノ(略)、吉野初瀬の花の中宿。ト歌ヒシハコ、ナリ。
 十101 多武峯ヲ西ヘ下レバ岡寺アリ。(略)。コ、ニ程近キ飛鳥ノ安居院ハ(略)。
 十101 岡寺ハ(略)。コ、ニ程近キ

飛鳥ノ安居院ハ(略)。(略)。コ、ヨ
リ西北へ進メバ、(略)。
十102 5 又畝傍山ノ東南ニ楹原神宮
アリ。コ、ニマウツルモノ、(略)。
十一22 2 行くく吉野宮に参拜
し、村上義光の墓をとぶらふ。眺望
いよく開けて、満目總べて花なり。
(略)。こを口の千本といふ。
十一39 9 吉野の(略)。(略)。天皇
のこに行幸ありしより三年、(略)。
十一11 9 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益
ノアルモノデアルガ、コ、ニ注意シ
ナケレバナラナイノハ共同一致トイ
フコトデアル。
十一23 2 幾年こにきまへとる
鐵より堅きのひふあり。
十一47 1 こにアラビヤ馬の達者
なことを證明する面白い話がある。
昔トルコの或大將がアラビヤ人から
一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をし
た。
十一48 5 遂に暮方になつた。アラビ
ヤ人はこに始めて馬に全速力を出
させて、雲を霞と逃げのびた。
十一83 1 (略)、百にも近き鶴、此
方に浮び、彼方に沈み、彼處にかく
れ、此處にあらはれ、(略)。
十一90 10 例へばこに一種の石あ
り、極めてまれにして隨意に得られ
ざるものなりとも、(略)。
十一92 1 例へばこに一戸の賣家
ありて、之を買はんとする人五人あ

るときは、(略)。
十一97 4 其の南部は車馬の往來
自在にしてこに樺太廳の所在地豊
原あり、(略)。
十一99 7 多來加灣頭に小さき海
釣島あり、夏より秋にかけてこに
集る鰐鰯は(略)。
十二35 5 本校新築落成式ヲ
舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列
スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル
所ナリ。
十二36 2 今本町民諸君ノ熱心ニヨ
リ、コ、ニ新校舎ノ落成ヲ見ルニ至
レルハ、(略)。
十二55 5 (略)奉天は、(略)。清
國政府はこに總督を置きて滿洲全
部を總管し、(略)。
十二56 2 長春は南滿洲鐵道最北の
驛にして、大連よりこに至る四百
三十六哩。
十二77 7 (略)カナリヤ島に着し、
こにて船體に修繕を加へ、(略)。
こ「古語」(名)2 古語
十78 10 西洋ノ古語ニ曰ク「健全ナ
ル精神ハ健全ナル身體ニ宿ル。」ト。
十二37 3 古語に「私事を以て公事
をすてず。」といへり。
こ「五戸」(名)1 五戸
十一92 6 (略)、同様なる賣家五戸
ありて、買はんとする人唯一人なる
ときは、(略)。
こ「五五」ひさんさん

こ「午後」(名)3 午後ひどうじつ
ここじ・ろくがつさんじゅうにちこ
こにじ
六38 7 午後京都からおとうさんの手
紙が着いた。
十56 3 毎週土曜日の午後には
(略)一切所持品の清潔検査これあり
候。
十57 4 (略)、術科は午前・午後
を通じて、四時間より六時間、(略)。
こいちじさんじつぶん「午後一時三十
分」(名)1 午後一時三十分
十二510 (略)との信號旗が
(略)にかゝげられたるは午後一時
三十分にして、(略)。
こいちじはん「午後一時半」(名)1
午後一時半
十90 3 拜啓、來る八日午後一時
半より當村小學校に於て、(略)に關
する講話これあり候。
こ「戸口」(名)1 戸口
八95 5 (略、鐵道の開通せしより、
商工業の發達著しく、(略)。戸口も
また年々増加す。
こ「股肱」(名)1 股肱
十二110 7 朕は汝等軍人の大元帥な
るぞ。されば朕は汝等を股肱と頼み、
汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は
特に深かるべき。
こ「御光來下さる」御光來下(下二)
1 御光來下さる「一レ」
十一62 4 (略)、心ばかりの祝宴

相開き、御心安き方々御招待致度と
存候間、同日午後五時御光來下され
候はば光榮の至に存候。
こ「御光臨」(名)1 御光臨
十一63 6 (略)建碑式舉行致候
間、御光臨の榮を賜はり度、此段御
案内申上候。
こ「える」(下二)1 こえる
「一エ」
十一56 7 (略)、谷へ下りる細道も雪
や氷にとざされて、(略)。(略)。お
くれ、ばピエールはこえて死ぬで
あらう。
こかしこ「此處彼處」(代名)1 此
處彼處
十二85 1 日ははや没して、燈火の光
が點々として此處彼處にかざやいて
ゐるとは、(略)。
ここくふさく「五穀不作」(名)1 五
穀不作
十32 5 (略)、是ヨリ後ハ五穀不作
ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノ
ナキニ至レリ。
こ「ココ」1 ココ
一24 2 オヤドリガ コココトヨ
ンデキマス。
こ「さんじ」午後三時(名)1 午後
三時
十一62 8 (略)、午後三時西方寺
に於て法會相營度候間、(略)。
こ「心地」(名)2 コ、チ 心地
七56 4 (略)、兩ガハニアマタノ店

アリ。勸工場ニ入りタルコ、チス。

九六九 併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、其の時はうらめしい心地がする。

こごと「戸毎」(名) 1 戸毎

十七四 湯元は一箇所にして、之を戸毎の浴室に引けり。

こごとにおいて「此処」(接) 4 こゝにおいて 是に於て

八七〇 かくて二三日を過せしに、(略)、身體は全く力なきにいたれり。

こゝにおいて、胃は一同に向つて曰く、(略)。

九五九 (略)、尊の野に入り給ふを見て、火を放ちて焼き奉らんとせり。

尊こゝにおいて天叢雲劍を抜き、草を薙拂ひ給ふに、(略)。

十二七六 コロンブスは(略)、何人も一笑に附して顧みるものなかりき。

是に於て空しく志を抱いて西班牙に轉じ、居ること多年、(略)。

十二九五 齊の臣答へて、「君子は過あれば謝す。君、實を以て謝せよ。」と。是に於て齊侯魯より奪略せる地數箇處を返せり。

こゝにじしじゅうごふん「午後二時四十五分」(名) 1 午後二時四十五分

十二六〇 時に午後二時四十五分、勝敗の數は既に定まれり。

ここのえ「九重」(名) 2 九重

九三三 (略)、古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬと、

つかうまつりし言の葉の(略)。

十九五 (略)、古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬるかな。

ここのつ「九」(名) 1 九つ

九四七 (略)、はや朝顔のはちをならべて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。

ここのつとや「九」(感) 1 九つとや

八五八 九つとや、心はかならず高くもて、(略)。

こころ「心」(名) 61 心々おみこころ・おこころやすい・おんこころやすい・なにこころない・なにこころなし・ははのこころ・ひとつこころ・まごころ・みこころ

四八〇 よ一は心のうちで、もしこれをいそごなつたら、生きてはあまいとかくごをきめて、(略)。

五八六 (略)、五月ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立テマス。鯉ガタキヲ上ルヤウニ、ズンズンシユツセヲセヨ

トイフ心デ祝フノデセウ。

五三六 コノカハイラシイ、美シイ蝶ヲツカマヘテイデメル人ハ、ドウイフ心デセウ。

六四四 じぶんの心では武士になりましたと思つてゐたのです。

六八五 (略)、心はかならず高くもて、たとひ身分はひくゝとも、輕くとも。

七六三 又冷水浴や海水浴はひふを強くし、したがつてからだを強くし、心をさわやかにする。

七七八 (略)、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、はげみ進むに何事の など成らざらん、(略)。

八八六 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲヲサメタルモ、(略)。

八八七 イカニ心ハ堅クテモ、身ハ鐵石デナイ。砲彈ニタフレル兵士ハ數ヘキレナイ。

八九二 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレム心モ深カツタ。

九一七 葉かげにいねし鳥ははやゆめも見あきつ。歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。

九二二 鳥の遊ぶ時は今なり。歌へ歌へ、心ゆたかに歌へ。

九三六 (略)、誰カハ義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。

九四四 アリは(略)、父の手紙を讀みて心勇み、(略)、隊商と共に出立したり。

九七九 道眞は(略)、少しも世をいきどほり、人をうらむる心なかりき。

十二五 「汝長大ニシテ、劔ヲオブトイヘドモ、心甚ダ弱シ。

十四一 (略)、『此の方面の戰

鬪に 二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』と。

十五三 平生にても、若き人は白髪を見て悔る心あり。

十六九 父は(略)、娘のやさしき心にはげまされて、ボートを用意す。

十九九 人はいさ心も知らず、故里は 花ぞ昔の香にほひける。

十一一四 君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)、名を子孫に傳ふべし。』といへば、心ある者どもいづれも此の議に同ず。

十一一六 天、勾踐を空しうするなかれ。(略)。主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

十一四九 いまだ幼ければ、敵も心をゆるすべく、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。

十一四三 一族の者領地をうばひて、我を追出したり。光範と心を併せての事とて、如何ともし難ければ、(略)。

十一四四 熊王今夜こそ正義を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。

十一四九 夜に入りて、討つべきは今なりと、心を取直せども、(略)。

十一四五 幾度か思ひ直して討たんとすれども、少しも疑ふ心なき正義の様を見ては、(略)。

十一45 6 図 (略)、熊王年来包みたる心の中を打明けて、(略)。

十一46 3 図 (略)、心の變ることもあるべきかとて、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十一52 4 図 心樂シケレバ自ラ笑フ。

十一54 4 図 (略)、ミダリニ聲色ヲ作リテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

十一60 8 図 親に事へ、弟を助け、家を治めん、妹我は。家の事をば心にかけて、御國の爲に行きませ、いぞや。

十一62 2 図 (略)、親族一同打寄り、心ばかりの祝宴相開き、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)。

十一69 6 図 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

十一69 7 図 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、時間を徒費すること甚だし。

十一104 1 図 孔明はヨリ幼主ヲ輔ケ、益々心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

十一113 3 図 (略)、兒童は(略)、學校を思ふ心厚く、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。

十一118 2 図 上下心一にして、同胞すべて六千萬。

十二3 7 図 此の御製を拜讀しては、

何人も義勇の心にをどり立つなるべし。

十二4 3 図 波風のあづかなる日も船人は かぢに心を許さざらん。

十二4 4 図 治に居て亂を忘れざるも此の心なり。

十二4 5 図 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

十二32 2 図 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、(略)。

十二32 6 図 (略)、稻生恆軒の妻の常に祖先の祭に心を盡したる、(略)、皆後世女子の模範とすべき德行なり。

十二33 5 図 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。此の心は何處如何なる場合にも忘るべからず。

十二33 8 図 平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。

十二38 8 図 (略)、趙王厚く之を用ふ。趙の將軍にて武功の聞え高かりし廉頗之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。

十二71 7 図 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

十二71 9 図 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、

心廣く、體ゆたかなり。

十二72 2 図 守る所正しければ、心に憂苦なく、行ふ所直ければ、身常に自由なり。

十二88 8 變化極りない妙音は、忽ち人の心を百花満開ののどかな春によはせ、又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈ませる。

十二83 10 人々は唯神曲に心を奪はれて、妙音の外には何物も見えも聞えもしない。

十二87 7 図 我が心の良雄を默待せしは罪死に當れり。」と。

十二91 7 図 家内能く和合して、互の心にわだかまりなく、(略)。

十二99 6 図 老人長者の爲に道をゆづり、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、(略)、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

十二100 1 図 若し公衆の間に、規則を守り、規律を重んずる心乏しき時は(略)。

十二111 3 図 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

十二114 3 図 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、心も無下に賤しくなりて、(略)。

十二114 10 図 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、何の用にか立たん。

十二115 6 図 太古以来忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、(略)。

十二120 1 図 (略)、教へ給ひし師の君の 導きなくば、いかで我が心に開く、知え徳え。

こころう「心得」(下二) 4 心得「一エ」

八16 6 図 (略) 松下禪尼、(略)、スハケタル障子ノ破レヲツクロヒキタリ。禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「召使ノ中ニカ、ル事ヲヨク心得タル者アリ。

八16 9 図 「我モコレ程ノ事ハ心得タリ。人手ヲカルニモ及バズ。」

八70 2 図 我等一同申し合せて、今日より働くことを止むべければ、左様心得られたし。」

十一72 1 図 (略) 畫工(略)、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して三年を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、(略)。

こころえ「心得」(名) 5 心得

十二109 8 図 (略)、國民皆兵なる今の

大御代、國民たる者は皆軍人たる心得なかるべからず。

十二110 10 図 さて軍人の心得として次の五箇條を論し給へり。

十二112 7 図 禮儀を守る心得を缺ける軍人は國家としても許し難き罪人ぞと論し給ふ。

十二115 6 図 此の勅諭は(略)、獨り

軍人としての心得なりと思ふべからず。

十二115 9 図 禮儀も亦（略）、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

こころがく「心掛」(下二) 4 心ガク

心ガク 心掛く「一ク・一ケ」

八17 図 (略)、國民も（略）、一生に一度は、かならず伊勢に参拜せんと心がけざるものなし。

九78 4 図 サレバ平生ノ收入中ヨリ成ルベク無用ノ入費ヲハブキテ、一錢・二錢ヅツニテモ貯ヘンコトヲ心ガクベシ。

十32 1 図 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノヲト心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、（略）。

十二104 7 図 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。

こころがけ「心掛」(名) 1 心がけ

九86 10 図 (略)、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは（略）。（略）。愛作さんのりつばな心がけで、熊吉の命が助かりました。

こころがける「心掛」(下一) 1 心がける「一ケル」

八26 7 其の中に雀のことはいつかわすれて、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、夜も晝もよく働きました。

こころがまえ・す「心構」(サ変) 1 心構す「一セ」

十一72 7 図 (略)、畫工「(略)」。さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。

こころきく「心利」(四) 1 心きく「一キ」

十17 8 図 是白樂天の詩に、「(略)」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。萬づに心ききたること、此の一例にても知るべし。

こころくじ「午後六時」(名) 2 午後六時

十二17 2 図 (略)、中央氣象臺は（略）、毎日其の日の午後六時より翌日の午後六時に至る、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。

十二17 2 図 (略)、毎日其の日の午後六時より翌日の午後六時に至る、向ふ二十四時間の（略）。

こころざし「志」(名) 7 こころざし志

六47 3 少しのゆだんもなく主人に仕へるこころざしにかんしんして、これから信長は目をかけて使ひました。

七44 1 図 「日ごろ貧しい暮しをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもとめた。見上げた志のもの、りつばな武士。」

八92 5 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、（略）。

十43 2 図 (略)、花筵ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、（略）。然レドモ少シモ其ノ志ヲタワメズ、イヨ／＼勇氣ヲフルヒテ考案ヲ續ケ、（略）。

十二73 8 図 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして、彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラなりき。

十二76 4 図 是に於て空しく志を抱いて西班牙に轉じ、（略）、其の保護の下に此の大探檢を行ふに至れり。

十二88 2 図 喜劍（略）、「我當に萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を抜き切腹して終る。時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

こころざす「志」(四) 2 志ス「一シ」

十42 7 図 明治九年頃ヨリモツバラ花筵ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、（略）。

十44 4 図 眠龍ガ（略）、熱心ニ此ノ業ニ志シ、機械ヲ發明シ、國産ヲ廣メシハ（略）。

「一シク」

九49 7 図 (略) 父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。やがて親子打連れて、心樂しく發足したり。

こころづ・く「心付」(四) 1 心づく「一カ」

五37 2 こといふのはかひのこととで、（略）。するはさうとは心づかず、（略）、「(略)」、子を出すやうに。」と、たくさんの子どもをもらつて、つれて來ました。

こころなし「心無」(形) 1 心なし「一シ」

十一73 1 図 (略)、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ寢間に歸れり。

こころならず「心」(副) 1 心ならず

十69 2 図 (略) 悲鳴の聲に目をさまし、（略）、幾度かいそべに出でてながめしが、（略）、一寸先をも見分けること能はず、心ならずも夜明を待ちたり。

こころみに「試」(副) 4 試ミニ試みに

九65 1 図 試みに茶わんのそこにするしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

十48 8 諸子よ、試みに此の外に諸子が日本一と思ふ物を數へ見よ。

十33 6 図 昆陽ハ（略）、此ノ芋ヲ植

ウルニ如クハナシト思ヒ、或年試ミ
ニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚ダ良カ
リキ。

十438 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・
米二國ヘ送りシニ、翌年英國ヨリ註
文アリシヲ始トシ、(略)、販路次第
ニ開ケ、(略)。

こころみる【試】(上) 2 試ミル

試みる 『一』

十435 眠亀ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、
自ラ花筵數十種ヲ織出シ、海外ニ輸
出セント試ミシガ、(略)。

十二807 其の後コロンブスは數回
の航海を試みしが、(略)第三回の航
海に於て、(略)、始めて亞米利加大
陸に上陸するに至れり。

こころもち【心持】(名) 5 心もち

心持

三414 水の中へはいつたら、
どんな心もちだらう。

六27 松・杉・ひのきなどが一面に
はえてゐるのは目がさめるやうな心
持がする。

九595 住居もなるべくきれいにせ
よ。よき心持のみにても病をふせぐ
に足らん。

十一1017 住めば都とやら、此の
極北の寒地も今はや生れ故郷の如
き心持に相成候。

十二837 聴衆は(略)。(略)、軽く
浮立つた調子に、野越え、山越え、
ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行

かれるやうな心持になる。

こころもとなし【心許無】(形) 2 心

もとなし 心許なし 『クーシ』

九496 たがひに心もとなく思ひ合
ひし父子の、今無事に相見し喜は
如何なりしぞ。

十一423 「幼き身を唯一人敵國
へやらんも心許なし。

こころやさし【心優】(形) 1 心やさ

し 『シキ』

十688 燈臺番の娘にグレース、ダ
ーリングとて心やさしき少女あり。

こころよし【快】(形) 2 快し 『クーシ』

九491 アリは(略)、ねんごろに
同行を頼みしに、一同快く引受けた
り。

十一834 (略)、半月金華山の上に
出でて、川風たもとを拂ふも快し。

こころ【古今】(名) 2 古今 今ないが
いこころ

十一1176 智は東西の長を採り、
文明古今の粹を抜く。

十二306 勝商(略)。勝頼怒りて
之を殺せり。昔調伊企(略)。
(略)。(略)、幾度責めらるれども改
めず、遂に殺されたり。古今勇士の
意氣甚だ相似たらずや。

こころどうたいいきねんひ【故近藤大尉
記念碑】(名) 1 故近藤大尉記念碑

十一634 かねて御賛同下され候
故近藤大尉記念碑、いよく出来上

り候については、(略)。

こさい【五歳】(名) 1 五歳

七229 保己一ハ五歳ノ時メクラト
ナリシガ、(略)。

こさか【小坂】(地名) 2 小坂

十608 我ガ國銅山ノ中ニテ最モ盛
ニ銅ヲ産出スルハ足尾・小坂・別子
等ナリ。

十二486 (略)、東に小坂、西別
子、足尾併せて三山は 銅の産額た
びまゝし。

ごさそうろう【御座候】(四) 23 御座
候 『フ』

九438 祖父様は(略)、昨日は
九つ咲きたり、今朝は十二咲きたり
などと御喜に御座候。

九439 (略)、本年は水も十分に
御座候間、少しも御案じ下さるまじ
く候。

九714 御一家御無事に御座候
や。

九723 幸に私方は(略)、家族
一同無事に御座候間、御安心下され
度候。

九735 (略)、もはや心配には及
ぶまじと立退きたる者も引返したる
程に御座候。

九740 唯氣の毒なるは隣村に御
座候。

十266 (略)御入營、軍務に服
せられ候事、御一家を始め一村の名
譽に御座候。

十563 (略)、又毎日朝夕兩度の
人員點呼も御座候。

十578 (略)、學科は讀法の講義
及び毎日の術科に關する説明に御座
候。

十602 先は近狀御報知申上度か
くの如くに御座候。

十917 なほ縣廳よりは小杉事務
官も御臨席のはずに御座候。

十一359 (略)、南部にてははや
稻の花盛りの由に御座候。

十一366 (略)、街路井然、總督
官邸をはじめ建築物の壯大なる、内
地にても見る能はざる程に御座候。

十一377 (略)、打狗の築港も唯
今盛に工事中に御座候。

十一3710 (略)、樟腦は世界産額
の八分の五を占むる由に御座候。

十一382 其の外金・材木・塩等
も年々其の産額を増加する模様は御
座候。

十一3810 (略)、數幹・數十幹入
亂れて一大樹を成したるは見事に御
座候。

十一398 臺南は(略)、附近に名
所・舊蹟の多き所に御座候。

十一408 (略)、蕃人も追々皇恩
に浴する様に相成候事、國家の爲眞
に大賀の至に御座候。

十一625 先は御案内まで、此の
如くに御座候。

十二9610 (略)、南部の(略)の

流域の如きは、地味肥え、有望の農業地に御座候。

十一98㊦ (略) の間は (略)、東西の交通最も便利なる所に御座候。

十一99㊦ (略) 撫綱にてすくひ取るを得る程にて、實に壯快なるものに御座候。

ござつ「五冊」(名) 1 五サツ

二48㊦ ワタクシハ本ヲ五サツモツテキマス。

ござる「御座」(五) 73 ゴザル ござる 御座る「ーイ」ゝありがとうございます

一23㊦ キレイデゴザイマス。

三24㊦ うまはからだ がほそくて、足がながう ございます。

三24㊦ 牛はからだ が太くて、足がみじかう ございます。

三24㊦ 牛は (略)、あるく ことがおそう ございます。

三25㊦ うまは (略)、はしる ことがはやう ございます。

三25㊦ どちらも たいそう やくに たつ どうぶつ で ございます。

三66㊦ 「ウラシマサン、コノアヒダ ハアリガタウ ゴザイマシタ。

三70㊦ 「イロイロ オセワ ニナツテ、アリガタウ ゴザイマスガ、(略)。

三70㊦ 「ソレ ハマコトニオナゴリヲシイコトデ ゴザイマスガ、(略)。

四26㊦ 「毎ド アリガタウ ゴザイマス。」

四66㊦ (略)、なく ころ はまことに かはいらしう ございます。

四67㊦ 苦シイコト ハゴザイマセンカ。」

四68㊦ 「オカアサン、ソノオクスリハ ニガウ ゴザイマスカ。」

四79㊦ (略) よしつね はけらいにむかつて、「(略)。」と たづねました。その時 一人 がすすみ出て、「なすのよ」と申すものが ございます。

四79㊦ (略)、三羽 ねらへば、二羽 だけはきつと いおとす ほどの 名人 で ございます。

四79㊦ これに まざる もの は ございせん。」

五6㊦ コノ天皇ガワルモノドモヲ御セイバツニナツタ時、(略)、オコマリノコトガゴザイマシタ。

五8㊦ (略)、コノ日ヲキゲンセツト申シテ、毎年オイハヒヲイタスノデ ゴザイマス。

五24㊦ やく人は二人をよび出して、(略)。うつたへた人は、「これは私が毎日使つてゐた釜で ございます。

五24㊦ それを私のるすにこのぬざりがぬすんだので ございます。」

五24㊦ 「お役人さま、(略)、私は (略)、両手をついて、やつとぬざり

あるくもので ございます。

五25㊦ その釜は私が前から持つてゐたので ございます。」

五35㊦ 蝶ニハ (略) サマハ アリマスガ、ドレヲ見テモ美シウ ゴザイマス。

五37㊦ (略)、皇后さまがかひこをおかひあそばすためで ございました。

五66㊦ おちよは (略)、葉書の裏へ次のやうに書きました。お手紙をいたゞいて、まことにうれしう ございます。

五78㊦ しろの後はけはしい阪で、馬の通れる所では ございせん。」

六11㊦ (略)、草の上にすわつて、にぎりめしをたべた時は大そううまう ございました。

六25㊦ 金ヤギンハ (略)、ドチラモタクサンアリマセンカラ、ネダンモ高ウ ゴザイマス。

六26㊦ 銅ハ (略)、シタガツテネダンモヤスウ ゴザイマス。

六43㊦ (略) 豊臣秀吉といふ人は、もといたつて身分のひくい人で ございました。

六53㊦ 京都の東山の山の上に秀吉のはかが ございます。

六53㊦ 又その山のふもとには秀吉をまつた神社も ございます。

六65㊦ シグマトイフ熊ハ (略)、力ガ強ウ ゴザイマス。

六69㊦ 私は古机で ございます。

六69㊦ 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年で ございますから、(略)。

六70㊦ (略)、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないと、顔を赤くする子供も ございました。

六70㊦ (略)、何を聞かれても、はつきりと答へる子供も ございました。

六71㊦ (略)するやうな、そゝつかしい子供も ございました。

六71㊦ (略)、少しも書きそこなひなぞをしない子供も ございました。

六71㊦ (略)、先生にしかれた子供も ございました。

六72㊦ 一日もけつせきもせず、ちこくもしなかつた子供も ございました。

六73㊦ 私は一たい子供がすきで ございますが、(略)。

六73㊦ (略) どうしてもきらひな子供が七八人 ございました。

六73㊦ 私のからだ (略) になつたのも、その子供たちのいたづらから でございます。

六73㊦ こんなにたくさん墨を附けたのも、その子供たちで ございます。

七16㊦ (略)、何かあちらでとゝのへて来る物が ございますなら、御ゑんりよなくおつしやつて下さい。

七17㊦ このよい時節に東京へお上りはおうらやましい事で ございます。

七十七〇園 (略)、種物屋から (略) を三色ばかり買つて来ていたゞきたうございます。
 七十七〇園 西洋西瓜には色々あるさうでございます、(略)。
 七十八〇園 (略)、これも二三種買つて来ていたゞきたうございます。
 七十八〇園 花の種類は何でもよろしうございます。
 七十九〇園 あなたと私は親類ださうでございますから、どうかこれからお心安く願ひます。
 七十九〇園 どういふわけで、おたがひに親類の間がらでございますか。
 七十九〇園 藤さうでございますか、はじめて承りました。
 七十九〇園 あんどう「あなたはそのお美しい花だけでたくさんでございます。」
 七十九〇園 あなたほどの大きな花ぶさは見たことがございません。
 七十九〇園 私どもの親類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲くれんげ草でございませう。
 七十九〇園 妻はこれを聞いて、夫に向つて、「その馬の直はいか程でございます。」
 七十九〇園 「さやうでございます。」
 七十九〇園 このお金は (略)、『夫の一大事の折に使へ。』と申して、父の渡してくれた金でございます。
 七十九〇園 さだめて皆様は御じまんの

馬に乗つてお集りのことでございませう。
 七十九〇園 (略) が大事と考へまして、今日このお金を出しましたのでございます。
 七十九〇園 けらいのものが、「これは一豊の馬でございます。」といひますと、(略)。
 七十九〇園 (略)、もうこんなに大きなのがなつたのでございます。
 七十九〇園 (略)、實も大きく、味もよほどよろしうございます。
 七十九〇園 さつそくいたゞきました、が、味は又かくべつでございます。
 七十九〇園 今日このなつかしい學校へ来て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしうございます。
 七十九〇園 一郎「これようございませう。」
 七十九〇園 一郎「これようございませう。」
 七十九〇園 一郎「これようございませう。」
 七十九〇園 祖母一人孫一人の事で御座いますから、(略)。
 七十九〇園 (略)、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。二月四日 浅吉 御主人様
 七十九〇園 「閣下、三千金が惜しう御座いますか。」
 七十九〇園 此の馬が欲しい御座いますか。
 七十九〇園 ござんどうくださる「御賛同下」(下二) 1 御賛同下さる「一レ」

十一六三〇園 かねて御賛同下され候故近藤大尉記念碑、いよく出来上り候については、(略)。
 七十九〇園「御参拝」(名) 1 御参拝
 八三六〇園 かゝるたふとき御宮なれば、(略)。明治三十七八年戦役の終りたる後も、天皇陛下御参拝あらせられ、平和の成りたるを告げたまひしが、(略)。
 七十九〇園「ござんれつなしくださる「御参列成下」(下二) 1 御参列成下さる「一レ」
 十一六二〇園 (略) 西方寺に於て法會相度候間、御多用中恐入候へども御参列成下され候はば、有り難く存じ奉り候。
 七十九〇園「越」ひとしこしざかな
 七十九〇園「腰」(名) 4 コシ こし
 七十九〇園 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀六刀さしとほしました。
 八八〇園 (略) 砲彈ノ破片ガ中佐ノコシニアツテ、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタ。
 七十九〇園 あいぬの男子は (略)、こしに小刀をさぐ。
 七十九〇園 最早弾く力も盡きて、傍の石にこしを下し、額を兩手に支へて人知れぬ涙をこぼして居る。
 七十九〇園「興」(名) 1 興
 七十九〇園 京城地方の婦人がたま／＼外出する時には、(略)。上流の婦人

は四方を閉ぢた興に乗つて、外から見られない様にする。
 七十九〇園「故事」(名) 1 故事
 七十九〇園 (略)、越王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。此の故事を引ききて、(略)。
 七十九〇園「枯死」(サ変) 1 枯死する「一ス」
 七十九〇園 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)、地球上の植物は盡く枯死すべきはずである。
 七十九〇園「五十銭」(名) 1 五十銭
 七十九〇園 五十銭
 七十九〇園「五十尋」(名) 1 五十ヒロ
 七十九〇園 (略)、岸二近イ浅イ所カラ五トヒログラキノ所マデニハ、海草ガハエテキル。
 七十九〇園「御支配」(名) 1 御支配
 七十九〇園 (略)、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。
 七十九〇園「午時分」(名) 2 午時分
 七十九〇園 受付 午 時 分
 七十九〇園 受付 午 時 分
 七十九〇園 受付 午 時 分
 七十九〇園「小島」(名) 1 小島
 七十九〇園 わけて名におふ松島の大島・小島その中を 通ふ白ほの美しや。
 七十九〇園「児島高德」(課名) 2
 七十九〇園 第四課 児島高德

十一 13 第四課 兒島高德

こじまたかのり「兒島高德」〔人名〕1

兒島高德

十一 13 9 此の頃備前の國に兒島高德といふ武士あり、主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を舉げしが、(略)。

ごじまん「御自慢」(名) 1 御じまん 七 42 4 園 さだめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのこととございませう。

こしみの「腰裳」(名) 1 こしみの 十一 80 3 園 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみのを着く。

ごしやく「五尺」(名) 2 五尺

五 15 1 ナラノ大ブツトイツテ(略)。(略)、中指ノ長サガ五尺アリマス。

十 41 10 園 蘭ハ(略)。(略)。莖ハ圓クシテ、長サ五尺バカリ、(略)。

ごしやくはつすん「五尺八寸」(名) 1

五尺八寸

九 62 10 園 田村麻呂は身の丈五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、體重は三十貫を越え、(略)。

ごしやくろくすん「五尺六寸」(名) 1

五尺六寸

五 14 8 ナラノ大ブツトイツテ(略)。(略)、手ノヒラノ長サガ五尺六寸、(略)。

(略)。

こしやく「古杜寺」(名) 1 古杜寺

十 4 2 園 我が國の建物はおほむね木造なれば、古杜寺等も昔のまゝにて

今にのこれるは甚だ少し。

こしゆ ぐししょうねんこしゆ

ごしゆ「五種」(名) 1 五種

十二 106 3 園 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。

ごじゅう「五十」〔課名〕6 五十

二 目 9 十九 ハナサカデヂイ……

……五十

三 目 7 十九 かへるとくも……

五十

四 目 4 十六 ナゾ……五十

七 目 3 第十五 郵便の話……五十

十 目 2 第十五課 齋藤實盛……五

十

十二 目 15 第十四課 貿易……五十

ごじゅう「五十」(名) 2 五十

四 12 6 コノゴロハクリノオチル

ジブンデ、(略)。ケサモ 五十

ホドヒロツテ来マシタ。

八 48 園 五十

ごじゅういち「五十二」〔課名〕1 五

十一

十一 目 13 第十二課 笑……五十一

ごじゅうく「五十九」〔課名〕4 五十九

六 目 6 第十八 人のなさけ……五

十九

七 目 6 第十八 犬……五十九

八 目 5 第十七 近江八景……五十

九

十二 目 3 第十六課 歐羅巴の三大都

……五十九

ごじゅうご「五十五」〔課名〕3 五十五

三 目 9 二十一 虫ボシ……五十五

六 目 5 第十七 上杉謙信……五十

五

十 目 3 第十六課 兵營内の生活……

……五十五

ごじゅうざ「五十座」(名) 1 五十座

十二 40 4 園 (略)、現に噴火せる火山の數も全國に於ては五十座を下らず。

ごじゅうさん「五十三」〔課名〕2 五

十三

六 目 4 第十六 塩ト砂糖……五十

三

九 目 3 第十六課 動物ノ體色……

五十三

ごじゅうさん「五十三」(名) 1 五十三

九 35 6 (略、其の間に五十三次とい

つて、重な宿場が五十三あつた。

ごじゅうさんつぎ「五十三次」(名) 1

五十三次

九 35 5 昔東海道といつたのは江戸か

ら京都へ上る街道で、(略)、其の間に五十三次といつて、重な宿場が五

十三あつた。

ごじゅうし「五十四」〔課名〕5 五十四

二 目 10 二十 ハナサカデヂイ……

……五十四

七 目 4 第十六 東京見物……

……五十四

八 目 4 第十六 鳥……五十四

十一 目 14 第十三課 少年鼓手……

五十四

十二 目 2 第十五課 南滿洲鐵道……

……五十四

ごじゅうしち「五十七」〔課名〕2 五

十七

七 目 5 第十七 東京見物……

……五十七

九 目 4 第十七課 養生……五十七

ごじゅうどいなん「五十度以南」(名)

1 五十度以南

十一 100 10 園 五十度以南我が帝國の領土となりしより、(略)。

ごじゅうどいほく「五十度以北」(名)

1 五十度以北

十一 100 10 園 羅シヤにて早くより開拓に力を用ひたるは主として五十度以北に候。

ごじゅうに「五十二」〔課名〕3 五十二

三 目 8 二十 ハイ今スグニ……

五十二

四 目 5 十七 白ウサギ……五十

十二

五 目 6 第十八 カウモリ……五十

二

ごじゅうにん「五十人」(名) 1 五十人

十 34 5 志望者は五十人ばかりも來た

が、(略)。

ごじゅうのとう「五重塔」(名) 2 五

重塔

九 94 2 園 (略)、東照宮の正面に出

づ。石の大鳥居高さ三丈餘、表門を

入れば五重塔あり。

十 94 3 園 興福寺ノ五重塔高ク其ノ北

ニソビユ。

こじゅうはち「五十八」〔課名〕 3 五

十八

二目11 二十一 ハナサカデヂイ……

……五十八

三目10 二十二 うみ……五十八

十一目15 第十四課 出征兵士……

五十八

こじゅうろく「五十六」〔課名〕 2 五

十六

四目6 十八 白ウサギ……五

十六

五目7 第十九 炭ト油……五十六

こじゅうろくちようぶ「五十六町歩」

(名) 1 五十六町歩

十一1147 〔略〕、二毛作をなし得る

良田五十六町歩を得るに至れり。

こしゅじん「御主人」(名) 1 御主人

七422 〔略〕、御主人織田様には、

近いうちに京都で馬ぞろへをなさ

ますとのこと。

こしゅじんさま「御主人様」(名) 1

御主人様

八682 〔略〕、どうか今四五日の

ところ御ゆるしを願ひ度う御座いま

す。二月四日 浅吉 御主人様

こしょ「古書」(名) 1 古書

十二638 〔略〕 英國博物館は古書・古物

の多きこと世界に冠たり。

こしょ「御所」(名) 1 御所

六395 〔略〕、晩の九時二十分に京

都に着いた。(略)。第一番に御所を

をがんで、それから東山の方へ行つた。

こしょう「故障」(名) 1 故障

九325 〔略〕、しらべて見ると、機

の一部に故障があつたので、すぐそ

れを直した。

こじょうさんじやくこすん「五丈三尺五

寸」(名) 1 五丈三尺五寸

五143 ナラノ大ブツツイツテ〔略〕、

スワツテイラツシヤル高サガ五丈三

尺五寸、〔略〕。

こしょうたいいたす「御招待」(四) 1

御招待致「一(シ)」

十一623 〔略〕、心ばかりの祝宴

相開き、御心安き方々御招待致度と

存候間、〔略〕。

こしょううち「御承知」(名) 5 御承知

九724 〔略〕 もはや新聞紙にて御承知

の事とは存候へども、〔略〕。

十906 〔略〕 同學士は御承知の通り、

多年府縣の技師をも務め、學理にも

通じ、實地にも明かなる人に候へば、

〔略〕。

十一361 〔略〕 當總督府の經營も着着

其の効を見るに至り候事、かねて御

承知の通りに候處、いよく實地見

聞致候へば、〔略〕。

十一378 〔略〕 本島産物の重なるもの

は、御承知の樟腦・米・茶・砂糖等

にて、〔略〕。

十一959 〔略〕 御承知の通り、冬は寒

氣厳しく、地面は三尺の下まで凍り、

〔略〕、流水の流れ来る事もこれあり候へば、〔略〕。

こしらえる「拵」(下) 20 コシラヘ

ル こしらへる「一ヘーヘル」

二354 〔略〕「モチハタイセツナオ米

デ コシラヘタモノデスカラ、

〔略〕」。

三93 〔略〕 三人デツンダノヲ

イツシヨニシテ、ハナタバヲコ

シラヘマシタ。

三302 竹馬モ竹デコシラヘ、タ

コノホネモ竹デ作りマス。

五198 母は流しもとで、まないたに

魚をのせて、さしみをこしらへてゐ

ます。

五331 ソノ葉デコシラヘル茶ガ一番

ヨイ茶ニナリマス。

五577 〔略〕炭ハ、木ヲヤイテコシ

ラヘタモノデス。

六276 〔略〕 ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サ

イ物カラ、キクワン車・軍カンノヤ

ウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ、

コシラヘルコトガ出来マセン。

七274 〔略〕、ノミ一ツデ見事ナホリ

物ヲコシラヘタリシテ、人ヲ感心サ

セルノモ、手ノハタラキデセウ。

七282 サルニハ〔略〕。シカシ人ノ

ヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ

出来マセン。

七467 〔略〕、書物モ近ゴロハ大

テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツ

タ。」

七642 〔略〕、水のまじつた物や、水

をまぜてこしらへた物を口に入れな

いことはない。

八156 働クコトガナケレバ、〔略〕、

着物モコシラヘラレナイ。

八319 〔略〕 年よりのかぢ屋があつ

た。〔略〕。ある時は釘をこしらへて

ゐた。

八327 〔略〕 するべの金たががこはれ

た時、つくろひを頼んだ事があつた

が、翌日すぐにこしらへてくれた。

八641 木綿織物ニ〔略〕ヤ其ノ他

色々ナ縞ガアルノハ、ドウシテコシ

ラヘルノデスカ。

九312 〔略〕、又之を車に應用して、

汽車をこしらへたのは、イギリスの

スチブンソンといふ人である。

九341 其の頃イギリスのある會社

で、馬車鐵道をこしらへようといふ

話があつたが、〔略〕。

十一94 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲ

コシラヘル者、〔略〕。

十二119 船ヲ造ルニハ先ヅ綿密ナ設

計圖ヲコシラヘル。

十二1410 〔略〕 船室ヲ分ツタリ、倉

庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、

機關ヲスエタリ、〔略〕。

こじろう「わだこじろうまさひろ

こじん「古人」(名) 4 古人

十一222 〔略〕 大いそくととばるる花は

吉野山。といひし古人の句我をあざ

むかず。

- 十一五三 古人の句に、歌書よりも軍書にかなし吉野山。
- 十一六八 古人の片言・隻句も我等が師なり。
- 十一九四 略、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、略。
- こじん「個人」(名) 3 個人 ひとかくこじん
- 十二九七 官位・門地(略)等に於て衆を抜く者は、個人としても自ら高尚なる品格を要するが如く、略、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。
- 十二九七 國民は個人の集合より成るものなれば、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。
- 十二九六 老人長者の爲に道をゆつり、略、が如きは、個人としても、國民としても、其の心の奥ゆかしきを感じずや。
- ごじんあい「御仁愛」(名) 1 御仁愛
- 十二一五 教育勅語と戊申詔書とは、略、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。
- ごしんじ「御心事」(名) 1 御心事
- 十一四一 略、後醍醐天皇の陵あり。天皇の(略)、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、涙わき出でて禁じ難し。
- ごしんたい「御神体」(名) 1 御神體
- 八二七 略、この御鏡を御神體と

- して、皇祖天照大神をまつりたまへるなり。
- ごしんにん「御信任」(名) 2 御信任
- 八八五 橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツタ。
- 九六三 略、かばかりの大功ありし人故、天皇の御信任も厚く、略。
- こす「越」(五) 3 越す「一サース」
- 九三六 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。
- 九三六 略、越すに越されぬ大井川。
- 九三六 略、越すに越されぬ大井川。
- 九三六 略、越すに越されぬ大井川。
- こすい「湖水」(名) 7 湖水
- 九三九 山上ナル蘆湖ノホトリニ關所アリテ、略、湖水ノホトリニハニギヤカナル市街アリキ。
- 九四二 略、水ノタマリタルモノハ蘆ノ湖ニシテ、湖水ノアフレテ流ル、モノハ即チ早川ナリ。
- 九四二 略、此ノ大ナル湖水ヨリ流レ落ちタル水ノ力ハハカリ知ルベカラズ。
- 十二二 日本一の湖水は近江の琵琶湖にして、周回六十里。
- 十二五 近江一國の川流はほとんど全く此の湖水に入り、略。
- 十二五 略、湖水より出づる瀬田川は下流宇治川となり、略。
- 十二七〇 されば河水・湖水におぼ

- れて魚腹に葬らるゝもの、略、其の數を知らず。
- こすう「戸數」(名) 1 戸數
- 十一一七 我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。
- こすえ「梢」(名) 1 こすえ
- 九一〇 歌へ歌へ、枝にこすえに。鳥の遊ぶ時は今なり。
- こすぎじむかん「小杉事務官」(人名)
- 1 小杉事務官
- 十一九一 略、なほ縣廳よりは小杉事務官も御臨席のほかに御座候。
- こする「擦」(四・五) 3 コスル こそする「一ツ・ーリ」
- 四五九 コノ神サマモ、「ナゼナクノカ。」トオタツネニナリマシタカラ、白ウサギハ目ヲコソツテ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。
- 五五六 大昔ハ木ト木ヲコソツテ火ヲ出シマシタガ、略。
- 九五九 略、よごれし手にて目をこすりて目をわづらひし人あり。
- こせい「小勢」(名) 1 小せい
- 七二二 略、コノ度ノ戰、敵ハ大ゼイニシテ、味方ハ小ゼイナリ。
- こせいうん「御盛運」(名) 1 御盛運
- 十二二八 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。
- こせいとく「御聖徳」(名) 1 御聖徳
- 十二一五 教育勅語と戊申詔書と

- は、略、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。
- こせいばつ「御征伐」(名) 1 御せいバツ
- 五六一 日本ノ一バンハジメノ天皇ヲ神武天皇ト申シ上ゲマス。コノ天皇ガワルモノドモヲ御セイバツニナツタ時、略。
- こせる「越」(下) 1 越せる「一セ」
- 十一一〇 オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、略。
- こせん「五錢」(名) 2 五セン 五錢
- 四二五 オマツハ太イフデト細イフデヲ出シテ、「コノ太イノガ五センデ、略。」
- 九九〇 五錢
- こぜん「午前」(名) 1 午前 ひめいじさんじゅうはちねんごがつにじゅうしちにちこぜんごじ
- 十五七 略、術科は午前・午後を通じて、四時間より六時間(略)。
- こぜんかい「御全快」(名) 1 御全快
- 九四三 姉上も最早御全快にて、四五日前より起きて蠶の世話なされ居り候。
- こぜんくじ「午前九時」(名) 1 午前九時
- 十二三四 午前九時(略、其ノ他工事關係者一同新校舎ニ參集シ、略)。
- こぜんじゅういちじさんじつぶん「午前

- 十一時三十分(名) 1 午前十一時三十分
- 十二85(略)、午前十一時三十分 全く敵を包圍せり。
- こせんじょう「古戦場」(名) 1 古戦場 十二23(略) 七里が濱のいそ傳ひ、稻村が崎、名將の 劍投ぜし古戦場。
- こせん・す「互選」(サ変) 2 互選す「シー・セ」
- 十二106(略)、同爵の互選せる伯爵男爵、(略)。
- 十二106(略)、及び各府縣に於て多額の直接國税を納むるもの十五人の中より一人を互選し、(略)。
- こせんまん「五千万」(名) 1 五千萬 十二101(略) 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、(略)。
- こせんまんえんいじょう「五千万円以上」(名) 1 五千萬圓以上
- 十一83(略)、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所用ヲミタシテ、尚海外ニ輸出スルモノ五千萬圓以上ニ及ブ。
- こぜんろくじ「午前六時」(名) 1 午前六時
- 六38 午前六時の汽車で、おとうさんが京都へお立ちになった。
- こそ(係助) 13 コソ こそ 八33(略) 「自分は今こそこんな小刀や釘などを造つてゐるが、元は少しは人に知られた刀かちで、(略)。
- 九52(略)、田植・草取・取入れに 農夫の辛苦共にする すげ笠
- こそはたふとけれ。
- 十二24(略) 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ先ダレタリ。(略)、五日目ノ朝ヲ約スルコト亦前ノ如シ。良此ノ度コソハト、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、(略)。
- 十一21(略) 我は海の子、白浪はさわぐいそべの松原に、煙となびくとまやこそ、我がふつかしき住家かれ。
- 十一30(略) 諸子ハ數多アル我ガ軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略) 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美ナレ。
- 十一42(略) 「年長じては敵も近づけ申すまじ。幼き時に参りてこそ」と、しきりに望めば、(略)。
- 十一44(略) いよく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。
- 十一71(略) 此の畫の出來たる由來こそ面白けれ。
- 十一118(略) 修身の徳是なりと、教育勸語のり給ひ、戦後經營かくこそと、戌申の詔書かしこしや。
- 十二109(略) 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽にすべからざるものなれ。
- 十二114(略) (略)の五箇條を特に軍人の精神と諭し給へる上に、此の五箇條を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せ給へり。
- 十二116(略)、大君の邊にこそ
- 死なめ、顧みはせじ。
- 十二118(略)、學びの道の 六年をば 卒へし今日こそ うれしけれ。
- こぞう「小僧」(名) 2 小ぞう 小僧 小しゅじんからこぞうへ
- 六44(略) うちがまづしかつたので、八つの時にお寺へ小ぞうにやられましたが、おきやうなどは何べんをしへてもおぼえません。
- 十一72(略) 或夜小僧住持の居間に來りて、(略)。
- こぞうからしゅじんへ「題名」 1 小ぞうから主人へ
- 八66(略) 小ぞうから主人へ 謹んで申し上げます。取分けおいがしい中を、一週間もおひまをいただきます。て、まことに有りがたう存じます。
- こそうだん「御相談」(名) 1 ござうだん
- 五24(略) よい神さまがたは、どうかして大神にまた出ていただきたいと、色色ござうだんのう、(略)、おかげをおはじめになりました。
- こぞつて「挙」(副) 1 舉ツテ
- 十一51(略) 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、(略)。故ニ笑フベシ、一家舉ツテ笑フベシ。
- ござんじ「御存」(名) 3 御存じ
- 七81(略) 皆さんは海を御存じでせう。
- 七81(略) 汽船も軍艦も御存じでせう。
- 八47(略) 「略」、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、サクヤとは書くには及ばない。
- こだい「古代」(名) 4 古代 九89(略) 等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。
- 七36(略) 道後は(略)、(略)、古代より世に著れ、往昔天皇の行幸し給ひしことも數回に及べり。
- 十97(略) 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。
- 十一80(略) 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみを着。かぶり火も亦古代の風を其のまなり。
- こだいこてんのう「後醍醐天皇」(人名) 3 後醍醐天皇 後醍醐天皇 十一29(略) 藏王堂の東なる吉水神社は後醍醐天皇の行宮の跡なり。
- 十一39(略) 寺の上の小高き所に後醍醐天皇の陵あり。天皇のこゝに行幸ありしより三年、北方の天を望みて崩御ありし御心事を祭し奉れば、(略)。
- 十一13(略) 元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。
- こだいこてんのう「後醍醐天皇陵」(名) 1 後醍醐天皇陵 十一2(略) 後醍醐天皇陵
- ごたいせつ「御大切」(形状) 1 御大

切

九44 1 〔圖〕 何とぞ御身御大切に成し下され、一日も早く御用御すましの
上、御歸りの程御待ち申上候。

こたう 〔答〕 (下二) 12 答フ 答ふ
對フ 『フーフルーへ』

七50 6 〔圖〕 「松村さん、郵便。」とよび
て、配達夫は入口に立ちたり。お花
は「はい。」と答へて受取らんとせ
しが、(略)。

八18 5 〔圖〕 義景重ネテ、「サラバコト
ムク張りカへ給へ。(略)。」トイ
へバ、「(略)破レタル所ノミツクロ
ヒテ用フルトキハ、シバラクハ用ヲ
ナスベキコトヲ、若キ者ニ知ラセン
トデカクスルナリ。」ト答ヘタリト
ゾ。

八52 9 〔圖〕 入鹿アヤシミテ「何故ゾ」
ト問ヘバ、「御前近ウシテ。」ト答フ。
九3 8 〔圖〕 尊は「何故にかくは泣きか
なしむぞ。」と問はせ給へば、おきな
は「(略)、此の地に八岐の大蛇とて
(略)。それをかなしみ申すなり。」と
答ふ。

九58 6 〔圖〕 八十歳を越えて病を知ら
ざる或老人に、長生の方法を問ひし
に、「やはらかなるものも二十七度
かめ。」と答へたりといふ。

十一43 8 〔圖〕 (略)、「何者ぞ。」と問ヘ
ば、「(略)宇野六郎の子なり。(略)。
(略)父の後をとぶらはんとて、か
く諸國を巡り歩くなり。」と答ふ。

十一103 8 〔圖〕 備崩ズルニ臨ミ、(略)、「
我ガ子若シタスクベクンバ、之ヲ
タスクヨ。(略)。」トイヒシニ、孔
明涙ヲ流シテ、「臣アヘテ死力ヲ盡
シ、忠節ヲ致スベシ。」ト答フ。

十一105 2 〔圖〕 (略)、「蜀軍ノ陣營ヲ示シ
テ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問
フ。孟獲答ヘテ曰ク、「此ノ如シト
知ラバ何ゾ敗レン。」ト。

十二114 4 〔圖〕 「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ
祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚ブ。」
十二37 9 〔圖〕 秀忠「さらば誰か然るべ
き。」といふ。「嘉明に如く者はあら
じ。」と答ふるに、(略)。

十二38 2 〔圖〕 (略)、「秀忠あやしみて、
「(略)今之を推舉するは如何に。」
と問ふ。「(略)是は公の大事なり。
何ぞ私事を以て公事を害せんや。」と
答ふ。

十二95 5 〔圖〕 景公歸りて群臣に告げて
曰ク「(略)我、罪を魯君に得たり、
如何にせば可ならん。」と。齊の臣答
へて、「君子は過あれば謝す。君、實
を以て謝せよ。」と。

こたえ 〔答〕 (名) 2 答
十40 5 〔圖〕 「(略)二子を失ひ給ひつ
る閣下の心如何にぞ。」と。『(略)。
これぞ武門の面目。』と、大將答力あ
り。

十一55 7 「ビエールよ、少年鼓手よ。」
と聲を揃へて呼んだが、何の答もな
い。

こたえ 〔答〕 (下二) 15 コタヘル

こたへる 答へる 『ハハヘル』
三39 7 なにをきかれても、この
口ではつきりこたへます。

三46 5 (略)、「おい、なにをして
ゐるのだ。」ときくと、「あまり
ほしがきれいだから、二つ三
つはたきおとさうと思ふの
だ。」とこたへました。

三54 6 「ハヤクオサラヒヲナサ
イ。」トイハレテモ、「ハイ、今
スグニ。」トコタヘルバカリデ
ス。

四29 6 一ぴきのきつねが(略)、「
「(略)あなたのおなかまは大
てい枯れてしまったやうです。
(略)。」といひました。のぎくは
「(略)らひ年またお目にかか
りませう。」とこたへました。

四44 1 おちよは(略)母に「(略)な
ぜのしをつけるのですか。」
と問ひました。母は「これは
昔からのしきたりで、(略)。
(略)。」と答へました。

四45 5 おちよは又、「どうしての
しあはびをつけるやうになつ
たのでせう。」と問ひました。母
は「(略)。(略)なまぐさのし
るしにのしあはびをつけるや
うになつたのでせう。(略)。」
と答へました。

四53 5 (略)、「オマヘノナカマト

オレノナカマトドツチガ多

イカ、クラベテ見ヨウ。」トイヒ
マシタ。ワニザメハ「ソレハオ
モシロカラウ。」ト答ヘテ、(略)。

五77 3 「年はいくつか。」と問へば、
「十七。」と答へた。
六46 5 信長は誰かとたづねますと、
木下藤吉郎秀吉と答へました。

六47 2 「誰も居らぬか。」とよびます
と、「藤吉郎秀吉こゝにひかへて居
ります。」と答へました。
六70 3 (略)、「先生に何か聞かれて
も、答へることが出来ないで、顔を
赤くする子供もございました。

六70 6 (略)、「何を聞かれても、はつ
きりと答へる子供もございました。
八21 4 白い雀が實際に居るのか。」
と、(略)、「農夫は問返しました。友
だちは答へて、「居るさうだ。

十34 10 (略)、「どういふ御見込で、あ
の青年を御用ひになつたのかとたづ
ねた。主人は答へて、「(略)色々な
美質をもつてゐることをよく見定め
ました上、なほ平生の行をしらべて
雇ふことに致しました。

十35 8 〔圖〕 (略)、「何を聞いても、一々
明白に答へて、しかもよいけいなこと
はいひません。

こだかい 〔小高〕 (形) 1 小高い
『イイ』
十一109 9 死人を葬るのに、小高い所
で南に面してゐる日當りのよい地を

選ぶ。

こだかし「小高」(形) 1 小高し

「一キ」

十一39図 寺の上の小高き所に後醍醐天皇の陵あり。

こだち「木立」(名) 1 木立ふゆこだち

九611図 人多き都會に住む者は、(略)又朝早く起きて、木立しげき公園等を散歩すべし。

こだち「小太刀」(名) 1 小太刀

八385図 「(略)、元は少しは人に知られた刀かちで、若い時から何十本となく大太刀・小太刀をきたへた。

こだまちよう「児玉町」(地名) 1 児玉町

十二547図 (略) 大連に着す。(略)。

市街に大山通・児玉町・乃木町等の名あるは、明治三十七八年戦役の記念たり。

こたようちゅう「御多用中」(名) 1

御多用中

十一629図 (略) 法會相當度候間、御多用中恐入候へども、御参列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

こたんじょうび「御誕生日」(名) 1

御誕生日

八904図 「今日ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日ダ。

こち「鯛」(名) 1 コチ

七706 魚類ニハ(略)、タヒ・ボラ

・ハモ・コチ・キスナドノヤウニ、

岩ノカゲや海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。

こち「東風」(名) 1 東風

九788図 東風吹かばにほひおこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな。

ごちそう「御馳走」(名) 2 ゴチソウ

三688 (略)、ウラシマノ來タノヲタイソウヨロコonde、イロイロナゴチソウヲシタリ、(略)。

三692 ウマイゴチソウモ毎日タベルト、シマヒニハイヤニナリマス。

ごちゅうもん「御注文」(名) 2 御注文

九132図 (略) 紺がすり上物十反だけ御見立の上、(略)御送り相成度願上候。先は重ねて御注文まで。

九137図 拜啓、御註文の縞物三十反、本日通運便により(略)發送いたし候。

ごちよう「五丁」(名) 1 5丁

十一2図 5丁

こちようこく「古彫刻」(名) 1 古彫刻

十二647図 ルーブル博物館は名畫・古彫刻最も多く、(略)。

こちら「此方」(代名) 11 コチラこちらら

一322 アチラデモ コチラデモタノクサヲトツテキマス。

一481 ワタクシガコチラノハシヲモツカラ、アナタハソチラノハシヲオモチナサイ。

二615 (略)、アチラノ山モ、コチラノ山モ、一メンニミゴトナハナザカリニナリマシタ。

三578 アソコニハ(略)ノオビガアリ、コチラニハ(略)ノハオリガアリマス。

四48図 「あそこ」に高い火の見のはしごが見える。あのこちらに白いかべが見えませう。

五402 こちらのの方は、(略)切符を切つてゐるのです。あちらの方は、(略)切符をうけ取つてゐるので

す。

五434 向フノ汽車カラコチラノ汽車ヲ見テモ、同ジコトデセウ。

六557 (略)、信玄は(略)、はさみうちにしようとした。謙信はそれを知つて、こちらから先がけをしよう

と、夜の間に信玄の陣に攻入つた。

七418図 このお金は私がこちらへある時、『夫の一大事の折に使へ。』と申して、父の渡してくれた金でございます。

八457図 「こちらでは近年にない大火事だから、誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。

八685図 (略)、手紙を見て安心しました。こちらの方はどうとも都合がつくから、心配するには及びません。

こっか「國家」(名) 14 國家

八344図 かゝるたふとき御官なれば、(略)、皇室及び國家に大事あれば、かならずこれを告げたまふ。

九211図 「一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。何にてもゑんりよなく言へ。」

十一408図 教育の事業も段々進歩し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

十二177図 陛下が萬機の政をみそなはず御かたはら、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、常に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の拜察せらるゝは、(略)。

十二210図 我等臣民も亦祖先の遺風に從ひ、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

十二395図 相如の日ふやう、(略)余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」といふ。

十二4610図 農業は我等が生活に必要な材料を作り出す所以にして、國家一日もこれなかるべからず。

十二538図 富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。

十二536図 (略)、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。

十二1065図 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。(略)、國家に勲勞あり又は學識あるものより勅任せられ

たるもの、(略)。

十二109 ① 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、(略)。

十二111 ⑤ 國家を護り、國權を維持するは兵力に賴るを以て、(略)。

十二111 ⑦ (略)、軍人たる者は一途に忠節を重んじ、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

十二112 ⑦ 禮儀を守る心得を缺ける軍人は國家としても許し難き罪人ぞと論し給ふ。

こっか【国歌】(名) 1 国歌

十二84 ⑧ 紳士は更に埃太利の國歌を彈始めた。幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

こっかい【国会】(名) 1 國會

十二64 ① 英國は國會の最も早く開けたる國にして、テームス河岸の國會議事堂は(略)。

こっかいぎじどう【国会議事堂】(名)

3 國會議事堂

十二63 ⑦ 倫敦には英國博物館・英蘭銀行・國會議事堂等世界に名を知られたる建築物多し。

十二64 ② (略)、テームス河岸の國會議事堂は第一に觀客の目を引く建築物なり。

十二65 ③ 伯林には(略)。最も人目を引くものは國會議事堂なりといへども、其の規模甚だ大ならず、其

の建築も亦新し。

こっかぜんたい【國家全体】(名) 1 國家全體

十一12 ⑨ 又國家全體カライへバ、農

夫ノ田畑ヲ耕シ、大工ノ家屋ヲ作り、商人ノ物品ヲ賣買シ、官公吏ノ事務ヲ取扱ヒ、教師ノ生徒ヲ教育スル等ハ皆分業ニ外ナラスノデアル。

こっかぼうぎよ【國家防禦】(名) 1 國家防禦

十一35 ③ 四面皆海ナル我が帝國ハ、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

こっき【国旗】(名) 5 国旗

二28 ① ドコノイヘニモカドマツガタテアリマス。コクキハヒラヒラトカゼニウゴイテキマス。

三30 ⑧ モノホシザラニモ、コクキノサヲニモ、(略)ニモ、竹ヲツカヒマス。

四8 ⑧ 日ノマルノコクキガアサ日ニカガイテキルノハ、イサマシイデハアリマセンカ。

八86 ⑧ 中佐ハ(略)、トウ／＼山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。

十二79 ⑨ (略)、コロンブスは深紅の美服を着し、西班牙の國旗を持し、(略)眞先に上陸し、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。

こっきよう【國境】(名) 3 國境

九15 ④ 更ニ東南ニ流レテ、上野・武藏ノ國境ヲ過ギ、渡良瀨川ヲ合セテ(略)。

九16 ② 江戸川ハ(略)。其ノ流ハ下總・武藏ノ國境ヲナセリ。

九16 ⑧ 本流ハ下リテ、下總・常陸ノ國境ヲ流レテ太平洋ニ入ル。

こっけん【國權】(名) 1 國權

十二111 ⑤ 國家を護り、國權を維持するは兵力に賴るを以て、(略)。

こっこう【國交】(名) 1 國交

十二101 ③ 國力我に劣れる國民を見て、(略)、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐることを多し。

こっこう【國光】(名) 1 國光

十一29 ③ 大小幾多の軍艦は(略)、遠く四方に航行して、到る處に國光をかゞやかせり。

こっくく【刻刻】(名) 1 刻々

十二69 ⑨ (略)、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、飢餓刻々にせまるが故に、次第に行進を早め、(略)。

こつそり【副】1 こつそり

五75 ⑧ (略)、てきのふいをうたなればならぬ。」と考へて、(略)、こつそりと裏道からひよどりごえに向つた。

こつち【此方】(代名) 1 こつち

五46 ⑦ ① 「早くこつちへ來たまへ。(略)、そんな所にゐてはあぶない。」

こつちみかどてんのう【後土御門天皇】(人名) 1 後土御門天皇

十二80 ⑩ コロンブスの遠征時代は、我が國後土御門天皇の御代にして、(略)。

こつつみゆうびん【小包郵便】(名) 2 小包郵便

七52 ④ ① 「小包郵便でもやはり四匁までが三錢ですか。」

七52 ⑦ ② 「小包郵便は二百匁まではどんなに遠い所でも、八錢でよいのです。」

コップ(名) 1 こつぷ

七84 ⑤ 船長はこつぷの水を一口飲みて、又その話をつゞけたり。

こて【鋳】(名) 2 コテ

一21 ② ヒノシコテ

八14 ⑤ 大工ハノコギリ、左官ハコテ、石屋ハノミ、カヂ屋ハツツ、仕立屋ハ針、ソレ／＼ノ道具ヲ持ツテ、(略)。

こと【言】(名) 1 言々おおせごと・ひとりごと

十二28 ⑩ 老人(略)、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」トイフ。良(略)、老人ノ言ナレバ、命ノマ、ニ拾ヒ取リテサ、ゲ。

こと【事】(名) 512 コト こと 事 ひとごと・なにごと・なにごともせいしん・はかりごと・はたらくことはひとのほんぶ

ん・まつりごと・ものごと

一516 (略)、「オヤニシンパイヲカケルノハワルイコトデス。

二42 オソクオキル人ハ、コノウツクシイ日ノデヲミルコトガデキマセン。

二35 ユミヲイルコトガスキデ、(略)。

二607 (略)、「オモシロイコトダ。ハナヲサカセテミヨ。」

三138 (略)、「ダレトスマフヲトツテモ、マケタコトハアリマセン。

三148 ケハヤハ(略)、ケルコトガマコトニハヤカッタノデス。

三197 (略)、「子ヒバリハスノ中デ、ドンナニマツテサルコトデセウ。

三228 私を(略)、「たたせることや、二つかさねることは、どうしてもできません。

三231 私を(略)、「二つかさねることは、どうしてもできません。

三246 牛は(略)、「あるくことがおそうございます。

三248 うまは(略)、「はしることはやうございます。

三388 これがなければ、せんせいのおつしやることや、みんなの言ふことがわかりません。

三391 これがなければ、(略)や、みんなの言ふことがわかりま

せん。

三395 耳も(略)、「ききおとすやうなことはありません。

三398 けれども(略)「よけいなことは言ひません。

三438 ソレディツデモイクサニカッタトイフコトデス。

三466 (略)「ばかなことをいふ。

三495 水の上で(略)、「ぼんやりうかんであることもあります。

三497 (略)は水の中にながく居ることはできません。

三503 かへるは(略)にもすむことができるのです。

三708 (略)「ソレハマコトニオナギリヲシイコトデゴザイマスガ、(略)。

三734 (略)、「オトヒメノイツタコトモワスレテ、タマデバコヲアケテ見ルト、(略)。

四161 三日目のくれがたのことです、(略)ゐのししが、(略)かけおいて来ました。

四283 (略)まことにおきのどくなこととです。」

四447 (略)「(略)おめでたくない時には、なまぐさものをもちひないことがおほいのです。

四601 (略)「ソレハカイサウナコトダ。

四674 (略)「苦シイコトハゴザイマセンカ。」

四778 (略)、「これを一矢でいおとすことは、なかなかむづかしさうです。

五22 (略)、「わるい神さまがさまざまのわるいことをはじめました。

五62 (略)、「オトホリスデノミチガケハシクテ、オコマリノコトガゴザイマシタ。

五72 (略)、「ワルモノドモハ目ヲアケテサルコトガデキマセン。

五155 池ノ中デコヒガオヨイデキルノヲ見タコトガアリマセウ。

五173 時ニハ二三尺モ高クトブコトガアリマス。

五177 鯉ノタキ上リトイツテ、タキデモ上ルコトガアルサウデス。

五234 (略)「私はよその物をぬすむやうなことはいたしません。」

五262 (略)「お前のいふことはまことにもつともだ。

五292 (略)、「七月・八月あついろ、三日三ばんの土用ぼし、思へばつらいことばかり、(略)。

五334 マタ三番茶・四番茶マデモツムコトガアリマスガ、(略)。

五367 (略)、「をたくさん集めて来いとおほせになりました。こといふのはかひのこととで、(略)。

五414 汽車はどんなことがあつても待ちません、(略)。

五435 (略)、「向フノ汽車ニノツテキル人ノカホハヨク見エマセン。向フ

ノ汽車カラコチヲノ汽車ヲ見テモ、同ジコトデセウ。

五564 火ヲ使フコトノ出来ルノハ人バカリデス。

五566 鳥ヤケモノハ火ヲ使フコトヲ知りマセン。

五605 昔ノ人ハ石炭ノコトヲモエル土、石油ノコトヲモエル水トイヒマシタ。

五605 昔ノ人ハ(略)、「石油ノコトヲモエル水トイヒマシタ。

五705 (略)「客ヲヨブコエヤラ、(略)ハヤシタテル音ヤラ、ニギヤカナコトデアル。

五727 (略)「出来ルコトナラ、モツトタクト強イ足ガホシイモノダ。」

五755 (略)「表から攻めおとすことはむづかしい。

五781 (略)「こゝからしろの方へ下りることが出来るか。」

五797 (略)「鹿の通れる所を馬の通れないといふことがあるものか。

五817 へいけはふいを打たれて、どうすることも出来ない。

六138 モシ列ニハナレルヤウナコトガアツテモ、(略)。

六262 (略)「ソレデゼニニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

六262 (略)「ソレデゼニニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

六276 (略)「カラ、(略)マデ、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコトガ出

來マセン。

六27 8 〔略〕、人ノ役ニ立ツコトハ銅ヨリモマダ上デス。」

六30 8 〔略〕「あゝ、大へんなことをした。今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」

六31 8 〔略〕「一錢まうけておけばよかつたのに。」〔略〕、「そんな事が出来るものか。」

六32 8 〔略〕、主人はこの事を聞いて、直吉は正直ものだとはめて、〔略〕。

六45 8 初は〔略〕、信長の目通りへ出ることも出来ませんでした。

六47 5 ある年、城のへいが百間ばかりこはれた事がありました。

六47 8 信長はどうとう秀吉にいひつけて、直させることにしました。

六49 2 秀吉は〔略〕、たびくいくさをしたけれども、一ぺんもまけたことがありません。

六49 7 秀吉が〔略〕、敵を攻めに行つてゐた間の事でしたが、信長は京都で〔略〕にころされました。

六50 8 〔略〕日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。

六52 8 をしいことに、そのいくさの終らない中に病氣でなくなつてしまひました。

六54 3 〔略〕ニモノヲスルニモ砂糖ヲ用フルコトアリ。

六58 6 ところがとなり國では〔略〕、塩を送らせないことにした。

六59 4 〔略〕それから信玄が死んだと聞いた時、謙信は「ああ、をしい事をした。」

六62 5 〔略〕「〔略〕、かなしいことに目が見えず、さがすことさへ出来ません。」

六62 6 〔略〕「〔略〕、かなしいことに目が見えず、さがすことさへ出来ません。」

六66 4 熊ハ〔略〕、カズノ子ノ俵ヲカツデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

六66 5 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカマヘルコトガアリマス。

六67 1 ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ來ルコトガアリマス。

六68 1 〔略〕杉ハ〔略〕ニ用ヒ、又〔略〕ナドラ作ルニ用フルコト多シ。

六70 3 〔略〕、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、顔を赤くする子供もございました。

六83 5 〔略〕、善き事がひにすゝめあひ、悪しきをいさめよ、友と友、人と人。

七1 9 〔略〕ヨク父ノ言フコトヲ聞分ケヨ。

七2 5 〔略〕我が生キテフタ、ビ汝ヲ見ンコトハカタカルベシ。

七2 9 〔略〕我が死ニタル後モ、〔略〕、天皇ノ御タメニツクスベシ。汝ノ孝行コレニスギタルコトナシ。」

七3 9 〔略〕「汝ヲサナクトモ、〔略〕、

コレホドノワケノ分ラヌコトハアルマジ。

七5 1 〔略〕正行〔略〕父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナカリキ。

七12 6 〔略〕商賣上でげんきんといひ、かけといふのは何の事ですか。

七13 9 〔略〕小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。

七14 3 〔略〕卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、〔略〕。

七14 5 〔略〕問屋といふのは何の事ですか。

七14 8 〔略〕問屋といふのは〔略〕、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。

七15 3 〔略〕たとへばごふく問屋といふのは、〔略〕、それをほかへ賣渡してやり、又〔略〕、それをほかから買取つてやる店のことです。

七17 1 〔略〕ぶじお着のことと存じます。

七17 3 〔略〕このよい時節に東京へお上りはおうらやましい事でございませう。

七22 2 〔略〕あなたほどの大きな花ぶさは見たことがございません。

七25 6 〔略〕モシ手ガナカツタラ、〔略〕。ハシヲ持つコトモ出来マセン。

七25 7 〔略〕オビヲムスブコトモ出来マセ

ン。

七25 8 カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出来マセン。

七25 8 カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出来マセン。

七26 7 イソガシイ時ニ手ノ足リナイトイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。

七27 7 ドンナガキガアツテモ、手ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出スコトハ出来マスマイ。

七28 3 シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。

七28 8 一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。

七31 8 〔略〕、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。

七40 2 〔略〕「あゝ、金がない程残念なことはない。

七42 4 〔略〕、御主人織田様には、近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。

七42 5 〔略〕さだめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのことでございませう。

七44 3 〔略〕、これが一豊の出世のものになつたといふことであります。

七48 2 〔略〕日本紙ハコヨリニシテ物ヲシバルコトガ出来ル。

七49 3 図 水ニヌレルグラキハ何デモ
ナイコトダ。」

七63 5 図 ある山國にては、犬のくび
に（略）かごをかけおきて、つかれ
たる旅人をすくはしむることあり。

七63 9 われくは一日も水を飲まな
いことはない。

七64 1 水を飲まないことはあつて
も、（略）。

七64 3 （略）、水のまじつた物や、水
をまぜてこしらへた物を口に入れな
いことはない。

七65 5 （略）、水がなければ、生きて
ゐることは出来ない。

七65 9 （略）を飲むと、おそろしい
病氣にかゝることがある。

七76 6 一ガイニフコトハ出来ナイ
ガ、（略）。

七78 1 （略）沈ンダリオヨイダリシ
テキルノハ、陸上デハ見ルコトノ出
来ナイ美シイ景色デアラウ。

七78 8 図（略）、一たん心定めては、
事に動かず、さそはれず、（略）。

七82 9 図 ある時には鯨が頭から高く
水けを吹いてゐることがあります。

七83 2 図 何萬とも知れないいるかが
およいでゐるのを見ることもありま
す。

七83 5 図 又ある時にはとび魚が甲板
の上へとび上ることもあります。

七84 8 図 「航海といふものは（略）、
又時にはおそろしい目にあふことも

あります。

七85 4 図 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。

七86 9 図 （略）、それを見ると、あれ
はどこだといふことが分ります。

七87 1 図 この星を見分けることや、
燈臺のあかりを知ることは、（略）。

七87 2 図 この星を見分けることや、
燈臺のあかりを知ることは、（略）。

七87 3 図 この星を見分けることや、
燈臺のあかりを知ることは、船に乗
る者には大切な事です。」

七87 6 図 「さておしまひに一ついつ
ておきたい事があります。

七87 8 図 日本は海國でありながら、
海を恐れる人の多いのは残念な事デ
す。

七88 4 図 （略）、こんなことではどう
して海國の國民といはれませう。

七92 1 図 （略）、敵ノ砲臺ヨリハ砲
丸ヲアビセカクルコトイヨ／＼盛ナ
リ。

八1 3 図 代々の天皇は皇大神宮をた
ふとびたまふことはめてあつく、
（略）。

八2 4 図 「この鏡を見ること我を
見るが如くせよ。」

八3 7 図 （略）、その御式の盛なるこ
と前古たぐひなかりきと申す。

八15 5 勸クコトガナケレバ、食物モ
買ハレナイシ、着物モコシラヘラレ

ナイ。

八16 1 勸クコトハ人ノ本分デアル。

八16 6 図 「召使ノ中ニカ／＼ル事ヲ
ヨク心得タル者アリ。

八16 9 図 「我モコレ程ノ事ハ心得
タリ。

八18 3 図 「（略）、總ベテ物ハ破レタ
ル所ノミツクロヒテ用フルトキハ、
シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若
キ者ニ知ラセントテ（略）。」

八20 4 （略）、雀といふものは（略）、
又大そう作物を荒すものだといふこ
とを話しました。

八20 8 図 「それはさうと、君は白い
雀を見たことがあるか。」

八21 1 図 「いや、見たことがない。

八22 1 図 （略）、毎朝早くすを出て、
糸をさがして、すぐ歸つてしまふと
いふことだ。」

八25 9 「（略）」といつて、今見た事
をすつかり話して聞かせました。

八26 6 其の中に雀のことはいつかわ
すれて、（略）。

八26 7 （略）、たゞ身代を取返す事に
ばかり心がけるやうになつて、（略）。

八29 5 図 幾度カマハリタレドモ、入
ルコトヲ得ず、（略）。

八31 8 一日も休んだ事がない。

八32 3 又車のわを打つてゐた事もあ
つた。

八32 6 僕の家で一度つるべの金たが
がこはれた時、つくるひを頼んだ事

があつたが、（略）。

八33 2 仕事をしながら、僕に色々な
話をした事もある。

八38 9 図 諸子ハイマダマツチノ製造
場ヲ見タルコトナカルベシ。

八43 7 一切の書類や記録類も皆ぶじ
であつたといふことだ。

八44 2 毎日の食物のにたきから種々
の工業まで、火の力を要することは
數へきれない程多い。

八44 6 これ程有用な火でも、ひよつ
とまちがふと大へんな事が出来る。

八46 9 図 焼けない事さへいへば、御
安心なさるから、（略）。

八47 3 図 又ことばも電報だから、そ
んなにていねいに書くことはいらな
い。」

八47 8 図 「（略）、火事の昨夜あつた
ことはもう御存じだから、（略）。

八48 2 図 又ヤケナイといへば、うち
の焼けなかつたことも分るから、ウ
チもいらない。

八51 4 図 コレヨリ鎌足、皇子ト親シ
ミ奉ルコトヲ得テ、（略）。

八51 8 図 サル程ニ三韓ノ使ミツギヲ
奉ルニヨリテ、入鹿ノ参内スルコト
アリ。

八53 2 図 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ
討ツベキ手ハズナリシガ、（略）今シ
バシタメラハバ事アラハレントス。

八56 2 走ることは馬よりも早いの
で、（略）、つばさははなはだ小さい。

八57 6 いすかのくちばしは(略)。それで「いすかはしのかひがひ。」といふことがある。

八67 1 (略)、一時はどうなることかと心配いたしました(略)。

八67 4 (略) 併し老病の事故、よほど大事にしなければならぬと存じます。

八67 6 (略) 祖母一人孫一人の事で御座いますから、(略)。

八70 2 (略) 我等一同(略)、今日より働くことを止むければ、左様心得られたし。」

八70 5 (略)、手は食物を口に入ることを止め、(略)。

八70 6 (略)、足は食堂へ行くことを止めたり。

八70 8 (略)、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、(略)。

八71 5 (略) 我若し食物をこなす事なくば、全身を養ふ血は如何にして得らるべき。

八72 9 (略) 「猫デナイシヨウコニ竹ヲ書イテオキ。」トイフコトアリ。

八73 9 (略) 虎ハ前足ノ一撃ニテ鹿ナドヲタフスコト、猫ノネズミヲトラフルガ如シ。

八74 2 (略) 足ノ先ニハ(略)爪アリ。用ナキ時之ヲカクスコト、虎モ猫モ相同ジ。

八75 1 (略) 虎モマタ猫ノ如ク、ヨクモノヨヂ上ルコトヲ得。

八79 4 (略) 東方へ向はば、二週

間あまりにして日本に歸着することを得べし。

八81 9 (略) かゝる地方にては(略)、美しき花木を見ること能はず。

八87 8 中佐ハ「(略)。」トサケンデ部下ヲハゲマシ、敵ヲ撃退スルコト數度ニ及ンダ。

八90 6 (略) 此ノメデタイ日ニ討死スルノハ軍人ノ面目ダ。名譽ノ事ダ。」

八92 1 馬丁ハドウナルコトカト心配シナガラ、様子ノ分ルヲ待ツテ居タガ、(略)。

八94 4 (略)、朝日・夕日にかゞやきて、遠く數里の外よりも望み見ることを得べし。

九1 6 (略) 此の劔初は天叢雲劔とし、後に改めて草薙劔と申すこととなれり。

九5 3 (略) 「つゝしみて怠ることなかれ。」

九7 3 又其ノ辯ハ(略)、一ツツツニ取離スコトガ出来ル。

九7 10 (略)、皆一ツツニナツテキテ、引キサカナケレバ取離スコトガ出来ナイ。

九14 1 (略) 次に老人向きの紺がすりは、(略)までには少々間に合ひかね候事と存候。

九20 4 大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。

九20 8 (略) 「聞けば、そなたは豊島

の戦にも出ず、(略)にもかくべつ

の働なかりきとのこと、(略)。

九21 2 (略) 『一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。』

九21 3 (略) 『(略)、定めて不自由なる事もあらん。』

九21 5 (略) 母は(略)、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、(略)。

九22 7 (略) 併し今の戦争は(略)、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九23 2 (略) 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。

九25 2 (略) 工兵は陣地をきづき、道を開き、(略)等、もつぱら技術の事にしたがふ。

九25 8 (略) 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵は(略)、其の任務には輕重の別あることなし。

九27 7 (略) 五月五日ニ(略)、男子ノ福運ヲイノルコト、我が國古ヨリノ風習ナリ。

九30 4 (略) 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々アリ。

九30 5 (略) カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、(略)。

九32 1 (略)「何月何日初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、(略)。

九33 1 之を聞いて、(略)、皆其の成功を喜んだといふことである。

九33 3 スチブソンは若い時から機關の事に明るかつたが、(略)。

九33 5 (略)、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、日夜其の事ばかり考へてゐた。

九33 8 さて幾度も幾度も造り直して、終に其の目的を達することが出来た。

九34 3 (略)、スチブソン^{Stevenson}の發明した汽車を用ひて見ようといふことになつて、(略)。

九35 8 それが今は朝の急行列車で東京を出立すれば、晩にははや京都に着くことが出来る。

九35 10 昔の旅行には色々難儀なことがあつた。

九37 4 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、(略)。

九37 8 馬は馬子が引いて、ゆるく歩むのだから、早いことはない。

九45 10 (略) アリは子供のことなれば、話相手もなく、(略)。

九46 3 (略) 一同はやむことを得ず、進

行を止めて、風のをさまるを待てり。

九48 5 (略) アリは幸にも星によりて方角を見定むることを知り居たれば、(略)。

九48 10 (略) アリはそこに行きて、ありし事を物がたり、ねんごろに同行を

頼みにし、(略)。

九49 4 聞けばハッサンはアリの來ることの餘りにおそれれば、(略)。

九54 8 (略)、自ラ其ノ周圍ノ物ノ色トマギレテ、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。

九55 8 保護色ノ變ズルハスデニ面白キコトナリ。

九55 5 (略)、ソレヨリモナホ面白キハ、(略)、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノアルコトナリ。

九56 2 農夫ナドハ小枝ト見チガヘテ、土ビンヲカケ、落シテワルコトアリ。

九57 4 他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、(略)。

九57 5 (略)、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。

九58 2 口にうましとて多く食ふことなかれ。

九58 2 多く飲むことなかれ。

九59 4 衣服もよく洗ひて、よこれたるをば着ることなかれ。

九59 8 常に無病にして、醫者にかゝりたることなき人あり、(略)。

九60 1 然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。

九60 7 空氣の大切なことも食物におとらず。

九61 2 室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青ざめて元氣なき

は、(略)。

九62 5 (略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばゝなりき。

九64 10 空氣は(略)、凡そ少しにてもすぎ間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。

九65 3 其のしるしは水にぬるることなかるべし。

九65 9 然れども空氣の流通餘りに強き時は、却つて火の消ゆることあるべし。

九66 8 若し空氣なからんには、人も鳥獸も草木も多くの生物は其の生を保つこと能はざるべし。

九69 2 (略)、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

九70 4 (略)、身を切るやうな寒さに思はず首をぢめることもある。

九70 6 夜が更けて、雨の音が靜かになつたから、止んだことと思つてゐると、(略)。

九70 8 (略)、翌朝起きて見れば、何時の間に雪に變つたか、そこら一面銀世界になつてゐることもある。

九71 5 御老人・御子供衆も御大勢の事故如何と御案じ申し居り候。

九72 4 御案じ申し居り候。の事とは存候へども、(略)。

九76 3 (略)、ヤ、高價ナル必要品モ買フコトヲ得ベク、(略)。

九76 4 (略)、家業ノ元手ノ一部分トモナスコトヲ得ベシ。

九76 5 又病氣其ノ他ノ場合ニモ、他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカルベシ。

九76 8 一度ニ拾錢以上ノ貯金ヲナスコト能ハザル者ノ爲ニハ、(略)。

九78 4 (略)無用ノ入費ヲハブキテ、一錢・二錢ヅツニテモ貯ヘンコトヲ心ガクベシ。

九78 6 (略)必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。

九80 4 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、(略)。

九80 5 (略)、片時も君を忘れ奉ること無く、(略)。

九81 10 昔或氏神のお祭に競馬の神事といふ事があつた。

九87 9 賣買トイフコトナカリシ遠キ昔ニハ、(略)。

九88 1 (略)物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。若シ今ノ世ニモナホカ、ル事アリトセバ、(略)。

九89 3 貝・毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコトアリ。

九89 7 是金銀ハ(略)、又分合スルコトモタヤスクシテ、(略)。

九89 9 是金銀ハ(略)、分合ノ爲ニ直段ノ割合ヲ變ズルコトナク、

(略)。

九90 6 (略)、金貨ハ日常流通スルコト少シ。

九90 10 紙幣ハ(略)、輕クシテ取扱ニ都合ヨキコトハ貨幣ニマサレリ。

九91 3 之ヲ日本銀行ニ持行カバ、何時ニテモ金貨ト交換スルコトヲ得ベシ。

十1 4 其の高さは(略)、富士山より高きこと凡そ一千尺なり。

十2 4 其の全景を見ること能はず。

十4 8 (略)奈良の大佛の大きさの日本一なることは諸子すでに之を知れり。

十5 6 (略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出來ルサウデア

ル。

十8 7 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。

十9 4 (略)落葉・こけ(略)木の根などは、地上に落ちたる水をふくみさゝふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。

十10 2 森林なければ、土砂附近の田畠に飛散りて、其の土地を荒すこと多し。

十11 2 (略)、近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ること

を禁ぜり。

十15 10 紫式部は(略)、兄の書を讀むを聞きゐて、直ちに之をそらん

じ、少しも忘るゝことなかりしかば、
(略)。

十179 萬づに心きたること、此
の一例にても知るべし。

十181 我々は毎日日本を読んで色々
事を覚える。

十184 讀んでゐる間の中に書いて
ある事ばかりを一心に考へてゐるか
ら、(略)。

十185 (略)、どうして出来るものか
といふ事は深く考へないが、(略)。

十218 活版は印刷が終れば、其の活
字を取離すことが出来るから、(略)。

十221 又活字は何時でも直に植ゑる
ことが出来るが、(略)。

十224 それ故近年は(略)、活版を
用ひることが多くなつた。

十241 老人怒リテ、五日目ノ朝ヲ
約スルコト亦前ノ如シ。

十265 拜啓、いよく來月一日
より御入營、軍務に服せられ候事、
(略)一村の名譽に御座候。

十308 名稱ノカク異ナルヲ以テ
モ、此ノ芋ノ次第二西方ヨリ傳來セ
シコトヲ知ルベシ。

十313 此ノ芋ノ(略)、内地へノ
渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナリ。

十332 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人
ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。

十346 (略)、主人は其の中で一人の
青年をやとひ入れることにきめた。

十353 きれいずきで、つゝしみ深

いことは、それでよく分りました。
十356 人に親切なことは是でも知
れると思ひました。

十359 (略)、何を聞いても、(略)、
しかもよけいなことはいひません。

十3510 はきくしてゐて、禮儀・
作法をわきまへてゐることも、それ
ですつかり分りました。

十366 (略) それで注意深い男といふこ
とを知りました。

十3610 あれの温順なことをよく現
して居ります。

十376 かういふやうな色々な美質
をもつてゐることをよく見定めまし
た上、(略)。

十378 (略)、なほ平生の行をしら
べて雇ふことに致しました。

十501 種々の模様を工夫し、又麗
しき色どりを案ずるは、工藝・美術
においては極めて大切な事とす。

十534 「されば思ひ出したる事
の候。實盛日頃申し候に、(略)」。

十568 兵舎内にては歌をうたふ
事、(略) 事等堅く禁ぜられ居り候。

十569 兵舎内にては(略)、高
聲にて談話する事、(略) 事等堅く禁
ぜられ居り候。

十5610 兵舎内にては(略)、所
定以外の場所にて煙草を吸ふ事等堅
く禁ぜられ居り候。

十572 是はもとより當然
の事に候。

十5710 小生の如く平素労働にな
れたる者には、術科もつらきことは
これなく、(略)。

十594 何か不都合なる事あり
て、罰に處せられたる者は(略)。

十598 入營當時は友人も少く、
生活も一變致し候事とて、(略)。

十615 然レドモ其ノ頃ハ(略)、
産出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト
多カリシナリ。

十618 (略)、新式ノ機械ヲ用ヒシ
以來、大イニ人力ヲ省クコトヲ得テ、
(略)。

十623 (略) 數千人ノ坑夫ガ銅鑛
ヲ掘取ルコト、晝夜止ム時ナシ。

十635 銅山ノ盛ナルコト、是ニテ
モオシハカルベシ。

十692 (略)、墨を流したる如き空
模様にて、一寸先をも見分くること
能はず、(略)。

十731 温泉の多きこと實に世界第
一なり。

十735 道後は(略)。(略)、帝都
をさること遠けれども、(略)。

十737 (略)、往昔天皇の行幸し給
ひしことも數回に及べり。

十798 女子は耳に耳輪をはむるこ
と男子に同じく、(略)。

十7910 然れども入墨をほどこすこ
とは今は全く禁ぜられたり。

十819 あいぬは時々子熊を捕へ來
り、(略)、之を殺して盛大なる儀式

を行ふことあり。
十846 東京市だけでも、一年にほふ
る牛は數千頭にも上るといふことで
ある。

十852 死んだ後で、身體の全部にす
たりのないことも牛と同じである。

十8510 西洋の馬がおとなしくて、日
本の馬のおとなしくないので、育て
方・使ひ方にあることで、(略)。

十867 豚肉はあぶらに富んでゐて、
養分の多いことは牛肉におとらぬ。

十8710 (略)、雞卵や雞肉の養分の多
いことは知らぬ人はない。

十909 (略)、其の講話は定めて
有益なる事と存候。

十915 御道筋の事故御立寄下さ
れ候はば、小生も御同行致すべく候。

十927 (略)、何れ熟考の上實行
せんと申合せ居り候事とて、(略)、
大いに參考に相成るべしと存候。

十964 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリ
テ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月
ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。

十967 昔安倍仲麻呂ガ(略)。ト
ヨメルコト人ノヨク知ル所ナリ。

十1006 コレヨリ谷川ニソヒテ、坂
路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、(略)ニ
達ス。

十151 (略)の頃には度々行幸
ありしが、山城へ遷都ありし後は其
の事絶えたり。

十167 秋・冬の花少き季節に入

りても、食物に不足することなきは、
一に其の勞役の結果なり。

十一81図 故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。

十一85図 (略)、花のとほしき時は蜂合戰の起ること珍しからず。

十一98 此ノ様ニ大勢ノ人が手分ヲシテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

十一106 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトニナル。

十一1010 (略)、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、(略)、ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。

十一112 (略)、ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。

十一114 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、(略)。

十一115 (略)、ソナナ手數ガ省ケテ、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十一117 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ精神ヲコラスコトニナルカラ、(略)。

十一118 (略)、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヤ發明ヲスルコトモアル。

十一1110 (略)、コ、ニ注意シナケレバナラナイノハ共同一致トイフコトデアル。

十一125 (略)、其ノ各部分ヲ造ル

人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。

十一128 (略)、今日デハドンナ品物ヲ製造スルニモ、分業法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。

十一135図 臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。

十一1310図 (略)、主上尙笠置におはしませし時、早くも義兵を挙げしが、事の末だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、(略)。

十一144図 志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。

十一144図 身を殺して仁を成すことあり。』とかや。

十一166図 されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ひとがむることもなかりき。

十一171図 (略)、越王勾踐(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十一173図 此の故事を引き、(略)、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十一196図 海の静かなることは鏡の如く、(略)。

十一207図 (略)、屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

十一274図 帆の運用自在なれば、風

の方向に關らず、十分に風力を利用することを得。

十一288図 國運發展の速なること實に驚くにたへたり。

十一333図 其ノ大ナルモノハ(略)、時ニ戰艦ト合同シテ敵ノ主力ト戰フコトアリ。

十一334図 (略)、何レモ多量ノ石炭ヲ積ミ、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。

十一336図 海防艦ハ専ラ自國ノ沿岸ヲ護ルコトヲ目的トス。

十一361図 當總督府の經營も着着其の効を見るに至り候事、かねて御承知の通りに候處、(略)。

十一369図 今や西部縱貫鐵道も全部開通致候事とて、(略)。

十一406図 其の中内地人は八萬餘、蕃人は此の外にて約十一萬と申す事に候。

十一408図 (略)、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

十一435図 光範と心を併せての事とて、如何ともし難ければ、(略)。

十一4410図 (略)、年頃の恩愛、殊には今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

十一462図 かくて光範の與へたる刀には事の由を書添へて送り返し、(略)。

十一463図 (略)、心の變ることもあ

るべきかとて、(略)。

十一467 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、(略)。

十一4610 飲まず食はずに終日・終夜走つても尚平然として居るといふことである。

十一471 こゝにアラビヤ馬の違者なことを證明する面白い話がある。

十一507 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。

十一509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。

十一5010 やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、(略)。

十一519図 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、(略)、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

十一521図 一家和合セザル時ハ家道次第ニオトロヘテ、笑聲ノ戸ヨリモル、事ナカルベシ。

十一527図 (略)、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十一529図 内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、(略)。

十一534図 (略)、時場合台トニヨリテ笑フベカラザルコトアリ。

十一608図 家の事をば心にかけず、御國の爲に行きませ、いぎや。

十一6110図 拜啓、老父事本年滿六十歳に相達候に付、(略)。

- 十一64 4 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。
- 十一69 1 図 我等の周圍には讀むべき書多く、學ぶべき物多く、成すべき事限りなし。
- 十一69 2 図 時間の貴きを知れる者は無爲に苦しむことなし。
- 十一69 3 図 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、(略)。
- 十一69 7 図 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、(略)。
- 十一69 7 図 (略)、思ふも益なき事に心を勞するは、時間を徒費すること甚だし。
- 十一69 8 図 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、時間を徒費すること甚だし。
- 十一69 8 図 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。
- 十一69 9 図 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。
- 十一69 10 図 若し過あらば、深く之を悔いて、其の過を再びせざらんことをちかふべし。
- 十一70 1 図 思ひても返らぬことをよくと心配するは、(略)。
- 十一70 2 図 思ひても返らぬことをよくと心配するは、未練にして愚

- なる人のする事なり。
- 十一71 10 図 此の繪をかける畫工(略)寄食してありしが、何一つ畫がくこともなく、(略)三年を経たり。
- 十一72 1 図 住持は心得ぬ事に思ひて、(略)。
- 十一72 3 図 (略)「君は(略)、三年の間未だ一度も畫筆を取り給ひしことなし。」
- 十一72 6 図 (略)「そはいと名残をしき事なり。」
- 十一74 3 図 (略)「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」
- 十一76 6 図 (略)、今は其の奇勝を見ることが能はず。
- 十一76 10 図 瀧の後より山路を上ると四町餘、一條の谷川あり、(略)。
- 十一79 1 図 鵜を使ひて魚を捕ふこと、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。
- 十一81 3 図 (略)、鵜は盛に活動し、ひたすら其の獲物の多からんことを競ふ。
- 十一81 5 図 鵜の首元は細なはにてしぱりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、(略)。
- 十一82 6 図 (略)、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふことを得るなり。
- 十一82 7 図 鵜はぐさり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、

- (略)。
- 十一86 5 図 熟練ト機敏トヲ要スルコト大ナリ。
- 十一87 1 図 (略)、今ハ僅カニ六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。
- 十一87 4 図 (略)、細大意ノマ、ニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。
- 十一90 6 図 物の價は効用あることと、(略)とによりて生ずるものなり。
- 十一90 6 図 物の價は(略)と、隨意に得られざることにによりて生ずるものなり。
- 十一90 8 図 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、(略)。
- 十一90 9 図 (略)、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなし。
- 十一91 2 図 (略)、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、隨つて價あることなし。
- 十一91 5 図 (略)、隨意に得らるゝものなれば、之を買ふ必要なく、隨つて亦價あることなし。
- 十一91 6 図 されど水は大都會などにては、時として價を生ずることあり。
- 十一91 7 図 是飲料水とぼしくして、意のまゝに之を得ること能はざればなり。
- 十一92 3 図 (略)、其の五人は各其の家の他人の手に渡らんことを恐れ

- て、(略)。
- 十一92 8 図 (略)、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、(略)。
- 十一92 10 図 (略)、最も價を低くしたる人、其の家を賣ることを得べきなり。
- 十一93 5 図 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、(略)。
- 十一95 1 図 (略)、需要の減ずるに非るよりは、決して安くなることなきなり。
- 十一96 1 図 (略)、海岸も海水厚く凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、(略)。
- 十一99 8 圖 (略)こゝに集る鴈鴨は數千頭にも達することこれあり候。
- 十一101 3 圖 (略)、諸種の經營追々成功致候へども、今後尚着手すべき事は多々これ有り候。
- 十一101 3 圖 新版圖の事に候へば、本島の開拓は我々國民の最も力を用ふべき所に候。
- 十一101 8 圖 (略)今はや生れ故郷の如き心持に相成候。極南暑熱の御地にも同じことと存候。
- 十一102 5 圖 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)。
- 十一103 1 圖 願ハクハ再ビイフコト

ナカレ。」

十一103 9 図 〔汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。〕

十一103 9 図 〔略〕、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。〕

十一105 4 図 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、〔略〕。

十一105 5 図 〔略〕、賊將歎ジテ、〔略〕、敵スベカラズ。〕トテ、マタ反スルコトナカリキ。

十一105 9 図 孔明、〔略〕、軍律ヲ亂サンコトヲ恐レ、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、〔略〕。

十一107 1 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。

十一110 6 婦人は〔略〕、來客に會ふことも、外出することも少い。

十一110 7 婦人は〔略〕、來客に會ふことも、外出することも少い。

十一111 1 〔略〕、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

十一112 4 図 又麥稗眞田を編み、花筵を織ること行はれ、〔略〕。

十一113 1 図 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、〔略〕。

競争するが如きこと更になし。

十二113 8 図 或年暴風雨の爲に不作なりしことあり、〔略〕。

十二115 4 図 〔略〕、其の一事業として〔略〕、一村共同の有益なる費用にあつることとせり。

十二120 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出來、〔略〕。

十二17 8 図 〔略〕、我等は之を見て、明日の天氣如何を豫知することを得べく、〔略〕。

十二19 1 図 〔略〕、又航海中の船は早く港に入りて難を避くることを得るなり。

十二19 2 図 諸子は中央氣象臺より發行する天氣圖を見たることありや。

十二21 5 若し之を消費するものがなければ、〔略〕、遂には地球上の動物が呼吸作用を営むことが出來なくなる道理である。

十二26 9 図 武田勝頼大軍を率ゐて來り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず、〔略〕。

十二27 7 図 〔略〕、進み出でて其の使たらんことを請ひ、〔略〕。

十二27 7 図 〔略〕、事の成否は今より豫測すべからず、〔略〕。

十二29 2 図 勝商事急なればとて直ちに引返す。

十二33 9 図 〔略〕、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。

十二35 3 〔略〕、今新校舍ノ出來上ツタノハ眞ニ慶賀スベキ事デアル。

十二36 1 図 〔略〕、學校ノ増設ヲ要スルコト日一日ヨリ急ナリ。

十二37 4 図 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、〔略〕。

十二38 4 図 嘉明後此の事を聞きて大いに恥ぢ、〔略〕。

十二39 10 図 富士山の古歌には煙の立つことを歌へるもの多く、〔略〕。

十二40 1 図 〔略〕、時時破裂せしことも亦歴史に見えたり。

十二40 2 図 昔箱根山の噴火せしことは我等既に之を學べり。

十二42 10 図 〔略〕、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。

十二43 8 図 〔略〕、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

十二45 5 図 〔略〕、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、〔略〕。

十二45 7 図 〔略〕、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

に今日の急務なり。

十二53 1 図 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラズ。

十二53 4 図 強兵ヲ以テ知ラレタル我が國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、〔略〕。

十二54 5 図 〔略〕、黃海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

十二54 10 図 大連より〔略〕、北へ進むこと約二百哩、遼陽あり。

十二55 10 図 奉天より北すること約百八十八哩、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

十二60 7 図 〔略〕、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雜を生ずることなし。

十二63 9 図 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

十二65 1 図 凱旋門は〔略〕、壯大なること世界第一と稱せらる。

十二65 10 図 〔略〕、露西亞の狼は〔略〕、中部獨逸にまで來りしことあり。

十二66 4 図 〔略〕、通常の灰色の鼠の一群大舉して、〔略〕、黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二66 10 図 〔略〕、道に當るもの一として之をさまたぐることは能はざりきといふ。

稀に見ることなれども、〔略〕。

十二67 1 図 此の如く全然移住するは

十二六七〇図 (略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。
 十二六九五図 (略)、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。
 十二六九〇図 (略)、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、(略)。
 十二七一〇図 人をねたまんよりは、勉めて之に勝らんことを工夫すべし。
 十二七一四図 身をはかなむも過ぎしこととは追ふべからず。
 十二七一五図 常に前を望みて、徒に後を顧みることなかれ。
 十二七一六図 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、(略)。
 十二七二八図 (略) 何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、(略)。
 十二七二九図 (略) 何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、(略)。
 十二七二九図 (略) 何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、(略)。
 十二七三二図 引込思案の人は (略)、良好なる時機を失ふこと多し。
 十二七四三図 (略)、便利なる航路を開かんことは歐洲人一般の希望なりき。
 十二七六四図 (略) 空しく志を抱いて西班牙に轉じ、居ること多年、(略)。
 十二七七四図 (略)、數萬の見物人は再び此の船を見ること能はざるべしと語れり。
 十二七九四図 是より先は未だ航行せし

ことなき大洋なれば、(略)。
 十二七八五図 コロンブスは獨り堅固なる決心を以て動かさること山の如く、(略)。
 十二七八九図 (略)、其の夜は一同うれしさに眠ること能はず。
 十二八六二図 (略)、東京高輪泉岳寺の墓前には今尚香花の絶ゆることなし。
 十二八六五図 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。
 十二八六五図 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。
 十二八六七図 (略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勸む。
 十二八六四図 (略)、汝家老として仇を報ずるを知らず、人面獸心とは汝の事なるべし。
 十二八八三図 事幕末の儒者林鶴梁の作れる烈士喜劍碑の文にくはし。
 十二八八七図 出入口に、はき物の置亂れたる家には、盜人のうかゞふこと多しといへり。
 十二八八八図 (略)、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。
 十二八九八図 (略) 何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要な事なり。
 十二八九一〇図 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにいとまあらず。
 十二九〇四図 一家中に病人なき程仕合なる事なし。

十二九一三図 (略)、幼兒は母の感化を受くること最も多し。
 十二九二二図 (略)、豫め其の支出を定め、衣服・飲食の費皆其の範圍を越ゆることなかるべし。
 十二九二七図 (略)、人情にそむき、義理に外れても、費用を惜しむは賤しむべき事なり。
 十二九四九図 (略) 魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん。
 十二九九四図 (略) 他人をおしのけ、(略) 我獨り廣き場處を占領し、(略)、他人の安眠をさまたぐるが如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。
 十二一〇〇二図 (略) 是等文明の利器も其の運用を全くすること能はず。
 十二一〇〇四図 (略)、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。
 十二一〇〇七図 之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。我等の學ぶべき事ならずや。
 十二一〇一四図 (略)、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐること多し。
 十二一〇二八図 地方人民協同一致して、自ら地方公共の事に任じ、(略)。
 十二一〇三〇図 (略) が如きは、自治の精神に反すること最も甚だし。
 十二一〇四七図 (略)、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。

十二一〇四九図 (略) 自治團體の事業は、地方人民の一般に之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。
 十二一〇五三図 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを諭し給ひ、(略)。
 十二一〇六四図 (略)、兵制にも變遷あること、(略)を詳に御諭しあり、(略)。
 十二一〇七四図 (略) 軍人たる者は(略)、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。
 十二一〇八四図 平生より此の覺悟なきものは、時に臨みて或は不覺の名を取ることあらんと戒め給ふ。
 十二一〇八七図 (略)、豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。
 十二一〇八八図 初より事の順逆・理非を熟考して、(略)。
 十二一〇九〇図 (略) 大いなる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと諭し給ふ。
 十二一〇九六図 信義は人と交り世に處するに於て最も大切な事にして、(略)。
 十二一〇九八図 平常質素を旨とすべきは(略) 何人にも最も大切なこと言を待たず。
 十二一〇九八図 此の五箇條は(略)、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 6 図 我等は（略）、既に祖先

の事蹟を學び得たること多し。

こと「異」（形状）12 異々あいことな

り

九56 1 図 其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木

ニ附ケ、體ヲナ、メニ突出スルトキ

ハ、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

九89 9 図 是金銀ハ（略）、產地異ナ

（リトモ、成分ニ異同ナクシテ、略）。

十30 5 図 甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異

ナリ。

十30 7 図 關東ニテハ（略）、薩摩ニテ

ハ（略）、琉球ニテハ唐芋トイフ。名

稱ノカク異ナルヲ以テモ、（略）。

十80 5 図 あいぬの風俗は（略）内

地人と同じからず。其の衣服・食物

・家屋の有様に至りても異なる所多

し。

十82 8 図 あいぬの言語は日本語とは

全く異なり。

十一90 4 図 （略）、ひたすら此の草の

成長を保護し、其の實の熟して地に

落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

是即ち農業の收穫に異ならず。

十二4 1 図 文武道を異にすれども、

國に盡す誠は一なり。

十二18 5 図 信號は警報の種類により

て異なり。

十二51 6 図 人種・風俗ノ異ナルニ依

リテ、人ノ嗜好モ亦同ジカラズ。

十二52 2 図 見本ト現物トヲ異ニシ、

約束ノ期限ヲ違へ、（略）ガ如キ皆信

用ヲ害スル所以ナリ。

十二95 8 図 此の會に於ける孔子の行

動は蘭相如が秦王を叱したるとは異

なり、相如は氣を以て人を服せりと

いへども、孔子は義を以て人を動か

せしなり。

こと（終助）2 コト こと

四75 6 図 母ハ來テ見テ、「（略）。

マア、ウツクシイコト。

六63 7 図 めくらは杖を受取つて、

「あゝ、ありがたうございます。うれ

しいこと。」とれいいつて、（略）。

こと「毎」（名）2 毎々いつかごと・

ごとと・たびごと・とおかごと・にじ

ゆうねんごと・にねんごと・ひとあめ

ごと

九21 5 図 母は其の方々の顔を見る

毎に、そなたのふがひなきことが思

ひ出されて、（略）。

十一82 7 図 鵜はくぐり入る毎に獲物

なくして浮び出づること少ければ、

（略）。

こと「古堂」（名）1 古堂

十98 3 図 此ノ寺ハ（略）、千二百餘

年ヲ經タル古堂ノ中ニハ當時ノ佛像

今尚存ス。

こと「御同行致す『御同行』（四）1

御同行致す『一ス』

ピン

六27 3 図 テツピンハ「（略）。ユラワ

カス私モ、私ノノル五トクモ鐵デ

ス。

ことごとく「尽」（副）9 コト々々ク

こと々々々 盡ク 盡ク

八17 5 図 「サラバコト々々ク張り

カヘ給ヘ。切張ハマダラニナリテ見

苦シ。」

八17 9 図 「我モ後ニハコト々々ク

張りカヘント思ヘドモ、（略）。

九6 4 図 （略）、蝦夷ども皆恐れて降

参し、東國こと々々く平ぎたり。

十70 9 図 水夫は盡く燈臺番の小屋に

入れられたり。

十95 10 図 大小ノ燈籠左右ニ多ク、

（略）。毎年節分ノ夜盡ク之ニ點火ス

トイフ。

十102 10 図 大和國ハ（略）、昔ナガラノ

山河、一木・一草盡ク上古ヲ談ゼザ

ルナシ。

十二12 9 イヅレモ大規模ニ出來テキ

テ、盡ク蒸氣や電氣ノ力ヲ利用スル。

十二22 3 若し炭酸瓦斯を供給するも

のがなければ、（略）、地球上の植物

は盡く枯死すべきはずである。

十二68 2 図 （略）、冬日河水盡く氷結

四10 6 今年ハエダガヲレルホ

ドタクサンナツテキマス。

四29 4 図 今年はもうこれです

みました。らい年またお目にか

かりませう。」

六69 8 私がこゝへまゐつたのは、こ

の學校がたつた年でございますか

ら、今年で三十年になります。

七66 8 図 いつしよにいついだ梨の木の

方は、今年はまだ實がなりません。

九69 8 今年は何事もなくて、（略）。

九82 6 図 「今年の競馬はさぞ面白か

らう。」

ことし（助動）143 如シ 如し「一キ・

一ク・一シ」

六35 4 図 フランネル・ラシヤ・メリ

ンスナドノ如ク、ケモノノ毛ヲツム

ギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。

七8 8 図 正行ノ如キハマコトニ忠孝

ニツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、

國民ノ手本トイフベシ。

七59 7 図 大なるは小馬の如く、小な

るは猫よりも小さし。

七60 4 図 毛の（略）、長きものは半

の如く、立ちてもその毛はなほ地面

に達す。

七60 7 図 あるものは頭大きくまるく

して、しゝの如く、（略）。

七60 8 図 （略）、あるものは顔長くと

がりで、狐の如し。

七92 2 図 中ニ毛福井丸ノボートニハ

敵ノ砲丸雨ノ如クニ降りソ、ギリ。

八二四〔図〕 (略)、八咫鏡を授けたま

ひて、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。

八三〇〔図〕 (略)、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

八三八〔図〕 マツチハ (略)、一箱三四厘ニモ足ラズ。カクノ如ク價ノ安キモノニテ、カクノ如ク便利ナルモノハ世ニ少カルベシ。

八三八〔図〕 カクノ如ク價ノ安キモノニテ、カクノ如ク便利ナルモノハ世ニ少カルベシ。

八五九〔図〕 琵琶の形に似たりとて、其の名をおへる湖の かゞみの如き水の面、(略)。

八七四〔図〕 虎ハ前足ノ一撃ニテ鹿ナドヲタフスコト、猫ノネズミヲトラフルガ如シ。

八七四〔図〕 又其ノ舌ニハ内方ニ向ツテハエタル太キ毛ノ如キトゲアリ、(略)。

八七四〔図〕 虎モマタ猫ノ如ク、ヨク木ニヨヂ上ルコトヲ得。

八七七〔図〕 イギリスは我が日本帝國の如き島國にして、(略)。

八八〇〔図〕 かくの如く日本を出で、海を越え、陸を越え、東へ東へと進めば、又元の日本に歸り来る。

八八二〔図〕 かゝる地方にては氣候つねに寒冷にして、美しき花木を見ること能はず。ある土人の如きは氷を以

て家を造りて住めり。

九三〇〔図〕 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々アリ。カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、(略)。

九三六 (略)、四方からの見物人は雲の如く集つた。

九四一〔図〕 若シ鳥ノ如ク高く大空ヨリ箱根山ヲ見下サバ、(略)。

九四二〔図〕 山ヲケツリ、谷ヲウガチ、(略)、遂ニ今日ノ如キ美シキ景色トナリシナリ。

九五四〔図〕 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)。

九五六〔図〕 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)、羽ヲ閉ヂテ、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

九五九〔図〕 此ノ種ノ體色ヲ警戒色ト名ヅク。タトヘバ毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黃ト黒トノダングラニテ、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。

九六〇〔図〕 「過ぎたるは及ばざるが如し。」と知るべし。

九六三〔図〕 田村麻呂は (略)、眼の光ははやぶさの如く鋭く、(略)。

九六三〔図〕 田村麻呂は (略)、ひげは針金の如くこはく、(略)。

九六五〔図〕 然れども空氣の流通餘りに強き時は、却つて火の消ゆることあ

るべし。燈の火の風に吹消さるゝが如きはなり。

九六六〔図〕 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。オルガンにて美しき音を發せしむるが如き、(略)が如き皆然り。

九六六〔図〕 (略)が如き、唐箕の車をまはして、もみとしひなとをあふぎ分くるが如き皆然り。

九七五〔図〕 又病氣其ノ他ノ場合ニモ、他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカルベシ。

九七五〔図〕 タマシ貯金センガ爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。

九七五〔図〕 (略)、湖面鏡の如く、四方の山々皆倒に影をうつせり。

一〇一〔図〕 (略)、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、(略)。

一〇九〔図〕 (略) 落葉・こけ及び網の如くひろがれる木の根などは、(略)。

一〇九〔図〕 (略)、地上に落ちたる水をふくみさゝふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。

一〇一〔図〕 森林の効用かくの如く著しきを以て、(略)。

一〇四〔図〕 老人怒リテ、五日目ノ朝ヲ約スルコト亦前ノ如シ。

一〇四〔図〕 然ルニ今日ノ如く全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、(略)。

一〇九〔図〕 サレバ平左衛門ノ死セシ時ハ、(略)父母ニ別ル、如ク悲シミ

タリトナリ。

一〇四〔図〕 (略)、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。

一〇四〔図〕 唐草模様・波模様の如きはなり。

一〇四〔図〕 かくの如き模様の工夫は無限に多し。

一〇四〔図〕 (略)、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。例へば赤に青を加ふれば、紫となり、青に黄を加ふれば、綠となるが如し。

一〇四〔図〕 (略)、色の調和を考へざるべからず。赤と綠とを並ぶれば、赤と黒とよく引立ちて見ゆれども、赤と黒とを並ぶれば、赤の黒ずみて見ゆるが如し。

一〇四〔図〕 小生の如く平素勞働になれたる者には、術科もつらきことはこれなく、(略)。

一〇四〔図〕 先は近狀御報知申上度かくの如くに御座候。

一〇四〔図〕 (略)、墨を流したる如き空模様にて、(略)。

一〇四〔図〕 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテオホレタルハ (略)。

一〇四〔図〕 又力士ノ如キハ常ニ全身ニ力ヲ入ル、ヲ以テ、何レノ部分モヨク發達セリ。

一〇四〔図〕 男子も女子も寒き時は犬の皮などにて造れる羽織の如きものを用ひ、(略)。

一〇四〔図〕 其の家はほつたて小屋の如

く、床もなく、天井もなし。

十924(國) 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、(略)。

十989(國) 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠綠シタ、ルガ如シ。

十10110(國) (略)ノ三山、(略)、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

十一116(國) 吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりけり。全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。

十一185(國) (略)、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十一189(國) 春は島山霞に包まれて眠るが如く、(略)。

十一194(國) 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛種を敷けるが如く、(略)。

十一196(國) 海の靜かなることは鏡の如く、(略)。

十一251(國) 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車の兩輪の如し。」といへども、(略)。

十一252(國) (略)、四國の猫車、臺灣の揀車の如きは唯一輪なり。

十一283(國) かくの如くにして、汽車・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

十一291(國) 重砲車の如きは十頭の馬をして引かしむ。

十一3010(國) 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナ

ル有様モオモヒ見ルベク、(略)。

十一313(國) 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・雲雀・鵲・雁・鴻・雉・鷗・鷺・鷺等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

十一315(國) 其ノ敏速ナル行動ハ鳥ノ空中ヲ飛行スル如クナレバナルベシ。

十一319(國) 戦艦ハ(略)、其ノ名ノ如ク堂々敵ト決戦スルヲ目的トス。

十一351(國) 以上ノ外、尚水雷母艦・工作船・給炭船等ノ如キ特別任務ヲ有スルモノアリ。

十一364(國) 當臺北市街の如きは、近年市區を改正し、街路井然、(略)建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程に御座候。

十一441(國) 月日は流るゝ水の如く、熊王十五歳になりぬ。

十一625(國) 先は御案内まで、此の如くに御座候。

十一645(國) 同ジ材料デモ、料理ノ塩梅ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、(略)。

十一705(國) 約束の時日を違ふが如きは時間の賊なり。

十一711(國) (略)、今日の如く通信交通の機關發達し、社會の活動敏速なる時代にありては、(略)。

十一735(國) かくて次の夜は如何にとうかどふに、前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく晝がかななどひとり言いひ居たり。

十一775(國) 神戸市に近き布引瀧は雄二瀑あり。美しき瀧にして、眞に白布をさらせるが如し。

十一782(國) 二瀑相並んで雄を争ひ、其のひゞき萬雷のとどろくが如く、(略)。

十一847(國) (略)綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、(略)。

十一853(國) 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ眞白雪ノ如ク、(略)。

十一854(國) (略)、四尺程ノ幅トナリテ進ム様、精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。

十一873(國) (略)、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲、(略)。

十一873(國) (略)、細大意ノマ、ニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。

十一895(國) 蟻は(略)、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

十一897(國) 熱き地方の白蟻は(略)小山の如き巢を造り、(略)。

十一913(國) 日光・空氣の如きは、(略)、隨意に得らるゝものなれば、之を買ふ必要なく、随つて亦價あることなし。

十一915(國) 水の如きも亦然り。

十一931(國) 物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、(略)。

十一949(國) (略)、供給に限りある物、例へば名高き古人の書畫・古器

物などの如きは、(略)。

十一954(國) 光陰矢の如く、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。

十一969(國) (略)鈴谷川・内淵川・留多加川の流域の如きは、地味肥え、有望の農業地に御座候。

十一1016(國) (略)、此の極北の寒地も今ははや生れ故郷の如き心持に相成候。

十一1022(國) 支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。

十一10210(國) 「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。

十一1039(國) 「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」

十一1052(國) (略)、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。孟獲答ヘテ曰ク、「此ノ如シト知ラバ何ゾ敗レン。」ト。

十一1064(國) 蜀ノ軍少シモサワガズ、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。

十一1131(國) 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、(略)。

十一1132(國) (略)、生徒も亦校長をしたふこと父母の如し。

十一1136(國) 村會議員も(略)、互に競争するが如きこと更になし。

十一1156(國) (略)、一村は一家の如く和合して、(略)。

十二68 風號び海怒りて、波浪山の如くなれども、(略)。

十二106 我ガ聯合艦隊ガック勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)。

十二112 皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。

十二195 天氣圖とは(略)、あたかも天上より下界を見下すが如く、一目に全國天候の如何を示すものなり。

十二197 天氣圖に用ふる普通の符號は左の如し。

十二275 今ハ轍にあげとふ鮒の如し。

十二332 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)、忠義の爲には恩愛を忘るゝ真心より出でたり。

十二359 (略)、今や全國就學兒童ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、本郡ノ如キハ實ニ百分ノ九十九ノ好成绩ヲ示セリ。

十二40 最も東なる根子岳は七面山とも稱し、山頂の齒の如し。

十二42 阿蘇山は此の如く複雑なる一大火山にして、(略)。

十二45 耕地の面積廣大なるが如くなれども、總面積の約一割五分に過ぎず。

十二46 栽培法の如きも、舊法に

なづまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

十二468 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあら

十二507 東西ノ交通盛ニシテ千里比隣ノ如キ今日ニ於テハ(略)。

十二510 我等ハ世界ノ市場ヨリ如何ナル物品ヲモ買ヒ得ルガ如ク、世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、(略)。

十二528 見本ト現物トヲ異ニシ、約束ノ期限ヲ違へ、(略)、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

十二531 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラズ。

十二611 シャンゼリゼーの大通の如きは、世界最美の街路と稱せらる。

十二638 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、市中到る處其の往來織るが如く、(略)。

十二638 (略)、殊に公園・廣小路の如きは、十數臺列をなして前後相接す。

十二6510 (略)、露西亞の狼は(略)、中部獨逸にまで來りしことあり。此の如きは動物の一時的移住なり。

十二671 此の如く全然移住するは稀に見ることなれども、(略)。

十二673 (略)、亞弗利加・印度の獅子、南亞米利加の野牛等の、昔の游牧の民の如く、食物を追うて其の居を轉ずるは(略)。

十二675 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、獸類中にも(略)其の居を移すもの少から

十二695 (略)、遠く之を望めば、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

十二727 不義にして富み且貴きは、我に於て浮雲の如し。

十二785 コロンブスは獨り堅固なる決心を以て動かざること山の如く、(略)。

十二865 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。

十二914 其の母によりて其の子を養ふ。といへるが如く、子供の行儀・作法等につきては、主婦たる人の責任最も重し。

十二967 汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。

十二972 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。

十二976 官位・(略)學問等に於て衆を抜く者は、個人としても自ら高尚なる品格を要するが如く、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、

國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

十二988 (略)を不潔にし、(略)等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、大國民の品格を傷つくるものなり。

十二994 (略)他人をおしおのけ、(略)我獨り廣き場處を占領し、(略)、他人の安眠をさまたぐるが如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。

十二995 老人長者の爲に道をゆづり、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、(略)、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

十二1012 國力我に劣れる國民を見て、(略)輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、却つて我が國民の度量の狭く、品格の低きを示す所以にして、(略)。

十二1039 まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、自治の精神に反すること最も甚だし。

十二1052 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、(略)。

十二1055 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、(略)。

十二1055 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、(略)。

なのドリル」

三三二 子ドモガ二三人アゼニ
タツテ、ナヘヲ田ノ中ヘナゲ
入レテキマス。

三六〇 今にあのあみをだんだん
はまべへひきよせてくると、
女や子どもも大ぜい出て、い
つしよになつてひきあげます。」

三六五 アル日ウミベへ出テ見
ルト、子ドモガ大ゼイデカメ
ヲツカマヘテ、オモチヤニシテ
キマス。

三六六 ウラシマハカイサウニ
思ツテ、子ドモカラソノカメヲ
買ツテ、(略)。

五三七 「天子様のおほせだから、子
を出すやうに。」と、たくさんの子
どもをもらつて、つれて來ました。

五七二 子ドモハフダンヨリハ美シイ
着物ヲ着テアソンデキル。

六二〇 その時そこに居た一人の子ど
もが、「そんなら私がはかつて見ま
せう。」といつて、(略)。

六二二 一人の子どもが水がめのふち
へ上つて、遊んでゐるうちに(略)。
六二三 居合せた子どもは皆うろたへ
てさわぎました。

六二三 その時一人の子どもは大きな
石を持つて來て、力まかせに投げつ
けました。

六二四 (略)、子どもはあやふい命を
たずかりました。

六六二 圖 〇 「わるい子どもが大ぜい
で、わたしの手からもぎ取つて、は
ふつた音はしましたが、(略)。」

六七〇 その間に色々な子どもを見ま
した。

六七四 (略)、先生に何か聞かれて
も、答へることが出来ないで、顔を
赤くする子供もございました。

六七六 (略)、何を聞かれても、はつ
きりと答へる子供もございました。

六七八 (略)、筆をおとしたり、すみ
ほごにしたりするやうな、そゝつか
しい子供もございました。

六八四 (略)、少しも書きそこなひな
どをしない子供もございました。

六八七 度々けつせきしたり、ちこく
したりして、先生にしかれた子供
もございました。

六八八 一日もけつせきもせず、ち
こくもしなかつた子供もございまし
た。

六九二 (略) 善い子供は、おとなに
なつてから、りつばな人になりまし
た。

六九八 (略) 悪い子供は、おとなに
なつてから、大いいつまらない人に
なつてゐます。

七〇二 私は一たい子供がすきでござ
います、(略)。

七四五 男や女や年よりや子供も大ぜ
い集つてゐますが、(略)。

七五〇 圖 〇 「私も子供の時には毎日こ
の學校へ通つて、(略)。

八五二 駝鳥は鳥類の中で一番大きく
て、卵も子供の頭程ある。

九四三 圖 〇 アリは十歳ばかりの子供な
りしが、(略)。

九四四 圖 〇 アリは子供のことなれば、
話相手もなく、(略)。

九四九 圖 〇 「然らばかの子供の乗れ
る駝駝を殺さん。」

九五五 圖 〇 (略)、怒る時はたけき獸も
恐れたり。されども(略)、笑ふ時
は子供もなつき親しみたりといふ。

九七三 圖 〇 (略)、川上の堤防切れ、
(略)、是大變なりと、直ちに老母
と子供を裏山に立退かせ、(略)。

九八二 図 〇 それは氏子の五箇村から子供
の騎手を一人づつ出して、(略)。

九八四 或年選ばれた子供の中に、す
ぐれて上手な騎手が二人あつた。

一〇五五 (略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子
供ヲ坐ラセルコトモ出來ルサウデア
ル。

一〇八六 殊に其の乳の成分は人の乳に
似てゐるから、子供に適する。

一一〇四 (略) 馬を家族の一員と考
へて、家長は之を自分の子供と同じ
様にかはいる。

一一五九 「馬が子供と遊んでゐるの
を見たことがある。

一二一〇 やうやく立歩くことのでき
る三つ四つの子供が、(略)。

一二一五 (略)、馬は(略)、口でお
もちやをさくづけて、其の子供をあや
してゐた。

一二二五 図 〇 家内には老人あり、子供
あり。

一二九四 圖 〇 (略)、子供の行儀・作法
等につきては、主婦たる人の責任最
も重し。

一二九八 圖 〇 人の子どものわしな
べて、ぬむを御國の おきてなる、
學びの道の 六年をば、卒へし今日
こそうれしけれ。

こどもたち「子供達」(名) 2 子供たち
六七五 (略)、その子供たちのいたづ
らからでございます。

六七七 こんなにたくさん墨を附けた
のも、その子供たちでございます。

こどものこころ「課名」 2 子ドモノ心
四目九 二十一 子ドモノ心
四六七 二十一 子ドモノ心
こどもら「子供等」(名) 1 子供ら
六八八 圖 〇 (略)、いつはりいはぬが
子供らの 學びのはじめぞ、つゝし
めよ、いましめよ。

ことり「小鳥」(名) 2 コトリ 小トリ
一四一 コトリタマゴ
三五一 コンドハウツクシイ小ト
リガマドノソトカラノゾイ
テ、(略)。

ことわざ「諺」「課名」 2 コトワザ

六目¹⁴ 第十三 コトワザ

六四⁸ 第十三 コトワザ

ことわざ【諺】(名) 3 コトワザ ことわざ

九二八¹⁰ (略)、春ノ盛りニハ花ノ

雲タナビキテ、「花ハ櫻木、人ハ武士。」ノコトワザモ自ラ思ヒ出デラル。

九六五⁵ (略) 西洋のことわざにも「よく日光の見舞ふ家には醫者は見舞はず。」といへり。

十一一〇² (略)、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のことわざがある。

こな【粉】(名) 3 こな

四三四³ 次郎「だんごにつけるこなは。」三郎「あれも豆です。」

四三四⁶ (略) 「それではあんの豆とだんごにつけるこなの豆と同じですか、(略)。」

四三五² (略)、こなにするのは大豆といふ豆です。」

こなしつくす【熟尽】(四) 1 コナシ

盡ス【一サ】

十七六⁴ (略) 胃ハロヨリ入來レル食物ヲ

コナシ、腸ハ胃ニテコナシ盡サザルモノヲコナシテ、(略)。

こなす【熟】(四・五) 5 コナス こ

なす【一シ・一ス】 〆かみこなす

七二四⁴ 刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめ

て、(略)。

八七一³ (略)、胃は一同に向つて曰く、「(略)、私の職務は食物をこなし、之を血の製造場へ送るにある。

八七四⁴ (略) 我若し食物をこなす事なくば、(略)。

十七六⁴ (略) 胃ハロヨリ入來レル食物ヲコナシ、(略)。

十七六⁴ (略)、腸ハ胃ニテコナシ盡サザルモノヲコナシテ、(略)。

こなた【此方】(代名) 3 コナタ 此方

八三〇¹ (略) 工、川成ヲ音ナヘバ、「イザ、コナタヘ。」トイフ。サラバト

テスラントスルニ、(略)。

十一五² (略) 敵は一人、此方は二人。

十一八二¹⁰ (略)、百にも近き驕、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかく

れ、此處にあらはれ、(略)。

こなれ【熟】(名) 2 コナレ こなれ

九五九⁶ (略) 運動不足なれば、食物のこなれ悪く、血のめぐりにぶく、身體

弱りて、氣分もふさぐ。

十一六四¹⁰ 衛生上ヨリハ、成ルベク滋

養ニ富ンデ、コナレノ良イモノヲ選

ブベク、(略)。

こにゅうえい【御入營】(名) 2 御入營

十二六⁴ (略) 拜啓、いよく來月一日

より御入營、軍務に服せられ候事、

御一家を始め一村の名譽に御座候。

十二六⁷ (略) 御入營の上は、品行方正、職務に忠實にして、隊中の

模範となられ度、(略)。

こにん【五人】(名) 11 五にん 五人

三二〇³ 子どもが五にん。(ひらがなのドリル)

四七一¹ (略) 今あのはしの上を

人がいくたりとほつてゐますか。」次郎「五人です。」

四七三³ (略) 「一人二人三人四人五人、やつぱり五人です。」

四七四⁴ (略)、やつぱり五人です。」

四二一⁷ (略) 「ウチノニイサンヤネ

エサンヲアハセルト、ミンナデ

五人デスカラ、(略)。

九八二⁸ やがて五人の騎手は(略)、

鳥居の下へ集つて來た。

九八三² 五人の騎手は(略)、第二の

あひづを待ちかまへてゐる。

九八三⁸ (略)、五人の騎手は打連れて、

(略)。

十一九二¹ (略) 例へばこゝに一戸の賣家

ありて、之を買はんとする五人あ

るときは、(略)。

十一九二² (略)、其の五人は各其

の家の他人の手に渡らんことを恐れ

て、(略)。

十一九二⁷ (略)、賣家の持主五人

は各其の家の賣れざらんことを恐れ

て、(略)。

こにんばやし【五人囃子】(名) 1 五

人バヤシ

四七四² 二ダン目ニハクワンデヨ

ヲスエテ、三ダン目ニハ五人バ

ヤシヲオキマシタ。

こねん【五年】(名) 1 五年

九七六¹ (略) 一日二錢・二錢ヅツニテ

モ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニ

ハ、餘程ノ金高トナリテ、(略)。

この【此】(連体) 266 この 此

ノ此の 此

二四一¹ イマ日ガデマス。(略)。

オソクオキル人ハ、コノウツク

シイ日ノデヲミルコトガデキ

マセン。

二五一¹ (略) 「ボクニハコノシロイ

ノヲクダサイ。」

二二二² (略) 「ニイサン、コノ川ニコ

ヒガキマスカ。」

二二二¹ (略) 「コノ川ハドコカラナ

ガレテクルノデスカ。」

二二二⁷ (略)、イツシヨニコノ

カキネノワキニカクレマセウ。」

二二二⁵ 「カガミモチヲマトニシ

テイテミマセウカ。」(略)ト、

トメマシタガ、キカナイデイマシ

タ。(略)ソレカラコノ人ノ

タニハ、オ米ガスコシモデキナ

クナツタトイヒマス。

二二二⁷ (略) スガハラノミチザ

ネトイフチユウギナオカタヲ

(略)コノオカタハウメノハ

ナガオスキデシタカラ、(略)。

二二二⁷ (略)、大キナ太イ木ニナ

リマシタ。ヨイオヂイサンハヤ

ガテコノ木ヲキツテ、(略)。
 二57 2 ヨイオデイサンハ(略)、
 ウスヲツクツテ、(略)。ヨクノ
 フカイオデイサンハマタコノ
 ウスヲカリテイツテ、(略)。
 二63 1 (略)、タクサンノゴボウ
 ビヨクダサイマシタ。ヨクノ
 フカイオデイサンハコノハナシ
 ヲキイテ、(略)。
 三10 7 ネエサンハコノアヒダ
 トナリムラヘオヨメニエキマシ
 タ。
 三37 8 がくかうへもつて行くも
 のは、みんなこのふろしきの
 中につつんであります。
 三39 7 だい三には口です。なに
 をきかれても、この口ではつ
 きりこたへます。
 三57 1 コノ赤イジュバンハイモ
 ウトノデス。
 三63 1 ごらんなさい、この貝がら
 は(略)、おもてにうづまきが
 あります。
 三66 7 金 「ウラシマサン、コノア
 ヒダハアリガタウゴザイマシタ。
 三71 2 金 ソレデハオワカレノシ
 ルシニコノハコヲオ上ゲマウ
 シマセウ。
 四2 6 そのすぢむかひに大きな
 ごふくやがあります。このへん
 は町中で一ばんにぎやかなと
 ころで、(略)。

四17 1 (略)、矢にあたつたるの
 ししが、(略)かけおりて來まし
 た。(略)。この時(略)といふ
 ぶしが、(略)、そのておひじし
 にむかひました。
 四25 1 金 オマツハ太イフデト
 細イフデヲ出シテ、「コノ太イ
 ノガ五センチ、(略)」。
 四37 5 麥ワラザイクニハカゴヤ
 オモチャヤ色色ナ物ガアリマ
 ス。マダコノホカニ(略)。
 四38 5 金 「コノアヒダ大キナフカ
 ガ來タ時ニ、(略)」。
 四39 2 金 ボクラハカウイフカ
 タイヨロヒヲキテキルカラ、
 ドンナ時デモ、コノ中ヘハイ
 ツテ、(略)。
 四43 6 金 このまん中に小さな物
 があります。
 四58 5 (略) オホクニヌシノミコト
 トイフ神サマガオ出デニナリ
 マシタ。コノ神サマハ(略)。
 四59 2 コノ神サマモ、「(略)」ト
 オタヅネニナリマシタカラ、
 (略)。
 四61 2 金 「オカゲサマデ、カラダ
 ハコノトホリニナホリマシタ。
 四71 2 金 太郎きのふはうんどろ
 くわいで、どろによごしたこ
 のはかま。
 四72 7 金 おはるあしたはひなさ
 ままつり。きせてやりたいこの

はれぎ。
 五5 8 日本ノ一バンハジメノ天皇ヲ
 神武天皇ト申シ上ゲマス。コノ天皇
 ガワルモノドモヲ御セイバツニナツ
 タ時、(略)。
 五8 2 (略)、天皇ノオクラキニオツ
 キニナリマシタ。ソノ日ハ二月十一
 日ニアタリマスカラ、コノ日ヲキゲ
 ンセツト申シテ、(略)。
 五23 2 金 「この釜は昔から私のうち
 にある釜です。
 五24 2 金 それを私のるすにこのゐざ
 りがぬすんだのでございます。」
 五26 2 金 この釜はお前の物にちがひ
 あるまい。
 五28 5 金 もとよりすつばいこのから
 だ、(略)。
 五29 8 金 ましていくさの時、
 なくてはならぬこのわたし。
 五35 4 コノ美シイ蝶ガトビマハルノ
 デ、花ゾノヤ野原ノケシキガーソウ
 引立チマス。
 五36 2 コノカハイラシイ、美シイ蝶
 ヲツカマヘテイデメル人ハ、ドウイ
 フ心デセウ。
 五47 4 金 この間先生がおつしやつた
 ではないか。」
 五72 5 金 ケレドモコノ足ハ細クテ、
 イカニモ弱サウニ見エル。
 五76 1 (略)、強いものばかり三千人
 をすぐつて、こつそりと裏道からひ
 よどりこえに向つた。この中にはベ

んけいも居つた。
 五76 7 (略) 日が暮れて、まつ暗に
 なつてしまつた。この時べんけいは
 (略)。
 五81 2 (略)、馬も(略)すくんでし
 まひ、人も(略)進まうとはしな
 い。この時よしつねは、(略)。
 六32 8 あとになつて、主人はこの事
 を聞いて、(略)。
 六33 7 金 絹糸ニテ織リタルモノヲ絹
 織物トイフ。(略)ナドノアタヒ高
 キモノハ大テイコノ絹織物ニテツク
 ル。
 六34 4 金 木綿糸ニテ織リタルモノヲ
 木綿織物トイフ。ワレヲノ着物ハ多
 クコノ木綿織物ニテツクル。
 六40 7 金 (略)、この次の水曜日まで
 にはかへる。
 六50 1 (略)、信長は京都で光秀とい
 ふけらいにころされました。秀吉は
 この知らせを聞くと、(略)。
 六54 4 金 塩ト砂糖トハ(略)、コノ
 ニツノ物ナケレバ、物ノ味ハウマカ
 ラズ。
 六69 7 私がこゝへまゐつたのは、
 この學校がたつた年でございますか
 ら、(略)。
 七1 9 金 コノ度ノ戦、敵ハ大ゼイ
 ニシテ、味方ハ小ゼイナリ。
 七5 7 金 正行コノ度ハサイゴノ合戦
 セントテ、(略)。
 七7 2 金 コノ度ノ合戦ニハ、師直

ラノクビヲ正行ガ取ルカ、(略)カ、

二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、(略)。」

七82 図 コノ度ノ合戦サダメテナ

ンギナルベケレド、(略)。

七171 図 このよい時節に東京へお

上りはおうらやましい事でございま

す。

七28 一匹の蠶の口から出る絲をの

ぼして見ると、五六町もあるといふ

ことである。この長い絲を出す蟲が

七321 (略)、しまひにはからだがす

きとほつて見える。この時(略)ま

七352 図 かくして出来たるものをす

やきといふ。(略)茶わん・皿・は

ちの類は、このすやきにうはぐすり

をかけて、(略)。

七418 図 このお金は私がこちらへま

ゐる時、(略)、父の渡してくれた金

でございます。

七428 図 (略)、今日このお金を出し

ましたのでございます。」

七469 図 「マツコノザシキヲ見渡シ

テモ、(略)。

七469 図 「(略)、コノタクサンノ障

子ハ皆僕ヲノ仲間デハツテアルデハ

ナイカ。

七517 図 この手紙は四匁より重いの

に、差出人が三錢しかはつておきま

せん。

七579 図 (略)、日比谷公園アリ。コ

ノ公園ハ新シクシテ、(略)。

七654 われくは一日も水を飲まな

いことはない。(略)。われくは毎

朝顔を洗ひ、口をすぐ。(略)。こ

のやうに水はわれくはの生活にもつ

とも大切なもので、(略)。

七725 又眞珠貝トイフモノガアル。

(略)美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカラ

ノ中ニアルノデアル。

七731 中デオモシロイノハサンゴ

デ、(略)、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキ

ル。(略)サンゴハコノ蟲ノ骨デア

ル。

七754 海草ニモ色々アル。マツタベ

ラレルモノニハ、(略)ナドガアリ、

ノリニスルモノニハ、(略)、トコロ

テンニスルモノニハ、(略)ガアル。

コノ他マダタクサンアルガ、(略)。

七776 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色

々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モ

アル。魚類ニハ(略)。(略)。廣イ

海ニハコノ通りニ多クノ動物ヤ植物

ガアル。

七807 図 「私も子供の時には毎日こ

の學校へ通つて、(略)。

七809 図 「(略)、あの運動場で體操

をしたり、この講堂でお話を聞いた

りしてゐたのです。

七811 図 今日このなつかしい學校へ

来て、皆さんにお話をするのは、そ

七871 図 (略)、星が出てゐれば、そ

れに便つて、(略)。海岸には燈臺が

ありますから、それを見ると、(略)。

この星を見分けることや、燈臺のあ

かりを知ることは、(略)。」

八22 図 神代の昔皇祖天照大神、

瓊々杵尊をこの國に降したまはんと

せし時、(略)。

八24 図 (略)、八咫鏡を授けたま

ひて、「この鏡を見ること我を見る

が如くせよ。」とおほせられたり。

八27 図 その神勅によりて、(略)、

この御鏡を御神體として、皇祖天照

大神をまつりたまへるなり。

八44 図 (略)、宇治橋のたもとにい

たる。このあたり御山木細工・貝細

工などを賣る店多し。

八78 図 今日神嘗祭なれば、(略)。

今日のこの日に年來ののぞみを達し

たるは何等の幸ぞや。

八92 図 うれし、この松の根もと

に、まづ見つけつと高く呼ぶ聲。

八99 図 この間にいさんがかへつて

來ましたので、(略)。

八128 図 この寫眞で見ると、おかあ

さんの小さい時分にそっくりです。

八199 (略)、何不足なく暮してゐた

農夫がありました。(略)よほど財

産を減らしました。(略)。ある日一

人の友だちはこの農夫と野原の草の

上に坐つて、(略)。

八205 (略)、そこらあたりに飛んで

いて、近年麥の取高の少いのは、こ

の雀のせいではあるまいかと思ひま

した。

八222 (略)、君は白い雀を見たこ

とがあるか。(略)。農夫は此の話

を聞いて、(略)。

八238 その中に下男が(略)。(略)、

居酒屋の方へ行きます。此の男は居

酒屋に酒代の借があるので、(略)。

八248 (略) 下女がばけつをさげて

牛小屋から出て來ました。(略)。此

の下女は(略)。

八386 図 我等ハ平生マツチヲ用ヒナ

レタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、

此ノモノノナカリシ昔ヲ思ヒ出スト

キハ、(略)。

八398 図 マツ木材ヲ切リテ、(略)。

(略)、外ガハニ藥ヲ塗ルナリ。此ノ

上ニ、(略)等ノ手數マデ數ヘ上グ

レバ、(略)。

八426 長い天氣つゞきで、かわきき

つてゐる上に、今夜の此のはげしい

風では、どこまで焼けて行くか分ら

ない。

八446 聞けば此の火事は材木屋の小

屋から出たので、(略)。

八508 図 今ヨリ千二百年ノ昔、(略)、

蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、

(略)。(略)。此ノ頃中大兄皇子ト申

スカシコキ皇子アリキ。

八505 図 此ノ頃中大兄皇子ト申スカ

シコキ皇子アリキ。鎌足(略)、大

九67 春の初に降るのは一雨毎に花

をもよほすかとうれしい。(略)。併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、(略)。

九73 雨も止み、風も静

まりて、日の光さへ見え出し候へば、此の分ならば、もはや心配には及ぶまじと(略)。

九77 金銭ヲ預ケタル者ニ

ハ、其ノ金高ヲ書入レタル通帳ヲ渡ス。此ノ通帳ハ(略)。

九78 此ノ通帳ハ此ノ後金銭ヲ預

クル時又ハ引出ス時共ニ必要ナルモノナレバ、(略)。

九87 人の命にはかへられない

と、相手を助けてやつたのは(略)。(略)。此の話が傳はつて、(略)。

九94 進んで陽明門に至る。此の

門一に日暮門の名あるは、(略)。

九96 男體山のふもとに中

禪寺あり、(略)。(略)。此の湖の落口は華嚴瀧となる。

九96 此の湖の落口は華嚴瀧とな

る。直下七十丈、(略)。此の水即ち大谷川の上流を成せり。

十25 日本一の湖水は近江の琵琶

湖にして、(略)。(略)。近江一國の川流はほとんど全く此の湖水に入

り、(略)。

十34 日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。(略)。汽車は此のトンネルを通過するに七八分を費

す。

十48 日本一の古き建物の今にのこれるは、大和の法隆寺なり。(略)。然るに此の寺は今より凡そ一千二百年以前のものにて、(略)。

十49 日本一の高山は(略)。(略)。

日本一の湖水は(略)。(略)。日本一の長流を(略)。(略)。諸子よ、試みに此の外に諸子が日本一と思ふ物を數へ見よ。

十67 ギザ／＼ノ深イノニナルト、

一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテナル。(略)。普通ノ葉ヲ單葉トイヒ、此ノ種類ノ葉ヲ複葉トイフ。

十179 ある雪の朝、皇后は(略)

と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみずをまき上げたり。(略)。萬づに心ききたること、此の一例にても知るべし。

十214 是は活版刷の本の造り方であ

るが、この外に木版刷の本もある。

十232 ヤ、アリテ引返し

来り、(略)、五日目ノ朝此ノ處ニテ我ヲ待ツベシ。」

十241 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ

先ダタレタリ。老人怒リテ、五日目ノ朝ヲ約スルコト亦前ノ如シ。良此ノ度コソハト、夜半ヨリ起キテ橋上

ニ至レバ、(略)。

十244 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテイフヤウ、「汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、遂ニ王者ノ師タラン。」

十307 甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。(略)。名稱ノカク異ナルヲ以テモ、此ノ芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

十312 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、(略)。

十321 或時旅僧ヨリ此ノ芋

ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、(略)。

十335 昆陽ハ之ヲ數フニハ、此

ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、(略)。

十338 其ノ作方、貯藏ノ方

法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。幕府ハ此ノ書物ニ種芋ヲ添ヘテ、(略)。

十351 「あれが此の室にはいる前

(略)。

十399 『此の方面の戦闘に

二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』

十421 藺ハ水草ナリ。(略)。莖ハ

圓クシテ、長さ五尺バカリ、(略)。我等ノ家ニ數ケル疊ノ表ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナリ。

十422 又此ノ莖ヲ染分ケテ、(略)。

十434 ヤウヤク一種ノ機械ヲ發明セリ。眠亀ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、(略)。

十435 眠亀ハ(略)、自ラ花筵數十

種ヲ織出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、此ノ時ハナホ世人ノ注目スル所トナラズ、(略)。

十4310 花鳥等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ(略)。(略)。販路次第ニ開ケ、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、(略)。

十444 眠亀ガ(略)、熱心ニ此ノ業ニ志シ、機械ヲ發明シ、國産ヲ廣メシハ(略)。

十476 かくの如き模様の工夫は無

限に多し。若し此の模様は種々の色どりを加ふるときは、(略)。

十5410 手塚、首をたづさへて、

(略)。(略)。義仲之を見て、「略」ひそかに我を此の齋藤別當のもとに預け、(略)。

十609 足尾銅山ハ日光山ノ西南ニ

アリ、今ヨリ三百年前、此ノ地ノ人始メテ之ヲ發見セリトイフ。

十611 足尾銅山ハ(略)。此ノ銅

山ハ發見ノ當初ヨリ産出高スコブル多ク、(略)。

十618 足尾銅山ハ(略)。(略)ノ

造營ニ用ヒタル銅ハ、大抵此ノ山ヨリ産出シタルモノナリトイフ。

十6110 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道

アリ。

十627 選鑛場ニハ種々ノ機械アリ、此ノ機械ニカケテ、(略)。

十632 足尾銅山ハ(略)。(略)。此ノアタリ、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、(略)。

十671 漕拔けた一隻は(略)、

急處めがけて破裂矢をしかけた銚を

打つ。(略)。捕鯨法には此の外に(略)などもあつた。

十68(略) 英國東海岸の一島に燈臺あり。(略)、此の燈臺附近の岩の上に乘上げた帆前船あり。

十69(略) 父は此の大波に何とて行かるべきと思ひしが、(略)。

十70(略) (略)、辛くして難破船に漕着けたり。父は直ちに勞れ果てたる水夫を助けて、ボートにうつす。此の間(略)、岩と波との間にボートをあやつり居たる少女の働は、(略)。

十71(略) (略)ダリーングの手は、(略)、半死半生の水夫を親切に看護せり。数日の後、水夫は此の少女の手に熱き感謝の涙をそそぎて、(略)。

十71(略) グレース、ダリーングの生家に程近き寺院の庭上には、(略)少女の銅像あり、永く此の勇ましく、やさしく、且は麗しき昔物語を語れり。

十75(略) 伊香保も(略)。(略)。此の地も亦夏甚だ涼しくして、(略)。

十76(略) 腹ノ中ニハ胃ト腸トアリ。(略)。此ノ外腹ニハ種々ノ内臓アリ。

十92(略) (略)、何れ熟考の上實行せんと申合せ居り候事とて、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

十94(略) 興福寺ノ(略)。此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニシテ(略)。

十96(略) (略)、官幣大社春日神社ニ

到ル。(略)。三笠山ハ此ノ神社ノ後方ニアリ。

十96(略) 三笠山ハ(略)。昔安倍仲麻呂ガ(略)、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。

十98(略) (略)法隆寺ニ向フ。此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、(略)。

十99(略) (略)、仁王門ヲスレバ百間ニ餘ル長廊アリ。紀貫之ガ(略)。

トヨミタリトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラニアリ。

十101(略) コ、ニ程近キ飛鳥ノ安居院ハ古ノ飛鳥寺ノ跡ニシテ、(略)、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。

十103(略) (略) 向ふの山腹に如意輪寺あり。正平の昔、楠木正行が(略)といふ一首の和歌を書残せるは此の所なり。

十104(略) 尚進めば、水分神社・金峰神社等あり。此の附近にも亦櫻樹多し。

十107(略) (略)、女王は(略)、臣下をひきあて分離す。此の時箱・樽等を適當なる所に置けば、(略)。

十109(略) (略) 軸木ヲコシラヘル者(略) 紙ニ包ム者、皆ソレノニチガフ。此ノ様ニ大勢ノ人ガ手分ヲシテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

十111(略) (略)、誰モ早く其ノ仕事ニ熟練スル。随ツテ良イ品物ガ出来テ、製造高モ多クナル。(略)。此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、(略)。

十113(略) 元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。(略)。此の頃備前の國に兒島高德といふ武士あり、(略)。

十114(略) (略)、君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)、名を子孫に傳ふべし。」といへば、心ある者どもいづれも此の議に同ず。

十115(略) いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)。(略)。高德せめても此の所存を上聞に達せばやとて、(略)。

十116(略) (略)、呉の勢盛になりて、會稽山の戰に越の軍を打破りたり。此のうらみ忘れ難く、越王勾踐つふさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)。

十117(略) (略)、越王勾踐(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。此の故事を引きて、(略)。

十117(略) (略)、下關海峡あり。(略) 豊後海峡をなす。(略)、明石海峡となり、(略)、鳴門海峡となる。此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十120(略) 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。嚴島は(略)、屋島・壇浦は(略)。我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、(略)。

十140(略) 全島の住民は約三百餘萬と申候。其の中内地人は八萬餘、蕃人は此の外にて約十一萬と申す事に候。

十141(略) (略)、赤松光範、楠木正儀と攝津の住吉に戰ひて、散々に撃破られたり。此の時討死せる宇野六郎の一子に、(略)。

十149(略) (略)、前の馬主が再び馬をひいて來て、(略)。此の馬が欲しい御座いますか。」

十151(略) (略) 三つ四つの子供が、(略)、戯れてゐると、馬はさもうれしさに、(略)、其の子供をあやしてゐた。此の一事でアラビヤに名馬の産する所以が分つた。」

十156(略) 兵士等は氣をあせるのみで、何の工夫もつかぬ。此の時「自分が行かう。」とさけぶ人を誰かと見れば、(略)。

十156(略) マクドナルは此の隊の司令官で、(略)。

十163(略) (略) 建碑式舉行致候間、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

十168(略) 人生七十年と見るも(略)。(略)、實際修學及び業務に用ふる時間は僅かに二十萬時間を越えざるべし。身を立て、父母をあらはすも、(略)、將又無爲にして一生を終ふる

も、唯此の二十萬時間を利用するとせざるとにあり。

十一718 図 (略) 一間の杉戸には繪一本を畫がき、他の一間には鶴二十五羽ばかり畫がけり。此の畫の出来たる由來こそ面白けれ。

十一719 図 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)。
十一719 図 泉州堺に一國寺といふ寺あり。(略)。此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)。

十一764 図 裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、(略)。

十一7610 図 瀧の後より山路を上ると四町餘、一條の谷川あり、この水即ちかゝつて第一の瀑布を成すなり。

十一795 図 (略) 橋を渡れば長良村あり。此の川上に瀬尻村あり。

十一796 図 (略) 橋を渡れば長良村あり。此の川上に瀬尻村あり。鶴飼を業とする漁夫は皆此の二村に住めり。

十一798 図 鶴飼は五月中旬に始り、十月中旬に終る。此の間毎夜月なき時をうかゞひて漁舟を出す。

十一807 図 鶴匠は(略)、右往左往思ひ／＼に浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。此の間に鶴を引上げて呑みたる魚を吐かせ、再び之を水に放ち、(略)。

十二854 図 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ(略)、精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。此ノ流ハ自ラ集メラレテ、(略)。

十二889 図 蜘蛛は(略)。(略)、終に完全なる網を造る。此の網にて蟲を捕ふるは(略)。

十二891 図 油蟲は(略)、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、(略)。

十二8910 図 一種の草の實を食用とするを以て、常に此の草の多く生ずる所を選びて住み、(略)。

十二902 図 一種の草の實を食用とするを以て、(略)、ひたすら此の草の成長を保護し、(略)。

十二934 図 物の價は(略)常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しかんとする傾きあるものなり。此の金額を普通の價といふ。

十一1015 圖 住めば都とやら、此の極北の寒地も今はや生れ故郷の如き心持に相成候。

十一1024 図 支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。劉備ハ(略)。(略)、シキリニ賢士ヲモトム。此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、(略)。

十一1051 圖 孟獲ヲ捕ヘ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。

十二1079 床下に土石を盛り、(略)、一方の口から火をたいて室内を温める。之をオンドルといふ。(略)。此のオンドルがある爲に、普通の家では冬でも夜具を用ひない。

十二1156 図 されば全村頗るゆたかにして、皆其の家業を樂しめり。村役場と學校とは(略)。(略)。耕地整理は(略)。(略)。萬事此の有様なれば、一村は一家の如く和合して、(略)。

十二210 図 我等臣民も亦祖先の遺風に從ひ、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

十二377 図 鍛ひたる劍の光いちじるく世にゝやかせ、我が軍人。此の御製を拜讀しては、(略)。

十二444 図 波風のあづかなる日も船人は かぢに心を許さざらん。治に居て亂を忘れざるも此の心なり。

十二455 図 波風の(略)。(略)。學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ(略)。

十二58 図 「皇國の興廢此の一戦にあり。

十二98 図 此の兩日の戦に、敵艦の大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。(略)。敵艦の大部分は(略)、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。(略)。我が軍の死傷甚だ少く、(略)。東郷司令長官此の

戦況を打電し、(略)。

十二111 圖 鷹下將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、(略)。

十二139 船ヲ組立テルニハ、(略)先ヅ龍骨トイフモノヲ置ク。コレハ人ノ脊骨ノ様ナモノデ、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シテ、(略)。

十二174 図 之を全國天氣豫報といふ。又各測候所が此の全國天氣豫報と其の地の觀測とによりて、(略)。

十二238 其の時花の中の花粉は是等の蟲に着いて(略)。動物は呼吸作用によつて、(略)。(略)、一方に於て植物が之を消費するからである。

(略)。此の外、(略)等、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。

十二335 図 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教へて家名をあげしむるに在り。此の心は何處如何なる場合にも忘るべからず。

十二352 就學兒童ノ數ガ年々増加シ、義務教育年限モ六年ニ延長セラレタノデ、此ノ改築ヲ計畫シ、今新校舍ノ出來上ツタノハ(略)。

十二384 図 「高虎の嘉明と相惡むは私の小事なり。是は公の大事なり。何ぞ私事を以て公事を害せんや。」と答ふ。(略)。嘉明後此の事を聞き

て大いに恥ぢ、(略)。

十二408 図 阿蘇山の舊噴火口は南北の長徑六里、東西の短徑四里にわた

り、此の間に（略）。

十二419 内二箇の噴孔ありて、盛に水蒸氣とよなと稱する火山灰とを噴出す。但し此の噴孔は（略）。

十二567 旅順口に達す。（略）露軍は海軍根據地として此の地を死守し、（略）。

十二582 安奉線は（略）、韓國の縦貫鐵道に連結す。此の鐵道は日露戰役中に急設したる輕便鐵道にして、（略）。

十二622 街路は掃除最もよく行きとどきて、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。此の點より見れば眞に近世都市の好模範たり。

十二663 灰色の鼠の一群（略）歐羅巴に移り、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二728 進取の氣象に富める人は何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、（略）。

十二761 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして（略）。（略）コロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

十二762 コロンブスは（略）西を指して進まば、印度の東海岸に到着すべしとの意見を抱けり。（略）コロンブスは（略）、熱心に此の説を

主張したりしが、（略）。

十二765 其の保護の下に此の大探検を行ふに至れり。

十二774 船の次第に朝霧の中にかくれ行くを見送りと、數萬の見物人は再び此の船を見ること能はざるべしと語れり。

十二795 明け行くまゝに見渡せば、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。

十二7910 コロンブスは（略）眞先に上陸し、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。

十二826 最早弾く力も盡きて、人知れぬ涙をこぼして居る。木蔭に立つてつくぐと此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

十二957 景公（略）魯公と會見す。（略）此の會に於ける孔子の行動は（略）。

十二967 「汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。」

十二1029 何をか自治の精神といふ。地方人民協同一致して、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。此の精神は（略）。

十二1032 一般人民の府縣・郡・市町村會議員を選挙するも、市町村長を選挙するも、一に此の精神に基づくべく、（略）。

十二1034 市町村長・參事會員等の其の事務を處理するも、（略）

も、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。

十二1118 國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。平生より此の覺悟なきものは、（略）。

十二1145 いつしか文弱に流れ、輕浮の風にそみ。此の風一度軍人の間に起りては、（略）。

十二1146 一には、軍人は質素を旨とすべし。（略）。（略）ゆめ此の訓を忘るなど、ねんごろに戒め給ふ。

十二1149 以上の五箇條即ち忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、

此の五箇條を行はんには（略）。十二1152 此の五箇條を行ふも、結局一の誠心を本とすと論し給へる、（略）。

十二1155 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ（略）。（略）此の勅諭は特に軍人に賜へるものなれども、（略）。

十二1159 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

十二1171 忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、（略）。（略）此の五箇條は（略）、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二1173 されば陛下も「此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。（略）」と論し給へるなり。

このえしだん「近衛師團」(名) 1 近衛師團

九271 三十七八年の戰役後は（略）十八箇師團、外に近衛師團を合せて十九箇師團となれり。

このころ「此頃」(名) 3 コノゴロ此ノゴロ 此の頃

四124 コノゴロハクリノオチルジブンデ、毎アサ早くオキテ、行ツテ見ルノガタノシミデス。

八281 「我、此ノゴロ小サキ堂ヲ建テタリ。此の頃の術科は分隊教練にて、學科は讀法の講義及び毎日の術科に關する説明に御座候。

このはちよう「木葉蝶」(名) 1 木ノ葉蝶

九564 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、羽ヲ閉テ、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

このみ「好」(名) 2 好ミ

十一652 味ハ人々ノ好ミヲ考ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選バナケレバナラス。

十一6510 又魚類ヤ野菜ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

このむ「好」(四・五) 4 好む 「ミーム・メ」

十一104 朝鮮人は煙草を好む。

十二745 図 ゼノアに生れて幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンブスは(略)。

十二936 図 孔子は魯といふ國に生れ、人と爲り禮を好み、温良・恭儉なりき。

十二938 図 孔子は年少にして禮を好み。

こはん「御飯」(名) 8 ゴハン こはん

二382 図 ハシヲモツテ、ゴハンヲタベサセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。

三122 図 パンノゴハンノスンドアトデ、オヂイサンハイロイロナオモシロイハナシヲキカセテクダサイマス。

三536 図 「モウゴハンダカラ、オイデナサイ。」

四308 図 「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」

四313 図 こはんの米はねばりけがすくないから、おもちにはなりません。」

四325 図 「それではごはんにたく麦と、うどんやさうめんにする麦は同じですか、(略)。」

四334 図 「(略)、ごはんにたく麦は大麥です。」

六365 ゆにはいつて、ごはんをた

べると、つかれてすぐにねてしまつた。

こびき「木挽」(名) 1 コビキ

六691 図 材木ヲヒキテ、板又ハ柱トナスモノハコビキナリ。

こひき「五四」(名) 2 五ヒキ 五四

一433 ヒゴヒガ(略)。(略)。アハセテ五ヒキデス。

九841 (略)、五匹の馬は一散にかけ出した。

こびじゅつ「古美術」(名) 1 古美術

十973 図 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。(略)。我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。

こひばり「子雲雀」(名) 1 子ヒバリ

三196 (略)、オヤドリガオリテコナイトキニハ、子ヒバリハスノ中デ、ドンナニマツテキルコトデセウ。

ごひやく「五百」(名) 4 500

九17 図

九17 図

九40 図

九40 図

ごひやくごじゅうまんちようぶ「五百五十万町歩」(名) 1 五百五十万町歩

七443 図 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十万町歩あり。

ごひやくごくづみ「五百石積」(名) 1 五百石積

十一271 図 和船の大なるは五百石積

・千石積等ありて、近海を航行すれども、橋はおほむね一本なり。

こぶ「瘤」(名) 2 コブ

一442 ヨイオヂイサンハコブラトラレテヨロコビマシタ。

一451 ワルイオヂイサンハコブラツケラレテコマリマシタ。

ごぶいん「御無音」(名) 1 御無音

十559 図 色色取りまぎれ、つひ御無音に打過ぎ候。

こふう「古風」(名) 4 古風

九519 図 古風ゆかしき我が國のかんむり・烏帽子今は唯 祭の服に残りたり。

十一259 図 (略)、古風の牛車は博物館に行かざれば見るべからず。

十一802 図 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみのを着く。

十二627 図 倫敦は(略) 街路狭ければ、古風の乗合馬車を以て主なる交通機關とす。

ごふうじゅうう「五風十雨」(名) 1 五風十雨

九671 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。

ごふくてん「おわりやごふくてん・おわりやごふくてんおんちゅう

ごふくどいや「呉服問屋」(名) 1 ごふく問屋

七148 図 たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にた

のまれて、それをほかへ賣渡してやり、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。

ごふくや「呉服屋」(名) 3 ゴフクヤ

ごふくや 呉服屋

一353 カドニハゴフクヤガアリマス。

四25 そのすぢむかひに大きなごふくやがあります。

八421 火元は裏町通の材木屋で、もう本町通へ抜けて、角の呉服屋が焼けてゐるのださうだ。

ごぶごぶ「五分五分」(名) 1 五分々々

九846 (略)、もはや熊吉と愛作の二人だけの競走となつた。二人の馬は五分々々に進んで行つたが、(略)。

こぶし「拳」(名) 1 こぶし ぐにぎりこぶし

十514 図 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、やがて打ちまたがつて首をかく。

ごぶじ「御無事」(形状) 1 御無事

九714 図 (略)、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由(略)。

御一家御無事に御座候や。

こぶつ「古物」(名) 1 古物

十二638 図 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

こぶん「古文」(名) 1 古文

十155 図 (略)、最も世に聞えたるは紫式部と清少納言となり。(略)、其

の作れる文は古文の手本として、今
なほひろく愛讀せらる。

ごへい「御幣」(名) 1 ゴヘイ

七49 〇 西洋紙ハ又「略」トイ
ヒマス、日本紙ハ神ダナヲ指サシ
テ、「ソナニイバツテモ、アノ神
ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマイ。」
トイヒマシタ。

ごへん「五遍」(名) 1 五ヘン

一49 5 タケヲサンカラオトビナ
サイ。一ペンニヘン三ペン四ヘ
ン五ヘン(略)。

ごへんかも「御返歌申」(四) 1

御返歌申す「一シ」

十89 〇 君は(略)、天が下には
かくれがもかし。御歌かしこみ・藤
房は(略)、尚袖ぬらす松の下露。
御返歌申し、泣きあたる(略)。

ごへんじ「御返事」(名) 1 御返事

十93 1 〇 御手紙拜見仕候。(略)。
當日は(略)、是非參會致すべく候。
取りあへず御返事まで。

ごほうちく「御報知下」(下二)

1 御報知下さる「一レ」

十27 1 〇 (略)、時々營内の様子御
報知下されたく願上候。

ごほうちも「御報知申上」(下

二) 2 御報知申上「一(ゲ)」

十60 1 〇 先は近狀御報知申上度か
くの如くに御座候。

十一95 8 〇 (略)、見聞取交へ、新
版圖の狀況大略御報知申上候。

ごほうび「御褒美」(名) 1 ゴホウビ

二62 5 「コレハメヅラシイ。ミゴ
ト、ミゴト。」トオホメニナツ
テ、タクサンノゴホウビヲクダ
サイマシタ。

ごほうちも「御報知申上」(下二)

1 御報知申上「一(ゲ)」

九75 7 〇 (略)、當時のあらましを
申上候。(略)。取急ぎ御禮かたがた
右御報知申上候。

ごぼく「古木」(名) 1 古木

七58 1 〇 コノ公園ハ新シクシテ、古
木多カラザレド、種々ノ草花ウルハ
シク咲キミダレタリ。

ごぼす「零」(五) 3 ごぼす「一シ」

六70 8 字を書くのに、筆をおとし
り、すみをこぼしたり、(略)。
八66 8 〇 病中の祖母も大そうよろこ
びまして、有りがた涙をこぼして居
ります。

十二82 5 (略)、傍の石にこしを下し、
額を両手に支て人知れぬ涙をこぼ
して居る。

こま「独楽」(名) 2 コマ こま

一22 タコ コマ

六36 3 ゆか下から去年なくしたこま
が出てうれしかった。

こまか「細」(形状) 1 細カ

七75 8 (略)、ゼンタイガ細カニ分レ

テ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。

こまかい「細」(形) 3 こまかい 細

カイ「一イーク」

七30 5 小さい時分はやはらかな葉を
こまかく切つてやるが、大きくな
と、枝のまゝやる。

八65 6 サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カク

キザンデ、日ニホシテ、ソレカラウ

スニ入レテツキカタメマス。

十二15 1 サテソレカラ船室ヲ分ツタ

リ、(略)、細カイ造作ヲシタリシテ、
スツカリ出来上ルマデニハ非常ナ手
數ガ掛ル。

こまかし「細」(形) 1 細カシ「一

キ」

十一85 1 〇 コレニハ細小ノ針金ニ

テ作リタルブラッシノ仕掛アリテ、

錠綿ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去

ル。

こまがたけ「駒岳」(地名) 2 駒岳

駒ガ岳

九40 〇 駒ガ岳

九41 9 〇 噴火一タン止ミテ後、其ノ

噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セ

リ。上二子・下二子・神山・駒岳是

ナリ。

こまつ「小松」(名) 1 小松

六1 5 海岸には(略)、一面に小松の

はえた小松原もあり、又大きな松が

ならんだ長い松原もある。

こまつばら「小松原」(名) 1 小松原

六1 5 一面に小松のはえた小松原も

あり、又大きな松がならんだ長い松

原もある。

四3 5 又町からは、きれやこ
まものやさかななどを買つて
かへります。

こまものや「小間物屋」(名) 1 コマ

モノヤ

一34 6 サカナヤノトナリハコマ

モノヤデス。

こまり「おこまり」

こまる「困」(五) 3 コマル こまる

「一ラーリ」

一45 2 ワルイオダイサンハコブ

ヲツケラレテコマリマシタ。

五13 2 町の中を通る時にきたない物

をなげつけられるのにはこまりまし

た。

六58 5 ところがとなり國では信玄を

こまらせようと思つて、塩を送らせ

ないことにした。

こみ「ひっこみ」

こみあう「込合」(五) 2 こみ合ふ

込合ふ「一ツ」

五39 4 汽車が今ていしやばへつきま

した。下りる人もあり、のりこまう

とする人もあり、(略)、大そうこみ

合つてゐます。

十36 8 〇 人が大勢込合つてゐる中

で、少しも人に先んじようとはせず、

靜かに自分の順番を待つてゐまし

た。

こむ「込」(四・五) ひうえこむ・うちこ

む・おちこむ・おどりこむ・かけこ

む・かりこむ・きりこむ・くいこむ・

せめこむ・つみこむ・とびこむ・とりこむ・ながれこむ・なげこむ・にげこむ・のみこむ・ひきこむ・ひっこむ・もうしこむ

こむ「込」(下二) 1 こむ 『ムル』

ひたちこむ・ぬりこむ

十25 図「我元 丹波の松よ、山こむる 霞を後よ、いかだして都に來けり。」

こむぎ「小麦」(名) 3 小麦

四32 図 小麦

四33 4 図 「いいえ、うどんやさうめんにする麦は小麦で、ごはんにたく麦は小麦です。」

十一99 10 図 農産物の種類は(略)、小麦・小麥・燕麥・裸麥・靈臺・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、(略)。

こめ「米」(名) 20 米 小おこめ・もちこめ

二56 2 ヨイオヂイサン ハ(略)、ウスヲツクツテ、ソレデ米ヲツキマシタガ、(略)。

二57 3 ヨクノフカイ オヂイサン ハマタコノウスヲカリテイツテ、米ヲツイテミマシタガ、(略)。

三34 1 圖 「コトシハホウネン、ホニホガサイテ、ミチノ小グサモ米ガナル。」

四30 8 図 「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」

四30 8 図 「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」

四30 8 図 「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」

四30 8 図 「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」

んの米はどうちがひますか。」

四31 8 図 「おもちにするのはもち米といふ米です。」

四31 8 図 ごはんの米はねばりけがすくないから、おもちにはなりません。

六15 3 かつた稻が雨にぬれると、米がわるくなるから、天氣のよい間に取入れなければなりません。

六16 6 そのもみを又よく日にかわかし、すりうすですつて、もみがらをのけると、はじめて米になるのです。

六16 8 米を俵に入れて、その俵をつみ重ねてながめた時は、田うゑや草取りの苦しさも、取入れのいそがしさも、全くわすれてしまひます。

七11 4 圖 刈つて、ひろげて、日にかわして、米にこなして、俵につめて、(略)。

九88 3 圖 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタヅネタリトセヨ。

九88 8 圖 カクテ持チアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

十一37 9 圖 本島産物の重なるものは、御承知の樟腦・米・茶・砂糖等にて、(略)。

十一108 1 (略)、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のこ

とわざがある。

十二43 10 図 我が國は氣候温に、地味肥え、極めて耕種に適し、米・麥の栽培は最も早く開けたり。

十二44 4 図 作物は米・麥其の大部分を占めて、(略)。

十二44 4 図 (略)、米の作付反別は凡そ二百九十萬町歩、其の收穫は年々凡そ四千六七百萬石にして、(略)。

十二44 7 図 我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

十二48 9 圖 米と麥とは全國に、製茶は静岡・三重・京都 農産收入何れど、小さき蟲の吐出す 生絲も無二の輸出品。

こめや「米屋」(名) 2 コメヤ 米屋

一34 1 コメヤノトナリハサカナヤデス。

八43 4 (略)、やうく米屋の土蔵でとまつたが、(略)、一棟はとうく焼けおちたさうだ。

こめん「湖面」(名) 1 湖面

九95 6 圖 (略)、男體山のふもとに中禪寺湖あり、周囲凡そ六里、湖面鏡の如く、四方の山々皆倒に影をうつせり。

こめん「御免」(名) 1 ごめん

六44 7 圖 (略) お寺へ小ぞうにやられましたが、(略)。(略)。お寺では「こないたづらは者はおめんです。」といつて、うちへかへしました。

ごめんかい「御面會」(名) 1 御面會

十93 7 圖 明後日御面會の節返上致すべく候。

ごめんください「御免下」(感) 1 ゴメンクダサイ

二8 3 図 オキクガイマ オキヤクニナツテキマシタ。「ゴメンクダサイ。」

こも「薦」(名) 1 コモ

四36 1 イネノワラデハ、タワラコモムシロナハワラデミノナドヲ作りマス。

こもり「子守」(名) 1 子守

十一21 8 圖 生れてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。

こもる「籠」(四・五) 3 こもる 『ツール』

九60 8 圖 閉ぢたる室内にはよごれたる空氣こもる。

十64 6 船長の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じて、北へ向つて走る。

十二26 5 圖 建長・圓覺古寺の山門高き松風に昔の音やこもるらん。

ごもん「御門」(名) 1 御門 ひいたがきごもん・たまがきごもん

八5 6 図 その御門を板垣御門といふ。

ごもん「御紋」(名) 2 ゴモン

一16 1 キクノゴモン

一16 2 キリノゴモン

こや「小屋」(名) 2 小屋 ぐうしこや

・ほったてこや・みせものこや

八四七 聞けば此の火事は材木屋の小

屋から出たので、(略)。

十七〇九 水夫は盡く燈臺番の小屋に

入れられたり。

こやま「小山」(名) 3 小山

十64 小山の様な白波が高くくだけ

て、夕立のやうに降散る。

十一89 熱き地方の白蟻は周圍十

間、高さ三間にも達する小山の如き

巢を造り、(略)。

十二55 其の西南なる首山堡は高

さ僅かに三百餘尺の小山なれども、

遼陽防備の要害地にして、(略)。

こ・ゆ「肥」(下二) 2 肥ゆ「一エ」

十一96 南部の鈴谷川・

内淵川・留多加川の流域の如きは、

地味肥え、有望の農業地に御座候。

十二43 我が國は氣候温に、地味

肥え、極めて耕種に適し、米・麥の

栽培は最も早く開けたり。

こ・ゆ「越」(下二) 13 コユ 越ユ 越

ゆ「一エ・ユル・ユレ」

七18 ナンデハ年スデ二十歳ヲ

コエタリ。

八80 かくの如く日本を出で、海

を越え、陸を越え、東へ東へと進め

ば、(略)。

八80 かくの如く日本を出で、海

を越え、陸を越え、東へ東へと進め

ば、(略)。

九39 鐵道開通後ハ旅客ハ

皆汽車ノ便ニヨルヲ以テ、今ハ此ノ

山坂ヲ越ユルモノ少シ。

九58 八十歳を越えて病を知らざ

る或老人に、長生の方法を問ひしに、

(略)。

九63 田村麻呂は身の丈五尺八

寸、胸の厚さ一尺二寸、體重は三十

貫を越え、(略)。

十一28 今や全國鐵道の延長六千

哩を越え、(略) 亞米利加・歐羅巴

の航路をも開くに至れり。

十一67 實際修學及び業務

に用ふる時間は僅かに二十萬時間を

越えざるべし。

十一77 又一山を越ゆれば、第三

の瀧に至る。

十二35 今や全國就學兒

童ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、

(略)。

十二44 蘭の取入高は年々増加し

て近年三百五十萬石を越え、(略)。

十二66 又かつて栗鼠の大群(略)

同一の進路を取りて、山あれば越え、

河あれば泳ぎ、道に當るものとして

て之をさまたぐるに能はざりきと

いふ。

十二92 家の収入を基として、

豫め其の支出を定め、衣服・飲食の

費皆其の範圍を越ゆることなかるべ

し。

こゆび「小指」(名) 4 小ユビ 小指

四20 一バン太イノガオヤ

ユビ、一バン小サイノガ小ユビ

デ、(略)。

四21 中ユビト小ユビ

ノアヒダノガクスリユビデス。」

四22 ソレカラ私ハ人サシユ

ビデ、三郎ハ小ユビデス。」

七29 けれども一月ばかりの内に

は、皆さんの小指程の大ききになり、

(略)。

こよう「御用」(名) 3 御用

五21 おはなは(略) たけ

のこをなべの中へ入れました。「こ

んどは何の御用をいたしませう。」

七47 父ノ汝ヲカヘシタマヒシ

ハ、(略)。大人トナリテ、君ノ御タ

メニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシ

メントナリ。(略)。カクテハ君ノ御

用ニ立ツベシトモオボエズ。」

九44 何とぞ御身御大切に成し

下され、一日も早く御用御すまし

上、御歸りの程御待ち申上候。

こよみゆはなこよみ

こより「紙縫」(名) 1 コヨリ

七48 日本紙ハコヨリニシテ物ヲ

シバルコトガ出來ル。

こら(感) 2 こら

五27 役人は後からこゑをかけ

て、「こら待て、ゐざり。釜ぬす人

はその方にきまつたぞ。」といつて、

(略)、しばらくしました。

九19 「こらどうした。命がをし

くなつたか、妻子がこひしくなつた

か。(略)、其の有様は何事だ。

こらい「古来」(名) 8 古来

十一50 古来アラビヤ人は馬を家族

の一員と考へて、家長は之を自分の

子供と同じ様にかはいがる。

十一75 我が國には數多の瀑布あ

り、古来多く詩歌に入り、畫圖に上

る。

十一79 鵜を使ひて魚を捕ふるこ

と、我が國にては古来廣く諸所に行

はれたり。

十二44 我が國は氣候温に、地味

肥え、極めて耕種に適し、米・麥の

栽培は最も早く開けたり。古来瑞穂

の國の名ある所以なり。

十二66 通常の灰色の鼠の

一群大舉して、印度よりペルシャを

經て歐羅巴に移り、古来此の地方に

ありし黒色の鼠を全く追拂ひしこと

あり。

十二110 勅諭は先づ我が國の軍隊

が古来天皇の統率し給ふ所なること

を諭し給ひ、(略)。

十二115 太古以來忠節の心にあつ

きは、我が國民の世界に無比なる美

徳にして、古来の歴史上の事蹟は十

分に之を證明せり。

十二116 武勇の精神も亦國民が古

來のほこりとなす所なり。

こらいかいあいなる「御來會相成」

(四) 1 御來會相成「一(リ)」

十914(園) (略) 耕地整理に關する講話これあり候。(略)。(略)、有志の方々御さそひ合せの上、御來會相成候ては如何。

ごらいかいくださる「御來會下」(下二)

1 御來會下さる『一レ』

十一638(園) (略) 建碑式舉行致候間、(略)。(略)、御來會下され候は

ば、(略) 御一報下され度候。

こらえかぬ「堪兼」(下二) 1 コラヘ

カス『一ネ』

八532(園) 他ノ二人ハ(略)、恐レテ

出デズ。今シバシタメラハバ事アラ

ハレントス。皇子コラヘカネテ、ヲ

ドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

こらす「凝」(四・五) 2 コラス『一

スーセ』

十428(園) 明治九年頃ヨリモツバラ花

筵ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械

ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)。

十一117 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事

ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ

精神ヲコラスコトニナルカラ、(略)。

こらん「御覽」(名) 6 こらん

三368(園) 「こ」があかるいから、

みえないのです。くらいところ

へはなして「こらん」。

五38 手力男のみことといふ力のつ

よい神さまが、これをこらんになる

と、(略)。

五246(園) 「お役人さま、こらんの通

り、私は足の立たないもので、兩手

をついて、やつとゐざりあるくものでございます。

五378 天皇はこれをこらんになつ

て、大そうお笑ひになりましたが、

(略)。

八463(園) 伯父さんが御安心なさる様

に早く返事を上げよう。お前一つ書

いて「こらん」。

八491(園) (略)、うちの名の和田を入

れて、十五字になるやうに書いてこ

らん」。

こらんくださる「御覽下」(五) 2 ゴ

ラン下サル 御覽下さる『一イ』

四753(園) 「オカアサマ、オヒナサマ

ヲカザリマシタカラ、ゴラン下

サイ」。

九202(園) 水兵は(略) しばらく大

尉の顔を見つめてゐたが、(略)、

「(略) どうぞ之を御覽下さい。」と

いつて、其の手紙を差出した。

こらんくださる「御覽下」(下二) 1

御覽下さる『一レ』

十一4010(園) 當總督府にて出版相

成候臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候

間、御覽下され度候。

こらんず「御覽」(サ変) 1 御覽す

『一ジ』

十169(園) ある雪の朝、皇后は美しき

御庭の雪景色を御覽じて、「香爐峯

の雪は如何に。」と仰せられしに、

(略)。

こらんなさる「御覽」(五) 11 ゴラン

ナサル ごらんなさる『一イ』

一284 アノハタヲゴランナサ

イ。

一414 イクツサイタカ、カゾヘテ

ゴランナサイ。

二462 ゴランナサイ、アノオヤネ

ニハウメバチノ大キナモンガ

ツイテキマス。

三176 ゴランナサイ、マタアソコ

カラモ一ピキ上リマシタ。

三342 ゴランナサイ、モウアノ

ヒロイ田ガハンブンバカリウ

ワリマシタ。

三447 アサ日ニムカツテ、手ヲ

ヒロゲテゴランナサイ。

三631 ごらんない、この貝がら

はかたつむりのやうに、おも

てにうづまきがあります。

四366 皆サンノ知ツテキルダケ

イツテゴランナサイ。

四518 何デセウ。アテテゴラン

ナサイ。

五152 ゴランナサイ、大ブツサマノ

マヘニ立ツテキル人ガ、コンナニ小

サク見エマス。

五633(園) 「ねえさんの所からお手紙が

來てゐます。読んで「こらんない」。

こりよう「御陵」(名) 2 御陵

十1021(園) 畝傍山ノ東北ニハ神武天皇

ノ御陵アリ。

十1022(園) 又近ク綏靖天皇ノ御陵ア

リ。

こりよう「古陵墓」(名) 1 古陵墓

十1023(園) (略) 神武天皇ノ御陵アリ。

又近ク綏靖天皇ノ御陵アリ。其ノ他

古陵墓甚ダ多シ。

こりん「五厘」(名) 1 五厘

七531(園) 又新聞は二十匁までが五

厘、書物や寫眞の類は三十匁まで二

錢で、これもたゞの手紙などよりは

よほど安いのです。

こりんせき「御臨席」(名) 1 御臨席

十917(園) (略) 耕地整理に關する

講話これあり候。(略)。なほ縣廳よ

りは小杉事務官も御臨席のほずに御

座候。

これ「此」(代名) 322 コレ これ之

是

二415(園) 「ヤットカラダガデキマ

シタ。コレカラアタマヲツクリ

マセウ」。

二417(園) 「コレデアタマモデキ

マシタ。

二421(園) コレガハナデ、コレガ

ロデス。

二422(園) コレガハナデ、コレガ

ロデス。

二434(園) 「コレデ目モデキマシ

タ。

二445 コレハ天ジンサマノオ

ヤシロデス。

二493(略) オトシダマニイタダ

イタ本ガ一サツアリマス。コレ

ニハ(略)、ハナサカデイノオ

ハナシガカイテアリマス。
 二49 〇 コレ カライツシヨ ニ ヨン
 デ ミマセウ。
 二54 〇 オデイサン ハ (略)、ソノ 犬
 ヲ コロシテ シマヒマシタ。(略)
 ヨイ オデイサン ハ コレヲ ミテ、
 タイソウ カナシンデ、(略)。
 二62 〇 ハヒヲ トツテ、カレ木
 ニ ナゲカケマス ト、(略)ミゴト
 ナ ハナザカリ ニ ナリマシタ。「コ
 レ ハメツラシイ。ミゴト、ミゴ
 ト。」ト オホメ ニ ナツテ、(略)。
 二65 〇 コンド ハイクラ ハヒヲ
 フリカケテモ、ハナ ハスコシ
 モ サキマセン。(略)。「コレ ハニ
 セモノダ。ニクイ ヤツダ。」
 二84 〇 (略)、マサヲ ガ本ヲ ヨ
 ンデ キマシタ。(略)。マサヲ ハミ
 ム キモ シナイデ、「コレ ガス
 ン デ カライ キマセウ。」
 二87 〇 マサヲ ハヤツバリ ミム
 キモ シナイデ、「コレ ガス
 ン デ カライ キマセウ。」
 二74 〇 「コレ カラ ハナヲ ツミ
 マセウ。」
 二88 〇 コレ カラ 二三日 タツタラ、
 マダ ズツト タカク ナリマセウ。
 二87 〇 七じ が なりました。さあ、
 これ から がくかう へ 行きませ
 う。
 二88 〇 だい一 には 目です。これ
 で 本 の 中 の じやあや、(略)

いろいろなものを見るのです。
 二87 〇 だい二 には 耳です。これ
 が なければ、せんせいの おつし
 やることや、みんなの 言ふこ
 とが わかりません。
 二64 〇 をちさんのおみやげに
 貝を、こんなにたくさん いた
 きました。(略)。私はをちさん
 に、「(略)。」とききましたら、「い
 いえ、これはひろつたのでは
 ない。」
 二66 〇 オトミ ハマルク キツタ
 白イ紙ヲ 三ツ出シテ、「三十セ
 ン アゲマス カラ、コレ デ トツテ
 クダサイ。」
 二94 〇 今年 は もう これ で す
 みました。らい年 また お目 に か
 かりませう。」
 二41 〇 (略)、外ヲ 見ルト、何ダ
 カ ヤウス ガ チガツテ キマス。コ
 レ ハ ヲカシイ ト オモツテ、ヨク
 ヨク 見ルト、(略)。
 二42 〇 (略) おとしだまにのし
 が ついてゐました。おちよはそ
 れを見て、母に「(略)、なぜの
 しをつけるのですか。」と問
 ひました。母は「これは昔から
 のしきたりで、昔はのしあは
 びをつけたのです。」
 二43 〇 このまんな中に小さな物
 がありませう。これがのしあは
 びのかはりです。」

四53 〇 ワニザメ ハ「(略)。」ト 答
 ヘテ、スグ ニ ナカマヲ 大ゼイ
 ツ レテ 来マシタ。白ウサギ ハ コレ
 ヲ 見テ、(略)。
 四70 〇 たらひの中に あるは
 何。これは太郎の こくらの
 はかま。
 四72 〇 ひざの上には 何が
 ある。これはおはるの はれぎ
 のはおり。
 四77 〇 ふねは なみに ゆられて、
 (略)。扇は 風 に ふかれて ぐるぐ
 る まはつてゐます。いくら 弓の
 名人でも、これを一矢でいお
 とすことは、なかなかむづかし
 さうです。
 四79 〇 なすのよ一と申すも
 のが ございます。(略)。これに
 まさるものは ございません。」
 四80 〇 よ一は心のうちで、もし
 これをいそごなつたら、生きて
 はあまいと かくごをきめて、
 (略)。
 五38 〇 (略)、大神は少しばかり戸を
 あけて、おのぞきになりました。手
 力男のみことといふ力のつよい神さ
 まが、これをごらんになると、(略)。
 五20 〇 それからそこに切つてある
 たけのこをおなべの中へ入れておく
 れ。「はい、これですか。」
 五24 〇 やく人は(略)、その釜を
 前において取りしらべました。うつ

たへた人は、「これは私が毎日使つ
 てゐた釜でございます。」
 五30 〇 コレハ茶ノ葉デス。ヨクソダ
 ツ茶ノ葉ハ長サガ二寸バカリモア
 リマス。
 五37 〇 すぎるは(略)、たくさんの子
 どもをもらつて、つれて来ました。
 天皇はこれをごらんになつて、大そ
 うお笑ひになりましたが(略)。
 五40 〇 こちらのの方は、これからの
 人の切符を切つてゐるのです。
 五44 〇 汽車ハ急ニマツクラナ所ヘ
 ハイリマシタ。(略)、父ニキ、マス
 ト、「コレハトンネルトイッテ、山ヲ
 ホリスイタ所デス。」トイヒマシタ。
 五58 〇 ソノホカニ石炭トイフモノガ
 アリマス。コレハ大昔ハエテキタ木
 ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出来
 タ物デ、(略)。
 五58 〇 石炭ノ火ノ力ハ木炭ヨリモズ
 ツトツヨイノデ、(略)キカイナド
 ヲウゴカスノニハ、皆コレヲ使ヒマ
 ス。
 五59 〇 ランプニトボスノハ石油トイ
 ヒマス。コレハ地ノ中カラシゼント
 ワキ出ルモノデ、(略)。
 五66 〇 おちよは(略)、葉書の裏
 へ次のやうに書きました。(略)。そ
 れを母に見せますと、母は「よく出
 来ました。これでよくわかります。」
 五69 〇 才宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ
 テキル。サンケイスル人ハ皆カハル

へ、コレヲ鳴ラシテヲガム。

五七七 「鹿はどうだ。」「鹿はをりく通ります。」よしつねはこれを聞くと、(略)。

五八五 この時よしつねは、「(略)。」

といひながら、馬に一むちあててかけ下りた。これを見た三千人の軍ぜいは、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。

六四七 (略)、「誰も居らぬか。」とよびますと、「藤吉郎秀吉こゝにひかへて居ります。」と答へました。少しのゆだんもなく主人に仕へるころざしにかんしんして、これから信

長は目をかけて使ひました。

六四八 秀吉は大ぜいの人を十組に分けて、(略)、仕事をいそがせましたから、すぐに出来上りました。信長はこれを見て、ますくかんしんして、(略)。

六五〇 それからは秀吉のいきほひは、しげんに日一日と盛になりました。信長の古いけらいの勝家などはこれをきらつて、きたひましたが、(略)。

六五三 (略) 上杉謙信は強い大将であつた。その相手は武田信玄で、これも謙信におとらないいくさの上手であつた。

六五五 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。コレヲ月ノワトイヒマス。

六七五 間もなくむねの上からもちを投げると、大ぜいがあらそつてそれを拾ひました。これがすむと、むしろをしいて、お祝ひのさかもりがはじまりました。

七一六 (略) 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

七二九 (略) 忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。汝ノ孝行コレニスギタルコトナシ。」

七三三 正成ハタシテ戦死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。正行ハコレヲ見テ、カナシサノアマリ、(略)。

七三八 (略) 「汝ヲサナクトモ、父ノ子ナレバ、コレホドノワケノ分ラヌコトハアルマジ。(略)。父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、(略)。大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七四九 母ハ走りヨリテ、正行ノウデヲオサヘ、「(略)。」トテ、泣くくイマシメタリ。正行大イニカンジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナカリキ。

七五七 正行コノ度ハサイゴノ合戦セントテ、皇居ニマキリテ申上グルヤウ、「(略)。」(略)。天皇ハコレヲ聞キ、(略)。

七六八 正行ハソレヨリ戦場ニ向ヒ、(略)、一族ノ人々トトモニ戦死

ヲトゲタリ。コレ正成戦死ノ後十三年目ニシテ、(略)。

七七一 母がてぎはの大こんなます、これがあなかの年こしざかな。七二五 又母がかねくめづらしい草花をほしくと申して居りますから、(略)、これも二三種買つて來ていたゞきたうございます。

七二九 あなたと私は親類だうでございますから、どうかこれから安心願ひます。」

七二八 シカルニ目ハ見エズシテ、大學者トナリシ人アリ、塙保己一コレナリ。

七三二 保己一ハ(略)、人ニ書物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカバ、(略)。

七三三 サルニハ(略)。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。コレハチエガ少イカラデス。

七三九 (略)、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て來る。これを蠶の蛾といふ。

七四〇 (略)、大そうよい馬を賣りに來た者がありました。これを見た人は皆ほしいとは思ひましたが、(略)。

七四四 一豊も(略)、思はずひとり言をいひました。妻はこれ聞いて、(略)。

七四九 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、「どうぞこれで

その馬をおともめあそばしませ。」

七五一 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、「(略)。」一豊はおどろいて、「これは又どうした金か。

七五三 これまで貧しい暮らしをしてゐるのに、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあと一言いはなかつた。」

七五五 (略)、「あゝ、よい馬、名馬々々。誰の馬か。」とたづねました。けらいのものが、「これは一豊の馬でございます。」といひますと、(略)。

七五七 「日ごろ貧しい暮らしをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもとめた。(略)。」と、信長は大そう感心して、これが一豊の出世のもとになつたといふことであります。

七五九 母は(略)、一通の手紙を受取りたり。お花はあやしみて、「これにはちやんと三錢の切手はつてあるのに、なぜまたおあしを拂ふのですか。」と問へり。

七六〇 又新聞は二十匁までが五厘、書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これまたの手紙などよりはよほど安いのです。

七六五 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、これは今日のやうに早くは配達

が出来ず、質錢も高かつたのです。

八二六 〔略〕天照大神、〔略〕ハ

咫鏡を授けたまひて、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。その神勅によりて、代々の天皇はこれを宮中にあがめたまひしが、〔略〕。

八三四 〔略〕 かゝるたふとき御宮なれば、〔略〕、皇室及び國家に大事あれば、かならずこれを告げたまふ。

八五二 〔略〕 橋を渡りて神苑に入る。〔略〕、日本海海戦の記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。これより少し進めば、〔略〕老木枝をまじへて、高く天をつく。

八六五 〔略〕 北條時頼ノ母松下禪尼、〔略〕、ス、ケタル障子ノ破レヲツクロヒキタリ。禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、〔略〕。

八六九 〔略〕 禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「召使ノ中ニカ、ル事ヲヨク心得タル者アリ。ソレニ命ジタマヘ。」トイヒシニ、「我モコレ程ノ事ハ心得タリ。人手ヲカルニモ及バズ。」トテ、〔略〕。

八二〇五 〔略〕、雀といふものはずぐふえるもので、又大そう作物を荒すものなどといふことを話しました。農夫は之を聞いて、〔略〕。

八二五四 〔略〕、自分の家は戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。〔略〕。「成程これでは

いけない。」と、〔略〕、まだねてゐ

た妻を呼び起して、「〔略〕。朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」といつて、今見た事をすつかり話して聞かせました。

八四〇二 〔略〕 等ノ手數マデ數ヘ上グレバ、一箱ノマツチガ我等ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手ヲ要スルカラ知ラズ。之ヲ思ハバ一本ノマツチモソマツニハ使フベカラズ。

八四〇七 〔略〕 マツチハ〔略〕、明治八年ヨリ内地ニテモ之ヲ製造スルニイタレリ。

八四四五 大きなきかいの動くのも、汽車や汽船の走るのも、皆火の力の利用によるのである。これ程有用な火でも、ひよつとまちがふと大へんな事が出来る。

八四六七 〔略〕 サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタシンルキミナブジデスゴアンシンクダサイ 一郎「これようございますか。」

八四七九 〔略〕 サクヤウチヤケナイシンルキミナブジ 一郎「これようございますか。」

八四九四 〔略〕、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。中臣鎌足コレヲウレヘテ、〔略〕。

八五一二 〔略〕、皇子ノクツヌゲタリ。鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツキテ皇子ニサ、ゲシニ、〔略〕。

八五一三 〔略〕 鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツ

キテ皇子ニサ、ゲシニ、皇子モマタヒザマツキテ、之ヲ受ケ給ヘリ。

八五一四 〔略〕 鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマツキテ皇子ニサ、ゲシニ、皇子モマタヒザマツキテ、之ヲ受ケ給ヘリ。コレヨリ鎌足、皇子ト親シミ奉ルコトヲ得テ、〔略〕。

八五三四 〔略〕 皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デテ、入鹿ノ足ヲキル。

八五四五 〔略〕 鎌足〔略〕、天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。藤原氏ノ一門コレヨリナガクサカエタリ。

八七〇三 〔略〕 ある時口・耳・目・手・足等一同申し合せて、胃に向つていふやう、「〔略〕。〔略〕、左様心得られたし。」とて、これより後は耳は食事の知らせを聞きて知らぬ風をし、〔略〕。

八七一一 〔略〕 我の職務は食物をこなし、之を血の製造場へ送るにあり。

八七一九 〔略〕、新しき血出來ずして、諸君は皆却つて自ら苦しむにいたれり。これ諸君の自ら招く所なり。

八七三五 〔略〕、クビ太ケレバ、他ノ獸類ヲトラヘタル時、之ヲ運ビ去ルニ便ナリ。

八七四二 〔略〕 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル爪アリ。用ナキ時之ヲカクスコト、

虎モ猫モ相同ジ。

八七四九 〔略〕 虎モ猫モ〔略〕、シヅカニ他獸ニ近ヨリ、急ニ飛ビツキテ之ヲ捕フ。

八七五五 〔略〕 猫ノ中ニモ其ノ毛色虎ニ似タルモノアリ、之ヲ虎猫トイフ。

八八〇三 〔略〕 かくの如く日本を出で、海を越え、陸を越え、東へ東へと進めば、又元の日本に歸り来る。〔略〕。

八八七一 〔略〕 山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。〔略〕。敵ハ之を見テ、三方カラ大砲ヲウチカケタ。

八八七三 〔略〕 砲彈ニタフレル兵士ハ數ヘキレナイ。之ヲ見タ敵ハ更ニ新手法ヘテ、フタ、ヒ攻メヨセテ來タ。

八九一四 〔略〕、中佐ノイキハトウトウ其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ、「〔略〕。」トイツタガ、〔略〕。

九三〇五 〔略〕、尊、「〔略〕。」とて、老人夫婦に命じて酒を造らせ、之を八つの酒槽に盛り、〔略〕。

九四〇三 〔略〕 あやしみて尾をさきて見給ふに、一ふりの劍出でたり。尊「こは神劍なり、〔略〕。」とて、之を天照大神に奉り給ふ。

九四〇四 〔略〕 尊「こは神劍なり、〔略〕。」とて之を天照大神に奉り給ふ。天照大神、八咫鏡・八坂瓊曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしかば、〔略〕。

九45 天照大神、八咫鏡・八坂瓊曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしかば、これより三種の神器の一となれり。

九410 人皇第十二代景行天皇の御代、東國の蝦夷叛きしかば、天皇日本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

九55 倭姫命此の時天叢雲劔を尊に授け、「略。」と教へ給へり。尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、「略。」

九61 尊こゝにおいて天叢雲劔を抜きて、草を薙拂ひ給ふに、「略。」これより此の劔の名を改めて草薙劔と申す。

九64 尊はなほも進みて北に向ひ給ひしに、「略。」東國ことく平ぎたり。尊これより引返して、近江の賊を討ち給ひしが、「略。」

九68 草薙劔は尾張の國にとゞめ給ひしかば、宮を建ててそこにまつれり。今の熱田神宮即ち是なり。

九1410 (略) 細谷川ハ、(略)、數多ノ小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。是ヨリ南流シテ吾妻川ヲ合セ、(略)。

九1610 本流ハ下リテ、(略) 太平洋ニ入ル。下總ノ手賀沼・印旛沼・長沼等ノ水ハ南ヨリ之ニ注ギ、(略)。

九1610 本流ハ下リテ、(略) 太平洋ニ入ル。(略)、常陸ノ霞浦・北浦ノ水ハ北ヨリ之ニ注グ。

九191 (略) 我が軍艦高千穂の一水兵が女手の手紙を読みながら泣いてゐた。ふと通りかゝつた大尉が之を見て、「略。」

九202 水兵は(略)、「(略)」。どうぞ之を御覽下さい。」といつて、其の手紙を差出した。

九221 (略) 如何ばかりの思にて、此の手紙をしたゞめしか、よく御察しこれあり度候。」

九222 水兵は(略)、其の手紙を差出した。(略) 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、「略。」

九232 豊島の戦になかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。併し是も仕方がない。

九264 歩兵は平時凡そ百五十人を一中隊とし、之を三箇小隊に分つ。

九3010 蒸氣機關は二百年程前に發明せられたが、(略) 始めて之を船に用ひて汽船を造つたのは、(略)。

九311 蒸氣機關は二百年程前に發明せられたが、(略) 又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、(略)。

九318 フルトンが工夫に工夫を重ねて造つた最初の船は、(略) 不幸にも直に沈んでしまつた。フルトンは之に驚かず、(略)。

九329 其の後は何の障もなく、百五十マイルを三十二時間で走つた。之を聞いて、(略)、皆其の成功を喜んで

だといふことである。

九329 其の後は何の障もなく、(略) 之を聞いて、是までフルトンを笑つた人々も大いに感心して、(略)。

九371 大水などの時には、水のひくまでは幾日でも泊つて待つてゐなければならなかつた。其の頃之を川止といつた。

九409 (略)、世ノ轉變ノ如何ニ甚ダシキニ驚クナラン。然レドモ自然ノ轉變ハ更ニ是ヨリモ甚ダシキモノアルヲ知ラズヤ。

九419 噴火一タン止ミテ後、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。上二子・下二子・神山・駒岳是ナリ。

九479 (略)、一同は行くべき方にまよひて、(略) 空しく一日を過せり。之が爲に一行の用意せる水も残り少になれり。

九4710 又一人「然らばかの子供の乗れる駱駝を殺さん。」といふ。之を聞けるアリの驚は一方ならず、(略)。

九487 夜明くれば、砂の上に新しき駱駝の足跡あり。之に力を得て、南へくと急がするに、(略)。

九562 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、(略)。(略)。故ニ或地方ニテハ之ヲドビンワリトイフ。

九568 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモ

ノアリテ、(略)、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。(略)。或動物ハ之ニ反シテ、周圍ノ物トマギレザルヤウ、コトニアザヤカナル體色ヲ有ス。

九573 或動物ハ(略)、コトニアザヤカナル體色ヲ有ス。(略)。他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、(略)。

九573 他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、(略)。

九6110 飲食に注意し、(略)、常に日光に浴して、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

九623 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、景行天皇の御代日本武尊之を征し給ひ、(略)。

九624 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略)、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、(略)。

九627 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略) 桓武天皇の御代に至り、將軍坂上田村麻呂之を平定して、(略)。

九6310 かばかりの大功ありし人故、(略)、其の薨ぜし時、天皇は深く之ををしみ給ひき。

九6310 田村麻呂は(略)。(略)。(略)、其の薨ぜし時、天皇は深く之

ををしめ給ひき。之をうむりし時は、(略)。

九64 5 扇を使へば風起り、むちをふるへば音を發す。是我等の周圍に空氣のあればなり。

九65 1 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

九65 3 其のしるしは水にぬるることなかるべし。是茶わんの中に空氣ありて、水の進入するを防げばなり。

九65 10 然れども空氣の流通餘りに強き時は、却つて火の消ゆることあるべし。燈の火の風に吹消さるゝが如き是なり。

九66 5 帆かけ船の水上を走る、たこの空高く上る、是皆人の自然の風を利用したるなり。

九72 9 暴風雨にて、川近きあたりにほつゝく立退きたる者もこれあり、(略)。

九72 10 人も眠につきたる者これなく候。

九74 2 隣村は大半水中にあり、救をもとむる聲かまびすしく候故、是は大變なりと、直ちに老母と子供を裏山に立退かせ、(略)。

九74 7 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、(略)。

九74 8 其の他にはかく別の異狀これなく、(略)。

九75 2 死者四人、傷者四五十人もこれあり候。

九77 2 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒオキテ、(略)郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、全部ハリ終ヘタル時、之ヲ郵便局ニ差出シテ、(略)。

九78 10 東風吹かばにほひおこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな。是は菅原道真が(略)、庭の梅に別ををしてみてもめる歌なり。

九88 10 或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九89 1 或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。貨幣即チ是ナリ。

九89 6 今ノ文明諸國ノ貨幣ニハ主トシテ金銀ヲ用フ。是金銀ハ(略)等、貨幣トスルニ最モ便利ナレバナリ。

九90 6 銀貨・銅貨ハ廣ク用ヒラルレドモ、金貨ハ日常流通スルコト少シ。是金貨ニ代ル紙幣ノ行ハル、ニヨル。

九91 2 我が國ノ紙幣ハ(略)ノ四種流通ス。之ヲ日本銀行ニ持行カバ、(略)。

九93 9 其の上にかゝる朱塗の橋、美觀先づ目を驚かす。是即ち有名なる神橋にして、(略)。

九94 9 次の門を唐門といふ。(略)。

之を過ぎて拜殿あり、(略)。

九95 1 之を過ぎて拜殿あり、拜殿の後に本殿あり、いづれも普盡し、美盡せり。是より西南にあたりて、家光の廟あり、(略)。

十4 8 全國無數の佛像中奈良の大佛の大きき日本一なることは諸子すでに之を知れり。

十8 8 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。されど森林のあたふる利益は是のみには止らず。

十15 9 紫式部は(略)、兄の書を讀むを聞きゐて、直ちに之をそらんじ、(略)。

十16 3 夫に別れて後、宮中に召されて、上東門院に漢文・漢詩を教へ參らせたり。是程の才學をもちながら、(略)。

十17 3 ある雪の朝、皇后は(略)、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、(略)。(略)。是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかゝげて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、(略)。

十21 4 活版所では、活字拾ひが(略)。(略)。印刷が出来上つてから本にとどるまでも、(略)。(略)。其の上に表紙をつけて、(略)。(略)。是は活版刷の本の造り方であるが、この外に木版刷の本もある。

十22 9 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落

シ、(略)。良(略)、命ノマ、ニ拾ヒ取りテサ、グ。老人足ニテ之ヲ受ケ、笑ヒテ去ル。

十24 7 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテ(略)、其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。受ケテ見レバ世ニモ得難キ兵書ナリ。良大イニ喜ビテ、朝夕之ヲ讀ミ、(略)。

十27 3 手放し難き商用これあり候へば、手紙を以て御祝ひ申上候。

十31 6 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、(略)。(略)。二人ガ之ヲヒロメントセシハ、(略)。

十31 7 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、不作ノ年餓死スル人ノ多キヲアハレミ、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

十32 2 直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。

十32 4 數年ナラズシテ石見一國ニヒロガリ、是ヨリ後ハ五穀不作ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レリ。

十32 6 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。

十33 5 罪人ドモハ(略)、餓死スルモノ年々少カラザリキ。昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、(略)。

十33 6 図 昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、或年試ミニ之ヲ作リシニ、(略)。

十35 6 図 談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、すぐに立つて、椅子をゆづりました。人に親切なことは是でも知れると思ひました。

十40 4 図 團圓 二人の我が子それ／＼に、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目。』と、大將答力あり。

十42 7 図 明治九年頃ヨリモツバラ花筵ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)。

十43 8 図 (略) 唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國ヘ送りシニ、(略)。

十47 4 図 模様には(略)、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。唐草模様・波模様のように是なり。

十48 3 図 色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

十50 10 図 手塚の家來は組ませじと中をへだつれば、敵は之をつかんで、片手にひつさぐ。

十52 4 図 「光盛、曲者の首取つて候。(略)。若者かと思へば、面におびたゞしきしわたゝめり。老人かと思へば、髪つやくと黒し。何者にてか候ふらん。」義仲之を聞きて、(略)。

十54 5 図 白髪頭にて若き人と先を爭ふものはぐかりあり。悲しきは老の白髪なり。』といひしにたがはず、墨を塗りて候。』とて、之を洗ふに白髪の頭となれり。

十54 6 図 (略)、之を洗ふに白髪の頭となれり。義仲之を見て、(略)。

十56 5 図 毎週土曜日の午後には居室・兵器・寢具其の他一切所持品の清潔検査これあり候。

十57 1 図 兵舎内にては歌をうたふ事、高聲にて談話する事、(略)等堅く禁ぜられ居り候。多人數の共同生活に候へば、是はもとより當然の事に候。

十57 10 図 小生の如く平素労働になれたる者には、術科もつらきことはこれなく、(略)。

十59 1 図 (略)、又日曜日等には忠臣・義士に關する講談等もこれあり、面白く有益に存候。

十60 9 図 足尾銅山ハ(略)、今ヨリ三百年前、此ノ地ノ人始メテ之ヲ發見セリトイフ。

十62 6 図 發掘シタル銅鑛ハ、(略)坑外ニ運ビ出シ、之ヲ選鑛場ニ送ル。

十62 9 図 カク選リ分ケタルモノハ之ヲ製煉場ニ送ル。

十63 6 図 (略)、今ヤ足尾町ハ(略)、學校・病院・銀行等皆備ラザルナシ。銅山ノ盛ナルコト、是ニテモオシハカラルベシ。

十69 6 図 水夫等はなほほばしらに抱きつきて、息も絶え／＼に救を呼べり。少女は之を見て、(略)。

十72 6 図 其の湯には大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。是種々の塩分をふくめるが故なり。

十74 9 図 湯元は一箇所にして、之を戸毎の浴室に引けり。

十76 2 図 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ送ル。

十77 3 図 目ハ色・形ヲ見、耳ハ音聲ヲ聞キ、鼻ハ香ヲカギ、口ハ味ヲ味ハヒテ、各之ヲ腦ニ報告ス。

十78 2 図 又筋肉ハ之ヲ用フルニシタガヒテ發達ス。

十78 4 図 擊劍家水夫等ノ手ノ太キ、郵便配達夫・車夫等ノ足ノ強キ、大工・カデヤ等ノタナゴコロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用スルヲ以テナリ。

十78 9 図 (略)、常ニ身體ヲ大切ニシ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

十79 5 図 是は北海道に住するあいぬ人を畫がけるものにて、左は男子、右は女子なり。

十80 2 図 あいぬの男子は髪とひげとを長くのばし、耳に金屬製の輪をはめ、こしに小刀をさぐ。女子は(略)。(略)。あいぬの風俗はこれのみにて既に内地人と同じからず。

十81 3 図 食物は(略)、鹿の肉は珍味として之を賞美す。

十81 7 図 屋内には中央にゐろりを造り、一家之を圍みて談笑す。

十81 9 図 あいぬは時々子熊を捕へ來り、一年の間養ひたる後、之を殺して(略)。

十82 1 図 殺したる熊の頭は垣にかけ、永く之を保存するを以て、(略)。

十85 8 すべて家畜はよく勞らなければならぬが、とかくに之をいぢめる風がある。

十90 5 図 拜啓、來る八日午後一時半より(略)耕地整理に關する講話これあり候。

十91 1 図 御村も(略)、整理の必要これあり候様存ぜられ候間、(略)。

十91 2 図 (略)、御差支これなく候はば、(略)、御來會相成候ては如何。

十92 2 図 來る八日講話會これあり候由にて(略)。

十92 5 図 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、(略)。

十95 10 図 大小ノ燈籠左右ニ多く、(略)。毎年節分ノ夜盡ク之ニ點火ストイフ。

十100 5 図 (略) 談山神社ノ一ノ鳥居アリ。コレヨリ谷川ニソヒテ、坂路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、(略)。

十14 2 図 陵に至る路のあたり櫻樹多し。之を中の千本といふ。

十14 5 図 尚進めば、水分神社・金峰神社等あり。此の附近にも亦櫻樹多し。之を奥の千本といふ。

あり。一種の草の實を食用とするを以て、(略)、ひたすら此の草の成長を保護し、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。是即ち農業の收穫に異ならず。

十一912 例へばこゝに一種の石あり、(略)、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、(略)。

十一914 日光・空氣の如きは、(略)、隨意に得らるゝものなれば、之を買ふ必要なく、(略)。

十一916 されど水は大都會などにては、時として價を生ずることあり。是飲料水とぼしくして、意のまゝに之を得ること能はざればなり。

十一917 されど水は(略)。是飲料水とぼしくして、意のまゝに之を得ること能はざればなり。

十一921 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。

十一926 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人ある時は、(略)。(略)之に反して、同様な賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。

十一938 (略)、靴の價にはかに高くなりて、(略)。かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、(略)。

十一939 (略)、又他の職業に従事

する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。

十一942 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、靴の價にはかに高くなりて、(略)。(略)。又之と反對に、價次第に安くなりて、普通の價よりも下るに至る時は、(略)。

十一961 (略)、海岸も海水厚く凍結し、流水の流れ来る事もこれあり候へば、(略)。

十一971 (略)、全島第一の良港に候。是より一條の大道遠く北へ通じて(略)。

十一998 (略)、夏より秋にかけてこゝに集る臘腸獸は數千頭にも達することこれあり候。

十一1005 (略)、蝦夷松・落葉松・白樺等一面に生ひ茂り、之を伐採せば少からぬ收益と相成るべく、(略)。

十一1013 (略)、今後尚着手すべき事は多々これ有り候。

十一1029 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽・張飛等ノ諸將ヲヨロコバズ。

十一1031 備サトシテ曰ク、「(略)」。願ハクハ再ビイフコトナカレ。」ト。

十一1036 (略)「我が子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。」

十一1036 (略)「我が子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。」

クンバ、之ヲタスケヨ。若シ不才ナラバ、君自ラ之ニ代レ。」

十一1039 (略)「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」

十一1041 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「(略)。」トイヒシニ、(略)。(略)。孔明是ヨリ幼主ヲ輔ケ、(略)、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

十一1053 孟獲答ヘテ曰ク、「此ノ如シト知ラバ何ゾ敗レン。」ト。孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。

十一1053 孟獲答ヘテ曰ク、「(略)。」孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。

十一1059 或時將軍馬謖、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。孔明、謖ノ舊功ヲ惜シミシカド、(略)、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、(略)。

十一1062 蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。

十一1076 朝鮮は(略)。(略)。床下に土石を盛り、數條のみぞを造つて、一方の口から火をたいて室内を温める。之をオンドルといふ。

十一1077 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。

十一1123 池には大抵鯉・鰯等を養

ひて、二年毎に之を賣るに、其の利少からず。

十一1133 其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵するが故に、兒童は皆よく之になつて、學校を思ふ心厚く、(略)。

十一1135 村會議員も全村一致して之を選擧し、互に競争するが如きこと更になし。

十一1139 (略) 學校の經費を議するに當り、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。

十一1144 耕地整理は縣下諸村に先んじて着手し、昨年既に之を完成せり。

十一1145 耕地整理は縣下諸村に先んじて着手し、昨年既に之を完成せり。之によりて用水路の改修行はれ、(略)。

十一1184 修身の徳是なりと、教育勅語のり給ひ、(略)。

十一1144 教育勅語と戊申詔書とは、我等が身を修め、世に處するの道を示し給へるものにして、之を拜讀するもの誰か(略)を仰ぎ奉らざらん。

十二52 我が海軍は初より敵を近海に迎へ撃つのを定め、(略)、遂に之と會して、世界史上空前なる大海戦となれり。

十二64 敵の先頭部隊は直ちに砲

火を開始せしが、我は之に應ぜず、
(略)。

十二116 勝報上聞に達し、陛下の下し給へる勅語の中に、「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚^{ホコ}フ。」と仰せられたり。將卒之を聞きて感泣せざるはなかりき。

十二138 船ヲ組立テルニハ、略、其ノ上ニ先ツ龍骨トイフモノヲ置ク。コレハ人ノ脊骨ノ様ナモノデ、(略)。
十二1310 (略)、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。之ヲ肋材トイフ。

十二142 (略) 先ツ龍骨トイフモノヲ置ク。(略)、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。(略)。肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支へ、(略)、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。コレデ船ノ大體ノ形ガ出來ル。

十二143 コレデ船ノ大體ノ形ガ出來ル。コレハホンノ大體ノ構造ノ話デ、(略)。

十二174 図 (略)、中央氣象臺は(略)、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。之を全國天氣豫報といふ。

十二178 図 是等の豫報は氣象臺・測候所を始め、官廳・諸役所等の前に揭示せらるゝを以て、我等は之を見て、(略)。

十二182 図 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、中央氣象臺は全國

暴風雨警報を發して之を豫告す。

十二183 図 又一地方に荒模様ある時は、測候所は地方暴風雨警報を發して之を豫告し、(略)。

十二189 図 又一地方に荒模様ある時は(略)、警報の信號を各信號所に掲ぐ。(略)。故に今より出帆せんとする船は、之を見て出發を見合せ、(略)。

十二213 動物は呼吸作用によつて、空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出す。若し之を消費するものがなければ、(略)。

十二217 然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。

十二228 金魚を細口のびんに入れて、二三日も水を取換へないと、金魚は死んでしまふ。是は水中に於てある酸素が吸盡されるからである。

十二231 若し其の中に青い水草を入れて置けば、水を取換へなくても金魚は割合に長く生きてゐる。是は前にいつた様な關係が(略)行はれるからである。

十二302 図 勝商城に向ひ、高らかに號んで曰く、「(略)。圍の解けんは二三日の内にあらん。」と。勝頼怒りて之を殺せり。

十二313 図 形名の妻、(略)、侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。賊之を聞きて、城中兵尚多からんと

思ひ、(略)。

十二337 図 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二349 (略)、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。敷地總坪數何千坪、建坪何百何十坪、之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、(略)。

十二377 図 會津は奥羽重要の地にして、一日も守なかるべからず。將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。

十二378 図 將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。高虎「(略)。」とて之を否む。

十二3710 図 図 「汝多年嘉明と不和なりと聞く。今之を推舉するは如何に。」

十二381 図 會津は奥羽重要の地にして、一日も守なかるべからず。(略)。「高虎の嘉明と相惡むは私の小事なり。是は公の大事なり。」

十二387 図 支那の昔趙といふ國に蘭相如といふ賢臣あり。敵國秦に使用て功ありしかば、趙王厚く之を用ふ。

十二388 図 (略) 蘭相如といふ賢臣あり。(略)、趙王厚く之を用ふ。(略) 廉頗之を見て心安からず、「(略)。」と言ひ居たり。

十二3810 図 (略) 廉頗(略)、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居

たり。相如聞きて、力めて之を避け、(略)。

十二391 図 相如聞きて、力めて之を避け、廉頗の來るを見れば、車を轉じて逃ぐ。相如の從者皆之を恥づ。

十二396 図 相如の曰ふやう、「(略) 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」といふ。廉頗之を聞きて、深く其の非をさと、(略)。

十二402 図 昔箱根山の噴火せしことは我等既に之を學べり。

十二429 図 其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。

十二439 図 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。是即ち農業の起原なり。

十二455 図 我が國の農業中最も開けざるは牧畜の業なり。是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。

十二465 図 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)。

十二469 図 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。是大なる誤解なり。

十二4610 図 農業は我等が生活に必要

なる材料を作り出す所以にして、國家一日もこれなかるべからず。

十二54 5 門司にて乗船し(略)大連に着す。是我が南滿洲鐵道の起點なり。

十二56 8 (略)、日清・日露兩役に有名なる旅順口に達す。日露の戰役に於ては、(略)、我が軍は苦戰十一箇月にして之を陥れたり。

十二58 9 安奉線は(略)、韓國の縦貫鐵道に連結す。此の鐵道は日露戰役中に急設したる輕便鐵道にして、明治四十二年よりこれが改築に着手せり。

十二59 5 テームスとセーヌとは(略)、河幅はるかに廣く、之に架したる橋は何れも壯大にして、(略)。

十二60 10 (略) 壯大なる建築の数々高く中空にそびゆるのみならず、人家も多くは六七層にして、町幅も亦之に適へり。

十二66 10 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、(略)同一の進路を取りて、山あれば越え、河あれば泳ぎ、道に當るもの一として之をさまたぐるこ能はざりきといふ。

十二67 9 南亞米利加の森林にオレンジの熟する季節には、數多の猿(略)集り來りて之を食ひ、(略)。

十二69 4 (略) レミングと稱する地鼠の一種なり。(略)。時としては

幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、遠く之を望めば、(略)。

十二71 2 世を憤らんよりは、進みて之を救済すべし。

十二71 3 人をねたまんよりは、勉めて之に勝らんことを工夫すべし。

十二71 9 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。是即ち遠きを慮る所以なり。

十二72 6 「疏食をくらひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。

十二74 6 (略)、便利なる航路を開かんことは歐洲一般の希望なりき。(略) コロンブスは最も熱心に之を考へ居たり。

十二77 8 パロスを出帆して七日目に、亞弗利加の北西岸に近きカナリヤ島に着し、(略)更に西へ向つて航行せり。是より先は未だ航行せしことなき大洋なれば、(略)。

十二79 7 船員皆歡喜して、コロンブスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。

十二80 1 (略)、コロンブスは(略)眞先に上陸し、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。是今の西印度諸島の一なり。

十二84 6 銅貨といはず、金銀貨といはず、雨の降る様に手當り次第に投

込む。またゝ間に帽子に一ぱいになつた。老人は之を袋に移して、再び帽子を差出す。

十二86 1 四十七士の事蹟は兒童・走卒も之を知らざるはなく、(略)。

十二87 2 喜劍(略)、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。良雄平然頭を低くして之を食ひ、(略)。

十二87 8 喜劍(略)、義士復仇の舉を聞き、(略)。是より暇を請ひて郷里に歸り、(略)。

十二88 2 喜劍(略)、刀を抜き切腹して終る。時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

十二93 8 「孔子は年少にして禮を好み。我死せば、汝必ず之を師とせよ。」

十二93 9 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く、「孔子は年少にして禮を好み。(略)」と。子其の遺言を奉じて、往いて學べり。是孔子が十七歳の時なりき。

十二95 2 其の時齊の有司進みて戲樂を奏せしかば、孔子は禮に反せるものありとて之を止めしむ。

十二96 1 智徳の最も圓滿に發達せる人格は孔子に於て之を見るべし。

十二96 8 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母(略)直ちに其の機を斷ち、孟子を戒めて曰く、「汝の今學を廢するは我が此

の機を斷つが如し。」と。孟子これより感奮・勉勵して(略)。

十二97 7 (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

十二99 9 汽車・汽船・電車等の交通機關、博物館・圖書館等の公共營造物に在りては、敏速と規律とを尊ぶものなれば、之に必要な諸種の規則あり。

十二100 6 又獨逸にては圖書館の書籍を借受くるに(略)。之を返すにも(略)。

十二100 9 外國人に接するに(略)等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

十二101 1 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、(略)。

十二101 1 國力我に劣れる國民を見て、(略)、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)。

十二102 9 何をか自治の精神といふ。地方人民協同一致して、自ら地方公共の事に任じ、誠意其の團體の爲に力を致すの精神なり。

十二103 9 まして威力を以て強制し、私利を以て勸誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、(略)。

十二104 4 公吏・議員等直接公共の

ると、二万匹の蠶をかふのに、(略)

眠るひまもない程いそがしい。

七39 山内一豊が織田信長のけらいになつたばかりのころ、大そうよい馬を賣りに來た者がありました。

八36 夕暮に咲く月見草、月見のころも近づけば、萩のうねりにやどる玉、(略)。

八50 皇極天皇ノ御代、蘇我入鹿(略)不忠ノフルマヒ多カリキ。(略)此ノ頃中大兄皇子ト申スカシコキ皇子アリキ。

八86 時ハ八月三十一日ノ朝日モマダ上ラナイ頃デアツタ。

九33 其の頃イギリスのある會社で、馬車鐵道をこしらへようといふ話があつたが、(略)。

九36 (略)富士川・大井川・天龍川なども、其の頃は橋が無かつたら、(略)。

九37 其の頃之を川止といつた。

九43 祖父様は(略)、私どもの目をさまし候頃には、はや朝顔のはちをならべて、(略)。

九54 タトヘバ北國ニスム野ウサギハ、其ノ毛色(略)、雪ノ降ル頃トナレバ、全ク白色ニ變ジ、(略)。

九68 梅の實の熟する頃降續く五月雨は、(略)。

九67 (略)、夏の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶもの最も多し。

十15 一條天皇の頃には才學すぐ

れたる宮女多かりしが、(略)。

十15 紫式部は幼き頃より物覺よく、(略)。

十61 然レドモ其ノ頃ハ掘取リテフキ分クル方法ナホ不十分ナリシカバ、(略)。

十一4 吉野には古く離宮あり、應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、(略)。

十一4 吉野には古く離宮あり、應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、(略)。

十一13 此の頃備前の國に兒島高德といふ武士あり、(略)。

十一41 吉野の朝の頃、赤松光範(略)、散々に撃破られたり。

十一54 隊中にビエールといふ年の頃十三四ばかりの少年鼓手があつた。

十二78 又嚴冬の頃は瀑水落つるに隨ひ氷結して、(略)。

十二37 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、會津の城主蒲生忠郷死せり。

十二69 満目の廣野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

十二81 コロンブスの遠征時代は(略)、北條早雲が小田原城に據りて、次第に其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。

ごろうじん「御老人」(名)1 御老人九71 御一家御無事に御座候

や。御老人・御子供衆も御大勢の事故如何と御案じ申し居り候。

ころがす「転」(五)1 ころがす「一」

三22 私をころがすのはだれにもできませんが、(略)。

ころがる「転」(五)2 コロガル 轉がる「一ツーレ」

四60 (略)、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。

九84 熊吉はつるりとすべつて、そのはずみにころごと轉がつて、池の中へ落ちこんだ。

ごろくすん「五六寸」(名)1 五六寸六38 朝おきると、雪が五六寸もつてゐた。

ごろくそう「五六艘」(名)1 五六そう三60 右の方に五六そうかたまつてゐるのは、今あみをおろしてゐるのです。

ごろくちよう「五六町」(名)1 五六町七28 一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。

ごろくねん「五六年」(名)1 五六年八19 (略)、牛も段々減り、畑の取高も年々に少くなつて、五六年の中によほど財産を減らしました。

ころころ(副)1 ころころ九84 熊吉はつるりとすべつて、そ

のはずみにころごと轉がつて、池の中へ落ちこんだ。

ころす「殺」(四・五)16 コロスころす 殺ス 殺す「一サ・一シ・一ス・一セ」ひいころす・きりころす・さしころす

二54 オダイサンハ(略)、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。

六49 (略)、信長は京都で光秀といふけらいにころされました。

六65 大テイノケモノハ一打デコロサレテシマヒマス。

七33 (略)、さなぎをころしておいて、それから繭をにて、絲を取るのである。

八53 入鹿ツヒニ殺サレタリ。

九47 「若し明日中に水のある所に着かずば、駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なかるべし。」

九49 「然らばかの子供の乗れる駱駝を殺さん。」

十25 若シ勇氣アラバ我ヲ殺セ。

十25 殺ス能ハズバ、我が勝ノ下ヲクバレ。」

十54 (略)、義仲二歳なりしを、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。

十81 あいぬは時々子熊を捕へ來り、(略)、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。

十81 殺したる熊の頭は垣にかけ

て、永く之を保存するを以て、(略)。

十一144 〇志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。身を殺して仁を成すことあり。』とかや。

十一562 しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。(略)。さては生きてゐるのか。あの勇ましい少年を殺してはならぬ。

十二302 〇勝商城に向ひ、高らかに號んで曰く、「(略)」と。勝頼怒りて之を殺せり。

十二306 〇伊企離却つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、遂に、殺されたり。

ごろっぴやくまんえん「五六百万円」(名)1 五六百萬圓

十442 〇近年ノ輸出高ハ年々五六百萬圓ヲ下ラズトイフ。

ごろっぽん「五六本」(名)1 五六本

四133 〇クリ林ノ中ニハ、ドンダリノ木モ五六本アリマス。

ころぶ「(五)4」コロブ ころぶ

『バーブ・バーブ』

三273 〇おまへがころべば、わたしもころぶ。

三274 〇おまへがころべば、わたしもころぶ。

三276 〇走れよ、走れよ、ころばぬやうに。

六427 〇コバヌ先ノ杖。

ころも「衣」(名)1 衣

十一114 〇秋の夜長には衣打つきぬたの音が村々相應じて聞える。

コロンプス「課名」2 コロンプス

十二目6 第十九課 コロンプス

十二735 第十九課 コロンプス

コロンプス「人名」16 コロンプス

十二737 〇始めて西半球の陸地を発見したるは伊太利人コロンプスにして、(略)。

十二745 〇ゼノアに生れて幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンプスは最も熱心に之を考へ居たり。

十二747 〇コロンプスは初より世界は球形なりと信じ、歐羅巴の西海岸より西を指して進まば、印度の東海岸に到着すべしとの意見を抱けり。

十二7510 〇(略)、地球を餘りに小さく見たるコロンプスの誤は遂に此の大発見を成さしむる基となりしなり。

十二762 〇コロンプスは葡萄牙に客遊中、熱心に此の説を主張したりしが、(略)。

十二767 〇西曆一千四百九十二年八月三日の朝、今日はコロンプスが遠征隊出發の日なりとて、西班牙パロスの港は未明より人の山を築けり。

十二7610 〇(略)、乗組員の運命をあはれむ者、コロンプスの暴舉をあざける者、皇后の無謀をそしる者、口々に語り合へり。

十二783 〇船員は失望の餘り、コロンプスを海に投じて歸國せんと謀るに至れり。

十二784 〇コロンプスは獨り堅固なる決心を以て動かざること山の如く、船員も(略)命令に服せざるを得ざりき。

十二796 〇船員皆歡喜して、コロンプスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不従順なりし罪を謝せり。

十二798 〇一千四百九十二年十月十二日、コロンプスは深紅の美服を着し、(略)、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、(略)。

十二802 〇かくてコロンプスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。

十二804 〇(略)、皆争ひてコロンプスを歓迎し、皇后も亦コロンプスを引見して、厚く其の勳功を賞せり。

十二805 〇(略)、皇后も亦コロンプスを引見して、厚く其の勳功を賞せり。

十二807 〇其の後コロンプスは數回の航海を試みしが、(略)、オリノコ河口に達し、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

十二809 〇コロンプスの遠征時代は我が國後土御門天皇の御代にして、(略)。

こわい「(形)1」コハイ『一』

二435 〇コハサウナ目ヲシテ、ニランデキルデハアリマセン

カ。」

こわがる「(恐) (五)2 こはがる

『ツール』

五808 よしつねは (略)、「進めく。」とさしづをしたが、馬もこはがつてすくんでしまひ、(略)。

七879 〇ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんせんか。

こわし「(強) (形)1 こはし『一ク』

九632 〇田村麻呂は (略)、ひげは針金の如くこはく、力あくまで強き人にて、(略)。

こわす「(壞) (五)1 コハス『一シ』

二577 (略)、ソノウスヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイテシマヒマシタ。

こわれる「(壞) (下)3 こはれる

『一レ』

三233 かたいものにあたればこはれます。

六475 ある年、城のへいが百間ばかりこはれた事がありました。

八325 僕の家で一度つるべの金たががこはれた時、つくろひを頼んだ事があつたが、(略)。

こん「(紺) (名)4 紺

八639 木綿織物ニ紺や淺黄やカスリヤ其ノ他色々ナ縞ガアルノハ、(略)。

八643 紺や淺黄やカスリハアサデ染メマス。

八644 コク染メタノガ紺デ、ウスイ

ノガ淺黄デス。

八66 1 其ノ中へ白絲ヤ白布ヲ入レテ、紺ヤ淺黄ニ染メルノデス。

こん 凸いちこん

こんいる「紺色」(名) 1 紺色

八65 9 藍玉ヲ水ノ中へ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。

こんがすり「紺紺」(名) 2 紺がすり

九12 10 其の節別に老人向きの紺がすり上物十反だけ御見立の上、(略)御送り相成度願上候。

九13 9 次に老人向きの紺がすりは、(略)少々間に合ひかね候事と存候。

こんきよち 凸かいぐんこんきよち

コンクリート(名) 1 コンクリート

十二15 8 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ疊ムカ、コンクリートデ固メルカシテアル。

こんげんどうがわ「権現堂川」(地名)

3 権現堂川 権現堂川

九15 8 北ナルヲ赤堀川トイヒ、南ナルヲ権現堂川トイフ。

九15 10 赤堀川ハ關宿ノ北ニテフタ、ビニツニ分レ、(略)、一ハ西南ニ向ヒ、権現堂川ニ合シテ江戸川トナル。

九17 國 権現堂川

こんご「今後」(名) 2 今後

八95 8 略、海陸運輸の便益、開け、産業の發達は今後いよいよ著しからん。

十一101 2 略、諸種の經營追々成功致候へども、今後尚着手すべき事は多々これ有り候。

こんこうせんか「金剛山下」(地名) 1 金剛山下

十90 1 略、やみの天地をまた元の 御代に返すは誰が任ぞ。金剛山下に忠士あり。

こんざつ「混雑」(名) 2 混雑

十二60 6 されど十字街頭に立てる巡查の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雑を生ずることなし。

十二89 2 略、諸道具の置場處を一定し、(略)急ぎの場合にも混雑なく、暗き時にも手探にて用を足し得る様に、極りよく整へ置くは(略)。

こんざつ「混雑」(サ変) 1 混雑す

「一せ」

十二88 7 出入口に、はき物の置亂れたる家には、(略)。出入口の混雑せる程なれば、(略)、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

こんざつ「混雑」(サ変) 1 コンザツスル「一し」

七37 6 略、人ハ皆前へ前へト進ンデ行ツテ、後へハ引キカヘサナイカラ、通り道ノセマイ割合ニハコンザツシナイ。

こんじやく「今昔」(名) 1 今昔

九81 3 去年の今夜清涼殿の御宴に

待し、(略)、其の御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。道眞今昔の感にたへず、(略)。

こんだて「献立」(名) 1 献立

十一66 3 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

こんど「今度」(名) 13 コンド こんど 今度

二64 4 略、「モウ一ドハナヲサカセテミヨ。」トオホセニナリマシタ。コンドハイクラハヒ

ヲフリカケテモ、ハナハスコシモサキマセン。

三5 1 ウツクシイサクランハナガ、マドノソトカラノゾイテ、(略)。(略)。コンドハウツクシイ

小トリガマドノソトカラノゾイテ、(略)。

四33 7 其の時あねのおはるは、(略)。(略)は何でつくり

ますか。(略)。(略)。あにの次郎が又よこから、「こんどはにいさん

がきくが、(略)。

四40 3 「コノアヒヒダ大キナフカ

ガ來タ時ニ、君ヲハズキブンアワテマシタネ。(略)。(略)、「コンドハタヒヤヒラメナド

ハキツトヤラレタニチガヒナイ。

四81 7 略、船がゆれて、まと

がさだまりません。しばらく目をつぶつて、(略)、目をひらいて見ると、こんどは扇が少しおちついて見えます。

五21 3 「はい、これですか。」と、

おはなはざるの中のとけのこをなべの中へ入れました。「こんどは何の御用をいたしませう。」

五45 1 汽車ハ急ニマツクラナ所へハイリマシタ。(略)。(略)、又暗クナツテ、何モ見えマセン。クレドモ

コンドハミジカイトンネルデ、(略)。

五54 2 略、ケモノガ勝チサウニナツタノヲ見テ、ニハカニ「(略)。」ト

イツテ、ケモノノミカタニナリマシタ。シバラクタツト、ケモノガ負ケ

サウニナツタノデ、コンドハ「(略)。」トイツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。

六51 3 秀吉はもう日本中に敵がなくなつたから、こんどは朝鮮せいばつをはじめました。

八24 4 その中に下男が麥俵をかついで裏門から出て來ました。(略)。取りもどして歸つて來ると、今度は下

女がばけつをさげて、牛小屋から出て來ました。

八84 7 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戰地ヘ向ツタガ、中佐ハ今度ノ出

陣ヲ幸ニ、(略)、メザマシイ働ヲシナケレバナラナイト、(略)。

十66 2 略、急處めがけて破裂矢をし

かけた銃を打つ。(略)。ボートは

(略)、又も鯨に近寄り、今度は銃を以て破裂矢を打込む。

十一739 図 (略)、行きてうかゞへ

ば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寝起する様なり。(略)。其の後又夜更けてうかゞひ見るに、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の卧したる様をなせり。

こんどう 母にこんどうたいいきねんひ

こんな(形状)25 コンナ こんな

二125 図 「コンナ小サナ川ニハ

コヒハキマセン。」

二407 図 「モウコンナニ大キクナリマシタ。」

三26 図 サクラノ木ハ、ヨソノクニニハ、コンナニタクサンアリマセン。

三84 図 「ボクハモウコンナニタクサンツミマシタ。」

三281 四五日マヘニアタマヲダシタケノコガ、モウコンナ

ニノビテ、(略)。

三615 図 おぢさんのおみやげに貝を、こんにちにたくさんいただきました。

三617 図 こんにに大きいのも、こんにに小さいのもあります。

三618 図 こんにに大きいのも、こんにに小さいのもあります。

三641 図 「どこでこんににたくさんおひろひになりました。」

五153 図 (略)、大ブツサマノマヘニ立ツテキル人ガ、コンナニ小サク見エマス。

五721 図 角ノアルケモノモタクサン知ツテキルガ、コンナリツパナ角ヲモツテキルモノハナイヤウダ。

六447 図 お寺では「こんないつら者はごめんです。」といつて、うちへかへしました。

六581 図 謙信は(略)。急に馬に打乗つて、(略)、信玄の本陣に切りこんで、(略)。(略)。上杉謙信はこんな

強い人であつたが、(略)。

六734 図 私のからだはこんににぐらつくやうになつたのも、その子供たちのいたづらからでございます。

六736 図 こんににたくさん墨を附けたのも、その子供たちでございます。

七216 図 私はこんな大きなりをしています。私の豆はたべられません。

七415 図 これは又どうした金か。これまで貧しい暮らしをしてゐるのに、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いはなかつた。

七666 図 一昨年つぎ木をしたわが木に、もうこんにに大きなのがなつたのでございます。

七673 図 もとからある分にくらべると、實も大きく、味もよほどよろしうございます。父はこんににちがふものなら、(略)皆つぎ木をすると

申ししてゐます。

七687 図 母はこんな美しい大きな桃は、はじめて見たと申して、(略)。

七692 図 (略)、こんな見事な桃があるのなら、植ゑて見たいと申して居ります。

七745 図 海ノ深い所ハ何千ヒロモアル。コンナ所ニハ動物モゴクマレデ、植物ハマツタクナイガ、(略)。

七883 図 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんか。海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。

(略)、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。

八333 図 「自分は今こそこんな小刀や釘などを造つてゐるが、元は少しは人に知られた刀がちで、(略)。

八448 図 (略)、四五十戸も焼けただらう。(略)。一服のすひがらがこんな大火事になつた。

こんにん「困難」(形状)1 困難

十二604 図 市の中央最も繁華なる處は道幅狭く、車馬街上に満ちて往來頗る困難なり。

こんにち「今日」(名)13 今日

七535 図 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、(略)。

八407 図 (略)、初ハモツバラ輸入品ヲ用ヒタリシガ、明治八年ヨリ内

地ニテモ之ヲ製造スルニイタレリ。今日ニテハ其ノ製造ハナハダ盛ニシテ、(略)。

九428 図 マシテ幾萬年ノ久シキ間、此ノ大ナル湖水ヨリ流れ落ちタル水ノ力ハハカリ知ルベカラズ。山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、(略)、遂ニ今日ノ如キ美シキ景色トナリシナリ。

十314 図 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、内地ヘノ渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナリ。然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、(略)。

十441 図 (略)、販路次第ニ開ケ、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、遂ニ今日ノ盛大ヲ見ルニ至レリ。

十一127 図 文明ノ進歩スルニ隨ヒ、分業法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。

十二248 図 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大きなに驚かざらん。

十二276 図 スチンソンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。

十一711 図 「時は金なり。」といふ古言あれども、今日の如く(略)、社會の活動敏速なる時代にありては、時間は金錢よりも貴し。

十二466 図 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)等を供給せ

んこと、實に今日の急務なり。

十二507 図 東西ノ交通盛ニシテ千里

比隣ノ如キ今日ニ於テハ (略)。

十二534 図 強兵ヲ以テ知ラレタル我

ガ國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ

急務ニシテ、(略)。

十二932 図 支那幾千年間の人物中、

大聖として徳化の尚今日に著しきも

の、孔子に如くはなし。

こんぶ「昆布」(名) 2 コンブ

七五1 海草ニモ色々アル。マヅタベ

ラレルモノニハ、コンブ・ワカメ・

アラメ・ヒジキ・ノリ・モヅクナド

ガアリ、(略)。

七七4 (略)、コンブヤアラメノヤウ

ニ茶色ノモノモアリ、(略)。

こんぼん「根本」(名) 1 根本

十二1029 図 此の精神は實に自治制の

根本にして、又其の生命なり。

こんもり (副) 2 こんもり

六八8 たんぼのさきにこんもりとし

た森があつて、(略)。

十281 宮の森のこんもりと茂つた間

から、(略)。

こんや「今夜」(名) 5 こんや 今夜

四355 図 「三郎はこんやは大そ

うもの知りになつたね。」

八425 (略)、今夜の此のはげしい風

では、どこまで焼けて行くか分らな

い。

九8010 図 去年の今夜清涼殿の御宴に

たりしが、(略)。

九816 図 去年の今夜清涼に侍す。

十一445 図 いよく忌日になりて、

熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひと

り心に思ひ定めたるに、(略)。

こんよう「昆陽」(人名) 3 昆陽 ヲあ

おきこんよう

十3210 図 昆陽ハ有名ナル學者ニテ、

平左衛門ヨリハ少シ後ノ人ナリ。

十334 図 昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ

芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、或

年試ミニ之ヲ作りシニ、(略)。

十341 図 昆陽ハ七十二歳ニテ死セ

リ。東京ノ西南、目黒ナル墓石ノ面

ニ「甘諸先生墓」トアリ。

こんりゅう「建立」(名) 1 建立

十969 図 東大寺ハ聖武天皇ノ建立ニ

シテ、(略)。

こんりゅう「す」建立」(サ変) 2 建立

ス「シーセ」

十946 図 此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニ

シテ藤原不比等ノ建立セシトコロ、

(略)。

十982 図 此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天

皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、

さ

さ「左」(名) 1 左

十二197 図 天氣圖に用ふる普通の符

號は左の如し。

さ「差」(名) 2 差

十一338 図 其ノ艦體ニ大小ノ差アレ

ドモ、(略)。

十二1023 図 我が國の地方自治團體は、

(略)。其の土地に廣狹の差あり、其

の組織に繁簡の別ありといへども、

(略)。

さ「あつさ」厚」・あつさ「暑」・いさまし

さ・いそがしさ・いたさ・うつくしさ

・うるわしさ・うれしさ・おおいさ・

おおいさ・おもしろさ・かしこさ・くるし

さ・こうごうしさ・さびしさ・さむさ

・たかさ・とうとさ・ながさ・にぎわ

しさ・のどけさ・ふかさ・ふとさ・わ

るさ

ざ「い」ちざ・ごじゅうざ

さあ(感) 6 サア さあ

一491 サア タケヲサンカラ オト

ビナサイ。

二66 図 サア、ミンナデ一ポン

ツツモツテ、キミガヨヲウタヒ

マセウ。」

三376 七じがなりました。さあ、

う。

五118 大神はおどろいて、あまの岩

戸の戸をたてて、その中へおかくれ

になりました。さあ大へん、(略)、

わるい神さまがさまさまのわるいこ

とをはじめました。

五654 図 「お話をする通りに書けば

よいのです。さあこゝに葉書があり

ます。」

五798 図 鹿の通れる所を馬の通れな

いといふことがあるものか。さあ、

あんないをせよ。」

さい「祭」 ヲかんめさい

さい「歳」 ヲごさい・さんしさい・しじ

っさい・しちじゅうにさい・じっさい

・じゅういっさい・じゅうごさい・じ

ゅうしさい・じゅうしちさい・じゅう

にさんさい・にさい・にさんさい・に

じゅうさんさい・はちじっさい・ひゃ

くさい・まんろくじっさい

さい「際」(名) 4 際

八48 図 電報送達の際發信人居所氏

名を送達紙の外部に表はさんとする

ものは(略)

九298 図 益次郎ハ維新ノ際軍事ニ功

勞多カリシ人ナリ。

十927 図 (略)、何れ熟考の上實行

せんと申合せ居り候事とて、此の際

其の道の専門家の講話を承るは、大

いに参考に相成るべしと存候。

十二329 図 (略)、戦陣の際に良人の

名譽を全うせる形名の妻と其の徳を

同じうすとやいはん。

ざい「材」(名) 1 材 木のきざい

八六〇図 (略)、神殿の(略)、棟に

はかつを木をならべ、兩はしに千木をうちがへたり。材は皆ひのきの

白木を用ひ、(略)。

ざい「財」(名) 1 財

九八四図 賣ル・買フ、財産ノ財、

貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ具ノ字アルハ、支那ノ古代ニ具ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。

さいか「裁可」(名) 2 裁可

十二一〇七図 (略) しかして、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経たる後、天皇の裁可を待ちて始めて成立するものとす。

十二一〇八図 兩院の決議一致すとも、

天皇の裁可を経ざれば其の効力を生ぜざるなり。

さいがく「才學」(名) 2 才學

十一五二図 一條天皇の頃には才學すぐれたる宮女多かりしが、(略)。

十一六三図 (略)、上東門院に漢文・漢詩を教へ參らせたり。是程の才學をもちながら、式部は少しも高ぶりたる風なく、(略)。

さいき「才氣」(名) 1 才氣

十一六七図 清少納言も亦紫式部と同じく宮中に仕へ、其の才氣を以て知られたるき。

さいきゅう「さいきさいきゅう

さいきよ「再舉」(名) 1 再舉

十二三一〇図 (略) 「二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。尚三子あれば更に再舉を圖るべし。」

ざいきょう「す」[在京] (サ変) 1 在京

す「一七」

十二七二図 (略) 愚僧も所用ありて京へ上り、一二年在京せんもはかり難し。

さいく「ひかいざいく・みやまぎざいく

・むぎわらざいく

さいくつ「探掘」(名) 1 探掘

十一一〇七図 (略) 石炭層各所にある、殆ど無盡蔵に候へども、未だ盛に探掘に着手せらるゝには至らず候。

さいくもの「細工物」(名) 2 細工物

十六七図 其の肉は食用となり、(略)、ひげは細工物に使はれる。

十四八七 (略)、其の骨や角は色々の細工物に使ふ。

さいげん「際限」(名) 1 際限

十一二九六図 人智の進歩は際限なしといふべし。

さいご「最後」(名) 2 サイゴ 最後

七五七図 正行コノ度ハサイゴノ合戦セントテ、(略)。「コノ度ノ合戦ニハ、師直ラノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラガクビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ中ノ一ツト思ヘバ、(略)。」

十一八五図 先ツ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、(略)。(略) 既ニ錠綿トナレバ梳綿機ニカク。(略)。(略)コ

レヲ練條機ト稱スル機械ニカケテ、(略)。サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)。

ざいこう「採光」(名) 1 採光

十二三六五図 本校舎ノ建築ハ(略)、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

ざいこく「西國」(名) 1 西國

十一五一〇図 手塚、首をたづさへて、大將義仲の前行き、(略)。「京家・西國の者かとすれば、坂東聲なり。」

ざいこくさんじゅうさんばん「西國三十三番」(名) 1 西國三十三番

十一〇一〇図 岡寺ハ西國三十三番第七ノ札處ナリ。

ざいさん「財産」(名) 3 財産

八一九 (略)、牛も段々減り、畑の取高も年々に少くなつて、五六年の中

によほど財産を減らしました。

九八四図 賣ル・買フ、財産ノ財、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ具ノ字アルハ、(略)。

十二九七五図 官位・門地・技術・財産・學問等に於て衆を抜く者は、個人としても自ら高尚なる品格を要するが如く、(略)。

ざいさんか「財産家」(名) 1 財産家

十一一一八図 村の財産家に勸業に熱心なる人あり、自ら先んじて耕作・養蠶・養雞・養魚等の模範を示せしを以て、(略)。

ざいし「妻子」(名) 1 妻子

九一九図 「こらどうした。命がし

くなつたか、妻子がこひしくなつたか。

さいじつ「祭日」(名) 3 祭日

八三三図 かゝるたふとき御官なれば、一年中の重だちたる祭日には勅使を差立てたまひ、(略)。

十二八一七 處は塊太利の首府維也納の大公園、今日はにぎやかな祭日である。

十二八一〇 見る物の多い今日の祭日に、時代後れの下手な音曲に耳を傾ける者は一人もない。

さいしゅつ「歳出」(名) 1 歳出

十二一〇七図 帝國議會の主要なる任務は法律及び歳出・歳入の豫算を議定するにあり。

さいしよ「最初」(名) 1 最初

九三六 フルトンが工夫に工夫を重ねて造つた最初の船は、(略) 直に沈んでしまつた。

さいじよ「さいさいじよ

さいしよ「細小」(名) 1 細小

十一八四図 コレニハ細小ノ針金ニテ作リタルブラッシノ仕掛アリテ、(略)。

さいじょう「最上部」(名) 1 最上部

十七六図 身體ノ最上部ナル頭ノ中ニハ腦アリ。

さいす「際」(サ変) 2 際す「一シ」

十二三三〇図 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざ

るは日本女子の美德なり。

十二三九〇 (略) 軍人たる者は (略) 國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

ざいせき「材積」(名) 1 材積

十一四〇二 (略) 阿里山の檜材は (略) 一樹にて千五百尺の材積を得るものもこれあり候由、(略)。

さいぜん「最善」(名) 1 最善

十二五二四 (略) 故二日ク、「正直ハ最善ノ商略ナリ。」ト。

さいだい「細大」(名) 1 細大

十一八七三 (略) 蠟燭ノ心トスル太キ絲、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲、細大意ノマ、ニシテ、(略)。

さいだい「最大」(形状) 1 最大

十二一五四 我が國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデア

さいだい「西大寺」(名) 1 西大寺

十九七八 (略) コ、ヨリ眺ムレバ、(略)、西ニハ西大寺・藥師寺等ノ堂塔アリ。

さいたま「埼玉」(地名) 1 埼玉

十二四九二 (略) 養蠶業の盛大は、長野・埼玉ギて群馬、海なき縣に著し。さいちゅう 旦那んわさいちゅう・まっさいちゅう

さいとう「斎藤実盛」(課名)

2 齋藤實盛

十目二 第十五課 齋藤實盛

十五〇二 第十五課 齋藤實盛

さいとうべつとう「齋藤別當」(人名)

2 齋藤別當

十五五二五 (略) 義仲之を聞きて、「そは武藏の齋藤別當にはあらずや。

十五四四〇 (略) 畠山は『略』とて、ひそかに我を此の齋藤別當のもとに預け、別當は七日の間手もとに置き

て、木會へつかはしたり。

さいにゅう「歳入」(名) 1 歳入

十二一〇七四 (略) 帝國議會の主要なる任務は法律及び歳出・歳入の豫算を議定するにあり。

さいにん「罪人」(名) 2 罪人

十三三一 (略) 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。

十二一五八 (略) 禮儀を守る心得を缺ける軍人は國家としても許し難き罪人ぞと論し給ふ。

ざいにんども「罪人共」(名) 1 罪人

十三三三 (略) 罪人ドモハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

さいのう「才能」(名) 1 才能

十一一〇五 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。

さいばい「栽培」(名) 1 栽培

十二四四一 (略) 我が國は (略)、米・麥の栽培は最も早く開けたり。

さいばい「サ変」2 栽培す

十二四三八 (略) 動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

十二四四二 (略) 茶も亦盛に栽培せられ、(略)。

さいばいほう「栽培法」(名) 1 栽培法

十二四六二 (略) 栽培法の如きも、舊法になつまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

さいばんしよ「裁判所」(名) 1 裁判所

十九四〇 (略) 縣廳・裁判所・師範學校・高等女學校等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境内ニ在リ。

さいびひせかいさいび

さいへん「細片」(名) 2 細片

十一八四六 (略) 其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、(略)。

十二四二九 (略) 其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、(略)。

さいほう「裁縫」(名) 1 裁縫

十一八七八 (略) 葉卷蟲の絲にて葉をつゞり合するは裁縫の業に同じ。

さいほうじ「西方寺」(名) 1 西方寺

十一六二八 (略) 拜啓来る十五日は亡父七回忌に相當り候に付、午後三時西方寺に於て法會相營度候間、(略)。

さいほうしつ「裁縫室」(名) 1 裁縫室

十二三六〇 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。

さいほく「最北」(名) 1 最北

十二五六一 (略) 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、(略)。

さいみつ「細密」(形状) 1 細密

十二一二三 設計圖ガ出來上ルト、細密ナ構造分圖ヲ各工場ニ廻シ、(略)。

さいめい「才名」(名) 1 才名

十一一〇二五 (略) 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、(略)、才名世ニカクレナケレバ、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

さいめいてんのう「齊明天皇」(人名)

1 齊明天皇

九六二 (略) 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略)、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、其の後も度々叛きて、(略)。

ざいもく「材木」(課名) 2 材木

六目八 第二十 材木

六六七 第二十 材木

ざいもく「材木」(名) 8 材木

六六七 (略) 材木ニハ松・杉・ヒノキ・栗・ケヤキナドアリ。

六六八 (略) 桐ハヤハラカクシテ弱キ木ナレバ、家ヲタツル材木トシテハ用ヒラレザレドモ、(略)。

六六八 (略) 材木ヲ山ヨリキリ出スモノハソマナリ。

六六八 (略) 材木ヲヒキテ、板又ハ柱トナスモノハコビキナリ。

六六九 (略) 材木ヲ用ヒテ家ヲタツルモノハダイクニシテ、ツクエ・本箱・

タンスナドヲ作ルモノハサシモノシナリ。

十87 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。

十一93 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲコシラヘル者、(略)。

十一38 其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様は御座候。

ざいもくや「材木屋」(名)2 材木屋
八41 火元は裏町通の材木屋で、(略)。

八44 聞けば此の火事は材木屋の小屋から出たので、(略)。

ざいりゅうす「在留」(サ変)1 在留す「スル」

十二55 満洲政治・交通の中心たる奉天は、(略)。(略)。其の附近我が國人の在留するもの多し。

ざいりょう「最良」(名)1 最良

十二105 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。

ざいりょう「材料」(名)8 材料

十87 羊や山羊は毛が必要である。長くのびると、刈取つて毛織物の材料にする。

十一64 毎三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

十一64 同ジ材料デモ、料理ノ塩梅

ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、(略)。

十一64 材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨリ考ヘナケレバナラス。

十一66 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、(略)。

十二13 船體ノ材料ガホム整フト、組立ニ取リカハル。

十二43 動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

十二46 農業は我等が生活に必要な材料を作り出す所以にして、國家一日もこれなかるべからず。

ざいりょうし「材料車」(名)1 材料車

十一28 軍事に用ふる車には、砲車・材料車・輜重車等種々あり。

さいわい「幸」(名)4 幸ひ 幸

八79 今日この日に年來のぞみを達したるは何等の幸ぞや。

八84 中佐ハ今度ノ出陣ヲ幸ニ、帝國ノため、天皇陛下ノ御タメニ、メザマシイ働ヲシナケレバナラナイト、(略)。

九49 聞けばハッサンは(略)道連のありしを幸ひ、迎へかたぐこゝに來りしなり。

九74 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、其の他にはかく別の異狀これなく、先以て不幸中

の幸と喜び居り候。

さいわい「幸」(形状)5 幸

八43 役場は幸に焼けなかつた。

九48 アリは幸にも星によりて方角を見定むることを知り居たれば、それを便りに進行せり。

九72 幸に私方は左程の損害も無く、家族一同無事に御座候間、御安心下され度候。

九75 幸に命を全うしたる者も、大がいは着のみ着のまゝにて、(略)。

十二27 「略」、若し向ひの山にのろしあがるを見れば、幸にして城を出でたりと知れ。

さへ(副助)12 さへ

四39 略、ドンナ時デモ、コノ中へハイツテ、内カラトヲシメテキサヘスレバ、アンシンナモノデス。

四67 三郎ハシンパイシテ、ヒマサヘアレバ、母ノソバヘ來テ、「略」トイツテタツネマス。

六28 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキマス。

六62 「略」わたしの手からもぎ取つて、はふつた音はしましたが、かなしいことに目が見えず、さがすことさへ出來ません。」

七53 今では切手をはつて出さへすれば、どんな遠い所へもどき

ますから、大そう便利です。」

七79 小さなきりぎりす、つばめさへ千里の波を渡るなり。

七87 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんか。

八47 焼けない事さへいへば、御安心なさるから、ゴアンシンクダサイと書くにも及ばない。

八70 かくて二三日を過せしに、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、皮膚の色さへ青ざめて、身體は全く力なきにいたれり。

九40 今ハ此ノ七湯ノ外ニ新シキ溫泉場モ開ケ、廣キ新道モ出來、山ノフモトナル湯本マデハ電車サヘ開通セリ。

九55 保護色ノ變ズルハスデニ面白キコトナリ。ソレヨリモナホ面白キハ、(略)、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。

九73 明けて二十九日には雨も止み、風も静まりて、日の光さへ見え出し候へば、(略)。

さえぎる「遮」(四・五)2 さへぎる

「ラ・リー」

十二2 いくより見ても山にさへぎられ、かすみにへだてられて、其の全景を見ること能はず。

十二7 敵は(略)逃れ去らんとせり。我は急に其の前路をさへぎり

て攻撃せしかば、(略)。
さえずる【轉】(四・五) 5 サヘツル

さへづる『ツーリーール』

三175 ヒバリガオモシロサウニ

サヘツツキマス。

三177 サヘツリ ナガラ ダンダン

タカカ上ツテイキマス。

三182 サヘツルダケ サヘツルト、

イマニマタオリテキマセウ。

三183 サヘツルダケサヘツルト、

イマニマタオリテキマセウ。

三1795 (略)、前面の一鳥草木青

々として、花開き、鳥さへづり、土

人は驚きて此の新來の客を眺めて立

てり。

さお【竿】(名) 8 サヲ さを ↓もの

ほしざお

三308 モノホシザヲニモ、コクキ

ノサヲニモ、(略)ニモ、竹ヲ

ツカヒマス。

三311 (略)ニモ、センドウガ舟

ヲヤルサヲニモ、竹ヲツカヒ

マス。

三457 あるばん一人の男がそ

らをむいて、ながいさををふ

りまはしてゐました。

三467 (略) そんなところでさをを

ふりまはしたつて、どうしてとど

くものか。

四767 見ればへさきに長いさを

を立てて、(略)。

四767 (略)、そのさをのさきに

はひらいた赤い扇がつけてあ

ります。

四772 さをのさきの扇をい

よといふのでせう。

六157 刈つた稻はさをや木にかける

か、地面にひろげるかして、よく日

にかわかしります。

さおう ↓うおうさおう

さおうどう【蔵王堂】(名) 3 蔵王堂

十一24 (略) 吉野の町に入れば蔵王堂

あり。

十一28 (略) 蔵王堂の東なる吉水神社

は後醍醐天皇の行宮の跡なり。

十一2 (略) 蔵王堂

さおさしゆ・く【棹差行】(四) 1 さを

さし行く『一く』

十一265 (略) 小歌交りに老船頭のさを

さし行く乗合舟ののどけさよ。

さか【坂】(名) 3 さか 坂 阪 ↓く

だんざか・ごくらくじざか・とうきよ

うくだんざか・やまさか

三257 (略) 山でも、さかでも、ずん

ずんあゆめ。

五784 (略) しろの後にはいい阪で、

馬の通れる所ではございませぬ。」

七592 (略) カヘリ道二坂ノ上ヨリ見下

セバ、コ・モマタ見渡スカギリ、人

家ナラザルハナシ。

さかい【堺】(地名) ↓せんしゅうさかい

さかい【境】(名) 3 境 ↓くにごかい

九38 (略) 箱根山ハ相模・駿河・伊豆

三國ノ境ニマタガル。

十一149 (略) さらばとて備前と播磨と

の境なる舟坂山にかくれ、(略)。

十一978 (略) 日・露の境は幅五間餘

を一文字に森林を伐りすかし、東西

三十三里、四箇所に境界石を置きて、

分明に相成居候。

さかえゆく【榮行】(四) 1 榮えゆく

『一く』

十二25 (略) 承けつぎし國の柱の動

きなく榮えゆく代を尚いゐるかな。

さかおとし ↓ひよりこえのさかおと

し

さかさま【逆様】(形状) 5 さかさま

倒

三488 かへるは(略)。(略)。又

さかさまになつて、下へもぐつ

て、(略)。

九414 (略) 大空ヨリ箱根山ヲ見

下サバ、全體ノ形ノスリバチヲ倒ニ

シタルニヒトシキヲ見ルベシ。

九651 (略) 試みに茶わんのそこにしる

しをつけ、之を倒にして、しづかに

水中に入れよ。

九956 (略)、湖面鏡の如く、四方

の山々皆倒に影をうつせり。

十一18 (略) 昔より富士は(略)。(略)、

其の形白扇を倒にかけたが如く美

しきは、(略)。

さがしあへる【捜当】(下) 1 さが

し當てる『一テ』

十一586 聲を限りに「ピエールよ、

ピエールよ。」と呼びながら、方々

を尋ねて、やうくさがし當てたが、

(略)。

さがす【捜】(四・五) 6 さがす『一

サ・シ・ス』

六626 (略) 「(略)わたしの手からも

ぎ取つて、はふつた音はしましたが、

かなしいことに目が見えず、さがす

ことさへ出来ません。」

六631 (略) おふみはいそぎ道は

たをそこかこゝかとさがすうち、

少しはなれたくさむらに、やうく

杖を見つつけ出し、(略)。

七303 かへりたてから、しきりに食

物をさがしてゐて、桑の葉をやると、

すぐ食ひはじめる。

七629 (略) 犬は(略)。(略)。(略)、か

りに用ひて、えものをさがしむる

に適す。

七636 (略) 又近ごろは戦場にも犬を用

ひて、たふれたる兵士をさがしむ

といふ。

八219 (略)、毎朝早くすを出て、

糸をさがして、すぐ歸つてしまふと

いふことだ。」

さかだい【酒代】(名) 1 酒代

八238 此の男は居酒屋に酒代の借が

あるので、其のかたに持つて行かう

とするのです。

さかな【魚】(名) 7 サカナ さかな

↓としこしざかな

二144 犬ガサカナヲクハヘテ、

ハシノウヘニキマシタ。
 二151 シタヲミルト、ミヅノ
 ナカニモサカナヲクハヘタ犬
 ガキマス。
 二153 ソノサカナモホシクナツ
 テ、(略)。
 二157 (略)、クハヘテキタサカナ
 ハミヅノナカヘオチマシタ。
 二403 うが川の中でさかな
 をとつてゐました。
 四35 又町からは、きれやこ
 まものやさかななどを買つて
 かへります。
 四506 サカナノニホヒガシマス
 ガ、アタマモヲモアリマセン。
 さかなや「魚屋」(名)3 サカナヤ
 一343 コメヤノトナリハサカナ
 ヤデス。
 一344 サカナヤノトナリハコマ
 モノヤデス。
 四413 (略)、ソコハサカナヤノ
 店デ、(略)。
 さかのうえのたむらまろ「坂上田村麻呂」
 「課名」2 坂上田村麻呂
 九目5 第十八課 坂上田村麻呂
 九621 第十八課 坂上田村麻呂
 さかのうえのたむらまろ「坂上田村麻呂」
 「人名」1 坂上田村麻呂
 九627 蝦夷は(略)。桓武天皇の
 御代に至り、將軍坂上田村麻呂之を
 平定して、大なる功勞を立てたり。
 さかのぼる「溯」(四・五)3 サカノ

ボル さかのぼる「一リール」
 九166 東京ヨリ江戸川ヲサ
 カノボリテ利根川ニ通ズル汽船ノ通
 路ニシテ、(略)。
 十一338 砲艦ハ(略)、或ハ河江ヲ
 サカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモ
 ノナリ。
 十二285 流をさかのぼる鱈の縄
 にふるゝならん。
 さかぶね「酒槽」(名)1 酒槽
 九35 老人夫婦に命じて酒
 を造らせ、之を八つの酒槽に盛り、
 (略)。
 さかまく「逆巻」(四)1 さかまく
 「一ク」
 十686 生残れる水夫は破れたる船
 體にすがり、さかまく波にもまれて
 聲を限りに救を呼べり。
 さがみ「相模」(地名)2 相模
 九17 相模
 九40 相模
 さがみ「相模」(名)1 相模
 十一2910 諸子ハ數多アル我ガ軍艦
 ノ名ヲ知レルナルベシ。國名ヲ以テ
 名ヅケラレタルモノハ、安藝・薩
 摩・石見・肥前・相模・周防・丹後
 等アリ。
 さがみするがいずさんこく「相模駿河伊
 豆三国」(名)1 相模・駿河・伊豆
 三国
 九38 箱根山ハ相模・駿河・伊豆
 三国ノ境ニマタガル。

さかみち「坂道」(名)3 坂路
 九41 川を渡りて坂路を上れば、
 東照宮の正面に出づ。
 十105 コレヨリ谷川ニソヒテ、坂
 路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、(略)。
 十一17 六田の渡を渡りて上り行
 く坂路の左右すでに櫻多し。
 さかもり「酒盛」(名)1 さかもり
 六754 これがすむと、むしろをし
 て、お祝ひのさかもりがはじまりま
 した。
 さか・ゆ「菜」(下二)2 サカユ「
 エ」
 八545 藤原氏ノ一門コレヨリナガ
 クサカエタリ。
 九399 箱根七湯ハ、開ケ行
 ク明治ノ御代ト共ニ益々サカエテ、
 浴客年ニ其ノ數ヲ加フ。
 さかり「盛」(名)5 盛り 盛り 凸お
 とこざかり・はなざかり
 九28 春ノ盛りニハ花ノ雲
 タナビキテ、(略)。
 九967 夏の盛りの頃、秋
 の紅葉の折には来り遊ぶもの最も多
 し。
 十293 寒菊が今を盛りと咲い
 てゐる。
 十一48 薨の花、中の花の
 盛り過ぎて、奥の花の盛りとなるま
 では、ほとんど一月にわたるといふ。
 十一48 奥の花の盛りとな
 るまでは、(略)。

さがり「下」(名)1 下り
 七456 藤の紋、
 (略)、紋の數々かぎりなし。
 さが・る「下」(四・五)6 サガル 下
 ル 下る「一ツ・一ル」
 二324 アレアレ、サガル。ヒケ
 ヒケ、イトヲ。
 四775 ふねはなみにゆられて、
 上つたり下つたりします。
 五688 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ
 テキル。
 八673 昨朝あたりから熱がずつと
 下つて、(略)。
 十一942 靴の價は(略)、
 普通の價に復するか、場合によりて
 は尚それ以下に下るべし。
 十一943 價次第に安くなり
 て、普通の價よりも下るに至る時は、
 (略)。
 さかん「左官」(名)2 左官
 七259 大工ガ家ヲタテルノモ、左官
 ガカベヲヌルノモ、(略)。
 八145 大工ハノコギリ、左官ハコテ、
 (略)、ソレハノ道具ヲ持ツテ、メ
 イノ仕事ニカ、ル。
 さかん「盛」(形状)39 盛
 六505 それからは秀吉のいきほひ
 は、しぜん一日と盛になりまし
 た。
 六806 秀吉コ、二城ヲキヅキシヨ
 リ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナ
 レリ。

七26 9 家デモ國デモ手ヲヨクハタラ
カセル人ガ多ケレバ多イ程盛ニナリ
マス。
七34 9 わが國は昔から養蠶の盛な國
で、(略)。
七92 1 國 (略)、敵ノ砲臺ヨリハ砲
丸ヲアビセカクルコトイ〱盛ナ
リ。
八3 7 國 (略)、天皇陛下御參拜あら
せられ、平和の成りたるを告げたま
ひしが、その御式の盛なること前古
たぐひなかりきと申す。
八40 8 國 今日ニテハ其ノ製造ハナハ
ダ盛ニシテ、(略)。
八76 5 國 農業・工業・商業共に盛に
して、國甚だ富めり。
八76 6 國 此の國にて商業の最も盛な
る都會をニューヨークといふ。
八77 3 國 イギリスは(略)、商業・
工業いづれも盛に、海軍強く、商船
多し。
八85 6 敵ハ(略)、上カラ下マデ幾重
モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。
八89 7 敵ノ突撃ノ聲ガ盛ニ聞エル。
八91 9 (略)、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ
起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。
八95 5 國 (略)、燒物・塗物・扇・綿
絲・織物等の産出すこぶる盛なり。
九38 10 國 (略)、昔ハ人馬ノ往來甚ダ
盛ナリキ。
九40 10 國 旅人ノ往來盛ナリシ箱根驛
モ、(略)。

九65 7 國 臺所にて火吹竹を使ふも、
かぢ屋にてふいごを用ふるも、皆空
氣を送りて、火の勢を盛ならしむる
爲にして、(略)。
十60 7 國 我が國銅山ノ中ニテ最モ盛
ニ銅ヲ産出スルハ足尾・小坂・別子
等ナリ。
十63 5 國 銅山ノ盛ナルコト、是ニテ
モオシハカラルベシ。
十97 9 國 人ヲシテソマロニ佛教ノ盛
ナリシ奈良時代ヲオモハシム。
十一6 3 國 働蜂の(略)、力強く壯
なるものは外に出でて花の蜜を吸來
る。
十一16 8 國 (略)、呉の勢盛になりて、
會稽山の戰に越の軍を打破りたり。
十一37 7 國 (略)、打狗の築港も唯
今盛に工事中に御座候。
十一39 9 國 南部地方には製糖業盛
に行はれ居候。
十一81 1 國 (略)、鶴は盛に活動し、
ひたすら其の獲物の多からんことを
競ふ。
十一83 6 國 我が國ノ機械工業中最モ
盛ナルハ紡績事業ニシテ、(略)。
十一93 8 國 かゝる時は靴屋は更に多
くの職人を雇ひ入れて盛に之を製造
すべく、(略)。
十一100 7 國 (略)、未だ盛に採掘に
着手せらるゝには至らず候。
十二21 10 國 外に同化作用といつて、盛
に炭酸瓦斯を取つて、(略) 酸素を放

つ作用がある。
十二31 2 國 形名の妻、(略)、侍女數
人ト弓を取りて盛に弦を鳴らせり。
十二35 8 國 (略)、教育ノ普及發達ハ
年ヲ追ウテイヨ〱盛ニ、(略)。
十二41 8 國 内に二箇の噴孔ありて、
盛に水蒸氣とよなと稱する火山灰と
を噴出す。
十二44 9 國 養蠶も亦早くより開け
て、今尚益々盛なり。
十二45 1 國 茶も亦盛に栽培せられ、
(略)。
十二46 5 國 家畜の飼養に至りては、
更に之を盛にし、(略)。
十二50 7 國 東西ノ交通盛ニシテ千里
比隣ノ如キ今日ニ於テハ(略)。
十二57 5 國 (略)、豆類・豆油・豆粕
の輸出甚だ盛に、(略)。
十二59 10 國 然れども近年獨逸國力の
盛に發展すると共に、(略)。
十二74 1 國 (略)、印度地方の寶石・
香料・絹布類は盛に(略) 歐洲へ輸
入せり。
さき「先」(名) 23 サキ さき 先
いっすんさき・おさき・かたさき・つ
まさきあがり・てさき・へさき・まっ
さき・やりさき・ゆびさき・りようこ
さき・りようこさきのちちにおくるて
がみ・われさきに
四63 4 やぶの 竹は(略)まがつ
て、中にはさきが土までとど
いてゐるのもあります。

四76 7 (略) 長いさをを立てて、
そのさをのさきにはひらいた
赤い扇がつけてあります。
四77 2 さをのさきの扇をい
よといふのでせう。
五6 7 (略) 金色ノトビガトンデ來
テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。
六8 8 たんぼのさきにこんもりとし
た森があつて、(略)。
六13 2 ソノ時ニハ一羽ノガンハ列ヲ
ハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。
六31 5 國 「先では知らないのだから、
一錢まうけておけばよかつたのに。」
六42 7 コロバヌ先ノ杖。
八56 9 水鳥のくちばしは平たくて先
が圓く、(略)。
八57 1 (略)、陸鳥のくちばしは圓く
細くて、先がとがつて居る。
八60 7 國 春より先に咲く花は、比
良の高ねの暮の雪。
八74 1 國 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル
爪アリ。
八91 1 (略)、中佐ノイキハトウトウ
其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。コレヨリ先、
中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ、(略)。
九3 10 國 (略) 劔を抜きて、ずたず
たに大蛇を斬り給ひしに、尾にいた
りて、劔の先少しくかけたり。
十5 10 サキヤ本ノ圓イ葉モアレバ、
(略)。
十6 10 葉ニハスベテ葉脈トイフモノ
ガアル。本ノ方ガ太クテ、サキヘ行

ク程段々ニ細クナツテ、(略)。

十74 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラ
(略)、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキ
ル。

十374 〔略〕、爪の先はみんなまつ
黒になつてゐました。

十542 〔図〕 白髪頭にて若き人と先を
争ふもはゞかりあり。

十669 他のボートを見れば、(略)。
さきのボートは鯨を引きながら母船
の方へ急ぐ。

十一95 (略)、乾イタ軸木ノ先へ藥
品ヲ附ケル者、(略)。

十二395 〔図〕 余の彼を避くるは、國
家の急を先にして、私のうらみを後
にするが爲なり。」

十二778 〔略〕 カナリヤ島に着し、
(略)、九月六日更に西へ向つて航行
せり。是より先は未だ航行せしこと
なき大洋なれば、(略)。

さき「咲」 凸いちりんざき
さき「崎」 凸いなむらがさき・いぬぼう
ざき

さき「驚」 (名) 2 さき 驚

八557 鶴・さき・くひななど水の中
をあるく鳥ははきが長い。

十一313 〔図〕 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・
雲雀・鶴・雁・鴻・雉・鷗・鶉・
鷺等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

さきがけ「先駆」 (名) 1 先がけ

六558 (略)、信玄は兵を右と左と二
手に分けて、はさみうちにしようと

した。謙信は(略)、こちらから先
がけをしようと、夜の間に信玄の陣
に攻入つた。

さきかわる「咲代」 (四) 1 さきかは
る「一リ」

八365 〔図〕 垣根にからむ朝顔の さ
きかはりつゝいさぎよく、(略)。

さきそむ「咲初」 (下二) 1 咲初む
「一メ」

十一47 〔図〕 花は麓より咲初めて次第
に山上に及び、(略)。

さきだつ「先立」 (四) 2 先ダツ 先
だつ「一タ・一チ」

十2310 〔略〕、老人スデニ來リテ、
良ヲ待テリ。(略)。次ノ五日目ノ朝
モ亦老人ニ先ダタレタリ。

十一141 〔略〕 義兵を擧げしが、
事の未だ成らざるに先だち、笠置も
落ちたる由風聞ありしかば、(略)。

さきに「先」 (副) 3 サキニ 先に
嚮ニ

十一749 〔図〕 「先に晝がきたる櫓の
枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝり
しが、(略)。」

十一10410 〔略〕 サキニ蜀ノ南方亂レシ
ヤ、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕へ、
(略)。

十二1010 〔図〕 (略)、嚮ニ敵ニ對シ勇
進敢戦シタル麾下將卒モ皆此ノ成果
ヲ見タルニ及ンデ、(略)。

さきのこる「咲残」 (五) 1 さきのこ
る「一ツ」

四275 (略) くさやはなは大きい
かれてしまひました。(略)。(略)

さきのこつてゐるのぎくを見つ
けて、(略)。

さきはじめる「咲始」 (下二) 1 サキ
ハジメル「一メ」

二451 ココニハウメノ木ガタ
クサンアリマス。モウハナガサ
キハジメマシタ。

さきほど「先程」 (名) 1 サキホド
四586 ソコヘカミサマガタガ
オトホリガカリニナツテ、(略)。

(略)。コノ神サマハサキホドオ
トホリニナツタ神サマガタノ
弟ノ方デス。

さきみだる「咲乱」 (下二) 2 咲キミ
ダル 咲きみだる「一レ」

七583 〔図〕 コノ公園ハ(略)、種々ノ草
花ウルハシク咲キミダレタリ。

八814 〔略〕 北半球にて百花咲きみだれ
て、蝶の飛ぶ春の時節は、(略)。

さきみだれる「咲乱」 (下二) 1 咲き
みだれる「一レ」

六102 (略)、道ばたにはきれいな草
花が咲きみだれてゐます。

さきみちる「咲満」 (上一) 1 咲きみ
ちる「一チ」

六62 〔図〕 わけてさくらの吉野山、一
目千本咲きみちて、かすみか雲か美
しや。

さきよう「作業」 (名) 2 作業 ヲぼう
せきさきよう

十一841 〔略〕 紡績工場ニ入りテ見ヨ。
(略) 機械ハ、幾臺トナク立並ビテ
廻轉スベク、其ノ作業ノ速ニシテ整
然タルニハ、(略)。

十一846 〔略〕 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテ
ホグシ、(略)、直徑尺餘ノ錠締ト
ス。(略)。其ノ作業ノ間ニハ(略)。

さきんず「先」 (サ変) 2 先んず
「一ジ」

十一1119 〔略〕 村の財産家に勸業に熱心
なる人あり、自ら先んじて耕作・養
蠶・養雞・養魚等の模範を示せしを
以て、(略)。

十一1144 〔略〕 耕地整理は縣下諸村に先
んじて着手し、昨年既に之を完成せ
り。

さきんずる「先」 (サ変) 1 先んずる
「一ジ」

十368 〔略〕 人が大勢込合つてゐる中で、
少しも人に先んじようとはせず、靜
かに自分の順番を待つてゐました。

さく「作」 凸にもうさく

さく「柵」 (名) 1 柵

十二2610 〔略〕、攻めあぐみて長圍
の計を取り、柵を城外に廻らし、繩
を城下の河中に張りて、城兵のひそ
かに逃れ出づるを防ぐ。

さく「咲」 (四・五) 42 サク さく
咲ク 咲く「一イ・カ・キ・ク・
一ケ」

一232 ユリノハナガ サキマシ
タ。

ウエンスキー中將は昨日の戦闘に傷を負ひ、(略)。

さくじつろくじ「昨日六時」(名) 1

昨日六時

六三九(三) 昨日六時の汽車に間に合つて、晩の九時二十分に京都に着いた。

さくぢや「揀車」(名) 2 揀車 揀車

十一二五(二) (略)、四國の猫車、臺灣の揀車の如きは唯一輪なり。

十一二六(四) 揀車

さくぢやあたり「昨朝辺」(名) 1

昨朝あたり

八六七(三) 昨朝あたりから熱がずつと下つて、食事が進みますから、一先

安心いたしました。

さくつたんべつ「作付反別」(名) 2

作付反別

十二四四(四) (略)、米の作付反別は凡そ二百九十萬町歩、(略)。

十二四六(四) (略)、麥の作付反別は凡そ百八十萬町歩、(略)。

さくねん「昨年」(名) 2 昨年

十一一四(四) 耕地整理は(略)、昨年既に之を完成せり。

十二三四(三) 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツ

テキタ學校ガ落成シテ、(略)。

さくのすけ ぐななばやしさくのすけ・

ななばやしさくのすけさま

さくもつ「作物」(名) 6 作物

八二〇(三) (略)、雀といふものは(略)、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

九七四(六) 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、(略)。

十三三(二) (略)、是等ノ島ニハ作物ノ

出来ザル荒地多クレバ、(略)。

十一一〇(四) (略) 耕作・養蠶・養雞・

養魚等の模範を示せしを以て、近年

作物の改良も出来、(略)。

十一一四(四) 又肥料の利目も著しく、

作物の發育も目立ちてよくなりて、

(略)。

十二四四(四) 作物は米・麥其の大部分

を占めて、(略)。

さくや「昨夜」(名) 6 サクヤ 昨夜

八四六(四) サクヤノクワジニウチハヤ

ケマセンデシタ

八四七(五) サクヤウチヤケナイ

八四八(四) 「(略)、火事の昨夜あつた

ことはもう御存じだから、サクヤとは書くには及ばない。

八四九(四) 「(略)、サクヤとは書くに

は及ばない。

十六三(八) 昨夜の風雨は名残なくをさま

つて、(略)。

十一七四(四) 「そは昨夜のぞき見て

知りたり。」

さくら「桜」(課名) 2 サクラ

三目一 サクラ

三一 一 サクラ

さくら「桜」(名) 25 サクラ さくら

櫻 ぐななばやし・ひがんざくら・や

えざくら

三一(三) ヲカノ上ニモ、ツツミノ

上ニモ、サクラノハナガ一メ

ンニサキマシタ。

三二(四) ムカフノ山ニハ、ユキガ

フツタヤウニ白クナツタトコ

ロガミエマス。アレモサクラノ

ハナデス。

三二(五) サクラノ木ハ、ヨソノ

クニニハ、コンナニタクサンア

リマセン。

三二(七) アツテモ、日本ノサクラ

ノヤウナウツクシイハナハサ

キマセン。

三三(五) ウツクシイサクラノハナ

ガ、マドノソトカラノゾイテ、

(略)。

五三(七) サクラノ花ノ下ニトンデキル

白イ蝶ヲ見ルト、花ガチツタノカト

思ヒ、(略)。

六五(七) うめ・も・さくら・ふぢ

・あやめ、白つゆむすぶ秋の野の

ちぐさの花もおもしろや。

六六(二) わけてさくらの吉野山、一

目千本咲きみちて、かすみか雲か美

しや。

七四(四) (略)、梅ばち・櫻・たち

ばなや、(略)、紋の数々かぎりなし。

七五(九) 上野公園ニハ(略)。(略)。

コ、ニハ櫻ノ木多シ。

七五(二) 川ノ向フガハ向島ニテ、

櫻ノ名所ナリ。

八四(七) 廣き道の左右に梅・松・櫻

などを植ふたり。

八三五(六) (略)、山々の櫻も咲け

ば、梨・すも、皆一時に紅白の

花のながめのうるはしさ。

九六(一〇) コ、ニハ櫻ノ花ガアル。

九六(一〇) 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツ

テ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。

九七(六) 梅・桃・梨・ナドノ花モ櫻ノ

ヤウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、(略)。

九七(四) サクラ

九二八(八) 境内ニハ櫻最モ多ク、春ノ

盛りニハ花ノ雲タナビキテ、「花ハ

櫻木、人ハ武士。」ノコトワザモ自ラ

思ヒ出デラル。

一七(五) 櫻や梅ノ葉ハ唯一スデノ太イ

脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ

細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

一〇九(九) 来て見ればこゝも櫻の峯

つゞき、吉野初瀬の花の中宿。

一一(一四) 吉野山霞の奥は知らね

ども、見ゆる限りは櫻なりけり。

一一(一七) 六田の渡を渡りて上り行

く坂路の左右すでに櫻多し。

一一(二四) 堂前四本の櫻ある處は

(略)。

一一(一五) 高德(略)、大いなる櫻

の木の幹をけつりて、大文字に詩の

句を書きつけたり。

一二(一八) 柳櫻の春にほふ錦

をきへて、野も山も。

さくらいちよう「桜井町」(地名) 2

櫻井町

一〇〇(二) 三輪町ノ南ニ櫻井町アリ。

其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、神功皇后以後、シバく皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。

十100 4 櫻井町ヲ南へ去レバ談山神社ノ一ノ鳥居アリ。

さくらいろ「桜色」(名) 1 櫻色

十48 9 花の名より取れる桃色・紅梅色・藤色・櫻色、(略)、色の名稱も亦千種萬様なり。

さくらがおか「桜岡」(地名) 1 櫻ガ岡
七55 2 櫻方岡ヨリ見下セバ、見エ
ルカギリハ皆人家ナリ。

さくらぎ「桜木」(名) 2 櫻木

九28 10 (略)、春ノ盛リニハ花ノ雲
タナビキテ、「花ハ櫻木、人ハ武士。」
ノコトワザモ自ラ思ヒ出デラル。

十12 2 園「我元 吉野の杉よ、
櫻木の 花をよそにて、霧深き 谷
間」立ちき。」

さくらじま「桜島」(地名) 1 櫻島

十二43 2 三十餘年前安永八年櫻島
の破裂せし時は、九州・四國・山陽
・山陰・東海道までも火山灰を降ら
したりといふ。

さくらだもん「桜田門」(名) 1 櫻田門

七57 9 櫻田門ヲ出ヅレバ、日比谷
公園アリ。

さぐりひてさぐり

さぐる「探」(四) 3 サグル さぐる

「一リール」

九24 8 騎兵は進退敏活にして、多
くは友軍の前方に出でて敵狀をさぐ

る。

十一32 8 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ
情勢ヲサグリ、(略)。

十一34 2 通報艦ハ(略)、或ハ敵ノ
軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我
ガ艦隊ニ報告ス。

さけ「酒」(名) 4 酒 ひいざかや

七64 4 酒やすや醬油も、(略)も、
水がなければ出来ない。

九35 5 尊、(略)、老人夫婦に命じ
て酒を造らせ、(略)。

九38 8 (略) かの大蛇あらはれ出
で、八つの頭を八つの槽の中に入れ、
酒を飲みてよひふしたり。

九58 9 酒・煙草の害は今更に言ふ
までもなし。

さけ「鮭」(名) 1 鮭

十一98 5 樺太にて最も有望なる
は漁業にて、(略) 鮭・鱒も亦少か
らず候。

さけぶ「叫」(四・五) 5 サケブ さ
けぶ 號ぶ「一バ・一ビ・一ブ・一ン」
ひなきさけぶ

八87 8 中佐ハ(略)、全滅スルトモ
敵ノ手ニワタスナ。一足モ退却スル
ナ。」トサケンデ部下ヲハゲマシ、
(略)。

十一56 9 此の時「自分が行かう。」
とさけぶ人を誰かと思れば、將軍マ
クドナールである。

十二6 8 風號ビ海怒りて、波浪山
の如くなれども、(略)。

十二29 10 勝商城に向ひ、高らかに

號んで曰く、「諸君、憂ふることな
かれ。(略)。圍の解けんは二三日の
内にあらん。」と。

十二30 5 其の將伊企雛をして日本
に向つて、「日本の將我がしりを食
へ。」と號ばしむ。

さける「裂」(下二) 3 サケル さけ
る「一ケ・一ケル」

五48 1 (略)、耳がさけるやうなおそ
ろしいかみなりが鳴りました。

五48 6 (略)、かみなりがおちて、そ
の高い木がまつ二つにさけてゐまし
た。

八63 5 實ガ熟スルト、サケテ中カラ
白イ綿ガハミ出シマス。

さげる「下」(下二) 3 さげる 下げ
る「一ゲ」

八24 5 (略)、今度は下女がぼけつを
さげて、牛小屋から出て來ました。

九19 9 水兵は驚いて、立上つてしば
らく大尉の顔を見つめてゐたが、や
がて頭を下げて、「それは餘りな御
言葉です。

九23 9 水兵は頭を下げて聞いてゐ
たが、やがて手をあげて敬禮して、
(略)。

ささう「支」(下二) 2 ささう 支フ

「一フ・一ヘ」ひふくみささう

十9 9 森林は能く暴風をささへ、
其の力をそぐを以て、土砂の飛散を
防ぎ、(略)。

十75 6 身體ノ(略)、二本ノ足ハ全
身ヲ支フ。

ささえ「榮螺」(名) 4 サザエ ささえ
三62 3 (略)、ささえのやうに、
ふかいつばのかたちになつて
ゐるのがあります。

四38 2 (略)、サザエガ岩ノカゲ
カラヨビトメテ、(略)。

四39 8 サザエハスグカラノ中
ヘヒツコンデ、フタヲシメテ、
(略)。

七71 7 (略)、サザエ・カキナドハ岩
ニツイテキル。

ささえうる「支得」(下二) 1 支へ得
る「一ウル」

十67 9 昔は大鯨一頭を捕へると、人
口數百人の一村、一箇月の生活費を
支へ得ると言つたものである。

ささえのじまん「課名」 2 サザエノジ
マン

四目13 十二 サザエノジマン
四37 8 十二 サザエノジマン

ささええる「支」(下二) 3 支ヘル 支
へる「一ヘ」

十二13 10 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支
へ、(略)。

十二81 5 (略)、やせ衰へた體を義足
に支へて、路ばたにバイオリンを弾
いて居る老人の辻音楽師がある。

十二82 5 (略)、傍の石にこしを下し、
額を兩手に支へて人知れぬ涙をこぼ
して居る。

- ささぐ「捧」(下二) 5 サ、グ さ、
ぐ「一グーグ」
- 851 鎌足のヲ拾ヒテ、ヒザマツキ
テ皇子ニサ、ゲシニ、(略)。
- 981 4 道眞(略)、恩賜の御衣を
さ、げて、はるかに東方を拜し、一
篇の詩を作りたり。
- 122 9 老人片足ノ靴ヲ橋下ニ落
シ、(略)。良(略)、命ノマ、二拾
ヒ取りテサ、グ。
- 1101 5 鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ
皇子ニ近ツキ奉リシハ、即チ此ノ寺
ナリ。
- 1161 2 武勇のはたらき命さ、
げて、御國の敵を討ちなん、我は。
ささげ「紅豆」(名) 1 さ、げ
721 2 大豆・小豆・さ、げ・そら
豆・なた豆などはすべて私どもの親
類です。
- ささげも「捧持」(四) 1 さ、げ持
つ「一チ」
- 981 7 恩賜の御衣なほこゝに在
り。さ、げ持ちて毎日餘香を拜す。
ささ、げる「捧」(下二) 2 さ、げる
「一グ」
- 1151 2 馬はさもうれしさう
に、口でおもちやをさ、げて、其の
子供をあやしてゐた。
- 1284 3 聴衆は錢をつかんで、
争つて老人のさ、げた帽子の中へ投
入れる。
- ささことうげ「笹子峠」(地名) 1 笹
子峠
- 12 10 日本一の大トンネルは中央
線の笹子峠にあり。
- ささなみ「小波」(名) 4 さ、波 小波
連
- 162 9 海はさ、波を立ててゐる。
海面はさ、波を立ててゐる。
- 119 9 月影の小波にくだだけ、漁
火の波間に出没する夜景も亦一段の
おもむきあり。
- 1132 驅逐艦連
- 129 5 我が驅逐艦の連、
陽炎の二隻に追撃せられ、(略)。
- ささのゆき「笹雪」(名) 1 さ、の雪
745 5 梅ぼち・櫻・たち
ばなや、三がい松にさ、の雪、(略)、
紋の数々かぎりなし。
- ささやか「細」(形状) 2 サ、ヤカ
914 9 略利根岳ヨリ發スルサ、
ヤカナル細谷川ハ、流レ下ルニシタ
ガヒテ、數多ノ小流ヲ集メ、(略)。
- 1101 6 今ハサ、ヤカナル堂中ニ古
キ丈六ノ佛ノミ残レリ。
- ささやく「囁」(四) 1 ささやく
「一ク」
- 1172 9 或夜小僧住持の居間に來
りて、「かしこに行きて、彼の畫師の
有様を見給へ」とささやくに、行き
てうかゞへば、(略)。
- さざれいし「細石」(名) 1 さざれ石
410 1 君がよはちよにや
ちよに、さざれ石のいはほと
なりて、こけのむすまで。
- さざんか「山茶花」(名) 1 さざん花
837 7 いつしか木々もうらが
れて、さびしきにはのさざん花や、
(略)。
- さしひひとさしゆび
さしあ、げる「差上」(下二) 3 差上げ
る「一ゲ」
- 766 4 桃がじゆくしましたから、
少しばかりですが、差上げます。
- 767 7 來年はたくさんなら
せて、たくさん差上げたいと思つて
居ります。
- 810 3 うち中の者がそろつ
て寫眞をとりました。ついでに私一
人のもとりましたから、兩方一枚づ
つ差上げます。
- さしだし「おんさしだし」
さしだし「差出」(四) 2 差出ス
差出「一シ」
- 977 3 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒ
オキテ、(略)、全部ハリ終ヘタル時、
之ヲ郵便局ニ差出シテ、郵便貯金ト
スルナリ。
- 1140 10 臺灣寫眞帖一部
郵便にて差出候間、御覽下され度候。
さしかか「差掛」(五) 1 さしか、
る「一ツ」
- 984 7 池の右手へさしか、つ
た時、熊吉の馬はつまづいて前足を
折つた。
- さしき「座敷」(名) 8 ザシキ 座敷
- 287 オハナハオキクヲザシキ
ヘトホシテ、オチャトオクワシ
ヲダシマシタ。
- 355 ザシキノウチニイクスデ
モツナヲハツテ、(略)。
- 746 9 「マヅコノザシキヲ見渡シ
テモ、コノタクサンノ障子ハ皆僕ラ
ノ仲間デハツテアルデハナイカ。
- 1167 座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置
ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミ
ナイノハワカシイ話アル。
- 1171 6 其の座敷の一間の杉戸に
は櫛一本を畫がき、(略)。
- 1266 8 屋根を傳ひ、窓を
抜け、座敷を横ぎり、(略)。
- 1288 9 座敷の床の間より臺所の
戸棚に至るまで、諸道具の置場處を
一定し、(略)。
- 1289 5 凡そ家内の掃除は座敷・
居間・臺所のみならず、便所の隅よ
り下駄箱の奥までも注意せざるべか
らず。
- さしきい「座敷一杯」(名) 1
座敷一ぱい
- 858 9 くじやくは(略)。(略)、若
し家の中でひろげさせたら、座敷一
ぱいになつて、天井へつかへる程で
ある。
- さしころす「刺殺」(四) 3 さし殺す
「一サース」
- 1172 勸蜂中には(略)検査掛
あり。(略)。怠りて持歸らざるもの

あれば、(略)、強ひて入らんとすれば立ちどころにさし殺す。

十一74図 雄蜂は(略)、秋の初には皆働蜂にさし殺さる。

十一84図 (略)、他群の蜂、我が群中に入り来れば、直ちに之をさし殺す。

さしず「指図」(名) 1 さしづ

五807 よしつねはこゝぞと思つて、

「進めく。」とさしづをしたが、(略)。

さしだしに「差出人」(名) 1 差出人

七518図 この手紙は四匁より重いの

に、差出人が三錢しかはつておきません。

さしだす「差出」(五) 2 差出す

「一しーす」

九208 水兵は(略)、「(略)」。どうぞ之を御覽下さい。」といつて、其の手紙を差出した。

十二846 (略)、聴衆は錢をつかんで、

争つて老人のさゝげた帽子の中へ投入れる。(略)。老人は之を袋に移して、再び帽子を差出す。

さしたつ「差立」(下二) 1 差立ツ

「一テ」

九301図 春秋兩度ノ大祭ニハ必ず勅

使ヲ差立テラレ、(略)。

さしたてたまふ「差立給」(四) 1 差

立てたまふ「一ヒ」

八33図 (略)、一年中の重だちたる祭日には勅使を差立てたまひ、(略)。

さしつかえひおんさしつかえ

さしとおす「刺通」(四・五) 2 さし

とほす さし通す「一シ」

四192 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀六刀さしとほしました。

十一515図 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、(略)。

さしとむ「差止」(下二) 1 差止ム

「一メ」

九391図 (略) 關所アリテ、日暮ヨ

リ後ハ一切旅人ノ通行ヲ差止メタレバ、(略)。

さしはさむ「差挟」(四) 2 サシハサ

ム さしはさむ「一ミーム」

十957図 (略)、老樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗半間ヲ行ケバ、(略)。

十二1037図 (略) 等を選擧するには

(略)、親族・縁故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

さしまねく「差招」(五) 1 さしまね

く「一イ」

四772 一人のくわんちよがその下に立つて、さしまねいてゐま

す。

さしみ「刺身」(名) 2 さしみ

五197 母は(略)、まないたに魚を

のせて、さしみをこしらへてゐます。五216 母は(略)、切つたさしみを

さらの中へ入れて、(略)。

さしも(副) 1 さしも

九637図 將軍田村麻呂の東北の地を

征するや、(略)、さしみに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至

れり。

さしものし「指物師」(名) 1 サシモノ

シ

六694図 (略)、ツクエ・本箱・タンス

ナドヲ作ルモノハサシモノシナリ。

ざじよう「座上」(名) 1 座上

十一295図 空中の交通開始せられ、

又其の軍事に應用せらるゝも決して座上の空談にあらざらんとす。

ざしよく「座食」(名) 1 坐食

十一683図 百歳の長命を保ちて、一

生を坐食に費す者あり。

さす「差」(四・五) 8 サス さす

指す「一サー・一しーす」ひさおさし

ゆく・ゆびさす・ゆびさす

三448 右ノ手ノサス方ガ南

デ、(略)。

三451 (略)、左ノ手ノサス方

ガ北デス。

四491図 ちつともおんなじ所を

ささずに、ばんまでかうして、かつちん、かつちん。

五201 母は戸だなの方をさして、「そ

こにおさがあるから、取つておく

れ。」といひました。

八617図 三つ四つ五つうち連れ

て、矢走をさして歸り行く 白帆を

送る夕風に、(略)。

十103図 總べて魚類は暗き處を喜

び、森林の影さす水中には多く集り

来るものなるを以て、(略)。

十893図 (略)、さして行く笠置の

山を出でしより、天が下にはかくれ

がもかし。

十二748図 コロンブスは(略)、歐羅

巴の西海岸より西を指して進まば、

印度の東海岸に到着すべしとの意見

を抱けり。

さす(助動) 2 サス 《サセ》

七78図 天皇ハコレヲ聞キ、ミスヲ

高クマキ上ゲサセ、正行ヲ近ク召シ

タマヒテ、(略)。

八524図 中大兄皇子命ジテ宮門ヲ閉

ヂサセ、長キヤリヲツテ物カゲニ

カクレ給フ。

ざす「座」(サ変) 4 坐ス 坐す

「一しーせ」

七924図 中佐ハポートニ坐シテ、ナ

ホモ杉野ヲウシニヒタルナゲキキ

タリ。

八699図 「我等はつねにいそがし

く働けるに、汝はただ坐して食ふの

みにて、少しも我等に報ゆる所なし。

八712図 (略)、胃は一同に向つて

曰く、「(略)、我はたゞ坐して食ふ

者にあらず。

九36図 (略)、其のほとりに娘を坐

せしめて待ち給ひしに、(略)。

さすく「授」(下二) 1 授く「一ケ」

九53図 倭姫命此の時天叢雲劍を尊

に授け、(略)。

さずけたまう〔授給〕(四) 2 授けた

まふ 授け給ふ 《一七》

八二〇〔圖〕 神代の昔皇祖天照大神、瓊

々杵尊をこの國に降したまはんとせ

し時、八咫鏡を授けたまひて、(略)。

九四四〔圖〕 天照大神、八咫鏡・八坂瓊

曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしか

ば、(略)。

さす〔摩〕(五) 1 サスル 《一ル》

七二五 8 モシ手ガナカツタラ、ドノク

ヲカクコトモ、イタイトコロヲサス

ルコトモ出来マセン。

させたまう (助動) 6 サセ給フ さ

せ給ふ 《一ヒ・フ・一ヘ》

八五二 3 天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ

入鹿カタハラニ侍ス。

九三九 〔圖〕 尊時分はよしと、おびさせ

給へる劔を抜きて、(略)。

一一二五 〔圖〕 (略) 大塔宮の吉野を落

ちさせ給ふ時、別離の宴を張りて舞

をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。

一二一七 〔圖〕 陛下が萬機の政をみそな

はす御かたはら、折にふれてよみ出

でさせ給へる御製にも、(略)。

一二〇五 〔圖〕 (略)、天皇は國務大臣の

輔弼によりて一切の政務を親裁させ

せ給ふ。

一二〇六 〔圖〕 (略)、別に帝國議會を設

けて、廣く衆議を聴く機關に供させ

せ給へり。

させばいぐんこうしょう〔佐世保海軍

工廠〕(名) 1 佐世保海軍工廠

一二一六 1 我が國デ一番大キイノハ佐

世保海軍工廠ノ船渠デ、(略)。

させる〔為〕(下二) 1 させる 《一

セ》ひあんしんさせる・かんしんさせ

る・へんかさせる

九八二 2 それは氏子の五箇村から子供

の騎手を一人づつ出して、競馬をさ

せて、(略)。

させる (助動) 6 サセル させる

《サセ・サセル》

二三八 〔圖〕 ハシヲモツテ、ゴハン

ヲタバサセテクダサツタノハ、

ドナタデスカ。

七三三 7 蟻は(略)、出て来ると、す

ぐに紙の上において卵を産みつけさ

せる。

七三三 7 その卵を産みつけさせた紙を

蠶卵紙といふ。

八五八 9 (略)、若し家の中でひろげさ

せたら、座敷一ぱいになつて、天井

へつかへる程である。

九八六 1 熊吉の落馬したのにかまは

ず、馬をかけさせたら、勝も勝、大

勝であつたのに、(略)。

一八五 5 (略)、將卒と共に戦場をかけ

めぐつて、勇士に軍功を立てさせる

ものは馬である。

さぞ〔囀〕(副) 1 さぞ

九八二 6 〔圖〕 或年選ばれた子供の中に、

すぐれて上手な騎手が二人あつた。

(略)。「今年の競馬はさぞ面白から

う。」と、(略)。

さそいあわす〔誘合〕(下二) 1 誘ひ

合す 《一セ》

一〇九二 〔圖〕 當日は本村の重なる人々

も精々誘ひ合せ、是非參會致すべく

候。

さそいあわせ ひおんさそいあわせ

さそう〔誘〕(四五) 2 サソフ さ

そふ 《一ハ・一ヒ》ひおんさそいくだ

さる

三六一 ソコヘトモダチガサソヒ

ニキマシタカラ、ヨロコンデイ

ツシヨニノハラヘアソビニイ

キマシタ。

七七八 〔圖〕 (略)、一たん心定めては、

事に動かず、さそはれず、はげみ進

むに何事のなど成らざらん、(略)。

さだのみさき〔佐田岬〕〔地名〕 2 佐

田岬 佐田岬

一一一七 〔圖〕 四國の西には佐田岬長く

突出で、(略)。

一一一九 〔圖〕 佐田岬

さだまる〔定〕(四五) 4 さだまる

定まる 《一リ・一ル・一レ》

四八五 5 (略)、船がゆれて、ま

がさだまりません。

一一九一 9 〔圖〕 物の價の高下は主として

需要と供給との關係によりて定まる

ものなり。

一一一六 〔圖〕 (略) 君臣分は定まり

て、萬世一系動きなき 我が皇室の

大みいつ。

一二七一 〔圖〕 (略)、勝敗の數は既に定

まれり。

さだむ〔定〕(下二) 8 定ム 定む

《一メ》ひおもいさだむ・みさだむ

七七八 〔圖〕 (略)、一たん心定めては、

事に動かず、さそはれず、はげみ進

むに何事のなど成らざらん、(略)。

七七九 〔圖〕 (略)、一たんめあて定め

ては、わき目もふらず、怠らず、ふ

るひ進むに何事かなど成らざらん、

(略)。

八五二 1 〔圖〕 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲ

オコナハントシ、アラカジメ其ノ手

ハズラ定メタリ。

九八八 〔圖〕 サレバ何レノ國ニテモ、世

ノ進ムニシタガヒ、或種類ノ物品ヲ

定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ

交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

一七二 1 〔圖〕 絶えずわき出づるものと、

時を定めてわき出づるものとあり。

一一二二 8 〔圖〕 丈餘のろかい操りて、

行手定めぬ浪まくら、百尋・千尋海

の底、遊びふれとる庭廣し。

一二五 1 〔圖〕 我が海軍は初より敵を近

海に迎へ撃つ計を定め、全力を朝

鮮海峡に集中せしが、(略)。

一二九二 1 〔圖〕 家の収入を基として、豫

め其の支出を定め、(略)の費皆其の

範圍を越ゆることなかるべし。

さだめ〔定〕(名) 1 定ひおんさだめ

九八二 3 〔圖〕 (略)、競馬をさせて、

勝つた村は次の祭の日まで、其の五

箇村の頭になるといふ定であつた。
さだめたまう「定給」(四) 2 定メ給

フ 定メ給ふ「ヒ・ヒ・ヘ」

十100 其ノ附近ノ地ハ(略)、神功皇后以後、シバく皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。

十二110 勅諭ハ(略)、復古の政と共に陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御論しあり、(略)。

さだめて「定」(副) 4 サダメテ さだめて 定めて

七8 度ノ合戦サダメテナンギナルベケレド、進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ。

七42 だめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのことございませう。

九21 『一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。

十90 同學士ハ(略)、學理にも通じ、實地にも明かなる人に候へば、其の講話は定めて有益なる事と存候。

さだめる「定」(下) 1 さだめる「メ」ひみさだめる

四82 よ一ハ(略)、よくねらひをさだめ、弓を引きしぼつて、ひようと一矢いはなしました。

さちのうみ「幸湖」(地名) 1 幸湖

九95 中禪寺湖あり、(略)。天皇陛下かつてこゝに行幸あり、其

の風景を賞し給ひて、幸湖の名を下し賜へり。

さつ ひいさつ・ごさつ・しさつ・にさつ

さつき「先」(名) 3 サツキ さつき 六79 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカラ牛ヲ何匹トナツルシオロシタ。

八42 さつきからも二時間もたつから、四五十戸も焼けただらう。

十28 中程の枝の上に鳥が二羽止つて、さつきから少しも動かない。

さつこう「作興」(名) 1 作興

十二105 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、(略)。

さつこん「昨今」(名) 1 昨今

十59 入營當時ハ(略)、多少不自由を感じ候へども、昨今は友人も出來、營内の生活にもなれ、日々楽しく暮し居り候。

さつしひおんさつし

さつしたてまつる「察奉」(四) 2 察し奉る「リー・レー」

十17 ある雪の朝、皇后ハ(略)。(略)。是白樂天の詩に、「略」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。

十一41 天皇のこゝに行幸ありしより三年、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、涙わき出でて禁じ難し。

りし御心事を察し奉れば、涙わき出でて禁じ難し。

さつす「察」(サ変) 3 察ス 察す

「シー・セー・セヨ」

十二51 故二商業ニ從事スルモノハ常ニ花客ノ嗜好ヲ考ヘ、流行ノオモムク所ヲ察セザルベカラズ。

十二91 「其の母によりて其の子を察せよ。」といへるが如く、(略)。

十二113 (略)、豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。

さつそう「雜草」(名) 1 雜草

十一90 一種の草の實を食用とするを以て、(略)、周圍の雜草を食切りて、ひたすら此の草の成長を保護し、(略)。

さつそく「早速」(副) 2 さつそく

五26 この釜はお前の物にちがひあるまい。さつそく持つてかへれ。

七68 見事な桃をたくさんおおくり下さいまして、有りがたう存じます。さつそくいたゞきました、(略)。

さつぱりする(サ変) 1 さつぱりする

「シー」

十37 又着物はそまつながら、さつぱりしたものを着て、齒もよく磨いてあました。

(略)。

十一85 コレニハ(略)ブラッシノ仕掛アリテ、錠綱ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。

さつま「薩摩」(地名) 4 薩摩 薩摩

サツマイモ

十30 關東ニテハ琉球芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。

十31 (略)、支那ヨリ琉球、琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。

十32 (略)、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。

十二86 薩摩の士に喜劍といふ人あり、(略)。

さつま「薩摩」(名) 3 薩摩 薩摩

十一29 諸子ハ數多アル我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。國名ヲ以テ名ツケラレタルモノニハ、安藝・薩摩・石見・肥前・相模・周防・丹後等アリ。

十一32 戰艦ハ(略)。(略)。安藝・薩摩・鹿島・香取等はナリ。

十二15 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、安藝ハ呉デ造ツタノデアル。

さつま「薩摩芋」(名) 1 薩摩芋

十30 甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、(略)。

さて「扱」(副) 1 さて

十一45 10 熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、さて往生院に入りて僧となり、(略)正寛法師と名乗れり。

さて「扱」(接) 12 サテ さて

七87 6 船長はかくいひ終へて、一段と聲をほり上げて、「さておしまひに一ついつておきたい事がありま

す。
八52 2 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲオコナハントシ、アラカジメ其ノ手ハズヲ定メタリ。サテイヨ／＼其ノ日トナレリ。

九33 6 ステブンソンは(略)、日夜其の事ばかり考へてゐた。さて幾度も幾度も造り直して、終に其の目的を達することが出来た。

九45 7 阿リは(略)、隊商と共に出立したり。さていよく沙漠に入りしが、木のかげ一つもなき砂原つゞきなれば、(略)。

九67 2 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。さて此の雨風も四季の時

候につれて、それ／＼にちがふ。
十18 8 (略)、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、(略)、幾度書直すかも知れない。

十19 9 活版所では、(略)、活字を拾つて並べる。(略)、寫眞は銅版に彫

りつけて、相當の場所に入れる。さてかりに印刷して、讀合せて見て、(略)。

十一47 3 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。

十一85 10 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練條機ト稱スル機械ニカケテ、(略)絲ノ形ニ近ツカシム。サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)、更ニヨリヲカケ、ツムニマキトラシム。

十二14 9 コレデ船ノ大體ノ形ガ出来ル。(略)。サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、(略)、細カイ造作ヲシタリシテ、(略)。

十二49 2 養蠶業の盛大は、長野・埼玉きて群馬、海なき縣に著し。

十二110 10 勅諭は先づ(略)由來を詳に御論しあり、(略)。とのたまへり。さて軍人の心得として次の五箇條を論し給へり。

さてさて(感) 1 サテ／＼
七24 9 保己一ハ笑ヒテ、「サテ／＼、目アキトイフモノハ不自由ナモノダ。」トイヒタリトゾ。

さては(接) 1 さては
七45 7 二つども多に三つども多、(略)、上り下りの藤の紋、さてはたかの羽・つるの丸、家の氏の名多ければ、紋の数々かぎりなし。

さては(感) 2 さては
九47 10 之を聞けるアリの驚は一方ならず、さては此のまゝにては過ぎれじと、(略)、そこより逃れ出でたり。

十一56 1 しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。(略)。ピエールが打ついつもの太鼓に違ない。さては生きてゐるのか。

さては(副) 1 さては
八8 3 秋の日の空すみわたり、風暖にさてはよき日や。
さと「里」(名) 5 里ひふるさと

五4 6 春が来た、春が来た、どこに來た。山に來た、里に來た、のにも來た。

五5 1 花がさく、花がさく、どこにさく。山にさく、里にさく、野にもさく。

五5 4 鳥がなく、鳥がなく、どこでなく。山で鳴く、里で鳴く、野でも鳴く。

六43 2 鳥ナキ里ノカウモリ。
八35 3 鳥ナキ里ノカウモリ。
八35 3 (略)、つゞいてかゝる梅が香に、うぐひす 鳴かぬ 里もなし。

さど「佐渡」(地名) 1 佐渡
十二48 7 古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は 山をうちて山を鑛る。
さとう「砂糖」(名) 6 砂糖 ひしおと さとう

六53 6 塩ハカラク、砂糖ハアマシ。
六53 8 菓子ノ中ニハ砂糖ヲフクマザルモノ少シ。

六54 3 ニモノヲスルニモ砂糖ヲ用フルコトアリ。
六54 3 塩ト砂糖トハ物ノ味ヲ附クルニ大切ナルモノニシテ、(略)。

六54 7 砂糖ハ種々ノモノヨリトレドモ、砂糖キビヨリツクレルモノ多シ。
十一37 9 本島産物の重なるものは、御承知の樟腦・米・茶・砂糖等にて、(略)。

さとうきび「砂糖黍」(名) 1 砂糖キビ
六54 8 砂糖ハ(略)、砂糖キビヨリツクレルモノ多シ。
さとうしんいち「佐藤真一」(人名) 1

佐藤真一
七67 9 九月一日 佐藤真一 村田新太郎様

さとうしんいちさま「佐藤真一様」(人名) 1 佐藤真一様
七69 7 九月二日 村田新太郎 佐藤真一様

さとし(名) ひおんさとし
さとし(形) ひみみざとし
さとしたまう「論給」(四) 7 論し給ふ「ヒ・フ・フ・ヘ」

十二110 9 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを論し給ひ、(略)。
十二110 10 さて軍人の心得として次

の五箇條を論し給へり。

十二112 8 國 禮儀を守る心得を缺ける軍人は國家としても許し難き罪人ぞと論し給ふ。

十二113 10 國 (略)、小さき信義を立てんが爲に大いなる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

十二114 9 國 (略) 忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、(略)。

十二115 3 國 此の五箇條を行ふも、結局一の誠心を本とすと論し給へる、返すくも服膺すべき大御言ならずや。

十二117 4 國 されば陛下も「此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。(略)。」と論し給へるなり。

さとす【論】(四) 2 サトス 『一シ・一ス』

七15 國 (略)、正成ハ道ニテサトスヤウ、(略)。ナンデハ年スデニ十歳ヲコエタリ。ヨク父ノ言フコトヲ聞分ケヨ。

十一102 9 國 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽・張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。備サトシテ曰ク、「我ノ孔明アルハアタカモ魚ノ水アルガ如シ。願ハクハ再ビイフコトナカレ。」ト。

さととり ひとおんさととり

さとる【恒】(四) 2 さとる 『一リ』

八72 1 國 諸君我を苦しめんとして、(略)却つて自ら苦しむにいたれり。(略)。諸君は今にして諸君の誤れるをさととりしならん。

十二39 6 國 廉頗之を聞きて、深く其の非をさととり、相如の門に至りて罪を謝し、(略)。

さなえ【早苗】(名) 1 さなへ 七10 3 國 ならぶすががさ涼しいこゑで、歌ひながらにうゑ行くさなへ。

さながら【苑】(副) 2 サナガラ さながら 九56 6 國 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、羽ヲ閉ヂテ、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

十一23 5 國 吹く嵐風に黒みたるはだは赤銅さながらに。

さなぎ【蛹】(名) 3 さなぎ 七32 7 國 繭の中の蠶はさなぎとなる。

七32 8 國 蠶が繭を作つてから二十日あまりたつと、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て来る。

七33 3 國 蛾が出ると、絲が取れないから、まだ出ない内にむして、さなぎをころしておいて、(略)。

さなだ ひとばっかんさなだ さねもり【実盛】(人名) 3 實盛 ひとさ とうさねもり

十53 1 國 國 「あな、むざんや、實盛にて候。」 十53 5 國 實盛日頃申し候に、『戦

場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。

十55 2 國 國 されば實盛は義仲の爲には七箇日の養父。

さは【然】(副) 1 さは 十13 3 國 國 床柱 なげきて語る、「略」、故里の 空なつかしや。」

「さはいへどうらやましきえ 身も輕き 君、床柱。あはれ我、(略) 片時も 休む間なし。」

さば【鱈】(名) 2 サバ 四38 1 國 アル日タヒ ヒラメ サバ タコナドガオヨイデキルト、(略)。

七70 2 國 魚類ニハイワシ・アヂ・サバ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガアリ、(略)。

さはあれ【然】(接) 1 さはあれ 十二112 9 國 一には、軍人は武勇を尚ぶべし。さはあれ、勇氣には大勇と小勇との區別あり。

さばき ひとわさばき さばく【左瀑】(名) 1 左瀑 十一77 9 國 ナイヤガラ瀑布は左右二つに分れ、左瀑は幅三百餘丈、右瀑は百餘丈、(略)。

さばく【砂漠】(名) 2 沙漠 ひとさいさ 九45 7 國 さていよく 沙漠に入りしが、木のかげ一つもなき砂原つゞきなれば、(略)。

九46 6 國 すべて沙漠の旅は、以前に通じし駱駝の足跡を目あてに行くなり。

さばく【捌】(四) 1 さばく 『一キ』 十一80 7 國 鵜匠は一人にて十二羽の鵜を使ひ、十二條の細なはを片手に握り、(略)、たくみにさばきてもつれしめず。

さび【錆】(名) 2 サビ 六29 2 國 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、時々青イ物ヲ出シマセウ。ソレガヤハリサビデス。

六29 3 國 シカモノソノサビハ大ソウドクナモノデス。」

さびし【寂】(形) 3 サビシ さびし 『一シキ・一シク』 八37 7 國 一つしか木々もうらがれて、さびしきにはのささん花や、(略)。

九39 7 國 昔ノ關所ハ僅カニ其ノアトヲ止ムルノミ。市街ハ甚ダサビシクナレリ。

十63 2 國 此ノアタリ、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、(略)。

さびしい ひとものさびしい さびしさ【寂】(名) 2 サビシサ さびしさ 九40 7 國 昔ヲ知レル人、若シ舊道ノ今ノサビシサト、昔ノニギハシサトヲクラベ見バ、(略)。

十二83 9 變化極らない妙音は、(略)、又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈

ませる。

さ・びる【錆】(上二) 2 サビル 『一
ビ・ビル』

六283図 「ソレデモ鐵ハデキニサビ
テ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六286図 「私タチノサビルノハ皆人
ガ使ハナイカラデス。」

さぶろう【三郎】(話し手名) 7 三郎

四323 三郎「知つてゐますとも。」

四332 三郎「同じです。」

四342 三郎「豆です。」

四344 三郎「あれも豆です。」

四348 三郎「それは知りません。」

四681 三郎「オカアサン、ソノオク
スリハニガウゴザイマスカ。」

四691 三郎「ソナニ少シツツ
ノマナイデ、(略)。」

さぶろう【三郎】(人名) 8 三郎

四227図 大キイネエサンハセイ
ガ高イカラ、高高ユビデス。

(略)。ソレカラ私ハ人サシユビ
デ、三郎ハ小ユビデス。」

四298 三郎のうちでは夕はん
が今すんで、(略)。

四306 母が父に「(略)。」とい
ひますと、三郎はそれをきい
て、(略)。

四354 父は三郎のあたまをな
でながら「(略)。」といひました。

四355図 「三郎はこんやは大そ
うもの知りになつたね。」

四668 三郎ノ母ハ四五日マヘ

カラ風ヲヒイテネテキマス。

四671 三郎ハシンバイシテ、ヒマ
サヘアレバ、母ノソバヘ來テ、
(略)。

八104図 三郎はいつもにこ／＼して
ゐますから、寫眞でも笑つて寫つて
ゐます。

さぶろうさん【三郎】(人名) 2 三郎
さん

四317図 その時あねのおはる
は、「三郎さんはまだそれを
知らなかつたのですか。」

八119図 三郎さんは實にかはいらし
く寫りました。

ざぶんと(副) 1 ざぶんと

四483 かへるは(略)。(略)。思ひ
だしたやうにざぶんと水の中
へとびこみます。

さほう【作法】(名) 2 作法

十3510図 (略)、何を聞いても、一々
明白に答へて、しかもよいなこと
はいひません。はき／＼してゐて、
禮儀作法をわきまへてゐることも、
それですつかり分りました。

十二914図 (略)、子供の行儀・作法
等につきては、主婦たる人の責任最
も重し。

さほど【然程】(副) 2 サ程 左程
八386図 我等ハ平生マツチヲ用ヒナ
レタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、
此ノモノノナカリシ昔ヲ思ヒ出スト
キハ、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル

、ナリ。

九722図 幸に私方は左程の損害も
無く、家族一同無事に御座候間、御
安心下され度候。

さま【様】(名) 7 さま 様 〆あなた

さま・あにがみさまがた・あにさまが
た・ありさま・うちやまいおきちさ
ま・おいしやさま・おかあさま・おか
げさま・おかだけいどうさま・おきや
くさま・おださま・おちよさま・おぼ
うえさま・おばさま・おはなさま・お
ひなさま・おひめさま・おやくにんさ
ま・おんありさま・かとうぜんさくさ
ま・かみさま・かみさまがた・かみな
りさま・こうごうさま・ごしゅじんさ
ま・さかさま・さとうしんいちさま・
じいさま・すずきあいきちさま・だい
ぶつさま・だいいりさま・たかはしちゅ
ういちさま・ちちうえさま・つつみと
みじさま・てんしさま・てんじんさ
ま・とくたろうさま・とのさま・なか
ばやしさくすけさま・にきちさま・
はちまんさま・ひなさままつり・ふじ
むらこうどうさま・ほとけさま・みな
さま・むらたしんたろうさま・やまも
とやさま

七632図 八九頭の犬いきほひよく數
人を乗せたるそりを引きて、雪の道
を走り行くさま。まことにいさまし。

七716 (略)、タコヤイカノアシヲソ
ロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。

十一254図 自轉車の兩輪が前後に並

べるも亦様變れり。

十一384図 耕作に水牛を使用する
様も珍しく、(略)。

十一452図 (略)、少しも疑ふ心なき
正儀の様を見ては、刀のつかに手を
かくべきやうもなし。

十一7310図 (略)、今度はひちを張り、
足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴
の卧したる様をなせり。

十一854図 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ
眞白雪ノ如ク、四尺程ノ幅トナリテ
進ム様、精巧ナルレースノ流ヲ見ル
ガ如シ。

さまざま【様様】(名) 16 サマザマ
サマ／＼ さまざま さま／＼ 様々
〆はなのさまざま

三683 (略)、イロイロナゴチソウ
ヲシタリ、サマザマノアソビヲ
シテ見セマシタ。

五21 (略)、わるい神さまがさまざ
まのわるいことをはじめました。

五352 (略)、羽ノ色ニモ、白イノヤ、
キイロナノヤ、黒イノヤ、マダラナ
ノヤサマ／＼アリマスガ、(略)。

六411図 おみやげもおみやげ話も様
々あるから、たのしみにして待つて
おいで。

七358図 塗物に黄・赤・黒・青など
さま／＼の色あるは、皆うるしに色
を着けたるなり。

七701 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色
々ノ動物ガ居リ、サマ／＼ノ植物モ

アル。
 七75 6 海草ノ形ハ様々デアアル。
 七77 8 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、(略)。
 八75 4 図 タビ猫ノ毛色ニハ黒・白・三毛ナド様々アレド、虎ハ一様ナリ。
 八83 5 図 地球上に住む人類は總數十六億ありて、其の人種はさまざまなり。
 九8 5 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、(略)。其ノ形モマタ様々デアアル。
 九51 7 図 (略)、所變れば様々に變るよそほひ面白や。
 十一24 8 図 (略)、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形状も様々なり。
 十一43 8 図 忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、かくと正儀に告ぐるに、(略)。
 十一72 10 図 (略)、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。
 十二48 1 図 (略) 四方の海の底廣く、魚介さま々海草の無限の富を藏したり。
 さます「寛」(四・五) 5 サマス さます「一シ・一ス」
 二1 3 ワタクシハマイアサハヤクメヲサマシマス。
 七62 1 図 犬は(略)、眠れる時も人の

足音を聞けば、たゞちに目をさます。
 九43 5 図 祖父様は(略)、私どもの目をさまし候頃には、はや朝顔のはちをならべて、(略)。
 九47 4 図 其の夜アリふと目をさまして、人々のかたるを聞けば、(略)。
 十68 10 図 波風にまじりて聞ゆる悲鳴の聲に目をさまし、(略)。
 さまたぐ「妨」(下二) 4 さまたぐ「一グル・一ゲ」
 十一70 3 図 人を訪問する時は業務をさまたげざる時間を選び、(略)。
 十二66 10 図 (略) 栗鼠の大群(略)、山あれば越え、河あれば泳ぎ、道に當るもの一として之をさまたぐることに能はざりきといふ。
 十二99 3 図 (略)、旅館にて夜晩く高聲を發して、他人の安眠をさまたぐるが如きは、(略)。
 十二101 4 図 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐることに多し。
 さまたげ「す」(サ変) 1 さまたげ「一セ」
 十二73 1 図 (略)、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ寢間に歸れり。

さみだれ「五月雨」(名) 1 五月雨さみだれ
 九68 2 梅の實の熟する頃降續く五月雨は、農家に取つては大切な雨である、それはちやうど田植の時節であるから。
 さむ「寛」(下二) 2 さむ 覺む「一ムル・一メ」
 九10 7 図 花に宿れる蝶は今眠さめたり。
 十一18 9 図 (略)、夏は山海皆綠にして目覺むるばかりあざやかなり。
 さむ「褌」 1 1 あおざむ
 さむい「寒」(形) 8 サムイ さむい 寒イ 寒い「一イ・一カッ・一ク」
 四26 8 さむい 北かぜがふいて、(略)。
 四27 7 図 (略)、かう さむくなつては、しかたがありますまい。
 五56 3 又サムイ時ニハ火ニアタリマス。
 六37 4 北風が一日ふき通して寒かつた。
 十27 10 山おろしの風は身にしみて寒い。
 十一54 9 (略)、吹く風は身を切るやうに寒かつた。
 十一65 4 寒イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、(略)。
 十一107 3 朝鮮は夏も暑い、冬は又案外に寒い。
 さむさ「寒」(名) 2 寒さ
 九70 8 (略)、身を切るやうな寒さに

思はず首をちぎめることもある。
 十一107 4 家の構造は主として寒さを防ぐ様に出来てゐる。
 さむし「寒」(形) 6 寒シ 寒し「一カラ・一キ・一シ」
 六7 6 図 秋ハス・シク、冬ハ寒シ。
 七62 8 図 又寒き國にては、犬をしてそりを引かしむ。
 八37 8 図 (略)、北風寒きやふかけに、びはの花咲く年の暮。
 八83 1 図 我が日本の國の大部分は、冬も甚だしく寒からず、夏も甚だしく暑からず、(略)。
 十80 6 図 男子も女子も寒き時は犬の皮などにて造れる羽織の如きものを用ひ、(略)。
 十二68 8 図 (略) 露西亞及びシベリヤの寒き平地に住せるレミングと稱する地鼠の一種なり。
 さむらい「侍」(名) 1 士
 十51 8 図 士かと見れば、錦のひたゝれ着けたり。大將かと思へば、續く者なし。
 さめ「雨」 1 1 はるさめ・むらさめ
 さめ「鮫」 1 1 1 わにさめ
 さめさめ「副」 1 1 1 さめさめ
 十55 5 図 義仲之を見て、「(略)」。されば實盛は義仲の爲には七箇日の養父。(略) 厚恩いかでか忘るべき。」と、さめさめと泣きたれば、(略)。
 さ・める「寛」(下二) 2 さめる「一メ・一メル」

十二 61 ⁴ 文 (略)、人道と車道との間

素を養分にして酸素を放つ作用があ

十一 77 5 文 美しき瀧にして、眞に白

ラズ。

九54文 (略)、拜殿の後に本殿あり、

いづれも善盡し、美盡せり。(略)。天然の美は更に人工の美よりも勝れたり。

十4510 直線を(略)並ぶ時は、美しき模様を生ず。(略)。(略)、曲線を用ふれば、更に美しき模様を得べし。

十6110 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道アリ。其ノ左右上下更ニ無數ノ坑道アリ。(略)。

十758 骨ハ筋肉ニ包マレ、皮膚更ニ其ノ上ヲオホフ。

十143 陵に至る路のあたり櫻樹多し。之を中の干本といふ。本道を更に南へ進めば、(略)竹林院あり。

十184 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十306 又(略)等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ツケタルモノニシテ、(略)ハ何レモ上古ノ武神ヲマツレル神宮ノ名ナリ。驅逐艦ノ名コソ更ニ優美ナレ。

十771 瀧の後より山路を上るのと四町餘、一條の谷川あり、(略)。更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。

十858 (略)、コレヲ練篠機ト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、又更ニ他ノ機械ニ移シ、イヨイヨ延シテ、イヨ／＼細クシ、(略)。

十861 (略)、又更ニ他ノ機械ニ

移シ、(略)、次第二ヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ヅカシム。サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)、更ニヨリヲカケ、ツムニマキトラシム。

十937 (略)、買手にはかに増すときは、(略)、靴屋の利益非常に多かるべし。かゝる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、(略)。

十1136 村會議員も全村一致して之を選挙し、互に競争するが如きこととなし。

十3110 「二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。尚三子あれば更に再舉を圖るべし。」

十465 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

十698 しかも僅かに飢をしのぐは先頭に進める一部に過ぎず、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、(略)。

十778 パロスを出帆して七日目に、(略)カナリヤ島に着し、(略)九月六日更に西へ向つて航行せり。

十848 やゝあつて紳士はしばらく弾く手を止めると、(略)紳士は更に埃太利の國歌を弾始めた。

十868 良雄一笑して更に耳を傾けず。

十919 (略)、むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ時、一日の勞苦は忘

れられて、更に明日の活動を思ふなり。

さらば「然」(接) 11 サラバ さらば さらば

八175 (略)。人手ヲカルニモ及バズ。トテ、(略)、破レタル所ヲ一間ツツ張レリ。(略)、「サラバコト／＼ク張りカヘ給へ。」

八302 工、川成ヲ音ナヘバ、「イザ、コナタヘ。」トイフ。サラバトテ入ラントスルニ、(略)。

九34 (略)、此の地に(略)大蛇あり、毎年來りて、我が娘を取食ひ、(略)。(略)と答ふ。尊、「さらば我汝等のために其の大蛇を退治せん。」とて、(略)。

十148 (略)、心ある者どもいづれも此の議に同ず。さらばとて備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、(略)。

十158 (略)山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、(略)。

十429 (略)と、しきりに望めば、力及ばず、「さらば是にて本意を遂げよ。」とて、(略)。

十598 さらば行くか、やよ待て、我ガ子。老いたる母の願は一つ。

十726 (略)、何處へなりとも出でて遊び給へ。(略)といへば、畫工「(略)。さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、(略)。

十1142 (略)、村長は「(略)との校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」と説明したれば、さらばとて原案のまゝに決議せり。

十297 「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。さらば我必ず重く汝を賞せん。」

十378 高虎「年老いて其の任にあらず。」とて之を否む。秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。

さらば「然」(感) 8 さらば さらば

十414 『さらば』と、握手ねんころゝ、別れて行くや右左。

十6010 さらばさらば、父母さらば。

十6010 さらばさらば、父母さらば。

十6010 さらばさらば、父母さらば。

十611 弟さらば、妹さらば。

十611 弟さらば、妹さらば。

十12010 師の君さらば、健か。

十1211 我が友さらば、健か。

十101 サルトカニ

一391 クルマニツンダタカラ

モノ、(略)。サルガアトオスエ

ンヤラヤ。

六423 サルモ木カラオチル。

七281 サルニハ手ノハタラキヲスル

モノガ四本アリマス。シカシ人ノヤ

ウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。コレハチエガ少イカラデス。

十二679 南亞米利加の森林にオレンジの熟する季節には、數多の猿遠く數百里の地より集り來りて之を食ひ、(略)。

さる「去」(四) 13 さる 去ル 去る

『ラ・リール・ル・レ』ひいてさる・こぎさる・たちさる・とりさる・のがれさる・はこびさる

十二20 老人足ニテ之ヲ受ケ、笑ヒテ去ル。

十二39 驚キテ目送スレバ、ヤ、アリテ引返し來リ、「(略)。」トイヒ捨テ去レリ。

十二46 十餘年ノ後、我マタ汝ヲ見ルベシ。」トテ、其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。

十二73 道後は四國の伊豫にあり。(略)、帝都をさること遠けれども、古代より世に著れ、(略)。

十二100 櫻井町ヲ南ヘ去レバ談山神社ノ一ノ鳥居アリ。

十二118 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十二689 (略)、街上に落ちたる硝子の一片を去るも、公衆の利益なるべし。

十二704 人を訪問する時は(略)、用事終れば直ちに去るべく、(略)。

十一84 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、土砂其ノ他ノ雜物ヲ去リ、(略) 縫綿トス。

十一85 (略) ブラッシノ仕掛アリテ、縫綿ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。

十二314 賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圍を解きて去れり。

十二675 又燕の春來りて秋去リ、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二675 又燕の春來りて秋去リ、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

さる「策」(名) 3 ザル さる

三298 (略) ザルカゴナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。

五211 (略)、おはなはざるの中のたけのこをなべの中へ入れました。

七384 (略)、出口ニハ(略)、ヲケ・トラヒ・ザルナドヲ賣ル荒物屋ガアル。

さるさわのいけ「猿沢池」〔地名〕1

猿澤ノ池 十942 停車場ヲ出デテ、左ニ開化天皇ノ陵ヲ拜シ、猿澤ノ池ニ至ル。

さるほに「然程」(接) 1 サル程ニ 八517 コレヨリ鎌足、皇子ト親シミ奉ルコトヲ得テ、(略)、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。サル程ニ三ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、入鹿ノ参内スルコトアリ。

されど「然」(接) 6 サレド されど 七911 「杉野々々。」中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。サレド杉野ハ見アタラズ。

十88 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。されど森林のあたふる利益は是のみには止らず。

十一165 主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊に麗しく笑ませ給ひぬ。されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ひとがむることもなかりき。

十一915 日光の如きは、(略) 價あることなし。水の如きも亦然り。されど水は大都會などにては、時として價を生ずることあり。

十二605 (略)、車馬街上に満ちて往來頗る困難なり。されど十字街頭に立てる巡查の一舉手の合圖に、(略)、少しも混雜を生ずることなし。

十二716 遠き慮なければ、必ず近き憂あり。されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

されども「然」(接) 2 サレドモ されども 七558 櫻ガ岡ヨリ見下セバ、見ユルカギリハ皆人家ナリ。サレドモコ、ニテ見ユルハ東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。

九634 田村麻呂は(略)、怒る時

はたけき獸も恐れたり。されども又いつくしみ深き人にて、笑ふ時は子供もなつき親しみたりといふ。

されば「然」(接) 14 サレバ されば 七621 犬は耳ざとき動物にして、眠れる時も人の足音を聞けば、たちち目をさます。されば夜を守らしむるによろし。

九782 (略)、預ケタル金高ノ次第ニ上リ行クハ樂シキモノナリ。サレバ(略) 無用ノ入費ヲハブキテ、(略) 貯ヘンコトヲ心ガクベシ。

九889 (略) 遠キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。(略)、其ノ不便如何バカリナラン。(略)。サレバ何レノ國ニテモ、(略)、或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九966 我が國(略)、よく人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。されば一年中遊覽者跡を絶たず、(略)。

十327 (略) 民ノ常食ニスベキモノヲト心ガケシガ、(略)、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レリ。(略)。

サレバ平左衛門ノ死セシ時ハ、中國ノ人々、知ルモ知ラヌモ父母ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。

十534 木會「如何に、髪・ひげの黒きは。」樋口「されば思ひ出したる事の候。

十551 皇山は『略』とて、

ひそかに我を此の齋藤別當のもとに預け、別當は七日の間手もとに置き

て、木會へつかはしたり。されば實

盛は義仲の爲には七箇日の養父。

十829 あいぬの敷、(略)、近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に

足らず。されば北海道舊土人保護法と稱する法律ありて、(略)、厚く保護の方法を講ぜり。

十一84 他群の蜂は甚だしく之を敵視し、(略)、我が群中に入り來れば、直ちに之をさし殺す。されば氣候不順にして、花のとぼしき

時は蜂合戦の起ること珍しからず。

十一339 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。サレバ艦

體輕ク、小サク、船脚ハ淺シ。

十一1125 (略)、近年作物の改良も出來、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多

く、難を飼はざる家なし。(略)。池には大抵鯉・鮒等を養ひて、(略)。

又麥稈眞田を編み、花筵を織ること行はれ、(略)。されば全村頗るゆたかにして、皆其の家業を樂しめり。

十二701 (略)、遂に危害を顧みず、向ふ處何物をもはからずして突進す。されば(略)魚腹に葬らるゝもの、野獸の爪牙にさかれて食はるゝもの、其の數を知らず。

十二1107 朕は汝等軍人の大元帥な

るぞ。されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は特に深かるべき。

十二1172 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。されば陛下も「此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。(略)」と論し給へるなり。

さわ どのさわ

さわがしい 騒(形) 2 さわがしい

『イ』

五121 ある時上の方でさわがしいおとがするから、見上げると、(略)、人や馬や車がたくさん通つてゐるのです。

九687 (略)、ほし物を取込むひまもない夕立は、さわがしい中に勇ましい。

さわぎ 騒(名) 1 さわぎ

九858 (略)、熊吉に水を吐かせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわぎである。

さわぐ 騒(四・五) 5 サワグ さわぐ 『ガ・ギ・グ』

六234 居合せた子どもは皆うろたへてさわぎました。

八362 野べも山べも新緑の風に藤波さわぐ時、池水にほふかきつ

ばた。

八423 火事場でさわぐ人の聲がこ

までも聞える。

十一213 我は海の子、白浪れ

さわぐいそべの松原に、(略)。

十一1063 蜀ノ軍(略)國ニ歸ラン

トス。魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。蜀ノ軍少シモサワガズ、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。

さわし しゃざわし

さわす 酢(五) 2 サハス 『サ・ス』

四114 今一本ノ木ハシブカキ

デスカラ、サハサナケレバタベラレマセン。

四115 サハスト アマク ナツテ、

タイソウウマイ カキ デス。

さわやか 爽(形状) 2 さわやか

七653 又冷水浴や海水浴は(略)からだを強くし、心をさわやかにする。

十724 温泉のわき出づる處はおほむね火山の附近に在りて、四圍の風

光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。

さわり 障(名) 1 障 しゃんざわり

九327 (略)、機關の一部に故障があつたので、すぐそれを直した。其の後は何の障もなく、百五十マイルを三十二時間で走つた。

二584 二十一 ハナサカヂイ(三)

三目3 コレガスンデカラ

三目4 ノアソビ

三65 ノアソビ

四目3 二山の上の見はらし

四目4 三十一月三日

四84 三十一月三日

八目3 第二 參宮日記の一節………

三

さん 三(名) 13 三 3 三 しゃん

こうにねんさんがつ・ごこさんじ・ごじょうさんじやく・ごすん・さがみする

がいずさんごく・そのさん・だいさん

かい・だいさんしゅ・だいさんず・だいさんだん・たいへいようだいにだい

さんかんたい・てんしようさんねんご

がつ・ヨーロッパのさんだいと・よく

ちようさんじころ

四46 三 ケタ

六75 三 ケタ

六75 三

七108 三

八48 三

八604 三

九17 三

九929 三

十一2 三

十一221 三

十一602 三

十一1167 三

十二119 6 三

さん「山」母あかぎさん・あそさん・ありさん・アルプさん・いちざん・かいけいざんのたたかい・きいのくになちさん・きんかざん・さんざん・しざん・しちめんざん・しらねざん・たいこさん・つくばざん・つるぎざん・なんたいさん・にざん・にっこうざん・はこねざんちゅう・はるなざん・ひこざん・ふじざん・ふんかざん・みょうぎさん

さん「産」(名) 2 産

十一67 9 図 身を立て、父母をあらはすも、産を破り、祖先をはづかしむるも、(略)。

十二92 4 図 身分不相當の活計は産を破り、家を亡す基なり。

さん「ああいさくさん・うらしまさん・

おかあさん・おきくさん(人名)・おきくさん・おじいさん・おじさん・おちよさん・おつかさん・おとうさん・

おとよさん・おばあさん・おぼさん・おはなさん・おまつさん・きむらさん・さぶろうさん・じろうさん・たけ

おさん・だるまさん・にいさん・ねえさん・ふじめさん・まさおさん・まつむらさん・みなさん

さんいん「山陰」(地名) 1 山陰

十二43 3 図 (略) 安永八年櫻島の破裂せし時は、九州・四國・山陽・山陰・東海道までも火山灰を降らしたりといふ。

さんいんどう「山陰道」(地名) 1 山陰道

十一15 2 図 (略)、播磨の今宿といふ所より山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

さんが「山河」(名) 1 山河

十102 10 図 大和國ハ(略)、昔ナガラノ山河、一木・一草盡ク上古ヲ談ゼザルナシ。

さんかい「三回」(名) 1 三回

十二16 10 図 各地の測候所は其の地方の氣象觀測を毎日三回中央氣象臺に報告し、(略)。

さんかいいたす「参会」(四) 1 参会致す「一ス」

十93 1 図 来る八日講話會これあり候由にて御誘ひ下され(略)。(略)。

當日は(略)、是非参会致すべく候。

さんがいまつ「三蓋松」(名) 1 三がい松

七45 5 図 (略)、梅ぼち・櫻・たちばなや、三がい松にさゝの雪、(略)、紋の数々かぎりなし。

さんがく「産額」(名) 3 産額ひせかいさんがく

十一38 2 図 其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様にて御座候。

十二48 7 図 (略)、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は 銅の産額た

びまじし。

十二49 5 図 近年やみに産額の増

大せしは北陸の 福井・石川・富山なる 羽二重織の輸出品。

さんかげつかん「三箇月間」(名) 1 三箇月間

十一96 2 図 (略)、一月より三月まで凡そ三箇月間は航路殆ど全く絶え、(略)。

さんがつ「三月」(名) 3 三月

五27 6 図 二月・三月花ざかり、うぐひす鳴いた春の日の たのしい時もゆめのうち。

六7 1 図 三月ノ初ヨリ五月ノ終マデハ春ナリ。

十一96 2 図 御承知の通り、冬は寒氣厳しく、(略)、一月より三月まで凡そ三箇月間は航路殆ど全く絶え、(略)。

さんがつみつか「三月三日」(名) 1 三月三日

十91 9 図 三月三日 藤村孝藏 中林作之助様

さんがつむいか「三月六日」(名) 1 三月六日

十93 3 図 三月六日 中林作之助 藤村孝藏様

さんかん「三韓」(名) 2 三韓 三韓

八51 7 図 サル程ニ三韓ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、入鹿ノ参内スルコトアリ。

八52 7 図 ヤガテ同志ノ一人御前ニ進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、(略)。

さんかん「山間」(名) 1 山間

十63 2 図 此ノアタリ、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、(略)。

さんき「三騎」(名) 1 三騎

九84 3 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、(略)。

さんきゅう「三級」(名) 1 三級

十二102 3 図 我が國の地方自治團體は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。

さんぎょう「産業」(名) 4 産業

八95 8 図 (略)、海陸運輸の便益々開け、産業の發達は今後いよいよ著しからん。

十一36 10 図 (略)、交通の利便いよく開け、産業の發達は益々多望に相成候。

十二50 4 図 産業組合

十二105 1 図 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、(略)に務むるが如きは、(略)。

さんぎょうくみあい「産業組合」(名) 1 産業組合

十二104 10 図 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、(略)に務むるが如きは、(略)。

さんぐうにつきのいっせつ「課名」2 參宮日記の一節

八目 第二 參宮日記の一節

八三九 第二 参宮日記の一節

さんけい ぐにっぽんさんけい

さんけいす「参詣」(サ変) 1 サンケ

イス「ース」

七五九 図 (略)、靖國神社ニサンケイ

ス。

さんけいする「参詣」(サ変) 5 サンケイスル さんけいする「一・シ・ースル」

五六八 オチヨトオハナハ (略)、オ宮ニサンケイシタ。

五八八 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツテキル。サンケイスル人ハ皆カハルくコレヲ鳴ラシテヲガム。

六九五 まづ御社にさんけいして、しばらくそこで休みました。

六三九 図 (略)、たくさんのお寺やお宮へさんけいした。

六四四 図 明日は (略)、金閣寺を見て、北野の天神様へさんけいする。

さんげん「三間」(名) 1 三間

十一八九 図 熱き地方の白蟻は周圍十間、高さ三間にも達する小山の如き巢を造り、(略)。

さんこ「三個」(名) 1 三箇

十二四二 図 (略) 杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。

さんこ「珊瑚」(名) 2 サンゴ

七七二 中デオモシロイノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキル。

七七三 一 カンザシノ玉ヤヲジメニスル

サンゴハコノ蟲ノ骨デアル。

さんこう「三港」(名) 1 三港

十一三七 図 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。

さんこう「参考」(名) 1 参考

十二九二 図 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、(略)、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

さんこく「山谷」(名) 1 山谷

十二六八 図 東南シベリヤの高地に住めるかもしかの一種は、冬日(略)、水を尋ねて低地に下り、春を待ちて再び山谷に入る。

さんこし「三箇小隊」(名) 1 三箇小隊

九二六 図 歩兵は平時凡そ百五十人を一中隊とし、之を三箇小隊に分つ。

さんこ「三箇大隊」(名) 1 三箇大隊

九二六 図 四箇中隊を大隊、三箇大隊を聯隊、二箇聯隊を旅團とす。

さんさい「三才女」(課名) 2 三才女

九目三 第二十六課 三才女

九四一 第二十六課 三才女

さんさい「散在」(サ変) 1 散在す

十一一八 図 瀬戸内海には、(略)、大小無数の島々は各所に散在す。

サンサルバドル「地名」 1 サンサルバドル

ドル

十二七九 図 (略)、コロンブスは(略)、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。是今の西印度諸島の

一なり。

さんさん「三山」(名) 2 三山

十二九二 図 敵傍山・香具山・耳無山ノ三山、(略)、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

十二四八 図 (略)、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は 銅の産額た

さんさん「散散」(形状) 2 さんぐ散々

五八八 へいはは (略)。三方から攻立てられて、さんぐにうちやぶられた。

十一四一 図 (略)、赤松光範、楠木正儀と攝津の住吉に戦ひて、散々に撃破られたり。

さんさん「三三五」(副) 1 三三五

十九五 図 神鹿ノ三々五々友ヲ呼び、

人ニ近ヅキ來リテ食ヲ求ムルモ愛ヲシ。

さんし「三子」(名) 1 三子

十二三三 図 (略) 「二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。尚三子あれば更に再舉を圖るべし。」

さんじかい「参事会員」(名) 2 参事会員

十二一三 図 (略)、府縣・郡・市會に

於て参事會員を選擧するも、(略)、一に此の精神に基づくべく、(略)。

十二一三 図 (略)、市町村長・参事會員等の其の事務を處理するも、議員の經費を議するも、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。

さんじかん「三時間」(名) 1 三時間

六一一 のぼる時には三時間もかゝつたが、(略)。

さんしさい「三四歳」(名) 1 三四歳

十五 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、(略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出來ルサウデアル。

さんしやく「三四尺」(名) 1 三四尺

五三〇 茶ノ木ノ高サハ大テイ三四尺グラサデ、(略)。

さんしせん「三四錢」(名) 1 三四錢

八三八 図 マツチハーダースノ價三四錢グラキナレバ、(略)。

さんじっかし「三十箇所」(名) 1 三十箇所

十七三 図 我が國は火山國にして、全國到る處に温泉あり。伊豆半島のみ

さんじっかん「三十貫」(名) 1 三十貫

九六三 田村麻呂は身の丈五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、體重は三十貫を越え、(略)。

さんじっせん「三十錢」(名) 1 三十

四二六 図 「三十セン アゲマスカラ、

コレデトツテクダサイ。」	九目 ¹¹ 第十課 汽船・汽車の發明……三十	六目 ¹² 第十一 太郎の日記……三十五	八目 ¹² 第十一 花ごよみ……三十
さんじったん「三十反」(名) 2 三十	十目 ¹¹ 第十課 甘藷……三十	十五	四
反	十二目 ⁹ 第八課 日本 <small>カシ</small> の女子……三十	九目 ¹² 第十一課 昔の旅……三十	十目 ¹² 第十一課 たしかな保證……三十四
九 ¹² 8 國 去月二十五日御差出の繙物二十反本日到着。(略)、なほ三十反御送り下され度、(略)。	三十	十一目 ¹⁰ 第九課 臺灣 <small>カラム</small> より樺太へ……三十四	十二目 ¹⁰ 第九課 學校落成式……三十四
九 ¹³ 7 國 拜啓、御註文の繙物三十反、(略)發送いたし候。	さんじゅう「三十」(名) 3 三十冊	……三十五	さんじゅうしち「三十七」(課名) 4
さんしや「三社」(名) 1 三社	30 ぐくがつさんじゅうにち・ごいちじさんじつぶん・ごぜんじゅういちじさんじつぶん・ろくがつさんじゅうにちごごにじ	さんじゅうごにん「三十五人」(名) 1 三十五人	さんじゅうしち「三十七」(課名) 4
九 ¹⁷ 7 國 中ニモ香取・息栖ノ兩社ハ北浦ノホトリナル鹿島トトモニ三社ノ名アリ。	八 ⁴⁸ 國 卅	十六 ³ (略)、三十五人の若者はひとしく目を其の方向に向けた。	二目 ⁵ 十五 オカアサン……三十
さんじやく「三尺」(名) 2 三尺	九 ⁴⁰ 國 卅	さんじゅうさん「三十三」(課名) 3 三十三	七
九 ⁵³ 1 國 (略)、手ぬぐひ三尺引きしほり、頭に結ぶはち巻は 次第々々にすたれ行く。	十一 ¹⁰⁹ 6 金がなくで、冠禮の行へない者は三十を過ぎてもチョンガーで、大人の仲間入が出来ない。	二目 ⁴ 十四 モチノマト……三十三	三月 ¹⁴ 十三 がくかうへもつていくもの……三十七
十一 ⁹⁵ 10 國 御承知の通り、冬は寒氣厳しく、地面は三尺の下まで凍り、(略)。	さんじゅういち「三十二」(課名) 2 三十一	十三	四月 ¹³ 十二 サザエノジマン……三十七
さんじやくくすん「三尺九寸」(名) 1 三尺九寸	三月 ¹² 十一 タウエ……三十一	五月 ¹³ 第十二 蝶……三十三	……三十七
五 ¹⁴ 6 ナラノ大ブツツイツテ(略)。(略)、目ノ長サガ三尺九寸、(略)。	八目 ¹¹ 第十 かぢ屋……三十一	六目 ¹¹ 第十 織物……三十三	十二月 ¹¹ 第十課 公事と私事……三十七
さんしゅう「三種」(名) 2 三種	さんじゅういち「三十二」(名) ぐはちがつさんじゅういちにち	さんじゅうさんげんどう「三十三間堂」(名) 1 三十三間堂	さんじゅうしちねん「三十七年」(名) 1 三十七年
九 ⁹⁰ 3 國 現今我が國ノ貨幣ニハ金貨・銀貨・銅貨ノ三種アリ。	さんじゅうく「三十九」(課名) 3 三十九	六 ³⁹ 8 國 三十三間堂のほとけのかずの多いのにはおどろいた。	八 ⁸⁴ 6 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戦地ヘ向ツタガ、(略)。
十一 ⁵⁷ 7 國 群中には必ず雌蜂・雄蜂・働蜂の三種あり。	六目 ¹³ 第十二 京都からの手紙……三十九	さんじゅうさんばん ぐさいごくさんじゅうさんばん	さんじゅうしちねん「三十七年」(名) 2 三十七年
さんじゅう「三十」(課名) 5 三十	七目 ¹³ 第十二 山内 <small>カサ</small> 一豊の妻……三十九	さんじゅうさんり「三十三里」(名) 1 三十三里	八 ⁴⁸ 8 國 明治二十七八年及び三十七八年戦役の戦利品たる大砲、(略)。
二目 ³ 十三 タコノウタ……三十五	十二目 ¹² 第十一課 阿蘇山……三十九	十一 ⁹⁷ 9 國 日・露の境は幅五間餘を一文字に森林を伐りすかし、東西三十三里、(略)。	九 ²⁶ 10 國 (略)、三十七八年の戦役後は(略)十九箇師團となれり。
五目 ¹² 第十一 茶……三十	さんじゅうご「三十五」(課名) 4 三十五	さんじゅうし「三十四」(課名) 5 三十四	さんしゅうする「参集」(サ変) 1 参集スル「一シ」
	四目 ¹² 十一 ワラ……三十五	七目 ¹³ 第十二 ほたる……三十四	
		七目 ¹¹ 第十 やき物とぬり物……三十四	

- 十二34 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集シ、(略)。
- さんじゅうにじかん「三十二時間」(名)
- 1 三十二時間
- 九32 8 (略)、百五十マイルを三十二時間で走つた。
- さんじゅうねん「三十年」(名) 2 三十年
- 六69 8 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、今年で三十年になります。
- 六73 2 (略)、三十年の間にどうしてもきらひな子供が七八人ございましてた。
- さんじゅうはち「三十八」(課名) 4 三十八
- 五目2 第十四 ていしやば……………三十八
- 八目13 第十二 マツチ……………三十八
- 九目13 第十二 箱根山……………三十八
- 十目13 第十二課 水師營の會見……………三十八
- さんじゅうはち「三十八」(名) ひめいじさんじゅうはちねんごがつにじゅうしちにちござんごじ
- さんじゅうはつせき「三十八隻」(名)
- 1 三十八隻
- 十二9 10 (略)、三十八隻の中逃げおほせたるは巡洋艦以下數隻のみ。
- さんじゅうもんめ「三十匁」(名) 1 三十匁
- 七53 1 (略)、書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、(略)。
- さんじゅうり「三十里」(名) 1 三十里
- 十一46 8 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、(略)、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。
- さんじゅうろく「三十六」(課名) 2 三十六
- 五目14 第十三 小子部のする……………三十六
- 七目12 第十一 勸工場……………三十六
- さんじゅうろく「三十六」(名) 1 36
- 九40 36
- さんじゅうろくまい「三十六枚」(名)
- 1 三十六枚
- 五16 4 鯉ハ(略)。(略)ウロコガ三十六枚ツツナランデキマス。
- さんしゅつ「産出」(名) 1 産出
- 八95 4 (略)、焼物・塗物・扇・綿絲・織物等の産出すこぶる盛なり。
- さんしゅつ「産出」(サ変) 3 産出ス 産出す「一シースル」
- 十60 7 我が國銅山ノ中ニテ最モ盛ニ銅ヲ産出スルハ足尾・小坂・別子等ナリ。
- 十61 3 (略)ニ用ヒタル銅ハ、大抵此ノ山ヨリ産出シタルモノナリトイフ。
- 十一7 6 女王の任務は卵を産むにあり。氣候の暖なる間絶えず之を産出するを以て、(略)。
- さんしゅつだか「産出高」(名) 3 産出高
- 十61 1 此ノ銅山ハ發見ノ當初ヨリ産出高スコブル多ク、(略)。
- 十61 5 然レドモ其ノ頃ハ(略)、産出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト多カリシナリ。
- 十61 8 明治二十年頃、新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、(略)、産出高モ著シク増加シ、(略)。
- さんしゅのじんぎ「三種神器」(名) 2 三種の神器
- 九1 3 代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。
- 九4 5 天照大神、八咫鏡・八坂瓊曲玉と共に之を皇孫に授け給ひしかば、これより三種の神器の一となれり。
- さんじょう「山上」(名) 5 山上
- 八86 7 中佐ハ(略)、トウく山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。
- 九38 10 箱根山ハ(略)。(略)。山上ナル蘆湖ノホトリニ關所アリテ、(略)。
- 十一4 7 花は薔より咲初めて次第に山上に及び、(略)。
- 十二27 10 三日を過ぎなば、又山上に來りて援軍の消息を示さん。
- 十二29 4 十六日勝商は再び山上にのろしをあげ、次いで城に入らんとするに、(略)。
- さんじょう「参上」(名) 1 参上
- 十7 2 當日参上御見送致すはずに候へども、(略)、手紙を以て御祝ひ申上候。
- さんじょうする「参上」(サ変) 1 参上する「一シ」
- 七69 4 其の内参上してお禮を申し上げます。
- さんじょうよ「三丈余」(名) 1 三丈餘
- 九94 2 石の大鳥居高さ三丈餘、表門を入れれば五重塔あり。
- さんしりん「三四厘」(名) 1 三四厘
- 八38 3 マツチハ(略)、一箱三四厘ニモ足ラズ。
- さんす「産」(サ変) 4 産ス 産す「一シースル」
- 九56 4 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)。
- 十42 4 花筵ヲ最モ多ク産スルハ岡山・廣島・福岡・大分等ノ諸縣ニシテ、(略)。
- 十一38 1 茶は主として北部に産し候。
- 十一89 9 アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。
- さんす「算」(サ変) 1 算す「一ス」
- 十二59 10 巴里の人口は二百八十

萬、伯林は二百萬を算す。

さんすい「山水」(名) 2 山水

七五〇四 花鳥・山水・人物などのものが、うはぐすりをかくる前にあがく。

七四一〇 旅館は山により、谷に臨みて、山水のながめをほし、いまゝにするを得べし。

さんすう「算数」(名) 1 算数

十〇二四 彼等は元は読み書きも知らず、算数の考もとぼしかりしが、今は(略)、読み書き・計算をまなし得るものあるに至り、(略)。

さん・する「産」(サ変) 2 産する

「スル」

十一四九 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一五一 此の一事でアラビヤに名馬の産する所以が分つた。

さんせい「参政」(名) 1 参政

十二一〇四 (略)、議員たる者は(略)忠實に其の職責を盡すべく、一般選舉人も亦(略)参政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

さんせき「三隻」(名) 2 三隻

十二一〇三 (略)、沈没したるもの僅かに水雷艇三隻に止れり。

十二二七二 遠征の船は三隻の小艦にして、(略)。

さんせん「三銭」(名) 8 三セン 三せん 三銭

四二四一 奥トミ「ソノ糸ハ一カケイクラデスカ。」オマツ「三センデス。」

六三〇二 (略)ふでを買ひに來た。一本三せんづつのを二本買つて、(略)。

七五一二 「これにはちやんと三銭の切手がはつてあるのに、(略)。」

七五一五 「手紙は四匁までは三銭ですが、(略)。」

七五二八 この手紙は四匁より重いの、差出人が三銭しかはつておきません。

七五二九 つまり三銭だけが不足です。

七五二四 「小包郵便でもやはり四匁までが三銭ですか。」

十一一〇 若シ一人ノ手デ製造スルナラバ、一包三銭ヤ三錢五厘ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。

さんせん「山川」(名) 1 山川

八八三 (略)、雪月花のながめも折節にかはりて面白く、山川の風景もうるはし。

さんぜんえん「三千円」(名) 2 三千圓

十一四七 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。

十一四七 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。

さんぜんきん「三千金」(名) 1 三千金 十一四九六 「閣下、三千金が惜しう御座いますか。此の馬が欲しい御座

いますか。」

さんせんごりん「三錢五厘」(名) 2

三セン五リン 三錢五厘

四二五二 「コノ太イノガ五センデ、細イノハ三セン五リンデス。」

十一一〇 若シ一人ノ手デ製造スルナラバ、一包三銭ヤ三錢五厘ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。

さんぜんにん「三千人」(名) 2 三千人 五七五 しかしよしつねは(略)、強いものばかり三千人をすぐつて、(略)ひよりごえに向つた。

五八五 これを見た三千人の軍ぜいは、(略)。

さんぜんねん「三千年」(名) 1 三千年 十一一七 建國以來三千年 歴史の跡にかんがみて、日進月歩ゆるみなき 同胞すべて六千萬。

さんそ「酸素」(名) 4 酸素 酸素 十二二二 動物は呼吸作用によつて、空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出す。

十二二八 植物も動物と同じく、呼吸作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、(略)。

十二二二 外に同化作用といつて、盛に炭酸瓦斯を取つて、(略)酸素を放つ作用がある。

十二二二 是は水中にとけてゐる酸素が吸盡されるからである。

さんだい「参内」(サ変) 1 参内ス

「スル」

八五一八 サル程ニ(略)、入鹿ノ参内スルコトアリ。

さんだいと「三大都」(名) 1 三大都

十二五九 倫敦・巴里・伯林を歐羅巴の三大都とす。

さんだいはくふ「三大瀑布」(名) 1 三大瀑布 十一一七〇 中にも華嚴・霧降・裏見を日光の三大瀑布と稱す。

さんだいまんこ「三大門戸」(名) 1 三大門戸 十二五八 安東縣は(略)、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

さんだんめ「三段目」(名) 1 三段目 四七二 (略)、三ダン目ニハ五人バヤシヲオキマシタ。

さんち「產地」(名) 4 產地 九八二 河口ニ銚子港アリ。醬油ノ產地トシテ知ラル。

九八九 是金銀ハ(略)、產地異ナリトモ、成分ニ異同ナクシテ(略)。

十一四六 アラビヤは世界に名高い良馬の產地である。

十二四九 絹織物の產地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も 古く其の名を知らまたり。

さんちゅう「山中」(名) 1 山中 十二四二 阿蘇山は(略)、山中に

多くの噴火口及び温泉あり。

さんちょう「山頂」(名) 1 山頂

十二40図 最も東なる根子岳は七面

山とも稱し、山頂鋸の齒の如し。

さんど「三度」(名) 2 三度

七341 蠶をかふのは春と夏と秋の三

度で、(略)。

十一643 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、

其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコト

ガ大切デアル。

さんとう ぐくさんとうくさる

さんとう ぐくさんとうくさる

さんなん「三人」(名) 6 三人

三66 マサヲトモキチトオハ

ナガ三人デノハラニアソンデ

キマス。

三92 ソレカラ三人デツンダ

ノライツシヨ ニシテ、(略)。

三104 ウチニハネエサンガ一

人、ニイサンガ三人、(略)アリ

マス。

四73図 「一人二人三人四人五

人、やつぱり五人です。」

八863 中佐ハ(略)、タチマチ三人

ノ敵ヲ斬リ殺シタ。

十516図 敵は一人、此方は二人。三

人組合ひて馬より落つ。

さんねん「三年」(名) 4 三年

七616図 昔より「犬は三日かへば、

三年その恩をわすれず。」といへり。

十一310図 天皇のこゝに行幸ありし

より三年、北方の天を望みて崩御あ

りし御心事を察し奉れば、(略)。

十一7110図 此の繪をかける畫工久し

く此の寺に寄食してありしが、毎日

遊び暮して三年を経たり。

十一722図 君は(略)、三年の間

未だ一度も畫筆を取り給ひしことな

し。

さんねん「残念」(形状) 7 さんねん

残念

四785図 「あの扇をいおとすも

のはいないか。あれをいないと

いふのもさんねんだ。

七402図 「あゝ、金がない程残念な

ことはな。武士としてはあのくら

ゐる馬をもつて見たい。」

七878図 日本は海國でありながら、

海を恐れる人の多いのは残念な事で

す。

七906図 (略)、タバー一人クマナク

船内ヲタツネタレドモ、杉野ノスガ

タナシ。「残念ナリ、今一度。」ト、

中佐ハマタモ船内ヲカケメグレリ。

八901図 「ア、残念。多數ノ部下ヲ

死ナセタ上、セツカク占領シタ陣地

ヲ取返サレテ残念千萬ダ。」

九208図 聞けば、そなたは豊島の

戦にも出ず、又八月十日の威海衛攻

撃とやらにもかくべつの働なかりき

とのこと、母は如何にも残念に思ひ

候。

九232図 豊島の戦に出なかつたこと

は艦中一同残念に思つてゐる。

さんねんが「残念」(五) 1 残念が

る「ール」

九225図 お前の残念がるのももつと

もだ。併し今の戦争は昔とちがつて、

一人で進んで功名を立てる様なこと

は出来ない。

さんねんせんばん「残念千万」(形状)

1 残念千万

八902図 多數ノ部下ヲ死ナセタ上、

セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ

残念千萬ダ。」

さんのいち「三一」(名) 1 三ノ一

十949図 此ノ寺ハ(略)、規模極メ

テ大ナリシガ、今ハ往時ノ三ノ一二

モ足ラズ。

さんば「三羽」(名) 1 三羽

四793図 そらをとんでゐる鳥

でも、三羽ねらへば、二羽だけ

はきつといおとすほどの名人

でございます。

さんばい「参拜」(名) 2 参拜 ぐさ

んばい

八78図 今日には神嘗祭なれば、夕方

には内宮へ勅使の参拜もあるべしと

いふ。

九302図 春秋兩度ノ大祭ニハ(略)、

陸海軍將卒ノ参拜アリ、(略)。

さんばい「参拜」(サ変) 4 参拜す

「シースースレーセ」

八17図 (略)、國民も(略)、一生

に一度は、かならず伊勢に参拜せん

と心がけるものなし。

八75図 (略)、外宮に参拜す。

十一18図 行くく吉野宮に参拜

し、村上義光の墓をとぶらふ。

十一367図 北方の臺灣神社ヲ参拜

すれば、そゝろに當年を追懷するの

情にたへず候。

さんばくふちゅう「三瀑布中」(名) 1

三瀑布中

十一767図 霧降瀧は(略)、三瀑布

中最も美觀を以て聞ゆ。

さんばつ「斬髮」(名) 1 斬髮

十一1097 近年は斬髮の風が行はれ

て、冠禮は段段すたれて行く。

さんばんだいこ「三番太鼓」(名) 2

三番太鼓

九8310 二番太鼓の「並べ。」のあひ

づに、(略)、馬の頭を揃へて、三番

太鼓を今やおそしと待構へてゐる。

九841 三番太鼓が鳴るが早いか、五

匹の馬は一散にかけ出した。

さんばんちゃ「三番茶」(名) 1 三番茶

五333 マタ三番茶・四番茶マデモツ

ムコトガアリマスガ、ソナニツム

ト、茶ノ木ノタメニハヨクナイサウ

デス。

さんびき「三匹」(名) 1 三匹

四22 ヒゴヒガ一匹キニヒキ三

匹キ四ヒキ、四ヒキキマス。

さんびやく「三百」(名) 1 三百 ぐや

くさんびやくよまん

十一1117図 我が村には戸數三百、人

口千四百餘あり。

- さんびやくごじゅうまんごく「三百五十万石」(名) 1 三百五十萬石
- 十二44回 蘭の取入高は年々増加して近年三百五十萬石を越え、(略)。
- さんびやくねいぜん「三百年以前」(名) 1 三百年以前
- 十三1回 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、(略)。
- さんびやくねまえ「三百年前」(名) 2 三百年前
- 八93回 名古屋城は今より凡そ三百年前、徳川家康が諸大名に課して造らしめたる名城にして、(略)。
- 十60回 足尾銅山ハ(略)、今ヨリ三百年前、此ノ地ノ人始メテ之ヲ發見セリトイフ。
- さんびやくよしやく「三百余尺」(名) 1 三百餘尺
- 十二55回 其の西南なる首山堡は高さ僅かに三百餘尺の小山なれども、(略)。
- さんびやくよじょう「三百余丈」(名) 1 三百餘丈
- 十一77回 ナイガガラ瀑布は左右二つに分れ、左瀑は幅三百餘丈、(略)。
- さんぶく「山腹」(名) 1 山腹
- 十一3回 吉水神社を出づれば、谷をへだてて向ふの山腹に如意輪寺あり。
- さんぶ・する「散布」(サ変) 1 散布する「スル」
- 十二20回 又ひよつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。それが爲におのづと種子をあちらこちらへ散布する。
- さんぶつ 〆ほんとうさんぶつ
- さんぶん・す「三分」(サ変) 1 三分ス「シ」
- 十一103回 孔明、劉備ニ事へ、(略)て遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。
- さんぶんのいち「三分二」(名) 2 三分ノ一 三分の一
- 七55回 サレドモコ、ニテ見ユルハ東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。
- 八80回 地球の表面の凡そ三分の二は海にして、三分の一は陸なり。
- さんぶんのに「三分二」(名) 2 三分の二
- 八80回 地球の表面の凡そ三分の二は海にして、三分の一は陸なり。
- 十一67回 人生七十年と見るも六十萬時間に過ぎず。其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。
- さんべん「三遍」(名) 1 三ベン
- 一49回 サア、タケヲサンカラオトビナサイ。一ベン二ベン三ベン四ベン(略)九ベン十ベン。
- さんほう「三方」(名) 3 三方
- 五81回 三方から攻立てられて、さんふにうちやぶられた。
- 八87回 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲ヲウチカケタ。
- 十二15回 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ疊ムカ、コンクリートデ固メルカシテアル。
- さんほうめん「三方面」(名) 1 三方面
- 十一64回 材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨリ考ヘナケレバナラス。
- さんぼ・す「散步」(サ変) 1 散歩す「ス」
- 九61回 人多き都會に住む者は、(略)、又朝早く起きて、木立しげき公園等を散歩すべし。
- さんぼん「三本」(名) 2 三本
- 三20回 ふえが三本。「ひらがなのドリル」
- 十一27回 西洋形の帆船船には二本・三本の檣あるもあり。
- さんまい「三枚」(名) 1 三枚
- 六30回 (略)そのつりに一せん銅貨を三枚渡した。
- さんまん「三万」(名) 1 三萬
- 十63回 (略)、今ヤ足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、(略)。
- さんみやく「山脈」(名) 3 山脈
- 十一96回 南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、(略)。
- 十一98回 (略)の間は最も狭く、且山脈低くして、東西の交通最も便利なる所に御座候。
- 十一100回 (略)、又山脈の兩がには石炭層各所にあり、(略)。
- さんもん「山門」(名) 1 山門
- 十二26回 建長・圓覺古寺の山門高き松風に昔の音やこもるらん。
- さんや「山野」(名) 1 山野
- 十二48回 又森林は全國の山野たははぬ處なく、殊に名高き木曾・吉野(略)。
- さんよう「山陽」(地名) 1 山陽
- 十二43回 (略)安永八年櫻島の破裂せし時は、九州・四國・山陽・山陰・東海道までも火山灰を降らしたりといふ。
- さんよう「三様」(名) 〆たてよこなめさんよう
- さんらん「産卵」(名) 1 産卵
- 十一99回 (略)、春夏の交産卵の爲、鯉の群をなして海岸近く寄來る時は(略)。
- さんらんし「蚕卵紙」(名) 1 蠶卵紙
- 七38回 その卵を産みつけさせた紙を蠶卵紙といふ。
- さんり「三里」(名) 1 三里
- 九95回 東照宮の西三里ばかり、男體山のふもとに中禪寺湖あり、(略)。
- さんりん「山林」(名) 2 山林
- 十一38回 中部の山林には樟・松・杉・檜・樺・椎等の繁茂著しく、(略)。
- 十一40回 阿里山の檜材は(略)、山林の富のみにても無盡藏と申すべく候。
- さんれつ 〆さんれつなしくださる

し

し「四」〔課名〕11 四 四だいし・だい

しか

二目4 三 キクノハナ……………四

二目5 四 オハナトオキク

二目7 四 オハナトオキク

三目5 四 ワタクシノウチ

三目10 四 ワタクシノウチ

四目5 四 カキトクリ

四目10 四 カキトクリ

五目3 第二課 春が来た……………四

九目3 第二課 草薙劍……………四

十目3 第二課 葉……………四

十二目3 第二課 日本海海戦……………

四

し「主」(名)4 主 主しじゅうしちし

・たじまのうがくし

七目3 楠木正行ハ正成ノ子ニシ

テ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。

九目1 維新前後國事ニタフレタル

人々ヲ始め、其ノ後ノ諸戰役ニ戰死

シタル忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。

十一目3 4 正平の昔、楠木正行が決

死の士百四十三名の名字を壁に書連

ね、(略)。

十二目6 薩摩の士に喜観といふ人

あり、(略)。

し「子」ひいし・さんし・にし・はく

しだんしゃく

し「史」ひせかいしじょう

し「四」(名)13 四 4 四 四せんか

んニコライいつせいかしせき・だい

しず

四目6 四 四

六目7 四 四

六目10 四 四 ハリ

七目11 四 四

八目18 四 四

八目60 四 四

九目17 四 四

十一目2 四 四

十一目22 四 四

十一目60 四 四

十一目117 四 四

十二目120 四 四

し「市」(名)4 市 市ぎふし・こうべ

し・こうべしすいどう・とうきようし

・なごやし・ふけんぐんしかい・ふけ

んぐんしちようそんかいぎいん・まえ

ばしし

十一目79 長良川は岐阜市の北を東

より西へ流る。市を出でて橋を渡れ

ば長良村あり。

十二目59 テームスとセーヌとは

(略)、之に架したる橋は何れも壯大

にして、市の美観を添ふ。

十二目60 倫敦の市街は(略)。市

の中央最も繁華なる處は道幅狭く、

(略)。

十二目102 我が國の地方自治團體

は、府縣・市の二級或は府縣・郡・

町村の三級に分れたり。

し「死」(名)3 死

十二目85 赤穂浪士が(略)、遂に

主君の仇を報じて、從容死に就ける

は(略)、日本武士道の精華を發揮

せるものといふべし。

十二目87 我が心の良雄を默待せ

しは罪死に當れり。」

十二目87 良雄以下既に死を賜へり。

ば、良雄以下既に死を賜へり。

し「師」(名)8 師 師さしものし・つ

じおんがくし

十二目24 「汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、

遂ニ王者ノ師タラン。

十一目68 古人の片言・隻句も我等

が師なり。

十二目93 「孔子は年少にして禮

を好めり。我死せば、汝必ず之を師

とせよ。」

十二目119 六年の月日 手を取り

て、教へ給ひし 師の君の 導きな

くば、いかで我が 心に開く、智を

徳ぞ。

十二目120 思へばうれし、師の情。

十二目120 思へばうれし、師の恵。

十二目120 師の賜物の 智を徳を、

かぢにあをりに 世の海を たり

て行かん。

十二目120 師の君きらは、健か。

し「紙」ひさんらんし・しんぶんし・せ

いようし・せいようしにつぼんし・

そうたつし・でんぼうらいしんし・に

つぼんし・らいしんし

し「詩」(名)6 詩

九目80 (略)、道眞は「驛長驚くな

かれ、時の變り改るを。(略)。」と

いふ意味の詩を作りてあたへたりと

いふ。

九目10 去年の今夜清涼殿の御宴に

侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、

(略)。

九目14 道眞(略)、はるかに東方

を拜し、一篇の詩を作りたり。

十目17 是白樂天の詩に、「香爐峯

の雪はすだれをかゝげて見る。」と

いふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひ

しを、(略)。

十一目15 高德(略)、大文字に詩

の句を書きつけたり。天、勾踐を空

しうするなかれ。時、范蠡無きにし

もあらず。

十一目16 主上は詩の心を御さとり

ありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひ

ぬ。

し「資」(名)1 資

十二目92 (略)、世間の交際をも外

さず、慈善の事業にも應分の資を授

ずべく、(略)。

し(援助)6 シ し

七目21 葉は羽形で、二枚づつ向ひ

合つてゐますし、花は同じく蝶の形

をしてゐます。

七46 ㊦ マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デアルシ、書物モ近ゴロハ大テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ。」
 七76 1 又ニハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。
 八15 6 働クコトガナケレバ、食物モ買ハレナイシ、着物モコシラヘラレナイ。
 九8 6 其ノ形モマタ様々デアル。豆ノ花ハ蝶ノ形ヲシテキルシ、朝顔ノ花ハジヤウゴノ様ナ形ヲシテキル。
 九37 10 かごも（略）、早くもないし、又そんなに樂でも無かつた。
 じ「字」(名) 14 ジ じ 字 じい じ・じゅうじ・にじ
 一27 5 ニイサンガジヲカイテキマス。
 三38 4 これで本の中のじやゑや、（略）いろいろなものを見るのです。
 四46 1 皆さんはとけいにかいてある字がよめますか。
 四47 2 皆さんがあさおきる時には、みじかいはりがどの字の所にありますか。
 四47 5 皆さんがよるねる時には、みじかいはりがどの字の所にありますか。
 五67 3 大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テアル。
 六70 8 字を書くのに、筆をおとしたり、すみをこぼしたり、（略）、紙を

たくさんほごにしたりするやうな、そゝつかしい子供もございました。
 七22 6 ㊦ 目ハ見ユレドモ、字ノ讀メザル人ヲアキメクラトイフ。
 八48 6 ㊦ にごつた字は二字に數へるから、（略）、十五字になるやうに書いてごらん。」
 八48 ㊦ 字
 九89 4 ㊦ 賣ル・買フ、財産ノ財、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、（略）。
 九89 4 ㊦ 賣ル・買フ、財産ノ財、貨幣ノ貨等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、（略）。
 十18 2 本の中には字ばかりのもあるが、畫や地圖や寫眞のはいつてゐるものもある。
 十37 2 ㊦ 又字を書くときに、指先を見ると、爪は短く切つてゐました。
 じ「寺」 ㊦ いっこくじ・きんかくじ・ぎんかくじ・けんちようじ・こうふくじ・ごくらくじさか・さいだいじ・さいほうじ・せんがくじ・とうだいじ・とくりじ・によりんじ・ほうりゅうじ・やくしじ
 じ「事」 ㊦ いちじ
 じ「時」 ㊦ いちじ・いっぶんじ・くじにじつぶん・ごこいちじさんじつぶん・ごこいちじはん・ごごさんじ・ごごにじしじゅうごふん・ごごろくじ・ごじふん・ごぜんくじ・ごぜんじゅういちじさんじつぶん・ごぜんろくじ・さく

じつろくじ・しちじ・しちじごろ・じゅうじごろ・じゅうにじご・どうじつごこじ・にじごろ・はちじ・みようちようろくじ・めいじさんじゅうはちねんごがつにじゅうしちにちごぜんごじ・やはんじゅうにじぜん・よくちようさんじごろ・ろくがつさんじゅうにちごごにじ
 じ「路」 ㊦ しおじ・やまじ
 じ（助動） 8 じ「ジ」
 九48 1 ㊦ 之を聞けるアリの驚は一方ならず、さては此のまゝにては過ぎれじと、（略）、そより逃れ出でたり。
 十50 10 ㊦ 手塚の家來は組ませじと中をへだつれば、（略）。
 十51 1 ㊦ 手塚は家來を討たせじと、敵に組みつく。
 十一3 6 ㊦ ㊦ あへらじとゐねて思へばあづさ弓 なき數に在る名をぞとむる。
 十一23 10 ㊦ 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。
 十二7 1 ㊦ 敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとせり。
 十二37 9 ㊦ 秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。「嘉明に如く者はあらじ。」と答ふるに、（略）。
 十二116 3 ㊦ ㊦ （略）、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ。
 しあ・げる「仕上」(下一) 1 シアゲル「一ゲル」

五60 1 ㊦ （略）、ワキ出タママノハニゴツテキマスガ、シアゲルト、スキトホツタ油ニナルノデス。
 しあわせ「幸」(名) 1 仕合
 八21 6 ㊦ さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくないといふが、毎年一羽づつしか出て來ない。
 しあわせ「幸」(形状) 2 仕合
 八42 7 ㊦ （略）此のはげしい風では、どこまで焼けて行くか分らない。仕合に風上で安心だが、（略）。
 十二90 4 ㊦ 一家中に病人なき程仕合なる事なし。
 しあん ㊦ ひっこみじあん
 しい「樵」(名) 1 樵
 十二38 7 ㊦ ㊦ 中部の山林には樵・松・杉・檜・樅・椎等の繁茂著しく、（略）。
 しい「四圍」(名) 1 四圍
 十72 4 ㊦ 温泉のわき出づる處はおほむね火山の附近に在りて、四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。
 しいか「詩歌」(名) 2 詩歌
 九80 7 ㊦ 筑紫に到りて後は、（略）、僅かに詩歌に思をよせて、ひとり自らなぐさめ居たり。
 十一75 7 ㊦ 我が國には數多の瀑布あり、古來多く詩歌に入り、畫圖に上る。
 じいさま「祖父様」(名) 1 祖父様
 九43 4 ㊦ ㊦ 祖父様はいつもの通り朝

起にて、(略)、はや朝顔のはちをならべて、(略)、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。

しいて「強」(副) 1 強ひて

十一71 罎 怠りて持歸らざるものあれば、検査掛は内に入るを許さず、強ひて入らんとすれば立ちどころにさし殺す。

しいな「粧」(名) 1 しひな

九68 罎 (略)、唐箕^{きみ}の車をまはして、もみとしひなとをあふぎ分くるが如き皆然り。

じいん「寺院」(名) 1 寺院

十一75 罎 グレース、ダールリングの生家に程近き寺院の庭上には、右手にかいを握れる少女の銅像あり、(略)。

じえき「次駅」(名) 1 次驛

十二56 罎 旅順線は大連の次驛臭水子より分れて、(略)旅順口に達す。

しえきする「使役」(サ変) 1 使役する「一スル」

十84 罎 田を耕させたり、荷車を引かせたり、(略)、農家では牛を色々の勞働に使役する。

しお「入」ひひとしお

しお「塩」(名) 12 しほ 塩

五28 罎 もとよりすつばいこのからだ、しほにつかつてからくなり、しそにそまつて赤くなり、(略)。
六53 罎 塩ハカラク、砂糖ハアマシ。
六53 罎 ツケ物ハスベテ塩ニテツケ、(略)。

六53 罎 (略)、ミソモ醤油モ塩ヲ入レテツクル。

六54 罎 塩ト砂糖トハ物ノ味ヲ附クルニ大切ナルモノニシテ、(略)。

六54 罎 塩ハ山ヨリモ出ヅレドモ、ワガ國ニテハ海ノ水ヨリツクル。

六58 罎 武田信玄の國は山國で、塩がない。

六58 罎 塩はとなりの國から買つてゐた。

六58 罎 ところがとなり國では信玄をこまらせようと思つて、塩を送らせないことにした。

六59 罎 謙信はそれを聞いて、「(略)」といつて、じぶんの國から塩を送らせた。

十一38 罎 其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様に御座候。

十一112 罎 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて一年中用ふる塩・醤油を買ふに餘あり。

しお「潮」(名) 1 しほ

十一21 罎 生れてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、(略)。

しお「塩風」(名) 1 塩風

十一23 罎 吹く塩風に黒みたるはだは赤銅さながらに。

しお「からい」(塩辛) (形) 1 塩カライ

十一66 罎 例へば(略)、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デア

ル。

しおく「四億」(名) 1 四億

十二53 罎 我ガ國ハ(略)、殊ニ近クハ人口四億ヲ有スル支那ノ大國ニ隣ス。

しおけ「塩氣」(名) 1 シホケ

四60 罎 ハヤク川へ行ツテ、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、(略)。

しおじ「潮路」(名) 1 しほ路

十三1 罎 「(略)、我が友よひとり離れて、はるくと五百重のしほ路、故里の空なつかしや。」

しおせんべい「塩煎餅」(名) 1 塩せんべい

六37 罎 (略)、をばさんの所へ使ひに行つた。をばさんから塩せんべいをいたゞいた。

しおとさとう「課名」 2 塩ト砂糖

六目4 第十六 塩ト砂糖

六53 罎 第十六 塩ト砂糖

しおり「枝折」(名) 1 えをり

十二120 罎 師の賜物の 智を徳を、かちにえをりに 世の海を、たりて行かん。尚高き 學びの高嶺をちて見ん。

しか「鹿」(名) 12 シカ 鹿

一91 シカ

一94 シカノツノ

三13 罎 ウシノツノヤ、シカノツノデモラツテシマフホドデ、(略)。

五70 罎 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷川ノ中ヘハイルマシタ。

五73 罎 鹿ハ輕イ足デズン／＼ニゲテ、林ノ中ヘカケコミマシタ。

五78 罎 「鹿はどうだ。」「鹿はをり／＼通ります。」

五78 罎 「鹿はどうだ。」「鹿はをり／＼通ります。」

五78 罎 「鹿も四つ足なら馬も四つ足、たゞつめがわれてゐるとゐないだけのちがひだ。

五79 罎 鹿の通れる所を馬の通れないといふことがあるものか。

八73 罎 虎ハ前足ノ一撃ニテ鹿ナドヲタフスコト、猫ノネズミヲトラフガ如シ。

九5 罎 「此のあたりには鹿多し。かりし給へ。」

十81 罎 食物は(略)、鹿の肉は珍味として之を賞美す。

しか(副助) 5 シカ しか

六11 罎 のぼる時には三時間もかゝつたが、下りる時には二時間しかかゝりませんでした。

七29 罎 卵からかへつたばかりの蠶は(略)、長さは一分ばかりしかない。

七47 罎 「君ヲハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ヲハ裏表トモニ使ハレル。」

七51 罎 「手紙は(略)、四女より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。この

手紙は四匁より重いのに、差出人が三錢しかはつておきません。

八二一〇 図 さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくなるというが、毎年一羽づつしか出て来ない。

しがいい「市街」(名) 12 市街 ひとた

いほくしがいい・ならしがいい

九三九 図 (略)、諸大名其ノ他旅客ノ宿泊スルモノ多ク、湖水ノホトリニハニギヤカナル市街アリキ。

九三九 図 昔ノ關所ハ僅カニ其ノアトヲ止ムルノミ。市街ハ甚ダサビシクナレリ。

九三九 図 日光の市街盡くる所に大谷川あり。

十97 5 図 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ跡ニシテ、(略)。

十二54 7 図 市街に大山通・兒玉町・乃木町等の名あるは、(略)。

十二59 4 図 倫敦にはテームス河、巴里にはセーヌ河、伯林にはスプレー河ありて各其の市街を貫流す。

十二60 3 図 倫敦の市街は繁盛を以て名高し。

十二60 8 図 巴里の市街は壯麗を以て聞ゆ。

十二61 7 図 伯林の市街は清潔を以て著る。

十二63 5 図 電車の便の最も開けたるは伯林にして、市街の隅々通ぜざる處なく、(略)。

十二98 6 図 市街・道路を不潔にし、

官廳・學校・神社・佛閣等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。

十二101 5 図 他國に行きて、其の市街・建築物等の状況、汽車・電車中に於ける乗客の舉止、道行く人の容儀等を見れば、(略)、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

しがいい「死骸」(名) 1 死ガイ

八92 4 馬丁ハ(略)、トウクノ戰死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死ガインニ取リスガツテ泣イタ。

しかいきよう「四海峽」(名) 1 四海峽

十一17 8 図 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

しかいけいてい「四海兄弟」(名) 1 四海兄弟

十二100 9 図 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

しがいいけんちくぶつ「市街建築物」(名) 1 市街建築物

十二54 6 図 市街建築物及び埠頭等頗る規模の壯大なるを見る。

しかいこうば「四開港場」(名) 1 四開港場

十一37 3 圖 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。

しがからさき「滋賀唐崎」(地名) 1 滋賀唐崎

八61 1 図 滋賀唐崎の一つ松、夜の雨にぞ名を得たる。

しかく「四角」(名) 1 シカク

一12 5 ヒシガタマルシカクしかく「資格」ひせんきよししかくしがくひぐんしがく

しかくしめん「四角四面」(名) 1 四角四面

八28 5 図 川成行キテ見ルニ、小サキ四角四面ノ堂アリテ、(略)。

しかけ「仕掛」(名) 1 仕掛 ひでんきじかけ

十一84 10 図 コレニハ(略)ブラッシノ仕掛アリテ、錠綿ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。

しかける「仕掛」(下二) 1 しかける

「一ヶ」

十64 10 漕抜けた一隻は(略)一頭の鯨に近寄り、急處めがけて破裂矢をしかけた鉦を打つ。

しかし(接) 13 シカシ しかし 併し

三15 1 ケハヤハ(略)、ケルコトガマコトニハヤカツタノデス。

シカシ スクネモチカラガツヨクテ、スパシコイ人デシタカラ、ナカナカケハヤニハケラレマセン、(略)。

三16 7 「おれよりちからのつよい人はあるまい。」といつて、

けはやがじまんをしました。しかしのみのすくねにはまけました。「ひらがなのドリル」

三71 4 図 (略) コノハコヲオ上ゲマウシマセウ。シカシケツシテフタヲオアケナサイマスナ。」

五75 4 げんじは二手に分れて、(略)よしつねのぐんぜいは西の門へ向つた。しかしよしつねは「表から攻めおとすことはむづかしい。(略)。」と考へて、(略)、こつそりと裏道からひよどりごえに向つた。

七15 3 図 問屋といふのは他人からたのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。(略)。

七28 2 サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。

七85 2 図 急に暴風雨が来ると、(略)船は今にも沈むかと思ふ様になります。しかし船はなか／＼沈むものではありません。

八56 6 はぎの長い鳥は首も長く、首の長い鳥は大にいくばくも長い。併しはせみははぎも首も短くて、くちばしばかりが長い。

八67 4 図 (略) 熱がずつと下つて、食事が進みますから、一先安心いたしました。併し老病の事故、よほど大事にしなければならぬと存じます。

九22 5 図 お前の残念がるのもつとまだ。併し今の戦争は昔とちがつ

て、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九二八 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。併し是も仕方がない。

九六七 春の初に降るのは一雨毎に花をもよほすかとうれしい。(略)。併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、其の時はうらめしい心地がする。

十一九六 御承知の通り、冬は寒氣厳しく、(略)。併し夏は氣候温和にして、至つて凌ぎよく候。

しかして (接) 3 しかして
十一九一 物の價の高下は主として需要と供給との關係によりて定まるものなり。しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。

十二一〇五 (略)、天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聽く機關に供せさせ給へり。

十二一〇七 豫算案は政府之を提出し、法律案は政府の外、貴族院・衆議院共に各之を提出するを得。しかして、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経たる後、天皇の裁可を待ちて始めて成立するものとす。

しかしよ [四箇所] (名) 1 四箇所

十一九七 日・露の境は (略)、四箇所に境界石を置きて、分明に相成居候。

しかた [仕方] (名) 3 しかた 仕方
四二七 八 (略) おきくさん、おきくさんかうさむくなつては、しかたがあまりすまい。あなたの おなかまは 大てい 枯れてしまつたやうです。

五二六 (略)、取りかへさうとすると、「(略)」といつて、どうしてもかへしません。しかたがないから、うつたへて出ました。

九二八 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。併し是も仕方がない。

しがたし [為難] (形) 1 し難し『一ケレ』

十一四三 光範と心を併せての事として、如何ともし難ければ、佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、(略)。

しかたなし [仕方無] (名) 2 シカタナシ しかたなし

五五五 (略) ケモノノ方へ行キマスト、「(略)」トイッテ、仲間へ入レマセン。又鳥ノ方へ行キマスト、「(略)」トイッテ、アヒテニシテクレマセン。シカタナシニ、ヒルノ間ハ (略) ニカクレテキテ、夜ニナルト出テ空ヲトビアルクヤウニナツタトイフハナシデス。

六四八 お寺では「こないたづら者はごめんです。」といつて、うちへかへしました。父はしかたなしに又よそへほうこうに出しました。

しがつ [四月] (名) 1 四月
八八六 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戦地ヘ向ツタガ、(略)。

しかねん [四箇年] (名) 1 四箇年
十二一〇七 衆議院は (略)、議員の任期は四箇年なり。

しかのみずかがみ [鹿水鏡] [課名] 2
鹿ノ水カギミ

五二七 第二十三 鹿ノ水カギミ
五七〇 第二十三 鹿ノ水カギミ

しかのみならず [加之] (接) 1 しかのみならず

一九二 森林の樹木は (略)、雨の一度に地上に落つるを止め、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。しかのみならず落葉・こけ及び (略) 木の根などは、(略)、水をして少しづつ靜かに流れ出でしむ。

じがみ [地紙] (名) 1 地紙
一四九 欄間の彫物、唐紙の地紙をはじめ、(略) 模様・色どりをほどこしたるもの多し。

しかも [然] (接) 4 シカモ しかも
六二九 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、時々青イ物ヲ出シマセウ。(略) シカモソノサビハ大ソウドクナモノデス。」

十三五 (略)、何を聞いても、一々

明白に答へて、しかもよいなことはいひません。

十八六 豚はどんな物でも食ふから、飼ふのにたやすい。しかも其の成長が極めて早い。

十二六九 過ぐる處の沿路、果實・草根を始め、凡そ取つて以て食ふべきものは殆ど餘す所なし。しかも僅かに飢をしのぐは先頭に進める一部に過ぎず、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、(略)。

しからば [然] (接) 1 然らば

九四九 (略)、「(略)、駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なかるべし。」又一人、「然らばかの子供の乗れる駱駝を殺さん。」といふ。

しかり [然] (ラ変) 6 然り『一リール』

九六六 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。オルガンにて美しき音を發せしむるが如き、唐箕の車をまはして、もみとしひなとをあふぎ分くるが如き皆然り。

九七三 (略)、もはや心配には及ぶまじと立退きたる者も引返したる程に御座候。然るところ翌朝三時頃急に水音はげしく相成り、(略)。

十一九一 日光・空氣の如きは、人の生命を保つに必要なれども、隨意に得らるゝものなれば、之を買ふ必要なく、隨つて亦價あることなし。

水の如きも亦然り。

十二378 〔図〕 將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。高虎「年老いて其の任にあらず。」とて之を否む。秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。

十二706 〔図〕 先づ苦しみて然る後に樂しむを賢者とし、(略)。

十二706 〔図〕 (略)、先づ樂しみて然る後に苦しむを愚人とす。

しかる「叱」(四・五)5 しかる 叱る「ツ・ラー・ール」

六717 度々つけせきしたり、ちこくしたりして、先生にしかられた子供もございました。

六727 學校で先生にしかられ、友だちにもきはれた悪い子供は、(略)。

九197 ふと通るかゝつた大尉が之を見て、あまりに女々しいふるまひと思つて、「(略)、其の有様は何事だ。(略)」と言葉鋭くしかつた。

十一582 (略)、早く自分を谷へ下せ。早くしないと、ピエールが死んでしまふ。」と、しかる様にいふので、兵士は止むを得ず將軍を谷底へ下した。

十二332 〔図〕 (略)、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)。

しかるに「然」(接)11 シカルニ 然ルニ 然るに
七68 〔図〕 「父正成ノ戦死セシ時、

臣ハワツカニ二十一歳、父ハ臣ヲ合戦ノ場ニモトモナハズ、(略)、朝敵ヲホロボセ。」ト申シ殘シタリ。シカルニ正行スデニ男盛りニ及ベリ。

七227 〔図〕 目ハ見ユレドモ、宇ノ讀メザル人ヲアキメクラトイフ。シカルニ目ハ見エズシテ、大學者トナリシ人アリ、(略)。

九394 〔図〕 箱根山ハ(略)。(略)、昔ハ人馬ノ往來甚ダ盛ナリキ。(略)。

然ルニ明治維新ノ後ハ大名ノ往來全ク絶エ、(略)、今ハ此ノ山坂ヲ越ユルモノ少シ。

九468 〔図〕 すべて沙漠の旅は、以前に通リし駱駝の足跡を目あてに行くなり。然るに此の大風の爲に、今までの駱駝の足跡消えなれば、(略)。

一同は行くべき方にまよひて、(略)。

十四3 〔図〕 我が國の建物ハ(略)、古社寺等も昔のまゝにて今にのこれるは甚だ少し。然るに此の寺ハ(略)、昔ながらの形を存せり。

十一314 〔図〕 此ノ芋ノ(略)、内地ヘノ渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナリ。然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、主トシテ(略)ノ盡力ニヨル。

十一142 〔図〕 (略)、主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を擧げしが、(略)、其のまゝにて止みたり。然るに今、主上隠岐に遷され給ふと聞き、一族共を集めていへるやう、

「(略)。(略)義軍を起し、(略)、名を子孫に傳ふべし。」といへば、(略)。

十一747 〔図〕 (略)、畫師(略)、東國へ出立せり。然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。

十二215 動物ハ(略)、炭酸瓦斯を吐出す。若し之を消費するものがなければ、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、(略)。然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。

十二224 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)植物は盡く枯死すべきはずである。然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、(略)、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

十二742 〔図〕 (略)、印度地方の寶石・香料・絹布類は盛に(略)歐洲へ輸入せり。然るに印度との交通は長日月を要し、中途の危険亦少からざれば、(略)。

しかれども「然」(接)12 然レドモ 然れども

九397 〔図〕 市街ハ甚ダサビシクナレリ。然レドモカノ名高キ箱根七湯ハ、(略)益々サカエテ、(略)。

九409 〔図〕 昔ヲ知レル人、(略)ヲク ラベ見バ、世ノ轉變ノ如何ニ甚ダシキニ驚クナラン。然レドモ自然ノ轉

變ハ更ニ是ヨリモ甚ダシキモノアルヲ知ラズヤ。

九5910 〔図〕 (略)、平生の養生法を問へば、「(略)、毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。」といへり。然れども運動多きに過ぐれば、却つて病を起すことあり。

九658 〔図〕 火は空氣なければ燃えず。臺所にて火吹竹を使ふも(略)。然れども空氣の流通餘りに強き時は、却つて火の消ゆることあるべし。

十一77 〔図〕 (略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。然れども四時雪をいたゞきて潔く、其の形白扇を倒にかけたが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。

十四31 〔図〕 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ねテ、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。然レドモ少シモ其ノ志ヲタワメズ、イヨ／＼勇氣ヲフルヒテ考案ヲ續ケ、(略)。

十一613 〔図〕 此ノ銅山ハ發見ノ當初ヨリ產出高スコブル多ク、(略)。然レドモ其ノ頃ハ(略)、產出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト多カリシナリ。

十一7910 〔図〕 女子ハ(略)、又口の周圍、手首・手の甲等には入墨をほどこせり。然れども入墨をほどこすことは今は全く禁ぜられたり。

十一692 〔図〕 我等の周圍には讀むべき書多く、學ぶべき物多く、成すべき

事限りなし。(略)。然れども人の勢力には限りあり。

十二39② 余は秦王を其の朝に叱したるもの。何ぞ獨り廉將軍を恐れんや。然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。

十二59 巴里の人口は二百八十一萬、柏林は二百萬を算す。然れども近年獨逸國力の盛に發展すると共に、(略)、其の巴里と同數に至るも亦甚だ遠からざるべし。

十二62 倫敦は(略)、古風の乗合馬車を以て主なる交通機關とす。然れども地下には各種の鐵道縱横に貫通し、(略)。

じかん「時間」(課名) 2 時間

十一目4 第十七課 時間

十一67 第十七課 時間

じかん「時間」(名) 16 時間

じかん・いちじかんよ・さんじかん・さんじゅうにじかん・じゅうじかん・すうじかん・ちようじかん・なんじかん・にじかん・にじゅうまんじかん・にじゅうよじかん・よじかん・ろくじかん・ろくじゅうまんじかん
五41 汽車は(略)、きまつた時間
にちやんと出ます。

十一99 同ジ人数デ同ジ時間ニ物ヲ製造スルノニ、(略)。

十一11 分業法ニ依ラズ、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、(略)。

ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。

十一114 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、(略)、徒ニ時間ヲ費スコトガナリ。

十一67 其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。

十一67 實際修學及び業務に用ふる時間は僅かに二十萬時間を越えざるべし。

十一69 時間の貴きを知れる者は無爲に苦しむことなし。

十一69 「よく勉め、又よく遊ぶ。」はよく時間を利用する所以なり。

十一69 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、時間を徒費すること甚だし。

十一70 人を訪問する時は業務をさまたげざる時間を選び、(略)。

十一70 約束の時日を違ふるが如きは時間の賊なり。

十一70 殊に集會の時間は正しく守らざるべからず。

十一70 一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。

會の活動敏速なる時代にありては、時間は金錢よりも貴し。

十一71 他人をして時間を損失せしむるは其の罪金錢を損失せしむるよりも重し。

しき「四季」(課名) 2 四季
六目3 第二 四季
六6 第二 四季

しき「式」(名) 2 シキ 式
き・がっこうらくせいしき・けんぴしき・ほんこうしんちくらくせいしき・らくせいしき

四94 私ドモノガクカウデモ、ケサ天長セツノシキガアリマシタ。

十二36 學校ガ落成シテ、(略)落成式ガ舉行サレタ。(略)。式終ツテ、一同校舍ヲ巡覽シタ。

しき「數」 風呂數
しき「士氣」(名) 1 士氣

十二114 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、心も無下に賤しくなりて、節操も武勇も忘れ果てて、(略)。此の風一度軍人の間に起りては、士氣も兵氣も衰ふべければ、(略)。

しき「四季」(名) 2 四季
しき「四季」(名) 2 四季
しき「四季」(名) 2 四季

六6 一年ヲ春・夏・秋・冬ノ四季ニ分ツ。

九67 さて此の雨風も四季の時候につれて、それ／＼にちがふ。

じき「時機」(名) 1 時機

十二73 引込思案の人は徒に其の結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。

じき「直」(副) 1 デキ
六28 「ソレデモ鐵ハチキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

しきかんしよ「四季寒暑」(名) 1 四季寒暑

十二90 四季寒暑の變り目にはとりわけ衣服・飲食に氣を附くべし。

しきたり「仕来」(名) 1 しきたり
四42 母に「人に物をあげる時に、なぜのしをつけるのですか。」と問ひました。

母は「これは昔からのしきたりで、昔はのしあはびをつけたのです。」

しきち「敷地」(名) 1 敷地
十95 縣廳・裁判所・師範學校・高等女學校等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境内ニ在リ。

しきちそうつぽすう「敷地總坪數」(名) 1 敷地總坪數
十二34 敷地總坪數何千坪、建坪何百何十坪、(略)。

しきぶ「式部」(人名) 1 式部
さきしきぶ・むらさきしきぶとせいしきぶ
十16 是程の才學をもちながら、式部は少しも高ふりたる風なく、常

十16 是程の才學をもちながら、式部は少しも高ふりたる風なく、常

に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

しきもの「[數物]」(名) 1 シキ物

六65 熊ノ皮ハヨイシキ物ニナリマス。

じぎよう「[事業]」(名) 9 事業 じいじぎよう・じぜんじぎよう・ぼうせきじぎよう

十一40 教育の事業も段々進歩し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

十一68 人生の長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て量るべからず。

十二45 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

十二73 引込思案の人は(略)、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。

十二73 快活なる精神を以て熱心に其の事業に従事せば、天下何事か成らざるを憂へん。

十二92 慈善の事業にも應分の資を投ずべく、公共の事業にも後れを取るべからず。

十二92 慈善の事業にも應分の資を投ずべく、公共の事業にも後れを取るべからず。

十二104 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、(略)。

十二105 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、(略)に務むるが如きは、

(略)、地方人民たる者は大いに力を是等の事業に盡すべきなり。

しきりに「[類]」(副) 9 シキリニしきりに

六78 (略)二本エントツノ汽船ハシキリニキテキヲ鳴ラシテキル。

七30 かへりたてから、しきりに食物をさがしてゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひはじめ。

七30 食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。

八23 牛小屋の牛はしきりに鳴いてゐるのに、誰も草をやるものがありません。

九34 やがて汽車が動き出すと、馬上の人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、(略)どうして競走が出来よう。

十29 二三羽のあひるが(略)、しきりにゑをあさつてゐる。

十一42 年長じては敵も近づけ申すまじ。幼き時に参りてこそ。」と、しきりに望めば、(略)。

十一102 劉備ハ(略)漢朝ノ復興ヲ圖リ、シキリニ賢士ヲモトム。

十二28 黒き影は(略)、ひらりとばかり身を水中に投入れたり。繩の鈴はしきりに鳴る。

しく「[市区]」(名) 2 市區

十一36 當臺北市街の如きは、近年市區を改正し、街路井然、(略)。

十二61 伯林の市街は清潔を以て著る。市區井然として家屋の高さ略々相等し。

しく「[如]」(四) 7 如ク 如く「一カーク」

九60 身體の勞を直すはよく眠るに如くはなし。

九96 我が國到るところ名勝の地にとほしからざれども、よく人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。

十33 昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、(略)。

十一54 (略)、ミダリニ聲色ヲ作リテハツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

十一75 水の奇觀は瀑布に如くはなし。

十二37 秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。「嘉明に如く者はあらじ。」と答ふるに、(略)。

十二98 支那幾千年間の人物中、大聖として徳化の尚今日に著しきもの、孔子に如くはなし。

しく「[數]」(四五) 9 シク しく 布ク 敷ク 敷く「一イ・キーク」 凸ちりしく

三34 イマニアノナヘガノビ

テ、アライタタミヲシイタヤウニナリマセウ。

四60 (略)、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。」

六75 これがすむと、むしろをしいて、お祝ひのさかもりがはじまりました。

八85 敵ハ(略)、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。

九34 (略)、スチブンソンは其の會社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を走る汽車を造つた。

十42 我等ノ家ニ數ケル疊ノ表ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナリ。

十62 (略)、或ハ坑内ニ數キタルレーンニヨリテ坑外ニ運ビ出シ、(略)。

十一19 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛種を敷けるが如く、(略)。

十二57 撫順は滿洲屈指の炭坑地なれば、特に支線を敷きたるなり。

じく「[軸]」(名) 1 ギク 三29 フデノヂク、(略)ナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。

じく「[軸木]」(名) 4 ギク木 軸木 軸木

八39 マツチノ製造ニハ(略)。 マツ木材ヲ切りテ、(略)、細クギザ

ミテチク木トシ、(略)。
 十一94 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲ
 コシラヘル者、(略)。
 十一94 (略)、軸木ヲ火ニ乾カス者、
 (略)。
 十一95 (略)、乾イタ軸木ノ先へ藥
 品ヲ附ケル者、(略)。
 しくしく(副) 1 しくしく
 六604 園 八つばかりの女の子、た
 もとを顔におしあてて、ひとりしく
 しく泣いてゐる。
 しぐま [類] (名) 1 シグマ
 六655 シグマトイフ熊ハ小馬ホドア
 ツテ、力ガ強ウゴザイマス。
 しぐれ [時雨] (名) 1 時雨
 十一307 園 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美
 ナレ。(略) 雨ニハ春雨・時雨・夕
 立・村雨、雪ニハ(略)等アリ。
 しげし [整] (形) 2 シゲシ しげし
 『キーク』
 六818 園 港ニハ船ノ出入シゲク、停
 車場ニハ汽車ノ發着タエズ。
 九611 園 人多き都會に住む者は、
 (略)、木立しげき公園等を散歩すべ
 し。
 しげる [茂] (四・五) 5 シゲル しげ
 る 茂る 『ツール』 凸おいしげる
 四62 園 あの川むかふの木の
 しげつてゐるのが、八まんさま
 のもりです。」
 五302 ハガヨクシゲツテ、下ノ方ハ
 枝モ見エマセン。

六24 どの山にも木がよくしげつて
 ゐる。
 十二8 園 園 「熱き國 しげる林」
 生ひ立ちし 我、タガヤサン、(略)。
 十281 宮の森のこんもりと茂つた間
 から、古い銀杏の木が一本、(略)。
 じこ [自己] (名) 2 自己
 八48 園 發信人は自己の居所氏名を
 可成本字にて此處に記すべし
 十二113 園 (略)、十分に自己の職務
 を盡す人を眞の大勇の人といふべし
 と訓へ給ふ。
 しこう [嗜好] (名) 3 嗜好
 十二516 園 人種・風俗ノ異ナルニ依
 リテ、人ノ嗜好モ亦同ジカラズ。
 十二517 園 同一國民ノ嗜好ニモ亦時
 ヲノ變遷アリ。
 十二518 園 故ニ商業ニ従事スルモノ
 ハ常ニ花客ノ嗜好ヲ考へ、流行ノオ
 モムク所ヲ察セザルベカラズ。
 じこう [時候] (名) 3 時候
 八812 園 北半球と南半球とは時候全
 く相反し、北半球の夏は南半球の冬
 なり。
 八816 園 北半球にて百花咲きみだれ
 て、蝶の飛ぶ春の時節は、南半球に
 ては木の葉散りしきて、蟲の鳴く秋
 の時候なり。
 九672 さて此の雨風も四季の時候に
 つれて、それなかにちがふ。
 しこうじょう [私交上] (名) 1 私交
 上

十二1037 園 市町村長・議員等を選舉
 するには(略)、親族・縁故其の他私
 交上の關係をさしはさむべからず。
 しこく [四國] (地名) 6 四國
 十734 園 道後は四國の伊豫にあり。
 十一176 園 四國の西には佐田岬長く
 突出で、(略)。
 十一178 園 淡路島の(略)、四國に近
 き所、鳴門海峡となる。
 十一18 園 四國
 十一252 園 (略)、四國の猫車、臺灣
 の揀車の如きは唯一輪なり。
 十二432 園 (略) 安永八年櫻島の破
 裂せし時は、九州・四國・山陽・山
 陰・東海道までも火山灰を降らした
 りといふ。
 じこく [自國] (名) 1 自國
 十一336 園 海防艦ハ専ラ自國ノ沿岸
 ヲ護ルコトヲ目的トス。
 じこく [時刻] どのうじこく
 じこく [地獄] (地名) 1 地獄
 十二41 園 地獄
 しこじこ [四五十戸] (名) 1 四五
 十戸
 八431 さつきからもう二時間もたつ
 から、四五十戸も焼けただらう。
 しこじゅうにん [四五十人] (名) 1
 四五十人
 九752 園 死者四人、傷者四五十人
 もこれあり候。
 しこせき [四五隻] (名) 1 四五隻
 十647 四五隻のボートは母船を離れ

て、我先にと漕いで行く。
 しこじゅうたい [四個中隊] (名) 1
 四個中隊
 九265 園 四個中隊を大隊、三個大隊
 を聯隊、二箇聯隊を旅團とす。
 しこじょう [四五町] (名) 1 四五町
 六84 (略)、川について、四五町行
 くと、もう町をはづれて、たんばへ
 出ました。
 しごと [仕事] (名) 20 仕事 どのりし
 ごと
 六482 秀吉は(略)、一組に十間づ
 つわりあてて、仕事をいそがせまし
 たから、すぐに出来上りました。
 七265 手ハスベテノ仕事ノモトデス。
 七887 園 又漁業その他海の仕事に出
 かける人もありませう。
 八147 大工ハノコギリ、左官ハコテ、
 石屋ハノミ、カヂ屋ハツチ、仕立屋
 ハ針、ソレノ道具ヲ持ツテ、メ
 イノノ仕事ニカル。
 八155 人ノ職業ニハいろくアツ
 テ、皆メイノノ仕事ヲシテ、毎日
 働イテキルノデアル。
 八331 仕事をしながら、僕に色々な
 話をした事もある。
 十一98 此ノ様ニ大勢ノ人が手分ヲ
 シテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業
 トイフ。
 十一910 (略)、全體ノ人が同ジ仕事
 ヲスルヨリモ、分業デスル方が品物
 ノ出来バエガ良クテ、製造高モハル

カニ多イ。

十一105 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。

十一106 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトナナル。

十一107 又毎日同じ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク其ノ仕事ニ熟練スル。

十一108 又毎日同じ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク其ノ仕事ニ熟練スル。

十一109 分業法ニ依ラズ、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、(略)。

十一110 (略)、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變へ、又器具ヲ取換ヘナケレバナライノデ、(略)。

十一111 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、(略)、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十一112 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、(略)。

十一117 (略)、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヲ發明ヲスルコトモアル。

十一121 分業デルスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、(略)。

十一122 (略)、ソレゾノノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。

十一126 セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナライ。

しごとば「仕事場」(名) 1 仕事場

八318 僕の近所に年よりののちが屋があつた。(略)。僕は時々其の仕事場の前に立つて見てゐた。

しごにち「四五日」(名) 4 四五日

七159 用事は四五日ですむはずですが、(略)。

八678 団 (略)、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

十一728 図 さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。

十二272 図 城中には僅かに四五日の糧食を餘せるのみ。

しごにちかん「四五日間」(名) 1 四五日間

十一467 アラビヤ馬の(略)、四五日間うち通し、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。

しごにちまえ「四五日前」(名) 3 四五日前

三278 四五日マヘニアタマヲダシタタケノコガ、モウコンナニノビテ、(略)。

四668 三郎ノ母ハ四五日マヘカラ風ヲヒイテネテキマス。

九438 園 姉上も最早御全快にて、四五日前より起きて蠶の世話をなされ居り候。

しごひき「四五匹」(名) 1 四五匹

五738 タクマシイ大キナカリ犬ガ四

五匹デオツカケテ来マス。

しごひやく「四五百」(名) 1 四五百

七338 一匹でおよそ四五百程の卵を産む。

じさい「自在」(形状) 2 自在

十一278 図 帆の運用自在なれば、風の方向に關らず、十分に風力を利用することを得。

十一978 園 其の南部は車馬の往來自在にして、(略)。

じさつ「四冊」(名) 1 四さつ

三202 ゑ本が四さつ。「ひらがなのドリル」

じさつ「自殺」(サ変) 1 自殺ス

『せ』

八538 図 蝦夷モマタ其ノ家ニテ自殺セリ。

しさん「四山」(名) 1 四山

九4110 図 上二子・下二子・神山・駒岳是ナリ。此ノ四山ノ噴火モ今ハ全ク止ミタリ。

しさん「四散」(サ変) 1 四散す

『せ』

十二309 図 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかば、夜に乗じて城をすてて逃れんとす。

しし「子思」(人名) 1 子思

十二968 図 孔子の孫子思の學説を受け、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

しし「志士」(名) 1 志士

十一148 図 『志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。身を殺して仁を成すことあり。』とかや。

しし「獅子」(名) 3 シ、し、獅子

子ひておいじし

七16 図 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

七607 図 犬の種類はすこぶる多し。(略)。あるものは頭大きくまるくして、しゝの如く、(略)。

十二678 図 (略)、亞弗利加・印度の獅子、(略)等の、(略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

しじ「四時」(名) 1 四時

十一18 図 昔より富士は(略)。然れども四時雪をいたゞきて深く、(略)。

しじ「私事」(名) 3 私事 ひこうじとしじ

十二378 図 私事は軽く、公事は重し。

十二378 図 古語に「私事を以て公事をすてず。」といへり。

十二388 図 「高虎の嘉明と相惡むは私の小事なり。是は公の大事なり。何ぞ私事を以て公事を害せんや。」

じじい ひはなさかじじい

じしつ「地質」(名) 1 地質

九126 園 (略) 稿物二十反本日到着。右は地質といひ、縞がらといひ、此の地方には賣行よろしかるべしと存ぜられ候間、(略)。

じじつ「時目」(名) 1 時目

十一705 図 約束の時日を違ふるが如きは時間の賊なり。

じじっさい「四十歳」(名) 1 四十歳

九242 図 我が國は國民皆兵なり、男子は十七歳より四十歳までの間、何れも兵役に服する義務あり。

ししや「死者」(名) 1 死者

九752 図 死者四人、傷者四五十人もこれあり候。

ししやく「四尺」(名) 3 四尺

十一844 図 (略)、長サ四尺バカリ、直徑尺餘ノ錠締トス。

十一853 図 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ眞白雪ノ如ク、四尺程ノ幅トナリテ進ム様、(略)。

十一1105 きせるは身分の高い人程長いを用ひる。長いのは四尺もある。

じじやく「自若」(形状) 1 自若

十二341 図 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

ししゅ「四種」(名) 1 四種

九912 図 我が國ノ紙幣ハ(略)、一圓・五圓・十圓・百圓ノ四種流通ス。

しじゅう「四十」(課名) 2 四十

二目6 ユキダルマ……………四十

三目2 十四 うとからす……………四十

十

しじゅう「四十」(名) 1 四十 凸いちりろくちようしじつけんこしやく・やくしじゅうマイル

八48 図 四十

しじゅういち「四十二」(課名) 5 四

十一

四目14 十三 のし……………四十一

五目3 第十五 汽車ノタビ……………四

十一

六目14 第十三 コトワザ……………四十

一

八目14 第十三 火事……………四十一

十目14 第十三 花錠……………四十一

しじゅうく「四十九」(課名) 3 四十九

五目5 第十七 瓜……………四十九

八目3 第十五 藤原鎌足……………四十

九

九目2 第十五課 かぶりもの……………四十九

四十九

しじゅうこ「四十五」(課名) 4 四十五

三目5 十七 ほしとり……………四十五

四目2 十四 とけい……………四十五

五目4 第十六 かみなり……………四十

五

八目2 第十四 電報……………四十五

しじゅうこ「四十五」(名) 凸こにじ

しじゅうごふん

しじゅうさん「四十三」(課名) 2 四

十三

六目2 第十四 豊臣秀吉……………四十三

十二目13 第十二課 我が國の農業……………四十三

………四十三

しじゅうさん「四十三」(名) 1 四十三

十二478 図 我が大日本帝國の古

き六十八國^{おきな} 沖繩諸島合せてぞ、府は三つ、縣は四十三。

しじゅうさんいちのう「四十三一納」

(名) 1 四三、一納

八48 図 四三、一納

しじゅうし「四十四」(課名) 6 四十四

二目7 十七 天ジンサマ……………四

十四

三目4 十六 四方……………四十四

七目14 第十三 家の紋……………四十四

九目15 第十四課 駱駝乘……………四十

四

十目15 第十四課 模様と色……………四

十四

十一目11 第十課 熊王丸……………四十

四

しじゅうしち「四十七」(課名) 2 四

十七

三目6 十八 かへる……………四十七

十二目14 第十三課 國産の歌……………四十七

四十七

しじゅうしちし「四十七士」(名) 3 四

十七士

七594 図 明日ハ芝公園ヲ見テ、ソレヨリ四十七士ノ墓ニマウデントス。

十二861 図 四十七士の事蹟は兒童・走卒も之を知らざるはなく、東京高輪泉岳寺の墓前には今尚香花の絶ゆることなし。

十二864 図 四十七士の統領たる大石良雄は初め京都に在り。

しじゅうに「四十二」(課名) 2 四十二

三目3 十五 ミギトヒダリ……………四十二

九目14 第十三課 旅行先の父に送る手紙……………四十二

しじゅうに「四十二」(名) 凸めいじし

じゅうにねん

しじゅうにち「四十目」(名) 1 四十日

七317 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、(略)。

しじゅうはち「四十八」(課名) 3 四十八

二目8 十八 ワタクシノホン……………四十八

………四十八

四目3 十五 とけいのうた……………四十八

六目3 第十五 豊臣秀吉……………四十八

しじゅうはちだき「四十八滝」(名) 1

四十八瀧

十一768 図 紀伊國那智山には四十八瀧あり。

しじゅうろく「四十六」(課名) 2 四十六

七目2 第十四 西洋紙ト日本紙……………四十六

………四十六

十一目12 第十一課 アラビヤ馬……………四十六

ししゅす「死守」(サ変) 1 死守す

「一シ」

十二567 図 日露の戦役に於ては、露軍は海軍根據地として此の地を死守し、(略)。

ししゅつ「支出」(名) 2 支出

十一115 〇 十四五年の後には村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。

十二92 〇 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、衣服・飲食の費皆其の範圍を越ゆることなるべし。

ししよ「死所」(名) 1 死所

十40 〇 二人の我が子それ〴〵に、死所を得たるを喜べり。

じじよ「侍女」(名) 1 侍女

十二31 〇 形名の妻、(略)、侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。

ししよ「死傷」(名) 4 死傷

九71 〇 (略)、御地方は非常の出水にて死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

十二10 〇 敵の死傷及び捕虜は司令長官以下無慮六千人。

十二10 〇 我が軍の死傷甚だ少く(略)。

十二10 〇 殊ニ我が軍ノ損失・死傷ノ僅少ナリシハ(略)。

しじよ「史上」(名) 1 史上

十二85 〇 赤穂浪士が數年の苦難を忍び、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは徳川時代に於ける史上の一美談たるのみならず、(略)。

しじよ「市場」(名) 4 市場

十二50 〇 千里比隣の今の世は有無互に相通じ、世界各國皆市場。

十二50 〇 我等ハ世界ノ市場ヨリ如何ナル物品ヲモ買ヒ得ルガ如ク、(略)。

十二50 〇 (略)、世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、全世界ノ人ハ皆我が商賣ノ花客ナリ。

十二54 〇 (略)、遼陽あり。滿洲内地屈指の市場にして、(略)。

しじよ「至情」(名) 1 至情

十一104 〇 孔明ハ(略)發スルニ臨ミ、表ヲ上ル。言々皆忠君ノ至情ヨリ發ス。

ししよ「試植」(サ変) 1 試植ス

「一セ」

十32 〇 (略)、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、其ノ出来非常ニ良カリシヲ以テ、(略)。

ししん「私心」(名) 1 私心

十二104 〇 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。

しす「死」(サ変) 10 死ス 死す 死す

「一シ・一ス・一セ」

十32 〇 サレバ平左衛門ノ死セシ時ハ、(略)父母ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。

十34 〇 昆陽ハ七十二歳ニテ死セリ。

十一60 〇 彈丸に死せとも、病に死せな。

十一60 〇 彈丸に死せとも、病に死せな。

十一106 〇 時ノ人「死セル諸葛、生ケル仲達ヲ走ラス。」トイヘリ。

十二37 〇 (略)、會津の城主蒲生忠郷死せり。

十二86 〇 「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、(略)。

十二87 〇 「あ、余死せん。(略)。

我が心の良雄を獸待せしは罪死に當れり。」

十二93 〇 我死せば、汝必ず之を師とせよ。」

十二96 〇 孟子死して二千餘年、孔子と共に其の名益々あらはる。

しす「資」(サ変) 1 資す 「一シ」

十二105 〇 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、(略)、自治の精神の養成に資し、自治團體を助長すべきを以て、(略)。

じす「侍」(サ変) 3 侍ス 侍す

「一シ・一ス」

八52 〇 天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ、入鹿カタハラニ侍ス。

九80 〇 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、(略)。

九81 〇 去年の今夜清涼に侍す。

じす「持」(サ変) 2 持す 「一シ」

十二33 〇 外温順・愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、(略)。

自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

十二79 〇 (略)、コロンブスは深紅の美服を着し、西班牙の國旗を持し、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、(略)。

しずおか「静岡」(地名) 1 静岡

十二48 〇 米と麥とは全國に、製茶は静岡・三重・京都 (略)。

しずおか「輪島」(地名) 1 輪島

十二49 〇 漆器は静岡・輪島、黒江・高岡・會津塗。

しずか「静」(形状) 22 シヅカ しづか

三77 〇 (略)、そとへはなしたら、あをく、光りながら、しづかにとんでいきました。

四28 〇 土の中で、しづかにら

い年のほるをまつてゐるのです。

四62 〇 ゆふべは風がなくて、しづかなぼんでしたから、少しも知らずにゐました。

五34 〇 又羽ヲタ、ンデ、シヅカニ木ノ葉ノ上ニネムツタヤウニシテキルノヲ見ルト、(略)。

六35 〇 (略)、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、まるで急にかいたやうである。

七89 〇 中佐ハシヅカニ、「杉野ハ今點火ヲ終ヘタルゾ。總員ポートヘ。」

八七四 虎モ猫モ（略）、歩ム時音ヲ立テズシテ、シツカニ他獸ニ近ヨリ、急ニ飛ビツキテ之ヲ捕フ。
 九六五 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。
 九六四 春の雨はしめやかに降つて、のきの玉水の音も靜かに聞える。
 九六七 「紅白花は開く煙雨の中。」といふ景色は、靜かな中に美しいなごめである。
 九七五 夜が更けて、雨の音が靜かになつたから、止んだことと思つてゐると、（略）。
 一九五 〔略〕落葉・こけ及び（略）木の根などは、（略）、水をして少しづつ靜かに流れ出でしむ。
 一三九 〔圖〕主柱 靜かに曰く、「ねだ低く、たるきは高し。（略）。つかとなり 床となる身も、それ／＼の務をもてり。
 一三五 〔圖〕「あれが此の室にはいる前（略）、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。
 一三六 〔圖〕 人が大勢込合つてゐる中で、（略）、靜かに自分の順番を待つてゐました。
 一六三 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。
 一八九 海の靜かなることは鏡の如く、（略）。
 一四七 馬主は（略）、靜かに其の

金を拾ひ上げ、（略）。
 一五五 靜かな山の中に流れる水の音が遠く聞えるばかり。
 一七三 〔圖〕 上るに隨つて、瀧はいよ／＼小、境は益々靜かなり。
 一四二 〔圖〕 波風のあづかなる日も船人は かぢに心を許さざらん。
 一二九 〔圖〕（略）、天よく晴れて海波靜かなり。
 しづく 〔滴〕（名） 1 シツク 凸ひとしづく
 九四二 〔圖〕 水ノシツクモ度重ナレバ石ヲモウガツトイフ。
 しづく 〔靜靜〕（副） 1 靜々
 九二九 やがて五人の騎手は多くの人々に附きそはれ、靜々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて來た。
 しづのおだまき 〔倭文学環〕（名） 1 しづのをだまき
 一二五 〔圖〕 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへせし人をしのびつゝ。
 しづまりいぬ 〔靜寢〕（下二） 1 靜まりいぬ 〔一ネ〕
 一四五 〔圖〕 人々皆 靜まりいねしま夜中に 家組立つる 木々も今語り出しぬ。
 しづまる 〔靜〕（四） 1 靜まる 〔一リ〕 凸ねしづまる
 九七三 〔圖〕 明けて二十九日には雨も止み、風も靜まりて、日の光さへ見え出し候へば、（略）。
 しづみゆく 〔沈行〕（四） 1 沈ミ行ク 〔一キ〕
 七九四 〔圖〕 船ハ次第ニ沈ミ行キテ、水ハスデニ甲板ヲヒタセリ。
 しづむ 〔沈〕（四・五） 12 シヅム しづむ 沈ム 沈む 〔一マ・一ミ・一ム・一ン〕
 三六七 〔略〕、カメニノルト、ダンドンウミノ中ヘシヅンデ行ツテ、マモナクリユウグウノ門ヘツキマシタ。
 五一〇 魚はうれしさうにういたりしづんだりして、およいでゐました。
 七七一 〔略〕、エヒ・カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデキルモノモアル。
 七七九 〔略〕、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、（略）。
 七五五 〔圖〕 急に暴風雨が來ると、（略）、船は今にも沈むかと思ふ様になります。
 七五五 〔圖〕 しかし船はなかく沈むものではありません。
 九三二 〔フルトン〕が（略）造つた最初の船は、（略）、不幸にも直に沈んでしまつた。
 一六五 〔ボート〕は（略）、或は右に或は左に引廻される。今にも沈むかと冷々する。
 一八二 〔圖〕 魚は（略）、水面近く浮ぶが故に、鵜は深く沈まずして、た

やすく魚を捕ふことを得るなり。
 一八二 〔圖〕（略）、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、（略）。
 一八三 重く沈んだ調に暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかとと思ふと、（略）。
 一八三 變化極らない妙音は、（略）、又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈ませる。
 しづめる 〔沈〕（下二） 1 しづめる 〔一メ〕
 五三 けれども重い物は皆そこへしづめてしまつて、（略）。
 しせい 〔市井〕（名） 1 市井
 一四六 〔圖〕 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、市井の感化を恐れて、三度其の居を遷せりといふ。
 しせい 〔姿勢〕（名） 1 しせい
 一六五 ちゃんとしせいをよくして、氣を附けてゐて、何を聞かれても、はつきりと答へる子供もございました。
 じせい 〔時世〕（名） 1 時世
 一四二 〔圖〕 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを論し給ひ、其の後時世の移り變るに連れて、兵制にも變遷あること、（略）を詳に御論しあり、（略）。
 しせいほうこう 〔至誠奉公〕（名） 1 至誠奉公
 一四二 〔圖〕（略）、議員たる者は至誠

奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

しせき「四隻」(名) 1 四隻

七918 四隻ノ船ハ皆爆沈シテ、(略)。

じせき「事蹟」(名) 3 事蹟

十二861 四十七士の事蹟は兒童・走卒も之を知らざるはなく、(略)。

十二1158 太古以來忠節の心にあつきは、我が國民の(略)美德にして、古來の歴史上の事蹟は十分に之を證明せり。

十二1175 我等は修身書に於て、歴史に於て、讀本に於て、既に祖先の事蹟を學び得たること多し。

しせつ「私設」(名) 1 私設
十二154 我が國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノ海軍ノ工廠デ、(略)。
又私設デハ三菱・川崎等ノ造船所ガ最モ大キイ。

じせつ「時節」(名) 3 時節
七172 このよい時節に東京へお上りはおうらやましい事でございませす。

八814 北半球にて百花咲きみだれて、蝶の飛ぶ春の時節は、南半球にては(略)秋の時候なり。

九684 (略)五月雨は、農家に取つては大切な雨である、それはちやうど田植の時節であるから。

しせん「支線」(名) 3 支線
十二564 南滿洲の支線としては旅

順線・營口線・煙台線・撫順線・安奉線あり。

十二5610 營口線は(略)清國京奉線の支線に連接す。

十二578 撫順は滿洲屈指の炭坑地なれば、特に支線を敷きたるなり。

しせん「四銭」(名) 1 四銭
七529 近い所ならもつと目方がふえても、四銭で送れます。

しぜん「自然」(名) 2 自然
九409 (略)、世ノ轉變ノ如何ニ甚ダシキニ驚クナラン。然レドモ自然ノ轉變ハ更ニ是ヨリモ甚ダシキモノアルヲ知ラズヤ。

九665 帆かけ船の水上を走る、たこの空高く上る、是皆人の自然の風を利用したるなり。

しぜん「自然」(副) 7 シゼン しぜん 自然
五583 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出來タ物デ、(略)、石炭トイヒマス。

五597 ランプニトボスノハ石油トイヒマス。コレハ地ノ中カラシゼントワキ出ルモノデ、(略)。

六17 海べはふだん強い風がふくから、高い松はしぜんにおもしろい枝ぶりになつてゐる。

六504 それから秀吉のいきほひは、しぜんに日一日と盛になりまして。

十7110 其の熱氣に温りたる水の自

然に地上にわき出づるもの、即ち温泉なり。

十一116 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ精神ヲコラスコトニナルカラ、(略)。

十二436 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、(略)。

じぜん「慈善」(名) 2 慈善
十二327 (略)、鈴木今右衛門の妻の慈善を行ひたる、皆後世女子の模範とすべき徳行なり。

十二929 (略)、世間の交際をも外さず、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、(略)。

じぜんじぎょう「慈善事業」(名) 1 慈善事業
十二10410 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、(略)。

しせんろくしちひやくまんごく「四千六七百万石」(名) 1 四千六七百万石
十二446 (略)、米の作付反別は凡そ二百九十萬町歩、其の收穫は年々凡そ四千六七百萬石にして、(略)。

しそ「紫蘇」(名) 3 シソ しそ
五287 もとよりすつばいこのからだ、しほにつかつてからくなり、しそにそまつて赤くなり、(略)。

九91 シソノ花ノ様ニクチビルノ形ヲシタノモアリ、(略)。

九9 シソ
しそ「志操」(名) 2 志操
十二324 是等の人々は(略)、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、其の志操の固きは男子にも勝れり。

十二3310 外温順・愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、(略)、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

しそつ「士卒」(名) 1 士卒
十一1067 (略)、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

しそん「子孫」(名) 1 子孫
十一147 (略)、君をうばひ奉りて義軍を起し、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。

した「下」(名) 33 シタ 下 ヲあめがした・はんした・みやのした・ゆかし

した「下」(名) 33 シタ 下 ヲあめがした・はんした・みやのした・ゆかし

十二147 シタヲミルト、ミヅノナカニモサカナヲクハヘタ犬ガキマス。

二十7 イマハ木ノ上ニキマスガ、モウスコシタツト、(略)、下ヘトビオリマス。

二24 (略)、アノ木ノ下ニタケラサンガキマス。」

二五七 ヨイオヂイサンハソノハ
ヒヲモラツテキテ、カマドノ
下ニオキマシタ。
三三八 又さかさまになつて、下
へもぐつて、しばらくたつと、
(略)、水の上へ出てきます。
三六一 はまべのまつの木の下
へ行つて見ませう。
四一三 圖 (略)、かみなりさまを
下にきく、ふじは日本一の山。
四一五 大ぜいのものが下にま
ちかまへてゐて、(略)おひおろし
て来るものを、弓でいといつ
たのです。
四七二 (略)、そのさをのさきに
はひらいた赤い扇がつけてあ
ります。一人のくわんちよがそ
の下に立つて、さしまねいてゐ
ます。
五三〇 コ、ニ茶ノ木ガアリマス。ハ
ガヨクシゲツテ、下ノ方ハ枝モ見え
マセン。
五三三 サクラノ花ノ下ニトシデキル
白イ蝶ヲ見ルト、花ガチツタノカト
思ヒ、(略)。
五三六 ソノウチニ下ノ方デカミナリ
ノヤウナ音ガシマシタ。
五四六 音次郎はおどろいて、道ばた
の高い木の下へにげこみました。
五四八 音次郎が木の下を出ると、
(略)。
五八四 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、

(略)。
五八〇 見下せば、しろは何十丈ある
か知れないがけの下にある。
六三七 (略)、橋の下に立つてつりす
る人など、(略)。
八五一 役所デモ、會社デモ、上カラ
下マデ一同ソロツテ事務ニ取りカ、
ル。
八四八 圖 發信人の居所氏名を受信人
に知らせんとする時は本文の終り又
は受信人居所氏名の下に片假名にて
記すべし
八五七 いすかのくちばしは上と下が
くちががつてゐる。
八五八 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、
上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、
(略)。
八八八 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸
ノ下ヲクバリナガラ、ケハシイガケ
ヲカケ下リタ。
九二六 圖 將校には(略)あり。其の
下に下士あり、兵卒あり。
九二九 やがて五人の騎手は(略)、
鳥居の下へ集つて来た。
九三六 (略)、熊吉に水を吐かせるや
ら、醫者と呼ばに走るやら、上を下
へのさわぎである。
一〇二五 圖 若シ勇氣アラバ我ヲ殺
セ。殺ス能ハズバ、我が誇ノ下ヲク
マレ。
一〇二五 圖 韓信(略)、ヤガテハラバ
ヒテ誇ノ下ヲクグル。

一二二 圖 (略)、波にくどくるかゝ
り火の下に、百にも近き鶴、此方に
浮び、彼方に沈み、(略)。
一二五 圖 御承知の通り、冬は寒
氣厳しく、地面は三尺の下まで凍り、
(略)。
一二八 (略) 冬の日でも、氷の下
の水をくんでせんたくする。
一二九 圖 又風の方向は矢を以て示
し、(略)、下へ向ふは北風、左へ向
ふは東風とす。
一三〇 圖 然れども地下には各種の
鐵道縱横に貫通し、テームス河床の
下をも往來せり。
一三二 圖 主婦は寢に就く前、先づ
竈の下より火消壺までもよく検査し
て、(略)。
した「舌」(名) 2 舌
八七四 圖 猫ノ口ニハ(略)。又其ノ
舌ニハ内方ニ向ツテハエタル太キ毛
ノ如キトゲアリ、(略)。
一二七 圖 我が目、獸として良
雄を視、我が舌、獸として良雄を罵
り、我が足、獸として良雄に食はし
めたり。
したい「死體」(名) 1 死體
八九一 圖 其ノ時ハオレノ死體ヲセオ
ツテ歸ル積リデカケツケヨ。
しだい「次第」(名) 3 次第 凸であた
りしだい
七二八 圖 (略)、私の豆はたべられま
せん。まことにおはづかしい次第で

す。
一二八 圖 (略)、諸道具の置場處を
一定し、前後左右次第よく並べて、
(略)。
一二九 圖 若し家内に傳染病等にか
ゝるものあらば、(略)、世間へ對し
ても相濟まぬ次第ならずや。
じだい「時代」(名) 3 時代 凸えんせ
いじだい・しゅんじゅうじだい・とく
がわじだい・ならじだい
九二九 圖 貨幣トシタル物品ハ時代ニ
ヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。
一三〇 圖 (略)、今日の如く通信交
通の機關發達し、社會の活動敏速な
る時代にありては、時間は金錢より
も貴し。
一三二 圖 外國トノ交通少カリシ時
代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタ
リキ。
じだい「時代」(名) 1 時代
後れ
一二八 圖 見る物の多い今日の祭日
に、時代後れの下手な音曲に耳を傾
ける者は一人もない。
しだいしだいに「次第次第」(副) 1
次第々々に
九三〇 圖 (略)、手ぬぐひ三尺引き
しばり、頭に結ぶはち巻は 次第々
々にすたれ行く。
じたい「辞退」(サ変) 1 じたい
する「一シ」
四八〇 「あの扇をいおとすもの

はないか。(略)。(略)、すぐに
よ一をよびだしました。(略)。一
どはじたいしましたが、よしつ
ねがゆるしません。

したいたてまつる「慕奉」(四) 1
タヒ奉ル「一リ」

八五〇四 鎌足早クヨリ其ノ人トナリ
ヲシタヒ奉リ、大事ヲ成スニハ此ノ
皇子ヲイタキ奉ルヨリ他二道ナシ
ト思ヒシガ、(略)。

しだいに「次第」(副) 24 次第二
第に

六八〇六 秀吉コ、ニ城ヲキヅキシヨ
リ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナ
レリ。

七八二二 海岸の松原も次第に遠く
つて、しまひにはもう何も見えなく
なります。

七九一四 船ハ次第ニ沈ミ行キテ、水
ハスデニ甲板ヲヒタセリ。

九四七五 全家立退の用意致
し居り候中、夜も明けはなれて、水
は次第に減退致し候。

九七八二 銀行貯金ニテモ、郵便貯金
ニテモ、預ケタル金高ノ次第二上リ
行クハ樂シキモノナリ。

十三〇七 此ノ芋ノ次第二西方
ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

十四三〇 (略)、販路次第二開ケ、此
ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、
(略)。

十六三三 此ノアタリ、(略)、鑛業ノ

盛大ニオモムクト共二次第二發達シ
テ、(略)。

十八二八 あいぬの數、(略)、近年次
第に減少して、今は僅かに二萬人に
足らず。

十一四七 花は麓より咲初めて次第
に山上に及び、(略)。

十一七六 氣候の暖なる間絶えず之
を産出するを以て、一群の數は次第
に増加す。

十一七〇 故に飼養者の注意により
ては、次第に其の群の數を増加する
ことを得べし。

十一二六 都會の地には電車・自動
車等も次第に多く行はれて、(略)。

十一五二 一家和合セザル時ハ家道
次第ニオトロヘテ、(略)。

十一八五 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コ
レヲ練條機ト稱スル機械ニカケテ、
(略)、次第ニヨリヲカケテ絲ノ形ニ
近ヅカシム。

十一八八 (略)、先づ幾條かのやゝ
太き絲を渡し、之を本として、次第
に細き絲をかけ、終に完全なる網を
造る。

十一九三 かくる時は靴の供給次第
に増來り、靴の價はやうやく安くな
りて、(略)。

十一九四 又之と反對に、價次第に
安くなりて、普通の價よりも下るに
至る時は、(略)。

十一九四 (略)、次第に其の製造高

を減ずるが故に、供給も随つて減じ
て、(略)。

十二六九 (略)、温暖なる地方に
移らんと欲するもの期せずして相集
り、次第に其の數を加ふ。

十二六九 (略)、飢餓刻々にせまる
が故に、次第に行進を早め、(略)。

十二七三 船の次第に朝霧の中にか
くれ行くを見送りにて、(略)。

十二七九 是より先は未だ航行せし
ことなき大洋なれば、乗組の人々も
次第に不安の念を生ぜり。

十二八二 (略)、北條早雲が小田原
城に據りて、次第に其の權力を四隣
に張らんとせる頃なりき。

したう「慕」(四) 1 したふ「一フ」
十一一三 校長も(略)、生徒を愛
すること子の如く、生徒も亦校長を
したふこと父母の如し。

したがう「從」(四・五) 18 シタガフ
したがふ したがふ 從フ 從ふ

隨フ 隨ふ「一ツ・ヒ・フ・ヘ」
八五二 中大兄皇子(略)、長キヤリ
ヲトツテ物カゲニカクレ給フ。鎌足

ハ弓矢ヲ持ツテ御後ニシタガヘリ。
九四九 (略)サ、ヤカナル細谷川
ハ、流れ下ルニシタガヒテ、數多ノ
小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。

九二五 工兵は陣地をきづき、(略)、
電信を通ずる等、もつぱら技術の事
にしたがふ。

九五七 動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物

ノ色ノ變ズルニシタガツテ、保護色
ノ變ズルモノアリ。

九八八 サレバ何レノ國ニテモ、世
ノ進ムニシタガヒ、(略)、物ト物ト
ヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

十四一 軍のおきてにしたがひ
て、他日我が手に受領せば、なぐく
いたまり養はん。」

十七八 又筋肉ハ之ヲ用フルニシタ
ガヒテ發達ス。

十一二七 文明ノ進歩スルニ隨ヒ、分
業ハ益々發達シテ、(略)。

十一七七 上るに隨つて、瀧はいよ
く小、境は益々靜かなり。

十一七八 又嚴冬の頃は瀑水落つる
に隨ひ氷結して、一面玉山銀臺とな
り、(略)。

十一九四 (略)、次第に其の製造高
を減ずるが故に、供給も隨つて減じ
て、(略)。

十一九四 (略)、例へば名高き古人
の書畫・古器物などの如きは、需要
増すに隨ひて、其の價益々高くなり、
(略)。

十一一〇三 備又其ノ子ニ向ヒテ、
「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事
フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」ト
イフ。

十二二九 我等臣民も亦祖先の遺風
に從ひ、一致協同して、此の國家を
護らざるべからず。

十二四五 學問を修むるにも、事業

に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

十二38 秀忠大いに感じて其の言に随ひ、嘉明を擧げて會津に封ぜり。

十二60 巡査の一擧手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、(略)。

十二72 何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。

したがって「從」(接) 8 シタガツテ

したがって 隨ツテ 隨つて

六25 銅ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、シタガツテネダンモヤスウゴザイマス。

七65 又冷水浴や海水浴はひふを強くし、したがってからだを強くし、心をさわやかにする。

九54 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。シタガツテ敵ニオソハル、ウレハ少ク、(略)。

十一10 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトニナル。又(略)、誰モ早く其ノ仕事ニ熟練スル。隨ツテ良イ品物が出來テ、製造高モ多クナル。

十一91 (略)、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものな

く、隨つて價あることなし。

十一91 日光・空氣の如きは、(略)、之を買ふ必要なく、隨つて亦價あることなし。

十二35 ソモく明治五年學制發布以來、教育ノ普及發達ハ年ヲ追ウテヨク盛ニ、(略)。隨ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、(略)。

十二10 國力我に劣れる國民を見て、(略)、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐる

したく「支度」(名) 3 シタク 支度

二25 オバアサンハ火ヲタイテ、ユフハンノシタクヲシテキマス。

八13 母ハ臺所デ朝飯ノシタクニカ、リ、(略)。

九83 神主は(略)、それがすむと「支度」といふあひづの一番太鼓を打鳴らした。

じだこ「字風」(名) 1 ジダコ 二31 エダコニ ジダコ、ドチラモマケズ、クモマデアガレ。

したしみ「親」(名) 1 親 十二110 されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は特に深かるべき。

したしみたてまつる「親奉」(四) 1 親シミ奉ル「ール」 八51 鎌足ヲ拾ヒテ、ヒザマツ

キチ皇子ニサ、ゲシニ、皇子モマタヒザマツキテ、之ヲ受ケ給ヘリ。コレヨリ鎌足、皇子ト親シミ奉ルコトヲ得テ、(略)。

したしむ「親」(五) 1 親しむ「シ」ひなつきしたしむ 十二50 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。

したたむ「認」(下二) 1 したゝむ「一メ」 九21 如何ばかりの思にて、此の手紙をしたゝめしか、よく御察しこれあり度候。

したためかた ひでんぼうしたためかたちゅうい したたる「滴」(四) 1 シタル「一ル」

十98 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠綠シタルガ如シ。

したつゆ「下露」(名) 1 下露 ひまつ のしたつゆ 十89 (略)、いかにせん、頼む

したてや「仕立屋」(名) 1 仕立屋 八14 (略)、仕立屋ハ針、ソレノ道具ヲ持ツテ、メイノ仕事ニカ、ル。

したび「下火」(名) 1 下火 八42 火事だ、火事だ。(略)。だん

したやくども「下役共」 1 下役ども

五27 役人は後からこゑをかけて、「(略)」。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」といつて、下役どもに言ひつけて、しばらせました。

しだれやなぎ「枝垂柳」(名) 1 しだれやなぎ 三50 しだれやなぎにとびつ

したわし「墓」(形) 1 したはし「一シク」 九80 筑紫に到りて後は、(略)、

しだん「師團」(名) 1 師團 ひこのえ しだん・しちこしだん・じゅうくしだん・じゅうさんこしだん・じゅうはちこしだん・だいいちしだん・だいいじゅうはちしだん

九26 二箇旅團の歩兵にそこぼくの騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へたるものを師團といふ。

しだんしれいぶ「師団司令部」(名) 1 師團司令部 九27 師團司令部のある所は東京

・大阪・名古屋・廣島・熊本等軍事上重要な地なり。

しち「課名」 8 七ひだいいしち・だいしちか

二目 四 オハナトオキク……

七

- 二目8 七 イヌノヨクバリ
二四2 七 イヌノヨクバリ
三目8 七 なぞ
三二2 七 なぞ
四目8 七 手ノユビ
四二2 七 手ノユビ
六目4 第三 遠足……七
しち「七」(名) 7 七 VII ムだいしち
ず・ぼうふしちかいき
四四四 VII
六五四 七
六五四 七
六五四 七 スキ
八四四 七
一一二四 七
一一一八 七 (七)
しち「自治」(名) 5 自治 ムちほうじ
ち・ちほうじちだんたい
一二二四 七 何をか自治の精神といふ。地方人民協同一致して、自ら地方公共の事に任じ、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。
一二二四 九 市町村長・議員等を選挙するには(略)。まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、自治の精神に反すること最も甚だし。
一二二四 一〇 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。
- 一二二五 二 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、(略)に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、自治の精神の養成に資し、自治團體を助長すべきを以て、(略)。
一二二五 六 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。
しちかい「七回」(名) 1 七回
一一一〇 四 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、(略)、マタ反スルコトナカリキ。
しちかいき「七回忌」(名) 1 七回忌
一一一四 四 あくる年は六郎の七回忌なり。
しちがつ「七月」(名) 1 七月
五二八 四 (略)七月・八月あつころ、三日三ばんの土用ぼし、(略)。
しちがつころ「七月頃」(名) 1 七月頃
八六四 四 綿ノ木ハ(略)。種ヲ蒔クノハ五月頃デ、七月頃ニ花ガ咲イテ、(略)。
しちがつじゅうごにち「七月十五日」(名) 1 七月十五日
九四四 四 七月十五日 増太郎 父上様
しちがつつつか「七月二日」(名) 1
七月二日
一一六二 一 拜啓、老父事本年満六十歳に相達候に付、来る七月二日の誕生日を以て、親族一同打寄り、(略)。
しちかにち「七箇日」(名) 1 七箇日
一五五 二 されば實盛は義仲の爲には七箇日の養父。
しちかねん「七箇年」(名) 1 七箇年
一二二五 九 貴族院は(略)。(略)。
第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。
しちこしだん「七個師団」(名) 1 七箇師団
九二六 九 明治二十七八年の戦役までは、我が國の陸軍は僅かに七箇師団に過ぎざりしが、(略)。
しちじ「七時」(名) 1 七じ
三三七 六 七じがなりました。さあ、これからがくかうへ行きませう。
しちじころ「七時頃」(名) 1 七時ころ
六八 三 (略)遠足に出かけました。家を出たのは朝の七時ころでした。
しちじゅう「七十」(課名) 3 七十
五目 二 鹿ノ水カマミ………七十
九目 八 第二十一課 水害見舞の文………七十
………七十
十二目 五 第十八課 苦樂………七十
しちじゅう「七十」(名) 2 七十
八四四 七
十五二 七 今は七十にも餘れば、殊の外白髪には成りたらんに、(略)。
- しちじゅういち「七十二」(課名) 2
七十一
十目 七 第二十課 温泉………七十一
十一目 五 第十八課 畫工の苦心………七十一
………七十一
しちじゅうく「七十九」(課名) 1 七十九
十目 九 第二十二課 あいぬの風俗………七十九
………七十九
しちじゅうご「七十五」(課名) 4 七十五
八目 一〇 第二十二 世界の話………七十五
………七十五
九目 九 第二十二課 貯金………七十五
五
十目 八 第二十一課 人ノ身體………七十五
七十五
十一目 六 第十九課 瀑布………七十五
五
しちじゅうこマイルいじょう(名) 1
七十五哩以上
十一二八 二 (略)今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。
しちじゅうさん「七十三」(課名) 1
七十三
十二目 六 第十九課 コロンブス………七十三
………七十三
しちじゅうさんり「七十三里」(名) 1
七十三里
九四六 四 利根川ハ日本東部ノ大川ニシテ、全長凡ソ七十三里、(略)。

しちじゅうし「七十四」〔課名〕3 七 十四	十一676 図 人生七十年と見るも六十 萬時間に過ぎず。	の之を助くるなくんば、自治團體の 圓滿なる發達は得て望むべからず。	(名) 1 七百三十萬
五月12 第二十四 ひよどりこえのさ かおとし (一)……七十四	しちじゅうはち「七十八」〔課名〕3 七十八	十二1047 図 例へば教育・衛生等自治 團體の事業は、(略)。	十二597 図 倫敦は人口四百八十萬、 接續都會を合すれば七百三十萬の多 きに達す。
六目10 第二十二 むね上げ……七 十四	七目11 第二十三 何事も精神…… 七十八	十二1053 図 又産業組合を設け、慈善 事業を起し、若しくは青年會を組織 して、(略)に務むるが如きは、(略)、 自治の精神の養成に資し、自治團體 を助長すべきを以て、(略)。	しちひやくねん「七百年」(名) 1 七 百年
七目10 第二十二 海ノ生物…… ……七十四	九目10 第二十三課 菅原道真…… 七十八	しちとう「七湯」(名) 2 七湯ひはこ ねしちとう	十二2510 図 歴史は長き 七百年、 興亡すべてゆめに似て、英雄墓はこ け蒸しぬ。
しちじゅうし「七十七」〔課名〕2 七十七	十一目7 第二十課 鵜飼……七十 八	九399 図 七湯トハ湯本・塔ノ澤・堂 ガ島・宮ノ下・底倉・木賀及ビ蘆ノ湯 ヲイフ。	しちへん「七遍」(名) 1 七ヘン 一496 サア、タケヲサンカラオ トビナサイ。一ベン(略)六ベン 七ヘンハヘン九ヘン十ベン。
五月13 第二十五 ひよどりこえのさ かおとし (一)……七十七	しちじゅうろく「七十六」〔課名〕1 七十六	九401 図 今ハ此ノ七湯ノ外ニ新シキ 温泉場モ開ケ、(略)。	しちめんざん「七面山」〔地名〕1 七 面山
六目11 第二十三 港……七十七 しちじゅうじょう「七十丈」(名) 2 七十丈	四目12 二十四 なすのよ一 (一)…… ……七十六	じちせい「自治制」(名) 3 自治制 十二1029 図 此の精神は實に自治制の 根本にして、又其の生命なり。	十二4010 図 最も東なる根子岳は七面 山とも稱し、山頂嶺の齒の如し。
九961 図 此の湖の落口は華嚴瀧とな る。直下七十丈、壯觀名狀すべから ず。	十二1046 図 故に人々常に自治制の本 旨を體し、協同一致して團體の福利 を増進せんことを心掛くべし。	じちのせいしん「課名」2 自治の精神 十二目12 第二十五課 自治の精神 十二1021 第二十五課 自治の精神	しちめんちよう「七面鳥」(名) 2 七 面鳥
十一761 図 (略)、直下七十丈の水は 絶壁に水晶のすだれをかく。	十二1055 図 自治制の如き最良の制度 も、人民に自治の精神乏しき時は、 いづくんぞ其の美果を收むるを得ん や。	しちはちにん「七八人」(名) 1 七八人 六733 (略)、三十年の間にどうして もきらひな子供が七八人ございまし た。	八553 又にはとり・七面鳥・あひる などは陸上や水上にばかり居て高く 飛ばないから、其のつばさが小さい。 十881 其の外あひるや七面鳥なども 家に飼はれる鳥である。
しちじゅうに「七十二」〔課名〕2 七 十二	しちせん「七銭」(名) 1 七セン 四257 図 「糸ガ十五セン、フデガ 七セン、ミンナデ二十二センニ ナリマス。」	しちはちふん「七八分」(名) 1 七八 分	しちゅう「市中」(名) 3 市中 六814 図 市中ヲ流ル、川ヲ浚川トイ フ。
しちじゅうにさい「七十二歳」(名) 1 七十二歳	じちだんたい「自治団体」(名) 3 自 治團體	十355 図 汽車は此のトンネルを通過 するに七八分を費す。	十249 図 韓信大刀ヲオビテ市中ヲ行 ク。
十341 図 昆陽ハ七十二歳ニテ死セリ。 しちじゅうねん「七十年」(名) 1 七 十年	十二1044 図 公吏・議員等(略)、如何 に其の職務に忠實なるも、一般人民	六94 あげ道を七八町通つて、小川 の橋を渡ると、御社の前へ出ました。 しちひやくさんじゅうまん「七百三十万」	十二632 図 壯麗なる馬車・自動車の 多きは巴里を第一とし、市中到る處 其の往來織るが如く、(略)。

- しちょう「四町」(名) 1 四町
 十947 図 (略)、昔ハ境内方四町、堂
 塔難舎ノ數百七十五アリ、規模極メ
 テ大ナリシガ、(略)。
- しちょうしゃ「輜重車」(名) 1 輜重車
 十一28 10 図 軍事上に用ふる車には、
 砲車・材料車・輜重車等種々あり。
- しちょうそんかい「市町村會」(名) 1
 市・町村會
 十二103 1 図 (略)、市・町村會に於て
 市・町村長を選挙するも、一に此の
 精神に基づくべく、(略)。
- しちょうそんちよう「市町村長」(名)
 3 市町村長 市・町村長
 十二103 2 図 (略)、市・町村會に於て
 市・町村長を選挙するも、一に此の
 精神に基づくべく、(略)。
- 十二103 3 図 (略)、市町村長・參事會
 員等の其の事務を處理するも、(略)、
 亦常に此の公平なる精神を以てすべ
 し。
- 十二103 6 図 市町村長・議員等を選
 挙するには専ら其の人物に重きを置
 き、(略)私交上の關係をさしはさ
 むべからず。
- しちょうへい「輜重兵」(名) 3 輜重
 兵 輜重兵
 九25 3 図 又別に輜重兵ありて、後方
 より兵糧・彈藥等(しちよう)を運ぶ。
 九25 6 図 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重
 兵は何れも戦争に必要にして、其の
 任務には輕重の別あることなし。
- 九26 7 図 二箇旅團の歩兵にそこばく
 の騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へ
 たるものを師團といふ。
- しちようよ「四町余」(名) 1 四町餘
 十一76 10 図 瀧の後より山路を上るこ
 と四町餘、一條の谷川あり、(略)。
- しちりがはま「七里浜」(地名) 1 七
 里が濱
 十二23 7 図 七里の濱のいそ傳ひ、
 稻村が崎、名將の劔投ぜし古戰場。
 しつ「室」(名) 3 室 凸さいほうしつ
 ・しよくいんしつ
 七35 5 図 母アヤシミテ、ソノ室ヲウ
 カマフニ、正行ハ(略)、今ニモハ
 ラヲ切ラントス。
- 十35 1 図 「あれが此の室にはいる前、
 先づ着物のほこりを拂ひ、はいつて
 からは靜かに後の戸をしめた。
 十一107 6 室が廣く、天井が高いと温
 りにくいから、成るべく狭く低くす
 る必要がある。
- しつ「質」(名) 1 質 凸しよくぶつし
 つ・どうぶつしつ
 十五4 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直徑
 ガ六尺モアツテ、葉ノ質モ丈夫デア
 ルカラ、(略)。
- じつ「目」凸すうじつ・すうじつかん・
 たいさいじつ
 じつ「実」(名) 2 實
 十二54 1 図 富國ノ實ノ擧ルト擧ラザ
 ルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏
 ノ如何ニ存ス。
- 十二95 6 図 齊の臣答へて、「君子
 は過あれば謝す。君、實を以て謝せ
 よ。」と。是に於て齊侯魯より奪略
 せる地數箇處を返せり。
- しつうはったつ「四通八達」(名) 1
 四通八達
 八95 1 図 名古屋は(略)。四通八達
 の要路にあたれるを以て、早くより
 東海道一の大都會なりしが、(略)。
- しつかり「確」(副) 2 しつかり
 四18 2 ただつねはしつかりとを
 をにぎつて、のつてゐます。
- 九83 6 図 五箇村の人々は各我が村
 の騎手に向つて、「(略)」「(略)」「
 「しつかりやつてくれ。」などと、口
 々に勢をつけてゐる。
- しつき「漆器」(名) 1 漆器
 十二49 8 図 漆器は静岡、輪島塗、
 黒江・高岡・會津塗。
- じつくみ「十組」(名) 1 十組
 六48 1 秀吉は大ぜいの人を十組に分
 けて、一組に十間づつわりあてて、
 仕事をいそがせましたから、(略)。
- じつげつ「十間」(名) 2 十間
 六48 2 秀吉は(略)、一組に十間づ
 つわりあてて、仕事をいそがせまし
 たから、(略)。
- 十一89 6 図 熱き地方の白蟻は周圍十
 間、高さ三間にも達する小山の如き
 巢を造り、(略)。
- じっこう・す「実行」(サ変) 1 實行す
- 「一セ」
 十92 6 圖 仰の如く本村にも耕地
 整理の必要これあり、(略)、何れ熟
 考の上實行せんと申合せ居り候事と
 て、(略)。
- じつさい「十歳」(名) 2 十歳
 七18 8 図 ナンデハ年スデニ十歳ヲ
 コエタリ。
 九45 3 図 アリは十歳ばかりの子供な
 りしが、(略)、隊商と共に出立した
 り。
- じつさい「實際」(名) 1 實際
 十二14 5 コレハホンノ大體ノ構造ノ
 話デ、實際ハ(略)ソレノ附屬具
 ガアリ、大キナ船デハ船底モ兩側モ
 二重張ニスル。
- じつさい「實際」(副) 2 實際
 八21 1 図 「いや、見たことがない。
 白い雀が實際居るのか。」
- 十一67 7 図 其の内寢食・談話・遊戲
 ・病氣等の爲に費す時間は三分の二
 を占め、實際修學及び業務に用ふる
 時間は(略)。
- しつ・す「叱」(サ変) 2 叱す 「一シ」
 十二39 2 図 「余は秦王を其の朝に
 叱したるもの。何ぞ獨り廉將軍を恐
 れんや。」
- 十二95 8 図 此の會に於ける孔子の行
 動は蘭相如が秦王を叱したるとは異
 なり、相如は氣を以て人を服せりと
 いへども、(略)。
- じっせん「十銭」(名) 1 十銭

九〇図 十銭

じっせんいじょう「十銭以上」(名) 2

拾銭以上

九七六図 郵便貯金ニテハ一度ノ預ケ

高一人拾銭以上ナリ。

九七六図 一度ニ拾銭以上ノ貯金ヲナ

スコト能ハザル者ノ爲ニハ、郵便切

手ニヨリテ貯金スル便利ナル方法ア

リ。

じっせんぎんか「十銭銀貨」(名) 1

十せん銀貨

六三〇 一本三せんづつのを二本買つ

て、十せん銀貨を出したから、(略)。

しっそ「質素」(名) 4 質素

十二一四二図 一には、軍人は質素を旨

とすべし。

十二一四二図 質素を旨とせざればいつ

しか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、

心も無下に賤しくなりて、節操も武

勇も忘れ果てて、(略)。

十二一四八図 以上の五箇條即ち忠節・

禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を

特に軍人の精神と論し給へる上に、

(略)。

十二一四七図 平常質素を旨とすべきは

修身・處世の上に於て何人にも最も

大切なこと言を待たず。

しっそ「質素」(形状) 1 質素

八六七図 その他には何の御かざりも

なき質素なる御かまへ、かへつてか

しこく、かたじけなし。

しっそけんこ「質素堅固」(名) 1 質

素堅固

十二三六四図 本校舎ノ建築ハ質素堅固

ヲ主トシ、外觀美ナラザレドモ、通

風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ

得、(略)。

じったん「十反」(名) 1 十反

九一二〇図 (略) 老人向きの紺がす

り上物十反だけ御見立の上、(略)御

送り相成度願上候。

じっち「実地」(名) 1 實地

十九〇八図 同學士は御承知の通り、

多年府縣の技師をも務め、學理にも

通じ、實地にも明かなる人に候へば、

(略)。

じっちけんぶんいたす「実地見聞」

(四) 1 實地見聞致「(一)シ」

十一三六二図 當總督府の經營も着着

其の効を見るに至り候事、かねて御

承知の通りに候處、いよく實地見

聞致候へば、聞きしにまさる進歩に

驚入候。

じつと(副) 1 じつと

六五六 謙信は勝氣な人で、いよいよ

いくさがはげしくなると、じつとし

ては居られない。

じつとう「十頭」(名) 1 十頭

十一二九一図 重砲車の如きは十頭の馬

をして引かしむ。

しつない「室内」(名) 4 室内

九六〇八図 閉ぢたる室内にはよごれた

る空氣こもる。

九六二四図 室内にのみ居て、外出する

こと少き人の、色青ざめて元氣なき

は、日光に浴せざるが爲なり。

十一一〇七 床下に土石を盛り、數條の

みぞを造つて、一方の口から火をた

いて室内を温める。

十一一〇六 婦人は室内に引込んでゐ

て、來客に會ふことも、外出するこ

とも少い。

じつに「実」(副) 16 じつに 實ニ

實ニ

五七四四図 「ジブンノ角ハジツニリツ

バナ物ダ。

八二九四図 三郎さんは實にかはいらし

く寫りました。

八四四 火は實に恐ろしいものだ。

九八七一図 愛作さんは實に見上げたも

のです。

十六七 捕鯨は實に勇壯なものである。

十七三 温泉の多きこと實に世界第

一なり。

十二二八四 國運發展の速なること實

に驚くにたへたり。

十一四六七 アラビヤ馬の長途の騎行

にたへることは實に驚くべき程で、

(略)。

十一八〇九 此の間に鵜を引上げて吞

みたる魚を吐かせ、(略)、又かゞり

火に薪を添ふるなど、其の手練實に

驚くべし。

十一九九五 春夏の交産卵の爲、

鯨の群をなして海岸近く寄來る時は

(略)、撫綱にてすくひ取るを得る程

にて、實に壯快なるものに御座候。

十二三三九 (略)、今や全國就學兒童

ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、本

郡ノ如キハ實ニ百分ノ九十九ノ好成

績ヲ示セリ。

十二四〇六 其の噴火口の大きさは日

本第一たるのみならず、亦實に世界

第一と稱せらる。

十二四六六 家畜の飼養に至りては、

更に之を盛にし、(略)等を供給せ

んこと、實に今日の急務なり。

十二五二九 米國商人ガ(略)廣告ニ

費ス金額ハ、一箇年實ニ十二億圓ノ

多キニ達ストイフ。

十二五九八 倫敦は(略)。歐羅巴第

一の大都會にして、亦實に世界第

一の大都會なり。

十二一〇二 此の精神は實に自治制の

根本にして、又其の生命なり。

じつは「実」(副) 1 實ハ

九一〇 (略) ナドハ一リン咲ノ様ニ

見エルガ、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タ

クサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキ

ルノデアル。

しつぱい「失敗」(名) 2 失敗

十四二八 (略)、先ツ之ヲ織ル機械ノ

製作ニ工夫ヲコラセシガ、失敗ノ上

ニ失敗ヲ重ネテ、(略)。

十四二九 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重

ネテ、(略)。

じつぶつだい「実物大」(名) 1 實物大

十二一二四 設計圖ガ出來上ルト、(略)。

必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、
始メテ製造ニ着手スルノデアル。

じっぶん【十分】(名) 1 十分

十一709 例へば六十人の集會に其
の中の一人若し十分を後るとせば、
(略)。

じっぺん【十通】(名) 1 十ペン

一496 サア、タケヲサンカラオ
トビナサイ。一ペン(略)九ヘン
十ペン。

しつぼう【失望】(名) 1 失望

十二782 陸地の片影だにみ
とめ難く、朝の風を聞きては鳥の聲
かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影か
と疑へるも、幾度なるを知らず。船
員は失望の餘り、コロンブスを海に
投じて歸國せんと謀るに至れり。

しつぼう【七宝】(名) 1 七寶

十二499 世界無比なる七寶の
名は海外にぞるけり、(略)。

じつよう【實用】(名) 2 實用

十一911 例へばこゝに一種の石あ
り、極めてまれにして隨意に得られ
ざるものなりとも、飾にも實用にも
ならざるものならば、之を買ふもの
なく、(略)。

十二366 本校舎ノ建築ハ質素堅固
ヲ主トシ、(略)、専ラ教授ノ便ヲ計
リ、實用ニ重キヲ置キ、(略)。

じつれい【実例】(名) 1 實例

十二323 形名の妻、(略)。(略)。
保の母は(略)。(略)。是等の人々

は皆(略)、能く其の處すべき道に
處したる我が國婦人の實例にして、
(略)。

して(接助)182 シテ して として・
にして・をして

六544 塩ト砂糖トハ物ノ味ヲ附ク
ルニ大切ナルモノニシテ、コノ二ツ
ノ物ナクレバ、物ノ味ハウマカラズ。

六674 モットモ多ク用フルモノハ
松ト杉トニシテ、上品ナルハヒノキ、
カタキハ栗ナリ。

六682 栗ハカタクシテ、ナガクク
サラザレバ、(略)。

六684 桐ハヤハラカクシテ弱キ木
ナレバ、(略)。

六686 桐ハ(略)、輕クシテ美シ
ケレバ、(略)。

六693 材木ヲ用ヒテ家ヲツルモ
ノハダイクニシテ、ツクエ・本箱・
タンスナドヲ作ルモノハサシモノシ
ナリ。

七12 楠木正行ハ正成ノ子ニシ
テ、父ニオトヲ忠義ノ士ナリ。

七14 正成ノ戦死セシハ正行ガ十
一歳ノ時ニシテ、ソノ折アトトモニ
戰場ニ出デントセシガ、(略)。

七21 コノ度ノ戦、敵ハ大ゼイ
ニシテ、味方ハ小ゼイナリ。

七42 父ノ汝ヲカヘシタマヒシ
ハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナ
シミタマヒテニアラス。

七88 コレ正成戦死ノ後十三年目

ニシテ、正行ガ二十三歳ノ時ナリキ。
七91 正行ノ如キハマコトニ忠孝
ニツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、
國民ノ手本トイフベシ。

七22 シカルニ目ハ見エズシテ、
大學者トナリシ人アリ、(略)。

七34 茶わん・土びん・皿・はち
などはやき物にして、ぜん・わん・
ぼん・重箱などはぬり物ナリ。

七58 コノ公園ハ新シクシテ、古
木多カラザレド、(略)。

七60 あるものは頭大きくまろく
して、しゝの如く、(略)。

七61 すべて犬は人になれ易く、
かしこくして、よく主人の命を守る。

七618 犬は耳ざとき動物にして、
眠れる時も人の足音を聞けば、たゞ
ちに目をさます。

八29 神殿は昔ながらの白木造に
して、二十年ごとに新しく造らせた
まふ御定なりと承る。

八46 五十鈴川は流早くして、水
清らかなり。

八48 今日ニテハ其ノ製造ハナハ
ダ盛ニシテ、外國へ輸出スルモノノ
ミニテモ、一年間一千萬圓ノ金高ニ
達シ、(略)。

八52 (略)、三韓ノ表文ヲ讀ム
ニ、手ワナ・キ聲フルフ。入鹿アヤ
シミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、「御前
近ウシテ。」ト答フ。

八71 (略)、新しき血出來ずし

て、諸君は皆却つて自ら苦しむにい
たれり。

八73 足モマタ太クシテ、力強シ。

八74 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル
爪アリ。

八748 虎モ猫モ(略)、歩ム時音
ヲ立テズシテ、シツカニ他獸ニ近ヨ
リ、急ニ飛ビツキテ之ヲ捕フ。

八76 農業・工業・商業共に盛に
して、國甚だ富めり。

八77 イギリスは我が日本帝國の
如き島國にして、商業・工業いづれ
も盛に、海軍強く、商船多し。

八78 ロシヤはヨーロッパ大陸の
東部にひろがれる國にして、其の領
地甚だ廣く、(略)。

八80 これ世界の圓きがためにし
て、若し平たき物ならば、行けば行
く程出發點に遠ざかるべきはずな
らず。

八808 地球の表面の凡そ三分の二
は海にして、三分の一は陸なり。

八81 北極・南極に近き地方にて
は、半年は晝にして、半年は夜なる
所あり。

八819 かゝる地方にては氣候つね
に寒冷にして、美しき花木を見るこ
と能はず。

八82 又世界の中には、年中夏の
氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を
知らざる國あり。

八827 かゝる地方にては、人は皆

はだかにして、布片を身體の一部に
まどふに過ぎず。

八93 名古屋城は（略）、徳川家
康が諸大名に課して造らしめたる名
城にして、其の天守閣は加藤清正の
きづきしものなり。

九14 利根川ハ日本東部ノ大川ニ
シテ、全長凡ソ七十三里、古ヨリ坂
東太郎ノ名アリ。

九16 コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運
河ハ、（略）ニ通ズル汽船ノ通路ニ
シテ、水運ノ便少カラズ。

九24 歩兵は戦争の主力にして、
其の數最も多し。

九24 騎兵は進退敏活にして、多
くは友軍の前方に出でて敵狀をさぐ
る。

九25 歩兵・（略）輜重兵は何れ
も戦争に必要にして、其の任務には
輕重の別あることなし。

九26 上下の別明かにして、何れ
も上官の命令を守るは諸子の能く知
る所なるべし。

九28 此ノ神社ノ建テラレタルハ
明治二年ニシテ、社殿ハ上古ノ風ヲ
ウツシテ造リ、（略）。

九29 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、
（略）大砲ヲ集メテ造リタルモノニ
シテ、日本第一ノ金ノ大鳥居ナリ。

九41 此ノスリバチノソコニア
タレル所ハ大ナル噴火口ニシテ、ソ
レヨリ噴出シタル物ノ四方ニナダレ

テ、冷エカタマリタルガ、今ノ箱根
山ヲ成セルナリ。

九42 （略）ノ間ニ水ノタマリタ
ルモノハ蘆湖ニシテ、湖水ノアフ
レテ流ル、モノハ即チ早川ナリ。

九53 田ニスムカヘルハ土色ニシ
テ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ綠色
ナリ。

九53 （略）、日暮ヨリ出デテ飛ブ
カウモリハ暗黒色ニシテ、海ノソコ
ノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類
ハ、其ノ體ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。

九57 是等ハ多クハ（略）武器又
ハ（略）惡味・惡臭ヲ有スルモノニ
シテ、他ノ動物ハ（略）、之ニ近ヅ
クコトナキガ故ニ、（略）。

九59 常に無病にして、醫者にか
ゝりたることなき人あり、（略）。

九65 臺所にて火吹竹を使ふも、
かち屋にてふいごを用ふるも、皆空
氣を送りて、火の勢を盛ならしむる
爲にして、火消つばの火の消ゆるは
空氣の供給絶ゆるが爲なり。

九89 是金銀ハ（略）、又分合ス
ルコトモタヤスクシテ、分合ノ爲ニ
直段ノ割合ヲ變ズルコトナク、（略）、
貨幣トスルニ最も便利ナレバナリ。

九89 是金銀ハ（略）、産地異ナ
リトモ、成分ニ異同ナクシテ、直段
ノ變動モ少キ等、貨幣トスルニ最も
便利ナレバナリ。

九90 紙幣ハ貨幣ノ代用トナルモ
ノニシテ、輕クシテ取扱ニ都合ヨキ
コトハ貨幣ニマサレリ。

九90 紙幣ハ（略）、輕クシテ取扱
ニ都合ヨキコトハ貨幣ニマサレリ。

九91 我が國ノ紙幣ハ日本銀行ヨ
リ發行スルモノニシテ、一圓・五圓
・十圓・百圓ノ四種流通ス。

九93 是即チ有名なる神橋にし
て、「日光の結構。」こゝに始る。

十14 其の高さは一萬三千七十餘
尺にして、富士山より高きこと凡そ
一千尺なり。

十22 日本一の湖水は近江の琵琶
湖にして、周回六十里。

十37 其の工事の總費用は百九十
萬圓餘にして、一里の長さだけ十圓
金貨を並べたるに等しいといふ。

十23 大イニ怒リテ、（略）。「ト
イフニ、良ヤムヲ得ズシテ歸レリ。

十24 「汝長大ニシテ、劔ヲオ
ブトイヘドモ、心甚ダ弱シ。

十26 （略）御入營の上は、品
行方正、職務に忠實にして、隊中の
模範となられ度、（略）。

十30 原産地ハアメリカニシテ、
アメリカヨリルソンニ傳ハリ、ルソ
ンヨリ支那ニ入リシガ、（略）。

十31 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハ
リシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、内
地ヘノ渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナ
リ。

リシヲ以テ、數年ナラズシテ石見一
國ニヒロガリ、（略）。

十41 蘭ハ水草ナリ。葉ナクシテ
唯莖アリ。

十41 莖ハ圓クシテ、長サ五尺バ
カリ、短キハ二尺位ナルモアリ。

十42 花筵ヲ最も多ク産スルハ
（略）等ノ諸縣ニシテ、其ノ織方ヲ
發明シタルハ（略）トイフ人ナリ。

十43 第一圖は縦の線のみを用
ひ、（略）、第三圖は斜の線のみを用
ひたるものにして、第四圖は縦・横
兩様の線を用ひ、（略）、第六圖は縦
・斜兩様の線を用ひ、（略）。

十48 色の原色は赤・青・黄にし
て、之を種々に配合すれば、種々の
色を生ず。

十72 我が國は火山國にして、全
國到處に温泉あり。

十73 湯のわき出づる口僅かに一
箇所にして、其の分量も少く、（略）。

十73 道後に次ぎて早く世に知ら
れたるは有馬の温泉にして、京都・
大阪に近ければ、浴客多く集り、す
こぶる繁榮せり。

十74 伊香保も亦古くより知られ
たる温泉にして、榛名山のふもとに
あり。

十74 湯元は一箇所にして、之を
戸毎の浴室に引けり。

十75 此の地も亦夏甚だ涼しくし
て、暑をさくるによろしければ、夏

時浴客あふるゝばかりなり。

十75⑤ 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、其ノ上ニ頭ヲイタダキ、左右ノ手ハ肩ヨリ分レ、二本ノ足ハ全身ヲ支フ。

十76⑧ 腦ハ精神ノ宿ル所ニシテ、全身ヲ支配ス。

十79② 身體ノ健全ナルトキハ精神モ亦常ニ快活ニシテ、何事ヲ爲シテモ良キ結果ヲ見ルナルベシ。

十94⑤ 此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニシテ藤原不比等ノ建立セシトコロ、(略)。

十96⑨ 東大寺ハ聖武天皇ノ建立ニシテ、タビニ大佛ノ大キサノ驚クベキノミナラズ、(略)、眞ニ世界第一ノ木造建築物トス。

十97② 帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。

十97⑤ 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ跡ニシテ、今ハオホムネ田畠トナレリ。

十98② 此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、千二百餘年ヲ經タル古堂ノ中ニハ當時ノ佛像今尚存ス。

十100③ 其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、神功皇后以後、シバく皇居ヲ定メ給ヒシトコロ。

十100⑦ (略) 談山神社ニ達ス。社殿壯麗ニシテ、關西日光ノ稱アリ。

十101④ (略) 安居院ハ古ノ飛鳥寺

ノ跡ニシテ、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。

十101⑨ 敵傍山・香具山・耳無山ノ三山、イヅレモ麗シキ山ニシテ、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。

十102⑨ 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、昔ナガラノ山河、一木・一草盡ク上古ヲ談ゼザルナシ。

十115⑧ 雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、雄蜂は二三百匹、餘は皆働蜂なり。

十117③ 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、何等の労働をもなさざるを以て、(略)。

十118④ されば氣候不順にして、花のとほしき時は蜂合戰の起ること珍しからず。

十118⑥ 働蜂の武器は體の後方にある鋭利なる針にして、攻撃にも防禦にも常に之を用ふ。

十118⑤ 一鳥未だ去らざるに、一鳥更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十118⑨ (略)、夏は山海皆綠にして目覺むるばかりあざやかなり。

十125⑤ 我が國に最も普通なるは荷車・人力車等にして、荷車には人の引くあり、牛馬に引かしむるあり。

十128③ かくの如くにして、汽車

・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

十130④ 又嚴島・(略)等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ヅケタルモノニシテ、鹿島・香取ハ(略)神宮ノ名ナリ。

十131⑨ 戰艦ハ軍艦中最モ優勢ナルモノニシテ、其ノ名ノ如ク堂々敵ト決戦スルヲ目的トス。

十132③ 巡洋艦ハ軍艦中最モ任務ノ多キモノニシテ、戰艦ト共ニ敵ニ當リ、或ハ(略)撃沈・捕獲ス。

十134⑤ 驅逐艦ハ艦體最モ輕ク、速度最モ大ニシテ、敵艦ニ近ヅキ、(略)スルヲ目的トス。

十152③ 身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。

十152⑧ 公明正大ニシテ、心中一點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。

十153⑤ 己ヒトリ樂シトテ、他人ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ人ナリ。

十168① 身を立て、父母をあらはすも、(略)、將又無爲にして一生を終ふるも、(略)。

十168④ 二十歳の短命にして美名を萬世にとゞむる者あり。

十169⑨ 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

十170② 思ひても返らぬことをよくよくと心配するは、未練にして愚

なる人のする事なり。

十173④ 筆勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。

十173⑥ (略) 夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかんなどひとり言いひ居たり。

十175⑩ 最も壯觀なるは華嚴にして、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

十176⑨ 最も大なるは第一の瀑布にして、高さ八十餘丈と稱す。

十177④ 美しき瀧にして、眞に白布をさらせるが如し。

十177⑤ 市民遊覽の地にして、又神戸市水道の源たり。

十182⑤ (略)、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふことを得るなり。

十182⑦ 鵜はくゞり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、(略)。

十183⑥ 我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。

十184② (略)、其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

十187③ (略)、細大意ノマ、ニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。

十190⑩ (略)、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、(略)。

十一917 図 是飲料水とほしくして、意のまゝに之を得ること能はざればなり。

十一965 図 併し夏は氣候温和にして、至つて凌ぎよく候。

十一973 図 其の南部は車馬の往來自在にして、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、(略)。

十一982 図 (略)の間は最も狭く、且山脈低くして、東西の交通最も便利なる所に御座候。

十一1003 図 森林は(略)廣大なる天然林にして、樺松・(略)等一面に生ひ茂り、(略)。

十一1023 図 劉備ハ漢朝ノ末流、英明ニシテ大志アリ。

十一1049 図 孔明ハ沈着ニシテ、機ニ臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。

十一1057 図 孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規律ヲ重ンジタリ。

十一1126 図 されば全村頗るゆたかにして、皆其の家業を樂しめり。

十一112 図 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、(略)。

十二14 図 教育勅語と戊申詔書とは、(略)の道を示し給へるものにして、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。

十二510 図 「(略)」との信號旗が戦關旗と共に我が艦三笠にかゝげら

れたるは午後一時三十分にして、東郷司令長官は(略)、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。

十二108 図 (略)前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ。

十二279 図 (略)若し向ひの山にのろしのがるを見れば、幸にして城を出でたりと知れ。

十二323 図 是等の人々は(略)、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、其の志操の固きは男子にも勝れり。

十二376 図 會津は奥羽重要な地にして、一日も守なかるべからず。

十二415 図 中岳は現今活動せる部分にして、其の火口は直徑六百メートルの圓形をなし、深さ百二十五メートルあり。

十二423 図 阿蘇山は此の如く複雑なる一大火山にして、山中に多くの噴火口及び温泉あり。

十二425 図 火山全體の占むる面積は百十三平方里にして、東西十二里九町、南北十一里半に達せり。

十二446 図 (略)、米の作付反別は(略)、其の收穫は年々凡そ四千六七百萬石にして、麥の作付反別は(略)、其の收穫は年々(略)なり。

十二448 図 我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

十二455 図 (略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、(略)。

十二4610 図 農業は我等が生活に必要な材料を作り出す所以にして、國家一日もこれなかるべからず。

十二473 図 「農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。」

十二507 図 東西ノ交通盛ニシテ千里比隣ノ如キ今日ニ於テハ(略)。

十二510 図 (略)、世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、全世界ノ人ハ皆我が商賣ノ花客ナリ。

十二5110 図 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマスカレズ。

十二535 図 (略)富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。

十二539 図 我が國ハ島國ニシテ、海外交通ノ便最モ多ク、(略)。

十二5410 図 (略)、遼陽あり。滿洲内地屈指の市場にして、我が駐劄軍の重要な駐劄地なり。

十二553 図 (略)首山堡は(略)、遼陽防備の要害地にして、明治三十七八年戰役激戰地の一なり。

十二561 図 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、大連よりこゝに至る四百三十六哩。

十二583 図 此の鐵道は日露戰役中に

急設したる輕便鐵道にして、明治四十二年よりこれが改築に着手せり。

十二596 図 (略)、之に架したる橋は何れも壯大にして、市の美觀を添ふ。

十二598 図 倫敦は(略)。歐羅巴第一の大都會にして、亦實に世界第一の大都會なり。

十二6010 図 (略)、人家も多きは六七層にして、町幅も亦之に適へり。

十二626 図 倫敦は(略)、古き都市にして街路狭ければ、古風の乗合馬車を以て主なる交通機關とす。

十二635 図 電車の便の最も開けたるは柏林にして、市街の隅々通ぜざる處なく、(略)。

十二636 図 (略)、車内亦清潔にして乗心地甚だ好し。

十二642 図 英國は國會の最も早く開けたる國にして、(略)國會議事堂は第一に觀客の目を引く建築物なり。

十二692 図 (略)、温暖なる地方に移らんと欲するもの期せずして相集り、次第に其の數を加ふ。

十二701 図 (略)、向ふ處何物をもはさからずして突進す。

十二726 図 不義にして富み且貴きは、我に於て浮雲の如し。

十二7210 図 (略)、成功は期せずして到る。

十二738 図 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして、彼をして其の志を成さしめたる

は西班牙の皇后イサベラなりき。

十二73 〇 當時伊太利は貿易の中心地にして、(略)は盛にベニス・ゼノア等の港を経て歐洲へ輸入せり。

十二77 〇 遠征の船は三隻の小艦にして、乗組總數は一百二十人。

十二80 〇 コロンブスの遠征時代は我が國後土御門天皇の御代にして、北條早雲が小田原城に據りて、(略)せる頃なりき。

十二90 〇 衛生上の注意を怠らずして、何人も病にかされぬ様にすべし。

十二93 〇 孔子は年少にして禮を好み。

十二96 〇 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母たましく機上に在り。

十二101 〇 (略)が如きは、却つて我が國民の度量の狭く、品格の低きを示す所以にして、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐること多し。

十二101 〇 (略)、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

十二102 〇 此の精神は實に自治制の根本にして、又其の生命なり。

十二105 〇 (略)が如きは、皆公共心の發動にして、(略)、地方人民たる者は大いに力を是等の事業に盡すべきなり。

十二113 〇 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、真正の軍人にあらず。

十二115 〇 (略)、我が國民の世界に無比なる美德にして、古來の歴史上の事蹟は十分に之を證明せり。

十二115 〇 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

十二115 〇 (略)、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

十二116 〇 信義は人と交り世に處するに於て最も大切な事にして、商工業の人としても常に之を重んぜざるべからず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 〇 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、軍人として始めて守るべき事に非ず。

ス。シテ見レバ銅ホド役ニ立ツモノハアリマスマイ。

じてんしゃ「自転車」(名) 1 自転車

十二25 〇 自転車の兩輪が前後に並べるも亦様變れり。

じどう「児童」(名) 2 児童 〇がくれいじどう・しゅうがくじどう・ぜんこくしゅうがくじどう

十一113 〇 其の他の教員も(略)、職務に勉勵するが故に、児童は皆よく之になつて、學校を思ふ心厚く(略)。

十二86 〇 四十七士の事蹟は児童・走卒も之を知らざるはなく、(略)。

じどうしゃ「自動車」(名) 3 自動車

十一26 〇 都會の地には電車・自動車等も次第に多く行はれて、ひとへに速力を競ふ世とはなれり。

十一27 〇 自動車

十二63 〇 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、(略)。

じどう「自動」(サ変) 1 自動ス

十一83 〇 紡績工場ニ入りテ見ヨ。蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、(略)。

しな「支那」(地名) 15 支那 支那

支那

六51 〇 支那から大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、(略)。

六51 〇 支那から大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、(略)。

六51 〇 支那から大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、(略)。

六51 〇 支那から大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、(略)。

くを申しこんで來ましたが、(略)。

八78 〇 アジヤ大陸には印度・支那・韓國等あり。

九51 〇 (略)、支那の帽子はいたゞきに、結ぶ赤だまはいらし。

九89 〇 賣ル・買フ、(略)等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。

十30 〇 (略)、ルソンヨリ支那ニ入リシガ、(略)。

十30 〇 (略)、支那ヨリ琉球、琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ、(略)。

十一16 〇 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、(略)。

十一102 〇 支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。

十二38 〇 支那の昔趙といふ國に關相如といふ賢臣あり。

十二53 〇 我が國ハ(略)、殊ニ近クハ人口四億ヲ有スル支那ノ大國ニ隣ス。

十二75 〇 (略)、若し歐羅巴より西へ向つて進まば、印度に達する前、日本又は支那に到着するならんと。

十二93 〇 支那幾千年間の人物中、大聖として徳化の尚今日に著しきもの、孔子に如くはなし。

十二93 〇 孔子は凡そ二千四百六十年前、支那の春秋時代に生る。

十二93 〇 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひた

十二93 〇 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひた

十二93 〇 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひた

十二93 〇 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひた

十二93 〇 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひた

り。

しなえんがん「支那沿岸」(名) 1 支那沿岸

十一287図 今や(略)、又支那沿岸

はおろか、印度・南洋より亞米利加・歐羅巴の航路をも開くに至れり。

しながたふね「支那形船」(名) 1 支那形船

十一374図(略)、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。

しなじん「支那人」(名) 1 支那人

十869 隣國の支那人は最も多く豚肉を食ふ國民である。

しなちゅうおう「支那中央」(名) 1 支那中央

十一1044図 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、(略)。

しなの「信濃」(地名) 2 信濃

九17図 信濃 日本一の長流を信濃川とす。信濃の東南部より發し、(略)。

しなのがわ「信濃川」(地名) 1 信濃川

十二8図 日本一の長流を信濃川とす。

しなののくに「信濃国」(地名) 1 信濃の國

十504図(略) かく申すは信濃の國の住人、手塚太郎光盛なり。

しなのまる「信濃丸」(名) 1 信濃丸

十二54図(略)、哨艦信濃丸は「敵艦見ゆ。」と報告す。

しなもの「品物」(名) 13 品物

四448図(略)、ふだん品物をやりとりする時には、なまぐさのしるしにのしあはびをつけるやうになつたのでせう。

七127図 品物と引きかへに代金を受取るのが現金で、(略)。

七128図(略)、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけです。

七138図 小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。

七141図 卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、(略)。

七146図 間屋といふのは他人からのまれて、品物を賣つたり買つたりして、(略)。

七343(略)、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

七369 ドノ店ニモ品物がキレイニナラベタル。

七386 品物ハ皆正札附デ、カケ直ガナイ。

七534図 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しました

が、(略)。

十一910(略)、分業デスル方ガ品物ノ出來バエガ良クテ、(略)。

十一108 随ツテ良イ品物ガ出來テ、

製造高モ多クナル。

十一128(略)、今日デハドンナ品物ヲ製造スルニモ、分業法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。

しに ぐうえじにす・うちじにす・うちにする

しにかた「死方」(名) 1 死方

八927 橋中佐ハ(略)中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイクラモアルガ、軍神トイハレル程ニウヤマハレタノハ、(略)。

しにん「死人」(名) 3 死人

八303図(略)、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

八308図(略)、カノ死人ト見エシハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。

十一1099 死人を葬るのに、小高い所で南に面してゐる日當りのよい地を選ぶ。

しぬ「死」(五) 18 シヌ しぬ 死ヌ

死ぬ「一ナースーン」

三226 うごかずにあますが、しんだのではありません。

三421(略)、川の中へはいりましたが、がぶがぶと水をのんで、とうとうしんでしまひました。

三498 こひやふななどは水から出ると、しんでしまひます。

三726(略)、父モ母モシンデシマツテ、ジブンノウチモアリマセン、(略)。

四273 くさのかげにないてゐた虫も死んでしまつたのか、(略)。

四445図「人の死んだ時などのおめでたくない時には、なまぐさものをもちひないことがおほいのです。

四515 今ハ死ンデキマスガ、モトハ海ノ中デオヨイデキマシタ。

五491図 もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」

六232 すてておけば、すぐ死んでしまひます。

六593 それから信玄が死んだと聞いた時、(略)。

七335 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、(略)。

八342 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。

八901図 多數ノ部下ヲ死ナセタ上、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ殘念千萬ダ。」

十851 馬も(略)。死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。

十一567 おくれゝば「ピエール」はこゝえて死ぬであらう。

十一578図 我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。

十一582図 早くしないと、ピエール

が死んでしまふ。」

十二228 金魚を細口のびんに入れて、二三日も水を取換へないと、金魚は死んでしまふ。

しぬ「死」(ナ変)5 死ヌ 死ぬ

「ナ・ニーヌル」

七26 図 我ガ死ニタル後モ、一門ノ

者一人ニテモ生キ残リテアル間ハ、
(略)、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七42 図 父ノ汝ヲカヘシタマヒシ

ハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナ
シミタマヒテニアラズ。

七69 図 モシ病ニカ、リテ早ク死

ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナ
リ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベ
シ。

十一456 図 (略)、「今は自ら死ぬ
るより外なし。」とて、刀を取直し

て腹かき切らんとす。

十二116 図 (略)、大君の邊にこそ

死なめ、顧みはせじ。

じねずみ「地鼠」(名)1 地鼠

十二689 図 (略)露西亞及びシペリ

ヤの寒き平地に住せるレミングと稱
する地鼠の一種なり。

しのがた「篠形」(名)1 篠形

十一855 図 此ノ流ハ自ラ集メラレ

テ、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中
ニ入ル。

しのぎよし「凌良」(形)1 凌ぎよし

「一ク」

十一966 図 併し夏は氣候温和にし

て、至つて凌ぎよく候。

しのぐ「凌」(四)2 しのぐ「一ギ・
一グ」

十一154 図 (略)、道も無き山の雲を

しのぎて杉坂に着きたりしに、(略)。

十二697 図 しかも僅かに飢をしのぐ

は先頭に進める一部に過ぎず、(略)。

しのびいる「忍入」(四)1 しのび入

る「一リ」

十一158 図 高德(略)、行在所の御

庭にしのび入り、(略)、大文字に詩
の句を書きつけたり。

しのぶ「忍」(四)3 シノブ 忍ぶ

「一ビ・一ブ」

十261 図 良や老人ノ無禮ヲトガメ

ズ、信や少年ノ笑罵ニ怒ラズ、其ノ
初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立

ツルニ至リシ所以ナリ。

十二708 図 永遠の幸福を望む者は一

時の勞苦を忍ぶべし。

十二858 図 赤穂浪士が數年の苦難を

忍び、遂に主君の仇を報じて、(略)。

しのぶ「偲」(四)2 シノブ しのぶ

「一バ・一ビ」

十一312 図 驅逐艦ノ名コソ更ニ優美

ナレ。風ノ名ヲ負ヘルモノニ(略)。
雨ニハ(略)、雪ニハ(略)。季節ノ

名ニハ(略)。雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ

物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯

ナル有様モオモヒ見ルベク、又優ニ

ヤサシキ武人ノ風流モシノバル。

十二254 図 若宮堂の舞の袖、しづ

のをだまきくりかへし かへせし人
をしのびつゝ。

しはい ぐごしはい

しはいす「支配」(サ変)1 支配ス

「一ス」

十768 図 腦ハ精神ノ宿ル所ニシテ、

全身ヲ支配ス。

しばかり「柴刈」(名)1 シバカリ

一374 オデイサンハヤマヘシバ

カリニ、オバアサンハカハヘ

センタクニ。

しばこうえん「芝公園」(名)1 芝公園

七594 図 明日ハ芝公園ヲ見テ、ソレ

ヨリ四十七士ノ墓ニマウデントス。

しばし「暫」(副)2 シバシ

八531 図 他ノ二人ハ(略)、恐レテ

出デズ。今シバシタメラハバ事アラ

ハレントス。

十254 図 韓信シバシ其ノ面ヲウチマ

モリシガ、ヤガテハラバヒテ勝ノ下

ヲクグル。

しばしば「屢」(副)4 シバく し

ばく

九591 図 しばく入浴し、身體を清

潔にすべし。

九615 図 (略)、夜具・衣服の類はし

ばく日光にかわがすべし。

九625 図 (略)、其の後も度々叛き

て、征東將軍をつかはされし事しば

くなりき。

十1003 図 其ノ附近ノ地ハ(略)、神

功皇后以後、シバく皇居ヲ定メ給

ヒシトコロ。

しばちゅうたつ「司馬仲達」(人名)1

司馬仲達

十一1062 図 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒

ス。(略)。魏將司馬仲達聞キテ之ヲ

追フ。

しばらく「暫」(副)16 シバラク し

ばらく

三491 又さかさまになつて、下

へもぐつて、しばらくたつと、

(略)、水の上へ出てきます。

四815 しばらく目をつぶつて、

神さまにいのつてから、目を

ひらいて見ると、(略)。

五95 一思ひにとび下りると、何だ

か目がまはつて、しばらくの間は何

も知らずにゐました。

五257 役人はしばらく考へてゐまし

たが、そのうちにゐざりにむかつて、

(略)。

五484 しばらくたつて、顔を上げ

て、そのあたりを見まはすと、(略)。

五541 シバラクタツト、ケモノガ負

ケサウニナツタノデ、(略)。

五656 おちよはしばらく考へて、葉

書の裏へ次のやうに書きました。

六96 まづ御社にさんけいして、し

ばらくそこで休みました。

八126 図 おはなさんはしばらく見な

いうちに、髪が大そうきれいになり

ました。

八182 図 (略)、總ベテ物ハ破レタ

ル所ノミツクロヒテ用フルトキハ、シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若キ者ニ知ラセントテカクスルナリ。」
 九19 8 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、(略)。
 十24 2 図 (略)、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、シバラクアリテ、カノ老人來レリ。
 十一47 7 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、(略)。
 十一55 9 (略) 水の音が遠く聞えるばかり。しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。
 十二28 6 図 黒き影は(略)身を水中に投入れたり。繩の鈴はしきりに鳴る。敵の衛兵相呼んで尋ねんとするに、(略)。しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。
 十二84 2 やゝあつて紳士はしばらく弾く手を止めると、(略)。
 しばる「縛」(四・五) 4 シバルしばる「ラー・リール」
 二65 6 「コレハニセモノダ。(略)。」ト、ワルイオダイサンハトウトウシバラレテシマヒマシタ。
 五27 3 釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」といつて、下役どもに言ひつけて、しばらくしました。
 七48 2 図 日本紙ハコヨリニシテ物ヲシバルコトガ出來ル。
 十一81 4 図 鵜の首元は細なはにてし

ばりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、(略)。
 しはんがっこう「師範学校」(名) 1 師範學校
 十94 10 図 縣廳・裁判所・師範學校・高等女學校等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境内ニ在リ。
 しはんがっこうもんない「師範学校門内」(名) 1 師範學校門内
 十95 2 図 師範學校門内ノ八重櫻一株、(略)奈良櫻ノ名殘ヲトメタリ。
 しひき「四匹」(名) 2 四ヒキ
 一42 3 ヒゴヒガ一ヒキニヒキ三ビキ 四ヒキ、四ヒキキマス。
 一42 4 ヒゴヒガ(略)、四ヒキキマス。
 しひやくさんじゅうろくマイル(名) 1 四百三十六哩
 十二56 2 図 長春は(略)、大連よりここに至る四百三十六哩。
 しひやくねんいぜん「四百年以前」(名) 1 四百年以前
 十二73 6 図 四百年以前までは東半球の人は全く西半球を知らざりき。
 しひやくはちじゅうまん「四百八十万」(名) 1 四百八十万
 十二59 7 図 倫敦は人口四百八十万、接續都會を合すれば七百三十萬の多きに達す。
 しぶかき「洪柿」(名) 1 シブカキ
 四11 3 今一本ノ木ハシブカキ

デスカラ、サハサナケレバタベラレマセン。
 しぶき「飛沫」(名) 2 シブキ しぶき
 七92 3 図 ボートハ水ニオツル砲丸ノシブキニ包マレタリ。
 十一78 7 図 (略)、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。
 じぶん「自分」(名) 16 ジブン じぶん 自分
 三72 7 ウチヘカヘツテ見ルト、オドロキマシタ、(略)、ジブンノウチモアリマセン、(略)。
 四68 7 図 「イエエ、オクスリハジブンデノマナケレバ、何ニモナリマセン。」
 五71 1 フト水ニウツツタジブンノスガタヲ見テ、(略)。
 六44 5 じぶんの心では武士になりましたと思つてゐたのです。
 六59 2 謙信はそれを聞いて、(略)、じぶんの國から塩を送らせた。
 七88 3 図 たとへば自分のうちを恐ろしがる様なもので、こんなことではどうして海國の國民といはれませう。
 八15 7 人ノ幸福ハ皆自分ノ働デ産ミ出ス外ハナイ。
 八22 9 歸つて見ると、自分の家は戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。
 八26 3 (略)、下男や下女は早くから畑へ出して働かせ、自分はどうかし

て白雀を見つけようと、たづねまはりました。
 八90 7 軍曹ハ自分ノ重傷ヲモウチ忘レテ、アランカギリノ力ヲツクシタガ、(略)。
 八91 1 コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ、(略)。
 九22 9 図 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。
 十36 9 図 (略)、少しも人に先んじようとはせず、靜かに自分の順番を待つてゐました。
 十一48 1 (略)、大將の部下の二三人は直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。
 十一50 3 (略)、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいがる。
 十二83 1 老人は、(略)、どうして又自分の弾く時にはあんな音が出ないのかと思議さうに、パイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。
 じぶん「時分」(名) 13 ジブン じぶん 時分
 四12 5 コノゴロハクリノオチルジブンデ、(略)。
 四37 6 (略) 麥ワラデ作ツタ物デ、アツイジブンニツカフ物ガアリマス。
 四66 5 (略)、うめの花のさくじぶんから、あんなうつくしいこゑでなきはじめます。

五三三 茶ハシンメノ出ルジブンニ、
ソノデータノ葉ヲツムノデス。
六四四 のぼりついたじぶんには足も
だいぶくたびれて、はらもすつかり
すぎました。
六四四 ガンハツバメノカヘルジブン
ニ來テ、ツバメノ來ルジブンニカヘ
ル。
六四五 ガンハツバメノカヘルジブン
ニ來テ、ツバメノ來ルジブンニカヘ
ル。
七三〇 小さい時分はやはらかな葉を
こまかく切つてやるが、(略)。
八二九 此の寫眞で見ると、おかあ
さんの小さい時分にそっくりです。
八三四 (略)、去年の暮に死んでしま
つた。其の時分までよそへ奉公に行
つて居つた若いむすこが、(略)。
九三九 (略)、酒を飲んでよひふし
たり。尊時分はよしと、おびさせ給
へる劔を抜きて、ずたずたに大蛇を
斬り給ひしに、(略)。
一〇六五 寒イ時ハ(略) アブラ氣ノ
多イ食物ガ適當デアルガ、暑イ時分
ハ其ノ必要ナク、(略)。
一一一三 暑イ時分汽車に乗つて朝鮮
を旅行すると、どここの山陰にも白い
着物が乾してある。
じぶん「自分」(代名)五 ジブン 自分
三二四「日本中ニハ(略)、ジブ
ンノアヒテニナルモノハ一
人モナイ。」

五七四「ジブンノ角ハジツニリツ
バナ物ダ。
八三三「自分は今こそこんな小刀
や釘などを造つてゐるが、(略)。
一〇五六 此の時「自分が行かう。」
とさげふ人を誰かと見れば、(略)。
一一五八 (略)、早く自分を谷へ下
せ。
じぶんこれつ「四分五裂」(名) 一 四
分五裂
一二七 (略) 敵艦にせまり、無
二無三に攻撃せしかば、敵艦隊は四
分五裂の有様となれり。
しへい「紙幣」(名) 三 紙幣
九〇六 銀貨・銅貨ハ廣ク用ヒラル
レドモ、金貨ハ日常流通スルコト少
シ。是金貨ニ代ル紙幣ノ行ハル、ニ
ヨル。
九〇八 紙幣ハ貨幣ノ代用ナルモ
ノニシテ、輕クシテ取扱ニ都合ヨキ
コトハ貨幣ニマサレリ。
九一〇 我が國ノ紙幣ハ日本銀行ヨ
リ發行スルモノニシテ、一圓・五圓
・十圓・百圓ノ四種流通ス。
シベリヤ「地名」 二 シベリヤ ヲと
う
シベリヤ
八七九 ロシアは(略)、アジア大
陸のシベリヤもまた其の一部なり。
一二六八 (略) 露西亞及びシベリ
ヤの寒き平地に住せるレミングと稱
する地鼠の一種なり。
シベリヤてつどう(名) 二 シベリヤ鐵

道
八七九 ヨーロッパよりシベリヤ
鐵道にて東方へ向はば、二週間あま
りにして日本に歸着することを得べ
し。
一二五八 (略)、露西亞の東清鐵道
及びシベリヤ鐵道を利用せんか、大
連より僅かに二週間にして歐羅巴の
中央に入るべし。
しへん「四遍」(名) 一 四ヘン
一四九 サア、タケヲサンカラオト
ビナサイ。一ヘンニヘン三ヘン
四ヘン(略)。
しへん「詩篇」(名) 一 詩篇
九八六 去年の今夜清涼に待す。
秋思の詩篇ひとりらはわたをたつ。
じへん「事變」(名) 二 事變
一二三六 人世には思はぬ不幸、驚
くべき事變の何時起り來らずとも限
らず。
一二三六 (略)、如何なる事變に際
しても、自若として其の常を失はざ
るは日本女子の美德なり。
しほう「四方」(課名) 二 四方
三目 十六 四方
三二四 十六 四方
しほう「四方」(名) 一五 四方
三四五 東ト西ト南ト北ヲ四
方トイヒマス。
四一七 あたを雲の上に
出、四方の山を見おろして、か
みなりさまを下にきく、ふじ

は日本一の山。
六一二 わが日本は島國である。四方
は海にとりまかれてゐる。
八二八「我、此ノゴロ小サキ堂
ヲ建テタリ。四方ノカベニ繪ヲカキ
テタマハリタシ。」
八二八 (略)、小サキ四角四面ノ堂
アリテ、四方ノ戸皆開キタリ。
九三六 (略)、四方からの見物人は雲
の如く集つた。
九四六 (略)、ソレヨリ噴出シタル
物ノ四方ニナダレテ、冷エカタマリ
タルガ、今ノ箱根山ヲ成セルナリ。
九五八 (略)、湖面鏡の如く、四方
の山々皆倒に影をうつせり。
一〇七九 (略)、見渡せば四方の山々の
いたゞきは、はやまつ白になつてゐ
る。
一一二九 大小幾多の軍艦は(略)、
遠く四方に航行して、到る處に國光
をかざやかせり。
一一八六 (略) 綿花ノ細片四方ニ
飛散シテ、吹雪ノ風ニクルフガ如ク、
(略)。
一一一〇 支那ノ昔後漢ノ末、天下
麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。
一一一〇 上流の婦人は四方を閉ぢた
輿に乗つて、外から見られない様に
する。
一二四八 四方の海の底廣く、魚
介さまぐ、海藻の 無限の富を藏し
たり。

十二83 4 聴衆は四方から集つて來て、見る内に人山を築いた。
 しぼうしゃ「志望者」(名) 1 志望者
 十34 5 (略) 店員入用の廣告を出した。志望者は五十人ばかりも來たが、(略)。
 しぼる「絞」(四) 2 しぼる 「ーラ」
 ひきしぼる
 十55 5 図 (略) さめくと泣きたれば、一座皆よろひの袖をしぼらざるはなかりき。
 十一13 8 図 御供仕うまつれる警固の武士もよろひの袖をしぼらざるはなかりき。
 しほん「四本」(名) 2 四本
 七28 1 サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。
 十一2 4 図 堂前四本の櫻ある處は(略)。
 しほん「資本」(名) 1 資本
 十二63 9 図 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。
 しま「島」(名) 7 島 島あわじしま・いつくしま・おおしま・おきのしまふきん・かわなかじまのたたかい・こじま・さくらじま・しょうどしま・ちしま・どろがしま・まつしま・むこうじま・やしま・やしまのたたかい
 四52 3 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、ムカフノ大キナヲカヘ行ツテ見タイト思ツテ、(略)。

十33 1 図 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。
 十33 2 図 (略) 是等ノ島ニハ作物ノ出來ザル荒地多ケレバ、(略)。
 十一18 2 図 船の其の間を行くとき、島かと見れば岬なり。
 十一18 3 図 岬かと見れば島なり。
 十一18 6 図 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。
 十一96 7 図 南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、(略)。
 しま「縞」(名) 1 縞
 八64 1 木綿織物ニ紺ヤ淺黄ヤカスリヤ其ノ他色々ナ縞ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。
 しまい「仕舞」(名) 6 シマヒ しまひ しまし
 三69 2 ウマイゴチソウモ毎日タベルト、シマヒニハイヤニナリマス。
 三69 4 オモシロイアソビモ毎日見ルト、シマヒニハアキテキマス。
 四56 3 ワニザメハ(略)、大ソウオコツテ、一バンシマヒニ居タノガ、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。
 六50 7 (略) 勝家などはこれをきらつて、てきたひましたが、かへつてほろぼされて、しまひには日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。

七31 8 眠る度に皮をぬぎかへて、しまひにはからだがすきとほつて見える。
 七82 3 図 (略) 人家も、段々に小さく見える様になります。海岸の松原も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。
 しまい「姉妹」(名) 1 姉妹
 十一51 7 図 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、(略)、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。
 しまう「仕舞」(五) 33 シマフ しまふ 「ーッ・ハー・ヒー・フ」
 二54 2 (略) ハラヲタテテ、ソノ大ヲコロシテシマヒマシタ。
 二58 2 (略)、ソノウスヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイテシマヒマシタ。
 二65 7 (略)、ワルイオヂイサンハトウトウシバラレテシマヒマシタ。
 三13 6 ウシノツノヤ、シカノツノデモヲツテシマフホドデ、(略)。
 三42 1 (略)、がぶがぶと水をのんで、とうとうしんでしまひました。
 三50 1 こひやふななどは水から出ると、しんでしまひます。
 三72 7 (略)、父モ母モシンデシマツテ、ジブンノウチモアリマセン、(略)。

三73 7 (略)、ウラシマハニハカニオヂイサンニナツテシマヒマシタ。
 四27 1 (略)、のはらのくさやはなは太ていかれてしまひました。
 四27 3 (略) 虫も死んでしまつたのか、もうなくこゑもきこえません。
 四28 1 図 あなたのおなまは太てい枯れてしまつたやうです。
 四56 4 (略)、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。
 五13 3 けれども重い物は皆そこへしづめてしまつて、軽い物は一しよにこまでもつて來ました。
 五39 5 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、もうのりこんだ人もあります。
 五43 1 (略)、馬モ車モ今見エタカト思フト、スグ後ニナツテシマヒマス。
 五49 1 図 「あゝ、あぶなかつた。もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」
 五76 6 そのうちに日が暮れて、まつ暗になつてしまつた。
 五80 8 (略)、馬もこはがつてすくんでしまひ、人も顔を見合せて進まうとはしない。
 六17 3 (略)、その俵をつみ重ねてながめた時は、田うゑや草取りの苦しさも、取入れのいそがしさも、全く

わすれてしまひます。
 六23 2 すてておけば、すぐ死んでしまひます。
 六29 4 シカモノサビハ大ソウドクナモノデス。」トイヒマシタノデ、ヤクワンハダマツテシマヒマシタ。
 六36 6 ゆにはいつて、ごはんをたべると、つかれてすぐになてしまつた。
 六53 1 (略)、そのいくさの終らない中に病氣でなくなつてしまひました。
 六65 8 大テイノケモノハ一打デコロサレテシマヒマス。
 七30 8 食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。
 七33 5 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、(略)。
 八22 1 (略)、毎朝早くすを出て、糸をさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。
 八34 2 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。
 九31 7 (略) 最初の船は、フランスのセイヌ川に浮べたが、不幸にも直に沈んでしまつた。
 九69 2 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、(略)、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。
 十一48 9 (略) 「騎者・騎馬・黄金、三つとも失つてしまひました。」

十一58 2 (略) 早くしないと、ピエールが死んでしまふ。
 十二22 8 金魚を細口のびんに入れて、二三日も水を取換へないと、金魚は死んでしまふ。
 しまがくれゆく「島隠行」(四) 1 島がくれ行く「一く」
 十一19 7 (略)、朝日・夕日を負ひて、島がくれ行く白帆の影ものどかなり。
 しまがら「縞柄」(名) 1 縞がら
 九12 6 (略) 右は地質といひ、縞がらといひ、此の地方には賣行よろしかるべしと存ぜられ候間、(略)。
 しまぐに「島国」(名) 4 島国
 六1 2 わが日本は島国である。
 八75 9 (略) 我が大日本帝國はアジア大陸の東の海中にある島国なり。
 八77 2 (略) イギリスは我が日本帝國の如き島国にして、(略)。
 十二53 9 (略) 我が國ハ島國ニシテ、海外交通ノ便最モ多ク、(略)。
 しまじま「島島」(名) 4 島々
 十33 7 (略) 幕府ハ此ノ書物ニ種々ヲ添ヘテ、島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、(略)。
 十一17 10 (略) 瀬戸内海には、(略)、大小無數の島々は各所に散在す。
 十一19 2 (略) 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、(略)。
 十一20 5 (略) 内海の沿岸及び島々には

名勝の地少からず。
 しまつゆふしまつ
 しまもの「縞物」(名) 3 縞物
 八64 9 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノガ縞物デス。
 九12 5 (略) 去月二十五日御差出の縞物二十反本日到着。
 九13 7 (略) 拜啓、御註文の縞物三十反、本日(略)發送いたし候。
 しまもよう「縞模様」(名) 1 縞模様
 十49 7 (略)、着物の縞模様、(略)に至るまで、我等の衣食住には模様・色どりをほどこしたるもの多し。
 しまやま「島山」(名) 1 島山
 十一18 8 (略) 瀬戸内海には、(略)。(略)。春は島山霞に包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして(略)。
 しまりやとじまり
 しまる「縞」(五) 1 しまる「一ツ」
 八23 1 (略)、自分の家は戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。
 しまん「自慢」(名) 2 ジマン じまん
 二34 5 アル日トモダチニユミノジマンヲシテ、(略)。
 三16 6 「おれよりちからのつよい人はあるまい。」といつて、けはやがじまをしました。(ひらがなのドリル)
 しまんあまり「四万余」(名) 1 四萬アマリ

九15 2 (略) 前橋市ハ人口四萬アマリ、(略)。
 しまんする「自慢」(サ変) 1 ジマン スル「一シ」
 七48 5 モトユヒヤ水引ノヤウナ、アンナ丈夫ナ物ハ日本紙デナクレバ出来ナイ。」トジマンシマス。
 しまんトンぜんご(名) 1 四萬噸前後
 十一28 2 (略) 四萬噸前後の大汽船をも製造するに至れり。
 しまんばなし「自慢話」(名) 2 ジマンバナシ
 四39 6 ボクラハカウイフカタイヨロヒヲキテキルカラ、ドンナ時デモ、(略)、アンシンナモノデス。」トイツテ、ジマンバナシヲシマシタ。
 六24 6 (略) ヤクワントテツピンガメイ「ジマンバナシヲシマシタ。マヅヤクワンガイヒマスニハ、(略)ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デセウ。
 しみる「染」(上) 1 しみる「一ミ」
 十27 10 山おろしの風は身にしてみて寒い。
 しみる「市民」(名) 1 市民
 十一77 5 (略) 神戸市に近き布引瀧は(略)。(略)。市民遊覽の地にして、又神戸市水道の源たり。
 しむ「染」(四) 2 しむ「一マミ」

八七四 〔略〕、我が國體のたふとさ、

いよいよ身にしみておぼゆ。

八三六 〔圖〕 (略)、にこりにしまぬ白蓮の 卷葉をもるゝつゆ涼し。

しむ 〔占〕 (下二) 6 占ム 占む

『ム・ムル・ム』

十一三三 〔圖〕 (略)、樟腦は世界産額の 八分の五を占むる由に御座候。

十一六七 〔圖〕 人生七十年と見るも六十萬時間に過ぎず。其の内 (略) 等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。

十一八三 〔圖〕 (略) 最茂盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。

十二四二 〔圖〕 火山全體の占むる面積は百十三平方里にして、(略)。

十二四四 〔圖〕 作物は米・麥其の大部分を占めて、(略)。

十二四五 〔圖〕 (略)、生絲は輸出品の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。

しむ (助動) 44 シム しむ 『シム・シムル・シムレ・シメ』

七四四 〔圖〕 父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、(略)。大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七六二 〔圖〕 犬は (略)。されば夜を守らしむるによろし。

七六三 〔圖〕 (略)、かりに用ひて、えものさをささしむるに適す。

七六六 〔圖〕 外國にては、犬をして牛かひ・羊かひの手つだひをなさしむ。

七六八 〔圖〕 二三匹の犬、よく二三百頭の牛、二三千頭の羊を追ひまはして、主人の行く方へ行かしむといふ。

七六九 〔圖〕 又寒き國にては、犬をしてそりを引かしむ。

七六五 〔圖〕 ある山國にては、犬のくびに (略) をかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。

七六六 〔圖〕 又近ごろは戦場にも犬を用ひてたふれたる兵士をさがさしむといふ。

八九三 〔圖〕 名古屋城は (略)、徳川家康が諸大名に課して造らしめたる名城にして、(略)。

九三六 〔圖〕 尊 (略)、其のほとりに娘を坐せしめて待ち給ひしに、(略)。

九四九 〔圖〕 砲兵は大砲を以て遠方より敵を砲撃し、友軍を前進し易からしむ。

九六〇 〔圖〕 時々障子を明放ちて、新しき空氣を流通せしむべし。

九六四 〔圖〕 之をほうむりし時は、よろひ・劔・弓・矢等を共にをさめ、(略)、ながく皇城を守護せしめたりといふ。

九六五 〔圖〕 臺所にて火吹竹を使ふも、かち屋にてふいごを用ふるも、皆空氣を送りて、火の勢を盛ならしむる爲にして、(略)。

九六六 〔圖〕 オルガンにて美しき音を發

せしむるが如き、(略)。

十一九五 〔圖〕 (略) 落葉・こけ及び網の如くひろがれる木の根などは、(略)、水をして少しづつ靜かに流れ出でしむ。

十一一〇 〔圖〕 森林は (略)、又常に土地をうるほして、土砂を落付かしむ。

十一二五 〔圖〕 (略)、良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、信ハ外ニ兵ヲ用ヒテ、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

十一七四 〔圖〕 腦ハ (略)、手・足・口等ニ命令シテ活動セシム。

十一九七 〔圖〕 人ヲシテソマロニ佛教ノ盛ナリシ奈良時代ヲオモハシム。

十一一五 〔圖〕 臨幸餘りにおそかりしかば、人をしてうかがはしむるに、(略)。

十一二五 〔圖〕 (略)、荷車には人の引くあり、牛馬に引かしむるあり。

十一二八 〔圖〕 (略)、汽車・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

十一二九 〔圖〕 重砲車の如きは十頭の馬をして引かしむ。

十一四二 〔圖〕 (略)、しきりに望めば、力及ばず、「さらば是にて本意を遂げよ。」とて、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしめたり。

十一七〇 〔圖〕 一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。

十一七一 〔圖〕 他人をして時間を損失せ

しむるは其の罪金錢を損失せしむるよりも重し。

十一七一 〔圖〕 (略) 其の罪金錢を損失せしむるよりも重し。

十一八〇 〔圖〕 鶴匠は (略)、十二條の細なを片手に握り、右往左思ひくゝに浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。

十一八五 〔圖〕 (略)、次第二ヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ツカシム。

十一八六 〔圖〕 サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)、更ニヨリヲカケ、ツムニマキトラシム。

十一八九 〔圖〕 (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、(略)、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十一一〇三 〔圖〕 孔明、劉備ニ事へ、(略)、遂ニ備ヲスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十一一〇五 〔圖〕 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。

十一二五 〔圖〕 東郷司令長官は (略)、先づ小軍艦をして敵艦隊を沖島附近に誘ひ寄せしむ。

十二二八 〔圖〕 家康直ちに勝商をして織田信長に見えて、長篠城の急を告げしむ。

十二三〇 〔圖〕 其の將伊企雛をして日本に向つて、「日本の將我がしりを食へ。」と號ばしむ。

十二三五 〔圖〕 凡そ婦人の道は夫を助け

て家政を治め、子に教へて家名をあ

げしむるに在り。

十二53 1 図 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、(略)。

十二73 8 図 (略)、彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラなりき。

十二76 1 図 (略)、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

十二87 7 図 (略)、我が足、獸として良雄に食はしめたり。

十二91 7 図 主婦は又常に家庭和樂の中心となりて、家内一同を樂しましむべし。

十二95 2 図 (略) 戲樂を奏せしかば、孔子は禮に反せるものありとて之を止めしむ。

じむ「事務」(名) 4 事務

八15 1 役所デモ、會社デモ、上カラ下マデ一同ソロットテ事務ニ取りカ、ル。

十一12 10 又國家全體カライヘバ、(略)、官公吏ノ事務ヲ取扱ヒ、(略)等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。

十二103 3 図 (略)、市町村長・參事會員等の其の事務を處理するも、(略)。
十二104 3 図 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、(略)。

じむかん「事務官」(名) 1 事務官

ひこすぎじむかん

十二34 7 (略)、縣廳カラモ知事ノ代理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。
しめ ひこじめ・せんごひやくしやくじめ

しめい「氏名」(名) 3 氏名 ひこじゅしんにんきよしよしめい・はつしんにんきよしよしめい
八48 図 (略) 其居所氏名を此處ヘ記すべし

八48 図 發信人の居所氏名を受信人に知らせんとする時は(略)
八48 図 發信人は自己の居所氏名を(略) 此處に記すべし

しめお・り「占居」(ラ変) 1 占め居「(リ)」
十一38 3 圖 米田は全平地の二分の一を占め居候。

しめしたま・う「示給」(四) 1 示し給ふ「一へ」
十二11 4 図 教育勅語と戊申詔書とは、我等が身を修め、世に處するの道を示し給へるものにして、(略)。

しめ・す「示」(四) 11 示ス 示す「サ・シ・ス・セ」
十47 4 図 次の圖は其の一二の例を示すものなり。

十一105 1 図 (略)、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕ヘ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。
十一111 9 図 (略)、自ら先んじて耕作・養蠶・養雞・養魚等の模範を示せ

しを以て、(略)。

十二18 5 図 信號は(略)。晝間は赤球を以て風の強きを示し、(略)。
十二18 7 図 (略)、圓筒形を以て風雨の強きを、圓錐形を以て暴風雨のおそれあるを示す。

十二19 6 図 天氣圖とは(略)、一日に全國天候の如何を示すものなり。
十二19 10 図 又風の方向は矢を以て示し、矢の上ヘ向ふは南風、(略)、左ヘ向ふは東風とす。

十二27 10 図 三日を過ぎなば、又山上に來りて援軍の消息を示さん。」
十二35 10 図 (略)、今や全國就學兒童ハ(略)、本郡ノ如キハ實ニ百分ノ九十九ノ好成绩ヲ示セリ。

十二98 8 図 市街・道路を不潔にし、官廳・學校・神社・佛閣等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。
十二101 3 図 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、却つて我が國民の度量の狭く、品格の低きを示す所以にして、(略)。

しめたまう(助動) 2 しめ給ふ
シメタマヒ・シメタマフ
九4 10 図 (略)、東國の蝦夷叛きしかば、天皇日本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

十一27 図 堂前四本の櫻ある處は大

塔宮の吉野を落させ給ふ時、別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。

しめやか(形状) 1 しめやか
九67 4 春の雨はしめやかに降つて、のきの玉水の音も靜かに聞える。
し・める「締」(下) 4 シメル しめる「メーメル」ひにぎりしめる

四39 4 図 (略)、サザエガ(略)、「(略)」。ボクラハ カウ イフ カタイヨロヒヲ キテ キルカラ、

(略)、コノ中ヘ ハイツテ、内カ ラトヲ シメテ キサヘ スレバ、(略)。

四40 2 サザエハ スグカラノ中ヘ ヒツコンデ、フタヲ シメテ、(略)。

十21 1 印刷する紙は(略)。それを折つて、揃へてとぢる。其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。

十35 2 図 「あれが此の室にはいる前、(略)、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。

しめん「四面」(名) 2 四面 ひしかく しめん
十一35 3 図 四面皆海ナル我が帝國ハ、(略)。

十二45 4 図 是我が國の(略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、(略)。

じめん「地面」(名) 4 地面

六157 刈つた稻はさをや木にかけるか、地面にひろげるかして、よく日にかわかします。

七605 図 (略)、長きものは羊の如く、立ちてもその毛はなほ地面に達す。

十一886 図 かくて数年の後には、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。

十一959 図 (略)、冬は寒氣厳しく、地面は三尺の下まで凍り、(略)。

しも「下」(名) 4 下

十一531 図 (略)、上、天ニ恥ヂズ、下、地ニ恥ヂズ、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

十二1121 図 上元帥より下一卒に至るまで、官職の高下、就職の新舊によりて上下の分別最も正し。

十二1126 図 下は上を敬し、上は下をあはれみ、一致協同して王事に勤むべし。

十二1126 図 下は上を敬し、上は下をあはれみ、(略)。

しも「霜」(名) 2 霜 ヲあさしも・はつしも

十二292 霜にやけて、赤くなつた杉垣の中には、(略)。

十二814 頭には霜をいたゞき、身にはつゞれをまとい、(略)老人の辻音楽師がある。

しも(係助) 1 しも ヲかならずしも・さしも

十一161 図 天、勾踐を空しうするなかれ。時、范蠡無きしもあらず。

しもうさ「下総」(地名) 4 下總 下總 九162 図 江戸川ハ(略)。其ノ流ハ下總・武藏ノ國境ヲナセリ。

九168 図 本流ハ下リテ、下總・常陸ノ國境ヲ流レテ太平洋ニ入ル。

九169 図 下總ノ手賀沼・印旛沼・長沼等ノ水ハ南ヨリ之ニ注ギ、(略)。

九17 図 下總

しもく「耳目」(名) 1 耳目 十一523 図 身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。

しもつけ「下野」(地名) 1 下野 九17 図 下野

しもものせき「下関」(地名) 1 下関 十一19 図 下関

しもものせきかいきょう「下関海峡」(地名) 2 下関海峡 十一175 図 本土の西、近く九州と相接せんとする所、下関海峡あり。

しもばしら「霜柱」(名) 1 霜柱 十一19 図 下関海峡

しもふたご「下二子」(地名) 1 下二子 九419 図 (略)、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。上二子・下二子・神山・駒岳是ナリ。

しもふたごやま「下二子山」(地名) 1

下二子山 九40 図 下二子山

しもんめ「四匁」(名) 4 四匁 七515 図 「手紙は四匁までは三錢ですが、(略)。

七515 図 「手紙は(略)、四匁より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。

七517 図 この手紙は四匁より重いのに、(略)。

七524 図 「小包郵便でもやはり四匁までが三錢ですか。」

しゃ「社」 ヲさんしゃ

しゃ「車」 ヲきかんしゃ・ざいりょうしゃ・しちようしゃ・じてんしゃ・じどうしゃ・じゅうほうしゃ・じんりきしや

しゃ「著」 ヲこうじかんけいしゃいちどう・しぼうしゃ・しようしゃ・そうしんとくむしや・ちようないゆうしや・てきにんしや・はんざいしや・ぶぐしや・ゆうししや・ゆうらんしや

しゃおん「謝恩」(名) 1 謝恩 十一726 図 (略)、畫工「(略)」。さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、(略)。

しゃか「沙河」(地名) 2 沙河 十二558 図 奉天の南方沙河の名も永く世人の忘れざる所なるべし。

十二57 図 沙河

しゃかい「社会」(名) 4 社會 十一711 図 (略)、今日の如く通信交

通の機關發達し、社會の活動敏速なる時代にありては、時間は金錢よりも貴し。

十二983 図 (略)、殊に他國人の注意を引くものは社會の公德及び國民の度量なりとす。

十二984 図 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を導び、公共の物品を大切にす等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二11510 図 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

ジャガタライも (名) 1 馬鈴薯 十一1001 図 農産物の種類は北海道と大差なく、大麥・小麥・燕麥・裸麥・蕎麥・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、(略)。

しゃく「勺」(名) 1 勺 六193 図 (略)、合十分ノ一ヲ勺トイフ。

しゃく「尺」(名) 3 尺 ヲいくじつしやく・いちじょうろくしやく・いちまんざんぜんしちじゅうよしやく・いちりろくちようしじつけんごしやく・いつしやく・いつしやくいじょう・いつしやくにすん・いつせんじやく・かねじやく・きゅうじつしやく・くじらじやく・ごしやく・ごしやくはつすん・ごしやくろくすん・ごじょうさんじやく

くごすん・さんししやく・さんじやく・さんじやくくすん・さんびやくよ
 しゃく・ししやく・せんごひやくしやく
 くじめ・さんじやく・にじしやく
 よ・にしやく・はししやくくごすん・ろくしじしやく・ろくしやく
 六十七 長サヲハカルニハ尺ヲモト
 トス。
 六十七 尺ノ十倍ヲ丈、(略)。
 六十七 尺ノ十分ノ一ヲ寸、(略)。
 しゃく「爵」ハはくしだんしやく
 しゃくどう「赤銅」(名) 1 赤銅
 十一 吹く塩風に黒みたる
 はだは赤銅ながらに。
 しゃくとり ヲえだしやくとり
 じゃくねん「若年」(名) 1 若年
 十二 老後の安樂を願ふ者は若
 年の辛苦をいとふべからず。
 しゃくよ「尺余」(名) 1 尺餘
 十一 鐵棒ニマキテ、長
 サ四尺バカリ、直径尺餘ノ筵締トス。
 しゃじ ヲこしやく
 しゃしまつる「謝奉」(四) 1 謝しま
 つる「ール」
 十 乃木大將は(略)大君
 の 大みことのり傳ふれば、かれか
 しこみて謝しまつる。
 しゃしん「写真」(名) 9 寫眞 ヲおし
 やしん・たいわんしやしんじょう
 七 書物や寫眞の類は三
 十 乃至二錢で、これもたゞの手紙

などよりはよほど安いのです。
 七 宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫
 眞ニテ見知りタル二重橋カ、レリ。
 八 この間にいさんがかへつて
 來ましたので、うち中の者がそろつ
 て寫眞をとりました。
 八 三郎は(略)、寫眞でも笑
 つて寫つてゐます。
 八 この寫眞で見ると、おかあ
 さんの小さい時分にそっくりです。
 八 寫眞を見て、急に皆さんに
 お目にかゝりたくなりました。
 十八 本の中には(略)、晝や地圖
 や寫眞のはいつてゐるものもある。
 十九 (略)、寫眞をうつす人の苦心
 も亦一通りではない。
 十九 (略)、寫眞は銅版に彫りつけ
 て、相當の場所に入れる。
 しゃしんをおくるてがみ「課名」 2 寫
 眞をおくる手紙
 八 寫眞をおくる手紙
 八 寫眞をおくる手紙
 しゃ・す「謝」(サ変) 6 謝す「シ・
 ス・スル・セ・セヨ」
 十 厚意謝するに餘りあ
 り。
 十二 廉頗之を聞きて、深く其
 の非をさとり、相如の門に至りて罪
 を謝し、つひに無二の親交を結べり
 とぞ。
 十二 船員(略)、争ひてこれ
 までの不從順なりし罪を謝せり。

十二 「我當に萬罪を地下に
 謝すべし」。
 十二 「君子は過あれば謝す」。
 十二 君、實を以て謝せよ」。
 しゃぜん「社前」(名) 1 社前
 九 靖國神社ハ、(略)。
 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、(略)。
 しゃちほこ「鱧」(名) 2 しやちほこ
 八 東海道の旅行中、最も多
 く衆人の目をひくものは、富士山と
 名古屋城の金のしやちほことなるべ
 し。
 八 名高き金のしやちほこは此
 の天守閣の棟の兩はしにあり。
 しゃでん「社殿」(名) 5 社殿
 九 此ノ神社ノ(略)、社殿ハ
 上古ノ風ヲウツシテ造り、(略)。
 九 社殿ノ後ニハ美シク作ラレ
 タル庭アリ。
 九 社殿ノカタハラナル西洋風
 ノ建物ヲ遊就館トイヒ、(略)。
 十 (略) 談山神社ニ達ス。社
 殿壯麗ニシテ、關西日光ノ稱アリ。
 十 社殿ノ後ノ山ニハ鎌足ノ墓
 アリ。
 しゃどう「車道」(名) 1 車道
 十二 (略)、人道と車道との間
 なる左右二列の綠樹は枝を交へて、
 雅麗比なし。
 しゃない「車内」(名) 1 車内
 十二 電車の便の最も開けたる
 は伯林にして、(略)、車内亦清潔に

して乗心地甚だ好し。
 しゃば「車馬」(名) 2 車馬
 十一 其の南部は車馬の往來
 自在にして、(略)。
 十二 倫敦の市街は繁盛を以て
 名高し。(略)、車馬街上に満ちて往
 來頗る困難なり。
 しゃふ「車夫」(名) 2 車夫
 九 車夫のかぶるは形より
 まんぢゆう笠の名をかし。
 十 (略)、郵便配達夫・車夫等
 ノ足ノ強キ、(略)、ヨク之ヲ使用ス
 ルヲ以テナリ。
 じゃんじゃんじゃん(感) 1 じゃん、
 じゃん、じゃん
 八 「じゃん、じゃん、じゃん」
 かねが鳴る。火事だ、火事だ。
 シャンゼリゼー「地名」 1 シャンゼリ
 ゼー
 十二 シャンゼリゼーの大通
 の如きは、世界最美の街路と稱せら
 る。
 しゅ「主」(名) 2 主
 十 食物は栗・稗・うばゆりの
 根等を主とし、鹿の肉は珍味として
 之を賞美す。
 十二 本校舎ノ建築ハ質素堅
 固ヲ主トシ、外觀美ナラザレドモ、
 (略)。
 しゅ「首」ひいししゅ
 しゅ「株」ひいししゅ
 しゅ「種」(名) 2 種ひいししゅ・い

<p>しゅ・さんしゅ・さんしゅのじんぎ・ししゅ・すうじつしゅ・すうしゅ・だ いごしゅ・だいさんしゅ・にさんしゅ 九54 5 図 カクノ如ク動物ノ體色ニハ 其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモ ノアリテ、(略)。此ノ種ノ體色ヲ保 護色ト名ヅク。</p>	<p>九57 6 図 或動物ハ(略)、周圍ノ物 トマギレザルヤウ、コトニアザヤカ ナル體色ヲ有ス。(略)。此ノ種ノ體 色ヲ警戒色ト名ヅク。</p>	<p>じゅ じゅいちじゅ しゅい「首位」(名) 1 首位</p>	<p>十二45 1 図 (略)、生絲は輸出品の首 位を占めて、(略)。</p>	<p>しゅ「週」 じゅいしゅうかん・にしゅ うかん・にしゅうかんあまり</p>	<p>しゅ「衆」(名) 3 衆 じゅおんこども しゅ</p>	<p>十二15 5 図 (略)、主上はや院庄に入 らせ給ひぬと申す。衆皆力を失ひて 散りぐに成れり。</p>	<p>十二97 5 図 官位・門地・技術・財産 ・學問等に於て衆を抜く者は、個人 としても自ら高尚なる品格を要する が如く、(略)。</p>	<p>十二11 5 図 此の如き人の組織せる軍 隊は即ち烏合の衆に同じ。</p>	<p>じゅ「十二」(課名) 9 十 じゅだいじつ か・だいじゅ</p>	<p>二目 十 カクレンボ 二22 1 十 カクレンボ</p>	<p>三目 5 四 ワタクシノウチ……</p>	<p>三目 11 十 タケ</p>	<p>三27 7 十 タケ</p>	<p>四目 5 四 カキトクリ……十</p>	<p>四目 11 十 こくもつ</p>	<p>四29 7 十 こくもつ</p>	<p>九目 5 第四課 舞へや歌へや……</p>	<p>十</p>	<p>じゅ「十二」(名) 6 十 10 X じゅい つせんしひやくくじゅうにねんじゅう がつじゅうにち・じんじょうしう がくとくほんまきじゅう・だいじゅう ず・でんだいじゅうごう</p>	<p>四46 図 X</p>	<p>八48 図 十</p>	<p>八48 図 十</p>	<p>十一2 図 10</p>	<p>十一19 図 10</p>	<p>十一98 図 10</p>	<p>じゅ「中」 じゅあしたじゅう・いちねん じゅう・いつかじゅう・うちじゅう ・くにじゅう・せかいじゅう・につば んじゅう・まちじゅう・やしきじゅう じゅ「住」 じゅいしよくじゅう</p>	<p>じゅ「銃」(名) 2 銃</p>	<p>十29 9 犬を連れた男が銃を肩にし て、森の蔭から出て来て、(略)。</p>	<p>十66 2 ポートは(略)、又も鯨に近 寄り、今度は銃を以て破裂矢を打込 む。</p>	<p>じゅ「自由」(名) 1 自由</p>	<p>十21 10 活版は(略)、同じ活字を何 度でも組立てて使へる。木版では一 枚々々彫らなければならぬから、其 の自由がきかぬ。</p>	<p>じゅ「自由」(形状) 2 自由 じゅふじ ゅ</p>	<p>十二12 10 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人 ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出来、 (略)。</p>	<p>十二72 8 図 守る所正しければ、心に 憂苦なく、行ふ所直ければ、身常に 自由なり。</p>	<p>しゅうい「周圍」(名) 12 周圍</p>	<p>九54 1 図 カクノ如ク動物ノ體色ニハ 其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモ ノアリテ、(略)。</p>	<p>九54 2 図 (略)、自ラ其ノ周圍ノ物ノ 色トマギレテ、タヤスク他ノ動物ニ 見附ケラル、コトナシ。</p>	<p>九54 7 図 動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物 ノ色ノ變ズルニシタガツテ、保護色 ノ變ズルモノアリ。</p>	<p>九55 5 図 (略)、其ノ動物ノ身ブリニ ヨリテ、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ル モノノアルコトナリ。</p>	<p>九56 8 図 或動物ハ之ニ反シテ、周圍 ノ物トマギレザルヤウ、コトニアザ ヤカナル體色ヲ有ス。</p>	<p>九64 6 図 是我等の周圍に空氣のあれ ばなり。</p>	<p>十8 4 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一 處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イデキ</p>	<p>ル。 十79 9 図 (略)、又口の周圍、手首・ 手の甲等には入墨をほどこせり。</p>	<p>十一68 10 図 我等の周圍には讀むべき 書多く、學ぶべき物多く、成すべき 事限りなし。</p>	<p>十一89 6 図 熱き地方の白蟻は周圍十 間、高さ三間にも達する小山の如き 巢を造り、(略)。</p>	<p>十一90 1 図 一種の草の實を食用とす るを以て、(略)、周圍の雜草を食切 りて、ひたすら此の草の成長を保護 し、(略)。</p>	<p>十一110 2 都市・村落の周圍の山や岡 には、(略)土山が數知れず並んで ゐる。</p>	<p>じゅういち「十二」(課名) 9 十一 じゅだいじゅういち・だいじゅういつか</p>	<p>二目 12 十 ユフガタ</p>	<p>二25 1 十 ユフガタ</p>	<p>三目 12 十 タウエ</p>	<p>三31 4 十 タウエ</p>	<p>四目 12 十 ワラ</p>	<p>四35 8 十 ワラ</p>	<p>五目 6 第五 水のたび (二)……十</p>	<p>一</p>	<p>十目 5 第四課 家……十一</p>	<p>十二目 4 第三課 造船ノ話……十</p>	<p>一</p>	<p>じゅういち「十二」(名) 1 XI じゅこぜ んじゅういちじさんじつぶん・じゅう がつじゅういちにち・じゅうにがつじ</p>
---	---	--------------------------------------	---	---	------------------------------------	--	--	--	---	-------------------------------------	-------------------------	-------------------	-------------------	------------------------	---------------------	---------------------	--------------------------	----------	---	----------------	----------------	----------------	-----------------	------------------	------------------	---	---------------------	--	--	-----------------------	--	-----------------------------------	---	--	--------------------------	--	---	--	--	---	--------------------------------------	--	---	--	--	---	--	--	---------------------	---------------------	--------------------	--------------------	-------------------	-------------------	----------------------------	----------	-----------------------	--------------------------	----------	---

ゆういちにち・じんじょうしょうがく
とくほんまきじゅういち・だいじゅう
いちず・にがつじゅういちにち・めい
じじゅういちねん

四六四 XI

じゅういちがつ「十一月」(名) 1 十

一月

六七四 九月ノ初ヨリ十一月ノ終マ

デハ秋ナリ。

じゅういちがついつか「十一月五日」

(名) 2 十一月五日

八二四 十一月五日 はな 伯母上

様

九二四 靖國神社ノ秋ノ大祭ハ十一

月五日ヨリ行ハル。

じゅういちがつごろ「十一月頃」(名)

1 十一月ごろ

五三四 茶ノ木ノ高サハ(略)。(略)。

十一月ゴロ白イ色ノ花ガサキマス。

じゅういちがつにじゅうこにち「十一月

二十五日」(名) 1 十一月二十五日

一七五 十一月二十五日 加藤善

作 内山五百吉様

じゅういちがつみつか「十一月三日」

(課名) 2 十一月三日

四四四 三 十一月三日

四八四 三 十一月三日

じゅういちがつみつか「十一月三日」

(名) 2 十一月三日

二三〇 一月一日 二月十一日 五月

二十八日 十一月三日

四八五 十一月三日ハ一年中デコ

トニオメデタイ日デス。(略)。

私ドモノガクカウデモ、ケサ天

長セツノシキガアリマシタ。

じゅういちがつようか「十一月八日」

(名) 1 十一月八日

八三六 十一月八日 伯母より お

はなさま

じゅういちまん ぐやくじゅういちまん

じゅういちりはん「十一里半」(名) 1

十一里半

一二四 火山全體の占むる面積は

(略)、南北十一里半に達せり。

じゅういつかげつ「十一箇月」(名) 1

十一箇月

一二八 我が軍は苦戦十一

箇月にして之を陥れたり。

じゅういつさい「十一歳」(名) 2 十

一歳

七一三 正成ノ戦死セシハ正行ガ十

一歳ノ時ニシテ、(略)。

七六三 父正成ノ戦死セシ時、

臣ハワヅカニ十一歳(略)。

じゅういつふうじゅう

しゅうえき「収益」(名) 1 収益

一一〇 森林は(略)、之を伐

採せば少からぬ収益と相成るべく、

(略)。

じゅうえん「十円」(名) 2 十圓

九四〇 十圓

九五一 我ガ國ノ紙幣ハ(略)、一

圓・五圓・十圓・百圓ノ四種流通

ス。

じゅうえんきんか「十円金貨」(名) 1

十圓金貨

一三六 其の工事の總費用は(略)、

一里の長さだけ十圓金貨を並べたる

に等しいふ。

じゅうかい「周回」(名) 2 周回

九五六 中禪寺湖あり、周回

凡そ六里、(略)。

一二二 日本一の湖水は近江の琵琶

湖にして、周回六十里。

じゅうかい「集会」(名) 2 集会

一二七 殊に集会の時間は正しく

守らざるべからず。

一二八 例へば六十人の集會に其

の中の一人若し十分を後るとせば、

(略)。

じゅうかく「收穫」(名) 5 收穫

一一九 收穫といふもの

あり。(略)、ひたすら此の草の成長

を保護し、其の實の熟して地に落つ

るを待ちて、其の巢に運び去る。是

即ち農業の收穫に異ならず。

一一〇 農産物の種類は北海道

と大差なく、大麥・(略)・豌豆等の

收穫多く、(略)。

一二四 米の作付反別は

(略)、其の收穫は年々凡そ四千六七

百萬石にして、(略)。

一二五 麥の作付反別は

(略)、其の收穫は年々凡そ二千萬石

なり。

一二六 栽培法の如きも、(略)、

能く學理を應用せば、一層其の收穫

を増加することを得ん。

じゅうかく「修學」(名) 1 修學

一一六 人生七十年と見るも六十

萬時間に過ぎず。(略)、實際修學及

び業務に用ふる時間は僅かに二十萬

時間を越えざるべし。

じゅうかく「就學」 ぐぜんこくしゅうが

くじどう

じゅうかくあり「收穫蟻」(名) 1 收

穫蟻

一一七 アメリカの一地方に産

する蟻の一種に收穫蟻といふものあ

り。

じゅうかくじどう「就學兒童」(名) 1

就學兒童

一二八 就學兒童ノ數ガ年々増加

シ、義務教育年限モ六年ニ延長セラ

レタノデ、(略)。

じゅうがつ「十月」(名) 1 十月

八三六 綿ノ木ハ(略)。(略)、九月

カラ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマス。

じゅうがつじゅういちにち「十月十一日」

(名) 1 十月十一日

一二九 十月十一日、河中に生ず

る水草流れ寄り、(略)。

じゅうがつじゅうしちにち「十月十七日」

(名) 1 十月十七日

八四一 十月十七日 晴

じゅうがつちゅうじゅん「十月中旬」

(名) 1 十月中旬

一二〇 鵜飼は五月中旬に始り、

十月中旬に終る。

じゅうがつふつか「十月二日」(名) 1

十月二日

九七五(國) 十月二日 岡田敬造 堤

富次様

じゅうかん じせいぶじゅうかんてつど

う

じゅうかんてつどう「縦貫鉄道」(名)

1 縦貫鐵道

十二五八(國) 安奉線は(略)、韓國の

縦貫鐵道に連結す。

しゅうき「臭氣」(名) 2 臭氣

八三〇(國) (略)、内ニハ黒ブクレニナ

リテクサリタル死人横タハリテ、臭

氣鼻ヲツクガ如シ。

七二五(國) 温泉の(略)。其の湯には大

抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。

しゅうぎ「衆議」(名) 1 衆議

十二一〇六(國) (略)、別に帝國議會を設

けて、廣く衆議を聽く機關に供せさ

せ給へり。

しゅうぎいん「衆議院」(名) 4 衆議院

十二一〇六(國) 帝國議會は貴族院・衆議

院の兩院より成る。

十二一〇六(國) 衆議院は一定の選舉資格

を有する臣民の公選したる議員を以

て組織し、議員の任期は四箇年なり。

十二一〇七(國) (略)、法律案は政府の外、

貴族院・衆議院共に各之を提出する

を得。

十二一〇八(國) 又貴族院及び衆議院は各

獨立して上奏し、建議し、且臣民の請

願を受けるの權能を與へられたり。

じゅうきよ「住居」(名) 1 住居

九五九(國) 住居もなるべくきれいにせ

よ。

しゅうきよう「宗教」(名) 1 宗教

十二一〇〇(國) 外國人に接するに人種・

宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる

四海兄弟の精神を以て等しく之を

親愛するは大國民の度量なり。

じゅうく「十九」(課名) 7 十九 じだ

いじゅうく

二目9 十九 ハナサカデイ(一)

二五〇 十九 ハナサカデイ(一)

三目7 十九 かへるとくも

三五〇 十九 かへるとくも

四目7 十九 雪のあさ

四六二 十九 雪のあさ

七目7 第六 豆の一族……十九

じゅうくけんよ「十九箇余」(名) 1

十九箇余

十二一六(國) (略)、渠口ノ幅十九箇余、

深サ八箇余アル。

じゅうくこしだん「十九個師團」(名)

1 十九箇師團

九二七(國) (略)、三十七八年の戦役後

は第一師團より第十八師團に至る十

八箇師團、外に近衛師團を合せて十

九箇師團となれり。

じゅうご「十五」(課名) 10 十五 じだ

いじゅうご・だいじゅうごか

二目5 十五 オカアサン

二七 十五 オカアサン

三目8 十五 ミギトヒダリ

三二四 十五 ミギトヒダリ

四目8 十五 とけいのうた

四目7 六 ふじのまきがり……

十五

四八三 十五 とけいのうた

五目8 第七 コヒ……十五

七目6 第五 問合の手紙……十五

十目6 第五課 紫式部と清少納言……

……十五

じゅうご「十五」(名) 1 十五 じゅう

にがつじゅうごにち・だいじゅうご

ず・ほんげつじゅうごにち・めいじじ

ゅうごねん・よくじゅうごにち・しち

がつじゅうごにち

十一一〇 十五

しゅうごう「集合」(名) 1 集合

十二一〇九(國) 國民は個人の集合より成

るものなれば、國民の品格といふも

亦各個人の品格の外に出でず。

じゅうごけん「十五間」(名) 1 十五間

十六七 鯨は(略)、長さは十五間、

即ち九十尺にも及ぶものも珍しくは

ない。

じゅうごさい「十五歳」(名) 2 十五歳

九八二 一人は熊吉、一人は愛作とい

つて、年は同じく十五歳。

十一一四 月日は流るゝ水の如く、

熊王十五歳になりぬ。

じゅうごじ「十五字」(名) 3 十五字

八四八(國) 電報は十五字までが一音信

で、(略)。

八四九(國) (略)、うちの名の和田を入

れて、十五字になるやうに書いてご

らん。

八四九(國) 「かうすると、ちやうど十

五字になります。」

じゅうごじよう「十五丈」(名) 1 十

五丈

十九六(國) (略)、大佛殿ノ高サ十五丈、

(略)。

じゅうごせん「十五銭」(名) 2 十五

セン 十五銭

四二五(國) 「糸ガ十五セン、フデガ

七セン、ミンナデ二十二センニ

ナリマス。」

七三六(國) たとへば十五銭で賣つてよ

いものを二十銭といふやうなもので

す。

じゅうごちよう「十五丁」(名) 1 十五丁

十一二(國) 十五丁

じゅうごにち「十五日」(名) 1 十五日

十一六二(國) 来る十五日は亡父七回

忌に相當り候に付、(略)。

じゅうごにん「十五人」(名) 1 十五人

十二一〇六(國) 貴族院は(略)。(略)、

及び各府縣に於て多額の直接國税を

納むるもの十五人の中より一人を互

選し、其の選に當りて勅任せられた

るものなり。

じゅうごふん「十五分」(名) 1 十五分

七五四(國) 新橋停車場ヲ出デテ、上野

行ノ電車ニ乗ル。(略)。十五分ホド

ニテ日本橋ニイタル。

じゅうごマイル(名) 1 十五マイル
九34 9 (略)、一時間に十五マイルも
走る汽車とはどうして競走が出来よ
う。

じゅうさん「十三」(課名) 11 十三

ひだいじゅうさん・だいいじゅうさんか

二目3 十三 タコノウタ

二30 4 十三 タコノウタ

三目6 五 ノミノスクネ……十

三 三目14 十三 がくかうへもつて

いくもの

三37 5 十三 がくかうへもつて

いくもの

四目6 五 ふじの山……十三

四目14 十三 のし

四41 7 十三 のし

五目7 第六 ナラノ大ブツ……十

三

八目6 第五 働クコトハ人ノ本分……

……十三

十一目5 第四課 兒島高德……十

三

じゅうさん「十三」(名) ひくがつじゅ

うさんにち・じゅうにがつじゅうさん

にち・だいいじゅうさんず

じゅうさんこしだん「十三個師団」(名)

1 十三箇師団

九26 9 明治二十七八年の戦役まで

は、我が國の陸軍は僅かに七箇師団

に過ぎざりしが、戦役後十三箇師団

となり、(略)。

じゅうさんし「十三四」(名) 1 十三四
十一54 10 隊中にビエールといふ年
の頃十三四ばかりの少年鼓手があつ
た。

じゅうさんち「集散地」(名) 1 集散地

十二58 5 安東縣は鴨綠江附近の森

林より伐出す木材の集散地なれば、

(略)。

じゅうさんねんめ「十三年目」(名) 1

十三年目

七8 7 コレ正成戦死ノ後十三年目

ニシテ、(略)。

じゅうし「秋思」(名) 1 秋思

九81 6 道眞(略)、一篇の詩を

作りたり。去年の今夜清涼に待す。

秋思の詩篇ひとりはらわたをたつ。

じゅうし「十四」(課名) 9 十四ひだ

いじゅうし・だいいじゅうしか

二目4 十四 モチノマト

二目8 七 イヌノヨクバリ……

十四

二33 1 十四 モチノマト

三目2 十四 うとからす

三40 2 十四 うとからす

四目2 十四 とけい

四45 6 十四 とけい

六目6 第五 取入れ……十四

九目7 第六課 利根川……十四

じゅうし「十四」(名) ひだいいじゅうし

ず

じゅうじ「住持」(名) 5 住持

十一72 1 此の繪をかける畫工久し

く此の寺に寄食してありしが、(略)。
住持は心得ぬ事に思ひて、(略)。
十一72 8 或夜小僧住持の居間に來
りて、(略)。

十一73 7 住持は知らぬ顔して過せ

しに、(略)。

十一73 10 夜明けて後、住持畫工に

向ひて、(略)。

十一74 8 (略)、又再び引返して一

國寺に歸れり。住持は驚きて、(略)。

じゅうじがいとう「十字街頭」(名) 1

十字街頭

十一60 5 されど十字街頭に立て

る巡查の一擧手の合圖に、通行の人

は行くも止るも唯其の命に従ひて、

(略)。

じゅうじかん「十時間」(名) 1 十時間

十一70 10 例へば六十人の集會に其

の中の一人若し十分を後とせば、

六十人の時間の損失は合して十時間

となるべし。

じゅうじけい「十字形」(名) 1 十字形

九8 9 葉や大根ノ花ヲ見ルト、瓣ガ

四ツ揃ツテ、十字形ニナツテキル。

じゅうじごじょう「十四五丈」(名) 1

十四五丈

十一76 6 霧降瀧は上下二層に分

れ、高さ各十四五丈、(略)。

じゅうしごにち「十四五日」(名) 1

十四五日

五33 2 ソレカラ十四日タツテツム

ノヲ二番茶トイヒマス。

じゅうしごねん「十四五年」(名) 1
十四五年
十一115 4 十四五年の後には村民は
教育の爲、一厘の支出を要せざるに
至るべし。

じゅうじごころ「十時頃」(名) 1 十時頃

十二78 10 十時頃はるかに一點の燈

火をみとめしが、(略)。

じゅうしさい「十四歳」(名) 1 十四歳

十二74 5 (略)、十四歳の時より

既に航海業に従事せるコロンブスは

(略)。

じゅうじす「従事」(サ変) 7 従事ス

従事す『ス・スル・セ』

十一69 6 業務に従事する間は熱心

に之を行ひて、他事に心を勞すべか

らず。

十一93 8 (略)、又他の職業に従事

する人も靴屋の利益あるを見て、之

に轉業するに至るべし。

十二47 1 農業に従事するものは多

く野外にありて、清潔なる空氣を呼

吸し、筋肉を勞するが故に、身體常

に健全なり。

十二51 7 故ニ商業ニ従事スルモノ

ハ常ニ花客ノ嗜好ヲ考ヘ、流行ノオ

モムク所ヲ察セザルベカラズ。

十二53 8 商人ハ軍人ノ戦場ニ立ツ

ト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以

テ、平和ノ戦争ニ従事スベシ。

十二73 8 快活なる精神を以て熱心

に其の事業に従事せば、天下何事か

成らざるを憂へん。

十二74 5 図 (略)、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンブスは(略)。

じゅうしち「十七」(課名) 10 十七

ひだいじゅうしち・だいじゅうしちか

二目7 十七 天ジン サマ

二四4 十七 天ジン サマ

三目5 十七 ほしとり

三目7 六 ヒバリ……十七

三四5 十七 ほしとり

四目5 十七 白ウサギ (一)

四52 2 十七 白ウサギ (一)

六目7 第六 物サシトマストハカリ

……十七

十目7 第六課 本……十七

十一目6 第五課 瀬戸内海……十

七

じゅうしち「十七」(名) 1 十七

ひじゅうがつじゅうしちにち・じゅう

にがつじゅうしちにち

五77 3 図 「年はいくつか。」と問へ

ば、「十七。」と答へた。

じゅうしちさい「十七歳」(名) 2 十

七歳

九24 2 図 我が國は國民皆兵なり、男

子は十七歳より四十歳までの間、何

れも兵役に服する義務あり。

十二93 9 図 是孔子が十七歳の時なり

き。

じゅうじつ「終日」(名) 3 終日

九72 7 図 (略)、二十八日は終日大

暴風雨にて、(略)。

十一5 10 図 終日労働して、一群の生

計を維持するものは働蜂なり。

十一46 9 飲まず食はずに終日・終夜

走つても尚平然として居るといふこ

とである。

じゅうしち「舟車」(名) 1 舟車

十一24 8 図 上古の舟車と今日の汽車

・汽船とをくらべんには、誰か人智

の進歩の大なるに驚かざらん。

じゅうしち「從者」(名) 1 從者

十二39 1 図 相如の從者皆之を恥づ。

じゅうしち「重傷」(名) 1 重傷

八90 7 軍曹ハ自分ノ重傷ヲモウチ忘

レテ、アランカギリノ力ヲツクシタ

ガ、(略)。

じゅうしち「就職」(名) 1 就職

十二112 2 図 上元帥より下一卒に至る

まで、官職の高下、就職の新舊によ

りて上下の分別最も正し。

じゅうしん「修身」(名) 4 シウシン

修身

二48 3 一サツハシウシンノ本、

(略)。

十一118 4 図 修身の徳是なりと、教

育勸語のり給ひ、(略)。

十二116 7 図 平常質素を旨とすべきは

修身・處世の上に於て何人にも最も

大切なこと言を待たず。

十二116 9 図 誠の一字之を貫くは、あ

らゆる修身の徳を一言にて盡し給へ

るものといふべし。

じゅうしん「終身」(名) 1 終身

十二106 9 図 第三種・第五種の議員の

任期は七箇年とし、其の他は終身と

す。

じゅうじん「衆人」(名) 2 衆人

八93 3 図 東海道の旅行中、最も多く

衆人の目をひくものは、(略)。

十二98 5 図 公德とは(略)等、總べ

て衆人の利害を考へて其の行爲をつ

ゝしむ徳義をいふ。

じゅうしん「重臣」(名) 2 重臣

十一102 7 図 此ノ時諸葛孔明トイフ人

アリ、(略)、劉備ハ三度マデモ其ノ

イホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセ

リ。

十二93 6 図 魯の重臣某の病死せんと

せし時、(略)。

じゅうしん「獸心」ひじんめんじゅうし

ん

じゅうじんぐんじゅう「衆人群集」(名)

1 衆人群集

十二99 1 図 衆人群集の場處にて他人

をおしのけ、(略)。

じゅうしん「修身書」(名) 1 修

身書

十二117 4 図 我等は修身書に於て、歴

史に於て、讀本に於て、既に祖先の

事蹟を學び得たること多し。

じゅうす「住」(サ変) 3 住す

シースルーセ

九62 2 図 蝦夷は東北の地に住して、

叛服常ならず、(略)。

十79 5 図 是は北海道に住するあいぬ

人を畫がけるものにて、(略)。

十二68 8 図 (略)露西亞及びシベリ

ヤの寒き平地に住せるレミングと稱

する地鼠の一種なり。

じゅうすい「臭水」(地名) 1 臭

水子

十二56 5 図 旅順線は大連の次驛臭水

子より分れて、(略)旅順口に達す。

じゅうすうだい「十数台」(名) 1 十

數臺

十二63 3 図 壯麗なる馬車・自動車の

多きは巴里を第一とし、(略)、殊に

公園・廣小路の如きは、十數臺列を

なして前後相接す。

じゅうすうほん「十數本」(名) 1 十

數本

十一86 7 図 上手ナル者ハ一分時ニヨ

ク十數本ノ絲ヲツナグトイフ。

じゅうせい「銃聲」(名) 3 銃聲

八91 2 図 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ

聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見

事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタト思へ。

八91 5 図 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、

砲聲・銃聲ガツクヤウナラ、(略)。

八92 1 (略)、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ

起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

じゅうぜん「修繕」(名) 2 修繕

十二15 7 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等

ヲスル處ヲ船渠トイフ。

十二77 7 図 (略)、こゝにて船體に修

繕を加へ、九月六日更に西へ向つて

航行せり。

じゅうだい「重大」(形状) 1 重大

十二109 1 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、(略)。

じゅうたいす「獸待」(サ変) 1 獸待す「一セ」

十二87 8 國 我が目、獸として良雄を視、(略)。我が心の良雄を獸待せしは罪死に當れり。」

じゅうちゅうす「集中」(サ変) 1 集中す「一セ」

十二5 2 國 我が海軍は(略)、全力を朝鮮海峡に集中せしが、(略)。

じゅうとう「周到」(形状) 1 周到

十二36 6 國 本校舎ノ建築ハ(略)、實用ニ重キヲ置キ、其ノ注意ノ周到ナル、縣下マレニ見ル所ナルベシ。

じゅうに「十二」(課名) 10 十二号だ

いじゅうに・だいじゅうにか

二目 2 十二 シンネン

二目 7 六 カハ……十二

二目 27 5 十二 シンネン

三目 13 十二 ほたる

三目 34 6 十二 ほたる

四目 13 十二 サザエノジマン

四目 37 8 十二 サザエノジマン

六目 5 第四 ガン……十二

七目 5 第四 商業問答……十二

九目 6 第五課 註文狀……十二

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

じゅうに「十二」(名) 4 十二 12

んじゅうがつじゅうににち・じゅうにがつじゅうににち・じんじょうしよう

がくときほんまきじゅうに・だいじゅうにず・だいじゅうにだい・やはんじゅうにじぜん

四46 國 XII

九40 國 12

九43 7 國 祖父様は(略)、はや朝顔のはちをならべて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。

十二36 9 國 教場ノ數ハ十二、(略)、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。

じゅうにおくえん「十二億圓」(名) 1

十二億圓

十二52 9 國 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、一箇年實ニ十二億圓ノ多キニ達ストイフ。

じゅうにかげつ「十二箇月」(名) 1

十二ヶ月

六6 7 國 一年ニハ十二ヶ月アリ。

じゅうにがつ「十二月」(名) 1 十二月

六7 4 國 十二月ノ初ヨリアクル年ノ二月ノ終マデハ冬ナリ。

じゅうにがつじゅういちにち「十二月十一日」(名) 1 十二月十一日

六36 7 國 十二月十一日 月曜 雨

じゅうにがつじゅうごにち「十二月十五日」(名) 1 十二月十五日

六38 3 國 十二月十五日 金曜 晴

じゅうにがつじゅうさんにち「十二月十三日」(名) 1 十二月十三日

六37 5 國 十二月十三日 水曜 曇

じゅうにがつじゅうしちにち「十二月十七日」(名) 1 十二月十七日

六38 7 國 十二月十七日 日曜 晴

じゅうにがつじゅうににち「十二月十二日」(名) 1 十二月十二日

六37 2 國 十二月十二日 火曜 晴

じゅうにがつじゅうよつか「十二月十四日」(名) 1 十二月十四日

六37 8 國 十二月十四日 木曜 雪

じゅうにがつじゅうろくにち「十二月十六日」(名) 2 十二月十六日

六38 6 國 十二月十六日 土曜 雨

六41 4 國 十二月十六日 父より

郎どの お花どの

じゅうにがつとおか「十二月十日」(名) 1 十二月十日

六35 8 國 十二月十日 日曜 晴

じゅうにく「獸肉」(名) 1 獸肉

十一65 5 國 寒イ時ハ(略)、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。

じゅうにさんさい「二十三歳」(名) 1

二十三歳

じゅうにさんさい「二十三歳」(名) 1

十一112 4 國 又麥稈稈田を編み、花筵を織ること行はれ、二十三歳の少女も手を空しうする者なきに至れり。

じゅうにさんび「二十三尾」(名) 1

二十三尾

十一81 6 國 (略)、大なる鵜は能く

十二三尾のあゆを喉元にふくむといふ。

じゅうにじ「十二時後」(名) 1 十二時後

九60 5 國 「夜半十二時前一時間の眠は、十二時後二時間の眠にまさる。」といへり。

じゅうにじよう「十二条」(名) 1 十二條

十一80 5 國 鵜匠は一人にて十二羽の鵜を使ひ、十二條の細なはを片手に握り、(略)。

じゅうににち「十二日」(名) 1 十二日

九35 7 國 昔東海道といつたのは(略)。一日の旅程を十里づつと見て、十二日程かつた。

じゅうににちづけ「十二日付」(名) 1

十二日附

九42 10 國 十二日附の御手紙今朝到着拜見仕候。

じゅうににん「十二人」(名) 1 十二人

九32 2 國 (略)乗船したものは僅か十二人に過ぎなかつた。

じゅうにばく「雌雄二瀑」(名) 1 雌雄二瀑

十一77 4 國 神戸市に近き布引瀧は雌雄二瀑あり。

じゅうにはこ「十二箱」(名) 1 十二箱

十一9 6 國 (略)揃へて箱二入レル者、十二箱ツツ集メテ紙二包ム者、皆ソレハニチガフ。

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

じゅうにゅう「収入」(名) 1 収入

母のうさんしゅうにゆう
 十二921 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、(略)。
 しゅうにゆうちゆう「収入中」(名) 1 收入中
 九78 〇 サレバ平生ノ收入中ヨリ成ルベク無用ノ入費ヲハブキテ、(略)。
 じゅうにりくちよう「十二里九町」(名) 1 十二里九町
 十二425 阿蘇山は(略)。(略)、東西十二里九町、南北十一里半に達せり。
 じゅうにわ「十二羽」(名) 1 十二羽
 十一805 鵜匠は一人にて十二羽の鵜を使い、(略)。
 じゅうにん「住人」(名) 1 住人
 十504 〇 かく申すは信濃の國の住人、手塚太郎光盛なり。
 じゅうにんといる「十人十色」(名) 1 十人十色
 六72 〇 十人十色と申しますが、(略)、顔のちがふやうに、せいしつも色々かはつてゐます。
 じゅうねん「十年」(名) 1 十年
 九761 〇 一日二錢・二錢ツツニテモ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニハ、餘程ノ金高トナリテ、(略)。
 じゅうばい「十倍」(名) 3 十倍
 六176 〇 尺ノ十倍ヲ丈、(略)。
 六188 〇 升ノ十倍ヲ斗、(略)。
 六191 〇 (略)、斗ノ十倍ヲ石トイヒ、(略)。

じゅうばこ「重箱」(名) 1 重箱
 七347 〇 (略)、ぜん・わん・ぼん・重箱などはぬり物なり。
 じゅうはち「十八」(課名) 9 十八
 〇 だいじゅうはち・だいじゅうはちか
 二目8 十八 ワタクシノホン
 二481 十八 ワタクシノホン
 三目6 十八 かへる
 三473 十八 かへる
 四目6 十八 白ウサギ (二)
 四565 十八 白ウサギ (二)
 五目9 第八 母の手つだひ……………十八
 八
 八目8 第七 白雀……………十八
 九目8 第七課 水兵の母……………十八
 じゅうはち「十八」(名) 2 十八
 〇 だいじゅうはちしだん
 六456 年が十八のころです、木下藤吉郎秀吉と名のつて、織田信長にかへました。
 九40 〇 十八
 じゅうはちしだん「十八個師團」(名) 1 十八箇師團
 九271 〇 (略)、我が國の陸軍は(略)、三十七八年の戦役後は第一師團より第十八師團に至る十八箇師團、外に近衛師團を合せて十九箇師團となれり。
 じゅうぶん「十分」(形状) 7 十分
 〇 じゅうぶん
 六156 〇 それで取入れの時は大へんにいそがしくて、夜も十分に眠れない

ほどです。
 九439 〇 又御宮裏の田も、本年は水も十分に御座候間、(略)。
 十188 〇 たくさんの本を讀んだ學問の深い人でも、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。
 十一273 〇 帆の運用自在なれば、風の方角に關らず、十分に風力を利用することを得。
 十二113 〇 能く義理をわきまへ、精神を修養し、(略)、十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。
 十二113 〇 故に十分に信義を盡さんと思はば、豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。
 十二115 〇 太古以來忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、古來の歴史上の事蹟は十分に之を證明せり。
 じゅうぶんのいち「十分一」(名) 7 十分一
 六176 〇 (略)、尺ノ十分ノ一ヲ寸、(略)トイフ。
 六177 〇 (略)、寸ノ十分ノ一ヲ分、(略)トイフ。
 六177 〇 (略)、分ノ十分ノ一ヲ厘トイフ。
 六192 〇 (略)、升ノ十分ノ一ヲ合、(略)トイフ。
 六192 〇 (略)、合ノ十分ノ一ヲ勺トイフ。
 六192 〇 (略)、合ノ十分ノ一ヲ勺トイフ。

イフ。
 六198 〇 (略)、夕ノ十分ノ一ヲ分、(略)トイフ。
 六201 〇 (略)、分ノ十分ノ一ヲ厘トイフ。
 じゅうほうしゃ「重砲車」(名) 1 重砲車
 十一291 〇 重砲車の如きは十頭の馬をして引かしむ。
 しゅうみつ「周密」(形状) 1 周密
 十592 〇 中隊長殿の何事にも注意の周密なるは隊中一同感謝致し居り候。
 じゅうみん「住民」(名) 1 住民
 十一404 〇 全島の住民は約三百餘萬と申候。
 しゅうや「終夜」(名) 1 終夜
 十一469 〇 飲まず食はずに終日・終夜走つても尚平然として居るといふことである。
 じゅうよう「重要」(形状) 5 重要
 八411 〇 (略)、我が國輸出品中ノ重要ナルモノノ一ツトナレリ。
 九274 〇 師團司令部のある所は東京・大阪・名古屋・廣島・熊本等軍事上重要な地なり。
 十776 〇 スベテ重要ナル機關アル部分ハ、殊ニ強堅ナル骨ニテ包マレタリ。
 十二375 〇 會津は奥羽重要の地にして、一日も守なかるべからず。
 十二551 〇 滿洲内地屈指の市場にし

て、我が駐劄軍の重要な駐劄地なり。

しゅうようす【修養】(サ変) 1 修養す『一シ』

十二113【図】能く義理をわきまへ、精神を修養し、(略)、十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。

じゅうようか【十四日】(名) 1 十四日 じゅうようががつじゅうようか

十二28【図】時は十四日の月夜なり。

じゅうよにん【十余人】(名) 1 十餘人 十二29【図】翌日壯士十餘人、勝商を圍みて城門に到る。

じゅうよねん【十餘年】(名) 1 十餘年 十24【図】十餘年後、我マタ汝ヲ見ルベシ。」

じゅうり【十里】(名) 2 十里 九35 昔東海道といつたのは(略)。

一日の旅程を十里づつと見て、十二日程かゝつた。

十一97【図】(略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、鈴谷川平野の中央に位し、大泊より十里、輕便鐵道も出來居候。

じゅうりょう【十兩】(名) 2 十兩 七40【図】「その馬の直はいか程ございます。」「金十兩。」

七40 妻は立つて、鏡箱の中から十兩の金を出して、「(略)。」

じゅうるい【獸類】(名) 2 獸類 八73【図】(略)、クビ太ケレバ、他ノ

獸類ヲトラヘタル時、之ヲ運ビ去ルニ便ナリ。

十二20 鳥ばかりではない、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。

じゅうるいちゅう【獸類中】(名) 2 獸類中

十67 鯨は獸類中最も大きなもので、(略)。

十二67【図】(略)、獸類中にも食物を求め、氣候を追ひて、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。

じゅうるいのいじゅう【課名】2 獸類の移住

十二目4 第十七課 獸類の移住 十二65 第十七課 獸類の移住

じゅうろく【十六】(課名) 9 十六 じゅうろくじゅうろく・だいじゅうろつか

二目6 十六 ユキダルマ 二目9 八 キノハ……十六

二40 十六 ユキダルマ 三目4 十六 四方

三44 十六 四方 四目4 十六 ナゾ

四50 十六 ナゾ 八目7 第六 松下禪尼……十六

十二目5 第四課 天氣豫報及び暴風雨警報……十六

じゅうろく【十六】(名) じゅうろくにがつじゅうろくにち・やくじゅうろくじよう

じゅうろくおく【十六億】(名) 1 十

六億 八83【図】地球上に住む人類は總數十六億ありて、其の人類はさまざまなり。

じゅうろくにち【十六日】(名) 1 十六日 十二29【図】十六日勝商は再び山上にのろしをあげ、(略)。

しゅか【主家】(名) 1 主家 十二86【図】「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、(略)。」

じゅぎよう【授業】(名) 1 授業 八14 學校デハモウ授業ガハジマツタ。

じゅくい【祝意】(名) 1 祝意 十二36【図】コ、二本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、(略)。(略)。

謹ンデ一言ヲノベテ祝意ヲ表ス。 じゅくえん【祝宴】(名) 1 祝宴

十一62【図】拜啓、老父事本年滿六十歳に相逢候に付、來る七月二日の誕生日を以て、親族一同打寄り、心ばかりの祝宴相開き、(略)。

じゅくじつ【祝日】(名) 1 祝日 十58【図】外出日は日曜日・祝日及び大祭日にて、(略)。

じゅくず【縮図】(名) 1 縮圖 十二11 其ノ圖ハ船ノ切斷面及び構成等ヲ何十分ノ一ニシタ縮圖デ、(略)。

じゅくす【熟】(サ変) 3 熟す『一

シースル・ーセ』

九58【図】熱せざるくだ物、生にえの肉、くさりたる魚などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

十一90【図】一種の草の實を食用とするを以て、(略)、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

十二67【図】南亞米利加之森林にオレシンの熟する季節には、數多の猿遠く數百里の地より集り來りて之を食ひ、(略)。

じゅくする【熟】(サ変) 6 じゅくする 熟スル 熟する『一シースル』

六14 (略)、稻がよくじゅくして、重さうにほをたれてゐます。

七63【図】桃がじゅくしましたから、少しばかりですが、差上げます。

八63 綿ノ木ハ(略)。(略)、九月カラ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマス。

八63 實ガ熟スルト、サケテ中カラ白イ綿ガハミ出シマス。

九68 梅の實の熟する頃降續く五月雨は、(略)。

十二20 又ひよやつぐみは美しく熟してある果實をついばむ。

じゅくば【宿場】(名) 1 宿場 九35 昔東海道といつたのは(略)、其の間に五十三次といつて、重要な宿場が五十三あつた。

じゅくはくす【宿泊】(サ変) 1 宿泊ス『一スル』

九39 2 図 箱根山ハ (略)。(略)。

(略)、諸大名其ノ他旅客ノ宿泊スルモノ多ク、(略)。

しゅくぶん「祝文」(名) 1 祝文

十二35 4 (略)、今新校舎ノ出来上ツタノハ眞ニ慶賀スベキ事デアル。郡

長ハ左ノ祝文ヲ讀ンダ。

じゅくれん「熟練」(名) 1 熟練

十一86 5 図 工女ハ (略)、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。熟練ト機敏トヲ要スルコト

大ナリ。

じゅくれん「熟練」(形状) 2 熟練

十一89 8 図 熟き地方の白蟻ハ (略)小山の如き巢を造り、木質にて内部を圍むといふ。熟練なる土木技師ともいふべし。

十二6 8 図 風號び海怒りて、波浪山の如くなれども、熟練なる我が砲手は物ともせず、打出す砲彈よく命中して、(略)。

じゅくれん「する」(熟練) (サ変) 1 熟練スル 《一スル》

十一10 8 又毎日同ジ仕事ヲク리카ヘスカラ、誰モ早く其ノ仕事ニ熟練スル。

しゅくん「主君」(名) 2 主君

十一41 7 図「正儀は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。

十二85 8 図 赤穂浪士が (略)、遂に主君の仇を報じて、従容死に就けるは (略)。

しゅこう「主公」(名) 1 主公

十二27 6 図 信昌將士を集めていふやう、(略)。城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なしか。」と。

しゅごす「守護」(サ変) 1 守護す

九64 2 図 之をほうむりし時は、よろひ・劔・弓・矢等を共にをさめ、かばねを宮城の方に向ひて立たせ、ながく皇城を守護せしめたりといふ。

しゅさんち「主産地」(名) 2 主産地

十一98 6 図 練の主産地は西海岸及び亞庭灣、(略)。

しゅざんぼう「首山堡」(地名) 2 首山堡

十一99 1 図 海岸にて、(略)。蜂の主産地は東

十二55 1 図 其の西南なる首山堡は高さ僅かに三百餘尺の小山なれども、遼陽防備の要害地にして、明治三十七八年戦役激戦地の一なり。

しゅし「種子」(名) 3 種子

十二57 図 首山堡

十83 1 図 (略)、農業を營まんとするものには土地を與へ、農具・種子等を給し、(略)。

十二20 9 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。それが爲におのづと種子をあちらこちらへ散布する。

十二20 10 (略)、人や獸類も果實をた

べては其の種子を方々へまき散すのである。

じゅしゃ「儒者」(名) 1 儒者

十二88 3 図 事幕末の儒者林鶴梁の作れる烈士喜劔碑の文にくはし。

しゅじゅ「種」(名) 21 種々

六54 7 図 砂糖ハ種々ノモノヨリトレドモ、砂糖キビヨリツクレルモノ多シ。

七54 7 図 上野公園ニハ廣キ動物園アリテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メタリ。

七56 7 図 淺草公園ニハ種々ノ見セ物アリ。

七58 2 図 コノ公園ハ (略)、種々ノ草花ウルハシク咲キミダレタリ。

八44 1 毎日の食物のたきから種々の工業まで、火の力を要することは數へきれない程多い。

九30 2 図 春秋兩度ノ大祭ニハ (略)、種々ノ餘興モ行ハレテ甚ダニギヤカナリ。

九66 6 図 又人は空氣を動かし、風を起して、種々の用に供す。

十7 2 ソノ派ニモ亦種々アル。

十8 1 葉ノ莖ニ附ク様子ニモ種々アル。

十47 7 図 若し此の模様は種々の色どりを加ふるときは、一層其の美しさを増すべし。

十48 3 図 色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。

十49 10 図 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、(略)。

十62 6 図 選鑄場ニハ種々ノ機械アリ、(略)。

十72 6 図 是種々の塩分をふくめるが故なり。

十76 6 図 此ノ外腹ニハ種々ノ内臟アリ。

十一10 10 分業法ニ依ラズ、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト (略)。

十一28 10 図 軍事に用ふる車には、砲車・材料車・輜重車等種々あり。

十一66 10 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ・洗ヒ流シヲスル所デアルカラ、(略)。

十一89 4 図 蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、(略)。

十二22 5 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、他にも種々の原因もあるが、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

しゅしょう「首相」(名) 1 首相

十一103 3 図 孔明、劉備ニ事へ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、(略)。

しゅじょう「主上」(名) 4 主上

十一13 9 図 (略)、主上尚笠置におはしませし時、早くも義兵を擧げしが、(略)。

十一142 然るに今、主上隠岐に遷され給ふと聞き、(略)。

十一155 (略)、主上はや院庄に入らせ給ひぬと申す。

十一163 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

しゅじん「主人」(名) 13 主人、しゅじん・ごしゅじんさま・こぞうからしゅじんへ

六298 ある日主人は朝から用たしに出たので、二人が店のるすをしてゐると、(略)。

六328 あとになつて、主人はこの事を聞いて、(略)。

六472 少しのゆだんもなく主人に仕へるこゝろざしにかんしんして、これから信長は目をかけて使ひました。

六765 羽織・はかまの主人は一同に向つて、うれしさうに、「どうも御苦勞、御苦勞。」とあいさつしました。

七426 あなた様にも、その折にはよい馬にめして、主人のお目にとまるやうになされるのが大事と考へまして、(略)。

七615 すべて犬は人になれ易く、かしこくして、よく主人の命を守る。

七627 二三匹の犬、よく二三百頭の牛、二三千頭の羊を追ひまはして、主人の行く方へ行かしむといふ。

八249 此の下女は毎朝かうして、主

人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。

十345 外國の或商會で(略)。(略)、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。

十347 或人が主人に向つて、(略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十3410 主人は答へて、(略)。

十二818 忠實な犬は古帽子をくはへて、あはれな主人の爲に、(略)喜捨を待ちわびてゐる。

十二868 「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、(略)。

しゅじんからこぞうへ「題名」1 主人から小ぞうへ

八682 二、主人から小ぞうへ

じゅしんにん「受信人」(名) 1 受信人

八48 発信人の居所氏名を受信人に知らせんとする時は(略)

じゅしんにんきよしよしめい「受信人居所氏名」(名) 2 受信人居所氏名

八48 受信人居所氏名

八48 (略)又は受信人居所氏名の下に片假名にて記すべし

しゅせんかんだい「主戦艦隊」(名) 2 主戦艦隊

十二611 (略)、東郷司令長官は三笠以下六隻の主戦艦隊を率ゐて、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。

十二82 によりて主戦艦隊及び巡洋艦隊は東方に向つて、其の進路をふさぎ、(略)。

しゅだん「手段」(名) 3 手段

十二526 廣告ハ商業發展ノ有力ナル手段ナリ。

十二5210 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、(略)。

十二1039 まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、(略)。

しゅちようす「主張」(サ変) 1 主張

す「一シ」

十二762 コロンブスは葡萄牙に客遊中、熱心に此の説を主張したりしが、(略)。

じゅつか「術科」(名) 5 術科

十573 課業は術科と學科との二つにて、(略)。

十573 術科は午前・午後を通じて、四時間より六時間、(略)。

十576 此の頃の術科は分隊教練にて、(略)。

十578 學科は讀法の講義及び毎日の術科に關する説明に御座候。

十5710 小生の如く平素勞働になれたる者には、術科もつらきことはこれなく、(略)。

じゅっこう「熟考」(名) 1 熟考

十926 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、(略)、何れ熟考の上實行せんと申合せ居り候事とて、(略)。

じゅっこうす「熟考」(サ変) 1 熟考

す「一シ」

十二1138 初より事の順逆・理非を熟考して、小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

しゅつじん「出陣」(名) 1 出陣

八848 (略)、中佐ハ今度ノ出陣ヲ幸ニ、帝國ノタメ、天皇陛下ノ御タメニ、メザマシイ働ヲシナケレバナナイト、(略)。

しゅつすい「出水」(名) 1 出水

九712 連日の大雨に候へば、(略)、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由承知致し(略)。

しゅつせ「出世」(名) 2 シュツセ

五185 鯉ガタキヲ上ルヤウニ、ズンズンシュツセヲセヨトイフ心デ祝フノデセウ。

七442 (略)、信長は大そう感心して、これが一豊の出世のもとになつたといふことであります。

しゅっせいへいし「出征兵士」(課名) 2 出征兵士

十一15 第十四課 出征兵士

十一593 第十四課 出征兵士

しゅっせいへいし「出征兵士」(名) 1

出征兵士

十一608 出征兵士の弟ぞ、我は。

しゅったつ「出立」(サ変) 3 出立

す「一シ―セ」

九455 阿リは(略)駱駝に乗り、

(略)隊商と共に出立したり。

九471 (略)翌日風なきて出立し

たれども、一同は行くべき方にまよ

ひて、(略)。

十一746 (略)畫師(略)唯櫓

一本を畫がきて、東國へ出立せり。

しゅったつ「出立」(サ変) 1 出

立する「一スレ」

九358 それが今は朝の急行列車で東

京を出立すれば、晩にははや京都に

着くことが出来る。

しゅっちよういた「出張」(四) 1

出張致「一シ」

十一372 先月は官命により南部

地方へ出張致候。

しゅつどう「出動」(名) 1 出動

十二55 東郷司令長官は直ちに全

軍に出動を命じ、(略)。

しゅつにゅう「出入」(名) 1 出入

六818 港ニハ船ノ出入シゲク、停

車場ニハ汽車ノ發着タエズ。

しゅっぱつ「出発」(名) 2 出発

十二189 故に今より出帆せんと

する船は、之を見て出發を見合せ、

(略)。

が遠征隊出發の日なりとて、(略)。

しゅっぱつ「出発」(サ変) 2 出發

す「一セ」

十二291 我、明日大軍を率ゐ

て出發せんとす。

十二301 徳川・織田二公大軍を

率ゐて、既に出發せらる。

しゅっぱつてん「出発点」(名) 1 出

發點

八805 (略)若し平たき物ならば、

行けば行く程出發點に遠ざかるべき

はずならずや。

しゅっぱん「出帆」(名) 1 出帆

十二803 かくてコロンブスは報告

の爲、西班牙に歸航せしが、パロス

港の群集は出帆の日に數倍し、(略)。

しゅっぱんあいなる「出版相成」(四)

1 出版相成「一リ」

十一409 當總督府にて出版相

成候臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候

間、(略)。

しゅっぱん「出帆」(サ変) 2 出帆

す「一シ―セ」

十二188 故に今より出帆せんと

する船は、之を見て出發を見合せ、

(略)。

十二776 パロスを出帆して七日目

に、(略)カナリヤ島に着し、(略)。

しゅっぱん「出帆」(サ変) 1 出

帆スル「一スル」

六787 汽船ハシキリニキテキ

ヲ鳴ラシテキル。今ニ出帆スルノデ

アラウ。

しゅっぱ「出費」(名) 1 出費

十二92 其の上不時の出費の爲、

多少の準備を爲し置くを必要とす。

しゅっぱつ「出沒」(サ変) 1 出沒

す「一スル」

十一1910 (略)漁火の波間に出現

する夜景も亦一段のおもむきあり。

しゅとして「主」(副) 8 主トシテ

主として

九896 今ノ文明諸國ノ貨幣ニハ主

トシテ金銀ヲ用フ。

十一315 (略)全國到處ニ作ラル

、ニ至リシハ、主トシテ井戸平左衛

門ト青木昆陽トノ盡力ニヨル。

十一341 通報艦ハ主トシテ艦隊ノ

命令・報告等ヲ傳達シ、或ハ敵ノ軍

艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が

艦隊ニ報告ス。

十一3710 茶は主として北部に産

し候。

十一918 物の價の高下は主として

需要と供給との關係によりて定まる

ものなり。

十一100 羅シヤにて早くより開

拓に力を用ひたるは主として五十度

以北に候。

十一104 蜀國ノ(略)常ニ其ノ

勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ

力ニヨレリ。

十一107 家の構造は主として寒さを

防ぐ様に出来てゐる。

しゅぬり「朱塗」(名) 1 朱塗

九938 其の上にかゝれる朱塗の

橋、美觀先づ目を驚かす。

じゅばん「襦袢」(名) 1 ジュバン

三571 コノ赤イジュバン ハイモ

ウトノデス。

しゅふ「主婦」(名) 5 主婦

十二89 (略)諸道具の置場處を

一定し、前後左右次第よく並べて、

(略)極りよく整へ置くは主婦たる

者の務なり。

十二901 主婦は寢に就く前、先づ

竈の下より火消盡までもよく検査し

て、戸締を爲すと共に火の用心を忘

れざる様にすべし。

十二911 主婦は老人にいたはりか

しづく外、幼児を育て上ぐる大任あ

り。

十二915 (略)子供の行儀・作法

等につきては、主婦たる人の責任最

も重し。

十二916 主婦は又常に家庭和樂の

中心となりて、家内一同を樂しまし

むべし。

しゅふ「首府」(名) 5 首府

八774 イギリスは(略)首府ロ

ンドンは世界の都市中にて、人口最

も多きところなり。

八789 フランスは(略)首府を

パリといひ、世界中最も美しき都

なり。

十二601 (略)伯林は(略)。然

れども近年獨逸國力の盛に發展すると共に、首府の人口も年々著しく増加する勢なれば、(略)。

十二65 獨逸帝國は創建以來年尚淺ければ、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは(略)。

十二81 處は埃太利の首府維也納の大公園、(略)。

しゅふのつとめ〔課名〕2 主婦の務

十二目9 第二十二課 主婦の務

十二88 第二十二課 主婦の務

しゅほ〔酒保〕(名) 1 酒保

十二58 兵營内の酒保には日用品・飲食物等を販賣致し居り候へば、(略)。

しゅぼう〔主謀〕(名) 1 主謀

十二87 喜劇(略)、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

じゅもく〔樹木〕(名) 3 樹木

十二80 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。

十二11 近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ることを禁ぜり。

十二98 公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、(略)。

しゅよう〔主要〕(形状) 1 主要

十二107 帝國議會の主要なる任務

は法律及び歳出・歳入の豫算を議定するにあり。

じゅよう〔需要〕(名) 4 需要

十一91 物の價の高下は主として需要と供給との關係によりて定まるものなり。

十一91 しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。

十一94 例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、需要増すに隨ひて、其の價益々高くなり、(略)。

十一94 需要の減ずるに非ざるよりは、決して安くなることなきなり。

じゅようききゅう〔需要供給〕(名) 3 需要供給

十一93 物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、(略)。

十二51 内國ノ商業モ、海外ノ貿易モ、(略)、需要供給ノ原則ニヨリテ物價ノ高下スルモ亦相同ジ。

十二51 故ニ商人ハ常ニ全世界ニ於ケル物價ノ高低ニ注意シ、需要供給ノ情況ニ精通スルヲ要ス。

じゅりようす〔受領〕(サ麥) 1 受領す〔一七〕

十一41 軍のおきてにしみたひて、他日我が手に受領せば、なみくいたそり羞はん。

しゅりよく〔主力〕(名) 3 主力

九24 歩兵は戦争の主力にして、其の數最も多し。

十一33 時ニ戰艦ト合同シテ敵ノ主力ト戰フコトアリ。

十二6 東郷司令長官は(略)、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。

しゅるい〔種類〕(名) 9 種類

七18 花の種類は何でもよろしうございます。

七59 犬の種類はすこぶる多し。

九88 或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。貨幣即チ是ナリ。

十六 普通ノ葉ヲ單葉トイヒ、此ノ種類ノ葉ヲ複葉トイフ。

十一24 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形狀も様々なり。

十一64 材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨリ考ヘナケレバナラス。

十一89 蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、(略)。

十一99 農産物の種類は(略)、大麥・小麥・燕麥・裸麥・蠶臺・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、(略)。

十二18 信號は警報の種類によりて異なり。

しゅれん〔手練〕(名) 1 手練

十一80 鵜匠は一人にて十二羽の鵜を使ひ、(略)、たくみにさばきてもつれしめず。此の間に鵜を引上げて呑みたる魚を吐かせ、再び之を水に放ち、又かぎり火に薪を添ふるなど、其の手練實に驚くべし。

しゅんか〔春夏〕(名) 1 春夏

十一99 春夏の交産卵の爲、練の群をなして海岸近く寄來る時は(略)。

じゅんぎやく〔順逆〕(名) 2 順逆

十二113 初より事の順逆・理非を熟考して、(略)。

十二113 小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

じゅんさ〔巡查〕(名) 1 巡查

十二60 されど十字街頭に立てる巡查の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、(略)。

しゅんじゅうじだい〔春秋時代〕(名) 1 春秋時代

十二93 孔子は凡そ二千四百六十年前、支那の春秋時代に生る。

しゅんじゅうりょうど〔春秋兩度〕(名) 1 春秋兩度

九29 靖國神社ノ(略)。春秋兩度ノ大祭ニハ必ズ勅使ヲ差立テラレ、(略)。

じゅんばん「順番」(名) 1 順番

十369 図 人が大勢込合つてゐる中で、少しも人に先んじようとはせず、靜かに自分の順番を待つてゐました。

じゅんぴ「準備」(名) 2 準備

十一638 圖 追て準備の都合もこれ有り候間、御來會下され候はば、(略) 御一報下され度候。

十二923 圖 其の上不時の出費の爲、多少の準備を爲し置くを必要とす。

じゅんゆう「巡遊」(名) 1 巡遊

十1031 圖 大和國ハ(略)。名所・舊蹟ヲアマネク尋ネンニハ、幾月ノ巡遊モ尙足ラザル感アルベシ。

じゅんようかん「巡洋艦」(名) 3 巡洋艦

十一317 圖 諸子ハ戰艦・巡洋艦・海防艦・砲艦・通報艦・驅逐艦・水雷艇・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十一324 圖 巡洋艦ハ軍艦中最モ任務ノ多キモノニシテ、戰艦ト共ニ敵ニ當リ、或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ情勢ヲサグリ、或ハ我が運送船・商船ヲ保護シ、或ハ敵ノ運送船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

十一32 圖 巡洋艦筑波

じゅんようかんいかすうせき「巡洋艦以下數隻」(名) 1 巡洋艦以下數隻

十二101 圖 此の兩日の戦に、(略)、三十八隻の中逃げおほせたるは巡洋艦以下數隻のみ。

じゅんようかんたい「巡洋艦隊」(名)

1 巡洋艦隊

十二83 圖 よりて主戰艦隊及び巡洋艦隊は東方に向つて、其の進路をふさぎ、(略)。

じゅんらんする「巡覽」(サ変) 1 巡覽スル「一シ」

十二369 式終ツテ、一同校舎ヲ巡覽シタ。

しよ「所」ひあんざいしよ・いつかしよ・かくしんごうじよ・かくそつこうじよ・かつばんじよ・さいばんしよ・さんじつかしよ・しかしよ・すうかしよ・ぞうせんじよ・そつこうじよ・にじゅうかしよ・ひやつかしよ・ふだし

しよ「書」(名) 5 書ひしゅうしんしよ

十158 圖 紫式部は(略)、兄の書を讀むを聞きあて、直ちに之をそらんじ、少しも忘るゝことなかりしかば、(略)。

十243 圖 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテイフヤウ、「汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、遂ニ王者ノ師タラン。」

十244 圖 汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、遂ニ王者ノ師タラン。

十246 圖 (略)、「(略)。」トテ、其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。

十一6810 圖 我等の周圍には讀むべき書多く、學ぶべき物多く、(略)。

しよ「暑」(名) 1 暑

十752 圖 此の地も亦夏甚だ涼しく

して、暑をさくるによろしければ、(略)。

しよ「署」ひけいさつしよ

しよ「升」(名) 3 升ひなんしよ

六187 圖 カサヲハカルニハ升ヲモトトス。

六188 圖 升ノ十倍ヲ斗、(略)。

六191 圖 (略)、升ノ十分ノ一ヲ合(略)。

しよ「庄」ひいんのしよ

しよ「省」ひかいぐんしよ・のうしよ・むしよ

しよ「將」(名) 4 將

十一10410 圖 (略)、孔明謀ヲ以テ其ノ將ヲ獲テ捕ヘ、(略)。

十二303 圖 昔調伊企つきのいきなは新羅と戦ひて新羅の將に捕へらる。

十二304 圖 其の將伊企いきなをして日本に向つて、「(略)。」と號はしむ。

十二304 圖 「日本の將我がしりを食ヘ。」

しよ「稱」(名) 1 稱

十1007 圖 (略) 談山神社ニ達ス。社殿壯麗ニシテ、關西日光ノ稱アリ。

しよ「小」(形状) 3 小

七598 圖 大なるは小馬の如く、小なるは猫よりも小さし。

十一348 圖 水雷艇ハ形體甚ダ小ナレドモ、速度驅逐艦ニ次ギ、(略)。

十一773 圖 上るに隨つて、瀧はいよく小、境は益々靜かなり。

十一499 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十二464 圖 家畜の飼養に至りては、(略)、善良なる耕作用の牛馬、強健なる軍用の馬匹、滋養に富める乳・肉等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

じよ「上」ひえいせいじよ・ぐんじよ・けいざいじよ・しこうじよ・しょうばいじよ・せいぞんじよ・せかいしじよ・ちきゅうじよ・れきしじよ

じよ「丈」(名) 1 丈ひいくひやくじよ・いちじようろくしやく・ごじようさんじやく・ごすん・さんじようよ・さんびやく・よじよう・しちじようじよ・じゅうごじよう・じゅうしごじよう・なんじゅうじよ・にじゅうくじよ・はちじゅうよじよう・ひやくじよ・やくじゅうろくじよう

六176 圖 尺ノ十倍ヲ丈、(略)。

じよ「条」ひいちじよう・ごかじよう・じゅうじよ・すうじよ

じよ「状」ひおみまいじよ・しよ

じよ「帖」ひたいわんしやしんじよ

じよ「城」ひあかさかじよ・えどじよ・おだわらじよ・ながしのじよ・なごやじよ

じよ「情」(名) 1 情

十一368 圖 北方の臺灣神社ニ參拜

すれば、そゝろに當年を追懷するの情にたへず候。

じょう【場】^{マシ}んばしていしやじょう・せいれんじょう・せんこうじょう・ならていしやじょう・みなみまんしゅうてつどうちゅうおううていしやじょう・れんべいじょう

じょう【錠】(名) 2 錠 錠
十二89 1 錠 (略)、錠を下すべき處には錠を下し、(略)。
十二89 1 錠 (略)、錠を下すべき處には錠を下し、(略)。
じょう【滋養】(名) 2 滋養

十一64 9 衛生上ヨリハ、成ルベク滋養ニ富シテ、コナレノ良イモノヲ選ブベク、(略)。
十二46 6 錠 (略)、滋養に富める乳・肉等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

しょうい【少尉】(名) 1 少尉
九25 10 錠 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

じょういん【乗員】(名) 1 乗員
七91 8 錠 四隻ノ船ハ皆爆沈シテ、乗員ハ思ヒノニコギサラントシ、(略)。

*じょうか【上下】^{ウヘ}じょうげ
しょうか【消化】(名) 1 消化
十一65 9 又魚類ヤ野菜ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

じょうか【城下】(名) 1 城下

十二26 10 錠 (略)、柵を城外に廻らし、柵を城下の河中に張りて、城兵のひそかに逃れ出づるを防ぐ。

しょうかい【商会】(名) 1 商会
十34 4 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。

しょうがい【傷害】(名) 1 傷害
十78 8 錠 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、一少部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關スルモノナレバ、(略)。
じょうがい【城外】(名) 1 城外

十二26 10 錠 (略)、柵を城外に廻らし、柵を城下の河中に張りて、城兵のひそかに逃れ出づるを防ぐ。
しょうがく^{マシ} じょうじょうしやうがくとくほんまききゅう・じんじょうしやうがくとくほんまききゅう・じんじょうしやうがくとくほんまききゅう・じんじょうしやうがくとくほんまききゅう・じんじょうしやうがくとくほんまききゅう

しょうかしやすい【消化易】(形) 1
消化シ易イ『一イ』
十一65 8 (略)、暑イ時分ハ(略)、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

しょうがつ^{マシ} じょうしやうがつ
しょうがっこう【小学校】(名) 1 小学校
十58 1 錠 (略)、又學科も小學校を卒業したる者には餘りむづかしとも覺え申さず候。

しょうがっこうきよういん【小学校教員】(名) 1 小学校教員

十82 6 錠 あいぬの(略)。(略)、今は内地人と同じく、読み書き・計算をもなし得るものあるに至り、中には小學校教員となるものもあり。

しょうかん【小艦】(名) 1 小艦
十二77 2 錠 遠征の船は三隻の小艦にして、乗組總數は一百二十人。
しょうかん【哨艦】(名) 1 哨艦
十二54 4 錠 (略)、哨艦信濃丸は「敵艦見ゆ。」と報告す。

じょうかん【上官】(名) 4 上官
九22 8 錠 將校も兵士も(略)。總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

九26 2 錠 將校には(略)あり。其の下に下士あり、兵卒あり。上下の別明かにして、何れも上官の命令を守るは(略)。
十二112 3 錠 故に下級の者の上官の命を承くるや、直ちに陛下の命令なりと思ふべく、(略)。

十二112 4 錠 (略)、上官の者は常に下級の人をいたはりて、いさゝかも輕侮の念を有すべからず。

しょうかんほうし【正寛法師】(人名) 1 正寛法師
十一46 1 錠 (略)、正儀より賜はりたる名の正寛を其のまゝに正寛法師とする

名乗れり。

じょうき【蒸氣】(名) 1 蒸氣 ^{マシ}かわじょうき・すいじょうき

十二12 9 イヅレモ大規模ニ出來テキテ、盡ク蒸氣ヤ電氣ノ力ヲ利用スル。じょうきかん【蒸氣機關】(名) 3

九30 8 蒸氣機關は二百年程前に發明せられたが、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。
十一27 10 錠 其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へたるを以て、今や列車の速度は一時間七十五哩以上に及ぶものあり。

十一83 10 錠 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、(略)。
じょうきづく【正氣付】(五) 1 正氣

ツク『一イ』
八89 5 (略)、一彈又モ中佐ノ胸ヲツラスキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。二人ハ投げ出サレテユメウツ。二人ハ吹ク朝風ニ正氣ツイタ。
じょうきやく【乘客】(名) 1 乘客

十二101 6 錠 (略)、汽車・電車中に於ける乘客の舉止、(略)等を見れば、(略)、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

じょうぎやう【商業】(名) 9 商業
六80 6 錠 大阪ハ(略)・秀吉コ・ニ城ヲキヅキシヨリ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナレリ。

本として上下すと知るべし。

十一948 物の價はかく上下するものなれども、(略)。

しょうこ「証拠」(名) 1 ショウコ

八728 猫デナイシヨウコニ竹ヲ書イテオキ。」トイフコトアリ。

しょうこ「上古」(名) 4 上古

九284 此ノ神社ノ建テラレタルハ明治二年ニシテ、社殿ハ上古ノ風ヲ

ウツシテ造リ、(略)。

十10210 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、昔ナガラノ山河、一

木・一草盡ク上古ヲ談ゼザルナシ。

十一248 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰か人智

の進歩の大なるに驚かざらん。

十一305 鹿島・香取ハ何レモ上古ノ武神ヲマツレル神宮ノ名ナリ。

じょうこ「漏斗」(名) 1 ジャウゴ

九87 (略)、朝顔ノ花ハジャウゴノ様ナ形ヲシテキル。

しょうこ「將校」(名) 2 將校

九227 將校も兵士も皆一つになつて働かなければならない。

九2510 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

しょうこ「商工業」(名) 3 商工業

八953 (略)、鐵道の開通せしより、商工業の發達著しく、焼物・塗物・

扇・綿絲・織物等の産出すこぶる盛なり。

十一1173 商工業の發達に 皇國の富を起さんと、勤勉・努力をみ

なき 同胞すべて六千萬。

十二1166 信義は(略)、商工業の人としても常に之を重んぜざるべからず。

しょうこ「正午頃」(名) 1 正午頃

九462 四日目の正午頃、大風吹起りて、砂煙は天をおほへり。

しょうこ「少佐」(名) 1 少佐

九2510 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

しょうこ「將士」(名) 1 將士

十二273 信昌將士を集めていふやう、「(略)」。城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。」と。

しょうこ「小事」(名) 2 小事

十261 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、其ノ初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

十二381 「高虎の嘉明と相惡むは私の小事なり。是は公の大事なり。

しょうこ「障子」(名) 4 障子

七471 (略)、日本紙ハ「(略)、コノタクサンノ障子ハ皆僕ラノ仲間デハツテアルデハナイカ。

八164 北條時頼ノ母松下禪尼、

(略)、ス、ケタル障子ノ破レヲツクロヒセタリ。

九608 時々障子を明放ちて、新しき空氣を流通せしむべし。

十一7210 (略)、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寝起する様なり。

しょうこ「正直」(名) 2 正直

十二524 信用ノ基ハ正直ニアリ。

十二524 故ニ曰ク、「正直ハ最善ノ商略ナリ。」ト。

しょうこ「正直」(形状) 2 正直

七135 正直な商人はかけねなどはいひません。

十二531 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラズ。

しょうこ「正直者」(名) 1 正直もの

六331 直吉は(略)。(略)。今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」といつて、(略)、残りの一錢を渡した。(略)。あとになつて、主人はこの事を聞いて、直吉は正直ものだとはめて、(略)。

しょうこ「賞給」(四) 1 賞し給ふ

九959 天皇陛下かつてこゝに行幸あり、其の風景を賞し給ひて、幸湖の名を下し賜へり。

しょうこ「傷者」(名) 1 傷者

九959 天皇陛下かつてこゝに行幸あり、其の風景を賞し給ひて、幸湖の名を下し賜へり。

しょうこ「傷者」(名) 1 傷者

九752 死者四人、傷者四五十人もこれあり候。

しょうこ「飼養者」(名) 1 飼養者

十一710 蜜蜂は(略)。(略)。故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。

しょうこ「城主」(名) 1 城主

十二375 (略)、會津の城主蒲生忠郷死せり。

しょうこ「詔書」(名) 1 詔書

十一1185 修身の徳是なりと、教育勅語のり給ひ、戦後經營かくこそと、戊申の詔書かしこしや。

しょうこ「相如」(人名) 6 相如

十二388 (略) 蘭相如といふ賢臣あり。(略)。(略) 廉頗之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。

十二389 相如聞きて、力めて之を避け、廉頗の來るを見れば、車を轉じて逃ぐ。

十二3810 相如の從者皆之を恥づ。

十二391 相如の曰ふやう、「余は秦王を其の朝に叱したるもの。何ぞ獨り廉將軍を恐れんや。(略)。

十二397 廉頗(略)、相如の門に至りて罪を謝し、つひに無二の親交を結べりとぞ。

十二958 此の會に於ける孔子の行動は、蘭相如が秦王を叱したるとは異

動は、蘭相如が秦王を叱したるとは異

動は、蘭相如が秦王を叱したるとは異

なり、相如は氣を以て人を服せりと
いへども、(略)。

しょうじょ「少女」(名) 6 少女ひい
さましきしょうじょ

十689 燈臺番の娘にグレース、ダ
ーリングとて心やさしき少女あり。

十696 少女は之を見て、「あはれ
なり、父上。早く船を出して救はん。
早くく。」とせき立つ。

十706 此の間岩にも當てず、波に
もまかせず、(略)ボートをあやつ
り居たる少女の働は、人間業とは見
えず。

十713 数日の後、水夫は此の少女
の手に熱き感謝の涙をそそぎて、各
我が家に歸りたりとぞ。

十716 グレース、ダーリングの生
家に程近き寺院の庭上には、右手に
かゝる握れる少女の銅像あり、(略)。
十1125 又麥稈眞田を編み、花冠
を織ること行はれ、十二三歳の少女
も手を空しうする者なきに至れり。

しょうじょ「少将」(名) 1 少将
とうごうしょうじょ・ネボカトフシ
ようしょう

九2510 將校には大將・中將・少將
・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・
少尉あり。

しょうじょ「少一」(副) 1 少々
九1310 綱がすりは、御申
越の期日までには少々間に合ひかね
候事と存候。

じょうじょく「常食」(名) 1 常食

十3110 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニ
スベキモノヲト心ガケシガ、或時旅
僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、(略)。

しょうす「称」(サ変) 19 稱ス 稱す
『シース・スール・セ』

十155 昔より富士は日本一の高山
と稱せられしが、(略)。

十211 然れども(略)、なほ我が
國第一の山といふべく、むしろ世界
一の名山とも稱すべし。

十331 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人
ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。

十746 湯のわき出づる處二十餘箇
所、大湯と稱するは一晝夜に數回噴
出す。

十8210 されば北海道舊土人保護法
と稱する法律ありて、(略)、厚く保
護の方法を講ぜり。

十292 大小幾多の軍艦は海上の
浮城とも稱すべく、遠く四方に航行
して、到る處に國光をかざやかせり。

十3910 阿里山の樹材は世界
無比の良材と稱せらるゝものにて、
(略)。

十17510 中にも華嚴・霧降・裏見
を日光の三大瀑布と稱す。

十1769 最も大なるは第一の瀑布
にして、高さ八十餘丈と稱す。

十1857 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コ
レヲ練機ト稱スル機械ニカケテ、
(略)。

十2406 其の噴火口の大きさは日
本第一たるのみならず、亦實に世界
第一と稱せらる。

十24010 最も東なる根子岳は七面
山とも稱し、山頂の嶺の如し。

十2419 内に二箇の噴孔ありて、
盛に水蒸氣とよなと稱する火山灰と
を噴出す。

十2572 營口は一に牛莊港と稱
し、(略)。

十2576 營口は(略)、大連と共
に滿洲の二大門戸と稱せらる。

十2587 安東縣は(略)、南滿洲の
三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十2612 シャンゼリゼーの大通
の如きは、世界最美の街路と稱せら
る。

十2651 凱旋門は(略)、壯大な
ること世界第一と稱せらる。

十2689 一定の季節に最も多數の
移住を見るは(略)レミングと稱す
る地鼠の一種なり。

しょうす「賞」(サ変) 5 賞す 『シ
シーセ』

九969 外國人の我が國に来る者亦
必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞
せざるものなし。

十1208 我が國に遊べる西洋人は
此の瀬戸内海の風景を賞して、世界
海上の一大公園なりといへり。

十2291 家康直ちに勝商をして織
田信長に見えて、長篠城の急を告げ

しむ。信長、勝商の勞を賞し、(略)。

十2297 勝頼、勝商に向ひてい
ふ、「明日城門に行きて、『援軍來ら
ず、速に降るべし。』と告げよ。さ
らば我必ず重く汝を賞せん。」

十2805 皇后も亦コロンブ
スを引見して、厚く其の勳功を賞せ
り。

しょうす「使用」(サ変) 2 使用ス
使用す 『スール』

十784 大工・カヂヤ等ノタ
ナゴコロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用ス
ルヲ以テナリ。

十1384 耕作に水牛を使用する
様も珍しく、(略)。

しょうす「飼養」(サ変) 1 飼養す
『シーシ』

十2437 動物を飼養し、又
植物を栽培して、衣食住の材料を得
ることを工夫するに至れり。

しょうす「生」(サ変) 12 生ず 『ブ
ズ・ズル・ゼ』

九664 空氣流動する時は風を生
ず。

十4410 直線を(略)、一定の間合
を置きて、或は縦に、或は横に、或
はななめに並ぶる時は、美しき模様
を生ず。

十484 色の原色は赤・青・黄にし
て、之を種々に配合すれば、種々の
色を生ず。

十1784 大地も爲にふる

ひ、附近數百歩の地にありては、器に盛れる水常に波紋を生ず。

十一901図 一種の草の實を食用とするを以て、常に此の草の多く生ずる所を選びて住み、(略)。

十一907図 物の價は効用あることと、隨意に得られざることによりて生ずるものなり。

十一916図 されど水は都會などにては、時として價を生ずることあり。

十二436図 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、(略)。

十二607図 (略) 巡查の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雜を生ずることなし。

十二7710図 是より先は未だ航行せしことなき大洋なれば、乗組の人々も次第に不安の念を生ぜり。

十二787図 十月十一日、河中に生ずる水草流れ寄り、(略)。

十二1083図 兩院の決議一致すとも、天皇の裁可を経ざれば其の効力を生ぜざるなり。

じょうず「上手」(名)2 上手 六554 其の相手は武田信玄で、これも謙信におとらないいくさの上手であつた。

七278 何事ニヨラズ手ノハタラキノヨイヲ上手トイヒ、手ノハタラキノワルイノヲ下手トイヒマス。

じょうず「上手」(形状)4 上手 四786図 あれをいらないといふのもざんねんだ。だれか上手なものはないか。

六488 秀吉はいくさの上手な人で、たびくいくさをしたけれども、一ぺんもまけたことがありません。

九824 或年選ばれた子供のの中に、すぐれて上手な騎手が二人あつた。

十一866図 熟練ト機敏トヲ要スルコト大ナリ。上手ナル者ハ一分時ニヨク十數本ノ絲ヲツナグトイフ。

じょうず「乗」(サ変)1 乗ず「一ジ」

十二3010図 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかば、夜に乘じて城をすてて逃れんとす。

じょうず「生」(サ変)1 生ズル「一ズル」

十五3 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、(略)。

じょうせい「笑声」(名)1 笑声 八295図 幾度カマハリタレドモ、入ルコトヲ得ズ、クチヲシクモ工ノ笑聲ヲ後ニシテ歸レリ。

じょうせい「小生」(代名)2 小生 十579図 小生の如く平素勞働になれたる者には、術科もつらきことはこれなく、(略)。

じょうせい「情勢」(名)2 情勢 十915図 御道筋の事故御立寄下され候はば、小生も御同行致すべく候。

十一327図 巡洋艦ハ(略)、或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ情勢ヲサグリ、(略)。

十一342図 通報艦ハ(略)、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が艦隊ニ報告ス。

じょうせん「商船」(名)3 商船 八774図 イギリスは(略)、商業・工業いづれも盛に、海軍強く、商船多し。

十一329図 巡洋艦ハ(略)、或ハ我が運送船・商船ヲ保護シ、(略)。

十一3210図 巡洋艦ハ(略)、或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃沈・捕獲ス。

じょうせん「乗船」(名)1 乗船 九321 「何月何日初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」

じょうせん「乗船」(サ変)1 乗船す「一シ」

十二544図 門司にて乗船し朝鮮海峡を過ぎて、黄海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

じょうせん「乗船」(サ変)1 乗船する「一シ」

じょうそ「上奏」(名)2 上奏 十二1086図 上奏とは文書を天皇に奉呈し、建議とは文書を政府に提出して意見を述ぶるをいふ。

十二1088図 上奏といひ、建議といひ、

請願といひ、(略)、要は下情上達の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

じょうぞう「醸造」(名)1 醸造 十一879図 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに集を造るは醸造の業と建築の業とをかねたりといはんか。

じょうぞう「正倉院」(名)1 正倉院 十972図 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。

じょうぞう「上奏」(サ変)1 上奏す「一シ」

十二1085図 又貴族院及び衆議院は各獨立して上奏し、建議し、且臣民の請願を受くるの權能を與へられたり。

じょうぞう「少壯有爲」(名)1 少壯有爲 十二709図 少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。

じょうそく「消息」(名)1 消息 十二2710図 三日を過ぎなば、又山上に來りて援軍の消息を示さん。

じょうそつ「將卒」(名)2 將卒 かししょうそつ・りくかいぐんしょうそつ

十854 (略)、將卒と共に戦場をかけめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十二116図 勝報上聞に達し、陛下の

下し給へる勅語の中に、「(略)」と仰せられたり。將卒之を聞きて感泣せざるはなかりき。

しょうたい【小隊】 凸さんこしょうたい
しょうたい【招待】 凸こしょうたいいたす

しょうたいじょう【招待状】(課名) 2

招待状

十一目 第十五課 招待状

十一61 第十五課 招待状

しょうたいす【招待】(サ変) 1 招待ス『一セ』

八16 北條時頼ノ母松下禪尼、アル日時頼ヲ招待セントテ、ス、ケタル障子ノ破レヲツクロヒセタリ。

しょうたいする【招待】(サ変) 1 招待スル『一スル』

十一64 人ヲ招待スル時ハイフマデモノク、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

じょうたつ 凸かじょうじょうたつ

しょうちいたす【承知】(四) 2 承知致す『一シ』 凸こしょうち

九71 略、本日ノ新聞により、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

十一95 先般御手紙にて御近況を承知致し、御なつかしく存候。

じょうちゅう【城中】(名) 2 城中

十二27 城中には僅かに四五日の糧食を餘せるのみ。

十二31 賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圍を解きて去れり。

しょうちよう【消長】(名) 1 消長

十二41 但し此の噴孔は時々其の位置を變じ、其の勢力にも消長あり。

しょうてき【小敵】(名) 1 小敵

十二113 略、小敵を侮らず、大敵を恐れず、十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。

しょうと【昌圖】(地名) 1 昌圖

十二57 昌圖

しょうとう【消灯】(名) 1 消燈

十56 兵營内の生活は規律正しく、朝の起床より夜の消燈まで、一々喇叭の合圖により、(略)。

じょうとうもんいん【上東門院】(人名) 1 上東門院

十16 紫式部は(略)。夫に別れて後、宮中に召されて、上東門院に漢文・漢詩を教へ參らせたり。

しょうとくたいし【聖德太子】(人名) 1 聖德太子

十98 此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、(略)。

しょうどしま【小豆島】(地名) 1 小豆島

十一18 小豆島

しょうなごん 凸せいしょうなごん・むらさきしきぶとせいしょうなごん

しょうにん【商人】(名) 13 商人 凸いちしょうにん・おろしうりしょうにん・かつこくしょうにん・べいこくしょうにん

七13 正直な商人はかけねなどはいひません。

七13 小賣といふのは商人から品物を使ふ人にすぐに賣渡すことです。

七13 小賣をする商人を小賣商人といひます。

十43 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國ヘ送りシニ、翌年英國ヨリ注文アリシヲ始トシ、(略)。

十一13 又國家全體カライヘバ、(略)、商人ノ物品ヲ賣買シ、(略)等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。

十一54 花客ニ接シテ愛敬ヲ盡スハ商人ノ美德ナレドモ、ミダリニ聲色ヲ作りテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、(略)。

十二51 故ニ商人ハ常ニ全世界ニ於ケル物價ノ高低ニ注意シ、需要供給ノ情況ニ精通スルヲ要ス。

十二51 商人ノ第一ニ重ンズベキハ信用ナリ。

十二51 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマヌカレズ。

十二53 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラズ。

十二53 海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。

十二53 商人ハ軍人ノ戰場ニ立ツト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戰爭ニ従事スベシ。

十二54 富國ノ實ノ舉ルト譽ラザルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏ノ如何ニ存ス。

しょうねん【少年】(名) 3 少年

十26 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、(略)。

十一56 あの前ましい少年を殺してはならぬ。

十一58 或る少年は息も絶え絶えであつたが、少年ははや息も絶え絶えであつた。

しょうねんこしゅ【少年鼓手】(課名) 2 少年鼓手

十一14 第十三課 少年鼓手

十一54 第十三課 少年鼓手

しょうねんこしゅ【少年鼓手】(名) 3 少年鼓手

十一54 隊中に「ピエール」といふ年の頃十三四ばかりの少年鼓手があつた。

十一55 かの勇ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。

十一55 「ピエールよ、少年鼓手よ。」と聲を揃へて呼んだが、何の答もない。

しょうねんら【少年等】(名) 1 少年等

十249 韓信大刀ヲオビテ市中ヲ行ク。無頼ノ少年等口々ニ罵リテ止マズ。

しょうのう「樟腦」(名) 2 樟腦 樟腦

十一378 本島産物の重なるものは、御承知の樟腦・米・茶・砂糖等にて、(略)。

十一379 樟腦は世界産額の八分の五を占むる由に御座候。

しょうば「笑罵」(名) 1 笑罵

十261 韓信(略)、ヤガテハラバヒテ勝ノ下ヲクグル。見ル者アザケリ笑ハザルハナシ。(略)。(略)、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、其ノ初メ小事ニシノビシハ、(略)。

しょうはい「勝敗」(名) 1 勝敗

十二71 敵艦續々火災を起し、(略)。時に午後二時四十五分、勝敗の数は既に定まれり。

しょうばい「商売」(名) 3 商賣

七88 外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。

八141 (略)、父ハハヤ店ニスワツテ商賣ノ用向ヲシラベテキル。

十二511 世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、全世界ノ人ハ皆我が商賣ノ花客ナリ。

しょうばいしょう「商売上」(名) 1 商賣上

七125 商賣上でげんきんといひ、かけといふのは何の事ですか。

しょうはつす「蒸発」(サ変) 1 蒸發

す「ースル」

十92 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、(略)、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。

しょうびす「賞美」(サ変) 1 賞美す

「ース」

十813 食物は(略)、鹿の肉は珍味として之を賞美す。

しょうひする「消費」(サ変) 2 消費する

「ースル」

十二213 動物は(略)、炭酸瓦斯を吐出す。若し之を消費するものがなければ、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、(略)。

十二217 然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。

しょうひん「商品」(名) 2 商品

十二5010 世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、(略)。

十二523 平素ノ愛顧ニナレテ、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

しょうひん「上品」(形状) 2 上品

六675 材木ニハ(略)。(略)、上品ナルハヒノキ、カタキハ栗ナリ。

十205 又極上品なものになると、機械では刷らないで、手刷にする。

しょうひん「滋養品」(名) 1 滋養品

十一664 例ハバ動物質ノ滋養品ニハ植物質ノ食物ヲ添へ、(略)。

しょうぶ「勝負」(名) 4 勝負

五546 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間

ガケンクワヲシタ時、(略)。(略)。イツマデタツテモ勝負ガツカナイカラ、兩方ガ仲ナホリヲシマシタ。

五702 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジマツテキル。勝負ガ一番スムト、ワ

アツトホメルコエガキコエル。

九864 (略)競馬の神事といふ事があつた。(略)。相手の熊吉があの通りで、今日の勝負はきまらないが、(略)。

九869 「もう改めて勝負には及びません。」

しょうぶ「上部」ひさいじょうぶ

しょうぶ「丈夫」(形状) 3 丈夫 ひさいじょうぶ

七483 モトヒヤ水引ノヤウナ、アンナ丈夫ナ物ハ日本紙デナクレバ出来ナイ。

八341 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。

十五4 (略)大鬼蓮ハ(略)、葉ノ質モ丈夫デアルカラ、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出来ルサウデアル。

しょうぶだつき「正札付」(名) 1 正札付

七386 品物ハ皆正札附デ、カケ直ガナイ。

しょうぶぶん「上聞」(名) 3 上聞

十一157 高徳せめても此の所存を

上聞に達せばやとて、行在所の御庭にしのび入り、(略)、大文字に詩の句を書きつけたり。

十一163 翌朝警固の武士ども之を見つけて、(略)、讀みかねて上聞に達したり。

十二113 勝報上聞に達し、陛下の下し給へる勅語の中に、「(略)」と仰せられたり。

しょうへい「正平」(名) 1 正平

十一34 正平の昔、楠木正行が決死の士百四十三名の名字を壁に書連ね、(略)。

しょうへい「城兵」(名) 2 城兵

十二268 (略)長篠城を守る。武勝頼頼大軍を率ゐて來り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず、(略)。

十二2610 (略)、柵を城外に廻らし、繩を城下の河中に張りて、城兵のひそかに逃れ出づるを防ぐ。

しょうほう「勝報」(名) 1 勝報

十二113 東郷司令長官此の戦況を打電し、(略)。勝報上聞に達し、(略)。

しょうほう「消防」(名) 1 消防

十二6110 (略)、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。

しょうむてんのう「聖武天皇」(人名)

1 聖武天皇

十96 9 図 東大寺ハ聖武天皇ノ建立ニシテ、(略)。

しょうめいす「証明」(サ変) 1 証明す「一セ」

十二115 8 図 太古以來忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、古來の歴史上の事蹟は十分に之を證明せり。

しょうめいす「証明」(サ変) 1 證明する「一スル」

十一47 1 図 こゝにアラビヤ馬の達者なことを證明する面白い話がある。

しょうめん「正面」(名) 3 正面

五68 7 図 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツテキル。

六78 5 図 正面ニアル二本エントツノ汽船ハシキリニキテキヲ鳴ラシテキル。

九94 1 図 川を渡りて坂路を上れば、東照宮の正面に出づ。

しょうもの「上物」(名) 1 上物

九12 10 図 其の節別に老人向きの紺がすり上物十反だけ御見立の上、(略)御送り相成度願上候。

じょうもん「城門」(名) 2 城門

十二29 6 図 「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。

十二29 9 図 翌日壯士十餘人、勝商を圍みて城門に到る。

しょうゆ「醬油」(名) 4 醬油

六53 7 図 (略)、ミソモ醬油モ塩ヲ入

レテツクル。

七64 4 図 酒やすや醬油も、(略)も、水がなければ出来ない。

九18 2 図 河口ニ銚子港アリ。醬油ノ産地トシテ知ラル。

十一112 2 図 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて一年中用ふる塩・醬油を買ふに餘あり。

しょうゆう「小勇」(名) 2 小勇

十二112 10 図 さはあれ、勇氣には大勇と小勇との區別あり。

十二113 1 図 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、眞正の軍人にあらず。

じょうよ「丈余」(名) 1 丈餘

十一22 7 図 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、(略)。

しょうよう「商用」(名) 2 商用

七15 7 図 急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。

十27 3 図 (略)、手放し難き商用これあり候へば、手紙を以て御祝ひ申上候。

しょうよう「從容」(形状) 1 從容

十二85 9 図 赤穂浪士が(略)、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは(略)、日本武士道の精華を發揮せるものといふべし。

しょうらい「將來」(名) 3 將來

十二36 7 図 將來本校ニ學ブ者ノ幸福如何ゾヤ。

十二53 10 図 海外貿易ノ將來ハ頗ル多

望ナリ。

十二71 7 図 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

しょうり「勝利」(名) 1 勝利

九83 3 五人の騎手は神に勝利をいのつて、(略)。

じょうりくす「上陸」(サ変) 2 上陸す「一シースル」

十二79 10 図 (略)、コロンブスは(略)眞先に上陸し、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。

十二80 9 図 其の後コロンブスは數回の航海を試みしが、(略)、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

じょうりくす「上陸」(サ変) 1 上陸する「一シ」

十一106 10 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。

しょうりやく「商略」(名) 1 商略

十二52 4 図 信用ノ基ハ正直ニアリ。故ニ曰ク、「正直ハ最善ノ商略ナリ。」ト。

しょうりゅう「小流」(名) 1 小流

九14 10 図 (略)サ、ヤカナル細谷川ハ、流レ下ルニシタガヒテ、數多ノ小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。

じょうりゅう「上流」(名) 2 上流

九96 2 図 此の水即ち大谷川の上流を成せり。

十一110 9 上流の婦人は四方を閉ぢた

與に乗つて、外から見られない様にする。

じょうろく「丈六」(名) 1 丈六

十101 7 図 今ハサ、ヤカナル堂中ニ古キ丈六ノ佛ノミ殘レリ。

じょおう「女王」(名) 3 女王

十一5 8 図 雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、(略)。

十一7 5 図 女王の任務は卵を産むにあり。

十一7 7 図 其の數餘りに多くなる時は、女王は新しく生れたる雌蜂に其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。

しよが「書畫」(名) 1 書畫

十一94 9 図 (略)、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、(略)、需要の減ずるに非るよりは、決して安くなることなきなり。

しよかつ「諸葛」(人名) 1 諸葛

十一106 4 図 時ノ人「死セル諸葛生ケル仲達ヲ走ラス。」トイヘリ。

じよがつこうめい「諸葛孔明」(課名) 2 諸葛孔明

十一102 1 第二十五課 諸葛孔明

十一102 1 第二十五課 諸葛孔明

しよかつこうめい「諸葛孔明」(人名) 1 諸葛孔明

十一102 4 図 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、才名世ニカクレナクレバ、劉備

ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

しょかん「諸艦」(名) 1 諸艦

十二73 我は急に其の前路をさへ

ぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、(略)。

しよぎょう「所行」(名) 1 所行

十二112 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、真正の軍人にあらず。

しよく「護」(人名) 1 護 ひとしよく

十一105 孔明、護ノ舊功ヲ惜シミ

シカド、軍律ヲ亂サンコトヲ恐レ、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、(略)。

しよく「蜀」(地名) 5 蜀 蜀

十一103 孔明、劉備ニ事ヘ、(略)、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十一104 薩キニ蜀ノ南方亂レシヤ、(略)。

十一106 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。

十一106 蜀ノ軍少シモサワガズ、(略)。

十一106 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ

時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、(略)。

しよく「色」 ひとあんこくしよく・けいかいしよく・ほごしよく

しよく「食」(名) 1 食 ひとしよくじゆう

十96 神鹿ノ(略)、人ニ近ヅキ

來リテ食ヲ求ムルモ愛ラシ。

しよく「職」(名) 1 職

十二93 孔子事ヘテ吏となりしに、

治績大いに擧り、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。

しよくいんしつ「職員室」(名) 1 職員室

十二36 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、町立ノ學校トシテハ先ヅ中分ノナイ設備デアル。

しよくぎょう「職業」(名) 3 職業

八15 人ノ職業ニハイロクアツテ、皆メイノノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。

十一93 (略)、又他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。

十二46 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。

しよくぎょうちゅう「職業中」(名) 1 職業中

十二47 「農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。」といへるワシントン

の言味はふべし。

しよくぐん「蜀軍」(名) 1 蜀軍

十一105 薩キニ蜀ノ南方亂レシヤ、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕ヘ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、(略)ト問フ。

しよくじ「食事」(名) 3 食事

八67 昨朝あたりから熱がずつと

下つて、食事も進みますから、一先安心いたしました。

八70 (略)耳は食事の知らせを聞けても知らぬ風をし、(略)。

十一64 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

しよくす「食」(サ変) 2 食す

十一73 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、(略)。

十二45 (略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、(略)。

しよくせき「職責」(名) 1 職責

十二109 (略)、議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

しよくだい「燭台」(名) 1 ショクダイ

四73 オハルハ(略)、オヒナサマヲカザリマシタ。ソノ左ト右ニウツクシイシヨクダイヲ立テマシタ。

しよくどう「食堂」(名) 1 食堂

八70 (略)、足は食堂ヘ行くことを止めたり。

しよくにん「職人」(名) 1 職人

十一93 かつては靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、(略)。

しよくぶつ「植物」(名) 18 ショクブツ

ツ 植物 ひとどうぶつとしよくぶつのかんけい

五59 油ニモ色々アリマス。魚カラ

トツタモノモアリ、(略)、シヨクブツカラトツタモノモアリマス。

七70 海ノ中ニハ(略)色々ノ動物ガ居リ、サマノノ植物モアル。

七74 コンナ所ニハ動物モゴクマレデ、植物ハマツタクナイガ、(略)。

七77 海草ハ(略)。根モ陸上ノ植物ノヤウニ養分ヲスヒ取ルタメノモノデハナク、(略)。

七77 廣イ海ニハ、コノ通りニ多クノ動物ヤ植物ガアル。

十五1 植物ノ葉ニハウキクサノ葉ノ様ニ小サナノモアリ、蓮・芭蕉ノ様ニ廣クテ大キナノモアル。

十一88 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一88 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十二217 然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、一方に於て植物が之を消費するからである。

十二218 植物も動物と同じく、呼吸作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、(略)。

十二223 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)、地球上の植物は盡く枯死すべきはずである。

十二233 此の外、動物は植物の果實・根・葉等食つて體を養ひ、(略)。

十二233 (略)、植物は動物質の腐敗物を肥料として成長する等、(略)。

十二235 (略)、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。

十二438 (略)、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

しよくぶつしつ「植物質」(名) 1 植物質

十一665 例へば動物質ノ滋養品ニハ植物質ノ食物ヲ添へ、(略)。

しよくむ「職務」(名) 7 職務

八713 (略)、胃は一同に向つて曰く、「(略)」。我的職務は食物をこなし、之を血の製造場へ送るにあり。

模範となられ度、(略)。

十一1132 (略) 其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵するが故に、兒童は皆よく之になつて、(略)。

十二718 (略) 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。

十二1043 (略) 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、(略)。

十二1133 (略)、小敵を侮らず、大敵を恐れず、十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。

しよくもつ「食物」(名) 29 食物

七302 かへりたてから、しきりに食物をさがしてゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひはじめる。

七633 (略) ある山國にては、犬のくびに藥品・食物などを入れたるかごをかけおきて、(略)。

八156 働クコトガナケレバ、食物モ買ハレナイシ、着物モコシラヘレナイ。

八441 毎日の食物のたきから種々の工業まで、火の力を要することは數へきれない程多い。

八704 (略)、目は食物を見ても見ぬふりをして過し、(略)。

八705 (略)、手は食物を口に入るゝことを止め、(略)。

て、之を血の製造場へ送るにあり。

八714 (略) 我若し食物をこなす事なくば、全身を養ふ血は如何にして得らるべき。

八717 (略)、此の數日間少しも食物を送らざるが故に、新しき血出來ずして、(略)。

八722 (略) 諸君若し我に食物を送るために働きたりといはば、我もまた諸君を養ふために勞したりといはん。

九584 (略) 食物はよくかみこなすべし。

九596 (略) 運動不足なれば、食物のこなれ悪く、(略)。

九607 (略) 空氣の大切なことも食物におとらず。

十763 (略) 胃ハヨリ入來レル食物ヲコナシ、(略)。

十775 (略)、食物ヲ食フモ、言語ヲ發スルモ、皆腦ノ命令ニヨル。

十804 (略) 其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

十812 (略) 食物は粟・稗・うばゆりの根等を主とし、鹿の肉は珍味として之を賞美す。

十一677 (略) 秋・冬の花少き季節に入りても、食物に不足することなきは、一に其の勞役の結果なり。

他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアラガ、(略)。

十一661 食物ハ又變化ガ大切デアル。

十一661 日々同じ食物ヲ用ヒルト、アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。

十一665 例へば動物質ノ滋養品ニハ植物質ノ食物ヲ添へ、(略)。

十一669 常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。

十一6610 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ・洗ヒ流シラスル所デアルカラ、(略)、常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラス。

十二436 (略) 太古(略)、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

十二673 (略)、亞弗利加・印度の獅子、南亞米利加之野牛等の、(略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

十二676 (略)、獸類中にも食物を求め、(略)其の居を移すもの少からず。

十二691 (略) 満目の廣野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

しよくよう「食用」(名) 5 食用

十676 其の肉は食用となり、(略)。

十851 馬も牛と同様に勞働にも使はれ、食用にもなる。

十864 豚はもつばら食用の爲に飼ふ。

十873 羊の肉も亦食用となり、(略)。

十一89 10 ㊦ (略) 收穫蟻といふものあり。一種の草の實を食用とするを以て、(略)。

しょくりん「植林」(名) 1 植林

十一115 2 ㊦ (略)、其の一事業として杉・檜等の植林を営み、其の利益を以て學校の基本金とし、(略)。

しょくん「諸君」(代名) 9 諸君

八71 2 ㊦ 諸君は知らずや、我はたゞ坐して食ふ者にあらず。

八71 6 ㊦ 諸君我を苦しめんとして、此の數日間少しも食物を送らざるが故に、(略)。

八71 8 ㊦ (略)、新しき血出來ずして、諸君は皆却つて自ら苦しむにいたり。

八71 9 ㊦ これ諸君の自ら招く所なり。

八71 9 ㊦ 諸君は今にして諸君の誤れるをさともしならん。

八72 1 ㊦ 諸君は今にして諸君の誤れるをさともしならん。

八72 2 ㊦ 諸君若し我に食物を送るために働きたりといはば、(略)。

八72 3 ㊦ (略)、我もまた諸君を養ふために勞したりといはん。

十二29 10 ㊦ 勝商城に向ひ、高らかに號んで曰く、「諸君、憂ふることなかれ。

しょぐん「諸軍」(名) 1 諸軍

十一104 5 ㊦ 孔明ハ(略)、先ヅ南方ノ亂ヲ平ゲ、遂ニ自ラ諸軍ヲ率テ

北征ス。

しょけん「諸県」(名) 1 諸縣

十42 5 ㊦ 花筵ヲ最モ多ク産スルハ岡山・廣島・福岡・大分等ノ諸縣ニシテ、(略)。

しょこう「諸侯」(名) 1 諸侯

十二93 4 ㊦ 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を爭ひたり。

しょこく「諸國」(名) 3 諸國

しょこく「諸國」(名) 3 諸國 ㊦ せいようしよこく・せかいしよこく・ぶんめいしよこく

十43 10 ㊦ (略)、翌年英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、ドイツ・アメリカ等ノ諸國ヨリモ續々註文ヲ受ケ、(略)。

十一29 4 ㊦ 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。

十一43 6 ㊦ (略)、佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、かく諸國を巡り歩くなり。」

しょざいち「所在地」(名) 1 所在地

十一97 4 ㊦ 其の南部は(略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、(略)。

しょし「諸子」(代名) 9 諸子

八1 8 ㊦ 諸子は皇大神宮のかくばかりたふときいはれを知れりや。

八38 9 ㊦ 諸子ハイマダマツチノ製造場ヲ見タルコトナカルベシ。

九26 2 ㊦ 上下の別明かにして、何れも上官の命令を守るは諸子の能く知る所なるべし。

十4 8 ㊦ (略) 奈良の大佛の大きさ

の日本一なることは諸子すでに之を知れり。

十4 8 ㊦ 諸子よ、試みに此の外に諸子が日本一と思ふ物を數へ見よ。

十4 9 ㊦ 諸子よ、試みに此の外に諸子が日本一と思ふ物を數へ見よ。

十一29 9 ㊦ 諸子ハ數多アル我ガ軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。

十一31 7 ㊦ 諸子ハ戰艦・(略)・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十二19 2 ㊦ 諸子は中央氣象臺より發行する天氣圖を見たることありや。

じよし「女子」(名) 4 女子 ㊦ じよし・につぼんのじよし

十79 6 ㊦ 是は(略) あいぬ人を畫がけるものにて、左は男子、右は女子なり。

十79 8 ㊦ 女子は耳に耳輪をはむること男子に同じく、又口の周圍、手首・手の甲等には入墨をほどこせり。

十80 6 ㊦ 男子も女子も寒き時は犬の皮などにて造れる羽織の如きものを用ひ、(略)。

十二32 8 ㊦ 孝女お房の(略)、稻生恆軒の妻の(略)、松下禪尼の(略)、鈴木今右衛門の妻の(略)、皆後世女子の模範とすべき德行なり。

しょじひん「所持品」(名) 1 所持品

十56 4 ㊦ 毎週土曜日の午後には居室・兵器・寝具その他一切所持品の清潔検査これあり候。

しょしゅ「諸種」(名) 3 諸種

十72 6 ㊦ 温泉の諸種の病を治するは、たゞに其のふくめる鑛物の効のみならず、(略)。

十一101 1 ㊦ 五十度以南我が帝國の領土となりしより、諸種の經營追々成功致候へども、(略)。

十二99 10 ㊦ (略) 等の交通機關、(略) 等の公共營造物に在りては、(略) 之に必要な諸種の規則あり。

しょしよ「所」(名) 1 所々

十33 9 ㊦ 幕府ハ(略)、島々ヲ始メ、内地ノ所々ハ配布セシカバ、間モナク全國ニ作ラル、ニ至レリ。

しょしよ「諸所」(名) 1 諸所

十一79 1 ㊦ 鵜を使ひて魚を捕ふること、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。

しょしよ「諸將」(名) 2 諸將

十一102 9 ㊦ 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽・張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。

十一103 1 ㊦ 是ヨリ諸將マタイフ者ナカリキ。

しょしよほうぼう「所所方方」(名) 1 所々方々

九38 2 ㊦ 今水路に汽船があり、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

しょす「処」(サ変) 6 處す

十59 4 ㊦ 何か不都合なる事ありて、罰に處せられたる者は外出を禁ぜられ、又重き者は營倉に入れられ

候由承り申候。

十二一三〇 教育勅語と戊申詔書とは、我等が身を修め、世に處するの道を示し給へるものにして、(略)。

十二三二 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二三二 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二三二 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二三二 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十二三三 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、(略)。

十一一五七 いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)。(略)。高德せめても此の所存を上聞に達せばやとて、(略)。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

十二六二 片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

ダナヲハジメ、料理道具・食器・フキンナドニ至ルマデ、常ニ清潔ニシテ置カケレバナラス。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二八九 其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七五三 書物や寫眞の類は三十匁まで二錢で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

切の書類や記録類も皆ぶじであつたといふことだ。

しらが「白髪」(名) 4 白髪

十527図 今七十にも餘れば、殊の外白髪には成りたらんに、髪・ひげの黒きは如何に。

十538図 平生にても、若き人は白髪を見て悔る心あり。

十543図 悲しきは老の白髪なり。

十545図 (略)、墨を塗りて候。」とて、之を洗ふに白髪の頭となれり。

しらがあたま「白髪頭」(名) 1 白髪頭

十542図 白髪頭にて若き人と先を争ふもはゞかりあり。

しらかば「白樺」(名) 1 白樺

十1004図 森林は(略)、榎松・蝦夷松・落葉松・白樺等一面に生ひ茂り、(略)。

しらがまじり「白髪混」(名) 1 白髪まじり

十526図 義仲の幼目に見たりし時も、すでに白髪まじりの老人なりき。

しらかわ「白川」(地名) 1 白川

十241図 白川

しらき「白木」(名) 1 白木

八63図 材は皆ひのきの白木を用ひ、(略)。

しらぎ「新羅」(地名) 2 新羅

十2303図 昔調伊企儼は新羅と戦ひて新羅の將に捕へらる。

十2303図 昔調伊企儼は新羅と戦ひて新羅の將に捕へらる。

十2303図 昔調伊企儼は新羅と戦ひて新羅の將に捕へらる。

しらぎおう「新羅王」(名) 1 新羅王

十2305図 伊企儼却つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、(略)。

しらきづくり「白木造」(名) 1 白木造

八29図 神殿は昔ながらの白木造にして、(略)。

しらくも「白雲」(名) 2 白雲

十119図 我々元 木曾の檜よ、白雲を うなじまきて、峯高く空よそびえき。」

十1308図 雨ニハ(略)、雪ニハ(略)、其ノ外白雲・白露・初霜・朝霜等アリ。

しらす「知」(下二) 2 知ラス 知らす「一セ」

八183図 「(略)、總ベテ物ハ破レタル所ノミツクロヒテ用フルトキハ、シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若キ者ニ知ラセントテカクスルナリ。」

八48図 發信人の居所氏名を受信人に知らせんとする時は(略)

しらすしらす(副) 1 知ラズく

七381 色々ナ店ノ前ヲ通ツテ、左ヘ折レタリ、右ヘ折レタリスルト、知ラズくニ出口ヘ出テ來ル。

しらせ「知」(名) 2 知らせ

六501 (略)、信長は京都で光秀といふけらいにころされました。秀吉はこの知らせを聞くと、すぐに敵とわ

ばくしてかへつて来て、(略)。

八703図 (略) 耳は食事の知らせを聞きて知らぬ風をし、(略)。

しらつゆ「白露」(名) 2 白つゆ 白露

六58図 (略)、白つゆむすぶ秋の野のちぐさの花もおもしろや。

十1308図 雨ニハ(略)、雪ニハ(略)、其ノ外白雲・白露・初霜・朝霜等アリ。

しらなみ「白波」(名) 2 白波 白浪

十651 小山の様な白波が高くくだけて、夕立のやうに降散る。

十1212図 我は海の子、白浪にさわぐいそべの松原に、(略)。

しらぬかおす「知顔」(サ変) 1 知らぬ顔す「一シ」

十1737図 かくて次の夜は如何にとうかどふに、(略)、明日はかく晝が

は知らぬ顔して過せしに、(略)。

しらねさん「白根山」(地名) 1 白根山

九17図 白根山

しらべ「調」(名) 4 しらべ 調

九118図 葉かげにいねし鳥ははやゆめも見あきつ。(略) 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。

九123図 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。

十15510 (略) 太鼓の音がかくかに聞える。耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。

十2835 重く沈んだ調に暗いく海の底へ引込まれるやうな氣がするかと

しらべる「調」(下二) 6 シラベル

しらべる「一べ」ひとりしらべる

五401 かいさつ口では切符をしらべてゐます。

八141 (略)、父ハハヤ店ニスワツテ商賣ノ用向ヲシラベテキル。

九83 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレト變ツテキル。

九325 此の時も少し進んだきりで、やがて動かなくなつたが、しらべて見ると、機關の一部に故障があつたので、(略)。

九373 箱根と新居とは關所があつて、役人が一々旅人をしらべて通した。

十377図 (略)、なほ平生の行をしらべて雇ふことに致しました。

しらほ「白帆」(名) 3 白帆

六55図 わけて名におふ松島の大島・小島その中を 通ふ白ほの美しや。

八618図 三つ四つ五つうち連れて、矢走をさして歸り行く 白帆を送る夕風に、(略)。

十1198図 (略)、朝日・夕日を負ひて、島がくれ行く白帆の影のどかなり。

しらゆき「白雪」(名) 2 白雪

十1192図 秋の山は紅葉の錦を織り、冬の木は白雪の綿を重ね。

十1308図 雨ニハ春雨・時雨・夕立・村雨、雪ニハ初雪・白雪・吹雪、

(略)。

しり「尻」(名) 3 しり

六五五 其の時信玄のけらいが、後からやり先で謙信の馬のしりを力一ぱいになぐりつけた。

十二三〇四 昔調伊企つきのいきなは(略)新羅の將に捕へらる。其の將伊企つきのいきなを(略)「日本の將我がしりを食へ。」と號ばしむ。十二三〇五 伊企つきのいきな雖却つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、(略)。

しり「知」 弓ものしり

しり「私利」(名) 1 私利

十二一〇三 市町村長・議員等を選挙するには(略)。まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、(略)。

しり「いる」[知居](上一) 1 知り居る

「一い」

九四八 阿アリは幸にも星によりて方角を見定むることを知り居たれば、(略)。

しりぞく「退」(四) 3 退く 退く

「キーク」

七三八 度ノ合戦サダメテナンギナルベケレド、進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ。

十五四 戦場にては、進まんとすれば、(略)、退く時には、今はかなふまじとそしる。

十二九四 孔子事へて吏となりしに、(略)、職を退きし後も弟子の道を問ふもの益々多かりき。

しりたまう「知給」(四) 1 知り給ふ

「一へ」

十一七四 日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、夜中のぞき見たる姿をして見するに、畫師は驚きて、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。

しりゆう「支流」(名) 1 支流

九一八 利根川ハ(略)、本流・支流ノ長サヲ合スレバ、一千餘里ニ及ブ。

しりよく「死力」(名) 2 死力

十六九 船の頭を立直しく、死力を盡して漕進む。

十一一〇三 臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致スベシ。」

しりわく「知分」(下二) 1 知分ク

「一クル」

十七六 物事ヲ知分クルモ、善惡ヲワキマフルモ、喜ブモ怒ルモ悲シムモ皆腦ノ作用ナリ。

しりん「四隣」(名) 1 四隣

十二八二 北條早雲が小田原城に據りて、次第に其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。

しる「汁」(名) 7 しる 汁 じどくじる

七三二 蠶の口の中には(略)。そのくだから出すねばつたしるが外へ出ると、すぐにかわいて絲になるのである。

七六四 ゆ・茶・汁・すひ物はいふまでもない。

八五九 藍玉ヲ水ノ中へ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。

十一八八 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一八八 油蟲は(略)、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、(略)。

十一八九 油蟲は(略)、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、(略)。

十二二四 蝶や蜂は花から花へいそがしさうに飛廻つて花の汁を吸ふ。

しる「知」(四・五) 88 知ル 知る

「一ッ・ラー・リー・ル・レ」 弓あいしる・しらずしらず・はかりしる・みしりたまう・みしる

三七二 トモダチモミンナキナクナツテ、知ツテキルモノハ一人モアリマセン。

四二〇 次郎、オマヘハ手ノユビノ名ヲ知ツテキマスカ。」

四二一 「一バン太イノガオヤユビ、(略)トモイヒマス。アトノ二本ハ知りマセン。」

四三七 「三郎さんはまだそれを知らなかつたのですか。」

四三二 それではうどんやさうめんは何でつくりますか。」三郎「知つてゐますとも。麥です。」

四三三 (略)あんの豆と、だんごにつけるこな豆と同じですか、ちがひますか。」三郎「それは知りません。」

四三六 (略)ツカヒミチハマダイクラモアリマス。皆サンノ知ツテキルダケイツテゴランナサイ。

四四五 皆さんはとけいの見方を知つてゐますか。

四六一 けさおきて見ると、雪がたくさんつもつて(略)ゆふべは風がなくて、しづかなばんでしたから、少しも知らずにゐました。

五九五 一思ひにとび下りると、何だか目がまはつて、しばらくの間は何も知らずにゐました。

五五六 鳥ヤケモノハ火ヲ使フコトヲ知りマセン。

五七八 角ノアルケモノモタクサン知ツテキルガ、コンナリツパナ角ヲモツテキルモノハナイヤウダ。

六二二 (略)、その石をおろして、ななどにもはかりにかけて、その目方を知りました。

六三一 「先では知らないのだから、一錢まうけておけばよかつたに。」

六42 4 ワガ身ヲツメツテ、人ノイタ
サヲ知レ。
六43 3 井ノ中ノカハヅ大海ヲ知ラ
ズ。
六55 7 (略)、信玄は(略)、はさみ
うちにしようとした。謙信はそれを
知つて、こちらから先がけをしよう
と、(略)。
六66 8 ソノツカマヘタ魚ヲ(略)、肩
ニカツイデ行キマスガ、後カラ一ツ
ヅツスケテオチルノヲ知りマセン。
六84 4 (略)、昔を考へ、今を知
り、學びの光を身にそへよ、身に
つけよ。
七24 4 (略)、風ニハカニ吹キテ、
トモシビキエタリ。保己ハソレト
モ知ラズ、講義ヲツマケタレバ、
(略)。
七45 1 (略) いほりもかうは孝行の
曾我兄弟に知られたり。
七87 2 (略) この星を見分けることや、
燈臺のあかりを知ることが、船に乗
る者には大切な事です。
八2 1 (略) 諸子は皇大神宮のかくばか
りたふときいはれを知れりや。
八33 4 (略)、元は少しは人に知ら
れた刀かちで、(略)。
八40 2 (略)、一箱ノマツチガ我等
ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手
ヲ要スルカヲ知ラズ。
八70 4 (略)、これより後は耳は
食事の知らせを聞きてでも知らぬ風を

し、(略)。
八71 2 (略) 「諸君は知らずや、我は
たゞ坐して食ふ者にあらず。
八82 5 (略) 又世界の中には、年中夏の
氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を
知らざる國あり。
九18 2 (略) 河口ニ銚子港アリ。醬油ノ
産地トシテ知ラル。
九26 2 (略) 上下の別明かにして、何れ
も上官の命令を守るは諸子の能く知
る所なるべし。
九40 6 (略) 昔ヲ知レル人、若シ舊道ノ
今ノサビシサト、昔ノニギハシサト
ヲクラベ見バ、(略)。
九40 10 (略) 然レドモ自然ノ轉變ハ更ニ
是ヨリモ甚ダシキモノアルヲ知ラズ
ヤ。
九58 5 (略) 八十歳を越えて病を知ら
ざる或老人に、長生の方法を問ひし
に、(略)。
九60 2 (略) 然れども運動多きに過ぐれ
ば、却つて病を起すことあり。「過
ぎたるは及ばざるが如し。」と知る
べし。
十4 8 (略) 奈良の大佛の大きさ
の日本一なることは諸子すでに之を
知れり。
十8 7 (略) 炭・薪・材木等の森林より
出づることは何人も知れる所なり。
十16 5 (略) 式部は(略)、常に一
といふ文字をだに知らぬ顔に過した
りといふ。

十16 8 (略) 清少納言も(略)、其の才
氣を以て知られたりき。
十17 9 (略) 萬つに心ききたること、此
の一例にても知るべし。
十29 1 (略)、ねぎや大根が青々とう
ねをかざつて、こゝばかりは冬を知
らないやうに活々とした色を見せて
ゐる。
十30 8 (略) 名稱ノカク異ナルヲ以テ
モ、此ノ芋ノ次第第二西方ヨリ傳來セ
シコトヲ知ルベシ。
十32 8 (略) サレバ平左衛門ノ死セシ時
ハ、中國ノ人々、知ルモ知ラスモ父
母ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。
十32 8 (略)、中國ノ人々、知ルモ
知ラスモ父母ニ別ル、如ク悲シミタ
リトナリ。
十36 6 (略)、あの青年ははいると
直に書物を取上げて、テーブルの上
に置きました。それで注意深い男と
いふことを知りました。
十73 2 (略) 中にも最も世に知られたる
は、西に道後・有馬、東に箱根・熱
海・伊香保等あり。
十73 8 (略) 道後に次ぎて早く世に知ら
れたるは有馬の温泉にして、(略)。
十74 8 (略) 伊香保も亦古より知られ
たる温泉にして、(略)。
十82 4 (略) 彼等は元は読み書きも知
らず、算數の考もとぼしかりしが、
(略)。
十88 1 (略)、雞卵や雞肉の養分の多

いことは知らぬ人はない。
十88 6 (略) 笠置の山の行在所、寄す
る雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち
給ふ。
十96 7 (略) 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリ
テ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月
ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。
トヨメルコト人ノヨク知ル所ナリ。
十99 5 (略) 人はいさ心も知らず、故
里は 花ぞ昔の香にほひける。
十一1 3 (略) 吉野山霞の奥は知らね
ども、見ゆる限りは櫻なりけぞ。
十一5 3 (略) 吉野には古く離宮あり、
(略)。其の後吉野の朝の皇居となり
しは人の能く知る所なり。
十一16 5 (略) 主上は詩の心を御さとり
ありて、(略)。されど武士どもは其
の意味を知らざりしかば、思ひとが
むることもなかりき。
十一18 7 (略) かくして鳥轉じ、海廻り
て、其の盡くる所を知らず。
十一29 9 (略) 諸子ハ數多アル我ガ軍艦
ノ名ヲ知レルナルベシ。
十一31 8 (略) 諸子ハ戰艦・(略)・潜水
艇等ノ任務ヲ知レリヤ。
十一44 6 (略)、熊王今夜こそ正義
を討ためと、ひとり心に思ひ定めた
るに、正義はかくとも知らず、「今日
は吉日なり、元服せよ。」とて、もと
よりを上げて、(略)。
十一53 6 (略) 謹嚴ナルベキ場合ニ笑フ
ハ、禮ヲ知ラザル人ナリ。

十一69 時間の貴きを知れる者は無爲に苦しむことなし。

十一74 図 略、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。「そは昨夜のぞき見て知りたり。」といへば、(略)。

十一75 日光山には華嚴瀧を始として、霧降・裏見・方等・般若等其の名世に知られたるもの少からず。

十一76 図 略、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。

十一94 即ち物の價は普通の價を本として上下すと知るべし。

十一105 蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。孟獲答ヘテ曰ク、「此ノ如シト知ラバ何ゾ敗レン。」ト。

十一106 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。(略)、賊將歎ジテ、(略)、マタ反スルコトナカリキ。其ノ度量ノ廣大ナルヲ知ルベシ。

十二11 魔下將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

十二17 図 略、又其の日の天氣豫報は毎朝の新聞紙にても知るを得べし。

十二27 図 略、若し向ひの山にのろしのがるを見れば、幸にして城を出でたりと知れ。

十二28 古く知らるゝ佐渡・生

野、其の他無數の礦坑は山をうがちて山を鑛る。

十二49 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も古く其の名を知らるゝたり。

十二53 強兵ヲ以テ知ラレタル我が國ハ(略)。

十二63 倫敦には英國博物館・英蘭銀行・國會議事堂等世界に名を知られたる建築物多し。

十二70 魚腹に葬らるゝもの、野獸の爪牙にさかれて食はるゝもの、其の數を知らず。

十二73 四百年以前までは東半球の人は全く西半球を知らざりき。

十二76 西班牙に轉じ、居ること多年、遂に皇后イサベラの知る所となり、其の保護の下に此の大探檢を行ふに至れり。

十二78 朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。

十二79 又果實の附きたる枝の波のまに／＼浮べるを見たり。

人々始めて陸地の近きを知り、(略)。

十二79 人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所を知らず。

十二85 かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。

十二85 かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。

十二86 四十七士の事蹟は兒童・走卒も之を知らざるはなく、(略)。

十二86 主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、(略)。

十二87 喜劇(略)、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、驚いて曰く、(略)。

十二101 他國に行きて、其の市街・建築物等の狀況、汽車・電車中に於ける乗客の舉止、道行く人の容儀等を見れば、(略)、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

十二104 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。

十二119 西も東も知らざりし身のいつしかに分けはたる、世の人並の文字の數。世の人並の道の筋。

しる(一知)(下二) 1 知る 『一レ』

十二69 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、(略)。

シルクハット(名) 1 シルクハット

九50 路行く人のかぶりもの、中折・鳥打・山高や、シルクハットと類多し。

しるけ「汁氣」(名) 1 汁氣

十二66 又汁氣ノナイモノノ次ニハ汁物ヲ出シ、(略)。

しるし「印」(名) 6 シルシ しるし ぐうまじるし

三72 ソレデハオワカレノシルシニコノハコヲオ上ゲマウシマセウ。

四45 品物をやりとりする時には、なまぐさのしるしにのしあはびをつけるやうになつたのでせう。

六21 さうして象の重みで船の水につかつた所にしるしを附けました。

六22 さうして前にしるしを附けておいた所まで船が水につかつた時に、(略)。

九65 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

九65 其のしるしは水にぬるることなかるべし。

しるしはんでん「印半纏」(名) 1 しるしはんでん

六74 略、新しいしるしはんでんを着てゐる大工が一番目立ちます。

しるす「記」(四) 4 記す 記す『一シース』

八48 其居所氏名を此處へ記すべし

八48 發信人の居所氏名を受信人に知らせんとする時は(略)片假名にて記すべし

八48 發信人は自己の居所氏名を(略)此處に記すべし

十337 図 (略) 其ノ作方、貯藏ノ方
法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。

しるもの「汁物」(名) 1 汁物

十一665 (略)、又汁氣ノナイモノノ
次ニハ汁物ヲ出シ、(略)。

しれいかん「司令官」(名) 1 司令官

十一5610 マクドナルは此の隊の司
令官で、突貫將軍といふあだ名をも
つた勇將である。

しれいちようかん「司令長官」(名) 1

司令長官 ムとうごうしれいちようか
ん

十二92 図 敵の司令長官ロジェスト

ウエンスキー中將は(略)。

しれいちようかんいかむりよろくせんに

ん「司令長官以下無慮六千人」(名)

1 司令長官以下無慮六千人

十二102 図 敵の死傷及び捕虜は司令

長官以下無慮六千人。

しれいぶひしだんしれいぶ

しれる「知」(下二) 12 知れる 「一

レーレル」

四542 図 「ナルホド、オマヘノナ

カマハズキブン多イ。オレノ

方ガ少イカモ知レナイ。

五803 見下せば、しるは何十丈ある

か知れないがけの下にある。

六324 図 「それでもだんなが居ない

から、だまつてゐれば、誰にも知れ

はしない。」

六618 圖 まへからわたしは目がわ

るく、杖をたよりにあるきます。い

まその杖をもぎ取られ、かへりの道
が知れませんか。」

七831 図 何萬とも知れないいるかが

およいであるのを見ることもありま
す。

八423 あゝ、火の勢が一そう強くな

つた。又隣へうつゝたのかも知れな

い。

十191 (略)、我我の讀む様なものに

なるまでには、幾度書直すかも知れ

ない。

十356 図 (略)、すぐに立つて、椅子

をゆつりました。人に親切なことは

是でも知れると思ひました。

十一564 深さは幾百丈とも知れない

谷底、(略)。

十一565 (略)、谷へ下りる細道も雪

や氷にとざされて、どこか全く知れ

ない。

十一1103 (略)、まんぢゆうの様に圓

く盛上げた土山が數知れず並んでゐ

る。

十二825 最早彈く力も盡きて、(略)、

額を兩手に支へて人知れぬ涙をこぼ

して居る。

しる「代」ムなわしる

しる「目」(名) 2 白ムましる・まっ

しろ

八754 図 タマ猫ノ毛色ニハ黒・白・

三毛ナド様々アレド、虎ハ一様ナリ。

九74 辯ノ色ハ白又ハウス桃色デ、

葛ノ色ハ青イ。

しる「城」(名) 18 しる 城 ムうきし
ろ

五743 へいけのぐんぜいがふくはら

のしろを守つてゐる。

五762 ひよどりごえはしろの北の方

にあつて、(略)。

五781 図 「こゝからしろの方へ下り

ることが出来るか。」

五783 図 しるの後はけはしい阪で、

(略)。

五802 見下せば、しるは何十丈ある

か知れないがけの下にある。

五816 これを見た三千人の軍ぜい

は、どつと一時にかけ下りて、城の

中へ攻めこんだ。

六475 ある年、城のへいが百間ばか

りこはれた事がありました。

六805 図 秀吉コ、ニ城ヲギツキシヨ

リ、次第ニ商業ノ盛ナル大都會トナ

レリ。

八946 図 名古屋は此の城あるにより

て名高く、(略)。

八947 圖 (略)、「尾張名古屋は城で

持つ。」とうたはれたり。

十二275 図 城を抜け出でて岡崎に

至り、急を主公に告ぐる者なきか。」

十二279 図 (略)、「若し向ひの山に

のろしのあるを見れば、幸にして城

を出でたりと知れ。

十二282 図 黒き影は城の一方より現

れ出で、(略)。

十二294 図 十六日勝商は(略)、次

いで城に入らんとするに、不幸發見
せられて、(略)。

十二299 図 勝商城に向ひ、高らかに

號んで曰く、(略)。

十二3010 図 上毛野形名、(略)、兵皆

四散せしかば、夜に乘じて城をすて

て逃れんとす。

十二315 図 新田義貞、尊良親王を奉

じて越前國金崎の城に在りし時、

(略)。

十二317 図 足利氏の大兵來り攻め、

城遂に陥り、保・義鑑共に戰死す。

しるあり「白蟻」(名) 1 白蟻

十一896 図 熱き地方の白蟻は周圍十

間、高さ三間にも達する小山の如き

巢を造り、木質にて内部を圍むとい

ふ。

しる「い」[白] (形) 28 シロイ 白イ 白

い「イイ・ク」ムあおしろい

一173 クロイ ネコ シロイ イヌ

一404 アカイノヤ シロイノヤ

イロイロマジツテキマス。

二51 図 「ボクニハコノ シロイ

ノヲクダサイ。」

二362 (略)、モチハ 白イトリニ

ナツテ、バツト トンデイキマシ

タ。

二453 白イノモ コウバイモア

リマス。

二506 ヨイ オヂイサンハ 白イ犬

ヲ一ピキカツテ、(略)。

三23 ムカフノ山ニハ、ユキガ

フツタヤウニ白クナツタトコロガミエマス。アレモサクラノハナデス。
 三73 5 (略)、タマテバコヲアケテ見ルト、中カラ白イケムリガ出テ、(略)。
 四4 8 図 あこのこちらに白いかべが見えませう。
 四26 1 オトミハマルクキツタ白イ紙ヲ三ツ出シテ、(略)。
 五16 6 ソノ色ニハクロイノモアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、皆金色ヲオビテキマス。
 五31 4 十一月ゴロ白イ色ノ花ガサキマス。
 五33 7 サクラノ花ノ下ニトシデキル白イ蝶ヲ見ルト、(略)。
 五35 1 蝶ニハ(略)、羽ノ色ニモ、白イノヤ、キイロナノヤ、黒イノヤ、マダラナノヤサマ／＼アリマスガ、(略)。
 五50 7 西瓜ノ種ハ大テ黒イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。
 五52 4 花ハタ顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。
 六1 8 白い砂に青い松、どこのはまべを見ても、美しい景色である。
 六3 1 所々に白いぬのをさらしたやうなたきや谷川があつて、(略)。
 六65 1 熊ノ毛色ハ(略)、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。

六78 2 白イ帆ヲアゲタ帆カケ船モイクトナクハイツテ來ル。
 八20 8 図 (略)、君は白い雀を見たことがあるか。
 八21 1 図 白い雀が實際居るのか。
 八63 6 實ガ熟スルト、サケテ中カラ白イ綿ガハミ出シマス。
 八64 6 又所々白ク染メ殘シタノガカスリデス。
 十64 5 はるかあなたに白い水煙が見える。
 十一108 3 第二に目につくのは白い着物である。
 十一108 7 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。
 十一111 4 (略)、どこの山陰にも白い着物が乾してある。
 しろいと「白糸」(名) 1 白絲
 八65 9 其ノ中へ白絲や白布ヲ入レテ、紺や淺黄ニ染メルノデス。
 しろう 凸にたんのしろう・にたんのしろうただつね
 じろう「次郎」(話し手名) 11 次郎
 四4 2 次郎「にいさん、ここから見ると、(略)。
 四5 3 次郎「ああ、あれですか。
 四6 4 次郎「それでは今くるまのとほつてゐる 長い はしが、(略)。
 四7 1 次郎「五人です。」
 四7 3 次郎「一人 二人 三人 四人 五人、(略)。」

四7 7 次郎「ああ、さうです、さうです。」
 四20 5 次郎「パン太イノガオヤユビ、(略)。
 四21 6 次郎「ウチノニイサンヤネエサンヲアハセルト、(略)。
 四34 3 次郎「だんごにつけるこなは。」
 四34 5 次郎「それではあんの豆と、(略)。
 四35 1 次郎「あんにするのはあづきといふ豆で、(略)。
 じろう「次郎」(人名) 3 次郎
 四3 8 太郎と次郎が二人で山へのぼりました。
 四20 3 図 オヂイサン「次郎、オマヘハ手ノユビノ名ヲ知ツテキマスカ。」
 四33 6 あにの次郎が又よこから、(略)。
 しろうさぎ「白兔」(課名) 4 白ウサギ
 四目 5 十七 白ウサギ (一)
 四目 6 十八 白ウサギ (二)
 四52 2 十七 白ウサギ (一)
 四56 5 十八 白ウサギ (二)
 しろうさぎ「白兔」(名) 10 白ウサギ
 四52 3 島ノ上ニ居タ 白ウサギガ、(略)、海ヲワタルクフウヲカンガヘテキマシタ。
 四53 7 白ウサギハコレヲ見テ、「ナルホド、オマヘノナカマハズキブン多イ。」

四54 8 ワニザメハ白ウサギノイフトホリニナラビマシタ。
 四55 2 白ウサギハ一ツ二ツトカゾヘテ、ワツツテ行キマシタガ、(略)。
 四56 3 ワニザメハ(略)、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。
 四56 6 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、ハマベニタツテ、ナイテキマシタ。
 四57 8 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、(略)。
 四59 6 白ウサギハ目ヲコスツテ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。
 四60 6 白ウサギガソノトホリニシマス、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。
 四61 7 ソノノチオホクニヌシノミコトハ白ウサギノイツタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。
 じろうさん「次郎」(人名) 1 次郎さん
 八12 4 図 なるほど皆さんと一しよの分は、おはなさんも次郎さんも少しまじめになつてゐます。
 しろうり「白瓜」(名) 3 白瓜
 五49 4 キ瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔・西瓜・トウ瓜・カボチャ・ヘチマナドラ瓜トイフ。
 五49 6 マツ形カライヘバ、キ瓜・白

瓜・ヘチマハ細長ク、(略)。

五五七 キ瓜や白瓜ハ生デ瓜モミニシ
テモ、ツケ物ニシテモタベ、又ニテ
モタベル。

しろし「巨」(形) 2 白シ 白し

「クーシ」

八八六 図 ヨーロッパ人は大むね皮膚

白く、髪赤く、眼の色青し。

一一八四 図 (略) 綿花ノ細片四方ニ

飛散シテ、(略)、機械ノ前ニ立テバ

全身忽チ白シ。

しろすずめ「白雀」(課名) 4 白雀

八目八 第七 白雀…(一)

八目九 第八 白雀…(二)

八二五 第七 白雀…(一)

八二五 第八 白雀…(二)

しろすずめ「白雀」(名) 4 白雀

八二七 次の朝農夫は(略)、若しや

白雀が居はしまいかと、屋敷のまは

りを見まはつて、(略)。

八二六 (略)、自分はどうかして白雀

を見つげようと、たづねまはりまし

た。

八二五 一週間程たづねたが、白雀は

見つかりませんでした。

八二七 図 「どうだ、白雀は見つかつ

たか。」

しろめの「白布」(名) 4 シロヌノ

白布

一一二一 キヌモメンシロヌノ

八六五 其ノ中へ白絲や白布ヲ入レ

テ、紺や淺黄ニ染メルノデス。

九五一 図 (略)、長き白布くるく

と 頭に巻ける印度人、(略)。

一一七五 美しき瀧にして、眞に白

布をさらせるが如し。

しろはた「白旗」(名) 1 白旗

一二八 敵今は逃れぬところと覺

悟したりけん、ネボカトフ少將は白

旗をかゝげ、(略) 降服せり。

しわ「皺」(名) 2 しわ

五二九 図 しわはよつてもわかい氣

で、小さい君らのなかま入、うんど

う會にもつて行く。

一五二 図 若者かと思へば、面にお

びたゞしきしわたゝめり。

しわざ「仕業」(名) 1 仕業

一二八五 弓が一度糸にふれると、天

上の音楽の様な美しい音がわき出し

た。(略)。一同は唯神の仕業とのみ

思つた。

しん「信」(人名) 2 信 凸かんしん

一五九 図 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖

ニ仕へ、良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、信ハ

外ニ兵ヲ用ヒテ、(略)。

一五九 図 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメ

ズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、(略)。

しん「秦」(地名) 1 秦

一二三八 図 (略) 蘭相如といふ賢臣

あり。敵國秦に使用して功ありしかば、

(略)。

しん「清」(地名) 凸につしんにちろり

ようえき

しん「心」(名) 1 心 凸こうきようし

ん

一一八七 図 (略) 彼ノ蠟燭ノ心トス

ル太キ絲、(略)。

しん「臣」(名) 8 臣

七七一 図 モシ病ニカ、リテ早ク死

ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナ

リ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベ

シ。

一四三 図 正儀の臣兵庫介忠元あや

しみて、「何者ぞ。」と問へば、(略)。

一四三 図 「赤松光範の臣宇野六

郎の子なり。

一二九四 図 「君君たり。臣臣たり。

一二九四 図 「君君たり。臣臣たり。

一二九四 図 或時齊の臣景公に告げて

曰く、(略)。

一二九四 図 景公歸りて群臣に告げ

て曰く「(略)、我が臣の行ふ所は禮

に反す。

一二九五 図 齊の臣答へて、「(略)。

君、實を以て謝せよ。」と。

しん「信」(名) 1 信

一二一三 図 一には、軍人は信義を重

んずべし。信とは我が言を行ひ、義

とは我が分を盡すをいふ。

しん「真」(名) 1 真

一二一三 図 (略)、小敵を侮らず、大

敵を恐れず、十分に自己の職務を盡

す人を眞の大勇の人といふべしと訓

へ給ふ。

しん「寝」(名) 1 寝

一二九一 図 主婦は寢に就く前、先づ

竈の下より火消壺までもよく検査し

て、(略)。

しん「親」(代名) 3 臣

七六二 図 正行(略)、皇居ニマキリ

テ申シ上グルヤウ、「父正成ノ戰死

セシ時、臣ハワヅカニ十一歳(略)。

七六四 図 父ハ臣ヲ合戰ノ場ニモト

モナハズ、「(略)。」ト申シ殘シタリ。

一一一〇三 図 備崩ズルニ臨ミ、(略)。

「(略)。」トイヒシニ、孔明涙ヲ流シ

テ「臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致

スベシ。」ト答フ。

じん「人」(代名) じん・アフリカじん

・アフリカネグロじん・アラビヤじん

・イタリヤじん・インドじん・おうし

ゆうじんいっぽん・がいこくじん・し

なじん・せいようじん・たこじん・

ちようせんじん・トルコじん・ないち

じん・につぼんじん・ヨーロッパじん

じん「仁」(名) 2 仁

一一一四 図 『志士・仁人は生を求

めて仁を害することなし。

一一一四 図 身を殺して仁を成すこ

とあり。』とかや。

じん「陣」(名) 1 陣

六五六 謙信は(略)、こちらから先

がけをしようと、夜の間に信玄の陣

に攻入つた。

しんあい 凸じんあい

しんあいす「親愛」(サ変) 1 親愛す

「スル」

十二100 9 図 外國人に接するに（略）、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

じんい「人為」(名) 1 人為

十二10 8 図 我ガ聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一二天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人為ノ能クスペキニアラズ。

しんいち ひさとうしんいち・さとうしんいちさま

じんいん「人員」(名) 1 人員

七81 8 図 私の乗つてゐる明治丸といふのは、（略）大きな汽船で、乗組の人員は二百人もあります。

じんいんてんこ「人員点呼」(名) 1

人員點呼

十56 3 図 兵營内の生活は（略）、又毎日朝夕兩度の人員點呼も御座候。

じんえい「陣営」(名) 2 陣營

十一105 1 図 （略）、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕ヘ、蜀軍ノ陣營ヲ示シテ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。

十一106 5 図 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

しんえん「神苑」(名) 2 神苑 神苑

八4 6 図 橋を渡りて神苑に入る。

八5 1 図 （略）記念砲身塔など、またいづれも神苑の内にあり。

しんおう「秦王」(名) 2 秦王 秦王

十二39 1 図 「余は秦王を其の朝に叱したるもの。」

十二95 8 図 此の會に於ける孔子の行動は蘭相如が秦王を叱したるとは異なり、（略）。

しんか「臣下」(名) 2 臣下

十一7 8 図 （略）、女王は新しく生れたる雌蜂に其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。

十一13 5 図 （略）、北條高時、後醍醐天皇を隠岐へ流し奉る。臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること無道の極みなり。

じんか「人家」(名) 4 人家

七55 3 図 櫻ガ岡ヨリ見下セバ、見ユルカギリハ皆人家ナリ。

七59 3 図 カヘリ道ニ坂ノ上ヨリ見下セバ、コ・モマタ見渡スカギリ、人家ナラザルハナシ。

七82 1 図 （略）港を出て行くと、立ちならんでゐる人家も、段々に小さく見える様になります。

十二60 10 図 （略）、人家も多くは六七層にして、町幅も亦之に適へり。

じんかく「人格」(名) 1 人格

十二95 10 図 智徳の最も圓滿に發達せる人格は孔子に於て之を見るべし。

しんがん「心願」(名) 1 心願

九21 8 図 八幡様に日参いたし候も、そなたがあつたばれなるてがらを立て候様との心願に候。

しんき「神氣」(名) 1 神氣

十72 4 図 温泉のわき出づる處はおほむね火山の附近に在りて、四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。

しんぎ「信義」(名) 5 信義

十二113 5 図 一には、軍人は信義を重んずべし。信とは我が言を行ひ、義とは我が分を盡すをいふ。

十二113 6 図 故に十分に信義を盡さんと思はば、豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。

十二113 9 図 （略）、小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

十二114 8 図 以上の五箇條即ち忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、（略）。

十二116 5 図 信義は人と交り世に處するに於て最も大切な事にして、商工業の人としても常に之を重んぜざるべからず。

じんぎ ひざんしゆのじんぎ

しんぎしゆ「新義州」(地名) 1 新義州

十二57 図 新義州

じんきち「仁吉」(人名) 1 仁吉

十一101 9 図 九月二十日 仁吉 徳太郎様

しんきゅう「新旧」(名) 1 新舊

十二112 2 図 上元帥より下一卒に至る

まで、官職の高下、就職の新舊によりて上下の分別最も正し。

しんきよく「神曲」(名) 1 神曲

十二83 10 人々は唯神曲に心を奪はれて、妙音の外には何物も見えも聞えもしない。

しんく「辛苦」(名) 4 辛苦

九52 4 図 （略）、田植・草取・取入れに 農夫の辛苦共にする すぐ笠こそはたふとけれ。

九68 10 （略）、堤は切れる、稻の花は散る、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

十一16 9 図 （略）、越王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を圖り、（略）、遂に呉を滅して（略）。

十二70 8 図 老後の安樂を願ふ者は若年の辛苦をいとふべからず。

しんく「真紅」(名) 1 真紅

十二42 9 図 其の破裂するや、（略）、又之に次ぎて真紅の熔岩噴出することあり。

しんく「深紅」(名) 1 深紅

十二79 8 図 （略）、ゴロンブスは深紅の美服を着し、西班牙の國旗を持し、（略）眞先に上陸し、（略）。

しんぐ「寝具」(名) 1 寝具

十56 4 図 （略）居室・兵器・寝具 其の他一切所持品の清潔検査これあり候。

じんぐう「神宮」(名) 2 神宮 ひあつ

たじんぐう・かしはらじんぐう・かし
まじんぐう・かとりじんぐう・こうだ
いじんぐう

九51 尊は先づ伊勢にいたりて神
宮を拜し、(略)。

十一305 鹿島・香取ハ何レ
モ上古ノ武神ヲマツレル神宮ノ名ナ
リ。

じんぐうこうごういご「神功皇后以後」
(名) 1 神功皇后以後

十1003 往昔ノ磐余ノ地ニシ
テ、神功皇后以後、シバく皇居ヲ
定メ給ヒシトコロ。

しんぐん「進軍」(名) 1 進軍

十一5510 谷底の方に太鼓の音
がかすかに聞える。耳をそばだてて
聞けば、進軍の調である。

しんげきする「進撃」(サ変) 1 進撃
スル「一シ」

八52 八月末ノ遼陽ノ戦ニハ、
部下ノ大隊ヲヒキキテ、勢鋭ク進撃
シタ。

しんけん「神剣」(名) 1 神剣

九42 あやしみて尾をさきて見
給ふに、一ふりの劍出でたり。尊「こ
は神劍なり、私すべきにあらず。」と
て、之を天照大神に奉り給ふ。

しんげん「信玄」(人名) 10 信玄 亡た
けだしんげん

六555 ある時謙信が(略)、信玄は
兵を右と左と二手に分けて、はさみ
うちにしようとした。

六558 謙信はそれを知つて、(略)、
夜の間に信玄の陣に攻入つた。

六561 信玄はふいをうたれておどろ
いたが、たちまち陣立をかへて、敵
を引受けた。

六571 謙信は(略)、味方の
まつ先に立つて、信玄の本陣に切り
こんで、信玄に打つてかゝつた。

六571 (略)、信玄の本陣に切りこん
で、信玄に打つてかゝつた。

六572 信玄は刀を抜くひまがない。
六574 その時信玄のけらいが、後か
らやり先で謙信の馬のしりを力一ぱ
いになぐりつけた。

六577 信玄はそのすきにあやふい命
をたすかつた。

六585 ところがとなり國では信玄を
こまらせようと思つて、塩を送らせ
ないことにした。

六593 それから信玄が死んだと聞い
た時、謙信は「(略)。よいいくさ相
手がなくなつた。」といつてなげい
た。

しんこう「進行」(名) 1 進行

九464 隊商と共に出立した
り。(略)。一同はやむことを得ず、
進行を止めて、風のをさまるを待て
り。

しんこう「親交」(名) 1 親交

十二397 廉頗(略)、相如の門に
至りて罪を謝し、つひに無二の親交
を結べりとぞ。

しんこう「信号」(名) 2 信號

十二184 又一地方に荒模様ある時
は、(略)、警報の信號を各信號所に
掲ぐ。

十二184 信號は警報の種類により
て異なり。

じんこう「人口」(名) 11 人口

八776 首府ロンドンハ世界の都市
中にて、人口最も多きところなり。
九152 前橋市ハ人口四萬アマリ、
(略)。

十634 今ヤ足尾町ハ人口凡
ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、(略)。
十678 (略)、人口數百人の一村、(略)。
十一1117 我が村には戸數三百、人
口千四百餘あり。

十二435 太古人口少く、人智も開
けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を
採りて食物とせり。

十二436 人口やうやく増加し、自
然に生ずる物のみにては不足を告ぐ
るに至りて、(略)。

十二5310 我が國ハ(略)、殊ニ近
クハ人口四億ヲ有スル支那ノ大國ニ
隣ス。

十二597 倫敦は人口四百八十萬、
接續都會を合すれば七百三十萬の多
きに達す。

十二599 巴里の人口は二百八十
萬、伯林は二百萬を算す。

十二601 然れども近年獨逸國力の
盛に發展すると共に、首府の人口も

年々著しく増加する勢なれば、(略)。

じんこう「人工」(名) 2 人工

九954 (略)、家光の廟あり建築の
善美を盡せる亦相似たり。天然の美
は更に人工の美よりも勝れたり。東
照宮の西三里ばかり、男體山のふも
とに中禪寺湖あり、(略)。

九965 (略)、よく人工の美と天然
の美とを併せたるは日光に如くはな
し。

しんこうき「信号旗」(名) 1 信號旗

十二59 皇國の興廢此の一戦に
あり。各員一層奮勵努力せよ。」と
の信號旗が戰鬪旗と共に我が旗艦三
笠にかゝげられたるは(略)。

しんこうしゃ「新校舍」(名) 3 新校舍

十二346 昨年ノ夏カラ建築ニカゝツ
テキタ學校ガ落成シテ、(略)。(略)
其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集
シ、(略)。

十二352 (略)、此ノ改築ヲ計畫シ、
今新校舍ノ出來上ツタノハ眞ニ慶賀
スベキ事デアル。

十二362 (略)、コ、ニ新校舍ノ落
成ヲ見ルニ至レルハ、國民教育ノ一
慶事トイフベシ。

しんこうじょ かくしんこうじょ

しんこうす「信仰」(サ変) 1 信仰ス

《一スル》

十二1010 殊ニ我が軍ノ損失・死
傷ノ僅少ナリシハ歴代神靈ノ加護ニ
依ルモノト信仰スルノ外ナク、(略)。

しんこうす【進行】(サ変) 1 進行す

「セ」

九四八 阿リは幸にも星によりて方角を見定むることを知り居たれば、それを便りに進行せり。

しんこく【清国】(地名) 1 清國

一二一六 清國(略)、全國に凡そ百箇處の測候所あり。尚韓國・清國にも二十餘箇處を置けり。

しんこく【深谷】(名) 1 深谷

一一七六 深谷(略)、水烟深谷をおほひ、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。

しんこくけいほうせん【清国京奉線】(名) 2 清国京奉線

一二五五 清国京奉線は奉天より北京に通ず。

一二五六 營口線は大石橋より分れ、營口に於て清国京奉線の支線に連接す。

しんこくせいふ【清国政府】(名) 1 清國政府

一二五五 清國政府はこゝに總督を置き、滿洲全部を總管し、(略)。

しんさいす【親裁】(サ変) 1 親裁す

一二一〇 天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。

しんし【紳士】(名) 6 紳士

一二八二 木蔭に立つてつくぐと此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

た。

一二八三 老人は、(略)不思議さうに、パイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

一二八四 やゝあつて紳士はしばらく彈く手を止めると、(略)。

一二八四 紳士は更に埃太利の國歌を彈始めた。

一二八四 歌が終ると、紳士はパイオリンを老人に渡し、目禮して何處へか行つた。

一二八五 かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。

しんじ【心事】(名) 1 心事

一一五四 他人ノ歡心ヲ買ハントシテハツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイヤシムベシ。

しんじ【神事】(名) 1 神事

九八一 昔或氏神のお祭に競馬の神事といふ事があつた。

しんしき【新式】(名) 1 新式

一六六一 明治二十年頃、新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、大イニ人カヲ省クコトヲ得テ、產出高モ著シク増加シ、(略)。

しんじつ【信実】(名) 1 信實

一一五四 心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

じんじや【神社】(名) 5 神社

すじんじや・おおみわじんじや・かすがじんじや・きんぶじんじや・たいわんじんじや・たつたじんじや・だんざんじんじや・ひろせじんじや・みくまりじんじや・やすくにじんじや・よしみずじんじや

六五三 又その山のおふもとは秀吉をまつた神社もございます。

九二八 此ノ神社ノ建テラレタルハ明治二年ニシテ、(略)。

一〇一〇 其の他森林は(略)、神社・佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

一〇九六 三笠山ハ此ノ神社ノ後方ニアリ。

一二九八 官廳・學校・神社・佛閣等の建築物をけがし、(略)が如きは、公德の低きを示し、大國民の品格を傷つくるものなり。

しんしゅ【進取】(名) 1 進取

一二二八 進取の氣象に富める人は何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。

しんじゅ【真珠】(名) 1 眞珠

七二五 指ワヤエリドメナドニハメル美シイ眞珠ハ、コノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

じんしゅ【人種】(名) 3 人種

八八三 地球上に住む人類は總數十億ありて、其の人種はさまざまなり。

り。ヨーロッパ人は(略)。アフリカ人は(略)。我等日本人は(略)。

一二五八 人種・風俗ノ異ナルニ依リテ、人ノ嗜好モ亦同ジカラズ。

一二一〇 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

しんじゅがい【眞珠貝】(名) 1 眞珠貝

七二八 又眞珠貝トイフモノガアル。

じんじょうしょうがくとくほんまきく【尋常小学読本卷九】(名) 2 尋常小學讀本卷九

九一一 尋常小學讀本卷九

九六〇 尋常小學讀本卷九終

じんじょうしょうがくとくほんまきじゅう【尋常小学読本卷十】(名) 2 尋常小學讀本卷十

一一一 尋常小學讀本卷十

一〇三 尋常小學讀本卷十終

じんじょうしょうがくとくほんまきじゅういち【尋常小学読本卷十一】(名) 2 尋常小學讀本卷十一

一一一 尋常小學讀本卷十一

一二一 尋常小學讀本卷十一終

しんしよく【寢食】(名) 1 寢食

一一六六 人生七十年と見るも六十

萬時間に過ぎず。其の内寝食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。

しんしん「心身」(名) 2 心身

十一53 笑ハ心身ノ良藥ナレド

モ、時ト場合トニヨリテ笑フベカラザルコトアリ。

十一69 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

じんしん「人心」(名) 1 人心

十二105 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、(略)。

じんしん「人臣」(名) 1 人臣

十二72 位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、(略)。

じんじん「仁人」(名) 1 仁人

十一14 志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。

しんず「信」(サ変) 2 信ず「一ジ」

十二74 コロンブスは初より世界は球形なりと信じ、(略)、印度の東海岸に到着すべしとの意見を抱けり。

十二75 亞細亞の東端は歐羅巴の西端に近しと信じ、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は(略)。

しんせい「真正」(形状) 1 真正

十二113 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、眞

正の軍人にあらず。

じんせい「人世」(名) 1 人世

十二33 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

じんせい「人生」(名) 2 人生

十一67 人生七十年と見るも六十萬時間に過ぎず。

十一68 人生の長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て量るべからず。

しんせつ「親切」(名) 1 親切

十一54 ミダリニ聲色ヲ作リテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

しんせつ「親切」(形状) 3 親切

九21 村の方々は(略)、(略)、定めて不自由なる事もあらん。何にてもあんりよなく言へ。」と親切におほせ下され候。

十35 老人がはいつて來ましたが、すぐに立つて、椅子をゆづりました。人に親切なことは是でも知れると思ひました。

十71 (略)ダリーングの手は、今ややさしきをとめの手にかへりて、半死半生の水夫を親切に看護せり。

しんせつこうへい「親切公平」(形状) 1 親切公平

十一112 村長は(略)、極めて親切公平なる人なれば、深く村民に敬

愛せられ、幾度の改選にも常に選舉せられて、(略)。

しんぜん「神前」(名) 1 神前

九83 神主は先づ神前で祝詞を上げて、(略)。

しんぞう「心臓」(名) 3 心臓

十75 兩肺ノ間ニ心臓アリ。

十75 心臓ハ肺臓ヨリ來ル新シキ血ヲ全身ニ送り、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ送ル。

十77 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテオホハレタルハ肺臓及ビ心臓ヲ保護センガ爲ナリ。

しんぞく「親族」(名) 1 親族

十二103 市町村長・議員等を選舉するには(略)、親族・縁故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

しんぞく「親族」(名) 1 親族

十一62 (略)、來る七月二日の誕生日を以て、親族一同打寄り、心ばかりの祝宴相開き、(略)。

しんたい「身体」(名) 21 身體 ひとしんたい・ひとのしんたい

八70 (略)、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、皮膚の色さへ青ざめて、身體は全く力なきにいたれり。

八82 かくる地方にては、人は皆はだかにして、布片を身體の一部にまとい過ぎず。

九59 しば／＼入浴し、身體を清潔にすべし。

九59 運動不足なれば、(略)、身體弱りて、氣分もふさぐ。

九60 身體の勞を直すはよく眠るに如くはなし。

九61 飲食に注意し、身體の清潔を保ち、(略)、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

十75 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、(略)。

十76 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ送ル。

十76 身體ノ最上部ナル頭ノ中ニハ腦アリ。

十78 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、(略)。

十78 (略)、常ニ身體ヲ大切ニシ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

十78 西洋ノ古語ニ曰ク、「健全ナル精神ハ健全ナル身體ニ宿ル。」ト。

十79 身體ノ健全ナルトキハ精神モ亦常ニ快活ニシテ、(略)。

十85 馬も(略)。死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。

十一10 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。

十一52 身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。

十一52 5 笑ハント欲セバ、衛生ニ注意シ、身體ヲ健全ニスベシ。

十一52 6 天性快活ナル人モ、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十一66 2 日々同ジ食物ヲ用ヒルト、アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。

十一88 10 油蟲は（略）、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、（略）。十二47 2 農業に従事するものは多く野外にありて、（略）、筋肉を勞するが故に、身體常に健全なり。

しんたい「神体」 ムごしんたい

しんたい「進退」 (名) 1 進退

九24 7 騎兵は進退敏活にして、多くは友軍の前方に出でて敵狀をさぐる。

しんたい「身代」 (名) 3 身代

八19 4 初は近所の人にもうらやまれる程の身代でしたが、牛も段々減り、畑の取高も年々にくくなつて、（略）。八25 8 朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」

八26 7 （略）、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、夜も晝もよく働きました。

じんたい「陣立」 (名) 1 陣立

六56 3 信玄はふいをうたれておどろいたが、たちまち陣立をかねて、敵を引受けた。

しんたろう ムむらたしんたろう・むらたしんたろうさま

じんち「人知」 (名) 3 人智

十一24 9 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん。

十一29 6 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。（略）。人智の進歩は際限なしといふべし。

十二43 5 太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

じんち「陣地」 (名) 6 陣地

八85 6 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。

八89 8 陣地ハフタ、ビ敵ニ取返サレルノデアラウ。

八90 2 （略）、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ殘念千萬ダ。」

八91 3 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタト思ヘ。」

九24 10 工兵は陣地をきづき、道を開き、（略）等、もつぱら技術の事にしたがふ。

十一33 9 砲艦ハ（略）、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。

しんちく ムほんこうしんちくらくせい

しんちゅう「心中」 (名) 2 心中

十一52 8 公明正大ニシテ、心中一點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。

十一52 9 内ニ省ミテ、ヤマシキコ

トアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセン。

しんちゅう「真鑑」 ムこうてつしんちゅうるい

じんちゅう ムほうこくじんちゅう しんちよく「神勅」 (名) 1 神勅

八25 5 （略）天照大神（略）、八咫鏡を授けたまひて、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。その神勅によりて、代々の天皇はこれを宮中にあがめたまひしが、（略）。

しんでん「神殿」 (名) 4 神殿

八26 8 （略）、後神殿を今の五十鈴の川上に造り、（略）。

八29 9 神殿は昔ながらの白木造にして、二十年ごとに新しく造らせたまふ御定なりと承る。

八58 8 （略）、神殿の御屋根はかやにてふき、棟にはかつを木をならべ、兩はしに千木をうちちがへたり。

八75 5 （略）、外宮に参拜す。神殿の御有様、おほよそ内宮に同じと見奉る。

しんどう「新道」 (名) 1 新道

九40 2 今ハ（略）新シキ温泉場モ開ケ、廣キ新道モ出来、（略）電車サへ開通セリ。

じんどう「人道」 (名) 1 人道

十二61 4 （略）、人道と車道との間なる左右二列の綠樹は枝を交へて、雅麗比なし。

じんどう「陣取」 (五) 2 陣取ル陣取る「一ツ」

六55 5 ある時謙信が山の上に陣取つてゐると、（略）。

八85 4 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。

*しんに ムまことに しんにゅうす「進入」 (サ変) 1 進入す「一スル」

九65 4 試みに茶わんのそこにするしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。（略）。是茶わんの中に空氣ありて、水の進入するを防げばなり。

しんにん ムごしんにん

しんねん「新年」 (課名) 2 シンネン

二目 2 シンネン

二27 5 シンネン

しんねん「新年」 (名) 2 シンネン

二29 5 「シンネン オメデタウ。」

二29 6 「シンネン オメデタウ。」

しんのう ムたかながしんのう

じんば「人馬」 (名) 1 人馬

九38 9 東海道ノ通路ニアタレルヲ以テ、昔ハ人馬ノ往來甚ダ盛ナリキ。

しんばい「心配」 (名) 2 シンバイ

心配

一51 4 （略）、オヤニシンバイヲ

カケルノハワルイコトデス。

九73 3 （略）雨も止み、風も静まりて、日の光さへ見え出し候へば、

此の分ならば、もはや心配には及ぶまじと(略)。

しんばいいたす「心配」(五) 1 心配いたす「—シ」

八七1 初は熱があまり高いので、一時はどうなることかと心配いたしました(略)。

しんばいいたす「心配」(形状) 1 心配ゲ

七九2 見渡セバ杉野ナシ。中佐ハ心配ゲニ、「ヨシ、タツネ来ん。」ト、(略)。

しんばいいたす「心配」(サ変) 1 心配す

「—スル」

十一701 思ひても返らぬことをくよくくと心配するは、未練にして愚なる人のする事なり。

しんばいいたす「心配」(サ変) 7 シンパイスル 心配スル 心配する「—シ—スル」

一506 ハヤクカヘラナイト、オカアサンガシンバイシマス。

二265 オトウサンハマダカヘリマセン。トモキチハシンバイシ

テ、カドグチヘデテミマシタ。二386 カゼヲヒイタリオナカ

ライタクシタリシタトキニ、シンバイシテ、クスリヲノマセテ

クダサツタノハ、ドナタデスカ。四671 三郎ノ母ハ(略)風ヲ

ヒイテネテキマス。三郎ハシンバイシテ、ヒマサヘアレバ、母

ノソバヘ来テ、(略)。

八196 (略)、五六年の中によほど財産を減らしました。親類や友だちは

大そう心配しまして、どうしたらよいかと、いろいろ考へてゐました。

八686 こちらの方はどうとも都合がつくから、心配するには及びません。

八922 馬丁ハドウナルコトカト心配シナガラ、様子ノ分ルヲ待ツテ居タガ、トウく戦死サレタト聞イテ、(略)。

しんばいいたす「新橋停車場」

(名) 1 新橋停車場

七542 新橋停車場ヲ出デテ、上野行ノ電車ニ乗ル。

しんばいと「新版圖」(名) 2 新版圖

十一958 樺太より臺灣へ(略)。(略)、見聞取交へ、新版圖の状況大

略御報知申上候。

十一1013 新版圖の事に候へば、

本島の開拓は我々國民の最も力を用ふべき所に候。

じんぶつ「人物」(名) 3 人物

七354 花鳥・山水・人物などのものやうは、うはぐすりをかくる前にゑ

がく。

十二1086 市町村長・議員等を選

舉するに専ら其の人物に重きを置

き、(略)私交上の關係をさしはさ

むべからず。十二1094 (略)、一般選舉人も亦

(略) 参政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

じんぶつちゅう「人物中」(名) 1 人物中

十二932 支那幾千年間の人物中、大聖として徳化の尚今日に著しきもの、孔子に如くはなし。

しんぶん「新聞」(名) 6 新聞

七466 マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デアルシ、(略)。

七529 又新聞は二十知までが五厘、(略)、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

八143 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛乳ヲ家々ニ配達シテアルク。

八459 「こちらでは近年にない大火事だから、(略)。それが東京の今朝の新聞に出たので、お分りになったのちにがひない。

九712 (略)、本日の新聞により、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

十二528 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、(略)。

しんぶんし「新聞紙」(名) 4 新聞紙

九321 (略)「何月何日初航海をするから、何人にも乗船の望に應じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、(略)。

九724 もはや新聞紙にて御承知の事とは存候へども、(略)。

十344 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十二179 (略)、又其の日の天氣豫報は毎朝の新聞紙にても知るを得べし。

しんぶんや「新聞屋」(名) 1 新聞屋

八143 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛乳ヲ家々ニ配達シテアルク。

しんべん「身邊」(名) 1 身邊

十二796 船員皆歡喜して、コロンブスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。

しんぼ「進歩」(名) 4 進歩

十一249 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん。

十一284 かくの如くにして、汽車・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

十一296 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。(略)。人智の進歩は際限なしといふべし。

十一363 當總督府の經營も着着其の効を見るに至り候事、(略)、聞きにまさる進歩に驚人候。

しんぼう「辛抱」(名) 1 辛抱

十一1081 (略)、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のこ

とわざがある。しんぼす「進歩」(サ変) 1 進歩す「—シ」

十二406 國^手 教育の事業も段々進歩し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成候事、(略)。

しんぼする「進歩」(サ変) 1 進歩スル『スル』

十一127 文明ノ進歩スルニ隨ヒ、分業ハ益々發達シテ、(略)。

しんみつ「親密」(形状) 2 親密

八724 國^圖 今より後はたがひに親密に暮すべし。世はすべて相持なり。」

十一82 國^圖 同群中の蜂は極めて親密に生活すれども、他群の蜂は甚だしく之を敵視し、(略)。

しんみん「新民」(地名) 1 新民

十二57 國^新 新民

しんみん「臣民」(名) 5 臣民

十二118 國^臣 陛下が(略)御製にも、常に國家を思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の拜察せらるゝは、(略)。

十二29 國^臣 我等臣民も亦祖先の遺風に従ひ、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

十二31 國^臣 陛下は忠勇なる我が臣民を深く信頼し給ひて、(略)。

十二106 國^臣 衆議院は一定の選舉資格を有する臣民の公選したる議員を以て組織し、(略)。

十二108 國^臣 又貴族院及び衆議院は各獨立して上奏し、建議し、且臣民の請願を受くるの權能を與へられたり。

じんみん「人民」(名) 1 人民 じんみん ばんじんみん・ちほうじんみん

十二106 國^自 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。

じんむてんのう「神武天皇」(課名) 2 神武天皇

五目4 第三 神武天皇

五目6 第三 神武天皇

じんむてんのう「神武天皇」(人名) 2 神武天皇 神武天皇

五目7 日本ノ一バンハジメノ天皇ヲ神武天皇ト申シ上ゲマス。

十二102 國^神 畝傍山ノ東北ニハ神武天皇ノ御陵アリ。

しんめ「新芽」(名) 1 シンメ

五32 茶ハシンメノ出ルジブンニ、ソノデータノ葉ヲツムノデス。

しんめい「身命」(名) 2 身命

十一810 國^身 蜜蜂の群集生活を營むを得るは、(略)、團體の爲には身命をしまざるによる。

十二111 國^身 (略)、軍人たる者は(略)、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

じんめんじゅうしん「人面獸心」(名) 1 人面獸心

十二86 國^人 「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、人面獸心とは汝の事なるべし。

しんよう「信用」(名) 7 信用

十二51 國^信 商人ノ第一ニ重ンズベキハ信用ナリ。

十二51 國^信 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマスカレズ。

十二52 國^信 見本ト現物トヲ異ニシ、約束ノ期限ヲ違ヘ、(略)、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

十二52 國^信 信用ノ基ハ正直ニアリ。

十二54 國^信 富國ノ實ノ舉ルト擧ラザルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏ノ如何ニ存ス。

十二63 國^信 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。

十二71 國^信 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。

しんらい「新來」(名) 1 新來

十二79 國^新 (略)、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。

しんらいしたまう「信頼給」(四) 1 信頼し給ふ『一ヒ』

十二81 國^信 陛下は忠勇なる我が臣民を深く信頼し給ひて、(略)。

しんらいす「信頼」(サ変) 1 信頼ス『一シ』

十一102 國^信 劉備深ク孔明ヲ信頼シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、(略)。

じんりきしや「人力車」(名) 3 人力車

九38 鐵道の通じてゐない所でも、馬車や人力車がある。

十一25 國^信 我が國に最も普通なるは荷車・人力車等にして、(略)。

十一114 國^信 里道の改修も全く成り、村内の重なる道路は荷車・人力車を通ずるに至れり。

しんりょうち「新領地」(名) 1 新領地

十二79 國^新 (略)、コロンブスは(略)、西班牙の國旗を持し、(略)眞先に上陸し、此の西班牙の新領地をサンサルバドルと命名せり。

しんりょうど「新緑」(名) 1 新緑

八36 國^新 野べも山べも新緑の風に藤波さわぐ時、池水にほふかきつばた。

じんりよく「人力」(名) 1 人力

十61 國^新 (略)、新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、大イニ人力ヲ省クコトヲ得テ、(略)。

じんりよく「尽力」(名) 1 盡力

十31 國^新 然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、主トシテ井戸平左衛門ト青木昆陽トノ盡力ニヨル。

しんりん「森林」(名) 18 森林

十87 國^森 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。

十88 國^森 されど森林のあたふる利益は是のみに止らず。

十810 國^森 森林の樹木は(略)、雨の一度に地上に落つるを止め、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。

十96 國^森 故に若しみにだりに森林をき

り荒す時は、数時間の暴雨にもたちまち大水出で、数日のひでりにも河水全くかはつべし。

十99 森林は（略）、土砂の飛散を防ぎ、又常に土地をうるほして、土砂を落付かしむ。

十101 森林なければ、土砂附近の田畠に飛散りて、其の土地を荒すこと多し。

十103 總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り来るものなるを以て、（略）。

十104 森林は漁業の爲にも大いなる利益をあたふ。

十105 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

十108 其他森林は氣候を和げ、土砂の流出を防ぎ、（略）一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

十111 森林の効用かくの如く著しきを以て、（略）。

十112 近年一定の森林を指定し、其の樹木を一時に伐取ることを禁ぜり。

十113 かく保護せられたる森林を保安林といふ。

十197 日・露の境は幅五間餘を一文字に森林を伐りすかし、（略）。

十100 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然

林にして、（略）。

十48 又森林は全國の山野たほはぬ處なく、殊に名高き木曾・吉野・樺太・臺灣太古より

の入らぬ林あり。

十58 安東縣は鴨綠江附近の森林より伐出す木材の集散地なれば、（略）。

十67 南亞米利加の森林にオレンジの熟する季節には、（略）。

じんりん「人倫」一名 人倫

十二117 「此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり。

しんるい「親類」一名 10 シンルキ

七19 にはの藤の花が咲いて（略）。

七20 どういふわけで、おたがひに親類の間からでございますか。」

七21 大豆・小豆・さゞげ・そら豆・なた豆などはすべて私どもの親類です。

七22 私どもの親類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲くれんげ草でございます。」

八19 五六年の中によほど財産を減らしました。親類や友だちは大そう心配しまして、（略）。

八46 サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタシルキミナブジデ

ス

八47 サクヤウチヤケナイシルキミナブジ

八48 ヤケナイシルキミナブジ

八49 ヤケナイシルキミナブジ

十二92 身分相當の交際は家を保つ上にも必要なり。親類・縁者はもとより、世間の交際をも外さず、（略）。

じんるい「人類」一名 1 人類

八83 地球上に住む人類は總數十六億ありて、其の人類はさまざまなり。

しんるい「神靈」一名 1 神靈

十二11 「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ

しんる「進路」一名 2 進路

十二8 によりて主戰艦隊及び巡洋艦隊は東方に向つて、其の進路をふさぎ、（略）。

十二66 又かつて栗鼠の大群、何れも南より北へ同一の進路を取りて、（略）。

しんるく「神鹿」一名 1 神鹿

十95 春日神社ニ到ル。（略）。

神鹿ノ三々五々友ヲ呼ビ、人ニ近ヅキ來リテ食ヲ求ムルモ愛ラシ。

す

す「巢」一名 10 ス 巣

三19 ヒバリハオリルトキニハ、ケツシテスノアルトコロヘハオリマセン。

三19 ケレドモ上ルトキニハ、スカラズグトビタチマス。

三19 子ヒバリハスノ中デ、ドンナニマツテキルコトデセウ。

三51 かげふく小えだにすをはる小ぐも、（略）。

三52 とうとう小えだにすをはつた。

八21 又若し外の雀が見つけると、（略）いちめるので、毎朝早くすを出て、多をさがして、（略）。

十一87 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは（略）。

十一89 蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、（略）。

十一89 熱き地方の白蟻は（略）小山の如き巢を造り、木質にて内部を圍むといふ。

十一90 收穫蟻といふものあり。（略）其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

す【酢】(名) 1 す

七64 酒やすや醬油も、(略)も、水がなければ出来ない。

す【為】(サ変) 211 ス す 《シ・ス・スル・スレ・セ・セヨ》 ㇿ あいす・あいせ

つす・あいたいりつす・あいたつす・あいつうず・あいどくす・あいはんす・あいわす・あんじおり・あんず・いかだす・いじす・いじゅうす・いっしょうす・いっちきようどうす・いっちす・いっていす・いろどりす・いんけんす・うえじにす・うちじにす・うんどうす・えとくす・おうず・おうせつす・おうせんす・おうようす・おうらいす・おもんず・おんいとまごいしたまう・かいけんす・かいしす・がいしゆつす・かいす・がいす・かいせいす・かいつうす・かいてんす・かいふくす・かくごしおく・かくごす・かくして・かけつす・がしたてまつる・かす【架】・かす【課】・がつす・かつどうす・からくして・かりしたまう・かるんず・かんきす・かんきゅうす・かんげいす・かんごす・かんじもうす・かんしんす・かんす・かんず・かんせいす・かんそくす・かんつうす・かんびす・かんぶんべんれいす・かんゆうす・かんらんす・かんりゆうす・きこうす・きこくす・きさいす・きしよくす・きす・きす・きたす・きちやくす・きていす・きゅうさいす・きゅうしんす・きゅうす・きゅうせつす・き

ゆうようす・きようきゅうす・ぎようこうしたまう・きようす・きようせいす・きようそうす・きようどういっちす・きようどうだんけつす・きようりよくす・きよこうす・きんず・きんぞくす・くうひす・くちくげきはす・くふうす・くらしいす・けいあいす・けいじす・けいす・げきちんす・げきちんほかくす・けつぎす・けつす・けつせんす・けつぼうす・けんぎす・げんしよくす・けんず・げんず・げんぶくす・ごあんじくださる・ごあんじもうしおり・こうかいす【後悔】・こうかいす【航海】・こうかんす・こうげいす・こうこうす・こうさんす・こうす・こうず【墓】・こうず【講】・こうせんす・こうどうす・こうふくす【降服】・こうふくす【興復】・こうりゅうす・こきゅうす・こころがまえす・こころす・ごせんす・ごらんず・こんざつす・こんりゅうす・ざいきようす・さいす・さいばいす・ざいりゅうす・さきんず・ざす・ざつしてまつる・ざつす・さまたげす・さゆうす・さんけいす・さんざいす・さんしゆつす・さんす【産】・さんす【算】・さんだいす・さんばいす・さんぶんす・さんぼす・じさつす・しさんす・ししゆす・ししよくす・しす【死】・しす【資】・じす【侍】・じす【持】・じつこうす・しつす・していす・じどうす・しはいす・しやしまつる・しやす・じゅうじ

す・じゅうす・じゅうたいす・しゅうちゅうす・しゅうようす・じゅくす・しゅくはくす・しゅくごす・しゅちようす・じゅつこうす・しゅつたつす・しゅつぽつす・しゅつばんす・しゅつぽつす・じゅりようす・じようげす・じようしたまう・じようす【称】・じようす【賞】・じようず・じようす【使用】・じようす【飼養】・じようず・じようせんす・じようそうす・じようたいうせんす・じようはつす・じようびす・じようめいす・じようりくす・じよくす・じよす・じよちようす・じよりす・しらぬかおす・しんあいす・しんこうす【信仰】・しんこうす【進行】・しんさいす・しんず・しんにゅうす・しんばいす・しんぼす・しんらいしたまう・しんらいす・すいきよす・すうばいす・せいしたまう・せいす【制】・せいす【征】・せいす【製】・せいぞうす・せいちようす・せいつうす・せいとんす・せいりつす・せつきんす・せつす・せつぶくす・せつめいす・せつやくす・せんきよす・せんこうす・せんしす・せんしゆつす・せんしんしやすし・せんりようす・せうおうす・せうかす・せうかんす・せうりんす・せうす・せうす・せうだいす・せうだんす・ぞくす・そしきす・そつぎようす・そつす・そらんず・そんざいす・ぞんじたてまつる・そんしつす・そんす・ぞんず・そんちようす・

たいきよす・たいぐんす・たいじす・たいしす・たいす【体】・たいす【対】・たいはいす・たつしう・たつす・だつりやくす・だでんす・だんしよくす・たんず・だんず・だんわす・ちす・ちやくしゆす・ちやくす・ちゅういす・ちゅうもくす・ちようざす・ちようず・ちよきんす・ちよくげんす・ちよくにんす・ちんぼつす・つかいす・ついげきす・つうかす・つうこうす・つかいす・つきす・ていしゆつす・ていす・でいりす・てきしす・てきす【適】・てきす【敵】・てんかす・てんぎようす・てんざいす・てんず・でんたつす・でんらいす・とうけつす・とうず・どうず・とうそつしたまう・とうちしたまう・とうちやくす・どくりつす・とつきす・とししゆつす・としんす・となりす・とひす・なんりゅうす・にゅうえいするともおくる・にゅうよくす・にんず・ねおきす・はいごうす・はいさつす・はいしたてまつる・はいす【拝】・はいす【魔】・はいどくす・はいふす・ばくちんす・はたあげす・はつきす・はつくつす・はつけんす・はつさいす・はつす・はつたつす・はつてんす・はつめいす・はれつす・はんえいす・はんす・はんべつす・はんもす・ひこうす・ひさんす・ひす・ひとめぐりす・ひやくしゆつす・ひようけつす・びようしす・ひようす・ふかす・

ふくす「服」・ふくす「復」・ふくよう
す・ふす・ふそくす・ふちやくす・ふ
ちんす・ふんかす・ぶんごうす・ふん
しゆつす・ぶんべつしやくす・ぶんり
す・ふんれいどりよくす・へいてい
す・べんきようす・へんず・へんせい
す・べんれいす・ほういす・ほうげ
きす・ほうこくす・ほうず「奉」・
ほうず「封」・ほうず「崩」・ほうず
「報」・ほうていす・ほうもんす・ほか
くす・ほくせいす・ほこす・ほぞん
す・ほつす・ほつす・ほつそくす・ま
つとうす・まんぞくす・みやこしたま
う・めいじたまう・めいじようす・め
いず・めいちゆうす・めいめいす・め
いれいす・めんかいす・めんす・もく
そうす・やくす・ゆあみす・ゆうしん
かんせんす・ゆうす・ゆしゆつす・ゆ
にゆうす・よういす・ようす・よく
す・よこくす・よそくす・よちす・り
ゆうこうす・りゆうつうす・りゆうど
うす・りようす・れいす・れつす・れ
んけつす・れんせつす・ろうす・ろう
どうす・わごうす・わたくしす
六17 6 長サヲハカルニハ尺ヲモト
トス。
六18 8 カサヲハカルニハ升ヲモト
トス。
六19 7 重サヲハカルニハ貫ヲモト
トス。
六54 2 ニモノヲスルニモ砂糖ヲ用
フルコトアリ。

六67 6 松・杉・ヒノキ・ケヤキハ
板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、
船ヲ作ルニ用フ。
六68 3 栗ハ（略）、家ノドダイ又
ハ鐵道ノマクラ木ナドトス。
六84 7 鐵道（略）、なんぎをする人見
るときは、力のかぎりいたはれよ、
あはれめよ。
七15 5 （略）、ソノ折父トモニ戰
場ニ出デントセシガ、（略）。
七36 6 （略）、正行ハ父ノカタミノ
刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラント
ス。
七58 8 正行コノ度ハサイゴノ合戰
セントテ、（略）。
七83 3 コノ度ノ合戰サダメテナ
ンギナルベケレド、進ムモ退クモ時
ヲ見テスベシ。
七24 2 アル夜弟子ヲ集メテ、書物
ノ講義ヲセシ時、（略）、トモシビキ
エタリ。
七34 9 （略）、土又は石のこをねり
かためてかわかし、かまどに入れて
焼く。かくして出来たるものをすや
きといふ。
七50 6 お花は「はい。」と答へて
受取らんとせしが、（略）。
七56 4 勸工場ニ入りタルコ、チ
ス。
七59 5 明日ハ芝公園ヲ見テ、ソレ
ヨリ四十七士ノ墓ニマウデントス。
七91 9 （略）、乗員ハ思ヒくニ

コギサラントシ、敵ノ砲臺ヨリハ砲
丸ヲアビセカクルコトイヨく盛ナ
リ。
八23 3 天照大神、瓊々杵尊
をこの國に降したまはんとせし時、
（略）、「略。」とおほせられたり。
八24 4 「この鏡を見ること我を
見るが如くせよ。」
八28 8 （略）、この御鏡を御神體と
して、皇祖天照大神をまつりたまへ
るなり。
八18 4 「我モ後ニハコトムク
張りカヘント思ヘドモ、（略）、若キ
者ニ知ラセントテカクスルナリ。」
八29 1 （略）、南ノロヨリ入ラント
スレバ、其ノ戸ハタト閉ヅ。
八29 2 驚キテ西ノロヨリ入ラント
スレバ、其ノ戸マタハタト閉ヅテ、
（略）。
八29 6 （略）、クチヲシクモ工ノ笑
聲ヲ後ニシテ歸レリ。
八30 2 （略）入ラントスルニ、内
ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死
人横タハリテ、（略）。
八39 3 （略）、ケヅリテウス板トシ、
細クキザミテデク木トシ、（略）。
八39 4 （略）、細クキザミテデク木
トシ、火ニカワカシテ、頭ニ藥ヲツ
ケ、（略）。
八48 8 （略）を送達紙の外部に表
はさんとするものは（略）。
八48 8 （略）を受信人に知らせん

とする時は（略）。
八49 8 （略）、蘇我入鹿勢ヲホシイ
マ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフ
ルマヒ多カリキ。
八51 9 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲ
オコナハントシ、アラカジメ其ノ手
ハズヲ定メタリ。
八53 2 今シバシタメラハバ事アラ
ハレントス。
八70 4 （略）耳は食事の知らせを
聞きても知らぬ風をし、（略）。
八70 5 （略）、目は食物を見ても見
ぬふりをして過し、（略）。
八71 5 我若し食物をこなす事な
くば、全身を養ふ血は如何にして得
らるべき。
八71 6 諸君我を苦しめんとし
て、（略）自ら苦しむにいたれり。
九32 2 （略）、毎年來りて、我が
娘を取食ひ、今また残りの一人をも
食はんとす。
九58 8 （略）、尊の野に入り給ふを
見て、火を放ちて焼き奉らんとせり。
九26 4 （略）凡そ百五十人を一中
隊とし、之を三箇小隊に分つ。
九26 6 四箇中隊を大隊、三箇大隊
を聯隊、二箇聯隊を旅團とす。
九41 4 （略）、全體ノ形ノスリバ
チヲ倒ニシタルニヒトシキヲ見ルベ
シ。
九44 10 （略）隊商の仲間に加り、
大沙漠を往來するを業とせり。

九52 4 図 略、田植・草取・取入

れに 農夫の辛苦共にする すげ笠こそはたふとけれ。

九59 2 図 しばく入浴し、身體を清潔にすべし。

九59 4 図 住居もなるべくきれいにせよ。

九60 3 図 よく働かんとするものはよく眠るべし。

九65 1 図 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

九76 7 図 金銭ヲ安全ニ貯フルニハ郵便貯金トナスヲヨシトス。

九77 1 図 略、貯金セントスル時ニハ、略。

九77 3 図 略、全部ハリ終ヘタル時之ヲ郵便局ニ差出シテ、郵便貯金トスルナリ。

九79 1 図 是は略、筑紫へ旅立たんとする時、庭の梅に別ををしてみてよめる歌なり。

九88 1 図 若シ今ノ世ニモナホカ、ル事アリトセバ、其ノ不便如何バカリナラン。

九88 4 図 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、略、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。

九88 10 図 略、或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九89 2 図 貨幣トシタル物品ハ時代ニ

ヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。

九89 10 図 是金銀ハ略、貨幣トスルニ最モ便利ナレバナリ。

十2 8 図 日本一の長流を信濃川とす。

十31 6 図 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、略、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

十31 7 図 二人ガ之ヲヒロメントセシハ、略、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

十31 10 図 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスペキモノヲト心ガケシガ、略。

十40 6 図 兩將晝食共にして、なほも盡きせぬ物語。

十43 9 図 略、英國ヨリ註文アリシヲ始トシ、ドイツ・アメリカ等ノ諸國ヨリモ續々註文ヲ受ケ、略。

十46 4 図 略、右の第十圖の八角形の角を圓くすれば、左の第十一圖を得。

十50 1 図 種々の模様を工夫し、又麗しき色どりを案ずるは、工藝・美術においては極めて大切な事とす。

十51 10 図 京家・西國の者かとすれば、坂東聲なり。

十53 10 図 まして戦場にては、進まんとすれば、大人げなしとあざけり、略。

十54 8 図 略、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。

十70 10 図 山なす大波を物ともせず、

男勝りの大力にてボートをあやつりしダリーングの手は、略。

十74 3 図 箱根は略、盛夏の候は何れの旅館も空室なきに至るを常とす。

十75 1 図 旅館は略、山水のながめをほしきまゝにするを得べし。

十75 10 図 肺ハ鼻・口ヨリ吸入ル、空氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。

十78 9 図 略、常ニ身體ヲ大切ニシ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

十78 9 図 略、常ニ身體ヲ大切ニシ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

十81 2 図 食物は粟・稗・うばゆりの根等を主とし、鹿の肉は珍味として之を賞美す。

十83 1 図 略、農業を營まんとするものには土地を與へ、略。

十89 6 図 いかにせん、頼むかげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。

十97 1 図 略、大佛殿ノ高サ十五丈、東西長サ二十九丈、眞ニ世界第一ノ木造建築物トス。

十一6 6 図 略、外役の蜂は朝より夕に至るまで、營營として寸時も休まず。

十一7 2 図 略、強ひて入らんとすれば立ちどころにさし殺す。

十一14 5 図 義を見てせざるは勇無きなり。

十一15 10 図 天、勾踐を空しうするなかれ。

十一17 5 図 本土の西、近く九州と相接せんとする所、下關海峡あり。

十一29 6 図 略、又其の軍事上に應用せらるゝも決して座上の空談にあらず。

十一30 10 図 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様オモヒ見ルベク、略。

十一31 10 図 戦艦ハ略、堂々敵ト決戦スルヲ目的トス。

十一33 6 図 海防艦ハ専ラ自國ノ沿岸ヲ護ルコトヲ目的トス。

十一34 7 図 驅逐艦ハ略、又敵ノ水雷艇ヲ驅逐・撃破スルヲ目的トス。

十一34 9 図 水雷艇ハ略、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃沈スルヲ任務トス。

十一35 1 図 潜水艇ハ略、敵艦ヲ撃沈スルヲ目的トス。

十一39 5 図 又竹を原料として竹紙を製造致居候。

十一41 8 図 如何にもして討取り申すべし。

十一44 2 図 正儀は河内にて領地を與へんとしたれども、略。

十一45 2 図 幾度か思ひ直して討たんとすれども、略。

十一45 5 図 正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、略。

十一45 7 図 略、熊王略、刀を取直して腹かき切らんとす。

十一48 8 追手のトルコ人は如何ともすべき方法が無い。

- 十一526 笑ハント欲セバ、衛生ニ注意シ、身體ヲ健全ニスベシ。
- 十一5210 内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセシ。
- 十一5310 イハンヤ我ニ優レル人ヲネタミ、其ノ聲譽ヲ傷ツクントシテ笑フ者ニ於テヲヤ。
- 十一541 他人ノ歡心ヲ買ハントシテヘツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイヤシムベシ。
- 十一682 (略)、唯此の二十萬時間を利用するとせざるとにあり。
- 十一6910 若し過あらば、(略)、其の過を再びせざらんことをちかふべし。
- 十一702 思ひても返らぬことをよくと心配するは、未練にして愚なる人のする事なり。
- 十一709 例へば六十人の集會に其の中の一人若し十分を俟るとせば、(略)。
- 十一742 (略)、夜中のぞき見たる姿をして見るに、(略)。
- 十一743 図 「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」
- 十一758 日光山には華嚴瀧を始として、霧降・裏見・方等・般若等其の名世に知られたるもの少からず。
- 十一796 鵜飼を業とする漁夫は皆此の二村に住めり。

- 十一818 鵜の鮎を吞むは必ず頭よります。
- 十一829 (略)、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鮎を得るを常とす。
- 十一838 年々一億圓ノ綿花ヲ輸入シテ、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所用ヲミタシテ、(略)。
- 十一845 先ヅ綿花ヲ(略)、鐵棒ニマキテ、長サ四尺バカリ、直徑尺餘ノ錠綿トス。
- 十一845 之ヲ紡績作業ノ第一段トス。
- 十一859 (略)、イヨイヨ延シテ、イヨく細クシ、次第二ヨリヲカケテ(略)。
- 十一872 (略)蠟燭ノ心トスル太キ絲、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲(略)。
- 十一882 蜘蛛は(略)網を張らんとする時は、(略)。
- 十一882 (略)、先づ幾條かのやゝ太キ絲を渡し、之を本として、次第に細キ絲をかけ、(略)。
- 十一8910 (略)收穫蟻といふものあり。一種の草の實を食用とするを以て、(略)。
- 十一921 (略)二戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。
- 十一926 (略)、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。
- 十一928 (略)、賣家の持主五人は

- (略)、争ひて其の價を低くすべし。
- 十一929 (略)、最も價を低くしたる人、其の家を賣ることを得べきなり。
- 十一934 物の價は(略)其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。
- 十一947 即ち物の價は普通の價を本として上下すと知るべし。
- 十一1025 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)。
- 十一1027 (略)、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。
- 十一1039 図 「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」
- 十一1045 孔明ハ(略)漢朝ヲ興復セントシ、先ヅ南方ノ亂ヲ平ゲ、(略)。
- 十一1053 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、(略)。
- 十一1062 蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國ニ歸ラントス。
- 十一1064 蜀ノ軍(略)、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。
- 十一1125 (略)、花筵を織ること行はれ、十三歳の少女も手を空しう

- する者なきに至れり。
- 十一1132 其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵するが故に、(略)。
- 十一1134 (略)、兒童は(略)、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。
- 十一1137 村會にて村費を議するにも、大抵原案を可決するを常とす。
- 十一11310 (略)、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。
- 十一1151 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、(略)。
- 十一1152 (略)杉・檜等の植林を營み、其の利益を以て學校の基本金とし、(略)。
- 十一1154 (略)、其の一部をさきて、一村共同の有益なる費用にあつることとせり。
- 十一1182 上下心算一にして、同胞すべて六千萬。
- 十一141 文武道を異にすれども、國に盡す誠は一なり。
- 十二410 (略)太平洋第二・第三艦隊は、朝鮮海峡を経てウラヂオストックに向はんとす。
- 十二69 (略)、波浪山の如くなれども、熟練なる我が砲手は物ともせず、打出す砲弾よく命中して、(略)。
- 十二72 敵はかなはじと、にはか

に路を變へて逃れ去らんとせり。

十二108 ㊦ 我ガ聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ。

十二118 ㊦ 故に今より出帆せんとする船は、之を見て出發を見合せ、(略)。

十二201 ㊦ 又風の方向は矢を以て示し、矢の上へ向ふは南風、(略)、左へ向ふは東風とす。

十二284 ㊦ 敵の衛兵相呼んで尋ねんとするに、一老兵のいふ、(略)。

十二286 ㊦ しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。

十二292 ㊦ 「我、明日大軍を率ゐて出發せんとす。

十二295 ㊦ (略)のろしをあげ、次いで城に入らんとするに、不幸發見せられて、(略)。

十二301 ㊦ 上毛野形名、(略)、夜に乗じて城をすてて逃れんとす。

十二328 ㊦ (略)、皆後世女子の模範とすべき德行なり。

十二321 ㊦ かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略) 形名の妻と其の徳を同じうすとやいはん。

十二341 ㊦ (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

十二356 ㊦ (略)、其ノ席末ニ列スル

ヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

十二364 ㊦ 本校舎ノ建築ハ質素堅固ヲ主トシ、(略)。

十二377 ㊦ 將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。

十二395 ㊦ 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」

十二395 ㊦ (略)、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」

十二405 ㊦ 就中噴火口の最も大なるを肥後の阿蘇山とす。

十二436 ㊦ 太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

十二465 ㊦ 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

十二493 ㊦ 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も 古く其の名を知らざりたり。

十二522 ㊦ 見本ト現物トヲ異ニシ、約束ノ期限ヲ違へ、(略)ガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

十二531 ㊦ 但シ不相当ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラス。

十二563 ㊦ 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、(略) 露西亞の東清鐵道

との連結點とす。

十二592 ㊦ 倫敦・巴里・伯林を歐羅巴の三大都とす。

十二618 ㊦ 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

十二628 ㊦ 倫敦は(略)、古風の乗合馬車を以て主なる交通機關とす。

十二632 ㊦ 壯麗なる馬車・自動車が多きは巴里を第一とし、市中到る處其の往來織るが如く、(略)。

十二671 ㊦ (略)オレンジの熟する季節には、數多の猿(略)集り來りて之を食ひ、果實盡くれば、再び其の故郷に歸るを例とす。

十二706 ㊦ 先づ苦しみて然る後に樂しむを賢者とし、(略)。

十二707 ㊦ (略)、先づ樂しみて然る後に苦しむを愚人とす。

十二726 ㊦ 「疏食をくらひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。

十二794 ㊦ (略、前面の一島草木青々として、花開き、鳥さへづり、(略)。

十二812 ㊦ コロンブスの遠征時代は(略)、北條早雲が(略)其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。

十二865 ㊦ 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。

十二861 ㊦ 獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

十二872 ㊦ 良雄平然頭を低くして之を食ひ、からくと打笑へり。

十二882 ㊦ 時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

十二881 ㊦ (略)、ふたをすべき物にはふたをし、(略)。

十二891 ㊦ (略)、ふたをすべき物にはふたをし、(略)。

十二898 ㊦ (略)何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要なる事なり。

十二903 ㊦ 主婦は(略)、戸締を爲すと共に火の用心を忘れざる様にすべし。

十二906 ㊦ 衛生上の注意を怠らずして、何人も病にをかされぬ様にすべし。

十二921 ㊦ 日々の暮しは「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。

十二921 ㊦ 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、(略)。

十二928 ㊦ 其の上不時の出費の爲、多少の準備を爲し置くを必要とす。

十二937 ㊦ 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く(略)。

十二938 ㊦ 「孔子は年少にして禮を好み。我死せば、汝必ず之を師とせよ。」

十二949 ㊦ 「魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん。」

十二955 ㊦ 我、罪を魯君に得たり、如何にせば可ならん。」

十二983 ㊦ (略、殊に他國人の注意

を引くものは社會の公德及び國民の度量なりとす。

十二985 ㊦ 公德とは（略）、公共の物品を大切にする等、（略）其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二986文 市街・道路を不潔にし、
 (略)、公園の樹木を折取るが如きは、
 (略)。

十二¹⁰⁰ 2 文 (略) 是等文明の利器も
其の運用を全くすること能はず。

十二1017 文 (略)、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、(略)。

十二¹⁰³5 〔文〕（略）を選擧するも、（略）議員の經費を議するも、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。

十二¹⁰⁶ 9 文 第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。

十二106	9	〔文〕	（略）、其の他は終身とす。
十二108	1	〔文〕	しかして、法律及び豫算
は（略）、			天皇の裁可を待ちて始め

て成立するものとす。

十二¹⁰⁹ 10 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽に

すべからざるものなれ。
十二121 文 一には、軍人は禮儀を正しくすべし。

十二114の文 一には、軍人は質素を旨
とすべし。

十二114の文 質素を旨とせざればいつ

しか文弱に流れ、(略)。

十二115 三 〔文〕 此の五箇條を行ふも、結局一の誠心を本とすと論し給へる、
〔略〕。

十二116 3 文韻 (略)、大君の邊にこそ
死なめ、顧みはせじ。

十二116 7 〔文〕 平常質素を旨とすべきは
 (略) 何人にも最も大切なこと言
 を待たず。

十二1176 〔文〕 常に之を忘れず、之を模範として、〔略〕。

十二117 文 (略)、唯々一の誠心を以て報國盡忠の道にいそしまんとす。
(助動) 凸あまてらすおおみかみ

（助動）18 スす《ス・スル・セ》
 七74 文会 コノ度ノ合戦ニハ、師直
 ラノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ラガ

クビヲカレラニ取ラスルカ、ニツノ
中ノ一ツト思ヘバ、(略)。」

ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心二勉
強セシカバ、(略)。

八三六 文 明治三十七八年戰役の終り

たる後も、天皇陛下御参拜あらせられ、平和の成りたるを告げたまひしが、〔略〕。

九三五 文 尊、（略）、老人夫婦に命じて酒を造らせ、之を八つの酒槽さかぶねに盛り、（略）。

九304文 臨時大祭二天皇皇后兩陛下
ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々ア
リ。

九48 8 文 夜明くれば、砂の上に新し

き駱駝の足跡あり。之に力を得て、南へくと急がするに、(略)。

九64の文（略）、かばねを宮城の方に
向ひて立たせ、ながく皇城を守護せ
しめたりといふ。

九七^三 候手（略）、直ちに老母と子供を裏山に立退かせ、必要書類など取りまとめ、（略）。

に、（略）進み寄る。手塚の家來は

組ませじと中をへだつれば、(略)。
 十511 ㊦ 手塚は家來を討たせじと、
 敵に組みつく。

十89 2 文 韻 君は御袖に降りかゝる露
 拂はせて、（略）。
 十89 5 文 韻 御歌かしこみ、藤房は聲

くもらせて、(略)。
十一447文(略)、正儀は(略)、「今日
は吉日なり、元服せよ。」とて、

もとづりを上げて、和田小次郎正寛と名乗らせ、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。

十一459 文 居合せたる人々（略）、
「何とて命を捨つるに及ぶべき。」
と、取つておさへて動かせず。

十一 78 8 文 (略)、水のしぶき枯木に
氷結して、水晶の花を咲かす。

みたる魚を吐かせ、(略)。
 十一 106 5 文会 時ノ人「死セル諸葛、
 生ケル仲達ヲ走ラス。」トイヘリ。

十二⁹⁵₁₀ 文 (略)、孔子は義を以て人

を動かせしなり。
 〔図〕(名) 5 圖
 ず

いいちず・だいにず・だいさんず・だ
いしず・だいがず・だいろくず・だい
しちず・だいはちず・だいくず・だい

じゅうず・だいじゅういちず・だいじ
 ゅうにず・だいじゅうさんず・だいじ
 ゆうしず・だいじゅうごず・てんきず

十91 畫をかく人、圖をひく人、寫眞をうつす人の苦心も亦一通りでは

ない。
 十 197 圖や畫は別に堅い木に彫り、
 (略)。

十474 文 次の圖は其の一二の例を示すものなり。

十二119 (略) 設計圖ヲコシラヘル。

其ノ圖ハ船ノ切斷面及ビ構成等ヲ何十分ノ一二シタ縮圖デ、(略)。

十二¹²4 設計圖ガ出來上ルト、(略)、

必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、
 (略)。
 ズ(助動) 421 ズ 非ズ 《ザラ・

ザリ・ザル・ザレ・ズ・ヌ・ネ」 凸あいか
わらず・おもわず・ころならず・し
かのみならず・しらずしらず・しらぬ

かおす・たえず・とおからず・とりあ
えず・のこらず・ひきもきらず
六四三 井ノ中ノカハツ大海ヲ知ラス。

六五三 文 菓子ノ中ニハ砂糖ヲフクマ
ザルモノ少シ。
六五四 文 (略)、コノ二ツノ物ナケレ

バ、物ノ味ハウマカラズ。

六68 ㊦ 栗ハカタクシテ、ナガクク

サラザレバ、(略)マクラ木ナドトス。

六68 ㊦ 桐ハ(略)、家ヲタツル材

木トシテハ用ヒラザレドモ、(略)。

六82 ㊦ (略)、停車場ニハ汽車ノ發

着タエズ。

六82 ㊦ (略)、いつはりいはぬが

子供らの 學びのはじめぞ、つゝし

めよ、いましめよ。

七1 ㊦ 楠木正行ハ正成ノ子ニシ

テ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。

七3 ㊦ 「汝ヲサナクトモ、(略)、

コレホドノワケノ分ラヌコトハアル

マジ。

七4 ㊦ 父ノ汝ヲカヘシタマヒシ

ハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナ

シミタマヒテニアラズ。

七4 ㊦ カクテハ君ノ御用ニ立ツ

ベシトモオボエズ。」

七6 ㊦ 父ハ臣ヲ合戦ノ場ニモト

モナハズ、「(略)、朝敵ヲホロボセ。」

ト申シ殘シタリ。

七22 ㊦ 目ハ見ユレドモ、字ノ讀メ

ザル人ヲアキメクヲトイフ。

七22 ㊦ シカルニ目ハ見エズシテ、

大學者トナリシ人アリ、(略)。

七24 ㊦ 保己ハソレトモ知ラズ、

講義ヲツマケタレバ、(略)。

七55 ㊦ サレドモコ、ニテ見ユルハ

東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。

七58 ㊦ コノ公園ハ新シクシテ、古

木多カラザレド、種々ノ草花ウルハ

シク咲キミダレタリ。

七59 ㊦ (略)、コ、モマタ見渡スカ

ギリ、人家ナラザルハナシ。

七60 ㊦ 毛のいたつて短きものは指

さきにもつまめぬ程なれど、(略)。

七61 ㊦ 昔より「犬は三日かへば、

三年その恩をわすれず。」といへり。

七78 ㊦ のきよりおつる雨だれの

たえず休まず打つ時は、(略)。

七78 ㊦ のきよりおつる雨だれの

たえず休まず打つ時は、(略)。

七78 ㊦ (略)、一たん心定めては、

事に動かず、さそはれず、(略)。

七78 ㊦ (略)、一たん心定めては、

事に動かず、さそはれず、(略)。

七79 ㊦ (略)、はげみ進むに何事

の など成らざらん、鐵石の かた

きもつひにとほすべし。

七79 ㊦ (略)、一たんめあて定

めては、わき目をふらず、怠らず、

ふるひ進むに何事か など成らざら

ん、(略)。

七79 ㊦ (略)、一たんめあて定

めては、わき目もふらず、怠らず、

ふるひ進むに何事か など成らざら

ん、(略)。

七80 ㊦ (略)、ふるひ進むに何事

か など成らざらん、ばんじやくの

重きもつひにうつすべし。

七91 ㊦ サレド杉野ハ見アタラズ。

八1 ㊦ (略)、一生に一度は、かな

らず伊勢に参拜せんと心がけざるも

のなし。

八17 ㊦ 人手ヲカルニモ及バズ。」

八29 ㊦ 幾度カマハリタレドモ、入

ルコトヲ得ズ、クチヲシクモ工ノ笑

聲ヲ後ニシテ歸レリ。

八30 ㊦ 「カク我ノ居ルニ、何ユ

エニ入り給ハザルカ。」

八35 ㊦ (略)、つゞいてかをる梅

が香に、うぐひす 鳴かぬ 里もな

し。

八36 ㊦ (略)、にごりにしまぬ白

蓮の 巻葉をもるゝつゆ涼し。

八38 ㊦ マツチハ(略)、一箱三四

厘ニモ足ラズ。

八38 ㊦ 我等ハ平生マツチヲ用ヒナ

レタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、

(略)、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル

ナリ。

八40 ㊦ (略)、一箱ノマツチガ我等

ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手

ヲ要スルカラ知ラズ。

八40 ㊦ 之ヲ思ハバ一本ノマツチモ

ソマツニハ使フベカラズ。

八50 ㊦ 鎌足(略)、未ダ近ゾキ奉

ル折ヲ得ザリキ。

八53 ㊦ 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ

討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出

デズ。

八59 ㊦ (略) かゞみの如き水の

面、あかぬがめは八つの景。

八60 ㊦ 栗津の松の色はえて、か

すまぬ空ののどけさよ。

八70 ㊦ (略) 耳は食事の知らせを

聞きても知らぬ風をし、(略)。

八70 ㊦ (略)、目は食物を見ても見

ぬふりをして過し、(略)。

八70 ㊦ (略)、動くことかなはず、

(略)、身體は全く力なきにいたれり。

八71 ㊦ 「諸君は知らずや、我は

たゞ坐して食ふ者にあらず。

八71 ㊦ (略)、我はたゞ坐して

食ふ者にあらず。

八71 ㊦ (略)、此の数日間少しも

食物を送らざるが故に、新しき血出

來ずして、(略)。

八71 ㊦ (略)、新しき血出來ずし

て、諸君は皆却つて自ら苦しむにい

たれり。

八74 ㊦ 虎モ猫モ(略)、歩ム時音

ヲ立テズシテ、シツカニ他獸ニ近ヨ

リ、(略)。

八80 ㊦ (略)、若し平たき物ならば、

行けば行く程出發點に遠ざかるべき

はずならずや。

八82 ㊦ かゝる地方にては(略)、

美しき花木を見ること能はず。

八82 ㊦ 又世界の中には、年中夏の

氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を

知らざる國あり。

八82 ㊦ かゝる地方にては、人は皆

はだかにして、布片を身體の一部に

まとうに過ぎず。

八83 ㊦ 我が日本の國の大部分は、

冬も甚だしく寒からず、夏も甚だし

ならず、さては此のまゝにては過さ

九六二 文 蝦夷は東北の地に住して、

行カザルベカラズ。

は是のみに止らず。

- 十107 ㊦ (略)、漁業の利を失ひたる
地方も少からず。
十108 ㊦ (略)、其の効用あけて數ふ
べからず。
十142 ㊦ ㊦ かべ土、塗込められ
てあらはれぬ、ぬきもあるなり。
十1410 ㊦ ㊦ げにくと、皆うなづき
て、(略) そのちは 音もきこえ
ず。
十161 ㊦ ㊦ 「汝の男と生れざりしが
口をし。」
十165 ㊦ (略)、常に一といふ文字を
だに知らぬ顔に過したりといふ。
十237 ㊦ ㊦ 「長者ト約シテ後ル、ハ
禮ニ非ズ。
十239 ㊦ (略)、良ヤムヲ得ズシテ歸
レリ。
十2410 ㊦ 無頼ノ少年等口々ニ罵リテ
止マズ。
十253 ㊦ ㊦ 殺ス能ハズバ、我ガ勝
下ヲクマレ。」
十256 ㊦ 見ル者アザケリ笑ハザルハ
ナシ。
十2510 ㊦ 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメ
ズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、(略)。
十261 ㊦ ㊦ 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメ
ズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、(略)。
十324 ㊦ (略)、數年ナラズシテ石見
一國ニヒロガリ、(略)。
十328 ㊦ (略)、知ルモ知ラヌモ父母
ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。
十332 ㊦ ㊦ (略)、是等ノ島ニハ作物ノ

- 出來ザル荒地多ケレバ、(略)。
十334 ㊦ (略)、餓死スルモノ年々少
カラザリキ。
十407 ㊦ ㊦ 兩將畫食共にして、なほ
も盡させぬ物語。
十432 ㊦ ㊦ 然レドモ少シモ其ノ志ヲタ
ワメズ、イヨく勇氣ヲフルヒテ考
案ヲ續ケ、(略)。
十436 ㊦ (略)、此ノ時ハナホ世人ノ
注目スル所トナラズ、(略)。
十443 ㊦ ㊦ 近年ノ輸出高ハ年々五六百
萬圓ヲ下ラズトイフ。
十493 ㊦ ㊦ 繪畫・模様等を色どりする
には、色の調和を考へざるべからず。
十494 ㊦ (略)、色の調和を考へざる
べからず。
十518 ㊦ ㊦ 名乗れと申せば、『略』。
といひて名乗らず。
十525 ㊦ ㊦ 「そは武藏の齋藤別當に
はあらずや。
十544 ㊦ ㊦ (略)』といひしにたが
はず、墨を塗りて候。」
十556 ㊦ (略)、一座皆よろひの袖を
しぼらざるはなかりき。
十582 ㊦ ㊦ (略)、又學科も(略)餘
りむづかしとも覺え申さず候。
十588 ㊦ ㊦ (略)、外出せずとも少し
も不自由を感じ申さず、(略)。
十589 ㊦ ㊦ (略)、外出せずとも少し
も不自由を感じ申さず、(略)。
十635 ㊦ (略)、學校・病院・銀行等
皆備ラザルナシ。

- 十692 ㊦ (略)、一寸先をも見分くる
こと能はず、心ならずも夜明を待ち
たり。
十704 ㊦ ㊦ 此の間岩にも當てず、波に
もまかせず、岩と波との間にボート
をあやつり居たる少女の働は、(略)。
十705 ㊦ ㊦ 此の間岩にも當てず、波に
もまかせず、岩と波との間にボート
をあやつり居たる少女の働は、(略)。
十706 ㊦ (略)少女の働は、人間業
とは見えず。
十7010 ㊦ 山なす大波を物ともせず、
男勝りの大力にてボートをあやつり
シターリングの手は、(略)。
十728 ㊦ ㊦ 温泉の諸種の病を治する
は、たゞに其のふくめる礦物の効の
みならず、一つには(略)が爲なる
べし。
十742 ㊦ ㊦ 箱根は(略)、廣大なる旅
館も少からざれども、(略)、盛夏の
候は何れの旅館も空室なきに至るを
常とす。
十764 ㊦ (略)、腸ハ胃ニテコナシ盡
サザルモノヲコナシテ、(略)。
十789 ㊦ (略)、常ニ身體ヲ大切ニシ、
之ヲ強健ニセザルベカラズ。
十789 ㊦ (略)、常ニ身體ヲ大切ニシ、
之ヲ強健ニセザルベカラズ。
十804 ㊦ ㊦ あいぬの風俗はこれのみに
ても既に内地人と同じからず。
十824 ㊦ ㊦ 彼等は元は讀み書きも知
らず、算數の考もとぼしかりしが、

- (略)。
十829 ㊦ (略)、今は僅かに二萬人に
足らず。
十886 ㊦ ㊦ 笠置の山の行在所、寄す
る雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち
給ふ。
十9410 ㊦ (略)、今ハ往時ノ三ノ一ニ
モ足ラズ。
十9610 ㊦ (略)、タマニ大佛ノ大キサ
ノ驚クベキノミナラズ、(略)、眞ニ
世界第一ノ木造建築物トス。
十985 ㊦ ㊦ 紅葉ニ名高キ龍田川モ程遠
カラズ。
十995 ㊦ ㊦ 人はいさ心も知らず、故
里は 花ぞ昔の香ににほひける。
十1028 ㊦ ㊦ コ・ニマウヅルモノ、誰カ
ハ(略)、皇室ノ御威徳ヲ仰ガザラン。
十10210 ㊦ (略)、昔ナガラノ山河、一
木・一草盡ク上古ヲ談ゼザルナシ。
十1032 ㊦ ㊦ 名所・舊蹟ヲアマネク尋ネ
ンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感
アルベシ。
十113 ㊦ ㊦ 吉野山霞の奥は知らね
ども、見ゆる限りは櫻なりけぞ。
十1122 ㊦ ㊦ おまそくとばるゝ花は
吉野山。といひし古人の句我をあざ
むかず。
十1146 ㊦ ㊦ 吉野山は(略)、到る處
櫻樹あらざるなし。
十1166 ㊦ (略)、外役の蜂は朝より
夕に至るまで、營營として寸時も休
まず。

- 十一610 図 怠りて持歸らざるものあれば、(略)。
- 十一71 図 (略)、検査掛は内に入るを許さず、強ひて入らんとすれば(略)。
- 十一74 図 (略)、何等の勞働をもなさざるを以て、秋の初には皆働蜂にさし殺さる。
- 十一85 図 されば氣候不順にして、花のとほしき時は蜂合戦の起ること珍しからず。
- 十一89 図 (略)、共同團結して勞働をいとはず、(略)、團體の爲には身命をしまざるによる。
- 十一810 図 (略)、團體の爲には身命をしまざるによる。
- 十一138 図 (略) 警固の武士もよろひの袖をしぼらざるはなかりき。
- 十一141 図 (略)、事の未だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、(略)。
- 十一145 図 義を見てせざるは勇無きなり。
- 十一161 図 時、范蠡^{はんれい}無きにしもあらず。
- 十一165 図 されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ひとがむることなかりき。
- 十一184 図 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、(略)。
- 十一187 図 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

- 十一205 図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。
- 十一228 図 文餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、(略)。
- 十一2410 図 (略)、誰か人智の進歩の大なるに驚かさらん。
- 十一251 図 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車の兩輪の如し。」といへども、(略)。
- 十一2510 図 (略)、古風の牛車は博物館に行かずば見るべからず。
- 十一2510 図 (略)、古風の牛車は博物館に行かずば見るべからず。
- 十一273 図 (略)、風の方向に關らず、十分に風力を利用することを得。
- 十一277 図 スチブンソンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。
- 十一296 図 (略)も決して座上の空談にあらざらんとす。
- 十一3010 図 雲霧ヲ利用シ、雨雪ヲ物トモセズ、風ノ如ク急進スル勇壯ナル有様モオモヒ見ルベク、(略)。
- 十一354 図 四面皆海ナル我が帝國ハ、(略)、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。
- 十一355 図 (略)、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。
- 十一366 図 (略)、街路井然、(略)建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程に御座候。
- 十一368 図 (略)、そざるに當年を

- 追懷するの情にたへず候。
- 十一428 図 (略)、しきりに望めば、力及ばず、(略)名刀を與へて行かしめたり。
- 十一4210 図 (略)、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしめたり。
- 十一443 図 (略)、熊王は「何の戦功もなければ。」とて受けざりき。
- 十一446 図 (略)、正義はかくとも知らず、「今日は吉日なり、元服せよ。」とて、(略)。
- 十一449 図 熊王恩に感じて、涙せきあへず。
- 十一459 図 (略)、「何とて命を捨つるに及ぶべき。」と、取つておさへて動かせず。
- 十一464 図 (略)、其の後一度も院の門外へは出でざりきとぞ。
- 十一5110 図 一家和合セザル時ハ家道次第二オトロヘテ、(略)。
- 十一531 図 (略)、上、天ニ恥デズ、下、地ニ恥デズ、外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル工夫ヲナスベシ。
- 十一531 図 (略)、上、天ニ恥デズ、下、地ニ恥デズ、外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル工夫ヲナスベシ。
- 十一531 図 (略)、上、天ニ恥デズ、下、地ニ恥デズ、外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル工夫ヲナスベシ。
- 十一532 図 (略)、上、天ニ恥デズ、下、地ニ恥デズ、外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル工夫ヲナスベシ。
- 十一532 図 (略)、上、天ニ恥デズ、下、地ニ恥デズ、外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル工夫ヲナスベシ。

- 十一534 図 (略)、時ト場合トニヨリテ笑フベカラザルコトアリ。
- 十一535 図 (略)、他人ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ人ナリ。
- 十一536 図 謹嚴ナルベキ場合ニ笑フハ、禮ヲ知ラザル人ナリ。
- 十一545 図 (略) ヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。
- 十一608 図 家の事をば心にかけて、御國の爲に行きませ、いざや。
- 十一676 図 人生七十年と見るも六十万時間に過ぎず。
- 十一679 図 (略)、實際修學及び業務に用ふる時間は僅かに二十萬時間を越えざるべし。
- 十一682 図 (略)、唯此の二十萬時間を利用するとせざるとにあり。
- 十一686 図 人生の長短は(略)、年齒の多少を以て量るべからず。
- 十一687 図 之を思へば、一寸の光陰も輕んずべからず。
- 十一689 図 路傍の一草・一木も學問の種ならぬはなく、(略)。
- 十一694 図 (略) 心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。
- 十一697 図 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。
- 十一6910 図 若し過あらば、(略)、其の過を再びせざらんことをちかふべ

し。

十一701図 思ひても返らぬことをくよくと心配するは、(略)。

十一703図 人を訪問する時は業務をさまたげざる時間を選び、(略)。

十一706図 殊に集會の時間は正しく守らざるべからず。

十一707図 殊に集會の時間は正しく守らざるべからず。

十一721図 (略)、毎日遊び暮して三年を経たり。住時は心得ぬ事に思ひて、(略)。

十一724図 我衣食の費をいとふにあらざれども、何處へなりとも出でて遊び給へ。

十一734図 筆勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。

十一736図 (略) 夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかんなどひとり言いひ居たり。

十一745図 (略)、畫師それより後の二枚には畫がかず、唯槽一本を畫がきて、東國へ出立せり。

十一747図 然るに未だ一月もたざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。

十一7410図 「先に畫がきたる櫓の枝に一枝足らぬ所あり、(略)。」

十一759図 日光山には華嚴瀧を始として、(略)等其の名世に知られたるもの少からず。

十一763図 (略)、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。

十一766図 (略)、今は其の奇勝を見ること能はず。

十一789図 其の奇觀眞に名狀すべからず。

十一807図 (略)、十二條の細なはを片手に握り、(略)、たくみにさばきてもつれしめず。

十一823図 かぎり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。

十一825図 (略)、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふことを得るなり。

十一874図 機械ノ力ハ驚クベキモノニアラスヤ。

十一888図 農夫の田畑を耕すに似たらずや。

十一904図 是即ち農業の收穫に異ならず。

十一906図 物の價は効用あることと、隨意に得られざることによひて生ずるものなり。

十一907図 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、(略)。

十一911図 (略)、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、(略)。

十一911図 (略)、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、(略)。

十一917図 是飲料水とぼしくして、意のまゝに之を得ること能はざればなり。

十一928図 (略) 各其の家の賣れざらんことを恐れて、(略)。

十一9410図 (略)、需要の減するに非るよりは、決して安くなることなきなり。

十一957図 其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

十一986図 (略)、鰯と鱒との漁利は殊に多く、鮭・鱒も亦少からず候。

十一993図 (略)、特殊の網を用ひずとも、撒網にてすくひ取るを得る程にて、(略)。

十一1003図 森林は内地及び北海道に於ては見るを得ざる廣大なる天然林にして、(略)。

十一1005図 之を伐採せば少からぬ收益と相成るべく、(略)。

十一1008図 (略)、未だ盛に採掘に着手せらるゝには至らず候。

十一1029図 (略)、關羽・張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。

十一1042図 孔明はヨリ幼主ヲ輔ケ、(略)、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

十一1047図 「出師ノ表ヲ見テ泣カザルモノハ人ニ非ズ。」

十一1047図 「出師ノ表ヲ見テ泣カザルモノハ人ニ非ズ。」

十一1055図 「公ハ天授ナリ、敵ス

ベカラズ。」

十一1063図 蜀ノ軍少シモサワガズ、旗ヲ反シ、(略) 仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。

十一1064図 仲達アヘテ近ヅカズ。

十一1121図 (略)、雞を飼はざる家なし。

十一1124図 (略)、二年毎に之を賣るに、其の利少からず。

十一1149図 (略)、村人の喜一方ならず。

十一1155図 (略) 村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。

十一1172図 瑞穂の國と農業は開けぬ地なし、野も山も。

十一116図 (略)、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。

十一229図 (略)、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

十二210図 我等臣民も(略)、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

十二210図 (略)、此の國家を護らざるべからず。

十二310図 國を思ふ道に二つはなかりけり、軍のには立つも立たぬも。

十二43図 波風のあづかなる日も

船人は かち心許さざらん。

十二44図 治に居て亂を忘れざるも此の心なり。

十二65図 (略)、我は之に應ぜず、距離六千メートルに近づきて始めて應戦し、(略)。

十二69図 (略)、熟練なる我が砲手は物ともせず、打出す砲弾よく命中して、(略)。

十二87図 敵今は逃れぬところと覺悟したりけん、(略)。

十二108図 (略)、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラス。

十二112図 (略)、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

十二116図 將卒之を聞きて感泣せざるはなかりき。

十二256図 (略)、盡させぬ親王のみうらみに 悲憤の涙 わきぬべし。

十二269図 (略) 來り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず、攻めあぐみて (略)。

十二273図 援軍の來らん日も亦期すべからず。

十二278図 (略) 「事の成否は今より豫測すべからず、若し向ひの山にのろしのあがるを見れば、(略)。

十二296図 『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。

十二306図 (略)、幾度責めらるれども改めず、遂に殺されたり。

十二307図 古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。

十二309図 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかば、

(略)。

十二321図 (略)、少しも悲しむ色を見せざりき。

十二322図 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二329図 かの山内^{かやま}・豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、(略)。

十二336図 此の心は何處如何なる場合にも忘るべからず。

十二336図 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

十二337図 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

十二337図 人世には思はぬ不幸、驚くべき事變の何時起り來らずとも限らず。

十二338図 (略) 之に處するの道を覺悟し置かずば、時に臨みて (略)、見苦しき行を爲すことあらん。

十二341図 (略)、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

十二364図 (略)、外觀美ナラザレドモ、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

十二374図 古語に「私事を以て公事をすてず。」といへり。

十二376図 會津は奥羽重要な地にし

て、一日も守なかるべからず。

十二378図 「年老いて其の任にあらず。」

十二388図 (略) 廉頗^{けんぱ}之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。

十二393図 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。

十二394図 『兩虎共に闘へば、勢共に生きず。』といへり。

十二404図 (略)、現に噴火せる火山の數も全國に於ては五十座を下らず。

十二406図 其の噴火口の大きさは日本第一たるのみならず、亦實に世界第一と稱せらる。

十二435図 太古人口少く、人智も開けざりし時は、(略)。

十二453図 我が國の農業中最も開けざるは牧畜の業なり。

十二454図 是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。

十二454図 是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。

十二459図 我が國の農業は、決して現状を以て満足すべきにあらず。

十二4510図 (略)、總面積の約一割五分に過ぎず。

十二463図 栽培法の如きも、舊法になづまず、能く學理を應用せば、(略)。

十二469図 世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。

十二471図 農業は(略)、國家一日もこれなかるべからず。

十二483図 又森林は全國の山野たほはぬ處なく、(略)。

十二484図 (略) 樺太・臺灣太古より^{けふ}の出入るぬ林あり。

十二516図 人種・風俗ノ異ナルニ依リテ、人ノ嗜好モ亦同ジカラズ。

十二519図 故ニ商業ニ従事スルモノハ(略)、流行ノオモムク所ヲ察セザルベカラズ。

十二519図 故ニ商業ニ従事スルモノハ(略)、流行ノオモムク所ヲ察セザルベカラズ。

十二521図 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマヌカレズ。

十二528図 近年各國商人(略)、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。

十二532図 (略) ガ如キハ、正直ナル商人ノ爲スベキ事ニアラス。

十二541図 富國ノ實ノ舉ルト擧ラザルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏ノ如何ニ存ス。

十二559図 奉天の南方沙河^かの名も永く世人の忘れざる所なるべし。

十二569図 其の後方の山々は皆我が同胞の血をそぐし地ならざるはなし。

十二602 図 (略)、其の巴里と同數に至るも亦甚だ遠からざるべし。

十二6010 図 (略) 壯大なる建築の數々高く空中にそびゆるのみならず、人家も多くは六七層にして、(略)。

十二635 図 電車の便の最も開けたるは伯林にして、市街の隅々通ぜざる處なく、(略)。

十二647 図 巴里にも (略)、世に聞えたる建物少からず。

十二654 図 (略)、其の規模甚だ大ならず、其の建築も亦新し。

十二655 図 (略)、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは固よりあやしむに足らず。

十二656 図 (略) 固よりあやしむに足らず。

十二6610 図 (略)、道に當るものとて之をさまたぐるに能はざりきといふ。

十二674 図 (略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

十二677 図 (略)、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。

十二692 図 (略)、温暖なる地方に移らんと欲するもの期せずして相集り、(略)。

十二693 図 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして (略)。

十二698 図 しかも僅かに飢をしのぐは先頭に進める一部に過ぎず、(略)。

十二699 図 (略)、列後に在るものは

更に一物をも食ふこと能はず、(略)。
十二6910 図 (略)、遂に危害を顧みず、向ふ處何物をもはゞからずして突進す。

十二701 図 (略)、向ふ處何物をもはゞからずして突進す。

十二703 図 (略)、野獸の爪牙にさかれて食はるゝもの、其の數を知らず。

十二709 図 老後の安樂を願ふ者は若年の辛苦をいとふべからず。

十二715 図 身をはかなむも過ぎしことは追ふべからず。

十二721 図 (略)、富貴なる者必ずしも樂しからず。

十二722 図 貧賤なる者必ずしも苦しからず。

十二7210 図 (略)、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。

十二731 図 (略) 其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。

十二733 図 (略)、天下何事か成らざるを憂へん。

十二736 図 四百年以前までは東半球の人は全く西半球を知らざりき。

十二743 図 (略)、中途の危険亦少からざれば、便利なる航路を開かんことは歐洲人一般の希望なりき。

十二775 図 (略)、數萬の見物人は再び此の船を見ること能はざるべしと語れり。

十二782 図 (略)、朝の風を開きては

鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。

十二784 図 コロンブスは獨り堅固なる決心を以て動かざること山の如く、(略)。

十二785 図 (略)、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。

十二786 図 (略)、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。

十二7810 図 (略)、其の夜は一同うれしさに眠ること能はず。

十二793 図 (略)、人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所を知らず。

十二8510 図 (略) 史上の一美談たるのみならず、日本武士道の精華を發揮せるものといふべし。

十二861 図 四十七士の事蹟は兒童・走卒も之を知らざるはなく、(略)。

十二866 図 (略)、未だ良雄と相識らざりしが、(略)、反復直言して復仇の事を勧む。

十二868 図 良雄一笑して更に耳を傾けず。

十二8610 図 (略)、汝家老として仇を報ずるを知らず、人面獸心とは汝の事なるべし。

十二896 図 凡そ家内の掃除は座敷・居間・臺所のみならず、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。

十二897 図 (略)、便所の隅より下駄

箱の奥までも注意せざるべからず。

十二897 図 (略)、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。

十二901 図 (略) 其の例數ふるにいとまあらず。

十二903 図 (略) 火の用心を忘れざる様にすべし。

十二905 図 衛生上の注意を怠らずして、何人も病にをかされぬ様にすべし。

十二906 図 (略)、何人も病にをかされぬ様にすべし。

十二907 図 病氣のみに限らず、何事にも少しの不注意は大いなる禍を招く。

十二9010 図 (略)、世間へ對しても相濟まぬ次第ならずや。

十二9010 図 若し家内に傳染病等にかゝるものあらば、(略)、世間へ對しても相濟まぬ次第ならずや。

十二929 図 (略)、世間の交際をも外さず、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、(略)。

十二9210 図 (略)、公共の事業にも後れを取るべからず。

十二965 図 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、(略)。

十二978 図 (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

十二978 図 (略)、國民としても之に

相應する品格を備へざるべからず。

十二97 図 (略)、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

十二99 4 図 (略) が如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。

十二99 7 図 (略) が如きは、個人としても、國民としても、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

十二100 2 図 (略) 是等文明の利器も其の運用を全くすること能はず。

十二100 3 図 英國にては (略) 合礼を要せず、(略) 各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。

十二100 7 図 之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。我等の學ぶべき事ならずや。

十二100 8 図 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、(略) 等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

十二101 2 図 國力我に劣れる國民を見て、(略) 甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)。

十二101 7 図 (略)、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、(略)。

十二101 7 図 (略)、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

十二103 8 図 市町村長・議員等を選挙するには (略) 私交上の關係をさし

はさむべからず。

十二104 2 図 眞に自治の精神に富める者は、(略)、其の他には何等の私心を有せざるなり。

十二104 5 図 (略)、自治團體の圓滿なる發達は得て望むべからず。

十二108 2 図 若し兩院の決議一致せざるときは、帝國議會の協賛にあらず。

十二108 2 図 若し兩院の決議一致せざるときは、帝國議會の協賛にあらず。

十二108 3 図 (略)、天皇の裁可を経ざれば其の効力を生ぜざるなり。

十二108 3 図 (略)、天皇の裁可を経ざれば其の効力を生ぜざるなり。

十二108 10 図 (略)、要は下情上達之道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

十二109 5 図 (略)、一般選舉人も (略) 參政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

十二109 5 図 (略)、一般選舉人も (略) 參政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

十二109 8 図 (略)、國民たる者は皆軍人たる心得なかるべからず。

十二109 10 図 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽にすべからざるものなれ。

十二111 8 図 (略)、軍人たる者は (略)、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

十二112 5 図 (略)、上官の者は常に下級の人をいたはりて、いさゝかも輕

侮の念を有すべからず。

十二113 1 図 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは (略)、眞正の軍人にあらず。

十二113 2 図 (略)、小敵を侮らず、大敵を恐れず、(略)。

十二113 2 図 (略)、小敵を侮らず、大敵を恐れず、十分に自己の職務を盡す人を (略)。

十二113 7 図 (略)、成し得べからざるものは引受くべからず。

十二113 8 図 (略)、成し得べからざるものは引受くべからず。

十二113 10 図 (略)、小さき信義を立てんが爲に大いなる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

十二114 2 図 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、(略)。

十二115 1 図 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、何の用にか立たん。

十二115 1 図 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、何の用にか立たん。

十二115 1 図 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、何の用にか立たん。

十二115 4 図 (略)、返すくも服膺すべき大御言ならずや。

十二115 6 図 此の勅諭は (略)、獨り軍人としての心得なりと思ふべからず。

十二115 9 図 禮儀も亦軍に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得な

くして如何でか日常の社會に立たんや。

十二116 7 図 信義は (略)、商工業の人としても常に之を重んぜざるべからず。

十二116 7 図 信義は (略)、商工業の人としても常に之を重んぜざるべからず。

十二116 8 図 平常質素を旨とすべきは (略) 何人にも最も大切なこと言を待たず。

十二117 2 図 此の五箇條は (略)、軍人として始めて守るべき事に非ず。

十二117 6 図 常に之を忘れず、之を模範として、唯々一の誠心を以て報國盡忠の道にいそしまんとす。

十二118 10 図 いろはのいをも わきまへぬ 身のいつしかに 積み得る、(略)、世の人並の 文字の數。

十二119 2 図 (略)、西も東も 知らざりし 身のいつしかに 分けなたる、(略)、世の人並の 道の筋。

すい「水」ひいんようすい・いんりようすい

すい「粹」(名) 2 粹

十97 3 図 (略) 正倉院アリ。(略)、多古古代ノ寶器ヲ藏ス。我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。

十一117 6 図 智は東西の長を採り、文明古今の粹を抜く。

すいあげる「吸上」(下) 1 すひ上

げる『一ゲル』

九30 9 蒸氣機關は（略）、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

ずい『隨意』（形状）5 隨意

十一90 6 物の價は効用あることと、隨意に得られざることにによりて生ずるものなり。

十一90 7 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、（略）。

十一90 9 略、効用あるものなりとも、隨意に得られざるものは亦價あることなし。

十一90 10 例へばこゝに一種の石あり、極めてまれにして隨意に得られざるものなりとも、（略）。

十一91 3 日光・空氣の如きは、人の生命を保つに必要なれども、隨意に得られざるものなれば、之を買ふ必要なく、（略）。

ずい『吸入』（下二）1 吸入ル

『ルル』
十75 9 肺ハ鼻・口ヨリ吸入ル、空氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。

すい『水運』（名）1 水運 凸りょうがすいりうん

九16 7 図 コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運河ハ、（略）利根川ニ通ズル汽船ノ通路ニシテ、水運ノ便少カラズ。

すい『水煙』（名）1 水煙

十一76 2 最も壯觀なるは華嚴にし

て、（略）。中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水煙深谷をおほひ、（略）。

すいか『西瓜』（名）6 西瓜 凸せいようすいか

五49 4 西瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔

・西瓜・トウ瓜・カボチャ・ヘチマ

ナドヲ瓜トイフ。

五49 7 マクハ瓜ヤ夕顔ヤ西瓜ニハ、マルイ形ノモ、長イ形ノモアル。

五50 5 カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜ハ中ガ赤イ。

五50 6 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

五51 1 西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲノコス。

五51 4 ナマデソノマ、タベルノハ、マクハ瓜ト西瓜デ、（略）。

すいがい『まいのぶん』（課名）2 水害見舞の文

九目 8 第二十一課 水害見舞の文

九70 9 第二十一課 水害見舞の文

すいがら『吸殻』（名）3 すいがら 吸ひがら

八44 7 聞けば此の火事は（略）、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

八44 8 一服のすひがらがこんな大火事になつた。

十二89 9 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにいとまあらず。

すいきた『吸入』（四）1 吸來る

『ル』

十一6 4 働蜂の（略）、力強く壯なるものは外に出でて花の蜜を吸來る。

すいぎゅう『水牛』（名）1 水牛

十一38 4 耕作に水牛を使用する様も珍しく、（略）。

すいぎょ『水魚』（名）1 水魚

十二38 4 嘉明後此の事を聞きて大いに恥ぢ、高虎と水魚の交をなすに至れりとぞ。

すいきよ『推挙』（サ変）1 推舉す

『スル』

十二37 10 秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。「嘉明に如く者はあらじ。」と答ふるに、（略）、「汝多年嘉明と不和なりと聞く。今之を推舉するは如何に。」と問ふ。

すいしえい『水師營』（地名）1 水師營

十38 5 旅順開城約成りて、敵の將軍ステツセル乃木大將と會見の處はいづゝ水師營。

すいしえい『かいけん』（課名）2 水師營の會見

十目 12 第十二課 水師營の會見

十38 1 第十二課 水師營の會見

すいしひょう『出師表』（名）1 出師ノ表

十一104 7 孔明ハ（略）諸軍ヲ率テ北征ス。發スルニ臨ミ、表ヲ上ル。言々皆忠君ノ至情ヨリ發ス。後

人曰ク、「出師ノ表ヲ見テ泣カザルモノハ人ニ非ズ。」ト。

すいしやば『水車場』（名）2 水車場

八23 6 その中以下男が麥俵をかついで、裏門から出て來ました。水車場へ行くのかと思つて見てみると、（略）。

八23 7 （略）、水車場の方へは行かずに、居酒屋の方へ行きます。

すいしやう『水晶』（名）2 水晶

十一76 1 最も壯觀なるは華嚴にして、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

十一78 8 又嚴冬の頃は（略）、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。

すいじやう『水上』（名）2 水上

八55 4 又にはとり・七面鳥・あひるなどは陸上や水上にばかり居て高く飛ばないから、（略）。

九66 4 帆かけ船の水上を走る、たこの空高く上る、（略）。

すいじやうき『水蒸氣』（名）3 水蒸氣

十二41 8 盛に水蒸氣とよなと稱する火山灰とを噴出す。

十二42 7 火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。

十二42 10 熔岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。

すいぜいてんのう『綏靖天皇』（人名）

- 1 綏靖天皇
十102 綏靖天皇ノ御陵アリ。
又近ク綏靖天皇ノ御陵アリ。
すいせん「水仙」(名) 1 水せん
六38 水せんの花を見て多をかいた。
すいぞくかん「水族館」(名) 1 水族館
七56 仁王門ヲ入りテ、観音堂ヲ
拜シ、ソレヨリ水族館ヲ見ル。
すいちゅう「水中」(名) 7 水中
九54 略、イカハ水中ニオヨグ
間ハ水色ナレドモ、(略)。
九65 試みに茶わんのそこにしる
しをつけ、之を倒にして、しづかに
水中に入れよ。
九73 略、川上の堤防切れ、
隣村は大半水中にあり、(略)。
十10 總べて魚類は暗き處を喜
び、森林の影さす水中には多く集り
来るものなるを以て、(略)。
十一34 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、
水雷ヲ放チテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目
的トス。
十二22 是は水中にとけてゐる酸素
が吸盡されるからである。
十二28 黒き影は(略)、ひらり
とばかり身を水中に投入れたり。
すいつくす「吸尽」(五) 1 吸盡す
《一サ》
十二22 是は水中にとけてゐる酸素
が吸盡されるからである。
すいっちゃん ちゅんちゅんちゅんちゅん
よんすいっちゃん
- すいてい「水底」(名) 1 水底
十一82 魚は(略)、水底にうつ
る鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが
故に、(略)。
すいでん「水田」(名) 1 水田
十一114 之によりて用水路の改修
行はれ、灌漑・排水其のよろしきを
得て、水田は乾田となり、(略)。
すいどう ちゅんちゅんすいどう
すいとる「吸取」(五) 2 スヒ取ル
《一ル》
七77 海草ハ(略)。根モ陸上ノ植
物ノヤウニ養分ヲスヒ取ルタメノモ
ノデハナク、(略)。
七77 海草ハスベテ養分ヲ葉ヤ莖デ
スヒ取ル。
すいふ「水夫」(名) 6 水夫
十68 生残れる水夫は破れたる船
體にすがり、さかまく波にもまれて
聲を限りに救を呼べり。
十70 父は直ちに勞れ果てたる水
夫を助けて、ボートにうつす。
十70 水夫は盡く燈臺番の小屋に
入れられたり。
十一71 略、半死半生の水夫を親
切に看護せり。
十一71 數日の後、水夫は此の少女
の手に熱き感謝の涙をそそぎて、各
我が家に歸りたりとぞ。
十78 擊劔家・水夫等ノ手ノ太
キ、(略)、ヨク之ヲ使用スルヲ以テ
ナリ。
- すいふら「水夫等」(名) 1 水夫等
十69 水夫等はなほぼほしらに抱
きつきて、息も絶えぬに救を呼べ
り。
すいぶん「水分」(名) 1 水分
十91 森林の樹木は(略)、又地
上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。
ずいぶん「随分」(副) 2 ズキブン
四39 「コノアヒダ大キナフカ
ガ來タ時ニ、君ヲハズキブ
ンアワテマシタネ。
四53 「ナルホド、オマヘノナ
カマハズキブン多イ。
すいへい「水兵」(名) 3 水兵 ぐい
すいへい・たかちほかんのりくみすい
へい
九19 水兵は驚いて、立上つてし
ばらく大尉の顔を見つめてゐたが、
(略)。
九22 大尉は之を讀んで、思はずも
涙を落し、水兵の手を握つて、(略)。
九23 水兵は頭を下げて聞いてゐた
が、やがて手をあげて敬禮して、に
っこりと笑つて立去つた。
すいへいのはは「課名」 2 水兵の母
九目8 第七課 水兵の母
九18 第七課 水兵の母
すいへいぼう「水兵帽」(名) 1 水兵帽
九50 星の形を打ちたるは陸
軍兵の帽子にて、艦の名あるは水兵
帽。
すいめん「水面」(名) 1 水面
- 十66 六七十尺の大鯨も今は全く息
絶えて、水面に横たはる。
すいめんちかし「水面近」(形) 1 水
面近し 《一ク》
十一82 魚は(略)、水底にうつ
る鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが
故に、(略)。
すいもの「吸物」(名) 1 すひ物
七64 ゆ・茶・汁・すひ物はいふま
でもない。
すいよう「水曜」(名) 1 水曜
六37 十二月十三日 水曜 曇
すいようび「水曜日」(名) 2 水曜日
六40 略、この次の水曜日まで
にはかへる。
十58 略、水曜日も其の日の
課業を終へたる時より夕食前まで外
出を許され候。
すいらい「水雷」(名) 1 水雷 ぐい
けいすいらい
十一34 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、
水雷ヲ放チテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目
的トス。
すいらいこうげき「水雷攻撃」(名) 1
水雷攻撃
十二74 略、我が驅逐隊より二
回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦
は遂に沈没し、(略)。
すいらいてい「水雷艇」(名) 5 水雷
艇
十一31 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・
雲雀・鵜・雁・鴻・雉・鷗・鵜・

鷺等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。其ノ敏速ナル行動ハ鳥ノ空中ヲ飛行スル如クナレバナルベシ。

十一317 諸子ハ戦艦・巡洋艦・海防艦・砲艦・通報艦・驅逐艦・水雷艇・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十一346 驅逐艦ハ（略）、又敵ノ水雷艇ヲ驅逐・撃破スルヲ目的トス。

十一348 水雷艇ハ形體甚ダ小ナレドモ、速度驅逐艦ニ次ギ、敵艦ニ近づキ、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃沈スルヲ任務トス。

十二103 我が軍の死傷甚だ少く、沈没したるもの僅かに水雷艇三隻に止れり。

すいらいていたい「水雷艇隊」(名) 1
水雷艇隊
十二76 夜に入りて、我が驅逐隊・水雷艇隊は砲火をくゞつて敵艦にせまり、無二無三に攻撃せしかば、（略）。

すいらいぼかん「水雷母艦」(名) 1
水雷母艦
十一351 以上ノ外、尚水雷母艦・工作船・給炭船等ノ如キ特別任務ヲ有スルモノアリ。

すいり「水利」(名) 1 水利
十90 御村も當村と同じく水利の良き割合には田地少く、整理の必要これあり候様存ぜられ候間、（略）。

すいりよく「翠緑」(名) 1 翠緑

十988 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠縁シタルガ如シ。

すいり「水路」(名) 2 水路
九382 今水路に汽船があり、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

十一184 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

すう「数」(名) 1 數ひしきちそうつぼすう
十二71 敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。（略）、勝敗の數は既に定まれり。

すう「吸」(四・五) 10 すふ 吸ふ
《一ハ・ヒ・フ》
九60 折々野外に出でて、新しき空氣をすひ、又（略）、木立しげき公園等を散歩すべし。

九61 新しき空氣をすひ、常に日光に浴して、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

九66 我等は常に此の空氣を吸はんが爲に呼吸す。

十56 兵舎内にては（略）、所定以外の場所にて煙草を吸ふ事等堅く禁ぜられ居り候。

十72 温泉の諸種の病を治するは、（略）、一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。

十一21 千里寄せくる海の氣を 吸ひてわらべとふりにけり。

十一88 油蟲は（略）、其の植物の汁を吸ひ、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、（略）。

十二205 蝶や蜂は（略）花の汁を吸ふ。

十二212 動物は（略）、空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出す。

十二218 植物も（略）酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、（略）。

すう「据」(下二) 1 すう 《一エ》
九21 夫婦の老人一人のむすめを中にすゑて泣きかなしめるを見給ふ。

すうかい「數回」(名) 3 數回
十73 往昔天皇の行幸し給ひしことも數回に及べり。

十74 大湯と稱するは一晝夜に數回噴出す。

十二80 其の後コロンブスは數回の航海を試みしが、（略）。

すうかし「數箇所」(名) 1 數箇處
十二95 是に於て齊魯より奪略せる地數箇處を返せり。

すうかん「數幹」(名) 1 數幹
十一38 南部には榕樹も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは（略）。

すうじ「數字」(名) 1 數字
八48 本文中の數字は片假名と分別し易き様大書すべし

すうじかん「數時間」(名) 1 數時間
十96 故に若しみにだりに森林をきり荒す時は、數時間の暴雨にもたちまち大水出で、（略）。

すうじつ「數日」(名) 3 數日
八29 數日ノ後、川成ヨリ「見せ申シ度キ繪出來タリ。（略）」ト、工ノモトニイヒ來レリ。

十97 故に若しみにだりに森林をきり荒す時は、（略）、數日のひでりにも河水全くかれはつべし。

十71 數日の後、水夫は（略）、各我が家に歸りたりとぞ。

すうじつかん「數十幹」(名) 1 數十幹
十一38 南部には榕樹も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは（略）。

すうじつかん「數日間」(名) 1 數日間
八71 諸君（略）、此の數日間少しも食物を送らざるが故に、新しき血出來ずして、（略）。

すうじつしゅ「數十種」(名) 1 數十種
十43 眠龜ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、自ラ花籃數十種ヲ織出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、（略）。

すうじつせき「數十隻」(名) 1 數十隻
十一83 之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯の光を水にう

つせる奇観は(略)。

すうしゅ【数種】(名) 1 数種

十437 眠亀ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、

自ラ花筵數十種ヲ織出シ、(略)、唯

一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取

リタルノミナリキ。

すうじょう【数条】(名) 2 数條

十一1074 床下に土石を盛り、數條の

みぞを造つて、(略)。

十二82 (略)、東方に當りて、は

るかに數條の黒煙を見る。

すうせき【数隻】(名) 1 數隻 弓じゅ

んようかんいかすうせき

十一829 數隻の漁舟相並び、(略)。

すうせんとう【数千頭】(名) 2 數千頭

十845 (略)、一年にはふる牛は數千

頭にも上るといふことである。

十一997 (略)こゝに集る臘腸

獸は數千頭にも達することこれあり

候。

すうせんにん【数千人】(名) 1 數千人

十622 (略)數千人ノ坑夫ガ銅鑛

ヲ掘取ルコト、晝夜止ム時ナシ。

すうせんねん【数千年】(名) 2 數千年

八52 (略)、數千年もへたらんか

と思はるゝ老木枝をまじへて、高く

天をつく。

十一4910 アラビヤに良馬の多く産す

るのは、(略)。數千年の久しい間、

土人の絶えてたゆまない丹誠の結果

である。

すうせんひやくび【数千百尾】(名) 1

數千百尾

十一828 漁夫は一時間餘にして數

數千百尾

千百尾の鮎を得るを常とす。

すうど【数度】(名) 1 數度

八879 (略)、敵ヲ撃退スルコト數度

ニ及ンダ。

すうにん【数人】(名) 2 數人

七629 八九頭の犬いきほひよく數

人を乗せたるそりを引きて、(略)。

十二312 形名の妻、(略)、侍女數

人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。

すうねん【数年】(名) 3 數年

十323 (略)、數年ナラズシテ石見

一國ニヒロガリ、(略)。

十一886 かくて數年の後には、地

面に近き土をば全く上下にうち返す

といふ。

十二858 赤穂浪士が數年の苦難を

忍び、遂に主君の仇を報じて、從容

死に就けるは(略)。

すうばいす【数倍】(サ変) 1 數倍す

《一シ》

十二803 (略)、パロス港の群集は

出帆の日に數倍し、(略)。

すうひやくにん【数百人】(名) 1 數

百人

十678 (略)、人口數百人の一村、一

箇月の生活費を支へ得ると言つたも

のである。

すうひやくまい【数百枚】(名) 1 數

百枚

十二122 (略)、大キナ戰艦ナドニナ

ルト、設計圖バカリデ數百枚モアル

トイフ。

ルト、設計圖バカリデ數百枚モアル

トイフ。

すうひやくり【数百里】(名) 1 數百里

十二679 (略)、數多の猿遠く數

百里の地より集り來りて之を食ひ、

(略)。

すうひゃっぽ【数百歩】(名) 1 數百歩

十一783 (略)、附近數百歩の地に

ありては、器に盛れる水常に波紋を

生ず。

すうへん【数片】(名) 1 數片

十二871 (略)、足の指に魚肉數片

をはさみて良雄の面前に出す。

すうまい【数枚】(名) 1 數枚

十65 ギザ／＼ノ深イノニナルト、

一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテ

ナル。

すうまん【數万】(名) 2 數萬

十一56 蜜蜂は(略)、一群の總

數數萬に及ぶものあり。

十二774 (略)、數萬の見物人は再

び此の船を見ること能はざるべしと

語れり。

すうり【數里】(名) 1 數里

八94 (略)、遠く數里の外よりも

望み見ることを得べし。

すえ【末】(名) 5 末 弓はずえ・はち

がつすえ

九69 秋の末になつて、(略)。

九92 (略)といひし 言の葉

は、天の橋立 末かけて、後の世永

くくちざらん。

十610 葉ニハスベテ葉脈トイフモ

ノガアル。本ノ方ガ太クテ、(略)、

末ニナルト、肉眼デハ見エナイ程細

イ。

十一475 段々口論の末、大將は怒つ

て三千圓の金を地に投げつけた。

十一102 支那ノ昔後漢ノ末、天

下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レ

リ。

すえふさ【季房】(人名) 1 季房

十88 君の御供に仕へしは 藤

房・季房唯二人。

すえる【据】(下一) 2 スエル 《一

エ》

四72 ニダン目ニハクワンデヨ

ヲスエテ、三ダン目ニハ五人バ

ヤシヲオキマシタ。

十二151 (略) 船室ヲ分ツタリ、倉

庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、

機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタ

リシテ、(略)。

すおう【周防】(名) 1 周防

十一301 (略) 我が軍艦ノ名ヲ知

レルナルベシ。國名ヲ以テ名ヅケラ

レタルモノニハ、安藝・薩摩・石見

・肥前・相模・周防・丹後等アリ。

すかずか【副】1 づか／＼

十二827 木陰に立つてつく／＼と此

の様子を見てゐた一人の紳士があつ

た。づか／＼と走り寄つて、「ちよ

つと貸したまへ。」と言ひながら、

其のバイオリンを取つて弾始めた。
すがた「姿」(名) 9 スガタ すがた
姿

三181 モウ コエ バカリ キコエテ、
スガタ ハミエマセン。

五358 キモノノモヤウヤ、カンザ
シナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、
ソノスガタガカハイラシイカラデセ
ウ。

五711 鹿ガ(略)。フト水ニウツツ
タジブンノスガタヲ見テ、(略)。

七905 中佐ハ(略)、タマ一人ク
マナク船内ヲタツネタレドモ、杉野
ノスガタナシ。

九108 花に宿れる蝶は今眠さめ
たり。舞へや舞へや、すがたやさし
く舞へや。

九113 舞へや舞へや、すがたや
さしく舞へや。

十一731 (略)、彼の畫師の有様を
見給へ。」とささやくに、行きてう
かへば、(略)、様々に姿を變へつ
ゝ寢起する様なり。

十一741 「今日書き給はん鶴の
姿はかやうなるべし。」

十一742 夜明けて後、住持畫工に
向ひて、「(略)」と、夜中のぞき見
たる姿をして見るに、(略)。

すがら 凸みちすがら・よもすがら
すがら「螺贏」(人名) 4 すがら 凸ち
いさこべのすがら

五365 昔雄略天皇がすがるといふ人

をおめしになつて、こをたくさん集
めて来いとおほせになりました。

五372 すがらは(略)、たくさんの
子どもをもらつて、つれて來ました。

五384 (略)、すがらには小子供とい
ふ姓をたまはりました。

五385 すがらはその大ぜいの子をお
みよのそばでやしなつて居つたと申
します。

すがら「縫」(四) 1 すがら 「一リ」
ひとりする

十685 生残れる水夫は破れたる船
體にすがり、さかまく波にもまれて
聲を限りに救を呼べり。

すがわらのみちさね「菅原道真」(課名)
2 菅原道真

九目10 第二十三課 菅原道真
九787 第二十三課 菅原道真
すがわらのみちさね「菅原道真」(人名)
2 スガハラノミチザネ 菅原道真

二466 天ジンサマハスガハラノ
ミチザネ トイフ チユウギナオ
カタヲマツツタノデス。

九7810 是は菅原道真が右大臣とい
ふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅
立たんとする時、庭の梅に別をし
みてよめる歌なり。

すぎ「透」(名) 2 スキ すき
三156 スキヲネラツテ、タツタ
一ケリデ、ケハヤヲケタフシマ
シタ。

六577 馬はおどろいてとび上つた。

信玄はそのすぎにあやふい命をたす
かつた。

すぎ「好」(形状) 4 スキ すき 凸お
すぎ・きれいすぎ

二335 ユミヲイルコトガスキ
デ、(略)。

三114 オトウトハ犬ガスキデ、
イツモブチトアソンデキマス。

六732 私は一たい子供がすぎでござ
います、(略)。

八692 (略)、何かすきな物を買つ
て上げて下さい。

すぎ「杉」(名) 9 スギ 杉
一215 タカイ スギノキ。

六25 松・杉・ひのきなどが一面に
はえてゐるのは目がさめるやうな心
持がする。

六673 材木ニハ松・杉・ヒノキ・
栗・ケヤキナドアリ。

六674 モツトモ多ク用フルモノハ
松ト杉トニシテ、(略)。

六676 松・杉・ヒノキ・ケヤキハ
板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、
船ヲ作ルニ用フ。

六677 杉ハデンシン柱ニ用ヒ、又
ハコ・ラケ・タルナドヲ作ルニ用フ
ルコト多シ。

(略)。
十一1151 (略) 青年會あり、其の一
事業として杉・檜等の植林を營み、
(略)。

すぎがき「杉垣」(名) 1 杉垣
十293 霜にやけて、赤くなつた杉垣
の中には、寒菊が今を盛りと咲いて
ゐる。

すぎさか「杉坂」(地名) 2 杉坂
十一154 (略) 杉坂に著きたりし
奉らんとて、(略)。

十一154 (略) 杉坂に着きたりし
に、主上はや院庄に入らせ給ひぬと
申す。

すぎど「杉戸」(名) 1 杉戸
十一716 其の座敷の一間の杉戸に
は、櫓一本を畫がき、(略)。

すぎとおる「透通」(五) 2 スキトホ
ル すきとほる 「一ツ」
五601 (略)、ワキ出タママノハニゴ
ツテキマスガ、シアゲルト、スキト
ホツタ油ニナルノデス。

七319 蠶が(略)。眠る度に皮をぬ
ぎかへて、しまひにはからだがすぎ
とほつて見える。

すぎの「杉野」(人名) 9 杉野
七898 「杉野ハ今點火ヲ終ヘタ
ルゾ。」

七901 見渡セバ杉野ナシ。
七905 (略) クマナク船内ヲタツ
ネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

七908 「杉野々々。」

- 七90 8 図 〔杉野々々。〕
 七91 1 図 サレド杉野ハ見アタラズ。
 七91 3 図 〔杉野々々。〕
 七91 3 図 〔杉野々々。〕
 七92 4 図 中佐ハ（略）、ナホモ杉野
 ヲウシナヒタルヲナゲキキタリ。
 すきま 〔透間〕（名）1 すき間
 九64 9 図 空氣は（略）、凡そ少しに
 てもすき間ある所には、必ず存在せ
 ずといふこと無し。
 すきゆく 〔通行〕（四）1 通行く
 〔一ケ〕
 十二24 7 図 由比の濱ベを 右に見
 て、雪の下村通行けば、八幡宮の御
 社。
 す・きる 〔過〕（上二）2 過ぎる 『一
 ギ』ひながすぎる・なりすぎる・のみ
 すぎる
 九32 3 図 （略）、何人にも乗船の望に應
 じる。』といふことを新聞紙に廣告
 したが、其の日になつて乗船したも
 のは僅か十二人に過ぎなかつた。
 十一109 6 金がなくて、冠禮の行へな
 い者は、三十を過ぎててもチョンガー
 で、大人の仲間入が出来ない。
 ずきん 〔頭巾〕（名）1 づきん
 九52 8 図 づきんにおこそ・大黒と
 其の名其の類亦多し。
 す・く 〔好〕（五）1 すく 『一カ』
 六72 5 學校で（略）、友だちにもす
 かれた善い子供は、おとなになつて
 から、りつばな人になりました。
- す・く 〔透〕（五）2 すく 『一イ・一
 キ』
 三35 3 あをいひかりがかみの
 上からすいてみえます。
 六10 6 のぼりついたじぶんには足も
 だいぶくたびれて、はらもすつかり
 すきました。
 す・く 〔漣〕（四）1 スク 『一キ』
 八39 8 図 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出
 シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數
 マデ數ヘ上グレバ、（略）。
 すぐ 〔直〕（副）50 スグ すぐ 直ぐ
 はいいますぐに・まっすぐ
 三19 3 ヒバリハ（略）スノアル
 トコロヘハオリマセン。ケレド
 モ上ルトキニハ、スカラスグ
 トビタチマス。
 三40 5 今もぐつたかとおもふ
 と、すぐに一びきくはへて、でて
 きます。
 三40 8 それをたべると、またす
 ぐにもぐります。
 三53 3 図 何ヲ言ヒツケラレテモ、
 「ハイ、今スグニ。」トイヒナガ
 ラ、ナカナカトリカカリマセン。
 三54 1 図 （略）、「ハイ今スグニ。」
 トイツテ、ナカナカスグニハ行
 キマセン。
 三54 2 図 （略）、ナカナカスグニハ
 行キマセン。
 三54 5 図 （略）、「ハイ、今スグニ。」
 トコタヘルバカリデス。
- 三55 2 図 （略）、「ハイ、今スグニ。」
 トイツテ、スグニハキマセン
 デシタ。
 三55 3 図 （略）、スグニハキマセン
 デシタ。
 四19 4 図 （略）、たふれるが早い
 か、ただつねは すぐに（略）木の
 上へとびのきました。
 四30 4 図 「もうすぐお正月です
 から、（略）。」
 四40 1 図 （略）大キナオトガシマ
 シタ。サザエハスグカラノ中
 ヘヒツコンデ、フタヲシメテ、
 （略）。
 四53 5 ワニザメハ（略）、スグニ
 ナカマヲ大ゼイ ツレテ 來マシ
 タ。
 四57 8 白ウサギハスグ海ノ水
 ヲアビマシタガ、（略）。
 四67 7 今モ外カラカヘツテ、ス
 グココヘ來テキル所デス。
 四79 8 よしつねは（略）、すぐに
 よ一をよび出しました。
 五41 1 図 （略）、これをくらんになると、
 すぐに大神のお手をとつて、お出し
 申し上げました。
 五9 2 私どものなかまは、出合ふ
 とすぐに一しよになるのがきまりで
 す。
 五42 8 図 （略）モ、馬モ車モ今見エタ
 カト思フト、スグ後ニナツテシマヒ
 マス。
- 五45 2 図 ケレドモコンドハミジカイト
 ンネルデ、スグニ通リヌケマシタ。
 五64 7 図 それから今すぐにへんじを
 書いてお出しなさい。』
 五71 6 図 毎年春ニナルトオチルガ、
 オチルトスグ又新シイノガハエテ、
 （略）。
 六14 1 図 （略）、ソノアヒツヲ聞クト、
 スグ列ニ加ルノデアル。
 六23 2 すてておけば、すぐ死んでし
 まひます。
 六31 2 直吉は（略）、すぐに追つか
 けて行つて、残りの一錢を渡した。
 六36 6 ゆにはいつて、ごはんをたべ
 ると、つかれてすぐになてしまつた。
 六48 3 図 （略）、仕事をいそがせました
 から、すぐに出来上りました。
 六50 1 秀吉はこの知らせを聞くと、
 すぐに敵とわばくしてかへつて來
 て、（略）。
 六63 4 図 （略）、少しはなれたくさむ
 らに、やうく杖を見つけ出し、す
 ぐに拾つて取つてやる。
 六79 8 オロシタ荷物ハスグニ車ニノ
 セテ、馬ニヒカセテ行ク。
 七13 9 図 小賣といふのは商人から
 品物を使ふ人にすぐに賣渡すことで
 す。
 七30 4 図 （略）、桑の葉をやると、すぐ
 食ひはじめ。
 七32 6 図 （略）ねばつたしるが外へ出
 ると、すぐにかわいて絲になるので

ですくひ取るを得る程にて、(略)。
すくう「救」(四) 4 すくふ 救フ

救ふ「一ハーフ」

七63 5 図 (略)、犬のくびに薬品・食物などを入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。

十31 7 図 (略)、不作ノ年餓死スル人多キヲアハレミ、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

十33 5 図 昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、(略)。

十69 7 図 (略)、岩の上に一隻の難破船横たはれり。(略)。少女は之を見て、「略」。早く船を出して救はん。

すくな 少のこりずくな
すくない「少」(形) 9 すくない 少イ 少い「一イ・一カッ・一ク」

四31 4 図 ごはんの米はねばりけがすくないから、おもちにはなりません。」

四54 1 図 「ナルホド、オマヘノナカマハズキブン多イ。オレノ方ガ少イカモ知レナイ。

七26 6 (略) 手ノ足リナイトイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。

七28 8 コレハチエガ少イカラデス。八19 5 (略)、牛も段々減り、畑の取

高も年々に少くなつて、(略)。
八20 5 (略)、近年麥の取高の少いの

は、この雀のせいではあるまいかと思ひました。

十84 4 維新前までは牛肉を食ふ人は至つて少かつたが、(略)。

十一110 7 婦人は(略)、來客に會ふことも、外出すること少い。

十二21 9 (略)、其の吐出す炭酸瓦斯の分量は至つて少い。

すくなし「少」(形) 39 少し 少シ「一カラ・一カリ・一カル・一キ・一ク・一クレ・一シ」

六53 8 図 菓子ノ中ニハ砂糖ヲフクマザルモノ少シ。

六80 8 図 昔仁徳天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲアハレミタマヒキ。

八38 4 図 (略)、カクノ如ク便利ナルモノハ世ニ少カルベシ。

九16 7 図 コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運河ハ、(略)、水運ノ便少カラズ。

九17 3 図 霞浦・北浦等ノ合流スルアタリニハ名勝ノ地少カラズ。

九39 6 図 (略)、鐵道開通後ハ(略)、今ハ此ノ山坂ヲ越エルモノ少シ。

九54 4 図 シタガツテ敵ニオソハル、ウレハ少ク、我ヨリ敵ヲオソフニハ便ナリ。

九58 8 図 (略) などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

九61 2 図 室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青さめて元氣なきは、(略)。

九71 3 図 (略)、御地方は非常の出水にて、死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

九77 6 図 (略)、貯蓄銀行ニテハ五圓ヨリ少キ金ニテモ預カル。

九89 10 図 是金銀ハ(略)、直段ノ變動モ少キ等、貨幣トスルニ最モ便利ナレバナリ。

九90 6 図 (略)、金貨ハ日常流通スルコト少シ。

十4 3 図 (略)、古社寺等も昔のまゝにて今にのこれるは甚だ少し。

十10 6 図 (略) 森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

十33 4 図 (略)、罪人ドモハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

十59 7 図 入營當時は友人も少く、生活も一變致し候事とて、多少不自由を感じ候へども、(略)。

十73 5 図 湯のわき出づる口僅かに一箇所にして、其の分量も少く、(略)。

十74 1 図 箱根は(略)、廣大なる旅館も少からざれども、(略)。

十91 1 図 御村も當村と同じく水利の良き割合には田地少く、(略)。

十一6 7 図 秋・冬の花少き季節に入りても、(略)。

十一20 5 図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

十一52 7 図 (略)、身體ノ健全ヲ害ス

レバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十二75 9 図 日光山には華嚴瀧を始として、霧降・裏見・方等・般若等其の名世に知られたるもの少からず。

十一82 7 図 鶉はくぐり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、(略)。

十一91 9 図 しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。

十一96 8 図 南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、平野少く候へども、(略)。

十一98 5 図 (略)、鰯と鰯との漁利は殊に多く、鮭・鱒も亦少からず候。

十一100 5 図 之を伐採せば少からぬ收益と相成るべく、(略)。

十一112 3 図 (略)、二年毎に之を賣るに、其の利少からず。

十二10 2 図 我が軍の死傷甚だ少く、沈没したるもの僅かに水雷艇三隻に止れり。

十二43 5 図 太古人口少く、人智も開けざりし時は、(略)。

十二45 5 図 (略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、(略)。

十二45 7 図 (略)、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

十二50 6 図 外國トノ交通少カリシ時

代ニハ、商業ハ殆ど内國ニ限ラレタ
リキ。

十二64 6 巴里にも（略）、世に聞
えたる建物少からず。

十二67 7 略、獸類中にも（略）、
毎年一定の季節に其の居を移すもの
少からず。

十二72 5 略、自ら省みてやまし
き所ある者は、苦多く、樂少し。

十二74 3 然るに印度との交通は長
日月を要し、中途の危険亦少からざ
れば、（略）。

すくね「宿禰」〔人名〕2 スクネすく
ねのみのすくね

三15 2 シカシスクネモチカラガ
ツヨクテ、スパシコイ人デシタ
カラ、（略）。

三17 1 それでけはやはわらはれ
て、すくねはほめられました。〔ひ
らがなのドリル〕

すくむ「疎」〔五〕1 すくむ「一ン」
五80 8 略、馬もこはがつてすくん
でしまひ、人も顔を見合せて進まう
とはしない。

すぐる「選」〔五〕1 すぐる「一ツ」
五75 7 略、強いものばかり三千人
をすぐつて、（略）ひよどりごえに
向つた。

すぐる「優」〔下二〕2 すぐる 勝る
《一レ》

九95 4 天然の美は更に人工の美よ
りも勝れたり。

十15 2 一條天皇の頃には才學すぐ
れたる宮女多かりしが、（略）。

すぐれて「優」〔副〕1 すぐれて
九82 4 或年選ばれた子供のの中に、す
ぐれて上手な騎手が二人あつた。

すけひひようこのすけただもと
すげがさ「菅笠」〔名〕2 すげがさ
すげ笠

七10 2 ならばすげがさ涼しいこゑ
で、歌ひながらにうゑ行くさなへ。

九52 5 昔の風をそのまゝに、田
植・草取・取入れに 農夫の辛苦共
にする すげ笠こそはたふとけれ。

すこいひものすこい
すこし「少」〔副〕31 スコシ すこし
少シ 少し

二20 5 イマハ木ノ上ニキマス
ガ、モウスコシタツト、（略）
トビオリマス。

二41 2 「マダ小サイカラ、モウ
スコシ大キクシマセウ。」

三5 8 スコシタツテオサラヒガ
スミマシタ。

四2 1 略北へまがつて、すこ
し行くと、左がはにいうびんき
よくがあります。

四18 5 もうすこしでよりともの
ちかくへ来るかと思ふと、
（略）。

四22 5 小サイネエサンハ私ヨ
リモスコシ高イカラ、クスリユ
ビデス。

四40 7 スコシタツテカラ、ソツト
フタヲアケテ、外ヲ見ルト、
（略）。

四51 7 海ニキタ時ヨリモ、今
ハスコシ長イ名ヲモツテキマ
ス。

四69 1 「ソナニ少シツツノ
マナイデ、モツトタクサンノ
ダラ、早クナホリマセウ。」

四81 8 略、こんどは扇が少し
おちついて見えます。

五3 4 略、大神は少しばかり戸を
あけて、おのぞきになりました。

五9 3 それから少し来ると、高いが
けの上へ出ました。

六13 2 ソノ時ニハ一羽ノガンハ列ヲ
ハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。

六18 8 カネ尺ハクデラ尺ヨリ少シ
ミジカク、（略）。

六47 2 少しのゆだんもなく主人に
仕るころざしにかんしんして、
（略）。

六63 2 おふみはいそぎ道ば
たをそこかこゝかとさがすうち、
少しはなれたくさむらに、やうく
杖を見つけ出し、（略）。

七24 6 「先生、少シオ待チ下サイ
マセ。

七48 7 「略、僕等ハ少シグラキ
水ニヌレテモ、裏ハ通ラナイ。」

七51 5 「手紙は（略）、四匁より少
しでも重いと、（略）。

七66 3 桃がじゆくしましたから、
少しばかりですが、差上げます。

七81 4 私は年中航海をしてゐるも
のですから、少しそのお話をいたし
ませう。

八5 2 これより少し進めば、（略）
老木枝をまじへて、高く天をつく。

八12 4 なるほど皆さんとしよの
分は、おはなんも次郎さんも少し
まじめになつてゐます。

八33 4 「自分は（略）、元は少しは
人に知られた刀かちで、（略）。

八46 8 「それでは少し長過ぎる。
九32 4 此の時も少し進んだきりで、
やがて動かなくなつたが、（略）。

九64 9 空氣は（略）、凡そ少しに
てもすき間ある所には、必ず存在せ
ずといふこと無し。

十9 5 略、あたかも海綿の如く
なるを以て、水をして少しづつ靜か
に流れ出でしむ。

十32 10 昆陽ハ（略）、平左衛門ヨ
リハ少シ後ノ人ナリ。

十一47 4 さていよく馬を受取る段
になつて、大將は今少しまけぬかと
いふ。

十二90 8 略、何事にても少しの
不注意は大いなる禍を招く。

すこしく「少」〔副〕2 少シク 少しく
九3 10 大蛇を斬り給ひしに、
尾にいたりて、劔の先少しくかけた
り。

九16 4 図 鬼怒川ノ落合フ所ヨリ少シ
ク下流ニアタリテ船戸アリ。

すこしも「少」(副) 24 スコシモ 少
シモ 少しも

二36 6 (略) コノ人ノタニハ、
オ米ガスコシモデキナクナツタ
トイヒマス。

二64 5 (略) イクラハヒヲフリカ
ケテモ、ハナハスコシモサキ
マセン。

四63 1 (略)、少しも知らずにゐ
ました。

六71 3 (略)、少しも書きそこなひな
どをしない子供もございました。

七47 9 図 「イヤ、君ヲハ破レ
易クテ、少しも強ミトイフモノガナ
イ。

八69 9 図 (略)、汝はただ坐して
食ふのみにて、少しも我等に報ゆる
所なし。

八71 7 図 諸君(略)、此の数日間
少しも食物を送らざるが故に、新し
き血出来ずして、(略)。

八82 4 図 又世界の中には、(略) 甚
だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あ
り。

八86 5 中佐ハハヤ、右手ニ一ヶ所
ノ傷ヲ受ケタガ、少しモヒルマズ、
(略)。

九43 1 図 少しも御障なく入らせら
れ候由、一同安心仕候。

九43 10 図 又御宮裏の田も、本年は

水も十分に御座候間、少しも御案じ
下さるまじく候。

九79 6 図 道眞は(略)、少しも世を
いきどほり、人をうらむる心なかり
き。

十15 9 図 紫式部は(略)、兄の書を
讀むを聞きあて、直ちに之をそらん
じ、少しも忘るゝことなかりしかば、
(略)。

十16 4 図 (略)、式部は少しも高ぶり
たる風なく、常に一といふ文字をだ
に知らぬ顔に過したりといふ。

十28 5 (略) 鳥が二羽止つて、さつ
きから少しも動かない。

十35 7 図 あいさつをしてもていねい
で、少しも生意氣な風がなく、(略)。

十36 3 図 外の者は少しも氣が附かな
い、中にはそれをふんだ者もあり
ましたが、(略)。

十38 8 図 (略)、少しも人に先んじよ
うとはせず、靜かに自分の順番を待
つてゐました。

十43 1 図 然レドモ少しモ其ノ志ヲタ
ワメズ、(略)。

十58 9 図 (略)、外出せずとも少し
も不自由を感じ申さず、(略)。

十一45 2 図 (略)、少しも疑ふ心なき
正儀の様を見ては、刀のつかに手を
かくべきやうもなし。

十一106 2 図 蜀ノ軍少しモサワガズ、
旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハ
ントスルモノノ如シ。

十二31 10 図 保の母は(略)、少しも
悲しむ色を見せざりき。

十二60 6 図 (略)、通行の人は(略)、
少しも混雜を生ずることなし。

すこす「過」(四) 7 過す 『一サ一
シ・ス・一セ』

八70 5 図 (略)、目は食物を見ても見
ぬふりをして過し、(略)。

八70 7 図 かくて二三日を過せしに、
耳鳴り、目暗み、手足なえて、(略)。

九45 9 図 日暮るれば、一同テントを
張りて夜を過す。

九47 2 図 (略)、一同は行くべき方に
まよひて、右に往き、左に往き、空
しく一日を過せり。

九48 1 図 (略)、さては此のまゝにて
は過されじと、(略)、ひそかに駱駝
にうち乗りて、そこより逃れ出でた
り。

十16 5 図 (略)、式部は(略)、常に
一といふ文字をだに知らぬ顔に過し
たりといふ。

十一73 7 図 住持は知らぬ顔して過せ
しに、十日餘にして鶴二十四五羽を
畫がけり。

すこつ「頭骨」(名) 1 頭骨

十82 2 図 殺したる熊の頭は(略)、
垣の上には多くの頭骨、風雨にさら
されて残れり。

すこぶる「顔」(副) 10 スコブル す
こぶる 顔 顔る

七59 7 図 犬の種類はすこぶる多し。

八95 4 図 (略)、商工業の發達著しく、
焼物・塗物・扇・綿絲・織物等の座
出すこぶる盛なり。

九18 7 図 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シ
テ、運輸ノ便スコブル多シ。

十61 1 図 此ノ銅山ハ發見ノ當初ヨリ
產出高スコブル多ク、(略)。

十73 9 図 道後に次ぎて早く世に知ら
れたるは有馬の温泉にして、(略)、
浴客多く集り、すこぶる繁榮せり。

十99 10 図 長廊盡キテ本堂アリ。結構
頗ル大ニ、眺望甚ダ美ナリ。

十一112 6 図 されば全村頗るゆたかに
して、皆其の家業を樂しめり。

十二54 1 図 海外貿易ノ將來ハ頗ル多
望ナリ。

十二54 6 図 市街建築物及び埠頭等頗
る規模の壯大なるを見る。

十二60 4 図 (略) 道幅狭く、車馬街
上に満ちて往來頗る困難なり。

すこやか「健」(形状) 2 健か

十二120 10 図 師の君きらば、健か。

十二121 1 図 我が友きらば、健か。

すさのおのみこと「素戔鳴尊」(人名)

2 すさのをのみこと 素戔鳴尊

五1 2 天照大神の御弟に、すさのを
のみことといふきのあらい神さまが
ありました。ある時生馬のかはをは
いで、大神がはたをおらせていらつ
しやる所へおなげ入れになりました。

九1 8 図 神代の昔、天照大神の御

弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひし

に、(略)、夫婦の老人(略)泣きか
なしめるを見給ふ。

すさまじ「凄」(形) 2 すさまじ

「ジ・ジキ」

1747 図 (略)、大湯と稱するは一晝
夜に數回噴出す。噴出する時は湯氣
立ちのぼりて、鳴動の音すさまじ。
12431 図 熔岩の光、火山灰及び水
蒸氣にうつりて、見るもすさまじき
光景を呈す。

すさまじ・い「凄」(形) 2 すさまじ

「イ」

9351 やがて汽車が動き出すと、
(略)。見物人一同は其の早いのと其
の勢のすさまじいのに驚いた。

11552 ふと山のいたゞきの方に
すさまじい物音が聞え始めたと思ふ
と、(略)、山のやうな雪なだれがな
だれて来て、(略)。

すさむ 凸ふきすさむ
すじ「筋」(名) 1 筋凸いくすじ・お
とおりすじ・おんみちすじ・ちゅうご
くすじ・ひとすじ

121195 図 (略)、西も東も 知ら
ざりし 身のいつしかに 分けにた
る、(略)。世の人並の 道の筋。

すじむかい「筋向」(名) 1 すぢむかひ
四24 (略) いうびんきよくがあ
ります。その すぢむかひに 大き
なごふくやがあります。

すず「鈴」(名) 4 スズ 鈴

175 クロイネコ(略)クビニ

スズ

5688 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ
テナル。サンケイスル人ハ(略)コ
レヲ鳴ラシテヲガム。

5692 オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシ
テヲガム。

12283 図 (略) 繩を城下の河中に
張りて、城兵のひそかに逃れ出づる
を防ぐ。(略) 黒き影は(略)身を
水中に投入れたり。繩の鈴はしきり
に鳴る。

すずき「鱧」(名) 1 鱧

12285 図 流をさかのぼる鱧の繩
にふるゝならん。

すずきあいきち「鈴木愛吉」(人名) 1

鈴木愛吉

7189 図 五月四日 鈴木愛吉 高橋
忠一様

すずきあいきちさま「鈴木愛吉様」

「人名」 1 鈴木愛吉様

7168 図 五月一日 高橋忠一 鈴木
愛吉様

すずきいまえもん「鈴木今右衛門」

「人名」 1 鈴木今右衛門

12327 図 (略)、鈴木今右衛門の妻
の慈善を行ひたる、皆後世女子の模
範とすべき德行なり。

すすく「煤」(下二) 1 ス、ク「一
ケ」

1614 図 (略) 松下禪尼、アル日時
頼ヲ招待セントテ、ス、ケタル障子

ノ破レヲツクロヒキタリ。

すすく「漱」(四五) 2 す、く「一
ギーク」

7648 われくは毎朝顔を洗ひ、口
をすくぐ。

855 図 五十鈴川の水に口すゝぎ手
洗ひて(略)、御宮の前にいたる。

すすし「涼」(形) 4 ス、シ 涼し

「シ・シク」

676 図 秋ハス、シク、冬ハ寒シ。

8367 図 (略)、にごりにしまぬ白
蓮の 卷葉をもるゝつゆ涼し。

1745 図 熱海は伊豆の東岸にあり。
(略)、冬暖に夏涼し。

1752 図 此の地も亦夏甚だ涼しく
して、暑をさくるによろしければ、
(略)。

すずしい「涼」(形) 3 すずしい 涼

シイ 涼しい「イ・イク」

6107 すずしい風にふかれながら、
草の上にすわつて、にぎりめしをた
べた時は(略)。

6128 ツバメハ暖ニナルト、ドコカ
ラカトンデ来テ、涼シクナルト、マ
タドコカヘトンデ行ク。

7102 図 ならぶすげがさ涼しいこゑ
で、歌ひながらにうゑ行くさなへ。

すすはき「煤掃」(名) 1 す、はき

6361 十二月十日(略)今日は天氣
がよくて暖いから、うちではすゝは
きをした。

すすみいず「進出」(下二) 2 進ミ出

ツ 進み出づ「一デ」

8535 図 之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デ
テ、入鹿ノ足ヲキル。

12276 図 鳥居勝商といふ者あり、
進み出でて其の使たらんことを請
ひ、(略)。

すすみ・でる「進出」(下二) 1 すすみ
出る「一デ」

4787 だれか上手なものとはな
いか。」とたづねました。その時

一人がすすみ出で、「なすのよ
一と申すものがございます。

すすみゆく「進行」(四) 1 進み行く
「一カ」

8761 図 我等若し汽船に乗りて、
(略)、東へ東へと進み行かば、(略)
アメリカ大陸に着くべし。

すすみよる「進寄」(四) 1 進み寄る

「一ル」

1509 図 組めや手塚。」といふまゝ、
に、はや弓を捨てて進み寄る。

すすむ「進」(四五) 40 すすむ 進ム
進む「一マ・ミ・ム・メ・メン」

いすすむ 凸こぎすすむ・はげみすすむ・ふる
すすむ

3262 図 おまへが すすめば、わ
たしも すすむ。

3264 図 おまへが すすめば、わ
たしも すすむ。

5807 図 よしつねはこゝぞと思つ
て、「進めく。」とさしづをした
が、(略)。

- 五八〇 〇 進めく。」
- 五八二 〇 (略)、馬もこはがつてすくんでしまひ、人も顔を見合せて進まうとはしない。
- 七八三 〇 〇ノ度ノ合戦サダメテナンギナルベケレド、進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ。
- 七三七 〇 (略)、人ハ皆前ヘ前ヘト進ンデ行ツテ、後ヘハ引キカヘサナイカラ、(略)。
- 七三六 〇 船には(略)、それで方角をとつて進んで行くのです。
- 七三六 〇 (略) 福井丸ハ、今旅順ノ港口ニ進ミタリ。
- 八五二 〇 橋を渡りて神苑に入る。(略)。これより少し進めば、(略)老木枝をまじへて、高く天をつく。
- 八五二 〇 ヤガテ同志ノ一人御前ニ進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、(略)。
- 八六七 〇 (略) 熱がずつと下つて、食事に進みますから、一先安心いたしました。
- 八七六 〇 こゝより汽船に乗りて、ふたゝび東へ進めば、(略)イギリス國の港に着く。
- 八七九 〇 ヨーロッパより船にて日本へ歸るには、(略)、印度洋を渡りて、東へ東へと進むなり。
- 八八〇 〇 (略)、東へ東へと進めば、又元の日本に歸り来る。
- 八八〇 〇 (略)、東へ東へと進めば、(略)。西へ西へと進むもまた同じ。
- 九五五 〇 尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、(略)。
- 九六一 〇 (略)、尊は難をまぬかれ給ひ、なほ進みて賊を討滅し給へり。
- 九六三 〇 尊はなほも進みて北に向ひ給ひしに、(略)。
- 九二二 〇 併し今の戦争は昔とちがつて、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。
- 九三二 〇 (略) 船を造つた。(略)。此の時も少し進んだきりで、やがて動かなくなつたが、(略)。
- 九四六 〇 二人の馬は五分々に進んで行つたが、(略)。
- 九八八 〇 (略)、世ノ進ムニシタガヒ、(略)、物ト物ト交換スル不便ヲ省クニ至レリ。
- 九四二 〇 (略)、表門を入れれば五重塔あり。進んで陽明門に至る。
- 一〇三〇 〇 進んで戦場にては、進まんとすれば、大人げなしとあざけり、退く時には、今はかなふまじとそしる。
- 一〇三〇 〇 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。
- 一〇九七 〇 奈良ヨリ汽車ニ乗リテ南へ進メバ、(略)三輪町ニ達ス。
- 一〇九八 〇 コ、ヨリ西北へ進メバ、敵傍・樞原ノ地ニ出ツ。
- 一一四三 〇 本道を更に南へ進めば、庭園を以て名高き竹林院あり。
- 一一四四 〇 尚進めば、水分神社・金山峰神社等あり。
- 一一四八 〇 アラビヤ人は(略)追手と或間隔を保ちながら進んで行く。
- 一一五五 〇 眞先に立つて、太鼓を打ちながら、かひなく進んで行く。
- 一一八四 〇 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ(略)、四尺程ノ幅トナリテ進ム様、精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。
- 一二五九 〇 大連より(略)を経て、北へ進むこと約二百哩、遼陽あり。
- 一二六八 〇 しかも僅かに飢をしのぐは先頭に進める一部に過ぎず、(略)。
- 一二七二 〇 世を憤らんよりは、進みて之を救済すべし。
- 一二七八 〇 コロンブスは(略)、歐羅巴の西海岸より西を指して進まば、印度の東海岸に到着すべしとの意見を抱けり。
- 一二七五 〇 (略)、若し歐羅巴より西へ向つて進まば、(略)、日本又は支那に到着するならんと。
- 一二二五 〇 をこりに流るるは易く、をこりより儉約に進むは難し。
- 一二九一 〇 景公(略)魯公と會見す。其の時齊の有司進みて戯樂を奏せしかば、(略)。
- すすむ「進」(下二) 1 進む『一』
- 一二一〇 〇 (略)、地方自治の精神に基づきて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。
- すすむ「勸」(下二) 2 勸む『一』
- 九五七 〇 (略)、「此のあたりに鹿多し。かりし給へ」と勸めて、尊をいざなひ、(略)。
- 一二八六 〇 (略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勸む。
- すすむ「鈴虫」(名) 1 鈴蟲
- 五六一 〇 〇 あれ、鈴蟲も鳴き出した。りんくくくく。りんりん。
- すすめ「雀」(名) 12 スズメ 雀
- ろすすめ・むらすすめ
- 一四三 タケニスズメ
- 二二八 ケサハカラスノナクコエモ、スズメノナクコエモ、ウレシサウニキコエマス。
- 八二〇 〇 (略)、そこらあたりに飛んでゐた雀を見て、(略)。
- 八二〇 〇 雀といふものはすぐふえるもので、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。
- 八二〇 〇 農夫は(略)、近年麥の取高の少いのは、この雀のせいではあるまいかと思ひました。
- 八二〇 〇 (略)、君は白い雀を見たことがあるか。
- 八二一 〇 白い雀が實際居るのか。
- 八二一 〇 又若し外の雀が見つけると、よつてたかつていぢめるので、(略)。
- 八二二 〇 どうかして其の雀をつかまへて見たい。」
- 八二六 〇 其の中に雀のことはいつかわすれて、(略)。

十287 唯あぜの様の木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。

十302 榛の木の雀は一度にばつと飛立つた。

すすめあう「勸合」(四) 1 すゝめあふ「一七」

六835 図(略)、善きことたがひに

すゝめあひ、悪しきをいさめよ、友と友、人と人。

すすやかわ「鈴谷川」〔地名〕 2 鈴谷川 鈴谷川

十一968 図(略)、南部の鈴谷川・内淵川・留多加川の流域の如きは、地味肥え、有望の農業地に御座候。

十一98 図 鈴谷川

すすやかわへい「鈴谷川平野」〔地名〕

1 鈴谷川平野

十一974 図(略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、鈴谷川平野の中央に位し、大泊より十里、輕便鐵道も出來居候。

すそ「裾」(名) 1 すそ 母おすそわけ

四146 圖 (略)、からだに雪の

きものきて、かすみの すそをとほくひく、ふじは 日本一の山。

すその「裾野」(名) 1 すその

四153 (略)、ふじの すそのでまきがりをしました。

ずたずた(形状) 1 ずたずた

九39 図 尊(略)、おびさせ給へる

劔を抜きて、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、(略)。

すたり「廢」(名) 2 スタリ すたり

十852 何から何まで役に立つて、不用な部分といふものは一つもない。

馬も(略)。死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。

十一651 (略)、經濟上ヨリハ、成ルベク價ノ安いモノヲ求メ、ソレヲ成ルベクスタリノナイ様ニ用フベク、(略)。

すだれ「簾」(名) 3 スダレ すだれ

三304 ソノホカ竹ノスダレモアリ、(略)。

十174 圖 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかがけて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、(略)。

十一761 圖 (略)、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

すたれゆく「廢行」(四) 1 すたれ行く「一七」

九533 圖 (略)、手ぬぐひ三尺引きしほり、頭に結ぶはち巻は 次第々々にすたれ行く。

すたれる「廢」(下二) 3 スタレル

すたれる「一七」

五604 ランプニ石油ヲトボサヤウニナツテカラ、アンドンハダンダンニスタレテ來マシタ。

十223 それ故近年は木版が段々すた

れて、活版を用ひることが多くなつた。

十一1098 近年は斬髪風の行はれて、冠禮は段段すたれて行く。

スチブンソン「人名」 6 スチブンソン スチブンソン

九312 蒸氣機關は(略)。(略)、又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、イギリスのスチブンソンといふ人である。

九333 スチブンソンは若い時から機關の事に明るかつたが、(略)。

九342 圖 スチブンソン

九342 (略)、スチブンソンの發明した汽車を用ひて見ようといふことになつて、(略)。

九343 (略)、スチブンソンは其の會社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を走る汽車を造つた。

十一275 圖 スチブンソンの造りし機關車は、今日の完備せる機關車にくらぶべくもあらず。

すつ「捨」(下二) 8 すつ 捨ツ 捨つ「ツツル・一七」 8 すつ 捨ツ 捨つ

九209 圖 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命をすてて君に報ゆる爲には候はずや。

九2210 圖 おつかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られるが、(略)。

十509 圖 組めや手塚。』といふまゝに、はや弓を捨てて進み寄る。

十774 圖 取ルモ捨ツルモ、行クモ止ルモ、食物ヲ食フモ、言語ヲ發スルモ、皆腦ノ命令ニヨル。

十一458 圖 (略)、「今は自ら死ぬるより外なし。」とて、刀を取直して腹かき切らんとす。居合せたる人々(略)、「何とて命を捨つるに及ぶべき。」と、(略)。

十二3010 圖 上毛野形名、(略)、兵皆四散せしかば、夜に乘じて城をすてて逃れんとす。

十二373 圖 古語に「私事を以て公事をすてず。」といへり。

十二3117 圖 (略)、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

ずつ(副助) 25 ツツ づつ

二66 圖 サア、ミンナデーボンツツモツテ、キミガヨヲウタヒマセウ。」

三105 ウチニハ(略)、オトウトトイモウトガ一人 ツツ アリマス。

四691 圖 「ソナニ少シツツノマナイデ、モツトタクサンノンダラ、早くナホリマセウ。」

五165 (略)、兩ワキニ(略)ウロコガ三十六枚ツツナランデキマス。

五318 ソノ實ハ(略)ソノ中ニマルイ種ガ二ツツツツアリマス。

五717 圖 (略)、オチルトスグ又新シイノガハエテ、ソノタビニ枝ガ一ツ

ツツフェル。

六30 一本三せんづつのを二本買つて、(略)。

六48 秀吉は大ぜいの人を十組に分けて、一組に十間づつわりあてて、仕事をいそがせましたから、(略)。

六66 (略) 魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、後カラ一ツツツスケテオチルノヲ知リマセン。

七20 葉は羽形で、二枚つつ向ひ合つてゐますし、(略)。

七31 (略)、その間に一日か二日つつ眠ることが四度ある。

八10 (略) そろつて寫眞をとりました。ついでに私一人のもとりましたから、兩方一枚づつ差上げます。

八17 (略)、オボツカナキ手ツキニテ、破レタル所ヲ一間ツツ張レリ。

八21 (略)、毎年一羽つつしか出て来ない。

八74 猫ノ口ニハ上下ニ二本ツツノ鋭キ牙アリテ、(略)。

九7 又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカラ、一ツツツニ取離スコトガ出来ル。

九35 一日の旅程を十里つつと見て、十二日程かつた。

九76 一日二一錢・二錢ツツニテモ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニハ、餘程ノ金高トナリテ、(略)。

九78 (略)、一錢・二錢ツツニテモ貯ヘンコトヲ心ガクベシ。

九82 それは氏子の五箇村から子供騎手を一人づつ出して、競馬をさせて、(略)。

十8 (略)、ナデシコナドノ葉ハ二枚ツツ向ヒ合ツテ附イテキル。

十9 (略)、水をして少しづつ靜かに流れ出でしむ。

十21 (略) 版木を造り、一枚づつ手刷にするのである。

十22 (略)、木版では一枚づつ彫るから、手間が幾層倍もかゝる。

十一9 (略)、十二箱ツツ集メテ紙ニ包ム者、(略)。

すっかり (副) 7 スツカリ すつかり

二34 ミテキルウチニダンダンノボツテキマス。アア、モウスツカリノボリマシタ。

四60 (略)、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。

四74 一パン上ノダンニハ(略)。(略)、花イケニハ(略)ヲイケマシタ。スツカリカザツテカラ、(略)。

六10 のぼりついたじぶんには(略)、はらもすつかりすぎました。

八25 (略)、今見た事をすつかり話して聞かせました。

十35 (略) はきくしてゐて、禮儀作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十二15 サテソレカラ(略)、細カイ造作ヲシタリシテ、スツカリ出来

上ルマデニハ非常ナ手數ガ掛ル。ずつと (副) 3 ズツト ずつと

三28 コレカラ二三日タツタラ、マダズツトタカクナリマセウ。

五55 石炭ノ火ノ力ハ木炭ヨリモズツツヨイノデ、(略)。

八67 昨朝あたりから熱がずつと下つて、食事も進みますから、(略)。

すつばい (酸) (形) 1 すつばい

『一イ』

五28 もとよりすつばいこのからだ、しほにつかつてからくなり、しそにそまつて赤くなり、(略)。

ステッセル (人名) 1 ステッセル

十38 旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル乃木大將と會見の處はいづゝ水師營。

すでに「既」 (副) 21 スデニ すでに

既ニ 既に

七18 ナンデハ年スデニ二十歳ヲコエタリ。

七68 シカルニ正行スデニ男盛リニ及ベリ。

七91 船ハ次第第二沈ミ行キテ、水ハスデニ甲板ヲヒタセリ。

八87 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。

十四 (略) 奈良の大佛の大ききの日本一なることは諸子すでに之を知れり。

十23 五日目ノ朝行キテ見レバ、老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。

十52 義仲の幼目に見たりし時も、すでに白髪まじりの老人なりき。今は七十にも餘れば、殊の外白髪には成りたらんに、(略)。

十80 あいぬの風俗はこれのみにても既に内地人と同じからず。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

十一17 六田の渡を渡りて上り行く坂路の左右すでに櫻多し。

十一69 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、(略)。

十一84 既ニ縫紳トナレバ梳櫛機ニカク。

十一85 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練機ト稱スル機械ニカケテ、(略)。

十一114 耕地整理は(略)、昨年既に之を完成せり。

十二71 時に午後二時四十五分、勝敗の数は既に定まれり。

十二30 徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。

十二40 昔箱根山の噴火せしことは我等既に之を學べり。

十二74 (略) 幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従

事せるコロンブスは(略)。

十二82 1 日は既に西へ傾いて、祭見物の人々は段々歸り始める。

十二87 10 (略)、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、良雄以下既に死を賜へり。

十二117 5 (略)、我等は(略)、既に祖先の事蹟を學び得たること多し。

す・てゐる「捨」(下二) 1 すてゐる「テ」ひなげすてゐる・ぬぎすてゐる

六23 2 一人の子どもが(略)、かめの中へおちました。すてておけば、すぐ死んでしまひます。

ずどんと(副) 1 ずどんと

十30 1 犬を連れた男が銃を肩にして、(略)。ずどんと一發。何を撃つたのだらう。

すな「砂」(名) 5 砂

六1 8 白い砂に青い松、どこのはまべを見ても、美しい景色である。

七71 7 アサリ・ハマグリナドハ砂ヤ泥ノ上ニ居リ、サザエ・カキナドハ岩ニツイテキル。

九48 7 (略) 夜明くれば、砂の上に新しき駱駝の足跡あり。

九53 9 (略)、海ノソコノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類ハ、(略)。

九53 10 (略)、其ノ體ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。

すなけむり「砂煙」(名) 1 砂煙
九46 2 (略)、大風吹起りて、砂煙は天をおほへり。

すなち「砂地」(名) 1 砂地

七71 1 (略)、エヒ・カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデキルモノモアル。

すなはら「砂原」(名) 1 砂原

六1 4 海岸には切立てたやうな岩山もあるが、平たい砂原になつてゐる所が多い。

すなはらつづき「砂原続」(名) 1 砂原つづき

九45 8 (略) さていよく沙漠に入りしが、木のかげ一つもなき砂原つづきなれば、其の苦しさたとへんに物なし。

すなわち「即」(接) 25 即ち 即ち

八54 2 (略) 中大兄皇子ハ後天皇ノ位ニツキ給フ。天智天皇ト申シ奉ルハ即ち此ノ御方ナリ。

九1 4 (略)、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。草薙劍は即ち其の一人なり。

九6 8 (略) 草薙劍は尾張の國にとゞめ給ひしかば、宮を建ててそこにまつれり。今の熱田神宮即ち是なり。

九42 3 (略)、湖水ノアフレテ流ル、モノハ即ち早川ナリ。

九89 1 (略)、世ノ進ムニシタガヒ、或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。貨幣即ち是ナリ。

九93 9 (略) 朱塗の橋、美觀先づ目を驚かす。是即ち有名なる神橋に

して、(略)。

九96 2 (略) 此の湖の落口は華嚴瀧となる。直下七十丈、(略)。此の水即ち大谷川の上流を成せり。

十3 2 (略) 其の長さ一萬五千二百七十六呎、即ち一里六町四十間五尺。

十6 6 ギザ／＼ノ深イノニナルト、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテキル。バラノ葉ヤ豆ノ葉ガ即チソレデアル。

十67 5 (略)、長さは十五間、即ち九十尺にも及ぶものも珍しくはない。

十71 10 (略) 其の熱氣に温りたる水の自然に地上にわき出づるもの、即ち温泉なり。

十101 6 (略) コ、ニ程近キ飛鳥ノ安居院ハ(略)、中大兄皇子ガ蹴鞠ノ遊ヲナシ給ヒ、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。

十一76 10 (略) 瀧の後より山路を上ること四町餘、一條の谷川あり、この水即ちかゝつて第一の瀑布を成すなり。

十一89 3 (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、(略)之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。是即ち一種の牧畜なり。

十一90 3 (略) 一種の草の實を食用とするを以て、(略)此の草の成長を保護し、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。是即ち農業の收穫に異ならず。

十一94 6 (略) かゝる時は靴の供給次第

に増來り、靴の價はやうやく安くなりて、(略)。又之と反對に、(略)、供給も隨つて減じて、又普通の價に復するか、場合によりては尚それ以上上るべし。即ち物の價は普通の價を本として上下すと知るべし。

十一95 1 (略)、供給に限りある物 例へば(略)の如きは、需要増すに隨ひて、其の價益々高くなり、需要の減ずるに非るよりは、決して安くなることなきなり。即ち供給に限りあるものは一定の價なしといふべし。

十二43 9 (略) 人口やうやく増加し、(略)、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。是即ち農業の起原なり。

十二71 9 (略) 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。是即ち遠きを慮る所以なり。

十二97 2 (略) 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。孟子の如きは即ち其の一人なり。

十二98 1 (略)、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。國民各自の行爲をつゝしみ、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、(略)。

十二111 5 (略) 此の如き人の組織せる軍

隊は即ち鳥合の衆に同じ。

十二114 図 以上の五箇條即ち忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、(略)。

十二117 1 図 此の五箇條は即ち皆我等が平常に之を身に行ふべきものにして、(略)。

十二117 7 図 (略)、唯々一の誠心を以て報國盡忠の道にいそしまんとす。是即ち我等の覺悟なり。

すばしこい(形) 1 スバシコイ「イ」

三15 3 図 シカシ スクネモ チカラガ ツヨクテ、スバシコイ人 デシタカラ、ナカナカケハヤニハケラレマセン、(略)。

スプレー「地名」1 スプレー

十二59 4 図 テームスとセーヌとはスプレーに比すれば、河幅はるかに廣く、(略)。

スプレーがわ「地名」1 スプレー河
十二59 3 図 倫敦にはテームス河、巴里にはセーヌ河、伯林にはスプレー河ありて各其の市街を貫流す。

すべすべ・する(サ変) 1 スベくスル「一シ」

十6 3 図 ヘリモ鋸ノ齒ノ様ニギザノアルノモアレバ、一體ニスベくシテキルノモアル。

すべたまう「統給」(四) 1 すべ給ふ「一フ」

九24 5 図 かしこくも天皇陛下は自ら大元帥なるぞとおほせて、陸海軍をすべ給ふ。

すべて「総」(副) 29 スベテ すべて 凡て 總ベテ 總べて 曷どうほうす べてろくせんまん

四45 3 図 今でも魚や貝や鳥や、すべてなまぐさものをおくる時には、のしをつけません。」

六5 2 図 見上げる峯の一つ松、はまべはつゞく松原の 枝ぶりすべておもしろや。

六53 6 図 ツケ物ハスベテ塩ニテツケ、ミソモ醬油モ塩ヲ入レテツクル。

七21 3 図 大豆・小豆・さゞげ・そら豆・なた豆などはすべて私どもの親類です。

七26 5 図 手ハスベテノ仕事ノモトデス。七61 4 図 すべて犬は人になれ易く、

かしこくして、よく主人の命を守る。七77 4 図 海草ハスベテ養分ヲ葉ヤ莖デスヒ取ル。

七84 2 図 見るもの聞くもの總べてめづらしいものばかりです。」

八18 1 図 図 (略)、總ベテ物ハ破レタル所ノミツクロヒテ用フルトキハ、シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若

キ者ニ知ラセントテカクスルナリ。」八55 1 (略)、大空を飛びまはつて、他の鳥をとらへて食ふ鳥や、(略)、氣候によつてすむ所をかへる鳥は、總べてつばさが大きい。

八72 5 図 世はすべて相持なり。」

九22 8 図 將校も兵士も(略)。總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

九46 6 図 すべて沙漠の旅行は、以前に通じし駱駝の足跡を目あてに行くなり。

十6 9 図 葉ニハスベテ葉脈トイフモノガアル。

十10 3 図 總べて魚類は暗き處を喜び、森林の影さす水中には多く集り来るものなるを以て、(略)。

十77 6 図 スベテ重要ナル機關アル部分ハ、殊ニ強堅ナル骨ニテ包マレタリ。

十85 7 図 すべて家畜はよく勞らなければならぬが、(略)。

十一1 9 図 眺望いよく開けて、満目總べて花なり。

十一116 2 図 (略)、朝日の御旗ひるがへも 同胞すべて六千萬。

十一116 6 図 あまねき光仰ぎ見る同胞すべて六千萬。

十一116 10 図 祖先の遺風つぎ／＼と、同胞すべて六千萬。

十一117 4 図 (略)、勤勉・努力まゆみなき 同胞すべて六千萬。

十一117 8 図 (略)、日進歩ゆるみなき 同胞すべて六千萬。

十一118 2 図 上下心算一にして、同胞すべて六千萬。

十一118 6 図 大みことのりたふとび

て、同胞すべて六千萬。

十二26 1 図 歴史は長き 七百年、興亡すべてゆめに似て、英雄墓はこけ蒸しぬ。

十二88 8 図 出入口の混雑せる程なれば、一事が萬事、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

十二98 5 図 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にす等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二105 5 図 凡て制度の運用は人にあり。

すべり「滑」(名) 2 すべり

九33 4 図 スチブンソンは(略)、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、(略)。

九33 4 図 スチブンソンは(略)、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、(略)。

すべる「滑」(五) 1 すべる「一ツ」

九84 8 (略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。熊吉はつるりとすべつて、そのはずみにころころと轉がつて、池の中へ落ちこんだ。

すま「須磨」(名) 1 須磨

十一30 3 図 諸子ハ數多アル我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略)。又嚴島・橋立・須磨・明石・宇治・龍田

等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ヅケタルモノ
ニシテ、(略)。

すまし 凸おんすまし

すまし「澄」(五) 2 スマス すまし

「一シ」

四四〇 カラノナイモノハカハ

イサウナモノダ。」トイツテ、ス

マシテキマシタ。

六四四 たゞ人がいくさのはなしをす

ると、耳をすまして聞いてゐました。

すみ「炭」(名) 3 すみ 炭

四三二 村の人人が、毎日やさい

やすみやたきぎを(略)、賣り

にきます。

五五七 火バチナドニ入レル炭ハ、木

ヲヤイテコシラヘタモノデス。

十八七 炭・薪・材木の森林より

出づることは何人も知れる所なり。

すみ「隅」(名) 3 スミ 隅

二五二 ハタケノスミヘツレテ

イツテ、(略)。

二五三 (略)、ハタケノスミヲホ

ツテミマシタガ、(略)。

十二八九 凡そ家内の掃除は(略)、

便所の隅より下駄箱の奥までも注意

せざるべからず。

すみ「墨」(名) 6 スミ すみ 墨

凸いれずみ

二一〇 かくレタ、クモニ。クロ

イクロイマツクロイ、スミノヤ

ウナクモニ。

六七〇 字を書くのに、筆をおとした

り、すみをこぼしたり、書きそこな
つて、(略)。

六七三 私は古机でございます。(略)。

こんなにくさん墨を附けたのも、

その子供たちでございます。

七三六 筆・墨・紙ナドノ店、(略)。

十五四 白髪頭にして若き人と先

を争ふもはゞかりあり。悲しきは老

の白髪なり。』といひしにたがはず、

墨を塗りて候。」

十九九 (略)、墨を流したる如き空

模様にて、一寸先をも見分けること

能はず、(略)。

すみか「住家」(名) 1 住家

十一二五 (略)、煙さなびくとま

やこそ、我があつかしき住家ふれ。

すみずみ「隅隅」(名) 1 隅々

十二六五 電車の便の最も開けたる

は伯林にして、市街の隅々通ぜざる

處なく、(略)。

すみだ「隅田」(名) 2 隅田

十一三〇 (略)、川ノ名ヲ附シタ

ルモノニ隅田・利根・最上・淀等ア

リ。

十一三三 砲艦ハ(略)。宇治・隅

田等はナリ。

すみだがわ「隅田川」(地名) 1 隅田川

七五九 コ・ローメグリシテ隅田川

ノホトリニ出ヅ。川ノ向フガハ向

島ニテ、櫻ノ名所ナリ。

すみとあぶら「課名」 2 炭ト油

五目 第十九 炭ト油

五五六 第十九 炭ト油

すみばしら「角柱」(名) 1 角柱

十三八 (略) あはれ我、梁や棟木や

桁どもを いつもせおひて 片時も

休む間なし。』と 角柱 ひとりつ

ぶやく。

すみやか「速」(形状) 3 速

十一二八 國運發展の速なること實

に驚くにたへたり。

十一八四 (略)、其ノ作業ノ速ニシ

テ整然タルニハ、何人モ驚クナルベ

シ。

十二二九 (略)、『援軍來らず、

速に降るべし。』と告げよ。

すみよし「住吉」(地名) 1 住吉

十一四四 (略)、赤松光範、楠木正

儀と攝津の住吉に戦ひて、散々に撃

破られたり。

すみよしのたたかい「住吉戦」(名) 1

住吉の戦

十一四三 (略)「赤松光範の臣宇野六

郎の子なり。住吉の戦に父の討死し

たる後、(略)。

すみれ「菫」(名) 2 スミレ

三八二 「ソレデハワタクシハス

ミレヲツミマセウ。」

三八八 「スミレハタクサンナイ

カラ、マダソナニツメマセ

ン。」

すみわたる「澄渡」(四) 1 すみわた

る「一リ」

八八二 秋の日の空すみわたり、

風暖にさてもよき日や。

すむ「住」(四五) 22 スム すむ

住ム 住む「一ミーム・ミー・ムーン」

三五四 かへるは水の中にも、

をかの上にもすむことがで

きるのです。

五二七 ぬす人はきんじよに住んで

ゐるゐざりだといふはさがあるの

で、(略)。

七二二 海ノ中ニハ(略)。(略)。魚

類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカ

ナドガスンデキル。

七二四 エビノピン／＼ハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ

川ニスムモノトチガハナイガ、(略)。

七三六 海ニハ又ケモノガスンデキル。

七四一 陸ニスムモノデハ、象ガマツ

一番大キイガ、(略)。

八四九 (略)、つる・がん・つばめな

どの様に、氣候によつてすむ所をか

へる鳥は、(略)。

八八〇 我等の住む世界は圓きもの

故、名づけて地球といふ。

八八二 ある土人の如きは水を以て

家を造りて住めり。

八八四 地球上に住む人類は總數十

六億ありて、(略)。

九四四 かの大蛇の住みし上には叢

雲常に立ちこめたれば、(略)。

九五五 田ニスムカヘルハ土色ニシ

テ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ緑色

ナリ。

- 九三九 〔略〕、海ノソコノ砂ノ上ニ
 スムヒラメ・カレヒノ類ハ、〔略〕。
 九四一 〔略〕 カクノ如ク動物ノ體色ニハ
 其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモ
 ノアリテ、〔略〕。
 九五四 〔略〕 タトヘバ北國ニスム野ウサ
 ギハ、〔略〕。
 九六〇 〔略〕 人多き都會に住む者は、折
 ヲ野外に出でて、〔略〕。
 九八二 〔略〕、其の御衣は今なほ西
 のはてに住む身に近くあり。
 一〇七九 〔略〕 鵜飼を業とする漁夫は皆
 此の二村に住めり。
 一〇八五 〔略〕 蚯蚓は地下に穴をうがち
 て住み、〔略〕。
 一一九〇 〔略〕 收穫蟻といふもの
 あり。〔略〕、常に此の草の多く生ず
 る所を選びて住み、〔略〕。
 一一〇五 〔略〕 住めば都とやら、此の
 極北の寒地も今はや生れ故郷の如
 き心持に相成候。
 一二六八 〔略〕 東南シベリヤの高地に住
 むるかもしかの一種は、〔略〕。
 す・む 〔済〕 (五) 13 スム すむ 《一
 ミ・ム・ーン》 ヲあいすむ・これがす
 んでから
 三三八 〔略〕 「コレガ スンデカライ
 キマセウ。」
 三五六 〔略〕 「コレガ スンデカライ
 キマセウ。」
 三五八 スコシタツテオサラヒガ
 スミマシタ。
 三二二 バンノゴハンノ スンダ
 アトデ、オヂイサンハ〔略〕ハナ
 シヲキカセテクダサイマス。
 四二九 〔略〕 今年はもうこれです
 みました。
 四二九 〔略〕 三郎のうちでは夕はん
 が今すんで、〔略〕。
 五七〇 〔略〕 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
 マツテキル。勝負ガ一番スムト、ワ
 アツトホメルコエガキコエル。
 六七五 〔略〕 これがすむと、〔略〕、お祝ひ
 のさかもりがはじまりました。
 六七六 〔略〕 歌がすむと手打をして、〔略〕。
 七〇九 〔略〕 二百十日も事なくすんで、
 村の祭のたいこがひびく。
 七五九 〔略〕 用事は四五日ですむはずで
 すが、〔略〕。
 七三九 〔略〕 又一下二色々ナ物ヲ買集メタ
 イ時ニハ、一トコロデスムカラ便利
 デアル。
 九八三 〔略〕 神主は先づ神前で祝詞を上げ
 て、それがすむと、〔略〕一番太鼓を
 打鳴らした。
 す・む 〔澄〕 (五) 1 すむ 《ーン》
 一〇二六 家の横に水がよくすんだ小川
 が流れてゐる。
 すむ ヲくろすむ
 すもう 〔相撲〕 (名) 3 スマフ
 三三三 〔略〕、ダレトスマフヲト
 ツテモ、マケタコトハアリマセ
 ン。
 三三六 〔略〕、ノミノ スクネト
 イフ人トスマフヲオトラセニ
 ナリマシタ。
 五七〇 〔略〕 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
 マツテキル。
 すもも 〔李〕 (名) 1 すもも、
 八三六 〔略〕、山々の 櫻も咲け
 ば、梨・すもも、皆一時に紅白の
 花のながめの うるはしさ。
 すやき 〔素焼〕 (名) 2 すやき
 七三五 〔略〕、土又は石のこをねり
 かためてかわかし、かまどに入れて
 焼く。かくして出来たるものをすや
 きといふ。
 七三五 〔略〕 我らのつねに用ふる茶わん
 ・皿・はちの類は、このすやきにう
 はぐすりをかけて、ふたゝび焼きた
 るものなり。
 すり 〔刷〕 ヲかつばんすり・てすり・ほ
 んすり・もくはんすり
 すり 〔摺〕 ヲくさすり
 すりうす 〔磨白〕 (名) 1 すりうす
 六六四 そのもみを〔略〕、すりうす
 ですつて、もみがらをのけると、は
 じめて米になるのです。
 すりばち 〔搗鉢〕 (名) 2 スリバチ
 九四四 〔略〕 大空ヨリ箱根山ヲ見
 下サバ、全體ノ形ノスリバチヲ倒ニ
 シタルニヒトシキヲ見ルベシ。
 九四五 〔略〕 此ノスリバチノソコニアタ
 レル所ハ大ナル噴火口ニシテ、〔略〕。
 する 〔副〕 (五) 2 副る 《一ラ・一
 レ》
 一〇二〇 〔略〕 一色の印刷は一度刷ればよい
 が、〔略〕。
 一〇二六 又極上品なものになると、機
 械では刷らないで、手刷にする。
 する 〔擦〕 (五) 1 する 《一ツ》
 一〇六五 そのもみを〔略〕、すりうす
 ですつて、もみがらをのけると、は
 じめて米になるのです。
 する 〔為〕 (サ変) 25 スル する 《シ
 ・スル・スレ・セ・セヨ》 ヲあいさつする
 ・あんしんする・いじする・いんさつ
 する・うちじにする・うっかりする・
 うんそうする・うんでんする・えんち
 ようする・おうようする・がいしゆつ
 する・かいほうする・かんしんする・
 かんびようする・きよういくする・き
 ようきゆうする・きようそうする・き
 よこうする・くせんする・くろうする
 ・けいかくする・けいがする・けいれ
 いする・げきたいする・けつせきする
 ・けんさする・けんぶつする・こうげ
 きする・こうこくする・こしする・こ
 んざつする・さきんずる・さつぱりす
 る・さんけいする・さんしゅうする・
 さんじようする・さんずる・さんぶず
 る・しえきする・じたいする・じまん
 する・じゆくする・じゆくれんする・
 しゆつたつする・しゆつばんする・し
 ゆとして・じゆんらんする・じようか
 しやすい・じようずる・じようせんす
 る・じようたいする・じようひする・
 じようめいする・じようりくする・し

んげきする・しんばいする・しんぼす
 する・すべすべする・せいかつする・せ
 いずする・せいする・せいぞうする・
 せいちようする・せつきんする・せつ
 だんする・せんしする・せんたくする
 ・せんめつする・せんりようする・ぞ
 うかする・そうして・ぞうしよくする
 ・ぞんずる・たいきやくする・たつす
 る・ちこくする・ちやくしゆする・ち
 ゆういする・ちゆうもんする・つうず
 る・つりする・てきする・てわけする
 ・てんずる・でんたつする・どうして
 ・どうしても・ときとして・とつげき
 する・にこにこする・はいごうする・
 はいたつする・ばいばいする・はきは
 きする・はつきりする・はっこうする
 ・はったつする・はつめいする・はれ
 つする・びつくりする・ひやひやする
 ・ふしようする・ふんばつする・ほう
 こくする・めんする・もくれいする・
 やまあそびする・ややもすれば・やり
 とりする・よういする・ようする・ら
 くせいする・らくぼする・りようする
 ・りようする・りようする・わぼ
 くる

二54 〇「オトヨサンノハドレ
 ニシマセウ。」
 二21 〇ワタクシノカラダハ、日
 ニヤケタ ヤウ ナイロ シテ
 キマス。
 二22 〇「カクレンボヲシテアソ
 ビマセウ。」
 二25 〇オバアサンハ(略)、ユフハ
 ンノシタクヲシテキマス。
 二34 〇アル日トモダチニユミノ
 ジマンヲシテ、「(略)。」トイヒ
 マシタ。
 二34 〇「カガミモチヲマトニ
 シテ、イテミマセウカ。」
 二38 〇カゼヲヒイタリオナ
 カヲイタクシタリシタトキニ、
 (略)。
 二38 〇カゼヲヒイタリオナ
 カヲイタクシタリシタトキニ、
 (略)。
 二39 〇キモノヲスツタリセン
 タクシタリシテクダサルノハ、
 ドナタデスカ。」
 二40 〇ワタクシモオカアサン
 ヲダイジニシマス。」
 二41 〇「マダ小サイカラ、モウ
 スコシ大キクシマセウ。」
 二43 〇コハサウナ目ヲシテ、ニ
 ランデキルデハアリマセンカ。」
 二44 〇「耳ハドウシマセウ。」
 「ダルマサンニハ、耳ハイリマ
 セン。」
 二47 〇マサヲハミムキモシナイ
 デ、「(略)。」
 二56 〇マサヲハヤツバリミムキ
 モシナイデ、「(略)。」
 三9 〇ソレカラ三人デツンダ
 ノヲイツシヨニシテ、ハナタバ
 ヲコシラヘマシタ。

三11 〇ワタクシハ(略)、イモウト
 ノモリヲシタリ、オツカヒニ
 イツタリシマス。
 三11 〇ワタクシハ(略)、イモウト
 ノモリヲシタリ、オツカヒニ
 イツタリシマス。
 三16 〇「(略)。」といつて、けはや
 がじまんをしました。「ひらがな
 のドリル」
 三29 〇アタラシイ竹ハアヲアヲ
 トシテ、マコトニウツクシイモ
 ノデス。
 三35 〇うちへかへつて、ちちに
 みせようとしたら、光がみえま
 せん。
 三42 〇うのまねするからず、水
 におぼれる。
 三46 〇「おい、なにをしてゐる
 のだ。」
 三47 〇かへるは(略)、大きな目
 をして、手をついてすわつて
 ゐます。
 三47 〇(略)、見むきもしません。
 三48 〇(略)、ばくつとくつて、へ
 いきなかはをしてゐます。
 三49 〇(略)、ひとりでにうかぶ
 やうにして、水の上へ出て
 きます。
 三58 〇うみの水が青青として、
 どこまでもつづいてゐます。
 三65 〇(略)、子トモガ大ゼイデ
 カメヲツカマヘテ、オモチヤニ

シテキマス。
 二66 〇(略)、ウラシマガウミベ
 デツリヲシテキルト、(略)。
 三68 〇(略)、イロイロナゴチソウ
 ヲシタリ、サマザマノアソビヲ
 シテ見セマシタ。
 三68 〇(略)、サマザマノアソビ
 ヲシテ見セマシタ。
 四8 〇ドンナウチデモオイハヒ
 ヲシナイトコロハアリマセン。
 四15 〇昔みなものよりともが
 (略)、ふじのすそのでまきが
 をしました。
 四16 〇(略)、きはをむき出して、
 はななきをあらくして、(略)、と
 んで來ます。
 四23 〇オマツガオトミトアキナ
 ヒノアソビヲシテキマス。
 四30 〇三郎のうちでは(略)、み
 んなあつまつて、色色なはなし
 をしてゐます。
 四30 〇「もちにする米とこは
 んの米はどうちがひますか。」
 四31 〇「おもちにするのはも
 ち米といふ米です。
 四32 〇うどんやさうめんにす
 る麦は同じですか、ちがひま
 すか。」
 四33 〇「いいえ、うどんやさうめ
 んにする麦は小麦で、(略)。」
 四35 〇「あんにするのはあづ
 きといふ豆で、(略)。」

- 四35 ㊦ 「(略)、こなに するの
は 大豆といふ豆です。」
- 四36 ㊦ イネノワラデハ、(略)。
又タタミノトコニシタリ、ヤ
ネヲフイタリシマス。
- 四36 ㊦ 又タタミノトコニシタ
リ、ヤネヲフイタリシマス。
- 四39 ㊦ (略)、コノ中へハイッ
テ、内カラトヲシメテキサハ
スレバ、アンシンナモノデス。」
- 四39 ㊦ (略)、「トイツテ、ジマンバ
ナシヲシマシタ。」
- 四39 ㊦ (略) 大キナオトガシマシ
タ。
- 四43 ㊦ (略) のしあはびといふの
は、あはびの肉をのして、紙
のやうにうすくしたものです。
- 四49 ㊦ (略)、ばんまで かうして、
かつちん、かつちん。
- 四50 ㊦ (略)、あさまで かうして、
かつちん、かつちん。
- 四50 ㊦ サカナノニホヒガシマス
ガ、(略)。
- 四51 ㊦ (略)、ソノママデヤイタ
リニタリシテタベルノデハア
リマセン。
- 四59 ㊦ アニ神サマガタノオトモ
ヲシテ、フクロヲカツイデイラ
ツシヤツタノデ、(略)。
- 四60 ㊦ 白ウサギガソノトホリニ
シマス、カラダハ(略)ナホ
リマシタ。
- 四64 ㊦ (略)、みんな で 雪なげを
しませう。
- 四77 ㊦ ふねは(略)、上つたり下
つたりします。
- 五2 ㊦ よい神さまがたは、どうかし
て大神にまた出ていただきたいと、
(略)。
- 五6 ㊦ ソノ光ガキラ／＼トシテ、ワ
ルモノドモハ目ヲアケテキルコトガ
デキマセン。
- 五10 ㊦ 魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。
- 五12 ㊦ (略) さわがしいおとがする
から、見上げると、(略)。
- 五13 ㊦ (略)、ひろ／＼として、どち
らを見ても水ばかりです。
- 五18 ㊦ (略)、ズンズンシユツセヲセ
ヨトイフ心デ祝フノデセウ。
- 五23 ㊦ 大そうおこつて、取りかへさ
うとすると、(略)、どうしてもかへ
しません。
- 五31 ㊦ 花ニハベンガ五ツアツテ、ヨ
イニホヒガシマス。
- 五34 ㊦ 又羽ヲタ、ンデ、シツカニ木
ノ葉ノ上ニネムタツヤウニシテキル
ノヲ見ルト、(略)。
- 五39 ㊦ 下りる人もあり、のりこまう
とする人もあり、(略)。
- 五43 ㊦ ソノウチニ下ノ方デカミナリ
ノヤウナ音ガシマシタ。
- 五47 ㊦ 友吉は(略)、そこをのかせよ
うとしましたが、音次郎はなか／＼
- きません。
- 五48 ㊦ (略) 目がくらむやうないな
びかりがして、(略)かみなりが鳴り
ました。
- 五51 ㊦ キ瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシ
テモ、ツケ物ニシテモタベ、(略)。
- 五51 ㊦ キ瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシ
テモ、ツケ物ニシテモタベ、(略)。
- 五53 ㊦ 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガ
ケンクワラシタ時、(略)。
- 五54 ㊦ (略)、両方ガ仲ナホリヲシマ
シタ。
- 五55 ㊦ 又鳥ノ方ヘ行キマス、「オ
前ハケモノダラウ。」トイツテ、アヒ
テニシテクレマセン。
- 五56 ㊦ 人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタ
リシテタベマス。
- 五65 ㊦ 「お話をする通りに書けば
よいのです。」
- 五73 ㊦ ソノ時後ノ方カラカリウドノ
來ル音ガシタノデ、(略)。
- 五77 ㊦ よしつねはよろこんで、刀や
よろひをやつてけらいにした。
- 五79 ㊦ さあ、あんないをせよ。」
- 五80 ㊦ よしつねはこゝぞと思つて、
「進め／＼。」とさしづをしたが、
(略)。
- 五81 ㊦ (略)、人も顔を見合せて進ま
うとはしない。
- 五81 ㊦ (略) この時よしつねは、「われを
手本にせよ。」といひながら、(略)。
- 五81 ㊦ へいはふいを打たれて、ど
うすることも出来ない。
- 六2 ㊦ 松・杉・ひのきなどが一面に
はえてゐるのは目がさめるやうな心
持がする。
- 六8 ㊦ たんぼのさきにこんもりとし
た森があつて、(略)。
- 六15 ㊦ 刈つた稻はさをや木にかける
か、地面にひろげるかして、よく日
にかわかします。
- 六20 ㊦ 昔ある國で大きな象の目方を
はからうとしたが、(略)。
- 六20 ㊦ (略)、どうしてはかつてよい
か分りませんでした。
- 六24 ㊦ (略)、ヤクワントテツピンガ
メイ／＼ジマンバナシヲシマシタ。
- 六28 ㊦ モシセイ出シテ使ツテクレ
サハスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキ
マス。
- 六30 ㊦ (略)、二人が店のるすをして
ゐると、(略)。
- 六30 ㊦ 「あゝ大へんなことをした。
- 六32 ㊦ (略)、だまつてゐれば、
誰にも知れはしない。」
- 六36 ㊦ (略)、うちではすゝはきをし
た。
- 六36 ㊦ 僕も手ぬぐひをかぶつて、手
つだひをした。
- 六37 ㊦ (略)、紙などをそまつにして
はならないと思つた。
- 六38 ㊦ 學校で雪投をして遊んだ。
- 六41 ㊦ おみやげもおみやげ話も様
々あるから、たのしみにして待つて

おいで。

六四四 たち人がいくさのはなしをす

ると、耳をすまして聞いてゐました。

六四五 けれども日吉丸は、どうかし

てりつばな武士になりたいと思つて

ゐましたから、(略)。

六四六 ある日信長が夜明け前に出

けようとする、(略)。

六四七 又ある朝早く信長がかりに出

ようとして、(略)。

六四八 信長はどうとう秀吉にいひつ

けて、直させることにしました。

六四九 (略) だん／＼重く取立てて、

一方の大將にしました。

六五〇 秀吉は(略)、たび／＼いく

さをしたけれども、一ぺんもまけた

ことがありません。

六五一 (略)、その使のもつて来た文

の中に、秀吉を日本國王にするとい

ふぶれいなことがありました。

六五二 (略)、信玄は(略)、はさみう

ちにしようとした。

六五三 (略)、信玄は(略)、はさみう

ちにしようとした。

六五四 謙信はそれを知つて、こちら

から先がけをしよう、夜の間に信

玄の陣に攻入つた。

六五五 謙信は(略)、じつとしては

居られない。

六五六 ところがとなり國では(略)、

塩を送らせないことにした。

六五七 園 「われ／＼はたがひにい

さをしてゐるけれども、(略)。

六五八 園 「ああ、をしい事をした。

六五九 園 (略)、おとし物でもした

のか。」と、(略)。

六六〇 園 「そんなわるさを誰がし

た。」

六六一 園 (略) わたしの手から

もぎ取つて、はふつた音はしました

が、(略)。」

六六二 あくびをしたり、わき見をし

たりしてゐて、(略)。

六六三 あくびをしたり、わき見をし

たりしてゐて、(略)。

六六四 あくびをしたり、わき見をし

たりしてゐて、(略)。

六六五 (略)、顔を赤くする子供もご

さいました。

六六六 ちゃんとしせいをよくして、

氣を附けてゐて、(略)。

六六七 (略)、紙をたくさんほごにし

たりするやうな、(略)。

六六八 (略)、紙をたくさんほごにし

たりするやうな、(略)。

六六九 (略)、少しも書きそこひな

どをしない子供もございました。

六七〇 度々けつせきしたり、ちこく

したりして、(略)。

七七一 一日もけつせきもせず、ちこく

もしなかつた子供もございました。

七七二 (略)、ちこくもしなかつた子

供もございました。

七七三 歌がすむと手打をして、口々

に「(略)。」といひました。

七七四 大キナキカイデ、(略) ラク

／＼ト上ゲオロシヲシテキル。

七七五 小賣をする商人を小賣商人

といひます。

七七六 (略)、卸賣をするものを卸

賣商人といひます。

七七七 (略)、品物を賣つたり買つ

たりして、口錢を取る店のことです。

七七八 しかし卸賣商人で、問屋を

してゐる場合がたくさんあります。

七七九 (略)、花は同じく蝶の形を

してゐます。

七八〇 私はこんな大きななりをし

てゐますが、(略)。

七八一 大工ガ家ヲタテルノモ、(略)、

農夫ガ田ヲタガヤシ、畠ヲツクルノ

モ、皆手デスルノデス。

七八二 フトコロ手バカリシテキル人

ガ多ケレバ多イ程オトロヘマス。

七八三 筆一本デ美シイエヲカイタ

リ、ノミ一ツデ見事ナホリ物ヲコシ

ラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ、

(略)。

七八四 サルニハ手ノハタラキヲスル

モノガ四本アリマス。

七八五 (略)、絹絲を織つて絹織物に

するまでには、大そうな手間がかゝ

る。

七八六 (略)、木の葉に雨が降りかゝ

るやうな音がする。

七八七 (略)、左へ折レタリ、右へ折

レタリスルト、知ラズ／＼ニ出口ヘ

出テ来ル。

七八八 馬の主は馬を引いてかへらう

としました。

七八九 園 「これは又どうした金か。

七九〇 園 これまで貧しい暮らしをして

ゐるのに、(略)。」

七九一 園 「日ごろ貧しい暮らしをして

ゐる一豊が、(略)。

七九二 園 日本紙ハコヨリニシテ物ヲ

シバルコトガ出来ル。

七九三 園 「僕等ノ仲間ニハカラカサ

ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ

ノガアル。

七九四 今では切手をはつて出しさ

へすれば、どんな遠い所へもどき

ますから、(略)。」

七九五 又冷水浴や海水浴はひふを強

くし、(略)。

七九六 (略)、したがつてからだを強

くし、心をさわやかにする。

七九七 (略)、したがつてからだを強

くし、心をさわやかにする。

七八八 けれども水をたくさん飲みす

ぎたり、冷たい水の中に長くはいつて

ゐたりするのはよくである。

七八九 一昨年つぎ木をしたわか木

に、(略)。

七九〇 園 (略)、やしき中の桃の木に

皆つぎ木をすと申してゐます。

七九一 園 一そう手入をして、來年は

たくさんならせて、(略)。

七72 中デオモシロイノハサングデ、
タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲ
シテキル。
七73 1 カンザシノ玉ヤラジメニスル
サンゴハコノ蟲ノ骨デアル。
七73 2 又物ヲ洗ツタリフイタリスル
時ニ使フ海綿モ、(略)。
七75 2 (略)、ノリスルモノニハ、
フノリ・ツノマタ、(略)。
七75 3 (略)、トコロテンニスルモノ
ニハ、テングサガアル。
七77 9 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略)。
七80 8 (略)、あの運動場で体操
をしたり、この講堂でお話を聞いた
りしてゐたのです。
七80 9 (略)、この講堂でお話を
聞いたりしてゐたのです。
七81 2 (略)、皆さんにお話をする
のは、何よりもうれしうございます。
七81 3 (略) 私は年中航海をしてゐるも
のですから、(略)。
七84 1 (略) 私たちとはまるでち
がつた風をして、かはつたことばで
話してゐます。
七84 4 (略) 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。
七85 6 (略) 悪くすると、浅瀬へ
乗上げたり、外の船につきあつたつた
りする様なまぢがひが出来ます。

七85 7 (略)、浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあつたりする様なま
ぢがひが出来ます。
七85 9 (略) 海の深さははかつた
り、きてきやかねを鳴らしたりしま
す。
七88 9 (略) 小さい時から海にな
れておくやうにしたいものです。
八11 9 (略)、皆さんにお目にかゝ
つたやうな氣がします。
八15 5 (略)、皆メイ／＼ノ仕事ヲシ
テ、毎日働イテキルノデアル。
八15 8 何モシナイデ遊ンデキルノハ
樂ナヤウニ見エルガ、(略)。
八19 7 (略)、どうしたらよいかと、
いろ／＼考へてゐました。
八20 1 (略)、いろ／＼世間話をして
ゐたが、(略)。
八21 3 (略)、ふしぎさうな顔附をし
て、農夫は問返しました。
八22 3 (略) どうかして其の雀をつかま
へて見たい。
八22 7 (略)、若しや白雀が居はしま
いかと、屋敷のまはりを見まはつて、
(略)。
八23 9 此の男は居酒屋に酒代の借が
あるので、其のかたに持つて行かう
とするのです。
八24 6 どうするのとか氣を付けてゐ
ると、隣の家の方へ行きます。
八24 9 此の下女は毎朝かうして、主
人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐ
たのです。

八25 7 (略) 朝ねをしてゐる間に、身代
が減つて行くのだ。
八26 3 (略)、自分はどうかして白雀
を見つけようと、たづねまはりまし
た。
八33 1 仕事をしながら、僕に色々な
話をした事もある。
八33 2 仕事をしながら、僕に色々な
話をした事もある。
八45 1 火の取扱は大切にしなければ
ならぬ。
八49 3 (略) 「かうすると、ちやうど十
五字になります。」
八62 2 皆サンノ着物ニシテキル木綿
織物ハドウシテ造リマスカ。
八62 2 皆サンノ着物ニシテキル木綿
織物ハドウシテ造リマスカ。
八62 5 木綿絲ハドウシテ出来マスカ。
八63 1 綿ノ木ハ(略)。又ドウシテ出
來マスカ。
八64 1 木綿織物ニ(略)色々な縞ガ
アルノハ、ドウシテコシラヘルノデ
スカ。
八67 5 (略) 併し老病の事故、よほど大
事にしなければならぬと存じます。
八84 9 (略)、メザマシイ働ヲシナケ
レバナラナイト、(略)。
八85 9 我が兵ハ物トモセズ敵陣メガ
ケテ突撃シタガ、(略)。
八88 8 中佐ハ目ヲ見張りテ、軍刀ヲ
杖ニ起シラウトスル。

八92 7 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイ
クラモアルガ、(略)。
九8 6 豆ノ花ハ蝶ノ形ヲシテキル
シ、(略)。
九8 7 (略)、朝顔ノ花ハジャウゴノ
様ナ形ヲシテキル。
九9 2 シソノ花ノ様ニクチビルノ形
ヲシタノモアリ、(略)。
九9 4 (略)、オシロイノ花ノ様ニク
ダノ形ヲシタノモアル。
九19 3 (略) 「こらどうした。
九23 5 (略) 目ざましい働をして、
我が高千穂艦の名をあげよう。
九31 10 「何月何日初航海をするから、
何人にも乗船の望に應じる。」
九33 5 (略)、すべりのよい車をすべ
りのよいレールの上で走らせる様に
したらよからうと、(略)。
九34 5 いや／＼鐵道が出来て、汽車
の運轉をして見る日になると、(略)。
九36 5 (略)、人の肩車に乗つたり渡船
に乗つたりして渡つたのであつた。
九37 4 若し其の關所をよけて、わき
道を通る様なことをすれば、(略)、
其のものは重い罰を受けた。
九67 9 (略)、其の時はうらめしい心
地がする。
九86 5 (略)、今日の勝負はきまら
ないが、いづれ又改めてやり直しを
してもらはなければならぬまい。
十18 4 (略)、どうして出来るものか
といふ事は深く考へないが、(略)。

十189 (略)、消したり加へたりして、
 (略)、幾度書直すかも知れない。
 十194 かうして出来上つたものを活
 版所へ渡す。
 十206 又極上品なものになると、機
 械では刷らないで、手刷にする。
 十216 (略)、一枚つつ手刷にするの
 である。
 十284 はうきを立てた様に高く雲を
 はらはうとしてゐる。
 十291 (略) 冬を知らないやうに活々
 とした色を見せてゐる。
 十299 犬を連れた男が銃を肩にし
 て、森の蔭から出て来て、(略)。
 十357 (略) あいさつをしてもていねい
 で、(略)。
 十369 (略) 人が大勢込合つてゐる中
 で、少しも人に先んじようとはせず、
 (略)。
 十382 又馬が人をけたり、牛が人を
 突いたりするもの、人に恐れるから
 である。
 十373 長くのびると、刈取つて毛織
 物の材料にする。
 十193 一箱ノマツチヲ造ル手數モ
 ナカク複雑ナモノデ、ソレヲ大勢
 ノ人ガ手分シテスルノデアル。
 十197 此ノ様ニ大勢ノ人ガ手分ヲ
 シテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業
 トイフ。
 十198 (略)、別別ノ仕事ヲスルコ
 トヲ分業トイフ。

十1910 (略)、全體ノ人ガ同ジ仕事
 ヲスルヨリモ、(略)。
 十1910 (略)、分業デスル方ガ品物
 ノ出来バエガ良クテ、(略)。
 十1106 分業法ニ依ルト、人々ガ
 其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトニナ
 ル。
 十11010 分業法ニ依ラズ、一人デ種々
 ノ仕事ヲスルコトニナルト、(略)。
 十1118 (略)、其ノ仕事ニ適スル器
 具ノ改良ヤ發明ヲスルコトモアル。
 十1121 分業デスル仕事ハ皆全體ノ
 一部分デアルカラ、(略)。
 十1122 (略)、ソレノノ仕事ヲス
 ルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、
 (略)。
 十1146 飲まず食はずに終日・終夜
 走つても尚平然として居るといふこ
 とである。
 十11473 昔トルコノ或大將ガ(略)
 名馬を三千圓で買ふ約束をした。
 十11484 追手が(略)、後れ、ば脚
 のきざみを短くする。
 十11559 しばらくすると、谷底の方
 に太鼓の音がかすかに聞える。
 十11562 どうかして助ける工夫はあ
 るまいかと、兵士等は皆氣をもんで
 る。
 十11573 將軍は上衣をぬぎすてて、
 はや谷へ下りようとする。
 十11582 (略) 早くしないと、ピエール
 が死んでしまふ。

十11588 (略) 合圖をみると、兵士等
 は力を合せて二人を引上げた。
 十11658 (略)、暑い時分ハ(略)、ア
 ツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ル
 ノガヨイ。
 十116610 臺所ハ(略)、ニタキ・洗
 ヒ流シヲスル所デアルカラ、(略)。
 十11672 臺所ハ(略)、常ニ清潔ニシ
 テ置カナケレバナラス。
 十11673 座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置
 ク人ガ、(略)。
 十11674 (略)、臺所ヲ不潔ニシテカ
 ヘリミナイノハワカシイ話デアル。
 十11677 室が廣く、天井が高いと温
 りにくいから、成るべく狭く低くす
 る必要がある。
 十11692 男の冠をかぶり、(略) 田
 舎道を通るのを見ると、昔の人に會
 つた様な氣がする。
 十11694 (略)、髪を三つ打ちにして
 後へたらしてゐる。
 十116910 上流の婦人は四方を閉ぢた
 輿に乗つて、外から見られない様に
 する。
 十1169110 其ノ圖ハ(略)ヲ何十分ノ
 ニシタ縮圖デ、(略)。
 十116912 (略)、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ
 甲板トスル。
 十116914 (略)、大キナ船デハ船底モ
 兩側モ二重張ニスル。
 十1169151 (略)、細カイ造作ヲシタリ
 シテ、(略)。
 十1169151 (略)、船室ヲ分ツタリ、倉
 庫ヲコシラヘタリ、橋ヲ附ケタリ、
 機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタ
 リシテ、(略)。
 十1169157 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等
 ヲスル處ヲ船渠トイフ。
 十1169159 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ
 疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ
 テアル。
 十1169221 (略)、其の中の炭素を養分
 にして酸素を放つ作用がある。
 十1169234 (略)、植物は動物質の腐敗
 物を肥料として成長する等、(略)。
 十1169348 (略)、町長ハ工事ノ報告ヲ
 シタ。
 十1169836 重く沈んだ調に暗い／＼海
 の底へ引込まれるやうな氣がするか
 と思ふと、(略)。
 十1169841 人々は唯神曲に心を奪はれ
 て、妙音の外には何物も見えも聞え
 もしない。
 十1169851 (略)、燈火の光が點々とし
 て此處彼處にかゞやいてゐるとは、
 (略)。
 するが「駿河」〔地名〕1 駿河 じまが
 みするがいずさんごく
 九40 駿河
 するがのくに「駿河国」〔地名〕1 駿
 河の國
 九55 尊之を受けて、進みて駿河
 の國に至り給ひしに、(略)。
 すると(接)2 スルト

十1169151 (略) 船室ヲ分ツタリ、倉
 庫ヲコシラヘタリ、橋ヲ附ケタリ、
 機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタ
 リシテ、(略)。
 十1169157 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等
 ヲスル處ヲ船渠トイフ。
 十1169159 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ
 疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ
 テアル。
 十1169221 (略)、其の中の炭素を養分
 にして酸素を放つ作用がある。
 十1169234 (略)、植物は動物質の腐敗
 物を肥料として成長する等、(略)。
 十1169348 (略)、町長ハ工事ノ報告ヲ
 シタ。
 十1169836 重く沈んだ調に暗い／＼海
 の底へ引込まれるやうな氣がするか
 と思ふと、(略)。
 十1169841 人々は唯神曲に心を奪はれ
 て、妙音の外には何物も見えも聞え
 もしない。
 十1169851 (略)、燈火の光が點々とし
 て此處彼處にかゞやいてゐるとは、
 (略)。
 するが「駿河」〔地名〕1 駿河 じまが
 みするがいずさんごく
 九40 駿河
 するがのくに「駿河国」〔地名〕1 駿
 河の國
 九55 尊之を受けて、進みて駿河
 の國に至り給ひしに、(略)。
 すると(接)2 スルト

ニ587 ヨイオヂイサンハソノハ
ヒヲモラツテキテ、カマドノ
下ニオキマシタ。スルトカゼガ
フィテ、ハヒガバツトタツテ、
(略)、ウツクシイハナガサキマ
シタ。
四598 白ウサギハ(略)、又ソノ
ワケヲ申シ上ゲマシタ。スルト
神サマハ、「ソレハカハイサウナ
コトダ。
するどい「鋭」(形)5 スルドイす
るどい 鋭イ 鋭い「イ・ーク」
六647 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、
(略)、スルドイ爪デヒツカキマス。
八313 (略)年よりのかぢ屋があつ
た。せが高く、目がするどくて、ち
よつと見ると、おそろしいが、(略)。
八573 わし・たか・とびなどは上く
ちばしがことに鋭くて、やゝ太い。
八852 (略)遼陽ノ戦ニハ、部下ノ
大隊ヲヒキキテ、勢鋭ク進撃シタ。
九197 (略)、其の有様は何事だ。兵
士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥
だぞ。」と言葉鋭くしかつた。
するどし「鋭」(形)4 スルドシ 鋭
シ 鋭し「キ・ーク」
七909 (略)「杉野々々。」中佐ノスル
ドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞
ユ。
八741 (略) 虎ハ(略)。足ノ先ニハ鋭
クシテ曲レル爪アリ。
八743 (略) 猫ノ口ニハ上下ニ二本ヅツ

ノ鋭キ牙アリテ、肉ヲサクニ適ス。
九632 (略) 田村麻呂ハ(略)、眼の光
ははやぶさの如く鋭く、(略)。
すれちが「擦達」(五)2 スレチガ
フ すれちがふ「ツ・ーフ」
四176 ゐのししはまつすぐにな
だつねの方へ下りて來ます。
すれちがつた時に、ただつねは
馬からゐのししのせなかへ
(略)とびうつりました。
五432 走ツテキル汽車ガスレチガフ
時ニハ、(略)。
す・れる「刷」(下)1 刷れる「一
レル」
十209 印刷する紙は廣い大きな紙
で、幾ページ分も一度に刷れる。
すわる「座」(五)7 スワル すわる
坐ル 坐る「ツ・ーラ」
三428 (略)、ユフハンニハ、ケラ
イノ人ヲ右ト左ニワケテ
スワラセマシタ。
三475 かへるはをかにあると
きには、(略)、手をついてすわ
つてゐます。
五143 ナラノ大ブツトイッテ(略)。
スワツテイラツシヤル高サガ五丈三
尺五寸、(略)。
六107 (略)、草の上にすわつて、に
ぎりめしをたべた時は(略)。
八141 (略)、父ハハヤ店ニスワツテ
商賣ノ用向ヲシラベテキル。
八201 ある日一人の友だちは、この

農夫と野原の草の上に坐つて、いろ
／＼世間話をしてゐたが、(略)。
十56 (略) 大鬼蓮ハ(略)、其ノ上
ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ
出來ルサウデアル。
すん「寸」(名)2 寸ひいしやくに
すん・いっすん・いっすんさき・ごし
やくはつすん・ごしやくろくすん・ご
じようさんじやくごすん・ごろくすん
・さんじやくくすん・にすん・はつし
やくごすん・はつすん
六177 (略)、尺ノ十分ノ一ヲ寸、
(略)。
六177 (略)、寸ノ十分ノ一ヲ分、
(略)。
すんじ「寸時」(名)2 寸時
十一66 (略)、外役の蜂は朝より
夕に至るまで、營營として寸時も休
まず。
十二109 (略) 明治十五年軍人に下し給
へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽に
すべからざるものなれ。
ずんずん(副)4 ズンズン ズン／＼
ずんずん
二553 ソノマツノ木ハズンズ
ン大キクナツテ、(略)。
三258 (略) はいしい、はいしい、あゆ
めよ、小馬。山でも、さかでも、
ずんずんあゆめ。
五184 鯉ガタキヲ上ルヤウニ、ズン
ズンシユツセヲセヨトイフ心デ祝フ
ノデセウ。

せ

一573 鹿ハ輕イ足デズン／＼ニゲ
テ、林ノ中ヘカケコミマシタ。
せ「背」(名)1 せ
八312 せが高く、目がするどくて、
ちよつと見ると、おそろしいが、
いたつて氣だてのやさしい老人であ
つた。
せ「瀬」ひあさせ・たかせ
せい「斉」(地名)5 齊 齊
十二942 (略) 齊の景公も亦道を孔子に
問へり。
十二947 (略) 或時齊の臣景公に告げて
曰く、「(略)」と。
十二948 (略) 「魯孔子を用ふ。或は
齊を危くすることあらん。」
十二951 (略) 其の時齊の有司進みて戲
樂を奏せしかば、孔子は禮に反せる
ものありとて之を止めしむ。
十二955 (略) 齊の臣答へて、「君子は過
あれば謝す。君、實を以て謝せよ。」
と。
せい「生」(名)2 生
九663 (略) 若し空氣なからんには、人
も鳥獸も草木も多くの生物は其の生
を保つこと能はざるべし。
十一143 (略) 『志士・仁人は生を求
めて仁を害することなし。身を殺し

て仁を成すことあり。』とかや。

せい【制】ひじちせい

せい【姓】(名) 2 姓

五38 5 天皇は(略)、すがるには小

子部といふ姓をたまはりました。

八54 4 〔略〕、天皇重ク用ヒテ大臣

トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。

せい【星】ひくようせい

せい【背】(名) 2 セイ

三28 2 〔略〕タケノコガ、(略)、私

ノセイトオナジクラキニナ

リマシタ。

四22 3 〔略〕大キイネエサンハセイ

ガ高イカラ、高高ユビデス。

せい【勢】ひおおぜい・こぜい

せい【精】(名) 1 精

九22 9 〔略〕總べて上官の命令を守つ

て、自分の職務に精を出すのが第一

だ。

せい【製】ひぎよせい・きんぞくせい

せい【所為】(名) 1 せい

八20 6 〔略〕、近年麥の取高の少いの

は、この雀のせいではあるまいかと

思ひました。

せい【誠意】(名) 1 誠意

十二102 8 〔略〕地方人民協同一致して、

自ら地方公共の事に任じ、誠意其の

團體の爲に力を致すの精神是なり。

せい【うんひ】こせいうん

せいか【生家】(名) 1 生家

十七1 5 〔略〕グレース、ダールリングの生

家に程近き寺院の庭上には、(略)。

せいか【成果】(名) 1 成果

十二11 1 〔略〕、獨ニ敵ニ對シ勇

進敢戦シタル麾下將卒モ皆此ノ成果

ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、

(略)。

せいか【盛夏】(名) 1 盛夏

十四7 2 〔略〕、盛夏の候は何れの旅

館も空室なきに至るを常とす。

せいか【精華】(名) 1 精華

十二85 10 〔略〕赤穂浪士が數年の苦難を

忍び、遂に主君の仇を報じて、從容

死に就けるは(略)、日本武士道の精

華を發揮せるものといふべし。

せいかつ【生活】(名) 7 生活 ひきよ

うどうせいかつ・ぐんしゅうせいかつ

・へいえないのせいかつ

七65 4 このやうに水はわれ／＼の生

活にもつとも大切なもので、水がな

ければ、生きてゐることは出来ない。

十五50 〔略〕兵營内の生活は規律正し

く、朝の起床より夜の消燈まで、一

々喇叭の合圖により、(略)。

十59 7 〔略〕入營當時は(略)、生活

も一變致し候事とて、多少不自由を

感じ候へども、(略)。

十五9 9 〔略〕、昨今は(略)、營

内の生活にもなれ、日々楽しく暮し

居り候。

十一5 6 〔略〕蜜蜂は群を爲して共同の

生活を営み、(略)。

十二16 4 〔略〕日々の天氣は我等の生活

に大なる關係あり。

十二46 9 〔略〕農業は我等が生活に必要な

なる材料を作り出す所以にして、國

家一日もこれなかるべからず。

せいかつ【生活】(サ変) 2 生活す

『スル・スレ』

十一7 3 〔略〕雄蜂は唯働蜂の集め來

りたる物を食して生活するものにし

て、何等の勞働をもなさざるを以て、

(略)。

十一8 2 〔略〕同群中の蜂は極めて親密

に生活すれども、他群の蜂は甚だし

く之を敵視し、(略)。

せいかつ【生活費】(名) 1 生活費

十67 9 昔は大鯨二頭を捕へると、人

口數百人の一村、一箇月の生活費を

支へ得ると言つたものである。

せい【請願】(名) 2 請願

十二108 6 〔略〕又貴族院及び衆議院は

各獨立して上奏し、建議し、且臣民

の請願を受くるの權能を與へられた

り。

十二108 8 〔略〕上奏といひ、建議といひ、

請願といひ、(略)、要は下情上達の

道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

せい【生計】(名) 2 生計

十一5 10 〔略〕終日労働して、一群の生

計を維持するものは働蜂なり。

十一111 8 〔略〕全村農業を以て生計を立

つ。

せい【清潔】(名) 4 清潔

九61 8 〔略〕飲食に注意し、身體の清潔

を保ち、(略)、なほ病にかゝらば、

是我が罪にあらず。

十一66 9 常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ

特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。

十二61 7 〔略〕伯林の市街は清潔を以て

著る。

十二89 7 〔略〕其他食器・衣服等何事

にも清潔を旨とするは衛生上にも必

要なる事なり。

せい【清潔】(形状) 6 清潔

九59 2 〔略〕しば／＼入浴し、身體を清

潔にすべし。

十75 10 〔略〕肺ハ鼻・口ヨリ吸入ル、空

氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。

十一67 2 〔略〕臺所ハ(略)、常ニ清潔ニ

シテ置カナケレバナラス。

十二47 2 〔略〕農業に従事するものは多

く野外にありて、清潔なる空氣を呼

吸し、(略)。

十二63 5 〔略〕車内亦清潔にして

乗心地甚だ好し。

十二89 5 〔略〕家内のよく整頓せる程の

家は日々のふき掃除も必ず行届きて

清潔なるものなり。

せい【つけんさ】【清潔検査】(名) 1

清潔検査

十56 5 〔略〕毎週土曜日の午後には居

室・兵器・寢具其の他一切所持品の

清潔検査これあり候。

せい【齊侯】(名) 1 齊侯

十二95 6 〔略〕是に於て齊侯魯より奪略

せる地數箇處を返せり。

せい【成功】(名) 2 成功 ひふせ

いこう
 九33 1 (略)、百五十マイルを三十二時間で走つた。之を聞いて、是までフルトン^{フルトン}を笑つた人々も(略)、皆其の成功を喜んだといふことである。
 十二72 9 (略)、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。
 せいこう「精巧」(名) 1 精巧
 十二49 10 (略)、ぎぎ出し蒔繪の精巧も 我が工業のほこりにて。
 せいこう「精巧」(形状) 1 精巧
 十一85 4 (略) 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ眞白雪ノ如ク、(略)、精巧ナルレーズノ流ヲ見ルガ如シ。
 せいこういたす「成功」(四) 1 成功
 致「(シ)」
 十一101 2 (略) 五十度以南我が帝國の領土となりしより、諸種の經營追々成功致候へども、(略)。
 せいさく「製作」(名) 1 製作
 十二42 7 (略)、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、(略)。
 せいし「聖旨」(名) 1 聖旨
 十二106 1 (略)、天皇は(略)一切の政務を親裁せさせ給ふ。しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聽く機關に供せさせ給へり。
 せいじ 母まんしゅうせいじこうつう
 せいしたまう「征給」(四) 1 征し給ふ「一七」

九62 3 (略) 景行天皇の御代日本武尊之を征し給ひ、(略)。
 せいしつ「性質」(名) 1 せいしつ
 六72 3 (略)、顔のちがふやうに、せいしつも色々かはつてゐます。
 せいしうなごん「清少納言」(人名)
 4 清少納言 母むらさきしきぶとせいしうなごん
 十五3 (略) 一條天皇の頃には才學すぐれたる宮女多かりしが、最も世に聞えたるは紫式部と清少納言となり。
 十六7 (略) 清少納言も亦紫式部と同じく宮中に仕へ、其の才氣を以て知られたりき。
 十六10 (略)「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。
 十七6 (略) 是白樂天の詩に、「略。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。
 せいしよく「声色」(名) 1 声色
 十一54 3 (略)、ミダリニ聲色ヲ作リテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、(略)。
 せいしん「誠心」(名) 3 誠心
 十二114 10 (略)の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、此の五箇條を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せ給へり。
 十二115 2 (略) 此の五箇條を行ふも、結

局一の誠心を本とすと論し給へる、(略)。
 十二117 6 (略)、唯々一の誠心を以て報國盡忠の道にいそしまんとす。
 せいしん「精神」(名) 25 精神 母じちのせいしん・なにごとともせいしん
 九22 4 (略) 大尉は(略)、水兵の手を握つて、「略」。おつかさんの精神は感心の外はない。
 十六7 7 (略) 腦ハ精神ノ宿ル所ニシテ、(略)。物事ヲ知分クルモ、善惡ヲワキマフルモ、喜ブモ怒ルモ悲シムモ皆腦ノ作用ナリ。
 十七8 10 (略) 西洋ノ古語ニ曰ク、「健全ナル精神ハ健全ナル身體ニ宿ル。」ト。
 十七9 1 (略) 身體ノ健全ナルトキハ精神モ亦常ニ快活ニシテ、(略)。
 十一11 7 (略)一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ精神ヲコラスコトニナルカラ、(略)。
 十一52 3 (略) 身體健全ナル人ハ、精神モ亦快活ニシテ、耳目ニフル、モノ皆樂シ。
 十二53 7 (略) 商人ハ(略)、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戰爭ニ從事スベシ。
 十二73 2 (略) 快活なる精神を以て熱心に其の事業に従事せば、(略)。
 十二100 9 (略) 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

十二102 4 (略)、地方自治の精神に基づきて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。
 十二102 7 (略) 何をか自治の精神といふ。
 十二102 9 (略) 地方人民協同一致して、自ら地方公共の事に任じ、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。
 十二102 9 (略) 此の精神は實に自治制の根本にして、又其の生命なり。
 十二103 2 (略) 議員を選挙するも、(略) 市・町村長を選挙するも、一に此の精神に基づくべく、(略)。
 十二103 4 (略)、市町村長・參事會員等の其の事務を處理するも、議員の經費を議するも、亦常に此の公平なる精神を以てすべし。
 十二103 10 (略) まして威力を以て強制し、私利を以て勧誘する等の手段を用ひ、又は之に左右せらるゝが如きは、自治の精神に反すること最も甚だし。
 十二103 10 (略) 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。
 十二105 2 (略) 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、(略)、自治の精神の養成に資し、自治團體

を助長すべきを以て、(略)。

十二105 6 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。

十二109 4 (略)、一般選舉人も亦公平無私の精神を以て參政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

十二111 4 (略) 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

十二113 2 (略) 能く義理をわきまへ、精神を修養し、小敵を侮らず、大敵を恐れず、(略)。

十二114 9 (略) 忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、(略)。

十二115 10 (略) 武勇の精神も亦國民が古來のほこりとなす所なり。

十二116 4 (略)、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ。といふ忠勇の精神は我等が祖先の教訓なり。

せいしん「清新」(形状) 1 清新

十二128 8 (略) 温泉の諸種の病を治するは、(略)、一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。

せいじん「聖人」(名) 1 聖人

十二129 9 (略) 孟子(略)、戰國爭奪の世に在りて、専ら聖人の道を講ぜり。

せいす「制」(サ変) 2 制ス 制す

十二120 6 (略) 「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)。

十二121 10 (略) 日々の暮しは、「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。

せいす「征」(サ変) 1 征す 「ースル」

九63 6 (略) 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、(略)蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

せいす「製」(サ変) 2 製ス 製す 「ースル」

八39 8 (略) 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數マデ數ヘ上グレバ、(略)。

十二125 5 (略)、又ポーロの旅行記によりて製したる地圖を得て(略)。

せいす「盛衰」(名) 1 盛衰

十二129 1 (略) 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、(略)。

せいす「製圖」(サ変) 1 製圖スル 「ースル」

十二121 1 (略) 綿密ナ設計圖ヲコシラヘル。(略)、多人數の技師ヤ技手ガ永クカ、ツテ製圖スルカラ、(略)。

せいす「製」(サ変) 1 製する 「ースル」

十二128 6 其の皮は革に製して、かばん

や靴などを造り、(略)。

せいせい「聖世」(名) 1 聖世

十二128 8 (略) 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

せいせい「精精」(副) 1 精々

十二129 10 (略) 當日は本村の重なる人々も精々誘ひ合せ、是非參會致すべく候。

せいせき「井然」(形状) 2 井然

十二136 5 (略) 當臺北市街の如きは、近年市區を改正し、街路井然、(略)。

十二131 8 (略) 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

せいぜん「井然」(形状) 1 井然

十二134 2 (略) 紡績工場ニ入りテ見ヨ。(略)、其ノ作業ノ速ニシテ井然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

せいぞう「製造」(名) 3 製造

八39 1 (略) マツチノ製造ニハ驚クベキ手數ノカ、ルモノナリ。

八40 8 (略) マツチハ(略)。(略)今日ニテハ其ノ製造ハナハダ盛ニシテ、(略)。

十二124 4 (略) 船ヲ造ルニハ(略)。(略)。(略)、必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、始メテ製造ニ着手スルノデア

を製造致居候。

せいぞうす「製造」(サ変) 4 製造ス

八40 7 (略) マツチハ(略)。我が國ニテハ、(略)、明治八年ヨリ内地ニテモ之ヲ製造スルニイタレリ。

十二128 8 (略) 四萬噸前後の大汽船をも製造するに至れり。

十二133 2 (略) 物の價は(略)、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。

十二133 8 (略) かゝる時は靴屋は(略)、盛に之を製造すべく、(略)。

せいぞうする「製造」(サ変) 5 製造スル 「ースル」

十二129 9 (略) 同ジ人數デ同ジ時間ニ物ヲ製造スルノニ、(略)。

十二130 2 (略) マツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。

十二130 3 (略) 若シ一人ノ手デ製造スルナラバ、(略)。

十二132 8 (略)、今日デハドンナ品物ヲ製造スルニモ、分業法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。

十二132 8 (略)、又木製ノ器具類ヲ製造スル木工場モアル。

せいぞうだか「製造高」(名) 3 製造高

十二130 1 (略)、分業デスル方ガ品物ノ出来バエガ良クテ、製造高モハルカニ多い。

十一108 随ツテ良イ品物が出来テ、製造高モ多クナル。

十一944 〔略〕、次第に其の製造高を減ずるが故に、供給も随つて減じて、〔略〕。

せいぞうば「製造場」(名) 2 製造場
八389 諸子ハイマダマツチノ製造場ヲ見タルコトナカルベシ。

八714 〔略〕、胃は一同に向つて曰く、「〔略〕。我の職務は食物をこなして、之を血の製造場へ送るにあり。

せいぞんじょう「生存上」(名) 1 生存上

十二234 此の外、動物は植物の果實・根・葉等食つて體を養ひ、植物は動物質の腐敗物を肥料として成長する等、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。

せいだい「盛大」(名) 4 盛大

十441 〔略〕、花筵ヲ〔略〕。〔略〕、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、遂ニ今日ノ盛大ヲ見ルニ至レリ。

十633 〔略〕、鑛業ノ盛大ニオモムクト共ニ次第ニ發達シテ、〔略〕。

十二491 〔略〕、養蠶業の盛大は長野・埼玉等群馬、海なき縣に著し。

十二533 〔略〕、富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。

せいだい「正大」ひこうめいせいだい

せいだい「盛大」(形状) 1 盛大

十819 〔略〕、あゐぬは時々子熊を捕へ來り、〔略〕、之を殺して盛大なる儀式

を行ふことあり。

せいだす「精出」(五) 3 セイ出ス

せい出す「一シース」

四702 〔略〕、朝早くから るどばたで、母はせい出す あらひ物。

四716 〔略〕、夜おそくまで おくのまに、母はせい出す はりしごと。

六287 〔略〕、モセイ出シテ使ツテクレサハスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキマス。

せいたん「西端」(名) 1 西端

十二759 〔略〕、亞細亞の東端は歐羅巴の西端に近しと信じ、地球を餘りに小さく見たるゴロンブスの誤は〔略〕。

せいちや「製茶」(名) 1 製茶
十二489 〔略〕、製茶は静岡・三重・京都〔略〕。

せいちよう「成長」(名) 2 成長
十865 豚は〔略〕。しかも其の成長が極めて早い。

十一902 〔略〕、周囲の雜草を食ひて、ひたすら此の草の成長を保護し、〔略〕。

せいちよう「す」〔成長〕(サ変) 1 成長

す「一セ」

十一893 〔略〕、蟻は〔略〕、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

せいちよう「する」〔成長〕(サ変) 1 成長する「一スル」

十二234 〔略〕、植物は動物質の腐敗

物を肥料として成長する等、〔略〕。

せいつう「す」〔精通〕(サ変) 1 精通スル「一スル」

十二515 〔略〕、故ニ商人ハ常ニ全世界ニ於ケル物價ノ高低ニ注意シ、需要供給ノ情況ニ精通スルヲ要ス。

せいと「生徒」(名) 5 セイト 生徒
四96 〔略〕、センセイモセイトモ一シヨニ君ガヨノウタヲウタヒマシタ。

九506 〔略〕、學生・生徒の帽子にも皆學校の徽章あり。

十一131 〔略〕、教師ノ生徒ヲ教育スル等ハ〔略〕。

十一112 〔略〕、校長も着實溫厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、〔略〕。

十一113 〔略〕、生徒も亦校長をしたふこと父母の如し。

せいど「制度」(名) 3 制度
十二105 〔略〕、凡て制度の運用は人にあり。

十二105 〔略〕、自治制の如き最良の制度も、〔略〕。

十二1105 〔略〕、復古の政と共に陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御論しあり、〔略〕。

せいと「ふせい」とう

せいどう「青銅」(名) 1 青銅

九295 〔略〕、社前ナル青銅ノ鳥居ハ、昔ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ造リタルモノニシテ、〔略〕。

せいと「うぎ」よう「製糖業」(名) 1 製糖業

十一399 〔略〕、南部地方には製糖業盛に行はれ居候。

せいと「しょうぐん」〔征東將軍〕(名) 1 征東將軍
九625 〔略〕、蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、〔略〕、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばくなりき。

せいとん「ふせいとん」

せいとん「す」〔整頓〕(サ変) 1 整頓す「一セ」

十二894 〔略〕、家内によく整頓せる程の家は日々のふき掃除も必ず行届きて清潔なるものなり。

せいなん「西南」(名) 5 西南
九1510 〔略〕、一ハ西南ニ向ヒ、權現堂川ニ合シテ江戸川トナル。

九951 〔略〕、是より西南にあたりて、家光の廟あり、〔略〕。

十341 〔略〕、東京ノ西南、目黒ナル墓石ノ面ニ〔略〕。

十608 〔略〕、足尾銅山ハ日光山ノ西南ニアリ、〔略〕。

十二551 〔略〕、其の西南なる首山堡は〔略〕。

せいなんぼう「西南方」(名) 1 西南方

十二421 〔略〕、烏帽子岳は其の西南方に在りて、〔略〕。

セイヌがわ「地名」 1 セイヌ川
九316 フルトンが〔略〕造つた最初

の船は、フランスのセイヌ川に浮べたが、(略)。

せいねん「青年」(名) 4 青年

十34 6 (略) 一人の青年をやとひ入れることにきめた。

十34 8 (略) どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十36 4 (略) あの青年はいると直に書物を取上げて、(略)。

十一14 10 (略) 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、(略)。

せいねんかい「青年會」(名) 2 青年會

十一15 1 (略) 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、(略)。

十二104 10 (略) 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、(略)、地方人民たる者は大いに力を是等の事業に盡すべきなり。

せいばつ せいせいばつ・ちようせんせいばつ

せいひ「成否」(名) 2 成否

十二27 8 (略) 「事の成否は今より豫測すべからず、(略)。

十二113 7 (略) 豫め能く事の成否を察し、成し得べからざるものは引受くべからず。

せいふ「政府」(名) 4 政府 せしんこくせいふ

十83 1 (略) 又政府の費用を以て學校を建つる等、厚く保護の方法を講ぜり。

十二107 5 (略) 豫算案は政府之を提出し、(略)。

十二107 6 (略) 法律案は政府の外、貴族院・衆議院共に各之を提出するを得。

十二108 7 (略) 建議とは文書を政府に提出して意見を述ぶるをいふ。

せいぶじゅうかんてつどう「西部縦貫鐵道」(名) 1 西部縦貫鐵道

十一36 8 (略) 今や西部縦貫鐵道も全部開通致候事とて、交通の利便いよく開け、(略)。

せいぶつ「生物」(名) 1 生物 せうみ

九66 2 (略) 若し空氣なからんには、人も鳥獸も草木も多くの生物は其の生を保つこと能はざるべし。

せいぶん「成分」(名) 2 成分

九89 9 (略) 是金銀ハ(略)、産地異ナリトモ、成分ニ異同ナクシテ、(略)。

十87 5 (略) 殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。

せいほう「西方」(名) 1 西方

十30 8 (略) 關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ、(略)、此ノ芋ノ次第ニ

西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

せいぼうき「精紡機」(名) 1 精紡機

十一85 10 (略) サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サトナシテ、更ニヨリ

ラカク、ツムニマキトラシム。

せいほく「西北」(名) 3 西北

十96 8 (略) 春日神社ヨリ西北ニ向ヒテ東大寺ニ到ル。

十101 8 (略) コ、ヨリ西北へ進メバ、畝傍・橿原ノ地ニ出ツ。

十二54 4 (略) 黄海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

せいむ「政務」(名) 1 政務

十二105 10 (略) 天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。

せいめい「生命」(名) 2 生命

十一91 9 (略) 日光・空氣の如きは、人の生命を保つに必要なれども、(略)。

十二102 10 (略) 此の精神は實に自治制の根本にして、又其の生命なり。

せいの「聲譽」(名) 1 聲譽

十一53 9 (略) イハンヤ我ニ優レル人ヲネタミ、其ノ聲譽ヲ傷ツケントシテ笑フ者ニ於テヲヤ。

せいよう「西洋」(名) 4 西洋

八19 1 (略) 昔西洋のある所に、(略)農夫がありました。

九61 5 (略) 西洋のことわざにも「よく日光の見舞ふ家には醫者は見舞はず。」といへり。

十78 10 (略) 西洋ノ古語ニ曰ク、「健全ナル精神ハ健全ナル身體ニ宿ル。」ト。

十85 8 (略) 西洋の馬がおとなしくて、日本

の馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、(略)。

せいようがた「西洋形」(名) 1 西洋形

十一27 2 (略) 西洋形の帆前船には二本・三本の樁あるもあり。

せいようし「西洋紙」(名) 6 西洋紙

七46 2 (略) 西洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、世ノ中ガヒラケテカラ、(略)、僕ヲノ仲間ノ方ガヨクイニ用ヒラレルヤウニナツタカト思フ。

七46 6 (略) マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デアルシ、(略)。

七46 7 (略) (略)、書物モ近ゴロハ大テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ。

七47 4 (略) 西洋紙ハ「君ヲハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ヲハ裏表トモニ使ハレル。

七48 5 (略) 西洋紙ハ「(略)、僕等ハ少シグラキ水ニヌレテモ、裏ハハ通ラナイ。」

七49 4 (略) 西洋紙ハ又「葉書ヤ切手ヤ印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」

せいようしとにっぽんし「課名」2 西洋紙ト日本紙

七目2 第十四 西洋紙ト日本紙

七46 1 第十四 西洋紙ト日本紙

せいようしよこく「西洋諸國」(名) 1 西洋諸國

十二45 10 (略) 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比す

れば、(略)。

せいようじん「西洋人」(名) 1 西洋人

十一208 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界海上の一大公園なりといへり。

せいようすいか「西洋西瓜」(名) 2

西洋西瓜

七175 図 (略)、種物屋から西洋西瓜の種を三色ばかり買つて來ていたゞきたうございます。

七177 図 西洋西瓜には色々あるさうでございますが、(略)。

せいようふう「西洋風」(名) 1 西洋風

九29 図 社殿ノカタハラナル西洋風ノ建物ヲ遊就館トイヒ、(略)。

せいようふじん「西洋婦人」(名) 2

西洋婦人

九50 10 図 西洋婦人のボンネット花をかざりてうるはしく、(略)。

十一108 図 女は(略)、西洋婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着ける。

せいり「整理」(名) 1 整理 ムこうちせいり

十一91 1 図 御村も(略)水利の良き割合には田地少く、整理の必要これあり候様存ぜられ候間、(略)。

せいりつ「す」【成立】(サ変) 1 成立す《一スル》

十二108 1 図 しかし、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経た後、天皇の裁可を待ち始めて成立するものとす。

せいりゅう「清流」(名) 1 清流

九93 8 図 岩にくだくる清流、雪と散り、玉と飛ぶ。

せいりよ「聖慮」(名) 1 聖慮

十二108 10 図 上奏といひ、建議といひ、請願といひ、(略)、要は下情上達の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

せいりよう「清涼」(名) 1 清涼

九81 6 図 去年の今夜清涼に待す。せいりようでん「清涼殿」(名) 1 清涼殿

九80 10 図 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、(略)。

せいりよく「勢力」(名) 4 勢力 ムゼんせいりよく

十一33 2 図 巡洋艦ハ(略)。其ノ大ナルモノハ戦艦ニ次グノ勢力ヲ有シ、時ニ戦艦ト合同シテ敵ノ主力ト戦フコトアリ。

十一69 2 図 然れども人の勢力には限りあり。活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

十一104 3 図 蜀國ノ魏・吳ニ強國ト相對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

十二41 10 図 (略) 其の火口は(略)。(略)。但し此の噴火は時々其の位置を變じ、其の勢力にも消長あり。

せいれきいっせんしひやくくじゅうにねんはちがつみつか「西暦一千四百九十

二年八月三日」(名) 1 西暦一千四百九十二年八月三日

十二76 7 図 西暦一千四百九十二年八月三日の朝、今日はコロンブスが遠征隊出發の日なりとて、西班牙パロスの港は未明より人の山を築けり。

せいれんじよう「製煉場」(名) 2 製煉場

十二62 9 図 發掘シタル銅鑛ハ、(略)。(略)。カク選り分ケタルモノハ之ヲ製煉場ニ送ル。

十二62 9 図 製煉場ニハ殊ニ大イナル爐アリテ、銅鑛ヨリ銅ヲフキ分クルナリ。

セーヌ「地名」1 セーヌ

十二59 4 図 テームスとセーヌとはスプレーに比すれば、河幅はるかに廣く、之に架したる橋は何れも壯大にして、市の美觀を添ふ。

セーヌ「地名」1 セーヌ河

十二59 3 図 倫敦にはテームス河、巴里にはセーヌ河、柏林にはスプレー河ありて各其の市街を貫流す。

せおう「背負」(四・五) 3 セオフ

せおふ「一ツヒ」

八88 9 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクバリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。

八91 7 図 其ノ時ハオレノ死體ヲセオツテ歸ル積リデカケツケヨ。」

十二63 6 図 家はれ我、梁や棟木や桁どもを いつもせおひて 片時

も 休む間なし。」と 角柱 ひとり つぶやく。

せかい「世界」(名) 14 せかい 世界

ひぎんせかい・ぜんせかい

五118 大神はおどろいて、あまの岩戸をたてて、(略)。(略)、今まであ

八77 5 図 首府ロンドンハ世界の都市中にて、人口最も多きところなり。

八80 3 図 これ世界の圓きがためにして、(略)。

八80 7 図 我等の住む世界は圓きもの故、名づけて地球といふ。

八82 3 図 又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。

十一46 6 アラビヤは世界に名高い良馬の産地である。

十二50 8 図 (略) 千里比隣ノ如キ今日ニ於テハ商業ハ世界ヲ相手ノ商業トナレリ。

十二50 9 図 我等ハ世界ノ市場ヨリ如何ナル物品ヲモ買ヒ得ルガ如ク、(略)。

十二50 10 図 (略)、世界ノ各國ハ亦皆我が商品ノ市場ニシテ、全世界ノ人ハ皆我が商賣ノ花客ナリ。

十二63 7 図 倫敦には(略)等世界に名を知られたる建築物多し。

十二63 9 図 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

十二65 ② 伯林には世界にはこるべき程の大建築物なし。

十二74 ⑦ ④ コロンブスは初より世界は球形なりと信じ、(略)。

十二115 ⑦ 太古以来忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、(略)。

せかいいち「世界二」(名) 1 世界一十二1 ④ (略)、富士は(略)。(略) 我が國第一の山といふべく、むしろ世界一の名山とも稱すべし。

せかいかいじょう「世界海上」(名) 1 世界海上

十一20 ⑨ (略) 西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界海上の大公園なりといへり。

せかいかつこく「世界各国」(名) 1 世界各國

十二50 ③ ④ 千里比隣の今の世は有無互に相通じ、世界各國皆市場。

せかいきようこく「世界強國」(名) 1 世界強國

十二97 ⑥ (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、(略)。

せかいさいきゅう「世界最旧」(名) 1 世界最舊

十四5 ④ 恐らくは木造建築物中世界最舊のものなるべし。

せかいさいび「世界最美」(名) 1 世界最美

十二61 ② ④ シャンゼリゼーの大通の如きは、世界最美の街路と稱せらる。

せかいさんがく「世界産額」(名) 1 世界産額

十一37 ⑨ ⑤ (略)、樟腦は世界産額の八分の五を占むる由に御座候。

せかいしじょう「世界史上」(名) 1 世界史上

十二5 ② ④ (略)、遂に之と會して、世界史上空前なる大海戦となれり。せかいじゅう「世界中」(名) 2 せかい中 世界中

五4 ② (略)、すぐに大神のお手をとつて、お出し申し上げました。それでせかい中がまたものどほりあかるくなつたと申します。

八78 ③ ④ 首府をパリといひ、世界中最も美しき都なり。

せかいしよこく「世界諸國」(名) 1 世界諸國

十一28 ④ ④ (略)、汽車・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

せかいだいいち「世界第二」(名) 7 世界第一

十73 ② ④ 温泉の多きこと實に世界第一なり。

十97 ① ④ (略)、大佛殿ノ高サ十五丈、東西長サ二十九丈、眞二世界第一ノ木造建築物トス。

十一77 ⑧ ④ 世界第一の大瀑布は北米合衆國のナイアガラなり。

十二40 ⑥ ④ 其の噴火口の大きさは日本第一たるのみならず、亦實に世界

第一と稱せらる。
十二59 ⑧ ④ 倫敦は(略)。歐羅巴第一の大都會にして、亦實に世界第一の大都會なり。

十二62 ⑤ ④ 倫敦は世界第一の大都會なれども、(略)。

十二65 ① ④ 凱旋門は(略)、壯大なること世界第一と稱せらる。

せかいのはなし「課名」4 世界の話
八目10 第二十二 世界の話(一)
八目11 第二十三 世界の話(二)
八75 ⑦ 第二十二 世界の話(一)
八80 ⑥ 第二十三 世界の話(二)

せかいむむ「世界無比」(名) 3 世界無比

十一39 ⑩ ④ 阿里山の檜材は世界無比の良材と稱せらるゝものにて、(略)。

十二49 ⑨ ④ 世界無比なる七寶の名は海外にぞろけり、(略)。

十二64 ⑧ ④ ルーブル博物館は名畫・古彫刻最も多く、美術博物館として世界無比の名あり。

せかいゆうすう「世界有數」(名) 1 世界有數

十61 ⑨ ④ (略)、産出高モ著シク増加シ、コ、ニ始メテ世界有數ノ大銅山トナレリ。

せき「石」 凸きようかいせき

せき「隼」 凸いっせき・さんじゅうはっせき・さんせき・しごせき・しせき・すうじつせき・すうせき・せんかん二

コライいっせいかしせき・にせき・みかさいかろくせき

せき「席」(名) 2 席
十一53 ⑥ ④ 儀式・公會等ノ席ニテ談笑ヲツ、シムハ我等文明國民ノ美風ナリ。

十二99 ⑤ ④ (略)、幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、(略)、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

せきあう「塞敢」(下二) 1 せきあふ
《一》
十一44 ⑨ ④ 熊王恩に感じて、涙せきあへず。

せきしよ「關所」(名) 5 關所
九37 ② 箱根と新居とは關所があつて、役人が一々旅人をしらべて通した。

九37 ③ 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、關所破といつて、其のものは重い罰を受けた。

九38 ⑤ 關所も無ければ、川止も無いから、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出来る。

九38 ⑩ ④ 山上ナル蘆湖ノホトリニ關所アリテ、日暮ヨリ後ハ一切旅人ノ通行ヲ差止メタレバ、(略)。

九39 ⑥ ④ 昔ノ關所ハ僅カニ其ノアトヲ止ムルノミ。

せきしよあと「關所跡」(名) 1 關所址

九40 ④ 關所址
せきしよやぶり「關所破」(名) 1 關

所破

九37 4 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、關所破といつて、其のものは重い罰を受けた。

せきしん「赤心」(名) 1 赤心

十二09 2 図 (略)、議員たる者は、至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

せきたつ「急立」(下二) 1 せき立つ「一ツ」

十69 7 図 少女は之を見て、「あはれなり、父上。早く船を出して救はん。早くく。」とせき立つ。

せきたん「石炭」(名) 5 石炭

五58 1 ソノホカニ石炭トイフモノガアリマス。

五58 4 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物デ、石ノヤウニカタクナツテキマスカラ、石炭トイヒマス。

五58 4 石炭ノ火ノ力ハ木炭ヨリモズツツヨイノデ、汽車や汽船ヤソノ他ノキカイナドヲウゴカスノニハ、皆コレヲ使ヒマス。

五60 5 昔ノ人ハ石炭ノコトヲモエル土、石油ノコトヲモエル水トイヒマシタ。

十一33 4 図 其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、何レモ多量ノ石炭ヲ積み、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。

せきたんそう「石炭層」(名) 1 石炭層

十一100 6 図 (略)、又山脈の兩がはには石炭層各所にあり、殆ど無盡藏に候へども、(略)。

せきにん「責任」(名) 1 責任

十二91 5 図 (略)、子供の行儀・作法等につきては、主婦たる人の責任最も重し。

せきひん「赤貧」(名) 1 赤貧

十42 10 図 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ねテ、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。

せきまつ「席末」(名) 1 席末

十二35 6 図 コ、ニ本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

せきやど「関宿」(地名) 2 関宿 関宿

九15 8 図 赤堀川ハ關宿ノ北ニテフタ、ビニツニ分レ、(略)。

九17 図 關宿

せきゆ「石油」(名) 3 石油

五59 5 ランプニトボスノハ石油トイヒマス。

五60 2 ランプニ石油ヲトボスヤウニナツテカラ、アンドンハダングンニスタレテ來マシタ。

五60 5 昔ノ人ハ石炭ノコトヲモエル土、石油ノコトヲモエル水トイヒマシタ。

せけん「世間」(名) 2 世間

十二90 10 図 若し家内に傳染病等にか

ゝるものあらば、近處・隣へ對しても申しわけなく、世間へ對しても相濟まぬ次第ならずや。

十二92 8 図 親類・縁者はもとより、世間の交際をも外さず、慈善の事業にも應分の資を投ずべく、(略)。

せけんばなし「世間話」(名) 1 世間話

八20 1 ある日一人の友だちは、この農夫と野原の草の上に坐つて、いろく世間話をしてゐたが、(略)。

せじりむら「瀬尻村」(地名) 1 瀬尻村

十一79 6 図 (略) 長良村あり。此の川上に瀬尻村あり。鵜飼を業とする漁夫は皆此の二村に住めり。

せじん「世人」(名) 3 世人

十43 6 図 眠亀ハ(略)、自ラ花筵數十種ヲ織出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、此ノ時ハナホ世人ノ注目スル所トナラズ、(略)。

十二55 9 図 奉天の南方沙河の名も永く世人の忘れざる所なるべし。

十二114 4 図 一には、軍人は質素を旨とすべし。質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、(略)、節操も武勇も忘れ果てて、世人の爪弾を受くるに至るべし。

せた「瀬田」(地名) 1 瀬田

八59 9 図 まづ渡り見ん瀬田の橋、かゞやく入日美しや。

せたがわ「瀬田川」(地名) 1 瀬田川

十二6 6 図 (略)、湖水より出づる瀬田川は下流宇治川となり、淀川となり

て、(略)。

せたまう「為給」(助動) 9 せたまふ

せ給ふ「一ヒ・フー・へ」

八3 1 図 神殿は昔ながらの白木造にして、二十年ごとに新しく造らせたまふ御定なりと承る。

九1 3 図 代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。

九2 6 図 尊は「何故にかくは泣きかなしむぞ。」と問はせ給へば、(略)。

十17 6 図 皇后の(略)。是白樂天の詩に、「(略)。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、(略)。

十89 1 図 夜晝三日供御もなく、歩みつかきて松かげに いこはせ給ふかしこさよ。

十一15 5 図 (略)、主上はや院庄に入らせ給ひぬと申す。

十一16 4 図 主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

十二2 8 図 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

十二108 10 図 (略)、要は下情上達の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

せつ「説」(名) 1 説

十二76 2 図 (略) 若し歐羅巴より西へ向つて進まば、印度に達する前、日本又は支那に到着するならんと。

(略)。コロンブスは葡萄牙に客遊

(略)。

中、熱心に此の説を主張したりしが、(略)。

せつ「節」(名) 3 節ひいせつ・きげんせつ・てんちようせつ

九二九(國) (略)、なほ三十反御送り下され度、其の節別に老人向きの紐がすり上物十反だけ(略)御送り相成度願上候。

九二五(國) (略)、折々會合の節は其の話も出で、(略)。

九三〇(國) 明後日御面會の節返上致すべく候。

せつ「切」(形状) 1 切

十一二〇(國) (略)、屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

せつかく「折角」(副) 2 セツカク

八九一(國) (略)、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ残念千萬ダ。」

十一二五 (略) メイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナラナイ。

せつきゅう「赤球」(名) 2 赤球

十二一八(國) 晝間は赤球を以て風の強きを示し、(略)。

十二一八(國) 夜間は紅燈を赤球に、綠燈を圓筒形に、紅綠二燈を圓錐形に代ふ。

せつきんす「接近」(サ変) 1 接近す

「一セ」

十一二八(國) (略)、汽車・汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。

せつきんする「接近」(サ変) 1 接近する「一スレ」

十一四八 追手が接近すれば速力を速め、後れ、ば脚のきさを短くする。

せつく「隻句」(名) 1 隻句

十一六八(國) 古人の片言・隻句も我等が師なり。

せつく「節句」(名) 1 セツク

五七 男ノ子ノアルウチデハ、五月ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立デマス。

せつけいず「設計圖」(名) 3 設計圖

十二一〇 船ヲ造ルニハ先ヅ綿密ナ設計圖ヲコシラヘル。

十二一〇 (略)、大キナ戰艦ナドニナルト、設計圖バカリデ數百枚モアルトイフ。

十二一〇 設計圖ガ出来上ルト、細密ナ構造分圖ヲ各工場ニ廻シ、(略)。

せつげつか「雪月花」(名) 1 雪月花

八八三(國) 我が日本の國の大部分は、(略)、雪月花のながめも折節にかはりて面白く、山川の風景もうるはし。

せつけん「節儉」(名) 1 節儉

八八六(國) 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲサメタルモ、カハル母ニ養ハレタルニヨルナルベシ。

せつす「接」(サ変) 3 接ス 接す

「一シースル」ひあいせつす

七二九(國) 温泉の諸種の病を治するは、(略)、一つには又(略)、美麗なる風光に接するが爲なるべし。

十一五四(國) 花客ニ接シテ愛敬ヲ盡スハ商人ノ美德ナレドモ、(略)。

十二一〇(國) 外國人に接するに(略)等しく之を親愛するは大國民の度量なり。

せつそう「節操」(名) 1 節操

十二一四(國) (略)、心も無下に賤しくなりて、節操も武勇も忘れ果てて、(略)。

せつぞくとかい「接統都會」(名) 1 接統都會

十二五九(國) 倫敦は人口四百八十萬、接統都會を合すれば七百三十萬の多きに達す。

せつだんする「切断」(サ変) 1 切断スル「一スル」

十二一三(國) (略)、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切断スル。

せつだんめん「切断面」(名) 1 切断面

十二一〇 其ノ圖ハ船ノ切断面及ビ構成等ヲ何十分ノ一ニシタ縮圖デ、(略)。

せつちゅう「雪中」(名) 1 雪中

十二六五(國) (略)、露西亞の狼は行く／＼雪中に倒る、佛兵の跡を追ひて、(略)。

せつつ「撰津」(地名) 1 撰津

「一セ」

十一四一(國) 吉野の朝の頃、赤松光範、楠木正儀と撰津の住吉に戦ひて、(略)。

せつび「設備」(名) 2 設備

十二三七 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。

十二六二(國) (略)、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。

せつぶくす「切腹」(サ変) 1 切腹す

「一シ」

十二八八(國) 喜劍直ちに泉岳寺に行き、(略)、「我當に萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を抜き切腹して終る。

せつぶん「節分」(名) 1 節分

十九五(國) (略) 春日神社ニ到ル。大小ノ燈籠左右ニ多く、(略)。毎年節分ノ夜盡ク之ニ點火ストイフ。

せつべき「絶壁」(名) 1 絶壁

十一七六(國) 最も壯觀なるは華嚴に於て、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

せつめい「説明」(名) 1 説明

十五七(國) (略)、學科は讀法の講義及び毎日の術科に關する説明に御座候。

せつめいす「説明」(サ変) 1 説明す

「一シ」

十一一四(國) (略)、村長は「不作の後なれば、成るべく經費を節約した」との校長の意見によりて豫算を編成し

たるなり。」と説明したれば、(略)。
せつやくす「節約」(サ変) 1 節約す

《一シ》

十一113 図 〔不作の後なれば、成るべく經費を節約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。〕
せつりつ「設立」(名) 1 設立

十二63 図 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きに於て、其の右に出づるものなし。

せとくたにありたきよみずさつまやき

〔瀬戸九谷有田清水薩摩焼〕(名) 1

瀬戸・九谷、有田・清水・薩摩焼

十四9 図 焼物類は瀬戸・九谷、有田・清水・薩摩焼。

せとないかい「瀬戸内海」〔課名〕 2

瀬戸内海

十一目6 第五課 瀬戸内海

十一17 4 第五課 瀬戸内海

せとないかい「瀬戸内海」〔地名〕 5

瀬戸内海

十一17 9 図 (略)、下關海峡あり。

(略) 豊後海峡をなす。(略)、明石海峡となり。(略)、鳴門海峡となる。

此の四海峡に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一17 10 図 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々は各所に散在す。

十一18 図 瀬戸内海

十一20 2 図 瀬戸内海の沿岸には高松・多度津・高濱・尾道・宇品等の港

多く、汽船絶えず通航して、(略)。

十一20 8 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界海上の一大公園なりといへり。

せなか「背中」(名) 4 セナカ せなか

三67 2 図 (略)、大キナカメガ出テキテ、(略)。私ノセナカヘ

オノリナサイ。」

三72 4 図 ウラシマハ(略)、マタカ

メノセナカニノツテ、(略)。

四17 7 図 (略)、ただつねは馬からゐのししのせなかへ(略)とびうつりました。

四54 3 図 白ウサギハ(略)、(略)。

オマヘタチノセナカノ上ヲ

アルイテ、カゾヘテ見ルカラ、(略)。

ぜに「錢」(名) 5 ゼニ 錢

六26 1 図 銅ハ(略)。ソレデゼニニ

ナルコトモ出来レバ、(略)。

六27 7 図 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハ

イレマセンガ、(略)。

十五8 葉ノ形ニハ(略)、錢ノ様ニ

圓イノモアリ、(略)。

十二82 2 帽子の中に一文の錢もない

老人は、(略)、幾度かためいきをついて居る。

十二84 3 図 (略)、聴衆は錢をつかんで、

争つて老人のさへげた帽子の中へ投入れる。

ゼノア「地名」 2 ゼノア

十二74 1 図 (略)、印度地方の寶石・

香料・絹布類は盛にベニス・ゼノア等の港を経て歐洲へ輸入せり。

十二74 4 図 ゼノアに生れて(略)、

十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンブスは(略)。

ぜひ「是非」(副) 2 是非

九83 5 図 「是非勝つてくれ。」

十93 10 図 當日は(略)、是非參會致すべく候。

ぜひと「是非共」(副) 1 是非とも

十26 9 図 (略)、私も明年は是非とも御仲間入致し度と今より相樂しみ居り候間、(略)。

ぜひなし「是非無」(形) 1 ゼヒナシ

七91 6 図 船ハ次第第二沈ミ行キテ、

水ハスデニ甲板ヲヒタセリ。「今ハゼヒナシ。」ト、中佐ハポートニ乗りウツレリ。

せぼね「背骨」(名) 2 脊骨 脊骨

十二13 8 図 船ヲ組立テルニハ、(略)龍

骨トイフモノヲ置ク。コレハ人ノ脊

骨ノ様ナモノデ、(略)。

十二13 9 図 (略)、此ノ脊骨ノ左右カラ

肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。

せまい「狭」(形) 5 セマイ せまい

狭い《一イ・ーク》

一21 6 図 ヒロイノハラ。セマイミチ。

五8 8 図 (略)、せまい谷へ下りました。

七37 3 図 店ハ兩ガハニアツテ、マン中ノ道ハセマイガ、(略)。

七37 6 図 (略)、通り道ノセマイ割合ニハコンザツシナイ。

十一107 7 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。

せまし「狭」(形) 4 狭し《一・ークレ》

十一98 2 図 帝國領の中部クスンナイとマスイとの間は最も狭く、且山脈低くして、(略)。

十二60 4 図 (略)道幅狭く、車馬街上に満ちて往來頗る困難なり。

十二62 7 図 倫敦は(略)、古き都市にして街路狭ければ、古風の乗合馬車を以て主なる交通機關とす。

十二101 2 図 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、却つて我が國民の度量の狭く、品格の低きを示す所以にして、(略)。

せまりきたる「迫来」(四) 1 せまり来る《一ール》

十一80 2 図 川上にかゝり火の明り先づ見え初めて、ほう／＼と呼ぶ聲を聞く内に、舟は早くも目前にせまり来る。

せまる「迫」(四) 3 せまる《一ール》

十一17 6 図 四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊後海峡をなす。

十二77 7 図 (略)、我が驅逐隊・水雷艦隊は砲火をくゞつて敵艦にせま

り、無二無三に攻撃せしかば、(略)。
 十二69 9 図 (略)、列後に在るものは更に一物をも食ふこと能はず、飢餓刻々にせまるが故に、次第に行進を早め、(略)。
 せみ「蟬」(名) 1 セミひかわせみ
 一20 3 セミガナイテキマス。
 せむ「攻」(下二) 1 攻ム「一メ」ひきたりせむ
 十一104 4 図 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、(略)。
 せ・む「責」(下二) 1 責む「一メ」
 十二30 6 図 伊企健却つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、(略)。
 せめ「責」(名) 1 責
 十一105 10 図 或時將軍馬護、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。孔明、(略)、又自ら責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。
 せめあく・む「攻倦」(四) 1 攻めあくむ「一ミ」
 十二26 9 図 武田勝頼(略)来り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず、攻めあくみて長圍の計を取り、(略)。
 せめいゐる「攻入」(四・五) 3 攻入ル攻入る「一ツーリ」
 六56 1 謙信は(略)、こちらから先がけをしようと、夜の間に信玄の陣に攻入つた。

十一54 7 ナポレオンがアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた時は冬の半で、(略)。
 十一106 7 図 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、(略)。
 せめおとす「攻落」(五) 1 攻めおとす「一ス」
 五75 5 図 へいけのぐんぜいがふくはらのしろを守つてゐる。(略)。しかしよしつねは「表から攻めおとす」とはむづかしい。
 せめこむ「攻込」(五) 2 攻めこむ「一マ・ーン」
 五80 6 へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。
 五81 6 これを見た三千人の軍ぜいは、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。
 せめたてる「攻立」(下二) 1 攻立てる「一テ」
 五81 8 へいけはふいを打たれて、どうすることも出来ない。三方から攻立てられて、さんぐにうちやぶられた。
 せめて(副) 1 せめて
 十一15 7 図 いでや臨幸の路次に参り會ひ、(略)。「といへば、(略)。(略)」。衆皆力を失ひて散りぐに成れり。高德せめても此の所存を上聞に達せばやとて、(略)。
 せめよ・せる「攻寄」(下二) 1 攻めヨ

セル「一セ」
 八87 4 之ヲ見タ敵ハ更ニ新テ、フタ、ビ攻メヨセテ来タ。
 せ・める「攻」(下二) 2 攻める「一メ」
 六43 5 日本中を平けて、後には朝鮮までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ人は、(略)。
 六49 6 秀吉が信長に言ひつかつて、敵を攻めに行つてゐた間の事でした、(略)。
 せる(助動) 37 セルせる「セ・セル」
 二37 3 図 「アカンボノトキニ、ダイテチチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。」
 二38 7 図 (略)、クスリヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二60 3 図 「(略)、カレ木ニハナヲサカセマセウ。」
 二61 1 図 ハナヲサカセテミヨ。」
 二64 1 図 「モウ一ドハナヲサカセテミヨ。」
 三22 8 私を(略)、たたせることや、二つかさねることは、どうしてもできません。
 三31 8 馬ニマゲハヲヒカセテ、田ヲカキナラシテキル人モアリマス。
 三42 8 (略)、ケライノ人ヲ右ト左ニワケテスワラセマシタ。
 四29 3 図 (略)、そのうちにきれ

いなのはなをさかせて見せます。
 五14 4 (略)、大神がはたをおらせていらつしやる所へおなげ入れになりました。
 五27 3 役人は(略)、「(略)」。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」といつて、下役どもに言ひつけて、しばらくせました。
 五47 1 友吉は「早くこつちへ来たまへ。(略)。」といつて、そこをかせようとしましたが、(略)。
 六21 2 (略)、まづ象を船にのらせました。
 六47 8 信長はとうとう秀吉にいひつけて、直させることにしました。
 六48 3 秀吉は(略)、一組に十間づつわりあてて、仕事をいそがせましたから、すぐに出来上りました。
 六58 5 ところがとなり國では信玄をこまらせようと思つて、(略)。
 六58 6 ところがとなり國では(略)、塩を送らせないことにした。
 六59 2 謙信はそれを聞いて、(略)、じぶんの國から塩を送らせた。
 六80 1 オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。
 七26 4 色々ナキカイガアツテモ、ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デス。
 七26 8 家デモ國デモ手ヲヨクハタラカセル人が多クレバ多イ程盛ニナリマス。

七677 〔略〕、來年はたくさんなら
せて、たくさん差上げたいと思つて
居ります。

八263 〔略〕、下男や下女は早くから
畑へ出して働かせ、〔略〕。

八901 〔略〕 多数ノ部下ヲ死ナセテ上、
セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ
残念千萬ダ。」

九335 〔略〕、すべりのよい車をすべ
りのよいレールの上で走らせる様に
したらよからうと、〔略〕。

九829 やがて五人の騎手は〔略〕、
静々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つ
て來た。

九856 附添人も見物人も、〔略〕、熊
吉に水を吐かせるやら、醫者を呼び
に走るやら、上を下へのさわぎであ
る。

十56 〔略〕大鬼蓮ハ〔略〕、其ノ上
ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ
出來ルサウデアアル。

十836 犬は夜を守らせる爲、又はか
りに使ふ爲に飼ひ、〔略〕。

十837 〔略〕、猫は鼠を捕らせる爲に
飼ふのである。

十8310 田を耕させたり、〔略〕、農家
では牛を色々の勞働に使役する。

十8310 田を耕させたり、荷車を引か
せたり、〔略〕。

十841 〔略〕、重い物を負はせて遠く
へ運ばせたり、〔略〕。

十841 〔略〕、重い物を負はせて遠く
へ運ばせたり、〔略〕。

へ運ばせたり、〔略〕。

十一485 アラビヤ人は〔略〕馬に全
速力を出させて、雲を霞と逃げのび
た。

十二839 變化極りない妙音は、忽ち
人の心を百花満開ののどかな春によ
はせ、〔略〕。

十二8310 〔略〕、又忽ち落葉散敷く秋
のさびしさに沈ませる。

せわ〔世話〕一名 1 世話 〆おせわ・
おんせわ くださる

九433 〔略〕 姉上も最早御全快にて、
四五日前より起きて蠶の世話になさ
れ居り候。

せん〔千〕一名 3 1000

九17 〔略〕 1000

九17 〔略〕 1000

九40 〔略〕 1000

せん〔山〕 〆こんこうせんか

せん〔船〕 〆うんそうせん・きゅうたん
せん・こうさくせん・なんばせん・ほ
げいせん・ほまえせん

せん〔戦〕 〆いっせん
せん〔錢〕 〆いっせん・いっせんごりん
・ごじつせん・ごせん・さんしせん・
さんじつせん・さんせん・しせん・し
ちせん・じつせん・じつせんいじょう
・じつせんぎんか・さんせんごりん・
じゅうごせん・にじつせん・にじゅう
にせん・にせん・はつせん・ろくせん

せん〔線〕一名 8 線 〆あんぼうせ
ん・えいこうせん・えんだいせん・か
んさいせん・けいぎせん・けいほうせ
ん・しんこくけいほうせん・ちゅうお
うせん・とうしんせん・ならせん・ぶ
じゅんせん・りよじゅんせん

十448 〔略〕 線には直線と曲線とあり。
十451 〔略〕 第一圖は縦の線のみを用
ひ、〔略〕。

十452 〔略〕、第二圖は横の線のみ
を用ひ、〔略〕。

十453 〔略〕、第三圖は斜の線のみ
を用ひたるものにして、〔略〕。

十454 〔略〕、第四圖は縦・横兩様
の線を用ひ、〔略〕。

十455 〔略〕、第五圖は横・斜兩様
の線を用ひ、〔略〕。

十456 〔略〕、第六圖は縦・斜兩様
の線を用ひ、〔略〕。

十457 〔略〕、第七圖は縦・横・斜
三様の線を併せ用ひたるものなり。

せん〔選〕一名 1 選
十二1067 〔略〕 十五人の中より一
人を互選し、其の選に當りて勅任せ
られたるものはなり。

ぜん〔前〕 〆やはんじゅうにじぜん
ぜん〔善〕一名 1 善
九951 〔略〕 之を過ぎて拜殿あり、拜殿
の後に本殿あり、いづれも善盡し、
美盡せり。

ぜん〔膳〕一名 3 ぜん ぜん 膳
〆おぜん

七346 〔略〕、ぜん・わん・ぼん・
重箱などはぬり物なり。

七365 〔略〕、左ノ方ニハゼン・ワン
・ハシナドノ塗物ヲ賣ル店ガアル。

十二918 〔略〕 家内能く和合して、互の
心にわだかまりなく、むつまじく打
揃うて夕の膳に向ふ時、一日の勞苦
は忘れられて、更に明日の活動を思
ふなり。

ぜんあく〔善悪〕一名 1 善惡
十768 〔略〕 物事ヲ知分クルモ、善惡ヲ
ワキマフルモ、喜ブモ怒ルモ悲シム
モ皆腦ノ作用ナリ。

せんいじょう〔千以上〕一名 1 1000 以上
九40 〔略〕 1000 以上

せんいん〔船員〕一名 3 船員
十二782 〔略〕 船員は失望の餘り、コロ
ンブスを海に投じて歸國せんと謀る
に至れり。

十二785 〔略〕、船員も其の勇氣に
感じて命令に服せざるを得ざりき。

十二796 〔略〕 船員皆歡喜して、コロ
ンブスの身邊を圍み、〔略〕。

せんえき〔戦役〕一名 4 戦役 〆し
よせんえき・にちろせんえきちゅう・
めいじさんじゅうしちはちねんせんえ
き・めいじさんじゅうしちはちねんせ
んえきげきせんち・めいじにじゅうし
ちはちねんせんえき

八48 〔略〕 明治二十七年及び三十七
八年戰役の戦利品たる大砲、〔略〕。

八841 明治三十七八年ノ戰役ニ、君

ノタメ國ノタメ、名譽ノ戦死ヲトゲ
 タ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。
 九二六八 明治二十七八年の戦役まで
 は、我が國の陸軍は僅かに七箇師團
 に過ぎざりしが、(略)。
 一二五六 (略) 旅順口に達す。日
 露の戦役に於ては、(略)、我が軍は
 苦戦十一箇月にして之を陥れたり。
 せんえきご「戦役後」(名) 2 戦役後
 九二六九 明治二十七八年の戦役まで
 は、(略)、戦役後十三箇師團となり
 (略)。
 九二六〇 (略)、三十七八年の戦役後
 は、(略)十九箇師團となれり。
 ぜんか「全家」(名) 1 全家
 九二七四 (略)、直ちに老母と子供
 を裏山へ立退かせ、(略)、全家立退
 の用意致し居り候中、(略)。
 ぜんかい 〆〆〆ぜんかい
 せんがくじ「泉岳寺」(名) 2 泉岳寺
 泉岳寺
 一二八六 (略)、東京高輪泉岳寺
 の墓前には今尚香花の絶ゆることな
 し。
 一二八七 喜剣直ちに泉岳寺に行
 き、其の墓を拜して曰く、(略)。
 せんかたなし「為方無」(形) 1 せん
 方なし「一ク」
 一二四五 熊王今はせん方なく、其
 の刀にてもとどりを切放ち、さて往
 生院に入りて僧となり、(略)。
 せんかん「船艦」(名) 1 船艦

一二一五 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等
 ヲスル處ヲ船渠トイフ。
 せんかん「戦艦」(名) 7 戦艦
 一一三一 諸子ハ戦艦・巡洋艦・海
 防艦・砲艦・通報艦・驅逐艦・水雷
 艇・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。
 一一三一 戦艦ハ軍艦中最モ優勢ナ
 ルモノニシテ、其ノ名ノ如ク堂々敵
 ト決戦スルヲ目的トス。故ニ何レモ
 大ナル大砲ヲ備へ、又艦ノ要部ハ極
 メテ厚キ鋼鐵ニテ包メリ。
 一一三二 巡洋艦ハ(略)、戦艦ト
 共ニ敵ニ當リ、(略)。
 一一三二 戦艦香取
 一一三三 巡洋艦ハ(略)、其ノ大ナ
 ルモノハ戦艦ニ次グノ勢力ヲ有シ、
 (略)。
 一一三三 (略)、時ニ戦艦ト合同シ
 テ敵ノ主力ト戦フコトアリ。
 一二一三 (略)、大キナ戦艦ナドニナ
 ルト、設計圖バカリデ數百枚モアル
 トイフ。
 せんかんニコライいっせいかしせき
 (名) 1 戦艦ニコライ一世以下四隻
 一二一八 (略)、ネボカトフ少將は
 白旗をかゝげ、戦艦ニコライ一世以
 下四隻を擧げて其の部下と共に降服
 せり。
 ぜんき「前記」(名) 1 前記
 一二一六 東郷司令長官此の戦況
 を打電し、其の後に附加して曰く、
 「我が聯合艦隊ガ(略)前記ノ如キ

奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)。
 せんきよ「船渠」(名) 3 船渠 船渠
 一二一五 船艦ノ修繕、船底ノ塗換等
 ヲスル處ヲ船渠トイフ。
 一二一五 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ
 疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ
 テアル。
 一二一六 我が國デ一番大キイノハ佐
 世保海軍工廠ノ船渠デ、長サ百三十
 四間、渠口ノ幅十九間餘、深サ八間
 餘アル。
 せんきよう「戦況」(名) 1 戦況
 一二一四 東郷司令長官此の戦況を
 打電し、(略)。
 せんきよしかく「選挙資格」(名) 1
 選挙資格
 一二一六 衆議院は一定の選挙資格
 を有する臣民の公選したる議員を以
 て組織し、(略)。
 せんきよ「選挙」(サ変) 6 選挙す
 「一シースル・ーセ」
 一一一三 村長は(略)、幾度の改
 選にも常に選挙せられて、二十餘年
 間繼續せり。
 一一一五 村會議員も全村一致して
 之を選挙し、互に競争するが如きこ
 と更になし。
 一二一〇 一般人民の府縣・郡・市
 町村會議員を選挙するも、(略)、一
 に此の精神に基づくべく、(略)。
 一二一〇 (略)、府縣・郡・市會に
 於て參事會員を選挙するも、(略)。

一二一三 (略)、市・町村會に於て
 市・町村長を選挙するも、(略)。
 一二一三 市町村長・議員等を選
 挙するには専ら其の人物に重きを置
 き、(略)私交上の關係をさしはさむ
 べからず。
 せんきよにん 〆〆いっばんせんきよにん
 ぜんぐん「全軍」(名) 2 全軍
 一一五九 (略)、軍中の花が助かつた
 ので、全軍一同に歡喜の聲をあげた、
 (略)。
 一二一五 東郷司令長官は直ちに全
 軍に出動を命じ、(略)。
 ぜんけい「全景」(名) 1 全景
 一二一四 日本一の湖水は近江の琵琶
 湖にして、(略)いづこより見ても
 山にさへぎられ、かすみへだてら
 れて、其の全景を見ることが能はず。
 せんげつ「先月」(名) 1 先月
 一一一七 先月は官命により南部
 地方へ出張致候。
 ぜんこ「前古」(名) 1 前古
 八三七 (略)、その御式の盛なるこ
 と前古たぐひなかりきと申す。
 ぜんご「前後」(名) 2 前後 〆〆いしん
 ぜんご・しまんトンぜんご
 一二一五 自轉車の兩輪が前後に並
 べるも亦様變れり。
 一二一六 (略)其の往來織るが如
 く、殊に公園・廣小路の如きは、十
 數臺列をなして前後相接す。
 せんこう「戦功」(名) 1 戦功

十一442 正儀は河内にて領地を

與へんとしたれども、熊王は「何の戦功もなければ」とて受けざりき。

せんこう「遷幸」(名) 1 遷幸

十一159 警固の武士、播磨の今宿といふ所より山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

せんこう「潜航」(サ変) 1 潜航ス

十一3410 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、水雷ヲ放チテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目的トス。

せんこう「選鉱場」(名) 2 選鉱場

十一626 發掘シタル銅鑛ハ、(略)、之ヲ選鉱場ニ送ル。

十一626 選鉱場ニハ種々ノ機械アリ、此ノ機械ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選り分ク。

ぜんこく「全国」(名) 12 全国

十一47 全國無數の佛像中奈良の大佛の大きさの日本一なることは諸子すでに之を知れり。

十一311 支那ヨリ琉球、琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。

十一314 然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、(略)。

十一3310 島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、間モナク全國ニ作ラル、ニ至レリ。

十一7210 我が國は火山國にして、全

國到る處に温泉あり。

十一844 (略)、今では全國食はぬ處がなくなつた。

十一286 今や全國鐵道の延長六千哩を越え、(略)。

十一168 南臺灣の熱帶地方より北樺太の寒帶に近き地方まで、全國に凡そ百箇處の測候所あり。

十二196 天氣圖とは(略)、一目に全國天候の如何を示すものなり。

十二403 (略)、現に噴火せる火山の數も全國に於ては五十座を下らず。

十二482 又森林は全國の山野たはぬ處なく、(略)。

十二489 米と麥とは全國に、製茶は静岡・三重・京都(略)。

ぜんこく「全國氣象」(名) 1 全國氣象

十二173 (略)、中央氣象臺は(略)、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。

ぜんこく「全國就學兒童」(名) 1 全國就學兒童

十二358 (略)、今や全國就學兒童ハ學齡兒童百分ノ九十七ヲ越エ、(略)。

ぜんこく「戰國爭奪」(名) 1 戰國爭奪

十二969 孟子(略)、戰國爭奪の世に在りて、専ら聖人の道を講ぜり。

ぜんこく「千石積」(名) 1 千石積

十一271 和船の大なるは五百石積・千石積等ありて、(略)。

ぜんこく「全國天氣豫報」(名) 2 全國天氣豫報

十二174 (略)、中央氣象臺は各測候所の報告によりて(略)、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。之を全國天氣豫報といふ。

十二174 又各測候所が此の全國天氣豫報と其の地の觀測とによりて、其の地方の天氣を豫告するを地方天氣豫報といふ。

ぜんこく「全國暴風雨警報」(名) 1 全國暴風雨警報

十二182 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、中央氣象臺は全國暴風雨警報を發して之を豫告す。

ぜんこく「戰後經營」(名) 1 戰後經營

十一1185 (略)、戰後經營かくこそと、戊申の詔書かしこしや。

ぜんこく「前後左右」(名) 1 前後左右

十二8810 (略)、諸道具の置場處を一定し、前後左右次第よく並べて、(略)。

ぜんこく「千五百尺」(名) 1 千五百尺

十一401 阿里山の檜材は(略)、一樹にて千五百尺の材積を得るものもこれあり候由、(略)。

ぜんさく「かとうぜんさく」(略)。

ぜんさく「かとうぜんさく」(略)。

ぜんさく「かとうぜんさく」(略)。

ぜんさく「かとうぜんさく」(略)。

ぜんさく「千差万別」(名) 1 千差万別

十一2610 荷足・高瀬・茶船・屋根船等其の目的により、大小・構造千差萬別あり。

ぜんざん「全山」(名) 1 全山

十一15 全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。

せんし「戦死」(名) 3 戦死

七86 正行ハ(略)、一族ノ人々トトモニ戰死ヲトゲタリ。

七87 コレ正成戰死ノ後十三年目ニシテ、(略)。

八84 明治三十七八年ノ戰役ニ、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

せんし「戦死」(サ変) 7 戦死ス

戰死ス 《一シース・一セ》

七13 正成ノ戰死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、(略)。

七32 正成ハタシテ戰死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。

七53 正成戰死シテ後ハ、敵ノイキホヒマス、強ク、(略)。

七61 「父正成ノ戰死セシ時、臣ハワヅカニ十一歳、(略)。

九2710 維新前後國事ニタフレタル人々ヲ始メ、其ノ後ノ諸戰役ニ戰死シタル忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。

十二318 足利氏の大兵來り攻め、

城遂に陥り、保・義鑑共に戦死す。

十二319 図 〔二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。〕

せんしする 〔戦死〕（サ変）1 戦死スル 〔一サ〕

八92 8 〔略〕、トウく〔戦死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死ガイニ取リスガツテ泣イタ。〕

せんしつ 〔船室〕（名）1 船室

十二14 9 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、〔略〕。

せんしひやくにじゅうしメートル（名）1 千四百二十四メートル

十二40 10 最も東なる根子岳は七面山とも稱し、〔略〕。高さ千四百二十四メートル、〔略〕。

せんしひやくよ 〔千四百余〕（名）1 千四百餘

十一11 7 図 我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。

ぜんしゅう 〔前週〕（名）1 前週

十二34 3 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、前週ノ土曜

日ニハ落成式ガ舉行サレタ。

せんしゅうさかい 〔泉州堺〕（地名）1 泉州堺

十一71 6 泉州堺に一國寺といふ寺あり。

せんしゅうつす 〔選出〕（サ変）1 選出す 〔一セ〕

十二10 5 図 〔略〕、一般選舉人も〔略〕

參政の公職に最も適任なる人物を選

出せざるべからず。

せんしゅうばんよう 〔千種万様〕（名）1 千種萬樣

十49 1 図 花の名より取れる〔略〕、實の名より取れる〔略〕、其の他〔略〕等、色の名稱も亦千種萬樣なり。

せんじょう 〔戦場〕（名）9 戦場 〔一セ〕

七14 図 正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トトモニ戦場ニ出デントセシガ、〔略〕。

七8 5 図 正行ハソレヨリ戦場ニ向ヒ、〔略〕、一族ノ人々トトモニ戦死ヲトゲタリ。

七63 5 図 又近ごろは戦場にも犬を用ひて、たふれたる兵士をさがさむといふ。

十53 6 図 〔略〕 『戦場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。』

十53 10 図 〔略〕 まして戦場にては、進まんとすれば、大人げなしとあざけり、〔略〕。

十66 9 〔略〕、今新に鯨を追ふものもあり、鉈を打つて鯨に引廻されてあるものもある。あちらこちら入亂れて戦場のやうである。

十85 4 〔略〕、將卒と共に戦場を駆けめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十一14 7 図 〔略〕 義軍を起し、たとひかばねを戦場にさらすとも、名

を子孫に傳ふべし。』

十二53 7 図 商人ハ軍人ノ戦場ニ立ツト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戦争ニ從事スベシ。

せんしん 〔先進〕（名）1 先進

十一11 1 図 東方文明先進の任務は重き日本國。

せんじん 〔戦陣〕（名）1 戦陣

十二32 9 図 〔略〕、戦陣の際に良人の名譽を全うせる形名の妻と其の徳を同じうすとやいはん。

ぜんしん 〔全身〕（名）8 全身

八71 5 図 我若し食物をこなす事なくば、全身を養ふ血は如何にして得らるべき。

十76 6 図 〔略〕、二本ノ足ハ全身ヲ支フ。

十76 7 図 全身ニ二百餘ノ骨アリ。

十76 1 図 心臓ハ肺臓ヨリ來ル新シキ血ヲ全身ニ送り、〔略〕。

十76 8 図 腦ハ精神ノ宿ル所ニシテ、全身ヲ支配ス。

十78 5 図 又力士ノ如キハ常ニ全身ニ力ヲ入ル、ヲ以テ、何レノ部分モヨク發達セリ。

十78 8 図 身體ノ構造ハ〔略〕、一小部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關スルモノナレバ、〔略〕。

十一84 7 図 〔略〕 綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、〔略〕、機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

ぜんしんしやすし 〔前進易〕（形）1

前進し易し 〔一カラ〕

九24 9 図 砲兵は大砲を以て遠方より敵を砲撃し、友軍を前進し易からしむ。

せんすいてい 〔潜水艇〕（名）2 潜水艇

十一31 7 図 諸子ハ戦艦・〔略〕・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十一34 10 図 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、水雷ヲ放テテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目的トス。

せんせい 〔先生〕（名）11 センセイ

せんせい 先生 〔一かんしよせんせい〕

のほか

一51 1 イツカセンセイガオハナシニナリマシタ、オヤニシンパイヤカケルノハワルイコトデス。

三38 4 これで本の中のじやゑや、せんせいの見せてくださるいろいろなものを見るのです。

三38 8 これがなければ、せんせいの

のおつしやることや、みんなの言ふことがわかりません。

四9 4 センセイガチヨクゴヲオヨミニナツテ、〔略〕。

四9 5 〔略〕、センセイモセイト

モ一シヨニ君ガヨノウタヲウタヒマシタ。

五47 4 図 「かみなりは高いもののある所へおちるのだ。この間先生がお

つしやつたではないか。」

六70 ㊦ (略) 先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、顔を赤くする子供もございました。

六71 ㊦ 度々けつせきしたり、ちこくしたりして、先生にしかられた子供もございました。

六72 ㊦ 学校でいつも先生にほめられ、友だちにもすかれた善い子供は、(略)、りつばな人になりました。

六72 ㊦ 学校で先生にしかられ、友だちにもきはれた悪い子供は、(略)。

七24 ㊦ 保己一ハソレトモ知ラズ、講義ヲツマケタレバ、弟子ドモハ、「先生、少シオ待チ下サイマセ。」

ぜんせいりよく「全勢力」(名) 1 全勢力

十二4 ㊦ 露國が(略)、本國に於ける海軍の幾んど全勢力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、(略)。

ぜんせかい「全世界」(名) 2 全世界

十二50 ㊦ (略)、全世界ノ人ハ皆我ガ商賣ノ花客ナリ。

十二51 ㊦ 故ニ商人ハ常ニ全世界ニ於ケル物價ノ高低ニ注意シ、需要供給ノ情況ニ精通スルヲ要ス。

ぜんせき「戦跡」(名) 1 戦蹟

十二54 ㊦ 大連より南山・得利寺・大石橋等の戦蹟を経て、(略)。

巴に移り、(略)黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

十二67 ㊦ 此の如く全然移住するは稀に見ることなれども、(略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

せんそう「戦争」(名) 6 戦争

九22 ㊦ 併し今の戦争は昔とちがつて、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九23 ㊦ 其のうちに花々しい戦争もあるだらう。

九24 ㊦ 歩兵は戦争の主力にして、其の數最も多し。

九25 ㊦ 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵は何れも戦争に必要にして、其の任務には輕重の別あることなし。

十85 ㊦ 其の上戦争には必ず無くてはならぬもので、兵器・糧食を運送し、將卒と共に戰場を駆けめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十二53 ㊦ 商人ハ軍人ノ戰場ニ立ツト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戦争ニ従事スベシ。

ぜんそくりよく「全速力」(名) 1 全速力

十一48 ㊦ アラビヤ人は(略)馬に全速力を出させて、雲を霞と逃げのびた。

ぜんそん「全村」(名) 4 全村

九74 ㊦ 全村百餘戸の中二十三十戸

も押流され候。

十一111 ㊦ 我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。全村農業を以て生計を立つ。

十一112 ㊦ されば全村頗るゆたかにして、皆其の家業を樂しめり。

十一113 ㊦ 村會議員も全村一致して之を選擧し、(略)。

せんたい「船体」(名) 4 船體

十68 ㊦ (略) 岩の上に乘上げたる帆船前船あり。船體二つにくだけて、一半ははや大波にさらはれたり。

十68 ㊦ 生残れる水夫は破れたる船體にすがり、(略)。

十二13 ㊦ 船體ノ材料ガホゞ整フト、組立ニ取りカゝル。

十二77 ㊦ (略)、カナリヤ島に着し、こゝにて船體に修繕を加へ、(略)。

せんだい「仙台」(地名) 1 仙臺

九25 ㊦ 仙臺

十二13 ㊦ 船ヲ組立テルニハ、船臺ノ上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、(略)。

十一9 ㊦ (略)、全體ノ人ガ同ジ仕事ヲスルヨリモ、分業デスル方ガ品物ノ出来バエガ良クテ、(略)。

十一12 ㊦ 分業デスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、(略)。

せんたく「洗濯」(名) 1 センタク

一37 ㊦ オヂイサンハヤマヘシバカリニ、オバアサンハカハヘセントクニ。

せんたくする「洗濯」(サ変) 2 センタクスル

十二39 ㊦ キモノヲヌツタリセントクシタリシテクダサルノハ、ドナタデスカ。

十一111 ㊦ 寒風身を切る様な冬の日でも、氷の下の水をくんでせんたくする。

せんち「戦地」(名) 1 戦地

八84 ㊦ 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戦地ヘ向ツタガ、(略)。

せんちよう「船長」(名) 5 船長

七80 ㊦ 長き航海を終へて歸り來れる明治丸の船長は、(略)、航海の話になしたり。

七84 ㊦ 船長は(略)、又その話をづけたたり。

七87 ㊦ 船長はかくいひ終へて、(略)、「(略)」。日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。

十64 ㊦ 甲板に立つてゐた船長を始

め、三十五人の若者は（略）。

十64 船長の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じて、北へ向つて走る。

ぜんちょう「全長」(名) 1 全長

九14 利根川ハ日本東部ノ大川ニシテ、全長凡ソ七十三里、(略)。

ぜんつうじ「普通寺」(地名) 1 普通寺

九25 善通寺

せんと「遷都」(名) 1 遷都

十一51 應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、山城へ遷都ありし後は其の事絶えたり。

せんとう「先頭」(名) 3 先頭

十二61 東郷司令長官は三笠以下六隻の主戦艦隊を率ゐて、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。

十二69 しかも僅かに飢をしのぐは先頭に進める一部に過ぎず、列後に在るものは(略)。

十二79 先頭の艦が発せる號砲に、人々喜びて、(略)。

せんとう「戦闘」(名) 2 戦闘

十39 此の方面の戦闘に二子を失ひ給ひつる閣下の心如何にぞ。』と。

十二93 敵の司令長官ロジェストウェンスキー中將は昨日の戦闘に傷を負ひ、(略)。

せんだう「船頭」(名) 2 センドウ

せんだう「船頭」(名) 2 センドウ

ひろうせんだう

三31 略、センドウガ舟ヲヤルサヲニモ、竹ヲツカヒマス。

七26 大工ガ家ヲタテルノモ、左官ガカベヲヌルノモ、センドウガ船ヲコグノモ、農夫ガ(略)モ、皆手デスルノデス。

ぜんとう「全島」(名) 1 全島

十一40 全島の住民は約三百餘萬と申候。

せんとうき「戦闘旗」(名) 1 戦闘旗

十二59 皇國の興廢此の一戦にあり。(略)との信號旗が戦闘旗と共に我が旗艦三笠にかゝげられたるは(略)。

ぜんとうだいいち「全島第二」(名) 1 全島第一

十一97 大泊は樺太島の入口とも申すべく、全島第一の良港に候。

せんとうぶたい「先頭部隊」(名) 1 先頭部隊

十二64 敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、(略)。

せんない「船内」(名) 2 船内

七90 中佐ハ(略)、ター一人クマナク船内ヲタツネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

七90 殘念ナリ、今一度。』ト、中佐ハマタモ船内ヲカケメグレリ。

ぜんに「禪尼」(名) 1 禪尼

八16 北條時頼ノ母松下禪尼、

(略)。禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、(略)。

ぜんにひやくねん「千二百年」(名) 1 千二百年

八49 今ヨリ千二百年ノ昔、皇極天皇ノ御代、(略)。

ぜんにひやくねん「千二百余年」(名) 1 千二百余年

十98 千二百餘年ヲ經タル古堂ノ中ニハ當時ノ佛像今尚存ス。

せんねん「先年」(名) 1 先年

十一76 先年大風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝を見ること能はず。

せんぱく「船舶」(名) 1 船舶

九18 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ、運輸ノ便スコブル多シ。

せんばん「先般」(名) 1 先般

十一95 先般御手紙にて御近況を承知致し、御なつかしく存候。

ぜんび「善美」(名) 1 善美

九95 家光の廟あり、建築の善美を盡せる亦相似たり。

ぜんぶ「全部」(名) 3 全部

九77 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒオキテ、(略)郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、全部ハリ終ヘタル時、之ヲ郵便局ニ差出シテ、(略)。

十85 馬も(略)。死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と

同じである。

十一36 今や西部縱貫鐵道も全部開通致候事とて、交通の利便いよ〈開け、(略)〉。

せんぶんのいち「千分二」(名) 1 千分一

六19 貫ノ千分ノ一ヲ又、(略)。

せんべい「せんべい」(名) 1 全平地

十一38 米田は全平地の二分の一を占め居候。

ぜんぼう「前方」(名) 1 前方

九24 騎兵は(略)、多くは友軍の前方に出でて敵狀をさぐる。

せんぼん「せんぼん」(名) 1 せんぼん

せんまんにん「千万人」(名) 1 千萬人

命は我々千萬人の命よりも貴い。

ぜんめつ「全滅」(サ変) 1 全滅

八87 一度占領シタ此ノ高地、全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。

ぜんめん「前面」(名) 2 前面

十四4 熱海は伊豆の東岸にあり。前面は海に臨み、後は山を負ひ、冬暖に夏涼し。

せんもんか「専門家」(名) 1 専門家

十928 〔圖〕 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、(略)、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

せんり 〔千里〕(名) 2 千里

七795 〔圖〕 小さきありもいそしめば、塔をもきづき、つばめさへ千里の波を渡るなり。

十一219 〔圖〕 (略)、千里寄せくる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。せんりひりん 〔千里比隣〕(名) 2 千里比隣

十二502 〔圖〕 千里比隣の今の世は有無互に相通じ、世界各國皆市場。

十二507 〔圖〕 東西ノ交通盛ニシテ千里比隣ノ如キ今日ニ於テハ商業ハ世界ヲ相手ノ商業トナレリ。

せんりひん 〔戦利品〕(名) 1 戦利品

八48 〔圖〕 明治二十七八年及び三十七八年戦役の戦利品たる大砲、(略)。

せんりゅう 〔川流〕(名) 1 川流

十二5 〔圖〕 近江一國の川流はほとんど全く此の湖水に入り、(略)。

ぜんりょう 〔善良〕(形状) 1 善良

十二465 〔圖〕 (略)、善良なる耕作用の牛馬、強健なる軍用の馬匹、(略)。

せんりょうす 〔占領〕(サ変) 1 占領す 〔一シ〕

十二992 〔圖〕 (略)、汽車・汽船等の中に我獨り廣き場處を占領し、(略)。

せんりょうする 〔占領〕(サ変) 2 占領スル 〔一シ〕

八876 〔圖〕 「一度占領シタ此ノ高地、全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。

八902 〔圖〕 (略)、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ殘念千萬ダ。」

ぜんりよく 〔全力〕(名) 1 全力

十二51 〔圖〕 我が海軍は初より敵を近海に迎へ撃つ計を定め、全力を朝鮮海峡に集中せしが、(略)。

せんれつ 〔戦列〕(名) 1 戦列

十二66 〔圖〕 (略)、はげしく敵を砲撃せしかば、敵の艦列忽ち亂れ、早くも戦列を離るゝものあり。

ぜんろ 〔前路〕(名) 1 前路

十二73 〔圖〕 敵は(略)路を變へて逃れ去らんとせり。我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、(略)。

せんろつびやくくメートル 〔名〕 1 千六百九メートル

十二412 〔圖〕 (略)、其の西にある高岳は高さ千六百九メートルあり。

そ

そ 〔其〕(代名) 3 そ

十二525 〔圖〕 若者かと思へば、(略)。

老人かと思へば、髪つやくと黒し。何者にて候ふらん。」義仲之を聞きて、「そは武藏の齋藤別當にはあらずや。

十二726 〔圖〕 愚僧も所用ありて京へ上り、一二年在京せんもはかり難し。」といへば、畫工「そはいと名残をしき事なり。

十一744 〔圖〕 (略)、「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」と問ふ。「そは昨夜のぞき見て知りたり。」といへば、(略)。

ぞ 〔係助〕 21 ゾ ぞ ぞなんぞ

七252 〔圖〕 保己一ハ笑ヒテ、「サテく、目アキトイフモノハ不自由ナノダ。」トイヒタリトゾ。

八79 〔圖〕 今日この日に年來ののぞみを達したるは何等の幸ぞや。

八185 〔圖〕 (略)ツクロヒテ用フルトキハ、シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若キ者ニ知ラセントテカクスルナリ。」ト答ヘタリトゾ。

八612 〔圖〕 滋賀唐崎の一つ松、夜の雨にぞ名を得たる。

九946 〔圖〕 此の門一に日暮門の名あるは、日暮るるまで見れどもあかずとの意なりとぞ。

十二162 〔圖〕 (略)、父の爲時は常に其の頭をなでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

十二172 〔圖〕 (略)清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。皇后の御感入なりきとぞ。

十二389 〔圖〕 (略)、くづれ残れる民屋は、今ぞ相見る二將軍。

十二401 〔圖〕 此の方面の戦闘に

二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。」と。

十二404 〔圖〕 二人の我が子それゝに、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目。」と、大將答力あり。

十二714 〔圖〕 数日の後、水夫は(略)、各我が家に歸りたりとぞ。

十二997 〔圖〕 人はいさ心も知らず、故里は 花ぞ昔の香にほひける。

十二137 〔圖〕 めへらじとゐねて思へばあづさ弓 なき數にいる名をぞとむる。

十二464 〔圖〕 (略)、其の後一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十二105 〔圖〕 孔明、(略)、涙ヲフルツテ之ヲ斬リ、又自ラ責ヲ引イテ位三等ヲ下セリトゾ。

十二45 〔圖〕 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

十二368 〔圖〕 將來本校ニ學ブ者ノ幸福如何ゾヤ。

十二385 〔圖〕 嘉明後此の事を聞きて大いに恥ぢ、高虎と水魚の交をなすに至れりとぞ。

十二398 〔圖〕 廉頗之を聞きて、(略)、相如の門に至りて罪を謝し、つひに無二の親交を結べりとぞ。

十二478 〔圖〕 我が大日本帝國の古き六十八國は 沖繩諸島合せてぞ、府は三つ、縣は四十三。

十二110 8 図 されば朕は汝等を股肱と

頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてそ其の親は特に深かるべき。

ぞ (終助) 26 ゾ ぞ

三27 2 図 ばかばか、ばかばか、走れよ、小馬。けれどもいそいでつまづくまいぞ。

五27 2 図 「こら待て、ゐざり。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」

五80 7 よしつねはこゝぞと思つて、「進めく。」とさしづをしたが、(略)。

六84 1 図 (略)、いつはりいはぬが子供らの 學びのはじめぞ、つゝしめよ、いましめよ。

七84 4 図 フカク汝ヲタノミニ思フゾ。」トオホセ出サレタリ。

七49 6 図 「葉書や切手や印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」

七89 8 図 「杉野ハ今點火ヲ終ヘタルゾ。總員ポートヘ。」

八52 8 図 入鹿アヤシミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、「御前近ウシテ。」ト答フ。

九25 5 図 尊は「何故にかくは泣きかなしむぞ。」と問はせ給へば、(略)。

九10 10 図 春風渡る廣野は 汝がたのしき庭ぞ。

九11 9 図 緑色そふ林は 汝が樂しき庭ぞ。

九19 6 図 兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」と言葉鋭くしか

つた。

九20 9 図 (略)、母は如何にも残念に思ひ候。何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。

九24 4 図 かしこくも天皇陛下は自ら大元帥なるぞとおほせて、陸海軍をすべ給ふ。

九49 7 図 たがひに心もとなく思ひ合ひし父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

九83 6 図 「負けたら村の名折になるぞ。」

十50 3 図 「唯一人ふみ止つて戦ひ給ふは誰ぞ。名乗り給へや。」

十50 5 図 かく申すは (略)、手塚太郎光盛なり。よき敵ぞ、組み給へ。」

十89 10 図 (略)やみの天地をまた元の 御代に返すは誰が任ぞ。

十一43 2 図 正儀の臣兵庫介忠元あやしみて、「何者ぞ。」と問へば、(略)。

十一45 5 図 正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、(略)。

十一60 3 図 出征兵士の弟ぞ、我は。十一74 9 図 住持は驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、再び歸り來られしは何故ぞ。」と問へば、(略)。

十二79 1 図 (略)「陸」「陸」と呼ぶものあり。「何處ぞ。」「すぐ其處に。」(略)。

十二110 7 図 朕は汝等軍人の大元帥な

るぞ。

十二112 8 図 禮儀を守る心得を缺ける軍人は國家としても許し難き罪人ぞと諭し給ふ。

そいひつきそいにん
そう「壯」(名) 1 壯

十二88 2 図 喜劍(略)、「我當に萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を抜き切腹して終る。時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

そう「草」ひいっそう・つきみそう・ふくじゅそう・れんげそう

そう「僧」(名) 1 僧

十一45 10 図 熊王(略)もとどりを切放ち、さて往生院に入りて僧となり、(略)。

そう「層」ひせきたんそう・にそう・ろくしちそう

そう「総」ひしきちそうつぽすう

そう「艘」ひいっそう・ごろくそう

そう「相」(形状) 29 サウ さう ひかわいそう

二29 1 ケサハ(略)モ、スズメノナク コエモ、ウレシサウ ニキ コエマス。

二29 3 ヲトコノ子モ、ヨシナノ子モ、オモシロサウ ニアソソデキマス。

二43 5 図 コハサウナ目ヲシテ、ニランデ キル デハ アリマセンカ。」

三17 5 ヒバリガ オモシロサウニ

サヘツツテ キマス。

三36 4 まさをはふしぎさうに、「どうしてもう 光らない のでせう。」といひますと、(略)。

四8 2 (略)雨がふりさうになつたので、いそいで 山を下りました。

四78 1 いくら弓の名人でも、これを一矢でいとおすことは、なかなかむづかしさうです。

五3 3 (略)大ぜいの神さまがたは手をたたいて、お笑ひになりました。あまりおもしろさうなので、大神は少しばかり戸をあけて、おのどきになりました。

五10 4 鳥はたのしさうに時々来て、羽をひたしました。

五10 5 魚はうれしさうにういたりしづんだりして、およいでゐました。

五12 5 (略)、人がいそがしさうにあるいてゐました。

五17 7 鯉ノタキ上リツイテ、タキデモ上ルコトガアルサウデス。

五33 5 (略)、ソソナニツムト、茶ノ木ノタメニハヨクナイサウデス。

五53 4 ソノ中ニケモノガ勝チサウニナツタノヲ見テ、(略)、ケモノノミカタニナリマシタ。

五54 2 シバラクタツト、ケモノガ負ケサウニナツタノデ、(略)、鳥ノ方ニツキマシタ。

五72 6 図 ケレドモコノ足ハ細クテ、

イカニモ弱サウニ見エル。

六15 1 (略)、稻がよくじゆくして、重さうにほをたれてゐます。

六76 羽織・はかまの主人は一同に向つて、うれしさうに、「どうも御苦勞、御苦勞。」とあいさつしました。

七17 8 西洋西瓜には色々あるさうでございますが、(略)。

七19 7 あなたと私は親類ださうでございまして、どうかこれからお心安く願ひます。」

八21 3 白い雀が實際居るのか。」と、ふしぎさうな顔附をして、農夫は問返しました。

八21 5 友だちは答へて、「居るさうだ。」

八34 1 何時も丈夫さうな老人であつたが、去年の暮に死んでしまつた。

八42 1 (略)、もう本町通へ抜けて、角の呉服屋が焼けてゐるのださうだ。

八43 6 (略)にいさんが歸つての話に、(略)、二棟の土蔵の中、一棟は

とう／＼焼けおちたさうだ。

十5 6 (略) 大鬼蓮ハ(略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出来ルサウデアル。

十一51 1 (略)、馬はさもうれしさうに、口でおもちやをさ／＼けて、其の子供をあやしてゐた。

十二20 4 蝶や蜂は花から花へいそがしさうに飛廻つて花の汁を吸ふ。

十二23 2 老人は、(略)不思議さう

に、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

そう「然」(副) 8 サウ さう 〽それはさうと

四6 7 次郎「それでは今くるまのとはつてゐる長いはしが、八まんさまのまへのはしですな。」太郎「さうです。」

四7 7 太郎「くるまにのつてゐる人を入れると、六人でせう。」次郎「ああ、さうです、さうです。」

四7 7 次郎「ああ、さうです、さうです。」

四69 4 三郎「(略)、モットタクサンノシラ、早くナホリマセウ。」

母「サウ一ドニノシラ、カヘツテワルイノデス。」

五37 2 こといふのはかひこのこと

で、(略)。すがるはさうとは心づかず、(略)、(略)、子を出すやうに。」

と、たくさんの子どもをもらつて、つれて来ました。

六61 4 〽もしおなかでもいたいの

か、おとし物でもしたのか。」と、(略)。涙をふいて女の子、「いゝえ、さうではありません。」

七21 5 〽あなたと私は大そう似てゐるではありませんか。(略)大豆・小豆・さ／＼げ・そら豆・なた豆などはすべて私どもの親類です。(略)。」

藤「さうでございますか、はじめて承りました。」

七47 3 (略)、日本紙ハ「(略)、コノタクサンノ障子ハ皆僕ヲノ仲間デハツテアルデハナイカ。コ、ニアル扇モウチハモヤハリサウダ。」

そ「沿」(四) 3 ソフ 沿ふ「一ヒ」

十98 10 (略)、初瀬川ニソヒテ爪先上リニ行ケバ、初瀬町ニ至ル。

十100 5 コレヨリ谷川ニソヒテ、坂路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、(略)。

十一77 1 更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。

そ「添」(四) 1 そふ 「一フ」 〽つきそう

九11 9 緑色そふ林は 汝が樂しき庭ぞ。

そ「添」(下二) 6 そふ 〽添き庭ぞ。

六84 5 (略)、昔を考へ、今を知り、學びの光を身にそへよ、身につけよ。

十10 9 其の他森林は(略)、神社・佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

十33 8 幕府ハ此ノ書物ニ種芋ヲ添ヘテ、島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、(略)。

十一80 8 此の間に(略)、又かゞり火に薪を添ふるなど、其の手練實に驚くべし。

十二59 6 テームスとセーヌとは

(略)、之に架したる橋は何れも壯大にして、市の美觀を添ふ。

十二118 7 柳櫻の 春にほふ 錦をきへて、野も山も。

ぞ「象」(名) 5 象

六20 4 昔ある國で大きな象の目方をはからうとしたが、(略)。

六21 1 (略)、「そんなら私がはかつて見ませう。」といつて、まづ象を船にのせました。

六21 2 さうして象の重みで船の水につかつた所にしるしを附けました。

六21 6 それから象をおろして、その代りに石をたくさんつみました。

七74 2 陸ニスムモノデハ、象ガマツ一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大人ト赤子ヨリモ、モットチガフ。

ぞ「蔵」〽むじんぞう

そ「いん」(総員) (名) 1 總員

七89 8 中佐ハシヅカニ、「杉野ハ今點火ヲ終ヘタルゾ。總員ポートヘ。」

そ「うん」〽ほうじょうそううん

そ「うい」(造営) (名) 1 造営

十61 2 (略)、江戸城及ビ日光東照宮等ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、(略)。

そ「おうす」(相応) (サ変) 1 相應す

十二97 7 (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

そうが「爪牙」(名) 1 爪牙

十二70② (略) 魚腹に葬らるゝもの、野獸の爪牙にさかれて食はるゝもの、其の數を知らず。

そうかい「壯快」(形状) 1 壯快

十一99⑤ (略) 練の群をなして海岸近く寄來る時は(略)、櫛網にてすくひ取るを得る程にて、實に壯快なるものに御座候。

そうかす「増加」(サ変) 12 増加ス
増加す「一シース—スル—セ」

八95⑤ 戸口もまた年々に増加す。

十44① (略)、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、(略)。

十61⑧ (略)、産出高モ著シク増加シ、コ、ニ始メテ世界有數ノ大銅山トナレリ。

十一7⑥ 氣候の暖なる間絶えず之を産出するを以て、一群の數は次第に増加す。

十一8① (略) 故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。

十一38② (略) 其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様に御座候。

十一113⑨ (略) 學校の經費を議するに當り、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。

十二36① (略) 隨ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、學校ノ増設ヲ要スルコ

ト日一日ヨリ急ナリ。

十二43⑥ 太古人口少く、(略)。人口やうやく増加し、(略)。

十二44⑩ 蕨の取入高は年々増加して(略)。

十二46④ 栽培法の如きも、(略)、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

十二60① (略)、首府の人口も年々著しく増加する勢なれば、(略)。

そうかする「増加」(サ変) 2 増加ス
増加する「一シ」

十二21④ (略)、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、(略)。

十二35① 就學兒童ノ數ガ年々増加シ、(略)。

そうかん「壯觀」(名) 3 壯觀

九96② 此の湖の落口は華嚴瀧となる。直下七十丈、壯觀名狀すべからず。

十二65⑤ 獨逸帝國は創建以來年尚淺ければ、首府の壯觀の未だ英佛二國に及ばざるものあるは(略)。

十二69⑤ 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、遠く之を望めば、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

そうかん「壯觀」(形状) 1 壯觀

十二75⑩ 最も壯觀なるは華嚴にして、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

そうかん・す「總管」(サ変) 1 總管す

十二55⑥ 清國政府はこゝに總督を置いて滿洲全部を總管し、(略)。

そうけい「總計」(名) 1 總計

十二34⑨ (略)、之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、(略)。

そうけんいらい「創建以來」(名) 1 創建以來

十二65④ 獨逸帝國は創建以來年尚淺ければ、(略)。

そうこ「倉庫」(名) 1 倉庫

十二14⑩ サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫛ヲ附ケタリ、(略)。

そうこん「草根」(名) 1 草根

十二69⑥ (略)、果實・草根を始め、凡そ取つて以て食ふべきものは殆ど餘す所なし。

そうさく「造作」(名) 1 造作

十二15① サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫛ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略)。

ぞうさない「造作無」(形) 1 造作ナ
イ「一ク」

十二13② (略)、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切斷スル。

速に降るべし。』と告げよ。(略)。」

と。翌日壯士十餘人、勝商を圍みて城門に到る。

そうじ「掃除」(名) 2 掃除 ヲふきそうじ

十二61⑨ 街路は掃除最もよく行くとゞきて、(略)。

十二89⑤ 凡そ家内の掃除は座敷・居間・臺所のみならず、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。

そうし ヲえそうしや

そうして「接」 5 サウシテ さうして

二53① トナリノワルイ オヂイサ

ンハ (略)、犬ヲカリニキマシ

タ。サウシテソノ犬ヲツレテ

イツテ、ハタケノスミヲホツテ

ミマシタガ、(略)。

六21② (略)、まづ象を船にのらせました。さうして象の重みで船の水につかつた所にしるしを附けました。

六21⑧ それから象をおろして、その代りに石をたくさんつみました。さうして前にしるしを附けておいた所まで船が水につかつた時に、その石をおろして、(略)。

八21⑤ 「居るさうだ。さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくないといふが、(略)。

八65⑤ 二月頃種ヲ蒔イテ、六月頃刈取ルノデス。サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、(略)。

ぞうしゃ ぐんどうとうぞうしゃ

そうしよく「裝飾」(名) 1 裝飾

十二115 1 図 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、何の用にか立たん。

ぞうしよくす「増殖」(サ変) 1 増殖

ス「一スル」

十二53 6 図 (略)、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。

そうしん「送信」(名) 1 送信

八48 図 送信

ぞうしんす「増進」(サ変) 1 増進す

「一セ」

十二104 6 図 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。

そうしんとうむしゃ「送信當務者」(名)

1 送信當務者

八48 図 送信當務者

そうす「奏」(サ変) 1 奏す「一セ」

十二95 1 図 其の時齊の有司進みて戲樂を奏せしかば、(略)。

ぞうす「藏」(サ変) 2 藏ス 藏す

「一シース」

十97 8 図 (略) 正倉院アリ。帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。

十二48 2 図 四方の海の底廣く、魚介さまぐ、海草の 無限の富を藏したり。

ぞうすい「増水」(名) 1 増水

九72 6 図 二十七日の夜中頃より追

々増水、二十八日は終日大暴風雨にて、(略)。

そうすう「総数」(名) 2 總數のり

くみそうすう

八83 4 図 地球上に住む人類は總數十

六億ありて、(略)。

十一5 6 図 蜜蜂は(略)、一群の總數數萬に及ぶものあり。

ぞうせつ「増設」(名) 1 増設

十二36 1 図 随ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、學校ノ増設ヲ要スルト日一日ヨリ急ナリ。

ぞうせんじよ「造船所」(名) 2 造船所

十二15 3 図 我が國ノ造船所デ、最モ規模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ、中ニモ横須賀ト呉ノ最大ナモノデア

ル。

十二15 5 又私設デハ三菱・川崎等ノ造船所ガ最モ大キイ。

ぞうせんのはなし「課名」2 造船ノ話

十二目 4 第三課 造船ノ話

十二11 8 第三課 造船ノ話

そうそう「草草」(感) 4 草々

九13 3 図 去月二十五日御差出の續物二十反本日到着。(略)。先は重ねて御註文まで。草々。

九71 7 図 連日の大雨に候へば、(略)。(略)。取りあへず御見舞まで。草々。

十一91 8 図 拜啓、來る八日(略)。(略)。(略) 小杉事務官も御臨席のはずに御座候。草々。

十一40 10 図 一別以來御變りもこれ無く候や。(略)。(略) 臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候間、御覽下され度候。草々。

そうそつ「走卒」(名) 1 走卒

十二86 1 図 四十七士の事蹟は兒童・走卒も之を知らざるはなく、(略)。

そうだい「壯大」(形状) 5 壯大

十一36 5 図 (略)、總督官邸をはじめ建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程に御座候。

十二54 6 図 市街建築物及び埠頭等頗る規模の壯大なるを見る。

十二59 6 図 テームスとセースとは(略)、之に架したる橋は何れも壯大にして、市の美觀を添ふ。

十二60 9 図 佛國の長き歴史を飾れる壯大なる建築の數々高く中空にそびゆるのみならず、(略)。

十二65 1 図 凱旋門は有名なるナポレオンの計畫に成れるものにて、壯大なること世界第一と稱せらる。

ぞうだいす「増大」(サ変) 1 増大す

「一セ」

十二49 5 図 近年ぐみに産額の増大せしは北陸の 福井・石川・富山なる 羽二重織の輸出品。

そうたつ ぐでんぼうそうたつ

そうだつ ぐせんぐくそうだつ

そうたつし「送達紙」(名) 1 送達紙

八48 図 (略) 發信人居所氏名を送達紙の外部に表はさんとするものは

(略)

そうだん ぐこそうだん

そうだんす「相談」(サ変) 2 相談す

「一スル・一セ」

九59 9 図 「我は天氣にも相談せず、毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。」

九59 10 図 (略)、毎日運動するが故に、醫者にも相談する必要なきなり。

そうちよう「早朝」(名) 1 早朝

十一73 3 図 翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。

そうとう「相當」(名) 2 相當 ぐみぶ

んそうとう・みぶんふそうとう

十一9 9 圖や畫は別に堅い木に彫り、寫眞は銅版に彫りつけて、相當の場所に入れる。

十一93 3 図 物の價は(略)、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。

そうとく「總督」(名) 1 總督 ぐとう

そうとくふ

十二55 6 図 清國政府はこゝに總督を置きて滿洲全部を總管し、(略)。

そうとくかんてい「總督官邸」(名) 1 總督官邸

十一36 5 圖 當臺北市街の如きは、(略)、總督官邸をはじめ建築物の壯大なる、内地にても見る能はざる程

に御座候。

そうひよう「総費用」(名) 1 總費用

十三6 図 其の工事の總費用は百九十萬圓餘にして、(略)。

そうめん「素麵」(名) 3 さうめん

四三2 1 図 それではうどんやさうめんは何でつくりですか。」

四三2 7 図 「それではごはんにたく

麦と、うどんやさうめんにする麦は同じですか、ちがひますか。」

四三3 8 図 「いいえ、うどんやさうめ

んにする麦は小麥で、(略)。」

そうめんせき「総面積」(名) 2 總面積

十二45 9 図 耕地の面積廣大なるが如くなれども、總面積の約一割五分に過ぎず。

十二45 10 図 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、(略)。

そうもく「草木」(名) 3 草木

九66 2 図 若し空氣なからんには、人も鳥獸も草木も多く生物は其の生を保つこと能はざるべし。

十47 2 図 模様には(略)、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。

十二79 4 図 (略)、前面の一島草木

青々として、花開き、鳥さへつり、(略)。

そうりょうじ「總領事」(名) 1 總領事

十二55 6 図 滿洲政治・交通の中心た

る奉天は、(略)。(略)、我が國亦總領事を置けり。

そうれい「壯麗」(名) 1 壯麗

十二60 8 図 巴里の市街は壯麗を以て聞ゆ。(略)壯大なる建築の数々高く

中空にそびゆるのみならず、(略)。

ジャンゼリゼーの大通の如きは、世界最美の街路と稱せらる。

そうれい「壯麗」(形状) 2 壯麗

十100 7 図 (略)、多武峯ナル談山神社ニ達ス。社殿壯麗ニシテ、關西日光ノ稱アリ。

十二63 2 図 壯麗なる馬車・自動車の

多きは巴里を第一とし、(略)。

そうろう「候」(四) 1 候「一フ」

十53 5 図「されば思ひ出したる事の候。

そうろう(助動) 163 候 候ふ「サフラハ・サフラフ・サフラへ」ひござそうろう

九12 8 図手 (略)、此の地方には實行よろしかるべしと存ぜられ候間、(略)。

九13 2 図手 (略)、二口とも本月十五日までに御送り相成度願上候。

九13 9 図手 (略)、本日通運便により汽船平安丸にて發送いたし候。

九14 1 図手 (略)、御申越の期日までには少々間に合ひかね候事と存候。

九14 1 図手 (略)、御申越の期日までには少々間に合ひかね候事と存候。

九14 2 図手 本月二十日までには必ず

發送仕るべく候。

九20 8 図手 「(略)、母は如何にも残念に思ひ候。

九20 9 図手 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。

九20 10 図手 一命をすてて君に報ゆる爲には候はずや。

九21 4 図手 村の方々は(略)。何にても多んりよなく言へ。」と親切におほせ下され候。

九21 6 図手 (略)、此の胸は張りさく

るばかりにて候。

九21 7 図手 八幡様に日参いたし候も、(略)。

九21 8 図手 (略)、そなたがあつば

れなるてがらを立て候様との心願に候。

九21 8 図手 (略)、そなたがあつば

九22 1 図手 (略)、よく御察しこ

れあり度候。

九43 1 図手 十二日附の御手紙今朝到着拜見仕候。

九43 1 図手 少しも御障なく入らせられ候由、一同安心仕候。

九43 2 図手 (略)、一同安心仕候。

九43 4 図手 姉上も(略)、四五日

べて、(略)。

九43 10 図手 (略)、本年は水も十分に御座候間、少しも御案じ下さるまじ

く候。

九44 1 図手 暑さ日に増し候へば、(略)。

九44 4 図手 (略)、御歸りの程御待ち

九70 10 図手 連日の大雨に候へば、(略)。

九71 1 図手 (略)、大川に近き御地は如何と案じ居り候ところ、(略)。

九71 4 図手 (略)、御地方は非常の出

水にて、死傷も少からざる由承知致し驚き入り候。

九71 6 図手 御老人・御子供衆も御大勢の事故如何と御案じ申し居り候。

九72 1 図手 御見舞狀有りがたく拜讀仕候。

九72 3 図手 (略)、家族一同無事に御

座候間、御安心下され度候。

九72 5 図手 もはや新聞紙にて御承知の事とは存候へども、(略)。

九72 6 図手 (略)、當時のあらましを

九72 10 図手 (略)、同夜は近村の者一

人も眠につきたる者これなく候。

九73 2 図手 (略)雨も止み、風も静

まりて、日の光さへ見え出し候へば、(略)。

九73 9 図手 (略)、隣村にて早がねを

打出し候。

九七三〇(國) 驚きて飛出し候へば、川

上の堤防切れ、(略)。

九七四〇(國) (略)、救をもとむる聲か

まびすしく候故、是は大變なりと、

(略)。

九七五〇(國) (略)、全家立退の用意

致し居り候中、夜も明けはなれて、

(略)。

九七六〇(國) (略)、水は次第に減退致

し候。

九七七〇(國) 田畑の作物には多少の損

害これあり候へども、(略)。

九七八〇(國) (略)、先以て不幸中の幸

と喜び居り候。

九七九〇(國) 全村百餘戸の中二十戸

も押流され候。

九八〇〇(國) 死者四人、傷者四五十人

もこれあり候。

九八一〇(國) (略)、當村に引取りて保

護を致し居り候者も百二十名の多

きに上り候。

九八二〇(國) (略)百二十名の多き

に上り候。

九八三〇(國) 取急ぎ御禮かたがた右御

報申上候。

九八四〇(國) (略)御入營、軍務に服

せられ候事、御一家を始め一村の名

譽に御座候。

九八五〇(國) (略)、私も明年は是非と

も御仲間入致し度と今より相樂しみ

居り候間、(略)。

九八六〇(國) (略)、時々營内の様子御

報知下されたく願上候。

十二七二〇(國) 當日參上御見送致すはず

に候へども、(略)。

十二七三〇(國) (略)、手放し難き商用こ

れあり候へば、(略)。

十二七四〇(國) (略)、手紙を以て御祝ひ

申上候。

十二七五〇(國) 手塚、(略)、大將義仲^{よしかね}の

前に行き、「光盛、曲者の首取つて

候。

十二七六〇(國) 何者にてか候ふらん。」

十二七七〇(國) 樋口は一目見て、「あな、

むざんや、實盛にて候。」

十二七八〇(國) 樋口「(略)。實盛日頃申

し候に、『戦場に出でん時は髪を染

めんと思ふなり。

十二七九〇(國) 悲しきは老の白髪なり。』

といひしにたがはず、墨を塗りて候。

十二八〇〇(國) 拜啓、入營後はや二箇月

に相成候。

十二八一〇(國) 色色取りまぎれ、つひ

く御無音に打過ぎ候。

十二八二〇(國) 毎週土曜日の午後には

(略)の清潔検査これあり候。

十二八三〇(國) 兵器は軍人のたましひに

候へば、(略)。

十二八四〇(國) (略)、其の手入は最も念

入に致し候。

十二八五〇(國) 兵舎内にては(略)等堅

く禁ぜられ居り候。

十二八六〇(國) 多人数の共同生活に候へ

ば、是はもとより當然の事に候へ

ば、是はもとより當然の事に候。

十二八七〇(國) (略)、學科は夜分又は雨

天等を利用して學習致し候。

十二八八〇(國) (略)、又學科も(略)餘

りむづかしとも覺え申さず候。

十二八九〇(國) (略)、水曜日も(略)よ

り夕食前まで外出を許され候。

十二九〇〇(國) 兵營内の酒保には日用品

・飲食物等を販賣致し居り候へば、

(略)。

十二九一〇(國) (略)忠臣・義士に關す

る講談等もこれあり、面白く有益に

存候。

十二九二〇(國) 中隊長殿の何事にも注意

の周密なるは隊中一同感謝致し居り

候。

十二九三〇(國) (略)、又重き者は營倉に

入れられ候由承り申候。

十二九四〇(國) (略)、又重き者は營倉に

入れられ候由承り申候。

十二九五〇(國) 入營當時は友人も少く、

生活も一變致し候事とて、(略)。

十二九六〇(國) 入營當時は(略)、多少

不自由を感じ候へども、(略)。

十二九七〇(國) (略)、昨今は友人も出來、

營内の生活にもなれ、日々樂しく暮

し居り候。

十二九八〇(國) (略)田島農學士の耕地

整理に關する講話これあり候。

十二九九〇(國) 同學士は(略)、學理に

ば、(略)。

十三〇〇〇(國) (略)、其の講話は定めて

有益なる事と存候。

十三〇一〇(國) 御村も(略)、整理の必

要これあり候様存ぜられ候間、(略)。

十三〇二〇(國) 御村も(略)、整理の必

要これあり候様存ぜられ候間、(略)。

十三〇三〇(國) (略)、御差支これなく候

はば、(略)、御來會相成候ては如何。

十三〇四〇(國) (略)、御差支これなく候

はば、(略)、御來會相成候ては如何。

十三〇五〇(國) (略)御立寄下され候は

ば、小生も御同行致すべく候。

十三〇六〇(國) (略)御立寄下され候は

ば、小生も御同行致すべく候。

十三〇七〇(國) 御手紙拜見仕候。

十三〇八〇(國) 來る八日講話會これあり

候由にて御誘ひ下され(略)。

十三〇九〇(國) (略)御誘ひ下され有り難

く存候。

十三一〇〇(國) (略)、何れ熟考の上實行

せんと申合せ居り候事とて、(略)。

十三一〇〇(國) (略)其の道の専門家の

講話を承るは、大いに参考に相成る

べしと存候。

十三一〇〇(國) 當日は本村の重なる人々

も精々誘ひ合せ、是非參會致すべく

候。

十三一〇〇(國) 尚々久しく拜借致し居り

候農業一夕話、まことに面白く通讀

致し候。

十三一〇〇(國) 尚々久しく拜借致し居り

候農業一夕話、まことに面白く通讀致し候。

十一 37 候 明後日御面會の節返上致すべく候。

十一 35 候 一別以來御變りもこれ無く候や。

十一 35 10 候 御地は今尚冬の季節と存候。

十一 36 1 候 當總督府の經營も着着其の効を見るに至り候事、(略)。

十一 36 2 候 (略)、かねて御承知の通りに候處、(略)。

十一 36 2 候 (略)、いよく實地見聞致候へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。

十一 36 3 候 (略)、いよく實地見聞致候へば、聞きしにまさる進歩に驚入候。

十一 36 8 候 北方の臺灣神社に參拜すれば、そろに當年を追懷するの情にたへず候。

十一 36 9 候 今や西部縦貫鐵道も全部開通致候事として、(略)。

十一 37 1 候 (略)、産業の發達は益々多望に相成候。

十一 37 2 候 先月は官命により南部地方へ出張致候。

十一 37 5 候 (略) 支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。

十一 38 1 候 茶は主として北部に産し候。

十一 38 3 候 米田は全平地の二分の一を占め居候。

十一 38 6 候 (略)、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覺え申候。

十一 38 8 候 (略)、南部には榕樹も身受け申候。

十一 39 4 候 (略)、是にて竹筏といふ臺灣特有の船を造り候。

十一 39 6 候 又竹を原料として竹紙を製造致居候。

十一 39 9 候 南部地方には製糖業盛に行はれ居候。

十一 40 2 候 (略)、中には直径二十尺餘、一樹にて千五百尺の材積を得るものもこれあり候由、(略)。

十一 40 3 候 (略)、山林の富のみにても無盡藏と申すべく候。

十一 40 4 候 全島の住民は約三百餘萬と申候。

十一 40 6 候 (略)、著人は此の外にて約十一萬と申す事に候。

十一 40 8 候 (略)、著人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。

十一 40 9 候 當總督府にて出版相成候臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候間、(略)。

十一 40 10 候 (略) 郵便にて差出候間、御覽下され度候。

十一 40 10 候 (略) 郵便にて差出候間、御覽下され度候。

十一 40 10 候 (略) 郵便にて差出候間、御覽下され度候。

十一 61 10 候 拜啓、老父事本年滿六十歳に相違候に付、(略)。

十一 62 3 候 (略)、心ばかりの祝宴相開き、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)。

十一 62 4 候 (略)、同日午後五時御光來下され候はば光榮の至に存候。

十一 62 4 候 (略)、同日午後五時御光來下され候はば光榮の至に存候。

十一 62 8 候 拜啓來る十五日は亡父七回忌に相當り候に付、(略)。

十一 62 9 候 (略) 西方寺に於て法會相營度候間、(略)。

十一 62 9 候 (略)、御多用中恐入候へども、御參列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

十一 62 10 候 (略)、御參列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

十一 62 10 候 (略)、御參列成し下され候はば、有り難く存じ奉り候。

十一 63 3 候 拜啓、益々御健勝實し奉り候。

十一 63 4 候 かねて御贊同下され候故近藤大尉記念碑、いよく出來上り候については、(略)。

十一 63 5 候 かねて御贊同下され候故近藤大尉記念碑、いよく出來上り候については、(略)。

十一 63 6 候 (略)、來る六月三十日(土曜日)午後二時建碑式舉行致候間、(略)。

十一 63 7 候 (略)、御光臨の榮を賜

はり度、此段御案内申上候。

十一 63 8 候 追て準備の都合もこれ有り候間、(略)。

十一 63 9 候 (略)、御來會下され候はば、(略) 御一報下され度候。

十一 64 1 候 (略)、御來會下され候はば、(略) 御一報下され度候。

十一 95 4 候 (略)、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。

十一 95 5 候 (略)、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。

十一 95 6 候 先般御手紙にて御近況を承知致し、御なつかしく存候。

十一 95 7 候 其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

十一 95 9 候 (略)、見聞取交へ、新版圖の狀況大略御報知申上候。

十一 96 1 候 (略)、流水の流れ來る事もこれあり候へば、(略)。

十一 96 5 候 西海岸の眞岡港のみ唯一の不凍港として僅かに内地との交通を保ち居候。

十一 96 6 候 併し夏は氣候温和にし、至つて涼しく候。

十一 96 7 候 南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、平野少く候へども、(略)。

十一 96 8 候 南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、平野少く候へども、(略)。

十一 97 1 候 大泊は(略)、全島第

一の良港に候。

十一973(候) 是より一條の大道遠く

北へ通じてロシヤ領に入候。

十一976(候) (略)、輕便鐵道も出來居候。

十一978(候) (略)、近時道路新に開

け、交通大いに便利に相成候。

十一9710(候) (略)、四箇所に境界石

を置きて、分明に相成居候。

十一986(候) (略)、鯨と鯨との漁利

は殊に多く、鯨も亦少からず候。

十一998(候) (略)こゝに集る臘肉

獸は數千頭にも達することこれあり

候。

十一1002(候) (略)、又牧畜にも適し

候。

十一1007(候) (略)、又山脈の兩がは

には石炭層各所にあり、殆ど無盡藏

に候へども、(略)。

十一1008(候) (略)、未だ盛に採掘に

着手せらるゝには至らず候。

十一10010(候) ロシヤにて早くより開

拓に力を用ひたるは主として五十度

以北に候。

十一1012(候) (略)、諸種の經營追々

成功致候へども、(略)。

十一1013(候) (略)、今後尚着手すべ

き事は多々これ有り候。

十一1014(候) 新版圖の事に候へば、

本島の開拓は我々國民の最も力を用

ふべき所に候。

十一1015(候) (略)、本島の開拓は我

々國民の最も力を用ふべき所に候。

十一1017(候) (略)、此の極北の寒地

も今ははや生れ故郷の如き心持に相

成候。

十一1018(候) 極南暑熱の御地にても

同じことと存候。

そえる「添」(下) 2 そへる 添へ

ル「へ」

六38 川の上にかけた橋、橋の下に

立つてつりする人など、それく川

の景色をそへてゐる。

十一665 例へば動物質ノ滋養品ニハ

植物質ノ食物ヲ添へ、(略)。

そがきようだい「曾我兄弟」(人名) 1

曾我兄弟

七451(圖) おほよそ家の紋どころ、

(略)。(略) いほりもかうは孝行の

曾我兄弟に知られたり。

そがのいるか「蘇我入鹿」(人名) 1

蘇我入鹿

八497(圖) (略)、皇極天皇ノ御代、蘇

我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦

夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。

そぐ「殺」(四) 1 そぐ「一殺」

十99(圖) 森林は能く暴風をさへ、

其の力をそぐを以て、土砂の飛散を

防ぎ、(略)。

そく「賊」(名) 6 賊

七44(圖) 大人トナリテ、君ノ御タ

メニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシ

メントナリ。

九510(圖) 尊こゝにおいて天叢雲劔を

抜きて、草を薙拂ひ給ふに、火勢却

つて賊の方に向ひ、(略)。

九61(圖) (略)、尊は難をまぬかれ給

ひ、なほ進みて賊を討滅し給へり。

九65(圖) 尊これより引返して近江の

賊を討ち給ひしが、(略)。

十一706(圖) 約束の時日を違ふが如

きは時間の賊なり。

十二313(圖) 上毛野形名、蝦夷を討ち

て(略)。(略) 賊之を聞きて、城

中兵尚多からんと思ひ、(略)。

そくしやう「賊將」(名) 1 賊將

十一1054(圖) サキニ蜀ノ南方亂レシ

ヤ、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕へ、

(略)。(略) 賊將歎ジテ、「公

ハ天授ナリ、敵スベカラズ。」トテ、

マタ反スルコトナカリキ。

そくす「属」(サ変) 2 属ス「一ス」

十一335(圖) 巡洋艦ハ(略)。(略) 筑

波・生駒・出雲・千歳ナドハ之ニ屬

ス。

十一344(圖) 通報艦ハ(略)。(略) 最

上・淀・千早・龍田等ハ之ニ屬ス。

そくぞく「統統」(副) 3 續々

十4310(圖) (略) 英國ヨリ註文アリシ

ヲ始トシ、ドイツ・アメリカ等ノ諸

國ヨリモ續々註文ヲ受ケ、販路次第

ニ開ケ、(略)。

十二69(圖) (略)、打出す砲彈よく命

中して、敵艦續々火災を起し、火煙

海をおほひて敵を包めり。

十二66(圖) 又かつて栗鼠の大群ウラ

ル山中の一都會に現れしが、一隊又

一隊、續々相次ぎ、三日三夜引きも

切らず、(略)。

そくど「速度」(名) 5 速度

十一281(圖) (略)、今や列車の速度

は一時間七十五哩以上に及ぶものあ

り。

十一334(圖) (略)、何レモ多量ノ石炭

ヲ積ミ、大ナル速度ニテ長時間航海

スルコトヲ得。

十一343(圖) 故ニ艦體甚ダ輕ク、速度

亦大ナリ。

十一345(圖) 驅逐艦ハ艦體最モ輕ク、

速度最モ大ニシテ、(略)。

十一348(圖) 水雷艇ハ形體甚ダ小ナレ

ドモ、速度驅逐艦ニ次ギ、(略)。

そくども「賊共」(名) 1 賊ども

九56(圖) (略)、ここにありし賊ども

いつはり降り、(略)、尊の野に入り

給ふを見て、火を放ちて焼き奉らん

とせり。

そくりよく「速力」(名) 2 速力 ぐぜ

んそくりよく

十一263(圖) 都會の地には電車・自動

車等も次第に多く行はれて、ひとへ

に速力を競ふ世とはなれり。

十一483 追手が接近すれば速力を速

め、後れゝば脚のきざみを短くする。

そこ「底」(名) 10 ソコ そこ 底

ひたにそこ・ふなぞこ

五132 (略)「美しい川だ。」といつ

て、ほめました。(略) きたない物

らあたり

八二〇 ある日一人の友だちは、この農夫と野原の草の上に坐つて、いろく世間話をしてゐたが、そこらあたりに飛んでゐた雀を見て、(略)。

そこらいちめん「其処一面」(名) 1

そこら一面
九七〇 (略)、翌朝起きて見れば、何時の間に雪に變つたか、そこら一面銀世界になつてゐることもある。

そし「疎食」(名) 1 疎食

十二七二 (略) 孔子曰く、「疎食をくらひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。」

そしき「組織」(名) 1 組織

十二一〇二 (略) 我が國の地方自治團體は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。其の土地に廣狹の差あり、其の組織に繁簡の別ありといへども、(略)。

そしき「組織」(サ変) 5 組織す

「シース・ーセ」

十二四九 (略) 露國が連敗の勢を回復せん爲、本國に於ける海軍の幾んど全勢力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、(略)。

十二一〇五 (略)、若しくは青年會を組織して、(略)、人心の作興に務むるが如きは、(略)。

十二一〇六 (略) 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。

十二一〇七 (略) 衆議院は一定の選舉資格

を有する臣民の公選したる議員を以て組織し、(略)。

十二一三三 (略) 此の如き人の組織せる軍隊は即ち鳥合の衆に同じ。

そしる「謗」(四) 3 そしる「一リール」

十二五二 (略) まして戦場にては、進まんとすれば、大人げなしとあざけり、退く時には、今はかなふまじとそしる。

十二七二 (略)、コロンプスの暴舉をあざける者、皇后の無謀をそしる者、口々に語り合へり。

十二八〇 (略)、前のそしりし者、怒りし者、罵りし者、泣きし者、皆争ひてコロンプスを歡迎し、(略)。

そせん「祖先」(名) 7 祖先

六八五 (略)、遠き祖先のをしへをも守りてつくせ、家のため、國のため。

十二六九 (略) 身を立て、父母をあらはすも、産を破り、祖先をはづかしむるも、(略)。

十一一六 (略) 祖先の遺風つぎく

て、同胞すべて六千萬。

十二二九 (略) 我等臣民も亦祖先の遺風に從ひ、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

十二三二 (略)、稻生恆軒の妻の常に祖先の祭に心を盡したる、(略)、皆後世女子の模範とすべき德行なり。

十二一六 (略)、大君の邊にこそ死

なめ、顧みはせじ。といふ忠勇の精神は我等が祖先の教訓なり。

十二一七五 (略) 我等は(略)、既に祖先の事蹟を學び得たること多し。

そせんいらい「祖先以來」(名) 1 祖先以來

十二三二 (略) 「良人今獨り身を全うして、祖先以來の勇名を辱しめ給ふか。」

そそ「祖宗」(名) 2 祖宗

十二二八 (略) 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

十二一四 (略) 「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚ル。」

そそ「注」(四) 7 ソ、グ、そ、ぐ

注グ 注グ「ギ・グ」ひふりそそぐ

六八五 (略) 淀川ハイクスデニモ分レテ海ニソ、グ。

九一六 (略) 利根川ノ本流ハ東南ニ流レテ(略)。下總ノ手賀沼・印旛沼・長沼等ノ水ハ南ヨリ之ニ注ギ、(略)。

九一六 (略)、常陸ノ霞浦・北浦ノ水ハ北ヨリ之ニ注グ。

十二二九 (略) 瀬田川は下流宇治川となり、淀川となりて、大阪に至りて海に注ぐ。

十七一四 (略) 数日の後、水夫は此の少女の手に熱き感謝の涙をそそぎて、各我が家に歸りたりとぞ。

十一八六 (略) 工女ハ(略)、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。

十二五九 (略) 其の後方の山々は皆我が同胞の血をそそぎし地ならざるはなし。

そそ「雪」(四) 1 雪ぐ「グ」

十一一七 (略) 此のうらみ忘れ難く、越王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

そそ「形」(形) 1 そ、つかしい

六七一 (略) 字を書くのに、筆をおとしたり、すみをこぼしたり、書きそこなつて、紙をたくさんごにしたりするやうな、そ、つかしい子供もございました。

そそ「漫」(形状) 2 ソ、マ、ロ、そ、ろ

十一九七 (略) 大佛殿・興福寺高クソビエ、西ニハ西大寺・藥師寺等ノ堂塔アリ。人ヲシテソ、マ、ロニ佛教ノ盛ナリシ奈良時代ヲオモハシム。

十一三六 (略) 北方の臺灣神社ヲ參拜すれば、そ、ろるに當年を追懷するの情にたへず候。

そだつ「音」(五) 2 ソダツ「ツ」

五三〇 (略) 茶ノ木ノ高サハ(略)、アタ、カイトコロニヨクソダツ木デス。

五三〇 (略) ヨクソダツ茶ノ葉ハ長サガ二寸バカリモアリマス。

そだつ「育」(下二) 1 育つ 「一テ」

十一62 図 働蜂の若きものは内に居て幼蟲を育て、又は其の居室を営み、(略)。

そだてあく「育上」(下二) 1 育て上ぐ 「一グル」

十二91 1 図 主婦は老人にいたはりかしづく外、幼児を育て上ぐる大任あり。

そだてかた「育方」(名) 1 育て方

十85 9 西洋の馬がおとなしくて、日本馬の馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、(略)。

そちら「其方」(代名) 1 ソチラ

一48 4 ワタクシガコチラノハシヲモツカラ、アナタハソチラノハシヲオモチナサイ。

そつぎょう「卒業」(課名) 2 卒業

十二目15 第二十八課 卒業

十二117 9 第二十八課 卒業

そつぎょう「卒業後」(名) 1 卒業後

十一113 4 図 (略)、兒童は(略)、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。

そつぎょう「卒業」(サ変) 1 卒業

す 「一シ」

十58 1 図 (略)、又學科も小學校を卒業したる者には餘りむづかしとも覺え申さず候。

そつくり(形状) 1 そつくり

八12 9 図 この寫眞で見ると、おかあさんの小さい時分にそつくりです。

そっこうじょ「測候所」(名) 5 測候

所 ぐかくそっこうじょ

十二16 5 図 故に文明諸國に於ては何れも氣象臺・測候所を置いて、日々の氣象を調査す。

十二16 9 図 南臺灣の熱帶地方より北樺太の寒帶に近き地方まで、全國に凡そ百箇處の測候所あり。

十二16 10 図 各地の測候所は其の地方の氣象觀測を毎日三回中央氣象臺に報告し、(略)。

十二17 7 図 是等の豫報は氣象臺・測候所を始め、官廳・諸役所等の前に揭示せらるゝを以て、(略)。

十二18 3 図 又一地方に荒模様ある時は、測候所は地方暴風雨警報を發して之を豫告し、(略)。

そつす「卒」(サ変) 1 卒ス 「一ス」

十一106 1 図 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。

そつと(副) 1 ソツト

四40 7 スコシタツテカラ、ソツトフタヲアケテ、外ヲ見ルト、何ダカヤウスガチガツテキマス。

そで「袖」(名) 5 袖 ぐつつそで・み

そで 九22 4 図 みのうちより 官人の袖引止めて、大江山 いく野の道の遠ければ、ふみ見ずといひし言の葉は、(略)。

十55 5 図 (略)、さめぐと泣きたれ

ば、一座皆よろひの袖をしぼらざるはなかりき。

十89 7 図 (略)、藤房は聲くもらせて、いかにせん、頼むかげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。

十一13 8 図 御供仕うまつれる警固の武士もよろひの袖をしぼらざるはなかりき。

十二25 2 図 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへせし人をしのびつゝ。

そと「外」(名) 24 ソト そと 外

三3 6 ウツクシイサクラノハナガ、マドノソトカラノゾイテ、(略)。

三5 2 コンド ハウツクシイ小トリガマドノソトカラノゾイテ、(略)。

三5 4 図 「(略)、ソナニウチニバカリキナイデ、チツトソトヘデテ、イツシヨニウタヲウタヒマセウ。」

三11 8 ウチノ人ガミンナソトヘデルトキニハ、オバアサンガオルスキヲナサイマス。

三23 2 私はそとがかたくて、中がやはらかです。

三37 2 父のいふとほり、そとへはなしたら、あをく光りながら、しづかにとんでいきました。

四40 8 スコシタツテカラ、ソツト、フタヲアケテ、外ヲ見ルト、

(略)。

四67 6 今モ外カラカヘツテ、ス

グココヘ來テキル所デス。

五2 5 (略)、一同あまの岩戸の外にあつまつて、おかぐらをおはじめになりました。

五42 1 マドカラ外ヲ見テキルト、山モ川モ野原モ林モ後ノ方ヘトンデ行クヤウニ見エマス。

五43 7 文太郎ハフシギニ思ツテ外ヲ見ルト、汽車ハハシノ上ヲ通ツテキマシタ。

五51 1 西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、(略)。

五51 2 (略)、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲノコス。

七19 5 鳥のゑんどうがかきの外からこゑをかけて、(略)。

七32 5 蠶の口の中には小さいくだが一つある。そのくだから出すねぼつたしるが外へ出ると、(略)。

八94 3 図 (略)、朝日・夕日にかゞやきて、遠く數里の外よりも望み見ることを得べし。

十25 9 図 (略)、良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、信ハ外ニ兵ヲ用ヒテ、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

十一6 3 図 働蜂の若きものは内に居て幼虫を育て、(略)、力強く壯なるものは外に出て花の蜜を吸來る。

十一49 4 四日目の朝、大將は何心なく外を眺めてゐると、(略)。

十一531 ㊦ ヨク笑ハント欲スルモノハ、(略)、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

十一1109 上流の婦人は四方を閉ぢた奥に乗つて、外から見られない様にする。

十二339 ㊦ 外温順・愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、(略)。

十二912 ㊦ 男子は外に出でて不在勝のものなれば、幼児は母の感化を受けること最も多し。

十二9710 ㊦ 國民は個人の集合より成るものなれば、國民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。

そとがわ「外側」(名) 2 外ガハ 外側
八396 ㊦ 箱ハウスキ木片ヲ折り、其ノ上ニ紙ヲ張りテ造り、外ガハニ藥ヲ塗ルナリ。

十二141 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。

そなう「備」(下二) 3 備フ 備ふ
「一へ」

十一89 ㊦ 蜜蜂の群集生活を營むを得るは、(略)、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、(略)。

十一3110 ㊦ 戦艦ハ(略)。故ニ何レモ大ナル大砲ヲ備へ、(略)。

十二978 ㊦ (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、國民としても之に相應する品格を備へざるべからず。

そなえる「供」(下二) 2 ソナヘル
そなへる 「一へ」

四746 ㊦ (略)、オヒナサマヲカザリマシタ。(略)、又ソノ次ノダンニハヒシモチトオゼンヲソナヘテ、(略)。

六744 ぬさの前にはおみきやもちや魚がそなへてあります。

そなた「其方」(代名) 3 そなた
九206 ㊦ 「聞けば、そなたは豊島トヨシマの戦にも出ず、(略)」とのこと、母は如何にも残念に思ひ候。

九215 ㊦ 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、(略)。

九217 ㊦ (略)、そなたがあつぱれなるてがらを立て候様との心願に候。

そなわる「備」(四) 2 備ル 具る
「一ラーレ」

十635 ㊦ (略)、今ヤ足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、學校・病院・銀行等皆備ラザルナシ。

十二622 ㊦ (略)、衛生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。

その「園」 ㄱはなぞの
その「其」(連体) 586 ソノ その 其ノ 其

二55 ㊦ 「オトヨサンノハドレニシマセウ。」「ワタクシニハソノキイロナノヲクダサイ。」

二152 シタヲミルト、ミヅノナカニモサカナヲクハヘタ犬ガキマス。ソノサカナモホシクナツテ、(略)。

二192 オハナハモミヂノハヲ一マイヒロヒマシタ。(略)、カミヲソノカタチニキリマシタ。

二193 イロモソノトホリニツケマシタ。

二487 一サツハシウシンノ本、一サツハカキカタノオデホン、二サツハトクホンノ一トニデス。ソノホカニ、(略)イタダ

イタ本ガ一サツアリマス。

二524 ㊦ (略)、オカネヤラ、キモノヤラ、ソノホカタカラモノガタクサンデマシタ。

二531 トナリノワルイオヂイサンハ(略)、犬ヲカリニキマシタ。サウシテソノ犬ヲツレテイツテ、(略)。

二542 オヂイサンハ(略)、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。

二547 ヨイオヂイサンハ(略)、犬ヲウヅメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲ一本ウエマシタ。

二552 ソノマツノ木ハズンズン大キクナツテ、(略)。

二577 ヨクノフカイオヂイサンハマタコノウスヲカリテイツテ、(略)。マタオコツテ、ソノウ

スヲコハシテ、(略)。

二585 ㊦ (略)、ソノウスヲコハシテ、火ニクベテヤイテシマヒマシタ。(略)ヨイオヂイサンハソノハヒヲモラツテキテ、(略)。

二596 オヂイサンハヨロコンデ、ソノハヒヲカゴニイレテ、(略)。

二148 ケハヤハソノナノトホリ、ケルコトガマコトニハヤカツタノデス。

二304 竹ハイロイロナヤクニタチマス。(略)。竹馬モ竹デコシラヘ、タコノホネモ竹デ作リマス。ソノホカ竹ノスダレ

モアリ、竹ノカキネモアリマス。

二398 なにをきかれても、この口ではつきりこたへます。けれども、そのほかによけいなことは言ひません。

二428 ㊦ (略)、ユフハンニハ、ケライノ人ヲ右ト左ニワケテスワラセマシタ。ソノ日ノイクサニテガラノアツタモノヲ

左ノ方ニナラベテ、(略)。

二634 ㊦ (略)、この貝がらは(略)、おもてにうづまきがあります。そのうづまきに、(略)、ふたいろ

あります。

二661 ㊦ (略)、子ドモガ大ゼイデカメヲツカマヘテ、オモチヤニシテキマス。ウラシマハ(略)、

子ドモカラソノカメラヲ買ツテ、
(略)。

四二〇 (略)、左がはにいうびん
きよくがあります。そのすぢむ
かひに大きなごふくやがあり
ます。

四一七 (略)、矢にあたつたあ
のししが(略)かけおきて來まし
た。(略)。(略)、にたんの四郎
ただつねといふぶしが、(略)、
そのておひじしにむかひました。

四二三 (略) ニイサンハ(略)、オヤユ
ビデス。(略)。(略)、三郎ハ小
ユビデス。オヂイサンハ「ナル
ホド、ソノトホリデス。」トイツ
テ、(略)。

四二八 (略) オマツノ店ニハ、糸ヤ
(略)ガナラベテアリマス。オト
ミ「ソノ糸ハ一カケイクラデス
カ。」

四二五 (略) オマツハ太イフデト
細イフデヲ出シテ(略)。オトミ
「ソノ細イノヲ二本クダサイ。
四三六 (略)、三郎はそれをき
いて、「(略)どうちがひますか。」
(略)。その時あねのおはるは、
(略)。

四三六 (略) イネノワラデハ、(略)ナ
ドヲ作りマス。又(略)ニシタ
リ、ヤネヲフイタリシマス。ソ
ノホカツカヒミチハマダイク
ラモアリマス。

四五〇 ヨク人ノタベルモノデ
スガ、ソノママデヤイタリニ
タリシテタベルノデハアリマ
セン。

四五九 (略)、「ナゼナクノカ。」
トオタツネニナリマシタカラ、
白ウサギハ(略)、又ソノワケ
ヲ申シ上ゲマシタ。

四六四 (略)、ガマノホヲシイ
テ、ソノ上ニコロガレ。」

四六六 (略)、シホケノナイ水デ
カラダヲアラツテ、ガマノホ
ヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。」
トヲシヘテクダサイマシタ。白
ウサギガソノトホリニシマス
ト、(略)。

四六一 白ウサギガソノトホリニ
シマス。ト、(略)ナホリマシタ。
(略)。ソノノチオホクニヌシノミ
コトハ(略)、エライオ方ニオ
ナリニナリマシタ。

四六八 (略) 三郎「オカアサン、ソノオ
クスリハニガウゴザイマスカ。
四七〇 (略) 一バン上ノダンニハダ
イリサマヲナラベテ、ソノ左ト
右ニウツクシイシヨクダイヲ
立デマシタ。

四七四 又四ダン目ニハ(略)ナド
ヲナラベ、又ソノ次ノダン
ニハヒシモテトオゼンヲソナ
ヘテ、(略)。

四七六 見ればへさきに長いさを

を立てて、そのさをのさきに
はひらいた赤い扇がつけてあ
ります。

四七二 見ればへさきに長いさを
を立てて、(略)赤い扇がつけ
てあります。一人のくわんぢよ
がその下に立つて、さしまねい
てゐます。

四七八 だれか上手なものはな
いか。」とたづねました。その時
一人がすすみ出て、(略)。

五一一 大神はおどろいて、あまの岩
戸の戸をたてて、その中へおかくれ
になりました。

五二六 (略)、おかぐらをおはじめに
なりました。その時あめのうずめの
みことといふ女の神さまのまひがお
もしろかつたから、(略)。

五三三 (略)、オトホリスデノミチガ
ケハシクテ、オコマリノコトガゴザ
イマシタ。ソノ時ヤタガラストイフ
鳥ガ出て來テ、(略)。

五三八 (略) 一羽ノ金色ノトビガト
ンデ來テ、オ弓ノサキニトマリマシ
タ。ソノ光ガキラ／＼トシテ、(略)。
五七三 ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ
行キマシタ。

五八一 天皇ハ(略)、天皇ノオクラキ
ニオツキニナリマシタ。ソノ日ハ二
月十一日ニアタリマスカラ、(略)。
五八五 鯉ハ(略)。(略)。ソノ色ニ
ハクロイノモアリ、赤イノモアリ、

白イノモアツテ、(略)。

五二八 (略) 「手がなまぐさいから、そ
のひしやくを取つて、水をかけてお
くれ。」

五三二 かまをぬすまれたものがあり
ました。ぬす人は(略)だといふう
はさがあるので、行つて見ると、な
るほどそのかまがあります。

五三三 やく人は二人をよび出して、
その釜を前において取りしらべまし
た。

五三九 (略) その釜は私が前から持つて
ゐたのでございます。」

五四〇 ゐざりは(略)、その釜をあ
たまにかぶつて、兩手をついてゐざ
り出しました。

五四一 ましていくさのその時は、
なくてはならぬこのわたし。

五四二 コ、ニ茶ノ木ガアリマス。
(略)。ソノ實ハツバキノ實ノヤウニ
カタクテ、(略)。

五四三 ソノ實ハツバキノ實ノヤウニ
カタクテ、ソノ中ニマルイ種ガ二ツ
三ツツツアリマス。

五四四 茶ハシンメノ出ルジブンニ、
ソノデタテノ葉ヲツムノデス。

五四五 (略)、一バンハジメニツムノ
ヲ一番茶トイヒマス。ソノ葉デコシ
ラヘル茶ガ一番ヨイ茶ニナリマス。

五四六 キモノノモヤウヤ、カンザ
シナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、
ソノスガタガハイライシイカラデセ

ウ。

五38 2 図 すがるは（略）、たくさん
の子どもをもらつて、つれて來まし
た。天皇はこれをごらんになつて、
（略）、「その子は皆お前にやるから、
やしなつてやるがよい。」（略）。

五38 5 すがるはその大ぜいの子をお
みやのそばでやしなつて居つたと申
します。

五48 4 しばらくたつて、顔を上げて、
そのあたりを見まはすと、（略）。

五48 5 音次郎は（略）高い木の下へ
にげこみました。（略）音次郎が木
の下を出ると、（略）。（略）。（略）。

そのあたりを見まはすと、かみなり
がおちて、その高い木がまつ二つに
さけてゐました。

五50 2 キ瓜ニハカハニ小サイトゲ
ガアリ、カボチャニハデコボコガア
ル。ソノ他ノ瓜ハ大テイナメラカデ
アル。

五50 7 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソ
ノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

五51 2 西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコ
シ、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲノ
コス。

五51 3 ナマデソノマ、タベルノハ、
マクハ瓜ト西瓜デ、（略）。

五52 4 花ハタ顔ダゲガ白クテ、ソノ
他ハ皆黄色デアル。

五54 7 （略）、兩方ガ仲ナホリヲシマ
シタ。ソノ時カウモリガケモノノ方

へ行キマス、（略）。

五58 1 火バチナドニ入レル炭ハ、木
ヲヤイテコシラヘタモノデス。ソレ
ユエ木炭トイヒマス。ソノホカニ石
炭トイフモノガアリマス。

五58 6 （略）、汽車ヤ汽船ヤソノ他ノ
キカイナドヲウゴカスノニハ、皆コ
レヲ使ヒマス。

五66 5 図 そのおしまひのあいてあ
る所へ、『（略）』と書きたして下さ
い。

五71 7 図 毎年春ニナルトオチルガ、
オチルトスグ又新シイノガハエテ、
ソノタビニ枝ガ一ツヅツフエル。

五73 1 フト水ニウツツタジブンノス
ガタヲ見テ、（略）ヒトリゴトヲハジ
メマシタ。（略）。ソノ時後ノ方カラ
カリウドノ來ル音ガシタノデ、（略）。

六5 4 図 わけて名におふ松島の 大
島・小島その中を 通ふ白ほの美し
や。

六9 2 御社の後には松山がありま
す。その松山へのぼらうといふので
す。

六13 1 ガンハイツデモ一シヨニナツ
テ、列ヲツクツテトブ。ソノ時ニハ
一羽ノガンハ列ヲハナレテ、少シ先
ノ方ニトンデ行ク。

六14 1 又トブ時ニハガアノト鳴合
フ。（略）。モシ列ニハナレルヤウナ
コトガアツテモ、ソノアヒツヲ聞ク
ト、スグ列ニ加ルノデアル。

六16 3 かわくと、それを稻こきでこ
いてもみを取ります。そのもみを又
よく日にかわかして、（略）。

六16 8 米を俵に入れて、その俵をつ
み重ねてながめた時は、（略）。

六18 4 図 カネ尺ハクデラ尺ヨリ少シ
ミジカク、ソノ一尺ハクデラ尺ノハ
寸ニアタル。

六20 7 （略）大きな象の目方をはか
らうとしたが、どうしてはかつてよ
いか分りませんでした。その時そこ
に居た一人の子どもが、（略）。

六21 7 それから象をおろして、その
代りに石をたくさんつみました。

六22 2 （略）石をたくさんつみまし
た。さうして前にしるしを附けてお
いた所まで船が水につかつた時に、
その石をおろして、（略）。

六22 3 （略）、その石をおろして、な
んどにもはかりにかけて、その目方
を知りました。

六23 5 一人の子どもが（略）、かめ
のなかへおちました。（略）。居合せ
た子どもは皆うろたへてさわぎまし
た。その時一人の子どもは（略）。

六25 4 図 金ヤギンハ美シクテ、指ワ
ニナツタリ、トケイニナツタリ、ソ
ノ他イロノナカザリ物ニナリマス
ガ、（略）。

六27 4 図 物ヲニル鍋モ鐵デス。ユラ
ワカス私モ、私ノノル五トクモ鐵デ
ス。ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サイ物

カラ、キクワン車・軍カンノヤウナ
大キナ物マデ、（略）。

六28 5 （略）、「ソレデモ鐵ハデキニサ
ビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」
トイヒマシタ。ソノ時鐵ビンハ、私
タチノサビルノハ皆人ガ使ハナイカ
ラデス。

六29 2 図 銅ハ（略）、時々青イ物ヲ出
シマセウ。ソレガヤハリサビデス。
シカモソノサビハ大ソウドクナモノ
デス。」

六30 4 一本三せんづつのを二本買つ
て、十せん銀貨を出したから、直吉
は（略）そのつりに一せん銅貨を
三枚渡した。

六30 5 男の子も氣がつかずにそのま
ゝかへつた。

六51 7 そこで支那もおそれて、わぼ
くを申しこんで來ましたが、その使
のもつて來た文の中に、（略）。

六52 6 秀吉は（略）、その使を追ひ
かへして、（略）。

六52 8 秀吉は（略）、二度目の朝鮮
せいばつをはじめました。をしいこ
とに、そのいくさの終らない中に病
氣でなくなつてしまひました。

六53 3 京都の東山の山の上に秀吉の
はかがございます。又その山のふも
とには秀吉をまつた神社もござい
ます。

六55 3 川中島の戦で名高い上杉謙信
は強い大将であつた。その相手は武

田信玄で、(略)。

六57 4 信玄は(略)。ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、かた先へ切りつけられた。その時信玄のけらいが、(略)なぐりつけた。

六57 7 馬はおどろいてとび上った。信玄はそのすきにあやふい命をたすかつた。

六61 1 團 八つばかりの女の子、(略)ひとりしくく泣いてゐる。姉のおつるは立ちよつて、「(略)」と、その子のかたに手をかけて、ことばやさしくなぐさめる。

六61 7 團 まへからわたしは目があるく、杖をたよりにあるきます。いまその杖をもぎ取られ、かへりの道が知れません。」

六66 6 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカマヘルコトガアリマス。ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。

六69 8 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、今年で三十年になります。その間に色色な子どもを見ました。

六72 2 十人十色と申しますが、まことにその通りで、(略)、せいしつも色々かはつてゐます。

六73 5 (略)、三十年の間にどうしてもきらひな子供が七八人ございました。私のからだがかんなにぐらつくやうになつたのも、その子供たちの

いたづらからでございます。

六73 7 こんなにたくさん墨を附けたのも、その子供たちでございます。

六76 1 一人の年取つた男が(略)、木やりの歌を歌ひ出すと、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

七1 4 團 正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トトモニ戦場ニ出デントセシガ、(略)。

七1 7 團 我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

七3 2 團 正成ハタシテ戦死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。

七3 4 團 正行ハ(略)ツト立チテ別室ニ行キタリ。母アヤシミテ、ソノ室ヲウカバフニ、(略)、今ニモハラヲ切ラントス。

七5 5 團 正成戦死シテ後ハ、敵ノイキホヒマス、強ク、天皇ハ吉野山ノカリノ皇居ニウツリタマヘリ。楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。

七21 9 團 「あなたはその美しい花だけでたくさんでございます。あなたほどの大きな花ぶさは見たことがございません。

七23 4 團 保己一ノ家ハ今ノ東京、ソノコロロ江戸ノ番町ニアリ、(略)。

七31 3 大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。そのころになると、(略)、眠るひまもない程いそがしい。

七31 7 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。

七32 5 蠶の口の中には小さいくだが一つある。そのくだから出すねばつたしるが外へ出ると、(略)。

七33 7 蛾は(略)、出て来ると、すぐに紙の上において卵を産みつけさせる。その卵を産みつけさせた紙を蠶卵紙といふ。

七38 8 何モ買フモノガナケレバ、ソノマ、カヘツテモヨイ。

七40 6 團 武士としてはあのくらゐな馬をもつて見たい。」と、(略)。妻はこれを聞いて、夫に向つて、「その馬の直はいか程でございます。」

七40 9 團 「どうぞこれでその馬をおもとめあそばしませ。」

七42 6 團 (略)、御主人織田様には、近いうちに京都で馬ぞろへをなさいますとのこと。(略)。あなた様にもその折にはよい馬にめして、主人のお目にとまるやうになされるのが大事と考へまして、(略)。

七43 1 一豊は妻に禮をのべて、その馬をもとめました。

七51 6 團 「手紙は四匁までは三錢ですが、四匁より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。

七52 1 團 不足の時には、その不足の倍だけを受取人の方で拂はなければならぬのです。」

七54 8 團 上野公園ニハ廣キ動物園アリテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メタリ。ソノ他博物館・パノラマナダアリ。

七60 5 團 犬の種類はすこぶる多し。毛のいたつて短きものは(略)、長きものは羊の如く、立ちてもその毛はなほ地面に達す。

七61 6 團 昔より「犬は三日かへば、三年その恩をわすれず。」といへり。

七62 2 團 犬は耳ざととき動物にして、(略)。又その鼻はよく物のにほひをかぎ分くるをもつて、(略)。

七69 9 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤソノ外色々ノ動物ガ居リ、サマ、ノ植物モアル。

七76 8 (略)緑色ノモノハ浅イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。

七80 5 團 (略)歸り來れる明治丸の船長は、一日その町の學校へまねかれて、航海の話をししたり。

七81 4 團 私は年中航海をしてゐるものですから、少しそのお話をいたしませう。

七82 7 團 日の出や日の入には日光が波にうつつて、水の色が金色になり

ます。月夜には波が銀の様に光つて、その美しさは何とも言ひ様がありません。

七84 図 船長はこつぷの水を一口飲み、又その話をつづけたり。

七88 図 皆さんの中にも、大きなつてから外國へ商賣その他の用事で出かける人もあります。

七88 図 又漁業その他海の仕事に出かける人もあります。

八25 図 (略) 天照大神、(略)、八咫鏡を授けたまひて、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。その神勅によりて、代々の天皇はこれを宮中にあがめたまひしが、(略)。

八37 図 明治三十七八年戦役の終りたる後も、天皇陛下御参拜あらせられ、平和の成りたるを告げたまひしが、その御式の盛なること前古たぐひなかりきと申す。

八53 図 (略)、數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高く天をつく。その神々しさいはん方なし。

八65 図 材は皆ひのきの白木を用ひ、金色の金物きら／＼と日にかゞやけり。その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、(略)。

八22 図 「(略)、君は白い雀を見たことがあるか。」(略)。農夫は此の話を聞いて、「(略)。どうかして其

の雀をつかまへて見たい。」と思ひました。

八23 図 此の男は居酒屋に酒代の借がある、其のかたに持つて行かうとするのです。

八24 図 その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て來ました。(略)。農夫は驚いて、其の麥俵を取りもどしました。

八25 図 (略) 下女がばけつをさげて、牛小屋から出て來ました。(略)。農夫はおこつて、其のばけつを引つたくりました。

八26 図 朝ねをしてゐる間に、身代が滅つて行くのだ。」といつて、今見た事をすつかり話して聞かせました。

其の後は毎朝必ず早く起きて、(略)。

八27 図 昔百濟川成トイフ名高キ畫工アリキ。其ノ友ニ飛驒工トテ世ニ聞エタル大工アリ。

八29 1 図 (略)、南ノロヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト閉ジ。

八29 2 図 驚キテ西ノロヨリ入ラントスレバ、其ノ戸マタハタト閉ジテ、(略)。

八31 図 僕の近所に年よりのかぢ屋があつた。(略)。僕は時々其の仕事場の前に立つて見てゐた。

たが、去年の暮に死んでしまつた。(略) 若いむすこが、今では其の後をついで、(略)。

八38 図 我等ハ平生マツチヲ用ヒナレタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、(略)、今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル、ナリ。

八39 4 図 (略)、頭ニ藥ヲツケ、其ノカタマルヲ待チテ、箱ニ入ル。

八39 6 図 箱ハウスキ木片ヲ折り、其ノ上ニ紙ヲ張りテ造リ、(略)。

八40 8 図 マツチハ(略)。(略)。今日ニテハ其ノ製造ハナハダ盛ニシテ、(略)。

八48 図 (略) 發信人居所氏名を送達紙の外部に表はさんとするものは其居所氏名を此處へ記すべし

八50 4 図 此ノ頃中大兄皇子ト申スカシコキ皇子アリキ。鎌足早クヨリ其ノ人トナリヲシタヒ奉リ、(略)。

八51 9 図 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲオコナハントシ、アラカジメ其ノ手ハズラ定メタリ。

八52 2 図 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲオコナハントシ、(略)。サテイヨ／＼其ノ日トナレリ。

八53 8 図 蝦夷モマタ其ノ家ニテ自殺セリ。

八54 2 図 中大兄皇子ハ後天皇ノ位ニツキ給フ。天智天皇ト申シ奉ルハ即チ此ノ御方ナリ。鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、(略)。

八55 6 又にはとり・七面鳥・あひるなどは陸上や水上にばかり居て高く飛ばないから、其のつばさが小さい。

八59 5 図 琵琶の形に似たりとて、其の名をおへる湖の かゞみの如き水の面、(略)。

八63 9 木綿織物ニ紺や淺黄やカスリヤ其ノ他色々ナ縞ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。

八65 5 二月頃種ヲ蒔イデ、六月頃刈取ルノデス。サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、(略)。

八65 9 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。其ノ中ヘ白絲ヤ白布ヲ入レテ、紺ヤ淺黄ニ染メルノデス。

八68 4 図 其の後どうかと思つてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八74 4 図 猫ノロニハ(略)。又其ノ舌ニハ内方ニ向ツテハエタル太キ毛ノ如キトゲアリ、(略)。

八75 5 図 猫ノ中ニモ其ノ毛色虎ニ似タルモノアリ、之ヲ虎猫トイフ。

八78 4 図 フランスの隣國にて、其の東北にあるドイツは學問のよく開けたる國なり。

八78 7 図 ロシヤはヨーロッパ大陸の東部にひろがれる國にして、其の領地甚だ廣く、(略)。

八78 8 図 ロシヤは(略)、其の領地甚だ廣く、アジア大陸のシベリヤもまた其の一部なり。

八八四 地球の上に住む人類は總數十
六億ありて、其の人類はさまざま
なり。

八八三 明治三十七八年ノ戰役ニ、君
ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲ
タ軍人ハ大ゼイアツタガ、ソノ中デ
モ（略）ノ二人ハ軍神トマデイハレ
タ。

八八四 （略）砲彈ノ破片ガ中佐ノコ
シニアツテ、中佐ハドウト其ノ場
ニ倒レタ。

八九〇 （略）、中佐ノイキハトウトウ
其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。

八九四 〔若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ
聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見
事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタト思ヘ。其ノ
時ハスグ馬ヲ引イテ來イ。

八九六 〔略〕砲聲・銃聲ガツマク
ヤウナラ、我が軍ガ苦戰シテキルト
思ヘ。其ノ時ハオレノ死體ヲセオツ
テ歸ル積リデカケツケヨ。〕

八九二 馬丁ハ（略）、トウ／＼戰死
サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死
ガイニ取リスガツテ泣イタ。

八九七 名古屋城は（略）名城にし
て、其の天守閣は加藤清正のきづき
しものなり。

九一四 代々の天皇の御位に即かせ
給ふ時には、必ず三種の神器を受け
つぎ給ふ。草薙劍は即ち其の一なり。

九三六 〔略〕此の地に八岐の
大蛇とて八つの頭と八つの尾とある

大蛇あり、毎年來りて、我が娘を取
食ひ、今また残りの一人をも食はん
とす。（略）尊、「さらば我汝等の
ために其の大蛇を退治せん。」とて、
（略）。

九三六 尊、（略）、之を八つの酒槽
に盛り、其のほとりに娘を坐せしめ
て待ち給ひしに、（略）。

九七二 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツ
テ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。
又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカ
ラ、（略）。

九八五 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見
ルト、カウイフ工合ニソレ／＼變ツ
テキル。其ノ形モマタ様々デアル。

九二九 〔略〕、なほ三十反御送り
下され度、其の節別に老人向きの紺
がすり上物十反だけ御見立の上、
（略）御送り相成度願上候。

九一六 江戸川ハ南流シテ海ニ入ル。
其ノ流ハ下總・武藏ノ國境ヲナセリ。
九一六 利根川ノ本流ハ東南ニ流レ
テ鬼怒川・小貝川ヲ合せ、益々其ノ
大イサヲ増ス。

九一五 〔略〕一水兵ガ女手の手
紙を讀みながら泣いてゐた。ふと通
りかゝつた大尉ガ之を見て、（略）、
「（略）。軍人となつて、いくさに出
たのを男子の面目とも思はず、其の
有様は何事だ。

九二〇 〔略〕一水兵ガ女手の手紙を
讀みながら泣いてゐた。（略）。水兵

は（略）、（略）。どうぞ之を御覽下
さい。」といつて、其の手紙を差出し
た。

九二四 村の方々は（略）御世話
下され、（略）。何にても多しなりよ
なく言へ。」と親切におほせ下され
候。母は其の方々の顔を見る毎に、
（略）。

九二一 つかさんは『一命をすて
て君に報いよ。』といつて居られる
が、まだ其の折に出會はないのだ。
九二四 其のうちには花々しい戰爭
もあるだらう。其の時には（略）、
我が高千穂艦の名をあげよう。

九二四 歩兵は戰爭の主力にして、
其の數最も多し。

九二五 歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜
重兵は何れも戰爭に必要にして、其
の任務には輕重の別あることなし。

九二六 將校には大將・中將・少將
・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・
少尉あり。其の下に下士あり、兵卒
あり。

九二七 維新前後國事ニタフレタル
人々ヲ始め、其ノ後ノ諸戰役ニ戰死
シタル忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。

九二八 〔略〕、内外古今ノ武器其ノ
他軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九三二 〔略〕何月何日初航海をする
から、何人にも乗船の望に應じる。」
といふことを新聞紙に廣告したが、
其の日になつて乗船したもの僅か

十二人に過ぎなかつた。

九三六 〔略〕、機關の一部に故障があ
つたので、すぐそれを直した。其の
後は何の障もなく、（略）。

九三六 之を聞いて、是までフルト
ンを笑つた人々も大いに感心して、
皆其の成功を喜んだといふことであ
る。

九三五 スチブソンは（略）、す
べりのよい車をすべりのよいレール
の上で走らせる様にしたらよからう
と、日夜其の事ばかり考へてゐた。

九三六 スチブソンは（略）、す
べりのよい車をすべりのよいレール
の上で走らせる様にしたらよからう
と、（略）。さて幾度も幾度も造り直
して、終に其の目的を達することが
出來た。

九三六 スチブソンは（略）、（略）
終に其の目的を達することが出來
た。其の頃イギリスのある會社で、
馬車鐵道をこしらへようといふ語が
あつたが、（略）。

九三六 其の頃イギリスのある會社
で、馬車鐵道をこしらへようといふ
語があつたが、（略）、スチブソン
は其の會社に頼まれて鐵道を敷き、
其の上を走る汽車を造つた。

九三六 〔略〕、スチブソンは其の會
社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を
走る汽車を造つた。

九三五 やがて汽車が動き出すと、

- (略)。見物人一同は其の早いのと其の勢のすさまじいのに驚いた。
- 九35 1 見物人一同は其の早いのと其の勢のすさまじいのに驚いた。
- 九35 5 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、凡そ百二十四里、其の間に五十三次といつて、重なる宿場が五十三あつた。
- 九36 3 (略)、富士川・大井川・天龍川なども、其の頃は橋が無かつたから、(略)。
- 九37 1 大水などの時には、水のひくまでは幾日でも泊つて待つてゐなければならなかつた。其の頃之を川止といつた。
- 九37 3 箱根と新居とは關所があつて、役人が一々旅人をしらべて通した。若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、(略)。
- 九37 4 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、關所破といつて、其のものは重い罰を受けた。
- 九39 2 図 (略)、諸大名其ノ他旅客ノ宿泊スルモノ多ク、(略)。
- 九39 6 図 昔ノ關所ハ僅カニ其ノアトヲ止ムルノミ。
- 九39 9 図 (略) 益々サカエテ、浴客年ニ其ノ數ヲ加フ。
- 九41 8 図 噴火一タン止ミテ後、其ノ噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セリ。

- 九44 10 図 (略) ハッサンといふ者あり、(略)。(略)、其の子のアリに駱駝を連れて、荷物を取りに来るべしと言ひつかはしたり。
- 九45 5 図 (略)、飲用水其の外何くれと用意して、隊商と共に出立したり。
- 九45 8 図 さていよいよ沙漠に入りしが、木のかげ一つもなき砂原つゞきなれば、其の苦しさたとへんに物なし。
- 九47 4 図 (略)、一同は行くべき方にまよひて、(略)、空しく一日を過せり。(略)。其の夜アリふと目をさまして、人々のかたるを聞けば、(略)。
- 九47 7 図 駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なるべし。
- 九48 8 図 (略)、そこより逃れ出でたり。(略)。(略)、其の日の夕方、一組の隊商の宿れるテントを見たり。
- 九49 2 図 かゝる間に、又向ふより一組の隊商到着せしが、其の中にはアリの父ハッサンもまじれり。
- 九52 2 図 昔の風をそのまゝに、田植・草取・取入れに 農夫の辛苦共にする すげ笠こそはたふとけれ。
- 九52 9 図 づきんにおこそ・大黒と其の名其の類亦多し。
- 九52 9 図 づきんにおこそ・大黒と其の名其の類亦多し。
- 九53 9 図 (略)、海ノソコノ砂ノ上ニスムヒラメ・カレヒノ類ハ、其ノ體

- ノ一面、砂ノ色ニ似たり。
- 九54 1 図 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)。
- 九54 2 図 カクノ如ク動物ノ體色ニハ(略)、自ら其ノ周圍ノ物ノ色トマギレテ、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。
- 九54 7 図 動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物ノ色ノ變ズルニシタガツテ、保護色ノ變ズルモノアリ。
- 九54 9 図 タトヘバ北國ニスム野ウサギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、(略)。
- 九55 4 図 ソレヨリモナホ面白キハ、其ノ動物ノ身ブリニヨリテ、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。
- 九55 5 図 ソレヨリモナホ面白キハ、其ノ動物ノ身ブリニヨリテ、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。
- 九55 7 図 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ體色ノ桑ノ木ニ似タル上、(略)。
- 九55 8 図 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、(略)、其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ・メニ突出スルトキハ、(略)。
- 九55 10 図 (略)、其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ・メニ突出スルトキハ、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラ

- ズ。
- 九56 4 図 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シキ色ドリアレドモ、(略)。
- 九57 2 図 或動物ハ(略)、周圍ノ物トマギレザルヤウ、コトニアザヤカナル體色ヲ有ス。(略)、他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、(略)。
- 九57 5 図 是等ハ多クハ他ノ動物ノ恐れ、武器又ハ他ノ動物ノイトフ惡味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、他ノ動物ハ(略)、之ニ近ツクコトナキガ故ニ、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。
- 九62 4 図 蝦夷は(略)、景行天皇の御代日本武尊之を征し給ひ、齊明天皇の御時阿倍比羅夫また之を討ちしが、其の後も度々叛きて、(略)。
- 九63 10 図 田村麻呂は(略)。(略)。(略)、其の薨ぜし時、天皇は深く之ををしみ給ひき。
- 九65 2 図 試みに茶わんのそこにするしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。其のしるしは水にぬるることなるべし。
- 九66 3 図 (略)、人も鳥獸も草木も多くの生物は其の生を保つこと能はざるべし。
- 九67 8 併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、其の時はうらめしい心地がする。

九七四 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、其の他にはかく別の異狀これなく、(略)。

九七六 又病氣其ノ他ノ場合ニモ、他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカルベシ。

九七九 (略)、貯金セントスル時ニハ、其ノ金銭ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、(略)。

九七八 (略)、金銭ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ書入レタル通帳ヲ渡ス。

九八一 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが其の御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。

九八二 それは氏子の五箇村から子供の騎手を一人づつ出して、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九八四 熊吉はつるりとすべつて、そのはずみにころころと轉がつて、池の中へ落ちこんだ。

九八八 賣買トイフコトナカリシ遠キ昔ニハ、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。若シ今ノ世ニモナホカ、ル事アリトセバ、其ノ不便如何バカリナラシ。

九八四 夕トヘバコ、ニ漁夫アリ

テ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。其ノ農夫若シ魚ヲ望マズバ、(略)。

九八八 (略) 漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。(略)。カクテ持チアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

九八八 (略) 大谷川あり。岩にくだくる清流、雪と散り、玉と飛ぶ。其の上にかゝれる朱塗の橋、(略)。

九八八 (略)、男體山のふもとに中禪寺湖あり、周回凡そ六里、湖面鏡の如く、四方の山々皆倒に影をうつせり。天皇陛下(略)、其の風景を賞し給ひて、幸湖の名を下し賜へり。

九八八 日本一の高山は臺灣の新高山なり。其の高さは一萬三千七十餘尺にして、(略)。

九八八 (略)、富士は(略)。(略)、其の形白扇を倒にかけたが如く美しきは、(略)。

九八八 日本一の湖水は近江の琵琶湖にして、周回六十里。いづこより見ても(略)、其の全景を見ることが能はず。

九八八 日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。其の長さ一萬五千二百七十六呎、(略)。

九八八 日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。(略)。其の工事の總費用は百九十萬圓餘にして、

(略)。

九五五 熱い國ニ生ズル大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、(略)、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出來ルサウデアル。

九七九 葉ニハスベテ葉脈トイフモノガアル。(略)。ソノ脈ニモ亦種々アル。

九八八 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。

九八八 森林は能く暴風をさへ、其の力をそぐを以て、(略)。

九八八 森林なれば、土砂附近の田畠に飛散りて、其の土地を荒すこと多し。

九八八 森林の樹木は(略)、雨の一度に地上に落つるを止め、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。(略)。

九八八 森林は能く暴風をさへ、土砂を落付かしむ。(略)。(略)、森林は漁業の爲にも大いなる利益をあたふ。(略)。其の他森林は氣候を和げ、(略)一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

九八八 其の他森林は(略)等其の効用あげて數ふべからず。

のちは 音もきこえず。

九五五 (略)、最も世に聞えたるは紫式部と清少納言となり。二人共に和漢の學に通じ、其の作れる文は古文の正本として、今なほひろく愛讀せらる。

九八八 紫式部は(略)、父の爲時は常に其の頭をなでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

九八八 清少納言も亦紫式部と同じく宮中に仕へ、其の才氣を以て知られたりき。

九八八 是白樂天の詩に、「香爐峯の雪はすだれをかゝげて見る。」といふ句あるを思ひ出でて問はせ給ひしを、清少納言は直ちに其の意を察し奉りしなり。

九八八 たくさんの本を讀んだ學問の深い人でも、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。

九八八 さてかりに印刷して、讀合せて見て、誤があれば、幾度でも其の活字を抜きかへて植直す。

九八八 それを折つて、揃へてとちる。其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。

九八八 それは版下を堅い木にはりつけて、其の上から彫つて版木を造り、(略)。

活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、(略)。

十21 活版は（略）、同じ活字を何度でも組立てて使へる。木版では一枚々彫らなければならぬから、其の自由がきかぬ。

十24 6 図 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテイフヤウ、「（略）。」トテ、其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。

十24 10 図 無頼ノ少年等口々ニ罵リテ止マズ。其ノ中ノ一人曰ク、「（略）。」

十25 4 図 無頼ノ少年等口々ニ罵リテ止マズ。其ノ中ノ一人曰ク、「（略）。」

若シ勇氣アラバ我ヲ殺セ。殺ス能ハズバ、我が膝ノ下ヲクマレ。」ト。韓信シバシ其ノ面ヲウチマモリシガ、（略）。

十25 9 図 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖ニ仕ヘ、「（略）、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

十26 1 図 良ヤ老人ノ無禮ヲトガメズ、信ヤ少年ノ笑罵ニ怒ラズ、其ノ初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

十31 3 図 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、内地ヘノ渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナリ。

十32 3 図 （略）、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、其ノ出來非常ニ良カリシヲ以テ、（略）。

十33 6 図 （略）、或年試ミニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚ダ良カリキ。

十33 7 図 昆陽ハ（略）、此ノ芋ヲ植ウ

ルニ如クハナシト思ヒ、「（略）。」ヨリテクハシク其ノ作方、貯藏ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。

十34 5 志望者は五十人ばかりも來たが、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。

十42 5 図 花筵ヲ最モ多ク産スルハ（略）、其ノ織方ヲ發明シタルハ岡山縣ノ磯崎眠亀トイフ人ナリ。

十43 1 図 （略）花筵ノ改良ニ志シ、先ヅ之ヲ織ル機械ノ製作ニ工夫ヲコラセシガ、（略）赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。然レドモ少シモ其ノ志ヲタフメズ、（略）。

十43 6 図 眠亀ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、自ラ花筵數十種ヲ織出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、（略）、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。

十43 8 図 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國ヘ送リシニ、（略）。

十47 4 図 模様には（略）、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。唐草模様・波模様は如きはなり。次の圖は其の一二の例を示すものなり。

十47 7 図 若し此の模様は種々の色どりを加ふるときは、一層其の美しさを増すべし。

十49 1 図 花の名より取れる桃色・（略）、實の名より取れる橙色・（略）、其の他鼠色・茶色・鳶色等、色の名

稱も亦千種萬様なり。

十49 8 図 欄間の彫物、唐紙の地紙をはじめ、着物の縞模様、焼物・塗物の繪模様、其の他菓子類に至るまで、我等の衣食住には模様・色どりをほとんどこしたるもの多し。

十51 4 図 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。手塚其の間に敵の草ずりを上げ、（略）。

十56 4 図 （略）居室・兵器・寢具其の他一切所持品の清潔検査これあり候。

十56 6 図 兵器は軍人のたましひに候へば、其の手入は最も念入に致し候。

十58 4 図 （略）、水曜日其の日の課業を終へたる時より夕食前まで外出を許され候。

十61 4 図 （略）、江戸城及日光東照宮等ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、大抵此ノ山ヨリ産出シタルモノナリトイフ。然レドモ其ノ頃ハ掘取りテフキ分クル方法ナホ不十分ナリシカバ、（略）。

十61 10 図 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道アリ。其ノ左右上下更ニ無數ノ坑道アリ、（略）。

十62 7 図 發掘シタル銅鑛ハ、（略）、之ヲ選鑛場ニ送ル。選鑛場ニハ種々ノ機械アリ、此ノ機械ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選り分ク。

十64 4 見張人がマストの上から北の方を指さして聲高く呼んだ。（略）。

甲板上立つてゐた船長を始め、三十五人の若者はひとしく目を其の方向に向けた。

十67 6 鯨は（略）。其の肉は食用となり、あぶらは機械油になり、ひげは細工物に使はれる。

十71 9 図 地球の内部には熱氣あり。其の熱氣に温りたる水の自然に地上にわき出づるもの、即ち温泉なり。

十72 5 図 温泉の（略）。其の湯には大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。

十72 7 図 温泉の諸種の病を治するは、たゞに其のふくめる鑛物の効のみならず、（略）。

十73 5 図 湯のわき出づる口僅かに一箇所にして、其の分量も少く、（略）。

十75 5 図 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、其ノ上ニ頭ヲイタダキ、（略）。

十75 8 図 骨ハ筋肉ニ包マレ、皮膚更ニ其ノ上ヲオホフ。

十76 5 図 （略）、腸ハ胃ニテコナシ盡サザルモノヲコナシテ、其ノ不用ナルモノヲ體外ニ出ス。

十77 3 図 目ハ色・形ヲ見、耳ハ音聲ヲ聞キ、鼻ハ香ヲカギ、口ハ味ヲ味ハヒテ、各之ヲ腦ニ報告ス。腦ハ其ノ報告ニヨツテ判別シ、（略）。

十80 4 図 あいぬの風俗は（略）。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。

- 十814 ㊦ あいぬの（略）。（略）。其の家はほつたて小屋の如く、床もなく、天井もなし。
- 十846 （略）、一年にほふる牛は数千頭にも上るといふことである。其の皮は革に製して、かばんや靴などを造り、（略）。
- 十847 （略）、一年にほふる牛は数千頭にも上るといふことである。（略）、其の骨や角は色々の細工物に使ふ。
- 十865 豚は（略）、飼ふのにたやすい。しかも其の成長が極めて早い。
- 十875 （略）、山羊の乳は牛乳のやうに飲料になる。殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。
- 十881 鳥類の中で家畜として最も多く農家に飼はれるのは雞で、（略）。其の外あひるや七面鳥なども家に飼はれる鳥である。
- 十908 ㊦ 同學士は（略）、學理にも通じ、實地にも明かなる人に候へば、其の講話は定めて有益なる事と存候。
- 十926 ㊦ 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、折々會合の節は其の話も出で、（略）。
- 十927 ㊦ 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、（略）、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。
- 十948 ㊦ （略）、猿澤ノ池ニ至ル。興

- 福寺ノ五重塔高ク其ノ北ニソビユ。
- 十955 ㊦ 師範學校門内ノ八重櫻一株、古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬるかな。ト、伊勢大輔ノヨミシ其ノ奈良櫻ノ名残ヲトメタリ。
- 十959 ㊦ 大小ノ燈籠左右ニ多く、其ノ數二千ニ近シ。
- 十978 ㊦ 我が國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。
- 十977 ㊦ （略）、東ニ春日・三笠・若草等ノ山々相連リ、其ノフモトニ大佛殿・興福寺高クソビエ、（略）。
- 十1002 ㊦ 三輪町ノ南ニ櫻井町アリ。其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、（略）。
- 十1023 ㊦ 畝傍山ノ東北ニハ神武天皇ノ御陵アリ。又近ク綏靖天皇ノ御陵アリ。其ノ他古陵墓甚ダ多シ。
- 十151 ㊦ 吉野には古く離宮あり、（略）の頃には度々行幸ありしが、山城へ遷都ありし後は其の事絶えたり。
- 十152 ㊦ 吉野には古く離宮あり、（略）。其の後吉野の朝の皇居となりしは人の能く知る所なり。
- 十162 ㊦ 働蜂の若きものは内に居て幼蟲を育て、又は其の居室を営み、（略）。
- 十168 ㊦ 百花満開の候には、外役の蜂は（略）、營營として寸時も休まず。秋・冬の花少き季節に入りて

- も、食物に不足することなきは、一に其の勞役の結果なり。
- 十176 ㊦ （略）、一群の數は次第に増加す。其の數餘りに多くなる時は、女王は（略）、臣下をひきゐて分離す。
- 十177 ㊦ （略）、女王は新しく生れたる雌蜂に其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。
- 十179 ㊦ 此の時箱・樽等を適當なる所に置けば、分離したる一群は直ちに其の中に入る。
- 十1710 ㊦ 蜜蜂は（略）。故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。
- 十1105 ㊦ 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。
- 十1106 ㊦ 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトナル。
- 十1108 ㊦ 又毎日同ジ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク其ノ仕事ニ熟練スル。
- 十1117 ㊦ （略）一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、（略）、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヲ發明ヲスルコトモアル。
- 十1124 ㊦ 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、（略）。
- 十1126 ㊦ セツカク苦勞シテモ、其ノ仕事ハ何ニモナラナイ。

- 十1142 ㊦ （略）、早くも義兵を擧げしが、事の未だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、其のまゝにて止みたり。
- 十1165 ㊦ 主上は詩の心を御さとりありて、（略）。されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、思ひとがむることもなかりき。
- 十1181 ㊦ 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々は各所に散在す。船の其の間を行くとき、島かと見れば岬なり。
- 十1187 ㊦ かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。
- 十1195 ㊦ 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。
- 十1247 ㊦ 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形狀も様々なり。
- 十1248 ㊦ 交通・運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形狀も様々なり。
- 十1269 ㊦ 荷足・高瀬・茶船・屋根船等其の目的により、大小・構造千差萬別あり。
- 十1279 ㊦ スチブソンノの造りし機關車は、（略）、フルトンノ始めて造りし汽船は（略）。其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へたるを以て、（略）。
- 十1295 ㊦ 空中の交通開始せられ、

又其の軍事上に應用せらるゝも決して座上の空談にあらざらんとす。

十一308 雨ニハ春雨・時雨・夕立・村雨、雪ニハ初雪・白雪・吹雪、其ノ外白雲・白露・初霜・朝霜等アリ。

十一314 水雷艇ニハ（略）等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。其ノ敏速ナル行動ハ鳥ノ空中ヲ飛行スル如クナレバナルベシ。

十一319 戦艦ハ軍艦中最モ優勢ナルモノニシテ、其ノ名ノ如ク堂々敵ト決戦スルヲ目的トス。

十一331 巡洋艦ハ（略）。

其ノ大ナルモノハ戦艦ニ次グノ勢力ヲ有シ、（略）。

十一333 巡洋艦ハ（略）。

其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、（略）。

十一361 當總督府の經營も着着（其の効を見るに至り候事、（略）。

十一374 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。

十一381 本島産物の重なるものは、御承知の樟腦・米・茶・砂糖等にて、（略）。

其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様にて、（略）。

十一382 其の外金・材木・塩等も年々其の産額を増加する模様にて、（略）。

座候。

十一388 南部には榕樹（略）も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは（略）。

十一404 全島の住民は約三百餘萬と申候。其の中内地人は八萬餘（略）。

十一459 熊王（略）、刀を取直して腹かき切らんとす。（略）。熊王今はせん方なく、其の刀にてもとどりを切放ち、（略）。

十一461 正儀より賜はりたる名の正寛を其のまゝに正寛法師と名乗れり。

十一463 熊王（略）、さて往生院に入りて僧となり、（略）正寛法師と名乗れり。（略）、心の變ることもあるべきかとて、其の後は一度も院の門外へは出でざりきとぞ。

十一477 大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。馬主は（略）、靜かに其の金を拾ひ上げ、（略）。

十一481 馬主は（略）、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。（略）、大將の部下の二三人は直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。

十一505 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。

十一512 やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、馬

はさもうれしさに、口でおもちやをさへげて、其の子供をあやしてゐた。

十一517 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、（略）。

十一531 ヨク笑ハント欲スルモノハ、常ニ其ノ行ヲツ、シミ、（略）。

十一539 イハンヤ我ニ優レル人ヲネタミ、其ノ聲譽ヲ傷ツケントシテ笑フ者ニ於テテヤ。

十一541 他人ノ歡心ヲ買ハントシテハツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイヤシムベシ。

十一644 毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

十一646 同じ材料デモ、料理ノ方法ニヨツテハ其ノ經濟ノ上ニモ大イナル得失ガアル。

十一655 寒イ時ハ（略）、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、（略）。

十一656 寒イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、暑い時分ハ其ノ必要ナク、（略）。

十一659 又魚類や野菜ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、（略）。

十一667 例ヘバ動物質ノ滋養品ニハ植物質ノ食物ヲ添ヘ、（略）、アマイ

物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

十一676 人生七十年と見るも六十萬時間に過ぎず。其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、（略）。

十一6910 若し過あらば、深く之を悔いて、其の過を再びせざらんことをちかふべし。

十一708 例へば六十人の集會に其の中の一人若し十分を後とせば、（略）。

十一713 他人をして時間を損失せしむるは其の罪金錢を損失せしむるよりも重し。

十一716 泉州堺に一國寺といふ寺あり。其の座敷の一間の杉戸には檜一本を畫がき、（略）。

十一732 行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ寢間に歸れり。

十一738 住持は知らぬ顔して過せしに、十日餘にして鶴二十四五羽を畫がけり。其の後又夜更けてうかゞひ見るに、（略）。

十一751 「先に畫がきたる檜の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、（略）よき枝ぶりの檜を見て、

其の意を得たれば、之を書添へんとて、わざ／＼歸り來りたるなり。」

十一75 8 図 日光山には華嚴瀧を始として、霧降・裏見・方等・般若等其の名世に知られたるもの少からず。

十一76 2 図 最も壯觀なるは華嚴にして、(略)。(略)、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。

十一76 5 図 裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、(略)、今は其の奇勝を見ることが能はず。

十一77 7 図 美濃の養老瀧は孝子の傳説を以て其の名天下に高し。

十一78 1 図 二瀧相並んで雄を争ひ、其のひゞき萬雷のとゞろくが如く、(略)。

十一78 9 図 又嚴冬の頃は瀑水落つるに随ひ氷結して、一面玉山銀臺となり、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。其の奇觀眞に名狀すべからず。

十一80 3 図 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、(略)。かぶり火も亦古代の風を其のままなり。

十一80 9 図 鶴匠は一人にて十二羽の鶴を使ひ、(略)、たくみにさばきてもつれしめず。此の間に鶴を引上げて呑みたる魚を吐かせ、再び之を水に放ち、又かぶり火に薪を添ふるなど其の手練實に驚くべし。

十一81 2 図 (略)、鶴は盛に活動し、

ひたすら其の獲物の多からんことを競ふ。

十一83 7 図 我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。

十一84 1 図 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

十一84 3 図 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、土砂其ノ他ノ雜物ヲ去リ、(略)。

十一84 6 図 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、(略)、長サ四尺バカリ、直径尺餘ノ錠綿トス。(略)。其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、(略)。

十一86 2 図 サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)、ツムニマキトラシム。工女ハ常ニ其ノ前ニ立チ、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。

十一88 1 図 蜘蛛は其の體より絲を出して網を張る。

十一88 10 図 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、(略)。

十一89 2 図 (略)、蟻は(略)、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十一89 4 図 蟻は其の種類によりて種

々の巢を造れども、(略)。

十一89 5 図 蟻は(略)、多くは地下に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

十一90 2 図 一種の草の實を食用とするを以て、(略)、ひたすら此の草の成長を保護し、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

十一90 3 図 アメリカの一地方に産する蟻の一種に收穫蟻といふものあり。(略)、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

十一92 2 図 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は(略)、争ひて高き價をつくべし。

十一92 2 図 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は各其の家の他人の手に渡らんことを恐れて、(略)。

十一92 3 図 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。かくて其の家の價は段々高くなりて、(略)。

十一92 7 図 之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらんことを恐れて、(略)。

十一92 8 図 之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、賣家の持主五人は

(略)、争ひて其の價を低くすべし。

十一92 9 図 之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。かくて其の家の價は段々安くなりて、(略)。

十一92 10 図 之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。(略)、最も價を低くしたる人、其の家を賣ることを得べきなり。

十一93 2 図 物の價は(略)、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。

十一94 4 図 (略)、價次第に安くなりて、普通の價よりも下るに至る時は、次第に其の製造高を減ずるが故に、供給も隨つて減じて、(略)。

十一94 10 図 (略)、供給に限りある物、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、需要増すに隨ひて、其の價益々高くなり、(略)。

十一95 6 圖 (略)、南北に別れ候より最早一箇年に相成候。(略)。其の後日々業務に追はれ、餘り旅行も致さず候へども、(略)。

十一97 3 圖 (略) 是より一條の大道遠く北へ通じてロシヤ領に入候。其の南部は車馬の往來自在にして、(略)。

十一102 6 圖 此ノ時諸葛孔明トイフ人アリ、民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)、劉備ハ三度マデモ其ノイ

ホリヲ訪ヒ、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

十一102 8 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、

一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、(略)。

十一103 4 孔明、(略)、遂ニ備ヲタ

スケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シ

テ其ノ一ヲ保タシム。

十一103 8 備又其ノ子ニ向ヒテ、

「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事

フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」ト

イフ。

十一104 3 蜀國ノ魏・吳ニ強國ト相

對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシ

ハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

十一104 10 サキニ蜀ノ南方亂レシ

ヤ、孔明謀ヲ以テ其ノ將孟獲ヲ捕ヘ、

(略)。

十一105 5 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再

ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクス

ルコト七回ニ及ビシカバ、賊將歎ジ

テ、(略)、マタ反スルコトナカリキ。

其ノ度量ノ廣大ナルヲ知ルベシ。

十一106 1 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒

ス。蜀ノ軍其ノ植ヲ護リテ國ニ歸ラ

ントス。

十一106 8 (略)、仲達ハ孔明ノ墓ヲ

祭リ、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草

ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十一108 5 男はゆるやかな股引をは

き、胴衣を着けて、其の上に長い上

衣を着る。

を通るのを見ると、(略)。

十一112 1 何れの家にても卵を賣れ

ば、其の代金にて一年中用ふる塩・

醬油を買ふに餘あり。

十一112 3 池には大抵鯉・鮒等を養

ひて、二年毎に之を賣るに、其の利

少からず。

十一112 6 (略)されば全村頗るゆたかに

して、皆其の家業を樂しめり。

十一113 2 校長も着實温厚なる人に

して、(略)。其の他の教員も校長を

模範として、職務に勉勵するが故に、

(略)。

十一113 8 或年暴風雨の爲に不作な

りしことあり、其の翌年學校の經費

を議するに當り、(略)。

十一113 9 (略)、其の翌年學校の經

費を議するに當り、村會にては其の

豫算の不足なるべきをうれへて、之

を増加せんとせしに、(略)。

十一114 5 之によりて用水路の改修

行はれ、灌溉・排水其のよろしきを

得て、水田は乾田となり、(略)。

十一115 1 青年の氣風を養ひ、智德

をみがくを目的とせる青年會あり、

其の一事業として杉・檜等の植林を

營み、(略)。

十一115 2 (略)杉・檜等の植林を

營み、其の利益を以て學校の基本金

とし、(略)。

部をさきて、一村共同の有益なる費

用にあつることとせり。

十一116 9 武勇のほまれ細戈千

足の國の名に負ひて、禮儀は早く唐

人も 稱へし其の名君子國。

十一119 9 陛下が萬機の政をみそな

はす御かたはら、折にふれてよみ出

でさせ給へる御製にも、常に國家を

思ひ、臣民をあはれみ給ふ大御心の

拜察せらるゝは、かしこしともかし

こき極みなり。いでや、其の二三を

申さん。

十二4 5 學問を修むるにも、事業

に従ふにも、常に此の心ありてぞ其

の目的は達し得らるべき。

十二7 2 敵はかなはじと、にはか

に路を變へて逃れ去らんとせり。我

は急に其の前路をさへぎりて攻撃せ

しかば、(略)。

十二7 5 (略)、敵の兩旗艦は遂に

沈没し、其の他にも相ついで沈没せ

るもの多し。

十二8 4 (略)敵を待ちしが、東

方に當りて、はるかに數條の黑煙を

見る。よりて主戰艦隊及び巡洋艦隊

は東方に向つて、其の進路をふさぎ、

(略)。

十二8 5 (略)、片岡・瓜生・東郷

の諸隊は其の退路を絶ち、(略)。

十二8 10 (略)、ネボカトフ少將は

を打電し、其の後に附加して曰く、

(略)。

十二11 9 船ヲ造ルニハ先ヅ綿密ナ設

計圖ヲコシラヘル。其ノ圖ハ船ノ切

断面及び構成等ヲ何十分ノ一ニシタ

縮圖デ、(略)。

十二13 6 船ヲ組立テルニハ、船臺ノ

上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、其ノ

上ニ先ヅ龍骨トイフモノヲ置ク。

十二15 9 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ

疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ

テアル。船ヲ其ノ中ニ入レテ一方ノ

扉ヲ閉デ、(略)。

十二15 9 船渠ノ(略)。船ヲ其ノ中

ニ入レテ一方ノ扉ヲ閉デ、其ノ水ヲ

ポンプデカイ出シテ工事ニ掛ルノデ

アル。

十二16 10 各地の測候所は其の地方

の氣象觀測を毎日三回中央氣象臺に

報告し、(略)。

十二17 2 (略)、中央氣象臺は(略)、

毎日其の日の午後六時より翌日の午

後六時に至る、向ふ二十四時間の全

國氣象の大勢を豫告す。

十二17 5 又各測候所が此の全國天

氣豫報と其の地の觀測とによりて、

其の地方の天氣を豫告するを地方天

氣豫報といふ。

十二17 5 又各測候所が(略)、其

の地方の天氣を豫告するを地方天氣

豫報といふ。

十二17 9 (略)、我等は之を見て、

明日の天氣如何を豫知することを得べく、又其の日の天氣豫報は毎朝の新聞紙にても知るを得べし。

十二201 又風の方向は矢を以て示し、(略)。又其の強弱は矢の羽の數にて表すなり。

十二205 蝶や蜂は花から花へいそがしさに飛廻つて花の汁を吸ふ。其の時花の中の花粉は是等の蟲に着いて、(略)。

十二210 (略)、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。

十二219 植物も動物と同じく、呼吸作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、其の吐出す炭酸瓦斯の分量は至つて少い。

十二2110 (略)、盛に炭酸瓦斯を取つて、其の中の炭素を養分にして酸素を放つ作用がある。

十二229 金魚を細口のびんに入れて、二三日も水を取換へないと、金魚は死んでしまふ。(略)。若し其の中に青い水草を入れて置けば、(略)。

十二277 城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。」と。鳥居勝商といふ者あり、進み出でて其の使たらんことを請ひ、(略)。

十二303 昔調伊企しらゐいは新羅と戦ひて新羅の將に捕へらる。其の將伊企しらゐいをくわいして日本に向つて、「(略)。」と號ばしむ。

十二314 形名の妻、(略)、侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圍を解きて去れり。

十二316 (略)、瓜生保其の弟義鑑等と共に杣山に旗あげして義貞に應ず。

十二323 是等の人々は(略)、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。

十二324 是等の人々は(略)、其の志操の固きは男子にも勝れり。

十二3210 かの山内一豊の妻が貧苦に居て、夫の一大事を忘れざりしは、戰陣の際に良人の名譽を全うせる形名の妻と其の徳を同じうすとやいはん。

十二332 (略)、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、(略)。

十二341 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

十二346 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集シ、(略)。

十二3410 (略)、之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、其ノ内何千圓ハ町内有志者ノ寄附金デアル。
十二355 本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列

スルヲ得タルハ(略)。
十二365 (略)、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

十二366 (略)、専ラ教授ノ便ヲ計リ、實用ニ重キヲ置キ、其ノ注意ノ周到ナル、縣下マレニ見ル所ナルベシ。

十二377 會津は奥羽重要の地に於て、(略)。將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。高虎「年老いて其の任にあらず。」とて之を否む。

十二383 秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。「嘉明に如く者はあらず。」と答ふるに、(略)。秀忠大いに感じて其の言に隨ひ、嘉明を擧げて會津に封ぜり。

十二391 (略) 「余は秦王を其の朝に叱したるもの。」

十二396 廉頗之を聞きて、深く其の非をさとて、相如の門に至りて罪を謝し、(略)。

十二405 就中噴火口の最も大なるを肥後の阿蘇山とす。其の噴火口の大きさは(略)。

十二411 最も東なる根子岳は七面山とも稱し、(略)。(略)、其の西にある高岳は高さ千六百九メートルあり。

十二415 中岳は現今活動せる部分にして、其の火口は直径六百メートルの圓形をなし、(略)。

十二4110 但し此の噴孔は時々其の位置を變じ、其の勢力にも消長あり。
十二4110 但し此の噴孔は時々其の位置を變じ、其の勢力にも消長あり。

十二4110 中岳は(略)。(略)。烏帽子岳は其の西南方に在りて、(略)。

十二422 烏帽子岳は其の西南方に在りて、(略)、其の北なる杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。

十二428 火山の破裂は地中の水蒸氣、(略)、ほどばしり出づるより起る。其の破裂するや、土地はふるひ、(略)。

十二444 作物は米・麥其の大部分を占めて、(略)。

十二445 (略)、米の作付反別は凡そ二百九十萬町歩、其の收穫は年々凡そ四千六七百萬石にして、(略)。

十二447 (略)、麥の作付反別は凡そ百八十萬町歩、其の收穫は年々凡そ二千萬石なり。

十二448 我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

十二451 (略)、生絲は輸出品の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。
十二4510 西洋諸國の耕地が其の總面積の二割より六割に及べるに比すれば、(略)。
十二463 栽培法の如きも、舊法になつまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。

- 十二48 8 図 三池・夕張・大の浦、掘れど炭礦限りなく、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は銅の産額たびまゝし。古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は山をうがちて山を鑛る。
- 十二49 4 図 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も古く其の名を知らるゝたり。
- 十二52 1 図 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマヌカレズ。
- 十二52 7 図 廣告ハ商業發展ノ有力ナル手段ナリ。近年各國商人皆爭ヒテ其ノ方法ヲ講ジ、(略)。
- 十二52 8 図 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、(略)。
- 十二55 1 図 (略)、遼陽あり。(略)。其の西南なる首山堡は(略)。
- 十二55 7 図 滿洲政治・交通の中心たる奉天は、(略)。(略)。其の附近我が國人の在留するもの多し。
- 十二56 8 図 (略)、日清・日露兩役に有名なる旅順口に達す。(略)。其の後方の山々は皆我が同胞の血をそぎし地ならざるはなし。
- 十二57 9 図 撫順は(略)。其の炭坑は炭層厚く、炭量亦豊富なり。
- 十二59 4 図 倫敦にはテームス河、巴里にはセーヌ河、柏林にはスプレー河ありて各其の市街を貫流す。
- 十二60 1 図 巴里の人口は二百八十

- 萬、柏林は二百萬を算す。(略)近年獨逸國力の盛に發展すると共に、首府の人口も年々著しく増加する勢なれば、其の巴里と同數に至るも亦甚だ遠からざるべし。
- 十二60 6 図 されど十字街頭に立てる巡查の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、(略)。
- 十二63 3 図 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、市中到る處其の往來織るが如く、(略)。
- 十二63 10 図 英蘭銀行は設立の古きと、資本の多きと、信用の厚きとに於て、其の右に出づるものなし。
- 十二65 3 図 最も人目を引くものは國會議事堂なりといへども、其の規模甚だ大ならず、其の建築も亦新し。
- 十二65 4 図 最も人目を引くものは國會議事堂なりといへども、其の規模甚だ大ならず、其の建築も亦新し。
- 十二67 3 図 (略)、亞弗利加・印度の獅子、南亞米利加の野牛等の、(略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。
- 十二67 7 図 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、獸類中にも(略)、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。
- 十二67 10 図 (略)、數多の猿遠く數百里の地より集り來りて之を食ひ、果實盡くれば、再び其の故郷に歸るを

- 例とす。
- 十二69 2 図 (略)食物の缺乏せる頃に至れば、温暖なる地方に移らんと欲するもの期せずして相集り、次第に其の數を加ふ。
- 十二70 2 図 されば河水・湖水におぼれて魚腹に葬らるゝもの、野獸の爪牙にさかれて食はるゝもの、其の數を知らず。
- 十二71 8 図 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。
- 十二72 6 図 「疏食をくらひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。
- 十二72 9 図 (略)何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、成功は期せずして到る。
- 十二72 10 図 引込思案の人は徒に其の結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。
- 十二73 1 図 引込思案の人は(略)、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時機を失ふこと多し。
- 十二73 3 図 快活なる精神を以て熱心に其の事業に従事せば、天下何事か成らざるを憂へん。
- 十二73 8 図 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして、彼をして其の志を成さしめたる

- は西班牙の皇后イサベラなりき。
- 十二76 5 図 (略)、遂に皇后イサベラの知る所となり、其の保護の下に此の大探檢を行ふに至れり。
- 十二78 5 図 コロンブスは獨り堅固なる決心を以て動かざること山の如く、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。
- 十二78 9 図 人々始めて陸地の近きを知り、其の夜は一同うれしさに眠ること能はず。
- 十二80 5 図 (略)、皇后も亦コロンブスを引見して、厚く其の勳功を賞せり。
- 十二80 7 図 西曆一千四百九十二年八月三日の朝、今日はコロンブスが遠征隊出發の日なりとて、(略)。(略)。かくてコロンブスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。其の後コロンブスは數回の航海を試みしが、(略)。
- 十二81 1 図 (略)、北條早雲が小田原城に據りて、次第に其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。
- 十二82 8 図 (略)、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音樂師がある。(略)一人の紳士があつた。づかくと走り寄つて、「ちよつと貸したまへ。」と言ひながら、其のバイオリンを取つて彈始めた。
- 十二87 4 図 (略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勸む。(略)。

喜劔大いに罵つて曰く、「(略)、人面獸心とは汝の事なるべし。(略)。

喜劔其の後江戸に出て、義士復仇の舉を聞き、(略)。

十二874 喜劔其の後江戸に出て、義士復仇の舉を聞き、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

十二8710 (略)、良雄以下既に死を賜へり。喜劔直ちに泉岳寺に行き、其の墓を拜して曰く、(略)。

十二882 喜劔直ちに泉岳寺に行き、其の墓を拜して曰く、「我當に萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を抜き切腹して終る。時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

十二897 凡そ家内の掃除は座敷・居間・臺所のみならず、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは(略)。

十二8910 煙草の吸ひがらより大火事を引起せしこと其の例數ふるにいとまあらず。

十二913 (略)「其の母によりて其の子を養せよ。」といへるが如く、(略)。

十二913 (略)「其の母によりて其の子を養せよ。」といへるが如く、(略)。

十二921 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、(略)。

十二922 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、衣服・飲食の

費皆其の範圍を越ゆることなかるべし。

十二935 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を爭ひたり。

十二937 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く、(略)。

十二939 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く、「孔子は年少にして禮を好み。我死せば、汝必ず之を師とせよ。」と。子其の遺言を奉じて、往いて學べり。

十二951 景公よりて魯と好を結ばんが爲に魯公と會見す。其の時齊の有司進みて戲樂を奏せしかば、(略)。

十二953 (略)「魯人は君子の道を以て其の君を輔くるに、我が臣の行ふ所は禮に反す。

十二963 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、(略)。

十二964 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、市井の感化を恐れ、三度其の居を遷せりといふ。

十二965 孟子の幼時母は深く意を其の教育に用ひ、(略)、三度其の居を遷せりといふ。其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、(略)。

十二966 其の後孟子(略)、學を卒へずして歸りし時、母たま／＼機上に在り。直ちに其の機を斷ち、孟子を戒めて曰く、(略)。

十二9610 孟子死して二千餘年、孔子と共に其の名益々あらはる。

十二972 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。孟子の如きは即ち其の一人なり。

十二985 公德とは(略)、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二996 (略)が如きは、個人としても、國民としても、其の心の奥ゆかしきを感じずや。

十二1001 汽車・汽船・電車等の交通機關、博物館・圖書館等の公共營造物に在りては、(略)。若し公衆の間に、規則を守り、規律を重んずる心乏しき時は是等文明の利器も其の運用を全くすること能はず。

十二1006 之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。

十二1015 他國に行きて、其の市街・建築物等の狀況、汽車・電車中に於ける乗客の舉止、道行く人の容儀等を見れば、(略)。

十二1016 他國に行きて、(略)等を見れば、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、(略)。

十二1017 他國に行きて、(略)等を見れば、未だ其の國情を詳にせず、其の國人と一語を交へずして、(略)。

十二1018 他國に行きて、(略)等を見れば、(略)、早くも其の國民の

品格の知らるゝものなり。

十二1023 我が國の地方自治團體は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。其の土地に廣狹の差あり、其の組織に繁簡の別ありといへども、(略)。

十二1025 我が國の地方自治團體は、(略)に分れたり。其の土地に廣狹の差あり、其の組織に繁簡の別ありといへども、(略)。

十二1025 (略)、地方自治の精神に基づきて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。

十二1028 地方人民協同一致して、(略)、誠意其の團體の爲に力を致すの精神はなり。

十二1029 此の精神は實に自治制の根本にして、又其の生命なり。

十二1033 (略)、市町村長・參事會員等の其の事務を處理するも、(略)。

十二1036 市町村長・議員等を選挙するには専ら其の人物に重きを置き、(略)。

十二1037 (略)、親族・縁故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

十二1042 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を舉ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。

十二1043 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠

實なるも、(略)。

十二104 9 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、(略)によりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

十二105 6 自治制の如き最良の制度も、人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其の美果を收むるを得んや。

十二106 7 (略) 各府縣に於て多額の直接國税を納むるもの十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるものはなり。

十二106 9 第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。

十二108 3 兩院の決議一致すとも、天皇の裁可を経ざれば、其の効力を生ぜざるなり。

十二108 9 上奏といひ、建議といひ、請願といひ、其の手續に於て各相異なりといへども、(略)。

十二109 3 (略) 議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

十二109 10 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ(略)。今謹みて其の大意を述べん。

十二110 3 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを論し給ひ、其の後時世の移り變るに連れて、兵制にも變遷あること、

(略)を詳に御論しあり、(略)。

十二110 8 されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は特に深かるべき。

十二111 4 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

そのいち「其二」(名) 1 其の一

十一61 9 第十五課 招待狀 其の一 そのうえ「其上」(接) 4 其の上

九38 4 今は水路に汽船があり、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。鐵道の通じてゐない所でも、馬車や人力車がある。其の上道もよくなり、橋も多くかけられた。

十84 2 田を耕させたり、荷車を引かせたり、重い物を負はせて遠くへ運ばせたり、農家では牛を色々の勞働に使役する。其の上牛肉と牛乳は飲食物としても大切である。

十85 3 馬も牛と同様に勞働にも使われ、食用にもなる。死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。其の上戦争には必ず無くてはならぬもので、兵器・糧食を運送し、(略)、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十二92 2 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、衣服・飲食の費皆其の範圍を越ゆることなかるべし。其の上不時の消費の爲、多少の準備を爲し置くを必要とす。

準備を爲し置くを必要とす。

そのうち「其内」(副) 15 ソノウチ そのうち ソノ中 その中 その内 其のうち 其の中

二63 5 ヨクノフカイオヂイサン

ハ(略)、カレ木ノ上ニノボツテ、トノサマノオカヘリヲマツテキマシタ。ソノウチニトノサマガオトホリニナツテ、(略)。

二55 4 アル日母ガ「早く、早く。」トヨンダノニ、(略)、「ハ、今スグニ。」トイツテ、スグニハキマセンデシタ。ソノウチニ、トナリノネコガダイジナキンギヨヲツツテ、(略)。

三69 6 ウラシマハ(略)、リュウグウノオキヤクサマニナツテ、ウチヘカヘルノモワスレテキマシタ。(略)ソノウチニウラシマハウチヘカヘリタクナツタカラ、(略)。

四8 1 二人はまだ方方がめて、あそんでゐましたが、そのうちに雨がふりさうになつたので、いそいで山を下りました。

四29 2 是るになつて、だんだんあたたかになると、枯れたあとから、まためをふき出して、そのうちにきれいな花をさかせて見えます。

四39 7 (略)、サザエガ(略)、ジマンバナシヲシマシタ。ソノウチ

ニ海ノ水ヲカキマハスヤウナ大キナオトガシマシタ。

五25 8 役人はしばらく考へてゐましたが、そのうちにゑざりにむかつて、「(略)。」と申しわたしました。

五43 6 文太郎ハ(略)、ハジメテ汽車ニノリマシタ。(略)。走ツテキル汽車ガスレチガフ時ニハ、向フノ汽車ニノツテキル人ノカホハヨク見エマセン。(略)ソノウチニ下ノ方デカミナリノヤウナ音ガシマシタ。

五53 3 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワヲシタ時、カウモリハ(略)、ドチラヘモツキマセンデシタ。ソノ中ニケモノガ勝チサウニナツタノヲ見テ、(略)、ケモノノミカタニナリマシタ。

五76 5 ふだんは人も通らない道だから、どこをどう行つてよいかわらない。そのうちに日が暮れて、まつ暗になつてしまつた。

七69 4 其の内參上してお禮を申し上げます。

八13 2 寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなりました。その内參りませう。

八23 5 歸つて見ると、自分の家は戸がまだしまつてゐて、(略)。牛小屋の牛はしきりに鳴いてゐるのに、誰も草をやるものがありません。その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て來ました。

八26 一週間程たづねたが、白雀は

見つかりませんでした。其の中に雀のことはいつかわずれて、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、(略)。

九23 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。(略)其のうちに花々しい戦争もあるだらう。

そのかみ「其上」(名) 1 其ノカミ

十102 又畝傍山ノ東南ニ榎原神宮アリ。コ、ニマウツルモノ、誰カハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ御威徳ヲ仰ガザラン。

そのさん「其三」(名) 1 其の三

十一63 第十五課 招待狀 (略)

其の三

そのに「其二」(名) 1 其の二

十一62 第十五課 招待狀 (略)

其の二

そのほう「其方」(代名) 1 その方

五27 役人は後からこゑをかけた、「こゝろ待て、ゐざり。金ぬす人はその方にきまつたぞ。」

そば「側」(名) 7 ソバ そば

四17 この時よりとものそばに居た、にたんの四郎たづねといふぶしが、(略)。

四19 ぬのししはどつとたふれましたが、(略)、ただつねはすぐにそばのたふれてゐた木の上へとびのきました。

四41 (略)、ヨクヨク見ルト、ソ

コハサカナヤノ店デ、ソバニ一セン五リントカイタフダガタテアリマシタ。

四67 三郎ハシンパシテ、ヒ

マサヘアレバ、母ノソバヘ來テ、「マダナホリマセンカ。

五11 そばを通る人が「美しい川だ。」といつて、ほめました。

五38 すがるはその大ぜいの子をおみやのそばでやしなつて居つたと申します。

七11 松を火にたくゐるりのそばで、夜はよもやま話がはずむ。

そばだて「款」(下二) 1 そばだてる「一テ」

十一55 しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。

そびえたつ「聳立」(五) 1 そびえたつ「一チ」

四14 青ぞら高く そびえたち、からだに雪のきものきて、

(略)、ふじは日本一の山。

そびゆ「聳」(下二) 4 ソビユ そびゆ「一エ・ユ・ユル」

十11 木曾の櫓よ、白雲をうなじよまきて、峯高く空よそびえき。」

十94 興福寺ノ五重塔高ク其ノ北ニソビユ。

十97 其ノフモトニ大佛殿

・興福寺高クソビエ、西ニハ西大寺・薬師寺等ノ堂塔アリ。

十二60 佛國の長き歴史を飾れる壯大なる建築の數々高く中空にそびゆるのみならず、(略)。

* そば 凸おぼ

そぼう「粗暴」(名) 1 粗暴

十二10 血氣にはやりて、粗暴の所行あるものは小勇の人にして、真正の軍人にあらず。

そま「杣」(名) 1 ソマ

六68 材木ヲ山ヨリキリスモノハソマナリ。

そまつ「粗末」(形状) 3 ソマツ そまつ

六37 學校で徳川光圀の話を聞いて、紙などをそまつにしてはならないと思つた。

八40 (略)、一箱ノマツチガ我等ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手ヲ要スルカヲ知ラズ。之ヲ思ハバ一本ノマツチモソマツニハ使フベカラズ。

十37 又着物はそまつながら、さつぱりしたものを着て、(略)。

そまやま「杣山」(地名) 1 杣山

十二31 (略)、瓜生保其の弟義鑑等と共に杣山に旗あげして義貞に應ず。

そまゐる「染」(五) 1 そまゐる「一ツ」

五28 もとよりすつばいこのからだ、しほにつかつてからくなり、し

そにそまつて赤くなり、(略)。

そむ「染」(四) 1 そむ「一ミ」

十二14 質素を旨とせざればいつしか文弱に流れ、輕浮の風にそみ、心も無下に賤しくなりて、(略)。

そむ「初」 凸さそむ・ほころびそむ

そむ「染」(下二) 1 染む「一メ」

十53 實盛日頃申し候に、『戰場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。』

そむく「叛」(四) 4 ソムク そむく 叛く「一キ」

九49 (略)、東國の蝦夷叛きしかば、天皇日本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

九62 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばしくなりき。

十一105 或時將軍馬護、孔明ノ軍令ニソムキテ大敗ス。

十二92 儉約を守るは大切なれども、人情にそむき、義理に外れても、費用を惜しむは賤しむべき事なり。

そののこす「染殘」(五) 1 染メ殘ス

「一シ」

八64 紺や淺黄やカスリハアキデ染メマス。(略)。又所々白ク染メ殘シタノガカスリデス。

そめる「染」(下二) 5 ソメル 染メル「一メ・メル」

四37 麥ワラデハ(略)、又赤ヤ

青ヤキ色ニソメテ、麥ワラザ
イクニモツカヒマス。

八64 紺ヤ淺黄ヤカスリハアキデ染
メマス。

八64 4 コク染メタノガ紺デ、ウスイ
ノガ淺黄デス。

八64 8 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノ
ガ縞物デス。

八66 1 其ノ中へ白絲ヤ白布ヲ入レ
テ、紺ヤ淺黄ニ染メルノデス。

そめわく「染分」(下二) 1 染分ク
「一ケ」

十42 2 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花鳥
等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ我
ガ國輸出品ノ一ナリ。

そめんき「梳綿機」(名) 2 梳綿機
梳綿機

十一84 8 既に筵綿トナレバ梳綿機
ニカク。コレニハ細小ノ針金ニテ作
リタルブラッシノ仕掛アリテ、筵綿
ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。

アタカモ人ノ頭髮ヲクシケヅルニ似
タリ。

十一85 3 梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ
眞白雪ノ如ク、四尺程ノ幅トナリテ
進ム様、精巧ナルレースノ流ヲ見ル
ガ如シ。

そもそも「抑」(副) 1 ソモソモ

十二35 7 コ、ニ本校新築落成式ヲ
舉行セラル、ニ當リ、其ノ席末ニ列
スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル
所ナリ。ソモソモ明治五年學制發布

以來、教育ノ普及發達ハ年ヲ追ウテ
イヨク盛ニ、(略)。

そよそよ(副) 3 ソヨソヨ そよ／＼
三17 3 アタタカイカゼガソヨソ
ヨトムギノホノ上ヲフイテ
キマス。

九67 10 雨のはれた朝、花の香を送つ
て、そよ／＼と吹く春風には、我が
身も蝶の様に飛立ちたくなる。

十63 8 昨夜の風雨は名残なくをさま
つて、そよ／＼と吹く風に、海面は
さざ波を立ててゐる。

そら「空」(名) 17 ソラ そら 空
ムあおぞら・おおぞら

一36 1 ソラガクモツテキマシタ。
二25 アチラノソラガマツカ
ニナリマシタ。

三45 6 あるばん一人の男がそ
らをむいて、ながいさををふ
りまはしてゐました。

四79 2 所らをとんでゐる鳥
でも、三羽ねらへば、二羽だけ
はきつといねとすほどの名人
でございます。

四82 5 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、そらにまひ上つ
て、ひらひらと二つ三つまはつ
て、波の上におちました。

五85 私はもと雨の一しづくです。
それからあつて、山の木のはの上に
休んでゐましたが、(略)。

五55 7 (略)、カウモリハ(略)。(略)。

(略)、夜ニナルト出テ空ヲトビアル
クヤウニナツタトイフハナシデス。

六14 3 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、
空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ
六81 2 今ハ工業モ大イニヒラケ
テ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。

八8 2 秋の日の空すみわたり、
風暖にさてもよき日や。

八41 6 あちらの空がまつかだ。火の
こが花火のやうに散つてゐる。

八56 3 駝鳥は(略)。走ることは馬
よりも早いので、空を飛ぶ必要はな
いから、つばさははなはだ小さい。

八60 3 粟津の松の色はえて、か
すまぬ空ののどけさよ。

九66 5 (略)、たこの空高く上る、是
皆人の自然の風を利用したるなり。

九80 6 筑紫に到りて後は、(略)、
雨の朝、風の夕、見るもの聞くもの
につけて、都の空のみしたはしく、
(略)。

十11 10 「我元 木曾の檜よ、
白雲を うなじよまきて、峯高く
空よそびえき。」

十13 2 「熱き國 しげる林よ
生ひ立ちし 我、タガヤサン、我が
友よ ひとり離れて、はる／＼と
五百重のしほ路、故里の 空なつか
しや。」

そらまめ「空豆」(名) 1 そら豆
七21 2 大豆・小豆・さゞげ・そら
豆・なた豆などはすべて私どもの親

類です。

そらもよう「空模様」(名) 1 空模様
十69 1 (略)、墨を流したる如き空
模様にて、一寸先をも見分けること
能はず、心ならずも夜明を待ちたり。

そらんず「語」(サ変) 1 そらんず
「一ジ」

十15 9 紫式部は幼き頃より物覺よ
く、兄の書を読むを聞きあて、直ち
に之をそらんじ、少しも忘るゝこと
なかりしかば、(略)。

そり「橇」(名) 2 そり
七62 9 又寒き國にては、犬をして
そりを引かしむ。

七63 1 八九頭の犬いきほひよく數
人を乗せたるそりを引きて、雪の道
を走り行くさま、まことにいさまし。

それ「其」(代名) 87 ソレ それ
二19 1 オハナハモミヂノハヲ
一マイヒロヒマシタ。ソレヲモ
ツテ、ウチヘカヘツテ、(略)。

二39 6 キモノヲヌツタリセン
タクシタリシテクダサルノハ、
ドナタデスカ。「ソレハオカア
サンデス。

二52 7 オヂイサンガソコヲホル
ト、(略)タカラモノガタクサン
デマシタ。トナリノワルイオヂ
イサンハソレヲキイテ、犬ヲ
カリニキマシタ。

二56 2 ヨイオヂイサンハ(略)、
ウスヲツクツテ、ソレデ米ヲ

ツキマシタガ、(略)。

三145 「日本中ニハヨワイモノ
バカリデ、ジブンノアヒテニ
ナルモノハ一人モナイ。」ト、
イバツテキマシタ。ソレヲ天子
サマガオキキニナツテ、(略)。
三407 うが(略)。今もぐつたか
とおもふと、すぐに一ぴきく
はへて、でてきます。それをた
べると、またすぐにもぐります。
三412 うが川の中でさかな
をとつてゐました。(略)。それ
をからすが木の上から見て
ゐて、(略)。

三468 さんなところ でさをを
ふりまはしたつて、どうしてとど
くものか。それよりはやねの
上へあがつてはたけ。」

三707 (略)、「モウウチヘカ
ヘリマセウ。」トイヒマシタ。オト
ヒメハ「ソレハマコトニオナゴ
リヲシイコトデゴザイマスガ、
(略)。

四306 母が父に「もうすぐお
正月ですから、もち米をようい
しなればなりません。」といひ
ますと、三郎はそれをきいて、
(略)。

四317 (略)「もちにする米とごは
んの米はどうちがひますか。」
(略)。「略」、「三郎さんはまだ
それを知らなかつたのですか。

四348 次郎「それでは あんの
豆と、だんごにつける こなの
豆と同じですか、ちがひます
か。」三郎「それは知りません。」

四421 をばさんからいただいた
おとしだまにのしが ついてあ
りました。おちよはそれを見て、
(略)。

四439 (略) のしあはびといふの
は、あはびの肉をのして、紙
のやうにうすくしたものです。
それがだんだんにかはつて、
(略)。

四534 (略)、「オマヘノナカマ
トオレノナカマト、ドツチガ
多イカクラベテ見ヨウ。」トイ
ヒマシタ。ワニザメハ「ソレハ
オモシロカラウ。」ト答へて、(略)。
四561 (略)、「オマヘタチハウマ
クダマサレタナ。オレハココ
ノヲカヘ來タカツタノダ。」ト
イツテワラヒマシタ。ワニザメ
ハソレヲキクト、大ソウオコ
ツテ、(略)。

四601 白ウサギハ目ヲコスツ
テ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシ
タ。スルト神サマハ、「ソレハ
カハイサウナコトダ。

四797 (略)「なすのよ」と申す
ものがございます。(略)。これ
にまさるものはございせん。」
(略)。よしつねは「それをよべ。」

五249 (略)「これは私が毎日使つてゐ
た釜でございます。それを私のす
にこのゐざりがぬすんだのでござい
ます。」

五298 (略)、「七月・八月あつといこ
ろ、三日三ばんの土用ぼし、思へば
つらいことばかり、それもよのため
人のため。

五66 おちよは(略)、葉書の裏へ
次のやうに書きました。(略)。それ
を母に見せました。(略)。

六97 御社の後から山へのぼる道が
あります。それは細くてけはしい道
で、(略)。

六139 ソノ時ニハ一羽ノガンハ列ヲ
ハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。
ソレハ道アンナイデアル。

六137 又トブ時ニハガアノト鳴合
フ。ソレハアヒツデアル。

六161 刈つた稻は(略)、よく日に
かわかします。かわくと、それを稻
こきでこいてもみを取ります。

六238 その時一人の子どもは大きな
石をもつて來て、力まかせに投げつ
けました。それがため、かめに大き
な穴があいて、(略)。

六257 金や銀ハ(略)、ドチラモ
タクサンアリマセンカラ、ネダンモ
高ウゴザイマス。銅ハソレニヒキカ
ヘテ、金や銀ヨリモタクサンアリマ
スカラ、シタガツテネダンモヤスウ
ゴザイマス。

六268 (略)「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、ソレヨ
リモツトタクサンアツテ、モツト役
ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六282 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハイ
レマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅
ヨリモマダ上デス。」ヤクワンハン
レヲ聞イテ、(略)。

六292 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、
時々青イ物ヲ出シマセウ。ソレガヤ
ハリサビデス。

六557 (略)、信玄は兵を右と左と二
手に分けて、はさみうちしようとし
た。謙信はそれを知つて、こちら
から先がけをしよう、(略)。

六586 ところがとなり國では信玄を
こまらせようと思つて、塩を送らせ
ないことにした。謙信はそれを聞い
て、(略)、じぶんの國から塩を送ら
せた。

六591 (略)「われ／＼はたがひにい
くさをしてゐるけれども、敵の國の人
には何のうらみもない。それを苦し
めるのはかはいさうだ。」

六627 (略)「かなしいことに目
が見えず、さがすことさへ出來ませ
ん。」それを聞くより妹の おふみ
はいそぎ道ばたを そこかゝかと
さがすうち、(略)。

六668 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ
通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、
後カラ一ツツヌケテオチルノヲ知

リマセン。ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ
來ルコトガアリマス。

六七五 間もなくむねの上からもちを
投げると、大ぜいがあらそつてそれ
を拾ひました。

七八五 正行（略）、皇居ニマキ
リテ（略）。（略）。天皇ハ（略）、

「（略）」トオホセ出サレタリ。正行
ハソレヨリ戦場ニ向ヒ、花々シク戦
ヒテ、（略）。

七三二 かけとかけねとは同じです
か。それは全くちがひます。

七四九 たとへばごふく間屋といふ
のは、織物を賣りたいといふ人にた
のまれて、それをほかへ賣渡してや
り、（略）。

七五二 又織物を買ひたいと
いふ人にたのまれて、それをほかか
ら買取つてやる店のことです。

七四四 風ニハカニ吹キテ、

トモシビキエタリ。保己一ハソレト
モ知ラズ、講義ヲツマケタレバ、弟
子ドモハ、（略）。

七二六 色々ナキカイガアツテモ、
ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デ
ス。

七二九 蠶をかつて絹糸を織つて絹織
物にするまでには、大そうな手間が
かゝる。それを考へると、絹織物の
あたひの高いのも、けつしてむりで
はない。

七三二 （略）、口から美しい糸を出し

て、からだを包む。それが二三日の
内に出来上つて繭になる。

七五四 十五分ホドニテ日本橋ニイ
タル。（略）。ソレヨリ二十分アマリ
ニテ上野公園ニ着ク。

七五六 仁王門ヲ入りテ、観音堂ヲ
拜シ、ソレヨリ水族館ヲ見ル。

七五九 明日ハ芝公園ヲ見テ、ソレ
ヨリ四十七士ノ墓ニマウデントス。

七六二 船にはらしんぎといふもの
があつて、それで方角をとつて進ん
で行くのです。

七六五 又夜はいくら暗くても、星
が出てあれば、それに便つて、居る
場所や方角がちやんと分ります。

七六八 海岸には燈臺がありますか
ら、それを見ると、あれはどこだと
いふことが分ります。

八一六 「召使ノ中ニカ、ル事ヲ
ヨク心得タル者アリ。ソレニ命ジタ
マヘ。」

八二五 白い雀が實際居るのか。
（略）。友だちは答へて、「居るさう
だ。さうしてそれをつかまへると、
大へんに仕合がよくなるといふが、
毎年一羽づつしか出て來ない。

八二二 農夫は此の話を聞いて、
「それはめづらしい。どうかして其
の雀をつかまへて見たい。」と思ひ
ました。

八四五 「（略）、誰かすぐに東京へ
電報を打つたのだらう。それが東京

の今朝の新聞に出たので、お分りに
なつたのにちがひない。

八四六 サクヤノクワジニウチハヤ
ケマセンデシタシンルキミナブジデ
スゴアンシンクダサイ。一郎「これ
ようございますか。」父「それでは少
し長過ぎる。

八四八 サクヤウチヤケナイシンル
キミナブジ。一郎「これようござ
いますか。」父「それでもよいが、
（略）、サクヤとは書くには及ばない。

八四九 ヤケナイシンルキミナブジワ
ダ。一郎「かうすると、ちやうど十五
字になります。」父「それでよろし
い。

八六三 綿ノ中ニハ種ガアリマスカ
ラ、綿クリ機械ニカケテ、ソレヲ取
去ルノデス。

八六五 サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カク
キザンデ、日ニホシテ、ソレカラウ
スニ入レテツキカタメマス。ソレヲ
藍玉トイヒマス。

九三二 八つの頭と八つの
尾とある大蛇あり、毎年來りて、我
が娘を取食ひ、今また残りの一人を
も食はんとす。それをかなしみ申す
なり。」

九三九 「こらどうした。命がをし
くなつたか、妻子がこひしくなつた
か。（略）」と言葉鋭くしかつた。

水兵は（略）、「それは餘りな御言葉
です。

九二四 水兵は（略）、其の手紙を差出
した。大尉はそれを取つて見ると、
（略）。

九三六 （略）、しらべて見ると、機關
の一部に故障があつたので、すぐそ
れを直した。

九三五 昔東海道といつたのは（略）。
一日の旅程を十里づつと見て、十二
日はどかゝつた。それが今は朝の急
行列車で東京を出立すれば、晩には
はや京都に着くことが出来る。

九四一 此ノスリバチノソコニア
タレル所ハ大ナル噴火口ニシテ、ソ
レヨリ噴出シタル物ノ四方ニナダレ
テ、冷エカタマリタルガ、（略）。

九四八 アリは幸にも星によりて方
角を見定むることを知り居たれば、
それを便りに進行せり。

九五五 保護色ノ變ズルハスデニ面
白キコトナリ。ソレヨリモナホ面白
キハ、（略）、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ
似ルモノノアルコトナリ。

九六三 梅の實の熟する頃降續く五月
雨は、農家に取つては大切な雨であ
る、それはちやうど田植の時節であ
るから。

九八二 昔或氏神のお祭に競馬の神事
といふ事があつた。それは（略）と
いふ定であつた。

九八三 神主は先づ神前で祝詞を上げ
て、それがすむと、（略）一番太鼓
を打鳴らした。

十66 ギザ／＼ノ深いノニナルト、

一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテ
キル。バラノ葉ヤ豆ノ葉ガ即チソレ
デアル。

十77 櫻ヤ梅ノ葉ハ唯一スデノ太イ
脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ
細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

十196 (略)、我我の讀む様なもの
なるまでには、幾度書直すかも知れ
ない。(略)。かうして出来上つたも
のを活版所へ渡す。活版所では、活
字拾ひがそれを讀みながら、活字を
拾つて並べる。

十209 印刷する紙は廣い大きな紙
で、幾ページ分も一度に刷れる。そ
れを折つて、揃へてとざる。

十215 (略)、この外に木版刷の本も
ある。それは版下を堅い木にはりつ
けて、其の上から彫つて版木を造り、
一枚づつ手刷にするのである。

十289 畑には麥がもう一寸程にのび
てゐる。それと隣り合つて、ねぎや
大根が青々とうねをかざつて、(略)。

十353 (略)「あれが此の室にはいる前、
先づ着物のほこりを拂ひ、はいつて
からは靜かに後の戸をしめた。きれ
いずきで、つゝしみ深いことは、そ
れでよく分りました。

十3510 (略) あいさつをしてもいてい
で、(略)、何を聞いても、一々明白
に答へて、しかもよけいなことはい
ひません。はき／＼してゐて、禮儀

・作法をわきまへてゐることも、そ
れですつかり分りました。

十364 (略) 私はわざと一巻の書物を床
の上に投げておきました。外の者は
少しも氣が附かないで、中にはそれ
をふんだ者もありましたが、(略)。

十366 (略)、あの青年ははいると
直に書物を取上げて、テーブルの上
に置きました。それで注意深い男と
いふことを知りました。

十192 一箱ノマツチヲ造ル手數モ
ナカ／＼複雑ナモノデ、ソレヲ大勢
ノ人ガ手分シテスルノデアル。

十195 (略)、乾イタ軸木ノ先ヘ藥
品ヲ附ケル者、ソレヲ温室デ乾カス
者、(略)。

十117 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事
ニバカリ掛ツテ居ルト、自然ソレニ
精神ヲコラスコトニナルカラ、(略)。

十125 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其
ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手
ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時
計ニ組立テルコトハ出来ナイ。

十1651 (略)、經濟上ヨリハ、成ル
ベク價ノ安いモノヲ求メ、ソレヲ成
ルベクスタリノナイ様ニ用フベク、
(略)。

十174 (略)、畫師は驚きて、「我
が畫がちゃんと思ひ構へしことを如何
にして知り給へるか。」と問ふ。「そ
は昨夜のぞき見て知りたり。」とい
へば、畫師それより後の二枚には畫

がかず、(略)。

十二209 又ひよやつぐみは美しく熟
してゐる果實をついばむ。それが爲
におのづと種子をあちらこちらへ散
布する。

それ(感)1 それ

十二4710 (略) 馬主は(略)、ひらりと
飛乗つて一散にかけ出した。「それ
馬主が逃げた。」といふので、大將の
部下の二三人は(略)、其の跡を追
つかけた。

それいか「其以下」(名)1 それ以下
十一941 (略)、靴の價はやうやく
安くなりて、普通の價に復するか、
場合によりては尙それ以下に下るべ
し。

それいじょう「其以上」(名)1 それ
以上

十一946 (略)、供給も随つて減じ
て、又普通の價に復するか、場合に
よりては尙それ以上に上るべし。

それから(接)23 ソレカラ それから
一311 ベンケイガウシワカマル
ニマケマシタ。ソレカラケライ
ニナリマシタ。

二365 (略)、「カガミモチヲマト
ニシテ、イデミマセウカ。」ト
イヒマシタ。(略)。アタルト、モ
チハ白イトリニナツテ、パツ
トトンデイキマシタ。ソレカラ
コノ人ノタニハ、オ米ガスコシ
モデキナクナツタトイヒマス。

三92 マサヲ「ボクハモウコンナ
ニタクサン ツミマシタ。」(略)。
オハナ「スミレハタクサン ナイ
カラ、マダソソナニ ツメマセ
ン。」ソレカラ三人 デツンダノ
ライツシヨニシテ、ハナタバ
ヲコシラヘマシタ。

三66 ウラシマハ(略)、子ドモ
カラソノカメヲ買ツテ、ウミヘ
ハナシテヤリマシタ。ソレカラ
二三日タツテ、ウラシマガウミベ
デツリヲシテキルト、(略)。

四226 (略) ニイサンハ(略)、オヤユビ
デス。大キイネエサンハ(略)、
高ユビデス。小サイネエサンハ
(略)、クスリユビデス。ソレカラ
私ハ人サシユビデ、三郎ハ小
ユビデス。」

四243 (略) オトミ「ソノ糸ハ一カケ
イクラデスカ。」(略)。オトミ
「ソレデハ五カケモラヒマセウ。
ソレカラフデヲ見セテクダサ
イ。」

五93 そこで大ぜいと一しよになつ
て、せまい谷へ下りました。(略)。
それから少し來ると、高いがけの上
へ出ました。

五115 ひるはあたたかな日にてらさ
れ、夜は美しい月をうかべながら、
休なしにあるきました。(略)。(略)
それから田や畠の間を通つて來るう
ちに、(略)。

五20 6 図 「そこにおさらがあるから、

取つておくれ。」(略)。母は「ありがたう。それからそこに切つてあるたけのこをおなべの中へ入れておくれ。」

五33 2 (略)、一バンハジメニツムノヲ一番茶トイヒマス。(略)。ソレカラ十四五日タツテツムノヲ二番茶トイヒマス。

五56 8 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ出シマシタガ、ソレカラ後ニハ石ト金ヲウチ合セテ出スヤウニナリマシタ。

五64 7 図 「あさつては學校がお休ですから、二人とも行つてお出でなさい。それから今すぐにへんじを書いてお出しなさい。」

五66 7 図 そのおしまひのあいである所へ、『(略)』と書きたして下さい。それから表の方へあて名を書いてお出しなさい。」

六11 6 かへりには同じ道を通らずに、別の道から下りました。(略)。それから又方々であそんで、うちへかへつたのは夕方でした。

六21 6 (略)、まづ象を船にのらせました。さうして象の重みで船の水につかつた所にするしを附けました。それから象をおろして、その代りに石をたくさんつみました。

六39 6 図 第一番に御所をがんで、それから東山の方へ行つた。

六40 2 図 明日は銀閣寺を見て、それから北山の方へ行つて、金閣寺を見て、北野の天神様へさんけいする。

六48 4 秀吉は(略)わりあてて、仕事をいそがせましたから、すぐに出來上りました。信長はこれを見て、ますますくかんしんして、それからだんく重く取立てて、一方の大將にしました。

六50 4 秀吉は(略)、光秀をうちほろぼしました。それから秀吉のいきほひは、しぜん一日と盛になりました。

六59 2 謙信はそれを聞いて、『(略)、敵の國の人には何のうらみもない。(略)』といつて、じぶんの國から塩を送らせた。それから信玄が死んだと聞いた時、謙信は「(略)。」といつてなげいた。

七33 3 蛾が出ると、絲が取れないから、まだ出ない内にむして、さなぎをころしておいて、それから繭をにて、絲を取るのである。

八65 6 サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、ソレカラウスニ入レテツキカタメマス。

十二14 9 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ造ツテ甲板トスル。サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、(略)、スツカリ出來上ルマデニハ非

常ナ手數ガ掛ル。それぞれ(名) 11 ソレゾレ ソレゾレ

六3 8 川の上にかけた橋、橋の下に立つてつりする人など、それぞれの景色をそへてゐる。

八14 6 大工ハノコギリ、左官ハコテ、石屋ハノミ、カヂ屋ハツチ、仕立屋ハ針、ソレゾレノ道具ヲ持ツテ、メイノ仕事ニカ、ル。

九8 4 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見ルト、カウイフ工合ニソレゾレ變ツテキル。

九9 5 花ノ附方モ亦ソレゾレチガフ。

九67 3 さて此の雨風も四季の時候につれて、それぞれにちがふ。

十14 4 図(略) 「ねだ低く、たるきは高し。(略)あらはれぬぬきもあるなり。つかとなり床となる身も、それぞれの務をもてり。

十40 2 図(略) 『二人の我が子それぞれに、死所を得たるを喜べり。』

十一9 7 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲコシラヘル者、軸木ヲ火ニ乾カス者(略)、揃ヘテ箱ニ入レル者、十二箱ツツ集メテ紙ニ包ム者、皆ソレゾレニチガフ。

十一66 7 其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

十二14 6 (略)、實際ハ龍骨ニモ、肋材ニモ、梁ニモ、外皮板ニモソレゾレノ附屬具ガアリ、(略)。

それで(接) 7 ソレデ それで

三13 8 (略)、ダレトスマフヲトツテモ、マケタコトハアリマセン。ソレデ「日本中ニハヨワイモノバカリデ、ジブンノアヒテニナルモノハ一人モナイ。」ト、イバツテキマシタ。

三16 8 (略)、けはやがじまんをしました。しかしのみのすくねにはまけました。それでけやははわらはれて、すくねはほめられました。「ひらがなのドリル」

三43 7 (略)、ミンナガフンパツスルヤウニナリマシタ。ソレディツデモイクサニカツタトイフコトデス。

五4 2 (略)、すぐに大神のお手をとつて、お出し申し上げました。それでせかい中がまたものととほりあかるくなつたと申します。

六15 5 かつた稻が雨にぬれると、米がわるくなるから、天氣のよい間に取入れなければなりません。それで取入れの時は大へんにいそがしくて、夜も十分に眠れないほです。

六26 1 図 銅ハ(略)、金ヤ銀ヨリモ

タクサンアリマスカラ、シタガツツネダシモヤスウゴザイマス。ソレデゼニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

八五五 いすかのくちばしは上と下がくちががつてゐる。それで「いすかのはしのくちががひ。」といふことがある。

それですから(接)2 それですから

四四七(略) おめでたくない時には、なまぐさものをもちひないことが、おほいのです。それです。ふだん品物をやりとりする時には、なまぐさのしるしにのしあはびをつけるやうになつたのでせう。

七八八(略) 大きくなつてから外國へ商賣その他の用事で出かける人もあります。又漁業その他海の仕事に出かける人もあります。それですから小さい時から海になれておくやうにしたいものです。

それでは(接)7 ソレデハ それでは

三八二(略) ボク ハレンジ ヲツムカラ、マサヲサン ハタンボボヲ オツミ ナサイ。「オハナ」ソレデハ ワタクシ ハスミレ ヲ ツミマセウ。」

三七一(略) (略)、モウウチヘカヘリマセウ。」トイヒマシタ。オトヒメハ「(略)、ソレデハ オワカレノシルシニコノハコヲオ上ゲ

マウシマセウ。

四六四(略) あの川むかふの木のしげつてゐるのが、八まんさまのもりです。次郎「それでは今くるまのとほつてゐる長いしが、八まんさまのまへのはしですね。」

四二四(略) オトミ「ソノ糸ハ一カケイクラデスカ。」オマツ「三センデス。」オトミ「ソレデハ五カケモラヒマセウ。」

四三二(略) 「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」(略)。その時あねのおはるは、「三郎さんはまだそれを知らなかつたのですか。それではうどんやさうめんは何でつくりますか。」

四三二(略) それではうどんやさうめんは何でつくりますか。三郎「知つてゐますとも。麦です。」おはる「それではごはんにたく麦と、うどんやさうめんにする麦は同じですか、ちがひますか。」

四三四(略) (略)、もちやだんごのあんは何で作るのですか。三郎「豆です。」次郎「だんごにつけるこなは。」三郎「あれも豆です。」次郎「それではあんの豆と、だんごにつけるこなの豆と同じですか、ちがひますか。」

それでも(接)4 ソレデモ それでも

五五五(略) それから今すぐにへんじを書いてお出しなさい。」おちよ「それでも私はまだ手紙の書き方を習ひませんから、どう書いてよいかわかりません。」

六二八(略) 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅ヨリモマダ上デス。」ヤクワンハソレヲ聞イテ、「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六三二(略) ほんとのまうけでない金は一厘でも取つてはならない。」それでもだんなが居ないから、だまつてゐれば、誰にも知れはしない。」

八八八 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、ソレデモタワマズ、奮戰ヲツバケテ居ルト、(略)。

それなら(接)1 ソレナラ

四五五(略) 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、(略)。ワケヲ申シ上ゲマスト、「ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテキルガヨイ。」

それはそうと(接)1 それはさうと

八二〇(略) (略)、雀といふものはすぐふえるもので、又大そう作物を荒すものだといふことを話しました。

(略)。友だちはふと思ひ出したやうに、「それはさうと、君は白い雀を見たことがあるか。」

それゆえ「其故」(接)3 ソレユエ

ソレ故 それ故

五五八 火バチナドニ入レル炭ハ、木ヲヤイテコシラヘタモノデス。ソレユエ木炭トイヒマス。

十二二 活版は(略)、同じ活字を何度でも組立てて使へる。木版では(略)、其の自由がきかぬ。又活字は何時でも直に植ゑることが出来るが、木版では(略)、手間が幾層倍もかかる。それ故近年は木版が段々すたれて、活版を用ひることが多くなつた。

十一六六 日々同じ食物ヲ用ヒルト、アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。ソレ故材料ヲ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同じ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

そろい ぐふぞろい

そろつ(揃)(五)8 ソロフ そろふ

揃フ「一ツ」ぐうちそろう

三九五(略)、ハナタバヲコシラヘマシタ。アカトキイロトムラサキト三イロソロットケキレイデス。

七二五(略) (略)、米にこなして、俵につめて、家内そろつて、ゑ顔にゑ顔。

八二〇(略) この間にいさんがかへつて來ましたので、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。

八二五 役所デモ、會社デモ、上カラ下マデ一同ソロットテ事務ニ取リカ、ル。

- 九七₁ 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツ
テ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。
九七₇ 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤ
ウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、豆ヤ藤
ノ花ノ瓣ハ不揃デアル。
九七₉ ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃
ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、
(略)。
九八₈ 葉ヤ大根ノ花ヲ見ルト、瓣ガ
四ツ揃ツテ、十字形ニナツテキル。
そろこ₁ [揃] (下二) 1 揃ふ『一へ』
十一₂₆ 筋骨たくましき若者が
體を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましき
よ。
そろえ₁ じうまそろえ
そろえる [揃] (下一) 7 ソロヘル
そろへる 揃ヘル 揃へる『一へ』
三三₄ ナヘヲウエテキル女ハ、
(略)、コエヲソロヘテ、ウタツテ
キマス。
六七₁ (略)、わかものどもはこゑを
そろへて、そのあとについて歌ひま
した。
七₇₁ (略)、タコヤイカノアシヲソ
ロヘテオゴ様ハマコトニ面白イ。
九八₁₀ 二番太鼓の「並べ。」のあひ
づに、五人の騎手は打連れて、(略)、
馬の頭を揃へて、三番太鼓を今やお
そしと待構へてゐる。
十₂₀ 印刷する紙は廣い大きな紙
で、幾ページ分も一度に刷れる。そ
れを折つて、揃へてとちる。
十一₉₆ (略)、軸木ヲ火ニ乾カス者、
乾イタ軸木ノ先へ藥品ヲ附ケル者、
ソレヲ温室デ乾カス者、揃ヘテ箱ニ
入レル者、(略)。
十一₅₅ 「ビエールよ、少年鼓手よ。」
と聲を揃へて呼んだが、何の答もな
い。
そろそろ (副) 1 ソロソロ
一₂₂ ソロソロ オアルキナサイ。
テヲヒイテアゲマス。
そん [村] じいっそん・いっそんきよう
どう・おんそん・ごかそん・にそん・
ふけんぐんしちようそんかいぎいん
そん [損] (形状) 1 損
八₂₅ 「朝ね程損なものはない。
朝ねをしてゐる間に、身代が減つて
行くのだ。」
そんかい [村会] (名) 2 村會
十一₁₁₃ 村會にて村費を議するに
も、大抵原案を可決するを常とす。
十一₁₁₃ (略) 學校の經費を議す
るに當り、村會にては其の豫算の不
足なるべきをうれへて、之を増加せ
んとせしに、(略)、さらばとて原案
のまゝに決議せり。
そんがい [損害] (名) 3 損害
九₇₂ 幸に私方は左程の損害も
無く、家族一同無事に御座候間、御
安心下され度候。
九₇₄ 田畑の作物には多少の損
害これあり候へども、(略)。
十二₇₃ 我は急に其の前路をさへ
ぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多
大の損害を受け、(略)。
そんかいぎいん [村會議員] (名) 1
村會議員
十一₁₁₃ 村會議員も全村一致して
之を選挙し、互に競争するが如きこ
と更になし。
そんざい [存在] (サ変) 1 存在す
『一セ』
九₆₄ 空氣は(略)、凡そ少しに
てもすき間ある所には、必ず存在せ
ずといふこと無し。
ぞんじ じぞんじ
ぞんじたてまつる [存奉] (四) 1 存
じ奉る『一リ』
十一₆₂ (略)、御参列成し下さ
れ候はば、有り難く存じ奉り候。敬
白。
ぞんしつ [損失] (名) 2 損失
十一₇₀ 例へば六十人の集會に其
の中の一人若し十分を後るとせば、
六十人の時間の損失は合して十時間
となるべし。
十二₁₀ 殊ニ我が軍ノ損失・死
傷ノ僅少ナリシハ(略)。
ぞんしつ [損失] (サ変) 2 損失す
『一セ』
十一₇₁ 他人をして時間を損失せ
しむるは其の罪金錢を損失せしむる
よりも重し。
十一₇₁ 他人をして時間を損失せ
しむるは其の罪金錢を損失せしむる
よりも重し。
ぞんず [存] (サ変) 3 存ス 存す
『一セ・一ス』
十₄₄ 然るに此の寺は今より凡そ
一千二百年以前ののにて、昔なが
らの形を存せり。
十₉₈ (略)、千二百餘年ヲ經タル
古堂ノ中ニハ當時ノ佛像今尚存ス。
十二₅₄ 富國ノ實ノ擧ルト擧ラザ
ルトハ我が商人ノ信用・勤勉・機敏
ノ如何ニ存ス。
ぞんず [存] (サ変) 14 存ず 存
『一(ジ)・一ズル・一ゼ』
九₁₂ 右は地質といひ、縞がら
といひ、此の地方には實行よろしか
るべしと存ぜられ候間、(略)。
九₁₄ (略)、御申越の期日まで
には少々間に合ひかね候事と存候。
九₇₂ もはや新聞紙にて御承知
の事とは存候へども、(略)。
十₅₁ 名乗れと申せば、『存ず
る由あり。木曾殿見知り給ふ。』と
いひて名乗らず。
十₅₉ (略)、又日曜日等には忠
臣・義士に關する講談等もこれあり、
面白く有益に存候。
十₉₀ (略)、其の講話は定めて
有益なる事と存候。
十₉₁ 御村も(略)、整理の必要
これあり候様存ぜられ候間、(略)。
十₉₂ (略) 御誘ひ下され有り
難く存候。

十929園(略)、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。

十一3510園(略) 御地は今尚冬の季節と存候。

十一623園(略)、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)。

十一624園(略) 御光来下され候はば光榮の至に存候。

十一956園(略) 先般御手紙にて御近況を承知致し、御なつかしく存候。

十一1018園(略) 極南暑熱の御地にてても同じことと存候。

ぞんずる「存」(サ変) 5 存ずる

《一ジ》
七171園 ぶじお着のことと存じます。

七201園 あなたと私は親類ださうでございまして、どうかこれからお心安く願ひます。」といふ。藤は「私はちつとも存じませんでした。

七684園 見事な桃をたくさんおおり下さいまして、有りがたう存じます。

八666園 (略)、一週間もおひまをいただきますして、まことに有りがたう存じます。

八676園 併し老病の事故、よほど大事にしなければならぬと存じます。

そんちよう「村長」(名) 2 村長

十一1127園 村長は村の舊家に生れ、極めて親切公平なる人なれば、深く

村民に敬愛せられ、幾度の改選にも常に選挙せられて、二十餘年間勤続せり。

十一11310園 (略)、村會にては(略)、村長は「不作の後なれば、成るべく経費を節約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」と説明したれば、(略)。

そんちよう「尊重」(サ変) 1 尊重

《一シ》
十二1048園 例へば教育・衛生等自治團體の事業は、地方人民の一般に之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

そんな(形状) 15 ソンナ そんな

三58園 (略)、マサヲガ本ヲヨンデキマシタ。(略)。(略)、「マサヲサン、ソナニウチニバカリキナイデ、チツトソトヘデテ、イツシヨニウタヲウタヒマセウ。」

三91園 マサヲ「ボクハモウコンナニタクサンツミマシタ。」(略)。

オハナ「スミレハタクサンナイカラ、マダソナニツメマセン。」

三466園 (略) 一人の男がそらをむいて、ながいさををふりまはしてゐました。(略)。ともだちは「(略)。そんなところでさををふりまはしたつて、どうしてと

どくものか。それよりはやねの上へあがつてはたけ。」

四691園 三郎「ソナニ少シツツノマナイデ、モツトタクサンノンダラ、早くナホリマセウ。」

五334園 マタ三番茶・四番茶マデモツムコトガアリマスガ、ソナニツムト、茶ノ木ノタメニハヨクナイサウデス。

五468園 音次郎はおどろいて、道ばたの高い木の下へにげこみました。友吉は「(略)。かみなりの鳴る時には、そんな所にゐてはあぶない。」

六318園 「先では知らないのだから、一錢まうけておけばよかったのに。」といつたら、直吉は「そんな事が出来るものか。」

六606園 八つばかりの女の子、(略)、ひとりしく泣いてゐる。姉のおつるは立ちよつて、「なんでそんなに泣いてゐる。」

六621園(略) いまその杖をもぎとられ、かへりの道が知れません。」「そんなわるさを誰がした。」

七498園 「葉書や切手や印紙ナドハ皆僕等ノ仲間ダゾ。」トイヒマス、日本紙ハ神ダナヲ指サシテ、「ソナニイバツテモ、アノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマイ。」

七858園 きりや雪で、方角の分らなくなつた時には、(略)。そんな時には海の深さをはかつたり、きてきや

かねを鳴らしたりします。

八455園 父「東京のをちさんから火事見まひの電報が来た。」一郎「どうしてそんなに早く伯父さんに分つたのでせう。」

八473園 サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタシルキミナブジデスゴアンシンクダサイ(略)。父「(略)。又ことばも電報だから、そんなにいていねいに書くことはいらな

い。」

九3710園 かごも人の肩でかいて、休み／＼行くのだから、早くもないし、又そんなに樂でも無かつた。

十一114園 (略)、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變へ、又器具ヲ取換ヘナクレバナライノデ、ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、ソナナ手數ガ省ケテ、(略)。

そんな「村内」(名) 1 村内

十一1149園 里道の改修も全く成り、村内の重なる道路は荷車・人力車を通ずるに至れり。

そんなら(接) 1 そんなら

六208園 (略) 大きな象の目方をはからうとしたが、どうしてはかつてよいか分りません。(略) 一人の子どもが、「そんなら私がかつて見ませう。」といつて、まづ象を船にのらせました。

そんぴ「村費」(名) 1 村費

十一113 6 村會にて村費を議するにも、大抵原案を可決するを常とす。

そんみん「村民」(名) 2 村民

十一112 8 村長は(略)、深く村民に敬愛せられ、(略)。

十一115 4 十四五年の後には村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。

そんらく「村落」(名) 2 村落

十63 2 此ノアタリ、元ハ山間ノサビシキ村落ナリシガ、(略)、今ヤ足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、(略)。

十一110 2 都市・村落の周圍の山や岡には、まんぢゆうの様に圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。

た

た「他」(名) 51 他

五50 3 キ瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、カボチャニハデコボコガアル。ソノ他ノ瓜ハ大テイナメラカデアル。

五50 7 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

五51 2 西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲノコス。

五52 4 花ハタ顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。

五58 6 (略)、汽車ヤ汽船ヤソノ他ノキカイナドヲウゴカスノニハ、皆コレヲ使ヒマス。

六25 4 金ヤギンハ美シクテ、指ワニナツタリ、トケイニナツタリ、ソノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、(略)。

六27 4 物ヲニル鍋モ鐵デス。ユヲワカス私モ、私ノノル五トクモ鐵デス。ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サイズ物カラ、キクワン車・軍カンノヤウナ大キナ物マデ、(略)。

七54 8 上野公園ニハ廣キ動物園アリテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メタリ。ソノ他博物館・パノラマナドアリ。

七75 4 海草ニモ色々アル。マヅタバラレルモノニハ、(略)ナドガアリ、ノリニスルモノニハ、(略)、トコロテンニスルモノニハ、テングサガアル。コノ他マダタクサンアルガ、イヅレモヨイ肥料ニナル。

七88 6 (略)外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。

七88 7 又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。

八6 5 (略)、金色の金物きら／＼と日にかざりやけり。その他には何の御かざりもなき質素なる御かまへ、かへつてかしこく、かたじけなし。

八50 6 鎌足(略)、大事ヲ成スニハ此ノ皇子ヲイタビキ奉ルヨリ他ニ道ナシト思ヒシガ、(略)。

八52 9 ヤガテ同志ノ一人御前ニ進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、(略)。(略)。他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出デズ。

八53 5 皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ入鹿ノ肩ヲキリ給フ。之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デテ、入鹿ノ足ヲキル。

八54 8 わし・たか・とびなどの様に、大空を飛びまはつて、他の鳥をとらへて食ふ鳥や、(略)。

八63 9 木綿織物ニ紺ヤ淺黄ヤカスリヤ其ノ他色々ナリ綿ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。

八73 4 (略)、クビ太ケレバ、他ノ獸類ヲトラヘタル時、之ヲ運ビ去ルニ便ナリ。

九29 4 (略)、内外古今ノ武器其ノ他軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九39 2 (略)、諸大名其ノ他旅客ノ宿泊スルモノ多ク、(略)。

九54 3 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。

九56 9 或動物ハ(略)、コトニアザヤカナル體色ヲ有ス。是等ハ多クハ他ノ動物ノ恐ル、武器又ハ(略)。

ヲ有スルモノニシテ、(略)。

九56 10 或動物ハ(略)。是等ハ多クハ(略)又ハ他ノ動物ノイフト惡味・惡臭ヲ有スルモノニシテ、(略)。

九57 1 (略)、他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、(略)。

九74 7 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、其の他にはかく別の異狀これなく、(略)。

九76 4 又病氣其ノ他ノ場合ニモ、他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカルベシ。

十10 8 森林の樹木は(略)、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。森林は能く暴風をさへ、(略)。

(略)。其の他森林は氣候を和げ、土砂の流出を防ぎ、(略)一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

十49 1 花の名より取れる桃色・(略)、實の名より取れる橙色・(略)、其の他鼠色・茶色・褐色等、色の名稱も亦千種萬様なり。

十49 8 欄間の彫物、唐紙の地紙をはじめ、着物の縞模様、焼物・塗物の繪模様、其の他菓子類に至るまで、我等の衣食住には模様・色どりをほどこしたるもの多し。

十56 4 毎週土曜日の午後には居室・兵器・寢具其の他一切所持品の清潔検査これあり候。

十667 ボートは（略）、又も鯨に近

より、今度は銃を以て破裂矢を打込む。（略）。他のボートを見れば、今新に鯨を追ふものもあり、銃を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。

十1028 畝傍山ノ東北ニハ神武天皇ノ御陵アリ。又近ク綏靖天皇ノ御陵アリ。其ノ他古陵墓甚ダ多シ。

十一656 寒イ時ハ（略）、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、（略）。

十一667 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。（略）。其ノ他切方・並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

十一717 其の座敷の一間の杉戸には檜一本を畫がき、他の一間には鶴二十五羽ばかり畫がけり。

十一848 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、土砂其ノ他ノ雜物ヲ去リ、（略）。

十一858 （略）、コレヲ練機ト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、又更ニ他ノ機械ニ移シ、（略）。

十一892 （略）、蟻は（略）、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十一938 かゝる時は靴屋は（略）、盛に之を製造すべく、又他の職業に

従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。

十一1132 校長も着實温厚なる人にして、（略）。其の他の教員も校長を模範として、職務に勉勵するが故に、（略）。

十二75 （略）、敵の兩旗艦は遂に沈没し、其の他にも相ついで沈没せるもの多し。

十二206 其の時花の中の花粉は是等の蟲に着いて、一つの花から他の花に傳達される。

十二206 植物の花には、同種の他の花の花粉を受けると、良い實を結ぶものがある。

十二225 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、他にも種々の原因もあるが、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

十二346 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集シ、（略）。

十二488 三池・夕張・大の浦、掘れど炭礦限りなく、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は銅の産額たびもゞし。古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は山をうがちて山を鑛る。

十二528 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、（略）。

十二897 凡そ家内の掃除は座敷・居間・臺所のみならず、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。其の他食器・衣服等何事にも清潔を旨とするは衛生上にも必要な事なり。

十二1037 市町村長・議員等を選舉するには（略）、親族・縁故其の他私交上の關係をさしはさむべからず。

十二1042 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を舉ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。

十二1069 第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。

た〔田〕（名）15 タ 田 田ひらた

一335 タハタケアゼウネ

二332 ムカシアルトコロニ、タヤハタケヲタクサン モツテキ

タ人ガアリマシタ。

二365 ソレカラコノ人ノタニハ、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。

三315 アメガフリツヅイテ、田ノ水ガタクサンニナリマシタ。

三318 馬ニマグハヲヒカセテ、田ヲカキナラシテキル人モアリマス。

三342 （略）、モウアノヒロイ田ガハンブンバカリウワリマシタ。

五115 それから田や畠の間を通過するうちに、（略）。

五425 田デハタライテキル人モ、道ヲ通ツテキル人モ、馬モ車モ今見エタカト思フト、スグ後ニナツテシマヒマス。

六148 この田を見ても、稻がよくじゆくして、重さうにほをたれてゐます。

七261 （略）、農夫ガ田ヲタガヤシ、畠ヲツクルノモ、皆手デスルノデス。

九439 又御宮裏の田も、本年は水も十分に御座候間、少しも御案じ下さるまじく候。

九535 田ニスムカヘルハ土色ニシテ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ綠色ナリ。

九694 （略）、黄色に實のつた秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、むら雀のぼつと飛立つのは面白い。

十8310 田を耕させたり、荷車を引かせたり、（略）、農家では牛を色々の勞働に使役する。

た〔誰〕（代名）1 誰

十8910 （略）やみの天地をまた元の御代に返すは誰が任ぞ。金剛山下に忠士あり。

た（助動）1069 タ た 《タ・ダ・タラ・ダラ》はるがきた

一232 ユリノハナガサキマシタ。

- 一30 4 ベンケイガウシワカマル
 ニマケマシタ。
 一31 4 ソレカラケライニナリマシタ。
 一36 2 ソラガクモツテキマシタ。
 一36 4 カミナリガナリダシマシタ。
 一38 2 罫 クルマニ ツンダ タカラモノ、イヌガヒキダス エンヤラヤ。
 一40 2 アサガホガサキマシタ。
 一41 2 イクツサイタカ、カゾヘテゴランナサイ。
 一44 3 ヨイオヂイサンハコブヲトラレテヨロコビマシタ。
 一45 2 ワルイオヂイサンハコブヲツケラレテコマリマシタ。
 一50 2 ユフガタニナリマシタ。
 一51 2 イツカセンセイガオハナシニナリマシタ、(略)。
 一26 アチラノソラガマツカニナリマシタ。
 一35 アア、モウスツカリノボリマシタ。
 一82 オキクガイマオキヤクニナツテキマシタ。
 一86 罫 「オキクサンデスカ。ヨクイラツシヤイマシタ。」
 一92 オハナハオキクヲザシキヘトホシテ、オチャトオクワシヲダシマシタ。
 一96 罫 デタデタ、ツキガ。
 一96 罫 デタデタ、ツキガ。
- 二10 4 罫 カクレタ、クモニ。
 二11 2 罫 マタデタ、月ガ。
 二14 7 犬ガ(略)、ハシノウヘニキマシタ。
 二15 2 (略)、ミヅノナカニモサカナヲクハヘタ犬ガキマス。
 二15 5 (略)、ハシノウヘカラ、ワント一コエホエマシタ。
 二15 7 (略)、クハヘテキタサカナハミヅノナカヘオチマシタ。
 二16 1 (略)、クハヘテキタサカナハミヅノナカヘオチマシタ。
 二18 4 タクサンチツタトコロハ、ニハノ土モミエマセン。
 二18 7 オハナハモミデノハヲ一マイヒロヒマシタ。
 二19 3 (略)、ウチヘカヘツテ、カミヲソノカタチニキリマシタ。
 二19 4 イロモソノトホリニツケマシタ。
 二19 5 モシナツデアツタラ、ドナイロヲツケタデセウ。
 二19 6 モシナツデアツタラ、ドナイロヲツケタデセウ。
 二21 2 ワタクシノカラダハ、日ニヤケタヤウナイロヲシテキマス。
 二25 2 モウ日ガクレマシタ。
 二26 6 トモキチハシンバイシテ、カドグチヘデテミマシタ。
 二27 1 ソコヘオトウサンガカヘツテキマシタ。
- 二27 3 トモキチハヨロコンデ、トンデイキマシタ。
 二33 4 ムカシアルトコロニ、タヤハタケヲタクサンモツテキタ人ガアリマシタ。
 二33 4 (略)、タヤハタケヲタクサンモツテキタ人ガアリマシタ。
 二34 1 (略)、トリヤケモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。
 二35 1 アル日(略)、カガミモチヲマトニシテ、イデミマセウカ。トイヒマシタ。
 二35 4 罫 「モチハタイセツナオ米デコシラヘタモノデスカラ、イテハイクマセン。」
 二35 6 トモダチハ「(略)」、ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。
 二35 7 トモダチハ「(略)」、ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。
 二36 1 ヤハウマクアタリマシタ。
 二36 4 アタルト、モチハ(略)、パットトンデイキマシタ。
 二36 7 ソレカラコノ人ノタニハ、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。
 二37 3 罫 「アカンボノトキニ、ダイトチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
- 二37 7 罫 (略)、ネンネコウタヲウタツテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二38 3 罫 (略)、ゴハンヲタベサセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二38 6 罫 カゼヲヒイタリオナカヲイタクシタリシタトキニ、(略)。
 二39 1 罫 (略)、シンバイシテ、クスリヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二41 1 罫 「モウコンナニ大キクナリマシタ。」
 二41 4 罫 「ヤツトカラダガデキマシタ。
 二41 7 罫 「コレデアタマモデキマシタ。
 二43 4 罫 「コレデ目モデキマシタ。
 二45 2 モウハナガサキハジメマシタ。
 二45 7 アノ太イ木ハカレタヤウニミエマシタ、ツボミガタクサンツイテキマス。
 二47 1 天ジンサマハ(略)トイフチュウギナオカタヲマツツタノデス。
 二47 4 コノオカタハウメノハナガオスキデシタカラ、(略)。
 二49 1 (略)、オカアサンカラオトシダマニイタイタ本ガ一サ

ツアリマス。
 二504 ムカシアルトコロニ、ヨ
 イオヂイサントワルイオヂイサ
 ンガアリマシタ。
 二511 ヨイオヂイサン ハ白イ犬
 ヲ一ヒキカツテ、(略)カハイガ
 ツテキマシタ。
 二521 ハタケノスミヘツレデ
 イツテ、(略)。「トヲシヘマシタ。
 二525 (略)、土ノ中カラ、(略)
 タカラモノガタクサンデマシタ。
 二531 トナリノワルイオヂイサ
 ンハ(略)、犬ヲカリニキマシ
 タ。
 二533 (略)、ハタケノスミヲホ
 ツテミマシタガ、(略)。
 二543 オヂイサンハ(略)、ソノ
 犬ヲコロシテシマヒマシタ。
 二552 ヨイオヂイサンハ(略)マ
 ツノ木ヲ一本ウエマシタ。
 二556 (略)、一月モタナイウ
 チニ、(略)、大キナ太イ木ニ
 ナリマシタ。
 二563 ヨイオヂイサンハ(略)、
 ウスヲツクツテ、ソレデ米ヲ
 ツキマシタガ、(略)。
 二567 ツクタビニ、(略)、イロイ
 ロナタカラモノガデマシタ。
 二574 ヨクノフカイオヂイサン
 ハ(略)、米ヲツイテミマシタ
 ガ、(略)。
 二582 (略)、ソノウスヲコハシ

テ、火ニクベテ、ヤイテシマヒ
 マシタ。
 二587 ヨイオヂイサンハソノハ
 ヒヲモラツテキテ、カマドノ
 下ニオキマシタ。
 二593 (略)、ハヒガバツタ
 ツテ、川ムカフノカレ木ノエ
 ダニカカツタカトオモフト、
 (略)。
 二595 (略)、ウツクシイハナガ
 サキマシタ。
 二604 オヂイサンハ(略)、「(略)。
 トヨンデアルキマシタ。
 二612 トノサマガココヲオトホ
 リニナツテ、(略)。「トオホセ
 ニナリマシタ。
 二621 (略)、一メンニミゴトナ
 ハナザカリニナリマシタ。
 二626 (略)、タクサンノゴホウビ
 ヲクダサイマシタ。
 二632 ヨクノフカイオヂイサン
 ハ(略)、ノコツテキタハヒヲ
 カキアツメテ、カレ木ノ上ニ
 ボツテ、(略)。
 二635 ヨクノフカイオヂイサン
 ハ(略)、トノサマノオカヘリヲ
 マツテキマシタ。
 二643 ソノウチニトノサマガ
 オトホリニナツテ、「(略)。「ト
 オホセニナリマシタ。
 二652 トノサマヤ、オトモノ人
 ノ目モ、口モ、耳モ、ハヒダラ

ケニナリマシタ。
 二661 (略)、ワルイオヂイサンハ
 トウトウシバラレテシマヒマシ
 タ。
 二14 (略)、サクラノハナガー
 メンニサキマシタ。
 二22 ムカフノ山ニハ、ユキガ
 フツタヤウニ白クナツタトコ
 ロガミエマス。
 二23 ムカフノ山ニハ、ユキガ
 フツタヤウニ白クナツタトコ
 ロガミエマス。
 二35 ハルノアタタカイ日ニ、
 マサヲガ本ヲヨンデキマシタ。
 二58 スコシタツテオサラヒガ
 スミマシタ。
 二62 ソコヘトモダチガサソヒ
 ニキマシタカラ、(略)。
 二63 (略)イツシヨニノハラハ
 アソビニイキマシタ。
 二85 (略)「ボクハモウコンナニ
 タクサンツミマシタ。」
 二87 (略)「ボクモモウテニ一パ
 イニナリマシタ。」
 二92 ソレカラ三人デツンダ
 ノライツシヨニシテ、ハナタバ
 ヲコシラヘマシタ。
 二93 ソレカラ(略)、ハナタバ
 ヲコシラヘマシタ。
 二98 小さなむしがとんできま
 した。「ひらがなのドリル」
 二101 大きなうまがはしつてき

ました。「ひらがなのドリル」
 二108 ネエサンハコノアヒダ
 トナリムラヘオヨメニイキマシ
 タ。
 二122 パンノゴハンノスンダ
 アトデ、(略)オモシロイハナシ
 ヲキカセテクダサイマス。
 二126 へやの中まであかるく
 なりました。「ひらがなのドリル」
 二135 ムカシタイマノケハヤト
 イフチカラノツヨイ人ガア
 リマシタ。
 二138 (略)、ダレトスマフヲト
 ツテモ、マケタコトハアリマセ
 ン。
 二144 ソレデ「(略)。「ト、イバツ
 テキマシタ。
 二147 (略)トイフ人トスマフ
 ヲオトラセニナリマシタ。
 二151 ケハヤハ(略)、ケルコト
 ガマコトニハヤカツタノデス。
 二154 シカシスクネモチカラガ
 ツヨクテ、スバシコイ人デシタ
 カラ、ナカナカケハヤニハケラ
 レマセン、(略)。
 二161 (略)、タツタ一ケリデ、ケ
 ハヤヲケタフシマシタ。
 二162 ミテキタ人ハミンナ一
 ドニテヲタイテホメマシタ。
 二163 ミテキタ人ハミンナ一
 ドニテヲタイテホメマシタ。
 二167 「(略)」といつて、けはや

がじまんをしました。「ひらがなのドリル」

三168 しかしのみのすくねにはまけました。「ひらがなのドリル」

三171 それではやはわらはれて、すくねはほめられました。「ひらがなのドリル」

三177 (略)、マタアソコカラモ一ピキ上リマシタ。

三226 うごかずにゐますが、しんだのではありません。

三278 四五日マヘニアタマヲダシタケノコガ、(略)、私ノ

セイトオナジクラキニナリマシタ。

三282 (略)、私ノセイトオナジクラキニナリマシタ。

三283 コレカラニ三日タツタラ、マダズツトタカクナリマセウ。

三298 (略)ナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。

三316 アメガフリツヅイテ、田ノ水ガタクサンニナリマシタ。

三343 (略)、モウアノヒロイ田ガハンブンバカリウワリマシタ。

三345 イマニアノナヘガノビテ、アライタタミヲシイタヤウニナリマセウ。

三348 あるばんまさは(略)よそからかへつてきました。

三352 みちでほたるを一ぴきつかまへて、母からかみをもら

つてつみました。

三356 うちへかへつて、ちちにみせようとしたら光がみえませんでした。

三357 (略)「おや、にげたのかしらん。」と、いそいでかみをあけてみると、(略)。

三372 (略)、父は「(略)」といひました。

三373 (略)、そとへはなしたら、あをく光りながら、しづかにとんでいきました。

三374 (略)、そとへはなしたら、あをく光りながら、しづかにとんでいきました。

三376 七じがなりました。

三404 うが川の中でさかなをとつてゐました。

三405 今もぐつたかとおもふと、すぐに一ぴきはへて、でてきます。

三414 (略)「水の中へはいつたら、どんな心もちだらう。

三418 それをからすが木の上から見てゐて、(略)」と、川の中へはいりましたが、(略)。

三421 (略)、がぶがぶと水をのんで、とうとうしんでしまひました。

三426 ミナモトノヨシイヘトイフタイシヤウガイクサニ行ツタトキ、(略)。

三428 (略)、ユフハンニハ、ケライノ人ヲ右ト左ニワケテスワラセマシタ。

三431 ソノ日ノイクサニテガラノアツタモノヲ左ノ方ニナラベテ、(略)。

三433 ソノ日ノイクサニ(略)、アマリハタラキノナカツタモノヲ右ノ方ニナラベタノデス。

三434 ソノ日ノイクサニ(略)、アマリハタラキノナカツタモノヲ右ノ方ニナラベタノデス。

三437 (略)、ミンナガフンパツスルヤウニナリマシタ。

三438 ソレデイツデモイクサニカツタトイフコトデス。

三458 あるばん一人の男がそらをむいて、ながいさををふりまはしてゐました。

三465 「(略)、二つ三つはたきおとさうと思ふのだ。」とこたへました。

三472 ともだちは「(略)」といつてわらひました。

三483 思ひだしたやうにざぶんと水の中へとびこみます。

三516 (略)、おちても、おちても、またとぶほどに、とうとうやなぎにとびついた。

三527 (略)、きれても、きれて

も、またはるほどに、とうとう小えだにすをはつた。

三531 ハツニナル女ノ子ガアリマシタ。

三551 アル日母ガ「早く、早く。」トヨンダノニ、(略)、スグニハキマセンデシタ。

三553 (略)、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、スグニハキマセンデシタ。

三556 (略)ネコガダイジナキンギヨヲトツテ、ニゲテ行キマシタ。

三576 私ガヲバサンカライタダイタムラサキ色ノハオリハ、イツマデタツテモ、色ガカハリマセン。

三581 私ガキヨネンマデキテキタワタイレハ、(略)ミジカクナツテ、モウキラレマセン。

三616 (略)貝をこんなにたくさんいいただきました。

三642 (略)「どこでこんなにたくさんおひろひになりました。」

三643 私はをぢさんに、「(略)」とききましたら、「(略)」

三644 (略)「いいえ、これはひろつたのではない。」

三646 (略)貝ざいくを賣るみせで買つてきたのです。」

三647 (略)買つてきたのです。」とおつしやいました。

三65 3 ムカシウラシマ太郎 トイ
フ人ガアリマシタ。
三66 3 ウラシマハ（略）、子ドモ
カラソノカメヲ買ツテ、ウミ
ヘハナシテヤリマシタ。
三66 8 ㊦ 「ウラシマサン、コノア
ヒダハアリガタウゴザイマシタ。
三67 7 ウラシマガヨロコンデ、カ
メニノルト、（略）、マモナクリ
ユウグウノ門ヘツキマシタ。
三68 2 （略）、ウラシマノ來タノ
ヲタイソウヨロコンデ、（略）。
三68 4 （略）、イロイロナゴチソウ
ヲシタリ、サマザマノアソビヲ
シテ見セマシタ。
三68 8 ウラシマハ（略）、ウチヘ
カヘルノモワスレテキマシタ。
三69 7 ソノウチニウラシマハ
ウチヘカヘリタクナツタカラ、
（略）。
三70 5 （略）、モウウチヘカヘリ
マセウ。」トイヒマシタ。
三72 2 オトヒメハ（略）、タマテバ
コトイフリツパナハコヲワタ
シマシタ。
三72 5 ウラシマハ（略）、海ノ上
ヘ出テ來マシタ。
三72 6 ウチヘカヘツテ見ルト、
オドロキマシタ、（略）。
三73 3 アマリカナシクナツタカ
ラ、（略）、タマテバコヲアケテ
見ルト、（略）。

三73 4 （略）、オトヒメノイツタ
コトモワスレテ、タマテバコヲ
アケテ見ルト、（略）。
三73 7 （略）、ウラシマハニハカニ
オヂイサンニナツテシマヒマシ
タ。
四4 1 太郎と次郎が二人で山
ヘのぼりました。
四5 4 ㊦ 「ああ、あれですか。私
はまるでちがつた方を見てゐ
ました。」
四5 5 ㊦ 私はまるでちがつた方
を見てゐました。」
四8 1 二人はまだ方々ながめ
て、あそんでゐましたが、（略）。
四8 2 （略）雨がふりさうにな
つたので、いそいで山を下りま
した。
四8 3 （略）雨がふりさうにな
つたので、いそいで山を下りま
した。
四9 4 私ドモノガクカウデモ、
ケサ天長セツノシキガアリマ
シタ。
四9 7 （略）一シヨニ君ガヨノ
ウタヲウタヒマシタ。
四10 8 一本ハキザハシデ、モウ
アマクナリマシタ。
四11 2 （略）、古イカサト古イモ
モヒキヲキセタカカシガタテ
テアリマス。
四12 2 去年ハホシテ、クシガキ

ニ作リマシタ。
四12 7 ケサモ五十ホドヒロツテ
來マシタ。
四15 4 昔みなものよりともが
（略）まきがりをしました。
四15 6 （略）おひおろして來るけ
ものを、弓でいとつたのです。
四15 8 はじめの日も、つぎの
日も、たくさんえものがありま
した。
四16 2 （略）、矢にあたつたゐのし
しが、（略）かけおきて來ました。
四16 4 （略）、矢にあたつたゐのし
しが、（略）かけおきて來ました。
四17 1 この時よりとものそば
に居た、にたんの四郎ただつね
といふぶしが、（略）。
四17 4 （略）、馬をとばして、その
ておひじしにむかひました。
四17 6 すれちがつた時に、ただつ
ねは（略）とびうつりました。
四17 8 すれちがつた時に、ただつ
ねは（略）とびうつりました。
四19 2 （略）、ただつねは（略）、つ
づけて五刀六刀さしとほしまし
た。
四19 3 ゐのししはどつとたふれ
ましたが、（略）。
四19 5 （略）、ただつねは（略）た
ふれてゐた木の上へとびのき
ました。
四19 6 （略）、ただつねは（略）た

ふれてゐた木の上へとびのき
ました。
四20 1 （略）、ただつねをほめる
こゑは、山もくづれるほどで
あつたといひます。
四23 2 オヂイサンハ「（略）。」ト
イツテ、ニツコリワラヒマシタ。
四26 1 オトミハマルクキツタ白
イ紙ヲ三ツ出シテ、「（略）。」
四27 2 （略）、のはらのくさやは
なは大ていかれてしまひまし
た。
四27 2 くさのかげにないてゐ
た虫も（略）、もうなくこゑも
きこえません。
四27 3 くさのかげにないてゐ
た虫も死んでしまつたのか、
（略）。
四28 2 ㊦ あなたのおなかまは大
てい枯れてしまつたやうです。
四28 4 一ぴきのきつねがさきの
こつてゐるのぎくを見つけて、
「（略）。」といひました。
四28 5 ㊦ 「いいえ、私たちは枯れ
たやうに見えても、ねは生き
てゐます。
四29 1 ㊦ （略）あたたかになる
と、枯れたあとから、まためを
ふき出して、（略）。
四29 5 ㊦ 今年はもうこれです
みました。
四29 6 のぎくは「（略）。」とこた

へました。

四31 8 ㊦ 「三郎さんはまだそれを知らなかったのですか。」

四35 6 ㊦ 「三郎はこんやは大それたもの知りになつたね。」

四35 7 ㊦ 父は「略」、「略」といひました。

四37 5 ㊦ 「略」麥ワラデ作ツタ物デ、アツイジブンニツカフ物ガアリマス。

四38 7 ㊦ 「コノアヒダ大キナフカガ来タ時ニ、（略）。」

四39 1 ㊦ 「コノアヒダ（略）、君ラハズキブンアワテマシタネ。」

四39 6 ㊦ 「略」、サザエガ岩ノカゲカラヨビトメテ、「略。」トイツテ、ジマンバナシヲシマシタ。

四39 8 ㊦ ソノウチニ（略）大キナオトガシマシタ。

四40 4 ㊦ 「コンドハタヒヤヒラメナドハキツトヤラレタニチガヒナイ。

四40 6 ㊦ サザエハスグカラノ中ヘヒツコンデ、フタヲシメテ、「略。」トイツテ、スマシテキマシタ。

四41 5 ㊦ 「略」、ソバニ一セン五リントカイタフダガタテデアリマシタ。

四41 6 ㊦ 「略」、ソバニ一セン五リントカイタフダガタテデアリマシタ。

四41 8 ㊦ をばさんからいただいたおとしだまにのしがついてゐました。

四42 1 ㊦ をばさんからいただいたおとしだまにのしがついてゐました。

四42 5 ㊦ 母に「（略）。」と問ひました。

四42 8 ㊦ 「略」、昔はのしあはびをつけたのです。

四43 3 ㊦ のしあはびといふのは、あはびの肉をのして、紙のやうにうすくしたものです。

四43 5 ㊦ 「略」、今では紙で作つたのしをつかふやうになりました。

四43 6 ㊦ 「略」、今では紙で作つたのしをつかふやうになりました。

四44 1 ㊦ 母は「（略）。」と答へました。

四44 3 ㊦ 「どうしてのしあはびをつけるやうになつたのでせう。」

四44 4 ㊦ おちよは又、「（略）。」と問ひました。

四44 5 ㊦ 「人の死んだ時などのおめでたくない時には、（略）。」

四45 2 ㊦ 「略」、なまぐさのしるしのしあはびをつけるやうになつたのでせう。

四45 5 ㊦ 母は「（略）。」と答へました。

た。

四51 6 ㊦ 「略」、モトハ海ノ中デオヨイデキマシタ。

四51 7 ㊦ 海ニキタ時ヨリモ、今ハスコシ長イ名ヲモツテキマス。

四52 3 ㊦ 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、（略）、海ヲワタルクフウラカンガヘテキマシタ。

四52 6 ㊦ 島ノ上ニ居タ白ウサギガ、（略）、海ヲワタルクフウラカンガヘテキマシタ。

四52 7 ㊦ アル日ハマベヘ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、「略。」トイヒマシタ。

四53 3 ㊦ アル日ハマベヘ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、「略。」トイヒマシタ。

四53 6 ㊦ ワニザメハ（略）、スグニナカマヲ大ゼイツレテ来マシタ。

四54 7 ㊦ 白ウサギハコレヲ見テ、「略。」トイヒマシタ。

四55 2 ㊦ ワニザメハ白ウサギノイフトホリニナラビマシタ。

四55 4 ㊦ 白ウサギハ一ツニツトカゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、（略）。

四55 7 ㊦ 「オマヘタチハウマクオレニダマサレタナ。

四55 8 ㊦ オレハココノヲカヘ来タカツタノダ。」

四56 1 ㊦ 「略」、イマ一足デヲカヘ上ラウトイフ所デ、「（略）。」トイツテワラヒマシタ。

四56 3 ㊦ 「略」、一バンシマヒニ居タノガ、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。

四56 4 ㊦ 「略」、一バンシマヒニ居タノガ、白ウサギノ毛ヲミンナムシリトツテシマヒマシタ。

四56 7 ㊦ 白ウサギハ（略）、ハマベニタツテ、ナイテキマシタ。

四57 3 ㊦ ソコヘカミサマガタガオトホリガカリニナツテ、「（略）。」トオタヅネニナリマシタ。

四57 7 ㊦ ワケヲ申シ上ゲマス、ト「（略）。」トオラシヘニナリマシタ。

四58 1 ㊦ 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、（略）。

四58 2 ㊦ 「略」、マヘヨリモカヘツテイタクナツテ、ナホナホクルシンデキマシタ。

四58 5 ㊦ ソコヘオホクニヌシノミコトトイフ神サマガオ出デニナリマシタ。

四58 7 ㊦ コノ神サマハサキホドオトホリニナツタ神サマガタノ弟ノ方デス。

四59 2 ㊦ 「略」、フクロヲカツイデイラツシヤツタノデ、オソクオナリニナツタノデス。

四59 3 ㊦ 「略」、フクロヲカツイデ

イラツシヤツタノデ、オソクオナリニナツタノデス。

四59 6 コノ神サマモ、「ナゼナクノカ。」トオタツネニナリマシタカラ、(略)。

四59 8 白ウサギハ(略)、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。

四60 5 スルト神サマハ、「(略)。」トヲシヘテクダサイマシタ。

四60 8 白ウサギガソノトホリニシマス、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。

四61 3 図 「オカゲサマデ、カラダハコノトホリニナホリマシタ。

四61 6 ヨロコンデオホクニヌシノミコトノ所ヘオレイニ行ツテ、「(略)。」ト申シ上ゲマシタ。

四61 8 (略)白ウサギノイツタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

四62 1 (略)白ウサギノイツタトホリ、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

四63 1 ゆふべは風がなくて、しづかなばんでしたから、少しも知らずにゐました。

四63 2 (略)、少しも知らずにゐました。

四63 6 にはの松の木はわたをのせたやうに見えます。

四63 7 はのおちた木もみんなまつ白になつて、(略)。

四63 8 はのおちた木もみんなまつ白になつて、はながさいたやうです。

四64 3 (略)、あしだのはにはさまつた雪をたたきおとしながらあるいてゐます。

四69 2 図 「(略)、モツトタクサンノンダラ、早くナホリマセウ。」

四71 2 図 太郎きのふは うんどくわいで、どろによごしたこのはかま。

四73 2 オハルハ(略)、オヒナサマヲカザリマシタ。

四74 1 ソノ左ト右ニウツクシイシヨクダイヲ立テマシタ。

四74 3 (略)、三ダン目ニハ五人バヤシヲオキマシタ。

四74 7 (略)、花イケニハモモノ花トヒガンザクラヲイケマシタ。

四75 2 図 「オカアサマ、オヒナサマヲカザリマシタカラ、ゴラン下サイ。」

四75 4 スツカリカザツテカラ、母ノ所へ行ツテ、「(略)。」トイヒマシタ。

四75 5 図 「タイソウヨクカザレマシタ。

四75 8 母ハ來テ見テ、「(略)。」トイヒマシタ。

四76 1 オハルハヨロコンデ、友ダチヲヨビアツメテアソビマシタ。

四76 4 (略)げんじはをか、へいけは海で、むかひあつてゐた時、(略)。

四76 6 (略)、へいけ方から一そうのふねをこぎ出して來ました。

四76 8 (略)、そのさをのさきにはひらいた赤い扇がつけてあります。

四78 7 げんじの大しやうよしつねはけらいにむかつて、「(略)。」とたづねました。

四79 6 その時一人がすすみ出て、「(略)。」といひました。

四79 8 よしつねは(略)、すぐによ一をよび出しました。

四80 4 一どはじたいしましたが、よしつねがゆるしません。

四80 7 よ一は(略)、もしこれをいそこなつたら、生きてはゐまいとかくこをきめて、(略)。

四81 2 よ一は(略)、海の中へのり入れました。

四82 3 よ一は(略)、弓を引きしぼつて、ひようと一矢いはなしました。

四82 6 赤い扇は(略)、波の上におちました。

四83 1 (略)、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。

四83 3 海の方でも(略)、一どにどつとほめました。

五1 3 (略)、すさのをのみこととい

ふきのあらい神さまがありました。

五1 6 ある時生馬のかはをはいで、(略)おなげ入れになりました。

五1 7 大神はおどろいて、(略)、その中へおかくれになりました。

五1 8 (略)、今まであかるかつたせかいがくらやみになつて、(略)。

五2 2 (略)、わるい神さまがさまざまのわるいことをはじめました。

五2 6 よい神さまがたは、(略)、おかくらをおはじめになりました。

五2 8 その時あめのうずめのみことといふ女の神さまのまひがおもしろかつたから、(略)。

五3 2 (略)、大ぜいの神さまがたは手をたたいて、お笑ひになりました。

五3 6 (略)、大神は少しばかり戸をあけて、おのぞきになりました。

五4 2 手力男のみことといふ力のつよい神さまが、(略)、すぐに大神のお手をとつて、お出し申し上げました。

五4 3 それでせかい中がまたもとのとほりあかるくなつたと申します。

五4 5 図 春が來た、春が來た、どこに來た。

五4 5 圖 春が來た、春が來た、どこに來た。

五4 5 圖 春が來た、春が來た、どこに來た。

五4 6 圖 山に來た、里に來た、のに

も來た。

- 五46 山に來た、里に來た、のにも來た。
- 五47 山に來た、里に來た、のにも來た。
- 五61 コノ天皇ガワルモノドモヲ御セイバツニナツタ時、(略)。
- 五68 (略)、オトホリスデノモチガケハシクテ、オコマリノコトゴザイマシタ。
- 五68 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ出テ來テ、(略)御アンナイ申シ上ゲマシタ。
- 五68 (略)一羽ノ金色ノトビガトソデ來テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。
- 五75 ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ行キマシタ。
- 五81 天皇ハ(略)、天皇ノオクラキニオツキニナリマシタ。
- 五86 そらからふつて、山の木のはの上に休んでゐましたが、(略)。
- 五87 (略)、風にふかれて、土の上へおちました。
- 五91 そこで大ぜいと一しよになつて、せまい谷へ下りました。
- 五94 それから少し來ると、高いがけの上へ出ました。
- 五96 (略)、何だか目がまはつて、しばらくの間は何も知らずにゐました。
- 五98 きがついて見ると、人が二三人立つて、(略)、ながめてゐました。
- 五102 だん／＼來ると、ひろい野はらへ出ました。
- 五103 野はらは平ですから、ゆつくりあるきました。
- 五105 鳥はたのしさうに時々來て、羽をひたしました。
- 五106 魚はうれしさうにういたりしづんだりして、およいでゐました。
- 五111 (略)、休なしにあるきました。
- 五113 そばを通る人が「美しい川だ。」といつて、ほめました。
- 五118 (略)、なかまがあつまつて來て、いよく／＼にぎやかになりました。
- 五126 (略)、人がいそがしさうにあるいてゐました。
- 五127 やがて重い物が私どもの上へ來ましたから、何かと思つたら、(略)。
- 五127 やがて重い物が私どもの上へ來ましたから、何かと思つたら、(略)。
- 五128 (略)、何かと思つたら、にもつをつんだ船が通つてゐたのです。
- 五128 (略)、何かと思つたら、にもつをつんだ船が通つてゐたのです。
- 五132 (略)きたない物をなげつけられるのにはこまりました。
- 五134 (略)、軽い物は一しよにここのまでもつて來ました。
- 五155 池ノ中デコヒガオヨイデキルノヲ見タコトガアリマセウ。
- 五162 ウロコハカハラヲフイタヤウ
- ニカサナリ合ツテキテ、(略)。
- 五191 「(略)」と、母はだいどころからよびました。
- 五203 母は戸だなの方をさして、「(略)」といひました。
- 五205 おはなは(略)さらを持つて來ました。
- 五212 (略)、おはなはざるの中のとけのこをなべの中へ入れました。
- 五216 母は(略)、切つたさしみをさらの中へ入れて、(略)。
- 五222 母は「(略)」といひました。
- 五224 おはなは水がめから水をくんで、母の手にかけました。
- 五226 かまをぬすまれたものがありました。
- 五226 かまをぬすまれたものがありました。
- 五226 かまをぬすまれたものがありました。
- 五237 しかたがないから、うつたへて出ました。
- 五241 やく人は(略)、その釜を前において取りしらべました。
- 五241 うつたへた人は、「(略)」と申します。
- 五242 「これは私が毎日使つてゐた釜でございます。
- 五244 それを私のるすにこのゐざりがぬすんだのでございます。」
- 五254 釜 その釜は私が前から持つてゐたのでございます。」
- 五258 役人はしばらく考へてゐましたが、(略)。
- 五265 役人はしばらく考へてゐましたが、(略)と申しわたしました。
- 五268 ゐざりは(略)、兩手をついてゐざり出しました。
- 五272 「こら待て、ゐざり。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」
- 五274 役人は(略)、下役どもに言ひつけて、しばらくしました。
- 五277 二月・三月花ざかり、うぐひす鳴いた春の日の たのしい時もゆめのうち。
- 五304 マルクカリコンダニハ木ノヤウニ見エマス。
- 五308 ヨクソダツタ茶ノ葉ハ長サガ二寸バカリモアリマス。
- 五338 サクラノ花ノ下ニトソデキル白イ蝶ヲ見ルト、花ガチツタノカト思ヒ、(略)。
- 五342 (略)、ナノ畠ニアソソデキル蝶ヲ見ルト、ナノ花ガトビ立ツタノカト思ヒマス。
- 五344 又羽ヲハンデ、シヅカニ木ノ葉ノ上ニネムツタヤウニシテキルノヲ見ルト、(略)。
- 五367 昔雄略天皇が(略)とおほせになりました。
- 五371 (略)、皇后さまがかひこをおかひあそばすためでございます。
- 五377 すぎるはさうとは心づかず、(略)、たくさんの子どもをもらつて、つれて來ました。
- 五381 天皇はこれをこらんになつ

て、大そうお笑ひになりましたが、(略)。

五三八 天皇は(略)、すぎるには小

子部といふ姓をたまはりました。

五三八 すぎるはその大ぜいの子をお
みやのそばでやしなつて居つたと申
します。

五三九 汽車が今ていしやばへつきま
した。

五三九 (略)、むかへに來た人もあり、

見おくりに來た人もあつて、(略)。

五三九 (略)、むかへに來た人もあり、

見おくりに來た人もあつて、(略)。

五三九 下りる人がまだ下りてしまは
ないうちに、もうのりこんだ人もあ
ります。

五四〇 あちらの方は、今下りた人
の切符をうけ取つてゐるのです。

五四一 えきふが(略)荷物をつんで
來ました。

五四一 あれは今のつた人の手荷物で
せう。

五四一 汽車は(略)、きまつた時間
にちやんと出ます。

五四二 文太郎ハ父ニツレラレテ、ハ
ジメテ汽車ニノリマシタ。

五四二 (略)モ、馬モ車モ今見エタ
カト思フト、スグ後ニナツテシマヒ
マス。

五四三 ソノウチニ下ノ方デカミナリ
ノヤウナ音ガシマシタ。

五四四 文太郎ハ(略)外ヲ見ルト、

汽車ハハシノ上ヲ通ツテキマシタ。

五四一 汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハ
イリマシタ。

五四四 〔コレハトンネルトイツテ、
山ヲホリスイタ所デス。〕

五四五 文太郎ハビツクリシテ、父ニ
キ、マスト、(略)トイヒマシタ。

五四五 ケレドモコンドハミジカイト
ンネルデ、スグニ通リスケマシタ。

五四五 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイ
タ時、文太郎ハ(略)ト思ヒマシタ。

五四六 (略)、文太郎ハモツトノツテ
キタイト思ヒマシタ。

五四六 (略)、にはかに雲が出て、か
みなりが鳴り出しました。

五四六 はじめのうちは遠くの方にき
こえてゐましたが、(略)。

五四六 (略)、だん／＼近くなつて、
雨もつよくふつてきました。

五四六 音次郎はおどろいて、道ばた
の高い木の下へにげこみました。

五四七 友吉は(略)、そこをかせ
ようとしましたが、(略)。

五四七 〔この間先生がおつしやつた
ではないか。〕

五四七 友吉は(略)、むりに手をひ
つばつてつれ出しました。

五四八 (略)おそろしいかみなりが
鳴りました。

五四八 二人は(略)、そこにたふれ
ました。

五四八 (略)、かみなりがおちて、そ

の高い木がまつ二つにさけてゐまし
た。

五四八 〔あゝ、あぶなかつた。〕

五四八 〔もし君が居なかつたら、僕
は死んでしまつたのだらう。〕

五四九 〔もし君が居なかつたら、僕
は死んでしまつたのだらう。〕

五四九 音次郎は友吉のかたに手をか
けて、(略)といひました。

五四九 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガ
ケンクワシタ時、(略)。

五四九 (略)、カウモリハ「(略)。」
トイツテ、ドチラヘモツキマセンデ
シタ。

五四九 ソノ中ニケモノガ勝チサウニ
ナツタノヲ見テ、(略)。

五四九 (略)、ニハカニ「(略)。」ト
イツテ、ケモノノミカタニナリマシ
タ。

五四九 シバラクタツト、ケモノガ負
ケサウニナツタノデ、(略)。

五四九 (略)、コンドハ「(略)。」ト
イツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。

五四九 (略)勝負ガツカナイカラ、
兩方ガ仲ナホリヲシマシタ。

五四九 (略)、ヒルノ間ハ木ノウロヤ
穴ノ中ニカクレテキテ、夜ニナルト
出テ空ヲトビアルクヤウニナツタト
イフハナシデス。

五四九 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
出シマシタガ、(略)。

五四九 (略)後ニハ石ト金ヲウチ合

セテ出サヤウニナリマシタ。

五四七 (略)炭ハ、木ヲヤイテコシ
ラヘタモノデス。

五四八 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土
ノ中ニウマツテ、シゼント出來タ物
デ、(略)。

五四八 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土
ノ中ニウマツテ、シゼント出來タ物
デ、(略)。

五四八 油ニモ色々アリマス。魚カラ
トツタモノモアリ、(略)。

五四九 (略)、ケモノカラトツタモノ
モアリ、(略)。

五四九 (略)、シヨクブツカラトツタ
ノモアリマス。

五四九 アンドンニトボスノハ大テイ
ナタネカラトツタ種油デス。

五四九 (略)、ワキ出タマモノハニゴ
ツテキマスガ、シアゲルト、スキト
ホツタ油ニナルノデス。

五四九 (略)、シアゲルト、スキトホ
ツタ油ニナルノデス。

五四九 (略)、アンドンハダングダンニ
スタレテ來マシタ。

五四九 昔ノ人ハ(略)、石油ノコト
ヲモエル水トイヒマシタ。

五四九 〔あれ、鈴蟲も鳴き出した。
五三九「(略)。」と、母は手紙をおち
よにわたしました。〕

五四九 おちよはしばらく考へて、葉
書の裏へ次のやうに書きました。

五四九 それを母に見せますと、母

は「よく出来ました。」

五67 1 それを母に見せますと、母は

「(略)。」といひました。

五67 3 大キナ字ヲ書イタ大キナノボ
リガ立テアル。

五68 3 オチヨトオハナハ(略)、オ

宮ニサンケイシタ。

五69 3 オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシ
テラガンダ。

五71 1 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷

川ノ中ヘハイリマシタ。

五71 1 フト水ニウツツタジブンノス
ガタヲ見テ、(略)、ヒトリゴトラハ
ジメマシタ。

五71 3 フト水ニウツツタジブンノス
ガタヲ見テ、(略)、ヒトリゴトラハ
ジメマシタ。

五73 2 ソノ時後ノ方カラカリウドノ
來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ
出シマシタ。

五73 2 ソノ時後ノ方カラカリウドノ
來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ
出シマシタ。

五73 2 ソノ時後ノ方カラカリウドノ
來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ
出シマシタ。

五73 2 ソノ時後ノ方カラカリウドノ
來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ
出シマシタ。

五73 5 鹿ハ(略)、林ノ中ヘカケコ
ミマシタ。

五73 8 トウ／＼犬ニ追ヒツメラレマ
シタ。

五74 8 (略)、海とをかとおし立て
た何千本の赤はたは、(略)。

五75 1 (略)何千本の赤はたは、ま
るで火のもえたつたやうに見える。

五75 4 げんじは二手に分れて、(略)、

よしつねのぐんぜいは西の門へ向つ
た。

五76 1 しかしよしつねは(略)、こ
つそりと裏道からひよどりごえに向
つた。

五76 1 この中にはべんけいも居つた。

五76 6 そのうちに日が暮れて、まつ
暗になつてしまつた。

五77 1 この時べんけいは(略)、一人
のかりうどをつれて來た。

五77 3 「年はいくつか。」と問へば、
「十七」と答へた。

五77 5 よしつねはよろこんで、(略)
けらいにした。

五77 8 よしつねはまつたづねた。

五80 2 よしつねは、(略)、夜のうち
にがけの上まで出た。

五80 2 まもなく夜が明けた。

五80 8 よしつねはこゝぞと思つて、
「(略)。」とさしづをしが、(略)。

五81 5 この時よしつねは、(略)、馬
に一むちあててかけ下りた。

五81 5 これを見た三千人の軍ぜい
は、どつと一時にかけ下りて、(略)。

五81 6 これを見た三千人の軍ぜい
は、(略)、城の中へ攻めこんだ。

五82 1 三方から攻立てられて、さん
／＼にうちやぶられた。

六1 3 海岸には切立てたやうな岩山
もあるが、(略)。

六1 5 一面に小松のはえた小松原も
あり、(略)。

六1 6 (略)、又大きな松がならんだ
長い松原もある。

六3 1 所々に白いぬのをさらしたや
うなたきや谷川があつて、(略)。

六3 6 (略)や、(略)は、まるでゑ
にかいたやうである。

六3 7 川の上にかけた橋、橋の下に
立つてつりする人など、それ／＼川
の景色をそへてゐる。

六4 5 一年中からりとれた日は
多い。

六7 8 きふは日本ばれのよい天氣
でした。

六8 2 私は(略)、二三人の友だち
と遠足に出かけました。

六8 3 家を出たのは朝の七時ごろで
した。

六8 3 家を出たのは朝の七時ごろで
した。

六8 3 家を出たのは朝の七時ごろで
した。

六8 6 (略)、川について、四五町行
くと、(略)、たんぼへ出ました。

六8 8 たんぼのさきにこんもりとし
た森があつて、(略)。

六9 5 (略)、小川の橋を渡ると、御
社の前へ出ました。

六9 6 (略)、しばらくそこで休みま
した。

六10 4 のぼりついたじぶんには足も
だいぶくたびれて、(略)。

六10 6 (略)、はらもすつかりすきま
した。

六10 8 (略)、にぎりめしをたべた時

は大そううまうございました。

六11 1 (略)、にぎりめしをたべた時
は大そううまうございました。

六11 3 かへりには(略)、別の道か
ら下りました。

六11 4 のぼる時には三時間もかゝつ
たが、(略)。

六11 5 (略)、下りる時には二時間し
かかゝりませんでした。

六11 7 (略)、うちへかへつたのは夕
方でした。

六11 7 (略)、うちへかへつたのは夕
方でした。

六11 7 晩にはくたびれた足をのぼし
て、けさまで一眠に眠りました。

六11 8 (略)、けさまで一眠に眠りま
した。

六12 6 モウ秋ニナツタカラ、ガンガ
オヒオヒトンデ來ル。

六14 4 曇ツタ夜ヤ月ノナイ夜ハ道ニ
マヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデ
アル。

六14 6 ヨクチュウイシタモノデハナ
イカ。

六15 3 かつた稻が雨にぬれると、米
がわるくなるから、(略)。

六15 7 刈つた稻は(略)、よく日に
かわかします。

六17 1 米を俵に入れて、その俵をつ
み重ねてながめた時は、(略)、取入
れのいそがしさも、全くわすれてし
まひます。

六205 昔ある國で大きな象の目方ははからうとしたが、(略)。

六206 (略)、どうしてはかつてよいか分りませんでした。

六207 その時そこに居た一人の子どもが(略)。

六212 その時そこに居た一人の子どもが、(略)、まづ象を船にのらせました。

六213 さうして象の重みで船の水につかつた所にしるしを附けました。

六215 さうして象の重みで船の水につかつた所にしるしを附けました。

六218 それから象をおろして、その代りに石をたくさんつみしました。

六221 さうして前にしるしを附けておいた所まで船が水につかつた時に、(略)。

六222 さうして前にしるしを附けておいた所まで船が水につかつた時に、(略)。

六224 (略)、その石をおろして、なんどもはかりにかけて、その目方を知りました。

六227 (略) 大きな水がめがあつて、雨水が一ぱいたまつてゐました。

六231 一人の子どもが(略)、かめの中へおちました。

六233 居合せた子どもは皆うろたへてさわぎました。

六234 居合せた子どもは皆うろたへてさわぎました。

六238 その時一人の子どもは(略)、力まかせに投げつけました。

六242 (略)、水が流れ出しましたから、子どもはあやふい命をたすかりました。

六243 (略)、水が流れ出しましたから、子どもはあやふい命をたすかりました。

六246 アル晩金物ヤノ店デ、ヤクワントテツピンガメイ／＼ジマンバナシヲシマシタ。

六285 ヤクワンハソレヲ聞イデ、(略)。「トイヒマシタ。」

六294 ソノ時鐵ビンハ、(略)。「トイヒマシタノデ、ヤクワンハダマツテシマヒマシタ。」

六295 (略)、ヤクワンハダマツテシマヒマシタ。

六297 直吉と長松は同じ店のでつちであつた。

六298 ある日主人は朝から用たしに出たので、二人が店のるすをしてゐると、(略)。

六302 (略)、一人の男の子がふでを買ひに來た。

六303 (略)、十せん銀貨を出したから、直吉は(略)一せんの銅貨を三枚渡した。

六305 (略)、直吉は(略)一せんの銅貨を三枚渡した。

六306 男の子も氣がつかずにそのまゝかへつた。

六308 図 「あゝ、大へんなことをした。」

六311 図 今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」

六313 直吉は(略)、すぐに追つかけて行つて、残りの一錢を渡した。

六316 図 「先では知らないのだから、一錢まうけておけばよかつたのに。」

六317 かへつて來ると、長松は笑つて、(略)。「といつたら、(略)。」

六327 (略)。「といつても、長松はまだ笑つてゐた。」

六332 (略)、主人はこの事を聞いて、(略)、長松にはひまをやつた。

六361 今日天気がよくて暖いから、うちではすゝきはをした。

六363 僕も手ぬぐひをかふつて、手つだひをした。

六363 ゆか下から去年なくしたこまが出てうれしかつた。

六364 ゆか下から去年なくしたこまが出てうれしかつた。

六365 うちが見ちがへるやうにきれいになつた。

六366 (略)、つかれてすぐにねてしまつた。

六368 道がわるかつた。

六371 (略)、紙などをそまつにしてはならないと思つた。

六373 朝おきて見ると、池に氷がはつてゐた。

六374 北風が一日ふき通して寒かつた。

六376 學校からかへつてから、をばさんの所へ使ひに行つた。

六377 をばさんから塩せんべいを買つた。

六381 朝おきると、雪が五六寸つもつてゐた。

六382 學校で雪投をして遊んだ。

六382 木村さんが遊びに來た。

六385 (略)、おとうさんが京都へお立ちになつた。

六385 水せんの花を見てゑをかい

た。

六388 午後京都からおとうさんの手紙が着いた。

六394 図 (略)、晩の九時二十分に京都に着いた。

六395 図 今日朝からあちらこちらを見物した。

六396 図 第一番に御所ををがんで、それから東山の方へ行つた。

六398 図 (略)、たくさんのお寺やお宮へさんけいした。

六401 図 三十三間堂のほとけのかずの多いのにはおどろいた。

六436 日本中を平げて、後には朝鮮までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ人は、(略)。

六437 (略)、もといいたつて身分のひくい人でございました。

六438 小さい時の名を日吉丸といひました。

六四一　うちがまづしかつたので、八つの時にお寺へ小ぞうにやられました。たが、（略）。

た時、(略)。

六59 3 それから信玄が死んだと聞いた時、(略)。

六59 4 図 「ああ、をしい事をした。」

六59 5 図 よいいくさ相手がなくなつた。

六59 5 それから信玄が死んだと聞いた時、謙信は「(略)。」といつてなげいた。

六60 8 図 もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、

(略)、ことばやさしくなぐさめる。

六62 1 図 「そんなわるさを誰がした。」

六62 4 図 「(略) わたしの手からもぎ取つて、はふつた音はしましたが、(略)。」

六62 4 図 「(略) わたしの手からもぎ取つて、はふつた音はしました

が、(略)。」

六63 2 図 (略) おふみはいそぎ道ばたを そこかこゝかとさがすうち、

少しはなれたくさむらに、やうく杖を見つげ出し、(略)。

六66 6 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。

六69 7 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、(略)。

六69 7 私がこゝへまゐつたのは、この學校がたつた年でございますから、(略)。

ら、(略)。

六70 1 その間に色々な子どもを見ました。

六70 4 (略) 先生に何か聞かれても、

答へることが出来ないで、顔を赤くする子供もございました。

六70 7 (略) 何を聞かれても、はつきりと答へる子供もございました。

六71 3 (略) したりするやうな、そ

うかしい子供もございました。

六71 5 (略) 少しも書きそこなひな

どをしない子供もございました。

六71 7 (略) 先生にしかられた子供もございました。

六71 7 (略) 先生にしかられた子供

もございました。

六71 8 一日もけつせきもせず、ちこく

もしなかつた子供もございました。

六72 1 一日もけつせきもせず、ちこく

もしなかつた子供もございました。

六72 5 學校でいつも先生にほめられ、友だちにもすかれた善い子供は、(略)。

六72 6 (略) 善い子供は、おとなになつてから、りつばな人になりまして、

六72 7 學校で先生にしかられ、友だちにもきはれた悪い子供は、(略)。

六73 4 (略) 三十年の間にどうして

もきらひな子供が七八人ございました。

六73 5 私のからだがかんなにぐらつ

くやうになつたのも、その子供たちのいたづらからでございます。

六73 7 こんなにたくさん墨を附けたのも、その子供たちでございます。

六74 2 むねの上には(略)、色どつ

た大きな弓矢や扇車がかざつてあります。

六75 2 間もなくむねの上からもちを投げると、大ぜいがあらそつてそれを拾ひました。

六75 6 これがすむと、むしろをしいて、お祝ひのさかもりがはじまりました。

六75 7 一人の年取つた男がこゑをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、(略)。

六76 2 (略) わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。

六76 5 歌がすむと手打をして、ロ々に「(略)。」といひました。

六76 8 羽織・はかまの主人は一同に向つて、うれしさうに、「(略)。」とあいさつしました。

六78 1 オキノ方カラ黒クヌツタ船ガ

ハイツテ來ル。

六78 3 白イ帆ヲアゲタ帆カケ船モイ

クツトナクハイツテ來ル。

六79 7 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカラ

ラ牛ヲ何匹トナクツルシオロシタ。

六79 8 オロシタ荷物ハスグニ車ニノ

セテ、馬ニヒカセテ行ク。

七13 2 図 ねぎられたら引く積りで、

高くいふ直段がかけねです。

七19 6 図 「とくに申し上げようと思

つてゐました。

七20 2 図 「私はちつとも存じませんでした。

七21 5 図 「さうでございますか、は

じめて承りました。

七22 2 図 あなたほどの大きな花ぶさは見たことがございません。

七24 7 図 「先生、少シオ待チ下サイマセ。今風デアカリガ消エマシタ。」

七25 5 モシ手ガナカツタラ、ドノクラキ不自由デセウ。

七27 6 ドンナガクキガアツテモ、手

ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出スコトハ出來マスマイ。

七29 6 卵からかへつたばかりの蠶は

あり程の大きさで、(略)。

七32 1 この時木の枝やわらなどで作

つたまふしへうつしてやると、(略)。

七32 5 そのくだから出すねばつたし

るが外へ出ると、すぐにかわいて絲

になるのである。

七33 7 その卵を産みつけさせた紙を

蠶卵紙といふ。

七36 3 町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸

工場ガ出來タ。

七39 3 山内一豊が織田信長のけらい

になつたばかりのころ、(略)。

七39 4 (略) 大そうよい馬を賣りに

來た者がありました。

七39 5 (略)、大そうよい馬を賣りに来た者がありました。

七39 5 これを見た人は皆ほしいとは思ひましたが、(略)。

七39 6 これを見た人は皆ほしいとは思ひましたが、(略)。

七39 8 馬の主は馬を引いてかへらうとしました。

七40 4 一豊も(略)、家へかへつて、「(略)」と、思はずひとり言をいひました。

七41 3 一豊はおどろいて、「これは又どうした金か。

七41 7 (略)、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いはなかつた。」

七42 1 (略) このお金は私がこちらへまゐる時『(略)』と申して、父の渡してくれた金でございます。

七42 8 (略) が大事と考へまして、今日このお金を出したのでございます。

七43 1 一豊は妻に禮をのべて、その馬をもとめました。

七43 5 (略)、一豊の馬ははたして信長の目にとまつて、「(略)」とたづねました。

七43 9 (略) 「日ごろ貧しい暮しをしてゐる一豊が、よくもかういふよい馬を買ひもとめた。

七44 1 (略) 見上げた志のもの、りつぱな武士。」

七44 3 (略)、これが一豊の出世のもとなつたといふことであります。

七46 5 (略) 「世ノ中ガヒラケテカラ、(略)、僕ヲノ仲間ノ方ガヨケイニ用ヒラレルヤウニナツタカト思フ。

七46 7 (略)、書物モ近ゴロハ大テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ。

七50 1 (略)、日本紙ハ神ダナヲ指サシテ、「(略)」トイヒマシタ。

七53 4 (略) 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、(略)。

七53 6 (略)、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、賃錢も高かつたのです。

七64 1 (略)、水のまじつた物や、水をまぜてこしらへた物を口に入れな

七64 2 (略)、水のまじつた物や、水をまぜてこしらへた物を口に入れな

七65 8 又きたない水やくさつた水を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがある。

七66 3 (略) 桃がじゆくしましたから、少しばかりですが、差上げます。

七66 5 (略) 一昨年つぎ木をしたわか木に、もうこんなに大きながなつたのでございます。

七66 6 (略)、もうこんなに大きながなつたのでございます。

七66 8 (略) いつしよについだ梨の木の方は、今年はまだ實がなりません。

七68 5 (略) さつそくいたゞきました

七68 8 (略) 母はこんな美しい大きな桃は、はじめて見たと申して、(略)。

七69 1 (略) 母は(略)、おとなりへもおすそ分けをいたしました。

七73 7 (略) 陸ノケモノニタモノニハ、ラツコ・ラツトセイナドガアリ、(略)。

七73 9 (略)、魚ニ似タモノニハ、鯨ガアル。

七76 1 又ニハトリノ尾ニ似タノモアルシ、ウチハナリノモアル。

七80 9 (略) 「私も子供の時には毎日この學校へ通つて、(略)、あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたりしてゐたのです。

七83 9 (略) そこに居る人は私たちとはまるでちがつた風をして、かはつたことばで話してゐます。

七84 1 (略) そこに居る人は私たちとはまるでちがつた風をして、かはつたことばで話してゐます。

七85 5 (略) きりや雪で、方角の分らなくなつた時には、(略)する様なまちがひが出来ます。

七88 1 (略) 海の波を見たばかりで、恐ろしがる人があるではありませんか。

八10 1 (略) この間にいさんがかへつて

来ましたので、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。

八10 2 (略) この間にいさんがかへつて来ましたので、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。

八10 3 (略) ついでに私一人のもとりましたから、兩方一枚づつ差上げます。

八10 7 (略) 私もみんなと一しよの分はまじめになり過ぎましたので、(略)。

八10 9 (略)、にいさんによそ行の顔だといつて笑はれました。

八11 1 (略) 一人の分はうっかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。

八11 2 (略) 一人の分はうっかりしてゐる間に寫されましたので、かへつてよく寫りました。

八11 8 (略) よく寫つてゐるので、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。

八12 1 (略) 三郎さんは實にかはいらしく寫りました。

八12 7 (略) おはなさんはしばらく見ないうちに、髪が大そうきれいになりました。

八13 2 (略) 寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなりました。

八13 7 (略) ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ上ツタ。

八13 8 (略) 人ハ皆ネドコヲハナレタ。

八14 9 (略) 學校デハモウ授業ガハジマツタ。

八19² 昔西洋のある所に、(略)、何
不足なく暮してゐた農夫がありまし
た。

八19³ 昔西洋のある所に、(略)、何
不足なく暮してゐた農夫がありまし
た。

八19⁴ 初は近所の人にもうらやまれ
る程の身代でしたが、(略)。

八19⁶ (略)、五六年の中によほど財
産を減らしました。

八19⁷ 親類や友だちは(略)、どう
したらよいかと、いろいろ考へてゐ
ました。

八19⁸ 親類や友だちは(略)、どう
したらよいかと、いろいろ考へてゐ
ました。

八20¹ ある日一人の友だちは、この
農夫と野原の草の上に坐つて、いろ
／＼世間話をしてゐたが、(略)。

八20² (略)、そこらあたりに飛んで
ゐた雀を見て、(略)といふことを話
しました。

八20⁴ (略)、そこらあたりに飛んで
ゐた雀を見て、(略)といふことを話
しました。

八20⁶ 農夫は之を聞いて、(略)で
はあるまいかと思ひました。

八20⁷ 友だちはふと思ひ出したやう
に、(略)。

八20⁸ (略)「それはさうと、君は白い
雀を見たことがあるか。」

八21¹ (略)「いや、見たことがない。」

八21⁴ (略)と、ふしぎさうな顔
附をして、農夫は問返しました。

八22⁴ 農夫は此の話を聞いて、「そ
れはめづらしい。(略)」と思ひま
した。

八22⁸ 次の朝農夫はいつになく早く
起きて、(略)、野原の方でも行つ
てたづねましたが、影も形も見えま
せん。

八23⁶ その中下男が麥俵をかつい
で、裏門から出て來ました。

八24² 農夫は驚いて、其の麥俵を取
りもどしました。

八24⁶ (略)、今度は下女がばけつを
さげて、牛小屋から出て來ました。

八25¹ 此の下女は毎朝かうして、主
人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐ
たのです。

八25³ 農夫はおこつて、其のばけつ
を引つたくりました。

八25⁵ (略)、すぐ家の中へかけこ
んで、まだねてゐた妻を呼び起して、
(略)。

八25⁹ (略)、今見た事をすつかり話
して聞かせました。

八26¹ (略)、今見た事をすつかり話
して聞かせました。

八26⁴ (略)、自分はどうかして白雀
を見つつけようと、たづねまはりまし
た。

八26⁵ 一週間程たづねたが、白雀は
見つかりませんでした。

八26⁶ 一週間程たづねたが、白雀は
見つかりませんでした。

八26⁸ 其の中に雀のことはいつかわ
すれて、(略)、夜も書もよく働きま
した。

八27¹ (略)「どうだ、白雀は見つかつ
たか。」

八27² 二三ヶ月立つてから、前の友
だちが來て、「(略)」と、笑ひなが
らたづねました。

八27³ (略)「おかげで目がさめた。
八27⁵ 農夫は(略)、かたく友だち
の手を握りしめました。

八31² 僕の近所に年よりのかぢ屋が
あつた。

八31⁵ (略)、いたつて氣だてのやさ
しい老人であつた。

八31⁸ 一日も休んだ事がない。

八31⁹ 僕は時々其の仕事場の前に立
つて見てゐた。

八32¹ ある時は釘をこしらへてゐ
た。

八32² ある時は鎌をきたへてゐた。
八32³ 又車のわを打つてゐた事もあ
つた。

八32³ 又車のわを打つてゐた事もあ
つた。

八32⁵ 僕の家で一度つるべの金たが
がこはれた時、つくろひを頼んだ事
があつたが、(略)。

八32⁶ 僕の家で(略)、つくろひを
頼んだ事があつたが、(略)。

八32⁶ 僕の家で(略)、つくろひを頼
んだ事があつたが、(略)。

八32⁸ (略)、翌日すぐにこしらへて
くれた。

八33¹ 夏のどんな暑い日でも、(略)、
暮方まで働いてゐた。

八33² 仕事をしながら、僕に色々な
話をした事もある。

八33⁴ (略)「(略)、元は少しは人に知
られた刀かぢで、(略)。」

八33⁶ (略)、若い時から何十本と
なく大太刀・小太刀をきたへた。

八33⁷ (略)刀は武士のたましひといは
れたものだから、(略)。」

八33⁸ (略)、きたへる時は身を清
めて、一心不乱に打つたものだ。」

八33⁹ ある時の話に、「(略)」とい
つた。

八34¹ 何時も丈夫さうな老人であつ
たが、(略)。

八34² (略)、去年の暮に死んでしま
つた。

八34³ 其の時分までよそへ奉公に行
つて居つた若いむすが、今では其
の後をついで、(略)。

八42² あゝ、火の勢が一そう強くな
つた。

八42² 又隣へうつゝたのかも知れな
い。

八43² さつきからもう二時間もたつ
から、四五十戸も焼けただらう。

八43³ 叔父さんのうちへ見まひに行

つたにいさんが歸つての話に、(略)。
 八435 (略)、やうく米屋の土蔵で
 とまつたが、二棟の土蔵の中、一棟
 はとうく焼けおちたさうだ。
 八436 (略)、二棟の土蔵の中、一棟
 はとうく焼けおちたさうだ。
 八437 役場は幸に焼けなかつた。
 八437 一切の書類や記録類も皆ぶじ
 であつたといふことだ。
 八447 聞けば此の火事は材木屋の小
 屋から出たので、(略)。
 八449 一服のすひがらがこんな大火
 事になつた。
 八454 (略)「東京のをちさんから火事
 見まひの電報が來た。」
 八455 (略)「どうしてそんなに早く伯
 父さんに分つたのでせう。」
 八458 (略)「こちらでは近年にない大
 火事だから、誰かすぐに東京へ電報
 を打つたのだらう。」
 八459 (略)それが東京の今朝の新聞に
 出たので、お分りになつたのにちが
 ひない。
 八461 (略)それが東京の今朝の新聞に
 出たので、お分りになつたのにちが
 ひない。
 八465 (略)サクヤノクワジニウチハヤ
 ケマセンデシタ
 八478 (略)「それでもよいが、火事の昨
 夜あつたことはもう御存じだから、
 サクヤとは書くには及ばない。」
 八482 (略)又ヤケナイといへば、うち

の焼けなかつたことも分るから、ウ
 チもいらぬ。
 八486 (略)電報は(略)、にこつた字
 は二字に數へるから、(略)。
 八589 くじやくは(略)。大きなも
 のになると、若し家の中でひろげさ
 せたら、座敷一ぱいになつて、(略)。
 八644 コク染メタノガ紺デ、ウスイ
 ノガ淺黄デス。
 八646 又所々白ク染メ殘シタノガカ
 スリデス。
 八648 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノ
 ガ縞物デス。
 八648 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノ
 ガ縞物デス。
 八672 (略)初は熱があまり高いので、
 一時はどうなることかと心配いたし
 ましたが、(略)。
 八674 (略)「略」、食事も進みますから、
 一先安心いたしました。
 八684 (略)其の後どうかと思つてゐま
 したが、手紙を見て安心しました。
 八685 (略)其の後どうかと思つてゐま
 したが、手紙を見て安心しました。
 八842 明治三十七八年ノ戦役ニ、君
 ノタメ國ノタメ、名譽ノ戦死ヲトゲ
 タ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。
 八842 明治三十七八年ノ戦役ニ、君
 ノタメ國ノタメ、名譽ノ戦死ヲトゲ
 タ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。
 八844 (略)、ソノ中デモ海軍ノ廣瀬
 中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ軍神ト

マデイハレタ。
 八846 橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太
 子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツ
 タ。
 八847 三十七年ノ四月第二軍ニツイ
 テ戦地ヘ向ツタガ、(略)。
 八853 (略)部下ノ大隊ヲヒキテ、
 勢鋭ク進撃シタ。
 八861 我が兵ハ物トモセズ敵陣メガ
 ケテ突撃シタガ、(略)。
 八861 (略)、敵ハツルギノ林ヲ以テ
 ムカヘタ。
 八863 中佐ハ(略)、タチマチ三人
 ノ敵ヲ斬リ殺シタ。
 八865 中佐ハハヤ、右手ニ一ケ所ノ
 傷ヲ受ケタガ、(略)。
 八868 中佐ハ(略)、トウノ山上
 ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立
 テタ。
 八869 時ハ八月三十一日ノ朝日モマ
 ダ上ラナイ頃デアツタ。
 八871 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲
 ヲウチカケタ。
 八873 之ヲ見タ敵ハ更ニ新手ヲ加ヘ
 テ、フタ、ビ攻メヨセテ來タ。
 八874 之ヲ見タ敵ハ更ニ新手ヲ加ヘ
 テ、フタ、ビ攻メヨセテ來タ。
 八876 (略)「一度占領シタ此ノ高地、
 全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。
 八879 中佐ハ(略)、敵ヲ撃退スル
 コト數度ニ及ンダ。
 八881 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ

右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、
 (略)。
 八884 (略)砲彈ノ破片ガ中佐ノコ
 シニアツツテ、中佐ハドウト其ノ場
 ニ倒レタ。
 八886 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐
 ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。
 八887 カタハラニ居タ一軍曹ハ中佐
 ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。
 八891 軍曹ハ(略)、ケハシイガケ
 ヲカケ下リタ。
 八893 (略)、一彈又モ中佐ノ胸ヲツ
 ラヌキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。
 八895 二人ハ吹ク朝風ニ正氣ツイ
 タ。
 八896 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ
 倒レテ居タ一兵士トモニ中佐ヲイ
 タハツタ。
 八897 軍曹ハ(略)「一兵士トモニ
 中佐ヲイタハツタ。」
 八901 (略)多數ノ部下ヲ死ナセタ上、
 セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ
 殘念千萬ダ。」
 八902 (略)、セツカク占領シタ陣
 地ヲ取返サレテ殘念千萬ダ。」
 八908 軍曹ハ(略)、アランカギリ
 ノ力ヲツクシタガ、(略)。
 八909 (略)、中佐ノイキハトウトウ
 其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。
 八913 (略)「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ
 聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見
 事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタと思ヘ。」

八九三 〇 若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ

聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見
事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタト思ヘ。

八九九 〇 コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬
丁ニ言付ケテ、「(略)。」トイッタガ、
(略)。

八九二 〇 馬丁ハ(略)心配シナガラ、
様子ノ分ルノヲ待ツテ居タガ、(略)。
八九三 〇 (略)、トウ／＼戦死サレタト
聞イテ、(略)。

八九四 〇 (略)、カケツケテ其ノ死ガイ
ニ取リスガツテ泣イタ。

八九五 〇 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、
勇氣ニミチタ軍人デ、(略)。

八九六 〇 橋中佐ハ(略)、部下ヲアハ
レム心モ深カツタ。

八九七 〇 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイ
クラモアルガ、(略)。

八九八 〇 (略)、軍神トイハレル程ニウ
ヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリ
ツパデアツタカラデアル。

八九九 〇 (略)、軍神トイハレル程ニウ
ヤマハレタノハ、平生カラノ行ガリ
ツパデアツタカラデアル。

九〇〇 〇 シソノ花ノ様ニクチビルノ形
ヲシタノモアリ、(略)。

九〇一 〇 (略)、オシロイノ花ノ様ニク
ダノ形ヲシタノモアル。

九〇二 〇 (略)、ニンジンノ様ニカラカ
サラヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモア
ル。

九〇三 〇 明治二十七八年戦役の時であ

つた、(略)。

九〇四 〇 (略)一水兵が女手の手紙を
読みながら泣いてゐた。

九〇五 〇 ふと通りかゝつた大尉が之を
見て、(略)。

九〇六 〇 「こらどうした。」

九〇七 〇 命がをしくなつたか、妻子
がこひしくなつたか。

九〇八 〇 命がをしくなつたか、妻子
がこひしくなつたか。

九〇九 〇 軍人となつて、いくさに出
たのを男子の面目とも思はず、其の
有様は何事だ。

九一〇 〇 ふと通りかゝつた大尉が之を
見て、(略)、「(略)。」と言葉鋭くし
かつた。

九一一 〇 水兵は驚いて、立上つてし
ばらく大尉の顔を見つめてゐたが、
(略)。

九一二 〇 水兵は(略)、「(略)。」とい
つて、其の手紙を差出した。

九一三 〇 大尉はそれを取つて見ると、
次の様な事が書いてあつた。

九一四 〇 「わたしが悪かつた。

九一五 〇 豊島の戦に出なかつたこと
は艦中一同残念に思つてゐる。

九一六 〇 大尉は(略)、水兵の手を握
つて、「(略)。」といひ聞かせた。

九一七 〇 水兵は頭を下げて聞いてゐた
が、(略)。

九一八 〇 水兵は(略)、やがて手をあ
げて敬禮して、につこりと笑つて立

去つた。

九一九 〇 蒸氣機関は二百年程前に發明
せられたが、(略)。

九二〇 〇 蒸氣機関は(略)、初の中は
たゞ水をすひ上げる爲に用ひる位で
あつた。

九二一 〇 始めて之を船に用ひて汽船を
造つたのは、アメリカのフルトンと
いふ人、(略)。

九二二 〇 (略)、又之を車に應用して、
汽車をこしらへたのは、イギリスの
スチブンソンといふ人である。

九二三 〇 フルトンが工夫に工夫を重ね
て造つた最初の船は、(略)。

九二四 〇 フルトンが工夫に工夫を重ね
て造つた最初の船は、フランスのセ
イヌ川に浮べたが、(略)。

九二五 〇 フルトンが(略)造つた最初
の船は、(略)、不幸にも直に沈んで
しまつた。

九二六 〇 フルトンは(略)、又一つの
船を造つた。

九二七 〇 (略)、「(略)。」といふことを
新聞紙に廣告したが、(略)。

九二八 〇 (略)、其の日になつて乗船
したものは僅か十二人に過ぎなかつ
た。

九二九 〇 (略)、其の日になつて乗船
したものは僅か十二人に過ぎなかつ
た。

九三〇 〇 (略)、其の日になつて乗船
したものは僅か十二人に過ぎなかつ
た。

九三一 〇 此の時も少し進んだきりで、
やがて動かなくなつたが、(略)。

九三二 〇 此の時も少し進んだきりで、
やがて動かなくなつたが、(略)。

九三三 〇 此の時も少し進んだきりで、
やがて動かなくなつたが、(略)。

九三四 〇 此の時も少し進んだきりで、
やがて動かなくなつたが、(略)。

九三五 〇 (略)、機関の一部に故障があ
つたので、すぐそれを直した。

九三六 〇 (略)、機関の一部に故障があ
つたので、すぐそれを直した。

九三七 〇 其の後は何の障もなく、百五
十マイルを三十二時間で走つた。

九三八 〇 之を聞いて、是までフルト
ンを笑つた人々も大いに感心して、
(略)。

九三九 〇 (略)、皆其の成功を喜んで
いふことである。

九四〇 〇 スチブンソンは若い時から機
関の事に明るかつたが、(略)。

九四一 〇 (略)、すべりのよい車をすべ
りのよいレールの上で走らせる様に
したらよからうと、(略)。

九四二 〇 (略)、日夜其の事ばかり考へ
てゐた。

九四三 〇 (略)、終に其の目的を達する
ことが出来た。

九四四 〇 其の頃イギリスのある會社
で、馬車鐵道をこしらへようといふ
話があつたが、(略)。

九四五 〇 (略)、スチブンソンの發明し
た汽車を用ひて見ようといふことに
なつて、(略)。

九四六 〇 (略)、スチブンソンは其の會
社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を
走る汽車を造つた。

九四七 〇 (略)、四方からの見物人は雲

九四八 〇 (略)、四方からの見物人は雲

九四九 〇 (略)、四方からの見物人は雲

の如く集つた。

九34 7 中には汽車と競走する積で、馬に乗つて来た人もある。

九34 9 (略)、馬上の人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、(略)。

九35 2 見物人一同は其の早いのと其の勢のすさまじいのに驚いた。

九35 4 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、(略)。

九35 6 (略)、其の間に五十三次といつて、重なる宿場が五十三あつた。

九35 7 一日の旅程を十里づつと見て、十二日程かゝつた。

九35 10 昔の旅行には色々難儀なことがあつた。

九36 3 (略)、富士川・大井川・天龍川なども、其の頃は橋が無かつたから、(略)。

九36 5 (略)、人の肩車に乗つたり渡船に乗つたりして渡つたのであつた。

九36 5 (略)、人の肩車に乗つたり渡船に乗つたりして渡つたのであつた。

九36 8 (略)、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九37 1 大水などの時には、(略)幾日も泊つて待つてゐなければならなかつた。

九37 1 其の頃之を川止といつた。

九37 3 箱根と新居とは關所があつて、役人が一々旅人をしらべて通し

た。

九37 5 (略)、關所破といつて、其のものは重い罰を受けた。

九37 6 昔の道中には馬とかごがあつた。

九38 1 かごも(略)、早くもないし、又そんなに樂でも無かつた。

九38 5 其の上道もよくなり、橋も多くなつた。

九37 9 雨のはれた朝、花の香を送つて、そよ／＼と吹く春風には、我が身も蝶の様に飛立ちたくなる。

九39 4 (略)、黄色に實のつた秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動かすと、(略)。

九39 8 (略)、風の吹散した木の葉の上に、雨の降りかゝるのは、何となく物さびしい。

九40 1 葉の散果てた冬木立に吹きさむ木枯の風は、(略)。

九40 6 夜が更けて、雨の音が静になつたから、止んだことと思つてゐると、(略)。

九40 6 夜が更けて、雨の音が静になつたから、止んだことと思つてゐると、(略)。

九40 7 (略)、翌朝起きて見れば、何時の間に雪に變つたか、そこら一面銀世界になつてゐることもある。

九41 10 昔或氏神のお祭に競馬の神事といふ事があつた。

九42 2 (略)、競馬をさせて、勝つた

村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九42 3 (略)、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九42 4 或年選ばれた子供の中に、すぐれて上手な騎手が二人あつた。

九42 5 或年選ばれた子供の中に、すぐれて上手な騎手が二人あつた。

九42 8 「(略)」と、祭の當日には、おびたゞしい見物人が朝早くから宮の境内へつめかけた。

九42 10 やがて五人の騎手は(略)、鳥居の下へ集つて来た。

九43 2 神主は(略)、「支度。」といふあひづの一番太鼓を打鳴らした。

九43 5 負けたら村の名折になるぞ。」

九44 2 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一散にかけ出した。

九44 3 社の森を離れるまでは、餘り甲乙はなかつた。

九44 5 (略)、もはや熊吉と愛作の二人だけの競走となつた。

九44 6 二人の馬は五分々々に進んで行つたが、(略)。

九44 7 (略)、池の右手へさしかゝつた時、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。

九44 8 (略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。

九44 9 熊吉は(略)、池の中へ落ち

こんだ。

九45 3 愛作は(略)、すぐに熊吉のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引きよせた。

九45 10 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかせさせたら、(略)。

九46 1 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九46 1 熊吉の落馬したのにかまはず、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九46 3 (略)、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

九46 3 (略)、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

九46 3 (略)、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

九46 7 愛作方の人々は愛作の肩をたゝいて、「(略)」といつた。

九47 1 愛作さんのりつばな心がけで、熊吉の命が助かりました。

九47 1 愛作さんは實に見上げたものです。

九47 5 熊吉方の人々は、「(略)」といつた。

九47 7 此の話が傳はつて、愛作は五箇村はおろか、近所近べんのほめ者となつた。

九47 7 (略) 太い脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ細い脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

十187 たくさんの本を読んだ學問の深い人でも、(略)。
 十194 かうして出来上つたものを活版所へ渡す。
 十204 (略)、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、(略)。
 十212 表紙には紙ばかりのもあり、紙の上を布で包んだのもある。
 十213 又りつばなものとになると、革をきせたのもある。
 十224 それ故近年は(略)、活版を用ひることが多くなつた。
 十278 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果てて、(略)。
 十281 宮の森のこんもりと茂つた間から、古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、(略)。
 十283 はうきを立てた様に高く雲をはらはうとしてゐる。
 十291 (略)、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。
 十293 霜にやけて、赤くなつた杉垣の中には、寒菊が今を盛りと咲いてゐる。
 十296 家の横に水がよくすんだ小川が流れてゐる。
 十299 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、(略)。
 十2910 犬を連れた男が銃を肩にして、(略) あちらの岡へ向つた。

十301 ずどんと一發。何を撃つたのだらう。
 十303 榛の木の雀は一度にばつと飛立つた。
 十345 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。
 十345 志望者は五十人ばかりも來たが、(略)。
 十346 (略)、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。
 十348 (略)、知名の人の手紙を持つて來た者も大勢あつたのに、(略)。
 十348 (略)、知名の人の手紙を持つて來た者も大勢あつたのに、(略)。
 十349 (略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。
 十349 (略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。
 十352 窓 「あれが此の室にはいる前、(略)、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。
 十354 窓 きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。
 十355 窓 談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、(略)。
 十355 窓 (略)、すぐに立つて、椅子をゆづりました。
 十356 窓 人に親切なことは是でも知れると思ひました。
 十361 窓 はきくしてゐて、禮儀・

作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。
 十363 窓 私はわざと一卷の書物を床の上に投げておきました。
 十364 窓 (略)、中にはそれをふんだ者もありましたが、(略)。
 十364 窓 (略)、中にはそれをふんだ者もありましたが、(略)。
 十366 窓 (略)、あの青年ははいると直に書物を取上げて、テーブルの上に置きました。
 十367 窓 それで注意深い男といふことを知りました。
 十3610 窓 (略)、靜かに自分の順番を待つてゐました。
 十371 窓 又着物はそまつながら、さつぱりしたものを着て、(略)。
 十372 窓 (略)、齒もよく磨いてゐました。
 十373 窓 (略)、指先を見ると、爪は短く切つてゐました。
 十374 窓 外の者は着物だけは美しかったが、(略)。
 十375 窓 外の者は(略)、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。
 十377 窓 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、(略)。
 十378 窓 (略)、なほ平生の行をしらべて雇ふことに致しました。
 十3710 主人は答へて、「(略)。」といつた。

十641 見張人が(略)聲高く呼んだ。
 十643 甲板に立つてゐた船長を始め、三十五人の若者は(略)。
 十644 甲板に立つてゐた船長を始め、三十五人の若者はひとしく目を其の方向に向けた。
 十646 船長の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じて、(略)。
 十646 船長の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じて、(略)。
 十648 漕拔けた一隻は勇氣をふるつて、見る内に一頭の鯨に近寄り、急處めがけて(略) 鉋を打つ。
 十6410 漕拔けた一隻は(略) 破裂矢をしかけた鉋を打つ。
 十654 鯨の一群は影も形も見えなくなつた。
 十656 破裂矢は鯨の體内に深く食込んで破裂した。
 十657 ポートは鉋に附けた長いつなに引かれて、(略)。
 十661 鯨は再び浮上つた。
 十674 (略)、又以前には鯨の通路に網を張つて鉋を打つ方法などもあつた。
 十679 昔は大鯨一頭を捕へると、(略)の生活費を支へ得ると言つたものである。
 十844 維新前までは牛肉を食ふ人は至つて少かつたが、(略)。

- 十844 (略)、今では全國食はぬ處がなくなつた。
 十852 死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。
 十8510 (略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。
 十861 (略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。
 十868 内地では昔から餘り多くは飼はなかつたが、(略)。
 十869 (略)、琉球ではたくさん飼つて居つた。
 十一95 (略)、軸木ヲ火ニ乾カス者、乾イタ軸木ノ先へ藥品ヲ附ケル者、(略)。
 十一101 手數ノカ、ツタマツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。
 十一106 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトニナル。
 十一124 例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。
 十一473 昔トルコの或大將がアラビヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ約束をした。
 十一476 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。
 十一477 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、(略)。
 十一479 馬主は(略)、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。
 十一4710 (略)「それ、馬主が逃げた。」といふので、大將の部下の二三人は(略)、其の跡を追つかけた。
 十一481 (略)、大將の部下の二三人は(略)、其の跡を追つかけた。
 十一485 遂に暮方になつた。
 十一486 アラビヤ人は(略)、雲を霞と逃げのびた。
 十一487 (略)、夜のときは全く馬主の行方をかくした。
 十一489 (略)「騎者・騎馬・黄金、三つとも失つてしまひました。」
 十一491 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて來た。
 十一493 (略)、一方には「(略)」と、口々にほめた。
 十一498 (略)、前の馬主が再び馬を引いて來て、「(略)」といつた。
 十一509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。」
 十一513 (略)、馬はさもうれしうに、(略)、其の子供をあやしてゐた。
 十一514 此の一事でアラビヤに名馬の産する所以が分つた。
 十一547 ナポレオンがアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた時は冬の半で、(略)。
 十一549 (略)、吹く風は身を切るやうに寒かつた。
 十一551 隊中にピエールといふ年の頃十三四ばかりの少年鼓手があつた。
 十一553 ふと山のいたゞきの方にすさまじい物音が聞え始めたと思ふと、(略)。
 十一556 (略)、かの勇ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。
 十一557 「ピエールよ、少年鼓手よ。」と聲を揃へて呼んだが、何の答もない。
 十一571 マクドナルは(略)、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。
 十一572 兵士等は驚いた。
 十一583 (略)、兵士は止むを得ず將軍を谷底へ下した。
 十一584 將軍が谷底へ下りた時には、もう太鼓の音は聞えぬ。
 十一586 (略)、方々を尋ねて、やう／＼さがし當てたが、(略)。
 十一589 (略)、兵士等は力を合せて二人を引上げた。
 十一5810 (略)、軍中の花が助かつたので、全軍一同に歡喜の聲をあげた、(略)。
 十一591 (略)、軍中の花が助かつたので、全軍一同に歡喜の聲をあげた、(略)。
 十一1078 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。
 十一1091 男の(略)、小馬に乗つて、田舎道を通るのを見ると、昔の人に會つた様な氣がする。
 十一1103 (略)、まんぢゅうの様に圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。
 十一1109 上流の婦人は四方を閉ぢた輿に乗つて、外から見られない様にする。
 十二1110 其ノ圖ハ船ノ切斷面及ビ構成等ヲ何十分ノ一ニシタ縮圖デ、(略)。
 十二116 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、安藝ハ吳デ造ツタノデアル。
 十二231 是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。
 十二343 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、(略)。
 十二344 (略)、前週ノ土曜日ニハ落成式ガ舉行サレタ。
 十二347 (略)、縣廳カラモ知事ノ代理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。
 十二348 先ヅ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。
 十二349 先ヅ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。
 十二349 (略)、之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、(略)。
 十二352 (略)、義務教育年限モ六年ニ延長セラレタノデ、此ノ改築ヲ計畫シ、(略)。

十二35² (略)、今新校舎ノ出来上ツ
 タノハ眞ニ慶賀スベキ事デアル。
 十二35⁴ 郡長ハ左ノ祝文ヲ讀ンダ。
 十二36⁹ 式終ツテ、一同校舎ヲ巡覽
 シタ。
 十二81⁵ (略)、やせ衰へた體を義足
 に支へて、路ばたにバイオリンを弾
 いて居る老人の辻音楽師がある。
 十二82⁶ 木蔭^{こかげ}に立つてつく／＼と此
 の様子を見てゐた一人の紳士があつ
 た。
 十二82⁷ 木蔭^{こかげ}に立つてつく／＼と此
 の様子を見てゐた一人の紳士があつ
 た。
 十二82⁸ (略)、其のバイオリンを取
 つて弾始めた。
 十二82¹⁰ 弓が一度糸にふれると、天
 上の音楽の様な美しい音がわき出し
 た。
 十二83³ 老人は、(略)不思議さうに、
 バイオリンと紳士の手つきを打ちま
 もつて居た。
 十二83⁴ 聴衆は(略)、見る内に人
 山を築いた。
 十二83⁵ 重く沈んだ調に暗い／＼海
 の底へ引込まれるやうな氣がするか
 と思ふと、(略)。
 十二83⁶ (略)、軽く浮立つた調子に、
 (略)春霞の彼方へ連れて行かれる
 やうな心持になる。
 十二84³ (略)、聴衆は錢をつかんで、
 争つて老人のさへげた帽子の中へ投

入れる。
 十二84⁵ また／＼間に帽子に一ぱい
 になつた。
 十二84⁸ 紳士は更に埃太利の國歌を
 弾始めた。
 十二84⁹ 幾千の聴衆は帽子をぬいで
 相和して歌つた。
 十二84¹⁰ 歌が終ると、紳士は(略)、
 目禮して何處へか行つた。
 十二85² 日ははや没して、燈火の光
 が(略)かゞやいてゐるとは、今の
 今まで誰一人も氣附かなかつた。
 十二85³ かの情深い紳士は誰であつ
 たか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。
 十二85⁴ 一同は唯神の仕業とのみ思
 つた。
 十二85⁵ 佛蘭西^{フランス}のバイオリンの名手
 アレキサンドル、ブーシェーであつ
 たとは後になつて分つた。
 十二85⁶ (略)であつたとは後にな
 つて分つた。
 だ(助動)83^ダ だ(ダ・ダラ・デ・ナ
 ・ナラ・ニ) 〆なんだか
 二23³ キレイデゴザイマス。
 二25⁵ アチラノソラガマツカ
 ニナリマシタ。
 二36⁶ ウツクシイデハアリマセン
 カ。
 二56⁶ 〆ワタクシニハソノキイ
 ロナノヲクダサイ。」
 二10² 〆 マルイマルイ マンマル
 イ、ボンノヤウナ ツキガ。

二10⁷ 〆 クロイクロイ マツクロ
 イ、スミノヤウナ クモニ。
 二11⁵ 〆 マルイマルイ マンマル
 イ、ボンノヤウナ 月ガ。
 二16³ (略)、イロイロナ木ノハ
 ガトンデキマス。
 二18¹ (略)、フネノヤウニナツ
 テ、ハシルノモアリマス。
 二19⁵ モシナツデアツタラ、ド
 >NNアイロヲツクタデセウ。
 二21² (略)、日ニヤケタヤウナ
 イロヲシテキマス。
 二24² 〆 「ドコダラウ、(略)」。
 二29¹ (略)、スズメノナクコエ
 モ、ウレシサウニキコエマス。
 二29³ (略)、オモシロサウニアン
 ンデキマス。
 二33⁶ ユミヲイルコトガスキ
 デ、(略)ヲイコロシテ、オモシロ
 ガツテキマシタ。
 二35³ 〆 「モチハタイセツナオ米
 デコシラヘタモノデスカラ、
 (略)」。
 二40³ 〆 ワタクシモオカアサン
 ラダイジニシマス。」
 二40⁷ 〆 「モウコンナニ大キク
 ナリマシタ。」
 二42¹ 〆 コレガハナデ、コレガ
 ロデス。
 二43⁵ 〆 コハサウナ目ヲシテ、
 ニランデキルデハアリマセン
 カ。」

二43⁶ 〆 (略)、ニランデキルデハ
 アリマセンカ。」
 二45⁷ アノ太イ木ハカレタヤ
 ウニミエマスカ、(略)。
 二46⁷ (略)スガハラノミチザネ
 トイフ チユウギナ オカタヲマ
 ツツタノデス。
 二51¹ (略)白イ犬ヲ一ピキカ
 ツテ、子ドモノヤウニカハイガ
 ツテキマシタ。
 二54¹ オダイサンハタイヘンニ
 ハラヲタテテ、(略)。
 二55⁵ (略)、天マデトドクカト
 オモフヤウナ、大キナ太イ木
 ニナリマシタ。
 二56⁶ (略)、イロイロナタカラモ
 ノガデマシタ。
 二60⁷ 〆 「オモシロイコトダ。
 二61⁷ (略)、一メンニミゴトナ
 ハナザカリニナリマシタ。
 二65³ 〆 「コレハニセモノダ。
 二65⁴ 〆 ニクイヤツダ。」
 二11⁶ マコトニウツクシイデハ
 アリマセンカ。
 二23³ (略)、ユキガフツタヤウ
 ニ白クナツタトコロガミエマ
 ス。
 二26⁶ サクラノ木ハ、ヨソノ
 クニニハ、コンナニタクサンア
 リマセン。
 二27⁷ アツテモ、日本ノサクラ
 ノヤウナウツクシイハナハサ

キマセン。

三53 ㊦ 「マサヲサン、ソナニ

ウチニバカリキナイデ、(略)。」

三72 ノハラニハ、(略)、イロイ

ロナハナガサイテキマス。

三84 「ボクハモウコンナニタ

クサンツミマシタ。」

三86 ㊦ 「ボクモモウテニ一パ

イニナリマシタ。」

三91 ㊦ 「スミレハタクサンナ

イカラ、マダソナニツメマセ

ン。」

三114 オトウトハ犬ガスキデ、

イツモブチトアソンデキマス。

三123 (略)、オヂイサンハイロイ

ロナオモシロイハナシヲキカセ

テクダサイマス。

三137 (略)デモヨツテシマフホ

ドデ、ダレトスマフヲトツテ

モ、マケタコトハアリマセン。

三141 ㊦ 「日本中ニハヨワイモノ

バカリデ、ジブンノアヒテニ

ナルモノハ一人モナイ。」

三175 ヒバリガオモシロサウニ

サヘツツテキマス。

三187 オルルトキニハ、オチル

ヤウニハヤクオリテキマス。

三197 (略)、子ヒバリハスノ中

デ、ドンナニマツテキルコト

デセウ。

三224 まるいけれどもまりのや

うにまんまるではありません。

三225 (略)まりのやうにまん

まるではありません。

三226 うにかずにゐますが、し

んだのではありません。

三253 どちらもたいそうやくに

たつどうぶつでございます。

三276 ㊦ 走れよ、走れよ、ころば

ぬやうに。

三281 四五日マヘニアタマヲ

ダシタケノコガ、モウコンナ

ニノビテ、(略)。

三291 (略)、タケノカハガオチ

テ、リツパナ竹ニナリマス。

三294 竹ハイロイロナヤクニ

タチマス。

三345 イマニ(略)、アライタタ

ミヲシイタヤウニナリマセウ。

三364 まさはふしぎさうに、

「どうしてもう光らないのでせ

う。」といひますと、(略)。

三374 (略)、あをく光りながら、

しづかにとんでいきました。

三382 ほかにまだだいいなもの

が三つあります。

三385 (略)、せんせいの見せて

くださるいろいろなものを見る

のです。

三395 耳もよくきこえて、きき

おとすやうなことはありませ

ん。

三398 (略)よけいなことは言ひ

ません。

三415 ㊦ 「水の中へはいつたら、

どんな心もちだらう。

三437 (略)、ミンナガフンパツス

ルヤウニナリマシタ。

三443 アサ日ノ上ル方ガ東

デ、ユフ日ノ入ル方ガ西デス。

三451 右ノ手ノサス方ガ南

デ、左ノ手ノサス方ガ北デ

ス。

三461 ㊦ 「おい、なにをしてゐる

のだ。」

三463 ㊦ 「あまりほしがきれい

だから、二つ三つはたきおとさ

うと思ふのだ。」

三464 ㊦ (略)、二つ三つはたきお

とさうと思ふのだ。」

三466 ㊦ 「ばかなことをいふ。

三482 (略)、ばくつとくつて、へ

いきなかほをしてゐます。

三483 思ひだしたやうにざぶん

と水の中へとびこみます。

三492 (略)、ひとりでにうかぶ

やうにして、水の上へ出て

きます。

三536 ㊦ 「モウゴハンダカラ、オ

イデナサイ。」

三555 (略)ダイジナキンギョヲ

トツテ、ニゲテ行キマシタ。

三588 とほくの方では青ぞら

といつしよになつてゐるやう

に見えます。

三592 今日のはなみがおだやか

で、舟がたくさんおきへ出て

ゐます。

三616 (略)貝をこんなにたく

さんいただきます。

三617 こんなに大きいのも、こ

んなに小さいのもあります。

三618 こんなに大きいのも、こ

んなに小さいのもあります。

三621 はまぐりのやうに二つ

合ふのもありますが、(略)。

三623 (略)、さざえのやうに、

ふかいつばのかたちになつて

ゐるのもあります。

三626 又あはびの貝のやう

に、一つでひらたいのもあり

ます。

三632 (略)、この貝がらはかた

つむりのやうに、おもてにう

づまきがあります。

三641 「どこでこんなにたくさ

んおひろひになりました。」

三644 ㊦ 「いいえ、これはひろつ

たのではない。

三661 ウラシマハカイサウニ

思ツテ、(略)。

三681 リユウグウニハオトヒメ

トイフキレイナオヒメサマガ

居テ、(略)。

三683 (略)、イロイロナゴチソウ

ヲシタリ、(略)。

三693 (略)、シマヒニハイヤニ

ナリマス。

三70 8 園 「ソレハマコトニオナゴ
リヲシイコトデゴザイマスガ、
(略)。
三72 1 (略) リツバナハコヲワタ
シマシタ。
三73 6 (略)、ウラシマハニハカニ
オヂイサンニナツテシマヒマシ
タ。
四1 6 がくかうの西どなりはや
くばで、やくばのまむかひが
けいさつしよです。
四2 7 このへんは町中で一ば
んにぎやかなところで、(略)。
四2 8 このへんは町中で一ば
んにぎやかなところで、大きな
店がたくさんあります。
四5 7 園 「(略) あんなにまがりま
がつて、とほくの方へながれて
ゐます。
四8 2 (略) 雨がふりさうにな
つたので、(略)。
四9 1 (略)、イサマシイデハアリ
マセンカ。
四10 7 一本ハキザハシデ、モウ
アマクナリマシタ。
四12 5 コノゴロハクリノオチル
ジブンデ、毎アサ早クオキテ、
行ツテ見ルノガタノシミデス。
四16 5 牛ほどもある大きな
のししで、きばをむき出して、
(略)、土けむりをたてて、とんで
来ます。

四17 5 ゐのししはまつすぐにな
だつねの方へ下りて来ます。
四20 1 (略)、ただつねをほめる
こゑは、山もくづれるほどで
あつたといひます。
四20 6 園 (略)、一バン小サイノ
ガ小ユビデ、マン中ノ一バン
高イノハ、中ユビトモ、高ユ
ビトモイヒマス。
四21 3 園 「オヤユビノ次ノハ人
サシユビデ、中ユビト小ユビノ
アヒダノガクスリユビデス。」
四22 7 園 ソレカラ私ハ人サシユ
ビデ、三郎ハ小ユビデス。」
四25 1 園 「コノ太イノガ五セン
デ、細イノハ三セン五リンデ
ス。」
四28 2 園 まことにおきのどくなこ
とです。」
四28 5 園 「いいえ、私たちは枯れ
たやうに見えても、ねは生き
てゐます。
四28 7 園 土の中で、しづかにら
い年のほるをまつてゐるの
です。
四29 1 園 はるになつて、だんだん
あたたかになると、(略)。
四29 3 園 (略)、そのうちにきれ
いなはなをさかせて見せます。
四30 1 (略)、みんなあつまつて、
色色なはなしをしてゐます。
四33 4 園 「いいえ、うどんやさう

めんにする麦は小麦で、ごは
んにたく麦は大麦です。」
四35 2 園 「あんにするのはあづ
きといふ豆で、こなにする
のは大豆といふ豆です。」
四37 3 麦ワラザイクニハ(略)色
色ナ物ガアリマス。
四37 6 (略) 麦ワラデ作ツタ物
デ、アツイジブンニツカフ物
ガアリマス。
四39 5 園 (略)、コノ中ヘハイッ
テ、内カラトヲシメテキサヘ
スレバ、アンシンナモノデス。」
四39 8 (略) 海ノ水ヲカキマハ
スヤウナ大キナオトガシマシ
タ。
四40 5 園 カラノナイモノハカ
ハイサウナモノダ。」
四40 5 園 カラノナイモノハカ
ハイサウナモノダ。」
四41 4 (略)、ソコハサカナヤノ
店デ、ソバニ一セン五リン
トカイタフダガタテアリマシ
タ。
四42 7 園 「これは昔からのしき
たりで、昔はのしあはびをつ
けたのです。
四43 2 園 (略)、あはびの肉をの
して、紙のやうにうすくした
ものです。
四43 5 園 (略)、今では紙で作つ
たのしをつかふやうになりま

した。
四44 3 園 「どうしてのしあはび
をつけるやうになつたのでせ
う。」
四45 2 園 (略)、なまぐさのしるし
にのしあはびをつけるやうに
なつたのでせう。
四50 5 木ノヤウニカタイガ、
木デハアリマセン。
四50 5 木ノヤウニカタイガ、
木デハアリマセン。
四51 1 (略)、ソノママデヤイタ
リニタリシテタベルノデハア
リマセン。
四51 2 チヨツト見ルト、リツパ
デハナイガ、(略)。
四55 8 園 オレハココノヲカヘ
來タカツタノダ。」
四60 1 園 「ソレハカハイサウナコ
トダ。
四60 1 園 「ソレハカハイサウナコ
トダ。
四60 7 (略)、カラダハスツカリ
モトノヤウニナホリマシタ。
四63 1 ゆふべは風がなくて、し
づかなばんでしたから、(略)。
四63 3 やぶの竹は弓のやう
にまがつて、(略)。
四63 6 にはの松の木はわた
をのせたやうに見えます。
四63 7 はのおちた木もみんな
まつ白になつて、(略)。

- 四69 1 〔ソナナニ少シツツノ
マナイデ、(略)〕
- 四78 6 〔あれをいらないといふ
のもさんねんだ。〕
- 四78 6 〔だれか上手なものは
ないか。〕
- 四79 4 〔(略) だけはきつといお
とすほどの名人でございます。〕
- 五3 3 〔あまりおもしろさうなので、
(略)、おのぞきになりました。〕
- 五8 3 〔(略)、毎年オイハヒライタス
ノデゴザイマス。〕
- 五9 7 〔「見ごとなたきた。」〕
- 五9 7 〔「見ごとなたきた。」〕
- 五10 4 〔鳥はたのしさうに時々来て、
羽をひたしました。〕
- 五10 5 〔魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。〕
- 五10 7 〔ひるはあたたかな日にてらさ
れ、(略)〕
- 五11 2 〔「美しい川だ。」〕
- 五11 8 〔(略)、いよくにぎやかにな
りました。〕
- 五12 5 〔(略)、人がいそがしさうにあ
るいてゐました。〕
- 五15 3 〔(略)、大ブツサマノマヘニ立
ツテキル人ガ、コンナニ小サク見え
マス。〕
- 五15 8 〔(略)、マコトニミゴトナモノ
デス。〕
- 五16 2 〔ウロコハカハラフイタヤウ
ニカサナリ合ツテキテ、(略)〕
- 五18 1 〔鯉ノヤウニゲンキガヨク、
(略)〕
- 五18 4 〔(略)、鯉ガタキヲ上ルヤウニ、
ズンズンシユツセヲセヨトイフ心デ
祝フノデセウ。〕
- 五22 7 〔ぬす人はきんじよに住んで
ゐるゐざりだといふうほさがあるの
で、(略)〕
- 五23 4 〔私はよその物をぬすむやう
なことはいたしません。〕
- 五24 2 〔「これは私が毎日使つてゐ
た釜でございます。〕
- 五24 4 〔それを私のるすにこのゐざ
りがぬすんだのでございます。〕
- 五24 7 〔(略)、私は足の立たないも
ので、両手をついて、やつとゐざり
あるくものでございます。〕
- 五24 8 〔(略)、両手をついて、やつ
とゐざりあるくものでございます。〕
- 五25 1 〔(略) どうして釜のやうな重い物
が持つて行かれませう。〕
- 五25 4 〔その釜は私が前から持つて
ゐたのでございます。〕
- 五26 2 〔「お前のいふことはまこと
にもつともだ。」〕
- 五29 4 〔「しわはよつてもわかい氣
で、小さい君らのなかま入、うんご
う會にもつて行く。〕
- 五30 4 〔マルクカリコンダニハ木ノヤ
ウニ見エマス。〕
- 五30 6 〔茶ノ木ノ高サハ大テイ三四尺
グラキデ、アタハカイトコロニヨク
ソダツ木デス。〕
- 五31 7 〔ソノ實ハツバキノ實ノヤウニ
カタクテ、(略)〕
- 五33 4 〔(略)、ソナナニツムト、茶ノ
木ノタメニハヨクナイサウデス。〕
- 五34 3 〔(略)、シヅカニ木ノ葉ノ上
ニネムツタヤウニシテキルノヲ見ル
ト、(略)〕
- 五34 4 〔(略)、シヅカニ木ノ葉ノ上
ニネムツタヤウニシテキルノヲ見ル
ト、(略)〕
- 五35 1 〔(略)、羽ノ色ニモ、白イノヤ、
キイロナノヤ、黒イノヤ、マダラナ
ノヤサマノアリマスガ、(略)〕
- 五35 2 〔(略)、羽ノ色ニモ、白イノヤ、
キイロナノヤ、黒イノヤ、マダラナ
ノヤサマノアリマスガ、(略)〕
- 五36 8 〔こといふのはかひこのこと
で、皇后さまがかひこをおかひあそ
ばすためでございました。〕
- 五37 1 〔(略)、皇后さまがかひこをお
かひあそばすためでございました。〕
- 五37 4 〔「天子様のおほせだから、
子を出すやうに。」〕
- 五37 4 〔「天子様のおほせだから、
子を出すやうに。」〕
- 五37 4 〔「天子様のおほせだから、
子を出すやうに。」〕
- 五40 8 〔えきふが(略)、山のやうに
荷物をつんで來ました。〕
- 五42 4 〔(略) 後ノ方ヘトンデ行クヤ
ウニ見エマス。〕
- 五43 6 〔(略) カミナリノヤウナ音ガ
シマシタ。〕
- 五43 7 〔文太郎ハフシギニ思ツテ外ヲ
見ルト、(略)〕
- 五44 1 〔汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハ
イリマシタ。〕
- 五44 1 〔汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハ
イリマシタ。〕
- 五44 1 〔汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハ
イリマシタ。〕
- 五44 7 〔「海ダ、海ダ。」〕
- 五44 8 〔「海ダ、海ダ。」〕
- 五45 2 〔クレドモコンドハミジカイト
ンネルデ、スグニ通りヌケマシタ。〕
- 五46 1 〔(略)、にはかに雲が出て、か
みなりが鳴り出しました。〕
- 五47 4 〔「かみなりは高いものなの
所へおちるのだ。〕
- 五47 4 〔「かみなりは高いものなの
所へおちるのだ。〕
- 五47 6 〔(略)、むりに手をひつぱつて
つれ出しました。〕
- 五48 1 〔(略) 目がくらむやうないな
びかりがして、(略)〕
- 五48 2 〔(略)、耳がさけるやうなおそ
ろしいかみなりが鳴りました。〕
- 五49 1 〔もし君が居なかつたら、僕
は死んでしまつたのだらう。〕
- 五50 3 〔ソノ他ノ瓜ハ大テイナメラカ
デアル。〕
- 五50 5 〔カボチャハ中ガ黄色デ、西瓜
ハ中ガ赤イ。〕
- 五51 4 〔ナマデソノマハタベルノハ、
マクハ瓜ト西瓜デ、ニナクレバタベ
ラレナイノハ、カボチャトウ瓜ト
タ顔デアル。〕

いそがしくて、(略)。

六15 6 (略)、夜も十分に眠れないほどです。

六23 7 (略) 大きな石を持つて来て、力まかせに投げつけました。

六25 4 金ヤギンハ(略) イロ／＼

ナカザリ物ニナリマスガ、(略)。

六26 3 金ダラヒニモナレバ、私ノ

ヤウナヤクワンニモナリマス。

六27 4 ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サ

イ物カラ、(略)。

六27 5 (略)、キクワン車・軍カン

ノヤウナ大キナ物マデ、(略)。

六28 3 「ソレデモ鐵ハデキニサビ

テ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六29 3 シカモソノサビハ大ソウド

クナモノデス。」

六29 7 直吉と長松は同じ店のでつち

であつた。

六30 8 「あゝ、大へんなことをした。

六31 5 「先では知らないのだから、

一錢まうけておけばよかつたのに。」

六32 1 ほんとのまうけでない金は

一厘でも取つてはならない。」

六32 5 「だんながおるすだから、

なほさらまちがひがあつてはならな

い。」

六33 1 (略)、直吉は正直ものだとい

めて、(略)。

六36 4 うちが見ちがへるやうにきれ

いになつた。

六36 5 うちが見ちがへるやうにきれ

いになつた。

いになつた。

六37 1 (略)、紙などをそまつにして

はならないと思つた。

六43 7 (略)、もとはいつて身分の

ひくい人でございました。

六45 2 (略) りつばな武士になりた

いと思つてゐましたから、(略)。

六45 8 初はひくい役目で、信長の

目通りへ出ることも出来ませんでした。

六48 8 秀吉はいくさの上手な人で、

(略)。

六48 8 秀吉はいくさの上手な人で、

(略)、一ぺんもまけたことがありま

せん。

六49 5 (略)、敵は戦はないでにげて

行くやうになりました。

六50 4 (略) 秀吉のいきほひは、し

ぜんに日一日と盛になりました。

六50 5 (略) 日一日と盛になりました。

六51 1 (略) 日本中の大名が皆秀吉の

言ふことをきくやうになりました。

六52 1 (略) といふふれいなことば

がありました。

六52 5 「日本國には天皇へいが

いらつしやるではないか。」

六55 3 川中島の戦で名高い上杉謙信

は強い大将であつた。

六55 3 その相手は武田信玄で、これ

も謙信におとらないいくさの上手で

あつた。

六55 4 (略)、これも謙信におとらな

い。

いくさの上手であつた。

六56 5 謙信は勝氣な人で、(略)。

六56 5 謙信は勝氣な人で、いよいよ

いくさがはげしくなると、じつとし

ては居られない。

六56 8 急に馬に打乗つて、(略)。

六58 1 上杉謙信はこんな強い人であ

つたが、(略)。

六58 2 (略)、又なさけぶかい人であ

つた。

六58 3 武田信玄の國は山國で、塩が

ない。

六59 1 それを苦しめるのはかはい

さうだ。」

六59 7 身をきるやうな北風の 吹

く夕暮にあねいもと、(略)。

六60 6 「なんでそんなに泣いて

ゐる。

六61 4 「いゝえ、さうではあり

ません。

六64 8 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、

ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガ

アリマス。

六66 1 熊ハイタヅラモノデ、(略)、

カズノ子ノ俵ヲカツイデ、ニゲテ行

クコトガアルトイヒマス。

六69 6 私は古机でございます。

六69 7 私がこゝへまゐつたのは、

この學校がたつた年でございますか

ら、(略)。

六70 1 その間に色々な子どもを見ま

した。

六71 2 (略)、紙をたくさんほごにし

たりするやうな、そゝつかしい子供

もございました。

六72 3 十人十色と申しますが、まこ

とにその通りで、(略)、せいしつも

色々かはつてゐます。

六72 3 (略)、顔のちがふやうに、せ

いしつも色々かはつてゐます。

六72 6 (略)、おとなになつてから、

りつばな人になりました。

六73 2 私は一たい子供がすぎでござ

います、(略)。

六73 3 (略) どうしてもきらひな子

供が七八人ございました。

六73 4 私のからだがかんなんにぐらつ

くやうになつたのも、(略)。

六73 5 私のからだがかんなんにぐらつ

くやうになつたのも、(略)。

六73 6 (略)、その子供たちのいたづ

らからでございます。

六73 6 こんなにたくさん墨を附けた

のも、(略)。

六73 7 こんなにたくさん墨を附けた

のも、その子供たちでございます。

六76 6 (略)、うれしさに、「どう

も御苦勞、御苦勞。」とあいさつし

ました。

六77 2 廣イ港ガ船デーバイニナツテ

キル。

六77 4 (略)、マルデ林ノヤウニ見エ

ル。

六77 6 アレハハシケデアル。

六七八 今ニ出帆スルノデアラウ。

六八〇 アレハ停車場へ送ルノデアラウ。

七一二 品物と引きかへに代金を受取るのが現金で、(略)、後になつて代金を受取るのがかけです。

七一三 たとへば十五錢で賣つてよいものを二十錢といふやうなものです。

七一五 正直な商人はかけねなどはいひません。

七一四 卸賣といふのは(略)、小賣店へ大口に賣渡すことで、卸賣をするものを卸賣商人といひます。

七一五 しかし卸賣商人で、問屋をしてゐる場合がたくさんあります。

七一七 急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。

七一六 (略)、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、御参りよなくおつしやつて下さい。

七一七 (略) おうらやましい事でございます。

七一八 西洋西瓜には色々あるさうでございますが、(略)。

七二一 (略)、なるべく大きくてうまい實のなるやうなのをお願い申し上げます。

七二九 あなたと私は親類ださうでございますから、(略)。

七二九 あなたと私は親類ださうでございますから、(略)。

七二〇 どういふわけで、おたがひに親類の間がらでございますか。

七二〇 「あなたと私は大そう似てゐるではありませんか。」

七二〇 葉は羽形で、二枚づつ向ひ合つてゐますし、(略)。

七二一 「さうでございますか、はじめて承りました。」

七二一 「あなたはその美しい花だけでたくさんでございます。」

七二二 「あなたはその美しい花だけでたくさんでございます。」

七二二 私どもの親類で、小さくてかはいらしいのは、(略) れんげ草でございませう。

七二四 「サテ、目アキトイフモノハ不自由ナモノダ。」

七二五 「サテ、目アキトイフモノハ不自由ナモノダ。」

七二六 色々なカイガアツテモ、(略)。

七二六 (略) 手ヲヨクハタラカセル人ガ多クレバ多イ程盛ニナリマス。

七二七 (略)、ノミ一ツデ見事ナホリ物ヲコシラヘタリシテ、(略)。

七二八 シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。

七二八 シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。

七二八 (略) 絲をのぼして見ると、五六町もあるといふことである。

七二九 (略)、大そうな手間がかかる。

七二九 (略)、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

七二九 卵からかへつたばかりの蠶はあり程の大きさで、長さは一分ばかりしかない。

七三〇 小さい時分はやはらかな葉をこまかく切つてやるが、(略)。

七三一 (略)、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。

七三一 蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。

七三二 (略) 外へ出ると、すぐにかわいて絲になるのである。

七三二 (略)、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て来る。

七三三 (略)、それから繭をにて、絲を取るのである。

七三三 蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春・夏・秋といふ名がある。

七三三 わが國は昔から養蠶の盛な國で、(略)。

七三三 わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

七三四 (略)、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

七三六 町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸工場ガ出来タ。

七三七 ドノ店ニモ品物ガキレイニナ

ラベテアル。

七三七 色々な店ノ前ヲ通ツテ、(略)。

七三八 日用品ナラバ、マツ何デモアルトイツテヨロシイ。

七三八 品物ハ皆正札附デ、カケ直ガナイ。

七三九 又一下ニ色々ナ物ヲ買集メタイ時ニハ、(略)。

七三九 (略)、一トコロデスムカラ便利ダル。

七四〇 「あゝ、金がない程残念なことはない。」

七四〇 武士としてはあのくらゐな馬をもつて見たい。

七四〇 「その馬の直はいか程でございます。」

七四一 (略)、こんな大金を持つてゐるなら、なぜあると一言いひなかつた。

七四一 「さやうでございます。」

七四二 このお金は(略)、父の渡してくれた金でございます。

七四二 さだめて皆様は御じまんの馬に乗つてお集りのこととございませう。

七四二 あなた様にも、(略)、主人のお目にとまるやうになされるのが大事と考へまして、(略)。

七四二 (略)と考へまして、今日このお金を出したのでございませう。

七四三 「これは一豊の馬でござい

ます。」

七四一 (略)、りつばな武士。」

七四三 (略)、これが一豊の出世の
とになったといふことであります。

七四四 (略)、僕ラノ仲間ノ方ガヨ
ケイニ用ヒラレルヤウニナツタカト
思フ。

七四五 (略)、僕ラノ仲間ノ方ガヨ
ケイニ用ヒラレルヤウニナツタカト
思フ。

七四六 (略)、マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デ
アルシ、(略)。

七四七 (略)、書物モ近ゴロハ大
テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツ
タ。」

七四八 (略)、コノタクサンノ障子
ハ皆僕ラノ仲間デハツテアルデハナ
イカ。

七四九 (略)、コ、ニアル扇モウチハモヤ
ハリサウダ。」

七五〇 (略)、モトユヒヤ水引ノヤウナ、
アンナ丈夫ナ物ハ (略)。

七五一 (略)、モトユヒヤ水引ノヤウナ、
アンナ丈夫ナ物ハ (略)。

七五二 (略)、日本紙デナケレバ出
来ナイ。」

七五三 (略)、水ニヌレルグラキハ何デモ
ナイコトダ。」

七五四 (略)、葉書ヤ切手ヤ印紙ナドハ
皆僕等ノ仲間ダゾ。」

七五五 (略)、ソナナニイバツテモ、ア
ノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマ

イ。」

七五七 (略)、どんなに遠い所でも、
八錢でよいのです。

七五八 (略)、近い所ならもつと目方がふ
えても、四錢で送れます。

七五九 (略)、書物や寫眞の類は三
十匁まで二錢で、これもたゞの手紙
などよりはよほど安いのです。

七六〇 (略)、これは今日のやうに
早くは配達が出来ず、賃錢も高かつ
たのです。

七六一 (略)、又冷水浴や海水浴は (略)、心
をさわやかにする。

七六二 (略)、このやうに水はわれ／＼の生
活にもつとも大切なもので、(略)。

七六三 (略)、このやうに水はわれ／＼の生
活にもつとも大切なもので、(略)。

七六四 (略)、このやうに水はわれ／＼の生
活にもつとも大切なもので、(略)。

七六五 (略)、飲みすぎたり、(略)長
くはいつてあたりするのはどくであ
る。

七六六 (略)、もうこんなに大きな
のがなつたのでございます。

七六七 (略)、もうこんなに大きな
のがなつたのでございます。

七六八 (略)、父はこんなにちがふものな
ら、(略)皆つき木をすると申してゐ
ます。

七六九 (略)、父はこんなにちがふものな
ら、(略)皆つき木をすると申してゐ
ます。

七七〇 (略)、父はこんなにちがふものな
ら、(略)皆つき木をすると申してゐ
ます。

ます。

七七一 (略)、見事な桃をたくさんおおく
り下さいまして、(略)。

七七二 (略)、味は又かくべつでこ
ざいます。

七七三 (略)、いづれも大よろこびで、こ
んな見事な桃がなるのなら、植ゑて
見たいと申して居ります。

七七四 (略)、こんな見事な桃がな
るのなら、(略)。

七七五 (略)、こんな見事な桃がな
るのなら、植ゑて見たいと申して居
ります。

七七六 (略)、魚類ニハイワシ・アデ・サ
バ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、
水ノ表面ニ近イ所ヲオヨグモノガア
リ、(略)。

七七七 (略)、タヒ・ボラ・ハモ・コ
チ・キスナドノヤウニ、岩ノカゲヤ
海草ノ間ヲオヨグモノガアリ、(略)。

七七八 (略)、エヒ・カレヒ・ヒラメ
ナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデ
キルモノモアル。

七七九 (略)、カキハスグニフエルモノデ、
物ニツケバ、中々ハナレナイ。

七八〇 (略)、カキヲカキオトサナケ
レバナライ程デアル。

七八一 (略)、眞珠ハ、コノ貝ノカラ
ノ中ニアルノデアル。

七八二 (略)、中デオモシロイハサンゴ
デ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ
形ヲシテキル。

七八三 (略)、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテ
キル。

七八四 (略)、サンゴハコノ蟲ノ骨デ
アル。

七八五 (略)、海綿モ、ヤハリ海ノソ
コノ岩ナドニ取りツイテキル蟲ノ骨
デアル。

七八六 (略)、コンナ所ニハ動物モゴクマレ
デ、植物ハマツタクナイガ、(略)。

七八七 (略)、海草ノ形ハ様々デアル。

七八八 (略)、オビノ様ニ廣クテ長イモノア
レバ、(略)。

七八九 (略)、ゼンタイガ細カニ分レ
テ、枝ノ様ニナツテキルモノモアル。

七九〇 (略)、枝ノ様ニナツテキルノ
モアル。

七九一 (略)、色モ一樣デハナイ。

七九二 (略)、ミルヤモツクノ様ニ緑色ノモ
ノモアレバ、(略)。

七九三 (略)、コンブヤアラメノヤウ
ニ茶色ノモノモアリ、(略)。

七九四 (略)、テングサノヤウニ紅色
ノモノモアル。

七九五 (略)、茶色ノモノハソノ中間
ニハエテキルノデアル。

七九六 (略)、根モ陸上ノ植物ノヤウニ養
分ヲスヒ取ルタメノモノデハナク、
(略)。

七九七 (略)、根モ (略)養分ヲスヒ取ルタ
メノモノデハナク、(略)。

七九八 (略)、タマハナレナイヤウニ、
岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲ

七九九 (略)、タマハナレナイヤウニ、
岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲ

ナスモノデアル。

七74 根モ(略)、岩ナリ石ナリヘク
ツクダケノ用ヲナスモノデアル。

七78 1 (略)シテキルノハ、陸上デハ
見ルコトノ出来ナイ美シイ景色デア
ラウ。

七80 8 (略)、皆さんと同じ様に、
あの運動場で體操をしたり、(略)。

七81 8 (略)、長さが六十間程もあ
る大きな汽船で、乗組の人員は二百
人もあります。

七82 2 (略)人家も、段々に小さ
く見える様になります。

七82 7 (略)月夜には波が銀の様に光つ
て、(略)。

七84 9 (略)急に暴風雨が来ると、山の
様な波が立つて、(略)。

七84 9 (略)、山の様な波が立つて、
(略)。

七85 1 (略)、船は今にも沈むかと
思ふ様になります。

七85 2 (略)しかし船はなか／＼沈むも
のではありません。

七85 7 (略)、淺瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたったりする様なま
ちがひが出来ます。

七86 9 (略)、それを見ると、あれ
はどこだといふことが分ります。

七87 2 (略)ことは、船に乗る者
には大切な事です。

七87 7 (略)日本は海國でありながら、
海を恐れる人の多いのは残念な事で

す。

七87 8 (略)、海を恐れる人の多い
のは残念な事です。

七87 9 (略)ちよつと渡船に乗つてさ
へ、こはがる者があるではありません
んか。

七88 2 (略)海の波を見たばかりで、
恐ろしがる人があるではありません
か。

七88 3 (略)たとへば自分のうちを恐ろ
しがる様なもので、(略)。

七88 3 (略)たとへば自分のうちを恐ろ
しがる様なもので、こんなことで
はどうして海國の國民といはれませ
う。

七88 9 (略)小さい時から海にな
れておくやうにしたいものです。

八10 7 (略)私もみんなと一しよの分は
まじめになり過ぎましたので、(略)。

八10 8 (略)、にいさんによそ行の
顔だといつて笑はれました。

八11 9 (略)よく寫つてゐるので、皆さ
んにお目にかゝつたやうな氣がしま
す。

八12 5 (略)、おはなさんも次郎さ
んも少しまじめになつてゐます。

八12 7 (略)、髪が大そうきれいに
なりました。

八13 1 (略)寫眞を見て、急に皆さんに
お目にかゝりたくなりました。

八14 8 (略)村デハ農夫ガクハヲカツ
イデ、タンボヘ出ル時デアル。

八15 5 (略)、皆メイ／＼ノ仕事ヲシ
テ、毎日働イテキルノデアル。

八15 9 (略)何モシナイデ遊ンデキルノハ
樂ナヤウニ見エルガ、(略)。

八15 9 (略)何モシナイデ遊ンデキルノハ
樂ナヤウニ見エルガ、(略)。

八15 9 (略)何モシナイデ遊ンデキルノハ
樂ナヤウニ見エルガ、(略)。

八16 1 (略)却ツテ苦シイモノデアル。
八20 3 (略)、雀といふものはすぐふ
えるもので、又大そう作物を荒すも
のだといふことを話しました。

八20 4 (略)、雀といふものはすぐふ
えるもので、又大そう作物を荒すも
のだといふことを話しました。

八20 6 (略)、近年麥の取高の少いの
は、この雀のせいではあるまいかと
思ひました。

八20 7 (略)友だちはふと思ひ出したやう
に、「それはさうと、君は白い雀を
見たことがあるか。」

八21 3 (略)、ふしぎさうな顔附をし
て、農夫は問返しました。

八21 5 (略)「居るさうだ。」

八21 6 (略)さうしてそれをつかまへる
と、大へんに仕合がよくなるといふ
が、(略)。

八22 1 (略)、糸をさがして、すぐ
歸つてしまふといふことだ。」

八25 4 (略)「成程これではいけない。」

八25 7 (略)「朝ね程損なものはない。」

八25 8 (略)朝ねをしてゐる間に、身代

が減つて行くのだ。」

八26 8 (略)、たゞ身代を取返す事に
ばかり心がけるやうになつて、(略)。

八27 1 (略)「どうだ、白雀は見つかつ
たか。」

八31 4 (略)、いたつて氣だてのやさ
しい老人であつた。

八33 2 (略)仕事をしながら、僕に色々な
話をした事もある。

八33 5 (略)「(略)、元は少しは人に知
られた刀かちで、若い時から何十本
となく大太刀・小太刀をきたへた。」

八33 7 (略)刀は武士のたましひといは
れたものだから、(略)。

八33 8 (略)、きたへる時は身を清
めて、一心不乱に打つたものだ。」

八33 8 (略)、きたへる時は身を清
めて、一心不乱に打つたものだ。」

八34 1 (略)何時も丈夫さうな老人であつ
たが、(略)。

八34 1 (略)何時も丈夫さうな老人であつ
たが、(略)。

八41 4 (略)火事だ、火事だ。

八41 5 (略)火事だ、火事だ。

八41 5 (略)どこだらう、あまり遠くはな
いらしい。

八41 6 (略)あちらの空がまつかだ。

八41 7 (略)火のこが花火のやうに散つて
ゐる。

八41 9 (略)火元は裏町通の材木屋で、も
う本町通へ抜けて、角の呉服屋が焼
けてゐるのださうだ。

八904 〔今日ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日ダ。〕

八905 此ノメデタイ日ニ討死スルノハ軍人ノ面目ダ。

八906 名譽ノ事ダ。

八913 〔略〕、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタ思ヘ。

八915 〔略〕、砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、我が軍ガ苦戦シテキルト思ヘ。

八919 〔略〕、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

八926 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレム心モ深カツタ。

八927 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイクラモアルガ、〔略〕。

八929 〔略〕、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。

八929 〔略〕、平生カラノ行ガリツバデアツタカラデアル。

八931 海軍ノ廣瀬中佐モヤハリ同じデアル。

九72 又其ノ癡ハ全ク別々ニナツテキルカラ、〔略〕。

九74 癡ノ色ハ白又ハウス桃色デ、幕ノ色ハ青イ。

九76 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤウニ癡ガヨク揃ツテキルガ、〔略〕。

九78 〔略〕、豆ヤ藤ノ花ノ癡ハ不揃デアル。

九82 又ユリヤアヤメノ花ハ幕ノ色ガ癡ト一ツ色デアル。

九85 其ノ形モマタ様々デアル。

九87 〔略〕、朝顔ノ花ハジャウゴノ様ナ形ヲシテキル。

九810 イチゴノ花ハボンノ様ナ形デ、〔略〕。

九810 イチゴノ花ハボンノ様ナ形デ、ホタルブクロノ花ハフクロノ様デアル。

九91 〔略〕、ホタルブクロノ花ハフクロノ様デアル。

九92 シソノ花ノ様ニクチビルノ形ヲシタノモアリ、〔略〕。

九93 〔略〕、オシロイノ花ノ様ニクダノ形ヲシタノモアル。

九96 タトヘバボタンノ様ニ一リン咲ノモアリ、〔略〕。

九97 〔略〕、ニンジンノ様ニカラカサヲヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモアル。

九99 又麥ノホノ様ナ形ニナツテ咲クモノニハ〔略〕。

九103 タンポコ・ヨメナナドハーリン咲ノ様ニ見エルガ、〔略〕。

九104 〔略〕、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。

九18 明治二十七八年戦役の時であつた、〔略〕。

九19 〔略〕、あまりに女々しいふるまひと思つて、〔略〕。

九195 〔略〕、其の有様は何事だ。

九196 兵士ノ恥ハ艦の恥、艦の恥ハ帝國の恥だぞ。

九1910 〔それは餘りな御言葉です。〕

九204 〔略〕、次の様な事が書いてあつた。

九225 前前の残念がるのもつともだ。

九227 〔略〕、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九2210 〔略〕、自分の職務に精を出すのが第一だ。

九232 〔略〕、まだ其の折に出會はないのだ。

九233 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。

九234 其のうちに花々しい戦争もあるだらう。

九309 〔略〕、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

九313 〔略〕、又之を車に應用して、汽車をこしらへたのは、イギリスのステブソンといふ人である。

九315 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出来上るものではない。

九315 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出来上るものではない。

九317 〔略〕、不幸にも直に沈んでしまつた。

九324 此の時も少し進んだきりで、

やがて動かなくなつたが、〔略〕。

九332 〔略〕、皆其の成功を喜んでといふことである。

九335 〔略〕、すべりのよい車をすべりのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、〔略〕。

九35 昔東海道といつたのは江戸から京都へ上る街道で、凡そ百二十四里、〔略〕。

九356 〔略〕、其の間に五十三次といつて、重なる宿場が五十三あつた。

九359 大變なちがひではないか。

九359 大變なちがひではないか。

九3510 昔の旅行には色々難儀なことがあつた。

九365 〔略〕、人の肩車に乗つたり渡船に乗つたりして渡つたのであつた。

九374 若し其の關所をよけて、わき道を通る様なことをすれば、〔略〕。

九378 馬は馬子が引いて、ゆる／＼歩むのだから、早いことはない。

九3710 かごも人の肩でかいて、休み／＼行くのだから、早くもないし、〔略〕。

九3710 かごも〔略〕、又そんなに樂でも無かつた。

九381 〔略〕、又そんなに樂でも無かつた。

九386 〔略〕、女子供でも安樂に旅行が出来る。

九672 〔略〕、五日毎の風、十日毎の

雨は太平無事の世の有様である。

九六四 春の雨はしめやかに降つて、
(略)。

九六五 (略)、のきの玉水の音も静かに聞える。

九六七 「(略)」といふ景色は、静かな中に美しいながめである。

九六七 「(略)」といふ景色は、静かな中に美しいながめである。

九七〇 (略)、我が身も蝶の様に飛立ちたくなる。

九八三 (略) 五月雨は、農家に取つては大切な雨である、(略)。

九八三 (略) 五月雨は、農家に取つては大切な雨である、(略)。

九八四 (略)、それはちやうど田植の時節であるから。

九八五 一天にはかにかき曇つて、
(略)。

九八九 恐ろしいのは二十日頃の大あらしで、(略)、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

九八九 (略)、一年中の農夫の辛苦が一夜の中にむだになつてしまふこともある。

九七〇 雨戸を明けて見ると、明るい月夜である、(略)。

九七〇 (略)、身を切るやうな寒さに思はず首をちぢめることもある。

九七五 夜が更けて、雨の音が静かになつたから、(略)。

九八二 それは(略)、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九八四 (略)、すぐれて上手な騎手が二人あつた。

九八五 (略)、上を下へのさわぎである。

九八五 (略) 「感心だく、えらい子だ。

九八五 (略) 「感心だく、えらい子だ。

九八五 (略) 「感心だく、えらい子だ。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

九八五 (略)、馬をかせさせたら、勝も勝、大勝であつたのに、(略)。

圓イノモアリ、(略)。

一五八 葉ノ形ニハ(略)、針ノ様ニ細長イノモアル。

一六二 ヘリモ鋸ノ齒ノ様ニギザ／＼ノアルノモアレバ、(略)。

一六六 バラノ葉ヤ豆ノ葉ガ即チソレデアル。

一七三 (略)、本ノ方カラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、(略)。

一七八 (略)、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

一七〇 モミデノ葉ハ幾スデカノ脈ガ本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ二分レテキル。

一八一 我々は毎日日本を讀んで色々な事を覺える。

一八六 (略)、本といふものはたやすく出来るものではない。

一八八 (略)、筆をとる前には十分に其の考を練らなければならぬ。

一八八 (略)、我々の讀む様なものになるまでには、幾度書直すかも知れない。

一九三 畫をかく人、圖をひく人、寫眞をうつす人の苦心も亦一通りではない。

一九八 圖や畫は別に堅い木に彫り、
(略)。

二〇二 一字も誤がなくなつてから本刷にかゝるのである。

二〇四 (略)、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、

(略)。

二〇五 又極上品なものになると、機械では刷らないで、手刷にする。

二〇八 印刷する紙は廣い大きな紙で、幾ページ分も一度に刷れる。

二一〇 又りつばなものになると、革をきせたのもある。

二一四 是は活版刷の本の造り方であるが、(略)。

二一七 それは(略)、一枚づつ手刷にするのである。

二二〇 (略) 四方の山々のいたゞきは、はやまつ白になつてゐる。

二二八 はうきを立てた様に高く雲をはらはうとしてゐる。

二二八 廣い田の面は切株ばかりで、人影の見えないのみか、かゝしの骨も残つてゐない。

二二九 (略) 冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

二三〇 何を撃つたのだらう。

二三二 (略)、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。

二三三 きれいすぎで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

二三六 人に親切なことは是でも知れると思ひました。

二三七 あいさつをしてもいいねいで、少しも生意氣な風がなく、(略)。

二三七 あいさつをしてもいいねいで、少しも生意氣な風がなく、(略)。

二三八 (略)、何を聞いても、一々

明白に答へて、(略)。

十359 園 (略)、しかもよいいなことはいひません。

十369 園 (略)、靜かに自分の順番を待つてゐました。

十3610 園 あれの温順なことをよく現して居ります。

十375 園 (略)、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。

十376 園 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、(略)。

十376 園 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、(略)。

十378 園 りつばな人の手紙よりも、(略)。

十379 園 (略)、本人の行がたしかに保證です。

十6310 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。

十651 小山の様な白波が高くくだけて、(略)。

十652 小山の様な白波が高くくだけて、夕立のやうに降散る。

十667 他のボートを見れば、今新に、鯨を追ふものもあり、(略)。

十669 あちらこちら入亂れて戦場のやうである。

十671 捕鯨は實に勇壯なものである。

十671 捕鯨は實に勇壯なものである。

十671 捕鯨は實に勇壯なものである。

る。

十675 鯨は獸類中最も大きなもので、長さは十五間、即ち九十尺にも及ぶものも珍しくはない。

十679 昔は(略)と言つたものである。

十835 犬と猫は最も多く家に飼はれる獸である。

十837 (略)、猫は鼠を捕らせる爲に飼ふのである。

十838 (略)、家畜としてもつと大切なものは牛・馬・羊・豚等である。

十839 (略)、家畜としてもつと大切なものは牛・馬・羊・豚等である。

十843 其の上牛肉と牛乳は飲食物としても大切である。

十846 (略)、一年にほふる牛は數千頭にも上るといふことである。

十849 (略)、不用な部分といふものは一つもない。

十851 馬も牛と同様に労働にも使はれ、食用にもなる。

十853 死んだ後で、身體の全部にすたりのないことも牛と同じである。

十854 其の上戦争には必ず無くてはならぬもので、兵器・糧食を運送し、(略)、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十855 (略)、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十8510 西洋の馬がおとなしくて、日本

本の馬のおとなしくないのは、育て

る。

方・使ひ方にあることで、日本では

餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。

十861 (略)、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。

十862 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするのも、人に恐れるからである。

十869 隣國の支那人は最も多く豚肉を食ふ國民である。

十871 羊や山羊は毛が必要である。

十874 (略)、山羊の乳は牛乳のやうに飲料になる。

十8710 (略) 最も多く農家に飼はれるのは雞で、雞卵や雞肉の養分の多いことは知らぬ人はない。

十882 其の外あひるや七面鳥なども家に飼はれる鳥である。

十92 一箱ノマツチヲ造ル手數モナカク複雜ナモノデ、(略)。

十92 一箱ノマツチヲ造ル手數モナカク複雜ナモノデ、ソレヲ大勢ノ人ガ手分シテスルノデアル。

十93 (略)、ソレヲ大勢ノ人ガ手分シテスルノデアル。

十101 (略)、製造高モハルカニ多い。

十102 (略) マツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。

十103 若シ一人ノ手デ製造スルナ

ラバ、(略)ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。

ラバ、(略)ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。

十104 (略)、トテモ引合フモノデナイ。

十112 (略)、ムダニ時間ヲ費スコトガ多い。

十114 (略)、ソナ手數ガ省ケテ、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十119 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、(略)。

十119 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、(略)。

十121 (略)、コ、ニ注意シナケレバナラナイノハ共同一致トイフコトデアル。

十121 分業デスル仕事ハ皆全體ノ一部分デアルカラ、(略)。

十124 (略)、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、(略)。

十125 (略)、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出來ナイ。

十125 (略)、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出來ナイ。

十132 (略) 等ハ皆分業ニ外ナラヌノデアル。

十466 アラビヤは世界に名高い良馬の産地である。

十467 アラビヤ馬の長途の騎行に

たへることは實に驚くべき程で、四

つた。

五日間うち通し、毎日三十里位かけるのは珍しくない。

十一46 10 飲まず食はずに終日・終夜走つても尚平然として居るといふことである。

十一47 1 こゝにアラビヤ馬の達者なことを證明する面白い話がある。

十一47 7 (略)、靜かに其の金を拾ひ上げ、(略)。

十一49 10 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一50 1 數千年の久しい間、土人の絶えてたゆまない丹誠の結果である。

十一50 4 (略)、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいる。

十一50 7 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。

十一51 2 (略)、馬はさもうれしそうに、口でおもちやをさゝげて、其の子供をあやしてゐた。

十一54 8 (略)、イタリアへ攻入つた時は冬の半で、山も谷も雪にうづめられて、吹く風は身を切るやうに寒かつた。

十一54 9 (略)、吹く風は身を切るやうに寒かつた。

十一55 4 (略)、百雷の一時に落ちかかる様なひびきと共に、(略)。

十一55 4 (略)、山のやうな雪なだれがなだれて來て、(略)。

十一55 8 靜かな山の中に流れる水の音が遠く聞えるばかり。

十一55 9 (略)、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。

十一55 10 耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。

十一56 6 打鳴らす太鼓の音は段々に低くかすかになる。

十一56 7 おくれゝばピエールはこゝえて死ぬであらう。

十一56 7 兵士等は氣をあせるのみで、何の工夫もつかぬ。

十一56 10 (略)とさげぶ人を誰かと見れば、將軍マクドナルである。

十一57 1 マクドナルは此の隊の司令官で、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。

十一57 1 (略)、突貫將軍といふあだ名をもつた勇將である。

十一57 7 圖 「兵士は皆我が子も同様である。

十一58 2 「(略)」と、しかる様にいふので、(略)。

十一58 7 (略)、少年ははや息も絶え絶えである。

十一59 2 全軍一同に歡喜の聲をあげた、アルプの山もふるふばかりに。

十一64 4 (略)、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

十一65 2 (略)、經濟上ヨリハ(略)、ソレヲ成ルベクスタリノナイ様ニ用フベク、(略)。

十一65 6 寒い時ハ(略)、獸肉其ノ他アラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。

十一65 7 (略)、暑イ時分ハ其ノ必要ナク、且胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、(略)。

十一66 1 食物ハ又變化ガ大切デアル。

十一66 3 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

十一66 4 (略)、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

十一66 7 例ヘバ(略)、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。

十一66 8 (略)、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

十一67 1 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ・洗ヒ流シヲスル所デアルカラ、(略)。

十一67 2 臺所ハ(略)、常ニ清潔ニシテ置カケレバナラス。

十一67 3 座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、(略)。

十一67 3 (略)、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハヲカシイ話デアル。

十一67 4 (略)、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハヲカシイ話デアル。

十一107 1 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい

事である。

十一107 2 町には瓦屋根の家もあるが、田舎は大抵藥屋根ばかりである。

十一107 4 家の構造は主として寒さを防ぐ様に出來てゐる。

十一107 8 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。

十一107 8 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。

十一108 3 第二に目につくのは白い着物である。

十一108 4 男はゆるやかな股引をはき、(略)。

十一108 8 女は(略)、西洋婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着ける。

十一108 9 女は(略)、西洋婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着ける。

十一109 2 (略)を見ると、昔の人に會つた様な氣がする。

十一109 6 金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎててもチョンガで、大人の仲間入が出来ない。

十一109 9 死人を葬るのに、小高い所で南に面してゐる日當りのよい地を選ぶ。

十一109 10 貴人の墓には内地の様に石をたてるけれども、(略)。

十一110 1 (略)、普通の墓は大抵土を盛上げるばかりである。

十一110 2 (略)、まんぢうの様に圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。

十一110 8 (略)、うしかけの様なものをかぶつて、目ばかり出してゐる。

十一110 10 上流の婦人は四方を閉ぢた輿に乗つて、外から見られない様にする。

十一111 1 (略)、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

十一111 2 寒風身を切る様な冬の日でも、(略)。

十二11 9 船ヲ造ルニハ先ヅ綿密ナ設計圖ヲコシラヘル。

十二11 10 其ノ圖ハ(略)等ヲ何十分ノ一ニシタ縮圖デ、(略)、大キナ戦艦ナドニナルト、設計圖バカリデ數百枚モアルトイフ。

十二12 3 設計圖が出来上ルト、細密ナ構造分圖ヲ各工場ニ廻シ、(略)。

十二12 4 (略)、必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、(略)。

十二12 5 (略)、必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、始メテ製造ニ着手スルノデアアル。

十二12 8 イヅレモ大規模ニ出来テキテ、(略)。

十二12 10 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人ノ手デ自由ニ運轉スルコトが出来、(略)。

十二13 2 (略)、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切斷スル。

十二13 9 コレハ人ノ脊骨ノ様ナモノデ、(略)。

十二13 9 コレハ人ノ脊骨ノ様ナモノデ、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。

十二14 5 コレハホンノ大體ノ構造ノ話デ、實際ハ(略)ソレノ附屬具ガアリ、大キナ船デハ船底モ兩側モ二重張ニスル。

十二15 2 (略)、スツカリ出来上ルマデニハ非常ナ手數ガ掛ル。

十二15 4 (略)、最モ規模ノ大キイノ海軍ノ工廠デ、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデアアル。

十二15 4 (略)、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデアアル。

十二15 4 (略)、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデアアル。

十二15 4 (略)、中ニモ横須賀ト呉ノガ最大ナモノデアアル。

十二15 6 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、安藝ハ呉デ造ツタノデアアル。

十二15 10 (略)、其ノ水ヲポンプデカイ出シテ工事ニ掛ルノデアアル。

十二16 1 我が國デ一番大キイノハ佐世保海軍工廠ノ船渠デ、長サ百三十四間、(略)、深サ八間餘アル。

十二20 4 蝶や蜂は花から花へいそがしさに飛廻つて花の汁を吸ふ。

十二20 10 鳥ばかりではない、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。

十二21 1 (略)、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。

十二21 5 若し之を消費するものがない

ければ、(略)、遂には地球上の動物が呼吸作用を営むことが出来なくなる道理である。

十二21 7 然るに空氣中の炭酸瓦斯の分量が増さないのは、(略)植物が之を消費するからである。

十二21 10 (略)、盛に炭酸瓦斯を取つて、(略)酸素を放つ作用がある。

十二22 4 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)、地球上の植物は盡く枯死すべきはずである。

十二22 6 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、(略)、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

十二22 9 是は水中にとけてゐる酸素が吸盡されるからである。

十二23 1 是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

十二23 2 是は前にいつた様な關係がびんの中の金魚と水草の間に行はれるからである。

十二23 5 (略)、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。

十二23 5 (略)、生存上動物と植物の關係は極めて密接なものである。

十二34 10 (略)、其ノ内何千圓ハ町内有志者ノ寄附金デアアル。

十二35 3 (略)、今新校舍ノ出来上ツタノハ眞ニ慶賀スベキ事デアアル。

十二37 1 (略)、町立ノ學校トシテハ

先ヅ申分ノナイ設備デアアル。

十二81 7 (略)、今日にはぎやかな祭日である。

十二81 7 (略)、今日にはぎやかな祭日である。

十二81 8 忠實な大は古帽子をくはへて、(略)喜捨を待ちわびてゐる。

十二81 8 (略)、あはれな主人の爲に、(略)。

十二81 10 (略)、時代後れの下手な音曲に耳を傾ける者は一人もない。

十二82 9 (略)、天上の音楽の様な美しい音がわき出した。

十二83 2 老人は、(略)不思議さうに、パイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

十二83 5 重く沈んだ調に暗い／＼海の底へ引込まれるやうな氣がするかと思ふと、(略)。

十二83 7 (略)、軽く浮立つた調子に、(略)春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

十二83 9 變化極らない妙音は、忽ち人の心を百花満開ののどかな春によはせ、(略)。

十二84 4 銅貨といはず、金銀貨といはず、雨の降る様に手當り次第に投込む。

十二84 5 また／＼間に帽子に一ぱい

になつた。

十二85 3 かの情深い紳士は誰であつ

たか、(略)。

十二85 5 (略) アレキサンドル、ブーシェーであつたとは後になつて分つた。

ダース ぐいちダース

ダールینگ (人名) 1 ダールینگ

ダグレースダールینگ

七11 1 山なす大波を物とせせず、男勝りの大力にてボートをあやつりしダールینگの手は、今ややさしきをとめの手にかへりて、半死半生の水夫を親切に看護せり。

たい【体】(名) 8 體

九53 10 図 (略)、海ノソコノ砂ノ上ニ

スムヒラメ・カレヒノ類ハ、其ノ體

ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。

九55 8 図 (略) エダシヤクトリハ、

其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、

體ヲナハメニ突出スルトキハ、其ノ

形桑ノ小枝ニ異ナラズ。

九55 9 図 (略)、其ノ體ノ後ノハシヲ

桑ノ木ニ附ケ、體ヲナハメニ突出ス

ルトキハ、(略)。

十一8 6 図 働蜂の武器は體の後方に

ある鋭利なる針にして、(略)。

十一58 7 (略)、少年ははや息も絶え

絶えである。手早く帶をほどいて、

ビエールの體にくゝりつけて合圖を

すると、(略)。

十一88 1 図 蜘蛛は其の體より絲を出

して網を張る。

十二23 3 此の外、動物は植物の果實

・根・葉等食つて體を養ひ、(略)。

十二71 9 図 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。

たい【隊】(名) 2 隊 ぐいいたい・えん

んせいたい・すいらいていたい・じゅんよう

かんたい・すいらいていたい

十一38 5 図 (略)、又平田に廣東婦

人が隊を成して草取を爲す有様は殊

に興味を覺え申候。

十一56 10 マクドナルは此の隊の司

令官で、突貫將軍といふあだ名をも

つた勇將である。

たい【鯛】(名) 4 タヒ

一43 4 タヒ コヒ フナ

四38 1 アル日タヒ ヒラメ サバ

タコナドガオヨイデキルト、

(略)。

四40 3 図 「コンド ハタヒ ヤヒラ

メナド ハキツト ヤラレタ ニチ

ガヒナイ。

七70 5 魚類ニハ (略)、タヒ・ボラ・

ハモ・コチ・キスナドノヤウニ、岩

ノカゲヤ海草ノ間ヲオヨグモノガア

リ、(略)。

たい(助動) 22 タイ たい 度い

《タイ・タウ・タカツ・タク》

三69 7 ソノウチ ニウラシマハ

ウチヘカヘリタク ナツタカラ、

(略)。

四52 4 (略) 白ウサギガ、ムカフ

ノ大キナヲカヘ行ツテ見タイ

ト思ツテ、(略)。

四55 8 図 オレハココノヲカヘ

來タカツタノダ。」

四72 6 図 おはるあしたは ひなさ

ままつり。きせてやりたい この

はれぎ。

五2 4 よい神さまがたは、どうかし

て大神にまた出ていただきたいと、

色色ござうだんの上、(略)。

五45 6 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイ

タ時、文太郎ハモツトノツテキタイ

ト思ヒマシタ。

六44 5 じぶんの心では武士になりた

いと思つてゐたのです。

六45 3 けれども日吉丸は、どうかし

てりつばな武士になりたいと思つて

ゐましたから、(略)。

七14 9 図 たとへばごふく問屋といふ

のは、織物を賣りたいといふ人にた

のまれて、それをほかへ賣渡してや

り、(略)。

七15 1 図 (略)、又織物を買ひたいと

いふ人にたのまれて、それをほかか

ら買取つてやる店のことです。

七17 7 図 (略)、種物屋から西洋西瓜

の種を三色ばかり買つて來ていたゞ

きたうございます。

七18 6 図 (略)、これも二三種買つて

來ていたゞきたうございます。

七38 9 又一ドニ色々ナ物ヲ買集メタ

イ時ニハ、一トコロデスムカラ便利

デアル。

馬をもつて見たい。」

七67 7 図 (略)、來年はたくさんなら

せて、たくさん差上げたいと思つて

居ります。

七69 3 図 (略)、こんな見事な桃がな

るのなら、植ゑて見たいと申して居

ります。

七87 6 図 「さておしまひに一ついつ

ておきたい事があります。

七88 9 図 それですから小さい時から

海になれておくやうにしたいもので

す。」

八13 2 図 寫眞を見て、急に皆さんに

お目にかゝりたくなりました。

八22 3 図 「それはめづらしい。どう

かして其の雀をつかまへて見たい。」

八67 9 図 (略)、勝手がましい御願で

すが、どうか今四五日のところ御ゆ

るしを願ひ度う御座います。

九68 1 (略)、我が身も蝶の様に飛立

ちたくなる。

だい【代】 ぐおやこにだい・さかだい・

だいじゅうにだい

だい【台】 ぐいくだい・きしょうだい・

じゅうすうだい・ちゅうおうきしよ

だい

だい【大】(形状) 22 大 ぐおやゆびだ

い・じつぶつだい

七59 7 図 大なるは小馬の如く、小な

るは猫よりも小さし。

九41 5 図 此ノスリバチノソコニアタ

レル所ハ大ナル噴火口ニシテ、(略)。

九42 4 図 マシテ幾萬年ノ久シキ間、此ノ大ナル湖水ヨリ流レ落チタル水ノ力ハハカリ知ルベカラズ。
九62 8 図 (略)、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。
十62 1 図 (略)、又上下ニ通ズル大ナル堅坑アリ。
十94 8 図 (略)、昔ハ境内方四町、堂塔雜舍ノ數百七十五アリ、規模極メテ大ナリシガ、(略)。
十99 10 図 長廊盡キテ本堂アリ。結構頗ル大ニ、眺望甚ダ美ナリ。
十一24 9 図 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰カ人智の進歩の大なるに驚かざらん。
十一26 10 図 和船の大なるは五百石積・千石積等ありて、近海を航行すれども、(略)。
十一31 10 図 故ニ何レモ大ナル大砲ヲ備ヘ、(略)。
十一33 1 図 其ノ大ナルモノハ戰艦ニ次グノ勢力ヲ有シ、(略)。
十一33 4 図 (略)、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。
十一34 3 図 故ニ艦體甚ダ輕ク、速度亦大ナリ。
十一34 5 図 驅逐艦ハ艦體最モ輕ク、速度最モ大ニシテ、(略)。
十一76 8 図 最も大なるは第一の瀑布にして、高さ八十餘丈と稱す。
十一81 5 図 (略)、大なる鵜は能ク十三三尾のあゆを喉元(のどもと)にふくむといふ。

十一86 6 図 熟練ト機敏トヲ要スルコト大ナリ。
十二16 4 図 日々天気は我等の生活に大なる關係あり。
十二40 4 図 就中噴火口の最も大なるを肥後の阿蘇山とす。
十二46 9 図 是大なる誤解なり。
十二52 10 図 但シ不正當ナル手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメントスルガ如キハ、(略)。
十二65 4 図 最も人目を引くものは國會議事堂なりといへども、其の規模甚だ大ならず、(略)。
たいい「大尉(名)」5 大尉ハこんなどうたいいきねんひ
九19 1 図 ふと通りかゝつた大尉が之を見て、(略)、言葉鋭くしかつた。
九19 8 図 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、(略)。
九20 4 図 大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。
九22 2 図 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を握つて、(略)。
九25 10 図 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。
たいい「大意(名)」1 大意
十二109 10 図 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ(略)。今謹みて其の大意を述べん。

だいいち「第二」(課名) 8 第一
五目2 第一 あまのいはと
五11 第一 あまのいはと
六目2 第一 日本
六11 第一 日本
七目2 第一 楠木正行(→)
七11 第一 楠木正行(→)
八目2 第一 皇大神宮
八11 第一 皇大神宮
だいいち「第二」(名) 11 だいいち 第一
一 凸せかいだいいち・ぜんとうだいいち・につぼんだいいち・ヨーロッパだいいち
三38 3 図 (略)だいいちなものが三つあります。だいいちには目です。
六82 4 図 一つとや、人々忠義を第一に、あふげや、高き君の恩、國の恩。
七34 3 図 (略)、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。
九22 9 図 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。
十一19 9 図 然れども四時雪をいたゞきて深く、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。
十一76 8 図 紀伊國那智山には四十八瀧あり。最も大なるは第一の瀑布にして、(略)。
十一76 10 図 (略)、一條の谷川あり、この水即ちかゝつて第一の瀑布を成すなり。

十一106 10 図 朝鮮の地に上陸して第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。
十二51 10 図 商人ノ第一ニ重ンズベキハ信用ナリ。
十二63 2 図 壯麗なる馬車・自動車の多きは巴里を第一とし、(略)。
十二64 3 図 (略)、テームス河岸の國會議事堂は第一に觀客の目を引く建築物なり。
だいいち「第二」(副) 2 だいいち 第一
三29 5 図 竹ハイロイロナヤクニタチマス。ダイータケノコガタバレマス。
七20 8 図 「あなたと私は大そう似てゐるではありませんか。第一あなたにも私にも豆がなります。
だいいち「第一義」(名) 1 第一義
十二91 10 図 日々の暮しは「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。
だいいち「第一師團」(名) 1 第一師團
九26 10 図 (略)、三十七八年の戰役後ハ第一師團より第十八師團に至る十八箇師團、外に近衛師團を合せて十九箇師團となれり。
だいいち「第一圖」(名) 2 第一圖
十45 1 図 第一圖は縦の線のみを用ひ、(略)。
十45 10 図 第一圖
だいいちだん「第一段」(名) 1 第一段

- 十一845 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテ
ホグシ、(略)、直徑尺餘ノ錠綿トス。
之ヲ紡績作業ノ第一段トス。
- だいいちばん「第一番」(名) 1 第一番
六395 今日は朝からあちらこちら
を見物した。第一番に御所ををが
んで、それから東山の方へ行つた。
- だいいちか「第一課」(課名) 8 第一課
九目2 第一課 草薙劍(一)
九12 第一課 草薙劍(一)
十目2 第一課 日本一の物
十一2 第一課 日本一の物
十一目2 第一課 吉野山
十一12 第一課 吉野山
十二目2 第一課 天皇陛下の御製
十二12 第一課 天皇陛下の御製
- たいおん「体温」(名) 1 体温
十一655 寒い時ハ特ニ体温ヲ維持
スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他ア
ブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、
(略)。
- たいか「大家」(名) 1 大家
十二968 孟子これより感奮・勉勵
して遂に一世の大家となり、戰國爭
奪の世に在りて、専ら聖人の道を講
ぜり。
- たいが「大賀」(名) 1 大賀
十一408 教育の事業も段々進歩
し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相
成候事、國家の爲眞に大賀の至に御
座候。
- たいかい「大海」(名) 1 大海
- 六433 井ノ中ノカハツ大海ヲ知ラ
ズ。
- たいがい「体外」(名) 1 体外
十765 (略)、腸ハ胃ニテコナシ盡
サザルモノヲコナシテ、其ノ不用ナ
ルモノヲ體外ニ出ス。
- たいがい「大概」(副) 2 大ガイ大
がい
六648 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、
(略)。
- 九753 幸に命を全うしたる者も、
大がいは着のみのまゝにて、(略)。
- だいかいせん「大海戦」(名) 1 大海戦
十二53 我が海軍は初より敵を近
海に迎へ撃つ計を定め、(略)、世
界史上空前なる大海戦となれり。
- だいがくしゃ「大學者」(名) 1 大學者
七227 シカルニ目ハ見エズシテ、
大學者トナリシ人アリ、塙保己一コ
レナリ。
- だいきせん「大汽船」(名) 1 大汽船
十一282 四萬噸前後の大汽船をも
製造するに至れり。
- だいきぼ「大規模」(形状) 2 大規模
十一375 基隆港の大規模の築港
も遠からず落成致すべく、(略)。
- 十二128 工場ニハ色々アル。(略)。
イズレモ大規模ニ出来テキテ、盡ク
蒸氣ヤ電氣ノ力ヲ利用スル。
たいきやくする「退却」(サ変) 1 退
却スル「一スル」
八877 「一度占領シタ此ノ高地、
- 全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。一
足モ退却スルナ。」
- たいぎよう「大業」(名) 2 大業
十259 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖
ニ仕へ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ
大業ヲ成サシメタリ。
- 十二28 祖宗の大業を承けて、明
治の聖世を開かせ給へる御盛運故な
きに非ず。
- たいきよす「大業」(サ変) 1 大業す
「一シ」
十二663 (略)、通常の灰色の鼠の
一群大舉して、印度よりペルシャを
經て歐羅巴に移り、(略)。
- たいきん「大金」(名) 1 大金
七415 (略)、こんな大金を持つて
ゐるなら、なぜあと一言いはなか
つた。」
- だいきん「代金」(名) 3 代金
七127 品物と引きかへに代金を受
取るのが現金で、(略)。
- 七128 (略)、品物を渡しておいて、
後になつて代金を受取るのがかけで
す。
- 十一112 何れの家にも卵を賣れ
ば、其の代金にて一年中用ふる塩・
醬油を買ふに餘あり。
- だいく「第九」(課名) 8 第九
五目10 第九 かまぬすびと
五225 第九 かまぬすびと
六目10 第九 よいでつち
六296 第九 よいでつち
- 七目10 第九 蠶
七286 第九 蠶
八目10 第九 ワザクラバ
八276 第九 ワザクラバ
だいく「大工」(名) 7 大工
六692 材木ヲ用ヒテ家ヲツルモ
ノハダイクニシテ、(略)。
- 六747 (略)、新しいしるしばんてん
を着てゐる大工が一番目立ちます。
七259 大工ガ家ヲタテルノモ、左官
ガカバヲスルノモ、(略)、皆手デス
ルノデス。
- 八145 大工ハノコギリ、左官ハコテ、
(略)、ソレノ道具ヲ持ツテ、メ
イノノ仕事ニカ、
八278 其ノ友ニ飛驒工トテ世ニ聞
エタル大工アリ。
- 十783 (略)、大工・カヂヤ等ノタ
ナゴコロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用ス
ルヲ以テナリ。
- 十一1210 又國家全體カライヘバ、
農夫ノ田畑ヲ耕シ、大工ノ家屋ヲ作
リ、(略)、教師ノ生徒ヲ教育スル等
ハ皆分業ニ外ナラスノデアル。
- だいくか「第九課」(課名) 8 第九課
九目10 第九課 靖國神社
九275 第九課 靖國神社
十目10 第九課 冬景色
十277 第九課 冬景色
十一目10 第九課 臺灣より樺太へ
十二356 第九課 臺灣より樺太へ
十二目10 第九課 學校落成式

十二34 第九課 學校落成式

だいくず「第九圖」(名) 2 第九圖

十46 2 右の第八圖の角を取れば、左の第九圖を得、(略)。

十46 第九圖

たいぐん「大軍」(名) 3 大軍

十二26 8 武田勝頼大軍を率ゐて來り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず、(略)。

十二29 1 図 我、明日大軍を率ゐて出發せんとす。

十二30 1 諸君、憂ふることなかれ。徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。

たいぐん「大群」(名) 3 大群

十二66 5 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、一隊又一隊、續々相次ぎ、三日三夜引きも切らず、(略)。

十二68 3 略 かししかの一種は、冬日河水盡く氷結するに至れば、大群をなし、(略)。

十二69 3 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、(略)。

たいぐん「退軍」(サ変) 1 退軍す

『一セ』

十二65 8 図 ナポレオンがモスコより退軍せし時、(略)。

たいけん「大賢」(名) 1 大賢

十二96 2 孔子の孫子思の學説を受け、孔子の道を傳へて大賢の名ある

は孟子なり。

だいがんすい「大元帥」(名) 3 大元帥

九24 4 かしこも天皇陛下は自ら大元帥なるぞとおほせて、陸海軍をすべ給ふ。

十二109 7 天皇陛下を大元帥と仰ぎ奉り、國民皆兵なる今の御代、國民たる者は皆軍人たる心得なかるべからず。

十二110 7 朕は汝等軍人の大元帥なるぞ。

だいくちんちくぶつ「大建築物」(名) 1 大建築物

十二65 2 伯林には世界にほこるべき程の大建築物なし。

たいこ「太古」(名) 2 太古

十二43 5 太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

十二48 4 略 樺太・臺灣太古より、れぞの入れぬ林あり。

たいこ「太鼓」(名) 8 タイコ たいこ 太鼓 ぐいちばん ぐいこ・さんば

五67 4 イサマシイタイコノ音ガ森ノ中カラキコエテクル。

五70 4 見セ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤラ、フエ・タイコデハヤシタテル音

ヤラ、ニギヤカナコトデアル。

七11 1 二百十日も事なくすんで、村の祭のたいこがひびく。

十一55 1 隊中に(略)少年鼓手があ

つた。眞先に立つて、太鼓を打ちながら、かひなく進んで行く。

十一55 9 しばらくすると、谷底の方に太鼓の音がかすかに聞える。

十一56 1 ビエールが打ついつもの太鼓に違ない。

十一56 5 打鳴らす太鼓の音は段々に低くかすかになる。

十一58 4 將軍が谷底へ下りた時には、もう太鼓の音は聞えぬ。

だいく「第五」(課名) 8 第五

五目6 第五 水のたび (一)

五目6 第五 水のたび (二)

六目6 第五 取入れ

六目6 第五 取入れ

七目6 第五 問合の手紙

七目6 第五 問合の手紙

八目6 第五 働クコトハ人ノ本分

八目6 第五 働クコトハ人ノ本分

八目6 第五 働クコトハ人ノ本分

たいこ「太古以来」(名) 1 太古以来

十二115 6 太古以来忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、(略)。

たいこう「大功」(名) 2 大功

九63 9 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、(略)蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。かばかりの大功ありし人故、天皇の御信任も厚く、(略)。

十26 2 後張良・韓信共二漢ノ高祖ニ仕へ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ

大業ヲ成サシメタリ。(略)、其ノ初

メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

だいく「第号」(名) 1 第號

八48 圖 第號

だいく「大公園」(名) 1 大公園

十二81 7 處は埃太利の首府維也納の大公園、今日にはぎやかな祭日である。

だいく「大坑道」(名) 1 大坑道

十61 10 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道アリ。

だいく「第五課」(課名) 8 第五課

九目6 第五課 註文狀

九目6 第五課 註文狀

十目6 第五課 紫式部と清少納言

十目6 第五課 紫式部と清少納言

十一目6 第五課 瀬戸内海

十一目6 第五課 瀬戸内海

十二目6 第五課 瀬戸内海

十二20 3 第五課 動物と植物の關係

たいこ「大國」(名) 1 大國

十二53 10 我ガ國ハ(略)、殊ニ近クハ人口四億ヲ有スル支那ノ大國ニ隣ス。

だいく「大黒」(名) 1 大黒

九52 8 図 つきんにおこそ・大黒と其の名其の類亦多し。

だいくでん「大極殿」(名) 1 大極殿

八52 2 図 サル程二三韓ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、(略)。(略)。天皇大極殿ニ出デサセ給ヒ、入鹿カタハラ

ニ侍ス。

だいこくみん「大国民」(名) 3 大国民

十二98図 市街・道路を不潔にし、

(略)等の建築物をけがし、公園の樹木を折取るが如きは、公德の低きを示し、大国民の品格を傷つくるものなり。

十二100図 外國人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大国民の度量なり。

十二101図 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

だいこくみのひんかく「課名」2 大國民の品格

十二目11 第二十四課 大國民の品格

十二97図 第二十四課 大國民の品格

たいこさん「大孤山」(地名) 1 大孤山

十二57図 大孤山

だいごしゅ「第五種」(名) 1 第五種

十二106図 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。(略)。第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。

だいごず「第五圖」(名) 2 第五圖

十45図 (略、第五圖は横・斜兩様の線を用ひ、(略)。

十46図 第五圖

だいこん「大根」(名) 4 ダイコン
大根

— 33 6 イネムギイモ ダイコン

九88 葉や大根ノ花ヲ見ルト、瓣ガ四ツ揃ツテ、十字形ニナツテキル。

十28図 (略)、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

十二131 (略、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切斷スル。

だいこんなます「大根脰」(名) 1 大こんなます

七119圖 母がてぎはの大こんなます、これがあなかの年こしざかな。

だいこんばたけ「大根畑」(名) 1 大根畠

九537図 黄色ノ蝶ハ某種ノ花ニムラガリ、白色ノ蝶ハ大根畠ニ集ル。

たいさ「大佐」(名) 1 大佐

九2510図 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

たいさ「大差」(名) 1 大差

十一9910圖 農産物の種類は北海道と大差なく、大麦・小麦・燕麥・裸麥・粟・麻・馬鈴薯・豌豆等の收穫多く、(略)。

たいさい「大祭」(名) 3 大祭 むりんじたいさい

九278図 靖國神社ノ春ノ大祭ハアタカモ此ノ日ニ始ル。

九2910図 靖國神社ノ秋ノ大祭ハ十一

月五日ヨリ行ハル。

九301図 春秋兩度ノ大祭ニハ必ず勅使ヲ差立テラレ、陸海軍將卒ノ參拜アリ、(略)。

たいさいじつ「大祭日」(名) 1 大祭日 十588圖 外出日は日曜日・祝日及び大祭日にて、(略)。

だいさばく「大砂漠」(名) 1 大砂漠 九449図 (略、駱駝に乗りて隊商の仲間に加り、大砂漠を往來するを業とせり。

だいさん「第三」(課名) 8 第三

五目4 第三 神武天皇

五56 第三 神武天皇

六目4 第三 遠足

六77 第三 遠足

七目4 第三 ゐなかの四季

七92 第三 ゐなかの四季

八目4 第三 たけがり

八81 第三 たけがり

だいさん「第三」(名) 2 だい三 第三

三 三たいはいようだいにだいさんか

三たい

三396 だい三には口です。

十一772図 又一山を越ゆれば、第三の瀧に至る。

だいさんか「第三課」(課名) 8 第三課

九目4 第三課 花ノサマ

九69 第三課 花ノサマ

十目4 第三課 保安林

十86 第三課 保安林

十一目4 第三課 分業

十一91 第三課 分業

十二目4 第三課 造船ノ話

十二118 第三課 造船ノ話

だいさんかい「第三回」(名) 1 第三回 十二808図 其の後コロンプスは數回の航海を試みしが、一千四百九十八年第三回の航海に於て、オリノコ河口に達し、(略)。

だいさんしゅ「第三種」(名) 1 第三種 十二106図 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。(略)。第三種・第五種の議員の任期は七箇年とし、其の他は終身とす。

だいさんず「第三圖」(名) 2 第三圖 十452図 (略、第三圖は斜の線のみを用ひたるものにして、(略)。

十45図 第三圖

だいさんだん「第三彈」(名) 1 第三彈

八881 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。

たいし「大志」(名) 1 大志

十一1023図 劉備ハ漢朝ノ末流、英明ニシテ大志アリ。漢朝ノ復興ヲ圖リ、シキリニ賢士ヲモトム。

たいし「太子」 凸こうたいしでんか・しようとかたいし

だいし「第四」(課名) 8 第四

五目5 第四 水のとび

五84 第四 水のとび

六目5 第四 ガン

六121 第四 ガン

七目5 第四 商業問答
 七124 第四 商業問答
 八目5 第四 寫眞をおくる手紙
 八98 第四 寫眞をおくる手紙
 だいし「台紙」(名) 1 臺紙ひちよき
 だいし・ゆうびんだいし
 九772 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒ
 オキテ、貯金セントスル時ニハ、其
 ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニ
 ハリツケ、(略)。
 だいじ「大事」(名) 6 大事ひいちだ
 いじ
 八34 かくるたふとき御宮なれ
 ば、(略)、皇室及び國家に大事あれ
 ば、かならずこれを告げたまふ。
 八505 鎌足(略)、大事ヲ成スニ
 ハ此ノ皇子ヲイタゞキ奉ルヨリ他ニ
 道ナシト思ヒシガ、(略)。
 八519 鎌足等此ノ日ヲ以テ大事ヲ
 オコナハントシ、アラカジメ其ノ手
 ハズヲ定メタリ。
 十二32 是等の人々は皆非常の大
 事にあひて心を取亂さず、能く其の
 處すべき道に處したる我が國婦人の
 實例にして、(略)。
 十二381 是は公の大事なり。何
 ぞ私事を以て公事を害せんや。」
 十二1117 (略)、軍人たる者は一途
 に忠節を重んじ、國家の大事に際し
 ては、身命をすつこと鴻毛よりも
 輕き覺悟なかるべからず。
 だいじ「大事」(形状) 5 ダイジだ

いじ 大事
 二402 ワタクシモオカアサン
 ヲダイジニシマス。」
 三382 ほかにまだだいじなもの
 が三つあります。
 三554 (略)ネコガダイジナキン
 ギョヲツツテ、ニゲテ行キマシ
 タ。
 七427 あなた様にも、その折には
 よい馬にめして、主人のお目にとま
 るやうになされるのが大事と考へま
 して、(略)。
 八675 併し老病の事故、よほど大
 事にしなければならぬと存じます。
 だいしか「第四課」(課名) 8 第四課
 九目5 第四課 舞へや歌へや
 九105 第四課 舞へや歌へや
 十目5 第四課 家
 十一14 第四課 家
 十一目5 第四課 兒島高德
 十一133 第四課 兒島高德
 十二目5 第四課 天氣豫報及び暴風
 雨警報
 十二163 第四課 天氣豫報及び暴風
 雨警報
 たいじす「退治」(サ変) 1 退治す
 「一せ」
 九34 尊、「さらば我汝等のた
 めに其の大蛇を退治せん。」とて、
 (略)。
 だいし「第四圖」(名) 2 第四圖
 十453 (略)、第四圖は縦・横兩様

の線を用ひ、(略)。
 十45 第四圖
 だいし「第七」(課名) 8 第七
 五目8 第七 コヒ
 五154 第七 コヒ
 六目8 第七 かしい子ども
 六202 第七 かしい子ども
 七目8 第七 塙保己一
 七225 第七 塙保己一
 八目8 第七 白雀(一)
 八189 第七 白雀(一)
 だいし「第七」(名) 1 第七
 十1013 岡寺ハ西國三十三番第七ノ
 札處ナリ。
 だいし「第七課」(課名) 8 第七課
 九目8 第七課 水兵の母
 九188 第七課 水兵の母
 十目8 第七課 張良ト韓信
 十225 第七課 張良ト韓信
 十一目8 第七課 車と船
 十一246 第七課 車と船
 十二目8 第七課 鳥居勝商
 十二266 第七課 鳥居勝商
 だいし「第七」(名) 2 第七圖
 十455 (略)、第七圖は縦・横・斜
 三様の線を併せ用ひたるものなり。
 十46 第七圖
 だいじ「第十課」(課名) 8 第十課
 九目11 第十課 汽船・汽車の發明
 九307 第十課 汽船・汽車の發明

十目11 第十課 甘藷
 十304 第十課 甘藷
 十一目11 第十課 熊王丸
 十一413 第十課 熊王丸
 十二目11 第十課 公事と私事
 十二372 第十課 公事と私事
 たいし「ひかんべいたいし」
 たいじ「ひかんべいたいし」
 たいじ「ひかんべいたいし」
 九631 田村麻呂は身の丈五尺八
 寸、胸の厚さ一尺二寸、體重は三十
 貫を越え、(略)。
 だいじゅう「第十」(課名) 8 第十
 五目11 第十 うめぼし
 五275 第十 うめぼし
 六目11 第十 織物
 六333 第十 織物
 七目11 第十 やき物とぬり物
 七345 第十 やき物とぬり物
 八目11 第十 かち屋
 八311 第十 かち屋
 だいじゅう「第十」(名) ひでんだいじ
 ゆうごう
 第十一
 五目12 第十一 茶
 五301 第十一 茶
 六目12 第十一 太郎の日記
 六357 第十一 太郎の日記
 七目12 第十一 勸工場
 七362 第十一 勸工場
 八目12 第十一 花ごよみ

八34 6 第十一 花ごよみ	だいじゅういちず「第十一図」(名) 2	十68 1 第十九課 勇ましき少女	第十三	六43 4 第十四 豊臣秀吉 (一)
だいじゅういちず「第十一図」(名) 2	第十一圖	十一目6 第十九課 襦布 <small>じゆふ</small>	五目14 第十三 小部屋 <small>こむど</small> のすがる	七目2 第十四 西洋紙ト日本紙
十46 5 図 (略)、右の第十圖の八角形の角を圓くすれば、左の第十一圖を得。	十46 5 図 (略)、右の第十圖の八角形の角を圓くすれば、左の第十一圖を得。	十一目75 5 第十九課 襦布 <small>じゆふ</small>	五36 4 第十三 小部屋 <small>こむど</small> のすがる	七46 1 第十四 西洋紙ト日本紙
十46 図 第十一圖	だいじゅういちず「第十一課」(課名)	十二目6 第十九課 コロンブス	六目14 第十三 コトワザ	八目2 第十四 電報
8 第十一課	だいじゅういちず「第十一課」(課名)	十二73 5 第十九課 コロンブス	六41 8 第十三 コトワザ	八45 2 第十四 電報
九目12 第十二課 昔の旅	だいじゅういちず「第十一課」(課名)	第十五	七目14 第十三 家の紋	だいじゅうしちか「第十四課」(課名) 8
九35 3 第十二課 昔の旅	五目3 第十五 汽車ノタビ	五41 7 第十五 汽車ノタビ	七44 4 第十三 家の紋	第十四課
十目12 第十二課 昔の旅	六目3 第十五 豊臣秀吉 (一)	六目3 第十五 豊臣秀吉 (一)	八目14 第十三 家の紋	九目15 第十四課 駱駝 <small>らくだ</small> 乗
十34 3 第十二課 たしかな保證	六48 7 第十五 豊臣秀吉 (一)	七目3 第十五 郵便の話	八41 3 第十三 火事	九44 7 第十四課 駱駝 <small>らくだ</small> 乗
十一目12 第十二課 アラビヤ馬	七50 2 第十五 郵便の話	八目3 第十五 郵便の話	だいじゅうさんか「第十三課」(課名) 8	十目15 第十四課 模様と色
十一46 5 第十一課 アラビヤ馬	八49 6 第十五 藤原鎌足 <small>ふじわら かんそく</small>	八49 6 第十五 藤原鎌足 <small>ふじわら かんそく</small>	九目14 第十三課 旅行先の父に送る	十一目15 第十四課 模様と色
十二目12 第十二課 アラビヤ馬	だいじゅうさんか「第十五課」(課名) 8	だいじゅうさんか「第十五課」(課名) 8	九42 9 第十三課 旅行先の父に送る	十一59 3 第十四課 出征兵士
十二39 9 第十一課 阿蘇山	第十五課	九目2 第十五課 かぶりもの	手紙	十二目15 第十四課 貿易
だいじゅういちず「第十九」(課名) 8	九目2 第十五課 かぶりもの	九49 9 第十五課 かぶりもの	十目14 第十三課 花 <small>はな</small> 燈 <small>とう</small>	十二50 5 第十四課 貿易
第十九	九49 9 第十五課 かぶりもの	十目2 第十五課 齋藤實盛 <small>さいとう じつせい</small>	十一目14 第十三課 少年鼓手 <small>せうねん ぐしゅ</small>	だいじゅうしちか「第十四圖」(名) 2
五目7 第十九 炭ト油	十目2 第十五課 齋藤實盛 <small>さいとう じつせい</small>	十50 2 第十五課 齋藤實盛 <small>さいとう じつせい</small>	十二目14 第十三課 少年鼓手 <small>せうねん ぐしゅ</small>	十46 9 図 見よ、(略)、直線・曲線を併せ用ひたる第十四圖・第十五圖の模様の如何に麗しきかを。
五56 1 第十九 炭ト油	十一目2 第十五課 招待狀	十一目2 第十五課 招待狀	十二47 6 第十三課 國産の歌	十47 図 第十四圖
六目7 第十九 熊	十一61 8 第十五課 招待狀	十二目2 第十五課 南滿洲鐵道	だいじゅうさんか「第十三圖」(名) 2	第十七
六64 3 第十九 熊	十二目2 第十五課 南滿洲鐵道	十二54 3 第十五課 南滿洲鐵道	十46 7 図 見よ、曲線のみにて成れる	五目5 第十七 瓜
七目7 第十九 水とからだ	だいじゅうさんか「第十五圖」(名) 2	だいじゅうさんか「第十五圖」(名) 2	第十三圖	五49 3 第十七 瓜
七63 8 第十九 水とからだ	十46 9 図 見よ、(略)、直線・曲線を併せ用ひたる第十四圖・第十五圖の模様の如何に麗しきかを。	十46 9 図 見よ、(略)、直線・曲線を併せ用ひたる第十四圖・第十五圖の模様の如何に麗しきかを。	十46 7 図 見よ、曲線のみにて成れる	六目5 第十七 上杉謙信 <small>うさぎ けんしん</small>
八目7 第十九 手紙	十47 図 第十五圖	十47 図 第十五圖	第十四	六55 1 第十七 上杉謙信 <small>うさぎ けんしん</small>
八66 2 第十九 手紙	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	五目2 第十四 ていしやば	七目5 第十七 東京見物 (一)
だいじゅうさんか「第十九課」(課名) 8	十47 図 第十五圖	十47 図 第十五圖	五38 8 第十四 ていしやば	七57 4 第十七 東京見物 (一)
第十九課	十47 図 第十五圖	十47 図 第十五圖	六目2 第十四 豊臣秀吉 (一)	八目5 第十七 近江八景
九目6 第十九課 空氣	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	六目2 第十四 豊臣秀吉 (一)	八59 2 第十七 近江八景
九64 4 第十九課 空氣	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	六目2 第十四 豊臣秀吉 (一)	だいじゅうしちか「第十七課」(課名)
十目6 第十九課 勇ましき少女	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	だいじゅうさんか「第十三」(課名) 8	六目2 第十四 豊臣秀吉 (一)	

8 第十七課

九目4 第十七課 養生

九57 第十七課 養生

十目4 第十七課 足尾銅山

十60 第十七課 足尾銅山

十一目4 第十七課 時間

十一67 第十七課 時間

十二目4 第十七課 獸類の移住

十二65 第十七課 獸類の移住

だいじゅうず「第十圖」(名)2 第十圖

十46 図 (略)、右の第十圖の八角形の角を圓くすれば、左の第十一圖を得。

十46 第十圖

だいじゅうに「第十二」(課名)8

第十二

五目13 第十二 蝶

五33 第十二 蝶

六目13 第十二 京都からの手紙

六39 第十二 京都からの手紙

七目13 第十二 山内一豊の妻

七39 第十二 山内一豊の妻

八目13 第十二 マツチ

八38 第十二 マツチ

だいじゅうに「第十二課」(課名)8

第十二課

九目13 第十二課 箱根山

九38 第十二課 箱根山

十目13 第十二課 水師營の會見

十38 第十二課 水師營の會見

十一目13 第十二課 笑

十一51 第十二課 笑

十二目13 第十二課 我が國の農業

十二43 第十二課 我が國の農業

だいじゅうに「第十二圖」(名)2

第十二圖

十46 図 見よ、曲線のみにて成れる

第十二圖及び第十三圖、(略)の模様の如何に麗しきかを。

十47 第十二圖

だいじゅうにだい「第十二代」(名)1

第十二代

九49 図 人皇第十二代景行天皇の御代、(略)。

だいじゅうはち「第十八」(課名)8

第十八

五目6 第十八 カウモリ

五52 第十八 カウモリ

六目6 第十八 人のなさけ

六59 第十八 人のなさけ

七目6 第十八 犬

七59 第十八 犬

八目6 第十八 木綿着物ノ由來

八62 第十八 木綿着物ノ由來

だいじゅうはつか「第十八課」(課名)8

第十八課

九目5 第十八課 坂上田村麻呂

九62 第十八課 坂上田村麻呂

十目5 第十八課 捕鯨船

十63 第十八課 捕鯨船

十一目5 第十八課 畫工の苦心

十一71 第十八課 畫工の苦心

十二目5 第十八課 苦樂

十二70 第十八課 苦樂

だいじゅうはちしだん「第十八師團」

(名)1 第十八師團

九26 10 図 (略)、我が國の陸軍は(略)、三十七八年の戦役後は第一師團より

第十八師團に至る十八箇師團、外に

近衛師團を合せて十九箇師團となれり。

だいじゅうろく「第十六」(課名)8

第十六

五目4 第十六 かみなり

五45 第十六 かみなり

六目4 第十六 塩ト砂糖

六53 第十六 塩ト砂糖

七目4 第十六 東京見物(一)

七54 第十六 東京見物(一)

八目4 第十六 鳥

八54 第十六 鳥

だいじゅうろく「第十六課」(課名)8

第十六課

九目3 第十六課 動物ノ體色

九53 第十六課 動物ノ體色

十目3 第十六課 兵營内の生活

十55 第十六課 兵營内の生活

十一目3 第十六課 料理

十一64 第十六課 料理

十二目3 第十六課 歐羅巴の三大都

十二59 第十六課 歐羅巴の三大都

たいしょう「大將」(名)17 タイシヤ

ウ 大しやう 大將のぎたいしょう

三42 5 ミナモトノヨシイヘトイ

フ タイシヤウ ガイクサニ行ツ

タトキ、(略)。

四78 2 げんじの大しやうよしつ

ねはけらいにむかつて、(略)。

四82 7 (略)大しやうよしつねを

はじめ、みんなが馬のくらを

たたいてよろこびました。

六48 5 信長は(略)、それからだん

く重く取立てて、一方の大將に

しました。

六55 2 川中島の戦で名高い上杉謙信

は強い大將であつた。

七56 6 図 (略)、アル年敵ノ大將高

師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來り攻

ム。

九25 10 図 將校には大將・中將・少將

・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・

少尉あり。

十40 5 図 (略)『これぞ武門の面

目』と、大將答力あり。

十50 6 図 唯首を取つて、大將の見

参に入れよ。木曾殿には見知り給は

ん。

十51 6 図 手塚、首をたづさへて、大

將義仲の前に行き、(略)。

十51 9 図 土かと見れば、錦のひた

れ着けたり。大將かと思へば、續

く者なし。

十一47 2 昔トルコの或大將がアラビ

ヤ人から一頭の名馬を三千圓で買ふ

約束をした。

十一47 4 さていよく馬を受取る段

になつて、大將は今少しまけぬか

といふ。

十一475 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。
 十一477 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、(略)。
 十一4710 「それ、馬主が逃げた。」といふので、大將の部下の二三人は直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。
 十一494 四日目の朝、大將は何心なく外を眺めてゐると、(略)。
 たいしょう「隊商」(名) 4 隊商
 九449 昔アラビヤの或町にハッサンといふ者あり、駱駝に乗りて隊商の仲間に加り、大沙漠を往來するを業とせり。
 九455 阿利は(略)、年頃かひならしたる駱駝に乗り、飲用水其の外何くれと用意して、隊商と共に出立したり。
 九489 (略、其の日の夕方、一組の隊商の宿れるテントを見たリ。
 九492 かくる間に、又向ふより一組の隊商到着せしが、(略)。
 たいしょう「大小」(名) 7 大小
 九186 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ、運輸ノ便スコブル多シ。
 十958 大小ノ燈籠左右ニ多ク、其ノ數二千ニ近シ。
 十一1710 瀬戸内海には、(略)、大小無數の島々は各所に散在す。
 十一269 荷足・高瀬・茶船・屋根船等其の目的により、大小・構造千

差萬別あり。
 十一291 大小幾多の軍艦は海上の浮城とも稱すべく、(略)。
 十一333 巡洋艦ハ(略)。(略)。其ノ艦體ニ大小ノ差アレドモ、(略)。
 十一685 人生の長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て量るべからず。
 たいじょうぶ「大丈夫」(形状) 1 大丈夫
 九319 (略)最初の船は、(略)直に沈んでしまつた。(略)、又一つの船を造つた。此の度は大丈夫と考へて、「(略、何人にも乗船の望に應じる。」といふことを新聞紙に廣告したが、(略)。
 たいしよく「体色」(名) 7 體色
 九541 かくノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)。
 九545 此ノ種ノ體色ヲ保護色ト名ヅク。
 九557 タトヘバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ體色ノ桑ノ木ニ似タル上、(略)。
 九569 或動物ハ之ニ反シテ、周圍ノ物トマギレザルヤウ、コトニアザヤカナル體色ヲ有ス。
 九572 (略)、他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、(略)。

九576 此ノ種ノ體色ヲ警戒色ト名ヅク。
 九577 タトヘバ毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黃ト黒トノダングラニテ、(略)。
 たいしよす「大書」(サ変) 1 大書す
 「一ス」
 八48 本文中の數字は片假名と分別し易き様大書すべし
 たいじん「対陣」(名) 1 對陣
 十一1061 孔明魏軍ト對陣ノ中ニ卒ス。
 たいじん「大臣」(名) 1 大臣
 だいじん「くくむだいじん」
 八544 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。
 だいじんぐう「くこうだいじんぐう」
 たいす「對」(サ変) 5 對ス 對す
 「一シースル」
 十二1010 (略、獨ニ敵ニ對シ勇進敢戰シタル麾下將卒モ(略)。
 十二536 (略)、海外貿易ノ發展ヲ圖リ、大イニ國富ヲ増殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。
 十二909 若し家内に傳染病等にかゝるものあらば、近處・隣へ對しても申しわけなく、(略)。
 十二9010 若し家内に傳染病等にかゝるものあらば、(略)、世間へ對しても相濟まぬ次第ならざや。
 十二991 道を行くにも、舟・車に

乗るにも、旅館に宿るにも、自ら公衆に對する禮儀あり。
 たいす「體」(サ変) 1 體す
 十二1046 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。
 だいず「大豆」(名) 3 大豆
 四32 大豆
 四352 「あんにするのはあづきといふ豆で、こなにするのは大豆といふ豆です。」
 七212 大豆・小豆・さゞげ・そら豆・なた豆などはすべて私どもの親類です。
 たいせい「大勢」(名) 1 大勢
 十二173 (略、中央氣象臺は略、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。
 たいせい「大聖」(名) 1 大聖
 十二932 支那幾千年間の人物中、大聖として徳化の尚今日に著しきもの、孔子に如くはなし。
 たいせいよう「大西洋」(地名) 2 大西洋
 八77 大西洋
 八77 大西洋
 たいせつ「大切」(形状) 21 タイセツ
 大切「たいせつ」
 二353 「モチハタイセツナオ米デコシラヘタモノデスカラ、イテハイケマセン。」
 六544 塩ト砂糖トハ物ノ味ヲ附ク

ルニ大切ナルモノニシテ、コノニツ
ノ物ナケレバ、物ノ味ハウマカラズ。
六八二(略) 二人のおや御を大
切に、思へや、ふかき父の愛、母の
愛。
七六五 このやうに水はわれ／＼の生
活にもつとも大切なもので、水がな
ければ、生きてゐることは出来ない。
七八二(略) この星を見分けることや、
燈臺のあかりを知ること、船に乗
る者には大切な事です。」
八四一 火の取扱は大切にしなければ
ならぬ。
九六〇(略) 空氣の大切なことも食物
におとらず。
九六八(略) 五月雨は、農家に取つ
ては大切な雨である、それはちやう
ど田植の時節であるから。
九七〇(略) 此ノ通帳ハ此ノ後金銭ヲ預
クル時又ハ引出ス時共ニ必要ナルモ
ノナレバ、大切ニ保存スベシ。
一〇五一(略) 種々の模様を工夫し、又麗
しき色どりを案ずるは、工藝・美術
においては極めて大切な事とす。
一〇七八(略) 身體ノ構造ハ(略)、一小部
分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關ス
ルモノナレバ、常ニ身體ヲ大切ニシ、
之ヲ強健ニセザルベカラズ。
一〇八三(略) 家畜としてもつと大切
なものは牛・馬・羊・豚等である。
一〇八四 其の上牛肉と牛乳は飲食物と
しても大切である。

一一六四(略) 毎日三度ノ食事ニモ、
其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコト
ガ大切デアアル。
一一六六 食物ハ又變化ガ大切デア
ル。
一二八九(略) 戸締の用心よりも火の用
心は一層大切なり。
一二九二(略) 儉約を守るは大切なれど
も、人情にそむき、義理に外れても、
費用を惜しむは賤しむべき事なり。
一二九八(略) 公德とは(略)、公共の
物品を大切に等、總べて衆人の
利害を考へて其の行爲をつゝしむ德
義をいふ。
一三〇四(略) 忠節・禮儀・武勇・
信義・質素の五箇條を特に軍人の精
神と論じ給へる上に、此の五箇條を
行はんには一の誠心こそ大切なれと
仰せ給へり。
一三〇六(略) 信義は人と交り世に處す
るに於て最も大切な事にして、商
工業の人としても常に之を重んぜざ
るべからず。
一三〇八(略) 平常質素を旨とすべきは
修身・處世の上に於て何人にも最も
大切なこと言を待たず。
だいせっきょう「大石橋」〔地名〕
大石橋
一三〇九(略) 大連より南山・得利寺・
大石橋等の戦蹟を経て、北へ進むこ
と約二百哩、遼陽あり。
一三一〇(略) 營口線は大石橋より分

れ、營口に於て清國京奉線の支線に
連接す。
一三二七(略) 大石橋
たいそう「体操」(名) 1 體操
七八〇(略) 「私も子供の時には毎日こ
の學校へ通つて、(略)、あの運動場
で體操をしたり、この講堂でお話を
聞いたりしてゐたのです。
たいそう「大層」(形状) 1 大そう
七二九(略) 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲
を織つて絹織物にするまでには、大
そうな手間がかかる。
たいそう「大層」(副) 22 タイソウ
たいそう 大そう 大そう
二五四 ヨイオダイサン ハコレヲ
ミテ、タイソウ カナシンデ、(略)。
三二五 どちらもたいそうやくに
たつ どうぶつでございます。
三六八(略) ウラシマノ來タノ
ヲタイソウ ヨロコンデ、(略)。
四一七 サハスト アマクナツテ、
タイソウ ウマイ カキデス。
四三五(略) 「三郎はこんなやは大そ
うもの知りになつたね。」
四五六 ワニザメハソレヲ キク
ト、大ソウ オコツテ、(略)。
四七五(略) 「タイソウ ヨク カザレマ
シタ。
五二三 大そうおこつて、取りかへさ
うとすると、(略)。
五二六 ゐざりは大そうよろこんで、
(略)。

五三八 天皇はこれをごらんになつ
て、大そうお笑ひになりましたが、
(略)。
五三九(略) 大そうこみ合つてゐま
す。
六一〇(略) 草の上にすわつて、に
ぎりめしをたべた時は大そううまう
ございました。
六二九(略) シカモノノサビハ大ソウド
クナモノデス。
六五二 秀吉は大そうおこつて、(略)。
七二〇(略) 「あなたと私は大そう似て
ゐるではありませんか。
七三九(略) 大そうよい馬を賣りに
來た者がありました。
七四二 見上げた志のもの、りつぱな
武士。」と、信長は大そう感心して、
(略)。
七五三(略) 今では切手をはつて出しさ
へすれば、どんな遠い所へもとどき
ますから、大そう便利です。」
八二六(略) おはなさんはしばらく見な
いうちに、髪が大そうきれいになり
ました。
八二九 親類や友だちは大そう心配し
まして、どうしたらよいかと、いろ
／＼考へてゐました。
八三〇(略) 雀といふものは(略)で、
又大そう作物を荒すものだといふこ
とを話しました。
八六六(略) 病中の祖母も大そうよろこ
びまして、有りがた涙をこぼして居

ります。

だいたい「大體」(名) 2 大體

十二14 助材ハ梁ヲ以テ内カラ支

へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ

造ツテ甲板トスル。コレデ船ノ大體

ノ形ガ出來ル。

十二14 4 コレハホンノ大體ノ構造ノ

話デ、實際ハ(略)ソレハノ附屬具

ガアリ、大キナ船デハ船底モ兩側モ

二重張ニスル。

だいたい「大隊」(名) 2 大隊 ムさん

こだいたい

八85 1 (略)中佐ハ(略)部下ノ大

隊ヲヒキキテ、勢銳ク進撃シタ。

九26 5 四箇中隊を大隊、三箇大隊

を聯隊、二箇聯隊を旅團とす。

だいたい「橙」(名) 1 だいく

十二29 4 物置の後には、大きなだい

くの木があつて、黄色い大きな實

が枝もたわむ程なつてゐる。

だいたい「橙」(名) 1 橙だいく

十48 10 (略)實の名より取れる橙

色・柿色・葡萄色・小豆色、(略)・

色の名稱も亦千種萬様なり。

だいたんけん「大探検」(名) 1 大探検

十二76 6 コロンブスは(略)。(略)・

其の保護の下に此の大探検を行ふに

至れり。

だいち「大地」(名) 1 大地

十一78 2 二瀑相並んで雄を争ひ、

其のひびき萬雷のとどろくが如く、

大地も爲にふるひ、(略)。

たいちゅう「隊中」(名) 2 隊中

十26 8 (略)御入營の上は、品

行方正、職務に忠實にして、隊中の

模範となられ度、(略)。

十一54 10 ナボレオンがアルプ山を越

えて、イタリヤへ攻入つた時は(略)・

隊中をピエールといふ年の頃十三四

ばかりの少年鼓手があつた。

たいちゅういちどう「隊中一同」(名)

1 隊中一同

十59 3 中隊長殿の何事にも注意

の周密なるは隊中一同感謝致し居り

候。

たいてい「大抵」(副) 19 大テイ 大

てい 大抵

四27 1 さむい北かぜがふいて、

のはらのくさやはなは 大てい

かれてしまひました。

四28 1 あなたのおなかまは 大

てい 枯れてしまつたやうです。

五30 5 茶ノ木ノ高サハ大テイ三四尺

グラキデ、(略)。

五50 3 ソノ他ノ瓜ハ大テイナメラカ

デアル。

五50 6 西瓜ノ種ハ大テイ黒イガ、ソ

ノ他ノ瓜ノハ白イノガ多イ。

五59 3 アンドンニトボスノハ大テイ

ナタネカラトツタ種油デス。

六14 5 曇ツタ夜ヤ月ノナイ夜ハ道ニ

マヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデ

アル。

六33 7 着物・羽織・ハカマ・オビ

ナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ

絹織物ニテツクル。

六65 7 大テイノケモノハ一打デコロ

サレテシマヒマス。

六72 8 (略)悪い子供は、おとなに

なつてから、大ていつまらない人に

なつてゐます。

七46 6 マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デ

アルシ、書物モ近ゴロハ大テイ西洋

紙デシラハルヤウニナツタ。」

七77 1 海草ハ大テイ花ガ咲カナイ。

八56 5 はぎの長い鳥は首も長く、首

の長い鳥は大ていくちばしも長い。

十61 3 (略)ニ用ヒタル銅ハ、大抵

此ノ山ヨリ産出シタルモノナリトイ

フ。

十72 5 温泉の(略)其の湯には大

抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。

十一107 1 町には瓦屋根の家もある

が、田舎は大抵葺屋根ばかりである。

十一110 1 貴人の墓には内地の様に石

をたてるけれども、普通の墓は大抵

土を盛上げるばかりである。

十一112 3 池には大抵鯉・鮒等を養

ひて、二年毎にこれを賣るに、其の

利少からず。

十一113 6 村會にて村費を議するに

も、大抵原案を可決するを常とす。

だいていこく「大帝国」(名) 1 大帝國

十二101 9 我等五千萬の同胞は常に

大帝國の國民たるを思ひ、一言・一

行の間にも、大國民の品格を高むる

の用意あるべきなり。

たいてき「大敵」(名) 2 大敵

六42 1 ユダン大敵。

十二113 2 (略)小敵を侮らず、大

敵を恐れず、十分に自己の職務を盡

す人を眞の大勇の人といふべしと訓

へ給ふ。

だいてつゝい「大鉄槌」(名) 1 大鐵鎚

十二12 10 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人

ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出來、

(略)。

だいと ムさんだいと・ヨーロッパのさ

んだいと

だいとう「大刀」(名) 1 大刀

十24 9 韓信大刀ヲオビテ市中ヲ行

ク。

だいどう「大道」(名) 1 大道

十一97 2 是より一條の大道遠く

北へ通じてロシア領に入候。

だいどうざん「大銅山」(名) 1 大銅山

十61 9 足尾銅山ハ(略)。(略)。

明治二十年頃、新式ノ機械ヲ用ヒシ

以來、(略)・産出高モ著シク増加シ、

コ、ニ始メテ世界有數ノ大銅山トナ

レリ。

だいとうのみや「大塔宮」(人名) 1

大塔宮

十一25 5 堂前四本の櫻ある處は大

塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離

の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所

なりと傳ふ。

だいとかい「大都會」(名) 7 大都會

六80 大阪ハ(略)。秀吉コ、ニ
城ヲキツキシヨリ、次第二商業ノ盛
ナル大都會トナレリ。

八95 名古屋ハ(略)。四通八達
の要路にあたるを以て、早くより
東海道一の大都會なりしが、(略)。

十一39 臺南ハ南部の大都會に
て、附近に名所・舊蹟の多き所に御
座候。

十一91 水は大都會などに
ては、時として價を生ずることあり。
十二59 倫敦ハ(略)。歐羅巴第
一の大都會にして、亦實に世界第一
の大都會なり。

十二59 歐羅巴第一の大都會にし
て、亦實に世界第一の大都會なり。
十二62 倫敦ハ世界第一の大都會
なれども、古き都市にして街路狭け
れば、古風の乗合馬車を以て主なる
交通機關とす。

だいどころ「台所」(名) 8 だいどこ
ろ 臺所
五19 「おはなや、用があるから、
ちよつとお出で。」と、母はだいで
ころからよびました。
八13 母ハ臺所デ朝飯ノシタクニカ
ハリ、(略)。
九65 臺所にて火吹竹を使ふも、
(略)。
十一66 常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ
特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。
十一66 臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、

ニタキ・洗ヒ流シスル所デアルカ
ラ、(略)、常ニ清潔ニシテ置カナケ
レバナラス。

十一67 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置
ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミ
ナインハカシイ話デアル。

十二88 座敷の床の間より臺所の
戸棚に至るまで、諸道具の置場處を
一定し、(略)。

十二89 凡そ家内の掃除は座敷・
居間・臺所のみならず、便所の隅よ
り下駄箱の奥までも注意せざるべか
らず。

だいトンネル(名) 1 大トンネル
十二10 日本一の大トンネルは中央
線の笹子峠にあり。

たいない「体内」(名) 1 体内
十65 破裂矢は鯨の体内に深く食込
んで破裂した。

たいなん「台南」(地名) 1 臺南
十一39 臺南ハ南部の大都會に
て、附近に名所・舊蹟の多き所に御
座候。

だいなごうてい「第何号艇」(名) 1
第何號艇
十一31 水雷艇ニハ(略)鳥ノ名
ヲ用ヒタリ。(略)。又第何號艇トノ
ミイフモノモ多シ。

だいに「第二」(課名) 8 第二
五目 第二 春が來た
五44 第二 春が來た
六目 第二 四季

六65 第二 四季
七目 第二 楠木正行(二)
七52 第二 楠木正行(二)

八目 第二 參宮日記の一節
八39 第二 參宮日記の一節
だいに「第二」(名) 4 だいに「第二」
ムたいへいようだいにだいさんかんた
い・ほへいだいしちじゅうにれんたい
だいにちゅうたい

三38 (略) だいに「第二」のもの
あります。だいに「第一」には目です。
(略)。だいに「第二」には耳です。

九83 五人の騎手ハ(略)、第二の
あひづを待ちかまへてある。
十一77 最も大なるは第一の瀑布
にして、(略)。(略)。更に川に沿ひ
て上れば、第二の瀧あり。

十一108 (略)、第一に目につく
は、家の低くて小さいことである。
(略)。第二に目につくのは白い着物
である。

だいに「第二位」(名) 1 第二位
十一17 昔より富士は日本一の高山
と稱せられしが、(略)、臺灣の我が
領土となりしより、富士は第二位に
落ちたり。

だいに「第二課」(課名) 8 第二課
九目 第二課 草薙劍(二)
九48 第二課 草薙劍(二)

十目 第二課 葉
十44 第二課 葉
十一目 第二課 蜜蜂

十一55 第二課 蜜蜂
十二目 第二課 日本海海戦
十二47 第二課 日本海海戦

だいにぐん「第二軍」(名) 1 第二軍
八86 三十七年ノ四月第二軍ニツイ
テ戦地ヘ向ツタガ、(略)。

だいにじゅう「第二十課」(課名) 8
第二十課
九目 第二十課 雨と風
九66 第二十課 雨と風

十目 第二十課 温泉
十71 第二十課 温泉
十一目 第二十課 鵜飼
十一78 第二十課 鵜飼

十二目 第二十課 辻音楽
十二81 第二十課 辻音楽
だいにじゅう「第二十」(課名) 8 第
二十

五目 第二十 蟲のこゑ
五60 第二十 蟲のこゑ
六目 第二十 材木
六67 第二十 材木
七目 第二十 桃をおくる手紙
七66 第二十 桃をおくる手紙

八目 第二十 胃と身體
八69 第二十 胃と身體
だいにじゅういち「第二十一」(課名)
8 第二十一

五目 第二十一 はがき
五63 第二十一 はがき
六目 第二十一 古机
六69 第二十一 古机

七月9	第二十一	海ノ生物：(一)	十一月12	第二十五課	諸葛孔明	七月12	第二十四	航海の話：(一)	六月10	第二十二	むね上げ
七69	第二十一	海ノ生物	十一月12	第二十五課	諸葛孔明	七80	第二十四	航海の話	六74	第二十二	むね上げ
八月9	第二十一	虎ト猫	十二月12	第二十五課	自治の精神	八月12	第二十四	橋中佐：(一)	七月10	第二十二	海ノ生物：(一)
八72	第二十一	虎ト猫	十二月12	第二十五課	自治の精神	八83	第二十四	橋中佐	七74	第二十二	海ノ生物
だいにじゅういっか	第二十一課		だいにじゅういっか	第二十三課	自治の精神	だいにじゅういっか	第二十四課	【課名】	八目10	第二十二	世界の話：(一)
【課名】8	第二十一課		【課名】8	第二十三課	自治の精神	【課名】8	第二十四課	【課名】	八75	第二十二	世界の話
九月8	第二十一課	水害見舞の文	五月11	第二十三	鹿ノ水カバミ	九月11	第二十四課	競馬	だいにじゅういっか	第二十二課	【課名】
九70	第二十一課	水害見舞の文	五月7	第二十三	鹿ノ水カバミ	九81	第二十四課	競馬	8	第二十二課	貯金
十月8	第二十一課	人ノ身體	六月11	第二十三	港	十月11	第二十四課	松の下露	九目9	第二十二課	貯金
十75	第二十一課	人ノ身體	六月11	第二十三	港	十88	第二十四課	松の下露	九75	第二十二課	貯金
十一月8	第二十一課	紡績	七月11	第二十三	何事も精神	十一月11	第二十四課	樺太より臺灣	十目9	第二十二課	あいぬの風俗
十一83	第二十一課	紡績	七月11	第二十三	何事も精神	十一月11	第二十四課	樺太より臺灣	十79	第二十二課	あいぬの風俗
十二月8	第二十一課	烈士喜剣	八月11	第二十三	世界の話：(一)	十二月8	第二十四課	大國民の品格	十一目9	第二十二課	蟲の農工業
十二85	第二十一課	烈士喜剣	八月11	第二十三	世界の話	十二月8	第二十四課	大國民の品格	十一87	第二十二課	蟲の農工業
だいにじゅういっか	第二十五課	【課名】8	だいにじゅういっか	第二十三課	【課名】8	十二月9	第二十四課	大國民の品格	十二目9	第二十二課	主婦の務
【課名】8	第二十五課	【課名】8	【課名】8	第二十三課	【課名】8	十二月8	第二十四課	大國民の品格	十二88	第二十二課	主婦の務
五月13	第二十五	ひよどりごえのさ	九月10	第二十三課	菅原道真	五月13	第二十七課	日光山	だいにじゅういっか	第二十八課	【課名】
かおとし	(一)		九月7	第二十三課	菅原道真	九月14	第二十七課	日光山	【課名】4	第二十八課	同胞すべて六
五77	第二十五	ひよどりごえのさ	十月10	第二十三課	家畜	九93	第二十七課	日光山	十一月15	第二十八課	同胞すべて六
かおとし	(一)		十月10	第二十三課	家畜	十月14	第二十七課	大和巡り	千萬	第二十八課	同胞すべて六
六月13	第二十五	かぞへ歌	十一月10	第二十三課	物の價	十月14	第二十七課	大和巡り	十一月8	第二十八課	同胞すべて六
六82	第二十五	かぞへ歌	十一月10	第二十三課	物の價	十月14	第二十七課	大和巡り	千萬	第二十八課	同胞すべて六
七月13	第二十五	航海の話：(一)	十二月10	第二十三課	孔子と孟子	十一月14	第二十七課	平和なる村	十二月15	第二十八課	卒業
七84	第二十五	航海の話	十二月10	第二十三課	孔子と孟子	十一月14	第二十七課	平和なる村	十二月15	第二十八課	卒業
八13	第二十五	橋中佐：(一)	十二月10	第二十三課	孔子と孟子	十一月14	第二十七課	平和なる村	十二月15	第二十八課	卒業
八88	第二十五	橋中佐	十二月10	第二十三課	孔子と孟子	十一月14	第二十七課	平和なる村	十二月15	第二十八課	卒業
だいにじゅういっか	第二十五課	【課名】8	だいにじゅういっか	第二十四課	【課名】8	十二月14	第二十七課	軍人に賜はり	だいにじゅういっか	第二十六課	【課名】
【課名】8	第二十五課	【課名】8	【課名】8	第二十四課	【課名】8	十二月14	第二十七課	軍人に賜はり	【課名】8	第二十六課	【課名】
八月12	第二十五課	貨幣	五月12	第二十四	ひよどりごえのさ	八月12	第二十七課	軍人に賜はり	七月14	第二十六	廣瀬中佐
九87	第二十五課	貨幣	五月12	第二十四	ひよどりごえのさ	九月10	第二十七課	軍人に賜はり	七89	第二十六	廣瀬中佐
十月12	第二十五課	講話會の案内文	六月12	第二十四	大阪	五月10	第二十七	マツリ	八月14	第二十六	名古屋
十90	第二十五課	講話會の案内文	六月12	第二十四	大阪	五月10	第二十七	マツリ	八月14	第二十六	名古屋
十一月2	第二十五課	講話會の案内文	六月12	第二十四	大阪	五月10	第二十七	マツリ	八月14	第二十六	名古屋

九目¹³ 第二十六課 三才女
 九14 第二十六課 三才女
 十目¹³ 第二十六課 大和巡り (一)
 十98 第二十六課 大和巡り (一)
 十一目¹³ 第二十六課 朝鮮の風俗
 十一106 第二十六課 朝鮮の風俗
 十二目¹³ 第二十六課 帝國議會
 十二105 第二十六課 帝國議會
 だいにず [第二圖] (名) 2 第二圖
 十45 1 圖 (略)、第二圖は横の線のみを用ひ、(略)。
 十45 圖 第二圖
 だいにだん [第二彈] (名) 1 第二彈
 八87 9 此ノ時中佐ハステニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。
 だいにっぽんていこく [大日本帝國]
 [地名] 2 大日本帝國
 八75 8 圖 我が大日本帝國はアジア大陸の東の海中にある島國なり。
 十二47 7 圖 我が大日本帝國の古き六十八國¹ 沖繩諸島合せてぞ、府は三つ、縣は四十三。北海道の一廳と、外に南北新領土。溫熱二帶にまゝがりて、天産多きうまし國。
 たいにん [大任] (名) 1 大任
 十二91 2 圖 主婦は老人にいたはりかしくく外、幼兒を育て上ぐる大任あり。
 たいはいず [大敗] (サ変) 1 大敗ス
 《一ス》
 十一105 8 圖 或時將軍馬謖、孔明ノ軍

令ニソムキテ大敗ス。
 だいはくふ [大瀑布] (名) 1 大瀑布
 十一77 8 圖 世界第一の大瀑布は北米合衆國のナイアガラなり。
 だいはち [第八] (課名) 8 第八
 五目9 第八 母の手つだひ
 五18 7 第八 母の手つだひ
 六目9 第八 ヤクワントテツピン
 六24 4 第八 ヤクワントテツピン
 七目9 第八 手ノハタラキ
 七25 3 第八 手ノハタラキ
 八目9 第八 白雀 (一)
 八22 5 第八 白雀 (二)
 だいはつか [第八課] (課名) 8 第八課
 九目9 第八課 我が陸軍
 九24 1 第八課 我が陸軍
 十目9 第八課 入營する友におくる
 十26 3 第八課 入營する友におくる
 十一目9 第八課 我が海軍
 十一29 8 第八課 我が海軍
 十二目9 第八課 日本の女子
 十二30 8 第八課 日本の女子
 だいはちず [第八圖] (名) 2 第八圖
 十46 1 圖 右の第八圖の角を取れば、左の第九圖を得、(略)。
 十46 圖 第八圖
 だいはっけん [大発見] (名) 1 大発見
 十二76 1 圖 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして、(略)。(略)。(略)、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となり

しなり。
 たいはん [大半] (名) 1 大半
 九73 10 圖 (略)、川上の堤防切れ、隣村は大半水中にあり、救をもとむる聲かまびすしく候故、(略)。
 たいふふいせたいふ
 たいふ [大部] (名) 1 大部
 十一83 7 圖 我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。
 だいは [大分] (副) 1 だいは
 六10 5 のほりついたじふんには足もだいはくたびれて、はらもすつかりすぎました。
 だいはう [大風雨] (名) 1 大風雨
 十一76 5 圖 (略)、先年大風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、(略)。
 だいはつ [大仏] (名) 4 大ブツ 大佛
 佛ハならのだいはつ
 五14 2 日本一ノ大キナホトケサマハ、ナラノオ寺ニアリマス。ナラノ大ブツトイツテ名高イモノデス。
 十47 7 圖 全國無數の佛像中奈良の大佛の大きさの日本一なることは諸子すでに之を知れり。
 十96 9 圖 東大寺ハ (略)、タマニ大佛ノ大キサノ驚クベキノミナラズ、(略)。
 十二24 3 圖 極樂寺坂越え行けば、長谷觀音の堂近く、露坐の大佛おはします。
 だいはつさま [大仏様] (名) 1 大ブ

ツサマ
 五15 2 (略)、大ブツサマノマヘニ立ツテキル人ガ、コンナニ小サク見えマス。
 だいはつでん [大仏殿] (名) 2 大佛殿
 十96 10 圖 東大寺ハ (略)、大佛殿ノ高サ十五丈、東西長サ二十九丈、眞ニ世界第一ノ木造建築物トス。
 十97 7 圖 コ、ヨリ眺ムレバ、東ニ春日・三笠・若草等ノ山々相連リ、其ノフモトニ大佛殿・興福寺高クソビエ、(略)。
 だいはふん [大部分] (名) 3 大部分
 八82 9 圖 我が日本の國の大部分は、冬も甚だしく寒からず、夏も甚だしく暑からず、(略)。
 十二9 8 圖 此の兩日の戦に、敵艦の大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、三十八隻の中逃げおはせたるは巡洋艦以下數隻のみ。
 十二44 4 圖 作物は米・麥其の大部分を占めて、(略)。
 たいへい [大兵] (名) 3 大兵
 六51 4 支那からは大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、(略)。
 七57 7 圖 (略)、アル年敵ノ大將高師直六万人ノ大兵ヲヒキテ來リ攻ム。
 十二31 7 圖 足利氏の大兵來り攻め、城遂に陥り、保・義鑑共に戦死す。
 たいへいぶじ [太平無事] (名) 1 太

平無事

九67 五風十雨といつて、五日毎の風、十日毎の雨は太平無事の世の有様である。

たいへいよう「太平洋」〔地名〕4 太平洋

八77 図

太平洋

九16 8 図 利根川ノ本流ハ（略）。（略）。

本流ハ下リテ、下總・常陸ノ國境ヲ

流レテ太平洋ニ入ル。

九17 図 太平洋

九18 3 図 銚子港ノ東南一里餘、大味

崎ニハ燈臺アリ。東太平洋ニ面シ、

風景ノ美ヲ以テ名高シ。

たいへいよう「たいにだいさんかんたい

「太平洋第二第三艦隊」(名) 1 太平

洋第二・第三艦隊

十二4 9 図 露國が（略）、本國に於

ける海軍の幾んど全勢力を擧げて組

織せる太平洋第二・第三艦隊は、朝

鮮海峡を経てウラヂオストックに向

はんとす。

たいへん「大麥」(形状) 8 タイヘン

大へん 大變

二54 1 オヂイサンハタイヘンニ

ハラヲタテテ、ソノ犬ヲコロシ

テシマヒマシタ。

五1 8 大神はおどろいて、あまの岩

戸の戸をたてて、其の中へおくれ

になりました。さあ大へん、(略)

せかいがくらやみになつて、わるい

神さまがさまざまのわるいことをは

じめました。

六15 5 それで取入れの時は大へんにいそがしくて、夜も十分に眠れないほどです。

六30 8 図 「あゝ、大へんなことをした。今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」

八21 6 図 さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくなるといふが、(略)。

八44 5 これ程有用な火でも、ひよつとまちがふと大へんな事が出来る。

九35 9 それが今は（略）、晩にははや京都に着くことが出来る。大變なちがひではないか。

九74 2 図 (略)、川上の堤防切れ、隣村は大平水中にあり、救をもとむる聲かまびすしく候故、是は大變なりと、直ちに老母と子供を裏山に立退かせ、(略)。

たいほう「大砲」(名) 7 大砲

七89 3 図 大砲ノヒマキハ、天モオチ

海モサクルカト思フバカリナリ。

八4 9 図 明治二十七八年及び三十七

八年戦役の戦利品たる大砲、(略)。

八87 1 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲

ヲウチカケタ。

九24 8 図 砲兵は大砲を以て遠方より

敵を砲撃し、友軍を前進し易からしむ。

九29 6 図 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、昔

ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ

造リタルモノニシテ、(略)。

十一31 10 図 戦艦ハ（略）。故ニ何レモ大ナル大砲ヲ備ヘ、(略)。

十一58 1 図 大砲のつなをくゝりつけて、早く自分を谷へ下せ。

だいぼうふう「大暴風雨」(名) 1 大暴風雨

九72 7 図 (略)、二十八日は終日大

暴風雨にて、(略)。

たいほくふとう「たいほくしがい

たいまのけはや「当麻蹴速」(人名) 1

タイマノケハヤ

三13 4 ムカシタイマノケハヤト

イフチカラノツヨイ人ガア

リマシタ。(略)、ダレトスマフ

ヲツツテモ、マケタコトハア

リマセン。

だいまよう「大名」(名) 2 大名

よだいまよう

六50 8 (略)、しまひには日本中の大

名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。

九39 4 図 箱根山ハ（略）。（略）。然

ルニ明治維新ノ後ハ大名ノ往來全ク

絶エ、(略)。

だいまんじ「大文字」(名) 1 大文字

十一15 9 図 高德(略)、大いなる櫻

の木の幹をけづりて、大文字に詩の

句を書きつけたり。

だいやがわ「大谷川」〔地名〕2 大谷

川 大谷川

九93 7 図 日光の市街盡くる所に大谷

川あり。

九96 2 図 此の湖の落口は華嚴瀧とな

る。(略)。此の水即ち大谷川の上流

を成せり。

たいゆう「大勇」(名) 2 大勇

十二12 9 図 さはあれ、勇氣には大勇

と小勇との區別あり。

十二13 3 図 能く義理をわきまへ、精

神を修養し、小敵を侮らず、大敵を

恐れず、十分に自己の職務を盡す人

を眞の大勇の人といふべしと訓へ給

ふ。

たいよう「大洋」(名) 1 大洋

十二77 9 図 是より先は未だ航行せし

ことなき大洋なれば、(略)。

だいう「代用」(名) 1 代用

九90 8 図 紙幣ハ貨幣ノ代用ナルモノ

ニシテ、輕クシテ取扱ニ都合ヨキ

コトハ貨幣ニマサレリ。

たいら「平」(形状) 1 平

五10 2 野はらは平ですから、ゆつ

りあるきました。

たいらぐ「平」(四) 1 平ぐ「一ギ」

九6 4 図 尊はなほも進みて北に向ひ

給ひしに、蝦夷ども皆恐れ降参し、

東國ことごとく平ぎたり。

たいらぐ「平」(下二) 2 平ぐ「一

ゲ

七4 4 図 大人トナリテ、君ノ御タ

メニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシ

メントナリ。

十一104 5 図 孔明ハ（略）、先ヅ南方

ノ亂ヲ平ゲ、遂ニ自ラ諸軍ヲ率キテ北征ス。

たいらげる「平」(下二) 1 平げる

『一ゲ』凸おたいらげる

六四三 日本中を平げて、後には朝鮮までも改めて行つた豊臣秀吉といふ人は、(略)。

だいら「代理」(名) 1 代理

十二三四 (略)、縣廳カラモ知事ノ代理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。

たいりく「大陸」(名) 1 大陸 ヲアジヤたいりく・アフリカたいりく・アメリカたいりく・ヨーロッパたいりく

八七九 (略) アジヤ大陸の西、ヨーロッパ大陸の南にある大陸をアフリカといふ。

だいらさま「内裏様」(名) 1 ダイリサマ

四七三 一バン上ノダンニハダイリサマヲナラベテ、(略)。

たいりつす ヲあいたいりつす

たいりやく「大略」(名) 1 大略

十一九五 (略)、見聞取交へ、新版圖の狀況大略御報知申上候。

だいらよこうか「大旅行家」(名) 1 大旅行家

十二七四 (略) 伊太利の大旅行家マルコ、ポーロの日本に關する記事を読み、(略)。

だいらん「大連」(地名) 8 大連

十二五四 (略) 門司にて乗船し朝鮮海峡を過ぎて、(略)約二日間にして大連

に着す。是我が南滿洲鐵道の起點なり。市街建築物及び埠頭等頗る規模の壯大なるを見る。市街に大山通・兒玉町・乃木町等の名あるは、明治三十七八年戰役の記念たり。

十二五四 (略) 大連より(略)、北へ進むこと約二百哩、遼陽あり。

十二五六 (略) 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、大連よりこゝに至る四百三十六哩。

十二五六 (略) 旅順線は大連の次驛臭水子より分れて、(略)旅順口に達す。

十二五七 (略) 營口は一に牛莊港と稱し、(略)、大連と共に滿洲の二大門戸と稱せらる。

十二五七 (略) 大連

十二五八 (略) 安東縣は(略)、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十二五九 (略) 南滿洲鐵道によりて、露西亞の東清鐵道及びシベリヤ鐵道を利用せんか、大連より僅かに二週間にして歐羅巴の中央に入るべし。

たいる「退路」(名) 1 退路

十二八五 (略) よりて主戰艦隊及び巡洋艦隊は東方に向つて、其の進路をふさぎ、(略)の諸隊は其の退路を絶ち、(略)全く敵を包圍せり。

だいらく「第六」(課名) 8 第六

五目七 第六 ナラノ大ブツ

五三三 第六 ナラノ大ブツ

六目七 第六 物サシトマストハカリ

六四七 第六 物サシトマストハカリ

七目七 第六 豆の一族

七九二 第六 豆の一族

八目七 第六 松下禪尼

八六二 第六 松下禪尼

だいらく「第六」(名) 2 第六圖

十四五 (略)、第六圖は縦・斜兩様の線を用ひ、(略)。

十四五 (略) 第六圖

だいらく「第六」(課名) 8 第六課

九目七 第六課 利根川

九四三 第六課 利根川

十目七 第六課 本

十一七〇 第六課 本

十一目七 第六課 我は海の子

十二二〇 第六課 我は海の子

十二二三 第六課 鎌倉

凡そ百箇處の測候所あり。

十二四四 (略) 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬町歩あり。

十二四八 (略) 又森林は全國の山野たほはぬ處なく、(略)樺太・臺灣太古より其の入れぬ林あり。

たいわんしゃんじよう「台灣写真帖」(名) 1 臺灣写真帖

十一四〇 (略) 當總督府にて出版相成候臺灣寫真帖一部郵便にて差出候間、御覽下され度候。

たいわんじんじや「台灣神社」(名) 1 臺灣神社

十一三六 (略) 當臺北市街の如きは、(略)北方の臺灣神社ヲ參拜すれば、そゝろに當年を追懷するの情にたへず候。

たいわんとくゆう「台灣特有」(名) 1 臺灣特有

十一三九 (略)、是にて竹筏といふ臺灣特有の船を造り候。

たいわんよりからふと「課名」2 臺灣より樺太へ

十一目十 第九課 臺灣より樺太へ

十一三五 第九課 臺灣より樺太へ

たう「耐」(下二) 4 たふ

九八三 (略) 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、(略)、その御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。道真今昔の感にたへず、恩賜の御衣をさへげて、(略)、一篇の詩を作りたり。

九八三 (略) 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、(略)、その御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。道真今昔の感にたへず、恩賜の御衣をさへげて、(略)、一篇の詩を作りたり。

九八三 (略) 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、(略)、その御衣は今なほ西のはてに住む身に近くあり。道真今昔の感にたへず、恩賜の御衣をさへげて、(略)、一篇の詩を作りたり。

十一28 9 図 今や全國鐵道の延長六千哩を越え、又（略）の航路をも開くに至れり。國運發展の速なることに實に驚くにたへたり。

十一36 8 図 北方の臺灣神社に參拜すれば、そとに當年を追懷するの情にたへず候。

十一69 4 図 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

たうえ「田植」〔課名〕2 タウエ

三目12 十一 タウエ

三31 4 十一 タウエ

たうえ「田植」(名) 4 田ウエ 田うゑ 田植

三31 6 ドコデモ 田ウエガ ハジマ

ツテ キマス。

六17 1 米を俵に入れて、(略)ながめた時は、田うゑや草取りの苦しきも、取入れのいそがしさも、全くわすれてしまひます。

九52 3 図 昔の風をそのまゝに、田植・草取・取入れに 農夫の辛苦共にする すげ笠こそはたふとけれ。

九68 4 (略)五月雨は、農家に取つては大切な雨である、それはちやうど田植の時節であるから。

たえす「絶」(副) 7 絶エズ 絶えす

十一71 10 図 (略)、即ち温泉なり。絶えずわき出づるものと、時を定めてわき出づるものとあり。

十一75 図 女王の任務は卵を産むに

あり。氣候の暖なる間絶えず之を産出するを以て、(略)。

十一20 3 図 (略)、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

十一48 2 アラビヤ人は後をふりかへりく、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。

十一86 3 図 工女ハ常ニ其ノ前ニ立チ、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、(略)。

十一88 10 図 油蟲は(略)、其の植物の汁を吸ひ、身體より絶えず甘き汁を出すものなれば、(略)。

十二22 4 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、(略)、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

たえだえ「絶絶」(形状) 2 絶え絶え 絶えん

十一69 5 図 水夫等はなほぼしらに抱きつきて、息も絶えんぐに救を呼べり。

十一58 6 (略)、やうくさがし當てたが、少年ははや息も絶え絶えである。

たえて「絶」(副) 2 絶えて

十一50 1 アラビヤに良馬の多く産するの、(略)。數千年の久しい間、土人の絶えてたゆまない丹誠の結果である。

十二100 7 図 之を返すにも其の期日を違ふる者絶えてなしといふ。

たえる「耐」(下二) 1 たへる「ヘル」

十一46 7 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、四五日間うち通し、毎日三十里位をかけるのは珍しくない。

たえる「絶」(下二) 3 絶エル「エ」ひいたえる

八90 9 (略)、中佐ノイキハトウトウ其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。

八91 3 図 「若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタと思へ。」

八92 1 (略)、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

だえんけい「楕円形」(名) 1 楕圓形 十五7 葉ノ形ニハ卵形ト楕圓形ガ最も多イガ、(略)。

たおす「倒」(四) 1 タフス「ース」ひけたおす

八73 9 図 虎ハ前足ノ一撃ニテ鹿ナドヲタフスコト、猫ノネズミヲトラフルガ如シ。

たおる「倒」(下二) 4 タフル たふる 倒る「ールル・ーレ」

七63 6 図 又近ごろは戦場にも犬を用ひて、たふれたる兵士をさがさむといふ。

九27 10 図 維新前後國事ニタフレタル人々ヲ始メ、(略)忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。

九30 4 図 カクノ如ク國事ニタフレタ

ル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、(略)。

十二65 9 図 ナボレオンが(略)退軍せし時、露西亞の狼は行くく雪中に倒るゝ佛兵の跡を追ひて、(略)。

たおれる「倒」(下二) 8 タフレタル 倒レル 倒れる「ーレ・ーレル」

四19 3 みのししはどつと たふれましたが、(略)。

四19 3 みのししはどつと たふれましたが、たふれるが早い、(略)。

四19 4 (略)、ただつねは(略)たふれてゐた木の上へとびのきました。

五48 3 二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふれました。

八87 2 砲彈ニタフレル兵士ハ數ヘキレナイ。

八88 4 (略)砲彈ノ破片ガ中佐ノコシニアタツテ、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタ。

八89 6 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トモニ中佐ライタハツタ。

九68 9 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、(略)。

たか「高」ひあすだけだか・きんだか・さんしゅつだか・せいぞうだか・とりいれだか・とれだか・やまたか・ゆしゅ

つだか

たか〔鷹〕(名) 3 たか

八54 7 わし・たか・とびなどの様に、大空を飛びまはつて、他の鳥をとらへて食ふ鳥や、(略)鳥は、總べてつばさが大きい。

八57 1 わし・たか・とびなどはよくちばしがことに鋭くて、やゝ太い。

八57 8 目の最も恐ろしげなのは、わし・たかの類で、(略)。

たが〔種〕(名) 1 タガムかねたが

三30 6 タルヤラクニモ、竹ノ

タガガカケテアリマス。

たかい〔高〕(形) 34 タカイ たかい
高イ 高い 『イー・ウ・カッ・ク』
凸こえたかい・こだかい・なだかい

一21 5 タカイ スギノキ。ヒクイヤネ。

一25 5 タカイ イシダンモ ミエマス。

三9 7 たかい木(ひらがなのドリル)

三17 8 サヘヅリナガラダンダン

タカク 上ツテイキマス。

三26 6 あゆめよ、あゆめよ、足おとたかく。

三28 4 (略) タケノコガ、モウコンナニノビテ、(略)。コレカラ

二三日タツタラ、マダズツトタカクナリマセウ。

四4 6 四 「あそこに 高い 火の 見のはしご が見える。」

四14 2 青ぞら 高くそびえたち、

(略)、ふじは 日本一の山。

四15 5 (略) 下に まちかまへてゐて、高いところから おひおろして来る けものを、弓で いとつたのです。

四20 7 四 「(略) マン中ノ一パン 高イノハ、中ユビトモ、高ユビトモイヒマス。」

四22 3 大キイ ネエサン ハセイガ 高イカラ、高ユビデス。

四22 5 小サイ ネエサン ハ私ヨリ モスコシ 高イカラ、クスリユビデス。

五9 3 それから少し来ると、高いがけの上へ出ました。

五17 3 鯉ハ (略)。(略)。時ニハ二三尺モ 高クトブコトガアリマス。

五46 5 音次郎はおどろいて、道ばたの高い木の下へにげこみました。

五47 3 「かみなりは高いもののある所へおちるのだ。」

五48 6 (略)、かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてゐました。

五77 1 見ると丈の高い、たくましい男である。

六1 7 海べは (略)、高い松はしぜんにおもしろい枝ぶりになつてゐる。

六25 6 金ヤギンハ (略)、ネダンモ 高ウゴザイマス。

六77 2 高イホバシラヤ、ヒクイホバ

シラガタクサン重リ合ツテ、(略)。

七13 3 ねぎられたら引く積りで、

七29 4 (略)、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

七39 6 (略) 皆ほしいとは思ひましたが、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。

七53 6 (略)、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、賃錢も高かつたのです。

七82 8 ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。

八23 2 日はもう高く上つてゐます。

八31 2 せが高く、目がするどくて、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。

八55 5 又にはとり・七面鳥・あひるなどは陸上や水上にばかり居て高く飛ばないから、(略)。

八66 9 初は熱があまり高いので、一時はどうなることかと心配いたしました。

八66 9 古い銀杏の木が一本、

十28 3 (略)、

十65 1 小山の様な白波が高くくだけて、夕立のやうに降散る。

十一107 6 室が廣く、天井が高いと温りにくいから、成るべく狭く低くする必要がある。

十一110 4 きせるは身分の高い人程長いを用ひる。

たがい〔互〕(名) 11 たがひ 互おたがい

六58 7 「われ／＼はたがひにいくさをしてゐるけれども、(略)。

六83 5 (略)、善き事たがひにすゝめあひ、悪しきをいさめよ、友と友、人と人。

八72 4 今より後はたがひに親密に暮すべし。世はすべて相持なり。」

九49 5 たがひに心もとなく思ひ合ひし父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。

十8 10 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。

十一16 7 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、(略)。

十一51 7 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、(略)。

十一113 5 村會議員も全村一致して之を選挙し、互に競争するが如きこと更になし。

十二50 3 千里比隣の今の世は有無互に相通じ、世界各國皆市場。

十二91 7 家内能く和合して、互の心にわだかまりなく、むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ時、(略)。

十二93 5 當時支那は王室衰へ、諸

侯各其の國によりて互に勢を爭ひたり。

たがう「達」(四) 1 たがふ「一ハ」

十54「四」 實盛日頃申し候に、『戰場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。』(略)『といひしにたがはず、墨を塗りて候。』

たがう「達」(下二) 3 達フ 達ふ

「フルーヘ」

十一70「五」 約束の時日を違ふが如きは時間の賊なり。

十二52「二」 見本現物トヲ異ニシ、約束ノ期限ヲ違へ、(略)、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

十二100「六」 之を返すにも其の期日を違ふ者絶えてなしといふ。

たかお「高雄」(地名) 1 打狗

十二37「六」 (略)、打狗の築港も唯今盛に工事中に御座候。

たかおか「くろくろ」たかおかあいつぬり

たかおこう「高雄港」(名) 1 打狗港

十一37「二」 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。

たかく「多額」(名) 2 多額

十二52「七」 近年各國商人(略)、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。

十二106「六」 (略) 各府縣に於て多額の直接國税を納むるもの十五人の中より一人を互選し、(略)。

たかさ「高」(名) 14 高サ 高さ

五14「三」 スワツテイラツシヤル高サガ五丈三尺五寸、(略)。

五30「五」 茶ノ木ノ高サハ大テイ三四尺グラキデ、(略)。

八94「一」 名高き金のしやちほこは(略)。高さ八尺五寸、(略)。

九94「二」 石の大鳥居高サ三丈餘、表門を入れれば五重塔あり。

十一1「三」 日本一の高山は臺灣の新高山なり。其の高さは一萬三千七十餘尺にして、(略)。

十96「一〇」 (略)、大佛殿ノ高サ十五丈、(略)。

十二76「六」 霧降瀧は上下二層に分れ、高さ各十四五丈、(略)。

十二76「九」 最も大なるは第一の瀑布にして、高さ八十餘丈と稱す。

十二77「一〇」 ナイヤガラ瀑布は左右二つに分れ、(略)、高さ各約十六丈あり。

十一89「六」 熱き地方の白蟻は周圍十間、高さ三間にも達する小山の如き巢を造り、(略)。

十二40「一〇」 最も東なる根子岳は七面山とも稱し、(略)。高さ千四百二十四メートル、(略)。

十二41「二」 (略)、其の西にある高岳は高さ千六百九メートルあり。

十二55「二」 其の西南なる首山堡は高さ僅かに三百餘尺の小山なれども、(略)。

十二61「八」 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

たかさき「高崎」(地名) 1 高崎

九17「四」 高崎

たかし「高」(形) 33 高シ 高し

「カリ・キー・ク・シ」 ヲこだかし・なだかし

六33「七」 着物・羽織・ハカマ・オビナドノアタヒ高キモノハ大デイコノ絹織物ニテツクル。

六82「五」 (略)、人々忠義を第一に、あふげや、高き君の恩、國の恩。

六85「五」 (略)、心はかならず高くもて、たとひ身分はひくゝとも、輕くとも。

七7「八」 天皇ハコレヲ聞キ、ミスヲ高クマキ上ゲサセ、(略)。

七44「八」 楠木父子の菊水は、忠義のかをりなほ高し。

八5「三」 (略) 老木枝をまじへて、高く天をつく。

八9「三」 うれし、この松の根もとに、まづ見つけつと高く呼ぶ聲。

九11「八」 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。

九12「三」 歌へ歌へ、しらべ高く歌へ。

九41「三」 若シ鳥ノ如ク高く大空ヨリ箱根山ヲ見下サバ、(略)。

九66「五」 (略)、たこの空高く上る、(略)。

九78「一〇」 是は菅原道真が右大臣とい

ふ高き官よりおとされて、(略)。

九89「七」 是金銀ハ價高く、保存スルニモ都合ヨク、(略)。

十一14「四」 其の高さは(略)、富士山より高きこと凡そ一千尺なり。

十一10「一〇」 「我ぞ元 木曾の橋よ、白雲を うなじよまきて、峯高く空よそびえき。」

十三10「一〇」 「ねだ低く、たるきは高し。」

十94「三」 興福寺ノ五重塔高く其ノ北ニソビユ。

十97「八」 (略)、其ノフモトニ大佛殿・興福寺高くソビエ、(略)。

十一22「二」 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

十一77「七」 美濃の養老瀧は孝子の傳説を以て其の名天下に高し。

十一91「一〇」 しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。

十一92「三」 (略)、其の五人は(略)、争ひて高き價をつくべし。

十一92「四」 かくて其の家の價は段々高くなりて、(略)。

十一92「四」 (略)、最も高き價をつけたる人の手に渡るべきなり。

十一93「二」 物の價は(略)需要供給の關係によりて、或時は高く、或時は安くなるものなれども、(略)。

十一93「六」 (略)、靴の價はにはかに高くなりて、(略)。

十一94 10 図 (略)、需要増すに随ひて、其の價益、高くなり、(略)。

十二15 図 (略) 誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。

十二24 10 図 上るや石のきざそしの、左に高き大銀杏、(略)。

十二26 4 図 建長・圓覺古寺の山門高き松風に昔の音やこもるらん。

十二38 8 図 趙の將軍にて武功の聞え高かりし廉頗之を見て(略)。

十二60 9 図 (略) 壯大なる建築の數々高く中空にそびゆるのみならず、(略)。

十二120 8 図 尚高き 學びの高嶺とちて見ん。

たかせ「高瀬」(名) 1 高瀬
十一26 8 図 荷足・高瀬・茶船・屋根船等其の目的により、大小・構造千差萬別あり。

たかだ「高田」(地名) 1 高田
九25 図 高田

たかたかゆび「高高指」(名) 2 高高ユビ
四20 7 図 「(略)、マン中ノ一バン高イノハ、中ユビトモ、高高ユビトモイヒマス。

四22 4 図 大キイネエサンハセイガ高イカラ、高高ユビデス。

ただけ「高岳」(地名) 3 高岳
十二40 8 図 阿蘇山の舊噴火口は(略)にわたり、此の間に根子岳・高岳・

中岳・烏帽子岳・杵島岳の五岳東より西に相連りて突起す。

十二41 2 図 (略)、其の西にある高岳は高さ千六百九メートルあり。

十二41 図 高岳
たかちほ「高千穂」(名) 1 高千穂
九18 10 (略)、ある日我が軍艦高千穂の一水兵が女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

たかちほかん「高千穂艦」(名) 1 高千穂艦
九23 5 図 其の時にはおたがひに目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

たかちほかん「高千穂艦」(名) 1 高千穂艦
九23 5 図 其の時にはおたがひに目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

たかちほかん「高千穂艦」(名) 1 高千穂艦
九23 5 図 其の時にはおたがひに目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

たかちほかん「高千穂艦」(名) 1 高千穂艦
九23 5 図 其の時にはおたがひに目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

十二33 1 図 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、保の母と同じく、忠義の爲には恩愛を忘るゝ眞心より出でたり。

たかとき「高千穂」(名) 4 高千穂
たかとき「高千穂」(名) 4 高千穂
うどうたかとき

十二37 6 図 將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。

十二37 7 高虎「年老いて其の任にあらず。」とて之を否む。

十二38 1 図 高虎の嘉明と相惡むは私の小事なり。
十二38 4 図 嘉明後此の事を聞きて大

いに恥ぢ、高虎と水魚の交をなすに至れりとぞ。

たかながしのう「尊良親王」(人名) 1 尊良親王
十二31 5 図 新田義貞、尊良親王を奉じて越前國金崎の城に在りし時、(略)。

たかなわ「高千穂」(名) 1 高千穂
八60 8 図 春より先に咲く花は、比良の高ねの暮の雪。

十二120 9 図 尚高き 學びの高嶺とちて見ん。

たかの「鷹羽」(名) 1 たかの羽
七45 7 図 上り下りの藤の紋、さてはたかの羽・つるの丸、(略)、紋の數々かぎりなし。

たかの「鷹羽」(名) 1 たかの羽
七45 7 図 上り下りの藤の紋、さてはたかの羽・つるの丸、(略)、紋の數々かぎりなし。

たかの「鷹羽」(名) 1 たかの羽
七45 7 図 上り下りの藤の紋、さてはたかの羽・つるの丸、(略)、紋の數々かぎりなし。

たかの「鷹羽」(名) 1 たかの羽
七45 7 図 上り下りの藤の紋、さてはたかの羽・つるの丸、(略)、紋の數々かぎりなし。

十一63 10 図 (略)、御來會下され候はば、(略)、本町二丁目高野義太郎宛御一報下され度候。

たかの「高徳」(人名) 1 高徳
じまたかのり

十一15 7 図 高徳(略)、行在所の御庭にしのび入り、(略)、大文字に詩の句を書きつけたり。

たかはし「高橋忠一」(人名) 1 高橋忠一
七16 7 図 五月一日 高橋忠一 鈴木愛吉様
たかはし「高橋忠一」(人名) 1 高橋忠一

「人名」1 高橋忠一様
七19 1 図 五月四日 鈴木愛吉 高橋忠一様

たかはま「高浜」(地名) 2 高浜
十一19 図 高浜

十一20 2 図 瀬戸内海の沿岸には高松・多度津・高濱・尾道・宇品等の港多く、(略)。

たかふる「高」(四) 1 高ふる「一リ」
十16 4 図 (略)、式部は少しも高ぶりたる風なく、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

たかまつ「高松」(地名) 2 高松
十一18 図 高松

十一20 2 図 瀬戸内海の沿岸には高松・多度津・高濱・尾道・宇品等の港多く、(略)。

たかむ「高」(下二) 2 高む「ムル」
十二98 1 図 國民各自の行爲をつゝし、しめ、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、(略)。

十二101 10 図 我等五千萬の同胞は常に大帝國の國民たるを思ひ、一言・一行の間にも、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

タガヤサン(名) 1 タガヤサン
十二12 9 図 床柱 なげきて語る、

「熱き國 しげる林」 生ひ立ちし我、タガヤサン、(略)。

たがやす「耕」(四・五) 4 タガヤス

耕ス 耕す『サ・シー・ス』

七26 (略)、農夫ガ田ヲタガヤシ、

畠ヲツクルノモ、皆手デスルノデス。

十83 田を耕させたり、荷車を引かせたり、(略)、農家では牛を色々の

勞働に使役する。

十一129 又國家全體カライヘバ、農

夫ノ田畑ヲ耕シ、大工ノ家屋ヲ作り、

(略)等ハ皆分業ニ外ナラヌノデア

ル。

十一88 (略) 蚯蚓は(略)、多量の土を吞込みては之を地上の穴の口に出す。かくて(略)、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。農夫の田畑を耕すに似たらずや。

たから「宝」(名) 1 寶

十二22 (略) 神代より承けし寶をまもりにて、治め來にけり、日の本つ國。

たから「高」(形状) 1 高らか

十二29 (略) 勝商城に向ひ、高らかに號んで曰く、「諸君、憂ふることなかれ。(略) 國の解けんは二三日の内にあらん。」と。

たからもの「宝物」(名) 3 タカラモノ

一38 (略) クルマニツンダ タカラモノ、イヌガヒキダス エンヤラヤ。

二524 オヂイサンガソコヲホルト、(略)、オカネヤラ、キモノヤラ、ソノホカ タカラモノ ガタクサンデマシタ。

二56 ツク タビニ、ウスノ中

カラ オカネヤキモノヤ、イロイ

ロナ タカラモノ ガデマシタ。

たから「集」(五) 1 たかる『一ツ』

八21 (略) 又若し外の雀が見つれると、よつてたかつていぢめるので、(略)。

たき「炊」(一)にたき

たき「滝」(名) 11 タキ たき 瀧

ゆうらみのたき・きりふりのたき・けごんのたき・しじゅうはちだき・ぬのびきのたき・ようろうのたき

五97 (略) 「見」となきたき。

五176 鯉ノタキ上リトイツテ、タキデモ上ルコトガアルサウデス。

五183 (略)、鯉ガタキ上ルヤウニ、ズンズンシユツセサセヨトイフ心デ祝フノデセウ。

六31 所々に白いぬのをさらしたやうなたきや谷川があつて、(略)。

九42 (略)、カ、リテハタキトナリ、ヨドミテハフチトナリ、又切レテハ急流トナリ、(略)。

十一76 (略) 裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、(略)。

十一769 (略) 瀧の後より山路を上ること四町餘、一條の谷川あり、(略)。

十一771 (略) 更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。

十一772 (略) 又一山を越ゆれば、第三の瀧に至る。

十一773 (略) 上るに随つて、瀧はいよ

／＼小、境は益々靜かなり。

十一774 (略) 神戸市に近き布引瀧は雄

雄二瀑あり。美しき瀧にして、眞に白布をさらせるが如し。

たき「薪」(名) 6 たき 薪

四33 村の人人が、毎日やさいやすみやたきを馬やくるまにつんで、賣りにきます。

十87 (略) 炭・薪・材木等の森林より出づることは何人も知れる所なり。

十一80 (略) 此の間に鵜を引上げて吞みたる魚を吐かせ、(略)、又かゞり火に薪を添ふるなど、(略)。

十一106 (略)、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭り、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十一107 (略) オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、(略)。

十一108 (略)、朝鮮では「米のなのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ意味のことわざがある。

たき「瀧口」(名) 1 瀧口

十一765 (略) 裏見瀧は(略)、先年大風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝を見ること能はず。

たき「瀧壺」(名) 1 瀧つぼ

十一762 (略)、其の瀧つぼの深さは幾十尺なるを知らず。

たきのぼり「滝登」(名) 1 タキ上リ

五176 鯉ノタキ上リトイツテ、タキ

デモ上ルコトガアルサウデス。

た「炊」(五) 3 タク たく『一ツ』

四32 (略) 「それではごはんにたく

麦と、(略)にする麦は同じです、(略)。

四33 (略) 「ごはんにたく麦は大麥です。」

六27 (略) メシヲタク釜モ鐵デス。

た「焚」(四・五) 5 タク たく『一・一ツ』

二253 オバアサンハ火ヲタイテ、ユフハンノシタクヲシテキマス。

七117 (略) 松を火にたくゐるりのそばで、夜はよもやま話がはずむ。

十一82 (略) かゞり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。

十一107 床下に土石を盛り、數條のみぞを造つて、一方の口から火をたいて室内を温める。

十一107 (略) オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、(略)。

た「抱」(五) 1 ダク 『一・一ツ』

二37 (略) 「アカンボノトキニ、ダイテチチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。

たぐいなし「類無」(形) 1 たぐひなし『一・カリ』

八37 (略)、その御式の盛なること前古たぐひなかりきと申す。

たくさん「沢山」(副) 56 タクサン
たくさん

二184 (略) 木ノハガトンデキ
マス。(略) タクサンチツタトコ

ロハ、ニハノ土モミエマセン。
二333 (略) タヤハタケヲタク

サンモツテキタ人ガアリマシ
タ。

二447 ココニハウメノ木ガタ
クサンアリマス。

二461 (略) ツボミガタクサン
ツイテキマス。

二525 (略) ソノホカタカラモノ
ガタクサンデマシタ。

二624 (略) タクサンノゴホウビ
ヲクダサイマシタ。

二226 サクラノ木ハ、ヨソノ
クニニハ、コンナニタクサンア
リマセン。

三44 (略) ワタクシドモノ
ナカマガタクサンサイテキマ
ス。

三84 (略) 「ボクハモウコンナニ
タクサンツミマシタ。」

三88 (略) 「スミレハタクサンナイ
カラ、マダソナニツメマセ
ン。」

三301 フデノデク、(略) ガルカ
ゴナド、竹デ作ツタモノガタ
クサンアリマス。

三313 竹ノツカヒミチハマダマ
ダタクサンアリマス。

三315 アメガフリツツイテ、田
ノ水ガタクサンニナリマシタ。

三592 (略) 舟がたくさんおき
へ出てゐます。

三613 あそこにはうつくしいか
ひや小石がたくさんあります。

三616 (略) 貝をこんなにたくさ
んいただきました。

三641 (略) 「どこでこんなにたく
さんおひろひになりました。」

四31 (略) 大きな店がたくさ
んあります。

四106 今年ハエダガラレルホ
ドタクサンナツテキマス。

四158 (略) たくさんえものが
ありました。

四624 (略) 雪がたくさんつも
つて、どこを見てもまっ白で
す。

四692 (略) 「(略) モツトタクサン
ノンダラ、早くナホリマセウ。」

五122 (略) 人や馬や車がたくさん
通つてゐるのです。

五156 大キナコヒガタクサンアツマ
ツテオヨイデキルノハ、(略)。

五366 (略) こをたくさん集めて来
いとおほせになりました。

五375 すぐは(略) たくさんの子
どもをもらつて、つれて来ました。

五694 オ宮ニハエマガタクサンカケ
テアル。

五718 (略) 角ノアルケモノモタクサン

知ツテキルガ、(略)。

六217 それから象をおろして、その
代りに石をたくさんつみました。

六255 (略) 金ヤギンハ、(略) ドチラ
モタクサンアリマセンカラ、ネダン
モ高ウゴザイマス。

六257 (略) 銅ハ(略) 金ヤ銀ヨリモ
タクサンアリマスカラ、(略)。

六267 (略) 「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、(略)。

六268 (略) 「(略) ソレヨリモツトタ
クサンアツテ、モツト役ニ立ツモノ
ハ鐵デセウ。

六397 (略) 清水寺をはじめ、たくさん
のお寺やお宮へさんけいした。

六711 (略) 書きそこなつて、紙を
たくさんほごにしたりするやうな、
(略)。

六736 こんなにたくさん墨を附けた
のも、その子供たちでございます。

六773 高イホバシラヤ、ヒクイホバ
シラガタクサン重リ合ツテ、マルデ
林ノヤウニ見エル。

七142 (略) 卸賣といふのは品物をたく
さん持つてゐて、小賣店へ大口に賣
渡すことで、(略)。

七154 (略) しかし卸賣商人で、問屋を
してゐる場合がたくさんあります。

七219 (略) 「あなたはその美しい花
だけでたくさんでございます。あな
たほどの大きな花ぶさは見たことが
ございませぬ。

七311 大きな蠶がたくさんで桑の葉
を食ふ時には、(略)。

七469 (略) 「(略) コノタクサンノ障
子ハ皆僕ラノ仲間デハツテアルデハ
ナイカ。

七656 けれども水をたくさん飲みず
ぎたり、(略) するのはどくである。

七676 (略) 来年はたくさんなら
せて、たくさん差上げたいと思つて
居ります。

七677 (略) 来年はたくさんなら
せて、たくさん差上げたいと思つて
居ります。

七683 (略) 見事な桃をたくさんおおく
り下さいまして、有りがたう存じま
す。

七727 蟲類モタクサン居ル。

七728 中デオモシロイノハサンゴ
デ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ
形ヲシテキル。

七754 海草ニモ色々アル。(略)。コ
ノ他マダタクサンアルガ、イヅレモ
ヨイ肥料ニナル。

八191 (略) 畑もたくさんもつて、
牛もたくさんかひ、(略)。

八192 (略) 畑もたくさんもつて、
牛もたくさんかひ、(略)。

九103 (略) 一ツノ莖ノ上ニ、タク
サンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキル
ノデアル。

十187 たくさんさんの本を読んだ學問の
深い人でも、(略)。

十20 〆 (略)、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、(略)。
 十28 〆 唯あぜの様の木に雀がたくさん集つてゐて、(略)。
 十86 〆 豚は(略)。(略)。(略)。(略)、琉球ではたくさん飼つて居つた。
 たくましー [逞] (形) 1 たくましー [一シキ]
 十一26 〆 筋骨たくましき若者が體を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましきよ。
 たくましー [逞] (形) 2 タクマシイ
 たくましー [一イ]
 五73 〆 タクマシイ大キナカリ犬が四五匹デオツカケテ來マス。
 五77 〆 見ると丈の高い、たくましい男である。
 たくみ [工] (人名) 5 工ひだのたくみ
 八29 〆 幾度カマハリタレドモ、入ルコトヲ得ズ、クチヲシクモ工ノ笑聲ヲ後ニシテ歸レリ。
 八29 〆 數日ノ後、川成ヨリ「見セ申シ度キ繪出來タリ。御出アリタシ。」ト、エノモトニイヒ來レリ。
 八29 〆 工、川成ヲ音ナヘバ、「イザ、コナタヘ。」トイフ。
 八30 〆 工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、(略)。
 八30 〆 工恐ルく近ヨリテ見レバ、(略)。

たくみ [巧] (形状) 2 たくみ
 十一80 〆 鶴匠は一人にて十二羽の鶴を使ひ、(略)、右往左思ひく浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。
 十一87 〆 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは醸造の業と建築の業とをかねたりといはんか。
 たくる 〆 ひつたくる
 たぐる [手繰] (五) 1 たぐる [一ツ]
 十66 〆 ボートはつなをたぐつて、又も鯨に近寄り、今度は銃を以て破裂矢を打込む。
 たくわー [蓄] (下二) 3 貯フ 貯ふ [一フルー] (一)
 九76 〆 金銭ヲ安全ニ貯フルニハ郵便貯金トナスヲヨシトス。
 九78 〆 (略) 成ルベク無用ノ入費ヲハブキテ、一錢・二錢ツツニテモ貯ヘンコトヲ心ガクベシ。
 十一6 〆 働蜂中には(略)。又之を受取りて貯ふる貯蓄掛あり。
 たぐん [他群] (名) 2 他群
 十一8 〆 同群中の蜂は極めて親密に生活すれども、他群の蜂は甚だしく之を敵視し、(略)。
 十一8 〆 (略)、他群の蜂、我が群中に入り來れば、直ちに之をさし殺す。
 たけ [竹] (課名) 2 タケ
 三目 十 タケ

三27 〆 十 タケ
 たけ [丈] (名) 2 タケ 丈ひのたけ
 三58 〆 私ガキヨネンマデキテキタワタイレハ、ユキモ タケ
 モミジカクナツテ、(略)。
 五77 〆 見ると丈の高い、たくましい男である。
 たけ [竹] (名) 21 タケ 竹ひふきだけ
 一41 〆 タケニスズメ
 三28 〆 ダンダンノビルト、タケノカハガオチテ、リツパナ竹ニナリマス。
 三29 〆 ダンダンノビルト、タケノカハガオチテ、リツパナ竹ニナリマス。
 三29 〆 アタラシイ竹ハアラアヲトシテ、マコトニウツクシイモノデス。
 三29 〆 竹ハイロイロナヤクニタチマス。
 三29 〆 タケノカハハモノヲツツムノニツカハレマス。
 三29 〆 フデノデク、モノサシフエツエザルカゴナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。
 三30 〆 竹馬モ竹デコシラヘ、(略)。
 三30 〆 (略)、タコノホネモ竹デ作リマス。
 三30 〆 ソノホカ竹ノスグレモ

アリ、竹ノカキネモアリマス。
 三30 〆 (略)、竹ノカキネモアリマス。
 三30 〆 タルヤヲケニモ、竹ノタガガカケテアリマス。
 三31 〆 モノホシザヲニモ、コクキノサヲニモ、センドウガ舟ヲヤルサヲニモ、竹ヲツカヒマス。
 三31 〆 竹ノツカヒミチハマダマダタクサンアリマス。
 四63 〆 やぶの竹は弓のやうにまがつて、(略)。
 六66 〆 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。
 七35 〆 塗物はくりたる木又は組合せたる木・竹又紙などにうるしを塗りてつくる。
 八72 〆 「猫デナイシヨウコニ竹ヲ書イテオキ。」トイフコトアリ。
 十7 〆 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキル。
 十一38 〆 竹にも直徑一尺以上のものこれあり、是にて竹筏といふ臺灣特有の船を造り候。
 十一39 〆 又竹を原料として竹紙を製造致居候。
 たけ [岳] 〆 ええほしだけ・きしまだけ・こまがたけ・たかだけ・とねだけ・なかだけ・ねこだけ
 だけ (副助) 19 ダケ だけ

三183 サヘヅルダケサヘヅルト、イマニマタオリテキマセウ。
 四36 皆サンノ知ツテキルダケイツテゴランナサイ。
 四793 所らをとんでゐる鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの名人でございます。
 五524 花ハタ顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。
 五793 鹿も四つ足なら馬も四つ足、たゞつめがわれてゐるとゐないだけのちがひだ。
 六648 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。
 七219 略、私の豆はたべられませんが。まことにおはづかしい次第です。ゑんどう「あなたはその美しい花だけでたくさんでございます。」
 七475 君ラハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕ラハ裏表トモニ使ハレル。
 七516 手紙は四匁までは三錢ですが、四匁より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。
 七519 手紙は四匁より重いのに、差出人が三錢しかはつておきません。つまり三錢だけが不足です。
 七521 不足の時には、その不足の倍だけを受取人の方で拂はなければ

ならないのです。」
 七774 根モ（略）養分ヲスヒ取ルタメノモノデハナク、タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデアル。
 八568 駝鳥ははぎも首も長く、くちばしだけが短い。
 九1210 其の節別に老人向きの紺がすり上物十反だけ御見立の上、二口とも（略）御送り相成度願上候。
 九702 葉の散果てた冬木立に吹きすさむ木枯の風は、音を聞くだけでも物すごい。
 九844 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、（略）もはや熊吉と愛作の二人だけの競走となつた。
 十38 其の工事の總費用は（略）一里の長さだけ十圓金貨を並べたるに等しいといふ。
 十374 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。
 十845 東京市だけでも、一年にほふる牛は數千頭にも上るといふことである。
 たけうま「竹馬」（名）1 竹馬
 三301 竹馬 モ竹デコシラへ、（略）。
 たけお 凸わたたけお
 たけおさん「人名」3 タケヲサン
 一492 サア、タケヲサンカラオトビナサイ。

二46 塔ケヲサンニハドレヲアゲマセウ。」
 二244 「ドコダラウ、アア、アノ木ノ下ニタケヲサンガキマス。」
 たけがり「茸狩」（課名）2 たけがり
 八目4 第三 たけがり
 八81 第三 たけがり
 たけがり「茸狩」（名）1 たけがり
 八97 いでや、あの岩の小かげに、皆うちよりてえもの數へん。たけがりのいさをくらべん。
 たけし「猛」（形）1 たけし「一キ」
 九63 田村麻呂は（略）、怒る時はたけき獸も恐れたり。
 たけだかつより「武田勝頼」（人名）1 武田勝頼
 十二268 天正三年五月奥平信昌（略）長篠城を守る。武田勝頼大軍を率ゐて來り攻むれども、（略）。
 たけだしんげん「武田信玄」（人名）2 武田信玄 武田信玄
 六553 その相手は武田信玄で、これも謙信におとらないいくさの上手であつた。
 六583 武田信玄の國は山國で、塩がない。
 たけのこ「竹子」（名）4 タケノコ
 たけのこ
 三278 四五日マヘニアタマヲダシタケノコガ、モウコンナニノビテ、（略）。

三295 竹ハイロイロナヤクニタチマス。ダイ一タケノコガタペラレマス。
 五207 それからそこに切つてあるたけのこをおなべの中へ入れておくれ。」
 五211 略、おはなはざるの中の花のこをなべの中へ入れました。
 たけひらちよう ひとうきようこうじま ちくたけひらちよう
 たける ひやまとたけるのみこと
 たこ「風」（名）5 タコ たこひえだこ・じだこ
 一21 タココマ
 二306 タコタコアガレ。
 二306 タコタコアガレ。
 三302 略、タコノホネモ竹デ作リマス。
 九665 略、たこの空高く上る、是皆人の自然の風を利用したるなり。
 たこ「蛸」（名）3 タコ
 四381 アル日タヒヒラメサバ
 タコナドガオヨイデキルト、（略）。
 七712 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナドガサンデキル。
 七715 略、タコヤイカノアシヲソロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。
 たこく「他國」（名）1 他國
 十二1015 他國に行きて、（略）等を見れば、（略）、早くも其の國民の品格の知らるゝものなり。

たこくじん「他國人」(名) 1 他國人

十二982(國) (略)、殊に他國人の注意を引くものは社會の公德及び國民の度量なりとす。

たこのうた「課名」2 タコノウタ

二目3 十三 タコノウタ

二304 十三 タコノウタ

たし「足」ひようたし

たし(助動) 19 タシ たし 度シ 度

《タキ・タク・タシ》

七76(國) コノ度ノ合戦ニハ、(略)

ト思ヘバ、今一度天顔ヲラガミテマキリタシ。」

八282(國) 「我、此ノゴロ小サキ堂ヲ建テタリ。四方ノカベニ繪ヲカキ

テタマハリタシ。」

八298(國) 「見セ申シ度キ繪出來タリ。

八298(國) 「見セ申シ度キ繪出來タリ。

八298(國) 「見セ申シ度キ繪出來タリ。御出アリタシ。」

八702(國) 我等一同申し合せて、今日より働くことを止むべければ、左様心得られたし。」

九129(國) (略)、此の地方には賣行よろしかるべしと存ぜられ候間、なほ三十反御送り下され度、(略)。

九132(國) (略)、二口とも本月十五日までに御送り相成度願上候。

九221(國) 如何ばかりの思にて、此の手紙をしたゝめしか、よく御察しこれあり度候。」

九723(國) (略)、家族一同無事に御座候間、御安心下され度候。

十二268(國) (略) 御入營の上は、品行方正、職務に忠實にして、隊中の模範となられ度、(略)。

十二269(國) (略)、私も明年は是非とも御仲間入致し度と今より相樂しみ居り候間、(略)。

十二271(國) (略)、時々營内の様子御報知下されたく願上候。

十二601(國) 先は近狀御報知申上度かくの如くに御座候。

十二4010(國) (略) 臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候間、御覽下され度候。

十二623(國) (略)、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)。

十二629(國) (略)、午後三時西方寺に於て法會相當度候間、(略)。

十二637(國) (略)、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

十二641(國) (略)、御來會下され候はば、(略) 高野義太郎宛御一報下され度候。

十二1141(國) 「不作の後なれば、成るべく經費を節約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」

十二696(國) 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

座候間、御安心下され度候。

十二268(國) (略) 御入營の上は、品行方正、職務に忠實にして、隊中の模範となられ度、(略)。

十二269(國) (略)、私も明年は是非とも御仲間入致し度と今より相樂しみ居り候間、(略)。

十二271(國) (略)、時々營内の様子御報知下されたく願上候。

十二601(國) 先は近狀御報知申上度かくの如くに御座候。

十二4010(國) (略) 臺灣寫眞帖一部郵便にて差出候間、御覽下され度候。

十二623(國) (略)、御心安き方々御招待致度と存候間、(略)。

十二629(國) (略)、午後三時西方寺に於て法會相當度候間、(略)。

十二637(國) (略)、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

十二641(國) (略)、御來會下され候はば、(略) 高野義太郎宛御一報下され度候。

十二1141(國) 「不作の後なれば、成るべく經費を節約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」

十二696(國) 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

たし「ひさしだしにん・ときだしまきえ・ひきだし

たし・う「足得」(下二) 1 足し得

《一ウル》

十二2892(國) (略)、諸道具の置場處を一定し、(略)、急ぎの場合にも混雑なく、暗き時にも手探にて用を足し得る様に、極りよく整へ置くは主婦たる者の務なり。

たしか「確」(形状) 1 たしか

十二379(國) りつばな人の手紙よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。

たしかなほしょう「課名」2 たしかな保證

十二1012 第十一課 たしかな保證

十二343 第十一課 たしかな保證

たしちろう「ひやまもとやたしちろう

たじつ「他日」(名) 1 他日

十二412(國) 軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、ななくいたそり養はん。」

たじまのうがくし「田島農學士」(人名)

1 田島農學士

十二904(國) (略)、農商務省の技師田島農學士の耕地整理に關する講話これあり候。

たじゅう「他獸」(名) 1 他獸

八748(國) 虎モ猫モ(略)、シヅカニ他獸ニ近ヨリ、急ニ飛ビツキテ之ヲ捕フ。

たしょう「多少」(名) 1 多少

十二685(國) 人生の長短は(略)、年齒の多少を以て量るべからず。

たしょう「多少」(副) 4 多少

九746(國) 田畑の作物には多少の損害これあり候へども、其の他にはかく別の異狀これなく、(略)。

十二598(國) 入營當時は友人も少く、生活も一變致し候事とて、多少不自由を感じ候へども、(略)。

十二654 季節ニ依ツテ、食物ノ選ビ方ニ多少ノ注意ヲ要スル。

十二923(國) 其の上不時の消費の爲、多少の準備を爲し置くを必要とす。

たす「足」(五) 1 たす 《一シ》

ひかきたす

六406(國) 明後日はこゝを立つて、道で用をたして、この次の水曜日までにはかへる。

だす「出」(五) 30 ダス 出ス 出ス

《一サ・シ・ス・セ》ひいざりだす

・うごきだす・うたひだす・うちだす

・うみだす・うりだす・おだしなさる

・おだしもうしあげる・おだす・おも

いだす・かいだす・かくだす・こぎだ

す・さしだす・せいだす・つれだす・

とびだす・なきだす・なげだす・なり

だす・のりだす・はきだす・はみだす

・ひきだす・ふきだす・みつくだす・

むきだす・もちだす・よびだす・わき

だす

十二265(國) デンデンムシムシ ツノ

ダセ ヤリダセ。

十二266(國) デンデンムシムシ ツノ

ダセ ヤリダセ。

十二292(國) オハナハオキクヲザシキ

ヘトホシテ、オチヤトオクワシ
ヲダシマシタ。

三二七 四五日マヘニアタマヲ
ダシタケノコガ、モウコンナ
ニノビテ、(略)。

三二八 くらいけむりを出して走
つていくきせんもあります。

四一三 あたまを雲の上に出
し、四方の山を見おろして、
(略)、ふじは日本一の山。

四二四 (略) フデヲ見セテクダサ
イ。オマツハ太イフデト細イ
フデヲ出シテ、「コノ太イノ

ガ五センチ、細イノハ三センチ
五リンデス。」

四二六 オトミハマルクキツタ白
イ紙ヲ三ツ出シテ、「三十センチ
アゲマスカラ、コレデトツテク
ダサイ。」

五三三 すぎるは(略)、「天子様の
おほせだから、子を出すやうに。」
と、たくさんの子どもをもらつて、
つれて来ました。

五三六 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
出シマシタガ、(略)。

五三九 (略) 後ニハ石ト金ヲウチ合
セテ出スヤウニナリマシタ。

六二九 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、
時々青イ物ヲ出シマセウ。ソレガヤ
ハリサビデス。

六三〇 一本三せんづつのを二本買つ
て、十せん銀貨を出したから、(略)。

六四五 父はしかたなしに又よそへは
うこうに出しました。

六七五 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シ
ナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガア
ル。

七二七 ドンナガクキガアツテモ、手
ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出ス
コトハ出来マスマイ。

七二八 この長い糸を出す蟲が百匹も
なければ、(略) 絹糸は出来ない。

七三二 (略)、口から美しい糸を出し
て、からだを包む。

七三三 そのくだから出すねぼつたし
るが外へ出ると、すぐにかわいて糸
になるのである。

七四〇 妻は立つて、鏡箱の中から十
兩の金を出して、(略)。

七四二 (略)、今日このお金を出し
ましたのでございます。

七五三 今では切手をはつて出しさ
へすれば、どんな遠い所へもとどき
ますから、大そう便利です。」

八二六 其の後は(略)、下男や下女
は早くから畑へ出して働かせ、(略)。

九二二 總べて上官の命令を守つ
て、自分の職務に精を出すのが第一
だ。

九二八 それは氏子の五箇村から子供
の騎手を一人づつ出して、競馬をさ
せて、(略)。

十三四 外國の或商會で新聞紙に店員
入用の廣告を出した。

十一四八 アラビヤ人はこゝに始めて
馬に全速力を出させて、雲を霞と逃
げのびた。

十一六六 (略)、又汁氣ノナイモノ
次ニハ汁物ヲ出シ、アマイ物ノ後ニ
ハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。

十一一〇 京城地方の婦人がたま／＼
外出する時には、うちかけの様なも
のをかぶつて、目ばかり出してゐる。

十二一三 (略)、此ノ脊骨ノ左右カラ
肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行ク。

たすう「多数」(名) 3 多数

八九〇 多数ノ部下ヲ死ナセタ上、
セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ
残念千萬ダ。」

十一六五 (略)、味ハ人々ノ好ミヲ考
ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選
バナケレバナラス。

十二六八 一定の季節に最も多數の
移住を見るは(略) レミングと稱す
る地鼠の一種なり。

たすか「助」(五) 4 たすかる 助
かる「一ツーリ」

六二四 (略)、子どもはあやふい命を
たすかりました。

六五七 信玄はそのすきにあやふい命
をたすかつた。

九八七 愛作さんのりつばな心がけ
で、熊吉の命が助かりました。

十一五八 將軍の愛情と勇氣によつ
て、軍中の花が助かつたので、全軍
一同に歡喜の聲をあげた、(略)。

たすき「褌」(名) 1 タスキ
三三三 ナヘヲウエテキル女ハ、
マルイカサヲカブツテ、アカイ
タスキヲカケテ、(略)。

たすく「助」(下二) 9 タスク 助ク
助く 輔ク 輔く「一ク・一クル・
一ケ・一ケヨ」あいたすく

十七〇 (略)、辛くして難破船に漕
着けたり。父は直ちに勞れ果てたる
水夫を助けて、ボートにうつす。

十一六〇 親に事へ、弟を助け、
家を治めん、妹我は。

十一一〇三 孔明、劉備ニ事へ、(略) 遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天
下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十一一〇三 備崩ズルニ臨ミ、後事
ヲ孔明ニユダセテ、「我が子若シタ
スクベクンバ、之ヲタスケヨ。」

十一一〇三 「我が子若シタスクベ
クンバ、之ヲタスケヨ。」

十一一〇四 孔明是ヨリ幼主ヲ輔ケ、
益、心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ
盡シテ變ラズ。

十二三三 凡そ婦人の道は夫を助け
て家政を治め、子に教へて家名をあ
げしむるに在り。

十二九五 景公歸りて群臣に告げ
て曰く「魯人は君子の道を以て其の
君を輔くるに、我が臣の行ふ所は禮
に反す。

十二一〇四 公吏・議員等(略)、如何
に其の職務に忠實なるも、一般人民

の之を助くるなくんば、自治團體の圓滿なる發達は得て望むべからず。

たすけ「助」(名) 2 助 援

十一16 〇 (略)、越王勾踐(略)、范蠡といふ無二の忠臣の助を得て、遂に呉を滅して(略)。

十二28 〇 (略)、勝商は(略)、走りて岡崎に到り、家康に見えて援を求む。

たすけたてまつる「助奉」(四) 1 タ

スケ奉ル「一リ」

八54 〇 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、(略)。

たすける「助」(下) 3 たすける

助ける「一ケ一ケル」

六51 〇 秀吉は(略)朝鮮せいばつをはじめました。支那からは大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、もとより強い日本兵にはかなひません。

九86 〇 熊吉の落馬したのかまはず、馬をかせせたら、勝も勝、大勝であつたのに、人の命にはかへられないと、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

十一56 〇 (略)少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。(略)。どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。

たすさう「携」(下二) 1 たすさふ

「一へ」

十一51 〇 手塚、首をたづさへて、大

將義仲の前行き、「光盛、曲者の首取つて候。

たすぬ「尋」(下二) 7 タツヌ たづぬ 尋ヌ 尋ぬ「一ネ」

七90 〇 中佐ハ心配ゲニ、「ヨシ、タツネ來ン。」ト、タマー人クマナク船内ヲタツネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

八86 〇 手かごを持ちて、いざ、裏山にきのこたづねん。山深く行きてたづねん。

八87 〇 山深く行きてたづねん。

九88 〇 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ツ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。

十103 〇 名所・舊蹟ヲアマネク尋ネンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感アルベシ。

十二28 〇 黒き影は(略)、ひらりとばかり身を水中に投入れたり。繩の鈴はしきりに鳴る。敵の衛兵相呼んで尋ねんとするに、(略)。

十二68 〇 (略)かもしかの一種は、冬日河水盡ク氷結するに至れば、大群をなし、水を尋ねて低地に下り、(略)。

たすねいだし「尋出」(四) 1 尋ね出す「一シ」

十一54 〇 (略)「(略)、義仲二歳なりしを、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。

たすねく「尋來」(カ変) 1 タツネ來

「一コ」

七90 〇 中佐ハ心配ゲニ、「ヨシ、タツネ來ン。」ト、タマー人クマナク船内ヲタツネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

たすねまわる「尋回」(四・五) 3 タツネマハル たづねまはる「一ツ一ツ一レ」

五37 〇 すぎるは(略)、あちらこちらをたづねまはつて、(略)、たくさんの子どもをもらつて、つれて來ました。

七91 〇 サレド杉野ハ見アトラズ。「今一度。」ト、中佐ハ三タビタツネマハレリ。

八26 〇 其の後は(略)、自分はどうかして白雀を見つけようと、たづねまはりました。

たすねる「尋」(下二) 12 タツネル たづねる 尋ねる「一ネ一ネル」

四67 〇 三郎ハ(略)、母ノソバヘ來テ、「(略)。苦シイコトハゴザイマセンカ。」トイツテタツネマス。

四78 〇 (略)よしつねはけらいにむかつて、「(略)。だれか上手なものはないか。」とたづねました。

五76 〇 この時べんけいは火の明りをたよりにたづねて行つて、一人のかりうどをつれて來た。

五77 〇

よしつねはまづたづねた。「こゝからしろの方へ下りることが出来るか。」

六46 〇 信長は誰かとたづねますと、木下藤吉郎秀吉と答へました。

七31 〇 食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。

七43 〇 (略)、一豊の馬ははたして信長の目にとまつて、「(略)。誰の馬か。」とたづねました。

八22 〇 (略)、若しや白雀が居はしまいかと、(略)、野原の方までも行つてたづねましたが、影も形も見えませんでした。

八26 〇 一週間程たづねたが、白雀は見つかりませんでした。

八27 〇 (略)、前の友だちが來て、「どうだ、白雀は見つかったか。」と、笑ひながらたづねました。

十34 〇 或人が主人に向つて、(略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十一58 〇 聲を限りに「ビエールよ、ビエールよ。」と呼びながら、方々を尋ねて、やうくさがし當てたが、(略)。

た「多」(副) 1 多々

十一101 〇 (略)、諸種の經營追々成功致候へども、今後尚着手すべき事は多々これ有候。

ただ「徒」(名) 2 たゞ

七53 〇 (略)、書物や寫眞の類は三

十奴まで二銭で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

九七三(國) (略) 水音はげしく相成り、犬のなき聲もたゞならずと思ふ間もなく、隣村にて早がねを打出し候。

ただ「唯」(副) 26 タゞ ただ たゞ 唯

五七八(國) 「鹿も四つ足なら馬も四つ足、たゞつめがわれてゐるとゐないだけのちがひだ。

七七七(根) (略) 養分ヲスヒ取ルタメノモノデハナク、タゞハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデアル。

七九〇(國) 中佐ハ(略)、タゞ一人クマナク船内ヲタヅネタレドモ、杉野ノスガタナシ。

八二六(其) 其の中に雀のことはいつかわすれて、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、(略)。

八六九(國) 「我等はつねにいそがしく働けるに、汝はただ坐して食ふのみにて、少しも我等に報ゆる所なし。

八七二(國) 「諸君は知らずや、我はたゞ坐して食ふ者にあらず。

九三〇(蒸) 蒸氣機關は(略)、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

九四五(國) アリは(略)、話相手もなく、たゞ父にあはんを樂みに一日々々と旅行をつゞけたり。

九五一〇(國) 古風ゆかしき我が國のかんむり・烏帽子今唯 祭の服に残りたり。

一七五 櫻や梅ノ葉ハ唯一スデノ太イ脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ

細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

一四九(蘭) 蘭ハ水草ナリ。葉ナクシテ唯莖アリ。

一四三(國) (略)、此ノ時ハナホ世人ノ注目スル所トナラズ、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。

一五〇(國) 「唯一人ふみ止つて戦ひ給ふは誰ぞ。

一五〇(國) 「思ふ様あれば、名乗るまじ。唯首を取つて、大將の見参に入れよ。

一八五(其) 其の家は(略)、床もなく、天井もなし。唯かつらなどにて、かやを結びて壁に代へ、又かやを並べて屋根となせり。

一八八(國) 君の御供に仕へしは 藤房・李房唯二人。

一五八(雌) 雌蜂は女王ともいひ、唯一匹にして、雄蜂は二三百匹、餘は皆働蜂なり。

一七二(雄) 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、何等の労働をもなさざるを以て、(略)。

一二五(二) 二物相待つに非ざれば用を爲し難きを「車の兩輪の如し。」

といへども、四國の猫車、臺灣の掠車の如きは唯一輪なり。

一四二(國) 「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。

一六八(國) (略)、功業を成し、公益を廣むるも、將又無爲にして一生を終ふるも、唯此の二十萬時間を利用するとせざるとにあり。

一七四(國) (略)、畫師それより後の二枚には畫がかず、唯槍一本を畫がきて、東國へ出立せり。

一九二(國) 之に反して、同様なる賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。

一六〇(國) (略) 巡査の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雜を生ずることなし。

一八三(人) 人々は唯神曲に心を奪はれて、妙音の外には何物も見えも聞えもしない。

一八五(情) かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。一同は唯神の仕業とのみ思つた。

ただ「唯」(接) 4 タゞ たゞ 唯

六四(略)、おきやうなどは何べんをしへてもおぼえません。たゞ人がいくさのはなしをすると、耳をすまして聞いてゐました。

八七五(略)、ヒゲノ太キマデ、相似タル所甚ダ多シ。タゞ猫ノ毛色ニハ黒・白・三毛ナド様々アレド、虎

ハ一樣ナリ。

九四〇(國) (略)、先以て不幸中の幸と喜び居り候。唯氣の毒なるは隣村に御座候。

一八七 廣い田の面は(略)、人影の見えないのみか、かゝしの骨も残つてゐない。唯あぜの木の木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。

ただ「多」(形状) 2 多大

一八二(其) 其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へたるを以て、(略)。

一七三(我) 我は急に其の前路をさへぎりにて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、(略)。

ただいま「只今」(名) 1 唯今

一三七(國) (略)、打狗の築港も唯今盛に工事中に御座候。

ただ「一」(下二) 3 たゞ 稱ふ

一三九(國) 昨日の敵は今日の友、語ることはもうとけて、我はたゞへつ、かの防備。

一三九(國) 我はたゞへつ、かの防備。かれは稱へつ、我が武勇。

一四六(國) (略)、禮儀は早く唐人も 稱へし其の名君子國。

ただ「戦」(名) 3 戦ひかいけい

さんなたたかい・かわなかじまのたたかい・すみよしのたたかい・ほうとうのたたかい・やしまのたたかい・りょ

うようのたたかい

七19〔図〕 コノ度ノ戦、敵ハ大ゼイ

ニシテ、味方ハ小ゼイナリ。

八887 戦ハマス／＼ハゲシイ。

十二98 此の兩日の戦に、敵艦の

大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈

せられ、或は捕獲せられて、(略)。

たたかいたまう〔戦給〕(四)1 戦ひ

給ふ「一フ」

十503〔図〕 「唯一人ふみ止つて戦ひ

給ふは誰ぞ。

たたかう〔戦〕(四・五)10 タ、カフ

戦フ 戦ふ 闘ふ「一ツ・一ハ・一ヒ

一フ・一へ」

五697 又日本ヘイガロシヤヘイトタ

、カツテキルエモアル。

六494 後には秀吉の馬じるしを見る

と、敵は戦はないでにげて行くやう

になりました。

七56 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居

ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。

七86 正行ハ(略)、花々シク戦

ヒテ、一族ノ人々トモニ戦死ヲト

ゲタリ。

十一33 其ノ大ナルモノハ(略)、

時ニ戦艦ト合同シテ敵ノ主力ト戦フ

コトアリ。

十一414 吉野の朝の頃、赤松光範、

楠木正儀と攝津の住吉に戦ひて、散

々に撃破られたり。

十一105 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再

ビ戦ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。

十二26 武田勝頼大軍を率ゐて来

り攻むれども、城兵善く戦ひて抜く

こと能はず、(略)。

十二30 昔調伊企は新羅と戦ひ

て新羅の將に捕へらる。

十二394 兩虎共に闘へば、勢

共に生さず。」といへり。

たたきおとす〔叩落〕(五)1 たたき

おとす「一シ」

四643 みちをとほる人は、あし

だのはにはさまつた雪をた

たきおとしながらあるいてゐま

す。

たたく〔叩〕(五)5 タタク たたく

たたく「一イ」

三163 ミテキタ人ハミンナ一

ドニテヲタイテホメマシタ。

四828 をかの方では(略)、みん

なが馬のくらをたたいてよ

ろこびました。

四882 海の方でもふなばたを

たたいて、一どにどつとほめま

した。

五31 (略)、大ぜいの神さまがたは

手をたたいて、お笑ひになりました。

九859 愛作方の人々は愛作の肩をた

たいて、「感心だ／＼、えらい子だ。

たださとむがもうたださと

ただし〔但〕(副)3 タバシ 但シ

但し

九784 (略) 無用ノ入費ヲハブキ

テ、一錢・二錢ヅツニテモ貯ヘンコ

ト用心ガクベシ。タバシ貯金センガ

爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如

キハ、ホムベキ事ニアラズ。

十二419 内に二箇の噴孔ありて、

(略)を噴出す。但し此の噴孔は時々

其の位置を變じ、其の勢力にも消長

あり。

十二5210 廣告ハ商業發展ノ有力ナ

ル手段ナリ。(略)。但シ不常ナル

手段・廣告ヲ以テ販路ヲ大ナラシメ

ントスルガ如キハ、正直ナル商人ノ

爲スベキ事ニアラズ。

ただし〔正〕(形)5 正シ 正し

「一シ・一シク・一シクレ」ヨリつた

だし

八186 時頼ガ心正シク、ツネニ節

儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲヲサメタル

モ、(略)。

十一706 殊に集會の時間は正しく

守らざるべからず。

十二722 守る所正しければ、心に

憂苦なく、行ふ所直ければ、身常に

自由なり。

十二1121 一には、軍人は禮儀を正

しくすべし。

十二1123 上元帥より下一卒に至る

まで、(略)上下の分別最も正し。

ただす〔正〕(四・五)2 正ス 正す

「一シ」

八903 中佐ハ(略)、形ヲ正シテ、

「今日ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日

ダ。此ノメデタイ日ニ討死スルノハ

軍人ノ面目ダ。

十398 〆たち正していひ出で

ぬ、「此の方面の戦闘に二子を失ひ

給ひつる閣下の心如何にぞ。」と。

たたずむ〔佇〕(四)1 たゝずむ

「ム」

十一431 熊王直ちに河内に行き

て、赤坂城のほとりたゝずむ。

ただただ〔唯唯〕(副)2 唯唯 唯々

十二111 鷹下將卒モ皆此ノ

成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ

極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

十二1176 常に之を忘れず、之を模

範として、唯々一の誠心を以て報國

盡忠の道にいそしまんとす。

ただちに〔直〕(副)22 たぢちに 直

チニ 直ちに

七619 犬は耳ざとき動物にして、

眠れる時も人の足音を聞けば、たゞ

ちに目をさます。

九742 川上の堤防切れ、

(略)、是は大變なりと、直ちに老母

と子供を裏山に立退かせ、(略)。

十五8 紫式部は(略)、兄の書を

讀むを聞きゐて、直ちに之をそらん

じ、(略)。

十七7 是白樂天の詩に、「(略)。」

といふ句あるを思ひ出でて問はせ給

ひしを、清少納言は直ちに其の意を

察し奉りしなり。

十322 (略)、或時旅僧ヨリ此ノ芋

ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜び、直チニ

種羊ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。

十709 父は直ちに勞れ果てたる水夫を助けて、ボートにうつす。

十788 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、一小部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關スルモノナレバ、(略)。

十一79 此の時箱・樽等を適當なる所に置けば、分離したる一群は直ちに其の中に入る。

十一84 他群の蜂、我が群中に入り來れば、直ちに之をさし殺す。

十一431 熊王直ちに河内に行きて、赤坂城のほとりたゝずむ。

十一481 (略)、大將の部下の二三人は直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。

十一704 人を訪問する時は(略)、用事終れば直ちに去るべく、(略)。

十一705 (略)、又人より訪問を受ける時は直ちにでて應接すべし。

十一864 工女ハ(略)、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。

十二55 東郷司令長官は直ちに全軍に出動を命じ、(略)。

十二64 敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、我は之に應ぜず、(略)。

十二289 家康直ちに勝商をして織

田信長に見えて、長篠城の急を告げしむ。

十二292 勝商事急なればとて直ちに引返す。

十二8710 喜劍直ちに泉岳寺に行き、其の墓を拜して曰く、(略)。

十二966 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母たましく機上に在り。直ちに其の機を斷ち、孟子を戒めて曰く、(略)。

十二1006 又獨逸にては圖書館の書籍を借受くるに一枚の葉書にて申し込めば直ちに送り來る。

十二1129 故に下級の者の上官の命を承くるや、直ちに陛下の命令なりと思ふべく、(略)。

ただつね「忠常」(人名)6 ただつね

ひにたんのしろうただつね

四175 あんのししはまつすぐにただつねの方へ下りて來ます。

四176 すれちがつた時に、ただつねは馬からあんのししのせなかへうしろむきにとびうつりました。

四182 ただつねはしつかりとををにぎつて、のつてゐます。

四188 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀六刀さしとほしました。

四194 (略)、ただつねはすぐにそばのたふれてゐた木の上へとびのきました。

四197 よりともはじめ 一どうのもの、ただつねをほめるこゑは、(略)。

ただに「菴」(副)2 タゞニ たゞに

十727 温泉の諸種の病を治するは、たゞに其のふくめる礦物の効のみならず、一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。

十969 東大寺ハ(略)、タゞニ大佛ノ大キサノ驚クベキノミナラズ、大佛殿ノ高サ十五丈、東西長サ二十九丈、眞ニ世界第一ノ木造建築物トス。

たたみ「疊」(名)3 タタミ 疊

三344 イマニアノナヘガノビテ、アライタタミヲシタヤウニナリマセウ。

四368 イネノワラデハ、(略)。

又タタミノトコニシタリ、ヤネヲフイタリシマス。

十421 蘭ハ水草ナリ。(略)。我等ノ家ニ數ケル疊ノ表ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナリ。

たたむ「疊」(四・五)3 タム たむ 疊む 「ム・メ・ム」

五348 又羽ヲタ、ンデ、シヅカニ木ノ葉ノ上ニムツタヤウニシテキルノヲ見ルト、(略)。

十522 若者かと思へば、面におびたゞしきわたゝめり。

十二158 船渠ノ底ト周リ三方ハ石デ疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ

テアル。

ただもと「忠元」(人名)1 忠元ひようごのすけただもと

十一438 忠元あはれみて、己が家に連歸り、(略)。

ただよう「漂」(四・五)2 たゞよふ

十666 六七十尺の大鯨も今は全く息絶えて、水面に横たはる。流れ出る血に紅の波がたゞよふ。

十一237 浪にたゞよふ氷山も、來らば來れ、恐れんや。

たち「立」ひこだち・なかだち・ゆうだち

たち「達」ひおまたち・きみたち・こどもたち・ともだち・わたくしたち

たち「太刀」ひおおだち・こだち

たちあがる「立上」(五)2 立上ル 立上る 「一ツ」

六64 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、後足デ立上ツテ、(略)、スルドイ爪デヒツカキマス。

九198 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、(略)。

たちあるく「立歩」(五)1 立歩く 「一ツ」

十一5010 やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、(略)。

たちからおのみこと「手力男命」(人名)1 手力男のみこと

五36 手力男のみことといふ力のつ

よい神さまが、(略)、すぐに大神のお手をとつて、お出し申し上げました。

たちこむ「立籠」(下二) 1 立ちこむ

「一メ」

九46 図 かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、劔の名を天叢雲劔と申せり。

たちさる「立去」(五) 1 立去る

「一ツ」

九23 10 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、(略)、につこりと笑つて立去つた。

たちどころに「立所」(副) 1 立ちどころに

十一72 図 怠りて持歸らざるものあれば、(略)、強ひて入らんとすれば立ちどころにさし殺す。

たちならぶ「立並」(四・五) 4 たちならぶ 立ちならぶ 立並ぶ 立並ぶ

「一ビ・一ベ・一ン」

五12 5 まもなく町の中へはいると、

兩がはにいへがたちならんで、(略)。

七81 9 図 (略) 港を出て行くと、立ちならんでゐる人家も、段々に小さく見える様になります。

十一83 9 図 鶴なほを引上げて、鶴のふなばたに立並べる時、(略)。

十一84 1 図 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、(略)。

たちのき「立退」(名) 1 立退

九74 4 図 (略)、全家立退の用意致し居り候中、(略)、水は次第に減退致し候。

たちのく「立退」(四) 3 立退く

「一カ・一キ」

九72 8 図 (略)、二十八日は終日大暴風雨にて、川近きあたりにはぼつ

く立退きたる者もこれあり、(略)。

九73 4 図 (略)、此の分ならば、もはや心配には及ぶまじと立退きたる者も引返したる程に御座候。

九74 3 図 (略)、川上の堤防切れ、(略)、是は大變なりと、直ちに老母と子供を裏山に立退かせ、(略)。

たちのぼる「立上」(四) 2 立ちのぼる 立上ル 「一リ・一ル」

六80 8 図 昔仁徳天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲハレミタマヒキ。

十74 7 図 噴出する時は湯氣立ちのぼりて、鳴動の音すまじ。

たちばな「橋」(名) 1 たちばな

七45 4 図 (略)、梅ばち・櫻・たちばなや、三がい松にさゝの雪、(略)、紋の数々かぎりなし。

たちばなちゅうさ「橋中佐」(課名) 4

橋中佐 橋中佐

八目12 第二十四 橋中佐…(一)

八目13 第二十五 橋中佐…(二)

八83 9 第二十四 橋中佐…(一)

八88 5 第二十五 橋中佐…(二)

たちばなちゅうさ「橋中佐」(人名) 3

橋中佐

八84 9 明治三十七八年ノ戰役ニ、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲ

タ軍人ハ大ゼイアツタガ、ソノ中デ

モ海軍ノ廣瀬中佐、陸軍ノ橋中佐ノ

二人ハ軍神トマデイハレタ。

八84 5 橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太子殿下ノ御信任ノアツイ軍人デアツ

タ。

八92 5 橋中佐ハ平生カラ志ノ堅イ、勇氣ニミチタ軍人デ、部下ヲアハレ

ム心モ深カツタ。

たちまち「忽」(副) 12 タチマチ

たちまち 忽チ 忽チ

六56 9 信玄はふいをうたれておどろ

いたが、たちまち陣立をかへて、敵を引受けた。

七89 6 図 爆發ノ聲タチマチ船ゾコニヒク。

七92 6 図 一發ノ砲丸ハタチマチ中佐ノ身ヲ拂ヘリ。

八86 9 中佐ハマツサキニ立ツテ、敵中ヘヲドリコンデ、タチマチ三人ノ敵ヲ斬リ殺シタ。

十97 9 図 (略)、數時間の暴雨にもたちまち大水出で、(略)。

十14 7 図 梁・棟木 つか・ぬき

・柱 何一つ 取外すとも、たちまち一 家え崩れん。」

十一18 5 図 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十一55 5 (略)、山のやうな雪なだれがなだれて来て、むざんや、かの勇ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。

十一84 7 図 其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、(略)、機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

十二66 6 図 (略)、はげしく敵を砲撃せしかば、敵の艦列忽ち亂れ、早くも戦列を離るゝものあり。

十二83 8 變化極りない妙音は、忽ち人の心を百花満開ののどかな春によはせ、(略)。

十二83 9 變化極りない妙音は、(略)、又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈ませる。

だちよう「駝鳥」(名) 3 駝鳥 駝鳥

八56 1 陸上に居る鳥で、はぎの長いのは駝鳥である。

八56 1 駝鳥は鳥類の中で一番大きくて、卵も子供の頭程ある。

八56 7 駝鳥ははぎも首も長くて、くちばしだけが短い。

たちよる「立寄」(四・五) 2 立ちよる 立寄る 「一ツ・一レ」 ムおんたち

よりくださる

六60 5 図 姉のおつるは立ちよつて、

「なんでそんなに泣いてゐる。(略)。」

と、その子のかたに手をかけて、こ

とばやさしくなぐさめる。

十89 6 図 (略)、いかにせん、頼む

かげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の

下露。

た・つ「立」(四・五)55 タツ たつ

立ッ 立ッ「エ・タ・チ・ツ・ツ・ツ・
ーテ」ひうきたつ・おいたつ・おたつ
・おどりたつ・おもいたつ・おもだつ
・さきだつ・そびえたつ・たびだつ・
とびたつ・ひきたつ・ひらめきたつ・
めだつ・もえたつ

二22 4 園 ワタクシハオニニナツ
テ、ココニタツテキマス。
二59 2 スルトカゼガフイテ、ハ
ヒガバツトタツテ、川ムカフノ
カレ木ノエダニカカツタカ
トオモフト、(略)。

三22 8 私をころがすのはだれ
にもできませんが、たたせること
や、二つかさねることは、どう
してもできません。
三25 2 どちらもたいそうやくに
たつどうぶつでございます。
三29 4 竹ハイロイロナヤクニ
タチマス。
三32 8 子ドモガニ三人アゼニ
タツテ、ナヘヲ田ノ中ヘナゲ
入レテキマス。
四56 7 白ウサギハ(略)、ハマベ
ニタツテ、ナイテキマシタ。
四77 1 一人のくわんちよがその
下に立つて、さしまねいてゐま
す。
五6 4 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ
出テ來テ、オサキニ立ツテ、ヨイミチ

ノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシタ。
五9 6 きがついて見ると、人が二三
人立つて、「見」となきただ。」とい
つて、ながめてゐました。
五15 2 (略)、大ブツサマノマヘニ立
ツテキル人ガ、コンナニ小サク見エ
マス。
五24 6 園「(略)、私は足の立たない
もので、両手をついて、やつとゐざ
りあるくものでございます。
六3 7 (略)、橋の下に立つてつりす
る人など、(略)。
六8 7 たんぽにはいねがよくみのつ
て、風のふくたびに黄色な波が立つ
てゐます。
六25 1 園「(略)、ナカデ一番人ノ役
ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デセ
ウ。
六26 5 園 シテ見レバ銅ホド役ニ立ツ
モノハアリマスマイ。」
六26 7 園「ナルホド銅ハタクサンア
ツテ、役ニモ立チマセウガ、(略)。
六27 1 園「(略)モツトタクサンア
ツテ、モツト役ニ立ツモノハ鐵デセ
ウ。
六27 8 園 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハ
イレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ
銅ヨリモマダ上デス。」
六40 6 園 明後日はこゝを立つて、道
で用をたして、この次の水曜日まで
にはかへる。
六56 8 急に馬に打乗つて、味方のま

つ先に立つて、信玄の本陣に切りこ
んで、(略)。
六69 7 私がこゝへまゐつたのは、
この學校がたつた年でございますか
ら、(略)。
七3 4 園 正行ハ(略)、ツト立チテ
別室ニ行キタリ。
七4 7 園 カクテハ君ノ御用ニ立ツ
ベシトモオボエズ。」
七15 8 園 急に商用が出来て、明朝六
時の汽車で東京へ立ちます。
七28 5 手バカリ動カシテモ、チエガ
ナケレバ何ノ役ニモ立チマセン。
七40 8 妻は立つて、鏡箱の中から十
兩の金を出して、(略)。
七47 5 園「君ラハ表ダクシカ役ニ立
タナイガ、僕ラハ裏表トモニ使ハレ
ル。
七50 4 園「松村さん、郵便。」とよび
て、配達夫は入口に立ちたり。
七60 4 園 毛の(略)、長きものは半
の如く、立ちてもその毛はなほ地面
に達す。
七60 9 園 耳のたれたるもの、立ちた
るもの、(略)、一々数へがたし。
七83 7 園 (略)、見なれない形の家が
ならんで立つてゐます。
七85 1 園 急に暴風雨が來ると、山の
様な波が立つて、(略)。
八31 9 僕は時々其の仕事場の前に立
つて見てゐた。
八86 2 中佐ハマツサキニ立ツテ、敵

中ヘヲドリコンデ、タチマチ三人ノ
敵ヲ斬リ殺シタ。
九18 1 園 香取・息栖ノ一ノ鳥居ハ何
レモ川ノ中ニ立テリ。
九64 2 園 之をうむりし時は、(略)、
かばねを宮城の方に向ひて立たせ、
ながく皇城を守護せしめたりとい
ふ。
十12 3 園 園「我元 吉野の杉よ、
櫻木の 花をよそにて、霧深き 谷
間ニ立ちき。」
十16 10 園 (略)、御前に侍りし清少納
言は、つと立ちてみすをまき上げた
り。
十35 5 園 談話最中一人の老人がはい
つて來ましたが、すぐに立つて、椅
子をゆづりました。
十64 9 甲板に立つてゐた船長を始
め、三十五人の若者は(略)。
十84 9 何から何まで役に立つて、不
用な部分といふものは一つもない。
十101 10 園 敵傍山・香具山・耳無山ノ
三山、(略)、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒ
テ立テリ。
十一55 1 眞先に立つて、太鼓を打ち
ながら、かひなくしく進んで行く。
十一84 7 園 其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ
細片四方ニ飛散シテ、(略)、機械ノ
前ニ立テバ全身忽チ白シ。
十一86 3 園 工女ハ常ニ其ノ前ニ立
チ、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、(略)。
十二3 10 園 國を思ふ道に二つはな

かりけり、軍のには立つも立たぬも。

十二30 〔圖〕 (略)、軍のには立つも立たぬも。

十二39 10 〔圖〕 富士山の古歌には煙の立つことを歌へるもの多く、(略)。

十二53 7 〔圖〕 商人ハ軍人ノ戦場ニ立つト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戦争ニ従事スベシ。

十二60 5 〔圖〕 されど十字街頭に立てる巡査の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雜を生ずることなし。

十二79 6 〔圖〕 (略)、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。

十二82 6 木蔭に立つてつくぐと此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

十二115 2 〔圖〕 心誠ならざれば、如何なる言行も表面の裝飾に過ぎざれば、何の用にか立たん。

十二115 10 〔圖〕 禮儀も (略)、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。

たつ「断」(四) 5 たつ 絶つ 断つ

《ター・チー・ツ》

九81 7 〔圖〕 秋思の詩篇ひとりらはわ

たをたつ。

九96 6 〔圖〕 されば一年中遊覽者跡を絶

たず、(略)。

十二85 5 〔圖〕 (略)、片岡・瓜生・東郷の諸隊は其の退路を絶ち、(略)全く

敵を包圍せり。

十二96 6 〔圖〕 直ちに其の機を斷ち、孟子を戒めて曰く、(略)。

十二96 7 〔圖〕 「汝の今學を廢するは我が此の機を斷つが如し。」

たつ「経」(四・五) 16 タツ たつ 立つ

《ター・チー・ツ》

二20 6 イマハ木ノ上ニキマスガ、モウスコシタツト、(略)、下ヘトビオリマス。

二55 4 (略)、一月モ タタナイウチニ、(略)、大キナ太イ木ニナリマシタ。

三5 8 スコシタツテオサラヒガスミマシタ。

三28 3 コレカラニ三日タツタラ、マダズツトタカクナリマセウ。

三49 1 (略)、下ヘもぐつて、しばらくたつと、(略)、水の上ヘ出てきます。

三57 7 (略) ムラサキ色ノハオリハ、イツマデタツテモ、色ガカハリマセン。

三66 4 ソレカラニ三日タツテ、ウラシマガウミベデツリヲシテキルト、(略)。

四40 7 スコシタツテカラ、ソツトフタヲアケテ、外ヲ見ルト、(略)。

五33 2 ソレカラ十四五日タツテツム

ノヲ二番茶トイヒマス。

五48 4 しばらくたつて、顔を上げ

て、そのあたりを見まはすと、(略)。

五54 1 シバラクタツト、ケモノガ負ケサウニナツタノデ、コンドハ「私ハ(略)、鳥ノ仲間ダ。」トイツテ、

鳥ノ方ニツキマシタ。

五54 6 イツマデタツテモ勝負ガツカナイカラ、兩方ガ仲ナホリヲシマシタ。

七32 8 蠶ガ繭を作つてから二十日あまりたつと、(略)、繭を破つて出て来る。

八26 9 二三ヶ月立つてから、前の友だちが来て、(略)、笑ひながらたづねました。

八43 1 さつきからもう二時間もたつから、四五十戸も焼けただらう。

十一74 7 〔圖〕 然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れる。

たつ「立」(下二) 21 タツ 立つ 立つ

つ 建ツ 建つ 《ツ・ツル・ツテ》

ひくみたつ・さしたつ・さしたてたまう・せきたつ・つみたつ

六67 7 〔圖〕 松・杉・ヒノキ・ケヤキハ板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、船ヲ作ルニ用フ。

六68 4 〔圖〕 桐ハ(略)、家ヲタツル材

木トシテハ用ヒラザレドモ、(略)。

六69 2 〔圖〕 材木ヲ用ヒテ家ヲタツルモノハダイクニシテ、(略)。

八43 〔圖〕 家々に日の丸の旗を立てたり。

八28 1 〔圖〕 「我、此ノゴロ小サキ堂ヲ建テタリ。

八30 4 〔圖〕 工驚キ、アツト聲立テテニ

ゲ出セバ、(略)。

八74 8 〔圖〕 虎モ猫モ(略)、歩ム時音ヲ立テズシテ、シツカニ他獸ニ近ヨリ、(略)。

九6 7 〔圖〕 草薙劍は(略)、宮を建ててそこにまつれり。

九21 8 〔圖〕 八幡様に日参いたし候も、そなたがあつばれなるてがらを

立て候様との心願に候。

九27 6 〔圖〕 五月五日ニ軍人形ヲカザリ、ノボリヲ立テテ、男子ノ福運ヲイノルコト、(略)。

九28 3 〔圖〕 此ノ神社ノ建テラレタルハ明治二年ニシテ、(略)。

九61 3 〔圖〕 家を建つるには日あたりよき所をえらび、(略)。

九62 9 〔圖〕 (略)、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。

十26 2 〔圖〕 (略)、其ノ初メ小事ニシノビシハ、後大功ヲ立ツルニ至リシ所以ナリ。

十54 9 〔圖〕 「(略)、敵は畠山に命

じ、尋ね出して殺さんとせり。畠山は『いかでかゝる幼き者に刀を立てん。』とて、(略)。

十83 2 〔圖〕 (略)、又政府の費用を以て學校を建つる等、厚く保護の方法を講ぜり。

十一67 9 〔圖〕 身を立て、父母をあらは

すも、産を破り、祖先をはづかしむるも、(略)。

十一103 4 図 孔明、(略)、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十一111 8 図 全村農業を以て生計を立つ。

十二97 1 図 孝經に曰く、「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあらはすは孝の終なり。」と。

十二113 9 図 (略)、小なき信義を立てんが爲に大いなる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

たっしう「達得」(下二) 1 達し得

「一エ」

十二4 5 図 學問を修むるにも、事業に従ふにも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

たっし「達者」(形状) 1 達者

十一47 1 図 こゝにアラビヤ馬の達者なことを證明する面白い話がある。

たっす「達」(サ変) 18 達ス 達す

「一シースースル・一セ」ひあいたつす

七60 5 図 毛の(略)、長きものは羊の如く、立ちてもその毛はなほ地面に達す。

八7 9 図 今日この日に年來ののぞみを達したるは何等の幸ぞや。

八40 9 図 今日ニテハ(略)、外國へ輸出スルモノミニテモ、一年間一

千萬圓ノ金高ニ達シ、(略)。

十98 8 図 奈良ヨリ汽車ニ乘リテ南へ進メバ、一時間バカリニシテ三輪町ニ達ス。

十100 6 図 (略)、坂路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、多武峯ナル談山神社ニ達ス。

十一15 7 図 高德せめても此の所存を上聞に達せばやとて、行在所の御庭にしひび入り、(略)、大文字に詩の句を書きつけたり。

十一16 3 図 翌朝警固の武士ども之を見つけて、(略)、讀みかねて上聞に達したり。

十二89 6 図 熱き地方の白蟻は周圍十間、高さ三間にも達する小山の如き巢を造り、(略)。

十一99 7 図 (略) こゝに集る臘肭獸は數千頭にも達することこれあり候。

十二11 3 図 勝報上聞に達し、陛下の下し給へる勅語の中に、「(略)」と仰せられたり。

十二42 5 図 火山全體の占むる面積は(略)、東西十二里九町、南北十一里半に達せり。

十二45 2 図 茶も亦盛に栽培せられ、輸出價額年々一千万圓に達す。

十二52 9 図 米國商人ガ(略)廣告ニ費ス金額ハ、一箇年實二十二億圓ノ多キニ達ストイフ。

十二56 6 図 旅順線は大連の次驛臭水

子より分れて、(略)旅順口に達す。

十二58 1 図 安奉線は奉天より(略)安東縣に達して、韓國の縦貫鐵道に連結す。

十二59 8 図 倫敦は人口四百八十萬、接續都會を合すれば七百三十萬の多きに達す。

十二75 8 図 (略)、若し歐羅巴より西へ向つて進まば、印度に達する前、日本又は支那に到着するならんと。

十二80 8 図 其の後コロンブスは(略)第三回の航海に於て、オリノコ河口に達し、始めて亞米利加大陸に上陸するに至れり。

たっする「達」(サ変) 2 達スル 達する「一スル・一セ」

九33 8 さて幾度も幾度も造り直して、終に其の目的を達することが出来た。

十一12 3 (略)、ソレムノノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、分業ノ目的ハ達セラレナイ。

たつた「竜田」(名) 2 竜田 龍田

十一30 3 図 (略) 我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。(略) 又嚴島・橋立・須磨・明石・宇治・龍田等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ヅケタルモノニシテ、(略)。

十一34 3 図 通報艦ハ(略)。最上・淀・千早・龍田等ハ之ニ屬ス。

たつた(副) 1 タツタ

三15 7 スキヲネラツテ、タツタ

一ケリデ、ケハヤヲケタフシマシタ。

たつたがわ「竜田川」(地名) 1 龍田川

十98 5 図 紅葉ニ名高キ龍田川モ程遠カラズ。

たつたじんじ「竜田神社」(名) 1 龍田神社

十98 4 図 法隆寺ノ附近ニハ廣瀨神社・龍田神社アリ。

たつて(接助) 1 たつて

三46 7 図 そんなところでさきをふりまはしたつて、どうしてとどくものか。

たつまき「竜巻」(名) 1 たつまき

十一23 9 図 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

だつりやくす「奪略」(サ変) 1 奪略す「一セ」

十二95 7 図 是に於て齊侯魯より奪略せる地數箇處を返せり。

たて「立」ひかえりたて・きだて・くみたて・こんだて・じんだて・でたて・ほつたてごや

たて「縦」(名) 3 縦

十44 9 図 直線を(略)、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶる時は、美しき模様を生ず。

十45 1 図 第一圖は縦の線のみを用ひ、第二圖は横の線のみを用ひ、第三圖は斜の線のみを用ひたるものにして、(略)。

十一967 國^ノ 南北に細長き島を山脈縦に走り候へば、平野少く候へども、(略)。

たていし「立石」(名) 1 立石

九839 二番太鼓の「並べ」のあひつに、五人の騎手は打連れて、拜殿の後の大きな立石の前に並んで、(略)。

たてがみ「鬘」(名) 1 たてがみ
三237 うまにはたてがみがあるけれども、牛にはありません。

たてこう「縦坑」(名) 1 縦坑

十621 此ノ銅山ニハ數箇ノ大坑道アリ。(略)、又上下ニ通ズル大ナル豎坑アリ。

たてつば「建坪」(名) 1 建坪

十二349 敷地總坪數何千坪、建坪何百何十坪、(略)。

たてなおす「立直」(四) 2 立直す
「一シ」

十6910 やがて二人は荒波に打返さるゝ船の頭を立直しゝ、死力を盡して漕進む。

十6910 (略) 船の頭を立直しゝ、(略)。

たてなめりようよう「縦斜兩様」(名)

1 縦斜兩様

十455 (略)、第六圖は縦・斜兩様の線を用ひ、(略)。

たての「立野」(地名) 1 立野

十二41 立野

たてまつりたまう「奉給」(四) 1 奉り給ふ
「一フ」

九43 尊「こは神劔なり、私すべきにあらざる」とて、之を天照大神に奉り給ふ。

たてまつる「奉」(四) 3 上ル 奉ル

「一ル・一レ」ひあおきたてまつる・いただきたてまつる・うかがいたてまつる・うつしたてまつる・うばいたてまつる・うやまいたてまつる・がしたてまつる・さつしたてまつる・したいたてまつる・したしみたてまつる・ぞんじたてまつる・たすけたてまつる・ちかづきたてまつる・ながしたてまつる・なしたてまつる・はいしたてまつる・まちたてまつる・みたてまつる・もうしたてまつる・やきたてまつる・やすんじたてまつる・わすれたてまつる

八517 サル程二三韓ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、入鹿ノ参内スルコトアリ。

十338 (略) 其ノ作方、貯藏ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。

十一1046 孔明はヨリ幼主ヲ輔ケ、(略)。(略) 發スルニ臨ミ、表ヲ上ル。

たてもの「建物」(名) 4 建物

九293 杜殿ノカタハラナル西洋風ノ建物ヲ遊就館トイヒ、(略)。

十310 日本一の古き建物の今にのこれるは、大和の法隆寺なり。

十411 我が國の建物はおほむね木造なれば、古社寺等も昔のまゝにて今にのこれるは甚だ少し。

十二646 巴里にもルーブル博物館・凱旋門を始め、世に聞えたる建物少からず。

たてよこ「縦横」(名) 1 縦横

十二6210 然れども地下には各種の鐵道縦横に貫通し、テームス河床の下をも往來せり。

たてよこなめさんよう「縦横斜三様」(名) 1 縦横斜三様

十456 (略)、第七圖は縦・横・斜三様の線を併せ用ひたるものなり。

たてよこりようよう「縦横兩様」(名) 1 縦横兩様

十453 (略)、第四圖は縦・横兩様の線を用ひ、(略)。

たてる「立」(下) 19 タテル たてる 立テル 立てる 「一テ・一テル」

ひおしたてる・きりたてる・くみたてる・せめたてる・そばだてる・とりたてる・はやしたてる・ひきたてる

二215 ワタクシヲヒノナカヘイレルト、大キナコエヲタテテ、トビダシマス。

二277 ドコノイヘニモカドマツガタテアリマス。

二541 オダイサンハタイヘンニハラヲタテテ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。

四112 (略)、古イカサト古イモモヒキヲキセタカカシガタテアリマス。

四166 (略) 大きなものししで、

(略)、土けむりをたてて、とんで來ます。

四415 (略)、ソバニ一セン五リントカイタフダガタテアリマシタ。

四741 ソノ左ト右ニウツクシイシヨクダイヲ立テマシタ。

四767 見ればへさきに長いさを立てて、(略)。

五17 大神はおどろいて、あまの岩戸の戸をたてて、その中へおかくれになりました。

五178 男ノ子ノアルウチデハ、五月ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立テマス。

五673 大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テアル。

六742 むねの上には紙のぬさを立てて、(略)。

七259 大工ガ家ヲタテルノモ、左官ガカベヲスルノモ、(略)、皆手デスルノデス。

八868 (略)、トウく山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。

九227 併し今の戦争は昔とちがつて、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

十283 (略)、古い銀杏の木が一本、(略) はうきを立てた様に高く雲をはらはうとしてゐる。

十639 (略)、そよくと吹く風に、海面はさゝ波を立ててゐる。

十85 5 (略)、將卒と共に戰場をかけめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。

十一109 10 貴人の墓には内地の様に石をたてるけれども、(略)。

だでんす [打電 (サ変)] 1 打電す

『一シ』

十二10 4 (略) 東郷司令長官此の戰況を打電し、其の後に附加して曰く、(略)。

たとい [仮令 (副)] 3 たとい

六85 6 (略) (略)、心はかならず高くもて、たとひ身分はひくゝとも、輕くとも。

十一14 6 (略) (略) いでや臨幸の路次に参り會ひ、君をうばひ奉りて義軍を起し、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。」

十一41 10 (略) (略) いまだ幼ければ、敵も心をゆるすべく、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。」

たとつ [譬 (下二)] 1 たとふ 『へ』

九45 8 (略) (略) さていよく沙漠に入りしが、木のかげ一つもなき砂原つゞきなれば、其の苦しさとへんに物なし。

たとえば [例 (副)] 17 タトヘバ た

とへば 例ヘバ 例ヘバ

七13 8 (略) (略) ねぎられたら引く積りで、高いいふ直段がかねです。たとへ

ば十五錢で賣つてよいものを二十錢といふやうなものです。

七14 8 (略) (略) 問屋といふのは他人からのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口銭を取る店のことです。たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にたのまれて、それをほかへ賣渡してやり、又(略)、それをほかから買取つてやる店のことです。

七88 2 (略) (略) 日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。(略)。たとへば自分のうちを恐ろしがる様なもので、(略)。

九9 6 (略) (略) 花ノ附方モ亦ソレノチガフ。タトヘバボタンノ様ニ一リン咲ノモアリ、ニンジンノ様ニカラササヒ

ログタ形ニ集ツテ咲クノモアル。九54 8 (略) (略) 動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物ノ色ノ變ズルニシタガツテ、保護色ノ變ズルモノアリ。タトヘバ北國ニ

スム野ウサギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、雪ノ降ル頃トナレバ、全ク白色ニ變ジ、(略)。

九55 5 (略) (略) 其ノ動物ノ身アリニヨリテ、形サヘ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。タトヘバ桑ノ

木ニ居ルエダシヤクトリハ、(略)、其ノ形桑ノ小枝ニ異ナラズ。九57 6 (略) (略) 此ノ種ノ體色ヲ警戒色ト名

ヅク。タトヘバ毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黃ト黒トノダンダラニテ、惡味

アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。

九88 2 (略) (略) 若シ今ノ世ニモナホカ、ル事アリトセバ、其ノ不便如何バカリナラン。タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、

魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。

十48 4 (略) (略) 色の原色は赤・青・黄にして、之を種々に配合すれば、種々の色を生ず。例へば赤に青を加ふれば、紫となり、青に黄を加ふれば、緑となるが如し。

十一12 3 (略) (略) ソレノノ仕事ヲスルモノニ、共同一致ノ考ガナケレバ、

分業ノ目的ハ達セラレナイ。例ヘバ時計ヲ造ルノニ、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイノ勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。

十一66 4 (略) (略) ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサス様ニ注意スルガヨイ。例ヘバ動物質ノ滋養品ニハ植物

質ノ食物ヲ添ヘ、(略)、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デア

ル。十一70 8 (略) (略) 殊に集會の時間は正しく

守らざるべからず。一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。例へば六十人の集會

に其の中の一人若し十分を後るとせば、六十人の時間の損失は合して十

時間となるべし。

十一90 9 (略) (略) 故に隨意に得られざるものなりとも、効用なきものは價あることなく、効用あるものなりとも、隨意に得らるゝものは亦價あることなし。例へばこゝに一種の石あり、

(略) 隨意に得られざるものなりとも、飾にも實用にもならざるものならば、之を買ふものなく、随つて價あることなし。日光・空氣の如きは、(略) 隨意に得らるゝものなれば、(略) 隨て亦價あることなし。

十一91 10 (略) (略) しかして供給の需要よりも少きときは物の價は高くなり、多きときは安くなるなり。例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は

(略) 争ひて高き價をつくべし。十一93 5 (略) (略) 常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾

きあるものなり。(略) 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、靴の價にはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。

十一94 9 (略) (略) 供給に限りある物、例へば名高き古人の書畫・古器物などの如きは、需要増すに隨ひて、其の價益々高くなり、(略)。

十二104 7 (略) (略) 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利

を體し、協同一致して團體の福利

を増進せんことを心掛くべし。例へば教育・衛生等自治團體の事業は、地方人民の一般に之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

たどつ

【多度津】〔地名〕2 多度津

多度津

十一18 図 多度津

十一20 図 瀬戸内海の沿岸には高松・多度津・高濱・尾道・宇品等の港多く、(略)。

たどりゆく・く【逆行】(四) 1 たどり行く【ク】

八8 図 たどり行く細路つたひ、

はや、かうばしくきのこにはへり。

たどん【炭団】(名) 1 タドン

二43 図 「チヨツト オマチ ナサイ、

ボク ガウチ カラ タドン ヲ モラ

ツテ キマス カラ。」

たな【棚】(名) 1 たな 凸かみだな・とだな

七12 図 たなのもちひくねずみの音

も、ふけてのきばに雪降積る。

たなごころ【掌】(名) 1 タナゴコロ

十78 図 (略)、大工・カヂヤ等ノタ

ナゴコロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用ス

ルヲ以テナリ。

たなびく・く【棚引】(四) 3 タナビク

たなびく・く 〓なびく 【キーク】

九28 図 境内ニハ櫻最モ多ク、春ノ

盛リニハ花ノ雲タナビキテ、(略)。

十一20 図 瀬戸内海の沿岸には(略)

等の港多く、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

十一21 図 (略)、煙さなびくとま

やこそ、我がふつかしき住家かれ。

たに【谷】(名) 8 谷 〓あそだに・い

ちのたに・なんごうだに・ゆのたに

五8 8 そこで大ぜいと一しよになつ

て、せまい谷へ下りました。

九42 図 山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、

カ、リテハタキトナリ、ヨドミテハ

フチトナリ、又切レテハ急流トナリ、

(略)。

十74 図 旅館は山により、谷に臨み

て、山水のながめをほしきまゝにする

を得べし。

十一3 図 吉水神社を出れば、谷

をへだてて向ふの山腹に如意輪寺あ

り。

十一54 図 ナボレオンがアルプ山を越

えて、イタリヤへ攻入つた時は冬の

半で、山も谷も雪にうづめられて、

(略)。

十一56 図 深さは幾百丈とも知れない

谷底、谷へ下りる細道も雪や氷にと

ざされて、どこか全く知れない。

十一57 図 將軍は上衣をぬぎすてて、

はや谷へ下りようとする。

十一58 図 大砲のつなをくゝりつけ

て、早く自分を谷へ下せ。

だに(副助) 2 だに

十一16 図 是程の才學をもちながら、

式部は少しも高ぶりたる風なく、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

十二77 図 かくて日数は重れども、

陸地の片影だにみとめ難く、(略)。

たにがわ【谷川】(名) 4 谷川 〓ほそ

たにがわ

五70 図 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷

川ノ中へハイリマシタ。

六3 図 所々に白いぬのをさらしたや

うなたきや谷川があつて、一そう山

の景色を引立てる。

十100 図 コレヨリ谷川ニソヒテ、坂

路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、(略)。

十一76 図 瀧の後より山路を上ること

と四町餘、一條の谷川あり、(略)。

たにそこ【谷底】(名) 6 谷ソコ 谷底

七17 図 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生

メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオ

トシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

十一55 図 (略)、山のやうな雪なだれ

がなだれて来て、むざんや、かの勇

ましい少年鼓手は忽ち谷底へはき落

された。

十一55 図 しばらくすると、谷底の方

に太鼓の音がかくすかに聞える。

十一56 図 深さは幾百丈とも知れない

谷底、谷へ下りる細道も雪や氷にと

ざされて、どこか全く知れない。

十一58 図 (略)、兵士は止むを得ず將

軍を谷底へ下した。

十一58 図 將軍が谷底へ下りた時に

は、もう太鼓の音は聞えぬ。

たにま【谷間】(名) 1 谷間

十二9 図 「我々元 吉野の杉よ、

櫻木の 花をよそにて、霧深き 谷

間1立ちき。」

たにん【他人】(名) 9 他人

七14 図 問屋といふのは他人からた

のまれて、品物を賣つたり買つたり

して、口銭を取る店のことです。

九76 図 又病氣其ノ他ノ場合ニモ、

他人ノ救ヲ受クルガ如キコトナカル

ベシ。

十一53 図 己ヒトリ樂シトテ、他人

ノ悲ヲ思ハズシテ笑フハ同情ノ無キ

人ナリ。

十一53 図 他人ノ惡事・短所ヲアザ

ケリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナ

リ。

十一53 図 他人ノ歡心ヲ買ハントシ

テヘツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイ

ヤシムベシ。

十一71 図 他人をして時間を損失せ

しむるは其の罪金錢を損失せしむる

よりも重し。

十一92 図 (略) 一戸の賣家ありて、

之を賣はんとする人五人あるとき

は、其の五人は各其の家の他人の手

に渡らんことを恐れて、(略)。

十二99 図 衆人群集の場處にて他人

をおしのけ、(略) が如きは、文明國

民の爲すべきことにあらず。

十二99 図 (略)、旅館にて夜晩く高

たのみ「頼」(名) 1 タノミ

七84〔図〕 コノ度ノ合戦サダメテナ
ンギナルベケレド、(略)。フカク汝
ヲタノミニ思フゾ。」

たのみ「頼」(四・五) 8 たのみ 頼
む『マ・ミーム・ーン』

七14〔図〕 問屋といふのは他人からた
のまれて、品物を賣つたり買つたり
して、口銭を取る店のことです。

七14〔図〕 たとへばごふく問屋といふ
のは、織物を賣りたいといふ人にた
のまれて、それをほかへ賣渡してや
り、(略)。

七15〔図〕 たとへばごふく問屋といふ
のは、(略)、又織物を買ひたいとい
ふ人にたのまれて、それをほかから
買取つてやる店のことです。

八32〔図〕 僕の家で一度つるべの金たが
がこはれた時、つくろひを頼んだ事
があつたが、(略)。

九34〔略〕、スチブンソンは其の會
社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を
走る汽車を造つた。

九48〔図〕 アリはそこに行きて、(略)、
ねんごろに同行を頼みしに、一同快
く引受けた。

十89〔図〕 (略)、いかにせん、頼む
かげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の
下露。

十二110〔図〕 されば朕は汝等を股肱と
頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其
の親は特に深かるべき。

たのみ「田面」(名) 1 田の面

十28〔図〕 廣い田の面は切株ばかりで、
人影の見えないのみか、かゝしの骨
も残つてゐない。

たば 〆はなたば
タバコ(名) 5 煙草

八44〔図〕 聞けば此の火事は材木屋の小
屋から出たので、多分煙草のすひが
らが元だらうといふ話だ。

九58〔図〕 酒・煙草の害は今更に言ふ
までもなし。

十56〔図〕 兵舎内にては(略)、所
定以外の場所にて煙草を吸ふ事等堅
く禁ぜられ居り候。

十一110〔図〕 朝鮮人は煙草を好む。
十二89〔図〕 煙草の吸ひがらより大火
事を引起せしこと其の例數ふるにい
とまあらず。

たはた「田畑」(名) 5 田畑 田畠
九74〔図〕 田畑の作物には多少の損
害これあり候へども、其の他にはか
く別の異狀これなく、(略)。

十10〔図〕 森林なければ、土砂附近の
田畠に飛散りて、其の土地を荒すこ
と多し。

十97〔図〕 奈良ノ市街ノ西ハ昔ノ都ノ
跡ニシテ、今ハオホムネ田畠トナレ
リ。

十一12〔図〕 又國家全體カライヘバ、農
夫ノ田畑ヲ耕シ、(略)、教師ノ生徒
ヲ教育スル等ハ皆分業ニ外ナラヌノ
デアル。

十一88〔図〕 農夫の田畑を耕すに似た
らずや。

たび「度」(名) 12 タビ たび 度
〆ひとたび・ふたたび・みたたび
二56〔図〕 ツクタビニ、ウスノ中
カラ(略)、イロイロナタカラモノ
ガデマシタ。

五71〔図〕 毎年春ニナルトオチルガ、
オチルトスグ又新シイノガハエテ、
ソノタビニ枝ガ一ツツツフエル。

六8〔図〕 たんぼにはいねがよくみのつ
て、風のふくたびに黄色な波が立つ
てゐます。

七1〔図〕 コノ度ノ戦、敵ハ大ゼイ
ニシテ、味方ハ小ゼイナリ。

七5〔図〕 正行コノ度ハサイゴノ合戦
セントテ、皇居ニマキリテ申シ上グ
ルヤウ、(略)。

七7〔図〕 コノ度ノ合戦ニハ、師直
ヲノクビヲ正行ガ取ルカ、正行ヲガ
クビヲカレラニ取ラスルカ、二ツノ
中ノ一ツト思ヘバ、(略)。

七8〔図〕 コノ度ノ合戦サダメテナ
ンギナルベケレド、進ムモ退クモ時
ヲ見テスベシ。

七19〔図〕 にはの藤の花が咲いて、風が
吹く度にむらさきのふさが動いてゐ
る。

七31〔図〕 (略)、その間に一日か二日づ
つ眠ることが四度ある。眠る度に皮
をぬぎかへて、(略)。

九31〔図〕 (略) 最初の船は(略) 直に

沈んでしまつた。(略)、又一つの船
を造つた。此の度は大丈夫と考へて、
(略)。

十24〔図〕 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ
先ダタレタリ。老人怒リテ、五日目
ノ朝ヲ約スルコト亦前ノ如シ。良此
ノ度コソハト、夜半ヨリ起キテ橋上
ニ至レバ、(略)。

十二2〔図〕 古の書見る度に思ふか
な、おのが治むる國は如何にと。

たび「旅」〆きしやのたび・みずのたび
・むかしのたび

たびかさなる「度重」(四) 1 度重ナ
ル『一レ』

九42〔図〕 水ノシヅクモ度重ナレバ石
ヲモウガツトイフ。

たびごと「度毎」(名) 1 度毎
十一11〔図〕 分業法ニ依ラズ、一人デ種
々ノ仕事ヲスルコトニナルト、仕事
ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變ヘ、
又器具ヲ取換ヘナケレバナラナイノ
デ、(略)。

たびだつ「旅立」(四) 1 旅立つ
『一タ』

九79〔図〕 是は菅原道真が(略)、筑
紫へ旅立たんとする時、庭の梅に別
ををしてみてもよめる歌なり。

たびたび「度度」(副) 6 たび／＼
度々

六48〔図〕 秀吉は(略)、たび／＼いく
さをしたけれども、一ぺんもまけた
ことがありません。

六116 度々つけせきしたり、ちこくしたりして、先生にしかれた子供もございました。

八137 ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ上ツタ。

九304 臨時大祭ニ天皇皇后兩陛下ノ行幸啓アラセラレシコトモ度々アリ。

九624 蝦夷は(略)、叛服常ならず、(略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばらくなりき。

十一511 (略)、應神天皇の頃より奈良朝の頃には度々行幸ありしが、(略)。

たびびと「旅人」(名)5 旅人

七634 ある山國にては、犬のくびに藥品・食物などを入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。

八152 兵士ハ練兵場へ向ヒ、旅人ハ停車場へ急グ。

九372 箱根と新居とは關所があつて、役人が一々旅人をしらべて通した。

九391 山上ナル蘆湖ノホトリニ關所アリテ、日暮ヨリ後ハ一切旅人ノ通行ヲ差止メタレバ、(略)。

九4010 旅人ノ往來盛ナリシ箱根驛モ、浴客ノ多ク集レル今ノ箱根七湯モ、(略)。

たぶん「多分」(副)1 多分

八447 聞けば此の火事は(略)、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。

*たべもの、ひしょくもつ

た・べる「食」(下)24 タベル たべる「一ペー・ペル」

二382 漢シヲモツテ、ゴハンヲタバサセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。

二295 ダイ一タケノコガタベラレマス。

三407 うが(略)さかなをとつてゐました。(略)。それをたべると、またすぐにもぐります。

三692 ウマイゴチソウモ毎日タベルト、シマヒニハイヤニナリマス。

四114 今一本ノ木ハシブカキデスカラ、サハサナケレバタバラレマセン。

四128 クリハユデテタバテモ、ヤイテタバテモ、ウマイモノデス。

四128 クリハユデテタバテモ、ヤイテタバテモ、ウマイモノデス。

四133 ドングリノミハタバラレマセン。

四508 ヨク人ノタバレルモノデスガ、ソノママデヤイタリニタリシテタバレルノデハアリマセン。

四511 (略)、ソノママデヤイタリニタリシテタバレルノデハアリマセン。

五511 西瓜ハ中ヲタバテ外ヲノコシ、(略)。

五512 (略)、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタバテ中ヲノコス。

五513 ナマデソノマ、タバレルノハ、マクハ瓜ト西瓜デ、(略)。

五515 (略)、ニナケレバタバラレナイノハ、カボチャトウ瓜トタ顔デアル。

五518 キ瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシテモ、ツケ物ニシテモタバ、又ニテモタバ。

五521 キ瓜ヤ白瓜ハ(略)、又ニテモタバ。

五521 ヘチマハワカイウチハタバレルガ、(略)。

五522 ヘチマハ(略)、實ガイルトタバラレナイ。

五562 人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタリシテタバマス。

六108 (略)、草の上にすわつて、にぎりめしをたべた時は大そううまうございました。

六366 ゆにはいつて、ごはんをたべると、つかれてすぐにねてしまつた。

七217 島の藤豆さんとはちがつて、私の豆はたべられません。

七749 マツタバベラレルモノニハ、コンブ・ワカメ・アラメ・ヒジキ・ノ

リ・モヅクナドガアリ、(略)。

十二2010 (略)、人や獸類も果實をたべては其の種子を方々へまき散すのである。

たぼう「多望」(形状)2 多望

十一3610 開け、産業の發達は益々多望に相成候。

十二541 海外貿易ノ將來ハ頗ル多望ナリ。

たま「玉」(名)4 玉 彈丸、ひあいだま・あかだま・おとしだま・やさかにのまがたま

七729 カンザシノ玉ヤラジメニスルサンゴハコノ蟲ノ骨デアル。

八371 月見のころも近づけば、萩のうねりにやどる玉、(略)。

九938 岩にくどくる清流、雪と散り、玉と飛ぶ。

十一601 軍に行かば、からだをいとへ。彈丸に死をも、病に死もな。

たまう「賜」(四)3 タマフ 賜ふ

「へ」ひあがめたまう・あそびたまう・あわれみたまう・いたりたまう・いましめたまう・いりたまう・うけたまう・うけつぎたまう・うしなしたまう・うつりたまう・うちほろぼしたまう・えたまう・おしめたまう・おちたまう・おんいとまごしたまう・かえしたまう・かきたまう・かくれたまう・か

したまう・かなしみたまう・かりしたまう・きたまう・ぎようこうしたまう・きりたまう・くだしたまう・くみたまう・けたまう・さしたまう・さだめたまう・しめしたまう・しめたまう・しゅうしたまう・しりたまう・しんらいしたまう・すべたまう・せいしたまう・せたまう・たたかいたまう・たてまつりたまう・つぎたまう・つくしたまう・つげたまう・とうそつしたまう・とうちしたまう・とうとびたまう・とどめたまう・とりたまう・なぎはらいしたまう・なしたまう・なのりたまう・のりたまう・はずかしめたまう・はりかえたまう・まちたまう・まつりたまう・まぬかれたまう・みしりたまう・みたまう・みやこしたまう・むかいたまう・めいじたまう・めしたまう・ゆきたまう・れたまう

八五四 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。

十二八七 略、良雄以下既に死を賜ヘリ。

十二二五 此の勅諭は特に軍人に賜へるものなれども、(略)。

たまがきごもん「玉垣御門」(名) 1
玉垣御門
八五七 板垣御門を入りて、玉垣御門の前にて拜し奉る。

たまご「卵」(名) 10 タマゴ 卵

一四二 コトリ タマゴ

七二九 卵からかへつたばかりの蠶はあり程の大きさで、(略)。

七三三 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、(略)。

七三六 (略)、出て来ると、すぐに紙の上において卵を産みつけさせる。

七三七 その卵を産みつけさせた紙を蠶卵紙といふ。

七三八 一匹でおよそ四五百程の卵を産む。

八五六 駝鳥は(略)、卵も子供の頭程ある。

十一七五 蜜蜂は(略)。(略)。女王の任務は卵を産むにあり。

十一八九 (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十一二二 何れの家にも卵を賣れば、其の代金にて一年中用ふる塩・醬油を買ふに餘あり。

たまごがた「卵形」(名) 1 卵形

十五七 葉ノ形ニハ卵形ト橢圓形ガ最も多イガ、(略)。

たましい「魂」(名) 2 たましひ

八三六 刀は武士のたましひといはれたものだから、きたへる時は身を清めて、一心不亂に打つたものだ。」

十五六 兵器は軍人のたましひに候へば、其の手入は最も念入に致し

候。

だます「騙」(五) 1 ダマス「サ」

四五六 「オマヘタチハウマクオレニダマサレタナ。オレハココノヲカヘ來タカツタノダ。」トイツテワラヒマシタ。

たまたま「偶偶」(副) 3 たま／＼

十一一〇 婦人は(略)、外出することもない。京城地方の婦人がたま／＼外出する時には、うちかけの様なものをかぶつて、(略)。

十二七四 元忽必烈に仕へたる伊太利の大旅行家マルコ・ポーロの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、(略)。

十二九六 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、母たま／＼機上に在り。

たまてばこ「玉手箱」(名) 2 タマテバコ

三七八 オトヒメハ(略)、タマテバコトイフリツバナハコヲワタシマシタ。

三七四 アマリカナシクナツタカラ、オトヒメノイツタコトモワスレテ、タマテバコヲアケテ見ルト、(略)。

たまみず「玉水」(名) 1 玉水

九六四 春の雨はしめやかに降つて、のきの玉水の音も靜かに聞える。

たまもの「賜物」(名) 1 賜物

十二二〇 師の賜物の智を徳を、かちにゑをりに 世の海を たりて行かん。

たまらない「堪」(形) 1 たまらない

「一い」

七三九 一豊もほしくて／＼たまらないから、家へかへつて、「(略)」。武士としてはあのくらゐな馬をもつて見たい。」と、思はずひとり言をいひました。

たま／＼「堪」(五) 4 タマル「一り」

三六八 ウラシマハオモシロクテタマリマセンカラ、(略)、ウチヘカヘルノモワスレテキマシタ。

三七二 何ダカカナシクテカナシクテタマリマセン。

四五六 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、ハマベニタツテ、ナイテキマシタ。

四五四 左ヲ見テモ、右ヲ見テモ、ケシキガカハルノデ、文太郎ハオモシロクテタマリマセン。

たま／＼「溜」(四・五) 2 タマル たまる 「一ッーり」

六二二 ある家にはに大きな水がめがあつて、雨水が一ぱいたまつてゐました。

九四二 是等ノ山ト元ノ噴火口ノマハリノ山トノ間ニ水ノタマリタルモノハ蘆ノ湖ニシテ、(略)。

だまる「黙」(五) 2 ダマル だまる 「一ッ」

六二九 4 ソノ時鐵ビシハ、「(略)」。銅

ハ人ニ使ハレテキテモ、時々青イ物ヲ出シマセウ。ソレガヤハリサビデス。シカモノソノサビハ大ソウドクナモノデス。」トイヒマシタノデ、ヤクワンハダマツテシマヒマシタ。

六三二 8 「それでもだんが居ないから、だまつてゐれば、誰にも知れはしない。」

たまわる「賜」(四・五) 7 タマハル

たまはる 賜はる「一リ」 ぐんじんにたまわたりたるちよくゆ

五三三 天皇はこれをごろんになつて、(略)、するには小子部といふ姓をたまはりました。

八二八 四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。」

九一八 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、詩を作りて天皇の御感に入り、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが、(略)。

一一四八 是より御いとま賜はり、河内に行きて正儀に仕へん。

一一四八 正儀は(略)、天皇より賜はりし具足一領を取出して與ふ。

一一四六 熊王(略)、正儀より賜はりたる名の正寛を其のまゝに正寛法師と名乗れり。

一一六三 建碑式舉行致候間、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

たみ「民」(名) 4 民 ぐくにたみ

六八〇 昔仁德天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲアハレミタマヒキ。

八七一 ところしへに民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大

神。

一三二 日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノヲト心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、(略)。

一三六 獅子、(略)野牛等の、昔の遊牧の民の如く、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

たむらまる「田村麻呂」(人名) 2 田村麻呂 ぐさかのうえのたむらまる

九二八 田村麻呂は身の丈五尺八寸、胸の厚さ二尺二寸、體重は三十貫を越え、(略)、力あくまで強き人にて、怒る時はたけき獸も恐れたり。されども又いつくしみ深き人にて、笑ふ時は子供もなつき親しみたりといふ。

九三六 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、恩威ならび行はれて、向ふ所敵なく、さしもに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

ため「為」(名) 72 タメ ため 爲 ぐおんため

五二九 思へばつらいことばかり、それよのため、人のため。

五二九 思へばつらいことばかり、それよのため、人のため。

かり、それもよのため、人のため。

五三三 マタ三番茶・四番茶マデモツムコトガアリマスガ、ソナニツムト、茶ノ木ノタメニハヨクナイサウデス。

五三六 昔雄略天皇が(略)、こをたぐさん集めて來いとおほせになりました。(略)、皇后さまがかひこをおかひあそばすためでございました。

六二八 大きな石を持つて來て、力まかせに投げつけました。それがため、かめに大きな穴があいて、水が流れ出ましたから、(略)。

六八六 遠き祖先のをしへをも 守りてつくせ、家のため、國のため。

六八六 遠き祖先のをしへをも 守りてつくせ、家のため、國のため。

六八六 遠き祖先のをしへをも 守りてつくせ、家のため、國のため。

七七一 モシ病ニカ、リテ早く死ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナリ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベシ。

七二七 根毛陸上ノ植物ノヤウニ養分ヲスヒ取ルタメノモノデハナク、タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデア

ル。

八五〇 中臣鎌足コレヲウレヘテ、國ノタメニ入鹿父子ヲノゾカント思ヒ立チタリ。

八七二 諸君若し我に食物を送る

ために働きたりといはば、(略)。

八七二 我もまた諸君を養ふために勞したりといはん。

八八〇 かくの如く日本を出で、(略)、東へ東へと進めば、又元の日本に歸り來る。(略)。これ世界の圓きがためにして、(略)。

八八四 明治三十七年ノ戰役ニ、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

八八四 明治三十七年ノ戰役ニ、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

八八四 明治三十七年ノ戰役ニ、君ノタメ國ノタメ、名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、(略)。

八八四 中佐ハ今度ノ出陣ヲ幸ニ、帝國ノタメ、天皇陛下ノ御タメニ、メザマシイ働ヲシナケレバナラナイト、(略)。

九三六 さらば我汝等のために其の大蛇を退治せん。

九三六 聞けば、そなたは豊島の戰にも出ず、又八月十日の威海衛攻撃とやらにもかくべつの働なかりきとのこと、(略)。何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。

九四〇 一命をすてて君に報ゆる爲には候はずや。

九四一 一人の子が國家の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。

九四九 蒸氣機關は(略)、初の中はたゞ水をすひ上げる爲に用ひる位であつた。

九46 9 図 然るに此の大風の爲に、今までの駱駝の足跡消えたれば、(略)。
 九47 3 図 (略)、一同は行くべき方にまよひて、(略)、空しく一日を過せり。之が爲に一行の用意せる水も残り少になれり。
 九61 3 図 室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青ざめて元氣なきは、日光に浴せざるが爲なり。
 九65 7 図 臺所にて火吹竹を使ふも、かち屋にてふいごを用ふるも、皆空氣を送りて、火の勢を盛ならしむる爲にして、(略)。
 九65 8 図 (略)、火消つばの火の消ゆるは空氣の供給絶ゆるが爲なり。
 九66 1 図 我等は常に此の空氣を吸はんが爲に呼吸す。
 九76 9 図 一度ニ拾錢以上ノ貯金ヲナスコト能ハザル者ノ爲ニハ、郵便切手ニヨリテ貯金スル便利ナル方法アリ。
 九78 5 図 タバシ貯金センガ爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。
 九89 8 図 是金銀ハ(略)、又分合スルコトモタヤスクシテ、分合ノ爲ニ直段ノ割合ヲ變ズルコトナク、(略)。
 十10 4 図 (略)、森林は漁業の爲にも大いなる利益をあたふ。
 十10 6 図 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

十55 2 図 されば實盛は養仲の爲には七箇日の養父。
 十72 9 図 温泉の諸種の病を治するは、(略)、一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。
 十77 8 図 頭ノ骨ノ堅キハ腦ヲ護ランガ爲ナリ。
 十77 9 図 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテオホハレタルハ肺臟及ビ心臓ヲ保護センガ爲ナリ。
 十83 6 犬は夜を守らせる爲、又はかりに使ふ爲に飼ひ、(略)。
 十83 6 犬は夜を守らせる爲、又はかりに使ふ爲に飼ひ、(略)。
 十83 7 (略)、猫は鼠を捕らせる爲に飼ふのである。
 十85 10 西洋の馬がおとなしくて、日本馬の馬のおとなしくないのは、育て方・使ひ方にあることで、日本では餘りいぢめた爲に、おのづから荒々しくなつたのである。
 十86 4 豚はもつぱら食用の爲に飼ふ。
 十一 8 10 図 蜜蜂の群集生活を營むを得るは、(略)、團體の爲には身命ををしまさるによる。
 十一40 8 図 教育の事業も段々進歩し、蕃人も追々皇恩に浴する様に相成候事、國家の爲眞に大賀の至に御座候。
 十一41 7 図 「正義は主君の敵にて、

我が爲にも父の仇なり。
 十一60 9 図 家の事をば心にかけて、御國の爲に行きませ、いぎや。
 十一66 2 日々同ジ食物ヲ用ヒルト、アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。
 十一67 7 図 其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。
 十一70 7 図 一人の後るゝ爲に多人數をして貴重の時間を空費せしむればなり。
 十一76 5 図 裏見瀧は(略)、先年大風雨の爲、瀧口の一角崩れ落ち、今は其の奇勝を見ること能はず。
 十一82 2 図 かぎり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。
 十一89 1 図 (略)、蟻は此の甘き汁を得んが爲に、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、(略)。
 十一99 2 図 (略)、春夏の交産卵の爲、鰍の群をなして海岸近く寄來る時は(略)。
 十一107 9 此のオンドルがある爲に、普通の家では冬でも夜具を用ひない。
 十一113 7 図 或年暴風雨の爲に不作なりしことあり、(略)。
 十一115 4 図 十四五年の後には村民は教育の爲、一厘の支出を要せざるに至るべし。
 十二4 8 図 露國が連敗の勢を回復せ

ん爲、本國に於ける海軍の幾んど全勢力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、(略)。
 十二9 9 図 (略)、敵艦の大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。
 十二20 9 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。それが爲におのづと種子をあちらこちらへ散布する。
 十二31 9 図 「二子の君の爲に戦死せるは家門の譽なり。
 十二33 3 図 (略)が如きは、保の母と同じく、忠義の爲には恩愛を忘るゝ眞心より出でたり。
 十二39 4 図 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。
 十二39 6 図 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」
 十二52 7 図 近年各國商人(略)、廣告ノ爲ニハ多額ノ費ヲ投ズルヲ惜シマズ。
 十二80 2 図 かくてゴンブスは報告の爲、西班牙に歸航せしが、(略)。
 十二81 8 忠實な犬は古帽子をくはへて、あはれな主人の爲に、道行く人の投與へる喜捨を待ちわびてゐる。
 十二92 3 図 其の上不時の出費の爲、多少の準備を爲し置くを必要とす。
 十二94 10 図 景公よりて魯と好を結ば

んが爲に魯公と會見す。

十二995 老人長者の爲に道をゆづり、(略)。

十二995 幼者・不具者の爲に席を與ふるが如きは、(略)。

十二1028 地方人民協同一致して、(略)、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。

十二1041 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、(略)。

十二1139 (略)、小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

ためいき「溜息」(名) 1 ためいき

十二823 帽子の中に一文の錢もない老人は、傾く夕日を望み、帽子の内を眺めては、幾度かためいきをついて居る。

ためし「例」(名) 1 例

十一1157 萬事此の有様なれば、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

ためす「試」(四) 1 タメス『一ス』

七17 我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。

ためとき「為時」(人名) 1 爲時

十二1510 紫式部は幼き頃より物覺よく、(略)、父の爲時は常に其の頭を

なでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

ために「為」(接) 2 爲に

十一782 二瀑相並んで雄を爭ひ、其のひゞき萬雷のとゞろくが如く、大地も爲にふるひ、(略)。

十一992 春夏の交産卵の爲、鯨の群をなして海岸近く寄來る時は海水爲に白色を呈し、(略)。

ためらう「躊躇」(四) 1 タメラフ『一ハ』

八532 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出デズ。今シバシタメラハバ事アラハ

レントス。皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

たもあみ「撫網」(名) 1 撫網

十一994 鯨の群をなして海岸近く寄來る時は海水爲に白色を呈し、特殊の網を用ひずとも、撫網にてすくひ取るを得る程にて、(略)。

たもちおり「保居」(ラ変) 1 保ち居『一(リ)』

十一965 西海岸の眞岡港のみ唯一の不凍港として僅かに内地との交通を保ち居候。

たもつ「保」(人名) 3 保 ひとりゅう たもつ

十二317 足利氏の大兵來り攻め、城遂に陥り、保・義鑑共に戦死す。

十二318 保の母は一時に二子を失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの

外、(略)、少しも悲しむ色を見せざりき。

十二332 (略)が如きは、保の母と同じく、忠義の爲には恩愛を忘るゝ眞心より出でたり。

たもつ「保」(四・五) 9 保ツ 保つ『一ターチーツ』

九575 他ノ動物ハ(略)、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、却ツテ其ノ身ノ安全ヲ保ツコトヲ得ルナリ。

九618 飲食に注意し、身體の清潔を保ち、適度の運動を怠らず、(略)。

九663 若し空氣なからんには、人も鳥獸も草木も多くの生物は其の生を保つこと能はざるべし。

十一48 アラビヤ人は後をふりかへりく、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。

十一66 常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。

十一68 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。

十一91 日光・空氣の如きは、人の生命を保つに必要なれども、隨意に得らるゝものなれば、(略)。

十一1034 孔明、(略)、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十二928 身分相當の交際は家を保つ上にも必要なり。

たもと「袂」(名) 9 タモト たもと

二51 アル日犬ハオヂイサンノタモトヲクハヘテ、ハタケノスミヘツレテイツテ、(略)。

六84 みんなと橋のたもとに出合つて、(略)。

六60 八つばかりの女の子、たもとを顔におしあてて、ひとりしく泣いてゐる。

七97 吹くや春風たもととも軽く、(略)。

八44 八時宿を出でて、町を南へ行けば、宇治橋のたもとにいたる。

九109 花に宿れる蝶は今眠さめたり。(略)。舞へや舞へや、たもと軽く舞へや。

九114 舞へや舞へや、たもと軽く舞へや。

九648 空氣は(略)、たもとの中にも、(略)、凡そ少しにてもすき間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。

十一834 鶉なはを引上げて、鶉のふなばたに立並べる時、(略)、川風たもとを拂ふも快し。

たやすし「形」 2 たやすし『一イーク』

十186 (略)、本といふものはたやすく出来るものではない。

十865 豚はどんな物でも食ふから、飼ふのにたやすし。

たやすし「形」 4 タヤスシ たやすし『一イーク』

九54 3 図 カクノ如ク動物ノ體色ニハ
其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモ
ノアリテ、(略)、タヤスク他ノ動物
ニ見附ケラル、コトナシ。
九57 3 図 他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリ
テ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅ
クコトナキガ故ニ、(略)。
九89 8 図 是金銀ハ(略)、又分合ス
ルコトモタヤスクシテ、(略)、貨幣
トスルニ最モ便利ナレバナリ。
十一82 5 図 魚は(略)、水面近く浮
ぶが故に、鵜は深く沈まずして、た
やすく魚を捕ふることを得るなり。
たゆ「絶」(下二) 8 タユ たゆ 絶
ユ 絶ゆ 「エーユル」
六82 1 図 (略)、停車場ニハ汽車ノ發
着タエズ。
七78 4 図 きのきよりおつる雨だれの
たえず休まず打つ時は、石にも穴
をうがつなり。
九39 4 図 然ルニ明治維新ノ後ハ大名
ノ往來全ク絶エ、(略)、今ハ此ノ山
坂ヲ越ユルモノ少シ。
九65 8 図 (略)、火消つばの火の消ゆ
るは空氣の供給絶ゆるが爲なり。
十41 6 図 砲音絶えし砲臺に ひら
めき立てり、日の御旗。
十一52 2 図 (略)の頃には度々行幸
ありしが、山城へ遷都ありし後は其
の事絶えたり。
十一96 3 図 (略)、海岸も海水厚く
凍結し、(略)、一月より三月まで凡そ

三箇月間は航路殆ど全ク絶え、(略)。
十二86 2 図 (略)、東京高輪泉岳寺の墓
前には今尚香花の絶ゆることなし。
たゆみなし「弛無」(形) 1 まゆみな
し「キ」
十一117 4 図 商工業の發達に 皇國
の富を起さんと、勤勉・努力ゆゆみ
なき 同胞すべて六千萬。
たゆむ「弛」(五) 1 たゆむ 「一マ」
十二50 1 アラビヤに良馬の多く産す
るのは、(略)、數千年の久しい間、
土人の絶えてたゆまない丹誠の結果
である。
たよう「ユ」こたようちゆう
たより「頼」(名) 4 たより 便り
便り
五76 7 この時べんけいは火の明りを
たよりにたづねて行つて、一人のか
りうどをつれて來た。
六61 6 図 まへからわたしは目がわ
るく、杖をたよりにあるきます。
九48 6 図 アリは幸にも星によりて方
角を見定むることを知り居たれば、
それを便りに進行せり。
十62 2 図 カンテラノ光ヲ便リニ數千
人ノ坑夫ガ銅鑛ヲ掘取ルコト、晝夜
止ム時ナシ。
たよる「頼」(四・五) 2 便る 頼る
「ツール」
七86 5 図 又夜はいくら暗くても、星
が出てゐれば、それに便つて、居る
場所や方角がちやんと分ります。

十二111 6 図 國家を護り、國權を維持
するは兵力に頼るを以て、(略)。
たら「鱈」(名) 1 鱈
十一98 5 図 樺太にて最も有望なる
は漁業にて、(略)、鮭・鱈も亦少
らず候。
たらい「鹽」(名) 2 タラヒ たらひ
ひかなだらひ
四70 4 図 (略)、母はせい出すあ
らひ物。たらひの中に あるは
何。
七38 4 (略)、出口ニハ(略)、ヲケ。
タラヒ・ザルナドヲ賣ル荒物屋ガア
ル。
タライカわん「地名」 1 多來加灣
十一98 図 多來加灣
タライカわん「名」 1 多來加灣頭
十一99 5 図 多來加灣頭に小さき海
豹島あり、(略)こゝに集る鰐鰓獸は
數千頭にも達することこれあり候。
だらけ「ひ」はいだらけ
たらす「垂」(五) 2 たらす 「一シ」
十一108 10 男の冠をかぶり、其のひも
を長くたらし、小馬に乗つて、田舎
道を通るのを見ると、(略)。
十一109 4 まだ冠禮を行はない者はチ
ョンガーといつて、髪を三つ打ちに
して後へたらしめてゐる。
たり「人」ひいくたり
たり「並助」64 タリ たり
二38 5 図 カゼヲヒイタリ オナカ
ヲイタクシタリ シタトキニ、

(略)。
二38 6 図 カゼヲヒイタリ オナカ
ヲイタクシタリ シタトキニ、
(略)。
二39 3 図 キモノヲヌツタリセン
タクシタリシテクダサルノハ、
ドナタデスカ。
二39 4 図 キモノヲヌツタリセン
タクシタリシテクダサルノハ、
ドナタデスカ。
二11 2 ワタクシハ(略)、イモウト
ノモリヲシタリ、オツカヒニ
イツタリシマス。
二11 3 ワタクシハ(略)、イモウト
ノモリヲシタリ、オツカヒニ
イツタリシマス。
二68 3 (略)、イロイロナゴチソウ
ヲシタリ、サマザマノアソビヲ
シテ見セマシタ。
四36 3 又タミノトコニシタ
リ、ヤネヲフイタリシマス。
四36 4 又タミノトコニシタ
リ、ヤネヲフイタリシマス。
四51 1 (略)、ソノママデヤイタ
リニタリシテタベルノデハア
リマセン。
四51 1 (略)、ソノママデヤイタ
リニタリシテタベルノデハア
リマセン。
四77 5 ふねはなみにゆられて、
上つたり下つたりします。
四77 6 ふねはなみにゆられて、

上つたり下つたりします。

五10 魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。

五10 魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。

五56 人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタ
リシテタバマス。

五56 人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタ
リシテタバマス。

六25 金ヤギンハ美シクテ、指ワ
ニナツタリ、トケイニナツタリ、ソ
ノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマス
ガ、(略)。

六25 金ヤギンハ美シクテ、指ワ
ニナツタリ、トケイニナツタリ、ソ
ノ他イロ／＼ナカザリ物ニナリマス
ガ、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

六70 あくびをしたり、わき見をし
たりしてゐて、(略)。

したりして、(略)。

六71 度々つけせきしたり、ちこく
したりして、(略)。

七14 間屋といふのは(略)、品
物を買つたり買つたりして、口錢を
取る店のことです。

七14 間屋といふのは(略)、品
物を買つたり買つたりして、口錢を
取る店のことです。

七27 筆一本デ美シイエヲカイト
リ、ノミーツデ見事ナホリ物ヲコシ
ラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ
、(略)。

七27 筆一本デ美シイエヲカイト
リ、ノミーツデ見事ナホリ物ヲコシ
ラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ
、(略)。

七27 筆一本デ美シイエヲカイト
リ、ノミーツデ見事ナホリ物ヲコシ
ラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ
、(略)。

七27 筆一本デ美シイエヲカイト
リ、ノミーツデ見事ナホリ物ヲコシ
ラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ
、(略)。

七37 左へ折レタリ、右へ折
レタリスルト、知ラズ／＼ニ出口へ
出テ來ル。

七37 左へ折レタリ、右へ折
レタリスルト、知ラズ／＼ニ出口へ
出テ來ル。

七37 左へ折レタリ、右へ折
レタリスルト、知ラズ／＼ニ出口へ
出テ來ル。

七37 左へ折レタリ、右へ折
レタリスルト、知ラズ／＼ニ出口へ
出テ來ル。

七49 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七49 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七49 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七65 けれども水をたくさん飲みす
ぎたり、冷い水の中に長くはいつて
ゐたりするのはどくである。

七65 けれども水をたくさん飲みす
ぎたり、冷い水の中に長くはいつて
ゐたりするのはどくである。

七65 けれども水をたくさん飲みす
ぎたり、冷い水の中に長くはいつて
ゐたりするのはどくである。

七71 エビノピン／＼ハネタリ、カ
ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

七73 又物ヲ洗ツタリフイタリスル
時ニ使フ海綿モ、(略)。

七73 又物ヲ洗ツタリフイタリスル
時ニ使フ海綿モ、(略)。

七73 又物ヲ洗ツタリフイタリスル
時ニ使フ海綿モ、(略)。

七77 様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略)。

七77 様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略)。

七77 様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略)。

七77 様々ノ魚ヤケモノガ浮
イタリ沈ンダリオヨイダリシテキル
ノハ、(略)。

七80 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七80 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七80 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七80 僕等ノ仲間ニハカラカサ
ニナツタリ、合羽ニナツタリスルモ
ノガアル。

七85 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。

七85 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。

七85 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。

七85 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なる事もあります。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

七85 浅瀬へ乗上げたり、
外の船につきあたつたりする様なま
ちがひが出來ます。

せたり、重い物を負はせて遠くへ運ばせたり、(略)。

十861 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするもの、人に恐れるからである。

十862 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするもの、人に恐れるからである。

十二149 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略) 非常ナ手數ガ掛ル。

十二1410 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略) 非常ナ手數ガ掛ル。

十二151 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略) 非常ナ手數ガ掛ル。

十二151 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略) 非常ナ手數ガ掛ル。

十二151 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略) 非常ナ手數ガ掛ル。

十二151 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、(略) 非常ナ手數ガ掛ル。

掛ル。

たり(助動) 33 タリ たり 《タラ・タリ・タル・ト》

八48 明治二十七八年及び三十七八年戦役の戦利品たる大砲、(略)。

十245 汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、遂ニ王者ノ師タラン。

十一66 百花満開の候には、外役の蜂は(略)、營營として寸時も休まず。

十一77 市民遊覧の地にして、又神戸市水道の源たり。

十一82 かゞり火をたくは(略)、又鶴をはげます一法たり。

十二84 其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

十二27 鳥居勝商といふ者あり、進み出でて其の使たらんことを請ひ、(略)。

十二33 外温順・愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、(略)。

十二34 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

十二40 其の噴火口の大きさは日本第一たるのみならず、(略)。

十二54 市街に大山通・兒玉町・乃木町等の名あるは、明治三十七八年戦役の記念たり。

十二55 満洲政治・交通の中心たる奉天は、(略)。

十二61 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

十二62 此の點より見れば真に近世都市の好模範たり。

十二63 英國博物館は古書・古物の多きこと世界に冠たり。

十二69 (略)、遠く之を望めば、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

十二72 位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、(略)。

十二85 赤穂浪士が(略)、從容死に就けるは徳川時代に於ける史上の一美談たるのみならず、(略)。

十二86 四十七士の統領たる大石良雄は初め京都に在り。

十二87 喜劍(略)、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、(略)。

十二89 (略)、極りよく整へ置くは主婦たる者の務なり。

十二91 (略)、子供の行儀・作法等につきては、主婦たる人の責任最も重し。

十二94 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」とは孔子が景公に教へたる語なり。

十二94 臣臣たり。

十二94 父父たり。

十二94 子子たり。

十二97 (略)、世界強國の國民たる名譽を負ふものは、(略)。

十二101 我等五千萬の同胞は常に

大帝國の國民たるを思ひ、(略)、大國民の品格を高むるの用意あるべきなり。

十二105 (略)、地方人民たる者は大いに力を是等の事業に盡すべきなり。

十二109 (略)、議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

十二109 (略)、國民皆兵なる今の

大御代、國民たる者は皆軍人たる心得なかるべからず。

十二108 (略)、國民たる者は皆軍人たる心得なかるべからず。

十二111 (略)、軍人たる者は一途に忠節を重んじ、(略)、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

たり(助動) 409 タリ たり たり

り 《タラ・タリ・タル・タレ》 ぐんじんにたまわたりたるちよくゆ

六33 絹糸ニテ織リタルモノヲ絹織物トイフ。

六34 木綿糸ニテ織リタルモノヲ木綿織物トイフ。

六34 麻又ハカラムシノ糸ニテ織リタルモノヲ麻織物トイフ。

六34 麻糸ニテ織リタルモノハカヤナドニツクリ、(略)。

六34 カラムシノ糸ニテ織リタルモノハカヤナドニツクル。

六35 6 図 (略)、ケモノノ毛ヲツムギ
テ織リタルモノヲ毛織物トイフ。
七18 図 ナンデハ年スデニ十歳ヲ
コエタリ。
七26 図 我ガ死ニタル後モ、(略)、
忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニ
ツクスベシ。
七29 図 汝ノ孝行コレニスギタル
コトナシ。
七31 図 (略)。「ト、ネンゴロニ言
ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。
七33 図 正成ハタシテ戦死シテ、ソ
ノクビハ家ニ送ラレタリ。
七34 図 正行ハコレヲ見テ、(略)、
ツト立チテ別室ニ行キタリ。
七46 図 ミヅカラ御コトバヲウケ
タマハリ來リテ我ニツゲタルヲ、汝
ハ早クモワスレタルカ。
七46 図 ミヅカラ御コトバヲウケ
タマハリ來リテ我ニツゲタルヲ、汝
ハ早クモワスレタルカ。
七48 図 母ハ走リヨリテ、正行ノウ
デヲオサヘ、「(略)。」トテ、泣ク
くイマシメタリ。
七66 図 『残りタル一門ノモノド
モヲ集メテ、朝敵ヲホロボセ。』
七68 図 父ハ臣ヲ合戦ノ場ニモト
モナハズ、「(略)。」ト申シ殘シタリ。
七77 図 正行コノ度ハサイゴノ合戦
セントテ、皇居ニマキリテ申シ上ゲ
ルヤウ、「(略)。」ト、涙ナガラニ申
シ上ゲタリ。

七85 図 天皇ハコレヲ聞キ、(略)、
「(略)。」トオホセ出サレタリ。
七87 図 正行ハソレヨリ戦場ニ向
ヒ、(略)、一族ノ人々トモニ戦死
ヲトゲタリ。
七89 図 正行ノ如キハマコトニ忠孝
ニツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、
(略)。
七24 1 図 時ノ人 番町デ目アキ目ク
ラニ物ヲキ、トイヒタリトイフ。
七24 3 図 アル夜弟子ヲ集メテ、書物
ノ講義ヲセシ時、風ニハカニ吹キテ、
トモシビキエタリ。
七24 4 図 保己一ハソレトモ知ラズ、
講義ヲツマケタレバ、(略)。
七25 2 図 保己一ハ笑ヒテ、「(略)。」
トイヒタリトゾ。
七35 1 図 かくして出來たるものをす
やきといふ。
七35 3 図 我らのつねに用ふる(略)
は、このすやきにうはぐすりをかけ
て、ふたゝび焼きたるものなり。
七35 6 図 塗物はくりたる木又は組合
せたる木・竹又は紙などにうるしを塗
りてつくる。
七35 6 図 塗物はくりたる木又は組合
せたる木・竹又は紙などにうるしを塗
りてつくる。
七35 9 図 塗物に黄・赤・黒・青など
さま／＼の色あるは、皆うるしに色
を着けたるなり。
七36 1 図 うるしの上に金又は銀にて

ゑがきたるものをまきふといふ。
七45 1 図 いほりもかうは孝行の
曾我兄弟に知られたり。
七50 4 図 「松村さん、郵便。」とよび
て、配達夫は入口に立ちたり。
七50 9 図 母は出て來りて、(略)、一
通の手紙を受取りたり。
七52 3 図 母は「(略)。」と教へたり。
七53 9 図 母はなほ「(略)。」といひ
きかせたり。
七54 8 図 上野公園ニハ廣キ動物園ア
リテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メ
タリ。
七56 4 図 勸工場ニ入りタルコ、チ
ス。
七57 6 図 宮城ノ御堀ニハ、カネテ寫
眞ニテ見知りタル二重橋カ、レリ。
七58 3 図 コノ公園ハ(略)、種々ノ
草花ウルハシク咲キミダレタリ。
七59 9 図 あばら骨の數へらるゝ程や
せ細りたるものあり。
七60 1 図 あるく時肉のゆれ動く程こ
え太りたるものあり。
七60 9 図 耳のたれたるもの、立ちた
るもの、(略)。
七60 9 図 耳のたれたるもの、立ちた
るもの、(略)。
七61 1 図 (略)、尾ののびたるもの、
たれたるもの、まきたるもの、(略)。
七61 1 図 (略)、尾ののびたるもの、
たれたるもの、まきたるもの、(略)。
七61 2 図 (略)、尾ののびたるもの、

たれたるもの、まきたるもの、(略)。
七63 1 図 八九頭の犬いきほひよく數
人を乗せたるそりを引きて、(略)。
七63 4 図 ある山國にては、犬のくび
に藥品・食物などを入れたるかごを
かけおきて、(略)。
七63 4 図 ある山國にては、(略)、つ
かれたる旅人をすくはしむることあ
り。
七63 6 図 又近ごろは戦場にも犬を用
ひて、たふれたる兵士をさがさしむ
といふ。
七80 6 図 (略)明治丸の船長は、一
日その町の學校へまねかれて、航海
の話をなしたり。
七84 6 図 船長は(略)、又その話を
つづけたリ。
七89 6 図 廣瀬中佐ノ乗レル福井丸
ハ、今、旅順ノ港口ニ進ミタリ。
七89 8 図 「杉野ハ今點火ヲ終ヘタ
ルゾ」。
七90 4 図 中佐ハ(略)、タマ一人ク
マナク船内ヲタツネタレドモ、杉野
ノスガタナシ。
七92 4 図 ボートハ水ニオツル砲丸ノ
シブキニ包マレタリ。
七92 5 図 中佐ハボートニ坐シテ、ナ
ホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキキ
タリ。
七92 5 図 中佐ハボートニ坐シテ、ナ
ホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキキ
タリ。

七九二 中佐ハ一片ノ肉ヲボートニ
 殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。
 八二五 神代ノ昔皇祖天照大神、
 瓊々杵尊をこの國に降したまはんと
 せし時、(略)、「(略)」とおほせら
 れたり。
 八三三 (略)、一年中の重だちたる
 祭日には勅使を差立てたまひ、(略)。
 八三五 明治三十七八年戦役の終り
 たる後も、天皇陛下御参拜あらせら
 れ、平和の成りたるを告げたまひし
 が、(略)。
 八三六 明治三十七八年戦役の終り
 たる後も、天皇陛下御参拜あらせら
 れ、平和の成りたるを告げたまひし
 が、(略)。
 八三七 明治三十七八年戦役の終り
 たる後も、天皇陛下御参拜あらせら
 れ、平和の成りたるを告げたまひし
 が、(略)。
 八四三 家々に日の丸の旗を立てた
 り。
 八四七 廣き道の左右に梅・松・櫻
 などを植ゑたり。
 八五二 (略)、數千年もへたらんか
 と思はるゝ老木枝をまじへて、高く
 天をつく。
 八六二 (略)、神殿の御屋根はかや
 にてふき、(略)、兩はしに千木をう
 ちちがへたり。
 八七九 今日この日に年來ののぞ
 みを達したるは何等の幸ぞや。
 八八四 北條時頼ノ母松下禪尼、
 (略)、ス、ケタル障子ノ破レヲツク
 ロヒキタリ。
 八八五 北條時頼ノ母松下禪尼、

(略)、ス、ケタル障子ノ破レヲツク
 ロヒキタリ。
 八八六 「召使ノ中ニカ、ル事ヲ
 ヨク心得タル者アリ。
 八八九 「我モコレ程ノ事ハ心得
 タリ。
 八九二 (略)、オボツカナキ手ツキ
 ニテ、破レタル所ヲ一間ツツ張レリ。
 八九三 (略)、總ベテ物ハ破レタ
 ル所ノミツクロヒテ用フルトキハ、
 (略)。
 八九四 義景重ネテ、「(略)」ト
 イヘバ、「(略)」ト答ヘタリトゾ。
 八九五 時頼ガ(略)、ヨク天下ヲ
 ヲサメタルモ、カ、ル母ニ養ハレタ
 ルニヨルナルベシ。
 八九六 時頼ガ(略)、ヨク天下ヲ
 ヲサメタルモ、カ、ル母ニ養ハレタ
 ルニヨルナルベシ。
 八九七 時頼ガ(略)、ヨク天下ヲ
 ヲサメタルモ、カ、ル母ニ養ハレタ
 ルニヨルナルベシ。
 八九八 其ノ友ニ飛驒工トテ世ニ聞
 エタル大工アリ。
 八九九 「我、此ノゴロ小サキ堂
 ヲ建テタリ。
 九〇〇 川成行キテ見ルニ、小サキ
 四角四面ノ堂アリテ、四方ノ戸皆開
 キタリ。
 九〇一 (略)、其ノ戸マタハタト閉
 デテ、南ノ戸開キタリ。
 九〇二 幾度カマハリタレドモ、入
 ルコトヲ得ズ、(略)。
 九〇三 「見セ申シ度キ繪出來タ
 リ。

九〇四 (略)、内ニハ黒ブクレニナ
 リテクサリタル死人横タハリテ、臭
 氣鼻ヲツクガ如シ。
 九〇五 我等ハ平生マツチヲ用ヒナ
 レタレバ、サ程ニハ思ハザレドモ、
 (略)。
 九〇六 諸子ハイマダマツチノ製造
 場ヲ見タルコトナカルベシ。
 九〇七 マツチハ今ヨリ凡ソ百年
 前、外國ニテ發明セラレタルモノナ
 リ。
 九〇八 我が國ニテハ、初ハモツバ
 ラ輸入品ヲ用ヒタリシガ、(略)。
 九〇九 中臣鎌足(略)、國ノタメ
 ニ入鹿父子ヲゾカント思ヒ立チタ
 リ。
 九一〇 アル日皇子、寺ノニハニテ
 ケマリノ會ヲナシ給ヒ、鎌足モ参リ
 合セタリ。
 九一一 御遊ナカバニシテ、マリヲ
 ケ給フハズミニ、皇子ノクツヌゲタ
 リ。
 九一二 鎌足等(略)、アラカジメ
 其ノ手ハズヲ定メタリ。
 九一三 入鹿ツヒニ殺サレタリ。
 九一四 藤原氏ノ一門コレヨリナガ
 クサカエタリ。
 九一五 琵琶の形に似たりとて、
 其の名をおへる湖の かゞみの如き
 水の面、(略)。
 九一六 滋賀唐崎の一つ松、夜の
 雨にぞ名を得たる。

九一七 (略)耳は食事の知らせを
 聞きても知らぬ風をし、(略)、足は
 食堂へ行くことを止めたり。
 九一八 諸君若し我に食物を送る
 ために働きたりといはば、(略)。
 九一九 (略)、我もまた諸君を養
 ふために勞したりといはん。
 九二〇 虎ト猫トハ最モヨク相似タ
 ル獸ナリ。
 九二一 (略)、クビ太ケレバ、他ノ
 獸類ヲトラヘタル時、之ヲ運ビ去ル
 ニ便ナリ。
 九二二 又其ノ舌ニハ内方ニ向ツ
 テハエタル太キ毛ノ如キトゲアリ、
 (略)。
 九二三 (略)、骨ニ附キタル肉ヲ食
 取ルニ便ナリ。
 九二四 此ノ外(略)ヨリ、(略)
 マデ、相似タル所甚ダ多シ。
 九二五 猫ノ中ニモ其ノ毛色虎ニ似
 タルモノアリ、(略)。
 九二六 早くより工藝・美術の發達
 したる國なり。
 九二七 (略)ドイツは學問のよく
 開けたる國なり。
 九二八 アフリカ人は皮膚黒く、髪
 ぢぢれたり。
 九二九 名古屋城は(略)、徳川家
 康が諸大名に課して造らしめたる名
 城にして、(略)。
 九三〇 名古屋は(略)、「尾張名古屋
 屋は城で持つ」とうたはれたり。

八957 近年新しき港も成りたれば、海陸運輸の便益を開け、(略)。

九38 略、やゝありてかの大蛇あらはれ出で、(略)、酒を飲みてよひふしたり。

九41 尊時分はよしと、(略)、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劔の先少しくかけたり。

九42 あやしみて尾をさきて見給ふに、一ふりの劔出でたり。

九46 かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、劔の名を天叢雲劔と申せり。

九64 略、蝦夷ども皆恐れて降参し、東國ことごとく平ぎたり。

九107 花に宿れる蝶は今眠さめたり。

九267 二箇旅團の歩兵にそこばくの騎兵・砲兵・工兵・輜重兵を加へたるものを師團といふ。

九2710 維新前後國事ニタフレタル人々ヲ始メ、(略) 忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。

九281 略、其ノ後ノ諸戰役ニ戰死シタル忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。

九283 此ノ神社ノ建テラレタルハ明治二年ニシテ、(略)。

九287 略、本殿ニハカシコクモ天皇陛下ノ御製ノ歌ヲカ、ゲタリ。

九292 杜殿ノ後ニハ美シク作ラレタル庭アリ。

九294 略、西洋風ノ建物ヲ遊就館トイヒ、(略) 軍事ニ關スル物ヲ多ク集メタリ。

九295 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、昔ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ造リタルモノニシテ、(略)。

九296 社前ナル青銅ノ鳥居ハ、昔ノ諸大名ノヲサメタル大砲ヲ集メテ造リタルモノニシテ、(略)。

九305 カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、(略)。

九391 略、日暮ヨリ後ハ一切旅人ノ通行ヲ差止メタレバ、諸大名其ノ他旅客ノ宿泊スルモノ多ク、(略)。

九414 略、大空ヨリ箱根山ヲ見下サバ、全體ノ形ノスリバチヲ倒ニシタルニヒトシキヲ見ルベシ。

九416 略、ソレヨリ噴出シタル物ノ四方ニナダレテ、冷エカタマリタルガ、今ノ箱根山ヲ成セルナリ。

九417 略、ソレヨリ噴出シタル物ノ四方ニナダレテ、冷エカタマリタルガ、今ノ箱根山ヲ成セルナリ。

九4110 此ノ四山ノ噴火モ今ハ全ク止ミタリ。

九421 是等ノ山ト元ノ噴火口ノマハリノ山トノ間ニ水ノタマリタルモノハ蘆ノ湖ニシテ、(略)。

九425 マシテ幾萬年ノ久シキ間、此ノ大ナル湖水ヨリ流レ落チタル水ノ力ハハカリ知ルベカラズ。

九437 略、はや朝顔のはちをならべて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。

九438 略、はや朝顔のはちをならべて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。

九452 或時旅行先より手紙を送りて、(略)、荷物を取りに来るべしと言ひつかはしたり。

九454 アリは(略)、年頃かひならしたる駱駝に乗り、(略)。

九455 アリは(略)、隊商と共に出立したり。

九461 アリは(略)、たゞ父にあはんを樂みに一日々々と旅行をつづけたリ。

九4610 然るに此の大風の爲に、今までの駱駝の足跡消えたれば、(略)。

九471 略、翌日風なぎて出立したれども、一同は行くべき方にまよひて、(略)。

九483 略、人々のねしづまるをうかゞひ、(略)、そこより逃れ出でたり。

九484 晴れたる大空には無數の星かゞやけり。

九485 アリは幸にも星によりて方角を見定むることを知り居たれば、それを便りに進行せり。

九489 略、其の日の夕方、一組

の隊商の宿れるテントを見たリ。

九491 アリは(略)、ねんごろに同行を頼みしに、一同快く引受けたリ。

九498 やがて親子打連れて、心樂しく發足したり。

九503 星の形を打ちたるは陸軍兵の帽子にて、(略)。

九521 略、かんむり・烏帽子今は唯 祭の服に残りたり。

九5310 略、ヒラメ・カレヒノ類ハ、其ノ體ノ一面、砂ノ色ニ似タリ。

九542 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)。

九558 タトハバ桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ體色ノ桑ノ木ニ似タル上、(略)。

九565 沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)、裏面ハ枯葉ニ似タルガ故ニ、(略)、サナガラ枯葉ノ如ク見ユ。

九586 略、或老人に、長生の方法を問ひしに、「(略)」と答へたりといふ。

九587 略、くさりたる魚などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

九593 衣服もよく洗ひて、よこれたるをば着ることなかれ。

九598 常に無病にして、醫者にかゝりたることなき人あり、(略)。

九602 「過ぎたるは及ばざるが如し。」と知るべし。

九607 閉ぢたる室内にはよこれたる空氣こもる。
 九608 閉ぢたる室内にはよこれたる空氣こもる。
 九629 (略)、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。
 九634 田村麻呂は(略)、怒る時はたけき獸も恐れたり。
 九635 (略)、笑ふ時は子供もなつき親しみたりといふ。
 九643 之をほうむりし時は、(略)、ながく皇城を守護せしめたりといふ。
 九666 帆かけ船の水上を走る、たこの空高く上る、是皆人の自然の風を利用したるなり。
 九728 (略)、二十八日は終日大暴風雨にて、川近きあたりにほづつゝ立退きたる者もこれあり、(略)。
 九7210 (略)、二十八日は終日大暴風雨にて、(略)、同夜は近村の者一人も眠につきたる者これなく候。
 九734 (略)、此の分ならば、もはや心配には及ぶまじと立退きたる者も引返したる程に御座候。
 九734 (略)、此の分ならば、もはや心配には及ぶまじと立退きたる者も引返したる程に御座候。
 九750 幸に命を全うしたる者も、大がいは着のみのまゝにて、(略)。
 九772 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒ

オキテ、(略)郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、全部ハリ終へタル時、之ヲ郵便局ニ差出シテ、(略)。
 九777 (略)、金錢ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ書入レタル通帳ヲ渡ス。
 九778 (略)、金錢ヲ預ケタル者ニハ、其ノ金高ヲ書入レタル通帳ヲ渡ス。
 九781 (略)、預ケタル金高ノ次第ニ上リ行クハ樂シキモノナリ。
 九803 (略)、道眞は「(略)」といふ意味の詩を作りてあたへたりといふ。
 九808 筑紫に到りて後は、(略)、僅かに詩歌に思をよせて、ひとり自らなぐさめ居たり。
 九812 去年の今夜清涼殿の御宴に侍し、(略)、御衣を賜はりて身に餘る面目をほどこしたりしが、(略)。
 九815 道眞(略)、はるかに東方を拜し、一篇の詩を作りたり。
 九8710 賣買トイフコトナカリシ遠キ昔ニハ、(略)物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。
 九884 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、(略)、先ヅ甲ノ農夫ヲタヅネタリトセヨ。
 九892 貨幣トシタル物品ハ時代ニヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。
 九893 貝・毛皮・穀物・牛等ヲ用ヒタルコトアリ。

九895 (略)等ノ字ノ一部ニ貝ノ字アルハ、支那ノ古代ニ貝ヲ用ヒタルガ故ナリトイフ。
 九9110 (略)、うぐひすの間は如何にと雲るまで聞え上げたる言の葉は、幾代の春かかをらん。
 九949 次の門を唐門といふ。木材は一切唐木を用ひたり。
 九953 (略)、家光の廟あり、建築の善美を盡せる亦相似たり。
 九954 天然の美は更に人工の美よりも勝れたり。
 九965 (略)、よく人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。
 十17 昔より富士は日本一の高山と稱せられしが、(略)、臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。
 十19 (略)、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふべく、(略)。
 十38 其の工事の總費用は(略)、一里の長さだけ十圓金貨を並べたるに等しといふ。
 十93 (略)落葉・こけ及び(略)木の根などは、地上に落ちたる水をふくみさへふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。
 十106 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地

方も少からず。
 十106 海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。
 十113 かく保護せられたる森林を保安林といふ。
 十152 一條天皇の頃には才學すぐれたる宮女多かりしが、(略)。
 十153 (略)、最も世に聞えたるは紫式部と清少納言となり。
 十162 (略)、父の爲時は常に其の頭をなでて、「略」といひたりとぞ。
 十163 夫に別れて後、宮中に召されて、上東門院に漢文・漢詩を教へ參らせたり。
 十164 (略)、式部は少しも高ふりたる風なく、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。
 十165 (略)、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。
 十168 清少納言も(略)、其の才氣を以て知られたりき。
 十171 (略)、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすまき上げたリ。
 十179 萬づに心きたること、此の一例にても知るべし。
 十2310 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ先ダテタリ。
 十248 良大イニ喜ビテ、朝夕之ヲ讀ミ、遂ニ兵法ヲ會得シタリ。

十2510 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖
 二仕へ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ
 大業ヲ成サシメタリ。
 十329 薩レバ平左衛門ノ死セシ時
 ハ、中國ノ人々、(略)父母ニ別ル、
 如ク悲シミタリトナリ。
 十409 圖 二人の我が子それ／＼
 に、死所を得たるを喜べり。
 十421 疊ノ表ハ、此ノ莖ヲ
 アミテ造リタルモノナリ。
 十425 花筵ヲ(略)、其ノ織方ヲ
 發明シタルハ岡山縣ノ磯崎眠亀トイ
 フ人ナリ。
 十437 唯一商人アリテ、
 其ノ中ノ數種ヲ買取りタルノミナリ
 キ。
 十453 第三圖は斜の線のみ
 を用ひたるものにして、(略)。
 十457 第七圖は縦・横・斜
 三様の線を併せ用ひたるものなり。
 十469 見よ、(略)、直線・曲線を
 併せ用ひたる第十四圖・第十五圖の
 模様如何に麗しきかを。
 十499 我等の衣食住には模
 様・色どりをほどこしたるもの多し。
 十519 土かと見れば、錦のひた
 れ着けたり。
 十526 義仲の幼目に見たりし時
 も、すでに白髪まじりの老人なりき。
 十527 今ハ七十にも餘れば、殊
 の外白髪には成りたらんに、(略)。
 十529 樋口は古き友なり、見知

りたらん。」
 十534 「されば思ひ出したる事
 の候。
 十551 別當は七日の間手
 もとに置いて、木曾へつかはしたり。
 十558 あやふき敵の手より救ひ
 くれたる厚恩、いかでか忘るべき。」
 十559 義仲之を見て、「(略)。」
 と、さめ／＼と泣きたれば、(略)。
 十579 小生の如く平素勞働にな
 れたる者には、術科もつらきことは
 これなく、(略)。
 十581 又學科も小學校を
 卒業したる者には餘りむづかしとも
 覺え申さず候。
 十585 水曜日其の日の
 課業を終へたる時より夕食前まで外
 出を許され候。
 十594 何か不都合なる事あり
 て、罰に處せられたる者は外出を禁
 ぜられ、(略)。
 十612 江戸城及日光東照
 宮等ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、(略)。
 十613 等ノ造營ニ用ヒタル
 銅ハ、大抵此ノ山ヨリ産出シタルモ
 ノナリトイフ。
 十624 發掘シタル銅鑛ハ、(略)坑
 外ニ運ビ出シ、之ヲ選鑛場ニ送ル。
 十625 發掘シタル銅鑛ハ、(略)、
 或ハ坑内ニ敷キタルレールニヨリテ
 坑外ニ運ビ出シ、(略)。
 十629 カク選り分ケタルモノハ之

ヲ製煉場ニ送ル。
 十683 或夜(略)、此の燈臺附近
 の岩の上に乘上げたる帆船あり。
 十685 船體二つにくだけて、一半
 ははや大波にさらはれたり。
 十689 生残れる水夫は破れたる船
 體にすがり、(略)救を呼べり。
 十691 幾度かいそべに出で
 てながめしが、墨を流したる如き空
 模様にて、(略)。
 十693 一寸先をも見分くる
 こと能はず、心ならずも夜明を待ち
 たり。
 十703 ポートは幾度となく
 打ちもどされ打ちもどさるゝを、辛
 くして難破船に漕着けたり。
 十705 父は直ちに勞れ果てたる水
 夫を助けて、ポートにうつす。
 十707 此の間(略)、岩と波との
 間にポートをあやつり居たる少女の
 働は、人間業とは見えず。
 十708 二人はまた有らん限
 りの勇氣をふるひて、遂に岸べに漕
 着けたり。
 十709 水夫は盡く燈臺番の小屋に
 入れられたり。
 十714 數日の後、水夫は(略)、各
 我が家に歸りたりとぞ。
 十719 其の熱氣に温りたる水の自
 然に地上にわき出づるもの、即ち温
 泉なり。
 十732 中にも最も世に知られたる

は、西に道後・有馬、東に箱根・熱
 海・伊香保等あり。
 十738 道後に次ぎて早く世に知ら
 れたるは有馬の温泉にして、(略)。
 十742 箱根は(略)、近く東京・横
 濱をひかへたれば、盛夏の候は何れ
 の旅館も空室なきに至るを常とす。
 十748 伊香保も亦古くより知られ
 たる温泉にして、(略)。
 十777 スベテ重要ナル機關アル部
 分ハ、殊ニ強堅ナル骨ニテ包マレタ
 リ。
 十779 胸部ノヨロヒノ如キ骨ニテ
 オホハレタルハ肺臟及ビ心臓ヲ保護
 センガ爲ナリ。
 十801 然れども入墨をほどこすこ
 とは今は全く禁ぜられたり。
 十811 あつし織とは、おひようと
 いふ木の皮を細く裂きて織りたる織
 物なり。
 十818 あいぬは時々子熊を捕へ來
 り、一年の間養ひたる後、之を殺し
 て(略)。
 十8110 殺したる熊の頭は垣にかけ
 て、永く之を保存するを以て、(略)。
 十898 御返歌申し、泣きゐたる
 やみの天地をまた元の 御代に返
 すは誰が任ぞ。
 十956 師範學校門内ノ八重櫻一
 株、(略)其ノ奈良櫻ノ名殘ヲトメ
 タリ。
 十964 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリ

テ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。
 十974 図 我ガ國ノ古美術ハコ、ニ其ノ粹ヲ集メタリトイフベシ。
 十982 図 此ノ寺ハ聖德太子ガ用明天皇ノ御爲ニ建立シタルモノニシテ、(略)。
 十983 図 (略)、千二百餘年ヲ經タル古堂ノ中ニハ當時ノ佛像今尚存ス。
 十998 図 紀貫之ガ(略)。トヨミタリトイフ梅ノ木ハ此ノ廊ノカタハラニアリ。
 十9910 図 廊下ノ兩ガハニハ幾百株トナク牡丹ヲ植込ミタリ。
 十一15 図 全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。
 十一52 図 (略)の頃には度々行幸ありしが、山城へ遷都ありし後は其の事絶えたり。
 十一73 図 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、(略)。
 十一77 図 (略)、女王は新しく生れたる雌蜂に其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。
 十一79 図 此の時箱・樽等を適當なる所に置けば、分離したる一群は直ちに其の中に入る。
 十一141 図 (略)、事の未だ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、(略)。

十一142 図 (略)、主上尚笠置におはしませし時早くも義兵を擧げしが、(略)、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、其のまゝにて止みたり。
 十一154 図 (略)、道も無き山の雲をしのぎて杉坂に着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ひぬと申す。
 十一159 図 高德(略)、行在所の御庭にしのび入り、(略)、大文字に詩の句を書きつけたり。
 十一163 図 翌朝警固の武士ども之を見つけて、何事を如何なる者の書きたるかと、讀みかねて上聞に達したり。
 十一163 図 翌朝警固の武士ども之を見つけて、(略)、讀みかねて上聞に達したり。
 十一168 図 (略)、呉の勢盛になりて、會稽山の戰に越の軍を打破りたり。
 十一171 図 (略)、越王勾踐(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。
 十一173 図 (略)、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。
 十一179 図 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。
 十一2210 図 (略)、百尋・千尋海の底、遊びふれる庭廣し。
 十一232 図 幾年こゝにきまへとる鐵より堅きあひかり。
 十一234 図 吹く塩風に黒みたる

はだは赤銅さながらに。
 十二257 図 昔都大路をねり行きたりし絲毛の車は如何に優美なりけん。
 十二281 図 其の後百年間の發達は蒸氣機關の上に多大なる改良を加へたるを以て、(略)。
 十二289 図 國運發展の速なることに實に驚くにたへたり。
 十二2910 図 國名ヲ以テ名ヅケラレタルモノニハ、安藝・(略)等アリ。
 十二301 図 山ノ名ヲ附シタルモノニ三笠・(略)等、川ノ名ヲ附シタルモノニ隅田・(略)等アリ。
 十二302 図 (略)、川ノ名ヲ附シタルモノニ隅田・(略)等アリ。
 十二304 図 又嚴島・橋立・須磨・明石・宇治・龍田等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ヅケタルモノニシテ、(略)。
 十二314 図 水雷艇ニハ千鳥・(略)等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。
 十二374 図 (略)、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。
 十二3810 図 其の氣根の地に入りて、(略)一大樹を成したるは見事に御座候。
 十二415 図 吉野の朝の頃、赤松光範、(略)、散々に撃破られたり。
 十二424 図 また我に代りて討死したる六郎の形見とも思ふものを。
 十二4210 図 (略)、「さらば是にて本意を遂げよ。」とて、常に身を離さ

ざりし名刀を與へて行かしめたり。
 十二434 図 住吉の戰に父の討死したる後、一族の者領地をうばひて、我を追出したり。
 十二434 図 (略)、一族の者領地をうばひて、我を追出したり。
 十二4310 図 (略)、正儀は情深き武士なれば、呼出して召使ひたり。
 十二442 図 正儀は河内にて領地を與へんとしたれども、熊王は「(略)」とて受けざりき。
 十二445 図 (略)、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、(略)。
 十二455 図 正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、(略)。
 十二455 図 (略)、熊王年來包みたる心の中を打明けて、(略)。
 十二457 図 居合せたる人々涙にくれながら、「(略)」と、取つておさへて動かせず。
 十二461 図 熊王(略)、正儀より賜はりたる名の正寛を其のまゝに正寛法師と名乗れり。
 十二462 図 かくて光範の與へたる刀には事の由を書添へて送り返し、(略)。
 十二595 図 老いゑる父の望は一つ。
 十二599 図 老いたる母の願は一つ。
 十二689 図 (略)、街上に落ちたる硝

子の一片を去るも、公衆の利益なるべし。

十一69 8 図 爲したる事に過なく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

十一71 8 図 此の畫の出來たる由來こそ面白けれ。

十一72 1 図 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)、毎日遊び暮して三年を経たり。

十一72 8 図 (略)、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。

十一73 4 図 翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。

十一73 7 図 (略)、前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかなどひとり言いひ居たり。

十一73 10 図 (略)、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の卧したる様をなせり。

十一74 2 図 夜明けて後、住持畫工に向ひて、「(略)」と、夜中のぞき見たる姿をして見るに、(略)。

十一74 4 図 「そは昨夜のぞき見て知りたり。」

十一74 9 図 「先に畫がきたる櫓の枝に一枝足らぬ所あり、(略)」

十一75 2 図 「(略)、箱根山中にてよき枝ぶりの櫓を見て、其の意を得たれば、之を書添へんとて、わざ／＼歸り來りたるなり。」

十一75 3 図 「(略)、之を書添へんとて、わざ／＼歸り來りたるなり。」

十一75 9 図 日光山には華嚴瀧を始として、(略)等其の名世に知られたるもの少からず。

十一76 4 図 裏見瀧は後の細道より瀧の裏面を望み見るを以て此の名を得たりしが、(略)。

十一79 2 図 鶴を使ひて魚を捕ふこと、我が國にては古來廣く諸所に行はれたり。

十一80 7 図 此の間に鶴を引上げて吞みたる魚を吐かせ、再び之を水に放ち、(略)。

十一81 4 図 鶴の首元は細なはにてしばりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、(略)。

十一81 4 図 鶴の首元は細なはにてしばりたれば、捕へたる魚を腹中に吞下すことなく、(略)。

十一81 8 図 くはへたる魚をふりかへて、頭より吞下す早業は、(略)。

十一84 10 図 コレニハ細小ノ針金ニテ作りタルブラッシノ仕掛アリテ、(略)。

十一85 2 図 アタカモ人ノ頭髮ヲクシケツルニ似タリ。

十一87 10 図 蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢を造るは醸造の業と建築の業とをかねたりといはんか。

十一88 8 図 農夫の田畑を耕すに似たらずや。

十一92 4 図 かくて其の家の價は段々高くなりて、最も高き價をつけたる人の手に渡るべきなり。

十一92 9 図 かくて其の家の價は段々安くなりて、最も價を低くしたる人、其の家を賣ることを得べきなり。

十一93 3 図 物の價は(略)、常に其の物を製造する費用と相當の利益とを併せたる金額に等しからんとする傾きあるものなり。

十一100 9 図 ロシヤにて早くより開拓に力を用ひたるは主として五十度以北に候。

十一105 7 図 孔明ハ嚴正ニシテ甚ダ規律ヲ重ンジタリ。

十一106 6 図 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

十一106 8 図 又魏軍ノ蜀ニ攻入りシ時、仲達ハ(略)、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十一114 1 図 「不作の後なれば、成るべく經費を節約したしとの校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」

十一114 2 図 (略)、村長は「(略)」と説明したれば、さらばとて原案のまゝに決議せり。

十一115 7 図 (略)、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

十二3 5 図 鍛ひたる劍の光いちじるく世にゝやかせ、我が軍人。

十二5 10 図 「(略)」との信號旗が戰闘旗と共に我が旗艦三笠にかゝげられたるは午後一時三十分にして、(略)。

十二8 7 図 敵今は逃れぬところと覺悟したりけん、(略)其の部下と共に降服せり。

十二10 1 図 (略)、三十八隻の中逃げおぼせたるは巡洋艦以下數隻のみ。

十二10 3 図 我が軍の死傷甚だしく、沈没したるもの僅かに水雷艇三隻に止れり。

十二10 7 図 「我が聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一二天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、(略)。

十二11 1 図 (略)、獨ニ敵ニ對シ勇進敢戰シタル麾下將卒モ、(略)。

十二11 1 図 (略)皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

十二11 6 図 勝報上聞に達し、陛下の下し給へる勅語の中に、「(略)」と仰せられたり。

十二19 2 図 諸子は中央氣象臺より發行する天氣圖を見たことありや。

十二19 3 図 天氣圖とは各地に於て同時刻に觀測したる(略)等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

十二27 4 図 「敵は長圍の計を取れるに、我は糧食殆ど盡きたり。

十二27 9 図 「(略)、若し向ひの山

にのろしのがるを見は、幸にして城を出でたりと知れ。

十二283 黒き影は（略）、ひらりとばかり身を水中に投入れたり。

十二287 しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。

十二306 伊企儼（略）、幾度責めらるれども改めず、遂に殺されたり。

十二307 古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。

十二323 是等の人々は（略）、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、（略）。

十二325 孝女お房の幼き身を以て能く父母に事へたる、（略）、皆後世女子の模範とすべき徳行なり。

十二326 稻生恆軒の妻の常に祖先の祭に心を盡したる、（略）、皆後世女子の模範とすべき徳行なり。

十二327 松下禪尼の儉約を守りたる、（略）、皆後世女子の模範とすべき徳行なり。

十二327 鈴木今右衛門の妻の慈善を行ひたる、皆後世女子の模範とすべき徳行なり。

十二333 楠木正行の母が正行を戒め、（略）が如きは、（略）、忠義の爲には恩愛を忘るゝ真心より出でたり。

十二356 二當り、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

十二389 廉頗之を見て心安からず、「略」と言ひ居たり。

十二392 余は秦王を其の朝に叱したるもの。

十二401 富士山の（略）、時時破裂せしことも亦歴史に見えたり。

十二433 安永八年櫻島の破裂せし時は、（略）までも火山灰を降らしたりといふ。

十二441 我が國は（略）、米・麥の栽培は最も早く開けたり。

十二482 四方の海の底廣く、魚介さまぐ海草の無限の富を藏したり。

十二494 絹織物の産地には、京都西陣始とし、群馬の桐生・伊勢崎も古く其の名を知らたり。

十二507 外國トノ交通少カリシ時代ニハ、商業ハ殆ド内國ニ限ラレタリキ。

十二534 強兵ヲ以テ知ラレタル我が國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、（略）。

十二568 日露の戦役に於ては、（略）、我が軍は苦戦十一箇月にして之を陥れたり。

十二578 撫順は満洲屈指の炭坑地なれば、特に支線を敷きたるなり。

十二583 此の鐵道は日露戦役中に急設したる輕便鐵道にして、（略）。

十二595 テームスとセーヌとは（略）、河幅はるかに廣く、之に架し

たる橋は何れも壯大にして、（略）。

十二634 電車の便の最も開けたるは伯林にして、（略）。

十二638 倫敦には（略）等世界に名を知られたる建築物多し。

十二641 英國は國會の最も早く開けたる國にして、（略）。

十二646 巴里にも（略）、世に聞えたる建物少からず。

十二737 始めて西半球の陸地を發見したるは伊太利人コロンブスにして、（略）。

十二738 彼をして其の志を成さしめたるは西班牙の皇后イサベラなり。

十二746 コロンブスは最も熱心に之を考へ居たり。

十二749 たまぐ元の忽必烈に仕へたる伊太利の大旅行家マルコ・ポーロの日本に關する記事を読み、（略）。

十二755 又ポーロの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、（略）。

十二7510 地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

十二763 コロンブスは葡萄牙に客遊中、熱心に此の説を主張したりしが、（略）。

十二788 又果實の附きたる

枝の波のまに／＼浮べるを見たり。

十二788 又果實の附きたる枝の波のまに／＼浮べるを見たり。

十二865 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。

十二869 「主人は死し、主家は亡びたるに、汝家老として仇を報ずるを知らず、（略）。

十二877 我が足、獸として良雄に食はしめたり。

十二886 出入口に、はき物の置亂れたる家には、盗人のうかゞふこと多しといへり。

十二935 當時支那は王室衰へ、諸侯各其の國によりて互に勢を爭ひたり。

十二946 「君君たり。（略）」とは孔子が景公に教へたる語なり。

十二955 我、罪を魯君に得たり、如何にせば可ならん。」

十二958 此の會に於ける孔子の行動は蘭相如が秦王を叱したるとは異なり、（略）。

十二1023 我が國の地方自治團體は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。

十二1066 國家に勤勞あり又は學識あるものより勅任せられたるもの、（略）。

十二1068 及び各府縣に於て（略）十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるもの

十二356 二當り、其ノ席末ニ列スルヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ナリ。

是なり。

十二106 〇 衆議院は一定の選舉資格を有する臣民の公選したる議員を以て組織し、(略)。

十二107 〇 しかして、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経たる後、天皇の裁可を待ちて始めて成立するものとす。

十二108 〇 又貴族院及び衆議院は(略)の權能を與へられたり。

十二117 〇 我等は(略)、既に祖先の事蹟を學び得たること多し。

十二119 1 〇 いろはのいをも わきまへぬ 身のいつしかに 積み得る、(略)、世の人並の 文字の數。

十二119 3 〇 (略)、西も東も 知らざりし 身のいつしかに 分けはたる、世の人並の 文字の數。世の人並の 道の筋。

た り ょ う 「多量」(名) 2 多量

十一33 3 〇 (略)、何レモ多量ノ石炭ヲ積み、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。

十一88 5 〇 蚯蚓は(略)、多量の土を呑込みては之を地上の穴の口に出す。

た り る 「足」(上一) 1 足リル 『一リ』

七26 6 〇 イソガシイ時ニ手ノ足リナイトイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。

たる「樽」(名) 3 タル 樽

三30 5 タルヤヲケニモ、竹ノ

タガガカケテアリマス。

六67 8 〇 杉ハ(略)、又ハコ・ヲケ・タルナドヲ作ルニ用フルコト多シ。

十一7 8 〇 蜜蜂は(略)。(略)。此の時箱・樽等を適當なる所に置けば、分離したる一群は直ちに其の中に入る。

た る 「足」(四) 9 足ル 足る 『一ルール』

七55 5 〇 サレドモコ、ニテ見ユルハ東京ノ三分ノ一ニモ足ラズトイフ。

八38 3 〇 マツチハーダースノ價三四錢グラキナレバ、一箱三四厘ニモ足ラズ。

九59 5 〇 よき心持のみにても病をふせぐに足らん。

十23 1 〇 「汝ハ教フルニ足ル者ナリ、(略)」。

十82 9 〇 あいぬの數、(略)、近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に足らず。

十94 10 〇 (略)、規模極メテ大ナリシガ、今ハ往時ノ三ノ一ニモ足ラズ。

十103 1 〇 名所・舊蹟ヲアマネク尋ネンニハ、幾月ノ巡遊モ尚足ラザル感アルベシ。

十一74 10 〇 「先に晝がきたる櫓の枝に一枝足らぬ所あり、氣にかゝりしが、(略)」。

十二65 6 〇 獨逸帝國は創建以來年尚淺ければ、首府の壯觀の未だ英佛二

國に及ばざるものあるは固よりあやしむに足らず。

た る 「垂」(下二) 2 たる 『一レ』

七60 8 〇 耳のたれたるもの、立ちたるもの、(略)。

七61 1 〇 (略)、尾ののびたるもの、たれたるもの、まきたるもの、(略)。

たるき「垂木」(名) 1 たるき

十13 10 〇 (略) 「ねだ低く、たるきは高し。

たるたま「垂玉」(地名) 1 垂玉

十二41 〇 垂玉

たるまゆゆきたるま

だるまさん「達磨」(名) 2 ダルマサン

二42 3 〇 ダルマサンノ目ハ大

キイカラ、大キナ目ヲツケマセウ。」

二44 2 〇 「ダルマサンニハ、耳ハイリマセン。」

たれゝあまだれ

だれ「誰」(代名) 23 ダレ だれ 誰

三13 7 〇 (略)、ダレトスマフヲトツテモ、マケタコトハアリマセン。

三22 7 私をころがすのはだれにもできますが、(略)、二つかさねることは、どうしてもできません。

三43 5 ダレモ右ノ方ノナカマニハイルノハイヤデスカラ、ミンナガフンパツスルヤウニナリマシタ。

四78 6 〇 だれか上手なものはないか。」

六32 4 〇 「それでもだんなが居ないから、だまつてゐれば、誰にも知れはしない。」

六46 4 〇 信長は誰かとたづねますと、木下藤吉郎秀吉と答へました。

六46 7 〇 又ある朝早く信長がかりに出ようとして、「誰も居らぬか。」とよびますと、(略)。

六62 1 〇 「そんなわるさを誰がした。」

七39 6 〇 これを見た人は皆ほしいとは思ひましたが、何分にも直が高いので、誰一人買はうといふ者がありません。

七43 4 〇 「あゝ、よい馬、名馬々々。誰の馬か。」

八23 1 〇 歸つて見ると、自分の家は戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。

八23 8 〇 牛小屋の牛はしきりに鳴いてゐるのに、誰も草をやるものがありません。

八45 7 〇 「こちらでは近年にない大火事だから、誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。

九30 6 〇 カクノ如ク國事ニタフレタル人々ヲアハレミ給フコトノ深ク且アツキヲ見ルモノ、誰カハ義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。

十50 3 〇 「唯一人ふみ止つて戦ひ

給ふは誰ぞ。名乗り給へや。

102 6 図 コ、ニマウヅルモノ、誰カハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ御威徳ヲ仰ガザラン。

11 10 7 又毎日同ジ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク其ノ仕事ニ熟練スル。

11 24 9 図 上古の舟車と今日の汽車・汽船とをくらべんには、誰カ人智の進歩の大なるに驚かざらん。

11 56 9 此の時「自分が行かう。」とさげぶ人を誰かと見れば、將軍マクドナルである。

12 14 4 図 (略)、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。

12 37 8 図 秀忠「さらば誰か然るべき。」といふ。

12 85 2 日ははや没して、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、今の今まで誰一人も氣附かなかつた。

12 85 3 かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。た・れる「垂」(下二) 1 たれる「レ」

16 15 1 どの田を見ても、稻がよくじゆくして、重さうにはをたれてゐます。

たろう「太郎」「話し手名」5 太郎 四 4 6 太郎「あそこに高い火の見えるのはしこが見える。」

四 5 6 太郎「うちのまへの川が

あんなにまがりまがつて、とほくの方へながれてゐます。

四 6 7 太郎「さうです。

四 7 2 太郎「いいえ、六人です。」

四 7 5 太郎「くるまにのつてゐる人を入れると、六人でせう。」

たろう「太郎」「人名」3 太郎「うらしまたろう・てづかのたろうみつもり・ばんどうたろう

四 3 8 太郎と次郎が二人で山へのぼりました。

四 70 6 図 これは太郎のこくらのほかま。

四 70 8 図 太郎きのふは うんどうくわいで、どうによこしたこのほかま。

たろうどの「太郎殿」「人名」1 太郎 どの

六 41 6 図 十二月十六日 父より 太郎どの お花どの

が枝もたわむ程なつてゐる。

たわむ「撓」(下二) 1 タワム「一メ」

10 43 2 図 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重

ネテ、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。然レドモ少シモ其ノ志ヲタ

ワメズ、イヨ／＼勇氣ヲフルヒテ考案ヲ續ケ、(略)。

たわむ・れる「戯」(下二) 1 戯れる「一レ」

11 51 1 やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。

たわら「俵」(名) 6 タワラ 俵「むぎだわら

四 36 1 イネノワラデハ、タワラ コモムシロナハワラデミノナ

ドロ作りマス。

六 16 8 米を俵に入れて、その俵をつみ重ねてながめた時は、(略)。

だん「男」ひはくしだんしゃく

だん「段」(名) 4 ダン 段「いしだん・さんだんめ・だいいちだん・だんめ・よだんめ

四 73 3 一バン上ノダンニハダ イリサマヲナラベテ、(略)。

四 74 5 (略)、又ソノ次ノダンニハヒシモチトオゼンヲソナヘテ、(略)。

11 47 4 さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。

11 63 7 図 (略) 建碑式舉行致候間、御光臨の榮を賜はり度、此段御案内申上候。

だん「彈」ひいちだん・だいさんだん・だいにだん

だんがん「彈丸」(名) 3 彈丸

八 85 6 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、(略)、盛ニ彈丸ヲ打出ス。

八 86 4 敵ノ彈丸ハ雨アラレノ様ニ飛ンデ來ル。

八 88 9 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクマリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。

だんがんと「彈丸跡」(名) 1 彈丸

あと

10 38 7 図 庭に一本棗の木、彈丸あ

ともいぢるく、くづれ残れる民屋

1、今ぞ相見る二將軍。

たんけい「短徑」(名) 1 短徑

12 40 7 図 阿蘇山の舊噴火口は南北

の長徑六里、東西の短徑四里にわた
り、(略)。

だんけつ 凸きようどうだんけつす

たんけん 凸だいたんけん

たんご 〔丹後〕(名) 1 丹後

十一301 〔略〕我が軍艦ノ名ヲ知
レルナルベシ。國名ヲ以テ名ツケラ
レタルモノニハ、安藝・薩摩・石見
・肥前・相模・周防・丹後等アリ。

だんご 〔団子〕(名) 3 だんご

四338 〔略〕、もちやだんごの

あんは何で作るのですか。」

四348 〔略〕「だんごにつけるこな

は。」三郎「あれも豆です。」

四345 〔略〕「それではあんの豆と、

だんごにつけるこなの豆と

同じですか、ちがひますか。」

たんこう 〔炭坑〕(名) 1 炭坑

十二579 〔略〕其の炭坑は炭層厚く、炭

量亦豊富なり。

たんこう 〔炭礦〕(名) 1 炭礦

十二485 〔略〕三池・夕張・大の浦、

掘れど炭礦限りなく、(略)。

たんこうち 〔炭坑地〕(名) 1 炭坑地

十二577 〔略〕撫順は滿洲屈指の炭坑地

なれば、特に支線を敷きたるなり。

たんこうば 〔鍛工場〕(名) 1 鍛工場

十二126 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、

鋼鐵・眞鍮類ヲ鑄ル處モアリ、(略)。

たんさんガス (名) 9 炭酸瓦斯 炭

酸瓦斯

十二212 動物は呼吸作用によつて、

空氣中の酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐
出す。

十二214 若し之を消費するものがない

ければ、空氣中には炭酸瓦斯が段々

に増加し、遂には地球上の動物が呼

吸作用を営むことが出来なくなる道
理である。

十二216 然るに空氣中の炭酸瓦斯の

分量が増さないのは、一方に於て植

物が之を消費するからである。

十二218 植物も(略)、呼吸作用で

酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、

十二219 植物も(略)、呼吸作用で

酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、

其の吐出す炭酸瓦斯の分量は至つて

少い。

十二2110 外に同化作用といつて、

盛に炭酸瓦斯を取つて、其の中の炭

素を養分にして酸素を放つ作用があ

る。

十二221 若し炭酸瓦斯を供給するも

のがなければ、空氣中の炭酸瓦斯の

分量が著しく減つて、(略)。

十二222 〔略〕空氣中の炭酸瓦斯の

分量が著しく減つて、地球上の植物

は盡く枯死すべきはずである。

十二224 然るに炭酸瓦斯が絶えず

供給されるのは、(略)、動物の呼吸

作用も與つて大いに力があるのであ

る。

談山神社

十1004 櫻井町ヲ南へ去レバ談山神

社ノ一ノ鳥居アリ。

十1006 〔略〕コレヨリ谷川ニソヒテ、坂

路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、多武峯
ナル談山神社ニ達ス。

だんし 〔男子〕(名) 9 男子 凸につば

んだんし

九195 〔略〕軍人となつて、いくさに出

たのを男子の面目とも思はず、其の

有様は何事だ。

九242 〔略〕我が國は國民皆兵なり、男

子は十七歳より四十歳までの間、何

れも兵役に服する義務あり。

九276 〔略〕五月五日ニ軍人形ヲカザ

リ、ノボリヲ立テテ、男子ノ福運ヲ

イノルコト、我が國古ヨリノ風習ナ

リ。

十796 〔略〕是は北海道に住するあいぬ

人を畫がけるものにて、左は男子、

右は女子なり。

十796 〔略〕あいぬの男子は髪とひげと

を長くのばし、耳に金屬製の輪をは

め、こしに小刀をさぐ。

十798 〔略〕女子は耳に耳輪をはむるこ

と男子に同じく、(略)。

十806 〔略〕男子も女子も寒き時は犬の

皮などにて造れる羽織の如きものを

用ひ、又あつし織の短きつゝ袖を着、
(略)。

婦人の實例にして、其の志操の固き
は男子にも勝れり。

十二912 〔略〕男子は外に出でて不在勝

のものなれば、幼兒は母の感化を受

くること最も多し。

たんしよ 〔短所〕(名) 1 短所

十二538 〔略〕他人ノ惡事・短所ヲアザ

クリ笑フハ、己ノ品位ヲ下ス所以ナ

リ。

だんしょう 〔談笑〕(名) 1 談笑

十一536 〔略〕儀式・公會等ノ席ニテ談

笑ヲツ、シムハ我等文明國民ノ美風

ナリ。

だんしょうす 〔談笑〕(サ変) 1 談笑

す 〔一ス〕

十817 〔略〕屋内には中央にゐるりを造

り、一家之を圍みて談笑す。

たんじょうう 〔誕生日〕(名) 1 誕生

日 凸こたんじょうう

十一621 〔略〕拜啓、老父事本年滿六

十歳に相違候に付、來る七月二日の

誕生日を以て、親族一同打寄り、心

ばかりの祝宴相開き、御心安き方々

御招待致度と存候間、(略)。

たんす 〔簞笥〕(名) 3 タンス

四743 又四ダン目ニハ小サナタ

ンスヤナガモチヤヒバチナド

ヲナラベ、(略)。

六686 〔略〕桐ハ(略)、輕クシテ美シケ
レバ、ツクエ・本バコ・タンス・ハ
キモノナドヲ作ルニ用フ。

六693 〔略〕材木ヲ用ヒテ(略)、ツクエ

・本箱・タンスナドヲ作ルモノハサシモノシナリ。

たんず「嘆」(サ変) 2 歎ズ「一ジ」

十一105 4 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再ビ戦ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、賊將歎ジテ、「公ハ天授ナリ、敵スベカラズ。」トテ、マタ反スルコトナカリキ。

十一106 6 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

だんず「談」(サ変) 3 談ズ 談ず「一ズルーゼ」

九88 6 太トヘバコ、ニ漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。(略)。

乙ノ農夫モ亦魚ヲ望マズバ、更ニ丙丁ノ農夫ニ談ゼザルベカラズ。

十102 10 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、昔ナガラノ山河、一木・一草盡ク上古ヲ談ゼザルナシ。

十二76 10 熱湯の海ありと語る者、舟を呑む海獸ありと談ずる者、乗組員の運命をあはれむ者、(略)、口々に語り合へり。

たんすい「淡水」(地名) 1 淡水

十一37 2 南部の打狗港と淡水・基隆・安平の三港とは本島の四開港場にこれあり、(略)。

たんせい「丹青」(名) 2 丹青

九94 6 此の門一に日暮門の名あるは、日暮るるまで見れどもあかずと

の意なりとぞ。金銀の光、丹青の色、目もまばゆきばかりなり。

十一73 4 翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴なり。筆勢非凡にして丹青の妙いふべからず。

たんせい「丹誠」(名) 1 丹誠

十一50 1 アラビヤに良馬の多く産するの、(略)。數千年の久しい間、土人の絶えてたゆまない丹誠の結果である。

たんそ「炭素」(名) 1 炭素

十二22 1 植物も(略)。外に同化作用といつて、盛に炭酸瓦斯を取つて、其の中の炭素を養分にして酸素を放つ作用がある。

たんそう「炭層」(名) 1 炭層

十二57 9 其の炭坑は炭層厚く、炭量亦豊富なり。

だんたい「団体」(名) 4 團體 じち

だんたい・ちほうじちだんたい

十一8 9 蜜蜂の群集生活を営むを得るは、共同團結して勞働をいとはず、(略)、團體の爲には生命をしまざるによる。

十二102 5 我が國の地方自治團體は、(略)、地方自治の精神に基づきて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。

十二102 8 何をか自治の精神といふ。地方人民協同一致して、(略)、誠意其の團體の爲に力を致すの精神

是なり。

十二104 6 故に人々常に自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。

だんだら「段」(名) 1 ダンダラ

九57 7 此ノ種ノ體色ヲ警戒色ト名ヅク。タトヘバ毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黃ト黒トノダンダラニテ、(略)。

だんだん「段段」(副) 30 ダンダン

だんだん だんく 段段 段々

二2 2 ワタクシノウタヲキクト、人ガダンダンオキテキマス。

二3 1 イマ日ガデマス。ミテキルウチニダンダンノボツテキマス。

三17 7 サヘヅリナガラダンダン

タカク上ツテイキマス。

三28 4 コレカラ二三日タツタラ、マダズツトタカクナリマセウ。

ダンダン ノビルト、タケノカハガオチテ、リツパナ竹ニナリマス。

三60 6 今にあのあみをだんだんはまべへひきよせてくると、(略)。

三67 5 ウラシマガヨロコンデ、カメニノルト、ダンダンウミノ

中ヘシジンデ行ツテ、(略)。

四29 1 はるになつて、だんだんあたたかになると、(略)。

四43 3 (略)、昔はのしあはびをつけたのです。(略)。それが

だんだんにかはつて、今では紙で作つたのしをつかふやうになりました。

五10 1 だんく來ると、ひろい野はらへ出ました。

五46 3 はじめのうちは遠くの方にきこえてゐましたが、だんく近くなつて、雨もつよくふつてきました。

五60 3 ランプニ石油ヲトボスヤウニナツテカラ、アンドンハダンダンニスタレテ來マシタ。

六48 5 信長はこれを見て、(略)、それからだんく重く取立てて、一方の大將にしました。

七29 9 (略)、色もはじめは黒いが、だんくかはつて青白くなる。

七82 1 (略)港を出て行くと、立ちならんでゐる人家も、段々に小さく見える様になります。

八12 7 おはなさんはしばらく見ないうちに、髪が大そうきれいになりました。段々おかあさんに似て來ます。

八14 2 ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ上ツタ。(略)。町ハ段々人通りガ多クナツテ、車モ通り、馬モ通ル。

八19 4 初は近所の人にもうらやまれる程の身代でしたが、牛も段々減り、畑の取高も年々になつて來てう

八42 9 だんく下火になつて來てうれしい。

十6 10 本ノ方ガ太クテ、サキヘ行ク

程段々ニ細クナツテ、末ニナルト、肉眼デハ見エナイ程細イ。
 十22 3 それ故近年は木版が段々すたれて、活版を用ひることが多くなつた。
 十66 3 鯨は段々弱つて、泳ぐ力もなくなる。
 十140 6 國手 教育の事業も段々進歩し、著人も追々皇恩に浴する様に相成候事、(略)。
 十147 5 (略)、大將は今少しまけぬかといふ。馬主はもう一文も引けぬといふ。段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。
 十156 6 打鳴らす太鼓の音は段々に低くかすかになる。
 十192 4 國 (略)、其の五人は(略)、争ひて高き價をつくれし。かくて其の家の價は段々高くなりて、(略)。
 十192 9 國 (略)、賣家の持主五人は(略)、争ひて其の價を低くすべし。かくて其の家の價は段々安くなりて、(略)。
 十109 7 近年は斬髪^{サツバツ}の風が行はれて、冠禮は段段すたれて行く。
 十113 9 (略)、此ノ脊骨ノ左右カラ肋骨ヲ出シテ、段々ニ組立テテ行く。
 十214 4 若し之を消費するものがなければ、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、(略)。
 十282 2 日は既に西へ傾いて、祭見物の人々は段々歸り始める。

だんな「旦那」(名) 2 だんな
 六32 3 國 ある日主人は朝から用たしに出たので、二人が店のすをしてみると、(略)。(略)。「それでもだんなが居ないから、だまつてゐれば、誰にも知れはしない。」
 六32 5 國 「だんながおるすだから、なほさらまちがひがあつてはならない。」
 たんに「單」(副) 1 單に
 十二115 8 國 禮儀も亦單に軍隊の間に行はるゝに非ずして、此の心得なくして如何でか日常の社會に立たんや。
 だんのうら「壇浦」(地名) 2 壇浦^{だんのうら}
 壇浦
 十19 國 壇浦
 十20 6 國 (略)、屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。
 たんば「丹波」(地名) 1 丹波^{たんば}
 十124 4 國 國 「我々元 丹波の松よ、山こむる 霞を後よ、いかだして都に來けり。」
 たんべつ「たんべつ」(名) 5 タンボ たんぼ
 三11 7 國 オトウサンヤニイサンハマイアサハヤクカラ タンボヘイキマス。
 六8 5 (略)、川について、四五町行くと、もう町をはづれて、たんぼへ出ました。

六8 6 國 たんぼにはいねがよくみのつて、風のふくたびに黄色な波が立つてゐます。
 六8 7 國 たんぼのさきにこんもりとした森があつて、(略)。
 八14 8 國 村デハ農夫ガクハヲカツイデ、タンボヘ出ル時デアル。
 たんぼ「蒲公英」(名) 2 タンボボタンボ、
 三7 7 國 ボクハレンゲヲツムカラ、マサヲサンハタンボボヲオツミナサイ。
 九10 2 國 タンボ、ヨメナナドハリーン咲ノ様ニ見エルガ、實ハ一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。
 たんめい「短命」(名) 1 短命
 十168 4 國 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。二三十歳の短命にして美名を萬世にとむる者あり。
 だんやく「彈藥」(名) 1 彈藥
 九25 4 國 又別に輜重兵ありて、後方より兵糧・彈藥等を運ぶ。
 たんよう「單葉」(名) 1 單葉
 十6 7 國 ギザ／＼ノ深イノニナルト、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテキル。(略) 普通ノ葉ヲ單葉トイヒ、此ノ種類ノ葉ヲ複葉トイフ。
 たんりょう「炭量」(名) 1 炭量
 十257 9 國 其の炭坑は炭層厚く、炭量亦豊富なり。

だんわ「談話」(名) 1 談話
 十167 7 國 人生七十年と見るも(略)。其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、實際修學及び業務に用ふる時間は(略)。
 だんわさいちゅう「談話最中」(名) 1 談話最中
 十35 4 國 談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、(略)。
 だんわす「談話」(サ変) 1 談話す
 《一スル》
 十56 9 國 兵舎内にては歌をうたふ事、高聲にて談話する事、(略)等堅く禁ぜられ居り候。

ち

ち「地」(名) 35 地 地あれち・おんち・かいぐんこんきよち・げんさんち・こうさくち・しきち・しきちそうつぽすう・しゅうさんち・ちゅうさつち・すなち・たんこうち・ちゅうさつち・ちゅうしんち・のうぎようち・めいじさんじゅうしちはねんせんえきげきせんち・ようがいち
 五59 6 國 ランプニトボスノハ石油トイヒマス。コレハ地ノ中カラシゼントワキ出ルモノデ、(略)。
 九28 8 國 此の地に八岐の大蛇と

て八つの頭と八つの尾とある大蛇あり、(略)。

九一七 霞浦・北浦等ノ合流スルアタリニハ名勝ノ地少カラズ。

九二四 師團司令部のある所は東京・大阪・名古屋・廣島・熊本等軍事上重要な地なり。

九二六 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略)。

九三六 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、恩威ならび行はれて、向ふ所敵なく、(略)。

九六四 我が國到るところ名勝の地にとぼしからざれども、(略)。

一〇九 其の他森林は(略)、神社・佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あけて數ふべからず。

一六〇 足尾銅山ハ(略)、今ヨリ三百年前、此ノ地ノ人始メテ之ヲ發見セリトイフ。

一七二 温泉の諸種の病を治するは、(略)、一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。

一七五 伊香保も(略)。(略)。此の地も亦夏甚だ涼しくして、暑をさくるによろしければ、(略)。

一八〇 三輪町ノ南ニ櫻井町アリ。其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、(略)。

一八三 三輪町ノ南ニ櫻井町アリ。

其ノ附近ノ地ハ往昔ノ磐余ノ地ニシテ、(略)。

一八八 コ、ヨリ西北へ進メバ、敵傍・樺原ノ地ニ出ツ。

一九二 大和國ハ久シキ間皇都ノアリシ地ニシテ、(略)。

二〇五 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

二一五 都會の地には電車・自動車等も次第に多く行はれて、(略)。

二二四 又嚴島・橋立・須磨・明石・宇治・龍田等ハ名勝ノ地ヲ以テ名ヅケタルモノニシテ、(略)。

二三八 南部には榕樹も見受け申候。其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは見事に御座候。

二四六 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。

二五三 ヨク笑ハント欲スルモノハ、(略)、上、天ニ恥デズ、下、地ニ恥デズ、外、人ニ恥デズ、内、己ニ恥デザル工夫ヲナスベシ。

二七五 神戸市に近き布引浦は(略)。(略)。市民遊覽の地にして、又神戸市水道の源たり。

二七八 大地も爲にふるひ、附近數百歩の地にありては、器に盛れる水常に波紋を生ず。

二九〇 ひたすら此の草の成長を保護し、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の集に運び去る。

一〇四 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、(略)。

一〇六 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。

一〇九 死人を葬るのに、小高い所で南に面してゐる日當りのよい地を選ぶ。

一一七 瑞穂の國と農業は開けぬ地なし、野も山も。

一二五 又各測候所が此の全國天氣豫報と其の地の觀測とによりて、其の地方の天氣を豫告するを地方天氣豫報といふ。

一三七 會津は奥羽重要な地にして、一日も守なかるべからず。

一五六 奉天より北すること約百八十八哩、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

一五六 旅順口に達す。日露の戰役に於ては、露軍は海軍根據地として此の地を死守し、(略)。

一五九 其の後方の山々は皆我が同胞の血をそゝぎし地ならざるはなし。

一六九 オレンジの熟する季節には、數多の猿遠く數百里の地より集り來りて之を食ひ、(略)。

一七五 是に於て齊侯魯より奪略せる地數箇處を返せり。

一八〇 血

一八三 血

一七三 胃は一同に向つて曰く、「(略)」。私の職務は食物をこなし、之を血の製造場へ送るにあ

り。

一七五 我若し食物をこなす事なくば、全身を養ふ血は如何にして得らるべき。

一七八 (略)、此の數日間少しも食物を送らざるが故に、新しき血出來ずして、(略)。

一五九 運動不足なれば、食物のこなれ悪く、血のめぐりにぶく、身體弱りて、氣分もふさぐ。

一六五 六七十尺の大鯨も今は全く息絶えて、(略)。流れ出る血に紅の波がたゞよふ。

一七〇 肺ハ鼻・口ヨリ吸入ル、空氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。

一七一 心臓ハ肺臟ヨリ來ル新シキ血ヲ全身ニ送り、(略)。

一七二 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸リ來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臟ニ送ル。

一八四 又皮・骨・ひづめなどからはにかはが出來、血や腸は肥料になる。

一五九 (略)、我が軍は苦戰十一箇月にして之を陥れたり。其の後方の山々は皆我が同胞の血をそゝぎし地ならざるはなし。

一七五 治に居て亂を忘れざるも此の心なり。

一八三 治

ち「知」(名) 3 智

十一117 6 図 智は東西の長を探り、

文明古今の粹を抜く。(略)、日進月歩ゆるみなき 同胞すべて六千萬。

十二120 1 図 六年の月日 手を取り

て、教へ給ひし 師の君の 導きなくば、いかで我が 心に開く、智え徳え。

十二120 6 図 師の賜物の 智を徳を、かちにをるに 世の海を たりて行かん。

ちいさい「小」(形) 22 小サイ 小さい「イ・イーク」

二6 1 図 「オハナサンハ一バン小サイカラ、一バン大キイノヲアゲマセウ。

二6 4 図 ヲバサンハ一バン大キイカラ、一バン小サイノヲトリマス。

二41 2 図 「マダ小サイカラ、モウスコシ大キクシマセウ。」

三61 8 こんなに大きいのも、こんなに小さいのもあります。

四20 6 図 「一バン太イノガオヤユビ、一バン小サイノガ小ユビ

デ、マン中ノ一バン高イノハ、中ユビトモ、高高ユビトモイヒマス。

四22 4 図 小サイネエサンハ私ヨリモスコシ高イカラ、クスリユビデス。

五15 3 (略)、大ブツサマノマヘニ立

ツテキル人ガ、コンナニ小サク見エマス。

五29 5 図 しわはよつてもわかい氣で、小さい君らのなかま入、うんどう會にもつて行く。

五50 1 キ瓜ニハカハニ小サイトゲガアリ、カボチャニハデコボコガアル。

六27 4 図 ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍カンノヤウナ大キナ物マデ、(略)。

六43 8 小さい時の名を日吉丸といひました。

七22 3 図 私どもの親類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲くれんげ草でございませう。」

七30 4 小さい時分はやはらかな葉をこまかく切つてやるが、大きくなると、枝のまゝやる。

七32 4 蠶の口の中には小さいくだが一つある。

七82 1 図 (略) 港を出て行くと、立ちならんでゐる人家も、段々に小さく見える様になります。

七88 8 図 それですから小さい時から海になれておくやうにしたいものです。」

八12 9 図 この寫真で見ると、おかあさんの小さい時分にそっくりです。

八55 6 又にはとり・七面鳥・あひるなどは(略)、其のつばさが小さい。

八56 4 (略)、空を飛ぶ必要はないから、つばさはなはだ小さい。

十6 5 (略)、一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテキル。

十一107 1 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。

十一107 8 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。

ちいさこべ「小子供」(人名) 1 小子供部

五38 4 天皇は(略)、「その子は皆お前にやるから、やしなつてやるがよい。」とおほせになつて、するには小子供といふ姓をたまはりました。

ちいさこべのすがる「小子供蝶」(課名) 2 小子供のすがる

五目14 第十三 小子供のすがる

五36 4 第十三 小子供のすがる

ちいさし「小」(形) 11 小サシ 小さい「イ・イーク・イシ」

七59 8 図 大なるは小馬の如く、小なるは猫よりも小さし。

七79 3 図 小さきありもいそしめば、塔をもきづき、つばめさへ千里の波を渡るなり。

八28 1 図 「我、此ノゴロ小サキ堂ヲ建テタリ。

八28 4 図 川成行キテ見ルニ、小サキ四角四面ノ堂アリテ、(略)。

十一27 8 図 フルトンの始めて造りし汽船は、今の小さき川蒸氣程の大きくなりしならん。

十一33 9 図 サレバ艦體輕ク、小サク、

船脚ハ淺シ。

十一99 6 図 多來加灣頭に小さき海豹島あり、(略)。

十二48 10 図 (略) 農産收入何れれど、小さき蟲の吐出す 生絲々無二の輸出品。

十二71 6 図 されど餘り小さき事にまで遠き將來を慮るは、却つて心を苦しめて益なし。

十二75 10 図 (略)、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

十二113 9 図 (略)、小さき信義を立てんが爲に大なる順逆を誤り、又は公道の理非に踏迷ふが如きこと有るべからずと論し給ふ。

ちいさな「小」(連体) 15 小サナ 小さな

二12 5 図 「コンナ小サナ川ニハコヒハキマセン。」

二16 5 (略) 木ノハガトンデキマス。大キナノモアリ、小サナノモアリ、(略)。

二54 7 (略)、犬ヲウツメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲ一本ウエマシタ。

三9 8 小さなむしがとんできまして。「ひらがなのドリル」

三47 8 小さな虫がまへへくると、ばくつとくつて、へいきなかなほをしてゐます。

四43 6 罎 このまん中に小さな物が
ありませう。

四65 5 あんな小さなからだで、
あんな大きなこゑの出るのが
ふしぎです。

四74 3 又四ダン目ニハ小サナタ
ンスヤナガモチヤヒバチナド
ヲナラベ、(略)。

五34 8 蝶ニハ大キナノモ、小サナノ
モアリ、(略)。

五40 7 えきふが小さな車の上へ、山
のやうに荷物をつんで來ました。

五68 5 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石
ダンノ道ヲ上ツテ、モウ一ツ小サナ
鳥居ヲクマルト、(略)。

六77 6 大キナ汽船ノ間ヲ、煙ヲ出シ
ナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガア
ル。

六77 7 小サナ和船モアチラコチラヲ
コギマハツテキル。

九10 3 タンボ、ヨメナナドハ一リ
ン咲ノ様ニ見エルガ、實ハ一ツノ莖
ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツ
テ咲イテキルノデアル。

十5 1 植物ノ葉ニハウキクサノ葉ノ
様ニ小サナノモアリ、蓮、芭蕉ノ様
ニ廣クテ大キナノモアル。

ちえ「知恵」(名) 2 チエ

七28 3 サルニハ手ノハタラキヲスル
モノガ四本アリマス。シカシ人ノヤ
ウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出
來マセン。コレハチエガ少イカラデ

ス。

七28 4 手バカリ動カシテモ、チエガ
ナケレバ何ノ役ニモ立チマセン。

ちか「地下」(名) 4 地下

十一88 5 蚯蚓は地下に穴をうがち
て住み、多量の土を呑込みては之を
地上の穴の口に出す。

十一89 4 蟻は(略)、多くは地下
に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、
(略)。

十二62 9 然れども地下には各種の
鐵道縱横に貫通し、デームス河床の
下をも往來せり。

十二88 1 喜劍直ちに泉岳寺に行
き、其の墓を拜して曰く、「我當に
萬罪を地下に謝すべし。」と、刀を
抜き切腹して終る。

ちか「近」(形) 6 近い 近い「一
イーク」

五46 3 (略)、かみなりが鳴り出しま
した。はじめのうちは遠くの方にき
こえてゐましたが、だん／＼近くな
つて、(略)。

七38 1 出口ニ近い所ニハ、着物・羽
織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。

七42 2 (略)、御主人織田様には、
近いうちに京都で馬ぞろへをなさ
いますとのこと。

七52 8 近い所ならもつと目方がふ
えても、四錢で送れます。

七70 4 魚類ニハイワシ・アヂ・サ
バ・マグロ・カツヲナドノヤウニ、

水ノ表面ニ近い所ヲオヨグモノガア
リ、(略)。

七74 7 (略)、岸ニ近い淺イ所カラ五
十ヒログラキノ所マデニハ、海草ガ
ハエテキル。

ちがい「違」(名) 6 チガヒ ちがひ

違ひ／＼いちがひ

四40 4 「コンド ハタヒヤヒラ
メナド ハキツト ヤラレタ ニチ
ガヒ ナイ。

五26 3 「お前のいふことはまこと
にもつともだ。この釜はお前の物に
ちがひあるまい。

五79 4 「鹿も四つ足なら馬も四つ
足、たゞつめがわれてゐるとゐない
だけのちがひだ。

八46 1 それが東京の今朝の新聞に
出たので、お分りになつたのにちが
ひない。

九35 9 昔東海道といつたのは(略)、
十二日程かゝつた。それが今は朝
の急行列車で東京を出立すれば、晩
にははや京都に着くことが出来る。
大變なちがひではないか。

十一56 1 耳をそばだてて聞けば、進
軍の調である。ピエールが打つとい
ふもの太鼓に違ない。

ちか「う」(聲) (四) 1 ちかふ 「フ」

十一70 1 若し過あらば、深く之を
悔いて、其の過を再びせざらんこと
をちかふべし。

ちが「う」(違) (五) 18 チガフ ちがふ

「ツーハ・ヒーフ」 ちがひが
う・すれちがう

四5 4 「ああ、あれですか。私
はまるでちがつた方を見てゐ
ました。」

四31 1 「もちにする米とごは
んの米はどうちがひますか。」

四33 1 「それではごはんになく
麥と、うどんやさうめんにす
る麥は同じですか、ちがひま
すか。」

四34 7 「それではあんの豆と、
だんごにつける こなの豆と
同じですか、ちがひますか。」

四41 1 スコシタツテカラ、ソツト
フタヲアケテ、外ヲ見ルト、
何ダカヤウスガチガツテキマ
ス。

五71 5 「ジブンノ角ハジツニリツ
バナ物ダ。牛ノ角トハチガツテ枝ガ
アル。

六72 3 十人十色と申しますが、(略)、
顔のちがふやうに、せいしつも色々
かはつてゐます。

七13 2 かけとかけねとは同じです
か。それは全くちがひます。

七13 7 小寶と卸寶とはどうちがひ
ますか。

七21 7 私はこんな大きななりをし
てゐますが、畠の藤豆さんとはちが
つて、私の豆はたべられませんか。

七67 3 父はこんなにちがふものな

ら、やしき中の桃の木に皆つぎ木を
すると申してゐます。

ちかごろ「近頃」(名) 3 近ごろ 近
ごろ

七七四 エビノピン／＼ハネタリ、カ
ニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ
川ニスムモノトチガハナイガ、(略)。

五五七 近ごろハ又マツチトイフベン
リナ物ガ出来テ、火打石ヤ火打金ヲ
使フ人ハメツタニアリマセン。

七七四 陸ニスムモノデハ、象ガマツ
一番大キイガ、鯨ニクラベルト、大
人ト赤子ヨリモ、モツトチガフ。

七四六 馬ツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デ
アルシ、書物モ近ごろハ大テイ西洋
紙デコシラヘルヤウニナツタ。

七三九 そこに居る人は私たちとは
まるでちがつた風をして、かはつた
ことばで話してゐます。

七三九 又近ごろは戦場にも犬を用
ひて、たふれたる兵士をさがさしむ
といふ。

九九五 多クノ花ヲ取ツテシラベテ見
ルト、(略)。其ノ形モマタ様々デア
ル。(略)。花ノ附方モ亦ソレ／＼チ
ガフ。

ちか・し「近」(形) 25 近シ 近し「
ウ・キ・ク・ケ・レ・シ」 ムすいめ
んちかし・ほどこかし

九二六 併し今の戦争は昔とちがつ
て、一人で進んで功名を立てる様
なことは出来ない。

七七八 天皇ハコレヲ聞キ、ミスヲ
高クマキ上ゲサセ、正行ヲ近ク召シ
タマヒテ、(略)。

九六三 さて此の雨風も四季の時候に
つれて、それ／＼にちがふ。

八五二 三韓ノ表文ヲ讀ム
ニ、手ワナ、キ聲フルフ。入鹿アヤ
シミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、「御前
近ウシテ。」ト答フ。

十一九七 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲ
コシラヘル者、(略)、揃ヘテ箱ニ入
レル者、十二箱ツツ集メテ紙ニ包ム
者、皆ソレ／＼ニチガフ。

八八七 北極・南極に近き地方にて
は、半年は晝にして、半年は夜なる
所あり。

ちがう「連」(下二) ムうちちがう・み
ちがう
ちがえる ムみちがえる
ちかく「近」(名) 1 ちかくムかいが
んちかく
四一八 もうすこしでよりのもの
ちかくへ来るかと思ふと、
(略)。

九七〇 連日の大雨に候へば、大
川に近き御地は如何と案じ居り候と
ころ、(略)。

九七二 二十八日は終日大
暴風雨にて、川近きあたりにはぼつ
／＼立退きたる者もこれあり、(略)。

九八二 其の御衣は今なほ西
のはてに住む身に近くあり。

一七三 (略) 是有馬の温泉にして、
京都・大阪に近ければ、浴客多く集
り、すこぶる繁榮せり。

近く、露坐の大佛 おはします。

一七四 箱根は(略)、近く東京・
横濱をひかへたれば、(略)。

一五三 我ガ國ハ島國ニシテ、
(略)、殊ニ近クハ人口四億ヲ有スル
支那ノ大國ニ隣ス。

一七五 目・耳・鼻・口ハ何レモ腦
ニ近キ位置ニ在リ。

一五八 安奉線は奉天より鴨綠江
の江口に近き安東縣に達して、(略)。

一七六 大小ノ燈籠左右ニ多ク、其
ノ數二千ニ近シ。

一七一 遠き慮なければ、必ず近
き憂あり。

一七七 敵傍山ノ東北ニハ神武天皇
ノ御陵アリ。又近ク綏靖天皇ノ御陵
アリ。

一七五 亞細亞の東端は歐羅巴の
西端に近しと信じ、地球を餘りに小
さく見たるコロンブスの誤は(略)。

一七八 本土の西、近く九州と相
接せんとする所、下關海峡あり。

一七八 人々始めて陸地の近きを
知り、(略)。

一七九 淡路島の(略)、四國に
近き所、鳴門海峡となる。

一七九 神鹿ノ三々五々友ヲ呼び、
ツキ來ル「一リ」

一八〇 (略)、汽船絶えず通航し
て、遠く近く黒煙の青空にたなびく
を見る。

一八〇 神鹿ノ三々五々友ヲ呼び、
ツキ來ル「一リ」

一八一 神戸市に近き布引瀧は雌
雄ニ瀑あり。

一八二 百にも近き鶴、此
方に浮び、彼方に沈み、彼處にかく
れ、此處にあらはれ、(略)。

一八三 蚯蚓は地下に穴をうがち
て住み、多量の土を吞込みては之を
地上の穴の口に出す。かくて數年の
後には、地面に近き土をば全く上下
にうち返すといふ。

一八三 南臺灣の熱帶地方より北
緯太の寒帶に近き地方まで、(略)。

一八四 長谷觀音の堂

一八四 長谷觀音の堂

一八五 近づく

一八五 近づく

けば、萩^{はぎ}のうねりにやどる玉、(略)。
 九57 3 他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリ
 テ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ツ
 クコトナキガ故ニ、(略)。
 十70 1 岩に近づけば、波は益々荒
 く、ボートは幾度となく打ちもどさ
 れ打ちもどさるゝを、(略)。
 十一34 5 驅逐艦ハ(略)、敵艦ニ
 近ツキ、魚形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈
 シ、(略)。
 十一34 9 水雷艇ハ(略)、敵艦ニ
 近ツキ、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃
 沈スルヲ任務トス。
 十一85 10 (略)、イヨイヨ延シテ、
 イヨノ細クシ、次第二ヨリヲカケ
 テ絲ノ形ニ近ツカシム。
 十一106 4 蜀ノ軍少シモサワガズ、
 旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハ
 ントスルモノ如シ。仲達アヘテ近
 ツカズ。
 十二6 5 (略)、我は之に應ぜず、
 距離六千メートルに近づきて始めて
 應戦し、はげしく敵を砲撃せしかば、
 (略)。
 ちかづけもうす「近付申」(四) 1 近
 づけ申す「一ス」
 十一42 6 (略)、河内^{かはち}に行きて正
 儀に仕へん。いまだ幼ければ、敵も
 心をゆるすべく、(略)。(略)。「年
 長じては敵も近づけ申すまじ。
 ちかよる「近寄」(四・五) 5 近ヨル
 近寄ル 近寄る「一リ」

八30 7 「カク我ノ居ルニ、何ユエ
 ニ入り給ハザルカ。」トイフ。工恐
 ルノ近ヨリテ見レバ、(略)。
 八74 8 虎モ猫モ(略)、シヅカニ
 他獸ニ近ヨリ、急ニ飛ビツキテ之ヲ
 捕フ。
 十64 9 漕拔けた一隻は(略)、見る
 内に一頭の鯨に近寄り、急處めがけ
 て破裂矢をしかけた鎗を打つ。
 十66 2 ボートはつなをたぐつて、又
 も鯨に近寄り、今度は銃を以て破裂
 矢を打込む。
 十一33 8 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近
 寄り、或ハ河江ヲサカノボリ、敵ノ
 陣地ヲ攻撃スルモノナリ。
 ちから「力」(名) 39 チカラ ちから
 カムおぢから
 三13 4 ムカシタイマノケハヤト
 イフチカラノツヨイ人ガア
 リマシタ。
 三15 2 シカシスクネモチカラガ
 ツヨクテ、スバシコイ人デシタ
 カラ、(略)。
 三16 4 「おれよりちからのつ
 よい人はあるまい。」「ひらがな
 のドリル」
 三24 6 牛は力がつよいけれど
 も、あるくことがおそうござい
 ます。
 四22 2 ニイサンハ一バン太ツ
 テ、一バン力ガツヨイカラ、オ
 ヤユビデス。

五3 7 手力男^{てぢから}のみことといふ力のつ
 よい神さまが、(略)。
 五58 5 石炭ノ火ノ力ハ木炭ヨリモズ
 ツトツヨイノデ、(略)。
 六65 6 シグマトイフ熊ハ小馬ホドア
 ツテ、力ガ強ウゴザイマス。
 六84 8 (略)、なんぎをする人見
 るときは、力のかぎりいたはれよ、
 あはれめよ。
 七17 7 「我聞ク、シ、ハ子ヲ生
 メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオ
 トシテ、ソノ力ヲタメストイフ。
 八44 1 毎日の食物のにたきから種々
 の工業まで、火の力を要することは
 数へきれない程多い。
 八44 4 大きなきかいの動くのも、汽
 車や汽船の走るのも、皆火の力の利
 用によるのである。
 八70 9 (略)、耳鳴り、目暗み、手
 足なえて、動くことかなはず、皮膚
 の色さへ青ざめて、身體は全く力な
 きにいたれり。
 八73 9 アゴ短ケレバ、物ヲカム力
 強く、(略)。
 八73 8 足モマタ太クシテ、力強シ。
 八90 8 軍曹ハ(略)、アランカギリ
 ノ力ヲツクシタガ、中佐ノイキハト
 ウトウ其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。
 九42 5 (略)、此ノ大ナル湖水ヨリ
 流れ落ちタル水ノ力ハハカリ知ルベ
 カラズ。
 九48 8 夜明くれば、砂の上に新し

き駱駝の足跡あり。之に力を得て、
 南へくと急がするに、(略)。
 九63 3 田村麻呂は(略)、力あく
 まで強き人にて、怒る時はたけき獸
 も恐れたり。
 十9 9 森林は能く暴風をさへ、
 其の力をそぐを以て、土砂の飛散を
 防ぎ、(略)。
 十40 5 「二人の我が子それ〴〵
 に、死所を得たるを喜べり。これぞ
 武門の面目。」と、大將答力あり。
 十64 6 船長の落ちついた力のこもつ
 た號令に、船ははや方向を轉じて、
 北へ向つて走る。
 十66 3 鯨は段々弱つて、泳ぐ力もな
 くなる。
 十78 1 強キ力ヲ要スル部分ニハ強
 キ筋肉アリ。
 十78 5 又力士ノ如キハ常ニ全身ニ
 カヲ入ルヲ以テ、何レノ部分モヨ
 ク發達セリ。
 十一6 2 働蜂の若きものは(略)、
 力強く壯なるものは外に出でて花の
 蜜を吸來る。
 十一15 5 (略)杉坂に着きたりし
 に、主上はや院庄^{いんじやう}に入らせ給ひぬと
 申す。衆皆力を失ひて散り〴〵に成
 れり。
 十一42 8 幼き時に参りてこそ。」
 と、しきりに望めば、力及ばず、「さ
 らば是にて本意を遂げよ。」とて、
 (略)名刀を與へて行かしめたり。

十一58 8 (略)、兵士等は力を合せて二人を引上げた。

十一83 10 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、(略)。

十一87 4 (略)、今ハ僅カニ六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。加フルニ(略)、細大意ノマヽニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。機械ノ力ハ驚クベキモノニアラズヤ。

十一100 9 羅シヤにて早くより開拓に力を用ひたるは主として五十度以北に候。

十一101 4 本島の開拓は我々國民の最も力を用ふべき所に候。

十一104 3 蜀國ノ(略)、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシハ、主トシテ孔明ノ力ニヨレリ。

十二12 9 イヅレモ大規模ニ出來テキテ、盡ク蒸氣や電氣ノ力ヲ利用スル。

十二22 6 然るに炭酸瓦斯が絶えず供給されるのは、他にも種々の原因もあるが、動物の呼吸作用も與つて大いに力があるのである。

十二82 4 最早彈ク力も盡きて、傍の石にこしを下し、額を兩手に支へて人知れぬ涙をこぼして居る。

十二102 8 地方人民協同一致して、(略)、誠意其の團體の爲に力を致すの精神是なり。

十二105 4 (略)、地方人民たる者は

大いに力を是等の事業に盡すべきなり。

ちからいっぱい「力一杯」(副) 1 力

一ぱい 六57 5 その時信玄のけらいが、後からやり先で謙信の馬のしりを力一ぱいになぐりつけた。

ちからまかせ「力任」(形状) 1 力まかせ 六23 7 その時一人の子どもは大きな石を持つて来て、力まかせに投げつけました。

ちぎ「千木」(名) 1 千木 八6 1 (略)、神殿の御屋根はかやにてふき、棟にはかつを木をならべ、

ちぎゅう「地球」(名) 5 地球 八80 7 我等の住む世界は圓きもの故、名づけて地球といふ。

八80 8 地球の表面の凡そ三分の二は海にして、三分の一は陸なり。

八81 1 地球を南北の兩半球に分てば、北半球は南半球よりも陸地多し。

十二75 10 地球の内部には熱氣あり。西端に近しと信じ、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は(略)。

ちきゅうじょう「地球上」(名) 3 地球上 八83 4 地球上に住む人類は總數十

六億ありて、其の人類はさまざまなり。

十二21 4 (略)、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、遂には地球上の動物が呼吸作用を営むことが出来なくなる道理である。

十二22 8 若し炭酸瓦斯を供給するものがなければ、(略)、地球上の植物は盡く枯死すべきはずである。

ちぐさ「千種」(名) 1 ちぐさ 六6 1 (略)、白つゆむすぶ秋の野のちぐさの花もおもしろや。

ちくし「竹紙」(名) 1 竹紙 十一39 5 又竹を原料として竹紙を製造致居候。

ちくりんいん「竹林院」(名) 2 竹林院 十一2 2 竹林院

十一4 8 本道を更に南へ進めば、庭園を以て名高き竹林院あり。

ちこく「遅刻」(名) 1 ちこく 六71 8 一日もけつせきもせず、ちこくもしなかつた子供もございました。

ちこくする「遅刻」(サ変) 1 ちこくする「一シ」

六71 6 度々けつせきしたり、ちこくしたりして、先生にしかられた子供もございました。

ちじ「知事」(名) 1 知事 十二34 6 (略)、縣廳カラモ知事ノ代理トシテ事務官ノ臨席ガアツタ。

ちしま「千島」(地名) 1 千島 十一115 10 北は樺太・千島より、南臺灣・澎湖島、朝鮮八道おしなべ

て、我が大君の食す國と、(略)。

ちじょう「地上」(名) 5 地上 十一9 1 森林の樹木はたがひに其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるを止め、(略)。

十一9 1 森林の樹木は(略)、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。

十一9 3 (略) 落葉・こけ及び(略)木の根などは、地上に落ちたる水をふくみさふること、あたかも海綿の如くなるを以て、(略)。

十一71 10 其の熱氣に温りたる水の自然に地上にわき出づるもの、即ち温泉なり。

十一88 6 蚯蚓は地下に穴をうがちて住み、多量の土を吞込みては之を地上の穴の口に出す。

ちず「治」(サ変) 1 治す「一スル」 十一72 7 温泉の諸種の病を治するは、たゞに其のふくめる鑛物の効のみならず、(略)。

ちず「地図」(名) 4 地圖 十一18 2 本の中には字ばかりのもあるが、畫や地圖や寫眞のはいつてゐるものもある。

十二20 4 (略)、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、幾度も幾度も印刷を重ねなければならぬ。

十二19 4 天氣圖とは各地に於て同時に觀測したる(略)等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

十二75 6 図 (略)、又ボートの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、(略)。

ちせき「治績」(名) 1 治績
十二93 10 図 孔子事へて吏となりしに、治績大いに擧り、(略)。
ちそう 凸こちそう

ちたるのくに 凸くわしほこちたるのくに

ちち「父」(話し手名) 5 父

八45 3 父「東京のをちさんから火事見まひの電報が来た。」

八45 7 父「(略)、誰かすぐに東京へ電報を打つたのだらう。」

八46 8 父「それでは少し長過ぎる。」

八47 8 父「それでもよいが(略)、サクヤとは書くには及ばない。」

八49 4 父「それでよろしい。」

ちち「父」(名) 42 ちち 父よりよさうさきのちちにおくるてがみ

三35 5 うちへかへつて、ちちにみせようとしたら、光がみえません。

三36 6 まさをはふしぎさうに、「どうしてもう光らないのでせう。」といひますと、父は「ここがあかるいから、みえないのです。(略)。」といひました。

三37 2 父のいふとほり、そとへはなしたら、あをく光りながらしづかにとんでいきました。

三72 6 ウチへカヘツテ見ルト、

オドロキマシタ、父モ母モシンデシマツテ、ジブンノウチモアリマセン、(略)。

四30 3 母が父に「もうすぐお正月ですから、もち米をよいいしなければなりません。」といひますと、(略)。

四35 4 父は三郎のあたまをなでながら、「三郎はこんやは大そうもの知りになつたね。」といひました。

五41 8 文太郎ハ父ニツレラレテ、ハジメテ汽車ニノリマシタ。

五44 2 文太郎ハビツクリシテ、父ニキ、マスト、「コレハトンネルトイツテ、山ヲホリヌイタ所デス。」トイヒマシタ。

六41 5 十二月十六日 父より太郎どの お花どの

六44 8 お寺では「こないたづら者はごめんです。」といつて、うちへかへしました。父はしかたなしに又よそへほうこうに出しました。

六82 8 図 (略)、二人のおや御を大切に、思へや、ふかき父の愛、母の愛。

七12 2 図 楠木正行ハ正成ノ子ニシテ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。

七14 4 正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トモニ戰場ニ出デントセシガ、(略)。
七19 9 図 ヨク父ノ言フコトヲ聞分

ケヨ。

七35 5 図 (略)、正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。

七38 8 図 「汝ヲサナクトモ、父ノ子ナレバ、コレホドノワケノ分ラヌコトハアルマジ。

七41 1 図 父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。

七49 9 正行大イニカンジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスルハコトナカリキ。

七61 1 図 「父正成ノ戦死セシ時、臣ハワヅカニ十一歳、(略)。」

七64 4 図 父ハ臣ヲ合戦ノ場ニモトモナハズ、「(略)、朝敵ヲホロボセ。」ト申シ残シタリ。

七71 1 図 モシ病ニカ、リテ早く死ナバ、君ノ御タメニハ不忠ノ臣トナリ、父ノタメニハ不孝ノ子トナルベシ。

七42 1 図 このお金は私がこちらへある時、『夫の一大事の折に使へ。』と申して、父の渡してくれた金でございます。

七67 2 図 父はこんなになちがふものなら、やしき中の桃の木に皆つぎ木をすると申してゐます。
八13 9 母ハ臺所デ朝飯ノシタクニカ、リ、父ハハヤ店ニスワツテ商賣ノ用向ヲシラベテキル。

八49 8 図 (略)、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。

九45 3 図 アリは十歳ばかりの子供なりしが、父の手紙を讀みて心勇み、(略)。

九45 10 図 アリは(略)、たゞ父にあはんを樂みに一日々々と旅行をつづけたり。

九49 3 図 (略)、其の中にはアリの父ハッサンもまじれり。

十15 10 図 (略)、父の爲時は常に其の頭をなでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

十54 7 図 「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、(略)。」

十68 10 図 (略) 悲鳴の聲に目をさまし、眠れる父をゆり起して、幾度かいそべに出でながめしが、(略)。

十69 7 図 父は此の大波に何とて行かるべきと思ひしが、娘のやさしき心にはげまされて、ボートを用意す。

十70 3 図 父は直ちに勞れ果てたる水夫を助けて、ボートにうつす。

十70 6 図 父はボートに引返し、二人は(略)、遂に岸べに漕着けたり。
十一41 7 図 「正義は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。」
十一43 3 図 住吉の戦に父の討死したる後、一族の者領地をうばひて、我を追出したたり。
十一43 6 図 (略)、佛門に入りて父

の後をとぶらはんとて、かく諸國を巡り歩くなり。」

十一579 図 我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。

十一595 図 老いゝる父の望は一つ。義勇の務御國に盡し、孝子の譽我が家にあげよ。

十一1039 図 「汝ハ孔明ト共ニ事ニ從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ如クセヨ。」

十二944 図 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」とは孔子が景公に教へたる語なり。

十二944 図 「君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。」

ちち「乳」(名) 5 チチ 乳

二378 図 「アカンボノトキニ、ダイテチチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。」

十874 図 (略)、山羊の乳は牛乳のやうに飲料になる。

十875 図 (略)、山羊の乳は(略)。殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。

十875 殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。

十二466 図 家畜の飼養に至りては、(略)、滋養に富める乳・肉等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

ちちうえ「父上」(名) 1 父上
十696 図 少女は之を見て、「あはれなり、父上。早く船を出して救は

ん。早くく。」とせき立つ。

ちちうえさま「父上様」(名) 1 父上様
九446 図 七月十五日 増太郎 父上様

ちちは「父母」(名) 1 父母
十一6010 図 ぎらばぎらば、父母ぎらば。弟ぎらば、妹ぎらば。

ちぢめる「縮」(下二) 1 ちぢめる
「一メル」
九704 雨戸を明けて見ると、(略)、身を切るやうな寒さに思はず首をちぢめることもある。

ちちゅう「地中」(名) 1 地中
十二427 図 火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。

ちちゅうかい「地中海」(地名) 1 地中海
八797 図 (略)、ヨーロッパ大陸とアフリカ大陸との中間にある地中海を過ぎ、(略)。

ちぢる「縮」(下二) 1 ちぢる
「一レ」
八837 図 アフリカ人は皮膚黒く、髪ちぢれたり。

ちっこう「築港」(名) 2 築港
十二376 図 基隆港の大規模の築港も遠からず落成致すべく、(略)。

十一377 図 (略)、打狗の築港も唯今盛に工事中に御座候。

ちつと(副) 1 チツト

三54 図 「マサヲサン、ソナニニウチニバカリキナイデ、チツトソトヘデテ、イツシヨニウタヲウタヒマセウ。」

ちつとも(副) 3 ちつとも
四488 図 とけいはあさからかつちん、かつちん。(略)。ちつともおんなじ所をささずに、ばんまでかうして、かつちん、かつちん。

四498 図 われらがねどこで、やすんで居るまも、ちつとも休まず、いきをもつがずに、あさまでかうして、かつちん、かつちん。

七201 図 あなたと私は親類ださうでございますから、どうかこれからお心安く願ひます。」といふ。藤は「私はちつとも存じませんでした。」

ちとく「知徳」(名) 2 智徳
十一11410 図 青年の氣風を養ひ、智徳をみがくを目的とせる青年會あり、(略)。

十二9510 図 智徳の最も圓滿に發達せる人格は孔子に於て之を見るべし。

ちとせ「千歳」(名) 2 千歳
九935 図 (略)、古の奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬと、つかうまつりし言の葉の花は千歳も散らざらん。

十一335 図 巡洋艦ハ(略)。(略)。筑波・生駒・出雲・千歳ナドハ之ニ屬ス。

ちどり「千鳥」(名) 1 千鳥
十一313 図 水雷艇ニハ千鳥・眞鶴・雲雀・鵠・雁・鴻・雉・鴨・鶉・鷺等ノ如ク鳥ノ名ヲ用ヒタリ。

ちば「千葉」(地名) 1 千葉
九17 図 千葉

ちはや「千早」(名) 1 千早
十一343 図 通報艦ハ(略)。(略)。最上・淀・千早・龍田等ハ之ニ屬ス。

ちひ「地皮」(名) 1 地皮
十二427 図 火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。

ちひろ「千尋」(名) 1 千尋
十一229 図 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、百尋・千尋海の底、遊びふれざる庭廣し。

ちほう「地方」(名) 13 地方
ほう・インドちほう・おんちほう・けいじょうちほう・ちゅうごくちほうぜんたい・なんぶちほう・ねったいちほう

八817 図 北極・南極に近き地方にては、半年は晝にして、半年は夜なる所あり。

八818 図 かゝる地方にては氣候つねに寒冷にして、美しき花木を見ること能はず。

八826 図 かゝる地方にては、人は皆はだかにして、布片を身體の一部にまとふに過ぎず。

九127 図 右は地質といひ、縞がら

て相集り、略。

團體の事業は、地方人民の一般に之

栽培は最も早く開けたり。

デス。

をまぜてこしらへた物を口に入れな

いことはない。ゆ・茶・汁・すひ物
はいふまでもない。

十一379(園) 本島産物の重なるものは、御承知の樟脳・米・茶・砂糖等にて、(略)。

十一3710(園) 茶は主として北部に産し候。

十二451(園) 茶も亦盛に栽培せられ、輸出價額年々一千萬圓に達す。

ちやいろ「茶色」(名) 4 チャイロ茶色

三572 アソコ ニハオトウサンノチャイロノオビガアリ、(略)。

七764 (略)、コンブヤアラメノヤウニ茶色ノモノモアリ、(略)。

七768 (略)、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。

十491(園) (略)、其の他鼠色・茶色・鳶色等、色の名稱も亦千種萬様なり。

ちやくじつおんこう「着実温厚」(形状) 1 着實温厚

十一11210(園) 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、(略)。

ちやくしゅす「着手」(サ変) 4 着手す「一シースーセ」

十一1008(園) (略) 石炭層各所にある、殆ど無盡蔵に候へども、未だ盛に採掘に着手せらるゝには至らず候。

十一1012(園) (略)、諸種の經營追々成功致候へども、今後尚着手すべき

事は多々これ有り候。

十一1144(園) 耕地整理は縣下諸村に先んじて着手し、昨年既に之を完成せり。

十二584(園) 此の鐵道は(略)、明治四十二年よりこれが改築に着手せり。

ちやくしゅす「着手」(サ変) 1 着手スル「一スル」

十二125 (略)、必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、始メテ製造ニ着手スルノデアル。

ちやくす「着」(サ変) 3 着す「一シース」

十二545(園) 門司にて乗船し(略)約二日間にして大連に着す。

十二777(園) パロスを出帆して七日目に、亞弗利加の北西岸に近きカナリヤ島に着し、(略)。

十二799(園) (略)、コロンブスは深紅の美服を着し、西班牙の國旗を持し、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、(略)。

ちやくちやく「着着」(副) 1 着着

十一3510(園) 當總督府の經營も着着其の効を見るに至り候事、かねて御承知の通りに候處、(略)。

ちやくきよく「着局」(名) 1 着局

八48(園) 着局

ちやばたけ「茶畑」(名) 1 茶畑

五321 コ、ハ茶島デス。

ちやぶね「茶船」(名) 1 茶船

十一269(園) 荷足・高瀬・茶船・屋根

船等其の目的により、大小・構造千差萬別あり。

ちやわん「茶碗」(名) 5 茶ワン茶わん

七346(園) 茶わん・土びん・皿・はちなどはやき物にして、(略)。

七352(園) 我らのつねに用ふる茶わん・皿・はちの類は、このすやきにうはぐすりをかけて、ふたゝび焼きたるものなり。

七364 マヅ入口ヲハイルト、右ノ方ニハ皿・ハチ・茶ワンナドノ焼物ヲ賣ル店ガアリ、(略)。

九651(園) 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

九658(園) 是茶わんの中に空氣ありて、水の進入するを防げばなり。

ちやんと(副) 4 ちやんと

五415 汽車はどんなことがあつても待ちません、きまつた時間にちやんと出ます。

六705 ちやんとしをいよくして、氣を附けてゐて、何を聞かれても、はつきりと答へる子供もございました。

七512(園) 「これにはちやんと三錢の切手のはつてあるのに、なぜまたおあしを拂ふのですか。」

七866(園) 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

ちゅうひきかいこうぎょうちゅう・きしやでんしやちゅう・きやくちゅうちゅう・くうきちゅう・ぐんかんちゅう・こうかいちゅう・こうじちゅう・ごたようちゅう・さんばくちゅう・しゅうにゅうちゅう・じゅうるいちゅう・しよくぎょうちゅう・じんぶつちゅう・どうぐんちゅう・としちゅう・にちろせんえきちゅう・のうぎょうちゅう・はこねさんちゅう・はたらきばちゅう・ふこうちゅう・ぶつぞうちゅう・ふんかこうちゅう・ほんぶんちゅう・もくぞうけんちゅう・ぶつちゅう・ゆしゅうひんちゅう・りょこうちゅう

ちゅうい「中尉」(名) 1 中尉

九2510(園) 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

ちゅうい「注意」(名) 6 注意ひでんぼうしたためかちゅうい・ふちゅうい

十592(園) 中隊長殿の何事にも注意の周密なるは隊中一同感謝致し居り候。

十一710(園) 故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。

十一654 季節ニ依ツテ、食物ノ選ビ方ニ多少ノ注意ヲ要スル。

十二366(園) 本校舎ノ建築ハ(略)、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、専ラ教授ノ便ヲ計リ、實用ニ

重キヲ置キ、其ノ注意ノ周到ナル、
縣下マレニ見ル所ナルベシ。

十二905 衛生上の注意を怠らずして、何人も病にかされぬ様にすべし。

十二982 略、殊に他國人の注意を引くものは社會の公徳及び國民の度量なりとす。

ちゅういす「注意」(サ変) 4 注意ス

注意す「一シ・一セ」

九618 飲食に注意し、身體の清潔を保ち、(略)、常に日光に浴して、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

十一525 笑ハント欲セバ、衛生ニ注意シ、身體ヲ健全ニスベシ。

十二515 故ニ商人ハ常ニ全世界ニ於ケル物價ノ高低ニ注意シ、需要供給ノ情況ニ精通スルヲ要ス。

十二896 凡そ家内の掃除は(略)、便所の隅より下駄箱の奥までも注意せざるべからず。

ちゅういす「注意」(サ変) 5 チュウイスル 注意スル 注意する「一シ・スル」

六146 曇ツタ夜ヤ月ノナイ夜ハ道ニマヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデアル。ヨクチュウイシタモノデハナイカ。

十一1110 此ノ様ニ分業ハ大キナ利益ノアルモノデアルガ、コ、ニ注意シナケレバナライノハ共同一致トイ

フコトデアル。

十一644 (略)、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。

十一664 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

十一110 朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

ちゅういす ちうたかはしちゅういち・たかはしちゅういちさま

ちゅういふか・い「注意深」(形) 1 注意深い「一イ」

十366 外の者は少しも氣が附かないで、中にはそれをふんだ者もありましたが、あの青年ははいると直に書物を取上げて、テーブルの上に置きました。それで注意深い男といふことを知りました。

ちゅうおう「中央」(名) 5 中央 ちうし

なちゅうおう・みなみまんしゅうてつ どうちゅうおうていしやじよう

十816 屋内には中央にゐるりを造り、一家之を圍みて談笑す。

十一975 國(略)、こゝに樺太廳の所在地豊原あり、鈴谷川平野の中央に位し、(略)。

十一1127 村役場と學校とは相並びて村の中央に在り。

十二5810 (略)、大連より僅かに

二週間にして歐羅巴の中央に入るべし。

十二603 市の中央最も繁華なる處は道幅狭く、車馬街上に滿ちて往來頗る困難なり。

ちゅうおういか「中央以下」(名) 1 中央以下

十一761 (略)、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。中央以下は霧と散り、雨と飛びて、(略)。

ちゅうおうきしうだい「中央氣象台」(名) 5 中央氣象臺

十二167 我が國には東京に中央氣象臺あり。

十二1610 各地の測候所は其の地方の氣象觀測を毎日三回中央氣象臺に報告し、(略)。

十二171 (略)、中央氣象臺は各測候所の報告によりて天氣圖を作り、(略)、向ふ二十四時間の全國氣象の大勢を豫告す。

十二181 我が國及び附近に風雨のおそれある時は、中央氣象臺は全國暴風雨警報を發して之を豫告す。

十二192 諸子は中央氣象臺より發行する天氣圖を見たることありや。

ちゅうおうせん「中央線」(名) 1 中央線

十二210 日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。

ちゅうかん「中間」(名) 2 中間

七768 (略)、マヅ綠色ノモノハ淺イ

所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。

八797 (略)、ヨーロッパ大陸とアフリカ大陸との中間にある地中海を過ぎ、(略)。

ちゅうぎ「忠義」(名) 8 忠義

六824 (略)、人々忠義を第一に、あふげや、高き君の恩、國の恩。

七12 楠木正行ハ正成ノ子ニシテ、父ニオトラス忠義ノ士ナリ。

七27 我が死ニタル後モ、(略)、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七43 大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七81 「親子二代相ツバイテノ忠義カンズルニアマリアリ。

七44 楠木父子の菊水は、忠義のかをりなほ高し。

十一104 孔明是ヨリ幼主ヲ輔ケ、益々心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

十二33 楠木正行の母が正行を戒め、高千穂艦乗組水兵の母が其の子を叱りしが如きは、保の母と同じく、忠義の爲には恩愛を忘るゝ真心より出でたり。

ちゅうぎ「忠義」(形状) 1 チュウギ

二467 天ジン サマハスガハラノミチザネトイフ チュウギナオ

カタヲマツツタノデス。

ちゅうぎょ「虫魚」(名) 1 蟲魚

十472 図 模様には(略)、草木・花鳥

・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。

ちゅうくう「中空」(名) 1 中空

十二609 図 佛國の長き歴史を飾れる壯大なる建築の數々高く中空にそびゆるのみならず、人家も多くは六七層にして、(略)。

ちゅうくん「忠君」(名) 1 忠君

十一1046 図 孔明はヨリ幼主ヲ輔ケ、(略)、忠義ヲ盡シテ變ラズ。(略)。發スルニ臨ミ、表ヲ上ル。言々皆忠君ノ至情ヨリ發ス。

ちゅうこう「忠孝」(名) 1 忠孝

七89 図 正行ノ如キハマコトニ忠孝ニツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、國民ノ手本トイフベシ。

ちゅうこく「中国」(地名) 2 中國

十328 図 (略)、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。サレバ平左衛門ノ死セシ時ハ、中國ノ人々、知ルモ知ラヌモ父母ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。

十一18 図 中國

ちゅうこくすじ「中国筋」(名) 1 中國筋

十二501 図 中國筋の花筵、(略)、輸出年々増すばかり。

ちゅうこくちほうぜんたい「中国地方全體」(名) 1 中國地方全體

十326 図 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植

エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。

ちゅうさ「中佐」(名) 26 中佐 中佐たち

ばなちゅうさ・ひろせちゅうさ

七897 図 中佐ハシツカニ、「杉野ハ今點火ヲ終ヘタルゾ。總員ボートヘ。」

七901 図 中佐ハ心配ケニ、「ヨシ、タヅネ來ン。」ト、タヅネ一人クマナク船内ヲタヅネタレドモ、(略)。

七907 図 「残念ナリ、今一度。」ト中佐ハマタモ船内ヲカケメケレリ。

七909 図 「杉野々々。」中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。

七912 図 「今一度。」ト、中佐ハ三タビタヅネマハレリ。

七917 図 「今ハゼヒナシ。」ト、中佐ハボートニ乘リウツレリ。

七924 図 中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキナリ。

七926 図 一發ノ砲丸ハタチマチ中佐ノ身ヲ拂ヘリ。

七926 図 中佐ハ一片ノ肉ヲボートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。

八847 図 (略)、中佐ハ(略)、帝國ノタメ、天皇陛下ノ御タメニ、メザマシイ勸ヲシナケレバナラナイト、(略)。

八862 中佐ハマツサキニ立ツテ、敵中ヘアドリコンデ、(略)。

八864 中佐ハハヤ、右手ニ一ヶ所ノ

傷ヲ受ケタガ、(略)。

八875 中佐ハ「(略)。」トサケンデ部下ヲハゲマシ、敵ヲ撃退スルコト數度ニ及ンダ。

八879 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。

八883 図 (略)、間モナク砲彈ノ破片ガ中佐ノコシニアタツテ、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタ。

八883 図 (略)、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタ。

八886 中佐ハ二居タ一軍曹ハ中佐ヲ壕ノ内ニ入レテカイハウシタ。

八887 中佐ハ目ヲ見張りテ、軍刀ヲ杖ニ起ラウトスル。

八889 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクマリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。

八892 中佐ハ「ア、残念。(略)。」トイヒナガラ、(略)。

八908 図 (略)、中佐ノイキハトウトウ其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。

八911 コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ、(略)。」トイツタガ、(略)。

八926 中佐ノ様ナ死方ヲシタ人ハイクラモアルガ、(略)。

九2510 図 將校には大將・中將・少將

・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

ちゅうさつぐん「駐劄軍」(名) 1 駐劄軍

十二551 図 滿洲内地屈指の市場にして、我が駐劄軍の重要な駐劄地なり。

ちゅうさつち「駐劄地」(名) 1 駐劄地

十二551 図 (略)、遼陽あり。滿洲内地屈指の市場にして、我が駐劄軍の重要な駐劄地なり。

ちゅうし「忠士」(名) 1 忠士

十901 図 (略) やみの天地をまた元の御代に返すは誰が任ぞ。金剛山下に忠士あり。

ちゅうじつ「忠実」(形状) 5 忠實

十267 図 申すまでもなく御入營の上は、品行方正、職務に忠實にして、隊中の模範となられ度、(略)。

十二718 図 現在の職務に忠實なれば、上下の愛敬・信用其の身に集り、心廣く、體ゆたかなり。

十二818 忠實な犬は古帽子をくはへて、あはれな主人の爲に、道行く人の投與へる喜捨を待ちわびてゐる。

十二104 図 (略) 直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、(略)。

十二109 図 (略)、議員たる者は至誠

奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

ちゅうじゅん 〆ごがつつちゅうじゅん・じゅうがつちゅうじゅん

ちゅうじょう 〔中將〕(名) 1 中將 〆ロジエストウエンスキーちゅうじょう

925 10 將校には大將・中將・少將・大佐・中佐・少佐・大尉・中尉・少尉あり。

ちゅうしん 〔中心〕(名) 3 中心

1154 3 〔略〕、ミダリニ聲色ヲ作リテハツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、ムシロ不愛敬ナリトモ、信實ノ心アルモノニ如カズ。

1255 4 滿洲政治・交通の中心たる奉天は、(略)、南滿洲鐵道中央停車場のある處なり。清國政府はこゝに總督を置きて滿洲全部を總管し、(略)。

1291 6 主婦は又常に家庭和樂の中心となりて、家内一同を樂しましむべし。

ちゅうしん 〔忠臣〕(名) 3 忠臣

158 10 〔略〕、又日曜日等には忠臣・義士に關する講談等もこれあり、面白く有益に存候。

1116 10 〔略〕、越王勾踐(略)、范蠡といふ無二の忠臣の助を得て、遂に呉を滅して(略)。

1117 2 此の故事を引き、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え

上げたるなり。

ちゅうしんち 〔中心地〕(名) 1 中心地

1273 10 當時伊太利は貿易の中心地にして、印度地方の寶石・香料・絹布類は盛んにペニス・ゼノア等の港を経て歐洲へ輸入せり。

ちゅうせつ 〔忠節〕(名) 6 忠節

1103 7 〔略〕 備崩ズルニ臨ミ、(略)、「我が子若シタスクベクンバ、之ヲタスケヨ。若シ不才ナラバ、君自ラ之ニ代レ。」トイヒシニ、孔明涙ヲ流シテ、「臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致スベシ。」ト答フ。

1211 2 一には、軍人としては忠節を盡すを本分と爲すべし。

1211 3 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

1211 7 〔略〕、軍人たる者は一途に忠節を重んじ、國家の大事に際しては、身命をすつること鴻毛よりも輕き覺悟なかるべからず。

1211 8 〔略〕 忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、(略)。

1211 6 太古以來忠節の心にあつきは、我が國民の世界に無比なる美德にして、(略)。

ちゅうぜんじこ 〔中禪寺湖〕〔地名〕1 中禪寺湖

955 5 東照宮の西三里ばかり、男體山のふもとに中禪寺湖あり、周回凡そ六里、湖面鏡の如く、四方の山々皆倒に影をうつせり。

ちゅうたい 〆ほへいだいしちじゅうにれんたいだいにちゅうたい・いちちゅうたい・しちちゅうたい

ちゅうたいちゅうどの 〔中隊長殿〕(名) 1 中隊長殿

159 1 〔略〕 中隊長殿の何事にも注意の周密なるは隊中一同感謝致し居り候。

ちゅうたつ 〔仲達〕(人名) 5 仲達 〆しちちゅうたつ

11106 3 蜀ノ軍少シモサワガズ、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。

11106 4 仲達アヘテ近ツカズ。

11106 5 時ノ人「死セル諸葛、生ケル仲達ヲ走ラス。」トイヘリ。

11106 5 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡ヲ觀テ、「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」ト歎ジタリ。

11106 7 又魏軍ノ蜀ニ攻入リシ時、仲達ハ孔明ノ墓ヲ祭リ、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

ちゅうと 〔中途〕(名) 1 中途

12174 2 然るに印度との交通は長日月を要し、中途の危險亦少からざれば、(略)。

ちゅうぶ 〔中部〕(名) 3 中部

175 5 身體ノ中部ハ胸ト腹トニシテ、(略)。

1138 7 中部の山林には樟・松・杉・檜・樅・椎等の繁茂著しく、(略)。

1198 1 帝國領の中部クسنナイとマヌイとの間は最も狭く、(略)。

ちゅうふく 〔中腹〕(名) 1 中腹

199 2 初瀬山ノ中腹ニ長谷ノ觀音アリ、(略)。

ちゅうぶドイツ 〔地名〕1 中部獨逸

1265 9 〔略〕、露西亞の狼は(略)佛兵の跡を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。

ちゅうもくす 〔注目〕(サ変) 1 注目ス

143 6 眠龜ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、自ラ花錠數十種ヲ織出シ、海外ニ輸出セント試ミシガ、此ノ時ハナホ世人ノ注目スル所トナラズ、(略)。

ちゅうもん 〔注文〕(名) 2 注文 〆ちゅうもん

143 9 其ノ商人ハ試ミニ之ヲ英・米二國へ送りシニ、翌年英國ヨリ注文アリシヲ始トシ、(略)。

143 10 〔略〕、ドイツ・アメリカ等ノ諸國ヨリモ續々注文ヲ受ケ、販路次第ニ開ケ、(略)。

ちゅうもんじょう 〔注文狀〕〔課名〕2 注文狀

九目 第五課 注文狀

九目 第五課 注文狀

九目 第五課 注文狀

ちょうい「長圍」(名) 2 長圍

十二26 9 武田勝頼(略)、攻めあ

ぐみて長圍の計を取り、柵を城外に廻らし、繩を城下の河中に張りて、城兵のひそかに逃れ出づるを防ぐ。

十二27 4 敵は長圍の計を取れるに、我は糧食殆ど盡きたり。

ちょうおう「趙王」(名) 1 趙王

十二38 7 敵國案に使用して功ありしかば、趙王厚く之を用ふ。

ちょうかいぎいん「町會議員」(名) 1 町會議員

十二34 5 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集シ、(略)。

ちょうかん「少しいちようかん・しれいちようかんいかむりよろくせん」にん・ごとうしれいちようかん

ちょうけい「長徑」(名) 1 長徑

十二40 7 阿蘇山の舊噴火口は南北の長徑六里、東西の短徑四里にわた

り、(略)。

ちょうこく「趙國」(地名) 1 趙國

十二39 3 然れども強秦の兵を趙國に加へざるは廉頗と我と二人あるが爲なり。

ちょうこく「彫刻」 少こちようこく

ちょうさ「調査」(サ変) 1 調査す

《一ス》

十二16 6 故に文明諸國に於ては何れも氣象臺・測候所を置きて、日々

の氣象を調査す。

ちょうし「銚子」(地名) 1 銚子

九17 図 銚子

ちょうし「調子」(名) 1 調子

十二83 6 (略)、其のバイオリンを取つて彈始めた。(略)。聴衆は(略)。重く沈んだ調に(略)、軽く浮立つた調子に、(略)、ふわりくと春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

ちょうじかん「長時間」(名) 1 長時間

十二33 4 (略)、何レモ多量ノ石炭ヲ積ミ、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。

ちょうしこう「銚子港」(名) 2 銚子港

九18 2 河口ニ銚子港アリ。醤油ノ產地トシテ知ラル。

九18 2 銚子港ノ東南一里餘、大吠崎ニハ燈臺アリ。

ちょうじつげつ「長日月」(名) 1 長日月

十二74 2 然るに印度との交通は長日月を要し、中途の危険亦少からざれば、(略)。

ちょうじや「長者」(名) 1 長者 少ろ

うじんちようじや

十二23 6 五日目ノ朝行キテ見レバ、老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。大イニ怒リテ、「長者ト約シテ後ル、ハ禮ニ非ズ。

ちょうしゅう「聴衆」(名) 4 聴衆

十二83 4 (略)、其のバイオリンを取つて彈始めた。(略)。聴衆は四方から集つて來て、見る内に人山を築いた。

十二84 2 (略)、聴衆は錢をつかんで、争つて老人のさへげた帽子の中へ投入れる。

十二84 8 幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

十二85 3 かの情深い紳士は誰であつたか、老人も知らぬ、聴衆も知らぬ。

ちょうじゅう「鳥獸」(名) 2 鳥獸

九66 2 若し空氣なからんには、人も鳥獸も草木も多くの生物は其の生を保つこと能はざるべし。

十二45 5 (略)、四面皆海にして、魚介の供給ゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、(略)。

ちょうしゅん「長春」(地名) 3 長春

十二55 10 奉天より北すること約百八十八哩、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

十二56 1 長春は南滿洲鐵道最北の驛にして、大連よりこゝに至る四百三十六哩。

十二57 図 長春

ちょうじよう「頂上」(名) 1 頂上

十二42 2 (略)、其の北なる杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。

ちょうさ「長」(サ変) 2 長ず 《一ジーズ》

十一42 6 「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。(略)。」とて固く止めしが、「年長じては敵も近づけ申すまじ。

十二111 3 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、一片忠節の心なからんには、其の人や全く精神なき人形のみ。

ちょうせきりようど「朝夕兩度」(名) 1 朝夕兩度

十一56 2 兵營内の生活は規律正しく、(略)、又毎日朝夕兩度の人員點呼も御座候。

ちょうせん「朝鮮」(地名) 7 朝鮮

六43 5 日本中を平げて、後には朝鮮までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ人は、(略)。

六51 4 支那からは大兵をおくつて、朝鮮をたすけましたが、もとより強い日本兵にはかなひません。

十一106 10 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。

十一107 3 朝鮮は夏も暑い、冬は又案外に寒い。

十一107 7 是が朝鮮の家の小さくなつた重なる原因である。

十一108 1 オンドルにたく薪がないと、冬が越せないから、朝鮮では「米のないのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」といふ

意味のことわざがある。

十一111 暑い時分汽車に乗って朝鮮を旅行すると、どこの山陰にも白い着物が乾してある。

ちょうせんかいきょう「朝鮮海峡」

〔地名〕3 朝鮮海峡 朝鮮海峡

十二410 〔略〕太平洋第二・第三艦隊は、朝鮮海峡を経てウラジオスツックに向はんとす。

十二51 我が海軍は初より敵を近海に迎へ撃つ計を定め、全力を朝鮮海峡に集中せしが、〔略〕。

十二54 門司にて乗船し朝鮮海峡を過ぎて、黄海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

ちょうせんじん「朝鮮人」(名) 2 朝鮮人

十二110 朝鮮人は煙草を好む。

十二110 朝鮮人は餘り衛生に注意しないが、婦人の着物をよく洗ふことは感心である。

ちょうせんせいばつ「朝鮮征伐」(名)

2 朝鮮せいばつ

六51 秀吉はもう日本中に敵がなくなつたから、こんどは朝鮮せいばつをはじめました。

六52 秀吉は大そうおこつて、〔略〕その使を追ひかへして、二度目の朝鮮せいばつをはじめました。

ちょうせんのかうそく「課名」2 朝鮮の風俗

十一目13 第二十六課 朝鮮の風俗

十一106 第二十六課 朝鮮の風俗

ちょうせんはちどう「朝鮮八道」〔地名〕

1 朝鮮八道

十一116 北は樺太・千島より、南臺灣・澎湖島、朝鮮八道おしなべて、我が大君の食す國と、朝日の御旗ひるがへも 同胞すべて六千萬。

ちょうそん「町村」(名) 1 町村

十二102 我が國の地方自治團體は、府縣・市の二級或は府縣・郡・町村の三級に分れたり。

ちょうだい「長大」(形状) 1 長大

十二410 汝長大ニシテ、劔ヲオブトイヘドモ、心甚ダ弱シ。

ちょうたん「長短」(名) 1 長短

十一68 人生の長短は事業の大小を以て量るべく、年齒の多少を以て量るべからず。

ちょうちよう「町長」(名) 2 町長

十二34 午前九時郡長・警察署長・郡視學・町長・郡會議員・町會議員・學務委員・有志者、其ノ他工事關係者一同新校舍ニ參集シ、〔略〕。

十二34 先づ君ガ代ノ歌ヲ歌ツタ後、町長ハ工事ノ報告ヲシタ。

ちょうちよう「蝶蝶」(名) 1 蝶々

七96 眠る蝶々、とび立つひばり、吹くや春風たもとも輕く、〔略〕。

ちょうちん「ひびきふちやうちん」

ちょうてき「朝敵」(名) 1 朝敵

七67 父ハ〔略〕「殘リタル一門ノモノドモヲ集メテ、朝敵ヲホロ

ボセ。」ト申シ殘シタリ。

ちようと「長途」(名) 1 長途

十一46 アラビヤ馬の長途の騎行にたへることは實に驚くべき程で、〔略〕。

ちようど「丁度」(副) 2 ちやうど

八49 電報は十五字までが一音信で、こつた字は二字に數へるから、〔略〕、十五字になるやうに書いてこらん。」ヤケナイシンルキブジワダ

一郎「かうすると、ちやうど十五字になります。」

九68 梅の實の熟する頃降續く五月雨は、農家に取つては大切な雨である、それはちやうど田植の時節であるから。

ちやうないゆうししゃ「町内有志者」(名) 1 町内有志者

十二34 〔略〕、之ニ要シタ經費ハ總計何萬何千圓、其ノ内何千圓ハ町内有志者ノ寄附金デアル。

ちやうひ「張飛」(人名) 1 張飛

十一102 劉備深ク孔明ヲ信賴シ、一々其ノ言ヲ用ヒシカバ、關羽・張飛等ノ諸將之ヲヨロコバズ。

ちようふ「ひびきふちやうふ」

ちようぶ「ひびきふちやうぶ・こひやく・こじゆうまんちやうぶ・ひやく・くじゆうまんちやうぶ・ひやくはちじゆうまんちやうぶ」

ちようぼう「眺望」(名) 2 眺望

十99 長廊盡キテ本堂アリ。結構

頗ル大ニ、眺望甚ダ美ナリ。

十一18 行くく吉野宮に參拜し、〔略〕。眺望いよく開けて、満目總べて花なり。

ちようまつ「長松」(人名) 4 長松

六29 直吉と長松は同じ店のでつちであつた。

六31 かへつて來ると、長松は笑つて、〔略〕、一鏡まうけておけばよかつたのに。」といつたら、〔略〕。

六32 「だんながおるすだから、なほさらましがひがあつてはならない。」といつても、長松はまだ笑つてゐた。

六33 あとになつて、主人はこの事を聞いて、直吉は正直ものだと思つて、長松にはひまをやつた。

ちようめ「ひびがしくひらのちやうめ」

ちようめい「長命」(名) 1 長命

十一68 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。

ちようりつ「町立」(名) 1 町立

十二36 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、町立ノ學校トシテハ先ヅ申分ノナイ設備デアル。

ちようりゅう「長流」(名) 1 長流

十二8 日本一の長流を信濃川とす。

ちようりよう「張良」(人名) 2 張良

十二6 張良、橋上ニテ白髮ノ一老人ニアフ。

十25 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖

ニ仕へ、良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

ちょうりょうとかんしん「課名」2 張

良ト韓信

十目8 第七課 張良ト韓信

十225 第七課 張良ト韓信

ちょうりい「鳥類」(名)3 鳥類

八561 駝鳥は鳥類の中で一番大きくて、卵も子供の頭程ある。

十877 廣く家畜といへば、鳥類までも入れて言ふ。

十878 鳥類の中で家畜として最も多く農家に飼はれるのは雞で、(略)。

ちょうれつ「長列」(名)1 長列

十二693 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、(略)。

ちようろう「長廊」(名)2 長廊 長廊

十994 初瀬山ノ(略)、仁王門ヲ入レバ百間ニ餘ル長廊アリ。

十9910 長廊盡キテ本堂アリ。

ちようわ「調和」(名)1 調和

十493 繪畫・模様等を色どりするには、色の調和を考へざるべからず。

ちよきん「貯金」(課名)2 貯金

九目9 第二十二課 貯金

九75 第二十二課 貯金

ちよきん「貯金」(名)1 貯金 ちよきん

こうちよきん・ゆうびんちよきん

九768 一度ニ拾錢以上ノ貯金ヲナ

スコト能ハザル者ノ爲ニハ、(略)。

ちよきんす「貯金」(サ変)4 貯金ス

「一スル―セ」

九769 (略)、郵便切手ニヨリテ貯金スル便利ナル方法アリ。

九7610 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒオキテ、貯金セントスル時ニハ、其ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、(略)。

九774 又銀行ニ貯金スル方法モアリ。

九785 タバシ貯金センガ爲ニ必要ナル費用マデモヲシムガ如キハ、ホムベキ事ニアラズ。

ちよきんだいし「貯金台紙」(名)1 貯金臺紙

九7610 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒオキテ、貯金セントスル時ニハ、其ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、(略)。

ちよく「勅」(名)1 勅

九917 (略)、勅なればいともかしこし、うぐひすの 間は如何にと 雲のまで 聞え上げたる 言の葉は、(略)。

ちよくげんす「直言」(サ変)1 直言す「一シ」

十二867 薩摩の士に喜劍といふ人あり、(略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勧む。

ちよくこ「勅語」(名)2 チヨクゴ

勅語 ちよきよういくちよくこ

四95 (略) 天長セツノシキガ

アリマシタ。センセイガチヨクゴヲオヨミ ニナツテ、(略) 君ガヨノウタヲウタヒマシタ。

十二113 勝報上聞に達し、陛下の下し給へる勅語の中に、「(略)。」と仰せられたり。

ちよくし「勅使」(名)3 勅使

八33 かつてたふとき御宮なれば、一年中の重だちたる祭日には勅使を差立てたまひ、(略)。

八77 今日神嘗祭なれば、夕方には内宮へ勅使の参拜もあるべしといふ。

九301 靖國神社ノ(略)。春秋兩度ノ大祭ニハ必ず勅使ヲ差立テラレ、(略)。

ちよくせつ「直接」(名)1 直接

十二104 公吏・議員等直接公共の事務に當る者、如何に其の職務に忠實なるも、一般人民の之を助くるなくんば、(略)。

ちよくせつこけい「直接国税」(名)1 直接國稅

十二106 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。(略)、及び各府縣に於て多額の直接國稅を納むるもの十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるものはなり。

ちよくせん「直線」(名)4 直線

十四48 線には直線と曲線とあり。

十四48 直線を適當の長さに切り、

(略)、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶる時は、美しき模様を生ず。

十四48 曲線は直線よりもやはらかなる感覺を與ふるを以て、(略)。

十四48 見よ、(略)、直線・曲線を併せ用いたる第十四圖・第十五圖の模様の如何に麗しきかを。

ちよくにんす「勅任」(サ変)2 勅任す「一セ」

十二106 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。(略)、國家に勤勞あり又は學識あるものより勅任せられたるもの、(略)。

十二106 貴族院は五種の議員を以て之を組織す。(略)、及び各府縣に於て多額の直接國稅を納むるもの十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるものはなり。

ちよくゆ「勅諭」(名)3 勅諭 ちよくじん じんにたまわたりたるちよくゆ

十二109 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽にすべからざるものなれ。

十二110 勅諭は先づ我が國の軍隊が古來天皇の統率し給ふ所なることを諭し給ひ、(略)、明治の大御代に及びて、復古の政と共に陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御諭しあり、(略)。

十二115 此の勅諭は特に軍人に賜

へるものなれども、獨り軍人としての心得なりと思ふべからず。

ちょぞう「貯蔵」(名) 1 貯蔵

十337 図 (略)、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、(略)。ヨリテクハシク其ノ作方、貯蔵ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。

ちょちくがかり「貯蓄係」(名) 1 貯蓄

十一610 図 働蜂中には蜂の集め来る蜜を検査する検査掛あり。又之を受取りて貯ふる貯蓄掛あり。

ちょちくぎんこう「貯蓄銀行」(名) 1 貯蓄銀行

九776 図 普通ノ銀行ニテハ一度ニ五圓以上ノ預金ノミヲ取りアツカヘドモ、貯蓄銀行ニテハ五圓ヨリ少キ金ニテモ預カル。

ちょっか「直下」(名) 2 直下

九961 図 此の湖の落口は華嚴瀧となる。直下七十丈、壯觀名狀すべからず。

十一761 図 最も壯觀なるは華嚴にて、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。

ちょっけい「直徑」(名) 6 直徑

十五4 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直徑ガ六尺モアツテ、(略)。

十一391 図 竹にも直徑一尺以上のものこれあり、(略)。

十一401 図 阿里山の檜材は(略)、中には直徑二十尺餘、一樹にて千五

百尺の材積を得るものもこれあり候由、(略)。

十一844 図 先ツ棉花ヲ俵ヨリ出シテ

ホグシ、(略)、鐵棒ニマキテ、長サ四尺バカリ、直徑尺餘ノ筵締トス。

十二415 図 中岳は(略)、其の火口は直徑六百メートルの圓形をなし、(略)。

十二421 図 烏帽子岳は(略)、直徑八百メートルの噴火口を有し、(略)。ちよつと(副) 7 チヨツト ちよつと

二431 図 「チヨツトオマチナサイ、ボクガウチカラタドンヲモラツテキマスカラ。」

四512 チヨツト見ルト、リツパデハナイガ、オメデタイ 時ノオクリモノニナリマス。

五188 図 「おはなや、用があるから、ちよつとお出で。」と、母はだいたいころからよびました。

五215 図 母は「ちよつとお待ち。」といつて、切つたさしみをさらの中へ入れて、(略)。

七878 図 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があるではありませんせんか。

八313 セが高く、目がするどくて、ちよつと見ると、おそろしいが、いたつて氣だてのやさしい老人であつた。

十二827 図 づかくと走り寄つて、ちよつと貸したまへ。」と言ひなが

ら、其のバイオリンを取つて弾始めた。

チヨンガー(名) 3 チヨンガー

十一1093 まだ冠禮を行はない者はチヨンガーといつて、髪を三つ打ちにして後へたらしめてゐる。

十一1094 チヨンガーの間は人に侮られるから、成るべく早く冠禮を行ふ。

十一1096 金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎててもチヨンガーで、大人の仲間入が出来ない。

ちよんちよんちよんちよんすいっちよん(感) 1 ちよんくくくくすいっちよん

五625 図 (略)、あとから馬おひおひついて、ちよんくくくくすいっちよん。

ちらす「散」(五) 1 散す 《一ス》 ちふきちらす・まきちらす

九678 「紅白花は開く煙雨の中。」といふ景色は、靜かな中に美しいながめである。併し此の雨はやがて花を散す雨となるので、其の時はうらめしい心地がする。

ちり「塵」(名) 1 チリ

六428 チリモツモレバ、山トナル。ちりしく「散敷」(四・五) 2 散りしく 散敷く 《一キーク》

八815 図 (略)、南半球にては木の葉散りしきて、蟲の鳴く秋の時候なり。十二839 變化極らない妙音は、(略)、又忽ち落葉散敷く秋のさびしさに沈

ませる。

ちりちり「散敷」(形状) 1 散りくく

十一156 図 衆皆力を失ひて散りくくに成れり。

ちりは・てる「散果」(下二) 2 散果てる 《一テ》

九701 葉の散果てた冬木立に吹きさむ木枯の風は、(略)。

十278 黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方は散果てて、(略)。

ちる「散」(四・五) 8 チル 散る 《一ッーラーリール》 ちよとびちる・ふりちる

二184 (略) 木ノハガトンデキマス。(略)。タクサンチツタトコロハ、ニハノ土モミエマセン。

三18 (略)、サクラノハナガ一メンニサキマシタ。(略)。ヒラヒラトカゼニチルノモマタミゴトデス。

五338 サクラノ花ノ下ニトンドキル白イ蝶ヲ見ルト、花ガチツタノカト思ヒ、(略)。

八417 火のこが花火のやうに散つてゐる。

九6810 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、稻の花は散る、(略)。

九935 図 きさいの宮の 仰言、御聲のもとに、(略)と、つかうまつりし 言の葉の 花は千歳も 散らざらん。

九38 図 岩にくどくる清流、雪と散り、玉と飛ぶ。

十一76 2 図 (略)、直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかく。中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水烟深谷をおほひ、(略)。

ちん「朕」(代名) 4 朕

十二11 4 図 (略) 「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚ル」。

十二110 7 図 朕は汝等軍人の大元帥なるぞ。

十二110 7 図 されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は特に深かるべき。

十二110 8 図 (略)、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は特に深かるべき。

ちんえん「鎮遠」(名) 1 鎮遠

十一33 7 図 海防艦ハ専ラ自國ノ沿岸ヲ護ルコトヲ目的トス。壹岐・鎮遠・見島等はナリ。

ちんせん「貨錢」(名) 1 貨錢

七53 6 図 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、貨錢も高かつたのです。

ちんちやく「沈着」(形状) 1 沈着

十一104 9 図 孔明ハ沈着ニシテ、機ニ臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。

ちんちろちんちろちんちろりん(感) 1

ちんちろくくちんちろりん

五61 1 圖 あれ、松蟲が鳴いてゐる。

ちんちろくく ちんちろりん。ちんぼつす「沈没」(サ変) 3 沈没す

「シー・セ」

十二75 5 図 (略)、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈没し、(略)。

十二75 5 図 (略)、敵の兩旗艦は遂に沈没し、其の他にも相ついで沈没せるもの多し。

十二10 8 図 我が軍の死傷甚だしく、沈没したるもの僅かに水雷艇三隻に止れり。

ちんみ「珍珠」(名) 1 珍珠

十81 2 図 食物は粟・稗・うばゆりの根等を主とし、鹿の肉は珍珠として之を賞美す。

つ

つ(格助) ひととおつみおや・ひのものとくに

つ(助動) 5 つ 《ツ・ツル》

八9 3 図 (略) うれし、この松の根もとに、まづ見つけつと高く呼ぶ聲。

九11 6 図 (略) 葉かげにいねし鳥ははやゆめも見あきつ。

十39 6 図 (略) 昨日の敵は今日の友、語ることもうちとけて、我はたゝへつ、かの防備。

十39 7 図 (略) かれは稱へつ、我が武勇。

十39 10 図 (略) うたち正していひ出でぬ、「此の方面の戦鬨に 二子を失ひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。」と。

*ついえひひ

つかいす「追懷」(サ変) 1 追懷す

「スル」

十一36 8 図 (略) 北方の臺灣神社ヲ參拜すれば、そごるに當年を追懷するの情にたへず候。

ついきぎす「追撃」(サ変) 1 追撃す

「セ」

十二9 5 図 敵の司令長官(略)は(略)一驅逐艦に移りしが、我が驅逐艦の連・陽炎の二隻に追撃せられ、遂に捕へらるゝに至れり。

ついたち ひとがつついたち・ごがつつ

ついつい(副) 1 つひくく

十55 9 図 (略) 色色取りまぎれ、つひく御無音に打過ぎ候。

ついで「次」(接) 1 次いで

十二29 4 図 十六日勝商は再び山上にのろしをあげ、次いで城に入らんとするに、(略)。

ついでに「序」(副) 1 ついでに

八10 2 図 (略)、うち中の者がそろつて寫眞をとりました。ついでに私人のもとりましたから、兩方一枚づつ差上げます。

ついでにはひとについては

ついに「終」(副) 35 ツヒニ つひに

遂ニ 遂に 終ニ 終に

七79 2 図 (略)、事に動かず、さはれず、はげみ進むに何事の など成らざらん、鐵石の かたきもつひにとほすべし。

七80 2 図 (略)、わき目もふらず、怠らず、ふるひ進むに何事か など成らざらん、ばんじやくの 重きもつひにうつすべし。

八53 6 図 (略) 之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デテ、入鹿ノ足ヲキル。入鹿ツヒニ殺サレタリ。

九6 6 図 尊(略) 近江の賊を討ち給ひしが、道にて病にかゝり、遂に伊勢にてかくれ給へり。

九33 7 さて幾度も幾度も造り直して、終に其の目的を達することが出来た。

九42 8 図 マシテ幾萬年ノ久シキ間、此ノ大ナル湖水ヨリ流レ落チタル水ノ力ハハカリ知ルベカラズ。山ヲケヅリ、谷ヲウガチ、(略)、又切レテハ急流トナリ、遂ニ今日ノ如キ美シキ景色トナリシナリ。

九63 8 図 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、(略)、さしに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

十24 4 図 (略) 「汝ヨク此ノ書ヲ學ババ、遂ニ王者ノ師タラン。」

十24 7 図 良大イニ喜ビテ、朝夕之ヲ讀ミ、遂ニ兵法ヲ會得シタリ。

十259 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖ニ仕へ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。

十311 原産地ハアメリカニシテ、(略)、支那ヨリ琉球、琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。

十326 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。

十441 (略)、販路次第ニ開ケ、此ノ業ヲ營ムモノモ亦追々ニ増加シ、遂ニ、今日ノ盛大ヲ見ルニ至レリ。

十707 (略)、二人はまた有らん限りの勇氣をふるひて、遂に岸べに漕着けたり。

十1610 (略)、越王勾踐つづさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十1484 アラビヤ人は(略)、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。(略)。遂に暮方になつた。アラビヤ人はこゝに始めて馬に全速力を出させて、雲を霞と逃げのびた。

十1694 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

十1883 網を張らんとする時は、先づ幾條かのやゝ太き絲を渡し、之を本として、次第に細き絲をかけ、終に完全なる網を造る。

十1026 (略)、劉備ハ三度マデモ其ノイホリヲ訪ヒ遂ニ、迎ヘテ重臣トセリ。

十1033 孔明、劉備ニ事ヘ、(略)、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十1045 孔明ハ(略)漢朝ヲ興復セントシ、先ヅ南方ノ亂ヲ平ゲ、遂ニ自ラ諸軍ヲ率キテ北征ス。

十1252 我が海軍は(略)の計を定め、全力を朝鮮海峡に集中せしが、遂に之と會して、世界史上空前なる大海戦となれり。

十1275 (略)、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈没し、(略)。

十1296 敵の司令長官(略)は(略)、我が驅逐艦の連・陽炎の二隻に追撃せられ、遂に捕へらるゝに至れり。

十12214 (略)、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、遂には地球上の動物が呼吸作用を営むことが出来なくなる道理である。

十12295 十六日勝商は(略)、次いで城に入らんとするに、不幸發見せられて、遂に敵兵に捕へらる。

十12306 伊金備(略)、幾度責めらるれども改めず、遂に殺されたり。

十12317 足利氏の大兵來り攻め、城遂に陥り、保・義鑑共に戰死す。

十12397 廣顔(略)、相如の門に

至りて罪を謝し、つひに無二の親交を結べりとぞ。

十12521 商人ニシテ信用ヲ失フトキハ其ノ極終ニ破産ヲマヌカレズ。

十126910 (略)、飢饉刻々にせまるが故に、次第に行進を早め、遂に危害を顧みず、向ふ處何物をもはゞからずして突進す。

十12761 (略)、地球を餘りに小さく見たるコロンブスの誤は遂に此の大發見を成さしむる基となりしなり。

十12765 是に於て空しく志を抱いて西班牙に轉じ、居ること多年、遂に皇后イサベラの知る所となり、(略)。

十12858 赤穂浪士が數年の苦難を忍び、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは(略)。

十12968 孟子これより感奮・勉勵して遂に一世の大家となり、(略)。

ついでに「啄」(五) 1 ついでに「ム」

十12208 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついでに。

ついでに「費」(四・五) 6 費ス 費ス「一ス」

十12355 汽車は此のトンネルを通過するに七八分を費す。

十12112 分業法ニ依ラズ、一人デ種々ノ仕事ヲスルコトニナルト、(略)、ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。

十12114 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ・ルコトニナルト、(略)、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十12677 人生七十年と見るも六十万時間に過ぎず。其の内寢食・談話・遊戲・病氣等の爲に費す時間は三分の二を占め、(略)。

十12683 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。

十12529 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、(略)。

つうひいつう

つううんびん「通運便」(名) 1 通運便

九137 拜啓、御註文の縞物三十反、本日通運便により汽船平安丸にて發送いたし候。

つうかす「通過」(サ変) 1 通過す「一スル」

十12344 汽車は此のトンネルを通過するに七八分を費す。

つうこう「通行」(名) 2 通行

九1291 (略) 關所アリテ、日暮ヨリ後ハ一切旅人ノ通行ヲ差止メタレバ、(略)。

十12605 されど十字街頭に立てる巡查の一舉手の合圖に、通行の人は行くも止るも唯其の命に従ひて、(略)。

つうこうす「通航」(サ変) 1 通航す

「一シ」

十一203 瀨戸内海の沿岸には(略)等の港多く、汽船絶えず通航して(略)。

つうじょう「通常」(名) 1 通常

十二662 (略)、通常の灰色の鼠の一群大舉して、(略)歐羅巴に移り、古來此の地方にありし黒色の鼠を全く追拂ひしことあり。

つうしんこうつう「通信交通」(名) 1

通信交通

十一711 (略)、今日の如く通信交通の機關發達し、社會の活動敏速なる時代において、(略)。

つうず「通」(サ変) 12 通ズ 通ず

《一ジーズ・ズル・ゼ》ひあいつうず

九166 (略) コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運河ハ、(略)。

九167 (略)、東京ヨリ江戸川ヲサカノボリテ利根川ニ通ズル汽船ノ通路ニシテ、(略)。

九251 (略) 工兵は(略)、電信を通ずる等、もつばら技術の事にしたがふ。

十154 (略) 二人共に和漢の學に通じ、(略)。

十574 (略) 術科は午前・午後を通じて、四時間より六時間、(略)。

十621 (略) 其ノ左右上下更ニ無數ノ坑道アリ、又上下ニ通ズル大ナル堅坑アリ。

十907 (略) 同學士は(略)、學理に

も通じ、實地にも明かなる人に候へば、(略)。

十一972 (略) 是より一條の大道遠く北へ通じてロシヤ領に入候。

十一114 (略) 里道の改修も全く成り、村内の重なる道路は荷車・人力車を通ずるに至れり。

十二558 (略) 又清國京奉線は奉天より北京に通ず。

十二635 (略) 電車の便の最も開けたるは柏林にして、市街の隅々通ぜざる處なく、(略)。

十二111 (略) 如何程技藝に通じ、學術に長ずとも、(略)。

つうずる「通」(サ変) 2 通ずる

《一ジ》

九383 今水路に汽船があり、陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

九383 鐵道の通じてゐない所でも、馬車や人力車がある。

*つうちよう ひかよいちよう
つうどくいたす「通読」(四) 1 通讀致す

《一シ》

十936 (略) 尚々久しく拜借致し居り候農業一夕話、まことに面白く通讀致し候。

つうふう「通風」(名) 1 通風

十二365 (略) 本校舎ノ建築ハ質素堅固ヲ主トシ、外觀美ナラザレドモ、通風・採光ニツナガラ其ノヨロシキヲ得、(略)。

つうほうかん「通報艦」(名) 3 通報艦

十一317 (略) 諸子ハ戰艦・巡洋艦・海防艦・砲艦・通報艦・驅逐艦・水雷艇・潜水艇等ノ任務ヲ知レリヤ。

十一32 (略) 通報艦最上

十一341 (略) 通報艦ハ主トシテ艦隊ノ命令・報告等ヲ傳達シ、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が艦隊ニ報告ス。故ニ艦體甚ダ輕ク、速度亦大ナリ。

つうろ「通路」(名) 4 通路

九155 (略) 栗橋ハ東北鐵道ノ通路ニアタリ、一大鐵橋カ、レリ。

九167 (略) コ、ヨリ江戸川ニ通ズル運河ハ、東京ヨリ江戸川ヲサカノボリテ利根川ニ通ズル汽船ノ通路ニシテ、(略)。

九389 (略) 箱根山ハ(略)。東海道ノ通路ニアタレルヲ以テ、昔ハ人馬ノ往來甚ダ盛ナリキ。

十673 捕鯨法には(略)、又以前には鯨の通路に網を張つて鉈を打つ方法などもあつた。

つえ「杖」(名) 7 ツエ 杖

三298 (略) ツエザルカゴナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。

六427 コロバヌ先ノ杖。

六616 (略) まへからわたしたは目がわるく、杖をたよりにあるきます。

六617 (略) いまその杖をもぎ取られ、かへりの道が知れません。」

六633 (略)、少しはなれたくさむ

らに、やう／＼杖を見つけ出し、すぐに拾つて取つてやる。

六635 (略) めくらは杖を受取つて、「あ、ありがたうございます。うれしいこと。」とれいいつて、(略)。

八88 中佐ハ目ヲ見張リテ、軍刀ヲ杖ニ起上ラウトスル。

つか「束」(名) 3 ツカ つか

六76 (略) 五ツカ

十143 (略) つかとなり 床となる身も、それ／＼の務をもてり。

十145 (略) 梁・棟木 つか・ぬき 柱 何一つ 取外すとも、たちまちハ家ハ崩れん。」

つか「柄」(名) 1 つか

十145 (略) 幾度か思ひ直して討たんとすれども、少しも疑ふ心なき正義の様を見ては、刀のつかに手をかくべきやうもなし。

つかい「使」(名) 5 使ひ 使ひおつかい・めしつかい

六376 學校からかへつてから、をばさんの所へ使ひに行つた。

六517 そこで支那もおそれて、わぼくを申しこんで來ましたが、その使のもつて來た文の中に、(略)。

六526 秀吉は大そうおこつて、(略)、その使を追ひかへして、二度目の朝鮮せいばつをはじめました。

八517 (略) サル程ニ三韓ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、入鹿ノ參内スルコトアリ。

十二277 城を抜け出でて岡崎に至

り、急を主公に告ぐる者なきか。」

と。鳥居勝南といふ者あり、進み出

でて其の使たらんことを請ひ、(略)。

つかいかた「使方」(名) 1 使ひ方

十859 (略)、日本の馬のおとなしく

ないのは、育て方・使ひ方にあるこ

とで、日本では餘りいぢめた爲に、お

のづから荒々しくなつたのである。

つかいす「使」(サ変) 1 使す「一

シ」

十二387 支那の昔趙といふ國に蘭

相如といふ賢臣あり。敵國秦に使し

て功ありしかば、(略)。

つかいみち「使道」(名) 2 ツカヒミ

チ

三312 竹ノツカヒミチ ハマダマ

ダタクサン アリマス。

四376 マダコノホカニ麥ワラ

デ作ツタ物デ、アツイジブン

ニツカフ物ガアリマス。

四435 (略)、今では紙で作つ

たのしをつかふやうになりま

した。

五242 「これは私が毎日使つてゐ

た釜でございます。

五564 火ヲ使フコトノ出來ルノハ人

バカリデス。

五565 鳥ヤケモノハ火ヲ使フコトヲ

知リマセン。

五574 近ゴロハ又マツチトイフベン

リナ物ガ出來テ、火打石ヤ火打金ヲ

使フ人ハメツタニアリマセン。

五587 石炭ノ火ノ力ハ(略)ツヨイ

ノデ、汽車ヤ汽船ヤソノ他ノキカイ

ナドヲウゴカスノニハ、皆コレヲ使

た。

七138 小賣といふのは商人から

品物を使ふ人にすぐに賣渡すことで

す。

七419 このお金は(略)、『夫の一

大事の折に使へ。』と申して、父の

渡してくれた金でございます。

七476 西洋紙ハ「君ヲハ表ダケシ

カ役ニ立タナイガ、僕ヲハ裏表トモ

ニ使ハレル。

七73 又物ヲ洗ツタリフイタリスル

時ニ使フ海綿モ、(略)。

八40 之ヲ思ハバ一本ノマツチモ

ソマツニハ使フベカラズ。

九645 扇を使へば風起り、むちを

ふるへば音を發す。

九655 臺所にて火吹竹を使ふも、

(略)、皆空氣を送りて、火の勢を盛

つかう「仕」(下二) 11 仕フ 仕ふ

事フ 事ふ「一フルーハ」

十167 清少納言も亦紫式部と同じ

く宮中に仕へ、(略)。

十258 後張良・韓信共ニ漢ノ高祖

ニ仕へ、(略)、遂ニ高祖ヲシテ其ノ

大業ヲ成サシメタリ。

十887 君の御供に仕へしは 藤

房・季房唯二人。

十一419 是より御いとま賜は

り、河内に行きて正儀に仕へん。

十一606 親に事へ、弟を助け、

家を治めん、妹我は。

十一1032 孔明、劉備ニ事へ、出デ

テハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツ

テハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、遂ニ備

ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、(略)。

十一1039 「汝ハ孔明ト共ニ事ニ

如クセヨ。」

十一1039 「汝ハ孔明ト共ニ事ニ

從ヒ、之ニ事フルコト父ニ事フルガ

如クセヨ。」

十二325 孝女お房の幼き身を以て

能く父母に事へたる、(略)、皆後世

女子の模範とすべき德行なり。

十二749 たま／＼元の忽必烈に

仕へたる伊太利の大旅行家マルコ・

ポーロの日本に關する記事を読み、

(略)。

十二930 孔子事へて吏となりし

に、治績大いに舉り、(略)。

つかえ 凸おんさしつかえ

つか・える「支」(下二) 1 つかへる

「へル」

八五九 1 くじやくは(略)。大きなものになると、若し家の中でひろげさせたら、座敷一ぱいになつて、天井へつかへる程である。

つか・える「仕」(下二) 2 つかへる

仕へる「へ・へル」

六四五 7 (略)、木下藤吉郎秀吉と名のつて、織田信長につかへました。

六四七 3 少しのゆだんもなく主人に仕へるころざしにかんしんして、(略)。

つか・える「使」(下二) 1 使へる「へル」

十一二九 活版は(略)、同じ活字を何度でも組立てて使へる。

つか・える「番」(下二) 1 つかへる

「へ」

四八二 1 よ一は弓に矢をつかへ、よくねらひをさだめ、弓を引きしほつて、(略)。

つかま・える「捕」(下二) 7 ツカマヘル

つかまへる「へ・へル」

三三五 1 みちでほたるを一ぴきつかまへて、(略)。

三六五 6 (略)、子ドモガ大ゼイデカメヲツカマヘテ、オモチヤニシテキマス。

五三六 2 コノカハイラシイ、美シイ蝶ヲツカマヘテイヂメル人ハ、ドウイ

フ心デセウ。

六六五 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカマヘルコトガアリマス。

六六六 6 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。

八二五 5 さうしてそれをつかまへると、大へんに仕合がよくなるといふが、毎年一羽づつしか出て来ない。

八二二 3 図 「それはめづらしい。どうかして其の雀をつかまへて見たい。」

つかまつる 凸あんしんつかまつる・はいけんつかまつる・はいどくつかまつる・はつそうつかまつる

つかみかかると「掴掛」(五) 1 ツカミカ、ル「ツツ」

六六四 6 熊ガ人ニムカツテ来ル時ニハ、(略)、大キナ手ノヒラデツカミカ、ツテ、スルドイ爪デヒツカキマス。

つかむ「握」(四・五) 2 つかむ「へ」

十50 10 図 手塚の家来は組ませじと中をへだつれば、敵は之をつかんで、片手にひつさぐ。

十二八四 3 (略)、聴衆は錢をつかんで、争つて老人のさへげた帽子の中へ投入れる。

つかふ「付」 凸いいつかふ

つかふ「浸」(五) 3 つかる「ツツ」

五二八 6 圖 もとよりすつぱいこのからだ、しほにつかつてからくなり、し

そにそまつて赤くなり、(略)。

六二一 3 さうして象の重みで船の水につかつた所にしを附けました。

六二二 2 (略) 石をたくさんつみました。さうして前にしを附けておいた所まで船が水につかつた時に、その石をおろして、(略)。

つか・る「疲」(下二) 2 つかる 勞る

七六三 4 図 ある山國にては、犬のくびに藥品・食物などを入れたるかごをかけおきて、つかれたる旅人をすくはしむることあり。

十一六九 4 図 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

つかれ「疲」(名) 1 勞

九六〇 3 図 身體の勞を直すはよく眠るに如くはなし。

つかれは「つ」 疲果(下二) 1 勞れ果つ「て」

十70 3 図 父は直ちに勞れ果てたる水夫を助けて、ボートにうつす。

つか・れる「疲」(下二) 1 つかれる

「て」

六三六 6 ゆにはいつて、ごはんをたべると、つかれてすぐにねてしまつた。

つかわ・す「遣」(四) 2 つかはす「サ・シ」 凸いいつかわす

九六二 5 図 蝦夷は(略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばくなりき。

十55 1 図 畠山は(略) 我を此の齋藤別當のもとに預け、別當は七日の間手もとに置いて、木曾へつかはしたり。

つき「月」(課名) 2 ツキ

二目六 五 ツキ

二九五 五 ツキ

つき「月」(名) 15 ツキ 月ムウづき・きくづき・ながつき・ひとつき・みかづきなり・みなづき

一二一 ツキ クサクモ

二九六 圖 デタデタ、ツキガ。

二一〇 3 圖 マルイ マルイ マンマルイ、ボンノヤウナ ツキガ。

二一二 圖 マタデタ、月ガ。

二一六 圖 マルイ マルイ マンマルイ、ボンノヤウナ 月ガ。

三二七 にはのまつの木の上へ月がでてゐます。「ひらがなのドリル」

五一〇 8 ひるはあたたかな日にてられ、夜は美しい月をうかべながら、(略)。

六六六 図 日カサナリテ月トナル。

六六六 図 月カサナリテ年トナル。

六四四 3 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晚ニ多イ。

六四四 4 曇ツタ夜ヤ月ノナイ夜ハ道ニマヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデアル。

八六五 図 石山寺の秋の月、雲をさまりてかげ清し。

十96 ⑧ 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリテ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。十96 ⑨ 天の原ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。十一79 ⑧ 鵜飼は五月中旬に始り、十月中旬に終る。此の間毎夜月なき時をうかゞひて漁舟を出す。
つき【付】 月がおつき・しょうふだつき・てつき・もんつき
つき【着】 月おつき
つき【次】(名) 15 つぎ 次 月ごじゅうさんつき
四15 ⑦ はじめの日も、つぎの日も、たくさんえものがありました。
四21 ② ④ 「オヤユビノ次ノハ人サシユビデ、(略)。」
四74 ⑤ 又四ダン目ニハ(略)ナドヲナラベ、又ソノ次ノダンニハヒシモチトオゼンヲソナヘテ、(略)。
五65 ⑥ おちよは(略)、葉書の裏へ次のやうに書きました。
六40 ⑦ ⑨ (略)、この次の水曜日まではかへる。
八22 ⑥ 次の朝農夫はいつになく早く起きて、(略)。
九20 ④ 大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。
九82 ② それは(略)、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五

箇村の頭になるといふ定であつた。
九94 ⑧ 進んで陽明門に至る。(略)。次の門を唐門といふ。
十23 ⑩ 次ノ五日目ノ朝モ亦老人ニ先ダタレタリ。
十47 ④ ⑨ 次の圖は其の一二の例を示すものなり。
十一50 ⑦ 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。
十一66 ⑤ (略)、又汗氣ノナイモノノ次ニハ汁物ヲ出シ、アマイ物ノ後ニハ塩カライ物ヲ配合スル類デアル。
十一73 ⑤ かくて次の夜は如何にとうかゞふに、前の如く夜もすがら寝ねずして、(略)。
十二110 ⑩ さて軍人の心得として次の五箇條を論し給へり。
つきあたる【突当】(五) 1 つぎあたる「一ツ」
七85 ⑦ ⑨ きりや雪で、方角の分らなくなつた時には、(略)、外の船につきあつたりする様なまぢがひが出来ます。
つきい・ず【突出】(下二) 1 突出つ「一デ」
十一17 ⑥ ⑨ 四國の西には佐田岬長く突出で、(略)。
つきかげ【月影】(名) 2 月かげ 月影七10 ⑤ ながい夏の日いつしか暮れて、うゑる手先に月かげ動く。
十一19 ⑧ 月影の小波にくだけ、漁火の波間に出没する夜景も亦一段の

おもむきあり。
つきかた【付方】(名) 1 附方
九9 ⑤ 花ノ附方モ亦ソレノチガフ。
つきかた・める【搗固】(下二) 1 ツキカタメル「一メ」
八65 ⑦ サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、ソレカラウスニ入レテツキカタメマス。
つきぎ【接木】(名) 2 つぎ木
七66 ⑤ ⑨ 一昨年つき木をしたわか木に、もうこんなに大きなのがなつたのでございます。
七67 ④ ⑨ 父は(略)、やしき中の桃の木に皆つき木をすると申してゐます。
つききり【付切】(名) 1 付きり
七31 ④ (略)二万匹の蠶をかふのに、人一人付きりて、眠るひまもない程いそがしい。
つきす【尽】(サ変) 2 盡きす「一セ」
十40 ⑦ ⑨ 兩將盡食共にして、なほも盡きせぬ物語。
十二25 ⑥ ⑨ 鎌倉宮にまうでは、靈きせぬ親王のみうらみに 悲憤の涙 わきぬべし。
つきそいにん【付添人】(名) 1 附添人
九85 ③ やがて五人の騎手は多くの人々に付きそはれ、(略)。(略)。附添人も見物人も、きもを冷してかけよつて、(略)。

つきそう【付添】(五) 1 付きそふ「一ハ」
九82 ③ やがて五人の騎手は多くの人々に付きそはれ、(略)、鳥居の下へ集つて來た。
つきたまう【就給】(四) 1 ツキ給フ「一フ」
八54 ① ⑨ 中大兄皇子ハ後天皇ノ位ニツキ給フ。
つきつぐ【継継】(四) 1 つぎぐ「一ギ」
十一116 ⑩ ⑨ 祖先の遺風つきぐて、同胞すべて六千萬。
つきとおす【突通】(五) 1 突通す「一シ」
十66 ③ ⑨ 鯨は(略)。若者は長い劔を突通し、幾度となく抜いては又突く。
つきに【次】(接) 1 次に
九13 ⑨ ⑨ 拜啓、御註文の絹物三十反、(略)汽船平安丸にて發送いたし候。次に老人向きの紺がすりは、御申越の期日までは少々間に合ひかね候事と存候。
つきのいきな【調伊企儼】(人名) 1 調伊企儼
十二30 ③ ⑨ 昔調伊企儼は新羅と戦つて新羅の將に捕へらる。
つきのわ【月輪】(名) 1 月ノワ
六65 ② 熊ノ毛色ハ大ガイマツ黒デ、ムネノ所ダケ三日月ナリノ白イ毛ガアリマス。コレヲ月ノワトイヒマス。
つきひ【月日】(名) 2 月日

十一441 月日は流るゝ水の如く、熊王十五歳になりぬ。

十二119 六年の月日 手を取りて、教へ給ひし 師の君の (略)。

つきみ「月見」(名) 1 月見

八36 夕暮に咲く月見草、月見のころも近づけば、萩のうねりにやどる玉、(略)。

つきみそう「月見草」(名) 1 月見草

八36 夕暮に咲く月見草、(略)。

つきよ「月夜」(名) 5 月夜

六45 月夜のながめもまた美しい。

六14 曇ツタ夜や月ノナイ夜ハ道ニマヨフカラ、大テイ月夜ニトブノデアル。

七82 月夜には波が銀の様に光つて、その美しさは何とも言ひ様がありません。

九70 雨戸を明けて見ると、明るい月夜である、(略)。

十二28 時は十四日の月夜なり。

つきる「尽」(上) 1 盡きる「キ」

十二82 最早弾く力も盡きて、傍の石にこしを下し、(略)。

つく「付」(四・五) 27 ツク つく

附ク 附ク「イ・カ・キ・ク・ケ」ひいだきつく・おいつく・きずつく・きづく・くみつく・ぐらつく・こころつく・しょうきづく・ちかづききたる・ちかづきたてまつる・ちかづく・とびつく・とりつく・については

・につき・につきて・まきつく・むらがりつく・もとづく

二27 犬モヲヲフツテ、ツイテイキマス。

二46 アノ太イ木ハ(略)、ツボミガタクサンツイテキマス。

二46 (略)、アノオヤネニハウメバチノ大キナモンガツイテキマス。

四42 をばさんからいただいたおとしだまにのしが ついてゐ

ました。

五96 (略)、何だか目がまはつて、しばらくの間は何も知らずにゐました。きがついて見ると、人が三人立つて、(略)、ながめてゐました。

五29 しわはよつてもわかい氣で、小さい君らのなかま入、うんどう會にもつて行く。

五53 昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワシタ時、カウモリハ「私ハ鳥デモケモノデモナイカラ。」ト

イツテ、ドチラヘモツキマセンデシタ。

五54 シバラクタツト、ケモノガ負ケサウニナツタノデ、コンドハ(略)、鳥ノ方ニツキマシタ。

五54 イツマデタツテモ勝負ガツカナイカラ、兩方ガ仲ナホリヲシマシタ。

六84 みんなと橋のたもとに出合つて、川について、四五町行くと、も

う町をはづれて、(略)。

六13 ホカノガンハ道アンナイノ行ク方ヘツイテ行ク。

六30 男の子も氣がつかずにそのまゝかへつた。

六30 直吉は後でふと氣が附いて、(略)。今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」といつて、すぐに追つかけて行つて、(略)。

六76 一人の年取つた男が(略)、木やりの歌を歌ひ出すと、わかものどもはこゑをそらへて、そのあとについて歌ひました。

七18 (略)、サザエ・カキナドハ岩ニツイテキル。

七71 カキハスグニフエルモノデ、物ニツケバ、中々ハナレナイ。

八68 こちらの方はどうとも都合がつくから、心配するには及びません。

八74 (略)、骨ニ附キタル肉ヲ食取ルニ便ナリ。

八84 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戦地ヘ向ツタガ、(略)。

十81 葉ノ莖ニ附ク様子ニモ種々アル。

十82 アブラナ・ツバキナドノ葉ハ一ツオキニ莖ニ附イテ居リ、(略)。

十83 (略)、ナデシコナドノ葉ハ二枚ヅツ向ヒ合ツテ附イテキル。

十36 外の者は少しも氣が附かないで、中にはそれをふんだ者もあり

ましたが、(略)。

十一56 兵士等は氣をあせるのみで、何の工夫もつかぬ。

十一106 朝鮮の地に上陸して、第一に目につくのは、家の低くて小さい事である。

十一108 第二に目につくのは白い着物である。

十二78 (略)、又果實の附きたる枝の波のまに／＼浮べるを見たり。

つく「吐」(五) 2 ツク つく「イ・ーク」

八89 ホットーイキツク折カラ、一彈又モ中佐ノ胸ヲツラスキ、(略)。

十二82 帽子の中に一文の錢もない老人は、(略)、幾度かためいきをついて居る。

つく「突」(四・五) 9 ツク つく 突く「イ・ーク」

三47 かへるはをかにゐるときには、(略)、手をついてすわつてゐます。

五24 (略)、私は足の立たないもので、兩手をついて、やつとゐざりあるくものでございます。

五26 あざりは(略)、兩手をついてゐざり出しました。

八5 (略)、數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高くと天をつく。

八30 (略)、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭

氣鼻ヲツクガ如シ。

十66 4 若者は長い劔を突通し、幾度となく抜いては又突く。

十86 2 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするのも、人に恐れるからである。

十一22 2 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

十二6 3 (略)、片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。

つく〔就〕(四) 5 ツク つく 即く就く 『カーキ・キーク・ケ』 ムおつく

七23 6 (略)、多クノデシ保己ニニツキテ學ビシカバ、(略)。

九1 3 代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。

九72 10 暴風雨にて、(略)、同夜は近村の者一人も眠につきたる者これなく候。

十二85 9 赤穂浪士が數年の苦難を忍び、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは(略)。

十二90 1 主婦は寢に就く前、先づ竈の下より火消壺までもよく検査して、(略)。

つく〔着〕(四・五) 14 ツク つく 着ク 着ク 『イー・カーキーク』 ムいつく・おちつく・のぼりつく

三67 6 (略)、ダンダンウミノ中

ヘシヅンデ 行ツテ、マモナクリ ユウグウノ門ヘツキマシタ。

五39 1 汽車が今ていしやばへつきました。

五45 5 汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイタ時、文太郎ハモツトノツテキタイト思ヒマシタ。

六38 8 午後京都からおとうさんの手紙が着いた。

六39 4 昨日六時の汽車に間に合つて、晩の九時二十分に京都に着いた。

六79 1 ハトバノ右ニ着イテキル汽船ハ今荷物ヲオロシテキル。

七54 6 ソレヨリ二十分アマリニテ上野公園ニ着ク。

七83 6 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

八76 2 (略)、我が帝國の港を出で、東へ東へと進み行かば、(略) アメリカ大陸に着くべし。

八76 9 こゝより汽船に乗りて、ふたゝぎ東へ進めば、一週間にしてイギリス國の港に着く。

九35 8 それが今は朝の急行列車で東京を出立すれば、晩にははや京都に着くことが出来る。

九47 6 「若し明日中に水のある所に着かずば、駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なかるべし。」

十一15 4 さらに美作の杉坂に待ち

奉らんとて、道も無き山の雲をしのぎて杉坂に着きたりしに、(略)。

十二20 5 其の時花の中の花粉は是等の蟲に着いて、一つの花から他の花に傳達される。

つく〔搗〕(五) 3 ツク 『イー・キーク』

二56 2 ヨイオダイサンハ(略)、ウスヲツクツテ、ソレデ米ヲツキマシタガ、(略)。

二56 3 (略)、ツクタビニ、ウスノカラ(略)、イロイロナタカラモノガデマシタ。

二57 3 ヨクノフカイオダイサンハマタコノウスヲカリテイツテ、米ヲツイテミマシタガ、(略)。

つく〔尽〕(上二) 6 盡ク 盡く 『キークル・クレ』

九93 7 日光の市街盡くる所に大谷川あり。

十99 10 (略)、仁王門ヲ入レバ百間ニ餘ル長廊アリ。(略)、長廊盡キテ本堂アリ。

十一13 6 武家の運命も今に盡きなんと、罵りいきどほる聲ちまたに満つ。

十一18 7 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

十二27 4 敵は長圍の計を取れるに、我は糧食殆ど盡きたり。

十二67 9 (略)、數多の猿(略)之を食ひ、果實盡くれば、再び其の故郷に歸るを例とす。

つく〔付〕(下二) 13 ツク つく 附ク 附ク 着ク 『キークル・ケ・ケヨ』 ムかきつく・ちかづけもうす・なづく・はりつく・みつく

六54 4 塩ト砂糖トハ物ノ味ヲ附クルニ大切ナルモノニシテ、(略)。

六84 5 (略)、昔を考へ、今を知り、學びの光を身にそへよ、身につけよ。

六85 3 (略)、病は口より入るといふ。飲食・食物氣を附けよ、心せよ。七35 9 塗物に黄・赤・黒・青などさまざまの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。

八39 4 (略)、細クキザミテデク木トシ、火ニカワカシテ、頭ニ藥ヲツケ、其ノカタマルヲ待チテ、箱ニ入ル。

九55 9 其ノ體ノ後ノハシヲ桑ノ木ニ附ケ、體ヲナ、メニ突出スルトキハ、(略)。

九65 1 試みに茶わんのそこにしるしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

九80 6 (略)、雨の朝、風の夕、見るもの聞くものにつけて、都の空のみしたはしく、(略)。

十519 図 士かと思れば、錦のひたれ着けたり。
 十一809 図 鶴匠は古風の風折烏帽子をかぶり、こしみを着く。
 十一929 図 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、其の五人は（略）、争ひて高き價をつくべし。
 十一924 図 かくて其の家の價は段々高くなりて、最も高き價をつけたる人の手に渡るべきなり。
 十二907 図 四季寒暑の變り目にはとりわけ衣服・飲食に氣を附くべし。
 つく「漬」(下二) 1 ツク 「一ケ」
 六537 図 ツケ物ハスベテ塩ニツケ、ミソモ醬油モ塩ヲ入レテツクル。
 つく「着」(下二) 5 次グ 次グ 「一ギ一ケ」
 十738 図 道後に次ぎて早く世に知られたるは有馬の温泉にして、（略）。
 十一332 図 巡洋艦ハ（略）。其ノ大ナルモノハ戰艦ニ次グノ勢力ヲ有シ、（略）。
 十一348 図 水雷艇ハ（略）、速度驅逐艦ニ次ギ、（略）。
 十一998 図 漁業に次ぎて有望なるは農業と林業とにて、（略）。
 十二429 図 （略）、岩の細片は火山灰となりて飛散し、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。
 つく「継」(五) 3 つぐ 「一イーガ」

ゆあいつぐ・うけつぎたまう・うけつぐ・つぎつぐ
 四501 圖 （略）、ちつとも休まず、いきをも つがずに、あさまでかうして、かつちん、かつちん。
 七667 圖 一昨年つぎ木をしたわか木に、（略）、いつしよにくだ梨の木の方は、今年はまだ實がなりません。
 八344 （略）若いむすこが、今では其の後をついで、朝から晩まで相かはらず、「略」と働いてゐる。
 つく「告」(下二) 9 ツグ 告ぐ 「一グル一ゲ一ゲヨ」
 七45 図 ミヅカラ御コトバヲウケタマハリ來リテ我ニツゲタルヲ、汝ハ早くモワスレタルカ。
 十一439 図 忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、かくと正儀に告ぐるに、（略）。
 十一758 図 畫工「略」とて、一枝を畫添へ、別を告げて出で去れりとなん。
 十二276 図 城を抜け出でて岡崎に至り、急を主公に告ぐる者なきか。
 十二2810 図 家康直ちに勝商をして織田信長に見えて、長篠城の急を告げしむ。
 十二297 図 「明日城門に行きて、『援軍來らず、速に降るべし。』と告げよ。
 十二437 図 人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐ

るに至りて、（略）。
 十二947 図 或時齊の臣景公に告げて曰く、「魯孔子を用ふ。或は齊を危くすることあらん」と。
 十二953 図 景公歸りて群臣に告げて曰く「魯人は君子の道を以て其の君を輔くるに、我が臣の行ふ所は禮に反す。（略）」と。
 つくえ「机」(名) 3 ツクエ 机 凸ふるづくえ
 六686 図 桐ハ（略）、輕クシテ美シケレバ、ツクエ・本バコ・タンス・ハキモノナドヲ作ルニ用フ。
 六698 図 材木ヲ用ヒテ（略）、ツクエ・本箱・タンスナドヲ作ルモノハサシモノシナリ。
 九648 図 空氣は（略）、機の引出しにも、（略）にも、凡そ少しにてもすき間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。
 つくし「筑紫」(地名) 3 筑紫 筑紫
 九791 図 是は菅原道眞が右大臣といふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅立たんとする時、（略）よめる歌なり。
 九798 図 筑紫へ下る道に、昔より相知りし驛長ありて、道眞の今の身の上を深く悲しみに、（略）。
 九804 図 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、（略）、都の空のみしたはしく（略）。
 つくしがたし「尺難」(形) 2 ツクシ

ガタシ 盡し難し「一シ」
 七573 図 廣キ東京ノ見物ハ一日ニテハツクシガタシ。
 十一832 図 數隻の漁舟相並び、（略）、之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯の光を水にうつせる奇觀は筆も言葉も盡し難し。
 つくしたまう「尽絶」(四) 1 盡し給ふ「一へ」
 十二1169 図 誠の一字之を貫くは、あらゆる修身の徳を一言にて盡し給へるものといふべし。
 つくす「尽」(四・五) 19 ツクス つくす 盡ス 盡す 「一サ一シ一ス一セ」 凸こなしつくす・すいつくす
 六861 図 （略）、遠き祖先のをしへをも、守りてつくせ、家のため、國のため。
 七28 図 我が死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生キ殘リテアル間ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。
 八908 軍曹ハ（略）、アランカギリノ力ヲツクシタガ、中佐ノイキハトウトウ其ノ日ノ夕方ニ絶エタ。
 九951 図 之を過ぎて拜殿あり、拜殿の後に本殿あり、いづれも善盡し、美盡せり。
 九951 図 （略）、いづれも善盡し、美盡せり。
 九952 図 （略）、建築の善美を盡せる亦相似たり。

十69 10 図 やがて二人は（略）、死力を盡して漕進む。

十一54 2 図 花客ニ接シテ愛敬ヲ盡スハ商人ノ美德ナレドモ、（略）。

十一59 6 図 義勇の務御國に盡し、孝子の譽我が家にあげよ。

十一103 7 図 「臣アヘテ死力ヲ盡シ、忠節ヲ致スベシ。」

十一104 2 図 孔明はヨリ幼主ヲ輔ケ、（略）、忠義ヲ盡シテ變ラス。

十二4 1 図 文武道を異にすれども、國に盡す誠は一なり。

十二32 6 図 （略）、稻生恆軒の妻の常に祖先の祭に心を盡したる、（略）、皆後世女子の模範とすべき德行なり。

十二105 4 図 （略）、地方人民たる者は大いに力を是等の事業に盡すべきなり。

十二109 3 図 （略）、議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、（略）。

十二111 2 図 一には、軍人としては忠節を盡すを本文と爲すべし。

十二113 3 図 能く義理をわきまへ、精神を修養し、（略）、十分に自己の職務を盡す人を眞の大勇の人といふべしと訓へ給ふ。

十二113 6 図 信とは我が言を行ひ、義とは我が分を盡すをいふ。

十二113 6 図 故に十分に信義を盡さんと思はば、豫め能く事の成否を察し、

成し得べからざるものは引受くべからず。

つくづく【熟】（副）2 ツクづくつくづく

五71 2 フト水ニウツツタジブンノスガタヲ見テ、アタマカラ足マデツクくトナガメテ、ヒトリゴトラハジメマシタ。

十二82 6 木蔭に立つてつくづく」と此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

つくば【筑波】（名）3 筑波 筑波

十一30 2 図 （略）我が軍艦ノ名ヲ知レルナルベシ。（略）。山ノ名ヲ附シタルモノニ三笠・富士・筑波・生駒・鞍馬・伊吹・淺間等、（略）。

十二32 図 巡洋艦筑波

十二33 5 図 巡洋艦ハ（略）。（略）。筑波・生駒・出雲・千歳ナドハ之ニ屬ス。

つくばさん【筑波山】（地名）1 筑波山

九17 図 筑波山

つくぐみ【鵜】（名）1 つぐみ

十二20 8 又ひよやつぐみは美しく熟してゐる果實をついばむ。

つくり 1 1 しらきづくり・れんがづくり

つくくりいだす【作出】（四）1 作り出す『一ス』

十二46 10 図 農業は我等が生活に必要な材料を作り出す所以にして、國家一日もこれなるべからず。

つくくりかた【作方】（名）2 造り方

作方

十21 4 是は活版刷の本の造り方であるが、この外に木版刷の本もある。

十33 7 図 （略）、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、（略）。ヨリテクハシク其ノ作方、貯藏ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。

つくくりなおす【作直】（五）1 造り直す『一シ』

九33 7 さて幾度も幾度も造り直して、終に其の目的を達することが出来た。

つくる【作】（四・五）84 ツクル つくる 作ル 作る 造ル 造る 『一ツ・ラー・リー・ル・ーレ』

二40 5 図 「ミンナデユキダルマヲツクリマセウ。」

二41 5 図 コレカラアタマヲツクリマセウ。」

二56 1 ヨイオデイサンハヤガテコノ木ヲキツテ、ウスヲツクツテ、（略）。

三29 8 フデノデク、モノサシフエツエザルカゴナド、竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。

三30 3 竹馬モ竹デコシラヘ、タコノホネモ竹デ作りマス。

四12 1 去年ハホシテ、クシガキニ作りマシタ。

四32 2 図 それではうどんやさうめんは何でつくりますか。」

四33 8 図 「（略）、もちやだんこの

あんは何で作るのですか。」

四36 2 イネノワラデハ、タワラコモムシロナハワラデミノナドヲ作りマス。

四37 5 マダコノホカニ麥ワラデ作ツタ物デ、アツイジブンニツカフ物ガアリマス。

四43 4 図 （略）、今では紙で作つたのしをつかふやうになりました。

六12 8 ガンハイッデモ一シヨニナツテ、列ヲツクツテトブ。

六33 8 図 着物・羽織・ハカマ・オビナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ絹織物ニテツクル。

六34 5 図 ワレヲノ着物ハ多クコノ木綿織物ニテツクル。

六34 8 図 麻糸ニテ織リタルモノハカヤナドニツクリ、（略）。

六35 2 図 （略）、カラムシノ糸ニテ織リタルモノハカタビラナドニツクル。

六53 7 図 （略）、ミソモ醬油モ塩ヲ入レテツクル。

六54 7 図 塩ハ山ヨリモ出ヅレドモ、ワガ國ニテハ海水ヨリツクル。

六54 8 図 砂糖ハ種々ノモノヨリトレドモ、砂糖キビヨリツクレルモノ多シ。

六67 7 図 松・杉・ヒノキ・ケヤキハ（略）家ヲタテ、橋ヲカケ、船ヲ作ルニ用フ。

八
62
3
皆サンノ着物ニシテヱル木綿

九三
四
（略）、スチブンソンは（略）

男子も女子も寒き時は犬の

十一
84
10
文

コレニハ細小ノ針金ニ

テ作りタルブラッシノ仕掛アリテ、
(略)。

十一877 蠶の絲を吐きて繭を造る
は紡績の業に等しく、(略)。

十一879 蜜蜂の蜜を吐き、又たく
みに巣を造るは醸造の業と建築の業
とをかねたりといはんか。

十一883 蜘蛛は(略)、(略)、先
づ幾條かのやゝ太き絲を渡し、之を
本として、次第に細き絲をかけ、終
に完全なる網を造る。

十一894 蟻は其の種類によりて種
々の巣を造れども、(略)。

十一895 蟻は(略)、多くは地下
に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、
其の内面を壁の如くに固む。

十一897 熱き地方の白蟻は周圍十
間、高さ三間にも達する小山の如き
巢を造り、(略)。

十一1075 床下に土石を盛り、數條の
みぞを造つて、一方の口から火をた
いて室内を温める。

十二119 船ヲ造ルニハ先ヅ綿密ナ設
計圖ヲコシラヘル。

十二124 設計圖ガ出來上ルト、(略)、
必要ナ部分ハ實物大ノ圖ヲ作ツテ、
始メテ製造ニ着手スルノデアル。

十二127 (略)、汽罐・煙突等ヲ造ル
處モアリ、又木製ノ器具類ヲ製造ス
ル木工場モアル。

十二142 肋材ハ梁ヲ以テ内カラ支
へ、外側ニ板ヲ張り、梁ノ上ニ床ヲ

造ツテ甲板トスル。

十二156 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、
安藝ハ呉デ造ツタノデアル。

十二172 (略)、中央氣象臺は各測
候所の報告によりて天氣圖を作り、
(略)。

十二883 事幕末の儒者林鶴梁の作
れる烈士喜劍碑の文にくはし。

つくろい「繕」(名) 1 つくろひ
八325 (略) つるべの金たががこはれ
た時、つくろひを頼んだ事があつた
が、翌日すぐにこしらへてくれた。

つくろい「繕」(上) 1 ツク
ロヒキル「一才」

八164 (略) 松下禪尼、(略)、ス
、ケタル障子ノ破レヲツクロヒキタ
リ。

つくろい「繕」(四) 1 ツクロフ「一
ヒ」

八182 (略) 「我モ後ニハコト／＼ク
張りカヘント思ヘドモ、總ベテ物ハ
破レタル所ノミツクロヒテ用フルト
キハ、シバラクハ用ヲナスベキコト
ヲ、若キ者ニ知ラセントテカクスル
ナリ。」

つけ 凸いつけ・うえつけ・うけつけ
・さくつけたんべつ・じゅうにちづ
け・ひづけいん

つけたま「告給」(四) 2 告げたま
ふ「一ヒーフ」

八34 (略) かゝるたふとき御宮なれ
ば、(略)、皇室及び國家に大事あれ

ば、かならずこれを告げたまふ。

八36 明治三十七八年戰役の終り
たる後も、天皇陛下御參拜あらせら
れ、平和の成りたるを告げたまひし
が、(略)。

つけもの「漬物」(名) 2 ツケ物
五518 キ瓜や白瓜ハ生デ瓜モミニシ
テモ、ツケ物ニシテモタベ、又ニテ
モタベル。

六536 ツケ物ハスベテ塩ニテツ
ケ、(略)。

つける「付」(下) 27 ツケル つけ
る 附ケル 附ける 着ける 「一ケ・
一ケル」凸いつける・うみつける・
かけつける・きりつける・くくりつけ
る・なぐりつける・なげつける・はり
つける・ほりつける

一451 ワルイオヂイサンハコブ
ヲツケラレテコマリマシタ。

二194 (略)、カミヲソノカタチ
ニキリマシタ。イロモノノトホ
リニツケマシタ。

二196 モシナツデアツタラ、ド
ンナイロヲツケタデセウ。

二426 ダルマサンノ目ハ大
キイカラ、大キナ目ヲツケマセ
ウ。

四34 (略) 「だんごにつけるこな
は。」

四34 (略) 「それではあんの豆と、
だんごにつけるこな豆と
同じですか、ちがひますか。」

四424 「人に物をあげる時
に、なぜのしをつけるのです
か。」

四428 (略)、昔はのしあはび
をつけたのです。

四44 (略) 「どうしてのしあはびを
つけるやうになつたのでせ
う。」

四451 (略)、ふだん品物をや
りとりする時には、なまぐさの
しるしにのしあはびをつける
やうになつたのでせう。

四454 (略)、すべてなまぐさも
のをおくる時には、のしをつ
けません。」

四76 (略)、そのさをのさきに
はひらいた赤い扇がつけてあ
ります。

五357 キモノノモヤウヤ、カンザ
シナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、
ソノスガタガカイラシイカラデセ
ウ。

六214 さうして象の重みで船の水に
つかつた所にしるしを附けました。

六221 さうして前にしるしを附け
ておいた所まで船が水につかつた時
に、(略)。

六705 ちゃんとしせいをよくして、
氣を附けてゐて、何を聞かれても、
はつきりと答へる子供もございま
した。

六737 こんなにたくさん墨を附けた

のも、その子供たちでございます。

七66 1 又きたない水やくさつた水を飲むと、おそろしい病氣にかゝることがある。よく氣を附けなければならぬ。

八24 7 (略) 下女がばけつをさげて、牛小屋から出て來ました。どうするかと氣を附けてゐると、隣の家の方へ行きます。

九83 6 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「是非勝つてくれ。」「負けたら村の名折になるぞ。」「しつかりやつてくれ。」などと、口々に勢をつけてゐる。

十20 10 印刷する紙は(略)。それを折つて、揃へてとぢる。其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。

十65 7 ポートは鋸に附けた長いつなに引かれて、或は右に或は左に引廻される。

十86 3 又馬が人をけたり、牛が人を突いたりするの、人に恐れるからである。氣を附けなければならぬ。

十一9 5 (略)、乾イタ軸木ノ先へ藥品ヲ附ケル者、(略)。

十一108 5 男は(略)、胴衣を着けて、其の上に長い上衣を着る。

十一108 9 女は(略)、西洋婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着ける。

十二15 1 (略)、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲスエタリ、

細カイ造作ヲシタリシテ、(略)。

つごう「都合」(名) 4 都合ひふつごう

八68 6 (手) こちらの方はどうとも都合がつくから、心配するには及びません。

九89 7 (文) 是金銀ハ價高ク、保存スルニモ都合ヨク、(略)。

九90 10 (文) 紙幣ハ(略)、輕クシテ取扱ニ都合ヨキコトハ貨幣ニマサレリ。

十一63 8 (手) 追て準備の都合もこれ有り候間、御來會下され候はば、(略)御一報下され度候。

つごうまつる「仕奉」(四) 1 つかうまつる「一り」ひおんともつごうまつる

九93 4 (圖) きさいの宮の 仰言、御聲のもとに、古の 奈良の都の 八重櫻、今日九重に にほひぬと、つかうまつりし 言の葉の 花は千歳も 散らざらん。

つじおんがく「辻音楽」(課名) 2 辻音楽

十二目 7 第二十課 辻音楽

十二81 3 第二十課 辻音楽

つじおんがく「辻音楽師」(名) 1 辻音楽師

十二81 6 (略)、身にはつゞれをまとい、やせ衰へた體を義足に支へて、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音楽師がある。

つたいひあぜみちづたい・いそづたい・

ほそみちづたい

つたう「伝」(四) 1 傳ふ「一ヒ」

十二66 7 (文) 又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが、(略)、町を過ぎ、屋根を傳ひ、窓を抜け、座敷を横ぎり、(略)。

つたう「伝」(下二) 4 傳ふ「一フ・一フレイ」へひききつたう

十39 2 (圖) 乃木大將はおごそかに、御めぐみ深き大君の 大みことのり傳ふれば、かれかしこみて謝しまつる。

十一2 7 (文) 堂前四本の櫻ある處は大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。

十一14 7 (文) (略)、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。

十二96 2 (文) 孔子の孫子思の學説を受け、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

つたわる「伝」(四・五) 4 傳ハル

傳はる「一ッ・一リ」

九87 6 此の話が傳はつて、愛作は五箇村はおるか、近所近べんのほめ者となつた。

十30 9 (文) 原産地ハアメリカニシテ、アメリカヨリルソンニ傳ハリ、ルソンヨリ支那ニ入リシガ、(略)。

十31 1 (文) (略)、支那ヨリ琉球、琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロ

ガリシナリ。

十31 2 (文) 此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ今ヨリ三百年以前ニシテ、(略)。

つち「土」(名) 12 土ひかべつち

二18 5 タクサンチツタトコロハ、ニハノ土モミエマセン。

二52 3 オヂイサンガソコヲホルト、土ノ中カラ、(略)タカラモノガタクサンデマシタ。

三9 7 くらい土「ひらがなのドリル」

四28 6 (文) のぎくは「(略)、ねは生きてゐます。土の中で、しばらくにいらひ年のはるをまつてゐるのです。」

四63 4 やぶの竹は弓のやうにまがつて、中にはさがが土までとどいてゐるのもあります。

五8 7 私はもと雨の一しづくです。(略)、山の木のはの上に休んでゐましたが、風にふかれて、土の上へおちました。

五58 2 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出來タ物デ、(略)、石炭トイヒマス。

五60 5 昔ノ人ハ石炭ノコトヲモエル土、石油ノコトヲモエル水トイヒマシタ。

七34 8 (文) やき物をつくるには、土又は石のこをねりかためてかわかし、

かまどに入れて焼く。

十一885 〔文〕 蚯蚓は（略）、多量の土を呑込みて之を地上の穴の口に出す。

十一887 〔文〕 かくて数年の後には、地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。

十一1101 （略）、普通の墓は大抵土を盛上げるばかりである。

つち〔鍵〕（名）2 ツチ つち

八146 （略）、カヂ屋ハツチ、仕立屋ハ針、ソレ／＼ノ道具ヲ持ツテ、メイ／＼ノ仕事ニカ、ル。

八317 「トテンカン、トテンカン。」と、毎朝早くから弟子を相手につちを打つ音が聞える。

つちいる「土色」（名）1 土色

九535 〔文〕 田ニスムカヘルハ土色ニシテ、木ノ葉ニヤドル雨ガヘルハ緑色ナリ。

つちけむり「土煙」（名）1 土けむり

四166 牛ほどもある大きなものしして、（略）、はないきをあらくして、土けむりをたてて、とんで來ます。

つちやま「土山」（名）1 土山

十一1103 （略）、普通の墓は大抵土を盛上げるばかりである。（略）、まんだゆうの様に圓く盛上げた土山が數知れず並んでゐる。

つち（接助）5 つゝ

八365 〔文〕 垣根からむ朝顔のさ

きはりつゝいさぎよく、（略）。

十一615 〔文〕 勇み勇みて出で行く兵士。はげましつゝも見送る一家。

十一731 〔文〕 （略）、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寝起する様なり。

十二254 〔文〕 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきりかへし かへせし人をしをびつゝ。

十二504 〔文〕 千里比隣の今の世は有無互に相通じ、世界各國皆市場。／＼／＼産業勵みつゝ、國の富をばぬやせかし。

つとおと「筒音」（名）1 砲音

十四16 〔文〕 砲音絶えし砲臺にひらめき立てり、日の御旗。

つづき／＼すなはらつづき・てんきつづき・みねつづき

つづ／＼〔統〕（四・五）10 ツバク つづ／＼つづ／＼續く「イー・イク」

ひあいつづ／＼ふりつづ／＼

三586 うみの水が青靑として、どこまでも つづいてゐます。

六51 〔文〕 （略）、はまべはつづ／＼松原の枝ぶりすべておもしろや。

七112 〔文〕 稻は實がいる、日よりはつづ／＼。

八349 〔文〕 年のはじめの福壽草、黄金の色の暖く、つゞいてかざる梅が香に、うぐひす 鳴かぬ里もなし。

八418 弓張を持つて走る人が、後から後からとつゞいて飛んで行く。

八915 〔文〕 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、砲聲・銃聲ガツゞクヤウナラ、我が軍ガ苦戦シテキルト思へ。

九843 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、（略）。

十292 畑に續いて、農家が一けんある。

十5110 〔文〕 大將かと思へば、續く者なし。

十二74 〔文〕 我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈没し、（略）。

つづ／＼〔統〕（下二）4 ツバク つづ／＼續く「イー」／＼おもいつづ／＼

七244 〔文〕 （略）、風ニハカニ吹キテ、トモシビキエタリ。保己一ハソレトモ知ラズ、講義ヲツゞケタレバ、（略）。

七846 〔文〕 船長はこつぷの水を一口飲みて、又その話をつゞけたり。

九461 〔文〕 アリは（略）、たゞ父にあはんを樂みに一日々々と旅行をつゞけたり。

十432 〔文〕 然レドモ少シモ其ノ志ヲタワメズ、イヨ／＼勇氣ヲフルヒテ考案ヲ續ケ、（略）、ヤウヤク一種ノ機械ヲ發明セリ。

つづける「統」（下二）2 ツバケル つづける「イー」

四191 （略）、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀六刀さしとほしました。

八882 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、ソレデモタワマズ、奮戦ヲツゞケテ居ルト、（略）。

つづじ「躑躅」（名）2 ツ、ジ

九78 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、引キサカナケレバ取離スコトガ出來ナイ。

九7 〔文〕 ツ、ジ

つしみぶかい「慎深」（形）1 つしみ深い「イー」

十358 〔文〕 「あれが此の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。きれいずきで、つしみ深いことは、それでよく分りました。

つしむ「慎」（四）10 ツ、シム つしむ 謹ム 謹む 「イー・ム・ミー・ン」

六841 〔文〕 （略）、いつはりいはぬが子供らの 學びのはじめぞ、つしめよ、いましめよ。

八664 〔文〕 謹んで申し上げます。取分けおひそがしい中を、一週間もおひまをいただきます。まことに有りがたう存じます。（略）。二月四日

浅吉 御主人様

九53 〔文〕 倭姫命此の時天叢雲劔を

尊に授け、「つゝしみて怠ることなかれ。」と教へ給へり。

九581 函 「病は口より入る。」つゝしむべきは飲食なり。口にうましとて多く食ふことなかれ。多く飲むことなかれ。

十一531 函 ヨク笑ハント欲スルモノハ、常ニ其ノ行ヲツ、シミ、上、天ニ恥ヂズ、下、地ニ恥ヂズ、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

十一537 函 儀式・公會等ノ席ニテ談笑ヲツ、シムハ我等文明國民ノ美風ナリ。

十二368 函 コ、ニ本校新築落成式ヲ舉行セラル、ニ當リ、(略)。(略)。

十二981 函 國民各自の行爲をつゝしむ、品格を重んずるは即ち國民の品格を高むる所以なりといへども、(略)。

十二986 函 公德とは公衆の衛生を重んじ、社會の規律を尊び、公共の物品を大切にす等、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二109 函 明治十五年軍人に下し給へる勅諭こそ一般國民の寸時も忽にすべからざるものなれ。今謹みて其の大意を述べん。

つつそで「筒袖」(名) 1 つゝ袖
十808 函 男子も女子も(略)、又あ

つし織の短きつゝ袖を着、足にもあつし織のきやはんをはく。

つつみ「包」 1 凸こづつみゆうびん・ひとつつみ
つつみ「堤」(名) 2 ツツミ 堤

三一2 ヲカノ上ニモ、ツツミノ上ニモ、サクランハナガゲームンニサキマシタ。
九689 恐ろしいのは二百十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、稻の花は散る、(略)。

つつみ「鼓」(名) 1 鼓
十一1068 函 魏將司馬仲達聞キテ之ヲ追フ。蜀ノ軍少シモサワガズ、旗ヲ反シ、鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモノノ如シ。

つつみとみじ「堤富次」(人名) 1 堤富次
九718 函 九月三十日 堤富次 岡田敬造様
つつみとみじさま「堤富次様」(人名) 1 堤富次様

九759 函 十月二日 岡田敬造 堤富次様
つつむ「包」(四・五) 16 ツツム つつむ 包ム 包む 《マーミー・ムー・メーン》

三296 タケノカハハモノヲツツムノニツカハレマス。
三352 みちではたるをを一びきつかまへて、母からかみをもらつてつつみました。

三381 がくかうへもつて行くものは、みんなこのふろしきの中につつんであります。

四256 オマツハ糸トフデヲ紙ニツツンデ、ワタシナガラ、「略」。

七329 蠶が(略)。(略)。(この時(略)まぶしへうつしてやると、口から美しい糸を出して、からだを包む。
七929 函 ボートハ水ニオツル砲丸ノシブキニ包マレタリ。

十二21 表紙には紙ばかりのもあり、紙の上を布で包んだのもある。
十757 函 骨ハ筋肉ニ包マレ、皮膚更ニ其ノ上ヲオホフ。

十777 函 スベテ重要ナル機關アル部分ハ、殊ニ強堅ナル骨ニテ包マレタリ。
十一15 函 全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。

十一96 (略)、十二箱ツツ集メテ紙ニ包ム者、(略)。
十一178 函 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。
十一188 函 春は島山霞に包まれて眠るが如く、(略)。

十一321 函 戦艦ハ(略)。(略)、又艦ノ要部ハ極メテ厚キ鋼鐵ニテ包メリ。
十一455 函 正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、熊王年来包み

たる心の中を打明けて、(略)。
十二610 函 (略)、敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。

つづりあわす「綴合」(下二) 1 つづり合す 《一スル》

十一878 函 (略)、葉卷蟲の絲にて葉をつづり合するは裁縫の業に同じ。
つづれ「綴」(名) 1 つづれ

十二814 頭には霜をいたゞき、身にはつづれをまとひ、やせ衰へた體を義足に支へて、(略) 老人の辻音楽師がある。

つと(副) 2 ツト つと
七34 函 正行ハコレヲ見デ、カナシサノアマリ、ツト立チテ別室ニ行キタリ。
十1610 函 (略)、「香爐峯の雪は如何に。」と仰せられしに、御前に侍りし清少納言は、つと立ちてみすをまき上げたり。

つとむ「努」(下二) 3 勉む 務む 勤む 《ムームル・ムメ》
十一695 函 「よく勉め、又よく遊ぶ。」はよく時間を利用する所以なり。

十二1051 函 又産業組合を設け、慈善事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、風俗の改善、人心の作興に務むるが如きは、皆公共心の發動にして、(略)。
十二1127 函 下は上を敬し、上は下をあはれみ、一致協同して王事に勤むべし。

つとむ「務」(下二) 1 務む「一メ」

十907 園 同學士は御承知の通り、多年府縣の技師をも務め、學理にも通じ、實地にも明かなる人に候へば、(略)。

つとめ「勤」(名) 3 務ひしゆふのつとめ

十144 園 かね土ま 塗込められてあらはれぬぬきもあるなり。つかとなり 床となる身も、それゝの務をもてり。

十一59 6 園 老いまる父の望は一つ。義勇の務御國に盡し、孝子の譽我が家にあげよ。

十二89 3 園 (略)、諸道具の置場處を一定し、(略)、ふたをすべき物にはふたをし、錠を下すべき處には錠を下し、急ぎの場合にも混雜なく、暗き時にも手探にて用を足し得る様に、極りよく整へ置くは主婦たる者の務なり。

つとめて「努」(副) 3 勉メテ 勉めて力めて

十一52 9 園 内二省ミテ、ヤマシキコトアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセン。

十二38 9 園 (略) 廉頗之を見て心安からず、「相如にあはば必ず辱しめん。」と言ひ居たり。相如聞きて、力めて之を避け、廉頗の來るを見れば、車を轉じて逃ぐ。

十二71 3 園 人をねたまんよりは、勉

めて之に勝らんことを工夫すべし。

つな「綱」(名) 5 ツナ つな

一39 5 園 クルマ ニツンダタカラモノ、(略)。(略)。キジガ ツナヒク エンヤラヤ。

三56 2 ザシキノウチニイクスデモ ツナヲハツテ、ウチデユウノ人ノキモノガホシテアリマス。

十65 7 ボートは舳に附けた長いつなに引かれて、或は右に或は左に引廻される。

十66 1 ボートはつなをたぐつて、又も鯨に近寄り、(略)。

十一58 1 園 大砲のつなをくゝりつけて、早く自分を谷へ下せ。

つなぐ「繋」(四) 4 ツナグ「一ゲ・一ゲ」

六81 6 園 又多クノホリアリテ、川ト川トヲツナゲリ。

十33 3 園 (略)、罪人ドモハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

十一86 4 園 工女ハ(略)、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。

十一86 7 園 上手ナル者ハ一分時ニヨク十數本ノ絲ヲツナグトイフ。

つね「常」(名) 5 常

九62 2 園 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事

しばゝなりき。

十74 3 園 箱根は(略)、盛夏の候は何れの旅館も空室なきに至るを常とす。

十一82 9 園 (略)、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鮎を得るを常とす。

十一113 7 園 村會にて村費を議するにも、大抵原案を可決するを常とす。

十二34 1 園 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。

つねに「常」(副) 46 ツネニ つねに

常ニ 常に

七5 5 園 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。

七35 1 園 我らのつねに用ふる茶わん・皿・はちの類は、(略)。

八18 6 園 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲヲサメタルモ、(略)。

八69 8 園 我等はつねにいそがしく働けるに、汝はただ坐して食ふのみにて、(略)。

八81 9 園 かゝる地方にては氣候つねに寒冷にして、美しき花木を見ること能はず。

九4 6 園 かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、(略)。

九59 7 園 常に無病にして、醫者にかゝりたることなき人あり、(略)。

九61 9 園 (略)、早く寝ね、早く起き、(略)、常に日光に浴して、なほ病に

かゝらば、是我が罪にあらず。

九66 1 園 我等は常に此の空氣を吸はんが爲に呼吸す。

九80 4 園 筑紫に到りて後は、常に門を閉ぢて出づることまれなりしが、(略)。

十9 10 園 森林は(略)、土砂の飛散を防ぎ、又常に土地をうるほして、土砂を落付かしむ。

十16 1 園 (略)、父の爲時は常に其の頭をなでて、「汝の男と生れざりしが口をし。」といひたりとぞ。

十16 5 園 (略)、式部は少しも高ぶりたる風なく、常に一といふ文字をだに知らぬ顔に過したりといふ。

十78 5 園 又力士ノ如キハ常ニ全身ニ力ヲ入ル、ヲ以テ、何レノ部分モヨク發達セリ。

十78 9 園 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、(略)、常ニ身體ヲ大切ニシ、之ヲ強健ニセザルベカラズ。

十79 1 園 身體ノ健全ナルトキハ精神モ亦常ニ快活ニシテ、(略)。

十一8 7 園 働蜂の武器は體の後方にある鋭利なる針にして、攻撃にも防禦にも常に之を用ふ。

十一35 4 園 四面皆海ナル我が帝國ハ、(略)、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十一42 10 園 (略)、「さらば是にて本意を遂げよ。」とて、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしめたり。

ばめ 〔燕〕(名) 7 ツバメ つばめ

燕

— 146 ヤナギ ニツバメ

六122 ツバメハ暖ニナルト、ドコカ

ラカトンデ来テ、涼シクナルト、マ

タドコカヘトンデ行ク。

六124 ガンハツバメノカヘルジブン

ニ来テ、(略)。

六124 ガンハ (略)、ツバメノ来ル

ジブンニカヘル。

七794 図 小さきありもいそしめ

ば、塔をもきづき、つばめさへ 千

里の波を渡るなり。

八548 (略)、つる・がん・つばめな

どの様に、氣候によつてすむ所をか

へる鳥は、總べてつばさが大きい。

十二675 又燕の春来りて秋去り、

雁の秋来りて春去るが如く、(略)、

毎年一定の季節に其の居を移すもの

少からず。

つぶさに「具」(副) 1 つぶさに

十一169 此のうらみ忘れ難く、越

王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を

圖り、(略)。

つぶや・く「弦」(四) 1 つぶやく「一

ク」

十138 図 「さはいへど うらやま

しきそ 身も輕き 君、床柱。あは

れ我、(略) 片時も 休む間なし。」

と 角柱 ひとりつぶやく。

つぶる「腰」(五) 1 つぶる「一ツ」

四815 しばらく 目をつぶつて、

神さまにいのつて から、 目を

ひらいて 見ると、(略)。

つば「坪」 凸たてつば・なんぜんつば・

なんびやくなんじつつば

つば「壺」(名) 2 ツボ つば 凸たき

つば・ひけしつば

— 184 アサイハチ フカイツボ

三624 (略)、さざえのやうに、

ふかい つぼのかたちになつて

ゐるのがあります。

つぼすう 凸しきちそうつぼすう

つばみ「蓄」(名) 1 ツボミ

二461 アノ太イ木ハ (略)、ツボ

ミガタクサンツイテキマス。

つま「妻」(名) 10 妻 凸やまのうちか

ずとよのつま

七404 妻はこれを聞いて、夫に向つ

て、「その馬の直はいか程でござい

ます。」

七408 妻は立つて、鏡箱の中から十

兩の金を出して、(略)。

七431 一豊は妻に禮をのべて、その

馬をもとめました。

八255 「成程これではいけない。」

と、すぐ家の中へかけこんで、まだ

ねてゐた妻を呼び起して、(略)。

九1910 図 私には妻も子もありませ

ん。

十二3010 図 形名の妻、夫を勵まし

て、(略)、自ら劔を帯び、侍女數人

と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。

十二326 図 (略)、稻生恆軒の妻の常

に祖先の祭に心を盡したる、(略)、皆

後世女子の模範とすべき德行なり。

十二327 図 (略)、鈴木今右衛門の妻

の慈善を行ひたる、皆後世女子の模

範とすべき德行なり。

十二328 図 かの山内一豊の妻が貧苦

に居て、夫の一大事を忘れざりしは、

(略)。

十二3210 図 (略)、戦陣の際に良人の

名譽を全うせる形名の妻と其の徳を

同じうすとやいはん。

つまさきあがり「爪先上」(形状) 1

爪先上り

十9810 図 (略)、初瀬川ニソヒテ爪先

上リニ行ケバ、初瀬町ニ至ル。

つまず・く「躰」(五) 2 つまづく「一

イ・ーク」

三272 図 ばかばか、ばかばか、走れ

よ、小馬。けれどもいそいでつま

づくまいぞ。

九847 (略)、熊吉の馬はつまづいて

前足を折つた。

つまはじき「爪弾」(名) 1 爪弾

十二1144 図 質素を旨とせざればいつ

しか文弱に流れ、(略)、節操も武勇

も忘れ果てて、世人の爪弾を受くる

に至るべし。

つまびらか「詳」(形状) 2 詳

十二1017 図 他國に行きて、(略)、道

行く人の容儀等を見れば、未だ其の

國情を詳にせず、其の國人と一語を

交はずして、早くも其の國民の品格

の知らるゝものなり。

十二1105 図 勅諭は(略)、明治の大

御代に及びて、復古の政と共に陸海

軍の今の制度を定め給へる由來を詳

に御論しあり、(略)。

つま・める「撮」(下一) 1 つまめる

「一メ」

七603 図 毛のいたつて短きものは指

さきにてつまめぬ程なれど、長き

ものは羊の如く、(略)。

つまり「詰」(副) 1 つまり

七519 図 この手紙は四匁より重いの

に、差出人が三錢しかはつておきま

せん。つまり三錢だけが不足です。

つま・る「詰」(五) 1 つまる「一ラ」

六728 (略) 悪い子供は、おとなに

なつてから、大ていつまらない人に

なつてゐます。

つま「罪」(名) 7 罪

九6110 図 飲食に注意し、身體の清潔

を保ち、(略)、常に日光に浴して、

なほ病にかゝらば、是我が罪にあら

ず。

九794 図 道眞は罪もなきに官を下げ

られ、あまつさへ遠國へうつされし

かども、(略)。

十一713 図 他人をして時間を損失せ

しむるは其の罪金錢を損失せしむる

よりも重し。

十二397 図 廉頗之を聞きて、深く其

の非をさと、相如の門に至りて罪

を謝し、つひに無二の親交を結べり

とぞ。

十二797 船員皆歡喜して、コロンブスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不従順なりし罪を謝せり。
 十二878 我が心の良雄を獸待せしは罪死に當れり。
 十二954 我、罪を魯君に得たり、如何にせば可ならん。
 つみ「積」 ぐこひゃつくくづみ・せんごくづみ
 つみ「積得」 (下二) 1 積み得「エ」
 十二1191 いろはのいをも わきまへぬ 身のいつしかに 積み得る、(略)、世の人並の 文字の數。
 つみかさ・ねる「積重」 (下二) 1 つみ重ねる「一ネ」
 六171 米を俵に入れて、その俵をつみ重ねてながめた時は、(略)。
 つみこ・む「積込」 (五) 1 積みこむ「一ン」
 六792 左手ノ汽船ハ今荷物ヲ積みコンデキル。
 つみた・つ「積立」 (下二) 1 積立ツ「一ツル」
 九761 一日二一錢・二錢ツツニテモ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニハ、餘程ノ金高トナリテ、(略)。
 つみはじ・める「摘始」 (下二) 1 ツミハジメル「一メ」
 五326 五月ゴロカラツミハジメマスガ、一バンハジメニツムノヲ一番茶トイヒマス。

つむ「鍾」 (名) 3 ツム
 十一861 サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、(略)、更ニヨリヲカケ、ツムニマキトラシム。
 十一8610 昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ、一本ノツムニ一人ヲ要スベキニ、(略)。
 十一871 今ハ僅カニ六七人ノ工女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。
 つむ「摘」 (五) 12 ツム つむ「一ミ・ム・ン」 ぐおつみなざる
 三75 コレカラハナヲツミマセウ。
 三76 ボクハレンゲヲツムカラ、(略)。
 三82 ソレデハワタクシハスミレヲ ツミマセウ。
 三85 「ボクハモウコンナニタクサンツミマシタ。」
 三92 ソレカラ三人デツンダノヲイツシヨニシテ、ハナタバヲコシラヘマシタ。
 五321 大ゼイノ女ガ茶ヲツンデキマス。
 五325 茶ハシンメノ出ルジブンニ、ソノデタテノ葉ヲツムノデス。
 五327 (略)、一バンハジメニツムノヲ一番茶トイヒマス。
 五332 ソレカラ十四五日タツテツムノヲ二番茶トイヒマス。
 五333 マタ三番茶・四番茶マデモツ

ムコトガアリマスガ、(略)。
 五334 (略)、ソナンニツムト、茶ノ木ノタメニハヨクナイサウデス。
 七98 (略)、あちらこちらに桑つむをとめ、(略)。
 つむ「積」 (四五) 7 ツム つむ積ム「一ミ・ン」
 一382 クルマニツンダタカラモノ、イヌガヒキダスエンヤラヤ。
 四33 村の人人が、毎日やさいやすみやたぎを馬やくるまにつんで、賣りにきます。
 五128 (略)、にもつをつんだ船が通つてゐたのです。
 五408 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ました。
 六218 (略)、まづ象を船にのらせました。(略)。(略)、その代りに石をたくさんつみました。
 十一334 (略)、何レモ多量ノ石炭ヲ積み、大ナル速度ニテ長時間航海スルコトヲ得。
 十二136 (略)、船臺ノ上ニ盤木ト呼ブ木材ヲ積ンデ、其ノ上ニ先ツ龍骨トイフモノヲ置ク。
 つむぎ・てつむぎ
 つむぎ・ぐ「紡」 (四五) 3 ツムゲ 紡グ「一ギ・ーグ」
 六355 (略)、ケモノノ毛ヲツムギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。
 八626 綿ヲ機械ニカケテツムゲト、

木綿絲ニナリマス。
 十一869 昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ、一本ノツムニ一人ヲ要スベキニ、(略)。
 つめ「爪」 (名) 6 つめ 爪
 三243 牛のつめは二つにわれてゐますが、(略)。
 五788 「鹿も四つ足なら馬も四つ足、たゞつめがわれてゐるとゐないだけのちがひだ。
 六647 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、(略)、スルドイ爪デヒツカキマス。
 八741 足ノ先ニハ鋭クシテ曲レル爪アリ。
 十373 又字を書くときに、指先を見ると、爪は短く切つてゐました。
 十374 外の者は着物だけは美しかったが、爪の先はみんなまつ黒になつてゐました。
 つめか・ける「詰掛」 (下二) 1 つめかける「一ケ」
 九828 「今年の競馬はさぞ面白からう。」と、祭の當日には、おびたしい見物人が朝早くから宮の境内へつめかけた。
 つめた・い「冷」 (形) 1 冷い「一イ」
 七657 (略)、冷い水の中に長くはいつてゐたりするのはよくである。
 つめ・る「抓」 (五) 1 ツメル「一ツ」
 六424 ワガ身ヲツメツテ、人ノイタサヲ知レ。

つめる【詰】(下) 1 つめる 『

メ』 凸おいつめる

七114 圖 (略)、米にこなして、俵につめて、(略)。

つめる【摘】(下) 1 ツメル 『

三91 圖 「スミレ ハタクサンナイカラ、マダ ソンナ ニ ツメマセ

ン。」

つもり【積】(名) 3 積リ 積リ 積

七133 圖 ねぎられたら引く積りで、

高くいふ直段がかけねです。

八917 圖 其ノ時ハオレノ死體ヲセオ

ツテ歸ル積リデカケツケヨ。」

九347 中には汽車と競走する積で、

馬に乗つて来た人もある。

つもる【積】(五) 3 ツモル つもる

『ツツーレ』凸ふりつもる

四625 (略)、雪がたくさんつも

つて、どこを見ても まつ白で

す。

八367 圖 (略)、にごりにしまぬ白

蓮の 巻葉をもる、つゆ涼し。

十892 圖 君は御袖に降りかゝる露

拂はせて、さして行く笠置の山を出

でしより、天が下にはかくれがもふ

し。

つゆ【露】(副) 1 つゆ

九219 圖 母も人間なれば、我が子

にくしとはつゆ思ひ申さず。

つよい【強】(形) 19 ツヨイ つよい

強イ 強い 『イ・ウ・ク』

三135 ムカシタイマノケハヤト

イフ チカラ ノ ツヨイ 人 ガ ア

リマシタ。

三153 シカシ スクネ モ チカラ ガ

ツヨクテ、スバシコイ 人 デシタ

カラ、(略)。

三164 圖 「おれよりちからのつ

五727 圖 出来ルコトナラ、モツト太

クテ強イ足ガホシイモノダ。」

五757 (略)、強いものばかり三千人

をすぐつて、こつそりと裏道からひ

よどりごえに向つた。

六177 海べはふだん強い風がふくか

ら、高い松はしぜんにおもしろい枝

ぶりになつてゐる。

六515 (略)、もとより強い日本兵に

はかなひません。

六552 (略) 上杉謙信は強い大将で

あつた。

六581 上杉謙信はこんな強い人であ

つたが、又なさけぶかい人であつた。

六644 日本二居ルケモノノ中デ一番

強イノハ熊デス。

六656 シグマトイフ熊ハ (略)、カ

ガ強ウゴザイマス。

く、商船多し。

九633 圖 田村麻呂は (略)、力あく

まで強き人にて、怒る時はたけき獸

も恐れたり。

九637 圖 (略)、さしにも強かりし蝦

夷も、遂に全く皇威に服するに至れ

り。

九659 圖 然れども空氣の流通餘りに

強き時は、却つて火の消ゆることあ

るべし。

十781 圖 強キカラ要スル部分ニハ強

キ筋肉アリ。

十781 圖 強キカラ要スル部分ニハ強

キ筋肉アリ。

十783 圖 (略)、郵便配達夫・車夫等

ノ足ノ強キ、(略)、ヨク之ヲ使用ス

ルヲ以テナリ。

十一62 圖 働蜂の (略)、力強く壯

なるものは外に出て花の蜜を吸來

る。

十二185 圖 晝間は赤球を以て風の強

きを示し、(略)。

十二186 圖 (略)、圓筒形を以て風雨

の強きを、圓錐形を以て暴風雨のお

それあるを示す。

つよみ【強】(名) 1 強ミ

七479 圖 日本紙ハ「イヤ、君ラ

ハ破レ易クテ、少シモ強ミトイフモ

ノガナイ。

つらい【辛】(形) 1 つらい 『イ

五292 圖 (略)、しほにつかつてから

くなり、しほにそまつて赤くなり、

つら

つら

つら

つら

七月・八月あつひころ、三日三ばんの土用ばし、思へばつらいことばかり、(略)。

つらし「辛」(形) 1 つらし「一キ」
十710(國) 小生の如く平素勞働になれたる者には、術科もつらきことはこれなく、(略)。

つらなる ぐあひつらなる
つらぬ ぐあひつらぬ
つらぬ ぐあひつらぬ
つらぬ ぐあひつらぬ

貫く「一キ・一ク」

八89(略)、一彈又モ中佐ノ胸ヲツ
ラヌキ、軍曹ノ胸ヲモ打抜イタ。

十二116(略) (略) の五箇條を特に軍人の精神と論し給へる上に、此の五箇條を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せ給へり。(略) 誠の一字之を貫くは、あらゆる修身の徳を一言にて盡し給へるものといふべし。

つらゆき ぐあひつらゆき

つり「釣」(名) 3 ツリ つり

三66(略)、ウラシマガウミベデ

ツリヲシテキルト、大キナカ

メガ出テキテ、(略)。

四26(略) オトミハ(略)、「三十セン

アゲマスカラ、コレデトツテク

ダサイ。」オマツハツリヲワタ

シテ、「(略)。」

六30(略) 一本三せんづつのを二本買つ

て、十せん銀貨を出したから、直吉

は(略) そのつりに一せん銅貨を

三枚渡した。

つり・する「釣」(サ麥) 1 つりする
「スル」

六3(略)、橋の下に立つてつりする人など、それぐ川の景色をそへてゐる。

つる「弦」(名) 1 弦

十二31(略) 形名の妻、夫を勵まして、(略)、自ら劍を帶び、侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、(略)。

つる「蔓」(名) 2 ツル つる

五52(略) 瓜ノツルニハナスビハナラス。

七21(略) 豆類にはつるになるのとな

らぬのがあります。」

つる「鶴」(名) 8 ツル つる 鶴

一8(略) アサヒ マツツル

八54(略)、つる・がん・つばめな

どの様に、氣候によつてすむ所をか

へる鳥は、總べてつばさが大きい。

八55(略) 鶴・さぎ・くひなど水の中

をあるく鳥ははきが長い。

十一71(略) 其の座敷の一間の杉戸に

は(略)、他の一間には鶴二十五羽

ばかり畫がけり。

十一73(略) 翌日畫工の早朝に起出で

て畫がけるを見れば、皆ふしたる鶴

なり。

十二73(略) (略)、十日餘にして鶴二

十四五羽を畫がけり。

十一73(略) (略)、今度はひちを張り、

足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の卧したる様をなせり。

十一74(略) 「今日書き給はん鶴の姿はかやうなるべし。」

つる「釣」(五) 1 つる「一ツ」

三60(略)、魚をつつてゐる舟

です。

つる「連」(下二) 2 連る「一レ」

ぐうちつる

九45(略)、其の子のアリに駱駝

を連れて、荷物を取りに来るべしと

言ひつかはしたり。

十二110(略) (略)、其の後時世の移り

變るに連れて、兵制にも變遷あるこ

と、(略)。

つるぎ「劍」(名) 12 ツルギ 劍

めむらくものつるぎ・くさなぎのつるぎ

八86(略) 我が兵ハ物トモセズ敵陣メガ

ケテ突撃シタガ、敵ハツルギノ林ヲ

以テムカヘタ。

九15(略) 此の劍初は天叢雲劍と

申し、後に改めて草薙劍と申すこと

となれり。

九16(略) いでや此の劍の由來をかた

らん。

九39(略) 尊時分はよしと、おびさせ

給へる劍を抜きて、ずたずたに大蛇

を斬り給ひしに、(略)。

九310(略)、尾にいたりて、劍の

先少しくかけたり。

九42(略) あやしみて尾をさきて見給

ふに、一ふりの劍出でたり。

九46(略) かの大蛇の住みし上には叢雲常に立ちこめたれば、劍の名を天

叢雲劍と申せり。

九62(略) これより此の劍の名を改めて草薙劍と申す。

九64(略) 之をうむりし時は、よろひ・劍・弓・矢等を共にをさめ、

(略)、ながく皇城を守護せしめたり

といふ。

十25(略) 「汝長大ニシテ、劍ヲオ

ブトイヘドモ、心甚ダ弱シ。

十二35(略) 鍛ひたる劍の光いちじ

るく世にゐるやかせ、我が軍人。

十二23(略) 七里が濱のいそ傳ひ、

稻村が崎、名將の劍投ぜし古戰場。

つるぎさん「劍山」(地名) 1 劍山

十一18(略) 劍山

つるしおる「吊降」(五) 1 ツルシ

オロス「一シ」

六79(略) 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカ

ラ牛ヲ何匹トナクツルシオロシタ。

つるのまる「鶴丸」(名) 1 つるの丸

七45(略) (略)、上り下りの藤の紋、

さてはたかの羽・つるの丸、家の氏

の名多ければ、紋の数々かぎりなし。

つるべ「釣瓶」(名) 1 つるべ

八32(略) 僕の家で一度つるべの金たが

がこはれた時、つくるひを頼んだ事

があつたが、(略)。

つるりと(副) 1 つるりと

九84(略)、熊吉の馬はつまづいて

前足を折つた。熊吉はつるりとすべつて、そのはすみどころと轉がつて、(略)。

つれひみちづれ

つれかえり「連帰」(四) 1 連歸る

「一」

十一438 忠元あはれみて、己が家に連歸り、様々に勞りて、(略)。
つれだす「連出」(五) 1 つれ出す

「一」

五476 音次郎は(略)高い木の下へにげこみました。(略)。友吉は「略」といつて、むりに手をひつぱつてつれ出しました。

つれる「連」(下二) 13 ツレル つれる 連れる「一」

二514 ハタケノスミヘツレテ イツテ、「ココ ホレ、ワンワンワン。(略)。」トヲシヘマシタ。

二532 サウシテソノ犬ヲツレテ イツテ、ハタケノスミヲホツテミマシタガ、(略)。

三671 奥レイニリユウグウヘ ツレテ行ツテアゲマセウ。

四153 昔みなものよりともがけらいをつれて、(略)まきがりをしました。

四535 ワニザメハ(略)、スグニナカマヲ大ゼイツレテ來マシタ。

五376 すがるは(略)、「天子様のおほせだから、子を出すやうに。」と、たくさんの子どもをもらつて、つれ

て來ました。

五418 文太郎ハ父ニツレラレテ、ハジメテ汽車ニノリマシタ。

五638 〇おはなさんもつれて一しよにお出でなさい。

五682 オチヨトオハナハアネニツレラレテ、オ宮ニサンケイシタ。

五768 この時べんけいは(略)、一人のかりうどをつれて來た。

九672 さて此の雨風も四季の時候につれて、それ／＼にちがふ。

十299 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て來て、(略)。

十二837 (略)、軽く浮立つた調子に、野越え、山越え、ふわり／＼と春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

て

て「手」(名) 59 テ 手ひいて・あらて・おつて・おて・おんなで・かいて・かたて・くちみめてあしらいちどろ・ひだりて・ひとで・ふたて・ふ

ところ・みぎて・ゆくて・りようて・224 ソロソロ オアルキナサイ。テヲヒイテアゲマス。

三86 〇「ボクモモウテニ一パイニナリマシタ。」

三162 ミテキタ人ハ(略)テヲ

タイテホメマシタ。

三222 わたくしには(略)。手もあしもありません。

三446 アサ日ニムカツテ、手ヲヒロゲテゴランナサイ。

三448 右ノ手ノサス方ガ南デ、(略)。

三451 (略)、左ノ手ノサス方ガ北デス。

三475 かへるはをかにあると きには、(略)、手をついてすわつてゐます。

四203 〇「次郎、オマヘハ手ノユビノ名ヲ知ツテキマスカ。」

五311 (略)女の神さまのまひがおもしろかつたから、大ぜいの神さまがたは手をたたいて、お笑ひになりました。

五218 〇「手がなまぐさいから、そのひしやくを取つて、水をかけておくれ。」

五222 おはなは水がめから水をくんで、母の手にかけました。

五476 友吉は「略」といつて、むりに手をひつぱつてつれ出しました。

五483 二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふれました。

五487 音次郎は友吉のかたに手をかけて、「略」。もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」といひました。

五771 手にはかりに使ふ弓矢を持つてゐる。

六611 〇姉のおつるは立ちよつて、(略)、その子のかたに手をかけて、ことばやさしくなぐさめる。

六623 〇「わるい子どもが大ぜいでわたしの手からもぎ取つて、はふつた音はしましたが、(略)。」

七254 取ル・拾フ・握ル・持ツ・投ゲルナドハ皆手ノハタラキデス。

七255 モシ手ガナカツタラ、ドノクラ非自由デセウ。

七262 大工ガ家ヲタテルノモ、(略)、農夫ガ田ヲタガヤシ、鳥ヲツクルノモ、皆手デスルノデス。

七264 色々ナキカイガアツテモ、ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デス。

七265 手ハスベテノ仕事ノモトデス。

七266 イソガシイ時ニ手ノ足リナイトイフノハ、ハタラク人ノ少イトイフコトデス。

七268 家デモ國デモ手ヲヨクハタラカセル人ガ多クレバ多イ程盛ニナリマス。

七275 筆一本デ美シイエヲカイタリ、ノミ一ツデ見事ナホリ物ヲコシラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ、手ノハタラキデセウ。

七276 ドンナガクキガアツテモ、手ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出ス

コトハ出来マスマイ。

七27 何事ニヨラス手ノハタラキノ

ヨイノヲ上手トイヒ、(略)。

七27 8 (略)、手ノハタラキノワルイ

ノヲ下手トイヒマス。

七28 1 サルニハ手ノハタラキラスル

モノガ四本アリマス。

七28 4 手バカリ動カシテモ、チエガ

ナケレバ何ノ役ニモ立チマセン。

八5 5 五十鈴川の水に口すゝぎ手

洗ひて左へ行き、(略) 御宮の前に

いたる。

八27 4 農夫は「(略) 御恩は一生忘

れない。」といつて、かたく友だち

の手を握りしめました。

八40 1 (略)、一箱ノマツチガ我等

ノ手ニ入ルマデニハ、何十人ノ人手

ヲ要スルカラ知ラズ。

八52 7 (略) ヤガテ同志ノ一人御前ニ進

ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、手ワナ

ハキ聲フルフ。

八70 5 (略)、手は食物を口に入る

ゝことを止め、足は食堂へ行くこと

を止めたり。

八87 7 一度占領シタ此ノ高地、

全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。

九22 2 大尉は之を讀んで、思はずも

涙を落し、水兵の手を握つて、「わ

たしが悪かつた。

九23 9 水兵は(略)、やがて手をあ

げて敬禮して、につこりと笑つて立

去つた。

九59 2 よこれし手にて目をこすり

て目をわづらひし人あり。

十7 9 モミヂノ葉ハ幾スデカノ脈ガ

本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキ

ル。

十41 2 軍のおきてにしたがひ

て、他日我が手に受領せば、ながく

いたより養はん。」

十55 3 あやふき敵の手より救ひ

くれたる厚恩、いかでか忘るべき。」

十71 1 (略)、男勝りの大力にて

ボートをあやつりしダールリングの手

は、今ややさしきをとめの手にかへ

りて、(略)。

十71 2 (略)ダールリングの手は、今

ややさしきをとめの手にかへりて、

半死半生の水夫を親切に看護せり。

十71 3 数日の後、水夫は此の少女

の手に熱き感謝の涙をそそぎて、各

我が家に歸りたりとぞ。

十75 6 (略)、左右ノ手ハ肩ヨリ分

レ、二本ノ足ハ全身ヲ支フ。

十77 4 脳ハ(略)、手・足・口等

ニ命令シテ活動セシム。

十78 3 撃劔家・水夫等ノ手ノ太

キ、(略)、大工・カヂヤ等ノタナゴ

コロノ堅キハ、ヨク之ヲ使用スルヲ

以テナリ。

十110 3 若シ一人ノ手デ製造スルナ

ラバ、一包三錢ヤ三錢五厘ニ賣ツテ

ハ、トテモ引合フモノデナイ。

十145 3 幾度か思ひ直して討たん

とすれども、(略) 正儀の様を見て

は、刀のつかに手をかくべきやうも

なし。

十173 9 (略)、今度はひちを張り、

足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴

の卧したる様をなせり。

十192 2 (略)、其の五人は各其

の家の他人の手に渡らんことを恐れ

て、争ひて高き價をつくれし。

十192 4 かくて其の家の價は段々

高くなりて、最も高き價をつけたる

人の手に渡るべきなり。

十112 5 又麥稗眞田を編み、花筵

を織ること行はれ、十二三歳の少女

も手を空しうする者なきに至れり。

十1210 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人

ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出来、

(略)。

十279 3 (略)、先頭の一艦が發せ

る號砲に、人々喜びて、手の舞ひ、

足のふむ所を知らず。

十284 2 やゝあつて紳士はしばらく

弾く手を止めると、聴衆は錢をつか

んで、(略) 帽子の中へ投入れる。

十2119 8 六年の月日 手を取り

て、教へ給ひし 師の君の 導きな

くば、(略)。

て(接助) 2962 テてて 凸あえて・

あらためて・いたつて・えて・おしな

べて・おつて・かえつて・かくして・

かくて・かさねて・がつこうへもつて

いくもの・かねて・からくして・きわ

めて・けつして・こそつて・これがす

んでから・さだめて・しいて・したが

つて・してみれば・しゅとして・すぐ

れて・すべて・せめて・そうして・た

えて・つとめて・どうして・ときとし

て・において・については・につきて

・はじめて・はたして・まして・より

て・わけて

—20 2 トンボガトンデキマス。

—20 4 セミガナイテキマス。

—22 5 テヲヒイテアゲマス。

—24 3 オヤドリガコココトヨ

ンデキマス。

—24 6 ヒヨコガビヨビヨビヨト

ナイテキマス。

—27 3 ネエサンガエヲミテキ

マス。

—27 6 ニイサンガジヲカイト

キマス。

—28 2 ヘイタイガナランデキマ

ス。

—32 4 (略) タノクサヲトツテ

キマス。

—33 3 (略) オモシロイウタヲウ

タツテキマス。

—36 1 ソラガクモツテキマシタ。

—40 5 アカイノヤシロイノヤ

イロイロマジツテキマス。

—41 3 イクツサイタカ、カゾヘテ

ゴランナサイ。

—43 2 アハセテ五ヒキデス。

—44 2 ヨイオヂイサンハコブヲ

トラレテ ヨロコビマシタ。

—451 ワルイ オヂイサン ハコブ
ヲツケラレテ コマリマシタ。

—463 ヒケシガ トンデイク。

—465 ポンブヲ ヒイテ ハシル。

—472 ハシゴヲ カツイデ イソグ。

—523 〔圖〕 カアカア、カラスガ ナ
イテイク。

—536 〔圖〕 (略)、カアカア、カラス
ガ ナイテイク。

—222 ワタクシノ ウタヲ キク
ト、人ガ ダンダン オキテ キマ
ス。

—227 ミテ キルウチ ニダンダン
ノボツテ キマス。

—232 ミテ キルウチ ニダンダン
ノボツテ キマス。

—267 〔圖〕 サア、ミンナデ 一ポン
ツツモツテ、キミガヨ ヲウタヒ
マセウ。

—275 オハナト オキクガ アソン
デ キマス。

—281 オキクガ イマ オキヤク ニ
ナツテ キマシタ。

—291 オハナハ オキクヲ ザシキ
ヘトホシテ、オチャト オクワシ
ヲダシマシタ。

—232 〔圖〕 「コノ川 ハドコ カラナ
ガレテ クルノ デスカ。」

—234 〔圖〕 「アノ山ノ オク カラナ
ガレテ クルノ デス。」

—235 〔圖〕 「ドコヘナガレテイク

ノ デセウ。」

—214 犬ガ サカナヲ クハヘテ、
ハシノウヘニ キマシタ。

—215 ソノ サカナモ ホシク ナツ
テ、(略)、ワント 一コエ ホエマ
シタ。

—216 ホエルト、口ガ アイデ、
クハヘテ キタ サカナハ ミヅノ
ナカヘ オチマシタ。

—217 (略)、クハヘテ キタ サカナ
ハ ミヅノ ナカヘ オチマシタ。

—218 カゼガ フイテ、イロイロナ
木ノ ハガ トンデ キマス。

—219 カゼガ フイテ、イロイロナ
木ノ ハガ トンデ キマス。

—220 カゼガ フイテ、イロイロナ
木ノ ハガ トンデ キマス。

—221 クルクルマハツテ、クモノ
スニ カカルノ モアリマス。

—222 ミヅノウヘニ オチテ、フ
ネノ ヤウニ ナツテ、ハシルノ
モアリマス。

—223 (略)、フネノ ヤウニ ナツ
テ、ハシルノ モアリマス。

—224 ソレヲ モツテ、ウチヘカ
ヘツテ、(略)。

—225 ソレヲ モツテ、ウチヘカ
ヘツテ、カミヲ ソノカタチニ
キリマシタ。

—226 ワタクシノ キモノニハ、
ホソイハリガ 一パイハエテ キ
マス。

—227 (略)、モウスコシタツト、
キモノヲヌイデ、下ヘトビオリ

マス。

—221 ワタクシノ カラダハ、日
ニヤケタヤウナ イロヲ シテ
キマス。

—222 ワタクシヲ ヒノナカヘ
イレルト、大キナコエヲ タテ
テ、トビダシマス。

—223 〔圖〕 「カクレンボヲ シテアソ
ビマセウ。

—224 〔圖〕 ワタクシハ オニニナツ
テ、ココニタツテ キマス。

—225 〔圖〕 ワタクシハ オニニナツ
テ、ココニタツテ キマス。

—226 〔圖〕 「イエエ、イツシヨニキ
テハイケマセン。

—227 オバアサンハ 火ヲタイ
テ、ユフハンノシタクヲシテ
キマス。

—228 オバアサンハ 火ヲタイ
テ、ユフハンノシタクヲシテ
キマス。

—229 オバアサンハ 火ヲタイ
テ、ユフハンノシタクヲシテ
キマス。

—230 オバアサンハ 火ヲタイ
テ、ユフハンノシタクヲシテ
キマス。

—231 オバアサンハ 火ヲタイ
テ、ユフハンノシタクヲシテ
キマス。

—232 オバアサンハ 火ヲタイ
テ、ユフハンノシタクヲシテ
キマス。

—233 トモキチハ シンバイシテ、
カドグチヘデテ ミマシタ。

—234 トモキチハ シンバイシテ、
カドグチヘデテ ミマシタ。

—235 トモキチハ シンバイシテ、
カドグチヘデテ ミマシタ。

—236 トモキチハ シンバイシテ、
カドグチヘデテ ミマシタ。

—237 トモキチハ シンバイシテ、
カドグチヘデテ ミマシタ。

ンデイキマシタ。

—273 トモキチハ ヨロコンデ、ト
ンデイキマシタ。

—274 犬モヲ フツテ、ツイテ
イキマス。

—275 犬モヲ フツテ、ツイテ
イキマス。

—276 ドコノイヘニモカドマツ
ガタテ アリマス。

—277 コクキハ ヒラヒラトカゼ
ニウゴイテ キマス。

—278 ヲトコノ子モ、ランナノ子
モ、オモシロサウニ アソンデキ
マス。

—279 アソコデモ、ココデモ、
「(略)。」トアイサツシテ キマス。

—312 〔圖〕 カゼヨクウケテ、クモ
マデアガレ。

—333 ムカシ(略)、タヤハタケ
ヲタクサンモツテ キタ人ガア
リマシタ。

—334 (略)、トリヤケモノヲイ
コロシテ、オモシロガツテ キマシ
タ。

—335 (略)、トリヤケモノヲイ
コロシテ、オモシロガツテ キマシ
タ。

—336 (略)、トリヤケモノヲイ
コロシテ、オモシロガツテ キマシ
タ。

—337 (略)、トリヤケモノヲイ
コロシテ、オモシロガツテ キマシ
タ。

—338 アル日トモダチニユミノ
ジマンヲシテ、「(略)。」トイヒ
マシタ。

—339 「カガミモチヲマトニ
シテ、イテミマセウカ。」

- 二34 7 窓 「カガミモチヲマトニシテ、イデミマセウカ。」
 二35 5 窓 「モチハ(略)、イデハイケマセン。」
 二35 7 トモダチハ「(略)」。ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。
 二36 3 アタルト、モチハ白イトリニナツテ、パットトンデイキマシタ。
 二36 3 アタルト、モチハ白イトリニナツテ、パットトンデイキマシタ。
 二37 2 窓 「アカンボノトキニ、ダイテチチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。」
 二37 3 窓 「(略)、ダイテチチヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。」
 二37 6 窓 アタタカイフトコロノ中ヘイレテ、ネンネコウタヲウタツテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二37 7 窓 (略)、ネンネコウタヲウタツテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二38 2 窓 ハシヲモツテ、ゴハンヲタベサセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二38 3 窓 (略)、ゴハンヲタベサセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二38 7 窓 (略)、シイバイシテ、クスリヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二38 7 窓 (略)、クスリヲノマセテクダサツタノハ、ドナタデスカ。
 二39 4 窓 キモノヲヌツタリセンタクシタリシテクダサルノハ、ドナタデスカ。
 二40 1 窓 オカアサンハワタクシヲカハイガツテクダサイマス。
 二43 3 窓 「(略)、ボクガウチカラタドンヲモラツテキマスカラ。」
 二43 5 窓 コハサウナ目ヲシテ、ニランデキルデハアリマセンカ。
 二43 6 窓 コハサウナ目ヲシテ、ニランデキルデハアリマセンカ。
 二46 2 アノ太イ木ハ(略)、ツボミガタクサンツイテキマス。
 二46 5 (略)、アノオヤネニハウメバチノ大キナモンガツイテキマス。
 二47 6 (略)、ドコノテンジンサマノオヤシロニモ、ウメノ木ガウエテアリマス。
 二48 3 ワタクシハ本ヲ五サツモツテキマス。
 二49 4 コレニハウツクシイエガアツテ、ハナサカヂデイノオハナシガカイテアリマス。
 二49 5 コレニハ(略)、ハナサカヂデイノオハナシガカイテアリマス。
 二49 7 コレカライツシヨニヨンデミマセウ。
 二50 7 ヨイオヂイサンハ白イ犬ヲ一ピキカツテ、子ドモノヤウニカハイガツテキマシタ。
 二51 1 (略)、子ドモノヤウニカハイガツテキマシタ。
 二51 2 アル日犬ハオヂイサンノタモトヲクハヘテ、ハタケノスミヘツレテイツテ、(略)。
 二51 4 アル日犬ハオヂイサンノタモトヲクハヘテ、ハタケノスミヘツレテイツテ、(略)。
 二51 4 アル日犬ハオヂイサンノタモトヲクハヘテ、ハタケノスミヘツレテイツテ、(略)。
 二51 4 アル日犬ハオヂイサンノタモトヲクハヘテ、ハタケノスミヘツレテイツテ、(略)。
 二52 7 トナリノワルイオヂイサンハソレヲキイテ、犬ヲカリニキマシタ。
 二53 2 サウシテソノ犬ヲツレテイツテ、ハタケノスミヲホツテミマシタガ、(略)。
 二53 2 サウシテソノ犬ヲツレテイツテ、ハタケノスミヲホツテミマシタガ、(略)。
 二53 3 サウシテソノ犬ヲツレテイツテ、ハタケノスミヲホツテミマシタガ、(略)。
 二53 6 (略)、キタナイドロ水ノホカニハナンニモデテキマセン。
 二54 2 オヂイサンハタイヘンニハラヲタテテ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。
 二54 2 オヂイサンハ(略)、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。
 二54 6 ヨイオヂイサンハコレヲミテ、タイソウカナシンデ、(略)。
 二54 6 ヨイオヂイサンハ(略)、タイソウカナシンデ、犬ヲウツメテ、(略)マツノ木ヲ一本ウエマシタ。
 二54 7 ヨイオヂイサンハ(略)、犬ヲウツメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲ一本ウエマシタ。
 二55 3 ソノマツノ木ハズンズン大キクナツテ、一月モタタナイウチニ、(略)、大キナ太イ木ニナリマシタ。
 二56 1 ヨイオヂイサンハヤガテコノ木ヲキツテ、ウスヲツクツテ、ソレデ米ヲツキマシタガ、(略)。
 二56 2 ヨイオヂイサンハヤガテコノ木ヲキツテ、ウスヲツクツテ、ソレデ米ヲツキマシタガ、(略)。
 二57 3 ヨクノフカイオヂイサンハマタコノウスヲカリテイツテ、米ヲツイテミマシタガ、(略)。
 二57 3 ヨクノフカイオヂイサン

ハマタコノウスヲカリテイツ
テ、米ヲツイテミマシタガ、
(略)。

二五^三 ヨクノフカイオデイサン
ハマタコノウスヲカリテイツ
テ、米ヲツイテミマシタガ、
(略)。

ニ⁵⁷5 (略)、ヤツパリキタナイモノバカリデテ、ヨイモノハナシニモデマセン。

二五七 マタオコツテ、ソノウス
ヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイ
テシマヒマシタ。

二五八 1 マタ オコツテ、ソノウス
ヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイ
テシマヒマシタ。

二五八 1 マタオコツテ、ソノウス
ヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイ
テシマヒマシタ。

二五八² マタオコツテ、ソノウス
ヲコハシテ、火ニクベテ、ヤイ
テシマヒマシタ。

二586 ヨイオヂイサンハソノハ
ヒヲモラツテキテ、カマドノ
下ニオキマシタ。

586 ヨイオヂイサンハソノハ
ヒヲモラツテキテ、カマドノ
下ニオキマシタ。

ニ⁵⁹₁ ヒガ パット カゼガ フイテ、ハ
ニ⁵⁹₂ スルト カゼガ フイテ、ハ
ヒガ パット タツテ、川ムカフノ

カレ木ノエダニカカツタカ
トオモフト、(略)。

ソノハヒヲカゴニイレテ、
「(略)。」トヨンデアルキマシタ。
ニ597 オダイサンハヨロコンデ、
ソノハヒヲカゴニイレテ、

「略」ト ヨンデ アルキマシタ。
 二604 オヂイサン ハ「略」ト ヨンデ アルキマシタ。

ニナリマシタ。

二61¹ 会 ハナヲサカセテミヨ。
二61³ ハヒヲトツテ、カレ木ニ
ナゲカケマス、ト、（略）。

二六二 4 「略」。トオホメニナツ
テ、タクサンノゴホウビヲクダ
サイマシタ。

二63 1 ヨクノフカイオダイサン
ハコノハナシヲキイテ、ノコツ
テキタハヒヲカキアツメテ、

二63 (略)、トノサマノオカヘリヲマ
ツテ 牛マシタ。
ヨクノフカイオヂイサン

ハ(略)、ノコツテ 牛タ ハヒヲ
カキアツメテ、(略)。
二63ヨクノフカイオヂイサン

二634 ヨクノフカイオヂイサン
ハ(略)、カレ木ノ上ニノボツ
テ、トノサマノオカヘリヲマツ

二六三 5 ヨクノフカイオデイサン
ハ(略)、トノサマノオカヘリヲ
マツテ 牛マシタ。

ニ⁶³7 (略) トノサマガオトホリ
ニナツテ、「(略)。」トオホセニ
ナリマシタ。

二64² 会 「モウ一ドハナヲサカ
セテミヨ。」

トウトウ シバラレテ シマヒマシ
タ。
三三五 ハルノ アタタカイ 日ニ、

マサヲガ本ヲヨンデキマシタ。
三三七 ウツクシイサクラノハナ
ガ、マドノソトカラノゾイテ、

「マサヲサン、(略)。(略)」。

三45 ㊦ 「マサヲサン、ノニモ山
ニモワタクシドモノナカマガ

タクサンサイテキマス。
三45 ㊦ デテキテ、イツシヨニ
アソビマセンカ。」

三45 会 デテキテ、イツシヨニ
アソビマセンカ。」
三47 マサヲハミムキモシナイ

デ、「コレガ スンデ カライ キマセウ。」
マサヲハ（略）、「コレガ スンデ カライ キマセウ。」

三五二 コンドハ ウツクシイ 小ト
リガ マドノ ソトカラ ノゾイ
テ、「マサヲサン、(略)。」

三54(会)「マサヲサン、ソナニ
ウチニバカリキナイデ、チツト
ソトヘデテ、イツシヨニウタ
ヲウタヒマセウ。」

三五⁴会「略」、チツトソトヘデ
テ、イツシヨニウタヲウタヒマ
セウ。」

三五六 マサヲハヤツパリミムキ
モシナイデ、「コレガスンデカ
ライキマセウ。」

三57 **会** マサヲハ（略）、「コレガ
スンデ カライキマセウ。」
三58 スコシタツテオサラヒガ

スミマシタ。
三六^② ソコヘトモダチガサソヒ
ニキマシタカラ、ヨロコンデイ

ツシヨニノハラヘアソビニイ
キマシタ。

ソndeキマス。
三七ノハラニハ、(略)、イロイ
ロナハナガサイテキマス。

三九三 ソレカラ 三人デ ツンダ
ノヲ イツシヨ ニシテ、ハナタバ
ヲ コシラヘマシタ。

三九五 アカトキイロトムラサキ
ト三イロソロツテキレイデス。
三九八 小さなむしがとんでき
した。「ひらがなのドリル」

三九五 アカトキイロトムラサキ
ト三イロソロツテキレイデス。
三九八 小さなむしがとんでき
した。「ひらがなのドリル」

三101 大きなうまがはしつてき
 ました。「ひらがなのドリル」
 三106 一パン上ノニイサンハ
 イマヘイタイニイツテキマス。
 三112 ワタクシハオカアサンノ
 イヒツケヲヨクキイテ、イモウ
 トノモリヲシタリ、オツカヒ
 ニイツタリシマス。
 三115 オトウトハ(略)、イツモ
 ブチトアソンデキマス。
 三124 (略)、オヂイサンハイロイ
 ロナオモシロイハナシヲキカセ
 テクダサイマス。
 三128 にはのまつの木の
 上へ月がでてゐます。「ひらが
 なのドリル」
 三131 にはとりはとやでねて
 ゐます。「ひらがなのドリル」
 三132 いぬはおきて、ないてゐ
 ます。「ひらがなのドリル」
 三136 ウシノツノヤ、シカノ
 ツノデモヲツテシマフホドデ、
 (略)。
 三144 ソレデ「(略)」トイバツテ
 キマシタ。
 三146 ソレヲ天子サマガオキ
 キニナツテ、ノミノスクネト
 イフ人トスマフヲオトラセニ
 ナリマシタ。
 三153 シカシスクネモチカラガ

ツヨクテ、スバシコイ人デシタ
 カラ、(略)。
 三157 (略)、スキヲネラツテ、タ
 ッタ一ケリデ、ケハヤヲケタフ
 シマシタ。
 三162 ミテキタ人ハミンナ一
 ドニテヲタイテホメマシタ。
 三163 ミテキタ人ハミンナ一
 ドニテヲタイテホメマシタ。
 三166 「(略)」といつて、けはや
 がじまんをしました。「ひらが
 なのドリル」
 三168 それでけはやはわらはれ
 て、すぐねはほめられました。「ひ
 らがなのドリル」
 三174 アタタカイカゼガソヨソ
 ヨトムギノホノ上ヲフイテ
 キマス。
 三175 ヒバリガオモシロサウニ
 サヘツツテキマス。
 三178 サヘツリナガラダンダン
 タカク上ツテイキマス。
 三181 モウコエバカリキコエテ、
 スガタハミエマセン。
 三185 サヘヅルダケサヘヅルト、
 イマニマタオリテキマセウ。
 三187 オリルトキニハ、オチル
 ヤウニハヤクオリテキマス。
 三196 ユフガタニナツテモ、オ
 ヤドリガオリテコナイトキニ
 ハ、(略)。
 三197 (略)、子ヒバリハスノ中

デ、ドンナニマツテキルコト
 デセウ。
 三232 私はそとがかたくて、中
 がやはらかです。
 三241 うまはからだがほそく
 て、足がながうございます。
 三243 牛はからだが太くて、足
 がみじかうございます。
 三244 牛のつめは二つにわれ
 てゐますが、(略)。
 三245 (略)、うまのはわれてゐ
 ません。
 三271 けれどもいそいでつまづ
 くまいぞ。
 三281 (略)タケノコガ、モウコ
 ンナニノビテ、私ノセイトオ
 ナジクラキニナリマシタ。
 三285 ダンダンノビルト、タケノ
 カハガオチテ、リツバナ竹ニ
 ナリマス。
 三292 アタラシイ竹ハアヲアヲ
 トシテ、マコトニウツクシイモ
 ノデス。
 三306 タルヤヲケニモ、竹ノ
 タガガカケテアリマス。
 三315 アメガフリツヅイテ、田
 ノ水ガタクサンニナリマシタ。
 三317 ドコデモ田ウエガハジマ
 ツテキマス。
 三318 馬ニマグハヲヒカセテ、
 田ヲカキナラシテキル人モア
 リマス。

三321 馬ニマグハヲヒカセテ、
 田ヲカキナラシテキル人モア
 リマス。
 三323 ナハシロデナヘヲトツテ
 キル人モアリマス。
 三325 ナヘカゴニナヘヲ入レ
 テ、ハシツテイク人モアリマス。
 三326 ナヘカゴニナヘヲ入レ
 テ、ハシツテイク人モアリマス。
 三328 子ドモガ二人アゼニ
 タツテ、ナヘヲ田ノ中ヘナゲ
 入レテキマス。
 三331 子ドモガ(略)、ナヘヲ田
 ノ中ヘナゲ入レテキマス。
 三332 ナヘヲウエテキル女ハ、
 (略)。
 三333 (略)、マルイカサヲカブ
 ツテ、アカイタスキヲカケテ、
 コエヲソロヘテ、ウタツテキマ
 ス。
 三334 ナヘヲウエテキル女ハ、
 (略)、コエヲソロヘテ、ウタツテ
 キマス。
 三334 ナヘヲウエテキル女ハ、
 (略)、コエヲソロヘテ、ウタツテ
 キマス。
 三337 「コトシハホウネン、ホ
 ニホガサイテ、ミチノ小グサ

モ米ガナル。」

三三四 イマニアノナヘガノビ
テ、アライタミヲシイタヤウ
ニナリマセウ。

三三四 あるばんまさははは
といつしよによそからかへつ
てきました。

三三五 みちでほたるを一びき
つかまへて、母からかみをもら
つてつみみました。

三三五 (略)、母からかみをもら
つてつみみました。

三三五 あをいひかりがかみの
上からすいてみえます。

三三五 うちへかへつて、ちに
みせようとしたら、光がみえま
せん。

三三五 「おや、にげたのかしら
ん。」と、いそいでかみをあけて
みると、(略)。

三三五 「おや、にげたのかしら
ん。」と、いそいでかみをあけて
みると、(略)。

三三五 けれども光つてはるませ
ん。

三三六 くらいところへはなし
てごらん。」

三三七 (略)、あをく光りながら、
しづかにとんでいきました。

三三七 がくかうへもつて行くも
のは、みんなこのふるしきの
中につつんであります。

三三八 がくかうへもつて行くも
のは、みんなこのふるしきの
中につつんであります。

三三八 これで(略)や、せんせい
のを見せてくださるいろいろなも
のを見るのです。

三三九 (略)、目はいつもはつき
りしてゐて、よく見えます。

三三九 (略)、目はいつもはつき
りしてゐて、よく見えます。

三三九 耳もよくきこえて、きき
おとすやうなことはありませ
ん。

三四十 うが川の中でさかな
をとつてゐました。

三四十 今もぐつたかとおもふ
と、すぐに一びきくはへて、でて
きます。

三四十 今もぐつたかとおもふ
と、すぐに一びきくはへて、でて
きます。

三四十 見てゐるうちにまた一
びきくはへて、ういて出ます。

三四十 見てゐるうちにまた一
びきくはへて、ういて出ます。

三四十 見てゐるうちにまた一
びきくはへて、ういて出ます。

三四十 それをからすが木の上
から見てゐて、「(略)。」と、川
の中へはいりましたが、(略)。
三四一 それをからすが木の上
から見てゐて、「(略)。」と、川

の中へはいりましたが、(略)。

三四一 (略)、一つやつて見よう。」

三四一 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

三四二 (略)、がぶがぶと水をの
んで、とうとうしんでしまひまし
た。

をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四五 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

三四六 かへるは(略)、大きな目
をして、手をついてすわつて
ゐます。

かへる、とんではおち、おちてはとび、(略)。

三50⁸ くだれやなぎにとびつくかへる、とんではおち、おちてはとび、(略)。

三52¹ かげふく小えだにすをはる小ぐも、はつてはきれ、きれてははり、(略)。

三52² かげふく小えだにすをはる小ぐも、はつてはきれ、きれてははり、(略)。

三54² (略)、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、ナカナカスグニハ行キマセン。

三55³ (略)、「ハイ、今スグニ。」トイツテ、スグニハキマセンデシタ。

三55⁵ (略)ネコガダイジナキンギョヲトツテ、ニゲテ行キマシタ。

三55⁵ (略)ネコガダイジナキンギョヲトツテ、ニゲテ行キマシタ。

三56² (略)イクスデモツナヲハツテ、ウチデユウノ人ノキモノガホシテアリマス。

三56⁴ (略)イクスデモツナヲハツテ、ウチデユウノ人ノキモノガホシテアリマス。

三58¹ 私ガキヨネンマデキテキタワタイレハ、(略)モウキラレマセン。

三58³ (略)ワタイレハ、ユキモタケモミジカクナツテ、モウキラレマセン。

三58⁵ うみの水が青青として、どこまでもつづいてゐます。

三58⁶ うみの水が青青として、どこまでもつづいてゐます。

三58⁷ とほくの方では青ぞらといつしよになつてゐるやうに見えます。

三59³ 今日(略)、舟がたくさんおきへ出てゐます。

三59⁴ ほを(略)、かけてゐるのもあり、(略)。

三59⁶ ほを(略)、かけてゐないのもあります。

三59⁸ くらいけむりを出して走つていくきせんもあります。

三60¹ くらいけむりを出して走つていくきせんもあります。

三60² 左の方にはなればなれになつてゐるのは、魚をつつてゐる舟です。

三60³ 左の方にはなればなれになつてゐるのは、魚をつつてゐる舟です。

三60⁴ 右の方には五六そくかたまつてゐるのは、今あみをおろしてゐるのです。

三60⁷ 今にあのあみをだんだんはまべへひきよせてくると、(略)。

三60⁸ (略)、女や子どもも大ぜい出て、いつしよになつてひきあげます。

三60⁸ (略)、女や子どもも大ぜい出て、いつしよになつてひきあげます。

三61² はまべのまつの木の下へ行つて見ませう。

三62⁵ (略)、さざえのやうに、ふかいつぼのかたちになつてゐるのもあります。

三63⁵ そのうづまきに、右から左へまはつてゐるのと、(略)と、ふたいろあります。

三63⁷ そのうづまきに、(略)と、左から右へまはつてゐるのと、ふたいろあります。

三64⁵ 貝ざいくを賣るみせで買つてきたのです。」

三65⁵ アル日ウミベへ出て見ルト、(略)。

三65⁷ (略)、子ドモガ大ゼイデカメヲツカマヘテ、オモチヤニシテキマス。

三65⁸ (略)、子ドモガ大ゼイデカメヲツカマヘテ、オモチヤニシテキマス。

三66¹ ウラシマハカイサウニ思ツテ、子ドモカラソノカメヲ

買ツテ、(略)。

三66² ウラシマハ(略)、子ドモカラソノカメヲ買ツテ、ウミへハナシテヤリマシタ。

三66² ウラシマハ(略)、子ドモカラソノカメヲ買ツテ、ウミへハナシテヤリマシタ。

三66⁴ ソレカラ二三日タツテ、ウラシマガウミベデツリヲシテキルト、(略)。

三66⁵ ソレカラ二三日タツテ、ウラシマガウミベデツリヲシテキルト、(略)。

三66⁶ (略)、大キナカメガ出デキテ、「(略)」トイヒマス。

三66⁶ (略)、大キナカメガ出デキテ、「(略)」トイヒマス。

三67¹ オレイニリユウグウヘツレテ行ツテアゲマセウ。

三67¹ オレイニリユウグウヘツレテ行ツテアゲマセウ。

三67⁴ ウラシマガヨロコンデ、カメニノルト、(略)。

三67⁵ ウラシマガヨロコンデ、カメニノルト、ダンダンウミノ中ヘシヅンデ行ツテ、(略)。

三67⁶ (略)、ダンダンウミノ中ヘシヅンデ行ツテ、マモナクリユウグウノ門ヘツキマシタ。

三68¹ リユウグウニハ(略)キレイナオヒメサマガ居テ、ウラシマノ來タノヲタイソウヨロコ

ンデ、(略)、サマザマノアソビヲシテ見セマシタ。

三六八² (略)、ウラシマノ來タノ
ヲタイソウヨロコンデ、イロイロ
ナゴチソウヲシタリ、サマザマ

ノアソビヲシテ見セマシタ。

三六八 (略)、イロイロナゴチソウ
ヲシタリ、サマザマノアソビヲ
シテ見セマシタ。

三六五 ウラシマハオモシロクテ
タマリマセンカラ、(略)、ウチヘ
カヘルノモワスレテヰマシタ。

三六八
7 ウラシマハ（略）、リュウグ
ウノオキヤクサマニナツテ、ウ
チヘカヘルノモワスレテキマ
シタ。

三六八 7 ウラシマハ(略)、ウチヘ
カヘルノモワスレテヰマシタ。

見ル ト、シマヒ ニハ アキテ キマ
ス。

三70 1 会 「イロイロ オセワ ニナ
ツテ、アリガタウゴザイマスガ、
(略)。

三
718 オトヒメハ「略。」トイ
ツテ、タマテパコトイフリツパ
ナハコヲワタシマシタ。

三72³ ウラシマハハコヲモラツ
テ、マタカメノセナカニノツ
テ、海ノ上へ出テ來マシタ。

三^二72⁴ ウラシマハ（略）、マタカ
メノセナカニノツテ、海ノ上

へ出テ來マシタ。

二七五 ウラシマハ（略）、マタカ
メノセナカニノツテ、海ノ上
へ出テ來マシタ。

三
72
5 ウチヘカヘツテ見ルト、

オドロキマシタ、(略)。
 三二六 (略)、父モ母モシンデ
 シマツテ、ジブンノウチモアリ

マセン、(略)。
 三二七 (略)、父モ母モシンデ
 シマツテ、ジブンノウチモアリ

マセン、(略)。
 $\frac{3}{72}8$ (略)、トモダチモミンナ
 ナクナツテ、知ツテキルモノ

ハ一人モアリマセン。
 三73 1 (略)、トモダチモミンナ
 ナクナツテ、知ツテキルモノ

ハ一人モアリマセン。
 二七三² 何ダカカナシクテカナシ
 クテタマリマセン。

ニ⁷³ 2 何ダカカナシクテカナシ
クテタマリマセン。
ニ⁷³ 4 (略)、オトヒメノイツタ

コトモ
ワスレテ、タマテバコヲ
アケテ見ルト、(略)。
二七五 (略)、オトヒメノイツタ

コトモワスレテ、タマテバコヲ
アケテ見ルト、(略)。
二七三 6 (略)、中カラ白イケムリ

ガ出テ、ウラシマハニハカニオ
 デイサンニナツテシマヒマシタ。
 二七三 (略)、ウラシマハニハカニ

オヂイサン ニナツテ シマヒマシ
タ。

四二一 けいさつしよのよこを北へまがつて、すこし行くと、
(略)。

四三三 村の人人が、(略)を馬
やくるまにつんで、賣りにき
ます。


四三五 又町からは、(略)などを
四四五 会 私にはまるでちがつた方

を見てゐました。」

の方へながれてゐます。

四六1会 「うちのまへの川が
あんなにまがりまがつて、とほく

の方へながれてゐます。

四六^二  あのカムカフの木の
しげつてゐるのが、八まんさま

のもりです。」

四六四会 「それでは今くるまの
とほつてゐる長いはしが、八ま

んさまのまへのはしですね。」

四六八回 今あのはしの上を人がいくたりとほつてゐますか。」

四七五 会 「くるまにのつてゐる
人を入れると、六人でせう。」
四七八 二人はまだ方方がめ

て、あそんでゐましたが、（略）。
四七 二人はまだ方方がめ
て、あそんでゐましたが、（略）。

四八二 (略) 雨がふりさうになつたので、いそいで山を下りました。

四八八 日ノマルノコクキガアサ
日ニカガヤイテキルノハ、イ
サマシイデハアリマセンカ。

四九五 センセイガチヨクゴヲオ
ヨミニナツテ、センセイモセイ
トモ一シヨニ君ガヨノウタ

ヲウタヒマシタ。
四102 文韻 (略)、さざれ石のいは
ほとなりて、こけのむすまで。

四107 今年ハエダガヲレルホ
ドタクサンナツテキマス。
四113 (略)カカシガタテテアリ

マス。
四116 サハスト アマク ナツテ、
タイソウ ウマイ カキ デス。

四十二 去年ハホシテ、クシガキ
 四十五 (略)、毎アサ早クオキテ、
 二作リマシタ。

行ツテ見ルノガタノシミデス。
四12 5 (略)、毎アサ早クオキテ、
行ツテ見ルノガタノシミデス。

四十二ケサモ五十ホドヒロツテ
 四十七クリハユデテタベテモ、
 來マシタ。

四十二 八 クリハユデテタベテモ、
ヤイテタベテモ、ウマイモノデ
ス。

ヤイテタベテモ、ウマイモノデ
ス。

四137 圖 (略)、四方の山を見おろして、かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山。
 四145 圖 (略)、からだに雪のきものきて、かすみのすそをとほくひく、ふじは日本一の山。
 四153 昔みなものよりとまがけらいをつれて、ふじのすそのでまきがりをしました。
 四155 大ぜいのものが下にまちかまへてゐて、(略)けものを、弓でいとつたのです。
 四156 (略)、高いところからおひおろして来るけものを、弓でいとつたのです。
 四163 (略)ゐのししが、(略)よりともの居る方へかけおいて来ました。
 四165 (略)、きばをむき出して、はないきをあらくして、土けむりをたてて、とんで来ます。
 四166 (略)、きばをむき出して、はないきをあらくして、土けむりをたてて、とんで来ます。
 四166 (略)、土けむりをたてて、とんで来ます。
 四167 早くて早くて、とても弓矢

ではいとれません。
 四167 早くて早くて、とても弓矢ではいとれません。
 四173 (略)、弓矢をなげすてて、馬をとばして、そのておひじしにむかひました。
 四173 (略)、弓矢をなげすてて、馬をとばして、そのておひじしにむかひました。
 四176 ゐのししはまつすぐにただつねの方へ下りて来ます。
 四181 ゐのししはますますあばれてかけおります。
 四184 ただつねはしつかりとををにぎつて、のつてゐます。
 四184 ただつねはしつかりとををにぎつて、のつてゐます。
 四184 ただつねはしつかりとををにぎつて、のつてゐます。
 四191 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀六刀さしとほしました。
 四191 (略)、ただつねはこしの刀をひきぬいて、つづけて五刀六刀さしとほしました。
 四195 (略)、ただつねはすぐにそばのたふれてゐた木のうへとびのきました。
 四204 圖 「次郎、オマへハ手ノユビノ名ヲ知ツテキマスカ。」
 四221 圖 ニイサンハ一パン太ツテ、一パン力ガツヨイカラ、オヤユビデス。
 四232 オヂイサンハ「(略)。」ト

イッテ、ニツコリワラヒマシタ。
 四235 オマツガオトミトアキナヒノアソビヲシテキマス。
 四237 オマツノ店ニハ、(略)ガラバテアリマス。
 四244 圖 ソレカラフデヲ見セテクダサイ。」
 四248 オマツハ太イフデト細イフデヲ出シテ、「コノ太イノガ五センチ、細イノハ三センチ五リンデス。」
 四256 オマツハ糸トフデヲ紙ニツツンデ、ワタシナガラ、「(略)。」
 四262 オトミハマルクキツタ白イ紙ヲ三ツ出シテ、「三十センチアゲマスカラ、コレドトツテクダサイ。」
 四264 圖 「三十センチアゲマスカラ、コレドトツテクダサイ。」
 四265 オマツハツリヲワタシテ、「毎ドアリガタウゴザイマス。」
 四268 さむい北かぜがふいて、のはらのくさははなは大いにかれてしまひました。
 四271 (略)、のはらのくさははなは大いにかれてしまひました。
 四272 くさのかげにないてゐた虫も(略)、もうなくこゑもきこえません。
 四273 くさのかげにないてゐた虫も死んでしまつたのか、

(略)。
 四275 一ぴきのきつねがさきのこつてゐるのぎくを見つけて、(略)。
 四276 一ぴきのきつねがさきのこつてゐるのぎくを見つけて、「おきくさん、おきくさん、かうさむくなつては、しかたがありません。」
 四278 圖 「(略)、かうさむくなつては、しかたがありません。」
 四281 圖 あなたのおなかまは大い枯れてしまつたやうです。
 四286 圖 「(略)枯れたやうに見える、ねは生きてゐます。」
 四288 圖 土の中で、しづかにらゐるのをはるをまつてゐるのです。
 四288 圖 はるになつて、だんだんあたたかになると、(略)。
 四292 圖 (略)、枯れたあとから、まためをふき出して、そのうちにきれいなはなをさかせて見せます。
 四293 圖 (略)、そのうちにきれいなはなをさかせて見せます。
 四301 (略)夕はんが今すんで、みんなあつまつて、色色なはなしをしてゐます。
 四301 (略)、みんなあつまつて、色色なはなしをしてゐます。
 四302 (略)、みんなあつまつて、

色色なはなしをしてゐます。

四30 7 (略)、三郎はそれをきいて、「もちにする米とごはんの米はどうちがひますか。」

四32 3 図 「知つてゐますとも。」

四36 6 皆サンノ知ツテキルダケ

イッテゴランナサイ。

四36 6 皆サンノ知ツテキルダケ

イッテゴランナサイ。

四37 1 (略)、又赤ヤ青ヤキ色

ニソメテ、麥ワラザイクニモツ

カヒマス。

四38 2 アル日タヒヒラメサバ

タコナドガオヨイデキルト、

(略)。

四38 4 (略)、サザエガ岩ノカゲ

カラヨビトメテ、「(略)。」トイ

ツテ、ジマンバナシヲシマシタ。

四39 2 図 ボクラハカウイフカ

タイヨロヒヲキテキルカラ、

(略)。

四39 4 図 (略)、コノ中へハイッ

テ、内カラトヲシメテキサヘ

スレバ、アンシンナモノデス。」

四39 4 図 (略)、コノ中へハイッ

テ、内カラトヲシメテキサヘ

スレバ、アンシンナモノデス。」

四39 6 「(略)。」トイッテ、ジマン

バナシヲシマシタ。

四40 1 サザエハスグカラノ中

へヒツコンデ、フタヲシメテ、

四40 2 サザエハスグカラノ中

へヒツコンデ、フタヲシメテ、

「(略)。」トイッテ、スマシテキマ

シタ。

四40 6 (略)、「(略)。」トイッテ、

スマシテキマシタ。

四40 6 (略)、「(略)。」トイッテ、

スマシテキマシタ。

四40 7 スコシタツテカラ、ソツト

フタヲアケテ、外ヲ見ルト、

(略)。

四40 8 スコシタツテカラ、ソツト

フタヲアケテ、外ヲ見ルト、

(略)。

四41 1 (略)、何ダカヤウスガ

チガツテキマス。

四41 2 コレハラカシイトオモツ

テ、ヨクヨク見ルト、(略)。

四41 5 (略)、ソバニ一セン五リン

トカイタフダガタテアリマ

シタ。

四42 1 をばさんからいただいた

おとしだまにのしがついてゐ

ました。

四42 2 おちよはそれを見て、母

に「(略)。」と問ひました。

四43 2 図 (略)、あはびの肉をの

して、紙のやうにうすくした

ものです。

四43 4 図 それがだんだんにかは

つて、今では紙で作つたのし

四45 7 皆さんはとけいの見方

を知つてゐますか。

四46 1 皆さんはとけいにかいて

ある字がよめますか。

四48 7 図 おんなじひびきで、うご

いて居れども、(略)。

四49 2 図 (略)、ばんまでかうし

て、かつちん、かつちん。

四49 7 図 われらがねどこで、や

すんで居るまも、(略)。

四50 2 図 (略)、あさまでかうし

て、かつちん、かつちん。

四51 1 (略)、ソノママデヤイタ

リニタリシテタベルノデハア

リマセン。

四51 5 今ハ死ンデキマスガ、

(略)。

四51 6 (略)、モトハ海ノ中デ

オヨイデキマシタ。

四51 8 (略)、今ハスコシ長イ名

ヲモツテキマス。

四51 8 アテテゴランナサイ。

四52 4 (略)白ウサギガ、ムカフ

ノ大キナヲカヘ行ツテ見タイ

ト思ツテ、(略)。

四52 5 (略)、ムカフノ大キナヲ

カヘ行ツテ見タイト思ツテ、

海ヲワタルクフウヲカンガヘ

テキマシタ。

四52 6 (略)、海ヲワタルクフウ

ヲカンガヘテキマシタ。

ルト、ワニザメガ居マシタカラ、

(略)。

四53 1 図 「(略)、ドツチガ多イ

カ、クラベテ見ヨウ。」

四53 5 ワニザメハ「(略)。」ト答

ヘテ、スグニナカマヲ大ゼイツ

レテ来マシタ。

四53 6 ワニザメハ「(略)。」ト答

ヘテ、スグニナカマヲ大ゼイツ

レテ来マシタ。

四53 7 白ウサギハコレヲ見テ、

「(略)。」トイヒマシタ。

四54 4 図 オマヘタチノセナカノ

上ヲアルイテ、カゾヘテ見ル

カラ、(略)。

四54 4 図 オマヘタチノセナカノ

上ヲアルイテ、カゾヘテ見ル

カラ、(略)。

四54 6 図 (略)、ムカフノヲカマ

デナランデ見ヨ。」

四55 3 白ウサギハ一ツニツト

カゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、

(略)。

四55 3 白ウサギハ一ツニツト

カゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、

(略)。

四56 1 白ウサギハ「(略)、「(略)。」

トイッテワラヒマシタ。

四56 2 ワニザメハ「(略)」、大ソウ

オコツテ、(略)、白ウサギノ毛

ヲミンナムシリトツテシマヒマ

四56 4 (略)、白ウサギノ毛ヲミ
ンナムシリトツテシマヒマシタ。
四56 6 白ウサギハイタクテタマ
リマセンカラ、(略)。
四56 7 白ウサギハ(略)、ハマベ
ニタツテ、ナイテキマシタ。
四56 7 白ウサギハ(略)、ハマベ
ニタツテ、ナイテキマシタ。
四57 1 ソコヘカミサマガタガ
オトホリガカリニナツテ、(略)。
トオタヅネニナリマシタ。
四57 5 園 「ソレナラ海ノ水ヲア
ビテ、ネデキルガヨイ。」
四57 5 園 「ソレナラ海ノ水ヲア
ビテ、ネデキルガヨイ。」
四58 2 (略)、マヘヨリモカヘツ
テイタクナツテ、ナホナホクル
シンデキマシタ。
四58 2 (略)、マヘヨリモカヘツ
テイタクナツテ、ナホナホクル
シンデキマシタ。
四59 1 アニ神サマガタノオトモ
ヲシテ、フクロヲカツイデイラ
ツシヤツタノデ、(略)。
四59 2 アニ神サマガタノオトモ
ヲシテ、フクロヲカツイデイラ
ツシヤツタノデ、(略)。
四59 7 白ウサギハ目ヲコスツ
テ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシ
タ。
四60 2 園 ハヤク川へ行ツテ、シ
ホケノナイ水デカラダヲア

ラツテ、(略)。
四60 3 園 (略)、シホケノナイ水
デカラダヲアラツテ、ガマノ
ホヲシイテ、ソノ上ニコロガ
レ。
四60 4 園 (略)、ガマノホヲシイ
テ、ソノ上ニコロガレ。
四60 5 スルト神サマハ、「(略)。
トヲシヘテクダサイマシタ。
四60 8 ヨロコンデオホクニヌシノ
ミコトノ所へオレイニ行ツ
テ、(略)。
四61 1 ヨロコンデオホクニヌシノ
ミコトノ所へオレイニ行ツ
テ、「(略)。」ト申シ上ゲマシタ。
四62 3 けさおきて見ると、(略)。
四62 5 (略)、雪がたくさんつも
つて、どこを見てもまつ白で
す。
四62 8 ゆふべは風がなくてし
づかなばんでしたから、(略)。
四63 4 やぶの竹は弓のやう
にまがつて、中にはさが土
までとどいてゐるのもありま
す。
四63 4 (略)、中にはさが土
までとどいてゐるのもありま
す。
四63 8 はのおちた木もみんな
まつ白になつて、はながさいた
やうです。
四64 1 犬はよろこんで、雪の中

をとびあいてゐます。
四64 2 犬はよろこんで、雪の中
をとびあいてゐます。
四64 4 (略)雪をたたきおとしな
がらあいてゐます。
四64 5 今日は早くから学校へ
行つて、みんな雪なげをしま
せう。
四65 1 うぐひすがないてゐます。
四65 4 今あうめの木の枝
から枝へとんでゐます。
四66 4 昔からうめにうぐひす
といつて、うめの花のさくじ
ぶんから、あんなうつくしいこ
ゑでなきはじめます。
四67 1 三郎ノ母ハ(略)風ヲ
ヒイテネテキマス。
四67 1 三郎ノ母ハ(略)風ヲ
ヒイテネテキマス。
四67 2 三郎ハシンパイシテ、ヒマ
サヘアレバ、母ノソバヘ來
テ、(略)。
四67 3 三郎ハ(略)、ヒマサヘア
レバ、母ノソバヘ來テ、「(略)。
トイッテタツネマス。
四67 6 三郎ハ(略)、「(略)。」ト
イッテタツネマス。
四67 7 今モ外カラカヘツテ、ス
グココヘ來テキル所デス。
四67 7 今モ外カラカヘツテ、ス
グココヘ來テキル所デス。
四68 5 園 苦クレバ私ガカハリニ

ノンデ上ゲマセウ。」
四69 1 園 「ソナニ少シツツノ
マナイデ、モットタクサンノ
ダラ、早クナホリマセウ。」
四69 4 園 「サウ一ドニノンデハ、
カヘツテワルイノデス。
四72 6 園 おはるあしたはひなさ
ままつり。きせてやりたいこの
はれぎ。
四73 1 オハルハアネニテツダツ
テモラツテ、オヒナサマヲカザ
リマシタ。
四73 1 オハルハアネニテツダツ
テモラツテ、オヒナサマヲカザ
リマシタ。
四73 6 一バン上ノダンニハダ
イリサマヲナラベテ、ソノ左ト
右ニウツクシイシヨクダイヲ
立デマシタ。
四74 2 ニダン目ニハクワンヂヨ
ヲスエテ、三ダン目ニハ五人バ
ヤシヲオキマシタ。
四74 6 (略)、又ソノ次ノダン
ニハヒシモチトオゼンヲソナ
ヘテ、花イケニハ(略)ライケマ
シタ。
四74 8 スツカリカザツテカラ、母
ノ所へ行ツテ、(略)。
四75 1 スツカリカザツテカラ、母
ノ所へ行ツテ、「(略)。」トイ
ヒマシタ。
四75 4 母ハ來テ見テ、(略)。

四七五 母ハ來テ見テ、「(略)。」

トイヒマシタ。

四七六 園 オチヨサンヤオマツサ

ンヲヨンデ來テ、オアソビナサ
イ。」

四七六 園 オチヨサンヤオマツサ

ンヲヨンデ來テ、オアソビナサ
イ。」

四七五 園 オハルハヨロコンデ、友ダ

チヲヨビアツメテアソビマシタ。

四七六 園 オハルハヨロコンデ、友ダ

チヲヨビアツメテアソビマシタ。

四七六 園 (略)げんじはをか、へい

けは海で、むかひあつてゐた
時、(略)。

四七六 園 (略)へいけ方から一そう

のふねをこぎ出して來ました。

四七六 園 見ればへさきに長いさを

を立てて、そのさをのさきに
はひらいた赤い扇がつけてあ
ります。

四七六 園 (略)そのさをのさきに

はひらいた赤い扇がつけてあ
ります。

四七六 園 一人のくわんぢよがその

ぐるまはつてゐます。

四七七 扇は(略)、ぐるぐるまは

つてゐます。

四七八 (略)よしつねはけらいに

むかつて、「(略)。」とたづねまし
た。

四七八 園 その時一人がすすみ出
て、「(略)。」といひました。

四七九 園 そらをとんでゐる鳥

でも、(略)。

四八〇 園 よ一は(略)、もしこれを

いそこなつたら、生きてはゐま
いとかくごをきめて、(略)。

四八〇 園 よ一は(略)とかくごを

きめて、馬にまたがつて、海の
中へのり入れました。

四八〇 園 よ一は(略)、馬にまたが

つて、海の中へのり入れました。

四八〇 園 弓をとりなほして、むかふ

を見わたすと、(略)。

四八〇 園 (略)、船がゆれて、まと

がさだまりません。

四八〇 園 しばらく目をつぶつて、

おちついて見えます。

四八二 園 よ一は(略)、弓を引きし

ぼつて、ひようと一矢いはなしま
した。

四八二 園 赤い扇はかなめのきは

をいきられて、そらにまひ上つ
て、(略)。

四八二 園 赤い扇は(略)、そらに

まひ上つて、ひらひらと二つ三つ
まはつて、波の上に おちまし
た。

四八二 園 赤い扇は(略)、ひらひら

と二つ三つまはつて、波の上
に おちました。

四八三 園 (略)、みんなが馬のくら

をたたいてよろこびました。

四八三 園 海の方でもふなばたを

たたいて、一どにどつとほめま
した。

五一一 園 ある時生馬のかはをはいで、

(略)へおなげ入れになりました。

五一一 園 (略)、大神がはたをおらせて

いらつしやる所へおなげ入れにな
りました。

五一一 園 大神はおどろいて、あまの岩

るいことをはじめました。

五二二 園 よい神さまがたは、どうかし

て大神にまた出ていただきたいと、
色色ごさうだんの(略)。

五二二 園 よい神さまがたは、どうかし

て大神にまた出ていただきたいと、
色色ごさうだんの(略)。

五二二 園 (略)、一同あまの岩戸の外に

あつまつて、おかぐらをおはじめに
なりました。

五三〇 園 (略)、大ぜいの神さまがたは

手をたたいて、お笑ひになりました。

五三〇 園 (略)、大神は少しばかり戸を

あけて、おのぞきになりました。

五四一 園 (略)、すぐに大神のお手をと

つて、お出し申し上げました。

五四二 園 (略)、オトホリスデノミチガ

ケハシクテ、オコマリノコトガゴザ
イマシタ。

五四三 園 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ

出テ來テ、(略)。

五四四 園 ソノ時ヤタガラストイフ鳥

ガ出テ來テ、オサキニ立ツテ、ヨイ

ミチノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシ

タ。

五四五 園 (略)、オサキニ立ツテ、ヨイ

ミチノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシ

タ。

五四六 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五四七 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五四八 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五四九 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五五〇 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五五一 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五五二 園 (略)金色ノトビガトンデ來

テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。

五68 ソノ光ガキラ／＼トシテ、ワ
ルモノドモハ目ヲアケテキルコトガ
デキマセン。
五71 (略)、ワルモノドモハ目ヲア
ケテキルコトガデキマセン。
五74 ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ
行キマシタ。
五74 ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ
行キマシタ。
五78 天皇ハ國ノ中ノワルモノド
モヲノコラズオタヒラゲニナツテ、
天皇ノオクラキニオツキニナリマシ
タ。
五82 (略)、コノ日ヲキゲンセツト
申シテ、毎年オイハヒヲイタスノデ
ゴザイマス。
五86 そらからふつて、山の木のは
の上に休んでゐましたが、(略)。
五86 そらからふつて、山の木のは
の上に休んでゐましたが、(略)。
五87 (略)、風にふかれて、土の上
へおちました。
五88 そこで大ぜいと一しよになつ
て、せまい谷へ下りました。
五95 (略)、何だか目がまはつて、
しばらくの間は何も知らずにゐまし
た。
五96 きがついて見ると、(略)。
五96 (略)、人が二三人立つて、「見
ごとなたきだ。」といつて、ながめて
ゐました。
五97 (略)、人が二三人立つて、「見

ごとなたきだ。」といつて、ながめて
ゐました。
五97 (略)、人が二三人立つて、「見
ごとなたきだ。」といつて、ながめて
ゐました。
五104 鳥はたのしさうに時々來て、
羽をひたしました。
五106 魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。
五106 魚はうれしさうにういたりし
づんだりして、およいでゐました。
五112 そばを通る人が「美しい川
だ。」といつて、ほめました。
五115 それから田や畠の間を通つて
来るうちに、(略)。
五117 (略)、右からも、左からも、
なかがあつまつて來て、(略)。
五117 (略)、右からも、左からも、
なかがあつまつて來て、いよく
にぎやかになりました。
五122 (略)、はしかけてあつて、
(略)。
五122 (略)、はしかけてあつて、
人や馬や車がたくさん通つてゐるの
です。
五123 (略)、人や馬や車がたくさん
通つてゐるのです。
五125 (略)、兩がはいへがたちな
らんで、人がいそがしさうにあるい
てゐました。
五126 (略)、人がいそがしさうにあ
るいてゐました。

五128 (略)、何かと思つたら、にも
つをつんだ船が通つてゐたのです。
五133 けれども重い物は皆そこへし
づめてしまつて、(略)。
五133 けれども重い物は皆そこへし
づめてしまつて、(略)。
五134 (略)、軽い物は一しよにここ
までもつて來ました。
五135 こゝへ來て見ると、ひろ／＼
として、(略)。
五135 こゝへ來て見ると、ひろ／＼
として、(略)。
五135 こゝへ來て見ると、ひろ／＼
として、(略)。
五142 ナラノ大ブツツイツテ名高イ
モノデス。
五143 スワツテイラツツシャル高サガ
五丈三尺五寸、(略)。
五152 (略)、大ブツサマノマヘニ立
ツテキル人が、コンナニ小サク見え
マス。
五155 池ノ中デコヒガオヨイデキル
ノヲ見タコトガアリマセウ。
五157 大キナコヒガタクサンアツマ
ツテオヨイデキルノハ、(略)。
五157 大キナコヒガタクサンアツマ
ツテオヨイデキルノハ、(略)。
五161 鯉ハ昔カラ川魚ノ長トイハレ
テキマス。
五163 ウロコハカラヲフイタヤウ
ニカサナリ合ツテキテ、(略)。
五163 ウロコハ(略)カサナリ合

ツテキテ、(略)、クロイデンノアル
ウロコガ三十六枚ヅツナランデキマ
ス。
五165 (略)ウロコガ三十六枚ヅツ
ナランデキマス。
五166 ソノ色ニハクロイノモアリ、
赤イノモアリ、白イノモアツテ、皆
金色ヲオビテキマス。
五167 (略)、皆金色ヲオビテキマス。
五167 目ハ大キクテ、口ノ右左ニハ
太イヒゲガアリマス。
五172 蟲ナドガ水ノ上ヲトンデキル
ト、(略)。
五172 (略)、ハネ上ツテトツテ食ヒ
マス。
五173 (略)、ハネ上ツテトツテ食ヒ
マス。
五175 又ドンナ流ノ早イ川デモ、オ
ヨイデノボリマス。
五176 鯉ノタキ上リトイツテ、タキ
デモ上ルコトガアルサウデス。
五182 鯉ノヤウニゲンキガヨク、大
キクナツテカラハ、(略)、ズンズン
シユツセヲセトイフ心デ祝フノデ
セウ。
五195 (略)、いそいで行つて見ると、
(略)。
五195 (略)、いそいで行つて見ると、
(略)。
五197 (略)、まないたに魚をのせて、
さしみをこしらへてゐます。
五198 (略)、まないたに魚をのせて、

さしみをこしらへてゐます。

五20 1 母は戸だなの方をさして、

「(略)。」といひました。

五20 2 窓 「そこにおさらがあるから、

取つておくれ。」

五20 5 おはなは(略)一ばん大きな

さらを持つて來ました。

五20 6 窓 それからそこに切つてある

たけのこをおなべの中へ入れておく

れ。」

五20 7 窓 それからそこに切つてある

たけのこをおなべの中へ入れておく

れ。」

五21 6 母は「(略)。」といつて、切つ

たさしみをさらの中へ入れて、(略)。

五21 7 母は(略)、切つたさしみを

さらの中へ入れて、「(略)。」といひ

ました。

五22 1 窓 「(略)、そのひしやくを取

つて、水をかけておくれ。」

五22 1 窓 「(略)、そのひしやくを取

つて、水をかけておくれ。」

五22 3 おはなは水がめから水をくん

で、母の手にかけました。

五22 7 ぬす人はきんじよに住んで

ゐるゐざりだといふうはさがあるの

で、(略)。

五22 8 (略)、行つて見ると、なるほ

どそのかまがありました。

五23 1 大そうおこつて、取りかへさ

うとすると、(略)。

五23 6 大そうおこつて、取りかへさ

うとすると、「(略)。」といつて、ど

うしてもかへしません。

五23 7 しかたがないから、うつたへ

て出ました。

五23 8 やく人は二人をよび出して、

その釜を前において取りしらべまし

た。

五24 1 やく人は(略)、その釜を前

において取りしらべました。

五24 2 窓 「これは私が毎日使つてゐ

た釜でございます。

五24 7 窓 「(略)、私は(略)、兩手を

ついて、やつとゐざりあるくもので

ございます。

五25 2 窓 どうして釜のやうな重い物

が持つて行かれませう。

五25 4 窓 その釜は私が前から持つて

ゐたのでございます。」

五25 7 役人はしばらく考へてゐまし

たが、(略)、

五26 1 (略)ゐざりにむかつて、

「(略)。」と申しわたしました。

五26 4 窓 さつそく持つてかへれ。」

五26 6 ゐざりは大そうよるこんで、

その釜をあたまにかぶつて、兩手を

ついてゐざり出しました。

五26 7 (略)、その釜をあたまにかぶ

つて、兩手をついてゐざり出しまし

た。

五26 7 (略)、兩手をついてゐざり出

しました。

「(略)。」といつて、(略)。

五27 3 役人は(略)、「(略)。」とい

つて、下役どもに言ひつけて、しば

らせました。

五27 3 役人は(略)、下役どもに言

ひつけて、しばせました。

五28 2 窓 五月・六月實がなれば、枝

からふるひおとされて、きんじよの

町へ持出され、何升何合はかり賣、

五28 6 窓 (略)、しほにつかつてから

くなり、(略)。

五28 7 窓 (略)、しそにそまつて赤く

なり、(略)。

五29 6 窓 (略)、うんどう會にもつい

て行く。

五29 8 窓 ましていくさのその時は、

なくてはならぬこのわたし。

五30 3 ハガヨクシゲツテ、下ノ方ハ

枝モ見エマセン。

五31 2 ツヤガアツテ、色ハコイミド

リ色デス。

五31 5 花ニハベンガ五ツアツテ、ヨ

イニホヒガシマス。

五31 7 ソノ實ハツバキノ實ノヤウニ

カタクテ、ソノ中ニマルイ種ガニツ

三ツツアリマス。

五32 1 大ゼイノ女ガ茶ヲツンデキマ

ス。

五33 2 ソレカラ十四五日タツテツム

ノヲ二番茶トイヒマス。

五33 7 サクラノ花ノ下ニトンデキル

五34 1 (略)、ナノ畠ニアソンデキル

蝶ヲ見ルト、(略)。

五34 3 又羽ヲタ、ンデ、シヅカニ木

ノ葉ノ上ニネムツタヤウニシテキル

ノヲ見ルト、(略)。

五34 4 (略)、シヅカニ木ノ葉ノ上

ニネムツタヤウニシテキルノヲ見ル

ト、(略)。

五34 5 (略)、ドンナユメヲ見テキル

ノカト思ヒマス。

五35 7 キモノノモヤウヤ、カンザ

シナドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、

(略)。

五36 2 (略)蝶ヲツカマヘテイデメ

ル人ハ、ドウイフ心デセウ。

五36 6 昔雄略天皇がするといふ人

をおめしになつて、(略)とおほせ

になりました。

五36 6 (略)、こをたくさん集めて來

いとおほせになりました。

五37 3 すがるは(略)、あちらこち

らをたづねまはつて、「(略)。」と、

たくさんの子どもをもらつて、つれ

て來ました。

五37 6 (略)、たくさんの子どもをも

らつて、つれて來ました。

五37 6 (略)、たくさんの子どもをも

らつて、つれて來ました。

五38 1 天皇はこれをごらんになつ

て、大そうお笑ひになりましたが、

(略)。

五38 2 窓 「その子は皆お前にやるか

- ら、やしなつてやるがよい。」
- 五三八 天皇は「略」、「略。」とおほせになつて、するがには小子部といふ姓をたまはりました。
- 五三六 するがはその大ぜいの子をおみやのそばでやしなつて居つたと申します。
- 五三九 下りる人もあり、「略」もあり、「略」もあり、見おくりに来た人もあつて、大そうこみ合つてゐます。
- 五三九 大そうこみ合つてゐます。
- 五三九 下りる人がまだ下りてしまはないうちに、もうのりこんだ人もありました。
- 五三九 かばんを持つて走つて行く人もあります。
- 五三九 かばんを持つて走つて行く人もあります。
- 五三九 まだきつぷを買つてゐる人もあります。
- 五四〇 かいさつ口では切符をしらべてゐます。
- 五四四 「略」、これからのる人の切符を切つてゐるのです。
- 五四六 「略」、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。
- 五四八 えきふが「略」、山のやうに荷物をつんで來ました。
- 五四九 まだむかふからいそいで走つて來る人があります。
- 五四三 まだむかふからいそいで走つて來る人があります。
- 五四八 文太郎ハ父ニツレラレテ、ハジメテ汽車ニノリマシタ。
- 五四二 マドカラ外ヲ見テキルト、「略」。
- 五四四 「略」、山毛川モ野原モ林モ後ノ方ヘトンデ行クヤウニ見エマス。
- 五四五 田デハタライテキル人モ、「略」。
- 五四六 「略」、道ヲ通ツテキル人モ、「略」。
- 五四一 「略」今見エタカト思フト、スグ後ニナツテシマヒマス。
- 五四二 走ツテキル汽車ガスレチガフ時ニハ、「略」。
- 五四三 「略」、向フノ汽車ニノツテキル人ノカホハヨク見エマセン。
- 五四七 文太郎ハフシギニ思ツテ外ヲ見ルト、「略」。
- 五四八 「略」、汽車ハハシノ上ヲ通ツテシマシタ。
- 五四二 文太郎ハビツクリシテ、父ニキ、マスト、「略」。
- 五四三 「略」コレハトンネルトイッテ、山ヲホリヌイタ所デス。」
- 五四六 トンネルヲ出ルト、マタ明ルクナツテ、ヒロイ海ガ見エマス。
- 五四七 文太郎ハヨロコビデ、「海ダ、海ダ。」トイッテキルウチニ、「略」。
- 五四八 文太郎ハヨロコビデ、「海ダ、海ダ。」トイッテキルウチニ、「略」。
- 五四八 「略」、又暗クナツテ、何モ見エマセン。
- 五四四 「略」、文太郎ハオモシロクテタマリマセン。
- 五四六 「略」、文太郎ハモツトノツテキタイト思ヒマシタ。
- 五四一 ある日友吉と音次郎の二人がよそからかへつて來る道で、「略」。
- 五四一 「略」、にはかに雲が出て、かみなりが鳴り出しました。
- 五四三 はじめのうちは遠くの方にきこえてゐましたが、「略」。
- 五四四 「略」、だん／＼近くなつて、雨もつよくふつてきました。
- 五四四 「略」、雨もつよくふつてきました。
- 五四五 音次郎はおどろいて、道ばたの高い木の下へにげこみました。
- 五四八 「略」かみなりの鳴る時には、そんな所にゐてはあぶない。」
- 五四一 友吉は「略。」といつて、そこをのかせようとしましたが、「略」。
- 五四六 友吉は「略。」といつて、むりに手をひつぽつてつれ出しました。
- 五四六 「略」、むりに手をひつぽつてつれ出しました。
- 五四一 「略」目がくらむやうないなびかりがして、耳がさけるやうなおそろしいかみなりが鳴りました。
- 五四三 二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふれました。
- 五四四 しばらくたつて、顔を上げて、そのあたりを見まはすと、「略」。
- 五四四 しばらくたつて、顔を上げて、そのあたりを見まはすと、「略」。
- 五四五 「略」、かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてゐました。
- 五四六 「略」、かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてゐました。
- 五四七 音次郎は友吉のかたに手をかけて、「略。」といひました。
- 五四一 「略」もし君が居なかつたら、僕は死んでしまつたのだらう。」
- 五四一 西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、「略」。
- 五四二 「略」、ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲノコス。
- 五四七 キ瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシテモ、ツケ物ニシテモタベ、「略」。
- 五四八 キ瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシテモ、ツケ物ニシテモタベ、「略」。
- 五四八 キ瓜ヤ白瓜ハ「略」、又ニシモタベ。
- 五四三 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエテキルノガアル。
- 五四三 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエテキルノガアル。
- 五四四 花ハ夕顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色デアル。
- 五四三 「略」、カウモリハ「略」。
- 五四三 「略」、ドチラハモツキマセンデ

シタ。
 五53 5 ソノ中ニケモノガ勝チサウニ
 ナツタノヲ見テ、ニハカニ「略。」
 トイツテ、ケモノノミカタニナリマ
 シタ。
 五53 6 園 「私ハカラダガネズミニニ
 テキルカラ、ケモノノ仲間ダ。」
 五53 8 (略)、ニハカニ「略。」ト
 イツテ、ケモノノミカタニナリマシ
 タ。
 五54 5 (略)、コンドハ「略。」ト
 イツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。
 五55 2 ソノ時カウモリガケモノノ方
 へ行キマスト、「略。」トイツテ、
 仲間へ入レマセン。
 五55 5 又鳥ノ方へ行キマスト、「オ
 前ハケモノダラウ。」トイツテ、ア
 ヒテニシテクレマセン。
 五55 5 (略)、アヒテニシテクレマセ
 ン。
 五55 7 シカタナシニ、ヒルノ間ハ木
 ノウロヤ穴ノ中ニカクレテキテ、夜
 ニナルト出テ「略。」
 五55 7 (略)、ヒルノ間ハ「略」ニカ
 クレテキテ、夜ニナルト出テ空ヲト
 ビアルクヤウニナツタトイフハナシ
 デス。
 五55 7 (略)、夜ニナルト出テ空ヲト
 ビアルクヤウニナツタトイフハナシ
 デス。
 五56 2 人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタ
 リシテタベマス。

五56 7 大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ
 出シマシタガ、(略)。
 五56 8 (略)、ソレカラ後ニハ石ト
 金ヲウチ合セテ出スヤウニナリマシ
 タ。
 五57 3 近ゴロハ又マツチトイフベン
 リナ物ガ出来テ、火打石ヤ火打金ヲ
 使フ人ハメツタニアリマセン。
 五57 7 (略)炭ハ、木ヲヤイテコシ
 ラヘタモノデス。
 五58 2 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土
 ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物
 デ、(略)。
 五58 3 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土
 ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物
 デ、(略)。
 五58 4 (略)、石ノヤウニカタクナツ
 テキマスカラ、石炭トイヒマス。
 五60 1 (略)、ワキ出タママノハニゴ
 ツテキマスカ、(略)。
 五60 3 ランプニ石油ヲトボスヤウニ
 ナツテカラ、アンドンハダンダンニ
 スタレテ来マシタ。
 五60 4 (略)、アンドンハダンダンニ
 スタレテ来マシタ。
 五60 8 園 あれ、松蟲が鳴いてゐる。
 五62 4 園 あとから馬おひおひつ
 て、ちよんくくくく すいつち
 よん。
 五63 2 園 「ねえさんの所からお手紙
 が来てゐます。
 五63 3 園 読んでごらんさい。」

五63 5 おちよは取上げて読んで見る
 と、(略)。
 五63 5 おちよは取上げて読んで見る
 と、(略)。
 五63 8 園 おはなさんもつれて一しよ
 にお出でなさい。
 五64 4 (略)と書いてあります。
 五64 4 おちよはよろこんで、母には
 なしますと、(略)。
 五64 7 園 (略)、二人とも行つてお出
 でなさい。
 五64 8 園 それから今すぐにへんじを
 書いてお出しなさい。
 五65 2 園 (略)、どう書いてよいか
 わかりません。
 五65 6 おちよはしばらく考へて、葉
 書の裏へ次のやうに書きました。
 五65 8 園 お手紙をいたゞいて、まこ
 とにうれしうございます。
 五66 5 園 そのおしまひのあいてゐる
 所へ、「(略)」と書きたして下さい。
 五66 6 園 そのおしまひのあいてゐる
 所へ、「(略)」と書きたして下さい。
 五66 7 園 それから表の方へあて名を
 書いてお出しなさい。
 五67 3 大キナ字ヲ書イタ大キナノボ
 リガ立テテアル。
 五67 5 イサマシイタイコノ音ガ森ノ
 中カラキコエテクル。
 五67 7 道ノ兩ガハニハ、(略)ナド
 ガ店ヲナラベテクル。
 五67 8 子ドモハフダンヨリハ美シイ

着物ヲ着テアソンデクル。
 五67 8 子ドモハフダンヨリハ美シイ
 着物ヲ着テアソンデクル。
 五68 2 オチヨトオハナハアネニツレ
 ラレテ、オ宮ニサンケイシタ。
 五68 4 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石
 ダンノ道ヲ上ツテ、(略)。
 五68 5 大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石
 ダンノ道ヲ上ツテ、モウ一ツ小サナ
 鳥居ヲクバルト、(略)。
 五68 8 オ宮ノ正面ニ大キナ鈴ガ下ツ
 テクル。
 五69 1 サンケイスル人ハ皆カハル
 ぐコレヲ鳴ラシテヲガム。
 五69 2 オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシ
 テヲガンダ。
 五69 4 オ宮ニハエマガタクサンカケ
 テアル。
 五69 7 又日本ヘイガロシヤヘイトク
 ハカツテクルエモアル。
 五70 1 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
 マツテクル。
 五70 8 鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷
 川ノ中ヘハイリマシタ。
 五71 2 フト水ニウツツタジブンノス
 ガタヲ見テ、アタマカラ足マデツク
 ぐトナガメテ、ヒトリゴトヲハジ
 メマシタ。
 五71 3 (略)、アタマカラ足マデツク
 ぐトナガメテ、ヒトリゴトヲハジ
 メマシタ。
 五71 5 園 牛ノ角トハチガツテ枝ガア

ル。

五七〇 〔略〕、オチルトスグ又新シイノガハエテ、ソノタビニ枝ガ一ツツツエル。

五七一 〔略〕角ノアルケモノモタクサン知ツテキルガ、〔略〕。

五七二 〔略〕、コンナリツパナ角ヲモツテキルモノハナイヤウダ。

五七三 〔略〕クレドモノ足ハ細クテ、イカニモ弱サウニ見エル。

五七四 〔略〕出来ルコトナラ、モツト太クテ強イ足ガホシイモノダ。

五七五 〔略〕、オドロイテカケ出シマシタ。

五七六 〔略〕カリ犬ガ四五匹デオツカケテ来マス。

五七七 〔略〕鹿ハ輕イ足デズン／＼ニゲテ、林ノ中ヘカケコミマシタ。

五七八 〔略〕角ガ木ノ枝ニヒツカ、ツテ、イクラモガイテモハヅレマセン。

五七九 へいけのぐんぜいがふくはらのしろを守つてゐる。

五八〇 東生田の門から西一の谷の門までの間、〔略〕、人や馬でふさがつてゐる。

五八一 又海には一面にいくさ船がならんでゐて、〔略〕。

五八二 又海には一面にいくさ船がならんでゐて、〔略〕何千本の赤はたは、まるで火のもえたつたやうに見える。

五七〇 げんじは二手に分れて、のりよりのぐんぜいは東の門へ向ひ、よしつねのぐんぜいは西の門へ向つた。

五七一 〔略〕何でも裏からまはつて、てきのふいをうたなければならぬ。

五七二 しかしよしつねは「〔略〕。」と考へて、〔略〕、こつそりと裏道からひよどりこえに向つた。

五七三 〔略〕、強いのばかり三千人をすくつて、こつそりと裏道からひよどりこえに向つた。

五七四 ひよどりこえはしろの北の方にあつて、よつぽどけはしい所である。

五七五 〔略〕、どこをどう行つてよいかわからない。

五七六 そのうちに日が暮れて、まつ暗になつてしまつた。

五七七 そのうちに日が暮れて、まつ暗になつてしまつた。

五七八 この時べんけいは火の明りをたよりにたづねて行つて、〔略〕。

五七九 この時べんけいは火の明りをたよりにたづねて行つて、一人のかりうどをつれて来た。

五八〇 この時べんけいは〔略〕、一人のかりうどをつれて来た。

五八一 手にはかりに使ふ弓矢を持つてゐる。

五八二 よしつねはよろこんで、刀やよろひをやつてけらいにした。

五七四 よしつねはよろこんで、刀やよろひをやつてけらいにした。

五七五 〔略〕「鹿も四つ足なら馬も四つ足、たゞつめがわれてゐるとゐないだけのちがひだ。

五七六 よしつねはこれを聞くと、「〔略〕。」と言ひつけて、夜のうちにがけの上まで出た。

五七七 よしつねはこゝぞと思つて、「進めく。」とさしづをしたが、〔略〕。

五七八 〔略〕、馬もこはがつてすくんでしまひ、〔略〕。

五七九 〔略〕、馬もこはがつてすくんでしまひ、〔略〕。

五八〇 〔略〕、人も顔を見合せて進まうとはしない。

五八一 この時よしつねは、〔略〕、馬に一むちあててかけ下りた。

五八二 〔略〕、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。

五八三 へいけはふいを打たれて、どうすることも出来ない。

五八四 三方から攻立てられて、さん／＼にうちやぶられた。

五八五 四方は海にとりまかれてゐる。

五八六 海岸には〔略〕、平たい砂原になつてゐる所が多い。

五八七 〔略〕、高い松はしぜんにおもしろい枝ぶりになつてゐる。

五八八 どの山にも木がよくしげつてゐる。

五八九 松・杉・ひのきなどが一面にはえてゐるのは目がさめるやうな心持がする。

六〇〇 〔略〕たきや谷川があつて、一そう山の景色を引立てる。

六〇一 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇二 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇三 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇四 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇五 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇六 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇七 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇八 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六〇九 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一〇 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一一 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一二 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一三 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一四 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一五 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一六 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

六一七 早い流をいかだの下つて行くのや、しづかな川をほかけ船の上つて行くのは、〔略〕。

波が立つてゐます。

六八 八 たんぼのさきにごんもりとした森があつて、森の間からはお社の赤い鳥居が見えます。

六九 四 あぜ道を七八町通つて、小川の橋を渡ると、(略)。

六九 六 まづ御社にさんけいして、しばらくそこで休みました。

六九 八 それは細くてけはしい道で、(略)。

六一〇 三 (略)、道ばたにはきれいな草花が咲きみだれてゐます。

六一〇 六 (略) 足もだいいぶくたびれて、はらもすつきりすきました。

六一〇 八 (略)、草の上にすわつて、にぎりめしをたべた時は(略)。

六一一 六 それから又方々であそんで、うちへかへつたのは夕方でした。

六一一 八 晩にはくたびれた足をのぼして、けさまで一眠に眠りました。

六一二 二 ツバメハ暖ニナルト、ドコカラカトンデ来テ、(略)。

六一二 三 ツバメハ暖ニナルト、ドコカラカトンデ来テ、涼シクナルト、マタドコカヘトンデ行ク。

六一二 四 ツバメハ(略)、涼シクナルト、マタドコカヘトンデ行ク。

六一二 五 ガンハツバメノカヘルジブンニ来テ、ツバメノ来ルジブンニカヘル。

六一二 六 モウ秋ニナツタカラ、ガンガオヒオヒトンデ来ル。

六一二 八 ガンハイツデモ一ショニナツテ、列ヲツクツテトブ。

六一三 一 ガンハイツデモ一ショニナツテ、列ヲツクツテトブ。

六一三 二 ソノ時ニハ一羽ノガンハ列ヲハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。

六一三 三 ソノ時ニハ一羽ノガンハ列ヲハナレテ、少シ先ノ方ニトンデ行ク。

六一三 五 ホカノガンハ道アンナイノ行ク方ヘツイテ行ク。

六一四 三 ガンノ鳴クコエヲ聞クノハ、空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ。

六一四 八 (略)、稲がよくじゅくして、重さうにほをたれてゐます。

六一五 一 (略)、稲がよくじゅくして、重さうにほをたれてゐます。

六一五 二 (略)、人が大ぜい出て、稲をかつてゐます。

六一五 三 (略)、人が大ぜい出て、稲をかつてゐます。

六一五 六 それで取入れの時は大へんにいそがしくて、夜も十分に眠れないほどです。

六一五 八 刈つた稲はさをや木にかけるか、地面にひろげるかして、よく日にかわかしす。

六一六 二 かわくと、それを稲こきでこいてもみを取ります。

六一六 四 そのもみを又よく日にかわかしして、すりうすですつて、もみがらをのけると、(略)。

六一六 五 そのもみを又よく日にかわかしして、すりうすですつて、もみがらをのけると、(略)。

して、すりうすですつて、もみがらをのけると、(略)。

六一六 八 米を俵に入れて、その俵をつみ重ねてながめた時は、(略)。

六一七 一 米を俵に入れて、その俵をつみ重ねてながめた時は、(略)。

六一七 三 (略)、田うゑや草取りの苦しさも、取入れのいそがしさも、全くわすれてしまひます。

六一七 五 (略) 象の目方をはからうとしたが、どうしてはかつてよいかりませんでした。

六一八 五 (略)、どうしてはかつてよいかりませんでした。

六一八 八 (略) 「そんなら私がはかつて見ませう。」

六一九 一 その時そこに居た一人の子どもが、「(略)」といつて、まづ象を船にのらせました。

六一九 六 それから象をおろして、その代りに石をたくさんつみしました。

六二〇 一 さうして前にしるしを付けておいた所まで船が水につかつた時に、(略)。

六二〇 二 (略)、その石をおろして、なんどにもはかりにかけて、その目方を知りました。

六二〇 三 (略)、なんどもはかりにかけて、その目方を知りました。

六二〇 六 (略) 大きな水がめがあつて、雨水が一ぱいたまつてゐました。

六二〇 七 (略)、雨水が一ぱいたまつてゐました。

六二〇 八 (略)、雨水が一ぱいたまつてゐました。

ゐました。

六二二 八 一人の子どもが水がめのふちへ上つて、遊んでゐるうちに、(略)。

六二二 八 一人の子どもが水がめのふちへ上つて、遊んでゐるうちに、(略)。

六二三 一 (略) ふみはづして、かめの中へおちました。

六二三 二 すてておけば、すぐ死んでしまひます。

六二三 三 すてておけば、すぐ死んでしまひます。

六二三 四 (略) 皆うろたへてさわざました。

六二三 六 その時一人の子どもは大きな石を持つて来て、力まかせに投げつけました。

六二三 七 (略) 大きな石を持つて来て、力まかせに投げつけました。

六二四 一 それがため、かめに大きな穴があいて、水が流れ出ましたから、(略)。

六二五 三 金ヤギンハ美シクテ、指ワニナツタリ、(略)、ソノ他イロクナカザリ物ニナリマスガ、(略)。

六二五 七 銅ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、(略)。

六二六 七 「ナルホド銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、(略)。

六二七 一 (略)、ソレヨリモツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六二七 一 (略)、ソレヨリモツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六二八^二 ヤクワンハソレヲ聞イテ、
 「略。」トイヒマシタ。
 六二八^三 「ソレデモ鐵ハデキニサビ
 テ、赤クナルデハアリマセンカ。」
 六二八^四 モシセイ出シテ使ツテクレ
 サハスレバ、(略)。
 六二八^五 モシセイ出シテ使ツテクレ
 サハスレバ、(略)。
 六二八^六 モシセイ出シテ使ツテクレ
 サハスレバ、(略)。
 六二八^七 モシセイ出シテ使ツテクレ
 サハスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキ
 マス。
 六二九^一 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、
 時々青イ物ヲ出シマセウ。
 六二九^四 (略)、ヤクワンハダマツテシ
 マヒマシタ。
 六三〇^一 (略)、二人が店のるすをして
 ると、(略)。
 六三〇^三 一本三せんづつのを二本買つ
 て、十せん銀貨を出したから、(略)。
 六三〇^七 直吉は後でふと氣が附いて、
 「(略)」といつて、(略)。
 六三二^二 直吉は(略)、(「略」)とい
 つて、すぐに追つかけて行つて、殘
 りの一錢を渡した。
 六三二^三 (略)、すぐに追つかけて行つ
 て、殘りの一錢を渡した。
 六三二^四 (略)、すぐに追つかけて行つ
 て、殘りの一錢を渡した。
 六三三^三 かへつて來ると、(略)。
 六三一^四 かへつて來ると、長松は笑つ
 て、「(略)」といつたら、(略)。
 六三一^五 (略)、一錢まうけておけ

ばよかつたのに。」
 六三二^一 (略) ほんとのまうけでない金は
 一厘でも取つてはならない。」
 六三二^三 (略)、だまつてゐれば、
 誰にも知れはしない。」
 六三二^六 (略) 「だんながおるすだから、
 なほさらまちがひがあつてはならな
 い。」
 六三二^七 (略)「といつても、長松は
 まだ笑つてゐた。
 六三二^八 あとになつて、主人はこの事
 を聞いて、(略)。
 六三二^八 (略)、主人はこの事を聞いて、
 直吉は正直ものだとはめて、長松に
 はひまをやつた。
 六三三^一 (略)、直吉は正直ものだとは
 めて、長松にはひまをやつた。
 六三五^五 (略)、ケモノノ毛ヲツムギ
 テ織リタルモノヲ毛織物トイフ。
 六三六^一 今日天氣がよくて暖いか
 ら、うちではすゝはきをした。
 六三六^二 僕も手ぬぐひをかぶつて、手
 っだひをした。
 六三六^三 ゆか下から去年なくしたこま
 が出てうれしかった。
 六三六^五 ゆにはいつて、ごはんをたべ
 ると、つかれてすぐにねてしまつた。
 六三六^六 (略)、つかれてすぐにねてし
 まつた。
 六三六^六 (略)、つかれてすぐにねてし
 まつた。
 六三六^八 學校で徳川光圀とくがわみつゐの話はなしを聞き

て、紙などをそまつにしてはならな
 いと思つた。
 六三七^一 (略)、紙などをそまつにして
 はならないと思つた。
 六三七^二 朝おきて見ると、池に氷がは
 つてゐた。
 六三七^三 朝おきて見ると、池に氷がは
 つてゐた。
 六三七^四 朝おきて見ると、池に氷がは
 つてゐた。
 六三七^五 朝おきて見ると、池に氷がは
 つてゐた。
 六三七^六 北風が一日ふき通して寒かつ
 た。
 六三七^六 學校からかへつてから、をば
 さんの所へ使ひに行つた。
 六三八^一 朝おきると、雪が五六寸つも
 つてゐた。
 六三八^二 學校で雪投をして遊んだ。
 六三八^五 水せんの花を見てゑをか
 いた。
 六三九^三 昨日六時の汽車に間に合つ
 て、晩の九時二十分に京都に着いた。
 六三九^六 第一番に御所ををがんで、
 それから東山の方へ行つた。
 六四〇^二 明日は銀閣寺ぎんかくじを見て、それ
 から北山の方へ行つて、金閣寺きんかくじを見
 て、(略)。
 六四〇^三 明日は銀閣寺ぎんかくじを見て、それ
 から北山の方へ行つて、金閣寺きんかくじを見
 て、(略)。
 六四〇^四 明日は銀閣寺ぎんかくじを見て、(略)、
 金閣寺きんかくじを見て、北野の天神様へさん
 けいする。
 六四〇^六 明後日はこゝを立つて、道
 で用をたして、この次の水曜日まで

にはかへる。
 六四〇^六 (略)、道で用をたして、こ
 の次の水曜日までにはかへる。
 六四二^二 (略)、たのしみにして待つ
 ておいで。
 六四二^三 (略)、たのしみにして待つ
 ておいで。
 六四二^四 (略)、たのしみにして待つ
 ておいで。
 六四二^五 (略)、たのしみにして待つ
 ておいで。
 六四二^六 人ノフリ見テ、ワガフリ直セ。
 六四二^四 ワガ身ヲツメツテ、人ノイタ
 サヲ知レ。
 六四三^五 日本中を平げて、後には朝鮮ちよせん
 までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ
 人は、(略)。
 六四三^五 日本中を平げて、後には朝鮮ちよせん
 までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ
 人は、(略)。
 六四四^四 (略)、耳をすまして聞いてゐ
 ました。
 六四四^五 (略)、耳をすまして聞いてゐ
 ました。
 六四四^六 (略) 武士になりたいと思つ
 てゐたのです。
 六四四^八 お寺では「(略)」といつて、
 うちへかへしました。
 六四五^二 けれども日吉丸は、どうかし
 てりつばな武士になりたいと思つて
 ゐましたから、(略)。
 六四五^三 けれども日吉丸は、どうかし
 てりつばな武士になりたいと思つて
 ゐましたから、(略)。
 六四五^七 (略)、木下藤吉郎秀吉と名の
 つて、織田信長につかへました。

六46 3 (略)、はや、馬を乗りまはしてゐる者があります。

六46 6 又ある朝早く信長がかりに出ようとして、「(略)。」とよびますと、(略)。

六47 1 圖 「藤吉郎秀吉こゝにひかへて居ります。」

六47 3 (略) 主人に仕へるこゝろさしにかんしんして、これから信長は目をかけて使ひました。

六47 4 (略)、これから信長は目をかけて使ひました。

六47 8 信長はどうとう秀吉にいひつけて、直させることにしました。

六48 2 秀吉は大ぜいの人を十組に分けて、一組に十間づつわりあてて、仕事をいそがせましたから、(略)。

六48 2 秀吉は大ぜいの人を十組に分けて、一組に十間づつわりあてて、仕事をいそがせましたから、(略)。

六48 4 信長はこれを見て、ますますかんしんして、(略)。

六48 4 信長はこれを見て、ますますかんしんして、(略)。

六48 4 信長はこれを見て、ますますかんしんして、(略)。

六48 5 (略)、それからだん／＼重く取立てて、一方の大將にしました。

六49 4 (略)、敵は戦はないでにげて行くやうになりました。

六49 5 (略)、敵は戦はないでにげて行くやうになりました。

六49 6 秀吉が信長に言ひつかつて、

敵を攻めに行つてゐた間の事でした、(略)。

六49 7 秀吉が信長に言ひつかつて、敵を攻めに行つてゐた間の事でした、(略)。

六50 2 秀吉は(略)、すぐに敵とわ

六50 2 秀吉は(略)、すぐに敵とわ

六50 2 秀吉は(略)、すぐに敵とわ

六50 6 (略) 勝家などはこれをきら

六50 7 (略) 勝家などはこれをきら

六51 4 支那からは大兵をおくつて、

六51 6 (略) 支那からは大兵をおくつて、

六51 6 (略) 支那からは大兵をおくつて、

六51 7 (略) 支那からは大兵をおくつて、

六51 7 (略) 支那からは大兵をおくつて、

六52 3 秀吉は大そうおこつて、(略)、

六52 6 (略)、その使を追ひかへして、

二度目の朝鮮せいばつをはじめました。

六53 1 (略) 病氣でなくなつてしま

六53 7 圖 (略)、ミソモ醬油モ塩ヲ入

六55 5 ある時謙信が山の上に陣取つ

六55 6 (略)、信玄は兵を右と左と二

六55 7 謙信はそれを知つて、こちら

六56 2 信玄はふいをうたれておどろ

六56 3 (略)、たちまち陣立をかへて

六56 7 (略) いくさがはげしくなる

六56 8 急に馬に打乗つて、味方のま

六57 1 (略)、味方のまつ先に立つて

六57 1 (略)、信玄の本陣に切りこん

六57 1 (略)、信玄に打つてかゝつた。

六57 3 (略)、えが折れて、かた先へ

六57 6 馬はおどろいてとび上つた。

六58 4 塩はとなりの國から買つてゐ

思つて、塩を送らせないことにした。

六58 6 謙信はそれを聞いて、「(略)。」

六58 7 圖 「われ／＼はたがひにい

六59 2 謙信はそれを聞いて、「(略)。」

六59 5 それから信玄が死んだと聞い

六60 3 圖 (略)、たもとを顔におしあ

六60 4 圖 (略)、たもとを顔におしあ

六60 5 圖 姉のおつるは立ちよつて、

六60 6 圖 (略) 「なんでそんなに泣いて

六61 1 圖 (略)、その子のかたに手

六61 3 圖 涙をふいて女の子、「いゝ

六62 3 圖 (略) わたしの手から

六63 4 圖 (略)、やう／＼杖を見つけ

六63 4 圖 (略)、やう／＼杖を見つけ

出し、すぐに拾つて取つてやる。

- 六63 5 園 めくらは杖を受取つて、
 「(略)」とれいいつて、(略)。
 六63 7 園 (略)、「(略)」とれいいつて、見えぬ目ながらふりかへり、二人の行くへ見送れば、(略)。
 六64 5 熊ガ人ニムカツテ来ル時ニハ、(略)。
 六64 6 (略)、後足デ立上ツテ、大キナ手ノヒラデツカミカ、ツテ、スルドイ爪デヒツカキマス。
 六64 7 (略)、大キナ手ノヒラデツカミカ、ツテ、スルドイ爪デヒツカキマス。
 六65 6 シグマトイフ熊ハ小馬ホドアツテ、力ガ強ウゴザイマス。
 六65 8 大テイノケモノハ一打デコロサレテシマヒマス。
 六66 2 熊ハ(略)、人ノ家ノクラノ戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ俵ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。
 六66 3 熊ハ(略)、カズノ子ノ俵ヲカツイデ、ニゲテ行クコトガアルトイヒマス。
 六66 5 又川バタニ行ツテ、魚ヲツカマヘルコトガアリマス。
 六66 7 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。
 六66 7 ソノツカマヘタ魚ヲ竹ノ枝ニ通シテ、肩ニカツイデ行キマスガ、(略)。
 六67 7 (略)、後カラ一ツツツヌケテオチルノヲ知りマセン。
 六67 1 ソレヲ人ガ後カラ拾ツテ来ルコトガアリマス。
 六67 6 園 (略)ハ板又ハ柱トシテ家ヲタテ、橋ヲカケ、船ヲ作ルニ用フ。
 六69 1 園 材木ヲヒキテ、板又ハ柱トナスモノハコビキナリ。
 六69 2 園 材木ヲ用ヒテ家ヲタツルモノハダイクニシテ、(略)。
 六70 2 あくびをしたり、わき見をしたりしてゐて、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、(略)。
 六70 2 あくびをしたり、わき見をしたりしてゐて、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、(略)。
 六70 4 (略)、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、顔を赤くする子供もございました。
 六70 5 ちゃんとしせいをよくして、氣を附けてゐて、(略)。
 六70 5 ちゃんとしせいをよくして、氣を附けてゐて、(略)。
 六70 6 ちゃんとしせいをよくして、氣を附けてゐて、何を聞かれても、はつきりと答へる子供もございました。
 六71 1 (略)、書きそこなつて、紙をたくさんほごにしたりするやうな、(略)。
 六71 3 よくおちついてゐて、少しも書きそこなひなどをしてない子供もございました。
 六71 3 よくおちついてゐて、少しも書きそこなひなどをしてない子供もございました。
 六71 6 度々けつせきしたり、ちこくしたりして、先生にしかれた子供もございました。
 六72 4 (略)、顔のちがふやうに、せいしも色々かはつてゐます。
 六72 6 (略) 善い子供は、おとなになつてから、りつばな人になりました。
 六72 8 (略) 悪い子供は、おとなになつてから、大ていつまらない人になつてゐます。
 六73 1 (略) 悪い子供は、おとなになつてから、大ていつまらない人になつてゐます。
 六74 2 むねの上には紙のぬさを立てて、色どつた大きな弓矢や扇車がかざつてあります。
 六74 3 (略)、色どつた大きな弓矢や扇車がかざつてあります。
 六74 5 ぬさの前にはおみきやもちや魚がそなへてあります。
 六74 6 男や女や年よりや子供も大ぜい集つてゐますが、(略)。
 六74 7 (略)、新しいしるしばんてんを着てゐる大工が一番目立ちます。
 六75 1 (略)、大ぜいがあらそつてそれを拾ひました。
 六75 4 これがすむと、むしろをしいて、お祝ひのさかもりがはじまりました。
 六75 8 一人の年取つた男がこゑをはり上げて、木やりの歌を歌ひ出すと、(略)。
 六76 1 (略)、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。
 六76 2 (略)、わかものどもはこゑをそろへて、そのあとについて歌ひました。
 六76 3 歌がすむと手打をして、ロキに「(略)」といひました。
 六76 6 羽織・はかまの主人は一同に向つて、うれしさうに、「(略)」とあいさつしました。
 六77 2 廣イ港ガ船デーパイニナツテキル。
 六77 4 (略)ホバシラガタクサン重リ合ツテ、マルデ林ノヤウニ見エル。
 六77 6 (略)、煙ヲ出シナガラ早く走ツテ行ク小サナ船ガアル。
 六77 8 小サナ和船モアチラコチララコギマハツテキル。
 六78 2 オキノ方カラ黒クヌツタ船ガハイツテ来ル。
 六78 4 (略)帆カケ船モイクツトナクハイツテ来ル。
 六78 7 (略)汽船ハシキリニキテキ

ヲ鳴ラシテキル。

六79 1 〔略〕ハトバノ右ニ着イテキル汽船ハ今荷物ヲオロシテキル。

六79 2 〔略〕ハトバノ右ニ着イテキル汽船ハ今荷物ヲオロシテキル。

六79 3 〔略〕左手ノ汽船ハ今荷物ヲ積ミコシテキル。

六79 4 〔略〕ドンナ重イ荷物デモラク／＼ト上ゲオロシテキル。

六80 1 〔略〕オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。

六80 2 〔略〕オロシタ荷物ハスグニ車ニノセテ、馬ニヒカセテ行ク。

六80 3 〔略〕大阪ハ昔ハ難波トイヒテ、仁徳天皇ノ都シタマヒシトコロナリ。

六80 4 〔略〕昔仁徳天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノマツシキヲアハレミタマヒキ。

六81 1 〔略〕今ハ工業モ大イニヒラケテ、エントツノ煙ハ空ヲオホヘリ。

六81 2 〔略〕淀川ハイクスデニモ分レテ海ニソ、グ。

六81 3 〔略〕又多クノホリアリテ、川ト川トワツナゲリ。

六86 1 〔略〕遠き祖先のをしへをも守りてつくせ、家のため、國のため。

七17 1 〔略〕「我聞ク、シ、ハチヲ生メバ、三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテ、ソノ力ヲタメストイフ。」

七24 1 〔略〕我が生キテフタ、ビ汝ヲ

見シコトハカタカルベシ。

七27 1 〔略〕一門ノ者一人ニテモ生キ残りテアル間ハ、(略)。

七28 1 〔略〕忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ。

七31 1 〔略〕「ト、ネンゴロニ言ヒフクメテ、國ヘカヘシタリ。」

七32 1 〔略〕正成ハタシテ戦死シテ、ソノクビハ家ニ送ラレタリ。

七33 1 〔略〕正行ハコレヲ見テ、カナシサノアマリ、ツト立チテ別室ニ行キタリ。

七34 1 〔略〕正行ハ(略)、ツト立チテ別室ニ行キタリ。

七34 2 〔略〕母アヤシミテ、ソノ室ヲウカマフニ、(略)。

七36 1 〔略〕正行ハ父ノカタミノ刀ヲ抜キテ、今ニモハラヲ切ラントス。

七37 1 〔略〕母ハ走りヨリテ、正行ノウデヲオサヘ、(略)。

七42 1 〔略〕父ノ汝ヲカヘシタマヒシハ、汝ノヲサナクシテ死ヌルヲカナシミタマヒテニアラズ。

七43 1 〔略〕大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七44 1 〔略〕大人トナリテ、君ノ御タメニ忠義ノ兵ヲ起シテ、賊ヲ平ゲシメントナリ。

七45 1 〔略〕ミツカラ御コトバヲウケタマハリ來リテ我ニツゲタルヲ、汝

ハ早クモワスレタルカ。

七49 1 〔略〕正行大イニカンジテ、コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナカリキ。

七49 2 〔略〕コレヨリ後ハ父ト母トノ教ヲ守リテ、一日モワスル、コトナカリキ。

七53 1 〔略〕正行戦死シテ後ハ、敵ノイキホヒマス／＼強ク、(略)。

七55 1 〔略〕楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。

七57 1 〔略〕アル年敵ノ大將高師直六万人ノ大兵ヲヒキキテ來リ攻ム。

七58 1 〔略〕正行コノ度ハサイゴノ合戦セントテ、皇居ニマキリテ申シ上グルヤウ、(略)。

七67 1 〔略〕「残りタル一門ノモノドモヲ集メテ、朝敵ヲホロボセ。」

七69 1 〔略〕モシ病ニカ、リテ早く死ナバ、(略)。

七75 1 〔略〕今一度天顔ヲヲガミテマキリタシ。」

七79 1 〔略〕天皇ハ(略)、正行ヲ近ク召シタマヒテ、(略)トオホセ出サレタリ。

七81 1 〔略〕「親子二代相ツバイテノ忠義カンズルニアマリアリ。」

七83 1 〔略〕進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ。

七86 1 〔略〕正成ハ(略)、花々シク戦ヒテ、一族ノ人々トモニ戦死ヲト

ゲタリ。

七94 1 〔略〕道をはさんで畠一面に、麥はほが出る、葉は花盛り。

七104 1 〔略〕ながい夏の日いつしか暮れて、うゑる手先に月かげ動く。

七109 1 〔略〕二百十日も事なくすんで、村の祭のたいこがひびく。

七113 1 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七118 1 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七119 1 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七114 1 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七114 2 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七115 1 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七115 2 〔略〕刈つて、ひろげて、日にかわかつて、米にこなして、俵につめて、(略)。

七123 1 〔略〕たのもちひくねずみの音も、ふけてのきばに雪降積る。

七128 1 〔略〕品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけて

す。

七128 2 〔略〕品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけて

す。

七128 3 〔略〕品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけて

七12 8 ㊦ (略)、品物を渡しておいて、後になつて代金を受取るのがかけです。

七13 4 ㊦ たとへば十五錢で賣つてよいものを二十錢といふやうなものです。

七14 2 ㊦ 卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、(略)。

七14 2 ㊦ 卸賣といふのは品物をたくさん持つてゐて、小賣店へ大口に賣渡すことで、(略)。

七14 6 ㊦ 問屋といふのは他人からのまれて、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。

七14 7 ㊦ (略)、品物を賣つたり買つたりして、口錢を取る店のことです。

七14 9 ㊦ たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にたのまれて、それをほかへ賣渡してやり、(略)。

七15 1 ㊦ たとへばごふく問屋といふのは、織物を賣りたいといふ人にたのまれて、それをほかへ賣渡してやり、(略)。

七15 2 ㊦ (略)、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。

七15 3 ㊦ (略)、又織物を買ひたいといふ人にたのまれて、それをほかから買取つてやる店のことです。

七15 4 ㊦ しかし卸賣商人で、問屋を

してゐる場合がたくさんあります。七15 7 ㊦ 急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。

七16 3 ㊦ (略)、何かあちらでとゝのへて来る物がございますなら、(略)。

七16 5 ㊦ (略)、御多分りよくおつしやつて下さい。

七17 4 ㊦ おほせにあまえて申し上げますが、(略)。

七17 6 ㊦ (略)、西洋西瓜の種を三色ばかり買つて来ていたゞきたうございます。

七17 6 ㊦ (略)、西洋西瓜の種を三色ばかり買つて来ていたゞきたうございます。

七17 9 ㊦ (略)、なるべく大きくてうまい實のなるやうなのをお願い申します。

七18 4 ㊦ 又母がかね／＼めづらしい草花をほしくと申して居りますから、(略)。

七18 5 ㊦ (略)、これも二三種買つて来ていたゞきたうございます。

七18 5 ㊦ (略)、これも二三種買つて来ていたゞきたうございます。

七19 3 ㊦ にはの藤の花が咲いて、風が吹く度にむらさきのふさが動いてゐる。

七19 4 ㊦ (略)、風が吹く度にむらさきのふさが動いてゐる。

七19 5 ㊦ 畠のゑんどうがかきの外からこゑをかけて、「(略)」といふ。

七19 6 ㊦ 「とくに申し上げようと思つてゐました。」

七20 7 ㊦ 「あなたと私は大そう似てゐるではありませんか。」

七21 1 ㊦ 葉は羽形で、二枚づつ向ひ合つてゐますし、(略)。

七21 1 ㊦ (略)、花は同じく蝶の形をしてゐます。

七21 6 ㊦ 私はこんな大きななりをしてゐますが、(略)。

七21 7 ㊦ (略)、畠の藤豆さんとはちがつて、私の豆はたべられません。

七22 3 ㊦ 私どもの親類で、小さくてかはいらしいのは、(略) れんげ草でございませう。」

七23 1 ㊦ 保己二ハ(略)、人ニ書物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカバ、(略)。

七23 6 ㊦ (略)、多クノデシ保己二ニツキテ學ビシカバ、(略)。

七24 2 ㊦ アル夜弟子ヲ集メテ、書物ノ講義ヲセシ時、(略)。

七24 3 ㊦ (略)、風ニハカニ吹キテ、トモシビキエタリ。

七24 8 ㊦ 保己一ハ笑ヒテ、「(略)。」トイヒタリトゾ。

七27 1 ㊦ フトコロ手バカリシテキル人ガ多ケレバ多イ程オトロヘマス。

七27 4 ㊦ 筆一本デ美シイエヲカイタリ、ノミ一ツデ見事ナホリ物ヲコシラヘタリシテ、人ヲ感心サセルノモ、(略)。

七28 7 ㊦ 一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。

七29 1 ㊦ 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そうな手間がかかる。

七29 2 ㊦ (略)、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そうな手間がかかる。

七30 1 ㊦ (略)、色はじめは黒いが、だん／＼かはつて青白くなる。

七30 3 ㊦ かへりたてから、しきりに食物をさがしてゐて、桑の葉をやると、すぐ食ひはじめる。

七30 6 ㊦ 小さい時分はやはらかな葉をこまかく切つてやるが、大きくなると、枝のまゝやる。

七30 8 ㊦ 食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。

七30 9 ㊦ (略)、頭をうごかして、しきりに桑の葉をたづねる。

七31 8 ㊦ 眠る度に皮をぬぎかへて、しまひにはからだが見え

七31 9 ㊦ (略)、しまひにはからだが見え

七32 2 ㊦ この時(略)まぶしへうつしてやると、(略)。

七32 2 ㊦ (略)、口から美しい絲を出して、からだを包む。

いふことであります。

七46 西 洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、

「(略)。」トイフト、(略)。

七46 世ノ中ガヒラケテカラ、

(略)、僕ラノ仲間ノ方ガヨケイニ用

ヒラレルヤウニナツタカト思フ。

七47 子ハ皆僕ラノ仲間デハツテアルデハ

ナイカ。

七47 伊ヤ、君ラハ破レ易

クテ、少シモ強ミトイフモノガナイ。

七48 日本紙ハコヨリニシテ物ヲ

シバルコトガ出来ル。

七48 日本紙ハ笑ツテ、「(略)。」水ニ

スレルグラキハ何デモナイコトダ。」

七49 (略)、日本紙ハ神ダナヲ指サ

シテ、「(略)。」トイヒマシタ。

七50 松村さん、郵便。」とよび

て、配達夫は入口に立ちたり。

七50 お花は「はい。」と答へて

受取らんとせしが、(略)。

七50 「おかあさんをよんで下さ

い。」

七50 母は出で来りて、やがて六

錢をはらひて、一通の手紙を受取り

たり。

七50 母は出で来りて、やがて六

錢をはらひて、一通の手紙を受取り

たり。

七51 お花はあやしみて、「(略)。」

と問へり。

七51 「これにはちやんと三錢の

切手はつてあるのに、なぜまたお

あしを拂ふのですか。」

七51 この手紙は四匁より重い

に、差出人が三錢しかはつておきま

せん。

七53 昔はひきやくといふものが

あつて、手紙や品物を配達しました

が、(略)。

七53 今では切手をはつて出しさ

へすれば、(略)。

七54 新橋停車場ヲ出デテ、上野

行ノ電車ニ乗ル。

七54 右ノ方ハ魚市場ニテ、賣買

ノコエカマビスシ。

七54 上野公園ニハ廣キ動物園ア

リテ、種々ノメヅラシキ動物ヲ集メ

タリ。

七55 上野ノ山ヲ下リテ、淺草行

ノ電車ニ乗ル。

七56 雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀

音堂ニ向ツテ行ケバ、(略)。

七56 雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀

音堂ニ向ツテ行ケバ、(略)。

七56 仁王門ヲ入リテ、觀音堂ヲ

拜シ、ソレヨリ水族館ヲ見ル。

七56 コ、ヤーメグリシテ隅田川

ノホトリニ出ツ。

七57 川ノ向フガハハ向島ニテ、

櫻ノ名所ナリ。

七57 今日ハマヅ丸ノ内ニ行キテ

宮城ヲ拜シ奉ル。

七58 イヅレモ洋風ノレングワヅ

クリニテリツパナリ。

七59 明日ハ芝公園ヲ見テ、ソレ

ヨリ四十七士ノ墓ニマウデントス。

七60 (略)、あるものは顔長くと

がりて、狐の如し。

七62 (略)、かりに用ひて、えも

のをさがさしむるに適す。

七62 二三匹の犬、(略)を追ひま

はして、主人の行く方ヘ行かしむと

いふ。

七63 八九頭の犬(略)そりを引

きて、雪の道を走り行くさま、まこ

とにいさまし。

七63 (略)、犬のくびに(略)か

ごをかけおきて、つかれたる旅人を

すくはしむることあり。

七63 又近ごろは戦場にも犬を用

ひて、たふれたる兵士をさがさしむ

といふ。

七64 (略)、水をまぜてこしらへた

物を口に入れないことはない。

七64 くだ物も水をふくんで居り、

やさいにも水けがある。

七65 (略)、水がなければ、生きて

ゐることは出来ない。

七65 (略)、冷い水の中に長くはい

つてゐたりするのはどくである。

七67 (略)、やしき中の桃の木に

皆つぎ木をすると申してゐます。

七67 一そう手入をして、來年は

たくさんならせて、(略)。

七67 (略)、來年はたくさんなら

せて、たくさん差上げたいと思つて

居ります。

七67 (略)、來年はたくさんなら

せて、たくさん差上げたいと思つて

居ります。

七68 見事な桃をたくさんおおく

り下さいまして、有りがたう存じま

す。

七68 母はこんな美しい大きな桃

は、はじめて見たと申して、おとな

りへもおすそ分けをいたしました。

七69 (略)、こんな見事な桃がな

るのなら、植ゑて見たいと申して居

ります。

七69 (略)、こんな見事な桃がな

るのなら、植ゑて見たいと申して居

ります。

七69 その内參上してお禮を申し

上げます。

七71 (略)、エヒ・カレヒ・ヒラメ

ナドノヤウニ、ソコノ砂地ニ沈ンデ

キルモノモアル。

七71 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ

コ・イカナダガステンデキル。

七71 エビノピンノハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、(略)。

七71 (略)、タコヤイカノアシヲソ

ロヘテオヨグ様ハマコトニ面白イ。

七71 (略)、サザエ・カキナドハ岩

ニツイテキル。

七72 中デオモシロイノハサンゴ

デ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ

形ヲシテキル。

七七二 (略)、タクサン集ツテ、木ノ枝ノ様ナ形ヲシテキル。

七七三 (略) 海綿モ、ヤハリ海ノソコノ岩ナドニ取リツイテキル蟲ノ骨デアル。

七七六 海ニハ又ケモノガスンデキル。

七七四 (略)、岸ニ近い浅イ所カラ五テヒログラキノ所マデニハ、海草ガハエテキル。

七七五 オビノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、(略)。

七七六 (略)、ゼンタイガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。

七七八 (略)、ゼンタイガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアル。

七七八 (略)、マツ緑色ノモノハ浅イ所ニ、(略)、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。

七七七 波ニユラレテ、色ノ美シイ海草ガヒラヒラト動く間ヲ、(略)。

七七七 (略)、様々ノ魚ヤケモノガ浮イタリ沈ンダリオヨイダリシテキルノハ、(略) 美シイ景色デアラウ。

七七八 (略) 我等は人と生れきて、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、(略)。

七七八 (略) 我等は人と生れきて、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、(略)。

七七八 (略) 我等は人と生れきて、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、(略)。

七七八 (略) 我等は人と生れきて、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、(略)。

七七八 (略) 我等は人と生れきて、一たん心定めては、事に動かず、さそはれず、(略)。

一たんめあて定めては、わき目もふらず、怠らず、(略)。

七七九 (略) ましてや人と生れ来て、一たんめあて定めては、わき目もふらず、怠らず、(略)。

七八〇 (略) 長き航海を終へて歸り來れる明治丸の船長は、(略)。

七八〇 (略)、一日その町の學校へまねかれて、航海の話となしたり。

七八〇 (略) 「私も子供の時には毎日この學校へ通つて、(略)、あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八〇 (略) 「あの運動場で體操をしたり、この講堂でお話を聞いたたりしてゐたのです。」

七八二 (略) 海岸の松原も次第に遠くにつて、しまひにはもう何も見えなくなりま。

七八二 (略) 日光が波にうつつて、水の色が金色になります。

七八二 (略) 月夜には波が銀の様に光つて、その美しさは何とも言ひ様がありません。

七八二 (略) ある時には鯨が頭から高く水けを吹いてゐることがあります。

七八二 (略) いるかがおよいでゐるのを見ることもあります。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

七八二 (略) 外國の港に着くと、見えない形の家がならんで立つてゐます。

があつて、それで方角をとつて進んで行くのです。

七八二 (略)、それで方角をとつて進んで行くのです。

七八二 (略)、それで方角をとつて進んで行くのです。

七八二 (略)、それで方角をとつて進んで行くのです。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

七八二 (略)、星が出てゐれば、それに便つて、居る場所や方角がちやんと分ります。

- ハスデニ甲板ヲヒタセリ。
- 七91 8 四隻ノ船ハ皆爆沈シテ、乗員ハ思ヒくニコギサラントシ、(略)。
- 七92 4 中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキキタリ。
- 七92 7 中佐ハ一片ノ肉ヲボートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。
- 八1 6 (略)、國民もまた深くうやまひ奉りて、一生に一度は、かならず伊勢に参拜せんと心がけざるものなし。
- 八2 4 神代ノ昔皇祖天照大神、(略)、八咫鏡を授けたまひて、「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」とおほせられたり。
- 八2 5 神勅によりて、代々の天皇はこれを宮中にあがめたまひしが、(略)。
- 八2 8 (略)、この御鏡を御神體として、皇祖天照大神をまつりたまへるなり。
- 八4 1 雨は夜中にはれて、今日はうらゝかなる天氣なり。
- 八4 3 八時宿を出でて、町を南へ行けば、(略)。
- 八4 6 橋を渡りて神苑に入る。
- 八5 3 (略)老木枝をまじへて、高く天をつく。
- 八5 5 五十鈴川の水に口すゝぎ手洗ひて左へ行き、(略)。
- 八5 7 板垣御門を入りて、玉垣御門の前にて拜し奉る。
- 八7 3 (略)の御製を思ひ出でて、我が國體のたふとさ、いよいよ身にしみておぼゆ。
- 八7 4 (略)我が國體のたふとさ、いよいよ身にしみておぼゆ。
- 八7 5 宿に歸りて一休みの後、外宮に参拜す。
- 八8 5 手かごを持ちて、いざ、裏山にきのこたづねん。
- 八8 7 山深く行きてたづねん。
- 八9 6 いでや、あの岩の小かげに、皆うちよりてえもの數へん。
- 八9 9 この間にいさんがかへつて來ましたので、(略)。
- 八10 1 (略)うち中の者がそろつて寫眞をとりました。
- 八10 4 三郎はいつもにこ／＼してゐますから、寫眞でも笑つて寫つてゐます。
- 八10 5 三郎は(略)、寫眞でも笑つて寫つてゐます。
- 八10 5 三郎は(略)、寫眞でも笑つて寫つてゐます。
- 八10 8 (略)にいさんによそ行の顔だといつて笑はれました。
- 八10 9 一人の分はうつかりしてゐる間に寫されましたので、(略)。
- 八11 3 伯母様お笑ひになつてはいけませんよ。
- 八11 7 よく寫つてゐるので、皆さんにお目にかゝつたやうな氣がします。
- 八12 2 おはなさんも一人の分はほんとによく寫つてゐます。
- 八12 5 なるほど皆さんと一しよの分は、(略)少しまじめになつてゐます。
- 八12 8 おはなさんは(略)、髪が大そうきれいになりました。段々おあさんに似て來ます。
- 八13 1 寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなりました。
- 八13 7 ニハトリガ度々鳴イテ、日ガ上ツタ。
- 八14 1 (略)、父ハハヤ店ニスワツテ商賣ノ用向ヲシラベテキル。
- 八14 1 (略)、父ハハヤ店ニスワツテ商賣ノ用向ヲシラベテキル。
- 八14 2 町ハ段々人通りガ多クナツテ、車モ通り、馬モ通ル。
- 八14 4 新聞屋ハ新聞ヲ、牛乳屋ハ牛乳ヲ家々ニ配達シテアルク。
- 八14 7 (略)、ソレ／＼ノ道具ヲ持ツテ、メイ／＼ノ仕事ニカ／＼。
- 八14 8 村デハ農夫ガクハヤカツイデ、タンボヘ出ル時デアル。
- 八15 1 (略)、上カラ下マデ一同ソロツテ事務ニ取リカ／＼。
- 八15 4 人ノ職業ニハイロ／＼アツテ、皆メイ／＼ノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。
- 八15 5 (略)、皆メイ／＼ノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。
- テ、毎日働イテキルノデアル。
- 八15 5 (略)、皆メイ／＼ノ仕事ヲシテ、毎日働イテキルノデアル。
- 八15 8 何モシナイデ遊ンデキルノハ樂ナヤウニ見エルガ、(略)。
- 八15 8 何モシナイデ遊ンデキルノハ樂ナヤウニ見エルガ、(略)。
- 八16 5 禪尼ノ兄義景コレヲ見テ、「(略)。」トイヒシニ、(略)。
- 八17 7 切張ハマダラニナリテ見苦シ。
- 八18 2 (略)總ベテ物ハ破レタル所ノミツクロヒテ用フルトキハ、(略)。
- 八18 6 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲササメタルモ、(略)。
- 八19 1 (略)畑もたくさんもつて、牛もたくさんかひ、何不足なく暮してゐた農夫がありました。
- 八19 2 (略)何不足なく暮してゐた農夫がありました。
- 八19 5 (略)牛も段々減り、畑の取高も年々に少くなつて、五六年の中によほど財産を減らしました。
- 八19 7 親類や友だちは大そう心配しまして、どうしたらよいかと、いろ／＼考へてゐました。
- 八19 8 親類や友だちは(略)どうしたらよいかと、いろ／＼考へてゐました。
- 八20 1 ある日一人の友だちは、この

農夫と野原の草の上に坐つて、いろ／＼世間話をしてゐたが、(略)。

八20 1 ある日一人の友だちは、この農夫と野原の草の上に坐つて、いろ／＼世間話をしてゐたが、(略)。

八20 2 (略)、そこらあたりに飛んでゐた雀を見て、(略)。

八20 2 (略)、そこらあたりに飛んでゐた雀を見て、(略)。

八20 5 農夫は之を聞いて、近年麥の取高の少いのは、この雀のせいではあるまいかと思ひました。

八21 3 「(略)。」と、ふしぎさうな顔附をして、農夫は問返しました。

八21 4 友だちは答へて、「居るさうだ。

八21 7 (略)、毎年一羽づつしか出て来ない。

八21 8 (略) 又若し外の雀が見つけると、よつてたかつていちめるので、(略)。

八21 8 (略) 又若し外の雀が見つけると、よつてたかつていちめるので、(略)。

八21 9 (略)、毎朝早くすを出て、ゑをさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。」

八21 9 (略)、毎朝早くすを出て、ゑをさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。」

八21 9 (略)、毎朝早くすを出て、

ゑをさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。」

八22 2 農夫は此の話を聞いて、「それはめづらしい。(略)。」と思ひました。

八22 3 (略) どうかして其の雀をつかまへて見たい。」

八22 3 (略) どうかして其の雀をつかまへて見たい。」

八22 6 次の朝農夫はいつになく早く起きて、(略)、屋敷のまはりを見まはつて、(略)。

八22 8 (略)、屋敷のまはりを見まはつて、野原の方でも行つてたづねましたが、(略)。

八22 8 (略)、野原の方でも行つてたづねましたが、影も形も見えませんでした。

八22 9 歸つて見ると、自分の家は戸がまだしまつてゐて、(略)。

八23 1 歸つて見ると、自分の家は戸がまだしまつてゐて、(略)。

八23 1 (略)、自分の家は戸がまだしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がありません。

八23 1 (略)、誰も起きてゐる様子がありません。

八23 2 日はもう高く上つてゐます。

八23 3 牛小屋の牛はしきりに鳴いてゐるのに、誰も草をやるものがありません。

で、裏門から出て来ました。

八23 6 その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て来ました。

八23 6 水車場へ行くのかと思つて見ると、(略)。

八23 6 水車場へ行くのかと思つて見ると、(略)。

八23 9 此の男は居酒屋に酒代の借があるの、其のかたに持つて行かうとするのです。

八24 1 農夫は驚いて、其の麥俵を取りもどしました。

八24 3 取りもどして歸つて来ると、(略)。

八24 5 (略) 下女がばけつをさげて、牛小屋から出て来ました。

八24 6 (略) 下女がばけつをさげて、牛小屋から出て来ました。

八24 7 どうするのかと氣を附けてゐると、(略)。

八24 9 此の下女は毎朝かうして、主人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。

八25 1 此の下女は毎朝かうして、主人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。

八25 2 農夫はおこつて、其のばけつ

を引つくりました。

八25 5 (略)、すぐ家の中へかけこんで、まだねてゐた妻を呼びして、(略)。

八25 5 (略)、すぐ家の中へかけこんで、まだねてゐた妻を呼びして、(略)。

八25 6 (略)、まだねてゐた妻を呼びして、「(略)。」といつて、(略)。

八25 7 (略) 朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」

八25 8 (略) 朝ねをしてゐる間に、身代が減つて行くのだ。」

八25 9 (略)、「(略)。」といつて、今見た事をすつかり話して聞かせました。

八26 2 其の後は毎朝必ず早く起きて、下男や下女は早くから畑へ出して働かせ、(略)。

八26 3 (略)、下男や下女は早くから畑へ出して働かせ、(略)。

八26 4 (略)、自分はどうかして白雀を見つければ、たづねまはりました。

八26 6 其の中に雀のことはいつかわすれて、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、(略)。

八26 8 (略)、たゞ身代を取返す事にばかり心がけるやうになつて、夜も晝もよく働きました。

晝もよく働きました。

八269 二三ヶ月立つてから、前の友だちが来て、「(略)」と、笑ひながらたづねました。

八269 二三ヶ月立つてから、前の友だちが来て、「(略)」と、笑ひながらたづねました。

八274 農夫は「(略)」といつて、かたく友だちの手を握りしめました。

八279 一日川成二向ヒテ、「(略)」トイヘリ。

八282 四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。

八284 川成行キテ見ルニ、小サキ四角四面ノ堂アリテ、(略)。

八285 小サキ四角四面ノ堂アリテ、四方ノ戸皆開キタリ。

八287 「入リテ見給へ。」

八289 何心ナクエンニ上リテ、南ノロヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト閉ツ。

八291 驚キテ西ノロヨリ入ラントスレバ、(略)。

八292 其ノ戸マタハタト閉ヂテ、南ノ戸開キタリ。

八296 クチヲシクモ工ノ笑聲ヲ後ニシテ歸レリ。

八303 内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

八303 内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣鼻ヲツクガ如シ。

八304 工驚キ、アツト聲立テテニゲ出セバ、(略)。

八305 川成腹ヲカ、ヘテ笑ヒナガラ、(略)。

八307 工恐ル／＼近ヨリテ見レバ、(略)、カノ死人ト見エシハ、フスマニエガケル繪ナリシナリ。

八313 セが高く、目がするどくて、ちよつと見ると、おそろしいが、(略)。

八319 僕は時々其の仕事場の前に立つて見てゐた。

八319 僕は時々其の仕事場の前に立つて見てゐた。

八319 ある時は釘をこしらへてゐた。

八322 ある時は鎌をきたへてゐた。

八323 又車のわを打つてゐた事もあつた。

八328 (略)、翌日すぐにこしらへてくれた。

八331 夏のどんな暑い日でも、(略)、暮方まで働いてゐた。

八334 「自分は今こそこんな小刀や釘などを造つてゐるが、(略)」

八337 刀は(略)、きたへる時は身を清めて、一心不乱に打つたものだ。」

八342 (略)、去年の暮に死んでしまつた。

八343 其の時分までよそへ奉公に行つて居つた若いむすこが、(略)。

八344 (略)、今では其の後をついで、朝から晩まで相かはらず、「(略)」と働いてゐる。

八345 (略)、朝から晩まで相かはらず、「トンテンカン、トンテンカン。」と働いてゐる。

八349 (略)、つゞいてかゝる梅が香に、うぐひす 鳴かぬ 里もなし。

八355 ひなの祭の桃の花 ほころびそめて、山々の 櫻も咲けば、(略)。

八376 いつしか木々もうらがれて、さびしきにはのささん花や、(略)。

八384 カクノ如ク價ノ安キモノニテ、カクノ如ク便利ナルモノハ世ニ少カルベシ。

八392 マツ木材ヲ切りテ、湯氣ニテムシ、(略)。

八393 (略)、ケツリテウス板トシ、(略)。

八393 (略)、細クキザミテデク木トシ、(略)。

八394 (略)、火ニカワカシテ、頭ニ藥ヲツケ、(略)。

八395 (略)、其ノカタマルヲ待チテ、箱ニ入ル。

八396 箱ハウスキ木片ヲ折り、其ノ上ニ紙ヲ張りテ造リ、(略)。

八417 火のこが花火のやうに散つてゐる。

八417 弓張を持つて走る人が、後から後からとつゞいて飛んで行く。

八418 (略)、後から後からとつゞいて飛んで行く。

八418 (略)、後から後からとつゞいて飛んで行く。

八421 火元は裏町通の材木屋で、もう本町通へ抜けて、角の呉服屋が焼けてゐるのださうだ。

八421 (略)、角の呉服屋が焼けてゐるのださうだ。

八425 長い天気つゞきで、かわききつてゐる上に、(略)。

八426 (略)、どこまで焼けて行くか分らない。

八429 だん／＼下火になつて来てうれしい。

八429 だん／＼下火になつて来てうれしい。

八434 叔父さんのうちへ見まひに行つたに、いさんが歸つての話を、(略)。

八439 火は一日も無くてはならぬものである。

八463 早く返事を上げよう。お前一つ書いてごらん。」

八491 (略)、うちの名の和田を入れて、十五字になるやうに書いてごらん。」

八491 (略)、うちの名の和田を入れて、十五字になるやうに書いてごらん。」

八495 こゝに頼信紙があるから、

書いてお出し。」

ハ49 8 図 (略)、蘇我入鹿勢ヲホシイマ、ニシテ、父蝦夷ト共ニ不忠ノフルマヒ多カリキ。

ハ50 1 図 中臣鎌足コレヲウレヘテ、國ノタメニ入鹿父子ヲノゾカント思ヒ立チタリ。

ハ51 2 図 鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマヅキテ皇子ニサ、ゲシニ、(略)。

ハ51 2 図 鎌足之ヲ拾ヒテ、ヒザマヅキテ皇子ニサ、ゲシニ、(略)。

ハ51 3 図 (略)、皇子モマタヒザマヅキテ、之ヲ受ケ給ヘリ。

ハ51 5 図 コレヨリ鎌足、皇子ト親シミ奉ルコトヲ得テ、(略)、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。

ハ51 5 図 (略)、同志ノ人々ヲモカタラヒテ、ヒソカニ時ノイタルヲ待テリ。

ハ51 7 図 サル程ニ三韓ノ使ミツギヲ奉ルニヨリテ、入鹿ノ参内スルコトアリ。

ハ52 4 図 中大兄皇子命ジテ宮門ヲ閉ヂサセ、(略)。

ハ52 4 図 (略)、長キヤリヲトツテ物カゲニカクレ給フ。

ハ52 5 図 鎌足ハ弓矢ヲ持ツテ御後ニシタガヘリ。

ハ52 7 図 ヤガテ同志ノ一人御前ニ進ミテ、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、(略)。

ハ52 8 図 入鹿アヤシミテ「何故ゾ」ト問ヘバ、(略)。

ハ53 1 図 他ノ二人ハ(略)、恐レテ出デズ。

ハ53 3 図 皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

ハ53 3 図 皇子コラヘカネテ、ヲドリ出デテ、入鹿ノ肩ヲキリ給フ。

ハ53 5 図 之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デテ、入鹿ノ足ヲキル。

ハ53 5 図 之ヲ見テ他ノ一人進ミ出デテ、入鹿ノ足ヲキル。

ハ54 3 図 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ奉リテ功アリシカバ、(略)。

ハ54 4 図 (略)、天皇重ク用ヒテ大臣トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。

ハ54 8 (略)、大空を飛びまはつて、他の鳥をとらへて食ふ鳥や、(略)。

ハ54 8 (略)、大空を飛びまはつて、他の鳥をとらへて食ふ鳥や、(略)。

ハ54 9 (略)、氣候によつてすむ所をかへる鳥は、(略)。

ハ55 5 (略) などは陸上や水上にばかり居て高く飛ばないから、(略)。

ハ56 2 駝鳥は鳥類の中で一番大きくて、卵も子供の頭程ある。

ハ56 6 併しかはせみははぎも首も短くて、くちばしばかりが長い。

ハ56 7 駝鳥ははぎも首も長くて、くちばしだけが短い。

ハ57 1 (略)、陸鳥のくちばしは圓く細くて、先がとがつて居る。

ハ57 3 わし・たか・とびなどは上くちばしにことに鋭くて、やゝ太い。

ハ57 4 いすかのくちばしは上と下がくちががつてゐる。

ハ58 8 くじやくは時時尾を扇形にひろげて見せる。

ハ59 1 (略)、座敷一ぱいになつて、天井へつかへる程である。

ハ60 2 図 粟津の松の色はえて、かすまぬ空ののどけさよ。

ハ60 6 図 石山寺の秋の月、雲をさまりてかげ清し。

ハ61 6 図 三つ四つ五つうち連れて、矢走をさして歸り行く 白帆を送る夕風に、(略)。

ハ61 7 図 三つ四つ五つうち連れて、矢走をさして歸り行く 白帆を送る夕風に、(略)。

ハ62 2 皆サンノ着物ニシテキル木綿織物ハドウシテ造リマス。

ハ62 3 (略)木綿織物ハドウシテ造リマス。

ハ62 4 木綿絲ヲ機デ織ツテ造リマス。

ハ62 5 木綿絲ハドウシテ出来マスカ。

ハ62 6 綿ヲ機械ニカケテツムグト、木綿絲ニナリマス。

ハ63 1 綿ノ木ハドコニ出来マスカ。

ハ63 4 綿ノ木ハ(略)。(略)、七月頃ニ花ガ咲イテ、九月カラ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマス。

ハ63 5 實ガ熟スルト、サケテ中カラ白イ綿ガハミ出シマス。

ハ63 7 (略)、綿クリ機械ニカケテ、ソレヲ取去ルノデス。

ハ64 1 木綿織物ニ(略)色々ナ綿ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。

ハ65 5 二月頃種ヲ蒔イテ、六月頃刈取ルノデス。

ハ65 6 サウシテ其ノ莖ト葉ヲ細カクキザンデ、日ニホシテ、(略)。

ハ65 6 (略)キザンデ、日ニホシテ、ソレカラウスニ入レテツキカタメマス。

ハ65 7 (略)、ソレカラウスニ入レテツキカタメマス。

ハ65 8 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。

ハ66 1 其ノ中ヘ白絲ヤ白布ヲ入レテ、紺ヤ淺黄ニ染メルノデス。

ハ66 4 図 謹んで申し上げます。

ハ66 6 図 (略)、一週間もおひまをいただきますして、まことに有りがたう存じます。

ハ66 8 図 病中の祖母も大そうよろこびまして、有りがた涙をこぼして居ります。

ハ66 8 図 (略)、有りがた涙をこぼして居ります。

ハ67㉓ 昨朝あたりから熱がずつと下つて、食事も進みますから、（略）。
ハ68㉔ 其の後どうかと思つてゐましたが、手紙を見て安心しました。
ハ68㉕ （略）、手紙を見て安心しました。
ハ68㉖ （略）、ゆつくり看病してお上げなさい。
ハ69㉗ （略）、何かすきな物を買つて上げて下さい。
ハ69㉘ ある時口・耳・目・手・足等一同申し合せて、胃に向つていふやう、（略）。
ハ69㉙ ある時口・耳・目・手・足等一同申し合せて、胃に向つていふやう、（略）。
ハ69㉚ 「（略）、汝はただ坐して食ふのみにて、少しも我等に報ゆる所なし」。
ハ69㉛ 「（略）、汝はただ坐して食ふのみにて、少しも我等に報ゆる所なし」。
ハ70㉜ 我等一同申し合せて、今日より働くことを止むべければ、左様心得られたし」。
ハ70㉝ （略）、目は食物を見ても見ぬふりをして過し、（略）。
ハ70㉞ （略）、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、（略）。
ハ70㉟ （略）、皮膚の色さへ青ざめ

て、身體は全く力なきにいたれり。
 ハ71 1 ㊦ こゝにおいて、胃は一同に
 向つて曰く、(略)。
 ハ71 2 ㊦ 「(略)、我はたゞ坐して
 食ふ者にあらず。
 ハ71 3 ㊦ 我的職務は食物をこなし
 て、之を血の製造場へ送るにあり。
 ハ71 5 ㊦ 我若し食物をこなす事な
 くば、全身を養ふ血は如何にして得
 らるべき。
 ハ71 6 ㊦ 諸君我を苦しめんとし
 て、此の數日間少しも食物を送らざ
 るが故に、(略)。
 ハ72 8 ㊦ 「猫デナイシヨウコニ竹
 ヲ書イテオキ。」トイフコトアリ。
 ハ74 3 ㊦ 猫ノロニハ(略) 鋭キ牙ア
 リテ、肉ヲサクニ適ス。
 ハ74 4 ㊦ 又其ノ舌ニハ内方ニ向ツテ
 ハエタル太キ毛ノ如キトゲアリ、
 (略)。
 ハ74 9 ㊦ (略)、シヅカニ他獸ニ近ヨ
 リ、急ニ飛ビツキテ之ヲ捕フ。
 ハ75 9 ㊦ 我等若し汽船に乗りて、我
 が帝國の港を出で、東へ東へと進み
 行かば、(略)。
 ハ76 8 ㊦ こゝより汽船に乗りて、ふ
 たゝび東へ進めば、(略)。
 ハ78 1 ㊦ フランスは海をへだててイ
 ギリスの南にあり。
 ハ78 4 ㊦ フランスの隣國にて、其の
 東北にあるドイツは(略)。
 ハ79 8 ㊦ (略)地中海を過ぎ、印度

洋を渡りて、東へ東へと進むなり。
 八〇七 〇 我等の住む世界は圓きもの故、名づけて地球といふ。
 八一四 〇 北半球にて百花咲きみだれて、蝶の飛ぶ春の時節は、(略)。
 八一五 〇 (略)、南半球にては木の葉散りしきて、蟲の鳴く秋の時候なり。
 八二二 〇 ある土人の如きは水を以て家を造りて住めり。
 八三二 〇 (略)、雪月花のながめも折節にかはりて面白く、(略)。
 八三四 〇 地球上に住む人類は總數十億ありて、其の人種はさまざまなり。
 八四七 三十七年ノ四月第二軍ニツイテ戦地へ向ツタガ、(略)。
 八五二 (略)、部下ノ大隊ヲヒキテ、勢鋭ク進撃シタ。
 八五八 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、上カラ下マデ幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。
 八五九 我ガ兵ハ物トモセズ敵陣メガケテ突撃シタガ、(略)。
 八六二 中佐ハマツサキニ立ツテ、敵中へヲドリコンデ、(略)。
 八六三 (略)、敵中へヲドリコンデ、タチマチ三人ノ敵ヲ斬リ殺シタ。
 八六四 敵ノ彈丸ハ雨アラレノ様ニ飛ンデ來ル。
 八六六 (略)、左手ニ軍刀ヲ持ツテ部下ノ兵士ヲハゲマシ、(略)。
 八六七 (略)、トウ／＼山上ノ敵ヲ追

拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。
 八87 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲ヲウチカケタ。
 八87 4 之ヲ見タ敵ハ更ニ新^{アラテ}手ヲ加ヘテ、フタ、ビ攻メヨセテ來タ。
 八87 4 (略)、フタ、ビ攻メヨセテ來タ。
 八87 8 中佐ハ「(略)。」トサケンデ部下ヲハゲマシ、(略)。
 八88 1 此ノ時中佐ハスデニ第二彈ヲ右手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケテ居タガ、(略)。
 八88 2 (略)、ソレデモタワマズ、奮戰ヲツマケテ居ルト、(略)。
 八88 3 (略) 砲彈ノ破片ガ中佐ノコシニアツツテ、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタ。
 八88 7 (略) 一軍曹ハ中佐ヲ壕^{ぼり}ノ内ニ入レテカイハウシタ。
 八88 8 中佐ハ目ヲ見張リテ、軍刀ヲ杖ニ起上ラウトスル。
 八88 9 軍曹ハ中佐ヲセオツテ、彈丸ノ下ヲクバリナガラ、ケハシイガケヲカケ下リタ。
 八89 4 二人ハ投げ出サレテユメウツ。
 八89 6 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トトモニ(略)。
 八89 6 軍曹ハ同ジク負傷シテソコニ倒レテ居タ一兵士トトモニ(略)。
 八90 2 (略)、セツカク占領シタ陣地ヲ取返サレテ殘念千萬ダ。」

八90 中佐ハ「(略)」。トイヒナガラ、形ヲ正シテ、「今日ハ我が皇太子殿下ノ御誕生日ダ。」

八90 軍曹ハ自分ノ重傷ヲモウチ忘レテ、アランカギリノ力ヲツクシタガ、(略)。

八91 コレヨリ先、中佐ハ自分ノ馬丁ニ言付ケテ、「(略)」。トイツタガ、(略)。

八91 若シ夜明頃、突撃ノ聲ガ聞エテ、砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタト思ヘ。

八91 其ノ時ハスグ馬ヲ引イテ来イ。

八91 砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、我が軍ガ苦戦シテキルト思ヘ。

八91 其ノ時ハオレノ死體ヲセオツテ歸ル積リデカケツケヨ。」

八92 馬丁ハ「(略)」。心配シナガラ、様子ノ分ルノヲ待ツテ居タガ、(略)。

八92 戦死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死ガイニ取リスガツテ泣イタ。

八92 戦死サレタト聞イテ、カケツケテ其ノ死ガイニ取リスガツテ泣イタ。

八92 其ノ死ガイニ取リスガツテ泣イタ。

八93 名古屋城ハ「(略)」。徳川家康が諸大名に課して造らしめたる名城にして、(略)。

八94 (略)、朝日・夕日にかゝやきて、遠く數里の外よりも望み見ることを得べし。

八94 名古屋は此の城あるによりて名高く、(略)。

八95 今合して名古屋市の一部となれり。

九15 此の劔初は天叢雲劔とし、後に改めて草薙劔と申すこととなれり。

九21 (略)、夫婦の老人一人のむすめを中にすゑて泣きかなしめるを見給ふ。

九31 (略)、毎年來りて、我が娘を取食ひ、(略)。

九35 尊、「(略)」とて、老人夫婦に命じて酒を造らせ、(略)。

九36 (略)、其のほとりに娘を坐せしめて待ち給ひしに、(略)。

九37 (略)、やゝありてかの大蛇あらはれ出で、(略)。

九38 (略)、酒を飲みてよひふしたり。

九39 (略)、おびさせ給へる劔を抜きて、ずたずたに大蛇を斬り給ひしに、(略)。

九40 (略) 大蛇を斬り給ひしに、尾にいたりて、劔の先少しくかけた

九41 あやしみて尾をさきて見給ふに、(略)。

ふに、(略)。

九40 (略)、天皇日本武尊に命じて、之を討たしめ給ふ。

九51 尊は先づ伊勢にいたりて神宮を拜し、(略)。

九53 「つゝしみて怠ることなかれ。」

九55 尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、(略)。

九56 尊之を受けて、進みて駿河の國に至り給ひしに、(略)。

九57 (略)、ここにありし賊どもいつはり降り、「(略)」と勸めて、尊をいざなひ、(略)。

九58 (略)、尊の野に入り給ふを見て、火を放ちて焼き奉らんとせり。

九59 (略)、火を放ちて焼き奉らんとせり。

九59 尊こゝにおいて天叢雲劔を抜きて、草を薙拂ひ給ふに、(略)。

九61 (略)、尊は難をまぬかれ給ひなほ進みて賊を討滅し給へり。

九62 これより此の劔の名を改めて草薙劔と申す。

九63 尊はなほも進みて北に向ひ給ひしに、(略)。

九64 (略)、蝦夷ども皆恐れて降参し、(略)。

九65 尊これより引返して近江の賊を討ち給ひしが、(略)。

九67 (略)、宮を建ててそこにまつれり。

九71 櫻ノ花ニハ五ツノ瓣ガアツテ、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。

九71 (略)、瓣ノ大キサガヨク揃ツテキル。

九72 又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカラ、(略)。

九77 梅・桃・梨ナドノ花モ櫻ノヤウニ瓣ガヨク揃ツテキルガ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

九79 ツ、ジノ花ヲ見ルト、瓣ハ揃ツテキルガ、皆一ツニナツテキテ、(略)。

サヲヒロゲタ形ニ集ツテ咲クノモアル。

九10 又麥ノホノ様ナ形ニナツテ咲クモノニハ大葉子ノ花ナドガアリ、(略)。

九101 (略)、總ノ形ニナツテ咲クモノニハ藤ナドガアル。

九104 タンポ、ヨメナナドハ(略)一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。

九104 タンポ、ヨメナナドハ(略)一ツノ莖ノ上ニ、タクサンノ小サナ花ガ集ツテ咲イテキルノデアル。

九149 (略) 細谷川ハ、流レ下ルニシタガヒテ、數多ノ小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。

九1410 (略) 是ヨリ南流シテ吾妻川ヲ合セ、(略)。

九154 (略) 更ニ東南ニ流レテ、上野・武藏ノ國境ヲ過ギ、(略)。

九155 (略)、渡良瀬川ヲ合セテ栗橋ニ至ル。

九157 (略) 栗橋ヲ過ギテ、間モナクニツニ分ル。

九159 (略)、一ハ東南ニ流レテ利根ノ本流ヲナシ、(略)。

九161 (略)、一ハ西南ニ向ヒ、權現堂川ニ合シテ江戸川トナル。

九161 (略) 江戸川ハ南流シテ海ニ入ル。

九163 (略) 利根川ノ本流ハ東南ニ流レテ鬼怒川・小貝川ヲ合セ、(略)。

九165 (略) 少シク下流ニアタリテ船戸アリ。

九166 (略)、東京ヨリ江戸川ヲサカノボリテ利根川ニ通ズル汽船ノ通路ニシテ、(略)。

九168 (略) 本流ハ下リテ、下總・常陸ノ國境ヲ流レテ太平洋ニ入ル。

九168 (略) 本流ハ下リテ、下總・常陸ノ國境ヲ流レテ太平洋ニ入ル。

九187 (略) 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ、運輸ノ便スコブル多シ。

九191 (略) 一水兵が女手の手紙を讀みながら泣いてゐた。

九191 ふと通りかゝつた大尉が之を見て、あまりに女々しいふるまひと思つて、(略)。

九192 (略)、あまりに女々しいふるまひと思つて、「(略)」と言葉鋭くしかつた。

九194 (略) 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、(略)。

九198 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、(略)。

九198 水兵は驚いて、立上つてしばらく大尉の顔を見つめてゐたが、(略)。

九199 (略)、やがて頭を下げて、「(略)」といつて、其の手紙を差出した。

九199 (略)、やがて頭を下げて、「(略)」といつて、其の手紙を差出した。

九203 水兵は(略)、「(略)」といつて、其の手紙を差出した。

九204 大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。

九204 大尉はそれを取つて見ると、次の様な事が書いてあつた。

九209 (略) 一命をすてて君に報ゆる爲には候はずや。

九213 (略) 何にても多しりやなく言へ。」

九216 (略) (略)、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九216 (略) (略)、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九222 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、(略)。

九223 大尉は(略)、水兵の手を握つて、「(略)」といひ聞かせた。

九226 (略) 併し今の戦争は昔とちがつて、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九226 (略) 併し今の戦争は(略)、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九228 (略) 將校も兵士も皆一つになつて働かなければならない。

九229 (略) 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

九231 (略) おつかさんは『(略)』といつて居られるが、(略)。

九231 (略) おつかさんは『(略)』といつて居られるが、(略)。

九233 (略) 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。

九235 (略) 目ざましい働をして、我が萬千穂艦の名をあげよう。

九237 (略) 此のわけをよくおつかさんにいつて上げて、安心させるがよい。」

九237 (略) 此のわけをよくおつかさんにいつて上げて、安心させるがよい。」

九239 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、(略)。

九239 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

九2310 (略)、やがて手をあげて敬禮して、(略)。

て十九箇師團となれり。

九二七 〇 (略) 軍人形ヲカザリ、ノ
ボリヲ立テテ、男子ノ福運ヲイノル
コト、我が國古ヨリノ風習ナリ。

九二八 〇 (略) 社殿ハ上古ノ風ヲウ
ツシテ造リ、(略)。

九二九 〇 (略) 春ノ盛リニハ花ノ雲
タナビキテ、「花ハ櫻木、人ハ武士。」
ノコトワザモ自ラ思ヒ出デラル。

九三〇 〇 (略) 種々ノ餘興モ行ハレ
テ甚ダニギヤカナリ。

九三〇 一 (略) 始めて之を船に用ひて汽船を
造つたのは、(略)。

九三一 〇 (略) 又之を車に應用して、
汽車をこしらへたのは、(略)。

九三一 一 (略) フルトンが工夫に工夫を重ね
て造つた最初の船は、(略)。

九三一 二 (略) 不幸にも直に沈んでし
まつた。

九三一 三 (略) フルトンは之に驚かず、更に
新しい機關をイギリスに注文して、
又一つの船を造つた。

九三一 四 (略) 此の度は大丈夫と考へて、
「(略)」といふことを新聞紙に廣告
したが、(略)。

九三一 五 (略) 其の日になつて乗船
したものは僅か十二人に過ぎなかつ
た。

九三一 六 (略) しらべて見ると、機關

の一部に故障があつたので、(略)。

九三二 〇 (略) 之を聞いて、是までフルト
ンを笑つた人々も大いに感心して、
(略)。

九三二 一 (略) 大いに感心して、皆其
の成功を喜んだといふことである。

九三二 二 (略) 日夜其の事ばかり考へ
てゐた。

九三二 三 (略) さて幾度も幾度も造り直し
て、終に其の目的を達することが出
來た。

九三二 四 (略) スチブソン^{Stevenson}の發明し
た汽車を用ひて見ようといふことにな
つて、(略)。

九三二 五 (略) 汽車を用ひて見ようと
いふことになつて、スチブソンは
(略) 鐵道を敷き、其の上を走る汽
車を造つた。

九三二 六 (略) スチブソンは其の會
社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を
走る汽車を造つた。

九三二 七 (略) 鐵道が出来て、汽車
の運轉をして見る日になると、(略)。

九三二 八 (略) いよく鐵道が出来て、汽車
の運轉をして見る日になると、(略)。

九三二 九 (略) 中には (略)、馬に乗つて來
た人もある。

九三二 一〇 (略) 馬上の人はしきりにむ
ちを打つてあせつて見たが、(略)。

九三二 一一 (略) 馬上の人はしきりにむ
ちを打つてあせつて見たが、(略)。

九三二 一二 (略) 其の間に五十三次とい

つて、重な宿場が五十三あつた。

九三二 一三 (略) 一日の旅程を十里づつと見て、
十二日程かゝつた。

九三二 一四 (略) 人の肩車に乗つたり
渡船に乗つたりして渡つたのであつ
た。

九三二 一五 (略) 水のひくまでは幾日でも
泊つて待つてゐなければならなかつ
た。

九三二 一六 (略) 幾日でも泊つて待つて
ゐなければならなかつた。

九三二 一七 (略) には關所があつて、役
人が一々旅人をしらべて通した。

九三二 一八 (略) 役人が一々旅人をしら
べて通した。

九三二 一九 (略) 若し其の關所をよけて、わき
道を通る様なことをすれば、(略)。

九三二 二〇 (略) 關所破といつて、其の
ものは重い罰を受けた。

九三二 二一 (略) 馬は馬子が引いて、ゆる／＼
歩むのだから、早いことはない。

九三二 二二 (略) かがも人の肩でかいて、休み
／＼行くのだから、早くもないし、
(略)。

九三二 二三 (略) 今は水路に汽船があり、陸上
にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

九三二 二四 (略) 鐵道の通じてゐない所でも、
馬車や人力車がある。

九三二 二五 (略) 山上ナル蘆湖ノホトリニ關
所アリテ、日暮ヨリ後ハ一切旅人ノ
通行ヲ差止メタレバ、(略)。

九三二 二六 (略) 箱根七湯ハ、開ケ行

ク明治ノ御代ト共ニ益々サカエテ、
浴客年ニ其ノ數ヲ加フ。

九三二 二七 (略) ソレヨリ噴出シタル
物ノ四方ニナダレテ、冷エカタマリ
タルガ、今ノ箱根山ヲ成セルナリ。

九三二 二八 (略) 噴火一タン止ミテ後、其ノ
噴火口中ニ更ニ四ツノ噴火山ヲ出セ
リ。

九三二 二九 (略) 湖水ノアフレテ流ル
、モノハ即チ早川ナリ。

九三二 三〇 (略) カ、リテハタキトナ
リ、ヨドミテハフチトナリ、(略)。

九三二 三一 (略) カ、リテハタキトナ
リ、ヨドミテハフチトナリ、(略)。

九三二 三二 (略) 又切レテハ急流トナ
リ、(略)。

九三二 三三 (略) 姉上も最早御全快にて、
四五日前より起きて蠶の世話をなさ
れ居り候。

九三二 三四 (略) 四五日前より起き
て蠶の世話をなされ居り候。

九三二 三五 (略) 祖父様はいつもの通り朝
起にて、私どもの目をさまし候頃に
は、はや朝顔のはちをならべて、
(略)。

九三二 三六 (略) はや朝顔のはちを
ならべて、(略) などと御喜に御座
候。

九三二 三七 (略) 駱駝に乗りて隊商の
仲間に加り、(略)。

九三二 三八 (略) 或時旅行先より手紙を送り
て、(略) と言ひつかはしたり。

九45 1 図 (略)、其の子のアリに駱駝

を連れて、荷物を取りに来るべしと言ひつかはしたり。

九45 4 図 アリは (略)、父の手紙を讀みて心勇み、(略)。

九45 5 図 (略)、飲用水其の外何くれと用意して、隊商と共に出立したり。

九45 9 図 日暮るれば、一同テントを張りて夜を過す。

九46 2 図 四日目の正午頃、大風吹き起りて、砂煙は天をおほへり。

九46 4 図 一同は (略)、進行を止め、風のをさまるを待てり。

九47 1 図 (略)、翌日風なきて出立したれども、(略)。

九47 2 図 (略)、一同は行くべき方にまよひて、右に往き、左に往き、空しく一日を過せり。

九47 4 図 其の夜アリふと目をさまして、人々のかたるを聞けば、(略)。

九47 7 図 (略)、駱駝を殺して、其の胃の中の水を飲むより外なかるべし。

九48 2 図 (略)、ひそかに駱駝にうち乗りて、そこより逃れ出でたり。

九48 5 図 アリは幸にも星によりて方角を見定むることを知り居たれば、(略)。

九48 8 図 之に力を得て、南へくと急がするに、(略)。

九48 10 図 アリはそこに行きて、ありし事を物がたり、ねんごろに同行を

頼みしに、(略)。

九49 7 図 やがて親子打連れて、心榮しく發足したり。

九50 4 図 星の形を打ちたるは陸軍兵の帽子にて、艦の名あるは水兵帽。

九51 1 図 西洋婦人のボンネット花をかざりてうるはしく、(略)。

九53 8 図 晝ハ暗キ所ニヒソミ、日暮ヨリ出デテ飛ブカウモリハ暗黒色ニシテ、(略)。

九54 2 図 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、自ラ其ノ周圍ノ物ノ色ト

マギレテ、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。

九54 3 図 (略)、自ラ其ノ周圍ノ物ノ色トマギレテ、タヤスク他ノ動物ニ見附ケラル、コトナシ。

九54 8 図 動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物ノ色ノ變ズルニシタガツテ、保護色ノ變ズルモノアリ。

九55 4 図 (略)、其ノ動物ノ身ブリニヨリテ、形サハ其ノ周圍ノ物ニ似ルモノノアルコトナリ。

九56 1 図 農夫ナドハ小枝ト見チガヘテ、土ビンヲカケ、落シテワルコトアリ。

九56 2 図 農夫ナドハ (略)、土ビンヲカケ、落シテワルコトアリ。

九56 6 図 (略)、羽ヲ閉ヂテ、草木ノ枝ニトマルトキハ、サナガラ枯葉ノ

如ク見ユ。

九56 8 図 或動物ハ之ニ反シテ、周圍ノ物トマギレザルヤウ、コトニアザヤカル體色ヲ有ス。

九57 2 図 他ノ動物ハ其ノ體色ニヨリテ、タヤスク之ヲミトメ、之ニ近ヅクコトナキガ故ニ、(略)。

九57 8 図 タトヘハ毒汁ヲ有スル蜂ノ體色ハ黃ト黒トノダングラニテ、惡味アル揚羽ノ蝶ノ羽ニハ美シキ色ドリアルガ如シ。

九58 4 図 八十歳を越えて病を知らざる或老人に、(略)。

九58 8 図 (略) などを食ひて、一命をうしなふ者少からず。

九58 9 図 きたなき水を飲みて、恐ろしき病にかゝる者多し。

九59 2 図 よごれし手にて目をこすりて目をわづらひし人あり。

九59 3 図 衣服もよく洗ひて、よごれたるをば着ることなかれ。

九59 7 図 運動不足なれば、(略)、身體弱りて、氣分もふさぐ。

九60 6 図 早く寝ねて早く起くべし。

九60 9 図 時々障子を明放ちて、新しき空氣を流通せしむべし。

九60 10 図 (略)、折々野外に出でて、新しき空氣をすひ、又 (略) 公園等を散歩すべし。

九61 1 図 (略)、又朝早く起きて、木立しげき公園等を散歩すべし。

九61 2 図 室内にのみ居て、外出する

こと少き人の、色青ざめて元氣なきは、(略)。

九61 3 図 室内にのみ居て、外出すること少き人の、色青ざめて元氣なきは、(略)。

九61 10 図 飲食に注意し、(略)、常に日光に浴して、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

九62 2 図 蝦夷は東北の地に住して、叛服常ならず、(略)。

九62 4 図 (略)、其の後も度々叛きて、征東將軍をつかはされし事しばゝなりき。

九62 8 図 (略)、將軍坂上田村麻呂之を平定して、大なる功勞を立てたり。

九63 3 図 (略)、力あくまで強き人にて、怒る時はたけき獸も恐れたり。

九63 4 図 されども又いつくしみ深き人にて、笑ふ時は子供もなつき親しみたりといふ。

九63 7 図 (略)、恩威ならび行はれて、向ふ所敵なく、(略)。

九64 2 図 (略)、かばねを宮城の方に向ひて立たせ、(略)。

九64 9 図 (略)、凡そ少しにてもすぎ間ある所には、必ず存在せずといふこと無し。

九65 2 図 試みに茶わんのそこにするしをつけ、之を倒にして、しづかに水中に入れよ。

九65 3 図 是茶わんの中に空氣ありて、水の進入するを防げばなり。

九六五 〇 (略)、皆空氣を送りて、火

の勢を盛ならしむる爲にして、(略)。

九六六 〇 (略) 又人は空氣を動かし、風を

起して、種々の用に供す。

九六六 〇 (略) 唐箕の車をまはして、

もみとしひなとをあふぎ分くるが如

き皆然り。

九六七 一 五風十雨といつて、五日毎の

風、十日毎の雨は太平無事の世の有

様である。

九六七 〇 さて此の雨風も四季の時候に

つれて、それ／＼にちがふ。

九六七 〇 春の雨はしめやかに降つて、

のきの玉水の音も静かに聞える。

九六七 〇 雨のはれた朝、花の香を送つ

て、そよ／＼と吹く春風には、(略)。

九六八 〇 (略) 五月雨は、農家に取つ

ては大切な雨である、(略)。

九六八 〇 一天にはかにかき曇つて、ほ

し物を取込むひまもない夕立は、さ

わがしい中に勇ましい。

九六九 〇 (略)、一年中の農夫の辛苦が

一夜の中にむだになつてしまふこと

もある。

九六九 〇 今年は何事もなくて、(略)

秋の田の上を吹渡る風が鳴子を動か

すと、むら雀のぱつと飛立つのは面

白い。

九六九 〇 秋の末になつて、風の吹散し

た木の葉の上に、雨の降りかゝるの

は、(略)。

九七〇 〇 雨戸を明けて見ると、明るい

月夜である、(略)。

九七〇 〇 夜が更けて、雨の音が静かに

なつたから、止んだことと思つてゐ

ると、(略)。

九七〇 〇 夜が更けて、雨の音が静かに

なつたから、止んだことと思つてゐ

ると、(略)。

九七〇 〇 (略)、翌朝起きて見れば、何

時の間に雪に變つたか、そこら一面

銀世界になつてゐることもある。

九七〇 〇 (略)、翌朝起きて見れば、何

時の間に雪に變つたか、そこら一面

銀世界になつてゐることもある。

九七一 〇 (略)、御地方は非常の出

水にて、死傷も少からざる由承知致

し驚き入り候。

九七二 〇 (略)、二十八日は終日大

暴風雨にて、川近きあたりにはぼつ

／＼立退きたる者もこれあり、(略)。

九七三 〇 (略) 明けて二十九日には雨も

止み、風も静まりて、(略)。

九七三 〇 (略) 雨も止み、風も静ま

りて、日の光さへ見え出し候へば、

(略)。

九七三 〇 (略) 驚きて飛出し候へば、川

上の堤防切れ、(略)。

九七四 〇 (略) 夜も明けはなれて、

水は次第に減退致し候。

九七五 〇 (略) 大がいは着のみ着

のまゝにて、當村に引取りて保護を

致し居り候者も百二十名の多きに

上り候。

九七五 〇 (略)、當村に引取りて保

護を致し居り候者も百二十名の多

きに上り候。

九七六 〇 一日二銭・二銭ツツニテ

モ積立ツル時ハ、(略)。

九七六 〇 (略)、五年・十年ノ後ニハ、

餘程ノ金高トナリテ、ヤ、高價ナル

必要品モ買フコトヲ得ベク、(略)。

九七六 〇 (略)、郵便切手ニヨリテ貯

金スル便利ナル方法アリ。

九七六 〇 貯金臺紙トイフモノヲ買ヒ

オキテ、貯金セントスル時ニハ、其

ノ金錢ニテ郵便切手ヲ買ヒテ臺紙ニ

ハリツケ、(略)。

九七七 〇 (略)、其ノ金錢ニテ郵便切

手ヲ買ヒテ臺紙ニハリツケ、(略)。

九七七 〇 (略)、之ヲ郵便局ニ差出し

テ、郵便貯金トスルナリ。

九七七 〇 (略)、貯蓄銀行ニテハ五圓

ヨリ少キ金ニテモ預カル。

九七八 〇 銀行貯金ニテモ、郵便貯金

ニテモ、預ケタル金高ノ次第二上リ

行クハ樂シキモノナリ。

九七八 〇 銀行貯金ニテモ、郵便貯金

ニテモ、預ケタル金高ノ次第二上リ

行クハ樂シキモノナリ。

九七八 〇 (略) 無用ノ入費ヲハブキ

テ、一銭・二銭ツツニテモ貯ヘンコ

トヲ心ガクベシ。

九七八 〇 (略)、一銭・二銭ツツニテ

モ貯ヘンコトヲ心ガクベシ。

九七九 〇 是は菅原道眞が右大臣とい

ふ高き官よりおとされて、筑紫へ旅

立たんとする時、(略)よめる歌なり。

九七九 〇 是は菅原道眞が(略)、庭の

梅に別ををしみてよめる歌なり。

九七九 〇 (略)、昔より相知りし驛長

ありて、道眞の今の身の上を深く悲

しみに、(略)。

九八〇 〇 (略)、道眞は「(略)」と

いふ意味の詩を作りてあたへたりと

いふ。

九八〇 〇 筑紫に到りて後は、常に門

を閉ぢて出づることまれなりしが、

(略)。

九八〇 〇 筑紫に到りて後は、常に門

を閉ぢて出づることまれなりしが、

(略)。

九八〇 〇 (略)、見るもの聞くものに

つけて、都の空のみしたはしく、

(略)。

九八〇 〇 (略)、僅かに詩歌に思をよ

せて、ひとり自らなぐさめ居たり。

九八〇 〇 いつか秋のなかばも過ぎ

て、九月十日の夜となれり。

九八〇 〇 (略)、詩を作りて天皇の御

感に入り、御衣を賜はりて身に餘る

面目をほどこしたりしが、(略)。

九八〇 〇 (略)、御衣を賜はりて身に

餘る面目をほどこしたりしが、(略)。

九八〇 〇 (略)、恩賜の御衣をさげ

て、はるかに東方を拜し、一篇の詩

を作りたり。

九八〇 〇 さげ持ちて毎日餘香を

拜す。

九八二 (略) 子供の騎手を一人づつ

出して、競馬をさせて、(略)。

九八二 (略) 子供の騎手を一人づつ

出して、競馬をさせて、勝つた村は次の祭の日まで、其の五箇村の頭になるといふ定であつた。

九八二 一人は熊吉、一人は愛作といつて、年は同じく十五歳。

九八二 やがて五人の騎手は(略)、静々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて来た。

九八二 やがて五人の騎手は(略)、静々馬を歩ませて、鳥居の下へ集つて来た。

九八二 神主は先づ神前で祝詞を上げて、それがすむと、(略) 一番太鼓を打鳴らした。

九八二 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

九八二 五人の騎手は(略)、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

九八二 五箇村の人々は各我が村の騎手に向つて、「(略)。」などと、口々に勢をつけてゐる。

九八二 「是非勝つてくれ。」

九八二 「しつかりやつてくれ。」

て、拜殿の後の大きな立石の前に並んで、(略)。

九八二 (略) 五人の騎手は打連れて、(略) 立石の前に並んで、馬の頭を揃へて、三番太鼓を今やおそしと待構へてゐる。

九八二 (略) 五人の騎手は(略)、馬の頭を揃へて、三番太鼓を今やおそしと待構へてゐる。

九八二 (略) 五人の騎手は(略)、三番太鼓を今やおそしと待構へてゐる。

九八二 馬場の中程から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、(略)。

九八二 馬場の中程から(略)、つゞいて三騎までも後れて、もはや熊吉と愛作の二人だけの競走となつた。

九八二 二人の馬は五分々に進んで行つたが、(略)。

九八二 (略)、熊吉の馬はつまづいて前足を折つた。

九八二 熊吉はつるりとすべつて、そのはすみにころころと轉がつて、池の中へ落ちこんだ。

九八二 熊吉は(略)、そのはすみにころころと轉がつて、池の中へ落ちこんだ。

九八二 愛作は驚いて、ひらりと馬から飛下りて、(略)。

九八二 愛作は驚いて、ひらりと馬から飛下りて、すぐに熊吉のえりを引

つつかんで、(略)。

九八二 愛作は(略)、すぐに熊吉のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引きよせた。

九八二 附添人も見物人も、きもを冷してかけよつて、(略)。

九八二 附添人も見物人も、きもを冷してかけよつて、熊吉に水を吐かせるやら、(略)、上を下へのさわぎである。

九八二 愛作方の人々は愛作の肩をたゝいて、「(略)。」といつた。

九八二 (略)、相手を助けてやつたのは如何にも見上げたりつばな行だ。

九八二 (略)、いづれ又改めてやり直しをしてもはなればなるまい。

九八二 (略)、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。

九八二 (略)、あなた方の村が五箇村の頭になつて、御支配をなさつて下さい。

九八二 此の話が傳はつて、愛作は(略)、近所近べんのはめ者となつた。

九八二 (略)、必要ノ場合ニ物ト物トヲ取換ヘテ有無相通ジタルニ過ギザリキ。

九八二 タトヘバコ、ニ漁夫アリテ、魚ヲ米ニ取換ヘントテ、先ヅ甲ノ農夫ヲタツネタリトセヨ。

九八二 カクテ持チアルク中ニハ、其ノ魚ハ腐リテ、一合ノ米ニモ換ヘ難キニ至ルベシ。

九八二 (略)、或種類ノ物品ヲ定メテ之ヲ仲ダチトシ、物ト物トヲ交換スル不便ヲ省クニ至レリ。

九八二 貨幣トシタル物品ハ時代ニヨリ、場所ニヨリテ一定セズ。

九八二 之ヲ日本銀行ニ持行カバ、何時ニテモ金貨ト交換スルコトヲ得ベシ。

九八二 色香も深き 紅梅の 枝にむすびて、(略)と 雲るまで聞え上げたる 言の葉は、(略)。

九八二 みすのうちより 宮人の袖引止めて、(略)といひし 言の葉は、(略)。

九八二 (略)、天の橋立 末かけで、後の世永く くちざらん。

九八二 川を渡りて坂路を上れば、(略)。

九八二 進んで陽明門に至る。

九八二 之を過ぎて拜殿あり、(略)。

九八二 是より西南にあたりて、家光の廟あり、(略)。

九八二 (略)、其の風景を賞し給ひて、幸湖の名を下し賜へり。

九八二 外國人の我が國に來る者亦必ずこゝに遊びて、日光の結構を賞せざるものなし。

九八二 然れども四時雪をいたゞきて深く、(略)。

十24 〇 いづこより見ても山にさへ
ぎられ、かすみにへだてられて、其
の全景を見ること能はず。

十26 〇 (略)、湖水より出づる瀬田
川は下流宇治川となり、淀川となり
て、大阪に至りて海に注ぐ。

十27 〇 (略)下流宇治川となり、
淀川となりて、大阪に至りて海に注
ぐ。

十29 〇 信濃の東南部より發し、越
後の新潟に至りて海に入る。

十44 〇 然るに此の寺は今より凡そ
一千二百年以前のものにて、昔なが
らの形を存せり。

十52 〇 植物ノ葉ニハ (略)、蓮、芭
蕉ノ様ニ廣クテ大キナノモアル。

十54 〇 熱イ國ニ生ズル大鬼蓮ハ直徑
ガ六尺モアツテ、葉ノ質モ丈夫デア
ルカラ、(略)。

十510 〇 サキヤ本ノ圓イ葉モアレバ、
尖ツテキル葉モアリ、(略)。

十61 〇 サキヤ本ノ圓イ葉モアレバ、
(略)、ハコンデキル葉モアル。

十63 〇 (略)ギザ／＼ノアルノモア
レバ、一體ニスベ／＼シテキルノモ
アル。

十65 〇 ギザ／＼ノ深イノニナルト、
一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分レテ
キル。

十610 〇 本ノ方ガ太クテ、サキヘ行ク
程段々ニ細クナツテ、(略)。

十610 〇 (略)、サキヘ行ク程段々ニ細

クナツテ、末ニナルト、肉眼デハ見
エナイ程細イ。

十74 〇 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カ
ラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出
テ、(略)。

十74 〇 竹ノ葉ヲ見ルト、(略)幾ス
デカノ脈ガ並ンデ出テ、サキニ行ツ
テ一ツニ集ツテキル。

十74 〇 (略)幾スデカノ脈ガ並ンデ
出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキ
ル。

十75 〇 (略)幾スデカノ脈ガ並ンデ
出テ、サキニ行ツテ一ツニ集ツテキ
ル。

十77 〇 (略)太イ脈ガマン中ニ通ツ
テ、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ
様ニナツテキル。

十78 〇 (略)、ソレカラ出タ細イ脈ガ
網ノ目ノ様ニナツテキル。

十710 〇 モミデノ葉ハ幾スデカノ脈ガ
本ノ處カラ手ノ指ノヤウニ分レテキ
ル。

十82 〇 アブラナ・ツバキナドノ葉ハ
一ツオキニ莖ニ附イテ居リ、(略)。

十83 〇 (略)、ナデシコナドノ葉ハ二
枚ヅツ向ヒ合ツテ附イデキル。

十83 〇 (略)、ナデシコナドノ葉ハ二
枚ヅツ向ヒ合ツテ附イデキル。

十84 〇 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一
處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イデキ
ル。

十85 〇 又車ユリナドハ多クノ葉ガ一

處ニ集ツテ、莖ノ周圍ヲ取巻イデキ
ル。

十810 〇 森林の樹木はたがひに其の
枝をまじへて、雨の一度に地上に落
つるを止め、(略)一時に蒸發するを
防ぐ。

十910 〇 森林は (略)、又常に土地
をうるほして、土砂を落付かしむ。

十102 〇 森林なければ、土砂附近の
田畠に飛散りて、其の土地を荒すこ
と多し。

十1010 〇 (略)、其の効用あげて數ふ
べからず。

十119 〇 〇 我々元 木曾の檜よ、
白雲を うなじよまきて、峯高く
空よそびえき。」

十122 〇 〇 我々元 吉野の杉よ、
櫻木の 花をよそにて、霧深き 谷
間よ立ちき。」

十126 〇 〇 我々元 丹波の松よ、
山こむる 霞を後よ、いかだして
都に來けり。」

十127 〇 〇 床柱なげきて語る (略)、
十1210 〇 〇 我が友よ ひとり離れ
て、はる／＼と 五百重のしほ路、
(略)。」

十136 〇 〇 あはれ我、梁や棟木や
桁どもを いつもせおひて 片時
も 休む間なし。」

十141 〇 〇 かべ土よ 塗込められ
て あらはれぬ ぬきもあるなり。

十148 〇 〇 げに／＼と 皆うなづき

て、折からの 夜半のあらしに そ
のちは 音もきこえず。

十158 〇 紫式部は (略)、兄の書を
讀むを聞きゐて、直ちに之をそらん
じ、少しも忘るゝことなかりしかば、
(略)。

十161 〇 (略)、父の爲時は常に其の
頭をなでて、「(略)。」といひたりと
ぞ。

十162 〇 夫に別れて後、宮中に召さ
れて、(略)。

十162 〇 (略)、宮中に召されて、上
東門院に漢文・漢詩を教へ參らせた
り。

十169 〇 ある雪の朝、皇后は美しき
御庭の雪景色を御覽じて、「(略)。」
と仰せられしに、(略)。

十171 〇 (略)清少納言は、つと立ち
てみすをまき上げたり。

十174 〇 〇 是白樂天の詩に、「香爐
峯の雪はすだれをかゝけて見る。」
といふ句あるを思ひ出でて問はせ給
ひしを、(略)。

十176 〇 〇 是白樂天の詩に、「(略)。」
といふ句あるを思ひ出でて問はせ給
ひしを、(略)。

十181 〇 我々は毎日本を讀んで色々な
事を覺える。

十183 〇 本の中には (略)、晝や地圖
や寫眞のはいつてゐるものもある。

十183 〇 讀んでゐる間は中に書いて
ある事ばかりを一心に考へてゐるか

- ら、(略)。
- 十183 讀んでゐる間の中に書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、(略)。
- 十184 讀んでゐる間の中に書いてある事ばかりを一心に考へてゐるから、(略)。
- 十184 讀んでゐる間は(略)、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、(略)。
- 十189 さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、(略)。
- 十189 さて書きはじめてからも、消したり加へたりして、(略)、幾度書直すかも知れない。
- 十194 かうして出来上つたものを活版所へ渡す。
- 十197 活版所では、活字拾ひがそれを読みながら、活字を拾つて並べる。
- 十199 圖や畫は別に堅い木に彫り、寫眞は銅版に彫りつけて、相當の場所に入れる。
- 十1910 さてかりに印刷して、讀合せて見て、(略)。
- 十1910 さてかりに印刷して、讀合せて見て、(略)。
- 十1910 (略)、讀合せて見て、誤があれば、幾度でも其の活字を抜きかへて植直す。
- 十201 (略)、誤があれば、幾度でも其の活字を抜きかへて植直す。
- 十202 一字も誤がなくなつてから本

- 刷にかゝるのである。
- 十206 又極上品なものになると、機械では刷らないで、手刷にする。
- 十207 印刷が出来上つてから本にとづるまでも、まだ中々手数がかゝる。
- 十209 それを折つて、揃へてとづる。
- 十209 それを折つて、揃へてとづる。
- 十210 其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。
- 十210 其の上に表紙をつけて、機械にかけて固くしめる。
- 十215 それは版下を堅い木にはりつけて、其の上から彫つて版木を造り、一枚づつ手刷にするのである。
- 十216 (略)、其の上から彫つて版木を造り、(略)。
- 十219 (略)、同じ活字を何度でも組立てて使へる。
- 十223 (略) 木版が段々すたれて、活版を用ひることが多くなつた。
- 十227 老人(略)、良ヲカヘリミテ、「拾ヒ來レ。」トイフ。
- 十229 良(略)、命ノマヽニ拾ヒ取りテサヽグ。
- 十229 老人足ニテ之ヲ受ケ、笑ヒテ去ル。
- 十2210 驚キテ目送スレバ、(略)。
- 十2210 驚キテ目送スレバ、ヤヽアリテ引返シ來リ、(略)。
- 十233 団(略)、「略」トイヒ捨テテ去レリ。

- 十234 五日目ノ朝行キテ見レバ、老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。
- 十235 老人スデニ來リテ、良ヲ待テリ。
- 十236 大イニ怒リテ、「(略)。」トイフニ、良ヤムヲ得ズシテ歸レリ。
- 十236 「長者ト約シテ後ルヽハ禮ニ非ズ。
- 十241 老人怒リテ、五日目ノ朝ヲ約スルコト亦前ノ如シ。
- 十242 良此ノ度コソハト、夜半ヨリ起キテ橋上ニ至レバ、(略)。
- 十243 シバラクアリテ、カノ老人來レリ。
- 十244 フトコロヨリ一卷ノ書ヲ取出シテイフヤウ、「(略)。
- 十246 其ノ書ヲ與ヘテ去レリ。
- 十246 受ケテ見レバ、世ニモ得難キ兵書ナリ。
- 十247 良大イニ喜ビテ、朝夕之ヲ讀ミ、遂ニ兵法ヲ會得シタリ。
- 十249 韓信大刀ヲオビテ市中ヲ行ク。
- 十2410 無賴ノ少年等口々ニ罵リテ止マズ。
- 十255 韓信(略)、ヤガテハラバヒテ跨ノ下ヲクグル。
- 十259 良ハ内ニ謀ヲ運ラシ、信ハ外ニ兵ヲ用ヒテ、遂ニ高祖ヲシテ其ノ大業ヲ成サシメタリ。
- 十278 黄に紅に林をかざつてゐた木

- の葉も、大方は散果てて、(略)。
- 十279 木の葉も、大方は散果てて、見渡せば四方の山々のいたゞきは、はやまつ白になつてゐる。
- 十2710 見渡せば四方の山々のいたゞきは、はやまつ白になつてゐる。
- 十2710 山おろしの風は身にしみて寒い。
- 十282 古い銀杏の木が一本、木枯に吹きさらされて、今は葉一枚も残つてゐない。
- 十283 古い銀杏の木が一本、(略)、今は葉一枚も残つてゐない。
- 十284 はうきを立てた様に高く雲をはらはうとしてゐる。
- 十284 中程の枝の上に鳥が二羽止つて、さつきから少しも動かない。
- 十286 廣い田の面は(略)、かゝしの骨も残つてゐない。
- 十287 唯あぜの木の木に雀がたくさん集つてゐて、(略)。
- 十287 唯あぜの木の木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。
- 十288 雀がたくさん集つてゐて、時々群になつては飛立つ。
- 十289 畑には麥がもう一寸程にのびてゐる。
- 十2810 それと隣り合つて、ねぎや大根が青々とうねをかざつて、(略)。
- 十2810 (略)、ねぎや大根が青々とう

ねをかざつて、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

十292 (略)、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。

十292 畑に續いて、農家が一けんある。

十293 霜にやけて、赤くなつた杉垣の中には、(略)。

十294 (略)、寒菊が今を盛りと咲いてゐる。

十295 物置の後は、大きなだい／＼の木があつて、黄色い大きな實が枝もたわむ程なつてゐる。

十295 (略)、黄色い大きな實が枝もたわむ程なつてゐる。

十296 家の横に水をよくすんだ小川が流れてゐる。

十298 二三羽のあひるが(略)、しきりにゑをあさつてゐる。

十299 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、(略)。

十299 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、(略)。

十2910 犬を連れた男が(略)、森の蔭から出て来て、あぜ道傳ひにあちらの岡へ向つた。

十302 銀杏の木は急いで山の方へ逃げて行く。

十302 銀杏の木は急いで山の方へ逃げて行く。

十305 甘諸ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。

十319 平左衛門ハ石見ノ國ノ役人ニテ、百七十餘年程前ノ人ナリ。

十322 或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、(略)。

十322 直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、(略)。

十326 隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、(略)。

十3210 昆陽ハ有名ナル學者ニテ、平左衛門ヨリハ少シ後ノ人ナリ。

十331 當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、(略)。

十334 罪人ドモハ魚類・果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。

十338 其ノ作方、貯藏ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。

十339 幕府ハ此ノ書物ニ種芋ヲ添ヘテ、島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、(略)。

十347 或人が主人に向つて、(略)、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十347 (略)、知名の人の手紙を持つて来た者も大勢あつたのに、(略)。

十3410 主人は答へて、「(略)。」といった。

十352 「あれが此の室にはいる前、(略)、はいつてからは静かに後の戸をしめた。

十354 談話最中一人の老人がはいつて来ましたが、(略)。

十355 (略)、すぐに立つて、椅子をゆづりました。

十358 (略)、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよいいなことはいひません。

十359 はき／＼してゐて、禮儀・作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十359 はき／＼してゐて、禮儀・作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十3510 はき／＼してゐて、禮儀・作法をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十362 私はずと一巻の書物を床の上に投げておきました。

十363 外の者は少しも氣が附かないで、中にはそれをふんだ者もありましたが、(略)。

十365 (略)、あの青年ははいると直に書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

十368 人が大勢込合つてゐる中で、少しも人に先んじようとはせず、(略)。

十369 (略)、靜かに自分の順番を待つてゐました。

十3610 あれの温順なことをよく現して居ります。

十372 又着物はそまつながら、さ

つぱりしたものを着て、齒もよく磨いてゐました。

十372 (略)、齒もよく磨いてゐました。

十373 (略)、指先を見ると、爪は短く切つてゐました。

十375 外の者は(略)、爪の先はみんなまっ黒になつてゐました。

十376 かういふやうな色々な美質をもつてゐることをよく見定めました上、(略)。

十378 (略)、なほ平生の行をしらべて雇ふことに致しました。

十382 旅順開城約成りて、敵の將軍ステツセル、乃木大將と會見の處はいづゝ水師營。

十393 大みことのり傳ふれば、かれかしこみて謝しまつる。

十395 (略)、語ることばもうちとけて、我はたゝへつ、かの防備。

十398 うち正していひ出でぬ、(略)二子を失ひ給ひつる閣下の心如何にぞ。」と。

十406 兩將畫食共にして、なほも盡きせぬ物語。

十411 軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、なぐいたそり養はん。」

十415 『さらば』と、握手ねんころゝ、別れて行くや右左。

十421 (略) 壘ノ表ハ、此ノ莖ヲアミテ造リタルモノナリ。

十421 (略) 壘ノ表ハ、此ノ莖ヲ

アミテ造リタルモノナリ。

- 十422 又此ノ莖ヲ染分ケテ、花鳥等ノ美シキ模様ヲ織出セル花筵ハ我が國輸出品ノ一ナリ。
- 十4210 (略)、失敗ノ上ニ失敗ヲ重ねテ、一時ハ赤貧洗フガ如キ有様トナレリ。
- 十432 (略)、イヨ／＼勇氣ヲフルヒテ案ヲ續ケ、(略)。
- 十434 (略) 眠亀ハ此ノ機械ヲ用ヒテ、自ラ花筵數十種ヲ織出シ、(略)。
- 十436 (略)、唯一商人アリテ、其ノ中ノ數種ヲ買取リタルノミナリキ。
- 十444 (略) 眠亀ガ一身一家ヲ忘レテ、熱心ニ此ノ業ニ志シ、機械ヲ發明シ、國產ヲ廣メシハ(略)。
- 十449 (略) 直線を(略)、一定の間合を置きて、或は縦に、或は横に、或はななめに並ぶる時は、(略)。
- 十473 (略) 模様には(略)、草木・花鳥・蟲魚等の形を變じて作れるもの多し。
- 十495 (略) 赤と緑とを並ぶれば、赤も緑もよく引立ちて見ゆれども、(略)。
- 十496 (略)、赤と黒とを並ぶれば、赤の黒ずみて見ゆるが如し。
- 十503 (略) 「唯一人ふみ止つて戦ひ給ふは誰ぞ。
- 十506 (略) 唯首を取つて、大將の見参に入れよ。
- 十509 (略)。「といふまゝに、はや弓を捨てて進み寄る。

- 十511 (略)、敵は之をつかんで、片手にひつさぐ。
- 十512 (略) 三人組合ひて馬より落つ。
- 十513 (略) 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。
- 十515 (略)、やがて打ちまたがつて首をかく。
- 十516 (略) 手塚、首をたづさへて、大將義仲の前行き、(略)。
- 十517 (略) 「光盛、曲者の首取つて候。
- 十518 (略) 名乗れと申せば、『略』といひて名乗らず。
- 十523 (略) 何者にてか候ふらん。」
- 十524 (略) 義仲之を聞きて、『そは武藏の齋藤別當にはあらずや。
- 十5210 (略) 樋口は一目見て、『あな、むざんや、實盛にて候。』
- 十531 (略) 「あな、むざんや、實盛にて候。」
- 十539 (略) 平生にても、若き人は白髪を見て侮る心あり。
- 十544 (略) 『といひしにたがはず、墨を塗りて候。』
- 十546 (略) 義仲之を見て、『略』と、さめ／＼と泣きたれば、(略)。
- 十548 (略) 「略)、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。
- 十551 (略) (略)、別當は七日の間手もとに置きて、木曾へつかはしたり。
- 十573 (略) 課業は術科と學科との二つにて、術科は午前・午後を通じて、

- 四時間より六時間、學科は夜分又は雨天等を利用して學習致し候。
- 十574 (略)、術科は午前・午後を通じて、四時間より六時間、(略)。
- 十576 (略)、學科は夜分又は雨天等を利用して學習致し候。
- 十577 (略) 此の頃の術科は分隊教練にて、學科は讀法の講義及び毎日の術科に關する説明に御座候。
- 十584 (略) 外出日は日曜日・祝日及び大祭日にて、水曜日(略)まで外出を許され候。
- 十594 (略) 何か不都合なる事ありて、罰に處せられたる者は外出を禁ぜられ、(略)。
- 十614 (略) 然レドモ其ノ頃ハ掘取リテフキ分クル方法ナホ不十分ナリシカバ、(略)。
- 十618 (略)、新式ノ機械ヲ用ヒシ以來、大イニ人カヲ省クコトヲ得テ、產出高モ著シク増加シ、(略)。
- 十625 (略) 發掘シタル銅鑛ハ、(略)、或ハ坑内ニ數キタルレールニヨリテ坑外ニ運ビ出シ、(略)。
- 十627 (略)、此ノ機械ニカケテ、一々其ノ良否ヲ選リ分ク。
- 十6210 (略) 製煉場ニハ殊ニ大イナル爐アリテ、銅鑛ヨリ銅ヲフキ分クルナリ。
- 十633 (略) 此ノアタリ、(略) 次第二發達シテ、今や足尾町ハ人口凡ソ三萬ヲ有スル一都會トナリ、(略)。

- 十638 昨夜の風雨は名残なくをさまつて、そよ／＼と吹く風に、海面はさゞ波を立ててゐる。
- 十639 (略)、海面はさゞ波を立ててゐる。
- 十6310 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。
- 十6311 一隻の捕鯨船が今靜かに波を切つて進んで行く。
- 十641 見張人が(略)北の方を指さして聲高く呼んだ。
- 十643 甲板に立つてゐた船長を始め、三十五人の若者は(略)。
- 十647 (略)、船ははや方向を轉じて、北へ向つて走る。
- 十647 (略)、船ははや方向を轉じて、北へ向つて走る。
- 十648 四五隻のボートは母船を離れて、我先にと漕いで行く。
- 十648 四五隻のボートは母船を離れて、我先にと漕いで行く。
- 十649 漕抜けた一隻は勇氣をふるつて、見る内に一頭の鯨に近寄り、(略)鉋を打つ。
- 十6410 (略)、急處めがけて破裂矢をしかけた鉋を打つ。
- 十651 小山の様な白波が高くくだけて、夕立のやうに降散る。
- 十656 破裂矢は鯨の體内に深く食込んで破裂した。
- 十658 ボートは(略)つなに引かれて、或は右に或は左に引廻される。

- 十661 ⑤ ボートはつなをたぐつて、又も鯨に近寄り、(略)。
 十663 ⑤ 鯨は段々弱つて、泳ぐ力もなくなる。
 十664 ⑤ 若者は長い劔を突通し、幾度となく抜いては又突く。
 十665 ⑤ 六七十尺の大鯨も今は全く息絶えて、水面に横たはる。
 十668 ⑤ 他のボートを見れば、(略)、
 十668 ⑤ 鰯を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。
 十668 ⑤ 他のボートを見れば、(略)、
 十668 ⑤ 鰯を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。
 十668 ⑤ 彼のボートを見れば、(略)、
 十668 ⑤ 鰯を打つて鯨に引廻されてゐるものもある。
 十669 ⑤ あちらこちら入亂れて戦場のやうである。
 十673 ⑤ 捕鯨法には(略)鯨の通路に網を張つて鰯を打つ方法などもあつた。
 十683 ⑤ 或夜にはかの風に吹かれて、此の燈臺附近の岩の上に乘上げたる帆船船あり。
 十684 ⑤ 船體二つにくだけて、一半ははや大波にさらはれたり。
 十686 ⑤ (略) 船體にすがり、さかまく波にもまれて聲を限りに救を呼べり。
 十689 ⑤ 波風にまじりて聞ゆる悲鳴の聲に目をさまし、(略)。
 十6810 ⑤ (略) 眠れる父をゆり起して、幾度かいそべに出でてながめしが、(略)。

- 十691 ⑤ (略) 眠れる父をゆり起して、幾度かいそべに出でてながめしが、(略)。
 十691 ⑤ (略) 墨を流したる如き空模様にて、一寸先をも見分けること能はず、(略)。
 十693 ⑤ 夜明けて見れば、岩の上に一隻の難破船横たはれり。
 十695 ⑤ 水夫等はなほぼしらに抱きつきて、息も絶え／＼に救を呼べり。
 十696 ⑤ 少女は之を見て、「(略)。」とせき立つ。
 十696 ⑤ 早く船を出して救はん。
 十699 ⑤ (略) 娘のやさしき心にはげまされて、ボートを用意す。
 十6910 ⑤ (略) 船の頭を立直しく、死力を盡して漕進む。
 十704 ⑤ 父は直ちに勞れ果てたる水夫を助けて、ボートにうつす。
 十707 ⑤ (略) 二人はまた有らん限りの勇氣をふるひて、遂に岸べに漕着けたり。
 十712 ⑤ (略) ダーリングの手は、今ややさしきをとめの手にかへりて、半死半生の水夫を親切に看護せり。
 十714 ⑤ 数日の後、水夫は此の少女の手に熱き感謝の涙をそそぎて、各我が家に歸りたりとぞ。
 十721 ⑤ 絶えずわき出づるものと、時を定めてわき出づるものとあり。
 十724 ⑤ 温泉のわき出づる處はおほ

- むね火山の附近に在りて、四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。
 十728 ⑤ (略) 一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。
 十738 ⑤ 道後に次ぎて早く世に知られたるは有馬の温泉にして、(略)。
 十747 ⑤ 噴出する時は湯氣立ちのぼりて、鳴動の音すさまじ。
 十7410 ⑤ 旅館は山により、谷に臨みて、山水のながめをほしきまゝにするを得べし。
 十762 ⑤ 心臓ハ(略)、又身體ノ各部ヨリ歸り來レル血ヲ集メテ、之ヲ肺臓ニ送ル。
 十765 ⑤ (略) 腸ハ胃ニテコナシ盡サザルモノヲコナシテ、其ノ不用ナルモノヲ體外ニ出ス。
 十773 ⑤ 目ハ色・形ヲ見、(略) 口ハ味ヲ味ハヒテ、各之ヲ腦ニ報告ス。
 十773 ⑤ 腦ハ其ノ報告ニヨツテ判別シ、(略)。
 十774 ⑤ 腦ハ(略) 手・足・口等ニ命令シテ活動セシム。
 十782 ⑤ 又筋肉ハ之ヲ用フルニシタガヒテ發達ス。
 十787 ⑤ 身體ノ構造ハ極メテ複雑ナルモノニテ、一小部分ノ傷害モ直チニ全身ノ元氣ニ關スルモノナレバ、(略)。
 十795 ⑤ 是は北海道に住するあいぬ

- 人を畫がけるものにて、左は男子、右は女子なり。
 十805 ⑤ 其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。
 十8010 ⑤ あつし織とは、おひようといふ木の皮を細く裂きて織りたる織物なり。
 十815 ⑤ 唯かつらなどにて、かやを結びて壁に代へ、(略)。
 十816 ⑤ (略) 又かやを並べて屋根となせり。
 十817 ⑤ (略) 一家之を圍みて談笑す。
 十819 ⑤ あいぬは(略) 一年の間養ひたる後、之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。
 十821 ⑤ 殺したる熊の頭は垣にかけて、永く之を保存するを以て(略)。
 十822 ⑤ (略) 垣の上には多くの頭骨、風雨にさらされて残れり。
 十829 ⑤ あいぬの数、(略) 近年次第に減少して、今は僅かに二萬人に足らず。
 十8210 ⑤ されば北海道舊土人保護法と稱する法律ありて、(略) 學校を建つる等、厚く保護の方法を講ぜり。
 十841 ⑤ (略) 重い物を負はせて遠くへ運ばせたり、(略)。
 十846 ⑤ 其の皮は革に製して、かばんや靴などを造り、(略)。
 十849 ⑤ 何から何まで役に立つて、不用な部分といふものは一つもない。

- 十853 其の上戦争には必ず無くてはならぬもので、(略)。
- 十855 (略)、將卒と共に戰場を駆けめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。
- 十859 西洋の馬がおとなしくて、日本の馬のおとなしくないのは、(略)。
- 十866 豚肉はあぶらに富んでゐて、養分の多いことは牛肉におとらぬ。
- 十866 豚肉はあぶらに富んでゐて、養分の多いことは牛肉におとらぬ。
- 十868 (略)、琉球ではたくさん飼つて居つた。
- 十872 長くのびると、刈取つて毛織物の材料にする。
- 十876 殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。
- 十878 廣く家畜といへば、鳥類までも入れて言ふ。
- 十8810 (略) 夜晝三日供御もなく、歩みつかまて松かげに いこはせ給ふかしこさよ。
- 十892 (略) 君は御袖に降りかゝる露拂はせて、さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれがもふし。
- 十893 (略) さして行く笠置の山を出でしより、(略)。
- 十895 (略) 御歌かしこみ、藤房は聲くもらせて、いかにせん、頼むかげとて立寄れば、尚袖ぬらす松の下露。
- 十914 (略) 有志の方々御さそ

- ひ合せの上、御來會相成候ては如何。
- 十942 (略) 停車場ヲ出デテ、左ニ開化天皇ノ陵ヲ拜シ、猿澤ノ池ニ至ル。
- 十957 (略) 帝室博物館ヲ觀覽シテ、老樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗キ間ヲ行ケバ、(略)。
- 十957 (略)、老樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗キ間ヲ行ケバ、(略)。
- 十961 (略) 神鹿ノ(略)、人ニ近ヅキ來リテ食ヲ求ムルモ愛ラシ。
- 十963 (略) 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリテ、都ニアリシ時此ノ山ニ出ヅル月ヲ眺メタルコトヲ思ヒ出デテ、(略)。
- トヨメルコト人ノヨク知ル所ナリ。
- 十964 (略) 昔安倍仲麻呂ガ唐土ニアリテ、(略)コトヲ思ヒ出デテ、(略)。
- トヨメルコト人ノヨク知ル所ナリ。
- 十968 (略) 春日神社ヨリ西北ニ向ヒテ東大寺ニ到ル。
- 十981 (略) 奈良見物ヲ終ヘテ法隆寺ニ向フ。
- 十987 (略) 奈良ヨリ汽車ニ乘リテ南ヘ進メバ、(略)。
- 十988 (略) 三輪山ハ老樹繁茂シテ、翠綠シタルガ如シ。
- 十9810 (略)、初瀬川ニソヒテ爪先上リニ行ケバ、初瀬町ニ至ル。
- 十9910 (略) 長廊盡キテ本堂アリ。
- 十1005 (略) コレヨリ谷川ニソヒテ、坂路ヲ上ルコト一里餘ニシテ、(略)。
- 十1009 (略) 來て見ればこゝも櫻の峯つゞき、吉野初瀬の花の中宿。

- 十1015 (略)、鎌足ガ靴ヲサ、ゲテ皇子ニ近ヅキ奉リシハ、即チ此ノ寺ナリ。
- 十10110 (略) 畝傍山・香具山・耳無山ノ三山、(略)、鍋ノ足ノ如ク向ヒ合ヒテ立テリ。
- 十1027 (略) コ、ニマウヅルモノ、誰カハ其ノカミヲオモヒ出デテ、皇室ノ御威徳ヲ仰ガザラン。
- 十117 (略) 六田の渡を渡りて上り行く坂路の左右すでに櫻多し。
- 十119 (略) 眺望いよく開けて、満目總べて花なり。
- 十126 (略) 大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。
- 十131 (略) 花よねてよしや吉野のよし水はまぐらのもとよ石走る音。
- 十133 (略) (略)、谷をへだてて向ふの山腹に如意輪寺あり。
- 十1310 (略)、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、涙わき出でて禁じ難し。
- 十141 (略) (略)、涙わき出でて禁じ難し。
- 十147 (略) 花は麓より咲初めて次第に山上に及び、(略)。
- 十148 (略) (略)、麓の花、中の花の盛り過ぎて、奥の花の盛りとなるまでは、(略)。
- 十156 (略) 蜜蜂は群を爲して共同の生活を営み、(略)。

- 十1510 (略) 終日勞働して、一群の生計を維持するものは働蜂なり。
- 十161 (略) 働蜂の若きものは内に居て幼蟲を育て、(略)。
- 十163 (略)、力強く壯なるものは外に出でて花の蜜を吸來る。
- 十166 (略) (略)、外役の蜂は朝より夕に至るまで、營營として寸時も休まず。
- 十1610 (略) 又之を受取りて貯ふる貯蓄あり。
- 十1610 (略) 怠りて持歸らざるものあれば、(略)。
- 十173 (略) 雄蜂は唯働蜂の集め來りたる物を食して生活するものにして、(略)。
- 十178 (略) (略)、女王は(略)其の位をゆづり、臣下をひきゐて分離す。
- 十1710 (略) 故に飼養者の注意によりては、次第に其の群の數を増加することを得べし。
- 十188 (略) (略)、共同團結して勞働をいとはず、(略)。
- 十189 (略) (略)、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、(略)。
- 十193 (略)、ソレヲ大勢ノ人ガ手分シテスルノデアル。
- 十194 (略) 材木ヲ機械ニカケテ軸木ヲコシラヘル者、(略)。
- 十196 (略) 揃へテ箱ニ入レル者、(略)。
- 十196 (略)、十二箱ツツ集メテ紙

ニ包ム者、(略)。

十一 97 此ノ様ニ大勢ノ人ガ手分ヲシテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

十一 101 (略)、分業デスル方ガ品物ノ出来バエガ良クテ、製造高モハルカニ多イ。

十一 102 (略) マツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデア。

十一 104 (略)、一包三錢ヤ三錢五厘ニ賣ツテハ、トテモ引合フモノデナイ。

十一 105 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。

十一 108 随ツテ良イ品物ガ出来テ、製造高モ多クナル。

十一 113 分業法ニ依ツテ、一人デ一種ノ仕事ニバカリカハルコトニナルト、(略)。

十一 114 (略)、ソナナ手數ガ省ケテ、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十一 116 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、(略)。

十一 116 又分業ニ依ツテ一ツノ仕事ニバカリ掛ツテ居ルト、(略)。

十一 127 (略)、分業ハ益々發達シテ、今日デハ(略)、分業法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。

十一 143 (略)と聞き、一族共を集めていへるやう、(略)。

十一 144 (略)『志士・仁人は生を求

めて仁を害することなし。

十一 144 (略) 身を殺して仁を成すことあり。』とかや。

十一 145 (略) 義を見てせざるは勇無きなり。

十一 146 (略) 君をうばひ奉りて義軍を起し、(略)。

十一 153 (略) 山陰道へかゝりて遷幸をなし奉るといふ。

十一 154 (略)、道も無き山の雲をしのぎて杉坂に着きたりしに、(略)。

十一 156 (略) 衆皆力を失ひて散りゝに成れり。

十一 158 (略)、大いなる櫻の木の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

十一 162 (略) 翌朝警固の武士ども之を見つけて、(略)、讀みかねて上聞に達したり。

十一 163 (略)、讀みかねて上聞に達したり。

十一 164 (略) 主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

十一 167 (略) 是は昔、支那に呉・越といふ二國ありてたがひに争ひしが、(略)。

十一 168 (略)、呉の勢盛になりて、會稽山の戦に越の軍を打破りたり。

十一 1610 (略)、越王勾踐つづさに辛苦をなめて報復を圖り、(略)。

十一 1610 (略)、范蠡といふ無二の

忠臣の助を得て、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十一 171 (略)、遂に呉を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

十一 172 (略) 此の故事を引きて、(略)、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十一 173 (略)、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十一 176 (略) 佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊後海峡をなす。

十一 187 (略) かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

十一 188 (略) 春は島山霞に包まれて眠るが如く、(略)。

十一 193 (略) 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛毯を敷けるが如く、(略)。

十一 197 (略)、朝日・夕日を負ひて、島がぐれ行く白帆の影ものどかなり。

十一 203 (略)、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

十一 206 (略) 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、(略)。

十一 208 (略) 西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界海上の一

大公園なりといへり。

十一 217 (略) 生れてしほに浴して、

浪を子守の歌と聞き、(略)。

浪を子守の歌と聞き、(略)。

十一 217 (略) 生れてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、(略)。

十一 2110 (略)、千里寄せる海の氣を吸ひてわらべとふりにけり。

十一 227 (略) 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、(略)。

十一 242 (略) いで、大船を乗出して、我は拾はん、海の富。

十一 244 (略) いで、軍艦に乘組みて、我は護らん、海の國。

十一 262 (略) 電車・自動車等も次第に多く行はれて、ひとへに速力を競ふ世とはなれり。

十一 267 (略) 若者が體を揃へて漕ぎ出す漁船の勇ましきさよ。

十一 271 (略) 和船の大なるは五百石積・千石積等ありて、近海を航行すれども、(略)。

十一 292 (略) 大小幾多の軍艦は(略)、遠く四方に航行して、到る處に國光をかざやかせり。

十一 332 (略)、時ニ戦艦ト合同シテ敵ノ主力ト戦フコトアリ。

十一 342 (略) 通報艦ハ(略)、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、我が艦隊ニ報告ス。

十一 346 (略) 驅逐艦ハ(略)、敵艦ニ近ツキ、魚形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈シ、(略)。

十一 349 (略) 水雷艇ハ(略)、敵艦ニ近ツキ、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃

沈ス。

沈スルヲ任務トス。

十一34 〇 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、水雷ヲ放チテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目的トス。

十一37 〇 〇 略、其の外支那形船に限りて許されたる數多の開港場もこれあり候。

十一37 〇 〇 本島産物の重なるものは、御承知の樟腦・米・茶・砂糖等にて、樟腦は世界産額の八分の五を占むる由に御座候。

十一38 〇 〇 略、又平田に廣東婦人が隊を成して草取を爲す有様は殊に興味を覚え申候。

十一38 〇 〇 其の氣根の地に入りて、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは（略）。

十一38 〇 〇 略、數幹・數十幹入亂れて一大樹を成したるは（略）。

十一39 〇 〇 又竹を原料として竹紙を製造致居候。

十一39 〇 〇 臺南は南部の大都會にて、附近に名所・舊蹟の多き所に御座候。

十一39 〇 〇 阿里山の檜材は世界無比の良材と稱せらるゝものにて、中には直徑二十尺餘、一樹にて千五百尺の材積を得るものもこれあり候由、（略）。

十一40 〇 〇 其の中内地人は八萬餘、蕃人は此の外にて約十一萬と申す事に候。

十一41 〇 〇 略、赤松光範、楠木正儀と攝津の住吉に戦ひて、散々に撃破られたり。

十一41 〇 〇 略、一日光範に向ひて、「（略）」と涙を流していふ。

十一41 〇 〇 「正儀は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。

十一41 〇 〇 如何にもして討取り申すべし。

十一41 〇 〇 是より御いとま賜はり、河内に行きて正儀に仕へん。

十一42 〇 〇 「（略）」と涙を流していふ。

十一42 〇 〇 また我に代りて討死したる六郎の形見とも思ふものを。」

十一42 〇 〇 「年長じては敵も近づけ申すまじ。

十一42 〇 〇 幼き時に参りてこそ。」

十一42 〇 〇 略、常に身を離さざりし名刀を與へて行かしめたり。

十一43 〇 〇 熊王直ちに河内に行きて、赤坂城のほとりになすむ。

十一43 〇 〇 正儀の臣兵庫介忠元あやしみて、「何者ぞ。」と問へば、（略）。

十一43 〇 〇 略、一族の者領地をうばひて、我を追出したり。

十一43 〇 〇 光範と心を併せての事とて、如何ともし難ければ、（略）。

十一43 〇 〇 略、佛門に入りて父の後をとぶらはんとて、かく諸國を巡り歩くなり。」

十一43 〇 〇 忠元あはれみて、己が家に連歸り、（略）。

十一43 〇 〇 略、様々に勞りて、かくと正儀に告ぐるに、（略）。

十一43 〇 〇 略、正儀は情深き武士なれば、呼出して召使ひたり。

十一44 〇 〇 いよく忌日になりて、熊王今夜こそ正儀を討ためと、ひとり心に思ひ定めたるに、（略）。

十一44 〇 〇 略、もとよりを上げて、和田小次郎正寛と名乗らせ、（略）。

十一44 〇 〇 略、具足一領を取出して與ふ。

十一44 〇 〇 熊王恩に感じて、涙せきあへず。

十一44 〇 〇 夜に入りて、討つべきは今なりと、心を取直せども、（略）。

十一45 〇 〇 略、年頃の恩愛、殊に今日の元服の事等思ひ續けては、如何でか討たるべき。

十一45 〇 〇 幾度か思ひ直して討たんとすれども、（略）。

十一45 〇 〇 略、少しも疑ふ心なき正儀の様を見ては、刀のつかに手をかきべきやうもなし。

十一45 〇 〇 思はず大聲をあげて泣號びぬ。

十一45 〇 〇 正儀驚きて、「如何にしたるぞ。」と問へば、（略）。

十一45 〇 〇 略、熊王年來包みたる心の中を打明けて、「（略）」とて、刀を取直して腹かき切らんとす。

十一45 〇 〇 略、刀を取直して腹かき切らんとす。

十一45 〇 〇 略、刀を取直して腹かき切らんとす。

十一45 〇 〇 居合せたる人々（略）、取つておさへて動かせず。

十一45 〇 〇 居合せたる人々（略）、取つておさへて動かせず。

十一45 〇 〇 略、さて往生院に入りて僧となり、（略）。

十一46 〇 〇 かくて光範の與へたる刀には事の由を書添へて送り返し、（略）。

十一46 〇 〇 飲まず食はずに終日・終夜走つても尚平然として居るといふことである。

十一47 〇 〇 さていよく馬を受取る段になつて、大將は今少しまけぬかといふ。

十一47 〇 〇 段々口論の末、大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。

十一47 〇 〇 馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、（略）。

十一47 〇 〇 略、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、（略）。

十一47 〇 〇 略、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、（略）。

十一47 〇 〇 略、ひらりと飛乗つて一散にかけ出した。

十一48 〇 〇 略、直ちに自分の馬にまたがつて、其の跡を追つかけた。

十一48 〇 〇 略、絶えず追手と或間隔を保ちながら進んで行く。

十一48 〇 〇 略、馬に全速力を出させて、雲を霞と逃げのびた。

十一48 〇 〇 略、馬に全速力を出させて、雲を霞と逃げのびた。

十一486 間もなく日は暮れて、夜のときは全く馬主の行方をかくした。

十一489 空しく歸つて、「略。」と報告する外はない。

十一489 圖 「騎者・騎馬・黄金、三つとも失つてしまひました。」

十一491 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて來た。

十一491 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて來た。

十一494 四日目の朝、大將は何心なく外を眺めてゐると、(略)。

十一495 (略)、前の馬主が再び馬をひいて來て、(略)。

十一495 (略)、前の馬主が再び馬をひいて來て、「略。」といった。

十一4910 アラビヤに良馬の多く産するのは、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一503 古來アラビヤ人は馬を家族の一員と考へて、家長は之を自分の子供と同じ様にかはいる。

十一505 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。

十一506 馬もよく飼主になれて、其の家族一同と親しんでゐる。

十一508 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の様なことが書いてある。

十一509 「馬が子供と遊んでゐるのを見たことがある。

十一511 (略) 三つ四つの子供が、

馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。

十一511 (略) 三つ四つの子供が、馬の尾を引き、脚をなでて、戯れてゐると、(略)。

十一512 (略)、馬は(略)、口でおもちやをさく上げて、其の子供をあやしてゐた。

十一512 (略)、馬は(略)、口でおもちやをさく上げて、其の子供をあやしてゐた。

十一517 圖 親子・夫婦・兄弟・姉妹ヨク和合スレバ、互ニ相助ケテ各其ノ家業ヲ樂シムヲ以テ、(略)。

十一518 圖 (略)、家運自ラ開ケテ一家ノ内笑フコト多シ。

十一521 圖 一家和合セザル時ハ家道次第ニオトロヘテ、笑聲ノ戸ヨリモル、事ナカルベシ。

十一527 圖 (略)、身體ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロヘテ笑フコト少シ。

十一529 圖 内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、(略)。

十一533 圖 (略)、時ト場合トニヨリテ笑フベカラザルコトアリ。

十一5310 圖 イハンヤ我ニ優レル人ヲネタミ、其ノ聲譽ヲ傷ツケントシテ笑フ者ニ於テヤ。

十一541 圖 他人ノ歡心ヲ買ハントシテヘツラヒ笑フハ、(略)。

十一542 圖 花客ニ接シテ愛敬ヲ盡ス

ハ商人ノ美德ナレドモ、(略)。

十一543 圖 (略)、ミダリニ聲色ヲ作リテヘツラヒ笑ヒ、中心却ツテ親切ノ念ナキモノハ、(略)。

十一547 ナボレオンがアルプ山を越えて、イタリヤへ攻入つた時は冬の半で、(略)。

十一548 (略)、山も谷も雪にうづめられて、吹く風は身を切るやうに寒かつた。

十一551 眞先に立つて、太鼓を打ちながら、かひなく進んで行く。

十一552 眞先に立つて、太鼓を打ちながら、かひなく進んで行く。

十一554 (略) 雪なだれがなだれて來て、(略) 少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。

十一555 (略) 雪なだれがなだれて來て、(略) 少年鼓手は忽ち谷底へはき落された。

十一557 「略。」と聲を揃へて呼んだが、何の答もない。

十一5510 耳をそばだてて聞けば、進軍の調である。

十一561 さては生きてゐるのか。

十一562 あの勇ましい少年を殺してはならぬ。

十一562 どうかして助ける工夫はあるまいかと、(略)。

十一563 どうかして助ける工夫はあるまいかと、兵士等は皆氣をもんでゐる。

十一565 (略)、谷へ下りる細道も雪や氷にとざされて、どこか全く知れない。

十一567 おくれ、バビエルはこゝえて死ぬであらう。

十一572 將軍は上衣をぬぎすてて、はや谷へ下りようとする。

十一573 兵士等はあわてて異口同音に、「略。」といつて引止める。

十一575 兵士等はあわてて異口同音に、「略。」といつて引止める。

十一579 圖 我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。

十一581 圖 大砲のつなをくくりつけて、早く自分を谷へ下せ。

十一582 圖 早くしないと、バビエルが死んでしまふ。」

十一586 (略)、方々を尋ねて、やうくさがし當てたが、(略)。

十一587 手早く帶をほどいて、バビエルの體にくくりつけて合圖をする

と、(略)。

十一588 手早く帶をほどいて、バビエルの體にくくりつけて合圖をする

と、(略)。

十一5810 將軍の愛情と勇氣によつて、軍中の花が助かつたので、(略)。

十一612 圖 武勇のはたらき命さへ

十一614 圖 勇み勇みて出で行く兵

士。

十一645 同ジ材料デモ、料理ノ塩梅ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、(略)。

十一646 (略)、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニモ大イナル得失ガアル。

十一6410 衛生上ヨリハ、成ルベク滋養ニ富シテ、コナレノ良イモノヲ選ブベク、(略)。

十一652 (略)、味ハ人々ノ好ミヲ考ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキ物ヲ選バナケレバナラス。

十一654 季節ニ依ツテ、食物ノ選ビ方ニ多少ノ注意ヲ要スル。

十一658 (略)、暑イ時分ハ(略)、アツサリトシテ消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。

十一659 (略) 季節ノ物ヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

十一663 (略) 適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

十一672 臺所ハ(略)、常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラス。

十一673 座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、(略)。

十一674 (略)、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハヲカシイ話デアル。

十一683 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。

十一693 活動するのみにて休養することなければ心身いつか勞れて、(略)。

十一694 心身いつか勞れて、遂には活動にたへざるに至る。

十一696 業務に従事する間は熱心に之を行ひて、他事に心を勞すべからず。

十一697 又事既に過ぎて、思ふも益なき事に心を勞するは、(略)。

十一6910 若し過あらば、深く之を悔いて、其の過を再びせざらんことをちかふべし。

十一705 (略)、又人より訪問を受ける時は直ちに出席すべし。

十一7010 (略)、六十人の時間の損失は合して十時間となるべし。

十一712 (略)、今日の如く通信交通の機關發達し、社會の活動敏速なる時代にありては、時間は金錢よりも貴し。

十一719 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)。

十一7110 (略)、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して三年を経たり。

十一721 住持は心得ぬ事に思ひて、或時畫工に向ひ、「(略)」といへば、(略)。

十一724 (略)、何處へなりとも出でて遊び給へ。

十一725 愚僧も所用ありて京

へ上り、一二年在京せんもはかり難し。」

十一727 さらば年來の謝恩に何か書きて參らすべし。」

十一729 或夜小僧住持の居間に來りて、「(略)」とささやくに、(略)。

十一729 (略) 「かしこに行きて、彼の畫師の有様を見給へ。」

十一7210 (略)、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。

十一7210 (略)、行きてうかゞへば、障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。

十一732 さまたげせんも心なしと思ひて、其のまゝ寢間に歸れり。

十一733 翌日畫工の早朝に起出でて畫がけるを見れば、(略)。

十一737 住持は知らぬ顔して過せしに、(略)。

十一738 其の後又夜更けてうかゞひ見るに、(略)。

十一739 (略)、今度はひちを張り、足をのべ、手を口にあてて、尚も鶴の卧したる様をなせり。

十一7310 夜明けて後、住持畫工に向ひて、(略)。

十一741 夜明けて後、住持畫工に向ひて、「(略)」と、夜中のぞき見たる姿をして見るに、(略)。

十一742 (略)、夜中のぞき見たる姿をして見るに、(略)。

十一742 (略)、畫師は驚きて、「(略)」と問ふ。

十一743 「我が畫がかんと思ひ構へしことを如何にして知り給へるか。」

十一744 「それは昨夜のぞき見て知りたり。」

十一745 (略)、唯繪一本を畫がきて、東國へ出立せり。

十一747 然るに未だ一月もたゞざる内、又再び引返して一國寺に歸れり。

十一748 住持は驚きて、「(略)」と問へば、(略)。

十一751 (略)、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、(略)。

十一753 (略)、別を告げて出で去れりとなん。

十一758 日光山には華嚴瀧を始として、(略) 等其の名世に知られたるもの少からず。

十一762 中央以下は霧と散り、雨と飛びて、水烟深谷をおほひ、(略)。

十一7610 (略)、この水即ちかゝつて第一の瀑布を成すなり。

十一771 更に川に沿ひて上れば、第二の瀧あり。

十一772 上るに隨つて、瀧はいよ／＼小、境は益々靜かなり。

十一7710 二瀑相並んで雄を争ひ、(略)。

十一七八〇 〔略〕、附近數百歩の地にありては、器に盛れる水常に波紋を生ず。

十一七八六 又嚴冬の頃は瀑水落つるに随ひ氷結して、一面玉山銀臺となり、〔略〕。

十一七八八 〔略〕、水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす。

十一七九一 鵜を使ひて魚を捕ふること、〔略〕 古來廣く諸所に行はれたり。

十一七九五 市を出でて橋を渡れば長良村あり。

十一七九九 此の間毎夜月なき時をうかゞひて漁舟を出す。

十一七九四 觀客は遊船を中流に浮べて、鵜舟の下り来るを待つ。

十一八〇一 川上にかゞり火の明り先づ見え初めて、ほうくと呼ぶ聲を聞く内に、〔略〕。

十一八〇七 〔略〕思ひく浮沈するを、たくみにさばきてもつれしめず。

十一八〇七 此の間に鵜を引上げて吞みたる魚を吐かせ、〔略〕。

十一八一一 〔略〕火のこの光にはげまされて、鵜は盛に活動し、〔略〕。

十一八一九 くはへたる魚をふりかへて、頭より吞下す早業は、〔略〕。

十一八二一 鵜をくはへてくちばしに卷附かれ、〔略〕。

十一八二一 鵜をくはへてくちばしに

卷附かれ、持て餘して見ゆるをか

十一八二四 魚は火の光を追ひて集り來り、〔略〕。

十一八二四 魚は〔略〕、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、〔略〕。

十一八三一 〔略〕、之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯の光を水にうつせる奇觀は〔略〕。

十一八三三 鵜なはを引上げて、鵜のふなばたに立並べる時、〔略〕。

十一八三四 〔略〕、半月金華山の上に

出でて、川風たもとを拂ふも快し。

十一八三八 年々一億圓ノ綿花ヲ輸入シテ、綿絲又ハ綿布トシ、〔略〕。

十一八三八 〔略〕、内國ノ所用ヲミタシテ、尚海外ニ輸出スルモノ五千萬圓以上ニ及ぶ。

十一八三〇 紡績工場ニ入りテ見ヨ。

十一八三〇 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、〔略〕。

十一八四一 蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動スル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、〔略〕。

十一八四三 先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテ

ホグシ、〔略〕。

十一八四四 〔略〕、鐵棒ニマキテ、長さ四尺バカリ、直徑尺餘ノ筵締トス。

十一八四五 皆機械ニヨリテナサル。

十一八四六 其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ、吹雪ノ風ニク

ルフガ如ク、〔略〕。

十一八五一 〔略〕ブラッシノ仕掛アリテ、筵締ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。

十一八五四 〔略〕、四尺程ノ幅トナリテ進ム様、精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。

十一八五五 此ノ流ハ自ら集メラレテ、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入ル。

十一八五五 〔略〕、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入ル。

十一八五八 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練篠機ト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、〔略〕。

十一八五九 〔略〕、又更ニ他ノ機械ニ移シ、イヨイヨ延シテ、イヨく細クシ、〔略〕。

十一八五九 〔略〕、次第二ヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ツカシム。

十一八六〇 〔略〕、サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サトナシテ、〔略〕。

十一八六一 〔略〕、サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サトナシテ、更ニヨリヲカケ、ツムニマキトラシム。

十一八六四 工女ハ〔略〕、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。

十一八七〇 蠶の絲を吐きて繭を造るは紡績の業に等しく、〔略〕。

十一八八一 蜘蛛は其の體より絲を出して網を張る。

十一八八三 〔略〕やゝ太き絲を渡し、之を本として、次第に細き絲をかけ、〔略〕。

十一八八五 蚯蚓は地下に穴をうがちて住み、〔略〕。

十一八八五 蚯蚓は〔略〕、多量の土を吞込みては之を地上の穴の口に出す。

十一八八〇 油蟲は植物の若芽・若葉などに群り着きて、其の植物の汁を吸ひ、〔略〕。

十一八八二 〔略〕、蟻は〔略〕、油蟲の附着せる植物に集りて之を保護し、〔略〕。

十一八九三 〔略〕、或は其の卵を他の植物にうつして成長せしむ。

十一八九四 蟻は其の種類によりて種々の巢を造れども、〔略〕。

十一八九五 〔略〕、多くは地下に穴をうがちて、部屋・廊下を造り、其の内面を壁の如くに固む。

十一九〇一 〔略〕、常に此の草の多く生ずる所を選びて住み、〔略〕。

十一九〇二 〔略〕、周圍の雜草を食切りて、ひたすら此の草の成長を保護し、〔略〕。

十一九〇二 〔略〕、其の實の熟して地に落つるを待ちて、〔略〕。

十一九〇三 〔略〕、其の實の熟して地に落つるを待ちて、其の巢に運び去る。

十一九〇七 物の價は効用あること

と、隨意に得られざることによりて生ずるものなり。

十一919 物の價の高下は主として需要と供給との關係によりて定まるものなり。

十一921 例へばこゝに一戸の賣家ありて、之を買はんとする人五人あるときは、(略)。

十一923 其の家の他人の手に渡らんことを恐れて、争ひて高き價をつくべし。

十一923 其の五人は(略)、争ひて高き價をつくべし。

十一924 かくて其の家の價は段々高くなりて、最も高き價をつけたる人の手に渡るべきなり。

十一926 之に反して、同様な賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。

十一926 之に反して、同様な賣家五戸ありて、買はんとする人唯一人なるときは、(略)。

十一928 其の家の賣れざらんことを恐れて、争ひて其の價を低くすべし。

十一928 賣家の持主五人は(略)、争ひて其の價を低くすべし。

十一929 かくて其の家の價は段々安くなりて、最も價を低くしたる人其の家を賣ることを得べきなり。

十一931 物の價はかくの如く需要供給の關係によりて、或時は高く、

或時は安くなるものなれども、(略)。

十一935 例へば靴を用ふること流行して、買手にはかに増すときは、(略)。

十一936 靴の價にはかに高くなりて、靴屋の利益非常に多かるべし。

十一938 かくる時は靴屋は更に多くの職人を雇ひ入れて、盛に之を製造すべく、(略)。

十一939 又他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。

十一941 靴の價はやうやく安くなりて、普通の價に復するか、場合によりては尚それ以下に下るべし。

十一941 普通の價に復するか、場合によりては尚それ以下に下るべし。

十一943 又之と反對に、價次第に安くなりて、普通の價よりも下るに至る時は、(略)。

十一945 次第に其の製造高を減ずるが故に、供給も随つて減じて、(略)。

十一945 供給も随つて減じて、又普通の價に復するか、場合によりては尚それ以上に上るべし。

十一945 又普通の價に復するか、場合によりては尚それ以上に上るべし。

十一947 即ち物の價は普通の價を本として上下すと知るべし。

十一9410 などの如きは、需要増すに隨ひて、其の價益々高くなり、(略)。

十一972 是より一條の大道遠く北へ通じてロシヤ領に入候。

十一9710 東西三十三里、四箇所に境界石を置きて、分明に相成居候。

十一984 樺太にて最も有望なるは漁業にて、鯨と鯔との漁利は殊に多く、(略)。

十一991 鯨の主産地は西海岸及び亞庭灣、鯔の主産地は東海岸にて、春夏の交産卵の爲、鯨の群をなして海岸近く寄來る時は(略)。

十一992 春夏の交産卵の爲、鯨の群をなして海岸近く寄來る時は(略)。

十一994 鯨の群をなして海岸近く寄來る時は(略)、撫網にてすくひ取るを得る程にて、實に壯快なるものに御座候。

十一996 夏より秋にかけてこゝに集る鰯鰯は(略)。

十一998 漁業に次ぎて有望なるは農業と林業にて、(略)。

十一999 漁業に次ぎて有望なるは農業と林業にて、農産物の種類は北海道と大差なく、(略)。

十一1022 天下麻ノ如ク亂レ

テ、英雄四方ニ起レリ。

十一1025 民間ニ在リテ耕作ヲ事トセシガ、(略)。

十一1027 劉備ハ(略)、遂ニ迎ヘテ重臣トセリ。

十一1029 備サトシテ曰ク、「略」ト。

十一1032 孔明、劉備ニ事ヘ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、(略)。

十一1033 孔明、劉備ニ事ヘ、出デテハ軍師トナリテ謀ヲ運ラシ、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、(略)。

十一1034 孔明、入ツテハ首相トナリテ政ヲ行ヒ、(略)。

十一1035 遂ニ備ヲスケテ蜀ノ國ヲ建テ、(略)。

十一1036 天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十一1037 備崩ズルニ臨ミ、後事ヲ孔明ニユダネテ、「略」トイヒシニ、(略)。

十一1038 孔明涙ヲ流シテ、「略」ト答フ。

十一1039 備又其ノ子ニ向ヒテ、「略」トイフ。

十一1041 孔明、益々心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

十一1042 孔明、益々心ヲ用ヒテ民福ヲ計リ、忠義ヲ盡シテ變ラズ。

ズ。

十一104 蜀國ノ魏・吳二強國ト相
對立シテ、常ニ其ノ勢力ヲ維持セシ
ハ、(略)。

十一104 孔明ハ魏ヲ攻メテ支那中
央ノ地ヲ取り漢朝ヲ興復セントシ、
(略)。

十一104 孔明ハ(略)、遂ニ自ラ
諸軍ヲ率テ北征ス。

十一104 後人曰ク、「出師ノ表
ヲ見テ泣カザルモノハ人ニ非ズ」
ト。

十一104 孔明ハ沈着ニシテ、機ニ
臨ミ、變ニ應ジテ、智謀百出セリ。

十一105 蜀軍ノ陣營ヲ示シ
テ、「此ノ軍備ヲ何ト見ル。」ト問フ。

十一105 孟獲答ヘテ曰ク、「此ノ
如シト知ラバ何ゾ敗レン。」ト。

十一105 孔明笑ヒテ之ヲ放チ、再
ビ戰ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。

十一105 再ビ戰ハシメテ再
ビ之ヲ捕フ。

十一105 賊將歎ジテ、「公
ハ天授ナリ、(略)。」トテ、マタ反
スルコトナカリキ。

十一105 或時將軍馬謖、孔明ノ軍
令ニソムキテ大敗ス。

十一105 孔明、(略)、軍律ヲ亂サ
ンコトヲ恐レ、涙ヲフルツテ之ヲ斬
リ、(略)。

十一105 又自ラ責ヲ引イテ
位三等ヲ下セリトゾ。

十一106 蜀ノ軍其ノ棺ヲ護リテ國
ニ歸ラントス。

十一106 魏將司馬仲達聞キテ之ヲ
追フ。

十一106 蜀ノ軍(略)、旗ヲ反シ、
鼓ヲ鳴ラシテ仲達ニ向ハントスルモ
ノノ如シ。

十一106 後仲達、孔明ノ陣營ノ跡
ヲ觀テ、「(略)。」ト歎ジタリ。

十一106 仲達ハ孔明ノ墓ヲ
祭リ、士卒ニ令シテ、其ノ附近ノ草
ヲ刈リ、薪ヲ伐ルヲ禁ジタリトイフ。

十一106 朝鮮の地に上陸して、第一
に目につくのは、(略)である。

十一106 朝鮮の地に上陸して、第一
に目につくのは、家の低くて小さい
事である。

十一107 家の構造は主として寒さを
防ぐ様に出来てゐる。

十一107 床下に土石を盛り、數條の
みぞを造つて、一方の口から火をた
いて室内を温める。

十一107 一方の口から火をた
いて室内を温める。

十一108 朝鮮では「米のない
のは辛抱も出来るが、薪がなければ
生きてゐられぬ。」といふ意味のこ
とわざがある。

十一108 男はゆるやかな股引をは
き、胴衣を着けて、其の上に長い上
衣を着る。

十一108 女は短い上衣を着て、西洋

婦人の用ひる様なゆるやかな袴を着
ける。

十一109 男の冠をかぶり、其のひも
を長くたらし、小馬に乗つて、田舎
道を通るのを見ると、(略)。

十一109 まだ冠禮を行はない者はチ
ョンガーといつて、髪を三つ打ちに
して後へたらしめてゐる。

十一109 チョンガーといつて、
髪を三つ打ちにして後へたらしめて
ゐる。

十一109 金がなくて、冠禮の行へな
い者は、三十を過ぎててもチョンガー
で、(略)。

十一109 近年は斬髪(ハゲ)の風が行は
れて、冠禮は段段すたれて行く。

十一109 近年は斬髪(ハゲ)の風が行は
れて、冠禮は段段すたれて行く。

十一109 死人を葬るのに、小高い所
で南に面してゐる日當りのよい地を
選ぶ。

十一110 山や岡には、(略)土
山が數知れず並んでゐる。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 婦人は室内に引込んでゐ
て、來客に會ふことも、外出するこ
とも少い。

十一110 外出する時には、う
ちかけの様なものをかぶつて、目ば
かり出してゐる。

十一110 うちかけの様なもの
をかぶつて、目ばかり出してゐる。

十一110 上流の婦人は四方を閉ぢた
輿に乗つて、外から見られない様に
する。

十一111 冬の日でも、氷の下
の水をくんでせんたくする。

十一111 暑い時分汽車に乗つて朝鮮
を旅行すると、(略)。

十一111 どの山陰にも白い
着物が乾してゐる。

十一111 秋の夜長には衣打つきぬた
の音が村々相應じて聞える。

十一111 自ら先んじて耕作
・養蠶・養雞・養魚等の模範を示せ
しを以て、(略)。

十一112 池には大抵鯉・鰯等を養
ひて、二年毎に之を賣るに、其の利
少からず。

十一112 村役場と學校とは相並び
て村の中央に在り。

十一112 幾度の改選にも常
に選舉せられて、二十餘年間勤續せ
り。

十一112 其の他の教員も校長を模
範として、職務に勉勵するが故に、
(略)。

十一112 兒童は皆よく之に
なつて、學校を思ふ心厚く、(略)。

十一112 兒童は皆よく之に
なつて、學校を思ふ心厚く、(略)。

十一112 兒童は皆よく之に
なつて、學校を思ふ心厚く、(略)。

十一112 兒童は皆よく之に
なつて、學校を思ふ心厚く、(略)。

十一113 5 村會議員も全村一致して之を選挙し、(略)。

十一113 9 (略)、村會にては其の豫算の不足なるべきをうれへて、之を増加せんとせしに、(略)。

十一114 1 (略) 「(略)との校長の意見によりて豫算を編成したるなり。」

十一114 4 (略) 耕地整理は縣下諸村に先んじて着手し、昨年既に之を完成せり。

十一114 5 (略) 之によりて用水路の改修行はれ、(略)。

十一114 6 (略)、灌溉・排水其のよろしきを得て、水田は乾田となり、(略)。

十一114 8 (略)、作物の發育も目立ちてよくなりて、(略)。

十一114 8 (略)、作物の發育も目立ちてよくなりて、村人の喜一方ならず。

十一115 3 (略)、其の利益を以て學校の基本金とし、其の一部をさきて、一村共同の有益なる費用にあつることとせり。

十一115 6 (略)、一村は一家の如く和合して、二十年來未だ一人の犯罪者をも出したる例なし。

十一116 4 (略) 君臣分は定まりて、萬世一系動きなき我が皇室の大みいつ。

十一116 8 (略) 武勇のほまれ細戈千足の國の名に負ひて、禮儀は早く唐

人も 稱へし其の名君子國。

十一116 10 (略) 祖先の遺風つぎく、同胞すべて六千萬。

十一117 7 (略) 建國以來三千年 歴史の跡にかんがみて、日進月歩ゆるみなき 同胞すべて六千萬。

十一118 2 (略) 上下心を一にして、同胞すべて六千萬。

十一118 6 (略) 大みことのりたふとびて、同胞すべて六千萬。

十一117 7 (略) 陛下が(略)、折にふれてよみ出でさせ給へる御製にも、(略)。

十一122 2 (略) 神代より承けし寶をまもりて、治め來にけり、日の本つ國。

十一122 8 (略) 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

十一122 10 (略) 我等臣民も(略)、一致協同して、此の國家を護らざるべからず。

十一123 1 (略) 陛下は忠勇なる我が臣民を深く信頼し給ひて、(略)。と仰せ給へり。

十一123 7 (略) 此の御製を拜讀しては、何人も義勇の心にをどり立つるべし。

十一124 4 (略) 治に居て亂を忘れざるも此の心なり。

十一124 5 (略) (略)にも、常に此の心ありてぞ其の目的は達し得らるべき。

十一124 9 (略) 露國が(略)幾んど全勢

力を擧げて組織せる太平洋第二・第三艦隊は、(略)。

十二4 10 (略)、朝鮮海峡を経てウラヂオストックに向はんとす。

十二5 2 (略)、遂に之と會して、世界史上空前なる大海戦となれり。

十二6 1 (略)、東郷司令長官は三笠以下六隻の主戰艦隊を率ゐて、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。

十二6 5 (略)、我は之に應ぜず、距離六千メートルに近づきて始めて應戦し、(略)。

十二6 8 (略) 風號び海怒りて、波浪山の如くなれども、(略)。

十二6 9 (略)、打出す砲彈よく命中して、敵艦續々火災を起し、(略)。

十二6 10 (略)、火煙海をおほひて敵を包めり。

十二7 2 (略) 敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとせり。

十二7 3 (略) 我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、(略)。

十二7 4 (略)、敵の諸艦皆多大の損害を受け、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、(略)。

十二7 5 (略) 我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈没し、(略)。

十二7 5 (略)、其の他にも相ついで沈没せるもの多し。

十二7 6 (略) 夜に入りて、我が驅逐隊

・水雷艇隊は砲火をくゞつて敵艦にせまり、(略)。

十二7 7 (略) 夜に入りて、我が驅逐隊・水雷艇隊は砲火をくゞつて敵艦にせまり、(略)。

十二7 9 (略) 明くれば二十八日、天よく晴れて海波靜かなり。

十二7 10 (略) 我が艦隊は(略)、露艦島附近に集りて敵を待ちしが、(略)。

十二8 1 (略)、東方に當りて、はるかに數條の黒煙を見る。

十二8 4 (略) よりて主戰艦隊及び巡洋艦隊は東方に向つて、其の進路をふさぎ、(略)。

十二8 10 (略)、ネボカトフ少將は(略)、戰艦ニコライ一世以下四隻を擧げて其の部下と共に降服せり。

十二9 10 (略)、敵艦の大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、三十八隻の中逃げおほせたるは巡洋艦以下數隻のみ。

十二10 4 (略) 東郷司令長官此の戰況を打電し、其の後に附加して曰く、(略)。

十二10 6 (略) 「我が聯合艦隊ガック勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、(略)。

十二11 1 (略) 陛下將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極、(略)。」

十二11 6 (略) 將卒之を聞きて感泣せざるはなかりき。

とするに、(略)。
 十二287 〇 しばらくして黒き影は向ひの岸に現れたり。
 十二288 〇 (略)、勝商は山に上りてのろしをあげ、(略)。
 十二288 〇 (略)、走りて岡崎に到り、家康に見えて援を求む。
 十二289 〇 (略)、家康に見えて援を求む。
 十二2810 〇 家康直ちに勝商をして織田信長に見えて、長篠城の急を告げしむ。
 十二291 〇 (略) 「我、明日大軍を率ゐて出發せんとす。
 十二292 〇 (略) 汝も止りて我と共に行け。」
 十二295 〇 (略)、不幸發見せられて、遂に敵兵に捕へらる。
 十二296 〇 勝頼、勝商に向ひていふ、「(略)。」と。
 十二296 〇 (略) 「明日城門に行きて、『(略)』と告げよ。
 十二299 〇 翌日壯士十餘人、勝商を圍みて城門に到る。
 十二2910 〇 勝商城に向ひ、高らかに號んで曰く、「(略)。」と。
 十二301 〇 (略) 徳川・織田二公大軍を率ゐて、既に出發せらる。
 十二302 〇 (略) 勝頼怒りて之を殺せり。
 十二303 〇 (略) 昔調伊企儼は新羅と戦ひて新羅の將に捕へらる。
 十二304 〇 (略) 其の將伊企儼をして日本

に向つて、「(略)。」と號ばしむ。
 十二306 〇 (略) 伊企儼却つて「(略)。」といひて、幾度責めらるれども改めず、(略)。
 十二309 〇 (略) 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、(略)。
 十二3010 〇 (略)、兵皆四散せしかば、夜に乗じて城をすてて逃れんとす。
 十二3010 〇 (略) 城をすてて逃れんとす。
 十二311 〇 (略) 形名の妻、夫を勵まして、「(略)。」と、自ら劔を帶び、(略)。
 十二311 〇 (略) 「良人今獨り身を全うして、祖先以來の勇名を辱しめ給ふか。」
 十二312 〇 (略)、侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。
 十二313 〇 (略) 賊之を聞きて、城中兵尚多からんと思ひ、其の夜圍を解きて去れり。
 十二314 〇 (略) 賊之を聞きて、(略)、其の夜圍を解きて去れり。
 十二315 〇 (略) 新田義貞、尊良親王を奉じて越前國金崎の城に在りし時、(略)。
 十二316 〇 (略)、瓜生保其の弟義鑑等と共に杣山に旗あげして義貞に應ず。
 十二318 〇 (略) 保の母は一時に二子を失ひて悲歎にくるゝならんと思ひの外、(略)。
 十二322 〇 (略) 是等の人々は皆非常の大

事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、(略)。
 十二329 〇 (略) かの山内一豐の妻が貧苦に居て夫の一大事を忘れざりしは、(略)。
 十二334 〇 (略) 凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、(略)に在り。
 十二334 〇 (略) 凡そ婦人の道は(略)、子に教へて家名をあげしむるに在り。
 十二338 〇 (略)、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。
 十二339 〇 (略)、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。
 十二3310 〇 (略) 外温順・愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、(略)。
 十二341 〇 (略)、如何なる事變に際しても、自若として其の常を失はざるは日本女子の美德なり。
 十二343 〇 (略) 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、(略)。
 十二343 〇 (略) 學校ガ落成シテ、前週ノ土曜日ニハ落成式ガ舉行サレタ。
 十二358 〇 (略)、教育ノ普及發達ハ年ヲ追ウテイヨク盛ニ、(略)。
 十二361 〇 (略) 隨ツテ學齡兒童ノ數ハ年々増加シテ、學校ノ増設ヲ要スルコト日一日ヨリ急ナリ。
 十二368 〇 (略) 謹ンデ一言ヲノベテ祝意ヲ表ス。

十二368 〇 (略) 謹ンデ一言ヲノベテ祝意ヲ表ス。
 十二369 〇 (略) 式終ツテ、一同校舎ヲ巡覽シタ。
 十二3610 〇 (略) 教場ノ數ハ十二、外ニ職員室・裁縫室モアツテ、(略)先ヅ申分ノナイ設備デアル。
 十二374 〇 (略) 昔藤堂高虎・加藤嘉明事によりて相惡みし頃、(略)。
 十二377 〇 (略) 將軍秀忠、高虎の武名を重んじて、之に封ぜんとす。
 十二377 〇 (略) 「年老いて其の任にあらず。」
 十二379 〇 (略)、秀忠あやしみて、「(略)。」と問ふ。
 十二383 〇 (略) 秀忠大いに感じて其の言に隨ひ、(略)。
 十二383 〇 (略)、嘉明を擧げて會津に封ぜり。
 十二384 〇 (略) 嘉明後此の事を聞きて大いに恥ぢ、(略)。
 十二387 〇 (略) 敵國秦に使して功ありしかば、(略)。
 十二388 〇 (略) 趙の將軍にて武功の聞え高かりし廉頗之を見て心安からず、(略)。
 十二388 〇 (略) 廉頗之を見て心安からず、(略)。
 十二389 〇 (略) 相如聞きて、力めて之を避け、(略)。
 十二3810 〇 (略)、廉頗の來るを見れば、車を轉じて逃ぐ。

十二395 図 余の彼を避くるは、國家の急を先にして、私のうらみを後にするが爲なり。」

十二396 図 廉頗之を聞きて、深く其の非をさと、(略)。

十二397 図 (略)、相如の門に至りて罪を謝し、(略)。

十二409 図 (略)の五岳東より西に相連りて突起す。

十二418 図 内に二箇の噴孔ありて、盛に水蒸氣と(略)とを噴出す。

十二421 図 烏帽子岳は其の西南方に在りて、直徑八百メートルの噴火口を有し、(略)。

十二427 図 火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。

十二429 図 其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、(略)。

十二429 図 (略)、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。

十二431 図 熔岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。

十二436 図 (略)、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。

十二437 図 (略)、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

十二438 図 (略)、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。

十二443 図 現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太を除きて凡そ五百五十萬町歩あり。

十二444 図 作物は米・麥其の大部分を占めて、米の作付反別は(略)、麥の作付反別は(略)。

十二449 図 養蠶も亦早くより開けて、今尚益々盛なり。

十二4410 図 繭の取入高は年々増加して近年三百五十萬石を越え、(略)。

十二451 図 (略)、生絲は輸出品の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。

十二456 図 (略)、又衣服の原料も綿・麻・生絲に仰ぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

十二464 図 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、(略)等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

十二471 図 農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉を勞するが故に、(略)。

十二478 図 我が大日本帝國の古き六十八國、沖繩諸島合せてぞ、府は三つ、縣は四十三。

十二4710 図 溫熱二帯にままがりて、天産多きうまし國。

十二486 図 (略)、東に小坂、西別子、足尾併せて三山は 銅の産額に

びまゝし。

十二488 図 古く知らるゝ佐渡・生野、其の他無數の礦坑は 山をうがちて山を鑛る。

十二4910 図 世界無比なる七寶の名は海外にやゝるけり、やぎ出し蒔繪の精巧も我が工業のはこりにて。

十二513 図 (略)、需要供給ノ原則ニヨリテ物價ノ高下スルモ亦相同ジ。

十二516 図 人種・風俗ノ異ナルニ依リテ、人ノ嗜好モ亦同ジカラズ。

十二522 図 (略)、平素ノ愛顧ニナレテ、商品ノ品質ヲ下スガ如キ皆信用ヲ害スル所以ナリ。

十二527 図 近年各國商人皆爭ヒテ其ノ方法ヲ講ジ、(略)。

十二529 図 米國商人ガ新聞其ノ他ノ印刷物ニ依リテ廣告ニ費ス金額ハ、(略)。

十二533 図 富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。

十二544 図 (略)朝鮮海峡を過ぎて、黃海を西北に航すること約二日間にして大連に着す。

十二549 図 大連より(略)等の戰蹟を経て、北へ進むこと約二百哩、遼陽あり。

十二556 図 清國政府はこゝに總督を置きて滿洲全部を總管し、(略)。

十二5510 図 (略)、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

十二565 図 旅順線は大連の次驛臭水

子より分れて、(略)旅順口に達す。

十二573 図 營口は(略)、遼河の河口にありて、遼河水運の起點なれば、(略)。

十二582 図 安奉線は奉天より(略)安東縣に達して、韓國の縱貫鐵道に連結す。

十二587 図 安東縣は(略)、大連・營口と相並んで、南滿洲の三大門戸と稱せらるゝ日あるべし。

十二588 図 南滿洲鐵道によりて、露西亞の東清鐵道及びシベリヤ鐵道を利用せんか、(略)。

十二593 図 倫敦にはテムス河、巴里にはセーヌ河、伯林にはスプレー河ありて各其の市街を貫流す。

十二604 図 (略)、車馬街上に満ちて往來頗る困難なり。

十二606 図 (略)行くも止るも唯其の命に従ひて、少しも混雜を生ずることなし。

十二615 図 (略)左右二列の綠樹は枝を交へて、雅麗比なし。

十二618 図 市區井然として家屋の高さ略々相等し。

十二6110 図 街路は掃除最もよく行くとゞきて、衛生・消防を始め、(略)百般の設備皆具れり。

十二634 図 (略)、殊に公園・廣小路の如きは十數臺列をなして前後相接す。

十二651 図 凱旋門は有名なるナポレ

オノの計畫に成れるものにて、壯大なること世界第一と稱せらる。

十二65 9 図 (略)、露西亞の狼は(略)佛兵の跡を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。

十二66 3 図 (略)、通常の灰色の鼠の一群大舉して、印度よりペルシヤを経て歐羅巴に移り、(略)。

十二66 3 図 (略)、印度よりペルシヤを経て歐羅巴に移り、(略)。

十二66 7 図 (略)、人々の驚き恐れて逃げかくるゝ中、(略)。

十二66 9 図 (略)、何れも南より北へ同一の進路を取りて、山あれば越え、河あれば泳ぎ、(略)。

十二67 3 図 (略)、食物を追うて其の居を轉ずるは珍しきことにあらず。

十二67 5 図 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二67 5 図 又燕の春來りて秋去り、雁の秋來りて春去るが如く、(略)。

十二67 6 図 (略)、獸類中にも食物を求め、氣候を追ひて、毎年一定の季節に其の居を移すもの少からず。

十二67 9 図 (略)、數多の猿達く數百里の地より集り來りて之を食ひ、(略)。

十二68 4 図 (略)、大群をなし、水を尋ねて低地に下り、(略)。

十二68 5 図 (略)、春を待ちて再び山谷に入る。

十二69 1 図 満目の廣野雪に埋れて食

物の缺乏せる頃に至れば、(略)。

十二69 4 図 時としては幾千萬とも數知れぬ大群、長列をなして枯野を横ぎるに、(略)。

十二69 6 図 (略)、果實・草根を始め、凡そ取つて以て食ふべきものは殆ど餘す所なし。

十二70 1 図 されば河水・湖水におぼれて魚腹に葬らるゝもの、(略)、其の數を知らず。

十二70 2 図 (略)、野獸の爪牙にさかれて食はるゝもの、其の數を知らず。

十二70 6 図 先づ苦しみて然る後に樂しむを賢者とし、(略)。

十二70 6 図 (略)、先づ樂しみて然る後に苦しむを愚人とする。

十二70 9 図 少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。

十二71 1 図 世を憤り、人をねたみ、身をはかなみて自ら苦しむは、(略)。

十二71 2 図 世を憤らんよりは、進みて之を救済すべし。

十二71 5 図 常に前を望みて、徒に後を顧みることなかれ。

十二71 7 図 (略)、却つて心を苦しめて益なし。

十二72 4 図 (略)、自ら省みてやましき所ある者は、苦多く、樂少し。

十二72 6 図 (略)「疏食をくらひ、水を飲み、脛を曲げて之を枕とするも、樂み亦其の中に在り。

十二72 9 図 (略)、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に従ふを以て、(略)。

十二73 1 図 引込思案の人は徒に其の結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、(略)。

十二74 1 図 (略)、印度地方の寶石・香料・絹布類は(略)等の港を経て歐洲へ輸入せり。

十二74 4 図 ゼノアに生れて幼時より海事を好み、十四歳の時より既に航海業に従事せるコロンプスは(略)。

十二74 8 図 (略)、歐羅巴の西海岸より西を指して進まば、(略)。

十二75 4 図 (略)、又ボーロの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、(略)。

十二75 7 図 (略)、又ボーロの旅行記によりて製したる地圖を得て思へらく、(略)。

十二75 7 図 (略)、若し歐羅巴より西へ向つて進まば、(略)。

十二76 3 図 (略)、何人も一笑に附して顧みるものなかりき。

十二76 4 図 是に於て空しく志を抱いて西班牙に轉じ、(略)。

十二77 4 図 船の次第に朝霧の中にかくれ行くを見送りて、數萬の見物人は(略)と語れり。

十二77 6 図 パロスを出帆して七日目に、(略)カナリヤ島に着し、(略)。

十二77 8 図 (略)、九月六日更に西へ

向つて航行せり。

十二78 1 図 (略)、朝の風を聞きては鳥の聲かと疑ひ、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。

十二78 1 図 (略)、朝の風を聞きては(略)、夕の雲を見ては陸の影かと疑へるも、幾度なるを知らず。

十二78 3 図 船員は(略)、コロンプスを海に投じて歸國せんと謀るに至れり。

十二78 5 図 (略)、船員も其の勇氣に感じて命令に服せざるを得ざりき。

十二79 3 図 (略)、人々喜びて、手の舞ひ、足のふむ所を知らず。

十二79 4 図 (略)、前面の一島草木青々として、花開き、鳥さへづり、(略)。

十二79 5 図 (略)、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。

十二79 6 図 (略)、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。

十二79 6 図 船員皆歡喜して、コロンプスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。

十二79 7 図 船員皆歡喜して、(略)、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。

十二79 9 図 (略)、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、(略)。

十二80 4 図 (略)、皆争ひてコロンプスを歡迎し、(略)。

十二805 図 (略)、皇后も亦コロソプス^スを引見して、厚く其の勳功を賞せり。

十二811 図 (略)、北條早雲が小田原城に據りて、次第に其の權力を四隣に張らんとせる頃なりき。

十二815 (略)、頭には霜をいたゞき、身にはつゞれをまとひ、やせ衰へた體を義足に支へて、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音楽師がある。

十二815 (略)、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の辻音楽師がある。

十二818 忠實な犬は古帽子をくはへて、(略)喜捨を待ちわびてゐる。

十二819 忠實な犬は古帽子をくはへて、(略)喜捨を待ちわびてゐる。

十二821 日は既に西へ傾いて、祭見物の人々は段々歸り始める。

十二823 (略)老人は、(略)、帽子の内を眺めては、幾度かためいきをついて居る。

十二824 (略)老人は、(略)、帽子の内を眺めては、幾度かためいきをついて居る。

十二824 最早弾く力も盡きて、傍の石にこしを下し、(略)。

十二825 (略)、額を両手に支へて人知れぬ涙をこぼして居る。

十二825 (略)、額を両手に支へて人知れぬ涙をこぼして居る。

十二826 木蔭に立つてつく／＼と此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

十二826 木蔭に立つてつく／＼と此の様子を見てゐた一人の紳士があつた。

十二827 つか／＼と走り寄つて、「(略)」と言ひながら、(略)。

十二828 (略)、其のバイオリンを取つて彈始めた。

十二833 老人は、(略)不思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

十二834 聴衆は四方から集つて来て、見る内に人山を築いた。

十二834 聴衆は四方から集つて来て、見る内に人山を築いた。

十二837 (略)、軽く浮立つた調子に、(略)春霞の彼方へ連れて行かれるやうな心持になる。

十二8310 人々は唯神曲に心を奪はれて、妙音の外には何物も見えも聞えもしない。

十二842 やゝあつて紳士はしばらく弾く手を止めると、(略)。

十二843 (略)、聴衆は錢をつかんで、争つて老人のさゝげた帽子の中へ投入れる。

十二843 (略)、聴衆は錢をつかんで、争つて老人のさゝげた帽子の中へ投入れる。

十二846 老人は之を袋に移して、再び帽子を差出す。

十二849 幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

十二849 幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

十二849 幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

十二849 幾千の聴衆は帽子をぬいで相和して歌つた。

十二8410 (略)、紳士はバイオリンを老人に渡し、目禮して何處へか行つた。

十二851 日ははや没して、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、(略)誰一人も氣附かなかつた。

十二851 (略)、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、(略)。

十二851 (略)、燈火の光が點々として此處彼處にかゞやいてゐるとは、(略)。

十二856 (略)アレキサンドル、ブーシェ^{シェ}であつたとは後になつて分つた。

十二858 赤穂浪士が數年の苦難を忍び、遂に主君の仇を報じて、從容死に就けるは(略)。

十二865 日々遊樂を事として全く復仇の事を忘れたるが如し。

十二867 図 (略)、一日良雄に面會し、反復直言して復仇の事を勸む。

十二868 図 良雄一笑して更に耳を傾けず。

十二868 図 喜剣大いに罵つて曰く、(略)。

十二868 図 喜剣大いに罵つて曰く、(略)。

十二871 図 獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

十二871 図 獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

十二871 図 獸ならば、かくして食へ。」と、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

十二871 図 (略)、足の指に魚肉數片をはさみて良雄の面前に出す。

十二872 図 良雄平然頭を低くして之を食ひ、(略)。

十二875 図 (略)、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、驚いて曰く、(略)。

十二875 図 (略)、其の主謀の良雄たるを知るに及びて、驚いて曰く、(略)。

十二878 図 是より暇を請ひて郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。

十二879 図 是より暇を請ひて郷里に歸り、公私の用を終へて、再び江戸に出づれば、(略)。

十二881 図 喜剣直ちに泉岳寺に行き、其の墓を拜して曰く、(略)。

十二882 図 (略)、刀を抜き切腹して終る。

十二882 図 時の人其の志を壯として之を義士の墓側に葬れりといふ。

十二8810 図 (略)、諸道具の置場處を一定し、前後左右次第よく並べて、ふたをすべき處にはふたをし、錠を下すべき處には錠を下し、(略)。

十二895 図 (略)日々のふき掃除も必ず行届きて清潔なるものなり。

十二902 図 (略)、先づ竈の下より火

十二902 図 (略)、先づ竈の下より火

十二902 図 (略)、先づ竈の下より火

消壺^{しょうう}までもよく検査して、戸締を爲すと共に火の用心を忘れざる様にすべし。

十二907 ㊦ (略)、何事にても少しの不注意は大いなる禍を招く。

十二909 ㊦ (略)、近處・隣へ對しても申しわけなく、(略)。

十二910 ㊦ (略)、世間へ對しても相濟まぬ次第ならずや。

十二912 ㊦ 男子は外に出でて不在勝のものなれば、(略)。

十二913 ㊦ 「其の母によりて其の子を察せよ。」といへるが如く、(略)。

十二916 ㊦ 主婦は又常に家庭和樂の中心となりて、家内一同を樂しましむべし。

十二917 ㊦ 家内能く和合して、互の心にわだかまりなく、(略)。

十二918 ㊦ (略)、むつまじく打揃うて夕の膳に向ふ時、(略)。

十二919 ㊦ (略)、一日の勞苦は忘れられて、更に明日の活動を思ふなり。

十二9110 ㊦ 日々の暮しは「入るを計つて出づるを制す。」を第一義とす。

十二921 ㊦ 家の収入を基として、豫め其の支出を定め、(略)。

十二935 ㊦ (略)、諸侯各其の國によりて互に勢を争ひたり。

十二937 ㊦ 魯の重臣某の病死せんとせし時、其の子に教へて曰く、(略)。

十二939 ㊦ 子其の遺言を奉じて、往いて學べり。

十二939 ㊦ 子其の遺言を奉じて、往いて學べり。

十二9310 ㊦ 孔子事へて吏となりしに、治績大いに舉り、(略)。

十二947 ㊦ 或時齊の臣景公に告げて曰く、「(略)」と。

十二951 ㊦ 其の時齊の有司進みて戲樂を奏せしかば、(略)。

十二953 ㊦ 景公歸りて群臣に告げて曰く「(略)」と。

十二953 ㊦ 景公歸りて群臣に告げて曰く「(略)」と。

十二955 ㊦ 齊の臣答へて、「君子は過あれば謝す。(略)」と。

十二962 ㊦ 孔子の孫子思の學説を受け、孔子の道を傳へて大賢の名あるは孟子なり。

十二964 ㊦ 孟子の幼時母は(略)、市井の感化を恐れて、三度其の居を遷せりといふ。

十二965 ㊦ 其の後孟子出でて學び、學を卒へずして歸りし時、(略)。

十二967 ㊦ 直ちに其の機を斷ち、孟子を戒めて曰く、「(略)」と。

十二968 ㊦ 孟子これより感奮・勉勵して遂に一世の大家となり、(略)。

十二969 ㊦ (略)、戰國爭奪の世に在りて、専ら聖人の道を講ぜり。

十二9610 ㊦ 孟子死して二千餘年、孔子と共に其の名益々あらはる。

十二971 ㊦ 「身を立て、道を行ひ、名を後世にあげて、以て父母をあら

はすは孝の終なり。」

十二985 ㊦ 公德とは(略)、總べて衆人の利害を考へて其の行爲をつゝしむ徳義をいふ。

十二993 ㊦ (略)、旅館にて夜晩く高聲を發して、他人の安眠をさまたぐるが如きは、(略)。

十二999 ㊦ (略)等の交通機關、(略)等の公共營造物に在りては、敏速と規律とを尊ぶものなれば、(略)。

十二10010 ㊦ 國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、(略)。

十二1015 ㊦ 他國に行きて、其の(略)等の狀況、(略)乗客の舉止、道行く人の容儀等を見れば、(略)。

十二1025 ㊦ (略)、地方自治の精神に基づきて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期するは一なり。

十二1027 ㊦ 地方人民協同一致して、自ら地方公共の事に任じ、(略)。

十二1042 ㊦ (略)、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、其の他には何等の私心を有せざるなり。

十二1046 ㊦ (略)自治制の本旨を體し、協同一致して團體の福利を増進せんことを心掛くべし。

十二1049 ㊦ (略)之を尊重し、之に協力するによりて、始めて其の効果を全うすることを得べきなり。

十二1051 ㊦ 又産業組合を設け、慈善

事業を起し、若しくは青年會を組織して、産業の發達、(略)に務むるが如きは、(略)。

十二10510 ㊦ (略)、天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。

十二1062 ㊦ (略)、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聴く機關に供せさせ給へり。

十二1068 ㊦ (略)十五人の中より一人を互選し、其の選に當りて勅任せられたるものはなり。

十二1081 ㊦ (略)、天皇の裁可を待ちて始めて成立するものとす。

十二1085 ㊦ 又貴族院及び衆議院は各獨立して上奏し、建議し、且臣民の請願を受くるの權能を與へられたり。

十二1087 ㊦ (略)、建議とは文書を政府に提出して意見を述ぶるをいふ。

十二10910 ㊦ 今謹みて其の大意を述べん。

十二1103 ㊦ (略)、其の後時世の移り變るに連れて、兵制にも變遷あること、(略)。

十二1104 ㊦ (略)、明治の大御代に及びて、復古の政と共に陸海軍の今の制度を定め給へる由來を詳に御論しあり、(略)。

十二1108 ㊦ されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其の親は特に深かるべき。

十二1117 ㊦ (略)、國家の大事に際し

ては、身命をすつること鴻毛よりも
軽き覺悟なかるべからず。

十二111 図 (略)、時に臨みて或は
不覺の名を取るにあらんと戒め給
ふ。

十二112 図 上元帥より下一卒に至る
まで、官職の高下、就職の新舊によ
りて上下の分別最も正し。

十二112 5 図 (略)、上官の者は常に下
級の人をいたはりて、いさゝかも輕
侮の念を有すべからず。

十二112 6 図 下は上を敬し、上は下を
あはれみ、一致協同して王事に勤む
べし。

十二112 10 図 血氣にはやりて、粗暴の
所行あるものは小勇の人にして、眞
正の軍人にあらず。

十二113 9 図 初より事の順逆・理非を
熟考して、(略) 大いなる順逆を誤
り、又は公道の理非に踏迷ふが如き
こと有るべからずと論し給ふ。

十二114 4 図 (略) いつしか文弱に流
れ、輕浮の風にそみ、心も無下に賤
しくなりて、節操も武勇も忘れ果て
て、(略)。

十二114 4 図 (略)、節操も武勇も忘れ
果てて、世人の爪弾を受くるに至る
べし。

十二114 5 図 此の風一度軍人の間に起
りては、士氣も兵氣も衰ふべければ、
(略)。

十二117 6 図 常に之を忘れず、之を模

範として、唯々一の誠心を以て報國
盡忠の道にいそしまんとす。

十二118 7 図 柳櫻の春にほふ錦
をきへて、野も山も。

十二119 8 図 六年の月日 手を取り
て、教へ給ひし 師の君の 導きな
くば、(略)。

十二120 8 図 (略) 世の海を 2 た
りて行かん。

十二120 9 図 尚高き 學びの高嶺
とぞて見ん。

で「出」ひひので
で(格助) 265 で ひそこで・それ
で・なんで

一32 1 アチラデモ コチラデモタ
ノクサヲトツテキマス。

一32 2 アチラデモ コチラデモタ
ノクサヲトツテキマス。

一32 6 ドコデモ オモシロイウタ
ヲウタツテキマス。

二6 6 図 サア、ミンナ デーポン
ヅツモツテ、キミガヨヲウタヒ
マセウ。

二26 1 オカアサン ハキドバタデ
水ヲクンデキマス。
二29 5 アソコデモ、ココデモ、
「略」トアイサツシテキマス。
二29 5 アソコデモ、ココデモ、
「略」トアイサツシテキマス。
二35 8 図 「モチハタイセツナオ米
デコシラヘタモノデスカラ、
(略)。」

二40 5 図 「ミンナデユキダルマヲ
ツクリマセウ。」

二41 7 図 「コレデアタマモデキ
マシタ。

二43 4 図 「コレデ目モデキマシ
タ。

二56 2 (略)、ウスヲツクツテ、ソ
レデ米ヲツキマシタガ、(略)。

二67 マサヲトモキチトオハ
ナガ三人デノハラニアソンデ
キマス。

二9 2 ソレカラ三人デツンダ
ノライツシヨニシテ、(略)。

二12 2 バンノゴハンノスンダ
アトデ、オデイサンハ(略)ハナ
シヲキカセテクダサイマス。

二13 1 にはとりはとやでねて
あます。「ひらがなのドリル」

二15 8 (略)、タツタ一ケリデ、ケ
ハヤヲケタフシマシタ。

二19 7 (略)、子ヒバリハスノ中
デ、ドンナニマツテキルコト
デセウ。

二29 8 (略)ナド、竹デ作ツタモ
ノガタクサンアリマス。
二30 2 竹馬モ竹デコシラへ、
(略)。
二30 2 (略)、タコノホネモ竹
デ作リマス。
二32 2 ナハシロデナヘヲトツテ
キル人モアリマス。
二35 1 みちでほたるを一びき

つかまへて、(略)。
二38 3 だいいには目です。これ
で本の中のじや(略)を見
るのです。

二39 7 なにをきかれても、この
口ではつきりこたへます。

二40 3 うが川の中でさかな
をとつてゐました。

二46 7 図 そんなところでさをを
ふりまはしたつて、どうしてとど
くものか。

二48 5 水の中ではあと足で水
をかきながら、あちらこちら
へおよぎまはります。

二48 6 水の中ではあと足で水
をかきながら、(略)。

二49 4 水の上で足をのぼし
て、ぼんやりうかんでゐること
もあります。

二58 6 とほくの方では青ぞら
といつしよになつてゐるやう
に見えます。

二62 7 又あはびの貝のやう
に、一つでひらたいのもあり
ます。

二64 1 図 「どこでこんなにたく
さんおひろひになりました。」

二64 5 図 貝ざいくを賣るみせで
買つてきたのです。」
二65 6 (略)、子ドモガダゼイデ
カメヲツカマヘテ、オモチヤニ
シテキマス。

三65 (略)、ウラシマガウミベ
 デツリヲシテキルト、(略)。
 四26 このへんは町中で一ぱ
 んにぎやかなところで、(略)。
 四38 太郎と次郎が二人で山
 へのぼりました。
 四85 十一月三日ハ一年中デコ
 トニオメデタイ日デス。
 四98 私ドモノガクカウデモ、
 ケサ天長セツノシキガアリマ
 シタ。
 四158 (略)、ふじのすそのでま
 きがりをしました。
 四156 (略)けものを、弓でいと
 つたのです。
 四167 早くて早くて、とても弓矢
 ではいとれません。
 四185 もうすこしでよりともの
 ちかくへ来るかと思ふと、
 (略)。
 四217 (略)「ウチノニイサンヤネ
 エサンヲアハセルト、ミンナデ
 五人デスカラ、(略)。
 四254 (略)ミンナデイクラニナリ
 マスカ。」
 四258 (略)「ミンナデ二十二
 センニナリマス。」
 四268 (略)「三十センアゲマスカラ、
 コレデトツテクダサイ。」
 四287 (略)土の中で、しづかにら
 い年のほるをまつてゐるの
 です。

四294 (略) 今年はまだこれです
 みました。
 四298 三郎のうちでは夕はん
 が今すんで、(略)。
 四321 (略) それではうどんやさう
 めんは何でつくりますか。」
 四338 (略)「もちやだんごの
 あんは何で作るのですか。」
 四361 (略) イネノワラデハ、タワラ
 (略)ナドヲ作リマス。
 四368 麦ワラデハヤネヲフキマ
 スガ、(略)。
 四375 (略) 麦ワラデ作ツタ物
 デ、アツイジブンニツカフ物
 ガアリマス。
 四434 (略) 今では紙で作つ
 たのしをつかふやうになりま
 した。
 四434 (略) 今では紙で作つ
 たのしをつかふやうになりま
 した。
 四486 (略) おんなじひびきで、うご
 いて居れども、(略)。
 四496 (略) われらがねどこで、や
 すんで居るまも、(略)。
 四511 (略) ソノママデヤイタ
 リニタリシテタベルノデハア
 リマセン。
 四516 (略) モトハ海ノ中デ
 オヨイデキマシタ。
 四554 (略) イマ一足デヲカヘ上ラ
 ウトイフ所デ、(略)。

四555 (略) イマ一足デヲカヘ上ラ
 ウトイフ所デ、(略)。「トイ
 ツテワラヒマシタ。
 四602 (略) シホケノナイ水
 デカラダヲアラツテ、(略)。」
 四612 (略) 「オカゲサマデ、カラダ
 ハコノトホリニナホリマシタ。
 四646 (略) みんなで雪なげを
 しませう。
 四656 あんな小さなからだで、
 あんな大きなこゑの出るのが
 ふしぎです。
 四666 (略) あんなうつくしいこ
 ゑでなきはじめます。
 四687 (略) 「イイエ、オクスリハジ
 ブンデノマナケレバ、何ニモナ
 リマセン。」
 四701 (略) 朝早くから めどばた
 で、母はせい出す あらひ物。
 四711 (略) 太郎きのふは うんどう
 くらいで、どうによこしたこの
 はかま。
 四764 (略) げんじはをか、へい
 けは海で、むかひあつてゐた
 時、(略)。
 四778 (略) これを一矢でいお
 とすことは、なかなかむづかし
 さうです。
 四807 (略) よ一は心のうちで、
 (略)とかくこをきめて、(略)。
 四827 (略) をかの方では(略)、みん
 なが馬のくらをたたいてよ

ろこびました。
 四831 (略) 海の方でもふなばたを
 たたいて、一どにとつとほめま
 した。
 五53 (略) 鳥がなく、鳥がなく、どこ
 でなく。
 五54 (略) 山で鳴く、里で鳴く、野で
 も鳴く。
 五54 (略) 山で鳴く、里で鳴く、野で
 も鳴く。
 五55 (略) 山で鳴く、里で鳴く、野で
 も鳴く。
 五88 (略) 土の上へおちました。
 そこで大ぜいと一しよになつて、せ
 まい谷へ下りました。
 五121 (略) ある時上の方でさわがしいお
 とがするから、見上げると、(略)。
 五155 (略) 池ノ中デコヒガオヨイデキル
 ノヲ見タコトガアリマセウ。
 五177 (略) 男ノ子ノアルウチデハ、五月
 ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立デマ
 ス。
 五186 (略) 鯉ガタキヲ上ルヤウニ、
 ズンズンシユツセサセヨトイフ心デ
 祝フノデセウ。
 五196 (略) 母は流しもとで、(略)、さし
 みをこしらへてゐます。
 五331 (略) ソノ葉デコシラヘル茶ガ一番
 ヨイ茶ニナリマス。
 五386 (略) すがるはその大ぜいの子をお
 みやのそばでやしなつて居つたと申
 します。

五40 1 かいさつ口では切符をしらべ
てゐます。

五42 5 田デハタライテキル人モ、道
ヲ通ツテキル人モ、(略)。

五43 6 ソノウチニ下ノ方デカミナリ
ノヤウナ音ガシマシタ。

五46 1 (略) よそからかへつて来る
道で、にはかに雲が出て、かみなり
が鳴り出しました。

五51 3 ナマデソノマ、タベルノハ、
マクハ瓜ト西瓜デ、(略)。

五51 7 キ瓜ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシ
テモ、ツケ物ニシテモタベ、(略)。

五56 2 人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタ
リシテタベマス。

五66 4 園 「よく出来ました。これで
よくわかります。

五70 1 オ宮ノ裏デハ今スマフガハジ
マツテキル。

五70 3 見セ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤ
ラ、(略)。

五70 4 (略)、フエ・タイコデハヤシ
タテル音ヤラ、(略)。

五73 3 (略) カリ犬ガ四五匹デオツ
カケテ来マス。

五73 4 鹿ハ輕イ足デズンくニゲ
テ、(略)。

五74 6 東生田の門から西一の谷の門
までの間、(略)、人や馬でふさがつ
てゐる。

六9 6 まづ御社にさんけいして、し
ばらくそこで休みました。

六11 6 それから又方々であそんで
(略)。

六16 1 かわくと、それを稻こきでこ
いてもみを取ります。

六16 4 そのもみを又よく日にかわか
して、すりうすですつて、(略)。

六20 4 昔ある國で大きな象の目方を
はからうとしたが、(略)。

六21 3 さうして象の重みで船の水に
つかつた所にするしを附けました。

六24 5 アル晩金物ヤノ店デ、ヤクワ
ントテツピンガメイくジマンバナ
シヲシマシタ。

六24 8 園 「金ニハイロくアリマス
ガ、ナカデ一番人ノ役ニ立ツノハ、
私ドモノ仲間ノ銅デセウ。

六27 7 園 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハ
イレマセンガ、(略)。

六30 7 直吉は後でふと氣が附いて、
(略)。

六31 5 園 「先では知らないのだから、
一錢まうけておけばよかつたのに。」

六36 1 (略)、うちではすゝはきをし
た。

六36 8 學校で徳川光圀とくがわみつの話の聞い
て、(略)。

六38 1 學校で雪投をして遊んだ。

六38 4 午前六時の汽車で、おとうさ
んが京都へお立ちになつた。

六40 6 園 (略)、道で用をたして、こ
の次の水曜日までにはかへる。

六44 5 じぶんの心では武士になりた

いと思つてゐたのです。

六44 7 お寺では「略ごめんです。」
といつて、うちへかへしました。

六49 7 (略)、信長は京都で光秀みつひとい
ふけらいにころされました。

六53 1 をしいことに、そのいくさの
終らない中に病氣でなくなつてしま
ひました。

六55 2 川中島の戦で名高い上杉謙信
は強い大將であつた。

六57 3 ぐんばいうちはでふせいだ
が、(略)。

六57 5 (略)、後からやり先で謙信
の馬のしりを力一ぱいになぐりつけ
た。

六58 5 ところがとなり國では信玄を
こまらせようと思つて、塩を送らせ
ないことにした。

六62 2 園 「わるい子どもが大ぜい
でわたしの手からもぎ取つて、は
ふつた音はしましたが、(略)。」

六64 4 日本二居ルケモノノ中デ一番
強イノハ熊デス。

六64 5 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニ
ハ、後足デ立上ツテ、(略)。

六64 6 (略)、大キナ手ノヒラデツカ
ミカ、ツテ、(略)。

六64 7 (略)、スルドイ爪デヒツカキ
マス。

六65 7 大テイノケモノハ一打デコロ
サレテシマヒマス。

六69 8 (略)、今年で三十年になりま

す。

六72 4 學校でいつも先生にほめら
れ、友だちにもすかれた善い子供は、
(略)。

六72 7 學校で先生にしかられ、友だ
ちにもきはれた悪い子供は、(略)。

六77 2 廣イ港ガ船デ一パイニナツテ
キル。

六79 3 大キナキカイデ、ドンナ重イ
荷物デモラクくト上ゲオロシヲシ
テキル。

六79 5 右ノ方ノ汽船デハ、サツキカ
ラ牛ヲ何匹トナクツルシオロシタ。

七10 2 園 ならばすがさ涼しいこゑ
で、歌ひながらにうゑ行くさなへ。

七11 7 園 松を火にたくゑろりのそば
で、夜はよもやま話がはずむ。

七12 5 園 商賣上でげんきんといひ、
かけといふのは何の事ですか。

七13 3 園 ねぎられたら引く積りで、
高くいふ直段がかけねです。

七13 4 園 たとへば十五錢で賣つてよ
いものを二十錢といふやうなもので
す。

七15 8 園 (略)、明朝六時の汽車で東
京へ立ちます。

七15 9 園 用事は四五日ですむはずで
すが、(略)。

七16 3 園 (略)、何かあらでとゝの
へて来る物がございますなら、(略)。

七20 3 園 どういふわけで、おたがひ
に親類の間からでございますか。」

八94 8 園 (略)、「尾張名古屋は城で

持つ。」とうたはれたり。

九22 6 園 併し今の戦争は(略)、一人

で進んで功名を立てる様なことは出来ない。

九31 4 (略)、一度や二度の不成功で

氣をくじく様では出来上るものではない。

九32 8 (略)、百五十マイルを三十二

時間で走った。

九33 5 (略)、すべりのよい車をすべ

りのよいレールの上で走らせる様にしたらよからうと、(略)。

九34 1 其の頃イギリスのある會社

で、馬車鐵道をこしらへようといふ話があつたが、(略)。

九34 7 中には汽車と競走する積で、

馬に乗つて来た人もある。

九35 8 それが今は朝の急行列車で東

京を出立すれば、(略)。

九37 9 かごも人の肩でかいて、休み

／＼行くのだから、(略)。

九38 6 (略)、僅かの旅費、僅かの日

數で、女子供でも安樂に旅行が出来

る。

九83 1 神主は先づ神前で祝詞を上げ

て、(略)。

九86 10 園 愛作さんのりつばな心がけ

で、熊吉の命が助かりました。

十7 1 (略)、肉眼デハ見エナイ程細

い。

十19 5 活版所では、活字拾ひがそれ

を読みながら、活字を拾つて並べる。

十20 6 (略)、機械では刷らないで、

手刷にする。

十21 1 表紙には紙ばかりのもあり、

紙の上を布で包んだのもある。

十21 10 木版では一枚々彫らなけれ

ばならぬから、其の自由がきかぬ。

十22 2 木版では一枚づつ彫るから、

手間が幾層倍もかゝる。

十34 4 外國の或商會で新聞紙に店員

入用の廣告を出した。

十34 6 (略)、主人は其の中で一人の

青年をやとひ入れることにきめた。

十34 8 (略)、どういふ御見込で、あ

の青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十35 3 園 きれいずきで、つゝしみ深

いことは、それでよく分りました。

十35 6 園 人に親切なことは是でも知

れると思ひました。

十35 10 園 はき／＼してゐて、禮儀・

作法をわきまへてゐることも、それ

ですつかり分りました。

十36 6 園 それで注意深い男といふこ

とを知りました。

十36 8 園 人が大勢込合つてゐる中

で、少しも人に先んじようとはせず、

(略)。

十84 1 (略)、農家では牛を色々の勞

働に使役する。

十84 4 (略)、今では全國食はぬ處が

なくなつた。

十84 5 東京市だけでも、一年にほふ

る牛は數千頭にも上るといふことで

ある。

十85 2 死んだ後で、身體の全部にす

たりのないことも(略)。

十85 10 (略)、日本では餘りいぢめた

爲に、おのづから荒々しくなつたのである。

十86 7 内地では昔から餘り多くは飼

はなかつたが、(略)。

十86 8 (略)、琉球ではたくさん飼つ

て居つた。

十87 8 鳥類の中で家畜として最も多

く農家に飼はれるのは雞で、(略)。

十9 5 (略)、ソレヲ温室デ乾カス

者、(略)。

十9 9 同ジ人数デ同ジ時間ニ物ヲ

製造スルノニ、(略)。

十9 10 (略)、分業デスル方ガ品物

ノ出来バエガ良クテ、(略)。

十10 3 若シ一人ノ手デ製造スルナ

ラバ、(略)。

十10 10 (略)、一人デ種々ノ仕事ヲ

スルコトニナルト、(略)。

十11 3 分業法ニ依ツテ、一人デ一

種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、(略)。

十12 1 分業デスル仕事ハ皆全體ノ

一部分デアルカラ、(略)。

十12 7 (略)、今日デハ(略)、分業

法ニ依ラナイコトハホトンドナイ。

十12 7 3 (略) 一頭の名馬を三千圓

で買ふ約束をした。

十151 2 (略)、馬は(略)、口でお

もちやをさくづけて、其の子供をあや

してゐた。

十151 3 此の一事でアラビヤに名馬

の産する所以が分つた。」

十157 9 (略)、普通の家では冬でも

夜具を用ひない。

十158 1 (略)、朝鮮では「(略)。」

といふ意味のことわざがある。

十152 2 (略)、設計圖バカリデ數百

枚モアルトイフ。

十152 10 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人

ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出来、

(略)。

十154 3 コレデ船ノ大體ノ形ガ出来

ル。

十154 7 (略)、大キナ船デハ船底モ

兩側モ二重張ニスル。

十155 3 我が國ノ造船所デ、最モ規

模ノ大キイノハ海軍ノ工廠デ(略)。

十155 4 又私デハ三菱・川崎等ノ

造船所ガ最モ大キイ。

十156 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、

安藝ハ呉デ造ツタノデアル。

十158 船渠ノ底ト周り三方ハ石デ

疊ムカ、コンクリートデ固メルカシ

テアル。

十158 (略)石デ疊ムカ、コンク

リートデ固メルカシテアル。

十1510 (略)、其ノ水ヲポンプデカ

イ出シテ工事ニ掛ルノデアル。

十二16 1 我ガ國デ一番大キイノハ佐世保海軍工廠ノ船渠デ、(略)。

十二21 8 植物も(略)、呼吸作用で酸素を吸ひ、炭酸瓦斯を吐出すが、(略)。

で(援助) 1 で

十一72 8 図 さらば年來の謝恩に何か書きて参らすべし。」とて、心構せし様なりしが、又筆もとらで四五日過ぎたり。

であう「出會」(四・五) 4 出合ふ

出會ふ 《一ツ・ハーフ》

五9 1 私はもと雨の一しづくです。

(略)。そこで大ぜいと一しよになつて、せまい谷へ下りました。私どものなまかは、出合ふとすぐに一しよになるのがきまりです。

六8 4 私は(略)、二三人の友だちと遠足に出かけました。みんなと橋のたもとに出合つて、川について、四五町行くと、(略)。

九23 1 図 おつかさんは『一命をすてて君に報いよ。』といつて居られるが、まだ其の折に出會はないのだ。

十一42 1 図 (略)、たとひ用心きびしくとも、長き間には必ず討取るべき折に出會ふべし。」

てあし「手足」(名) 1 手足

八70 7 図 かくて二三日を過せしに、耳鳴り、目暗み、手足なえて、動くことかなはず、(略)。

てあしらいちどう「手足等一同」(名)

1 手足等一同

八72 6 図 「(略)」といふに、手足等一同成程と感心せり。

てあたりしだい「手当次第」(副) 1

手當り次第

十二84 4 (略)、聴衆は錢をつかんで、(略)帽子の中へ投入れる。銅貨といはず、金銀貨といはず、雨の降る様に手當り次第に投込む。

てい「体」(名) 1 體

十一48 10 三日目の夕方一同半死半生の體になつて歸つて來た。

てい「艇」凸すいらいてい・すいらいていたい・せんすいてい・だいなごうてい

てい「庭園」(名) 2 庭園

十一4 8 図 本道を更に南へ進めば、庭園を以て名高き竹林院あり。

十一67 3 座敷や庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミ

ナイノハヲカシイ話デアル。

ていかとん「鄭家屯」(地名) 1 鄭家屯

十二57 図 鄭家屯

ていこく「帝國」(名) 5 帝國 凸だいていこく・だいにっぽんていこく・ド

イツていこく・にっぽんていこく

八75 9 図 我等若し汽船に乗りて、我が帝國の港を出で、東へ東へと進み行かば、(略)。

八84 8 (略)、中佐ハ今度ノ出陣ヲ幸ニ、帝國ノタメ、天皇陛下ノ御タメ

ニ、メザマシイ勳ヲシナケレバナラナイト、(略)。

九19 6 図 兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

十一35 9 図 四面皆海ナル我ガ帝國ハ、國家防禦ノ上ヨリイフモ、商業保護ノ上ヨリイフモ、常ニ強大ナル海軍ヲ有セザルベカラズ。

十一101 1 図 五十度以南我が帝國の領土となりしより、諸種の經營追々成功致候へども、(略)。

ていこくぎかい「帝國議會」(課名) 2

帝國議會

十二目13 第二十六課 帝國議會

十二105 8 第二十六課 帝國議會

ていこくぎかい「帝國議會」(名) 6

帝國議會

十二106 1 図 しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聴く機關に供せさせ給へり。

十二106 3 図 帝國議會は貴族院・衆議院の兩院より成る。

十二107 3 図 帝國議會の主要なる任務は法律及び歳入・歳入の豫算を議定するにあり。

十二107 9 図 しかして、法律及び豫算は帝國議會の協賛を経たる後、天皇の裁可を待ちて始めて成立するものとす。

十二108 2 図 若し兩院の決議一致せざるときは、帝國議會の協賛にあらず。

十二109 1 図 帝國議會の協賛は國家の盛衰、國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、(略)。

ていこくぐんかん「帝國軍艦」(名) 1

帝國軍艦

十二15 5 帝國軍艦ノ薩摩ハ横須賀、安藝ハ吳デ造ツタノデアル。

ていこくりよう「帝國領」(名) 1 帝國領

十一97 10 図 帝國領の中部クスンナイとマヌイとの間は最も狭く、且山脈低くして、(略)。

ていしつ「帝室」(名) 1 帝室

十97 2 図 東大寺ノ境内ニ正倉院アリ。帝室ノ御有ニシテ、多ク古代ノ寶器ヲ藏ス。

ていしつはくぶつかん「帝室博物館」(名) 1 帝室博物館

十95 7 図 帝室博物館ヲ觀覽シテ、老樹路ヲサシハサミテ畫尚小暗キ間ヲ行ケバ、官幣大社春日神社ニ到ル。

ていしやじよう 凸しんばしていしやじよう・ならていしやじよう・みなみま

んしゅうてつどうちゅうおううていしやじよう

ていしやば「停車場」(課名) 2 ていしやば

五目2 第十四 ていしやば

五38 8 第十四 ていしやば

ていしやば「停車場」(名) 6 ていし

やば 停車場

五39 1 汽車が今ていしゅつすへつきました。

六80 1 アレハ停車場へ送ルノデアアラウ。

六81 8 港ニハ船ノ出入シゲク、停車場ニハ汽車ノ發着タエズ。

八15 2 兵士ハ練兵場ヘ向ヒ、旅人ハ停車場ヘ急グ。

十94 1 停車場ヲ出デテ、左ニ開化天皇ノ陵ヲ拜シ、猿澤ノ池ニ至ル。

十二100 2 英國にては停車場に手荷物ヲ預くるに合礼ヲ要せず、(略)。

ていしゅつす「提出」(サ変) 3 提出す「一シースル」

十二107 6 帝國議會の主要なる任務は法律及び歳入・歳入の豫算を議定するにあり。豫算案は政府之を提出し、(略)。

十二107 8 (略)、法律案は政府の外、貴族院・衆議院共に各之を提出するを得。

十二108 7 (略)、建議とは文書を政府に提出して意見を述ぶるをいふ。

ていじょう「庭上」(名) 1 庭上

十七1 5 園 (略) に程近き寺院の庭上には、右手にかいを握れる少女の銅像あり、(略)。

ていす「呈」(サ変) 3 呈す「一シースル」

十一99 3 園 (略) 産卵の爲、鯉の群をなして海岸近く寄來る時は海水

爲に白色を呈し、(略)。

十二43 1 燐岩の光、火山灰及び水蒸氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。

十二69 5 (略)、遠く之を望めば、あたかも洋々たる江流を見るが如き壯觀を呈することあり。

ていち「低地」(名) 1 低地

十二68 4 東南シベリヤの高地に住めるかもしかの一種は、(略)、水を尋ねて低地に下り、(略)。

ていと「帝都」(名) 1 帝都

十73 5 道後は(略)。(略)、帝都をさること遠けれども、古代より世に著れ、往昔天皇の行幸し給ひしことも數回に及べり。

ていねい「丁寧」(形状) 2 ていねい

八47 3 サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタ(略)ゴアンシンクダサイ(略)。(略)。又ことばも電報だから、そんなにていねいに書くことはいらぬ。」

十35 7 あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風がなく、(略)。

ていぼう「堤防」(名) 1 堤防

九73 10 驚きて飛出し候へば、川上の堤防切れ、隣村は大半水中にあり、(略)。

*でいりり「しゅつ」にゅう

でいりぐち「出入口」(名) 2 出入口

十二88 6 出入口に、はき物の置かれたる家には、盗人のうかつふこと

多しといへり。

十二88 7 出入口の混雜せる程なれば、一事が萬事、總べて家内に不整頓・不始末の事多きが故なるべし。

ていりす「出入」(サ変) 1 出入す「一スル」

十一113 4 (略)、兒童は(略)、卒業後も尚學校の門に出入するを樂みとせり。

ていれ「手入」(名) 2 手入

七67 5 やしき中の桃の木に皆つき木をすると申してゐます。一そう手入をして、來年はたくさんらせて、(略)。

十56 6 兵器は軍人のたましひに候へば、其の手入は最も念入に致し候。

てうち「手打」(名) 1 手打

六76 3 むねあげ(略)。歌がすむと手打をして、口々に「おめでたう、おめでたう。」といひました。

テーブル(名) 1 テーブル

十36 5 (略)、あの青年ははいると直に書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

テームス(地名) 1 テームス

十二59 4 テームスとセーヌとはスプレーに比すれば、河幅はるかに廣く、(略)。

テームスカが(名) 1 テームス河岸

十二64 2 (略)、テームス河岸の國會議事堂は第一に觀客の目を引く建

築物なり。

テームスカしよう(名) 1 テームス河床

十二62 10 然れども地下には各種の鐵道縱横に貫通し、テームス河床の下をも往來せり。

テームスがわ(地名) 1 テームス河

十二59 2 倫敦にはテームス河、巴里には(略)ありて各其の市街を貫流す。

ておいじし「手負猪」(名) 1 ておいじし

四17 4 (略)、にたんの四郎 だだつねといふぶしが、(略)、そのておいじしにむかひました。

でかける「出掛」(下二) 4 出かける「一ケケル」

六8 2 私は(略)、二三人の友だちと遠足に出かけました。

六46 2 ある日信長が夜明け前に出かけようとする、(略)。

七88 6 (略)外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。

七88 7 又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。

てかこ「手籠」(名) 1 手かこ

八8 5 友よ、來よ。手かこを持ちて、いざ、裏山にきのこたづねん。

てかず「手数」(名) 7 手数ひおてかず・おんてかずながら

八39 1 マツチノ製造ニハ驚クベキ

手数ノカ、ルモノナリ。

八39 9 図 此ノ上ニ、山ヨリ木ヲ切出シ、紙ヲスキ、藥ヲ製スル等ノ手數マデ數ヘ上グレバ、(略)。

十20 8 印刷が出来上つてから本にとおるまでも、まだ中々手數がかゝる。

十一9 2 一箱ノマツチヲ造ル手數モナカク、複雑ナモノデ、(略)。

十一10 1 手數ノカ、ツタマツチノ價ノ安イノモ、分業法ニ依ツテ製造スルカラデアル。

十一11 4 (略)、仕事ノ移リ變ル度毎ニ、居ル場所ヲ變ヘ、又器具ヲ取換ヘナクレバナライノデ、ムダニ時間ヲ費スコトガ多イ。(略)、一人デ一種ノ仕事ニバカリカ、ルコトニナルト、ソナナ手數ガ省ケテ、徒ニ時間ヲ費スコトガナイ。

十二15 2 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、倉庫ヲコシラヘタリ、櫓ヲ附ケタリ、機關ヲセタリ、細カイ造作ヲシタリシテ、スツカリ出来上ルマデニハ非常ナ手數ガ掛ル。

てがぬま「手賀沼」〔地名〕2 手賀沼手賀沼

九16 9 図 下總ノ手賀沼・印旛沼・長沼等ノ水ハ南ヨリ之ニ注ギ、(略)。

九17 図 手賀沼

てがみ「手紙」〔課名〕2 手紙

八目7 第十九 手紙
八66 2 第十九 手紙
てがみ「手紙」〔名〕17 手紙 ヲおてが

み・おんてがみ・きょうとからのてがみ・しゃんをおくるてがみ・といあわせのてがみ・もをおくるてがみ・りよこうさぎのちちにおくるてがみ
五63 4 「ねえさんの所からお手紙が来てゐます。(略)。」と、母は手紙をおちよにわたしました。

五65 1 図 おちよ、それでも私はまだ手紙の書き方を習ひませんから、どう書いてよいかわかりません。」母「お話をする通りに書けばよいのです。」

六38 8 おとうさんの手紙が着いた。
七50 9 図 母は出て来りて、やがて六錢をはらひて、一通の手紙を受取りたり。

七51 5 図 「手紙は四匁までは三錢ですが、四匁より少しでも重いと、その倍の六錢だけ切手をはらなければなりません。」

七51 7 図 この手紙は四匁より重いのに、差出人が三錢しかはつておきません。

七53 2 図 又新聞は(略)、書物や寫眞の類は(略)で、これもたゞの手紙などよりはよほど安いのです。

七53 4 図 昔はひきやくといふものがあつて、手紙や品物を配達しましたが、(略)。

八68 5 図 其の後どうかと思つてゐましたが、手紙を見て安心しました。

九18 10 (略) 我が軍艦高千穂の一小

兵が女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

九20 3 どうぞ之を御覽下さい。」といつて、其の手紙を差出した。

九21 10 図 如何ばかりの思にて、此の手紙をしたゝめしか、よく御察しこれあり度候。」

九44 10 図 或時旅行先より手紙を送りて、其の子のアリに(略)と言ひつかはしたり。

九45 3 図 アリは(略)、父の手紙を読みて心勇み、(略)。

十27 4 図 當日參上御見送致すはずに候へども、手放し難き商用これあり候へば、手紙を以て御祝ひ申上候。

十34 7 (略)、知名の人の手紙を持つて来た者も大勢あつたのに、どういふ御見込で、あの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

十37 8 図 りつばな人の手紙よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。

てがら「手柄」〔名〕2 テガラ てがら三43 1 ソノ日ノイクサニテガラノアツタモノヲ左ノ方ニナラベテ、(略)。

九21 7 図 八幡様に日参いたし候も、そなたがあつたればなるてがらを立て候様との心願に候。

てき「的」 ヲいぢてきいじゅう
てき「敵」〔名〕73 てき 敵
五75 6 図 何でも裏からまはつて、て

きのふいをうたなければならぬ。」
五80 5 へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。

六49 4 後には秀吉の馬じるしを見ると、敵は戦はないでにげて行くやうになりました。

六49 6 秀吉が信長に言ひつかつて、敵を攻めに行つてゐた間の事でした、(略)。

六50 1 秀吉は(略)、すぐに敵とわばくしてかへつて来て、(略)。

六51 2 (略) 日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました。秀吉はもう日本中に敵がなくなつたから、(略)。

六56 4 信玄は(略)、たちまち陣立をかへて、敵を引受けた。

六58 8 図 「われ／＼はたがひにくさをしてゐるけれども、敵の國の人には何のうらみもない。

七19 9 図 コノ度ノ戦、敵ハ大ゼイニシテ、味方ハ小ゼイナリ。

七53 3 図 正成戦死シテ後ハ、敵ノイキホヒマス／＼強ク、(略)。

七55 図 楠木氏ハソノ後ツネニ皇居ヲ守リテ、敵ト戦ヒシガ、(略)。

七56 6 図 (略)、アル年敵ノ大將高師直六万人ノ大兵ヲヒキテ来リ攻ム。
七90 9 図 中佐ノスルドキ聲ハ敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。

七九一 〇 敵ノ砲臺ヨリハ砲丸ヲアビセカクルコトイヨク盛ナリ。
 七九二 〇 中ニモ福井丸ノボートニハ敵ノ砲丸雨ノ如クニ降りソ、ゲリ。
 八五五 〇 敵ハケハシイ山ニ陣取ツテ、(略) 幾重モノ陣地ヲ布キ、盛ニ砲丸ヲ打出ス。
 八八六 〇 我ガ兵ハ物トモセズ敵陣メガケテ突撃シタガ、敵ハツルギノ林ヲ以テムカヘタ。
 八八七 〇 中佐ハ(略)、敵中ヘヲドリコンデ、タチマチ三人ノ敵ヲ斬り殺シタ。
 八八八 〇 敵ノ彈丸ハ雨アラレノ様ニ飛ンデ來ル。
 八八九 〇 中佐ハ(略)、トウ／＼山上ノ敵ヲ追拂ツテ、日ノ丸ノ國旗ヲ立テタ。
 八九〇 〇 敵ハ之ヲ見テ、三方カラ大砲ヲウチカケタ。
 八九一 〇 之ヲ見タ敵ハ更ニ新ヲ加ヘテ、フタ、ヒ攻メヨセテ來タ。
 八九二 〇 「一度占領シタ此ノ高地、全滅スルトモ敵ノ手ニワタスナ。
 八九三 〇 中佐ハ(略)。」トサケンデ部下ヲハゲマシ、敵ヲ撃退スルコト數度ニ及ンダ。
 八九四 〇 敵ノ突撃ノ聲ガ盛ニ聞エル。
 八九五 〇 陣地ハフタ、ヒ敵ニ取返サレルノデアラウ。
 八九六 〇 (略)、突撃ノ聲ガ聞エテ、

砲聲・銃聲ガ絶エタラ、見事ニ敵ノ陣地ヲ取ツタと思ヘ。
 九四九 〇 砲兵は大砲を以て遠方より敵を砲撃し、友軍を前進し易からしむ。
 九五〇 〇 カクノ如ク動物ノ體色ニハ其ノ住メル周圍ノ物ノ色ニ似タルモノアリテ、(略)シタガツテ敵ニオソハル、ウレヘ少ク、我ヨリ敵ヲオソフニハ便ナリ。
 九六〇 〇 將軍田村麻呂の東北の地を征するや、恩威ならび行はれて、向ふ所敵なく、(略)。
 九六一 〇 旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル、乃木大將と會見の處はいづゝ水師營。
 九六二 〇 昨日の敵は今日の友、語ることはもうちとけて、我はたゞへつ、かの防備。
 九六三 〇 かく申すは信濃の國の住人、手塚太郎光盛なり。よき敵ぞ、組み給へ。」
 九六四 〇 手塚の家來は組ませじと中をへだつれば、敵は之をつかんで、片手にひつさぐ。
 九六五 〇 手塚は家來を討たせじと、敵に組みつく。
 九六六 〇 敵は一人、此方は二人。
 九六七 〇 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。

九五八 〇 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、やがて打ちまたがつて首をかく。
 九五九 〇 「我が父の討たれ給ひし時、義仲二歳なりしを、敵は畠山に命じ、尋ね出して殺さんとせり。
 九六〇 〇 あやふき敵の手より救ひくれたる厚恩、いかでか忘るべき。」
 九六一 〇 戦艦ハ(略)堂々敵ト決戦スルヲ目的トス。
 九六二 〇 巡洋艦ハ(略)、戦艦ト共ニ敵ニ當リ、(略)。
 九六三 〇 或ハ敵ノ港灣及ビ軍艦ノ情勢ヲサグリ、(略)。
 九六四 〇 或ハ敵ノ運送船・商船又ハ之ヲ保護スル軍艦ヲ撃シ・捕獲ス。
 九六五 〇 (略)、時ニ戦艦ト合同シテ敵ノ主力ト戦フコトアリ。
 九六六 〇 砲艦ハ或ハ敵ノ沿岸ニ近寄り、(略)。
 九六七 〇 砲艦ハ(略)、敵ノ陣地ヲ攻撃スルモノナリ。
 九六八 〇 通報艦ハ(略)、或ハ敵ノ軍艦又ハ沿海ノ情勢ヲサグリテ、(略)。
 九六九 〇 驅逐艦ハ(略)、又敵ノ水雷艇ヲ驅逐・撃破スルヲ目的トス。
 九七〇 〇 「正儀は主君の敵にて、我が爲にも父の仇なり。
 九七一 〇 いまだ幼ければ、敵も心をゆるすべく、(略)。」

九七二 〇 「年長じては敵も近づけ申すまじ。
 九七三 〇 出征兵士の弟ぞ、我は。(略)兄弟共に敵をば討さん。
 九七四 〇 武勇のはたらき命さゝげて、御國の敵を討ちなん、我は。
 九七五 〇 我が海軍は初より敵を近海に迎へ撃つの計を定め、(略)。
 九七六 〇 (略)、東郷司令長官は(略)、上村艦隊と共に先頭にある敵の主力に當り、(略)。
 九七七 〇 (略)、片岡・出羽・瓜生・東郷(少將)の諸隊は敵の後尾をつく。
 九七八 〇 敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、(略)。
 九七九 〇 はげしく敵を砲撃せしかば、(略)。
 九八〇 〇 敵の艦列忽ち亂れ、早くも戦列を離るゝものあり。
 九八一 〇 敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひて敵を包めり。
 九八二 〇 敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとせり。
 九八三 〇 敵の諸艦皆多大の損害を受け、(略)。
 九八四 〇 敵の兩旗艦は遂に沈没し、(略)。
 九八五 〇 我が艦隊は(略)、蔚陵島附近に集りて敵を待ちしが(略)。
 九八六 〇 (略)全く敵を包圍せり。
 九八七 〇 敵今は逃れぬところと覺

悟したりけん、(略)。

十二92 敵の司令長官ロジェストウエンスキー中將は(略)。

十二101 敵の死傷及び捕虜は司令長官以下無慮六千人。

十二1010 敵(略)、嚮二敵二對シ勇進敢戦シタル麾下將卒モ(略)。

十二274 敵は長圍の計を取れるに、我は糧食殆ど盡きたり。

十二284 敵の衛兵相呼んで尋ねんとするに、(略)。

でき「出来」(名) 1 出来

十三23 直チ二種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、其ノ出来非常ニ良カリシヲ以テ、(略)。

できあが「出来上」(四・五) 9 出来上ル 出来上る 『一ッ・リー・ール』

六48 秀吉は大ぜいの人を十組に分けて、(略)、仕事をいそがせましたから、すぐに出来上りました。

七32 (略)、口から美しい糸を出して、からだを包む。それが二三日の内に出て出来上つて繭になる。

九31 如何なる發明も、一度や二度の不成功で氣をくじく様では出来上るものではない。

十二194 (略)、我の讀む様なものになるまでには、幾度書直すかも知れない。(略)。かうして出来上つたものを活版所へ渡す。

十二207 印刷が出来上つてから本にとるまでにも、(略)。

十一634 敵(略) 故近藤大尉記念碑、いよく出来上り候については、(略)。

十二12 設計圖が出来上ルト、細密ナ構造分圖ヲ各工場ニ廻シ、(略)。

十二15 2 サテソレカラ船室ヲ分ツタリ、(略)、細カイ造作ヲシタリシテ、スツカリ出来上ルマデニハ非常ナ手數ガ掛ル。

十二35 2 (略)、今新校舍ノ出来上ツタノハ眞ニ慶賀スベキ事デアル。

できおり「出来居」(ラ変) 1 出来居 『一(リ)』

十一976 其の南部は車馬の往來自在にして、(略)、輕便鐵道も出来居候。

できか「敵艦隊」(名) 2 敵艦隊

十二56 敵艦(略)、先づ小軍艦をして敵艦隊を沖島附近に誘ひ寄せしむ。

十二78 敵艦にせまり、無二無三に攻撃せしかば、敵艦隊は四分五裂の有様となれり。

できぐん「敵軍」(名) 1 敵軍

十一89 蜜蜂の群集生活を営むを得るは、(略)、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體の爲には生命ををしまざるによる。

できし「敵視」(サ変) 1 敵視す 『一シ』

十一83 敵群の蜂は甚だしく之を敵視し、他群の蜂、我が群中

に入り来れば、直ちに之をさし殺す。

できじよう「敵狀」(名) 1 敵狀

九24 騎兵は進退敏活にして、多くは友軍の前方に出でて敵狀をさぐる。

できじん「敵陣」(名) 1 敵陣

八85 我ガ兵ハ物トモセズ敵陣メガケテ突撃シタガ、敵ハツルギノ林ヲ以テムカヘタ。

できす「適」(サ変) 5 適ス 適す 『一シ・ス・セ』

七62 大は(略)。(略)。又その鼻はよく物のにほひをかぎ分くるをもつて、かりに用ひて、えものをさがさむるに適す。

八74 猫ノロニハ上下ニ二本ツツノ鋭キ牙アリテ、肉ヲサクニ適ス。

十一100 農産物の種類は北海道と大差なく、(略)、又牧畜にも適し候。

十二43 我が國は氣候温に、地味肥え、極めて耕種に適し、(略)。

十二45 是我が國の氣候・風土の牧畜に適せざるにあらず、(略)。

できす「敵」(サ変) 1 敵ス 『一ス』

十一105 孔明(略)、再ビ戦ハシメテ再ビ之ヲ捕フ。カクスルコト七回ニ及ビシカバ、賊將歎ジテ、「公ハ天授ナリ、敵スベカラス。」トテ、マタ反スルコトナカリキ。

できする「適」(サ変) 5 適スル 適する 『一シ・スル』

十87 殊に其の乳の成分は人の乳に似てゐるから、子供に適する。

十一106 分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタ仕事ヲスルコトナル。

十一117 (略)、其ノ仕事ニ適スル器具ノ改良ヤ發明ヲスルコトモアル。

十一49 アラビヤに良馬の多く産するの、風土が馬の飼養に適してゐるばかりではない。

十一65 又魚類や野菜ハ各其ノ季節ノ物ヲ用ヒルト、(略)、又人々ノ好ミニモ適スル。

できた「敵討」(五) 1 てきたふ 『一ヒ』

六50 秀吉のいきほひは、しぜん一日と盛になりました。信長の古いけらいの勝家などはこれをきらつて、てきたひましたが、かへつてほろぼされて、(略)。

できちゅう「敵中」(名) 1 敵中

八86 中佐ハマツサキニ立ツテ、敵中ヘヲドリコンデ、(略)。

できど「適度」(名) 1 適度

九61 適度の運動を怠らず、(略)、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず。

できとう「適當」(形状) 5 適當

十44 直線を適當の長さに切り、一定の間合を置きて、(略)並ぶる時は、美しき模様を生ず。

十一79 此の時箱・樽等を適當な

る所に置けば、分離したる一群は直ちに其の中に入る。

十一65 6 寒イ時ハ特ニ体温ヲ維持スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他アブラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、(略)。

十一66 3 ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。

十一85 10 〇 サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サトナシテ、(略)。

てきにん「適任」(形状) 1 適任

十二109 4 〇 (略)、一般選舉人も(略)參政の公職に最も適任なる人物を選出せざるべからず。

てきにん「適任者」(名) 1 適任者

十二104 1 〇 眞に自治の精神に富める者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧ぐるを知りて、(略)。

できばえ「出来映」(名) 1 出来バエ

十一9 10 (略)、分業デスルガ品物ノ出来バエガ良クテ、製造高モハルカニ多イ。

できふてき「適不適」(名) 1 適不適

十一10 5 人ハ其ノ身體・才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル。

てきへい「敵兵」(名) 2 敵兵

十88 5 〇 笠置の山の行在所、寄する雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち給ふ。

十二29 5 〇 十六日勝商は(略)城に入らんとするに、不幸發見せられて、遂に敵兵に捕へらる。

で・きる「出来」(上) 70 デキルで
きる 出来ル 出来る 「一キ・キル・キレ」

二4 3 オソク オキル 人ハ、コノウツクシイ 日ノデヲミル コトガデキマセン。

二36 6 ソレカラコノ人ノタニハ、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。

二41 4 〇 「ヤツトカラダガデキマシタ。

二41 7 〇 「コレデアタマモデキマシタ。

二43 4 〇 「コレデ目モデキマシタ。

二22 7 私をころがすのはだれにもできませんが、(略)。

二23 1 (略)、たたせることや、二つかさねることは、どうしてもできません。

二49 7 人や犬などは水の中にながく居ることはできません。

二50 3 かへるは水の中にも、をかのうにもすむことができますのです。

五7 2 ソノ光ガキラ／＼トシテ、ワルモノドモハ目ヲアケテキルコトガデキマセン。

五56 4 火ヲ使フコトノ出来ルノハ人バカリデス。

五57 3 近ゴロハ又マツチトイフベリナ物ガ出来テ、(略)。

五58 3 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマツテ、シゼント出来タ物デ、(略)。

五66 4 〇 それを母に見せますと、母は「よく出来ました。」

五72 6 〇 出来ルコトナラ、モツト太クテ強イ足ガホシイモノダ。」

五78 1 〇 「こゝからしろの方へ下りることが出来るか。」

五78 3 〇 「とても出来ません。

五81 7 へいけはふいを打たれて、どうすることも出来ない。

六26 2 〇 ソレデゼニニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

六26 2 〇 ソレデゼニニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

六27 7 〇 (略)、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコトガ出来マセン。

六31 8 〇 「先では知らないのだから、一錢まうけておけばよかったのに。」

六45 8 初はひくい役目で、信長の目通りへ出ることも出来ませんでした。

六62 6 〇 (略)、かなしいことに目が見えず、さがすことさへ出来ません。」

六70 3 (略)、先生に何か聞かれても、答へることが出来ないで、顔を赤くする子供もございました。

七15 7 〇 急に商用が出来て、明朝六時の汽車で東京へ立ちます。

七25 6 モシ手ガナカツタラ、ドノクラ半不自デセウ。ハシヲ持ツコトモ出来マセン。

七25 7 オビラムスブコトモ出来マセン。

七25 8 カユイ所ヲカクコトモ、イタイトコロヲサスルコトモ出来マセン。

七27 7 ドンナガクキガアツテモ、手ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出スコトハ出来マスマイ。

七28 3 サルニハ(略)。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセン。

七29 1 この長い糸を出す蟲が百匹もなければ、木綿はど一尺の絹織物を織る絹絲は出来ない。

七36 3 町ノニギヤカナ所ニ新シイ勸工場ガ出来タ。

七48 2 〇 日本紙ハコヨリニシテ物ヲシバルコトガ出来ル。

七48 4 〇 モトユヒヤ水引ノヤウナ、アンナ丈夫ナ物ハ日本紙デナケレバ出来ナイ。」

七53 5 〇 昔はひきやくといふものがあつて、(略)、これは今日のやうに早くは配達が出来ず、(略)。

- 七64 酒やすや醬油も、(略)も、水がなければ出来ない。
 七65 水がなければ、生きてゐることは出来ない。
 七76 一ガインイフコトハ出来ナイガ、マツ緑色ノモノハ浅イ所ニ、(略)、茶色ノモノハソノ中間ニハエテキルノデアル。
 七78 1 (略)シテキルノハ、陸上デハ見ルコトノ出来ナイ美シイ景色デアラウ。
 七85 8 (略)、悪くすると、浅瀬へ乗上げたり、外の船につきあたつたりする様なまちがひが出来ます。
 八44 6 これ程有用な火でも、ひよつとまちがふと大へんな事が出来る。聞けば此の火事は(略)、多分煙草のすひがらが元だらうといふ話だ。
 八62 5 木綿糸ハドウシテ出来マスカ。
 八63 1 綿ノ木ハドコニ出来マスカ。
 八63 1 綿ノ木ハドコニ出来マスカ。
 又ドウシテ出来マスカ。
 八68 8 (略)、一人でね起きの出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。
 九7 3 又其ノ瓣ハ全ク別々ニナツテキルカラ、一ツツツニ取離スコトガ出来ル。
 九8 1 (略)、皆一ツツナツテキテ、引キサカナケレバ取離スコトガ出来ナイ。

- 九22 7 (略) 併し今の戦争は昔とちがつて、一人で進んで功名を立てる様なことは出来ない。
 九33 9 さて幾度も幾度も造り直して、終に其の目的を達することが出来た。
 九34 5 いや／＼鐵道が出来て、汽車の運轉をして見る日になると、(略)。
 九34 10 (略)、馬上の人はしきりにむちを打つてあせつて見たが、一時間に十五マイルも走る汽車とはどうして競走が出来よう。
 九35 9 それが今は朝の急行列車で東京を出立すれば、晩にははや京都に着くことが出来る。
 九38 6 (略)、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出来る。
 十5 6 (略)大鬼蓮ハ直径ガ六尺モアツテ、葉ノ質モ丈夫デアルカラ、其ノ上ニ三四歳位ノ子供ヲ坐ラセルコトモ出来ルサウデアル。
 十18 4 讀んでゐる間は(略)、どうして出来るものかといふ事は深く考へないが、(略)。
 十18 6 (略)、本といふものはたやすく出来るものではない。
 十21 8 活版は印刷が終れば、其の活字を取離すことが出来るから、(略)。
 十22 2 又活字は何時でも直に植ゑることが出来るが、(略)。
 十84 8 又皮・骨・ひづめなどからは

- にかはが出来、血や腸は肥料になる。
 十一10 8 随ツテ良イ品物ガ出来テ、製造高モ多クナル。
 十一12 5 (略)、其ノ各部分ヲ造ル人々ガメイ／＼勝手ナ形ヲ造ツタナラ、ソレヲ完全ナ時計ニ組立テルコトハ出来ナイ。
 十一50 10 やうやく立歩くことのできる三つ四つの子供が、(略)。
 十一107 4 家の構造は主として寒さを防ぐ様に出来てゐる。
 十一108 1 「米のなのは辛抱も出来るが、薪がなければ生きてゐられぬ。」
 十一109 7 金がなくて、冠禮の行へない者は、三十を過ぎててもチョンガーで、大人の仲間入が出来ない。
 十二12 9 イヅレモ大規模ニ出来テキテ、盡ク蒸氣や電氣ノ力ヲ利用スル。
 十二12 10 何千貫トイフ大鐵鎚モ一人ノ手デ自由ニ運轉スルコトガ出来、(略)。
 十二14 3 コレデ船ノ大體ノ形ガ出来ル。
 十二21 5 (略)、空氣中には炭酸瓦斯が段々に増加し、(略)呼吸作用を營むことが出来なくなる道理である。
 てぎわ「手際」(名) 1 てぎは
 七11 9 母がてぎはの大こんなます、これがゐるなかの年こしざかな。
 てく「出来」(上二) 8 出来「一キ」
 七35 1 (略) やき物をつくるには、土又は石のこをねりかためてかわかし、

- かまどに入れて焼く。かくして出来たるものをすやきといふ。
 八29 8 (略) 「見セ申シ度キ繪出来タリ。御出アリタシ。」
 八71 8 (略)、此の數日間少しも食物を送らざるが故に、新しき血出来ずして、(略)。
 九40 3 (略) 今ハ此ノ七湯ノ外ニ新シキ温泉場モ開ケ、廣キ新道モ出来、(略)電車サハ開通セリ。
 十33 2 (略)、是等ノ島ニハ作物ノ出来ザル荒地多ケレバ、(略)。
 十59 9 (略)、昨今は友人も出来、營内の生活にもなれ、(略)。
 十一71 8 (略) 此の畫の出来たる由來こそ面白けれ。
 十一111 10 (略)、近年作物の改良も出来、又桑を植ゑ、蠶を養ふ者多く、(略)。
 てぐち「出口」(名) 3 出口
 七38 1 色々ナ店ノ前ヲ通ツテ、左ヘ折レタリ、右ヘ折レタリスルト、知ラズ／＼ニ出口ヘ出テ來ル。
 七38 1 出口ニ近イ所ニハ、着物・羽織ナドヲ賣ツテキル店ガアリ、(略)。
 七38 3 (略)、出口ニハ(略)ナドヲ賣ル金物屋ト、(略)ナドヲ賣ル荒物屋ガアル。
 てくび「手首」(名) 1 手首
 十79 9 (略) 女子は(略)、又口の周圍、手首・手の甲等には入墨をほどこせり。

でこぼこ「凸凹」(名) 1 デコボコ
 五〇^二 キ瓜ニハカハニ小サイトゲガ
 アリ、カボチャニハデコボコガアル。
 てさき「手先」(名) 1 手先
 七〇^五 (略)、歌ひながらにうゑ行
 くさなへ。ながい夏の日いつしか暮
 れて、うゑる手先に月かげ動く。
 てさぐり「手探」(名) 1 手探
 一二^八 (略)、諸道具の置場處を
 一定し、前後左右次第よく並べて、
 (略)、暗き時にも手探にて用を足し
 得る様に、極りよく整へ置くは主婦
 たる者の務なり。
 でし「弟子」(名) 4 デシ 弟子
 七^三 (略)、多クノデシ保己ニ
 ツキテ學ビシカバ、(略)。
 七^四 (略) アル夜弟子ヲ集メテ、書物
 ノ講義ヲセシ時、(略)。
 八^三 (略)、毎朝早くから弟子を相
 手につちを打つ音が聞える。
 十二^九 (略) 孔子(略)、職を退きし
 後も弟子の道を問ふもの益々多かり
 き。
 でしども「弟子共」(名) 1 弟子ども
 七^四 (略) 保己一ハソレトモ知ラズ、
 講義ヲツバケタレバ、弟子どもハ、
 「(略)。」トイフ。
 です(助動) 二八^三 です 《デシ、デ
 ス、デセ》トイフそれですから
 一^二 アレガグンキデス。
 一^三 コメヤノトナリハサカナ
 ヤデス。

一^三 サカナヤノトナリハコマ
 モノヤデス。
 一^四 アハセテ五ヒキデス。
 一^五 オヤニシンバイヲカケル
 ノハワルイコトデス。
 一^六 「オキクサンデスカ。ヨ
 クイラツシヤイマシタ。」
 一^七 「コノ川ハドコカラナ
 ガレテクルノデスカ。」
 一^八 「アノ山ノオクカラナ
 ガレテクルノデス。」
 一^九 「ドコヘナガレテイク
 ノデセウ。」
 一^{一〇} 「アチラノ大キナ川ヘ
 ナガレコムノデス。」
 一^{一一} モシナツデアツトラ、ド
 ナイロヲツケタデセウ。
 一^{一二} 「モチハタイセツナオ米
 デコシラヘタモノデスカラ、
 イテハイケマセン。」
 一^{一三} 「アカンボノトキニ、ダ
 イテチチヲノマセテクダサツタ
 ノハ、ドナタデスカ。」
 一^{一四} (略)、ネンネコウタヲウ
 タツテクダサツタノハ、ドナタ
 デスカ。
 一^{一五} (略)、ゴハンヲタベサセ
 テクダサツタノハ、ドナタデス
 カ。
 一^{一六} (略)、クスリヲノマセテ
 クダサツタノハ、ドナタデス
 カ。

一^{一七} キモノヲヌツタリセン
 タクシタリシテクダサルノハ、
 ドナタデスカ。」
 一^{一八} 「ソレハオカアサンデ
 ス。」
 一^{一九} コレガハナデ、コレガ
 ロデス。
 一^{二〇} コレハ天ジンサマノオ
 ヤシロデス。
 一^{二一} 天ジンサマハスガハラノ
 ミチザネトイフチユウギナオ
 カタヲマツツタノデス。
 一^{二二} コノオカタハウメノハ
 ナガオスキデシタカラ、(略)。
 一^{二三} (略)、ニサツハトクホン
 ノ一トニデス。
 一^{二四} ヒラヒラトカゼニチルノ
 モマタミゴトデス。
 一^{二五} アレモサクラノハナデ
 ス。
 一^{二六} アカトキイロトムラサキ
 ト三イロソロツテキレイデス。
 一^{二七} ケハヤハソノナノトホ
 リ、ケルコトガマコトニハヤカ
 ツタノデス。
 一^{二八} シカシスクネモチカラガ
 ツヨクテ、スバシコイ人デシタ
 カラ、(略)。
 一^{二九} (略)、子ヒバリハスノ中
 デ、ドンナニマツテキルコト
 デセウ。
 一^{三〇} 私はそとがたたくて、中

がやはらかです。
 一^{三一} 私はなんでせう。
 一^{三二} アタラシイ竹ハアヲアラ
 トシテ、マコトニウツクシイモ
 ノデス。
 一^{三三} 「どうしてもう光らない
 のでせう。」
 一^{三四} 「ここがあかるいから、
 みえないのです。」
 一^{三五} だいいには目です。
 一^{三六} これで本の中のじや
 (略)を見るのです。
 一^{三七} だいいには耳です。
 一^{三八} だいいには口です。
 一^{三九} (略)テガラノアツタモノ
 ヲ左ノ方ニナラベテ、アマリ
 ハタラキノナカツタモノヲ右
 ノ方ニナラベタノデス。
 一^{四〇} ダレモ右ノ方ノナカマ
 ニハイルノハイヤデスカラ、
 (略)。
 一^{四一} ソレデイツデモイクサニ
 カツタトイフコトデス。
 一^{四二} アサ日ノ上ル方ガ東
 デ、ユフ日ノ入ル方ガ西デ
 ス。
 一^{四三} 右ノ手ノサス方ガ南
 デ、左ノ手ノサス方ガ北デ
 ス。
 一^{四四} かへるは水の中にも、
 をかの上にもすむことがで
 きるのです。

三54 6 「ハヤク オサラヒ ヲナサ
イ。」トイハレテモ、「ハイ、今
スグニ。」トコタヘルバカリデ
ス。
三55 3 (略)、「ハイ、今スグニ。」
トイツテ、スグニハキマセンデ
シタ。
三55 8 今日ハウチノ虫ボシデ
ス。
三56 8 アノキモノトハカマハ
ニイサンノデス。
三57 2 コノ赤イジエバンハイモ
ウトノデス。
三60 3 左の方にはなればなれ
になつてゐるのは、魚をつつ
てゐる舟です。
三60 5 右の方には五六そうかた
まつてゐるのは、今あみをお
ろしてゐるのです。
三61 7 みんなめづらしい貝ばか
りです。
三64 6 貝ざいくを賣るみせで
買つてきたのです。
四1 7 がくかうの西どなりはや
くばで、やくばのまむかひが
けいさつしよです。
四4 5 うちはどれでせう。」
四5 2 あれがうちです。」
四5 3 「ああ、あれですか。
四6 3 あの川むかふの木の
しげつてゐるのが、八まんさま
のもりです。」

四6 6 (略)「長いはしが、八ま
んさまのまへのほしです
ね。」
四6 7 (略)「さうです。」
四7 1 (略)「五人です。」
四7 2 (略)「いいえ、六人です。」
四7 4 (略)「やつぱり五人で
す。」
四7 6 (略)「くるまにのつてゐる
人を入れると、六人でせう。」
四7 7 (略)「ああ、さうです、さうで
す。」
四7 7 (略)「ああ、さうです、さうで
す。」
四8 6 十一月三日ハ一年中デコ
トニオメデタイ日デス。
四11 4 今一本ノ木ハシブカキ
デスカラ、サハサナクレバタベラ
レマセン。
四11 8 サハストアマクナツテ、
タイソウウマイカキデス。
四12 6 (略)、「毎アサ早くオキテ、
行ツテ見ルノガタノシミデス。
四13 1 クリハユデタベテモ、
ヤイテタベテモ、ウマイモノデ
ス。
四15 7 (略)、「高いところからお
ひおろして来るけものを、弓で
いとつたのです。」
四16 1 三日目のくれがたのこと
です、(略)。
四21 5 (略)、「略、中ユビト小ユビ

ノアヒダノガクスリユビデ
ス。」
四21 7 (略)「ウチノニイサンヤネ
エサンヲアハセルト、ミンナデ
五人デスカラ、(略)。
四22 1 (略)、「カタ手ノユビノ
カズト同ジデス。」
四22 2 (略)「ニイサンハ一バン太ツ
テ、一バン力ガツヨイカラ、オ
ヤユビデス。」
四22 4 (略)「大キイネエサンハセイ
ガ高イカラ、高ユビデス。」
四22 6 (略)「小サイネエサンハ私ヨ
リモスコシ高イカラ、クスリユ
ビデス。」
四22 7 (略)「ソレカラ私ハ人サシユ
ビデ、三郎ハ小ユビデス。」
四23 1 (略)「ナルホド、ソノトホリ
デス。」
四23 8 (略)「ソノ糸ハ一カケイク
ラデスカ。」
四24 1 (略)「三センデス。」
四25 2 (略)「コノ太イノガ五セン
デ、細イノハ三セン五リンデ
ス。」
四28 2 (略)「あなたのおなかまは太
てい枯れてしまつたやうです。」
四28 3 (略)「まことにおきのどくなこ
とです。」
四28 8 (略)、「しづかにらい年の
はるをまつてゐるのです。」
四30 4 (略)「もうすぐお正月です

から、もち米をよいしなければ
なりません。」
四31 3 (略)「おもちにするのはも
ち米といふ米です。」
四31 8 (略)「三郎さんはまだそれ
を知らなかつたのですか。」
四32 4 (略)「麦です。」
四33 1 (略)「うどんやさうめんにす
る麦は同じですか、ちがひま
すか。」
四33 2 (略)「同じです。」
四33 5 (略)「略、ごはんにたく麦
は大麥です。」
四34 1 (略)「略、もちやだんごの
あんは何で作るのですか。」
四34 2 (略)「豆です。」
四34 4 (略)「あれも豆です。」
四34 6 (略)「それではあんの豆と、
だんごにつけるこな豆と
同じですか、ちがひますか。」
四35 3 (略)「略、こなにするの
は大豆といふ豆です。」
四37 7 (略)「皆サン何デセウ。」
四39 5 (略)「内カラトヲシメ
テサハスレバ、アンシンナモ
ノデス。」
四42 4 (略)「人に物をあげる時
に、なぜのしをつけるのです
か。」
四43 1 (略)「略、昔はのしあはび
をつけたのです。」
四43 3 (略)「略、紙のやうにうす

くしたものです。
 四四三 八 八 これがのしあはびのか
 はりです。」
 四四四 八 八 「どうしてのしあはびを
 つけるやうになつたのでせ
 う。」
 四四七 八 八 「略」おめでたくない時
 には、なまぐさものをもちひな
 いことがおほいのです。
 四四五 八 八 「略」、なまぐさのしるし
 にのしあはびをつけるやうに
 なつたのでせう。
 四五〇 八 八 ヨク人ノタベルモノデ
 スガ、(略)。
 四五一 八 八 何デセウ。
 四五二 八 八 コノ神サマハ(略)ノ弟
 ノ方デス。
 四五三 八 八 (略)、フクロヲカツイデ
 イラツシヤツタノデ、オソクオ
 ナリニナツタノデス。
 四六二 八 八 (略)、どこを見てもまつ
 白です。
 四六三 八 八 ゆふべは風がなくて、し
 づかなぼんでしたから、(略)。
 四六四 八 八 (略)みんなまつ白になつ
 て、はながさいたやうです。
 四六五 八 八 (略)、あんな大きなこゑ
 の出るのがふしぎです。
 四六七 八 八 今モ外カラカヘツテ、ス
 グココヘ來テキル所デス。
 四六八 八 八 「サウ一ドニノンデハ、
 カヘツテワルイノデス。」

四七七 八 八 さをのさきの扇をい
 よといふのでせう。
 四七八 八 八 (略)、これを一矢でいお
 とすことは、なかなかむづかし
 さうです。
 四八五 八 八 私はもと雨の一しづくです。
 四八九 八 八 私どものなかまは、出合ふ
 とすぐに一しよになるのがきまりで
 す。
 四九〇 八 八 野はらは平ですから、ゆつく
 りあるきました。
 四九二 八 八 (略)、はしがかけてあつて、
 人や馬や車がたくさん通つてゐるの
 です。
 四九三 八 八 (略)、何かと思つたら、にも
 つをつんだ船が通つてゐたのです。
 四九四 八 八 こゝへ來て見ると、(略)、ど
 ちらを見ても水ばかりです。
 四九五 八 八 ナラノ大ブツツイツテ名高イ
 モノデス。
 四九六 八 八 大キナコヒガ(略)オヨイデ
 キルノハ、マコトニミゴトナモノデ
 ス。
 四九七 八 八 鯉ハマコトニキセイノヨイ魚
 デス。
 四九八 八 八 鯉ノタキ上リツイツテ、タキ
 デモ上ルコトガアルサウデス。
 四九九 八 八 (略)、ズンズンシユツセラセ
 ヨトイフ心デ祝フノデセウ。
 五〇〇 八 八 「はい、これですか。」
 五〇一 八 八 「この釜は昔から私のうち
 にある釜です。」

五〇二 八 八 茶ノ木ノ(略)、アタ、カイ
 トコロニヨクソダツ木デス。
 五〇三 八 八 コレハ茶ノ葉デス。
 五〇四 八 八 ツヤガアツテ、色ハコイミド
 リ色デス。
 五〇五 八 八 コ、ハ茶晶デス。
 五〇六 八 八 茶ハ(略)、ソノデタテノ葉
 ヲツムノデス。
 五〇七 八 八 (略)、ソナニツムト、茶ノ
 木ノタメニハヨクナイサウデス。
 五〇八 八 八 蝶ハイツ見テモカハイラシイ
 モノデス。
 五〇九 八 八 (略)ナドニ蝶ノ形ノツケテ
 アルノモ、ソノスガタガカハイラシ
 イカラデセウ。
 五一〇 八 八 (略)蝶ヲツカマヘテイデメ
 ル人ハ、ドウイフ心デセウ。
 五一一 八 八 こちらのの方は、これからの
 人の切符を切つてゐるのです。
 五一二 八 八 あちらの方は、今下りた人
 の切符をうけ取つてゐるのです。
 五一三 八 八 あれは今のつた人の手荷物で
 せう。
 五一四 八 八 あの人はいもう間に合はないで
 せう。
 五一五 八 八 向フノ汽車カラコチラノ汽車
 ヲ見テモ、同ジコトデセウ。
 五一六 八 八 「コレハトンネルツイツテ、
 山ヲホリヌイタ所デス。」
 五一七 八 八 (略)、カウモリハ(略)。
 五一八 八 八 トイツテ、ドチラヘモツキマセンデ
 シタ。

五五八 八 八 シカタナシニ、(略)、夜ニナ
 ルト出テ空ヲトビアルクヤウニナツ
 タトイフハナシデス。
 五五九 八 八 火ヲ使フコトノ出來ルノハ人
 バカリデス。
 五六〇 八 八 (略)炭ハ、木ヲヤイテコシ
 ラヘタモノデス。
 五六一 八 八 アンドンニトボスノハ大テイ
 ナタネカラトツタ種油デス。
 五六二 八 八 (略)、シアゲルト、スキトホ
 ヲツタ油ニナルノデス。
 五六三 八 八 あさつては八まんさまのお
 まつりですから、朝早くからあそび
 にいらつしやい。
 五六四 八 八 「あさつては學校がお休
 ですから、二人とも行つてお出でなさ
 い。
 五六五 八 八 「お話をする通りに書け
 ばよいのです。
 五六六 八 八 きのは日本ばれのよい天氣
 でした。
 五六七 八 八 家を出たのは朝の七時ごろで
 した。
 五六八 八 八 その松山へのぼらうといふの
 です。
 五六九 八 八 (略)、下りる時には二時間し
 かかゝりませんでした。
 五六〇 八 八 (略)、うちへかへつたのは夕
 方でした。
 五六一 八 八 それで取入れの時は(略)、
 夜も十分に眠れないほどです。
 五六二 八 八 (略)、もみがらをのけると、

はじめて米になるのです。

六20 6 (略)、どうしてはかつてよいか分りませんでした。

六25 1 窓 (略) 一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デセウ。

六27 1 窓 (略)、ソレヨリモツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六27 2 窓 メシヲタク釜モ鐵デス。

六27 2 窓 物ヲニル鍋モ鐵デス。

六27 4 窓 ユヲワカス私モ、私ノノル五トクモ鐵デス。

六28 1 窓 (略)、人ノ役ニ立ツコトハ銅ヨリモマダ上デス。

六28 7 窓 「私タチノサビルノハ皆人ガ使ハナイカラデス。

六29 2 窓 ソレガヤハリサビデス。

六29 3 窓 シカモノサビハ大ソウドクナモノデス。」

六44 6 じぶんの心では武士になりた

六44 7 窓 「こないたづら者はこめ

六45 5 (略)、どこへ行つてもながく

六45 6 年が十八のころです、(略)。

六46 1 (略)、信長の目通りへ出るこ

強イノハ熊デス。

七12 6 窓 商賣上でげんきんといひ、

七12 9 窓 (略)、品物を渡しておいて、

七13 1 窓 かけとかけねとは同じです

七13 3 窓 ねざられたら引く積りで、

七13 5 窓 たとへば十五銭で賣つてよ

七13 9 窓 小賣といふのは商人から

七14 5 窓 問屋といふのは何の事です

七14 8 窓 問屋といふのは(略)、品

七15 3 窓 たとへばこふく問屋といふ

七15 9 窓 用事は四五日ですむはずで

七16 6 窓 宿はいつもの所です。

七20 2 窓 「私はちつとも存じません

七21 3 窓 (略) などはずべて私ども

七21 8 窓 まことにおはづかしい次第

です。」

七25 5 取ル・拾フ・握ル・持ツ・投

七25 6 モシ手ガナカツタラ、ドノク

七26 2 大工ガ家ヲタテルノモ、(略)

七26 4 色々ナキカイガアツテモ、

七26 5 手ハスベテノ仕事ノモトデ

七26 7 (略) 手ノ足りナイトイフノ

七27 5 (略) シテ、人ヲ感心サセル

七28 4 コレハチエガ少イカラデス。

七51 3 窓 (略) 三銭の切手ははつて

七51 5 窓 「手紙は四匁までは三銭で

七51 9 窓 つまり三銭だけが不足で

七52 2 窓 (略)、その不足の倍だけを

七52 4 窓 「小包郵便でもやはり四匁

七52 8 窓 「小包郵便は二百匁までは

です。

七53 3 窓 (略)、これもたゞの手紙な

七53 6 窓 (略)、これは今日のやうに

七53 8 窓 今では(略)、どんな遠い

七66 4 窓 桃がじゆくしましたから、

七81 1 窓 「私も(略)、あの運動場で

七81 4 窓 私は年中航海をしてゐるも

七81 5 窓 皆さんは海を御存じでせ

七81 6 窓 汽船も軍艦も御存じでせ

七82 4 窓 どちらを向いても青い水ば

七84 3 窓 見るもの聞くもの總べてめ

七84 7 窓 「航海といふものはかうい

七86 3 窓 船にはらしんぎといふもの

七87 3 窓 この星を見分けることや、

(略) ことは、船に乗る者には大切

な事です。」

七87 日本は海國でありながら、海を恐れる人の多いのは残念な事です。

七89 1 図 それですから小さい時から海になれておくやうにしたいものです。」

八13 1 図 この寫眞で見ると、おかあさんの小さい時分にそっくりです。

八19 4 初は近所の人にもうらやまれる程の身代でしたが、(略)。

八23 9 此の男は居酒屋に酒代の借があるの、其のかたに持つて行かうとするのです。

八25 1 此の下女は毎朝かうして、主人の目をかすめて、牛乳を賣つてゐたのです。

八26 6 一週間程たづねたが、白雀は見つかりませんでした。

八45 6 図 「どうしてそんなに早く伯父さんに分つたのでせう。」

八46 5 図 サクヤノクワジニウチハヤケマセンデシタ

八46 5 図 シンルキミナブジデス

八63 8 綿ノ中ニハ種ガアリマスカラ、綿クリ機械ニカケテ、ソレヲ取去ルノデス。

八64 1 木綿織物ニ(略)色々ナ縞ガアルノハ、ドウシテコシラヘルノデスカ。

八64 5 コク染メタノガ紺デ、ウスイノガ淺黄デス。

八64 7 又所々白ク染メ殘シタノガカスリデス。

八64 9 又色々ニ染メタ絲デ織ツタノガ縞物デス。

八65 2 藍ハ何カラ取りマスカ。藍ノ革カラデス。

八65 4 綿ハ實カラトリマスカ、藍ハ葉ト莖カラ取ルノデス。

八65 5 二月頃種ヲ蒔イテ、六月頃刈取ルノデス。

八66 1 其ノ中へ白絲ヤ白布ヲ入レテ、紺ヤ淺黄ニ染メルノデス。

八67 7 図 (略)、勝手がましい御願ですが、どうか今四五日のところ御ゆるしを願ひ度う御座います。

八69 1 図 此のかはせの金は、ほんの僅かですが、何かすきな物を買つて上げて下さい。

九19 10 図 「それは餘りな御言葉です。

九20 1 図 私も日本男子です。

九86 10 図 勝はあなたの方のものです。

九87 2 図 愛作さんは實に見上げたものです。

十37 9 図 りつばな人の手紙よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。

*てすう 凸てかず
てずり「手刷」(名) 2 手刷

十20 6 又極上品なものになると、機械では刷らないで、手刷にする。

十21 6 (略) 版木を造り、一枚づつ手刷にするのである。

でたて「出立」(名) 1 デカタ

五32 茶ハシンメノ出ルジブンニ、ソノデタテノ葉ヲツムノデス。

てつ「鉄」(名) 11 鐵

六27 1 図 「ナルホド銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、ソレヨリモツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六27 2 図 メシヲタク釜モ鐵デス。

六27 2 図 物ヲニル鍋モ鐵デス。

六27 3 図 ユヲワカス私モ、私ノノル五トクモ鐵デス。

六27 6 図 ソノ他釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍カンノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ、コシラヘルコトガ出来マセン。

六27 7 図 今デハ鐵ハ錢ノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅ヨリモマダ上デス。」

六28 3 図 「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六28 8 図 モシセイ出シテ使ツテクレサハスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキマス。

十一23 3 図 幾年こゝにきゑへゝる鐵より堅きのひふあり。

十二12 6 鐵ヲ鍛フ鍛工場モアレバ、鋼鐵・眞鍮類ヲ鑄ル處モアリ、(略)。

十二13 1 (略)、何時ト厚イ鐵ノ板デモ、大根ヲ切ル様ニ造作ナク切斷スル。

てづか「手塚」(人名) 6 手塚

十50 8 図 唯首を取つて、大將の見参に入れよ。(略)。組めや手塚。」

十50 9 図 手塚の家來は組ませじと中をへだつれば、(略)。

十51 1 図 手塚は家來を討たせじと、敵に組みつく。

十51 3 図 敵は手塚の家來を押へ、刀を抜きて首をかく。

十51 4 図 手塚其の間に敵の草ずりを上げ、こぶしも通れとさし通し、(略)。

十51 6 図 手塚、首をたづさへて、大將義仲の前行き、「光盛、曲者の首取つて候。

てづかのたるうみつもり「手塚太郎光盛」(人名) 1 手塚太郎光盛

十50 4 図 かく申すは信濃の國の住人、手塚太郎光盛なり。よき敵ぞ、組み給へ。」

てっかん「鉄管」(名) 2 鐵管

十一85 5 図 此ノ流ハ(略)、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入ル。

十一85 7 図 既ニ鐵管ニ滿ツレバ、コレヲ練篠機ト稱スル機械ニカケテ、(略)。

てっかん「敵艦」(名) 7 敵艦

十一34 5 図 驅逐艦ハ(略)、敵艦ニ近ツキ、魚形水雷ヲ放チテ之ヲ撃沈シ、(略)。

十一34 8 図 水雷艇ハ(略)、敵艦ニ近ツキ、魚形水雷ヲ放チテ、之ヲ撃沈スルヲ任務トス。

十一34 10 図 潜水艇ハ水中ヲ潜航シ、水雷ヲ放チテ、敵艦ヲ撃沈スルヲ目的トス。

十二5 4 図 (略)、哨艦信濃丸は「敵艦見ゆ。」と報告す。

十二6 9 図 (略)、打出す砲弾よく命中して、敵艦續々火災を起し、(略)。

十二7 7 図 夜に入りて、我が驅逐隊・水雷艦隊は砲火をくゞつて敵艦にせまり、無二無三に攻撃せしかば、(略)。

十二9 8 図 此の兩日の戦に、敵艦の大部分は我が艦隊の爲に、或は撃沈せられ、或は捕獲せられて、(略)。

てつき「手付」(名) 2 手ツキ 手つき 八17 2 図 「我モコレ程ノ事ハ心得タリ。(略)。」トテ、オボツカナキ手ツキニテ、破レタル所ヲ一聞ツツ張レリ。

十二83 2 老人は、どうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、(略)と不思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもつて居た。

てつきようひいちだいてつきよう

てつこく「敵国」(名) 2 敵國

十一42 2 図 (略) 「幼き身を唯一人敵國へやらんも心許なし。

十二88 6 図 支那の昔趙といふ國に蘭相如といふ賢臣あり。敵國秦に使用て功ありしかば、(略)。

てつせき「鉄石」(名) 2 鐵石

七9 1 図 (略)、一たん心定めては、

事に動かず、さそはれず、はげみ進むに何事の など成らざらん、鐵石のかたきもつひにとほすべし。

八87 2 イカニ心ハ堅クテモ、身ハ鐵石デナイ。砲彈ニタフレル兵士ハ數ヘケレナイ。

てつだい「手伝」(名) 2 手つだい

ひははのてつだい

六36 2 (略)、うちではすゝはきをした。僕も手ぬぐひをかぶつて、手つだひをした。

七62 5 図 外國にては、犬をして牛かひ・羊かひの手つだひをなさしむ。

てつだい「手伝」(五) 1 テツダフ

四73 1 オハルハアネニテツダツ

テモラツテ、オヒナサマヲカザ

リマシタ。

てつち「丁稚」(名) 1 てつち

六29 7 直吉と長松は同じ店のでつちであつた。

てつちいひだいてつちい

てつづき「手続」(名) 1 手續

十二108 9 図 上奏とは文書を天皇に奉呈し、建議とは文書を政府に提出して意見を述べるをいふ。上奏といひ、建議といひ、請願といひ、其の手續に於て各相異なりといへども、(略)。

てつどう「鉄道」(名) 11 鐵道

ぼうてつどうかいちくらくせい・けい

べんてつどう・シベリヤてつどう・じ

ゆうかんてつどう・せいぶじゆうかんてつどう・とうしんてつどう・とうほくてつどう・ばしやてつどう・みなまなしゆうてつどう・みなみまなしゆうてつどうちゆうおうていしやじよう

六68 2 図 栗ハカタクシテ、ナガクク

サラザレバ、家ノドダイ又ハ鐵道ノ

マクラ木ナドトス。

八95 2 図 (略)、鐵道の開通せしよ

り、商工業の發達著しく、(略)。

九24 10 図 工兵は陣地をきづき、道を

開き、橋をかけ、鐵道を造り、電信

を通する等、もつぱら技術の事にしたがふ。

九34 4 (略)、スチブンソンは其の會

社に頼まれて鐵道を敷き、其の上を

走る汽車を造つた。

九34 5 いよく鐵道が出来て、汽車

の運轉をして見る日になると、(略)。

九38 2 今ハ水路に汽船があり、陸上

にも所々方々に鐵道が通じてゐる。

九38 3 鐵道の通じてゐない所でも、

馬車や人力車がある。

十一28 5 図 思へば今より六十年以前

には、我が國に一哩の鐵道も、一隻

の汽船もなかりしなり。

十一28 6 図 今や全國鐵道の延長六千

哩を越え、(略)。

十二58 2 図 此の鐵道は日露戰役中に

急設したる輕便鐵道にして、(略)。

十二62 9 図 然れども地下には各種の

鐵道縱横に貫通し、テームス河床の

下をも往來せり。
てつどうかいつう「鐵道開通後」(名) 1 鐵道開通後

九39 4 図 (略)、鐵道開通後ハ旅客ハ

皆汽車ノ便ニヨルヲ以テ、今ハ此ノ

山坂ヲ越ユルモノ少シ。

てつぱい「竹筏」(名) 1 竹筏

十一39 2 図 竹にも直徑一尺以上の

ものこれあり、是にて竹筏といふ臺

灣特有の船を造り候。

てつびん「鉄瓶」(名) 5 テツビン

鐵ビン ちやかんとてつびん

一21 2 テツビン ヒノシコテ

六24 5 アル晩金物ヤノ店デ、ヤクワ

ントテツビンガメイノジマンバナ

シヲシマシタ。

六26 6 テツビンハ、「ナルホド銅ハ

(略)、ソレヨリモツトタクサンアツ

テ、モツト役ニ立ツモノハ鐵デセウ。

六28 5 ソノ時鐵ビンハ、「私タチノサ

ビルノハ皆人ガ使ハナイカラデス。

七38 3 (略)、出口ニハ鍋・釜・鐵ビ

ン・火バシナドヲ賣ル金物屋ト、(略)

ガアル。

てつぼう「鉄棒」(名) 1 鐵棒

十一84 4 図 先ツ棉花ヲ俵ヨリ出シテ

ホグシ、(略)、鐵棒ニマキテ、(略)。

てつむぎ「手紡」(名) 1 手紡

十一87 2 図 (略) 太キ絲、(略) 細キ

絲、細大意ノマ、ニシテ、手紡ノ如

ク不揃トナルコトナシ。機械ノ力ハ

驚クベキモノニアラズヤ。

てつれい「鉄嶺」〔地名〕2 鐵嶺^{てつれい} 鐵嶺

嶺

十二55 10 國 奉天より北すること約百八十八哩、鐵嶺を過ぎて長春の地に至る。

十二57 國 鐵嶺

てにもつ「手荷物」(名)2 手荷物

五41 1 えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ました。あれは今のつた人の手荷物でせう。

十二100 2 國 英國にては停車場に手荷物を預くるに合札を要せず、旅客は下車驛にて各自に荷物を受取るに、間違の起ること殆ど無し。

てぬぐい「手拭」(名)2 手ぬぐひ

六36 2 (略)、うちではすゝはきをした。僕も手ぬぐひをかぶつて、手つだひをした。

九53 1 國 圖 かぶり物にはあらねども、手ぬぐひ三尺引きしほり、頭に結ぶはち巻は 次第々々にすたれ行く。

てのこう「手甲」(名)1 手の甲

十79 9 國 女子は(略)、又口の周圍、手首・手の甲等には入墨をほどこせり。

てのはたらき「課名」2 手ノハタラクキ

七目9 第八 手ノハタラクキ

七25 8 第八 手ノハタラクキ

てのひら「手平」(名)2 手ノヒラ

五14 7 (略)、手ノヒラノ長サガ五尺六寸、中指ノ長サガ五尺アリマス。

六64 6 熊ガ人ニムカツテ來ル時ニハ、(略)、大キナ手ノヒラデツカミ

カ、ツテ、(略)。

てのゆび「課名」2 手ノユビ

四目8 七 手ノユビ

四20 2 七 手ノユビ

ではひそれでは

てばこひたまてばこ

てはず「手筈」(名)2 手ハズ

八51 9 國 鐵足等此ノ日ヲ以テ大事ヲ

オコナハントシ、アラカジメ其ノ手

ハズヲ定メタリ。

八53 1 國 他ノ二人ハ此ノ間ニ入鹿ヲ

討ツベキ手ハズナリシガ、恐レテ出

デズ。

てばなしがたし「手放難」(形)1 手

放し難し「一キ」

十27 9 國 圖 當日參上御見送致すはず

に候へども、手放し難き商用これあ

り候へば、手紙を以て御祝ひ申上候。

てばやい「手早」(形)1 手早い

「一ク」

十一58 7 手早く帶をほどいて、ピエ

ールの體にくゝりつけて合圖をする

と、(略)。

てほん「手本」(名)4 テホン 手本

ひおてほん

一19 9 テホンガアリマス。フデガ

アリマス。

五81 8 國 此時よしつねは、「われを手本にせよ。」といひながら、馬に一むちあててかけ下りた。

七9 1 國 正行ノ如キハマコトニ忠孝

ニツノ道ヲ全ウシタル武士ニシテ、

國民ノ手本トイフベシ。

十15 5 國 二人共に和漢の學に通じ、

其の作れる文は古文の手本として、

今なほひろく愛讀せらる。

てま「手間」(名)2 手間

七29 9 蠶をかつて絹絲を取り、絹絲

を織つて絹織物にするまでには、大

そうな手間がかかる。

十22 2 又活字は何時でも直に植ゑる

ことが出来るが、木版では一枚づつ

彫るから、手間が幾層倍もかかる。

ても(接助) 66 テモ ても ひどうし

ても

二64 5 コンド ハイクラハヒヲ

フリカケテモ、ハナハスコシモ

サキマセン。

三2 6 (略)、ヨソノクニニハ、

コンナニタクサンアリマセン。

アツテモ、日本ノサクラノヤ

ウナウツクシイハナハサキマ

セン。

三13 7 (略)、ダレトスマフヲト

ツテモ、マケタコトハアリマセ

ン。

三19 5 ユフガタニナツテモ、オ

ヤドリガオリテコナイトキニ

ハ、(略)。

三39 6 なにをきかれても、この口ではつきりこたへます。

三47 8 とんぼなどがあたまの

上をとびまはつても、見むきも

しません。

三51 1 國 おちても、おちても、ま

たとふ ほどに、とうとう やな

ぎに とびついた。

三51 2 國 おちても、おちても、ま

たとふ ほどに、(略)。

三52 9 國 きてても、きてても、ま

たはる ほどに、とうとう 小え

だに すをはつた。

三52 9 國 きてても、きてても、ま

たはる ほどに、(略)。

三53 2 何ヲ言ヒツケラレテモ、

「ハイ、今スグニ。」トイヒナガ

ラ、ナカナカトリカカリマセン。

三53 8 「(略)。」トヨバレテモ、

「ハイ、今スグニ。」トイツテ、ナ

カナカスグニハ行キマセン。

三54 4 「(略)。」トイハレテモ、

「ハイ、今スグニ。」トコタヘル

バカリデス。

三57 7 (略) ムラサキ色ノハオリ

ハ、イツマデタツテモ、色ガカ

ハリマセン。

四12 8 クリハユデタタベテモ、

ヤイテタベテモ、ウマイモノデ

ス。

四12 8 クリハユデタタベテモ、

ヤイテタベテモ、ウマイモノデ

ス。

四28 6 國 「いいえ、私たちは枯れたやうに見えても、ねは生き

てゐます。

四六二 (略)、雪がたくさんつもつ

て、どこを見ててもまつ白です。

五三六 (略)、ひろくとして、どちら

らを見てても水ばかりです。

五二九 (略) しわはよつてもわかい氣

で、小さい君らのなかま入、(略)。

五三四 蝶ハイッ見テモカイラシイ

モノデス。

五三五 蝶ニハ (略) サマノアリマ

スガ、ドレヲ見テモ美シウゴザイマ

ス。

五四一 汽車はどんなことがあつても

待ちません、(略)。

五四五 向フノ汽車カラコチヲノ汽車

ヲ見テモ、同ジコトデセウ。

五四五 左ヲ見テモ、右ヲ見テモ、ケ

シキガカハルノデ、(略)。

五四五 左ヲ見テモ、右ヲ見テモ、ケ

シキガカハルノデ、(略)。

五四六 イツマデタツテモ勝負ガツカ

ナイカラ、(略)。

五七三 カハイサウニ美シイ角ガ木ノ

枝ニヒツカ、ツテ、イクラモガイテ

モハヅレマセン。

六二二 白い砂に青い松、どこのはま

べを見てても、美しい景色である。

六三三 モシ列ニハナレルヤウナコト

ガアツテモ、ソノアヒツヲ聞クト、

スグ列ニ加ルノデアル。

六四四 どこの田を見てても、稻がよく

じゆくして、重さうにはをたれてゐ

ます。

六九一 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、

時々青イ物ヲ出シマセウ。

六三二 「だんながおるすだから、なほ

さらまちがひがあつてはならない。」

といつても、長松はまだ笑つてゐた。

六四四 (略)、おきやうなどは何べん

をしへてもおぼえません。

六四五 (略)、どこへ行つてもながく

は居つきませんでした。

六七〇 (略)、先生に何か聞かれても、

答へることが出来ないで、(略)。

六七〇 (略)、何を聞かれても、はつ

きりと答へる子供もございました。

七二六 色々ナキカイガアツテモ、

ソレヲハタラカセルノハヤハリ手デ

ス。

七二七 ドンナガクキガアツテモ、手

ガナカツタラ、オモシロイ音ヲ出ス

コトハ出来マスマイ。

七二八 手バカリ動カシテモ、チエガ

ナケレバ何ノ役ニモ立チマセン。

七四九 「マツコノザシキヲ見渡シ

テモ、コノタクサンノ障子ハ皆僕ヲ

ノ仲間デハツテアルデハナイカ。

七四九 (略)、僕等ハ少シグラキ

水ニヌレテモ、裏ヘハ通ラナイ。」

七四九 「ソナニイバツテモ、ア

ノ神ダナノ御札ヤゴヘイニハナレマ

イ。」

七五九 近い所ならもつと目方がふ

えても、四銭で送れます。

七六〇 (略)、長きものは半の如く、

立ちてもその毛はなほ地面に達す。

七六四 水を飲まないことはあつて

も、水のまじつた物や、(略)を口

に入れないことはない。

七八二 どちらを向いても青い水ば

かりです。

七八六 又夜はいくら暗くても、星

が出てゐれば、それに便つて、居る

場所や方角がちやんと分ります。

八〇四 (略) 耳は食事の知らせを

聞きても知らぬ風をし、(略)。

八〇四 (略)、目は食物を見ても見

ぬふりをして過し、(略)。

八七二 イカニハ堅クテモ、身ハ鐵

石デナイ。

八九一 若シ突撃ノ聲ガ聞エテモ、

砲聲・銃聲ガツマクヤウナラ、我が

軍ガ苦戦シテキルト思ヘ。

八九九 (略)、夜明頃突撃ノ聲ガ盛ニ

起ツテモ、砲聲・銃聲ハ絶エナイ。

九二二 いづこより見ても山にさへ

ぎられ、かすみにへだてられて、其

の全景を見ること能はず。

九三五 あいさつをしていてもいねい

で、少しも生意氣な風がなく、(略)。

九三五 (略)、何を聞いても、一々

明白に答へて、しかもよけいなこと

はいひません。

九七九 身體ノ健全ナルトキハ精神

モ亦常ニ快活ニシテ、何事ヲ爲シテ

モ良キ結果ヲ見ルナルベシ。

十一六 秋・冬の花少き季節に入

りても、食物に不足することなきは、

(略)。

十一二 セツカク苦勞シテモ、其ノ

仕事ハ何ニモナラナイ。

十一四 飲まず食はずに終日・終夜

走つても尚平然として居るといふこ

とである。

十一九 「あれ程の名馬はいくら

金を拂つても惜しくはない。」

十一七 思ひても返らぬことをく

よくと心配するは、(略)。

十一〇 金がなくて、冠禮の行へな

い者は、三十を過ぎててもチョンガー

で、(略)。

十二二 (略) 青い水草を入れて置

けば、水を取換へなくても金魚は割

合に長く生きてゐる。

十二三 (略)、如何なる事變に際

しても、自若として其の常を失はざ

るは日本女子の美德なり。

十二九 (略)、人情にそむき、義

理に外れても、費用を惜しむは賤し

むべき事なり。

でも (副助) 45 デモ でも ひそれ

も・なんでも

三三 ウシノツノヤ、シカノ

ツノデモ ヲツテシマフホドデ、

(略)。

三五 山でも、さかでも、ずん

ずん あゆめ。

三五 山でも、さかでも、ずん

ずん あゆめ。

三三六 ④ ドコデモ 田ウエガ ハジマツテキマス。

三三八 ④ ソレデイツデモ イクサニカツタ トイフ コトデス。

四八六 ④ ドンナウチデモ オイハヒヲシナイトコロハアリマセン。

四三九 ④ (略) ドンナ時デモ、コノ中ヘハイツテ、内カラトラシメテキサヘスレバ、アンシンナモノデス。」

四四五 ④ 今でも (略) なまぐさものを おくる 時には、のしをつけません。」

四四九 ④ とけいは ぼんでも かつちん、かつちん。

四七七 ④ いくら弓の名人でも、これを 一矢でいおとすことは、なかなかむづかしさうです。

四七九 ④ そらをとんでゐる鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの名人でございます。

五七五 ④ 又ドンナ流ノ早イ川デモ、オヨイデノボリマス。

五七六 ④ 鯉ノタキ上リトイツテ、タキデモ上ルコトガアルサウデス。

六二八 ④ ガンハイツデモ一シヨニナツテ、列ヲツクツテトブ。

六二八 ④ モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、鐵ハイツデモ光ツテキマス。

六三二 ④ ほんとのまうけでない金は一厘でも取つてはならない。」

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

六六〇 ④ ④ もしおなかでもいたいのか、おとし物でもしたのか。」と、(略)。

ゆつくり看病してお上げなさい。

八六八 ④ 五日でも十日でも、(略)ゆつくり看病してお上げなさい。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

九三六 ④ ④ 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」といふ歌などもあつた。

十一一〇八 ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

十一一〇八 ⑥ ⑥ 上衣と股引は冬でも多くは白いのを用ひる。

- 十一39 寺の上の小高き所に後醍醐天皇の陵あり。
 十一71 泉州^{さかひ}堺に一國寺といふ寺あり。
 十一71 此の繪をかける畫工久しく此の寺に寄食してありしが、(略)。
 五10 7 ひるはあたたかな日にてられ、夜は美しい月をうかべながら、休なしにあるきました。
 てりひひでり
 てるひあまてらすおおみかみ
 出る【出】(下二) 75 デル 出る 出ル 出る 《デ・デル》ひすすみでる・ながれでる・わきでる
 二14 ヒノデナイウチニ(略)。
 二27 イマ日ガデマス。
 二96 デタデタ、ツキガ。
 二96 デタデタ、ツキガ。
 二11 マタデタ、月ガ。
 二26 トモキチハシンバイシテ、カドグチヘデテミマシタ。
 二52 オデイサンガソコヲホルト、土ノ中カラ、(略)タカラモノガタクサンデマシタ。
 二53 キタナイドロ水ノホカニハナンニモデテキマセン。
 二56 ツクタビ、ニ、ウスノ中カラ(略)タカラモノガデマシタ。
 二57 (略)ヤツバリキタナイモノバカリデテ、ヨイモノハナンニモデマセン。
 二57 (略)ヨイモノハナンニモデマセン。
 三45 デテキテ、イツシヨニアソビマセンカ。
 三54 (略)ウチニバカリキナイデ、チツトソトヘデテ、イツシヨニウタヲウタヒマセウ。
 三11 ウチノ人ガミンナソトヘデルトキニハ、オバアサンガオルスキヲナサイマス。
 三12 にはのまつの木の上へ月がでてゐます。〔ひらがなのドリル〕
 三40 うが川の中で(略)。今もぐつたかとおもふと、すぐに一びきくはへて、でてきます。
 三41 見てゐるうちにまた一びきくはへて、ういて出ます。
 三49 (略)下へもぐつて、しばらくたつと、ひとりでにうかぶやうにして、水の上へ出てきます。
 三49 こひやふななどは水から出ると、しんでしまひます。
 三59 (略)舟がたくさんおきへ出てゐます。
 三60 (略)あみをだんだんはまべへひきよせてくると、女や子どもも大ぜい出て、いつしよになつてひきあげます。
 三64 アル日ウミベへ出テ見ルト、子トモガ大ゼイデカメヲツカマヘテ、(略)。
 三66 (略)ウラシマガウミベデツリヲシテキルト、大キナカメガ出テキテ、(略)。
 三72 ウラシマハ(略)マタカメノセナカニノツテ、海ノ上へ出テ来マシタ。
 三73 (略)タマテバコヲアケテ見ルト、中カラ白イケムリガ出テ、(略)。
 四52 アル日ハマベへ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、(略)。
 四65 あんな小さなからだで、あんな大きなこゑの 出るのがふしぎです。
 五24 (略)どうかして大神にまた出ていただきたいと、(略)一同あまの岩戸の外にあつまつて、おかくらをおはじめになりました。
 五6 ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ出テ来テ、(略)ヨイミチノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシタ。
 五9 それから少し来ると、高いがけの上へ出ました。
 五10 だん／＼来ると、ひろい野はらへ出ました。
 五23 しかたがないから、うつたへて出ました。
 五32 茶ハシンメノ出ルジブンニ、ソノデタテノ葉ヲツムノデス。
 五41 もう汽車が出ます。
 五41 汽車は(略)きまつた時間にちやんと出ます。
 五44 トンネルヲ出ルト、マタ明ルクナツテ、(略)。
 五46 (略)にはかに雲が出て、かみなりが鳴り出しました。
 五47 音次郎が木の下を出ると、間もなく(略)おそろしいかみなりが鳴りました。
 五57 (略)ヒルノ間ハ木ノウロヤ穴ノ中ニカクレテキテ、夜ニナルト出テ空ヲトビアルクヤウニナツタトイフハナシデス。
 五80 さあ、あんないをせよ。」と言ひつけて、夜のうちにがけの上まで出た。
 六8 家を出たのは朝の七時ごろでした。
 六8 (略)川について、四五町行くと、もう町をはづれて、たんぼへ出ました。
 六9 あぜ道を七八町通つて、小川の橋を渡ると、御社の前へ出ました。
 六15 今日天気もよいから、人が大ぜい出て、稻をかつてゐます。
 六29 ある日主人は朝から用たしに出たので、二人が店のるすをしてゐると、(略)。
 六36 (略)うちではすゝはきをした。(略)ゆか下から去年なくしたこまが出てうれしかった。
 六45 初はひくい役目で、信長の

目通りへ出ることも出来ませんでした。

六46 又ある朝早く信長がかりに出ようとして、(略)。

七95 道をはさんで畠一面に、麥はほが出る、葉は花盛り。

七28 一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、(略)。

七32 6 そのくだから出すねばつたしるが外へ出ると、すぐにかわいて絲になるのである。

七32 9 (略)、さなぎが蝶のやうな形になつて、繭を破つて出て来る。

七33 2 蛾が出ると、絲が取れないから、(略)。

七33 2 蛾が出ると、絲が取れないから、まだ出ない内にむして、(略)。

七33 4 蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、(略)。

七33 6 蛾は (略)、出て来ると、すぐに紙の上において卵を産みつけさせる。

七38 1 色々ナ店ノ前ヲ通ツテ、左ヘ折レタリ、右ヘ折レタリスルト、知ラズノニ出口ヘ出テ来ル。

七81 9 園 まづいかりをぬいて港を出て行くと、(略)。

七86 4 園 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、(略)。

八14 8 村デハ農夫ガクハヲカツイデ、タンボヘ出ル時デアル。

八21 7 園 (略)、毎年一羽づつしか出て来ない。

八21 9 園 (略)、毎朝早くすを出て、糸をさがして、すぐ歸つてしまふといふことだ。

八23 5 その中に下男が麥俵をかついで、裏門から出て来ました。

八24 6 (略)、今度は下女がばけつをさげて、牛小屋から出て来ました。

八44 7 聞けば此の火事は材木屋の小屋から出たので、(略)。

八45 9 園 こちらでは近年にない大火事だから、(略)。それが東京の今朝の新聞に出たので、(略)。

八65 9 藍玉ヲ水ノ中ヘ入レテオクト、紺色ノ汁ガ出マス。

九19 4 園 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、(略)。

九20 6 園 (略) 聞けば、そなたは豊島の戦にも出ず、(略)とのことと、(略)。

九23 2 園 豊島の戦に出なかつたことは艦中一同残念に思つてゐる。

十7 4 竹ノ葉ヲ見ルト、本ノ方カラマツ直ニ幾スデカノ脈ガ並ンデ出テ、(略)。

十7 7 櫻ヤ梅ノ葉ハ唯一スデノ太イ脈ガマン中ニ通ツテ、ソレカラ出タ細イ脈ガ網ノ目ノ様ニナツテキル。

十29 9 犬を連れた男が銃を肩にして、森の蔭から出て来て、(略)。

十二83 1 老人は、どうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、(略)。

十二83 2 (略)、どうして又自分の

弾く時にはあんな音が出ないのかと(略)。

でわ「出羽」(人名) 1 出羽

十二6 2 園 (略)、片岡・出羽・瓜生・東郷(少将)の諸隊は敵の後尾をつく。

てわけ「手分」(名) 1 手分

十一9 7 此ノ様ニ大勢ノ人ガ手分ヲシテ、別別ノ仕事ヲスルコトヲ分業トイフ。

てわけ「手分」(サ変) 1 手分スル「一シ」

十一9 8 一箱ノマツチヲ造ル手數モナカノ複雑ナモノデ、ソレヲ大勢ノ人ガ手分シテスルノデアル。

てん「天」(名) 10 天

二31 4 園 タコタコアガレ。(略)、クモマデアガレ。天マデアガレ。

二32 3 園 クモマデアガレ。天マデアガレ。

二55 4 (略)、天マデトドクカトオモフヤウナ、大キナ太イ木ニナリマシタ。

七89 3 園 大砲ノヒマキハ、天モオチ、海モサクルカト思フバカリナリ。

八5 3 園 (略)、數千年もへたらんかと思はるゝ老木枝をまじへて、高く天をつく。

九46 2 園 四日目の正午頃、大風吹起りて、砂煙は天をおほへり。

十一3 10 園 天皇のこゝに行幸ありし

より三年、北方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、(略)。

十一15 10 園 天、勾踐を空しうするなかれ。

十一53 1 園 (略)、常ニ其ノ行ヲツ、シミ、上、天ニ恥ヂズ、下、地ニ恥ヂズ、外、人ニ恥ヂズ、内、己ニ恥ヂザル工夫ヲナスベシ。

十二7 9 園 明くれば二十八日、天よく晴れて海波靜かなり。

てん「店」 凸おわりやごふくてん・おわりやごふくてんおんちゅう・こうりてん

てん「点」(名) 2 テン 點 凸しゅつぱつてん・れんけつてん

五16 4 (略)、クロイテンノアルウロコガ三十六枚ツツナランデキマス。

十二62 3 園 街路は掃除最もよく行くとゞきて、衛生・消防を始め、(略)百般の設備皆具れり。此の點より見れば眞に近世都市の好模範たり。

てん 凸とてん

てん 凸かぐらでん・せいりようでん・だいごくでん・だいぶつでん

てん 凸いんにゅうよう「店員入用」(名) 1 店員入用

十34 4 外國の或商會で新聞紙に店員入用の廣告を出した。

でんえん「田園」(名) 1 田園

十一19 3 園 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、(略)。

てんか「天下」(名) 7 天下

八186 図 時頼ガ心正シク、ツネニ節儉ヲ守リテ、ヨク天下ヲヲサメタルモ、(略)。

十一77 図 美濃の養老瀬は孝子の傳説を以て其の名天下に高し。

十一102 図 支那ノ昔後漢ノ末、天下麻ノ如ク亂レテ、英雄四方ニ起レリ。

十一103 4 図 孔明、(略)、遂ニ備ヲタスケテ蜀ノ國ヲ建テ、天下ヲ三分シテ其ノ一ヲ保タシム。

十一106 6 図 「孔明ハ天下ノ奇才ナリ。」

十二72 4 図 位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、(略)。

十二73 3 図 快活なる精神を以て熱心に其の事業に従事せば、天下何事か成らざるを憂へん。

てんか「点火」(名) 1 点火

七89 8 図 「杉野ハ今点火ヲ終ヘタルゾ。總員ポートヘ。」

てんか「点火」(サ変) 1 点火ス

「一ス」

十95 10 図 大小ノ燈籠左右ニ多く、其ノ數二千ニ近シ。毎年節分ノ夜盡ク之ニ點火ストイフ。

てんが「天顔」(名) 2 天顔

七75 図 正行(略)、皇居ニマキリテ申シアグルヤウ、(略)。(略)、今一度天顔ヲヲガミテマキリタシ。」

十一16 4 図 主上は詩の心を御さとり

ありて、天顔殊に麗しく笑ませ給ひぬ。

てんき「天気」(名) 8 天気 丹ぜんこくてんきよほう・ちほうてんきよほう

六78 きのふは日本ばれのよい天気でした。

六15 1 今日天気もよいから、人が大ぜい出て、稻をかつてゐます。

六15 4 (略)、天気のよい間に取入れなければなりません。

六35 8 今日天気がよくて暖いから、うちではすゝはきをした。

八42 図 雨は夜中にはれて、今日はうらゝかなる天気なり。

九59 9 図 「我は天気にも相談せず、毎日運動するが故に、(略)。」

十二16 4 図 日々の天気は我等の生活に大なる關係あり。

十二17 5 図 又各測候所が(略)、其の地方の天気を豫告するを地方天気豫報といふ。

てんき「電気」(名) 1 電気

十二12 9 工場ニハ色々アル。(略)。

イツレモ大規模ニ出来テキテ、盡ク蒸氣や電気ノ力ヲ利用スル。

てんきいかん「天気如何」(名) 1 天気如何

十二17 8 図 是等の豫報は(略)に掲示せらるゝを以て我等は之を見て、明日の天気如何を豫知することを得べく、(略)。

てんきじかけ「電気仕掛」(名) 1 電

氣ジカケ

十62 4 図 發掘シタル銅鑛ハ、或ハ電氣ジカケノ機械ニテマキ上ゲ、(略)。

てんき「天気圖」(名) 4 天気圖

十二17 2 図 (略)、中央氣象臺は各測候所の報告によりて天気圖を作り、(略)。

十二19 2 図 諸子は中央氣象臺より發行する天気圖を見たことありや。

十二19 3 図 天気圖とは各地に於て同時刻に觀測したる晴・曇・雨・雪、風の方向・強弱、温度等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、あたかも天上より下界を見下すが如く、一目に全國天候の如何を示すものなり。

十二19 7 図 天気圖に用ふる普通の符號は左の如し。

てんきつづき「天氣統」(名) 1 天氣つづき

八42 5 長い天氣つづきで、かわききつてゐる上に、(略)。

てんきよう「転業」(サ変) 1 轉業

「一スル」

十一93 9 図 (略)、又他の職業に従事する人も靴屋の利益あるを見て、之に轉業するに至るべし。

てんきようそ「天氣要素」(名) 1 天氣要素

十二19 4 図 (略)晴・曇・雨・雪、風の方向・強弱、温度等一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)。

てんきよほう「天氣予報」(名) 1 天

氣豫報

十二17 9 図 (略)、又其の日の天氣豫報は毎朝の新聞紙にても知るを得べし。

てんきよほう「およびぼうふううけいほう」(課名) 2 天氣豫報及び暴風雨警報

十二目5 第四課 天氣豫報及び暴風雨警報

十二16 3 第四課 天氣豫報及び暴風雨警報

てんぐさ「天草」(名) 2 テングサ

七75 3 (略)、トコロテンニスルモノニハ、テングサガアル。

七76 5 (略)、テングサノヤウニ紅色ノモノモアル。

てんこ「じんいんてんこ」

てんこう「天候」(名) 1 天候

十二19 6 図 天氣圖とは(略)一般の天氣要素を地圖の上に記載し、(略)、一目に全國天候の如何を示すものなり。

てんざい「点在」(サ変) 1 點在す

「一ス」

十一19 5 図 (略) 田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。

てんさん「天産」(名) 1 天産

十二47 10 図 温熱二帶にまゝがりて、天産多きうまし國。

でんじ「田地」(名) 1 田地

十91 1 図 御村も當村と同じく水利の良き割合には田地少く、(略)。

てんしさま「天子様」(名) 2 天子サ

マ 天子様

三145 ソレヲ 天子サマガ オキ

キニ ナツテ、ノミノ スクネト

イフ 人ト スマフヲ オトラセニ

ナリマシタ。

五374 図 するは (略)、「天子様の

おほせだから、子を出すやうに。」

と、(略)。

てんじてんのう「天智天皇」(人名) 1

天智天皇

八541 図 中大兄皇子ハ後天皇ノ位ニ

ツキ給フ。天智天皇ト申シ奉ルハ即

チ此ノ御方ナリ。

でんし「電車」(名) 8 電車 ひきし

やでんしやちゆう

七542 図 新橋停車場ヲ出デテ、上野

行ノ電車ニ乗ル。

七558 図 上野ノ山ヲ下リテ、淺草行

ノ電車ニ乗ル。

七561 図 雷門ニテ電車ヲ下リテ、觀

音堂ニ向ツテ行ケバ、(略)。

七589 図 電車ニテ九段坂ノ上ニイタ

リ、靖國神社ニサンケイス。

九404 図 (略)、山ノフモトナル湯本

マデハ電車サヘ開通セリ。

十一261 図 都會の地には電車・自動

車等も次第に多く行はれて、ひとへ

に速力を競ふ世とはなれり。

十二634 図 電車の便の最も開けたる

は伯林にして、市街の隅々通ぜざる

處なく、車内亦清潔にして乗心地甚

だ好し。

十二998 図 汽車・汽船・電車等の交

通機關、博物館・圖書館等の公共營

造物に在りては、敏速と規律とを尊

ぶものなれば、(略)。

てんじゅ「天授」(名) 1 天授

十一1054 図 孔明(略)、再び戰ハ

シメテ再び之ヲ捕フ。カクスルコト

七回ニ及ビシカバ、賊將歎ジテ、「公

ハ天授ナリ、敵スベカラズ。」トテ、

マタ反スルコトナカリキ。

てんしゅかく「天守閣」(名) 2 天守

八938 図 名古屋城は(略)、其の天守

閣は加藤清正のきづきしものなり。

八939 図 名高き金のしやちほこは此

の天守閣の棟の兩はしにあり。

てんじょう「天上」(名) 2 天上

十二195 図 天氣圖とは(略)一般の

天氣要素を地圖の上に記載し、あた

かも天上より下界を見下すが如く、

一目に全國天候の如何を示すものな

り。

十二829 弓が一度糸にふれると、天

上の音樂の様な美しい音がわき出し

た。

てんじょう「天井」(名) 3 天井

八591 くじやくは(略)。大きなも

のになると、若し家の中でひろげさ

せたら、(略)、天井へつかへる程で

ある。

十814 図 其の家はほつたて小屋の如

く、床もなく、天井もなし。(略)、

かやを結びて壁に代へ、又かやを並

べて屋根となせり。

十一1076 室が廣く、天井が高いと温

りにくいから、成るべく狭く低くす

る必要がある。

てんしゅうさんねんこがつ「天正三年五

月」(名) 1 天正三年五月

十二267 図 天正三年五月奥平信昌、

徳川家康の命を受けて長篠城を守

る。

てんしよく「天職」(名) 1 天職

十一11710 図 東洋平和の天職はか

ゝる、我等の肩の上。

でんしん「電信」(名) 1 電信

九251 図 工兵は陣地をきづき、道を

開き、橋をかけ、鐵道を造り、電信

を通ずる等、もつぱら技術の事にし

たがふ。

てんじんさま「天神様」(課名) 2 天

ジンサマ

二目7 十七 天ジンサマ

二44 十七 天ジンサマ

てんじんさま「天神様」(名) 4 テン

ジンサマ 天ジンサマ 天神様

二445 コレハ 天ジンサマノオ

ヤシロデス。

二466 天ジンサマハスガハラノ

ミチザネトイフ チユウギナオ

カタヲ マツツタノデス。

二475 コノオカタハウメノハ

ナガオスキデシタカラ、ドコ

ノテンジンサマノオヤシロニ

モ、ウメノ木ガウエテアリマ

ス。

六404 図 (略)、北野の天神様へさん

けいする。

でんしんばしら「電信柱」(名) 1 デ

ンシン柱

六677 図 杉ハデンシン柱ニ用ヒ、又

ハコ・ラク・タルナドラ作ルニ用フ

ルコト多シ。

てんず「転」(サ変) 5 轉ず「一ジ・

ズル」

十728 図 温泉の諸種の病を治する

は、(略)、一つには又地を轉じて清

新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に

接するが爲なるべし。

十一186 図 一島未だ去らざるに、一

島更に現れ、(略)、かくして島轉じ、

海廻りて、其の盡くる所を知らず。

十二3810 図 相如聞きて、力めて之を

避け、廉頗の來るを見れば、車を轉

じて逃ぐ。

十二673 図 (略)、亞弗利加・印度の

獅子、南亞米利加の野牛等の、(略)、

食物を追うて其の居を轉ずるは珍し

きことにあらず。

十二764 図 コロンブスは葡萄牙に客

遊中、熱心に此の説を主張したりし

が、(略)。是に於て空しく志を抱

いて西班牙に轉じ、居ること多年、

(略)。

てんずる「転」(サ変) 1 轉ずる

『一ジ』

十647 船長の(略)號令に、船はは
や方向を轉じて、北へ向つて走る。
てんせい「天性」(名) 1 天性

十一526 天性快活ナル人モ、身體
ノ健全ヲ害スレバ、意氣モ亦オトロ
ヘテ笑フコト少シ。

でんせつ「伝説」(名) 1 傳説

十一777 美濃の養老瀬は孝子の傳
説を以て其の名天下に高し。
でんせんびよう「伝染病」(名) 1 傳
染病

十二908 若し家内に傳染病等にか
ゝるものあらば、近處・隣へ對して
も申しわけなく、世間へ對しても相
濟まぬ次第ならずや。

でんだいじゅうこう「電第十号」(名)

1 電第一〇號

八48 電第一〇號

でんたつす「伝達」(サ変) 1 傳達ス

『一シ』

十一341 通報艦ハ主トシテ艦隊ノ
命令・報告等ヲ傳達シ、(略)。
でんたつす「伝達」(サ変) 1 傳達
する『一サ』

十二206 其の時花の中の花粉は是等
の蟲に着いて、一つの花から他の花
に傳達される。

てんち「天地」(名) 2 天地

十899 天地(略) やみの天地をまた
元の 御代に返すは誰が任ぞ。
十二1173 此の五箇條は天地の公

道、人倫の常經なり。

*でんち 凸でんじ

てんちようせつ「天長節」(名) 1 天
長セツ

四93 私ドモノガクカウデモ、
ケサ 天長セツノシキガアリマ
シタ。

てんでんと「点」(副) 1 點々と

十二851 日ははや没して、燈火の光
が點々として此處彼處にかゝやいて
あるとは、(略)。

でんでんむしむし(名) 1 デンデナム
シムシ

一264 キノエダニカタツムリ
ガキマス。デンデナムシムシ
ノダセ ヤリダセ。

テント(名) 2 テント

九459 さていよく沙漠に入りし
が、(略)。日暮るれば、一同テント
を張りて夜を過す。

九489 (略)、其の日の夕方、一組
の隊商の宿れるテントを見たり。

てんねん「天然」(名) 2 天然

九954 天然の美は更に人工の美よ
りも勝れたり。東照宮の西三里ばか
り、男體山のふもとに中禪寺湖あり、
(略)。
九965 (略)、よく人工の美と天然
の美とを併せたるは日光に如くはな
し。

てんねんりん「天然林」(名) 1 天然
林

十一1003 森林は(略)廣大なる

天然林にして、榎松・蝦夷松・落葉
松・白樺等一面に生ひ茂り、(略)。
てんのう「天皇」(名) 28 天皇 〃いち
じようてんのう・おうじんてんのう・
かいがてんのう・かんむてんのう・け
いこうてんのう・こうぎよくてんのう
・ごだいごてんのう・ごだいごてんの
うりよう・ごつちみかどてんのう・さ
いめいてんのう・しようむてんのう・
じんむてんのう・すいぜいてんのう・
てんじてんのう・にとくてんのう・
ゆうりやくてんのう・ようめいてんの
う

五57 日本ノ一バンハジメノ天皇ヲ
神武天皇ト申シ上ゲマス。
五58 コノ天皇ガワルモノドモヲ御
セイバツニナツタ時、(略)。
五76 天皇ハ國ノ中ノワルモノド
モヲノコラスオタヒラゲニナツテ、
(略)。
五78 天皇ハ(略)、天皇ノオクラ
キニオツキニナリマシタ。
五378 天皇はこれをごらんになつ
て、(略)、するには小皇子といふ
姓をたまはりました。

七28 我が死ニタル後モ、(略)、
忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニ
ツクスベシ。
七54 (略)、天皇ハ吉野山ノカリ
ノ皇居ニウツリタマヘリ。
七77 天皇ハコレヲ聞キ、ミスラ

高クマキ上ゲサセ、正行ヲ近ク召シ
タマヒテ、(略)。

八12 代々の天皇は皇大神宮をた
ふとびたまふときははめてあつく、
(略)。

八25 其の神勅によりて、代々の
天皇はこれを宮中にあがめたまひし
が、(略)。

八52 天皇大極殿ニ出デサセ給
ヒ、入鹿カタハラニ侍ス。

八541 中大兄皇子ハ後天皇ノ位ニ
ツキ給フ。

八543 鎌足其ノ後モ天皇ヲタスケ
奉リテ功アリシカバ、(略)。

八543 (略)、天皇重ク用ヒテ大臣
トナシ、藤原ノ姓ヲタマヘリ。

九13 代々の天皇の御位に即かせ
給ふ時には、必ず三種の神器を受け
つぎ給ふ。

九410 (略)、天皇日本武尊に命
じて、之を討たしめ給ふ。

九639 かばかりの大功ありし人
故、天皇の御信任も厚く、(略)。

九6310 (略)、其の薨せし時、天皇
は深く之ををしみ給ひき。

九8010 (略)、詩を作りて天皇の御
感に入り、御衣を賜はりて身に餘る
面目をほどこしたりしが、(略)。

十736 道後は(略)。(略)、古代
より世に著れ、往昔天皇の行幸し給
ひしことも數回に及べり。
十一39 天皇のこゝに行幸ありし

後 記 — 編集の経過と担当者

国語辞典編集準備室では昭和五十六年度から第二期国定読本すなわち『尋常小学読本』（いわゆるハタタコ読本）に関する作業に入った。昭和五十七年三月から手作業総索引方式による作業原本作成・複写カード作成を行い、四月からカード採集をはじめた。

昭和六十年四月からは『国定読本用語総覧2』の編集作業を開始し原稿作成の作業に入った。作業の手順は『国定読本用語総覧1』の後記に記した通りである。完成原稿を三省堂に渡しはじめたのは昭和六十一年の八月であった。

第二期に関する作業にたずさわったのは次の通りである。

昭和五十六年度

主幹 斎賀秀夫 副主幹 飛田良文 補助員 斎藤純子 調査員 見坊

豪紀・木村睦子・湯浅茂雄・村山昌俊・碁石雅利

昭和五十七年度から昭和六十一年度まで

主幹 飛田良文 研究員 高梨信博 調査員 林大・見坊豪紀・木村

睦子・瀧本典子（昭和六十年三月まで）・中田恵美子（同上）・二戸

麻砂彦（昭和五十八年三月まで）・加藤信明（昭和五十八年四月か

ら）・貝美代子（昭和六十一年九月から）・服部隆（昭和六十二年二

月から）

なお、久池井紀子・伊藤眞一郎・平澤啓・木下哲生・吉竹孝介・三宅順子・妹尾和子・山川淑子・山下かおり・吉野美奈子がこの作業を助けた。

解説は飛田良文が執筆した。

また、このほか昭和五十四年度に国語辞典編集準備室が開設されてから今日まで、用例を採集する文献の目録を作成する作業と、用例採集の

方法についての実験が継続している。以下の成果が国語辞典編集準備資料として完成している。

0 国語辞典覚書（林大）

1 諸外国における大辞典（千石喬・池上嘉彦・佐藤純一・田島宏・石綿敏雄ほか）

2 用例採集のための主要文学作品目録（飛田良文・清水康行・湯浅茂雄・柏木成章）

3 用例採集のための主要雑誌目録（飛田良文・高梨信博・見坊豪紀・荒尾禎秀・村山昌俊・斎藤純子）

4 用例採集のためのベストセラー目録（飛田良文・高梨信博・見坊豪紀・村山昌俊・斎藤純子・瀧本典子）

5 用例辞典編集作業のために(一)(二)（見坊豪紀）

6 現代語用例辞典の構想——用例採集法を中心として——（林大・飛田良文）

7 用語総索引作成のための電算機利用方式（木村睦子）

8 スカウト式用例採集の手引き（見坊豪紀）

別冊 国語辞典編集準備室所蔵 見坊文庫目録

（飛田良文記す）

CONCORDANCE 2 OF KOKUTEI TOKUHON

1. CONCORDANCE 2 is the result of work done by the Section for Dictionary Research of the NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE.
2. CONCORDANCE 2 is published as part of the basic research materials to be used for the Historical Japanese Dictionary being planned.
3. The making of CONCORDANCE 2 was done manually, although our future works will be computerized.
4. *Kokutei Tokuhon* was a series of Japanese textbooks edited six times by the Ministry of Education. These were used in all elementary schools nationwide for 45 school years from April 1904 to March 1949.
5. CONCORDANCE 2 covers the second *Kokutei Tokuhon*, called the *Zinzyô Syôgaku Tokuhon* or elementary school reader. The original textbooks in twelve volumes were used for the six grades of compulsory education from April 1910 to March 1918.
6. The *Zinzyô Syôgaku Tokuhon* was revised several times. The text chosen for CONCORDANCE 2 is an earlier version published in the years 1909 and 1910 and is now in the possession of the NATIONAL ARCHIVES OF JAPAN (国立公文書館).
7. CONCORDANCE 2 covers the first half of the vocabulary of the second *Kokutei Tokuhon* or words from *A* (あ) to *TE* (て); the latter half of the words from *TO* (と) to *N* (ん) will be covered by CONCORDANCE 3.
8. The introduction explains the following:
 - the transition from the first to the second *Kokutei Tokuhon*;
 - the characteristics of the second *Kokutei Tokuhon*;
 - the editorial policy of the second *Kokutei Tokuhon*; and
 - the bibliography.
9. The appendix will be contained in CONCORDANCE 3.

国立国語研究所 国語辞典編集資料2

国定読本用語総覧2 第二期 あゝて

昭和六二年三月

国立国語研究所

〒一五 東京都北区西が丘三丁目九番一四号
電話 (〇三) 九〇〇―三二二 (代表)

本書の市販品発行所

〒一〇一 東京都千代田区三崎町二丁目二番一四号
電話 (〇三) 二三〇―九四一二

株式会社 三省堂